

独立行政法人国立文化財機構年報

平成26年度

平成26年度 年報 目次

I	26年度自己点検評価報告書 総括表	1
II	26年度自己点検評価報告書 個別表	
i.	国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するために とるべき措置	85
1.	歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	85
2.	文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	111
3.	我が国における博物館の中核としての機能の強化	194
4.	文化財に関する調査及び研究の推進	214
5.	文化財保護に関する国際協力の推進	588
6.	情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信	610
7.	地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	662
	(受託事業)	695
ii.	業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置	761
iii.	予算、収支計画及び資金計画	—
iv.	その他主務省令で定める業務運営に関する事項	777
III	施設概要	783
IV	財務諸表	787
V	評価	
1.	独立行政法人国立文化財機構の平成26年度における業務の実績に関する評価	834
2.	独立行政法人国立文化財機構の第3期中期目標期間の終了時に見込まれる業務の実績に関する評価	885
3.	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価	940
VI	日誌	1008
VII	運営委員・評議員・外部評価委員名簿及び組織図	1025
	附属資料 : 26年度自己点検評価報告書 統計表	1038

平成 26 年度

新収品図版 [東京国立博物館]

寄 贈



林逋帰亭図屏風



桐葉尾扇



押出如来立像

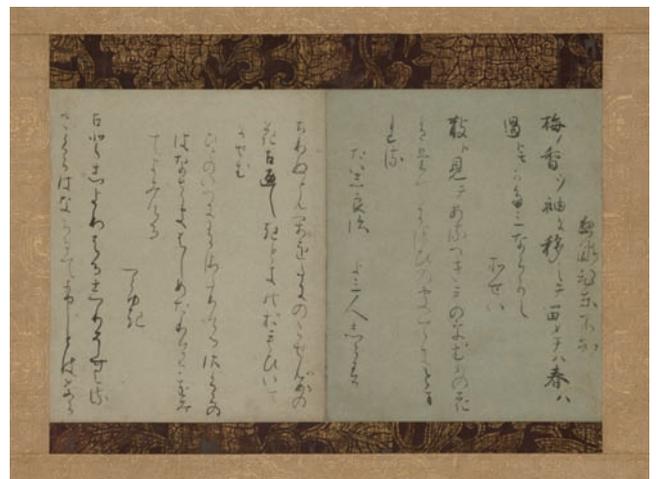


山羊形リュトン

購 入



重要美術品 融通念仏縁起絵断簡



古今和歌集卷第一断簡(関戸本)

平成 26 年度

新収品図版 [京都国立博物館]

購 入



七宝唐花文手付盆



鐘秀斎図



仏涅槃図

寄 贈



御殿雛飾り



青磁輪花碗（破片） 越洲窯



天保九如图・四季草花図屏風

平成 26 年度
 新収品図版 [奈良国立博物館]
 購 入



木造如来立像



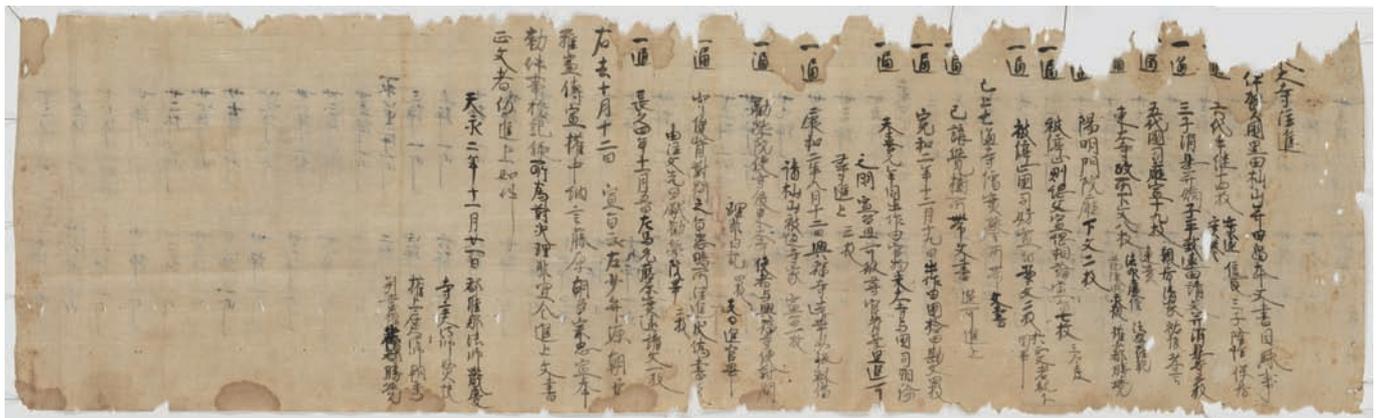
絹本着色春日宮曼荼羅



金銅能作性塔



伝滋賀県比叡山根本如法堂付近出土品



天永二年十一月二十一日東大寺注進状案 (紙背 遠江国条里坪付帳断簡)

平成 26 年度

新収品図版 [九州国立博物館]

購 入



紙本墨画松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風 狩野永徳筆



藍紙墨書大方広仏華嚴経卷第十五 (泉福寺焼経)



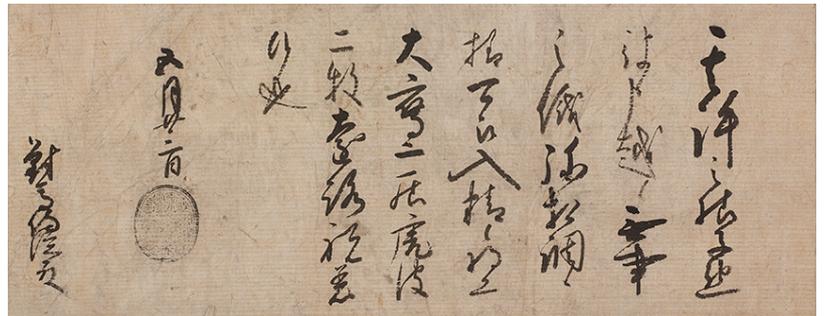
阿弥陀如来坐像



黄地松皮菱繋ぎ槍扇団扇菊椿文紅型胴衣



龍鳳彫彩漆合子



紙本墨書徳川家康御内書

寄 贈



金銅装単龍環頭柄頭



金剛鈴



タイ・バンチェン遺跡出土 土器

I 26年度自己点検評価報告書 総括表
自己点検評価報告書「総括表」 様式補足説明

○ 定量評価項目

評価は、以下の評定区分を使用している。

<p>S：達成率 120%以上かつ質的に顕著な成果 A：達成率 120%以上 B：達成率 100%以上 120%未満 C：達成率 80%以上 100%未満 D：達成率 80%未満 ※B評価が標準となる</p>

○ 自己評価

評価（年度：年度計画に対する総合評価、中期：中期計画に対する総合評価）は、以下の評定区分を使用している。

<p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている A：所期の目標を上回る成果が得られている B：所期の目標を達成している C：所期の目標を下回っており、改善を要する D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する ※B評定が標準となる</p>
--

平成 26 年度 独立行政法人国立文化財機構 自己点検評価報告書総括表

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

(1) 収蔵品の収集

<p>【中期目標】国の文化財保護政策との整合性、一体性を保ちつつ機構の設置する博物館各館の役割・任務に沿って収集方針を定め、これに基づき、計画的かつ適時適切な購入と寄贈・寄託の受け入れを進め、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の充実と保全を図ること。</p>	
<p>【中期計画】 (1)－1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (東京国立博物館) 日本を中心として広くアジア諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。 (京都国立博物館) 京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。 (奈良国立博物館) 仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。 (九州国立博物館) 日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。 (1)－2 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。</p>	<p>【主な計画上の評価指標】 ○購入、寄贈・寄託の受け入れにより、各館の特色に沿った体系的・通史的にバランスのとれたコレクションを形成すること。 【25年度評価における主な指摘事項】</p>

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
1111	<p>(1)－1 適時適切な収集 各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ的確な情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。 (東京国立博物館) 日本を中心として広くアジア諸地域の文化の体系的陳列を目指し、絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料の中から重点的に購入する。</p>	<p>(1)－1 適時適切な収集 【東京国立博物館】 ・購入件数 9件。内訳：絵画3件、書跡1件、漆工1件、東洋染織4件。 ・決算額 139,686,000円 26年度は、絵画3件「柿本人麻呂像」・「融通念仏縁起絵断簡」・「桜下美人図」、書跡1件「関戸本古今和歌集切」、漆工1件「花卉漆絵片口」、東洋染織「スレンダン(肩衣) 茜地草花文様緋緋絢織」・「頭巾</p>	B	総合文化展の充実に寄与する貴重な作品が購入できた。	B	中期計画に基づき順調に成果をあげている。

1112	(京都国立博物館) 京都文化を中心とした絵画、彫刻、書跡、陶磁器、染織品、漆工芸品、金工品、考古資料、歴史資料の中から重点的に購入する。	紫地段幾何文様浮紋織・「帯 茜地段幾何文様浮紋織」・「スレندان(肩衣) 茜地段幾何文様浮紋織」の計9件を購入した。 【京都国立博物館】 ・購入件数 9件 内訳:絵画2件、金工1件、漆工5件、染織1件 ・決算額 227,452,000円 今年度は、近年新たに発見された藤末謙初の「仏涅槃図」、室町幕府の同朋衆芸阿弥に水墨画を習った祥啓の「鍾秀斎図」(重文)、加賀藩家老前田家に伝来した有線七宝の名品「七宝唐花文手付盆」、中世の蒔絵手箱の好例「千鳥蒔絵手箱」、桃山時代の高台寺蒔絵様式による「桐達鷹羽蝶紋蒔絵筆箱」、類例の少ない江戸時代の刺繍による「紅縹子地松竹梅鶴花車文様繡掛下帯」といった京都文化を物語る良品を購入することができた。	B	国指定品を含めた高水準の作品の購入を進め、収蔵品の欠落部分の一部を補うことができた。	B	京都文化を研究・展示するのに効果的な作品を収集することができた。
1113	(奈良国立博物館) 仏教美術及び奈良を中心とした絵画、彫刻、書跡、工芸品、考古資料、歴史資料等の中から重点的に購入する。	【奈良国立博物館】 ・購入件数 15件 内訳:彫刻2件、絵画4件、書跡1件、金工4件、漆工1件、考古3件 ・決算額 261,960,000円 購入により15件の文化財が新たな収蔵品として加わった。木造如来立像、銅造光背、絹本着色春日宮曼荼羅、絹本着色釈迦十六善神像、愛染明王像印仏、最勝曼荼羅、天永二年十一月二十一日 東大寺注進状案、金銅火焰宝珠形舍利容器、金銅能作性塔、金銅蓮華形磬、金銅都五結杵、愛染明王彩繪舍利厨子、人面付蓮華文鬼瓦(八島廃寺出土)、伝奈良県葛城市出土品(銅製骨蔵器)、伝滋賀県根本如法堂付近出土品	B	仏教美術及び奈良に関わる文化財を分野に偏りなく収集できた。	B	仏教美術を中心にバランスの取れた収蔵品蓄積が図られている。
1114	(九州国立博物館) 日本とアジア諸国との文化交流を中心とした美術、考古及び歴史・民族資料等の中から重点的に購入する。	【九州国立博物館】 ・購入件数 14件 内訳:絵画4件、書跡1件、彫刻1件、漆工1件、染織3件、考古2件、歴史資料2件 ・決算額 727,228,000円 当館のテーマである日本とアジア諸国との文化交流の足跡を示す作品を収集する一方で、日本の王朝文化を象徴する作品として、優れた文化財を14件購入した。	B	「松に叭叭鳥・柳に白鶯図 六曲屏風」などの国立博物館として収集すべき作品と、文化交流を端的に示す作品とを、バラン	B	文化交流を端的に示す作品を、バランスよく収集した。

1121	(1) - 2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用 (4館共通) 1) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。	(1) - 2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用 【東京国立博物館】 1)○寄贈 ・新規寄贈品件数 100件 内訳:絵画3件、書跡11件、彫刻1件、金工14件、漆工1件、考古6件、東洋金工1件、東洋考古62件、東洋民族1件。 ○寄託 ・新規寄託品件数 604件 内訳:絵画86件、書跡26件、彫刻104件、金工6件、刀剣3件、陶磁4件、漆工16件、染織217件、考古12件、歴史資料4件、東洋絵画22件、東洋書跡15件、東洋彫刻20件、東洋金工4件、東洋陶磁55件、東洋漆工8件、東洋考古2件。 ・寄託品は新規に604件を受け入れ、59件を返却した。	B	総合文化展と研究に寄与する内容の寄託を受けることができた。	B	中期計画に基づいて順調に成果をあげている。
1122		【京都国立博物館】 1)○寄贈 ・新規寄贈品件数 379件 内訳:絵画49件、書跡17件、金工56件、陶磁86件、漆工161件、染織7件、考古3件 ○寄託 ・新規寄託品件数 162件 内訳:絵画122件、書跡18件、彫刻5件、金工9件、陶磁4件、漆工3件、染織1件 ・新規受入件数では昨年度より倍増した。これは、中国絵画のまとまったコレクションを受託できたことによる。天野山金剛寺の重文「大日如来坐像」と重文「不動明王坐像」は、同寺本堂の改修期間に合わせて借用しているもので、圧倒的な存在感の丈六仏であり、26年9月にリニューアル・オープンした名品ギャラリーの顔ともなった。	A	文化庁との連携により、大型彫刻の長期寄託が実現し、平常展で注目を集めた。個人から大量の寄贈を受け、収蔵品を大幅に充実させることができた。	A	寄贈・寄託とも、質・量のいずれかにおいても従来の実績を大幅に上回り、たいへん順調に推移した。

1123	<p>【奈良国立博物館】 1)○寄贈 ・新規寄贈品件数 0件 ○寄託 ・新規寄託品件数 7件※1 内訳は下記のとおり 彫刻 3件：重要文化財 木造菩薩面 2面 重要文化財 木造行道面 蠅払 1面 重要文化財 木造舞楽面 皇仁庭 2面 ※1 重要文化財 乾漆虚空蔵菩薩半跏像 1軀 絵画 1件：最勝曼荼羅 1幅 工芸 3件：重要文化財 秋草松喰鶴鏡 1面 木造黒漆六角厨子 1基 金銅鬼面五鈷杵 1口</p> <p>※1 彫刻「重要文化財 木造舞楽面 皇仁庭 2面」は、既に寄託されている作品1件に点数の追加としたため、下記定量的評価項目の寄託品件数26年度実績値には含まない。</p>	B	新規寄託件数は、前年度比マイナスではあるものの23・24年度とは同程度であり、かつ、すぐに平常展に出陳しており、順調と言える。	B	新規に寄託を受けた最勝曼荼羅1幅は、すぐに名品展で陳列しており、積極的な活用が図られている
1124	<p>【九州国立博物館】 1)○寄贈 ・新規寄贈品件数 5件 内訳：金工1件、考古3件、民族資料1件 ○寄託 ・新規寄託品件数 12件 内訳：絵画9件、書跡1件、彫刻2件</p>	B	文化交流を主軸に据えた寄託品・寄贈品の受入を、分野のバランスよく行うことができた。特に館蔵品の少ない考古分野の優品の寄贈を受けることができた。	B	文化交流を主軸に据えた寄託品・寄贈品の受入を、分野のバランスよく行うことができたため。

(2) 適切な管理保存

【中期目標】 収蔵品全体を常時、適切な保存及び管理環境下に置くこと。特に、施設の老朽化、耐震対策に計画的かつ速やかに取り組み、収蔵品と人の安全を守る施設・設備の整備を図ること。

<p>【中期計画】 (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。</p>	<p>【主な計画上の評価指標】 ○収蔵品を適切に保存・管理するための、写真・管理データを蓄積すること。 ○展示場、収蔵庫の老朽化対策や温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施すること。 【25年度評価における主な指摘事項】</p>
--	--

(2)-2 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。				
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
1211	<p>(2) - 1 収蔵品の管理・保存 収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。 (4館共通) 1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。 2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。</p>	<p>(2) - 1 収蔵品の管理・保存 【東京国立博物館】 1) 寄託品の状態確認作業を行い、所在情報を更新した。また、寄託の継続について寄託者の確認をとった。 2) 本格修理のための列品調査、対症修理の実施、列品貸与の点検として1,721件の保存カルテを作成し、蓄積した。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新した。 (東京国立博物館) 1) 収蔵品情報調査を継続して行い、収蔵品データベースを更新した。 2) 旧資料部関係品を整理し、列品として26年度は506件の歴史資料を編入した。</p>	B	B
	<p>(東京国立博物館) 1) 収蔵品情報調査を継続して行う。 2) 歴史資料・和書・古写真・ガラス乾板・館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用・公開するための作業を進める。</p>			
1212	<p>(東京国立博物館) 1) 収蔵品情報調査を継続して行う。 2) 歴史資料・和書・古写真・ガラス乾板・館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用・公開するための作業を進める。</p>	<p>【京都国立博物館】 1) 年2回行う寄託品の継続手続きに合わせて、所在確認作業を実施した。 2) 貸与に伴う点検時を主体として作成を行っている館蔵品の保存カルテの作成を継続して行い、204件作成した。 ・収蔵品の貸与記録及び館内の展示記録を継続して行った。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館)</p>	B	B

1213	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 文化財保存修理所を円滑に運用して、文化財の積極的な保存修理を図る。</p>	<p>1) 購入品、寄贈品、新規寄託品等、文化財情報システムの収蔵品データを更新した。 ○彫刻の大型作品の写真撮影を行った。 ○仮設収蔵庫から新館収蔵庫へ各分野の作品移動を行った。 ○新規寄贈品・寄託品を中心に、収蔵庫搬入前に酸化エチレン製剤「エキヒュームS」による燻蒸庫燻蒸を実施した。</p> <p>【奈良国立博物館】 (4館共通) 1) 寄託品の所在確認 ・寄託品の移動時に、保存修理指導室及び列品室への所定のフォームに基づく日時連絡を徹底した。 ・2ヶ月に1回実施している収蔵庫内環境チェック時、及び年末の収蔵庫査察時に寄託品の所在確認を行った。 2) 保存カルテの作成 ・保存カルテについては、文化財の個別写真が添付されたフォームに統一し、保存修理指導室で作成・保管するシステムの運用が軌道に乗ったことで、115件を順調に作成した。 ・保存カルテのコンディション評価欄に記入されたA～Eの5段階評価についてデータを集計し、館蔵・寄託品データベースに統合するための準備を進めた。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 収蔵品情報システムの運用を継続し、26年度新収品を含む収蔵品データを更新した。 (奈良国立博物館) 1) 文化財保存修理所の運用 ・学芸部と文化財保存修理所において、修理に従事する公益財団法人美術院、株式会社文化財保存、北村工房の3工房代表者との懇談会である文化財保存修理所協議会を26年9月11日及び27年3月5日に開催し、各工房の修理事業実施状況、修理所施設の維持・管理、工房内の温湿度をはじめとする保存環境改善に関する課題などを討議した。 ・館長以下博物館職員が定期的に文化財保存修理所各工房の修理実施状況を視察する修理所巡回を3回実施した。</p>	B	B	<p>文化財情報システムと連動して保存カルテの効率的な運用を計った。文化財保存修理所の各工房との連携を通じて、修理所の積極的な活用を行った。</p>	B	<p>保存カルテを順調に作成し、文化財保存修理所での修理につなげることができた。その成果を修理所公開や特集陳列「新たに修理された文化財」等で広く公開できた。</p>
1214	<p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 博物館科学・保存修復諸室を計画的に運用し、文化財の適切な保存・積極的活用を図る。</p>	<p>【九州国立博物館】 1) 出品期間の更新または返却の時期に合わせて所在確認作業を行った。</p>	B	B	<p>保存状況と構造調査等を例年通り着実に実施す</p>	B	<p>文化財を永く次世代に伝えるため、保存・管理・</p>

	<p>2) より充実した業務システムの構築を目指す。</p>	<p>2) 収蔵品及び修理完了資料を中心とした保存カルテを75件作成した。 (九州国立博物館) 1) 収蔵品・展示品を中心にX線CTスキャナ・3Dデジタルタイザ・三次元プリンタを用いて非接触で三次元データを取得し、保存状況と構造調査を実施した。測定結果をデータ化するとともに、3Dプリンタで出力した。このデジタルデータは文化財の保存に役立てると共に展示に反映した。また、保存修復施設1～6を運用し、計画的な保存修理事業を進めた。 2) 現行システムの問題点を洗い出した結果を受け、新システムに向けた取り組みを行った。</p>	B	B	<p>調査等を例年通り着実に実施することができた。</p>
1221	<p>(2) ー2 施設的环境整備 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。 (4館共通) 1) 収蔵品の生物被害を防止するため、I P M (総合的有害生物管理) の徹底を図る。</p> <p>(東京国立博物館) 1) 本館収蔵庫の整備計画を作成しつつ、既存収蔵庫のセキュリティ強化、環境改善の工事を実施する。 2) 収蔵品の保存と展示に関する環境について全館的視野にたつて調査研究を進め、環境データの解析・蓄積を行う。 3) 展示場及び収蔵庫における地震対策の再検討と改善を図る。 4) 収蔵庫、展示室の温湿度、汚染気体など保存環境に関する年次報告を整備する。 5) 輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査を実施する。</p>	<p>(2) ー2 施設的环境整備 (東京国立博物館) (4館共通) 1) 収蔵庫など325地点における生物生息状況を夏季に調査した。また、ゴキブリなどの生活害虫を防除するため、夏季に防虫薬剤を全館に設置した。 (東京国立博物館) 1) 設備と収納を評価するための各項目を設定し、本館に存在する収蔵庫18箇所の収蔵実態について悉皆調査を実施した。調査によって収蔵庫全体の整備計画に必要な情報を収集、整理した。 2) 収蔵庫及び展示室など367地点の温湿度を計測し、環境の評価及び処置を実施した。空気環境に関しては、収蔵庫及び外気など11地点におけるアルデヒド類及び有機酸類などを計測し、蓄積した。 3) 平成館1階展示室改修工事に伴う新規導入免震台の加振実験を行い、免震効果を検証した。東洋館展示室に陳列する資料の支持具を新規製作し、地震対策を強化した。 4) 収蔵庫、展示室など258カ所の温湿度、及び11地点の空気汚染物質濃度に関し年次報告書を整備した。</p>	B	B	<p>生物生息、温湿度、輸送中の振動、免震装置の効果などに関する調査と検証を実施し、文化財を保存するための環境の整備に役立てた。</p> <p>展示、収蔵スペースの保存環境の質的向上を計画的に進めるため、各種の環境データの集積と解析によって、環境改善を効果的に進めることができた。</p>

<p>1222</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 平成知新館(新平常展示館)の講堂ほかの先行運用を開始し、9月に全館開館する。 2) 平成知新館の開館までに、空調による調整開始前の空気環境、粉塵等の環境調査を行い、開館後の効率的な展示収蔵環境の維持管理に役立てる。 3) 明治古都館(特別展示館、旧本館)の免震補強ほかの改修を前提として活用計画を策定する。 4) 明治古都館の温湿度など、展示・保存環境に関わる調査研究を行う。</p>	<p>5) クリーブランド美術館からの国際輸送、特別展「みちのくの仏像」、特別展「3.11 大津波と文化財の再生」出品作品の国内輸送において、輸送中に発生する振動・衝撃の計測を実施した。</p> <p>【京都国立博物館】 (4館共通) 1) 年間を通じて、収蔵庫での網羅的な昆虫類生息調査を行った。また、温湿度モニタリングを拡大した。日常清掃のための備品を拡充した。 (京都国立博物館) 1) 25年度に展示製作工事が完了した平成知新館(新館)は枯らし期間を終えて26年9月13日より一般公開を開始し、初回展示「京へのいざない」は連日、1万人前後に上る多数の来館者を迎えたが、温湿度制御監視により適正な環境を維持した。 2) 平成知新館では、空気環境目標が達成され、新しい展示ケースと収蔵庫については、収蔵・展示前に専門的な虫菌害調査と除塵清拭清掃を行った。 3) 明治古都館(本館)免震補強ほかの準備として、保存活用計画報告書の原案を作成した。 4) 明治古都館、東収蔵庫等では、温湿度モニタリングや昆虫類生息調査等に基づいた、効率的な環境維持を目指した。北収蔵庫の適切な空調運転体制の整備を図った。</p>	<p>B</p> <p>平成知新館の環境を完全に整えて開館し、収蔵品・寄託品の移動を行うことができた。</p>	<p>B</p> <p>新館収蔵庫の管理システムを構築し、生物・カビの調査、気流調査を実施する等、順調に成果をあげた。</p>
<p>1223</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 展示室及び展示ケースの温湿度管理について、無線LANによるデータ管理システムを更に充実させる。 2) 展示ケース内の温湿度・粉塵量などを継続的に計測し、ケースの調湿性能や気密性能の向上を図る。 3) 収蔵庫及び展示室の適正な温湿度管理の徹底を図る。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (4館共通) 1) ・館内の文化財害虫生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示にかかわる箇所を中心に、昆虫調査用トラップを2ヵ月に1回設置・回収し、調査結果の蓄積・分析を行った。 ・文化財害虫の生息が確認された展示室・展示ケースを中心に防虫シートの設置や殺虫処置を行い、併せて展示施設の周囲に害虫忌避剤を散布した。 ・収蔵庫周辺や展示室内、調査室内の衛生環境保持のため、掃除と防塵マット交換を定期的の実施した。 (奈良国立博物館) 1) 展示室及び展示ケース内の温湿度の管理をすることができる無線LANによるリアルタイムの温湿度管理システムにより、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示室内の温湿度環境の変化に、科学的データを以て即時に対応した。</p>	<p>B</p> <p>無線LAN温湿度管理、文化財害虫調査用トラップの回収、展覧会の環境対応など、当初の計画通り実施できた。</p>	<p>B</p> <p>調査で得られたデータの解析が進みつつあり、保存・展示環境のよりよい構築が進みつつある。</p>
<p>1224</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 館内の温湿度・空気質など保存環境に関するデータを蓄積する。 2) 全館的視野に立った陳列品の展示・保存環境に係る調査研究を進め、環境データの蓄積解析を行う。</p>	<p>2) ・展覧会ごとに展示レイアウトに応じて無線LAN温湿度センサーを設置し、期間中に得られたデータを展示終了後に分析して報告書を作成した。 ・正倉院展終了直後の26年11月13日に、毎年継続的に実施している展示ケース内の粉塵調査を宮内庁正倉院事務所研究員とともに行った。 3) 展示室内の温湿度については無線LAN温湿度管理システムにより24時間リアルタイムで状況を把握した。収蔵庫及び文化財保存修理所各工房内については、ロガータイプの温湿度センサーによる監視を継続するとともに、定期的にデータの回収、分析を行うことにより温湿度の変化を把握した。</p> <p>【九州国立博物館】 (4館共通) 1) 収蔵品の生物被害を防止するため、IPMの徹底を図った。文化財搬入に際し、IPMメンテナンスに基づく収蔵準備作業を実施すると共に、必要に応じて殺虫殺菌処理を実施した。 (九州国立博物館) 1) 展示室に新たな温湿度モニタリング装置を導入し、より確実な温湿度データの蓄積を図った。収蔵庫、諸室等館内約420ヵ所にトラップを設置し、虫の侵入を調査して保存環境の改善を行った。 2) ・収蔵庫にこれまでの温湿度データロガーとは別に、温湿度モニタリング装置を導入し、早期対策に努めた。 ・環境データを解析することで、海外より借用した文化財の安定した状態での展示に寄与することができた。</p>	<p>B</p> <p>温湿度計測に関して新たなモニタリング装置を導入してより確実なデータの集積を図った。IPM活動に関しては市民ボランティアや地元NPO法人と連携して進めることができた。</p>	<p>B</p> <p>新システムの導入(温湿度モニタリング装置)、地道な粘着トラップによる生息調査、環境のモニタリングにより、確かな環境整備を行うことができ順調である。中期計画の最終年度である次年度はこれまでの環境整備を見直し、次につながる環境整備システムを検討する。</p>

(3) 計画的な修理

<p>【中期目標】 収蔵品の保存技術の向上に努めること。</p>	<p>【主な計画上の評価指標】</p>
<p>【中期計画】 (3)-1 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。 (3)-2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。</p>	<p>○緊急性の高い収蔵品等から計画的に修理を実施すること。 ○文化財保存修理所の整備・充実のための取組を行うこと。</p>

(3)-3 収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査・研究並びに修理に伴う調査・研究のための基本設備の充実を図る。		○計画的な収蔵スペースの確保及び調査研究のための基本設備充実に向けた取り組みを行うこと。 【25年度評価における主な指摘事項】				
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
1311-1	<p>(3) - 1 収蔵品の修理</p> <p>① 計画的な修理及びデータの蓄積 修理、保存処理を要する収蔵品等については外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。 (4館共通)</p> <p>1) 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件(東京:40、京都:10、奈良:9、九州21)の本格修理を実施する。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 引き続き国宝・重要文化財の中長期修理計画を策定する。 2) 保存修復関係資料(前年度修理実施分)のデータベース化を図る。(70件)</p>	<p>(3) - 1 収蔵品の修理</p> <p>① 計画的な修理及びデータの蓄積</p> <p>【東京国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 紙本などの修理技術者として保存修復課に2名のアソシエイトフェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急(対症)修理を本格化させた。作品の劣化予防のために413件の応急修理を実施し、緊急性の高いものから78件の本格修理を実施した。うち国宝2件、重要文化財1件、未指定品4件は寄附金による本格修理である。 (東京国立博物館)</p> <p>1) 修理計画立案に向け、国宝・重要文化財を含む305件の作品に関して修理仕様の検討を行い、中長期修理計画策定を進めた。 2) データベース構築のために25年度に本格修理を実施した93件の内、修理が完了した61件の修理内容についてデジタル化を実施した。 『東京国立博物館文化財修理報告書XV』を刊行した。</p>	A	<p>緊急性の高い本格修理及び応急修理、計画立案のための事前調査を計画的に実施し、厳しい経済的事情の中で国宝2件、重要文化財1件を含む修理を実施し、当初予定を上回る内容の成果を挙げた。合わせて修理関係資料のデータベース化を予定通り完了した。</p>	B	<p>事前調査、応急修理、本格修理の各段階で保存科学と修理技術が連携して保存修理事業に当たり、博物館活動に対して最適な作品修理を行うことができた。</p>
1312-1	<p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 中長期的修理計画の策定を検討する。 2) 収蔵品修理資料のデータベース化に向けた調査を開始する。</p>	<p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) ・館費による修理に加えて、館への寄附金による修理を1件新規で実施し、平成24年度より朝日新聞文化財団の修理助成にて継続して行われている修理を1件実施した。 ・絵画2件と漆工1件について、修理中に修理請負候補者選定委員による工程検査を行い、修理が適正に実施されているかを現場確認した。 ・本格修理実績 11件 内訳は絵画4件、金工1件、漆工1件、染織3件、考古1件、歴史資料1件 (京都国立博物館)</p> <p>1) 中長期的修理計画の策定に向けて、確保できる財源についての検討を行い、昨年度に引き続いて各分野の作品担当と実施作品についての調整を行った。 2) 昨年度から引き続き、収蔵品データベースの更新計画に修理情報の集積を盛り込むことを念頭に、必要項目の洗い出しとデータ状況の確認を行った。</p>	B	<p>今年度の修理件数は当初目標値の10件を超えており、懸案であった指定品の修理にも着手できた。</p>	B	<p>緊急性の高い重要文化財の屏風作品の修理に着手しており、計画達成に向けて順調に成果を上げている。</p>
1313-1	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 引き続き修理の中長期的計画に基づき修理を実施する。 2) 修理資料のデータベース化を図る。 3) 寄託の継続を図る必要性の高い寄託品について修理を実施する。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) ・館蔵品修理10件(応急修理1件含む)のうち、新規7件、前年度からの継続事業3件を実施した。 内訳 絵画4件 (※うち絹本着色六字経曼茶羅1件は2ヵ年継続事業の最終年度。絹本着色山越阿弥陀図1件は3ヵ年継続事業の1年目。紙本着色泣不動縁起及び絹本着色東大寺曼茶羅2件は2ヵ年継続事業の1年目。) 書跡1件 工芸2件 (※うち国宝 刺繡釈迦説法図1件は4ヵ年継続事業の3年目) 考古資料3件 (※うち二塚古墳出土鉄製品1件は2ヵ年事業の最終年度。) ・年度内に6件が完了した。 (奈良国立博物館)</p> <p>1) 平成22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づき、計画通りに館蔵品修理を実施している。</p>	B	<p>22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づいて館蔵品の修理を実施するとともに、文化財保存修理所で行われた文化財修理のデータベース化を着実に実施した。</p>	B	<p>館蔵品、寄託品について長期計画に基づきながら修理を着実に実施することができた。修理に際しては、当館保存担当者が光学的調査を実施してその所見を修理仕様に反映するとともに、修理監督についても当館研究員が適宜行った。</p>

1314-1	<p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 博物館科学・保存修復諸室の積極的活用を図る。</p> <p>2) 修理資料のデータベース化の調査を実施する。</p>	<p>2) 前年度に引き続き、当館紀要『鹿園雑集』に「奈良国立博物館文化財保存修理所 修理一覧」の掲載作業を進めるとともに、併せて修理報告資料を整理し、データベース化を進めた。</p> <p>3) 寄託品3件について当館の推薦による財団助成を受けて修理を実施した。</p> <p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 館所蔵品を中心に、展示や損傷の程度を勘案して、緊急性の高い文化財29件(本格修理23件、応急修理6件)を修理した。(九州国立博物館)</p> <p>1) 九州をはじめとする館外所蔵者負担による文化財修理32件のために、当館の保存修復諸施設を積極的に活用した。館費による修理とあわせて61件の修理を実施した(施設内修理58件、施設外修理3件合計61件)。このうち、九州の寺院に伝来した重要美術品・両界曼荼羅(奈良国立博物館所蔵)については、長期貸与を前提として3年間かけて当館経費で本格修理を行っている。この修理において奈良国立博物館の保存修理担当者と連携して調査を行い、修理を進めているところである。</p> <p>2) 修理報告書及び修理経過を示す画像データを整理して、データベース化に備えた。</p>	B	B	<p>機構の保存修復担当者と連携しながら修理を進めており、中期計画を順調に達成していると判断できる。</p>
1311-2	<p>② 科学的な技術を取り入れた修理 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通)</p> <p>1) 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。</p> <p>2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) X線CTスキャナを運用し、研究の進展を図り、より適切な修理方法を検討する。</p>	<p>② 科学的な技術を取り入れた修理</p> <p>【東京国立博物館】</p> <p>・東京国立博物館でもより深い文化財調査を行うべく、性能の違う3台のX線CTスキャナを設置し、研究を開始した。所蔵品の貸与前の点検時に亀裂等の確認を行うことで適切で安全な輸送方法の検討を行えるようになった。大型X線CTを用いた他の</p>	B	B	<p>東日本大震災で被災した文化財の修理のための事前調査を始めとして、各種の</p>
1312-2	<p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 文化財材質分析システム等を整備する。</p>	<p>研究機関との共同による調査研究も進み、今後の研究の進展が期待できる。また、東日本大震災で被災した文化財の修理前調査を行い、適切な修理方法の設計、施工を行うことが出来た。</p> <p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 24年度より朝日新聞文化財団の助成にて修理を継続している国宝「病草紙」について、本紙の裏面に接着する肌裏紙の分析(明度・色目・紙厚・質目)を行い、修理完成にむけた指針の策定に役立てた。</p> <p>2) 25年度に設置したマイクロフォーカスX線CTシステムの運用を開始し、文化財の調査を行った結果、内部構造の解明、修理に資することが出来た。 (京都国立博物館)</p> <p>1) 電子顕微鏡システム、3Dプリンター、蛍光X線分析装置などの機器を新たに調達した。</p>	B	B	<p>文化財の保存状態確認のための調査を修理技術者、学芸研究者らと共に実施し、具体的な修理の仕様策定に結びつけることができた。</p> <p>科学的な手法を加味した、より精度の高い保存修理の実現に向け、順調に成果を上げている。</p>
1313-2	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 木造文化財について、木材樹種同定の調査を行い、文化財の材料の解明及び修理指針の検討に役立てる。</p> <p>2) 古墳出土の甲冑片、武器等鉄製品、木造彫刻などのX線撮影及び実測図作成を順次進め、材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 紺紙金地五苦章句経の修理に際して料紙の繊維分析を実施し、補紙として用いる紙の仕様を決定した。(実施回数1回)</p> <p>2) 小野流相承絵系図の修理に際し、当館光学調査室の機器を用いて顔料の蛍光X線分析を実施した。(実施回数2回)</p> <p>・花鳥時絵螺鈿櫃(阪急文化財団蔵)の修理に際し、当館研究員がX線透過撮影を実施し、螺鈿金具の固定に関する調査を行った。(実施回数4回) (奈良国立博物館)</p>	B	B	<p>携帯型蛍光X線分析装置を導入し、修理現場で光学的調査を随時実施する体制が整いつつある。</p>

1314-2		<p>1) 当館文化財保存修理所で修理施工された木造彫刻作品11件について、京都大学生存圏研究所に委託して樹種同定調査を実施し、その成果を当館研究紀要『鹿園雑集』に掲載した。</p> <p>2) 古墳出土の鉄器を中心とする館蔵考古資料の修理に際し、X線透過撮影を実施し、修理方針の決定に役立てた。</p> <p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 当館所蔵国宝茶花物語及び重要文化財布袋図等の紙本作品9件について繊維同定を行った。</p> <p>2) ・当館所蔵物語図屏風(A75)について、現状二曲屏風であるが、表現や本紙の状況から度重なる改装が行われていることが予想されたため、絵の具の顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。その結果、予想された改装順序に矛盾が無いことが判明した。</p> <p>・当館所蔵朱漆螺鈿二層(ME1)については近代の作品であったため、使用されている赤色着色材料が有機化合物である可能性も考慮しX線回折分析を行った。その結果、着色材料は無期化合物である朱(HgS)であることが明らかになった。</p> <p>・前年度調査を行った当館所蔵仏涅槃図命尊筆(A74)の裏彩色に用いられた彩色材料の調査結果について、修理完成記念特別公開も兼ねた当館トピック展示「大涅槃展」でパネルを用いて展示するとともに、展示図録にも掲載し、一般の方々へ修理に伴う科学調査の必要性を伝えることができた。</p>	B	B	科学調査の件数も毎年10件前後と安定しており、中期計画を順調に達成していると判断できる。
1320	<p>(3) - 2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。</p> <p>(京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館)</p> <p>1) 文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 文化財保存修理所の改修工事を行う。</p>	<p>(3) - 2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。</p> <p>【京都・奈良・九州国立博物館】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館)</p> <p>1) ・京都国立博物館の文化財保存修理所の空調機を点検し、空調機内の中性性能フィルターを一部の空調機で交換した。</p> <p>・奈良国立博物館の文化財保存修理所の空調機を点検し、空調機内のプレフィルター及び活性炭フィルターを一部の空調機で交換した。</p> <p>・九州国立博物館の保存修復施設について、室内温湿度環境の改善の検討を行った。</p> <p>・九州国立博物館の保存修復施設において、修理件数の増加に伴い、修復収蔵庫内の既存木製棚に棚板を増設した。</p>	B	B	京都国立博物館文化財保存修理所の大規模修理を行うなど、中期計画を順調に達成している。

		<p>・九州国立博物館の保存修復施設では、近年、古文書や歴史資料等の大量一括紙文化財の修理事業が年々増加してきており、将来的に修復施設が手狭になることが予想されるため、外部専門家を交えて空調や修復作業の安全性等を考慮した中二階増設のための検討を行った。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 文化財保存修理所改修工事(一期工事)を完了した。また、電気設備及び機械設備の改修工事に着手した。</p>	B	B	事も順調に進行している。
1330	<p>(3) - 3 収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査研究並びに修理に伴う調査研究のための基本設備の充実に向けた検討を行う。</p>	<p>(3) - 3 収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査研究並びに修理に伴う調査研究のための基本設備の充実に向けた検討を行う。</p> <p>【東京・京都・奈良・九州国立博物館】 (東京国立博物館)</p> <p>・東洋館2階の収蔵庫に棚を設置し、収納の効率化を図った。</p> <p>・資料館3階の収蔵庫を整理し、より効率的な収納が可能となるよう収蔵品を移動した。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>・X線CTを導入し、調査研究に活用することを始めた。今後、電子顕微鏡、蛍光X線分析装置等の科学機器を設置することで、調査研究の充実を図ることができる。</p> <p>・平成知新館にて「環境モニタリングシステム」の運用を開始し、温湿度環境の維持に役立てることができた。</p> <p>・北収蔵庫1階に新たな収納棚を設置し、収蔵スペースを確保した。</p> <p>・京都府精華町の旧私のしごと館の収蔵庫整備を設計し、着手した。</p> <p>・平成知新館のフィルム保管室に、独立した空調機を1機増設した。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>・複数室一体で温湿度管理を実施していた箇所について、詳細な温湿度管理に向けて各部屋毎に計測器を設置した。</p> <p>・X線装置の設置に伴い、機器の有効利用に向けた施設改修の検討を行った。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>・これまで空席であった撮影技師の採用に向け、写場及び撮影機材の整備・拡充に努めた。</p> <p>・写場の専属撮影技師の作業スペースとして、写場隣にある器材庫の改修を行った。(27年3月)</p>	B	B	京都国立博物館では収蔵庫のスペースを新たに確保するなど、中期計画に基づき順調に成果をあげている。

		定量評価項目	26年度	25年度	目標値	評価
		文化財の本格修理(件)				
	東京国立博物館		78	93	40	A
	京都国立博物館		11	15	10	B
	奈良国立博物館		9	8	9	B
	九州国立博物館		23	17	21	B
		文化財修理のデータベース化(件)				
	東京国立博物館		86	84	70	A
	京都国立博物館		113	101	—	—
	奈良国立博物館		77	73	—	—

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

(1) 展示の充実

<p>【中期目標】 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。</p> <p>(1) 展覧事業の充実</p> <p>我が国の中核的拠点として、展覧事業については常に点検・評価を行うなど改善への取組みを進め、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外に発信し、これらについての理解促進に寄与するものとなるように努めること。</p> <p>①展覧事業の中核である平常展は、歴史・伝統文化についての理解に資するよう、体系的・通史的な展示に努めるとともに、各館の収蔵品を法人全体として有効活用した魅力ある展示を行うこと。また、より多くの方々に我が国の歴史・文化財の理解を深めてもらうため、来館者の増加に努めること。さらに海外からの来訪者が必ず訪れる博物館を目指し、魅力ある展示と展示に関する説明を一層充実させること。</p> <p>②特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行うこと。また、展示方法、解説などについて機構の人的資源を最大限に生かした魅力あるものを提供すること。また、展示内容・展覧環境を踏まえた適切な来館者数の確保に努めること。</p> <p>③海外に向けても機構の各博物館の収蔵する日本の優れた文化財と優れた人材を活用して、我が国の歴史と伝統文化を紹介する機会の拡充に努めること。</p>	
<p>【中期計画】</p> <p>文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図るとともに、政府の観光政策と連動した観光資源としても活用を図る。</p> <p>(1) 展覧事業の充実</p> <p>我が国の中核的拠点として、展覧事業については、常に点検・評価を行い国民のニーズ、学術的動向等を踏まえた質の高いものを実施するとともに、展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、国際文化交流に配慮するなど魅力あるものとする。</p> <p>また、見やすさ分かりやすさに配慮した展示及び解説や音声ガイド等の導入を行うことにより、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化についての理解を深めるものとなるよう工夫する。</p> <p>①-1 平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。</p> <p>なお、京都国立博物館においては、耐震化を図るための平常展示館建て替え終了後、国際文化観光都市・京都において京都文化発信の核となる博物館を目指した平常展を平成26年度までに開催する。</p> <p>①-2 展示に関する説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに英語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を80%以上設置する。</p> <p>②特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。</p> <p>特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。</p> <p>(東京国立博物館) 年3～4回程度</p>	<p>【主な計画上の評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国民のニーズや学術的動向等を踏まえた質の高いものとする。 ○観覧者の理解が深まるよう展示・解説を工夫すること。 (平常展) ○平常展事業の中核として、各館の特色を十分に発揮した体系的・通史的な展示とすること。 ○作品のキャプションについては、すべてに英語訳を付すこと。 ○海外からの来館者向けに、展示テーマごとに外国語の解説パネル等を80%以上設置すること。 (特別展) ○我が国の博物館の中核的拠点にふさわしい質の高い展示とすること。 ○各館ごとに以下の回数程度の特別展を実施すること。 東京国立博物館 3～4回 京都国立博物館 奈良国立博物館 九州国立博物館 2～3回 ○個々の展覧会ごとに、展示内容・観覧環境を踏まえた目標来館者数を定め、それを達成すること。 ○展覧会来館者の満足度を把握し、改善を図ること。 ○海外において展覧会を開催し、日本の歴史と伝統文化を紹介すること。 <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○各館における特別展・平常展の個々について、展示内容と来館者数等の自己評価がなされているが、その結果を次年度以降の展示に如何に反映させるか、必ずしも明確に示されていない。展示の質を高め、来館者数を増加させるための重要な作業と思われる

(京都国立博物館) 年2～3回程度 (奈良国立博物館) 年2～3回程度 (九州国立博物館) 年2～3回程度 ③海外からの要請等に応じて、海外において展覧会等を行うことにより、日本の優れた文化財をもとにした歴史と伝統文化を紹介する。		○平常展示の充実、博物館として本来あるべき姿を追求するものであり、今後も創意工夫の元に一層の充実を図られた。京都国立博物館の平常展示施設が開業されれば、さらなる進展が期待される。				
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
2111-1	(1) 展覧事業の充実 東京、京都、奈良、九州4館それぞれの特色を活かし、国内はもとより、海外からも国立博物館を訪れたいくなるような魅力ある平常展や特別展を実施する。 ① -1 平常展 展覧事業の中核と位置づけ、各国立博物館の特色を十分発揮した特集陳列等を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。 (4館共通) 平常展来館者数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期計画期間の年度平均の確保を目指す。 (東京国立博物館) ア 定期的な陳列替の実施(年5,800件) イ 陳列総件数 約7,500件 ウ 本館「日本美術の流れ」を始めとする日本美術関係の展示、平成館の日本考古展示の更なる充実を図る。平成27年1月より黒田記念館の一般公開を再開する。黒田記念館内の展示室のうち黒田記念室については本館等と同様、原則週6日の公開とする。 エ 特集 特別展「日本国宝展」の開催に合わせた「国宝再現—田中親美と模写の世界—」(10月15日～12月7日)を開催する。東洋館の展示を中核に据えた「博物館でアジアの旅」期間を秋に設け、「中国書画精華」(9月30日～12月7日)、「唐物ってなに? 唐物受容のその後」(9月30日～11月24日)などを開催す	(1) 展覧事業の充実 ①-1 平常展 【東京国立博物館】 (4館共通) 総合文化展(平常展)は、平成館1階考古展示室が27年10月のリニューアルオープンに向け、26年12月～27年3月まで工事のため閉室したが、黒田記念館のリニューアルオープンや「博物館に初もうで」などの事業の充実によって、平常展来館者数の目標値である前中期計画期間の年度平均を上回った。 (東京国立博物館) ア 定期的な陳列替を実施し、5,506件の展示替を行った。 イ 陳列総件数 8,161件 ウ 展示ケースの修理点検、清掃などで保存環境及び観覧環境の向上を図った。東洋館・法隆寺宝物館の展示ケースの補修を行った。また、26年12月より平成館1階考古展示室を閉室し、展示環境の改善のための工事を開始した(27年10月再開予定)。耐震改修のため24年4月8日より休館していた黒田記念館は、27年1月2日より展示を再開した。以前は週2日の限定公開であったが、再開後は東京国立博物館の休館日・開館時間に準じた。	B	本館特別1室を緊急に改修する必要があったため陳列替件数が目標に達しなかったが、黒田記念館のリニューアルオープンや「博物館に初もうで」などの事業の充実によって目標を上回る来館者があった。	B	平常展示とともに、テーマ性を持った特集展示、「博物館でアジアの秋」などのイベント等を充実させることにより、国内外の多くの来館者があり、中期計画に向け順調にすすんでいる。

2112-1	る。すでに恒例となった「博物館に初もうで」関連企画、上野動物園・国立科学博物館との動物を取り上げた連携企画、台東区立書道博物館との連携企画「趙之謙の書画と北魏の書」(7月29日～9月28日)などを実施する。 ・「日本人が愛した官窯青磁」(5月27日～10月13日) ・「伊能忠敬の日本図」(6月24日～8月17日) ・「甕つた飛鳥・奈良染織の美—初公開の法隆寺裂—」(8月19日～9月15日)等 オ 文化庁関係企画 ・「平成26年 新指定 国宝・重要文化財」(仮称) (4月22日～5月11日) 平成26年に新たに国宝・重要文化財に指定される文化財を展示する。 (京都国立博物館) ア 平成26年9月13日に平成知新館を開館し、平成知新館開館記念展「京(みやこ)へのいざない」を開催する(9月13日～11月16日)。 イ 定期的な陳列替を行い、テーマ性を持った展示を行う。(陳列替件数 年700件) ウ 陳列総件数 約1,000件 エ 特別展示室において、部門を超えた特別展示を行う。 オ 特集陳列 ・「ひなまつりと人形」(平成27年2月21日～4月7日)	エ 22件の特集を実施した。 オ 「平成26年 新指定国宝・重要文化財」を実施した(26年4月22日～5月11日)。また、新指定の重要文化財となった彫刻の一部を、同時期の本館11室においても展示した。 【京都国立博物館】 ア 26年9月13日に平成知新館を開館し、平成知新館開館記念展「京(みやこ)へのいざない」を開催した(26年9月13日～11月16日)。 イ 定期的な陳列替を行い、各展示室ごとにテーマ性を持った展示を行った。(陳列替件数 693件) ウ 陳列総件数 980件 エ 特別展示「桃山 秀吉とその周辺」(26年10月13日～11月16日)、特別展「島根鰐淵寺の名宝」(27年1月2日～2月15日)等、特別展示室において、分野を超えた特別展示を行った。 オ 特集陳列「雛まつりと人形」(27年2月21日～4月7日)、特別展「天野山金剛寺の名宝」(27年3月4日～3月29日)を開催した。	A	判定根拠：陳列替件数・陳列総件数は目標値をわずかに下回ったものの、粒よりの名品を効果的に展示したことにより、予期以上の好評を博し、目標値の4倍以上に達する来館者を迎えることができた。対応と課題：26年秋の混雑した平成知新館も新年度では沈静化が見込まれるので来館者確保のために各種特集陳列の企画・広	A	判定根拠：平成知新館の開館に伴い京都文化の様相をよく示す「京へのいざない」展を開催することによって日本人およびアジア・欧米からの来館者に向けて日本の伝統美術工芸作品を紹介することができた。音声ガイドも日・英・中・韓の4言語を用意して来館者対応を強化した。課題と対応：京都文化の本質を
--------	---	--	---	--	---	---

<p>2113-1-1</p>	<p>(奈良国立博物館) ア 活発な収集と新しい資料の発掘により名品展（平常展）の充実を図る。 ・西新館 絵画・書跡・工芸・考古部門の名品展 ・なら仏像館 彫刻部門の名品展 大きな仏像を中心に、できるだけケース外での展示を増やし、より見やすい環境で、優れた仏教彫刻を展示する。（ただし年度の下半期は展示ケース等改修工事のため休館予定） ・青銅器館 中国青銅器の名品展 国内における屈指の青銅器コレクションを展示する。 ・特集展示コーナー等を設け、観覧者の関心を喚起する。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (4館共通) 平常展来館者数は、今年度の目標値である94,338人を若干下回った。なお目標値は、工事による閉館を勘案して補正した。 (奈良国立博物館) ア 名品展においては、多数の優れた文化財をバランス良く展示することができた。 ・西新館 彫刻・絵画・書跡・工芸・考古部門の名品展 26年12月9日～27年3月31日の日程で開催した。なら仏像館の休館に伴い、彫刻の一部を西新館名品展で陳列した。 ・なら仏像館 彫刻部門の名品展 26年4月1日～9月7日の日程で開催した。館内では通常展示のほか、以下の特別公開を実施した。 特別公開「金剛寺 降三世明王坐像」（23年10月24日～26年9月7日） 特別公開「定朝様の丈六阿弥陀像」（24年6月26日～26年9月7日） ・青銅器館 中国青銅器の名品展 館が所蔵する中国・商（殷）～漢時代までの青銅器の逸品を展示した。ただし、26年10月23日～11月12日は臨時休館した。また、26年9月9日以降は、上記休館期間を除き、観覧無料とした。 ・西新館で特集展示「新たに修理された文化財」（26年12月23日～27年1月18日）、及び特集展示「和紙—文化財を支える日本の紙—」（27年1月27日～3月15日）を開催した。</p>	<p>B 報及びイベントの実施などを強化して来館者減を極力抑えるように努める。 B 近年新たに見出され当館寄託となった内山永久寺の扁額を展示するなど、新資料の公開に成果を上げた。</p>	<p>紹介できる平常展示・特集陳列を積極的に推進することが欠かせない。 B 当館の特色である仏教美術のテーマに沿って、時に特別公開や特集展示を設けながら、充実した平常展を実施できている。</p>
<p>2113-1-2</p>	<p>イ 定期的な陳列替の実施（年80件） ウ 陳列総件数 約475件 エ 特別陳列により名品展の充実を図る。 独自の研究テーマ及び地域に密着した研究テーマによる特別陳列の充実 ・「おん祭と春日信仰の美術」（12月9日～平</p>	<p>(奈良国立博物館) イ 定期的な陳列替を実施し、208件を替えた。 ウ 陳列総件数 791件（特別陳列を含む） エ 下記特別陳列を開催し、平常展の充実を図った。 ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」（26年12月9日～27年1月18日） 陳列件数54件（陳列替13件）</p>	<p>B 奈良の地域に根ざした内容の特別陳列や世界的に価値の認められた和紙に関する特集展など、</p>	<p>B 和紙に関する特集展示を組むなど、日本の伝統文化理解の促進に寄与する展示ができた。</p>
<p>2114-1</p>	<p>成27年1月18日） ・「お水取り」（平成27年2月7日～3月15日） (九州国立博物館) ア 定期的な陳列替の実施（年800件） イ 陳列総件数 約1,000件 ウ 文化交流展（平常展）のリニューアルに向けて引き続き検討する。 エ トピック展示により、独自のテーマ及び地域に密着したテーマを掘り下げる。 ・「館蔵 近世絵画名品展」（平成26年2月25日～4月6日；4月8日～5月18日） ・「中国を旅した禅僧の足跡」（5月27日～7月6日） ・「全国高等学校 考古名品展」（7月15日～9月23日） ・「大涅槃展」（平成27年1月14日～2月15日） ①-2 展示説明の充実 (4館共通) 1) 作品キャプションについては全てに英語訳を付す。</p>	<p>・特別陳列「お水取り」（27年2月7日～3月15日） 陳列件数62件（陳列替2件） 【九州国立博物館】 (4館共通) 平常展来館者数は、前中期計画期間の年度平均に届かなかった。 (九州国立博物館) ア 定期的かつ計画的に陳列替を実施し、1,027件の陳列替を行った。 イ 陳列総件数 1,904件 ウ 開館10周年のリニューアルに向けて、基本展示室のケース配置やグラフィックを抜本的に見直すべく、秋からテーマ会議を招集し、計画を進めた。 エ 独自の着想に基づいたトピック展示・特別公開を11回開催し、新鮮な展示を提供することができた。 ①-2 展示説明の充実 【東京・京都・奈良・九州国立博物館】 1) 東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館及び九州国立博物館の展示説明において作品キャプション全てに英語訳を付した。</p>	<p>C 当館ならではの企画を織り込み、充実した平常展を展開することができた。 C 判定根拠：文化交流展示室の展覧会事業のうち、トピック展示・特別公開は特別展的な性質を持っており、当初想定していた来館者の動員を行うことができず、目標値に達することができなかった。 課題と対応：今後、平常展に関する広報を充実させ、かつ効率的に展開すべく広報戦略の見直しも含め、効果的に機能させることで対応していく。来館者増加につながるような広報のあり方について検討する必要がある。</p>	<p>B 判定根拠：全体として順調に推移している。 課題と対応：今後、広報戦略も含め実績の分析・対策を積極的に打っていくことで、来館者増加を図っていく。</p>
<p>2110-2</p>	<p>(4館共通) 1) 作品キャプションについては全てに英語訳を付す。</p>	<p>【東京・京都・奈良・九州国立博物館】 1) 東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館及び九州国立博物館の展示説明において作品キャプション全てに英語訳を付した。</p>	<p>B 4館とも作品キャプション英訳100%、テーマ</p>	<p>B 外国語パネルを設置することにより、外国語解</p>

	2) 展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を80%以上設置する。	2) 展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を各館とも80%以上設置した。 (東京国立博物館) 展示テーマ数131件のうち、131件(100%)については外国語パネルを設置した。また、74件(56%)については中国語、韓国語での解説も付している。 (京都国立博物館) 展示テーマ数63件のうち、63件(100%)について外国語パネルを設置した。 (奈良国立博物館) 展示テーマ数65件のうち、65件(100%)について外国語パネルを設置した。 (九州国立博物館) 展示テーマ数54件のうち、50件(92%)について外国語パネルを設置した。また、33件(61%)については中国語、韓国語での解説も付している。		解説英訳80%以上であり、年度計画を達成している。加えて、中国語・韓国語による解説も整備が進んでいる、今年度リニューアルオープン後の東京国立博物館黒田記念館(27年1月2日)、京都国立博物館平成知新館(26年9月13日)においても、海外からの来館者への対応ができており、順調である。	説の充実とサービスの向上に努め、中期計画達成に向け順調である。
2120	② 特別展	② 特別展 【東京・京都・奈良・九州国立博物館】 (東京国立博物館) 特別展を8回開催した。 内訳：当館開催7回、海外展1回 (京都国立博物館) 特別展を2回開催した。 (奈良国立博物館) 特別展を3回開催した。 (九州国立博物館) 特別展を5回開催した。	B	4館とも目標値を達成し、年度計画通り特別展を順調に開催できている。混雑対策については引き続き検討していく。	B 判定根拠：東京国立博物館においては年度計画外の特別展も開催するなど、4館とも中期計画達成に向けて順調である。 課題と対応：京都国立博物館では特別展会場である明治古館の耐震強度が必ずしも充分ではないため、開催の在り方を検討

2121-1	(共同企画) ・「クリーブランド美術館展 一名画でたどる日本の美ー」(平成25年度 東京国立博物館、平成26年度 九州国立博物館) ・特別展「台北 國立故宮博物院 一神品至宝ー」(平成26年度 東京国立博物館、九州国立博物館) (東京国立博物館) ア 開山・栄西禅師800年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」(平成26年3月25日～5月18日) 建仁寺開山・栄西の事跡と建仁寺の法脈をたどり、建仁寺に関わる文化にも注目する。(目標来館者数20万人)	・「クリーブランド美術館展 一名画でたどる日本の美ー」九州国立博物館での開催については、処理番号2124-2 ・特別展「台北 國立故宮博物院 一神品至宝ー」東京国立博物館での開催については、処理番号2121-3 九州国立博物館での開催については、処理番号2124-3 【東京国立博物館】 ・展覧会名 開山・栄西禅師800年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」 ・会期 26年3月25日(火)～5月18日(日)(49日間) ・会場 平成館 特別展示室第1～4室 ・主催 東京国立博物館、建仁寺、読売新聞社、NHK、NHKプロモーション ・協賛 ジェイティービー、日本写真印刷 ・協力 あいおいニッセイ同和損保 ・作品件数 183件(うち、国宝4件、重要文化財37件、重要美術品3件) ・来館者数 252,116人(目標200,000人・達成率126.1%) ・入場料金 一般1,600円(1,400円/1,300円)、大学生1,200円(1,000円/900円)、高校生900円(700円/600円)、中学生以下無料 * ()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度72% 建仁寺山内の塔頭に伝わる工芸や絵画の名品、栄西をはじめとした建仁寺歴代名僧の書跡、全国の建仁寺派寺院などが所蔵する宝物を展示することで、近年研究の進展している栄西の著述のほか、建仁寺に関わりのある禅僧の活動を通して、栄西の伝えようとしたもの、そして建仁寺が日本文化の発展に果たした役割を広く検証することができた。	A	目標を大きく上回る来館者数を達成し、全国の建仁寺派寺院に関わる多様な分野の調査研究の成果をわかりやすく展示することができたため。	B 所期の目標を上回る来館者数を達成し、かつ質の高い展示ができたため。
2121-2	イ 特別展「キトラ古墳壁画」(4月22日～5月18日) キトラ古墳壁画の修理や、今後の保存活用展開をより広く国民に紹介する。(目標来館者数8.7万人)	・展覧会名 特別展「キトラ古墳壁画」 ・会期 26年4月22日(火)～5月18日(日)(25日間) ・会場 本館 特別5室 ・主催 文化庁、東京国立博物館、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、国土交通省近畿地方整備局、	A	目標を大きく上回る来館者数を達成し、かつ修理完了後には移動して展示する	B 所期の目標を上回る来館者数を達成し、積年の研究成果を各研究機関と連携し

<p>2121-3</p>	<p>ウ 特別展「台北 國立故宮博物院 一神品至宝」(6月24日～9月15日) 台北故宮博物院の収蔵品の中から、北宋山水画、王羲之に始まる名筆、青磁・汝窯、玉器・青銅器などの名品を初めて日本で展示する。(目標来館者数45万人)</p>	<p>奈良県教育委員会、明日香村</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催 朝日新聞社 ・協賛 岡村印刷工業 ・特別協力 情報通信研究機構、大塚オーミ陶業、日本通運 ・作品件数 18件(そのほか、参考出品13件) ・来館者数 119,268人(目標87,000人・達成率137.1%) ・入場料金 一般900円(800円)、大学生700円(600円)、高校生400円(300円) 中学生以下無料 *()内は前売り・20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度63% <p>我が国で2例目の大陸風極彩色壁画古墳であるキトラ古墳の保存管理への取り組みも紹介しながら、複製陶板により剥き取り以前の壁画全体を実感してもらい、四神のうち高松塚古墳壁画では確認できなかった躍動的に描かれた朱雀やほぼ完全な姿で残る玄武などを広く紹介することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「台北 國立故宮博物院一神品至宝」 ・会期 26年6月24日(火)～9月15日(月・祝)(78日間) ・会場 平成館、本館特別5室 ・特別後援 日華議員懇談会 ・主催 東京国立博物館、國立故宮博物院、NHK、NHKプロモーション、読売新聞社、産経新聞社、フジテレビジョン、朝日新聞社、毎日新聞社、東京新聞 ・特別協力 TBS、テレビ朝日、日本テレビ放送網、共同通信社 ・協力 チャイナ エアライン (中華航空) ・作品件数 186件 ・来館者数 402,241人(目標450,000人・達成率89.4%) ・入場料金 一般1,600円(1,400円/1,300円)、大学生1,200円(1,000円/900円)、高校生700円(600円/500円)、中学生以下無料 *()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度63% <p>「碧玉白菜」をはじめとする台北 國立故宮博物院が収蔵するひとときを優れた中国の文化財によって、中国文化の特質や素晴らしさを広く提示することができた。</p>	<p>A</p> <p>所期の目標の来館者数に達しなかったが、我が国で初めて台北 國立故宮博物院のコレクションを展示したことで国民に極めて貴重な鑑賞機会を提供できたため。</p>	<p>B</p> <p>国民の知的的好奇心を刺激する極めて貴重な展示機会となったため。</p>
<p>2121-4</p>	<p>エ 2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」(9月17日～11月24日予定) 日中韓国立博物館の合同企画として、東京国立博物館、中国国家博物館、韓国国立中央博物館それぞれの蔵品の中から、東アジアの陶磁器の名品を選び一堂に展示する。(目標来館者数3.4万人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」 ・会期 26年9月20日(土)～11月24日(月・休)(57日間) ・会場 本館 特別5室 ・主催 東京国立博物館、中国国家博物館、韓国国立中央博物館 ・作品件数 45件(うち、国宝1件、重要文化財10件) ・来館者数 65,075人(目標34,000人・達成率191.4%) ・入場料金 一般620円(520円)、大学生410円(310円) 総合文化展観覧料、*()内は20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度60% <p>日本、中国、韓国の3カ国の国立博物館が合同で実施する初めての国際共同企画展という極めて意義深い展覧会となった。各館の陶磁器コレクションの特徴をふまえて厳選された名品を一堂に展示することによって、各国の陶磁器の特質をわかりやすく展示できた。</p>	<p>A</p> <p>3カ国の国立博物館が合同で実施する初めての国際共同企画展であり、3カ国の陶磁器の特質を各国ブロックにより明確に区分した展示構成によって、わかりやすく示すことができた。さらに所期の目標を大きく上回る来館者数を集めた。</p>	<p>B</p> <p>3カ国の国立博物館が合同で実施する初めての国際共同企画展という極めて意義深い展覧会を開催することができたため。</p>
<p>2121-5</p>	<p>オ 「日本国宝展」(10月15日～12月7日) 大切に継承されてきた「信ずるもの」の評価の結晶こそが「国宝」であると考え、国宝によって日本文化形成の精神をたどる。(目標来館者数35万人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 「日本国宝展」 ・会期 26年10月15日(水)～12月7日(日)(47日間) ・会場 平成館 特別展示室第1～4室 ・主催 東京国立博物館、読売新聞社、NHK、NHKプロモーション ・協賛 損保ジャパン日本興亜、大伸社、日本通運、みずほ銀行 ・作品件数 130件(うち、国宝119件、正倉院宝物11件) ・来館者数 386,708人(目標350,000人・達成率110.5%) ・入場料金 一般1,600円(1,400円/1,300円)、大学生1,200円(1,000円/900円)、高校生900円(700円/600円) 中学生以下無料 *()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度70% <p>類い稀な国の宝としての「国宝」を人々の篤い信仰心が結実した文化的遺産として捉え、日本文化形成の精神を見つめ直し、日本文化の粋の結集を提示することができた。</p>	<p>B</p> <p>所期の目標来館者数を達成することができ、かつ様々な分野の国宝によって、日本文化の信仰心がいかに表現されたかを広く提示することができたため。</p>	<p>B</p> <p>所期の目標の来館者数を達成し、かつ「信じる」というテーマ設定により、質の高い展示ができたため。</p>

2121-6	カ 特別展「みちのくの仏像」(平成27年1月14日～4月5日) 東京において、東北の優れた仏像がまとめて展示される初めての展覧会とする。(目標来館者数14万人)	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「みちのくの仏像」 ・会 期 27年1月14日(水)～4月5日(日)(73日間) ・会 場 本館 特別5室 ・主 催 東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション、読売新聞社 ・後 援 文化庁、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県 ・協 賛 大伸社 ・協 力 あいおいニッセイ同和損害保険 ・作品件数 19件(うち、国宝1件、重要文化財8件) ・来館者数 179,521人(目標140,000人・達成率128%) ・入場料金 一般1,000円(900円)、大学生700円(600円)、高校生400円(300円)、中学生以下無料 ＊()内は前売り・20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度79% <p>「東北の三大薬師」とも称される、黒石寺・双林寺・勝常寺に伝わる薬師如来像が一堂に会して展示されるなど、東京において東北の仏像に的を絞って展示する初めての機会となり、東北の優れた仏像の特色を魅力的に示すことができた。</p>	A	A 目標を上回る来館者数を達成し、かつ東京ではじめて東北地方の仏像をまとめて鑑賞できる貴重な機会を提供でき、東北の仏像の魅力を示せたため。
2121-7	(年度計画外に実施)	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「3.11大津波と文化財の再生」 ・会 期 27年1月14日(水)～3月15日(日)(53日間) ・会 場 本館 特別2室・特別4室 ・主 催 東京国立博物館、津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会 ・作品件数 73件(うち、登録有形民俗文化財4点) ・来館者数 この特別展は会場が平常展の一部で別途カウントを行っていない。 参考値：78,615人(開催期間中の平常展来館者数) ・アンケート結果 満足度59% <p>当館が、陸前高田市立博物館、岩手県立博物館やその他の機関と協力し、被災文化財の再生に取り組んできた約4年にわたる成果と現状を、修理に関わる具体例とともに示すことができた。</p>	B	B 約4年にわたる被災文化財の再生事業について、各関係研究機関と連携して十全に提示できたため。

2122-1	○目標来館者数の合計126.1万人(海外展、他館での開催展を除く。) (京都国立博物館) ア 特別展覧会「南山城の古寺巡礼」(4月22日～6月15日) 京都府南部、木津川流域には奈良時代以来の古い寺院が分布している。この展示ではそれらの古寺に伝来した彫刻や絵画・工芸作品などの名宝を展示し、南山城地域(京都府南部木津川流域)の歴史と文化風土を紹介する。(目標来館者数5万人)	<p>○東京国立博物館の特別展来館者数の合計(評価用)は1,404,929人 ※評価用：年度計画であげた特別展の来館者数合計 参考：統計用の合計は1,326,115人 ※統計用は26年4月1日～27年3月31日の特別展来館者数合計。なお、平常展料金の特別展は平常展来館者数に計上。</p> <p>【京都国立博物館】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展覧会「南山城の古寺巡礼」 ・会 期 26年4月22日(火)～6月15日(日)(49日間) ・会 場 京都国立博物館 明治古都館(本館) ・主 催 京都国立博物館、朝日新聞社 ・後 援 文化庁、京都府、木津川市、京田辺市、井手町、宇治田原町、笠置町、(公財)京都文化交流コンベンションビューロー ・協 賛 岡村印刷工業、きんでん、京阪電気鉄道、竹中工務店、福寿園 ・特別協力 京都南山城古寺の会、飛鳥園 ・協 力 日本香堂 ・作品件数 139件(うち、国宝2件、重要文化財27件) ・来館者数 69,443人(目標50,000人・達成率138.9%) ・入場料金 一般1,500円、大学・高校生900円、中学・小学生500円 ・アンケート結果 満足度92% <p>京都市と奈良市に挟まれて従来観光寺院としてはあまり注目されなかった南山城地域の小規模な寺院にスポットを当てた展覧会として、来館者の評価も高く、「現地でお寺を見てみたい」との感想が多く寄せられた。木津川流域の歴史と仏教文化のありかたへの理解が高まった展覧会であると評価できる。</p>	A	A 共催新聞社の紙面広報も多数行われて目標来館者数を大きく上回った。同時期の関西地域の仏教彫像関係の展覧会と比較しても第一位の来館者数を数えた。
2122-2	イ 特別展覧会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」(10月7日～11月24日) 平成21年から修理が行われていた、国宝「鳥獣人物戯画」4巻(高山寺蔵)の修理が平成25年3月をもって無事終了した。これを記念して修理後の国宝「鳥獣人物戯画」4巻を特別展覧会として一般に公開し、併せて高山寺の名宝の数々を公開する。(目標来館者数10万人)	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展覧会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」 ・会 期 26年10月7日(火)～11月24日(月・休)(43日間) ・会 場 京都国立博物館明治古都館(本館) ・主 催 京都国立博物館、高山寺、朝日新聞社 ・後 援 公益財団法人京都文化交流コンベンションビューロー ・特別協力 岡墨光堂 ・協 力 朝日放送、日本香堂 ・協 賛 カネカ、京都銀行、きんでん、JR西日本、竹中工務店、凸版印刷 	A	A 判定根拠：目標値の倍以上に上る来館者数を達成し、図録販売数(31,366冊)、オーディオガイド利用台数(40,221台)なども大きな伸び

<p>2123-1</p> <p>○目標来館者数の合計15万人</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>ア 特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像―迫真とエキゾチシズム―」(4月5日～6月1日)</p> <p>鎌倉の地に根づいた仏教文化の中から生まれた迫真性とエキゾチシズムに富んだ魅力ある仏像の数々を一挙紹介する。(目標来館者数5万人)</p>	<p>・作品件数 84件(うち、国宝8件、重要文化財54件)</p> <p>・来館者数 203,900人(目標100,000人・達成率 203,9%)</p> <p>・入場料金 一般1,500円、大学生1,200円、高校生900円、中学生以下無料</p> <p>・アンケート結果 満足度84%</p> <p>予備調査や修理を通じて得られた最新の知見を盛り込みながら、鳥獣人物戯画を核として高山寺の名宝の数々を公開し、鎌倉時代を代表する僧明恵や「学問寺」である高山寺の文化財及び中世の日本文化に対する理解を深めることができた。</p> <p>○京都国立博物館の特別展来館者数の合計は273,343人</p> <p>【奈良国立博物館】</p> <p>・展覧会名 特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 迫真とエキゾチシズム」</p> <p>・会 期 26年4月5日(土)～6月1日(日)(51日間)</p> <p>・会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館</p> <p>・主 催 奈良国立博物館、鎌倉国宝館、読売新聞社</p> <p>・後 援 文化庁、NHK奈良放送局、奈良テレビ放送</p> <p>・協 力 日本香堂、仏教美術協会</p> <p>・協 賛 あいおいニッセイ同和損保、岩谷産業、大伸社、大和ハウス工業、非破壊検査</p> <p>・作品件数 53件(うち重要文化財26件)</p> <p>・来館者数 37,022人(目標50,000人・達成率74.0%)</p> <p>・入場料金 一般1,300円、高校・大学生800円、小・中学生500円</p> <p>・アンケート結果 満足度85%</p> <p>関西においてはじめて東国の仏教美術の中心地である鎌倉の仏像の代表作を多数展示し、関西とは異なる東国独自のエキゾチックなものへの美意識を紹介できた。仏像を中心に、仏教美術を専門に展示し、その普及に努めている奈良国立博物館として、意義深い展覧会が行えた。</p>	<p>びを示すなど、全体的に予期した以上の実績を残すことができた。</p> <p>課題と対応：待ち時間対策に工夫が必要であるため、引き続き検討する。</p> <p>B 来館者数は目標値よりも下回ったが、関西において初めて鎌倉の仏像が一挙多数展示された本展覧会は、仏教美術を専門に展示し、その普及に努めている当館としては意義深く、また来館者アンケートでも好評であったことから我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行えたことは非常に意義深いものである。</p> <p>A 単なる寺宝展とは一線を画し、醍醐寺文書聖教の重要性と醍醐寺の歴史を理解できる展示構成</p>	<p>B 本展覧会の来館者数は目標値を下回ったが、関西ではじめて東国の中心地である鎌倉の仏像に焦点を当てた展覧会を開催できたこと、また来館者アンケートでも好評であったことから我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行えたことは非常に意義深いものである。</p> <p>A 長年の調査により25年度に国宝指定された醍醐寺文書聖教を主要テーマとし、通常注目さ</p>	
<p>2123-2</p> <p>イ 醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて―密教のほとけと聖教―」(7月19日～9月15日)</p> <p>醍醐寺の歴史を伝える古文書・聖教69,378点が国宝に指定されたことを記念し、平安</p>	<p>・展覧会名 醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて―密教のほとけと聖教―」</p> <p>・会 期 26年7月19日(土)～9月15日(月・祝)(52日間)</p> <p>・会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館</p> <p>・主 催 奈良国立博物館、総本山醍醐寺、日経新聞社</p> <p>・共 催 NHK奈良放送局</p>	<p>・後 援 文化庁、奈良テレビ放送</p> <p>・協 賛 岩谷産業、オリックス、京都銀行、住友林業、ダイキン工業、大和ハウス工業</p> <p>・協 力 朝日生命保険、日本香堂、日本通運、仏教美術協会</p> <p>・作品件数 192件(うち、国宝62件、重要文化財85件)</p> <p>・来館者数 78,476人(目標50,000人・達成率157.0%)</p> <p>・入場料金 一般1,500円、高校・大学生1,000円、小・中学生500円</p> <p>・アンケート結果 満足度84%</p> <p>本展覧会のメインテーマに据えた下記の3つの要素について、展示構成に十分反映させることができ、また観覧者からの評価を得た。</p> <p>・従来注目されていなかった醍醐寺と奈良の歴史的結びつきへの着目。</p> <p>・単なる名品紹介や時代順展示ではなく、醍醐寺の歴史的特色と役割を明確に打ち出す展示構成。</p> <p>・「醍醐寺文書聖教7万点」の実態とその重要性について取り上げ、通常注目されにくい文書聖教を主要な展示作品として扱い、観覧者の興味を引き出した。</p> <p>また国宝指定に至る文書聖教の保存と管理の歴史を取り上げ、現在の文化財保存に結びつくテーマにスポットを当てた。</p>	<p>を実現し、目標値の1.5倍の来館者数を達成した。</p> <p>B 判定根拠：展示の工夫、題箋や参考パネルのわかりやすさ、適切な照明など、概ね好評であった。また、展示ケース内の環境が良好であり、宝物の保存上も問題なかった。課題と対応：課題は混雑した会場の整理であるが、臨機に対応して改善することができた。</p>	<p>れにくい文書聖教の全体像と歴史的意義を紹介することに成功した。これにより、研究者のみならず一般観覧者からも高い評価を獲得した。</p> <p>B 判定根拠：海外からの集客も増え、国際的にも注目されている。当館が正倉院展を開催する博物館としてのイメージも定着し、秋の奈良の代表行事として定着している。課題と対応：混雑の緩和と学校教育との連携など教育面に課題があり、引き続き検討したい。</p>
<p>2123-3</p> <p>ウ 特別展「第66回正倉院展」(予定)</p> <p>正倉院宝庫に伝わる宝物約70件を展示。(目標来館者数18万人)</p>	<p>・展覧会名 天皇皇后両陛下奉寿記念「第66回正倉院展」</p> <p>・会 期 26年10月24日(金)～11月12日(水)(20日間)</p> <p>・会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館</p> <p>・主 催 奈良国立博物館</p> <p>・特別協力 読売新聞社</p> <p>・協 力 NHK奈良放送局、奈良テレビ放送、日本香堂、仏教美術協会、ミネルヴァ書房、読売テレビ</p> <p>・協 賛 岩谷産業、NTT西日本、キヤノン、京都美術工芸大学、近畿日本鉄道、JR東海、JR西日本、ダイキン工業、大和ハウス工業、白鶴酒造、丸一鋼管</p> <p>・作品件数 59件</p> <p>・来館者数 269,348人(目標180,000人・達成率149.6%)</p> <p>・入場料金 一般1,100円、高校・大学生700円、小・中学生400円</p> <p>・アンケート結果 満足度69%</p> <p>天皇皇后両陛下奉寿記念にふさわしい華やかな宝物が出陳され、会期は通常より3日長い20日間開催された。とりわけ、宝庫を代表する名品である鳥毛立女屏風4扇、白瑠璃瓶、桑木阮咸、襦袢履などが</p>	<p>を實現し、目標値の1.5倍の来館者数を達成した。</p> <p>B 判定根拠：展示の工夫、題箋や参考パネルのわかりやすさ、適切な照明など、概ね好評であった。また、展示ケース内の環境が良好であり、宝物の保存上も問題なかった。課題と対応：課題は混雑した会場の整理であるが、臨機に対応して改善することができた。</p>	<p>れにくい文書聖教の全体像と歴史的意義を紹介することに成功した。これにより、研究者のみならず一般観覧者からも高い評価を獲得した。</p> <p>B 判定根拠：海外からの集客も増え、国際的にも注目されている。当館が正倉院展を開催する博物館としてのイメージも定着し、秋の奈良の代表行事として定着している。課題と対応：混雑の緩和と学校教育との連携など教育面に課題があり、引き続き検討したい。</p>	

<p>2124-1</p> <p>○目標来館者数の合計28万人</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>ア 特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」(4月15日～6月8日)</p> <p>公家を代表する近衛家に伝来した宮廷文化の精華を紹介する。(目標来館者数7万人)</p>	<p>人気を集めた。また、手鉾、銅漆作大刀、無莊刀など古代の武器武具類がまとまって展示され、注目を集めた点は評価される。リピーターの獲得はもちろん、新しい客層の開拓も着実に実を結んでいる。一日平均の来館者数が1万人を優に超える展覧会ながら、大きな混乱はなく、講演会やシンポジウムなどの行事も滞りなく開催された。</p> <p>○奈良国立博物館の特別展来館者数の合計は 384,846 人</p> <p>【九州国立博物館】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」 ・会期 26年4月15日(火)～6月8日(日) (49日間) ・会場 九州国立博物館 特別展示室 ・主催 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、T V Q九州放送、公益財団法人陽明文庫 ・作品件数 114件(うち、国宝18件、重要文化財34件、重要美術品13件) ・来館者数 60,808人(目標70,000人・達成率86.9%) ・入場料金 一般1,500円、高大生1,000円、小中生600円 ・アンケート結果 満足度 88% <p>25年6月に世界記憶遺産に登録された国宝「御堂関白記」の公開を中核とするタイムリーな展覧会である。「御堂関白記」に代表される文書・記録の展示では記憶を後世に伝えることの重要性を、書跡の展示では日本書道史の展開を紹介することができた。また、九州ゆかりの近衛信尹を主要なテーマとして位置づけ、初公開となる作品を紹介することができたのも重要な成果である。</p>	<p>・展覧会名 特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会期 26年4月15日(火)～6月8日(日) (49日間) ・会場 九州国立博物館 特別展示室 ・主催 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、T V Q九州放送、公益財団法人陽明文庫 ・作品件数 114件(うち、国宝18件、重要文化財34件、重要美術品13件) ・来館者数 60,808人(目標70,000人・達成率86.9%) ・入場料金 一般1,500円、高大生1,000円、小中生600円 ・アンケート結果 満足度 88% <p>25年6月に世界記憶遺産に登録された国宝「御堂関白記」の公開を中核とするタイムリーな展覧会である。「御堂関白記」に代表される文書・記録の展示では記憶を後世に伝えることの重要性を、書跡の展示では日本書道史の展開を紹介することができた。また、九州ゆかりの近衛信尹を主要なテーマとして位置づけ、初公開となる作品を紹介することができたのも重要な成果である。</p>	<p>B</p> <p>来館者数が目標値の87%であったが、九州において大規模で質の高い書跡・歴史系の展覧会を開催できたことは、大変有意義である。また、アンケート結果によると「とても良かった」が半数を上回る51%、「良かった」が37%となっており、お客様満足度が非常に高いことから大変充実した展覧内容だったと言える。</p>	<p>B</p> <p>国宝「御堂関白記」の世界記憶遺産登録記念を冠する本展覧会は時宜を得たものである。展示作品は質の高い作品ばかりで、来館者の鑑賞時間が長い傾向が認められた。</p>
<p>2124-2</p> <p>イ 特別展「クリーブランド美術館展 一名画でたどる日本の美ー」(7月8日～8月31日)</p> <p>平安～明治時代の日本の絵画40数点を通して、日本の美術の流れと魅力をたどる。(目標来館者数5万人)</p>	<p>・展覧会名 特別展「クリーブランド美術館展一名画でたどる日本の美ー」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会期 26年7月8日(火)～8月31日(日) (49日間) ・会場 九州国立博物館 特別展示室 ・主催 九州国立博物館・福岡県、クリーブランド美術館、西日本新聞社、T V Q九州放送、テレビ西日本 ・作品件数 51件 ・来館者数 70,794人(目標50,000人・達成率141.5%) 	<p>・展覧会名 特別展「クリーブランド美術館展一名画でたどる日本の美ー」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会期 26年7月8日(火)～8月31日(日) (49日間) ・会場 九州国立博物館 特別展示室 ・主催 九州国立博物館・福岡県、クリーブランド美術館、西日本新聞社、T V Q九州放送、テレビ西日本 ・作品件数 51件 ・来館者数 70,794人(目標50,000人・達成率141.5%) 	<p>S</p> <p>迫力のあるポスターデザイン、多彩な広報展開、教育普及事業などを通じて、集中豪雨の続いた天候不順の時期であった</p>	<p>S</p> <p>所期目標の50,000人に対して、141%の70,794人の来館者があり、好評を得た。また、特別展に合わせた文化交流展示</p>
<p>2124-3</p> <p>ウ 特別展「台北 国立故宮博物院 一珍品至宝ー」(10月7日～11月30日)</p> <p>台北故宮博物院所蔵の優れた文化財を通して、中国文化の特質や素晴らしさを紹介する。(目標来館者数15万人)</p>	<p>・入場料金 一般1,400円、高大生1,000円、小中生600円</p> <p>・アンケート結果 満足度 86%</p> <p>世界有数の東洋美術コレクションを所蔵するクリーブランド美術館の名品を、九州で初めて紹介した。これまで日本で紹介される機会が少なく、地名や所蔵品の九州における知名度の低さが懸念されたため、展示・照明・解説を工夫し、効果的な広報を行った。同時期に開催した「海を越えた再会ークリーブランド美術館の仲間たち」も好評を得た。</p>	<p>・入場料金 一般1,400円、高大生1,000円、小中生600円</p> <p>・アンケート結果 満足度 86%</p> <p>世界有数の東洋美術コレクションを所蔵するクリーブランド美術館の名品を、九州で初めて紹介した。これまで日本で紹介される機会が少なく、地名や所蔵品の九州における知名度の低さが懸念されたため、展示・照明・解説を工夫し、効果的な広報を行った。同時期に開催した「海を越えた再会ークリーブランド美術館の仲間たち」も好評を得た。</p> <p>・展覧会名 特別展「台北 国立故宮博物院 一珍品至宝ー」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会期 26年10月7日(火)～11月30日(日) (51日間) ・会場 九州国立博物館 特別展示室 ・主催 九州国立博物館・福岡県、東京国立博物館、国立故宮博物院、西日本新聞社、NHK福岡放送局、NHK ・協賛 ブラネット九州、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、RKB毎日放送、T V Q九州放送 ・作品件数 110件 ・来館者数 256,070人(目標150,000人・達成率170.7%) ・入場料金 一般1,600円(1,400円)、高大生900円(700円)、小中生400円(200円) ・* ()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度 79% <p>中国皇帝コレクションを受け継ぐ世界的な博物館の名品を、東京国立博物館とともに、アジアで初めて紹介した。中国文明を総体的に紹介するために多様な分野の作品を公開し、その照明・解説などの展示方法を工夫して好評を得た。注目度の高い展覧会だったため、展示の期間や内容を様々な媒体を通じて告知し、効果的な広報を行った。</p>	<p>にもかかわらず目標を上回る来場者数を得ることができ、高い満足度を得た。</p> <p>S</p> <p>中華文明の神髄であり、人類の至宝とも呼ぶべき台北故宮の所蔵品の数々を、日本で初めて出陳することができた。多彩な広報活動を展開して陳列品に関する周知を徹底させ、所期目標を大幅に超える来館者を迎えることができた。</p>	<p>(平常展示)で関連展示を行ったため、特別展と文化交流展示の両方を観覧した来場者が54%に上った(通常は40%前後)。</p> <p>S</p> <p>日本初の台北故宮展であるこの展覧会では、同館の代表的な作品を数多く九州で紹介することができ、陳列品の品質としても来館者数の数値としても、目標を大きく超える成果を上げることができた。また、2016年の台北故宮での交換展につなげることができた。</p>
<p>2124-4</p> <p>エ 特別展「古代日本と百済の交流 一大宰府・飛鳥そして公州・扶余ー」(平成27年1月1日～3月1日)</p> <p>日本の古代文化と百済の関わりについて、交流の歴史を紹介する。(目標来館者数3万人、オト一体でカウント)</p>	<p>・展覧会名 特別展「古代日本と百済の交流 一大宰府・飛鳥そして公州・扶余ー」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会期 27年1月1日(木・祝)～3月1日(日) (52日間) ・会場 九州国立博物館 特別展示室 ・主催 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、T V Q九州放送 ・特別協力 国立公州博物館、国立扶余文化財研究所、太宰府天満宮 ・作品件数 74件(うち、国宝4件、重要文化財5件、重要美術品2件、韓国国宝2件、韓国宝物1件) 	<p>・展覧会名 特別展「古代日本と百済の交流 一大宰府・飛鳥そして公州・扶余ー」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会期 27年1月1日(木・祝)～3月1日(日) (52日間) ・会場 九州国立博物館 特別展示室 ・主催 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、T V Q九州放送 ・特別協力 国立公州博物館、国立扶余文化財研究所、太宰府天満宮 ・作品件数 74件(うち、国宝4件、重要文化財5件、重要美術品2件、韓国国宝2件、韓国宝物1件) 	<p>S</p> <p>目標値の約2倍となる来館者数があり、とても注目度の高い展示会となった。また、来館者アンケートによると、展示内容に関して「とても</p>	<p>A</p> <p>所期目標30,000人に対して198%の来館者があり、予想を遥かに超える反響であった。この展覧会を通して次年度の特別展「美の国日</p>

2124-5	<p>オ 特別展「発掘された日本列島2014」（平成27年1月1日～3月1日） 近年発掘された埋蔵文化財を中心に、20年の成果を展示する。（目標来館者数3万人、エト一体でカウント）</p> <p>○目標来館者数の合計30万人</p>	<p>・来館者数 59,629人（目標30,000人・達成率198.7%） ・入場料金 一般1,400円、高大生1,000円、小中生600円（「発掘された日本列島2014」展と共通チケット） ・アンケート結果 満足度 87%</p> <p>本年は日韓外交正常化50周年にあたり、両国の国宝を含め、古代日本と百済との交流を物語る代表的な作品を数多く展示し、両国相互の文化理解に貢献した。また、期間限定ではあるが、門外不出とされる石上神宮の国宝「七支刀」を展示することができた。</p> <p>・展覧会名 特別展「日本発掘 発掘された日本列島2014」 ・会 期 27年1月1日（木・祝）～3月1日（日）（52日間） ・会 場 九州国立博物館 特別展示室 ・主 催 九州国立博物館、文化庁、東北歴史博物館、東京都江戸東京博物館、堺市博物館、長野市立博物館 ・作品件数 960件（うち、重要文化財47件） ・来館者数 59,629人（目標30,000人・達成率198.7%） ・入場料金 一般1,400円、高大生1,000円、小中生600円（「古代日本と百済の交流展」と共通チケット） ・アンケート結果 満足度 87%</p> <p>全国の主だった遺跡の出土品を集め展示し、それぞれの発掘調査の成果を広く来館者に知ってもらう機会を提供した。特に、九州内の遺跡から出土した重要文化財を一挙に見ることができる大変貴重な機会を提供できた。</p> <p>○九州国立博物館の特別展来館者数の合計は 447,301 人</p>	<p>良かった」が45%、「良かった」が36%であり、8割以上の来館者から良いとの評価を得た。また、門外不出とされる石上神宮の国宝「七支刀」を展示することができ、好評を博した。</p> <p>B 最新の科学的な調査を行うとともに、無機質になりがちな展示室に現場の「野帳」を展示することによって来館者からも評価を得た。</p>	<p>本」でも韓国との連携をつなげることができた。さらに本年は、日韓外交正常化50周年にあたり、また水城・大野城・基肆城築造1350年記念といった節目の年であったことから、非常にタイムリーな展覧会として来館者の知的好奇心を刺激できた展覧会だったと言える。</p> <p>B 特別展については、計画通り順調に開催を行っている。特に教育普及に力を入れた取り組みを実践していることが来館者からの評価を得ることにつながっており、今後も継続していききたい。</p>
--------	--	---	--	---

2131	<p>③海外展 (東京国立博物館) 1) 海外展「伝統の再創造：日本の近代美術」（平成26年2月16日～5月11日） 会場：クリーブランド美術館（米国） 東京国立博物館の近代美術作品により、日本近代美術を伝統の再創造という観点で紹介する。</p>	<p>・展覧会名 海外展「伝統の再創造：東京国立博物館所蔵 日本の近代美術」 Remaking Tradition: Modern Art of Japan from the Tokyo National Museum ・会 期 26年2月16日（日）～5月11日（日）（72日間） ・会 場 アメリカ・クリーブランド美術館ケルビン&エレノア・スミス財団展示ホール ・主 催 クリーブランド美術館、東京国立博物館 ・作品件数 55件（うち、重要文化財6件） ・来館者数 37,648人</p> <p>東京国立博物館所蔵の絵画、書跡、彫刻、工芸の近代美術作品の優品を通して、東洋の古典的主題の新たな表現や、西欧から学んだ技術の受容の様相、そして風景画（山水画）が洗練され、花鳥画が再構築されたことなど、近代日本において造形文化の伝統が「再創造」されたことを示すことができた。</p>	B	B	<p>開催館における企画展では近年類のない来館者数を集め、大変高い評価を得たため。</p> <p>アメリカにおいて広く、日本の優れた文化財をもとにした近代の文化を紹介することができたため。</p>																																																																																														
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>定量評価</th> <th>26年度</th> <th>25年度</th> <th>目標値</th> <th>評定</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>【平常展】平常展来館者数(人)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>東京国立博物館(23年度より黒田記念館を含む)</td> <td>587,528</td> <td>484,429</td> <td>362,470</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>265,791</td> <td>—</td> <td>96,981</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>92,147</td> <td>122,075</td> <td>94,338</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>357,362</td> <td>349,848</td> <td>380,690</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>【平常展】陳列替え件数(件)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>5,506</td> <td>5,708</td> <td>5,800</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>693</td> <td>—</td> <td>700</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>208</td> <td>130</td> <td>80</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>1,027</td> <td>1,157</td> <td>800</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>【平常展】陳列総件数(件)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>8,161</td> <td>8,824</td> <td>7,500</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>980</td> <td>—</td> <td>1,000</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>675</td> <td>632</td> <td>475</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>1,904</td> <td>2,750</td> <td>1,000</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>【平常展】外国語パネルの設置(%)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>100%</td> <td>100%</td> <td>80%</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>100%</td> <td>—</td> <td>80%</td> <td>A</td> </tr> </tbody> </table>	定量評価	26年度	25年度	目標値	評定	【平常展】平常展来館者数(人)					東京国立博物館(23年度より黒田記念館を含む)	587,528	484,429	362,470	A	京都国立博物館	265,791	—	96,981	S	奈良国立博物館	92,147	122,075	94,338	C	九州国立博物館	357,362	349,848	380,690	C	【平常展】陳列替え件数(件)					東京国立博物館	5,506	5,708	5,800	C	京都国立博物館	693	—	700	C	奈良国立博物館	208	130	80	A	九州国立博物館	1,027	1,157	800	A	【平常展】陳列総件数(件)					東京国立博物館	8,161	8,824	7,500	B	京都国立博物館	980	—	1,000	C	奈良国立博物館	675	632	475	A	九州国立博物館	1,904	2,750	1,000	S	【平常展】外国語パネルの設置(%)					東京国立博物館	100%	100%	80%	A	京都国立博物館	100%	—	80%	A		
定量評価	26年度	25年度	目標値	評定																																																																																															
【平常展】平常展来館者数(人)																																																																																																			
東京国立博物館(23年度より黒田記念館を含む)	587,528	484,429	362,470	A																																																																																															
京都国立博物館	265,791	—	96,981	S																																																																																															
奈良国立博物館	92,147	122,075	94,338	C																																																																																															
九州国立博物館	357,362	349,848	380,690	C																																																																																															
【平常展】陳列替え件数(件)																																																																																																			
東京国立博物館	5,506	5,708	5,800	C																																																																																															
京都国立博物館	693	—	700	C																																																																																															
奈良国立博物館	208	130	80	A																																																																																															
九州国立博物館	1,027	1,157	800	A																																																																																															
【平常展】陳列総件数(件)																																																																																																			
東京国立博物館	8,161	8,824	7,500	B																																																																																															
京都国立博物館	980	—	1,000	C																																																																																															
奈良国立博物館	675	632	475	A																																																																																															
九州国立博物館	1,904	2,750	1,000	S																																																																																															
【平常展】外国語パネルの設置(%)																																																																																																			
東京国立博物館	100%	100%	80%	A																																																																																															
京都国立博物館	100%	—	80%	A																																																																																															

	奈良国立博物館	100%	91%	80%	A
	九州国立博物館	92%	85%	80%	B
	【特別展】開催回数(回)				
	東京国立博物館	8	8	3~4	A
	京都国立博物館	2	3	2~3	B
	奈良国立博物館	3	3	2~3	B
	九州国立博物館	5	5	2~3	A
	【特別展】来館者数(人)				
	東京国立博物館	1,404,929	—	1,261,000	B
	①「采西と建仁寺」	252,116	—	200,000	A
	②「キトラ古墳壁画」	119,268	—	87,000	A
	③「台北 国立故宫博物院—神品至宝—」	402,241	—	450,000	C
	④「東アジアの華 陶磁名品展」	65,075	—	34,000	A
	⑤「日本国宝展」	386,708	—	350,000	B
	⑥「みちのくの仏像」	179,521	—	140,000	A
	⑦「3.11 大津波と文化財の再生」	※(78,615)	—	—	—
	京都国立博物館	273,343	—	150,000	A
	①「南山城の古寺巡礼」	69,443	—	50,000	A
	②「国宝 鳥獣戯画と高山寺」	203,900	—	100,000	S
	奈良国立博物館	384,846	—	280,000	A
	①「武家のみやこ 鎌倉の仏像—追真とエキジシズム—」	37,022	—	50,000	D
	②「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」	78,476	—	50,000	A
	③「第66回正倉院展」	269,348	—	180,000	A
	九州国立博物館	447,301	—	300,000	A
	①「近衛家の国宝 京都・陽明文庫」	60,808	—	70,000	C
	②「グリーンランド美術館展—名画でたどる日本の美—」	70,794	—	50,000	S
	③「台北 国立故宫博物院—神品至宝—」	256,070	—	150,000	S
	④「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」	59,629	—	30,000	S
	【海外展】来館者数(人)				
	東京国立博物館				
	海外展「伝統の再創造：東京国立博物館所蔵 日本の近代美術」(アメリカ・グリーンランド美術館)	(37,648)	—	—	—

※この特別展は会場が平常展の一部で別途カウントを行っていない。(開催期間中の平常展来館者数を参考値で計上)

(2) 教育活動の充実

【中期目標】					
日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、子どもから成人まで、対象に応じた多彩な学習機会の提供を実施し、ボランティアを育成し、教育活動の充実に努めるとともに、次代の博物館事業を担う人材育成に寄与すること。					
【中期計画】			【主な計画上の評価指標】		
(2) 教育活動の充実			○講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の目標参加者数を達成すること。		
日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、機構の人的資源・物的資源・情報資源を活用した教育活動を実施する。			○ボランティアを支援すること。		
① 学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。			○企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図ること。		
② 教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。			○大学との連携事業等を実施すること。		
③ 大学との連携事業、各種セミナー、インターンシップ等の実施を通じて人材育成に寄与する。			【25年度評価における主な指摘事項】		
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価		
			年度	中期	
2211-1	(2) 教育活動の充実	(2) 教育活動の充実	B	全観覧者向け、ファミリー向け、親子向けなどさまざまな対象に向けたプログラムを展開し、幅広い層に楽しむ機会を提供することができた。	B
	日本の歴史・伝統文化及びアジア諸地域の歴史・文化の理解促進を図り、国立博物館としてふさわしい教育普及事業を実施する。	① 学習機会の提供			
	① 学習機会の提供 (4館共通) 1) キャンパスメンバーズ(学校法人会員制度)による大学等との連携を継続して実施する。	① 学習機会の提供			
	(東京国立博物館) 1) 日本の歴史・文化及びアジア諸地域の歴史・文化の理解促進を図るための教育普及の先導的事業を実施する。本館地下、本館19室、東洋館2室、6室等を教育普及スペース「みどりのライオン」と位置づけ、適宜、小講堂やミュージアムシアター等も活用し、内容に応じた環境を設定しながら事業を展開する。	【東京国立博物館】 (東京国立博物館) 1) 総合文化展の状況に応じ歴史・文化の理解促進を目的とした教育普及事業を展開した。 ・総合文化展鑑賞の手がかりとして、展示や作品に関連した企画を通じ、伝統文化への興味関心を高めることができた。 ・4月16日から本館19室に「みどりのライオン 体験コーナー」を開設。伝統模様のスタンプでポストカードを作る「トーハクでデザイン」、制作工程や技法がわかる「トーハクで○○ができるまで」、e 国宝がさらに使いやすくなった「トーハクで国宝をさぐる」、3Dの作品画像を自由に動かす「トーハクをまわそう」の5つの体験コーナーができた。			
	○ファミリー向け教育普及的展示企画「親子のギャラリー」の実施				

<p>2211-2</p>	<p>・特集「親子のギャラリー 仏像のみかた鎌倉時代編（6月10日～8月31日）」 ○教育的展示及びイベント「博物館でお花見を」（平成26年3月18日～4月13日）を実施する。 ○体験型プログラムの実施 ・特集「親子のギャラリー 仏像のみかた鎌倉時代編」など、総合文化展（平常展）に関連した一般向け及びファミリー向けのギャラリートークや体験型プログラムを実施する。 ・本館19室・本館地下教育普及スペース・東洋館オアシスで展開する教育普及スペースで、ワークショップやハンズオンアクティビティなどの体験型プログラムを実施する。 ・お花見企画「博物館でお花見を」、正月企画「博物館に初もうで」に関連して、ワークシートを用いた体験型プログラムを実施する。</p> <p>2) 学校との連携事業を推進する。 ・スクールプログラム（鑑賞支援・体験型プログラム等）を継続して実施する（小・中・高校生対象）。 ・職場体験の受け入れを継続して行う（中・高校生対象）。 ・全国高等学校美術・工芸教育研究会所属教員のための研修を継続して実施する。 ・教員鑑賞会・ガイダンスを継続して実施する。</p>	<p>・本館地下、東洋館2室、6室、ミュージアムシアターや小講堂において、体験型プログラム、ギャラリートーク、ワークショップ等を行った。 ○ファミリー向け教育普及的展示として、特集「親子のギャラリー 仏像のみかた鎌倉時代編」（6月10日～8月31日）を実施し、仏像鑑賞に必要なキーワードをトビックスに、分かりやすく伝えることができた。また、特集「熊めぐり」（4月22日～6月1日）を実施し、熊をテーマにした文化財ならびに、国立科学博物館、恩賜上野動物園から借用した資料をもとに、熊をめぐる文化史や生態についてわかりやすく伝えることができた。 ○「博物館でお花見を」に関連し、鑑賞ガイド、桜セミナー、ボランティアによるガイドツアー及び体験型プログラムを実施した。 ○体験型プログラムの実施 ・総合文化展関連ワークショップ及び関連事業 25回 1,721人 ・博物館でアジアの旅に関連し、「アジアンぬりえ」（10月4・5・11・12日/329人）、「着てみて！ポーズ 中国・韓国の伝統衣装」（9月30日～10月13日/868人）を実施した。また、東洋館2室で体験型プログラム「旅の案内所」、6室で体験型プログラム「アジアの古い体験」を通年実施した。 ・「博物館でお花見を」に関連し「ぬり絵 日本のデザイン、色づかい」（3月29・30日、4月5・6日/684人）、「桜スタンプラリー」（3月18日～4月13日/12,489人）、「花見で一句」（3月18日～4月13日/285人、うち6人が入選）を実施した。 正月企画「博物館に初もうで」関連のワークシートを用いたアクティビティ「トーハク羊めぐり」（27年1月2日、3日/5,500人）を実施した。 ○特別展の鑑賞手引きとしてジュニアガイドの制作、配布を行った。</p> <p>(4館共通) 1) 国立博物館と大学等との連携を図り、歴史・伝統文化に対する理解促進に寄与し、博物館が所蔵する文化財を核とした学ぶ場を提供することができた。加入校数44校、団体利用を含み28,700名の学生・教員が本制度を利用し入館した。（東京国立博物館） 2) 学校との連携事業を計画通り実施した。 ・スクールプログラムを実施し、児童生徒に対し目的、学年、人数などに応じたプログラムを提供することで、充実した鑑賞体験の提供に寄与した。また、伝統文化への興味関心を高め、理解を促した。</p>	<p>B</p> <p>従来の事業を進めるとともに、学校連携では盲学校との連携も始めるなど、着実に成果を伸ばしつつある。</p>	<p>B</p> <p>順調。研究の成果による新たなプログラムの開始を含め、成果をあげている。</p>
<p>2211-3</p>	<p>3) 文化財について分かりやすく理解するためのギャラリートーク・月例講演会・記念講演会・連続講座・教育普及イベント等を継続して実施する。 (講演会等の目標) 参加者数計7,830人(実施回数計77回) ・講演会 参加者数3,500人(実施回数20回) ・ギャラリートーク等 参加者数4,000人(実施回数55回) ・連続講座 参加者数 250人(実施回数 1回) ・公開講座 参加者数 80人(実施回数 1回)</p>	<p>なお、一部をボランティアにより実施した(詳細は処理番号2221-1参照)。 ・職場体験として、19校63人を受け入れた。 ・全国高等学校美術・工芸教育研究会所属教員のための研修(共催：東京藝術大学)を26年7月30日～8月1日の3日間開催し、41名が参加した。展示のみならず博物館への理解を深め、学校団体での博物館利用について検討するきっかけとなる研修を提供した。 ・教員鑑賞会・ガイダンスを3回実施し、計469人が参加した。 ○「盲学校のためのスクールプログラム」を3校17人に対して実施した。</p> <p>3) 文化財について分かりやすく理解するためのギャラリートーク・月例講演会・記念講演会・連続講座を継続して実施した。総参加者数計14,419人(実施回数 計127回) ・講演会 参加者数6,735人(実施回数30回) うち月例講演会1,893人(12回)、記念講演会3,651人(13回)、テーマ別講演会1,096人(4回)、その他講演会95人(1回) ・ギャラリートーク等 参加者数7,326人(実施回数94回)(26年4月より列品解説をギャラリートークに名称変更した。) ・連続講座 参加者数320人(実施回数1回) ・公開講座 参加者数38人(実施回数2回)</p> <p>【京都国立博物館】 (4館共通) 1) キャンパスメンバーズを継続し、大学と連携(29校)した。(京都国立博物館) 1) 「記念講演会」(1回・193人)・「土曜講座」(31回・3,888人)を実施した。 ・展覧会の「鑑賞ガイド」(国宝・鳥獣戯画と高山寺、140,000部)を発行した。 ・「少年少女博物館くらぶ」(2回・57人)を開催した。 ・小中学生向け「ワークシート」(南山城のみほとけめぐり、50,000部)を発行した。 ・「博物館Dictionary」(4回、8,000部)を発行した。 2) 「夏期講座(古社寺と文化財Ⅱ)」(1回・206人)を開催した。 ・「文化財に親しむ授業」(9回・581人)を実施した。</p>	<p>B</p> <p>順調。一部予定変更があったが、全体としては目標通り事業を達成した。</p>	<p>B</p> <p>順調。目標通り事業を達成した。</p>
<p>2212</p>	<p>(京都国立博物館) 1) 展覧会内容及び展示作品への理解を深めるための事業を実施する。 ・「土曜講座」など各種の講座を実施する。 ・展覧会鑑賞ガイド・ワークシートなどを発行する。 ・小中学生向けワークショップ「少年少女博物館くらぶ」を実施する。 ・小中学生向けワークシートを発行する。 ・分かりやすい展示作品解説シート「博物館デイクショナリー」を発行し配信する。 2) 歴史及び文化財への理解促進を図るために教育普及事業を実施する。 ・テーマを定めた一般向けの連続講座として「夏期講座」などを開講する。</p>	<p>【京都国立博物館】 (4館共通) 1) キャンパスメンバーズを継続し、大学と連携(29校)した。(京都国立博物館) 1) 「記念講演会」(1回・193人)・「土曜講座」(31回・3,888人)を実施した。 ・展覧会の「鑑賞ガイド」(国宝・鳥獣戯画と高山寺、140,000部)を発行した。 ・「少年少女博物館くらぶ」(2回・57人)を開催した。 ・小中学生向け「ワークシート」(南山城のみほとけめぐり、50,000部)を発行した。 ・「博物館Dictionary」(4回、8,000部)を発行した。 2) 「夏期講座(古社寺と文化財Ⅱ)」(1回・206人)を開催した。 ・「文化財に親しむ授業」(9回・581人)を実施した。</p>	<p>A</p> <p>平成知新館の開館に伴って講堂を活用し、講演会には目標値以上の参加者数があった。さらにセミナーやシンポジウムなど、国外からも研究者を招聘した専門性の高い会合を開くことができた。</p>	<p>B</p> <p>外部機関と連携協力しながら、各種の学習機会を提供することができた。</p>

2213-1	<ul style="list-style-type: none"> ・京都市内の小中学生を対象とする訪問授業「文化財に親しむ授業」を実施する。 ・文化財への関心を高めるワークショップなどを実施する。 3) 教育諸機関との連携事業を推進する。 ・京都市内4美術館・博物館(京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都文化博物館、京都市美術館)で組織する「京都市内4館連携協力協議会」での連携協力として「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」を開催する。 ・教員のための講座を開講する。(講演会等の目標)参加者数計3,120人(実施回数計22回) ・記念講演会 参加者数 160人(実施回数 1回) ・土曜講座 参加者数2,800人(実施回数20回) ・夏期講座 参加者数 160人(実施回数 1回(3日間)) ・「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」参加者数 120人(実施回数 1回)(土曜講座の内数) <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 小中学校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良県内の小中学校にメールマガジンを配信する。 ・奈良市内の公立小中学校に博物館だよりを送付する。 ・奈良市内の小学校5年生を中心に、幼稚園児から中学3年生までを対象に奈良市教育委員会と連携して世界遺産学習を実施する。 ・奈良市内の小学校6年生を対象に、奈良市教育委員会と連携して正倉院展見学を実施する。 ・中学生の職場体験学習を受け入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東日本復興支援の「こども☆ひかりプロジェクト」に参加しワークショップを行った。(2回・620人) ・国際研究セミナー「日仏芸芸交流史を学ぶ」(1回・75人)を開催した。 3) 「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」(1回・113人)を土曜講座と合同で開催した。 ・「社会科教員のための向上講座」(1回・66人)を実施した。 <p>【奈良国立博物館】</p> <p>1) キャンパスメンバーズへの入会及び更新を積極的に進めてきた結果、本年度まで入会校数は27校、大学との連携を継続した。(奈良国立博物館)</p> <p>1) 小中学校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良県内の小中学校222校に対してメールマガジンの配信を行った。 ・『奈良国立博物館だより』は、奈良市内の全小中学校への郵送配布を行った。 ・世界遺産学習事業は、奈良市内小学校5年生35校、合計2,281名に対して実施した。 ・中学2年生の職場体験を3校12人受け入れた。 <p>3) 奈良市教育委員会と連携した教員への研修(8月26日実施、参加者63名)として講演を行った。</p> <p>4) 地下回廊のタッチパネル式学習端末機で、収蔵品の中から名品の画像を公開した。</p>	B	B
2213-2	<p>2) 講座等の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仏教美術等に関するサンデートークを定期的に実施する。 ・特別展等に際してシンポジウム、フォーラム及び公開講座等を開催する。 ・一般向け教育普及事業として夏季講座を開催する。 ・特別陳列に因み、伝統的行事を体験する催しを実施する。 ・文化財保存修理所の一般公開を行い、文化財保存の意義についての認知度向上に努める。(講演会等の目標) 参加者数計2,650人(実施回数計27回) ・特別展等講座 参加者数1,500人(実施回数14回) ・夏季講座 参加者数 500人(実施回数 1回(3日間 9講座)) ・サンデートーク 参加者数 650人(実施回数12回) <p>3) 奈良市教育委員会と連携して教員の研修を受け入れる。</p> <p>4) 地下回廊のタッチパネル式学習端末機で名品のハイビジョン映像等を公開する。</p> <p>5) 地下回廊で仏像模型及びパネルを用いて文化財に関する情報を継続的に公開する。</p>	<p>5) 地下回廊で仏像模型及びパネルを用いて、文化財に関する情報を継続的に公開した。</p> <p>2) 講座等の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サンデートークは毎月第3日曜日に実施し、実績は12回、合計978人の参加があり、アンケート結果では87%の平均満足度が得られた。 ・公開講座は、3つの特別展及び2つの特別陳列の会期中に実施した。公開講座の実施回数は、合計12回、1,600人の参加があり、平均満足度は87%を得た。その他、特集展示「和紙-文化財を支える日本の紙-」に関連して記念講座&座談会「和紙-文化財を支える日本の和紙-」を実施した。 ・正倉院展に関連したシンポジウムは「正倉院学術シンポジウム2014」と題して26年11月2日に実施し、3人のパネラーにより基調講演と討論を行った。192人の参加を得、満足度は89%であった。 ・夏季講座は、今年は第43回目を迎え、奈良県文化会館で開催した。「醍醐寺と南都の密教」と題し、26年8月19日～21日の3日間に実施、講師は計9人、561人の参加があった。 ・特別陳列「お水取り」では、東大寺の協力のもと、「お水取り「講話」と「粥」の会」を27年2月14日に実施し、35人の参加があった。 ・文化財保存修理所の一般公開は、27年1月15日に3回実施し、計110人の参加があった。 <p>○講演会等の実績 総計27回・参加者3,525人 特別展等講座14回・参加者1,986人(うち公開講座12回・1,600人、シンポジウム1回・192人)、夏季講座1回(3日間)・参加者561人、サンデートーク12回・参加者978人</p> <p>【九州国立博物館】 (九州国立博物館)</p> <p>1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験型展示室「あじっば」の運営を進め、従来からのプログラム、キットの継続展開に加え、これまでの調査研究で得られた新知見を加味して内容を充実させた各プログラムを開発し、来館者向け、及びアウトリーチでの活動時に展開した。 ・「いこうよ!あじっば夏祭り」やボランティアワークショップを実施し、幅広い層の来館者に体験の場を提供した。 	B	B
2214-1	<p>1) 博物館における体験型事業の充実を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育普及ゾーンで活用する様々な教育キットを開発する。 ・幅広い層に向け体験活動の促進を図るため、教育活動の場を提供する。 ・アジア諸国の文化を理解する様々な体験学習プログラムを開発する。 	<p>【九州国立博物館】 (九州国立博物館)</p> <p>1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験型展示室「あじっば」の運営を進め、従来からのプログラム、キットの継続展開に加え、これまでの調査研究で得られた新知見を加味して内容を充実させた各プログラムを開発し、来館者向け、及びアウトリーチでの活動時に展開した。 ・「いこうよ!あじっば夏祭り」やボランティアワークショップを実施し、幅広い層の来館者に体験の場を提供した。 	B	B

<p>2214-2</p>	<p>2) 学校教育との連携事業を実施する。 ・職場体験(中学生)の受け入れを実施する。 ・ジュニア学芸員(高校生)事業を実施する。 ・博物館活用の促進を図るため、教員研修の場を設置する。 ・学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸し出しを実施する。</p>	<p>・アジア各国の文化の類似性や相違性についての理解を深めるため、様々なテーマのもと、「あじ庵」「あじぎやら」「ディスプレイ」において特集展示を行った。また、季節にあわせて体験資料の展示替えを随時行った。</p> <p>(4館共通) 1) キャンパスメンバーズ(学校法人会員制度)による大学等との連携を継続して実施した。 (九州国立博物館) 2) ・中学生・高校生の職場体験を23校101名(のべ51日間)受け入れた。 ・高校生「ジュニア学芸員」は、9校24名の参加を得て計8回の継続プログラムで実施した。 ・高等学校初任者研修に係わる体験活動研修を希望する教員4校6名に対し、3日間の体験研修を実施した。 ・学校教育における「きゅうぱっく」及び博物館の活用に関する教員研修会を1回実施した。 ・学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸出を引き続き行い、67件の貸出を行った。 ・出前講座や館内での体験等を希望する学校への個別対応を行った。</p> <p>9) 放送大学の面接授業を実施した。(「美術工芸品にみる文化交流の諸相」26年11月15日、16日)</p>	<p>B</p> <p>キャンパスメンバーズ加入校数について前年度数を維持することができ、職場体験、教員研修、放送大学等についても、計画通り着実に実施できたため。</p>	<p>B</p> <p>中期計画に対して学校教育との連携を順調に推進しており、職場体験、教員研修、放送大学等についても、計画通り着実に実施できたため。</p>
<p>2214-3</p>	<p>3) シンポジウムを開催する。 4) 特別展記念講演会を開催する。 5) 文化交流展、特別展に関連した教育普及事業を実施する。 6) ミュージアムトークを随時実施する。 7) 文化施設等へ講師を派遣する。 8) 特別展の内容に親しみをもたせ、より良く理解するためのワークショップを開催するとともに、文化交流展示の内容とも連携した事業展開を行う。</p> <p>9) 放送大学の面接授業を実施する。 (講演会等の目標) 参加者数計3,100人(実施</p>	<p>3) 国際シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味—工芸における復古と革新—」を開催した。(10月25日開催)(詳細は処理番号3214参照) 4) 本年度は特別展記念講演会を4回開催した。 5) 本年度は講演会等を26回開催し、連続講座も開催した。 6) 定例のミュージアムトークを52回開催し、展示だけでは伝わらない博物館活動の内容を紹介し、好評を博している。 7) 文化施設等へ講師を派遣した。(福岡市 アクロス・文化学び塾等) 8) 文化交流展、特別展に関連した教育普及事業としてワークショップ等を行った。</p> <p>2214-2に記載</p>	<p>B</p> <p>特別展や文化交流展示における展示作品について、多角的に学習の機会を提供し、理解促進に寄与するなど予定通り実施でき、また来館者の好評を得ている。</p>	<p>B</p> <p>特別展や文化交流展示における展示作品について、幅広い年齢層に対して学習の機会を提供し、理解促進に寄与しているため。</p>

	<p>回数計54回) ・特別展記念講演会 参加者数 600人(実施回数 4回) ・講演及びシンポジウム 参加者数1,300人(実施回数10回) ・ミュージアムトーク 参加者数1,200人(実施回数40回)</p>			
<p>2221-1</p>	<p>②-1 ボランティア活動の支援 (東京国立博物館) 1) 館内案内、各種教育事業及びイベントの補助活動等の充実を図る。 2) 点字パンフレット、触知図、盲学校対応プログラム等による視覚障がい者対応、手話やコミュニケーションボード等による聴覚障がい者への博物館案内等、バリアフリー活動を実施する。 3) 自主企画グループによる各種ガイドツアー等を継続して実施する。 4) ボランティアの自主性を活かし、ボランティアデーなどにおいてボランティアの企画立案によるプログラムの充実を図る。</p>	<p>②-1 ボランティア活動の支援 【東京国立博物館】 (東京国立博物館) 1) 館内各所での案内、本館19室みどりのライオン体験コーナー、東洋館オアシスでの活動、職場体験の活動補助の他、イベント班とワークショップ班による、年間を通した各種イベント・ワークショップの補助活動を実施。また、今年度よりスクールプログラム班を立ち上げ、スクールプログラムの一部をボランティアにより実施した。また、各活動実施のための研修会・解説会を実施した。 2) 通年で触知図やコミュニケーションボード等を用いたバリアフリー活動を実施。バリアフリー対応班により、盲学校を含む視覚障がい者対応、点字パンフレットの印刷、自主企画グループにより手話通訳付きのガイドを実施した。また、実施準備や活動のための研修会を実施した。 3) 新規1グループを含めた全16の自主企画グループによるガイドツアー等の活動を実施した。また、研究員による、ボランティア活動のための研修会を実施した。 4) 通常の自主企画グループの活動の他に「留学生の日」・「ボランティアデー」・「博物館でお花見を」・「博物館でアジアの旅」などでの活躍の場を設け、より自主性を持った活動を行えるよう支援した。また、ボランティアデーでは、新規ボランティア応募者を対象に募集説明会とボランティアによるボランティア活動紹介ツアーを実施した。</p>	<p>B</p> <p>順調にボランティア活動及び活動支援を行っている。</p>	<p>B</p> <p>ボランティアの特性を活かしながら順調に実績をあげている。</p>
<p>2222-1</p>	<p>(京都国立博物館) 1) 平成知新館の新装開館に向け、新規ボランティア事業を立ち上げるための準備を行うとともに、平成知新館でのボランティア活動を開始する。</p>	<p>【京都国立博物館】 (京都国立博物館) 1) 9月13日の平成知新館オープンとともに、新規ボランティアである京博ナビゲーターの活動を開始した。京博ナビゲーターの募集・活</p>	<p>A</p> <p>京博ナビゲーターの活動を立ち上げるなど、予期以上の多大な成果をあげた。</p>	<p>A</p> <p>新規ボランティアを加え、きわめて充実した活動を展開することができた。</p>

2223-1	<p>2) 調査・研究支援ボランティアを受け入れ、各種事業活動の充実を進める。</p> <p>3) 文化財に親しむ授業講師（文化財ソムリエ）として大学生・大学院生ボランティアを育成し、小中学校への訪問授業を実施する。</p> <p>4) 「京都・らくご博物館」において、大学生をボランティアとして起用する。</p> <p>（奈良国立博物館）</p> <p>1) ボランティアの各グループ（世界遺産グループ、解説グループ、サポートグループ）の活動の充実を図る。</p> <p>2) ボランティアの資質向上を目的に、定期的に研修を実施する。</p> <p>3) 勉強会や見学会等によって、ボランティア同士のグループ別学習の充実を図る。</p> <p>4) ボランティアの自主性を活かし、ボランティアによる企画立案プログラムの充実を図るための支援を行う。</p>	<p>動開始にあたっては、募集説明会（1日×6回）や基礎講座（1日×8回）を実施した。</p> <p>2) 収蔵品調査及び社寺調査の補助のため、調査・研究支援ボランティアを受け入れた。（16人）</p> <p>3) ・文化財ソムリエを対象としたスクーリングを実施した。（21回） ・文化財ソムリエによる、京都市内の小中学校への訪問授業等を実施した。（7回）</p> <p>4) 「京都・らくご博物館」において、大学生をボランティアとして起用した。（9人）</p> <p>【奈良国立博物館】 （奈良国立博物館）</p> <p>1) ボランティアの新制度が発足して3年目になり、世界遺産グループ、解説グループ、サポートグループ、それぞれの活動がより充実した。奈良市教育委員会と連携し、世界遺産学習として奈良市の35校の小学5年生（2,281人）を受け入れ、また同学習で県内外の小学生～高校生（18校、1,045名）を受け入れた。</p> <p>2) ボランティア全員に対して、名品展研修を毎月実施し、また特別展、特別陳列の開催ごとに展覧会担当者による展示内容の研修を実施して全ての展覧会図録を配布し、解説と自己研修のための学習資料とした。</p> <p>正倉院展の会期中に、ボランティアによる講堂解説を実施した。このため、教育室がスライド資料と原稿を作成し、ボランティア室が約1ヵ月間の練習の立会と指導をした。</p> <p>3) ボランティアのグループ別に、毎月の勉強会を実施し、その指導に当たった。チーム力と知識の向上を図るため、毎月それぞれテーマを決めて勉強会を行った。解説グループの勉強会では、オブザーバーとして学芸部が立会、指導した。</p> <p>4) ボランティアによる自主企画として、敷地内の茶室庭園や仏教美術資料研究センターの案内ツアーを実施した。</p> <p>プログラムの企画立案にあたって、学芸部や総務課の協力を得ながら、ミーティングの立会と指導をした。</p> <p>また、ボランティア活動3年目の集大成として、12月に「ボランティア・フェスタ」を実施した。ボランティア・フェスタの企画立案にあたり、実行委員会を組織し、ボランティア室と約1年間計画を練り、ボランティア全員が何らかの活動で関わられるよう助言を行った。</p>	B	B
2224-1	<p>（九州国立博物館）</p> <p>1) ボランティアを受け入れ、展示解説部会、教育普及部会、館内案内部会（日本語、英語、中国語、韓国語）、環境部会、イベント部会、資料整理部会、サポート部会、学生会の充実を図る。</p> <p>2) ボランティアに対し資質向上を目的に基礎研修・専門研修を実施する。</p> <p>3) ボランティア同士のグループ別学習の充実を図る。</p>	<p>【九州国立博物館】 （九州国立博物館）</p> <p>1) 第3、4期ボランティアの体的な活動を重視することによって、活動意欲の向上、活動の活性化・充実、そして市民視点の活動の創造等が行われた。</p> <p>2) ボランティア自身の企画・実施による研修等を積極的に実施することで、活動の資質の向上や活性化、発展が行われた。</p> <p>3) 各部会において研修やグループ別学習、活動を行った。また、グループ活動や子どもフェスタにおいて、部会の枠を超えてボランティア同士が活動を行った。</p>	A	B
	<p>②-2 博物館支援者の増加 （4館共通） 企業との連携及びび友の会活動等の会員制度の活性化を図る。</p> <p>1) 会員制度によるリピーターの拡大に努める。</p> <p>2) 会員制度利用者を対象とした事業を実施する。</p> <p>3) 企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。</p> <p>4) 展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。</p>	<p>②-2 博物館支援者の増加</p>		

2221-2	<p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 各種会員制度を整理し、割引の適用や新たな会員制度を導入することで、リピーターの促進や若年層の拡充を図る。</p> <p>2) 近隣地域の諸団体や支援団体等と連携したイベントの実施及び広報活動の充実を図る。</p>	<p>【東京国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 26年4月の消費税率改定による料金の改定に伴い、これまで独立していた賛助会・友の会・パスポートの会員制度を一元化し、支援者の選択の幅を広げ、継続的に支援しやすい体系を整備した。</p> <p>2) 友の会、賛助会会員を対象に、講演会を実施した。また、賛助会会員を対象に感謝会を実施した。</p> <p>3) 日本橋三越本店と銀座三越の三越新春祭と当館の「博物館で初もうで」での共同企画を実施し、当館の宣伝活動の拡大を図った。</p> <p>4) 一部の特別展において、三菱商事株式会社と共催で「障がいのある方のための特別鑑賞会」を実施した。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 26年4月の会員制度改定後、個人会員が大幅に増加した。26年度末時点で友の会会員数2,145人(前年度比35%増)、パスポート会員数20,302人(前年度比23%増)となり、新規に創設したベーシック会員も1,038人の新規会員を集めた。賛助会についても、会員数414件(前年度比9%増)、金額ベース8%増を達成した。</p> <p>2) ・上野ミュージアムウィーク(上野のれん会との共催)、上野の山文化ゾーンフェスティバル(台東区との共催)及び東京・春・音楽祭(東京・春・音楽祭実行委員会との共催)等、地域連携事業に参加した。</p> <p>・27年3月14日のJ R上野東京ラインの開業に合わせて国立科学博物館、国立西洋美術館との3館を回れる共通入場チケットを3万枚発行し、上野地域の周遊を促した。</p>	A	個人会員の大幅増を達成できた。団体会員は微減となったが、金額ベースでは増となった。次年度は団体会員数増に重点化して取り組みたい。また、大手百貨店との共同企画等を博物館の来館者数増につなげることができており、企業や地域との連携は順調に実施できている。	B	個人の会員数の増加、企業との共同事業や地域との連携の拡大は、順調に達成できていると評価できる。
2222-2	<p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 支援団体等が行う文化財の鑑賞会・見学会等に協力する。</p>	<p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 「パスポート」事業を継続し、リピーターの拡大に努めた。</p> <p>2) 「パスポート」会員を対象とした事業を実施した。</p> <p>3) 企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努めた。</p> <p>4) 22年度に設置した「ミュージアム・パートナー」制度について引き続き周知を続けた結果、新たに株式会社日本香堂がパートナー会員になった。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 支援団体(社団法人清風会)が行う鑑賞会(3回)・見学会(3回)・会報(3回)の解説・執筆及び、総会の開催に協力した。また、地域・機関との連携事業に協力した。</p>	A	企業等と連携し、閉館後の特別鑑賞会などを開催し好評を得た。また平常展示館建替工事のため年2回しか行えなかった「京都・らくご博物館」を、年3回開催した。	A	パスポート会員が大幅に増加し、また企業との多彩な連携事業を展開するなど、博物館支援者の増加を図ることができた。
2223-2	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 支援団体等との連携により施設を活用したイベント等を実施し、博物館支援の輪を広げる。</p> <p>2) 支援団体等と連携し、展覧会の充実を図る。</p> <p>3) 賛助会員制度の継続・拡充を図る。</p> <p>4) 地域、企業との連携を推進する。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) パスポート会員 会員数3,162人(一般3,026人、学生99人、家族37人)</p> <p>2) 会員に夏季講座を優先的に受講できるようにした。</p> <p>3) 株式会社日本香堂提供のラジオ番組で、展覧会のPRを行った。</p> <p>4) 他の主催者と連携し、企業等からの協賛・協力を募った。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 支援団体等が主催する展覧会の解説付の鑑賞会の実施に協力した。</p> <p>2) 特別展の実施に際して企業等からの協力金を得て特別展の充実を図った。</p> <p>3) 賛助会員 27団体46人(特別支援会員:5団体、特別会員:4団体、一般会員(個人):46人、(団体):18団体)</p> <p>4) 観光関連業界と連携し顧客層の開拓を行った。</p> <p>奈良の観光イベント「ムジークフェストなら2014」、「ライトアッププロムナード・なら2014」、「なら燈花会」、「なら瑠璃絵」に対して協力した。</p>	B	パスポート会員が昨年度比564名増や、賛助会員が3会員増など新たな博物館支援者を獲得する事ができた。	B	順調に成果を上げているため。
2224-2	<p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 近隣地域の諸団体や支援団体等と連携したイベントの実施及び広報活動の充実を図る。</p>	<p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 「友の会」等の会員制度を継続して実施した。</p> <p>2) 「友の会」会員を対象に、季刊情報誌『アジアージュ』、トピック展示チラシ等の送付を行った。</p> <p>3) 企業等と連携し、広報活動を行った。</p> <p>4) 展覧会事業への企業からの協賛・協力を得た。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 支援団体や近隣地域と連携したイベントを実施し、広報活動の充実を図った。</p>	B	26年4月の消費税率改定による料金の改定にも関わらず、友の会及びパスポート会員数はほぼ前年度並びを維持できた。各種イベントを実施し、博物館の活性化に寄与した。	B	「友の会」等の会員制度について、徐々にではあるが会員数を増やしている。各種イベントを実施し、博物館の活性化に寄与した。
2231	<p>③ 大学との連携 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館)</p> <p>1) インターシップを継続して実施する。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) キャンパスメンバーズへの教育連携事業を実施する。</p>	<p>③ 大学との連携</p> <p>【東京国立博物館】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館)</p>	B	順調。目標通り事業を達成できた。	B	順調。例年通り実施できた。

2232	<p>2) 東京藝術大学との連携事業を継続して実施する(大学院生対象)。</p> <p>3) 日本大学芸術学部と連携し柳瀬荘アート・教育プロジェクトを実施する。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 京都大学大学院人間・環境学研究所の歴史文化社会論講座を担当する。</p>	<p>1) 博物館学芸員を目指す学生の学習意欲の喚起及び高い職業意識の育成を目的として、大学院生を対象にインターンシップを募集し、それぞれ学芸研究部・学芸企画部の9部署で10～30日間の活動を行い、11大学11名が修了した。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 東京藝術大学大学院インターンシップでは、ギャラリートーク(研究発表)班3名、調査研究班12名が活動した。ギャラリートーク班では大学院生と当館研究員が連携して準備を行い、総合文化展の解説を行った。調査研究班では館蔵の「突起装飾杯(TJ-5401)」の工程見本の展示及び教育普及事業を行った。</p> <p>2) キャンパスメンバーズ加入校の学生を対象に、博物館の歴史、保存修復、博物館情報、教育普及事業等について当館の職員が実例を交えた解説を実施。また、キャンパスメンバーズ加入校の学芸員志望学生を対象として、作品の取り扱い等博物館実務全般について演習・実習を実施した。(9月8日～13日に実施し、21大学・34人が参加した)</p> <p>3) 日本大学芸術学部と共同で「柳瀬荘アート・教育プロジェクト」を実施した。</p> <p>【京都国立博物館】 (京都国立博物館)</p> <p>1) 京都大学大学院人間・環境学研究所の歴史文化社会論講座において、研究員4人で8科目の授業を担当し、実際の文化財を教材にしながら、研究指導を行った。</p>	B	B
2233	<p>(東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館)</p> <p>1) インターンシップを継続して実施する。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 奈良女子大学及び神戸大学との連携講座を継続して実施する(大学院生対象)。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館)</p> <p>1) 立命館大学から3名の学生をインターンシップとして受け入れた。(奈良国立博物館)</p> <p>1) 奈良女子大学大学院人間文化研究所博士後期課程に学芸部研究員1名を客員准教授として派遣し、日本古典資料論の講義を行った。</p>	B	B

2234	<p>2) 奈良教育大学・奈良市教育委員会と連携して世界遺産学習のプログラム開発を進める。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 博物館実習生の受け入れを実施する。</p>	<p>た。授業の内容は古典資料講読を中心とし、受講生は前期4人、後期4人であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 神戸大学大学院人文学部研究科の連携講座文化資源論に、学芸部研究員2人を客員教授と客員准教授として派遣し、文化資源論の講義を行った。受講した学生は同研究科の修士課程、博士課程の大学院生16人であった。 <p>2) 26年11月9日(日)、奈良市教育センター及びなら100年会館を会場として、「第5回世界遺産学習全国サミット in なら」を文部科学省・奈良市教育委員会・奈良教育大学等と共同で開催し、女優・タレントのサヘル・ローズ氏及び帝塚山大学教授の西山厚氏による『「伝えるということ」～未来を創るあなたへ』と題した対談及び子供達による世界遺産学習発表会を行った。</p> <p>【九州国立博物館】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館)</p> <p>1) 当館の保存修復施設を利用して地域大学との協業を図る短期インターンシップ研修プログラムを実施した。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 博物館実習生を11大学15人、計10日間受け入れた。(うちキャンパスメンバーズ校は5大学8人)</p> <p>○博物館見学実習に対応した。(16件延べ491人)</p>	B	B
------	--	--	---	---

		26年度	25年度	目標値	評定
学習機会の提供 講演会等参加者数(人)					
東京国立博物館		14,419	15,777	7,830	A
講演会		6,735	7,184	3,500	A
ギャラリートーク等		7,326	8,205	4,000	A
連続講座(夏期講座)		320	354	250	A
公開講座		38	34	80(40)	D(C)
京都国立博物館		4,596	2,062	3,120	A
土曜講座		3,888	1,257	2,800	A
記念講演会		193	190	160	A
夏期講座		206	219	160	A
社会科教員のための向上講座		66	30	—	—
セミナー・シンポジウム		243	366	—	—
京都ミュージアムズ・フォー連携講座(土曜講座に含む)		113	157	120	C

	奈良国立博物館	3,525	3,219	2,650	A
	特別展等講座	1,986	1,682	1,500	A
	夏季講座	561	587	500	B
	サンデートーク	978	950	650	A
	九州国立博物館	4,694	7,276	3,100	A
	特別展記念講演会	980	1,108	600	A
	講演及びシンポジウム	2,132	4,450	1,300	A
	ミュージアムトーク	1,582	1,718	1,200	A
	学習機会の提供 講演会等実施回数(回)				
	東京国立博物館	127	131	77	A
	講演会	30	30	20	A
	ギャラリートーク等	94	98	55	A
	連続講座(夏期講座)	1	1	1	B
	公開講座	2	2	1(2)	A(B)
	京都国立博物館	36	21	22	A
	土曜講座	31	10	20	A
	記念講演会	1	1	1	B
	夏期講座	1	1	1	B
	社会科教員のための向上講座	1	1	—	—
	セミナー・シンポジウム	2	8	—	—
	京都ミュージアムズ・フォー連携講座(土曜講座の内数)	1	1	1	B
	奈良国立博物館	27	26	27	B
	特別展等講座	14	13	14	B
	夏季講座	1	1	1	B
	サンデートーク	12	12	12	B
	九州国立博物館	82	90	54	A
	特別展記念講演会	4	5	4	B
	講演及びシンポジウム	26	38	10	S
	ミュージアムトーク	52	47	40	A

(3) 快適な観覧環境の提供

【中期目標】国民に親しまれ、他の館の見本となる施設を目指し、来館者の立場に立った観覧環境の整備や観覧料金及び開館時間の弾力化などの利用者の要望を踏まえた管理運営を行い、来館者の期待に応えること。

<p>【中期計画】</p> <p>国民に親しまれる施設を目指し、来館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。</p> <p>①施設のバリアフリー化、各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。</p> <p>②一般来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施する。調査結果から来館者のニーズを把握し、観覧料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。また、施設の収容力に応じた来館者数を確保するとともに、混雑時の対応を含め利用者にも配慮した運営を行う。</p> <p>③ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。</p>		<p>【主な計画上の評価指標】</p> <p>○施設のバリアフリー化を進めること。</p> <p>○利用者のニーズを踏まえ、観覧料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行うこと。</p> <p>○利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等のサービスを改善すること。</p>				
<p>【25年度評価における主な指摘事項】</p> <p>○ミュージアムショップの商品は、インターネット販売など、観覧者へのサービスの向上に向けた更なる取組を期待したい。</p>						
処理番号	年度計画	主な実績		自己評価		
		年度	中期			
2311-1	<p>(3) 快適な観覧環境の提供</p> <p>①施設・設備等の充実(4館共通)</p> <p>1) 特別展において音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、来館者に対するサービスの向上を図る。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 多言語による案内及び誘導サイン等を順次整備する。</p> <p>2) より快適な観覧環境を構築するため、展示照明を順次整備する。</p>	<p>(3) 快適な観覧環境の提供</p> <p>①施設・設備等の充実</p> <p>【東京国立博物館】(4館共通)</p> <p>1) 当館開催の特別展のうち、6つの特別展で音声ガイドを実施し、来館者サービスの向上を図った。特別展「キトラ古墳壁画」の音声ガイドでは、松尾佳子(声優)のナビゲーター起用等が好評を博し、貸出率が24.8%となった。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 27年1月2日(金)リニューアルオープンした「黒田記念館」への案内について、東博敷地(正門)から記念館までの誘導サインを多言語で整備した。</p> <p>2) ・リニューアルオープンした黒田記念館の黒田記念室において、天井間接照明用スプレッドレンズ付LEDスポットライトを整備したことにより、展示室全体の明るさ感が向上し、天井装飾を効果的に照明する効果が得られた。</p> <p>・東洋館のさらなるお客様誘導効果と親しみやすさ向上のため、東洋館入口前にサインと懸垂幕を設置し、懸垂幕と獅子に対して新たに照明を整備した。</p>	B	<p>所定の目標を達成し、来館者へのサービス向上の成果を出した。</p>	B	<p>新規にリニューアルオープンした施設等を含め、計画にあげたサービス提供が実現できている。</p>

2311-2	<p>3) 総合文化展におけるスマートフォンアプリを用いたガイド「トーハクナビ」(日本語版・英語版)・「法隆寺宝物館30分ナビ」(日本語版・英語版)を引き続き実施する。</p> <p>4) 障がい者のために点字版パンフレット等を引き続き配布する。</p> <p>5) 「総合案内パンフレット」(7言語(8種):日、英、中(簡体字・繁体字)、韓、仏、独、西)を制作・配布する。</p> <p>6) 本館2階「日本美術の流れ」の展示を外国人に理解してもらうために、より基礎的な解説を盛り込んだ、3言語(英、中、韓)のパンフレットを継続して制作・配布する。</p> <p>7) 育児中の来館者が快適に観覧できるよう託児サービスを提供する。</p>	<p>(東京国立博物館)</p> <p>3)24年度より公開しているアプリ「トーハクナビ」(日・英)の提供を継続した。</p> <p>26年4月にはAndroid版とiOS版コンテンツで機能とコンテンツを統一したver. 2.0を公開し、さらに10月にバージョンアップ(ver. 3.0)を行い、「本館2階 日本美術の流れコース」に新たに「今日のオススメ」作品ガイド機能を搭載した。また、iOSアプリ「法隆寺宝物館30分ナビ」(日本語・英語対応)を引き続き公開した。</p> <p>4)障がい者の方のための点字版パンフレット等を引き続き配布した。</p> <p>5)総合案内パンフレット「案内と地図」(7言語(8種):日、英、中(簡体字・繁体字)、韓、仏、独、西)の制作・配布を行った。</p> <p>6)本館2階「日本美術の流れ」の展示を外国人に理解してもらうために、より基礎的な解説を盛り込んだ3言語(英、中、韓)のカラーパンフレットを継続して制作・配布した。展示テーマと主な展示作品の解説を収録した日本語版は展示替えに応じて更新・配布した。11月、「トーハクナビ」の「今日のオススメ」作品ガイドの配信開始に伴い、『博物館ニュース』ページ中の「日本美術の流れ」を「今日のオススメ」と連動させ、アプリ掲載作品ガイドをかねるパンフレット「日本美術の流れ 今日のオススメ」として作成し、配布した。また、総合文化展の見学ポイントを示し、鑑賞と理解を促す子供向けワークシート「本館1階見学マップ」「本館2階見学マップ」「暮らしの道具 今昔」「日本の伝統もよう」の4種を制作・配布した。</p> <p>7)これまで試行実施に留まっていた託児サービスを、26年度より通年で実施した。</p>	A	B
2312	<p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 快適な観覧環境を提供するための平成知新館の建替プログラムを継続して推進する。</p> <p>2) 館内案内リーフレット(6言語:日、英、中、韓、仏、西)を継続して制作・配布する。</p>	<p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1)特別展及び平常展(平成知新館名品ギャラリー)において音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、来館者に対するサービスの向上を図った。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1)25年度に展示製作工事が完了した平成知新館(名品ギャラリー)の開館準備として、より快適な観覧環境を提供するため、外構工事(本館前庭整備)、南門ショップ改修整備、サイン追加整備を実施した。</p>	A	A

2313	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 快適な観覧環境を提供するための展示施設の計画的な整備を実施する。</p> <p>2) 誘導サイン及び展示照明を整備し、より快適な観覧環境を確保する。</p> <p>3) 正倉院展の際に託児室を設置する。</p> <p>4) ウェブサイトで展覧会の混雑状況・待ち時間の速報を行う。</p> <p>5) 館内案内リーフレット(7言語:日、英、中、韓、仏、独、西)を継続して制作する。</p> <p>6) なら仏像館の会場案内図、展示一覧を作成する。</p>	<p>2)前年度に製作した館内案内リーフレット(6言語:日、英、中、韓、仏、西)を継続して配布した。また、平成知新館展示案内リーフレット(6言語:日、英、中、韓、仏、西)を新規に制作・配布した。</p> <p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1)特別展において音声ガイドを活用した情報提供を行い、来館者に対するサービスの向上を図った。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1)快適な観覧環境を提供するための展示施設の計画的な整備を実施した。</p> <p>2)誘導サイン及び展示照明を整備し、より快適な観覧環境を提供した。</p> <p>3)正倉院展の会期中に、託児室を開設し、保育士2人が常駐して1歳児から未就学児までの預かりを予約制で実施した。会期中142人の利用があった。</p> <p>4)ウェブサイトでの展覧会の混雑状況・待ち時間の速報については、正倉院展において特別協力の新聞社ウェブサイトリンクを張る形で行った。</p> <p>5)館内案内リーフレット(7言語:日、英、中、韓、仏、独、西)を継続して制作した。</p> <p>6)なら仏像館の会場案内図、展示リストを作成・配布した。</p>	B	B
2314-1		<p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1)特別展等において展覧会の内容のより深い理解を助けるための音声ガイドを実施した。</p>	B	B

2314-2	<p>(九州国立博物館)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 快適な観覧環境を提供するための展示施設等の調査・分析及び検討を進める。 2) 来館者にとって分かりやすい展示室内サインを開発し、快適な鑑賞環境を提供する。 3) 館内案内リーフレット(7言語:日、英、中、韓、仏、独、西)を継続して制作する。 4) 文化交流展示室の展示を、日本文化に初めて接する海外の来館者にも理解しやすいような、外国語のパンフレットを刊行する。 5) 英語・中国語・韓国語版の文化交流展示室のマップを継続して制作する。 	<p>(九州国立博物館)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 開館10周年に向けて、文化交流展示室のケース配列を再検討し、展示テーマの見直しや中央部分の活用等について議論を重ねた。 2) 分かりにくいという声のあった関連展示室サインの場所とデザインについて、デザイナーへの提案要件事項を整理し、開館10周年を機にリニューアルを図る予定である。 3) 館内案内リーフレット(7言語:日、英、中、韓、仏、独、西)を継続して作成・配布した。 4) 文化交流展示室では引き続き、英語・中国語・韓国語版のマップを展示替に応じて更新し、作成・配布した。 <p>(中期計画記載事項)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身障者トイレに幼児用補助便座を取り付けた。(6カ所:1階、3階、4階) ・公益財団法人日本博物館協会が実施する車椅子・ベビーカーの寄贈事業を活用し、ベビーカーを新たに2台導入した。 ・斜行リフト案内板(国博通り側)に英語・中国語・韓国語の案内文を追記した。 	B	B	<p>身障者トイレに幼児用補助便座を取り付けるなど利用者へ配慮した。</p> <p>ベビーカーを新たに2台導入し、斜行リフト案内板に英語・中国語・韓国語の案内文を追記するなどして利用者に配慮した取り組みを推進している。</p>
2321	<p>② 来館者満足度調査及び利用者へ配慮した運営(4館共通)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 来館者のニーズを引き出すため来館者調査を実施し、その結果を改善に活かす。 2) 混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を立て、収容力に応じた入場者数の調整、陳列品の配置及び音声ガイドの対象となる文化財の解説場所の工夫等を行い、展覧会場の快適な環境維持に努める。 	<p>② 来館者満足度調査及び利用者へ配慮した運営</p> <p>【東京国立博物館】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) タッチパネルアンケート(特別展、総合文化展)を平成館、本館、東洋館で開催された全ての特別展及び総合文化展でアンケートを実施し、集計結果を元に環境改善に努めた。 <ul style="list-style-type: none"> ・「総合文化展100万人プロジェクト」の一環として、館内環境の整備や外国人来館者対応の問題点の洗い出しなどに努めた。 2) 特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」において、期間中の混雑対応等、展覧会場の快適な環境維持に努めた。 	B	B	<p>アンケートでの満足度に大きな変化はなく、アンケートやモニタリング調査で出された意見や要望について引き続き検討が必要。特に特別展</p> <p>外国人をはじめとする一般来館者の意見については聴取できているため、それを基に今後改善を行う。混雑時の観覧環境の維</p>
2322	<p>(京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 特別展等に関し、専門家の展覧会評を求め、広報誌等に掲載する。 <p>(京都国立博物館)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) モニターを委嘱し、提言を受け、博物館運営に反映する。 	<p>【京都国立博物館】</p> <p>(4館共通)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 来館者アンケートを実施し、その結果を改善に生かした。 2) 混雑時には入場制限を行い、来館者の安全の確保、快適な観覧環境の維持に努めた。 <p>(京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 特別展覧会等に関する専門家の展覧会評を求め、『京都国立博物館だより』に掲載した。 <p>(京都国立博物館)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 小学校・中学校・高等学校の教員、キャンパスメンバーズ加盟校の学生及び外国人招致活動勤務に携わっている方、近畿地区在住の外国人の方へモニターを委嘱し、提言を受けた。館内で情報を共有し、展覧会を含めた博物館運営に反映した。 	B	B	<p>により長時間の待ち時間が発生したものがあったため、今後の混雑対策について検討中である。</p> <p>特別展覧会ではテントやコインロッカーの増設を行い、混雑状況に応じて入館制限も行うなど、快適な観覧環境を実現すべく、施策を着実に実施した。</p> <p>来館者へのアンケートや専門家による批評、モニターからの提言などの取り組みを継続的に進めている。</p>
2323	<p>(京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 特別展等に関し、専門家の展覧会評を求め、広報誌等に掲載する。 	<p>【奈良国立博物館】</p> <p>(4館共通)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 来館者のニーズを引き出すため来館者にアンケートを実施し、その結果を改善に活かした。 2) 混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を行い、実際の混雑に対しては、収容力に応じた来館者数の調整、陳列品の配置及び音声ガイドの対象となる文化財の解説場所の工夫等を行い、展覧会場の快適な環境維持に努めた。 <p>(京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 特別展「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」に関し、専門家の展覧会評を『奈良国立博物館だより』92号に掲載した。 	B	B	<p>来館者アンケートを実施し、その結果をもとに改善を実施した。</p> <p>特別展について専門家の展覧会評を『奈良国立博物館だより』に掲載している。また一般来館者のアンケートを実施し改善すべきところを把握し、特に混雑する正倉院展については工夫してその緩和に努めた。</p>

2324		<p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 来館者のニーズを引き出すため、文化交流展示及び各特別展で来館者調査を実施した。</p> <p>2) ・混雑が予想される展覧会（特別展「台北 國立故宮博物院一神品至宝」）について、入場規制、展示レイアウトの工夫をし、展覧会場の快適な環境維持に努めた。</p> <p>・来館者のニーズ等を把握するため、識者や市民代表などの外部委員による懇話会を開催した。</p>	B	B	<p>管理運営のためのアンケート結果を関係各課で改善に向けて活かしている。また、外部委員のまとめを全職員に配布し、来館者ニーズ等に対する職員の意識改革の推進を図った。なお、混雑が予想される特別展については、関係部署と連携を取り対応等を講じることができた。</p>
	<p>③ ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実</p> <p>ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、利用者サービスの向上に努める。 (4館共通)</p> <p>1) オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。</p>	<p>③ ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実</p>			

2331	<p>る。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 正門周辺の再開発に伴い設置する無料ゾーンに、ミュージアムショップを併設する。</p> <p>2) 黒田記念館別館のカフェで黒田清輝作品関連のグッズ販売を行う。</p>	<p>【東京国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) ・ミュージアムグッズは、東京国立博物館協力会と協議を重ね、新たな商品の開発に努めた。26年度は、考古フィギュア、卓上カレンダーなどを新たに販売開始した。</p> <p>・レストランでは、特別展に合わせたメニューを提供する等、サービスの向上に努めた。</p> <p>・低価格帯のカフェがないとお客様の声を受けて、26年10月の「アジア・フェス」期間中にケータリングカーによる軽食の屋外販売を試行的に行い、順調であったことから、3月のお花見の時期に合わせて本格的に野外販売を開始した。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 正門プラザの無料ゾーンに、ミュージアムショップを併設し、26年4月15日にオープンした。</p> <p>2) 黒田記念館別館の上島珈琲店で黒田清輝作品関連商品の販売を引き続き行った。また、27年1月2日の黒田記念館のリニューアルオープンにあわせ、黒田記念館内にミュージアムショップをオープンし、同日よりオリジナルグッズを販売した。</p>	B	B	<p>引き続き利用者の意見を収集し、サービスの向上に努めている。</p>
2332	<p>(京都国立博物館)</p> <p>1) レストラン利用者にアンケート調査を行いサービス向上に努める。</p> <p>2) 平成知新館に新たなレストランを設け、更なる利用者サービス向上を図る。</p>	<p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 新規にオリジナルグッズを作成し、また展覧会に応じた関連商品、関連書籍等を取り揃え、サービスの向上に努めた。 (京都国立博物館)</p> <p>1) レストラン利用者にアンケート調査を実施し、アンケートの集計結果をレストラン外部委託業者に提示し、さらなる接客サービスの向上に努めた。</p> <p>2) 平成知新館に新たなレストランを設けた。 ○平成知新館内に新たなミュージアムショップを設けた。</p>	B	B	<p>ミュージアムショップやレストランのサービスについて、利用者に対し定期的にアンケートを行うなど、快適な観覧環境を実現するための事業を的確に推進している。</p>
2333	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) ノベルティグッズを作成し、来館者に配布するなどのサービスを行う。</p> <p>2) 仏教美術に関する図書の販売の充実を図る。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) オリジナルグッズ（元気が出る仏像シリーズ、正倉院展模様シリーズ、博物館グッズ）の商品をミュージアムショップで販売し、サービスの向上に努めた。</p>	B	B	<p>ミュージアムショップにおけるオリジナルグッズや仏教美術に関する図書の販</p>

2334	(九州国立博物館) 1) 特別展に関連した特別メニューを提供するなど、サービスの向上に努める。	(奈良国立博物館) 1) 正倉院展のオータムレイトの観覧券を購入した方に非売品のしおりを配布した。 ・27年1月2日に来館された方に正月サービスとして非売品のオリジナルステッカーを配布した。 2) 仏教美術に関する図書の販売の充実を図った。	た、ミュージアムショップにおいて、オリジナルグッズを新たに開発し販売した。	売について、利用者の意見を参考に充実を図った。また、レストランにおいても利用者の意見を収集し、サービスの向上に努めており、中期計画期間中の改善が順調に行われている。		
		【九州国立博物館】 (4館共通) 1) ミュージアムショップでは、特別展及び文化交流展示の展示内容に即した商品陳列を行い、オリジナル商品の陳列面積を増やすとともに地場産業のお菓子やグッズなどを提供した。 (九州国立博物館) 1) レストランでは、特別展に関連したメニューを期間限定で提供した。	B	ミュージアムショップが新聞に取り上げられ、特別展「北北国立故宮博物院」開催中はレストランが大勢の方で賑わうなど順調である。	B	経営側との頻繁な意見交換を行うなど、中期計画に基づいてサービスを改善するための取り組みを行った。
		定量評価項目	26年度	25年度	目標値	評定
		リーフレット等 (カ国語)				
		東京国立博物館	7	7	7	B
		京都国立博物館	6	6	6	B
		奈良国立博物館	7	7	7	B
		九州国立博物館	7	7	7	B

(4) 文化財情報の発信と広報の充実

【中期目標】 文化財情報の蓄積と発信の充実を図るとともに、展示及び各種事業に関し、積極的な広報に努めること。	
【中期計画】 (4) 文化財情報の発信と広報の充実	【主な計画上の評価指標】 ○収蔵品等に関するデジタル化目標件数を定め、それを達成すること。また、公開データ件数を増加させること。 ○報資料を収集し、レファレンス機能を充実させること。

<p>①収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、データ整備及びデジタル化を推進する。また、整備したデータを公開するウェブサイトなどの公開システムの充実を行う。公開データの件数は継続的に増加させる。 収蔵品等に関するデジタル化件数は、その都度目標を設定する。</p> <p>②美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。</p> <p>③展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。</p> <p>④広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。</p> <p>⑤ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。</p>	<p>○計画的な広報・情報提供を行うこと。 ○ウェブサイトアクセス件数の向上を図ること。</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】 ○文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信に際して、分かりやすく親しみもてる平常展の構築、e 国宝やHPによる情報提供、SNS、ガイドアプリ等広い年代層へむけての各種広報などが行われ様々なニーズに応えているが、今後はさらに新たな入館者のシーズを掘り起こすような一層の創意工夫と、多言語化の推進が求められる。</p>
---	--

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
2411	(4) 文化財情報の発信と広報の充実 ① デジタル化の推進 (4館共通) 1) 収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びインターネットでの公開を継続して行う。 2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語 (日、英、中、韓、仏)の説明を付したデジタル高精細画像(e 国宝)を継続して公開する。 3) 約5,800件 (東京:300、京都:2,000、奈良:3,000、九州:500)の収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施する。	(4) 文化財情報の発信と広報の充実 ① デジタル化の推進 【東京国立博物館】 (4館共通) 1) デジタル画像を資料館及びインターネットで公開した。 2) 国宝・重要文化財の高精細画像(e 国宝)を継続して公開した。また10S、Androidそれぞれのアプリ版「e 国宝」を継続して公開した。	B	デジタル画像の公開、データベース開発やデータ整備等は順調である。既存フィルムのデジタ	B	既存フィルムのデジタル化はほぼ完了しているが、その他のデータ整備や和古書・洋古書デジタル化を進め

2412	<p>及びデータ整備を引き続き推進する。</p> <p>3) 収蔵品の和古書・洋古書のデジタル化を実施し、データを整備して、公開する。</p> <p>4) 法隆寺献納宝物について、5言語(日、英、中、韓、仏)の説明を付したデジタル高精細画像(「法隆寺献納宝物デジタルアーカイブ」)等の提供を法隆寺宝物館にて継続して実施するとともに、システムの更新について検討する。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品について6言語(日、英、中、韓、仏、西)の説明を付した国宝重要文化財・名品高精細画像閲覧システムの整備を継続して実施する。</p>	<p>3) 通常博物館で使用する形態の既存フィルムのデジタル化は大半が既に終了しており、今年度は、26年度新規フィルム撮影分及び25年度末撮影分にあたる、カラーフィルム41枚、モノクロフィルム38枚をデジタル化した。(東京国立博物館)</p> <p>1) 「列品管理プロトタイプデータベース」について、機能向上に向けてプログラムコードの大幅な整理を行うとともに、列品に関する調査結果のデータの流し込み機能を開発した。</p> <p>2) 収蔵品情報のデータ化とデータ整備を推進した。</p> <p>3) 収蔵する和古書・漢籍について25,991カット、また洋古書について10,820カットのデジタル撮影を行い、前年度までに撮影したものの一部を公開した。</p> <p>4) 「法隆寺献納宝物デジタルアーカイブ」は故障のため25年4月より一時公開を停止しシステムの更新を行ったが、27年度の法隆寺宝物館の改修が完了した後、再度公開する予定である。</p> <p>○東京国立博物館情報アーカイブの運用を継続し、収蔵品、調査研究成果等の情報公開の充実を図った。</p> <p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 収蔵品のデジタルデータを作成し、文化財情報システム及び公開収蔵品データベースのシステム修正およびデータ更新を随時行い、当館デジタルアーカイブ及び公開情報サービスを行った。</p> <p>2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語(日本語、英語、中国語、韓国語、フランス語)の説明を付したデジタル高精細画像(e国宝)を継続して公開した。</p> <p>3) ・収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を継続し、5,536件実施した。 ・フィルム用スキャナを運用し、既存フィルムのデジタル化を促進した。 ・ガラス乾板及びマイクロフィルムのデジタル化を行った。(詳細は処理番号2422を参照) (京都国立博物館)</p> <p>1) 京都国立博物館所蔵国宝重要文化財・名品高精細画像公開システム「KNM GALLERY」の内容及び表示方法等について前年度に引き続きシステム修正を行った。 (中期計画記載事項)今年度は公開データを103件増加した。</p> <p>【奈良国立博物館】</p> <p>1) 収蔵品データベースと画像データベースの公開により、来館者及びインターネットでの情報提供を継続して行った。</p> <p>2) 国宝・重要文化財のデジタル高精細画像(e国宝)を継続して公開した。</p>	B	<p>デジタル化は大幅に進めることができた。公開方法について課題が残った。言語によるアクセス件数を考慮して対応を検討したい。</p>
2413	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品について情報の整備を継続して実施し、収蔵品データベースの充実を図</p>	<p>1) 収蔵品データベースと画像データベースの公開により、来館者及びインターネットでの情報提供を継続して行った。</p> <p>2) 国宝・重要文化財のデジタル高精細画像(e国宝)を継続して公開した。</p>	S	<p>目標値を大きく上まわり、かつデータの質の維持にも力を注いでおり、</p>
2414	<p>る。</p> <p>2) 画像データベースの個別データを約2,000件追加更新する。</p> <p>3) 修理記録・古写真・ガラス乾板等の整理とデジタル化を推進し、運用方法について検討する。</p> <p>4) 仏教美術情報の公開・普及を図る。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品に関するコンテンツを順次追加し、デジタルアーカイブの充実を図る。</p> <p>2) 対馬宗家文書データベース等の効率的な運用を検討し、実施する。</p> <p>3) 海外調査で撮影した写真やビデオを展示や教育普及事業で活用するための整備を行う。</p> <p>②博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化 美術史・考古学その他の関連諸学に関</p>	<p>3) 収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施した(5,154件)。(奈良国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品情報システムに新たに収蔵品となった文化財の情報を継続して蓄積し、内容の充実を努めた。これらは公開用の収蔵品データベースにも反映され、当館から発信する収蔵品の情報を充実させることが出来た。また画像データベースとのリンク情報も追加し、情報の効率的な運用と公開に努めた。</p> <p>2) 写真情報システムの個別データを5,447件追加更新した。このうち公開データは3,376件。</p> <p>3) 「日本美術院彫刻等修理記録」の整理とデータ修正が完了し、公開用のデータベースを新規に作成した。仏教美術資料研究センターでは全ての画像ならびにテキストデータ、インターネットでは全てのテキストデータを公開した(26年7月)。</p> <p>4) 仏教美術資料研究センターのウェブサイト運営し、蔵書、論文データの更新を行い内容の充実を努めた。</p> <p>(中期計画記載事項) インターネットで公開している収蔵品データベース、画像データベースの公開件数を継続的に増加させている。</p> <p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 「九州国立博物館収蔵品デジタルアーカイブ」の拡充を図り、館内及びインターネットで継続して収蔵品情報を発信した。</p> <p>2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、デジタル高精細画像(e国宝)を継続して公開した。</p> <p>3) 776件の収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施した。(九州国立博物館)</p> <p>1) 九州国立博物館デジタルアーカイブの運用・公開を継続した。</p> <p>2) 対馬宗家文書データベースの運用・公開を継続した。</p> <p>3) ミャンマーにおける伝統文化・工芸品等の実態を調査して写真に取め、今後の博物館教育の参考資料とした。次年度以降体験型展示室「あじっば」にてミャンマーの資料を展示する際に活用する予定である。</p> <p>②博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化</p>	B	<p>超える数値となった。既存データの訂正、非公開から公開への切り替えを行ったため、昨年度より若干減少したものの、引き続き既存フィルムのデジタル化を重点的にしているため。</p> <p>中期計画におけるデータ整備及びデジタル化について顕著な成果と言えるため。</p> <p>収蔵品等のデータ整備及びデジタル化については順調に推移している。</p>

<p>2421</p>	<p>する基礎資料、国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図る。また、資料の登録や検索・利用については、最新の情報処理技術を用いた、活用しやすいシステムを開発する。 (4館共通) 1) 約13,000件 (東京:6,000、京都:3,000、奈良:3,000、九州:1,000)の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備する。 (東京国立博物館) 1) 資料館において、美術史等の情報及び資料を一般に広く公開するために、図書管理システム及び画像管理システムを軸とした図書資料、画像資料などのデータ整備を推進し、レファレンス機能とサービスの充実を図る。 2) 法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続実施する。 3) 調査・研究・教育など博物館の機能全般に関する有益な情報及び関係資料を収集・蓄積する。 4) 資料館の機能の拡充に向け、施設・設備の見直しを含めた、利用計画を策定する。</p>	<p>【東京国立博物館】 (4館共通) 1) 本年度は10,720件の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備した。 (東京国立博物館) 1) 資料館における美術史等の情報・資料の公開のため、8,115件の図書資料のデータ整備入力を行った。 ・博覧会資料565件と売立目録332件の書誌データを整備し、国立情報学研究所が提供する総合目録データベースへの登録を実施した。また所蔵する和雑誌のNCへの所蔵登録を継続し、1,995タイトルの所蔵情報を点検・登録した。 ・画像管理システムに画像データ10,720件を登録し、既存データ493件の修正を行って正確な情報の提供に努めた。 ・シーボルト旧蔵本の保存とデジタルアーカイブでの公開について図書館振興財団からの助成を受け、修理・保管箱作成(77冊)及びデジタル撮影(29冊)等を行い、一部をウェブサイトで公開した。 ・また助成金枠以外にも洋書28冊、漢籍79冊の貴重書のデジタル撮影を行った。 ・博覧会資料と売立目録について、中性紙封筒への収納を行った。また、博覧会関係資料、戦前目録類、洋書等約2,000点について大量脱酸の処理のための事前調査を行い、戦前目録492冊について脱酸化処理を実施した。 ・資料の閲覧、複写及びレファレンスサービスを継続し、資料館利用者数は前年度に引き続き増加した。 (6,118人 参考:25年度5,661人)</p>	<p>B</p> <p>法隆寺宝物館での図書コーナーは平成館工事に伴い一時中止があったが、基本である資料館での美術史等の情報及び資料の公開とその活用を支援する事業は順調に行われ、検索方法ガイドの作成など新たな利用促進の試みも進んでいる。</p>	<p>B</p> <p>データ整備入力、データベース作成、調べ方ガイド作成など、情報の発信とレファレンスに有益な業務を展開できた。</p>
<p>2422</p>	<p>(京都国立博物館) 1) 資料情報などの研究系システムについて、サーバ仮想化(多数のサーバを仮想的に少数のハードウェア装置へ集約する技術)による費用低減と性能向上を図る。 2) 蔵書管理システムをデータベース統合し、資料の管理性や検索性を向上させる。</p>	<p>・「日本国宝展」の開催時期に合わせ、「東京国立博物館資料館 調べ方ガイド 1重要文化財」を作成し、資料館内での配布と、ウェブサイトでのPDF版公開を行った。また図書館システム改定に合わせ検索方法のガイド(冊子)を作成し、PDF版を公開した。 2) 法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続した。(12月～年度末までは平成館工事に伴い飲食可能な休憩スペースとしたため中止。27年4月再開予定。) 3) 当館開催の特別展(戦後分)の出品作品データベースを作成・維持した。また、刊行物に記載されている当館の所蔵品を調査し、約86冊の図書・雑誌のデータに列品番号の情報を入力した。 4) 黒田記念館の書庫スペースについて、書架を設置し、資料の再配置の一環として一部の資料を移動した。 【京都国立博物館】 (4館共通) 1) 収蔵品、出品作品等の新規撮影は、フィルム撮影を557枚、デジタル撮影を4,370枚行った。 ・高精細デジタルカメラが導入され、デジタル撮影を中心としてフィルム撮影も並行して行った。 ・画像利用申請に伴う収蔵フィルムのデジタル化作業を継続して行った。 ・当館で所有するスキャナを使用し、所蔵フィルムのデジタル化を開始した。 ・8×10フィルムの高精細スキャニング作業を開始した。 ・館蔵ガラス乾板の保存整理作業、及びガラス乾板のデジタル化を継続して行った。 ・フィルムの保存状態改善のため、保存に適した収納箱への移し替えを継続して行った。 ・経年劣化の激しいマイクロフィルムのデジタル化を継続して行った。 ・調査、研究、教育等に資するため、図書資料においては、新規図書9,758冊、逐次刊行物1,011冊を収集した。 (京都国立博物館) 1) 研究系基盤サーバにおいて仮想化統合を実施した。処理能力の向上により、レファレンスの検索速度が向上した。 2) 蔵書管理システムについて、図書システムとサブシステムを統合したことにより資料検索の利便性を向上させた。 ・統合する際、サブシステムに登録している書誌データに登録番号を付与し、管理上の便宜を図った。</p>	<p>B</p> <p>新規撮影件数・図書資料の収集を滞りなく実施することができた。</p>	<p>B</p> <p>資料の収集・整備、及び情報の発信とレファレンスを滞りなく行うことができた。</p>

2423	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 図書情報システム及び写真情報システムによる資料整備と情報蓄積を推進し、内外の利用者に対してサービスの充実を図る。</p> <p>2) 仏教美術資料研究センターの利用者に対し、利便性向上を図るため、資料配置を見直し、資料の有効的な活用と効率的な運用について検討し、実施する。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 収蔵品・展覧会等出品作品等の新規撮影を多数行い、関連データを整備した(5,478件)。 (奈良国立博物館)</p> <p>1) 図書情報システム及び画像情報システムによる情報蓄積を推進し、仏教美術資料研究センター及びインターネットにおける情報公開を充実させた。</p> <ul style="list-style-type: none"> OPACの機能を強化し、図書・論文の書誌情報を一括で検索する画面を新規に作成した。これにより、内部で継続して蓄積を行っている、論集・学術雑誌・展覧会図録等に掲載されている論文情報をより有効に活用することが叶い、情報発信と利便性の向上が実現した。 <p>2) 仏教美術資料研究センターでは、通常の資料・施設の公開にとどまらず、ボランティアによる建築案内や、専門家の見学や研修の受け入れを複数回行っている。今年度は、文化庁招聘の日本美術資料専門家(欧米)の研修を実施し、日本東洋美術に関する資料の蓄積やデジタル化について強い関心が集まった。こうした外部からの見学・取材依頼に適宜対応することにより、機能及び施設の普及・宣伝に著実に効果を上げている。</p>	A	<p>美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。</p>
2424	<p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 博物館資料(図書、写真など)データベースにおける業務の効率化に向けて、第2次業務システムについて継続的に見直しと改良を加え、より充実した業務システム構築を目指す。</p>	<p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 1,167件の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備した。 (九州国立博物館)</p> <p>1) 博物館資料(収蔵品、図書、写真など)データベースにおける業務の効率化に向けて、第2次業務システムの検討を行った。その結果、図書管理については、日本事務器製ネオシリウス(蔵書管理システム)を導入した。収蔵品、写真管理については、日本写真印刷製アルタイズネットを導入した。</p>	B	<p>目標値は達成した。撮影業務は引き続き外部委託として実施しているが、委託業者の確保と撮影制度の向上には留意している。蔵書管理システム等の導入により、より充実した業務システムの構築を実現することができた。</p> <p>B 撮影自体は各年の展覧会開催や借用実績等の事情によってかなり左右されるが、毎年度の目標値は順調に達成している。なお、画像データの管理について新しい文化財管理システムの導入の中でプロトタイプを作成した。</p>

2430	<p>③ 広報計画の策定と情報提供</p> <p>(機構本部)</p> <p>1) 機構の概要、年報を作成する。</p> <p>2) 機構本部ウェブサイトを運用し、法人情報の提供を行う。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。</p>	<p>③ 広報計画の策定と情報提供</p> <p>【本部事務局】 (機構本部)</p> <p>1) 『独立行政法人国立文化財機構概要 平成26年度』(日本語版・英語版)を26年7月に発行し、PDF版をウェブサイトに掲載した。 『独立行政法人国立文化財機構年報 平成25年度』を26年12月に発行し、PDF版をウェブサイトに掲載した。</p> <p>2) 機構本部ウェブサイト(http://www.nich.go.jp/)の運用を継続した。随時掲載情報の追加更新を行い、広く一般に向けた法人情報の提供を行った。</p>	B	<p>B 計画通り概要・年報を作成し、本部ウェブサイトの運用においても必要な情報提供を行うことが出来た。</p>
2431	<p>(東京国立博物館)</p> <p>総合文化展の活性化に重点をおいた広報活動を行う。</p> <p>1) 広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等を行う。</p> <p>2) 春の「博物館でお花見を」、秋の「博物館でアジアの旅」、正月の「博物館に初もうで」を軸とした総合文化展の広報の企画・運営を行う。</p> <p>3) 本館2階「日本美術の流れ」のテーマ解説及び主な展示作品の解説をまとめ、展示替ごとに更新する日本語パンフレットを継続して作成し、配布する。</p>	<p>【東京国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 年間スケジュールリーフレットを制作し(35,000部)、送付及び館内配布した。 (東京国立博物館)</p> <p>1) 『東京国立博物館ニュース』(隔月刊)や、総合案内パンフレット「案内と地図」(7言語8種)、「展示・催し物のご案内」を作成、配布した。</p> <p>2) 「博物館でアジアの旅」、「秋の特別公開」、「博物館に初もうで」、「黒田記念館リニューアル」などにおいて、チラシ、パンフレット、ポスターなど各種広報印刷物を作成・配布し、また当館ウェブサイト・SNSによる告知を行った。</p> <p>3) 本館2階「日本美術の流れ」のテーマ解説及び主な展示作品の解説をまとめ、展示替ごとに更新する日本語パンフレットを10月まで作成し、配布した。11月以降、「トーハクナビ」の「今日のオススメ」作品の配信開始に伴い、『東京国立博物館ニュース』ページ中の「日本美術の流れ」を「今日のオススメ」と連動させ、パンフレット「日本美術の流れ 今日のおすすめ」として作成し、配布した。</p>	B	<p>B スケジュールや案内は当初計画した形での広報物作成と配布が実施できた。また各企画において印刷物を作成し効果的な広報が展開できた。</p> <p>B より一般来館者の関心を惹き、かつ外国人や若年層など、今後来館の幅を広げる層にも訴求するような印刷物及び広報展開が実施できている。</p>
2432	<p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 26年9月13日の平成知新館開館に伴い、広報用ポスター・パンフレットの企画・制作・配付等を行う。</p>	<p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行った。 (京都国立博物館)</p>	A	<p>A 年間スケジュールや展覧会チラシ・メールマガジンの発行・ツイッターでの特</p> <p>A 中期計画に従って、年間スケジュールや展覧会チラシ・メールマガジンの発行・ツイ</p>

<p>2433</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等を行う。 2) 特別展の際に、タクシー・ホテル等関係者に対する内覧会を実施し、タクシー・ホテル等利用者への広報活動を展開する。 3) 地域の観光協会を通じて観光客への広報活動を展開する。 4) 地域の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動の展開を図る。 5) 文化大使を引き続き任命し、広報活動を行う。 6) 写真・映像の撮影等に場所提供を含め協力することにより博物館の認知度を高める。</p>	<p>1) ・26年9月13日の平成知新館開館に伴い、平成知新館の建築及びオープン記念展を紹介するプレスリリース、広報用ポスター・パンフレットの企画・製作・配付等を行った。 ・平成知新館開館ならびにオープン記念展「京へのいざない」の開催に向けて、事前記者発表を3回(うち1回は東京)開催した。 2) 文化大使を引き続き任命し、広報活動を行った。</p> <p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 26年7月～27年5月の展覧会日程を記載したリーフレットの初版を5月に5,000部、一部改訂版を10月に30,000部作成し、配布した。 (奈良国立博物館)</p> <p>1) それぞれの展覧会の特性や意義に応じた広報の方針、及び印刷物の部数を議論する広報戦略委員会を、6回実施した。 2) 特別展では、タクシー・ホテル等関係者に対する内覧会を実施、タクシー・ホテル等の利用者への広報活動を行った。 3) 奈良市観光協会への入会をはじめ、積極的に地元観光業界に対し広報活動を展開するとともに情報収集に努めた。 4) 奈良県が後援する観光イベントへの積極的な協力や、奈良県ビジターズビューローとの連携等、地域の観光団体等と連携した広報活動を展開した。 5) 文化大使の次期候補者から就任の内諾を得た。 6) 新聞社や鉄道会社の広報誌、地元のタウン情報誌等の写真撮影協力やテレビ局に対して放送のための映像撮影協力をを行い、博物館の認知度を高めた。</p>	<p>【九州国立博物館】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 年間スケジュールリーフレット「九州国立博物館 展示スケジュールのご案内」の制作・配布を行った。(50,000部) (九州国立博物館)</p> <p>1) 特別展にかかわるポスター、ちらしなどの広報・宣伝材料を制作した。 2) 過去の特別展やトピック展などの情報の整備とともに、現在及び将来の展示リストの検索・紹介、新鮮な展示情報について情報発信するためのウェブデータベースの整備についても実施した。 3) トピック展示ポスター、ちらし、「展示・イベントスケジュール」の設置など観光協会と連携した広報活動を実施した。 4) 九州観光推進機構のウェブサイトに博物館情報を掲載し、アジアへ情報を発信した。 5) 特別展と文化交流展示室とで統一的な企画を行った際、チケット半券に文化交流展示室の詳細情報を記載し、特別展来場者が文化交流展示室へも足を運ぶよう工夫した。</p>	<p>別展覧会混雑状況の告知など多方向の媒体を活用して着実な広報活動を行うと共に、当初、予定になかった東京での報道発表を実施し、報道関係者及び一般読者等から多大な好評を得た。引き続き様々な機会と媒体に対して積極的な発信を行うこととする。</p> <p>B 昨年引き続き、近隣商店街など地域と連携して博物館の情報を発信することができた。</p>	<p>ターでの特別展覧会混雑状況の告知など多方向の媒体を活用して博物館の広報活動を着実に進めた。また東京での記者発表を実施する等、新館開館に伴い、これまでになく広範な広報活動を行った。引き続き様々なマスコミや媒体に対して積極的な発信を行うこととする。</p> <p>B 順調に成果を上げているため。</p>
<p>2434</p> <p>(九州国立博物館)</p>	<p>1) 特別展の実施に伴う広報・宣伝材料を制作する。 2) 現在及び過去や将来の展示リストを検索・紹介し、新鮮な展示情報を情報発信するためのウェブデータベースの整備を継続する。 3) 地域の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動を展開する。 4) 九州観光推進機構などを通じた海外への広報・営業活動を展開する。 5) 文化交流展示室からの積極的な情報発信を図るため、ポスター・ちらし・ウェブコンテンツの活用を一層、促進する。</p>	<p>【東京国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。 2) ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行った。 3) メールマガジンを配信した。(22回) (東京国立博物館)</p> <p>1) 『東京国立博物館ニュース』の編集・発行・配布を行った。(年6回) 2) 『1089プロク』により、情報発信を行った。(更新数82回) ・「投票」など、読者参加型のコンテンツで、展示や文化財についての興味喚起を図った。 3) 26年4月よりスマートフォン対応を目的としたモバイルサイトを開発し、26年12月17日に一般向けに正式公開した。 4) 25年7月より開始したSNS「Facebook」、 「Twitter」による情報発信を継続し、よりタイムリーな情報発信と新たな来館者層の開拓に努めた。</p>	<p>実施した特別展のそれぞれの適正に応じたポスター・ちらしなどの制作や、航空会社機内誌への掲載など新たな取り組みも行うことができた。</p> <p>B 雑誌の特集対応、ウェブサイトの充実やSNSの活用により、東京国立博物館のより積極的なPRに寄与した。</p>	<p>各年度において広報計画を策定し、告知にあたっては、企画目的を考慮し、地域・年齢層などのターゲットインギを行い、効果的に広報を行うことができた。</p> <p>B スマートフォン用サイトの開発や記者懇談会の実施などにより、一般およびメディア媒体への認知度は年々着実に浸透している。</p>
<p>2441</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>④ 広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動 (4館共通)</p> <p>1) マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。 2) ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行う。 3) メールマガジンを配信する。</p>	<p>④ 広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動 (4館共通)</p> <p>1) 『東京国立博物館ニュース』の編集・発行・配布を行った。(年6回) 2) 『1089プロク』により、情報発信を行った。(更新数82回) ・「投票」など、読者参加型のコンテンツで、展示や文化財についての興味喚起を図った。 3) 26年4月よりスマートフォン対応を目的としたモバイルサイトを開発し、26年12月17日に一般向けに正式公開した。 4) 25年7月より開始したSNS「Facebook」、 「Twitter」による情報発信を継続し、よりタイムリーな情報発信と新たな来館者層の開拓に努めた。</p>	<p>実施した特別展のそれぞれの適正に応じたポスター・ちらしなどの制作や、航空会社機内誌への掲載など新たな取り組みも行うことができた。</p> <p>B 雑誌の特集対応、ウェブサイトの充実やSNSの活用により、東京国立博物館のより積極的なPRに寄与した。</p>	<p>実施した特別展のそれぞれの適正に応じたポスター・ちらしなどの制作や、航空会社機内誌への掲載など新たな取り組みも行うことができた。</p> <p>B 雑誌の特集対応、ウェブサイトの充実やSNSの活用により、東京国立博物館のより積極的なPRに寄与した。</p>	<p>各年度において広報計画を策定し、告知にあたっては、企画目的を考慮し、地域・年齢層などのターゲットインギを行い、効果的に広報を行うことができた。</p> <p>B スマートフォン用サイトの開発や記者懇談会の実施などにより、一般およびメディア媒体への認知度は年々着実に浸透している。</p>

2442	<p>5) 主要メディアの文化担当記者との懇談会を開催し、マスコミとの連携を強化する。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 『京都国立博物館だより』、『Newsletter』(英文)の編集・発行・配布を行う。(年4回)</p> <p>2) 地域等が主催する各種の委員会に参加・連携し、広報活動を展開する。</p> <p>3) 京都市内4美術館博物館で連携し、共通の展覧会情報パンフレットを制作・配布する。</p> <p>4) 既刊の博物館ディクショナリーをウェブサイトに掲載し、新刊をメールマガジンにて配信し、利用者の拡大を図る。</p> <p>5) 収蔵品貸与情報をウェブサイトに公開する。</p>	<p>5) 新聞雑誌各紙の美術・文化担当記者ならびに文部科学省記者クラブのメンバーを対象とした記者懇談会第2回を実施した(26年4月14日)。また総合文化展示活性化の一環として企画した「博物館でアジアの旅」では、FMラジオ局J-WAVEと連携し、リスナーを招待しての打楽器コンサートを開催した。</p> <p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 各展覧会の招待日のプレス発表会とは別に、調査研究成果のプレス発表会を随時開催し、博物館の研究活動の広報に努めた。また平成知新館開館にあわせ、平成知新館の建築及びオープン記念展を紹介する事前記者発表を開催した。</p> <p>2) ウェブサイトによる情報提供(日本語・英語)、及び、モバイルサイトによる情報提供を行った。</p> <p>3) メールマガジンを配信した。また、メールマガジン読者限定特典のブックレット「京博PLUS」の配信を行った。(メールマガジン12回、ブックレット6回)</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>1) 『京都国立博物館だより』(年4回)、『Newsletter』(年4回)の発行・配布を行った。</p> <p>2) 東山南部地域の社寺やホテル等と連携し、展覧会チケットが割引券となる地域マップ付チラシを作成し、広報活動を展開した。</p> <p>3) 京都市内4館(京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都府文化博物館、京都市美術館)の連携協力の提携を結び、共通の展覧会情報パンフレットを作成・配布した。</p> <p>4) 既刊の博物館Dictionaryをウェブサイトに掲載し、新刊をメールマガジンにて配信し、利用者の拡大を図った。</p> <p>5) 収蔵品貸与情報をウェブサイトに公開した。</p> <p>○京都新聞社と連携し、年間を通して館蔵の名品を紹介する『名品手帳』を連載した。</p> <p>○雑誌『婦人画報 京都国立博物館非公式ガイドブック』、『月刊文化財 京都国立博物館・平成知新館の全て』、書籍『京都で日本美術をみる【京都国立博物館編】』(集英社)を始め、多くの雑誌、書籍、に記事が掲載され新たな来館者層の開拓に寄与した。</p> <p>○朝日放送の「京へのいざない」9月15日放送など複数のテレビ番組の京都国立博物館特集番組に協力して新たな来館者層の開拓に寄与した。</p>	A	A
2443-1		<p>1) 年間を通じて文化財の魅力を紹介する新聞連載を行ったほか、各特別展等の開催に合わせて、マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。</p> <p>2) 特別展や公開講座等の企画ごとに、また展示替えごとにウェブサイト及びモバイルサイトを更新し、最新の情報提供を行った。</p>	B	B
2443-2	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 特別展及び名品展の情報を掲載した『奈良国立博物館だより』の編集・発行・配布を行う。(年4回)</p> <p>2) ウェブサイトの外国語版の充実を図る。</p> <p>3) 「奈良トライアングルミュージアムズ」(奈良国立博物館、奈良県立美術館、入江泰吉記念奈良市写真美術館)の3館で連携し、集客増に繋がる広報活動を展開する。</p> <p>4) 周辺関係社寺等と連携し、特別展等の割引特典付きチラシを配布する。</p> <p>5) マスコミからの取材申し込みを積極的に受け入れ、展覧会、博物館活動への理解・促進を図る。</p> <p>6) 季刊誌『奈良国立博物館だより』のPDF版をウェブサイトに継続して掲載する。</p> <p>7) 英語による展覧会チラシを作成し、外国人観光客誘致のための情報発信を行う。</p>	<p>3) メールマガジンを毎月1回配信した。(11回)</p> <p>【奈良国立博物館】 (奈良国立博物館)</p> <p>1) 名品展や特別展の紹介に加え、文化財情報を満載した季刊誌『奈良国立博物館だより』を発行した。(4回)</p> <p>2) ウェブサイトの英語版に関して、すべての内容や用語の見直しを図った。適切な美術用語、新しい施設名称、外国人にも分かり易い表現などを積極的に採用し、アクセス数の集中する正倉院展の会期前までに修正を完了した。</p> <p>3) 奈良トライアングルミュージアムズ(奈良国立博物館・奈良県立美術館・入江泰吉記念奈良市写真美術館)として、26年9月に奈良国立博物館にてワークショップ、26年12月に奈良まほろば館にて東京セミナーを実施した。</p> <p>4) ・東大寺、春日大社の協力を得て、体験型のイベントを行った。 ・冬季の集客を図るため割引券を作成し、観光案内所及び市内の宿泊施設に配布した。 ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」について、期間限定(27年1月2日～4日)の無料観覧券(※名品展も無料)を、春日大社において配付し、おん祭展の広報と館の認知度アップに繋げた。 ・特別陳列「お水取り」について、期間限定(27年3月6日～8日)の無料観覧券(※名品展も無料)を、東大寺において配付し、お水取り展の広報と館の認知度アップに繋げた。</p> <p>5) 特別展、特別陳列等の開催にあたっては、報道発表、プレスレビューを実施、取材にも積極的に対応した。</p> <p>6) 季刊誌『奈良国立博物館だより』のPDF版をウェブサイトに掲載した。</p> <p>7) 特別展では、英文チラシを作成、外国人観光客向けの情報発信を行った。</p>	B	B
2444	<p>(九州国立博物館)</p> <p>1) ウェブサイトで提供する博物館情報の充実を図るとともに、利用者の利便性を考慮した情報の発信に努める。</p> <p>2) 「九州国立博物館季刊情報誌アジアージュ」の編集・発行・配布を行う。(年4回)</p>	<p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) マスコミや公共交通機関等と連携し、新聞紙上での作品の解説や公共交通機関での広報活動を行った。</p> <p>2) ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行った。26年7月、フォーマットをリニューアルした。</p> <p>3) メールマガジンを配信した。(毎月2回、年24回)</p> <p>(九州国立博物館)</p>	B	B
2442			A	A
2443-1			B	B
2443-2			B	B
2444			B	B

	3) 太宰府市と連携し、スマートフォンに対応した文化情報発信サイトにより情報発信を行う。	1) ウェブサイトにて文化交流展示室の「今月の名品」のスケジュール等を掲載し、また研究員が展覧会等の解説を行う動画を「YouTube」で配信した。 (詳細は処理番号2454参照) 2) 九州国立博物館季刊情報誌『アジアージュ』を発行した。(年4回) 3) スマートフォン向け情報ガイド「太宰府市イベントガイド」で展覧会情報等を発信した。 ○『きゅーはく攻略本』を増刷・福岡県内全小中学校等へ配付した。(26年8月・27年1月)				
2451	⑤ ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。 (4館共通) 1) アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図る。	⑤ ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。 【東京国立博物館】 (4館共通) 1) アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図った。 (詳細は処理番号2441参照)	B	SNS やブログを積極的に活用し多くのアクセスを得た。スマートフォン対応ウェブサイトを開発し、予定通り公開することができた。	B	コンテンツ内容の充実とともに、日々新展開するITツールに積極的に対応し、着実にアクセス数を延伸している。
2452		【京都国立博物館】 (4館共通) 1) 平成知新館(新平常展示館)開館を控えた26年6月に、当館ウェブサイトのリニューアル公開を行った。 ・ウェブサイトにおいて、平成知新館開館に伴う新規コンテンツの集中投入や各種情報の大幅な整理を行ったほか、特別展覧会、各種講座、イベント、教育等のコンテンツも掲載や更新を継続的に実施し、内容の充実に向けた。 ・ウェブサイトにおける博物館概要、刊行物案内などのページも刷新するとともに、研究成果の発信機能を強化した。 ・メールマガジン及びメールマガジン読者特典ブックレットを配信し、親しみやすさの向上等に努めた。(詳しくは処理番号2442を参照)	B	平成知新館開館に合わせてリニューアル公開を通じ、広報強化を実現した。情報発信に関わるマンパワー不足が限界を超えており、今後の課題となる。	A	前年度に対し、190%のアクセス件数向上を達成した。来年度のアクセス数低下に備え、引き続き情報発信の充実を図る。

2453		・平成知新館開館に伴う来館者の混雑に対応するため、これまで特別展会場 の混雑状況を発信してきた「Twitter」の活用を広げるなどの試みを行った。 【奈良国立博物館】 (4館共通) 1) ・「トビックス」の欄を頻繁に更新し、さらにイベント情報欄には文字情報のみならずチラシ画像なども掲載して、より多くの情報を発信することに努めた。 ・特別展および特別陳列を紹介する頁に、主な出展作品の写真付き解説を掲載し、展示構成や作品理解への便宜を図った。特に昨年以上に掲載作品を増やし、より展覧会の理解に資するよう努めた。 ・『奈良国立博物館だより』の最新版をウェブサイト上で閲覧できるよう適宜アップした。 ・「第66回 正倉院展」の会期中、読売新聞大阪本社(特別協力)のウェブサイトと連携して「ただ今の混雑状況」を知らせる小窓を設置した。 ・ホームページから閲覧できる主要作品の写真情報や解説の追加・見直しに努めた。	B	昨年に引き続き、イベント情報等への充実に向けた。	B	順調に成果を上げているため。
2454		【九州国立博物館】 (4館共通) 1) ウェブサイトにおいて特別展、トピック展示、特別公開やイベント等の情報を常に更新し、内容の充実を図った。 ・研究員が展覧会の解説を行う動画の配信を行った。 ・駐車場空き情報の提供を行った。 ・26年5月から、ご利用案内に「団体でのご利用について」を追加し、学校団体等からの問合せに迅速に対応できるように努めた。 ・26年7月から、「画像のご利用について」の項目を追加し、文化財ならびに博物館建物外観等画像の利用に関する問合せに迅速に対応できるように努めた。	B	スペースの都合でチラシに掲載できない情報などもウェブサイトに盛り込み充実を図った。その結果、アクセス件数が前年度を上回った。	B	ウェブサイトアクセス件数の向上を図るため、特別展、トピック展示、特別公開やイベント等の情報を常に更新し、また研究員が展覧会の解説を行う動画の配信など内容の充実を推進している。

定量評価項目		26年度	25年度	目標値	評価
収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数(件)					
東京国立博物館		79	550,305	300(79)	D(B)
京都国立博物館		5,536	2,682	2,000	A
奈良国立博物館		5,154	7,615	3,000	S
九州国立博物館		776	62	500	A

	収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数（件）				
	東京国立博物館	10,720	9,865	6,000	A
	京都国立博物館	4,927	4,525	3,000	A
	奈良国立博物館	5,478	4,648	3,000	A
	九州国立博物館	1,167	1,512	1,000	B
	各博物館発行の広報印刷物発行回数（回）				
	東京国立博物館				
	東京国立博物館ニュースの発行	6	6	6	B
	京都国立博物館				
	博物館だよりの発行	4	4	4	B
	Newsletterの発行	4	3	4	B
奈良国立博物館					
博物館だよりの発行	4	4	4	B	
九州国立博物館					
「九博季情報誌アジアーヂュ」の発行	4	4	4	B	

3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与

【中期目標】博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。

(1) 収蔵品等に関する調査研究成果の発信

【中期目標】収蔵品等に関する調査・研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く博物館関係者の知見の向上に資すること。

【中期計画】

博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。
(1) 収蔵品等に関する調査・研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧会に関わる刊行物などで発表するとともに、こうした刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を行う。

【主な計画上の評価指標】

○各種刊行物等で調査・研究の成果を広く公表すること。
○各種刊行物の電子書籍化、インターネットでの公開を行うこと。

【25年度評価における主な指摘事項】

○インターネットを用いた公開も行われているが、今後は、多言語化、一般向けの分かりやすい成果報告など、なお一層の工夫が望まれる。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
3111	(1) 調査研究の成果の発信 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (東京国立博物館) 1) 東京国立博物館情報アーカイブを運用し「東京国立博物館情報アーカイブ」等、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2) 紀要・図版目録等を刊行する。 3) 法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。 4) 研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回)	(1) 調査研究の成果の発信 【東京国立博物館】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『東京国立博物館文化財修理報告』XVを刊行した。 (東京国立博物館) 1) (東京国立博物館情報アーカイブの詳細は処理番号2411参照)。特別展図録・特集陳列印刷物(リーフレット)12件を発行した。そのうちPDFファイル版5件を東京国立博物館ウェブサイト上に公開することによって研究情報の普及を図った。 2) 『東京国立博物館紀要』50号、『東京国立博物館図版目録 東洋彫刻篇』を刊行した。 3) 『法隆寺献納宝物特別調査概報XXXV 古今目録抄1』を刊行した。 4) 研究誌『MUSEUM』649～654号を刊行した。 ○特別展図録・特集図録を編集した。 ○出版企画委員会6回、『MUSEUM』『紀要』等編集委員会8回を開催し、博物館の出版事業の拡充を図った。	B	刊行の実績値が前年度に比べ高くなっており、その事業も順調に進んだため。	B	博物館における出版刊行事業を通じて、調査研究の成果が十分発信されたため。
3112	(1) 文化財修理報告書を刊行する。 (京都国立博物館)	【京都国立博物館】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『文化財保存修理所修理報告書12号』を刊行した。 (京都国立博物館)	C	平成知新館の開館に合わせて館蔵名品図録『京都国立博物館所	B	一部刊行の遅れている報告書等があるものの、その他展覧会図

3113	<p>1) 平成知新館開館に伴い、『京都国立博物館所蔵名品120選—京（みやこ）へのいざない—』を発行する。</p> <p>2) 研究紀要『学叢』を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイトで公開する。</p> <p>3) 社寺調査報告書等を刊行する。</p> <p>(奈良国立博物館、九州国立博物館)</p> <p>1) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 研究紀要『鹿園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイトで公開する。</p> <p>2) 入場無料ゾーンを利用し、調査研究活動実績をパネル等で公開する。</p>	<p>1) 『京都国立博物館所蔵名品120選 京（みやこ）へのいざない』を発行した。</p> <p>2) 研究紀要『学叢』第36号を刊行した。</p> <p>3) 社寺調査報告書についてはデータ整理に正確さを期すために次年度に刊行することとした。</p> <p>○特別展等の図録を2巻刊行した。</p> <p>【奈良国立博物館】 (奈良国立博物館、九州国立博物館)</p> <p>1) 文化財修理に関する調査研究成果は、研究紀要『鹿園雑集』内に包摂する形で刊行した（27年3月）。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 研究紀要『鹿園雑集』は、前年度刊行予定であった分とあわせ、合併号として刊行した（27年3月）。</p> <p>2) 地下回廊の入場無料ゾーンにおいて、東京文化財研究所との共同研究による仏教美術の光学調査の成果、館蔵品の修理実績等に関するパネル展示を行った(26年9月7日まで)。また、9月9日より同所にて特別企画「正倉院展ポスター昭和22—昭和63」（9月9日～11月30</p>	<p>蔵名品 120 選 京へのいざない』を刊行し、特別展覧会『南山城の古寺巡礼』及び『鳥獣戯画と高山寺』の展覧会図録を編集するなど館蔵品や古社寺の文化財の図録を刊行して研究成果の発信を着実にいった。また研究誌である『学叢』を発行して、学術研究成果を公開した。南山城地域の社寺調査報告書についてはデータ整理中であるため報告書は次年度に刊行する予定である。</p> <p>B 入場無料ゾーンでの研究活動実績公開を複数回にわたり実施することができた。</p>	<p>録・研究紀要などを予定通りに刊行し、中期計画に沿って着実に研究成果の普及を行った。</p> <p>B 展覧会図録等を予定通りに刊行し、中期計画に沿って着実に研究成果の発信を行った。</p>
------	---	---	---	---

3114	<p>(奈良国立博物館、九州国立博物館)</p> <p>1) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。</p> <p>2) 保存修復活動の成果を教育普及事業に反映させる。</p>	<p>日)、仏像写真展「大和の仏たち」（12月2日～27年3月31日）を開催した。</p> <p>○展覧会等図録10冊を刊行し、その中に収蔵品の調査研究成果の一部を収録した。</p> <p>【九州国立博物館】 (奈良国立博物館、九州国立博物館)</p> <p>1) 九州国立博物館トピック展示「大涅槃展」展示図録に修理と科学調査に関する解説を掲載した。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 研究紀要『東風西声』第10号を刊行した。</p> <p>2) ・保存修復活動の成果を反映させた教育普及事業を行った。</p> <p>・九州国立博物館トピック展示「大涅槃展」において、修理と科学調査に関するパネルを展示した。</p>	<p>B 特別展図録・特集陳列等図録11冊を刊行するなど、年度計画を順調に達成している。</p>	<p>B 予定通りに図録を刊行するなど、中期計画に沿って順調に達成している。</p>
		<p style="text-align: center;">定量評価</p> <p>研究誌の刊行回数(回) 東京国立博物館 (MUSEUM)</p>	<p>26 年度</p> <p>25 年度</p>	<p>目標値</p> <p>評定</p>
		6	6	6 B

(2) 海外研究者の招聘

<p>【中期目標】 国内外の博物館関係者及び文化財とその活用に関する専門家と積極的に学術・人物交流等を行い、国際的な博物館の拠点となることを目指すこと。</p>				
<p>【中期計画】</p> <p>(2) 文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。</p>		<p>【主な計画上の評価指標】</p> <p>○国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施すること。</p> <p>○職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関や国際会議等に派遣すること。</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p>		
処理番号	年度計画	主な実績		自己評価
	<p>(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施 (4館共通)</p> <p>1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。(18人：東京6、京都2、奈良6、九州4)</p>	<p>(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施</p>		<p>年度</p> <p>中期</p>

3211	<p>2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。(31人:東京6、京都15、奈良6、九州4)</p> <p>3) 国際的な講演・研究会、シンポジウムを開催する。</p> <p>4) ICOM (国際博物館会議) 大会の日本への招致に向けた活動を促進する。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 学術交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。</p> <p>2) 日中韓国立博物館長会議を開催するとともに、IEO (国際展覧会オーガナイザー会議) 等の国際会議へ参加する。</p>	<p>【東京国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 韓国、中国、アメリカ、イギリス、タイ等より47名の研究者を招聘し、学術交流に寄与した。</p> <p>2) 韓国、中国、アメリカ、イギリス、ドイツ、オーストリア等に延べ18名の研究員を派遣し、学術交流及び展覧会準備・調査の実施、あるいは研究会・国際会議に参加した。</p> <p>3) 国立故宮博物院展関連事業として国際シンポジウムを、「東アジアの華」展の関連事業として記念講演会を開催した。</p> <p>4) 2019年ICOM世界大会誘致の足がかりの一つとして、「米欧ミュージアム専門家交流事業」を開催し、欧米の日本美術担当研究員10名(上記34名のうち)を招聘して、交流を深めた。(26年11月8日～16日)</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1) 韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館、故宮博物院との学術交流協定に基づき、研究員の交流を行うとともに、海外での作品調査や特別展等共同事業の企画・実施準備、国際会議出席などのため海外に研究員を派遣、調査研究及び海外館とのネットワーク構築や交流事業の推進を図った。</p> <p>2) 第8回日中韓国立博物館長会議を開催し、中国国家博物館・韓国国立中央博物館の館長らと交流・情報交換を行い、ネットワークを強化した。(26年9月18日) またIEOに研究員を派遣し、欧米各国を中心とした主要美術館・博物館の展覧会担当責任者との意見交換を実施し、ネットワーク強化を図った。(26年5月5～9日ウィーン)</p>	A	A	<p>外部資金も活用し目標値以上の研究者招聘・派遣を行い目標以上の成果を達成した。今後、対象国がやや偏っていることの改善策を検討したい。</p>	<p>中期計画をかなり上回る成果を達成し、順調に進んでいる。</p>
3212		<p>【京都国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 26年度実績 2名</p> <p>2) 研究交流並びに研修のため研究員を海外へ14人派遣した。</p>	B	B	<p>判定根拠:今年度は新館開館準備に重点を置いたため、海外へ</p>	<p>判定根拠:毎年の国際シンポジウムをほぼ1回開催するととも</p>
3213	<p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館との交流を活発に行う。</p>	<p>3) 「鳥獣戯画を語る」と題した特別シンポジウムを開催(26年11月15日)、第1部については日英同時通訳をつけた。</p> <p>4) ICOM大会招致活動の一環である「米欧ミュージアム専門家交流事業」に協力した。事業の詳細は処理番号3211を参照。</p> <p>5) 国際研究セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」(1回・75人)を開催した。</p> <p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 中国・韓国の研究者等計9名を招聘し、今後の共同調査や展示活動等に関わる実りある情報交換を実施した。</p> <p>2) 職員延べ13名を諸外国に派遣し、文化財に関する情報収集や現地研究者との交流を図った。</p> <p>3) 26年8月5日に韓国の古代古墳に関する国際研究会を開催し、申大坤氏(韓国国立慶州博物館学芸室長)が「天馬塚出土文化財の意義」のタイトルで口頭報告した。(奈良国立博物館)</p> <p>1) 中国上海博物館、中国河南博物院、韓国国立慶州博物館との間で、学術交流協定に基づいて研究員等を派遣し、また招聘して、今後の共同調査や展覧会開催に向けて情報を交換した。</p>	B	B	<p>海外からの研究者招聘、当館からの海外派遣とも充実した内容の実績を上げることができた。</p>	<p>研究者の海外派遣を着実にやっている。課題と対応:今後は、より積極的に海外博物館及び研究者との交流を進めていきたい。</p> <p>学術交流協定に基づく交流が堅調で、招聘及び派遣を継続できている。</p>
3214	<p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 国際交流活動推進へ向けての基盤を整備するとともに学術文化交流協定を締結している</p>	<p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p>	A	B	<p>予算を工夫した結果、目標値を大きく上回る研</p>	<p>一定数の研究者を招聘及び派遣し、国際シンポ</p>

<p>海外博物館等との交流を活発に行う。 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招聘し、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。</p>	<p>1) オランダ、デンマーク等、海外の博物館・美術館等の研究者を35人招聘した。 2) 当機構職員を台湾等、海外の博物館・美術館等に研究交流及び特別展「台北 国立故宫博物院-神品至宝」等のため、82人派遣した。 3) 国際シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味-工芸における復古と革新-」を開催した。(10月25日150人参加) 国際シンポジウム「世界のアリタ-有田焼の伝統と未来へ続く創造性-」を開催した。(3月8日253人参加) (九州国立博物館) 1) 国際交流活動推進へ向けての基盤を整備し、海外博物館等との交流を実施した。(タイ芸術局、韓国国立公州博物館等) 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招聘し、文化財保存に関するセミナーや講演会を実施した。(オランダ7月14日、デンマーク27年1月27日)</p>	<p>研究者招聘ならびに研究者派遣が可能となり、海外研究者との交流を活動的に行うことが出来た。また、シンポジウムについても着実に実施しており、計画通り順調に進んでいる。</p>	<p>ジウム、調査等も計画通り実施することができた。</p>																																																							
	<p style="text-align: center;">定量評価</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th></th> <th>26年度</th> <th>25年度</th> <th>目標値</th> <th>評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>海外研究者招聘(人)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>47</td> <td>21</td> <td>6</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>9</td> <td>9</td> <td>6</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>35</td> <td>16</td> <td>4</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>研究員派遣(人)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>18</td> <td>41</td> <td>6</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>14</td> <td>19</td> <td>15</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>13</td> <td>8</td> <td>6</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>82</td> <td>87</td> <td>4</td> <td>S</td> </tr> </tbody> </table>		26年度	25年度	目標値	評価	海外研究者招聘(人)					東京国立博物館	47	21	6	A	京都国立博物館	2	0	2	B	奈良国立博物館	9	9	6	A	九州国立博物館	35	16	4	S	研究員派遣(人)					東京国立博物館	18	41	6	A	京都国立博物館	14	19	15	C	奈良国立博物館	13	8	6	A	九州国立博物館	82	87	4	S		
	26年度	25年度	目標値	評価																																																						
海外研究者招聘(人)																																																										
東京国立博物館	47	21	6	A																																																						
京都国立博物館	2	0	2	B																																																						
奈良国立博物館	9	9	6	A																																																						
九州国立博物館	35	16	4	S																																																						
研究員派遣(人)																																																										
東京国立博物館	18	41	6	A																																																						
京都国立博物館	14	19	15	C																																																						
奈良国立博物館	13	8	6	A																																																						
九州国立博物館	82	87	4	S																																																						

(3) 博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施

<p>【中期目標】国内外の文化財の保存・修理に関する人材育成に寄与すること。</p>			
<p>【中期計画】 (3) 保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施する。</p>		<p>【主な計画上の評価指標】 ○研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施すること</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p>	
<p>処理番号</p>	<p>年度計画</p>	<p>主な実績</p>	<p>自己評価 年度 中期</p>

<p>3311</p>	<p>(3) 保存修理事業への研修プログラム (4館共通) 1) 保存修理事業者を対象とした研修会を開催するとともに、インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を開催する。</p>	<p>(3) 保存修理事業への研修プログラム</p> <p>【東京国立博物館】 (4館共通) 1) ・特定非営利活動法人文化財保存支援機構(NPO-JCP)が主催する専門家セミナーに当館が共催し、当館を会場として「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ」(26年9月1日～11日の10日間)を開催した。当館は講師・プログラムの選定、及びセミナー会場・修理施設・展示施設の提供を行った。本セミナーの対象は、社会で活動している文化財保存修復専門家及び専門家を指す学生である。内容は、国内外で活躍できる高度な能力を持つ専門家を育成するために、基礎能力の格段の向上を目指すものであり、既に現場で活躍している講師陣による実践セミナーである。受講生は全国から26名が参加した。</p> <p>・レベルⅠの応用編として「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅡ 陸前高田学校」(26年7月28日～8月3日の7日間)を別会場において開催し、受講生は11名であった。</p> <p>・大学院生のインターンシップを2人受け入れ、当館の臨床保存と包括的保存について研修を実施した(26年10月6日～20日)。</p> <p>・東京藝術大学保存科学研究室、日本博物館協会、岩手県立博物館、陸前高田市立博物館、特定非営利活動法人文化財保存支援機構(NPO-JCP)との連携し、大津波被災文化財保存修復連携プロジェクトとして「津波被災文化財の安定化処理に関するワークショップ」(27年1月30日)を開催し、参加者は30名であった。</p>	<p>B</p> <p>当初計画の通り「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠおよびⅡ」、大学院生のインターンシップを実施し、研修生に対して実践的な研修機会と知識の提供が出来た。</p>	<p>B</p> <p>中期計画に基づき、関係機関と連携の上、文化財保存に関する研修を効果的に実施することができた。</p>
<p>3312</p>		<p>【京都国立博物館】 1) 毎月1回文化財保存修理所内工房を当館研究員が巡回し、文化財の修復状況を確認するとともに、修理技術者に指導・助言を行った。また、2ヵ月に1回、修理技術者と当館との定例会議を開催した。(巡回12回・会議6回)</p>	<p>B</p> <p>年度計画に記載した事項については、修理技術者及び博物館関係者に益する内容を実施し、目</p>	<p>B</p> <p>中期計画に記載した所期の目標を順調に達成している。保存修理の意義をより多くの国民に知</p>

3313		<ul style="list-style-type: none"> ・当館開催の特別展覧会において、修理技術者に対する定例の研修会(熟覧)を実施した。(計2回・87人) <ul style="list-style-type: none"> 26年6月9日 「南山城の古寺巡礼」展 (35人) 26年10月20日 「国宝 鳥獣戯画と高山寺」展 (52人) ・文化財修復に関わる大学院生 (1人)のインターンシップ実習 (26年8月18日～9月19日)を実施し、26年12月10日に口頭による報告会を開催し(出席者42人)、報告書を作成した。 ・国内外博物館における保存科学、修復の専門家、あるいは文化庁の主催する「指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー」による文化財保存修理所の視察を受け入れ、情報交換などを行った。(計6回・61人) <ul style="list-style-type: none"> 26年9月2日 国立台湾大学博物館及び京都大学総合博物館 (7人) 26年9月24日 フォルゲン博物館 (2人) 26年10月23日 文化庁 (25人) 26年11月14日 米欧ミュージアム専門家交流事業実行委員会 (20人) 詳細は処理番号3211を参照 26年10月30日 フリーア美術館 (2人) 26年12月16日 韓國學中央研究院蔵書閣 (5人) ・保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会を26年9月5日に実施した。(参加者19人) <p>【奈良国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1)</p> <p>○保存修理事業者を対象とした研修会(計4回・67人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化財保存修理所技術者研修会を1回実施した(27年1月16日)。(41人) ・国内外の保存修復専門家による文化財保存修理所各工房での研修・視察を合計3回受け入れ、各工房技術者との間で情報交換を行った。(計3回・26人) <ul style="list-style-type: none"> ・26年5月15日:インドネシア・ジャカルタ特別州職員による視察・研修(5人) ・26年10月17日:米国・ポールゲッティ美術館支援者による視察・研修(16人) ・27年1月9日:東京文化財研究所新入職員による視察・研修(5人) <p>○一般向け講演会等</p>	<p>標を達成している。</p> <p>B</p> <p>文化財保存修理所の修理技術者研修会を実施し、漆工室工房代表者による報告に基づいた活発な議論を通じて、各工房の技術者及び当館研究員の垣根を越えた研鑽を積むことができた。文化財保存修理所の研修・視察申し込みが例年に比べて少な</p>	<p>ってもらうため、一般向けの講演会の実施を検討したい。</p> <p>B</p> <p>中期計画に沿って、関係機関と連携し研修会等を実施することができた。また、修理技術者研修会などを通じて文化財保存修理所の各工房が垣根を越えた研鑽を積むことで、修理現場における工房同士の協業が増えており、文化財保存修理所全体の</p>
------	--	---	---	---

3314		<ul style="list-style-type: none"> ・文化財保存修理所の概要及び諸活動、修理内容に関する一般向けの講演会を実施(計4回)。 <p>【九州国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を行った。(3回30人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化財保存、I P M普及のための講座・研修を開催した。(計6回145人) 	<p>ったが、今後はインターンシップの受け入れなど修理技術交流の方法を新たに検討していく。</p> <p>B</p> <p>保存科学、修理技術、博物館関係者等がそれぞれ多く参加したことにより、有意義な研修会を開催することができた。</p>	<p>活動の活発化につながっている。また講演会などを通じてそうした活動内容を広く一般に伝えることができた。</p> <p>B</p> <p>中期計画に基づき、保存科学、修理技術及び博物館関係者等の様々な分野の専門家と連携しながら、着実に研修会を実施し、成果をあげている。</p>
------	--	--	---	---

(4) 公私立の博物館等への貸与の推進

【中期目標】国内外の博物館等の展覧事業の活性化を支援するため、収蔵品の貸与を実施すること。						
【中期計画】 (4) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等の要請に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を実施する。			【主な計画上の評価指標】 ○収蔵品の保存状況に配慮した貸与を実施すること			
【25年度評価における主な指摘事項】						
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
3411	<p>(4) 収蔵品の貸与 (4館共通)</p> <p>1) 国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。</p> <p>(東京国立博物館・奈良国立博物館)</p> <p>1) 国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。 (東京国立博物館)</p> <p>1) 長崎歴史文化博物館の平常展示のため、引き</p>	<p>(4) 収蔵品の貸与</p> <p>【東京国立博物館】 (4館共通)</p> <p>1) 国内の博物館等108機関に1,059件の作品を貸与した。 (東京国立博物館・奈良国立博物館)</p>	B	平成館改修に伴う考古資料貸与業務中止により貸与件数は若干減少したが、予	B	中期計画に基づき順調に成果をあげている。

3412	<p>続き長期貸与する。 2) 海外の美術館・博物館等で開催する展覧会へ貸与する（海外交流展出品作品を含む）。</p>	<p>1) 大阪府立近つ飛鳥博物館と協力して考古資料の相互貸借を実施した。 (東京国立博物館) 1) 長崎歴史文化博物館の平常展示のため、年度を越えた長期貸与を実施した。 2) 海外の美術館・博物館等延べ7機関に71件の作品を貸与した。</p> <p>【京都国立博物館】 (4館共通) 1) 82機関に対し582件の収蔵品・寄託品貸与を行った。(うち海外3機関に対し12件) 収蔵品の貸与件数：272件 寄託品の貸与件数：310件 計：582件 ○本年度も継続してウェブサイトにて「貸出作品リスト」の公開を行った。</p>	B	<p>定通り貸与業務を行えた。</p> <p>出品申請に対しては、貸与先の環境、作品の状態を確認したうえで、積極的に対応した。</p>	B	<p>中期計画に沿って、着実に貸与業務を実施することができた。</p>
3413	<p>(東京国立博物館・奈良国立博物館) 1) 国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。</p>	<p>【奈良国立博物館】 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 収蔵品と寄託品を、国内外合わせて47の機関に、計149件貸し出した。 (東京国立博物館・奈良国立博物館) 1) 平泉町（平泉文化遺産センター）、島根県立八雲立つ風土記の丘資料館、涌谷町（涌谷町立わかや万葉の里歴史館）、色麻町（色麻町立農業伝習館）、五條市（市立五条文化博物館）の計5館との間で相互貸借事業を実施した。</p>	A	<p>計画どおり、貸与申請に対して慎重に、かつ積極的に対応できたため。貸与件数についても例年と同様、100件を超える貸与を行った。なお本年は考古相互貸借も5機関と実施することで、広く文化財の公開に寄与できた。</p>	A	<p>中期計画に基づき、貸与申請に対して慎重に、かつ可能な限り全てに応えるよう対処し、文化財の公開活用に貢献することができ、中期計画は順調に進んでいる。</p>
3414		<p>【九州国立博物館】 (4館共通) 1) 国内 27 機関・海外 3 機関に収蔵品及び寄託品計 101 件を貸与した。 (機関数は延べ数。東京国立博物館からの長期管理換品を含む。)</p>	B	<p>公私立の博物館等の要請に対し、適切に貸与を実施した。</p>	B	<p>中期計画に沿って、適切に貸与を実施し、公私立博物館の展示等の充実に寄与</p>

						<p>することができた。</p>
--	--	--	--	--	--	------------------

(5) 公私立博物館等に対する援助・助言

<p>【中期目標】 全国の博物館等の運営に対する援助、助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めること。</p>	
<p>【中期計画】 (5) 公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等を行う。</p>	<p>【主な計画上の評価指標】 ○公私立博物館等に対する援助・助言を行うこと。</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p>

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
3511	<p>(5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進 (4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。</p> <p>(東京国立博物館) 1) 新規貸与館に対する環境調査は、東京文化財研究所と協力して指導助言を行う。</p>	<p>(5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進</p> <p>【東京国立博物館】 (4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、119件の援助・助言を行った。 ・文化庁や地方公共団体等の文化財関係事業にて協力(21件) ・公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言(48件) ・講演会やセミナー等における講演等での協力(7件) ・作品の展示・保存環境についての調査・指導(20件) ・博物館の管理運営にかかわる助言(23件) (東京国立博物館) 1) 新規貸与館に対する環境調査を実施し、東京文化財研究所と協力して指導助言を行った。</p>	B	<p>件数、内容ともに適切に公私立博物館・美術館等に対する援助・助言を実施することができた。</p>	B	<p>中期計画に基づき、援助・助言を着実に行うことにより、我が国における博物館の中核としての機能の強化がなされた。</p>
3512		<p>(4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、29件の援助・助言を行った。 ・文化財の展示、修理にかかる指導助言 (12件) ・文化財の調査に関する指導助言 (9件) ・講演会、セミナー等における講演等での協力 (7件)</p>	C	<p>26年度は平成知新館開館に向けた準備業務に重点を置いたため、人的資源を集中せざるを得</p>	C	<p>26年度は平成知新館開館に向けた準備業務に重点を置いたため、人的資源を集中せざるを得</p>

3513	(奈良国立博物館) 1) 福岡市美術館、静岡市立美術館、岡崎市美術館で開催する「法隆寺展－聖徳太子と平和への祈り－」(主催:各開催館、法隆寺、読売新聞社)に学術協力する。	・地方公共団体の文化財保護審議会等会議にて協力 (1件) 【奈良国立博物館】 (4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対する援助・助言は、総計58件を実施した。 ・文化財の展示にかかる援助と助言 (13件) ・文化財の調査、保存、修理にかかる援助と助言 (14件) ・講演会やセミナー等における講演等での協力 (8件) ・文化庁や地方公共団体、その他各種団体等の文化財関係事業への協力 (17件) ・博物館等の運営にかかわる援助と助言 (6件) (奈良国立博物館) 1) 福岡市美術館、静岡市立美術館、岡崎市美術館で開催された「法隆寺展－聖徳太子と平和への祈り－」(主催:各開催館、法隆寺、読売新聞社)に学術協力した。	B	なかったことにより、対応件数が減少した。次年度は解消される見込みである。 援助・助言の件数、内容とも、十分な実績を上げることができた。	B	なかったことにより、対応件数が減少した。中期計画最終年度となる次年度は実績が上向き見込みである。 23～26年度を通じて、内容とともに援助・助言件数は堅調に推移している。
3514	(九州国立博物館) 1) 地域の自治体と連携し、公私立博物館・美術館等職員のための古文書保存に関する専門講座を開催する。 2) 地域の自治体と連携し、公私立博物館・美術館等職員・ボランティアのための I P M (総合的有害生物管理)に関する専門講座を開催する。	【九州国立博物館】 (4館共通) 1) 公私立博物館等で開催された研究会及び講演会において指導・助言を行った。(57件) ・文化財の調査に係る助言 (14件) ・文化財の保存修理にかかる援助、助言 (12件) ・作品の展示及び運営等についての指導、助言 (19件) ・講演会、セミナー等における講演 (12件) (九州国立博物館) 1) 「古文書保存基礎講座」を実施した。 2) 文化財関係者及び市民等に向けての研修会「ミュージアム I P M 支援者研修」基礎編・技術編・実践編を実施した。	B	計画通り、順調に進んでいる。	B	講座及び研修会等を実施しており、計画を順調に達成している。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

【中期目標】我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤

の形成に寄与すること。

(1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

【中期目標】文化財の各分野に関する基礎的・体系的な調査・研究や、総合的な視点に基づく文化財の調査・研究手法の開発等を推進することにより、国及び地方公共団体における文化財保護施策の企画立案及び文化財の評価等に係る業務の基盤形成に寄与すること。	【中期計画】 貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。 (1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組み、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。 ①我が国の美術を中心とする有形文化財及びそれに係わる諸外国の文化財に関し調査・研究を実施する。 ②我が国の歴史、文化の究明及び理解の促進等を図るため、歴史資料・書跡資料等に関する調査・研究を実施する。 ③歴史的建造物の保存・活用の促進等を図るため、建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究を実施する。 ④無形文化遺産の伝承・公開の基盤の形成等を図るため、無形文化財、無形民俗文化財、文化財保存技術に関する調査・研究を実施する。 ⑤文化財の保存に加え、地域振興・国際的動向の観点も含めた活用の促進等を図るため、記念物に関する調査・研究を実施する。 ⑥古代日本の都城の解明等を図るため、平城宮跡、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に関する調査・研究を実施する。 ⑦文化的景観の文化財としての概念の定着と保存・活用の促進等を図るため、文化的景観に関する調査・研究を実施する。 ⑧遺物及び遺構の保存・活用の促進等を図るため、埋蔵文化財に関する調査・研究を実施する。	【主な計画上の評価指標】(1)～(5)共通 ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定すること。 ○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施すること。また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置等が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施すること。 ○調査研究の成果により我が国の文化財保護政策に寄与するとともに、学術雑誌等への論文の掲載、学会、研究会での発表、データベースの追加等により定量的観点からも調査研究の成果を確保すること。
	【25年度評価における主な指摘事項】	

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
	(1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究を推進することにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。			

4111	① 我が国の美術を中心とする有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。 ア 他機関との連携を図りつつ、文化財情報の公開・活用のための、より望ましい手法等の研究を行う。	①ーア 文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究 一昨年度一般公開を開始した「東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』」の明治期全ての分の公開を開始した。『日本美術画報』をはじめとする貴重書の公開準備を始めた。また、「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に各種図書情報を移行し、各部署が所蔵する図書情報の一元化と一体運用のための準備を進めた。アーカイブズを主題とする各種研究会を開催し、アーカイブズのあり方について検討した。	B	B
4112	イ 日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤を整備、確立する。併せて、その基盤を礎としながら国内外の研究交流を推進し、成果を広く一般に公開する。	①ーイ 文化財の資料学的研究 (1) 東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業。 ・美術史研究のためのコンテンツづくりとして、平安時代在銘彫刻作品の銘文データの入力と編年目録（年表）の作成を行った。 (2) (1)の東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業の成果の一端を企画情報部研究会（26年8月6日）で口頭発表を行った。 (3) (2)の成果（企画情報部研究会での口頭発表）の内容を『美術研究』414号、同415号に掲載した。 ・東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作の『記事珠』ウェブサイト上での公開に向けてのパイロット版を作成した。 ・第48回オープンレクチャー「モノ/イメージとの対話」（26年10月31日）で講演を行った。	B	B
4113	ウ 日本を含む東アジア諸地域における近現代美術の研究資料の収集、整理、調査研究を行うとともに、その交流を明らかにする有効な視点と調査研究方法の開発を目指す。また、多様化する我が国の現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を作成する。	①ーウ 近現代美術に関する交流史的研究	B	B
4114	エ 美術や文化財についてのより深い理解を形成するため、彫刻や絵画を中心に、その表現・技法・材料の問題に対して基礎的な情報を収集・整理・蓄積するとともに、関連諸分野と連携した多角的な調査研究を行う。	①ーエ 美術の表現・技法・材料に関する多角的な研究 (1) 鶴見大学文学部文化財学科と共同で朝鮮螺鈿漆器の光学調査を実施した。 ・デジタル情報公開を目的とする故秋山光和氏調査資料の整理作業を引き続き実施した。 ・研究所が所蔵するガラス乾板のデジタル化作業を引き続き実施した。 ・龍谷ミュージアムにおいて、光照寺所蔵一流相承系図（絵系図）ほかの調査を行った。 ・東京国立博物館において、国宝孔雀明王像の調査を実施した。 ・愛知県陶磁美術館にて朝鮮螺鈿漆器の調査を実施した。 ・その他、鶴見大学・目白漆芸研究所との研究協議及び意見交換、また新たなデータベース作成に関する所内研究協議を実施した。 ・東京国立博物館所蔵国宝普賢菩薩像について高精細画像をもとに東京国立博物館との研究会を行った。 (2) 浦添市美術館で開催された「第5回琉球の漆文化と科学」において、琉球螺鈿漆器技術・トルコ螺鈿・パレスチナ螺鈿についてポスター発表を行い、これまでの調査成果について報告した。 ・企画情報部12月研究会において、南蛮漆器についての編年案を発表した。 ・企画情報部12月研究会において、東京国立博物館所蔵国宝普賢菩薩像について発表した。 (3) デジタル化したガラス乾板については文字データなどの整理作業を行い順次ウェブサイト公開した。 ・彩色DBについては長年の作成・校訂作業を終了し、ウェブサイトに公開した。	B	B
4121	② 日本の歴史、文化の源流等の実態を探り、それらを記録した資料の保存活用に資するために、近畿を中心とする古寺社や旧家等が所蔵してきた歴史資料・書跡資料等に関する原本調査、記録作成を体系的に実施するとともに、公表に向けて整理検討を行う。	② 近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究 仁和寺所蔵の書跡資料の調査成果として、『仁和寺史料 目録編【稿】Ⅱ』を公刊した。ここには、仁和寺御経藏聖教の第31函～第50函の目録を収録した。仁和寺は、中世・近世には法親王が門跡として入寺する、最高の格式を持った真言宗寺院であり、その聖教は、御流聖教と呼ばれて尊ばれてきた。その内容がはじめて世に出るものであり、学問的価値の高いものである。また、三仏寺が所蔵する勝手権現像についての調査成果を公表した。勝手権現とは、修験道では蔵王権現・子守権現とともに三所権現と称された重要な存在だが、明治の神仏分離により、実態がよく分かっていない点が多い。今回の調査により、中世に2軀の勝手権現像が、甲冑像・着衣像という、異なる姿で製作されている例が明らかになった。	B	B
4131	③ 我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に関する基礎データの収集、未指定建造物の調査、古代建築の今後の保存と復原に資するための調査・研究を行い、整理が終了したものより順次公表を行うとともに、伝統的建造物群及びその保存・活用に関する調査・研究を推進し、伝統的建造物群の保存を行っている各地への協力を行う。また、アジア地域における文化財建造物の保存・修復及び伝統的建造物群の保存・活用について、関係各国に対し協力をを行う。	③ 我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究 文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料「ガラス乾板」について画像のデジタルデータ化により、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する再検証作業を「法隆寺金堂古材調査」を継続的に実施した。このほか、受託事業により、秋田県横手市増田町の歴史的建造物の調査を行った。	B	B

4141	④ - 1 無形文化財の伝承実態に関する基礎的な調査研究及び資料の収集、記録作成を行い、その成果の一部を公開学術講座として発表する。具体的には伝統音楽・伝統芸能で用いる楽器、能楽の文献資料、未調査の音声・映像資料の整理と古い媒体による音声・映像資料の再生及びデジタルアーカイブ化、工芸技術に関する技法書及び工芸技術記録等を対象に調査を行い、能楽及び講談等の記録作成を行う。	④-1 無形文化財の保存・活用に関する調査研究 (1) 古典芸能（能楽）の作曲法等について調査を行い、その成果を公表した。 (2) 染織技術を支える原材料や道具等について調査を行い、その成果を公表した。 (3) 無形文化遺産部が所蔵する音声資料の整理を行い、その成果を公表した。 (4) 上演機会が著しく減少している伝承芸能について実演記録を作成した。	B	B
4142	④ - 2 我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。また、これまでに研究所で収集・保管している記録・資料の整理を行い、必要に応じて媒体転換等の措置を講ずる。さらに、無形文化遺産の記録やその所在情報を継続的に収集し、その情報の整理・公開に努める。	④-2 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 民俗芸能・風俗慣習・民俗技術の伝承実態・伝承組織について現地調査と資料収集を行った。特に東北の被災地域における無形民俗文化財の現状調査は昨年度に引き続き重点的に行った。 調査の成果は、無形文化遺産の民俗学的解明に貢献し、また震災関連では把握されていない情報の集積に役立った。 また、無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議した。特に本年度は被災地における無形文化遺産の継承を考えるために、移転・移住と無形文化遺産についてテーマとして取り上げ、関係者間の協議やネットワーク形成を図った。その成果は報告書にまとめ、関係者及び関係機関等に配布した。 さらに、無形文化遺産情報ネットワーク協議会も開催し、本年度は文化財の防災に関する点からも情報収集と関係者間の協議・ネットワーク形成を図った。	B	B
4143	④ - 3 日本と関連の深いアジア諸国等との間において研究員交流や無形文化遺産関連調査を行うなど、無形文化遺産分野における研究交流事業を実施する。	④-3 無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集 韓国国立無形遺産院との交流事業において、23年度に調印した合意書（当時の韓国側の組織名は韓国国立文化財研究所）に基づき、研究員の相互派遣を内容とする研究交流を実施した。また関係する国際会議・シンポジウム等へ参加し、海外研究者への助言や調査協力を通して、無形文化遺産分野における国際的情報収集及び情報提供を行った。	B	B
4151	⑤ 我が国の記念物に関し、以下の調査・研究を実施する。 ア 遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料の収集・調査・整理等を行うとともに、遺跡等の保存・活用に関する一体的な研究を推進し、個々の状況に応じた適切な管理・整備等に資する。また、過年	⑤ -ア 我が国の記念物に関する調査・研究（遺跡等整備） 「史跡等の整備・活用の長期的な展開」を主題として、遺跡整備及び関連する分野の取組に関する情報収集を行うとともに、遺跡整備及び関連する分野の代表的な事例に関する発表及び総合討議からなる研究会を開催した。また、過年度の成果について、『計画の意義と方法』[平成25年度遺跡等マネジメント研究会（第3回）報告書]を刊行・配布するなど、その普及等を行った。	B	B

	度開催した研究会の成果の取りまとめ及び公表を行うとともに、遺跡等のマネジメントに関する研究会を開催する。			
4152	イ 庭園史に関する文献調査・内外での現地調査等を行い、研究会を開催するとともに、日本庭園に関する基礎的資料のデータベース化を進める。また、現存する庭園及びその保護に関する調査・研究を行う。 さらに、これまで取り組んで来た庭園に関する公開情報の増補改訂を行うとともに、所蔵資料の整理を進める。	⑤ -イ 我が国の記念物に関する調査・研究（庭園） 「平成26年度庭園の歴史に関する研究会」を開催し、報告書をまとめた。この研究会では、「戦国時代の城館の庭園」をテーマに、建築史学・美術史学・考古学等の研究者と共に、学際的な議論を行った。戦国時代の城館に関する遺構は、発掘調査によって近年も検出事例が相次ぐ一方、その空間構成に関する研究は十分に進展していないのが現状で、本研究会での学際的な議論は、中世庭園史研究の進展に寄与しただけでなく、検出遺構の解釈等の埋蔵文化財の調査研究に資する成果となった。また、奈良市における庭園の悉皆的調査では、寺院の庭園を中心に現地調査を行い、奈良市内に現存する寺院庭園の全体像を把握することができた。	B	B
4153	ウ 不動産文化財等に関連する各種研究成果について、米国コロンビア大学との研究交流のもとに成果発表を行う。	⑤-ウ 我が国の記念物に関する調査・研究（国際研究交流） 米国・コロンビア大学において、日本の不動産文化財に係る講演2件を実施した。	B	B
4161-1	⑥ 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財建造物に関する基礎的調査研究を実施する。 ア 古代都城の解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施するとともに、古代官衙・集落遺跡に関する研究会、古代瓦に関する研究会を実施し、報告書を刊行する。	⑥-ア-1 平城京右京一条二坊一坪・二条二坊四坪・一条南大路の発掘調査 平城京右京一条二坊四坪及び二条二坊一坪にあたる地域の発掘調査を実施し、多大な成果を挙げた。 良好に遺存する平城京の条坊遺構（一条南大路南北両側溝）を検出した。 大規模な土木工事による平城京造営過程等を明らかにすることができた。 宅地内の遺構や、宅地を区画する築地痕跡などを確認した。 ・調査研究成果の公表を行った。 ウェブサイトにて「奈文研本庁舎発掘だより」を1~2週間に1度公開した。調査の進捗に応じて記者発表も行った。	B	B
4161-2		⑥-ア-2 古代官衙・集落遺跡等に関する研究会の実施、報告書の刊行 (1) 第18回古代官衙・集落研究会「宮都・官衙の土器(官衙・集落と土器1)」を開催。 古代官衙・官衙出土土器の様相の地域間比較や、考古学・文献史学等の分野横断的な検討を行った。 古代官衙・官衙出土土器と在地集落出土土器の様相の明瞭な差異が確認され、その意義について議論を深めた。	B	B

		各地域における研究手法の違いなどを明らかにし、今後の調査・研究における課題を共有した。 (2)『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』(報告編・資料編)①の刊行 昨年度開催した第17回研究会の報告書を刊行し、研究成果の公開を行った。		
4161-3		⑥-ア-3 古代瓦に関する研究会の実施、報告書の刊行 (1)第15回古代瓦研究会シンポジウム「8世紀の瓦づくり IV-平城宮式軒瓦の展開 2 6282-6721系-」を開催 平城宮式軒瓦の主体となる6282-6721型式について、平城宮・京での出土状況、各地における当該型式採用の経緯、時期、製作技法など多岐にわたる検討・議論を行った。 奈良時代後半に主流となる平城宮式の瓦が、平城宮・京でどのように使用され、それらが各地へどのように展開していくかを検討した。 (2)シンポジウムの開催にあたり、発表要旨集を作成した。	B	B
4161-4		⑥-ア-4 藤原宮跡の発掘調査(大極殿院) ・藤原宮大極殿院の発掘調査(飛鳥・藤原第182次)を実施した。 ・調査の結果、藤原宮の中核部において、藤原宮の時代を中心とする前後の時期にわたる遺構変遷を明らかにすることができた。 ・発掘調査で得た新知見より、今後の調査計画を明確にすることができた。	B	B
4161-5		⑥-ア-5 藤原宮跡の発掘調査(東方官衙北地区) ・藤原宮東方官衙北地区の発掘調査(飛鳥藤原第183次)を実施した。 ・調査の結果、藤原宮の官衙地区で初の事例となる礎石建物や、床束をもつ大型掘立柱建物など、格式高い建物を検出し、官衙地区の建物配置に重要な新知見を得た。また、条坊道路や建物・塀など、藤原宮造営直前から造営期の遺構も多数確認し、この時期の複雑な遺構変遷を明らかにした。古墳時代を含む、さらに古い時期の遺構の存在も把握した。 ・藤原宮の構造や成立過程の解明に寄与する多数の成果があがった。	B	B
4161-6		⑥-ア-6 飛鳥地域発掘調査 掘立柱建物5棟、掘立柱塀1基、土坑3基、溝状土坑1基などを検出した。檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世初頭の二時期に建物等が建立されたという従前の調査成果を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開することがあきらかになった。	B	B
4162-1		⑥-イ-1 平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等 (1)本年度の発掘調査出土遺物・検出遺構について、整理・分析及び研究、図面作成・写真撮影等の基礎作業を行った。 (2)昨年度以前の出土遺物・検出遺構に関する継続的な整理・分析研究・調査を行った。 研究を進展させ報告書作成に備えるとともに、出土文化財の保全に万全を期した。また、出土遺物の科学的分析・保存処理を行った。	B	B
4162-2	イ 出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復元的研究を総合的・多角的に実施し、整理が終了したものより順次公表を行う。	(3)出版物等により、調査成果の公表を行った。 ⑥-イ-2 飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等 ・本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、成果の一部を公表した。 ・前年度までの発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類、木簡などの再調査・再整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の再整理・再検討作業を実施し、成果の一部を公表した。	B	B
4163	ウ 飛鳥時代の壁画古墳についての調査研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、出土遺物を中心とした資料の調査を実施する。また、飛鳥時代木造建築遺物の研究として、山田寺等の飛鳥・藤原京跡内寺院の出土部材の研究を行う。	⑥-ウ 東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究 (1)キトラ古墳、高松塚古墳壁画に関する研究を継続した。 (2)飛鳥寺塔心礎出土品を含む飛鳥寺跡発掘調査出土品の再整理を継続した。 (3)川原寺裏山出土塑像の再整理を実施した。 (4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像の非破壊分析を実施した。 (5)過去に実施した和鏡に関する蛍光X線分析のデータを整理した。 (6)山田寺跡出土部材の計測調査を継続した。	B	B
4164	エ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、日本の古代都城及び北魏洛陽城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究、中国の生産遺跡(陶磁器窯跡及び生産品)に関する河南省文物考古研究所との共同研究、遼西地域の都城に関する遼寧省文物考古研究所との共同研究、日韓古代文化の形成と発展過程に関する韓国国立文化財研究所との共同研究等を、協定に基づいて実施する。また、整理が終了したものより順次公表を行う。	⑥-エ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力 (1)中国社会科学院との共同発掘調査成果の整理と次期共同研究への準備を行う。 (2)遼西地域東晋十六国期都城文化関連遺跡・遺物の調査と調査研究報告書を公刊する。 (3)鞏義市黄冶唐三彩窯跡等出土品の共同研究を実施し、成果を公刊する。 (4)日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究と発掘調査交流を、韓国国立文化財研究所と行う。	B	B
4171	⑦ 文化的景観及びその保護に関する基礎的応用的な調査研究を推進し、諸外国との比較のもとに、我が国の文化的景観保護に関する情報の収集・検討等を行う。また、過年度開催した研究会の成果の取りまとめ及び公表を行うとともに、これまでの成果を踏まえつつ、文化的景観の学術及び保護に資する検討会を主催し、文化的景観の概念及び調査・計画手法等の体系化に取り組む。	⑦ 文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究 文化的景観及びその保存・活用に関する調査・研究の一環として、「文化的景観学」検討会を開催して、文化的景観に関する体系化に関する検討を進めたほか、文化的景観の現地調査等を行い、論文等を通じて成果を報告した。また、昨年度の研究会報告書及び『World Heritage Papers 26』日本語版を刊行した。	B	B

4181	⑧ 我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査・研究を実施する。 ア 全国の遺跡に関する資料収集及び分析に有効な指標や手法についての研究を進め、その成果をデータベース化して順次公開する。	⑧ーア 遺跡データベースの作成と公開 官衙関係遺跡・集落・宮都等の建物データについて全国的に網羅して作成した資料集をもとに、報告書『長舎と官衙の建物配置』を刊行した。また、官衙・寺院関係遺跡及び井戸遺構に関するデータベースを作成し、官衙・寺院データベースの北陸地方から関東地方の一部までについて新たに公開した。	B	B
4182	イ 出土遺物等の材質構造調査を行い、劣化状態に関する基礎データを集積する。また、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査を実施し、埋蔵中に生じる遺物の劣化現象に関して、環境が及ぼす影響の基礎データを集積する。	⑧ーイ 出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査 (1) 標準試料のラムンスペクトルを集積するとともに、顔料、ガラス、石製品、紙資料のラムンスペクトルを取得した。 (2) 遺跡から出土した大量の玉類のX線CR撮影を実施することにより、材質と内部構造を明らかにした。 (3) 三内丸山遺跡出土の漆製品について、漆使用の有無をFT-IR法により明らかにした。また、赤色塗膜には酸化鉄を主成分とする赤色顔料ヘマタイト(Fe ₂ O ₃)の使用が明らかになった。 (4) 古墳石室における埋蔵環境を再現した模擬石室で金属製遺物の暴露試験を開始し、埋蔵環境が金属製品の腐食に与える影響の解明に取り組んだ。 (5) 「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」をテーマとした研究集会を開催した。	B	B
4183	ウ 平城宮跡等をフィールドとして、遺構における水分移動及び溶質移動に関する計測と数値解析を行い、遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集する。	⑧ーウ 遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集 ・土遺構の露出展示保存を実施している平城宮跡遺構展示館を研究対象として、外界気象条件や覆屋内温熱環境、析出物の種類や分布、水質に関する実測調査を行うとともに、土中と覆屋内空気における熱、水分及び酸素、溶質の移動を考慮した同時移動解析を行った。 ・現在、石室保護施設を建設中のガランドヤ古墳では、石室内の環境の変化について調査を行うとともに、換気や熱源の運用方法について検討した。さらに、同じ日田市に所在する穴観音古墳と法恩寺山3号墳の2基の装飾古墳においても、墳丘直上の外界気象条件と石室内温熱環境に関する実測調査を行い、ガランドヤ古墳と併せて封土の状態や墳丘表面の被覆状況が石室内温熱環境に及ぼす影響について検討した。 ・塩の析出による劣化が喫緊の課題となっている大分市元町石仏では、塩析出による劣化の抑制を試みた。あわせて、季節毎に析出している塩の種類と分布、地下水の水質と覆屋内の温熱環境に関する調査を実施し、塩析出の要因について検討した。	B	B

(2) 文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進

【中期目標】文化財の研究に関する調査手法の拡充と新たな技術開発を推進すること。

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(2) 文化財の研究に関する新たな調査手法の研究・開発の推進 文化財の調査手法に関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。 ①文化財の現状及び経年変化等の記録や解析に応用するため、デジタル画像の形成方法等について研究・開発を実施する。 ②遺跡調査の質的向上及び作業の効率化等を図るため、遺跡の調査手法に関する研究・開発を実施する。 ③木造文化財の年代及び産地の特定等を図るため、年輪年代の調査手法に関する研究・開発を実施する。 ④過去の生業活動の解明等を図るため、動植物遺存体等の調査手法に関する研究・開発を実施する。	

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
4211	(2) 文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進 文化財の調査手法に関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。 ① 高精細デジタル撮影により、文化財が本来有する多様な情報を目的に応じて正確・詳細に視覚化するとともに、その公開を目指して、調査・研究を行う。	① 文化財デジタル画像形成に関する調査研究 ・宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「春日権現験記絵」第7・14巻の光学調査を実施した。 ・奈良国立博物館と研究協議会を開催した。 ・泉屋博古館分館において黒田清輝作「菊花と西洋婦人」の全図・近赤外線撮影を実施した。 ・飯田市美術館において菱田春草作「菊慈童」の全図撮影を実施した。 ・熊本県立美術館において、永青文庫寄託菱田春草作「落葉」「黒き猫」の全図撮影を実施した。 ・永青文庫において洋人奏楽図屏風の撮影を実施した。 ・東京国立近代美術館所蔵菱田春草作「早春」の全図撮影を実施した。 ・東京国立近代美術館所蔵岸田劉生作「古屋君の肖像」「壺の上に林檎が載っている」全図・近赤外線撮影を実施した。 ・ポーランド、プロツワフ国立博物館所蔵、秋野蒔絵硯箱の全図・部分撮影を実施した。 ・徳川記念財団所蔵蒔絵長持の全図・部分撮影を実施した。 ・平等院の依頼を受け、扉絵の修理に伴う撮影を実施した。	B	B

		<ul style="list-style-type: none"> ・この他、修復を行っている日本銀行貴賓室染織品、修復作業状況 国内各地の伝統保存修復技術の記録撮影を行った。 ・奈良博との共同研究成果について、報告書内に論考として公表した。 ・報告書の発刊の他、データは画像処理を行った上で、記憶媒体に記録して保存している。 		
4221	② 埋蔵文化財の調査における新たな手法の開発・導入と応用に関する研究を行う。特に、情報取得手段としての遺跡探査と遺構・遺物の計測、それらの成果を公開・活用する方法について重点的に研究を進める。	② 文化財の測量・探査等に関する研究 (1) 三次元レーザーキャナーによる文化財計測の精緻化と迅速化を更に進め、応用研究を進めた。 (2) SfM（複数画像から撮影位置と方向を復元する技術）/MVS（前述の複数画像を利用した三次元形状計測データ生成技術）の実用化と精度検証を達成し、実践に移した。 (3) UAV（無人飛行艇）をプラットフォームとした各種遺跡調査システムを試行した。 (4) アレイ式中レーダー・多チャンネル式電磁探査機・磁気探査機の試験を行い、必要な機器の開発を進めた。 (5) 発掘調査記録の迅速化及び精緻化を目的とした簡便な手法の検討を重ねた。 (6) 窯業生産資料の広域編年と流通に関連する研究を推進した。 (7) 各地方公共団体等の依頼により、計測及び探査を実施した。	B	B
4231	③ 出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財の年輪年代調査を実施し、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資する。とりわけ、奈良文化財研究所で開発、実用化したマイクロフォーカスX線CTを用いた調査手法は貴重な文化財の非破壊調査に有効であるため、調査対象の拡充と活用を図り、これらの研究成果を公表する。	③ 文化財の測量・探査等に関する研究 考古学・建築史・美術史といった多分野にわたる22件の木造文化財を対象とした年輪年代調査及び樹種同定調査を行った。また、デバイスの交換により高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスX線CT装置を用いて、同装置による調査対象拡大に向けた非破壊検査を行った。そして、これらの調査・研究成果の一部を論文等、学会等において発表した。	B	B
4241	④ 動植物遺存体による環境考古学的研究を継続的に実施する。また、各種計測機器、マイクロスコープを活用して出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。さらに、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行い、東アジア、環太平洋世界の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。	④ 動植物遺存体による環境考古学的研究 震災復興事業に伴う整理作業や報告書作成に対する支援を行うとともに、幅広い地域や時代の動植物遺存体の分析を進め、その研究成果を学会で発表した。また、一般向けの講演のほか、環境考古学に関わる展示にも協力するなどの社会貢献を行った。ほかに、研究の基礎となる標本を継続的に収集・作製した。	B	B

(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進

【中期目標】 最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査・研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査・研究を通じて、文化財の保存・修復に係る技術・技法や材料の開発・評価等を推進し、文化財の保存や修復の質的向上に寄与すること。				
【中期計画】 (3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進 最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する以下の調査・研究に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。 ① 大規模燻蒸に替わるカビ対策のシステム化等を図るため、文化財における生物被害の予防と対策に関する調査・研究を実施する。 ② 文化財の状態の安定化等を図るため、文化財の保存環境に関する調査・研究を実施する。 ③ 文化財の材質分析及び劣化診断の向上等を図るため、計測手法に関する調査・研究を実施する。 ④ 屋外文化財の修復材料・技法に関する研究及び文化財の自然災害による被害軽減のため必要な調査・研究を実施する。 ⑤ 文化財に用いられた伝統的な技法及び合成樹脂などの修復材料に関する研究を行い、成果を文化財修復や人材育成に活用する。 ⑥ 近代文化遺産の保存のための修復材料及び技法の開発評価を行い、成果を保存修復に活用するとともに、海外研究機関との共同研究を推進する。		【主な計画上の評価指標】		
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
4311	(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進 最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査・研究としての課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。 ① 博物館、美術館、図書館などの屋内環境におけるカビの予防、対策のみならず、寺社等の歴史的建造物や古墳環境などの屋外に近い、環境管理が難しい場所での制御方法についても検討を行う。	① 文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究 (1) 環境制御が難しい古墳環境において浮遊菌、付着菌、浮遊粒子数の調査を継続的に実施し、除菌清掃のための管理基準を策定した。 (2) 空調がない寺社などの現場で、文化財保存環境の浮遊菌、付着菌、文化財害虫棲息状況を調査し、対策に向けた基礎資料とした。 (3) 歴史的木造建造物の生物劣化要因として、木材成分を分解する木材害虫あるいはその腸管微生物に由来する酵素について調査した。 (4) 処理中にはカビの発生を抑制し殺虫処理が行える低酸素濃度処理について、常識的な温度条件で	B	B

		殺虫処理ができる最短期間を検討した。 (5) カナダ保存研究所から研究者を招聘し、研究交流を実施した。		
4321	② 保存環境を考慮した文化財の展示・収蔵施設の省エネ化の研究及び環境データやシミュレーション技術を用いた文化財の保存環境改善のための研究を推進する。	② 文化財の保存環境の研究 (1) 1970年代に建てられた美術館の展示ケース内の温湿度分布と壁面温度の実測と解析を行った。 (2) テスト用実大展示ケースを用いたガス濃度実測結果とシミュレーションとの整合性の検討を行った。 (3) 研究成果を速やかに学会等で発表し、研究会を開催し公開した。 (4) これらの結果を、国指定文化財公開のための環境調査や館内環境改善のための助言に活用した。	B	B
4331	③ 文化財の材質分析及び劣化診断を目的とした計測手法に関する調査研究を進める。 ア その場合分析を思考した小型化半方機器の精度向上を行うとともに、これまで開発・導入を図った可搬型機器を活用して絵画等の彩色材料調査及び金属製文化財等の材質・劣化状態調査を推進する。	③-ア 文化財の材質及び劣化調査法に関する研究 (1) 持ち運びが可能な小型機器によるその場合分析の適用範囲拡大についての研究を進めた。 (2) 同時に、研究室内での精密機器による分析の高度化についての研究を推進した。特に、本年度は鎌倉〜江戸期絵画の彩色材料調査を積極的に進めるとともに、工芸品・金属製品等の材料・構造調査を行った。 (3) 科学的調査データの蓄積と解析を目的に、これまでに実施した絵画や金属製品等に関するデータ解析を進め、論文投稿・学会発表を行うとともに、初期洋風画に関する調査報告書2冊を刊行した。	B	B
4332	イ ミリ波イメージング及びテラヘルツ分光イメージングにより文化財を対象とした測定に必要なデータを収集するための基礎実験を行う。さらに、文化財に用いられている材料のテラヘルツ分光スペクトルの収集を行う。	③-イ ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等 サブミリ波イメージング(テラヘルツ分光イメージング)により漆器の塗装構造に関する非破壊調査を行った。新規に導入予定のメーカプロトタイプの特ラヘルツイメージング装置の測定試験を実施し、文化財への適用性を検討した。	B	B
4341	④ 石造・木質文化財を対象に、周辺環境等の劣化要因の究明及び修復材料・技術に関する研究を行う。また、石造文化財及び美術工芸品の災害対策に関する基礎的調査を行う。さらに、被災文化財に関して、被災状況に合わせた保存・修復方法の研究を行う。	④-1 周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究 (1) 石造文化財では、出島の旧石倉(長崎市)において砂岩の劣化機構の解明と周辺環境の影響に関する調査、幸橋(平戸市)において既に修復された物件の保存状態に関する追跡調査などを実施した。 (2) 木造建造物では加賀市内神社(中嶋神社、稲荷神社)において材質の違いによる覆屋内環境と本体の保存状態の違いについて調査を継続した。 (3) 25年度までに得られた成果について論文及び学会発表を行った。	B	B
4342		④-2 文化財の防災計画に関する研究 (1) 東日本大震災被災文化財の保全に関する研究として、石巻文化センター被災文化財仮設収蔵庫として使用している旧石巻市立湊第二小学校の環境調査を継続した。 (2) 文化財の地震対策に関する研究として、石灯籠の地震対策に関する評価を実寸大のものを使って行った。 (3) 25年度に実施した石灯籠縮小模型の振動台実験結果について、国際会議で発表し、成果の公表に	B	B

		努めた。		
4351	⑤ 文化財の真正性を考慮した修復に寄与するために、伝統的修復技術及び材料の調査・分析を行う。また、これまで使用されてきた修復材料の追跡調査を行うことにより、それらの評価を行う。さらに、修復に今後使用されることが想定される材料について、それを文化財に適切に使用するための調査・研究を行う。	⑤-1 文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究 本年度は中期計画の4年目に当たり、劣化が著しい考古資料等の漆文化財や、伝統的な文化財建造物の塗装材料である漆塗装や乾性油塗料等の過去の塗装彩色修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。また、第8回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会を開催するとともに、第2冊目となるこれまでの研究会内容を纏めたブックレット形式の報告書を作成した。	B	B
4352		⑤-2 文化財修復材料の適用に関する調査研究 (1) 絵画修復材料に関する化学分析、クリーニング方法の検討実験を行った。 (2) 建造物等修理材料の現地曝露試験とその評価を開始した。 (3) 工芸品の調査として、染織品及び漆芸品についての調査・分析をし、評価方法について検討した。	B	B
4361	⑥ 近代文化遺産の特徴であるレンガ・石・コンクリート・各種金属・各種合成樹脂・各種繊維等の多種多様な材料の劣化状況や保存手法に関する調査・研究を行う。写真や図面等紙資料類等の保存修復に関する研究を進める。史跡の構成要素となっている建造物や建造物の保存理念や活用手法に関する研究を進める。ドイツ技術博物館との共同研究及び欧米あるいは東南アジアでの保存や修復事例調査を行う。	⑥ 近代の文化遺産の保存修復に関する研究 (1) 洋紙：明治時代になってから急速に普及した洋紙及び没食子インクで記された文章の保存と修復に関して、各種書類の保存と修復に関して、調査研究を行った。 (2) 屋外展示物：屋外展示されている大型建造物、鉄道車両や航空機等の文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外曝露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査した。 (3) 建造物・構造物：佐渡金銀山遺跡、長崎県端島(軍艦島)、山口県萩市や静岡県伊豆の国市の反射炉等、史跡指定地に建つ建造物や構造物の保存や修復に関する研究を行い、地盤工学会にて発表を行った。 (4) 報告書：前年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。	B	B

(4) 国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施

【中期目標】	国や地方公共団体の要請に応じて、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性の高い文化財の保存・修復に係る実践的な調査・研究を実施すること。
【中期計画】	<p>(4) 高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。</p>
	【主な計画上の評価指標】

処理 番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
4411	(4) 高松塚古墳・キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。 ① 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。	①-1 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力 高松塚古墳・キトラ古墳壁画共にクリーニングに効果期待される酵素群の利用に関する研究を継続実施し、キトラ古墳壁画では墓室壁面からの取り外しによって分かれている漆喰の再構成のための修復材料の検討を行った。修理施設の生物・温湿度環境の安定化のための調査を実施した。劣化原因調査で採取された両壁画由来の微生物株について整理と公的機関への寄託についての準備を行った。高松塚古墳壁画の色彩について、奈良文化財研究所と共同で調査を行った。	B	B
4412		①-2 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力 文化庁が進める国宝高松塚古墳壁画の保存・活用に関する事業が円滑かつ適正に遂行するよう協力した。キトラ古墳では、史跡整備にむけて、仮設保護覆屋解体作業の立会調査や解体後の記録作業を実施した。また、古墳の保存、活用、整備の方向性を検討するにあたり、技術的な支援・協力を行った。	B	B
4421	② 国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。	② 国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的に協力 本年度は檜隈寺跡の北の丘陵地から、史跡檜隈寺跡の東側に沿って南に延び、塔跡の東側に至る範囲の工事立会（A区）、檜隈寺跡の北の丘陵地の西斜面の工事立会（B区）の2カ所において調査を実施した。 A区では一部、古代の遺構面を検出した。B区では、8世紀後半から平安時代頃の瓦窯を1基検出した。	B	B

(5) 有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

【中期目標】有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等に必要な調査・研究を計画的に実施すること。				
【中期計画】		【主な計画上の評価指標】		
(5) 有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究 有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次世代への継承及び我が国文化の向上に寄与する。 ①適切な作品の収集・修理計画を立て、分かりやすい効果的な展示など、有形文化財の保存と活用を促進するため、所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査を行う。 ②日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究を行う。 ③平安時代から江戸時代までの京都文化を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究を行う。 ④仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究を行う。 ⑤アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究を行う。 ⑥有形文化財の保存と活用の向上を図るため、有形文化財の保存環境・保存修復に関する調査・研究を行う。 ⑦有形文化財の次世代への継承に寄与するため、文化財を活用した効果的な展示や、歴史・伝統文化の理解促進に資する教育活動等に関する調査・研究を行う。				
処理 番号	年度計画	主な実績	自己評価	
	(5) 有形文化財の保存と活用を推進し、次世代に継承して、我が国の文化の向上に資するため、その収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究を進める。		年度	中期
4511-1	① 収蔵品・寄託品等の基礎的かつ総合的な調査・研究 (東京国立博物館) 1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究を行う。	① 収蔵品・寄託品等の基礎的かつ総合的な調査・研究 【東京国立博物館】 1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、併せて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。	B	B
4511-2	2) 特別調査「法隆寺献納宝物」(第36次)を行う。	2) 特別調査法隆寺献納宝物(第36次)「聖徳太子伝私記(古今目録抄)」(第1年度)重要文化財「聖徳太子伝私記(古今目録抄)」を調査し、『法隆寺献納宝物特別調査概報36』「古今目録抄 上巻表」を刊行した。	B	B
4511-3	3) 特別調査「書跡」第12回を行う。	3) 特別調査「書跡」第12回 本年度は当館寄託受入となる「大日本古写経」に収められた写経断簡類について、作品の名称、制作年代、形状、界線等について確認した。断簡は原典推定をし、可能な限り『大正大藏經』の本文と	B	B

		の照合を行った。合わせて原装丁の推測、使用された料紙の紙質の検討も合わせて行った。今回の調査対象について記載文字を可能な限り解読し書誌情報を収集した。また対象全件について分量を計測した。なお、本年度はスケジュールの都合により調査会場が狭隘であったため、高精細画像の撮影は実施しなかった。		
4511-4	4) 特別調査「工芸」第6回を行う。	4) 特別調査「工芸」第6回 東京国立博物館の金工・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。今後の列品の公開に知見を反映し、展示内容を向上できる。金工調査では、今年度は和鏡を取り上げ、4館の研究者やアソシエイトフェローが揃って調査が実施され、特に古代に多く作例がみられる八稜鏡について活発な議論が加えられた。漆工調査では昨年に引き続き、香道具の中でも不定形な様相を示す香箆笥をとりあげ、記述、計測、デジタルカメラ撮影、デジタル顕微鏡撮影の調査を行った。香道具の形式、加飾技法や材料の多様性を示す調査結果が得られた。	B	B
4511-5	5) 特別調査「彫刻」第4回を行う。	5) 特別調査「彫刻」第4回 (1)文化庁所蔵の彫刻作品の調査を実施した。 (2)作品の形状、構造、保存状態などの調査結果を踏まえ、機構内4博物館への貸与作品を決定した。なお、平成27年度以降の各館の展示等へ活用する予定である。	B	B
4511-6	6) 油彩画の材料・技法に関する共同調査を継続して行う。	6) 油彩画の材料・技法に関する共同調査 平成20年11月から開始した。本調査は、3年間の調査期間の締結を更新し、さらなる調査を進めている(更新2年目)。本年度調査が終了作品は、4点である。	B	B
4511-7	7) 漆塗籠棺残片の保存に関する共同研究を行う。	7) 漆塗籠棺残片の保存に関する共同研究 修理仕様の策定を行い、修理前の事前調査を開始した。	B	B
4511-8	8) 東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査を行う。	8) 東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査 平成24年度に高精細デジタル画像撮影を行った国宝「普賢菩薩像A-1」について東博・東文研両機関研究者による検討会を開催し、撮影画像をもとに「普賢菩薩像」に用いられた技法を詳細に観察、検討した結果、従来絵具で表されていると思われていた文様の一部が凹線によるものであることや、着衣の白く光る照暈が従来の認識とは逆の構造によって作られていることなど、これまで認識されてこなかった細部の技巧についての知見を深めることができ、今後の平安仏画の美的表現の研究・公開に資するに足る重要な資料を得た。また、来年度も継続的に調査と検討を行うために国宝「孔雀明王像A-11529」の高精細デジタル画像撮影を行った。	A	A
4511-9	9) 創立150年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究を行う。	9) 創立150年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究 ・館内各所から収集した、館史関係の文書記録・刊行物類を整理して目録を作成し、今後の館史編纂の利用に供することができるようにした。 ・資料の適切な保存を図るための措置を順次講じた。	B	B
4511-10	10) 板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究を行う。	10) 板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究(科学研究費補助金) 伝来資料について、1,566点(4,027カット)の撮影を終了するとともに、並行して下絵と関連する原作品の確認など知見の整理、絵画資料の調査、古文書の翻刻を行った。また、スタッフによる研究会と下絵作品の名称を決定するための画題研究会を開いた。本年度は、東京周辺と四国地方、海外所在の板谷派ならびに本家筋に当たる住吉派作品の調査を行った。	A	A

4511-11	11) 中世聖徳太子絵伝の図像展開に関する調査研究を行う。	11) 中世聖徳太子絵伝の図像展開に関する調査研究(科学研究費補助金) ①太子絵伝、あるいは関連する中世絵画について、博物館所蔵の作品、寄託品、及び特別展に出品された作品等の調査を実施することができた。 ②作品基礎データ、細部拡大写真などのデータ集積を行うことができた。 ③作品解説の充実、解説パネルの作成等、より効果的な展示に反映することができた。	B	C
4511-12	12) 模写資料における書の内容・鑑賞に関する基礎的研究を行う。	12) 模写資料における書の内容・鑑賞に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金) (1)東京国立博物館所蔵の模写資料の調査・撮影を進めるとともに、個人蔵の模写資料の調査・撮影を行った。また、宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所、九州国立博物館、東山御文庫(御物)の関連史料を調査した。 (2)明治時代の東京国立博物館の模写活動や、明治～大正時代の田中親美による模写活動の一端を明らかにすることができた。また、平安～鎌倉時代の古写本の中にも本研究に関連性の高い資料を見つけたことができた。 (3)特集「国宝再現 田中親美と模写の世界」(平成館企画展示室、10/15-12/7)に、東京国立博物館の模写活動を模本によって示すとともに、田中親美の未公開資料の展示とパネル解説、配布物(リーフレット)によってその模写活動を紹介した。また、成果を論文等で発表した。	B	B
4511-13	13) 博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流に関する基礎的研究を行う。	13) 博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (1) 本研究に関連した館史資料である『列品録』の項目一覧表を作成し、関係資料の積読を進めた。 これにより、東博とオーストラリアとの列品交換などの初期の交流の経緯について解明するとともに、いくつかの知見を得た。 (2) 館史資料のうち、『重要雑録』の高精細デジタル撮影を行い、『動物録』の撮影にも着手した。 (3) 本研究に関連した列品を調査した。 (4) 内外の関係機関に対し、聞き取り調査を行った。 これにより、明治初年における諸外の日本美術の収蔵状況や、東博に外国からもたらされた物品の国立科学博物館での収蔵状況を知った。 (5) 現地調査として、国内調査(国立科学博物館筑波研究施設)、海外調査(オーストラリア)を行った。 (6) メンバーと研究協力者による勉強会を開催した。	B	B
4511-14		14) 宮崎県西都原古墳群出土資料基礎調査(共同調査) ① 宮崎県立西都原考古博物館へ列品の長期貸与を行い、西都原古墳群発掘調査100周年記念特別展に協力した。 ② 宮崎県立西都原考古博物館で、双方の担当で列品に関する共同研究会を開催した。 ③ 年度末に、共同研究の研究成果報告書を作成した。	B	B
4511-15		15) 「家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究」(学術研究助成基金助成金)	B	B

	科学研究費補助金C・B(2000～2002・2005～2007年度)による調査・研究成果に基づき、各地の主要古墳出土埴輪群の分析結果の検討と研究会を実施し、本年度は次のような活動および成果があった。 ①東京都・大阪府・福岡県・石川県で共同研究会を開催した。 ②大阪府・石川県で埴輪の調査を実施した。 ③年度末に、研究成果報告書を作成した。		
4511-16	16) 縄文時代における浅鉢形土器の研究(学術研究助成基金助成金) (1) 遺跡出土浅鉢のデータベース化: 文献調査 ・以下の対象地域に関する文献(発掘調査報告書等)の精査と文献複写作業 (対象地域: 埼玉県、新潟県、福島県、群馬県の一部) (2) 浅鉢形土器の資料調査(写真撮影・観察・計測等) ・東北地方の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。 ・群馬県内及び茨城県内出土の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。 ・長野県東信地方出土の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。	B	B
4511-17	17) 博物館における文化財の情報資源化に関する研究(科学研究費補助金) ① 文化財に関連する目録類、図書、各種文書など基礎資料のリストを検討し、その全体像を明らかにした。さらに、分類法の検討を行った。 ② 文化財と関連資料について、それぞれのデジタル化によって、相互の関連付けが可能となった。 ③ 研究の成果を統合データベースに反映するための準備を行った。	B	B
4511-18	18) 古墳時代の農具研究(科学研究補助金) (1) 雄山閣より単著『古墳時代の農具研究』(総数285頁、26年8月25日)を刊行した。 (2) 本研究成果を、アメリカや韓国、日本で開催された学会や研究会にて紹介した。	B	B
4511-19	19) 古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究(科学研究費補助金) (1) 染織作品館内調査等: 東京国立博物館・法隆寺宝物館所蔵の染織品(以下、法隆寺裂)のうち、列品(登録されている染織品)と未整理品(未登録の染織品)の調査と写真撮影を行い、資料の蓄積を行った。これらは点数が多いため、次年度以降も継続して行う予定である。これらの成果として、博物館において特集陳列「甦った飛鳥・奈良染織の美」を開催して、リーフレットを制作し、列品解説も行った。また、文化財保存修復学会においてポスター発表を行った。さらに、法隆寺裂の献納経緯と技法・文様等について外部講演を行った。昨年調査を行った正倉院所在の法隆寺裂についての詳細を『正倉院紀要』において論文発表した。 (2) 考古作品外部調査: 金鈴塚古墳出土品(千葉県・木更津市郷土博物館のすず)、瓢塚古墳出土品(千葉県成田市・房総のむら風土記の丘資料館)、石原稲荷山古墳等出土品(群馬県・高崎市観音塚資料館)、マケン堀横穴墓出土品(鳥取県西伯郡南部町教育委員会)、土塩冶横穴墓出土品(島根県埋蔵文化財センター)、九州国立博物館開催の「古代日本と百済の交流」展、島内地下式横穴墓出土品(宮崎県・えびの市歴史資料館)、入西石塚古墳出土品(埼玉県・坂戸市立歴史民俗資料館)。上記、各出土品については調査及び写真撮影を行い資料の収集等を行った。	B	B

4511-20	20) 法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究(学術研究助成基金助成金) (1) 韓国での考古遺物調査。法隆寺献納宝物の一部と推定される唐櫃の調査。 (2) 韓国における調査の結果、武寧王陵出土品な陵山里古墳群出土品、また弥勒寺西石塔出土品など、百済の遺物に著しい共通点が見られることを確認した。唐櫃調査の結果、同作が法隆寺献納宝物の一部であり、かつては現在宝物館で保管されている上代裂を納めていた可能性が高くなった。 (3) 韓国での考古遺物調査の成果として、今後献納宝物との比較研究に関する論文を執筆予定。また現在本研究の一環として上代裂の修理報告書の定期的な発表を目指しており、その第一回目の論文中に調査した唐櫃の概要と上代裂との関係について執筆した(『MUSEUM』655号掲載予定)。	B	C
4511-21	多数募り構成される仏教尊像に関する調査研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (1) 奈良国立博物館「鎌倉の仏像」展出品作品調査 ・京都国立博物館「南山城の古寺巡礼」展出品作品調査を行った。 ・広島にて鞆の浦・三原の寺院調査を行った。 ・宮城にて双林寺の調査を行った。 (2) 「鎌倉の仏像」においては鎌倉国宝館所蔵および寄託の作品を熟覧でき、貴重な資料が収集できた。 ・「南山城の古寺巡礼」展においては出品作品の細部写真撮影など、貴重な資料が収集できた。 ・鞆の浦の安国寺、三原の棲真寺において所蔵作品を調査撮影し、資料の収集を行った。 ・双林寺において、所蔵作品の詳細を調査することができた。 (3) 「鎌倉の仏像」展は昨年度の当科研による調査の成果に基づく。開催中に出品作品の調査も行い新たな知見を得ることができた。 ・「南山城の古寺巡礼」の図録、講演会、シンポジウムに際して科研の成果を反映した。 ・鞆の浦安国寺では納入品の詳細なデータを収集することができた。その成果は井上一稔氏によって公表される予定である。 ・双林寺調査で得られた情報は「みちのくの仏像」展の展示及び図録に反映した。	B	B
4511-22	22) 海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究(科学研究費補助金) (1) ・米国、ドイツ、マレーシア、シンガポールにおいて1939年以降に開催された日本古美術展関係および1940-1945年の南方接収博物館関係の資料調査を実施するとともに、日本美術を扱った展覧会及び関連事業を視察した。国内では、東京国立博物館内文化庁分室及び京都国立博物館保管の海外日本古美術展関係資料の調査を実施し、写真資料のデジタル化を行った。 ・Webサイトや各館年報、関係資料を調査するとともに、関係者への聞き取り調査を行った。 (2) ・海外訪問調査により、関係文献資料・展示風景写真等関係資料を入手、写真撮影によりデジタル化した。国内では、東京国立博物館内文化庁分室保存の1995-2003年開催の文化庁海外日本古美術展12展覧会について、会場写真(紙焼き)、各展覧会の記録冊子のデータ化を完了、閲覧可能とした。また、京都国立博物館主催の海外展について、面談調査を実施、記録写真を入手した。その他、展覧会を主催した新聞社、寺院など博物館以外の関係者との面談調査により、海外での展覧会の企画から運営の実態について知見を得た。	B	B

		<ul style="list-style-type: none"> ・1936年ボストンにおける「日本古美術展」から2013年までに海外で開催された日本古美術展の暫定リストを作成した。 (3)・国内外訪問調査により、現地ではしか得られない記事のクリッピングや関連資料を収集、海外展に当館がどう関わったかの一端を見ることができ、東京国立博物館150年史編纂に向けての基礎資料収集が進んだ。 ・現地の反応や当時の解説及び現状の日本美術展示についての知見を、館内展示等外国人向け解説の英語版・中国語版に生かすことができた。 ・面談調査を通じ、日本美術展示を担当する学芸員との交流を深め、今後の国際交流事業の企画に向けての足がかりとなった。 		
4511-23		23) 能狂言面の美術史的アプローチによる基礎的調査研究 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) 研究開始年度である本年度は、本研究の目標のひとつである能狂言面の調査方法の確立のための試行と検証を兼ね、東京国立博物館所蔵の能面の調査を中心にすすめた。調査の結果、調査方法は概ね決定することができた。	B	B
4511-24		24) 日本における「美術」概念の再構築—語彙と理論にまたがる総合的研究 (科学研究補助金) ・日本の「美術」を語る体系全体とそれに従う美術作品記述の手法の再検討と、日本美術を捉え方とあるべき記述法に関する現代美術、工芸及び古美術という分野別研究。 ・アジアでの漢字文化圏における「美術」について、各地域での状況とその、さらに脱植民地化の中での状況などの研究。 ・同時代美術の動向と美術館の状況、さらに「美術」概念の再構築として翻訳とテクノロジーという面からの研究。 これらを国際シンポジウムを含む研究会の開催し、研究成果の共有と問題点について検討を行っている。	B	B
4511-25		25) 描いた女性たちに関する研究—桃山時代から明治・大正期まで (科学研究費補助金) 前年度に引き続き、実践女子大学はじめ他機関の科研メンバーと協力し、9月1日～4日、福岡市で近世の女性画家の作品の調査を行い、これまで注目されていなかった作品の情報を収集するとともに、女性画家の伝記等に関するデータ収集に協力し、外部研究者と連携した質の高い研究を行うことができた。当該科研は今年度で終了するが、次年度以降も、外部との協力により当館所蔵の女性画家資料に対する研究を進めるよう準備を行った。	B	B
4511-26		26) 武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) 古墳時代中期における武装具集積の典型資料の調査および研究会を実施し、今年度は次のような研究成果があった。 <ol style="list-style-type: none"> ① 東京国立博物館所蔵資料を整理して、基礎情報を提示するために実測調査を進めた。 ② 調査情報を基礎として、「武装具の集積現象」を比較検討し、研究を推進した。 ③ 平成26年度平成館改修に伴う考古展示室計画に反映させた。 	B	B
4511-27		27) 三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獸鏡の総合的研究 (科学研究費補助金) <ol style="list-style-type: none"> ① 既存の調査成果の調査データ・写真の整理・分析を行なった。 ② 既存の主要古墳出土銅鏡・埴輪等の三次元データ分析と画像処理を行い、今後の活用に向けて 	B	B

		データ分析の方法の整備を図った。 ③ 研究成果を発表・公開した。		
4511-28		28) 木彫像の樹種識別技術の高度化 (科学研究費補助金) (1) 伐採後、数百年以上経過した木材中に残存するDNAの質と量について評価した。 (2) 京都東寺の北総門に用いられていた伐採後400年以上経過したスギ材にも一定の量と質のDNAが残存することが分かった。 (3) 伐採後数百年以上経過した木材からもDNAが得られることから、木彫像や建築物などから微量でも木材の試料が得られる場合、それを分析することで、樹種に関してのより詳細な情報が得られる可能性があり、文化財の製作された背景などに関して、科学的に考察できる可能性がある。	B	B
4511-29		29) 作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究 (科学研究費補助金) (1) 博物館、寺院及び古跡に赴き、現地調査を行った。 (2) 実際の作品を熟覧のうえ、写真撮影を行った。 (3) 東洋館8室での展示、及び学会発表、論文等で成果を公表することができた。	B	B
4511-30		30) 在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信 (科学研究費補助金) (1) ・イギリス・大英博物館、大英図書館において、日本仏教美術の調査を実施した。 ・在欧博物館所蔵の日本仏教美術のデータベース公開について、本研究担当で今後の方針など検討会を行った。 ・米欧ミュージアム専門家交流シンポジウムと同事業のワークショップにおいて、米欧ミュージアム担当者と意見交換を行った。 (2) ・イギリス・大英博物館、大英図書館が所蔵する日本仏教美術作品の確認が取れた。 ・在欧博物館所蔵の日本仏教美術データベースの内容を充実させることができた。 ・米欧ミュージアム担当者と意見交換において、新たな調査対象を見つけることができた。 (3) ・米欧ミュージアム専門家交流シンポジウムにて、これまでの成果を口頭発表した。	B	B
4512-1	(京都国立博物館)	【京都国立博物館】 1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究 館蔵品、寄託品、それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりえる文化財と、その周辺領域に関して、美術史、歴史学、考古学、博物館学、保存科学等の各見地から調査研究を実施し、各種学会等・学術誌等でその成果を発表した。	B	B
4512-2		2) 調点資料としての典籍に関する調査研究 これまでの調査を踏まえて、客員研究員の宇都宮啓吾が東京文化財研究所で開催された国際研修「紙の保存と修復」において、講師として「古写経と調点」(東京文化財研究所 International Course on Conservation of Japanese Paper 2014 2014.9.9)の講演を行った。また、秋の特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」に展示予定の高山寺所蔵『仏説弥勒上生経』『金剛頂瑜伽経』などに付された調点の調査を行い、展示に反映させた。	B	B
4512-3		3) 特別調査「彫刻」(5-①) ・特別展「南山城の古寺巡礼」出品作品の調査、撮影を行った。	B	B

4512-4-1	4) 出土・伝世古陶磁に関する調査研究を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・京都国立博物館収蔵の大型作品の調査、撮影を行った。 ・京都市・妙心寺の仏像調査を行い、江戸時代の銘記を複数見出した。 ・木津川市篤瀧寺、常念寺、滋賀県彦根市・高宮寺の予備調査を行い、平安時代、鎌倉時代の像を見出した。 ・河内長野市金剛寺の大黒天立像の調査により制作年代を記した銘記を発見した。 ・京都市・知恩寺の仏像調査を行った。 ・収蔵品等のX線CT調査を行った。 		
4512-5	5) 特別調査「漆工」を行う。	<p>4) 出土・伝世古陶磁に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福井市愛宕坂茶道美術館の所蔵品調査を行い、28件の調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。 ・徳島城博物館の寄贈品について調査を行い、29件の調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。 <p>5) 特別調査「漆工」（科学研究費補助金）</p> <p>昨年度までの成果の一部を当館研究紀要に発表することができた。昨年度にひきつづき、イギリスのV&A美術館とフランスパリ装飾美術館の収蔵庫にて漆器を調査し、イギリスではV&A美術館の家具修復担当者、フランスではルーヴル美術館の学芸員やオルセー美術館の名誉学芸員、またパリの家具修復家なども日本製漆器の受容のありようについてさまざまな意見交換も行った。パリ装飾美術館からは、先方のコレクションを用いた展覧会を企画しないかとの提案も受けた。1月にはV&A美術館のジュリア・ハット氏とパリ装飾美術館のアンス・フォレ・キャリリエ氏を当館へ招聘し、特にフォレ・キャリリエ氏とは「日仏漆芸交流を学ぶ」と題した国際研究セミナーを実現した。</p>	B	B
4513-1	(奈良国立博物館) 1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究を行う。	<p>【奈良国立博物館】</p> <p>1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究</p> <p>収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後に収集・展示の対象となりうる文化財について、研究員それぞれの専門分野の立場から調査を実施し、その調査に基づく研究の成果は、展示会場におけるパネル解説や、各種刊行物に掲載の論文、館内外での講座等に反映された。</p>	B	B
4513-2	2) 復元模写制作に伴う仏教絵画の光学的調査と研究を行う。	<p>2) 復元模写制作に伴う仏教絵画の光学的調査と研究</p> <p>(1) 文化庁の復元模写事業に伴い、国宝信貴山縁起絵巻及び重要文化財板絵神像の光学的調査で得られたデータに基づいて研究会を実施した。</p> <p>(2) ポリライトを用いた可視光励起による蛍光画像の撮影などの光学的調査を通じて得られたデータにより、有機色料の有無など制作当初の彩色の状態を復元的に把握することができた。</p> <p>(3) 光学的調査で得られたデータを基に当初の彩色の姿について検討を重ね、その所見を復元模写制作に反映させた。</p>	B	B
	3) 平安時代の大般若経を総合的に調査し、歴史資料としての情報資源化を図る。	<p>3) 平安時代の大般若経を総合的に調査し、歴史資料としての情報資源化を図る(学術研究助成基金助成金)</p> <p>・昨年度に引き続き、「安倍小水麻呂願経」と呼ばれる貞観13年(871)の願文を持つ大般若経を、巻頭から巻末まで全巻開いて調査し、写真撮影した。その結果、慈光寺所蔵の大般若経は全て調査を終え、調書整理とデータ化に着手した(27年3月完了予定)。調査及びデータ整理の途上において、この大般若経は巻による筆跡の相違が顕著であることが判明した。</p>	B	B

4513-4	4) 仏教工芸の総合的調査を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・本研究課題の一環として海住山寺所蔵の大般若経(11世紀)、及び長弓寺所蔵の大般若経(12世紀)を調査したが、これは当館で来年度開催の特別展「まぼろしの久能寺経に出会う 平安古経展」の準備にも繋がるものである。 	B	B
4513-5	5) 古墳・古墓出土品の調査と研究を行う。	<p>4) 仏教工芸の総合的調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別展「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」の事前調査を行い、同寺所蔵の仏教工芸品を調査した。 ・収蔵する仏教工芸品に関して光学調査を含む調査を行った。 ・修理中の国宝・釈迦如来説法図(館蔵)について、東京国立博物館、京都国立博物館、九州国立博物館、正倉院事務所等の研究員を招き、研究会を行った。 ・特別展「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」では初出陳の工芸品を展示することができ、工芸史研究に新たな資料を提供できた。 ・同展に出陳され、後に当館の所蔵となった能作性宝珠(能作性塔付属)に舍利らしき納入品が発見され、中世の宝珠信仰の研究に新たな資料を提供できた。 <p>5) 古墳・古墓出土品の調査と研究</p> <p>五條猫塚古墳出土品の各遺物の実測図や写真数枚をとりまとめ、出土地点や遺物の種類ごとに分けて序列化し、報告書の作成をすすめた。写真図版編、報告編、考察編の三冊の構成をとることにして、写真図版編を完成させ、報告編も編集を終了した。当年度内に二冊の印刷を終え、残りの考察編のとりまとめを進め、次年度にて三冊揃いの報告書を公表する計画である。また、この報告書の作成により、各遺物の現況が明らかになったため、錆や破損の著しい鉄製品を抽出し随時修理に回すことが容易になった。</p>	B	B
4514-1	(九州国立博物館) 1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究を行う。	<p>【九州国立博物館】</p> <p>1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財と、それらに関連する資料等について、美術史学・歴史学・考古学・博物館学・保存科学等の多様な見地から調査研究を行い、その成果を様々な展示に反映させ、また学会・研究会ならびに学術雑誌・書籍等でも発表・公開した。 ・様々な研究成果を以下のような展覧会に反映させた。 <p>特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」(26年4月15日～6月8日)</p> <p>特別展「クレーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」(26年7月8日～8月31日)</p> <p>特別展「武寧王時代の東アジア」：韓国・国立公州博物館開催(26年9月23日～11月23日)</p> <p>特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」(26年10月7日～11月30日)</p> <p>特別展「日本発掘 —発掘された日本列島2014」(27年1月1日～3月1日)</p> <p>特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」(27年1月1日～3月1日)</p> <p>トピック展示「館蔵近世絵画名品展」(前期：26年2月25日～4月6日、後期：26年4月8日～5月18日)</p> <p>特別公開 国宝 琉球王国尚書関係資料修理完成記念特別公開(26年4月8日～5月18日)</p> <p>特別公開 国宝「西光寺梵鐘」(26年4月22日～8月31日)</p>	B	B

		<p>特別公開「解剖書に見る東洋と西洋—ファブリカからターヘル・アナトミアへ—」(26年5月20日～7月13日)</p> <p>トピック展示「中国を旅した禅僧の足跡」(26年5月27日～7月6日)</p> <p>関連展示 小中学生からの考古学(26年7月1日～9月23日)</p> <p>特別公開「海を越えた再会—クリーブランド美術館の仲間たち—」(26年7月15日～8月24日)</p> <p>トピック展示「全国高等学校考古名品展」(26年7月15日～9月23日)</p> <p>特集展示「『鳴りもの』の世界—九州ゆかりの梵音具を中心に—」(26年11月18日～27年2月15日)</p> <p>新春特別公開「徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」(27年1月1日～1月25日)</p> <p>トピック展示「大涅槃展」(27年1月14日～2月15日)</p>		
4514-2	2) X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析を行う。	<p>2) X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析</p> <p>(1) 泉屋博古館の所蔵品を中心に中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積すると共にX線CT、3Dデジタル、3Dプリンター等の科学調査機器を用いて、調査研究を行った</p> <p>(2) 本研究成果として、中国国内の研究者に公開するために、中国科学院自然科学史研究所と協力して研究報告書を作成した。</p> <p>(3) 調査研究の成果として、中国古代青銅器の構造・技法研究を非接触・非破壊で解明することができた。作品の安全を第一とする博物館における新しい研究方法として世界でも最初の研究成果である。また、中国古代青銅器の高い製作技術をパネルで紹介することができた。</p>	B	B
4514-3	3) 日本中世の工芸、特に茶道具に関する調査研究を行う。	<p>3) 日本の中世の工芸、特に茶道具に関する調査研究</p> <p>芦屋鋳物師が製作した鋳造作品について、地元自治体文化財担当者や関連施設研究員の協力を得ながら三次元実測、X線CTスキャン調査を実施し、芦屋鋳物師に特徴的な制作技法と構造を確認することができた。その成果は特集展示「『鳴りもの』の世界—九州ゆかりの梵音具(ほんおんぐ)を中心に—」で公開した。</p>	B	B
4514-4	4) 日本中世における仏涅槃図の基礎的研究を行う。	<p>4) 日本中世における仏涅槃図の基礎的研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本中世の涅槃図を中心に作品調査を実施した。 ・事前調査により、日本中世を中心にアジアにおける涅槃図の図像的、様式の展開を見通すことができた。展覧会開催前後には、写真撮影(赤外線撮影を含む)や詳細な調査を行い、作品に関する基礎データを集積した。 ・調査の成果として、トピック展示(特集陳列)「大涅槃展」を開催した。アジア全域に広がった涅槃図及び涅槃図の展開をわかりやすく展示した。 	B	B
4521-1-1	<p>② アジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究(東京国立博物館における調査研究)</p> <p>1) 特別展等の開催に伴う調査研究を行う。</p>	<p>② アジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究【東京国立博物館】</p> <p>1)-1 特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前の作品調査に基づき、各作品に最も適した梱包を検討し、安全かつスムーズに輸送を行うことができた。 	A	S

4521-1-2		<ul style="list-style-type: none"> ・前年度からの作品調査の蓄積に基づき、皇帝コレクションの意味を確認するとともに、その特性を分かりやすく図録及び展示に反映することができた。 ・展覧会開催中も、内外の研究者を招いたシンポジウムを開催することで、国立故宮博物院所蔵品に対するより深い認識を得ることができた。 <p>1)-2 2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」に関する調査研究</p> <p>(1) 中国国家博物館、韓国国立中央博物館の所蔵品を調査して作品選定を行うことで、それぞれの館の所蔵品の特性を活かしながら、それぞれの国の陶磁の展開を特徴的に示すことができた。</p> <p>(2) 日中、日韓、そして中韓の相互の陶磁の文化交流をテーマに中国、韓国の研究者と共同研究の中から作品を選定し、東アジアの陶磁の世界での交流の状況と各国の独自性を示す展示となった。</p> <p>(3) 展覧会会期中に中国国家博物館、韓国国立中央博物館を招き、三ヶ国の研究者による記念講演会を実施した。</p>	B	B
4521-1-3		<p>1)-3 特別展「日本国宝展」に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出陳交渉に併せて作品の所在・保存状態を調査するとともに、安全な運搬・展示、効果的な展示方法などについて検討し、展覧会の内容充実に大きく寄与することができた。 	B	B
4521-1-4		<p>1)-4 特別展「みちのくの仏像」に関する調査研究</p> <p>(1) 出品作品について作品調査、写真資料の作成を行って、基礎データの集積を行うことができた。</p> <p>(2) 岩手・黒石寺の薬師如来像の像内墨書銘の赤外線撮影を行った結果、従来とは異なる読み方ができた。</p> <p>(3) 事前の調査によって得られた知見や写真を会場や図録に掲示し観覧者の理解を深めることができた。</p>	B	B
4521-1-5		<p>1)-5 特別展「3.11 大津波と文化財の再生」に関する調査研究</p> <p>(1) 被災文化財の調査を行い安定化処理技術に関する研究をまとめた。</p> <p>(2) 文化財レスキューの概要と陸前高田市立博物館の文化財の再生の過程をまとめた。</p> <p>(3) 文化財レスキューが現在抱える課題と上記の成果を合わせて展示グラフィック等で公開し、情報の充実を図った。</p> <p>(4) ギャラリートーク、講演会、シンポジウム等で文化財再生の現状を広く社会に伝えることができた。</p> <p>(5) 成果を論文や学会で発表した。</p>	B	B
4521-1-6		<p>1)-6 特別展「鳥獣戯画—京都 高山寺の至宝—」に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出陳交渉により、鳥獣戯画の伝わる高山寺、及び中興の祖明恵上人に関わる作品をかつてない規模で展覧する見通しが立った。 ・出品作品の事前調査を行うことで、作品の保存状態などを詳しく精査することができた。 ・高山寺、明恵上人関連史跡を踏査することで、展示ディスプレイ、グラフィック等の充実をはかることができた。 	B	B
4521-1-7		<p>1)-7 特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏—仏教美術の源流—」に関する調査研究</p> <p>(1) コルカタ・インド博物館において、展覧会出品予定の作品調査、撮影を実施した。展覧会の構成、図録原稿などを準備した。</p>	A	A

4521-1-8		(2) 日本では見る機会の少ないインドの仏像について、古代初期の前2世紀頃から12世紀以後の1000年以上の幅で多様な作品を調査できた。原始仏教からの発展や、密教の隆盛など仏教の大きな展開を様々な作品を通して通覧した。 (3) 調査によって得られた成果は、展覧会の展示構成や、図録原稿に反映し、観覧者へ供与した。		
4521-1-9		1)-8 特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」に関する調査研究 ・出品交渉によって12カ国、40を超える所蔵先から古代エジプトの王妃に関する作品を集め、効果的な展示を行う見通しが得られた。 ・なかでもベルギー王立美術館博物館所蔵「アメンヘテプ3世の王妃ティイのレリーフ」の出品は、日本初公開であるだけでなく、本例が出土したウセルハト墓を2011年に近藤氏が約100年ぶりに再発見したこともあって、本展の目玉の一つになると考える。 ・出品作品の事前調査を行うことで、作品の状態などを詳しく確認することができた。また関連作品の展示調査などによって支持具などの展示方法についても知見を得ることができた。	B	B
4521-1-10		1)-9 特別展「始皇帝と大兵馬俑」に関する調査研究 (1) 秦始皇帝陵博物院など中国陝西省にある展覧会出品候補作品の所蔵館において、作品状態の詳細とともに、所蔵機関における展示状況を調査して、より安全かつ効果的な展示手法を検討した。 (2) 報告書の写真・図版・記載だけではわからない作品の詳細を実査することで、形態・製作技法などに関する実態を確認するとともに、新知見を得ることができた。これにより、作品解説などの執筆にかかる、より確実に詳細なデータを用意することができた。 (3) 作品の保存状態ならびに、現在の展示状況も把握することで、特別展会場において適切な作品配置や安全対策を検討することができた。	B	B
4521-2	2) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究を行う。	2) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究 ① 当館の所蔵するシーボルト献納本について、その書誌学的調査を行い、データベースを作成した。 貴重な図書を永く保存・活用するために修復とデジタル撮影を実施した。 ② シーボルト献納本に最小限の修理を施し、安全に取り扱うことが可能になった。 ③ 修理の方針や、その過程を伝える画像などを、当館のウェブ上で公開した。	B	B
4521-3	3) 東洋民族資料に関する調査研究を行う。	3) 東洋民族資料に関する調査研究 (1) 東京国立博物館と天理大学附属天理参考館においてオセアニア、及び台湾のタオ族、パイワン族、平埔族の民族資料に対して調査を実施した。 (2) 東京国立博物館が所蔵する東洋民族の列品に関する基礎データを整理するとともに、いくつかの新知見を得ることができた。	B	B

4521-4	4) 東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究を行う。	(3) 調査で得られた知見は、東洋館13室で実施した次の展示に反映させた。 ・「台湾の海の民・タオ族の伝統文化―」(26年4月15日～26年7月6日) ・「南太平洋の暮らしと道具」(27年1月2日～27年4月5日予定) 4) 東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究 (1) 東京国立博物館と天理大学附属天理参考館においてオセアニア、及び台湾のタオ族、パイワン族、平埔族の民族資料に対して調査を実施した。 (2) 東京国立博物館が所蔵する東洋民族の列品に関する基礎データを整理するとともに、いくつかの新知見を得ることができた。 (3) 調査で得られた知見は、東洋館13室で実施した次の展示に反映させた。 ・「台湾の海の民・タオ族の伝統文化―」(26年4月15日～26年7月6日) ・「南太平洋の暮らしと道具」(27年1月2日～27年4月5日予定)	B	B
4521-5	5) 絵巻の〈伝来〉をめぐる総合的研究を行う。	5) 絵巻の〈伝来〉をめぐる総合的研究(科学研究費補助金) 前年度に引き続き、絵巻の伝来、鑑賞歴といった情報を収集するため、以下の調査研究を進めた。 ・古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化 ・東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査 ・東京文化財研究所所蔵の売立目録の調査とデータ整理	B	B
4521-6	6) 神像表現における物語性の研究を行う。	6) 神像表現における物語性に関する研究(学術研究助成基金助成金) 平成25年度に調査を実施した広島・南宮神社神像群についての論文を執筆した。	B	B
4521-7	7) 江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究を行う。	7) 江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究(学術研究助成基金助成金) 前年度の狩野探幽及び狩野常信の写生図の調査をふまえて、本年度は常信と交友のあった京都の公家・近衛家熙が制作した写生図の調査研究をすすめた。 (1) 家熙の日記『家熙公記』、及び家熙の言行を記録した山科道安著『槐記』を精査した。 (2) 京都・陽明文庫所蔵「花木真写図巻」(近衛家熙作)三巻を調査した。 (3) 『家熙公記』『槐記』の精査によって、家熙が本草学・名物学については、『和名類聚抄』(源順・平安時代)、『本草綱目』(李時珍・明時代)から影響をうけていたことを指摘し、そして「花木真写図巻」の調査によって、家熙が探幽・常信のみならず、ドドネウス著『草木誌』のような西洋の植物図からも新たな構図法を学んでいた可能性がみいだされた。さらに、家熙が典薬頭の錦小路頼庸や絵師の渡辺始興と交流しながら、本草学・博物学への造詣を深め、「花木真写図巻」のような植物図譜を制作した背景を考察した。 (4) 家熙は官廷や公家のみならず、将軍家、幕府の御用絵師、縁戚の水戸藩、薩摩藩、津輕藩などの人脈をもっていた。写生図制作についても、官廷、幕府、藩主といった知的人脈をさらに明確にしていける必要があり、今年度は将軍家、水戸藩について調査した。 (5) 本年の調査によって得られた知見は論文として発表した。また前年度の調査をふまえた狩野探幽とその写生図についての研究成果を論文として発表した。	B	B
4521-8	8) 東京藝術大学付属図書館所蔵後藤家文書の研究を行う。	8) 刀装具―派後藤家の鑑定 極帳(鑑定控)の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ・極帳の翻刻を継続し、後藤家の鑑定活動や極帳との関係について更に理解を深めた。 ・極帳の鑑定記録と東京国立博物館所蔵にされる刀装具との照合が部分的に行えた。	B	B

		・上記研究成果を、展示会に協力することで視覚的に発表し、同展カタログにおいてその詳細を論述できた。		
4521-9	9) 中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察に関する研究を行う。	9) 中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (1) ・東京国立博物館展示室において、輝度カメラ、分光光度計を用いて、既存照明器具で構成される展示照明環境の現状分析を行った。 ・東京国立博物館敷地内の施設並びに館外施設の展示室内の光の計測、調査を行い、比較資料となるデータ収集を行った。 ・研究協力社のもとで、LED照明、有機EL照明器具の先進装置を調査、実験を行った。 (2) 調査、実験結果のデータを考慮、検証することで、絵画の制作当時の状況を復元的に考察することができた。 (3) 調査、実験成果をもとに、先進的LED照明、有機EL照明を用いた展示照明を実際の文化財展示に反映させた。	B	B
4521-10	10) 東アジアにおける繡仏の基礎的研究を行う。	10) 東アジアにおける繡仏の基礎的研究 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (1) 研究2年目である本年度は、主として国内外に所在する中国の作例の実見調査を実施することで、図像・材質技法・様式の詳細な分析を行った。 (2) これらの調査によって得られた繡仏の現存作例に関する、法量・図像・材質・技法・銘文・箱書・関連情報などを整理した。	B	B
4521-11	11) 極薄青銅器の製作技術解明に関する研究を行う。	11) 極薄青銅器の製作技術解明ー中国金属工芸史を再構築するための基盤研究 (1) 国内外の博物館において極薄青銅器ないしそれに関連するユギの調査と分析を実施し、いくつかの製作技法を明らかにすることができた。 (2) 調査で明らかにした製作技法を東京藝術大学における実験で検証し、技法各種を可能とする条件について知見を得た。 (3) 調査で得た途中成果を刊行物、学会などで発表した。	B	B
4521-12		12) デイルムン文明の起源ーバハレーン島における古墳群の考古学的調査研究 (1) バハレーン王国に所在する古墳群において考古学的発掘調査を実施し、また関連学術情報を収集した。 (2) 古墳群の地政学的データ、3Dデータ、考古学的・建築学的・人類学的データ等を取得した。 (3) 成果を国内外の関係学会で発表し、また一部は一般向けメディアでも公開する予定である。	B	B
4521-13		13) 東アジアからみた乾隆画壇の総合的研究 (科学研究費補助金) (1) 中国の博物館及び古跡に赴き、現地調査を行った。 (2) 実際の作品を観覧して写真撮影を行った。 (3) 東洋館8室での展示、及び学会発表、論文等で成果を公表することができた。	B	B
4521-14		14) 高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相 (科学研究費補助金) インドに残る古代絵画の希少な作例であるアジャンタ石窟、エローラ石窟の調査を実施した。	B	B
4521-15		15) 古代イスラエルの墓制と世界観に関する総合的研究 (科学研究費補助金)	B	B

4521-16		イスラエルにて現地調査を実施し、関連考古資料の収集を行った。国内では天理大学及び天理大学付属天理参考館が所蔵するゼロール遺跡出土資料を調査した。調査・研究の成果は、すでに日本オリエント学会での研究発表や、早稲田大学エジプト学研究所主催の国際シンポジウムで発表している	B	B
4521-17		16) 中国典籍日本古写本の研究 (科学研究費補助金) 研究に関連する文献の収集に努めた。	B	B
4521-18		17) 5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究 (科学研究費補助金) ・東京国立博物館において法隆寺献納宝物中の金銅仏及び金工品の調査を行った。 本調査では、日韓の同時代に製作された金銅仏でも、鉛の含有率など、銅に含まれる成分に違いがあることが判明した。 ・九州国立博物館で開催された『百済展』に出品される日韓の金銅仏に関して、2月12～13日調査を行った。 本調査では、日韓両国の金銅仏の表情や肉体表現などにおける様式的な相違および金工品の加飾技法と金銅仏の加飾技法の共通性などについて検討を行った。	B	B
4521-19		18) 東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究 (科学研究費補助金) ・国内に点在する木彫像の調査及び木片採取を実施した。 ・昨年度採取した木片の分析が完了しによって、木彫像の素材となる樹種の同定ができた。	B	B
4521-19		19) 東アジア文化の基層としての儒教の視覚イメージに関する研究 (科学研究費補助金) 中国美術に関する文献資料及び画像資料に徴し、中国儒教美術データベースの構築を進めた。また調査研究の過程で、中国西南部における神仏習合の様相が明らかとなった。	B	B
4532-1-1	③ 京都文化を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究 (京都国立博物館における調査研究) 1) 特別展覧会等の開催に伴う調査研究を行う。	③ 京都文化を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究【京都国立博物館】 1)-1 特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」に関する調査研究 ・調査によって、学問印信・課業印信掛板を確認し、紀州に於ける明恵の事蹟の一端を初公開した。 ・龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センターと合同して、非破壊による写本と版本の紙質調査を実施し、展覧会図録に反映させた。 ・84件の展示作品を選定した。	B	B
4532-1-2		1)-2 特別展覧会「桃山時代の狩野派」に関する調査研究 (1) 関東・近畿・四国・九州地方の博物館・美術館及び社寺や個人が所蔵する桃山時代後期の狩野派出陳予定作品 (障壁画・屏風・掛軸) の調査を行った。 (2) これまで未紹介の作品の発見があり、出陳予定作品の候補に加えることができた。 (3) 桃山時代の狩野派 展の出陳予定リストを確定させることができた。	B	B
4532-1-3		1)-3 特別展覧会「琳派 京を彩る」に関する調査研究 (1) 琳派関連書籍の収集を行い、研究史の整理を進めた。 (2) 当館及び外部機関が収蔵する琳派関連作品の実見調査に基づき調査書を作成した。この調査により、これまでに紹介されていない琳派作品を知る機会を得た。 (1)、(2)の成果により、展覧会出品作品を選定し、出品交渉を進めた。 (3) 京都市内4館連携会議や、琳派400年祭実行委員会と連携し、関連教育事業を策定した。	B	B

4532-1-4		1)-4 特別展観「山陰の古刹 島根鱒淵寺の名宝」に関する調査研究 鱒淵寺伝来の重要文化財2件、重要美術品1件を含む彫刻作品について調査研究を進め、従来不明確であった尊格の同定や、銅造仏について蛍光X線による成分分析を行った。また、鱒淵寺伝来の金工作品について密教法具を中心に調査研究を進め、同寺所蔵の大形塔鈴の存在に着目し、近世初頭における無動寺と鱒淵寺との関係性を発見した。これらの調査研究をもとに、特別展観「山陰の古刹 島根鱒淵寺の名宝」(27年1月2日～2月15日)を開催した。	B	B
4532-1-5		1)-5 特別展観「天野山金剛寺の名宝」に関する調査研究 金剛寺所蔵の文化財について、彫刻、書画、工芸の各分野にわたって調査を実施した。近年の調査を踏まえ、今まで紹介されていない仏教と文学に関する典籍類を確認することができた。調査成果を活かし、国宝3件、重文16件、重美1件を含む38件の文化財を特別展観用に選定した。	B	B
4532-2	2) 近畿地区(特に京都)社寺文化財の調査研究を行う。	2) 近畿地区(特に京都)社寺文化財の調査研究(科学研究費補助金) 平成25年度末までの文化財の調査研究成果をもとに特別展覧会『南山城の古寺巡礼』を京都国立博物館の明治古都館(本館)において平成26年4月22日から同年6月15日まで開催した。この特別展覧会に出品するため20体ほどの彫刻作品の移動を行い、その移動に際して彫刻作品に関する新たな知見が得られた。	B	B
4532-3	3) 近世絵画に関する調査研究を行う。	3) 近世絵画に関する調査研究 ・当館に保管及び寄託される近世絵画に関する調査研究を進め、平成知新館の展示及び展示計画に必要な情報収集・整理を行った。 ・京都市内を中心に近世絵画の所在調査を行い、一部は今後寄託作品とすべく当館に移送した。	B	B
		4) 近畿旧家伝来文化財総合調査 現地に担当研究員が赴き、漆工300件、陶磁200件、金工100件の調査作成、ならびに資料写真撮影を行った。また、調査関連データの整備とデータベース化を図った。 平成24年度からの調査成果をもとに、所蔵者より多数の文化財が当館へ寄贈された。	B	A
4543-1-1	④ 仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究(奈良国立博物館における調査研究) 1) 特別展等の開催に伴う調査研究を行う。	④ 仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究【奈良国立博物館】 1)-1 醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」に関する調査研究 (1) 醍醐寺の所蔵する彫刻・絵画・工芸・書跡・考古・建築の各分野の文化財について、調査・撮影を行った。 (2) 各研究員がそれぞれの専門分野に沿って文化財調査・撮影を実施した結果、新たな知見や資料を得ることができた。また展覧会開催中にも写真撮影を含む調査研究を行い、展示品に関する基礎データの集積を行う事ができた。 (3) 調査成果を反映し、従来の醍醐寺をテーマとした展覧会とは一線を画す、醍醐寺の歴史的特色をわかりやすく示す展覧会構成を実現した。	B	B

4543-1-2		1)-2 特別展「天皇皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展」に関する調査研究 (1) 展覧会に先立ち、正倉院事務所において正確かつ最新の情報を得るために当館研究員が調書の精読、書写を行った。その情報は展覧会図録や展示パネル、題箋等に反映している。また、日頃の各研究員の研究は、展覧会図録の「宝物寸描」(小論文)に掲載したほか、公開講座等で発表した。 (2) 宝物をいかに美しく、かつ快適にご覧いただき、さらに宝物への安全性も重要な研究課題である。例えば、照明の方法、ケース内の環境変化への対応、展示台の高さや角度の問題などであるが、アンケートによれば見やすさ、快適さは数年前に比べ各段に好評となっており、この分野における当館の対応も実を結びつつあることを実感している。 (3) 正倉院展図録の印刷数は3万冊を超えており、発表媒体としてはきわめて多い点の特筆される。観覧者が購入することはもとより、多くの図書館等に収蔵されるので、展覧会後も探すことは容易である。さらに公開講座(当館職員は1回)、正倉院学術シンポジウムの発表(当館職員は1回)を実施している。 正倉院展図録のコラム「宝物寸描」は当館研究員2名が執筆したほか、概論が新規に執筆され、日頃の当館の研究成果が盛り込まれている。	B	B
4543-1-3		1)-3 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に関する調査研究 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」は今年で9回目を数える。毎年異なるテーマを特集しており、これまで田楽や舞楽、神事の相撲や競馬、社家の文芸活動、大和士などについて詳細を紹介してきた。今年度の特集は、春日大社と協議の上で、祭礼に場に飾られる「威儀物」について特集することとした。過去のおん祭に使われた威儀物はほとんど現存しないことから、その探索は困難をきわめたが、京都の呉服の老舗「千総」に「千切台」なる威儀物の旧物が伝わることを知り、その調査と現物の展示公開を行うことができた。春日大社の祭礼に関わることは老舗のステイタスシンボルであり、「まつり」の原動力の一斑はこうした点にも求め得ると紹介できた。また、春日大社の式年造替が始まることもあり、過去の造替にまつわる遺品、例えば室町時代の本殿の御簾金具や、江戸時代の社殿の設計図などについても調査、公開することができた。	B	B
4543-1-4		1)-4 特別陳列「お水取り」に関する調査研究 (1) 東大寺ミュージアムにおいて、文化財担当者と同陳候補文化財に関する打ち合わせを行い、また調査を実施した。 (2) 出陳可能な文化財の決定と、その内容の確認を行うことができた。 (3) 特別陳列「お水取り」の展示構成、また図録に上記の内容を反映させた。	B	B
4543-1-5		1)-5 特別展「まほろしの久能寺経に出会う 平安古経展」に関する調査研究 ・紺紙金字経や彩箋墨書経を調査して製作年代を推定し、展覧会への出陳の有無を決定した。 ・経塚出土の經典遺品を数多く調査し、本展の内容に相応しい遺品を絞り込んだ。	B	B
4543-1-6		1)-6 開館120年記念特別展「白鳳」に関する調査研究 (1) 館外の作品調査(鳥取県、島根県、大分県、福岡県、奈良県、京都府、大阪府、愛知県、三重県、滋賀県、千葉県、東京都)を実施。写真撮影、詳細な観察、構造等の精査などを実施した。既知の資料はもちろん、新出の資料も数多く発見することができた。また、関連する展覧会や研究会がある場合は、可能な限り脚を運び、成果を蓄積した。	B	B

4543-2	2) 南都の古代・中世の彫刻に関する調査と研究を行う。	(2)館内の作品調査。これまで白鳳時代の作と認められていなかった品、未発表の作品も数多くあり、それらを改めて精査した。 2) 南都の古代・中世の彫刻に関する調査と研究 ・館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。主要な作品は、法隆寺夢違観音像、深大寺釈迦如来像、海住山寺四天王像、正寿院十一面観音像、額安寺虚空蔵菩薩像、北僧坊虚空蔵菩薩像など。 ・いずれの像についても、調査の結果、学術的に重要な新知見が得られた。 ・特別展や名品展における図録の解説や題簽執筆、また公開講座での報告に新知見を反映させることができ、新たな解説を行えた。	B	B
4543-3	3) 綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）、信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）の調査など、東京文化財研究所と共同で仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術等の解明に寄与する。	3) 綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）、信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）の調査など、東京文化財研究所と共同で仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術等の解明に寄与する (1)大徳寺五百羅漢図の光学調査に関する成果を報告し、天台高僧像及び信貴山縁起絵巻の調査成果の公表方法について検討を重ねた。 (2)調査報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』の刊行に伴う研究会および関連作品の追加調査を実施。天台高僧像及び信貴山縁起絵巻の調査報告書の刊行時期とその方法について協議を行った。 (3)報告書刊行に伴う研究会を通じて共同研究の成果を広く公表。天台高僧像の調査報告書を平成27年度中に刊行、信貴山縁起絵巻の調査成果を平成28年度開催予定の信貴山縁起絵巻展に反映させることで合意。	B	B
4554-1-1	⑤ アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本及びアジア諸地域の文化に関する調査・研究（九州国立博物館における調査研究） 1) 特別展等の開催に伴う調査研究を行う。	⑤ アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本及びアジア諸地域の文化に関する調査・研究【九州国立博物館】 1)-1 特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」に関する調査研究 (1)韓国国内の文化財について、国立博物館・国立文化財研究所での調査及び遺跡での現地踏査を行った。また各館の学芸員と意見交換を行い、多くの示唆を得た。 (2)日本国内に所在する百済関係の文化財調査を行い、遺跡での現地踏査を行った。 (3)研究成果を特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」として九州国立博物館で行った他、韓国国立公州博物館でも研究成果を活かした特別展「武寧王時代の東アジア世界」が行われた。 (4)日韓の研究者が最新の研究成果を発表する講演会を開催し、討論を行った。	B	B
4554-1-2		1)-2 特別展「発掘された日本列島2014」に関する調査研究 (1)展示で借用した島内地下式横穴墓群の金属製品についてX線CT調査を実施した。 (2)従来のX線写真より詳細な象嵌のデータを得ることができた。また、外面から判断できない金属内部の脆弱な部分についての調査も行った (3)従来の象嵌データに新たに反映することができた。	B	B
4554-1-3		1)-3 特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波瀾—」に関する調査研究 ・計23機関で陶磁・金工・刀剣・漆工作品、及び考古資料・歴史資料の詳細調査を行った。	B	B

4554-1-4		・各作品の状態・法量を把握し、陶磁・刀剣作品及び考古資料の製作技法、漆工作品の加飾技法・木地構造、歴史資料の形態的特徴・文字情報等に関して知見を得た。 ・本調査研究の成果は、次年度当初の特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波瀾—」展に反映する予定である。		
4554-1-5		1)-4 特別展「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史—A History of the World in 100 objects」に関する調査研究 (1)26年9月6日～13日に、河野と西島が大英博物館を訪問し、相手側展覧会担当者と協議を進め、さまざまな施設・部門を見学するとともに、展覧会に出陳予定の作品をつぶさに調査できた。 (2)大英博物館のコレクション及びそれを支えた英国の歴史について現地調査ができ、展覧会のメッセージについて具体的なイメージを確立することができた。 (3)現地調査研究の成果を、展覧会の企画や図録の翻訳作業に反映することができ、プロジェクトが飛躍的に前進した。	B	B
4554-1-6		1)-5 特別展「美の国日本」に関する調査研究 27年度開催予定の開館10周年記念展「美の国 日本」の出陳交渉を進めるとともに、各所蔵者の協力を得ながら出陳予定作品の現地調査を行い、輸送計画及び展示計画の立案に有効なデータを得ることができた。	B	B
4554-2	2) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究を行う。	1)-6 特別展「アフガニスタン美術展」に関する調査研究 ・展覧会図録（英文）を入手し、展覧会の内容と出品作品について把握した。オーストラリア・西オーストラリア博物館会場内の展示状況などを調査した。展覧会出品作品の輸送用外箱の保管状況を含む、展覧会に関する様々な情報収集を行った。 ・展示室内の実物をつぶさに観察でき、展示作品の質の高さと保存状態を確認することができた。また国際巡回にあたって準備された展示具を多用する展示の手法についても検討することができた。 ・展覧会企画書作成、文化庁を含む関係者との打ち合わせにあたって、本展覧会に出品された作品の質の高さと文化財保護に関する意義を説くことができた。図録解説執筆及び展示のイメージを固めることができた。 2) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究 (1) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究 ・百済と倭国の交流を出土品で跡づけることができた。 ・特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」の企画や実施が大変効率的に進められた。 (2) 内モンゴ所在壁画墓壁画の高精細画像データベースの構築 ・内モンゴ博物院が所蔵する、内モンゴ所在壁画墓壁画の高精細画像データベースの整備を進めた。 ・高精細画像データベースの展示事業への利活用のための基礎的作業を開始した。 (3)タイにおける異文化の受容と変容 ・国内にあるタイ由来文物や、タイに持ち込まれた我が国由来の作品について、両国研究者の理解が一段深まった。 ・27年の特別展のための準備が順調に進んだ。	B	B

4554-3	3) 九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤を創設する。	3)九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設(科学研究費補助金) (1)九州の特質とも言える外来文化の受容と展開における先進性や辺境性を示す文化財を対外交流文化財として位置づけ、東西南北4つの方向から流入した文化の中から代表的な事象を選んで調査を展開している。本研究期間内では、北ルート(古代を中心とする大陸との交流)及び西ルート(中世・近世を中心とするアジア・ヨーロッパとの交流)を中心に調査を展開した。 (2)各地で現地調査した文化財を必要に応じて九州国立博物館に移動して、大型X線CT、精密三次元計測機、高精細大型スキャナなどの最新鋭のデジタル計測機器を活用した科学調査を実施した。また、高精度の情報を網羅したデジタルアーカイブを新しい博物館情報として利用するために、展示への活用を計画した。 ・本年度は研究の最終年度にあたるので、本研究の総括報告書を作成した。	B	B
4554-4	4) 中国山東省を中心とする漆工品の調査研究を行う。	4) 中国・山東省を中心とする漆工品に関する調査研究 (1)調査対象とする螺鈿箱の調査分析を、他作例と比較しながら多角的に進めることができた。 (2)螺鈿器及び関連漆器の調査を広範囲に行うことにより、今まで知られていなかった比較作例を数多く集めることができた。 (3)調査の過程で明らかになった新たな検討課題について、総括に向けて考察を深めることができた。	B	B
4554-5	5) タイにおける異文化の受容と変容-13世紀から18世紀の対外交易品を中心として-に関する研究を行う。	5)タイにおける異文化の受容と変容-13世紀から18世紀の対外交易品を中心として-(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ・前年度に続き、タイ及び日本においてタイ関係交易資料の調査を実施した。 ・日タイ双方においては個人コレクター所蔵資料を含む調査研究を行い、基礎データを強化できた。特に在日本タイ資料についてはタイ側の協力により新しい視点から見直すための資料情報を得ることができた。 ・タイにおいてセミナーを開催し、調査研究について発表し、その成果について現地に還元することができた。	B	B
4554-6	6) 中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究を行う。	6) 中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金) ・長崎県立対馬歴史民俗資料館及び神宮文庫において、古文書・経典の調査を計4回実施した。 ・中世～近世初期の対馬の古文書の収集(撮影)・整理(データベース化)を行うとともに、対馬所在の大蔵経の印刷・将来年代等に関する知見を得ることができた。 ・前年度に引き続き、中世松浦地域に関する史料の収集(刊本めぐり作業)・整理(データベース化)を行った。	B	B
4554-7	7) 契丹壁画墓の集成と公開-唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解-に関する研究を行う。	7)契丹壁画墓の集成と公開-唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解-(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (1)・内蒙古自治区フフホト市の内蒙古博物院で、内蒙古自治区所在の壁画墓からはぎ取られた壁画資料について、高精細画像データ(通常の画像、斜光線下の画像及び赤外線画像の三種)を作成した。 ・内蒙古自治区エチナ旗の黒水城遺跡で、契丹と同様、独自の文字を作り出した西夏の文物について現地調査を行った。	B	B

4554-8	8) 水中遺跡の保存・活用に関する調査研究を行う。	(2)契丹以前の五代の壁画墓資料についても高精細画像データを作成したため、契丹壁画の特性について比較する良質の材料が入手できた。 (3)通常光下、斜光線下及び赤外線下の3種類の画像高精細画像データを比較しながら、技法を含む研究を進めている。	B	B
4554-9	9) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究を行う。	9) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究 ・展覧会の出陳作品調査と併せて、百済と倭国の交流を示す出土資料を実現し、調査することができた。 ・画像だけでは分かり難い作品コンディションや、細部の構造について、調査・検討を加えることができた。また、所蔵機関スタッフとの交流の中で、歴史背景をはじめとする付帯情報を入手することができた。 ・特別展「古代日本と百済の交流-大宰府・飛鳥そして公州・扶餘」ならびに「日本発掘-発掘された日本列島2014-展」の展示企画や図録製作に活用することができ、準備作業を効率的に進めることができた。	B	B
4554-10	10) VR技術を活用した装飾古墳アーカイブに関する調査研究を行う。	10) VR技術を活用した装飾古墳アーカイブに関する調査研究 (1)桂川町立王塚装飾古墳館で、王塚古墳石室模型を撮影し、実際の石室の装飾文様が浮かび上がるようなARコンテンツを作成した。 (2)今まで蓄積した装飾古墳VRデータを、映像コンテンツ以外で活用するため、様々な実験的な取り組みを行った。	B	B
4554-11	11) 平成20年度に開催した特別展「工芸のいま 伝統と創造」の成果を基礎に九州・沖縄の伝統工芸作家について継続的かつ発展的に調査研究を行う。	11) 平成20年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への継続的かつ発展的な調査研究 (1)染織工芸(久留米絨、久米島紬)、芦屋釜鋳造工房、津屋崎人形工房において作品及び制作方法や制作用具について調査を行った。 (2)上記の調査に伴い、体験プログラムに応用する方法が確認できた。 (3)次年度実施する体験プログラムの企画に調査結果を盛り込むことが可能となった。	B	B

4554-12	12) 和泉市久保惣記念美術館所蔵の日本と中国の考古工芸品について、X線CTスキャナ、3Dデジタル、三次元プリンタ等を用いて、科学調査を実施する。	12) 和泉市久保惣記念美術館の収蔵品の調査研究 ・本年度は帯鉤金具を中心に計測画像から、青銅器の内部構造について非接触・非破壊で青銅器の構造を解析した。 ・殷周青銅器では取っ手などの立体造形の接続状況に着目して解析を行った。その結果、無垢でつくられるものと中子を挿入して金属湯をまわすものの2種類が存在することを確認した。また、中子と外型とを固定するためのスペーサーについても具体的な位置を確認することができた。この研究成果は久保惣記念美術館の展示として生かすことができた。	B	B
4554-13	13) 中世大般若経の史料学構築に向けての基礎的研究を行う。	13) 中世大般若経の史料学構築に向けての基礎的研究 (1) 翻刻史料及び未翻刻史料を広く調査し、中世大般若経に関する資料を収集した。 (2) 前年度に引き続き、中世大般若経に関する基礎資料の収集を進めることができた。また、これにより、大般若経の果たした歴史的役割の変遷を跡づけることができた。 (3) 大般若経の果たした歴史的役割の変遷についての知見を展示に反映することができた。	B	B
4554-14	14) 九州南島の交流史に関する調査研究を行う。	14) 九州南島の交流史に関する調査研究 前年度に調査を行った徳之島と喜界島の個人所蔵の縄文時代の土器・石器について、外部の専門家を交えて詳細な検討を行なった結果を、各調書に纏めた。このうち、特に重要であった喜界島の土器について論文に纏め、九州と南島に深い交流があったことを明らかにすることができた。	B	B
4561-1	⑤ 有形文化財の保存環境・保存修復に関する調査・研究 (東京国立博物館) 1) 博物館の環境保存に関する研究を行う。	⑥ 有形文化財の保存環境・保存修復に関する調査・研究 【東京国立博物館】 1) 博物館の環境保存に関する研究 今年度は展示環境に関する調査研究の内、展示ケース内の湿度環境について特殊な要件を実現するための手法に関する研究と現存の照明器具(蛍光灯、ハロゲンランプ)及び次世代型照明器具(LED、OLED)の比較評価と、次世代型照明器具を効果的かつ安全に導入するための研究を中心に実施した。具体的な成果は下記の通り。 ・ 展示ケース内を低湿度環境に維持するための研究を行い、文化財の材質の安定及び所蔵先からの要求条件を実現することができた。 ・ 展示室内及び展示ケース内蔵の照明器具から発する熱的影響を赤外線サーモグラフィで観測・評価し、文化財への影響を回避するための手法を実践した。 ・ 展示環境をより安定化できる展示ケースを新たに設計した。 ・ 照明器具の熱的影響に関して学会発表を行ない、次世代型照明器具の評価と使用に関する論文を発表した。 2) 被災博物館等の汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究(科学研究費補助金) パリ市内に所在する博物館施設を訪問し、セース川氾濫時における緊急避難プログラムの詳細を聞き取り調査した。	B	B
	(京都国立博物館)	【京都国立博物館】		
4562-1	1) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究を行う。	1) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 (1) 新規に搬入された文化財について、「修理計画書(設計書)」に基づきデータを入力した。また、京都国立博物館研究員による定期的な修理工房の巡回、あるいは適宜、行う調査を通して、修理中でなければ得ることのできない情報を収集した。 (2) 修理が完成し、搬出した文化財については、修理工房から提出された「修理解説書(報告書)」によって、データの追加、及び更新を行った。 (3) 以前、修理が完成した文化財に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告集』第12号に掲載し、修理時の調査により発見された銘文を「銘文集成」として報告した。	B	B
4562-2	2) 文化財の保存・修復に関する調査研究を行う。	2) 文化財の保存・修復に関する調査研究 (1) 平成23年度から4カ年計画で修理を行っている国宝「病草子」について、本紙の裏面に接着する肌裏紙の調査を行いつつ、修理完成にむけた装幀の検討会を実施した。 (2) 本年度から2カ年計画で修理を行う「賀茂御祖神社絵図(下鴨神社絵図)」について、調査を実施し、修理の方針を策定した。 (3) 国宝「釈迦金棺出現図」について、彩色に使用されている顔料の色見本を作成した。	B	B
4563-1	(奈良国立博物館) 1) 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究を持続的に実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る。	【奈良国立博物館】 1) 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究を持続的に実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る (1) 展示室・展示ケース内や収蔵庫に設置した温湿度センサーのデータを分析し、展示・収蔵環境の保持に努めた。 (2) 展示ケース内から回収した粉塵の種類や量を計測し、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。 (3) 展示室・収蔵庫等への昆虫トラップの設置回収により、文化財害虫の生息状況を調査し害虫被害の回避につなげた。 (4) 「環境整備委員会 保存環境に関するワーキンググループ」会議を定期的に開催し、保存環境の改善に努めた。	B	B
4563-2	2) 収蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する。	2) 収蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する (1) 館蔵品、寄託品について保存状態調査を実施し、その所見をもとに保存カルテを作成した。 ・ 文化財保存修理所で修理された文化財について、樹種同定調査及び銘文調査を実施した。 (2) 保存カルテをもとに修理調書を作成し、修理方針を決定した。 ・ 樹種同定調査は京都大学生存圏研究所との共同研究として実施し、銘文調査は当館で文字の翻刻を行った。 (3) 修理の概要、樹種同定調査及び銘文調査の結果について、当館紀要への掲載の準備を進めた。	B	B
4563-3	3) 収蔵品・寄託品等の調査研究を保存科学の観点から実施し、貴重な文化財の後世への継承に資する。	3) 収蔵品・寄託品等の調査研究を保存科学の観点から実施し、貴重な文化財の後世への継承に資する (1) 館蔵、寄託品の修理に際し、X線透過撮影での構造調査を彫刻や漆工品に実施し、蛍光X線分析での顔料調査を絵画に実施した。	B	B

		(2) 館蔵、寄託品のうち絹製文化財の修理において、電子顕微鏡を用いた料線の組成調査、紙製文化財の修理において同じく料紙の繊維調査を実施し、その所見を修理に用いる補絹・補紙の調製に反映した。 (3) 文化財保存修理所の修理寄託中の文化財について、蛍光X線分析装置を用いた材料調査を実施し、修理方針に資するデータを蓄積した。		
4564-1	(九州国立博物館) 1) 文化財の材質・構造等に関する共同研究を行う。	【九州国立博物館】 1) 文化財の材質・構造等に関する共同研究 (1) 資料のX線CT撮影を行い、鉄錆地三十六間四方白兜の構造並びに金属の亀裂の有無を調査した。また繊維の断裂などを確認した。 (2) 図2に示すように鋳と鉄板との接合状態を明らかにすることができた。また金属や繊維に亀裂または断裂は確認できず、良好な状態であることがわかった。 (3) 展示前に状態調査を行ったことで、資料の状態を判断することができた。	B	B
4564-2	2) 博物館における文化財保存修復に関する研究を行う。	1) 文化財の材質・構造等に関する共同研究 (1) 吉備国際大学2名、九州産業大学2名、別府大学1名、広島市立大学1名の計4大学6名を対象に研修を実施した。 (2) 修復技術者の協力を得て、少人数で実践的な研修を実施することができた。 (3) 本研修により、修理技術者育成に寄与すると共に、学生の文化財保護への理解を深めることができた。	B	B
4564-3	3) 博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究を行う。	3) 博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究 (1) 継続的に行ってきたミュージアムIPM研修(基礎編)の募集地域の範囲を広げ、これまで受講していない地域の博物館学芸員を積極的に受け入れることで、IPMの普及に努めた。 (2) 参加申込受付開始日に定員20名のところ、80名以上の応募があるなど、参加人数が大幅に増え、学芸員・市民の関心の高さがうかがえた。そこで本年度のミュージアムIPM研修(基礎編)の実施回数を1回から2回に増やした。 (3) IPM研修会の成果を博物館のIPM活動業務に生かすことができた。	B	B
4564-4	4) 赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究を行う。	4) 赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究(学術研究助成基金助成金) (1) 国内外の様々な絵画の赤外線画像を撮影し、画像データを蓄積するとともに、館蔵品に関しては分光反射スペクトルを測定した。 (2) 赤外線画像と分光反射スペクトルを比較し、彩色材料に関する情報が得られた。 (3) ・画像や彩色の調査結果を展示に反映させることができた。 ・研究成果を日本文化財科学会で発表した。	B	B
4564-5	5) 三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発-興福寺 国宝阿修羅像を中心に関する研究を行う。	5) 三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発 -興福寺 国宝阿修羅像を中心- (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ・奈良興福寺の特別な許可を得て、X線CT調査で得られた国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4軀、八部衆像5軀の高精細三次元データを、美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析した。 ・文化財科学・美術史・工芸・修復技術の専門家が集まって、X線CTによって得られた三次元画像を1000枚以上蓄積した。	B	B

4564-6	6) 三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究を行う。	・本研究の成果を出版すべく編集作業を進めた。 6) 三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ・中国古代青銅器の三次元調査成果に基づいて、研究チーム内での論文作成を進めた。 ・中国語版の報告書作成を進め、日中両国で刊行した。 ・相互に密な連絡を重ねて、日中の共同研究基盤を固めることができた。	B	B
4564-7	7) 石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究を行う。	7) 石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究(学術研究助成基金助成金) これまで赤色顔料使用の様相が不明であった日本列島東半部の前期古墳について調査を実施し、少なくとも新潟北部～栃木北部ライン以南では、墳墓内での朱とベンガラの使用分けが畿内とほぼ同時期に始まっていることが実証された。また、朱については、古墳を飾る壺に装飾を目的として塗布されたものがあること、ベンガラについては漆工品の下地として使用されているものもあること、青銅鏡や銅鏡に装飾目的で塗布されているものがあることなど、西日本の当該期ではあまり知られていないような使用方法も散見され、赤色顔料使用に多様性があることも判明した。	B	B
4564-8		8) 酸化促進剤の添加による文化財建造物用油性塗料の塗膜形成(学術研究助成基金助成金) (1) 油性塗料で施工された可能性が指摘されていた建中寺や薬師寺などの文化財建造物について塗装材料調査を行った。その結果、赤色などの同一色で施工された部材について複数の色料、展色剤が用いられていたことを明らかにした。 (2) 塗膜の形成状況に関する知見を得るため、木材片を支持体として調査研究を行った。その結果、酸化促進剤を添加しなかった塗料は重合乾燥に非常に長い時間がかかり、表面に近い部位のみ膜が形成されることを明らかにした。	B	B
4564-9		9) みんなでまもるミュージアム(文化庁文化芸術振興費補助金) (1) 事業計画検討実施及び教訓と課題を共有するための事例発表を含む全体合同会議を開催し、被災地の施設・団体と防災対策の先進館において調査・情報収集を行い、研修プログラムの一部を試行した。 (2) 災害の内容や地域性を考慮した研修プログラム策定のための基礎情報を共有した。 (3) 事例発表と調査で得た情報を活かした博物館職員及び市民が共に学ぶ研修プログラムの一部を試行し、事業報告書を刊行した。	B	B
4571-1	⑦ 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査・研究(東京国立博物館) 1) 博物館環境デザインに関する調査研究を行う。	⑦ 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査・研究 【東京国立博物館】 1) 博物館環境デザインに関する調査研究 ・平成27年1月2日にリニューアルオープンした黒田記念館のため、東博から黒田記念館へ<案内・誘導サイン>及び<展示解説サイン>について、多言語(4ヶ国語:日英中韓、2ヶ国語:日英)で整備を行った。 ・黒田記念館の開館準備として、展示室・資料室・映像室・ショップ・トイレ・ホール等について、建築空間の質的調和を考慮した、木製家具補修・新規家具什器・カーテン・ロッカー・カサ立て及び照明がデザインされた。 ・平成館改修工事に伴い、本館地下ラウンジへ移設された<ポスター掲示板>を新設し、東博及	B	B

4571-2	2) 博物館教育に関する調査研究を行う。	<p>び他館での展覧会等とともに憩いのスペースとなるようした。</p> <ul style="list-style-type: none"> 東洋館の入口に東洋館名称「内照式サイン」と「懸垂バナー」を設置し、東洋館の認知度アップをはかった。 <p>2015年3月には懸垂バナーと獅子、計4ヶ所にLED スポット照明が追加設置された。</p> <p>2) 博物館教育に関する調査研究</p> <p>(1) 各種教育プログラムの開発と運営に関して、これまでの研究をもとに発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 9月18日 藤田千織 「学校のよりよい利用形態にむけて」(事例発表・ディスカッション) 文化庁第4回ミュージアムエディケーター研修、シンポジウム「コレクションを活かした鑑賞教育とは」 27年1月10日 藤田千織 科学研究費による研究「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」(代表 一條彰子) 成果発表・美術科教育学会共同開催 <p>(2) ・特集「熊めぐり」(4月22日～6月1日 神辺知加)では、来館者にとってのわかりやすさとはなにかについて考察を深めることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 親と子のギャラリー「仏像のみかた 鎌倉時代編」(6月10日～8月31日 川岸瀬里)では、普段なじみのない仏像作品へのアプローチのしかたを提示することができた。 <p>(3) トーハクナビは、ISID(電通国際情報サービス)、クウジツ社との共同研究で開発し、平成24年4月より一般公開を始め、その後、コンテンツの拡充、各種OSに対応するバージョンをリリースしてきた。本年度は、4月に全館をカバーするコースガイドの配信、10月に展示替えに即した作品解説を掲載した「トーハクナビ3.0」へのバージョンアップを実施。また、外国語による情報発信の方法についての調査・研究の結果、人工音声エンジンを導入したシステムを構築した。12月には、これらについてのアンケート調査を実施し、今後の展開についての研究を継続中。</p>	B	B
4571-3	3) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究を行う。	<p>3) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究</p> <p>東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑賞会議機能、貸与管理機能、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。また、様々な調査結果のデータを一括でアップロードする機能を複数実装した。さらに、今後の継続的なシステム改修・改善のため、システム全体のプログラムコードを大幅に整理した。</p>	B	B
4571-4	4) 凸版印刷と共同で、ミュージアムシアターでの公開に向けた研究を引き続き実施する。	<p>4) 凸版印刷と共同で、ミュージアムシアターでの公開に向けた研究を引き続き実施する</p> <p>(1) 前年度にデータ取得及びコンテンツ制作に着手した文化財について、ミュージアムシアターのコンテンツ2件を公開した。</p> <p>(2) 新たに列品1件について新設したX線CTスキャナーを使用して3次元データを取得した。</p> <p>(3) 既に取得した作品のデータを元にしたコンテンツの内容の修正について監修し、公開した。</p>	B	B
4571-5	5) 聴力障がいを持つ児童・生徒のための鑑賞プログラムの構築に関する研究を行う。	<p>5) 聴力障がいを持つ児童・生徒のための鑑賞プログラムの構築(学術研究助成基金助成金)</p> <p>聴覚障がいをもつ児童・生徒への特別支援教育についての調査と、国内外の美術館・博物館で行われているバリアフリー化、ユニバーサル化事業の調査を行った。</p>	B	B
4571-6		<p>6) 占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究(科学研究費補助金)</p>	B	B

4571-7		<p>(1) 国立国会図書館が保管するCIE(民間情報教育局)文書の約30,000件から、『MUSEUM』、『EXHIBIT』に関する400件の資料を調査し、そのうち200件を文字データ化し翻訳を行った。内容を分析し国立博物館関連の資料を発見した。</p> <p>(2) 国立博物館関連の資料についてデータベースを構築し一般公開する(27年3月公開)</p>	B	B
4571-8		<p>7) ミュージアムにおける鑑賞者開発の研究：新来館者の定着に向けた実証的調査分析(科学研究費補助金)</p> <p>(1) 鑑賞者開発を目指したイベント「博物館で野外シネマ」においてパイロット調査を実施した。</p> <p>(2) 上記調査の分析により、過去の調査からの仮説「非来館者はきっかけがあれば来館する」を実証した。</p> <p>(3) 全国の博物館・美術館に鑑賞者開発の現状を把握するためのアンケートを実施した。</p> <p>(4) 今後のミュージアム・イベントと本格調査の方向性が定まった。</p>	B	B
4571-9		<p>8) 藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究(科学研究費補助金)</p> <p>(1) 藤ノ木古墳出土品(金銅製鞍金具・龍文飾金具)の輸送中における振動の記録と輸送前後の形状変化の比較検討。</p> <p>(2) 輸送中における作品の振動に関する基礎データの集積を行うことができた。また輸送前後の形状比較のために三次元計測を行うことでその計測データを得ることができた。</p> <p>(3) 今後の館内での作品移動や特別展などの貸出に伴う輸送について安全で適正な取扱や輸送方法を確立するための見通しと問題点が明らかになった。また三次元計測によって得られたデータによって、展示に伴う支持具の作成や輸送のための安定台の作成に反映させることができる。</p>	B	B
4571-10		<p>9) 日本とドイツの美術解剖学教育の発展と展開(科学研究補助金)</p> <p>東京国立博物館所蔵の美術解剖学関係資料、特に森鷗外・久米桂一郎・黒田清輝に関する資料調査を、24年度より継続して行っている。</p>	B	B
4571-11		<p>10) 文化財管理における美術品用語辞典の作成(科学研究費補助金)</p> <p>文化財に関する情報を扱う施設から収集した用語データを整理、体系化した。特に分担者は、データの整理や公開方法について検討した。</p>	B	B
4572-1	(京都国立博物館) 1) 文化財情報に関する調査研究を行う。	<p>11) 美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発(科学研究費補助金)</p> <p>北米及びオーストラリアの美術館における鑑賞教育プログラムの調査を実施した。これにより、鑑賞教育プログラムと各美術館・博物館の所蔵作品、およびスタンダード(学習指導要領)との関係性について分析を行うことができた。</p> <p>また、研究に参加している中の数館で実践(研究授業)を行い、相互行為分析と発達段階別の検証を行った。</p> <p>国内外の鑑賞プログラムの事例調査と、国立美術館・博物館の所蔵作品を使って行った鑑賞プログラムの実践・分析結果をとりまとめ、研究報告会を開催した。さらにこれをウェブサイトにて報告した。</p> <p>【京都国立博物館】</p> <p>1) 文化財情報に関する調査研究</p>	B	B

		(1) 写真資料・作品情報のデジタル化を進め、ウェブサイトにおける収蔵品公開データベースの更新を随時行った。 (2) デジタル化の推進やウェブサイトにおける公開機能の強化に対応するため、文化財情報システムの改良や運用改善を随時行うとともに、将来計画に向けた調査・検討を行った。 (3) 平成知新館開館を期に、展示系システムに関わる整備や館内ネットワークの更新による処理能力向上を行った。 (4) 科学調査機器の整備にあわせ、研究系サーバの能力強化や仮想化技術の導入を進めた。 (5) 文化財防災に関わる機能強化のため、文化財情報のバックアップ強化を検討し、各種試験を行った。		
4572-2	2) 平成知新館の新装開館に向け、同館における新たな教育ツールの開発を行う。	2) 平成知新館における教育ツールの開発 (1) 京博ナビゲーターのための実践マニュアル「虎の巻」を作成した (163 部) (2) 京博ナビゲーターのための基礎講座を開催した (1 日×8 回) (3) 平成知新館において「ミュージアム・カート」の活動実践を行った (161 日、1 日最大約 500 人) (4) 実践をふまえて、ナビゲーターからの意見も集めツール・手法の改善を行った (5) ミュージアム・カートについて館外への情報発信を行った	B	B
4572-3	3) 高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育について調査・研究を行う。	3) 高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究 (1) 文化財ソムリエ (大学生ボランティア) に対するスクリーニングを行った (21 回) (2) 文化財ソムリエによる京都市内の小中学校への訪問授業を行った (7 回 488 人) (3) 文化財の複製を用いた授業に関する交流会を行った (1 回 29 人) (4) 高精細複製を用いた授業実践への協力を行った (4 回) (5) 研究員による訪問授業を行った (2 回 93 人) (6) 館蔵品の高精細複製を制作した (2 件) (7) 他館の活動調査や、学生ボランティア同士の交流の機会を設けた (5 回) (8) 『小さな瞳にワクワクを—平成 26 年度「文化財に親しむ授業」記録集—』を刊行した (1,000 部) (9) 『文化財に親しむ授業ガイドブック』を配布 (910 部)、増刷した (500 部) ※(3)～(9)は、「平成 26 年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を受けて実施した	B	B
	(奈良国立博物館)			
4573-1	1) 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究を行い、その成果を児童・生徒を対象として行う「世界遺産学習」等に反映させる。	1) 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究を行い、その成果を児童・生徒を対象として行う「世界遺産学習」等に反映させる。 (1) 奈良の歴史と伝統文化に関する情報を、本年度開催した展覧会 (名品展・特別展・特別陳列) の中から抽出した。 (2) その情報を、児童・生徒が歴史への関心を高めるのに使える情報は何かを検討した。 (3) ボランティアへの指導と話し合いを通して、世界遺産学習実践の場での「語りかけ」の精度を高めることに努めた	B	B
4573-2	2) 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究を行い、その成果をデジタル画像の作成・各種データベースの構築 (収蔵品・画像・図書) ・各種情報資源の公開推進に反映させる。	2) 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究を行い、その成果をデジタル画像の作成・各種データベースの構築 (収蔵品・画像・図書) ・各種情報資源の公開推進に反映させる。(学術研究助成基金助成) デジタル撮影の安定的な稼働を目指して、撮影機材、撮影環境、保存用ストレージ、体制等の整備を引き続き行い、多数の文化財を撮影した。館内の情報システムや公開用データベースのデータ更新を適宜行い、情報資源の拡充と公開に積極的に取り組んだ。今年度は、新たに修理記録のデータベースの公開も実施した。また、地下回廊において仏像写真展「大和のほとけたち—奈良博写真技師の眼—」と題する展示を実施するなど、当館における文化財写真アーカイブズ形成の成果を一般に広めることにも取り組んだ。	B	B
	(九州国立博物館)			
4574-1	1) NHKと協同で高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターでの映像公開に向けた研究を引き続き実施する。	【九州国立博物館】 1) NHKと協同で高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアター (シアター4000) での映像公開に向けた研究 (1) NHK放送技術研究所において 8 K 映像技術の情報収集を行った。 (2) 九州国立博物館において映像の出力形式及び保守設備について打合せを実施し、新規コンテンツ制作のための基盤情報を整理した。 (3) 長野県の駒ヶ根美術館において、画像展示に関する調査を実施した。 (4) 宗像大社において沖ノ島の植生と生態に関する情報収集を実施した。 (5) 沖ノ島において祭祀遺跡の立地を調査した。 (6) 東京で関係者による打合せを実施し、本年度のまとめを行うとともに、番組構成案ならびに次年度のスケジュールを策定した。	B	B
4574-2	2) 特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究を行う。	2) 特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究 展示室内での解説パネルの掲出や体験コーナーの設置、室外のワークショップや講演会などを実施。アンケートには、分かりやすかった、体験できて楽しかった、展示に対してもっと興味を持てた、などの感想がみられた。	B	B
4574-3	3) 学校教育との連携を図りながら、学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・開発を引き続き実施する。	3) 学校教育現場との連携を図って作り上げる学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・調査 「きゅうぱっく」を活用した実践事例や博物館を活用した授業づくりに関する指導案を収集するとともに、「きゅうぱっく」に関する情報発信・利用の普及を図った。また、新規キットの開発に向けた研究を行っている。	B	B
4574-4	4) 平成27年度に迎える開館10周年における一定程度のリニューアルを見据え、現在の展示施設、展示環境や展示方法の課題や展望について検討する。	4) 27 年度に迎える開館 10 周年における一定程度のリニューアルを見据えた、現在の展示施設、展示環境や展示方法の課題や展望についての検討 (1) 学芸部研究員全員参加による学芸部会議をはじめ、各テーマ担当者会議、事務局会議などを開催し、これまで抽出してきた文化交流展示室の課題改善に向けての検討を重ねた。 (2) 外部委員会「次の 10 年を考える懇話会」第 10 回 (最終回) を開催した。 (3) 上記検討の成果をリニューアル計画として具体化させるとともに実施に向けての館内調整を進めた。 (4) 27 年 10 月 17 日開催予定の開館 10 周年記念式典までにリニューアルを完了させる計画である。	B	B

4574-5	5) 高等学校所蔵考古資料の調査研究を行う。	5) 高等学校所蔵考古資料の調査研究 (1) 24年度からの調査研究の中間報告として、7月15日から9月23日にかけて当館文化交流展示室において「真夏のトピック展示 全国高等学校 考古名品展」を開催し、展示と図録を通じて、一般には知られていない高校所蔵考古資料の存在を浮き彫りにした。 (2) 高校が主体となる考古学活動は1970年代頃から下火となったとみられていたが、これまでの現地調査をまとめることにより、現在においても活動を続けている高校があることを確認した。 (3) 8月16日に当館ミュージアムホールにおいて「全国高等学校考古学フォーラム in 九州国立博物館 2014」を開催することにより、現役高校生による考古学研究発表の場を創出し、高校生による考古学活動はすでに下火になっているとの認識を改めることができた。 (4) 佐賀県下の県立高校の考古資料の所蔵実態と活動状況について、佐賀県に依頼して悉皆調査を実施し全容を把握した。 ・徳島県、愛媛県、秋田県、三重県、長野県における高校所蔵考古資料の実態について、当該自治体文化財関係者にヒアリングを行い、また文献調査を実施し、今後の調査にむけての基礎情報を収集した。	B	B
4574-6		6) 文化財管理及び画像情報データベースの効率的な運用についての調査研究 (1) 京都国立博物館(列品調査室)及び奈良国立博物館(情報サービス室)で運用されている文化財管理システムの調査・研究を、当該担当者の指導・助言を得て行った。 (2) 現行システムの問題点を洗い出した結果、新システムの採用に向けた取り組みを行った。 (3) (2)と並行して博物館データベース及びシステムの専任者を採用した。 (4) 当館で撮影された写真フィルムの完全デューブ化を実現した。 (5) より高品位の記憶媒体に画像データを保管した。 (6) デジタル撮影の本格的稼働に備え、撮影機材、撮影環境、保存用ストレージ、体制等の整備に取り組んだ。	B	B

5 文化財保護に関する国際協力の推進

【中期目標】文化財の保護に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図り、我が国の国際貢献に寄与すること。

(1) 保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤の整備

【中期目標】研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークの構築、アジア諸国等における文化財の保護協力、技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行い、人類共通の財産である文化財の保護に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与すること。

【中期計画】 (1) 文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用する。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化を図るとともに、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア地域を中心とする諸外国の文化財の保護事業を推進する。	【主な計画上の評価指標】 ○情報の収集・分析及びその提供を行うこと。 ○国際協力のネットワークを構築すること。 ○アジア地域を主とする諸外国において、文化財保護事業を進めること。 【25年度評価における主な指摘事項】
--	--

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
5111	文化財保護に関する国際協力に関して、以下の事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財保護に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。 (1) 文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化を図るとともに、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア地域を中心とする諸外国において文化財の保護事業を推進する。	① 文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信 ・世界遺産委員会（ドーハ）、奈良文書20周年記念会合（奈良）、ICOMOS 総会（フィレンツェ）、ICCROM 理事会（ローマ）、無形文化遺産政府間委員会（パリ）等の国際会議に出席し、文化財保護に関する国際情報収集を行った。 ・日本の文化財の所蔵館や、他の所内業務において関連のある美術館・博物館を中心にアメリカにおける動産文化財の所蔵・管理状況についての調査を行った。 ・文化財保護関連の法令の収集・分析及び翻訳作業を実施し、対訳法令集シリーズを新たに1冊刊行した。	B	B

に供する。

(2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進

【中期目標】				
【中期計画】		【主な計画上の評価指標】		
(2) 国際共同研究等を通じて諸外国の保存・修復の考え方や技術に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を形成するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とする諸外国において文化財保護事業を推進する。		【25年度評価における主な指摘事項】		
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
5211-1	ア 敦煌莫高窟壁画を始めとする中国の文化遺産の保存修復のための共同研究を実施する。 ① 文化財の保存修復事業及び国際共同研究事業を以下のように実施し、成果を広く公表する。	①ーア 中国の文化遺産の保存修復のための共同研究 敦煌研究院、陝西省考古研究院との共同関係を維持し、壁画文化財等の保護に関する研究について実績をあげた。 (1)敦煌研究院保護研究所と共同で、莫高窟第285窟で壁画の材質調査と環境に関する調査を実施した。 (2)陝西歴史博物館壁画展示館及び西安市所在の地下遺構保存に関連する施設、博物館を視察した。 (3)前年度までの研究成果を国内学会で発表した。 (4)中国で実施された壁画の保護に関する国際シンポジウムに参加し、発表を行った。 (5)敦煌研究院の若手研究者の研修を行った。	B	B
5212-1	イ 韓国及び日本の石造文化財を対象に保存修復のための共同研究を実施する。	①ーイ 韓国及び日本の石造文化財を対象に保存修復のための共同研究 「文化財の保存環境及び保存修復技術研究」に関する日韓共同研究合意書に基づく韓文研保存科学研究室との共同研究において（26年度で第4期4年目）、韓国側研究者との研究交流により双方の研究発展を図っている。26年度は、以下の内容を実施した。	B	B

5213	ウ カンボジア・アンコール遺跡群（特に西トップ遺跡及びタ・ネイ遺跡）を始めとする東南アジア地域等の文化財保護に関する調査研究及び保存修復協力事業を実施する。	(1) 5月に韓文研保存科学センターセミナー室で研究会を開催し、両国の研究者による発表及び討議を行った。 (2) 5月に韓国において、9月に日本国内での現地調査を実施した。 (3) 研究会での発表内容については韓日共同研究報告書として刊行した。 ①ーウ 東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力 (1)カンボジアでは、タネイ遺跡の保存整備に向けた作業工程及び現状記録技術の実地検討を行った。基本的な手法を確立し、現地機関に活用されている。 (2)タイでは、寺院扉の螺鈿装飾の科学的な現地調査を行い、技法・材料等に関するデータを取得した。分析結果は同作品の保存修復方針に反映される。 (3)ミャンマーでは、伝統的漆工芸品の保存協力協定を締結したほか、同国木造建築に関する研究会を開催し、研究課題等を把握・共有した。 ①ーウ・エ カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ遺跡の建築学的・考古学的・保存科学的調査 (1)西トップ遺跡に関しては、遺跡の安定化を図るための修復工事に本格的にとりかかり、まず南祠堂の解体修理に着手し、本年後半には再構築を開始した。 (2)修復工事に伴って発掘調査を適時実施し、本遺跡の基壇構造、基壇構築にかかる祭祀遺構などの発見があった。 (3)調査の成果を再構築のための基壇強化の手法に反映するとともに、遺跡の築造順位を確定することができた。	B	B
5214	エ アフガニスタン（主としてパーミヤーン）及びイラクの文化財保存修復協力事業を実施する。また、併せて周辺地域（西アジア諸国等）において、文化財調査研究及び保存修復協力事業を実施する。	①ーエ 西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業 (1)アフガニスタン：保存修復専門家の人材育成・技術移転を実施した。前年度活動の報告書の作成・刊行を実施した。 (2)西アジア周辺諸国の文化遺産の調査研究・保護への協力等：タジキスタン、キルギス、イラン、エジプト、アルメニア等において実施した。	B	B
5215	オ 上記各事業と連携しつつ、中央アジア諸国等ユーラシア地域における文化財の保存及び修復に係る調査研究を推進する。また、文化財の保存修復手法に関するワークショップの開催等を通じて国内外の専門家との情報の共有化を図る。	①ーオ ユーラシア壁画の調査研究と保存修復 (1)タジキスタン：本年度は、フルブック壁画断片の安定化処置を完了し、展示公開が実現できた。また、新たにベンジケント遺跡等出土ソグド壁画断片の一部のドキュメンテーションを実施した。 (2)イタリア、ドイツ：ユーラシア壁画の保存修復に着目してヨーロッパ諸国の壁画修復現場を視察し、修復技法や状態に関する調査を行った。 (3)壁画研究会：ユーラシア壁画の技法材料研究に関する研究会を開催し、関連分野に携わる専門家間の意見交換、議論の場を提供した。 (4)ウズベキスタン：ユーラシア壁画の保存修復に着目し、タシケントの関連機関での視察を行い、修復技法や状態に関する調査を実施した。	B	B

(3) 研修、専門家の派遣を通じた諸外国における人材育成、技術移転

【中期目標】				
【中期計画】		【主な計画上の評価指標】		
(3) 文化財保護の担当者や学芸員並びに保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化財の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。		○諸外国への文化財の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進めること。		
		【25年度評価における主な指摘事項】		
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
5311	(3) 文化財保護の担当者や学芸員及び保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化財の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。	①-1 国際研修「紙の保存と修復」 (1)和紙を使用した紙文化財の保存修復に関する研修を行った。 ・国内研修：修復材料の基礎科学、道具の製作、学術的見地からみた文化財に関する講義。卷子修復、和綴り冊子作製、掛軸・屏風の取り扱い実習。和紙製作現場や文化財修復工房等の見学。 ・メキシコ研修：修復材料、装こう技術、道具に関する講義。和紙やデンプン糊を用いた基礎的な修復実習。 (2)両研修では日本の文化財修復の技術や知識を海外の修復技術者及び文化財関係者に伝えることができた。 (3)昨年度の参加者からの意見を踏まえ、研修内容に若干の見直しを加えた。	B	B
5312		①-2 在外日本古美術品保存修復協力事業 ・作品修復のため、掛軸1作品を輸入し、詳細な状態調査を開始した。使用されている材料および損傷状況等、修復作業に必要な基本的情報を得ることができた。 ・漆工芸品1作品の状態調査を行い、得られた情報に基づき修復を行った。 ・日本美術品を所蔵する海外の美術館博物館において絵画及び漆工芸品の調査を行い、今後の修復候補作品選定の基礎情報を収集することができた。 ・ベルリンにおいて紙本絹本文化財の保存修復に関するワークショップを、ケルンにおいて漆文化財の保存修復に関するワークショップを開催した。各国の文化財保存修復の専門家の参加があり、日本の文化財に対する理解の深化、修復技術の移転を行うことができた。 ・絹や色材といった修復に使用する材料の基礎的な研究を行い、学会発表を行った。研究によって明らかになった諸材料の特性を修復作業に反映させることができた。 ・25年度までに修復を行った作品についての報告書を発行した。	B	B

5321	② 国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力を行う。	② ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力 (1)集団研修「遺跡・遺物の調査と保存」ではアジア太平洋諸国16カ国、16名の研修生に対して、考古学的遺跡・遺物の調査と保存に関する研修を行った。 (2)個人研修「遺跡の調査・保存と管理活用」ではバヌアツ人専門家2名に対して、遺跡の調査・保存と管理活用に関する研修を行った。 (3)個人研修「写真による文化遺産の記録とデジタルデータの管理・活用」ではブータン人専門家3名に対して、写真による文化遺産の記録とデジタルデータの管理・活用に関する研修を行った。 (4)バングラデシュで実施された「文化遺産ワークショップ」では当研究所の研究員1名を講師として派遣し、バングラデシュ人専門家15名に対して考古学的遺物の分析に関する研修を行った。	B	B
------	--	---	---	---

(4) アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究

【中期目標】平成23年度にアジア太平洋無形文化遺産研究センターを開設し、同地域における無形文化遺産保護に寄与すること。				
【中期計画】		【主な計画上の評価指標】		
(2) 23年度にアジア太平洋無形文化遺産研究センターを設置し、ユネスコ無形文化遺産保護条約を中心とした国際的動向の情報収集を図り、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に係る調査・研究の拠点として、同地域の無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究を行うとともに、我が国の知見を通じて、無形文化遺産保護の国際的充実に資する。		○アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究を行うこと。		
		【25年度評価における主な指摘事項】		
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
5411	(4) アジア太平洋無形文化遺産研究センターは、アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護のための調査研究拠点として、同地域における危機に瀕した無形文化遺産の保護に向けた現地調査やワークショップを実施する。また、無形文化遺産保護の分野の研究データ及び同地域の研究機関や研究者についての総合的な情報収集を行うための国際会議を開催し、その成果についてデータベースを構築し、共有する。さらに国際会議への出席やユネスコとの連携を通じて、無形文化遺産保護を中心とした国際的動向の情報収集を図る。	(4) アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究の推進 文化庁受託事業「平成26年度無形文化遺産保護パートナーシッププログラム」及び文部科学省補助金「平成26年度政府開発援助ユネスコ活動費補助金」による事業を通じ、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護の調査研究に関する情報収集と研究促進にむけたデータベース構築及び国際専門家会合、消滅の危機に瀕する無形文化遺産保護の現状・方策に関する現地での実態調査やワークショップを実施した。	B	B

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

【中期目標】国際化の推進を図るためインターネット等による情報発信を強化し、調査・研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。

(1) 情報基盤の整備充実

<p>【中期計画】</p> <p>(1) 文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を行う。 また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査・研究に基づく成果としてのデータベースの充実を行う。</p>	<p>【主な計画上の評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ネットワークセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備充実を図ること。 ○文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図ること。 <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○研究成果、保存修復の成果の公開は、学術分野においても重要だが、広く国民への還元という点で、わかりやすい広報の仕方も求められる。博物館における展示活動に加え、文化財レスキューといった支援事業の内容や文化財保存における科学的解析の成果利用の実績など、機構の活動の具体的な内容や社会的意義を広く国民に周知する取組が求められる。
--	--

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
	<p>以下のとおり、調査・研究に基づく資料の作成及び文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査・研究成果を積極的に公表・公開し、国内外の研究者や広く一般の人が調査・研究成果を容易に入手できるようにする。</p> <p>(1) 文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を行う。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査・研究に基づく成果としてのデータベースの充実を行う。</p>			

6111	① 文化財に関するデータベースの充実とアーカイブ機能の更新と拡張を図る。	<p>①-1 文化財情報基盤の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保守期限切れを迎えるネットワーク機器の更新を実施し、無線 LAN のアクセスポイントを追加した。また、仮想サーバを導入した。 ・アクセスポイントについては接続状況を再調査し、設置が必要な場所に追加した。また、WordPress による総合検索システムの導入に伴い不要となったサーバを活用して仮想サーバ化を行い、物理的には1台のサーバを複数のサーバとして利用することとした。 ・費用対効果の面で効果的にウェブサイトの運用を行うことができたため、更新が必要な機器を前倒しで更新することができた。 	B	B
6112		<p>①-2 無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化</p> <p>映像資料に関しては、前年度に引き続き、旧芸能部の年代に作成された映像資料の媒体変換を実施した。 アナログ音声資料に関しては、オープンリールとカセットテープについて、収録内容の確認を含めた整理を行った。 無形文化遺産部所蔵資料の内、稀少性の高い刊行年代が昭和30年代に溯る紙媒体資料のデジタル化に向けて所蔵調査を行った。</p>	B	B
6113		<p>①-3 文化財に関するデータベースの充実</p> <p>GIS(地理情報システム)を活用した文化財情報の取得・分析に関する研究を行うとともに、成果を学会で発表している。文化財情報の電子化に関する研究を基に開発・改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても、記載方法の標準化を進めながらデータの充実を図った。</p>	B	B
6121	② 被災文化財関連情報に関するデータベースの充実とアーカイブ機能の更新と拡張を図る。	<p>② 被災文化財関連情報に関するデータの蓄積・分析及び情報発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化庁委託事業「文化財(美術工芸品)等緊急保全活動・現況調査事業」と連携し、文化財レスキュー事業によって蓄積された情報の分析と発信について検討を行った。 ・文化財レスキュー事業実施時に撮影された画像について、そのデータベース化と共有のためのシステムを構築し、所内で公開した。また、シンポジウムや報告書などの調査研究成果をウェブで発信した。 ・従来は困難であった画像の検索を、テキストと関連させることで可能とし、またウェブデータベース化することで遠隔地との共有を可能とした。また、文化財レスキュー事業に関する情報を共有することができた。 	B	B
6131	③ 文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供について充実するよう努める。	<p>③-1 専門的アーカイブの充実(資料閲覧室運営)</p> <p>資料閲覧室の運営、並びに資料の登録と情報のデータベース化、またそれを利用した外部公開用 SQL データの更新・運用を行った。</p>	B	B
6132		<p>③-2 図書の収集・整理・公開・提供</p> <p>遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入及び寄贈による収集を行い、整理された資料をデータベースに蓄積してインターネットに公開した。また、図書館システムをクラウド化することにより、サーバの維持管理を省力化することができた。</p>	B	B

(2) 研究所の研究成果の発信

【中期目標】 -----				
【中期計画】		【主な計画上の評価指標】		
(2) 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図るとともに、ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。		○公開講演会、現地説明会、国際シンポジウム等を積極的に行うこと。 ○ウェブサイトの充実を図るとともに、アクセス件数の向上を図ること。		
		【25年度評価における主な指摘事項】		
処理番号	年度計画	主な実績		自己評価 年度 中期
6211	(2) 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図るとともに、アクセス件数の向上を図る。 ① 定期刊行物の刊行 ○『東京文化財研究所年報』 ○『東京文化財研究所概要』 ○『東文研ニュース』	①-1 定期刊行物の刊行（年報、概要、ニュース） ・『年報』2013年度版、『概要』2014年度版を編集、刊行した。また、『東文研ニュース』を年3回刊行した。さらに、エントランスロビーパネル展示を更新した。 ・東京文化財研究所による研究成果をまとめるとともに、わかりやすく発信することができた。 ・東京文化財研究所への来訪者や、訪問先の関係者に対する研究成果の説明について有効に活用することができた。		B B
6212	○『美術研究』（年3冊） ○『日本美術年鑑』	①-2 定期刊行物の刊行（『平成25年版日本美術年鑑』、『美術研究』） 本年度は、『平成25年版 日本美術年鑑』及び『美術研究』413～415号を刊行した。		B B
6213	○『無形文化遺産研究報告』 ○『無形民俗文化財研究協議会報告書』	①-3 定期刊行物の刊行（『無形文化遺産部研究報告』、『無形民俗文化財研究協議会報告書』） (1) 主として無形文化遺産部研究員の業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』第9号の刊行。 (2) 26年12月5日に開催した無形民俗文化財研究協議会での事例報告・総合討議を内容とする『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行。		B B
6214	○『保存科学』	①-4 定期刊行物の刊行（『保存科学』54号） 『保存科学』第54号を発行した		B B
6215	○『奈良文化財研究所紀要』 ○『奈良文化財研究所概要』 ○『東文研ニュース』 ○『埋蔵文化財ニュース』	①-5 定期刊行物の刊行 紀要等2点、ニュース2種8点、合計10点を刊行した。		B B

6221	② 公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等	②-1 第37回文化財の保存と修復に関する国際研究会の報告書作成 前年度の26年1月10日（金）～12日（日）、東京文化財研究所の地下セミナー室において開催した、第37回文化財の保存と修復に関する国際研究会の報告書を作成した。	B	B
6222	○公開講座（オープンレクチャー）	②-2 平成26年度オープンレクチャー (1) 第48回企画情報部オープンレクチャー「モノ/イメージとの対話」と題して4講演を2日間にわたり開催した。 (2) 参加者数：163人、アンケートによる満足度：82.7%（回収率：78%） (3) 4講演中の1つは講演内容を踏まえて、次年度『美術研究』に論文として掲載を予定。	B	B
6223	○公開講演会 ○現地説明会	②-3 公開講演会、現地説明会等の開催 (1) 公開講演会は、例年実施している定例公開講演会（奈良）を2回、特別講演会（東京）を1回、飛鳥資料館特別展記念講演会等を2回開催した。いずれも多くの参加者があり、日頃の当研究所研究成果を一般に発信できた。 (2) 発掘調査に伴う現地説明会等を2回実施した。このことにより、調査研究成果を適時に適切に国民に公開・公表することができ、事業としては実施できた。	B	B
6231	③アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図る。	③-1 ウェブサイトの運用 (1) 活動報告（和英）や研究会等の開催情報などの広報について、及び文化財アーカイブズ研究室と連携しての文庫や写真などの所蔵資料、研究成果の発信についてその手法の検討を行った。 (2) 黒田清輝関連のページを中心としたウェブサイトの更新を随時実施し、レイアウトやメニュー構成などデータへのアクセス方法を改善した。また、WordPressによるデータベースを昨年度に引き続き随時整備・公開した。さらに、それらの更新情報をソーシャルネットワークサービス（SNS）により発信した。 (3) データベースの整備・公開により、調査研究情報へのアクセスが容易となった。	B	B
6232		③-2 ウェブサイトの充実 (1) アクセス解析の精査による利用増加施策を戦略的に立案した。 (2) リポジトリコンテンツ増加により利用者数の増加が見られた。 (3) コラムの継続発信とブログの活用促進を行った。 (4) ウェブサイトの多言語化対応ページの充実を行った。 (5) ウェブサイト内コンテンツの再配置を行った。	B	B

(3) 研究所所管の展示公開施設の充実

【中期目標】 -----				
【中期計画】		【主な計画上の評価指標】		
(3) 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。来館者数については、前期中期目標期間の年度平均（特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く。）以上確保すること。		○来館者数については、前期中期計画期間の年度平均（特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く。）以上を確保すること。		
		【25年度評価における主な指摘事項】		

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
6311	(3) 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。来館者数については、前期中期計画期間の年度平均(特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く。)以上確保する。 ① 平城宮跡資料館における展示・公開常設展(月曜日、年末年始休館)特別展(年1回)企画展(年1回)年間目標来館者数 85,300人	① 平城宮跡資料館における展示公開 (1)常設展の円滑な実施のため、その維持・管理に努めるとともに、高精細画像鑑賞システムを新規設置した。 (2)夏期企画展「平城京ピクニックはくらんかい」を開催した。 (3)秋期特別展「地下の正倉院展—木簡を科学する—埋蔵文化財センターの40年」を開催した。 (4)ミニ展示「発掘速報展平城2014」を2期へ分けて開催した。	B	B		
6321	② 飛鳥資料館における常設展示の充実と特別展示の開催 常設展(月曜日、年末年始休館 有料公開)特別展(年2回)企画展(年1回以上)年間目標来館者数 48,800人	② 飛鳥資料館における展示公開 (1)常設展示室の展示内容を部分的に改装、映像コーナーの映像を入れ替えた。 (2)春期特別展「いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代—」を26年4月25日～6月15日に開催し、記念座談会を26年5月11日に開催した。ギャラリートークを3回(26年4月26日、5月11日、5月24日)実施した。 (3)夏期企画展「第5回写真コンテスト「飛鳥の薨」応募作品展」を26年7月25日～9月7日に開催し、写真教室を26年7月25日、8月23日に開催した。 (4)明日香村活性化事業「飛鳥光の回廊」に参加した。26年9月13日～14日開催。 (5)企画展「津田洋 大和の美仏に魅せられて」を26年9月12日～9月28日に開催した。 (6)秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどり—大地にきざまれた記憶—」を26年10月10日～11月30日に開催し、記念講演会を26年11月1日に開催した。ギャラリートークを4回(26年10月10日、11月22日に2回ずつ)実施した。 (7)冬期企画展「飛鳥の考古学2014—縄文・弥生・古墳から飛鳥へ—」を27年1月16日～3月1日に開催。ギャラリートークを4回(27年1月17日、2月15日に2回ずつ)実施。	B	B		
6331	③ 藤原宮跡資料室における展示・公開常設展(年末年始休館 無料公開)年間目標来館者数 4,509人	③ 藤原宮跡資料室における展示公開 常設展示及び発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の充実を図った。庁舎エントランスの速報展示コーナーでは、最新の調査研究成果の公開を実施した。その他、適宜展示解説や各地の博物館への文化財貸与を行った。	B	B		
		定量的評価	26年度	25年度	目標値	評定
		来館者数 平城宮跡資料館	109,188	108,896	83,500	A

	飛鳥資料館	38,096	41,736	48,800	D
	藤原宮跡資料室	8,461	7,869	4,509	A

(4) 文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力

【中期目標】	-----
【中期計画】 (4) 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成するとともに、NPO法人等が自主的に行う各種ボランティア事業に対して活動機会・場所の提供等の支援を行う。	【主な計画上の評価指標】 ○文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力すること。また、ボランティアへの活動支援を行うこと。 【25年度評価における主な指摘事項】

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
6411	(4) 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財及び奈良文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成するとともに、NPO法人等が自主的に行う各種ボランティア事業に対して活動機会・場所の提供等の支援を行う。 ① 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 ○ 文化庁が行う平城宮跡、藤原宮跡の管理への協力 ○ 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力 ○ 国土交通省が行う平城宮跡展示館(仮称)の建設への協力 ○ 国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設への協力	①-1 文化庁平城宮跡管理事務所の運営への協力 文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力し、文化庁の平城宮跡等整備事業に協力した。	B	B

6412		①-2 文化庁・国土交通省が行う平城宮跡の復原・整備への協力 (1) 第一次大極殿院の建物復原研究のため、所内検討会及び有識者を招聘した検討会を開催し、記録集を作成した。 (2) 文化庁や国土交通省が開催する会議等に対して、専門的・技術的な援助・助言を行った。 ・文化庁や国土交通省と共催し、第一次大極殿院の復原整備についての講演会を開催した。 ・平成12年度までに行った平城宮跡の整備について報告書を作成した。 ・平城宮跡の整備設計・工事等に対して、設計条件の整理、提出資料に対する助言、立会調査等を実施した。	B	B
6413		①-3 国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設への協力 (1) 国営飛鳥歴史公園事務所の依頼に基づき、キトラ古墳体験学習館の展示に資する奈文研所蔵資料一覧の中から実際に貸与可能な物件と、貸与の場合に求められる条件を提示した。 (2) 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）と協力して国営飛鳥歴史公園事務所と展示内容について助言・協力をを行った。	B	B
6414		①-4 国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設への協力 (1) 展示評価のためのアンケート調査、フォーカスグループインタビューを実施した。 (2) 遺跡立地型展示施設等にて展示手法の調査を実施した。 (3) 詳覧ゾーン基本設計の展示内容を一部修正し、展示候補品を再選定のうえ、リストと資料カードを作成した。	B	B
6421	② 平城宮跡解説ボランティア事業の実施	② 平城宮跡解説ボランティア事業の実施 高い知識に基づく解説をより多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。	B	B
6431	③ 平城宮跡防災・防犯パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加	③ 平城宮跡防災・防犯パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加 平城宮跡来訪者に平城宮跡内でのマナーの向上や防災・防犯活動を行っていることを理解してもらうことができた。 みまもり隊の活動が近隣住民、来訪者に浸透した結果、一般人の参加者が前年度を上回った。	B	B
6441	④ NPO法人等への支援	④ NPO法人等への支援 ボランティア団体への支援は、その育成につながった。 第29回国民文化祭シンポジウムに招待されて、平城宮跡及び平城京と秋田城との繋がりを紹介するとともに、遺跡ボランティア団体などによる遺跡紹介や交流イベントに参加し、平城宮跡の現状と魅力を発表した。	B	B

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

<p>【中期目標】 我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、地方公共団体や大学、研究機関とのネットワークや連携協力体制を構築し、機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を図り、我が国全体の文化財の収集・展示、調査・研究の質的向上に寄与すること。また、地方公共団体等の指導者層を主たる対象とする高度な研修事業や、若手研究者の育成に寄与するため実践的な連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成すること。</p>

【中期計画】		【主な計画上の評価指標】			
<p>我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。</p> <p>(1) 地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。</p> <p>(2) 文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に対し埋蔵文化財等に関する研修を実施するとともに、保存担当学芸員に対し保存科学に関する研修を実施する。</p>		<p>○文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行うこと。</p> <p>○地方公共団体等で中核となる文化財担当者に対し埋蔵文化財等に関する研修を実施すること。また、保存担当学芸員に対し保存科学に関する研修を実施すること。</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p>			
処理番号	年度計画	主な実績		自己評価	
		年度	中期	年度	中期
7111	我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。				
7112	(1) 地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査・研究成果発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。				
7113	① 地方公共団体等からの要請に応じ、それへの協力・助言・専門的知識の提供等を実施する。	①-1 文化財の収集、保管に関する指導助言 各研究員の専門的知識を活かして、地方公共団体等の行う文化財の収集、保存、展示に対して指導助言を行った。	B	B	B
		①-2 無形文化遺産に関する助言 26年度は、無形文化遺産の保存・伝承・活用等に関して、文化庁文化財部伝統文化課に対する助言を始め、以下の助言を実施した。	B	B	B
		①-3 文化財の修復及び整備に関する調査・助言 26年度は、蛍光X線分析やX線回折分析による材質調査、X線透過撮影による構造調査等、以下に示す調査・助言を実施した。	B	B	B

7114		①-4 文化財の虫菌害に関する調査・助言 本年度は、対応件数が37件（内訳：国内35件、国外2件）であり、指導助言先も国内のみならず、文化財保存に携わる国外文化財関係機関からの問い合わせも含めて多岐にわたり、複数回の指導助言に及んだ場合もあった。適正に文化財の虫菌害対策が実施されるように努めるとともに、今後の研究の課題にもつながり得るような新たな知見も得ることを念頭に調査・助言を実施した。	B	B
7115		①-5 文化財の材質・構造に関する調査・助言 26年度は、蛍光X線分析やX線回折分析による材質調査、X線透過撮影による構造調査等、以下に示す調査・助言を実施した。	B	B
7116		①-6 美術館・博物館等の環境調査と援助・助言 国指定品の収蔵、展示を予定する58館を対象とした環境調査を行い、報告書を作成した。また、全国の多くの文化財施設等からの保存環境に関する相談に対して、必要な対応を行った。	B	B
7117		①-7 地方公共団体等の要請による発掘調査等への協力・援助 ・地方公共団体からの要請に基づき、平城宮・京跡における小規模開発に伴う発掘調査・立会調査を実施した。 ・緊急性を要する状況に適切に対応し、効率的な調査を実施した。 平城宮・京跡に関する基礎的資料を継続的に蓄積することができた。 ・地方公共団体に対し、調査成果を迅速に伝達し、文化財保護行政に資する情報として共有した。また、紀要を通じて調査成果を公表し、学術的情報として公表した。	B	B
7118		①-8 地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言 藤原宮跡において地方公共団体が行う発掘調査への援助・助言の事業は10件あり、主に工事に伴う事前調査や立会である。緊急性を要する事前調査に効率よく対応し、藤原宮ならびに飛鳥・藤原地域についての基礎資料を継続的に蓄積した。	B	B
7119		①-9 地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言 地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業について、専門委員会委員への就任等を通して、建造物修理、史跡整備、出土文字資料調査、発掘調査等に関する専門的・技術的助言を行った。	B	B
7121	② これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、他機関等との共同研究及び受託研究を実施する。	②-1 他機関等との共同研究及び受託研究を実施 地方公共団体等が行う文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、共同研究及び受託研究を行った。 ②-2 他機関等との共同研究及び受託研究を実施 地方公共団体等が行う文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、受託研究等を行った。	B	B

7131	③ 東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査について、地方公共団体等に対する支援・協力をを行う。	③ 東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対する地方公共団体等への支援・協力 東日本大震災被災地の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対し、今までの調査・研究の成果を反映させた発掘調査への効果的な支援や報告書作成に係る支援を行った。同時に、奈文研の特性を踏まえた写真撮影等の技術について、地方公共団体等の要請を受け支援・協力を実施した。	B	B
7140	④ 今後可能性が指摘されている巨大地震等大規模災害が発生した際に、各地域における文化財等の防災や被災した文化財等の救出・修復等の適切な処置を行うための体制を整備する。	④ 文化財防災ネットワーク推進事業 ・文化財防災ネットワーク推進のため「文化財防災ネットワーク推進本部」を設置した ・文化財防災ネットワーク構築の必要性と、今後の取り組みについて共通理解を得るため、文化遺産防災ネットワーク推進会議を設立した。 ・今後のネットワーク構築に向けた知見を得るため、文化遺産防災ネットワーク有識者会議を設立した。 ・全国各地に存在する史料ネットと連携のため、全国史料ネットネットワーク集会を共同開催した。 ・けいはんなオープンイノベーションセンター（略称：KICK、旧私のしごと館）の収蔵庫の整備を行い、防災・レスキュー拠点等として活用するための体制を整備した。（27年3月） ・第3回国連防災世界会議の一部として、国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」を実施した。 ・国内外の事例現地調査及び災害痕跡のデータベース作成や動態記録の作成・研究等を実施した。 ・被災文化財等の救出、応急措置等に関する調査研究を複数実施した。 ・文化財レスキュー活動のノウハウの継承・発展のための研修を実施した。 （自己評価の判定根拠） 年度：年度途中で交付決定された補助金事業にもかかわらず、短い期間で体制を整備し、ネットワークの構築を行い、国際専門家会合等複数の事業を実施することができた。 中期：連携・協力体制を構築し、翌年度以降の事業実施とネットワークの拡大強化の基礎を築くことができた。今後は常置の事業となるよう努力が必要である。	A	A
7211	① 埋蔵文化財及びその他文化財の担当者研修の実施 専門研修15課程、研修人数延べ190人	（2） ① 文化財担当者研修 遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員を対象として、専門研修15課程の研修を実施し、延べ171名が受講した。研修受講者全員に対するアンケート調査では、ほぼ全員から「有意義であった」「役に立った」との回答を得ており、充実した研修が実施できた。	B	B

7221	② 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修の実施 期間2週間、受講生25名	② 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 各地の文化財施設で資料保存を業務とする学芸員や行政担当者などを対象として、第31回博物館・美術館等保存担当学芸員研修を開催した	B	B		
7231	③ 東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育等の推進 ○ 東京藝術大学：システム保存学(保存環境学、修復材料学) ○ 京都大学：共生文明学(文化・地域環境論) ○ 奈良女子大学：比較文化学(文化史論)	③-1 東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進 保存環境計画論、修復計画論、修復材料学特論、保存環境学特論をシラバスに則り開講した。また文化財保存学演習(文化財保存学専攻修士課程1年対象)を1コマ担当した。 26年度修士課程1・2年に各1名の学生を受け入れ、修士論文指導を行った。	B	B		
7232		③-2 京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進 京都大学大学院人間・環境学研究科において5名、奈良女子大学大学院人間文化研究科において2名の研究職員が、客員教授・准教授として各専門分野に関する講義、演習、実習を通して、大学院生の研究指導を行った。 なお、平成26年度の入学生数は京都大学44名、奈良女子大学7名であった。 その他、奈良大学との協定を締結し、5名の研究職員が非常勤講師として、学部生の教育を行った。	B	B		
		定量評価	26年度	25年度	目標値	評定
		埋蔵文化財担当者研修 課程数(課程)	15	9	15	B
		研修受講者数(延べ)	171	138	190	C
		保存担当学芸員研修 期間(週間)	2	2	2	B
		受講生(名)	31	30	25	A

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 一般管理費等の削減

<p>【中期目標】業務運営に関しては、「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」(平成22年12月7日閣議決定)等を踏まえ、国立文化財機構の活性化が損なわれないよう十分配慮しつつ、一層の業務の効率化を推進することにより、文化財購入等の効率化になじまない特殊要因経費を除き、中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費についても5%以上の効率化を図ること。ただし、人件費については次項に基づいた効率化を図る。 なお、19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費削減を図ること。</p>				
<p>【中期計画】</p> <p>1 中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を行う。ただし、文化財購入費、文化財修復費等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。</p> <p>なお19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を削減する。</p> <p>このため、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、事務、事業、組織等の見直しや、公用車の運転業務など外部委託できる業務を引き続き精査して計画的にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。</p> <p>具体的には下記の措置を講じる。</p> <p>(1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化 (2) 計画的なアウトソーシング (3) 使用資源の減少 ・省エネルギー(エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減) ・廃棄物減量化 ・リサイクルの推進</p>		<p>【主な計画上の評価指標】</p> <p>○中期目標の期間中、一般管理費15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を図ること。 ○共通的な事務の一元化を図ること。 ○計画的なアウトソーシングを図ること。 ○エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%の削減を図ること。 ○廃棄物の減量化を図ること。 ○リサイクルの推進を図ること。 ○競争性のある契約への移行を推進すること。 ○民間競争入札等の推進を図ること。</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p>		
処理番号	年度計画		自己評価	
	主な実績		年度	中期
9110	<p>1 一般管理費の削減</p> <p>(1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>1) 共通的な事務の一元化を推進し事務の効率化を引き続き図る。 2) 国立博物館各館における翌年度以降の展覧会企画等について「研究・学芸系職員連絡協議会」において連絡・調整を行い、企画機能強化を図る。</p>	<p>1 一般管理費の削減</p> <p>(1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>1) 共通的な事務の一元化と事務の効率化のため、機構共通の業務システムである、グループウェア、財務会計システム、人事給与統合システム、web給与明細システムの運用を継続した。 2) 国立博物館各館及び各研究成果公開施設における26~30年度の展覧会予定表を毎月更新し、研究調整役を中心に企画調整を継続するとともに、「研究・学芸系職員連絡協議会」を開催し、連絡・調整を行った。</p>	B	B

	3) 機構共通のネットワーク及びシステムにより、業務の効率的な運用及び情報の共有化を引き続き推進する。	3) 業務の効率的な運用と情報共有化のため、機構共通の業務システムである、グループウェア「サイボウズ」、財務会計システム「GrowOne」、人事給与統合システム「U-PDS」、web給与明細システム「U-PHS HR」、また、これら各システムの基盤となるネットワーク「機構VPN(Virtual Private Network)」の運用を継続した。		テムは既に稼動しており、適切に運用を継続することができた。	の一元化による業務の効率化を順調に達成している。
9120	(2) 計画的なアウトソーシング 以下の業務の外部委託を継続して実施する。 (東京国立博物館) ・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務 ・資料館業務の一部 ・施設内店舗業務 (京都国立博物館) ・看視案内業務及び設備保全業務の一部 ・受付・案内・警備業務、売札業務及び清掃業務 (奈良国立博物館) ・建物設備の運転・管理業務 ・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務 (九州国立博物館) ・建物設備の運転・管理業務等 ・警備業務、看視案内業務及び清掃業務 (東京文化財研究所・奈良文化財研究所) ・警備業務、清掃業務及び建物設備の運転・管理業務等	(2) 計画的なアウトソーシング ・全ての施設において、電気設備保守業務、機械設備保守業務、昇降機設備保守点検業務、構内樹木等維持管理業務、清掃業務、各種事務補助作業等について、民間委託を実施している。 ・博物館は警備・展示室監視等業務の大部分を民間委託している。また、研究所は警備業務の全てを民間委託している。 ・博物館の来館者サービスに関しては、売札業務、受付・案内業務、図書・写真資料を閲覧等の利用に供するサービス及び図書整理業務等について民間委託を実施している。 ・東京国立博物館及び東京文化財研究所の施設管理・運営業務（展示等の企画運営を除く）、東京国立博物館の展示場における来館者応対等業務について民間競争入札を実施している。	B	計画どおり外部委託を実施している。	B 計画どおり外部委託を実施している。
9130	(3) 使用資源の減少	(3) 使用資源の減少			

<p>・省エネルギー</p> <p>1) 光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に引き続き節減に努める。 (エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減)</p> <p>・廃棄物減量化</p> <p>1) 使用資源の節減に努め、廃棄物の減量化に引き続き努める。 ・リサイクルの推進</p> <p>1) 廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを引き続き推進する。</p>	<p>・日常の節電節水の周知徹底、クールビズ・ウォームビズの推進、冷暖房の省エネ運転等を行った。</p> <p>・廃棄物削減では、両面印刷の励行、館内LAN・電子メール等の活用を引き続き行い、会議でのiPad活用による文書のペーパーレス化を実施した。</p> <p>・リサイクルの実施（廃棄物の分別収集、リサイクル業者への古紙売り払い、再生紙の発注等）</p> <p>使用資源の推移等 光熱水料金 (千円)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>事項</th> <th>25年度</th> <th>26年度</th> <th>差額</th> <th>増減率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>電気料</td> <td>496,266</td> <td>549,706</td> <td>53,440</td> <td>10.77%</td> </tr> <tr> <td>水道料</td> <td>87,249</td> <td>89,418</td> <td>2,169</td> <td>2.49%</td> </tr> <tr> <td>ガス料</td> <td>180,761</td> <td>186,427</td> <td>5,666</td> <td>3.13%</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>764,276</td> <td>825,551</td> <td>61,275</td> <td>8.02%</td> </tr> </tbody> </table> <p>※電気料は、下記の特異要因により使用量・料金ともに増額となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電気料特異要因①：原料高騰、再生可能エネルギー発電促進賦課金の賦課による契約単価と燃料調整費の上昇により増額となった。 ・電気料特異要因②：東京国立博物館における正門プラザ開業と黒田記念館の開館により使用量が増加した。 ・電気料特異要因③：東京文化財研究所における大型実験装置の稼動により使用量が増加した。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>事項</th> <th>25年度単価 (円/kwh)</th> <th>26年度単価 (円/kwh)</th> <th>差 (円/kwh)</th> <th>単価影響額 (千円)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>電気料特異要因①</td> <td>19.3</td> <td>20.8</td> <td>1.5</td> <td>37,933</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1"> <thead> <tr> <th>事項</th> <th>増加量 (kwh)</th> <th>26年度単価 (円/kwh)</th> <th>単価影響額 (千円)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>電気料特異要因②</td> <td>505,103</td> <td>22.6</td> <td>11,409</td> </tr> <tr> <td>電気料特異要因③</td> <td>215,071</td> <td>22.9</td> <td>4,920</td> </tr> </tbody> </table>	事項	25年度	26年度	差額	増減率	電気料	496,266	549,706	53,440	10.77%	水道料	87,249	89,418	2,169	2.49%	ガス料	180,761	186,427	5,666	3.13%	計	764,276	825,551	61,275	8.02%	事項	25年度単価 (円/kwh)	26年度単価 (円/kwh)	差 (円/kwh)	単価影響額 (千円)	電気料特異要因①	19.3	20.8	1.5	37,933	事項	増加量 (kwh)	26年度単価 (円/kwh)	単価影響額 (千円)	電気料特異要因②	505,103	22.6	11,409	電気料特異要因③	215,071	22.9	4,920	B	判定根拠：光熱水料金の削減目標を達成したほか、省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクル推進の取組状況も良好である。 課題と対応：廃棄物排出量が前年度比で僅かに増加しており、来年度は節減に努める。	B 判定根拠：光熱水料金の削減目標を達成したほか、省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクル推進の取組状況も良好である。 課題と対応：廃棄物排出量が前年度比で僅かに増加しており、来年度は節減に努める。
事項	25年度	26年度	差額	増減率																																															
電気料	496,266	549,706	53,440	10.77%																																															
水道料	87,249	89,418	2,169	2.49%																																															
ガス料	180,761	186,427	5,666	3.13%																																															
計	764,276	825,551	61,275	8.02%																																															
事項	25年度単価 (円/kwh)	26年度単価 (円/kwh)	差 (円/kwh)	単価影響額 (千円)																																															
電気料特異要因①	19.3	20.8	1.5	37,933																																															
事項	増加量 (kwh)	26年度単価 (円/kwh)	単価影響額 (千円)																																																
電気料特異要因②	505,103	22.6	11,409																																																
電気料特異要因③	215,071	22.9	4,920																																																

※水道料は、全体として使用量ベースでは減少したが、単価の上昇により使用料金ベースで増額となった。

事項	25年度単価 (円/㎡)	26年度単価 (円/㎡)	差(円/ /kwh)	単価影響額 (千円)
水道料特殊要因	566.9	602.7	35.8	3,521

※ガス料は、全体として使用量ベースでは減少したが、下記の特種要因により使用料金ベースで増額となった。

・ガス料特殊要因①：原料高騰により契約単価が上昇した。
 ・ガス料特殊要因②：京都国立博物館における平成知新館（平常展示館）の閉館により使用量が増加した。

事項	25年度単価 (円/㎡)	26年度単価 (円/㎡)	差(円/ ㎡)	単価影響額 (千円)
ガス料特殊要因①	94.5	97.9	3.4	4,705

事項	増加量 (㎡)	26年度単価 (円/㎡)	単価影響額 (千円)
ガス料特殊要因②	96,111	97.7	9,387

特殊要因を考慮した光熱水料金 (千円)

事項	25年度	26年度	差額	増減率
電気料(※)	496,266	495,444	△822	△0.17%
水道料(※)	87,249	85,897	△1,352	△1.55%
ガス料(※)	180,761	172,335	△8,426	△4.66%
計	764,276	753,676	△10,600	△1.39%

※それぞれ特殊要因を勘案して算定。

廃棄物排出量 (kg)

事項	25年度	26年度	差額	増減率 (%)
一般廃棄物	238,041	241,900	3,859	1.62%

9140	<p>(4) 自己収入の増大</p> <p>独立行政法人整理合理化計画（19年12月24日閣議決定）の方針に基づき設定した外部資金の活用及び自己収入の増大に向けた定量的目標の達成を、引き続き目指す。</p> <p>1) 機構全体において、入場料収入（共催展を除く）及びその他収入について、1.16%の増加を目指す。</p> <p>2) 機構全体において、寄附金350件及び科学研究費補助金76件の確保を目指す。</p>	<p>(4) 自己収入の増大</p> <p>1) 定量的目標を設定した自己収入については、下表のとおり29.04%増となり、目標を上回った。</p> <p style="text-align: right;">(単位：千円)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成24年度</th> <th>平成25年度</th> <th>平成26年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己収入基準額</td> <td>904,886</td> <td>915,383</td> <td>926,001</td> </tr> <tr> <td>自己収入目標額</td> <td>915,383</td> <td>926,001</td> <td>936,743</td> </tr> <tr> <td>自己収入実績額</td> <td>880,271</td> <td>968,819</td> <td>1,194,914</td> </tr> <tr> <td>増加率</td> <td>△2.72%</td> <td>5.91%</td> <td>29.04%</td> </tr> </tbody> </table> <p>※受託研究・受託事業を除く。 ※自己収入目標額は、前年度の目標額から1.16%増加した場合の額。 ※増加率は、自己収入基準額（前年度の目標額）に対する増加率。</p> <p>2) 下表のとおり、寄附金及び科学研究費補助金ともに目標件数を上回ることができた。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>目標値</th> <th>平成26年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>寄附金</td> <td>350件</td> <td>561件</td> </tr> <tr> <td>科学研究費補助金</td> <td>76件</td> <td>107件</td> </tr> </tbody> </table>		平成24年度	平成25年度	平成26年度	自己収入基準額	904,886	915,383	926,001	自己収入目標額	915,383	926,001	936,743	自己収入実績額	880,271	968,819	1,194,914	増加率	△2.72%	5.91%	29.04%		目標値	平成26年度	寄附金	350件	561件	科学研究費補助金	76件	107件	A	自己収入及び寄附金ともに目標を上回ることが出来た	A	自己収入及び寄附金ともに目標を上回ることが出来た。				
	平成24年度	平成25年度	平成26年度																																				
自己収入基準額	904,886	915,383	926,001																																				
自己収入目標額	915,383	926,001	936,743																																				
自己収入実績額	880,271	968,819	1,194,914																																				
増加率	△2.72%	5.91%	29.04%																																				
	目標値	平成26年度																																					
寄附金	350件	561件																																					
科学研究費補助金	76件	107件																																					
		<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>26年度</th> <th>25年度</th> <th>目標値</th> <th>評定</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>一般管理費の効率化(対前年度比%)</td> <td>37.15%増</td> <td>10.88%減</td> <td>3.20%減</td> <td>D</td> </tr> <tr> <td>業務経費の効率化(対前年度比%)</td> <td>1.70%増</td> <td>2.61%減</td> <td>1.03%減</td> <td>D</td> </tr> <tr> <td>光熱水料費の削減(対前年度比%)</td> <td>1.39%減</td> <td>2.18%減</td> <td>1.03%減</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>自己収入増加率</td> <td>29.04%</td> <td>5.91%</td> <td>1.16%</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>寄附金件数</td> <td>561件</td> <td>486件</td> <td>350件</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>科学研究費採択件数</td> <td>107件</td> <td>95件</td> <td>76件</td> <td>A</td> </tr> </tbody> </table>		26年度	25年度	目標値	評定	一般管理費の効率化(対前年度比%)	37.15%増	10.88%減	3.20%減	D	業務経費の効率化(対前年度比%)	1.70%増	2.61%減	1.03%減	D	光熱水料費の削減(対前年度比%)	1.39%減	2.18%減	1.03%減	A	自己収入増加率	29.04%	5.91%	1.16%	A	寄附金件数	561件	486件	350件	A	科学研究費採択件数	107件	95件	76件	A		
	26年度	25年度	目標値	評定																																			
一般管理費の効率化(対前年度比%)	37.15%増	10.88%減	3.20%減	D																																			
業務経費の効率化(対前年度比%)	1.70%増	2.61%減	1.03%減	D																																			
光熱水料費の削減(対前年度比%)	1.39%減	2.18%減	1.03%減	A																																			
自己収入増加率	29.04%	5.91%	1.16%	A																																			
寄附金件数	561件	486件	350件	A																																			
科学研究費採択件数	107件	95件	76件	A																																			

2 給与水準の適正化等

<p>【中期目標】 給与水準については、「公務員の給与改定に関する取扱いについて」（平成22年11月1日閣議決定）を踏まえ、国家公務員の給与水準等を十分考慮して、検証したうえで、業務の特殊性を踏まえた適切な目標水準・目標期限を設定し、その適正化に取組むとともに、検証結果や取組状況を公表すること。</p> <p>総人件費についても、平成23年度はこれまでの人件費改革の取組を引き続き着実に実施するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、厳しく見直すこと。</p>						
<p>【中期計画】</p> <p>2 国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、对国家公務員指数については現状を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。また、これまでの人件費改革の取り組みを平成23年度まで継続するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、取り組むこととする。ただし、人事院勧告を踏まえた給与改定分及び競争的資金により雇用される任期付職員に係る人件費については本人件費改革の削減対象から除く。</p> <p>なお、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬（給与）、賞与、その他の手当の合計額とし、退職手当、福利厚生費は含まない。</p>			<p>【主な計画上の評価指標】</p> <p>○对国家公務員指数について、現状を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表すること。</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p>			
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
9210	<p>2 給与水準の適正化等</p> <p>国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、对国家公務員指数は国家公務員の水準を超えないよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。また人件費改革の取り組みについて、今後の独立行政法人制度の見直し等を踏まえて検討する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 人事給与統合システムが20年4月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。 地域手当について、25年度においても21年度の率を据え置くことが決定された。また、27年度以降は国の状況及び当機構の人件費の状況を勘案し、毎年度検討することを決定した。 役職員の報酬額については、毎年度、総務省の実施している「独立行政法人の役員報酬等及び職員の給与の水準の公表方法等について（ガイドライン）、平成15年9月9日策定」において、個別の額を公表しており、また、法人ウェブサイト上においても掲載している。今後も引き続き公表することとしている。 	B	<p>人件費削減に向けたシミュレーションを行い、26年度実績も概ね順調に人件費に関する計画を遂行できたが、今後は、中期的な人事計画をもとに、最広義人件費の削減についても検討を進めていく。</p>	B	<p>引き続き、人件費改革の取り組みを実施し、順調に人件費削減を遂行している。</p>

3 契約の適正化の推進

<p>【中期目標】 契約については、「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」（平成21年11月17日閣議決定）に基づく取組を着実に実施し、一層の競争性と透明性の確保に努め、契約の適正化を推進するとともに外部委託の活用等により、定型的な管理・運営業務の効率化を図ること。</p>						
<p>【中期計画】</p> <p>3 「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」（平成21年11月17日閣議決定）に基づき引き続き取組を着実に実施し、文化財の購入等随意契約が真にやむを得ないものを除き、競争性のある契約への移行を推進することにより、経費の効率化を行う。また「独法の事務・事業の見直しの基本方針」（平成22年12月7日閣議決定）に基づき、施設内店舗の賃借について、企画競争を導入するなど競争性と透明性を確保した契約方式とする。なお民間競争入札については、現在実施している民間競争入札の検証結果等を踏まえ、一層推進する。</p>			<p>【主な計画上の評価指標】</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p>			
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
9310	<p>3 契約の適正化の推進</p> <p>1) 契約監視委員会を実施する。 2) 施設内店舗の貸付・業務委託について引き続き企画競争を実施する。 3) 民間競争入札を推進する。 (東京国立博物館・東京文化財研究所) ・施設管理・運営業務を継続して民間競争入札による外部委託を行う。 (東京国立博物館) ・展示場における来館者応対等業務を継続して民間競争入札による外部委託を行う。</p>	<p>3 契約の適正化の推進</p> <p>1) 「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて（平成21年11月17日閣議決定）」に基づき、外部委員で構成された契約監視委員会を設置し、機構が26年度に締結した契約の点検・見直しを行った。 第1回契約監視委員会（26年11月28日開催） 第2回契約監視委員会（27年6月12日開催予定） 2) 京都国立博物館平成知新館（ミュージアムショップ・レストラン）運営業務について、企画競争を実施した。 東京国立博物館（ミュージアムショップ・レストラン・黒田記念館カフェ、正門プラザ（ミュージアムショップ））、京都国立博物館（南門カフェ）、奈良国立博物館（ミュージアムショップ・レストラン）、奈良文化財研究所（ミュージアムショップ）については、既に企画競争を実施済み。 今後も、賃貸借期間終了時に順次企画競争を実施予定である。 3) 総務省からの要請に基づき、「独立行政法人整理合理化計画（平成19年12月24日閣議決定）」の一環として、随意契約の見直しを行い、随意契約によることややむを得ないものを除き、引き続き競争契約に移行している。 ・より多くの競争参加者を募るため、公告期間をこれまでの「10日間以上」から自主的措置として20日間以上確保するように引き続き努めている。 ・列品等修理契約について、修理契約委員会を設置し、修理可能な業者が複数存在すると判断された契約は企画競争を実施している。</p>	B	<p>計画どおり取組を実施している。</p>	B	<p>計画どおり取組を実施している。</p>

		一般競争入札件数				
		年度	25年度	26年度	増減	
		件数	171件	169件	△2件	

4 保有資産の有効利用の推進

【中期目標】 保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、本来業務に支障のない範囲で有効利用の推進を図ること。

【中期計画】 4 保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、有効利用の推進を図るため、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施する。	【主な計画上の評価指標】 【25年度評価における主な指摘事項】
---	------------------------------------

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
9411	4 保有資産の有効利用の推進 (博物館4施設)	<p>【東京国立博物館】</p> <p>1) 月例講演会等の他、当館主催や外部利用による講演会を実施した。</p> <p>2) 撮影件数増加のためインターネットロケーション検索サイト(ロケナビ!)への登録を継続した。</p> <p>3) 定期的にコンサート、寄席などの文化イベントを開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「国際博物館の日」を記念して上野地区の機関と連携し、ガイドツアーなどを実施した。 ・「留学生の日」イベントを行い、ガイドツアーや茶道体験など日本文化の紹介を行った。 ・総合文化展100万人プロジェクトの一環として若年層の新規来館者を狙ったイベント「博物館で野外シネマ」を前庭で実施し、室外スペースを有効利用した。 	B	計画どおり施設の有効活用を進めることができたため。	B	中期計画に記載のとおり、順調に保有資産の有効利用を推進できている。
9412	1) 講座・講演会等を開催する。 2) 講堂等の利用案内を関係団体、学校等に対し積極的に行う。 3) 国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。	<p>【京都国立博物館】</p> <p>1) 展覧会等に関する講演会、土曜講座、特別シンポジウムを開催した。</p> <p>2) 庭園を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進を図った。また、外部団体等の講演会・研修会等への施設の貸出を積極的に行った。</p> <p>3) 来館者の拡大を目的としたコンサートを実施し、施設の有効利用を図った。</p>	B	館休館期間中には庭園を利用した大規模なコンサートを開催し、平成知新館開館後は講堂やグラウンドロビーを利用した講演	B	中期計画に沿って、順調に講堂・会議室等の貸与を実施している。

9413		<p>【奈良国立博物館】</p> <p>1) 公開講座、サンデーターク、正倉院展ボランティア解説、特別鑑賞会、文化財保存修理所特別公開等を開催した。</p> <p>2) 奈良市教育委員会と連携し、市内の小学校5年生を対象とした世界遺産学習を実施した。</p> <p>3) 地元自治体等と連携し、敷地内でコンサート等のイベントを実施した。</p>	B	国内のみならず地方公共団体を通じてアジア地域に関連する催しにも会場提供を行い、博物館の認知及び、施設の有効活用ができた。	B	計画どおり順調に成果を上げている。
9414		<p>【九州国立博物館】</p> <p>(博物館4施設)</p> <p>1) 文化交流展示や特別展に関連する講座・講演会等を開催した。</p> <p>2) ミュージアムホール、エントランスホール、研修室、茶室等において、館主催事業及び各種団体主催のイベントを開催するとともに、希望団体にはミュージアムホール、研修室、茶室の貸出を行った。</p> <p>3) 国際シンポジウム、アジア諸国に関するイベント、留学生の日のイベント等を開催した。また、ガムランワークショップや茶道体験、コンサートの開催等を継続的に実施し、施設の有効活用を促進した。</p>	B	展示と関係のある講演会やワークショップを開催したほか、9周年記念イベントを来館者数が比較的少ない時期に開催し来館者数の増加に貢献するなど、施設の有効利用を図った。	B	中期計画に基づき、適切に施設の貸与を行うことができた。
9415	(文化財研究所2施設) セミナー室、講堂等一般の利用の供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を引き続き図る。	<p>【東京文化財研究所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セミナー室、会議室等を利用することにより、施設の有効利用の推進を図った。 ・研究成果を広く一般にも公表するためのオープンレクチャーを本年度も開催した。この事業は台東区との連携事業として毎年開催されている「上野の山文化ゾーンフェスティバル」に東京文化財研究所のオープンレクチャーを同事業の講演会シリーズとして実施している。 	B	会議・セミナーのための会議室・セミナー室の有料貸付を本来業務に支障のない範囲で実施したため。	B	会議・セミナーのための会議室・セミナー室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施したため。

9416	<p>【奈良文化財研究所】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>施設名</th> <th>平成26年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平城宮跡資料館講堂</td> <td>108件 (内 有償貸与 3件)</td> </tr> <tr> <td>平城宮跡資料館小講堂</td> <td>115件 (内 有償貸与 9件)</td> </tr> <tr> <td>飛鳥資料館講堂</td> <td>28件 (内 有償貸与 0件)</td> </tr> <tr> <td>その他(本庁舎・管理棟・収蔵庫等)</td> <td>35件 (内 有償貸与 14件)</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>286件 (内 有償貸与 26件)</td> </tr> </tbody> </table> <p>・一般利用申し出への行政サービスの向上を図る方針のもとに、ウェブサイト上の施設利用紹介等による積極的有効利用(貸付等)の促進を図った。 ・上記のほか、平城宮跡資料館、飛鳥資料館の各ミュージアムショップ(売店)の運営を外部委託し、図録等の販売を通して来館者の利便に供した。 ・本庁舎改築整備に伴って、当研究所が企画実施する研修等に際しての寄宿舎施設が取り壊された。</p>	施設名	平成26年度	平城宮跡資料館講堂	108件 (内 有償貸与 3件)	平城宮跡資料館小講堂	115件 (内 有償貸与 9件)	飛鳥資料館講堂	28件 (内 有償貸与 0件)	その他(本庁舎・管理棟・収蔵庫等)	35件 (内 有償貸与 14件)	合計	286件 (内 有償貸与 26件)	C	<p>特別要因として寄宿舎施設が取り壊しとなったため、全体の利用実績件数は大幅に減少した。寄宿舎を除くほかの施設の有効利用件数は、減少傾向にはあるが推移としては鈍い。現在、本庁舎改築整備のため仮設庁舎での業務を行っており、限られたスペースで本来業務に支障のない範囲で、施設の有効利用を実施している。これまでの経年変化でもわかるように有効利用件数の年々の減少は、施設の老朽化等による影響も少なくはない。よって、本庁舎が新営となったおりに、施設利用紹介等を含めて有効利用の促進が期待される。</p>	C	<p>特別要因として寄宿舎施設の取り壊し、寄宿舎を除くほかの施設の有効利用件数は、減少傾向で鈍く推移している。このことは施設の老朽化等による影響も少なくはない。現在、本庁舎改築整備が進められており、本庁舎の新営は、施設利用紹介等を含めて有効利用の促進につながる。但し、寄宿舎施設については、附設の計画はない。</p>
		施設名	平成26年度														
平城宮跡資料館講堂	108件 (内 有償貸与 3件)																
平城宮跡資料館小講堂	115件 (内 有償貸与 9件)																
飛鳥資料館講堂	28件 (内 有償貸与 0件)																
その他(本庁舎・管理棟・収蔵庫等)	35件 (内 有償貸与 14件)																
合計	286件 (内 有償貸与 26件)																

5 内部統制の充実・強化
 (1) 理事長のマネジメント強化

<p>【中期目標】 法令等を遵守するとともに、業務の特性や実施体制に応じた効果的な統制機能の在り方を検討し、内部統制の充実・強化を図ること。</p>						
<p>【中期計画】 5 (1) 理事長のマネジメント強化のため業務の特性や実施体制に応じた効果的な統制機能の在り方を検討し、自己点検評価を始め監事監査、内部監査などモニタリングを行う。</p>		<p>【主な計画上の評価指標】 ○自己点検評価、監事監査、内部監査等を行うこと。 【25年度評価における主な指摘事項】 ○収蔵品の整備と次代への継承を確実に進展させるため、適時適切な収集と十分な収蔵施設の確保、保存修理部門を充実することが求められる。</p>				
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
9510	<p>5 (1) 理事長のマネジメント強化</p> <p>1) モニタリングの実施 ・自己点検評価を行う。 ・監事監査を行う。 ・内部監査を行う。</p> <p>2) リスクマネジメントの実施 ・リスク管理の必要に応じて、関連する諸規程の整備・見直しを行う。 ・危機管理マニュアルの見直し等を随時行う。</p>	<p>5 (1) 理事長のマネジメント強化</p> <p>1) モニタリングの実施 ・自己点検評価を行い、『平成25年度 独立行政法人国立文化財機構自己点検評価報告書』を作成(26年6月)し、評価結果をウェブサイト上で公開した。外部評価委員からの意見等を踏まえ、評価のしやすさに配慮して自己点検評価報告書を作成した。 ・監事による定期監査(26年6月19日)を行ったほか、臨時監査を本部事務局・東京国立博物館(27年2月13日)、奈良国立博物館(27年2月19～20日)を対象に行った。 ・内部監査を、26年10月30日～11月28日の日程で、本部事務局及び各施設を対象に順次行った。</p> <p>2) リスクマネジメントの実施 ・情報システム管理・セキュリティ対策の一環として関連する諸規程の見直しを行い、情報セキュリティ強化のため、独立行政法人国立文化財機構ネットワーク管理運用要項に、プロキシサーバ(中継サーバ)を情報化委員会申し合わせにより運用する事項を加えた。 ・理事長からの指示に基づき、危機管理マニュアルの見直しを行った。東京国立博物館は26年4月改訂、京都国立博物館は見直し作業を継続して27年度改訂予定、奈良国立博物館は27年3月改訂、九州国立博物館では暫定版から正式版に26年12月に改訂、東京文化財研究所では27年3月改訂、奈良文化財研究所では27年3月改訂を行った。</p>	B	<p>監事による定期監査及び臨時監査を行い、危機管理マニュアルの見直し・改訂を行うなど、モニタリング、リスクマネジメントともに適切に実施することができた。</p>	B	<p>今年度も自己点検評価、監事監査及びモニタリングを適切に行うことができ、中期計画の達成に向けて順調である。</p>

(2) 外部有識者による事業評価

<p>【中期目標】 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ事業評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させること。</p>			
<p>【中期計画】 5 (2) 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映さ</p>		<p>【主な計画上の評価指標】 【25年度評価における主な指摘事項】</p>	

せる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を行う。						
処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度		中期	
9520	5 (2) 外部有識者による事業評価 1) 運営委員会、外部評価委員会を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。 2) 職員の資質向上を図るため各種研修を実施する。	5 (2) 外部有識者による事業評価 1) 運営委員会 (26年7月23日)、外部評価委員会 (研究所・センター調査研究等部会：26年4月23日、博物館調査研究等部会：4月25日、総会：5月30日) を実施し、その結果を機構の事業等の改善に反映させた。 2) (各種研修について詳細は処理番号 0230 参照)	B	運営委員会、外部評価委員会を予定通り実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させることができた。	B	年1回以上の事業評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させることができ、順調である。

(3) 情報セキュリティ対策の向上と改善

【中期目標】 管理する情報の安全性向上のため、政府の方針を踏まえた適切な情報セキュリティ対策を推進し、必要な措置をとること。	
【中期計画】 5 (3) 管理する情報の安全性向上のため、政府の方針を踏まえた情報セキュリティに配慮した業務運営の情報化・電子化に取り組み、情報セキュリティ対策の向上と改善を図るため定期監査等を実施する。	【主な計画上の評価指標】 ○情報セキュリティに配慮した情報化・電子化に取り組むこと。 ○情報セキュリティ対策の向上・改善のための定期監査等を実施すること。 【25年度評価における主な指摘事項】 ○友の会等の充実が自己収入確保の観点から重要であるが、これらの個人情報の漏えい等、顧客に対するセキュリティ強化を図られたい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度		中期	
9530	5 (3) 情報セキュリティ対策の向上と改善 1) 情報セキュリティについて定期監査等を実施する。 2) 機構全体での情報セキュリティ強化のため、ネットワーク環境等の見直しについて、検討を継続する。	5 (3) 情報セキュリティ対策の向上と改善 1) ・保有個人情報管理監査を、本部事務局、東京国立博物館 (27年2月13日)、奈良国立博物館 (27年2月19日～20日) を対象に実施した。 ・情報システム監査を、奈良文化財研究所を対象に実施した。(27年2月24日) ・情報システム自己点検・評価について、セキュリティ対策の実施状況に重点を置いて実施した。(26年4月) ・監査法人による監査の一環として、システム監査を実施した。(27年1月) 2) 情報セキュリティ水準の向上のための機器の更新、導入を行った。	B	情報システム監査の実施、情報セキュリティ水準の向上のための機器の更新・導入などにより、所期の目標を充分達成している。	B	政府の方針を踏まえた情報セキュリティ対策のために当該規程の見直しに着手するなど、中期計画達成に向けて順調である。

		○政府機関における情報セキュリティ対策に基づき、26年6月25日に「独立行政法人における情報セキュリティ対策の推進について」が示された。これを踏まえ、機構の情報セキュリティポリシーの見直しを行うため、セキュリティポリシー見直しWGを設置し、27年度改正に向けた準備を進めた。		標を充分達成している。		けて順調である。
--	--	---	--	-------------	--	----------

Ⅲ 予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画

<p>【中期目標】 入場料収入、寄付金等による自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。</p> <p>1 自己収入の増加 入場料収入、寄付金等の外部資金、本来業務に支障のない範囲で施設の有効利用により自己収入を確保することで財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に向けた取り組みを進めること。 また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。</p> <p>2 固定的経費の節減 管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定的経費の節減を図ること。</p>													
<p>【中期計画】 管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営を行う。 また、収入面に関しては、実績を勘案しつつ、入場料収入、寄付や賛助会員等への加入者の増加、募金箱の設置などによる外部資金、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなど、施設の有効利用により自己収入を確保することで財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に向けた取り組みを進めることにより、計画的な収支計画による運営を行う。</p>	<p>【主な計画上の評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○当期総利益（又は当期総損失）の発生要因が明らかになること。また、当期総利益（又は当期総損失）の発生要因の分析を行った上で、当該要因が法人の業務運営に問題等があることによるものかを検証し、業務運営に問題等があることが判明した場合には当該問題等を踏まえた評価を行うこと。 ○利益剰余金が計上されている場合、国民生活及び社会経済の安定等の公共上の見地から実施されることが必要な業務を遂行するという法人の性格に照らし過大な利益となっていないかについて評価を行うこと。 ○繰越欠損金が計上されている場合、その解消計画の妥当性について評価すること。当該計画が策定されていない場合、未策定の理由の妥当性について検証を行うこと。（既に過年度において繰越欠損金の解消計画が策定されている場合の、同計画の見直しの必要性又は見直し後の計画の妥当性についての評価を含む）。さらに、当該計画に従い解消が進んでいるかどうかについて評価を行うこと。 ○当該年度に交付された運営費交付金の当該年度における未執行率が高い場合において、運営費交付金が未執行となっている理由を明らかにすること。 ○運営費交付金債務（運営費交付金の未執行）と業務運営との関係についての分析を行った上で、当該業務に係る実績評価を適切に行うこと。 <p>【25年度評価における主な指摘事項】</p>												
<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">処理 番号</th> <th rowspan="2">年度計画</th> <th rowspan="2">主な実績</th> <th colspan="2">自己評価</th> </tr> <tr> <th>年度</th> <th>中期</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> </tbody> </table>	処理 番号	年度計画	主な実績	自己評価		年度	中期						
処理 番号				年度計画	主な実績	自己評価							
	年度	中期											

予算

(単位：百万円)

区 分	金 額
収入	
運営費交付金	8,239
施設整備費補助金	2,990
展示事業等収入	1,323
受託収入	26
計	12,578
支出	
管理経費	1,696
うち人件費	688
うち一般管理費	1,008
業務経費	7,866
うち人件費	2,412
うち調査研究事業費	1,309
うち情報公開事業費	181
うち研修事業費	20
うち国際研究協力事業費	214
うち展示出版事業費	160
うち展覧事業費	3,494
うち教育普及事業費	76
施設整備費	2,990
受託事業費	26
計	12,578

収支計画

(単位：百万円)

区 分	金 額
費用の部	7,499
経常経費	7,499
管理経費	1,634
うち人件費	688
うち一般管理費	946
業務経費	5,443
うち人件費	2,412
うち調査研究事業費	1,147
うち情報公開事業費	168
うち研修事業費	20
うち国際研究協力事業費	204
うち展示出版事業費	126
うち展覧事業費	1,292
うち教育普及事業費	74
受託事業費	26
減価償却費	396
収益の部	7,499
運営費交付金収益	5,754
展示事業等の収入	1,323
受託収入	26
資産見返運営費交付金戻入	383
資産見返物品受贈額戻入	13

資金計画

(単位：百万円)

区 分	金 額
資金支出	12,578
業務活動による支出	7,103
投資活動による支出	5,475
資金収入	12,578
業務活動による収入	9,588
運営費交付金による収入	8,239
展示事業等による収入	1,323
受託収入	26
投資活動による収入	2,990
施設整備費補助金による収入	2,990

Ⅳ その他主務省令で定める業務運営に関する事項

<p>【中期目標】 1 施設・設備に関する計画 各施設の安全かつ良好な施設環境を維持するとともに、業務の目的・内容に適切に対応するため長期的視野に立った施設・設備の整備計画、研究機器の整備・更新計画を作成し、整備を図ること。 2 人事に関する計画 人事管理、人事交流の適切な実施により、内部管理事務の改善を図り、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用すること。また機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を図ること。</p>	<p>【主な計画上の評価指標】 ○職員的能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討・導入を図ること。 ○人事交流の促進、職員への研修機会の提供等を図ること。 ○専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行うこと</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】 ○一般管理費や人件費の削減は既に限界を超えつつあり、これ以上の予算圧迫は博物館業務に重大な影響を及ぼすおそれがある。我が国文化の地球規模での発信は、国際理解や相互交流に不可欠の不可欠であるが、現状ではこれ以上の展開は望めない。今後は自己収入を確保し、博物館・研究所業務のさらなる発展に努められたい。</p>
<p>【中期計画】 1 施設・設備に関する計画 施設・設備の老朽化度合い等を勘案しつつ、別紙4のとおり施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。 2 人事計画に関する計画 (1)方針 ①国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員的能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。 ②人事交流を促進するとともに、職員資質向上を図るための研修機会の提供を行う。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 ③機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行う。 (2)人員に係る指標 給与水準の適正化等を図りつつ、業務内容を踏まえた適切な人員配置等を推進する。 中期目標期間中の人件費総額見込額 13,087百万円 但し、上記の額は、役員員に対し支給する報酬（給与）、賞与、その他の手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。 3 中期目標期間を超える債務負担 中期目標期間を超える債務負担については、機構の業務運営に係る契約の期間が中期目標期間を超える場合で、当該債務負担行為の必要性及び資金計画の影響を勘案し、合理的と判断されるものについて行う。 4 積立金の使途 前中期目標期間の期間の最終年度において、独立行政法人通則法第44条の処理を行ってなお積立金があるときは、その額に相当する金額のうち文部科学大臣の承認を受けた金額について、次期へ繰り越した経過勘定損益影響額等に係る会計処理に充当する。</p>	<p>【主な計画上の評価指標】 ○職員的能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討・導入を図ること。 ○人事交流の促進、職員への研修機会の提供等を図ること。 ○専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行うこと</p> <p>【25年度評価における主な指摘事項】 ○一般管理費や人件費の削減は既に限界を超えつつあり、これ以上の予算圧迫は博物館業務に重大な影響を及ぼすおそれがある。我が国文化の地球規模での発信は、国際理解や相互交流に不可欠の不可欠であるが、現状ではこれ以上の展開は望めない。今後は自己収入を確保し、博物館・研究所業務のさらなる発展に努められたい。</p>

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価															
			年度	中期														
0110	<p>1 施設・設備に関する計画 別紙のとおり施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。</p> <p style="text-align: center;">施設・設備に関する計画 (単位：百万円)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 60%;">施設・整備の内容</th> <th style="width: 10%;">予定額</th> <th style="width: 30%;">財源</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>京都国立博物館 緊急屋根等漏水補修工事</td> <td style="text-align: center;">182</td> <td>施設整備費補助金</td> </tr> <tr> <td>奈良文化財研究所 本庁舎地区再開発計画の推進</td> <td style="text-align: center;">2,808</td> <td>施設整備費補助金</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">計</td> <td style="text-align: center;">2,990</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	施設・整備の内容	予定額	財源	京都国立博物館 緊急屋根等漏水補修工事	182	施設整備費補助金	奈良文化財研究所 本庁舎地区再開発計画の推進	2,808	施設整備費補助金	計	2,990		<p>1 施設・設備に関する計画 (東京国立博物館) ・観覧環境向上のため、平成館において、展示室改修及び連絡通路の増築等を実施しており、27年3月に完了した。 (京都国立博物館) ・緊急屋根等漏水補修工事は、本館中央室屋根修繕工事として屋根下地と瓦の葺替と正面破風銅板葺替等を7月に完了した。また11月末に文化財保存修理所改修一期工事として屋上及び外壁の防水改修、3階部分の建具改修及び断熱等内装工事、更に改修機械設備工事として、給水方式を直圧式に改修し、配管を更新した。 ・平成25年度に完成した平成知新館(新平常展示館)において、今年度は展示製作工事等を終え、26年9月13日に開館した。 (奈良国立博物館) ・なら仏像館において重要文化財建造物の保存修理工事として、屋根改修(回廊部分銅板屋根、中層瓦屋根(一部))、飾桁及び縦樋修繕、外壁洗浄・補修、飾石修繕、建具塗装、鋼製装飾塗装等を実施した。 ・なら仏像館において内部の展示室整備工事として、13室ある展示室の内6室(5・7・8・9・10・12室)について免震展示ケースの設置を伴う内装改修工事(電気設備・空調改修を含む)を実施した。 (奈良文化財研究所) ・旧庁舎取壊工事を平成25年度に引き続き実施しているが、埋蔵文化財発掘調査のため工期を26年度末まで延長した。 ・建設予定地地下の遺構を保存する必要があるため、新庁舎の設計を変更する準備を行っている。</p>	B	当該年度実施予定の施設整備費補助金事業等、計画に沿った整備が実施されているため。	B	施設整備費補助金事業等、計画に沿った整備が実施されているため。
	施設・整備の内容	予定額	財源															
京都国立博物館 緊急屋根等漏水補修工事	182	施設整備費補助金																
奈良文化財研究所 本庁舎地区再開発計画の推進	2,808	施設整備費補助金																
計	2,990																	

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価			
			年度	中期		
0210	<p>2 人事計画に関する計画 (1)職員的能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討</p>	<p>2 人事計画に関する計画 (1)職員的能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討する。 平成20年度において、機構として統一的な運用及び規程を整備し、勤務評定制度を開始した。給与へは昇給及び勤勉手当に反映している。</p>	B	26年度においても、勤務評定制度を実施した。	B	例年同様、平成26年度においても、

討する。

また、現行制度についての課題等を洗い出し、職員の能力や業績等をより適切に評価できるように、新たな評価制度の検討を開始した。

勤務評定制度を実施した。
また、職員の能力や業績等をより適切に評価できるように、新たな評価制度の検討を開始した。

0220

(2) 近隣大学等との交流を進め、優秀な人材を確保する。

(2) 近隣大学等との交流を進め、優秀な人材を確保する。

(事務系職員)

- ・本部事務局及び各施設において、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学及び(独)国立美術館等から受け入れており、人材の確保と適材適所の人員配置を行った。
- ・機構内での人事交流を図るため、本部及び各施設間(計9人)における交流を行っている。

年度	本部・東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	年度計(人)
22	18 (東大、東近美政研大京博)	14 (京大、阪大、民博、奈文研、東博)	8 (文化庁、阪大、京大、京博)	8 (九大、本部)	5 (医科歯科大、東博、奈文研)	11 (京大、阪大、総地研、奈女大)	—	64 (9)
23	17 (東大、東近美、政研大、奈文研)	14 (京大、阪大、民博、奈文研、東博)	12 (阪大、京大、京博、本部)	8 (九大、本部)	6 (医科歯科大、東博、本部)	12 (文化庁京大、阪大、奈女大)	1 (奈文研)	70 (12)
24	17 (東大、学士院、奈文研)	14 (京大、民博、奈文)	9 (阪大、京大、京博、本部)	9 (九大、本部)	7 (医科歯科大、東近美、東博、本部)	8 (京大、阪大、奈女大、京博)	1 (奈文研)	65 (11)

B

事務系においては、7法人8機関並びに機構内において51人の人事交流等を実施した。前年度に比して交流者数は減じたが、交流機関等と真に必要な交流ポストを選択し、集中的に優秀かつ多様な人材を確保した。研究系においても、主に文化庁との人事交流ではあるが、引き続き順調に交流を行った。

B

交流機関、交流者数ともに減じているが、交流者受入の必要性を検討し、効率的に優秀かつ多様な人材を確保した。また、機構外だけでなく機構内の人事交流を活性化することにより中堅職員の育成、幹部職員候補の育成を図ることができた。

0230

(3) 各種研修を積極的に実施し、また、職員を外部の研修に派遣するなど、その資質の向上を図る。

(3) 各種研修を積極的に実施し、また、職員を外部の研修に派遣するなど、その資質の向上を図る。

- ・職員としての資質向上を図るため、新任職員や職員を対象とした各種研修(4件)、施設系の職員を対象とした研修(1件)、会計系の職員を対象とした研修(1件)及びハラスメントに関する研修(1件)を行った。
- ・その他、他機関で実施する研修に延べ12名の職員を参加させ、職員の能力開発に寄与した。

研修名称	日程	受講対象者	受講者数
新任職員研修会	26年7月23日～25日	平成25年度以降の新任職員等	44人
接遇研修	26年7月25日	平成25年度以降の新任職員等	44人

B

対象を限定し、機構全体の研修プログラムを6件実施した。また、文化財防災ネットワーク補助事業を活用した育成研修も実施した。今後の検討事項として、QJTをより効果的に行うための研修プログラムを効率的に実施する必要がある。また、専門的な研修

B

新任職員を対象とした集合研修、全階層を対象とした個人情報、ハラスメント等の倫理等研修を実施した。また、会計、施設等の職務能力の開発を対象とした研修を実施し、諸研修の機会を提供した。

		<p>個人情報保護についての研修・講演会</p> <p>26年7月25日</p>	<p>平成25年度以降の新任職員等及び本部事務局、東京国立博物館、東京文化財研究所全職員及び近隣独立行政法人職員</p> <p>約80人</p>		<p>等についても検討を実施する。</p>	
0240	<p>(4) 非公務員化のメリットを活かした制度の活用方法について引き続き検討する。</p>	<p>ハラスメント防止に関する研修・講演会</p> <p>26年7月25日</p>	<p>各施設の職員、ハラスメント防止等委員会委員及び相談員等</p> <p>約80人</p>		<p>A 平成26年度において専門的分野・事項を取扱う新たな職として専門職制度を創設し、国際交流分野（特にアジア圏）において人材の確保を行った。事務職員については、平成25年度に引き続き平成26年度についても採用試験を実施し、複数名の優秀な人材の確保が行えた。</p>	<p>B 専門的分野・事項を取り扱うパーマネントの職として新たに専門職制度を導入し、国際交流分野（特にアジア圏）において人材の確保を行った。現行のアソシエイトフェロー制度をより柔軟に採用・登用ができるよう給与制度を含む制度の見直しが必要である。</p>
		<p>会計事務研修会</p> <p>26年12月3日</p>	<p>機構内の会計系職員</p> <p>25人</p>			
		<p>施設系職員研修会</p> <p>26年7月17日～18日、27年2月19日～20日</p>	<p>機構内の施設系職員</p> <p>延べ19人</p>			
		<p>文化財防災事業アソシエイトフェロー研修</p> <p>26年12月8日～10日</p>	<p>文化財防災事業に関わるアソシエイトフェロー並びに機構内職員</p> <p>21人</p>			
0250	<p>(5) 専門スタッフの配置などの計画的な人材の確保・育成に向け、検討を進める。</p>		<p>(4) 非公務員化のメリットを活かした制度の活用方法について引き続き検討する。 ・平成19年度において、技術職員及び技能・労務職員について、機構独自で採用可能とする規程の整備を行い、平成20年度に施設の維持管理を行う職員を適用範囲とし、平成24年度において、事務職員を適用範囲とした。平成26年度においても同採用制度を活用し、事務職員4名の採用を行い、事務職員2名の採用内定を行った。 ・また、平成25年の採用方法を検証し、採用活動方法を改善した結果、当機構が想定する適切な母集団形成を実施することができ、より優秀な人物の獲得に寄与した。 ・平成20年度において、常勤の研究職員に準じた有期雇用職員の人事制度（アソシエイトフェロー）を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有する専門職を対象として採用可能とした。平成26年度は東京国立博物館で14人、京都国立博物館で4人、奈良国立博物館で2人、九州国立博物館で4名、東京文化財研究所で6人、奈良文化財研究所で8人及びアジア太平洋無形文化遺産研究センターで2人の計40人を採用した。 ・新たに平成26年度より、機構の専門的分野・事項を取り扱う職として専門職制度を創設し、国際交流分野に1名の採用内定を行った。 ・平成26年度の機構独自の採用人数は上記のとおり、事務職員4名、アソシエイトフェロー40名の計44名である。</p> <p>(5) 専門スタッフの配置などの計画的な人材の確保・育成に向け、検討を進める。 ・高度の専門的知識経験又は優れた識見を一定の期間活用して行うことが必要と認める業務に雇用する者とした任期付専門員制度を活用し、平成23年度において1名採用し</p>		<p>B 配置実績はなかったが、新たに専門職制度を創設し、採用活</p>	<p>B 配置実績はなかったが、新たに専門職制度を創設し、</p>
			<p>た。平成25年度において、柔軟かつ多様な人材の確保のため、新たに任期付専門職員制度を整備し、平成25年8月に1名を採用した。 ・高度に優れた専門的技術を兼ね備えた人材を確保すべく、専門職制度を創設し、採用活動を行ない、国際交流部門に1名を配置することが内定した。併せて、当該職の人事・給与制度の整備を行った。</p>		<p>動を行い、国際交流部門に1名を配置することが内定した。既存の任期付職員制度と新たな専門職制度の棲み分けを明確にする必要がある。</p>	<p>採用活動を行い、国際交流部門に1名を配置することが内定した。</p>

26年度自己点検評価報告書 個別表

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 1111

大項目	I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)-1 適時適切な収集

【年度計画】

各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ確かな情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。

(東京国立博物館)

日本を中心として広くアジア諸地域の文化の体系的陳列を目指し、絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長 富田 淳
------	------------	-------	---------

【実績・成果】

- ・購入件数 9件 内訳：絵画3件、書跡1件、漆工1件、東洋染織4件
- ・決算額 139,686,000円

26年度は、絵画3件「柿本人麻呂像」・「融通念仏縁起絵断簡」・「桜下美人図」、書跡1件「関戸本古今和歌集切」、漆工1件「花卉漆絵片口」、東洋染織「スレンダン(肩衣)茜地草花文様緯緋浮紋織」・「頭巾 紫地段幾何文様浮紋織」・「帯 茜地段幾何文様浮紋織」・「スレンダン(肩衣)茜地段幾何文様浮紋織」の計9件を購入した。

【補足事項】

- ・絵画の「柿本人麻呂像」は、中国の隠逸文人を源泉とする「維摩居士系」に分類されるもので、中世にさかのぼる数少ない作例の一つである。中国風のモチーフと和装の人物をあわせた特異な画面を有し、美術的、資料的な価値が極めて高い。
- ・書跡の「関戸本古今和歌集切」は、春の歌を装飾料紙に揮毫した極めて価値の高いものである。
- ・漆工の「花卉漆絵片口」は、朱漆で描かれた文様と、注ぎ口や高台の形状が安土桃山時代の特徴を示しており、中尊寺などの奥羽地方に伝わる、いわゆる秀衡碗の中では、時代の遡る作例である。
- ・東洋染織の「頭巾 紫地段幾何文様浮紋織」は、スマトラ島の特色である金糸浮紋織の中でも、バリエーションに富んだ様々な幾何文様が細密に織り出された優品である。



[購入品]花卉漆絵片口

【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
収蔵品件数	116,268件	—	—			113,258	113,897	114,362
うち国宝	87件	—	—		87	87	87	87
うち重要文化財	634件	—	—		629	631	631	633
購入件数	9件	—	—		4	0	5	5

【年度計画に対する総合評価】

評価：B

【判定根拠、課題と対応】

総合文化展の充実に寄与する貴重な作品が購入できた。

【中期計画記載事項】体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。

(東京国立博物館)日本を中心にして広くアジア諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】

評価：B

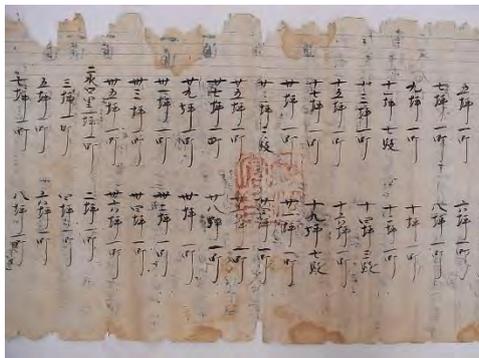
【判定根拠、課題と対応】

中期計画に基づき順調に成果をあげている。

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1)-1 適時適切な収集							
<p>【年度計画】</p> <p>各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ的確な情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>京都文化を中心とした絵画、彫刻、書跡、陶磁器、染織品、漆工芸品、金工品、考古資料、歴史資料の中から重点的に購入する。</p>								
担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長 浅見龍介					
<p>【実績・成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 購入件数 9件 内訳:絵画2件、金工1件、漆工5件、染織1件 決算額 227,452,000円 <p>今年度は、近年新たに発見された藤末謙初の「仏涅槃図」、室町幕府の同朋衆芸阿弥に水墨画を習った祥啓の「鍾秀斎図」(重文)、加賀藩家老前田家に伝来した有線七宝の名品「七宝唐花文手付盆」、中世の蒔絵手箱の好例「千鳥蒔絵手箱」、桃山時代の高台寺蒔絵様式による「桐違鷹羽蝶紋蒔絵筆筒」、類例の少ない江戸時代の刺繍による「紅縹子地松竹梅鶴花車文様繡掛下帯」といった京都文化を物語る良品を購入することができた。</p>								
<p>【補足事項】</p> <p>予算を確保できなかった昨年度より候補作品の選定作業を進め、今年度特別に配分された購入予算を加味し、諸々の事情に照らして優先順位の高いものを選び、購入の手続きを進めた。</p> <p>右に写真を掲載したのは祥啓筆「鍾秀斎図」。祥啓は建長寺の画僧で、京都に来て室町幕府の同朋衆芸阿弥に絵を学んだ。東国の水墨画の隆盛は祥啓に始まる。京都文化を東国に伝えた人として重要である。</p>								
								
[購入品]重要文化財 鍾秀斎図 祥啓筆 玉隠英瑛等賛								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
収蔵品件数	7,109件	—	—		6,584	6,621	6,708	6,721
うち国宝	27件	—	—		27	27	27	27
うち重要文化財	180件	—	—		177	177	179	179
購入件数	9件	—	—		23	13	1	0
【年度計画に対する総合評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 国指定品を含めた高水準の作品の購入を進め、収蔵品の欠落部分の一部を補うことができた。					
<p>【中期計画記載事項】体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。</p>								
【中期計画に対する評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 京都文化を研究・展示するのに効果的な作品を収集することができた。					

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 1113

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1)-1 適時適切な収集							
【年度計画】								
各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ確かな情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。 (奈良国立博物館)								
仏教美術及び奈良を中心とした絵画、彫刻、書跡、工芸品、考古資料、歴史資料等の中から重点的に購入する								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 野尻 忠					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> 購入件数 15件 内訳：彫刻2件、絵画4件、書跡1件、金工4件、漆工1件、考古3件 決算額 261,960,000円 								
購入により15件の文化財が新たな収蔵品として加わった。 木造如来立像、銅造光背、絹本着色春日宮曼荼羅、絹本着色釈迦十六善神像、愛染明王像印仏、最勝曼荼羅、天永二年十一月二十一日 東大寺注進状案、金銅火焰宝珠形舍利容器、金銅能作性塔、金銅蓮華形磬、金銅都五鈷杵、愛染明王彩繪舍利厨子、人面付蓮華文鬼瓦（八島廃寺出土）、伝奈良県葛城市出土品（銅製骨藏器）、伝滋賀県根本如法堂付近出土品								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> 彫刻の木造如来立像は、貴重な平安時代（10-11世紀）の一木彫像で、奈良にゆかりのある品と推定され、当館の所蔵品として相応しい。 彫刻の銅造光背は、小品ながら完形品の稀少な平安時代（12世紀）の遺品であり、名品展をはじめ様々なテーマでの展示に活用できる。 絵画の絹本着色春日宮曼荼羅は、中世に広く製作された春日宮曼荼羅のなかでも13世紀に遡る数少ない遺品として、奈良に立地する当館の所蔵品として相応しく、名品展や特別陳列での展示ができる。 絵画の絹本着色釈迦十六善神像は、縦170cm超の大画面を有する奈良伝来の仏画であり、展示効果の大きさが期待される。 書跡の天永二年十一月二十一日東大寺注進状案は、紙背の「遠江倉印」が特に注目され、行方不明文書の再発見としての意義も大きい。 金工の金銅火焰宝珠形舍利容器は、これまで館蔵品になかったタイプの舍利容器であり、名品展での多様な舍利荘厳の展示に活用できる。 金工の金銅能作性塔は、能作性珠を具備する極めて貴重な異例であり、火焰宝珠形の形も他に例を見ない。展示効果の大きさが期待される。 考古の人面付蓮華文鬼瓦（八島廃寺出土）は、人面を瓦の文様に採用する日本では珍しい遺品で、名品展での瓦展示の多様化を図れる。 								
								
【購入品】 天永二年十一月二十一日東大寺注進状案 紙背 部分								
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
収蔵品件数	1,877件	—	—	経 年 変 化	1,827	1,831	1,834	1,862
うち国宝	13件	—	—		13	13	13	13
うち重要文化財	111件	—	—		109	109	111	111
購入件数	15件	—	—		7	4	2	3
【年度計画に対する総合評価】			【判定根拠、課題と対応】					
評価：B			判定根拠：仏教美術及び奈良に関わる文化財を分野に偏りなく収集できた。					
【中期計画記載事項】								
体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (奈良国立博物館)								
仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
【中期計画に対する評価】			【判定根拠、課題と対応】					
評価：B			判定根拠：仏教美術を中心にバランスの取れた収蔵品蓄積が図られている。					

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1) -1 適時適切な収集							
【年度計画】								
各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ確かな情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。 (九州国立博物館)								
日本とアジア諸国との文化交流を中心とした美術、考古及び歴史・民族資料等の中から重点的に購入する。								
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長 富坂 賢					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・購入件数 14件 内訳：絵画 4件、書跡 1件、彫刻 1件、漆工 1件、染織 3件、考古 2件、歴史資料 2件 ・決算額 727,228,000円 当館のテーマである日本とアジア諸国との文化交流の足跡を示す作品を収集する一方で、日本の王朝文化を象徴する作品として、優れた文化財を 14 件購入した。								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・14 件を購入した ・絵画分野では、狩野永徳の大作「紙本墨画松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風 狩野永徳筆」が特筆される。代表作「花鳥図」(国宝、京都・聚光院所蔵)に酷似し、祖父・元信の端正な図様を継承しつつ、新時代の豪壮な様式を予感させる優品である。 ・書跡分野では、「藍紙墨書大方広仏華嚴経卷第十五(泉福寺焼経)」を購入した。金箔を散らした藍色の料紙に『大方広仏華嚴経卷第十五』を书写した、12世紀の装飾経の優品である。 ・彫刻分野では、平安時代・10世紀の「阿弥陀如来坐像」を購入した。 ・染織分野では、琉球の第二尚氏時代・19世紀に制作された女性の上着「黄地松皮菱繫ぎ檜扇団扇菊椿文紅型胴衣」など、東アジアにゆかりの作品を購入した。 ・漆工分野では、「龍鳳彫彩漆合子」を購入した。官製銘をもつ中国明時代嘉靖期(1522-66)彫彩漆の典型作である。 ・考古分野では、縄文時代・亀ヶ岡文化の「伝青森県つがる市森田町床舞出土 長胴異形壺形土器」などを購入した。 ・歴史資料分野では、「紙本墨画徳川家康御内書」が特筆される。『宗家文書』(当館所蔵、重要文化財)の一部にかつて含まれ、その後散逸した古文書のうちの1通で、文禄・慶長の役後の講和交渉の推進を、徳川家康が宗義智に指示したものである。 ・いずれも、日本と大陸あるいは九州と本州の文化交流を物語るもの、あるいは時代の美意識や工芸技術の高さを示す優品といえる。 								
								
[購入品]紙本墨画松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風 狩野永徳筆								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
収蔵品件数	512件	—	—	経 年 変 化	433	453	474	493
うち国宝	3件	—	—		3	3	3	3
うち重要文化財	29件	—	—		28	29	29	29
購入件数	14件	—	—		31	17	18	15
【年度計画に対する総合評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 「松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風」などの国立博物館として収集すべき作品と、文化交流を端的に示す作品とを、バランスよく収集した。					
【中期計画記載事項】体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (九州国立博物館)日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 文化交流を端的に示す作品を、バランスよく収集した。					

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 1121

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1) -2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用							
【年度計画】 (4館共通) 1) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。								
担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長 富田 淳					
【実績・成果】 1) ○寄贈 ・新規寄贈品件数 100件 内訳：絵画3件、書跡11件、彫刻1件、金工14件、漆工1件、考古6件、東洋金工1件、東洋考古62件、東洋民族1件 ○寄託 ・新規寄託品件数 604件 内訳：絵画86件、書跡26件、彫刻104件、金工6件、刀剣3件、陶磁4件、漆工16件、染織217件、考古12件、歴史資料4件、東洋絵画22件、東洋書跡15件、東洋彫刻20件、東洋金工4件、東洋陶磁55件、東洋漆工8件、東洋考古2件 ・寄託品は新規に604件を受け入れ、59件を返却した。								
【補足事項】 ○寄贈 ・作品の寄贈については11名の所蔵者から、100件の文化財を受け入れた。 ・彫刻の寄贈品のうち、「押出如来立像」は飛鳥～奈良時代の典型的な押出仏の遺品であり、保存状態の良さからも価値が高い。 ・漆工の寄贈品のうち、「桔梗蒔絵螺鈿聖龕」は現存する類例の少ない携帯用の聖龕で、安土桃山時代の輸出漆器の特徴を良く示している。 ・東洋考古の寄贈品のうち、「双耳壺」は保存状態の良い優品で、青い釉薬も鮮やかな仕上がりで、展示効果が高い。 ○寄託 ・作品の寄託については6機関2個人から、604件の文化財を新規に受け入れた。 ・寄託品のうち、国宝は絵画1件、書跡1件、彫刻1件の計3件、重要文化財は絵画4件、書跡1件、彫刻1件、陶磁1件、漆工2件、考古12件、東洋書跡3件の計24件となり、総合文化展の充実と研究に大きく寄与しうる。								
								
[寄贈品] 押出如来立像								
【定量的評価】項目								
	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
新規寄贈品件数	100件	—	—		23	151	63	471
寄託品件数	3,064件	—	—		2,726	2,689	2,563	2,519
うち新規寄託品件数	604件	—	—		5	7	3	20
登録美術品件数	25件	—	—		3	3	2	23
【年度計画に対する総合評価】 評定：B				【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：総合文化展と研究に寄与する内容の寄託を受けることができた。				
【中期計画記載事項】 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B				【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：中期計画に基づいて順調に成果をあげている。				

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1)－2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用							
【年度計画】 (4館共通) 1) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。								
担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長 浅見龍介					
【実績・成果】 1) ○寄贈 ・新規寄贈品件数 379件 内訳：絵画49件、書跡17件、金工56件、陶磁86件、漆工161件、染織7件、考古3件 ○寄託 ・新規寄託品件数 162件 内訳：絵画122件、書跡18件、彫刻5件、金工9件、陶磁4件、漆工3件、染織1件 ・新規受入件数では昨年度より倍増した。これは、中国絵画のまとまったコレクションを受託できたことによる。天野山金剛寺の重文「大日如来坐像」と重文「不動明王坐像」は、同寺本堂の改修期間に合わせて借用しているもので、圧倒的な存在感の丈六仏であり、26年9月にリニューアル・オープンした名品ギャラリーの顔ともなった。								
【補足事項】 ○寄贈 ・寄贈は379件で、寄贈者は14人であった。 ・絵画で寄贈された長澤蘆雪筆「人物鳥獣画卷」は、近年見いだされた蘆雪初期の作品で、主題・描法の多彩さ、機知に富む画面構成、大巻であること等から初期の代表作に位置づけられる。特に卷子作品はこれまで晩年作2点しか知られておらず、蘆雪の画業研究の上でも貴重である。 ・絵画44件、書跡16件、金工56件、陶磁85件、漆工161件、染織1件、考古1件の計364件の寄贈者は、大阪府貝塚市で江戸時代から続いた商家であり、土蔵に伝わる文化財の悉皆調査を当館に依頼の上、寄贈候補品の取捨選択を一任された。内容は、初期狩野派による「扇面貼交屏風」、酒井抱一筆「梅に鶯・椿に雀図屏風」、司馬江漢筆「富岳遠望之図」、河鍋暁斎筆「梅に鳥」、重要美術品の豊臣秀吉筆「消息」、柴田是真作「青海塗菓子銘々盆」、中山胡民作「富士蒔絵盆」、小島漆壺斎作「七宝花菱唐草鮫鱈棗」、各種茶碗、茶入、茶杓などの茶道具、近代竹工の名品、御所人形のコレクションなど多岐にわたり、幕末近代の関西圏における豪商の生活を支えた物質文化の全容を示す。寄贈を前提とした調査は来年度も続く予定である。 ○寄託 ・新規寄託の文化財には、上述の天野山金剛寺の重文「大日如来坐像」と重文「不動明王坐像」をはじめ、個人から重文「太刀 銘備中国住人左衛尉直次作／建武二年十一月」など、多数の指定文化財が含まれている。天球院の重文・狩野山楽・山雪筆「竹虎図襖」「梅遊禽図襖」の寄託は寺坊でデジタル複製の襖に入れ替えての原図保存のためであり、博物館が担うべき文化財保存の役割にかなっている。 ・返却した寄託品は53件である。								
								
[寄託品]大日如来坐像と不動明王坐像								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
新規寄贈品件数	379件	—	—	変化	35	24	86	13
寄託品件数	6,001件	—	—		6,005	6,013	5,914	5,892
うち新規寄託品件数	162件	—	—		107	93	73	70
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 文化庁との連携により、大型彫刻の長期寄託が実現し、平常展で注目を集めた。個人から大量の寄贈を受け、収蔵品を大幅に充実させることができた。							
【中期計画記載事項】	収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。							
【中期計画に対する評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 寄贈・寄託とも、質・量のいずれかにおいても従来の実績を大幅に上回り、たいへん順調に推移した。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1123

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(1)ー2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用							
【年度計画】 (4館共通) 1) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 野尻 忠					
【実績・成果】 1) ○寄贈 ・新規寄贈品件数 0件 ○寄託 ・新規寄託品件数 7件※1 内訳は下記のとおり 彫刻 3件：重要文化財 木造菩薩面 2面 重要文化財 木造行道面 蠅払 1面 重要文化財 木造舞楽面 皇仁庭 2面 ※1 重要文化財 乾漆虚空蔵菩薩半跏像 1軀 絵画 1件：最勝曼荼羅 1幅 工芸 3件：重要文化財 秋草松喰鶴鏡 1面 木造黒漆六角厨子 1基 金銅鬼面五鈷杵 1口 ※1 彫刻「重要文化財 木造舞楽面 皇仁庭 2面」は、既に寄託されている作品1件に点数の追加としたため、下記定量的評価項目の寄託品件数26年度実績値には含めない。								
【補足事項】 ○寄贈 ・26年度は文化財寄贈の申入れがなかった。 ○寄託 ・彫刻分野の寄託品のうち木造舞楽面 皇仁庭は、墨書銘から平安時代の長久3年(1046)の作とわかる貴重なもの。名品展「珠玉の仏教美術」で26年9月7日まで展示した。 ・絵画分野の寄託品である最勝曼荼羅は、縦3m以上に及ぶ大幅で、興福寺における祈雨法要に使用された本尊画像の一遺例。現存例が極めて少ない点でも本品は貴重だが、さらに墨書銘から製作経緯が判明する点も重要。26年12月9日～27年1月12日に名品展「珠玉の仏教美術」において陳列した。 ・工芸分野の寄託品である秋草松喰鶴鏡は、白銅色を呈する鑄銅鏡で、鏡背の文様は萩、女郎花、薄という秋草の描写の間に、水辺に立つ鶴と松の小枝を加えて飛ぶ鳥を配する。高い鑄造技術、華やかな文様構成は、平安時代後期の鏡の中でも類まれな優品であり、展示への活用が期待できる。								
								
[寄託品] 木造舞楽面 皇仁庭								
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
新規寄贈品件数	0件	—	—	年 変 化	8	0	1	25
寄託品件数	1,984件	—	—		1,947	1,945	1,951	1,994
うち新規寄託品件数	(※1) 7件	—	—		6	12	13	49
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 新規寄託件数は、前年度比マイナスではあるものの23・24年度とは同程度であり、かつ、すぐに平常展に出陳しており、順調と言える。							
【中期計画記載事項】 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 新規に寄託を受けた最勝曼荼羅1幅は、すぐに名品展で陳列しており、積極的な活用が図られている。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(1)－2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用								
【年度計画】									
1) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。									
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長 富坂 賢						
【実績・成果】									
1) ○寄贈 <ul style="list-style-type: none"> ・新規寄贈品件数 5件 内訳：金工1件、考古3件、民族資料1件 ○寄託 <ul style="list-style-type: none"> ・新規寄託品件数 12件 内訳：絵画9件、書跡1件、彫刻2件 									
【補足事項】									
○寄贈 <ul style="list-style-type: none"> ・5件の寄贈があった。 ・金工分野では、15世紀インドネシアの密教法具「金剛鈴」があげられる。 ・考古分野では、北部九州の素封家に伝わった、古墳時代の出土品を主体とする3件の寄贈があった。とりわけ、豊前地域の有力首長墓からの出土例が知られる金銅装馬具、金銅装単龍環柄頭付大刀、全国的に出土例が稀少で九州では唯一の青銅鈴釧など、古墳時代の日本と朝鮮半島との交流を物語る優品は特筆される。また、東南アジアでは、土器や青銅器を中心とする、タイの紀元前後のバンチェン文化やカンボジア5～6世紀の先クメール時代の出土資料が寄贈された。いずれも、列品の少ない考古分野の充実に寄与することとなった。 ○寄託 <ul style="list-style-type: none"> ・12件の新規寄託があった。 ・絵画分野のうち東洋絵画では、中国・五代後晋時代・天福6年(941)の年紀をもつ「観音曼荼羅図」（重要文化財）、清時代の画家で写実的な花鳥表現を長崎に伝えた沈南蘋筆「海棠白頭翁・萱草小禽図」、また、現存作例が少ない韓国・朝鮮時代の「洞庭秋月・瀟湘夜雨図」があげられる。また、日本絵画では、安土桃山時代・16世紀の画壇の巨匠・狩野永徳が描いた「瀟湘八景図」、江戸時代・安永7年(1778)の年紀のある伝曾我蕭白筆「蘭亭曲水図」といった、中国に題材をとった対外交流に直結する作品を含む寄託を受けた。 ・書跡分野では、江戸時代前期の臨濟僧・雲居希膺が、中国・元時代の禅籍『緇門警訓』の一節を揮毫した「法語」の寄託を受けた。 ・彫刻分野では、室町時代16世紀の「木造十一面観音像」は、古代中世の大宰府の宗教的中心地・原山に伝わったことが明らかな仏像である。また、東洋彫刻では、中国・北魏時代の「銅像釈迦如来坐像」（重要文化財）があげられる。 ・寄託のうち、谷家関係資料が国の登録美術品に認定された関係で178件の寄託を解除し、2件の登録美術品として計上した。 									
									
						[寄贈品]金銅装単龍環頭柄頭			
									
						[寄贈品]青銅鈴釧			
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
新規寄贈品件数		5件	—	—		4	1	3	4
寄託品件数		795件	—	—		1,297	1,219	1,238	1,081
うち新規寄託品件数		12件	—	—		50	17	30	15
登録美術品件数		2件	—	—		0	0	0	0
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化交流を主軸に据えた寄託品・寄贈品の受入を、分野のバランスよく行うことができた。特に館蔵品の少ない考古分野の優品の寄贈を受けることができた。							
【中期計画記載事項】		収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。							
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化交流を主軸に据えた寄託品・寄贈品の受入を、分野のバランスよく行うことができたため。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 1211

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)－1 収蔵品の管理・保存								
<p>【年度計画】 収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。 (4館共通)</p> <p>1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。 2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <p>1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。 (東京国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品情報調査を継続して行う 2) 歴史資料・和書・古写真・ガラス乾板・館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用・公開するための作業を進める。</p>									
担当部課	学芸研究部列品管理課 学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 富田 淳 課長 神庭信幸						
<p>【実績・成果】(4館共通)</p> <p>1) 寄託品の状態確認作業を行い、所在情報を更新した。また、寄託の継続について寄託者の確認をとった。 2) 本格修理のための列品調査、対応修理の実施、列品貸与の点検として1,721件の保存カルテを作成し、蓄積した。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <p>1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新した。 (東京国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品情報調査を継続して行い、収蔵品データベースを更新した。 2) 旧資料部関係品を整理し、列品として26年度は506件の歴史資料を編入した。</p>									
<p>【補足事項】 (4館共通)</p> <p>2) ・本格修理時334件、応急修理時692件、列品貸与時695件、合計1,721件の保存カルテを作成した。 ・『博物館資料の臨床保存学』武蔵野美術大学出版局を出版した。 ・臨床支援システムを用いた各種データの有効活用を行い、収蔵品の管理保存の実効性を向上させている。 (東京国立博物館)</p> <p>1) 列品情報整備事業の6年目にあたる本年度は、黒田記念館所蔵品、歴史資料の分野を中心に調査を行った。26年度の調査件数は3,512件である。 ○ICタグを利用した列品移動情報システムを構築するための打合せ及び実験を行った。</p> <div style="text-align: right;">  <p>列品移動情報システムの実験</p> </div> <div style="text-align: right;">  <p>出版『博物館資料の臨床保存学』</p> </div> <p>※保存カルテ作成件数の計数方法については、23年度より収蔵品及び寄託品のみを対象とし、特別展等の借用品における応急修理時の保存カルテ作成分は含まないものとした(22年度までは含む)。</p>									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25	
保存カルテ作成件数 (23年度より計数方法変更)		1,721件	—	—	経年 変化	2,368	1,187	1,594	1,492
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 列品貸与、応急修理、本格修理などの業務を通じて資料の状態を観察し、保存カルテに記載した。業務の進捗に合致した蓄積と共有化を図ることができた。							
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 従来から蓄積されつつある保存カルテによって、収蔵品に関する詳細な状態把握が可能になった。資料を確実に次世代に継承するための基本情報の整備が着実に進んでいる。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2) -1 収蔵品の管理・保存								
<p>【年度計画】</p> <p>収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。</p> <p>2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <p>1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。</p>									
担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長 浅見龍介						
<p>【実績・成果】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 年2回行う寄託品の継続手続きに合わせて、所在確認作業を実施した。</p> <p>2) 貸与に伴う点検時を主体として作成を行っている館蔵品の保存カルテの作成を継続して行い、204件作成した。 ・収蔵品の貸与記録及び館内の展示記録を継続して行った。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館)</p> <p>1) 購入品、寄贈品、新規寄託品等、文化財情報システムの収蔵品データを更新した。</p> <p>○彫刻の大型作品の写真撮影を行った。</p> <p>○仮設収蔵庫から新館収蔵庫へ各分野の作品移動を行った。</p> <p>○新規寄贈品・寄託品を中心に、収蔵庫搬入前に酸化エチレン製剤「エキヒュームS」による燻蒸庫燻蒸を実施した。</p>									
<p>【補足事項】</p> <p>○燻蒸庫燻蒸は、I PM(総合的有害生物管理)の一環として実施しており、文化財への安全性を検証するため、燻蒸中の温湿度調査や、燻蒸庫の点検なども行った。</p>									
									
大型彫刻の新館収蔵庫への移動作業									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
保存カルテ作成件数		204件	—	—		108	249	215	253
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 新館収蔵庫への作品の移動を行い、作品の管理データを蓄積した。							
【中期計画記載事項】国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 作品の写真・データを蓄積し、展示・研究等に繋げる基盤を作った。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 1213

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2) -1収蔵品の管理・保存								
【年度計画】 収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。 (4館共通) 1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。 2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。 (奈良国立博物館) 1) 文化財保存修理所を円滑に運用して、文化財の積極的な保存修理を図る。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 寄託品の所在確認 ・ 寄託品の移動時に、保存修理指導室及び列品室への所定のフォームに基づく日時連絡を徹底した。 ・ 2ヶ月に1回実施している収蔵庫内環境チェック時、及び年末の収蔵庫査察時に寄託品の所在確認を行った。 2) 保存カルテの作成 ・ 保存カルテについては、文化財の個別写真が添付されたフォームに統一し、保存修理指導室で作成・保管するシステムの運用が軌道に乗ったことで、115件を順調に作成した。 ・ 保存カルテのコンディション評価欄に記入されたA～Eの5段階評価についてデータを集計し、館蔵・寄託品データベースに統合するための準備を進めた。 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 収蔵品情報システムの運用を継続し、26年度新収品を含む収蔵品データを更新した。 (奈良国立博物館) 1) 文化財保存修理所の運用 ・ 学芸部と文化財保存修理所において、修理に従事する公益財団法人美術院、株式会社文化財保存、北村工房の3工房代表者との懇談会である文化財保存修理所協議会を26年9月11日及び27年3月5日に開催し、各工房の修理事業実施状況、修理所施設の維持・管理、工房内の温湿度をはじめとする保存環境改善に関する課題などを討議した。 ・ 館長以下博物館職員が定期的に文化財保存修理所各工房の修理実施状況を視察する修理所巡回を3回実施した。									
【補足事項】 ・ 26年12月23日から27年1月18日まで、当館西新館北第1室において保存修理指導室が中心となり準備した特集陳列「新たに修理された文化財」を開催し、前年度に文化財保存修理所各工房などで修理が完了した当館収蔵品・寄託品を修理解説パネルとともに展示(7件)することで、文化財修理技術を広く一般に理解してもらう機会とした。 ・ 文化財保存修理所の施設や事業の概要を紹介する日本語版と英語版の案内パンフレットを修理所内に設置した専用ラックに常備し、修理所公開や国内外の修理専門技術者による修理所視察などの機会に配布した。 ・ 27年1月15日に、21年から続く文化財保存修理所一般公開を開催し、修理所各工房の活動を広く知ってもらう機会とした。 ・ 27年1月27日から3月16日まで、当館西新館第1室において文化財保存修理所の各工房に協力を仰いで、特集展示「和紙－文化財を支える日本の紙」を開催し、文化財修理に用いられる和紙の重要性を紹介した。									
									
特集展示「和紙－文化財を支える日本の紙」 図録表紙									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
保存カルテ作成件数		115件	—	—		218	130	127	120
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財情報システムと連動して保存カルテの効率的な運用を計った。文化財保存修理所の各工房との連携を通じて、修理所の積極的な活用を行った。							
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 保存カルテを順調に作成し、文化財保存修理所での修理につなげることができた。その成果を修理所公開や特集陳列「新たに修理された文化財」等で広く公開できた。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)-1 収蔵品の管理・保存								
<p>【年度計画】</p> <p>収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。</p> <p>2) 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (九州国立博物館)</p> <p>1) 博物館科学・保存修復諸室を計画的に運用し、文化財の適切な保存・積極的活用を図る。</p> <p>2) より充実した業務システムの構築を目指す。</p>									
担当部課	学芸部博物館科学課 学芸部文化財課	事業責任者	課長 今津節生 課長 富坂 賢						
<p>【実績・成果】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1) 出品期間の更新または返却の時期に合わせて所在確認作業を行った。</p> <p>2) 収蔵品及び修理完了資料を中心とした保存カルテを75件作成した。 (九州国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品・展示品を中心にX線CTスキャナ・3Dデジタイザ・3次元プリンタを用いて非接触で3次元データを取得し、保存状況と構造調査を実施した。測定結果をデータ化するとともに、3Dプリンタで出力した。このデジタルデータは文化財の保存に役立てると共に展示に反映した。また、保存修復施設1～6を運用し、計画的な保存修理事業を進めた。</p> <p>2) 現行システムの問題点を洗い出した結果を受け、新システムに向けた取り組みを行った。</p>									
<p>【補足事項】</p> <p>(4館共通)</p> <p>2) 保存カルテの作成は、修理完了作品の他、収蔵品の中から計画的に対象を選定して行っている。本年度は、修理完了作品と寄贈陶磁器の保存状況を調査し、カルテを作成した。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 長崎県鷹島海底遺跡から発見された元寇遺物の「てつはう」をX線CTでデータ化し、内容物である鉄片・陶器片をそれぞれ3次元データから製作して触れる複製品として展示した。また、同様にX線CTで3次元データ化した新潟県出土火焰土器を3Dプリンタで出力し、これを原型に陶器で製作した複製品を展示した。さらに、鹿児島県広田遺跡出土の貝製品を3Dデジタイザで3次元計測し、これを3Dプリンタで出力して触れる展示として活用した。</p>									
									
3Dプリンタで出力した鹿児島県広田遺跡出土の貝製品の展示風景									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
保存カルテ作成件数		75件	—	—	経年 変化	101	107	91	94
CTスキャン調査		64件	—	—		60	60	59	58
3次元計測		53件	—	—		58	55	34	43
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 保存状況と構造調査等を例年通り着実に実施することができた。							
【中期計画記載事項】国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財を永く次世代に伝えるため、保存・管理・調査等を例年通り着実に実施することができた。							

【書式A】

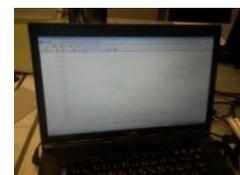
施設名 東京国立博物館処理番号 1221

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)-2 施設的环境整備								
【年度計画】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。 (4館共通) 1) 収蔵品の生物被害を防止するため、I P M (総合的有害生物管理) の徹底を図る。 (東京国立博物館) 1) 本館収蔵庫の整備計画を作成しつつ、既存収蔵庫のセキュリティ強化、環境改善の工事を実施する。 2) 収蔵品の保存と展示に関する環境について全館の視野にたつて調査研究を進め、環境データの解析・蓄積を行う。 3) 展示場及び収蔵庫における地震対策の再検討と改善を図る。 4) 収蔵庫、展示室の温湿度、汚染気体など保存環境に関する年次報告を整備する。 5) 輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査を実施する。									
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 神庭信幸						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 収蔵庫など325地点における生物生息状況を夏季に調査した。また、ゴキブリなどの生活害虫を防除するため、夏季に防虫薬剤を全館に設置した。 (東京国立博物館) 1) 設備と収納を評価するための各項目を設定し、本館に存在する収蔵庫18箇所の収蔵実態について悉皆調査を実施した。調査によって収蔵庫全体の整備計画に必要な情報を収集、整理した。 2) 収蔵庫及び展示室など367地点の温湿度を計測し、環境の評価及び処置を実施した。空気環境に関しては、収蔵庫及び外気など11地点におけるアルデヒド類及び有機酸類などを計測し、蓄積した。 3) 平成館1階展示室改修工事に伴う新規導入免震台の加振実験を行い、免震効果を検証した。東洋館展示室に陳列する資料の支持具を新規製作し、地震対策を強化した。 4) 収蔵庫、展示室など258カ所の温湿度、及び11地点の空気汚染物質濃度に関し年次報告書を整備した。 5) クリーブランド美術館からの国際輸送、特別展「みちのくの仏像」、特別展「3.11大津波と文化財の再生」出品作品の国内輸送において、輸送中に発生する振動・衝撃の計測を実施した。									
【補足事項】 <div style="text-align: right;">  <p>免震台の加振実験</p> </div>									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
-		-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 生物生息、温湿度、輸送中の振動、免震装置の効果などに関する調査と検証を実施し、文化財を保存するための環境の整備に役立てた。							
【中期計画記載事項】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 展示、収蔵スペースの保存環境の質的向上を計画的に進めるため、各種の環境データの集積と解析によって、環境改善を効果的に進めることができた。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)ー2 施設的环境整備								
【年度計画】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。 (4館共通)1)収蔵品の生物被害を防止するため、I P M(総合的有害生物管理)の徹底を図る。 (京都国立博物館)1)平成知新館(新平常展示館)の講堂ほかの先行運用を開始し、9月に全館開館する。 2)平成知新館の開館までに、空調による調整開始前の空気環境、粉塵等の環境調査を行い、開館後の効率的な展示収蔵環境の維持管理に役立てる。 3)明治古都館(特別展示館、旧本館)の免震補強ほかの改修を前提として活用計画を策定する。 4)明治古都館の温湿度など、展示・保存環境に関わる調査研究を行う。									
担当部課	学芸部列品管理室 総務課	事業責任者	室長 浅見龍介 課長 植田義雄						
【実績・成果】(4館共通) 1)年間を通じて、収蔵庫での網羅的な昆虫類生息調査を行った。また、温湿度モニタリングを拡大した。日常清掃のための備品を拡充した。 (京都国立博物館) 1)25年度に展示製作工事が完了した平成知新館(新館)は枯らし期間を終えて26年9月13日より一般公開を開始し、初回展示「京へのいざない」は連日、1万人前後に上る多数の来館者を迎えたが、温湿度制御監視により適正な環境を維持した。 2)平成知新館では、空気環境目標が達成され、新しい展示ケースと収蔵庫については、収蔵・展示前に専門的な虫菌害調査と除塵清拭清掃を行った。 3)明治古都館(本館)免震補強ほかの準備として、保存活用計画報告書の原案を作成した。 4)明治古都館、東収蔵庫等では、温湿度モニタリングや昆虫類生息調査等に基づいた、効率的な環境維持を目指した。北収蔵庫の適切な空調運転体制の整備を図った。									
【補足事項】 ○保全業務・空調設備の予防的メンテナンスに努め、定期的な保守・点検、各種フィルターの適宜交換等を行い、展示室及び収蔵庫の温湿度環境の適正管理を目指した。 ・データロガー、毛髪温湿度計、中央監視値を併せた空調運転状況の監視体制を維持した。 ・電力事情を考慮し、外気温の変動に応じた温室度の設定変更を実施した。 ○展示室：明治古都館 ・展示室内及び展示ケース内の温湿度モニタリングを継続し、展示品の材質や保存状態、借用条件を考慮した環境監視体制を整え、気象や混雑状況による展示環境の変動等を継続して調査した。 ・展示室内の昆虫類生息調査は、監視スタッフと協力し、目視点検を中心に行った。 ・室内空間、床下部分、小屋裏部分の現地調査を実施した。また、『保存活用計画』に挿入する『価値評価報告書』の作成を京都工芸繊維大学、石田純一郎教授(近代建築史)に依頼した。 ○収蔵庫：特別展示館及び東収蔵庫等 ・データロガー等による温湿度モニタリングにより、空調設備の整備・点検・調整を適宜依頼することができた。 ・明治古都館と東収蔵庫にて昆虫類生息調査(インジケータ調査)を4回(明治古都館70、東収蔵庫90箇所)実施した。 ・北収蔵庫の使用を再開し、中央監視データとモニタリングデータの両方をもとに適切な運用方針の整備を図った。 ・清浄・清掃用品の充実によって簡易清掃が習慣となりつつあり、予防体制が強化されている。 ○平成知新館 ・収蔵庫・展示室の空気環境は目標値を全て達成した。 ・データロガー等による温湿度の計測を拡大し、「環境モニタリングシステム」の運用を開始した。これらのモニタリングの成果を、空調の制御や運転計画に役立てることができた。 ・展示ケースと収蔵庫・写場には、専門的な虫菌害調査と除塵清拭清掃を実施、安全性を確認した後、展示・収蔵・撮影を開始した。 ・展示室・収蔵庫にて昆虫類生息調査を(2回・延べ約320箇所)開始した。 ・展示室、収蔵庫のロック機構を取り外して免震装置を本稼働させた。 ・BEMS(ビルディングマネジメントシステム)のモニターを監視室以外に執務室にも配して活用した。									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—		—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評定：B 【中期計画記載事項】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。		平成知新館の環境を完全に整えて開館し、収蔵品・寄託品の移動を行うことができた。							
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評定：B 【年度計画に対する総合評価】		新館収蔵庫の管理システムを構築し、生物・カビの調査、気流調査を実施する等、順調に成果をあげた。							



展示ケースの除塵清拭清掃



BEMSの監視モニター

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 1223

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)ー2 施設的环境整備								
【年度計画】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。 (4館共通) 1) 収蔵品の生物被害を防止するため、I P M(総合的有害生物管理)の徹底を図る。 (奈良国立博物館) 1) 展示室及び展示ケースの温湿度管理について、無線LANによるデータ管理システムを更に充実させる。 2) 展示ケース内の温湿度・粉塵量などを継続的に計測し、ケースの調湿性能や気密性能の向上を図る。 3) 収蔵庫及び展示室の適正な温湿度管理の徹底を図る。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・館内の文化財害虫生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示にかかわる箇所を中心に、昆虫調査用トラップを2ヵ月に1回設置・回収し、調査結果の蓄積・分析を行った。 ・文化財害虫の生息が確認された展示室・展示ケースを中心に防虫シートの設置や殺虫処置を行い、併せて展示施設の周囲に害虫忌避剤を散布した。 ・収蔵庫周辺や展示室内、調査室内の衛生環境保持のため、掃除と防塵マット交換を定期的に行なった。 (奈良国立博物館) 1) 展示室及び展示ケース内の温湿度の管理をすることができる無線LANによるリアルタイムの温湿度管理システムにより、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示室内の温湿度環境の変化に、科学的データを以て即時に対応した。 2) ・展覧会ごとに展示レイアウトに応じて無線LAN温湿度センサーを設置し、期間中に得られたデータを展示終了後に分析して報告書を作成した。 ・正倉院展終了直後の26年11月13日に、毎年継続的に実施している展示ケース内の粉塵調査を宮内庁正倉院事務所研究員とともにに行った。 3) 展示室内の温湿度については無線LAN温湿度管理システムにより24時間リアルタイムで状況を把握した。収蔵庫及び文化財保存修理所各工房内については、ロガータイプの温湿度センサーによる監視を継続するとともに、定期的にデータの回収、分析を行うことによって温湿度の変化を把握した。									
【補足事項】 ・展示室・収蔵庫・文化財保存修理所内など館内150ヵ所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制により2ヵ月に1回交換・回収し、回収したトラップは外部業者に委託して文化財害虫の捕獲数データを蓄積した。この調査データをもとに、害虫被害が懸念される箇所を中心に忌避対策及び殺虫処置を実施し、併せて害虫発生を防ぐための清掃による衛生環境の保持などI P Mの実践につなげた。 ・展示ケースの残留ガス(VOC)をチェックするため、外部機関に検査を依頼するとともに、館内でもバンプインジケータを利用した独自検査を実施した。 ・自動調湿装置を内蔵した免震ケースを使用し、気象条件や多数の観覧者など外的要因で展示室内の温湿度環境に変動が生じた場合でも、展示ケース内の温湿度を安定して好条件に保つことができた。									
									
展示ケース内に設置した文化財害虫用防虫シート									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25
-		-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 無線LAN温湿度管理、文化財害虫調査用トラップの回収、展覧会の環境対応など、当初の計画通り実施できた。							
【中期計画記載事項】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 調査で得られたデータの解析が進みつつあり、保存・展示環境のよりよい構築が進みつつある。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(2)-2 施設的环境整備								
【年度計画】 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。 (4館共通) 1) 収蔵品の生物被害を防止するため、IPM(総合的有害生物管理)の徹底を図る。 (九州国立博物館) 1) 館内の温湿度・空気質など保存環境に関するデータを蓄積する。 2) 全館的視野に立った陳列品の展示・保存環境に係る調査研究を進め、環境データの蓄積・解析を行う。									
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 今津節生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 収蔵品の生物被害を防止するため、IPMの徹底を図った。文化財搬入に際し、IPMメンテナンスに基づく収蔵準備作業を実施すると共に、必要に応じて殺虫殺菌処理を実施した。 (九州国立博物館) 1) 展示室に新たな温湿度モニタリング装置を導入し、より確実な温湿度データの蓄積を図った。収蔵庫、諸室等館内約420カ所にトラップを設置し、虫の侵入を調査して保存環境の改善を行った。 2) 収蔵庫にこれまでの温湿度データロガーとは別に、温湿度モニタリング装置を導入し、早期対策に努めた。 ・環境データを解析することで、海外より借用した文化財の安定した状態での展示に寄与することができた。									
【補足事項】 ・展示室にSDカードにデータを蓄積できる温湿度モニタリング装置を導入した。これによりデータの欠落をなくすることができるようになり、確実なデータ収集が可能となった。 ・収蔵庫でこれまで使用していた温湿度データロガーの老朽化に伴い、新たに温湿度モニタリング装置を導入し、精度の高い温湿度データの蓄積を図った。 ・温湿度データの管理、解析によって本年度も展示、収蔵環境をより安定させることができた。今後も安定を維持しつつ、より一層の効率化を図りながらエネルギーの削減に寄与したい。 ・収蔵庫、展示室、諸室等の約420カ所に常時粘着トラップを設置し年間を通して、2週間おきに定期的モニタリングを実施した。害虫侵入箇所と館内の害虫の生息状況を早期に発見対処する体制を維持した。 ・地元NPO法人やボランティア活動との連携に努め、文化財の適切な管理・保存について市民や地域の理解を深めた。展示室等一般来館者エリアの温湿度記録や粘着トラップの観察には、本年度も引き続き両者の協力を得た。 ・ミュージアムIPM研修や連絡会議を実施することにより、市民ボランティアやNPO法人等によるIPM活動へのさらなる指導をすすめることができた。 ・殺虫殺菌処置は、特別展やトピック展あるいはイベント用資料等借用や持ち込み資料についての対応である。内訳は二酸化炭素処置1件、低酸素法処置8件。 ・1階研修室(和室)で文化財害虫が確認されたが、生物モニタリングを継続して観察を進め、徹底的なメンテナンスによって被害拡大を未然に防ぐことができた。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
殺虫殺菌処置		9件	—	—		7	6	6	10
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 温湿度計測に関して新たなモニタリング装置を導入してより確実なデータの集積を図った。IPM活動に関しては市民ボランティアや地元NPO法人と連携して進めることができた。							
【中期計画記載事項】展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 新システムの導入(温湿度モニタリング装置)、地道な粘着トラップによる生息調査、環境のモニタリングにより、確かな環境整備を行うことができ順調である。中期計画の最終年度である次年度はこれまでの環境整備を見直し、次につながる環境整備システムを検討する。							



地元NPO法人による収蔵庫前室兼通路のIPMメンテナンスの様子

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 1311-1

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)－1 収蔵品の修理 ①計画的な修理及びデータの蓄積								
<p>【年度計画】</p> <p>修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件（東京：40、京都：10、奈良：9、九州21）の本格修理を実施する。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1)引き続き国宝・重要文化財の中長期修理計画を策定する。</p> <p>2)保存修復関係資料(前年度修理実施分)のデータベース化を図る。(70件)</p>									
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 神庭信幸						
<p>【実績・成果】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)紙本などの修理技術者として保存修復課に2名のアソシエイトフェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急(対症)修理を本格化させた。作品の劣化予防のために413件の応急修理を実施し、緊急性の高いものから78件の本格修理を実施した。うち国宝2件、重要文化財1件、未指定品4件は寄附金による本格修理である。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>1)修理計画立案に向け、国宝・重要文化財を含む305件の作品に関して修理仕様の検討を行い、中長期修理計画策定を進めた。</p> <p>2)データベース構築のために25年度に本格修理を実施した93件の内、修理が完了した61件の修理内容についてデジタル化を実施した。『東京国立博物館文化財修理報告書XV』を刊行した。</p>									
<p>【補足事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国宝「鷹見泉石像」(江戸時代)、「坪内老大人画稿」(江戸時代)、「坪内老大人像」(江戸時代)はバンク・オブ・アメリカからの寄附金により修理を開始し、継続して修理を行なった。 ・国宝「雪景山水図」(南宋時代)は増井久代氏からの寄附金により修理を引き続き行った(25年度着工)。 ・重文「放犢図」(元時代)、「大燈籠」(明治時代)、「河童形土偶」(縄文時代(中期)・前3000～前2000年)は飯田貞子氏からの寄附金により修理を開始した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月7日、東京)において「被災文化財等救援活動における保存修理－キャンバス作品の脱塩の試み－」を発表した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月8日、東京)において「博物館における修理技術者専門員の異議について－東京国立博物館の取り組みを例に」を発表した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月7日、東京)において「国宝繪図屏風(東京国立博物館蔵)の修理事例－本紙裏面に遺されていた情報に着目して－」を発表した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月7日、東京)において「染織品の展示方法における新案－東京国立博物館の展示例－」を発表した。 ・文化財保存修復学会第36回大会(26年6月7日、東京)において、「劣化で一部粉状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例－東京国立博物館所蔵作品の事例－」を発表した。 									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
修理件数(本格修理)		78件	40件	A	変化	139	106	95	93
文化財修理データベース化件数		86件	70件	A		98	114	83	84
【年度計画に対する総合評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 緊急性の高い本格修理及び応急修理、計画立案のための事前調査を計画的に実施し、厳しい経済的事情の中で国宝2件、重要文化財1件を含む修理を実施し、当初予定を上回る内容の成果を挙げた。合わせて修理関係資料のデータベース化を予定通り完了した。							
【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 事前調査、応急修理、本格修理の各段階で保存科学と修理技術が連携して保存修理事業に当たり、博物館活動に対して最適な作品修理を行うことができた。							



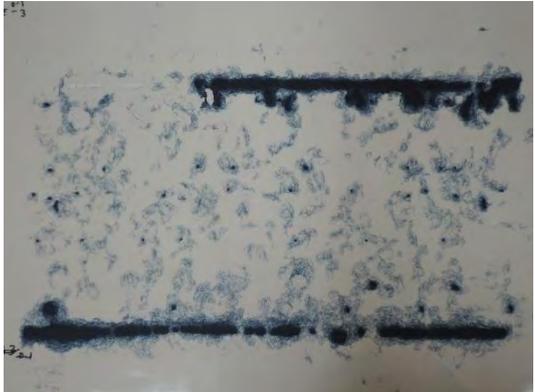
列品番号A-12087「坪内老大人画稿」の修理中検討会

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承																																	
事業名	(3)-1 収蔵品の修理 ①計画的な修理及びデータの蓄積																																	
【年度計画】 修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。 (4館共通) 1) 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件（東京：40、京都：10、奈良：9、九州21）の本格修理を実施する。 (京都国立博物館) 1) 中長期的修理計画の策定を検討する。 2) 収蔵品修理資料のデータベース化に向けた調査を開始する。																																		
担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長 浅見龍介																															
	学芸部保存修理指導室		室長 赤尾栄慶																															
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・館費による修理に加えて、館への寄附金による修理を1件新規で実施し、24年度より朝日新聞文化財団の修理助成にて継続して行われている修理を1件実施した。 ・絵画2件と漆工1件について、修理中に修理請負候補者選定委員による工程検査を行い、修理が適正に実施されているかを現場確認した。 ・本格修理実績 11件 内訳は絵画4件、金工1件、漆工1件、染織3件、考古1件、歴史資料1件 (京都国立博物館) 1) 中長期的修理計画の策定に向けて、確保できる財源についての検討を行い、昨年度に引き続いて各分野の作品担当と実施作品についての調整を行った。 2) 昨年度から引き続いて、収蔵品データベースの更新計画に修理情報の集積を盛り込むことを念頭に、必要項目の洗い出しとデータ状況の確認を行った。																																		
【補足事項】 (4館共通) 1) ・今年度は博物館の当初予算で割り当てられた以外に個人の篤志家からの寄附金により、重要文化財「紙本淡彩耕作図」久隅守景筆（6曲1双）の修理（3カ年約950万円）に着手した。当初予算が潤沢に確保できない中で、指定品の高額修理が実施できた意義は大きい。 ・24年度から継続して朝日新聞文化財団の助成による国宝「病草紙」（10面）の修理（4カ年約2000万円）を実施している。 ・修理請負候補者選定委員会に諮られる高額修理案件は、修理工房間の企画競争により、さまざまな角度から意欲的な修理提案を受けることができた。例えば、その成果は「竹石図」詹仲和筆の表装についての修理方針に反映されている。 ・修理請負候補者選定委員会委員は前述の「紙本淡彩耕作図」と「竹石図」の絵画2件について、修理工程検査を27年1月に実施した。なお、昨年度実施した漆工の「花鳥蒔絵螺鈿筆筒」の工程検査について、今年度も継続して第2回目を27年1月に実施した。 ・今後の館蔵品の修理については、高額修理と少額修理を組み合わせ、外部資金の獲得を目指しながら弾力的に実施していきたい。 (京都国立博物館) 2) 文化財保存修理所では、本年度は113件の新規修理文化財の搬入がありデータベース化を行った。また、過去のデータに関して2,306回追加、更新を行った。																																		
																																		
竹石図 詹仲和筆																																		
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">【定量的評価】項目</th> <th style="text-align: center;">26年度実績</th> <th style="text-align: center;">目標値</th> <th style="text-align: center;">評価</th> <th style="text-align: center;">経年変化</th> <th style="text-align: center;">22</th> <th style="text-align: center;">23</th> <th style="text-align: center;">24</th> <th style="text-align: center;">25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>修理件数(本格修理)</td> <td style="text-align: center;">11件</td> <td style="text-align: center;">10件</td> <td style="text-align: center;">B</td> <td rowspan="2" style="text-align: center;">変化</td> <td style="text-align: center;">9</td> <td style="text-align: center;">10</td> <td style="text-align: center;">13</td> <td style="text-align: center;">15</td> </tr> <tr> <td>文化財修理データベース化件数</td> <td style="text-align: center;">113件</td> <td style="text-align: center;">—</td> <td style="text-align: center;">—</td> <td style="text-align: center;">106</td> <td style="text-align: center;">118</td> <td style="text-align: center;">93</td> <td style="text-align: center;">101</td> </tr> </tbody> </table>									【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	修理件数(本格修理)	11件	10件	B	変化	9	10	13	15	文化財修理データベース化件数	113件	—	—	106	118	93	101
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25																										
修理件数(本格修理)	11件	10件	B	変化	9	10	13	15																										
文化財修理データベース化件数	113件	—	—		106	118	93	101																										
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 今年度の修理件数は当初目標値の10件を超えており、懸案であった指定品の修理にも着手できた。																															
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。																																		
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 緊急性の高い重要文化財の屏風作品の修理に着手しており、計画達成に向けて順調に成果を上げている。																															

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1313-1

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3) -1 収蔵品の修理 ①計画的な修理及びデータの蓄積								
【年度計画】									
修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。 (4館共通)									
1)文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件（東京：40、京都：10、奈良：9、九州21）の本格修理を実施する。 (奈良国立博物館)									
1)引き続き修理の中長期的計画に基づき修理を実施する。									
2)修理資料のデータベース化を図る。									
3)寄託の継続を図る必要性の高い寄託品について修理を実施する。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】									
(4館共通)									
1)・館蔵品修理10件（応急修理1件含む）のうち、新規7件、前年度からの継続事業3件を実施した。 内訳 絵画4件（※うち絹本着色六字経曼荼羅1件は2ヵ年継続事業の最終年度。絹本着色山越阿弥陀図1件は3ヵ年継続事業の1年目。紙本着色泣不動縁起及び絹本着色東大寺曼荼羅2件は2ヵ年継続事業の1年目。） 書跡1件 工芸2件（※うち国宝 刺繍釈迦説法図1件は4ヵ年継続事業の3年目） 考古資料3件（※うち二塚古墳出土鉄製品1件は2ヵ年事業の最終年度。） ・年度内に6件が完了した。 (奈良国立博物館)									
1)22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づき、計画通りに館蔵品修理を実施している。									
2)前年度に引き続き、当館紀要『鹿園雑集』に「奈良国立博物館文化財保存修理所 修理一覧」の掲載作業を進めるとともに、併せて修理報告資料を整理し、データベース化を進めた。									
3)寄託品3件について当館の推薦による財団助成を受けて修理を実施した。									
【補足事項】									
<ul style="list-style-type: none"> 賛助会員や協賛企業からの寄附金を館蔵品修理費に使用する従来の規定に加えて、展示会場入り口に募金箱を設置して募った寄附金を収蔵品の修理費に使用する取扱要項を新たに策定し、これに基づいて前年度からの継続事業である刺繍釈迦説法図の国宝1件の修理を実施した。またこの寄附金による修理が平成25年度に完了した館蔵の絹本着色十王図及び絹本着色安東円恵像の重要文化財2件を、特集展示「新たに修理された文化財」で公開した。 寄託品修理については、出光文化福祉財団の助成による奈良・瀧上寺所蔵八高僧像修理、住友財団の助成による京都・真輪院所蔵星曼荼羅修理、朝日新聞文化財団の助成による黒漆箱型礼盤修理が新規着工した。 									
館蔵五苦章句経の補修紙作成									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
修理件数(本格修理)		9件	9件	B		9	11	9	8
文化財修理データベース化件数		77件	—	—		—	54	70	73
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評価：B		22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づいて館蔵品の修理を実施するとともに、文化財保存修理所で行われた文化財修理のデータベース化を着実に実施した。							
【中期計画記載事項】		修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。							
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評価：B		館蔵品、寄託品について長期計画に基づきながら修理を着実に実施することができた。修理に際しては、当館保存担当者が光学的調査を実施してその所見を修理仕様に反映するとともに、修理監督についても当館研究員が適宜行った。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)－1 収蔵品の修理 ①計画的な修理及びデータの蓄積								
【年度計画】									
修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。									
(4館共通)									
1)文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから80件（東京：40、京都：10、奈良：9、九州21）の本格修理を実施する。									
(九州国立博物館)									
1)博物館科学・保存修復諸室の積極的活用を図る。									
2)修理資料のデータベース化の調査を実施する。									
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 今津節生						
【実績・成果】									
(4館共通)									
1)館所蔵品を中心に、展示や損傷の程度を勘案して、緊急性の高い文化財29件（本格修理23件、応急修理6件）を修理した。									
(九州国立博物館)									
1)九州をはじめとする館外所蔵者負担による文化財修理32件のために、当館の保存修復諸施設を積極的に活用した。館費による修理とあわせて61件の修理を実施した（施設内修理58件、施設外修理3件 合計61件）。このうち、九州の寺院に伝来した重要美術品・両界曼荼羅（奈良国立博物館所蔵）については、長期貸与を前提として3年間かけて当館経費で本格修理を行っている。この修理において奈良国立博物館の保存修理担当者と連携して調査を行い、修理を進めているところである。									
2)修理報告書及び修理経過を示す画像データを整理して、データベース化に備えた。									
【補足事項】									
(4館共通)									
1)館費による修理件数29件（本格23、応急6）									
（絵画12（うち本格9、応急3）、書跡2（うち本格2）、金工2（うち本格1、応急1）、陶磁1（うち本格1）、染織5（うち本格5）、考古6（うち本格4、応急2）、歴史資料1（うち本格1））									
(九州国立博物館)									
1)・修復施設1～3では、国宝修理装演師連盟が館所蔵品15件の他、国宝・琉球国王尚家関係資料の文書記録類（那覇市所蔵）や重要文化財・田能村竹田関係資料（大分市美術館所蔵）など、合計39件の修理を実施した。									
・修復施設4では、美術院が鹿児島県指定文化財・阿弥陀如来立像（光明禅寺所蔵）の修理を実施した。									
・修復施設5では、芸匠が館所蔵品4件の他、重要文化財広田遺跡出土品（南種子町）など、合計8件の修理を実施した。									
・修復施設6では、目白漆芸文化財研究所が2件の館所蔵品等の修理を実施した。また大西漆芸修復スタジオが、天草市指定文化財・燈など8件の修理を実施した。									
・修復施設外では、美術院が1件の仏像の修理を実施した。また目白漆芸文化財研究所が1件、大西漆芸修復スタジオが1件の修理を実施した。									
・修理に使用するための表具裂を2件新調したことに伴い、その表具裂データを作成した。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
修理件数(本格修理)		23件	21件	B		19	19	20	17
文化財修理データベース化件数		—	—	—		—	—	—	—
修復施設の活用(補助事業等)		31件	—	—		23	19	22	29
表具裂データ		2件	—	—		9	0	0	10
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 館費による本格修理件数ならびに館外所蔵者負担による文化財修理件数は徐々に増加しており、年度計画を順調に達成していると判断できる。							
【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 機構の保存修復担当者と連携しながら修理を進めており、中期計画を順調に達成していると判断できる。							



修復施設3での修理風景
重要美術品・両界曼荼羅
(奈良国立博物館所蔵)

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1311-2

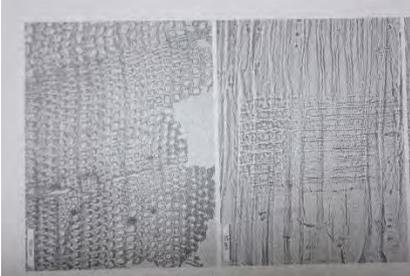
中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)-1 収蔵品の修理 ②科学的な技術を取り入れた修理								
【年度計画】 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通) 1) 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、赤外線撮影、X線透過撮影、三次元蛍光分光分析などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (東京国立博物館) 1) X線CTスキャナーを運用し研究の進展を図り、より適切な修理方法、展示、輸送に関する検討する。									
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 神庭信幸						
【実績・成果】(4館共通) 1) 絵画、書跡などの本紙あるいは敷き紙などについて、植物繊維の同定を26件(A-11182 山水図 など)実施し、本紙の保存に関して検討を行った。 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析140件、4573箇所(A-9972 鷹見泉石像など)、X線透過撮影 92件、172カット(H-3502 女乗物など)、赤外線撮影 3件(A-11182 林和靖図など)、三次元蛍光分光分析 12件、173箇所(A-9972 鷹見泉石像など)の科学的調査を実施した。これらの結果を構造調査と修理設計に役立てた。 (東京国立博物館) 1) 大型垂直式X線CTスキャナー、大型水平式X線CTスキャナー、微小部X線CTスキャナーなど3機種の本格運用を開始し、144件(TJ-1835 パシエリエンブタハのミイラなど)の撮影を行った。									
【補足事項】 ・東京国立博物館でもより深い文化財調査を行うべく、性能の違う3台のX線CTスキャナーを設置し、研究を開始した。所蔵品の貸与前の点検時に亀裂等の確認を行うことで適切で安全な輸送方法の検討を行えるようになった。大型X線CTを用いた他の研究機関との共同による調査研究も進み、今後の研究の進展が期待できる。また、東日本大震災で被災した文化財の修理前調査を行い、適切な修理方法の設計、施工を行うことが出来た。									
 水平型X線CT撮影装置を用いた調査研究作業									
		大型垂直式X線断層撮影装置 Vertical CT	大型水平式X線断層撮影装置 Horizontal CT	微小部X線断層撮影装置 Precision CT					
									
マニ ブレ ータ	全体寸法	約5,400x 4,200x 4,300mm	約5,100x 2,800x 4,450mm	約2,500x 1,200x2,000mm					
	対象物 最大重量	500kg	100kg	25kg					
	テーブル サイズ	φ2,500mm/φ1,200mm	長さx幅:3,000mm x 920mm (複合 素材製)	φ450mm					
検出 器		ラインセンサー(LDA) Y.LineScan 250-16-100 ピッチ: 254 μm, 4,030 素子 耐電圧:600kV	フラットパネル検出器 Y.XRD1621 AN15 ES"premium"有効画素数:1,024x1,024 2,048x2,048						
線源	X線発生 装置	管電圧:20kV-600kV 最大管電流2.5mA、焦点寸法:準 拠 EN 12543:1.0mm/0.4mm	管電圧:20kV-600kV 最大管電流2.5mA、焦点寸法:準 拠 EN 12543:1.0mm/0.5mm	管電圧10kV-225kV, 最大管電流3.0mA 最大出力320/64W,最小焦点寸法 <6μm、最小識別度<3μm					
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—		—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定: B		【判定根拠、課題と対応】 蛍光X線分析、赤外線撮影、X線透過撮影など従来から運用している分析方法に加え、X線CTスキャナーの導入により多面的に文化財の内部構造あるいは状態を確認することが可能になり、本格修理や調査研究に対して精度の高い基礎情報を提供できた。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評定: B		【判定根拠、課題と対応】 東日本大震災で被災した文化財の修理のための事前調査を始めとして、各種の文化財の保存状態確認のための調査を修理技術者、学芸研究者らと共に実施し、具体的な修理の仕様策定に結びつけることができた。							

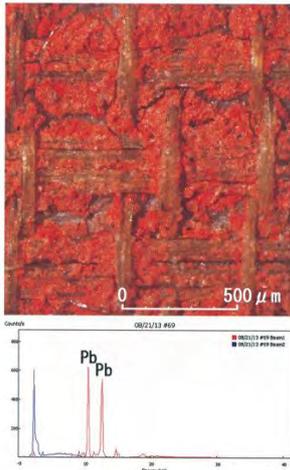
中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)-1 収蔵品の修理 ②科学的な技術を取り入れた修理								
【年度計画】 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通) 1) 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (京都国立博物館) 1) 文化財材質分析システム等を整備する。									
担当部課	学芸部 学芸部 学芸部	事業責任者	部長 松本伸之 上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶 列品管理室長 浅見龍介						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 24年度より朝日新聞文化財団の助成にて修理を継続している国宝「病草紙」について、本紙の裏面に接着する肌裏紙の分析(明度・色目・紙厚・簀目)を行い、修理完成にむけた指針の策定に役立てた。 2) 25年度に設置したマイクロフォーカスX線CTシステムの運用を開始し、文化財の調査を行った結果、内部構造の解明、修理に資することが出来た。 (京都国立博物館) 1) 電子顕微鏡システム、3Dプリンター、蛍光X線分析装置などの機器を新たに調達した。									
【補足事項】 (4館共通) 1) 国宝「病草紙」については、肌裏紙の分析を行った結果、修理前に用いられていたものよりも、明るい色目を採用することで、文化財に対する安全性の確保とあわせ、公開における観賞性を高めることを目指した。 2) ・運用を開始したマイクロフォーカスX線CTシステムについては、重要文化財「十二神将立像」(静嘉堂文庫蔵)、「地藏菩薩立像」(法性寺蔵)、重要文化財「白光神立像」(高山寺蔵)、重要文化財「蘭溪道隆坐像」(建長寺蔵)、重要文化財「薬師如来坐像」(神護寺蔵)で調査を行ったところ、立体的に見ることによって初めて判明する内部構造に関する有益な情報を得ることができた。 ・これらの情報は、実際に行われている修理のみならず、将来的な修理、あるいは立体を中心とした文化財の取り扱いなどにも益するものである。 (京都国立博物館) 1) ・26年度は、電子顕微鏡システム、コンピューテッドラジオグラフィ、蛍光X線分析装置、3Dプリンター、赤外線撮影用カメラレンズ、工業用内視鏡、イメージングプレートを新たに調達した。 ・27年度は、諸調査が効率的かつ安全に実施することのできる機器を継続して調達し、導入した機器の運用を随時開始する予定である。									
									
		マイクロフォーカスX線CTシステムによる撮影			工業用内視鏡を用いた仏像の調査(デモ)				
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
科学的調査		6件	—	—		—	—	1	1
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 分析機器の整備を進め、科学的な手法を取り入れるための基礎を整えることができた。							
【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 科学的な手法を加味した、より精度の高い保存修理の実現に向け、順調に成果を上げている。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1313-2

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)－1 収蔵品の修理 ②科学的な技術を取り入れた修理								
【年度計画】 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通)1) 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (奈良国立博物館) 1) 木造文化財について、木材樹種同定の調査を行い、文化財の材料の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 古墳出土の甲冑片、武具等鉄製品、木造彫刻などのX線撮影及び実測図作成を順次進め、材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 紺紙金地五苦章句経の修理に際して料紙の繊維分析を実施し、補紙として用いる紙の仕様を決定した。(実施回数1回) 2) ・小野流相承絵系図の修理に際し、当館光学調査室の機器を用いて顔料の蛍光X線分析を実施した。(実施回数2回) ・花鳥蒔絵螺鈿櫃(阪急文化財団蔵)の修理に際し、当館研究員がX線透過撮影を実施し、蝶番金具の固定に関する調査を行った。(実施回数4回) (奈良国立博物館) 1) 当館文化財保存修理所で修理施工された木造彫刻作品11件について、京都大学生存圏研究所に委託して樹種同定調査を実施し、その成果を当館研究紀要『鹿園雑集』に掲載した。 2) 古墳出土の鉄器を中心とする館蔵考古資料の修理に際し、X線透過撮影を実施し、修理方針の決定に役立てた。									
【補足事項】 ・文化財保存修理所各工房が当館館蔵・寄託品を修理するに際して文化財調査を学芸部研究員と共同で実施し、データの収集・共有化に努めた。また同調査を円滑に進めるために当館の備品である光学機器(高精細デジタルカメラ、近赤外線カメラ、X線透過撮影装置)や蛍光X線分析装置を積極的に利用した。									
									
木造彫刻の樹種同定結果の例									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
光学的調査		7回	—	—		—	—	—	9
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財の修理に際し、光学的調査を連携して随時行うことで、修理の指針に役立てることができた。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 携帯型蛍光X線分析装置を導入し、修理現場で光学的調査を随時実施する体制が整いつつある。							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承							
事業名	(3)-1 収蔵品の修理 ②科学的な技術を取り入れた修理							
【年度計画】 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 (4館共通) 1) 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。								
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 今津節生					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 当館所蔵国宝栄花物語及び重要文化財布袋図等の紙本作品9件について繊維同定を行った。 2) 当館所蔵物語図屏風(A75)について、現状二曲屏風であるが、表現や本紙の状況から度重なる改装が行われていることが予想されたため、絵の具の顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。その結果、予想された改装順序に矛盾が無いことが判明した。 ・当館所蔵朱漆螺鈿二層(ME1)については近代の作品であったため、使用されている赤色着色材料が有機化合物である可能性も考慮しX線回折分析を行った。その結果、着色材料は無機化合物である朱(HgS)であることが明らかになった。 ・前年度調査を行った当館所蔵仏涅槃図命尊筆(A74)の裏彩色に用いられた彩色材料の調査結果について、修理完成記念特別公開も兼ねた当館トピック展示「大涅槃展」でパネルを用いて展示するとともに、展示図録にも掲載し、一般の方々へ修理に伴う科学調査の必要性を伝えることができた。								
【補足事項】 ・各種最新の分析機器を備えた博物館内に修復施設が設置されている特色を生かし、絵画、書跡、歴史資料、漆工、彫刻などの各専門分野を持つ研究者と修理技術者、文化財科学専門の研究員の3者が共同で修理作品の調査、検討を行い、最善の修理を行うことができた。 ・例えば、文化財科学専門の研究者は、【実績・成果】に記したように多くの調査を実施した。このことにより、作品の材質や技法、構造を詳しく知ることが可能となり、安全かつ適切な修理の実施に役立つことが非常に大きかった。さらに、今回のように、修理時にしかできない科学調査の結果を、展示や図録を通して一般の方々にも周知できたことは、非常に大きな成果である。 ・また、それぞれの専門を持つ研究者と協議しながら修理を進めることができたので、各作品の特色を踏まえ、取り扱いや保管、展示についても十分に考慮した修理ができた。 ・このように、館内で打ち合わせを密にしながら修理を進められる環境にあることが、有意義であった。 ・当館所蔵国宝栄花物語等の紙本作品9件及び物語図屏風、朱漆花鳥草樹螺鈿二層、仏涅槃図命尊筆について、計12件の科学的調査を実施した。								
 <p>橙色の粒子が認められる。鉛(Pb)のピークが特徴的である。鉛を含む橙色顔料としては鉛丹(ミノウム, Pb_3O_4)がよく知られている。</p>								
トピック展示「大涅槃展」展示図録に掲載された当館所蔵仏涅槃図命尊筆の裏彩色の科学調査結果(一例)								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
科学的調査	12件	—	—		7	24	11	10
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 紙本文化財の繊維同定を行うことによって適切な補修紙の作成を行うことができた。また、文化財の修理履歴について、目視だけに頼っていたものをより客観的に判断することができた。以上から年度計画を順調に達成していると判断できる。							
【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 科学調査の件数も毎年10件前後と安定しており、中期計画を順調に達成していると判断できる。							

【書式A】

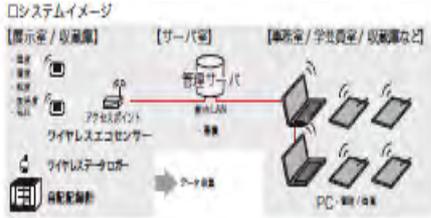
施設名

京都・奈良・九州国立博物館

処理番号

1320

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)-2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。								
【年度計画】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) 1)文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。 (京都国立博物館) 1)文化財保存修理所の改修工事を行う。									
担当部課	京都国立博物館総務課 奈良国立博物館総務課 九州国立博物館学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 植田義雄 課長 中村 恵 課長 今津節生						
【実績・成果】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) 1)・京都国立博物館の文化財保存修理所の空調機を点検し、空調機内の中性能フィルターを一部の空調機で交換した。 ・奈良国立博物館の文化財保存修理所の空調機を点検し、空調機内のプレフィルター及び活性炭フィルターを一部の空調機で交換した。 ・九州国立博物館の保存修復施設について、室内温湿度環境の改善の検討を行った。 ・九州国立博物館の保存修復施設において、修理件数の増加に伴い、修復収蔵庫内の既存木製棚に棚板を増段した。 ・九州国立博物館の保存修復施設では、近年、古文書や歴史資料等の大量一括紙文化財の修理事業が年々増加してきており、将来的に修復施設が手狭になることが予想されるため、外部専門家を交えて空調や修復作業の安全性等を考慮した中二階増設のための検討を行った。 (京都国立博物館) 1) 文化財保存修理所改修工事（一期工事）を完了した。また、電気設備及び機械設備の改修工事に着手した。									
【補足事項】									
									
クラック補修後、外装タイル張替 (京博)			アスファルト防水改修後の屋上 (京博)			躯体の内断熱後の修理室内部 (京博)			
(九州国立博物館) ・保存修復施設内の温室度環境をより安定的に維持し、安全に修復作業を行えるようにするため、保存修復施設外周部のダブルスキン化について検討を行った。									
			増段した修復収蔵庫内の木製棚(九博)						
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 3館とも文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行い、必要に応じて改善を実施しており、年度計画を達成している。京都国立博物館文化財保存修理所の改修工事も順調に進行している。								
【中期計画記載事項】国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。									
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 京都国立博物館文化財保存修理所の大規模修理を行うなど、中期計画を順調に達成している。								

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3)－3 収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査研究並びに修理に伴う調査研究のための基本設備の充実に向けた検討を行う。								
【年度計画】	収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査研究並びに修理に伴う調査研究のための基本設備の充実に向けた検討を行う。								
担当部課	東京国立博物館学芸研究部列品管理課 京都国立博物館学芸部列品管理室 奈良国立博物館総務課 九州国立博物館学芸部文化財課	事業責任者	課長 富田 淳 室長 浅見龍介 課長 中村 恵 課長 富坂 賢						
【実績・成果】	<p>(東京国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> 東洋館2階の収蔵庫に棚を設置し、収納の効率化を図った。 資料館3階の収蔵庫を整理し、より効率的な収納が可能となるよう収蔵品を移動した。 <p>(京都国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> X線CTを導入し、調査研究に活用することを始めた。今後、電子顕微鏡、蛍光X線分析装置等の科学機器を設置することで、調査研究の充実を図ることができる。 平成知新館にて「環境モニタリングシステム」の運用を開始し、温湿度環境の維持に役立てることができた。 北収蔵庫1階に新たな収納棚を設置し、収蔵スペースを確保した。 京都府精華町の旧私のしごと館の収蔵庫整備を設計し、着手した。 平成知新館のフィルム保管室に、独立した空調機を1機増設した。 <p>(奈良国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> 複数室一体で温湿度管理を実施していた箇所について、詳細な温湿度管理に向けて各部屋毎に計測器を設置した。 X線装置の設置に伴い、機器の有効利用に向けた施設改修の検討を行った。 <p>(九州国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで空席であった撮影技師の採用に向け、写場及び撮影機材の整備・拡充に努めた。 写場の専属撮影技師の作業スペースとして、写場隣にある器材庫の改修を行った。(27年3月) 								
【補足事項】	<p>(京都国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「環境モニタリングシステム」では、多数のワイヤレスセンサーとアクセスポイントを経由して、平成知新館の展示室・収蔵庫の温度・湿度等が即時にモニタリングでき、同時にデータがサーバーに蓄積されるよう設計されている。現在は、計測・蓄積だけでなく、データの閲覧・統計・分析がより効率的に行えるよう、システムの更新を検討している。 北収蔵庫は、昨年度までに耐震補強・断熱強化の改装工事を終え使用を再開した。さらに今年度は1階部分に収蔵棚を新設し収納の効率化を図った。設置工事にあたっては、空気環境対策・虫菌害対策に万全を期した。 平成知新館に設けられた2室のフィルム保管室のうち、1室の空調機は、事務エリアと同じ熱源となっていたが、写真資料に適した温湿度環境を安定的に維持できるよう、独立した空調機を1機増設した。 <p>(九州国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> 写場及び撮影機材の整備・拡充を図り、調査研究のための基本設備充実の改修を行った。 								
				 <p>「環境モニタリングシステム」システムイメージ(京都国立博物館)</p>					
	 <p>器材庫の現状写真(九州国立博物館)</p>								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 順調に成果をあげている。例えば、京都国立博物館では科学機器を備えることができ、九州国立博物館では写場及び撮影機材の整備・拡充を図るなど、調査研究のための設備の充実を行うことができた。								
【中期計画記載事項】 収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査・研究並びに修理に伴う調査・研究のための基本設備の充実を図る。									
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 京都国立博物館では収蔵庫のスペースを新たに確保するなど、中期計画に基づき順調に成果をあげている。								

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 2111-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 展覧事業の充実 ①-1平常展								
【年度計画】									
展覧事業の中核と位置づけ、各国立博物館の特色を十分発揮した特集陳列等を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。 (4館共通) 平常展来館者数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期計画期間の年度平均の確保を目指す。 (東京国立博物館)									
ア 定期的な陳列替の実施(年5,800件)									
イ 陳列総件数 約7,500件									
ウ 本館「日本美術の流れ」を始めとする日本美術関係の展示、平成館の日本考古展示の更なる充実を図る。平成27年1月より黒田記念館の一般公開を再開する。黒田記念館内の展示室のうち黒田記念室については、本館等と同様、原則週6日の公開とする。									
エ 特集									
特別展「日本国宝展」の開催に合わせた「国宝再現―田中親美と模写の世界―」(10月15日～12月7日)を開催する。東洋館の展示を中核に据えた「博物館でアジアの旅」期間を秋に設け、「中国書画精華」(9月30日～12月7日)、「唐物ってなに? 唐物受容のその後」(9月30日～11月24日)などを開催する。すでに恒例となった「博物館に初もうで」関連企画、上野動物園・国立科学博物館との動物を取り上げた連携企画、台東区立書道博物館との連携企画「趙之謙の書画と北魏の書」(7月29日～9月28日)などを実施する。									
・「日本人が愛した官窯青磁」(5月27日～10月13日)									
・「伊能忠敬の日本図」(6月24日～8月17日)									
・「甦った飛鳥・奈良染織の美―初公開の法隆寺裂―」(8月19日～9月15日)等									
オ 文化庁関係企画									
・「平成26年 新指定 国宝・重要文化財」(仮称)(4月22日～5月11日)									
平成26年に新たに国宝・重要文化財に指定される文化財を展示する。									
担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	列品管理課長 富田 淳						
【実績・成果】(4館共通)									
総合文化展(平常展)は、平成館1階考古展示室が27年10月のリニューアルオープンに向け、26年12月～27年3月まで工事のため閉室したが、黒田記念館のリニューアルオープンや「博物館に初もうで」などの事業の充実によって、平常展来館者数の目標値である前中期計画期間の年度平均を上回った。 (東京国立博物館)									
ア 定期的な陳列替を実施し、5,506件の展示替を行った。									
イ 陳列総件数 8,161件									
ウ 展示ケースの修理点検、清掃などで保存環境及び観覧環境の向上を図った。東洋館・法隆寺宝物館の展示ケースの補修を行った。また、26年12月より平成館1階考古展示室を閉室し、展示環境の改善のための工事を開始した(27年10月再開予定)。耐震改修のため24年4月8日より休館していた黒田記念館は、27年1月2日より展示を再開した。以前は週2日の限定公開であったが、再開後は東京国立博物館の休館日・開館時間に準じた。									
エ 22件の特集を実施した。									
オ 「平成26年 新指定国宝・重要文化財」を実施した(26年4月22日～5月11日)。また、新指定の重要文化財となった彫刻の一部を、同時期の本館11室においても展示した。									
【補足事項】※陳列替については、23年度より定量的評価の項目を陳列替回数から陳列替件数に変更した。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
平常展来館者数(23年度より黒田記念館を含む)		587,528人	362,470人	A	経 年 変 化	373,068	324,597	416,430	484,429
陳列替件数		5,506件	5,800件	C		290	4,914	6,989	5,708
陳列総件数		8,161件	7,500件	B		5,610	7,394	9,190	8,824
特集陳列等実施回数		22件	—	—		53	32	47	33
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 本館特別1室を緊急に改修する必要があったため陳列替件数が目標に達しなかったが、黒田記念館のリニューアルオープンや「博物館に初もうで」などの事業の充実によって目標を上回る来館者があった。							
【中期計画記載事項】平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 平常展示とともに、テーマ性を持った特集展示、「博物館でアジアの秋」などのイベント等を充実させることによって国内外の多くの来館者があり、中期計画に向け順調にすすんでいる。							

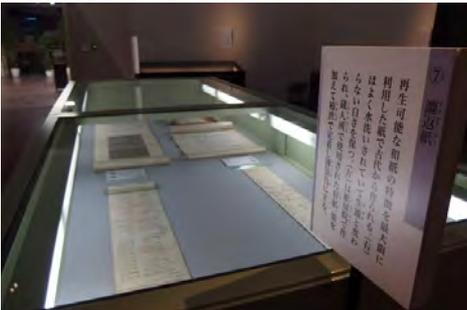
中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																																																				
事業名	(1) 展覧事業の充実 ①-1 平常展																																																				
<p>【年度計画】 (4館共通) 平常展来館者数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期計画期間の年度平均の確保を目指す。 (京都国立博物館)</p> <p>ア 平成26年9月13日に平成知新館を開館し、平成知新館開館記念展「京(みやこ)へのいざない」を開催する(9月13日～11月16日)。 イ 定期的な陳列替を行い、テーマ性を持った展示を行う。(陳列替件数 年700件) ウ 陳列総件数 約1,000件 エ 特別展示室において、部門を超えた特別展示を行う。 オ 特集陳列 ・「ひなまつりと人形」(平成27年2月21日～4月7日)</p>																																																					
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 宮川禎一																																																		
<p>【実績・成果】(京都国立博物館) ア26年9月13日に平成知新館を開館し、平成知新館開館記念展「京(みやこ)へのいざない」を開催した(26年9月13日～11月16日)。 イ定期的な陳列替を行い、各展示室ごとにテーマ性を持った展示を行った。(陳列替件数 693件) ウ陳列総件数 980件 エ特別展示「桃山 秀吉とその周辺」(26年10月13日～11月16日)、特別展観「島根鱒淵寺の名宝」(27年1月2日～2月15日)等、特別展示室において、分野を超えた特別展示を行った。 オ特集陳列「雛まつりと人形」(27年2月21日～4月7日)、特別展観「天野山金剛寺の名宝」(27年3月4日～3月29日)を開催した。</p>																																																					
<p>【補足事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成知新館の開館を機に、一般の方々により親しみがもてるよう、平常展を「名品ギャラリー」と改称した。 金剛寺丈六本尊をはじめ、類を見ないほど高水準かつ多彩な展示内容を実現したことにより、従来の実績を元とした目標値の4倍以上にのぼる来館者数を達成した。 当初目標としていた陳列替件数・陳列総件数は、旧来の展示館の実績を新館(平成知新館)の平面図に単純に当てはめて算出したものであった。しかし、実際に新館での展示を始めたところ、陳列ケースや陳列台等の形状や仕様の違いにより、想定していた数量の文化財を陳列するには無理のあることが判明し、現状に最もふさわしい数量の文化財を陳列するに留めたことにより、目標値を若干下回ることとなった。 <p>※平常展来館者数の、26年度目標値算出について (H26目標来館者数) = 171,110人(前中期平均来館者数) × 174日(平成知新館開館後の年度内開館実績) / 307日(工事がなかった場合の開館日数) = 96,980.912... ≈ 96,981人</p>									平成知新館開館記念展「京(みやこ)へのいざない」会場																																												
<p>【定量的評価】</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>26年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評価</th> <th rowspan="5" style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">経 年 変 化</th> <th>22</th> <th>23</th> <th>24</th> <th>25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平常展来館者数</td> <td style="text-align: right;">265,791人</td> <td style="text-align: right;">※96,981人</td> <td style="text-align: center;">S</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>陳列替件数</td> <td style="text-align: right;">693件</td> <td style="text-align: right;">700件</td> <td style="text-align: center;">C</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>陳列総件数</td> <td style="text-align: right;">980件</td> <td style="text-align: right;">約1,000件</td> <td style="text-align: center;">C</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>特集陳列等実施回数</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </tbody> </table>									項目	26年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	22	23	24	25	平常展来館者数	265,791人	※96,981人	S	—	—	—	—	—	陳列替件数	693件	700件	C	—	—	—	—	—	陳列総件数	980件	約1,000件	C	—	—	—	—	—	特集陳列等実施回数	—	—	—	—	—	—	—	—
項目	26年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	22	23	24	25																																													
平常展来館者数	265,791人	※96,981人	S		—	—	—	—	—																																												
陳列替件数	693件	700件	C		—	—	—	—	—																																												
陳列総件数	980件	約1,000件	C		—	—	—	—	—																																												
特集陳列等実施回数	—	—	—		—	—	—	—	—																																												
<p>【年度計画に対する総合評価】 評価：A</p>		<p>【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：陳列替件数・陳列総件数は目標値をわずかに下回ったものの、粒よりの名品を効果的に展示したことにより、予期以上の好評を博し、目標値の4倍以上に達する来館者を迎えることができた。 対応と課題：26年秋の混雑した平成知新館も新年度では沈静化が見込まれるので来館者確保のために各種特集陳列の企画・広報及びイベントの実施などを強化して来館者減を極力抑えるように努める。</p>																																																			
<p>【中期計画記載事項】 平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。なお、京都国立博物館においては、耐震化を図るための平常展示館建て替え終了後、国際文化観光都市・京都において京都文化発信の核となる博物館を目指した平常展を平成26年度までに開催する。</p>																																																					
<p>【中期計画に対する評価】 評価：A</p>		<p>【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：平成知新館の開館に伴い京都文化の様相をよく示す「京へのいざない」展を開催することによって日本人およびアジア・欧米からの来館者に向けて日本の伝統美術工芸作品を紹介することができた。音声ガイドも日・英・中・韓の4言語を用意して来館者対応を強化した。 課題と対応：京都文化の本質を紹介できる平常展示・特集陳列を積極的に推進することが欠かせない。</p>																																																			

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 2113-1-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信			
事業名	(1) 展覧事業の充実 ①ー 平常展 (1/2) 1			
【年度計画】 (4館共通) 平常展来館者数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期計画期間の年度平均の確保を目指す。 (奈良国立博物館) ア 活発な収集と新しい資料の発掘により名品展（平常展）の充実を図る。 ・西新館 絵画・書跡・工芸・考古部門の名品展 絵画・書跡・工芸・考古の各ジャンルにわたる日本仏教美術の粋ともいべき作品群を展示する。 ・なら仏像館 彫刻部門の名品展 大きな仏像を中心に、できるだけケース外での展示を増やし、より見やすい環境で、優れた仏教彫刻を展示する。 (ただし年度の下半期は展示ケース等改修工事のため休館予定) ・青銅器館 中国青銅器の名品展 国内における屈指の青銅器コレクションを展示する ・特集展示コーナー等を設け、観覧者の関心を喚起する イ～エ(略)				
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長	野尻 忠
【実績・成果】 (4館共通) 平常展来館者数は、今年度の目標値である94,338人を若干下回った。なお目標値は、工事による閉館を勘案して補正した。 (奈良国立博物館) ア 名品展においては、多数の優れた文化財をバランス良く展示することができた。 ・西新館 彫刻・絵画・書跡・工芸・考古部門の名品展 26年12月9日～27年3月31日の日程で開催した。なら仏像館の休館に伴い、彫刻の一部を西新館名品展で陳列した。 ・なら仏像館 彫刻部門の名品展 26年4月1日～9月7日の日程で開催した。館内では通常展示のほか、以下の特別公開を実施した。 特別公開「金剛寺 降三世明王坐像」(23年10月24日～26年9月7日) 特別公開「定朝様の丈六阿弥陀像」(24年6月26日～26年9月7日) ・青銅器館 中国青銅器の名品展 館が所蔵する中国・商(殷)～漢時代までの青銅器の逸品を展示した。ただし、26年10月23日～11月12日は臨時休館した。また、26年9月9日以降は、上記休館期間を除き、観覧無料とした。 ・西新館で特集展示「新たに修理された文化財」(26年12月23日～27年1月18日)、及び特集展示「和紙—文化財を支える日本の紙—」(27年1月27日～3月15日)を開催した。				
【補足事項】 当館のメインの展示館である「なら仏像館」は、建物内外の改修工事のため、9月8日から休館した。それに伴い、26年度平常展来館者数の目標値は、前中期計画期間の平均値を基に、下記にて補正して算出した。その上で来館者数の目標値に実績が達しなかった要因としては、なら仏像館の改修工事による閉館が、想定以上に来館に影響を及ぼしたものと推察される。 ※平常展来館者数の目標値の補正算定式 (1) 補正前の目標値118,032人を展示面積で按分 なら仏像館： $118,032人 \times 1,261m^2 \div 1,731m^2 \approx 85,984人$ 青銅器館： $118,032人 \times 470m^2 \div 1,731m^2 \approx 32,048人$ (2) 工事による閉館日数を考慮 なら仏像館： $85,984人 \times 240日(開館実績) \div 321日(工事がなかった場合の開館日数) \approx 64,287人(a)$ 青銅器館： $32,048人 \times 301日(開館実績) \div 321日(工事がなかった場合の開館日数) \approx 30,051人(b)$ (3) 補正目標値 = (a) + (b) = 94,338人				
				
名品展「珠玉の仏像美術」(26年12月9日～27年3月31日) 会場風景				
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化
平常展来館者数	92,147人	94,338人※	C	22 71,566 23 130,839 24 145,914 25 122,075
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 近年新たに見出され当館寄託となった内山永久寺の扁額を展示するなど、新資料の公開に成果を上げた。			
【中期計画記載事項】 平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。				
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 当館の特色である仏教美術のテーマに沿って、時に特別公開や特集展示を設けながら、充実した平常展を実施できている。			

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ①-1 平常展 (2/2)							
【年度計画】 (奈良国立博物館) ア(略) イ 定期的な陳列替の実施(年80件) ウ 陳列総件数 約475件 エ 特別陳列により名品展の充実を図る。 独創的な研究テーマ及び地域に密着した研究テーマによる特別陳列の充実 ・「おん祭と春日信仰の美術」(12月9日～平成27年1月18日) ・「お水取り」(平成27年2月7日～3月15日)								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長	野尻 忠				
【実績・成果】 (奈良国立博物館) イ 定期的な陳列替を実施し、208件を替えた。 ウ 陳列総件数 791件(特別陳列を含む) エ 下記特別陳列を開催し、平常展の充実を図った。 ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」(26年12月9日～27年1月18日) 陳列件数54件(陳列替13件) ・特別陳列「お水取り」(27年2月7日～3月15日) 陳列件数62件(陳列替2件)								
【補足事項】 特別陳列等を除き、名品展(平常展)における陳列総件数は次のとおり。 珠玉の仏たち(なら仏像館)137件 珠玉の仏教美術(西新館) 281件 特集展示「新たに修理された文化財」(西新館) 7件 特集展示「和紙—文化財を支える日本の紙—」(西新館) 13件 中国古代青銅器(青銅器館)237件 計675件 西新館での名品展の開催期間が予定よりも長くなったため、陳列替件数・陳列総数ともに計画より増加した。 ※陳列替については、23年度より定量的評価の項目を陳列替回数から陳列替件数に変更した。								
								
特集展示「和紙」(展示室風景)								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
陳列替件数	208件	80件	A		101	481	465	130
陳列総件数	675件	約475件	A		340	1,092	814	632
特集陳列等実施回数	6回	—	—		5	12	6	10
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 奈良の地域に根ざした内容の特別陳列や世界的に価値の認められた和紙に関する特集展など、当館ならではの企画を織り込み、充実した平常展を展開することができた。							
【中期計画記載事項】 平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 和紙に関する特集展示を組むなど、日本の伝統文化理解の促進に寄与する展示ができた。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2114-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 展覧事業の充実 ①-1 平常展								
【年度計画】 (4館共通) 平常展来館者数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期計画期間の年度平均の確保を目指す。 (九州国立博物館) ア 定期的な陳列替の実施 (年800件) イ 陳列総件数 約1,000件 ウ 文化交流展(平常展)のリニューアルに向けて引き続き検討する。 エ トピック展示により、独創的なテーマ及び地域に密着したテーマを掘り下げる。 ・「館蔵 近世絵画名品展」(平成26年2月25日～4月6日; 4月8日～5月18日) ・「中国を旅した禅僧の足跡」(5月27日～7月6日) ・「全国高等学校 考古名品展」(7月15日～9月23日) ・「大涅槃展」(平成27年1月14日～2月15日)									
担当部課	学芸部企画課	事業責任者	文化交流展示室長 河野一隆						
(4館共通) 平常展来館者数は、前中期計画期間の年度平均に届かなかった。 (九州国立博物館) ア 定期的かつ計画的に陳列替を実施し、1,027件の陳列替を行った。 イ 陳列総件数 1,904件 ウ 開館10周年のリニューアルに向けて、基本展示室のケース配置やグラフィックを抜本的に見直すべく、秋からテーマ会議を招集し、計画を進めた。 エ 独創的な着想に基づいたトピック展示・特別公開を11回開催し、新鮮な展示を提供することができた。									
【補足事項】 (4館共通) イ 特別展「台北 国立故宮博物院一神品至宝一」では多くの来館者を見込み、開館日を増やしたことに伴い、文化交流展示室の展示替を当初予定以上に行ったことにより展示品陳列替件数と陳列総件数が増加した。 エ 26年度に開催したトピック展示・特別公開のうち、特に注目すべき内容を持つものについて以下に記す。 ・トピック展示「館蔵 近世絵画名品展」(26年2月25日～5月18日) 17世紀から19世紀の絵画を中心に、当館がこれまで収集した作品を広く紹介した。 ・トピック展示「中国を旅した禅僧の足跡」(26年5月27日～7月6日) 14世紀の日本僧、無夢一清の中国での旅と生涯をたどり、個性豊かな禅書の魅力と、日中禅僧による文化交流を紹介した。 ・トピック展示「全国高等学校 考古名品展」(26年7月15日～9月23日) 全国の高等学校に所蔵されている考古資料から選りすぐった優品を通して、日本の考古文化に光をあて、あわせて高等学校の考古学に関する研究活動を紹介した。 ・特別公開「海を越えた再会―クリーブランド美術館の仲間たち―」(26年7月15日～9月23日) 特別展「クリーブランド美術館―名画でたどる日本の美―」を記念し、クリーブランド美術館所蔵の優品にゆかりの深い、日本国内に所蔵されている作品を公開した。 ・トピック展示「大涅槃展」(27年1月14日～2月15日) 当館所蔵の「涅槃図」修理完成を記念して、涅槃図の意義やその変遷について紹介した。									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
平常展来館者数		357,362人	380,690人	C		274,545	358,366	460,525	349,848
陳列替件数		1,027件	800件	A	334	1,373	1,195	1,157	
陳列総件数		1,904件	約1,000件	S	1,668	2,417	2,416	2,750	
特集陳列等実施回数		11回	—	—	12	13	12	14	
【年度計画に対する総合評価】 評定：C	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：文化交流展示室の展覧会事業のうち、トピック展示・特別公開は特別展的な性質を持っており、当初想定していた来館者の動員を行うことができず、目標値に達することができなかった。 課題と対応：今後、平常展に関する広報を充実させ、かつ効率的に展開すべく広報戦略の見直しも含め、効果的に機能させることで対応していく。来館者増加につながるような広報のあり方について検討する必要がある。								
【中期計画記載事項】 平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。									
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：全体として順調に推移している。 課題と対応：今後、広報戦略も含め実績の分析・対策を積極的に打っていくことで、来館者増加を図っていく。								



中国を旅した禅僧の足跡展会場風景



全国高等学校考古名品展会場風景

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ①-2 展示説明の充実							
【年度計画】 (4館共通) 1) 作品キャプションについては全てに英語訳を付す。 2) 展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を80%以上設置する。								
担当部課	東京国立博物館学芸研究部列品管理課 京都国立博物館総務課 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部企画課	事業責任者	課長 富田 淳 総務課長 植田義雄 美術室長兼列品室長 岩田茂樹 文化交流展室長 河野一隆					
【実績・成果】 1) 東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館及び九州国立博物館の展示説明において作品キャプション全てに英語訳を付した。 2) 展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を各館とも80%以上設置した。 (東京国立博物館) 展示テーマ数131件のうち、131件(100%)について外国語パネルを設置した。また、74件(56%)については中国語、韓国語での解説も付している。 (京都国立博物館) 展示テーマ数63件のうち、63件(100%)について外国語パネルを設置した。 (奈良国立博物館) 展示テーマ数65件のうち、65件(100%)について外国語パネルを設置した。 (九州国立博物館) 展示テーマ数54件のうち、50件(92%)について外国語パネルを設置した。また、33件(61%)については中国語、韓国語での解説も付している。								
【補足事項】 (東京国立博物館) ・黒田記念館のリニューアルでは、それまでは無かった英語による解説パネルを設置した。 (京都国立博物館) ・京都国立博物館は平成知新館(新平常展示館)開館に伴い、展示テーマの紹介パネル全てに英語訳を付した。また4言語による音声ガイドを導入した。 (九州国立博物館) ・九州国立博物館では、3言語による音声ガイド、展示テーマパネルを4言語で提供しているほか、トピック展示の趣旨や時代背景についても、必ず英語を併記している。 ・特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘」では、韓国からの来館者を想定して、すべての作品名にハングルを併記するなど、多言語対応を行った。								
								
(京都国立博物館) 特別展観「山陰の古刹 島根鰐淵寺の名宝」 解説パネル(日英)		(九州国立博物館) 全国高等学校考古名品展 挨拶パネル(日英)			(九州国立博物館) 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘」章解説 グラフィック(日英韓)			
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	22	23	24	25
外国語パネル等の設置								
東京国立博物館	100%	80%以上	A		96%	97%	100%	100%
京都国立博物館	100%	80%以上	A		—	—	—	—
奈良国立博物館	100%	80%以上	A		84%	89%	100%	91%
九州国立博物館	92%	80%以上	B	83%	94%	87%	85%	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 4館とも作品キャプション英訳100%、テーマ解説英訳80%以上であり、年度計画を達成している。加えて、中国語・韓国語による解説も整備が進んでいる、今年度リニューアルオープンした東京国立博物館黒田記念館(27年1月2日)、京都国立博物館平成知新館(26年9月13日)においても、海外からの来館者への対応ができており、順調である。							
【中期計画記載事項】 展示に関する説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに英語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を80%以上設置する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 外国語パネルを設置することにより、外国語解説の充実とサービスの向上に努め、中期計画達成に向け順調である。							

【書式A】

施設名 東京・京都・奈良・九州国立博物館

処理番号 2120

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展							
【年度計画】 特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館) 年3～4回程度 (京都国立博物館) 年2～3回程度 (奈良国立博物館) 年2～3回程度 (九州国立博物館) 年2～3回程度								
担当部課	東京国立博物館学芸企画部企画課 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部企画課	事業責任者	学芸企画部長 学芸部長 部長 課長	伊藤嘉章 松本伸之 内藤 栄 臺信祐爾				
【実績・成果】 (東京国立博物館) 特別展を8回開催した。 内訳：当館開催7回、海外展1回 (京都国立博物館) 特別展を2回開催した。 (奈良国立博物館) 特別展を3回開催した。 (九州国立博物館) 特別展を5回開催した。								
【補足事項】 (東京国立博物館) ・当初の年度計画になかった特別展「3.11大津波と文化財の再生」を、急遽開催することとなった。 (京都国立博物館) ・特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」と平成知新館(新館)開館記念展「京へのいざない」の開催時期が重なり、相乗効果によって共に多数の観覧者を迎えることができた。その一方、待ち時間が長時間に及んだり、会場内が多数の観覧者が身動きがとりづらくなる場合があったことなど、混雑対策に課題が残った。 (九州国立博物館) ・特別展覧会「古代日本と百済の交流 一大宰府・飛鳥そして公州・扶餘一」及び「日本発掘—発掘された日本列島2014—展」を同時開催した。								
								
(京都国立博物館) 国宝鳥獣戯画と高山寺展会場								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	22	23	24	25
特別展等の開催回数								
東京国立博物館	8回	年3～4回程度	A		10	7	9	8
京都国立博物館	2回	年2～3回程度	B		5	6	5	3
奈良国立博物館	3回	年2～3回程度	B		4	3	3	3
九州国立博物館	5回	年2～3回程度	A	5	5	4	5	
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B		判定根拠：4館とも目標値を達成し、年度計画通り特別展を順調に開催できている。混雑対策については引き続き検討していく。						
【中期計画記載事項】 特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館)年3～4回程度 (京都国立博物館)年2～3回程度 (奈良国立博物館)年2～3回程度 (九州国立博物館)年2～3回程度								
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B		判定根拠：東京国立博物館においては年度計画外の特別展も開催するなど、4館とも中期計画達成に向けて順調である。 課題と対応：京都国立博物館では特別展会場である明治古都館の耐震強度が必ずしも充分ではないため、開催の在り方を検討する予定である。						

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (1/7)							
【年度計画】								
ア 開山・栄西禅師800年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」(平成26年3月25日～5月18日) 建仁寺開山・栄西の事跡と建仁寺の法脈をたどり、建仁寺に関わる文化にも注目する。(目標来館者数20万人)								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課 絵画・彫刻室長 田沢裕賀					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 開山・栄西禅師 800年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」 ・会 期 26年3月25日(火)～5月18日(日)(49日間) ・会 場 平成館 特別展示室第1～4室 ・主 催 東京国立博物館、建仁寺、読売新聞社、NHK、NHKプロモーション ・協 賛 ジェイティービー、日本写真印刷 ・協 力 あいおいニッセイ同和損保 ・作品件数 183件(うち、国宝4件、重要文化財37件、重要美術品3件) ・来館者数 252,116人(目標200,000人・達成率126.1%) ・入場料金 一般1,600円(1,400円/1,300円)、大学生1,200円(1,000円/900円)、高校生900円(700円/600円)、中学生以下無料 * ()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度72% <p>建仁寺山内の塔頭に伝わる工芸や絵画の名品、栄西をはじめとした建仁寺歴代名僧の書跡、全国の建仁寺派寺院などが所蔵する宝物を展示することで、近年研究の進展している栄西の著述のほか、建仁寺に関わりのある禅僧の活動を通して、栄西の伝えようとしたもの、そして建仁寺が日本文化の発展に果たした役割を広く検証することができた。</p>								
【補足事項】								
 <p>展覧会風景</p>  <p>ポスター</p>								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	252,116人	200,000人	A		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 目標を大きく上回る来館者数を達成し、全国の建仁寺派寺院に関わる多様な分野の調査研究の成果をわかりやすく展示することができたため。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館) 年3～4回程度								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 所期の目標を上回る来館者数を達成し、かつ質の高い展示ができたため。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 2121-2

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (2/7)							
【年度計画】								
イ 特別展「キトラ古墳壁画」(4月22日～5月18日) キトラ古墳壁画の修理や、今後の保存活用の展開をより広く国民に紹介する。(目標来館者数8.7万人)								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課 考古室長 白井克也					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「キトラ古墳壁画」 ・会 期 26年4月22日(火)～5月18日(日)(25日間) ・会 場 本館 特別5室 ・主 催 文化庁、東京国立博物館、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、国土交通省近畿地方整備局、奈良県教育委員会、明日香村 ・共 催 朝日新聞社 ・協 賛 岡村印刷工業 ・特別協力 情報通信研究機構、大塚オーミ陶業、日本通運 ・作品件数 18件(そのほか、参考出品13件) ・来館者数 119,268人(目標87,000人・達成率137.1%) ・入場料金 一般900円(800円)、大学生700円(600円)、高校生400円(300円) 中学生以下無料 *()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度63% <p>我が国で2例目の大陸風極彩色壁画古墳であるキトラ古墳の保存管理への取り組みも紹介しながら、複製陶板により剥ぎ取り以前の壁画全体を実感してもらい、四神のうち高松塚古墳壁画では確認できなかった躍動的に描かれた朱雀やほぼ完全な姿で残る玄武などを広く紹介することができた。</p>								
【補足事項】								
 <p>展覧会風景</p>  <p>ポスター</p>								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	119,268人	87,000人	A		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 目標を大きく上回る来館者数を達成し、かつ修理完了後には移動して展示することが不可能な文化財を観覧できる貴重な機会を提供できたため。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館)年3～4回程度								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 所期の目標を上回る来館者数を達成し、積年の研究成果を各研究機関と連携して十全に提示できたため。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (3/7)							
【年度計画】								
ウ 特別展「台北 國立故宮博物院 ー神品至宝ー」(6月24日～9月15日) 台北故宮博物院の収蔵品の中から、北宋山水画、王羲之に始まる名筆、青磁・汝窯、玉器・青銅器などの名品を初めて日本で展示する。(目標来館者数45万人)								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部列品管理課長 富田淳					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「台北 國立故宮博物院 ー神品至宝ー」 ・会 期 26年6月24日(火)～9月15日(月・祝)(78日間) ・会 場 平成館、本館特別5室 ・特別後援 日華議員懇談会 ・主 催 東京国立博物館、國立故宮博物院、NHK、NHKプロモーション、読売新聞社、産経新聞社、フジテレビジョン、朝日新聞社、毎日新聞社、東京新聞 ・特別協力 TBS、テレビ朝日、日本テレビ放送網、共同通信社 ・協 力 チャイナ エアライン (中華航空) ・作品件数 186 件 ・来館者数 402,241人 (目標450,000人・達成率89.4%) ・入場料金 一般1,600円(1,400円/1,300円)、大学生1,200円(1,000円/900円)、高校生700円(600円/500円)、中学生以下無料 * ()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度63% <p>「翠玉白菜」をはじめとする台北 國立故宮博物院が収蔵するひととき優れた中国の文化財によって、中国文化の特質や素晴らしさを広く提示することができた。</p>								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・本展は、政府による美術品補償制度の適用を受けた。 ・國立故宮博物院との十分な事前確認ができなかったため、十分な広報活動ができず、展覧会周知が不足したことで、目標来館者数に届かなかった。 ・長年にわたる台北 國立故宮博物院との人的・学術交流のもと、門外不出の名を品含む諸文物を借用し、アジアで初めて実現した。さらに刊行物・講演等についても当初の予定を大幅に上回る質と内容を誇れるものとなった。また事前の調査研究による皇帝コレクションに対する深い理解のもとに、多くの鑑賞者に分かりやすく、その魅力を提示することができた。 								
								
								
						<p>展覧会風景</p>		
								
						<p>ポスター</p>		
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	402,241人	450,000人	C	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 所期の目標の来館者数に達しなかったが、我が国で初めて台北 國立故宮博物院のコレクションを展示したことで国民に極めて貴重な鑑賞機会を提供できたため。						
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館)年3～4回程度								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 国民の知的好奇心を刺激する極めて貴重な展示機会となったため。						

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 2121-4

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (4/7)							
【年度計画】								
エ 2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」(9月17日～11月24日予定) 日中韓国立博物館の合同企画として、東京国立博物館、中国国家博物館、韓国国立中央博物館それぞれの蔵品の中から、東アジアの陶磁器の名品を選び一堂に展示する。(目標来館者数3.4万人)								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	企画課特別展室 横山梓					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」 ・会 期 26年9月20日(土)～11月24日(月・休)(57日間) ・会 場 本館 特別5室 ・主 催 東京国立博物館、中国国家博物館、韓国国立中央博物館 ・作品件数 45件(うち、国宝1件、重要文化財10件) ・来館者数 65,075人(目標34,000人・達成率191.4%) ・入場料金 一般620円(520円)、大学生410円(310円)総合文化展観覧料、*()内は20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度60% <p>日本、中国、韓国の3カ国の国立博物館が合同で実施する初めての国際共同企画展という極めて意義深い展覧会となった。各館の陶磁器コレクションの特徴をふまえて厳選された名品を一堂に展示することによって、各国の陶磁器の特質をわかりやすく展示できた。</p>								
【補足事項】								
 展覧会風景								
 ポスター								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	65,075人	34,000人	A	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 3カ国の国立博物館が合同で実施する初めての国際共同企画展であり、3カ国の陶磁器の特質を各国ブロックにより明確に区分した展示構成によって、わかりやすく示すことができた。さらに所期の目標を大きく上回る来館者数を集めた。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館)年3～4回程度								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 3カ国の国立博物館が合同で実施する初めての国際共同企画展という極めて意義深い展覧会を開催することができたため。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (5/7)							
【年度計画】								
オ 「日本国宝展」(10月15日～12月7日) 大切に継承されてきた「信ずるもの」の評価の結晶こそが「国宝」であると考え、国宝によって日本文化形成の精神をたどる。(目標来館者数35万人)								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	広報室長 伊藤信二					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 「日本国宝展」 ・会 期 26年10月15日(水)～12月7日(日)(47日間) ・会 場 平成館 特別展示室第1～4室 ・主 催 東京国立博物館、読売新聞社、NHK、NHKプロモーション ・協 賛 損保ジャパン日本興亜、大伸社、日本通運、みずほ銀行 ・作品件数 130件(うち、国宝119件、正倉院宝物11件) ・来館者数 386,708人(目標350,000人・達成率110.5%) ・入場料金 一般1,600円(1,400円/1,300円)、大学生1,200円(1,000円/900円)、高校生900円(700円/600円) 中学生以下無料 * ()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度70% <p>類い稀な国の宝としての「国宝」を人々の篤い信仰心が結実した文化的遺産として捉え、日本文化形成の精神を見つめ直し、日本文化の粋の結集を提示することができた。</p>								
【補足事項】								
				 				
				<p style="text-align: center;">展覧会風景</p>  <p style="text-align: center;">ポスター</p>				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	386,708人	350,000人	B		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評価：B	所期の目標来館者数を達成することができ、かつ様々な分野の国宝によって、日本文化の信仰心がいかに表現されたかを広く提示することができたため。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。								
特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館)年3～4回程度								
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評価：B	所期の目標の来館者数を達成し、かつ「信じる」というテーマ設定により、質の高い展示ができたため。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 2121-6

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (6/7)							
【年度計画】								
カ 特別展「みちのくの仏像」(平成27年1月14日～4月5日) 東京において、東北の優れた仏像がまとめて展示される初めての展覧会とする。(目標来館者数14万人)								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部列品管理課平常展調整室長 丸山士郎					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「みちのくの仏像」 ・会 期 27年1月14日(水)～4月5日(日)(73日間) ・会 場 本館 特別5室 ・主 催 東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション、読売新聞社 ・後 援 文化庁、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県 ・協 賛 大伸社 ・協 力 あいおいニッセイ同和損害保険 ・作品件数 19件(うち、国宝1件、重要文化財8件) ・来館者数 179,521人(目標140,000人・達成率128.2%) ・入場料金 一般1,000円(900円)、大学生700円(600円)、高校生400円(300円)、中学生以下無料 *()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度79% <p>「東北の三大薬師」とも称される、黒石寺・双林寺・勝常寺に伝わる薬師如来像が一堂に会して展示されるなど、東京において東北の仏像に的を絞って展示する初めての機会となり、東北の優れた仏像の特色を魅力的に示すことができた。</p>								
【補足事項】								
								
					展覧会風景			
								
					ポスター			
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	179,521人	140,000人	A		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評価：A 判定：A	目標を上回る来館者数を達成し、かつ東京ではじめて東北地方の仏像をまとめて鑑賞できる貴重な機会を提供でき、東北の仏像の魅力を示せたため。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のおりとする。(東京国立博物館)年3～4回程度								
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評価：A 判定：A	東北の優れた仏像を東京で初めて、まとめて展示したことで、その特色を十全に示すこととなり、さらに今後の東北地方の仏像研究に資することとなったため。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (7/7)							
【年度計画】 (東京国立博物館) (年度計画外に実施) 特別展「3.11大津波と文化財の再生」(平成27年1月14日～3月15日) 東日本大震災における被災文化財の再生の取り組みの成果とその現状を紹介する。								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部保存修復課長 神庭信幸					
【実績・成果】 ・展覧会名 特別展「3.11大津波と文化財の再生」 ・会 期 27年1月14日(水)～3月15日(日)(53日間) ・会 場 本館 特別2室・特別4室 ・主 催 東京国立博物館、津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会 ・作品件数 73件(うち、登録有形民俗文化財4点) ・来館者数 この特別展は会場が平常展の一部で別途カウントを行っていない。 参考値：78,615人(開催期間中の平常展来館者数) ・アンケート結果 満足度59% 当館が、陸前高田市立博物館、岩手県立博物館やその他の機関と協力し、被災文化財の再生に取り組んできた約4年にわたる成果と現状を、修理に関わる具体例とともに示すことができた。								
【補足事項】 本展は本年に入り、被災文化財レスキュー活動の一定の成果が蓄積され、展示できることとなり、活動の意義、必要性を広く周知するため、当初年度計画になかったが急遽開催することとなった。								
								
展覧会風景								
								
ポスター								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数(参考値)	78,615人	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 考古資料、歴史資料、仏像、民俗資料、自然史資料など多岐にわたる陳列された再生文化財によって具体的な再生事業を示すことができた。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館)年3～4回程度								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 約4年にわたる被災文化財の再生事業について、各関係研究機関と連携して十全に提示できたため。							

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 2122-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (1/2)							
【年度計画】								
ア 特別展覧会「南山城の古寺巡礼」(4月22日～6月15日) 京都府南部、木津川流域には奈良時代以来の古い寺院が分布している。この展示ではそれらの古寺に伝来した彫刻や絵画・工芸作品などの名宝を展示し、南山城地域(京都府南部木津川流域)の歴史と文化風土を紹介する。 (目標来館者数5万人)								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長兼考古室長 宮川禎一					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展覧会「南山城の古寺巡礼」 ・会 期 26年4月22日(火)～6月15日(日)(49日間) ・会 場 京都国立博物館 明治古都館(本館) ・主 催 京都国立博物館、朝日新聞社 ・後 援 文化庁、京都府、木津川市、京田辺市、井手町、宇治田原町、笠置町、(公財)京都文化交流コンベンションビューロー ・協 賛 岡村印刷工業、きんでん、京阪電気鉄道、竹中工務店、福寿園 ・特別協力 京都南山城古寺の会、飛鳥園 ・協 力 日本香堂 ・作品件数 139件(うち、国宝2件、重要文化財27件) ・来館者数 69,443人(目標50,000人・達成率138.9%) ・入場料金 一般1,500円、大学・高校生900円、中学・小学生500円 ・アンケート結果 満足度92% 								
<p>京都市と奈良市に挟まれて従来観光寺院としてはあまり注目されなかった南山城地域の小規模な寺院にスポットを当てた展覧会として、来館者の評価も高く、「現地でお寺を見てみたい」との感想が多く寄せられた。木津川流域の歴史と仏教文化のありかたへの理解が高まった展覧会であると評価できる。</p>								
【補足事項】								
京都府南部、木津川流域の古寺の文化財調査を前提とした展示であり、展覧会後に一部作品の寄託を受けるなど、ご所蔵寺院との連携が深まったことも成果のひとつといえる。								
								
展覧会風景				展覧会ポスター				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	69,443人	50,000人	A		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 共催新聞社の紙面広報も多数行われて目標来館者数を大きく上回った。同時期の関西地域の仏教彫像関係の展覧会と比較しても第一位の来館者数を数えた。						
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (京都国立博物館) 年2～3回程度								
【中期計画に対する評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 南山城地域の古寺に関して3年間にわたる京都国立博物館による文化財調査の結果を展覧会に反映できた。また出陳寺院との信頼関係が生まれて、展覧会後において文化財の一部の寄託を受けることができ、今後の平常陳列にも利用できるようになった。						

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (2/2)							
【年度計画】 イ 特別展覧会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」(10月7日～11月24日) 平成21年から修理が行われていた、国宝「鳥獣人物戯画」4巻(高山寺蔵)の修理が平成25年3月をもって無事終了した。これを記念して修理後の国宝「鳥獣人物戯画」4巻を特別展覧会で一般に公開し、併せて高山寺の名宝の数々を公開する。(目標来館者数10万人)								
担当部課	学芸部	事業責任者	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶					
【実績・成果】 ・展覧会名 特別展覧会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」 ・会 期 26年10月7日(火)～11月24日(月・休)(43日間) ・会 場 京都国立博物館 明治古都館(本館) ・主 催 京都国立博物館、高山寺、朝日新聞社 ・後 援 公益財団法人京都文化交流コンベンションビューロー ・特別協力 岡墨光堂 ・協 力 朝日放送、日本香堂 ・協 賛 カネカ、京都銀行、きんでん、JR西日本、竹中工務店、凸版印刷 ・作品件数 84件(うち、国宝8件、重要文化財54件) ・来館者数 203,900人(目標100,000人・達成率 203.9%) ・入場料金 一般1,500円、大学生1,200円、高校生900円、中学生以下無料 ・アンケート結果 満足度84% 予備調査や修理を通じて得られた最新の知見を盛り込みながら、鳥獣人物戯画を核として高山寺の名宝の数々を公開し、鎌倉時代を代表する僧明恵や「学問寺」である高山寺の文化財及び中世の日本文化に対する理解を深めることができた。								
【補足事項】 ・国宝「鳥獣人物戯画」4巻(高山寺蔵)の修理の様子や成果をパネルなどによって随所に散りばめ、鑑賞の一助とした。特に、修理過程に発見された料紙の表裏接合の状況に関する新知見を詳細に解説し、文化財修理に対する理解が深まるように配慮した。 ・国宝「鳥獣人物戯画」全巻の本格的な修理終了後、初のお披露目となったことから、連日、多数の来館者で賑わったものの、絵巻物を鑑賞するために長蛇の列ができ、入場制限を実施せざるを得なかった。その結果、連日、長時間の待ち行列が生じたことは、今後課題を残すこととなった。								
				 <p>展覧会風景</p>  <p>ポスター</p>				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	203,900人	100,000人	S		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：目標値の倍以上に上る来館者数を達成し、図録販売数(31,366冊)、オーディオガイド利用台数(40,221台)なども大きな伸びを示すなど、全体的に予期した以上の実績を残すことができた。 課題と対応：待ち時間対策に工夫が必要であるため、引き続き検討する。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (京都国立博物館)年2～3回程度								
【中期計画に対する評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：来館者数をはじめとして、目標を大きく上回り、アンケート等でも多大な好評を得た。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 2123-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (1/3)								
【年度計画】	ア 特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像―迫真とエキゾチシズム―」(4月5日～6月1日) 鎌倉の地に根づいた仏教文化の中から生まれた迫真性とエキゾチシズムに富んだ魅力ある仏像の数々を一挙紹介する。(目標来館者数5万人)								
担当部課	学芸部	事業責任者	美術室長兼列品室長 岩田茂樹						
【実績・成果】	<p>・展覧会名 特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 迫真とエキゾチシズム」</p> <p>・会 期 26年4月5日(土)～6月1日(日)(51日間)</p> <p>・会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館</p> <p>・主 催 奈良国立博物館、鎌倉国宝館、読売新聞社</p> <p>・後 援 文化庁、NHK奈良放送局、奈良テレビ放送</p> <p>・協 力 日本香堂、仏教美術協会</p> <p>・協 賛 あいおいニッセイ同和損保、岩谷産業、大伸社、大和ハウス工業、非破壊検査</p> <p>・作品件数 53件(うち重要文化財26件)</p> <p>・来館者数 37,022人(目標50,000人・達成率74.0%)</p> <p>・入場料金 一般1,300円、高校・大学生800円、小・中学生500円</p> <p>・アンケート結果 満足度85%</p> <p>関西においてはじめて東国の仏教美術の中心地である鎌倉の仏像の代表作を多数展示し、関西とは異なる東国独自のエキゾチックなものへの美意識を紹介できた。仏像を中心に、仏教美術を専門に展示し、その普及に努めている奈良国立博物館として、意義深い展覧会が行えた。</p>								
【補足事項】	<p>・なかなか見ることのできない仏像が一堂に会していたことがたいへんよかった、あるいは、展示された仏像に迫力と勢いがあり、関西の仏像とは異なるエキゾチックな雰囲気がおもしろかった、という感想がアンケートでは多く寄せられた。</p> <p>・近畿圏の仏像愛好家にとって、東国の仏像に対する関心が予想よりも低かったことも来館者数が目標を下回った一因と推察される。</p>								
									
	展覧会風景				展覧会チラシ				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	
来館者数	37,022人	50,000人	D		—	—	—	—	
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】								
総合評価 評価：B	来館者数は目標値よりも下回ったが、関西において初めて鎌倉の仏像が一挙多数展示された本展覧会は、仏教美術を専門に展示し、その普及に努めている当館としては意義深く、また来館者アンケートでも好評であったことから充実した展覧会であった。								
【中期計画記載事項】	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (奈良国立博物館)年2～3回程度								
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】								
評価 評価：B	本展覧会の来館者数は目標値を下回ったが、関西ではじめて東国の中心である鎌倉の仏像に焦点を当てた展覧会を開催できたこと、また来館者アンケートでも好評であったことから我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行えたことは非常に意義深いものである。								

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (2/3)							
【年度計画】	イ 醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて ―密教のほとけと聖教―」(7月19日～9月15日) 醍醐寺の歴史を伝える古文書・聖教69,378点が国宝に指定されたことを記念し、平安時代から近世に至る醍醐寺の歴史と美術をたどる。(目標来館者数5万人)							
担当部課	学芸部	事業責任者	教育室員 斎木涼子					
【実績・成果】	<p>・展覧会名 醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展 「国宝 醍醐寺のすべて―密教のほとけと聖教―」</p> <p>・会 期 26年7月19日(土)～9月15日(月・祝)(52日間)</p> <p>・会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館</p> <p>・主 催 奈良国立博物館、総本山醍醐寺、日経新聞社</p> <p>・共 催 NHK奈良放送局</p> <p>・後 援 文化庁、奈良テレビ放送</p> <p>・協 賛 岩谷産業、オリックス、京都銀行、住友林業、ダイキン工業、大和ハウス工業</p> <p>・協 力 朝日生命保険、日本香堂、日本通運、仏教美術協会</p> <p>・作品件数 192件(うち、国宝62件、重要文化財85件)</p> <p>・来館者数 78,476人(目標50,000人・達成率157.0%)</p> <p>・入場料金 一般1,500円、高校・大学生1,000円、小・中学生500円</p> <p>・アンケート結果 満足度84%</p> <p>本展覧会のメインテーマに据えた下記の3つの要素について、展示構成に十分反映させることができ、また観覧者からの評価を得た。</p> <p>・従来注目されていなかった醍醐寺と奈良の歴史的結びつきへの着目。</p> <p>・単なる名品紹介や時代順展示ではなく、醍醐寺の歴史的特色と役割を明確に打ち出す展示構成。</p> <p>・「醍醐寺文書聖教7万点」の実態とその重要性について取り上げ、通常注目されにくい文書聖教を主要な展示作品として扱い、観覧者の興味を引き出した。</p> <p>また国宝指定に至る文書聖教の保存と管理の歴史を取り上げ、現在の文化財保存に結びつくテーマにスポットを当てた。</p>							
【補足事項】	 <p>展示風景</p>				 <p>展覧会ポスター</p>			
【定量的評価】項目	26度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	78,476人	50,000人	A	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 単なる寺宝展とは一線を画し、醍醐寺文書聖教の重要性と醍醐寺の歴史を理解できる展示構成を実現し、目標値の1.5倍の来館者数を達成した。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (奈良国立博物館)年2～3回程度								
【中期計画に対する評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 長年の調査により25年度に国宝指定された醍醐寺文書聖教を主要テーマとし、通常注目されにくい文書聖教の全体像と歴史的意義を紹介することに成功した。これにより、研究者のみならず一般観覧者からも高い評価を獲得した。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 2123-3

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (3/3)							
【年度計画】								
ウ 特別展「第66回正倉院展」(予定) 正倉院宝庫に伝わる宝物約70件を展示。(目標来館者数18万人)								
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 内藤 栄					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 天皇后両陛下傘寿記念 「第66回正倉院展」 ・会 期 26年10月24日(金)～11月12日(水) (20日間) ・会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館 ・主 催 奈良国立博物館 ・特別協力 読売新聞社 ・協 力 NHK奈良放送局、奈良テレビ放送、日本香堂、仏教美術協会、ミネルヴァ書房、読売テレビ ・協 賛 岩谷産業、NTT西日本、キャノン、京都美術工芸大学、近畿日本鉄道、JR東海、JR西日本、ダイキン工業、大和ハウス工業、白鶴酒造、丸一鋼管 ・作品件数 59件 ・来館者数 269,348人 (目標180,000人・達成率149.6%) ・入場料金 一般1,100円、高校・大学生700円、小・中学生400円 ・アンケート結果 満足度69% 								
<p>天皇后両陛下傘寿記念にふさわしい華やかな宝物が出陳され、会期は通常より3日長い20日間開催された。とりわけ、宝庫を代表する名品である鳥毛立女屏風4扇、白瑠璃瓶、桑木阮咸、衾御礼履などが人気を集めた。また、手鉾、銅漆作大刀、無荘刀など古代の武器武具類がまとめて展示され、注目を集めた点は評価される。リピーターの獲得はもちろん、新しい客層の開拓も着実に実を結んでいる。一日平均の来館者数が1万人を優に超える展覧会ながら、大きな混乱はなく、講演会やシンポジウムなどの行事も滞りなく開催された。</p>								
【補足事項】								
								
展示風景					展覧会チラシ			
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25
来館者数	269,348人 (20日間)	180,000人	A		294,804 (20日間)	239,581 (17日間)	238,019 (17日間)	246,269 (17日間)
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：展示の工夫、題箋や参考パネルのわかりやすさ、適切な照明など、概ね好評であった。また、展示ケース内の環境が良好であり、宝物の保存上も問題なかった。 課題と対応：課題は混雑した会場の整理であるが、臨機に対応して改善することができた。							
【中期計画記載事項】								
<p>特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。</p> <p>特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (奈良国立博物館)年2～3回程度</p>								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：海外からの集客も増え、国際的にも注目されている。当館が正倉院展を開催する博物館としてのイメージも定着し、秋の奈良の代表行事として定着している。 課題と対応：混雑の緩和と学校教育との連携など教育面に課題があり、引き続き検討したい。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (1/5)							
【年度計画】								
ア 特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」(4月15日～6月8日) 公家を代表する近衛家に伝来した宮廷文化の精華を紹介する。(目標来館者数7万人)								
担当部課	学芸部企画課	事業責任者	文化財課主任研究員 荒木和憲					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」 ・会 期 26年4月15日(火)～6月8日(日) (49日間) ・会 場 九州国立博物館 特別展示室 ・主 催 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、TVQ九州放送、公益財団法人陽明文庫 ・作品件数 114件(うち、国宝18件、重要文化財34件、重要美術品13件) ・来館者数 60,808人(目標70,000人・達成率86.9%) ・入場料金 一般1,500円、高大生1,000円、小中生600円 ・アンケート結果 満足度 88% <p>25年6月に世界記憶遺産に登録された国宝「御堂関白記」の公開を中核とするタイムリーな展覧会である。「御堂関白記」に代表される文書・記録の展示では記憶を後世に伝えることの重要性を、書跡の展示では日本書道史の展開を紹介することができた。また、九州ゆかりの近衛信尹を主要なテーマとして位置づけ、初公開となる作品を紹介することができたのも重要な成果である。</p>								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果から、本年度の他の特別展に比べて高校生以下の割合が少なかったことが分かった。このことから、書跡・歴史系の展覧会の魅力を若い世代にまで十分に広報できなかつたと分析される。 ・見るだけでなく、実際に貴族が使っていた「つづき字」などをタッチパネルに描く体験コーナー「かな文字をかいてみよう」を設置したところ、体感することで書の楽しさ、難しさを実感してもらうことができる展覧会となった。 								
 <p>御堂関白記の展示風景</p>								
 <p>展覧会ポスター</p>								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	60,808人	70,000人	C	—	—	—	—	—
年度計画に対する総合評価 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 来館者数が目標値の87%であったが、九州において大規模で質の高い書跡・歴史系の展覧会を開催できたことは、大変有意義である。また、アンケート結果によると「とても良かった」が半数を上回る51%、「良かった」が37%となっており、お客様満足度が非常に高いことから大変充実した展覧内容だったと言える。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (九州国立博物館)年2～3回程度								
中期計画に対する評価 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 国宝「御堂関白記」の世界記憶遺産登録記念を冠する本展覧会は時宜を得たものである。展示作品は質の高い作品ばかりで、来館者の鑑賞時間が長い傾向が認められた。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2124-2

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (2/5)							
【年度計画】								
イ 特別展「クリーブランド美術館展 ー名画でたどる日本の美ー」(7月8日～8月31日) 平安～明治時代の日本の絵画40数点を通して、日本の美術の流れと魅力をたどる。(目標来館者数5万人)								
担当部課	学芸部企画課	事業責任者	研究員 鷲頭 桂					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「クリーブランド美術館展 ー名画でたどる日本の美ー」 ・会 期 26年7月8日(火)～8月31日(日) (49日間) ・会 場 九州国立博物館 特別展示室 ・主 催 九州国立博物館・福岡県、クリーブランド美術館、西日本新聞社、TVQ九州放送、テレビ西日本 ・作品件数 51件 ・来館者数 70,794人(目標50,000人・達成率141.5%) ・入場料金 一般1,400円、高大生1,000円、小中生600円 ・アンケート結果 満足度 86% <p>世界有数の東洋美術コレクションを所蔵するクリーブランド美術館の名品を、九州で初めて紹介した。これまで日本で紹介される機会が少なく、地名や所蔵品の九州における知名度の低さが懸念されたため、展示・照明・解説を工夫し、効果的な広報を行った。同時期に開催した「海を越えた再会ークリーブランド美術館の仲間たち」も好評を得た。</p>								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・クリーブランド美術館に現在所蔵されている日本美術と、かつて一揃えだった日本国内の作品を集め、特別展と同時期に、文化交流展示(平常展示)で「海を越えた再会ークリーブランド美術館の仲間たち」と題して展示した。これにより、特別展来場者の54%が文化交流展示も見学した。近年の特別展では40%前後であるため、通常よりも多くの方に来場いただくことができた。 ・教育普及の観点から、会場内の題箋やパネルの文言、デザインを工夫した。子どもや大人の来場者に読みやすく、理解を深める内容となった。 ・クリーブランド美術館の所蔵品について、同館及び東京国立博物館と継続して研究を進める協力関係を築いた。 ・展覧会会期中、講演会や紙面連載、テレビ出演、動画公開など、展示室以外でも展覧会の魅力を伝えることに努めた。 								
								
展覧会風景				ポスター				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	70,794人	50,000人	S		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：S	【判定根拠、課題と対応】 迫力のあるポスターデザイン、多彩な広報展開、教育普及事業などを通じて、集中豪雨の続いた天候不順の時期であったにもかかわらず目標を上回る来場者数を得ることができ、高い満足度を得た。							
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (九州国立博物館) 年2～3回程度								
【中期計画に対する評価】 評価：S	【判定根拠、課題と対応】 所期目標の50,000人に対して、141%の70,794人の来館者があり、好評を得た。また、特別展に合わせて文化交流展示(平常展示)で関連展示を行ったため、特別展と文化交流展示の両方を観覧した来場者が54%に上った(通常は40%前後)。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (3/5)							
【年度計画】								
ウ 特別展「台北 國立故宮博物院 ー神品至宝ー」(10月7日～11月30日) 台北故宮博物院所蔵の優れた文化財を通して、中国文化の特質や素晴らしさを紹介する。(目標来館者数15万人)								
担当部課	学芸部企画課	事業責任者	文化財課資料管理室主任研究員 畑靖紀					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「台北 國立故宮博物院 ー神品至宝ー」 ・会 期 26年10月7日(火)～11月30日(日) (51日間) ・会 場 九州国立博物館 特別展示室 ・主 催 九州国立博物館・福岡県、東京国立博物館、國立故宮博物院、西日本新聞社、NHK福岡放送局、NHKプラネット九州、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、RKB毎日放送、TVQ九州放送 ・作品件数 110件 ・来館者数 256,070人(目標150,000人・達成率170.7%) ・入場料金 一般1,600円(1,400円)、高大生900円(700円)、小中生400円(200円) *()内は前売り/20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度 79% <p>中国皇帝コレクションを受け継ぐ世界的な博物館の名品を、東京国立博物館とともに、アジアで初めて紹介した。中国文明を総合的に紹介するために多様な分野の作品を公開し、その照明・解説などの展示方法を工夫して好評を得た。注目度の高い展覧会だったため、展示の期間や内容を様々な媒体を通じて告知し、効果的な広報を行った。</p>								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・日本で初めて開催する、本格的な台北故宮展であった。 ・台北故宮の代表的な作品である、汝窯の青磁や肉形石等、貴重な文物を110件出陳することができた。 ・注目度の高い展覧会だったため、新聞、テレビほか交通広告等、多彩な広報を展開し、多くの来場者を迎えることができた。 ・修学旅行の多い秋期の開催であることから、小中学生向けの無料ガイドブックを作成し、配布した。幅広い層に受け入れられる展示となった。 								
								
展示風景				展覧会ポスター				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	256,070人	150,000人	S		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：S		【判定根拠、課題と対応】 中華文明の神髄であり、人類の至宝とも呼ぶべき台北故宮の所蔵品の数々を、日本で初めて出陳することができた。多彩な広報活動を展開して陳列品に関する周知を徹底させ、所期目標を大幅に超える来館者を迎えることができた。						
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。 特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (九州国立博物館)年2～3回程度								
【中期計画に対する評価】 評定：S		【判定根拠、課題と対応】 日本初の台北故宮展であるこの展覧会では、同館の代表的な作品を数多く九州で紹介することができ、陳列品の品質としても来館者数の数値としても、目標を大きく超える成果を上げることができた。また、2016年の台北故宮での交換展につなげることができた。						

【書式A】

施設名 九州国立博物館

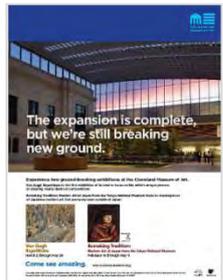
処理番号 2124-4

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (4/5)							
【年度計画】								
エ 特別展「古代日本と百済の交流 ー大宰府・飛鳥そして公州・扶余ー」(平成27年1月1日～3月1日) 日本の古代文化と百済の関わりについて、交流の歴史を紹介する。(目標来館者数3万人、オと一体でカウント)								
担当部課	学芸部企画課	事業責任者	展示課主任研究員 岸本 圭					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「古代日本と百済の交流 ー大宰府・飛鳥そして公州・扶余ー」 ・会 期 27年1月1日(木・祝)～3月1日(日) (52日間) ・会 場 九州国立博物館 特別展示室 ・主 催 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、TVQ九州放送 ・特別協力 国立公州博物館、国立扶余文化財研究所、太宰府天満宮 ・作品件数 74件(うち、国宝4件、重要文化財5件、重要美術品2件、韓国国宝2件、韓国宝物1件) ・来館者数 59,629人(目標30,000人・達成率198.7%) ・入場料金 一般1,400円、高大生1,000円、小中生600円(「発掘された日本列島2014」展と共通チケット) ・アンケート結果 満足度 87% 								
<p>本年は日韓国交正常化50周年にあたり、両国の国宝を含め、古代日本と百済との交流を物語る代表的な作品を数多く展示し、両国相互の文化理解に貢献した。また、期間限定ではあるが、門外不出とされる石上神宮の国宝「七支刀」を展示することができた。</p>								
【補足事項】								
								
国宝七支刀展示風景		展覧会ポスター						
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
来館者数	59,629人	30,000人	S	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：S	<p>【判定根拠、課題と対応】</p> <p>目標値の約2倍となる来館者数があり、とても注目度の高い展示会となった。また、来館者アンケートによると、展示内容に関して「とても良かった」が45%、「良かった」が36%であり、8割以上の来館者から良いとの評価を得た。</p> <p>また、門外不出とされる石上神宮の国宝「七支刀」を展示することができ、好評を博した。</p>							
<p>【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。</p> <p>特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (九州国立博物館)年2～3回程度</p>								
【中期計画に対する評価】 評価：A	<p>【判定根拠、課題と対応】</p> <p>所期目標30,000人に対して198%の来館者があり、予想を遥かに超える反響であった。この展覧会を通して次年度の特別展「美の国日本」でも韓国との連携をつなげることができた。さらに本年は、日韓国交正常化50周年にあたり、また水城・大野城・基肄城築造1350年記念といった節目の年であったことから、非常にタイムリーな展覧会として来館者の知的好奇心を刺激できた展覧会だったと言える。</p>							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ② 特別展 (5/5)							
【年度計画】								
オ 特別展「発掘された日本列島2014」(平成27年1月1日～3月1日) 近年発掘された埋蔵文化財を中心に、20年の成果を展示する。(目標来館者数3万人、エと一体でカウント)								
担当部課	学芸部企画課	事業責任者	展示課主任研究員 進村 真之					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「日本発掘 発掘された日本列島2014」 ・会 期 27年1月1日(木・祝)～3月1日(日) (52日間) ・会 場 九州国立博物館 特別展示室 ・主 催 九州国立博物館、文化庁、東北歴史博物館、東京都江戸東京博物館、堺市博物館、長野市立博物館 ・作品件数 960件(うち、重要文化財47件) ・来館者数 59,629人(目標30,000人・達成率198.7%) ・入場料金 一般1,400円、高大生1,000円、小中生600円(「古代日本と百済の交流展」と共通チケット) ・アンケート結果 満足度 87% <p>全国の主だった遺跡の出土品を集め展示し、それぞれの発掘調査の成果を広く来館者知ってもらう機会を提供した。特に、九州内の遺跡から出土した重要文化財を一挙に見ることができる大変貴重な機会を提供できた。</p>								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・展示室内で、考古学者が使用するメモ帳「野帳」に焦点を当て、展示作品が出土した遺跡で実際に使われた野帳を6冊紹介した。併せて、当館考古担当者の野帳も展示した。 ・小学生を対象としたワークショップ「なりきり考古学者 スペシャルバージョン」を2回実施。大宰府政庁跡で、考古担当研究員が指導して平板測量を行った。 ・野帳展示に関連して、コクヨ(株)が販売している測量野帳のオリジナルデザインをコクヨとのタイアップで製作し、販売した。デザインは九州地方に多く分布する装飾古墳の文様をモチーフとした。 ・併せて、装飾古墳の文様をあしらったマスキングテープの製作、販売も行った。 						 <p>展覧会風景</p>		
						 <p>展覧会ポスター</p>		
【定量的評価】項目								
来館者数	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
	59,629人	30,000人	S		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B		最新の科学的な調査を行うとともに、無機質になりがちな展示室に現場の「野帳」を展示することによって来館者からも評価を得た。						
【中期計画記載事項】特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。								
特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (九州国立博物館) 年2～3回程度								
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B		特別展については、計画通り順調に開催を行っている。特に教育普及に力を入れた取り組みを実践していることが来館者からの評価を得ることにつながっており、今後も継続していきたい。						

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 2131

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 展覧事業の充実 ③ 海外展							
【年度計画】 (東京国立博物館) 1) 海外展「伝統の再創造：日本の近代美術」(平成26年2月16日～5月11日) 会場：クリーブランド美術館(米国) 東京国立博物館の近代美術作品により、日本近代美術を伝統の再創造という観点で紹介する。								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	特別展室長 松嶋雅人					
【実績・成果】 ・展覧会名 海外展「伝統の再創造：東京国立博物館所蔵 日本の近代美術」 Remaking Tradition: Modern Art of Japan from the Tokyo National Museum ・会 期 26年2月16日(日)～5月11日(日)(72日間) ・会 場 アメリカ・クリーブランド美術館ケルビン&エレノア・スミス財団展示ホール ・主 催 クリーブランド美術館、東京国立博物館 ・作品件数 55件(うち、重要文化財6件) ・来館者数 37,648人 東京国立博物館所蔵の絵画、書跡、彫刻、工芸の近代美術作品の優品を通して、東洋の古典的主題の新たな表現や、西欧から学んだ技術の受容の様相、そして風景画(山水画)が洗練され、花鳥画が再構築されたことなど、近代日本において造形文化の伝統が「再創造」されたことを示すことができた。								
【補足事項】 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p style="text-align: center;">展覧会風景</p> <div style="text-align: center;">  <p>チラシ</p> </div>								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	22	23	24	25
来館者数	37,648人	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 開催館における企画展では近年類のない来館者数を集め、大変高い評価を得たため。							
【中期計画記載事項】 海外からの要請等に応じて、海外において展覧会等を行うことにより、日本の優れた文化財をもとにした歴史と伝統文化を紹介する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 アメリカにおいて広く、日本の優れた文化財をもとにした近代の文化を紹介することができたため。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供(1/3)							
<p>【年度計画】</p> <p>(4館共通)1) (略)</p> <p>(東京国立博物館)1) 日本の歴史・文化及びアジア諸地域の歴史・文化の理解促進を図るための教育普及の先導的事業を実施する。本館地下、本館19室、東洋館2室、6室等を教育普及スペース「みどりのライオン」と位置づけ、適宜、小講堂やミュージアムシアター等も活用し、内容に応じた環境を設定しながら事業を展開する。</p> <p>○ファミリー向け教育普及的展示企画「親と子のギャラリー」の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特集「親と子のギャラリー 仏像のみかた鎌倉時代編」(6月10日～8月31日) <p>○教育的展示及びイベント「博物館でお花見を」(平成26年3月18日～4月13日)を実施する。</p> <p>○体験型プログラムの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特集「親と子のギャラリー 仏像のみかた鎌倉時代編」など、総合文化展(平常展)に関連した一般向け及びファミリー向けのギャラリートークや体験型プログラムを実施する。 ・本館19室・本館地下教育普及スペース・東洋館オアシスで展開する教育普及スペースで、ワークショップやハンズオンアクティビティなどの体験型プログラムを実施する。 ・お花見企画「博物館でお花見を」、正月企画「博物館に初もうで」に関連して、ワークシートを用いた体験型プログラムを実施する <p>2) 3) (略)</p>								
担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育普及室長 小山弓弦葉					
<p>【実績・成果】(東京国立博物館)</p> <p>1) 総合文化展の状況に応じ歴史・文化の理解促進を目的とした教育普及事業を展開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合文化展鑑賞の手がかりとして、展示や作品に関連した企画を通じ、伝統文化への興味関心を高めることができた。 ・4月16日から本館19室に「みどりのライオン 体験コーナー」を開設。伝統模様のスタンプでポストカードを作る「トーハクでデザイン」、制作工程や技法がわかる「トーハクで○○ができるまで」、e 国宝がさらに使いやすくなった「トーハクで国宝をさぐる」、3D の作品画像を自由に動かす「トーハクをまわそう」の5つの体験コーナーができた。 ・本館地下、東洋館2室、6室、ミュージアムシアターや小講堂において、体験型プログラム、ギャラリートーク、ワークショップ等を行った。 <p>○ファミリー向け教育普及的展示として、特集「親と子のギャラリー 仏像のみかた鎌倉時代編」(6月10日～8月31日)を実施し、仏像鑑賞に必要なキーワードをトピックスに、分かりやすく伝えることができた。また、特集「熊めぐり」(4月22日～6月1日)を実施し、熊をテーマにした文化財ならびに、国立科学博物館、恩賜上野動物園から借用した資料をもとに、熊をめぐる文化史や生態についてわかりやすく伝えることができた。</p> <p>○「博物館でお花見を」に関連し、鑑賞ガイド、桜セミナー、ボランティアによるガイドツアー及び体験型プログラムを実施した。</p> <p>○体験型プログラムの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合文化展関連ワークショップ及び関連事業 25回 1,721人 ・博物館でアジアの旅に関連し、「アジアぬりえ」(10月4・5・11・12日/329人)、「着てみて! ポーズ 中国・韓国の伝統衣装」(9月30日～10月13日/868人)を実施した。また、東洋館2室で体験型プログラム「旅の案内所」、6室で体験型プログラム「アジアの占い体験」を同年実施した。 ・「博物館でお花見を」に関連し「ぬり絵 日本のデザイン、色づかい」(3月29・30日、4月5・6日/684人)、「桜スタンプラリー」(3月18日～4月13日/12,489人)、「花見で一句」(3月18日～4月13日/285人、うち6人が入選)を実施した。正月企画「博物館に初もうで」関連のワークシートを用いたアクティビティ「トーハク羊めぐり」(27年1月2日、3日/5,500人)を実施した。 <p>○特別展の鑑賞手引きとしてジュニアガイドの制作、配布を行った。</p>								
<p>【補足事項】(東京国立博物館)</p> <p>○体験型プログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東洋館でのアクティビティ「アジアの占い体験」 通年34,944人 ・本館19室みどりのライオン体験コーナー 通年197,544人 								
 <p>体験型プログラム 「アジアの占い体験」 (東洋館6室)</p>								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 全観覧者向け、ファミリー向け、親子向けなどさまざまな対象に向けたプログラムを展開し、幅広い層に楽しむ機会を提供することができた。							
【中期計画記載事項】学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 順調。幅広い層へ機会提供し、目標を達成できた。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 2211-2

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供(2/3)							
【年度計画】 (4館共通) 1) キャンパスメンバーズ(学校法人会員制度)による大学等との連携を継続して実施する。 (東京国立博物館) 1) (略) 2) 学校との連携事業を推進する。 <ul style="list-style-type: none"> ・スクールプログラム(鑑賞支援・体験型プログラム等)を継続して実施する(小・中・高校生対象)。 ・職場体験の受け入れを継続して行う(中・高校生対象)。 ・全国高等学校美術・工芸教育研究会所属教員のための研修を継続して実施する。 ・教員鑑賞会・ガイダンスを継続して実施する。 3) (略)								
担当部課	総務部総務課 学芸企画部博物館教育課	事業責任者	課長 竹之内勝典 教育普及室長 小山弓弦葉					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 国立博物館と大学等との連携を図り、歴史・伝統文化に対する理解促進に寄与し、博物館が所蔵する文化財を核とした学ぶ場を提供することができた。加入校数44校、団体利用を含み28,700名の学生・教員が本制度を利用し入館した。 (東京国立博物館) 2) 学校との連携事業を計画通り実施した。 <ul style="list-style-type: none"> ・スクールプログラムを実施し、児童生徒に対し目的、学年、人数などに応じたプログラムを提供することで、充実した鑑賞体験の提供に寄与した。また、伝統文化への興味関心を高め、理解を促した。なお、一部をボランティアにより実施した(詳細は処理番号2221-1参照)。 ・職場体験として、19校63人を受け入れた。 ・全国高等学校美術・工芸教育研究会所属教員のための研修(共催：東京藝術大学)を26年7月30日～8月1日の3日間開催し、41名が参加した。展示のみならず博物館への理解を深め、学校団体での博物館利用について検討するきっかけとなる研修を提供した。 ・教員鑑賞会・ガイダンスを3回実施し、計469人が参加した。 ○「盲学校のためのスクールプログラム」を3校17人に対して実施した。								
【補足事項】 1) 学生向けの広報を充実させるとともに、10月9,10日に若者向けイベント「博物館で野外シネマ」を行ったことにより、キャンパスメンバーズ加入校の入館者数が大幅に増加した。 2) スクールプログラムでは、ガイダンス、鑑賞支援プログラム、体験型プログラムなど11のコースを設け、169校5,594人に対して実施した。また、大学生、専門学校生及び教育関連機関の見学対応を、12校254人を対象に行った。 ○本館1階リニューアルオープンに伴い、展示室に近い本館地下にレクチャースペース、ワークショップスペースを設けることができた。近年増加している数名から40名程度の学校団体での利用時に、規模に適した対応が可能となった。								
								
<p>スクールプログラム 「はじめての東博」実施の様子 (本館地下教育スペース)</p>								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
キャンパスメンバーズ加入校数	44校	—	—		35	37	38	43
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 従来の事業を進めるとともに、学校連携では盲学校との連携も始めるなど、着実に成果を伸ばしつつある。							
【中期計画記載事項】 学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 順調。研究の成果による新たなプログラムの開始を含め、成果をあげている。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供(3/3)								
<p>【年度計画】</p> <p>(4館共通)1) (略)</p> <p>(東京国立博物館)1)2) (略)</p> <p>3)文化財について分かりやすく理解するためのギャラリートーク・月例講演会・記念講演会・連続講座・教育普及イベント等を継続して実施する。</p> <p>(講演会等の目標) 参加者数計7,830人(実施回数計77回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講演会 参加者数3,500人(実施回数20回) ・ギャラリートーク等 参加者数4,000人(実施回数55回) ・連続講座 参加者数 250人(実施回数 1回) ・公開講座 参加者数 80人(実施回数 1回) 									
担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育講座室長 浅湫毅						
<p>【実績・成果】(東京国立博物館)</p> <p>3)文化財について分かりやすく理解するためのギャラリートーク・月例講演会・記念講演会・連続講座を継続して実施した。総参加者数 計14,419人(実施回数 計127回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講演会 参加者数6,735人(実施回数30回) うち月例講演会1,893人(12回)、記念講演会3,651人(13回)、テーマ別講演会1,096人(4回)、その他講演会95人(1回) ・ギャラリートーク等 参加者数7,326人(実施回数94回)(26年4月より列品解説をギャラリートークに名称変更した。) ・連続講座 参加者数320人(実施回数1回) ・公開講座 参加者数38人(実施回数2回) 									
<p>【補足事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他展示に関連する事業18回・817人 恩賜上野動物園・国立科学博物館連携事業 1回 45人 博物館でアジアの旅関連イベント 8回 772人 特別展「3・11大津波と文化財の再生」関連イベント 9回 <p>※講演会等の参加者数が目標値を大幅に上回った理由</p> <p>ギャラリートークは会場の広さと作品の見やすさから1回50人程度の参加者数を想定したが、テーマや作品が来館者のニーズに非常によく合致したこと、また、年度計画にはなかった特別展関連ギャラリートーク(台北故宮展3回、3・11大津波と文化財の再生1回)、本年度から開始した「博物館でアジアの旅」関連東洋館スペシャルツアー(9回)の実施も参加者数増加につながった。</p> <p>講演会においても記念講演会は250名、月例講演会は100名の参加者数を想定していたが、来館者の興味要望に合致したものが多かったため、ほとんどの講演会において想定を上回る参加者数となった。</p> <p>※公開講座(保存修復ツアー)の参加者数が目標値を下回った理由</p> <p>年度計画策定後に参加人数の見直しを行い、実際の修復現場に入ることに伴う事故の防止及び修復専門スタッフとお客様との交流の充実を図るため、1回の定員数を80名から20名へ変更した。その代わりに実施回数を1回から2回に増やした。</p>									
									
<p>ギャラリートークの様子 (26年4月、会場：本館18室)</p>									
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25		
うち	講演会等の参加者数	14,419人	7,830人	A	経 年 変 化	13,319	12,664	13,193	15,777
	実施回数	127回	77回	A		126	112	126	131
	講演会参加者数	6,735人	3,500人	A		9,290	8,224	6,952	7,184
	実施回数	30回	20回	A		39	32	31	30
	ギャラリートーク参加者数	7,326人	4,000人	A		3,659	3,963	5,805	8,205
	実施回数	94回	55回	A		83	76	90	98
	連続講座参加者数	320人	250人	A		278	380	303	354
	実施回数	1回	1回	B		1	1	1	1
	公開講座参加者数	38人	80人(40人)	D(C)		92	97	133	34
	実施回数	2回	1回(2回)	A(B)		3	3	4	2
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】								
評定：B	順調。一部予定変更があったが、全体としては目標通り事業を達成した。								
【中期計画記載事項】学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。									
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】								
評定：B	順調。目標通り事業を達成した。								

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 2212

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供		
<p>【年度計画】 (4館共通)</p> <p>1) キャンパスメンバーズ(学校法人会員制度)による大学等との連携を継続して実施する。 (京都国立博物館)</p> <p>1) 展覧会内容および展示作品への理解を深めるための事業を実施する。 ・「土曜講座」など各種の講座を実施する。 ・展覧会鑑賞ガイド・ワークシートなどを発行する。 ・小中学生向けワークショップ「少年少女博物館くらぶ」を実施する。 ・小中学生向けワークシートを発行する。 ・分かりやすい展示作品解説シート「博物館Dictionary」を発行し配信する。</p> <p>2) 歴史及び文化財への理解促進を図るために教育普及事業を実施する。 ・テーマを定めた一般向けの連続講座として「夏期講座」などを開講する。 ・京都市内の小中学生を対象とする訪問授業「文化財に親しむ授業」を実施する。 ・文化財への関心を高めるワークショップなどを実施する。</p> <p>3) 教育諸機関との連携事業を推進する。 ・京都市内4美術館・博物館(京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都文化博物館、京都市美術館)で組織する「京都市内4館連携協力協議会」での連携協力として「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」を開催する。 ・教員のための講座を開講する。</p> <p>(講演会等の目標) 参加者数計3,120人(実施回数計22回) ・記念講演会 参加者数 160人(実施回数 1回) ・土曜講座 参加者数 2,800人(実施回数20回) ・夏期講座 参加者数 160人(実施回数 1回(3日間)) ・「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」 参加者数 120人(実施回数 1回)(土曜講座の内数)</p>			
担当部課	学芸部 総務課	事業責任者	教育室長 山川 暁 総務課長 植田義雄
<p>【実績・成果】(4館共通)</p> <p>1) キャンパスメンバーズを継続し、大学と連携(29校)した。 (京都国立博物館)</p> <p>1) 「記念講演会」(1回・193人)・「土曜講座」(31回・3,888人)を実施した。 ・展覧会の「鑑賞ガイド」(国宝・鳥獣戯画と高山寺、140,000部)を発行した。 ・「少年少女博物館くらぶ」(2回・57人)を開催した。 ・小中学生向け「ワークシート」(南山城のみほとけめぐり、50,000部)を発行した。 ・「博物館Dictionary」(4回、8,000部)を発行した。</p> <p>2) 「夏期講座(古社寺と文化財Ⅱ)」(1回・206人)を開催した。 ・「文化財に親しむ授業」(9回・581人)を実施した。 ・東日本復興支援の「こども☆ひかりプロジェクト」に参加しワークショップを行った。(2回・620人) ・国際研究セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」(1回・75人)を開催した。</p> <p>3) 「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」(1回・113人)を土曜講座と合同で開催した。 ・「社会科教員のための向上講座」(1回・66人)を実施した。</p>			
<p>【補足事項】</p> <p>・講座・講演会は、新しくオープンした平成知新館講堂にて実施した。土曜講座は26年度末で1,778回を数える歴史ある普及活動で、参加者の高い評価を得ている。夏期講座は遠方からの聴講者も多く、見学会と合わせて好評を博している。</p> <p>・子ども向けのワークシートや博物館Dictionaryは、大人にも入門的な解説書として好評で、モニターアンケートでも評価が高かった。</p> <p>・前年度に引き続き、東日本復興支援の「こども☆ひかりプロジェクト」に参加し、仙台にてワークショップを実施した。地元の大学生と連携して実施することで、単発的な復興支援ではなく、継続的に「地域間の交流」や「若者の成長」を促す場を設ける活動としても意義深いものとなった。</p> <p>・年度計画にはなかったが、科学研究費補助対象、若手(A)「内外伝世品の調査ならびに比較基づく京都製蒔絵歴史的研究」の成果として、国際研究セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」を開催した。</p> <p>・平成知新館開館に伴い、9月～11月初旬の土曜講座(7回)が想定より多く開催された。</p>			



「こども☆ひかりプロジェクト」
ワークショップの様子

【次ページへ続く】

【前ページから続く】

【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25
講演会等の参加者数	4,596人	3,120人	A	2,313	1,450	3,150	2,062
実施回数	36回	22回	A	17	15	19	21
うち土曜講座 参加者数	3,888人	2,800人	A	2,076	1,199	2,682	1,257
実施回数	31回	20回	A	15	13	16	10
うち記念講演会 参加者数	193人	160人	A	—	—	215	190
実施回数	1回	1回	B	—	—	1	1
うち夏期講座 参加者数	206人	160人	A	205	193	213	219
実施回数	1回	1回	B	1	1	1	1
うち社会科教員のための向上講座 参加者数	66人	—	—	32	58	40	30
実施回数	1回	—	—	1	1	1	1
セミナー・シンポジウム等 参加者数	243人	—	—	—	—	—	—
実施回数	2回	—	—	—	—	—	—
うちギャラリートーク 参加者数	—	—	—	—	—	—	366
実施回数	—	—	—	—	—	—	8
「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」 (土曜講座の内数) 参加者数	113人	120人	C	—	158	119	157
実施回数	1回	1回	B	—	1	1	1
少年少女博物館くらぶ 参加者数	57人	—	—	20	75	85	68
実施回数	2回	—	—	1	2	2	2
文化財に親しむ授業 参加者数	581人	—	—	406	552	613	435
実施回数	9回	—	—	5	7	8	7
ワークショップ（こどもひかり） 参加者数	620人	—	—	—	—	—	1,300
実施回数	2回	—	—	—	—	—	2
ワークシート・鑑賞ガイド 発行部数	190,000部	—	—	15,000	30,000	110,000	20,000
発行回数	2回	—	—	1	1	3	1
博物館Dictionary 発行部数	8,000部	—	—	5,000	5,000	5,000	7,000
発行回数	4回	—	—	1	1	1	2
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 平成知新館の開館に伴って講堂を活用し、講演会には目標値以上の参加者数があった。さらにセミナーやシンポジウムなど、国外からも研究者を招聘した専門性の高い会合を開くことができた。						
【中期計画記載事項】	学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。						
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 外部機関と連携協力しながら、各種の学習機会を提供することができた。						

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 2213-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供(1/2)								
【年度計画】 (4館共通) 1) キャンパスメンバーズ(学校法人会員制度)による大学等との連携を継続して実施する。 (奈良国立博物館) 1) 小中学校との連携 <ul style="list-style-type: none"> ・奈良県内の小中学校にメールマガジンを配信する。 ・奈良市内の公私立小中学校に博物館だよりを送付する。 ・奈良市内の小学校5年生を中心に、幼稚園児から中学3年生までを対象に奈良市教育委員会と連携して世界遺産学習を実施する。 ・奈良市内の小学校6年生を対象に、奈良市教育委員会と連携して正倉院展見学を実施する。 ・中学生の職場体験学習を受け入れる。 2) (略) 3) 奈良市教育委員会と連携して教員の研修を受け入れる。 4) 地下回廊のタッチパネル式学習端末機で名品のハイビジョン映像等を公開する。 5) 地下回廊で仏像模型及びパネルを用いて、文化財に関する情報を継続的に公開する。									
担当部課	総務課渉外室企画推進係 学芸部教育室	事業責任者	係長 石田義則 室長 岩井共二						
【実績・成果】 (4館共通) 1) キャンパスメンバーズへの入会及び更新を積極的に進めてきた結果、本年度までで入会校数は27校、大学との連携を継続した。 (奈良国立博物館) 1) 小中学校との連携 <ul style="list-style-type: none"> ・奈良県内の小中学校222校に対してメールマガジンの配信を行った。 ・『奈良国立博物館だより』は、奈良市内の全小中学校への郵送配布を行った。 ・世界遺産学習事業は、奈良市内小学校5年生35校、合計2,281名に対して実施した。 ・中学2年生の職場体験を3校12人受け入れた。 3) 奈良市教育委員会と連携した教員への研修(8月26日実施、参加者63名)として講演を行った。 4) 地下回廊のタッチパネル式学習端末機で、収蔵品の中から名品の画像を公開した。 5) 地下回廊で仏像模型及びパネルを用いて、文化財に関する情報を継続的に公開した。									
【補足事項】  <p style="text-align: center;">小学生に向けた世界遺産学習の様子</p>									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
キャンパスメンバーズ加入校数		27校	—	—		28	28	27	26
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 キャンパスメンバーズ加入校は脱会が1校あったが、新規加入が2校あり、より多くの大学等と連携を図れた。							
【中期計画記載事項】 学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 順調に成果を上げているため							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供(2/2)							
【年度計画】 (4館共通) 1) (略) (奈良国立博物館) 1), 3) ~ 5) (略) 2) 講座等の開催 ・ 仏教美術等に関するサンデートークを定期的を実施する。 ・ 特別展等に際してシンポジウム、フォーラム及び公開講座等を開催する。 ・ 一般向け教育普及事業として夏季講座を開催する。 ・ 特別陳列に因み、伝統的行事を体験する催しを実施する。 ・ 文化財保存修理所の一般公開を行い、文化財保存の意義についての認知度向上に努める。 (講演会等の目標) 参加者数計2,650人(実施回数計27回) ・ 特別展等講座 参加者数1,500人(実施回数14回) ・ 夏季講座 参加者数 500人(実施回数 1回(3日間 9講座)) ・ サンデートーク 参加者数 650人(実施回数12回)								
担当部課	学芸部教育室	事業責任者	室長 岩井共二					
【実績・成果】(奈良国立博物館) 2) 講座等の開催 ・ サンデートークは毎月第3日曜日に実施し、実績は12回、合計978人の参加があり、アンケート結果では87%の平均満足度が得られた。 ・ 公開講座は、3つの特別展及び2つの特別陳列の会期中に実施した。公開講座の実施回数は、合計12回、1,600人の参加があり、平均満足度は87%を得た。その他、特集展示「和紙-文化財を支える日本の紙-」に関連して記念講座&座談会「和紙-文化財を支える日本の和紙-」を実施した。 ・ 正倉院展に関連したシンポジウムは「正倉院学術シンポジウム2014」と題して26年11月2日に実施し、3人のパネラーにより基調講演と討論を行った。192人の参加を得、満足度は89%であった。 ・ 夏季講座は、今年は第43回目を迎え、奈良県文化会館で開催した。「醍醐寺と南都の密教」と題し、26年8月19日~21日の3日間に実施、講師は計9人、561人の参加があった。 ・ 特別陳列「お水取り」では、東大寺の協力のもと、「お水取り「講話」と「粥」の会」を27年2月14日に実施し、35人の参加があった。 ・ 文化財保存修理所の一般公開は、27年1月15日に3回実施し、計110人の参加があった。 ○ 講演会等の実績 総計27回・参加者3,525人 特別展等講座14回・参加者1,986人(うち公開講座12回・1,600人、シンポジウム1回・192人)、夏季講座1回(3日間)・参加者561人、サンデートーク12回・参加者978人								
【補足事項】  正倉院学術シンポジウム2014 会場風景								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
講演会等の参加者数	3,525人	2,650人	A		3,349	3,006	3,454	3,219
実施回数	27回	27回	B		28	28	29	26
うち特別展等講座参加者数	1,986人	1,500人	A		2,172	1,839	2,172	1,682
実施回数	14回	14回	B		15	15	16	13
うち夏季講座 参加者数	561人	500人	B		556	522	438	587
実施回数	1回	1回	B		1	1	1	1
うちサンデートーク参加者数	978人	650人	A	621	645	844	950	
実施回数	12回	12回	B	12	12	12	12	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 当初の予定通り各種の講座及び講演会を実施することができ、目標値を上回る参加者数が得られた上、アンケートでみる満足度も高かった。							
【中期計画記載事項】学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 奈良教育大学、奈良市教育委員会との連携協力を行い、学習プログラムの開発を進めており、中期計画に対し順調である。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2214-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供(1/3)								
【年度計画】 (4館共通) 1) (略) (九州国立博物館) 1) 博物館における体験型事業の充実を図る。 ・教育普及ゾーンで活用する様々な教育キットを開発する。 ・幅広い層に向け体験活動の促進を図るため、教育活動の場を提供する。 ・アジア諸国の文化を理解する様々な体験学習プログラムを開発する。 2)～9) (略)									
担当部課	交流課	事業責任者	教育普及室主任研究員 池内一誠						
【実績・成果】 (九州国立博物館) 1) ・体験型展示室「あじっば」の運営を進め、従来からのプログラム、キットの継続展開に加え、これまでの調査研究で得られた新知見を加味して内容を充実させた各プログラムを開発し、来館者向け、及びアウトリーチでの活動時に展開した。 ・「いこうよ!あじっば夏祭り」やボランティアワークショップを実施し、幅広い層の来館者に体験の場を提供した。 ・アジア各国の文化の類似性や相違性についての理解を深めるため、様々なテーマのもと、「あじ庵」「あじぎやら」「ディスプレイ」において特集展示を行った。また、季節にあわせて体験資料の展示替えを随時行った。									
【補足事項】 (九州国立博物館) 1) ・染織の原理について理解を深めるためのプログラムとして、藍の生葉を用いた「藍の生葉で繭を染めてみよう」「藍の生葉でたたき染めをしてみよう」を開発した。(アウトリーチプログラムとして実施) ・従来のプログラムに改善を加えた。(インドネシアと沖縄の音階の相似性に基づき、それぞれの国の楽器と一緒に演奏するプログラム、考古資料としての貝を自然史的・物理的観点から紹介するプログラムなど。アウトリーチプログラムとして実施) ・当館では、他の博物館ならびに社会教育施設等の要望に応え、「きゅーはくきやらばん」として各種体験プログラムを館外において展開している。 ・「あじ庵」における特集展示は「桃の節句」「ひと針に込めた思い」「楽器のいろいろ」「装う」の計4回を実施した。 ・「あじぎやら」における特集展示は「はらのなかのはらっぱで」「木から生まれるもの」「花と鳥(アジア各国の工芸品に表現された花と鳥)」「インドネシアの伝統文化」「郷土人形-笑い・干支・未」の計5回を実施した。 ・ディスプレイにおける特集展示は「インドネシア」「オランダ」「ちょっとひと休み(アジア各国の喫茶具)」「日本・韓国・中国のお正月」の計4回を実施した。 ・小学校児童向けに「わくわく通信」を年間5回発行し、体験プログラム等の告知を行った。配布地域は福岡市を含む博物館近隣14市町、毎回136,000枚を配布している。募集プログラムは前年度の経験を踏まえ、あらかじめ実施回数を増やす等の措置を行った。それでもほとんどが定員に達した。告知の効果は高い。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
-		-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 新規プログラム開発、プログラムの改善が順調に進んでいるため、また、小学生・大人など、幅広い年齢層に向けてのプログラムも実施できているため。							
【中期計画記載事項】学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 開発したプログラムは館内のみならず学校や他の博物館等においても実践し、広く学習機会を提供できているため。							



考古・自然史融合プログラム
「南の貝のものがたり」

(兵庫県立人と自然の博物館におけるアウトリーチにて)

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																									
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供(2/3)																									
【年度計画】 (4館共通) 1) キャンパスメンバーズ(学校法人会員制度)による大学等との連携を継続して実施する。 (九州国立博物館) 1) (略) 2) 学校教育との連携事業を実施する。 <ul style="list-style-type: none"> ・職場体験(中学生)の受け入れを実施する。 ・ジュニア学芸員(高校生)事業を実施する。 ・博物館活用の促進を図るため、教員研修の場を設置する。 ・学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸し出しを実施する。 3)～8) (略) 9) 放送大学の面接授業を実施する。																										
担当部課	総務課 交流課	事業責任者	課長 阿部 勝 課長 篠崎孝司																							
【実績・成果】 (4館共通) 1) キャンパスメンバーズ(学校法人会員制度)による大学等との連携を継続して実施した。 (九州国立博物館) 2) ・中学生・高校生の職場体験を23校101名(のべ51日間)受け入れた。 <ul style="list-style-type: none"> ・高校生「ジュニア学芸員」は、9校24名の参加を得て計8回の継続プログラムで実施した。 ・高等学校初任者研修に係わる体験活動研修を希望する教員4校6名に対し、3日間の体験研修を実施した。 ・学校教育における「きゅうぱっく」及び博物館の活用に関する教員研修会を1回実施した。 ・学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸出を引き続き行い、67件の貸出を行った。 ・出前講座や館内での体験等を希望する学校への個別対応を行った。 9) 放送大学の面接授業を実施した。(「美術工芸品にみる文化交流の諸相」26年11月15日、16日)																										
【補足事項】 (4館共通) 1) 大学等との連携を継続させるため、本年度も募集、実施し、各教育機関(大学・短期大学・高校)が新規及び継続で入会した。 加入校内訳(大学14校、短期大学3校、専門学校1校、高等学校6校) <ul style="list-style-type: none"> ・会員校の学園祭に協賛した。(6校) ・特典の利用として文化交流展を3,641人(学生3,418人、教職員223人)、特別展を2,444人(学生2,128人、教職員316人)が観覧した。また、パスポートを2,434人(学生2,245人、教職員189人)が割引購入した。 ・会員校である筑紫台高等学校は、キャンパスメンバーズ制度を活用し、授業のカリキュラムに当館の特別展観覧を組み込んでいる。 (九州国立博物館) 9) ・放送大学受講者は定員50名、定員以上の申込があり、放送大学事務局で調整した。 <ul style="list-style-type: none"> ・講義タイトルは24年度と同タイトル。同年度に申込多数で受講できない希望者が多かったため、放送大学事務局と協議のうえ26年度は24年度と同タイトルで実施することとしたためである。 																										
																										
<p style="text-align: center;">エントランスで接客(誘導業務)を体験する中学生</p>																										
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">【定量的評価】項目</th> <th style="text-align: center;">26年度実績</th> <th style="text-align: center;">目標値</th> <th style="text-align: center;">評価</th> <th rowspan="2" style="text-align: center;">経年 変化</th> <th style="text-align: center;">22</th> <th style="text-align: center;">23</th> <th style="text-align: center;">24</th> <th style="text-align: center;">25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>キャンパスメンバーズ加入校数</td> <td style="text-align: center;">24校</td> <td style="text-align: center;">—</td> <td style="text-align: center;">—</td> <td></td> <td style="text-align: center;">27</td> <td style="text-align: center;">28</td> <td style="text-align: center;">24</td> <td style="text-align: center;">24</td> </tr> </tbody> </table>									【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25	キャンパスメンバーズ加入校数	24校	—	—		27	28	24	24
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25																		
キャンパスメンバーズ加入校数	24校	—	—			27	28	24	24																	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B				【判定根拠、課題と対応】 キャンパスメンバーズ加入校数について前年度数を維持することができ、職場体験、教員研修、放送大学等についても、計画通り着実に実施できたため。																						
【中期計画記載事項】 学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。																										
【中期計画に対する評価】 評価：B				【判定根拠、課題と対応】 中期計画に対して学校教育との連携を順調に推進しており、職場体験、教員研修、放送大学等についても、計画通り着実に実施できたため。																						

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2214-3

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(2) 教育活動の充実 ①学習機会の提供(3/3)								
【年度計画】 (4館共通)1) (略) (九州国立博物館)1)2) (略) 3) シンポジウムを開催する。 4) 特別展記念講演会を開催する。 5) 文化交流展、特別展に関連した教育普及事業を実施する。 6) ミュージアムトークを随時実施する。 7) 文化施設等へ講師を派遣する。 8) 特別展の内容に親しみをもたせ、より良く理解するためのワークショップを開催するとともに、文化交流展示の内容とも連携した事業展開を行う。 9) (略) (講演会等の目標) 参加者数 計3,100人 (実施回数計54回) ・特別展記念講演会 参加者数 600人 (実施回数 4回) ・講演及びシンポジウム 参加者数1,300人 (実施回数10回) ・ミュージアムトーク 参加者数1,200人 (実施回数40回)									
担当部課	学芸部企画課・交流課	事業責任者	課長 臺信祐爾 ・ 教育普及室主任研究員 池内一誠						
【実績・成果】 (九州国立博物館) 3) 国際シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味—工芸における復古と革新—」を開催した。(10月25日開催)(詳細は処理番号3214参照) 4) 本年度は特別展記念講演会を4回開催した。 5) 本年度は講演会等を26回開催し、連続講座も開催した。 6) 定例のミュージアムトークを52回開催し、展示だけでは伝わらない博物館活動の内容を紹介し、好評を博している。 7) 文化施設等へ講師を派遣した。(福岡市 アクロス・文化学び塾等) 8) 文化交流展、特別展に関連した教育普及事業としてワークショップ等を行った。									
【補足事項】(九州国立博物館) 8) ・特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」では、書跡の作品が多数出品されたことから、タブレットを使用した書に親しむ体験コーナー「かな文字を書いてみよう」を設置した。また、ワイヤーを曲げてつづけ字しおりを作るワークショップも行った。 ・特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美—」では、展示作品である渡辺崋山作「大空武左衛門」が写真鏡を使って描かれたことを体感してもらうため、写真鏡のレプリカを実際に手にとってもらう体験コーナーを設置した。また、夏休み期間中であったことから、親子を対象にした「てづくりカメラワークショップ」を行い、写真鏡の製作と写真鏡を使って絵を描く体験を通して、展示物の魅力を伝えた。 ・特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美—」の開催にあわせ、日本画ワークショップ「琳派の燕子花を描く」を実施した。小中学生対象(定員10名、申込5名)、15歳以上対象(定員10名、申込48名)の2回実施。 ・特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」では、展覧会関連史跡を展覧会担当者が案内するウォーキングツアー「考古学者と行く! 史跡探訪」を2回実施した。また、同時開催の「日本発掘—発掘された日本列島2014—」では、考古学者の仕事体験する「なりきり考古学者 スペシャルバージョン」を2回実施。考古学担当研究員が大宰府政庁跡の測量の仕方を直接指導した。 ・トピック展示「全国高等学校 考古名品展」の開催にあわせ、「全国高等学校考古学フォーラム in 九州国立博物館2014」を実施した。壇上発表4校、ポスター発表3校、聴衆93人。 ・文化交流展示室関連第9室「梵音具」の展示にあわせ、インドネシアの青銅打楽器アンサンブル「ガムラン」の演奏会を展示室内において2回実施した。各回聴衆約50名。									
【定量的評価】項目									
		26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
講演会等の参加者数		4,694人	3,100人	A	経年変化	3,996	7,833	8,354	7,276
実施回数		82回	54回	A		64	89	102	90
うち特別展記念講演会	参加者数	980人	600人	A		1,410	1,500	966	1,108
	実施回数	4回	4回	B		9	7	5	5
うち講演及びシンポジウム	参加者数	2,132人	1,300人	A		1,266	4,592	4,918	4,450
	実施回数	26回	10回	S		11	39	45	38
うちミュージアムトーク	参加者数	1,582人	1,200人	A		1,320	1,741	2,470	1,718
	実施回数	52回	40回	A		44	43	52	47
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 特別展や文化交流展示における展示作品について、多角的に学習の機会を提供し、理解促進に寄与するなど予定通り実施できており、また来館者の好評を得ている。								
【中期計画記載事項】 学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 特別展や文化交流展示における展示作品について、幅広い年齢層に対して学習の機会を提供し、理解促進に寄与しているため。								



日本画ワークショップ
「琳派の燕子花を描く」

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(2) 教育活動の充実 ②-1 ボランティア活動の支援								
【年度計画】 (東京国立博物館) 1) 各種教育事業及びイベントの補助活動等の充実を図る。 2) 点字パンフレット、触知図、盲学校対応プログラム等による視覚障がい者対応、手話やコミュニケーションボード等による聴覚障がい者への博物館案内等、バリアフリー活動を実施する。 3) 自主企画グループによる各種ガイドツアー等を継続して実施する。 4) ボランティアの自主性を活かし、ボランティアデーなどにおいてボランティアの企画立案によるプログラムの充実を図る。									
担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	ボランティア室長 鈴木みどり						
【実績・成果】 (東京国立博物館) 1) 館内各所での案内、本館19室みどりのライオン体験コーナー、東洋館オアシスでの活動、職場体験の活動補助の他、イベント班とワークショップ班による、年間を通じた各種イベント・ワークショップの補助活動を実施。また、今年度よりスクールプログラム班を立ち上げ、スクールプログラムの一部をボランティアにより実施した。また、各活動実施のための研修会・解説会を実施した。 2) 通年で触知図やコミュニケーションボード等を用いたバリアフリー活動を実施。バリアフリー対応班により、盲学校を含む視覚障がい者対応、点字パンフレットの印刷、自主企画グループにより手話通訳付きのガイドを実施した。また、実施準備や活動のための研修会を実施した。 3) 新規1グループを含めた全16の自主企画グループによるガイドツアー等の活動を実施した。また、研究員による、ボランティア活動のための研修会を実施した。 4) 通常の自主企画グループの活動の他に「留学生の日」・「ボランティアデー」・「博物館でお花見を」・「博物館でアジアの旅」などでの活躍の場を設け、より自主性を持った活動を行えるよう支援した。また、ボランティアデーでは、新規ボランティア応募者を対象に募集説明会とボランティアによるボランティア活動紹介ツアーを実施した。									
【補足事項】 2) バリアフリー活動として、点字パンフレットを22冊作成、手話通訳付きガイドツアーとして「たてももの散歩ツアー」(隔月1回、全6回)を実施した。 3) ・各自企画グループ及びボランティア活動紹介ツアー等を実施した。 (374回 13,428人) ・自主企画グループ(16グループ)による活動は以下のとおり。 樹木ツアー、浮世絵ガイド、本館ハイライトツアー、法隆寺宝物館ガイド、考古展示室ガイド、陶磁ガイド、庭園茶室ツアー、お茶会、彫刻ガイド、英語ガイド、こどもたちのアートスタジオ、たてももの散歩ツアー、たんけんマップ、近代美術ガイド、東洋館ツアー、刀剣・武士の装いツアー ・ボランティアに対する研修を行った。(80回、解説会6回) ※「東京藝術大学大学院インターンシップ」は、従前との比較のため、ボランティア数の内数として計上している。従前の「東京芸術大学学生ボランティア」を25年4月より名称変更し、現在は「2(2)③大学との連携」の事業である。詳細は処理番号2231を参照。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	23	23	24	25
ボランティア数		173人	—	—	化	159	169	170	169
うち生涯学習ボランティア登録者数		158人	—	—		152	163	164	152
※うち東京藝術大学大学院インターンシップ数		15人	—	—		7	6	6	17
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 順調にボランティア活動及び活動支援を行っている。							
【中期計画記載事項】教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化に等により博物館支援者の増加を図る。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 ボランティアの特性を活かしながら順調に実績をあげている。							



触知図を使った館内案内
(生涯学習ボランティアによるバリアフリー活動)

【書式A】

施設名 京都国立博物館処理番号 2222-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信										
事業名	(2) 教育活動の充実 ②-1 ボランティア活動の支援										
【年度計画】 (京都国立博物館) 1) 平成知新館の新装開館に向け、新規ボランティア事業を立ち上げるための準備を行うとともに、平成知新館でのボランティア活動を開始する。 2) 調査・研究支援ボランティアを受け入れ、各種事業活動の充実を進める。 3) 文化財に親しむ授業講師(文化財ソムリエ)として大学生・大学院生ボランティアを育成し、小中学校への訪問授業を実施する。 4) 「京都・らくご博物館」において、大学生をボランティアとして起用する。											
担当部課	学芸部	事業責任者	教育室長 山川 暁								
【実績・成果】 (京都国立博物館) 1) 9月13日の平成知新館オープンとともに、新規ボランティアである京博ナビゲーターの活動を開始した。京博ナビゲーターの募集・活動開始にあたっては、募集説明会(1日×6回)や基礎講座(1日×8回)を実施した。 2) 収蔵品調査及び社寺調査の補助のため、調査・研究支援ボランティアを受け入れた。(16人) 3) ・文化財ソムリエを対象としたスクーリングを実施した。(21回) ・文化財ソムリエによる、京都市内の小中学校への訪問授業等を実施した。(7回) 4) 「京都・らくご博物館」において、大学生をボランティアとして起用した。(9人)											
【補足事項】 1) 京博ナビゲーターは、150名の募集に対して358名の応募があり、選考の結果163名が登録された。それぞれ月1回程度来館し、平成知新館内のミュージアム・カートやレファレンス・コーナーにて活動を行った。最も混雑した時期の簡易統計によれば、ミュージアム・カートは一日500人以上の来館者に利用されていた。 2) 各研究員の指導のもと、調査・研究支援ボランティアが収蔵品調査及び社寺調査の補助を行った。 3) 「文化財ソムリエ」として登録している大学生・大学院生のボランティア(22名)に対して、当館研究員がスクーリング21回を実施した。教材となる文化財や教育普及の手法についてレクチャーを行い、文化財ソムリエが授業案や教材を作成するにあたって、議論を促し、指導・助言を行った。本年度は「平成26年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を受け、教員と意見交換をするための交流会の開催、他館活動の調査なども精力的に行った。											
【定量的評価】項目				26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25	
ボランティア数				210人	—	—	経 年 変 化	40	64	45	45
うち京博ナビゲーター				163人	—	—		—	—	—	—
うち調査・研究支援ボランティア数				16人	—	—		15	22	21	25
うち文化財ソムリエ数				22人	—	—		7	14	16	13
うちらくご博物館学生ボランティア数				9人	—	—		—	10	8	7
【年度計画に対する総合評価】				【判定根拠、課題と対応】							
評価：A				京博ナビゲーターの活動を立ち上げるなど、予期以上の多大な成果をあげた。							
【中期計画記載事項】 教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化に等により博物館支援者の増加を図る。											
【中期計画に対する評価】				【判定根拠、課題と対応】							
評価：A				新規ボランティアを加え、きわめて充実した活動を展開することができた。							



文化財ソムリエへのスクーリング

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ②-1ボランティア活動の支援							
【年度計画】 (奈良国立博物館) 1) ボランティアの各グループ（世界遺産グループ、解説グループ、サポートグループ）の活動の充実を図る。 2) ボランティアの資質向上を目的に、定期的に研修を実施する。 3) 勉強会や見学会等によって、ボランティア同士のグループ別学習の充実を図る。 4) ボランティアの自主性を活かし、ボランティアによる企画立案プログラムの充実を図るための支援を行う。								
担当部課	ボランティア室	事業責任者	室長 清水 功					
【実績・成果】 (奈良国立博物館) 1) ボランティアの新制度が発足して3年目になり、世界遺産グループ、解説グループ、サポートグループ、それぞれの活動がより充実した。奈良市教育委員会と連携し、世界遺産学習として奈良市の35校の小学5年生（2,281人）を受け入れ、また同学習で県内外の小学生～高校生（18校, 1,045名）を受け入れた。 2) ボランティア全員に対して、名品展研修を毎月実施し、また特別展、特別陳列の開催ごとに展覧会担当者による展示内容の研修を実施して全ての展覧会図録を配布し、解説と自己研修のための学習資料とした。正倉院展の会期中に、ボランティアによる講堂解説を実施した。このため、教育室がスライド資料と原稿を作成し、ボランティア室が約1ヵ月間の練習の立会と指導をした。 3) ボランティアのグループ別に、毎月の勉強会を実施し、その指導に当たった。チーム力と知識の向上を図るため、毎月それぞれテーマを決めて勉強会を行った。解説グループの勉強会では、オブザーバーとして学芸部が立会、指導した。 4) ボランティアによる自主企画として、敷地内の茶室庭園や仏教美術資料研究センターの案内ツアーを実施した。プログラムの企画立案にあたって、学芸部や総務課の協力を得ながら、ミーティングの立会と指導をした。また、ボランティア活動3年目の集大成として、12月に「ボランティア・フェスタ」を実施した。ボランティア・フェスタの企画立案にあたり、実行委員会を組織し、ボランティア室と約1年間計画を練り、ボランティア全員が何らかの活動で関われるよう助言を行った。								
【補足事項】 1) ・正倉院展講堂解説では、解説グループ・世界遺産グループ・サポートグループの3つが協力して、成果を上げた。 ・他施設のボランティアとの交流会を実施し、スライドでボランティア活動を紹介し、当館の展示や施設の案内を行った。また、10月に京エコロジーセンターのシンポジウム「博物館・公園等ボランティア交流会」に参加し、当館ボランティア活動の紹介をして、他館ボランティアと交流を深めた。 ・世界遺産学習では、なら仏像館閉館に伴い、9月から特別プログラム「仏像・いろいろ」を実施した。プログラムの実施にあたり、教育室の指導で原案を作成し、ボランティア室の指導を基に約2ヵ月間の練習を行った。 ・英語や韓国語で、名品展解説を行った。 2) ・ボランティア間の通信誌「ぶりっじ」を、2ヵ月ごとに発行した。 3) ・ボランティアの企画立案による「茶室庭園案内ツアー」を26年4月に、合計2回実施した。「仏教美術資料研究センター見学ツアー」を26年4月に、合計2回実施した。実施にあたって、数回のリハーサルを行い、万全を期した。 ・特別陳列「お水取り」のツアー解説を27年3月に、14日間実施した。 ・ボランティア間の交流と研修を兼ねて、社寺旧跡見学会を26年4月・5月・10月の合計3回実施した。 ・修学旅行生のためのプログラム「仏像の見方」のスライドを、教育室の協力とボランティア室の指導のもとに作成した。27年度に実施する予定。								
 <p>「世界遺産学習」の活動風景</p>  <p>「ボランティア・フェスタ」の活動風景</p>								
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
ボランティア数	110人	—	—		85	87	121	114
うち世界遺産グループ数	38人	—	—		—	—	42	41
うち解説グループ数	43人	—	—		—	—	43	39
うちサポートグループ数	29人	—	—		—	—	36	34
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 ボランティア活動の支援の一層の充実に向け、各グループの活動もより活性化し、また「ボランティア・フェスタ」などの自主的な企画も成功し、当初の目的を達成した。							
【中期計画記載事項】教育活動の充実へ寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化に等により博物館支援者の増加を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 小中高生への世界遺産学習や来館者への解説などの、ボランティア活動への支援により教育普及の充実へ寄与した。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2224-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ②-1 ボランティア活動の支援							
【年度計画】 (九州国立博物館) 1) ボランティアを受け入れ、展示解説部会、教育普及部会、館内案内部会(日本語、英語、中国語、韓国語)、環境部会、イベント部会、資料整理部会、サポート部会、学生会部の充実を図る。 2) ボランティアに対し資質向上を目的に基礎研修・専門研修を実施する。 3) ボランティア同士のグループ別学習の充実を図る。								
担当部課	交流課	事業責任者	ボランティア室主任研究員 八尋智之					
【実績・成果】 (九州国立博物館) 1) 第3、4期ボランティアの体的な活動を重視することによって、活動意欲の向上、活動の活性化・充実、そして市民視点の活動の創造等が行われた。 2) ボランティア自身の企画・実施による研修等を積極的に実施することで、活動の資質の向上や活性化、発展が行われた。 3) 各部会において研修やグループ別学習、活動を行った。また、グループ活動や子どもフェスタにおいて、部会の枠を超えてボランティア同士が活動を行った。								
【補足事項】 1) 第4期ボランティアを中心に、第3期ボランティアからアドバイスを受けながら活動を行った。開館以来の活動に加え、新たな視点・思いによる活動が加わり、活動の発展や充実が計られた。 ・各期ボランティア数(26年度当初) 第3期ボランティア(23年4月から活動)数 144人 第4期ボランティア(26年4月から活動)数 208人 ・通常の活動においては、1日平均30～40名、1ヵ月平均延べ1,000人前後のボランティアが、主に午前と午後に分かれて活動。約6割のボランティアが週1回程度で活動 ・日常の活動は、館内案内、あじっば(体験型展示室)における活動のサポート、文化交流展示室の解説案内、博物館内のIPM活動。土日を中心とした手話通訳による案内。 2) 活動の活性化・発展・創造やボランティアの資質向上を目的に、ボランティア自身の意向に沿った研修や館外研修(視察・交流等)を実施した。 〔主な研修〕障がい者接遇・英語解説講座・古代韓国歴史講座・古文書講座・IPM関連講座 〔主な館外研修先〕壱岐市立一支国博物館・熊本市現代美術館・兵庫県立人と自然の博物館・兵庫県立考古博物館・装飾古墳館・宇佐神宮・伊都国歴史博物館等 3) 企画から実施まで、全てボランティアに担わせることで、イベントやワークショップのみならず、通常の活動においてボランティア自身や部会(グループ)の主体性や自主性を高めることができた。 〔実施したイベント等〕お月見(26年9月)・手作り年賀状作り(26年12月)・書き初め(27年1月)								
 <p>ボランティア研修の様子 (バックヤードツアー：第3期による第4期への指導)</p>  <p>学生会部イベントの様子 (オリジナル年賀状作りのワークショップ)</p>								
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
ボランティア数	352人	—	—	経年変化	288	355	308	287
うち展示解説ボランティア数	86人	—	—		63	84	77	75
うち教育普及ボランティア数	37人	—	—		53	48	41	39
うち館内案内ボランティア数	38人	—	—		32	31	29	26
うち外国語案内ボランティア数	94人	—	—		53	89	69	63
うち環境ボランティア数	33人	—	—		28	38	35	29
うちイベントボランティア数	6人	—	—		10	10	6	6
うち資料整理ボランティア数	25人	—	—		18	20	19	19
うちサポートボランティア数	24人	—	—		19	25	23	22
うち学生ボランティア数	9人	—	—		12	10	9	8
【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 当初計画していたよりも多くの研修を、ボランティアが企画したため、充実した活動を行うことができたため。また、他部会との交流も積極的に行う部会が多かったため。							
【中期計画記載事項】教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化に等により博物館支援者の増加を図る。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 来館した学校団体へは、ボランティアが活動を支援することができた。次年度は博物館と学校の相互交流をより活発に行うため、出前授業を行う予定である。この時、講師として職員だけでなく、当館ボランティアも参加する計画である。また、特別支援学校への対応は職員中心に行っているが、当館ボランティアも含めて、対応を検討していく。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ②-2博物館支援者の増加							
【年度計画】 (4館共通) 企業との連携及び友の会活動等の会員制度の活性化を図る。 1) 会員制度によるリピーターの拡大に努める。 2) 会員制度利用者を対象とした事業を実施する。 3) 企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。 4) 展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。 (東京国立博物館) 1) 各種会員制度を整理し、割引の適用や新たな会員制度を導入することで、リピーターの促進や若年層の拡充を図る。 2) 近隣地域の諸団体や支援団体等と連携したイベントの実施及び広報活動の充実を図る。								
担当部課	総務部総務課	事業責任者	課長 竹之内勝典					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 26年4月の消費税率改定による料金の改定に伴い、これまで独立していた賛助会・友の会・パスポートの会員制度を一元化し、支援者の選択の幅を広げ、継続的に支援しやすい体系に整備した。 2) 友の会、賛助会会員を対象に、講演会を実施した。また、賛助会会員を対象に感謝会を実施した。 3) 日本橋三越本店と銀座三越の三越新春祭と当館の「博物館で初もうで」での共同企画を実施し、当館の宣伝活動の拡大を図った。 4) 一部の特別展において、三菱商事株式会社と共催で「障がいのある方のための特別鑑賞会」を実施した。 (東京国立博物館) 1) 26年4月の会員制度改定後、個人会員が大幅に増加した。26年度末時点で友の会会員数2,145人(前年度比35%増)、パスポート会員数20,302人(前年度比23%増)となり、新規に創設したベーシック会員も1,038人の新規会員を集めた。賛助会についても、会員数414件(前年度比9%増)、金額ベース8%増を達成した。 2) ・上野ミュージアムウィーク(上野のれん会との共催)、上野の山文化ゾーンフェスティバル(台東区との共催)及び東京・春・音楽祭(東京・春・音楽祭実行委員会との共催)等、地域連携事業に参加した。 ・27年3月14日のJ R上野東京ラインの開業に合わせて国立科学博物館、国立西洋美術館との3館を回れる共通入場チケットを3万枚発行し、上野地域の周遊を促した。								
【補足事項】 (4館共通) 1) 会員へ新会員制度の案内を積極的に行い、リピーターの拡大、及びより上位の会員への移行の推進に努めた。 2) 友の会、賛助会向けに東大寺講演会を実施した。 3) 三越と共同で行った新春祭では、新聞折込や店頭配布、DMなど合計で100万部のチラシにて当館の「博物館に初もうで」の周知ができ、27年1月2日、3日の当館への来館者も過去最高を記録した。8,000人以上が参加したメダルラリーや三越でのトークショー、各種ワークショップの実施など、様々な共同企画を実施した。 4) 「栄西と建仁寺」(4月18日)、「台北 国立故宫博物院展」(7月12日)にて  三越新春祭トークショー(銀座三越) (東京国立博物館) 1) 26年4月1日に会員制度全体をわかりやすく制度改定し、パスポートから友の会、友の会から賛助会へと移行を促す工夫をした。								
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
友の会会員数	2,145人	—	—	経年変化	1,412	1,802	1,570	1,586
パスポート会員数	20,302人	—	—		13,733	17,672	16,569	16,474
ベーシック会員数	1,038人	—	—		—	—	—	—
賛助会員数	414件	—	—		235	292	332	379
個人会員(プレミアム)	2人	—	—		—	—	—	—
(特別)	6人	—	—		—	—	—	—
(維持)	345人	—	—		191	238	269	315
団体会員(プレミアム)	—	—	—		—	—	—	—
(特別)	20団体	—	—		16	19	20	20
(維持)	41団体	—	—		28	35	43	44
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 個人会員の大幅増を達成できた。団体会員は微減となったが、金額ベースでは増となった。次年度は団体会員数増に重点化して取り組みたい。また、大手百貨店との共同企画等を博物館の来館者数増につなげることができており、企業や地域との連携は順調に実施できている。							
【中期計画記載事項】教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化に等により博物館支援者の増加を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 個人の会員数の増加、企業との共同事業や地域との連携の拡大は、順調に達成できていると評価できる。							

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 2222-2

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(2) 教育活動の充実 ②-2博物館支援者の増加								
【年度計画】 (4館共通) 企業との連携及び友の会活動等の会員制度の活性化を図る。 1) 会員制度によるリピーターの拡大に努める。 2) 会員制度利用者を対象とした事業を実施する。 3) 企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。 4) 展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。 (京都国立博物館) 1) 支援団体等が行う文化財の鑑賞会・見学会等に協力する。									
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長 企画室長	植田義雄 宮川禎一					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 「パスポート」事業を継続し、リピーターの拡大に努めた。 2) 「パスポート」会員を対象とした事業を実施した。 3) 企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努めた。 4) 22年度に設置した「ミュージアム・パートナー」制度について引き続き周知を続けた結果、新たに株式会社日本香堂がパートナー会員になった。 (京都国立博物館) 1) 支援団体(社団法人清風会)が行う鑑賞会(3回)・見学会(3回)・会報(3回)の解説・執筆及び、総会の開催に協力した。また、地域・機関との連携事業に協力した。									
【補足事項】 (4館共通) 2) 「パスポート」会員が当館ミュージアムショップにおいて、「パスポート」会員カードを提示すると、商品(書籍・グッズ等)が10%引きで購入できる等の特典がある。 3) ・人間国宝 桂米朝氏の所属している米朝事務所の制作協力による「京都・らくご博物館」を実施した。今年度は春、秋、冬の3回実施した。 ・アメリカンエクスプレス会員を対象に落語会・特別鑑賞会を開催し博物館の認知度向上に努めた。 ・JR東海と連携し、夜間特別鑑賞会を開催することで、博物館の認知度向上に努めた。 ・ハースト婦人画報社と連携し、特別鑑賞会を開催した。 ・三越伊勢丹と連携し、特別鑑賞会を開催した。 ・ハイアットリージェンシー京都と連携し、平成知新館開館記念セレモニーを開催した。関係者約1,700人を招待したほか、各メディアで大きく取り上げられた。 (京都国立博物館) 1) 「京都市内4館連携協力協議会」では、京都国立近代美術館、京都市美術館、京都文化博物館、京都国立博物館の4館が連携し、広報のための合同パンフレットを60,000部製作、連携講座やスタンプラリーを実施するなど事業内容の充実を図るとともに、「友の会」の相互協力を行った。									
 京都市内4館連携合同パンフレット									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
パスポート会員数		6,522人	—	—	経年変化	2,468	2,667	3,064	2,295
ミュージアム・パートナー会員数		1件	—	—		1	2	—	—
清風会会員数		350人	—	—		391	373	353	336
うち賛助会員数		32人	—	—		34	34	33	30
うち特別会員数		63人	—	—		61	61	60	58
うち普通会員数		255人	—	—		296	278	260	248
【年度計画に対する総合評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 企業等と連携し、閉館後の特別鑑賞会などを開催し好評を得た。また平常展示館建替工事中のため2回しか行えなかった「京都・らくご博物館」を、年3回開催した。							
【中期計画記載事項】教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化に等により博物館支援者の増加を図る。									
【中期計画に対する評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 パスポート会員が大幅に増加し、また企業との多彩な連携事業を展開するなど、博物館支援者の増加を図ることができた。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ②-2博物館支援者の増加							
<p>【年度計画】 (4館共通) 企業との連携及び友の会活動等の会員制度の活性化を図る。 1) 会員制度によるリピーターの拡大に努める。 2) 会員制度利用者を対象とした事業を実施する。 3) 企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。 4) 展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。 (奈良国立博物館) 1) 支援団体等との連携により施設を活用したイベント等を実施し、博物館支援の輪を広げる。 2) 支援団体等と連携し、展覧会の充実を図る。 3) 賛助会員制度の継続・拡充を図る。 4) 地域、企業との連携を推進する。</p>								
担当部課	総務課渉外室企画推進係	事業責任者	係長 石田義則					
<p>【実績・成果】 (4館共通) 1) パスポート会員 会員数3,162人(一般3,026人、学生99人、家族37人) 2) 会員に夏季講座を優先的に受講できるようにした。 3) 株式会社日本香堂提供のラジオ番組で、展覧会のPRを行った。 4) 他の主催者と連携し、企業等からの協賛・協力を募った。 (奈良国立博物館) 1) 支援団体等が主催する展覧会の解説付の鑑賞会の実施に協力した。 2) 特別展の実施に際して企業等からの協力金を得て特別展の充実を図った。 3) 賛助会員 27団体46人(特別支援会員：5団体、特別会員：4団体、一般会員(個人)：46人、(団体)：18団体) 4) 観光関連業界と連携し顧客層の開拓を行った。奈良の観光イベント「ムジークフェストなら2014」、「ライトアッププロムナード・なら2014」、「なら燈花会」、「なら瑠璃絵」に対して協力した。</p>								
<p>【補足事項】 ・ 賛助会員に対する特別観賞会を実施するなど、あらゆる機会を通じて会員獲得に対する努力を行った。 ・ 24・25年度に引き続いて26年度も日本香堂からの寄附があり、仏像彫刻の解説冊子『仏像を観る』（日本語版、英語版）の改訂版を、寄附金により作成した。</p>								
			 <p>ムジークフェストなら2014</p>	 <p>なら瑠璃絵</p>	 <p>日本香堂の寄附により作成した『仏像を観る』（日本語版）表紙</p>			
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
パスポート会員数	3,162人	—	—	経 年 変 化	3,180	2,615	2,486	2,598
賛助会員数	73件	—	—		64	65	68	70
うち特別支援会員数	5団体	—	—		4	5	5	5
うち特別会員数	4団体	—	—		4	5	5	4
うち一般会員数	64件	—	—		56	55	58	61
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 パスポート会員が昨年度比564名増や、賛助会員が3会員増など新たな博物館支援者を獲得する事ができた。							
【中期計画記載事項】教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化に等により博物館支援者の増加を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 順調に成果を上げているため。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2224-2

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(2) 教育活動の充実 ②-2博物館支援者の増加								
【年度計画】 (4館共通) 企業との連携及び友の会活動等の会員制度の活性化を図る。 1) 会員制度によるリピーターの拡大に努める。 2) 会員制度利用者を対象とした事業を実施する。 3) 企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。 4) 展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。 (九州国立博物館) 1) 近隣地域の諸団体や支援団体等と連携したイベントの実施及び広報活動の充実を図る。									
担当部課	総務課 広報課 交流課	事業責任者	課長 課長 事務主査	阿部 勝 田端幸朋 岩橋神奈子					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 「友の会」等の会員制度を継続して実施した。 2) 「友の会」会員を対象に、季刊情報誌『アジアージュ』、トピック展示チラシ等の送付を行った。 3) 企業等と連携し、広報活動を行った。 4) 展覧会事業への企業からの協賛・協力を得た。 (九州国立博物館) 1) 支援団体や近隣地域と連携したイベントを実施し、広報活動の充実を図った。									
【補足事項】 (4館共通) 1) 「年間パスポート」の広報を実施した。 (九州国立博物館) 1) 支援団体や近隣地域と連携したイベント ・福岡県立太宰府高等学校と連携して、特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」に関連した書道実演を開催した。(26年5月25日) ・支援団体である九州国立博物館を愛する会と連携して、特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」に関連した影絵公演「水城跡のものがたり ひともっこ山と父子島」を開催した。(27年1月18日) ・福岡女子短期大学(太宰府市)と連携して館内のカフェで定期的にコンサートを実施した。 ・開館以来、9年連続で国の重要無形文化財である博多祇園山笠の飾り山をエントランスホールで展示した。この事業は、西日本新聞社と九州国立博物館振興財団との共同事業として実施した。 ・内容を勘案した上で、自治体等が主催するイベントを受け入れ、各団体との連携を強化した。 ・支援団体である九州国立博物館を愛する会、太宰府観光協会への内覧会を行った。(27年1月28日)				 <p>「近衛家の国宝」関連書道実演</p>  <p>「古代日本と百済の交流」関連影絵公演</p>					
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価					
友の会会員数		192人	—	—	22	23	24	25	
パスポート会員数		4,990人	—	—	144	117	196	141	
					経年変化	3,318	3,093	4,224	4,633
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 26年4月の消費税改定による料金の改定にも関わらず、友の会及びパスポート会員数はほぼ前年度並びを維持できた。各種イベントを実施し、博物館の活性化に寄与した。							
【中期計画記載事項】教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化に等により博物館支援者の増加を図る。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 「友の会」等の会員制度について、徐々にではあるが会員数を増やしている。各種イベントを実施し、博物館の活性化に寄与した。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ③大学との連携							
【年度計画】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) インターンシップを継続して実施する。 (東京国立博物館) 1) 東京藝術大学との連携事業を継続して実施する(大学院生対象)。 2) キャンパスメンバーズへの教育連携事業を実施する。 3) 日本大学芸術学部と連携し柳瀬荘アート・教育プロジェクトを実施する。								
担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育普及室長 小山弓弦葉 教育講座室長 浅湊毅 ボランティア室長 鈴木みどり 総務課長 竹之内勝典					
	総務課							
【実績・成果】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 博物館学芸員を目指す学生の学習意欲の喚起及び高い職業意識の育成を目的として、大学院生を対象にインターンシップを募集し、それぞれ学芸研究部・学芸企画部の9部署で10～30日間の活動を行い、11大学11名が修了した。 (東京国立博物館) 1) 東京藝術大学大学院インターンシップでは、ギャラリートーク(研究発表)班3名、調査研究班12名が活動した。ギャラリートーク班では大学院生と当館研究員が連携して準備を行い、総合文化展の解説を行った。調査研究班では館蔵の「突起装飾坏(TJ-5401)」の工程見本の展示及び教育普及事業を行った。 2) キャンパスメンバーズ加入校の学生を対象に、博物館の歴史、保存修復、博物館情報、教育普及事業等について当館の職員が実例を交えた解説を実施。また、キャンパスメンバーズ加入校の学芸員志望学生を対象として、作品の取り扱い等博物館実務全般について演習・実習を実施した。(9月8日～13日に実施し、21大学・34人が参加した) 3) 日本大学芸術学部と共同で「柳瀬荘アート・教育プロジェクト」を実施した。								
【補足事項】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) インターンシップ ・インターンシップの募集は、近隣の60大学への郵送による通知の他、全国あるいは国外からも応募できるようにウェブサイトでも行った。 ・インターンシップ受入部署 学芸研究部 上席研究員、東洋室、保存修復課、平常展調整室 学芸企画部 教育普及室、教育講座室、情報管理室、デザイン室、広報室 (東京国立博物館) 1) 東京藝術大学大学院インターンシップ ・東京藝術大学大学院インターンシップギャラリートーク(研究発表)班によるギャラリートーク 18回 参加人数 603人 ・東京藝術大学大学院インターンシップ調査研究班によるギャラリートーク 10回 166人、スライドトーク 1回 33人 ・東京藝術大学大学院インターンシップ調査研究班による制作工程模型展示「突起装飾坏ができるまで」 26年4月15日～27年4月6日 3) 26年10月9日～11月2日の木、金、土、日に実施し、計16日間226名の参加者を得た。								
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 60%;">  <p>東京藝術大学大学院インターンによるギャラリートーク</p> </div> <div style="width: 35%;">  <p>柳瀬荘アート・教育プロジェクト</p> </div> </div>								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 順調。目標通り事業を達成できた。							
【中期計画記載事項】大学との連携事業、各種セミナー、インターンシップ等の実施を通じて人材育成に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 順調。例年通り実施できた。							

【書式A】

施設名 京都国立博物館処理番号 2232

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ③大学との連携							
【年度計画】 (京都国立博物館) 1) 京都大学大学院人間・環境学研究科の歴史文化社会論講座を担当する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶					
【実績・成果】 (京都国立博物館) 1) 京都大学大学院人間・環境学研究科の歴史文化社会論講座において、研究員4人で8科目の授業を担当し、実際の文化財を教材にしながら、研究指導を行った。								
【補足事項】 ・研究員4人が客員教授(3人)、客員准教授(1人)を担当し、博士前期・後期課程の学生に対して、実作品の展示・調査活動を通じた専門的な教育を行った。博士後期課程の学生1名に対しては、同研究科の『歴史文化社会論講座紀要』に掲載する論文の指導を行い、修士課程の学生1名については、修士論文の指導を行った。 ・京都大学国際交流センターの日本語・日本文化研修留学生に客員教授の1名が「日本の美術」に関する特別講義を当館で行い、見学会を実施した。(12月3日に実施、留学生19人)								
								
学生とのフィールドワーク								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 博士後期課程及び修士課程の学生に対して専門的な教育や論文指導等を着実に実施し、また、日本語・日本文化研修留学生のための授業も行うなど、順調に成果を上げた。							
【中期計画記載事項】大学との連携事業、各種セミナー、インターンシップ等の実施を通じて人材育成に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 博士後期課程と修士課程の学生に指導を行い、計画通り、着実に人材育成を図っている。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(2) 教育活動の充実 ③大学との連携							
【年度計画】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) インターンシップを継続して実施する。 (奈良国立博物館) 1) 奈良女子大学及び神戸大学との連携講座を継続して実施する(大学院生対象)。 2) 奈良教育大学・奈良市教育委員会と連携して世界遺産学習のプログラム開発を進める。								
担当部課	総務課総務係 学芸部企画室	事業責任者	係長 金谷嘉久 室長 野尻 忠					
【実績・成果】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 立命館大学から3名の学生をインターンシップとして受け入れた。 (奈良国立博物館) 1) 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程に学芸部研究員1名を客員准教授として派遣し、日本古典資料論の講義を行った。授業の内容は古典資料講読を中心とし、受講生は前期4人、後期4人であった。 ・神戸大学大学院人文学研究科の連携講座文化資源論に、学芸部研究員2人を客員教授と客員准教授として派遣し、文化資源論の講義を行った。受講した学生は同研究科の修士課程、博士課程の大学院生16人であった。 2) 26年11月9日(日)、奈良市教育センター及びなら100年会館を会場として、「第5回世界遺産学習全国サミットinなら」を文部科学省・奈良市教育委員会・奈良教育大学等と共同で開催し、女優・タレントのサヘル・ローズ氏及び帝塚山大学教授の西山厚氏による『「伝えるということ」～未来を創るあなたへ』と題した対談及び子供達による世界遺産学習発表会を行った。								
【補足事項】								
								
「第5回世界遺産学習全国サミットinなら」チラシ								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 年度計画どおり、各種の事業を実施できた。							
【中期計画記載事項】大学との連携事業、各種セミナー、インターンシップ等の実施を通じて人材育成に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 大学との連携事業、各種セミナー、インターンシップを継続的に実施しており、これらの取り組みを通じて人材育成に寄与できている。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2234

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(2) 教育活動の充実 ③大学との連携								
【年度計画】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) インターンシップを継続して実施する。 (九州国立博物館) 1) 博物館実習生の受け入れを実施する。									
担当部課	学芸部博物館科学課 交流課	事業責任者	課長 教育普及室主任研究員	今津節生 池内一誠					
【実績・成果】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 当館の保存修復施設を利用して地域大学との協業を図る短期インターンシップ研修プログラムを実施した。 (九州国立博物館) 1) 博物館実習生を11大学15人、計10日間受け入れた。(うちキャンパスメンバーズ校は5大学8人) ○ 博物館見学実習に対応した。(16件延べ491人)									
【補足事項】 (東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) ・装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」を実施した。(26年8月18日～22日) ・吉備国際大学2人、九州産業大学2人、別府大学1人、広島市立大学1人の計4大学6人が研修に参加した。 ・研修では屏風の下貼り作製に関する講義と実習を通じて、文化財保存修復に対する参加学生の理解と研鑽を深めることができた。 (九州国立博物館) 1) ・実習実施期間 26年8月20日～9月1日(のべ10日間) ・実習内容は、博物館の各機能に関するレクチャー、来館者対応についての実習、展示企画の立案についての実習等を行った。 ○ ・見学実習に対応した大学は、九州産業大学(50人)、九州造形短期大学(150人)、熊本大学(25人)、徳島大学(8人)、崇城大学(10人)、筑紫女学園大学(全4回144人)、佐賀女子短期大学(25人)、香蘭女子短期大学(16人)、長崎国際大学(32人)、九州大学大学院(24人)、早稲田大学(13人)、大阪工業大学(30人)、北九州市立大学(14人) ・見学実習の対応は、研究員による解説、ボランティアによる解説等、大学側の要望等にあわせて実施した。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
インターンシップ及び博物館実習参加者数		21人	—	—	経年変化	21	28	29	28
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 館内各部門の協力を得て、順調に博物館実習を実施できているため。							
【中期計画記載事項】大学との連携事業、各種セミナー、インターンシップ等の実施を通じて人材育成に寄与する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 博物館実習、見学実習を継続して順調に実施できており、人材育成に寄与できているため。							



博物館実習：作品取扱実習（金工）の様子

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ①施設・設備等の充実(1/2)							
【年度計画】 (4館共通) 1) 特別展において音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、来館者に対するサービスの向上を図る。 (東京国立博物館) 1) 多言語による案内及び誘導サイン等を順次整備する。 2) より快適な観覧環境を構築するため、展示照明を順次整備する。 3)～6) (略)								
担当部課	総務部経理課 学芸企画部企画課 学芸企画部企画課	事業責任者	環境整備室長 大江信浩 特別展室長 松嶋雅人 デザイン室長 木下史青					
【実績・成果】(4館共通) 1) 当館開催の特別展のうち、6つの特別展で音声ガイドを実施し、来館者サービスの向上を図った。特別展「キトラ古墳壁画」の音声ガイドでは、松尾佳子(声優)のナビゲーター起用等が好評を博し、貸出率が24.8%となった。 (東京国立博物館) 1) 27年1月2日(金)リニューアルオープンした「黒田記念館」への案内について、東博敷地(正門)から記念館までの誘導サインを多言語で整備した。 2) ・リニューアルオープンした黒田記念館の黒田記念室において、天井間接照明用スプレッドレンズ付LEDスポットライトを整備したことにより、展示室全体の明るさ感が向上し、天井装飾を効果的に照明する効果が得られた。 ・東洋館のさらなるお客様誘導効果と親しみやすさ向上のため、東洋館入口前にサインと懸垂幕を設置し、懸垂幕と獅子に対して新たに照明を整備した。								
【補足事項】								
								
黒田記念館へのサイン整備		東洋館入口前サイン、懸垂幕		黒田記念室・天井間接照明				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
音声ガイド貸出台数	261,241台	—	—	年変化	130,850	319,172	225,235	154,056
展示照明整備件数	12件	—	—		4	3	3	2
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 所定の目標を達成し、来館者へのサービス向上に成果を出した。							
【中期計画記載事項】施設のバリアフリー化、各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 新規にリニューアルオープンした施設等を含め、計画にあげたサービス提供が実現できている。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 2311-2

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信									
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ①施設・設備等の充実(2/2)									
<p>【年度計画】 (4館共通)1) (略) (東京国立博物館)1)2) (略) 3) 総合文化展におけるスマートフォンアプリを用いたガイド「トーハクナビ」(日本語版・英語版)・「法隆寺宝物館30分ナビ」(日本語版・英語版)を引き続き実施する。 4) 障がい者のために点字版パンフレット等を引き続き配布する。 5) 「総合案内パンフレット」(7言語(8種):日、英、中(簡体字・繁体字)、韓、仏、独、西)を制作・配布する。 6) 本館2階「日本美術の流れ」の展示を外国人に理解してもらうために、より基礎的な解説を盛り込んだ、3言語(英、中、韓)のパンフレットを継続して制作・配布する。 7) 育児中の来館者が快適に観覧できるよう託児サービスを提供する。</p>										
担当部課	総務部総務課 学芸企画部博物館教育課 学芸企画部広報室	事業責任者	課長 竹之内勝典 課長 小林 牧 教育普及室長 小山弓弦葉 室長 伊藤信二							
<p>【実績・成果】 (東京国立博物館) 3) 24年度より公開しているアプリ「トーハクナビ」(日・英)の提供を継続した。 26年4月にはAndroid版とiOS版コンテンツで機能とコンテンツを統一したver. 2.0を公開し、さらに10月にバージョンアップ(ver. 3.0)を行い、「本館2階 日本美術の流れコース」に新たに「今日のオススメ」作品ガイド機能を搭載した。また、iOSアプリ「法隆寺宝物館30分ナビ」(日本語・英語対応)を引き続き公開した。 4) 障がい者の方のための点字版パンフレット等を引き続き配布した。 5) 総合案内パンフレット「案内と地図」(7言語(8種):日、英、中(簡体字・繁体字)、韓、仏、独、西)の制作・配布を行った。 6) 本館2階「日本美術の流れ」の展示を外国人に理解してもらうために、より基礎的な解説を盛り込んだ3言語(英、中、韓)のカラーパンフレットを継続して制作・配布した。展示テーマと主な展示作品の解説を収録した日本語版は展示替えに応じて更新・配布した。11月、「トーハクナビ」の「今日のオススメ」作品ガイドの配信開始に伴い、『博物館ニュース』ページ中の「日本美術の流れ」を「今日のオススメ」と連動させ、アプリ掲載作品ガイドをかねるパンフレット「日本美術の流れ 今日のおすすめ」として作成し、配布した。また、総合文化展の見学ポイントを示し、鑑賞と理解を促す子供向けワークシート「本館1階見学マップ」「本館2階見学マップ」「暮らしの道具 今日」の4種を制作・配布した。 7) これまで試行実施に留まっていた託児サービスを、26年度より通年で実施した。</p>										
<p>【補足事項】 3) 各アプリの今年度のダウンロード件数は以下の通りである。 ・Android版「トーハクナビ」2,615件(累計6,353件、24年4月18日公開) ・iOS版「トーハクナビ」5,995件(累計8,923件、25年9月26日公開) ・iOSアプリ「法隆寺宝物館30分ナビ」1,071件(累計22,926件、23年1月20日公開)</p>										
										
			「トーハクナビ」作品ガイド画面			正門プラザ内託児室				
<p>(東京国立博物館) 6) 「日本美術の流れ」パンフレット 日本語版計17回更新(第312号～第329号)、「日本美術の流れ 今日のおすすめ」パンフレット(26年1月から毎月1回) 7) 託児サービスは特別展の有無に限らず通年で実施した。会場は昨年度までの会議室ではなく、正門プラザ内に新設された託児室を使用。サービスは原則毎月第1、第3土曜日、第2、第4水曜日の4回提供を行い、26年4月23日(水)～12月20日(土)の30回実施、利用者数は58人(児童数60人)だった。昨年度に引き続き、アンケートではご利用いただいたすべてのお客様から、サービスに対して満足であるとの回答を得た(「大変良かった」91%、「良かった」9%)。今後は更に利用者を増やすことができるよう、ウェブサイト上での告知等、引き続き広報活動を進める予定である。 ○新設された正門プラザ内に授乳室を開設した。 ○23年度より開始したベビーカー貸出サービスを継続した。</p>										
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年	22	23	24	25	
リーフレット等		7言語	7言語	B	変化	7	7	7	7	
【年度計画に対する総合評価】 評価: A			【判定根拠、課題と対応】 順調。「トーハクナビ」の作品解説(日・英)掲載開始により、本館展示案内のいっそうの充実がはかられた。また、託児サービスの本運用を行うなど、多岐にわたり観覧環境の整備に努めた。							
【中期計画記載事項】 施設のバリアフリー化、各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。										
【中期計画に対する評価】 評価: B			【判定根拠、課題と対応】 順調。「トーハクナビ」の作品解説(日・英)掲載開始により、より時代に即したサービスを提供できた。託児サービスを始めとして、来館者の様々なニーズに応じた観覧環境の整備を着実に進めている。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ①施設・設備等の充実							
【年度計画】 (4館共通) 1) 特別展において音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、来館者に対するサービスの向上を図る。 (京都国立博物館) 1) 快適な観覧環境を提供するための平成知新館の建替プログラムを継続して推進する。 2) 館内案内リーフレット(6言語：日、英、中、韓、仏、西)を継続して制作・配布する。								
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長 植田義雄 部長 松本伸之					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 特別展及び平常展（平成知新館名品ギャラリー）において音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、来館者に対するサービスの向上を図った。 (京都国立博物館) 1) 25年度に展示製作工事が完了した平成知新館（名品ギャラリー）の開館準備として、より快適な観覧環境を提供するため、外構工事（本館前庭整備）、南門ショップ改修整備、サイン追加整備を実施した。 2) 前年度に製作した館内案内リーフレット(6言語：日、英、中、韓、仏、西)を継続して配布した。また、平成知新館展示案内リーフレット(6言語：日、英、中、韓、仏、西)を新規に制作・配布した。								
【補足事項】 (4館共通) 1) 音声ガイド利用台数 計76,671台 特別展覧会「南山城の古寺巡礼」（日本語のみ）8,753台 平成知新館オープン記念展「京へのいざない」（4言語：日、英、中、韓）18,246台 特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」（日本語のみ）40,328台 平成知新館 名品ギャラリー(4言語：日、英、中、韓)9,374台 (京都国立博物館) 1) ・文化財保存修理所の車椅子用便所を温水暖房付便器に改修した。 ・南門休憩室を文化財保護基金コーナーに改修し、南門ミュージアムショップを拡充した。 ・平成知新館開館に合わせて重要文化財旧表門「正門」を一般のお客様の退館及び、団体のお客様の入退館用として利用を開始した。あわせて表札を新たに製作した。 ・植込み・芝生地の改修や屋外展示物の配置替えを行い、本館前広場をシンメトリーに整えた。								
								
南門に新設された保護基金コーナー		表札が改められた正門		中央部の植込みを改修し東西軸線を強調				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
音声ガイド貸出回数 リーフレット等	76,671台 6言語	— 6言語	— B		47,668 6	34,095 6	35,037 6	17,202 6
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：平常展（平成知新館名品ギャラリー）音声ガイドにおいて多言語（4言語）を導入し、積極的な情報提供を推進した。庭園も含めた施設全体として意匠統一された整備を行うことで、快適かつ美的な環境を実現し、各種メディアから高い評価を得て集客増に繋がった。							
【中期計画記載事項】施設のバリアフリー化、各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：平成知新館建替プログラムの実施及び平成知新館展示案内リーフレット制作・配布等各種案内の充実を通じ、快適な観覧環境の提供を行った。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 2313

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																									
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ①施設・設備等の充実																									
【年度計画】 (4館共通) 1) 特別展において音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、来館者に対するサービスの向上を図る。 (奈良国立博物館) 1) 快適な観覧環境を提供するための展示施設の計画的な整備を実施する。 2) 誘導サイン及び展示照明を整備し、より快適な観覧環境を確保する。 3) 正倉院展の際に託児室を設置する。 4) ウェブサイトで展覧会の混雑状況・待ち時間の速報を行う。 5) 館内案内リーフレット(7言語：日、英、中、韓、仏、独、西)を継続して制作する。 6) なら仏像館の会場案内図、展示一覧を作成する。																										
担当部課	総務課渉外室	事業責任者	総括専門職員 森継明広																							
【実績・成果】 (4館共通) 1) 特別展において音声ガイドを活用した情報提供を行い、来館者に対するサービスの向上を図った。 (奈良国立博物館) 1) 快適な観覧環境を提供するための展示施設の計画的な整備を実施した。 2) 誘導サイン及び展示照明を整備し、より快適な観覧環境を提供した。 3) 正倉院展の会期中に、託児室を開設し、保育士2人が常駐して1歳児から未就学児までの預かりを予約制で実施した。 会期中142人の利用があった。 4) ウェブサイトでの展覧会の混雑状況・待ち時間の速報については、正倉院展において特別協力の新聞社ウェブサイトにリンクを張る形で行った。 5) 館内案内リーフレット(7言語：日、英、中、韓、仏、独、西)を継続して制作した。 6) なら仏像館の会場案内図、展示リストを作成・配布した。																										
【補足事項】 (奈良国立博物館) 1) なら仏像館休館後の庭園等開放実施のための通路の整備工事を行い、より快適な観覧環境を提供した。 2) 正倉院展の会期中には、臨時的誘導サインを増設し、より快適な観覧環境を提供した。																										
																										
通路整備			館内誘導サイン																							
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: left;">【定量的評価】項目</th> <th>26年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評価</th> <th rowspan="2">経年 変化</th> <th>22</th> <th>23</th> <th>24</th> <th>25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>音声ガイド貸出台数 リーフレット等</td> <td style="text-align: center;">55,466台 7言語</td> <td style="text-align: center;">— 7言語</td> <td style="text-align: center;">— B</td> <td></td> <td style="text-align: center;">69,219 7</td> <td style="text-align: center;">46,113 7</td> <td style="text-align: center;">41,504 7</td> <td style="text-align: center;">46,953 7</td> </tr> </tbody> </table>									【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25	音声ガイド貸出台数 リーフレット等	55,466台 7言語	— 7言語	— B		69,219 7	46,113 7	41,504 7	46,953 7
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25																		
音声ガイド貸出台数 リーフレット等	55,466台 7言語	— 7言語	— B			69,219 7	46,113 7	41,504 7	46,953 7																	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 なら仏像館休館後の展覧会のない時期に庭園等の無料開放を実施して来館者サービスの維持に努めた。																							
【中期計画記載事項】 施設のバリアフリー化、各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。																										
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 館内案内リーフレットの多言語化を継続し、正倉院展では託児室を設置した。																							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信															
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ①施設・設備等の充実(1/2)															
【年度計画】 (4館共通) 1) 特別展において音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、来館者に対するサービスの向上を図る。 (九州国立博物館) 1)～5) (略)																
担当部課	学芸部企画課	事業責任者	課長 臺信祐爾													
【実績・成果】 (4館共通) 1) 特別展等において展覧会の内容のより深い理解を助けるための音声ガイドを実施した。																
【補足事項】 (4館共通) 1) 特別展音声ガイド <ul style="list-style-type: none"> ・特別展「近衛家の国宝－京都陽明文庫展」では、60,808人の来館者に対して8,955台の貸出があった（貸出率14.7%）。 ・特別展「クリーブランド美術館展－名画でたどる日本の美」では、70,794人の来館者に対して7,416台の貸出があった（貸出率10.5%）。 ・特別展「台北 国立故宮博物院－神品至宝－」では、256,070人の来館者に対して39,633台の貸出があった（貸出率15.5%）。 ・特別展「古代日本と百済の交流－大宰府・飛鳥そして公州・扶餘－」及び同時開催特別展「日本発掘－発掘された日本列島2014－」では、59,629人の来館者に対して6,111台の貸出があった。（貸出率10.2%） <p>○文化交流展示音声ガイド（3言語対応：英語、中国語、韓国語） 文化交流展示音声ガイド実施状況（貸出件数）</p> <table border="1"> <tr> <td>文化交流展示</td> <td>計5,550台</td> </tr> <tr> <td>英語版</td> <td>1,864台</td> </tr> <tr> <td>中国語版</td> <td>1,193台</td> </tr> <tr> <td>韓国語版</td> <td>2,493台</td> </tr> </table>									文化交流展示	計5,550台	英語版	1,864台	中国語版	1,193台	韓国語版	2,493台
文化交流展示	計5,550台															
英語版	1,864台															
中国語版	1,193台															
韓国語版	2,493台															
				 <p>特別展音声ガイド貸出風景</p>												
				 <p>音声ガイド利用の様子</p>												
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25								
音声ガイド貸出件数	67,665台	—	—		81,717	56,993	114,064	55,611								
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 本年度の特別展「台北 国立故宮博物院－神品至宝－」において来館者数が多かった影響で、前年度より貸し出し台数が増加しており、来館者の理解に役立っている。															
【中期計画記載事項】施設のバリアフリー化、各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。																
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 所期の目的を達成しており、順調に推移している。															

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2314-2

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ①施設・設備等の充実(2/2)							
【年度計画】 (4館共通) 1) (略) (九州国立博物館) 1) 快適な観覧環境を提供するための展示施設等の調査・分析及び検討を進める。 2) 来館者にとって分かりやすい展示室内サインを開発し、快適な鑑賞環境を提供する。 3) 館内案内リーフレット(7言語：日、英、中、韓、仏、独、西)を継続して制作する。 4) 文化交流展示室の展示を、日本文化に初めて接する海外の来館者にも理解しやすいような、外国語のパンフレットを刊行する。 5) 英語・中国語・韓国語版の文化交流展示室のマップを継続して制作する。								
担当部課	学芸部企画課 展示課 総務課	事業責任者	課長 臺信祐爾 課長 楠井隆志 課長 阿部 勝					
【実績・成果】 (九州国立博物館) 1) 開館10周年に向けて、文化交流展示室のケース配列を再検討し、展示テーマの見直しや中央部分の活用等について議論を重ねた。 2) 分かりにくいという声のあった関連展示室サインの場所とデザインについて、デザイナーへの提案要件事項を整理し、開館10周年を機にリニューアルを図る予定である。 3) 館内案内リーフレット(7言語：日、英、中、韓、仏、独、西)を継続して作成・配布した。 4) 文化交流展示室では引き続き、英語・中国語・韓国語版のマップを展示替に応じて更新し、作成・配布した。 (中期計画記載事項) ・身障者トイレに幼児用補助便座を取り付けた。(6ヵ所：1階、3階、4階) ・公益財団法人日本博物館協会が実施する車椅子・ベビーカーの寄贈事業を活用し、ベビーカーを新たに2台導入した。 ・斜行リフト案内板(国博通り側)に英語・中国語・韓国語の案内文を追記した。								
【補足事項】 (九州国立博物館)								
								
障がい者トイレに設置した幼児用補助便座								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
リーフレット等	7言語	7言語	B		7	7	7	7
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 身障者トイレに幼児用補助便座を取り付けるなど利用者へ配慮した。							
【中期計画記載事項】 施設のバリアフリー化、各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 ベビーカーを新たに2台導入し、斜行リフト案内板に英語・中国語・韓国語の案内板を追記するなどして利用者へ配慮した取り組みを推進している。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信										
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ②来館者満足度調査及び利用者に配慮した運営										
【年度計画】 (4館共通) 1) 来館者のニーズを引き出すため来館者調査を実施し、その結果を改善に活かす。 2) 混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を立て、収容力に応じた入場者数の調整、陳列品の配置及び音声ガイドの対象となる文化財の解説場所の工夫等を行い、展覧会場の快適な環境維持に努める。											
担当部課	総務部総務課	事業責任者	課長 竹之内勝典								
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・タッチパネルアンケート(特別展、総合文化展)を平成館、本館、東洋館で開催された全ての特別展及び総合文化展でアンケートを実施し、集計結果を元に環境改善に努めた。 ・「総合文化展100万人プロジェクト」の一環として、館内環境の整備や外国人来館者対応の問題点の洗い出しなどに努めた。 2) 特別展「台北 国立故宮博物院－神品至宝－」において、期間中の混雑対応等、展覧会場の快適な環境維持に努めた。											
【補足事項】 1) ・定期的にアンケートの項目を見直し、要望が多いキャプション等への指摘に対して改善を行った。 ・お客様からの質問・意見については、担当部署へ照会するとともに館内で情報共有を図った。また、質問には迅速に対応した。 ・100万人プロジェクトの一環として、外国人を対象としたモニタリング調査を実施し、実際の来館体験をヒアリングした。作品解説や館内案内などに問題があったため、次年度以降順次改善予定。 ・100万人プロジェクトの一環として、展示作品の音声ガイドを総合文化展に導入。既存の「トーハクなび」に作品解説を追加し、より初心者にもわかりやすい解説を目指した。英語版も同時リリースした。 ・100万人プロジェクトの一環として、外国人来館者を想定して館内一部にて試験的にWiFiを導入した。今後も上野地区等と連携の上、順次導入予定。 2) 特別展会場における混雑対応 ・特別展「台北 国立故宮博物院－神品至宝－」では、入場待ちのお客様に少しでも快適にお並びいただけるよう、テントの増設やミストマシン、給水所の設置、移動販売の実施などを行った。 ・特別展「台北 国立故宮博物院－神品至宝－」の『翠玉白菜』特別展示期間中の2週間及び「日本国宝展」の期間の最終週は、開館時間を延長した。 ○上野公園と周辺博物館・美術館で開催するイベント「創エネ・あかりパーク2014」に協力し、施設への美術品画像の投影と期間中の開館時間延長を実施した。											
【定量的評価】項目				26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
栄西と建仁寺 満足度				72%	—	—	経年変化	—	—	—	—
キトラ古墳壁画 満足度				63%	—	—		—	—	—	—
台北 国立故宮博物院－神品至宝－ 満足度				63%	—	—		—	—	—	—
東アジアの華 陶磁名品展 満足度				60%	—	—		—	—	—	—
日本国宝展 満足度				70%	—	—		—	—	—	—
3.11 大津波と文化財の再生 満足度				59%	—	—		—	—	—	—
みちのくの仏像 満足度				79%	—	—		—	—	—	—
総合文化展 満足度				77%	—	—		88%	65%	70%	78%
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 アンケートでの満足度に大きな変化はなく、アンケートやモニタリング調査で出された意見や要望について引き続き検討が必要。特に特別展により長時間の待ち時間が発生したものがあったため、今後の混雑対策について検討中である。								
【中期計画記載事項】 一般来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施する。調査結果から来館者のニーズを把握し、観覧料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。また、施設の収容力に応じた来館者数を確保するとともに、混雑時の対応を含め利用者に配慮した運営を行う。											
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 外国人をはじめとする一般来館者の意見については聴取できているため、それを基に今後改善を行う。混雑時の観覧環境の維持も課題である。								



外国人モニタリング調査の様子



トーハクなび英語版作品解説

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 2322

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																																											
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ②来館者満足度調査及び利用者に配慮した運営																																											
【年度計画】 (4館共通) 1) 来館者のニーズを引き出すため来館者調査を実施し、その結果を改善に活かす。 2) 混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を立て、収容力に応じた入場者数の調整、陳列品の配置及び音声ガイドの対象となる文化財の解説場所の工夫等を行い、展覧会場の快適な環境維持に努める。 (京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 特別展等に関し、専門家の展覧会評を求め、広報誌等に掲載する。 (京都国立博物館) 1) モニターを委嘱し、提言を受け、博物館運営に反映する。																																												
担当部課	総務課	事業責任者	総務課長 植田義雄																																									
【実績・成果】 (4館共通) 1) 来館者アンケートを実施し、その結果を改善に生かした。 2) 混雑時には入場制限を行い、来館者の安全の確保、快適な観覧環境の維持に努めた。 (京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 特別展覧会等に関する専門家の展覧会評を求め、『京都国立博物館だより』に掲載した。 (京都国立博物館) 1) 小学校・中学校・高等学校の教員、キャンパスメンバーズ加盟校の学生及び外国人招致活動用務に携わっている方、近畿地区在住の外国人の方へモニターを委嘱し、提言を受けた。館内で情報を共有し、展覧会を含めた博物館運営に反映した。																																												
【補足事項】 (4館共通) 2) ・明治古都館内及び庭園内において、混雑状況に応じて休憩場所の箇所を変更し、お客様が休憩しやすいようにした。前年度に引き続いて、特別展会期中、日よけテント、待合所テントの設置、自動販売機及び観光客の旅行用大型バッグ(カート)の収納が可能な大型コインロッカーの増設も行った。 ・また、前年度に引き続き、特別展会期中に入館までの待ち時間等の情報をウェブサイト等で掲載した。 ・「鳥獣戯画と高山寺」展会期中は、展示室内の混雑を避けるため入館制限を行った。入館待ちのお客様のために、明治古都館前にテントを設置した。 (京都国立博物館) 1) ・作品の展示期間についてもっと積極的に情報提供すべきとの意見があったため、広報刊行物において展示期間を積極的に記載し、情報提供を行った。 ○職員等への防災・接遇研修等 ・当館職員を対象に、普通救命講習及びAED取扱講習会を実施した。全事務職員が普通救命講習を受講しており、衛士は上級救命講習を受講している。AED取扱についても繰り返し訓練している。 ・各展覧会の開催期間中に火災及び地震を想定した避難誘導訓練を実施し、職員等の防災に対する意識を高めた。 ・京都市総合防災訓練に参加し、庭園内において支援物資の配布や情報提供の訓練を行った。																																												
 <p>入館待ちのお客様のためのテント (「鳥獣戯画と高山寺」会期中)</p>  <p>避難誘導訓練風景</p>																																												
<table border="1"> <thead> <tr> <th>【定量的評価】項目</th> <th>26年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評価</th> <th>経年変化</th> <th>22</th> <th>23</th> <th>24</th> <th>25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>南山城の古寺巡礼 満足度</td> <td>92%</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>国宝 鳥獣戯画と高山寺 満足度</td> <td>84%</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>平常展 満足度</td> <td>74%</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>									【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	南山城の古寺巡礼 満足度	92%	—	—	—	—	—	—	—	国宝 鳥獣戯画と高山寺 満足度	84%	—	—	—	—	—	—	—	平常展 満足度	74%	—	—	—	—	—	—	—
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25																																				
南山城の古寺巡礼 満足度	92%	—	—	—	—	—	—	—																																				
国宝 鳥獣戯画と高山寺 満足度	84%	—	—	—	—	—	—	—																																				
平常展 満足度	74%	—	—	—	—	—	—	—																																				
【年度計画に対する総合評価】 評価：B				【判定根拠、課題と対応】 特別展覧会ではテントやコインロッカーの増設を行い、混雑状況に応じて入館制限も行うなど、快適な観覧環境を実現すべく、施策を着実に実施した。																																								
【中期計画記載事項】 一般来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施する。調査結果から来館者のニーズを把握し、観覧料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。また、施設の収容力に応じた来館者数を確保するとともに、混雑時の対応を含め利用者に配慮した運営を行う。																																												
【中期計画に対する評価】 評価：B				【判定根拠、課題と対応】 来館者へのアンケートや専門家による批評、モニターからの提言などの取り組みを継続的に行っている。																																								

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信										
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ②来館者満足度調査及び利用者に配慮した運営										
【年度計画】 (4館共通) 1) 来館者のニーズを引き出すため来館者調査を実施し、その結果を改善に活かす。 2) 混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を立て、収容力に応じた入場者数の調整、陳列品の配置及び音声ガイドの対象となる文化財の解説場所の工夫等を行い、展覧会場の快適な環境維持に努める。 (京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 特別展等に関し、専門家の展覧会評を求め、広報誌等に掲載する。											
担当部課	総務課渉外室	事業責任者	総括専門職員 森継明広								
【実績・成果】 (4館共通) 1) 来館者のニーズを引き出すため来館者にアンケートを実施し、その結果を改善に活かした。 2) 混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を行い、実際の混雑に対しては、収容力に応じた来館者数の調整、陳列品の配置及び音声ガイドの対象となる文化財の解説場所の工夫等を行い、展覧会場の快適な環境維持に努めた。 (京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 特別展「国宝 醍醐寺のすべて―密教のほとけと聖教―」に関し、専門家の展覧会評を『奈良国立博物館だより』92号に掲載した。											
【補足事項】 (4館共通) 1) アンケートなどの意見を反映して、下記の改善を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・正倉院展の会期中、展示ケースのガラス清掃を業者委託により実施した。 ・正倉院展の会期中、臨時誘導サインを設置した。 ・正倉院展の会期中、館内やトイレを見回り、ゴミや汚れを発見次第、迅速に対応を行った。 ・ウェブサイトから寄せられたご意見等の質問に対し、迅速に対応した。 2) 混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を立て、実際の混雑に対して工夫等を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・正倉院展では、入場待ちの来館者のためテントを設置し、ピロティではモニターを設置して展示案内や館内注意事項の映像を流した。 ・正倉院展では、混雑状況(待ち時間)の速報を、ハローダイヤル、近鉄奈良駅、JR奈良駅及び読売新聞大阪本社(特別協力)のウェブサイトと連携して行った。 ・正倉院展では、館内の混雑調整のための入場制限や入場待ち列の混雑緩和のための誘導案内を行った。 											
【定量的評価】項目				26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
武家のみやこ 鎌倉の仏像 満足度				85%	—	—	—	—	—	—	—
国宝 醍醐寺のすべて 満足度				84%	—	—	—	—	—	—	—
第66回正倉院展 満足度				69%	—	—	77%	73%	77%	70%	
名品展 満足度				81%	—	—	75%	74%	79%	84%	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B				【判定根拠、課題と対応】 来館者アンケートを実施し、その結果をもとに改善を実施した。							
【中期計画記載事項】一般来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施する。調査結果から来館者のニーズを把握し、観覧料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。また、施設の収容力に応じた来館者数を確保するとともに、混雑時の対応を含め利用者に配慮した運営を行う。											
【中期計画に対する評価】 評定：B				【判定根拠、課題と対応】 特別展について専門家の展覧会評を『奈良国立博物館だより』に掲載している。また一般来館者のアンケートを実施し改善すべきところを把握し、特に混雑する正倉院展については工夫してその緩和に努めた。							



入場待ち列テント

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2324

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信									
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ② 来館者満足度調査及び利用者に配慮した運営									
【年度計画】 (4館共通) 1) 来館者のニーズを引き出すため来館者調査を実施し、その結果を改善に活かす。 2) 混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を立て、収容力に応じた入場者数の調整、陳列品の配置及び音声ガイドの対象となる文化財の解説場所の工夫等を行い、展覧会場の快適な環境維持に努める。										
担当部課	総務課	事業責任者	課長 阿部 勝							
【実績・成果】 (4館共通) 1) 来館者のニーズを引き出すため、文化交流展示及び各特別展で来館者調査を実施した。 2) ・混雑が予想される展覧会（特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」）について、入場規制、展示レイアウトの工夫をし、展覧会場の快適な環境維持に努めた。 ・来館者のニーズ等を把握するため、識者や市民代表などの外部委員による懇話会を開催した。										
【補足事項】 (4館共通) 1) 管理運営の改善のためアンケート結果を関係各課へ回覧した。 ・平常展アンケート 満足度 62% 回答数 267件 (とても良い 36%、良い 26%、普通 14%、あまりよくない 1%、よくない 4%、無回答 19%) 2) 混雑が予想された特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」では、以下の対応を行った。 ・ハローダイヤル、日本道路交通情報センターなど関係各所にファックスを送信し、混雑状況の周知を図った。 ・主催事務局において、特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」公式ウェブサイト、「Facebook」にて待ち時間を発信した。 ・入場待ちの来館者のために、ミュージアムホールにて展示品紹介映像を流した。(10月7日～20日) ○開館10周年に向けて、「次の10年を考える懇話会」を開催し(1回)、外部委員からの要望・意見聴取等を実施し、「次の10年を考える懇話会のまとめ」を作成した。 ○太宰府消防署の協力により、地域と連携した防災訓練を実施した。 ○筑紫野警察署の協力により、不審物発見時(爆破予告)避難訓練を実施した。										
【定量的評価】項目				26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25
近衛家の国宝 京都・陽明文庫展 満足度				88%	—	—	—	—	—	—
クリーブランド美術館展 —名画でたどる日本の美— 満足度				86%	—	—	—	—	—	—
台北 國立故宮博物院 —神品至宝— 満足度				79%	—	—	—	—	—	—
古代日本と百済の交流 —大宰府・飛鳥そして公州・扶余— 満足度				87%	—	—	—	—	—	—
発掘された日本列島2014 満足度				87%	—	—	—	—	—	—
文化交流展 満足度				62%	—	—	59%	65%	70%	65%
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 アンケート結果は概ね好評を得ている。また、管理運営のためのアンケート結果を改善に向けて活かしている。さらには、外部からの要望意見聴取等をまとめという形で発行した。なお、混雑が予想された特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」については、東京国立博物館へ事前調査を行い、情報収集し、その情報を基に混雑対策を講じることができた。その結果、入場の待ち時間はあったが、混乱なく入場案内ができた。								
【中期計画記載事項】一般来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施する。調査結果から来館者のニーズを把握し、観覧料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。また、施設の収容力に応じた来館者数を確保するとともに、混雑時の対応を含め利用者に配慮した運営を行う。										
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 管理運営のためのアンケート結果を関係各課で改善に向けて活かしている。また、外部委員のまとめを全職員に配布し、来館者ニーズ等に対する職員の意識改革の推進を図った。なお、混雑が予想される特別展については、関係部署と連携を取り対応等を講じることができた。								



特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」
会場内待ち列の様子

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ③ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実								
【年度計画】 ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、利用者サービスの向上に努める。 (4館共通) 1)オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。 (東京国立博物館) 1)正門周辺の再開発に伴い設置する無料ゾーンに、ミュージアムショップを併設する。 2)黒田記念館別館のカフェで黒田清輝作品関連のグッズ販売を行う。									
担当部課	総務部総務課	事業責任者	課長 竹之内勝典						
【実績・成果】 (4館共通) 1)・ミュージアムグッズは、東京国立博物館協会の協力を重ね、新たな商品の開発に努めた。26年度は、考古フィギュア、卓上カレンダーなどを新たに販売開始した。 ・レストランでは、特別展に合わせたメニューを提供する等、サービスの向上に努めた。 ・低価格帯のカフェがないとのお客様の声を受けて、26年10月の「アジア・フェス」期間中にケータリングカーによる軽食の屋外販売を試行的に行い、順調であったことから、3月のお花見の時期に合わせて本格的に野外販売を開始した。 (東京国立博物館) 1)正門プラザの無料ゾーンに、ミュージアムショップを併設し、26年4月15日にオープンした。 2)黒田記念館別館の上島珈琲店で黒田清輝作品関連商品の販売を引き続き行った。また、27年1月2日の黒田記念館のリニューアルオープンにあわせ、黒田記念館内にミュージアムショップをオープンし、同日よりオリジナルグッズを販売した。									
【補足事項】 (4館共通) 1)・オリジナル商品として、海洋堂による考古フィギュアの第2弾の販売を開始した。 ・東洋館の展示作品を集めた卓上カレンダーを製作、販売を開始した。 ・定期的にミュージアムショップを利用・非利用した来館者を対象にアンケート調査を実施した。 ・オリジナル切手シートを製作、販売を開始した。 ○今後もミュージアムショップやレストランと連携協力を図りつつ、利用者のニーズをより適切に反映できるよう努めていく必要がある。									
									
考古フィギュア第2弾			正門プラザ ミュージアムショップ			黒田記念館 ミュージアムショップ			
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
-		-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価： B		【判定根拠、課題と対応】 レストランやショップと協力しながら、サービスの向上に努めている。							
【中期計画記載事項】 ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。									
【中期計画に対する評価】 評価： B		【判定根拠、課題と対応】 引き続き利用者の意見を収集し、サービスの向上に努めている。							

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 2332

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ③ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実							
【年度計画】								
ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、利用者サービスの向上に努める。								
(4館共通)								
1)オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。 (京都国立博物館)								
1)レストラン利用者にアンケート調査を行いサービス向上に努める。								
2)平成知新館に新たなレストランを設け、更なる利用者サービス向上を図る。								
担当部課	総務課	事業責任者	総務課長 植田義雄					
【実績・成果】								
(4館共通)								
1)新規にオリジナルグッズを作成し、また展覧会に応じた関連商品、関連書籍等を取り揃え、サービスの向上に努めた。 (京都国立博物館)								
1) レストラン利用者にアンケート調査を実施し、アンケートの集計結果をレストラン外部委託業者に提示し、さらなる接客サービスの向上に努めた。								
2)平成知新館に新たなレストランを設けた。								
○平成知新館内に新たなミュージアムショップを設けた。								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・南門施設は21年7月にオープンし、ミュージアムショップ、レストラン、インフォメーションコーナーがあり、入場料を払わずにお客様が利用できるスペースとなっている。3業務とも外部業者に委託しているが、連絡を密にとり、当館の要望に応えた運営になるよう心がけた。 ・明治古都館（特別展示館）が閉館の期間についても、ミュージアムショップ、レストラン及びインフォメーションコーナーは営業を行った。 ・インフォメーションコーナーでは、展覧会関係及び京都観光案内等のチラシ掲示や、英会話のできる人員の配置など、当館の案内だけでなく京都市内の観光案内等も行った。 ・当館オリジナルグッズ（クリップ、立体カード、ジグソーパズル等）を引き続き販売した。 ・来館できない方には、図録等の通信販売を実施した。 ・ミュージアムショップにおいて、25年度に引き続き、350種類の絵はがきを販売し、日本美術を中心としたグッズを販売した。 ・手ぬぐいやタンブラーなど季節感のあるものの販売も行った。26年9月から新たに竹虎ぬいぐるみ、名品トランプ、チケット入れ、平成知新館開館記念切手等の販売を開始し好評であった。 								
 竹虎ぬいぐるみ								
 名品トランプ								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 平成知新館内に新たにレストラン及びミュージアムショップを設け、利用者サービスの向上に努めるなど、着実な成果をあげた。							
【中期計画記載事項】	ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。							
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 ミュージアムショップやレストランのサービスについて、利用者に対し定期的にアンケートを行うなど、快適な観覧環境を実現するための事業を的確に推進している。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ③ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実							
【年度計画】 ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、利用者サービスの向上に努める。 (4館共通) 1)オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。 (奈良国立博物館) 1)ノベルティグッズを作成し、来館者に配布するなどのサービスを行う。 2)仏教美術に関する図書の販売の充実を図る。								
担当部課	総務課渉外室	事業責任者	総括専門職員 森継明広					
【実績・成果】 (4館共通) 1)オリジナルグッズ(元気が出る仏像シリーズ、正倉院展模様シリーズ、博物館グッズ)の商品をミュージアムショップで販売し、サービスの向上に努めた。 (奈良国立博物館) 1)・正倉院展のオータムレイトの観覧券を購入した方に非売品のしおりを配布した。 ・27年1月2日に来館された方に正月サービスとして非売品のオリジナルステッカーを配布した。 2)仏教美術に関する図書の販売の充実を図った。								
【補足事項】 (4館共通) 1)堅苦しくなりがちな仏像をかわいらしくデザインし、手を上げている、走っている等の仏像の動きをポップなカラーで表現した「元気が出る仏像シリーズ」の新品ミニクリアファイル、正倉院展模様のお盆「桜盆」、お線香・お香等をミュージアムショップで開発し販売した。								
								
ミニクリアファイル			お盆「桜盆」			お線香・お香		
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 ノベルティグッズを作成して来館者に配布し、サービスの向上に努めた。また、ミュージアムショップにおいて、オリジナルグッズを新たに開発し販売した。							
【中期計画記載事項】 ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 ミュージアムショップにおけるオリジナルグッズや仏教美術に関する図書の販売について、利用者の意見を参考に充実を図った。また、レストランにおいても利用者の意見を収集し、サービスの向上に努めており、中期計画期間中の改善が順調に行われている。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2334

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(3) 快適な観覧環境の提供 ③ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実							
【年度計画】 ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、利用者サービスの向上に努める。 (4館共通) 1) オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。 (九州国立博物館) 1) 特別展に関連した特別メニューを提供するなど、サービスの向上に努める。								
担当部課	広報課	事業責任者	課長 田端幸朋					
【実績・成果】 (4館共通) 1) ミュージアムショップでは、特別展及び文化交流展示の展示内容に即した商品陳列を行い、オリジナル商品の陳列面積を増やすとともに地場産業のお菓子やグッズなどを提供した。 (九州国立博物館) 1) レストランでは、特別展に関連したメニューを期間限定で提供した。								
【補足事項】 (4館共通) 1) オリジナルグッズとして特別展の図柄をデザインした「さいふごま」を製作した。 新聞の「お薦めのミュージアムグッズが買える東西10施設」という企画の西日本部門で4位に選ばれた。 (九州国立博物館) 1) 特別展に関連したメニューを提供した。 <ul style="list-style-type: none"> ・特別展「近衛家の国宝」では、京料理に馴染みのある鰹や胡麻豆腐を取り入れ、京都産の野菜や丹羽の黒豆、西京味噌等を使い「京都」をイメージした『ミュージアム松花堂弁当“京春御膳”』や京都の食材を使ったランチコース等を提供した。 ・特別展「クリーブランド美術館展」では、“アメリカン満載”のスペシャルランチ、アメリカンリブローズステーキセット等を提供した。 ・特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」では、台北 國立故宮博物院敷地内のレストラン「故宮晶華」の牛肉麵（台湾の牛肉麵コンクール優勝メニュー）等を提供した。 特別メニューが好評で、テレビで取り上げられた。また、入店待ちの行列ができることが多かった。 								
		 アメリカンリブローズステーキセット						
		 グランプリ牛肉麵						
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 ミュージアムショップが新聞に取り上げられ、特別展「台北 國立故宮博物院」開催中はレストランが大勢の方で賑わうなど順調である。							
【中期計画記載事項】 ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 経営側との頻繁な意見交換を行うなど、中期計画に基づいてサービスを改善するための取り組みを行った。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信						
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ①デジタル化の推進						
【年度計画】(4館共通)							
1) 収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びインターネットでの公開を継続して行う。							
2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語(日、英、中、韓、仏)の説明を付したデジタル高精細画像(e国宝)を継続して公開する。							
3) 約5,800件(東京:300、京都:2,000、奈良:3,000、九州:500)の収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施する。							
(東京国立博物館)1)外部への公開を見据えた「列品管理プロトタイプデータベース」(学芸業務支援システム)の構築を進め、博物館機能の充実を図る。							
2) 収蔵品に関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。							
3) 収蔵品の和古書・洋古書のデジタル化を実施し、データを整備して、公開する。							
4) 法隆寺献納宝物について、5カ国語(日、英、中、韓、仏)の説明を付したデジタル高精細画像(「法隆寺献納宝物デジタルアーカイブ」)等の提供を法隆寺宝物館にて継続して実施するとともに、システムの更新について検討する。							
担当部課	学芸企画部博物館情報課	事業責任者	課長 高橋裕次				
【実績・成果】(4館共通)							
1) デジタル画像を資料館及びインターネットで公開した。							
2) 国宝・重要文化財の高精細画像(e国宝)を継続して公開した。またiOS、Androidそれぞれのアプリ版「e国宝」を継続して公開した。							
3) 通常博物館で使用する形態の既存フィルムのデジタル化は大半が既に終了しており、今年度は、26年度新規フィルム撮影分及び25年度末撮影分にあたる、カラーフィルム41枚、モノクロフィルム38枚をデジタル化した。							
(東京国立博物館)							
1) 「列品管理プロトタイプデータベース」について、機能向上に向けてプログラムコードの大幅な整理を行うとともに、列品に関する調査結果のデータの流し込み機能を開発した。							
2) 収蔵品情報のデータ化とデータ整備を推進した。							
3) 収蔵する和古書・漢籍について25,991カット、また洋古書について10,820カットのデジタル撮影を行い、前年度までに撮影したものの一部を公開した。							
4) 「法隆寺献納宝物デジタルアーカイブ」は故障のため25年4月より一時公開を停止しシステムの更新を行ったが、27年度の法隆寺宝物館の改修が完了した後、再度公開する予定である。							
○東京国立博物館情報アーカイブの運用を継続し、収蔵品、調査研究成果等の情報公開の充実を図った。							
【補足事項】(4館共通)							
2) 各アプリ版「e国宝」の年度末時点でのダウンロード件数累計は以下の通りである。							
・iOSアプリ512,034件(23年1月20日リリース)参考:25年度末時点446,827件							
・Androidアプリ173,877件(25年2月6日リリース)参考:25年度末時点161,433件							
(東京国立博物館)							
3) 既存フィルムのデジタル化は大半が既に完了しているため、デジタル化件数目標値及び実績値は、新規撮影フィルム分を計上している。目標値300件に対し実績79件となった要因は、26年度の新規フィルム撮影件数は前年同様となると見込んで目標値を設定していたが、撮影そのもののデジタル化が計画策定時の予定以上に進み、デジタル化が必要なフィルムがそもそも少なかったことによるものである。デジタル化可能な分については全て実施しており、当事業の目的は達成されていると考える。今後は適正な評価のため、次期中期では、数値でなく文章表現での目標設定も検討している。							
4) 利用者用端末を設置している法隆寺宝物館中2階資料室は、平成館工事に伴い26年12月から27年4月まで休憩室としており、平成27年度の法隆寺宝物館改修後の資料室再開と同時に利用者端末稼働となる見込である。							
○本館19室のリニューアルに伴い、「e国宝」のデータをタッチパネルで閲覧する「トーハクで国宝をさぐる」及び三次元計測データをジェスチャーで操作する「トーハクをまわそう」をそれぞれ開発し、公開した。							
【定量的評価】							
項目	26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25
収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数	79件	300件(79件)	D(B)	8,639	1,468	776	550,305
うちカラーフィルム	41件	—	—	5,136	1,392	715	304
うちモノクロフィルム	38件	—	—	3,503	76	61	1
うちマイクロフィルム	—	—	—	—	—	—	550,000
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】						
評価: B	デジタル画像の公開、データベース開発やデータ整備等は順調である。既存フィルムのデジタル化はほぼ全て完了しているため、目標値の設定について見直しが必要である。一方、和古書・洋古書のデジタル化件数は増加している。また本館19室では先進的なシステムを開発し、データ公開を大きく充実させた。						
【中期計画記載事項】収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、データ整備及びデジタル化を推進する。また、整備したデータを公開するウェブサイトなどの公開システムの充実を行う。公開データの件数は継続的に増加させる。収蔵品等に関するデジタル化件数は、その都度目標を設定する。							
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】						
評価: B	既存フィルムのデジタル化はほぼ完了しているが、その他のデータ整備や和古書・洋古書デジタル化を進めた。また本館19室では先進的な公開システムを開発した。						



リニューアル後の本館19室

【書式A】

施設名 京都国立博物館処理番号 2412

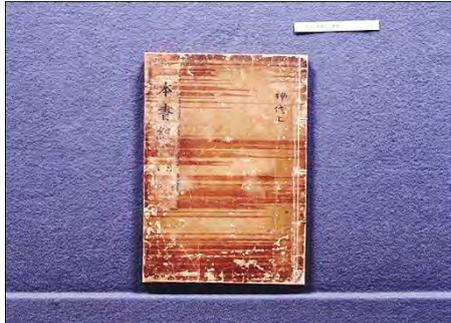
中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ①デジタル化の推進								
【年度計画】 (4館共通) 1) 収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びインターネットでの公開を継続して行う。 2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語(日、英、中、韓、仏)の説明を付したデジタル高精細画像(e国宝)を継続して公開する。 3) 約5,800件(東京:300、京都:2,000、奈良:3,000、九州:500)の収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施する。 (京都国立博物館) 1) 収蔵品について6言語(日、英、中、韓、仏、西)の説明を付した国宝重要文化財・名品 高精細画像閲覧システムの整備を継続して実施する。									
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 浅見龍介						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 収蔵品のデジタルデータを作成し、文化財情報システム及び公開収蔵品データベースのシステム修正およびデータ更新を随時行い、当館デジタルアーカイブ及び公開情報サービスを行った。 2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語(日本語、英語、中国語、韓国語、フランス語)の説明を付したデジタル高精細画像(e国宝)を継続して公開した。 3) 収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を継続し、5,536件実施した。 ・フィルム用スキャナを運用し、既存フィルムのデジタル化を促進した。 ・ガラス乾板及びマイクロフィルムのデジタル化を行った。(詳細は処理番号2422を参照) (京都国立博物館) 1) 京都国立博物館所蔵国宝重要文化財・名品高精細画像公開システム「KNM GALLERY」の内容及び表示方法等について前年度に引き続きシステム修正を行った。 (中期計画記載事項)今年度は公開データを103件増加した。									
【補足事項】 (4館共通) 3) デジタル化に必要なフィルム量が膨大であるため、昨年度に引き続き、従来のアウトソーシングと同時に、館内でのスキャニング作業を積極的に行い、フィルムのデジタル化が促進され、費用削減にも貢献した。 ・館内のフィルム用スキャナを使用出来る要員を増やすことにより、館内でのスキャニング作業の充実をはかるとともに、8×10フィルム等の館内ではスキャニング出来ないフィルムを外注に出し、デジタル化を効率的に行うことができた。 (京都国立博物館) 1) 26年6月に当館ウェブサイトのリニューアル公開を行い、「KNM GALLERY」と合わせて相乗的かつ効果的な運用を図れるように、再構成した。									
									
京都国立博物館所蔵国宝重要文化財 ・名品高精細画像公開システム 「KNM GALLERY」			フィルムのスキャニング作業						
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25
収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数		5,536件	2,000件	A		—	2,165	2,732	2,682
【年度計画に対する総合評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 既存フィルムのデジタル化は目標値を大きく上回った。しかし、6言語による高精細画像閲覧システムは費用対効果の面で問題が生じ、見直しを始めた。							
【中期計画記載事項】 収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、データ整備及びデジタル化を推進する。また、整備したデータを公開するウェブサイトなどの公開システムの充実を行う。公開データの件数は継続的に増加させる。収蔵品等に関するデジタル化件数は、その都度目標を設定する。									
【中期計画に対する評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 デジタル化は大幅に進めることができた。公開方法について課題が残った。言語によるアクセス件数を考慮して対応を検討したい。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ①デジタル化の推進								
<p>【年度計画】 (4館共通)</p> <p>1) 収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びインターネットでの公開を継続して行う。 2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語（日、英、中、韓、仏）の説明を付したデジタル高精細画像（e 国宝）を継続して公開する。 3) 約5,800件（東京：300、京都：2,000、奈良：3,000、九州：500）の収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施する。 (奈良国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品について情報の整備を継続して実施し、収蔵品データベースの充実を図る。 2) 画像データベースの個別データを約2,000件追加更新する。 3) 修理記録・古写真・ガラス乾板等の整理とデジタル化を推進し、運用方法について検討する。 4) 仏教美術情報の公開・普及を図る。</p>									
担当部課	学芸部資料室	事業責任者	室長 宮崎幹子						
<p>【実績・成果】 (4館共通)</p> <p>1) 収蔵品データベースと画像データベースの公開により、来館者及びインターネットでの情報提供を継続して行った。 2) 国宝・重要文化財のデジタル高精細画像（e 国宝）を継続して公開した。 3) 収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施した(5,154件)。 (奈良国立博物館)</p> <p>1) 収蔵品情報システムに新たに収蔵品となった文化財の情報を継続して蓄積し、内容の充実に努めた。これらは公開用の収蔵品データベースにも反映され、当館から発信する収蔵品の情報を充実させることが出来た。また画像データベースとのリンク情報も追加し、情報の効率的な運用と公開に努めた。 2) 写真情報システムの個別データを5,447件追加更新した。このうち公開データは3,376件。 3) 「日本美術院彫刻等修理記録」の整理とデータ修正が完了し、公開用のデータベースを新規に作成した。仏教美術資料研究センターでは全ての画像ならびにテキストデータ、インターネットでは全てのテキストデータを公開した(26年7月)。 4) 仏教美術資料研究センターのウェブサイト運営し、蔵書、論文データの更新を行い内容の充実に努めた。 (中期計画記載事項)</p> <p>インターネットで公開している収蔵品データベース、画像データベースの公開件数を継続的に増加させている。</p>									
<p>【補足事項】</p> <p>「日本美術院彫刻等修理記録」のデータベースを学芸部内で運用し、資料整理とデータ作成を継続していたが、この度作業が完了し、新規に公開用のデータベースを作成して、全ての情報の公開が実現した。このデータベースには、簿冊約400冊（約8万枚）分の修理記録と約7千枚のガラス乾板の画像及び関連テキストが格納されており、文化財に関する情報発信をさらに発展させることができた。</p> <p>なお、(財)美術院国宝修理所の奈良・京都の各工房からは、全ての画像データを参照出来るように独自に設定をしており、現代の文化財修理事業への協力もより具体的に進めることができた。</p> <p>既存フィルムの早期デジタル化完了を目指し、フィルムのデジタル化を昨年に引き続き重点的に行った。この作業は他業務との兼ね合いにより例年数値に変化が生じるため、目標値は人員の面からも概ね穏当と考える。</p>									
									
<p>「日本美術院彫刻等修理記録」データベース</p>									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数		5,154件	3,000件	S		4,311	5,297	4,924	7,615
写真データベースの個別データ追加更新件数		5,447件	2,000件	S		5,190	4,370	13,402	9,093
【年度計画に対する総合評価】 評価：S		【判定根拠、課題と対応】 既存フィルムのデジタル化を重点的に実施し、目標値を大幅に超える数値となった。既存データの訂正、非公開から公開への切り替えを行ったため、昨年度より若干減少したものの、引き続き既存フィルムのデジタル化を重点的に行っているため。							
<p>【中期計画記載事項】 収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、データ整備及びデジタル化を推進する。また、整備したデータを公開するウェブサイトなどの公開システムの充実を行う。公開データの件数は継続的に増加させる。 収蔵品等に関するデジタル化件数は、その都度目標を設定する。</p>									
【中期計画に対する評価】 評価：S		【判定根拠、課題と対応】 目標値を大きく上まわり、かつデータの質の維持にも力を注いでおり、中期計画におけるデータ整備及びデジタル化について顕著な成果と言えるため。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2414

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ① デジタル化の推進								
【年度計画】 (4館共通) 1) 収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びインターネットでの公開を継続して行う。 2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語(日、英、中、韓、仏)の説明を付したデジタル高精細画像(e 国宝)を継続して公開する。 3) 約5,800件(東京:300、京都:2,000、奈良:3,000、九州:500)の収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施する。 (九州国立博物館) 1) 収蔵品に関するコンテンツを順次追加し、デジタルアーカイブの充実を図る。 2) 対馬宗家文書データベース等の効率的な運用を検討し、実施する。 3) 海外調査で撮影した写真やビデオを展示や教育普及事業で活用するための整備を行う。									
担当部課	学芸部文化財課 交流課	事業責任者	課長 富坂 賢 教育普及室主任研究員 池内一誠						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 「九州国立博物館収蔵品デジタルアーカイブ」の拡充を図り、館内及びインターネットで継続して収蔵品情報を発信した。 2) 収蔵品の国宝・重要文化財について、デジタル高精細画像(e 国宝)を継続して公開した。 3) 776件の収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施した。 (九州国立博物館) 1) 九州国立博物館デジタルアーカイブの運用・公開を継続した。 2) 対馬宗家文書データベースの運用・公開を継続した。 3) ミャンマーにおける伝統文化・工芸品等の実態を調査して写真に収め、今後の博物館教育の参考資料とした。次年度以降体験型展示室「あじっば」にてミャンマーの資料を展示する際に活用する予定である。									
【補足事項】 (九州国立博物館) 3) 体験用資料収集の過程で、ミャンマー現地における日常生活・伝統校文化・工芸品等についての写真及び動画撮影を行った。撮影カット数のべ1,256枚、撮影動画時間240分。撮影した写真及び動画は今後体験型展示室「あじっば」において随時活用の予定である。									
									
フィルムのデジタル化画像 「紙本墨刷日本書紀 帆足長秋書入本」 (第1冊巻第1 表紙)									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	22	23	24	25
収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数		776件	500件	A		1,391	2,146	1,450	62
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 デジタルアーカイブ及び宗家文書データベースの運用・公開を前年同様に実施した。また、ミャンマーにおける伝統文化・工芸品の実態を静止画・動画に収めることができ、且つ次年度以降の活用について具体的な方法等が確認できた。							
【中期計画記載事項】 収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、データ整備及びデジタル化を推進する。また、整備したデータを公開するウェブサイトなどの公開システムの充実を行う。公開データの件数は継続的に増加させる。収蔵品等に関するデジタル化件数は、その都度目標を設定する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 収蔵品等のデータ整備及びデジタル化については順調に推移している。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																																																							
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ②博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化																																																							
【年度計画】 美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図る。また、資料の登録や検索・利用については、最新の情報処理技術を用いた、活用しやすいシステムを開発する。 (4館共通) 1)約13,000件(東京:6,000、京都:3,000、奈良:3,000、九州:1,000)の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備する。 (東京国立博物館) 1)資料館において、美術史等の情報及び資料を一般に広く公開するために、図書管理システム及び画像管理システムを軸とした図書資料、画像資料などのデータ整備を推進し、レファレンス機能とサービスの充実を図る。 2)法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続実施する。 3)調査・研究・教育など博物館の機能全般に関わる有益な情報及び関係資料を収集・蓄積する。 4)資料館の機能の拡充に向け、施設・設備の見直しを含めた、利用計画を策定する。																																																								
担当部課	学芸企画部博物館情報課	事業責任者	課長 高橋裕次																																																					
【実績・成果】(4館共通) 1)本年度は10,720件の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備した。 (東京国立博物館) 1)・資料館における美術史等の情報・資料の公開のため、8,115件の図書資料のデータ整備入力を行った。 ・博覧会資料565件と売立目録332件の書誌データを整備し、国立情報学研究所が提供する総合目録データベースへの登録を実施した。また所蔵する和雑誌のNCへの所蔵登録を継続し、1,995タイトルの所蔵情報を点検・登録した。 ・画像管理システムに画像データ10,720件を登録し、既存データ493件の修正を行って正確な情報の提供に努めた。 ・シーボルト旧蔵本の保存とデジタルアーカイブでの公開について図書館振興財団からの助成を受け、修理・保管箱作成(77冊)及びデジタル撮影(29冊)等を行い、一部をウェブサイトで公開した。 ・また助成金枠以外にも洋書28冊、漢籍79冊の貴重書のデジタル撮影を行った。 ・博覧会資料と売立目録について、中性紙封筒への収納を行った。また、博覧会関係資料、戦前目録類、洋書等約2,000点について大量脱酸の処理のための事前調査を行い、戦前目録492冊について脱酸化処理を実施した。 ・資料の閲覧、複写及びレファレンスサービスを継続し、資料館利用者数は前年度に引き続き増加した。 (6,118人 参考:25年度5,661人) ・「日本国宝展」の開催時期に合わせ、「東京国立博物館資料館 調べ方ガイド 1重要文化財」を作成し、資料館内での配布と、ウェブサイトでのPDF版公開を行った。また図書館システム改定に合わせ検索方法のガイド(冊子)を作成し、PDF版を公開した。 2)法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続した。(12月～年度末までは平成館工事に伴い飲食可能な休憩スペースとしたため中止。27年4月再開予定。) 3)当館開催の特別展(戦後分)の出品作品データベースを作成・維持した。また、刊行物に収載されている当館の所蔵品を調査し、約86冊の図書・雑誌のデータに列品番号の情報を入力した。 4)黒田記念館の書庫スペースについて、書架を設置し、資料の再配置の一環として一部の資料を移動した。																																																								
【補足事項】(東京国立博物館) 1)・図書資料データ整備の内訳は、新規受入図書 6,849冊、既存図書の遡及入力1,266冊である。一部の個人寄贈図書を除いて遡及入力はほぼ完了したが、引き続きデータ整備を継続している。 ・博覧会資料と売立目録については従来当館独自に書誌を整備していたが、今回NCのルールに準拠して書誌を再整備した。またこれらの資料及び雑誌の所蔵登録の際、NCに書誌がない場合は原則としてNC書誌を新規作成しCiNii Booksでも検索できるようにしている。 4)・図書資料の展示コーナー及び新着書架において、所蔵資料紹介の展示(年2回)、及び月毎の新着資料の展示を行った。また、展覧会開催に合わせて、特別展関連図書コーナーを設置し、資料館及び展示会場インフォメーションにて関連図書リストを配布した。 ・『東京国立博物館ニュース』及びライブラリーニュース(OPAC)に記事を掲載し資料館からの情報発信に努めた。																																																								
<table border="1"> <thead> <tr> <th>【定量的評価】項目</th> <th>26年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評価</th> <th>22</th> <th>23</th> <th>24</th> <th>25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数</td> <td>10,720件</td> <td>6,000件程度</td> <td>A</td> <td>11,343</td> <td>10,566</td> <td>9,556</td> <td>9,865</td> </tr> <tr> <td>うちフィルム撮影</td> <td>77件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>5,377</td> <td>1,379</td> <td>1,063</td> <td>22</td> </tr> <tr> <td>うちデジタル撮影</td> <td>10,643件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>5,966</td> <td>9,187</td> <td>8,493</td> <td>9,843</td> </tr> <tr> <td>新規図書整理</td> <td>6,849件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>7,345</td> <td>3,970</td> <td>4,877</td> <td>4,989</td> </tr> <tr> <td>遡及図書整理</td> <td>1,266件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>7,836</td> <td>5,459</td> <td>13,693</td> <td>3,505</td> </tr> </tbody> </table>									【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25	収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数	10,720件	6,000件程度	A	11,343	10,566	9,556	9,865	うちフィルム撮影	77件	—	—	5,377	1,379	1,063	22	うちデジタル撮影	10,643件	—	—	5,966	9,187	8,493	9,843	新規図書整理	6,849件	—	—	7,345	3,970	4,877	4,989	遡及図書整理	1,266件	—	—	7,836	5,459	13,693	3,505
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25																																																	
収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数	10,720件	6,000件程度	A	11,343	10,566	9,556	9,865																																																	
うちフィルム撮影	77件	—	—	5,377	1,379	1,063	22																																																	
うちデジタル撮影	10,643件	—	—	5,966	9,187	8,493	9,843																																																	
新規図書整理	6,849件	—	—	7,345	3,970	4,877	4,989																																																	
遡及図書整理	1,266件	—	—	7,836	5,459	13,693	3,505																																																	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 法隆寺宝物館での図書コーナーは平成館工事により一時中止があったが、基本である資料館での美術史等の情報及び資料の公開とその活用を支援する事業は順調に行われ、検索方法ガイドの作成など新たな利用促進の試みも進んでいる。																																																							
【中期計画記載事項】美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。																																																								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 データ整備入力、データベース作成、調べ方ガイド作成など、情報の発信とレファレンスに有益な業務を展開できた。																																																							



資料館調べ方ガイド 1

【書式A】

施設名 京都国立博物館処理番号 2422

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																																						
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ②博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化																																						
【年度計画】 美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図る。また、資料の登録や検索・利用については、最新の情報処理技術を用いた、活用しやすいシステムを開発する。 (4館共通)1)約13,000件(東京:6,000、京都:3,000、奈良:3,000、九州:1,000)の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備する。 (京都国立博物館) 1)資料情報などの研究系システムについて、サーバ仮想化(多数のサーバを仮想的に少数のハードウェア装置へ集約する技術)による費用低減と性能向上を図る。 2)蔵書管理システムをデータベース統合し、資料の管理性や検索性を向上させる。																																							
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 浅見龍介																																				
【実績・成果】(4館共通)1) <ul style="list-style-type: none"> ・収蔵品、出品作品等の新規撮影は、フィルム撮影を557枚、デジタル撮影を4,370枚行った。 ・高精細デジタルカメラが導入され、デジタル撮影を中心としてフィルム撮影も並行して行った。 ・画像利用申請に伴う収蔵フィルムのデジタル化作業を継続して行った。 ・当館で所有するスキャナを使用し、所蔵フィルムのデジタル化を開始した。 ・8×10フィルムの高精細スキャニング作業を開始した。 ・館蔵ガラス乾板の保存整理作業、及びガラス乾板のデジタル化を継続して行った。 ・フィルムの保存状態改善のため、保存に適した収納箱への移し替えを継続して行った。 ・経年劣化の激しいマイクロフィルムのデジタル化を継続して行った。 ・調査、研究、教育等に資するため、図書資料においては、新規図書9,758冊、逐次刊行物1,011冊を収集した。 (京都国立博物館) 1)研究系基盤サーバにおいて仮想化統合を実施した。処理能力の向上により、レファレンスの検索速度が向上した。 2)・蔵書管理システムについて、図書システムとサブシステムを統合したことにより資料検索の利便性を向上させた。 ・統合する際、サブシステムに登録している書誌データに登録番号を付与し、管理上の便宜を図った。																																							
【補足事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・当館の展覧会出品作品の撮影は、「南山城の古寺巡礼」展、「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」展、また27年4月7日開催予定の「桃山時代の狩野派」展を対象として進めた。 ・平成知新館開館に伴い、オープン記念展「京へのいざない」、特別展観「山陰の古刹・島根鱒淵寺の名宝」、特集陳列「雛まつりと人形」、特別展観「天野山金剛寺の名宝」を対象とした出品作品の撮影を行った。 ・京都市左京区の知恩寺において今年度の社寺調査を行い、併せて作品の撮影を行った。 ・高精細のデジタルカメラを用いた撮影の本格運用を開始した。 ・画像利用申請に伴うアウトソーシングのスキャニングとは別に、劣化の激しい撮影年代の古いカラーフィルムを、当館で所有するスキャナを使用して、館内においても順次スキャニングしデジタル化を開始した。 ・当館所有のスキャナでは8×10フィルムの高精細スキャニングが行えないため、ドラムスキャナを使用したスキャニングをアウトソーシングで開始した。 ・デジタル画像の提供は、別途「@KYOTOMUSE Digital Archives」(artize.net)を介し継続的に行っている。 ・ガラス乾板の劣化状態調査を京都造形芸術大学の協力により行い、同時にスキャナを用いて、ガラス乾板のデジタル化を行った。 ・劣化しているフィルム保存箱を、保存に適した収納箱に順次、移し替えを行っている。 ・重要度の高いマイクロフィルムのデジタル化を行った。 ・図書管理システム、資料の登録・検索を行う文化財情報システムについては、引き続き情報システム検討委員会で課題を検討しつつ、運用している。 																																							
館内資料作成の撮影風景																																							
																																							
【定量的評価】 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>26年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評価</th> <th rowspan="2">経年変化</th> <th>22</th> <th>23</th> <th>24</th> <th>25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数</td> <td>4,927件</td> <td>3,000件</td> <td>A</td> <td></td> <td>3,379</td> <td>3,580</td> <td>2,713</td> <td>4,525</td> </tr> <tr> <td>うちフィルム撮影</td> <td>557件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td></td> <td>—</td> <td>3,410</td> <td>2,168</td> <td>1,406</td> </tr> <tr> <td>うちデジタル撮影</td> <td>4,370件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td></td> <td>—</td> <td>170</td> <td>545</td> <td>3,119</td> </tr> </tbody> </table>				項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数	4,927件	3,000件	A		3,379	3,580	2,713	4,525	うちフィルム撮影	557件	—	—		—	3,410	2,168	1,406	うちデジタル撮影	4,370件	—	—		—	170	545	3,119
項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24		25																														
収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数	4,927件	3,000件	A			3,379	3,580	2,713	4,525																														
うちフィルム撮影	557件	—	—		—	3,410	2,168	1,406																															
うちデジタル撮影	4,370件	—	—		—	170	545	3,119																															
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 新規撮影件数・図書資料の収集を滞りなく実施することができた。																																					
【中期計画記載事項】 美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。																																							
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 資料の収集・整備、及び情報の発信とレファレンスを滞りなく行うことができた。																																					

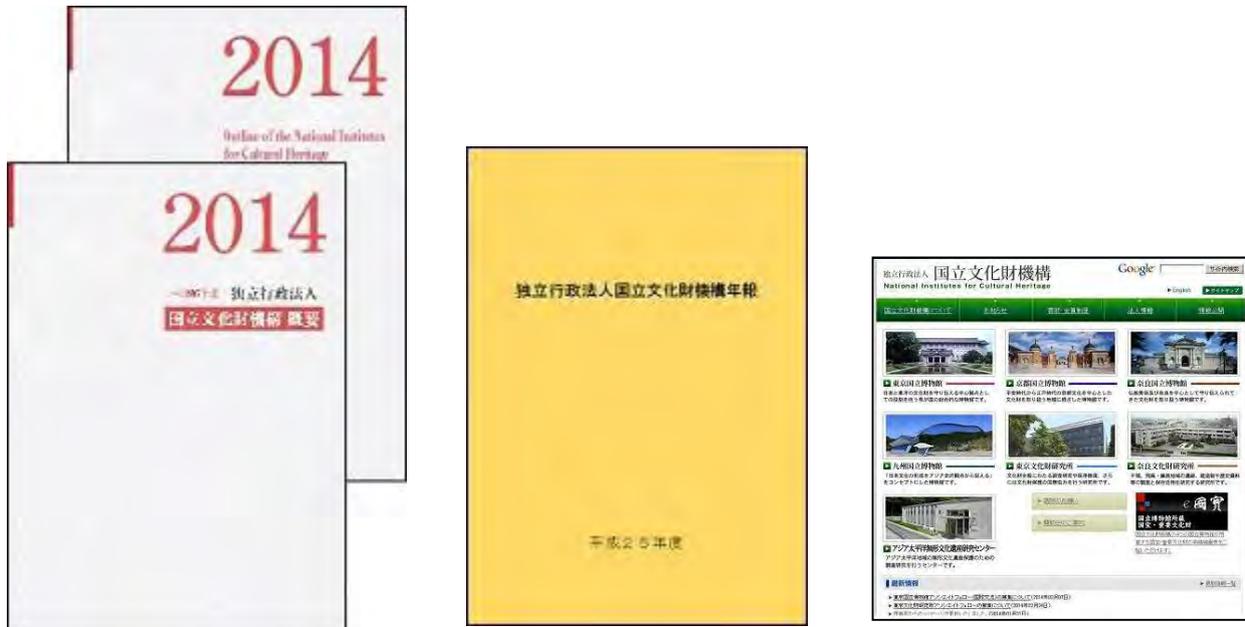
中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ②博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化							
<p>【年度計画】</p> <p>美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図る。また、資料の登録や検索・利用については、最新の情報処理技術を用いた、活用しやすいシステムを開発する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)約13,000件（東京：6,000、京都：3,000、奈良：3,000、九州：1,000）の収藏品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備する。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1)図書情報システム及び写真情報システムによる資料整備と情報蓄積を推進し、内外の利用者に対してサービスの充実を図る。</p> <p>2)仏教美術資料研究センターの耐震補強工事完了をうけて、利用者に対し利便性向上を図るため、資料配置を全面的に見直し、資料の有効的な活用と効率的な運用について検討し、実施する。</p>								
担当部課	学芸部資料室	事業責任者	室長 宮崎幹子					
<p>【実績・成果】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)収藏品・展覧会等出品作品等の新規撮影を多数行い、関連データを整備した(5,478件)。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1)・図書情報システム及び画像情報システムによる情報蓄積を推進し、仏教美術資料研究センター及びインターネットにおける情報公開を充実させた。</p> <p>・OPACの機能を強化し、図書・論文の書誌情報を一括で検索する画面を新規に作成した。これにより、内部で継続して蓄積を行っている、論集・学術雑誌・展覧会図録等に掲載されている論文情報をより有効に活用することが叶い、情報発信と利便性の向上が実現した。</p> <p>2)仏教美術資料研究センターでは、通常の資料・施設の公開にとどまらず、ボランティアによる建築案内や、専門家の見学や研修の受け入れを複数回行っている。今年度は、文化庁招聘の日本美術資料専門家（欧米）の研修を実施し、日本東洋美術に関する資料の蓄積やデジタル化について強い関心が集まった。こうした外部からの見学・取材依頼に適宜対応することにより、機能及び施設の普及・宣伝に着実に効果を上げている。</p>								
<p>【補足事項】</p> <p>1)美術史分野における論文情報の蓄積と公開は、昨今世界的な話題となっているが、日本美術史に関しては、東文研の他に博物館・美術館が自館刊行物について独自に情報の蓄積を行っており、統一的な展開はみられない。当館では、以前より自館刊行物以外にも範囲を広げて論文情報の蓄積に努めており、その数は1万件を超える。こうした情報が効果的に外部に発信する道が拓けたという点で、OPACの機能拡張は大きな意味をもつ。</p> <p>2)今年度は、なら仏像館の閉館を受けて、仏教美術資料研究センター関野ホールの無料公開を実施した。9月から12月にかけての期間中、16,187人の見学者が訪れた。建物及びセンターの活動の広報に大きな成果をあげた。</p>								
								
図書・雑誌論文一括検索画面								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
収藏品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数	5,478件	3,000件	A		11,684	6,103	4,960	4,648
うちフィルム撮影	7件	—	—		1,725	219	14	87
うちデジタル撮影	5,471件	—	—		10,677	5,884	4,944	4,561
【年度計画に対する総合評価】 評定： A	【判定根拠、課題と対応】 目標値を上まわる数値となっており、継続的な蓄積が達成されている。							
【中期計画記載事項】美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。								
【中期計画に対する評価】 評定： A	【判定根拠、課題と対応】 データ整備の目標値を上まわる数値となるだけに留まらず、情報の発信についてもOPACの機能強化等新たな試みの実施により、着実に機能を充実させることができた。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2424

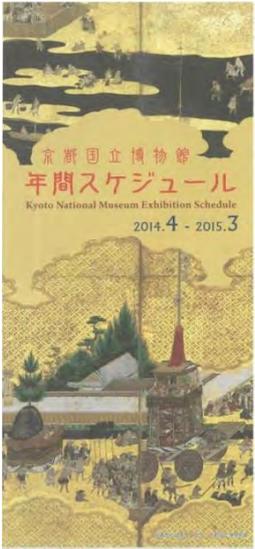
中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ②博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化								
<p>【年度計画】</p> <p>美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図る。また、資料の登録や検索・利用については、最新の情報処理技術を用いた、活用しやすいシステムを開発する。</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)約13,000件（東京：6,000、京都：3,000、奈良：3,000、九州：1,000）の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備する。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1)博物館資料（図書、写真など）データベースにおける業務の効率化に向けて、第2次業務システムについて継続的に見直しと改良を加え、より充実した業務システム構築を目指す。</p>									
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長 富坂 賢						
<p>【実績・成果】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)1,167件の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備した。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1)博物館資料（収蔵品、図書、写真など）データベースにおける業務の効率化に向けて、第2次業務システムの検討を行った。その結果、図書管理については、日本事務器製ネオシリウス（蔵書管理システム）を導入した。収蔵品、写真管理については、日本写真印刷製アルタイズネットを導入した。</p>									
<p>【補足事項】</p> <p>(4館共通)</p> <p>1)収蔵品・出品作品等の新規撮影は、フィルム撮影に代わりデジタル撮影が主体となりつつある。</p>									
									
デジタル撮影風景（スタジオパッション）									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	22	23	24	25
収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数		1,167件	1,000件	B		1,393	4,441	2,142	1,512
うちフィルム撮影		4件	—	—		1,357	2,175	1,480	822
うちデジタル撮影		1,163件	—	—		36	2,266	662	690
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 目標値は達成した。撮影業務は引き続き外部委託として実施しているが、委託業者の確保と撮影制度の向上には留意している。蔵書管理システム等の導入により、より充実した業務システムの構築を実現することができた。							
【中期計画記載事項】美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 撮影自体は各年の展覧会開催や借用実績等の事情によってかなり左右されるが、毎年度の目標値は順調に達成している。なお、画像データの管理について新しい文化財管理システムの導入の中でプロトタイプを作成した。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ③ 広報計画の策定と情報提供								
<p>【年度計画】 (機構本部) 1)機構の概要、年報を作成する。 2)機構本部ウェブサイトを運用し、法人情報の提供を行う。</p>									
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸						
<p>【実績・成果】 (機構本部) 1)『独立行政法人国立文化財機構概要 平成26年度』（日本語版・英語版）を26年7月に発行し、PDF版をウェブサイトに掲載した。 『独立行政法人国立文化財機構年報 平成25年度』を26年12月に発行し、PDF版をウェブサイトに掲載した。 2)機構本部ウェブサイト (http://www.nich.go.jp/) の運用を継続した。随時掲載情報の追加更新を行い、広く一般に向けた法人情報の提供を行った。</p>									
<p>【補足事項】 1)『独立行政法人国立文化財機構概要』は、今回ページ構成の見直しを行い、日本語版と英語版を別冊子に分けて作成した。(日本語版：2,100部、英語版カラー600部。いずれもカラー25ページ) 『平成25年度年報』：232部、カラー4ページ・モノクロ1,226ページ。 2)機構本部ウェブサイトアクセス件数：325,132件</p>									
									
『独立行政法人国立文化財機構概要 平成26年度』（日本語版・英語版）			『独立行政法人国立文化財機構年報 平成25年度』			独立行政法人国立文化財機構ウェブサイト トップページ			
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
-		-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 計画通り概要・年報を作成し、本部ウェブサイトの運用においても必要な情報提供を行うことが出来た。							
【中期計画記載事項】 展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 機構本部から一般への情報提供について、計画通り行うことが出来ている。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 2431

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ③広報計画の策定と情報提供							
【年度計画】 (4館共通) 1)年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。 (東京国立博物館) 総合文化展の活性化に重点をおいた広報活動を行う。 1)広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等を行う。 2)春の「博物館でお花見を」、秋の「博物館でアジアの旅」、正月の「博物館に初もうで」を軸とした総合文化展の広報の企画・運営を行う。 3)本館2階「日本美術の流れ」のテーマ解説及び主な展示作品の解説をまとめ、展示替ごとに更新する日本語パンフレットを継続して作成し、配布する。								
担当部課	学芸企画部広報室	事業責任者	室長 伊藤信二					
【実績・成果】 (4館共通) 1)年間スケジュールリーフレットを制作し(35,000部)、送付及び館内配布した。 (東京国立博物館) 1)『東京国立博物館ニュース』(隔月刊)や、総合案内パンフレット「案内と地図」(7言語8種)、「展示・催し物のご案内」を作成、配布した。 2)「博物館でアジアの旅」、「秋の特別公開」、「博物館に初もうで」、「黒田記念館リニューアル」などにおいて、チラシ、パンフレット、ポスターなど各種広報印刷物を作成・配布し、また当館ウェブサイト・SNSによる告知を行った。 3)本館2階「日本美術の流れ」のテーマ解説及び主な展示作品の解説をまとめ、展示替ごとに更新する日本語パンフレットを10月まで作成し、配布した。11月以降、「トーハクナビ」の「今日のオススメ」作品の配信開始に伴い、『東京国立博物館ニュース』ページ中の「日本美術の流れ」を「今日のオススメ」と連動させ、パンフレット「日本美術の流れ 今日のオススメ」として作成し、配布した。								
【補足事項】 2)・『東京国立博物館ニュース』では、総合文化展のページを増やし、きめ細かい情報発信に努めた。 ・「博物館でアジアの旅」「博物館に初もうで」では、朝日、読売、毎日新聞への広告を出展した。本広告は第82回毎日広告賞準部門賞を受賞した。								
 『東京国立博物館ニュース』728号								
 「博物館に初もうで」毎日新聞広告								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 スケジュールや案内は当初計画した形での広報物作成と配布が実施できた。また各企画において印刷物を作成し効果的な広報が展開できた。						
【中期計画記載事項】 展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 より一般来館者の関心を惹き、かつ外国人や若年層など、今後來館の幅を広げうる層にも訴求するような印刷物及び広報展開が実施できている。						

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ③ 広報計画の策定と情報提供								
【年度計画】 (4館共通) 1)年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。 (京都国立博物館) 1)26年9月13日の平成知新館開館に伴い、広報用ポスター・パンフレットの企画・製作・配付等を行う。 2)文化大使を引き続き任命し、広報活動を行う。									
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 宮川禎一						
【実績・成果】 (4館共通) 1)年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行った。 (京都国立博物館) 1)・26年9月13日の平成知新館開館に伴い、平成知新館の建築及びオープン記念展を紹介するプレスリリース、広報用ポスター・パンフレットの企画・製作・配付等を行った。 ・平成知新館開館ならびにオープン記念展「京へのいざない」の開催に向けて、事前記者発表を3回(うち1回は東京)開催した。 2)文化大使を引き続き任命し、広報活動を行った。									
【補足事項】 (4館共通) 1)26年4月～27年3月の展覧会日程を記載した年間スケジュールリーフレットを作成・配布した。(30,000部) (京都国立博物館) 2)博物館の活動の周知とイメージアップを図り、当館が幅広い年齢層に受け入れてもらえるよう、引き続き(H23年1月から任命中)文化大使として俳優の竹下景子氏を任命した。(H27年1月) ○近隣私鉄会社と連携し、ポスター・チラシの駅構内掲示等広報活動を実施した。 ○展覧会のジャンルに併せてチラシ等発送リストの見直しを行い、より効果的な情報発信に努めた。 ○メールマガジン会員数の維持・増加を目的として24年度に開始した会員特典の小冊子(PDF)の刊行を継続して行った(詳しくは処理番号2442を参照)。 ○「Twitter」を通じて展覧会の混雑状況の迅速な情報発信を行った。 ○一般社団法人京都府タクシー協会、公益財団法人京都文化交流コンベンションビューローの構成員に対して展覧会の特別鑑賞会を実施し、さらなる観覧者数の増加を図った。 ○ウェブサイトにおける貸出作品の情報公開(トップページ「館外での作品公開」)は、寄託作品や個人名を伏せるなどして、網羅的なリストを提示している。このような情報公開は、日本の博物館では極めて画期的なものといえる。									
 年間スケジュール (26年4月～27年3月)									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—		—	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 年間スケジュールや展覧会チラシ・メールマガジンの発行・ツイッターでの特別展覧会混雑状況の告知など多方向の媒体を活用して着実な広報活動を行うと共に、当初、予定になかった東京での報道発表を実施し、報道関係者及び一般読者等から多大な好評を得た。引き続き様々な機会と媒体に対して積極的な発信を行うこととする。							
【中期計画記載事項】 展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。									
【中期計画に対する評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に従って、年間スケジュールや展覧会チラシ・メールマガジンの発行・ツイッターでの特別展覧会混雑状況の告知など多方向の媒体を活用して博物館の広報活動を着実にを行った。また東京での記者発表を実施する等、新館開館に伴い、これまでになく広範な広報活動を行った。引き続き様々なマスコミや媒体に対して積極的な発信を行うこととする。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 2433

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ③広報計画の策定と情報提供								
【年度計画】 (4館共通) 1)年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。 (奈良国立博物館) 1)広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等を行う。 2)特別展の際に、タクシー・ホテル等関係者に対する内覧会を実施し、タクシー・ホテル等利用者への広報活動を展開する。 3)地域の観光協会を通じて観光客への広報活動を展開する。 4)地域の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動の展開を図る。 5)文化大使を引き続き任命し、広報活動を行う。 6)写真・映像の撮影等に場所提供を含め協力することにより博物館の認知度を高める。									
担当部課	学芸部情報サービス室 総務課渉外室企画推進係	事業責任者	室長 吉澤 悟 係長 石田義則						
【実績・成果】 (4館共通) 1)26年7月～27年5月の展覧会日程を記載したリーフレットの初版を5月に5,000部、一部改訂版を10月に30,000部作成し、配布した。 (奈良国立博物館) 1)それぞれの展覧会の特性や意義に応じた広報の方針、及び印刷物の部数を議論する広報戦略委員会を、6回実施した。 2)特別展では、タクシー・ホテル等関係者に対する内覧会を実施、タクシー・ホテル等の利用者への広報活動を行った。 3)奈良市観光協会への入会をはじめ、積極的に地元観光業界に対し広報活動を展開するとともに情報収集に努めた。 4)奈良県が後援する観光イベントへの積極的な協力や、奈良県ビジターズビューローとの連携等、地域の観光団体等と連携した広報活動を展開した。 5)文化大使の次期候補者から就任の内諾を得た。 6)新聞社や鉄道会社の広報誌、地元のタウン情報誌等の写真撮影協力やテレビ局に対して放送のための映像撮影協力をを行い、博物館の認知度を高めた。									
【補足事項】 3)・「はじめは正倉院展実行委員会」に参加し、「まちなかバル」及びスタンプラリーに協力した。 ・地元ホテルのスタンプラリーの特典として、観覧料金の割引を実施した。 ・地元商店街の割引クーポン利用施設に参加した。 5)次期候補は「笑い飯哲夫」。									
									
年間展示案内リーフレット (一部改訂版)									
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 昨年に引き続き、近隣商店街など地域と連携して博物館の情報を発信することができた。								
【中期計画記載事項】 展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 順調に成果を上げているため。								

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ③広報計画の策定と情報提供								
【年度計画】 (4館共通) 1)年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。 (九州国立博物館) 1)特別展の実施に伴う広報・宣伝材料を制作する。 2)現在及び過去や将来の展示リストを検索・紹介し、新鮮な展示情報を情報発信するためのウェブデータベースの整備を継続する。 3)地域の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動を展開する。 4)九州観光推進機構などを通じた海外への広報・営業活動を展開する。 5)文化交流展示室からの積極的な情報発信を図るため、ポスター・ちらし・ウェブコンテンツの活用を一層、促進する。									
担当部課	学芸部企画課 学芸部広報課	事業責任者	課長 臺信祐爾 課長 田端幸朋						
【実績・成果】 (4館共通) 1)年間スケジュールリーフレット「九州国立博物館 展示スケジュールのご案内」の制作・配布を行った。(50,000部) (九州国立博物館) 1)特別展にかかわるポスター、ちらしなどの広報・宣伝材料を制作した。 2)過去の特別展やトピック展などの情報の整備とともに、現在及び将来の展示リストの検索・紹介、新鮮な展示情報について情報発信するためのウェブデータベースの整備についても実施した。 3)トピック展示ポスター、ちらし、「展示・イベントスケジュール」の設置など観光協会と連携した広報活動を実施した。 4)九州観光推進機構のウェブサイトに博物館情報を掲載し、アジアへ情報を発信した。 5)特別展と文化交流展示室とで統一的な企画を行った際、チケット半券に文化交流展示室の詳細情報を記載し、特別展来場者が文化交流展示室へも足を運ぶよう工夫した。									
【補足事項】 3)・商工団体へ展示・イベント案内ちらしを毎月、『季刊情報誌アジアージュ』を年4回送付し、会員等への周知を依頼した。 ・福岡県が運営するポップカルチャー配信サイト「アジアンビート」のウェブサイトに博物館情報を掲載した。 4)・旅行代理店やクルーズ客船の担当等を招聘し広報・営業を行った。 ・航空会社国際線機内誌に特別展及び施設紹介を掲載した。 5) 特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美—」とあわせて、文化交流展示室において特別公開「海を越えた再会—クリーブランド美術館の仲間たち」という統一的な企画を行った。その際に、チケットの半券に文化交流展示室での特別公開の情報（特別公開タイトル、会期）を掲載することでパブリシティの向上に取り組んだ。その結果、特別展来場者の54%が文化交流展示を観覧し、通常時より多くの来館者を動員することができた。									
 <p style="text-align: right;">年間スケジュールリーフレット</p>									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—		—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 実施した特別展のそれぞれの適正に応じたポスター・ちらしなどの制作や、航空会社機内誌への掲載など新たな取り組みも行うことができた。							
【中期計画記載事項】 展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 各年度において広報計画を策定し、告知にあたっては、企画目的を考慮し、地域・年齢層などのターゲティングを行い、効果的に広報を行うことができた。							

【書式A】

施設名 東京国立博物館処理番号 2441

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ④広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動							
【年度計画】 (4館共通) 1)マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。 2)ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行う。 3)メールマガジンを配信する。 (東京国立博物館) 1)『東京国立博物館ニュース』の編集・発行・配布を行う。(年6回) 2)ウェブサイトでは、ブログや投票などの博物館の顔が見えるコンテンツ及びユーザ参加型のコンテンツを継続して発信する。 3)スマートフォン対応を目的としたモバイルサイトの充実を図る。 4)SNS(ツイッター、フェイスブック)による情報発信を継続して行う。 5)主要メディアの文化担当記者との懇談会を開催し、マスコミとの連携を強化する。								
担当部課	学芸企画部広報室	事業責任者	室長 伊藤信二					
【実績・成果】 (4館共通) 1)マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。 2)ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行った。 3)メールマガジンを配信した。(22回) (東京国立博物館) 1)『東京国立博物館ニュース』の編集・発行・配布を行った。(年6回) 2)・「1089ブログ」により、情報発信を行った。(更新数82回) ・「投票」など、読者参加型のコンテンツで、展示や文化財についての興味喚起を図った。 3)26年4月よりスマートフォン対応を目的としたモバイルサイトを開発し、26年12月17日に一般向けに正式公開した。 4)25年7月より開始したSNS「Facebook」、「Twitter」による情報発信を継続し、よりタイムリーな情報発信と新たな来館者層の開拓に努めた。 5)新聞雑誌各紙の美術・文化担当記者ならびに文部科学省記者クラブのメンバーを対象とした記者懇談会第2回を実施した(26年4月14日)。また総合文化展示活性化の一環として企画した「博物館でアジアの旅」では、FMラジオ局J-WAVEと連携し、リスナーを招待しての打楽器コンサートを開催した。								
【補足事項】 (4館共通) 1)茶道美術関連雑誌『なごみ』26年10月号の東京国立博物館特集に協力し、140年を超える歴史と蓄積された文化財の質の高さに裏打ちされた東京国立博物館の品格を十分にアピールできた。 (東京国立博物館) 2)・「1089ブログ」では、研究員はもとより、館内の様々な部署の職員が、展示・催し、その他館の活動に関する情報発信に関わった。 ・「Twitter」フォロワー11,388(前年度5,255)、「Facebook」いいね!6,823(前年度3,288)を獲得し、前年度より着実に数を伸ばしている。								
								
『なごみ』26年10月号 東京国立博物館特集			記者懇談会					
【定量的評価】項目								
『東京国立博物館ニュース』発行	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
	6回	6回	B		6	6	7	6
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 雑誌の特集対応、ウェブサイトの充実やSNSの活用により、東京国立博物館のより積極的なPRに寄与した。						
【中期計画記載事項】 広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 スマートフォン用サイトの開発や記者懇談会の実施などにより、一般およびメディア媒体への認知度は年々着実に浸透している。						

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ④広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動								
【年度計画】 (4館共通) 1)マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。 2)ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行う。 3)メールマガジンを配信する。 (京都国立博物館)1)『京都国立博物館だより』、『Newsletter』(英文)の編集・発行・配布を行う。(年4回) 2)地域等が主催する各種の委員会に参加・連携し、広報活動を展開する。 3)京都市内4美術館博物館で連携し、共通の展覧会情報パンフレットを制作・配布する。 4)既刊の博物館ディクショナリーをウェブサイトに掲載し、新刊をメールマガジンにて配信し、利用者の拡大を図る。 5)収蔵品貸与情報をウェブサイトにて公開する。									
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 宮川禎一						
【実績・成果】 (4館共通) 1)各展覧会の招待日のプレス発表会とは別に、調査研究成果のプレス発表会を随時開催し、博物館の研究活動の広報に努めた。また平成知新館開館にあわせ、平成知新館の建築及びオープン記念展を紹介する事前記者発表を開催した。 2)ウェブサイトによる情報提供(日本語・英語)、及び、モバイルサイトによる情報提供を行った。 3)メールマガジンを配信した。また、メールマガジン読者限定特典のブックレット「京博PLUS」の配信を行った。(メールマガジン12回、ブックレット6回) (京都国立博物館) 1)『京都国立博物館だより』(年4回)、『Newsletter』(年4回)の発行・配布を行った。 2)東山南部地域の社寺やホテル等と連携し、展覧会チケットが割引券となる地域マップ付チラシを作成し、広報活動を展開した。 3)京都市内4館(京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都府文化博物館、京都市美術館)の連携協力の提携を結び、共通の展覧会情報パンフレットを作成・配布した。 4)既刊の博物館Dictionaryをウェブサイトに掲載し、新刊をメールマガジンにて配信し、利用者の拡大を図った。 5)収蔵品貸与情報をウェブサイトにて公開した。 ○京都新聞社と連携し、年間を通して館蔵の名品を紹介する『名品手帳』を連載した。 ○雑誌『婦人画報 京都国立博物館非公式ガイドブック』、『月刊文化財 京都国立博物館・平成知新館の全て』、書籍『京都で日本美術をみる【京都国立博物館編】』(集英社)を始め、多くの雑誌、書籍、に記事が掲載され新たな来館者層の開拓に寄与した。 ○朝日放送の「京へのいざない」9月15日放送など複数のテレビ番組の京都国立博物館特集番組に協力して新たな来館者層の開拓に寄与した。									
【補足事項】 ・『京都国立博物館だより』は、年4回、それぞれ5千部から2万部発行(季節による来館者見込により増減)し、観覧者、新聞・雑誌・放送局各社、学校・図書館・美術館・博物館他、郵送希望者にも発送している。 ・『京都国立博物館だより』は平成知新館の開館にあわせ、デザインを一押し、平成知新館開館、平常展示の再開により頁数も増やした。 ・『Newsletter』は、『京都国立博物館だより』の英語版として原則として年4回発行。日本語版にあわせてデザインを刷新し、イメージの統一を図った。現在124号に達しすでに四半世紀を超えた刊行物であり、外国人観覧者や留学生らの好評を博している。 ・「京博 PLUS」は、メールマガジン読者を増やすため、読者限定特典として、わかりやすさや即時性をより重視した博物館全体を話題にするブックレットとして24年度末に刊行を開始、本年度も継続して刊行した。									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
『京都国立博物館だより』発行		4回	4回	B	変化	4	4	4	4
『Newsletter』発行		4回	4回	B		4	4	4	3
【年度計画に対する総合評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 より読みやすく平常展示の内容について読者に興味を持ってもらえるよう『京都国立博物館だより』や英語版『Newsletter』デザインを刷新し、新たな京博を印象付ける広報活動を展開した。さらに平成知新館の開館にあたりさまざまな媒体の活用が進んだため。							
【中期計画記載事項】 広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 『京都国立博物館だより』・『Newsletter』・Webサイトの更新・メールマガジンの発行など平成知新館の開館にあたり着実な刊行が継続できている。さらにテレビ・雑誌・単行本などに新館の紹介番組・記事がでるように積極的な広報展開を実施し、中期計画に対し順調に成果を上げている。							



京都新聞名品手帳 婦人画報 10月号

【書式A】

施設名 奈良国立博物館処理番号 2443-1

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ④広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動(1/2)							
【年度計画】 (4館共通) 1)マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。 2)ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行う。 3)メールマガジンを配信する。 (奈良国立博物館) 1)～7) (略)								
担当部課	学芸部情報サービス室 総務課渉外室企画推進係	事業責任者	室長 吉澤 悟 係長 石田義則					
【実績・成果】 (4館共通) 1)年間を通じて文化財の魅力を紹介する新聞連載を行ったほか、各特別展等の開催に合わせて、マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。 2)特別展や公開講座等の企画ごとに、また展示替えごとにウェブサイト及びモバイルサイトを更新し、最新の情報提供を行った。 3)メールマガジンを毎月1回配信した。(11回)								
【補足事項】 1)○名品展及び館全体の広報 <ul style="list-style-type: none"> ・読売新聞に、年間を通じて文化財の魅力を紹介する連載「奈良博手帖」を行った。(隔週) ・大阪府警連絡誌「なにわ」に毎月展示品解説のコラムを投稿した。 ・朝日新聞日曜版に館蔵品の魅力紹介の記事を連載した(全6回)。 ○特別展「鎌倉の仏像」広報 <ul style="list-style-type: none"> ・読売新聞に展示品紹介を連載した。(5回) ○特別展「醍醐寺のすべて」広報 <ul style="list-style-type: none"> ・読売新聞に展示品紹介を連載した。(3回) ・大阪市営地下鉄にチラシ配置、車内吊製作等を行った。 ・全国書店配付の無料しおりを作成・配置した。 ・大阪の日経新聞社読者への広告ハガキを配付した。 ○「第66回正倉院展」広報 <ul style="list-style-type: none"> ・読売新聞に展示品紹介を連載した。(5回) ・NHK教育で「日曜美術館 第66回正倉院展」がそれぞれ放映された。 								
 <p>全国書店配布の無料しおり</p>								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 昨年に引き続き、各メディアの協力を得て、広報物の製作に努めた。							
【中期計画記載事項】 広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 順調に成果を上げているため。							

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ④広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動(2/2)							
【年度計画】 (4館共通)(略) (奈良国立博物館) 1)特別展及び名品展の情報を掲載した『奈良国立博物館だより』の編集・発行・配布を行う。(年4回) 2)ウェブサイトの外国語版の充実を図る。 3)「奈良トライアングルミュージアムズ」(奈良国立博物館、奈良県立美術館、入江泰吉記念奈良市写真美術館)の3館で連携し、集客増に繋がる広報活動を展開する。 4)周辺関係社寺等と連携し、特別展等の割引特典付きチラシを配布する。 5)マスコミからの取材申し込みを積極的に受け入れ、展覧会、博物館活動への理解・促進を図る。 6)季刊誌『奈良国立博物館だより』のPDF版をウェブサイトに継続して掲載する。 7)英語による展覧会チラシを作成し、外国人観光客誘致のための情報発信を行う。								
担当部課	学芸部情報サービス室 総務課渉外企画推進係	事業責任者	室長 吉澤 悟 係長 石田義則					
【実績・成果】 (奈良国立博物館) 1)名品展や特別展の紹介に加え、文化財情報を満載した季刊誌『奈良国立博物館だより』を発行した。(4回) 2)ウェブサイトの英語版に関して、すべての内容や用語の見直しを図った。適切な美術用語、新しい施設名称、外国人にも分かり易い表現などを積極的に採用し、アクセス数の集中する正倉院展の会期前までに修正を完了した。 3)奈良トライアングルミュージアムズ(奈良国立博物館・奈良県立美術館・入江泰吉記念奈良市写真美術館)として、26年9月に奈良国立博物館にてワークショップ、26年12月に奈良まほろば館にて東京セミナーを実施した。 4)・東大寺、春日大社の協力を得て、体験型のイベントを行った。 ・冬季の集客を図るため割引券を作成し、観光案内所及び市内の宿泊施設に配布した。 ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」について、期間限定(27年1月2日～4日)の無料観覧券(※名品展も無料)を、春日大社において配付し、おん祭展の広報と館の認知度アップに繋げた。 ・特別陳列「お水取り」について、期間限定(27年3月6日～8日)の無料観覧券(※名品展も無料)を、東大寺において配付し、お水取り展の広報と館の認知度アップに繋げた。 5)特別展、特別陳列等の開催にあたっては、報道発表、プレスプレビューを実施、取材にも積極的に対応した。 6)季刊誌『奈良国立博物館だより』のPDF版をウェブサイトに掲載した。 7)特別展では、英文チラシを作成、外国人観光客向けの情報発信を行った。								
【補足事項】								
								
奈良トライアングルミュージアムズ 「東京セミナー」								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
『奈良国立博物館だより』発行	4回	4回	B		4	4	4	4
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 昨年に引き続き、近隣美術館や関連社寺と連携しイベントを行い、集客に努めた。							
【中期計画記載事項】 広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 順調に成果を上げているため。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2444

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																					
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ④広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動																					
【年度計画】 (4館共通) 1)マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。 2)ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行う。 3)メールマガジンを配信する。 (九州国立博物館) 1)ウェブサイトを提供する博物館情報の充実を図るとともに、利用者の利便性を考慮した情報の発信に努める。 2)「九州国立博物館季刊情報誌アジアージュ」の編集・発行・配布を行う。(年4回) 3)太宰府市と連携し、スマートフォンに対応した文化情報発信サイトにより情報発信を行う。																						
担当部課	広報課 総務課	事業責任者	課長 田端幸朋 課長 阿部 勝																			
【実績・成果】 (4館共通) 1)マスコミや公共交通機関等と連携し、新聞紙上での作品の解説や公共交通機関での広報活動を行った。 2)ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行った。26年7月、フォーマットをリニューアルした。 3)メールマガジンを配信した。(毎月2回、年24回) (九州国立博物館) 1)ウェブサイトにて文化交流展示室の「今月の名品」のスケジュール等を掲載し、また研究員が展覧会等の解説を行う動画を「YouTube」で配信した。(詳細は処理番号2454参照) 2)九州国立博物館季刊情報誌『アジアージュ』を発行した。(年4回) 3)スマートフォン向け情報ガイド「太宰府市イベントガイド」で展覧会情報等を発信した。 ○『きゅーはく攻略本』を増刷・福岡県内全小中学校等へ配付した。(26年8月・27年1月)																						
【補足事項】 (4館共通) 1)・公共交通機関にて、ポスターの掲示、チラシの設置等を行った。 ・新聞紙上で展示作品の解説を行った。 新聞にて特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」、特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」、特別展「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」、特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」及び同時開催特別展「日本発掘—発掘された日本列島2014—」の展示解説を連載し、展示作品の紹介を行った。 2)・駐車場の混雑対策のため、ウェブサイト、モバイルサイトにて駐車場空き情報を継続して提供した。 ・ウェブサイト利用者からの意見に九博メールで対応した。 ・団体利用の来館者には、これまで電話にて受付後、FAXで申込書を送っていたが、ウェブサイトより直接申込書をダウンロードできるようにした。また、「よくあるご質問」ページに、より詳細な利用情報を掲載した。 3)・読者投稿紹介やクイズなど双方向型とした。 ・登録数は毎月伸びており、開封率も高水準を維持している。 (九州国立博物館) 2)九州国立博物館季刊情報誌『アジアージュ』を26年4月1日、7月1日、10月1日、27年1月1日の4回発行した。 ○若年層も含めりピーター確保のため『きゅーはく攻略本』を継続して配布した。																						
<table border="1"> <tr> <td>【定量的評価】項目</td> <td>26年度実績</td> <td>目標値</td> <td>評価</td> <td>経年変化</td> <td>22</td> <td>23</td> <td>24</td> <td>25</td> </tr> <tr> <td>九博季刊情報誌『アジアージュ』発行</td> <td>4回</td> <td>4回</td> <td>B</td> <td></td> <td>4</td> <td>4</td> <td>4</td> <td>4</td> </tr> </table>					【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	九博季刊情報誌『アジアージュ』発行	4回	4回	B		4	4	4	4
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25														
九博季刊情報誌『アジアージュ』発行	4回	4回	B		4	4	4	4														
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 ウェブサイト利用者からの意見に対応し、より快適な利用者サービスの向上に努め、好評の声を得た。																				
【中期計画記載事項】 広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。																						
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 積極的な広報活動を順調に行っている。 特に故宮展では、多くのマスメディアと連携し、十分な告知が行えた。																				



季刊情報誌『アジアージュ』

Vol. 35

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ⑤ ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。

【年度計画】

(4館共通)

1)アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図る。

担当部課	学芸企画部広報室	事業責任者	室長 伊藤信二
------	----------	-------	---------

【実績・成果】

(4館共通)

1)アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図った。(詳細は処理番号2441参照)

【補足事項】

- 1)・SNS、メールマガジン、ブログなど複数媒体を連動させた情報発信を行い、訴求力を高めた。
- ・トップページのフラッシュに新規画像を追加、「博物館に初もうで」や開催中の特別展に関連した画像も使用し、各企画の訴求力を高めた。
 - ・特別展ごとに、テーマを絞って展示作品をピックアップし投票していただく投票コーナーを実施した。
 - ・所蔵作品をデザインしたポストカード等、ダウンロードアイテムを更新した。
 - ・特別展「東アジアの華 陶磁名品展」に関して中国語・韓国語のページを設け充実を図った。
 - ・動画「国宝元興寺極楽坊五重小塔の展示の様子」、「国宝檜図屏風 平成の大修理」をアップした。
 - ・「とーはくナビ」の更新版をアップした。
 - ・27年1月の「黒田記念館」リニューアルオープンなどに伴い、基本情報の改訂、マップ画像の改訂等を行った。
 - ・スマートフォン用ウェブサイトを開発、26年12月17日に公開した。
- 内部業務用システムの改変
- ・更新作業の効率化を図るため、CMS（コンテンツ管理システム）機能の改変を実施した。



ウェブサイト 1089ブログ



スマートフォン用ウェブサイト画面

【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
ウェブサイトアクセス件数	4,248,437件	—	—		4,971,306	2,772,633	2,982,729	2,898,885

【年度計画に対する総合評価】
 評価：B

【判定根拠、課題と対応】

SNSやブログを積極的に活用し多くのアクセスを得た。スマートフォン対応ウェブサイトを開発し、予定通り公開することができた。

【中期計画記載事項】 ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。

【中期計画に対する評価】
 評価：B

【判定根拠、課題と対応】

コンテンツ内容の充実とともに、日々新展開するITツールに積極的に対応し、着実にアクセス数を延伸している。

【書式A】

施設名 京都国立博物館処理番号 2452

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ⑤ ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。								
【年度計画】 (4館共通) 1)アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図る。									
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長 企画室長	植田義雄 宮川禎一					
【実績・成果】 (4館共通) 1)平成知新館(新平常展示館)開館を控えた26年6月に、当館ウェブサイトのリニューアル公開を行った。 ・ウェブサイトにおいて、平成知新館開館に伴う新規コンテンツの集中投入や各種情報の大幅な整理を行ったほか、特別展覧会、各種講座、イベント、教育等のコンテンツも掲載や更新を継続的に実施し、内容の充実にも努めた。 ・ウェブサイトにおける博物館概要、刊行物案内などのページも刷新するとともに、研究成果の発信機能を強化した。 ・メールマガジン及びメールマガジン読者特典ブックレットを配信し、親しみやすさの向上等に努めた。(詳しくは処理番号2442を参照) ・平成知新館開館に伴う来館者の混雑に対応するため、これまで特別展会場の混雑状況を発信してきた「Twitter」の活用を広げるなどの試みを行った。									
【補足事項】 1) ・平成知新館開館に伴って名品ギャラリー(平常展)の全展示室に渡る情報ページを新製したほか、開館記念展「京へのいざない」など多数の展示情報、各種講座、イベント、教育事業等に関する情報を集中的に新規掲載し、最新の博物館情報の広報に努めた。 ・ウェブサイトはトップページの主要部にタイル状デザインを採用するなどして情報を整理し、ユーザが目的の情報へ短いステップで到達できるよう導線から全面的に見直した。また、PDF形式記事への依存度を極力減らすことでモバイル端末の利用者にも配慮し、閲覧しやすい記事コンテンツ充実を図った。 ・月1回発行しているメールマガジンについても、平成知新館開館や特別展覧会に伴う臨時号を随時追加して最新の博物館情報の提供に努めるとともに、より親しみやすく展覧会の見どころや作品などを紹介する読者特典ブックレットを併せて発行した。 ・特別展覧会においてはSNSメディア「Twitter」を通じて会場の混雑状況を1時間ごとに発信してきたが、これを平成知新館開館記念展に伴う混雑への対応にも活用を広げた。「Twitter」を使用しない閲覧者にも配慮するとともに、SNSの特性である情報速達性を生かし、台風に伴う臨時休館などの防災情報発信にも活用を広げた。 ・収蔵品データベースで公開する画像は全て見やすく整えた上で公開し、また昨年度より検索できる件数をさらに増やし、利便性を高めた。 ・開館前後の各種報道によってウェブサイトへのアクセスが集中したが、システムの各種調整や監視強化によって対応した。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
ウェブサイトアクセス件数		2,964,705件	—	—		2,077,562	1,835,640	1,837,113	1,562,480
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 平成知新館開館に合わせたリニューアル公開を通じ、広報強化を実現した。情報発信に関わるマンパワー不足が限界を超えており、今後の課題となる。							
【中期計画記載事項】ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。									
【中期計画に対する評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 前年度に対し、190%のアクセス件数向上を達成した。来年度のアクセス数低下に備え、引き続き情報発信の充実を図る。							



リニューアルしたトップページ

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ⑤ ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。

【年度計画】

(4館共通)

1)アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図る。

担当部課	学芸部情報サービス室	事業責任者	室長 吉澤 悟
------	------------	-------	---------

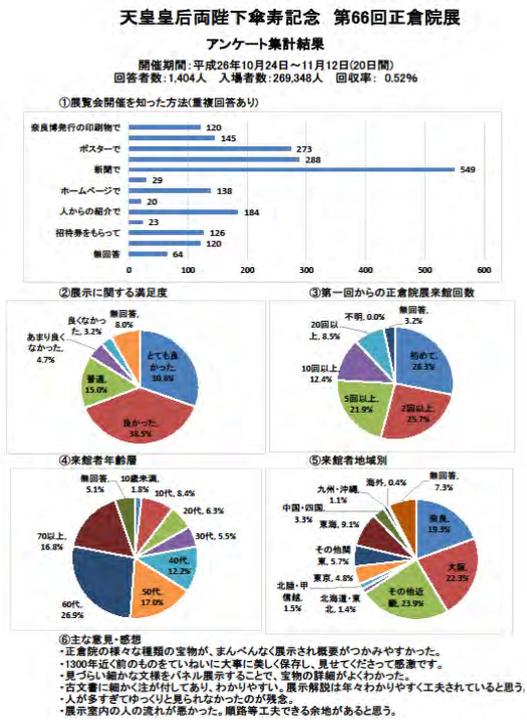
【実績・成果】

(4館共通)

1)

- ・「トピックス」の欄を頻繁に更新し、さらにイベント情報欄には文字情報のみならずチラシ画像なども掲載して、より多くの情報を発信することに努めた。
- ・特別展および特別陳列を紹介する頁に、主な出陳作品の写真付き解説を掲載し、展示構成や作品理解への便宜を図った。特に昨年以上に掲載作品を増やし、より展覧会の理解に資するよう努めた。
- ・『奈良国立博物館だより』の最新版をウェブサイト上で閲覧できるよう適宜アップした。
- ・「第66回 正倉院展」の会期中、読売新聞大阪本社（特別協力）のウェブサイトと連携して「ただ今の混雑状況」を知らせる小窓を設置した。
- ・ホームページから閲覧できる主要作品の写真情報や解説の追加・見直しに努めた。

【補足事項】



ウェブサイト内で閲覧可能な各特別展のアンケート集計結果

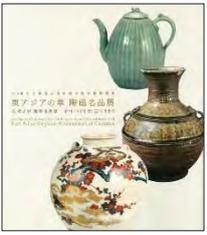
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
ウェブサイトアクセス件数	1,196,669件	—	—			769,293	722,249	845,202
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 昨年に引き続き、イベント情報等への充実に努めた。							
【中期計画記載事項】ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 順調に成果を上げているため。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 2454

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4)文化財情報の発信と広報の充実 ⑤ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。							
【年度計画】 (4館共通) 1)アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図る。								
担当部課	広報課 総務課	事業責任者	課長 田端幸朋 課長 阿部 勝					
【実績・成果】 (4館共通) 1)ウェブサイトにおいて特別展、トピック展示、特別公開やイベント等の情報を常に更新し、内容の充実を図った。 ・ 研究員が展覧会の解説を行う動画の配信を行った。 ・ 駐車場空き情報の提供を行った。 ・ 26年5月から、ご利用案内に「団体でのご利用について」を追加し、学校団体等からの問合せに迅速に対応できるように努めた。 ・ 26年7月から、「画像のご利用について」の項目を追加し、文化財ならびに博物館建物外観等画像の利用に関する問合せに迅速に対応できるように努めた。								
【補足事項】 (4館共通) 1) ・ 前年度までは、修学旅行等の学校団体からの問合せには、個別に電話とファックスで対応していたが、ウェブサイトに「団体でのご利用について」を追加することで、各学校団体には事前にウェブサイトで情報を提供できるようになった。 ・ 前年度までは、文化財ならびに博物館建物外観等画像の利用に関する問合せには、個別に電話で対応していたが、ウェブサイトに「画像のご利用について」を追加することで、事前にウェブサイトで情報を提供できるようになった。 ・ 特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」、特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」、特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」、特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」や文化交流展示室のトピック展示「全国高等学校 考古名品展」等を、ウェブサイトにて研究員が解説する動画を「YouTube」で配信した。 ・ 駐車場の混雑対策のため、ウェブサイト、モバイルサイトにて駐車場空き情報を継続して提供した。								
								
九州国立博物館ウェブサイト 「団体でのご利用について」								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
ウェブサイトアクセス件数	1, 827, 152件	—	—		1, 384, 701	1, 150, 408	2, 078, 279	1, 209, 272
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 スペースの都合でチラシに掲載できない情報などもウェブサイトにも盛り込み充実を図った。その結果、アクセス件数が前年度を上回った。							
【中期計画記載事項】ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 ウェブサイトアクセス件数の向上を図るため、特別展、トピック展示、特別公開やイベント等の情報を常に更新し、また研究員が展覧会の解説を行う動画の配信など内容の充実を推進している。							

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化																																																				
事業名	(1) 調査研究の成果の発信																																																				
<p>【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (東京国立博物館) 1) 東京国立博物館情報アーカイブを運用し、「東京国立博物館情報アーカイブ」等、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2) 紀要・図版目録等を刊行する。 3) 法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。 4) 研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回)</p>																																																					
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	出版企画室長 勝木言一郎																																																		
<p>【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『東京国立博物館文化財修理報告』XVを刊行した。 (東京国立博物館) 1) (東京国立博物館情報アーカイブの詳細は処理番号2411参照)。特別展図録・特集陳列印刷物(リーフレット)12件を発行した。そのうちPDFファイル版5件を東京国立博物館ウェブサイト上に公開することによって研究情報の普及を図った。 2) 『東京国立博物館紀要』50号、『東京国立博物館図版目録 東洋彫刻篇』を刊行した。 3) 『法隆寺献納宝物特別調査概報XXXV 古今目録抄1』を刊行した。 4) 研究誌『MUSEUM』649～654号を刊行した。 ○特別展図録・特集図録を編集した。 ○出版企画委員会6回、『MUSEUM』『紀要』等編集委員会8回を開催し、博物館の出版事業の拡充を図った。</p>																																																					
<p>【補足事項】(東京国立博物館) ○以下の出版物を編集、発行した。 ・『MUSEUM』発行(6回) ・定期刊行物(4件) 『東京国立博物館紀要』50号、『東京国立博物館文化財修理報告』XV、『法隆寺献納宝物特別調査概報 XXXV 古今目録抄1』、『東京国立博物館図版目録 東洋彫刻篇 I』 ・特別展図録・特集印刷物(リーフレット)等(13件) ≪特別展図録≫『キトラ古墳壁画』、『台北 国立故宮博物院—神品至宝—』、『東アジアの華 陶磁名品展』、『日本国宝展』、『みちのくの仏像』、『コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流』 ≪特集図録≫『能面 創作と写し』 ≪特別展印刷物≫「3.11大津波と文化財の再生」 ≪特集刷物≫「古文書の世界」、「甦った飛鳥・奈良染織の美—初公開の法隆寺裂—」、「国宝再現—田中親美と模写の世界—」、「東京国立博物館コレクションの保存と修理」、「国宝 檜図屏風」 ・その他(12件) 「3.11大津波と文化財の再生」パンフレット、「The Great Tsunami of March 11, 2011 and Restoration of Cultural Properties」 「文化財の“臨床保存” —東京国立博物館の挑戦—」 『東京国立博物館所蔵 重要考古資料学術調査報告書(第4冊) —国宝埴輪掛甲武人・重要文化財埴輪盛装女子・重要文化財埴輪猪 附埴輪男子—』 『東京国立博物館ハンドブック』(日本語改訂版及び英語改訂版) 『自在置物』増刷、『根付 高円宮コレクション』増刷、「東京国立博物館コレクションの保存と修理」(平成21～24年度版)増刷</p>																																																					
 <p>『東アジアの華 陶磁名品展』</p>																																																					
 <p>『能面 創作と写し』</p>																																																					
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 30%;">【定量的評価】項目</th> <th style="width: 10%;">26年度実績</th> <th style="width: 10%;">目標値</th> <th style="width: 10%;">評価</th> <th rowspan="5" style="width: 5%;">経年変化</th> <th style="width: 5%;">22</th> <th style="width: 5%;">23</th> <th style="width: 5%;">24</th> <th style="width: 5%;">25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>『MUSEUM』発行</td> <td>6回</td> <td>6回</td> <td>B</td> <td></td> <td>6</td> <td>6</td> <td>6</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>定期刊行物</td> <td>4件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td></td> <td>5</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>特別展図録・特集印刷物等</td> <td>13件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td></td> <td>12</td> <td>12</td> <td>10</td> <td>14</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>12件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td></td> <td>2</td> <td>2</td> <td>4</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table>									【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	『MUSEUM』発行	6回	6回	B		6	6	6	6	定期刊行物	4件	—	—		5	3	4	4	特別展図録・特集印刷物等	13件	—	—		12	12	10	14	その他	12件	—	—		2	2	4	2
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25																																													
『MUSEUM』発行	6回	6回	B			6	6	6	6																																												
定期刊行物	4件	—	—			5	3	4	4																																												
特別展図録・特集印刷物等	13件	—	—			12	12	10	14																																												
その他	12件	—	—			2	2	4	2																																												
<p>【年度計画に対する総合評価】 評価：B</p>				<p>【判定根拠、課題と対応】 刊行の実績値が前年度に比べ高くなっており、その事業も順調に進んだため。</p>																																																	
<p>【中期計画記載事項】 収蔵品等に関する調査・研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧会に関わる刊行物などで発表するとともに、こうした刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を行う。</p>																																																					
<p>【中期計画に対する評価】 評価：B</p>				<p>【判定根拠、課題と対応】 博物館における出版刊行事業を通じて、調査研究の成果が十分発信されたため。</p>																																																	

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 3112

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(1) 調査研究の成果の発信								
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (京都国立博物館) 1) 平成知新館開館に伴い、『京都国立博物館所蔵名品120選—京(みやこ)へのいざない—』を発行する。 2) 研究紀要『学叢』を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイトで公開する。 3) 社寺調査報告書等を刊行する。									
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 宮川禎一						
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『文化財保存修理所修理報告書12号』を刊行した。 (京都国立博物館) 1) 『京都国立博物館所蔵名品120選 京(みやこ)へのいざない』を発行した。 2) 研究紀要『学叢』第36号を刊行した。 3) 社寺調査報告書についてはデータ整理に正確さを期すために次年度に刊行することとした。 ○特別展等の図録を2巻刊行した。									
【補足事項】 (京都国立博物館) 1) 『学叢』第36号で、論文、作品研究、調査報告、修理報告、をそれぞれ1本発表した。 ○特別展等図録(2冊) ・南山城地域の古寺に伝来した彫刻や絵画・工芸作品の調査結果を盛り込み、特別展覧会「南山城の古寺巡礼」を開催、図録を刊行した。 ・21年から修理が行われていた国宝「鳥獣人物戯画」(高山寺蔵)の修理の様子や修理によって得られた新知見などを紹介、また高山寺の名宝の数々を公開する特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」を開催し図録を刊行した。 ○25年度に二度開催した京博紹介シンポジウム(東京・京都)の講演内容をまとめた『京博が新しくなります』(クパプロ)を26年8月に刊行した。									
 『京都国立博物館所蔵名品120選 京へのいざない』									
【定量的評価】 項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
定期刊行物		2件	—	—	—	—	3	3	3
特別展図録・特集陳列印刷物等		3件	—	—		—	4	5	2
【年度計画に対する総合評価】 評定：C			【判定根拠、課題と対応】 判定根拠 平成知新館の開館に合わせて館蔵名品図録『京都国立博物館所蔵名品120選 京へのいざない』を刊行し、特別展覧会『南山城の古寺巡礼』及び『鳥獣戯画と高山寺』の展覧会図録を編集するなど館蔵品や古社寺の文化財の図録を刊行して研究成果の発信を着実にいった。また研究誌である『学叢』を発行して、学術研究成果を公開した。南山城地域の社寺調査報告書についてはデータ整理中であるため報告書は次年度に刊行する予定である。						
【中期計画記載事項】 収蔵品等に関する調査・研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧会に関わる刊行物などで発表するとともに、こうした刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を行う。									
【中期計画に対する評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 一部刊行の遅れている報告書等があるものの、その他展覧会図録・研究紀要などを予定通りに刊行し、中期計画に沿って着実に研究成果の普及を行った。						

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化							
事業名	(1) 調査研究の成果の発信							
【年度計画】 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1)文化財修理に関する印刷物を刊行する。 (奈良国立博物館) 1)研究紀要『鹿園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイトで公開する。 2)入場無料ゾーンを利用し、調査研究活動実績をパネル等で公開する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 野尻 忠					
【実績・成果】 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1)文化財修理に関する調査研究成果は、研究紀要『鹿園雑集』内に包摂する形で刊行した(27年3月)。 (奈良国立博物館) 1)研究紀要『鹿園雑集』は、前年度刊行予定であった分とあわせ、合併号として刊行した(27年3月)。 2)地下回廊の入場無料ゾーンにおいて、東京文化財研究所との共同研究による仏教美術の光学調査の成果、館蔵品の修理実績等に関するパネル展示を行った(26年9月7日まで)。また、9月9日より同所にて特別企画「正倉院展ポスター昭和22—昭和63」(9月9日～11月30日)、仏像写真展「大和の仏たち」(12月2日～27年3月31日)を開催した。 ○展覧会等図録10冊を刊行し、その中に収蔵品の調査研究成果の一部を収録した。								
【補足事項】 ・展覧会等図録10冊を刊行した。 『武家のみやこ 鎌倉の仏像 迫真とエキゾチシズム』(特別展図録) 『国宝 醍醐寺のすべて 一密教のほとけと聖教一』(特別展図録) 『第66回正倉院展』(特別展図録) 『The 66th Annual EXHIBITION OF SHOSO-IN TREASURES』(特別展英語版図録) 『おん祭と春日信仰の美術』(特別陳列図録) 『お水取り』(特別陳列) 『正倉院展ポスター昭和22—昭和63』(特別企画図録) 『大和の仏たち 一奈良博写真技師の眼一』(仏像写真展図録) ほか2件 ・特別展「鎌倉の仏像」にあたっては、読売新聞紙上に展示品紹介の連載を3回実施した。 ・「第66回正倉院展」にあたっては、読売新聞紙上に展示品紹介の連載を5回実施した。								
								
展覧会図録								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
定期刊行物	1件	—	—	—	1	—	1	—
特別展図録・特別陳列印刷物等	10冊	—	—		5	5	6	6
研究論文等発表実績	22件	—	—		33	29	31	22
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 入場無料ゾーンでの研究活動実績公開を複数回にわたり実施することができた。							
【中期計画記載事項】収蔵品等に関する調査・研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧会に関わる刊行物などで発表するとともに、こうした刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を行う。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 展覧会図録等を予定通りに刊行し、中期計画に沿って着実に研究成果の発信を行った。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 3114

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化							
事業名	(1) 調査研究の成果の発信							
【年度計画】 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。 2) 保存修復活動の成果を教育普及事業に反映させる。								
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 今津節生					
【実績・成果】 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 九州国立博物館トピック展示「大涅槃展」展示図録に修理と科学調査に関する解説を掲載した。 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』第10号を刊行した。 2) ・保存修復活動の成果を反映させた教育普及事業を行った。 ・九州国立博物館トピック展示「大涅槃展」において、修理と科学調査に関するパネルを展示した。								
【補足事項】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』では、論文10本（うち当館職員9本）を掲載した。（27年3月刊行） 2) 文化財保存のための講演会等を開催した。 ・文化財保存交流セミナーを開催した。 ○特別展図録・特集陳列等図録 11冊を刊行した。 （うちトピック展示図録 5冊）								
								
トピック展示「大涅槃展」 修理と科学調査に関するパネル								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
定期刊行物	1件	—	—		1	1	1	1
特別展図録・特集陳列印刷物等	11冊	—	—		11	10	9	11
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 特別展図録・特集陳列等図録 11冊を刊行するなど、年度計画を順調に達成している。							
【中期計画記載事項】 収蔵品等に関する調査・研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧会に関わる刊行物などで発表するとともに、こうした刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 予定通りに図録を刊行するなど、中期計画に沿って順調に達成している。							

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化							
事業名	(2)海外研究者の招聘等研究交流の実施							
【年度計画】 (4館共通) 1)海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。(18人：東京6、京都2、奈良6、九州4) 2)当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。(31人：東京6、京都15、奈良6、九州4) 3)国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4)ICOM(国際博物館会議)大会の日本への招致に向けた活動を促進する。 (東京国立博物館) 1)学術交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。 2)日中韓国立博物館長会議を開催するとともに、IEO(国際展覧会オーガナイザー会議)等の国際会議へ参加する。								
担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	国際交流室長 鬼頭智美					
【実績・成果】(4館共通) 1)韓国、中国、アメリカ、イギリス、タイ等より47名の研究者を招聘し、学術交流に寄与した。 2)韓国、中国、アメリカ、イギリス、ドイツ、オーストリア等に延べ18名の研究員を派遣し、学術交流及び展覧会準備・調査の実施、あるいは研究会・国際会議に参加した。 3)国立故宫博物院展関連事業として国際シンポジウムを、「東アジアの華」展の関連事業として記念講演会を開催した。 4)2019年ICOM世界大会誘致の足がかりの一つとして、「米欧ミュージアム専門家交流事業」を開催し、欧米の日本美術担当研究員10名(上記47名のうち)を招聘して、交流を深めた。(26年11月8日～16日) (東京国立博物館) 1)韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館、故宫博物院との学術交流協定に基づき、研究員の交流を行うとともに、海外での作品調査や特別展等共同事業の企画・実施準備、国際会議出席などのため海外に研究員を派遣、調査研究及び海外館とのネットワーク構築や交流事業の推進を図った。 2)第8回日中韓国立博物館長会議を開催し、中国国家博物館・韓国国立中央博物館の館長らと交流・情報交換を行い、ネットワークを強化した。(26年9月18日) またIEOに研究員を派遣し、欧米各国を中心とした主要美術館・博物館の展覧会担当責任者との意見交換を実施し、ネットワーク強化を図った。(26年5月5～9日ウィーン)								
【補足事項】(4館共通) 1)上記研究員派遣の人数については、当館予算で主体的に派遣した人数の延べ人数を示す。科学研究費及び外部の助成金等による派遣人数を含む人数は、派遣38人であった。 ※実績が目標値を大幅に上回っているのは、当初予算で実施可能な人数を目標値に設定しているため。 (東京国立博物館) 1)研究員の海外交流の成果を館内で共有するため、学術交流発表会を実施した。 ・韓国国立中央博物館との学術交流発表会(26年10月31日教育文化交流団展示課学芸員 朴恵元氏、学芸研究室美術部学芸員 柳京熙氏)館内30名参加 ・同(26年12月18日)26年度派遣の川村佳男研究員、三田覚之研究員による報告会を開催、館内15名、館外1名が参加した。 ・タイバンコク国立博物館長トッサポーン・シーサーマン氏らによる講演会(26年10月18日黒田記念館にて)に館内外あわせて30名が参加した。 2)・日中韓国立博物館長会議は、三館共同企画特別展「東アジアの華 日中韓陶磁名品展」の開会に合わせて開催、韓国国立中央博物館長、中国国家博物館副館長ら各5～6名が出席、三館での共同事業や学術交流について意見交換を行った。 ・IEOはウィーン美術史博物館が会場となり、欧米の主要美術館・博物館を中心に約100名が参加、展覧会実務の諸問題について意見交換を実施、また各館の担当者との交流を図った。 3)・特別展「台北 国立故宫博物院—神品至宝—」開催記念シンポジウム 『中国皇帝コレクションの意味—書画における復古と革新—』参加者数延べ422人 ・東アジアの華 陶磁名品展 記念講演会 参加者数220人								
【定量的評価】								
項目	26年度実績	目標値	評価					
海外からの研究者招聘	47人	6人	A	経年 変化				
海外への研究者派遣	18人	6人	A					
国際シンポジウム開催数	2回	—	—					
国際シンポジウム参加者数	422人	—	—					
					22	23	24	25
					15	16	11	21
					54	48	34	41
					—	1	—	—
					—	323	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：A								
【判定根拠、課題と対応】 外部資金も活用し目標値以上の研究者招聘・派遣を行い目標以上の成果を達成した。今後、対象国がやや偏っていることの改善策を検討したい。								
【中期計画記載事項】文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。								
【中期計画に対する評価】 評価：A								
【判定根拠、課題と対応】 中期計画をかなり上回る成果を達成し、順調に進んでいる。								



第8回日中韓国立博物館長会議
(26年9月、東京国立博物館)

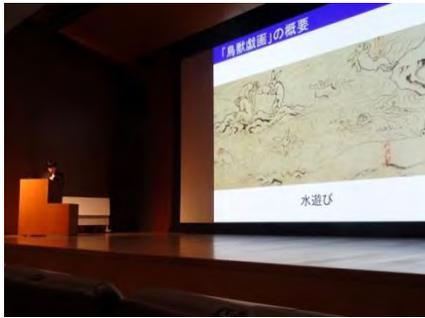


タイからの招聘者による
講演会(黒田記念館)

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 3212

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化							
事業名	(2)海外研究者の招聘等研究交流の実施							
【年度計画】 (4館共通) 1)海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。(18人：東京6、京都2、奈良6、九州4) 2)当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。(31人：東京6、京都15、奈良6、九州4) 3)国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4)ICOM(国際博物館会議)大会の日本への招致に向けた活動を促進する。								
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長 企画室長	植田義雄 宮川禎一				
【実績・成果】 (4館共通) 1)26年度実績 2名 2)研究交流並びに研修のため研究員を海外へ14人派遣した。 3)「鳥獣戯画を語る」と題した特別シンポジウムを開催(26年11月15日)、第1部については日英同時通訳をつけた。 4)ICOM大会招致活動の一環である「米欧ミュージアム専門家交流事業」に協力した。事業の詳細は処理番号3211を参照。 5)国際研究セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」(1回・75人)を開催した。								
【補足事項】 ・研究員を作品調査、科研費調査及び国際会議出席などで派遣した。								
								
特別シンポジウム「鳥獣戯画を語る」								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年 変 化	22	23	24	25
海外からの研究者招聘	2人	2人	B		7	21	3	0
海外への研究者派遣	14人	15人	C		27	25	15	19
国際シンポジウム開催数	1回	—	—		1	1	1	—
国際シンポジウム参加者数	168人	—	—		213	150	209	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：今年度は新館開館準備に重点を置いたため、海外への研究者派遣がやや低調であったが、国際シンポジウムのほか、国際研究セミナーの開催や、さらには新館開館に伴い、海外からの研究者の訪問が多数に上るなど、数値に表れないところで国際交流の進展が見られた。 課題と対応：27年度は琳派に関する国際シンポジウムを開催予定。							
【中期計画記載事項】 文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：毎年の国際シンポジウムをほぼ1回開催するとともに研究者の海外派遣を着実にしている。 課題と対応：今後は、より積極的に海外博物館及び研究者との交流を進めていきたい。							

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施								
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。(18人：東京6、京都2、奈良6、九州4) 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。(31人：東京6、京都15、奈良6、九州4) 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) ICOM (国際博物館会議) 大会の日本への招致に向けた活動を促進する。 (奈良国立博物館) 1) 学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館との交流を活発に行う。									
担当部課	学芸部企画室	事業責任者	室長 野尻忠						
【実績・成果】(4館共通) 1) 中国・韓国の研究者等計9名を招聘し、今後の共同調査や展示活動等に関わる実りある情報交換を実施した。 2) 職員延べ13名を諸外国に派遣し、文化財に関する情報収集や現地研究者との交流を図った。 3) 26年8月5日に韓国の古代古墳に関する国際研究集会を開催し、申大坤氏(韓国国立慶州博物館学芸室長)が「天馬塚出土文化財の意義」のタイトルで口頭報告した。 (奈良国立博物館) 1) 中国上海博物館、中国河南博物院、韓国国立慶州博物館との間で、学術交流協定に基づいて研究員等を派遣し、また招聘して、今後の共同調査や展覧会開催に向けて情報を交換した。									
【補足事項】(奈良国立博物館) 1) 学術交流協定に基づき、以下の交流を行った。 ・中国上海博物館との学術交流協定に基づき、同館から職員3名を10日間招聘、当館から職員3名を10日間派遣した。 ・中国河南博物院との学術交流協定に基づき、同館から職員2名を1ヵ月間招聘、当館から職員1名を約1ヵ月間派遣した。 ・韓国国立慶州博物館との学術交流協定に基づき、同館から研究員2名を各1ヵ月間招聘、当館から職員1名を1ヵ月間派遣した。 ○その他以下の交流を行った。 ・26年11月4日、韓国国立慶州博物館の館長と研究員1名を招聘し、博物館の状況や展示方法について意見交換した。 ・26年7月20日～22日、当館研究員1名を韓国慶州国立博物館に派遣し、日韓の文化財研究について情報交換した。 ・26年8月30日～9月5日に、アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス市のカウンティ美術館へ研究員等4名を派遣し、日本彫刻14件を調査した。 ・26年5月20日～25日に、フランス共和国パリ市に研究員等3名を派遣し、ルーブル美術館・同ランス別館、ギメ美術館、装飾芸術美術館、ケ・ブランリー美術館の展示ケース及び展示室内照明を視察した。 ・26年5月15日、インドネシアのジャカルタ特別州文化財保存研究所長ほか文化財行政関係者5名を受け入れ、文化財の保護について意見交換した。 ・26年12月3日、ブータン王国の文化局職員3名を受け入れ、当館の展示活動について講義した。 ○26年8月5日の国際研究集会には、館外の研究者を含む29名が参加し、活発な議論が展開された。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25	
海外からの研究者招聘		9人	6人	A	経年 変化	9	20	7	9
海外への研究者派遣		13人	6人	A		14	19	17	8
国際シンポジウム開催数		—	—	—		1	—	—	—
国際シンポジウム参加者数		—	—	—		150	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 海外からの研究者招聘、当館からの海外派遣とも充実した内容の実績を上げることができた。							
【中期計画記載事項】文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 学術交流協定に基づく交流が堅調で、招聘及び派遣を継続できている。							



河南博物院招聘者の現地研修 薬師寺
(奈良市)

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 3214

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施								
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。(18人：(他館内訳略)九州4) 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。(31人：(他館内訳略)九州4) 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) ICOM (国際博物館会議) 大会の日本への招致に向けた活動を促進する。 (九州国立博物館) 1) 国際交流活動推進へ向けての基盤を整備するとともに学術文化交流協定を締結している海外博物館等との交流を活発に行う。 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招聘し、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。									
担当部課	交流課 総務課 学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 篠崎孝司 課長 阿部 勝 課長 今津節生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) オランダ、デンマーク等、海外の博物館・美術館等の研究者を35人招聘した。 2) 当機構職員を台湾等、海外の博物館・美術館等に研究交流及び特別展「台北 国立故宫博物院-神品至宝-」等のため、82人派遣した。 3) 国際シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味-工芸における復古と革新-」を開催した。(10月25日150人参加) 国際シンポジウム「世界のアリタ -有田焼の伝統と未来へ続く創造性-」を開催した。(3月8日253人参加) (九州国立博物館) 1) 国際交流活動推進へ向けての基盤を整備し、海外博物館等との交流を実施した。(タイ芸術局、韓国国立公州博物館等) 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招聘し、文化財保存に関するセミナーや講演会を実施した。(オランダ7月14日、デンマーク27年1月27日)									
【補足事項】 (4館共通) 1) 文部科学省招聘事業「新世紀国際教育交流プロジェクト・行政官等受入事業」によりベトナム国立歴史博物館やタイ芸術局から研究者等を招聘した。 なお、海外からの研究者招聘と海外への研究者派遣の目標値は、年度当初の予算をもとに設定したものである。これに対し実績値は、その他の予算を工夫しながら様々な事業に伴う研究者招聘ならびに研究者派遣の数を加えたため、目標値を大幅に超えた数値となっている。特に、特別展「台北国立故宫博物院-神品至宝-」では展覧会開催に向け様々な調整が必要になったことから、台湾からの招聘者ならびに台湾への派遣者が大幅に増加した。また、学術文化交流事業等の円滑な活動推進のため招聘者・派遣者数が増加した。 (九州国立博物館) 1) 学術文化交流協定に基づく交流事業により、タイ芸術局の調査団(6月12日～7月1日、11名)、韓国国立公州博物館の研究員(27年2月2日～13日、3名)等を招聘し、共同研究や研究員等の交流を実施した。 ・25年度文化庁委託事業「水中遺跡の保存活用に関する調査研究」の一環としてオランダ文化遺産庁、デンマークバイキング博物館より研究者を招聘し、各地の博物館等の視察及び当館で職員等を対象とした講演会を実施した。 (オランダ26年7月14日、デンマーク27年1月27日)									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
海外からの研究者招聘		35人	4人	S	経年変化	9	21	3	16
海外への研究者派遣		82人	4人	S		77	56	60	87
国際シンポジウム開催数		2回	—	—		1	1	2	1
国際シンポジウム参加者数		403人	—	—		117	263	450	207
【年度計画に対する総合評価】 【判定根拠、課題と対応】 判定：A		【判定根拠、課題と対応】 予算を工夫した結果、目標値を大きく上回る研究者招聘ならびに研究者派遣が可能となり、海外研究者との交流を活動的に行うことが出来た。また、シンポジウムについても着実に実施しており、計画通り順調に進んでいる。							
【中期計画記載事項】 文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。									
【中期計画に対する評価】 【判定根拠、課題と対応】 判定：B		【判定根拠、課題と対応】 一定数の研究者を招聘及び派遣し、国際シンポジウム、調査等も計画通り実施することができた。							



国際シンポジウム
「中国皇帝コレクションの意味-工芸における復古と革新-」

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化							
事業名	(3) 保存修理事業者への研修プログラム							
【年度計画】 (4館共通) 1) 保存修理事業者を対象とした研修会を開催するとともに、インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を開催する。								
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 神庭信幸					
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・ 特定非営利活動法人文化財保存支援機構(NPO-JCP)が主催する専門家セミナーに当館が共催し、当館を会場として「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ」(26年9月1日～11日の10日間)を開催した。当館は講師・プログラムの選定、及びセミナー会場・修理施設・展示施設の提供を行った。本セミナーの対象は、社会で活動している文化財保存修復専門家及び専門家を目指す学生である。内容は、国内外で活躍できる高度な能力を持つ専門家を育成するために、基礎能力の格段の向上を目指すものであり、既に現場で活躍している講師陣による実践セミナーである。受講生は全国から26名が参加した。 ・ レベルⅠの応用編として「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅡ 陸前高田学校」(26年7月28日～8月3日の7日間)を別会場において開催し、受講生は11名であった。 ・ 大学院生のインターンシップを2人受け入れ、当館の臨床保存と包括的保存について研修を実施した(26年10月6日～20日)。 ・ 東京藝術大学保存科学研究室、日本博物館協会、岩手県立博物館、陸前高田市立博物館、特定非営利活動法人文化財保存支援機構(NPO-JCP)との連携し、大津波被災文化財保存修復連携プロジェクトとして「津波被災文化財の安定化処理に関するワークショップ」(27年1月30日)を開催し、参加者は30名であった。								
【補足事項】 (4館共通) 1) ・ ICOM-CC, 17th Triennial Conference, 2014 Melbourneにて『Stabilization processing of cultural assets damaged by the tsunami of 11 March 2011』を発表した。 ・ 文化財保存修復学会第36回大会(26年7月20日、東京)において「津波被災資料の安定化処理—陸前高田市立博物館の取り組み—」を発表した。								
								
						<p>「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅡ 陸前高田学校」の講義風景</p>		
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
保存修理事業者を対象とした研修会 開催回数	2回	—	—		2	2	2	2
参加者数	37人	—	—		49	37	47	48
インターン受入れ	2人	—	—		3	4	4	8
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 当初計画の通り「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠおよびⅡ」、大学院生のインターンシップを実施し、研修生に対して実践的な研修機会と知識の提供が出来た。							
【中期計画記載事項】保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき、関係機関と連携の上、文化財保存に関する研修を効果的に実施することができた。							

【書式A】

施設名 京都国立博物館処理番号 3312

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化							
事業名	(3)保存修理事業者への研修プログラム							
【年度計画】 (4館共通) 1)保存修理事業者を対象とした研修会を開催するとともに、インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を開催する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶					
【実績・成果】 (4館共通) 1)・毎月1回文化財保存修理所内工房を当館研究員が巡回し、文化財の修復状況を確認するとともに、修理技術者に指導・助言を行った。また、2ヵ月に1回、修理技術者と当館との定例会議を開催した。(巡回12回・会議6回) ・当館開催の特別展覧会において、修理技術者に対する定例の研修会(熟覧)を実施した。(計2回・87人) 26年6月9日 「南山城の古寺巡礼」展(35人) 26年10月20日 「国宝 鳥獣戯画と高山寺」展(52人) ・文化財修復に関わる大学院生(1人)のインターンシップ実習(26年8月18日～9月19日)を実施し、26年12月10日に口頭による報告会を開催し(出席者42人)、報告書を作成した。 ・国内外博物館における保存科学、修復の専門家、あるいは文化庁の主催する「指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー」による文化財保存修理所の視察を受け入れ、情報交換などを行った。(計6回・61人) 26年9月2日 国立台湾大学博物館及び京都大学総合博物館(7人) 26年9月24日 フォルゲン博物館(2人) 26年10月23日 文化庁(25人) 26年11月14日 米欧ミュージアム専門家交流事業実行委員会(20人)詳細は処理番号3211を参照 26年10月30日 フリーア美術館(2人) 26年12月16日 韓國學中央研究院蔵書閣(5人) ・保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会を26年9月5日に実施した。(参加者19人)								
【補足事項】 (4館共通) 1)・文化財保存修理所巡回によって、修理技術者から文化財の修復状況について説明をうけ、当館研究員から専門的な立場から指導・助言を行うことで、双方の見識にプラスとなった。 ・修理技術者に対する定例の研修会(熟覧)においては、実際の文化財を目にすることにより、修理技術の習得や向上に資することができた。 ・文化財修復に関わる大学院生をインターンシップとして受け入れ、実習を行ったことは、修復技術の継承や今後の技術者育成を考える上でも意義は大きい。 ・保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会後に実施したアンケートでは、「技術や意識をしっかりと受け継ぎたい」、「大学院で実施している修復事業をより精度の高いものにしたいたい」あるいは「修復に携わるものとしての使命感を身につめられた」など、実際の修理現場の見学・説明といった研修を行うことで、学生の意欲や目的意識の向上を図ることができた。								
								
保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会(26年9月5日)								
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	22	23	24	25
保存修理事業者を対象とした研修会				経 年 変 化				
開催回数	2回	—	—		4	4	4	3
参加者数	87人	—	—		166	160	169	140
インターン受入れ		1人	—	—	2	4	3	4
大学院生のための研修会参加者数		19人	—	—	16	13	29	18
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 年度計画に記載した事項については、修理技術者及び博物館関係者に益する内容を実施し、目標を達成している。						
【中期計画記載事項】保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に記載した所期の目標を順調に達成している。保存修理の意義をより多くの国民に知ってもらうため、一般向けの講演会の実施を検討したい。						

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(3) 保存修理事業者への研修プログラム								
【年度計画】 (4館共通) 1) 保存修理事業者を対象とした研修会を開催するとともに、インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を開催する。									
担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長 谷口耕生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) ○保存修理事業者を対象とした研修会(計4回・67人) ・文化財保存修理所技術者研修会を1回実施した(27年1月16日)。(41人) ・国内外の保存修復専門家による文化財保存修理所各工房での研修・視察を合計3回受け入れ、各工房技術者との間で情報交換を行った。(計3回・26人) ・26年5月15日：インドネシア・ジャカルタ特別州職員による視察・研修(5人) ・26年10月17日：米国・ポールゲッティ美術館支援者による視察・研修(16人) ・27年1月9日：東京文化財研究所新入職員による視察・研修(5人) ○一般向け講演会等 ・文化財保存修理所の概要及び諸活動、修理内容に関する一般向けの講演会を実施(計4回)。									
【補足事項】 ○保存修理事業者を対象とした研修会 ・文化財保存修理所技術者研修会 27年1月16日に、文化財修理所の各工房修理技術者を対象とする研修会を開催し、漆工室工房代表者による漆工品修理に関する報告(「菊桐紋蒔絵眉作箱の保存修理」)を踏まえた討議を実施した。参加者は41人。 ○一般向け講演会等 ・26年12月25日、アメリカンエクスプレス主催「文化財プレミアム・ミュージアム・ビューイング」において、文化財保存修理所の活動に関する講演、及び特集陳列「新たに修理された文化財」のギャラリートークをそれぞれ1回実施。 ・27年1月16日、文化財保存修理所特別公開に伴い、当館研究員が講堂解説を実施。1日3回、各会約40人参加。									
									
文化財保存修理所技術者研修会 報告「菊桐紋蒔絵眉作箱の保存修理」									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
保存修理事業者を対象とした研修会									
開催回数		4回	—	—	6	7	9	6	
参加者数		67人	—	—	—	97	93	71	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財保存修理所の修理技術者研修会を実施し、漆工室工房代表者による報告に基づいた活発な議論を通じて、各工房の技術者及び当館研究員の垣根を越えた研鑽を積むことができた。文化財保存修理所の研修・視察申し込みが例年に比べて少なかったが、今後はインターンシップの受け入れなど修理技術交流の方法を新たに検討していく。							
【中期計画記載事項】 保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って、関係機関と連携し研修会等を実施することができた。また、修理技術者研修会などを通じて文化財保存修理所の各工房が垣根を越えた研鑽を積むことで、修理現場における工房同士の協業が増えており、文化財保存修理所全体の活動の活発化につながっている。また講演会などを通じてそうした活動内容を広く一般に伝えることができた。							

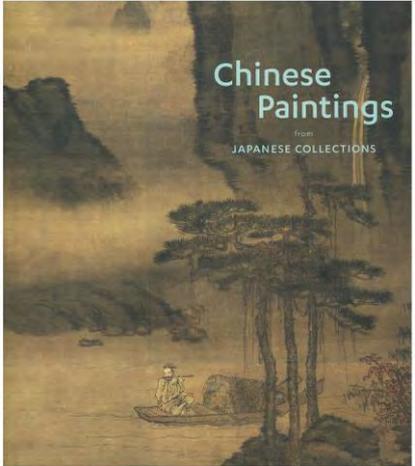
【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 3314

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(3) 保存修理事業者への研修プログラム								
【年度計画】 (4館共通) 1) 保存修理事業者を対象とした研修会を開催するとともに、インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を開催する。									
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 今津節生						
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を行った。(3回30人) ・文化財保存、IPM普及のための講座・研修を開催した。(計6回145人)									
【補足事項】 ○保存修理技術者を対象とした研修会 ・短期インターンシップ「文化財保存修復研修」(大学生 6名) (1回) 26年8月18日～22日 ・古文書保存基礎講座(文化財関係者 24名) 27年1月30日、31日 (2回) ○IPM普及のための研修会 ・環境調査報告会(環境関係者 20名) 26年6月11日 ・IPM普及のための連絡会議 (連携協力：NPO法人ミュージアムサポートセンター) 会議1回 27年1月23日 参加者41名 ・ミュージアムIPM研修(基礎編・技術編・実践編) 研修会4回 参加者84名									
○一般向け講演会等(計2回・64人) ・文化財保存国際交流セミナー ・第1回文化財保存国際交流セミナー(26年4月13日) 参加者40名 シリチャイ・ワンチャルントラクン氏(タイ王国芸術局国立博物館部保存科学専門官) 「バンコク国立博物館における保存修復」 ・第2回文化財保存国際交流セミナー(26年5月30日) 参加者24名 大沢眞澄氏(東京学芸大学名誉教授) 「文化財科学研究の発展を辿るー考古学を中心に」									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
保存修理事業者を対象とした研修会									
開催回数		9回	—	—		22	10	7	6
参加者数		175人	—	—		—	263	280	139
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 保存科学、修理技術、博物館関係者等がそれぞれ多く参加したことにより、有意義な研修会を開催することができた。							
【中期計画記載事項】 保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき、保存科学、修理技術及び博物館関係者等の様々な分野の専門家と連携しながら、着実に研修会を実施し、成果をあげている。							

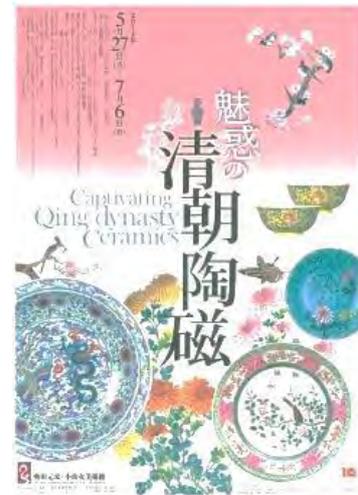
第2回文化財保存国際交流セミナー
講演風景

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化							
事業名	(4)収蔵品の貸与							
【年度計画】 (4館共通) 1)国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。 (東京国立博物館・奈良国立博物館) 1)国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。 (東京国立博物館) 1)長崎歴史文化博物館の平常展示のため、引き続き長期貸与する。 2)海外の美術館・博物館等で開催する展覧会へ貸与する(海外交流展出品作品を含む)。								
担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長 富田 淳					
【実績・成果】 (4館共通) 1)国内の博物館等108機関に1,059件の作品を貸与した。 (東京国立博物館・奈良国立博物館) 1)大阪府立近つ飛鳥博物館と協力して考古資料の相互貸借を実施した。 (東京国立博物館) 1)長崎歴史文化博物館の平常展示のため、年度を越えた長期貸与を実施した。 2)海外の美術館・博物館等延べ7機関に71件の作品を貸与した。								
【補足事項】 (東京国立博物館・奈良国立博物館) 1)東京国立博物館では、考古資料相互貸借事業経費により、大阪府立近つ飛鳥博物館に50件を貸与、12件を借用した。借用品により、特集「西日本の埴輪―畿内・大王陵古墳の周辺―」を開催した。 (東京国立博物館) 1)アメリカのロサンゼルスカウンティ美術館で開催された特別展「日本所蔵の中国絵画展」には、当館から19件の文化財を貸与し、作品展示・展示替え・撤収・輸送随伴・シンポジウムに延べ4名の人員を派遣した。								
								
ロサンゼルスカウンティ美術館 「日本所蔵の中国絵画展」図録								
【定量的評価】 項目	26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25
貸与件数	1,130 件	—	—		1,315	905	1,295	1,137
うち国内の貸与件数	1,059 件	—	—		1,155	865	1,252	1,086
うち海外の貸与件数	71 件	—	—		160	40	43	51
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 平成館改修に伴う考古資料貸与業務中止により貸与件数は若干減少したが、予定通り貸与業務を行えた。							
【中期計画記載事項】 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等の要請に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を実施する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき順調に成果をあげている。							

【書式A】

施設名 京都国立博物館処理番号 3412

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(4) 収蔵品の貸与								
【年度計画】 (4館共通) 1)国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。									
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 浅見龍介						
【実績・成果】 (4館共通) 1)82機関に対し582件の収蔵品・寄託品貸与を行った。(うち海外3機関に対し12件) 収蔵品の貸与件数：272件 寄託品の貸与件数：310件 計：582件 ○本年度も継続してウェブサイトにて「貸出作品リスト」の公開を行った。									
【補足事項】 ・展示館建替に伴い「貸出し停止」措置をとる博物館・美術館が多い中、当館は積極的に貸出を行い、収蔵品の公開に努めた。 ・今年度は、東京国立博物館の「栄西と建仁寺」展に、国宝1件、重要文化財23件、重要美術品3件を含む68件の収蔵品を、「日本国史展」に国宝12件(収蔵品4件、寄託品8件)を貸与した。 ・昨年度当館が企画した「魅惑の清朝陶磁」展を、奥田元宋・小由女美術館及びパラミタミュージアムに巡回し、収蔵品延べ122件を貸与した。 ・京都国立近代美術館の特別展「うるしの近代—京都、(工芸)前夜から」に38件、サントリー美術館の特別展「仁阿弥道八」展に25件、広島県立歴史民俗資料館の特別企画展「かぐわしき日本の香り」に12件などの大口貸与のほか、三井記念美術館の特別展「東山御物の美—足利将軍家の至宝—」には国宝2件、重要文化財2件を含む5件、仙台市博物館の特別展「樹木礼賛—日本絵画に描かれた木と花の美—」には重要文化財2件を含む8件などの収蔵品を貸与した。 ・海外では、大韓民国国立中央博物館の特別展「山水画、理想郷を追い求める(Landscapes: Seeking the Ideal Land)」へ1件、フランスのグラン・パレ・ナショナル・ギャラリーの「パリ北斎」展へ2件、フィラデルフィア美術館の海外展『Ink and Gold:Art of the Kano「狩野派」展』へ9件貸与した。 ・東京国立博物館、九州国立博物館等の特別展の京都における集荷に際し、一時保管庫を提供し、搬出入に立ち会った。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
貸与件数		582件	—	—	年 変 化	297	429	304	626
うち国内の貸与件数		570件	—	—		281	426	301	623
うち海外の貸与件数		12件	—	—		16	3	3	3
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 出品申請に対しては、貸与先の環境、作品の状態を確認したうえで、積極的に対応した。							
【中期計画記載事項】収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等の要請に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を実施する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って、着実に貸与業務を実施することができた。							



奥田元宋・小由女美術館
共催「魅惑の清朝陶磁」展

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化																																									
事業名	(4) 収蔵品の貸与																																									
【年度計画】 (4館共通) 1) 国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。 (東京国立博物館・奈良国立博物館) 1) 国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。																																										
担当部課	学芸部	事業責任者	美術室長兼列品室長 岩田茂樹																																							
【実績・成果】 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 1) 収蔵品と寄託品を、国内外合わせて47の機関に、計149件貸し出した。 (東京国立博物館・奈良国立博物館) 1) 平泉町(平泉文化遺産センター)、島根県立八雲立つ風土記の丘資料館、涌谷町(涌谷町立わくや万葉の里歴史館)、色麻町(色麻町立農業伝習館)、五條市(市立五条文化博物館)の計5館との間で相互貸借事業を実施した。																																										
【補足事項】 (東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館) 貸与申請のあったものうち、作品の保存状態に問題がないものについては、展示期間や会場の温湿度の設定、また警備体制などを調査したうえで、慎重に、しかし可能な限りその全てに応えるように対処した。結果、100件を超える貸与件数となり、公私立等の博物館の展示の充実に寄与しえたと考える。 1) ○貸出先47件の内訳 ・ 国立9件 公立28件 私立10件 海外0件 ○貸与作品149件の内訳 ・ 国宝20件(収蔵品6件・寄託品14件)、重要文化財41件(収蔵品8件・寄託品33件)、その他88件(収蔵品33件・寄託品55件) ・ 収蔵品 47件(絵画18件・彫刻7件・書跡4件・工芸6件・考古12件) ・ 寄託品 102件(絵画41件・彫刻32件・書跡7件・工芸19件・考古3件) (東京国立博物館・奈良国立博物館) 1) 相互貸借事業における貸与品件数、借用品件数は以下のとおりである。 ・ 平泉町(平泉文化遺産センター)(貸与品:1件、借用品:15件) ・ 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館(貸与品:3件、借用品:5件) ・ 涌谷町(涌谷町立わくや万葉の里歴史館)(貸与品:1件(68点)、借用品:5件) ・ 色麻町(色麻町立農業伝習館)(貸与品:1件(68点)、借用品:0件) ・ 五條市(市立五条文化博物館)(貸与品:1件(89点)、借用品:5件(6点))																																										
<table border="1"> <tr> <td>【定量的評価】項目</td> <td>26年度実績</td> <td>目標値</td> <td>評価</td> <td>経年変化</td> <td>22</td> <td>23</td> <td>24</td> <td>25</td> </tr> <tr> <td>貸与件数</td> <td>149件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td rowspan="3">年 変 化</td> <td>159</td> <td>118</td> <td>102</td> <td>135</td> </tr> <tr> <td>うち国内の貸与件数</td> <td>149件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>145</td> <td>113</td> <td>100</td> <td>135</td> </tr> <tr> <td>うち海外の貸与件数</td> <td>0件</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>14</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>—</td> </tr> </table>									【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	貸与件数	149件	—	—	年 変 化	159	118	102	135	うち国内の貸与件数	149件	—	—	145	113	100	135	うち海外の貸与件数	0件	—	—	14	5	2	—
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25																																		
貸与件数	149件	—	—	年 変 化	159	118	102	135																																		
うち国内の貸与件数	149件	—	—		145	113	100	135																																		
うち海外の貸与件数	0件	—	—		14	5	2	—																																		
【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり、貸与申請に対して慎重に、かつ積極的に対応できたため。貸与件数についても例年と同様、100件を超える貸与を行った。なお本年は考古相互貸借も5機関と実施することで、広く文化財の公開に寄与できた。																																									
【中期計画記載事項】収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等の要請に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を実施する。																																										
【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき、貸与申請に対して慎重に、かつ可能な限り全てに応えるよう対処し、文化財の公開活用に貢献することができ、中期計画は順調に進んでいる。																																									



貸与品：国宝
木造薬師如来坐像 館蔵品

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 3414

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(4)収蔵品の貸与								
【年度計画】 (4館共通) 1)国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。									
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長 富坂 賢						
【実績・成果】 (4館共通) 1)国内 27 機関・海外 3 機関に収蔵品及び寄託品計 101 件を貸与した。 (機関数は延べ数。東京国立博物館からの長期管理換品を含む。)									
【補足事項】 (九州国立博物館) 1)○国内の貸与先機関は、下記のとおりである。 <ul style="list-style-type: none"> ・国及び国立博物館 文化庁、東京国立博物館、京都国立博物館 ・地方公共団体及び公立博物館・美術館 (福岡県内) 九州歴史資料館、甘木市歴史資料館、伊都国歴史博物館、小郡市埋蔵文化財センター、太宰府市文化ふれあい館、求菩提資料館、福岡市博物館、福岡市美術館 (福岡県外) 宮崎県立西都原考古博物館、東北歴史博物館、東京都江戸東京博物館、堺市博物館、長野市立博物館、岐阜県現代陶芸美術館、吉野ヶ里歴史公園、佐賀県立九州陶磁文化館、長崎歴史文化博物館 ・私立博物館・美術館及び私立団体 財団法人古都大宰府保存協会 大宰府展示館、奥田元宋・小由女美術館、パラミタミュージアム、薩摩伝承館、MIHO MUSEUM、五島美術館 <p>○海外の貸与先機関は、下記のとおりである。 大韓民国国立公州博物館、大韓民国国立古宮博物館、フィラデルフィア美術館</p>									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	22	23	24	25
貸与件数		101件	—	—		165	119	113	143
うち国内の貸与件数		89件	—	—		131	118	105	117
うち海外の貸与件数		12件	—	—		34	1	8	26
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 公私立の博物館等の要請に対し、適切に貸与を実施した。							
【中期計画記載事項】収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等の要請に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を実施する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って、適切に貸与を実施し、公私立博物館の展示等の充実に寄与することができた。							



大韓民国国立公州博物館「武寧王時代の東アジア世界」出品 重要美術品 三上山下古墳出土獣帯鏡

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進								
【年度計画】 (4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。 (東京国立博物館) 1) 新規貸与館に対する環境調査は、東京文化財研究所と協力して指導助言を行う。									
担当部課	学芸研究部 総務部	事業責任者	部長 谷 豊信 部長 栗原 祐司						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、119件の援助・助言を行った。 ・文化庁や地方公共団体等の文化財関係事業にて協力(21件) ・公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言(48件) ・講演会やセミナー等における講演等での協力(7件) ・作品の展示・保存環境についての調査・指導(20件) ・博物館の管理運営にかかわる助言(23件) (東京国立博物館) 1) 新規貸与館に対する環境調査を実施し、東京文化財研究所と協力して指導助言を行った。									
【補足事項】 (4館共通) 1) ○文化庁や地方公共団体等の文化財関係事業にて協力 ・日本博物館協会 日本のミュージアムのための国際発信力向上推進事業委員会出席 ・山梨県指定文化財調査委員会出席 など ○公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言 ・大阪市立美術館 日本書芸院と共催の書道展に関わる助言 ・東京都庭園美術館 スマートフォンによるアプリの開発と運用について など ○講演会やセミナー等における講演等での協力 ・文化庁 指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー講師 ・東京国立近代美術館 「海外日本美術資料専門家(司書)の招聘・研修・交流事業2014」研修講師 など ○作品の展示・保存環境についての調査・指導 ・岡田美術館、島根県立古代出雲歴史博物館、大分県立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、など (東京国立博物館) 1) 環境調査を実施した新規貸与館は、パラミタミュージアム、グラン・パレ・ナショナル・ギャラリーなど6館。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
公私立博物館・美術館への援助・助言件数		119件	-	-		84	126	85	114
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 件数、内容ともに適切に公私立博物館・美術館等に対する援助・助言を実施することができた。							
【中期計画記載事項】公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等を行う。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき、援助・助言を着実にを行うことにより、我が国における博物館の中核としての機能が強化されている。							



文化財救援活動
(岩手県山田町立鯨と海の科学館)

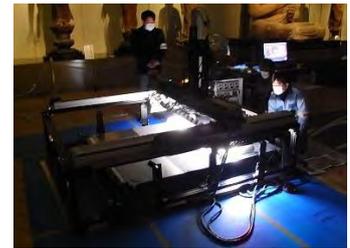
【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 3512

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化							
事業名	(5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進							
【年度計画】 (4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。								
担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長 松本伸之					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、29件の援助・助言を行った。 ・文化財の展示、修理にかかる指導助言 (12件) ・文化財の調査に関する指導助言 (9件) ・講演会、セミナー等における講演等での協力 (7件) ・地方公共団体の文化財保護審議会等会議にて協力 (1件)								
【補足事項】 ○文化財の展示、修理にかかる指導助言 ・碧南市藤井達吉現代美術館 作品展示の指導 など ○文化財の調査にかかる指導助言 ・大津市教育委員会 大津曳山祭総合調査の指導 ・徳島市立徳島城博物館 資料調査 など ○講演会、セミナー等における講演等での協力 ・上海・復旦大学中華文明国際研究中心 国際検討会へ参加し助言 など ○地方公共団体の文化財保護審議会等会議にて協力 ・島根県文化財保護審議会								
								
徳島市立徳島城博物館 資料調査								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
公私立博物館・美術館への援助・助言件数	29件	—	—		123	91	65	43
【年度計画に対する総合評価】 評価：C	【判定根拠、課題と対応】 26年度は平成知新館開館に向けた準備業務に重点を置いたため、人的資源を集中せざるを得なかったことにより、対応件数が減少した。次年度は解消される見込みである。							
【中期計画記載事項】公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：C	【判定根拠、課題と対応】 26年度は平成知新館開館に向けた準備業務に重点を置いたため、人的資源を集中せざるを得なかったことにより、対応件数が減少した。中期計画最終年度となる次年度は実績が上向き見込みである。							

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(5)公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進								
【年度計画】 (4館共通) 1)公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。 (奈良国立博物館) 1)福岡市美術館、静岡市立美術館、岡崎市美術博物館で開催する「法隆寺展－聖徳太子と平和への祈り－」(主催：各開催館、法隆寺、読売新聞社)に学術協力する。									
担当部課	学芸部企画室	事業責任者	室長 野尻 忠						
【実績・成果】 (4館共通) 1)公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対する援助・助言は、総計58件を実施した。 ・文化財の展示にかかる援助と助言(13件) ・文化財の調査、保存、修理にかかる援助と助言(14件) ・講演会やセミナー等における講演等での協力(8件) ・文化庁や地方公共団体、その他各種団体等の文化財関係事業への協力(17件) ・博物館等の運営にかかわる援助と助言(6件) (奈良国立博物館) 1)福岡市美術館、静岡市立美術館、岡崎市美術博物館で開催された「法隆寺展－聖徳太子と平和への祈り－」(主催：各開催館、法隆寺、読売新聞社)に学術協力した。									
【補足事項】(4館共通) 1)○文化財の展示にかかる援助と助言 ・四国民家博物館(高松市)開催の「手のひらの上の仏像」展(26年9月13日～11月30日)の展示内容への助言、陳列作業の指導 など ○文化財の調査、保存、修理にかかる援助と助言 ・雲辺寺(徳島県三好市)所蔵品の修復についての指導と助言 ・旧首里城正殿鐘の保存状態調査に関して助言 ・大型オルソスキャナーによる唐招提寺所蔵品のスキャン作業に伴う指導・助言など ○講演会やセミナー等における講演等での協力 ・奈良市教育センターにおける教職員研修講座での講演 ・公益財団法人京都市環境保全活動推進協会における博物館・講演ボランティア交流会に出席し講演 など ○文化庁や地方公共団体、その他各種団体等の文化財関係事業への協力 ・文化庁 文化審議会専門委員(文化財分科会) ・奈良県教育委員会 奈良県文化財保護審議会委員 など ○博物館等の運営にかかわる援助と助言 ・公益財団法人大和文華館 など (奈良国立博物館) 1)学術協力した「法隆寺展－聖徳太子と平和への祈り－」にあたり、福岡市美術館、静岡市立美術館、岡崎市美術博物館の各会場へ、展示指導・援助・助言のため研究員を3名ずつ派遣した。また法隆寺等からの展示品借り出し、返却作業のために延べ10日間にわたり研究員を総計8名派遣した。									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25
公私立博物館・美術館への援助・助言件数		58件	—	—		35	98	67	71
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 援助・助言の件数、内容とも、十分な実績を上げることができた。							
【中期計画記載事項】公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等を行う。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 23～26年度を通じ、内容とともに援助・助言件数は堅調に推移している。							



大型オルソスキャナーによる唐招提寺所蔵品のスキャン作業

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 3514

中項目	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化								
事業名	(5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進								
【年度計画】 (4館共通) 1) 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。 (九州国立博物館) 1) 地域の自治体と連携し、公私立博物館・美術館等職員のための古文書保存に関する専門講座を開催する。 2) 地域の自治体と連携し、公私立博物館・美術館等職員・ボランティアのための I P M (総合的有害生物管理) に関する専門講座を開催する。									
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 井上 洋一						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 公私立博物館等で開催された研究集会及び講演会において指導・助言を行った。(57件) ・文化財の調査に係る助言(14件) ・文化財の保存修理にかかる援助、助言(12件) ・作品の展示及び運営等についての指導、助言(19件) ・講演会、セミナー等における講演(12件) (九州国立博物館) 1) 「古文書保存基礎講座」を実施した。 2) 文化財関係者及び市民等に向けての研修会「ミュージアム I P M 支援者研修」基礎編・技術編・実践編を実施した。									
【補足事項】 (九州国立博物館) 1) 「古文書保存基礎講座」(第9回) 主催：九州国立博物館・福岡県教育委員会・筑紫野市歴史博物館 協力：国宝修理装飾師連盟 参加者数：24名 本研修は、協力団体共催の「寒糊炊き」にあわせて毎年開催している。 2) 「ミュージアム I P M 研修」 主催：九州国立博物館 博物館科学課 ミュージアム I P M 研修(基礎編2回)・(技術編1回)・(実践編1回) 合計4回実施 参加総数84名									
									
古文書保存基礎講座									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価		22	23	24	25
公私立博物館・美術館への援助・助言件数		57件	—	—	経年変化	77	97	109	64
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 計画通り、順調に進んでいる。							
【中期計画記載事項】 公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等を行う。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 講座及び研修会等を実施しており、計画を順調に達成している。							

業務実績書

研No.1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究(1)－①－ア)		
【事業概要】 他機関との連携を図り、文化財の研究情報について、効果的に発信していくための手法を研究・開発し、文化財に関する研究情報の蓄積を行うとともに、公開・活用のための手法等について総合的に研究する。また、東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築を推進する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務) 田中淳
【スタッフ】 山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、津田徹英(文化形成研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、城野誠治(専門職員)、橘川英規(アソシエイトフェロー)、福永八朗(アソシエイトフェロー)、津村宏臣(同志社大学准教授・客員研究員)、中村佳史(HUMI コンサルティング株式会社・客員研究員)、吉崎真弓(客員研究員)、丸川雄三(国立民族学博物館准教授・客員研究員)、飯島満(無形文化遺産部長)、佐野千絵(保存修復科学センター保存科学研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、山内和也(文化遺産国際協力センター地域環境研究室長)、加藤雅人(国際情報研究室長)、平出秀文(研究支援推進部管理室長)			
【主な成果】 一昨年度一般公開を開始した「東京文化財研究所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』」の明治期全ての分の公開を開始した。『日本美術画報』をはじめとする貴重書の公開準備を始めた。また、「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に各種図書情報を移行し、各部署が所蔵する図書情報の一元化と一体運用のための準備を進めた。アーカイブズを主題とする各種研究会を開催し、アーカイブズのあり方について検討した。			
【年度実績概要】 ・研究会の開催：皿井舞「文化財アーカイブズ構築の取り組み」(東京文化財研究所総合研究会、27年1月13日、東京文化財研究所セミナー室) ・東京文化財研究所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(http://mizue.bookarchive.jp/index.html)：国立情報学研究所と共同開発したデータベースをもとに、前年度までに創刊号から50号までの一般公開を行い、さらに本年度は90号まで(明治期全て)の公開を開始した。			
			
『みづゑ』の世界トップページ			
<p>・その他：前年度に引き続き、写真図版を中心とする画集や図録類のデジタルアーカイブの構築に向け、『日本美術画報』を素材として、いかなる検索方法等の検討を進め、公開準備を進めた。また、東京文化財研究所蔵売り立て目録のデジタル化とその公開に向けての協議を重ねた。</p> <p>・東京文化財研究所刊行物アーカイブの構築については、前年度に完成した「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に、図書情報と目録情報の移行を進め、各種データベースの一体化のための作業を進めた。また、誌面のデジタル化とデータ処理についても作業を継続中である。</p> <p>・以上に関連して、下記の報告2件を刊行した。</p> <p>(1) 津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規「研究ノート ウェブ版『みづゑ』の研究—美術史料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望—」(『美術研究』414号、27年2月)</p> <p>(2) 「アートアーカイブの諸相」(『美術研究』415号、27年3月)</p> <p>橘川英規「はじめに」 加治屋健司(京都市立芸術大学)「美術アーカイブのなかの美術史」 上崎千(慶応義塾大学アート・センター)「アーカイブと前衛—表現の非永続性 ephemerality と資料体」 橘川英規「中村宏氏作成ノートに残された記録と資料—観光芸術研究所、東京芸術柱展を中心に」 加治屋・上崎・橘川「ディスカッション」</p>			
【実績値】 研究情報のウェブサイト上での公開件数2件(備考欄①②)、研究報告数2件(備考欄③④)			
【備考】 ① 東京文化財研究所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(創刊号～90号) ② 『日本美術画報』初編～5編 ③ 津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規「研究ノート ウェブ版『みづゑ』の研究—美術史料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望—」(『美術研究』414号、27年2月) ④ 「アートアーカイブの諸相」(『美術研究』415号、27年3月)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4111

自己点検評価調査

研No.1

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：情報化社会において専門的研究機関から発信される情報の意義が見直されている今般、本研究は緊急性が高い。 独創性：通常の図書館や資料館にはない、よりきめ細やかな情報提供ないし総合的な情報発信を目指して当研究所ならではのオリジナリティのある発信方法を模索し、昨年度、国立情報学研究所と共同で策定した方針に基づきその一部を実現している。 発展性：文字情報や画像情報等、多様な資料の在り方に着目しており、常に応用性を重視して研究を進め、『美術研究』等で報告することができた。 効率性：限られた予算額の中で費用対効果を厳しく吟味しながら検討を進めている。 継続性：過去と現在と未来をつなぐアーカイブを構想しており、一時的なものに終わらないよう十分に留意している。 正確性：単なるPDF配信に終わらない付加価値のある情報発信を実現している。						

2. 定量的評価

観点	研究情報のウェブサイト上での公開件数	研究報告数				
判定	B	B				
判定理由 研究情報のウェブサイト上での公開件数： 本年度目標としたデジタルアーカイブをウェブサイト上で公開することができた。 研究報告数：当初の計画どおり、アーカイブにかかる研究会について成果公開をすることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度計画に沿って順調に成果をあげることができた。また、東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築にあたり、「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に、図書情報と目録情報の移行を進め、各種データベースの一体化のための作業を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国立情報学研究所との連携を図り、多種多様な文化財の研究情報について、効果的かつ有機的に蓄積して発信していくための手法を総合的に研究・開発し、計画4年目としては所期の成果を得られた。「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に、図書情報と目録情報の移行を進め、各種データベースの一体化のための作業を進めることができたが、中期計画最終年度である次年度には、統合の完成をめざしたい。

業務実績書

研No.2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の資料学的研究 (1)－①－イ)		
【事業概要】日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤を整備、確立する。併せて、その基盤を礎としながら国内外の研究交流を推進し、成果を広く一般に公開する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長 津田徹英
【スタッフ】田中淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(任研究員)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男(客員研究員)、三上豊(和光大学教授・客員研究員)、近松鴻二(学習院大学非常勤講師・客員研究員)、吉田千鶴子(東京藝術大学非常勤講師・客員研究員)			
【主な成果】			
<p>(1)・東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美術史研究のためのコンテンツづくりとして、平安時代在銘彫刻作品の銘文データの入力と編年目録(年表)の作成を行った。 <p>(2) (1)の東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業の成果の一端を企画情報部研究会(26年8月6日)で口頭発表を行った。</p> <p>(3) (2)の成果(企画情報部研究会での口頭発表)の内容を『美術研究』414号、同415号に掲載した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作の『記事珠』ウェブサイト上での公開に向けてのパイロット版を作成した。 ・第48回オープンレクチャー「モノ/イメージとの対話」(26年10月31日)で講演を行った。 			
【年度実績概要】			
<p>(1)・黒田清輝宛書簡7,570通の手紙に記された内容が把握できるように、本年度は2,300通の判読作業を行い、その過程でトピックスとなる事項を記して、内容検索ができる目録作業を進めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すでに研究所のデータベースとして公開されている10世紀～15世紀にいたる絵画作例の銘文を集めた『年記資料集成データベース』に対応する彫刻作例の銘文データベースを構築すべく、平安時代の在銘彫刻作品の銘文をデータ入力し、あわせて編年目録の作成を進めた。 <p>(2) ○(1)の黒田清輝宛書簡のうち、一群をなす書簡について、企画情報部研究会(26年8月6日)で、外部研究者を交えて口頭発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・吉田千鶴子「黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」 ・児島 薫「藤島武二から黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について」 <p>(3) ○(2)の成果を踏まえ、26年度刊行の『美術研究』に「研究資料」として掲載した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『美術研究』414号掲載：吉田千鶴子「黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」 ・『美術研究』415号掲載：児島 薫「藤島武二による黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について(一)」 <p>○このプロジェクトの成果の一端についての公表を第48回オープンレクチャー「モノ/イメージとの対話」(26年10月31日)において行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・津田徹英「一流相承系図(絵系図)の構想と機能」 			
			
(1) 黒田清輝宛書簡の判読と内容の入力作業			
【実績値】			
論文等掲載数4件(①～④) 発表件数3件(⑤～⑦)			
【備考】			
論文			
①江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂—ポルトランド美術館所蔵作品簡介(一)—」『美術研究』414号、27年2月			
②江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂—ポルトランド美術館所蔵作品簡介(二)—」『美術研究』415号、27年3月			
③吉田千鶴子「研究資料 黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」『美術研究』414号、27年2月			
④児島薫「藤島武二から黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について(1)」『美術研究』415号、27年3月			
発表			
⑤吉田千鶴子「黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」企画情報部研究会(26年8月6日)			
⑥児島 薫「藤島武二から黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について」企画情報部研究会(26年8月6日)			
⑦津田徹英「一流相承系図(絵系図)の構想と機能」第48回オープンレクチャー「モノ/イメージとの対話」(26年10月31日)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4112

自己点検評価調査

研No.2

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 <p>適時性：存在が知られるようになった黒田清輝宛書簡について、内容の把握に努めるとともに、外部研究者を交えてその研究交流の促進のために研究会を開催し、その内容を『美術研究』において公表することで、成果が認められた。</p> <p>独創性：このプロジェクトの成果の一端をオープンレクチャーにて公表するとともに、その際「モノ／イメージとの対話」というテーマを掲げることで、研究所独自の切り口で講演を行うことができた。</p> <p>発展性：全貌について知られていなかったアメリカ・ポートランド美術館所蔵の日本絵画作品のうち重要作品について、調査時の知見を踏まえ、その知見を『美術研究』に掲載し、取り上げた作品の全てカラー口絵に収めた。そのことで今後、その存在が周知され、研究資料として資することができた。また、10世紀～15世紀にいたる絵画作例の銘文を集めた『年紀資料集成データベース』を彫刻の分野にまで展開すべく、日本彫刻作例の銘文データベースの構築を目指し、本年度は平安時代の在銘彫刻作品の銘文をデータ入力し、あわせて編年目録の作成を進めることができた。</p> <p>継続性：前年度に引き続き、黒田清輝宛書簡の内容把握を進めるとともに、このうち、「外国人留学生書簡」の一群を『美術研究』に研究資料として提示することができた。</p> <p>正確性：黒田清輝宛外国人書簡について、影印（モノクロ）を付して翻刻し、あわせて、書簡のそれぞれに解題を付した。いずれの資料も影印を付すことで翻刻の正確性を期すことができた。</p>						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数				
評定	B	B				
掲載論文数・発表件数：目標を達成したので、Bと判定した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>定性的にB評価、定量的にもB評価とした。それゆえ総合的評価（平均値）もB評価とした。</p> <p>正確性と継続性を見据えつつ黒田清輝宛書簡を、影印と翻刻を対比的に配して、一点ずつに解題を付して行う資料紹介の手法は、史料紹介のあり方として規範・定型をなし得るものであり、この手法を踏襲しつつ、引き続き翻刻・解題の充実に努めたい。あわせて、文化財研究の「今」を見据え、研究の発展性を念頭に置きつつ、ウェブサイト、研究会、講演などさまざまな手法を用いて、成果の周知と公表を行っていききたい。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に対する実施状況は、所期の目的を達成している。次年度は、中期計画の趣旨に沿って5ヵ年計画の5年目として、調査・研究を踏まえた美術史研究のためのコンテンツの形成、研究交流促進と成果公表のための研究会等の開催を行っていききたい。</p>

業務実績書

研No.3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近現代美術に関する交流史的研究(1)－①－ウ)		
【事業概要】			
日本を含む東アジア諸地域における近現代美術の研究資料の収集、整理、調査研究を行うとともに、その交流を明らかにする有効な視点と調査研究方法の開発を目指す。また、多様化する我が国の現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を作成する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 塩谷 純
【スタッフ】			
田中 淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、城野誠治(専門職員)、橘川英規(アソシエイトフェロー)、河合大介(アソシエイトフェロー)、三上 豊(和光大学教授・客員研究員)、丸川雄三(国立民族学博物館准教授・客員研究員)			
【主な成果】			
近現代美術資料の収集として、日本彫刻の近代化に大きく貢献した新海竹太郎に関する手稿等の資料を遺族より受贈、これまでの黒田清輝アーカイブに加え、近代の作家を核とするアーカイブ拡充へ向けての展望が開けた。また現代美術を専門とするスタッフ(橘川・河合)の参加により、中村宏や赤瀬川原平といった作家と交流のあった今泉省彦の旧蔵資料を調査するなど、これまで手薄だった戦後美術の調査研究にも大きな進展が見られた。			
【年度実績概要】			
(1) 黒田清輝作品及び関連資料の調査研究			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒田清輝《東久世伯肖像》(参議院蔵)、《春・秋》(個人蔵)の調査を行った。また菱田春草《菊慈童》(飯田市美術博物館蔵)、岸田劉生《古屋君の肖像(草持てる男の肖像)》(東京国立近代美術館蔵)の光学調査を行った。 			
(2) 現代美術資料の整理作業及びデータベース化作業			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈の整理・調査を進めた。また美学校の中心的人物だった今泉省彦所蔵の資料調査を行った。 ・ 当所所蔵近現代美術資料データの公開促進についての調査研究として新海竹太郎の手記や制作に関する写真・書類等、資料一括を受贈、前年度に寄贈を受けたガラス乾板に加え、新海竹太郎アーカイブの拡充を図った。 			
			
<p>新海竹太郎《鐘ノ音》(1924年作)制作のための写真</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 矢代幸雄・ベレンソン往復書簡の翻刻・翻訳及び関連調査としてベレンソンの研究所を引き継いだイタリアのヴィラ・イタッティでの調査を行った(一部科研)。 ・ 現代美術資料の整理作業及びデータベース化作業として今泉省彦資料の調査をもとに、企画情報部研究会で橘川・河合による口頭発表を行った。 			
(3) 東アジアを中心とする近代美術の交流に関する調査研究として東京工業大学准教授の戦暁梅氏、ソウルで研究活動を進める稲葉真以氏を招き、近代中国の蒐集家廉泉、及び韓国美術のジャンル形成についての企画情報部研究会を開催した。			
(4) 東アジアを中心とする近代美術の交流に関する調査研究として韓国国立中央博物館でのシンポジウム「東洋を蒐集する」に山梨が参加、「李王家コレクションの位置づけをめぐって」の題で発表を行った。			
【実績値】 論文等掲載数 3件 (【備考】①～③) 発表件数 6件 (【備考】④～⑨)			
【備考】 論文			
① 塩谷純「明治期やまと絵断章」(『美術フォーラム21』29 26年5月)			
② 塩谷純「春草と“金銀体”」(『菱田春草』展図録 東京国立近代美術館 26年9月)			
③ 塩谷純「開国から1920年代 プロローグとしての日本近代美術史」(東京美術倶楽部編『日本の20世紀芸術』平凡社 26年11月)			
発表			
④ 山梨絵美子「黒田清輝『昔語り』再考」(企画情報部研究会 26年9月30日)			
⑤ 山梨絵美子「李王家コレクションの位置づけをめぐって」(韓国国立中央博物館シンポジウム「東洋を蒐集する」 26年11月14日)			
⑥ 田中淳「岸田劉生と古屋芳雄—劉生の「駒沢村新町」療養期を中心に」(企画情報部研究会 26年9月30日)			
⑦ 塩谷純「仙台・昭忠碑、被災から復興へ向けて」(東京文化財研究所第48回オープンレクチャー 26年11月1日)			
⑧ 河合大介「反芸術・脱主体化・匿名性—1960年前後の赤瀬川原平周辺から」(企画情報部研究会 27年3月24日)			
⑨ 橘川英規「観光芸術多摩川展パノラマ図を観る」(企画情報部研究会 27年3月24日)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4113

自己点検評価調査

1. 定性的評価

研No.3

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性・独創性： 近年、日本の戦後美術への関心は国内外で高まりを見せ、作家やグループの活動を検証する展覧会も開催される状況下で、今泉省彦資料の調査を行い、赤瀬川原平のような脚光を浴びた作家の背後に迫ることができた意義は大きい。 発展性・効率性： 新海竹太郎資料を受贈したことで、従来の黒田清輝アーカイブに加え、近代の作家を核とするアーカイブ拡充への展望が開けた。また同資料のデータ化に着手し、ウェブ上でのデータベース公開に向けた研究利用の効率化を図った。 継続性・正確性： 前年度より研究協議を行ってきた稲葉真以氏を発表者とする韓国近代美術についての研究会を開催。また笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈の整理も継続して行い、データの精度向上に努めている						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数				
評定	B	B				
判定理由 論文等掲載数・発表件数 論文等掲載数、発表件数ともに目標を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的、定量的にB評価とした。したがって総合的評価（平均値）もB評価とした。 本年度は現代美術研究の進展が著しく、その一方で従来から行っている黒田清輝の作品調査も積極的に進め、次年度に東京国立博物館・当研究所の共催による黒田清輝展への足がかりとした。また作家遺族からの資料寄贈を受けて、今後は文化財アーカイブズ研究室・情報システム研究室と連携し、新海竹太郎アーカイブの構築に努めていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新海竹太郎資料の収集・整理及び今泉省彦資料の調査研究、また韓国の近代美術研究者との交流やイタリア、ヴィラ・イタッティでの調査等により、当該年度計画を達成していると判定した。次年度は最終年度となるため、これまで積み上げてきた個別の調査研究を総括できるよう努めたい。

業務実績書

研No.4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	美術の表現・技法・材料に関する多角的研究(1)－①－エ)		
【事業概要】 様々な美術作品を構成する材料やそこに用いられた技法、ひいては表現、その制作過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にどう至ったか、それがどのように受容されてきたか等を、関連書分野と連携しながら多角的に分析し、現在目の前にある「作品」ないし文化財に対するより深い理解を形成することを目指す。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 小林 公治
【スタッフ】 田中淳 (副所長 (部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子 (副部長)、二神葉子 (情報システム研究室長)、津田徹英 (文化形成研究室長)、塩谷純 (近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗 (主任研究員)、皿井舞 (主任研究員)、安永拓世 (研究員)、江村知子 (文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男 (客員研究員)			
【主な成果】			
<p>(1)・鶴見大学文学部文化財学科と共同で朝鮮螺鈿漆器の光学調査を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> デジタル情報公開を目的とする故秋山光和氏調査資料の整理作業を引き続き実施した。 研究所が所蔵するガラス乾板のデジタル化作業を引き続き実施した。 龍谷ミュージアムにおいて、光照寺所蔵一流相承系図 (絵系図) ほかの調査を行った。 東京国立博物館において、国宝孔雀明王像の調査を実施した。 愛知県陶磁美術館にて朝鮮螺鈿漆器の調査を実施した。 この他、鶴見大学・目白漆芸研究所との研究協議及び意見交換、また新たなデータベース作成に関する所内研究協議を実施した。 東京国立博物館所蔵国宝普賢菩薩像について高精細画像をもとに東京国立博物館との研究会を行った。 		 <p>国宝 孔雀明王像の調査</p>	
<p>(2)・浦添市美術館で開催された「第5回琉球の漆文化と科学」において、琉球螺鈿漆器技術・トルコ螺鈿・パレスチナ螺鈿についてポスター発表を行い、これまでの調査成果について報告した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 企画情報部 12月研究会において、南蛮漆器についての編年案を発表した。 企画情報部 12月研究会において、東京国立博物館所蔵国宝普賢菩薩像について発表した。 			
<p>(3)・デジタル化したガラス乾板については文字データなどの整理作業を行い順次ウェブサイト公開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 彩色DBについては長年の作成・校訂作業を終了し、ウェブサイト公開した。 			
【年度実績概要】			
<p>(1)・ガラス乾板デジタル化作業では本年度内に約 18,000 枚のガラス乾板をデジタル化し、そのうちの約 3,553 枚について文字データ入力校正や整形加工を行った (26年12月末現在)。</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京国立博物館所蔵国宝孔雀明王像調査の結果、これまで明らかでなかった製作技法についての詳細を検討する手がかりを得た。(27年1月15日) 愛知県陶磁美術館にまとも寄託されている個人蔵朝鮮螺鈿漆器について詳細な実見調査を行い、唐草文様の構成原理や製作技術などの検討・意見交換を行った。 			
<p>(2)・これまで各地で実施した調査内容を詳細に検討した結果、南蛮漆器書見台は初期から末期までの5期に分類でき、各種特徴によってその変遷を追えることが明らかになった。(26年12月9日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 前年度東京国立博物館で実施した国宝普賢菩薩像調査について更なる検討を行い、截金を中心とするその製作技術の実態について明らかにし、また平安時代当時にこうした絵画表現が行なわれた意味について考究した。(26年7月23日・12月9日) 			
<p>(3)・デジタル化できたガラス乾板のうち、種々の入力校正や画像加工が終了し、サーバーにアップしてウェブサイト公開を行った画像は2,456件となった。(26年12月末現在)</p>			
【実績値】			
<p>発表件数 3件(①～③) 論文掲載数 2件(④～⑤) 調査件数 4件</p>			
【備考】			
<p>① 小林公治「琉球王国時代の螺鈿漆器製作技術を探る」(「第5回琉球の漆文化と科学」ポスター発表 26年11月15日) ② 小林公治「トルコの螺鈿—本格調査に向けた予備的検討—」(「第5回琉球の漆文化と科学」ポスター発表 26年11月15日) ③ 小林公治「パレスチナの螺鈿—その特徴と歴史に関する予察—」(「第5回琉球の漆文化と科学」ポスター発表 26年11月15日) ④ 小林公治「2013年開催の南蛮漆器に関する展覧会から」(『美術研究』413号 26年10月24日) ⑤ 小林達朗「美しい術—国宝千手観音の場合」(「かたち」再考 26年12月17日)</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4114

自己点検評価調査

1. 定性的評価

研No.4

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本プロジェクトは、単視眼的になりがちな美術品の研究を多面的に進めようとするものであり、またその手法には最先端の方法論も積極的に取り込んでいる。得られた成果にはこれまで知られていない知見も多く、また随時報告を行うことで社会と成果内容を共有することに努めている。 独創性：本研究プロジェクトでは、これまでほとんど研究が進められてこなかった工芸品について研究を進めたり、また日本の代表的仏画について国内外でも適用事例がほとんど無い高解像度画像を駆使した分析を実施したりするなど、十分な独創性を持っていると評価できる。 発展性：e 国宝の精細画像をはるかに超える高精細画像による分析等、本プロジェクトで試みている研究事例の多くとその成果は、今後各地で研究を進める際のモデル・パイロット事例になり得るものであり、そこには多様な展開が期待できる。 効率性：例えばガラス乾板デジタル化作業では一般的なスキャニングではなくデジタル撮影によってデジタル化を行うなど、適宜工夫を試み効率性に配慮している。 継続性：本プロジェクトの調査や研究はいずれも一過性のものではなく、普遍性の高い研究目的の下で継続性や質を維持しつつ実施しているものである。 正確性：本プロジェクトの基本的な研究姿勢は実証性であり、その裏付けとなるデータの確保や取得には人文学的研究手法を中心に論証可能で客観性を持つ方法論を元に行っている。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文掲載数	調査件数			
評定	B	B	B			
判定理由 発表件数：ポスター発表など、多様な形で成果の公表を行うことができた。 論文掲載数：プロジェクト内の主たる研究事例について論文での成果公開を行うことができた。 調査件数：大学との共同研究を実施するなど、新たな試みも加えて様々な調査を行えた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価については適宜、独創的な調査研究を実施でき、また定量的評価についてもいずれの項目でもまとまった件数の実績を上げることができた。こうした双方の評価内容から総合的評価をBとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画4年度目にあたる本年度は、当初より計画し継続的に実施してきた調査対象について、引き続きまとまった調査の実施と成果の公表を行った。また、年度途中より新たに開始した調査等についても成果の公表等を含めて実施できた。こうしたこれまでの取り組みから評価をBとした。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究((1)－②))		
【事業概要】			
<p>近畿地方を中心として、重要な古寺社や関連する旧家等が所蔵する歴史資料や書跡資料等について、継続的・悉皆的に整理・調書作成・写真撮影等の調査を行い、現存資料の把握に努め、成果を目録・データベース等により、また重要資料は翻刻して公開する。このような調査によって文化財研究の基礎を固めた上で、文化財の歴史的・性格・特徴等を研究し、日本の歴史・文化の研究に資する。撮影した写真は研究者等の研究に供する。</p>			
【担当部課】		文化遺産部	【プロジェクト責任者】
			歴史研究室長 吉川 聡
【スタッフ】			
<p>小原嘉記(中京大学国際教養学部准教授、客員研究員)、渡辺晃宏(史料研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、山本 崇(都城発掘調査部主任研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、山本祥隆(史料研究室研究員)、高田祐一(文化財情報係アソシエイトフェロー)、中村 玲(企画展示室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)、飯田ゆりあ(写真室技術補佐員)</p>			
【主な成果】			
<p>仁和寺所蔵の書跡資料の調査成果として、『仁和寺史料 目録編〔稿〕二』を公刊した。ここでは、仁和寺御経蔵聖教の第31函～第50函の目録を収録した。仁和寺は、中世・近世には法親王が門跡として入寺する、最高の格式を持った真言宗寺院であり、その聖教は、御流聖教と呼ばれて尊ばれてきた。その内容がはじめて世に出るものであり、学問的価値の高いものである。また、三仏寺が所蔵する勝手権現像についての調査成果を公表した。勝手権現とは、修験道では蔵王権現・子守権現とともに三所権現と称された重要な存在だが、明治の神仏分離により、実態がよく分かっていない点が多い。今回の調査により、中世に2軀の勝手権現像が、甲冑像・着衣像という、異なる姿で製作されている例が明らかになった。</p>			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・興福寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、二条家記録第6函～第10函の調書を作成した。また第109函等の写真を撮影した。 ・仁和寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、御経蔵聖教第53函～第65函の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第31函～第50函について、資料目録を作成・刊行した。 ・薬師寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第5函～第8函の目録校正、第25函の写真撮影を実施した。 ・三仏寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第4函・経典函等の調書を作成し、仏神像・銅鏡・木札等の調査・写真撮影を実施した。また、関連資料が愛媛県の横峰寺に存在したので、その調査・写真撮影を実施した。 ・唐招提寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、宝蔵・新宝蔵に所在する資料の確認調査・整理作業を行い、宝蔵第2函を写真撮影した。 ・東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第78函～80函の調査データ入力、第56函・第35函の撮影等を行った。 ・奈良の旧家が所蔵する平群郡今国府村庄屋関係資料の調査・生駒市有里町自治会等が所蔵する絵図の写真撮影を実施した。 ・氷室神社の大宮家所蔵文書について、昨年度に奈良市と共編で刊行した報告書に基づいて、公開データベースを増補・更新した。 			
			
三仏寺調査風景			
【実績値】			
<p>刊行物・論文等数2件(①～②) (参考値)調査資料点数</p> <p>興福寺：調書作成資料点数186点、写真撮影資料点数80点 仁和寺：調書原本校正資料点数263点、写真撮影資料点数263点 薬師寺：調書原本校正資料点数111点、写真撮影資料点数172点 三仏寺：調書作成資料点数420点、写真撮影資料点数95点 唐招提寺：写真撮影資料点数93点 東大寺：調査データ入力点数290点、写真撮影資料点数13点 奈良の旧家等：調書作成資料点数4点、写真撮影資料点数10点 大宮家文書データベース 増補点数1260点</p>			
【備考】			
<p>① 『仁和寺史料 目録編〔稿〕二』2015.3 ② 吉川聡・児島大輔「三徳山三佛寺所蔵木造勝手権現像について」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4121

自己点検評価調査

1. 定性的評価

研No.5

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：近畿を中心とする、世界遺産にも登録されるような古寺社等には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、適時性が高い調査である。</p> <p>独創性：三仏寺の勝手権現像においては、文献調査・美術史的調査・ファイバースコープによる胎内銘調査をおこない、それらの調査を総合的にふまえた所見を打ち出しており、独創性がある。</p> <p>発展性：これらの資料には、日本史を研究する上で重要な内容を持つものが多く含まれており、本年度は特に、仁和寺の御経蔵聖教の一部の目録を公表した。これは、仏教史・日本史研究の上で今後大いに活用できるものであり、発展性がある。また、三仏寺所蔵の2軀の神像を、中世の勝手権現像と比定できた。これも、今後の修験道研究の発展に役立つものである。</p> <p>効率性：資料の状況・緊急性等に合わせて、調査の取り方・撮影方法などを変えており、効率性を充分考慮している。</p> <p>継続性：膨大な資料を、長年にわたって着実に中断なく、全容を把握する調査を実行している。このような調査は大学等の機関ではなしえない事業であり、継続性に極めて優れている。</p> <p>正確性：調査資料の重要性に鑑みて、詳細・正確な調査を実施している。</p>						

2. 定量的評価

観点	刊行物・論文等数				
評定	B				
<p>判定理由</p> <p>刊行物・論文等数：目標の数を達成した。</p>					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	興福寺・仁和寺・薬師寺・三仏寺・唐招提寺・東大寺の調査を実施した。また奈良の旧家が所蔵する資料調査なども行った。そして、仁和寺・三仏寺所蔵資料を公表できた。特に仁和寺の御経蔵聖教は、昭和30年代以来の当研究所の調査研究の成果であり、内容的にも、初めて世に知られる貴重なものである。また三仏寺所蔵資料も、文献調査・美術史的調査・ファイバースコープによる胎内銘調査など、総合的な調査を形にできた。刊行物・論文等も、定量的評価の数を満たしている。以上の成果を総合的に判定してBとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業は、堅調に実現できたと考える。特に、長年積み重ねた成果に基づいて、仁和寺御経蔵聖教の一部を公表できたことは大きな成果である。ただし、新たな成果を生み出すための前提としては、長年の地道な調査が不可欠である。今後も地道な調査を継続していくことが必要だろう。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究 (1)－③		
【事業概要】	我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の技法についての再検証(調査研究)を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。		
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	建造物研究室長 林 良彦
【スタッフ】	箱崎和久(遺構研究室長)、西山和宏(都城発掘調査部主任研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、番 光(遺構研究室研究員)、鈴木智大(遺構研究室研究員)、松下迪生(遺構研究室アソシエイトフェロー)、村山聡子(遺構研究室アソシエイトフェロー)、中島咲紀(遺構研究室アソシエイトフェロー)、海野 聡(建造物研究室研究員)、中島義晴(文化遺産部主任研究員)、西田紀子(企画展示室研究員)		
【主な成果】	文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料「ガラス乾板」について画像のデジタルデータ化により、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する再検証作業を「法隆寺金堂古材調査」を継続的に実施した。このほか、受託事業により、秋田県横手市増田町の歴史的建造物の調査を行った。		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・所内で保管している文化財建造物等の保存修理時の撮影ガラス乾板を整理して、約700枚の画像をデジタル化した(デジタル化は外注)。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。 ・古代建築の技法に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を2009年～13年度に引き続き実施した。本年度は、引き続きかつて法隆寺西院金堂に使用されていた部材について調査を行い、西院金堂の現地調査をほぼ終了した。なお、調査にあたっては、年代学研究室の協力を得た。 ・海外関連事業として、ベトナムカイバイ市の保存に向けた集落調査報告書(英語版)を出版した。 (予定していた日中韓建築文化遺産保存国際学術会議(北京)への出席は中国側の都合で取りやめとなった。) ・秋田県横手市増田町の伝統的建造物群保存地区に残る町家2件の詳細調査を受託し、調査・図面作成・報告書原稿作成等を行った。 		
		法隆寺古材調査風景(西院金堂焼損部材)	
【実績値】	刊行図書数1冊(①) 学会等発表件数3件(②)、論文等数6件(③) 保管建造物関係資料整理:写真乾板デジタル化700枚 古代建築研究現地資料収集:法隆寺古材調査38回 保管建造物資料の外部者利用数:乾板写真1件16枚、建造物保存図3件57枚、摺拓本件2冊		
【備考】	刊行図書 ①奈良文化財研究所『ベトナム カイバイ市集落調査報告書(英語版)』2015.3 論文等 ②林良彦「平出集落の価値-伝統的建造物群保存対策調査から-」,塩尻市平出伝統的建造物群保存対策調査現地説明会,2014.6 ほか2件 ③大林潤「法隆寺所蔵古材調査4-昭和の大修理と古材の整理-」,『奈良文化財研究所紀要2014』,2014.6 ほか5件		

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.6

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：法隆寺古材調査は、法隆寺が行っている収蔵庫の再整備にともなうもので、貴重な資料の全貌を明らかにする上で緊急性が高い。</p> <p>独創性：古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、法隆寺古材調査では「技術・技法」等の視点を加え、独創性のある研究内容といえる。</p> <p>発展性：法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査行い、成果を資料化することは、古代建築研究の展開に大きく貢献するものである。</p> <p>効率性：限られた人員に対し十分な成果を出している。</p> <p>継続性：文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は近年継続的に実施しており、地味な作業ではあるが高く評価できる。</p> <p>正確性：受託業務として行った増田町建造物調査においては、詳細かつ正確な調査にもとづいて、その価値を明確にすることで、近年文化庁で推進されている文化財の保存・活用によるまちづくり施策に、大きく貢献している。</p>						

2. 定量的評価

観点	刊行図書数	学会等発表件数	論文等数	保管建造物関係資料整理	古代建築研究現地資料収集	
判定	B	B	B	B	B	
<p>判定理由</p> <p>論文等数：目標値の6件に達した。</p> <p>学会等発表件数：目標の3件に達した。</p> <p>刊行図書数：ベトナムカイベイ市の集落調査報告書を刊行できた。</p> <p>保管建造物関係資料整理：建造物修理にともなう写真乾板700枚を修復デジタル化した。</p> <p>古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査のうち、金堂分の現地調査について完了した。</p> <p>刊行図書数以下は特に目標値を上げていないが十分に成果が認められるので、Bと判定した。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施できた。 受託事業で、増田町の歴史的建築の具体相を究明できたことは、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できる。 古代建築の研究「法隆寺古材調査」は継続して行っている基礎的な作業であり、今後高く評価されるものと考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は基礎的な作業であるが、これを継続させたい。後者の研究は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究ならではの研究である。法隆寺古材調査は膨大な作業量があり、次年度直ちに報告書を刊行することは困難と考えるが、現場での作業を続けるとともに研究成果をまとめて公表して行く方向で本研究の実施にさらに力を注ぎたい。</p>

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究(1)－④－1)		
【事業概要】	我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。		
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】	高桑いづみ(無形文化財研究室長)、菊池理予(研究員)、佐野真規(アソシエイトフェロー)、星野厚子(東京藝術大学助手・客員研究員)、早川典子(保存修復科学センター主任研究員)		
【主な成果】	<p>(1) 古典芸能(能楽)の作曲法等について調査を行い、その成果を公表した。</p> <p>(2) 染織技術を支える原材料や道具等について調査を行い、その成果を公表した。</p> <p>(3) 無形文化遺産部が所蔵する音声資料の整理を行い、その成果を公表した。</p> <p>(4) 上演機会が著しく減少している伝承芸能について実演記録を作成した。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 現行の能・狂言で伝承されている「海道下り」と『放下僧』の小歌について、特異な音楽構造を取ることを解明し、第9回無形文化遺産部公開学術講座で公表した。</p> <p>能の構成要素である「上歌」の音楽構造が、研究の結果、世阿弥自筆能本成立時代には、かなりの程度整っていたことが判明した。また、世阿弥自作『四季祝言』『敷島』の復元した旋律について調査を行い、併せて能楽学会編『能と狂言』第12号で公表し、これまでの成果と共に単著にまとめた。</p> <p>(2) 染織技術のうち、熊谷染(埼玉県)の事例を中心に、原材料や道具の入手・供給の状況を調査し、道具のメンテナンスの状況が各工房の作品・商品、問屋との関わりと密接であることが明らかとなった。調査時に作成した映像資料は文化学園服飾博物館「時代と生きる」展(26年12月～27年2月)で公開し、展覧会の会期にあわせて研究会を開催した。</p> <p>織技術の解明に向けて染織品調査と染織技法書の抽出整理を行い、「地入れ」が染色技法の解明や産地などの特定では重要と考えられることが明らかとなった。その成果は『無形文化遺産研究報告』第9号に掲載した。</p> <p>(3) 特殊再生装置を要する音声資料の内、フィルム音帯について継続調査を実施し、所蔵資料についての報告を『無形文化遺産研究報告』第9号に掲載した。</p> <p>(4) 連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録16席を作成した。なお、神田松鯉師は1演目について収録が完了し(23年9月から本年9月まで全17席)、新たな演目の記録作成を実施する運びとなった。また、前年度に引き続き、ほとんど上演されなくなっている落語の正本芝居噺(道具入り)について、林家正雀師による実演記録2席を作成した。</p>		
【実績値】	<p>学会等発表 7件(備考①～⑦)</p> <p>論文等発表 6件(備考⑧～⑬)</p> <p>(参考値) 実演記録作成 講談16席・落語2席</p>		
【備考】	<p>①高桑いづみ「謡のフシ付けを考える」観世流若手研修会講座 26年6月24日</p> <p>②高桑いづみ「放下の歌と能・狂言」第9回無形文化遺産部公開学術講座 26年10月18日</p> <p>③高桑いづみ「ヨウ吟・ツヨ吟 現在に至る変遷」観世流若手研修会講座 26年12月8日</p> <p>④高桑いづみ「山崎家旧蔵伝書の概要」『よみがえる音色—幸流名家山崎家旧蔵伝書と鼓胴』法政大学能楽研究所 27年2月27日</p> <p>⑤菊池理予「染織技術の伝承における道具の役割—熊谷染を事例として—」平成26年度第2回総合研究会 26年11月4日</p> <p>⑥菊池理予「日本伝統染織技術の継承と発展」27年1月26日 文化学園大学特別講義</p> <p>⑦菊池理予 無形文化遺産(伝統技術)の伝承に関する研究会「染織技術をささえる人と道具」趣旨説明とパネルディスカッションコーディネーター 文化学園大学 27年2月3日</p> <p>⑧高桑いづみ「返シを謡うということ—[上ゲ歌]形成の一過程とその応用—」『能と狂言』12 26年8月</p> <p>⑨高桑いづみ「『四季祝言』『敷島』の謡復元」『能と狂言』12 14.8</p> <p>⑩高桑いづみ「上ゲ歌の「《放下僧》」の歌」『花もよ』第15号 26年9月1日</p> <p>⑪高桑いづみ『能と狂言 謡の変遷』 27年2月</p> <p>⑫飯島満「フィルム音帯一覧」『無形文化遺産研究報告』第9号 27年3月</p> <p>⑬菊池理予「染織技法書に見られる豆汁の役割—寛文6年刊『紺屋茶染口伝書』を中心として—」無形文化遺産報告第9号 27年3月</p>		



【林家正雀師による正本芝居噺『鯉沢』の一場面】

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4141

自己点検評価調査

研No.7

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	継続性	適時性		
評定	B	B	B	B		
判定理由 独創性：能楽の音楽的側面からの調査研究は、当研究所独自のものであるが、その音楽構造の一端や中世以来の伝承の実際を解明した今年度の実績は、わが国の代表的な古典芸能である能楽のこれからの伝承のありかたを考えてゆく上でも、非常に意義深い成果をあげている。また、講談の長編続き物の記録作成についても、継続的に実施している機関は当研究所のみであり、その独創性は高く評価できる。 発展性：江戸時代に刊行された染織技法書の整理は、今なお明らかにされていない技法解明等に向けての基礎資料となるばかりか、今後の染織品の保存修復技術をより高めて行く上でも必要不可欠な情報になるものと期待できる。また、本事業で作成した動画記録（工芸技術・古典芸能）は、次代への技芸の伝承へ向けて、有益な資料になるものと評価できる。 継続性：本事業での調査研究は、いずれも以前から実施してきたが、例えばフィルモン音帯（特殊な再生装置を要する音声資料）について、現存未確認であった資料の報告を地方の郷土資料館から受けるなど、さらなるデータの蓄積等がみられた。講談の長編続き物の記録作成は、平成14年度から実施してきており、これまでに計5演目の収録を完了した。無形文化遺産分野において、継続的な調査研究から生み出される成果は大きい。 適時性：無形文化遺産には、その衰滅が危ぶまれるものが少なくないが、本年度から実質的な調査を始めた熊谷染に関しても、その工房の中には、すでに廃業を予定しているところが多い。作業工程の動画記録作成を含め、可及的早急な調査の必要性が極めて高い。また、正本芝居噺は現在では上演自体が稀なものとなっており、実演記録の作成は緊急性が高い事業であるといえる。						

2. 定量的評価

観点	学会等発表	論文等発表				
評定	B	B				
判定理由 学会等発表・論文等発表：論文等掲載数、発表件数ともに十分である。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	上記の定性的評価、定量的評価に拠り、判定をBとした。無形文化財の記録作成も着実に実施を重ねており、無形文化遺産に係る様々な調査・資料収集・記録作成とあわせ、プロジェクトの一層の充実に努めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究、資料収集、成果の発表ともに計画通り達成していることから、判定をBとした。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究((1)－④－2)		
【事業概要】			
我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集し、保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行い、媒体転換等の必要な措置を講じるための準備を進める。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】			
久保田裕道（無形民俗文化財研究室長）、今石みぎわ（研究員）、齊藤裕嗣（客員研究員）			
【主な成果】			
民俗芸能・風俗慣習・民俗技術の伝承実態・伝承組織について現地調査と資料収集を行った。特に東北の被災地域における無形民俗文化財の現状調査は昨年度に引き続き重点的に行った。 調査の成果は、無形文化遺産の民俗学的解明に貢献し、また震災関連では把握されていない情報の集積に役立った。また、無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議した。特に本年度は被災地における無形文化遺産の継承を考えるために、移転・移住と無形文化遺産についてテーマとして取り上げ、関係者間の協議やネットワーク形成を図った。その成果は報告書にまとめ、関係者及び関係機関等に配布した。 さらに、無形文化遺産情報ネットワーク協議会も開催し、本年度は文化財の防災に関する点からも情報収集と関係者間の協議・ネットワーク形成を図った。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・無形民俗文化財に関する調査・資料収集 民俗芸能の調査として「杉沢比山番楽」「岳神楽」「幸田神楽」等について、民俗技術の調査として「木積の藤箕製作技術」「能登の揚げ浜製塩の技術」「長良川鵜飼い」について伝承や保護の実態についての現地調査や資料収集を行い、現状を把握するとともに現地関係者とのネットワークを構築した。このうち長良川鵜飼いについては市民向け講座で保存・活用についての講演を行った。また継続テーマである「削りかけ」状祭具に関わる技術と風俗慣習の研究として、石川県輪島市において調査を行った。 ・被災地域の無形文化遺産に関する調査とアーカイブの構築 民俗芸能、風俗慣習の調査として東日本大震災被災地である福島県南相馬市の山田神社祭礼、浪江町の苧宿鹿舞・田植踊り、宮城県女川町の祭礼及び獅子舞、岩手県遠野市周辺の鹿踊りに関して、資料収集・記録保存を行った。 ・研究集会の開催 第9回無形民俗文化財研究協議会を26年12月5日「地域アイデンティティと民俗芸能—移住・移転と無形文化遺産—」をテーマに東京文化財研究所において開催し、128名の参加を得た。4件の事例報告（舟山直治・入澤紀・青原さとし・丸尾依子）をもとにコメンテーター2名（星野紘・高倉浩樹）を含めた総合討議を行った。成果は『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめる。27年3月には第3回無形文化遺産情報ネットワーク協議会を東京文化財研究所において開催。東北被災地域における無形文化遺産の復興支援に関わる様々な分野の関係者と共に今後の支援の在り方について協議した。 ・無形文化遺産関係ネットワークの構築 被災地でのネットワーク構築及び関係者ネットワーク構築に向けて福島県・山形県で、県内の無形文化遺産関係者に聞き取り調査などを実施。なお、岩手県大船渡市では市民向け講座で講演を行った。また、伝統文化活性化国民協会からデジタルコンテンツ（無形文化遺産の所在記録等情報データベース・神楽マップ・東京都民俗芸能マップ）の移譲を受けたことに加え、無形文化遺産情報ネットワークにおけるデジタルアーカイブの公開準備を進めるなど、デジタルコンテンツのさらなる拡充と整備を行った。 			
			
<p>【復活した獅子が一堂に会した「女川獅子振り披露会」における女川町小乗地区の獅子舞】</p>			
【実績値】			
学会等発表 3件（備考①～③）			
論文等発表 1件（備考④）			
【備考】			
①今石みぎわ「伝統技術を伝えていくということ—『長良川の鵜飼漁の技術』の保存・活用」岐阜市 27年1月25日			
②今石みぎわ「暮らしの記憶を記録する ごいし民俗誌その後」岩手県大船渡市碓石地区 27年2月15日			
③今石みぎわ「菅笠作りは福岡の宝」ふくおか文化総合センター 27年3月29日			
④今石みぎわ『花とイナウー世界の中のアイヌ文化』（共著）北海道大学アイヌ民族文化センター 27年3月（予定）			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4142

自己点検評価調査

研No.8

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評定	A	B	B	B		
<p>判定理由</p> <p>適時性：継承の危機にある無形民俗文化財の調査研究、記録作成は極めて必要性、緊急性が高い。特に東日本大震災以降、無形文化遺産が果たす役割の重要性について改めて光が当てられており、調査・研究の社会的ニーズもより一層高くなっている。中でも無形文化遺産情報ネットワークでは被災した無形民俗文化財の被災状況の把握と復興の点から必要性、緊急性が高く、社会的にもその成果は認められている。また17年度から指定制度が始まった民俗技術については、近年地方自治体においてもその保存活用に関する議論が高まりを見せているにも関わらず、その調査研究は他分野に比べても十分でないことから、調査研究や記録は急務であり適時性が高い。さらに本年は、公益財団法人伝統文化活性化国民協会の解散に伴い当協会管理運用のデジタルコンテンツが移譲される方針となったことから、急遽環境整備を行い、移設作業を完了させた。これによりさらなるアーカイブの拡充が図られたと共に、貴重なコンテンツの保全・活用が図られたことは適時性に照らしても高く評価できる。</p> <p>独創性：国内唯一の無形民俗文化財の研究部として全国の関係者を集めて専門的観点から協議会を開催し、関係者のネットワーク構築を促進させていることは、無形民俗文化財の保護体制の整備・強化の観点から見て、その独創性を十分評価できる。また被災地域における無形民俗文化財に関する調査・研究及び提言を率先して行ったことは、その独創性において大きな成果が認められる。</p> <p>発展性：無形民俗文化財の積極的活用についての議論・提言を行うことで、記録保存に留まらない無形の文化財保護の在り方を模索したことは発展性の面からみて評価できる。さらに無形文化遺産情報ネットワークを通じ、無形文化遺産の文化財防災についての議論を深化させたことは発展性に富むもので十分評価できる。</p> <p>継続性：全国の無形民俗文化財関係者間、また被災地域における関係者間のネットワーク構築は継続的に行うべき性質のものであり、これを継続的・積極的に行っていることは無形民俗文化財の保護体制の強化に繋がるものとして十分評価できる。また特に民俗技術に関しては全国的な調査の継続により成果が蓄積されてきており、保存活用に向けた新たな調査・研究視点の提供や提言が可能になってきていることは十分に評価できる。</p>						

2. 定量的評価

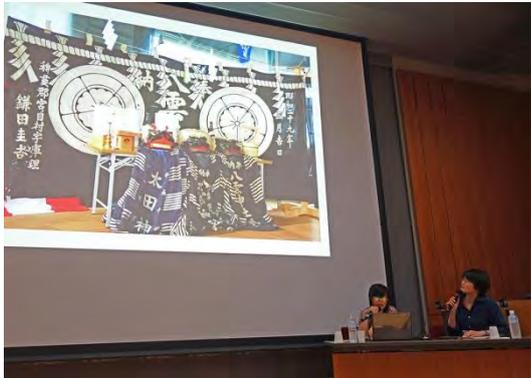
観点	学会等発表	論文等発表				
評定	B	B				
<p>判定理由</p> <p>学会等発表・論文等発表：論文等掲載数、発表件数ともに十分である。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施することができた。前年度から引き続いて行っている被災地域における無形民俗文化財の調査・記録の成果は、全国の継承が困難な無形民俗文化財の保存に際しても活用できるものであり、将来を見通した取組としても極めて重要である。特に本年度は、居住地の移転・移住後の無形文化遺産の動向をテーマとした協議会を開催したが、東日本大震災被災地域が現在直面している課題を、過疎高齢化・少子化による伝承の衰退といった全国的テーマに敷衍して議論することにより、より広い課題の共有と議論の深化を図ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り実施しており、当該年度計画を達成したため順調と判定した。次年度は最終年度となるため中期計画の趣旨に沿って、無形民俗文化財の保存・活用に資する調査研究をとりまとめる。また研究協議会についても、引き続き適時性や独創性を持ったテーマを選択し、開催する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集((1)－④－3)		
【事業概要】			
無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】			
高桑いづみ(無形文化財研究室長)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、菊池理予(究員)、今石みぎわ(研究員)、二神葉子(企画情報部情報システム研究室長)			
【主な成果】			
韓国国立無形遺産院との交流事業において、23年度に調印した合意書(当時の韓国側の組織名は韓国国立文化財研究所)に基づき、研究員の相互派遣を内容とする研究交流を実施した。また関係する国際会議・シンポジウム等へ参加し、海外研究者への助言や調査協力を通して、無形文化遺産分野における国際的情報収集及び情報提供を行った。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・韓国との交流事業では、23年度に調印した「無形文化遺産の保護に関する日韓研究交流合意書」に基づき、韓国国立無形遺産院から、調査研究記録課の李明珍学芸研究士を26年8月11日～9月9日の間、無形文化遺産部に迎え、研究交流を実施した。日本側からは、8月18日～30日の間、菊池理予研究員を派遣し、韓国における無形文化財(工芸技術)の保護制度について調査研究を行った。また、27年3月2日～14日には久保田裕道無形民俗文化財研究室長を派遣し、韓国における民俗芸能・風俗慣習についての調査研究を行った。 ・無形文化遺産分野の国際的情報収集では、以下の国際会議等へ出席し、情報収集及び研究発表等を実施した。 <ul style="list-style-type: none"> 26年11月23日～29日「無形文化遺産保護条約第9回政府間委員会」フランス パリ・ユネスコ本部 26年10月16日「韓・中・日無形遺産国際シンポジウム」韓国 ソウル・重要無形文化財伝授会館 			
			
李明珍学芸研究士による成果報告会(東京文化財研究所 26年9月8日)			
【実績値】			
学会等発表 3件(①②③)			
論文等発表 1件(④)			
【備考】			
①菊池理予「染織技術に関わる原材料と道具の現状」韓国国立無形遺産院(26年9月4日)			
②久保田裕道「日本における風流芸能の伝承と保存」韓国文化財保護財団(26年10月16日)			
③久保田裕道「日韓の正月儀礼を中心とした比較研究」韓国国立無形遺産院(27年3月13日)			
④二神葉子「無形遺産保護の保護に関する第9回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」『無形文化遺産研究報告』第9号 27年3月			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4143

自己点検評価調査

研No.9

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：無形文化遺産保護条約第9回政府間委員会では、「和紙 日本の手漉和紙技術」が無形文化遺産登録されるなど、国内外での関心も高く、委員会に出席することによって、適切な情報収集を行うことができた。 発展性・継続性：第2期を迎えた韓国との研究交流事業は、相手側の改組後も滞りなく継続されており、より緊密な関係を築くことができた。						

2. 定量的評価

観点	学会等発表	論文等発表				
評定	B	B				
判定理由 学会等発表・論文等発表：論文等掲載数、発表件数ともに十分である。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国との交流に関しては、相手側の改組後も、研究員の相互派遣交流が実施できた。国際会議等での情報収集も、効率的に実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国国立無形遺産院との研究交流は順調であり、国際会議等における情報収集も、当初の計画通りに実施している。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究（遺跡等整備）（(1)－⑤－ア）		
【事業概要】			
遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料収集・調査・整理等を行い、文化財の包括的保存管理を検討する一環として、遺跡等のマネジメントに関する研究集会を開催するとともに、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修理・整備に資する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 林 良彦
【スタッフ】			
中島義晴(文化遺産部主任研究員)、高橋知奈津(遺跡整備研究室研究員)、平澤 毅(景観研究室長)			
【主な成果】			
「史跡等の整備・活用の長期的な展開」を主題として、遺跡整備及び関連する分野の取組に関する情報収集を行うとともに、遺跡整備及び関連する分野の代表的な事例に関する発表及び総合討議からなる研究集会を開催した。また、過年度の成果について、『計画の意義と方法』[平成25年度遺跡等マネジメント研究集会（第3回）報告書]を刊行・配布するなど、その普及等を行った。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 国内外における遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。 ・ 27年1月16日（金）に、「史跡等の整備・活用の長期的な展開 ―経年によるソフト・ハードの変化と再生―」を主題とし、平成26年度研究集会を平城宮跡資料館講堂において開催した。 遺跡整備の事例（登呂遺跡・一乗谷朝倉氏遺跡・西都原古墳群）に関する発表、次いで関連する分野（都市公園・博物館・動植物園）の再生事例に関する発表の後、これらを踏まえて総合討議において発表者及び参加者とテーマに基づいて議論を行った。 ・ 研究集会開催後、次年度にこの研究集会の報告書を編集・刊行する準備として、討議内容及び今後の調査研究の課題等についての整理を進めた。 ・ 昨年度の研究集会「計画の意義と方法」の成果について検討を加え、『奈良文化財研究所紀要 2014』に報告するとともに、報告書を執筆・編集・刊行した。 ・ 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主管課等に対して、25年度刊行の研究集会報告書を配布するなど、過年度の成果の公表に努めた。 		 <p>平成26年度研究集会（27年1月16日）</p>	
【実績値】			
研究集会開催数	1回(①)	参加者数	地方公共団体職員・民間事業者・大学所属研究者等 85名)
刊行図書数	1件(②)		
論文等数	1件(③)		
【備考】			
研究集会			
①『遺跡整備に関する研究集会「史跡等の整備・活用の長期的な展開」講演・報告資料集』 2015.1			
刊行図書			
②『計画の意義と方法』平成25年度遺跡等マネジメント研究集会（第3回）報告書 2015.1			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4151

自己点検評価調査

研No.10

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：史跡等の整備・活用の長期的な展開について検討した研究集会は、今日的な課題を扱ったものであり、時宜を得たものと言える。</p> <p>独創性：史跡等の整備・活用の長期的な展開について、多様な分野からの発表をもとに検討した研究集会は、これまでに無く独創的なものと言える。</p> <p>発展性：今年度の研究集会は、23年度「自然的文化財のマネジメント」、24年度「パブリックな存在としての遺跡・遺産」、25年度「計画の意義と方法」をテーマとした研究集会に続けて、遺跡整備に関する課題について発展的に検討を重ねている。</p> <p>効率性：研究集会の開催、報告書の刊行等をスケジュール通りに進めることができ、事業を効率的に実施できた。</p> <p>継続性：遺跡の保存・活用に関する基礎的・応用的な検討を基礎としながら、研究集会の開催等を通じ、遺跡整備について継続的に検討を進めている。</p> <p>正確性：研究集会での配付資料及び昨年度の研究集会報告書の作成にあたり、必要な調査・検討を行い、正確な情報が提供できた。</p>						

2. 定量的評価

観点	研究集会開催回数	刊行図書数	論文等数			
評定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>研究集会開催回数：計画通り、研究集会を1回開催した。</p> <p>刊行図書数：計画通り、1冊刊行できた。</p> <p>論文等数：十分な成果が認められる。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施した。特に、研究集会については、史跡等の整備・活用の長期的な展開を主題とし、近年の全国的な課題を検討した取組として極めて重要である。また、前年度研究集会の報告書を刊行し、遺跡の整備に関する論文等を発表しており、調査・研究の成果を公表している。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	遺跡等の整備に関する情報の収集・整理・公開の検討を様々な観点から進めることができた。特に、研究集会については、23年度「自然的文化財のマネジメント」、24年度「パブリックな存在としての遺跡・遺産」、25年度「計画の意義と方法」に引き続き、「史跡等の整備・活用の長期的な展開」を主題として検討した。これらによって、急速に変化していく社会構造・国民生活等と遺跡を含む記念物保護との関係を考慮しつつ、遺跡整備に関する特に重要な諸課題について検討を行い、文化財の保存と活用を図るための調査・研究を推進できている。また、今年度の成果は、次年度に予定している整備・活用の長期的な展開に関する研究の基礎となるものである。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)((1)ー⑤ーイ)		
【事業概要】庭園史に関する文献調査及び国内外での現地調査の他、「庭園の歴史に関する研究会」の開催など、日本庭園に関する基礎的資料の検討を行い、併せて森・村岡・牛川資料の整理・研究を進める。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 林 良彦
【スタッフ】 中島義晴(文化遺産部主任研究員)、高橋知奈津(遺跡整備研究室研究員)、小野健吉(副所長)、エドワーズ・W、(中国科学院心理学研究所編集局事務担当・客員研究員)、マレス・E・ベルナル(総合地球環境学研究所事務補佐員・客員研究員)			
【主な成果】 「平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会」を開催し、報告書をまとめた。この研究会では、「戦国時代の城館の庭園」をテーマに、建築史学・美術史学・考古学等の研究者と共に、学際的な議論を行った。戦国時代の城館に関する遺構は、発掘調査によって近年も検出事例が相次ぐ一方、その空間構成に関する研究は十分に進展していないのが現状で、本研究会での学際的な議論は、中世庭園史研究の進展に寄与しただけでなく、検出遺構の解釈等の埋蔵文化財の調査研究に資する成果となった。また、奈良市における庭園の悉皆的調査では、寺院の庭園を中心に現地調査を行い、奈良市内に現存する寺院庭園の全体像を把握することができた。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・「平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会」の実施 10 月 25 日に、「戦国時代の城館の庭園」をテーマとして、大学などの外部研究者(庭園史学、建築史学、美術史学、文献史学)、地方自治体の埋蔵文化財発掘調査担当者等 21 名を招聘し、開催した。庭園史、建築史、文献史の立場から各研究発表 3 本、近年の庭園遺構が検出された遺跡である、大内氏館跡、小田原城御用米曲輪、岐阜城跡織田信長居館跡の事例報告 3 本があった。その後の討議では、地勢に根差した庭園独特の特性を踏まえた遺構解釈の必要性や、価値の相対化が進む中世の文化的展開を、特に建築史・庭園史研究において、遺構から丁寧に読み解いていく作業が必要であること等の課題が明らかにされた。 			
<ul style="list-style-type: none"> ・「平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会」報告書の刊行 上記の研究会の報告書の執筆・編集・刊行を行った。ここでは、研究会の参加者 7 名の論考及び、質疑応答・討議内容を掲載した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2015』等で公表する予定である。 ・連携研究：奈良市における庭園の悉皆的調査 奈良市と連携研究協定を結び、奈良市における庭園の悉皆的調査に取り組み、寺院及び民家の庭園について、現地調査を行い、35 件の概要調査を終了した。 ・発掘庭園データベース更新に向けた事例収集を実施した。 ・森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、国内外の庭園・遺跡を撮影したスライドを分類し、注記整理を進めた。 			
【実績値】 研究会開催数：1 回（奈良文化財研究所、大学等研究者 21 名参加、配布資料①～②） 刊行図書数：1 件（③） 論文等数：8 件（講演・発表等 3 件、論文 5 件④～⑤）。			
【備考】			
研究会配布資料			
① 「平成 26 年度庭園の歴史に関する研究会 戦国時代の城館の庭園 発表資料集」26 年 10 月			
② 「平成 26 年度庭園の歴史に関する研究会参考資料集 中世城館の庭園遺構集成」26 年 10 月			
刊行図書			
③ 『戦国時代の城館の庭園』平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会報告書 27 年 3 月			
論文等			
④ 中島義晴「室町時代の将軍の庭園」『奈良文化財研究所紀要 2014』26 年 6 月			
⑤ 高橋知奈津「平安貴族の遊覧と文芸一道長と桂、宇治」『庭園学講座 21 日本庭園と文芸』26 年 8 月 ほか 6 件			

平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会の様子

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4152

自己点検評価調査

研No.11

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：「庭園の歴史に関する研究会」では、近年、発掘調査によって新たな検出が相次ぎ、研究の進展が期待される戦国時代の城館の庭園について取り扱い、報告書にとりまとめることができた。</p> <p>独創性：「庭園の歴史に関する研究会」では、庭園史学のみならず、建築史学、美術史学、文献史学、考古学の多分野の研究者とともに取り組んでいる点で、学際性の高い研究を実施することができた。</p> <p>発展性：今期中期計画で取り組んでいる、中世の庭園の歴史に関する研究では、従来研究の進んでいない時代の庭園を取り扱っており、今後の研究課題が研究者間で共有されたことは、中世庭園史の研究の進展に資する。特に、本年度取り組んだテーマは、埋蔵文化財発掘調査に基づく考古学的研究の発展も期待できる。</p> <p>効率性：研究会の開催時期を踏まえ、庭園の調現地査等の日程を計画的に調整し、年度内での報告書の刊行を含めて、スケジュール通りに進めることができたので、事業を効率的に実施できたと評価できる。</p> <p>継続性：今期中期計画で取り組んでいる中世の庭園の歴史に関する研究について、継続的にテーマを設定して進めることができた。他、資料収集やデータの改訂に向けた作業等、前年度から行ってきた事業を着実に進めることができた。</p> <p>正確性：発掘庭園に関する正確な情報提供のため、新たな事例収集・更新内容の検討を実施することができた。</p>						

2. 定量的評価

観点	研究会 開催回数	報告書等 刊行件数	論文等数			
評定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>研究会開催回数：計画通り、研究会を1回開催し、研究を深めることができた。</p> <p>報告書等刊行件数：計画通り、報告書を1冊刊行した。</p> <p>論文等数：十分な成果が認められる。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施した。また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、「庭園の歴史に関する研究会」を開催し、発掘調査での新検出が相次ぎ研究の進展の期待される戦国時代の城館の庭園について、庭園史学、建築史学、美術史学、考古学などの外部研究者とともに、多面的に遺構解釈等について考え、報告書にまとめたことは意義があった。また、庭園史及び歴史的庭園等の調査に関する研究成果の情報発信も着実に進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	庭園史に関する文献調査、庭園の現地調査、研究会の実施、日本庭園に関する基礎的資料のデータベース化の他、資料の整理についても、着実に進め、最終年度における取りまとめに向けて準備することができた。

業務実績書

研No.12

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究(国際研究交流)((1)ー⑤ーウ)		
【事業概要】 不動産文化財に関連した研究成果について、米国・コロンビア大学との研究交流の下に、コロンビア大学にて講演を行う。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 林 良彦
【スタッフ】 中島義晴(文化遺産部主任研究員)、高橋知奈津(遺跡整備研究室研究員)、清野孝之(考古第三研究室長)、星野安治(年代学研究室研究員)			
【主な成果】 米国・コロンビア大学において、日本の不動産文化財に係る講演2件を実施した。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・26年9月17日に、米国・コロンビア大学において、コロンビア大学中世日本研究所及びコロンビア大学建築・計画・保存大学院と講演会を共催し、“Ideal management of historic parks: From past to present to future” (清野孝之)及び“A Review of the Application of Dendrochronology to Japanese Cultural Heritage”(星野安治)の2つの講演を行い、それぞれ、日本において史跡の保存管理主体が文化財保護部局と公園部局に分かれている現状と課題について、また、日本の文化遺産研究において成果を挙げている年輪年代学の概要について発表した。 			
			
コロンビア大学 Buell Hall での講演			
【実績値】 講演会開催数：1回(米国・コロンビア大学；約30名参加)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4153

自己点検評価調書

研No.12

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：講演内容には史跡の管理活用の事例及び年輪年代学研究におけるCTの利用など最新の情報や成果を取り入れた。</p> <p>独創性：不動産文化財について23年度から毎回多様なテーマで講演を行っている。</p> <p>発展性：日本における調査研究の成果について、外国においても共通するテーマでの講演を行っている。</p> <p>効率性：講演のための渡米に合わせて米国における史跡の保護に関する情報収集を行った。</p> <p>継続性：23年度からの研究交流を着実に進めた。</p> <p>正確性：研究発表では、自ら行っている研究の成果を主題としており正確な情報に基づくものである。</p>						

2. 定量的評価

観点	講演会開催数					
評定	B					
<p>判定理由</p> <p>講演会開催数：計画通り、米国・コロンビア大学において、講演会を1回開催できた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施し、不動産文化財等に関する研究成果として、史跡の管理活用及び年輪年代学研究についての情報発信を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	米国・コロンビア大学との研究交流のもとに不動産文化財等に関連する研究成果の発表を行うことができた。併せて、次年度の研究交流事業の方向性等を確認できた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城京右京一条二坊一坪・二条二坊四坪・一条南大路の発掘調査((1)－⑥－ア)		
【事業概要】 古代都城の解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施する。			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】 渡辺晃宏、尾野善裕、今井晃樹、馬場 基、神野 恵、石田由起子、小田裕樹、番 光、鈴木智大、川畑 純、大澤正吾、清野陽一、松下迪生、金 宇大、浦 蓉子(以上、都城発掘調査部)、小池伸彦、高妻洋成、金田明大、山崎 健、脇谷草一郎、田村朋美、星野安治、村田泰輔(以上、埋蔵文化財センター)、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾(以上、企画調整部)			
【主な成果】 ・平城京右京一条二坊四坪及び二条二坊一坪にあたる地域の発掘調査を実施し、多大な成果を挙げた。 良好に遺存する平城京の条坊遺構(一条南大路南北両側溝)を検出した。 大規模な土木工事による平城京造営過程等を明らかにすることができた。 宅地内の遺構や、宅地を区画する築地痕跡などを確認した。 ・調査研究成果の公表を行った。 ウェブサイトにて「奈文研本庁舎発掘だより」を1～2週間に1度公開した。調査の進捗に応じて記者発表も行った。			
【年度実績概要】 発掘調査面積は3,591㎡。調査期間は26年4月14日～27年2月18日。 ・基本層序 地山は、緑灰色粘土と黒褐色粘土の互層。平城京造営以前までは北西から南東方向に河川(秋篠川旧流路)が通り、河川堆積・沼状堆積が認められる。平城京造営時の河川埋立て土と整地土、奈良時代中頃以降の整地土が部分的に残る。その上に中世以降の耕土・床土の上に旧庁舎の造成土が厚く堆積する。 ・主な検出遺構 一条南大路関連遺構：平城京造営期に、秋篠川旧流路を敷葉工法を用いて埋め立て、その上に一条南大路及び南北両側溝を作る。南北両側溝の路面側は、しがらみ土留遺構を伴う。一条南大路路面上に南北両側溝をつなぐ南北溝、平城京右京二条二坊一坪の北面築地の添柱とみられる柱穴列も検出した。 坪内の遺構：右京二条二坊一坪の北東隅で大土坑、右京一条二坊四坪で井戸9基と小規模な掘立柱建物などを検出した。また、坪内の整地についても確認した。 地震痕跡：調査区内各所で液状化現象の痕跡等を確認し、災害考古学に資する重要な情報を蓄積した。 ・主な出土遺物 木簡、木器、弥生時代から奈良時代を中心とする土器、瓦磚類(緑釉瓦含む)。 ・調査所見 古墳時代以前の自然流路が交錯し、平城京造営直前には秋篠川旧流路が北西から南東に流れていたことを確認した。平城京造営時の大規模な埋め立てや、条坊道路・側溝の敷設過程が良くわかる。また、平城京右京二条二坊一坪は北側を築地塀で区画していたこと、右京一条二坊四坪の一部は整備が奈良時代の中頃に下る可能性が高いものの、墨書土器等の出土遺物等から考えて、官衙的な施設が置かれていた可能性が高いこともわかった。			
【実績値】 論文数：1件(①) 報道発表等件数：2件 (参考値) 出土遺物：瓦片267箱、土器片241箱、木製品1100箱、木簡45点(うち削屑12点) 記録作成数：実測図260枚(A2判)、遺構写真246枚(4×5)、デジタル写真約6300枚			
【備考】 ①小田裕樹・鈴木智大・神野恵他「平城京右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・一条南大路の発掘調査 平城第530次」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定			



一条南大路を西から見る

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4161-1

自己点検評価調査

研No.13

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	A	B	B	B
判定理由 適時性：大規模土木工事という機会を捉え、広範囲に及ぶ発掘調査を実施し、大規模な都城遺構を調査して多くの成果を得ることができた。 独創性：考古学のみならず、建築史・文献史からの分析や、木材分析・災害痕跡分析なども含む多様な自然科学的分析を行い、さらに、最新の測量技術を導入するなど、奈良文化財研究所ならではの学際的で多様な検討や調査を行い、多くの成果を上げることができた。 発展性：平城京の条坊に関する詳細な情報を得ることができ、さらに平城京造営時の大規模な土木工事の様相が初めて明らかになった。今後の平城京研究、ひいては古代国家研究に基点となる調査成果を得ることができた。また多分野横断的な調査の経験を多く積むことができ、今後の他分野横断的調査研究方法の発展・展開に寄与すると考えられる。 効率性：庁舎解体の遅れに伴う発掘調査計画の遅延・変更や、予想を超える遺存状況・規模の検出など、想定外の状況の発生に対し、重機の有効活用や調査員・作業員の集中投入、3D測量など最新技術の活用によって、最大限の効率化を図った。 継続性：平城京内の詳細で正確な条坊データの蓄積に寄与することができた。今後の調査計画においても重要な指標となると考える。 正確性：調査員の数を増強して多様に展開する現場の様相に対応した他、所内各部門の知見を結集し、部内検討会を開催することで、正確な調査を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	記者発表数			
評定	B	A			
判定理由 論文数：目標値の1件を達成した 記者発表数：目標値の1件を上回る2件を達成した。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 平城京条坊遺構の詳細な情報や、平城京造営時の大規模な土木工事の実態などこれまで知られていなかった新知見・新発見を多く得た。これらの情報は、今後の平城宮・京研究に大きな影響を与えると考えられる。 数次にわたる地震痕跡等を確認し、災害考古学的情報を多く得た。 発掘調査の情報を、ウェブサイトを通じて速報し、記者発表も適時に行った。調査成果を積極的に公開した。 調査終了は当初計画より遅延したが、調査着手当初は解体工事と併行せざるを得なかったことや、遺跡の規模が想定を遙かに超えるものであったこと等を考慮し、以上の定性的・定量的評価を踏まえて、Bと判定する 次年度以降、今回の調査成果を調査・研究に活用するとともに、今回試みた様々な調査手法についても、今後積極的に活用していく必要がある。また、ウェブサイトを通じての速報は、検出遺構を早く伝えるという速報性と、検出遺構の意義づけ等を丁寧に行うという正確性の両立の困難さを改めて感じる場面も多々あった。その解決に向けて次年度以降も努力して行きたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 古代都城の解明の解明に、極めて重要で多大な成果を得た。 「奈文研本庁舎発掘だより」のウェブサイト公開など、積極的に多様な情報公開を行った。 以上より、Bと判定する。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	古代官衙・集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行((1)－⑥－ア)		
【事業概要】			
<p>国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財造物に関する基礎的調査研究を実施する。古代都城の解明のため、古代官衙・集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。</p>			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】			
<p>玉田芳英(都城発掘調査部副部長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、青木 敬(都城発掘調査部主任研究員)、森川 実(都城発掘調査部主任研究員)、小田裕樹(考古第二研究室研究員)、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、海野 聡(建造物研究室研究員)、小池伸彦(遺跡・調査技術研究室長)</p>			
【主な成果】			
<p>(1) 第18回古代官衙・集落研究会「宮都・官衙の土器(官衙・集落と土器1)」を開催。 古代官衙・官衙出土土器の様相の地域間比較や、考古学・文献史学等の分野横断的な検討を行った。 古代官衙・官衙出土土器と在地集落出土土器の様相の明瞭な差異が確認され、その意義について議論を深めた。 各地域における研究手法の違いなどを明らかにし、今後の調査・研究における課題を共有した。</p> <p>(2) 『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』(報告編・資料編)①の刊行 昨年度開催した第17回研究集会の報告書を刊行し、研究成果の公開を行った。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 研究集会の開催(26年12月12～13日・於：平城宮跡資料館講堂)の開催</p> <p>研究報告は、高橋照彦「都と地方の土器」、森川実「平城宮とその周辺の土器様相」、佐藤敏幸「東北の城柵官衙と土器」、依田亮一「東国の官衙と土器」、中島恒次郎「土器から考える遺跡性格」、岡田裕之「出雲における国府と集落の土器様相」、三舟隆之「文献から見た官衙と土器」の計7本。 報告後、会場からの質問や意見を交えつつ、報告者を中心に討論を行った。 研究集会開催に際しては、報告資料集②を編集・刊行し、参加者等に配布した。</p>			
			
<p>研究集会の様子</p>			
<p>(2) 『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』①の刊行 昨年度開催した第17回古代官衙・集落研究会の成果報告書として、『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』(報告編・資料編)①を刊行した。 報告編は総頁数256頁で論文7本と討論内容を所収し、資料編は総頁数456頁で276遺跡348例の長舎遺構の遺構図と集成表を掲載した。</p>			
【実績値】			
<p>公刊図書数：2件①～② 論文数：14本①～②</p>			
(参考値)			
<p>研究集会参加者 148名 アンケート回答 131名(回収率88.5%) アンケート内容 大変有意義であった80名、有意義であった48名、普通4名、あまり有意義でなかった1名、有意義でなかった0名 研究報告書での収集資料数：276遺跡348例</p>			
【備考】			
<p>①『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』26年12月 ②『第18回古代官衙・集落研究会 宮都・官衙と土器(官衙・集落と土器1)研究報告資料』26年12月</p>			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-2

自己点検評価調査

研No.14

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：古代官衙・集落遺跡の調査・研究推進上、重要で適切な課題設定のもと、第18回研究集会を開催した。昨年度開催した第17回研究集会の成果を、遅滞なく研究報告書として刊行し、広く公開した。 独創性：土器は、従来は編年に基づく年代判定に特化する傾向が強かったが、遺跡の性格を明らかにする上で重要な指標となり得ることを示した。 発展性：土器は、遺跡の性格にかかわらず普遍的に出土する遺物であるため、同じ視点で様々な遺跡の様相を比較することができる。今回の議論を基点として、今後対象を広げるなど、大きな発展性を持つものと考えられる。 効率性：地方官衙関係遺跡データベース構築作業との連携により、効率を高めた。 継続性：当研究所の事業として、18回目の研究集会を開催した。継続的開催によって、多くの研究成果が蓄積され、また研究所内外から積極的な情報提供や研究集会への参加等を得ている。 正確性：研究集会において、各発表者の報告と会場参加者も含めた議論等を通じ、研究成果等を確認・共有した。また、研究報告書では、長舎の類例について悉皆的な集成を行い、今後の研究に資する正確なデータを広く提供した。						

2. 定量的評価

観点	公刊図書数	論文数				
評定	B	B				
判定理由 刊図書数：目標件数2件を達成した。 論文数：目標件数研究集会報告資料7件・研究報告書7件をそれぞれ達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 適切なテーマ設定の下に研究集会を開催し、地方自治体職員も含め、多くの参加者を得た。報告・討論とも充実しており有意義であった。こうした状況は、参加者アンケートの結果からも確認できる。 充実した内容の研究報告書を、目標の期日に刊行し、公開した。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。 次年度以降も、今年度と同様の成果が上がるよう、適切なテーマ設定を行い、研究集会の開催と質の高い報告書刊行を継続的に行うことを目指したい。 なお、研究集会は、地方自治体の埋蔵文化財担当職員等も含め、全国的で高度な研究・調査情報交換・共有の場としての役割も果たしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 研究集会での報告や討論を通じて、古代国家形成の分析や古代都城研究に資する研究成果を得た。 全国の地方自治体の埋蔵文化財担当職員等との調査・研究情報の交換を通じ、本研究所の研究の質的向上に資した。 研究報告書の刊行によって研究成果を公表し、国民共有の財産となった。 以上より、中期計画の所期の目標を達成しておりBと判定した。 本研究集会及び報告書は、古代国家形成・古代都城研究に役立ち、また全国の地方自治体の埋蔵文化財担当職員をはじめとした参加者からその継続を望む声も大きい。今後も継続して事業を推進する必要がある。継続的な事業実施のためにも、報告書編集作業の一層の効率化、適切なテーマ設定による質の高い研究集会の開催を進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行((1)－⑥－ア)
【事業概要】	
<p>国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財造物に関する基礎的調査研究を実施する。古代都城の解明のため、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。</p>	
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)
【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	
<p>清野孝之(考古第三研究室長)、今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、森先一貴、石田由紀子、川畑 純、清野陽一(以上、考古第三研究室研究員)、中川二美、南部裕樹(以上、都城発掘調査部アソシエイトフェロー)</p>	
【主な成果】	
<p>(1) 第15回古代瓦研究会シンポジウム「8世紀の瓦づくり IV ー平城宮式軒瓦の展開2 6282-6721系ー」を開催 平城宮式軒瓦の主体となる6282-6721型式について、平城宮・京での出土状況、各地における当該型式採用の経緯、時期、製作技法など多岐にわたる検討・議論を行った。 奈良時代後半に主流となる平城宮式の瓦が、平城宮・京でどのように使用され、それらが各地へどのように展開していくのかを検討した。</p> <p>(2) シンポジウムの開催にあたり、発表要旨集を作成した。</p>	
【年度実績概要】	
<p>(1) 研究会シンポジウム(27年2月14～15日・於：平城宮跡資料館)の開催 口頭研究報告は2日間で6本を実施し、さらに2本の紙上報告があった。 口頭報告終了後、口頭報告者8名および紙上発表者2名を加えて、当該型式を中心とした瓦の文様、技法の共通性、瓦の年代観、各地における当該型式の歴史的意義などについて討論を実施した。</p> <p>(2) 報告書の刊行 シンポジウムの発表要旨集(①)を制作し、配布した。</p>	
【実績値】	
<p>報告書等数：1件(①) 論文等数：8件(②～⑨)</p>	
(参考値)	
<p>研究会参加者133名 アンケート回答68名(回収率51%) シンポジウムの内容：瓦の出土品を見ながら報告を聞いたのがよい。 今後取り上げてほしいテーマ：国府、国分寺の瓦、全国に敷衍する瓦の技法について。</p>	
 <p>各報告</p>	 <p>討論会</p>
【備考】	
<p>①『8世紀の瓦づくり IV ー平城宮式軒瓦の展開2 6282-6721系ー』第15回シンポジウム発表要旨集、2015.2 ②川畑純「平城宮の6282-6721型式軒瓦」、③宮崎正裕「平城京の6282-6721型式軒瓦」、④大坪州一郎「南山城地域の6282-6721型式軒瓦」、⑤古閑正浩「河内地域の6282-6721系軒瓦」、⑥池田征弘・中川猛「播磨の6721系軒瓦 ーいわゆる本町式軒瓦についてー」、⑦佐川正敏・藤木海「東北地方の6282-6721系軒瓦」、⑧新田剛「伊勢出土の6719A」、⑨早川和賀子「沓岐・豊前出土の6284型式軒瓦」</p>	

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4161-3

自己点検評価調査

研No.15

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：シンポジウムの課題設定が、古代瓦研究を推進するうえで、重要で適切であった。 独創性：平城宮出土軒瓦中で最も出土点数が多く、かつ全国的にも分布する型式の軒瓦(6282-6721系)を課題とし、全国的な視野で同一型式を論じることで、中央と地方における瓦生産の共通点と相違点を明瞭にすることができた。 発展性：今回対象とした型式以外にも、奈良時代後半期で特徴的で、かつ全国的に広く分布する軒瓦は複数型式存在する。それらを今後の課題とすることにより、より多角的な視点で中央と地方とでの瓦生産のあり方について明らかにできる。 効率性：シンポジウムの準備や報告書などの作成は、都城発掘調査部を中心に効率的に進めることができた。 継続性：当研究所の事業として、予定通りシンポジウムを開催した。これまでのシンポジウムの蓄積を生かすことができた一方、新たな視点・課題が明らかになり、次年度以降も継続的なシンポジウム開催が必要である。 正確性：シンポジウム予稿集は、全国的な視野で特定型式の古代瓦の報告がなされており、研究に資する正確なデータを広くひろめるとともに、各地の研究者が当該型式を研究する上で必要不可欠となる水準を保持している。						

2. 定量的評価

観点	報告書等数	論文等数			
評定	B	B			
判定理由 報告書等数：目標件数1件を達成した。 論文等数：目標件数8件を達成した。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムには多くの参加者があり、活発な議論が行われ、古代瓦研究に新たな視点を提供するなど、多くの成果を得た。 ・シンポジウムに際し、予稿集を予定通り刊行・配布し、研究成果・データの公表を行った。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。 なお、各地方自治体からは高い評価をえるとともに、研究会の継続、シンポジウムの開催し、研究成果の公刊が望まれている。次年度以降はシンポジウムの開催と同時に、研究報告書を刊行する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムの報告や討論を通じて、古代都城・古代国家研究に資する成果を得た。 ・予稿集の刊行により、研究成果を広く公表した。 以上より、中期計画の所期の目標を達成しており、Bと判定した。 なお、本研究集会については、全国の自治体職員等より継続を望む声が多く、古代都城を考える上でも重要な意義をもつものであり、今後も継続して事業を推進する必要があると考える。そのためにも、報告書編集作業ならびに研究集会準備の効率化を一層推し進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	藤原宮跡の発掘調査(大極殿院) (1)－⑥－ア)		
<p>【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果は広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は我が国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、中枢部については平成11年度以降、実態解明のための計画調査を実施している。</p>			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
<p>【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、廣瀬 覚、森川 実(都城発掘調査部主任研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)</p>			
<p>【主な成果】 ・藤原宮大極殿院の発掘調査(飛鳥・藤原第182次)を実施した。 ・調査の結果、藤原宮の中枢部において、藤原宮の時代を中心とする前後の時期にわたる遺構変遷を明らかにすることができた。 ・発掘調査で得た新知見より、今後の調査計画を明確にすることができた。</p>			
<p>【年度実績概要】 ・調査地： 藤原宮大極殿院(飛鳥・藤原第182次) ・目的： 藤原宮大極殿院の様相解明。大極殿前面広場の空間利用の解明。 ・調査期間： 26年4月1日～27年2月25日 ・調査面積： 1450㎡ ・調査成果： 藤原宮大極殿の南面において藤原宮造営期の南北大溝(運河)1条、南北溝3条、東西溝1条、藤原宮期の礫敷広場を確認し、藤原宮造営期の斜行溝1条を新たに発見した。これらのほかに奈良時代の建物2棟、土器埋納遺構1基、平安時代の建物1棟、平安時代土器埋納遺構1基などを確認した。さらに、藤原宮造営以前の古墳周溝を検出し、藤原宮中枢部における古墳時代から平安時代までの遺構変遷を明らかにした。 ・今年度の発掘調査で発見した斜行溝は、藤原宮中枢部の造営過程を明らかにするうえで重要な遺構であり、次年度以降の継続調査につながった。</p>			
			
<p>調査区全景(南から)</p>			
<p>【実績値】 発表件数：4件(論文等2件①・④、報道発表1件②、現地説明会1件③) (参考値) 出土遺物：軒瓦・面戸瓦等381点(15箱)、丸平瓦コンテナ243箱、土器・埴輪コンテナ63箱、木製品・木質遺物コンテナ7箱、金属製品24点、石器・石製品29点、獣骨・馬歯8点、種実コンテナ1箱 記録作成数：遺構実測図54枚、写真(4×5)178枚、デジタル写真553枚 現地説明会来場者数：800人</p>			
<p>【備考】 ①森川 実「藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第182次)」『奈文研ニュース』No.55 2015.12 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第182次調査)記者発表資料」26.11.06 ③奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第182次調査)現地説明会資料」26.11.08 ④奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第182次調査)」『奈良文化財研究所紀要2015』2015.6 予定</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4161-4

自己点検評価調査

研No.16

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：古代都城における大極殿院の成立過程を解明するために必要な場所を選定して実施したものである。当研究所で行っている平城宮大極殿院の復元研究にも貴重な情報をもたらすと考えられる。 独創性：藤原宮中枢部において、古墳時代から平安時代までの遺構変遷を明らかにし、宮造営に関わる新たな遺構の事例を加えた。 発展性：藤原宮中枢部の空間利用、造営過程の実態解明に関する成果を蓄積し、研究課題への新たな展望を得た。 効率性：従前の調査成果などから事前に十分な準備を行うとともに、最新の調査手法を取り入れ効果的、効率的な調査を実施した。 継続性：藤原宮の様相解明のための長期的な継続調査の一環として、今年度より大極殿院の継続的な発掘調査に着手し、今後の継続調査に資する基礎的データを得た。 正確性：出土遺物・遺構を、その地域性や年代観の特徴・特性を踏まえ、正確かつ的確に記録を作成するとともに、その公表を行った。						

2. 定量的評価

観点	発表件数					
評定	B					
判定理由 発表件数：当初予定の4件を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、26年度当初の計画通りに実施されており、適切な調査成果をあげることにより目標を順調に達成した。中期計画の4年目に当たる26年度の調査成果により、最終年度となる27年度に向け、研究の蓄積を加えることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	藤原宮跡の発掘調査（東方官衙北地区）（(1)－⑥－ア）		
【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果は広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は我が国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、官衙地区については研究所発足当初から、発掘調査を計画的に実施している。			
【担当部課】		都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】
			都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 西山和宏（都城発掘調査部主任研究員）、森先一貴（考古第三研究室研究員）、諫早直人（考古第一研究室研究員）、金宇大（考古第二研究室アソシエイトフェロー）、栗山雅夫（写真室技術職員）、飯田ゆりあ（写真室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 ・藤原宮東方官衙北地区の発掘調査（飛鳥藤原第183次）を実施した。 ・調査の結果、藤原宮の官衙地区で初の事例となる礎石建物や、床束をもつ大型掘立柱建物など、格式高い建物を検出し、官衙地区の建物配置に重要な新知見を得た。また、条坊道路や建物・塀など、藤原宮造営直前から造営期の遺構も多数確認し、この時期の複雑な遺構変遷を明らかにした。古墳時代を含む、さらに古い時期の遺構の存在も把握した。 ・藤原宮の構造や成立過程の解明に寄与する多数の成果があがった。			
【年度実績概要】 調査地：藤原宮東方官衙北地区の南西部。24年度の第175次調査区の南西側。 目的：第175次調査で一部を検出していた礎石建物の全容解明と周辺施設の確認。 調査期間：26年10月1日～12月25日 調査面積：973㎡ 調査成果：藤原宮期の遺構			
①藤原宮官衙地区で初事例となる桁行4間×梁行3間の東西棟総柱礎石建物を検出。大型の倉庫か楼閣とみられ、官衙地区の構造解明に重要な手がかりとなる。礎石抜取穴より飛鳥時代の佐波理碗が出土。 ②調査区西端にて、桁行5間以上×梁行2間の、床束をもつ大型の掘立柱建物を全面的に検出。内裏東官衙地区の官衙C区画塀より古いことから、藤原宮前半に存在したものである可能性が高い。 7世紀後葉～藤原宮造営期の遺構 ③藤原宮造営に先立って施行された先行東一坊大路両側溝とそれに伴う塀を検出。また先行東一坊大路に重複して、その直前に設けられた道路両側溝も検出した。藤原宮の成立過程を知る重要な知見である。 ④藤原宮造営期では掘立柱建物と塀を検出。			
今回の調査成果をもとに藤原宮官衙地区の構造解明と変遷観に新しい知見を追加し、その成果を反映した内容を現地見学会等にて公表した。			
【実績値】 発表件数：5件（論文等3件①・④・⑤、報道発表1件②、現地見学会1件③） （参考値） 出土遺物：軒瓦6点、丸平瓦コンテナ7箱、土器コンテナ20箱、金属製品（佐波理碗）1点、石器・石製品5点、木製品11点、木炭8点、馬歯1点 記録作成数：遺構実測図43枚、写真（4×5）78枚、デジタル写真305枚 現地見学会来場者数：622人			
【備考】 ①森先一貴「藤原宮東方官衙北地区の調査（飛鳥藤原第183次）」『奈文研ニュース』No.56 27年3月 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮東方官衙北地区の調査（飛鳥藤原第183次調査）記者発表資料」26年12月11日 ③奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮東方官衙北地区の調査（飛鳥藤原第183次調査）現地見学会資料」26年12月14日 ④森先一貴ほか3名「藤原宮東方官衙北地区の調査（飛鳥藤原第183次調査）」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定 ⑤諫早直人ほか1名「藤原宮・京出土の銅鏡」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定			



第183次調査区全景（南東から）

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4161-5

自己点検評価調査

研No.17

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	B	A	B	B
判定理由 適時性：発掘調査は、現在必要な課題を解明するために調査地を選定して実施したものである。今回の調査地は、一昨年有一部分を検出していた建物周囲の全容解明を目指したもので、調査の適時性は高い。 独創性：日本初の本格的都城である藤原宮の官衙地区の特殊性を解明しようとする独創的な試みであり、調査結果はその予想を上回る成果を得た。 発展性：藤原宮官衙地区の構造解明と、藤原宮の成立過程の実態解明に関する想定以上の新知見を蓄積し、研究課題への新たな展望を得た。 効率性：必要最低限の時間的・人的・設備的投資によって、当初計画していた範囲について調査できた。隣接地における調査成果をもとに綿密な調査計画を組むことで、予定よりも短時間で遂行することができた。 継続性：特別史跡藤原宮跡の全体解明のための長期継続的な計画調査であり、長年の調査実績を基礎とした質の高い調査を実施した。 正確性：発掘調査の結果は最新の測量機器や写真機材を用いて現地で高い精度で全て記録した。また出土遺物についても発掘調査と並行して分析を進め、結果を発掘調査に反映しつつ遺跡の理解を正確に行った。						

2. 定量的評価

観点	発表件数					
評定	A					
判定理由 発表件数：論文等、報道発表、現地説明会で、当初の目標4件を上回る5件の発表を実施した。予想以上の調査成果を得たことから、それぞれの発表の内容についても今後の藤原宮の構造を考える上で貢献が大きいものとなった。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、調査の実施、記録、公開、発表等を適切かつ効率的に行い、発掘調査成果も当初の予想を上回る重要性をもつものといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、26年度当初の計画通りに実施されたものである。しかし、調査の結果得られた研究成果は、藤原宮の官衙地区で検出例のない礎石建物の全貌を明らかにするとともに、藤原宮造営期及びそれ以前の土地利用の状況を明らかにするなど、官衙地区の構造解明、藤原宮造営期の実態解明について予想を上回る内容であった。発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うという当該事業、および26年度で4年目となり、27年度で最終年度を迎える中期計画の中において、貴重な成果と位置づけられる。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥地域発掘調査 ((1) -⑥-ア)		
【事業概要】			
<p>飛鳥・藤原地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。檜隈寺は、我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、中心部は史跡に指定されている。その実態解明に向け調査を実施している。</p>			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】			
<p>山本崇(都城発掘調査部主任研究員)、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、前川歩(遺構研究室研究員)、清野陽一(考古第三研究室研究員)、金宇大(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、井上直夫(写真室再雇用職員)、飯田ゆりあ(写真室アソシエイトフェロー)</p>			
【主な成果】			
<p>掘立柱建物5棟、掘立柱塀1基、土坑3基、溝状土坑1基などを検出した。檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世初頭の二時期に建物等が建立されたという従前の調査成果を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開することがあきらかになった。</p>			
【年度実績概要】			
<p>本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は昨年度の調査区の南方にあたる、丘陵の南東裾部分について調査を実施した。</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査地：25年度調査（第180次調査）区の南方に位置する。 ・調査期間：27年2月2日～3月27日 ・調査面積：377㎡ ・調査成果：古代と推定される掘立柱建物2棟、掘立柱塀1基を検出した。中世と推定される掘立柱建物3基を検出した。その他、土坑3基、溝状土坑1基を検出した。古代と推定される建物は檜隈寺伽藍の造営方位の振れにおおむね一致する。檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世初頭の二時期に建物等が建立されたという25年度の第180次調査での見解を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開することがあきらかとなった。 ・出土遺物：瓦、土器、金属製品等 			
			
<p>調査区中段部遺構検出状況(北西から)</p>			
【実績値】			
(参考値)			
<p>出土遺物 軒瓦5点、丸平瓦12箱、土器4箱、鉄器2点 記録作成数 遺構実測図33枚、写真(4×5)24枚、デジタル写真122枚、デジタルメモ写真349枚</p>			
【備考】			
<p>①前川歩「檜隈寺周辺の調査-飛鳥藤原第184次」『奈良文化財研究所紀要2015』2015.6 予定 ②前川歩「檜隈寺周辺の調査(飛鳥藤原第184次)」『奈文研ニュース』No.56 2015.3</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4161-6

自己点検評価調査

研No.18

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判断理由</p> <p>適時性：檜隈寺跡の伽藍南方の状況を明らかにし、飛鳥地域における調査研究データを蓄積するとともに、檜隈寺跡の適切な保存・活用を行うための歴史公園整備事業に適切に対応した。</p> <p>独創性：我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な檜隈寺跡において、史跡指定地である中心伽藍の南方への遺構の広がり、土地利用の様子を明らかにした。</p> <p>発展性：今回の調査により、遺構がさらに南方へ広がることを確認し、今後の調査研究に向けて新たな見通しを得た。</p> <p>効率性：これまでの調査成果を踏まえ、事前に十分な準備を行い、効率的に調査成果を得ることができた。</p> <p>継続性：檜隈寺跡における調査研究の継続により、遺跡全容の解明に資するデータを加えた。</p> <p>正確性：出土遺物・遺構の地域性や年代観の特徴を踏まえ、正確かつ的確に記録するとともに、檜隈寺跡の今回の調査の位置づけをおこなった。</p>						

2. 定量的評価

観点	論文数					
評定	B					
<p>判断理由</p> <p>論文等数：目標通り、紀要等で調査成果を2件公表することができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判断の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	25年度の調査（第180次調査）において古代から中世と推定される建物、塀が発見されており、今回の調査ではそれらの建物、塀の広がりを確認し、古代から中世にかけての檜隈寺の実態を知る手がかりを得ることを目的とした。調査の結果、第180次調査での見解を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開することが明らかとなり、今後の研究に有益な資料を得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判断の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、26年度当初の予定通り実施し、檜隈寺伽藍南方の実態を知る手がかりを得ることができ、檜隈寺およびその周辺の全体像解明に向けての目的を順調に達成した。中期計画の4年目に当たる26年度の調査成果により、最終年度となる27年度に向け、飛鳥地域における調査研究の蓄積を加えることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等((1)－⑥－イ)		
【事業概要】			
<p>国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財建造物に関する基礎的調査研究を実施する。出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施し、整理が終了したものより順次公表を行う。</p>			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】			
<p>渡邊晃宏、尾野善裕、箱崎和久、神野 恵、馬場 基、今井晃樹、青木 敬、芝康次郎、庄田慎矢、小田裕樹、石田由紀子、川畑 純、山本祥隆、番 光、海野 聡、松下迪生(以上、都城発掘調査部)、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾(以上、企画調整部)、高妻洋成、脇谷草一郎、田村朋美、金田明大(以上、埋蔵文化財センター)</p>			
【主な成果】			
<p>(1) 本年度の発掘調査出土遺物・検出遺構について、整理・分析及び研究、図面作成・写真撮影等の基礎作業を行った。 (2) 昨年度以前の出土遺物・検出遺構に関する継続的な整理・分析研究・調査を行った。 研究を進展させ報告書作成に備えるとともに、出土文化財の保全に万全を期した。また、出土遺物の科学的分析・保存処理を行った。 (3) 出版物等により、調査成果の公表を行った。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 26年度の発掘調査による検出遺構・出土遺物の整理と研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡等の整理・分析及び研究、検出遺構の図面トレース及び遺構の分析・解釈、撮影写真の整理を実施した。 ・受託事業として行った平城京内の発掘調査についても、出土遺物や検出遺構の整理・分析研究といった基礎作業の大半は本事業で行っている。 <p>(2) 過年度発掘調査出土遺物の整理と科学的保存処理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去の調査出土遺物の洗浄・整理・分析研究等の作業を継続的に実施した。 ・過去の調査出土木製品及び木簡、金属製品の保存処理を継続して実施し、適宜遺物の材質等の分析を行った。 ・旧大乘院庭園及び平城宮東区朝堂院の学報作成に向けて、遺物・遺構の整理・分析・研究・執筆作業を行った。 <p>(3) 調査・研究成果の公表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平城第530次調査で2回の記者発表を実施した。また、今年度の発掘調査の概報を作成した。 ・7世紀の須恵器を焼成した窯跡の遺構、遺物をあらためて整理、研究し正式報告書『奈良山発掘調査報告Ⅱ一歌姫西須恵器窯の調査一』奈良文化財研究所2014(①)年を刊行した。 ・特別展『地下の正倉院展』(26年10月18日～11月30日・於：平城宮跡資料館)を開催し、図録(②)を刊行するとともに、1回の記者発表を実施した。 			
			
<p>出土遺物(種子)の調査風景</p>			
【実績値】			
報告書等数：3件(①～③)			
【備考】			
<p>①奈良文化財研究所学報第93冊『奈良山発掘調査報告Ⅱ一歌姫西須恵器窯の調査一』26年10月 ②『地下の正倉院展 木簡を科学する』26年10月 ③『奈良文化財研究紀要2015』27年6月予定</p>			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4162-1

自己点検評価調査

研No.19

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本年度調査での検出遺構・出土遺物の資料的価値を明らかにし、随時発掘調査現場にフィードバックした。また、発掘調査現場の記者発表等の機会を利用して迅速に情報公開を行い、文化財に関する普及啓発を促進した。 独創性：自然科学分野との連携により、多様な分析を試みるとともに、文化財保全に万全を期した。 発展性：新たに検出した遺構や遺物の分析・研究を通して、都城研究をさらに推進するとともに、今後の調査、研究に資する新知見を得、明らかにすべき課題を明確にすることができた。 効率性：データベース化の促進等を積極的に行い、整理・管理作業を中心にその効率化を促進した。 継続性：従来の平城宮・京跡及び寺院跡の発掘調査で得た膨大な歴史資料についての基礎的な分析と研究成果を踏まえて、本年度の研究に活用し、かつ新たな課題・視点の発見につなげた。 正確性：出土資料を的確に資料化し、これまでの成果に新たな知見を得て、歴史的事実を正確に把握した。						

2. 定量的評価

観点	報告書等数					
評定	B					
判定理由 報告書等数：目標値3件を達成した						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 継続的な学術調査を、正確に、かつ多様な手法を用いて実施することができた。 図書の刊行・記者発表などを通じて、調査成果を積極的に公開することができた。 本年度の平城宮・京跡及び寺院跡で出土した膨大な考古資料・文字資料を継続的に整理・分析し、その概要を刊行するとともに、従来の調査資料を再度検討し、展覧会や正式な報告書の形でその成果を公表することができた。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に資する、検出遺構・出土遺物に関する総合的・多角的な調査・研究を実施した。 整理が終了した調査成果を、迅速に公表した。調査成果の正確な公表に向けた基礎的作業を積み重ねた。 以上より、Bと判定する。

業務実績書

研No.20

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等(①-⑥-イ)		
【事業概要】			
<p>本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施する。</p>			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】			
<p>清野孝之(考古第三研究室長)、西山和宏、森川 実、廣瀬 覚、降幡順子、山本 崇(以上、都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、大澤正吾、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、大林 潤、前川歩(遺構研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、森先一貴、清野陽一(考古第三研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、金宇大(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)、飯田ゆりあ(写真室アソシエイトフェロー)</p>			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、成果の一部を公表した。 ・前年度までの発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類、木簡などの再調査・再整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の再整理・再検討作業を実施し、成果の一部を公表した。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・本年度の発掘調査による出土遺物について 本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2015』等で論文として公表する予定。 ・前年度までの出土遺物について 発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。 この他、坂田寺出土建築部材の整理及び写真撮影、高所寺池出土建築部材の保存処理、藤原宮西方地区出土木簡の整理、藤原宮・京出土銅鏡の整理、藤原宮出土瓦の胎土分析、飛鳥寺出土の文字瓦の調査を実施し、その成果の一部を『奈良文化財研究所紀要 2015』等で論文として公表する。また、藤原宮出土瓦の胎土分析の成果の一部を文化財科学会で公表した。 			
【実績値】			
発表件数 4 件 (論文 3 件②③④、研究発表 1 件①)			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ①降幡順子ほか 2 名 「藤原宮・京跡出土瓦の胎土分析」日本文化財科学会第 31 回大会 26 年 7 月 6 日 ②森先一貴ほか 1 名 「藤原宮・京出土瓦の胎土分析 (2)」『奈良文化財研究所紀要 2015』27 年 6 月予定 ③諫早直人ほか 1 名 「藤原宮・京出土の銅鏡」『奈良文化財研究所紀要 2015』27 年 6 月予定 ④清野孝之ほか 2 名 「飛鳥寺出土文字瓦の再調査」『奈良文化財研究所紀要 2015』27 年 6 月予定 			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4162-2

自己点検評価調査

研No.20

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：新出土資料を迅速に公開し活用に供した。過去の出土した資料も今日的な観点から再整理、再分析した。 独創性：我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった飛鳥・藤原地域において、古代国家の具体像を復元すべく再調査、再検討を行った。 発展性：蓄積された歴史資料を今後の調査研究に活かすため、資料化を行った。 効率性：新出及び蓄積された歴史資料の調査・再検討を計画的に遅滞なく行い、公表するために必要な整理・分析等を効率的に行った。 継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究と保存処理を継続的に実施した。 正確性：新出資料や蓄積された資料について、その地域的特性や年代観等の特性を十分に踏まえ、正確な資料的性格と価値を把握し、公表した。						

2. 定量的評価

観点	発表件数					
評定	B					
判定理由 発表件数：過去の調査研究の資料を整理研究し、4件の論文等を公表することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、調査成果の公開も適切に行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、計画的に実施することができた。また、成果の公開も予定通りに行った。中期計画の4年目に当たる26年度の作業の実績及び研究成果の公表により、最終年度となる27年度に向け適切な研究の蓄積を加えることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究 ((1)－⑥－ウ)		
【事業概要】			
飛鳥地域の壁画古墳についての調査研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、金属工芸関連遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築遺物の調査として、山田寺跡出土部材の研究を行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】			
西田紀子(学芸室研究員)、丹羽崇史(学芸室研究員)、杉山 洋(企画調整部長)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)			
【主な成果】			
<p>(1)キトラ古墳、高松塚古墳壁画に関する研究を継続した。</p> <p>(2)飛鳥寺塔心礎出土品を含む飛鳥寺跡発掘調査出土品の再整理を継続した。</p> <p>(3)川原寺裏山出土塑像の再整理を実施した。</p> <p>(4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像の非破壊分析を実施した。</p> <p>(5)過去に実施した和鏡に関する蛍光X線分析のデータを整理した。</p> <p>(6)山田寺跡出土部材の計測調査を継続した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1)壁画のうち特にキトラ古墳天文図、高松塚古墳星宿図に関する調査研究を重点的に行い、関連資料を収集した。どのような系統の天文図か、日本独自・朝鮮半島・中国北方系・中国南方系のいずれの可能性も視野に入れて検討を行った。またキトラ古墳天文図を分析した天文学の研究者と意見交換をし、天文学の手法で星の観測年代を推定できる可能性があることなどの所見を得た。系統、製作年代、観測緯度などいずれの要素も確定には至っていないので、次年度も継続する予定である。</p> <p>(2)飛鳥寺塔心礎埋納品のうち常設展示している金属製品を中心にリストと実測図を作成した。またガラス玉の蛍光X線分析、甲冑のX線CT画像撮影も一部実施した。これらの作業は次年度も継続する予定である。</p> <p>(3)当館に収蔵されている川原寺裏山出土塑像の点数を確認し、台帳用の写真撮影を行った。詳細データを収集する作業が残っており、次年度も継続する予定である。</p> <p>(4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像について蛍光X線分析とX線CT画像撮影を行い、成分及び内部構造について知見を得た。成果は論考にまとめる予定。</p> <p>(5)過去に本研究で実施した和鏡に関する蛍光X線分析のデータを整理し、研究図録を作成した。</p> <p>(6)重要文化財山田寺跡出土品のうち建築部材について計測調査を継続し、データを収集した。これらは中長期的な変化を知るための基礎データとなるものである。</p>			
			
飛鳥寺塔心礎埋納品の一部			
【実績値】			
研究図録数 1 件 (①)			
山田寺部材計測データ 1 年分 (2 時間ごと 1 回、年間 4,380 回計測)			
【備考】			
研究図録			
①飛鳥資料館研究図録第 18 冊『鏡に関する研究雑感』2015.2 (予定)			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4163

自己点検評価調査

研No.21

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：飛鳥寺跡発掘調査出土品の再整理(2)は脆弱な遺物の劣化が懸念される状況のなかで喫緊の課題である。また、(4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像の調査は一時預かりの貴重な機会を逃さずに実施したものである。 独創性：(1)のキトラ古墳・高松塚古墳の天文図・星宿図について、天文学分野の知見も踏まえて天文暦法の観点から調査した研究はほとんどない。また、(4)金銅観音菩薩立像の分析と(5)和鏡の調査はこれまで行われていない調査の貴重なデータである。 発展性：飛鳥寺跡の出土品は全点の図面・写真が作成されれば画期的な基礎資料となることが期待できる。山田寺跡出土の建築部材の計測は、保存処理して再組み立てを実施した有機質遺物の経年変化を知る上で重要な知見を得られると見込まれる。 効率性：実物資料を収蔵している飛鳥資料館が中心となって、他部門の研究員の協力を得ることで、多様な調査研究を滞りなく遂行することができた。 継続性：(1)については、これまでの絵画史や天文学に関する知見を収集し、これまで当館で作成してきた両古墳壁画に関する図録の論考などを参考にしつつ、東アジア的規模での調査研究をすすめた。(5)については、過去に調査研究を行った研究員がすでに他部局へ異動しているが、その協力を得て過去のデータをとりまとめる作業を行った。 正確性：蛍光X線分析、X線CT画像撮影では当研究所の保存科学分野の研究員にも協力を得て、精確な機械操作と、キャリブレーションされた機器で測定するなどによって正確性を確保した。						

2. 定量的評価

観点	研究図録数	山田寺部材計測データ				
評価	B	B				
判定理由 研究図録数：目標値（年1冊以上）を達成できた。 山田寺部材計測データ：目標値（1年分）を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	歴史的に重要な飛鳥の地にあり、発掘調査で見つかった貴重な実物資料を多数収蔵しているという、飛鳥資料館の特性を最大限に生かして活動している。飛鳥時代の山田寺跡出土建築部材の研究もまた、当館ならではのものである。 様々な課題について、複数年にわたり地道な調査研究作業を継続していることは評価に値する。次年度以降はさらに正確性と継続性に留意しつつ、当館の特性を生かした調査研究を続け、その成果を研究図録や展示といった形で還元していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各種のデータを着実に収集している。研究図録の刊行も順調である。保存科学的分析などともリンクした研究を行っており、その成果は展示にも活かせるものといえる。 次年度以降も当研究所の体制を生かした総合的な研究を行っていくことが期待できる。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力((1)－⑥－エ)
<p>【事業概要】</p> <p>(1) 中国社会科学院との共同発掘調査成果の整理と次期共同研究への準備を行う。</p> <p>(2) 遼西地域東晋十六国期都城文化関連遺跡・遺物の調査と調査研究報告書を公刊する。</p> <p>(3) 鞏義市黄冶唐三彩窯跡等出土品の共同研究を実施し、成果を公刊する。</p> <p>(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究と発掘調査交流を、韓国国立文化財研究所と行う。</p>	
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)
【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
<p>【スタッフ】</p> <p>(1) 玉田芳英・今井晃樹(以上、都城発掘調査部)、栗山雅夫(企画調整部)</p> <p>(2) 小野健吉・清野孝之・川畑 純・森先一貴・廣瀬 覚・諫早直人(以上、都城発掘調査部)、小池伸彦(埋蔵文化財センター)、栗山雅夫(企画調整部)、他4名(呉炎亮・李霞・肖俊涛・高振海)</p> <p>(3) 玉田芳英・尾野善裕・森川 実・降幡順子他6名、難波洋三(埋蔵文化財センター)、丹羽崇史(企画調整部) 他5名(賈連敏・楊振威・梁兆奎・曹艳朋・朱树政)</p> <p>(4) 玉田芳英・清野孝之・青木 敬・諫早直人・廣瀬 覚(以上、都城発掘調査部)、他24名(金東烈他)</p>	
<p>【主な成果】</p> <p>(1) 中国社会科学院との共同調査・研究及び成果発表を行った。</p> <p>(2) 金嶺寺遺跡出土瓦の調査研究、大板宮子遺跡出土金属器の調査研究を行った。</p> <p>(3) 唐三彩関連資料を調査等を行った。</p> <p>(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施した。</p>	
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1) 中国社会科学院との共同調査・研究及び成果発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月に1名が鄴城国際シンポジウムで平城京の学術報告(①④)。 ・12月に2名派遣し、北魏洛陽城及び鄴城出土遺物(北魏洛陽城出土瓦磚の比較資料として)の調査を実施。 <p>(2) 金嶺寺遺跡出土瓦の調査研究、大板宮子遺跡出土金属器の調査研究(②)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技法を明らかにした。大板宮子遺跡出土鉄矛の年代と性格を明らかにした。 ・12月に遼寧省文物考古研究所の研究員4名を招聘。 <p>(3) 唐三彩関連資料の調査等を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月に4名を派遣し、河南省鄭州市・浙江省揚州市にて唐三彩関連資料を調査。調書作成・写真撮影を実施。 ・11月に5名を河南省から招聘。 <p>(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共同研究にかかる研究者派遣8名・受入れ1名。発掘調査交流にかかる研究者派遣1名・受入れ1名。 ・『奈文研ニュース』No. 55にて発掘調査交流の内容を公表(③) 	
	
<p>新羅王京遺跡の発掘調査風景</p>	
<p>【実績値】</p> <p>口頭発表等数：1件(④)</p> <p>論文等数：3件(①～③)</p> <p>(参考値)</p> <p>(1) 実測図：10枚、デジタル写真：80枚。</p> <p>(2) デジタル写真：539枚。</p> <p>(3) 調書：32枚、デジタル写真：32枚。</p>	
<p>【備考】</p> <p>① 今井晃樹「平城京の造営規格」(『東亜古代都城及び業城考古歴史国際学術検討会』26年8月)</p> <p>② 小池伸彦「中国遼寧省文物考古研究所との共同研究」(『奈良文化財研究所概要2014』26年9月)。</p> <p>③ 廣瀬 覚「日韓発掘交流に参加して」(『奈文研ニュース No. 55』26年12月)。</p> <p>④ 今井晃樹「平城京の造営規格」(『鄴城国際シンポジウム』26年8月)</p>	

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4164

自己点検評価調査

研No.22

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：国際シンポジウムにおける発表や、刊行物における成果公表等、適切かつ速やかな公表を行った。</p> <p>独創性：各事業において、奈文研が蓄積してきた精緻な視点で各種遺物の調査研究を行うノウハウを、中国・韓国出土遺物の調査にも応用することで、一定の成果を挙げている。</p> <p>発展性：いずれの事業でも製作技術や年代観等を中心とした遺物の調査研究が進んだ。加えて海外研究者との意見交換も一層進んだことにより、正式な成果報告を公刊するための各種知見の蓄積も順調に進んでいる。</p> <p>効率性：限られた時間を有効に活用して、効果的な資料調査と意見交換が全ての事業で推進された。</p> <p>継続性：全ての事業で、今後の正式な成果報告刊行へ向けて、実測図や写真データ等を中心に資料の充実が図られた。</p> <p>正確性：対象資料を比較検討するためにより対象地域を広げて資料を収集し、データ化することで、一層網羅的に収集した資料を比較検討できる基礎固めが進んだ。</p>						

2. 定量的評価

観点	口頭発表等数	論文等数				
評定	B	B				
<p>判定理由</p> <p>口頭発表等数：目標値1件を達成した。</p> <p>論文等数：目標値3件を達成した。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・中国・韓国双方の研究機関との連携の継続により、計画通りの資料収集を行い、多大な成果を挙げた。 ・国際シンポジウムにでの発表や適宜調査成果の公表により、研究成果を速やかに公表した。 ・人的交流の促進により、多くの研究成果を共有し、また今後の共同研究の基礎を拡充した。 <p>以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>(1)～(4)のいずれの研究も計画通り実施・進捗し、成果を挙げて、中期計画の所期の目標を達成している。以上から、Bと判定した。</p> <p>なお、中国・韓国双方の研究機関と共同研究が継続的に行われることが、研究成果の共有・研究水準の向上に資するものとなっており、さらに今後の研究の発展にも繋がると考えられる。次年度以降も継続的に本事業を進めていく計画である。</p>

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究 ((1)～⑦)		
<p>【事業概要】文化的景観及びその保護に関する基礎的・応用的な調査研究を推進し、諸外国との比較のもとに、我が国の文化的景観保護に関する情報の収集・検討等を行う。また、過年度開催した研究集会の成果の取りまとめ及び公表を行うとともに、これまでの成果を踏まえつつ、文化的景観の学術及び保護に資する検討会を主催し、文化的景観の概念及び調査・計画手法等の体系化に取り組む。</p>			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	景観研究室長 平澤 毅
<p>【スタッフ】 恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊地淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)、広田純一(岩手大学教授・客員研究員)、小浦久子(大阪大学准教授・客員研究員)</p>			
<p>【主な成果】 文化的景観及びその保存・活用に関する調査・研究の一環として、“「文化的景観学」検討会”を開催して、文化的景観に関する体系化に関する検討を進めたほか、文化的景観の現地調査等を行い、論文等を通じて成果を報告した。また、昨年度の研究集会報告書及び『World Heritage Papers 26』日本語版を刊行した。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1) 基礎的・体系的な研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「文化的景観学」検討会を、26年4月20日、5月31日、6月30日、8月8日、11月18日、27年1月21日、2月28日に開催し、文化的景観学の体系化に向けて検討を進めた。このうち、26年5月31日には、検討会メンバー12名に合わせ、行政担当者、NPO、コンサルタント、研究者など32名と公開ワークショップを開催した。 ・ 昨年度、遺跡整備研究室と合同で開催した研究集会の成果報告書(備考①)を刊行した。 ・ 文化的景観の国際情勢等に関する検討を踏まえ、UNESCOとの契約に基づき、World Heritage Papers 26『World Heritage Cultural Landscapes: A Handbook for Conservation and Management』の日本語版『世界遺産の文化的景観 保全・管理のためのハンドブック』(備考②)を刊行した。 ・ 27年度刊行を計画している文化的景観資料集成第2集・第3集の執筆・編集等を進めた。 <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  </div> <p style="text-align: center; margin-top: 5px;">「文化的景観学」検討会公開ワークショップ(26年5月31日)</p> <p>(2) 文化的景観保護に関する現地調査・研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 諸外国との比較研究のため、バリ州の文化的景観：トリ・ヒタ・カラナの哲学を表現したスバック・システム(インドネシア、cultural landscapeとして、2012年に世界文化遺産登録)等に関する現地調査を8月25～30日に行い、東南アジアの農業景観に関する知見を得た。(※奈文研紀要2015で報告予定) ・ 宇治市、四万十市、阿蘇市等をフィールドに、それぞれの地方公共団体担当部局への協力を通じて、文化的景観の価値評価及び整備計画に関する検討を行った。 ・ 重要文化的景観等に関する最新の情報を収集・整理し、関連情報とのリンクを付してウェブサイト上に公開した。 ・ 全国の文化的景観に関する協議等により、文化的景観の価値評価及び保護のあり方について検討を進めた。 			
<p>【実績値】 刊行図書数：2冊①② 論文等数：15件(講演・発表等8件③、論文等7件④)</p>			
<p>【備考】 刊行図書 ①奈良文化財研究所『計画の意義と方法 ～計画は何のために策定し、どのように実施するのか～ 平成25年度遺跡整備・景観合同研究集会報告書』26.12 ②奈良文化財研究所『世界遺産の文化的景観 保全・管理のためのハンドブック』(World Heritage Papers 26の日本語版)2015.3 論文等 ③平澤毅「文化財庭園の保護と景観」文化財庭園の保護継承シンポジウム, 26.6 ほか7件 ④恵谷浩子「生産と製造が結びついた農業景観の保護手法一日仏の比較」奈良文化財研究所紀要, 26.6 ほか6件</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4171

自己点検評価調査

研No.23

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化的景観の概念及び調査・計画等を体系化することを目指した「文化的景観学」の取組は、文化的景観の保護に関わる多くの行政担当者、NPO、コンサルタント、研究者の関心を集め、公開ワークショップによって、昨年度の検討会の成果について更に深化することができ、時宜を得た検討に関する大きな期待が寄せられた。 独創性：文化的景観の保護における複雑な課題に対して、これまで学術分野としての「文化的景観学」に関する体系的検討は行われておらず、また、そうしたことを主題としたワークショップの開催は初めてのものであった。 発展性：検討会での検討の他、国内外の事例に関する調査研究を踏まえつつ、文化的景観の概念適用と実践体系に関する検討を深化していくことは、地域社会の持続可能性にも大きく貢献できるものであり、『世界遺産の文化的景観 保全・管理のためのハンドブック』の日本語版制作は、特に日本国内の文化的景観保護の取組にも大きな参考となる。 効率性：数多くの分野との協働が欠かせない文化的景観に関する検討において、24年度から構成した検討会に様々な専門と立場のメンバーを招聘して多角的な情報を共有し、また、公開ワークショップを開催することで、文化的景観に関する検討を効率的に行うことができた。 継続性：過年度において5回にわたって開催してきた文化的景観研究集会の成果を踏まえつつ、24年度からは行政・研究の専門家9名を招聘して実施している「文化的景観学」検討会の取組は、文化的景観の保護に関する体系化に関する検討を深め、その成果の客観性を高める上で極めて重要な経過を辿っている。 正確性：文化庁及び各地方公共団体との連携・協力の下に、国内の文化的景観に関わる情報の把握・収集及び現地調査において、詳細かつ正確な把握・検討・公開等を行ったとともに、海外の文化的景観についても現地調査、最新議論及び各国の専門家からの直接情報に基づき詳細かつ正確な把握を行った。						

2. 定量的評価

観点	刊行図書数	論文等数			
評定	B	B			
判定理由 刊行図書数：計画通り2冊の報告書等を刊行した。 論文等数：広く文化的景観の諸課題の検討に応じ、大小の講演会等のほか、多様な刊行物への論文等の公表により、目標件数を達成した。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	1：文化的景観に関する研究集会等の実施による保護行政や学術研究への貢献、2：宇治市、四万十川流域阿蘇地域などを対象とした現地での調査研究、3：文化的景観に関する重要な海外事例の調査及び海外文献の翻訳、4：報告書の刊行や学会・学術雑誌等での研究成果発表等、年度当初の計画を的確に遂行することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化的景観に関する検討会の開催や現地調査の実施等により、当初の計画通り研究を遂行することができた。特に、検討会では文化的景観の概念及び調査・計画等の体系化に関する検討を深め、また、現地調査・研究では、保存計画や整備・活用計画の策定について検討を進めることができた。特に文化的景観においては、多様な分野及び立場との緊密な協働を実現していくことが重要との観点から、文化財以外の行政分野も含め、恒常的な情報共有と検討の場を継続的に経営していく必要がある。 その基礎的取組のひとつとして、第3期中期計画の最終年度である27年度には、「文化的景観学」検討会を中心に、個別の課題に対する検討も重ね、文化的景観に関する学術上及び保護行政上の検討を反映した一定の知見を取りまとめ公表することが極めて重要である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開 ((1)－⑧－ア)		
【事業概要】	官衙関係遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡の発掘調査で抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析を行い、一般公開する。		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦
【スタッフ】	山中敏史(元文化遺産部長、客員研究員)、小澤 毅(三重大学人文学部教授、客員研究員)、森本 晋(企画調整部国際遺跡研究室長)、馬場 基、青木 敬(以上、都城発掘調査部主任研究員)、小田裕樹、大澤正吾(以上、都城発掘調査部研究員)、海野 聡(文化遺産部研究員)		
【主な成果】	官衙関係遺跡・集落・宮都等の建物データについて全国的に網羅して作成した資料集をもとに、報告書『長舎と官衙の建物配置』を刊行した。また、官衙・寺院関係遺跡及び井戸遺構に関するデータベースを作成し、官衙・寺院データベースの北陸地方から関東地方の一部までについて新たに公開した。		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> 24年度に全国的に収集・整理した長舎遺構の資料を追加・補足・修正し、『長舎と官衙の建物配置』資料編・報告編(奈良文化財研究所研究報告第14冊、①)として編集・刊行した。 今年度開催した第18回古代官衙・集落研究会「宮都・官衙と土器」(官衙・集落と土器1)の研究報告資料を作成した(②)。 神奈川県・新潟県・富山県・石川県・福井県について報告書のめくり作業を行い、国府・官衙・城柵やその他の官衙関係遺跡等の資料を追加収集・整理した。また、25年度までに刊行された古代寺院に関する報告書のめくり作業を行った。 新たに収集した官衙関係遺跡と古代寺院遺跡の資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。 前年度に資料を収集しデータ化した全国の長舎遺構の中から、特に桁行9間・梁行2間あるいは3間の建物についてデータを抽出して属性分析を進め、その性格等を検討した。 神奈川県・新潟県・富山県・石川県・福井県の古代井戸遺構に関する資料を収集・整理し、それらをデータベース化した。 		
			
	古代井戸データベース入力画面		
【実績値】	<p>データベース入力・補訂件数：計 8,510 件</p> <p>官衙関係遺跡データベース：遺跡数 375 件、文献データ 1,785 件、建物データ 486 件、画像データ 763 件</p> <p>古代寺院遺跡データベース：遺跡数 131 件、文献データ 1,184 件、建物データ 336 件、画像データ 812 件</p> <p>古代井戸データベース：遺跡数 349 件、文献データ 492 件、井戸データ 1,792 件</p> <p>公開データ数：計 84,346 件</p> <p>官衙関係遺跡：遺跡数 1,727 件、文献データ 17,216 件、建物データ 20,235 件、画像データ 20,669 件</p> <p>古代寺院遺跡：遺跡数 1,430 件、文献データ 15,645 件、建物データ 3,312 件、画像データ 4,112 件</p> <p>報告書件数：1 件 (①)</p> <p>(参考値)</p> <p>研究会当日資料集：1 件 (②)</p>		
【備考】	<p>①小田裕樹ほか編『長舎と官衙の建物配置』資料編・報告編、奈良文化財研究所研究報告第14冊、26.12.</p> <p>②小田裕樹ほか編『宮都・官衙と土器』第18回古代官衙・集落研究会当日資料、26.12.</p>		

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4181

自己点検評価調査

研No.24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：従来から需要の多い古代官衙関連遺跡・古代寺院遺跡データベースを充実させ活用に供するとともに、近年需要の増加している井戸関連遺跡に対応したデータベースを設置し、データ入力している。 独創性：全国を網羅していることに加え、様々な遺跡や遺構の性格分析・研究などに役立つ多彩な項目を設置したデータベースである。 発展性：井戸関連遺跡へも収集範囲を広げてデータベースを拡充している。 効率性：官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・井戸関連遺跡に関する膨大なデータから、様々な項目から必要に応じて素早くデータを抽出することができ、遺跡等の各種分析・研究に対する利便性は極めて高い。 継続性：毎年増加し続ける遺跡データを継続的に収集・入力し公開している。 正確性：新出資料の追加に加え、既存のデータに関しても変更を生じた事項について改訂を行った。						

2. 定量的評価

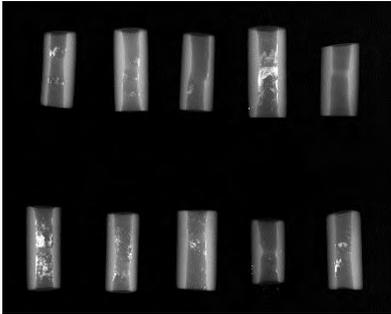
観点	データ入力 ・補訂件数	公開データ数	報告書件数			
評定	A	A	B			
判定理由 データ入力・補訂件数：目標の2,500件を大きく上回った。 公開データ数：目標の60,000件を上回った。 報告書件数：計画通り1件を刊行した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	データベース入力件数、公開件数とも目標値を上回ったほかに、井戸関連遺跡データベースの入力も開始した。また、報告書『長舎と官衙の建物配置』を刊行し、さらに研究集会資料集『宮都・官衙と土器』を作成した。以上の理由から、総合的にみてBと判定した。 全国で官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・古代井戸について調査研究にあたる人々にとって、遺跡や遺構データの抽出・分析等においてさらなる利便性・効率性の向上に寄与すると期待できる。データ量が増すほどに寄与する度合いも増加すると考えられるので、引き続き、古代官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・古代井戸に関する新資料等を収集・整理し、これらデータベースの一層の充実を図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	官衙関連遺跡・古代寺院については、新資料の収集・整理、既存データの補訂などで着実にデータの蓄積を進め、それらを順次、地域ごとに公開しており、本年度は神奈川県までのデータベース化を達成した。以上のことから、事業を計画通り順調に進めていると判定した。また、年度ごとに異なるテーマに従い、資料集作成や報告書刊行を行っているが、これらについても次年度以降、継続していく所存である。今中期計画期間の最終年度である次年度は、古代官衙・寺院関連では、本年度に入力の済んだ神奈川県までのデータベースを公開するとともに、データ収集・入力の主軸を関東地方に移したい。古代井戸データベースでは500件程度の新データ入力を目標とし、データの蓄積を進める。また、本年度実施した研究集会の研究報告書を次年度に刊行する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査 (1)－⑧－イ)		
【事業概要】			
標記プロジェクトに関して、(1) 考古遺物の非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、(2) 高エネルギーX線CT法及びX線CR法の応用研究、(3) 漆製遺物や塗装材料などの分析法の実用化とデータベース作成、(4) 鉄製遺物の埋蔵環境調査、(5) 文化財の収蔵・展示環境についての研究集会の開催、に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】			
脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、杉岡奈穂子(埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー)、佐藤昌憲(京都市芸繊維大学特任教授・客員研究員)、肥塚隆保(元副所長・客員研究員)			
【主な成果】			
<p>(1) 標準試料のラマンスペクトルを集積するとともに、顔料、ガラス、石製品、紙資料のラマンスペクトルを取得した。</p> <p>(2) 遺跡から出土した大量の玉類のX線CR撮影を実施することにより、材質と内部構造を明らかにした。</p> <p>(3) 三内丸山遺跡出土の漆製品について、漆使用の有無をFT-IR法により明らかにした。また、赤色塗膜には酸化鉄を主成分とする赤色顔料ヘマタイト(Fe₂O₃)の使用が明らかになった。</p> <p>(4) 古墳石室における埋蔵環境を再現した模擬石室で金属製遺物の暴露試験を開始し、埋蔵環境が金属製品の腐食に与える影響の解明に取り組んだ。</p> <p>(5) 「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」をテーマとした研究集会を開催した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 遺跡から出土した炭化紙資料のレーザーラマン分光分析の有効性を検討するため、炭化程度の異なる紙資料(標準資料)のレーザーラマン分光分析を実施し、炭化程度に応じた紙資料のラマンスペクトルを集積した。また、佐賀県鳥栖市永田1区6号墳出土の特殊な黄色不透明ガラス資料に含まれる黄色不透明粒子について、レーザーラマン分光分析とX線回折分析を併用することで、人工黄色顔料の錫酸鉛が用いられていることを明らかにした。</p> <p>(2) 奈良県明日香村飛鳥寺塔心礎埋納物として大量に出土したガラス小玉について、X線CR撮影を実施することでガラス材質を明らかにした。また、島根県出雲市西谷3号墓出土碧玉製管玉の拡大CR撮影を実施し、穿孔方法(石針による両面穿孔)について明らかにした。</p> <p>(3) 三内丸山遺跡出土の漆製品について、漆使用の有無をFT-IR(ATR法)で測定したところ、漆に特徴的なピークが検出された。また、赤色塗膜の色料については、蛍光X線分析の結果、鉄(Fe)が強く検出され、水銀(Hg)は全く検出されなかった。赤色の色料は、酸化鉄を主成分とする赤色顔料ヘマタイト(Fe₂O₃)の使用が推定される。</p> <p>(4) 模擬石槨を作って周辺の環境測定を行うとともに、石槨内に金属板を設置して、腐食過程をモニタリングした。その結果、石槨内で発生する結露水が腐食の進行を律していることが確認された。</p> <p>(5) 「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」と題した研究集会を開催し(27年1月23日)、石造文化財の保存の現状と課題について全国の文化財担当者との問題意識を共有し、総合討議を通じて様々な角度から意見交換を行った。</p>			
			
碧玉製管玉のCR画像			
【実績値】			
発表件数：9件 (①～③)			
論文等数：16件 (④～⑤)			
研究集会開催件数：1件 (⑥)			
【備考】			
発表			
①田村朋美・大賀克彦・赤田昌倫・北條芳隆「エジプト・カラニス遺跡出土ガラスの考古科学的研究」日本文化財科学会第30回大会、26.7.6			
②柳田明進・脇谷草一郎・安井洋之・小椋大輔・高妻洋成・鉢井修一「模擬古墳から検討した埋蔵環境下における遺物保存に関する研究(その2)埋葬主体内部の環境が金属製遺物の腐食速度に及ぼす影響」日本文化財科学会第31回大会、26.7.7			
③Tomomi TAMURA, Katsuhiko OGA「Distribution of lead-barium glasses in ancient Japan」Sixth Worldwide Conference of the SEAA in Ulaanbaatar, Mongolia、26.6.9 ほか6件			
論文等			
④田村朋美・星野安治「宮城県追戸横穴墓出土トンボ玉の自然科学的研究」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6.			
⑤田村朋美・大賀克彦「佐賀県内出土ガラス製玉類の考古科学的研究」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書第39集』2015.3. ほか14件			
研究集会			
⑥研究集会「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」(発表件数：7件、参加人数：75名、開催日：2015.1.23)			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4182

自己点検評価調査

研No.25

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	B	B	B	B	
<p>判定理由</p> <p>適時性：出土遺物の材質構造調査に非破壊的な手法が求められているなか、種々の調査機器を応用することで、より多様な遺物の材質構造調査が可能となり、古代の材料や技術に関する新しい知見を得ることができる。また、平城宮跡など、遺物が埋蔵した状態で整備が行われる事例の増加に伴い、埋蔵環境中での遺物の劣化機構の解明が求められている。</p> <p>独創性：埋蔵環境中における鉄製品の腐食に関する基礎データを収集するため、海底遺跡をフィールドとして現地に暴露試験用の資料を設置するとともに、鉄製遺物の埋蔵環境を室内で再現した腐食実験を行った。また、古墳石室における埋蔵環境を再現した模擬石室で金属製遺物の暴露試験を開始した。このような手法を用いた埋蔵環境が金属製遺物の腐食に与える影響についての研究は他に類を見ない。</p> <p>発展性：出土遺物の材質構造に関するデータを集積することで、近隣諸国だけでなく地中海周辺地域で出土した類例との比較研究も可能となり、ユーラシア大陸の東西を結ぶ古代の交易関係を明らかにすることができた。</p> <p>効率性：遺跡から大量に出土する玉類などの遺物に対して、同時に多量の材質調査が可能な方法（AR法及びCR法）を適用することで、迅速な調査を実施した。</p> <p>正確性：蛍光X線分析法とレーザーラマン分光分析法に加え、可視分光分析法や非破壊微小点X線回折分析など、複数の分析法を併用することで、精度の高い材質調査を行うことができた。</p>						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会開催件数			
判定	A	A	B			
<p>判定理由</p> <p>発表件数：目標件数2件を大きく上回る9件を達成した。</p> <p>論文等数：目標件数2件を大きく上回る16件を達成した。</p> <p>研究集会開催件数：目標件数1件を達成した。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業を当初計画どおり順調に遂行しただけでなく、目標を大きく上回る発表・論文等数を達成することができた。次年度は、出土炭化紙資料などの有機遺物やガラス製遺物の乳濁剤の同定にラマン分光分析の応用範囲を広げていきたい。埋蔵環境調査に関しては、鷹島海底遺跡に設置した暴露試験のデータ回収を継続するとともに、模擬石室に本年度設置した暴露試験についてもデータ回収を始める予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度の事業を当初の計画どおり実施でき、更には発表・論文等数で目標を大きく上回ったことから、Bと判定した。今中期計画期間の最終年度である次年度は、出土炭化紙資料などラマン分光分析のさらなる応用範囲の拡大を予定している。埋蔵環境については、模擬石室及び鷹島海底遺跡における環境調査と暴露試験のデータ収集を進め、それぞれの埋蔵環境が遺物の劣化に及ぼす影響について検討を行う予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集 ((1)－⑧－ウ)		
【事業概要】土質遺構や装飾古墳の安定した公開・展示を行うことを目的とした環境調査、ならびに維持管理技術の開発的研究の一環として、遺跡を構成する土、石材及び空気における熱・水分・溶質移動を推定し、それらが形成する環境を予測する解析技術に関する研究、及び土質遺構露出展示、装飾古墳の公開・展示に関する実地試験に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 土遺構の露出展示保存を実施している平城宮跡遺構展示館を研究対象として、外界気象条件や覆屋内温熱環境、析出物の種類や分布、水質に関する実測調査を行うとともに、土中と覆屋内空気における熱、水分及び酸素、溶質の移動を考慮した同時移動解析を行った。 ・ 現在、石室保護施設を建設中のガランドヤ古墳では、石室内の環境の変化について調査を行うとともに、換気や熱源の運用方法について検討した。さらに、同じ日田市に所在する穴観音古墳と法恩寺山3号墳の2基の装飾古墳においても、墳丘直上の外界気象条件と石室内温熱環境に関する実測調査を行い、ガランドヤ古墳と併せて封土の状態や墳丘表面の被覆状況が石室内温熱環境に及ぼす影響について検討した。 ・ 塩の析出による劣化が喫緊の課題となっている大分市元町石仏では、塩析出による劣化の抑制を試みた。あわせて、季節毎に析出している塩の種類と分布、地下水の水質と覆屋内の温熱環境に関する調査を実施し、塩析出の要因について検討した。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 平城宮跡遺構展示館では、冬期を中心に磚や石材からの塩析出や、土中からしみ出した水で含水酸化鉄の沈殿が生じ遺構の劣化を引き起こしている。そこで、覆屋内の温熱環境と塩の分布を行い、塩の析出が促進される温熱環境について検討した。また、遺構直近の地下水について水質分析を行い、塩の起源や鉄が遺構面において沈殿し得る環境であるのか検討した。あわせて数値解析から、遺構土壌における塩析出と含水酸化鉄の沈殿を抑制するための環境条件、現状の覆屋の問題点について検討した。 ・ ガランドヤ古墳は、恒久的な保存施設の建設によって、石室内部の結露性状が大きく変化した。特に建設工事期間中は周辺の環境が急激に変化することから、石室内部の温熱環境を常にモニタリングし、結露の抑制につとめた。また、保存施設完成後の長期的な保存環境の制御方法について検討するため、保存施設の換気を稼働した場合などに石室内温熱環境がどのように変化するのか実測調査を行った。 ・ 元町石仏では冬期を中心に、塩析出による石仏表面の剥離が生じている。そこで、季節毎の覆屋内温熱環境、析出塩の種類と分布、周辺地下水の溶存成分に関する実測調査を行い、覆屋の仕様と運用方法の問題点について検討した。また、塩類風化に対する有効性を一昨年度に確認している、和紙によるフェイシングを石仏に対して行い、塩類風化の程度について検討した。 			
			
			
(上) 元町石仏表面の塩、(下) フェイシング			
【実績値】			
発表件数：9件 (①～③)			
論文等数：10件 (④・⑤)			
(参考値)			
調査実施回数：23回 平城宮跡遺構展示館 (12回)、ガランドヤ古墳 (6回)、元町石仏 (5回)			
【備考】			
発表			
①Soichiro Wakiya, Takeshi Ishizaki, Yohsei Kohdzuma, Shigeo Aoki 「Study on Preservation Methods of Imperial Citadel of Thang Long Based on Heat and Moisture Movement in the Remains」 2014 ICOMOS-ISCS, 26.5.21			
②桑原範好、鈴木修一、脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」日本建築学会近畿支部、26.6.22			
③脇谷草一郎、小椋大輔、高妻洋成「史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究—結露の抑制方法に関する検討—」日本文化財科学会第31回大会、26.7.6 ほか6件			
論文			
④高妻洋成、脇谷草一郎「史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究 2-結露抑制の手法に関する検討-」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6.27			
⑤脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』26.6.22 ほか8件			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4183

自己点検評価調査

研No.26

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：遺跡の公開・活用が推進される現在において、適切な環境下で遺跡の安定性の維持を図りつつ、観覧に供する技術の開発は不可欠のものである。 独創性：本研究では、整備後に生じる遺構の劣化を予測し、それを予め回避するために適切な環境の制御を行うことで、遺構保存を実現することを目的としており、土や石材の強化処置を主とする既往の手法とはコンセプトを異にするものである。 発展性：遺構を取り巻く環境は様々であるが、乾湿の繰り返しや塩類析出などの遺構で生じる劣化は熱、水分、溶質移動によって引き起こされる普遍的なものである。したがって、本研究から得られた知見は広く汎用性を有しており、様々な遺構への応用が可能と考える。 効率性：フィールド調査で使用する機材や調査手法は、取り巻く環境を異にする様々な遺構で使用可能なものであることから、設備的投資の効率は高いと考える。 継続性：各調査フィールドにおいて調査の最終的な目標（長期的な目標）、及び各年の短期的な目標を明確に設定し、カウンターパートとなる地方公共団体と目標を共有することとともに、可能な限り受託調査研究として調査旅費などの予算を確保することで継続性を確保している。 正確性：恒常的な高湿度環境など、継続的な環境調査は過酷な条件下で行われることが多いが、それらに対する耐性を備えた測定器具類を選定しており、得られたデータは十分な正確性を有すると考える。また、研究は常に実測調査と数値解析の両輪から成り立っており、数値解析のみの結果で保存方法を検討するのではなく、解析結果と実測調査結果を常に比較することで、解析モデルの妥当性について十分な検討を行っている。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
評定	A	A				
判定理由 発表件数：目標値である2件を大きく上回った。 論文等数：目標値である2件を大きく上回った。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各調査フィールドでの調査研究事業を当初の計画通り順調に遂行することができ、その成果発表は目標を大きく上回った。本年度は土中の熱、水分移動に加え、溶存酸素や溶質移動についても解析上の検討対象とした。次年度はこれらの解析解の精度を高めるとともに、溶存酸素濃度は土中に埋蔵されている金属製遺物や木製遺物の腐食に大きく影響を及ぼす因子であることから、埋蔵環境の推定や現地保存法の検討に発展させていく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業を当初の計画通り順調に遂行することができ、成果発表も目標を大きく上回ったことから、Bと判定した。今中期計画期間の最終年度である次年度は土遺構や磨崖仏における実測調査から、析出する塩の種類と周囲の温熱環境についてデータのさらなる蓄積を行う。また、平城宮跡遺構展示館では地下水からの鉄沈殿による遺構の汚損が問題となっていることから、水質の実測調査を継続し、データの蓄積を行う。あわせてこれらの数値解析を実施し、解析モデルの拡充と精度の向上を目指す。

業務実績書

研No.27

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財デジタル画像形成に関する調査研究(2)-①		
【事業概要】			
本研究では、着色仏画、彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法及びその応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 小林 公治
【スタッフ】			
田中淳（副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務））、山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、城野誠治（専門職員）、早川泰弘（保存修復科学センター分析科学研究室長）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「春日権現験記絵」第7・14巻の光学調査を実施した。 ・ 奈良国立博物館と研究協議会を開催した。 ・ 泉屋博古館分館において黒田清輝作「菊花と西洋婦人」の全図・近赤外線撮影を実施した。 ・ 飯田市美術博物館において菱田春草作「菊慈童」の全図撮影を実施した。 ・ 熊本県立美術館において、永青文庫寄託菱田春草作「落葉」「黒き猫」の全図撮影を実施した。 ・ 永青文庫において洋人奏楽図屏風の撮影を実施した。 ・ 東京国立近代美術館所蔵菱田春草作「早春」の全図撮影を実施した。 ・ 東京国立近代美術館所蔵岸田劉生作「古屋君の肖像」「壺の上に林檎が載っている」全図・近赤外線撮影を実施した。 ・ ポーランド、ブロッツワフ国立博物館所蔵、秋野蒔絵硯箱の全図・部分撮影を実施した。 ・ 徳川記念財団所蔵蒔絵長持の全図・部分撮影を実施した。 ・ 平等院の依頼を受け、扉絵の修理に伴う撮影を実施した。 ・ この他、修復を行っている日本銀行貴賓室染織品、修復作業状況、国内各地の伝統保存修復技術の記録撮影を行った。 ・ 奈良博との共同研究成果について、報告書内に論考として公表した。 ・ 下記報告書の発刊の他、データは画像処理を行った上で、記憶媒体に記録して保存している。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 本年度は長期的に継続して実施している宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「春日権現験記絵」の第7巻及び14巻について、本プロジェクトによるデジタル画像形成とその成果画像の検討も加えた保存修復科学センタープロジェクトによる蛍光 X 線分析とを一連の作業として実施することができた。 ・ 著名な近代絵画作品、種々分野からなる保存修復作品、また保存修復技術の記録や啓発を目的とした画像形成など幅広い調査を実施することができた。 ・ 肉眼では判読不能な大徳寺伝来五百羅漢図の銘文について、マイクロカラー撮影・近赤外線撮影・蛍光撮影により作品へのダメージを与えずに可視化する方法について報告することができた。 ・ 前年度までの調査成果を含め、備考欄に記載のとおり様々な内容（学術書・報告書・展覧会図録等）の刊行物に反映することができた。 			
			
平等院での調査風景			
【実績値】			
光学調査撮影件数 15件			
論文掲載数 1件（備考①）			
報告書刊行数 5件（備考②～⑥）			
【備考】			
① 城野誠治「『大徳寺伝来五百羅漢図』銘文の可視画像化について」『大徳寺伝来五百羅漢図』奈良国立博物館・東京文化財研究所編 26年5月20日			
② 『大徳寺伝来五百羅漢図』奈良国立博物館・東京文化財研究所編、26年5月20日			
③ 『大洋州島嶼国調査報告書』東京文化財研究所、26年8月1日			
④ 『日本国宝展』「普賢菩薩像」・「虚空蔵菩薩像」pp70-74、東京国立博物館、26年10月15日			
⑤ 『洋人奏楽図屏風光学調査報告書』東京文化財研究所、27年2月23日			
⑥ 『泰西王侯騎馬図屏風光学調査報告書』東京文化財研究所、27年3月25日			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4211

自己点検評価調査

研No.27

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：所内外の幅広い要望に応じた調査を実施し、また調査後迅速な調査成果の公表に努めてきた。 独創性：本プロジェクトで実施しているデジタル画像形成方法は、長年行ってきた類稀な文化財の調査によって得られた様々な実地経験と画像形成に対する種々の研究から生み出された独自の方法に基づいている。 発展性：過去の調査では対象物が絵画にかなり限定されていたが、現在は時代、地域を問わず様々な文化財を対象として実施し、新たな知見の獲得へと発展してきている。 効率性：担当職員の協力による対応を進め、調査ができるだけ効率的に進められるようにしている。 継続性：単年度的なものばかりではなくかなりの期間にわたって継続的に実施している調査もあり、また本プロジェクト成果が文化財調査の基礎的な存在として認知されるようになってきている。 正確性：成果をできるだけ早急に公表し、それらが共有できるように進めている。						

2. 定量的評価

観点	光学調査撮影件数	論文掲載数	報告書刊行数			
評価	B	B	B			
判定理由 光学調査撮影件数：プロジェクトの当初計画である共同研究を始め、所内外の様々な依頼にも対応して調査を実施した。 論文掲載数：デジタル画像形成にかかる論文を発表し、新たな成果を公開することができた。 報告書刊行数：これまでの調査成果を含め、多数の報告書の刊行により迅速な調査成果が公表できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価については要望に応じた調査を適宜実施し報告書にて公表することができ、また調査対象も従来実施してきた分野から広く発展させるきっかけを得ることができた。また定量的評価でもまとまった件数の実績を上げることができた。こうした内容から総合的評価をBとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は長期的なプロジェクトに加え、有形文化財・無形文化財など様々な対象について積極的な調査を実施することができた。また公刊図書による成果の公表も十分に行えたことから所期の目標を達成していると評価する。今中期計画期間の最終年度である次年度も引き続きより調査の実施や成果の公表に努めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の測量・探査等に関する研究 (2)－②		
【事業概要】文化財保護に資する研究を主眼として、発掘調査の際の測量・計測による記録方法の高度化、非破壊的手段である探査による地下遺構の把握、その他遺跡を対象とした各種の研究法の開発と試験、活用方法の検討を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦
【スタッフ】金田明大(埋蔵文化財センター主任研究員)、西村 康((財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所長・客員研究員)、西口和彦(元兵庫県立考古博物館調査専門委員・客員研究員)			
【主な成果】			
<p>(1) 三次元レーザースキャナーによる文化財計測の精緻化と迅速化を更に進め、応用研究を進めた。</p> <p>(2) SfM (複数画像から撮影位置と方向を復原する技術) /MVS (前述の複数画像を利用した三次元形状計測データ生成技術) の実用化と精度検証を達成し、実践に移した。</p> <p>(3) UAV (無人飛行艇) をプラットフォームとした各種遺跡調査システムを試行した。</p> <p>(4) アレイ式地中レーダー・多チャンネル式電磁探査機・磁気探査機の試験を行い、必要な機器の開発を進めた。</p> <p>(5) 発掘調査記録の迅速化及び精緻化を目的とした簡便な手法の検討を重ねた。</p> <p>(6) 窯業生産資料の広域編年と流通に関連する研究を推進した。</p> <p>(7) 各地方公共団体等の依頼により、計測及び探査を実施した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 薬師寺東塔・島内地下式横穴墓などの遺構や平城宮木簡・各地出土窯業資料などの遺物を計測した。取得したデータを三次元プリンター及び CNC (コンピューター数値制御自動旋盤) で出力し、活用可能で廉価なレプリカの作成試験を行い、従来方法と比較した。</p> <p>(2) SfM 及び MVS 技術を用いて、一般に普及しているデジタルカメラとコンピュータを用いた極めて安価かつ迅速な三次元計測手法を実用化した。加えて、計測データの多様な活用方法について検討した。</p> <p>(3) 小型 UAV による安価な空中写真計測システムを実用化した。SfM/MVS 技術を用いて高精度遺構計測が可能となった。マルチスペクトルカメラによる植生撮影試験を行い、NDVI (植物の光合成活性を調べるための植生指標) 等の指標による新たな写真判読手法の研究を開始した。</p> <p>(4) 平城宮跡等でアレイ式地中レーダー機器を試験した。遺跡に柔軟に対応可能な走査方法の検討と器具の製作を行った。3 深度及び導電率と磁化率を同時計測可能な多チャンネル式磁気探査機を導入し、宮殿や窯跡、古墳において試験した。従来の比抵抗探査等とほぼ同等の成果が 1/30 程度の時間で得られた。多プローブの磁気探査機器の同時測定試験では隣接プローブ間のキャリブレーションやドリフトといった課題が浮かび上がった。</p> <p>(5) 発掘調査記録は、現状では作成に多くの時間が費やされている。『発掘調査のてびき』に示されるような標準化と効率化が時間短縮に有効と考えるが、これらを支援する技術は未だ存在しない。このような技術を検討し、本年度は簡易な方法による遺構断面の土色や遺物の色彩計測を試みた。</p> <p>(6) 考古学の方法論としての型式論や流通論に資するための基礎研究として、窯業生産資料、特に古代土器生産・流通の研究方法を検討した。識別子による分類や製作技術の検討、情報収集と試行を行った。</p> <p>(7) 遺構計測では、平城京、東大寺、薬師寺、興福寺、水木古墳、弁天塚古墳 (以上、奈良市)、金沢城 (石川県)、島内地下式横穴墓 (宮崎県) 等で現地作業と解析を実施し、前年度までのデータ解析を進めた。遺物は 100 点以上の計測試験を行った。探査は平城宮・東大寺西塔及び戒壇院・薬師寺東塔 (以上、奈良市)、大萱古窯跡群 (岐阜県)、金沢城 (石川県)、甲立古墳 (広島県)、実相寺古墳群 (大分県) 等で現地作業と解析を進め、東北被災地を含む前年度までのデータ解析と報告作成をした。</p>			
			
<p>薬師寺東塔基壇での探査</p>			
【実績値】			
<p>三次元計測件数：140 件 (遺構 20 ヶ所、遺物 120 点)</p> <p>文化財探査件数：10 件</p> <p>発表件数 : 7 件 (①～③)</p> <p>論文等件数 : 8 件 (④～⑤)</p>			
(参考値)			
色彩計測試験 : 20 回以上			
【備考】			
発表			
①金田明大「Structure from Motion による遺構計測の試行」日本文化財科学会第 31 回大会、26.07.05～06			
②金田明大「Sfm による近接写真計測の遺跡への応用」日本文化財科学会第 31 回大会、26.07.05～06			
③金田明大「Sfm 各手法による三次元計測の比較」日本文化財科学会第 31 回大会、26.07.05～06			
論文等			
④金田明大「Structure from Motion による遺構計測の試行」『日本文化財科学会第 31 回大会研究発表要旨集』26.07			
⑤金田明大「Sfm による近接写真計測の遺跡への応用」『日本文化財科学会第 31 回大会研究発表要旨集』26.07			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4221

自己点検評価調査

研No.28

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：計測・探査は文化財研究及び保護において最も基礎的な分野であり、その必要性も高いため、各方面からの需要が極めて高い。 独創性：機器等を改良して文化財に特化した手法を確立しており、新しい手法として普及を図る段階にまで押し上げた。 発展性：既存の調査・研究の蓄積との連携に配慮しながら、地方公共団体等で簡便に導入可能な方法を開発しており、今後これらの手法が基礎的な記録手段として広範に普及していくと考えられる。 効率性：遺跡・遺物の詳細な記録を従来の数十分の一の時間と労力で取り、なおかつ低コストで実現できる方法をほぼ達成しつつある。 継続性：独法化以前からの研究資産・研究水準を引き継ぎつつ、不断の技術改良と現在の文化財研究及び保護に要求される水準に沿った研究を進め、成果を上げている。						

2. 定量的評価

観点	三次元探査件数	文化財計測件数	発表件数	論文等件数		
評定	A	A	A	A		
判定理由 三次元探査件数：突発的な発見などに伴う遺跡保存に関する緊急対応等で、目標の5件を大きく上回った。 文化財計測件数：依頼件数が急増するなかで緊急対応した案件も多く、目標の5件を大きく上回った。 発表件数：目標件数2件を大きく上回った。 論文等数：目標件数2件を大きく上回った。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>目標を達成していることからBとする。ComputerVisionをはじめとする諸技術は、民生用デジタルカメラなど一般に普及している機材を用い低コストで簡便に詳細な三次元データを生成することを可能としており、文化財の記録手法を画期的に変化させることが可能となる。こうして得られたデータを元に木簡のレプリカなどを低価格で製作することが可能になり、博物館での展示やデジタルドキュメンテーション（アーカイブ）を推進することにも繋げられる。</p> <p>探査技術は、より高精度で迅速な手法の確立に目途をつけることができた。計測、探査とも今後の発展が期待される分野であり、現在普及の壁となっている課題を解決しながら各方面への技術移転を進めたい。</p> <p>他に、遺跡調査記録の迅速化と標準化を目的として色彩計測などの研究を進めており、次年度以降注力していきたい。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>他分野で試みられている新技術を導入し独自の改良を加えることにより、計測、探査を始めとする発掘及び調査技術について、導入ならびに利用コストの低い方法を開発し、地方公共団体等に普及させる可能性を示したことで、本年度の目標を達成していると評価できる。</p> <p>一方、連携研究等により人材育成や技術の移転を進めており、それにより他機関における研究の活性化と人材の育成に貢献している。高まりつつある技術に対する注目と期待に応えることができたと考えられる。文化財の記録は文化財研究の基礎であり、一研究室や少人数での遂行には限界がある。文化財保護行政に資する研究を推進するという観点から、これまでに達成し得られた技術を地方公共団体等へより積極的に移転し普及させる必要がある。今中期計画期間の最終年度である次年度はこの点に注力し、技術を多くの外部研究機関・行政機関と幅広く共有していくとともに、本年度までに認識された課題を解決して目標を達成し、本研究を完結したいと考えている。</p>

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	年輪年代学研究 (2) - (3)		
【事業概要】			
<p>出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財の年輪年代調査を実施し、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資する。とりわけ、奈良文化財研究所で開発、実用化したマイクロフォーカスX線CTを用いた調査手法は貴重な文化財の非破壊調査に有効であるため、調査対象の拡充と活用を図り、これらの研究成果を公表する。</p>			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
【スタッフ】			
<p>大河内隆之(埋蔵文化財センター主任研究員)、星野安治(年代学研究室研究員)、伊東隆夫(南京林業大学特別招聘教授・客員研究員)、光谷拓実(元総合地球環境研究所客員教授・客員研究員)、藤井裕之(奈良県教育委員会日々雇用職員・客員研究員)、児島大輔(大阪市立美術館学芸員・客員研究員)</p>			
【主な成果】			
<p>考古学・建築史・美術史といった多分野にわたる22件の木造文化財を対象とした年輪年代調査及び樹種同定調査を行った。また、デバイスの交換により高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスX線CT装置を用いて、同装置による調査対象拡大に向けた非破壊検査を行った。そして、これらの調査・研究成果の一部を論文等、学会等において発表した。</p>			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 10件の出土木製遺物、6件の木造建造物、4件の木造美術工芸品、2件の自然木について、年輪年代調査と樹種同定調査を実施した。 ・ このうち法隆寺金堂古材調査では、年輪数が多く、部材表面でデジタル画像による非破壊年輪計測ができる150点以上の部材を悉皆的に調査した。当初材だけでなく中近世の修理部材についても対象とし、法隆寺金堂の建立年代及び建立後の修理の経過を推定する資料を得ることを目的とした。 ・ 標準年輪曲線の年代的・地域的拡充を行うため、全国各地の基礎データの蓄積を継続したが、本年度は特に中国地方のデータを充実させることができた。 ・ デバイスの交換により高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスX線CT装置を用いて、既存の装置では不得手であった保存処理済出土木製遺物への応用を行うとともに、遺跡の堆積物等の非破壊での三次元構造把握などに一定の成果を得た。 ・ マイクロフォーカスX線CT装置を用いた非破壊での樹種識別を目指し、現生木での基礎的な検討を行った。 ・ 以上の調査・研究成果の一部を、論文等、及び学会等において発表した。 			
			
出土木材の調査風景			
【実績値】			
調査件数：22件			
論文等：3件 (①～③)			
発表等：3件 (④～⑥)			
【備考】			
論文等			
①大河内隆之、星野安治、高妻洋成、芝康次郎「平京城二条大路出土墨画板のマイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊年輪年代調査」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6			
②庄田慎矢、星野安治、降幡順子「 ¹⁴ Cウイグルマッチングによる甘樫丘東麓遺跡の年代学的検討」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6			
③芝康次郎、諫早直人、星野安治「薬師寺食堂と西大寺旧境内における放射性炭素年代測定」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6			
発表等			
④田村朋美、星野安治「宮城県追戸横穴墓出土斑点紋トンボ玉の自然科学的研究」日本文化財科学会第31回大会、26.7.5			
⑤山崎健、丸山真史、菊地大樹、田村朋美、赤田昌倫、星野安治、大河内隆之、鈴木三男、小林和貴「富山県小竹貝塚から出土した鯛の歯を象嵌した漆製品片」日本文化財科学会第31回大会、26.7.5			
⑥星野安治「木の年輪で作った年代を測るものさし - 年輪年代学の成果 - 」奈良文化財研究所特別講演会「遺跡の年代を測るものさしと奈文研」、26.10.25			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4231

自己点検評価調査

研No.29

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：木製遺物の出土、あるいは建造物や木彫像の解体修理等、各地方文化財担当部署の要請に迅速に対応することができた。 独創性：デバイスを更新したマイクロフォーカスX線CT装置を用いた遺跡堆積物の三次元構造把握などは、地球科学など他分野でもあまり行われていない独創性の高いものである。 発展性：標準年輪曲線の地域的な拡充を行うことにより、暦年代測定と同時に年輪年代学的な手法を用いた木材の産地推定を可能にすべく、データを蓄積している。 効率性：デジタル画像による調査手法の活用により、従来に比較して、より多くの点数が効率よく調査できるようになった。 継続性：標準年輪曲線の拡充を行うため、全国各地の年輪データを収集しているが、本年度は特に中国地方におけるデータを充実させることができた。 正確性：年輪年代測定で得られる1年単位の年代は、他の多くの自然科学的年代測定の中でも際立って精度が高く、正確性の高いものである。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	論文等数	発表等数			
評定	B	A	A			
判定理由 調査件数：考古・建築・美術など、三つ以上の幅広い分野にわたる文化財を調査した。 論文等数：目標の2件を上回った。 発表等数：目標の2件を上回った。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	標準年輪曲線の地域的拡充、マイクロフォーカスX線CT装置の多角的応用、目標を上回る論文等数など、良好な成果があがりつつあるため、Bと判定した。次年度はこれらの成果を引き継ぎつつ、さらに論文等、及び発表等で公表する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査・研究事業を順調に遂行できており、所期の目標を達成できていると判断して、Bと判定した。中期計画の当初に想定されていた状況に加え、標準年輪曲線の地域的拡充、マイクロフォーカスX線CT装置の多角的応用など、より発展的な研究成果が得られてきているため、今中期計画期間の最終年度である次年度は、これらを生かした応用をこれまで以上に進め、成果を発表する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	動植物遺存体による環境考古学的研究 (2) - ④		
【事業概要】			
<p>動植物遺存体による環境考古学的研究を継続的に実施する。また、各種計測機器、マイクロスコープを活用して出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。さらに、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行い、東アジア、環太平洋世界の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。</p>			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
【スタッフ】			
<p>山崎 健(環境考古学研究室研究員)、松井 章(元埋蔵文化財センター長・客員研究員)、丸山真史(京都市埋蔵文化財研究所・客員研究員)、菊地大樹(元埋蔵文化財センター任期付研究員・客員研究員)、上中央子(前東北大学植物園教育研究支援者・客員研究員)</p>			
【主な成果】			
<p>震災復興事業に伴う整理作業や報告書作成に対する支援を行うとともに、幅広い地域や時代の動植物遺存体の分析を進め、その研究成果を学会で発表した。また、一般向けの講演のほか、環境考古学に関わる展示にも協力するなどの社会貢献を行った。ほかに、研究の基礎となる標本を継続的に収集・作製した。</p>			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 神谷地遺跡(秋田県)、南鴻沼遺跡(埼玉県)、丸山B遺跡(東京都)、木曾田遺跡(三重県)などの遺跡から出土した動物遺存体を分析して、発掘調査報告書を執筆した。 ・ 東日本大震災の復興事業に伴う調査を支援し、磯草貝塚(宮城県)では出土した動物遺存体の整理作業を行った。 ・ 平城京跡右京一条二坊四坪や藤原宮跡大極殿院で、古環境復原の調査を行った。 ・ 現生標本の収集と公開では、東北地方の貝殻標本などを収集し、標本見学に対応した。 ・ 研究成果の発信として、日本考古学協会、日本学術会議、日本文化財科学会、日本動物考古学会、日本哺乳類学会などの学会やシンポジウムで研究発表を行った。 ・ 研究成果の社会還元や普及事業として、平城宮跡資料館、福井県美浜町、奈良市中学生職場体験などで、一般向けの展示や講演を行った。 			
			
<p>平城京跡右京一条二坊四坪での土壌サンプリング</p>			
【実績値】			
論文等数：10件 (①・②)			
発表件数：9件 (③・④)			
【備考】			
論文			
①山崎健「藤原宮造営の運河から出土した小児骨」『奈良文化財研究所 2014』、26.6			
②山崎健「近現代の貝釦」『季刊考古学』128、26.8 ほか8件			
発表			
③山崎健「小竹貝塚の動物遺存体」日本考古学協会第80回総会、26.5			
④山崎健「自然史標本と文化財」日本学術会議シンポジウム、26.9 ほか7件			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4241

自己点検評価調査

研No.30

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評価	A	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：地方公共団体からの要請を受け、発掘調査や整理作業、報告書作成において環境考古学に関する協力や助言を行い、動物遺存体の分析も数多く担当した。とくに、緊急性の高い震災復興事業に伴う整理作業や報告書作成の支援作業に従事したことからAとした。 独創性：非接触三次元レーザースキャナーによる現生骨格標本のデジタルアーカイブ化を実施した。 発展性：幅広い時代や地域の動植物遺存体の調査研究を進めて、動植物利用の歴史を明らかにした。 効率性：一定の精度を確保しながら試料を効率的に採取する方法等を工夫することで、緊急性を要する復興支援に対応しながら、全国からの調査研究の要請にもよく対応した。 継続性：研究の基礎となる現生標本を、継続的に収集・作製・管理した。 正確性：地方公共団体からの多数の要請にもかかわらず、いずれの調査においても精度を確保して対応した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
評価	A	A				
判定理由 論文等数：当初の目標2件を大きく上回る論文等を、査読誌を含む刊行物上で発表した。 発表件数：当初の目標2件を大きく上回る発表を、学会や研究会において行った。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	緊急性を要する復興支援に従事しながら他の地方公共団体からの要請にも応えつつ、幅広い地域や時代の動物遺存体の調査研究を進めるとともに、研究の基礎となる標本の収集を継続的に進める一方で、発表等数が当初の目標を大きく上回ったため、Bと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度も多くの学会や研究会などで講演や研究発表を行い、得られた成果を広く紹介してきた。また、地方公共団体等からの調査要請に応えつつ一般向けの展示も実施するなど、公開・普及にも対応してきた。今中期計画期間の最終年度である次年度も、復興事業に伴う調査は続くため継続的に支援するとともに、地方公共団体等の実施する、発掘調査や出土動植物遺存体の整理において活用できるマニュアルを配布する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究((3)-①)		
【事業概要】			
博物館、美術館、図書館などの屋内環境におけるカビの予防、対策のみならず、寺社等の歴史的建造物や古墳環境などの屋外に近い、環境管理が難しい場所での制御方法についても検討を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	生物科学研究室長 木川りか
【スタッフ】			
佐藤嘉則（研究員）、佐野千絵（保存科学研究室長）、犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、小野寺裕子（研究補佐員）、岡田健（センター長）、藤井義久（京都大学教授・客員研究員）、小峰幸夫（文化財虫菌害研究所・客員研究員）、間瀬創（三重県立博物館学芸員・客員研究員）			
【主な成果】			
<ol style="list-style-type: none"> (1) 環境制御が難しい古墳環境において浮遊菌、付着菌、浮遊粒子数の調査を継続的に実施し、除菌清掃のための管理基準を策定した。 (2) 空調がない寺社などの現場で、文化財保存環境の浮遊菌、付着菌、文化財害虫棲息状況を調査し、対策に向けた基礎資料とした。 (3) 歴史的木造建造物の生物劣化要因として、木材成分を分解する木材害虫あるいはその腸管微生物に由来する酵素について調査した。 (4) 処理中にはカビの発生を抑制し殺虫処理が行える低酸素濃度処理について、常識的な温度条件で殺虫処理ができる最短期間を検討した。 (5) カナダ保存研究所から研究者を招聘し、研究交流を実施した。 			
【年度実績概要】			
<ol style="list-style-type: none"> (1) 古墳環境においてこれまで集積してきた観察室の浮遊菌、付着菌の計測値をもとに、除菌清掃を実施する必要がある浮遊菌数の基準値の試案を設定することができた。 (2) カビの発生原因や状況が分析できた現場においては、現地の状況に適合した新たな湿度管理方法について具体的な方策を検討した。 (3) 歴史的木造建造物の生物劣化要因として、昆虫、もしくはそれらに共生する微生物由来の酵素活性について詳細な検討を行い、その研究成果を学会及び研究紀要などに発表した。 (4) 処理中のカビの発生を抑制しつつ殺虫処理が行える低酸素濃度処理については、温度が低くなると処理に要する期間が長くなることがわかっていたが、常識的な温度条件（25℃、27.5℃など）で完全に殺虫処理ができる最短期間を実験によって検討した。またその結果を研究紀要に発表した。 (5) 海外から研究者を招聘し、温湿度が変動する環境におけるカビ発生条件について議論を行った。 			
			
古墳環境における浮遊菌、付着菌の調査			
【実績値】			
論文数 3件 (①、②、③)			
研究発表件数 1件 (④)			
【備考】			
論文			
① 佐藤嘉則、犬塚将英、森井順之、矢島國雄、木川りか：虎塚古墳公開保存施設の管理方法変更による微生物汚染状況の推移、「保存科学」54、27年3月			
② 小野寺裕子、小峰幸夫、木川りか：低酸素濃度殺虫法—25℃、27.5℃、30℃における処理期間の検討—、「保存科学」54、27年3月			
③ 木川りか、雪真弘、佐藤嘉則、遠藤力也、小峰幸夫、原田正彦、大熊盛也：歴史的木造建造物を加害するオオナガシバンムシ幼虫のセルラーゼ活性について、「保存科学」54、27年3月			
発表			
④ 木川りか、雪真弘、佐藤嘉則、遠藤力也、小峰幸夫、原田正彦、大熊盛也：歴史的木造建造物を加害するオオナガシバンムシ幼虫のセルラーゼ活性について、文化財保存修復学会第36回大会 26年6月7日、8日			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4311

自己点検評価調査

研No.31

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	A	B	B	B
判定理由 <p>適時性：歴史的建造物や古墳環境などの環境管理が難しい場所における生物被害の抑制策は喫緊の課題であるが、本年に調査結果を対策に結び付ける基準について具体的成果が得られた。また調査結果の公開についても速やかに実行できた。</p> <p>独創性：歴史的木造建造物における生物劣化のメカニズムについて、文化財を加害するオオナガシバンムシの幼虫を用いた実験により、昆虫あるいはその腸管微生物が産生する酵素が木材のセルロース成分の分解に大きな役割を担っている可能性があることを示した。このことは、非常にオリジナリティの高い新規性のある研究成果といえる。</p> <p>発展性：具体的な古墳環境において、環境の微生物モニタリング結果（浮遊菌数）の値から具体的な対策を実施する必要がある指標値を現場で設定できたことは、モニタリングと対策を結びつける点で、今後多くの現場で応用できる可能性がある。また多くの美術館、博物館等ですでに実施されている低酸素濃度殺虫法について、まだ決定的なデータが欠けていた中温度（25℃、27.5℃）における殺虫に必要な最短期間を実験で検討できた。これは、今後多くの文化財施設に有用な情報を提供すると期待される。</p> <p>効率性：少ないスタッフの人数のなかで、各人の得意分野を反映させて業務を効率的に分担し、できる限り仕事の効率が上がるように努めた結果、少人数でも十分な成果をあげることができた。</p> <p>継続性：調査をすることになった現場では、できる限り継続的、定期的、基礎的なモニタリングデータを取り、全体の傾向を把握したうえで個々の問題点の原因を究明するように努めた。その結果、個々の現場の調査結果であっても、まとまった現象として状況が解明されることによって、他の現場にも応用ができる知見が得られることとなった。</p> <p>正確性：実験で得られる値については、機器は正確に校正したものをを用いている。また複数回の測定を実施するなど、データの正確性については非常に気をつけてデータを出すように努めている。その結果、非常に信頼性の高いデータを取得できていると考えている。</p>						

2. 定量的評価

観点	論文数	研究発表件数				
評定	B	B				
判定理由 <p>論文数：検討した結果について、目標数の論文を出すことができた。</p> <p>研究発表件数：重要なテーマについて、検討結果を速やかに公表することができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	設定していた課題について、重要な内容について十分な成果をあげることができた。また、主要なテーマについて速やかに検討結果を発表することができた。次年度は、これまでに積み上げてきた個々の検討結果を総合させる作業をしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画していた課題について、十分な成果が認められた。 最終年度へ向けてこれまで得られたデータを総合的にとりまとめていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究(3)－②		
【事業概要】	<p>異常な高温・低温など最近の異常気象は文化財を展示収蔵する施設内の環境にも影響を与え、様々な問題を生じている。環境データや材料の水分特性など基本的なデータを用いた環境シミュレーションを行い、文化財の保管環境を考慮した博物館の省エネ化に関する研究を行う。また、展示ケース等から放散する汚染ガス対策の研究を行い、文化財収蔵空間で使用可能な材料を選択する試験法の試案をまとめる。総合的に文化財の保存環境の向上に資する。</p>		
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存科学研究室長 佐野千絵
【スタッフ】	<p>犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、木川りか（生物科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、呂俊民（客員研究員）、北原博幸（トータルシステム研究所代表・客員研究員）、間渕創（三重県総合博物館学芸員・客員研究員）、古田嶋智子（東京藝術大学助手・客員研究員）、石井恭子（研究補佐員）</p>		
【主な成果】	<p>(1) 1970年代に建てられた美術館の展示ケース内の温湿度分布と壁面温度の実測と解析を行った。 (2) テスト用実大展示ケースを用いたガス濃度実測結果とシミュレーションとの整合性の検討を行った。 (3) 研究成果を速やかに学会等で発表し、研究会を開催し公開した。 (4) これらの結果を、国指定文化財公開のための環境調査や館内環境改善のための助言に活用した。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 1970年代に建てられた美術館の展示ケース内の温湿度分布と壁面温度の実測と解析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 冬季に外壁に近い部分で湿度が高くなり、カビの発生が懸念される施設の収蔵庫において、その原因の究明及び対策の検討を行うために、収蔵庫内の温湿度に加えて、6月から壁面の温度の測定を行った。 ・ 屋外からの影響により、壁面の温度が低くなっていたことが実測から確認することができた。このような壁面の温度の低下が湿度の上昇を招いていたので、外壁の断熱性を上げることが対処法のひとつであると考えられる。 ・ 全国に類似した問題を抱えている博物館等における対策を検討する際に反映することができた。 <p>(2) テスト用実大展示ケースを用いたガス濃度実測結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ガス発生源がケース内にある場合には任意の時間のケース内濃度が予測可能であることがわかった。 ・ 計測のためにガラス面等に多数の測定孔を持つテスト用実大展示ケース（行燈型）を実験室内に設置し、床面にガス放散が継続している合板を据えてケース内の酢酸濃度を定期的に実測した。この結果、時間の経過に伴い酢酸濃度の上昇幅は小さくなることがわかった。またケース容積が小さいほど試料サンプリングの影響が大きくなり、補正が必要になることがわかった。 ・ これら補正を加えて材料試験の結果との整合性を比較し、材料試験のシミュレーション精度を高めることができた。 <p>(3) 研究成果の公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 文化財保存修復学会、室内環境学会、Indoor Air Quality, International Institution for Conservation of Artistic and Historic Works 香港大会等、国内外の関連学会の年次大会において研究成果を発表した。また得られた成果を、当研究所紀要『保存科学』に速やかに公開した。 ・ 「文化財の保存環境の制御と予測」の研究会を開催し、文化財の展示施設・収蔵施設における空調設備を用いた温湿度制御の事例、展示ケース内における温湿度や空気質を調査した事例、コンピュータシミュレーションを用いた温湿度環境の予測及び実測値との比較等、文化財の保存環境について検討した(27年2月9日、発表者：6名、外部からの参加者数：29名)。 <p>本研究で得られた成果を速やかに国指定文化財公開のための環境調査や環境改善のための助言に生かした。</p>		
【実績値】	<p>学会発表 3件(①、②、③)ほか1件、論文発表 2件(④、⑤)、研究会 1回(⑥)</p>		
【備考】	<p>① Tomoko Kotajima, Toshitami Ro and Chie Sano “Estimation of acetic acid and ammonia gases concentration in museum display cases using emission rate of construction materials” 11th International Conference - Indoor Air Quality in Heritage and Historic Environments, 26年4月13-16日、プラハ(チェコ)</p> <p>② 間渕創、犬塚将英：気流解析と実測によるLED照明を用いた展示ケース内の温湿度分布の調査、文化財保存修復学会、26年6月8日、東京</p> <p>③ 古田嶋智子、呂俊民、林良典、須賀政晴、佐野千絵：気密性を有する展示ケースのガス濃度推移、室内環境学会、26年12月5日、6日、東京</p> <p>④ Masahide Inuzuka “Modelling temperature and humidity in storage spaces used for cultural property in Japan” Studies in Conservation vol.59 supplement 1, pp52-54 (2014)、International Institution for Conservation of Historic and Artistic Works, 26年9月</p> <p>⑤ 古田嶋智子、呂俊民、林良典、須賀政晴、佐野千絵：試験用実大展示ケースを用いたケース内ガス濃度の解析、『保存科学』、27年3月</p> <p>⑥ 研究会 「温湿度環境の予測と制御」、27年2月9日、東京文化財研究所(参加者数 29名)</p>		



ケース内濃度の連続測定

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4321

自己点検評価調査

研No.32

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：1970年代に建てられた美術館等の改築・改修にあたり、どのような問題が保存上起こるのか、いかに確実に解決するか当所の研究成果として求められることが多い。また、文化財を保管する展示ケース内の環境は気密性が高いほど外から検知しにくく、安全に長期に保存できる環境か予測できる方法の確立が求められている。得られた成果は速やかに公開されている。当研究成果は必要性、公共性、緊急性が高く、国際的にも成果が期待されている。 独創性：改修前に問題点を明らかにして最小費用で最大効果を得る手法を選択しようとする当研究の視点は、着想が新しく公共団体から研究の進展が期待されている。また展示ケース内の空気環境について実験的に連続してデータを得た例はなく、非常に新規性の高い研究を実施できた。 発展性：得られた成果は、改築・改修、設備更新等、文化財を守る建物や設備に幅広く応用可能で、成果が速やかに公開されていることから国内全体の保存の状況を改善する研究成果である。 効率性：研究協力について公示して応募してきた展示ケース製作会社と共同し、原材料の入手時期や加工時期、資材の段階の保管状況が既知の原材料で作った実験用展示ケースを用いて研究を実施した点で、時間的投資、人的投資、設備的投資いずれも効率が良く研究を実施できた。 継続性：研究協力に関する協定は本研究期間をカバーして締結しており、継続性を担保した研究スケジュールを確保できた。展示ケース製作会社と共同で研究を進めることで、多量の原材料情報を集中的に得られ、質・量ともに優れている。 正確性：校正された機器、センサー等を用いて測定を行った。展示ケース内の濃度推移についてはサンプリングによる影響も補正しており、計測値の正確性は高い。						

2. 定量的評価

観点	学会発表	論文発表	研究会			
評定	B	B	B			
判定理由 学会発表：前年度までの研究成果及び本年度の研究成果を、適した学会でいずれのテーマも1本以上速やかに発表しており、十分な成果公開がなされている。 論文発表：本年度の研究成果を速やかに公開しており、研究が効率的に実施されている。 研究会：年度当初より十分に講演者と内容を検討協議して実施した。専門家と質の高い研究交流が達成できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館・美術館や文化財を保管する展示ケース等の保存上の問題点を、根拠となる測定データを実測から得るとともに、コンピュータシミュレーションも活用しつつ、改修した場合の保存環境の改善方法の提案や展示ケース内の濃度予測を行った。文化財の保存現場からの要求の高い内容を、正確に、かつ効率良く実施できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画の第4年度として、温熱シミュレーション、展示ケース内汚染ガス濃度推移シミュレーションとともに、予測精度を上げることができ、美術館・博物館の環境改善に役立てることができた。研究成果をすみやかに、国内外の学会や雑誌で公開し、当所の技術力を国内外にアピールすることに努めた。充実した基礎研究をまとめることができた。 中期計画最終年度である次年度は、施設改修への温熱シミュレーションの応用や展示ケース内汚染ガス対策など応用研究を実施するとともに、これまでの成果をまとめ、「空気清浄化マニュアル」(仮)を含むプロジェクト報告書を刊行し、研究会にて成果普及を図る予定である。

業務実績書

研No.33

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究(③-③-ア)		
【事業概要】			
<p>小型可搬型機器によるその場分析、及び非破壊非接触技術による診断・解析手法の確立と実資料への応用を行う。絵画や彩色文化財に使われている顔料・染料の同定や褪色の評価、あるいは金属製文化財の材質調査や腐食生成物の分析などに関する調査手法の確立を行い、調査結果の蓄積と成果公開を行う。</p>			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	分析科学研究室長 早川泰弘
【スタッフ】			
<p>岡田健(センター長)、佐野千絵(保存科学研究室長)、木川りか(生物科学研究室長)、吉田直人(主任研究員)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、三浦定俊(文化財虫菌害研究所・客員研究員)、城野誠治(企画情報部専門職員)</p>			
【主な成果】			
<p>(1) 持ち運びが可能な小型機器によるその場分析の適用範囲拡大についての研究を進めた。 (2) 同時に、研究室での精密機器による分析の高度化についての研究を推進した。特に、本年度は鎌倉～江戸期絵画の彩色材料調査を積極的に進めるとともに、工芸品・金属製品等の材料・構造調査を行った。 (3) 科学的調査データの蓄積と解析を目的に、これまでに実施した絵画や金属製品等に関するデータ解析を進め、論文投稿・学会発表を行うとともに、初期洋風画に関する調査報告書2冊を刊行した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>5年計画の第4年度として、以下に示す成果を得た。また、これまでの調査研究成果に関する報告書を刊行した。</p> <p>(1) 小型可搬型機器によるその場分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハンディ型蛍光X線分析装置により、国宝平等院鳳凰堂板扉絵(平等院)、春日権現験記絵巻(宮内庁三の丸尚蔵館)、伊能図(徳島大学)等の彩色材料調査を実施し、データの蓄積・解析を行った。 ・小型可搬型の可視反射スペクトル分析装置により、江戸期の絵図や日本絵画に使われている有機染料の分析・解析を進めた。 ・可搬型のX線透過撮影装置とイメージングプレートを用い、仏像や金工品等の内部構造について現地での撮影を行った。 <p>(2) 分析の高度化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蛍光X線分析による分析精度の向上を目的に、定量法に関する条件検討を行うとともに、実資料への適用を行い、金銅仏等の金属製品に関する高精度データ解析を行った。 ・有機質材料の高精度分析を目的に、材料の蛍光特性変化に着目した非破壊分析の可能性を検討した。いくつかの有機質材料について、その蛍光寿命や蛍光波長が材料の状態や特性に依存する結果を見出すことができた。 ・前年度導入した高エネルギーX線透過撮影用機器の調整と試験を行った。これらの機器を用いて、仏像、漆工芸品、絵画等の構造調査を行った。 <p>(3) 調査研究成果に関する報告書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでに実施した絵画や金属製品等の調査結果に対し、論文2件、学会発表2件の公表を行った。また、これまでに光学調査を実施した重要文化財泰西王侯騎馬図屏風(サントリイ美術館、神戸市立博物館所蔵)、及び重要文化財洋人奏楽図屏風(永青文庫所蔵)に関する光学調査報告書を刊行した。 			
【実績値】			
論文等	2件	(①、②)	
学会発表等	2件	(③、④)	
報告書等	2件	(⑤、⑥)	
【備考】			
論文等			
① 早川泰弘：平等院鳳凰堂の金属部材の材料調査、鳳翔学叢 11、27年3月			
② 吉田直人：膠の主成分ゼラチンの蛍光特性変化について -濃度依存性と硫酸アルミニウムカリウムの影響-、保存科学 54、27年3月			
発表			
③ 早川泰弘 城野誠治、神居文彰：平等院の国宝鳳凰・梵鐘・装飾金物の材料調査、日本文化財科学会第31回大会、26年7月5日、6日			
④ 佐々木良子、吉田直人、佐々木健：蛍光寿命測定 of 文化財材料への応用に関する基礎研究1、日本文化財科学会第31回大会、26年7月5日、6日			
報告書			
⑤ 「泰西王侯騎馬図屏風 光学調査報告書」、27年3月			
⑥ 「洋人奏楽図屏風 光学調査報告書」、27年3月			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.33

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化財資料の科学調査の適用範囲拡大と高度化を目的としたタイムリーな研究である。 独創性：調査機器に関する基礎研究から実資料調査に至る応用研究まで、広範囲な研究を行っている。 発展性：美術史学・金属学等との連携が行えるなど発展性は大きい。 効率性：運営費交付金以外に他機関からの調査派遣依頼などにに基づき研究を推進している。 継続性：種々の作品を系統的に調査することで、単一作品の調査だけでは見出せない情報を顕在化できる。 正確性：複数の調査手法を取り入れることで科学的客観性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	論文等	学会発表等	報告書等			
評定	B	B	B			
判定理由 論文等：研究成果が2件掲載され（保存科学誌、平等院紀要）、目標値を達成した。 学会発表等：研究発表を2件行い（日本文化財科学会）、目標値を達成した。 報告書等：計画通り、研究調査報告書（非売品）を2冊刊行した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究の量・質ともに所期の目標を達成した。基礎的研究から応用的研究に至るまでの幅広い研究を少数の人員で的確に進めている。作品を所蔵する博物館・美術館・社寺等からの信頼を増大すべく、共同調査の実施や、調査結果の解析・公開を積極的に行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画の第4年度として、科学調査データの一層の蓄積を進めるとともに、研究成果（論文投稿・学会発表及び調査報告書の刊行）の公開を積極的に推進した。小型可搬型機器によるその場分析と、研究室内での精密機器による高精度分析の両者を高いレベルで実践している機関は他になく、東文研の技術力・信頼性をアピールすることに努めた。調査データや画像等の蓄積も着実に進んでおり、これまでに膨大な調査結果が収蔵されている。中期計画最終年度となる次年度は、この膨大なデータの保管・維持・活用方法についてシステム化・予算化を進めるとともに、中期計画5か年間の成果報告書を刊行し、成果公開に努める。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等 ((3)-③-イ)		
【事業概要】			
ミリ波イメージング及びテラヘルツ分光イメージングにより文化財を対象とした測定に必要となるデータを収集するための基礎実験を行う。さらに、文化財に用いられている材料のテラヘルツ分光スペクトルの収集を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】			
脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)			
【主な成果】			
サブミリ波イメージング(テラヘルツ分光イメージング)により、漆器の塗装構造に関する非破壊調査を行った。新規に導入予定のメーカープロトタイプの特ラヘルツイメージング装置の測定試験を実施し、文化財への適用性を検討した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ サブミリ波イメージングによる調査に関しては、Picometrix社製 T-Ray4000を用いて、漆器の塗装構造の調査を行った。塗装工程のわかっている塗装手板に対するテラヘルツイメージング実験により、層構造として精度よく塗装手順を可視化することができることが明らかとなった。また、宋代の漆器等についてもその塗装構造を非破壊で可視化することができた。 ・ キトラ古墳壁画に対して実施したテラヘルツイメージングによる調査成果の一端について、東京国立博物館で行われた特別展「キトラ古墳壁画」の図録で紹介するとともに、同展記念講演会(1)「キトラ古墳壁画保護の歩み」において講演を行った。 ・ 文化財に関するテラヘルツ時間領域分光イメージング (THz-TDI) の調査事例について、Terahertz Advanced Research Techniques for non-invasive analysis in art conservation (THz-ARTE)のInternational Workshop (Rome)において報告を行った。 			
<p style="text-align: center;">漆器のテラヘルツイメージング</p> <p>右図は、左写真の赤線部分に対して、テラヘルツ時間領域分光イメージング (THz-TDI) により得られた断面像である。木地部の乱れ、塗装構造などを可視化することができた。</p>			
【実績値】			
発表件数：2件 (①～②)			
論文件数：3件 (③～⑤)			
【備考】			
発表			
①高妻洋成「キトラ古墳壁画の材料調査」、特別展「キトラ古墳壁画」記念講演会(1)「キトラ古墳壁画保護の歩み」26.4.26			
②C. L. Koch-Dandolo, K. Fukunaga, Y. Kohzuma, K. Matsuda, K. Kiriyama, T. Filtenborg, J. Skou-Hansen, A. Cosentino, P. Uhd Jepsen, "Contribution of Reflection Terahertz Time Domain-Imaging (THz-TDI) to Imaging Analysis of Artworks", Terahertz Advanced Research Techniques for non-invasive analysis in art conservation, International Workshop, Rome, 2014.12.2-3			
論文			
③福永香・高妻洋成「壁画の下の漆喰が見たい!」『特別展「キトラ古墳壁画」図録』26.4			
④福永香・高妻洋成・建石徹「科学の目で観る古代壁画」『0 PLUS E』、26.7			
⑤C. L. Koch-Dandolo, K. Fukunaga, Y. Kohzuma, K. Matsuda, K. Kiriyama, T. Filtenborg, J. Skou-Hansen, A. Cosentino, P. Uhd Jepsen "Contribution of Reflection Terahertz Time Domain-Imaging (THz-TDI) to Imaging Analysis of Artworks", Terahertz Advanced Research Techniques for non-invasive analysis in art conservation, International Workshop, Rome, 2014.12			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4332

自己点検評価調査

研No.34

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：漆器等の多層の塗装構造を有する文化財に対する非破壊調査法として開発されている。 独創性：漆器の複雑な塗装構造の調査に適用した。 発展性：新規導入予定のテラヘルツイメージング装置を用いることで、より安全で精度の高い計測とデータ解析が可能となる。 効率性：漆の標準的な塗装工程を再現した手板資料を標準試料としてデータを蓄積したことで、漆器の層構造の解析が効率よくできた。 継続性：テラヘルツイメージング技術を文化財の表層付近の断面構造の可視化技術として広く応用できる可能性を示した。 正確性：漆器の複雑な塗装構造を可視化することができた。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文件数				
評定	B	A				
判定理由 発表件数：目標値である2件を達成した。 論文件数：目標値である2件を上回った。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	漆器の複雑な塗装構造をサブミリ波イメージング技術により可視化することができるようになり、同技術のさらなる応用範囲の拡大を図ることができた。 テラヘルツ分光スペクトルの収集は金属さびの標準スペクトルの収集を行ったが、前年度に引き続き、次年度は染料についてさらに標準スペクトルを収集する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	概ね、前年度策定した計画を予定通りに実施できたことから、順調と判定した。一部、予定を変更して染料に代わりに、金属さびのテラヘルツ分光スペクトルの標準スペクトルを収集したが、有効となる染料資料の収集も併行して進めた。今中期計画期間の最終年度である次年度は、染料の標準スペクトルをさらに収集する予定である。 また、新規導入予定のメーカープロトタイプของテラヘルツ分光イメージング装置を文化財に適用できるよう、試験測定と応用実験を次年度に進める予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究(3)－④		
【事業概要】			
屋外に位置する木造建造物及び石造文化財を対象に、文化財劣化要因となる周辺環境の影響評価手法や劣化診断手法を確立する。また、木造建造物の修復材料について実験室及び現地曝露試験による評価を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】			
早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、岡田健（センター長）			
【主な成果】			
(1) 石造文化財では、出島の旧石倉（長崎市）において砂岩の劣化機構の解明と周辺環境の影響に関する調査、幸橋（平戸市）において既に修復された物件の保存状態に関する追跡調査などを実施した。 (2) 木造建造物では加賀市内神社（中嶋神社、稲荷神社）において材質の違いによる覆屋内環境と本体の保存状態の違いについて調査を継続した。 (3) 25年度までに得られた成果について論文及び学会発表を行った。			
【年度実績概要】			
(1) 石造文化財の調査研究			
・砂岩の劣化機構解明と周辺環境影響に関する調査（出島旧石倉）（調査日：26年5月12日、6月16日、17日） 天草砂岩でみられる表層剥離について、旧石倉及び旧出島神学校基礎床面で調査を行い、剥離片表面が剥離後の本体表面と比べて硬質であること、雨がかかりやすく乾燥しやすい部分で劣化が顕著であることが把握できた。 ・既修理事物の保存状態に関する追跡調査（幸橋）（調査日：26年5月13日） 幸橋は昭和58年度の保存修理工事において石材の基質強化にシリコン樹脂が使用されている。シリコン樹脂は水分が多い環境で劣化が著しいが、主に目視による保存状態調査の結果、30年経過した現在でも特に大きな問題が生じていないことが確認できた。			
(2) 木造建造物の調査研究			
・材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査（中嶋神社、稲荷神社）（調査期間：24年10月～現在） ガラス張りの透明な覆屋（稲荷神社）と従来からある木板の雪囲い（中嶋神社）で、覆屋内の温湿度・照度・紫外線強度の調査を継続した。回収に成功した一部の機器から透明覆屋内の紫外線強度が高かったことが確認できた。			
(3) 前年度までに得られた成果の公表等			
花見瀧墓地赤碓塔（琴浦町）のハニカム状風化について調査により得られた成果をまとめ、保存科学に報文として投稿し掲載された。			
			
図1 出島旧石倉の表面劣化状態			
【実績値】			
論文等：3件（①～③）			
発表件数：4件（④～⑦）			
【備考】			
論文等			
① 朽津信明、森井順之、佐藤円香、西山賢一：鳥取県・花見瀧墓地赤碓塔に見られるハニカム状風化、保存科学 54、pp. 1-14、27年3月			
② 朽津信明：日本における横穴墓の保存 『日韓共同研究成果報告会報告書 2014』 pp. 2-7 韓国国立文化財研究所・東京文化財研究所、26年5月			
③ 森井順之：屋外文化財の保存と公開のための覆屋について、第44回熱シンポジウム『役に立つ湿気研究』、日本建築学会、pp. 91-96、26年10月			
発表			
④ 朽津信明、伊藤広宣、山路しのぶ、神田高士：臼杵市・下藤キリシタン墓地における遺構の凍結防止策(2)、文化財保存修復学会第36回大会、明治大学、26年6月7日			
⑤ 小泉圭吾、森井順之、神田高士、伊藤広宣：冬場の臼杵石仏における覆屋の有効性評価のためのリアルタイム環境観測システム、日本文化財科学会第31回大会、奈良教育大学、26年7月5日、6日			
⑥ 朽津信明、森井順之、佐藤円香、西山賢一：長崎市出島で見られる砂岩石材の風化現象について、日本応用地質学会平成26年度研究発表会、九州大学、26年10月29日、30日			
⑦ 森井順之：臼杵磨崖仏における保存環境調査と次期保存修理計画、保存科学研究集会 2014「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」、奈良文化財研究所、27年1月23日			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4341

自己点検評価調査

研No.35

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：既に樹脂等で強化された石造文化財は、次期修理において何をすべきかについて所有者・管理者の関心が高く、劣化要因及び保存環境に関する調査研究は常に求められる。 独創性：砂岩の剥離現象に対して周辺環境、特に水分移動に着目して劣化機構を解明しようとしているところに独創性が認められる。 発展性：材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査は、近年オリジナルを保存することが多い建造物の内外に描かれた壁画について、より良い保存環境条件の提案に役立つなどの応用性が期待できる。 継続性：屋外文化財の劣化状態と周辺環境の相関については、問題点の把握がより正確に行えるよう1年以上の調査期間を確保している。 正確性：覆屋内の環境については温度・湿度・照度・紫外線強度データロガーを用いた計測、剥離片の状態についてはエコーチップ、モース硬度、色差など規格化された手法により正確性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
評定	B	B				
判定理由 論文数：前年度までの研究成果を中心に論文にまとめられ、十分な成果公表ができたと言える。 発表件数：各種学会発表において屋外文化財の風化現象の解明やその対策について研究結果を発表し、当初の目標を十分に達成できたと言える。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	次期修理において何をすべきかについて所有者・管理者の関心が高い屋外文化財について、劣化要因及び保存環境に関する調査研究成果を出すことができた。特に出島旧石倉の表面劣化機構の解明については高い独創性を有するとともに、材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査については、近年オリジナルを保存することが多い建造物壁画についてより良い保存環境条件の提案に役立つなど、応用性が期待できる研究を進めることができた。また、学会発表や論文等により、今まで得られた成果の公表も十分に行えた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年計画の4年目として、まとめにつながる多くの研究成果を得ることができた。石造文化財については、出島旧石倉の劣化機構の解明を行うことができ、類似した劣化現象が見られる他の文化財に研究を発展させていくことができた。材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査では、今後の保存対策に役立つために十分なデータを得ることができた。中期計画最終年度となる次年度も、より正確性を高めるために計測を継続していく予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する研究(3)－④		
【事業概要】			
<p>自然災害による文化財被害は甚大であり、復旧には多大な労力と時間を要する。我が国では自然災害の発生予測が難しいうえ、発生後すぐの救援はほぼ不可能である。そのため、「減災」の方向性を探ることが求められている。本研究課題では「地震・津波」を対象に下記の調査研究を進め、文化財の減災に必要な研究成果を提供する。</p>			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】			
森井順之（主任研究員）、岡田健（センター長）			
【主な成果】			
<p>(1) 東日本大震災被災文化財の保全に関する研究として、石巻文化センター被災文化財仮設収蔵庫として使用している旧石巻市立湊第二小学校の環境調査を継続した。</p> <p>(2) 文化財の地震対策に関する研究として、石灯笼の地震対策に関する評価を実寸大のものを使って行った。</p> <p>(3) 25年度に実施した石灯笼縮小模型の振動台実験結果について、国際会議で発表し、成果の公表に努めた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 東日本大震災被災文化財の保全に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧石巻市立湊第二小学校環境調査（調査日：26年9月16日、17日、27年3月12日） <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災で津波被害を受けた石巻文化センター収蔵品の一時保管施設である旧石巻市立湊第二小学校で、温湿度データ回収、文化財害虫調査、空気質調査などを前年に続き石巻市・東北歴史博物館と共同で実施した。石巻文化センターの再建が31年度以降と言われているなか、これらの調査を現地担当者と一緒に行うことで、資料保存に関する技術移転も進めることができた。 (2) 文化財の地震対策に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ・実物大石灯笼の振動台実験（実験日：26年10月30日、31日） <ul style="list-style-type: none"> 昨年度実施した縮小模型による実験ではスケール効果により不明な点が多かったため、つくば市にある独立行政法人防災科学技術研究所の一次元大型振動台を用いて実物大石灯笼の振動実験を実施した。石灯笼は、空積に加えモルタル接合・芯棒・免震ゲルと3種類の地震対策を施したサンプルを用意し、新潟県中越地震の波形を使って揺らしたところ、本来の50%の振幅（震度6弱相当）で全て倒壊した。画像解析や加速度計データにより倒壊プロセスが確認でき、今後の地震対策について有用なデータを得た。 ・地震災害の現場調査（12月1日） <ul style="list-style-type: none"> 11月22日に長野県北部で発生した震度6の地震により倒壊被害があった長野市善光寺境内の石灯笼・石碑の被害状況を調査し、被害発生の機構と安全対策についての検討を行った。 ・25年度研究成果の公表 <ul style="list-style-type: none"> 前年度三重大学で実施した石灯笼縮小模型の振動台実験結果をまとめ、「石造文化財および地盤遺産の保存に関する国際シンポジウム（26年5月20日～23日、韓国・公州大学）」に参加して研究発表を行い、論文が掲載された。 			
			
実物大石灯笼の振動台実験			
【実績値】			
論文等数 1件 (①)、発表件数 1件 (②)			
【備考】			
論文等			
① Masayuki Morii, Nobuaki Kuchitsu, Madoka Sato, Yumiko Okamoto and Toshikazu Hanazato : Fundamental research about vibration of stone lantern (ishi-toro) by earthquake Proceedings of the international conference on conservation of stone and earthen architectural heritage, pp.98-108, ICOMOS ISStone, Kongju National University、26年5月			
発表			
② 森井順之、及川規、芳賀文絵：石巻市仮収蔵施設の保存環境、平成26年度宮城県被災文化財等保全連絡会議研修会、東北歴史博物館、26年11月20日			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4342

自己点検評価調査

研No.36

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：26年11月末の長野県神城断層地震における善光寺石灯籠の倒壊等、石灯籠の地震対策が急務と捉えられているなか、実物大石灯籠を対象とした振動台実験を行い、その挙動について多くの情報を得ることができた。 独創性：石灯籠の地震対策については研究例が無く、本研究成果が今後の地震対策に与える影響は大きい。 発展性：実物大石灯籠の振動台実験において組積のみの試験体から得られたデータは、五輪塔や層塔等多くの石造文化財に応用可能である。 効率性：石巻文化センター被災文化財一時保管場所における環境調査では、現地担当者との情報共有を行うことで、保存管理のために必要な作業について現地での対応を可能とした。 継続性：石巻文化センター再建が31年度以降と言われているなか、被災文化財の保存状態の変化を正確に把握するため、石巻市合意のもとで持続可能な観測体制の維持に努めている。 正確性：実物大石灯籠の振動台実験では高精度の速度計、ハイスピードカメラを用いて、地震時挙動の正確な把握を行った。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
評定	B	B				
判定理由 論文等数：前年度実施した石灯籠縮小模型の振動台実験の成果を中心に論文にまとめられ、十分な成果公表ができたと言える。 発表件数：被災文化財一時保管場所の環境について、被災地である宮城県各市担当者に向けて正確な情報発信を行うことができ、当初の目標を十分に達成したと言える。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東日本大震災にて被災した文化財の保存修復に関する調査研究では、被災地での作業が長期化するなか、一時保管場所における保存管理の在り方について石巻文化センター被災文化財を対象に十分な調査及び情報発信を行うことができた。石灯籠の地震対策に関する調査では、前年度縮小模型ではスケール効果により把握できなかったそれぞれの地震対策について、実物大の石灯籠による実験でシビアに評価することができ、今後の地震対策を考えるうえで十分なデータを得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究では、中期計画策定時に想定していなかった東日本大震災の発生を受け、災害発生時の対応とその結果への検証を経て、具体的な事例をもって将来にわたる防災対策の構築を行うことになった。その中で、被災地復興が長期化するなかで、被災文化財一時保管施設の保存環境について有効な情報提供を行うことができた。また、石灯籠等石造文化財の地震時挙動については、実物大石灯籠を使った実験を行うことでより詳細な情報を得るなど、最終年のまとめに向けて多くの情報を得ることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究((3)－⑤)		
【事業概要】			
我が国ではこれまで和紙、糊、膠、漆、顔料などの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。これら文化財に使用される伝統技術及び材料や保存修理で使用する合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査・分析・評価及び開発を行い、修理現場での応用を図る。以上の内容に即した研究会を開催する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	伝統技術研究室長 北野信彦
【スタッフ】 朽津信明(修復材料研究室長)、早川典子(主任研究員)、吉田直人(主任研究員)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、本多貴之(明治大学講師・客員研究員)、加藤雅人(文化遺産国際協力センター国際情報研究室長)			
【主な成果】 本年度は中期計画の4年目に当たり、劣化が著しい考古資料等の漆文化財や、伝統的な文化財建造物の塗装材料である漆塗装や乾性油塗料等の過去の塗装彩色修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。また、第8回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会を開催するとともに、第2冊目となるこれまでの研究会内容を纏めたブックレット形式の報告書を作成した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・文化財建造物に使用する塗装材料の耐候性向上に向けた手板曝露試験を進めるとともに、Py-GC/MS分析装置を用いた塗装材料の性質(漆塗料・膠材料・乾性油塗料の同定及びブレンド状況等)の調査を行った。このような調査実績を日光東照宮陽明門や巖島神社反橋及び荒胡子神社等の塗装彩色修理の実践的な施工作業に役立てた。 ・研究所が所蔵する表具裂見本の絹布関係資料について、個々の資料の絹の折状態や繊維の拡大顕微鏡画像の取り込みを行い、基礎データを集積した。 ・桃山文化期の当世具足には漆塗料では獲得できないような肌色や緑色塗料が表面塗装されている場合がある。本年度鍋島家所蔵具足の塗料分析(Py-GC/MS分析、X線回折分析、分光分析等)を行ったところ、石黄+植物藍を混和した乾性油系塗料であることがわかり、この甲冑の保存修理や復元に役立てた。 ・「日光東照宮陽明門西壁面唐油蒔絵の調査と修理」という内容で、26年12月18日(木)に東京文化財研究所の地下セミナー室で第8回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会を開催し、計132名の参加を得た。 			
		<p>報告: 1, 日光東照宮陽明門における塗装彩色修理の概要: 浅尾 和年(日光社寺文化財保存会)、2, 唐油蒔絵のX線透撮影による画像調査: 犬塚将英、3, 唐油蒔絵の塗料を構成する成分調査: 本多貴之、4, 唐油蒔絵の顔料・塗膜構造調査: 北野信彦、5, 唐油蒔絵の修理: 中右恵理子(油彩画修理技術者)、6, 唐油蒔絵の調査と修理に関するまとめと今後の課題: 佐藤則武(日光社寺文化財保存会)、7, 参加者全員「総合討論」</p> <p>・第6、7、8回の文化財における伝統技術及び材料に関する研究会の報告内容を、今後行われるであろう文化財建造物の塗装彩色修理の施工に役立てる目的で、コンパクトに纏めたブックレット形式の報告書を作成して刊行した。</p>	
(東照宮陽明門西壁面唐油蒔絵の調査と修理指導後の現況)			
【実績値】			
研究会開催数 1回、報告書数 2冊(①～②)、論文数 2件(③～④)、研究発表件数 2件(⑤～⑥)			
【備考】			
報告書			
①『文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究報告書2014年度』東京文化財研究所、27年3月			
②『文化財建造物における塗装彩色材料の調査・修理・活用』東京文化財研究所、27年3月			
論文			
③北野信彦、本多貴之、佐藤則武、浅尾和年: 日光東照宮唐門および透塀の塗装彩色材料に関する調査、『保存科学』54、27年3月			
④北野信彦: 出土装飾部材の漆塗装に関する調査、『東京都千代田区有楽町一丁目遺跡』、武蔵文化財研究所、27年3月			
研究発表			
⑤北野信彦、犬塚将英、吉田直人、桐原瑛奈、本多貴之、浅尾和年、佐藤則武: 日光東照宮陽明門側面大羽目絵画の彩色に関する調査、第36回文化財保存修復学会、明治大学、26年6月8日			
⑥北野信彦、本多貴之、佐藤則武、浅尾和年: 日光桃山文化期欄間彩色の保存と資料活用に関する基礎的調査、第31回、日本文化財科学会、奈良教育大学、26年7月5日、6日			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4351

自己点検評価調査

研No.37

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
備考						
<p>適時性：本年度は、日光東照宮陽明門、巖島神社反橋等の文化財建造物で実施されている塗装修理や出土漆器等の保存処理施工方法の策定に、本プロジェクトで実施する旧塗装材料・技法の調査や曝露実験などの調査結果を反映させた。また、文化財建造物保存技術協会においても文化財建造物の塗装彩色に関する調査と施工に関する内容が取り上げられ、その基調講演を行った。</p> <p>独創性：過去の塗装材料や彩色材料の調査方法として、Py-GC/MS分析法をさらに応用して日光東照宮陽明門の西壁壁画の彩色修理に油彩画修理の方法を応用することができた。また、桃山文化期の当世具足(鍋島家所蔵資料)の塗装材料に乾性油塗料が使用されていることが確認され、当該分野の研究に寄与することができた。</p> <p>発展性：本プロジェクトでは特に風雨に晒されて劣化が著しい文化財建造物の塗装彩色の修理や、脆弱な漆塗料や有機質材料を伴う複合材料からなる考古資料を研究対象としている。これらの材質・技法に関する分析調査やその結果を考慮した手板試料の劣化促進実験を伴う基礎調査結果の蓄積は、今後国内のみならず海外においても同様の劣化が著しい文化財の保存修復方法の策定処に応用できるものと考えられる。</p> <p>効率性：これまで開発した分析手法は、基本的には現有施設と人員を使用することで比較的多くの分析試料を短期間に結果が出せること、さらにはこの結果を実際の保存修復作業の現場にも生かせることが実証された。</p> <p>継続性：実際の文化財建造物における塗装彩色修理や考古資料の保存処置は、タイトな期間内に比較的安価で効率よく実施することが基本である。本プロジェクトの成果は幾つかの保存修復の現場の作業に効率よく反映させており、今後はこのようなアプローチ法を広く定着させる人材育成プログラム策定を行う予定である。</p> <p>正確性：本プロジェクト研究については、多方面の分野の研究者や技術者が係わっており、絶えず意見交換を行って正確性を高める努力をしている。特に調査結果を実際の国指定文化財である文化財建造物の塗装彩色修理などの施工に反映させる場合には、各種専門委員会に諮問した上で施工に適応されるシステムが構築されているので、客観的な正確性は保つことが可能である。</p>						

2. 定量的評価

観点	研究会開催数	報告書数	論文数	研究発表件数		
評定	B	B	B	B		
判定理由						
<p>研究会開催数：当初計画の目標値を達成することができた。</p> <p>報告書数：当初計画の目標値を達成することができた。</p> <p>論文数：当初計画の目標値を達成することができた。</p> <p>研究発表数：当初計画の目標値を達成することができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財建造物に使用する屋外塗装や彩色材料の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験を行い、実際の塗装修理の現場の施工に役立てた。絹などの表具裂見本のデータベース化、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。さらにこの成果の一部を研究会やブックレット方式の報告書などを通じて公表し、参加者数も満足度も目標値を満了したのでBと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本プロジェクトで実行している手法や調査結果の有用性が修理現場に応用されるなど、当初の計画通り有効性が明らかになってきた。それに伴い重要な知見の蓄積とこれらの一部を報告書と研究会報告の形で公開及び纏めることができた。そのため、計画の実施状況は順調である。中期計画最終年度である次年度は、基礎的知見の蓄積と資料調査結果のデータベース目録化を推進し、最終的なまとめを行う予定である。

業務実績書

研No.38

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財修復材料の適用に関する調査研究(3)－⑤		
<p>【事業概要】文化財修復においては、使用する材料及び手法の適切な適用が修復後の作品の状態を大きく左右する。本プロジェクトでは、文化財の種類を問わず修復に用いられる材料について、修復現場での具体的な使用を念頭に材料の分析及び評価を行い、個々の材料について分野にとらわれず横断的な研究を行うことで、最適な使用方法や使用条件の確立を目指す。</p>			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
<p>【スタッフ】 早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、北野信彦（伝統技術研究室長）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、岡田健（センター長）、本多貴之（明治大学講師・客員研究員）、宇高健太郎（客員研究員）、酒井清文（客員研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、山下好彦（任期付研究員）、大河原典子（鎌倉女子大学講師・客員研究員）</p>			
<p>【主な成果】 (1) 絵画修復材料に関する化学分析、クリーニング方法の検討実験を行った。 (2) 建造物等修理材料の現地曝露試験とその評価を開始した。 (3) 工芸品の調査として、染織品及び漆芸品についての調査・分析をし、評価方法について検討した。</p>			
<p>【年度実績概要】 (1) 絵画修復材料に関する科学分析及びクリーニング方法の検討実験 <ul style="list-style-type: none"> ・ 絵画の修復材料に使用される膠について、その最適な適用条件を検討した。調製条件の異なる膠は、ゼリー強度や表面張力などの物性において差異があり、適切な膠を選択することで、絵画や建造物彩色の剥落止めを安全に行うことが可能になる。本年度は、擬似劣化試料を作製し、そこへの各種膠の適用を検討した。 ・ 日本画の修復に用いられる古糊の使用時に限定的に行われる「増裏打ち」という作業の熟練度と古糊使用との関連について、接着強度と技術者の熟練を中心に解析した。 ・ 日本画で見られる緑青焼けについて、裏打ち紙の分析を行うことで劣化の状態を確認し、報告を行った。 ・ 文化財修復に用いられるフノリについて調製条件による物性の差異を科学的に評価し、IIC 香港大会において発表を行った（26年9月）。 </p> <p>(2) 建造物等修理材料の現地曝露試験とその評価 <ul style="list-style-type: none"> ・ 巖島神社において、大鳥居修理材料について現地曝露試験を行い、耐久性に関する評価を目視観察及び測色により行ってきたが、その結果、良好な経過を示した試料について26年10月に実際の試験施工を行った。 ・ 白杵磨崖仏で現地に設置している石材の修理材料について、経過観察及び評価を行った。（27年1月） </p> <p>(3) 工芸品の評価方法についての検討 <ul style="list-style-type: none"> ・ 染織文化財について、国内の生糸の調査及び韓国での摺箔技法とそこに使用されている材料について現地調査を行った（26年8月、27年1月）。また、染織品に使用されている材料について分光分析を使用して評価方法を検討した。 ・ 漆芸文化財について、塗膜の物理強度の測定方法を検討した。塗膜の強度は従来塗膜全体を剥離して測定する方法のみ使用されていたが、漆は紫外線により表面のみ劣化していく。そのため、表面のみの強度測定方法についてMSE試験の適用を検討した。次年度以降、実用的な使用方法へと発展させる予定である。27年3月に沖縄で使用されている漆芸品の材料調査を行ったほか、国内の採漆現場（26年7月）や精漆工場（26年12月）の現地調査を行った。 </p>			
			
<p>巖島神社における修理試験施工</p>			
<p>【実績値】 論文件数 1件 (①)、発表件数 3件 (②～④)</p>			
<p>【備考】 論文等 ① 岡泰央、早川典子、高井由佳、後藤彰彦：増裏打ち作業における古糊と打刷毛の接着効果について：保存科学 54号、pp.15-26、27年3月 ② Noriko Hayakawa, Keiko Kida, Takuya Ohmura, Noriko Yamamoto, Kyoko Kusunoki and Wataru Kawanobe：Characterization of Funori as a conservation material: Influence of seaweed species and extraction temperature, IIC-HongKong, Hongkong city hall,、26年9月24日 ③ 早川典子：典籍類に使用された「豆糊」に関する赤外分光分析、文化財保存修復学会第36回大会、明治大学、26年6月8日 大河原典子、綿引はるな、早川典子：日本画の修復および制作に用いる膠の基礎的特性に関する報告、文化財保存修復学会第36回大会、明治大学、26年6月8日</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4352

自己点検評価調査

研No.38

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：現在実際に修復されている作品に即し、即時性・緊急性の高いテーマ設定をしており、必要性・公共性が高い研究を行った。また、国際学会においても成果を報告し、かつ国内材料と海外の材料の比較についても現地調査をし、国際性の高い成果を得ている。 独創性：修復材料に関する科学分析を現地調査と常に緊密に関連づけながら遂行しており、従来にはない視点で研究を進めることができています。 発展性：文化財の修理材料を横断的に扱うことで、俯瞰的・網羅的に研究を遂行できており、材料同士の相関のみならず文化財修復全体を視野に入れて発展させていくことが可能になる。 効率性：所内の横断的なメンバーにより研究を分担し、他機関からの調査派遣依頼等に基づき研究を推進しており、効率よく推進することを可能とした。 継続性：文化財修復材料に関する基礎的研究と現場への適用研究との両者を連携づけ、十分な成果を得られている。 正確性：複数の分析手法、多岐にわたる修復材料を網羅し、科学的客観性を確保している。特に、従来は数値化しにくいと言われていた修理技術者の「技術」についても熟練者と非熟練者による作製試料を評価することで、数値化することに成功した。						

2. 定量的評価

観点	論文件数	発表件数				
評定	B	B				
判定理由 論文件数：雑誌『保存科学』に、修理技術者の技術と材料に関する報告を掲載し、目標の件数をクリアした。 発表件数：膠、豆糊、和紙、充填材等について文化財修復学会で報告し、さらに IIC 香港においてフノリに関する発表を行うことにより、目標の件数をクリアした。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財修復に使用されている材料について、広範囲に網羅した研究を行い、それぞれについて科学的な分析評価を行うことで現場での問題点を具体的に解明し、かつ改善方法について提示することができた。実際の修復現場で、これらの成果が具体的に活用され始めており、基礎研究を遂行しながら、具体性、発展性の高い研究を行うことができており、今後は、さらに修復現場における適用性の高い研究へと発展することが可能である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、文化財修復現場での適用を念頭に材料の精査を遂行できている。また、本年度は材料のみならず修復現場で材料に関連した技術や、材料の劣化現象の解明等まで含めて成果を得ており、前年度よりも研究を深めることができています。 中期計画最終年度である次年度は、本年度の成果をもとに、さらに発展させた研究を行う予定である。

業務実績書

研No.39

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究(③)～⑥)		
【事業概要】 近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物等従来の文化財とは、規模、材質、製造方法等に大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型建造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両等の保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長 中山俊介
【スタッフ】 朽津信明(修復技術研究室長)、早川典子(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、小林芳妃(研究補佐員)、小堀信幸(船の科学館・客員研究員)、横山晋太郎(客員研究員)、長島宏行(日本航空協会・客員研究員)、堤一郎(中央大学非常勤講師・客員研究員)			
【主な成果】 (1) 洋紙：明治時代になってから急速に普及した洋紙及び没食子インクで記された文章の保存と修復に関して、各種書類の保存と修復に関して、調査研究を行った。 (2) 屋外展示物：屋外展示されている大型建造物、鉄道車両や航空機等の文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外曝露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査した。 (3) 建造物・構造物：佐渡金銀山遺跡、長崎県端島(軍艦島)、山口県萩市や静岡県伊豆の国市の反射炉等、史跡指定地に建つ建造物や構造物の保存や修復に関する研究を行い、地盤工学会にて発表を行った。 (4) 報告書：前年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 (1) 洋紙の保存と修復： ・明治維新以降急速に普及した洋紙の保存に関して、建築物や列車(御料車など)の室内装飾に使用された裂地などの保存と修復に関して、国内の専門家と共に調査研究を行った。さらに、国内の専門家に加えて海外の博物館や研究所において同様に保存や修復を担当している専門家を招き、保存と修復手法について発表、討論した研究会を26年11月21日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。 ・メキシコ及びカナダの国立公文書館において、洋紙の保存と修復に関する現状の調査を実施するとともに関係者と情報交換を実施した。 (2) 屋外展示物： ・ドイツの産業遺産を往訪し、産業遺産の保存理念や、周囲との関係を考慮した保存手法や修復手法の現地調査を実施した。 ・屋外展示されている鉄道車両や航空機などの、金属を主体とする文化財の防錆対策のために試験片を作成し、日本国内の6ヵ所において曝露実験を実施し、塗装の劣化と屋外環境との相関について調査を実施した。 (3) 建造物・構造物：新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市葦山反射炉、山口県萩市の反射炉や長崎県長崎市端島(軍艦島)、更には足尾銅山跡の各施設等、史跡指定地内の建造物や構造物の保存と修復に関する現地調査を実施し、現状を把握するとともに、具体的な修復手法に関する討論を実施した。特に葦山反射炉における石造物に対する含有水分量の違いによる劣化状況の違いに関して1年間現地で計測した結果を元に地盤工学会にて発表を行った。 (4) 報告書：前年度実施した研究会『近代テキスタイルの保存と修復』をまとめ報告書を製作し配布した。 (5) その他：航空機関連の設計図面あるいは明治後期から大正期、昭和初期にかけて記録された関連資料などの保存の一環としてデジタル化を行うなど貴重な資料を後世に遺すべく現地で状態を調査し保存手法の研究を実施した。			
【実績値】 論文等 2件(①～②)、発表件数 4件(③～⑥)、報告書刊行数 1件(⑦)			
【備考】 論文等 ①森井順之、朽津信明、中山俊介：史跡・葦山反射炉の保存環境について、土木史跡の地盤工学的分析・評価に関するシンポジウム、地盤工学会、pp.167-168、26年10月 ②中山俊介：近代テキスタイルの保存と修復、近代テキスタイルの保存と修復、pp.4-17、27年3月 発表 ③中山俊介：洋紙の保存と修復、洋紙の保存と修復に関する研究会、東京文化財研究所、26年11月21日 ④中山俊介：保存科学による文化遺産の修復-建造物を中心に-、台湾総督府鉄道部の保存修復活動における講演会、国立台湾博物館、26年12月20日 ⑤中山俊介：(基調講演)近代文化遺産の保存と動態保存に関して、第33回シンポジウム「日本の技術史を見る眼」、中部産業遺産研究会、27年2月22日 ⑥森井順之、朽津信明、中山俊介：史跡・葦山反射炉の保存環境について、土木史跡の地盤工学的分析・評価に関するシンポジウム、地盤工学会、26年10月10日 報告書 ⑦ 『近代テキスタイルの保存と修復』、東京文化財研究所、27年3月			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4361

自己点検評価調査

研No.39

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：明治、大正、昭和初期に作成された公文書など、重要文化財指定された物も数多いが、紙が酸性化するなど経年劣化が多く見られる。加えて没食子インクを使って記述された書類のインク焼けも問題となっている現状を踏まえ、保存及び修復手法の研究の必要性が認められる。 独創性：今まであまり問題視されて来なかった洋紙及びそれに使われている没食子インクが原因となって劣化が引き起こされる現象に関して着目し、その保存と修復手法に関する調査研究を実施する事が出来た。 発展性：洋紙の保存と修復は今後ますます対象範囲が拡大する。それに備えた研究が実施出来た。更には、金属製文化財の保存に関する対処法の研究は今後も益々必要とされるテーマでありそれに寄与する事が期待される。 効率性：テーマを絞る事で高い専門性を持った研究者や技術者との交流も生まれ今後の情報収集にも大いに寄与する体制が構築できた。 継続性：屋外保存された金属製文化財の維持に最も必要である塗装の耐久性及び防錆効果に関する研究のために行っている曝露実験は長期にわたる金属製文化財保存の維持に貢献する。 正確性：これまでに実施した現地調査の結果、現場にて劣化状態を観察し、これまでに得た知見・知識をもとにそれに適した修復手法の選択を行った。						

2. 定量的評価

観点	論文等	発表件数	報告書刊行数			
評定	B	B	B			
判定理由 論文等：葦山で実施した石造物に関する現地調査と本年度通して行ったテキスタイルに関する調査研究の成果をまとめて2件の論文等を発表し、当所計画の目標を達成した。 発表件数：本年度調査した洋紙に関する調査結果、また、建造物の保存と修復に関する保存科学の概要について、更には近代文化遺産の保存理念等に関する調査研究の成果を4件発表し当所計画の目標を達成した。 報告書刊行数：テキスタイルに関する調査研究成果をまとめた報告書を1冊刊行し当所計画の目標を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近代文化遺産の保存・修復と活用について、各種の現地調査を実施することができた。その現地調査を通じて、現状の把握、解決すべき問題点等も新たに把握することができた。重要文化財指定も受けている行政文書に代表される洋紙と、記すのに使われている没食子インクが原因となる洋紙の劣化に関して着目し調査研究を実施した後、研究会を開催し多くの貴重な知見を得る事が出来、また新たな研究者との連携も可能となった。また、史跡指定地内に立てられた産業遺産の保存と修復に関する理念を形作るための調査を通して関連する専門家とのネットワークが出来、更に続く研究を進める事ができる様になった。更に今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事ができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	明治以降記録素材として活用された洋紙の保存と修復手法に関する調査研究及び研究会を通じて今中期計画の4年目として当所の計画とおりに調査研究を順調に遂行する事ができた。それに加えて屋外保存されている金属製文化財の保存手法の調査研究、史跡指定地内の建造物及び構造物の保存理念、並びに修復理念に関する調査研究を実施し検討を深める事ができた。中期計画最終年度である次年度も近代文化遺産に使用されている新しい材料に関する調査研究を行う。近代文化遺産に使用されている材料は多種多様であり、その全てに関して対応しかねているのが現状であり、毎年度着実に調査研究を進める必要がある。

業務実績書

研No.40

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－①)		
【事業概要】 我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施し、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 佐野千絵（保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、早川泰弘（分析科学研究室長）、朽津信明（修復材料研究室長）、北野信彦（伝統技術研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、酒井清文（客員研究員）、宇高健太郎（客員研究員）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、加藤雅人（国際情報研究室長）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、楠京子（アソシエイトフェロー）、大河原典子（鎌倉女子大学講師・客員研究員）、前川佳文（絵画保存修復士・客員研究員）			
【主な成果】 高松塚古墳・キトラ古墳壁画共にクリーニングに効果が期待される酵素群の利用に関する研究を継続実施し、キトラ古墳壁画では墓室壁面からの取り外しによって分かれている漆喰の再構成のための修復材料の検討を行った。修理施設の生物・温湿度環境の安定化のための調査を実施した。劣化原因調査で採取された両壁画由来の微生物株について整理と公的機関への寄託についての準備を行った。高松塚古墳壁画の色料について、奈良文化財研究所と共同で調査を行った。			
【年度実績概要】 ○高松塚古墳壁画 生物・環境調査：修理施設の修理作業室等において、昆虫トラップ設置による害虫等生息調査、浮遊菌・付着菌調査を定期的に行い、環境の清浄度を確認するモニタリングを継続実施している。修理施設内各所の温湿度の測定も継続実施し、適切な温湿度条件を安定して維持するための空調機の制御方法についても検討を行った。 高松塚古墳の微生物分離株は、劣化要因の調査や漆喰壁からのカビの除去試験などで利用されたのち、アンプルとして保存されており、貴重な研究資源となっている。これらの微生物株を保存していくため、公的機関への寄託を念頭に、菌株のデータ集、基本台帳やシークエンスデータファイルの作成を実施した。 修復研究：壁画のクリーニング方法として、酵素の使用法に関して、現場での作業性の向上を検討し、適用した。また、再結晶化した表面のカルサイト部分について、国宝修理装演師連盟と共同し、新たに損傷地図の作成を行った。 材料技法調査：色料の分析調査を継続的に実施している。新たに蛍光分光法を適用するための基礎的検討を行った。これまでに取得した分析データの整理を行った。 ○キトラ古墳壁画 生物・環境調査：24年9月に石室内から採取した試料、及び25年2月に実施された盗掘口のステンレス台取り外しに伴う盗掘口・閉塞石からの微生物採取試料について、菌叢を調査した結果をとりまとめた。また、キトラ古墳石室が発掘された16年から石室の埋戻しが行われた25年までの期間にわたる微生物の調査結果を踏まえ、微生物相の推移についてとりまとめを行った。キトラ古墳に由来する微生物株についても、高松塚古墳由来の微生物株と並行して、公的菌株保存機関への寄託を念頭に、基本台帳とDNAシークエンスデータファイルの作成を実施した。 修復研究：漆喰の再構成を行うために、修復材料の検討を行った。また、表面のクリーニングのために酵素の使用を検討し、汚れの状態によって異なるクリーニング手法を適用することを確認した。 材料技法調査：新たに蛍光分光法を適用するための基礎的検討を行った。これまでに取得した分析データの整理を行った。 ○その他 ・本年度2回実施された文化庁による国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設（国営飛鳥歴史公園内）の一般公開に際して研究員を派遣し協力した。26年8月23日～31日（4人）、27年1月17日～25日（5人）。 ・東京国立博物館で開催された特別展「キトラ古墳壁画」で、輸送、梱包、環境調整、画像展示等について協力した。 ・文化庁委託事業「古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査」を受託し、修理終了後の当分の間適切な保存管理・公開を行うための施設のあり方を検討するための基礎データ収集作業を実施した。 ・福岡県うきは市珍敷塚古墳で保存庫内の温湿度計測を継続するとともに、うきは市が実施するモニタリングへ指導助言を行った。同県日岡古墳で冬季に発生する保存施設内壁の結露への対策を講じるため、施設の壁面温度の計測を行った。 ・古墳壁画保存関連の事業全般について情報共有を行い、効率的で正確な作業を行うために、26年5月8日、11月10日、27年2月4日の3回にわたり、奈良文化財研究所と古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議を開催した。 ・27年1月7日に文化庁が開催した第16回古墳壁画の保存活用に関する検討会に事務局として出席し、報告を行った。			
【実績値】 援助・助言実施件数 2件、研究報告2件（①②）			
【備考】 ①佐藤嘉則・木川りか・喜友名朝彦・立里臨・杉山純多：パイロシークエンス法によるキトラ古墳石室内の微生物群集構造解析、「保存科学」54、27年3月 ②木川りか・喜友名朝彦・立里臨・佐藤嘉則・佐野千絵・杉山純多：キトラ古墳の微生物調査報告（2012年～2013年）および2004年から2013年までの微生物調査結果概要、「保存科学」54、27年3月			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 4411

自己点検評価調査

研No.40

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：25年度に埋め戻しが行われたキトラ古墳について、石室が発掘された16年からの微生物相の推移についてとりまとめを行うなど、作業の進展に伴う状況の把握、記録化を適切に行っている。 独創性：両古墳の石室等から採取された微生物株は、古墳環境において生物劣化に関わる微生物類の性状を解析する上で貴重な研究資源となった。また今後、古墳環境における生物劣化を調査していくうえでも比較株として重要な役割を担うことが期待される。これらの微生物株を将来に残し、広く今後の研究活動に活用していただくためにも公的機関への寄託の準備を進めた。 発展性：各地の装飾古墳の保存・活用に関して、積極的に助言・提言を行うことができた。 効率性：修理施設の環境管理の課題を解決するために、環境計測データをもとに空調機の運用上の課題について迅速に調査を実施し、どの部分に問題があるのかを明確にすることができた。 正確性：客観性のある研究成果をもとに適切な材料選択を行い、修復作業に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	援助・助言 実施件数	研究報告				
評定	B	B				
判定理由 援助・助言実施件数：修理施設の環境維持管理に関して、常に文化庁・奈良文化財研究所現地担当との連携を取り、的確な判断により作業の進行を助けている。修復作業に関しても随時現地へ赴き、詳しく状況を理解し、予定通り適切な助言を行った（2件、のべ56回）。 研究報告：調査研究について2件の報告を上げることができ、十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各種調査によって収集したデータを整理保存するとともに、将来に向けても活用できるよう準備を進めるなど、高松塚・キトラ古墳壁画の文化財としての価値を伝えていくための作業を周到に続けている。 材料調査と修復作業との連携、修理施設の環境改善に関する文化庁・奈良文化財研究所との連携、将来における高松塚古墳壁画の保存活用に向けての奈良文化財研究所の考古学調査との連携も適切に図られている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	19年度に石室ごと解体され、10年を目途に修理作業が続けられている高松塚古墳壁画については、修理後の「将来的には、カビ等の影響を受けない環境を確保した上で現地に戻す」という保存方針のもと、本年度も修理の完成に向けた調査と修復材料の検討が着実に進められており、安全性と正確性に考慮しつつ、重要な成果をあげている。修理施設の環境管理の課題に対しても迅速に対応している。中期計画最終年度である次年度も引き続き奈良文化財研究所との連携のもと事業を推進する。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)-①)
【事業概要】我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施し、文化庁が行う高松塚・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力を行う。	
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】廣瀬 覚、降幡順子、青木 敬(以上、都城発掘調査部主任研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、前川 歩(遺構研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、辻本与志一(株式会社文化財保存・客員研究員)、杉岡奈穂子(保存修復科学研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)、肥塚隆保(奈良文化財研究所副所長・客員研究員)、岡田健、早川泰弘、朽津信明、犬塚将英、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊(以上、東京文化財研究所)、水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所調査部)、相原嘉之(明日香村教育委員会文化財課)	
【主な成果】 文化庁が進める国宝高松塚古墳壁画の保存・活用に関する事業が円滑かつ適正に遂行するよう協力した。キトラ古墳では、史跡整備にむけて、仮設保護覆屋解体作業の立会調査や解体後の記録作業を実施した。また、古墳の保存、活用、整備の方向性を検討するにあたり、技術的な支援・協力を行った。	
【年度実績概要】 (1)高松塚古墳 ・石室解体に伴う発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、石室解体作業の3次元アニメーション(長編)、及びそのモデル作成を行った。また、目地漆喰の保管兼展示用の台座(南壁石-西壁石1間)を作成した。 ・壁画の保存修復(劣化原因)について、蛍光X線分析による材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、分光分析による顔料調査などを実施した。 ・26年8月・27年1月の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際し、解説員として研究員(延べ21人)を派遣した。 (2)キトラ古墳 ・キトラ古墳仮設保護覆屋の解体作業において、立会調査を実施した。 ・仮設保護覆屋解体後、墳丘整備前の記録として、墳丘南側部分の3次元レーザー測量を実施した。 ・東京国立博物館「特別展 キトラ古墳壁画」開催にあわせ、(株)凸版印刷が作製したキトラ古墳の高画質映像の内容につき、資料提供と助言を行った。 ・国営飛鳥歴史公園(キトラ周辺地区)内に建設予定の体験学習館の展示内容につき、資料提供と助言を行った。 ・国営飛鳥歴史公園(キトラ周辺地区)内に設置予定の解説パネルの内容につき、資料提供と助言を行った。 ・キトラ古墳天文図につき、国立天文台の研究者と共同研究を実施した。観測年代等につき、新たな分析結果を得た。 ・報告書未掲載の出土遺物である骨片31箱分について、クリーニング、強化処置、接合などの保存処理を実施した。 ・墓道部版築の剥ぎ取り資料の活用を図るとともに、版築層の粒度分布に関する調査を実施した。 ・出土遺物の定期的な点検作業、環境モニタリングを実施した。	
キトラ古墳覆屋解体後3D測量データ	
【実績値】 論文数9件(①~⑨)	
【備考】 ①若杉智宏・水野敏典・長谷川透「キトラ古墳の発掘調査」(特別展図録「キトラ古墳壁画」各論 26年4月) ②井上直夫「キトラ古墳壁画のフォトマップ撮影」(特別展図録「キトラ古墳壁画」コラム 26年4月) ③福永香・高妻洋成「壁画の下の漆喰を見たい！」(特別展図録「キトラ古墳壁画」コラム 26年4月) ④高妻洋成「キトラ古墳壁画の材料調査」(特別展図録「キトラ古墳壁画」各論 26年4月) ⑤降幡順子「キトラ古墳出土ガラス小玉(第135次)」(『奈文研紀要2014』pp.122-123、26年6月) ⑥赤田昌倫他「高松塚古墳壁画の材料調査-西壁女子群像の赤衣像青色裳に使用された色料について-」(『日本文化財科学会第31回大会要旨集』pp.72-73、26年7月) ⑦降幡順子他「高松塚古墳壁画の赤色・黄色色料に関する調査」(『日本文化財科学会第31回大会要旨集』pp.204-205、26年7月) ⑧Tomohiko Kiyunaa, Kwang-Deuk Ana, Rika Kigawab, Chie Sanob, Sadatoshi Miurab, Junta Sugiyamac「"Black particles", the major colonizers on the ceiling stone of the stone chamber interior of the Kitora Tumulus, Japan, are the bulbiferous basidiomycete fungus <i>Burgoa anomala</i> 」(『Mycoscience』2014 26年10月) ⑨木川りか・喜友名朝彦・立里臨・佐藤嘉則・杉山純多「キトラ古墳の微生物群調査報告(2012~2013年)および2004年から2013年までの微生物調査結果概要」(『保存科学』54、27年3月)	



【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4412

自己点検評価調査

研No.41

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	B	B	B	B
判定理由 適時性：キトラ古墳の整備にむけ、仮設保護覆屋の解体工事の進展に合わせ、随時、立会調査と記録作業を適切に行った。 独創性：当研究所の独自性を活かし、保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・整備・活用に助言を行った。また、キトラ古墳に関する調査研究の蓄積を活かし、東京国立博物館における展示公開（特別展「キトラ古墳壁画」26年4月22日～5月18日）にも主体的に関わった。 発展性：壁画・装飾古墳や緊急性を有する文化財の保存・活用に対する新たな方向性を示すことができた。 効率性：立会調査での指示等により、キトラ古墳の仮設保護覆屋解体作業を迅速に実施することができた。 継続性：整理作業・分析調査を継続的に遂行し、今後の保存・活用にむけた成果を得た。 正確性：発掘調査の成果を再現動画の作成や古墳整備に正確に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数					
評定	B					
判定理由 論文数：高松塚・キトラ古墳の保存・活用に資する学術的成果を論文等にまとめ、目標の本数を達成することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高松塚古墳の発掘調査成果の整理・検討、壁画材料の分析調査が進み、また、キトラ古墳仮設保護覆屋の解体作業が完了したことにより、今後の保存・活用・整備等の事業が円滑に進むものと期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目にあたる26年度も、高松塚・キトラ両古墳の保存・活用に関する業務を遂行し、重要かつ緊急性を有する文化財の今後の保存・活用に対して大きく貢献することができた。最終年度となる27年度に向け、継続的に着実な成果を蓄積することができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)-②)		
【事業概要】	<p>本事業は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内に所在する檜隈寺の全体像を明らかにすべく、遺跡周辺の調査を行うものである。檜隈寺は、我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、中心部は史跡に指定されている。この遺跡の実体解明及び保存整備に資するため、2008年度より発掘調査を実施している。</p>		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】	<p>清野孝之(考古第三研究室長)、西山和宏、降幡順子(以上、都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、森先一貴(考古第三研究室研究員)、前川 歩(遺構研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、栗山雅夫(写真室技術職員)</p>		
【主な成果】	<p>本年度は檜隈寺跡の北の丘陵地から、史跡檜隈寺跡の東側に沿って南に延び、塔跡の東側に至る範囲の工事立会(A区)、檜隈寺跡の北の丘陵地の西斜面の工事立会(B区)の2カ所において調査を実施した。 A区では一部、古代の遺構面を検出した。B区では、8世紀後半から平安時代頃の瓦窯を1基検出した。</p>		
【年度実績概要】	<p>国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所(以下、国交省)が実施する、国営飛鳥歴史公園(キトラ古墳周辺地区)整備工事ともなう嚴重立会等調査である。調査地は、檜隈寺跡の北の丘陵地から、史跡檜隈寺跡の東側に沿って南に延び、塔跡の東側に至る範囲の工事立会(A区)、檜隈寺跡の北の丘陵地の西斜面の工事立会(B区)の2カ所である。</p> <p>A区では、現代の造成盛土や耕作土などの中で収まるところがほとんどであったが、一部、遺構面を検出した部分については、国交省の理解と協力の下、設計変更を行い遺構面は現状保存された。</p> <p>B区では、東西方向を主軸とし、西側に開口する瓦窯を1基検出した。窯の構造は有畦式平窯で、窯体の残存長は約2.3m、最大幅は約1.8mである。出土遺物のほとんどは、7世紀後半から8世紀初頭の軒瓦を含む瓦類である。しかし、出土遺物の中に平安時代になる土器がわずかに出土していることや、瓦窯の構造からみて、8世紀後半から平安時代頃のものと推定される。なお、本瓦窯は、国交省の協力の下、現地保存された。</p> <p>調査期間は26年5月15日から6月17日まで、調査面積は269㎡である。</p> <p>調査地：檜隈寺跡北側の丘陵地と東側の平坦部(A区)と檜隈寺跡北西の斜面地(B区)</p> <p>調査期間：26年5月15日～6月17日 調査面積：269㎡ 調査成果：A区 古代と推定される遺構面、瓦溜まり1基 B区 瓦窯1基 8世紀後半から平安時代の有畦式瓦窯1基 出土遺物：瓦、土器など。</p>		
			
	<p>B区 瓦窯検出状況 (西から見る。窯体内は南半のみ掘り下げ。周囲の溝は調査用排水溝)</p>		
【実績値】	<p>発表件数：3件(論文等2件①・③、報道発表1件②)</p> <p>(参考値) 出土遺物：土器1箱、鉄釘1点、瓦・焼土塊24箱(軒丸瓦4点、軒平瓦4点) 記録作成数 遺構実測図10枚、写真(4×5)180枚、デジタル写真136枚、デジタルメモ写真558枚</p>		
【備考】	<p>①森先一貴「檜隈寺瓦窯の調査(飛鳥藤原第181-4次)」『奈文研ニュース』No.54 26年9月 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「檜隈寺瓦窯の調査(飛鳥藤原第181-4次調査)記者発表資料」26年7月29日 ③森先一貴ほか2名「檜隈寺瓦窯の調査(飛鳥藤原第181-4次調査)」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定</p>		

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 4421

自己点検評価調査

研No.42

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国営公園整備事業の事前調査として迅速に対応した。 独創性：檜隈寺周辺において、初めてとなる瓦窯を検出した。 発展性：檜隈寺の奈良・平安時代における歴史、檜隈寺周辺の遺構状況の解明について重要な資料を得た。 効率性：緊急性の高い開発事業の事前調査として迅速に対応するため、最小限の人数と期間で必要な調査成果を得られるよう、適切かつ効率的に調査を実施した。 継続性：20年度から檜隈寺周辺の全体像復元にかかわる継続的な調査を計画通り実施した。 正確性：今後の調査研究に資するよう、遺構・遺物の地域的・年代的特性を踏まえ、正確かつ的確な記録を作成した。						

2. 定量的評価

観点	発表件数				
評定	B				
判定理由 発表件数：当初予定の3件を達成した。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査では、檜隈寺に関連すると見られる瓦窯を初めて発見し、奈良・平安時代における檜隈寺の歴史、檜隈寺周辺の実態解明について重要な資料を得た。文献資料に乏しい檜隈寺に新たな知見を追加する貴重な発見である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査は、年度当初の計画通りに実施されており、国営公園整備事業に関わる事業にともない、檜隈寺の全体像復元、歴史の解明に向け、貴重な資料を得ることができた。中期計画の4年目に当たる26年度の調査成果により、最終年度となる27年度に向け、研究の蓄積を加えることができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】			
館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、併せて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】			
<p>荒木臣紀（保存修復課調査分析室長）、井出浩正（調査研究課考古室研究員）、池田宏（上席研究員）、伊藤嘉章（学芸企画部長）、伊藤信二（広報室長）、恵美千鶴子（客員研究員）、遠藤楽子（企画課出版企画室研究員）、沖松健次郎（保存修復課保存修復室主任研究員）小野真由美（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、小野塚拓造（企画課特別展室アソシエイトフェロー）、小山弓弦葉（調査研究課工芸室主任研究員）、勝木言一郎（企画課出版企画室長）、金井裕子（企画課特別展室研究員）、河野正訓（調査研究課考古室アソシエイトフェロー）、川村佳男（列品管理課平常展調整室研究員）、神庭信幸（保存修復課長）、鬼頭智美（企画課国際交流室長）、木下史青（企画課デザイン室長）、救仁郷秀明（列品管理課登録室長）、小泉恵英（企画課長）、後藤健（特任研究員）、小林牧（博物館教育課長）、酒井元樹（保存修復課保存修復室主任研究員）、澤田むつ代（客員研究員）、品川欣也（調査研究課考古室研究員）、島谷弘幸（副館長）、白井克也（調査研究課考古室長）、鈴木希帆（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、鈴木みどり（学芸企画部博物館教育課ボランティア室長）、関紀子（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、瀬谷愛（列品管理課平常展調整室研究員）、高木結美（企画課特別展室アソシエイトフェロー）、高橋裕次（博物館情報課長）、竹内奈美子（調査研究課工芸室長）、田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、田島太良（列品管理課登録室アソシエイト・フェロー）、谷豊信（学芸研究部長）、塚本磨充（調査研究課東洋室研究員）、土屋貴裕（列品管理課平常展調整室研究員）、土屋裕子（保存修復課保存修復室長）、富田淳（列品管理課長）、西木政統（調査研究課絵画・彫刻室アソシエイトフェロー）、平河智恵（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、古谷毅（列品管理課主任研究員）、松嶋雅人（企画課特別展室長）、丸山士郎（列品管理課平常展調整室長）、三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）、三田覚之（調査研究課工芸室研究員）、六人部克典（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、村田良二（学芸企画部博物館情報課情報管理室長）、山下善也（調査研究課絵画・彫刻室主任研究員）、横山梓（学芸企画部企画課特別展室研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）</p>			
【主な成果】			
館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後・収集・展示の対象となりうる文化財と、それらに関連する資料等について、美術史学・歴史学・考古学・博物館学等の多様な見地から調査研究を行い、その成果を学会・研究会・学術雑誌・書籍等に発表・公開した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・内外の学会・研究会等で研究成果を発表した。 ・学術雑誌等に各種の論考を掲載するとともに、著作を刊行した。 			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・学会・研究会等発表件数：95 件 ・論文等掲載数：120 件 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：学界動向に留意するとともに、社会的な関心や特集展示、特別展と関連付けて研究を行っている。 独創性：当館のコレクションは国内外に類例のないもので、常に新規の知見を見出している。 発展性：蓄積されてきたコレクションに対する知見をもとに、新たな視点を持った研究を行っている。 効率性：所蔵品の管理や展示・外部への貸出等、他業務に多く時間を割かれながらも、成果を蓄積している。 継続性：各研究員の長期にわたる学術的関心をもとに研究を行っている。 正確性：実証に基づいた確実な研究を行っている。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会 等発表件数	論文等掲載数				
判定	B	B				
判定理由 学会・研究会等発表件数、論文等掲載数： 研究機関の規模（研究員の人数）と業務の繁多を考慮した上で、過去に比べて遜色のない成果をあげている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費等の獲得も増加し、それらの調査研究を基礎とした研究成果を順次公開できている。また、また外部機関との共同研究の実施を行うとともに、各ジャンルにわたり、学術情報の公開を行っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画に基づき、順調に進捗している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 特別調査法隆寺献納宝物(第36次)「聖徳太子伝私記(古今目録抄)」(第1年度) (5)-①		
【事業概要】 東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和54年より、36次にわたって献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 島谷弘幸(副館長)、池田宏(学芸研究部上席研究員)、三田覚之(学芸研究部調査研究課工芸室研究員)、東野治之(奈良大学教授、東京国立博物館客員研究員)、新川登亀男(早稲田大学文学研究院教授)			
【主な成果】 重要文化財「聖徳太子伝私記(古今目録抄)」を調査し、『法隆寺献納宝物特別調査概報36』「古今目録抄 上巻表」を刊行した。			
【年度実績概要】 館内職員および外部研究者により、下記の日程で原本調査を行った。 26年 8月25日、26日 古今目録抄 上巻 調査(本文及び訓点等の確認)。 12月3日 原本撮影作業 27年 1月7日、8日 原本撮影作業 1月15日 原本校正作業 原本調査完了後、報告書の編集に着手し、本資料の一部の高精細画像と積文を収録した『法隆寺献納宝物特別調査概報36 古今目録抄 上巻表』を刊行した。			
			
重要文化財「古今目録抄」			
【実績値】 調査件数: 1点 調査日数: 3日間			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：当該作品は学術的な研究が進み、より詳細な本文情報が求められているため。 独創性：原本を直接参照することにより、他にない情報を提供できる。 発展性：調査成果の公刊により、古代史や文学研究に寄与するところが大きい。 効率性：必要最小限の経費と日程で実施しているため。 継続性：次年度以降に残余の部分について調査と報告書の刊行を行う。 正確性：本分野の代表的研究者の参加を得ており、提供する情報の質は高い。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査日数				
判定	B	B				
判定理由 調査件数：予定どおりの件数を調査した。 調査日数：予定どおりの日数の調査を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の件数と内容の文化財の調査を実施し、その成果を公刊した。残りの部分については4年計画で、同様の調査と報告書作成を行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	未調査の文化財を含め、計画的に調査の実施と報告書の刊行を行っている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別調査「書跡」第12回		
<p>【事業概要】 館書跡収蔵品・寄託品の中で、平安時代から江戸時代にわたる歌書、物語、願文、経典などの書跡類を調査する。この分野ではすでに平安時代の作品を中心とした図版目録『日本書跡篇 和様 I』『日本書跡篇 古写経』を刊行しているが、その後の新規収集品及び寄託品を対象とする。特に古筆切となっている断簡類の原典特定作業、使用された料紙の種類、書写年代の比定を行うとともに、法量計測など基礎データを収集し今後の研究に便宜を図る。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
<p>【スタッフ】 島谷弘幸（東京国立博物館副館長）、高橋裕次（博物館情報課長）、藍原有理子（東京国立博物館調査研究課アソシエイトフェロー）、恵美千鶴子（東京国立博物館客員研究員）、赤尾栄慶（京都国立博物館上席研究員）、羽田聡（京都国立博物館保存修理指導室主任研究員）、野尻忠（奈良国立博物館学芸部企画室長）丸山猶計（九州国立博物館文化財課主任研究員）、一瀬智（福岡県立アジア文化交流センター展示課研究員）、吉川聡（奈良文化財研究所文化遺産部歴史研究室長）、田中知佐子（大倉集古館副主任学芸員）</p>			
<p>【主な成果】 本年度は当館寄託受入となる「大日本古写経」に収められた写経断簡類について、作品の名称、制作年代、形状、界線等について確認した。断簡は原典推定をし、可能な限り『大正大蔵経』の本文との照合を行った。合わせて原装丁の推測、使用された料紙の紙質の検討も合わせて行った。今回の調査対象について記載文字を可能な限り解読し書誌情報を収集した。また対象全件について法量を計測した。なお、本年度はスケジュールの都合により調査会場が狭隘であったため、高精細画像の撮影は実施しなかった。</p>			
<p>【年度実績概要】 本年度寄託受入作品のうち書跡分野「大日本古写経」所収の写経断簡類について次の項目について調査を実施した。 1, 名称・通称の検討、2, 制作年代、4, 形状性質の確認、5, 本紙の法量計測、6, 出典の推定、8, 使用料紙の分析、9, 界線の分析、10, 記載文字の判読、11, 書誌情報の確認 調査対象：「大日本古写経」「古写経貼交屏風」等 調査日：27年2月16日(木)～18日(金)。</p>			
<p>【実績値】 調査件数：「大日本古写経」「古写経貼交屏風」等4件 調査日数：3日間 調書作成：207枚 (参考値) 調査人数：参加者 23人日(のべ)</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：館蔵品の収集、寄託品の受入が行われる適切な段階で実施しているため。 独創性：館蔵品・寄託品を対象とした詳細な調査で、他では実施できないため。 発展性：調査成果は今後の展示への反映や目録の刊行等につながるため。 効率性：必要最小限の経費で実施しているため。 継続性：館蔵品・寄託品の調査を毎年蓄積しているため。 正確性：各参加者の専門性を活かして、正確な調査内容となっているため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査日数	調書作成			
判定	B	B	B			
判定理由 調査件数：所期の件数を調査した。 調査日数：所期の日数の調査を行った。 調書作成：今後の研究に十分な調書の作成を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今後の研究に必要な件数と内容の文化財の調査を実施している。本年度は新規に寄託を受け入れる大規模な資料について調査を行い、所期の点数を調査できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査は、所蔵・寄託文化財の持つ情報を詳細に把握し、公開するためのものである。毎年度適切な材料を選択し、実施している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 特別調査「工芸」第6回(5)－①		
【事業概要】			
<p>東京国立博物館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館4館及び文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、担当研究員の育児休暇や他業務を鑑み、今年度は金工・漆工の調査会を行うこととする。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長 竹内奈美子
【スタッフ】			
<p>伊藤信二(学芸企画部広報室長)、酒井元樹(保存修復課保存修復室研究員)、永島明子(京都国立博物館学芸部列品管理室主任研究員)、末兼俊彦(京都国立博物館学芸部企画室研究員)、清水健(奈良国立博物館学芸部企画室主任研究員)、田澤梓(奈良国立博物館学芸部アソシエイトフェロー)、川畑憲子(九州国立博物館学芸部企画課文化交流展室研究員)、望月規史(九州国立博物館学芸部文化財課研究員)</p>			
【主な成果】			
<p>東京国立博物館の金工・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。今後の列品の公開に知見を反映し、展示内容を向上できる。金工調査では、今年度は和鏡を取り上げ、4館の研究員やアソシエイトフェローが揃って調査が実施され、特に古代に多く作例がみられる八稜鏡について活発な論議が加えられた。漆工調査では昨年に引き続き、香道具の中でも不定形な様相を示す香篋筒をとりあげ、記述、計測、デジタルカメラ撮影、デジタル顕微鏡撮影の調査を行った。香道具の形式、加飾技法や材料の多様性を示す調査結果が得られた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>・金工調査 実施期間 27年3月27日(金) 今年度は金工列品のうち和鏡2面を取り上げ、重要文化財・瑞花双鳳八稜鏡(E-19934)に代表され、特に古代に多く作例がみられる、八稜鏡について活発な論議が加えられた。調査は、まず議論によって文様の形式分類に基づき大まかな年代観を導きだし、さらに個々の鏡について技法などの観点から編年を試みた。その結果、古代の鏡においては寸法に関して規格の存在が想定され、文様に関しては平安時代後期から鎌倉時代にかけて大きな変化が起こり、予想以上に多様な形式が併存していたことが分かった。同時に今後の課題として、出土品などの基準作例や、国内外の作品を視野に入れた研究が必要であることが確認された。</p>			
<p>・漆工調査 実施期間 27年2月19日(木)・20日(金) 漆工列品のうち継続的に香道具をテーマとし、今年度は昨年度に続き、細々とした道具類や多種多様な香木片を引出しの中に収めるための篋筒形式の列品4件をとりあげて記述、計測、デジタルカメラ撮影、デジタル顕微鏡撮影の調査を行った。中でも秋草虫蒔絵提篋筒(H-82)は引き出しの内に小箱を並べ、さらにその内に仕切りを設けて円形合子を並べ収める特異な形式が注目され、香道具の形式の多様性が確認された。また菊水蒔絵香篋筒(H-90)は2段の引き出しの蒔絵装飾に微妙な相異が判明し、多くの内容品からなる香道具は一部に欠損や後補のある可能性が高いことを再認識した。またミニチュアのように小型の香篋筒には、模造珊瑚の使用が認められ、香道具における加飾技法や装飾材料の多様性を示した例と位置付けられた。</p>			
			
金工調査風景		漆工調査風景	
【実績値】			
調査回数	2回		
調査日数	3日		
調査員	9名		
調査対象作品	24件		
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：工芸分野では美術や考古、歴史などの分野より研究者が不足しており、研究推進の緊急性が高く、本事業は時宜に適っているため。</p> <p>独創性：工芸各分野の研究者がそれぞれ複数揃う国立文化財機構ならではの事業である。</p> <p>効率性、正確性：本年度も各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた精度の高い知見を共有し、議論を深めることができた。</p> <p>継続性、発展性：本年度の調査事業は6回目の実施となり、継続して行うことができた。これにより、今後の研究推進や展示公開に向け寄与するところは大きいと考えるため。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員	調査対象作品		
判定	B	B	B	B		
<p>判定理由</p> <p>調査回数：計画通り、金工・漆工それぞれの調査会を実施した。</p> <p>調査日数：計画通り、それぞれ1～2日にわたる調査を実施した。</p> <p>調査員：金工・漆工分野とも、各機関専門家がそれぞれ全員揃って調査を行った。</p> <p>調査対象作品：各分野の調査において極めて効率良く、相当数の作品を調査できた。漆工調査の対象作品は1件に多数の内容品を含むため比較的に作品件数は少ないが、実際には多岐にわたる多数の作品の調査を行っている。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り作品調査を実施することにより、研究を推進し、その成果が展示公開の向上に寄与するという所期の目標を達成している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 特別調査「彫刻」第4回 ((5) -①)		
【事業概要】			
<p>社寺等所蔵の仏像、神像、肖像彫刻を調査し、調査研究報告、論文等の研究活動に結び付け、あるいは寄託の増加、特別展等の企画につなげて展示の質の向上を図る。</p> <p>今年度は、文化庁所蔵の彫刻を調査し機構所属の博物館において活用の道を探る。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長 丸山士郎
【スタッフ】			
<p>浅湫毅(学芸企画部博物館教育課教育講座室長)、西木政統(調査研究課絵画彫刻室アソシエイトフェロー)、浅見龍介(京都国立博物館学芸部列品管理室長)、岩田茂樹(奈良国立博物館学芸部上席研究員)、楠井隆志(九州国立博物館展示課長)、宮田大樹(九州国立博物館展示課研究補佐員)、津田徹英(東京文化財研究所企画情報部文化財形成研究室長)、皿井舞(東京文化財研究所企画情報部主任研究員)、奥健夫(文化庁文化財部美術学芸課主任調査官)、川瀬由照(文化庁文化財部美術学芸課調査官)、井上大樹(文化庁文化財部美術学芸課調査官)</p>			
【主な成果】			
<p>(1) 文化庁所蔵の彫刻作品の調査を実施した。</p> <p>(2) 作品の形状、構造、保存状態などの調査結果を踏まえ、機構内4博物館への貸与作品を決定した。なお、27年度以降の各館の展示等へ活用する予定である。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 27年3月20日に東京国立博物館内の文化庁分室において「木造不動明王立像」、「銅造薬師如来坐像」、「木造伎楽面」、「木造雲中供養菩薩像」など10件の作品を調査した。</p> <p>(2) ・文化庁所蔵の彫刻作品10件の、形状、構造、保存状態について調査を実施し、文化庁の担当者より伝来等の説明を受けた。それらを総合し機構内4博物館への貸与作品を決定した。</p> <p>・調査対象作品はこれまで展示の機会がほとんど無かったが、今後は各館での展示で活用する予定である。</p>			
			
調査風景			
【実績値】			
調査研究会開催数 1回			
研究会参加者数 12名			
調査作品数 10件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：今回調査した文化庁所蔵作品はこれまで展示の機会がほとんど無かったが、今後は広く公開することができる。 独創性：当機構の彫刻担当職員が集まって調査研究する機会はこれまでになかった。 発展性：展示等の解説に今回の成果を活かすことができる。 効率性：当機構の彫刻担当職員の大多数が参加し効率よく調査し、受入れ館を決めることができた。 継続性：今回調査した作品は一般にも公開するので、各館を中心に多くの研究者が研究を進めることができる。 正確性：当機構の彫刻担当職員の大多数が集まることによって調査研究の正確性を高めることに努めた。						

2. 定量的評価

観点	調査研究会 開催数	研究会 参加者数	調査作品数			
評定	B	B	B			
判定理由 調査研究会開催数：予定通り当機構の彫刻担当職員が集まる調査研究会を1回開催した。 研究会参加者数：予定通り当機構の彫刻担当職員、文化庁彫刻担当者が参加した。 調査作品数：文化庁所蔵作品の貸与可能作品を予定通り全て調査することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当機構の彫刻担当職員が集まったことによって効率よく、正確な調査研究を実施することができた。また、これまで活用されてこなかった作品を展示等に供することができるようになった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。次年度も当機構の彫刻担当職員が集まって調査研究を実施する機会を設ける予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 油彩画の材料・技法に関する共同調査 (5)－①)		
【事業概要】			
<p>本研究は東京藝術大学との共同研究で 20 年度から開始し、24 年度に継続の手続きを行い、続行しているものである。東京国立博物館所蔵の油彩画約 150 件の中から、明治期を中心とした約 50 件を調査対象としている。東京芸術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析等の科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行い、これまで芸大が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものとする。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】			
<p>木島隆康(東京芸術大学大学院教授)、大久保早希子(東京芸術大学大学院助教)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、土屋裕子(保存修復課保存修復室長)、荒木臣紀(保存修復課調査分析室長)、沖松健次郎(保存修復課主任研究員)</p>			
【主な成果】			
<p>20 年 11 月から開始した。本調査は、3 年間の調査期間の締結を更新し、さらなる調査を進めている (更新 2 年目)。本年度調査が終了した作品は、4 点である。</p>			
【年度実績概要】			
<p>26 年度に調査が終了した作品 (これまでに調査した作品の追加調査も含む) は、①A-11305 興津富士、②A-11308 森、③A-11250 西村茂樹像、④A-12427 東禅寺事件図、以上 4 点。</p>			
			
油彩画の調査風景			
【実績値】			
調査回数 : 2 回			
調査作品数 : 4 点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	B	B	C	B	
判定理由 適時性：展示への活用に資する時宜を得た調査であるため。 独創性：当館保有の油彩画に関して初めての総合調査であるため。 発展性：明治期に油彩画に関して他館との比較研究が可能になるため。 効率性：当初計画を十分に実施することができなかつたため。 正確性：調査内容は目的とするメニューを行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数				
判定	B	B				
判定理由 調査回数、調査作品数：ほぼ当初予定通りに実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	一連の調査によって徐々に東京藝術大学の同時期の作品群及び他館が収蔵する作品との比較研究が可能になってきている。特にX線透過画像、デジタル顕微鏡画像などの詳細なデータ間の比較によって、作品の特性のみならず、関係性などについても新たな検討ができるデータが整いつつある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は、博物館側担当者のスケジュールリングに困難があったこと、藝大側の研究室改装などがあり、調査回数及び点数が限定されたが、今年度積み残し分は、更新最終年度の来年度に組み入れて、当初の計画通りのノルマを実施し、『MUSEUM』での発表を行っていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 漆塗籠棺残片の保存に関する共同研究((5)-①)		
【事業概要】			
水漬状態の漆塗籠棺残片(J-39374)のミクロ及びマクロ的な構造を理化学的に調査分析し、合わせて過去の処置事例を検討しながら、水漬状態の資料に対する乾燥方法を確定し、具体的に乾燥処理を行うことを目的とした事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】			
古谷毅（列品管理課主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室長）、川村佳男（列品管理課平常展調整室研究員）、土屋裕子（保存修復課保存修復室長）市元 壘（九州国立博物館企画課研究員）、永嶋正春（国立歴史民俗博物館情報資料研究系客員教授）、今津節生（九州国立博物館学芸研究部博物館科学課長）、高妻洋成（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長）、北野信彦（東京文化財研究所保存修復科学センター主任研究員）、望月幹夫（当館客員研究員）、松井敏也（筑波大学准教授・当館客員研究員）			
【主な成果】			
・修理仕様の策定を行い、修理前の事前調査を開始した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・水浸保管中の漆残片の保存状態、形状などについて定期的な点検調査を実施した。 ・奈良文化財研究所にて26年10月から28年9月末にかけて本格修理を行うことが決定した。館外での本格的な修理を前に、詳細な状態チェック及び処置前保存状態記録写真撮影を行った。また、奈良文化財研究所に搬入の際には、今後の調査についての打ち合わせを行った。 ・10月22日奈良文化財研究所において、古谷毅（東博）、土屋裕子（東博）、高妻洋成（奈文研）が今後の分析調査の方法、修理工程の内容について検討を行った。 			
			
搬出前の状態調査及び記録撮影			
【実績値】			
調査回数 6回 水浸保管中の漆残片の保存状態の調査を継続的に実施した。			
調査研究会 1回 古谷毅、高妻洋成、土屋裕子が参加して、修理についての検討を行った。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-7

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性	継続性	効率性		
判定	B	B	B	B		
<p>判定理由</p> <p>適時性：緊急性が高く、事業完了後は公開を目指した事業を実施した。</p> <p>正確性：理化学的調査で得られたデータに基づく修理計画立案を目的とする事業を実施した。</p> <p>継続性：26年10月から28年9月末にかけて本格修理を行うことが決定している。</p> <p>効率性：出土木材など類似の考古遺物の調査及び保存処置に経験が豊富な奈文研にて修理を行うことによって効率的な修理に繋がる。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査研究会回数				
判定	B	B				
<p>判定理由</p> <p>調査回数：年度内に十分な内容を伴う調査を予定通り実施した。</p> <p>調査研究会回数：予定通り1回の研究会を開催し、本格的修理に向けた検討を実施した。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本格修理に必要な成果を得て、26年10月より奈良文化財研究所にて本格修理を実施している。27年9月までは詳細な事前調査を行って現状を記録する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	漆塗籠棺残片の制作技法と修理方法の検討は順調に進み、修理にむけて事前状態記録撮影、奈文研への輸送、修理方針検討会を行なった。来年度9月期までに詳細な構造調査を経て、10月からは樹脂含浸作業へ移行する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査 ((5) -①)		
【事業概要】			
東京国立博物館所蔵の仏教絵画を対象として、東京文化財研究所のもつ高精度のデジタル画像調査による共同調査を行い、仏教絵画の価値認識を深め、劣化しない長期保存可能な最高レベルの記録を作成し、作品の保護に寄与することを旨とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】			
沖松健次郎（保存修復課保存修復室主任研究員）、小林達朗（東京文化財研究所主任研究員）、城野誠治（東京文化財研究所専門職員）、小林公治（東京文化財研究所広領域研究室長）、江村知子（東京文化財研究所主任研究員）、皿井舞（東京文化財研究所主任研究員）			
【主な成果】			
24年度に高精細デジタル画像撮影を行った国宝「普賢菩薩像 A-1」について東博・東文研両機関研究員による検討会を開催し、撮影画像をもとに「普賢菩薩像」に用いられた技法を詳細に観察、検討した結果、従来絵具で表されていると思われていた文様の一部が凹線によるものであることや、着衣の白く光る照量が従来の認識とは逆の構造によって作られていることなど、これまで認識されてこなかった細部の技巧についての知見を深めることができ、今後の平安仏画の美的表現の研究・公開に資するに足る重要な資料を得た。また、来年度も継続的に調査と検討を行うために国宝「孔雀明王像 A-11529」の高精細デジタル画像撮影を行った。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・国宝「普賢菩薩像」について 25年度に高精細デジタル画像撮影を行った TIFF 高精細画像 26 点、閲覧用ファイル（Zoomify 形式）26 組を受け入れ、調査成果の共有化を図った。 同画像をもとに東博・東文研両機関研究員による検討会を26年7月23日に東京文化財研究所において開催した。検討会の成果は、小林達朗（東京文化財研究所企画情報部主任研究員）が、26年12月9日に東博研究員の参加のもと、東京文化財研究所企画情報部研究会で「東京国立博物館蔵 国宝・普賢菩薩像の表現—附論 仏画における「荘厳」」と題して発表した。 ・国宝「孔雀明王像」について27年1月15日に高精細デジタル画像撮影を行った。 			
			
東京文化財研究所における検討会 (国宝「普賢菩薩像」)		国宝「孔雀明王像」調査・撮影風景	
【実績値】			
検討会回数 1回（「普賢菩薩像」26年7月23日 於東京文化財研究所）			
作品調査回数 1回（「孔雀明王像」27年1月15日 於東京国立博物館）			
研究発表回数 2回			
作成データ量 TIFF 高精細画像 26点、JPEG 画像等による Zoomify 形式 26組（「普賢菩薩像」）			
【備考】			
本年度は、このプロジェクトによって得られた「普賢菩薩像」の画像資料に基づいて東京文化財研究所スタッフ（小林達朗）による研究成果の発表が行われたほか、24年度に調査を行なった国宝「千手観音像 A-10506」の画像資料、およびその両機関の研究者による検討に基づいて、東京文化財研究所スタッフ（小林達朗）により「美しい術—国宝千手観音像の場合」（『「かたち」再考』東京文化財研究所編 26年12月17日）として研究成果が一般に公表され、充実したものとなった。			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日本美術史研究において重要な国宝の平安仏画を対象とした研究を、現在最高レベルの高精細調査技術を用いて共同研究を行った。これまでの研究成果が公開されたことで、研究者の高い注目を集め、今年度もそれに連続して調査報告がなされたため。 独創性：同機構内で貴重な文化財を管理するスタッフと最高レベルの高精細画像調査技術を持つスタッフが相互に補完しつつ重要な表現を持っているものを対象に選んで研究を行っているため。 発展性：細部の調査、認識による研究は、仏教絵画以外にも発展的に応用できる研究方法であるため。 効率性：異なる機関のスタッフによる共同研究のため、検討会に参加出来ないスタッフもいたが、スタッフの協力体制が確立しており、美術史的観点からポイントを絞って調査準備をおこなったことで効率のよい調査ができたため。 継続性：来年度も継続的に調査をする準備段階が確立しており、当初計画以上の技術的進歩がみられ、すでに調査済作品と継続しての比較検討がおこなわれているため。 正確性：最高レベルの高精細画像調査技術による調査がなされ多くの美術史上の知見が得られたため。						

2. 定量的評価

観点	検討会回数	作品調査回数	研究発表回数	作成データ量		
判定	B	B	A	B		
判定理由 検討会回数：東京国立博物館、東京文化財研究所のプロジェクトスタッフ以外にも、呼びかけを行い、非常に多くの参加者による充実した意見検討が行われ、従来認識されてこなかった細部の技巧についての知見が得られ予定の成果を残すことが出来た。 作品調査回数：本年度検討対象とした国宝「普賢菩薩像」については、高精細画像調査が昨年度に行われており、本年度には、国宝「孔雀明王像」について、高精細画像調査が行われ、来年度の検討・研究の準備を果たすことができた。 研究発表回数：「普賢菩薩像」の研究成果につき、外部の専門家を含む東博・東文研両機関の研究者が参加する場での研究発表を行うことができ、今後のさらなる研究の可能性について認識を共有できた。また24年度調査の「千手観音像」について、その成果の一部を上記東文研編の刊行書で公刊した。これにより、当初の研究者を対象とした報告だけでなく、一般にも広く成果を公表することができた。 作成データ量：TIFF 高精細画像 26点を記録し、JPEG 画像等によるZoomify形式による26組の閲覧用画像を共有することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高精細デジタル画像撮影の成果を美術史研究に反映させることで、より客観的研究体制を確立しており、画像情報調査のデータも継続的に蓄積が進んでいる。関係する研究者だけでなく広い対象への公開が行われるなど、研究成果の共有も進んでいる。次年度も継続的に調査を行う準備ができ、更なる研究の進化が期待できる状況にある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、共同研究をはじめて4年度目にあたる。個別作品の研究としても重要なプロジェクトであるが、対象とする調査作品を変えることで、研究が毎年蓄積され、総合的な判断へ向けての準備がなされている。これにより日本の仏教絵画に対する広範な視点による研究を導き出すことが可能になると考える。次年度も継続的に調査を行う体制が確立しており、正確性の高い研究により大きな研究成果を発信していくことが期待されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 創立 150 年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究 ((5)-①)		
【事業概要】			
平成 34 年度の東京国立博物館創立 150 年へ向けて、『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。25 年度は館内から収集した文書類に加え、過去に収集し整理を必要とする文書類の内容目録を作成した上、保存措置を講じる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】			
鷲塚麻季 (調査研究課主任研究員)、高橋裕次 (学芸企画部博物館情報課長)、保坂裕興 (客員研究員・学習院大学教授)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・館内各所から収集した、館史関係の文書記録・刊行物類を整理して目録を作成し、今後の館史編纂の利用に供することができるようにした。 ・資料の適切な保存を図るための措置を順次講じた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・アルバイト 1 名を採用し、定期的に資料整理作業を行った。 ・24 年度以前に収集整理した資料について、文書タイトル等の項目の目録への入力を継続した。 ・資料の良好な状態での保存を図るため、さびたクリップの除去、資料のクリーニング、中性紙封筒への入れ替えなどを実施した。 ・資料の所在に関する館内からの問い合わせ等に対応した。 			
			
保存のため中性紙の封筒に収納した館史資料			
【実績値】			
調査日数：83 日			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：創立 150 周年へ向けて、いち早く着手している。 独創性：当館は日本最古・最大級の博物館で、他にはない資料を対象としているため。 発展性：調査成果は今後の館史編纂に十分に反映されるため。 効率性：必要最小限の経費で実施しているため。 継続性：調査内容を標準化し、今後の継続的な調査に備えているため。 正確性：アーカイブズ学の専門家の指導を仰ぎ、方法・内容の正当性と正確さを確保しているため。						

2. 定量的評価

観点	調査日数					
判定	B					
判定理由 調査日数：執行可能な予算及び業務量の範囲で、最大の日数の調査を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	24 年度の本研究開始時に引き継いだ資料について、主に保存のための措置を講じ、今後の利用に供する準備を行った。27 年度以降の編纂事業に反映する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画 I-4-(1)-②「我が国の歴史、文化の究明及び理解の促進等を図るため、歴史資料・書跡資料等に関する調査・研究を実施する」を反映した事業として適切に実施している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究(科学研究費補助金)((5)-①)		
【事業概要】	<p>21年度東京国立博物館に一括寄贈された約1万件に及ぶ板谷家伝来資料について、デジタル撮影、データ整理を行い、データベース作成・公開への準備を進める。また、各古文書・絵画資料の画題や原本、伝来等について調査するとともに、板谷家作品を所蔵する機関にて現存作品調査を実施。これにより伝来資料について、資料そのものと現存作品との比較という両面から理解を深め、その成果を公開する。</p>		
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】	<p>池田宏(上席研究員)、小野真由美(列品管理課貸与特別観覧室主任研究員)、塚本鷹充(調査研究課東洋室研究員)、金井裕子(学芸企画部企画課特別展室研究員)、山下善也(調査研究課絵画彫刻室主任研究員)、瀬谷愛(列品管理課平常展調整室研究員)</p>		
【主な成果】	<p>伝来資料について、1,566点(4,027カット)の撮影を終了するとともに、並行して下絵と関連する原品作品の確認など知見の整理、絵画資料の調査、古文書の翻刻を行った。また、スタッフによる研究会と下絵作品の名称を決定するための画題研究会を開いた。本年度は、東京周辺と四国地方、海外所在の板谷派ならびに本家筋に当たる住吉派作品の調査を行った。</p>		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・伝来資料のデジタル撮影、データ整理 作品保存とデータベース公開のため、伝来資料のデジタル撮影、データ整理を、週2回のペースで行った。 ・調査の実施 東京国立博物館所蔵の住吉家、板谷家作品の調査を継続的に行った。また26年度は土佐山内家宝物資料館(26年8月26日)、徳島城博物館(8月27日)、国立ギメ東洋美術館(10月29日)、ライデン民族学博物館(10月31日)、大英博物館(11月3・4日)、松戸市戸定歴史館(27年3月23日)で実測や撮影等の調査を実施した。 ・研究会の実施 26年7月29～31日と、27年1月28・29日の2回、東京国立博物館内で、館外の研究者を交えて資料の内容を検討する調査研究会を行った。 画題研究会を11回行った。 		
			
	ライデン民族学博物館での調査	研究会(27年1月)	
【実績値】	<p>研究会回数 13回(調査研究会 2回、26年7月29～31日、27年1月28・29日、画題研究会11回) 外部調査回数 6回(国内調査回数 3回、海外調査回数 3回) 画像データ作成点数 1,566点 4,027カット</p>		
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名 東京国立博物館処理番号 4511-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	B	
<p>判定理由</p> <p>適時性：近年の御用絵師研究の進展に寄与する研究であり、他機関の展示で本研究の成果が確認され、新たな板谷派作品の情報が寄せられるなど研究成果が他機関にも波及し、研究成果に対して高い関心を集めているため。</p> <p>独創性：総数1万点を超える御用絵師資料の総括的研究は、これまでにないため。</p> <p>発展性：住吉家（本年調査を実施）・狩野家など板谷家以外の御用絵師の活動と連動した研究により、様々な研究が可能となるため。</p> <p>効率性：これまで御用絵師研究に関わってきた研究者の協力を得て効率の良い調査がなされているため。</p> <p>正確性：下絵・粉本等の総量が多いが、画題検討会を行い、精度を高めているため。</p>						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	外部調査回数	画像データ作成点数			
判定	A	B	B			
<p>判定理由</p> <p>研究会回数：館内での画題検討会11回のほか、館外の研究者を交えた研究会を2回開催するなど予定をこえる研究会の開催ができた。</p> <p>外部調査回数：海外を含め当初計画にもとづいた調査ができた。</p> <p>画像データ作成点数：卷子装作品など糊離れしやすい作品が多く、修理の必要があったが、それにもかかわらず予定数の撮影を行うことができた。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	撮影数等、本年度の当初目標を達成することができた。研究面では、海外作品調査を含み多くの作品の所在を確認し、目標以上の成果が得られた。保存状態の悪い作品の応急修理体制も確立し、次年度以降の撮影作業の準備態勢が確立された。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>本年度の撮影点数は、例年より少なかったが、これまでの撮影件数が当初予定より先行しているため、中期計画の予想以上の成果を達成し進捗している。また、本年度の途中で明らかになった撮影のために修理を必要とする作品に対しても、応急修理体制と人員増加体制を確立することができ、最終年度のデータ集約作業の目処がたっている。次年度は、研究成果の報告と、これまで蓄積した作品情報にもとづいた特集陳列を開催して、一般来館者にもわかりやすいかたちでの成果公開ができるよう準備が進んでいる。本年度後半からは、画題研究会を予定を上回る回数で開催することができるようになり、データ整理の正確性を高める体制も確立している。</p> <p>引き続きこれらのデータをもとに各資料に関する情報を精査し、利便性の高いデータベースの作成を追及していきたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11)中世聖徳太子絵伝の図像展開に関する調査研究(科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】			
本研究は日本における古代中世の大画面説話画の中でも、画題として比較的早い時期から成立し、多く描かれた主題のひとつである聖徳太子絵伝について、現存諸作品の詳細な調査に基づき、社会的・文化的・宗教的な動向や、他の説話画制作の状況も踏まえた上で、どのように図様が展開したのかを明らかにしようとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室主任研究員 沖松健次郎
【スタッフ】			
伊藤信二(学芸企画部広報室長)、土屋貴裕(列品管理課平常展調整室研究員)、瀬谷愛(列品管理課平常展調整室研究員)、小林達朗(東京文化財研究所企画情報部主任研究員)、谷口耕生(奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長)、朝賀浩(文化庁美術学芸課主任文化財調査官)、石川知彦(龍谷ミュージアム教授)、村松加奈子(龍谷ミュージアム研究員)、阿部泰郎(名古屋大学教授)			
【主な成果】			
①太子絵伝、あるいは関連する中世絵画について、博物館所蔵の作品、寄託品、及び特別展に出品された作品等の調査を実施することができた。			
②作品基礎データ、細部拡大写真などのデータ集積を行うことができた。			
③作品解説の充実、解説パネルの作成等、より効果的な展示に反映することができた。			
【年度実績概要】			
① 特別展「栄西と建仁寺」に出品の作品について調査を行った(2014年4月) 東博内で川合玉堂氏旧蔵の太子絵伝3幅について調査を行った(2014年10月上旬) 能登半島の結集寺院である岩倉寺や天王寺で奥能登地域の未調査の中近世仏画の調査を行った。(2014年10月24日・25日) 「日本国宝展」に出品の作品についてハンディデジタルマイクロスコープで絹目の拡大写真を撮影した。 (2014年12月10日)			
② 能登地域での寺院における調査では、一定空間に点在しながら行事をとおしてつながりのある寺院間での主題や図像の共通性などの傾向の一端が確認できた。 収蔵品の3幅本太子絵伝の調査では、本図のみ見られる図様の詳細について確認できた。 絹目の拡大写真と集めることで、時代や制作環境の判断材料となる基礎情報の蓄積をすることができた。			
③ 収蔵の3幅本の詳細な調査観察によって、分かりやすい場面解説パネルや作品解説の作成をすることができた。			
【実績値】			
調査・研究の回数 4回 調査・研究の成果を反映させた刊行物等 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	C	B	B
判定理由 適時性：従来体系的な検討の試みられなかった聖徳太子絵伝の研究を進める必要性は高いため。 独創性：絵画史のみならず、工芸、有職の知見から研究を進めるため。 発展性：聖徳太子絵伝のみならず、他の大画面説話画、中世仏画の今後の研究にも寄与するため。 効率性：太子絵伝作品の年度期間内でのデータ収集数が所期の目標に対して少なかった。 継続性：本研究は5ヵ年計画で進めており、次年度以降も継続的に研究を進めるための整備を行えた。 正確性：中世太子伝の比較検討のための対照表により、各事跡はより正確に把握することができるため。						

2. 定量的評価

観点	調査・研究の回数	調査・研究の成果を反映させた刊行物等				
判定	C	C				
判定理由 作品調査：関連作品についてはは予定より多くの調査を実施することができたが、太子絵伝そのものに関する調査は1回であった。 成果を反映させた刊行物等：聖徳太子絵伝（川合玉堂氏旧蔵3幅本）に関しては、件数としては1件だが、博物館の作品情報として詳しく整備されてこなかった場面解説を整備でき、今後の基礎情報とすることができた。						

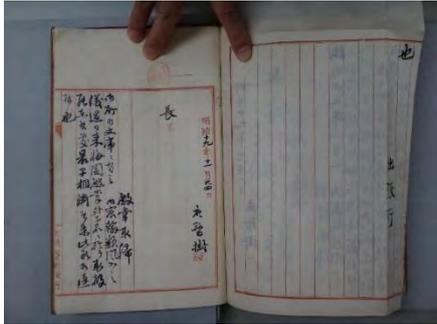
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年目である本年度は、現存作例の中でも独立した図様系統を示す作例の一つである川合玉堂氏旧蔵の3幅本について詳しく調査観察し、解説に反映できたこと、また、関連作品調査で絹目写真の集積や、地方寺院での仏画の制作・流通状況を知る上での基礎情報の収集を行うことができたことは意義が大きいと考える。しかし、課題として所蔵先との日程調整の関係で、肝心の太子絵伝作例の調査件数が目標より少なかったことが挙げられ、その対応として次年度以降では、太子絵伝そのものの調査の件数を更に充実させることに重点を置き、所蔵者との綿密な連絡、日程調整を重点的に行う。文献的な整備は、昨年度に引き続きデータ化を進めることができたので、次年度も引き続きデータ化作業を着実にやっていく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
C	関連作品の調査件数や内容については、所期の目標よりも上回る成果を得られていると考えるが、本来すべき聖徳太子絵伝の調査が遅れ気味であるため。 課題は聖徳太子絵伝の調査回数、件数を増やすことであり、その対応として作品の位置づけから調査実施優先度を振り分け、それに基づいて残りの期間で消化できる効率的な調査先の組み合わせと日程案を策定し、速やかな連絡調整を行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 模写資料における書の受容・鑑賞に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)-①)		
【事業概要】			
本研究は模写資料を調査することによって、書の受容や鑑賞の歴史を明らかにしようとするものである。東京国立博物館の蔵する模写資料の調査を実施し、写真撮影をして、ホームページ上で画像を公開する。また関連作品の調査、関連資料のデータ収集を行なうことから、個別研究も進めていく。東京国立博物館においては、模写資料に関する展示を企画し、模写を通じた鑑賞を提示するとともに、多様な鑑賞のあり方を示す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室客員研究員 恵美千鶴子
【スタッフ】			
島谷弘幸(副館長)			
【主な成果】			
<p>(1) 東京国立博物館所蔵の模写資料の調査・撮影を進めるとともに、個人蔵の模写資料の調査・撮影を行った。また、宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所、九州国立博物館、東山御文庫(御物)の関連史料を調査した。</p> <p>(2) 明治時代の東京国立博物館の模写活動や、明治～大正時代の田中親美による模写活動の一端を明らかにすることができた。また、平安～鎌倉時代の古写本の中にも本研究に関連性の高い資料を見つけることができた。</p> <p>(3) 特集「国宝再現 田中親美と模写の世界」(平成館企画展示室、10/15-12/7)に、東京国立博物館の模写活動を模本によって示すとともに、田中親美の未公開資料の展示とパネル解説、配布物(リーフレット)によってその模写活動を紹介した。また、成果を論文等で発表した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) ・東京国立博物館にて(7月14日・22日～23日):複製本「瑞穂帖」と「久能寺経」の撮影を行ない、細部の観察と伝来のわかる附属資料を確認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人所蔵者宅(5月28日、7月8日・14日):田中親美作成模本の調査と撮影、所蔵者より模本作成に関する聞き取り調査を行った。 ・個人所蔵先(27年1月21日):作品に附属する史料の調査と撮影を行った。 ・京都大学総合博物館(27年2月19日):模写資料の調査と撮影を行った。 ・宮内庁書陵部宮内公文書館(7月2日、8月18日、10月2日・30日ほか)、東京大学史料編纂所(4月2日、5月13日ほか)、九州国立博物館(4月14日)、東山御文庫(11月2日):近世から近代にかけて作品がどのように伝来したのかを明らかにするための関連史料の調査と撮影を行なった。 <p>(2) ・「久能寺経」の調査と撮影で、その伝来と修理に関する附属資料を確認できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・田中親美作成模本のうち未公開作品の確認と、その作成状況に関する新知見を得た。 ・近世～近代の皇室における作品伝来の一端を知ることができる資料を確認できた。 <p>(3) ・「久能寺経」の調査により明らかになった伝来は、特別展「日本国宝展」図録の作品解説に反映できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・田中親美作成模本の未公開作品を、特集「国宝再現 田中親美と模写の世界」で公開できた。また田中親美の模写作成に関する新知見を、同特集の配布物にて報告した。 			
			
宮内庁書陵部宮内公文書館にて関連史料の撮影			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> <li style="width: 50%;">・調査件数 156 件 <li style="width: 50%;">・撮影点数 409 点 <li style="width: 50%;">・画像登録点数 17 点 <li style="width: 50%;">・関連データ収集点数 4,544 点 <li style="width: 50%;">・関連データ入力点数 5,503 点 <li style="width: 50%;">・研究論文発表件数 5 件(①) 			
【備考】			
①恵美千鶴子「博物館制作『巖島神社蔵経模本』—明治の人々が見た『平家納経』」(東京国立博物館研究誌『MUSEUM』第651号、26年8月)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-12

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	A	A	B	A
判定理由 適時性：これまで未公開だった模写資料を撮影し、その画像をインターネットで公開することは必要性・公開性が高いといえる。 独創性：先行研究の少ない模写資料を研究対象として位置づけるものであり、新規性があり独創的であるといえる。 発展性：模写資料自体の研究も進めていくが、その画像を公開することから、歴史学や美術史、文学史などへの発展的研究を可能とするものである。 効率性：既存の施設やシステムを使用し、通常の業務の中でも調査研究を行なってきたため、効率的に進めることができた。 継続性：これまで蓄積されたデータを活用しながら、新たなデータ収集を恒常的に行なうことができた。 正確性：調査や撮影、データ収集を行なうだけでなく、得られたデータを分析して論文や展示として発表することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	撮影点数	画像登録点数	関連データ 収集点数	関連データ 入力点数	研究論文 発表件数
評価	B	B	C	B	B	S
判定理由 調査件数：東京国立博物館、宮内庁書陵部、個人の所蔵品を中心に十分に調査を行うことができた。 撮影点数：東京国立博物館所蔵分は目標件数に達しなかったが、予定にはなかった他の所蔵者の分を撮影することができた。 画像登録点数：個人の所蔵者の画像について、公開のための登録を行うことができなかったため、登録点数が少なかった。 関連データ収集点数：歴史的社会的関連資料のデータ収集、他の所蔵者からのデータ収集を目標通り実施できた。 関連データ入力点数：関連史料のデータ入力を十分に行うことができた。 研究論文発表件数：1年に1件を目標値としていたため、目標を大幅に上回る論文発表ができた。また、成果を広く公開することのできる展示と配布物作成を行うことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	通常の業務の中でも継続的・効率的に調査研究を進めることができ、調査件数や撮影点数は目標を達成することができた。インターネット公開のための画像登録件数は減少したが、データ収集やデータ入力により、本研究課題における研究や分析を進めることができ、論文発表を十二分に行なうことができた。また、本研究成果をテーマとする特集展示を行ない、配布物を作成することで、より広く成果を公開することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は、画像の登録件数の減少を除いて、ほぼ計画通りに実行することができた。次年度は、さらに効率的に進め、画像の登録件数が増加するように工夫して行ないたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
<p>【事業概要】 本研究は、幕末期における西欧の博物館との接触から、維新後における博物館の創設を経て、帝室博物館の成立に至る明治期を中心とした博物館史を、世界史的な視野で再構成するための基礎的な資料調査と研究を、特に所蔵品の流通に着目して行おうとするものである。 対象地域としてドイツ、イギリス、オーストラリアを選び、三カ年にわたって当時の文書や交換・寄贈された文化財を調査する。 あわせて、館史資料の撮影を進め、館史資料の公開・共有を目指す。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室長 白井克也
<p>【スタッフ】 伊藤嘉章(学芸企画部長)、 田良島哲(調査研究課長)、 鬼頭智美(学芸企画部企画課国際交流室長)、 土屋裕子(保存修復課保存修復室長)、 遠藤楽子(学芸企画部企画課出版企画室研究員)</p>			
<p>【主な成果】 (1) 本研究に関連した館史資料である『列品録』の項目一覧表を作成し、関係資料の積読を進めた。 これにより、東博とオーストラリアとの列品交換などの初期の交流の経緯について解明するとともに、いくつかの知見を得た。 (2) 館史資料のうち、『重要雑録』の高精細デジタル撮影を行い、『動物録』の撮影にも着手した。 (3) 本研究に関連した列品を調査した。 (4) 内外の関係機関に対し、聞き取り調査を行った。 これにより、明治初年における諸外の日本美術の収蔵状況や、東博に外国からもたらされた物品の国立科学博物館での収蔵状況を知った。 (5) 現地調査として、国内調査(国立科学博物館筑波研究施設)、海外調査(オーストラリア)を行った。 (6) メンバーと研究協力者による勉強会を開催した。</p>			
<p>【年度実績概要】 (1) 列品録調査 昨年度調査した高精細デジタル画像の項目一覧表を作成し、画像によりオーストラリア関係資料の積読を進め、実物の『列品録』調査を実施して内容を確認した。 これにより、東博とオーストラリアとの列品交換などの初期の交流の経緯について解明するとともに、『列品録』の編纂過程で生じた錯簡を発見し、『列品録』編纂過程の復元の手がかりを得た。また、『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真資料目録1』(1999)において「メルボルン万国博覧会」(1880年)として提示されている写真が、「メルボルン植民地博覧会」(1875年)のものであることを解明した。 (2) 『重要雑録』の高精細デジタル撮影を行い、さらに国立科学博物館筑波研究施設での国内調査成果にもとづき、『動物録』の撮影にも着手した。 (3) 列品調査 10月17日(金)にオーストラリアからもたらされた列品の見学会を開催、作品の遺存状況や特性を確認した。 (4) 聞き取り調査 5月22日(木)にスコットランド国立博物館のロジャー・バックランド氏より、同博物館の日本関係作品の由来についてインタビューした。 9月4日(木)にヴィクトリア国立美術館のウェイン・クロザー氏より、オーストラリアへの日本美術の流入例についてインタビューした。 10月10日(金)に国立科学博物館と館史研究に関する面談を実施し、今後の研究協力について打ち合わせるとともに、葬法が保有する資料の内容を確認し合った。 11月21日(金) ウィーン民族学博物館のベッティーナ・ツォーン氏より、ウィーン万博やシーボルトに関連した所蔵品について研究状況の意見交換をした。 (5) 現地調査 国内調査として1月16日(金)に国立科学博物館筑波研究施設を訪問し、オーストラリアからもたらされ科博に移管された旧天産列品とその台帳を調査し、その収蔵状況を確認した。 海外調査として1月26日(月)～2月1日(日)にオーストラリア博物館、西オーストラリア美術館、メルボルン博物館、ヴィクトリア国立美術館、王立植物園を訪問調査し、東博との交流にかかわる文書調査と作品調査を実施し、交換の経緯と、該当作品の現在の収蔵状況を明らかにした。 (6) メンバーと研究協力者による勉強会を開催し、館史資料を積読し、調査成果を今後の方針を確認した。</p>			
<p>【実績値】 現地調査回数 2回、デジタル撮影枚数 8,000コマ (参考値) 研究会回数 8回、聞き取り調査回数 4回</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-13

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本の国際化を近代にさかのぼって跡付ける内容であり、時宜にかなっている。 独創性：博物館資料の国際的な交流を時代背景とのかかわりから再認識しようとするものであり、新たな研究方法といえる。また、明治初期における日本とオーストラリアの関係に関する研究は従来あまり行われておらず、未解明の領域である。 発展性：館史資料の精密なカラー画像の公開を目指しており、今後の研究に貢献するところが大きい。さらに、国立科学博物館やオーストラリアの諸機関とも協力関係を構築できた。 効率性：東京国立博物館における館史資料の整理の成果のほか、他機関における研究成果を利用している。 継続性：研究代表者・研究分担者のこれまでの研究成果を踏まえ、発展させたものである。 正確性：館史資料の撮影を高い精度で進めた。						

2. 定量的評価

観点	現地調査回数	デジタル撮影枚数				
評価	B	B				
判定理由 現地調査回数：現地調査を十分に行うことができた。 デジタル撮影枚数：目標を上回るペースで撮影を行うことができた。						

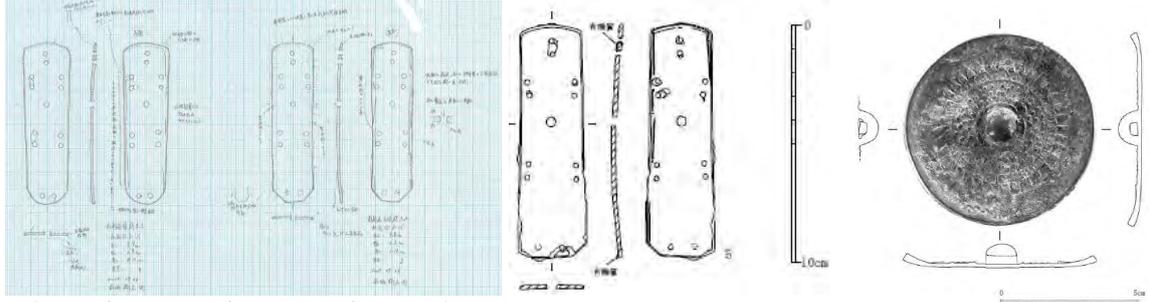
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度予定していた現地調査、館史資料のデジタル撮影、館史資料の積読などを滞りなく終えることができたうえ、国内外の関連分野の研究者との意見交換などにより、今後の研究の展望をひらくことができた。 特に、館史資料の積読を進めたことにより、『列品録』の編纂過程の手がかりを得たり、東博の出版物のデータの誤りを解明するなど、今後の館史研究の推進に役立つ多くの観点を得た。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は予定していた調査・撮影を滞りなく終えるとともに、これまでほとんど取り上げられてこなかった、日本とオーストラリアの博物館交流史の研究に、文書資料と作品の双方を活用して着手することができた。また、明治初期の列品の主体であった天産資料について、現在の所蔵者である国立科学博物館との協力関係を構築し、一部現地調査を行うことができたので、今後の調査を円滑に進めることができるようになった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 宮崎県西都原古墳群出土資料基礎調査 (共同調査) (5)-①		
【事業概要】			
西都原古墳群発掘調査 100 周年を記念して開催される特別展「西都原の 100 年 考古博の 10 年 そして、次の時代へ」への作品貸与を機に、両者が所有する出土遺物を詳細に比較検討することにより、学史的にも極めて重要である西都原古墳群の研究を大きく進展させることが期待できる。そのため、当館列品の遺物について、特別展での展示期間を含めて通常よりも長期の貸出を行い、同館において両館職員による共同作業を含めた調査を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】			
東 憲章(宮崎県立西都原考古博物館 副主幹: 研究代表者)・藤木 聡・吉永和美(以上、宮崎県立西都原考古博物館)・西嶋剛広(宮崎県宮崎市文化財課 主任技師)			
【主な成果】			
① 宮崎県立西都原考古博物館へ列品の長期貸与を行い、西都原古墳群発掘調査 100 周年記念特別展に協力した。 ② 宮崎県立西都原考古博物館で、双方の担当で列品に関する共同研究会を開催した。 ③ 年度末に、共同研究の研究成果報告書を作成した。			
【年度実績概要】			
1) 西都原古墳群発掘調査 100 周年を記念特別展「西都原の 100 年考古博の 10 年 そして、次の時代へ」[会期: 26 年 4 月 19 日(土) ~ 26 年 9 月 21 日(日)] へ長期貸与し、特別協力を行った。 2) 宮崎県立西都原考古博物館における共同研究会(26 年 8 月 30・31 日)を開催し、東京国立博物館所蔵資料の実測図作成および宮崎県出土遺物との比較検討を行った。 3) 年度末に刊行された『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』第 11 号に、共同調査報告書を掲載した。			
			
○調査資料: 宮崎県西都市西都原古墳群出土資料 [左: 小札(実測図)、中: 小札(報告書掲載図)、右: 朱文鏡(報告書掲載図)] (東京国立博物館蔵)			
【実績値】			
○共同調査日数 : 2 日間 ・調査件数 : 8 件 ・主な調査資料 : 宮崎県西都市 西都原古墳群出土資料 (東京国立博物館・宮崎県立西都原考古博物館 所蔵) ○論文等公開件数 : 1 件 (備考①)			
【備考】			
①古谷 毅・東 憲章・藤木 聡・吉永和美・西嶋剛広「西都原古墳群基礎調査における東京国立博物館との共同調査について—珠文鏡・銅釧・挂甲小札の報告—」『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』第 11 号、宮崎県立西都原考古博物館、pp.1 - 14、27 年 3 月 31 日			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-14

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	A	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：西都原古墳群発掘調査100周年記念事業の一環で、今年度の実施は緊急性と需要・必要性に富み、1912年から1917年に宮崎県・当館で共同事業として実施された同古墳群調査の共同研究として、公共性・公開性を備えている。</p> <p>独創性：上記と同じく西都原古墳群発掘調査100周年記念事業の一環として発想・着想され、新規事業として新規性に優れ、他期間では実施不能なオリジナリティや卓越性を備えている。</p> <p>発展性：わが国最初の公式な古墳調査として実施された西都原古墳群発掘調査の共同研究は、当館列品および日本考古学研究の多様性や応用性・汎用性に裨益し、他機関への影響性も大きいと期待される。</p> <p>効率性：時現、在双方に所蔵されている1912～1917年宮崎県・当館調査の同古墳群出土資料を直接比較・検討することにより、著しく時間的・設備的および人的投資に寄与することができた。</p> <p>継続性：期間、1997年から1999年に西都原古墳群出土(重要文化財)埴輪子持家・船の修理に当って、宮崎県の協力を得て進められ、2006年には当館収蔵埴輪資料を宮崎県立西都原考古博物館において調査しており、質・内容・量とも当該対象研究の基礎性に優れ、期間もこれまでの匈奴研究の経緯と時宜を得ていると思われる。</p> <p>正確性：本事業は共同研究として双方の参加者による相互確認によって、また対象資料の資料化(データ化)を目標として数値・データの把握を目標としているため、双方の機関所蔵資料の調査においては網羅性にも優れている。</p>						

2. 定量的評価

観点	共同調査日数	調査件数	論文等公開件数			
判定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <ul style="list-style-type: none"> 共同調査日数：おおむね必要な日数は実施できた。 調査件数：単年度事業として、おおむね適切である。 論文等公開件数：年度内に公表し、単年度事業としておおむね適切である。 						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、単年度事業としておおむね順調であった。また、研究予算運用の効率性・適時性は適切で、今後さらに研究・分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図る必要がある。単年度事業ではあるが、これらの成果として研究成果報告書を刊行した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析および学術的評価に関する十分な考古学的情報の整備ができた。また、展示・解説(論文・講演・ニュース等)・出版等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として、研究成果報告書に反映させることができ、十分な蓄積を行うことができたと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。また、今後は研究会等の充実により、さらに高度な効率性・適時性および発展性・独創性の確立が課題である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15) 「家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究」(学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】			
<p>日本古代国家形成期である古墳時代の葬送儀礼を家形埴輪の群構成と階層性から分析・研究する。とくに東アジア農耕社会の集落建築や家形造形品との比較・検討から、古墳時代社会の安定と成長に大きな役割を果たした古墳葬送儀礼とその背景にある古墳時代他界観(世界観)を解明するための基礎研究の確立を目的とする。</p> <p>また、これまでの科学研究費補助金C(2000～2002年度)・同 B(2005～2007年度)の調査・研究成果と併せ、総合研究報告書の作成準備を進める。</p>			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】 犬木 努(大阪大谷大学 文学部教授)			
【主な成果】			
<p>科学研究費補助金C・B(2000～2002・2005～2007年度)による調査・研究成果に基づき、各地の主要古墳出土埴輪群の分析結果の検討と研究会を実施し、本年度は次のような活動および成果があった。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 東京都・大阪府・福岡県・石川県で共同研究会を開催した。 ② 大阪府・石川県で埴輪の調査を実施した。 ③ 年度末に、研究成果報告書を作成した。 			
【年度実績概要】			
<p>①東京国立博物館(26年5月27日)、高槻市立今城塚古代歴史館・茨木市立文化財資料館(同6月7・8日)、九州大学・福岡市博物館(同7月20・21日)、および小松市埋蔵文化財センター(同10月11～13日)に研究会を実施した。古代窯業生産体制に関する先行研究の分析・検討に関して、表記テーマに関する発表と討論を行うとともに、問題点の把握と整理に努めた。また、調査資料の把握と資料化のための基礎資料を得た。</p> <p>②大阪府高槻市立今城塚古代歴史館・茨木市立文化財資料館で所蔵埴輪の調査を行った。また、小松市埋蔵文化財センターで、小松市矢田野エジリ古墳出土埴輪の調査を実施し、写真撮影・調書作成を通じて、資料の把握と資料化のための基礎資料を得た。</p> <p>③年度末に23～26(2010～2014)年度科学研究費基盤研究C(2)[研究課題番号:23520943]成果報告書を刊行した。</p>			
			
<p>○共同研究会：資料調査と共催者(小松市埋蔵文化財センター所長 榎田誠氏)による講演風景 〔於：小松市埋蔵文化財センター〕</p>			
【実績値】			
<p>○調査日数 : 3日間</p> <p>・調査件数 : 約40件</p> <p>・主な調査資料 : 大阪府高槻市今城塚古墳出土埴輪(高槻市立今城塚古代歴史館蔵)、同 茨木市内出土埴輪(茨木市立文化財資料館蔵)、矢田野エジリ古墳出土埴輪(小松市埋蔵文化財センター)など</p> <p>○研究会日数 : 5日間</p> <p>○論文等公開件数 : 3件(備考①～③)</p> <p>○成果刊行物等 : 『家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究』23～26(2010～2014)年度科学研究費 基盤研究C(2)[研究課題番号:23520943]</p>			
成果報告書、東京国立博物館、27年3月31日			
【備考】			
<p>①古谷 毅「中小古墳と大型古墳－再整理からみた七観古墳の歴史的的位置－」『巨大古墳あらかわ - 履中天皇陵古墳を考える -』(第四回百舌鳥古墳群講演会記録集)堺市文化財講演会録第7集、堺市文化観光局文化部文化財課、pp.27-73、27年2月27日</p> <p>②犬木 努「轟俊二郎が採集した埴輪片－『埴輪研究第1冊』の原風景－」『博古研究』第47号、博古研究会、pp.9-26、2014年4月</p> <p>③犬木 努「西都原古墳群の埴輪－「平成調査」から「大正調査」へ－」『西都原古墳群総括報告書』宮崎県立西都原考古博物館、pp.93-114、2015年3月31日</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-15

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	A	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：配分を受けた既存の科学研究費による調査・研究成果の公開性において必要性・必要性がある。また、昨年度韓国研究会を開催し国際性と早期の公開を目指した概要報告(研究成果報告書)の作成で公開性も一定程度達成した。</p> <p>独創性：古墳時代労働編制研究の視角を中心にして発想・着想しており、埴輪研究においてはオリジナリティ及び新規性には優れ、また実物資料で検証する方法はある程度卓越性を備えていると思われる。</p> <p>発展性：従来の円筒埴輪中心であった埴輪研究に比べ、多様な形象埴輪を対象としており、研究の多様性・汎用性に適合すると共に、研究視角の面では考古学および古代史研究に与える応用性・影響性などに一定の成果があると思われる。</p> <p>効率性：連携研究者と共に日本古代史研究者を含む多数の研究協力者を得ており、予算運用の時間的・人的投資について有効であると思われる。一方、設備的投資については、消耗品を含めてほとんど行なっていない</p> <p>継続性：これまで交付された科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正で、質・内容・量ともに従来の調査・研究例を上回っており、本研究テーマの資料的基盤を構築する基礎性に優れている。</p> <p>正確性：実測図の作成はほとんど行っていない点に課題はあるが、数値・データに関してはすでに写真撮影だけでも30,000カットを超えており、達成値・網羅性については従来の調査研究事例に類似する成果は見られない。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開件数	成果刊行物		
判定	B	B	B	A		
<p>判定理由</p> <ul style="list-style-type: none"> 調査日数：展示室改修等で十分とはいえないが、おおむね必要な日数は実施できた。 研究会日数：日本古代史研究者を含む多数の研究協力者を得て、最低限の研究会を開催した。 論文等公開件数：公開性に鑑みても、さらに努力が求められると思われる。 成果刊行物：4カ年の研究成果概要報告として総頁数200頁を超え、公開性はある程度達成できたと思われる。 						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続性については変更の必要が認められないと考えられ、他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、補足調査と調査精度の向上をさらに高める必要があり、東京国立博物館所蔵資料(列品)の整理・分析は不十分であった。しかし、研究予算運用の効率性・適時性を高めることができ、研究会ではさらに研究・分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図ることができた。これらの成果として、最終年度として研究成果報告書をまとめ刊行した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析及び学術的評価に関する十分な考古学的情報、及び展示・解説(論文・講演・ニュース等)・出版等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として、十分な蓄積を行うことができたと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。また、今年度は研究会の充実により高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることができ、最終年度として研究成果報告書に反映させることができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) 縄文時代における浅鉢形土器の研究 (学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】			
日本先史時代における社会構造の解明を研究テーマとする。特に縄文時代中期 (BC5000~4000年) の東日本における浅鉢形土器の型式学的検討と具体的な機能の検討を通じ、当該期の集団間の物質文化の流通の把握を目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室研究員 井出 浩正
【スタッフ】			
【主な成果】			
<p>(1) 遺跡出土浅鉢のデータベース化：文献調査</p> <ul style="list-style-type: none"> 以下の対象地域に関する文献（発掘調査報告書等）の精査と文献複写作業 （対象地域：埼玉県、新潟県、福島県、群馬県の一部） <p>(2) 浅鉢形土器の資料調査（写真撮影・観察・計測等）</p> <ul style="list-style-type: none"> 東北地方の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。 群馬県内及び茨城県内出土の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。 長野県東信地方出土の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。 			
【年度実績概要】			
<p>(1) 早稲田大学図書館において当該地域に関する文献調査（図書検索と文献複写）を実施（26年7月～9月の土曜日に4回）</p> <ul style="list-style-type: none"> 群馬県渋川市（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（発掘情報館）において群馬県内の文献調査（図書検索と文献複写）を実施（27年3月1日） <p>(2) 岩手県盛岡市遺跡の学び館にて岩県内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察など）を行った（26年9月4日）</p> <ul style="list-style-type: none"> 群馬県前橋市毛野考古学研究所において、群馬県内及び茨城県内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察・計測など）を行った（26年11月4日） 長野県北佐久郡御代田町浅間縄文ミュージアムにおいて町内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察・計測など）を行った（27年2月13～14日） 群馬県渋川市（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（発掘情報館）において群馬県内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察）を行った（27年3月1日） 長野県南佐久郡北相木村考古博物館において町内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察・計測など）を行った（27年3月6～8日） 			
			
資料調査風景（観察）			
【実績値】			
文献調査：5回 調査・研究回数：5回 成果の発表：1回(①)			
【備考】			
成果の発表 ①井出浩正「縄文時代のうつわを考える」（2014年11月8日東京国立博物館月例講演会）			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-16

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	A	B	B	B
判定理由 適時性：これまでに資料の蓄積と解析手法があり、新たな研究視点を導入する段階にあるため。 独創性：研究対象としてこれまで注目されていない資料群のデータベース化が進んだ結果、饗宴や葬送儀礼の観点から当該資料群へのアプローチが可能となったため。 発展性：定量的、総括的なデータベースによって浅鉢形土器を含む縄文土器の使用方法について知見が得られ、新たに我が国の饗宴史及び葬送儀礼の観点からの研究展開が見込めるため。 効率性：当該研究の進捗過程において必要性の高くなった地域に対する集約的な資料調査を新たに加えて実施したため。 継続性：データベース化と資料調査が当初の計画通りに実施したため。 正確性：データベース化の際には悉皆的な文献検索を行い、また資料調査の際には必ず確認用の撮影記録と肉眼観察を行っているため。						

2. 定量的評価

観点	文献調査	調査・研究回数	成果の発表			
評定	B	A	B			
判定理由 文献調査：当初の計画通りに達成した。 調査・研究回数：当初の計画通りに達成したほか、研究の過程で調査の必要性が高まった地域へ新たに追加の調査を2度実施した。 成果の発表：当該研究の成果の公開を目的とする発表を実施した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当該研究の対象地域での資料調査については、前年度から継続した分と併せ目標を達成した。また、現地での資料調査については、研究の進捗によって群馬県西部及び長野県東部の調査が必要となったが、そうした地域を含め、当初予定を達成することができた。 それらの諸成果を踏まえ、研究成果の公開を目的とする発表を実施できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年は最終年度となり、これまで2カ年にわたる研究課題について、当初の計画どおりに進捗している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 博物館における文化財の情報資源化に関する研究(科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】			
<p>本研究は、博物館が収集した文化財と関連する資料(図書・文書など)の分析と整理、データ化を行い、文化財との相互の関連付けを行うことで、これらを一元的に管理し、必要なときに引き出して活用できる博物館アーカイブズを構築する。さらに他の研究機関と情報の共有化を図るため、情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論を、実践をとおして研究する。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】			
<p>伊藤嘉章(部長)、浅見龍介(併任 学芸研究部)、丸山士郎(学芸研究部列品管理課平常展調整室長)、 恵美千鶴子(学芸研究部 客員研究員)、村田良二(博物館情報課情報管理室長)、横山梓(企画課特別展室研究員)</p>			
【主な成果】			
<p>① 文化財に関連する目録類、図書、各種文書など基礎資料のリストを検討し、その全体像を明らかにした。さらに、分類法の検討を行った。</p> <p>② 文化財と関連資料について、それぞれのデジタル化によって、相互の関連付けが可能となった。</p> <p>③ 研究の成果を統合データベースに反映するための準備を行った。</p>			
【年度実績概要】			
<p>① 調査の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化財に関連する目録類、図書、文書などのリストをまとめ、各資料の作成時期、保管の状況を考慮した上で、資料群としてのまとまりを尊重しながら、分類法を検討した。 ・展覧会図録については、文化財の具体的な活用を示す記録として、できるだけ多くの情報の抽出につとめた。 ・博物館の草創期以来、文化財を主な対象として撮影されてきた写真資料のデジタル化を推進した。 <p>② 研究の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・列品録、重要雑録など主要な資料の目次のデータベースを作成したことで、研究の利便性が向上した。 ・博物館の機能との関わりのなかで作成された資料を、文化財の活用という観点からとらえることで、文化財と関連資料との相互の関連付けが可能となった。 <p>③ 成果の公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の成果を統合データベースに反映させる準備に着手したことで、文化財の情報資源化の方法論を研究するための基礎作業を進めることができた。 			
【実績値】			
<p>調査件数 16,000 件 写真撮影件数 154 件 フィルムデジタルデータ変換 131,903 点 公文書テキストデータ化 770,000 文字</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-17

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：東京国立博物館百五十年史の編纂に向けて、こうした基礎作業を推進する必要がある。 独創性：日本における博物館の発展の歴史を考える上で、文化財の情報資源化という新しい考え方を導入している。 発展性：博物館、図書館、文書館といういわゆる MLLA 連携を見据えた発展性のある課題に取り組んでいる。 効率性：まず基礎データの整理を実施し、全体像を把握するといった、効率性を考慮した手順で作業を進めている。 継続性：科学研究費補助金による4ヵ年事業の初年度として実施している。 正確性：すべての情報をデータベースに入力することで、数値や網羅性において正確を期している。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影件数	フィルムデジタル化点数	公文書テキストデータ化		
判定	B	B	B	B		
判定理由 調査件数：当初の計画に基づき作品調査を実施できた。 写真撮影件数：当初の計画に基づき公開用の画像を撮影できた。 フィルムデジタルデータ変換件数：当初の計画に基づき作品のデータ変換を実施できた。 公文書テキストデータ化件数：当初の計画に基づき公文書のテキストデータ化を実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京国立博物館百五十年史の編纂に向けた作業のなかで、文化財の情報資源化という新しい考え方を導入して、MLLA 連携を見据えたデータベースの構築をめざし、計画的に調査・研究を行い、所期の目標を達成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費補助金として実施している事業であり、4ヵ年計画の初年度として、計画に従って着実に進め、所期の目標を達成している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	18) 古墳時代の農具研究 (科学研究補助金) ((5)-①)		
【事業概要】			
農具鉄製刃先にかんする基礎的な概念や分類、変遷など新たな分析視角を導入することで、古墳時代の社会経済や祭祀を読み解くための基礎研究となる書籍『古墳時代の農具研究』を刊行することが本事業の目的である。26年8月に(株)雄山閣より書籍を公刊でき、本事業の目的は達成した。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室アソシエイトフェロー 河野正訓
【スタッフ】			
【主な成果】			
(1) 雄山閣より単著『古墳時代の農具研究』(総数285頁、26年8月25日)を刊行した。 (2) 本研究成果を、アメリカや韓国、日本で開催された学会や研究会にて紹介した。			
【年度実績概要】			
(1) 『古墳時代の農具研究』の刊行(備考①) (株)雄山閣とで前年度中に出版に関する詳細な打ち合わせを済ませているため、26年8月25日に本書を500部刊行できた。30部を研究機関や研究者に無償で謹呈し、残り470部を販売することで広く社会に研究成果を提供した。			
(2) 研究発表等 『古墳時代の農具研究』の概要をアメリカで開催されたSAA(Society For American Archaeology)にて発表した(備考②)。また、韓国釜山で開催された研究会(備考③)や、日本の中国四国前方後円墳研究会(備考④)にて、本研究成果を継承・発展する形で口頭発表を行った。			
			
『古墳時代の農具研究』			
【実績値】			
(1) 書籍 1冊(備考①) (2) 口頭発表 3件(備考②～④)			
【備考】			
書籍 ①河野正訓『古墳時代の農具研究』雄山閣(26年8月25日)			
口頭発表 ②Masanori KAWANO, Nature of Authority during the Kofun Period from the Standpoint of Iron Agricultural Tools, SAA(Society For American Archaeology) 79th Annual Meeting 26年4月26日 ③河野正訓「古墳・三国時代における外来系農工具の定着過程」(「韓日交渉 考古学—三国・古墳時代—」研究会第2回共同研究会 26年10月31日) ④河野正訓「古墳時代前期の農工漁具の編年」(中四国前方後円墳研究会第17回研究集会 26年11月30日)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-18

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：館内の考古展示室をリニューアルする上で参考となる書籍を刊行できたため。 独創性：農具鉄製刃先を考古学的に検討して1冊にまとめた類書はないため。 発展性：海外の研究会・学会への発表依頼が来るなど、研究が国外からも注目されているため。 効率性：成果物を書籍として出版したことで情報公開が促進されたため。 継続性：成果の大半が基礎研究であるゆえ、本成果をもとに研究を発展的に継続できている。 正確性：目標として掲げていた書籍の出版を達成した。						

2. 定量的評価

観点	書籍	口頭発表				
評定	B	A				
判定理由 書籍：当初予定のとおり、研究成果を出版することができた。 口頭発表：予定にはなかったが、アメリカや韓国などで本成果をもとに発表できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の予定通り、書籍を刊行することができ、古墳時代研究に与える影響は大きかった。さらに科学研究費研究成果公開促進費（学術図書）という性格上、計画には挙げていないが、世界的学会で本成果を紹介し、研究を進展する形で韓国や日本で発表できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	単年度で行う学術図書の研究成果公開であり、当初の目標のとおり書籍を刊行することができた。次年度は、日々の業務との連携を図り、本成果をもとに館内外の古墳時代資料の報告を行い、査読誌に論文を公表するとともに、講演やギャラリートーク、研究発表をおこなうことで研究を広く社会に還元していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	19) 古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史的研究(科学研究費補助金)(5)-①)		
【事業概要】 本研究は我が国において伝来、また出土した染織作品を通じ、広く古代東アジア世界における染織文化の実像を明らかにしようとする試みである。これまで日本染織史の分野で研究されてきた作品を国際的な文化交流の枠組みで捕らえなおし、我が国に伝来した染織作品がもつ意義の大きさを明らかにしたい。また、考古遺物に付着した繊維を詳細に検討することで、現在では形の失われた作品の遺存状態や織物などの種類や仕様等とおして現存作品と比較検討し、古代東アジアにおける染織品の使用法についても、その実態の解明を目指すものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	客員研究員 澤田むつ代
【スタッフ】 三田覚之(調査研究課工芸室員)			
【主な成果】 (1) 染織作品館内調査等：東京国立博物館・法隆寺宝物館所蔵の染織品(以下、法隆寺裂)のうち、列品(登録されている染織品)と未整理品(未登録の染織品)の調査と写真撮影を行い、資料の蓄積を行った。これらは点数が多いため、次年度以降も継続して行う予定である。これらの成果として、博物館において特集陳列「甦った飛鳥・奈良染織の美」を開催して、リーフレットを制作し、列品解説も行なった。また、文化財保存修復学会においてポスター発表を行った。さらに、法隆寺裂の献納経緯と技法・文様等について外部講演を行った。昨年調査を行った正倉院所在の法隆寺裂についての詳細を『正倉院紀要』において論文発表した。 (2) 考古作品外部調査：金鈴塚古墳出土品(千葉県・木更津市郷土博物館金のすず)、瓢塚古墳出土品(千葉県成田市・房総のむら風土記の丘資料館)、石原稻荷山古墳等出土品(群馬県・高崎市観音塚資料館)、マケン堀横穴墓出土品(鳥取県西伯郡南部町教育委員会)、上塩冶横穴墓出土品(島根県埋蔵文化財センター)、九州国立博物館開催の「古代日本と百済の交流」展、島内地下式横穴墓出土品(宮崎県・えびの市歴史資料館)、入石塚古墳出土品(埼玉県・坂戸市立歴史民俗資料館)。上記、各出土品については調査及び写真撮影を行い資料の収集等を行った。			
【年度実績概要】 (1) 館内調査 ・上記1の法隆寺裂については、他の染織品と同一条件で比較するため、スケール入りによる写真撮影と調査を行い、データの蓄積につとめた。 ・法隆寺裂の一部について文化財保存修復学会(第36回大会、明治大学アカデミーコモン)で研究成果をポスター発表で公表し、『研究発表要旨集』の執筆も行った。 ・法隆寺裂の一部について特集陳列を実施し、リーフレット制作と列品解説を行った。 ・法隆寺裂の献納経緯と作品の種類と技法等について外部講演を行なった。 (2) 外部調査 ・金鈴塚古墳出土品の調査を3回行い(写真撮影と作品調査)基礎データの収集及び成果発表を行った。また、研究成果を論文としてまとめ、『金鈴塚古墳研究』3号に執筆した(27年3月末刊行)。さらに、その一部を東アジア考古研究会で発表した。 ・瓢塚古墳出土品調査を1回行い、調査報告書(調査概要等)を提出した。 ・石原稻荷山古墳出土品調査を1回行い、調査報告書(調査概要等)を提出した。 ・マケン堀横穴墓出土品調査を1回行い、調査報告書(調査概要等)を提出した。 ・上塩冶横穴墓出土品調査を1回行い、調査報告書(調査概要等)を提出した。 ・「正倉院展」において法隆寺裂との関連について、基礎データを収集した。 ・正倉院所在の法隆寺裂について、正倉院裂所蔵の膨大な写真資料を調査(25年度)し、26年度の『正倉院紀要』にて研究成果を発表した。			
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 70%;"> <p>特集陳列掲載作品： 淡茶地白虎文描繪綾天蓋垂飾</p> </div>  </div>			
【実績値】 ・調査件数：8件(館内調査1、外部調査8(うち参考値1))、写真撮影点数約1,200枚、研究発表等13件(論文発表2件(①~②)、学会発表1件(③)、シンポジウム発表1件、講演4件(④~⑥)、展覧会1件(⑦)、報告書4件)			
【備考】 ①論文発表：「正倉院所在の法隆寺献納宝物染織品一錦と綾を中心に」(『正倉院紀要』第36号、2014年3月) ②論文発表：「武者塚古墳出土の遺体の埋葬仕様と経錦について」(『特別展 武者塚古墳とその時代』2014年10月) ③学会発表：「劣化で一部粉状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例—東京国立博物館所蔵作品の事例—」(文化財保存修復学会、2014年6月7日、東京・明治大学アカデミーコモン) ④講演：「法隆寺と正倉院の染織品—用途にみる形状の違い—」(中国四川省成都・成都博物院・四川大学、2014年12月3日) ⑤講演：「武者塚古墳出土の遺体の埋葬仕様と経錦の用途について」(上高津貝塚ふるさと歴史の広場主催、土浦市亀城プラザ文化ホール、2014年11月9日) ⑥講演：「飛鳥～奈良時代の金糸の変遷—金鈴塚古墳出土の金糸を中心に—」(金鈴塚古墳研究会、千葉県木更津市郷土博物館金のすず、2014年8月10日) ⑦展覧会：特集陳列「甦った飛鳥・奈良染織の美」(東京国立博物館・法隆寺宝物館、2014年8月19日～9月15日)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-19

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	A	B	B	B
判定理由 適時性：考古の遺物に付着する繊維等については、発掘調査報告書刊行には欠かせない要素になってきており、需要が高まってきていることから、本格的に調査を行うようになったため。 独創性：これまで染織は染織史、考古は遺物中心で、その扱う分野自体が縦割りに分割されてきたため、学際的な視点から見直されることは極めて稀であった。このため、相互の研究交流があつてこそ、はじめて実像が見えてくるに違いないと考えてことから、両研究分野の橋渡しを意図している。こうした視点で横断的に分野を越えた研究は、これまでほとんど行われておらず独創性がある。 発展性：考古の分野において、しばしば遺物に付着する繊維が発見されている。これらを染織の立場で仔細に調査し、法隆寺裂等の知見を活用することで、付着繊維の技法や用途等を明らかにすることができ、これまで関心が薄かった分野における研究を進展させることができた。 効率性：考古の研究者にあつては付着繊維の種類、技法、用途等に関心が高まってきているため。 継続性：これまでの調査研究を踏まえた資料の収集と外部の考古遺物に付着する繊維について、調査依頼もあることから、調査を積極的に行う予定である。 正確性：考古の研究者間では繊維について感心はあつても踏み込んだ研究がなされていないことから、古代の染織研究者が入ることで、横断的で幅広い研究が可能になる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	研究発表等			
評定	B	B	B			
判定理由 調査件数：外部調査については、今年度の目標の件数はこなすことができた。 写真撮影点数：考古の遺物に付着した繊維については、予定以上の撮影を行うことができた。 研究発表等：論文の一つである「正倉院所在の法隆寺献納宝物染織品一錦と綾を中心に一」については、これまで誰も行っていない画期的なものであり、新聞紙上にも取り上げられた。また、学会発表では「劣化で一部粉状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例—東京国立博物館所蔵作品の事例—」について法隆寺裂の修理の事例を公開でき、一般及び研究者にも関心をもっていただけた。さらに、考古の分野でも遺物に付着した繊維については、仕様や用途について法隆寺裂を基に推測し、これまでにない研究発表を行うことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	内部調査の法隆寺裂については、染織の列品として登録されているが、ほとんど展示されたことのない法隆寺伝来裂等の調査及び修理をすることにより、これまで公開できなかった作品を、特集陳列で一般に広く公開することができた。また、リーフレットを制作したことで、来館者によりわかりやすいものとなった。さらに、展示作品の列品解説を行って、直に作品の魅力を伝えることができた。外部調査については、次年度以降も、各所に調査場所を広げていきたいと考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺裂については、これまでスケールを入れての撮影はほとんど行われていなかった。スケールを入れることで、同種の織物等の文様や織り密度等を画面上で比較検討することができるようになる。また、これまで調査や修理等が行われていない作品についても、詳細な調査を行うことで、適切な修理の仕様と保存方法について検討し、後世へ安定した状態で伝えていきたい。 考古の分野において、しばしば遺物に織物等が付着していることがある。これらは考古の研究者においては関心があつても、踏み込んだ研究がなされていないのが現状のようである。こうしたことから、織物の付着状況を通してその種類や仕様を検討することで、棺内や古墳等に遺物を埋納する際に、織物がどのようにかかわっていたかを見極めることは非常に重要であると考えている。ひいては遺体の埋葬仕様を推測することも可能になると考えている。遺物に付着する織物等については、外部からの調査依頼もあり、今後もこの分野においては発展性が見込まれるため、積極的に調査を実施し、考古の遺物に付着する織物等から古代裂における織物等の発展について橋渡しをしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	20) 法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究(学術研究助成基金助成金)((5)-①)		
【事業概要】			
<p>法隆寺献納宝物として東京国立博物館が所蔵する法隆寺伝来の上代裂(じょうだいぎれ 古代の織物)を中心に、献納宝物及び正倉院宝物の歴史的・文化的背景を造形の側から明らかにするとともに、現在バラバラの状態では保管されている上代裂について、本来作品として仕立てられていた当時の組み合わせを作品調査に基づいて明らかにする。また未解明な部分が多い法隆寺裂の全体像(数量・技法・文様)についても作品調査と写真撮影によってデータベース化を図り、写真つき目録の形にする予定である。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室 研究員 三田覚之
【スタッフ】			
【主な成果】			
<p>(1) 韓国での考古遺物調査。法隆寺献納宝物の一部と推定される唐櫃の調査。 (2) 韓国における調査の結果、武寧王陵出土品な陵山里古墳群出土品、また弥勒寺西石塔出土品など、百済の遺物に著しい共通点が見られることを確認した。唐櫃調査の結果、同作が法隆寺献納宝物の一部であり、かつては現在宝物館で保管されている上代裂を納めていた可能性が高くなった。 (3) 韓国での考古遺物調査の成果として、今後献納宝物との比較研究に関する論文を執筆予定。また現在本研究の一環として上代裂の修理報告書の定期的な発表を目指しており、その第一回目の論文中に調査した唐櫃の概要と上代裂との関係について執筆した(『MUSEUM』655号掲載予定)。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 韓国での調査 10月20日～30日：国立中央博物館、松林寺(石製舍利外容器の調査)、大国立邱博物館(松林寺五層石塔出土品の調査)、国立公州博物館(武寧王陵出土品の調査)、国立扶余文化財研究所(王興寺址出土品調査)、国立扶余博物館(陵山里古墳群の出土品調査)、国立全州博物館(王宮里五層石塔出土品の調査)、益山弥勒寺址(弥勒寺西石塔出土品の調査)。 (2) 国内での調査 法隆寺献納宝物の染織品調査(通年)、東京国立博物館の唐櫃調査(12月～27年1月)。 (3) 韓国での調査は主に金工作品に注目して行った。献納宝物のうちには年代や制作地が不明のものが多くこのこされている。そうした作品の造形的な特長を近年韓国で発掘された考古遺物と比較研究した。その結果、百済の美術、なかでも6世紀末から7世紀はじめの作品と多くの類似性が見出せた。これはちょうど聖徳太子が活躍していた時期にあたり、太子周辺を主導とした古代の日韓交流について、実作品を通じて跡付けることができた。 また、献納宝物の染織作品に対する調査で得た知見を、現在行われている法隆寺裂の保存修理に反映させることができた。</p>			
		<p>(4) 韓国での調査成果については口頭発表を行った。この内容については論文にまとめ『MUSEUM』に投稿する予定である。また、上記(3)でも述べたように、現在館内においては継続して法隆寺裂の保存修理が行われている。作品の調査に基づいて、現在はバラバラの状態である作品本来の形を推定することが可能となったため、これを反映した修理を行った。なお、現在本研究の一環として上代裂の修理報告書の定期的な発表を目指しており、その第一回目の論文中に調査した唐櫃の概要と上代裂との関係について執筆した(『MUSEUM』655号掲載予定)。</p>	
法隆寺献納宝物の染織品調査			
【実績値】			
・調査9箇所(国外1箇所、国内8箇所)・写真撮影点数約1,000枚・研究発表2件(①～②)・論文発表3件(③～⑤)			
【備考】			
研究発表			
①「法隆寺献納宝物における百済系文物」、26年10月29日、於 韓国国立中央博物館			
②「日本・韓国 学術交流報告会—法隆寺献納宝物の源流を求めて—」、26年12月18日、於 東京国立博物館			
論文発表			
③「玉虫厨子本尊変遷考」、『仏教美術論集3 図像学Ⅱ—イメージの成立と伝承(浄土教・説話画)』、竹林舎、26年5月1日、査読無			
④「聖徳太子ゆかりの宝物—天寿国繡帳と呉竹形の塵尾—」、『季刊 明日香風』131号、公益財団法人 古都飛鳥保存財団、26年7月1日、査読無			
⑤「武者塚古墳出土の銀带状金具と宝珠形中心飾の源流」、『上高津貝塚ふるさと歴史の広場 第13回特別展 武者塚古墳とその時代』、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、26年10月15日、査読無			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-20

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：館内の調査や調査出張の時期を調整し、修理や論文執筆の予定に合わせ、適時に調査ができたため。 独創性：近年発掘された考古作品と献納宝物を様式比較する方法を新たに用いたため。 発展性：現在継続して行われている法隆寺裂の保存修理においても、調査研究の成果を還元しているため。 効率性：東京国立博物館の業務（法隆寺裂の調査研究と保存修復）とも関連したかたちで研究を進めているため。 継続性：上記業務と関連し、継続的な調査を行っているため。 正確性：目標として掲げていた今年度の調査件数を達成し、成果を一般に公開することで、科学研究費を用いた研究が有効になされたため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	研究発表	論文執筆		
判定	C	B	B	B		
判定理由 調査件数：献納宝物の源流に関する研究として、韓国内における必要箇所をほぼ網羅的に調査することができた。 写真撮影点数：効率的に調査地を巡ることができたことにより、献納宝物の源流に関する関係作品を写真記録として残すことができた。 研究発表：日韓双方において調査に基づく研究成果を予定通り発表することができた。 論文執筆：当初予定していた以上に執筆を進めることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は主に韓国での調査を行い、成果を挙げるすることができた。これにより次年度に執筆を予定する研究論文の材料を得ることができた。また法隆寺裂に対する研究の成果を作品の保存修復の場でも生かすことができた。 なお上記を踏まえ、次年度には国内調査を充実なものとしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
C	韓国の考古作品については、研究成果を発表するのに必要な調査と写真撮影をおよそ完了することができた。また論文の執筆も順調に進めることができた。だが一方で本研究において目標としている国内調査（正倉院事務所をはじめとした美術館・博物館・個人）についてはあまり進展していない。この反省を踏まえ、次年度では国内での調査研究を充実したものとしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	21) 多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)-①)		
【事業概要】 多数尊から構成される仏教尊像とは、複数の像から構成される一群の像で、例えば四天王、六観音、八部衆(二十八部衆)、十大弟子、十二神将、十六羅漢などをここでは指す。これらは、同時代の作品でも作品間での変化をつけるためか、その形姿や持物などには様々なヴァリエーションがある。しかしそれらがどのような典拠(古典作品、図像、儀軌等)に基づき、どのように組み合わせられているのかなどに関しては不明確といえる。また一群の作例の場合、工房における分担製作の実態も不明な点が多い。本研究では、上記のごとく不明な点が多くこのされている多数尊より構成される尊像群について、図像的典拠と工房における分担製作の視点から、あらためて調査研究し、分析を行おうというものである。本年度は4年計画の第3年次である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 浅湫 毅
【スタッフ】 浅見龍介(京都国立博物館学芸部列品室長)、岩田茂樹(奈良国立博物館上席研究員)、山口隆介(奈良国立博物館情報サービス室研究員)、井上一稔(同志社大学文学部教授)、寺島典人(天津市歴史博物館学芸課研究員)、田中健一(大阪大谷大学文学部常勤講師)			
【主な成果】 (1) 奈良国立博物館「鎌倉の仏像」展出品作品調査 ・京都国立博物館「南山城の古寺巡礼」展出品作品調査を行った。 ・広島にて鞆の浦・三原の寺院調査を行った。 ・宮城にて双林寺の調査を行った。 (2) 「鎌倉の仏像」においては鎌倉国宝館所蔵および寄託の作品を熟覧でき、貴重な資料が収集できた。 ・「南山城の古寺巡礼」展においては出品作品の細部写真撮影など、貴重な資料が収集できた。 ・鞆の浦の安国寺、三原の棲真寺において所蔵作品を調査撮影し、資料の収集を行った。 ・双林寺において、所蔵作品の詳細を調査することができた。 (3) 「鎌倉の仏像」展は昨年度の当科研による調査の成果に基づく。開催中に出品作品の調査も行い新たな知見を得ることができた。 ・「南山城の古寺巡礼」の図録、講演会、シンポジウムに際して科研の成果を反映した。 ・鞆の浦安国寺では納入品の詳細なデータを収集することができた。その成果は井上一稔氏によって公表される予定である。 ・双林寺調査で得られた情報は「みちのくの仏像」展の展示及び図録に反映した。			
【年度実績概要】 (1) ・奈良国立博物館「鎌倉の仏像」展においては会期中(4~5月)適宜、鎌倉国宝館所蔵の十二神将に関して詳細な調査を行った。 ・京都国立博物館「南山城の古寺巡礼」展においては会期中(4~6月)適宜、海住山寺所蔵の四天王立像に関して詳細な調査を行った。 ・9月17日に鞆の浦安国寺で、法燈国師像及び納入品、9月18日に棲真寺では二十八部衆像の詳細な調査を行った ・10月19日に双林寺で、薬師如来及び二天立像ほかの詳細な調査を行った。 (2) ・奈良国立博物館「鎌倉の仏像」展出品作の十二神将については江戸時代の後補作品も含まれており、両者の造像技法の違いなどで、新たな知見を得ることができた。 ・京都国立博物館「南山城の古寺巡礼」展出品作の四天王立像については、細部の表現を観察した結果、複数の仏師によるものであることが確認できた。 ・安国寺法燈国師像では納入文書を詳細に確認することにより、その造立年代に関する知見を得ることができた。 ・双林寺では、薬師像を詳細に観察した結果、それが天台薬師といわれるものと共通の特徴を持つことに気づいた。 (3) ・「鎌倉の仏像」展で得られた成果は来年度に発行予定の本科研報告書内で公表する予定である。 ・「南山城の古寺巡礼」展で得られた成果は、仏教美術研究上野記念財団助成研究会主催のシンポジウムで浅湫、岩田が口頭で発表し、その内容は27年3月に同財団が発行する報告書において発表する予定である。 ・安国寺の成果は井上一稔氏によって『日本彫刻史基礎資料集成鎌倉編第12巻』に掲載される予定である。 ・双林寺の成果は『みちのくの仏像』展図録において観察の結果を作品解説に反映した。			
【実績値】 調査回数 6回 研究会回数 2回 【参考値】 刊行物 4件 『鎌倉の仏像』展図録／『南山城の古寺巡礼』展図録／『みちのくの仏像』展図録／『公益財団法人仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第41冊 南都と南山城をめぐる僧と造仏』			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-21

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評定	B	B	B	B		
<p>適時性：近年仏像とその作者に関する一般的な関心が高まっているなか、これまで単に一群の像とみられていた多数から構成される仏教尊像に関して、より詳細な研究を行なうことは必要であり、それらの成果を新たな知見として展覧会などで公表することも時宜にかなっているものと考えられる。</p> <p>独創性：これまで多数の尊像から構成される群像に関して、工房内における分担製作の実態や画像選択の経緯という観点からの研究はなかった。</p> <p>発展性：今回の科研で得られた結果をもとに、各尊像別にさらなる研究を加えることで今後の発展が期待される。</p> <p>継続性：今回の調査で得られた、群像内での分担製作の実態について細部の形式をもとに判断するという手法は、すべての群像において応用できる手法であり、継続して分担製作の実態について調査する上で有益である。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究会回数				
評定	C	B				
<p>判定理由</p> <p>調査回数：国内調査に関しては当初予定以上の成果を上げることができたが、海外調査に関しては先方の都合や代表者の転勤による担当業務の変更などがあり、次年度に延期せざるを得なかったため。</p> <p>研究会回数：当初予定していた「南山城の古寺巡礼」における研究会にくわえ、「みちのくの仏像」においても研究会を実施することができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究代表者の転勤ほかの事情により、海外調査（イタリア・フランス）を来年度に延期せざるを得なかったが、国内調査やその結果をもとにした発表や展覧会に際しての原稿執筆などでは、当初の予定以上の成果を上げることができた。次年度は延期した海外調査をぜひ実施したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	海外調査を除いては、予定した調査は順調に遂行している。また、調査で得られた結果は、シンポジウム、講演会、展覧会の図録執筆、論文などに順調に公表している。最終年度に当たる次年度は、今年度延期になった海外調査を行うとともに、これまでの3年間の研究で集積されたデータをもとに、報告書の発行を計画している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	22) 海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究 (科学研究費補助金) (5)-①)		
【事業概要】 1939年以降海外で開催された日本古美術展について一覧化を進めるとともに、文化庁所蔵資料のデータ化及び主要な展覧会の資料を収集・整理することにより、海外における日本観とその変遷を考察・研究する基礎資料を整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課国際交流室長 鬼頭智美
【スタッフ】 高橋裕次(学芸企画部博物館情報課長)、田良島哲(学芸研究部調査研究課長)、白井克也(学芸研究部調査研究課考古室長)、浅見 龍介(京都国立博物館学芸部列品管理室長)、横山 梓(学芸企画部企画課特別展室研究員)、楊鋭(学芸企画部企画課国際交流室アソシエイトフェロー)、吉田憲司(国立民俗学博物館教授)			
【主な成果】			
<p>(1)・米国、ドイツ、マレーシア、シンガポールにおいて1939年以降に開催された日本古美術展関係および1940-1945年の南方接収博物館関係の資料調査を実施するとともに、日本美術を扱った展覧会及び関連事業を視察した。国内では、東京国立博物館内文化庁分室及び京都国立博物館保管の海外日本古美術展関係資料の調査を実施し、写真資料のデジタル化を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Webサイトや各館年報、関係資料を調査するとともに、関係者への聞き取り調査を行った。 <p>(2)・海外訪問調査により、関係文献資料・展示風景写真等関係資料を入手、写真撮影によりデジタル化した。国内では、東京国立博物館内文化庁分室保存の1995-2003年開催の文化庁海外日本古美術展12展覧会について、会場写真(紙焼き)、各展覧会の記録冊子のデータ化を完了、閲覧可能とした。また、京都国立博物館主催の海外展について、面談調査を実施、記録写真を入手した。その他、展覧会を主催した新聞社、寺院など博物館以外の関係者との面談調査により、海外での展覧会の企画から運営の実態について知見を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1936年ボストンにおける「日本古美術展」から2013年までに海外で開催された日本古美術展の暫定リストを作成した。 <p>(3)・国内外訪問調査により、現地でしか得られない記事のクリッピングや関連資料を収集、海外展に当館がどう関わったか的一端を見ることができ、東京国立博物館150年史編纂に向けての基礎資料収集が進んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地の反応や当時の解説及び現状の日本美術展示についての知見を、館内展示等外国人向け解説の英語版・中国語版に生かすことができた。 ・面談調査を通じ、日本美術展示を担当する学芸員との交流を深め、今後の国際交流事業の企画に向けての足がかりとなった。 			
【年度実績概要】			
<p>(1)・ドイツ・ベルリンアジア美術館、ケルン日本文化会館、ケルン東洋美術館、ドイツ国立公文書館、ベルリン国立博物館群図書館にて文献・写真資料調査を行い、ドイツにおける1939年から1950年代を中心とした日本美術展の概況についての知見を得た(26年5月11日-12日及び11月15日-22日)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ・サンフランシスコ アジア美術館及びデ・ヤング美術館にて調査を行い、戦後の米国巡回古美術展及び1970年の考古展についての文献・写真資料収集・整理した(26年7月16日-17日)。 ・当館内文化庁分室にて、文化庁主催の海外日本古美術展に関する記録・写真資料及び他機関主催の海外日本古美術展の資料を閲覧・複写した。(26年8月27日) ・京都国立博物館にて、「京都からの美のたより」展及び「18世紀京都画壇の革新者たち」について、資料収集及び当時の担当者への聞き取り調査を行った。(26年9月26日) ・シンガポール国立博物館・図書館等で、太平洋戦争中に日本の占領下にあった博物館等について調査、当時の関係資料・写真を収集するとともに、関係者への面談調査を実施、関係展示を視察した(27年1月31日-2月4日)。 ・米国・メトロポリタン美術館及びニューヨーク公立図書館にて、米国巡回「日本古美術展」関係資料等米国開催の日本美術展覧会関係資料を調査、現地所蔵の文献資料を入手した。(27年2月15日-17日)。 <p>(2)・ドイツにて、1939年「日本古美術展」、1974年「日本の美」展に関する関係資料・書簡、記事クリッピング、会場写真等の収集・複写を行った。主に文献資料を調査し、複写可能なものは写真撮影等により複写・デジタル化を行った。この調査により、現地の記事クリッピングなど現地ではかえられない貴重な資料を得ることができた。また「印象派と日本」展、「パウル・クレーと日本」展を視察、それぞれ西洋美術の文脈における日本美術の解釈、また日本美術普及のためのプログラムについての知見を得た。米国の調査で上記展覧会の基礎資料を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2002年チェコ・キンスキー宮殿(プラハ)開催の「京都からの美のたより」展の会場写真を当時の担当研究員より入手、そのデータ化を行った。また、2006年サンフランシスコ・アジア美術館開催「18世紀京都画壇の革新者たち」展の関係文書・写真資料を収集・整理した。 			
<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="width: 60%;"> <p>【実績値】 訪問調査7回、館内調査2回、面談調査4回</p> <p>【備考】 東京国立博物館総合文化展解説に成果を反映。海外での日本古美術展開催リスト(1936-2014)暫定版作成。</p> </div> <div style="width: 35%; text-align: center;">  <p>ケルン東洋美術館での調査</p> </div> </div>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-22

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：当館 150 年史編纂に向け、関係資料を確実に入手・整理を進めることができたため。 独創性：これまで国際交流事業について海外で行われた特別展を主として考察する研究はなかったため。 発展性：調査先での研究者の関心が高く、今後の共同事業への発展が期待できるため。 効率性：調査先に適切な協力者を得て、順調に調査が進んでおり、他業務との連動により効率よく予算を消化することができた。 継続性：年度内に概ね予定通り海外調査を実施、貴重な文献・写真資料を収集し、データ化を進めることができた。 正確性：展覧会の会場館で実際に現地での一次資料を得たことで正確な情報を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	訪問調査	館内調査	面談調査			
評定	B	B	B			
判定理由 訪問調査：ドイツ及び米国にて調査を行い、主要な展覧会について数多くの貴重な文献資料を得ることができた。 館内調査：文化庁の協力を得て順調に分室内の資料を調査し写真資料のデジタル化を進めることができた。 面談調査：国立博物館の担当者、海外の会場館の担当者、共催した新聞社の担当者のそれぞれの立場からの話を聞くことができ、多角的に海外古美術展のありようを検証する資料を得ることができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度に予定した資料調査が順調に進み、海外の主要館においてこの研究についての理解・協力を得られることができた。特に、研究テーマの基点となる1939年のベルリンにおける「日本古美術展」について、また主要調査対象となる文化庁主催の海外日本古美術展の日本側の資料は、画像資料を中心にかなり整理・データ化することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度から着手した研究であるが、概ね計画通りに進んでおり、次年度以降の調査に向けての協力・準備体制も整ってきている。来年度は成果としての論文発表及び最終年度の報告書出版に向けて、収集した資料の整理及び翻訳作業をいっそう進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	23)能狂言面の美術史的アプローチによる基礎的調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)-①）		
【事業概要】			
<p>能狂言面は能楽の道具として芸能史研究の中で注目される一方、美術史ではその卓越した造形は認知されているものの、能狂言面の美術史研究に必要な基礎データ、制作年代や作者、伝来を特定できる基準作例が乏しいため、美術史的手法を用いた研究はほとんどされていない。本研究では多くの優れた能狂言面を調査し、基礎データの収集、多角的、総合的な分析・検討から制作年代・作者等の客観的判断基準を見出し、その美術史的研究方法を確立することを目指す。研究成果をもとに、能狂言面を美術史、特に日本彫刻史の中に位置付けることを最終目標とする。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部付 浅見龍介
【スタッフ】			
矢野賀一(学芸企画部企画課デザイン室主任研究員)、川岸瀬里(学芸企画部博物館教育課教育普及室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】			
<p>研究開始年度である本年度は、本研究の目標のひとつである能狂言面の調査方法の確立のための試行と検証を兼ね、東京国立博物館所蔵の能面の調査を中心にすすめた。調査の結果、調査方法は概ね決定することができた。</p>			
【年度実績概要】			
(1)能狂言面の調査方法の検証			
<p>本研究では「彫刻研究の手法で能狂言面の造形について検討する」ことが前提となっている。彫刻研究の手法を能狂言面の調査に持ち込むために、調査に必要な器具、機材を検討、設計した。その器具や機材を用い彫刻研究の手法で調査及び撮影を行い、調査データ収集のテスト、データの検証及び蓄積を行った。これは従前行われてこなかったことで、今後本研究を継続するための大きな成果といえよう。</p>			
(2)能狂言面の調査研究			
<p>前述の(1)で検証した調査方法を用い、東京国立博物館所蔵作品を中心に計画的に調査研究を進めることができた。東京国立博物館以外では以下の施設所蔵の能狂言面の調査を行った。</p> <p>京都国立博物館、三井記念美術館、国立能楽堂、松井家</p>			
(3)調査データ等の蓄積			
<p>(1)(2)によって得られた作品情報を整理し、データ化することで分析を正確に行う基礎ができ、次年度以降の調査研究課題を洗い出すことができた。</p> <p>また、歴史史料等の収集も同時にすすめ、調査データと照らし合わせることで、これまで不明な点の多かった能狂言面の造形とその背景について検証する基礎ができた。</p>			
			
東京国立博物館での能面調査の様子			
【実績値】			
調査回数 11回			
撮影回数 16回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-23

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本彫刻史を考える上で、非常に多くの優れた作例が残りながら検討されてこなかった能狂言面の研究は必須であるため 独創性：能狂言面の研究はもっぱら能楽の道具として、芸能史の観点からの研究がほとんどであったが、本研究では、能狂言面を彫刻として、彫刻の調査研究の手法を用いて検証しようという、これまでにない研究であるため。 発展性：能狂言面を美術史のなかに位置づけることができれば、芸能史等他分野研究にも寄与するところが大きい ため。 効率性：限られた時間の中で効率的に調査データを収集し、効率的に検証できるよう整理をすすめたため。 継続性：初年度に基礎となる調査方法の検証をすすめ、来年度以降の調査研究を計画的に行うことが可能になった ため。 正確性：調査データの検証を複数名で、また必要な場合は複数回行うことで、データの正確性を期したため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	撮影回数				
評定	B	C				
判定理由 調査件数：当初計画通り、能狂言面の調査を行った。 撮影回数：従来開発されていなかった、仮面撮影に適した指示具を新たに開発作成し、仮面撮影に適した照明のテスト等に時間を要したため撮影回数は少なくなった。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	彫刻の調査方法を用いて能狂言面を研究することは従来行われてこなかったため、本研究の意義は大きいと言える。 研究初年度である本年度は、調査方法と調査器具の試行錯誤を重ねながら、能面のなかでも非常に重要と思われる金春家伝来の能面（東京国立博物館所蔵）の調査を重ね、本研究の基礎をつくり上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は当初計画に則り、概ね順調であり、研究の基本的な基盤を整えることができた。 本研究で得られた調査データは、統一の基準に基づく客観的データであり、これまでのデータよりも美術史的研究に有用なものとなっている。 また、次年度は適宜撮影と撮影データの整理を進め、史料として収集した文書、付属品である面袋などから得られる情報を精査する。能狂言面の調査データとあわせて検証することで、能狂言面の造形を、総合また体系的に捉えていきたい。東京国立博物館所蔵品については特集陳列で成果の一部を発表する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	24) 日本における「美術」概念の再構築—語彙と理論にまたがる総合的研究 (科学研究補助金) (⑤-①)		
<p>【事業概要】 近代日本が西洋から受容した「美術」は自らの美意識とは異質な分類枠のものであり、それらの作品は西洋とは異なる価値基準によって定義され、記述されるべきものである。 真正の日本の「美術」概念を再構築する場が生成するために、“概念としての「美術」”にかかわる先行研究の成果を踏まえて、日本の「美術」を語る体系全体とそれに従う作品記述の語彙を再検討する。それによりどのように日本美術を捉え、どのような記述がふさわしいのかを理論的に探究する。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 伊藤嘉章
<p>【スタッフ】 山崎剛 (金沢美術工芸大学教授)、並木誠士 (京都工芸繊維大学教授)、佐藤道信 (東京芸術大学教授)、鈴木浩之 (金沢美術工芸大学准教授)、横溝廣子 (東京芸術大学准教授)、森仁史 (金沢美術工芸大学教授)、後小路雅弘 (九州大学教授)、北澤憲昭 (跡見学園女子大学教授)、山梨絵美子 (東京文化財研究所企画情報部副部長)、青木美保子 (京都女子大学准教授)</p>			
<p>【主な成果】 ・日本の「美術」を語る体系全体とそれに従う美術作品記述の手法の再検討と、日本美術を捉え方とあるべき記述法に関する現代美術、工芸及び古美術という分野別研究。 ・アジアでの漢字文化圏における「美術」について、各地域での状況とその、さらに脱植民地化の中での状況などの研究。 ・同時代美術の動向と美術館の状況、さらに「美術」概念の再構築として翻訳とテクノロジーという面からの研究。</p> <p>これらを国際シンポジウムを含む研究会の開催し、研究成果の共有と問題点について検討を行っている。</p>			
<p>【年度実績概要】 26年4月5日 現代美術部会研究会 東京都現代美術館 26年6月14～15日 工芸及び古美術研究会 金沢美術工芸大学 26年11月8～9日 国際シンポジウム①② 福岡アジア美術館 ①「美術」にかかわる分類の検討-漢字文化圏を中心に ②「美術」の脱植民地化-グローバル化の中で 26年12月6～7日 国際シンポジウム③④ 金沢美術工芸大学 金沢21世紀美術館 ③同時代美術の動向と美術館——「美術」のオルタナティブをめぐって ④「美術」概念の“再構築 [アップデート]”、—翻訳とテクノロジー—</p>			
			
<p>26年11月8日 国際シンポジウム</p>			
<p>【実績値】 研究会回数 2回 (現代美術部会研究会 1回、工芸及び古美術研究会 1回) 国際シンポジウム回数 2回</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-24

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：研究代表者らは先に日本の工芸・デザイン作品の検索システム構築を行う中で、西洋で形成された体系や用語のみでそれらを行うことの問題に直面した。今後の研究の進展には日本の「美術」のために新たな美術概念の構築を必要不可欠である。 独創性：この分野の研究は日本の工芸・デザインの個別研究から生まれてくるものではなく、近代美術史の進展により、近代における西洋美術概念の導入が明らかになることで、初めて生まれた問題意識である。 発展性：今回の研究では、近代のみでなく、古美術や、日本だけでなく、アジア美術についてもその研究を広げようとするものであり、発展性は大きい。 効率性：分野、地域等に内容に応じて複数の研究会、国際シンポジウムを開催することで効率良く成果をあげている。 継続性：昨年度から引き続き、計画的に研究会等を開催することを継続しており、着実に成果をあげている。 正確性：分野、時代、地域といった重要と思われる部分に着目しながら研究を積み上げることを行っており、全体の正確性が担保されつつある。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	国際シンポジウム回数				
評価	B	B				
判定理由 研究会回数・国際シンポジウム回数： 計画的な研究会と国際シンポジウムを実施できており、研究成果の共有が進みつつある。問題点が討論等で明らかになることで、研究の方向性が定まり、進展が期待できる。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	個々で進められた研究が研究会、シンポジウムによって研究成果と今後の課題についての共有が進みつつある。これによって、さらに研究を積み上げるとともに、日本のみならず、アジアにおける各国の「美術」概念研究も進展が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は昨年度に引き続き分野別の研究会を開催し、成果の共有を進めた。また国際シンポジウムの開催では、アジアにおける「美術」概念という従来に無い視野での問題意識によって検討が重ねられている。今年度としてはこれらによって明らかになった問題点を検討する段階へと進みつつある。来年度はこれらを通して見えてきた問題点の整理を進めるとともに、日本美術、東アジア美術についての美術概念の研究に新たな方向を示していくことができる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	25) 描いた女性たちに関する研究－桃山時代から明治・大正期まで（科学研究費補助金） （5）－①）		
【事業概要】 桃山時代から明治・大正期までの女性画家に関して、その実態を文献・作品の両面から明らかにし、造形的・社会的・文化的特質と意義を考察する。制作の目的、制作を可能とした社会的な要件、女性であることと表現内容との相関関係、また、各時代の価値観・倫理観が女性の行動に及ぼした影響等も分析しつつ、歴史的な社会における視覚的イメージを表現することの意味について考察する。合わせて、女性の作画に関するデータベースの作成も目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室主任研究員 山下善也
【スタッフ】 田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、仲町啓子（実践女子大学文学部教授）			
【主な成果】 前年度に引き続き、実践女子大学はじめ他機関の科研メンバーと協力し、9月1日～4日、福岡市で近世の女性画家の作品の調査を行い、これまで注目されていなかった作品の情報を収集するとともに、女性画家の伝記等に関するデータ収集に協力し、外部研究者と連携した質の高い研究を行うことができた。当該科研は今年度で終了するが、次年度以降も、外部との協力により当館所蔵の女性画家資料に対する研究を進めるよう準備を行った。			
【年度実績概要】 ・女性画家作品の調査 (1)福岡市西区能古島の能古博物館で、亀井少菜作品（父南冥の作品を含む）28件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（9月2日）。 (2)福岡市博物館で、亀井少菜作品を中心に織田瑟々、伝玉瀾などの作品30余件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（9月3日）。 (3)福岡市図書館で、亀井少菜の伝記情報を収集すべく、亀井家の日誌をマイクロリーダーで閲覧し、情報収集を行った（9月3日）。 (4)京都個人宅にて、清原雪信の屏風ほか女性画家作品9件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（27年2月13日）。 (5)東京国立博物館で、野口小蘗ほか女性画家作品9件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（27年3月17日）。 (6)大阪個人宅にて、立原春沙ほか女性画家作品8件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（27年3月23日）。 ・女性画家の作品制作の背景を考察 個々の調査作品の制作背景について、順次調査を行った（当館にて随時）。			
			
能古博物館調査風景			
【実績値】 作品調査回数 6回（上記）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-25

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：女性芸術家に対する現代的関心が高い。 独創性：女性画家を総合化した画家としての社会的要因にまで踏み込んだ研究はなされていない。 発展性：各時代の価値観・倫理観が女性の行動に及ぼした影響等、社会における視覚的イメージ表現の意味について研究を広げることができる。 効率性・継続性：実践女子学園香雪記念資料館のデータ蓄積を生かし、未紹介作品の発見・統合を行うことが可能であり、当該科研で得た新知見を、当館の総合文化展示での解説等に生かし続けることができる。 正確性：女性画家の作品研究はこれまであまり行われていなかった。そのため、科学研究費の代表者である仲町氏を中心に多くの作品の調査作業を進めたが、現時点では、質的判断に供しえる基準作品の選定段階である。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数					
評定	B					
判定理由 作品調査回数：計画していた所期の回数を実現できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。これまで実施していなかった遠隔地の女性画家の作品調査を十分に行うことができ、このテーマにおける情報の地域的な蓄積を増大させた。外部との調査協力体制も確立し、所蔵品を含めより広範な調査計画が進行中である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。実践女子大学との共同の調査に参加し、外部との調査協力体制が確立した。当該科研は今年度で終了する。今後、本テーマを基にして新たなテーマへの発展・展開を検討していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	26) 武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (5)-①		
【事業概要】			
<p>古墳時代は、象徴的な器物の授受を通じて、王権中枢が地域社会との関係を構築した時代である。5世紀の古墳時代中期には、武器と武具とを組み合わせた武装具が、王権から地域社会（首長）へと配布される象徴的器物であった。本研究は、武装具が古墳に集積する現象に注目して、古墳時代中期社会の特質を描き出すことを目的とする。奈良県円照寺墓山1号墳の出土資料を事例として取り上げ、武装具が集積することの意味を「王権」「地域」「東アジア」という3つの視座から検討する。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】			
<p>上野祥史(国立歴史民俗博物館 研究部考古研究系・准教授)、齋藤 努(国立歴史民俗博物館 研究部・教授)、坂本稔(同 研究部・准教授)、橋本達也(鹿児島大学 総合研究博物館・准教授)、杉井 健(熊本大学 文学部・准教授)、阪口英毅(京都大学 文学研究科・助教)、諫早直人(奈良文化財研究所 都城発掘調査部・研究員)、川畑 純(同 都城発掘調査部・研究員)、高橋 工(大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・難波宮調査事務所長)、清水和明(同 大阪文化財研究所・事務企画課長)、鈴木一有(浜松市教育委員会 学芸員)、西嶋剛広(宮崎市教育委員会 学芸員)</p>			
【主な成果】			
<p>古墳時代中期における武装具集積の典型資料の調査および研究会を実施し、今年度は次のような研究成果があった。</p> <p>① 東京国立博物館所蔵資料を整理して、基礎情報を提示するために実測調査を進めた。</p> <p>② 調査情報を基礎として、「武装具の集積現象」を比較検討し、研究を推進した。</p> <p>③ 26年度平成館改修に伴う考古展示室計画に反映させた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>① 東京国立博物館において研究会（26年5月14～17日・7月30日～8月2日・8月13～16日・9月17～20日・11月19～22日・12月24～27日・27年2月18～21日）を開催し、円照寺墓山1号墳出土資料の整理および実測調査を進めた。調査資料の際は、研究協力者を雇用して、写真・データ等の整理・分析を実施した。</p> <p>② 1) 東京国立博物館において検討会で研究報告を行い、論点の整理とその共有を図り、これまでの調査成果の確認と問題点を検討・分析した。</p> <p>2) 韓国・東新大学校博物館と共同研究会(26年5月3日)を開催し、同博物館所蔵資料の羅州地方出土甲冑・武器武具などの調査資料を行い、相互に問題点を検討・分析した。</p>			
			
<p>共同研究会：資料調査風景（東京国立博物館）</p>			
【実績値】			
<p>○調査日数 : 28日間</p> <p>・調査件数 : 約50件</p> <p>・主な調査資料 : 奈良県円照寺墓山1号墳出土資料・京都府久津川車塚古墳出土資料(東京国立博物館蔵)</p> <p>○研究会日数 : 4日間</p> <p>○論文等公開件数 : 3件(①～③)</p>			
【備考】			
<p>①古谷 毅「中小古墳と大型古墳－再整理からみた七観古墳の歴史的的位置－」『巨大古墳あらわる－履中天皇陵古墳を考える－』(第四回百舌鳥古墳群講演会記録集)堺市文化財講演会録第7集、堺市文化観光局文化部文化財課、pp.27-73、27年2月27日</p> <p>②古谷 毅「古墳時代武装の性格－日本列島における武器武具の社会的役割－」(埼玉県立歴史と民俗の博物館「特別展 甞る鉄剣展」記念講演会)26年11月15日</p> <p>③古谷 毅(他4名と共著)「西都原古墳群基礎調査における東京国立博物館との共同調査について－珠文鏡・銅釧・挂甲小札の報告－」『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』第11号、宮崎県立西都原考古博物館、pp.1-14、27年3月31日</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-26

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	A	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：当館所蔵資料(列品)の調査・研究成果の緊急性・公開性において必要性・必要性があり、早期の公開を目指しているが、今年度は十分な調査を実施することができた。また、韓国における共同調査など国際性の要素も含めることが出来た。</p> <p>独創性：古墳時代鉄製武器・武具・馬具研究史を踏まえて発想・着想しており、鉄製武器武具馬具研究におけるオリジナリティおよび新規性と卓越性において優れていると思われる。</p> <p>発展性：写真や簡略な実測図中心であった従来の武器武具馬具研究に比べて、研究視角の面からは古墳時代および金属器研究に与える応用性など、研究方向の多様性・汎用性に裨益し、一定の成果があると思われる。</p> <p>効率性：研究代表者・研究分担者・連携研究者とともに調査を進め、また実測調査に先立ち研究協力者を雇用して資料の事前整理を進めており、予算運用の時間的・人的投資について有効であると思われる。一方、設備的投資については、消耗品を含めてほとんど行なっていない。</p> <p>継続性：これまで交付された各種科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正で、質・内容・量ともに従来の調査・研究事例を上回っており、本研究テーマの資料的基盤を構築する基礎性に優れている。</p> <p>正確性：従来この規模の資料群では、実測図の作成はほとんど行なわれていないが、作成した実測図はすでに150枚を超えており、達成値・網羅性については従来の調査・研究事例に類似する事例は見られない。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開			
判定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>調査日数：目標に照らして十分な日数を確保し、実施した。</p> <p>研究会日数：必要な研究会を開催した。</p> <p>論文等公開：公開性に鑑みてもほぼ適当な分量と思われる。</p>						

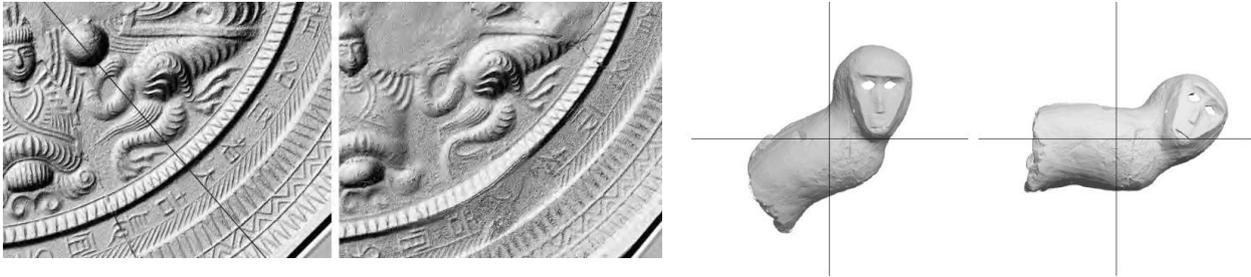
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続性については変更の必要が認められないと考えられる。他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、調査回数は十分であり、調査精度の向上をさらに高めたい。東京国立博物館所蔵資料の列品整理としても顕著な成果が挙げられている。今年度はさらに韓国との共同開催など、国際性も加えることが出来た。次年度以降は、より研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会をさらに充実し、さらに発展性・独創性の拡充と確立を図る所存である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析および学術的評価に関する十分な考古学的情報の整理・資料化、また論文発表・講演等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として十分な蓄積を行ったと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。改良・改善点は、より高度な効率性・適時性および発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次年度の計画へ反映させる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	27) 三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獸鏡の総合的研究(科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】			
<p>古墳時代前期を代表する遺物である「三角縁神獸鏡とは何か」について三次元計測技術を応用して製作技法から考えることを目的とする。舶載三角縁神獸鏡と仿製三角縁神獸鏡の対比を中心に、それを取りまく倭鏡、中国鏡、銅鐸の同一文様をもつ青銅器を分析対象として、量産技法から相互関係を分析する。そのための手段として精密三次元計測データによる客観的で詳細な分析を用いる。そして、肉眼観察では扱うことが不可能であった青銅器表面の微細な鑄型の傷や、面的な変形、収縮についての新しい情報を得ることで、これまでにない製作技法の解明を進める。</p> <p>さらに、青銅器製作技術から「舶載」と「仿製」三角縁神獸鏡の技術的系譜を明らかにすることも目的とする。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】			
<p>水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所 調査課総括研究員：研究代表者)、菅谷文則(奈良県立橿原考古学研究所 所長)、奥山誠義・柳田明進(奈良県立橿原考古学研究所主任研究員・研究員)、北井利幸(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 主任学芸員)、連携研究者：今津節生(九州国立博物館) 森下章司(大手前大学)</p>			
【主な成果】			
<p>① 既存の調査成果の調査データ・写真の整理・分析を行なった。</p> <p>② 既存の主要古墳出土銅鏡・埴輪等の三次元データ分析と画像処理を行い、今後の活用に向けてデータ分析の方法の整備を図った。</p> <p>③ 研究成果を発表・公開した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>① 東京国立博物館所蔵資料の調査成果の調査データ・写真の整理・分析および解析を行なった。</p> <p>② 新規に奈良県立橿原考古学研究所蔵資料・東京国立博物館所蔵資料のほか、古代出雲歴史博物館・天理参考館所蔵飼料などの三次元計を行った。</p> <p>一方、これまでの研究成果(科学研究費補助金 基盤研究(A):課題番号 25284161・18 年度～21 年度、基盤研究(A):課題番号 25284161・14 年度～16 年度)において調査した東京国立博物館所蔵の主要古墳出土銅鏡のデータ・写真の整理・分析を行い、今後の研究資料の整備を図った。</p> <p>③ 第 80 回日本考古学協会で、三角縁神獸鏡の同型技法における使用痕跡の研究成果を発表・公開した。</p>			
			
<p>○三次元計測データの画像分析および可視化(オルソ画像処理(正射投影図)) [左：森尾・佐味田宝塚古墳出土三角縁神獸鏡、右：埴輪 猿(東京国立博物館蔵)]</p>			
【実績値】			
<p>○調査・分析日数 : 3 日間</p> <p>・調査件数 : 約 5 件</p> <p>・主な調査・分析資料 : 三角縁神獸鏡・日本列島製漢式鏡、埴輪 猿(東京国立博物館蔵)</p> <p>○研究会日数 : 1 日間</p> <p>○論文等公開件数 1 件(①)</p>			
【備考】			
<p>①水野敏典・奥山誠義・古谷 毅・徳田誠志「三角縁神獸鏡『同範鏡』にみる同型技法の使用痕跡の研究」『一般社団法人日本考古学協会第 80 回(2014 年度)総会 発表要旨』日本考古学協会、p22、2014 年 5 月 17 日</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-27

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：既存の科学研究費補助金A(2002～2004・2006～2009年)による調査・研究成果の公開性において需要性・必要性があり、早期の公開を目指しているが今年度は一部スタッフの都合で、十分な緊急性には応えていない部分が残った。</p> <p>独創性：三次元計測データの解析・応用研究を目的に発想・着想しており、従来の青銅器研究においてオリジナリティおよび新規性には優れていると思われる。</p> <p>発展性：肉眼観察が中心であった従来の青銅器研究の多様性・汎用性に裨益し、研究視角の面からは原始・古代金属器研究および弥生・古墳時代の考古学研究に与える応用性などに一定の影響性があると思われる。</p> <p>効率性：研究代表者・研究分担者の研究協力を得ており、予算運用の計画は時間的・人的投資について有効であると思われるが、今年度は一部スタッフの都合で十分には達成できない部分が残った。なお、設備的投資については、今後の研究を進める基盤を形成した。</p> <p>継続性：前回科学研究費補助金A(2002～2004・2006～2009年)による調査・研究成果を継承し、期間は適正である。また、従来の研究で得たデータは質・内容・量とも本研究テーマの資料的基盤を形成し、基礎性において優れている。</p> <p>正確性：数値・データに関してはすでに従来の研究成果で基盤を形成しており、達成値・網羅性については従来の調査・研究事例に類似する成果は見られない。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開件数			
判定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>○調査・分析日数：館内の展示室改修に伴う撤収・立会等で、必要な日数を実施した。</p> <p>○研究会日数：館内の展示室改修に伴う撤収・立会等で、必要な日数を実施した。</p> <p>○論文等公開件数：公開性に鑑みてもさらに努力が求められると思われる。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続性については変更の必要が認められないと考えられるため、他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、調査とデータ分析の質をさらに高める必要があるが、今年度は研究代表者の本務の都合で十分に達成したとはいえない。来年度はより研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会で分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図り、さらに調査を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析および学術的評価に関する十分な考古学的情報の発表等を通じて、当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として蓄積は実施できたと思われる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。改良・改善点は3.総合的評価のように、今後の計画遂行とより高度な効率性・適時性および発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次年度計画を策定する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	28) 木彫像の樹種識別技術の高度化 (科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】			
木彫像の樹種判別に非破壊分析手法、顕微手法を応用した精密分析手法を導入することにより、種レベルでの正確な樹種を特定する研究。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【スタッフ】			
安部久 (森林総合研究所主任研究員)、渡邊宇外 (千葉工業大学准教授)、渡辺憲 (森林総合研究所研究員)、石川敦子 (森林総合研究所主任研究員)、久保智史 (森林総合研究所主任研究員)			
【主な成果】			
(1) 伐採後、数百年以上経過した木材中に残存する DNA の質と量について評価した。			
(2) 京都東寺の北総門に用いられていた伐採後 400 年以上経過したスギ材にも一定の量と質の DNA が残存することが分かった。			
(3) 伐採後数百年以上経過した木材からも DNA が得られることから、木彫像や建築物などから微量でも木材の試料が得られる場合、それを分析することで、樹種に関してのより詳細な情報が得られる可能性があり、文化財の製作された背景などに関して、科学的に考察できる可能性がある。			
【年度実績概要】			
(1) ・ 森林総合研究所及び京都大学生存圏研究所の木材標本庫に所蔵されている伐採後の経過年数が異なるスギ材標本、及び、千代田試験地において伐採後すぐに冷凍保存した木材をを試料として、リアルタイム PCR 法によって、木材中に残存している葉緑体 DNA のコピー数を分析した。 ・ 静岡県坂の上薬師堂 (26 年 8 月 6-7 日)、奈良県興福寺 (26 年 9 月 8 日)、岐阜県薬王寺 (26 年 12 月 16-17 日) に木彫像の調査を行い、近赤外の吸収スペクトルを収集した。			
(2) 東寺北総門に用いられていたスギ材において 185np 以下の長さの領域の DNA は増幅され、分析する領域を 200bp 以下にすると伐採後数百年以上経過した木材でも DNA による分析が可能であると考えられた。			
(3) 日本木材学会の英文誌 (Journal of Wood Science) に論文が掲載された。			
			
岐阜県薬王寺での調査風景			
【実績値】			
調査回数 3 回			
調査地 (木彫像数/取得スペクトル数) : 興福寺 (2 体/29 スペクトル), 薬師堂 (15 体/128 スペクトル), 薬王寺 (22 体/150 スペクトル)			
(参考値)			
学術論文発表 1 件			
Watanabe U., Abe H., Yoshida K., Sugiyama J.: Quantitative evaluation of properties of residual DNA in <i>Cryptomeria japonica</i> wood. J.Wood Sci. DOI 10.1007/s10086-014-1447-6 (2014) (オンライン)			
国内学会発表 1 件			
日本木材学会第 65 回記念大会 2015 年 3 月 16-18 日			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-28

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：特に近赤外分析法では非破壊分析が可能となるため、文化財を傷めずに調査できる手法の確立が求められている。 独創性：樹種を判別することで文化財の製作背景を探るという観点に新規性が認められる。 発展性：木彫像に限らず多様な木質文化財に調査対象を広げることができる。 効率性：一度の調査で数多いスペクトルを収集できるように現場での準備や調査手法を工夫している。 継続性：複数年かけて多くのスペクトルを収集し、標準的なデータベースの構築を試みている。 正確性：科学的な分析手法によって樹種同定に客観性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査木彫像数	取得スペクトル数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：いずれも普段は木彫像に接近することが許されない調査地であり、十分な回数である。 調査木彫像数：1年で39体の木彫像を調査対象とすることができた点はB評価に値する。 取得スペクトル数：客観的な結果を論じる上で十分な数のスペクトルを収集できたと評価する。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	全ての定性評価及び定量評価についてB評価であり、総合的に見てもB評価と判断できる。次年度もこの水準で継続できるよう計画したいと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。次年度もこの水準で継続できるよう計画したいと考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	29) 作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究(科学研究費補助金)((5)-①)		
【事業概要】南宋時代の代表的な羅漢図である「五百羅漢図」(大徳寺伝来)は、美術史のみならず、南宋における江南地域社会の成立を解明する重要な作品である。それは日本に舶載されることによって、異なる文化のコンテキストによって解釈され、受容されてきた。その具体相を、文献と作品そして残されたさまざまな視覚資料から探ろうとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員 塚本鷹充
【スタッフ】			
【主な成果】			
<p>(1) 博物館、寺院及び古跡に赴き、現地調査を行った。</p> <p>(2) 実際の作品を熟覧のうえ、写真撮影を行った。</p> <p>(3) 東洋館8室での展示、及び学会発表、論文等で成果を公表することができた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 山口県徳地町、山口県立美術館、大分県中津市耶馬溪羅漢寺、福岡市立博物館、などで調査を行った。</p> <p>(2) 鎌倉から近世にいたる羅漢信仰と現地の所在文化財の調査を行うことにより、宋代の羅漢信仰の流布について大きな知見を得た。</p> <p>(3) 東洋館8室における「金大受「十六羅漢像」と道釈人物画」では、所蔵される金大受羅漢像を全幅展示し、あわせてベルリン東アジア美術館、群馬県立美術館に分蔵される羅漢図を復元的に展示することができ、研究の成果を反映することができた。</p>			
			
金大受「十六羅漢図」の展示		西金居士「羅漢図」模写(晴水養廣模)	
【実績値】			
作品調査：写真撮影 600 枚、現地調査：写真 200 枚			
学会発表：1 回(①)			
【備考】			
学会発表			
①2014 年 12 月 6 日、「《唐繪手鑑(筆耕園)》與江戸時代中國繪畫知識の架構」「創新與創造：明清知識建構與文化交流」國際學術研討會(於：中央研究院 中國文哲研究所)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-29

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：大徳寺伝来五百羅漢図は、国際的にも近年大いに注目されている作品であり、その意味の解明が求められている。 独創性：大徳寺伝来五百羅漢図は従来までの中国美術史研究になかった新視点をもたらす存在であり、アジアの広地域における仏教美術研究のなかでも独創的な位置を占めている。 発展性：将来的にも美術史のみならず、仏教学、歴史学に及ぶ広範な成果が期待できる。 効率性：現地の学芸員の協力の下、効果的な作業ができた。 継続性：作成済みの五百羅漢図の資料を中心に、アジア地域における羅漢信仰の調査を継続する。 正確性：計画的な調査を遂行することができたため、高解像度の画像を得ることが出来た。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	現地調査	学会発表			
評定	B	B	B			
判定理由 作品調査：効率よく十分な調査ができたため。 現地調査：十分な研究成果を得ることができたため。 学会発表：その成果をもとに十分に発信することができたため。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大徳寺伝来五百羅漢図の作品誌的理解をするために、十分な調査活動を行うことができたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大徳寺伝来五百羅漢図の作品誌的理解をするために、現地調査や作品調査を行うことができた。来年度も引き続き調査を実施する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	30) 在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信（科学研究費補助金）（(5)-①）		
【事業概要】 在欧博物館が所蔵する日本仏教美術作品の悉皆調査を行なう。それらのコレクションの流通経路も調査し、作品自体のデータと合わせて、英語と日本語による画像付データベースを作成して公開する。欧州と日本相互の研究成果の交換を可能にし、在欧における日本美術史研究や日本観の研究を促進するとともに、今後の欧州における日本関係美術品の活用の進展をはかる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	副館長 島谷弘幸
【スタッフ】 ヨゼフ・クライナー（客員研究員）、小口雅史（法政大学文学部教授・法政大学国際日本学研究所 所長）、河合正朝（千葉氏美術館 館長）、智恵・シュタイネック（チューリヒ大学）、伊藤信二（学芸企画部広報室長）、丸山士郎（学芸研究部列品管理課平常展調整室長）、小山弓弦（学芸企画部博物館教育課教育普及室長）、恵美千鶴子（調査研究課書跡・歴史室客員研究員）			
【主な成果】 (1) ・イギリス・大英博物館、大英図書館において、日本仏教美術の調査を実施した。 ・在欧博物館所蔵の日本仏教美術のデータベース公開について、本研究担当者で今後の方針など検討会を行った。 ・米欧ミュージアム専門家交流シンポジウムと同事業のワークショップにおいて、米欧ミュージアム担当者と意見交換を行った。 (2) ・イギリス・大英博物館、大英図書館が所蔵する日本仏教美術作品の確認が取れた。 ・在欧博物館所蔵の日本仏教美術データベースの内容を充実させることができた。 ・米欧ミュージアム担当者ととの意見交換において、新たな調査対象を見つけることができた。 (3) ・米欧ミュージアム専門家交流シンポジウムにて、これまでの成果を口頭発表した。			
【年度実績概要】 (1) ・イギリス・大英博物館、大英図書館において同館所蔵の日本仏教美術の調査を実施した（27年2月19日～20日）。 ・本研究の今後の調査方針やデータベースをより使いやすいものにするための検討会を実施した（於法政大学国際日本学研究所：7月25日、於東京国立博物館：6月9日、7月8日、11月8日）。 ・本研究担当者智恵・シュタイネック氏のイギリス調査実施について、現地担当者（大英博物館 担当ニコル・ルマニエール）との連絡調整を行った（於東京国立博物館：6月25日～30日）。 ・米欧ミュージアム担当者と意見交換を行った（於東京都美術館 11月11日、於大阪大学中之島センター：11月13日）。 ・在欧日本仏教美術に関する問い合わせに対応した（6月25日ほか）。 (2) ・ドイツ・ケルン東アジア美術館が所蔵する日本仏教美術作品で未公開の作品も含み、所蔵作品の全体像の確認が取れた。 ・在欧博物館所蔵の日本仏教美術データベースをさらに作品数・項目数を増加させることができた。 ・米欧ミュージアム担当者ととの意見交換において、アメリカ・フィラデルフィア美術館などアメリカ方面にも新たな調査先を確認することができた。 (3) 米欧ミュージアム専門家交流シンポジウムにて、在欧日本仏教美術の内容について報告するとともに、東京国立博物館がこれまで在欧博物館等とどのように展示交流してきたのかを発表できた。			
			
ドイツ・フォルクヴァンク美術館からの日本仏教美術に関する問い合わせに対応（27年1月）			
【実績値】 ・調査件数 30件 ・データ入稿件数 30件 ・関連データ収集件数 50件 ・研究報告件数 1件（①）			
【備考】 研究報告 ①島谷弘幸「展覧会の交換と専門家による国際交流」（シンポジウム「米欧ミュージアムの日本美術コレクションとその活用」、於東京都美術館講堂、26年11月11日）			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4511-30

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：在欧博物館が所蔵する日本仏教美術のデータベース化を予定通り進めており、未公開の作品を確認できるようになっており、欧州と日本の研究者相互の国際交流も進んでいる。 独創性：なかなか調査しがたい状況であった在欧博物館所蔵の日本仏教美術について、着実に調査を進めて目標を達成できている。それらの作品を悉皆調査してデータベース化することは、独創的であるといえる。 発展性：画像付データベースを予定通り公開を進めており、日本における仏教美術研究の対象を広げるのみならず、欧州における日本美術研究の促進に寄与できている。 効率性：在欧博物館への調査が一年で一度の実施であったが、日本において基礎的データ収集を進めることができた。 継続性：本研究は、すでに法政大学で数年来進めてきているもので、画像付データベースも公開済みである。調査結果はすみやかにデータ入力してデータベースとして公開できる状況である。 正確性：すでにデータベース本体が完成しているため、調査結果はすみやかにデータベースに流入することができる。データベースは、日本仏教美術研究者に活用できるものとなっている。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	データ入稿件数	関連データ収集件数	研究報告件数		
評価	B	B	B	B		
判定理由 調査件数：欧州の博物館において現地調査を目標通りに実施することができた。 データ入稿件数：調査を実施した結果について速やかにデータ入力して入稿することができた。 関連データ収集件数：東京国立博物館において関連作品の資料収集を十分に進めることができた。 研究報告件数：研究成果を口頭発表し、海外の研究者や博物館担当者と交流することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続してきた研究課題であり、本年度の調査対象である在欧博物館での悉皆調査も効率的に進めることができた。公開している画像付データベースについても、さらに充実した内容となるように検討会を行い、本年度の調査結果も随時データ入稿している。研究成果は口頭発表することができて、海外研究者との交流も行なった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	在欧博物館での調査実施や、東京国立博物館におけるデータ収集など計画通りに進行している。次年度は、引き続き調査を実施し着実にデータ公開件数を増やしていくとともに、日本美術研究の発展のためにも、データベース自体の普及につとめたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究(5)-①		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 松本伸之
【スタッフ】 赤尾栄慶(上席研究員)、山本英男(上席研究員)、宮川禎一(企画室長)、浅見龍介(列品管理室長)、山川暁(教育室長)、永島明子(列品管理室主任研究員)、大原嘉豊(企画室主任研究員)、羽田聡(保存修復指導室主任研究員)、呉孟晋(列品管理課主任研究員)、降矢哲男(工芸室研究員)、福士雄也(美術室研究員)、末兼俊彦(企画室研究員)、水谷亜希(教育室研究員)、鬼原俊枝(学芸部研究員)、池田素子(列品管理室アソシエイトフェロー)、井波林太郎(美術室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 館蔵品、寄託品、それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりえる文化財と、その周辺領域に関して、美術史、歴史学、考古学、博物館学、保存科学等の各見地から調査研究を実施し、各種学会等・学術誌等でその成果を発表した。			
【年度実績概要】 ・研究会等で発表を行った。 ・学術雑誌他出版物に論文等を掲載した。			
			
国際シンポジウムにおける研究発表風景			
【実績値】 ・学会、研究会等発表件数：18件 ・論文等掲載数：34件			
【備考】 研究発表：赤尾栄慶「京都国立博物館蔵『続高僧伝』二種」(7/19 中国・復旦大学中華文明国際研究センター 国際学術検討会「仏教と中国宗教研究の新視野と新方法」)ほか 論文等：山本英男ほか14名「京都国立博物館名品手帳」(京都新聞朝刊連載 4月1日～27年3月31日)ほか			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4512-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：特別展覧会及び平常展示との関連を重視しつつ、学会や世間の動向にも留意しながら研究を行った。 独創性：当館収蔵品・寄託品を中心に、京都の伝統文化に関わる文化財に重点を置いて研究を進めた。 発展性：新たな視点を盛り込みながら研究を行い、その成果を展示等にも反映する等、一般へ広く還元した。 効率性：人員・時間・予算・設備等に関わる様々な制約の中で、多くの研究を実施した。 継続性：長期にわたって継続的な研究を行い、折々の成果を発表した。 正確性：綿密な調査と確実な記録に基づき、実証的な研究を行った。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等 発表件数	論文等掲載数				
評定	B	B				
判定理由 学会・研究会等発表件数、論文等掲載数： いずれも、研究機関の規模及び業務の繁多を勘案した上で、適切な成果を上げている。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	十分な調査研究成果の公開を行い、絵画・書跡・工芸・考古・歴史資料等の各分野にわたり、最新の学術成果を盛り込んだ情報を発信した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	従来成果も活かしながら、広く一般への還元を図るなど、研究計画に基づき、順調に進捗している。 次年度には、中期計画最終年度として、総合的な調査研究に主眼を置いていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 訓点資料としての典籍に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】			
<p>漢文を訓読するために施された訓点の資料は、漢籍が比較的少なく、その大半が仏典である。主に平安時代や鎌倉時代を中心とした仏典に施された訓点によって、当時の日本人がどのように本文を理解していたか、或いは当時の日本語の有り様が知られることになる。ことに当館は、国内トップレベルの写経コレクションを有していることから、専門の学識者を客員研究員に迎えつつ、それらの調査研究を行い、その成果を研究者や一般に還元する。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】			
宇都宮啓吾（客員研究員、大阪大谷大学教授）、羽田聡（主任研究員）			
【主な成果】			
<p>これまでの調査を踏まえて、客員研究員の宇都宮啓吾が東京文化財研究所で開催された国際研修「紙の保存と修復」において、講師として「古写経と訓点」（東京文化財研究所 International Course on Conservation of Japanese Paper 2014 2014.9.9）の講演を行った。また、秋の特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」に展示予定の高山寺所蔵『仏説弥勒上生経』『金剛頂瑜伽経』などに付された訓点の調査を行い、展示に反映させた。</p>			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査を年10回実施し、重要な部分は写真撮影を行った。 ・ 漢字文化圏の訓読現象をも視野に入れており、26年7月及び8月に韓国の口訣学会のメンバーとの意見交換及び検討会を実施し、宇都宮啓吾が国際研修「紙の保存と修復」において発表を行った。 ・ 秋の特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」に展示予定の高山寺所蔵『仏説弥勒上生経』『金剛頂瑜伽経』などや『論語』に付された訓点の調査を行い、解説と展示に反映させた。 ・ 赤尾栄慶が26年11月13日に開催された、国宝修理装演師連盟の定期研究会で「書跡と文化財修理」と題した講演を行い、訓点の重要性など付いても指摘を行った。 			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査 11回 ・ 国際交流 2回 ・ 論文 2回(①～②) ・ 研究成果公開（講演・発表・解説） 3回 			
【備考】			
論文			
①宇都宮啓吾「智積院蔵『醍醐祖師開書』について一意教上人頼賢とその周辺を巡って―」（『智山学報』64 201			
②赤尾栄慶「隋経『阿難見水光瑞経』の出現」（『高田時雄教授退休記念東方学研究論集（日英文分冊）』）26年6月			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4512-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：和紙が世界的に注目される中、料紙に付された訓点の理解に努めた。 独創性：宇都宮論文において、鎌倉中期の真言僧、頼賢に関する新たな視点を提供した。 発展性：写経のみならず、『論語』などの漢籍にも目を向けた調査を実施した。 効率性：調査結果を直ちに、特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」の図録の解説に反映させた。 継続性：韓国の口訣学会との国際交流会と寄託品を含む文化財の調査を行い、引き続き情報交換を行うこととした。 正確性：国語学・書誌学を中心とした解説及び料紙の紙質（楮紙、雁皮）に関する最新の成果を提供した。						

2. 定量的評価

観点	調査	国際交流	論文	研究成果公開		
評定	B	A	B	B		
判定理由 調査： ほぼ、毎月の調査が実施できた。 国際交流： 韓国の口訣学会との国際交流会は、年間1回を予定していたが、2回実施できた。 論文：宇都宮2回 出版物に付した解説 赤尾1回・羽田1回 研究成果公開：予定通り、特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」の図録を出版した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査及び成果を反映させた特別展覧会「国宝鳥獣戯画と高山寺」の図録を出版し、訓点に関する論文も発表したことから、所期の目的を達成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各年度ごとに国際交流も実施し、論文発表や図録の出版などが予定通りに実施されており、順調に成果を上げている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別調査「彫刻」(5)-①		
【事業概要】			
京都国立博物館収蔵の彫刻作品及び京都周辺社寺の仏像の調査研究、撮影			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長 浅見龍介
【スタッフ】			
岡田愛（列品管理室員）、池田素子（列品管理室員）、浅湫毅（東京国立博物館）、井上一稔（同志社大学文学部教授・客員研究員）、田中健一（大阪大谷大学専任講師・調査員）			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・特別展「南山城の古寺巡礼」出品作品の調査、撮影を行った。 ・京都国立博物館収蔵の大型作品の調査、撮影を行った。 ・京都市・妙心寺の仏像調査を行い、江戸時代の銘記を複数見出した。 ・木津川市鶯瀧寺、常念寺、滋賀県彦根市・高宮寺の予備調査を行い、平安時代、鎌倉時代の像を見出した。 ・河内長野市金剛寺の大黒天立像の調査により制作年代を記した銘記を発見した。 ・京都市・知恩寺の仏像調査を行った。 ・収蔵品等のX線CT調査を行った。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・京都国立博物館所蔵、寄託作品の写真は、撮影からかなりの時間が経過しているものが多く、カラー写真は限定される。今回、大型作品のデジタル撮影をまとめて行い、調書を作成した。 ・妙心寺の調査では、江戸時代の仏師康乗銘のある作品、文献から同時代の藤村仲円の作と考えられる像を発見することができた。 ・寄託品である神護寺の木心乾漆造葉師如来坐像のX線CT調査では、木心の顔、2層目の顔を観察することができた。 ・河内長野市金剛寺の大黒天立像の銘記を新たに導入したファイバースコープで観察・撮影し、展示で示すことができた。 ・知恩寺の仏像調査により、『社寺調査報告書』の刊行の目途が立った（27年度9月頃刊行予定）。 			
			
妙心寺 地藏菩薩坐像調査			
【実績値】			
調査日数 24 日、調査件数 100 件、撮影件数 100 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4512-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	B	A	B	A	B
判定理由 適時性：新館が開館し、新しい情報を発信することが望まれるため、この調査研究が有効である。 独創性：X線CT、ファイバースコープを駆使した多角的な調査を実施できる機関は極めて限られている。 発展性：京都周辺の仏像調査はすでに行われているものの、科学機器を用いた成果はまだ少ない。今後の進展の可能性が大きい。 効率性：限られた予算内で大型作品を含め、銘文の発見、時代判定に有効なさまざまな角度の写真撮影等効果的な調査・撮影を実施できた。 継続性：京都及びその周辺には対象となる仏像が極めて多いが、客員研究員、調査員や国立博物館の彫刻担当研究員の参加による現在の体制で、着実に調査を継続していくことが可能である。 正確性：X線CT、ファイバースコープ、デジタルカメラにより映像と客観的なデータを蓄積し、提示して検証可能な状況を確保している						

2. 定量的評価

観点	調査日数	調査件数	撮影件数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査日数：月平均2日の調査を実施し、実績を上げることができた。 調査件数：調査は効率よく進めており、調査を実施した作品数も満足できる数である。 撮影件数：様々なカットを含め、有用な撮影ができた。						

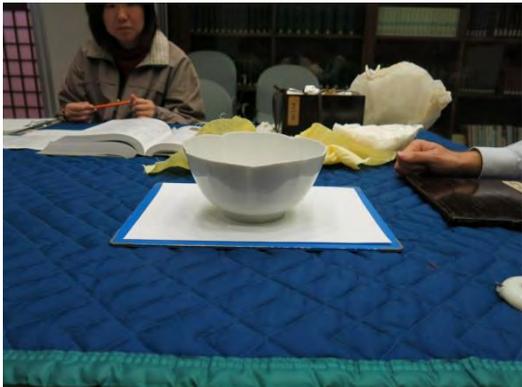
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	金剛寺大黒天立像の像内墨書銘の解読をファイバースコープによって行なったことは新聞に掲載された。X線CT調査はテレビで取り上げられ、視聴者の注目を集めた。これらを含む成果によって京都国立博物館の展示、出版等、博物館活動の充実に寄与することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は、科学機器を用いた調査手法を導入し、新しい研究方法を開発する基盤を構築することができた。社寺所蔵の文化財調査に於いては、保存状況を確認し、地方公共団体と文化財保護について連携することができた。 次年度は、これを一層推進して成果を挙げ、京都の社寺から調査を要望されるような関係を築くことを目標とする。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 出土・伝世古陶磁に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】			
日本国内で出土・伝世した陶磁器について、総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室研究員 降矢哲男
【スタッフ】			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・福井市愛宕坂茶道美術館の所蔵品調査を行い、28件の調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。 ・徳島城博物館の寄贈品について調査を行い、29件の調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。 			
【年度実績概要】			
<p>所蔵や寄贈を検討している陶磁について調査を依頼されている、福井市愛宕坂茶道美術館、徳島城博物館において、各2日、計4日の調査を実施した。いずれも近代になって収集されたものである。器形や年代、産地等についても多岐に及んでいるが、茶道具として用いるために集められたものであり、収集家の個性や地域性などを探る上で、その傾向や蒐集経路などについての知見を得ることができた。</p>			
			
福井市愛宕坂茶道美術館調査風景			
【実績値】			
調書作成件数 57件			
調査日数(館外) 4日間			
成果公表4件(研究発表数 2回(①、②)、論文等執筆件数 2件(①、②))			
【備考】			
研究発表			
①「京都・堺の茶の湯文化」、大分市戦国時代館セミナー「戦国時代の庭園と茶の湯」、ホルトホール大分、2014年10月5日			
②「秀吉と茶の湯」、河内長野地域学講座V I <歴史編2>、河内長野市立市民交流センター、2014年12月17日			
論文執筆			
①「茶道資料館開館35周年秋季特別展「茶の湯の名碗」展について」『淡交』68(11)、淡交社、2014年10月28日			
②「名碗の魅力」開館35周年記念秋季特別展図録『茶の湯の名碗』、茶道資料館、2014年10月10日			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	C	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：所蔵品・寄託品の充実や、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させた。</p> <p>独創性：基礎情報の収集に主眼があり、独創性にはやや乏しい。</p> <p>発展性：調査成果を今後の展覧会や研究発表等に活かすことができる。</p> <p>効率性：数量的にはこれまでの調査件数を下回る調査数ではあるが、茶道具とであることから付属資料も多く、そうした中では効率よく調査が行えた。</p> <p>継続性：文化財に関する基礎的な情報の収集を中長期的な視野に立って実施している。</p> <p>正確性：調査時間も限られた中での調査のため、一点ごとに多くの調査時間を割くことができなかったが、写真撮影を行うことにより、調査後にも再度確認を行うことができた。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査作成件数	調査日数	成果公表			
評価	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>調査作成件数：短い期間の中、計 57 件の調査を行うことができた。</p> <p>調査日数：二か所、計四日間の調査日数ではあるが、短期間に他業務との兼ね合いの中で一定の調査を行うことができた。</p> <p>成果公表：基礎データを蓄積でき、平常展示や講演会などにおいてもその成果を公表することができた。</p>						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	基礎データ蓄積していくことが本プロジェクトの根本であり、一つの調査成果だけでは独創性を持った展開にはなり難い部分がある。しかし、調査成果を蓄積していくことによって、展覧会や講演会などの博物館事業の内容を充実させていくことに繋がった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究成果の蓄積を、研究発表や展示を通じて、着実に還元してきている。 次年度は、新たなデータの蓄積を継続して進めていくとともに、従来の蓄積データを総括しながら、さらなる成果の結実に結び付けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 特別調査「漆工」(科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】	<p>科学研究費補助金(若手研究(A))「内外伝世品の調査ならびに比較に基づく京都製蒔絵の歴史的研究」の一環として、国内外の蒔絵の伝世品を調査し、既知の基準作と比較し、また伝世の経緯を伝える史料を研究することによって、近世から近代への微妙な様式変化や、京都とそれ以外の地域の蒔絵の差異を見極めることを目標と定め、京都の蒔絵史を捉えることを目的とする。また海外の所蔵者や研究者との交流を深め、将来の共同研究の在り方を探る。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員 永島明子
【スタッフ】	<p>【主な成果】昨年度までの成果の一部を当館研究紀要に発表することができた。昨年度にひきつづき、イギリスのV&A美術館とフランスパリ装飾美術館の収蔵庫にて漆器を調査し、イギリスではV&A美術館の家具修復担当者、フランスではルーヴル美術館の学芸員やオルセー美術館の名誉学芸員、またパリの家具修復家などとも日本製漆器の受容のありようについてさまざまな意見交換も行った。パリ装飾美術館からは、先方のコレクションを用いた展覧会を企画しないかとの提案も受けた。1月にはV&A美術館のジュリア・ハット氏とパリ装飾美術館のアンヌ・フォレ・キャルリエ氏を当館へ招聘し、特にフォレ・キャルリエ氏とは「日仏漆芸交流を学ぶ」と題した国際研究セミナーを実現した。</p>		
【年度実績概要】	<p>昨年度までの成果の一部を当館研究紀要『学叢』に「ルーヴル美術館蔵アドルフ・ティエール(一七九七～一八七七)蒔絵コレクション」として発表することができ、19世紀パリにおける東洋趣味の流れと流通していた日本製漆工作品の流通状況のおよその対応を掴むことができた。イギリスでは、万国博覧会の時代を中心とした膨大なコレクションを誇るV&A美術館の収蔵庫において漆器調査を進めた。調査の一部分に京都国立近代美術館の中尾優衣氏も同席し、意見を交換しながら作業を分担して、効率のよい調査を行うことができた。フランスでは、昨年度に引き続きパリ装飾美術館の漆器を調査した。昨年同様、調査内容はフランス語でも記録され、先方の台帳情報に役立てられることになっている。本年度は同館の文献情報センターでの調査も行い、2年間に調査した漆器の全てについて寄贈者等の来歴情報を収集した。パリ装飾美術館の学芸員からは同館所蔵の漆器で展覧会を企画しないかとの提案も受けた。</p>		
			
調査中の作品をともに熟覧するフランスの学芸		V & A及びパリ装飾美術館の収蔵品	
【実績値】	<p>調査作品数 136 件 撮影カット数 3,103 カット</p>		
【備考】	<p>・「ルーヴル美術館蔵アドルフ・ティエール(一七九七～一八七七)蒔絵コレクション」『学叢』36号、京都国立博物館編、2014年5月：pp.10-20 および69-98。 ・国際交流セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」於京都国立博物館 平成知新館B1F講堂、2015年1月25日開催。</p>		

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	A	B	S	A
<p>判定理由</p> <p>適時性：京都製漆器の未来を考える上で重要なデータを収集しており、今年度、京都国立近代美術館で開催された「うるしの近代」展へも調査の成果を提供した。</p> <p>独創性：輸出漆器のデータから国内の漆器生産の状況を知る手法の独創性が認められて科研の助成対象となった。</p> <p>発展性：調査の成果をその場で所蔵者に還元。今後の展示や執筆物に活かされる情報を収集。所蔵館から国際共同研究の提案を受けた。</p> <p>効率性：調査後、資料整理の時間がとれていない。限られた時間に現地語で調査を実施することができた。</p> <p>継続性：3年前からの継続事業。研究の大枠は十数年来、一環して続く。比較データの蓄積。</p> <p>正確性：システマチックな調査と顕微鏡画像を含む比較データの蓄積。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査作品数	撮影カット数				
評定	B	A				
<p>判定理由</p> <p>調査中に同席する研究者からの質問を多く受け、それに答えることも職務の一環と判断したため、調査作品数が予定より格段に増えることはなかった。しかし、撮影カット数はおよび比較ポイントを押さえた画像の内容は、所期の目標を上回る成果を上げたと考える。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>昨年度の調査の成果を当館研究紀要にまとめることができた。これまで熟覧の機会が提供されることがほとんどなかったパリ装飾美術館の日本製漆器コレクションについて、その全容をほぼ把握することができた上、同館からその成果を展覧会にまとめないかとの提案を受けた。今後も研究費の取得に努め、日本製漆器を大量に所蔵しながら関連情報を十分に持っていない海外所蔵館との研究交流を深め、日本の知識の橋渡しをし、また、日本の一般市民に向けても展示や執筆を通して研究成果を還元したい。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>おおむね計画通りに推移している。</p>

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究 ((5)-①)		
【事業概要】 収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後に収集・展示の対象となりうる文化財を調査し、併せて保存・展示・公開に関する研究を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 内藤 栄
【スタッフ】 岩田茂樹（上席研究員）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（企画室長）、清水健（主任研究員）、鳥越俊行（主任研究員）、岩戸晶子（列品室員）、齋木涼子（教育室員）、北澤菜月（美術室員）、山口隆介（情報サービス室員）、田澤梓（工芸考古室員）、原瑛莉子（企画室員）			
【主な成果】 収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後に収集・展示の対象となりうる文化財について、研究員それぞれの専門分野の立場から調査を実施し、その調査に基づく研究の成果は、展示会場におけるパネル解説や、各種刊行物に掲載の論文、館内外での講座等に反映された。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・購入8件、寄託5件を受け入れるにあたり、綿密な調査に基づく調書を各担当研究員が作成した。 ・各研究員がそれぞれの研究分野に沿って文化財調査を実施し、その成果は特別展・特別陳列・名品展における会場パネル解説等と、各展示図録掲載の解説等に反映された。 ・各研究員の研究成果の一端は、「奈良国立博物館だより」、読売新聞の連載「奈良博手帖」、特別展会期中の新聞連載での展示品解説で紹介した。 ・客員研究員及び調査員の助言を仰ぐための調査会を、22回実施した（延べ人数：25人）。 ・東大寺での聖教原本調査会に参加した（26年12月11日～12日）。 ・市内個人宅での文化財調査を実施した（26年8月11日）。 ・寄託品の染田天神講連歌資料を調査した（27年1月20日） 			
			
連歌資料収納唐櫃の調査			
【実績値】			
購入・寄託に向けた文化財調書の作成枚数	13枚		
客員研究員・調査員の調査回数（延べ人数）	22回（延べ25人）		
研究発表等件数	34件（①～②）		
【備考】			
研究発表等			
①齋木涼子「醍醐寺のすべて」（特別展図録『国宝醍醐寺のすべて』総論 26年7月19日）			
②野尻忠「公盛の書状」（「奈良博手帖」読売新聞朝刊 27年1月27日）ほか32件			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4513-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：内山永久寺（奈良県天理市に所在した廃寺）開創900年の記念の年に、「内山永久寺と南都の密教絵画」と題する講座を開催することができ、適時に事業を実施することができた。 独創性：講座「密教法具の始まりを求めて」など、当館の長年にわたる仏教美術研究の蓄積に基づかなければ成し得ない成果を公表できた。 発展性：研究報告「写経遺品からみる宝亀初年の一切経書写と正倉院文書」は、写経本体には書写年代が記されない遺品につき、周辺史料から書写年を特定する試みであり、いまだ膨大な数がある書写年不詳写経の研究へ応用と発展が期待できる。 効率性：学術研究とは一線を画する他業務を数多く抱えながらも、研究成果を着実に発表できている。 継続性：当館が50年以上にわたり活動の中心に据えてきた仏教美術研究の基礎に基づき、調査・収集・展示をできた。 正確性：研究員が作成する文化財調査書は、館内で複数回の鑑査会を実施して内容の正確性を高めている。特に購入時の調査書については、外部委員による協議会に諮って了承されており、的確な内容であったと言える。						

2. 定量的評価

観点	購入・寄託に向けた文化財調査書の作成枚数	客員研究員・調査員の調査回数（延べ人数）	研究発表等件数			
評価	B	B	B			
判定理由 購入・寄託に向けた文化財調査書の作成枚数：新規に受け入れた全ての文化財の調査書を作成できた（総数は例年並）。 客員研究員・調査員の調査回数：限られた時間のなかで、22回（延べ25人）（回数は例年並）を実施できた。 研究発表等件数：毎月1回のサンデートークを計画通り実施したほか、展覧会事業に対応した新聞連載を実施するなど、各研究員の専門性を生かした文化財研究の成果を公表できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度も、これまでと同様、仏教美術及び奈良関係の文化財を中心としたコレクションを充実させることができ、それらの調査に基づく研究成果を各種媒体に公表、また口頭報告することができた。この分野における研究と展示で中心的役割を果たしてきた当館に期待される成果は、本年度も順調に積み上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度も多数の文化財を調査できた。調査は、当館が長年にわたり築いてきた深い知識と経験に基づくものであり、継続性が何よりも肝要である。そのなかで、館として成果を発表する場を積極的に設け、また各研究員が自らの専門分野で刊行物等に成果を報告していることは、目標達成計画実現のための着実な歩みと評価できる。今後もこの研究体制を維持できれば、さらなる上積みが可能となる。来年度も現在の研究体制を維持し、引き続き文化財調査に取り組む。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 復元模写制作に伴う仏教絵画の光学的調査と研究（(5)－①）		
【事業概要】	国宝信貴山縁起絵巻及び重要文化財板絵神像の復元模写制作に伴う光学的調査及び彩色の復元的研究		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
【スタッフ】	北澤菜月（美術室員）、原瑛莉子（企画室員）		
【主な成果】	<p>(1) 文化庁の復元模写事業に伴い、国宝信貴山縁起絵巻及び重要文化財板絵神像の光学的調査で得られたデータに基づいて研究会を実施した。</p> <p>(2) ポリライトを用いた可視光励起による蛍光画像の撮影などの光学的調査を通じて得られたデータにより、有機色料の有無など制作当初の彩色の状態を復元的に把握することができた。</p> <p>(3) 光学的調査で得られたデータを基に当初の彩色の姿について検討を重ね、その所見を復元模写制作に反映させた。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 国宝信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）及び重要文化財板絵神像（薬師寺蔵）に関する文化庁の復元模写事業に協力する形で、当館調査室において両作品に対する熟覧・高精細カラー撮影を実施し、同時に前年度までに東京文化財研究所との共同研究形式で実施していた可視光励起による蛍光画像撮影、蛍光X線を用いた顔料分析、近赤外線撮影等の光学的調査成果に基づいて研究会を開催した（26年6月5日）。</p> <p>(2) 信貴山縁起絵巻について蛍光X線分析に基づくデータを検討した結果、着衣部分には金泥が精緻に用いられる一方、面相部には顔料が塗られていないことが判明するなど、当初の彩色を復元的に解明することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・板絵神像についてポリライトを用いた可視光励起による蛍光画像や近赤外線画像を分析した結果、有機系色料を使用していることなど、剥落部分を含めた当初の彩色を復元的に解明することができた。 ・板絵神像の透過エックス線撮影データを分析した結果、板地に端喰を固定している釘打ちの構造が明らかとなり、板地の復元に資することができた。 <p>(3) 信貴山縁起絵巻、板絵神像ともに、光学的調査及び研究会で得られた彩色に関する知見を、文化庁による復元模写事業に反映させることで、制作当初の姿に近い復元模写を完成させることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・信貴山縁起絵巻については完成した復元模写を28年度に当館において開催予定の信貴山縁起絵巻展で公開し、併せて調査で得られた知見を展覧会図録や展示パネル等で公表する予定である。 ・板絵神像については休ヶ岡八幡宮（薬師寺鎮守）の秋大祭において完成した復元模写を展示し、調査成果を広く公開した（26年9月13日）。 		
			
	<p>重要文化財板絵神像（薬師寺蔵）の可視光励起による蛍光画像</p>		
【実績値】	<p>調査回数：2回（26年6月5日に信貴山縁起絵巻、板絵神像の2件について実施）</p> <p>調査作品数：2件（信貴山縁起絵巻3巻、板絵神像6面）</p> <p>研究会開催件数：1件（①）</p>		
【備考】	<p>信貴山縁起絵巻の光学的調査の成果については、28年度に当館で開催予定の信貴山縁起絵巻展の展覧会図録において公表する予定。</p> <p>研究会開催</p> <p>①26年6月5日、信貴山縁起絵巻・板絵神像の光学的調査終了後、前年度までの調査で得られたデータと当日得られた調査データを分析・検討し、模写制作に資する顔料の復元案を提示した。</p>		

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4513-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：平安絵巻の代表的な国宝信貴山縁起絵巻、及び鎌倉時代の南都仏画の基準作である薬師寺の板絵神像を文化庁主導で復元模写するというまたとない機会に、両作品の寄託館である当館が主導して光学的調査及び研究会を実施することができた。 独創性：信貴山縁起絵巻、板絵神像ともに可視光励起による蛍光画像撮影や蛍光X線分析など最新の光学機器を用いた調査、及びその成果をもとに復元模写を制作することは史上初めてであり、平安時代、鎌倉時代を代表する両作品の当初の彩色が解明されるという画期的な成果が得られた。 発展性：現在は変色・剥落などによって肉眼では彩色が判別できない状態になっている他の文化財に対しても、今回と同様の最新の光学機器を用いた顔料分析を実施することによって当初の彩色を解明し、復元模写へとつなげることが可能となる。 効率性：光学的調査のうち、信貴山縁起絵巻については主に東京文化財研究所との共同研究の形で実施し、板絵神像については当館の光学機器を積極的に活用した。 継続性：光学的調査そのものは前年度までに実施しており、本年度はその成果に基づく研究会を実施し、復元模写の完成へとつなげた。二つの模写事業が同時に進行していたこともあり、1日に2作品に関する研究会を同時に実施することになったが、その成果は模写事業に十分反映することができた。 正確性：信貴山縁起絵巻の光学的調査は、16年度より継続的に実施している共同研究で確立され、過去に多くの成果を挙げてきた方法を踏襲したものであり、得られたデータの信頼性は十分に確保されている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	研究会開催件数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：作品そのものの主要な調査は前年度までに実施していたため、本年度は確認のための追加調査を年度当初の目標どおり2回実施した。 調査作品数：取り扱いの難しい国宝絵巻1件3巻と重文の板絵1件6面について年度当初の目標どおり調査を実施した。 研究会開催件数：調査データに基づく彩色復元に関する研究会を年度当初の目標どおり1回実施した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平安絵巻の名品である国宝信貴山縁起絵巻と、鎌倉時代における南都仏画の基準作である薬師寺所蔵の重要文化財板絵神像に関する復元模写事業を実施するというまたとない機会を捉え、光学的調査実施とその調査データに基づいた制作当初の彩色の復元的研究を行い、その成果を復元模写に反映させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	信貴山縁起絵巻と板絵神像という二つの重要作品については、すでに昨年度までに光学的調査は終わっており、本年度は研究会を開催して調査データの分析で得られた成果を復元模写に反映させることが中心課題となった。中期計画最終年度である次年度新たな復元模写の対象として当館所蔵の重要文化財大仏頂曼荼羅を取り上げる予定であり、引き続きこれまでと同様の光学的調査を実施していく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 平安時代の大般若経を総合的に調査し、歴史資料としての情報資源化を図る(学術研究助成基金助成金) ((5)－①)		
【事業概要】			
<p>安時代に日本で書写された『大般若波羅蜜多経』(略して「大般若経」とも)の網羅的な調査を通じて、当該期における写経の形態的特徴を明らかにするとともに、写経遺品から得られる情報を歴史学の研究資料として利用するための基盤を構築しようとするものである。平安時代のなかでも9～11世紀のものは情報の共有が不足しているため、本研究ではその時代に書写された『大般若波羅蜜多経』の基礎データの蓄積に重点を置く。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 野尻 忠
【スタッフ】			
齋木涼子(教育室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続き、「安倍小水麻呂願経」と呼ばれる貞観13年(871)の願文を持つ大般若経を、巻頭から巻末まで全巻開いて調査し、写真撮影した。その結果、慈光寺所蔵分の大般若経は全て調査を終え、調書整理とデータ化に着手した(27年3月完了予定)。調査及びデータ整理の途上において、この大般若経は巻による筆跡の相違が顕著であることが判明した。 ・本研究課題の一環として海住山寺所蔵の大般若経(11世紀)、及び長弓寺所蔵の大般若経(12世紀)を調査したが、これは当館で来年度開催の特別展「まぼろしの久能寺経に出会う 平安古経展」の準備にも繋がるものである。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・安倍小水麻呂願経の調査(26年12月1日)。調書作成12巻。 ・安倍小水麻呂願経の写真撮影(26年12月2日、27年1月7日)。撮影巻数13巻。 ・安倍小水麻呂願経の残存巻次のテキストを『大正新脩大蔵経』と照合(142巻分)。 ・安倍小水麻呂願経の調書整理と、調査項目のデジタルデータ化。 ・安倍小水麻呂願経の追加調査とデータ整理法の検討(27年2月23日) ・大般若経595帖(長弓寺所蔵)のうち10帖を調査(26年12月22日)。 ・大般若経599帖(海住山寺所蔵)のうち10帖を調査(27年1月10日)。 			
			
調査風景(27年2月23日)			
【実績値】			
文化財調査の回数	6回		
研究成果発表件数	5件(①～⑤)		
【備考】			
研究成果発表			
①野尻忠「大般若経」ほか作品解説(静岡市美術館ほか特別展図録『法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り—』26年4月19日)			
②野尻忠「理趣経」ほか作品解説(奈良国立博物館特別展図録『国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—』26年7月19日)			
③野尻忠「東南院院主房起請」(『なにわ』711号 26年8月28日)			
④野尻忠「東大寺封戸処分勅書」ほか作品解説(奈良国立博物館特別展図録『第六十六回 正倉院展』26年10月23日)			
⑤野尻忠「春日御社御造営事(断簡貼交屏風)」ほか作品解説(奈良国立博物館特別陳列図録『おん祭と春日信仰の美術【特集】威儀物—神前のかざり—』26年12月9日)			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4513-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：これまで九世紀の写経に関する研究は前後の時代に比べて手薄であり、調査と研究の進展が望まれている。 独創性：長く研究の必要性が認識されながら、着手されていなかった安倍小水麻呂願経の全巻調査に、初めて本格的に取り組んでいる。 発展性：この基礎研究によって得られる成果は、同時代の他の写経研究だけでなく、前後の時代の大般若経調査にも有用な情報を提供することになると思われる。 効率性：1日で10巻以上の調査を実施するなど、調査開始初期に比べ1巻あたりの調査にかかる時間が短縮されている。 継続性：古写経研究は、当館がこれまで、そしてこれからも一貫して取り組む研究課題であり、今回の調査で培われたノウハウは、今後他の写経群を原本調査する際にも役立つと考えられる。 正確性：調書の作成は限られた研究者で行っており、書式の統一と正確性の維持は達成しやすい。今年度はできあがった調書のデータ入力に着手したが、これは調書内容の再チェックも兼ねており、調査の正確性はさらに高まる。						

2. 定量的評価

観点	文化財調査の回数	研究成果発表件数				
評定	B	B				
判定理由 文化財調査の回数：3年間のプロジェクト期間の2年目で、当初の目的であった安倍小水麻呂願経は全巻をひとつおりの調査し終えた上、他の経巻調査にも取り組むなど、十分な調査回数を実施できた。 研究成果発表件数：研究成果を複数回発表することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平安時代写経史研究のなかでも、9～11世紀については研究蓄積が少ない。この分野に取り組む本研究は、地道な基礎研究にならざるを得ないが、原本調査の数をこなし、確実に成果を上げている。次年度に向けては、当館寄託分を除く僚巻の調査に取り組み、一方でこれまでに作成した調書の精度を上げていき、最終的な報告書へと繋げていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	上記のとおり本研究は順調に成果をあげている。中期計画の「文化財に関する調査及び研究の推進」における本研究の役割は十分に果たしている。次年度は科研の最終年度でもあるため、これまでに作成した調書や画像をもとに研究を進め、報告書等の形にまとめる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 仏教工芸の総合的調査 ((5)-①)		
【事業概要】 仏教工芸品の総合的な調査・研究を行う			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長兼工芸考古室長 内藤 栄
【スタッフ】 清水健 (主任研究員)、田澤梓 (工芸考古室員)			
<p>【主な成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」の事前調査を行い、同寺所蔵の仏教工芸品を調査した。 ・収蔵する仏教工芸品に関して光学調査を含む調査を行った。 ・修理中の国宝・釈迦如來說法図 (館蔵) について、東京国立博物館、京都国立博物館、九州国立博物館、正倉院事務所等の研究員を招き、研究会を行った。 ・特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」では初出陳の工芸品を展示することができ、工芸史研究に新たな資料を提供できた。 ・同展に出陳され、後に当館の所蔵となった能作性宝珠 (能作性塔付属) に舍利らしき納入品が発見され、中世の宝珠信仰の研究に新たな資料を提供できた。 			
<p>【年度実績概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月28日、醍醐寺の工芸品調査を行った。 ・5月22日、6月12日、国宝 刺繍釈迦如來說法図の研究会を行った。 ・国宝 釈迦如來說法図に関しては、以前の修理個所に貼り間違えがあること、その本来の位置がどこであるかなど、専門家による討議が行われた。また、制作された地域についての新知見も得られた。 ・醍醐寺の密教法具作品に未紹介の優品を見いだすことができた。 ・収蔵する工芸品 (館蔵品、寄託品) の光学調査等の研究によって、材質、内部構造等に新知見が得られた。 ・醍醐寺の工芸品については、特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」図録に写真図版と解説、作品データを掲載した。 ・刺繍釈迦如來說法図についての知見は、修理後の報告書等で公表される予定。 ・収蔵する工芸品の新知見に関しては、当館発行の紀要論文集等で公表される予定。 			
			
醍醐寺のすべて展に向けた調査			
<p>【実績値】</p> <p>研究会回数：3回 調査回数：10回 刊行物等件数：1回</p>			
<p>【備考】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内藤栄「醍醐寺の舍利・宝珠信仰」 (『醍醐寺のすべて』展図録、奈良国立博物館編集、奈良国立博物館・日本経済新聞社発行、26年7月発行) 			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4513-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国宝 刺繍釈迦如來說法図、醍醐寺の工芸品をはじめわが国を代表する工芸品について専門家による意見交換を行った。醍醐寺の作品に関しては展覧会という発表の機会を踏まえての研究であり、緊急性があった。 独創性：博物館という作品を扱う部署ならではの研究活動であり、得られた情報は今後の研究活動の基本になるものと思われる。 発展性：刺繍釈迦如來說法図の研究は法隆寺金堂壁画などの研究にも影響を与え、醍醐寺の工芸品に研究はわが国の請来仏具の系譜の研究に貢献するものと思われる。 効率性：当館の研究員だけでは人手不足、研究範囲の問題などがあり、外部研究者を招待することでカバーすることができた。 継続性：今後も工芸品の作品調査は持続的に行う必要がある。 正確性：実際に作品を扱う立場だからこその研究方法を大切にし、外部の研究機関に発信できる基礎的な情報を蓄積してゆくように考えている。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	調査回数	刊行物等件数			
評定	B	B	B			
判定理由 研究会回数・調査回数・刊行物等件数：予定通り実施、発行することが出来た。 ・調査は古代染織の優品である刺繍釈迦如來說法図、醍醐寺の工芸品など、貴重な作品が対象であり、充実した内容となった。外部から招聘した研究者も多く、当館としても得るところが大きかった。 ・客員研究員1名、調査員1名による収藏品調査を行い、調書を作成した。着実に成果を上げている。 ・公表の媒体は展覧会図録であり、図録に最新情報を盛り込むことができた。この事業は継続的に実施されており、今後の継続も期待される。所期の成果をあげることができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	概ね当初の予定を実施することができた。改良点は調査対象を増やすこと、外部での調査回数を増やすことなどをあげることができる。次年度は主に南都の寺社の工芸品の調査を継続的に行うことにある。とりわけ、平成30年度に開催を予定している春日大社の宝物等を対象としたいと考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に則して順調に調査を行っている。調査成果は展覧会図録のほか、紀要論文集等に掲載するなどして公表している。とりわけ、中期計画における博物館の中核的存在としての国立博物館としての使命を、調査研究面でも発揮できていると考えられる。コンスタントな調査研究は、充実した展覧会内容に反映しており、新資料の発表、寺社の総合的な文化財の展観など、当館ならではの切り口の展覧会の基盤となっている。次年度は翌年に計画される信貴山朝護孫子寺の寺宝や鎌倉時代の僧侶、忍性の関連遺品などの調査を実施していきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 古墳・古墓出土品の調査と研究 ((5)-①)		
<p>【事業概要】 当館所蔵の五條猫塚古墳（奈良県五條市）の出土品は、蒙古鉢形冑や龍文透彫金具など大陸系の文化を背景にした武器・武具、工具、装飾品類が特徴的であり、我が国の5世紀の文化交流を検討する上で非常に貴重な資料となっている。過去数年間、科研費の交付などの気運を得て当古墳の出土品の再実測や写真撮影を行ってきたが、本事業ではこれを報告書にとりまとめるべく情報の整理と図版・原稿の編集をすすめ、併せて外部研究者との情報交換を行い、最新の成果の公表に努めることとする。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	情報サービス室長 吉澤 悟
【スタッフ】			
内藤栄（部長）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩戸晶子（列品室員）			
【主な成果】			
<p>五條猫塚古墳出土品の各遺物の実測図や写真数百枚をとりまとめ、出土地点や遺物の種類ごとに分けて序列化し、報告書の作成をすすめた。写真図版編、報告編、考察編の三分冊の構成をとることにして、写真図版編を完成させ、報告編も編集を終了した。当年度内に二分冊の印刷を終え、残りの考察編のとりまとめを進め、次年度にて三冊揃いの報告書を公表する計画である。また、この報告書の作成により、各遺物の現況が明らかになったため、錆や破損の著しい鉄製品を抽出し随時修理に回すことが容易になった。</p>			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・「五條猫塚古墳出土遺物の研究」写真図版編、報告編の編集、印刷が完了した。 ・報告書掲載の実測図に基づき、眉底付冑ほかの修理方法を検討し、次年度の修理事業の仕様を作成した。 			
			
<p>五條猫塚古墳出土遺物の研究</p>			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・報告書作成部数 2冊（各700部） 「五條猫塚古墳出土遺物の研究」写真図版編・報告編 各700部の印刷を終了（三冊目が完成するまで未公表） 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4513-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本国内はもとより、中国・韓国の研究者からも注目されている資料を整理し報告書化することができた。 独創性：外部研究者の協力を最大限に活用し、個々の遺物の報告としてはきわめて質の高い報告が作成できた。 発展性：本報告や研究知見を通じて、5世紀の対外交流史に関する研究進展に貢献することができる。 効率性：武器・武具など鉄製品の専門家に原稿執筆を依頼して、適格な情報を収集することができた。 継続性：本報告書をもとにして五條猫塚古墳出土品を重要文化財に指定するよう努める計画である。 正確性：四半世紀前に作成された報告書の誤謬を正し、今日的な学術的評価を加えることができた。						

2. 定量的評価

観点	報告書作成部数					
評価	B					
判定理由 報告書作成部数：2冊（各700部） 五條猫塚古墳の出土品は総計で600点以上を数える。このすべてを器種同定し、大半を実測図付で報告書に掲載できた。報告書は写真図版編、報告書とも各700部を製作することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	五條猫塚古墳の出土品は5世紀の大陸との文化交流に関する基準資料である。それを専門家の知見を借りながら今日的な学術的水準で報告書を作成できたことは、考古学界における大きな貢献である。この成果は展示や解説にも反映され得るであろうし、同古墳の鉄製品の修理にも役立てることができる。研究の基盤形成の点で大きく評価されるべき仕事である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査に基づく保存（保管）や活用という目標に沿って、地道に活動を継続して成果を上げている。中期計画の当該項目に対して順調に進展していると言ってよいと思われる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】			
収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 井上洋一
【スタッフ】			
<p>基信祐爾（企画課長）、原田あゆみ（企画課特別展室主任研究員）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、森實久美子（企画課特別展室研究員）、鷺頭桂（企画課特別展室研究員）、西島亜木子（企画課特別展室アソシエイトフェロー）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、川畑憲子（企画課文化交流展室主任研究員）、酒井田千明（企画課文化交流展室アソシエイトフェロー）、富坂賢（文化財課長）、丸山猶計（文化財課資料登録室主任研究員）、畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）、荒木和憲（文化財課資料登録室主任研究員）、望月規史（文化財課資料登録室アソシエイトフェロー）、藤生京子（文化財課：佐賀県教育委員会研修生）、竹内俊貴（文化財課資料管理室アソシエイトフェロー）、本田光子（学芸部特任研究員）、今津節生（博物館科学課長）、志賀智史（博物館科学課保存修復室主任研究員）、秋山純子（博物館科学課環境保全室研究員）、渡辺史之（博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー）、赤田昌倫（博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー）、三角菜緒（博物館科学課アソシエイトフェロー）、楠井隆志（展示課長）、岸本圭（展示課展示調整室主任研究員）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、一瀬智（展示課展示調整室研究員）、進村真之（展示課情報サービス室主任研究員）、小嶋篤（展示課情報サービス室研究員）、池内一誠（交流課教育普及室主任研究員）</p>			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財と、それらに関連する資料等について、美術史学・歴史学・考古学・博物館学・保存科学等の多様な見地から調査研究を行い、その成果を様々な展示に反映させ、また学会・研究会ならびに学術雑誌・書籍等でも発表・公開した。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・様々な研究成果を以下のような展覧会に反映させた。 特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」(26年4月15日～6月8日) 特別展「クリーブランド美術館展一名画でたどる日本の美」(26年7月8日～8月31日) 特別展「武寧王時代の東アジア世界」：韓国・国立公州博物館開催(26年9月23日～11月23日) 特別展「台北 国立故宫博物院一神品至宝一」(26年10月7日～11月30日) 特別展「日本発掘 一発掘された日本列島2014」(27年1月1日～3月1日) 特別展「古代日本と百済の交流一大宰府・飛鳥そして公州・扶餘一」(27年1月1日～3月1日) 特別公開 国宝 琉球王国尚家関係資料修理完成記念特別公開(26年4月8日～5月18日) 特別公開 国宝「西光寺梵鐘」(26年4月22日～8月31日) 特別公開「解剖書に見る東洋と西洋ーファブリカからターヘル・アナトミアへー」(26年5月20日～7月13日) 特別公開「海を越えた再会ークリーブランド美術館の仲間たちー」(26年7月15日～8月24日) 新春特別公開「徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」(27年1月1日～1月25日) 特集展示「『鳴りもの』の世界ー九州ゆかりの梵音具を中心に」(26年11月18日～27年2月15日) v 関連展示 小中学生からの考古学(26年7月1日～9月23日) トピック展示「館蔵近世絵画名品展」(前期：26年2月25日～4月6日、後期：26年4月8日～5月18日) トピック展示「中国を旅した禅僧の足跡」(26年5月27日～7月6日) トピック展示「全国高等学校考古名品展」(26年7月15日～9月23日) トピック展示「大涅槃展」(27年1月14日～2月15日) 			
【実績値】			
調査・研究会等発表件数：25回			
論文等掲載数：25回			
展示への反映：17回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：学会動向に留意するとともに、社会的な関心や展覧会等と関連づけた研究を行っている。 独創性：アジア史的観点から日本文化の形成を捉える研究を行い、その成果を展示や図録に反映させている。 発展性：国内外の研究者との学术交流を深めながら、常に新たな問題意識をもって研究を行っている。 効率性：館藏品や寄託品の管理や展示に伴う諸作業等、他業務に多くの時間が割かれながらも研究成果を蓄積している。 継続性：各研究員の長期にわたる学術的関心をもとに研究を行っている。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等発表件数	論文等掲載数	展示への反映			
評価	B	B	B			
判定理由 学会・研究会等発表件数ならびに論文掲載数：いずれも研究機関の規模（研究員の人数）と業務の繁多を考慮したうえで、適切な成果をあげている。 展示への反映：多岐にわたる調査研究の成果を17回の様々な展示活動に反映させた。						

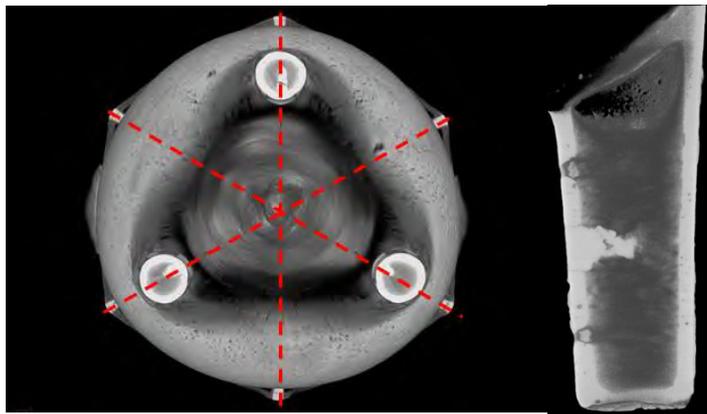
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究員の様々な調査研究を通し、博物館活動としての資料収集、調査・研究、公開が一体となり、極めて充実したものとなった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査研究に基づき館藏品・寄託品の計画的収集や魅力ある展示活動を展開するなど、計画は順調に進捗している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析 ((5)-①)		
【事業概要】 日本国内で最も優れた中国古代青銅器コレクションである住友コレクション 180 点を中心に、日本国内で所蔵されている中国古代青銅器を調査する。古代中国青銅器の鑄造技術の解明のための採り得る方法として、X線CTスキャナ調査、三次元計測による調査、3Dプリンタによる造形出力、鑄造実験による検証を実施する。本研究をまとめた研究報告を中国で出版する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 井上洋一（学芸部長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）			
【主な成果】 (1) 泉屋博古館の所蔵品を中心に中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積すると共にX線CT、3Dデジタルイザ、3Dプリンタ等の科学調査機器を用いて、調査研究を行った (2) 本研究成果として、中国国内の研究者に公開するために、中国科学院自然科学史研究所と協力して研究報告書を作成した。 (3) 調査研究の成果として、中国古代青銅器の構造・技法研究を非接触・非破壊で解明することができた。作品の安全を第一とする博物館における新しい研究方法として世界でも最初の研究成果である。また、中国古代青銅器の高い製作技術をパネルで紹介することができた。			
【年度実績概要】 (1) 26年6月以降、展示で借用した機会にCT調査や3Dデジタルイザによる精密三次元計測を実施した。特に、青銅器の様々な装飾、持ち手、釣り手などの立体造形をどのように器本体に付けたのかを解明することを主眼において観察を進めた。 (2) 本研究により実物では観察が不可能な青銅器の内部構造の観察を行うことができた。三足の器である鼎（てい）の脚部の内部構造について新知見を得た。鑄型を製作する際に青銅の壁を均一にする工夫や幾何学的に鑄型を組み立てる構造を明らかにした。 本研究の成果は、論文として報告書に発表すると共に文化交流展の展示に活用している。			
 <p>X線CTで明らかになった鼎の足の構造</p>			
【実績値】 調査回数 3回 収集資料数 12点 発表数・論文数等（論文 1件（①）、学会研究会等発表 1件（②）、報告書・図録等 1件） 研究者海外派遣数 1回 展示への反映 1回			
【備考】 論文 ① 論文「X線CTスキャナと3Dデータを応用した文化財調査・研究・展示への活用」『三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究』（27年3月31日） 学会研究会等 ②学会研究会等発表 「X線CTを核にした三次元計測による博物館資料の活用と連携」（26年12月20日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：CT調査は形状や保存状態の把握に効果がある。 独創性：我が国の博物館で唯一、非破壊で文化財の構造調査や三次元計測、三次元造形を行うことができる。 発展性：X線CT・3Dデジタル・三次元プリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：X線CT・3Dデジタル・三次元プリンタは短時間でデータを取得できるので時間的投資効果が大きい。 継続性：非破壊で採取した計測データを基に質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：X線CTでは文化財内部の構造を約0.2mm、3Dデジタルでは0.02mmの高精度で記録することができる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料 収集数	発表・論文数	研究者海外 派遣数	展示への反映		
評定	B	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：計画通り実施することができた。 資料収集数：予定通り実施することができた。 発表・論文数：中国科学出版社から『泉屋透賞』として研究報告を出版するなど、計画通り順調に実施することができた。 研究者海外派遣数：北京に研究者を2回派遣して中国科学院の研究者と情報交換した。 展覧会数：文化交流展示に活用した。							

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化交流展示室で展示した泉屋博古館など中国古代青銅製品について調査を実施することができた。今後も展示借用計画と連動して計画的な調査を実施したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行できた。また、研究をまとめた報告書を刊行した。最終年度である次年度は彫刻についての研究を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 日本の中世の工芸、特に茶道具に関する調査研究(5)－①)		
【事業概要】 茶の湯を彩るさまざまな道具の世界を館蔵品を中心に紹介するトピック展示「茶の湯を楽しむ」は、文化交流展における重要テーマのひとつとして位置づけ、平成20年以来これまでに6回開催してきた。このトピック展示は今後もさまざまな観点から展開を行う予定である。今後のテーマ立案のため、日本の中世から近世にかけて制作された茶道具（とくに陶磁器、漆器、金工、染織など）の基礎的な調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部展示課	【プロジェクト責任者】	展示調整室研究員 遠藤啓介
【スタッフ】 川畑憲子（企画課文化交流展室主任研究員）、望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）、酒井田千明（企画課アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 芦屋鋳物師が製作した鋳造作品について、地元自治体文化財担当者や関連施設研究員の協力を得ながら三次元実測、X線CTスキャン調査を実施し、芦屋鋳物師に特徴的な制作技法と構造を確認することができた。その成果は特集展示「「鳴りもの」の世界 - 九州ゆかりの梵音具（ぼんおんぐ）を中心に -」で公開した。			
【年度実績概要】 ・ 芦屋釜については、24年に「茶の湯を楽しむV」として「芦屋釜と館蔵茶道具」を開催したが、そのとき企画協力を頂いた「芦屋釜の里」（福岡県遠賀郡芦屋町）の研究員とともに関連資料の調査を実施した。 ・ 特集展示「「鳴りもの」の世界 - 九州ゆかりの梵音具（ぼんおんぐ）を中心に -」（会期：26年11月18日～27年2月15日）の開催にあわせて、茶窯以外の罌口、梵鐘等、出陳した芦屋鋳物師の鋳造作品について写真撮影と三次元実測、CTスキャン調査を行い、芦屋鋳物師に特徴的な制作技法と構造を確認することができた。調査の成果は展示の作品解説に反映させ、公開した。 ・ これらの調査成果は、27年度、「茶の湯を楽しむ」シリーズの関連企画として「芦屋鋳物師」（仮称）に反映する計画である。			
			
特集展示「鳴りもの世界」会場風景			
【実績値】 調査回数：4回 （参考値） 刊行物件数：1件(①)			
【備考】 刊行物 ①コラム「梵鐘の魅力」（『アクロス福岡文化誌8 福岡県の仏像』所収 アクロス福岡文化誌編集委員会 26年3月31日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：トピック展示「茶の湯を楽しむ」は九州国立博物館における毎年秋の企画としての期待も高い。 独創性：九州にゆかりのある作品を重点的に紹介する企画であり、独創性は高い。 発展性：過去の調査の成果を別の新たな企画に発展させることができた。 効率性：次年度の企画検討、調査、出陳依頼に時間をかけて取り組むことができた。 継続性：トピック展示「茶の湯を楽しむ」は九州国立博物館のシリーズ企画として定着をみている。 正確性：限られた時間のなかで次年度以降の企画につながる調査を着実に実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
評定	B					
判定理由 調査回数：現地調査を4回実施し、目標を達成した。調査内容としても将来の企画に発展していく数々の成果が得られた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	次年度以降の企画検討・調査研究に力を入れた。地元九州に立脚した本調査研究の成果はトピック展示など様々な企画に発展しつつあり、九州国立博物館らしい将来性が期待されるプロジェクトといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	茶道具に関する本調査研究は、地元九州に立脚した、多様な視点を形成しつつある。地元教育委員会文化財担当者等とも密接な連携をはかり、文化財保護施策の立案及び文化財の評価等にも大きく寄与しているといえ、順調に実施されている。次年度以降もこの方向性を重視し、一層展開させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 日本中世における仏涅槃図の基礎的研究((5)-①)		
【事業概要】 日本中世に制作された作品を中心に、涅槃図の調査研究を広く行った。調査の中で新しく見出された作品、初公開となる作品も複数あり、このたびの調査の意義は大きい。また、その成果はトピック展示「大涅槃展」に結実させる。当館が所蔵する命尊筆仏涅槃図の修理期間中でもあったことから、赤外線撮影や非破壊の顔料分析など科学的な調査も実施する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 森實久美子
【スタッフ】 畑靖紀(学芸部文化財課資料管理室主任研究員)、鷲頭桂(学芸部企画課特別展室研究員)、志賀智史(学芸部博物館科学課保存修復室主任研究員)、秋山純子(学芸部博物館科学課環境保全室研究員)			
【主な成果】 ・日本中世の涅槃図を中心に作品調査を実施した。 ・事前調査により、日本中世を中心にアジアにおける涅槃図の図像的、様式的展開を見通すことができた。展覧会開催前後には、写真撮影(赤外線撮影を含む)や詳細な調査を行い、作品に関する基礎データを集積した。 ・調査の成果として、トピック展示(特集陳列)「大涅槃展」を開催した。アジア全域に広がった涅槃像及び涅槃図の展開をわかりやすく展示した。			
【年度実績概要】 ・調査の実施 兵庫・妙法寺、岐阜・汾陽寺、神奈川・鎌倉国宝館、奈良、福岡・東長寺、鹿児島・輝津館、鹿児島・黎明館、福岡市博物館、福岡・慈光寺、福岡・伯林寺、アメリカ・フレア美術館にて、涅槃図の調査を行った。各所蔵先、寄託先における事前調査により、図録等の画像では確認しにくい細部まで観察を行うことができた。 ・調査の成果 日本中世の涅槃図を詳細に調査することにより、図像だけでなく、これまで比較の難しかった表現のレベルまで考察を及ぼすことができた。 ・展覧会の開催と出版物の刊行 当館において、トピック展示「大涅槃展」を開催した(27年1月14日～2月15日)。特に日本・平安～鎌倉時代及び中国・南宋時代の作品を重点的に集めることにより、描写や図像の比較を同時に行い、涅槃図の展開を実物で追える展示を行った。また、修理報告や細部写真を多く掲載した図録を出版した。 ・本作品は鎌倉時代の基準作であり、その分析結果を図録などで公開することで研究者間の情報共有にも配慮するなどした。			
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">アメリカ・フレア美術館での調査</p> <p style="text-align: center;">展示室の風景</p>			
【実績値】 ・調査回数 11回 ・論文 1件(①) ・展示への反映 1回 (参考値) ・刊行物 1件			
【備考】 論文 ①「命尊筆仏涅槃図試論」『図像学Ⅱ—イメージの成立と伝承(浄土教・説話画)—〈仏教美術論集3〉』竹林舎(26年5月10日) 刊行物 ①『〈トピック展示〉大涅槃展 図録』九州国立博物館(27年1月14日)			

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-4

(様式2)

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：鎌倉時代の基準作である当館所蔵の命尊筆涅槃図が約80年ぶりに一般公開されるという好機にあたる。 独創性：日本中世の涅槃図を中心に丁寧な調査を行い、その成果を展示においても視覚的に示すことができた。 発展性：調査の成果をトピック展示として広く一般に公開することができた。 効率性：研究者との情報共有を積極的に行い、協力も得ることで、効率よく調査を進めることができた。 継続性：長期に及ぶ調査成果を十分に反映した展覧会を実施することができた。 正確性：詳細な調査の実施により、正確なデータを取得することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会研究会等 発表	展示への反映			
評定	B	B	B			
判定理由 調査回数：11回の調査を実施し、計画通り実施することができた。 学会研究会等発表：本研究の成果をまとめた論文を専門書に1件掲載し、また図録を作成し、目標を達成することができた。 展示への反映：研究で得られた図様伝播の流れを視覚的に展示構成に反映させることができ、目標を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り調査を実施することができ、その成果を展示において来館者に紹介することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。展覧会終了後も引き続き、涅槃図の調査は順調に進んでおり、研究者との情報共有も行っている。次年度以降についても、すでに調査及び高精細画像の撮影などが予定されており、計画は順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-1 特別展「台北 国立故宫博物院－神品至宝－」に関する調査研究(5)-②		
【事業概要】特別展「台北 国立故宫博物院－神品至宝－」(26年6月24日～9月15日)に関する調査研究 26年6月24日～9月15日にかけて開催された特別展「台北 国立故宫博物院－神品至宝－」出陳作の安全な輸送と、 展示及び図録内容の充実を図るための調査研究。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課長 富田淳
【スタッフ】谷豊信(学芸研究部長)、竹内奈美子(学芸研究部調査研究課工芸室長)、川村佳男(学芸研究部列品管理課 平常展調整室主任研究員)、小山弓弦葉(博物館教育課教育普及室長)、塚本鷹充(学芸研究部調査研究課東洋室研究員)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・事前の作品調査に基づき、各作品に最も適した梱包を検討し、安全かつスムーズに輸送を行うことができた。 ・前年度からの作品調査の蓄積に基づき、皇帝コレクションの意味を確認するとともに、その特性を分かりやすく図録及び展示に反映することができた。 ・展覧会開催中も、内外の研究者を招いたシンポジウムを開催することで、国立故宫博物院所蔵品に対するより深い認識を得ることができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・台北国立故宫博物院における作品梱包時の調査により、画像では確認できない作品細部の観察を行うことができた。また、通常は見ることのできない作品の伝来を示す資料や、題跋識語の状況を確認することができた。(26年6月3日～9日)それをふまえ、皇帝コレクションの意味と伝統文化の再編にかかわる知見をもとに、充実した図録の執筆と訴求力・説得力のある展示をすることができた。 ・台北国立故宫博物院における作品梱包・陳列時の調査により、通常は見ることのできない多宝格に収納される各種文物の詳細を観察することができた。(26年6月16日～20日) ・シンポジウム「皇帝コレクションの意味－書画における復古と革新－」を開催し、日本と中国の文化交流、作品研究等の観点から内外の研究者10名が発表し、あわせて総合討論を行った。所蔵者や時代によって文物の持つ意味合いが変貌する状況の一斑を明らかにすることができた。(26年7月5日・6日) 			
			
中国古代の宇宙観「天円地方」をふまえた多宝格のディスプレイ		内外の研究者10名によるシンポジウムでの総合討論	
【実績値】			
・調査・研究 5回 ・刊行物・講演等 25件 (図録1件)、論考4本(①～④)、コラム16本(⑤～⑩)、シンポジウム2件(⑪～⑫)、記念講演会2回(⑬～⑭)			
【備考】			
①川村佳男「中国皇帝コレクションの淵源－青銅器・玉器と祭礼」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、序章総論、26年6月24日)			
②富田淳「中国士大夫の精神－宋元時代の書画」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、第一章総論、26年6月24日)			
③三笠景子「天と人との競合－宋・元・明・清の工芸品」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、第二章総論、26年6月24日)			
④塚本鷹充「中国伝統文化の再編－清朝皇帝の世界」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、序章総論、26年6月24日)			
⑤谷豊信「青銅器の銘文」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、コラム1、26年6月24日)			
⑥富田淳「孫過庭の草書書譜巻」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、コラム3、26年6月24日)			
⑦塚本鷹充「唐代から五代・北宋山水への発展」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、コラム4、26年6月24日)			
⑧三笠景子「皇帝が愛したやきもの－汝窯青磁」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、コラム10、26年6月24日)			
⑨竹内奈美子「色彩と彫技の豊－明代漆芸の魅力」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、コラム12、26年6月24日)			
⑩小山弓弦葉「染織で表わされた「絵画」－中国絵画、知られざる伝統」(特別展図録『台北国立故宫博物院神品至宝』、コラム13、26年6月24日)			
⑪塚本鷹充「乾隆コレクションにおける模写・模造事業－乾隆帝の書画コレクションと狩野派」(開催記念国際シンポジウム「皇帝コレクションの意味－書画における復古と革新－」、26年7月5日)			
⑫富田淳「徽宗の7壘と乾隆帝の8壘について」(開催記念国際シンポジウム「皇帝コレクションの意味－書画における復古と革新－」、26年7月6日)			
⑬川村佳男「故宮コレクションと「復古」－青銅器・玉器のかたち象徴された伝統－」(特別記念講演会、26年6月28日、東京国立博物館大講堂)			
⑭塚本鷹充「文物がつくる社会－中国書画・故宮コレクションからアジア世界へ－」(特別記念講演会、26年7月26日、東京国立博物館大講堂)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	S	S	A	A	A	B
判定理由 適時性：2011年に施行された美術品保障制度・海外美術品等公開促進法をうけて、従来は実現が難しかった特別展が開催できた。 独創性：アジアで初めて実現した国立故宮博物院の特別展であり、皇帝コレクションという独自の観点から展覧会を構成した。 発展性：皇帝コレクションの持つ意味は時代とともに変容し、日本に与えた影響も大きい。今後も様々な側面から研究を推進し、新たな特別展が期待される。 効率性：2011年の上記法施工後、速やかに先方と協議を重ね、きわめて短期間で実現できた。 継続性：古くからの人的交流に基づき、通常では海外への貸与が難しい名品を借用しえた。 正確性：作品の綿密な調査と、現地スタッフとの協議を重ねて展覧会を実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査研究	刊行物・講演等				
評定	B	S				
判定理由、 調査研究：当初の予定通り順調に進行した。 刊行物・講演等：論考4本、コラム16本、開催記念国際シンポジウム2発表、特別記念講演会2回と、刊行物・講演ともに当初の予定に倍する内容を盛り込むことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本特別展は長年にわたる先方との人的・学術的交流のもと、2011年に施行された上記法を受けて速やかにプロジェクトチームを編成し、門外不出の名品を含む諸文物を借用したもので、アジアで初めて実現した。さらに刊行物・講演等についても当初の予定を大幅に上回る内容となった。皇帝コレクションに対する深い理解のもとに、鑑賞者に分かりやすくその魅力を提示しえた本展は、所期の目標を大きく上回り、社会的に一定の貢献を果たしたと考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	アジア初の開催となった本展覧会は、数十年に及ぶ準備のもとに、現地スタッフと学術交流を重ね、きわめて質の高い研究成果を展示及び多数の刊行物・講演等に結実することができた。世界に散在する中国美術の根幹をなす皇帝コレクションは、今後、作品の価値体系の多様性を解明するうえでも重要なテーマの一つである。所期の目標を質量ともに大きく上回るとともに、次年度以降の発展性を考慮してS評定とした。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2 2014 年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】			
<p>2014 年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」(9 月 17 日～11 月 24 日)に関する調査研究</p> <p>26 年 9 月 17 日～11 月 24 日に開催した 2014 年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」の出品予定作品の調査研究を行う。</p>			
【担当部課】		【プロジェクト責任者】	
学芸企画部		企画課特別展室研究員 横山梓	
【スタッフ】			
伊藤嘉章(学芸企画部長)、三笠景子(学芸研究部保存修復課保存修復室研究員)			
【主な成果】			
<p>(1) 中国国家博物館、韓国国立中央博物館の所蔵品を調査して作品選定を行うことで、それぞれの館の所蔵品の特性を活かしながら、それぞれの国の陶磁の展開を特徴的に示すことができた。</p> <p>(2) 日中、日韓、そして中韓の相互の陶磁の文化交流をテーマに中国、韓国の研究者と共同研究の中から作品を選定し、東アジアの陶磁の世界での交流の状況と各国の独自性を示す展示となった。</p> <p>(3) 展覧会会期中に中国国家博物館、韓国国立中央博物館を招き、三ヶ国の研究者による記念講演会を実施した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 26 年 2 月 12 日～13 日、韓国国立中央博物館において、展示準備のための出品予定作品の調査を行った。</p> <p>(2) 26 年 3 月 19 日、中国国家博物館において、出品作品の選定と展示準備のための調査を行った。</p>			
調査の結果得られた知見・発見等			
<ul style="list-style-type: none"> ・韓国国立中央博物館においては、国宝 96 号・青磁亀形水注をはじめとする高麗青磁を中心に調査を行い、中国国家博物館では 2 級文物・三彩馬を含む、唐三彩等貴人墓出土品を中心に行った。それぞれにおいて、作品の展示に際しての状態、展示具の必要性等について確認を行うことができた。 			
調査・研究の成果への反映			
<ul style="list-style-type: none"> ・図録の編集にあたっては、日中韓三ヶ国でその方針について協議を重ね、調査の知見をもとに出品作品を中心とした総論、作品解説を各国それぞれで執筆した。これを展覧会図録として発刊した。 ・26 年 9 月 27 日に東京国立博物館にて記念講演会を実施し、展覧会の出品作品に即しながらそれぞれの所蔵品の特色、各国相互尾の影響関係などについて講演を行った。 			
			
中国国家博物館 調査		展覧会場風景	
			
展覧会図録			
【実績値】			
○展示構成等検討会回数 5 回			
○展示作品数 中国：15 件、韓国：15 件、日本：15 件			
(参考値)			
○論文数：3 件(日、中、韓 各 1 件)			
○作品解説：45 件			
○作品調査回数 2 回(前年度) 中国・国家博物館 韓国・国立中央博物館			
【備考】			
横山梓「2014 年日中韓国立博物館合同企画 特別展「東アジアの華 陶磁名品展」に寄せて」陶説 No. 738 2014 年 9 月			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：東京国立博物館は中国・国家博物館、韓国・国立中央博物館と隔年で会議を開催し、相互理解を深め、相互協力を進めている。その成果を広く還元するための第一回目の共同企画展としての開催であった。日本、中国、韓国が古くから文化交流によって深く結びついていることを示す上でも意義深いものであった。 独創性：日中韓の三国立博物館最初の共同企画展として、三ヶ国にあり、それぞれが関係し、また独自の展開を示す陶磁を「東アジアの華」として取り上げたことで、交流とそれぞれの独自性を示すことが可能となった。 発展性：東京国立博物館の展示体系では日本と東洋は本館、東洋館と別の館での展示となっている。今回、中国、韓国、日本という三ヶ国の陶磁を一堂に展示することで、観客にお互いの影響関係などを伝えることができるとともに、それぞれの特徴を示すことでも有効であった。今後、陶磁あるいはその他の分野において、こうした展示を行うことで、より深い理解に導くことができる。						

2. 定量的評価

観点	展示構成等 検討会回数	展示作品数				
評定	B	B				
判定理由 展示構成等検討会回数：調査結果に基づいて展覧会を構成、展示照明などについて、十分に検討することができた。この結果を三ヶ国で討議し、展示の全体像の構築が可能となった。 展示作品数：会場となった特5展示室において、日中韓三ヶ国の陶磁を余裕を持った空間構成により効果的に展示することができた。各国の陶磁の歴史をそれぞれの館のコレクションの性格にあわせながら、初の三館共同企画展としてバランスの良い構成ができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品調査とその際の所蔵館担当者との展覧会に対する検討を基礎として、その後の相互検討を加えていく中で、日中韓三ヶ国の陶磁の国際交流を示す展覧会を実現することができた。 三ヶ国の国立博物館による共同研究とその成果の国民への還元について、ひとつのあり方を示すことができた。 今後、隔年での共同展覧会の開催が計画されており、今回の経験の上でさらなる成果が期待される。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査、研究の成果を展覧会、講演会等に反映することができた。 三ヶ国の研究者による共同研究であるとともに、国際交流の姿を展示によって示すことができた。 国際共同研究とその成果発表にとってのひとつのモデルとなるものとなった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-3 特別展「日本国宝展」に関する調査研究(5)-②)		
【事業概要】			
<p>特別展「日本国宝展」(26年10月15日～12月7日開催)に関する調査研究 26年10月15日～12月7日で開催された特別展「日本国宝展」の展示予定作品の調査研究。 ワーキンググループによる事前の作品選定に基づき、作品の所有者に対する出品交渉及び作品の所在・状態調査を実施した。また関係者との協議を行った。</p>			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	広報室長 伊藤 信二
【スタッフ】			
田良島哲(学芸研究部調査研究課長)、丸山士郎(学芸企画部平常展調整室長)、沖松健次郎(学芸研究部保存修復課保存修復室主任研究員)、品川欣也(学芸研究部調査研究課考古室主任研究員)			
【主な成果】			
・出陳交渉に併せて作品の所在・保存状態を調査するとともに、安全な運搬・展示、効果的な展示方法などについて検討し、展覧会の内容充実に大きく寄与することができた。			
【年度実績概要】			
・仏像、仏画、工芸品、考古資料、歴史資料、建造物のうちいずれも国宝に指定されている貴重な作品について、「信仰」「祈り」というテーマから、作品を厳選した。 ・出陳交渉の終了している作品で、大型・重量物であるような作品について、作品の調査を5回実施し、作品を安全に展示するための梱包・輸送方法について、所蔵者、共催者、輸送業者などとともに協議を行った。 ・このうち特に奈良・元興寺に伝来する国宝元興寺極楽坊五重小塔(奈良時代・8世紀)については、展示に際する作品の解体・輸送に先立って、26年4月7日～12日の日程で、解体事前調査及び彩色剥落止、クリーニング処置を実施した。この調査によって、塔の構造、解体方法、保存状態、運搬状況を事前に把握することができ、展示に際しての本番の解体・輸送・組み立てを極めてスムーズに行うことができた。			
			
奈良・元興寺での五重小塔の事前解体調査、剥落止、クリーニング			
【実績値】			
○出陳交渉及び現地調査	5回		
○協議会・検討会回数	20回(共催者との協議12回、展示会場デザイン検討会8回)		
(参考値)			
○講演会等	10回(記念講演会2回、自治体講演会8回)		
【備考】			
伊藤信二「日本国宝展－「祈り、信じる力」の造形」(特別展図録『日本国宝展』総論 26年10月15日)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	継続性		
判定	B	A	B	B		
判定理由 適時性：自然災害や経済状況から「こころの時代」が叫ばれる現代、人々が求める「祈り」の造形という観点から、国宝の世界を再構築するというテーマ設定を行った。 独創性：従来国宝展といえば絵画、彫刻、工芸などとジャンル別に展示構成が行われていたが、ジャンルを横断する「信仰」をテーマにすえたことにより、日本文化精神の形成過程を「オール国宝」により提示するという独創的な展示となった。 効率性：テーマに沿ってあらかじめ国宝作品を選定することで、文化財所蔵者の理解も得やすく、スムーズな作品調査にもつながった。また事前調査により展覧会開催前の作品の梱包、運搬、展示を安全かつスムーズに行うことができた。 継続性：今後も研究や展示活用が大いに期待される貴重な国宝の数々について、多くの情報を得ることができた。また文化財の所蔵者にとっては、今後の保存、管理のあり方にも参考となる情報となることが期待される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	協議会・ 検討会回数				
判定	B	B				
判定理由 調査回数：全国各地に所在する国宝作品について、5回にわたり精力的な現地調査を実施することができた。 協議会・検討会回数：共催者や施工業者など関係者との間で定期的に12回の協議会を行い、安全な輸送、効果的な展示、運営体制に関して共通理解を得ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国宝作品の安全な搬送・展示及び作品研究、充実した展覧会構成、効率的かつスムーズな展覧会の運営体制などにおいて着実な成果を挙げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査並びに協議会・検討会の成果を、着実に安全かつ効果的な展覧会運営へ反映させることができた。次年度以降の作品の借用・展示計画に寄与するものであり、かつ所有者にとっては保存管理および防災上の重要な知見となったものとする。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-4 特別展「みちのくの仏像」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】			
特別展「みちのくの仏像」(27年1月14日～4月5日開催予定)に関する調査研究 27年1月14日(水)から4月5日(日)開催の、特別展「みちのくの仏像」出品作品の作品調書、写真資料の作成及び研究を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長 丸山士郎
【スタッフ】			
浅湫毅(学芸企画部博物館教育課教育講座室長)			
【主な成果】			
(1) 出品作品について作品調書、写真資料の作成を行って、基礎データの集積を行うことができた。 (2) 岩手・黒石寺の薬師如来像の像内墨書銘の赤外線撮影を行った結果、従来とは異なる読み方ができた。 (3) 事前の調査によって得られた知見や写真を会場や図録に掲示し観覧者の理解を深めることができた。			
【年度実績概要】			
(1) 展覧会期間中に作品の調査を行い、表現・技法について詳細な観察を行うことができた。 (2) 岩手・黒石寺の薬師如来像について事前の調査を実施し、像内墨書銘の赤外線撮影を行った結果、従来とは異なる読み方が出来た。 (3) 出品作品について事前の調査を実施し、充実した会場、図録の解説を書くことができた。展示・照明についても効果的な方法を検討することができた。			
			
会場風景			
【実績値】			
○現地調査 12箇所			
○会場デザイン検討会 12回			
【備考】			
丸山士郎「みちのくの仏像と東北における仏像表現の受容」(特別展図録『みちのくの仏像』平成27年1月15日)			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本展覧会は東日本大震災の復興支援を目的とするもので、記憶が薄れてきたいま実施する意義は大きい。 独創性：東京で東北の仏像に的を絞った展覧会は初めてであり、その魅力を伝える貴重な機会となる。 発展性：作品調査で新たな知見が得られ今後の研究に活かすことができる。 効率性：短期間のうちに多くの調査を実施することができた。 継続性：会場デザイン検討会で得られた成果は今後の展示に活かすことができる。 正確性：共催者、業者と打合せを重ねることで、データの正確性を確保できた。						

2. 定量的評価

観点	現地調査	会場デザイン 検討会				
判定	B	B				
判定理由 現地調査：短期間のうちに現地調査延べ12箇所と、多くの調査を実施することができた。 会場デザイン検討会：作品調査の成果を踏まえ効果的なレイアウト、照明方法を検討することができた。 出品作品19件のうち15件について高精細カメラによる写真撮影を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	震災復興支援という時機に適った目的と今までになかったテーマの展覧会を企画し、出品交渉・作品調査も順調に実施することができた。 162,948名（1日平均2,396名）の観覧者があった（27年3月31日現在）

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	時機に適った展覧会を企画し開催することができた。撮影した写真資料を今後の館内外の研究に活用できる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-5 特別展「3.11 大津波と文化財の再生」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】			
特別展「3.11 大津波と文化財の再生」(27年1月14日～3月15日開催)に関する調査研究 27年1月14日(水)から3月15日(日)開催の、特別展「3.11 大津波と文化財の再生」出品作品の調査、東北地方太平洋沖地震被災文化財の再生に関連する資料の作成及び研究を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】			
和田浩(学芸研究部保存修復課環境保存室長)、救仁郷秀明(学芸研究部列品管理課貸与特別観覧室長)			
【主な成果】			
<p>(1)被災文化財の調査を行い安定化処理技術に関する研究をまとめた。</p> <p>(2)文化財レスキューの概要と陸前高田市立博物館の文化財の再生の過程をまとめた。</p> <p>(3)文化財レスキューが現在抱える課題と上記の成果を合わせて展示グラフィック等で公開し、情報の充実を図った。</p> <p>(4)ギャラリートーク、講演会、シンポジウム等で文化財再生の現状を広く社会に伝えることができた。</p> <p>(5)成果を論文や学会で発表した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1)安定化処理技術に関する研究をまとめた書籍『安定化処理』を出版した。</p> <p>(2)文化財レスキューの概要と陸前高田市立博物館の文化財の再生の過程をまとめ、リーフレット「3.11 大津波と文化財の再生」を発行した。</p> <p>(3)特別2室で多くの文化財を公開するとともに、特別4室において「文化財再生のみちのり」をテーマとしたパネル展示を実施した。</p> <p>(4)以下の事業を実施し、文化財再生に関する現状を社会に伝えた。 2015年1月30日(金)ワークショップ「被災資料の安定化処理技術」 2015年1月31日(土)ミニ講演会&ギャラリートーク「被災現場からの報告」 2015年1月31日(土)オルガン演奏会(安定化処理が完了したリードオルガンを演奏) 2015年2月21日(土)オルガン演奏会(安定化処理が完了したリードオルガンを演奏) 2015年3月11日(水)シンポジウム「文化を守る絆—津波被災文化財再生への挑戦」 2015年3月14日(土)オルガン演奏会(安定化処理が完了したリードオルガンを演奏)</p>			
			
		展示室の様子	
(5)			
○論文			
神庭信幸・和田浩「環境および施設整備の考え方」(『安定化処理』)			
神庭信幸・和田浩「環境および施設整備の実態」(『安定化処理』)			
和田浩・神庭信幸「環境モニタリング」(『安定化処理』)			
○学会発表			
神庭信幸 他「津波被災資料の安定化処理—陸前高田市立博物館の取り組み—」(文化財保存修復学会第36回大会26年6月7日)			
神庭信幸 他「Stabilization processing of cultural assets damaged by the tsunami of 11 March 2011」(ICOM-CC26年9月17日)			
【実績値】			
○出版物 2冊 (書籍1冊、リーフレット1冊)			
○関連事業 6回			
○論文 3本			
○学会発表 2回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：震災後約4年たった今も被災文化財の修理が継続して行なわれていることを社会に普及する意義は大きい。 独創性：被災文化財の安定化処理に的を絞った展覧会は初めてであり、その内容を伝える貴重な機会となる。 発展性：安定化処理技術をまとめた研究成果は将来の災害発生時に活用することができる。 効率性：短期間で展覧会、関連事業、学術発表、出版物に関する実績を蓄積できた。 継続性：関連して実施したシンポジウム等の情報発信は来年度以降も実施主体を変えて継続する。 正確性：陸前高田市立博物館、岩手県立博物館、日本博物館協会等の専門家とともに正確な情報を伝えた。						

2. 定量的評価

観点	出版物	関連事業	論文	学会発表		
判定	B	B	B	B		
判定理由 出版物：書籍1冊、リーフレット1冊を出版できたことは十分な評価に値すると考える。 関連事業：短期間で多くの関連事業を実施できたことは十分な評価に値すると考える。 論文：展覧会に関連する研究内容で3本の論文を書籍に発表できたことは十分な評価に値すると考える。 学会発表：展覧会に関連する研究内容で2回の学会発表ができたことは十分な評価に値すると考える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	安定化処理という日本で初めての取り組みを多くの人々に伝えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示とメディアを通じて過去4年間の安定化処理に関する取り組み広く伝えると共に、今後の災害対応に関する中期的な見通しを確認することができた。研究成果を将来起こりうる大規模災害への備えとしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-6 特別展「鳥獣戯画—京都 高山寺の至宝」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】			
<p>特別展「鳥獣戯画—京都 高山寺の至宝」(27年4月28日～6月7日開催予定)に関する調査研究 27年4月28日(火)～6月7日(日)に開催される特別展「鳥獣戯画—京都 高山寺の至宝」に出陳される作品の 出品交渉及び事前調査を行う。また、会場での展示ディスプレイ、グラフィック等の充実を図るため、高山寺他での現 地踏査をあわせて行なう。</p>			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課平常展調整室研 究員 土屋貴裕
【スタッフ】			
松嶋雅人(企画課特別展室長)、浅湫毅(博物館教育課講座室長)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・出陳交渉により、鳥獣戯画の伝わる高山寺、及び中興の祖明恵上人に関わる作品をかつてない規模で展覧する見通しが立った。 ・出品作品の事前調査を行うことで、作品の保存状態などを詳しく精査することができた。 ・高山寺、明恵上人関連史跡を踏査することで、展示ディスプレイ、グラフィック等の充実をはかることができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・総計120件を越す作品が出陳予定である。 ・高山寺については、出陳交渉、事前調査を含め計5回訪れ、展覧会図録、会場ディスプレイへの反映が期待される。 ・高山寺以外でも、40箇所の出陳交渉、作品調査を行うことができた。これらの成果を図録等の解説に反映することができる。 ・高山寺をはじめ、明恵上人の生地である紀州など、5箇所の現地踏査を行うことができた。ここでの成果は会場グラフィック等に反映する予定である。 			
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>京都・高山寺での事前調査</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>和歌山・浄教寺での事前調査</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>明恵上人が修行した鷹島・刈藻島</p> </div> </div>			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・出陳交渉、事前調査 40箇所 ・現地踏査 5回 ・共催者との打合せ 15回 ・展示会場デザイン検討会 5回 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：4年間の修理を終え、東京での初公開となる鳥獣戯画、及び高山寺の文化財を公開する貴重な機会となった。 独創性：成立や伝来など、謎の多い鳥獣戯画に関して、高山寺所蔵の文化財の伝来などから検討する独自の視点を提示することができた。 発展性：知名度の高い鳥獣戯画により、より広範な観覧者に多くの文化財を観覧いただく機会となる。 効率性：限られた調査期間の中で、関西地区を中心に、九州、関東を含めた広範囲となる出品予定作品の所蔵機関を効率的に調査することができた。 正確性：共催を含めた担当者間で複数の打合せを行うことで、データ等の正確性を確保できた。						

2. 定量的評価

観点	出陳交渉、事前調査	現地踏査	共催者との打合せ	展示会場デザイン検討会		
評定	B	B	B	B		
判定理由 出陳交渉、事前調査：限られた期間内に、多くの交渉、調査を行なうことができた。 現地踏査：展示グラフィックに十分な踏査を行なうことができた。 共催者との打合せ：メール等での検討含め、十分な打合せを行うことができた。 展示会場デザイン検討会：施工会社等も含め、混雑対策を踏まえた検討を行うことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	効率的かつ積極的に出陳交渉、作品調査を行い、多くの出品数を達成することができた。また、作品の保存状況等を確認することで、展示のディスプレイ等にも反映することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度得られた成果は十分であり、これを踏まえ、次年度の実際の展示、図録・会場解説、ディスプレイ、グラフィック等に反映させたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-7 特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏—仏教美術の源流」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】			
特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏—仏教美術の源流」(27年3月17日～5月17日)に関する調査研究 表記の特別展の展示の内容策定、充実のための調査研究。古代インドの仏教美術の作品調査等を通じて展示手法、 展示構成を検討し、展覧会を実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長 小泉恵英
【スタッフ】			
三田覚之(学芸研究部調査研究課工芸考古室)			
【主な成果】			
<p>(1)コルカタ・インド博物館において、展覧会出品予定の作品調査、撮影を実施した。展覧会の構成、図録原稿などを準備した。</p> <p>(2)日本では見る機会の少ないインドの仏像について、古代初期の前2世紀頃から12世紀以後の1000年以上の幅で多様な作品を調査できた。原始仏教からの発展や、密教の隆盛など仏教の大きな展開を様々な作品を通して通覧した。</p> <p>(3)調査によって得られた成果は、展覧会の展示構成や、図録原稿に反映し、観覧者へ供与した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1)・コルカタ・インド博物館において、展覧会出品予定の作品調査及び撮影を実施、館長及び担当学芸員と運営に関する協議を行った(26年9月20～24日)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上海博物館において、先行巡回していた同展覧会を視察し、展示に関する技術的な情報交換や、補足的な作品調査を実施した(26年12月12～14日)。 ・名古屋市博物館において、出品作品と関連する貝葉經典の調査を実施した(27年2月16日)。 <p>(2)コルカタ・インド博物館所蔵のパールフット遺跡出土彫刻の調査を行い、寺院の造営や当時の教団の運営に関しての歴史的背景を考察し、インドの広域にわたる人々が寺院と関わっていることを確認した。また、パーラ朝の貝葉經典を調査し、密教信仰の展開と図像表現についての歴史的な展開についての知見を得た。</p> <p>(3)パールフット調査については、古代初期のインド仏教遺跡について最新の研究成果を反映した論文を展覧会図録に発表した。經典資料については、図像の解釈をより噛み砕いた形で展覧会場に紹介する教育普及的なパネルを作成し、一般になじみのない密教信仰や様々な仏教信仰について、幅広い世代に紹介するよう努めた。</p>			
			
コルカタ・インド博物館での調査		上海博物館での調査	
【実績値】			
○作品調査回数 3回 コルカタ・インド博物館、上海博物館、名古屋市博物館。			
○出版物 展覧会図録1冊			
○論文 1本(①)			
【備考】			
論文			
①小泉恵英「パールフット—インド古代仏教美術のあけぼの」『コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏—仏教美術の源流』H27年3月			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評定	S	A	A	S	A	
判定理由 適時性：現代国際社会において日印関係は両国首脳の間往があるなどきわめて緊密であり、インドに対する社会的な関心はきわめて高い。仏教は我が国に長く根付き、文化の根底をなす重要な宗教であり、その源流をたどることの意義は大きい。本展のインド政府からの開催依頼は26年6月であり、それに対して即応的に対応した。 独創性：我が国では古代インドの美術に接する機会は極めて少なく、一般の認知は必ずしも高くない。この度の調査・展示では日本で知られていないインドの重要な作品を数多く展示する内容となっており、インド文化の深層的な理解に寄与する内容となっている。 発展性：インド仏教文化の基層から多様な展開までを示す内容の展示によって、今後の我が国におけるインド研究に新たな材料を提供している。 効率性：わずか9ヶ月前の開催依頼から、きわめて限られた時間で、調査から図録作成、展示の構成までを実現した。 継続性：東京国立博物館では、インド亜大陸に由来する収蔵品を所蔵しており、今回の調査や展示で得られた資料や情報は、今後の総合文化展にも活用でき、特別展だけでなく幅広く将来にわたって活用が見込まれる。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	出版物	論文			
評定	A	B	B			
判定理由 作品調査回数：インド側の協力も得つつ、必要な調査を極めて限られた時間で実施できた。 出版物：作品解説、論文を含め、出土遺跡の紹介など網羅的に作品を理解できる図録を作成した。 論文：日本側で準備した論文に加え、インド側からも寄稿を得て、インド仏教美術を紹介する豊富な情報を提供した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現代の国際情勢を踏まえて時宜を得た内容の展覧会をきわめて限られた時間で準備し、実施した。その内容は我が国の文化においても深い影響を歴史的に与えてきた仏教に関するもので、展覧会の観覧者に仏教文化の基層への理解を深めるものであった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が収蔵管理、展示を行っている東洋美術の分野において、特別展の形でインドの仏教文化の展開を紹介できた。特別展そのものによるインド理解に加えて、総合文化展の観覧に際しての情報の付与という観点からも本展は大きく寄与している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-8 特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】			
<p>特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」(27年7月11日から9月23日に開催予定)に関する調査研究。 27年7月11日から9月23日に開催予定の特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」の出品交渉ならびに事前調査を行う。また会場での展示方法などの参考のために、関連する作品の展示を行っている美術館・博物館の調査を行う。</p>			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
【スタッフ】			
小泉恵英(企画課長)、小野塚拓造(企画課特別展室アソシエイトフェロー)、近藤二郎(早稲田大学文学学術院教授・ゲストキュレーター)、CHRISTAIN ZIEGLER(ルーヴル美術館古代エジプト美術部門名誉部長・ゲストキュレーター)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 出品交渉によって12カ国、40を超える所蔵先から古代エジプトの王妃に関する作品を集め、効果的な展示を行う見通しが得られた。 ・ なかでもベルギー王立美術館博物館所蔵「アメンヘテプ3世の王妃ティイのレリーフ」の出品は、日本初公開であるだけでなく、本例が出土したウセルハト墓を2011年に近藤氏が約100年ぶりに再発見したこともあって、本展の目玉の一つになると考える。 ・ 出品作品の事前調査を行うことで、作品の状態などを詳しく確認することができた。また関連作品の展示調査などによって支持具などの展示方法についても知見を得ることができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 総数200件弱の作品が出品予定である。 ・ 現在の継続している近藤氏の発掘風景は展示映像などに、調査成果は図録などに盛り込む予定である。 ・ 出品作品の状態確認などの事前調査や関連する作品の展示調査を受けて、展示構成や作品に合わせた効果的な展示を行うことが可能となった。 			
			
ボストン美術館での作品調査		ボストン美術館での展示調査	
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 出品交渉・事前調査 10回 (ルーヴル美術館・ボストン美術館・大英博物館・カイロエジプト考古学博物館など) ・ 展示構成などの打ち合わせ 4回 ・ 共催社など含む打ち合わせ 8回 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：女性の活躍促進が内閣府の政策として進められているなかであって、古代エジプトの女性(王妃や女王)の活躍に注目した本展は時宜を得たものであると考える。 独創性：過去の日本におけるエジプト展は王であるファラオに注目したものが多く、本展のような女性(王妃や女王)に注目したものはほとんどなく、古代エジプトへ対する新たな視点を提示することができる。 発展性：従来の古代エジプト展とは異なり女性(王妃や女王)に注目した本展は、多く観覧客に対して古代エジプトへ対する関心を広げ、また知識を深めるよい機会になると考える。 効率性：ZIEGLER氏と近藤氏をゲストキュレーターに迎えることで、古代エジプトに関する世界各地の博物館・美術館の所蔵品に関する情報を効率的に集め、出品交渉を的確に進めることができた。 継続性：本展で得られた知見などは、今後東洋館での古代エジプトの展示に活用することができる。 正確性：担当者・共催社・所蔵先との連絡を密にとることで情報の遺漏を減らし、現状の研究では複数案が出されている年代観や名称なども一定の基準に従って準備を進めている。						

2. 定量的評価

観点	出品交渉・事前調査	展示構成などの打ち合わせ	共催社を含む打ち合わせ			
評定	B	B	B			
判定理由 出品交渉・事前調査：所蔵先が複数国・複数館にまたがるものの、効率よく所蔵先との出品交渉と事前調査を行なうことができた。 展示構成などの打ち合わせ：展示順や展示方法だけではなく、観覧客が古代エジプトの王妃や女王に関心がもつことができるように配慮して検討を行った。 共催社を含む打ち合わせ：メール等での連絡や検討も含め、十分な打ち合わせを行うことができた。						

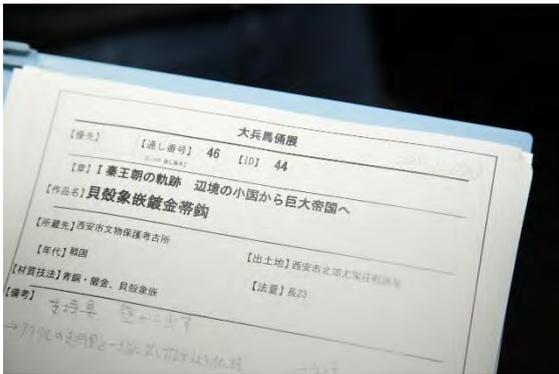
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出品交渉や事前調査を効率的に行い、12カ国40を超える所蔵先から多くの出品が可能となった。また関連作品の展示方法の調査や最新の発掘調査の成果を盛り込むことで、より効果的な展示ができると考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は古代エジプトへ対する関心を広げ、また知識を深めるよい機会になると考える。加えて、東京国立博物館東洋館にて収蔵・展示している古代エジプト資料を観客へ周知するという点からも本展は大きく寄与すると考えている。調査や打ち合わせなどで行った検討を踏まえて、来年度の広報・展示・図録・講演会など本展にかかわる様々な事業にその成果を反映させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-9 特別展「始皇帝と大兵馬俑」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】	特別展「始皇帝と大兵馬俑」(27年10月27日～28年2月21日)に関する調査研究 27年10月27日～28年2月21日に開催予定の特別展「始皇帝と大兵馬俑」の展示を充実させるための調査研究。 20世紀最大の考古学発見ともいわれる兵馬俑の魅力、及び兵馬俑に象徴される秦・始皇帝のなしたげた歴史的大事業の数々を適切に示すため、展示品及び関連遺跡の調査を通して、より安全かつ効果的な展示手法・構成の検討を行う。		
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課主任研究員 川村 佳男
【スタッフ】	谷 豊信(学芸研究部長)、井出浩正(学芸研究部調査研究課考古室研究員)、和田浩(学芸研究部保存修復課環境保存室長)、市元星(九州国立博物館学芸部企画課主任研究員)		
【主な成果】	<p>(1) 秦始皇帝陵博物院など中国陝西省にある展覧会出品候補作品の所蔵館において、作品状態の詳細とともに、所蔵機関における展示状況を調査して、より安全かつ効果的な展示手法を検討した。</p> <p>(2) 報告書の写真・図版・記載だけではわからない作品の詳細を実査することで、形態・製作技法などに関する実態を確認するとともに、新知見を得ることができた。これにより、作品解説などの執筆にかかる、より確実で詳細なデータを用意することができた。</p> <p>(3) 作品の保存状態ならびに、現在の展示状況も把握することで、特別展会場において適切な作品配置や安全対策を検討することができた。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 陝西省歴史博物館・陝西省考古研究院・秦始皇帝陵博物院(26年11月5日)、商洛市博物館・陝西省考古研究院・西安博物院・西安市文物保護研究院(27年1月26日)、秦始皇帝陵博物院・臨潼博物館・陝西省歴史博物館(27年1月27日)、咸陽博物館・咸陽市文物保護中心・咸陽市文物考古研究所・秦咸陽宮遺址博物館(27年1月28日)、中国書画芸術博物館(27年1月29日)などの展覧会出品候補を所蔵する中国陝西省の機関において、作品の形状・保存状態・展示状況などの調査を行った。 また、陝西省文物交流中心(26年11月4日、27年1月26日)、中国国家博物館(26年11月5日)、北京大学サクラ考古与芸術博物館(27年1月31日)において、本展覧会関連情報を収集した。</p> <p>(2) 細部を含めて作品を熟覧・計測・撮影し、調書に記入することで、支持具の製作や作品解説などの執筆に必要な情報と知見を得ることができた。</p> <p>(3) 作品調査と展覧会関連情報収集の結果を受けて、展覧会会場における効果的な作品配置や安全対策の検討を行い、展覧会の準備を大幅に進めることができた。</p>		
			
	秦始皇帝陵博物院における作品の展示状況		作品調査で得た情報や知見を記入した調書
【実績値】	<p>○作品調査回数 20回 陝西省歴史博物館・陝西省考古研究院・秦始皇帝陵博物院・商洛市博物館・西安博物院・西安市文物保護研究院・臨潼博物館・陝西省歴史博物館・咸陽博物館・咸陽市文物保護中心・咸陽市文物考古研究所・秦咸陽宮遺址博物館・中国書画芸術博物館等(複数回数調査した機関も含む)</p> <p>○調書作成件数 73件</p> <p>○撮影カット数 約4500カット</p> <p>○打合せ回数 24回</p>		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	発展性		
評定	A	B	A	B		
判定理由 適時性：兵馬俑発見から約40年が経過した現在、「20世紀最大の考古学的発見」とも称される兵馬俑の魅力と中国史における位置づけを今日的視点から再評価する貴重な契機となった。 独創性：展示予定作品の調査機会を得たことで、作品の形状・材質だけでなく、保存状態や所蔵館における現在の展示状況なども調査を実施したことで、作品のより良い展示手法を検討できることとなった。 効率性：ワーキンググループのメンバーのみならず、環境保存担当者や外部の関係者とともに役割分担を明確にしつつともに調査することで、展覧会準備を学術・安全・展示効果などの様々な面から多角的に効率よく進めることができた。 発展性：様々な展覧会関係者が集まり、作品調査を総合的かつ効率的に行う今回の手法は、今後、本展覧会の未調査作品を調査する際にも効果を期待できるものである。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	調書作成件数	撮影カット数	打合せ回数		
評定	C	B	A	B		
判定理由 作品調査回数：悪天候のため、現地で予定していた作品調査計画を途中で見直さざるを得なくなった。 調書作成件数：作品調査回数は初期の数値に及ばなかったものの、効率的な調査を実施することで、調書作成件数の目標を達成することができた。 撮影カット数：通常レンズのカメラとともに、作品の詳細部分を専用で撮るためのマクロレンズ付カメラを併用することで、より多くのカット数で撮影することができた。 打合せ回数：十分な回数の打合せを実施することで、有意義な調査研究を効率的に進めることができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	効率的に作品調査を行い、作品の現状における展示状況も把握できたことで、作品の詳細情報を得ることとともに、その成果を取り入れた兵馬俑とその関連遺物のより安全かつ効果的な展示準備を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品調査ならびにその内容の検討の成果によって、本展覧会において、より適切な展示を可能とする体制と基盤を構築することができた。次年度は展覧会実施のためにさらに調査、検討を続けたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-10 特別展「生誕150年 黒田清輝」(仮称)に関する調査研究		
【事業概要】	特別展「生誕150年 黒田清輝」(仮称)(28年3月23日～5月15日)に関する調査研究 28年3月23日～5月15日に開催予定の特別展「生誕150年 黒田清輝」(仮称)の展示を充実させるための調査研究。近代美術史において極めて大きな位置を占める黒田清輝の画業を適切に示すため、展示作品の作品調査により、照明効果を勘案した展示手法、展示構成の検討を行う。		
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長 松嶋 雅人
【スタッフ】	山梨絵美子(東京文化財研究所企画情報部副部長)、三浦篤(東京大学人文科学研究科教授・ゲストキュレーター)		
【主な成果】	<p>(1)山形美術館など展覧会出品候補作品の所蔵館において、作品状態の詳細とともに、所蔵機関における展示状況を調査して、適切な展示手法を検討した。</p> <p>(2)近年、公開されていない作品も含め、作品を実査することで、表現技法の詳細を把握、黒田清輝の画業のなかに位置づけることができた。</p> <p>(3)作品の保存状況並びに、現状の展示状況も把握することで、特別展会場において適切な作品配置や照明効果を検討することができた。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1)ブリヂストン美術館(26年8月29日)、山梨県立美術館(26年9月30日)、静嘉堂文庫美術館(26年10月22日)、後藤美術館、山形美術館(26年12月14日)などの展覧会出品予定作品の所蔵館において、作品に関わる情報の聞き取り調査、ならびに作品調査を行い、作品の保存状況、展示状況などの調査を行った。 黒田記念館(26年12月10日)において、黒田清輝作品の代表的作品の展示手法の現状調査を行った。</p> <p>(2)作品の所蔵展示施設における展示状況を調査し、作品の画面詳細を調査することで、展示における効果的な配置、照明設計を検討する必要な情報を得ることができた。 さらに近年、作品の公開機会がなかった黒田清輝作品の所在等の情報を得ることができた。</p> <p>(3)作品調査ならびに作品情報収集の結果を受けて、展覧会会場における効果的な作品配置や照明効果の検討を行い、十全な展示の想定が可能となった。</p>		
	 		
	黒田清輝作品の現状における展示状況の調査(実施場所・黒田記念館)		
【実績値】	<p>○作品調査回数 11回 ブリヂストン美術館、山梨県立美術館、静嘉堂文庫美術館、後藤美術館、山形美術館、日本銀行等(個人所蔵にかかるものなど、表記不可の機関も含む)</p> <p>○展示構成等検討会回数 4回</p>		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-1-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	発展性		
評定	A	B	B	B		
判定理由 適時性：明治維新から150年が経過した現在、近代美術に大きな足跡を残した黒田清輝の画業を検討する貴重な契機となった。 独創性：展示予定作品の調査機会を得たことで、作品の現状把握だけでなく、通例はほとんどかえりみられないことのない所蔵機関における照明状況など現状の展示状況も調査を行うことで、作品のより良い展示手法を検討できることとなった。 効率性：関東を含めた九州から東北地方にかけての広範囲となる出品予定作品の所蔵機関を効率的に調査することができた。 発展性：作品調査によって作品の詳細情報を得た上で、現状の展示状況を吟味する手法は、絵画作品だけでなく、他分野作品の展示においても、照明効果を含めた種々の展示効果を検討する上で参考となるものである。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	展示構成等検討会回数				
評定	B	B				
判定理由 作品調査回数：想定される展覧会の展示に適切に反映させることのできる十分な調査結果を得ることができた。 展示構成等検討会回数：調査結果に基づいた想定できる展覧会構成、展示照明などについて、十分に検討することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	効率的に作品調査を行い、作品の現状における展示状況も把握できたことで、作品の詳細情報を得ることとともに、その成果を取り入れた黒田清輝の画業と作品に対する鑑賞者の理解を深める展示を想定することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品調査ならびにその内容の検討の成果によって、本展覧会において、より適切な展示を可能とする材料を得ることができた。次年度は展覧会実施のためにさらに調査、検討を続けたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究((5)-②)		
【事業概要】			
<p>東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。対象としたのは、安政6年にドイツ人医師シーボルトが再来日したときに携えてきた洋書、および滞留中に収集した洋書である。明治2年に長子アレキサンダー・シーボルトが外務省に寄贈した後、同17年に農商務省博物館の所管となり、現在にいたったもので、約300冊を数える。西欧の日本に対する深い関心が知られる内容のものが少なくない。貴重図書として保管されてきたこれらの詳細調査をもとに画像データベースを作成し、その学術的意義を明らかにすることを目的とする。なお、本年度に公益財団法人図書館振興財団の助成を得て、実施した。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】			
住広昭子（博物館情報課情報資料室専門職員）			
【主な成果】			
<p>① 当館の所蔵するシーボルト献納本について、その書誌学的調査を行い、データベースを作成した。 貴重な図書を永く保存・活用するために 修復とデジタル撮影を実施した。</p> <p>② シーボルト献納本に最小限の修理を施し、安全に取り扱うことが可能になった。</p> <p>③ 修理の方針や、その過程を伝える画像などを、当館のウェブ上で公開した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>① 調査の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シーボルトが来日してまもなく作成した献納本の目録をもとに、データベースを作成した。 ・収集した資料や、台帳などの基礎データによって、目録中の書誌情報を分析した。 <p>② 研究の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データベースによって、シーボルト献納本の全体像を解明するための手がかりを得ることができた。 ・表紙に貼付されたラベルの記載をとおして、献納本の活用の状況が明らかになった。 <p>③ 成果の公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当初の姿を伝える残す修理の様子や、保存箱の作成手順などをウェブ上で公開したことで、貴重図書に対する博物館の取り組みを広く伝えることができた。 			
【実績値】			
<p>調査件数 308冊 修理件数 77件 写真撮影件数 57件（26,000カット）</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：公益財団法人図書館振興財団の助成を得る過程で、事業のあり方などが審査の対象となり、その意義が認められた。 独創性：これまで解明されていなかったシーボルト献納本の全貌や、献納するにいたった動機などを明らかにすることを目標とする。 発展性：本の内容についても検討を行い、解題などを付けることで、その意義を広く一般に伝え、研究の進展をうながす。 効率性：修理の進捗状況にあわせて、人員の配置や確保を行っており、本の状態によって、修理と撮影の手順を変更・調整している。 継続性：次年度の助成が確定しており、事業を進める際には、修理とデジタル撮影の質量のバランスに配慮して計画を立案している。 正確性：シーボルトが作成した目録をもとに、常に献納本の全体のなかでの位置づけを行うことを心がけた。さらに書誌情報の分析を原本の調査にもとづいて実施することで正確を期した。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	修理件数	写真撮影件数			
判定	B	B	B			
判定理由 調査件数：当初の計画に基づき作品調査を実施できた。 修理件数：当初の計画に基づき作品の修理を実施できた。 写真撮影件数：当初の計画に基づき公開用の画像を撮影できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京国立博物館にまとめて所蔵されているシーボルト献納本の書誌学的調査を実施するため、公益財団法人図書館振興財団の助成を得て、シーボルトが作成した目録をもとに構築したデータベースを駆使して、献納本の全貌を明らかにした。さらに画像データベースをWeb上で公開することで、貴重図書に対する博物館の取り組みを周知させるなど、所期の目標を達成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	公益財団法人図書館振興財団の助成として実施している事業であり、次年度の助成も確定している。 計画に従って着実に進行し、所期の目標を達成している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 東洋民族資料に関する調査研究 ((5)-②)		
【事業概要】			
東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究を行う。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほか、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	平常展調整室主任研究員 川村佳男
【スタッフ】			
丸山清志 (客員研究員)			
【主な成果】			
(1) 東京国立博物館と天理大学附属天理参考館においてオセアニア、及び台湾のタオ族、パイワン族、平埔族の民族資料に対して調査を実施した。 (2) 東京国立博物館が所蔵する東洋民族の列品に関する基礎データを整理するとともに、いくつかの新知見を得ることができた。 (3) 調査で得られた知見は、東洋館 13 室で実施した次の展示に反映させた。 ・「台湾の海の民－タオ族の伝統文化－」(26 年 4 月 15 日～26 年 7 月 6 日) ・「南太平洋の暮らしと道具」(27 年 1 月 2 日～27 年 4 月 5 日予定)			
【年度実績概要】			
(1) 26 年 9 月 19 日に東京国立博物館で平埔族の民族資料を、10 月 17 日に東京国立博物館でオセアニアの民族資料を、10 月 27 日に天理大学附属天理参考館でタオ族、パイワン族、平埔族の民族資料を、12 月 17 日と 18 日に東京国立博物館でオセアニア、タオ族、パイワン族の民族資料を調査した。 (2) オセアニアの民族資料については、オーストラリアのものとしてきた一群のなかにバヌアツなど他地域の民族資料が混在していること、また、いくつかの資料に用いられた従来不明だった材質を明らかにすることができた。台湾の民族資料については、東京国立博物館、天理大学附属天理参考館、国立台湾博物館にそれぞれ清時代の平埔族首長を描いた絵画が所蔵され、なおかつ、互いにたいへん近似した作品であることが判明した。このほか、東京国立博物館所蔵のタオ族、パイワン族の民族資料について、形状、材質、保存状態などの基本情報を整理した。 (3) オセアニアと台湾の民族資料調査で得られた新知見や基本情報は、東京国立博物館のデータベースとともに、東洋館 13 室における展示の題箋やキャプションに反映させることで、展示内容をさらに充実させることができた。			
			
「台湾の海の民－タオ族の伝統文化－」の展示品		「南太平洋の暮らしと道具」展示作業	
【実績値】			
調査回数：5 回。作品調査件数：185 件。関連展示回数：2 件。撮影点数：約 250 カット。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	A	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：日本ではあまり知られていないオセアニアや台湾の民族資料の魅力を調査・展示によって積極的に発信・公開することができた。とくに東洋館13室の展示「台湾の海の民-タオ族の伝統文化-」は、東京国立博物館の平成館・本館において開催した特別展「神品至宝 台北 国立故宫博物院」の会期と一部重なる時期に実施することで、台湾文化に対する関心をさらに高めることができた。</p> <p>独創性：東京国立博物館が所蔵する東洋民族の資料は、アジア、オセアニアのさまざまな地域のものだけでなく、19世紀後半にまでさかのぼる古いものが豊富に含まれている。したがって、これらは民族資料であるとともに、明治から昭和にかけて日本の東洋民族資料に対する認識がどのように変化していったのかを知る貴重な歴史資料でもある。この視点に立つことで、今年度の調査で判明したオーストラリア民族資料の一群におけるバヌアツ民族資料の混在などは、単なる「誤り」としてではなく、明治時代当時の認識をうかがい知る「情報」として積極的に評価することができた。</p> <p>発展性：これまでの調査による知見の着実な蓄積により、天理大学附属天理参考館や台湾の博物館が収蔵する資料との比較研究を進めやすくなってきた。</p> <p>効率性：今年度の調査は、他の研究プロジェクトと連携することで効率性を非常に高めることができた。</p> <p>継続性：毎年度、東洋館13室の展示コーナー「アジアの民族文化」において東洋民族の列品を活用した内容の展示を企画、実施している。本研究成果の公開手段として展示を位置づけることで、継続性を確保させている。</p> <p>正確性：東京国立博物館の列品データベースに得られた知見や基礎データを個体ごとに随時記録、保管することで正確性を担保した。また、動物遺存体を使用した材質は、動物考古学の専門家に同定を依頼することで、正確性のさらなる向上を図った。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	作品調査件数	関連展示回数	撮影点数		
評価	B	B	B	A		
<p>判定理由</p> <p>調査回数：目標としていた回数（5回）で調査を実施し、かつ、いくつかの新知見を得ることができた。</p> <p>作品調査件数：目標の180件を若干上回る件数の作品を調査することができた。</p> <p>関連展示回数：目標通りの回数で関連展示を実施した。</p> <p>撮影点数：目標200件を上回る件数の作品を撮影することができた。</p>						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	基礎的な情報データベースのさらなる充実、タオ族、パイワン族といったテーマ性のある展示ソフトの増加に加えて、天理大学附属天理参考館など他館の所蔵品と比較することで、当館が所蔵する東洋民族資料の新知見をいくつか得ることができた。また、博物館コレクション形成史など関連するテーマの研究と連携することで、調査をより効率的に進めることができた。次年度も、当館所蔵品に対する調査研究に基軸を置きつつ、外部博物館所蔵品との比較研究、及びほかのテーマ研究との連携を継続することで、いっそうの成果を期したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ここ数年、東洋館13室における東洋民族資料の展示ソフトは着実に数を増している。これは、これまで蓄積させてきた基礎的なデータベースをもとに、オセアニアや台湾のタオ族、パイワン族といったテーマごとに知見を深め、展示という具体的な成果の公開につなげるサイクルが軌道にのりつつあることの表れである。次年度はこれまでの調査研究で得ることのできた知見を踏まえた、東洋民族資料の新規展示案をさらにもうひとつ作成したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																								
プロジェクト名称	4) 東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究(5)－②)																								
【事業概要】																									
2011年3月11日に発生した東日本大震災によって津波被害に遭った文化財の保存修復についての保存環境、安定化処理、本格修理に関する調査研究を行い、被災資料の保全を図るとともに今後想定される自然災害に対する有効な手立てを開発することを目的として実施する。																									
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸																						
【スタッフ】																									
和田浩(保存修復課環境保存室長)、土屋裕子(保存修復課保存修復室長)、荒木臣紀(保存修復課調査分析室長)																									
【主な成果】																									
<ul style="list-style-type: none"> ・ 陸前高田市立博物館内の環境を調査し、問題点については環境改善を実施した。 ・ 陸前高田市立博物館が所蔵する工芸資料及び美術資料の安定化処理を実施した。 ・ 研究成果を学会で発表し、刊行した出版物に掲載した。 																									
【年度実績概要】																									
<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境調査及び改善 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%;">26年5月26日から28日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>26年6月16日から18日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>26年8月24日から25日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>26年8月27日から29日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>26年9月29日から30日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>26年10月19日から21日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>26年11月17日から19日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>26年12月16日から17日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>26年12月18日から19日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>27年1月21日から23日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> <tr> <td>27年2月25日から27日</td> <td>陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施</td> </tr> </table> ・ 安定化処理 <ul style="list-style-type: none"> 陸前高田市立博物館所蔵の工芸資料(10件)の安定化処理を実施 陸前高田市立博物館所蔵の美術資料(3件)の安定化処理を実施 ・ 学会発表 <ul style="list-style-type: none"> 26年6月 文化財保存修復学会にて研究発表を行う(2件)。 ・ 出版物 <ul style="list-style-type: none"> 27年1月 研究成果物として「安定化処理」を出版する(一部を執筆)。 				26年5月26日から28日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	26年6月16日から18日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	26年8月24日から25日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	26年8月27日から29日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	26年9月29日から30日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	26年10月19日から21日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	26年11月17日から19日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	26年12月16日から17日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	26年12月18日から19日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	27年1月21日から23日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施	27年2月25日から27日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施
26年5月26日から28日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
26年6月16日から18日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
26年8月24日から25日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
26年8月27日から29日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
26年9月29日から30日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
26年10月19日から21日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
26年11月17日から19日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
26年12月16日から17日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
26年12月18日から19日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
27年1月21日から23日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
27年2月25日から27日	陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施																								
 <p style="text-align: center;">収蔵環境改善のための防虫施工</p>																									
【実績値】																									
環境調査回数：11回(29日間)、工芸資料の安定化処理件数：10件、美術資料の安定化処理件数：3件 学会発表件数：2件、出版物数：1冊																									
【備考】																									

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：津波で被災した文化財を迅速に処理し、長期間保管する具体的な解決策を探る研究である。 独創性：現場や被災資料からデータを密に入手し、活用している。 発展性：将来発生しうる自然災害に対して成果の活用が大いに期待できる。 効率性：研究成果を現場に即座にフィードバックしながら進めることができた。 継続性：現場の学芸員等が持続可能な方策を提案する研究である。 正確性：豊富なデータを多角的に解析して評価し、改善策を構築することができた。						

2. 定量的評価

観点	環境調査回数	工芸資料の安定化処理件数	美術資料の安定化処理件数	学会発表件数	出版物数
判定	B	B	B	B	B
判定理由 環境調査回数：正確な状況把握を行なうのに必要かつ十分な調査回数である。 工芸資料の安定化処理件数：限定された期間内に実験を含めて処理を実施できた件数としては十分である。 美術資料の安定化処理件数：限定された期間内に実験を含めて処理を実施できた件数としては十分である。 学会発表件数：成果の波及効果が期待される学術団体において公表することができた。 出版物数：一般に販売する書籍に成果を公表することができた。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初予定の作業を実施すると共に、環境改善に対する具体的な指針、あるいは安定化処理に関する具体的な方法論を創出することができたので、実績として十分なものと判定する。次年度以降も研究計画に沿って実施する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り達成しているものを判定する。次年度の研究調査によって中期計画期間中の目標を達成し、次期中期計画においてはより高度な問題について取り組む予定でいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 絵巻の〈伝来〉をめぐる総合的研究(科学研究費補助金)((5)-②)		
【事業概要】			
<p>本研究は、絵巻の研究を従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉え直し、推進する。研究にあたっては、絵巻の伝来、鑑賞歴に関わる情報を収集・蓄積した上で、絵巻が今日に至るまでにどのような軌跡を経て伝世したのかという、各作品の通時的な歴史性に配慮し、絵巻という媒体全体を視野に入れた総合的な分析を行うことを最終的な目標として設定する。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室研究員 土屋貴裕
【スタッフ】			
【主な成果】			
<p>前年度に引き続き、絵巻の伝来、鑑賞歴といった情報を収集するため、以下の調査研究を進めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化 ・東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査 ・東京文化財研究所所蔵の売立目録の調査とデータ整理 			
【年度実績概要】			
<p>(1) 文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化</p> <p>本研究が主な対象とする古代中世絵巻の伝来、鑑賞情報を得るためには、日記、古記録等の文献資料を博捜し、そこに記載された本文を整理する必要がある。抜き出しにあたっては、絵巻のみならず仏画、肖像画、屏風等、絵画関係の記事をピックアップし、本年度はおおよそ57タイトルの文献資料から約5300件の記事を抜き出し、その一部をデータ化した。</p> <p>(2) 東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査</p> <p>絵巻模本の多くは近世に作られたが、その制作に際して、所蔵者や伝来等の情報が記されている場合がままある。本研究では、東京国立博物館所蔵絵巻模本の悉皆調査を目指し、目録の整理、撮影、所蔵者や伝来、模写者等の情報を収集すべく、模本リストの整理を行った。調査順は列品番号順を基本として進め、本年度は幕末の復古やまと絵師による模本など約60件の調査を行うことができた。</p> <p>(3) 売立目録の調査</p> <p>(1)と(2)が前近代における絵巻情報の収集と整理であるのに対し、近代における作品の移動等を追うため、売立目録に記載された絵巻の調査を進めた。とりわけ、東京文化財研究所には国内有数の売立目録が所蔵されており、その全てから、絵巻を中心とするやまと絵の情報を抜き出し、PDF化を進める準備を整えた。本年度は、昨年度までの抽出したデータの校正と、試験版データベースでの画像ファイルとのリンクを進めた。</p> <p>(4) 調査・研究の展示での公開</p> <p>上記の調査・研究の成果を踏まえ、26年7月23日から8月31日の間、東京国立博物館特別2室において「特集陳列 春日権現験記絵模本Ⅰ—美しき春日野の風景—」を開催した。このほか、綿田稔・江村知子・土屋貴裕「続稀蹟雑纂—ポर्टランド美術館所蔵作品簡解」(『美術研究』414号、27年2月掲載)を発表した。</p>			
			
<p>「特集陳列 春日権現験記絵模本Ⅰ—美しき春日野の風景—」 展示風景</p>			
【実績値】			
<p>絵巻伝来関係資料の抜き出し件数 約5,300件</p> <p>絵巻模本の調査件数 約60件</p> <p>売立目録の調査件数(既入力データの校正含む) 約5,000件</p> <p>展示への反映 1件</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉える本研究の意義は大きいため。 独創性：作品の付属情報に留まらず、日記、古記録などの文献資料、売立目録の情報により多角的に研究を推進する本研究の独創性は高いため。 発展性：絵巻研究のみならず、仏画、肖像画をはじめとする絵画の研究にも寄与することができるため。 効率性：限られた時間の中で、対象資料の目処を立て、効率的にデータ収集を行えたため。 継続性：前年度までの計画を引き続き継続して調査研究を進めることができたため。 正確性：データに関しては、入力時、入力後の二度確認を行うことで、資料の正確性を期した。						

2. 定量的評価

観点	関係資料の 抜き出し件数	絵巻模本の 調査件数	売立目録の 調査件数	展示への反映		
評定	B	B	B	B		
判定理由 関係資料の抜き出し：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 絵巻模本の調査：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 売立目録の調査：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 展示への反映：一般にも開かれた研究成果の公開を行うことができた。 論文等の成果公開：1件。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	最終年度である今年度は、これまでの研究蓄積、そして研究手法を踏まえながら、文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化、絵巻模本の調査、売立目録の調査という、本研究推進にあたっての基礎作業を着実に進めることができた。あわせて、成果公開を展覧会という形で一般向けに行うこともでき、論文等も公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は絵巻の研究を作品のみならず、その付帯情報から総合的にとらえるべく進めてきたが、研究開始当初の計画に沿ったデータ収集を行うことができた。また、絵巻模本の調査もリストはおおむね整理することができた。ただし、本研究が対象とする調査対象は、限られた年度のなかで全ての調査を完遂するのは不可能である。蓄積データの効率的な公開に向け、継続して研究を推進していくことを目指したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 神像表現における物語性に関する研究 (学術研究助成基金助成金) ((5)-②)		
【事業概要】 本研究は、多くの神像は固有の物語 (伝承・信仰) を背景に制作されたという視点に立つもので、表情や仕草を読み解き、姿にこめられた意味を探ることを目的にする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部平常展調整室長 丸山士郎
【スタッフ】			
【主な成果】 25年度に調査を実施した広島・南宮神社神像群についての論文を執筆した。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none">・25年度に調査を実施した広島・南宮神社神像群の作品概要と、表現の物語性に関する論文を執筆した (「広島・南宮神社神像群と神像の物語性」『MUSEUM』652、2015年10月、東京国立博物館)。・静岡県河津町所在の南禅寺所蔵の神像7体 (男神1体、女神1体) の調査を実施し、作品調書及び写真の作成をした (26年6月21日)。・東北地方の仏像は、仏であるとともに神でもあるといわれ、ナタ彫りはその性格を示す表現である。ナタ彫りの代表作品である岩手・天台寺の聖観音菩薩立像など、東京国立博物館で開催された「みちのくの仏像」展出品作品26点の調査を実施した。			
			
南宮神社神像群の調査風景			
【実績値】 調査作品数：彫刻 33 体 論文執筆数：1 件 (①)			
【備考】 論文 ①丸山士郎「広島・南宮神社神像群と神像の物語性」『MUSEUM』652、2015年10月、東京国立博物館			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：近年神像彫刻研究への関心が高まっており、調査結果はその推進に寄与することができる。 独創性：神像彫刻の表現を固有の物語（伝承等）から考察する視点はこれまでになく、新たな成果が期待できる。 発展性：未紹介作品の調査を実施できたので、その成果は今後の神像研究に活用できる。 効率性：東京国立博物館で開催された展覧会における成果も反映しており、効率よく研究を進めることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査作品数	論文執筆数				
判定	B	B				
判定理由 調査作品数：展覧会出品作品 26 体を含む 33 体の調査を実施し、予定通りの成果を挙げる事ができた。 論文執筆数：25 年度に調査を実施した広島・南宮神社神像群に関する論文を執筆した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年関心の高まっている神像について、東京国立博物館で開催した展覧会成果も取り入れながら、予定通りの作品調査、論文執筆を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度の研究実施計画どおり展覧会出品作品を中心に、作品調書、写真撮影を実施し、昨年度調査した作品の論文を執筆した。来年度は、引き続き同様の調査を実施するとともに、それらの成果を基にした論文を執筆する。

業務実績書

中期計画の項目	4 有形文化財に関する調査及び研究推進		
プロジェクト名称	7)江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究（学術研究助成基金助成金）(5)-②		
【事業概要】 自然観察によって自然の原理や根源を求めていこうとする動向は、我が国においては博物学として江戸時代にすでにその兆しがみられた。江戸幕府による本草学や博物学の興隆は、江戸中期、特に享保年間（1716-36）以降と考えられてきた。しかし本事業では、その萌芽の時期を江戸初期すなわち17世紀に求めるべく、狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」を調査するものである。これら膨大な写生図を調査することで、江戸初期の幕臣や御用絵師らによって、自然観察や諸産物の集成といった科学的視点が牽引され、その後、享保年間以降の本草学や博物学の興隆が導き出されたことを明らかにしたい。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課貸与特別観覧室 主任研究員 小野真由美
【スタッフ】 松島 仁（徳川文化財団 特別研究員）			
【主な成果】 前年度の狩野探幽及び狩野常信の写生図の調査をふまえて、本年度は常信と交友のあった京都の公家・近衛家熙が制作した写生図の調査研究をすすめた。 (1)家熙の日記『家熙公記』、及び家熙の言行を記録した山科道安著『槐記』を精査した。 (2)京都・陽明文庫所蔵「花木真写図巻」（近衛家熙作）三巻を調査した。 (3)『家熙公記』『槐記』の精査によって、家熙が本草学・名物学については、『和名類聚抄』（源順・平安時代）、『本草綱目』（李時珍・明時代）から影響をうけていたことを指摘し、そして「花木真写図巻」の調査によって、家熙が探幽・常信のみならず、ドドネウス著『草木誌』のような西洋の植物図からも新たな構図法を学んでいた可能性がみいだされた。さらに、家熙が典薬頭の錦小路頼庸や絵師の渡辺始興と交流しながら、本草学・博物学への造詣を深め、「花木真写図巻」のような植物図譜を制作した背景を考察した。 (4)家熙は宮廷や公家のみならず、将軍家、幕府の御用絵師、縁戚の水戸藩、薩摩藩、津軽藩などの人脈をもっていた。写生図制作についても、宮廷、幕府、藩主といった知的人脈をさらに明確にしていく必要があり、今年度は将軍家、水戸藩について調査した。 (5)本年の調査によって得られた知見は論文（【備考②】）として発表した。また前年度の調査をふまえた狩野探幽とその写生図についての研究成果を論文として発表した（【備考①】）			
【年度実績概要】 ・京都・陽明文庫にて近衛家熙作「花木真写図巻」の調査を行った（26年8月20日）。 ・水戸・個人宅にて水戸藩御用絵師関連作品の調査を行った（26年10月24日）。			
			
<p>(左) ドドネウス著『草木誌』東京国立博物館 (右) 近衛家熙「花木真写図巻」陽明文庫</p>			
【実績値】 ・研究会回数 2回（5月・27年3月 於東京国立博物館） ・作品調査回数 2回（8月 京都・陽明文庫、10月 水戸・個人）			
【備考】 ①松島 仁「狩野探幽筆 海棠に尾長鳥図」『國華』1428号、2014年10月20日 ②小野真由美「予楽院の庭—陽明文庫所蔵「花木真写」考—」『國華』1429号、2014年11月20日			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：本年度は陽明文庫所蔵「花木真写図巻」三巻の全ての画像を撮影し、データベース化することができた。これは美術史、歴史学、博物学、自然史などの諸分野の研究に資するものである。</p> <p>独創性：これまで江戸初期（17世紀）における自然観察の事例は実証されていなかったが、本事業は狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」に着目することで、江戸初期における博物学の萌芽の様相や、そこに関わった幕府の状況について新知見を示し、さらにその直接的な影響が江戸中期（18世紀）において、陽明文庫所蔵「花木真写図巻」に及んでいることを明らかにした。</p> <p>発展性：本事業における江戸初期の写生図についての調査は、幕府主導の事例である。そこからさらに幕府及び御用絵師と交友のあった撰閤家・近衛家熙の事例とを関連付け、その調査へと発展させたことで、前年度以上に美術史や歴史学、博物学史などに資する内容となった。</p> <p>効率性：本年度行った陽明文庫所蔵「花木真写図巻」三巻の法量、注記、料紙についての情報は国立情報学研究所のResearchmapにおける資料公開 (https://researchmap.jp/onomayumi/%E8%B3%87%E6%96%99%E5%85%AC%E9%96%8B/) に掲載し、多くの研究者が利用可能なものしている。</p> <p>継続性：本年度の調査によって陽明文庫所蔵「花木真写図巻」が公家文化における伝統に立ちながら、新たな西洋からの知識をとりいれていることが明らかになった。そしてそこに幕府や御用絵師が関わったこともみえてきた。そうした人的ネットワークの解明を課題とし、継続的に調査をすすめている。</p> <p>正確性：陽明文庫所蔵「花木真写図巻」全てのデータ化を行った。すでに先行研究として淡交社刊行『花木真写』があるが、本研究は先行研究に、各図の法量、料紙の状況、制作背景の考察を加えたものとなっている。そのため正確で客観性のある研究成果が得られたといえる。</p>						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	作品調査回数			
評定	B	B			
<p>判定理由</p> <p>研究会回数：5月と27年3月に前年度の成果の確認と本年度の調査計画を行った。研究会は2回と少なかったが、メールでの情報共有により十分な確認と意見交換を行うことができた。</p> <p>作品調査回数：作品調査のうち、陽明文庫所蔵「花木真写図巻」は、撰閤家筆頭近衛家の伝来品であり、調査の機会を得ることが困難な作品であった。この貴重な調査によって、江戸中期の植物図譜の一端が明らかになったといえる。また水戸藩御用絵師関連の調査では、今後の研究に関わる様々な知見を得ることができた。</p>					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	春期から計画的に調査とデータ構築を行い、陽明文庫所蔵「花木真写図巻」のデータ化を行うことができた。さらに家熙をめぐる知的人脈やその制作背景などを明らかにすることができた。今後は幕府や水戸藩、常信などとの関連を調査し、多角的な研究へと発展させたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」の網羅的調査が計画通りに達成され（【備考②】）、更に幕府と関わりの深い近衛家熙へと研究を進展することができた（【備考②】）。次年度は、江戸初期の写生図制作が、江戸中期以降にどのような展開をみせたのかを明らかにしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) 刀装具一派後藤家の鑑定 極帳（鑑定控）の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（5）-②

【事業概要】

本研究は、東京藝術大学附属図書館が所蔵する後藤家文書の調査などによって、近世最大の刀装具一派であった後藤家の鑑定活動と、同家の作品の価値付けの様相を具体的に捉えるものである。後藤家では刀装具制作とともに、祖先の作品の鑑定も行っており、その結果は後藤家文書のうち「極帳」という鑑定控に記録されていた。本研究では、極帳を含む後藤家文書の撮影を行い、鑑定された作品のリストを作成し、現存作品との照合を可能な限り進める。そして、その作業から鑑定基準などの鑑定の様相を考察し、近世における工芸品の価値付けの実際を考察する。

【担当部課】

学芸研究部

【プロジェクト責任者】

保存修復課保存修復室研究員 酒井元樹

【スタッフ】

【主な成果】

- ・極帳の翻刻を継続し、後藤家の鑑定活動や極帳との関係について更に理解を深めた。
- ・極帳の鑑定記録と東京国立博物館所蔵にされる刀装具との照合が部分的に行えた。
- ・上記研究成果を、展示会に協力することで視覚的に発表し、同展カタログにおいてその詳細を論述できた。

【年度実績概要】

- ・極帳の翻刻、及び鑑定活動の様相の検討を行った。
- ・当館所蔵品を調査し、極帳との照合作業を部分的に行うことができた。
- ・極帳の文書としての構造に関して新たな知見が得られた。それは、初めて鑑定が依頼され、同家の作品と認められた刀装具に対して、極帳には「折紙」と呼ばれる鑑定書を発行した記録だけがあるものと考えていたが、同帳にはこれとともに鑑定所見を刀装具裏面に彫り付ける「極銘」の記録も残していたことが判明した。
- ・上記研究成果を、東京藝術大学附属図書館貴重資料展「後藤家文書 刀装金工の鑑定と記録②」（会期 26年12月1日～25日）に協力することで視覚的に提示し、その詳細を「後藤家文書 極帳について②」と題して同展カタログにおいて論述した。



左図 「後藤家文書 刀装金工の鑑定と記録②」展 カタログ表紙
右図 同展カタログ所収 論文「後藤家文書 極帳について②」（部分）

【実績値】

論文件数 1件。

【備考】

「後藤家文書 極帳について②」（『後藤家文書 刀装金工の鑑定と記録②』 25年12月）

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：最新の研究成果を展示会において展示・文献面で公開できたため。 独創性：極帳について従来知られていなかった文書の構造に言及できたため。 発展性：今年度判明した文書の構造への更なる理解は、今後の研究で基礎的、かつ重要な検討要素となるため。 効率性：東京国立博物館の所蔵品を精査することで、人材・設備の投資を最大限に抑えられたため。 継続性：翻刻や実作品との照合において継続的な検討の時間を設けているため。 正確性：研究成果の詳細を論述した論考を発表できたため。また、東京国立博物館の所蔵品について鑑定記録を得られ、自館の文化財について新たなデータが得られたため。						

2. 定量的評価

観点	論文件数					
評定	B					
論文件数：予定通り研究の中間報告を論文などで発表できたため。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度の目標どおり、研究成果を展示会と論考で公開でき、さらには自館の文化財に対して新たな理解ができたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、極帳の画像作成、部分的な翻刻を中心とした情報整理、実作品との照合といった課題が段階的にあり、後者二項目は併行して行われている。現状では研究成果を複数回発表しており進捗は計画通りである。今後も継続して翻刻作業を行い、現存する刀装具との照合を計りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (5)-②		
【事業概要】 中世から近代までの日本絵画を照らす照明の状況を大きな指標ととらえ、まず<現代の展示空間における光>が、どのような状況にあるのかを把握する。そして制作された当時、絵画がどのように受容されていたのかを考察しながら、<歴史的な光>を先進的照明機器によって復元することで、絵画の展示の手法を拡張しようとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 松嶋雅人
【スタッフ】 和田浩 (保存修復課環境保存室長)、矢野賀一 (学芸企画部企画課デザイン室主任研究員)、土屋貴裕 (列品管理課平常展調整室員)			
【主な成果】			
<p>(1) ・東京国立博物館展示室において、輝度カメラ、分光光度計を用いて、既存照明器具で構成される展示照明環境の現状分析を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京国立博物館敷地内の施設並びに館外施設の展示室内の光の計測、調査を行い、比較資料となるデータ収集を行った。 ・研究協力社のもので、LED 照明、有機 EL 照明器具の先進装置を調査、実験を行った。 <p>(2) 調査、実験結果のデータを考慮、検証することで、絵画の制作当時の状況を復元的に考察することで可能となり、先進的 LED 照明、有機 EL 照明をに用いた展示室で実際の展示効果を検証することができた。</p> <p>(3) 調査、実験成果をもとに、先進的 LED 照明、有機 EL 照明を用いた展示照明を実際の文化財展示に反映させた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 下記の調査、実験を行った。</p> <p>東京国立博物館総合文化展にて輝度分布調査(輝度計測 30 箇所) (26 年 4 月 2 日～20 日)</p> <p>特別展「栄西と建仁寺」において輝度分布調査(輝度計測 5 箇所) (26 年 4 月 20 日)</p> <p>東京国立博物館総合文化展にて輝度分布調査(輝度計測 11 箇所) (26 年 4 月 22-25 日)</p> <p>東京国立博物館総合文化展にて輝度分布調査(輝度計測 10 箇所) (26 年 5 月 11 日)</p> <p>東京国立博物館春草蘆・六窓庵にて輝度分布調査(輝度計測 28 箇所) (26 年 5 月 12 日)</p> <p>東京国立博物館総合文化展にて輝度分布調査(輝度計測 12 箇所) (26 年 5 月 16 日)</p> <p>新規導入照明器具の調査(輝度計測 22 箇所、分光スペクトル計測 22 箇所) (26 年 6 月 13 日)</p> <p>龍谷ミュージアム展示室にて輝度分布調査(輝度計測 31 箇所) (26 年 9 月 6 日)</p>			
			
春草蘆		春草蘆内の輝度分布画像	
<p>(2) 文化財照明における諸データを収集したことで、先進的 LED 照明、有機 EL 照明等の照明機器の効果的な仕様作製に関連付けすることができた。(26 年 4 月～12 月)</p> <p>(3) ・上記調査結果の知見をもとに、有機 EL 照明による文化財照明について学会発表を行い、論文を発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成館特別展室の照明器具改修に上記調査結果を反映させた。(26 年 12 月～27 年 3 月) 			
【実績値】			
<p>東京国立博物館展示室、館外施設(屋外、寺院)の計測調査箇所 171 箇所 (輝度計測 計 149 箇所 分光スペクトル計測 計 22 箇所)</p> <p>展示への反映 2 回</p>			
【備考】			
<p>和田浩・松嶋雅人・矢野賀一・土屋貴裕「次世代型展示用照明器具の評価法に関する研究」文化財保存修復学会第 36 回大会(26 年 6 月 8 日)</p> <p>和田浩・松嶋雅人・矢野賀一・土屋貴裕「OLED 光源を用いた面発光照明器具による伝統的な屋内光環境効果の復元」『展示学』52 号(27 年 3 月)</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：各展示施設における既存の照明器具から先進器具への転換が数多くなされている現状において、本研究は極めて緊急性、公共性が高く、また数多くの計測資料は国内のみならず、国外施設との比較材料として極めて有効である。 独創性：美術史、展示デザイン、保存科学各分野を統合した本研究は、これまでに他に類をみない。 発展性：本研究の実測データ、その効果の多様性は、今後の文化財展示に様々な示唆、影響を与える。 効率性：東京国立博物館総合文化展の展示替機会を、調査実験のデータ収集機会として効率的に利用している。 継続性：年間に数多く実施される東京国立博物館総合文化展、並びに特別展において、さまざまな文化財分野の調査機会を多数得ることができる。 正確性：現状の展示環境、並びに先進的照明器具の各種データは数多くの収集機会を得ることによって、その正確性が担保されている。						

2. 定量的評価

観点	計測調査箇所	展示への反映				
評定	A	B				
判定理由 計測調査箇所：東京国立博物館内外の展示室における照明環境について、絵画作品の形状、素材について各種の測定が数多く実施することができた。 展示への反映：調査研究の成果をもとに、実際の展示に先進照明器具を用い、高い展示効果が得られた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>今年度は、東京国立博物館総合文化展、並びに特別展等の既存展示環境の現状把握を数多く行ったことで、各種データを効率的に収集することができ、より先進的な展示環境を構築する先進的照明器具の仕様作製に反映させることができた。</p> <p>次年度にはさらに広範囲における展示環境の数値、データを収集しつつ、実際に新規の先進的照明器具を採用した文化財照明についての検証を行いつつ、これまでにない展示環境の提示が広範にできるよう理論構築を進めたい。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>現状における展時室等の展示環境の調査を十全に行うことができ、さらに各種の先進照明器具の検討を実施したことで、その成果が実際に東京国立博物館展示室へ反映されることとなった。</p> <p>次年度以降、さらに諸環境における計測値を多数収集し、特別展等で本研究の成果を反映させたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 東アジアにおける繡仏の基礎的研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)－②)		
【事業概要】			
本研究は、刺繍により仏教尊像や仏教的主題を表した「繡仏」について、日本中世～近世期を中心に、同時期の中国・朝鮮半島など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査にもとづいて図像・技法・様式を分析することで、仏教絵画史及び染織史の観点から同時代繡仏を総合的・体系的にとらえることを目的とするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	広報室長 伊藤信二
【スタッフ】			
塚本鷹充（調査研究課東洋室研究員）、土屋貴裕（列品管理課平常展調整室研究員）、高木結美（学芸企画部企画課特別展室アシエイトフェロー）			
【主な成果】			
(1) 研究2年目である本年度は、主として国内外に所在する中国の作例の実見調査を実施することで、図像・材質技法・様式の詳細な分析を行った。			
(2) これらの調査によって得られた繡仏の現存作例に関する、法量・図像・材質・技法・銘文・箱書・関連情報などを整理した。			
【年度実績概要】			
(1) 繡仏作品実見調査			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 26年 6月 12日 ・ 国宝刺繍如來說法図 1幅 唐時代 8世紀（奈良国立博物館）実見調査 ・ 26年 8月 14日 ・ 刺繍如来三尊図 1幅 唐時代 8世紀（大英博物館）実見調査 <ul style="list-style-type: none"> ・ 刺繍幡残欠 5点 唐～宋時代 8～10世紀（大英博物館）実見調査 ・ 26年 8月 15日 ・ 刺繍キリスト像 2枚 明時代 17世紀か（V&A 美術館）実見調査 <ul style="list-style-type: none"> ・ 刺繍種子文袈裟 1領 江戸時代末期～近代（V&A 美術館）実見調査 ・ 刺繍幡残欠 3点 唐～宋時代 8～10世紀（V&A 美術館）実見調査 ・ 26年 10月 10日～11日 ・ 刺繍千手観音菩薩図 1幅 南宋時代 12～13世紀（台北国立故宫博物院）実見調査 <ul style="list-style-type: none"> ・ 刺繍仙人図 12幅 明時代 17世紀（台北国立故宫博物院）実見調査 ・ 刺繍咸池浴日図 1幅 南宋時代 12～13世紀（台北国立故宫博物院）実見調査 ・ 刺繍師普賢菩薩 1幅 清時代 17世紀（台北国立故宫博物院）実見調査 <p style="margin-left: 40px;">※台北国立故宫博物院所蔵作品は展示施設である九州国立博物館にて調査</p>			
(2) 奈良国立博物館の釈迦說法図（通称勸修寺繡仏）は、現存作例の極めて少ない唐時代の繡仏作品の代表作として名高いが、現在同館で解体修理が行われており、肌裏を除去した本紙裏が観察されるという千載一遇の好機を得て、中国繡仏に特有な技法である相良繡、鎖繡の裏側の具体的な運針を観察できた。また同時期でやはり大型の当代繡仏である大英博物館の釈迦三尊図（通称敦煌請来繡仏）を詳細に観察することができた。比較検討により、勸修寺繡仏の極めて手堅い技法、敦煌請来繡仏の緻密だがおおらかな技法という差異が看取され、これが工人や工房などの制作環境に由来するもの（例えば官製と民間製あるいは私製のような）との仮説が得られた。			
また明時代の繡仏作品については、面部に刺繍糸を平行に運針する「平繡」が多用されていることをかつて指摘したことがあるが、すでに南宋時代の作品にもこの傾向が見られることが判明した。			
			
調査風景 V&A 美術館			
【実績値】			
繡仏作品の調査件数 約 28 点			
調査作品デジタル画像撮影件数 約 1,000 枚			
繡仏現存作例の作品情報データ化件数 約 100 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：中国の繡仏について現存作例を網羅的に調査する作業は従来ほとんど行われてこなかったため、本研究の意義は大きい。 独創性：繡仏現存作例について図像・技法を詳細に分析し、様式編年化する本研究の独創性は高いため。 発展性：染織研究のみならず、仏画をはじめとする絵画については仏教美術の研究にも寄与することができるため。 効率性：中国繡仏では特に古くかつ稀少な大型の唐代の作品2点をはじめ、限られた時間の中で、効率的に調査を実施できたため。 継続性：研究開始年度に基礎データを整備することで、来年度以降の調査研究課題を洗い出すことができたため。 正確性：データ作成に関しては、入力後、確認者を替えて複数の確認を行うことで、資料の正確性を期したため。						

2. 定量的評価

観点	繡仏作品の調査件数	調査作品デジタル画像撮影件数	繡仏現存作例の作品情報データ化件数			
判定	B	B	B			
判定理由 繡仏作品の調査件数：当初の計画に基づき作品調査を実施できた。 調査作品デジタル画像撮影件数：当初の計画に基づき作品調査と画像撮影を実施できた。 繡仏現存作例の作品情報データ化件数：当初の計画に基づき研究の基盤となるデータを作成できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本中世～近世期の繡仏を中心に、同時期の中国など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の所在を網羅するという作業は従来ほとんど行われてこなかったこともあり、本研究の意義は極めて大きいと言える。本年度は、中国の繡仏作品、特に現存作例が極めて少なく、東アジア繡仏研究においては極めて重要な位置を占める唐代の大型作品2点を初め、多数の中国繡仏を実見調査し、本研究推進にあたって基盤となるデータを作成することが出来た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究開始から2年度目にあたる本年度は、中国繡仏の現存作例について掌握することに努めたが、重要作例についての作品調査もあわせて着実に進めることができた。本研究は当初の研究計画に則り概ね順調であり、基本的な研究基盤を整えつつある。また、調査によって得た詳細情報を整理し作成した基礎データ及びデジタル画像は、繡仏を東アジア仏教美術史に体系的に位置づける本研究にとって極めて重要な情報と考える。次年度以降も引き続き、繡仏に関する作品実験調査及びデータ集積を進めていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 極薄青銅器の製作技術解明－中国金属工芸史を再構築するための基盤研究（(5)－②）		
【事業概要】 厚さ1mmに満たない青銅製容器が、戦国時代（前5世紀）以降の中国で急速に普及していった。その製作技術を3次元計測、蛍光X線元素分析装置などの光学機器の使用を含む多角的な分析と製作実験により解明することで、中国金属工芸史の再構築につながる基盤研究を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男
【スタッフ】 谷豊信（部長）、和田浩（保存修復課環境保存室長）、矢野賀一（学芸企画部企画課デザイン室主任研究員）、松本伸之（京都国立博物館副館長）、赤沼潔（東京藝術大学教授）			
【主な成果】 (1) 国内外の博物館において極薄青銅器ないしそれに関連するユギの調査と分析を実施し、いくつかの製作技法を明らかにすることができた。 (2) 調査で明らかにした製作技法を東京藝術大学における実験で検証し、技法各種を可能とする条件について知見を得た。 (3) 調査で得た途中成果を刊行物、学会などで発表した。			
【年度実績概要】 (1) 天理大学附属天理参考館(26年10月21日)、黒川古文化研究所(26年10月22日)、和泉市久保惣記念美術館(26年10月26日、28日、29日)、泉屋博古館(26年10月30日、31日)、京都国立博物館(27年3月18日)において、極薄青銅器の調査及び3次元計測、蛍光X線分析、CT撮影などを実施した。このほか、韓国中央国立博物館、国立古宮博物館、ソウル大学博物館、宗廟、安城博物館、安城ユギ工房において極薄青銅器の参考資料として韓国出土青銅器及びユギの調査(26年8月6日～8月14日)を実施した。 (2) 東京藝術大学では昨年度、銅・錫・鉛の成分比率を変えながら铸造したサンプルに対して加工実験を8回行った(26年8月3日～5日、18日～21日、25日)。また、加工前後で表面の成分比率や色がどのように変化するかを調べるため、サンプルに対して蛍光X線分析と分光計測も1回実施した(27年3月27日)。 (3) 調査で得られた途中成果は『日本中国考古学会2014年度大会 発表資料集』(26年12月6日発行)、韓国国立中央博物館での学術交流発表会(26年8月8日)、及び広島大学で開催された日本中国考古学会平成26年度大会(26年12月6日～12月7日)にて報告した。			
			
和泉市久保惣記念美術館における調査(26年10月28日)		サンプルを用いた加工実験(26年8月21日)	
【実績値】 調査・分析実施回数：1回 サンプルの加工実験回数：8回 加工実験を行ったサンプルの点数：56点 研究成果の公開回数：3回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	S	A	B	B	B
判定理由 適時性：発掘の増加によって大幅に資料数が増加しつつある中国古代の極薄青銅器が、どのように製作されたものであるのか探究することは、中国古代金属工芸史の新領域を開拓する可能性につながる。 独創性：熟覧に加えて、3次元計測、蛍光X線分析、分光計測といった様々な分析手法を多角的に取り入れて、極薄青銅器の製作技法を探究し、その知見を実験によって検証しようとする試みは、これまでに例のないものである。 発展性：本研究による成果が蓄積されることにより、他地域や中国のより新しい時代における極薄の青銅器との比較をより詳細に行うことができる。 効率性：東京藝術大学の夏季休暇期間にサンプルの加工実験を実施して作業人員が集まりやすくするなど、予定していた計画に沿って調査分析を進めることができた。 継続性：研究の進展によって、極薄青銅器のなかにも時代や形状によって異なるいくつかの技術体系のあることがわかってきた。引き続き、各種技術体系の詳細を明らかにすることが必要である。 正確性：調査分析データは計測結果だけでなく、計測条件および計測部位を詳細に記録することで、客観的な検証が可能となるようにしている。						

2. 定量的評価

観点	調査・分析 実施回数	サンプルの加工 実験回数	加工実験を行った サンプルの点数	研究成果の 公開回数		
評定	B	B	C	A		
判定理由 調査・分析実施回数：目標通りの回数で調査分析を実施し、かつ、いくつかの新知見を得ることができた。 サンプルの加工実験回数：目標通りの回数でサンプル実験を行うことができた。 加工実験を行ったサンプルの点数：加工時におけるサンプルの破損が予想を上回り、加工実験の目標としていたサンプル点数には届かなかった。 研究成果の公開回数：当初予定しなかった韓国においても、成果発表の機会を得ることができた。						

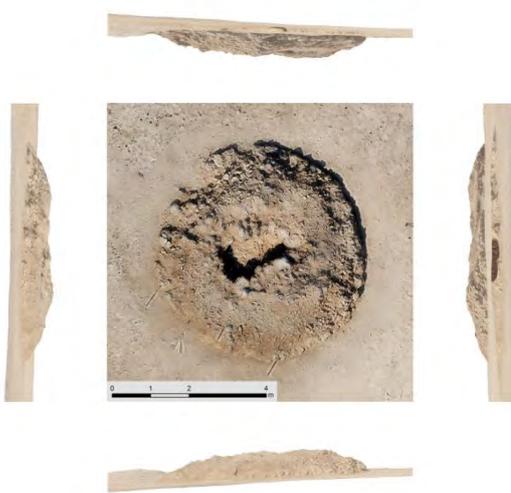
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	昨年度、東京国立博物館が所蔵する極薄青銅器をおもな対象として実施した調査・分析の成果を、今年度は館外収蔵品を調査・分析することによっていっそう深化させることができた。例えば、極薄青銅器の製作技術から抽出されたいくつかの技術系統は、今年度の最たる成果であるが、次年度は中国における出土資料を用いて、各種技術系統の時期や分布の差異を明らかにしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査、分析及び実験によって、極薄青銅器の製作技術を解明しつつあるだけでなく、研究の進展によって複数の技術系統を予察できるようになった。最終年度となる次年度は、それぞれの技術系統から中国古代における極薄青銅器製作集団の動向を読み解くことができるように、中国における出土品の調査にとくに注力したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) デイルムン文明の起源－バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究((5)-②)		
【事業概要】	ペルシア湾では、前 2050 年頃、現バハレーン王国にある「バハレーン砦」に首都を置くデイルムン文明が興ったことが知られている。本研究では、この原因と過程を、同国に多数存在する高塚式古墳の考古学的発掘調査を実施し、その内容を分析することによって解明する。		
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 後藤 健
【スタッフ】	浜崎一志(滋賀県立大学人間文化学部教授)、原田 怜(東京文化財研究所客員研究員・JICA 専門家)、安倍雅史(東京文化財研究所文化遺産国際協力センター前アソシエイトフェロー)、西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所技術顧問)		
【主な成果】	<p>(1)バハレーン王国に所在する古墳群において考古学的発掘調査を実施し、また関連学術情報を収集した。</p> <p>(2)古墳群の地政学的データ、3Dデータ、考古学的・建築学的・人類学的データ等を取得した。</p> <p>(3)成果を国内外の関係学会で発表し、また一部は一般向けメディアでも公開する予定である。</p>		
【年度実績概要】	<p>本研究は 26～30 年度の 5 年度にわたる研究の第一年度である。</p> <p>(1)考古学的調査：27 年 1 月 6 日～1 月 28 日、バハレーン王国内陸部に所在するワーディー・アッ=サイル古墳群において、地形測量、3D撮影、高塚式古墳群の考古学的発掘調査を実施する予定した。またバハレーン国立博物館、バハレーン砦遺跡博物館等に収蔵される関連資料、とりわけ粘土板文書に関するデータを収集した。</p> <p>(2)調査の結果得られた知見・発見等：ワーディー・アッ=サイル古墳群の考古学的発掘調査により、「デイルムン文明」成立直前期（前 2200～前 2050 年頃）の高塚式墳墓の構造・内容・被葬者等に関する新知見が得られた。</p> <p>(3)調査研究成果の公表：バハレーン王国文化省考古局に成果の概要を報告書として提出した（備考）。また今後日本西アジア考古学会、日本オリエント学会、Seminar for Arabian Studies 等の国内外の学会で成果を公表し、また一般書、ブログ、公開講座等でも成果の普及活動を行う予定である。</p>		
			
<p>発掘後、3D撮影によって作成された バハレーン王国ワーディー・アッ=サイル古墳群の「前期型古墳」の写真。</p>			
【実績値】	<p>・調査件数 1 件（国外）、写真撮影点数 約 5,000 枚、測量図 約 20 面。</p>		
(参考値)	<p>刊行物等 バハレーン王国文化省に対する公式の調査概報 2 巻を作成。また国内外の学会機関紙等に論文 2 篇を執筆予定。</p> <p>本研究は 5 年度（24～28 年度）にわたる計画であり、本年度はその初年度にあたる。各年次の成果は当該年度以降に随時公表される予定である。</p>		
【備考】	<p>T. Gotoh, K. Saito, M. Abe, R. Harada et al. First 15th Day's Report of the 2015 Season of the Bahrain Wadi as-Sail Archaeological Project by Japanese Archaeological Team in Bahrain (27 年 1 月 20 日) 及び続巻 (Second 15th Day's ... 27 年 1 月 31 日)</p>		

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：ペルシア湾の考古学・歴史学研究は近年世界の研究者の焦点の課題であり、古代文明解明の糸口となる最新テーマである。 独創性：主な調査対象であるワーディー・アッ=サイル古墳群は「ディルムン文明」誕生直前の「前期」古墳群で、文明期の「後期」古墳群の前身にあたるため、発掘によって文明成立の原因を解明するに最適と考えられる。しかしこれまでは不十分な調査しか行なわれたことがない。 発展性：三次元写真の撮影・計測により、古墳群の立体的画像を作成した。この技術は最先端のものであり、今後他の文化財の調査研究にも大いにされるであろう。 効率性：考古学者を中心に、測量、3D写真技術者、建築学者、シュメル学者、人類学者、環境科学者、文化財学者らを、順に各1～4週間交代で順に派遣し、国外における効率的な調査活動を実施することができた。 継続性：相手国であるバハレーン王国政府による5カ年間の調査研究許可が得られている。また機材の貸与、調査補助員の派遣などの全面的支援が得られている。 正確性：調査対象である古代遺跡の地形測量を最新技術によって実施し、地球座標に載せることができた。また3D写真・計測により現在最も正確なデータが得られた。その他の専門家による被葬者の形質、関連資料（史料）の精査・解説等を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	測量図			
評価	B	B	B			
判定理由 調査件数：1ヶ月弱の期間に最も標準的な規模・形状の高塚式古墳1基を完掘し、次年度以降の調査計画に大いに資する成果を得た。 写真撮影点数：対象古墳の三次元写真を完成させるために必要な枚数を撮影することができた。 測量図：対象古墳の学術記録に必要な枚数の測量図を作成することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通りの成果を得たため、Bと判定した。 本年度精査した古墳は1基に絞ったため、十分な精査を行うことができ、それによって基本的な構造を理解することができた。しかしそれは次年度以降も同程度の古墳を対象とすることを意味するものではない。 本年度得られた被葬者の人骨は保存状態が良好でなかったが、次回以降は調査対象数を増やすことで、保存の良好な資料を入手することを考慮したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	初年度の研究としては所期の目的を達成したが、時間的制約による不備もなかった訳ではない。 次年度以降は同じ古墳群において、「より大型のもの」、「より小型のもの」を含む複数の古墳を精査し、それらのヴァリエーションを解明したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 東アジアからみた乾隆画壇の総合的研究 (科学研究費補助金) (5) - (2)		
【事業概要】	<p>本研究は、18世紀に盛行を迎えた“乾隆画壇”を、東アジアの視点から総合的に研究するものである。乾隆画壇の研究は、従来まで豊富な文献資料と作品を所有する台湾と中国において盛んに行われてきたが、そこでは乾隆画壇が東アジア全域においてどのような影響を与えたのかという視点が欠けていた。また、東京国立博物館に所蔵される(伝)木挽町狩野派模本類も、乾隆画壇との関係が予測されるものであるが、それを東アジア的視点から研究したものは甚だ少なかった。本研究では、これらの問題点から出発し、“乾隆画壇”の成立過程とその具体相を解明し、あわせて東アジア全域に及ぶその意味を解明しようとするものである。</p>		
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員 塚本麿充
【スタッフ】			
【主な成果】	<p>(1) 中国の博物館及び古跡に赴き、現地調査を行った。 (2) 実際の作品を観覧して写真撮影を行った。 (3) 東洋館8室での展示、及び学会発表、論文等で成果を公表することができた。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 南京、上海、香港への調査を実施した。また「国立故宫博物院 神品至宝」展にあわせて、作品調査を実施した。 (2) 清代を中心とした宮廷画壇、及びその周辺の作品を調査したことにより、乾隆画壇について大きな知見を得た。 (3) 東洋館8室における特集「南京の書画—仏教の聖地、文人の楽園—」では、列品、寄託品を中心に、宋元時代から明清に至る作品を展示し、あわせて現地の風景を並べて展示することで、研究の成果を反映することができた。また今年度は東洋館10室「朝鮮の美術」において、朝鮮の宮廷画員の作品を展示予定である。</p>		
			
	「南京の書画」展示		
【実績値】	<p>作品調査：写真撮影 600 枚 現地調査：写真 200 枚 学会発表等：7 件(論文発表 5 件(①～⑤)、学会発表 2 件(⑥～⑦))</p>		
【備考】	<p>論文(以下、特別展「台北 国立故宫博物院—神品至宝—」図録に掲載) ①「中国伝統文化の再編—清朝皇帝の世界—」 ②「唐代から五代・北宋山水への発展」 ③「徽宗のコレクション」 ④「趙孟頫と元末四大家—反俗・友人・故郷へのまなざしと筆墨文化—」 ⑤「国立故宫博物院開院の以前と以後」</p> <p>学会発表 ⑥26年10月5日、「北京・故宫博物院本「清明上河図」と中国都市図の展開」「開館50周年記念シンポジウム「描かれた都、開封と京都」(於：林原美術館) ⑦26年7月5日、「皇帝コレクションにおける模写・模造事業—乾隆帝の書画コレクションと狩野派—」「特別展シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味」—書画における復古と革新—」(於：東京国立博物館)</p>		

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-13

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：乾隆画壇は、国際的にも近年大いに注目されており、今年度に行われた「国立故宮博物院 神品至宝」展において関連作品を十分に調査することができた。 独創性：乾隆画壇は従来までの中国美術史研究になかった新視点をもたらす存在であり、アジアの広地域における清朝美術の役割を考えるためにも独創的な位置を占めている。 発展性：将来的にも美術史のみならず、歴史学におよぶ広範な成果が期待できる。 効率性：現地の学芸員の協力の下、効果的な作業ができた。 継続性：作成済みの写真を中心に、アジア地域における清朝美術の調査を継続する。 正確性：計画的な調査を遂行することができたため、高解像度の画像を得ることが出来た。						

2. 定量的評価

観点	現地調査	作品調査	学会発表等			
評定	B	B	B			
判定理由 作品調査：効率よく十分な調査ができたため。 現地調査：十分な研究成果を得ることができたため。 学会発表等：その成果をもとに十分に発信することができたため。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	乾隆画壇の理解のために、十分な調査活動を行うことが出来たため。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	乾隆画壇の理解のために、現地調査や作品調査を行うことができた。来年度も引き続き調査を実施する

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相 (科学研究費補助金) ((5)-②)。		
【事業概要】	<p>本研究は京都・神護寺に伝来する高雄曼荼羅を中心とする研究である。高雄曼荼羅は空海が中国より請来した曼荼羅を写したものであるが、類する作品は中国には残っていない。その表現は多分にインド的であるが、当代にさかのぼる絵画作品はインドにはわずかししか残っておらずインドとの関係も明らかになってはいない。おそらく、インドの表現が、中国、日本で受容される過程で、それぞれの表現的要素を取り入れたものと考えられる。本研究は、日本、中国、インドの絵画、彫刻、工芸を研究するスタッフによって、高雄曼荼羅とそれに関する国内外の作品を検討し、古代アジアの仏教美術の様相を探ろうとするものである。</p>		
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部付 松本伸之
【スタッフ】	<p>丸山士郎 (平常展調整室長)、小泉恵英 (学芸企画部企画課長)、伊藤信二 (学芸企画部広報室長)、沖松健次郎 (保存修復課環境保存修復室主任研究員)、和田浩 (保存修復課環境保存室長)、塚本鷹充 (学芸研究部東洋室研究員)、安藤香織 (徳川美術館学芸員)</p>		
【主な成果】	<p>インドに残る古代絵画の希少な作例であるアジャンタ石窟、エローラ石窟の調査を実施した。</p>		
【年度実績概要】	<p>アジャンタ石窟、エローラ石窟、アウランガバード石窟群、エレファンタ島遺跡で調査を実施した。アジャンタ石窟には5世紀後半-7世紀、エローラ石窟には9世紀-10世紀の絵画が残されている。十分な画像が公開されていないが、今回の調査では壁画が残る窟を中心に、細部の表現まで確認することが出来る高精細な画像を撮影した。それらは今後の研究に活かすことができる。</p>		
			
	アジャンタ石窟 (第1窟)		
【実績値】	<p>関連作品調査：4件(アジャンタ石窟、エローラ石窟、アウランガバード石窟群、エレファンタ島遺跡) 資料作成：約2,000画像</p>		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4521-14

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：高雄曼荼羅は日本絵画史のみならず、中国、インドなどアジアの絵画史を考える上でも重要で、それらを俯瞰する本研究の成果は国内外に発信できる。 独創性：本研究では高雄曼荼羅を通してアジアの広い地域の仏教美術を比較検証する研究であり、これまでに無い視点である。 発展性：高雄曼荼羅は美術史のみならず仏教学、歴史学上も重要な作品で、本研究の成果はそれらにも活用できる。 効率性：事前にインド政府当局より撮影許可を得て、効率的な作業ができた。 継続性：作成済みの高雄曼荼羅資料を中心に、アジア地域の調査を継続する。 正確性：撮影許可を得て調査に当たったため高解像度の画像を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	関連作品調査	資料作成				
判定	B	B				
判定理由 関連作品調査：効率よく十分な調査ができたため。 資料作成：インド政府当局の事前許可を得て実施し、高解像度の資料を多く作成できたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	アジアの中で高雄曼荼羅を捉えるという研究目的を達成するために、その源流と考えられるインドの現存する希少な絵画作品を調査することができたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高雄曼荼羅をとおして古代アジアの様相を探る上で、最も重要となる古代インド絵画作品の調査を実施できた。来年度は作成した資料を検討するとともに、引き続き調査を実施する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15) 古代イスラエルの墓制と他界観に関する総合的研究(科学研究費補助金) ((5)-②)		
【事業概要】			
<p>本研究は、後のユダヤ教、キリスト教に引き継がれるヤハウェー神教を確立させた古代イスラエルの民間における宗教実態を実証的に解明し、旧約聖書に基づく古代イスラエル宗教史の理解の盲点を補うことを目的とする。具体的には、中期青銅器時代第II期（前二千年紀中葉）から鉄器時代第IIA期（前一千紀中葉）にいたるパレスチナ諸遺跡で発見されている墓の遺構および副葬品を調査研究の対象とし、それらを地域別、時代別に分類しつつ、古代イスラエルにおける葬制とそこに表れる他界観、さらには旧約聖書が禁じた死者儀礼の実態の解明を目指す。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室アソシエイトフェロー 小野塚 拓造
【スタッフ】 月本昭男（上智大学神学部教授）			
【主な成果】			
<p>イスラエルにて現地調査を実施し、関連考古資料の収集を行った。国内では天理大学及び天理大学付属天理参考館が所蔵するゼロール遺跡出土資料を調査した。調査・研究の成果は、すでに日本オリエント学会での研究発表や、早稲田大学エジプト学研究所主催の国際シンポジウムで発表している</p>			
【年度実績概要】			
<p>○海外での調査・研究（イスラエルでの現地調査、8月9日～24日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レヘシュ遺跡の発掘調査に参加し、同遺跡で出土した埋葬遺構及び関連出土物を調査した。 ・イスラエル考古局が保管するゼロール遺跡の出土物を再調査（実測図作成、写真撮影など）し資料化した。 ・調査成果や得られたデータの検討会を現地で開催した。E. マルクス博士（ハイファ大学海洋学研究所）、グンナー・レーマン教授（ベングリオン大学）など、現地の著名な研究者が参加し、最新の調査成果を共有することができた。 <p>○国内での調査・研究（天理大学考古学・民俗学専攻、天理大学付属天理参考館での資料調査、11月18日～24日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1960年代に実施されたゼロール遺跡の発掘調査記録（調査日誌、写真、図面）を整理しデジタル化した。 ・天理参考館が所蔵するゼロール遺跡出土遺物を実見し、必要に応じて実測図作成・写真撮影を行った。 <p>○調査・研究の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古代イスラエルの民間信仰がある程度反映されていると考えられる新たな考古資料（埋葬遺構、副葬品、土偶や祭儀台などの宗教遺物）をデータ化し、専ら文献資料によって語られてきた当時の信仰の実態を、出土資料に基づいて考察することができた。 <p>○調査・研究成果の発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査研究の成果は、学会発表や講演を通して、学会と社会の双方に発信している。 			
			
		<p>ゼロール遺跡で出土した甕棺墓 (1965年の調査記録からデジタル化した写真)</p>	
【実績値】			
調査件数 2件（調査回数：国内1回、国外1回）			
写真撮影画像や調査記録のスキャン画像：約1,500件			
研究発表等 6件（論文発表2件 ①～②、講演2件③～④、学会発表2件⑤～⑥）			
【備考】			
研究発表等			
①論文発表「考古資料に見るフェニキア人による最初の交易活動」『高梨学術奨励基金年報（18年度）』2014年11月（査読無）。			
②共同論文発表「新バビロニアの拠点遺跡を探る—イスラエル、テル・レヘシュ第8次発掘調査（2014年）」日本西アジア考古学会編『考古学が語る古代オリエント 第22回西アジア発掘調査報告会報告集』、97-101頁（査読無）。			
③招待講演「『油滴る地—聖書時代のオリーブ油生産—』『聖書の世界を発掘する—聖書考古学の現在—』（上智大学キリスト教文化研究所 2014年度聖書講座）、2014年11月15日。			
④招待講演 Multiple aspects of the 'Egypto-Canaanite system' during the Late Bronze Age and the Early Iron Age Symposium "The Levant and Egypt in Contact"（早稲田大学エジプト学研究所主催・公開シンポジウム）、11月30日。			
⑤学会発表「アッシリア後のパレスチナ—テル・レヘシュ第8次発掘報告—」（共同ポスター発表）日本オリエント学会 第56回大会、2014年10月26日（共同ポスター発表）。			
⑥学会発表「新バビロニアの拠点遺跡を探る—イスラエル、テル・レヘシュ第8次発掘調査（2014年）」『平成26年度考古学が語る古代オリエント 第22回西アジア発掘調査報告会—2014年度発掘調査の速報』、2015年3月22日（共同発表）。			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-15

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：本研究は一神教宗教の成立と実態を解明しようとするもので、キリスト教やイスラームを根っこから理解するための基礎研究でもある。「アラブの春」以降の中東地域の騒乱は、国際社会の様々な側面に影響を及ぼしており、「不可解な」中東地域の理解につながる本研究はますます重要となっている。</p> <p>独創性：研究課題である古代イスラエルの墓制と他界観の研究は文献資料の解釈を中心に進められてきた。これに対して本研究は、考古資料を最大限に活用した実証的な研究となっている。出版されているデータに加え、自身で発掘した資料を中心に、未発表の資料を数多く分析することができたことが特筆される。</p> <p>発展性：国際的に注目されている研究課題であり、海外の研究機関から共同研究の打診を受けるなど、計画以上に研究の射程が広がっている。</p> <p>効率性：関係機関・研究協力者と密に連絡をとり、調査の事前準備を整えたことで、限られた時間の中で計画以上の資料を実見しデータとすることができた。調査記録のデジタル化も、協力機関（天理大学、イスラエル考古局等）の設備を利用することができ、より効率的に進めることができた。</p> <p>継続性：本研究はプロジェクト責任者が継続的に取り組んできた研究テーマの依拠するものである。研究の成果は、日本西アジア考古学会、日本オリエント学会等で15年にわたって継続的に報告されている。今年度の成果もこれらの学会で報告することができたほか、その成果の一部は国際シンポジウムでも発表できた。</p> <p>正確性：調査対象の考古資料はプロジェクト責任者自身が時間をかけて実見し資料化している。これに加えて、得られたデータを、科研のメンバーらと常に共有し、複数の眼でチェックすることを実践できた。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影画像や調査記録のスキャン画像	研究発表等			
評定	A	A	A			
<p>判定理由</p> <p>調査件数：予定していた国外調査に加え、日常業務との日程調整の結果、天理大学での資料調査を追加して行うことができた。</p> <p>写真撮影画像や調査記録のスキャン画像：出土物の撮影、調査記録のスキャンについては1000件程度をこなす見込みであったが、作業を工夫したことで、約1500件のデータを収集することができた。</p> <p>研究発表等：本年度は学会発表1件を予定していたが、2件の学会発表に加え、講演会等でも調査成果を公表できた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は国内外で関連考古資料を収集することができ、予想を大きく上回る成果を得ることができた。来年度は本科研の最終年度であるため、これまでに収集した資料をうまく活用し、研究課題である古代イスラエルの墓制や他界観について結論づけることが求められる。また、そのためには業務スケジュールを調整し、調査・研究の時間を確保することも必要となる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における当該年度計画を達成するとともに、追加の調査やデータ収集も実施することができた。次年度も、所属部署の業務との連携を図り、その中で調査・研究成果を活用していくとともに、館内外の査読誌や海外の学術雑誌に論考を投稿できるようにしたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-16

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) 中国典籍日本古写本の研究(科学研究費補助金) ((5)-②)		
【事業概要】 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(A)(研究代表者 高田時雄)による研究で、25年度から5ヵ年継続予定である。日本国内に所蔵されている日本古写中国典籍を網羅的に調査し、その総目録を作成することを主たる目的としている。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島哲
【スタッフ】			
【主な成果】 研究に関連する文献の収集に努めた。			
【年度実績概要】 ・研究の資料として、原本との比較の素材となる漢籍の影印本、複製本を収集した。			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-16

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>適時性：中国典籍研究は、国際的な必要性が高くなっており、時宜を得た研究計画である。</p> <p>独創性：世界的にも希少性の高い古写本を研究対象としており、他では困難な研究である。</p> <p>発展性：人文学各分野の基礎となる資料を構築する研究であり、広い範囲に影響を与える。</p>						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は直接当館に関連する調査等を行われなかったが、随時研究代表者と連絡を取っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今後の年次で当館に関連する残余の文化財についても順次調査を行う。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究(科学研究費補助金)((5)-②)		
【事業概要】			
<p>本研究は、5～9世紀の中国・韓国・日本の金銅仏について、蛍光X線、マイクロSCOPE撮影、X線CTスキャン等の科学的調査によって製作技法を検討し、様式と技法の両面からその製作地、さらには製作年代の推定を導き出すことを目的としている。これら東アジアの金銅仏、とりわけ小金銅仏は、その可動性ゆえに製作地を離れて伝来しているものが少なくない。本プロジェクトの前段階として、大阪大学では「科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究」という科研による調査を行い、浅湫も研究分担者として参加した。同研究は半跏思惟像を中心に6～7世紀の東アジアの小金銅仏について調査するものであった。その結果、これらの中に本来の製作地を再検討すべき作例が多く張ることが判明したが、本研究はこれを継承発展させ、5～9世紀の東アジア金銅仏研究において新たな基盤を築くことを目的としている。本年度は4年計画の第2年次である。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 浅湫 毅
【スタッフ】			
<p>藤岡穰（大阪大学大学院文学研究科准教授）、浅見龍介（京都国立博物館列品管理室長）、岩田茂樹（奈良国立博物館上席研究員）、楠井隆志（九州国立博物館展示課）・皿井舞（東京文化財研究所企画情報部主任研究員）、稲本泰生（京都大学人文科学研究所准教授）、加島勝（大正大学文学部歴史学科教授）、関丙賛、権江美、郭東錫（韓国国立中央博物館）</p>			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・東京国立博物館において法隆寺献納宝物中の金銅仏及び金工品の調査を行った。 本調査では、日韓の同時代に製作された金銅仏でも、鉛の含有率など、銅に含まれる成分に違いがあることが判明した。 ・九州国立博物館で開催された『百済展』に出品される日韓の金銅仏に関して、2月12～13日調査を行った。 本調査では、日韓両国の金銅仏の表情や肉体表現などにおける様式的な相違および金工作品の加飾技法と金銅仏の加飾技法の共通性などについて検討を行った。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・法隆寺献納宝物のうち、重文の摩耶夫人及び天人像4軀（N-191）をはじめとする金銅仏、光背、金銅幡等、20件の作品について、蛍光X線撮影による成分分析、マイクロSCOPEによる細部の詳細な撮影と調査を行い、詳細な観察に基づく調書を作成した。その結果として、日本の古代金銅仏は銅の割合が高く、鉛がほとんど含まれていないということが判明した。全体としての成果は、最終年度に発行する調査報告書において詳細は報告を行う予定である。個人的には、本館、法隆寺宝物館、東洋館での総合文化展における展示及び解説等で活用する予定である。 ・九州国立博物館『百済』展においては、出品されていた金銅仏に関して、わが国の金銅仏との相違点に着目して調査を行った。また、金工作品に用いられているタガネ等による加飾技法について観察し、法隆寺献納宝物をはじめとするわが国の金銅仏で用いられている加飾技法との関連について考察した。 			
【実績値】			
<p>調査回数 2回 論文 1本 浅湫毅「須磨家旧蔵の木造菩薩坐像と像内納入品」『学叢』36 京都国立博物館 2014年5月 (参考値) 研究会 1回</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-17

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評定	B	B	B	B		
<p>適時性：各国個別の研究という枠を超えて、韓国の研究者も交え国際的な観点から金銅仏に関して調査を行う本研究は、国際交流のさらなる推進が望まれる美術研究のうえで、時宜にかなったものと考えられる。</p> <p>独創性：蛍光X線による金銅仏の成分分析という手法と、その成果に基づく製作地の判定ということは、これまで誰もなしえなかった研究である。</p> <p>発展性：次の段階としては、9世紀以降の金銅仏や東南アジア、南アジアの金銅仏に対象を広げていくことが可能である。</p> <p>継続性：古代の金銅仏は日、中、韓とも遺例が多く、本研究は三国の金銅仏の相違点についてさらなる成果を得るための基礎となる研究である。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	論文				
評定	B	B				
<p>判定理由 調査回数：大阪大学藤岡穰氏を中心とする全体的な計画は、当初の予定通り遂行している。 論文：浅湫個人も本科研に付随する研究として行った中国の仏像に関する論文を1本執筆した。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大阪大学藤岡穰氏を中心とする全体的な計画としては、順調に計画通り行われている。個人的には、研究自体が関西を中心に遂行されているため、東京への転勤以降は調査及び研究会への参加が限られることとなった。次年度以降は計画通りの参加を行い、さらなる成果を目指すとともに、当館の事業への反映を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	全体の計画としては順調に遂行されている。次年度以降も同様に、当館所蔵の法隆寺献納宝物中の金銅仏をはじめとする作品に関し、蛍光X線分析装置等を用いた科学的分析を継続して行う予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	18) 東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金)((5)-②)		
【事業概要】			
日本に於ける木彫技法の変革や鎌倉時代新様式の確立に伴う用材観の変化及び形成に関する調査研究、及びその用材観に東アジア世界が及ぼした影響に関する調査研究を行う事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【スタッフ】			
丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、浅見龍介(京都国立博物館学芸部列品管理室長)、岩佐光晴(成城大学文芸学部教授)、小澤正人(成城大学文芸学部教授)、能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域チーム長)、藤井智之(八ヶ岳中央農業実践大学校長)、安部久(森林総合研究所木材特性研究領域主任研究員)、金子啓明(興福寺国宝館長)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・国内に点在する木彫像の調査及び木片採取を実施した。 ・昨年度採取した木片の分析が完了しによって、木彫像の素材となる樹種の同定ができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・南禅寺(静岡県)にて木彫像の調査を実施した(26年6月19日～6月22日) ・坂ノ上薬師堂(静岡県)にて木彫像の調査を実施した(26年8月6日～8月9日) ・興福寺(奈良県)にて木彫像の調査を実施した(26年9月8日～9月9日) ・薬王寺(岐阜県)にて木彫像の調査を実施した(26年12月15日～17日) ・昨年度採取した木片237個の分析を森林総合研究所で実施し、163個の木片について樹種同定ができた。 			
			
南禅寺での調査			
【実績値】			
国内調査回数 4回、樹種同定木片数 163個			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-18

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：科学的根拠のない樹種特定がなされた木彫像に対して科学的な判断とその公開が求められている。 独創性：「用材観」という独創的概念から着想に至った研究である。 発展性：素材の使い分けを究明することで、各地域における信仰対象としての木彫像のあり方及び仏教の伝播についての推察など発展的に進めることができる。 効率性：異分野(美術史、保存科学、木材科学)の研究者が共同で遂行し、一回の調査で多角的な分析を可能としている。 継続性：10数年来継続している木彫像の樹種に関する研究を受け継ぐ事業である。 正確性：樹種同定の正確性は木材分析の専門家及び専門的施設が担うことで担保されている。						

2. 定量的評価

観点	国内調査回数	樹種同定木片数				
評定	B	B				
判定理由 国内調査回数：所蔵者の同意を得た上で安全に調査を完了できる回数としては十分であると判定する。 樹種同定木片数：科学的な根拠として樹種同定結果を取り扱うには十分な量であると判定する。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価及び定量的評価の全ての項目に関してB評定であり、総合的評価もBが妥当である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。次年度も引き続き、木彫像の調査、木片の採取及び分析を実施する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	19) 東アジア文化の基層としての儒教の視覚イメージに関する研究(科学研究費補助金) ((5)-②)		
【事業概要】 プロジェクト名称、年度計画と内容が一致するよう記載してください。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課出版企画室長 勝木言一郎
【スタッフ】 守屋正彦 (筑波大学芸術系教授)			
【主な成果】 中国美術に関する文献資料及び画像資料に徴し、中国儒教美術データベースの構築を進めた。また調査研究の過程で、中国西南部における神仏習合の様相が明らかとなった。			
【年度実績概要】 中国における絵画・彫刻・工芸・建築・考古資料・歴史資料など、幅広くジャンルを網羅した儒教美術データベースの構築を開始した。今年度は彫刻と建築に重点を置き、下記の作例の文献資料及び画像資料の収集を行った。			
(1) 中国儒教彫刻			
重慶市 大足石窟石篆山第6窟文宣王像及び弟子像 (北宋時代) 大足石窟妙高山第2窟釈迦仏像、老君像、孔子像 (南宋時代)			
			
大足石窟石篆山第6窟文宣王像及び弟子像		大足石窟妙高山第2窟釈迦仏像、老君像、孔子像	
(2) 中国儒教建築			
山東省曲阜市 曲阜孔廟 (金元明清時代) 顔廟 (元時代)			
山東省鄒県 孟廟 (明時代)			
北京市 北京孔廟 (元時代)			
北京市 国子監 (明時代)			
天津市 天津文廟 (清時代)			
江蘇省蘇州市 蘇州府文廟 (明時代)			
上海市 嘉定文廟 (明時代)			
四川省資中県 資中文廟 (清時代)			
雲南省建水市 建水文廟 (元時代)			
調査研究の過程で、大足石窟からは本来、石窟総体が仏教寺院でありながら一つの洞窟の中に仏教や道教、儒教の三つの宗教が混交した尊像がつけられた作例や、儒教の尊像龕が単独に造営された作例が確認され、中国西南部では仏教・道教・儒教の融合が礼拝対象の製作のレベルで展開されていたことが明らかとなった。			
【実績値】 データ入力数 73件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4521-19

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：東アジアにおいて儒教が保ち続けてきた共時的、通時的な価値観を研究することに国際性が認められるため。 独創性：日本はおろか、中国、台湾、朝鮮における儒教美術の研究は極めて僅少であり、研究に新規性が認められるため。 発展性：東アジアにおける精神史の一翼を担ってきた儒教をテーマとした美術史研究に発展性や影響性を認めるため。 効率性：東京国立博物館における美術史、考古学、歴史学の研究者の協力によって効率的なデータの収集が可能であるため。 継続性：東京国立博物館が所蔵する文献資料及び画像資料によって継続的なデータの収集が可能であったため。 正確性：中国儒教美術データベースの対象を絵画・彫刻・工芸・建築などジャンルを幅広く網羅したため。						

2. 定量的評価

観点	データ入力数					
評定	B					
判定理由 データ入力数：中国における儒教美術に関するデータを順調に入力することができた。						

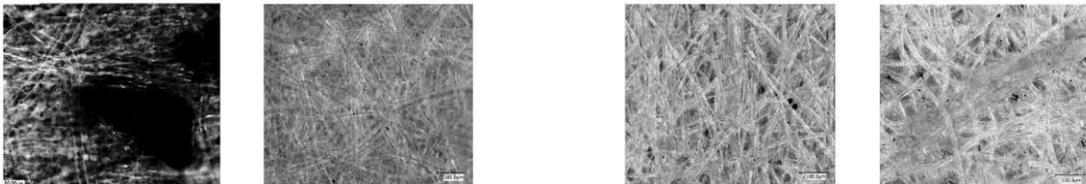
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は中国儒教美術データベースの構築を開始するとともに、中国の仏教石窟への儒教美術の受容にまで考察が進んだ。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は科研費研究の1年目に当たり、中国儒教美術に関するデータベースの構築を開始した。次年度は日々の業務との連携を図りながら、データベースの構築を継続していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-1 特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」に関する調査研究((5)-③)		
【事業概要】			
特別展覧会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」(26年10月7日～11月4日)に関する調査研究 10月7日から11月24日まで開催する、特別展覧会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」に展示する作品の調査を行い、作品選定に反映させ、特別展覧会を開催する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】			
調査員 石塚晴通(北海道大学名誉教授、高山寺責任役員)、浅見龍介(列品管理室長)、永島明子、大原嘉豊、羽田聡(以上、主任研究員)、鬼原俊枝、呉孟晋、末兼俊彦(以上、研究員)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査によって、学問印信・課業印信掛板を確認し、紀州に於ける明恵の事績の一端を初公開した。 ・龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センターと合同して、非破壊による写本と版本の紙質調査を実施し、展覧会図録に反映させた。 ・84件の展示作品を選定した。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・国宝「鳥獣人物戯画」の修理を担当した修理技術者との検討会を3回実施した。 ・作品調査を2回、顕微鏡による紙質調査も2回実施し、図録に反映させた。 ・宋版の断簡類を調査し、重要な刊記を有する断簡を調査し、4点を展示、公開した。 ・調査によって、学問印信・課業印信掛板を確認し、紀州に於ける明恵の事績の一端を初公開した。その際には、墨書が見やすいように赤外線撮影した写真を会場に掲示し、図録にも掲載した。 			
			
「国宝鳥獣戯画と高山寺展」図録より			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査回数 4回(文化財調査2回、光学機器を利用した調査2回) ・検討会 3回(修理技術者との検討会) ・特別撮影 1回(赤外線撮影) 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	A
判定理由 適時性：国宝「鳥獣人物戯画」の修理完成後の、初公開を行った。 独創性：写本と版本に関して、光学機器を利用した紙質調査を実施し、500倍の倍率で撮影した写真を4点、図録に掲載した。 発展性：書跡の分野に於ける紙質の問題について、非破壊による調査を実施し、今後の方向性を提示した。 効率性：出品作品84件のうち、寄託されている文化財が半数以上を占めた。 継続性：数多い紙本の文化財の紙質調査が、今後、容易の実施に実施可能となる。 正確性：目視による観察に加え、光学機器を使用した紙質調査を行った結果、作品に関する新事実が判明した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	検討会	特別撮影			
評定	B	B	B			
判定理由 調査回数：予定していた調査回数をこなすことができた。 検討会：初期の検討を複数回実施した。 特別撮影：赤外線撮影を行い、通常の画像ではみえにくい箇所を可視化した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予定通り、調査を実施し、84件の展示作品を選定し、紙質調査などの成果を特別展覧会の図録などに反映させることに努めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展覧会において、文化財修理の様態や新知見を広く公開するとともに、科学的な調査を活用した成果を図録の解説に盛り込んだ。今後の料紙調査の方向性を示した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2 特別展覧会「桃山時代の狩野派」に関する調査研究 (5)-③		
【事業概要】			
特別展覧会「桃山時代の狩野派」(27年4月7日～5月17日開催予定)に関する調査研究 27年4月7日～5月17日の開催予定である特別展覧会「桃山時代の狩野派」に関して、展覧会出陳予定作品の調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼美術室長 山本英男
【スタッフ】 福士雄也(美術室研究員)			
【主な成果】			
<p>(1) 関東・近畿・四国・九州地方の博物館・美術館及び社寺や個人が所蔵する桃山時代後期の狩野派出陳予定作品(障壁画・屏風・掛幅)の調査を行った。</p> <p>(2) これまで未紹介の作品の発見があり、出陳予定作品の候補に加えることができた。</p> <p>(3) 桃山時代の狩野派」展の出陳予定リストを確定させることができた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 東京国立博物館、徳川美術館(「芒燕図屏風」「三十六歌仙図絵馬」ほか)、伊勢神宮(「唐美人図貝桶」ほか)、佐賀県三岳寺(「閑室元信像」ほか)、伊達宇和島文化保存会(「豊臣秀吉像」ほか)、滋賀県・個人宅(「槇に白鷺図屏風」)ほか、30回にわたる調査を行った。</p> <p>(2) 「芒燕図屏風」については小栗宗湛筆の伝承があったが、細部表現から狩野孝信の作と判断された。「槇に白鷺図屏風」は未紹介の作品で、作者も狩野山楽と判断された。</p> <p>(3) 障壁画・屏風などの大画面から掛幅などの小画面まで網羅した、バラエティー豊かな構成の展示構成が可能となった。</p>			
			
槇に白鷺図屏風 山楽筆			
【実績値】			
調査回数 30回			
調査作品数 120点			
出品作品数 69件			
【備考】 「桃山時代の狩野派」展図録にその成果を反映させる予定である。			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：極めて上質な作品が多数あるにもかかわらず、狩野永徳没後、狩野探幽が登場するまでの桃山後期狩野派に焦点を当てた展覧会が開催されてこなかったため。</p> <p>独創性：障壁画や屏風のような代表作はもちろん、これまで取り上げられてこなかった肖像画や書状類などを含む網羅的な調査研究に新規性が認められる。</p> <p>発展性：肖像画など、作者を認定するための基準（目安）が確定すると、これまで作者不詳とされてきた作品の作者比定が可能となる。</p> <p>効率性：展覧会場のスペースをあらかじめ考慮した上で、上質な作品から順に調査に着手した。そのため短い期間内に調査を行うことができた。</p> <p>継続性：膨大な数量に上る作品が全国各地に所在しており、その調査研究が控えている。</p> <p>正確性：詳細な画風比較によって障壁画・屏風・掛幅など代表作となるであろう作品はほぼ調査を完了した。これにより、桃山時代の狩野派の特質は展覧会において披露できる準備が整った。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	出品作品数			
評定	B	A	B			
<p>判定理由</p> <p>調査回数：予定していた所蔵先の調査を全て終了した。</p> <p>調査作品数：予定していた100件を大きく上回る数の作品を調査することができた。</p> <p>出品作品数：予定していた出品作品数60件を上回る69件の出陳件数の承諾を得た。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予定していた作品の出陳が叶った。加えて、新発見の作品が数点あり、充実した内容となった。ただし、展覧会場のスペースの問題があり、重文指定の作品でも候補から外さざるを得なかったのが残念である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	順調に作品選定が進んでおり、意図通りに展覧会が開催できる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-3 特別展覧会「琳派 京を彩る」に関する調査研究((5)-③)		
【事業概要】			
特別展覧会「琳派 京を彩る」(27年10月10日～11月23日開催予定)の調査研究			
(1)27年度秋期特別展覧会「琳派 京を彩る」の開催に向け、琳派関連文献を調査・研究を行う。			
(2)当館が収蔵する琳派作品及び外部機関所蔵琳派作品について、可能な限り実見調査を行う。			
(3)京都全体で進める琳派400年祭の中核展覧会として、関係機関と連携する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 山川 暁
【スタッフ】			
福士雄也(美術室研究員)、降矢哲男(工芸室研究員)、羽田聡(保存修理指導室主任研究員)、永島明子(列品管理室主任研究員) 中部義隆(工芸室客員調査員)			
【主な成果】			
(1)琳派関連書籍の収集を行い、研究史の整理を進めた。			
(2)当館及び外部機関が収蔵する琳派関連作品の実見調査に基づき調書を作成した。この調査により、これまでに紹介されていない琳派作品を知る機会を得た。			
(1)、(2)の成果により、展覧会出品作品を選定し、出品交渉を進めた。			
(3)京都市内4館連携会議や、琳派400年祭実行委員会と連携し、関連教育事業を策定した。			
【年度実績概要】			
・琳派関連書籍を収集し、絵画・陶磁・書跡・漆工・染織、各分野スタッフが、それぞれに研究史の整理を進めた。			
・毎月一回、調査員中部氏をまじえ、収蔵品調査及び外部機関調査を進め、展覧会出品作品の検討を行った。			
・スタッフそれぞれが外部所蔵機関に赴き、出品候補作品の実見調査を行い、調書を作成した。			
・京都市内4館連携会議フォーラムの主催、琳派400年祭実行委員会との国際シンポジウムの共同主催について、調整を進めた。			
・調査研究成果を基に、山川が「琳派と染織」という研究発表を行った(5月23日・京鹿の子絞振興協同組合総会)。			
			
琳派作品実見調査風景			
【実績値】			
調査回数 17回			
調書作成数 約45件			
研究成果の公表 1件(①)			
【備考】			
研究成果の公表			
①京鹿の子絞振興協同組合総会講演「琳派と染織」 5月23日 山川暁			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4532-1-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：琳派400年祭を一丸となつて行ふ京都にとって、琳派の本質を明らかにする研究及び展覧会は、極めて時宜に適うものである。 独創性：調査の結果、新出作品が幾つか見出すことができた。 発展性：新出作品の検討など、今後の研究進展へと結び付く要素を見出すことができた。 効率性：近隣の外部調査機関をまとめて訪問するなど、調査日程の調整を行い、効率的に調査を進めた。 継続性：各スタッフが調査を継続するとともに、月一回の検討会を行い、継続的に討議を進めた。 正確性：実見調査に基づく調査作成に加え、琳派専門家を調査員として迎え、詳細な検討を重ねた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作成数	研究成果の公表			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数・調査作成数：所期の調査をこなすことができた。 研究成果の公表：本年度は事前調査の段階ながら、研究成果の一端を示すことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	琳派誕生400年、尾形光琳没後300年という、琳派にとって記念すべき年を控え、各地で琳派を中心とする展覧会が企画されるなか、当館開催琳派展の方向性を検討した。本年の研究成果を基に、展覧会開催年となる次年度は、琳派誕生の地に所在する当館ならではの、地域性を活かした展覧会および付随教育事業を企画したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究の結果、出品作品がほぼ決定し、順調に進展している。 来年度は、展覧会の開催、図録作成に取り組むとともに、京都全体で取り組んでいる琳派400年祭の中核となる展覧会として、関係機関と相互に連携しながら、様々な付随事業を行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-4 特別展観「山陰の古刹 島根鱒淵寺の名宝」に関する調査研究((5)-③)		
【事業概要】			
<p>特別展観「山陰の古刹 島根鱒淵寺の名宝」(27年1月2日～2月15日)に関する調査研究 島根県・浮浪山鱒淵寺伝来の文化財の調査及び、調査成果発表としての特別展観の開催を行う。なかでも京都を含める畿内の天台宗が山陰地方に与えた文化的影響関係を主眼とする。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室研究員 末兼俊彦
【スタッフ】			
浅見龍介(列品管理室長)、羽田 聡(保存修理指導室主任研究員)			
【主な成果】			
<p>鱒淵寺伝来の重要文化財2件、重要美術品1件を含む彫刻作品について調査研究を進め、従来不明確であった尊格の同定や、銅造仏について蛍光X線による成分分析を行った。また、鱒淵寺伝来の金工作品について密教法具を中心に調査研究を進め、同寺所蔵の大形塔鈴の存在に着目し、近世初頭における無動寺と鱒淵寺との関係性を発見した。これらの調査研究をもとに、特別展観「山陰の古刹 島根鱒淵寺の名宝」(27年1月2日～2月15日)を開催した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>鱒淵寺及び、鱒淵寺所蔵文化財が寄託されている島根県立古代出雲歴史博物館において出陳文化財の作品調査を行った。また、外部資金として公益財団法人仏教美術研究上野記念財団の出版助成(60万円)を受け、展覧会配布用の解説付出陳目録と出陳作品のポストカードを製作し、これらを配布した。 展覧会出陳作品34件の選定を行った。</p>			
			
重要美術品・銅造不動明王像の調査風景			
【実績値】			
<p>作品調査：2回(調査作品数30件)(展観準備以外にも過去に科研調査や、特別展覧会「大出雲」開催時に調査を行っており、その結果も含む) 教育普及：出陳目録1件 ポストカード4件 公益財団法人仏教美術研究上野記念財団の出版助成を受け、作品解説付き目録等を無償配布した。 作品選定：34件</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：鱒淵寺所蔵の文化財が島根県指定になるのに合わせて天台宗としての繋がり強い京都で公開した。 独創性：島根県を代表する古刹の文化財を精査し、山陰地域の文化的な特質に迫った。 発展性：天台密教の広がり、中央と地方との結びつきの強さ等、重要なテーマの研究を進める足掛かりとなった。 効率性：限られた回数の中で多数の文化財を調査し、展示公開まで結びつけることができた。 継続性：中世以降の京都や畿内の宗教文化の波及を俯瞰的にとらえる理解の足がかりとなった。 正確性：作品調書を1点ずつ作成してデータを整備し、研究及び展観の基礎をすることができた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	教育普及	作品選定			
評定	B	B	B			
判定理由 作品調査：綿密な調査の下、所期の調査を順調にこなした。 教育普及：一般の観覧者に対して、予定通り、充実した教育普及事業を実施できた。 作品選定：初出陳作品1件を含め、計画上、必要十分な作品を選定できた						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	既に知られた作品のみならず、「京都と地方の繋がり」という視点の元、初出陳となる作品を見出し、京都で地方の寺院を紹介する意味合いを具体的に示すことができた。文化の地方波及を考える上で、具体的な手がかりを提示することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費等をもとに行ったこれまでの調査研究の成果を活かして効率的な調査を行い、それを展示公開に結実させた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-5 特別展観「天野山金剛寺の名宝」に関する調査研究(5)-③		
【事業概要】			
特別展観「天野山金剛寺の名宝」(27年3月4日～3月29日)の関する調査研究 天野山金剛寺の本尊・大日如来坐像及び不動明王坐像(ともに重文)をはじめ、金剛寺所蔵の文化財を広範に調査し、その成果を特別展観に反映する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】			
浅見龍介(列品管理室長)、永島明子、大原嘉豊、羽田聡(以上、主任研究員)、末兼俊彦(企画室研究員)、鬼原俊枝(美術室研究員)			
【主な成果】			
金剛寺所蔵の文化財について、彫刻、書画、工芸の各分野にわたって調査を実施した。近年の調査を踏まえ、今まで紹介されていない仏教と文学に関する典籍類を確認することができた。調査成果を活かし、国宝3件、重文16件、重美1件を含む38件の文化財を特別展観用に選定した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・金剛寺にて、6回にわたって各分野の文化財を実査し、調査作成や写真撮影等を行った。 ・10月25日に中国・北京の中国人民大学外国語学院で開催された「仏教と文学—日本金剛寺仏教典籍調査研究成果報告国際学術シンポジウム—」において、プロジェクト責任者の赤尾栄慶上席研究員が「天野山金剛寺の文化財」という講演を行った。 ・展示作品38件の選定を行った。 			
			
特別展観「天野山金剛寺の名宝」の調書			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査回数 6回 ・研究発表 1回(中国・北京の中国人民大学外国語学院において) ・作品選定 38件 			
【備考】			

【書式B】
様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：26年9月にオープンした平成知新館に本尊を展示し、さらに金剛寺の全体像を紹介する展覧を実施した。 独創性：近年の調査で確認された仏教文学や音楽関係の書跡を初公開するため。 発展性：真言密教寺院に所蔵される多彩な文化財を研究者及び一般の人々に広く公開するため。 効率性：展示中の二軀の文化財を中心として、コンパクトにまとめた展示となるため。 継続性：仏教文学関係の書跡の内容など、今後とも引き続き調査研究が必要となるため。 正確性：調査や画像など、関連情報を収集し、それらを的確に整備した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究発表	作品選定			
評定	B	B	B			
判定理由 調査回数：ほぼ予定した調査を実施することができた。 研究発表：予定通り、国際的な成果の発表に結び付けることができた。 作品選定：計画していた件数を確保することができた						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年9月にオープンした平成知新館の展示に合わせて、その他の金剛寺所蔵の文化財を関連づけて展示、公開する機会を設けた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平成知新館のオープンに合わせた企画であり、今まで知られていなかった文化財を広く公開する展示となるため。次年度以降も、適宜、社寺所蔵文化財に関する調査及び展覧を計画していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)近畿地区(特に京都)社寺文化財の調査研究(科学研究費補助金)((5)-③)		
【事業概要】			
科学研究費補助金「南山城地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」(基盤研究B 課題番号 23320038)代表 佐々木丞平、による調査研究。対象は京都府南部の古寺院(笠置寺・浄瑠璃寺・岩船寺・海住山寺・現光寺・神童寺・蟹満寺・寿宝寺・観音寺・酬恩庵・禅定寺)に関する所蔵文化財である。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 宮川禎一
【スタッフ】			
赤尾栄慶(上席研究員)、山本英男(上席研究員)、大原嘉豊(企画室主任研究員)、羽田聡(保存修理指導室主任研究員)、山川暁(教育室長)、永島明子(列品管理室主任研究員)、水谷亜希(教育室研究員)、末兼俊彦(企画室研究員)、呉孟晋(列品管理室研究員)、岡田愛(列品管理室員)			
【主な成果】			
25年度末までの文化財の調査研究成果をもとに特別展覧会『南山城の古寺巡礼』を京都国立博物館の明治古都館(本館)において26年4月22日から同年6月15日まで開催した。この特別展覧会に出品するため20体ほどの彫刻作品の移動を行い、その移動に際して彫刻作品に関する新たな知見が得られた。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・26年4月22日～6月15日に京都国立博物館の明治古都館で開催した特別展覧会『南山城の古寺巡礼』展において前年度までの調査成果をもとに寺院伝来の古文化財139件の展示を行い、調査研究成果を一般公開した。50日弱の公開期間に凡そ7万人の来館者があった。調査研究成果の公開という点で重要な展覧会であった。 ・展示作業のため仏像を移動した際に材質などの新しい知見が得られた。 ・展示会場においてはお寺で文化財調査の様子を写真と文章で掲示して、科学研究費による調査研究がどのようなものであったかを来館者に理解いただいた。アンケートなどでは博物館による調査の様子が良く分かった、と好評であった。 ・展覧会に合わせて博物館講堂で土曜講座を4回開催し、調査成果の公開に努めた。 ・調査時に撮影した写真を含む展覧会図録を作成し来館者に販売した。その図録には科学研究費による成果公開であることを明記した。なお科学研究費による調査報告書については制作中である。 			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査対象寺院：11ヶ寺 ・総調査日数：14日 ・調査件数：140件 ・調査で撮影した写真はおよそ100件。 ・特別展図録 1冊(①) 			
【備考】			
特別展図録 「南山城の古寺巡礼」朝日新聞社刊 26年4月刊行 6000冊			



宇治田原町禅定寺本尊十一面観音立像(平安時代・重文)の搬出風景

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4532-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：地域の仏教文化に焦点をあてた文化財の調査であったこと 独創性：京都国立博物館の学芸スタッフならではの多面的な文化財調査であったこと。 発展性：地域の対象寺院以外の文化財の所在情報も集積されて、今後の調査研究の発展性を予期させること。 効率性：日帰り圏内の寺院のために宿泊が不要で効率的な調査が行えた。 継続性：調査は一旦終了している。 正確性：作品調書の作成、写真の撮影など客観的で正確な調査を行った。						

2. 定量的評価

観点	調査寺院数	調査日数	調査件数	写真撮影数	報告書	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 ・調査寺院数：11 箇寺の文化財の一部を博物館へ搬入搬出し、展示の前後に追加調査を行った。 ・調査日数：14 日間 ・調査件数：総数 140 件（展示作品数） ・写真撮影数：約 100 件（博物館内での新撮） ・報告書：展覧会図録『南山城の古寺巡礼』1 部を刊行した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館の本務のひとつである地域の文化財の調査として所期の目標であった南山城の古寺11箇寺の文化財調査を終えて、その成果を特別展覧会『南山城の古寺巡礼』という形で社会に還元することができたことは評価される。調査研究だけでなくこの南山城地域の仏教美術・文化財・歴史に関する知見を高めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都および近畿地方の社寺の文化財の調査と保存という目標の中で社寺調査を継続的に行う目標のうち23～25年度に科研費を用いて「南山城地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」を行った。従来京都市内の調査が多かったが、今回京都府南部地域での社寺調査が行えたことは調査範囲の拡大という点で評価できる。また展覧会にも反映することができた。今後は対象を改めて継続的に社寺の文化財調査を続けることとし、文化財の保存保護と研究及び展示に役立てることとする。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 近世絵画に関する調査研究((5)-③)		
【事業概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・当館に保管及び寄託される近世絵画に関する調査研究を行う。 ・京都市内を中心に、近世絵画の所在調査を行う。 			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長 山本英男
【スタッフ】			
福士雄也（美術室研究員）、鬼原俊枝（美術室研究員）			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・当館に保管及び寄託される近世絵画に関する調査研究を進め、平成知新館の展示及び展示計画に必要な情報収集・整理を行った。 ・京都市内を中心に近世絵画の所在調査を行い、一部は今後寄託作品とすべく当館に移送した。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・池大雅筆「寒山拾得図」、呉春筆「芋畑図」等、当館に保管及び寄託される近世絵画を調査し、詳細画像等作品のデータを収集、展示テーマに即した解説の執筆等を行うことができた。 ・上京区の個人宅等、作品情報が寄せられた京都市内の個人所蔵家を中心に近世絵画の調査を行い、特別展覧会を含む今後の展示活動、研究活動に有用な作品としてその一部は順次寄託手続きを取るべく当館に移送した。 ・通常は見ることのできない襖絵の裏面についても調査を行い、室内装飾としての襖絵の機能について考察するデータを得た。 			
			
<p>伊藤若冲筆「群鶏図襖」（当館蔵） の調査</p>			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査回数 20回 ・調査作品数 100件 ・成果提示 20件（展示解説等） 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4532-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：平成知新館での展示計画、今後の特別展覧会の準備に向け、着実な成果を上げた。 独創性：京都の地に伝わる文化財についての情報収集は、地域に根差す活動を標榜する当館ならではの活動といえる。 発展性：作品所蔵者とのコネクションは、新たな作品情報に結び付き得る発展性を有している。 効率性：平成知新館の展示においては、作品調査の成果を順次解説等に反映させることができ、この点は効率的であった。 継続性：作品に関する情報は日々増加しており、継続性は極めて高い。 正確性：基礎データの収集、細部撮影、関連資料の収集等により、正確性を期すことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	成果提示			
評定	B	B	B			
判定理由 調査回数：責任者が平成知新館オープンを担当して、またスタッフ1名も年度途中からの採用であったが、予定していた回数を行うことができた。 調査作品数：同上 成果提示：同上						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵・寄託の近世絵画に関する調査研究及び作品の所在情報収集は、順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵・寄託の近世絵画に関する調査研究及び作品の所在情報収集は、新館オープンと連動して概ね順調に進んでいる。寄託品も着実に増加していることは、今後の展示・研究活動の充実に資するものといえる。 次年度は、本中期計画期間最終年度として、近5年間の成果をまとめ、展示等を通じて一般へ還元していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)近畿旧家伝来文化財総合調査((5)-③)		
【事業概要】			
<p>近畿地方の江戸時代から続く旧家が所蔵する伝世文化財の総合調査を実施する。 24年度から継続している調査研究事業の一環であり、その成果として、旧家所蔵文化財の中から質の高い作品を当館が選定し、寄贈の推進を図る。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室 末兼俊彦
【スタッフ】			
<p>佐々木丞平（館長）、松本伸之（副館長兼学芸部長）、永島明子（列品管理室主任研究員）、羽田聡（保存修復指導室主任研究員）、降矢哲男（工芸室研究員）、福士雄也（美術室研究員）、水谷亜希（教育室研究員）、岡田愛（列品管理室員）、鬼原俊枝（美術室研究員）、池田素子（列品管理室アソシエイトフェロー）</p>			
【主な成果】			
<p>現地に担当研究員が赴き、漆工 300 件、陶磁 200 件、金工 100 件の調書作成、ならびに資料写真撮影を行った。また、調査関連データの整備とデータベース化を図った。 24年度からの調査成果をもとに、所蔵者より多数の文化財が当館へ寄贈された。</p>			
【年度実績概要】			
<p>計 10 名の当館研究員が参画し、計 25 日に及ぶ調査を実施した。 作品調査と共に、現地の収納場所である土蔵（4 棟）において、温湿度及び昆虫生息の調査を実施した。 調査の結果、当館の展示・研究等に活用できるものを選定し、所蔵者と協議の結果、それらの中から、計 488 件の寄贈を受けた。</p>			
			
		近畿旧家調査風景	
【実績値】			
<p>調書作成件数：約 600 件 調査日数：25 日（のべ 49 日人） 寄贈件数：364 件（この他、124 件を備品登録） 内訳：絵画 44 件・書跡 16 件・金工 56 件・陶磁 85 件・漆工 161 件・染織 1 件・考古 1 件</p>			
【備考】			
<p>年度当初計画には独立した項目を立てていない事業であるが、年度計画「4 文化財に関する調査及び研究の推進(5) ①収藏品・寄託品等の基礎的かつ総合的な調査・研究」の一環として実施した。今年度は、調査の結果を受けて、多数の寄贈を受けることができたので、独立した一項目を立てて報告する次第である。 なお、来年度も継続的な調査及び寄贈が見込まれるため、来年度の年度計画には独立した調査研究項目として明記する予定である。</p>			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	A	B	B	B
判定理由 適時性：旧家伝来の文化財の総合的調査を進めてその価値を明らかにすると共に、文化財散逸の防止にもつなげることができた。 独創性：江戸時代からの旧家の伝世品を総合的に調査するという稀少な機会を得ての事業である。 発展性：今後の展覧会や研究に大いに活用が期待される文化財が数多くあり、予想を大幅に上回る多数の寄贈によって収蔵品の充実に繋げることができた。 効率性：業務繁多な折、片道2時間近くを要する場所での調査に様々な障害が伴ったものの、十分な回数と件数をこなすことができた。 継続性：数年来、継続的かつ着実に調査を進めることができ、来年度も引き続き実施する予定である。 正確性：これまで未調査であった文化財のデータを地道に採取・蓄積し、多数に上る文化財の基本情報整備を進めることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査作成件数	調査日数	寄贈件数			
評定	B	B	A			
判定理由 調査作成件数：未整理の状態で長年蔵の中に放置されていたおびただしい数の文化財を、一つ一つ仕分けながら実施するという手間暇かかる作業を勘案すれば、十分な数量をこなすことができた。 調査日数：新館開館前後の業務繁多のなか、のべ49日人の研究員が参加できた。日常業務効率化の努力によるところが大きい。 寄贈件数：当初100件前後の寄贈を予想していたところ、360件余りに上る多数かつ多様な作品の寄贈を受けることができた。						

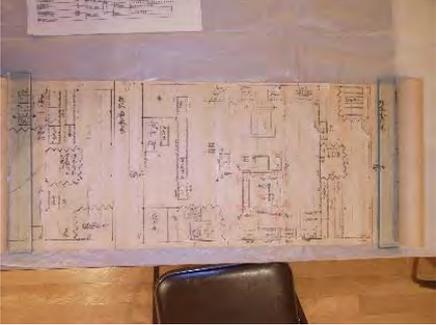
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	数年にわたる作業を通じて、所蔵者との厚い信頼関係を構築し、膨大な種類・数量に及ぶ文化財について、効率的かつ有用な調査を進めることができ、360件余りに上る寄贈を受けることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	数年にわたって予想をはるかに上回る数の文化財を調査し、その結果、収蔵品の充実にきわめて大きな役割を果たした。 来年度には、本調査研究に一定の区切りをつけ、さらなる受贈の増加を図っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-1 醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」に関する調査研究(5)－④
【事業概要】特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」(26年7月19日～9月15日)に関する調査研究 醍醐寺の歴史や文化に関わる文化財調査を行い、その成果を展覧会の内容に反映させるとともに出陳作品の選定を行う。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	教育室員 斎木涼子
【スタッフ】内藤栄(部長)、岩田茂樹(上席研究員)、吉澤悟(情報サービス室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、野尻忠(企画室長)、清水健(主任研究員)、岩戸晶子(列品室員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、原瑛莉子(企画室員)、田澤梓(工芸考古室員)、佐々木香輔(資料室員)	
【主な成果】 (1) 醍醐寺の所蔵する彫刻・絵画・工芸・書跡・考古・建築の各分野の文化財について、調査・撮影を行った。 (2) 各研究員がそれぞれの専門分野に沿って文化財調査・撮影を実施した結果、新たな知見や資料を得ることができた。また展覧会開催にも写真撮影を含む調査研究を行い、展示品に関する基礎データの集積を行う事ができた。 (3) 調査成果を反映し、従来の醍醐寺をテーマとした展覧会とは一線を画す、醍醐寺の歴史的特色をわかりやすく示す展覧会構成を実現した。	
【年度実績概要】 (1) 醍醐寺において、出陳予定作品の調査を行った(4月21日)。 <ul style="list-style-type: none"> 京都国立博物館文化財修理所において、修理寄託中の醍醐寺文書聖教の調査・撮影を行った(4月22日)。 醍醐寺において、出陳予定作品の調査・撮影を行った(5月22日)。 醍醐寺五重塔四天柱(国宝)について、展覧会期間中に表面に描かれた彩色画の詳細な調査・撮影を行った(7月28日、31日)。 醍醐寺の理源大師像(重要文化財)について、展覧会期間中にX線透過撮影を行った(8月18日)。 (2) 醍醐寺における文化財調査により、膨大な所蔵品の中から本展覧会のテーマにふさわしい文化財を選定することができた。特に、国宝指定された7万点の文書聖教の中からは、展覧会において重要な意味を持ち、また効果的展示が期待される数十点を選び出すことができた。 <ul style="list-style-type: none"> 展覧会に出陳した醍醐寺文書聖教の多くは未紹介であるため、詳細な調査と写真撮影を行った。 醍醐寺五重塔四天柱(国宝)について、展覧会期間中に表面に描かれた彩色画の調査・撮影により、新たな知見と資料を得ることができた。 醍醐寺の理源大師像(重要文化財)について、X線透過撮影により像内部に五輪塔が納められていることが確認された。 (3) 醍醐寺の美術工芸品の中心とした文化財と醍醐寺文書聖教の包括的調査と分析により、かつての名品紹介や時代順展示とは異なる、醍醐寺の歴史的特色を鮮明に、かつわかりやすく示す展示構成を実現した。 <ul style="list-style-type: none"> 文書聖教の十分な選定により、単調になりがちな書跡の展示に工夫を凝らし、観覧者の注目と興味を引き出した。 醍醐寺における文化財調査で得られた知見をもとに、より充実した作品解説を執筆することが可能となり、彫刻・絵画・工芸・書跡部門の調査・研究の成果は、各研究員によって展覧会図録中の総論・各論として発表された。 醍醐寺の理源大師像(重要文化財)について、X線透過撮影によって判明した像内納入品について報道発表を行った。 	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>(文書聖教の調査風景)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(工芸品の調査・撮影風景)</p> </div> </div>	
【実績値】・調査回数 (人数×日数の延べ回数) 15回 ・刊行物発行数 1回 ・論文等発表数 5回(①～②) ・講座等発表回数 13回	
【備考】 ①斎木涼子「醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」(特別展図録「国宝 醍醐寺のすべて」総論 26年7月19日) ②谷口耕生「醍醐寺聖教としての白描図像」(特別展図録「国宝 醍醐寺のすべて」各論 26年7月19日) ほか3件	

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4543-1-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	B	B	B	B
判定理由 適時性：25年度に国宝に指定されたばかりの醍醐寺文書聖教について、長年の調査成果をもとに展覧会の趣旨に合わせた調査を行った。これにより、指定された文書聖教の全容と歴史的意義を広く一般に公開することができた。 独創性：醍醐寺の所蔵する文化財の包括的調査により、名品紹介や単純な時代順展示ではなく、「密教修法」「聖教」「修験道」「政治世界との関わり」など、醍醐寺の歴史的特徴を明確にかつわかりやすく紹介する展示を実現した。また、一般には分かりにくい文書聖教の全体像と、文化財保存の意義や重要性を広く喧伝した。 発展性：各分野の研究者が専門分野に沿った調査を行い、新たな知見を得たことで、今後の各自の研究や、新しい展覧会へのアイデアを得ることができた。 効率性：長年の醍醐寺文化財調査の成果を参考に、効率的な調査を行った。また各分野の研究者が同時に調査に赴き、綿密に意見交換を行うことで、短時間の調査でも、互いにより良いアイデアや新しい知見を得ることが出来た。 継続性：調査により、新たなデータや写真資料などを数多く得ることが出来、今後の研究・展示活動にも活用することが期待される。 正確性：各研究者の調査により、文化財の基礎データを再確認することで、図録などの内容を正確なものにすることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	刊行物	論文等発表数	講座等発表回数		
評定	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：展覧会の学術面における充実・深化を図るべく、情報交換・内容検討・協議等を行う場を、必要十分な回数、設けることができた。 刊行物：調査結果を十分に反映した充実した内容の展覧会図録を発行することができた。 論文発表数：調査で得られた知見などを反映し、各分野の研究者がそれぞれ研究成果を発表することができた。 講座等発表回数：調査で得られた知見などを反映した講座等を企画することができ、各分野の研究者が研究成果を発表することができた。また昨年夏の特別展で1回だった展覧会公開講座を、4回開催することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏教美術に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から特別展「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けを伴ったものとするべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開した。特に、国宝指定された醍醐寺文書聖教の全容と歴史的意義を広く公開することは、本調査、そしてその成果を反映させる展覧会において、最も重要なテーマの一つであったが、その点において十分な実績を挙げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」の企画立案から開催に至るまでの過程における調査研究を、「文化財に関する調査及び研究の推進」という計画に沿うよう展開し、その点において順調に実績を積み重ねた。調査成果は展覧会構成、図録等刊行物に反映され、また各研究者の個別研究発表にも結びついている。 さらに、本調査・研究で得られた新たな知見や資料は、来年度以降の研究、展覧会等に反映されることが期待される。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2 特別展「天皇皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展」に関する調査研究 ((5)-④)		
【事業概要】			
特別展「天皇皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展」(26年10月24日～11月12日開催)に関する調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 内藤 栄
【スタッフ】			
岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(企画室主任研究員)、鳥越俊行(保存修理指導室主任研究員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】			
<p>(1) 展覧会に先立ち、正倉院事務所において正確かつ最新の情報を得るために当館研究員が調書の精読、書写を行った。その情報は展覧会図録や展示パネル、題箋等に反映している。また、日頃の各研究員の研究は、展覧会図録の「宝物寸描」(小論文)に掲載したほか、公開講座等で発表した。</p> <p>(2) 宝物をいかに美しく、かつ快適にご覧いただき、さらに宝物への安全性も重要な研究課題である。例えば、照明の方法、ケース内の環境変化への対応、展示台の高さや角度の問題などであるが、アンケートによれば見やすさ、快適さは数年前に比べ各段に好評となっており、この分野における当館の対応も実を結びつつあることを実感している。</p> <p>(3) 正倉院展図録の印刷数は3万冊を超えており、発表媒体としてはきわめて多い点が特筆される。観覧者が購入することはもとより、多くの図書館等に収蔵されるので、展覧会後も探すことは容易である。さらに公開講座(当館職員は1回)、正倉院学術シンポジウムの発表(当館職員は1回)を実施している。正倉院展図録のコラム「宝物寸描」は当館研究員2名が執筆したほか、概論が新規に執筆され、日頃の当館の研究成果が盛り込まれている。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) ・正倉院事務所において調書、研究報告を調査し、一部の宝物については事前に実見した。また、会期中の開館時間以外の時間を使って、可能な限り宝物を実見するように努めた。 ・正倉院展図録の解説、宝物寸描、概論等に反映したほか、展示室内にもパネル等で紹介した。</p> <p>(2) 照明については、見やすさ、温度変化の少なさなどを考慮してLED照明を用い、また会場の空気の滞留とケース内環境との関連について研究し、環境変化の少ない会場構成を実現した。</p>			
			
正倉院宝物の調査点検			
【実績値】			
◎講演会回数 3回 (参考値)			
<ul style="list-style-type: none"> ・正倉院学術シンポジウム 1回(発表3回、討論会1回) ・正倉院フォーラム(展覧会前の講演会) 東京・大阪・福岡・名古屋各1回 ・大学での講義(京都美術工芸大学、奈良女子大学等) 2回 ・『第66回正倉院展』目録 			
【備考】			
講演会			
<ul style="list-style-type: none"> ・10月25日 「鳥毛立女屏風と唐代絵画」(東京大学東洋文化研究所教授 板倉聖哲氏) ・11月3日 「正倉院宝物の科学的調査」(宮内庁正倉院事務所保存科学室員 中村力也氏) ・11月8日 「正倉院の武器・武具」(奈良国立博物館学芸部研究員 岩戸晶子) 			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4543-1-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 <p>適時性：正倉院展は秋の奈良を代表する行事として定着し、観覧者はきわめて多い。研究を発表する場としてきわめてふさわしいものであり、時期的にも適うものであった。</p> <p>独創性：正倉院宝物は、その重要性にも関わらず、研究者の総数は多いとは言えない。その理由は実際に手に取ることができないという制限によるかと思われるが、その点当館は宝物に直接接することのできる数少ない機関であり、独創性、正確さの点で優れた業績を納めている。</p> <p>発展性：正倉院展は毎年当館で開催されているため、宝物の研究は継続して行っている。将来的にも奈良国立博物館の重要な研究分野として発展が期待される。また、正倉院宝物以外の奈良時代の文化財にも触れる機会も多く、広い視野から宝物を研究できる。</p> <p>効率性：実際に宝物を実見する前に研究を行う点に効率上の問題があるが、実見後に研究を修正するなどして対応しており、効率に問題はない。</p> <p>継続性：正倉院展は毎年実施されるため、研究は単年度ごとの観があるが、実際には毎年継続して研究していることになり、その蓄積は大きい。正倉院宝物を研究する機関として、奈良国立博物館は今後ますます重要度を増すことが着たいされる。</p> <p>正確性：正倉院事務所の調書を参照すること、そして実際に正倉院展に際して実物を見ること、さらに必要とあれば宝物を詳細に観察することも可能である。これによって研究の正確さが確保されている。</p>						

2. 定量的評価

観点	講演会回数				
評定	B				
判定理由 講演会回数： 講演会の回数は計画通り例年と同じく3回開催した。講演内容は出陳宝物に関わる内容であり、毎回多くの聴衆が聴講した。いずれも最新の研究成果に基づくものであり、学術的にも成果の高いものであった。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の正倉院宝物に対する研究は、総合的に判断してきわめて高い水準を保っていると自負している。その水準は正倉院展図録の概論や宝物寸描、さらに各解説に現れている。この図録は正倉院宝物を知る上での最も入手しやすく、信頼のおける資料として多くの人から重宝されている。可能ならば海外調査を行い、正倉院宝物の源流を考えたいところであるが、宝物の故郷とも言われる中東地域に調査が適わない点は残念である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	正倉院宝物に対する研究は、博物館施設の中核的存在としての活動に該当すると考えられる。正倉院宝物という日本国内に留まらない世界的な価値を持つ文化財を、研究対象とすることは当館の存在意義を高めていると考えられる。今後の継続性も望め、しかも光学調査など新資料の提供もあり、今後ますます楽しい研究分野であると言える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-3 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に関する調査研究 ((5)-④)		
【事業概要】			
特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の開催に先立って、おん祭に関わる祭儀や伝統芸能、奉仕集団などに関する調査を行い、その成果を展示や図録解説に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	情報サービス室長 吉澤 悟
【スタッフ】			
内藤栄 (部長)、吉澤悟 (情報サービス室長)、北澤菜月 (美術室員)			
【主な成果】			
<p>特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」は今年で9回目を数える。毎年異なるテーマを特集しており、これまで田楽や舞楽、神事の相撲や競馬、社家の文芸活動、大和士などについて詳細を紹介してきた。今年度の特集は、春日大社と協議の上で、祭礼に場に飾られる「威儀物」について特集することとした。過去のおん祭に使われた威儀物はほとんど現存しないことから、その探索は困難をきわめたが、京都の呉服の老舗「千総」に「千切台」なる威儀物の旧物が伝わることを知り、その調査と現物の展示公開を行うことができた。春日大社の祭礼に関わることは老舗のステイタスシンボルであり、「まつり」の原動力の一斑はこうした点にも求め得ると紹介できた。また、春日大社の式年造替が始まることもあり、過去の造替にまつわる遺品、例えば室町時代の本殿の御簾金具や、江戸時代の社殿の設計図などについても調査、公開することができた。</p>			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 26年7月 おん祭の田楽装束賜の式に飾られる「千切台」の旧物についての調査を行った。 ・ 26年9月 春日大社に伝わる「献菓子台」の旧物の調査を行った。 ・ 26年10月 おん祭に使われる威儀物を図解した冊子「春日若宮祭礼図」の調査を行った。 ・ 26年10月 江戸時代の本殿の障壁に描かれた絵馬の写し図など、ご造替に関わる遺品の調査を行った。 ・ 全ての調査成果は26年12月～27年1月の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の展示品、会場パネル、解説図録等に反映させて公開した。威儀物に関する研究はこれまでにないため、研究基盤としての展示の役割を示すことができた。 ・ 27年1月10日 春日大社権宮司の岡本彰夫氏による講演会「おん祭と威儀物」を実施。 ・ 威儀物に関する論考を、春日大社が発行する「おん祭解説書」と、当館の展示図録の双方に掲載し、おん祭の観覧者と博物館の来館者に示した。 ・ 展覧会の入館者は本展の過去9年では最高の2万7千人であった。 			
			
<p>新たに見つかった祭具・千切台の旧物</p>			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 展示への反映 1件 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」 出陳作品数 54件、うち初出陳品は24件 入館者数は2万7千人 刊行物等件数 1件 ・ 同上の図録 総頁数80頁、うち総論4頁、特論6頁 			
【備考】			
『おん祭と春日信仰の美術—特集 威儀物：神前のかざり—』展示図録 奈良国立博物館			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4543-1-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：おん祭は約800年続く伝統行事であるが、その中でも本来の意味や役割が不明となった祭具や祭儀が含まれている。今回はその一部である威儀物をはじめ調査し、展覧会の特集として世に示した。 独創性：これまで歴史学も民俗学も扱わなかった祭具について焦点をあてた。 発展性：現時点で分かる威儀物の実態や役割を示したが、これは今後の研究の基礎資料として役立つと思われる。 効率性：春日大社の禰宜や権宮司との協業によって新出資料を探し出すことができた。 継続性：おん祭や春日信仰の展示は次年度以降も継続するものであり、さらに別の角度からも調査研究が進められる予定である。 正確性：現物を調査した上で報告、紹介している。また過去の史料にも遡及的な調査に努めており、資料精度は高い。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	刊行物等件数				
評定	B	B				
判定理由 展示への反映：春日大社おん祭の祭具に対する新たな資料を展示に反映することができたのは大きな成果である。 刊行物等件数：展覧会図録は予定通りに作成し、内容的にも新情報を含めたものを発行することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では大和の寺社の歴史や美術の調査研究と展示による一般公開を大きな活動の柱にしている。本事業は春日大社と長いお付き合いと信頼関係によってはじめて実現する調査であり、地味ながらも普段は注目されない事象を深く掘り下げてその歴史性を示したことは高く評価され得ると考える。向後も、さらに別の切り口から伝統行事や信仰の歴史を検討し、展示として成果発表をして行く責務があると思われる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に従って着実に成果を蓄積しており、今後にも発展性を含んでいるため、引き続き春日大社おん祭や春日信仰に関する調査を継続する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-4 特別陳列「お水取り」に関する調査研究 (5) - (4)		
【事業概要】			
南都諸社寺等における文化財の調査、宗教文化に関する調査の一環として、奈良において著名な伝統行事の一つである、東大寺二月堂修二会（お水取り・毎年三月に催行）に関する調査・研究を行い、その成果を毎年恒例開催となっている特別陳列「お水取り」に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室員 齋木涼子
【スタッフ】			
内藤栄（部長）、岩田茂樹（上席研究員）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（企画室長）、清水健（主任研究員）、岩戸晶子（列品室員）、北澤菜月（美術室員）、山口隆介（情報サービス室員）、原瑛莉子（企画室員）、田澤梓（工芸考古室員）、佐々木香輔（資料室員）			
【主な成果】			
(1) 東大寺ミュージアムにおいて、文化財担当者と出陳候補文化財に関する打ち合わせを行い、また調査を実施した。 (2) 出陳可能な文化財の決定と、その内容の確認を行うことができた。 (3) 特別陳列「お水取り」の展示構成、また図録に上記の内容を反映させた。			
【年度実績概要】			
(1) ・ 展覧会担当者2名が、出陳を前提とする古文書の調査を東大寺にて行った（26年9月9日）。 ・ 展覧会担当者2名が、出陳を前提とする文化財（古文書除く）の調査を東大寺にて行った（27年1月14日）。 (2) ・ 東大寺が所蔵する重要文化財「二月堂修二会記録文書」について、内容を検討した。現在、当該文書が部分的に修理に入っているため、修理未着手分の出陳と、来年度以降の修理終了分の展示予定が提案された。 ・ 工芸品の調査と聞き取りにより、従来の作品名称が誤りであることが判明し、新たな名称が付された。 ・ 東大寺が所蔵する修二会（お水取り）関係の文化財、特に塔頭が所蔵する民俗資料的な文化財を中心に調査を行った。			
		(牛玉櫃の内容物調査)	
(3) ・ 調査により得られた文化財の正確な使用目的、伝来など、新たな知見を元に、26年度特別陳列「お水取り」出陳作品を選定し、展示を実現した。			
【実績値】			
・ 作品調査回数（人数×日数の延べ回数） 4回 ・ 刊行物発行回数 1回 ・ 講座等開催回数 2回			
【備考】			
・ 齋木涼子「東大寺二月堂お水取りの歴史」（特別陳列図録「お水取り」総説 27年2月7日）			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4543-1-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：奈良の著名な伝統行事、東大寺二月堂の修二会（お水取り）の時期に合わせ（行事期間平成 27 年 3 月 1 日～14 日）、特別陳列「お水取り」を開催した。また、新たな知見の反映した展覧会図録を刊行した。 独創性：特別陳列「お水取り」は、奈良の古社寺への調査を継続的に行い、その行事に深い理解を有し、長年にわたり資料収集を行う当館ならではの企画である。 発展性：修二会のような行事に関わる文化財の調査は、今後の伝統行事研究への大きな礎となるものである。 効率性：長年の調査研究の蓄積により、新たな調査を必要最低限かつ的確なものに絞ることが出来た。 継続性：来年度以降も、修二会（お水取り）をテーマとした特別陳列を計画しており、調査研究の蓄積が期待される。 正確性：調査などにより展覧会図録や展示内容をリニューアルし、また作品名称を訂正するなど展示内容を正確なものとする事ができた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	刊行物発行回数	講座等開催回数			
評定	B	B	B			
判定理由 作品調査回数：展覧会の学術面における充実・深化を図るべく、情報交換・内容検討・協議等を行う場を、必要十分な回数、設けることができた。 刊行物発行回数：最新の研究成果を反映した展覧会図録を刊行した。 講座等発表回数：特別陳列「お水取り」開催中、東大寺二月堂修二会（お水取り）に関連する講座・展示解説を開催した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏教美術及び奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から特別陳列「お水取り」の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けを伴ったものとするべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開してきた。本年度は、新たな知見を反映した新しい図録を刊行することができた。次年度以降も将来の企画展示の充実に向けて同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別陳列「お水取り」の企画立案から開催に至るまでの過程における調査研究を、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画に沿うよう展開しており、その点において順調に実績を積み重ねている。また、複数回の調査によって新たな知見を得ることができ、最新の研究成果を反映して作品名称の訂正なども随時行われている。 次年度も、同特別陳列の開催に向けた調査研究を行う予定であり、これを円滑に遂行し、確実な成果の蓄積へと導く業務のサイクルが、すでに確立されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-5 特別展「まぼろしの久能寺経に出会う 平安古経展」に関する調査研究 (5)-④		
【事業概要】			
<p>特別展「まぼろしの久能寺経に出会う 平安古経展」(27年4月7日～5月17日開催予定)に関する調査研究 修理の完了した法華経(久能寺経)4巻を公開するとともに、同時代またはこれに先行する時代の写経・經典遺品を展示し、平安時代經典史を概観する展覧会に向け、文化財を調査し、研究を進める。</p>			
【担当部課】		【プロジェクト責任者】	
学芸部		企画室長 野尻 忠	
【スタッフ】			
<p>内藤栄(学芸部長)、岩田茂樹(上席研究員)、吉澤悟(情報サービス室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、清水健(主任研究員)、鳥越俊行(主任研究員)、岩戸晶子(列品室員)、齋木涼子(教育室員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、大江克己(保存修理指導室員)</p>			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・紺紙金字経や彩牋墨書経を調査して製作年代を推定し、展覧会への出陳の有無を決定した。 ・経塚出土の經典遺品を数多く調査し、本展の内容に相応しい遺品を絞り込んだ。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・経塚遺物の集中調査を実施した。(26年4月17日) ・五島美術館(東京都世田谷区)において、彩牋墨書 法華経 序品 1巻を調査するとともに、展示中の種々の経巻を閲覧した。(26年8月1日) ・彩牋墨書 法華経 8巻(龍興寺所蔵、11世紀)の調査を実施した。(26年8月22日) ・紺紙金字 観普賢経 1巻(個人蔵、11世紀)の調査を実施した。(26年11月24日) ・浅草寺(東京都台東区)において、紺紙金字経の調査を実施した。(26年12月4日) ・紺紙金字 細字法華経 1巻(個人蔵、12世紀)、紺紙金字 大毘盧遮那成仏神変加持経 卷第一 1巻(長谷寺所蔵、12世紀)、紺紙金字 撰大乘論 卷第一 1巻(光慶寺、12世紀)等の調査を実施した。(26年12月8日) ・大般若経 595帖(長弓寺所蔵)のうち10帖を調査し(26年12月22日)、既刊報告書の全面的な再検証を必要とすることが判明した。 ・大般若経 599帖(海住山寺所蔵)のうち10帖の調査を実施した。(27年1月10日)。 			
			
個人蔵経筒の調査			
【実績値】			
文化財調査の回数	8回		
研究成果発表件数	3件(①～③)		
【備考】			
研究成果発表			
<ul style="list-style-type: none"> ①野尻忠「平安時代の写経一九・十世紀篇一」(サンデートーク、於. 奈良国立博物館、26年5月18日) ②野尻忠「写経遺品からみる宝亀初年の一切経書写と正倉院文書」(口頭報告、人間文化研究機構連携研究「正倉院文書の高度情報化研究」研究会、於. 国立歴史民俗博物館、26年7月31日) ③野尻忠「流転する正倉院の古文書―「万昆嶋主不参解」を中心に―」(口頭発表、正倉院文書連続座1、於. 金鷲会館 宝形塔屋講義室、26年11月1日) 			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4543-1-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：近年修理が終了した写経を初めて公開する機会にあわせ、関連文化財の出陳に向けた調査を実施できた。 独創性：平安時代に作成された一点一点の写経には著名なものが多いが、それらを通時代的に概観する展覧会は初めてであり、その開催に向けた有意義な研究が展開できた。 発展性：本展覧会の開催を契機に経巻遺品への注目度が上がることにより、新発見資料の出現が期待される。 効率性：サンデートークや口頭研究発表などの場で、他の独自テーマではなく、展覧会の内容に直結する話題を取り上げることで、本来の研究と業務に割く時間のバランスを図っている。 継続性：写経研究は、当館がこれまで重点的に取り組んできた分野であり、今後もその方針は変わらない。このプロジェクトで得た成果は、1回限りの展覧会だけでなく、今後の研究活動にも生かされる。 正確性：展覧会に向けた調査は、企画担当の個人だけでなく、館内の複数の研究者によって実施されており、正確性は保たれている。さらに、研究成果を発表する図録は、企画担当とは別の研究員が編集し、査読機能を果たしている。						

2. 定量的評価

観点	文化財調査の回数	研究成果発表件数				
評定	B	B				
判定理由 文化財調査の回数：回数・内容とも十分な成果を上げることができた。 研究成果発表件数：件数・内容とも、特別展に向けた研究として相応しい成果を上げることができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本プロジェクトにより、世に余りその名を知られていない、しかし貴重な平安時代の経典遺品を見出すことができた。その成果は、展覧会開催という形で博物館の事業に直結するものであり、意義は大きい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	上記のとおり本研究は順調に成果をあげた。中期計画の「文化財に関する調査及び研究の推進」における本研究の役割は十分に果たせた。次年度は今年度の調査のノウハウを生かし、追加調査を実施したうえで、研究成果をまとめ論説等の形で発表する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-6 開館 120 年記念特別展「白鳳」に関する調査研究 (5) - (4)		
【事業概要】			
<p>開館 120 年記念特別展「白鳳」(27 年 7 月 18 日～9 月 23 日開催予定)に関する調査研究 7 世紀後半から 7 1 0 年までの仏教美術品、考古遺品の調査。この時代は全国的に寺院造営が広がり、造形的にも優れた作品が生まれた時代であった。この時代は金銅仏や塑像などが作られたが、飛鳥時代と奈良時代との境が明らかでないため、作品の特定が難しい。この調査では白鳳美術の作品を特定する作業を中心に行った。</p>			
【担当部課】 学芸部		【プロジェクト責任者】 部長 内藤 栄	
【スタッフ】 岩田茂樹(上席研究員)、吉澤悟(情報サービス室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、野尻忠(企画室長)、清水健(主任研究員)、鳥越俊行(主任研究員)、岩戸晶子(列品室員)、斎木涼子(教育室員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)			
【主な成果】			
<p>(1) 館外の作品調査(鳥取県、島根県、大分県、福岡県、奈良県、京都府、大阪府、愛知県、三重県、滋賀県、千葉県、東京都)を実施。写真撮影、詳細な観察、構造等の精査などを実施した。既知の資料はもちろん、新出の資料も多く発見することができた。また、関連する展覧会や研究会がある場合は、可能な限り脚を運び、成果を蓄積した。</p> <p>(2) 館内の作品調査。これまで白鳳時代の作と認められていなかった品、未発表の作品も数多くあり、それらを改めて精査した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 各地域において多大の成果を得ているが、とりわけ滋賀県の埋蔵文化財に興味深い資料が多く見いだされた。この地は天智天皇による近江宮の造営など重要な白鳳文化の中心地である(27 年 1 月～2 月)。また、鳥取県の白鳳寺院の調査も行い、この地に朝鮮半島系の文化が開いた時期があったことを確認した(26 年 9 月)。千葉県では龍角寺の調査を実施(27 年 2 月)。奈良県は飛鳥、藤原京を中心に随時行っている。</p> <p>(2) 館内の収蔵品では考古部門に白鳳美術が多く収蔵されている。しかし、これまで十分に評価されていなかった作品も多く見られ、この機会に見直しを行った。館内調査は随時開催している。</p> <p>研究の成果は 27 年度夏に開催される、開館 1 2 0 年記念特別展「白鳳—花ひらく仏教美術」展において発表される予定である。</p>			
			
鳥取県・北新造院跡の調査			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査回数 32 回 (鳥取県と島根県 1 回、大分県 1 回、福岡県 5 回、奈良県 10 回、京都府 3 回、大阪府 2 回、愛知県 1 回、三重県 2 回、滋賀県 3 回、千葉県 2 回、東京都 2 回) ・調査点数 150 件以上 			
【備考】			
開館 1 2 0 年記念特別展「白鳳—花ひらく仏教美術」展において発表される予定である。			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4543-1-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：総合的な白鳳文化研究はこれが初めてである。近年、博物館の表記等から「白鳳」が消える傾向にあり、白鳳を見直す良い機会になったと思われる。 独創性：奈良国立博物館は仏教美術を専門にした博物館である。白鳳を当館が取り上げることはきわめて重要であり、当館の使命でもあると言える。近年、藤原京の発掘の進展などにより、白鳳時代の様子がかなり明らかになってきた。この研究はそのような発掘の成果も取り入れたもので、独創性に溢れている。 発展性：白鳳の研究はそれだけで完結せず、飛鳥時代や奈良時代の研究にも大きく影響を与える。 効率性：彫刻、考古学、工芸など、各分野の担当者が分担して実施し、効率性を上げることができた。 継続性：調査は継続して実施しており、多くの地域を網羅することができた。 正確性：調査する地域の教育委員会、博物館研究員などと連携して、詳細な発掘の状況、作品の構造等に正確な情報を得るように努めている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査点数			
評定	B	B			
判定理由 調査回数： 予定した回数の調査を実施することが出来た。 調査地域は12都道府県に及んでおり、奈良県に至っては飛鳥や斑鳩など複数地域に及んでいる。白鳳文化は日本全国に広まってはいるが、実際に遺品が残る地域は限定されており、今回の調査で一部を除きほぼ網羅できていると考えられる。 調査点数： 予定した点数の調査が実施でき、豊富な情報を蓄積することができた。調査人数は基本的に学芸部員全員で当たっており、各研究員の得意分野を活かした研究を行っている。調査内容は国宝、重要文化財をはじめとする名品から、新出の資料に及んでいる。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初海外調査を予定していたが、研究を進めるうちに、白鳳文化の故郷をどこに求めるべきかが担当者間で問題となった。当初は中国の山東省を候補に挙げていたが、実際には韓国・慶州や扶余などが故郷の有力候補であろうという結論に達した。この地域に関しては、当館研究員は既に踏査しており、さらなる調査の必要性が認められなかったため、国内調査に重点を置いた。一部計画の変更はあったが、それは研究の進展に基づくものであり、所期の目的は果たしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館は仏教美術を展示、研究の柱に据えており、白鳳文化はそれにふさわしい内容である。この成果は展覧会や紀要論文集などに反映することが可能であり、当館の中期計画に則した活動であったと考えられる。当館の中期目標に奈良を中心とした社寺の宝物調査を掲げているが、この研究はそれに則した内容であり、今後の継続が望まれる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 南都の古代・中世の彫刻に関する調査と研究 ((5)-④)		
【事業概要】	<p>展覧会における借用品及び収蔵・寄託品、また館外の寺社等で収蔵される作品のなかから、南都に伝来した古代・中世彫刻につき、調書を作成し、詳細な記録写真を撮影し、データの収集・蓄積に努める。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 岩田茂樹
【スタッフ】	岩井共二(教育室長)、山口隆介(情報サービス室研究員)		
【主な成果】	<ul style="list-style-type: none"> ・館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。主要な作品は、法隆寺夢違観音像、深大寺釈迦如来像、海住山寺四天王像、正寿院十一面観音像、額安寺虚空蔵菩薩像、北僧坊虚空蔵菩薩像など。 ・いずれの像についても、調査の結果、学術的に重要な新知見が得られた。 ・特別展や名品展における図録の解説や題簽執筆、また公開講座での報告に新知見を反映させることができ、新たな解説を行えた。 		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・調査対象、時期 法隆寺夢違観音像(4月17日、於:福岡市美術館)、海住山寺四天王像(4月23日、於:海住山寺)、正寿院十一面観音像(4月24日、於:正寿院)、深大寺釈迦如来像(7月22日、於:静岡市美術館)、ロサンゼルス州立美術館十一面観音像(9月1日、於:ロサンゼルス)、同美術館蔵王権現像(9月2日、於:ロサンゼルス)、浄教寺阿弥陀如来像(12月4日、於:当館)、北僧坊虚空蔵菩薩像(12月5日、於:当館)、額安寺虚空蔵菩薩像(1月13日、於:当館) ・調査の成果 法隆寺夢違観音像と深大寺釈迦如来像については、作品の構造及び彩色技法に関する新知見を得た。海住山寺四天王像については、製作年代と当初の安置場所を解明した。正寿院十一面観音像については、鎌倉時代にさかのぼる作品であることが判明した。浄教寺阿弥陀如来像については、像の詳細な形状を3D計測した。北僧坊虚空蔵菩薩像については、X線透過撮影により、像の詳細な構造及び修理箇所が判明した。 ・調査成果の反映 法隆寺夢違観音像・深大寺釈迦如来像は、27年夏の特別展「白鳳」に出陳されるので、得られた新知見を図録解説等に反映させ、かつ公開講座等で報告する。また法隆寺夢違観音像に関する知見は、奈良国立博物館発行『大和の仏たち—奈良博写真技師の眼—』に反映させた。海住山寺四天王像については、26年5月12日に行われた(公財)仏教美術研究上野記念財団(事務局京都国立博物館内)主催のシンポジウムで成果を公表し、また新しい題箋を作成した。北僧坊虚空蔵菩薩像についても、調査結果を反映した題箋を作成・掲示した。 		
			
	<p>正寿院_十一面観音像</p>		
【実績値】	<ul style="list-style-type: none"> ・調査回数 9回 ・刊行物等 1件 『大和の仏たち—奈良博写真技師の眼—』(奈良国立博物館発行、12月2日) 		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムでの発表実績 岩田茂樹「海住山寺四天王像とその周辺」((公財)仏教美術研究上野記念財団(事務局京都国立博物館内)主催シンポジウム「南都をめぐる僧と造仏」5月12日、於:京都国立博物館) 岩田茂樹「海住山寺四天王像とその周辺—大仏殿様四天王像再考—」(上記シンポジウム報告書、3月下旬発行予定) 		

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4543-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：法隆寺夢違観音像や深大寺釈迦如来像は、平成27年夏の奈良国立博物館における特別展「白鳳」に出陳予定であり、展覧会で新たな知見を公表できる。また両像の調査は、奈良国立博物館が学術協力した展覧会「法隆寺展－聖徳太子と平和への祈り」（4月19日～6月1日、於、福岡市美術館、6月14日～7月27日、於、静岡市美術館、8月9日～9月21日、於、岡崎市美術博物館）の展示期間を利用して行った。</p> <p>独創性：法隆寺夢違観音像や深大寺釈迦如来像の頭部の彩色技法に関して全く指摘されていなかった新知見を発見できた。海住山寺四天王像の製作年代と当初の安置場所についても確定でき、定説を提出できた。正寿院十一面観音像の製作年代もこれまで知られていず、その重要性は初めて確認できた。北僧坊虚空蔵菩薩像の構造についても新知見が得られている。</p> <p>発展性：法隆寺夢違観音像や深大寺釈迦如来像は、27年夏の奈良国立博物館における特別展「白鳳」に出陳し、新たな知見を公表するが、同様の調査手法によって、出陳される他の作品についても比較検討を経て、新知見を獲得できる可能性がある。北僧坊虚空蔵菩薩像に試みたX線透過撮影により、同像が造られた平安時代初期（9世紀）の仏像の製作技法に関する貴重な資料が得られたが、これを他作品と比較検討することにより、当該時代の仏像制作技法の展開を把握することが期待できる。</p> <p>効率性：X線透過撮影方法をデジタル化したことにより、調査に要する時間は大幅に減少したにもかかわらず、獲得できる情報量は格段に増加した。なお奈良国立博物館には彫刻担当研究員が3名いるので、それぞれが別個に調査に赴く機会も確保し、調査回数が増すように努めた。</p> <p>継続性：館の内外における展覧会のおりには、ふだんは寺社にあってなかなか調査が困難な作品も調査・撮影が可能なので、その機会を逸さないよう努めた。また科研費を使用して海外調査（アメリカ・ロサンゼルス州立美術館）も実施し、もとは南都にあったと考えられる在外作品の調査も行ったが、今後も同様の試みを継続する予定である。</p> <p>正確性：調査書の作成だけでは主観の混入する余地があるので、デジタル写真、X線透過写真など、できるだけ成果公表における可視化を心がけた。また成果をシンポジウムで公表して他の研究者の意見を聞いたり、個別に学識経験者の意見を求めるなどして、公表前には客観性の確保に努めた。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	刊行物等				
評定	A	B				
<p>判定理由</p> <p>調査回数・刊行物等： 目標値は設定していないが、展覧会（学術協力として参画した館外の展覧会を含める）や科研費による計画的調査、作品所蔵者である寺社等からの依頼による調査など、様々な機会を利用して着実に調査を行い、刊行物の制作を行うことができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会等の事業開催に合わせて積極的に館内外における調査の機会を設け、着実に調査を行った。その結果、新たな知見がいくつも得られた。その成果をシンポジウムや報告書、あるいは展示の題箋等で公表することができた。次年度も同様の機会をできるだけ多く利用してほぼ同数の調査を行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	数値目標はないが、適時性・独創性・発展性・効率性・継続性・正確性のいずれの観点からも着実に成果を得ており、順調に中期計画を遂行中である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）、信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）の調査など、東京文化財研究所と共同で仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術等の解明に寄与する（(5)－④）		
【事業概要】 奈良国立博物館と東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき、両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。光学的調査は、高精細フルカラー画像の作成、可視光励起による高精細蛍光画像の作成、高精細反射近赤外線画像の作成、高精細透過近赤外線画像の作成、蛍光X線による非破壊分析、を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
【スタッフ】内藤栄(部長)、岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)、【東京文化財研究所】田中淳(企画情報部長)、皿井舞(企画情報部主任研究員)、早川泰弘(分析科学研究室長)、城野誠治(専門職員)			
【主な成果】 (1) 大徳寺五百羅漢図の光学調査に関する成果を報告し、天台高僧像及び信貴山縁起絵巻の調査成果の公表方法について検討を重ねた。 (2) 調査報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』の刊行に伴う研究会および関連作品の追加調査を実施。天台高僧像及び信貴山縁起絵巻の調査報告書の刊行時期とその方法について協議を行った。 (3) 報告書刊行に伴う研究会を通じて共同研究の成果を広く公表。天台高僧像の調査報告書を27年度中に刊行、信貴山縁起絵巻の調査成果を28年度開催予定の信貴山縁起絵巻展に反映させることで合意。			
【年度実績概要】 (1) ・21年度から5年間にわたり本共同研究の一環として実施してきた調査の成果報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』を刊行し、その成果報告の研究会を大徳寺で実施した(26年6月6日)。 ・当館において大徳寺本系統の図像を踏襲する神奈川円覚寺本五百羅漢図の調査(26年6月2日)、同じく山口県立美術館において東光寺本の調査を実施(26年11月22日)。 ・国宝聖徳太子及び天台高僧像(一乗寺蔵)及び国宝信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵)について、今後の追加調査実施の計画について協議し、併せて調査成果の中間報告及び最終的な調査報告書刊行の計画について検討を重ねた。 (2) ・調査報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』刊行後の研究会を通じて共同研究の意義を広く広報することができた。 ・円覚寺本、東光寺本の調査を通じて、大徳寺系統の図像が広く我が国に受容されたことを確認することができた。 ・共同研究で得られた膨大な画像データを共有するための検討会を当館で開催し(26年5月28日)、ネットワークシステムの構築により当館・東文研双方においてコンピュータ上での閲覧を可能とすることで、報告書刊行に向けて画像の分析がスムーズに進められることとなった。 (3) ・『大徳寺伝来五百羅漢図』を思文閣出版から刊行し、本共同研究の5冊目の成果報告書として世に公表した。 ・国宝聖徳太子及び天台高僧像については透過エックス線撮影を伴う追加調査を実施した上で、27年度中に報告書を刊行することで合意した。 ・信貴山縁起絵巻については、顕微鏡写真撮影を追加で実施した上、その成果を28年度に開催予定の信貴山縁起絵巻展の図録に中間報告として反映させ、最終的に調査報告書を刊行することで合意した。			
			
共同研究報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』の表紙			
【実績値】 調査回数 2回(6/2、11/22) 調査作品数 2件 研究会開催件数 2件(5/28、6/6) (参考値) 刊行物等 1件『大徳寺伝来五百羅漢図』(思文閣出版、26年5月20日刊行)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4543-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：調査対象となる国宝信貴山絵巻及び国宝天台高僧像は平安絵画を代表する名品である。28年度に当館で開催予定の信貴山縁起絵巻展をひかえたこの時期に調査を実施することで、その成果を展覧会で広く公表できる。 独創性：信貴山縁起絵巻、板絵神像ともに高精細デジタルカメラによるカラー画像及び近赤外線写真、蛍光画像等の撮影を伴う光学的調査は初めてであり、その調査データの分析に基づく制作当初の彩色の復元は、美術史研究にも大きく寄与する。 発展性：すでに同様の方法で光学的調査が実施されている伴大納言絵巻のデータや、当館所蔵の大仏頂曼荼羅などを対象に実施する追加調査で得られたデータと比較分析を行うことにより、平安時代絵画に広く用いられる彩色の復元的な考察が可能となる。 効率性：東京文化財研究所との共同研究として実施することにより、文化財調査に伴う所蔵者への事務連絡等の調整を当館、最新の光学機器を用いた調査を東文研が担い、その成果を両機関で分析するという協業によって効率的に研究成果を上げることができる。 継続性：本共同研究は平成16年から始まってすでに10年が経過しており、その成果も5冊の報告書に結実している。 正確性：調査に用いる光学機器はいずれも最新かつ信頼性の高いものであり、一つの文化財に対してカラー画像、近赤外線画像、可視光励起による蛍光画像、透過エックス線写真等を分割撮影することで、彩色や基底材の画像情報を網羅的に取得できる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	研究会開催件数			
評定	B	B	B			
判定理由 調査回数：年度計画どおり、調査報告書を刊行した大徳寺五百羅漢図の関連作品について2回の作品調査を実施した。 調査作品数：大徳寺五百羅漢図と密接に関連する円覚寺本1件4幅、東光寺本1件14幅の合計2件16幅を調査し、年度計画を達成した。 研究会開催件数：年度当初の予定どおり、大徳寺五百羅漢図の調査報告書刊行に伴う成果報告会、天台高僧像・信貴山縁起絵巻の成果報告書刊行に向けて画像データ取り扱いに関する検討会の2回実施した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	21年度から調査を進めて大徳寺五百羅漢図について、5月に総合調査報告書を刊行した。大徳寺五百羅漢図については本年度に関連作品の追加調査も実施し、出版によって公表された共同研究の成果がもつ意義をさらに深化させることができた。また前年度までに調査を進めている国宝信貴山縁起絵巻及び国宝天台高僧像について報告書の刊行を目指し、追加調査の計画や、データ共有の方法などについて協議を重ねた。今後は追加調査を踏まえつつ、報告書の刊行準備を着実に進めていく。さらにこれまで当館の館蔵・寄託品を主な対象として調査を進めてきたが、今後は東京国立博物館及び京都国立博物館など法人内の他の博物館とも連携を取りつつ、広く平安仏画の作品を調査対象としていくことも検討したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所との共同研究に基づき、着実に成果を挙げることができた。特に本共同研究の5冊目の報告書となる『大徳寺伝来五百羅漢図』を5月に刊行し、各方面から高い評価を得ている。本年度は平安絵画を代表する信貴山縁起絵巻及び天台高僧像の調査報告書刊行に向けて準備を進め、画像データの分析をスムーズに行えるように、ネットワークシステムを通じたデータの共有のあり方について協議を重ね、システム構築に向けて一定の合意を得ることができた。今後もさらに本共同研究を通じて膨大な画像データが作成されていく見込みであり、その共有化の方式が定まったことで、分析の精度と効率性が一層上がることは間違いなく、さらに充実した共同研究の成果が期待できる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-1 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」に関する調査研究(5)-⑤		
<p>【事業概要】特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」(27年1月1日～3月1日)に関する調査研究古代日本の文化形成において朝鮮半島にあった百済は非常に重要な立場にある。古墳時代から飛鳥時代にかけて数々の交流を通じてそれぞれの文化を築いてきた。特に26、27年は百済の技術者の指導により水城・大野城・基肄城が築かれてから1350年の節目の年である。本研究では両国に所在する交流を物語る文化財を調査し、その成果を特別展の開催により広く公開するものとする。</p>			
【担当部課】	学芸部展示課	【プロジェクト責任者】	展示調整室主任研究員 岸本圭
<p>【スタッフ】井上洋一(部長)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、原田あゆみ(企画課特別展室主任研究員)、進村真之(情報サービス室主任研究員)、小嶋篤(情報サービス室研究員)、赤司善彦(福岡県教育庁文化財保護課長)</p>			
<p>【主な成果】</p> <p>(1) 韓国国内の文化財について、国立博物館・国立文化財研究所での調査及び遺跡での現地踏査を行った。また各館の学芸員と意見交換を行い、多くの示唆を得た。</p> <p>(2) 日本国内に所在する百済関係の文化財調査を行い、遺跡での現地踏査を行った。</p> <p>(3) 研究成果を特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」として九州国立博物館で行った他、韓国国立公州博物館でも研究成果を活かした特別展「武寧王時代の東アジア世界」が行われた。</p> <p>(4) 日韓の研究者が最新の研究成果を発表する講演会を開催し、討論を行った。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1) ・国立中央博物館・国立公州博物館・国立扶餘博物館・国立清州博物館・国立扶餘文化財研究所で文化財の調査(26年6月29日～7月3日):百済関連の土器や金属製品の詳細な観察を行い、製作技法等について比較検討を行った。各館の学芸員からは百済の文化財の諸特徴を絡めた多くの教示を得た。また公州宋山里古墳群や扶餘王興寺址、益山弥勒寺址等、百済の重要遺跡の踏査を行い、研究者から様々な最新成果を聞くことができた。</p> <p>・関東における文化財調査(高崎市観音塚考古資料館・木更津市郷土博物館金のすず・かすみがうら市郷土資料館、26年4月22日～25日):国立公州博物館担当者ととともに調査を行い、銅鏡の日韓比較を主題とした資料の熟覧等の研究を行った。</p> <p>(2) ・九州内における文化財調査(熊本県立装飾古墳館・大刀洗町教育委員会・九州歴史資料館等、26年7月14日等):九州各地に所在する百済関係の資料調査を行い、製作技法等の類似性等を検討した。水城・大野城・基肄城築造1350年の年にあたり、関連文化財の現地踏査・出土品の検討は頻繁に行い、各自治体の研究者との意見交換を行った。</p> <p>・武寧王生誕祭での日韓研究者意見交換(加唐島・名護屋城博物館、26年6月7日):武寧王生誕祭が行われる加唐島において日韓研究者とともに現地調査及び意見交換を行った。日韓交流のルートである加唐島の現地地形を把握することができた。</p> <p>・日本国内百済関連文化財の調査(飛鳥資料館・法隆寺・柏原市立歴史資料館、26年8月11日～13日):関西方面の代表的な百済関連の文化財調査を行い、極めて百済との類似度が高い文化財等の熟覧を行った。</p> <p>(3) ・韓国国立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア世界」における調査(国立公州博物館、26年9月21日～26日、11月23日～26日):国立公州博物館で開催された特別展は、日中韓の交流を物語る文化財が多数展示されるまたない機会であった。国立公州博物館・中国南京博物館の研究者と百済時代の交流に関して意見交換を行った。大刀を中心とした出土品の熟覧の機会をもち、日本との比較研究に関する意見交換を行った。</p> <p>・研究成果は特別展図録として出版した。百済との交流をストーリーにとって展開させ、遺跡写真を多数併せて掲載する等により最新の研究成果をわかりやすい形で提示することができた。</p> <p>(4) 「七支刀と百済研究の最前線(①)」と題する講演会を行い、日韓の最新研究成果の発表・討論を行った。</p>			
<p>【実績値】調査回数 韓国5回 日本国内20回</p> <p>資料収集数 国立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア世界」への日本からの出陳件数7件 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」出陳件数74件</p> <p>展示への反映2件 国立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア」(26年9月25日～11月23日) 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」(27年1月1日～3月1日)</p> <p>図録等 2件 国立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア」展示図録 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」展示図録</p> <p>講演会数 4回(①～④)</p>			
<p>【備考】</p> <p>① 特別展記念講演会「七支刀と百済研究の最前線」(27年1月17日;森正光(石上神宮宮司)、金鍾萬(韓国国立公州博物館長)、李炳鎬(韓国国立中央博物館研究企画部学芸研究官)、赤司善彦(福岡県教育庁文化財保護課長))</p> <p>② しつこ九博!「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」解説講座(筑紫野市)(27年1月30日;岸本圭)</p> <p>③ 九博研究員が語る!考古学を100倍楽しむ方法(27年2月1日;岸本圭、河野一隆)</p> <p>④ 九博研究員が語る!考古学を100倍楽しむ方法(27年2月22日;小嶋篤、進村真之)</p>			



調査風景(韓国国立扶餘博物館)

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：26年度は水城・大野城・基肆城築造 1350年の節目の年にあたり、さらに日韓国交正常化 50周年記念の年でもあり、タイムリーな展覧会であった。また、各機関との積極的な連携が十分にとれ、韓国国立公州博物館開催の特別展との方向性が合致した。 独創性：日韓の最新の調査研究成果を活かすことができた。 発展性：多数の調査を行ったことで博物館との交流、韓国研究者とのネットワークの構築ができ、今後の調査研究を発展的に進めることができる。 効率性：韓国からの研究者の来日に合わせて、事前に綿密な打合せを行い、効率良く共同の調査研究を行うことができた。 継続性：これまでの研究成果を発揮できる展示・図録刊行を行うことができた。 正確性：日韓には多数の百済関係の資料が所在しており、今後も継続した調査研究が必要である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	展示への反映	図録等	講演会等	
評定	A	B	B	B	B	
判定理由 調査回数：予定回数が韓国 2回・国内 16回に対し、韓国 5回・国内 20回という多くの調査を行うことができた。 資料収集数：韓国国宝 2件、宝物 1件を含め充実した収集ができた。 展覧会数：九州国立博物館のみでなく韓国国立公州博物館で同様のテーマでの特別展に関わることができた。 図録等：研究成果を踏まえた図録を刊行することができた。 講演会等：当初の予定通り 4回実施でき目標を達成した。1月 27日開催の講演会 (①) に関しては、定員 280名に対し約 500名の応募が殺到したので定員枠を広げ、319名が聴講した。他の講演会も同様に、多くの方から応募人数を大幅に上回る聴講希望を頂き、4回とも大変反響が大きい企画を行うことができた。						

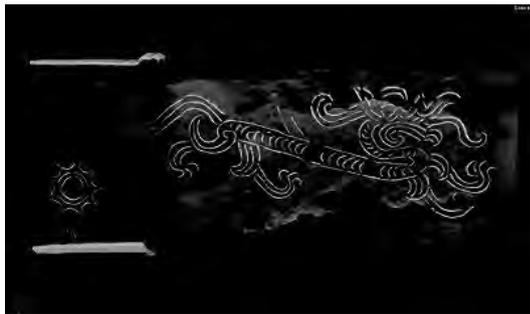
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国国立博物館や文化財研究所、日本国内の各機関の学芸員・研究員との共同研究・意見交換を多数行うことができ、今後の調査研究に活かせる活動を行うことができた。調査成果は本年度の特別展で活かされたが、これで留まるものではなく、今後の発展が見込まれる研究者間の交流を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国国立公州博物館での特別展とも関連する調査研究テーマとなり、研究者間の意見交換・交流が例年よりも増して活発に行うことができた。新たな調査成果に関する情報の交換を行い、次年度以降の調査研究に繋がるものと期待される。また特別展はこれまで継続して行われてきた百済との交流に関する調査研究を発揮する集大成的な場となった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2 特別展「発掘された日本列島 2014」に関する調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】			
特別展「発掘された日本列島 2014」(27年1月1日～3月1日開催)の期間中に当館で借用した作品の金属の内部状況の基礎データを得るための調査を行った。			
【担当部課】	学芸部展示課	【プロジェクト責任者】	情報サービス室主任研究員 進村真之
【スタッフ】			
河野一隆(企画課文化交流展示室長)、原田あゆみ(企画課特別展室主任研究員)、岸本圭(展示課展示調整室主任研究員)、小嶋篤(展示課情報サービス室研究員)			
【主な成果】			
(1) 展示で借用した島内地下式横穴墓群の金属製品についてX線CT調査を実施した。			
(2) 従来のX線写真より詳細な象嵌のデータを得ることができた。また、外面から判断できない金属内部の脆弱な部分についての調査も行った			
(3) 従来の象嵌データに新たに反映をすることができた。			
【年度実績概要】			
(1) 九州国立博物館内に於いて重要文化財島内地下式横穴墓出土銀象嵌大刀のX線CT調査を行った。(26年12月8日)			
(2) 従来のX線写真より詳細に象嵌の太さや深さなどのデータを得ることができた。			
(3) 従来の象嵌データの一部不鮮明だった部分に新たなデータを反映させ、加筆することができた。			
・ 外見的には丈夫そうに見える部分に置いても錆びによる劣化が進んでいる点が観察できた。			
			
より鮮明に得られた銀象嵌大刀の画像データ			
【実績値】			
調査回数	2回		
資料収集数	3件		
展示への反映	1件	特別展「発掘された日本列島 2014」(27年1月1日～3月1日開催)	
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-2

自己点検評価調査

2. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：近年、考古学上の新発見が相次ぎ、一般の方々の考古学への関心が高まっている時期に開催を行った。 独創性：発掘担当者の野帳（メモ帳）の展示など、当館ならではの取り組みを盛り込んだ。 発展性：わかりやすい展示を目指し、専門家でない人々を校正に加えた。 効率性：限られた予算のなかで効率的に研究成果を発信した。 継続性：日本各地の出土品を展示することで、今後研究を深めていく上での足がかりが各所にできた。 正確性：X線CTの検査結果を元に危険部位に注意する展示を行った。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	展示への反映			
評定	B	B	B			
判定理由 調査回数：調査可能な作品に対して十分な調査を行った。 資料収集数：今後の展覧会を解する上で、基礎資料となるに十分な件数の調査を行った。 展覧会数：目標の件数を達成し、研究成果を来館者に十分還元ができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	巡回展であるが、「野帳」の展示など、館独自の取り組みを行ったことで、来館者数は当初の予測を上回ることができた。また、X線CTの調査結果により、危険部位を判定し、安全な展示を行うことが可能となった。またその研究成果を講演会などで紹介するなど、来館者に十分に還元することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CTを活用した内部の状況調査など、今後、安全に展覧会を開催する上で貴重な資料を蓄積することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-3 特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—」に関する調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】 特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—」(27年4月21日～5月31日開催)に関する調査研究 室町～江戸時代初期の日本の国際関係は、九州を玄関口として展開された。本調査研究は、東アジア・東南アジア・ヨーロッパ諸国との外交・貿易を積極的に推進した九州の大名に焦点をあて、歴史資料・考古資料等を通してその足跡を明らかにするとともに、各大名家に伝来した安土桃山～江戸時代初期の大名道具のあり方についても検討しようとするものである。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 荒木和憲
【スタッフ】 川畑憲子(企画課文化交流展室主任研究員)、岸本圭(展示課展示調整室主任研究員)、一瀬智(展示課展示調整室研究員)、望月規史(資料登録室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 ・計23機関で陶磁・金工・刀剣・漆工作品、及び考古資料・歴史資料の詳細調査を行った。 ・各作品の状態・法量を把握し、陶磁・刀剣作品及び考古資料の製作技法、漆工作品の加飾技法・木地構造、歴史資料の形態的特徴・文字情報等に関して知見を得た。 ・本調査研究の成果は、次年度当初の特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—」展に反映する予定である。			
【年度実績概要】 総合調査：松浦史料博物館(6月18日)、佐賀県立博物館(6月30日)、熊本県立美術館(7月9日)、立花家史料館(9月14日)、柞原八幡宮(11月7日)、南蛮文化館(12月11日)陶磁・金工・刀剣・漆工・歴史資料分野の作品調査を行い、作品の状態・法量・技法等に関する知見を得た。 金工調査：阿久根市立郷土資料館(6月4日)、餘慶寺(6月13日)、秋月郷土館(6月24日)、竹田市立歴史資料館(6月25日)、光ミュージアム(10月31日) 詳細な観察・撮影を行い、作品の状態・法量、製作・鑄造技法に関して知見を得た。 漆工調査：対馬歴史民俗資料館(7月9日) 詳細な観察・撮影を行い、作品の状態・加飾技法・木地構造に関して知見を得ることができた。 考古資料調査：大分県埋蔵文化財センター(5月7日)、福岡市埋蔵文化財センター(8月20日) 歴史資料調査：鹿児島大学附属図書館(6月3日)、鹿児島県歴史資料センター黎明館(6月4日)、尚古集成館(6月4日)、静岡市立芹沢銈介美術館(6月12日)、米山寺(6月13日)、京都大学総合博物館(7月28日)、山口県立山口博物館(9月11日)、柳川古文書館(9月25日)、大分市歴史資料館(11月20日) 詳細な観察・撮影を行い、作品の状態等に関する知見を得た。			
			
立花家史料館での調査風景			
【実績値】 調査回数 23回			
【備考】 特別展図録『戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—』(27年4月21日刊行予定) 収録論考①荒木和憲「九州の群雄とアジアの波濤」 ②荒木和憲「戦国大名と戦国時代」 ③川畑憲子「桃山の南蛮美術」 ④岸本圭「貿易都市の考古学」 ⑤一瀬智「戦国大名の肖像画と賛」 ⑥望月規史「戦国時代の刀剣」 ⑦酒井田千明「西国大名と九州・山口の陶磁」			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：開館 10 周年記念事業の一環で、「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」との基本理念に即している。</p> <p>独創性：九州の戦国大名・豊臣大名を包括的に捉えつつ、アジア・ヨーロッパとの国際交流の歴史に重点を置いている。</p> <p>発展性：江戸時代の幕藩体制形成の前提となる重要なテーマであり、今後の調査研究の発展が期待できる。</p> <p>効率性：限られた期間内において最大限の時間的・人的投資を行い、効率的に調査研究を行うことができた。</p> <p>継続性：限られた期間内において必要とする調査研究を実施し、今後の調査研究の基礎を築くことができた。</p> <p>正確性：九州の戦国大名・豊臣大名にかかる美術工芸品の情報を網羅的に収集することができた。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
評定	B					
調査回数：限られた期間内において必要回数の作品調査を行うことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	開館 10 周年記念特別展の開催を目標として実施した本調査研究は、「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」という基本理念に基づいたものである。九州の戦国大名を切り口としているが、単に九州という一地域の歴史に焦点を当てたものではなく、日本の国際交流の歴史を明らかにしようとする試みであり、ここに本調査研究の大きな意義がある。本調査研究の成果は、次年度当初に開催する特別展に反映させる予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、多種多様な国際交流が営まれた中世後期～近世初期に対象とする時代を設定し、かつ国際交流の玄関口である九州に拠点を置く戦国大名・豊臣大名に着目したもので、中期計画4-(5)-⑤「アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究を行う」の趣旨に合うものである。最新の研究動向を踏まえ、当該期の日本の歴史・文化をアジア史的観点から明らかにするという所期の目標を達成した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-4 特別展「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史—A History of the World in 100 objects」に関する調査研究((5)-⑤)		
<p>【事業概要】 特別展「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史—A History of the World in 100 objects」(27年7月14日～9月6日開催)に関する調査研究 世界最古にして最大の博物館である大英博物館は、2014年にワールド・コンサベーション・アンド・エキシビジョンセンター(WCEC)がオープンし、揺ぎ無い地位を確立している。この大英博物館を視察、館員との討議を踏まえて、館の理念や歴史を調査すると同時に、次年度開催予定の特別展に反映する。併せて、展示室の設計や図録の作成を効率的に進めるための各種情報を入手し、円滑なプロジェクト推進を目指す。</p>			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室長 河野一隆
<p>【スタッフ】 市元壘(特別展室主任研究員)、西島亜木子(アソシエイトフェロー)、富永絵美(特別展室研究補佐員)、池内一誠(交流課教育普及室主任研究員)</p>			
<p>【主な成果】 (1)26年9月6日～13日に、河野と西島が大英博物館を訪問し、相手側展覧会担当者との協議を進め、さまざまな施設・部門を見学するとともに、展覧会に出陳予定の作品をつぶさに調査できた。 (2)大英博物館のコレクション及びそれを支えた英国の歴史について現地調査ができ、展覧会のメッセージについて具体的なイメージを確立することができた。 (3)現地調査研究の成果を、展覧会の企画や図録の翻訳作業に反映することができ、プロジェクトが飛躍的に前進した。</p>			
<p>【年度実績概要】 (1)大英博物館訪問を通して、本展担当者とのつぶさに企画の調整、実見調査を進めることができ、画像だけでは確認しにくい作品のコンディションについても確認することができた(26年9月6日～13日)。さらに、大英博物館スタッフより施設や歴史等について詳しく教示を受けるとともに、大英博海外展担当者による当館訪問を契機とする相互交流を進めることができた。 (2)27年度開催予定の「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史—A History of the World in 100 objects」について、作品の歴史背景や展示方法について、実見しなければ分からない事実を確認することができ、また各部門スタッフと意見交換することができた。 (3)26年3月刊行予定の展覧会公式カタログ訳文の批判的検討及び校正に、上記の成果を反映することができた。本展は、200万年にも及ぶ世界の歴史を扱うため、記述の裏取りに膨大な時間や労力を必要とするところであるが、実見調査によってスムーズに校正作業を進めることができた。また、併せて題箋等の作成にも様々な形で反映させることが期待できる。 (4)27年2月22日～24日に、河野と西島が国立故宮博物院(台北)を訪問し、バハレーンに引き続き開催された「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史」の展示状況、作品について調査することで、当館での展示造作プランに反映することができた。</p>			
			
			大英博物館での調査
<p>【実績値】 調査回数 2回(海外2回) 研究員海外派遣数 延べ4名 研究員受入数 延べ2名 調査日数 10日間</p>			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-4

自己点検評価調査

3. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展覧会準備に直結した形で進めることができた。 独創性：他に類のない企画のため、独創性は充分にある。 発展性：展覧会をさらにより充実した形で進めることのできるものである。 効率性：効率的な準備作業を進めることができた。 継続性：継続的な取り組みを続けている。 正確性：実見したことで正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数	調査日数		
評価	B	B	B	B		
調査回数：所期の目標通り2回の調査を行い、大英博物館において担当者と展示意図について協議することができた。また台北国立故宮博物院では実際の展示手法や解説パネルなどの設置状況など、当館における陳列の参考とすることができた。 研究員海外派遣数：海外調査の実績を積むことができ、所期の目標が達成できた。 研究員受入数：大英博物館側からも担当者2名を招聘し、推進に向けて協議を進めることができた。 調査日数：1週間という短い期間ながら、十分な調査を積むことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会出陳作品について、実見調査や意見交換を行うことができ、効率的な準備作業を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	図録解説や単行本を参照しながら、大英博物館館長が構想した本展の内容の理解に努めたうえで、図録の解説がより分かりやすい日本語となるよう、関係者間で十分な打ち合わせを行った。そのため、展覧会の設計について、より具体的かつ効率的に進めることができた。次年度の展覧会の実現に向けて、本年度は具体的な戦略策定や効果的に推進するための基盤を確立することができ、そのための足がかりとなる成果となった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-5 特別展「美の国日本」に関する調査研究(5)-⑤		
【事業概要】 特別展「美の国 日本」(27年10月18日～11月29日開催予定)に関する調査研究 27年度開催予定の開館10周年記念展「美の国 日本」に向けて、内容について検討するとともに候補作品の出陳交渉を進める。			
【担当部課】	学芸部展示課	【プロジェクト責任者】	課長 楠井隆志
【スタッフ】 三輪嘉六(館長)、井上洋一(部長)、本田光子(特任研究員)、臺信祐爾(企画課長)、富坂賢(文化財課長)、今津節生(博物館科学課長)、秋山純子(博物館科学課環境保全室研究員)、志賀智史(博物館科学課保存修復室主任研究員)、渡部史之(博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー)、赤田昌倫(博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、川畑憲子(企画課文化交流展室主任研究員)、原田あゆみ(企画課特別展室主任研究員)、森實久美子(企画課特別展室研究員)、鷲頭桂(企画課特別展室研究員)、西島亜木子(企画課特別展室アソシエイトフェロー)、酒井田千明(企画課特別展室アソシエイトフェロー)、丸山猶計(文化財課資料登録室主任研究員)、荒木和憲(文化財課資料登録室主任研究員)、畑靖紀(文化財課資料管理室主任研究員)、望月規史(文化財課資料登録室アソシエイトフェロー)、藤生京子(文化財課資料登録室研修生)岸本圭(展示調整室主任研究員)、進村真之(情報サービス室主任研究員)、一瀬智(展示調整室研究員)、遠藤啓介(展示調整室研究員)、小嶋篤(情報サービス室研究員)、池内一誠(交流課教育普及室主任研究員)			
【主な成果】 27年度開催予定の開館10周年記念展「美の国 日本」の出陳交渉を進めるとともに、各所蔵者の協力を得ながら出陳予定作品の現地調査を行い、輸送計画及び展示計画の立案に有効なデータを得ることができた。			
【年度実績概要】 (1)出陳交渉先 正倉院事務所・宮内庁書陵部・興福寺・法隆寺・平等院・神護寺・仁和寺・六波羅蜜寺・清凉寺・松尾大社・金剛峯寺・大將軍八神社・清水寺・毛越寺・中尊寺・東大寺・西大寺・沖縄県立博物館・那覇市歴史博物館・広島県立歴史博物館・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館・藤田美術館・香川県立ミュージアム・長崎歴史文化博物館・韓国国立中央博物館・韓国国立公州博物館・中国揚州市文物考古研究所・国家文物局・個人ほか (2)候補作品及び関連資料調査 ・東京国立博物館法隆寺宝物館にて法隆寺献納宝物の調査に参加する機会を得て、本展における作品選定に役立てた(26年6月19・20日)。 ・法隆寺金堂にて候補作品の状態確認を行った(26年6月26日)。梱包・輸送作業にあたり注意すべき箇所などの事前把握ができた。 ・中国揚州市博物館にて隋煬帝墓(1号墓)出土品を実見する機会を得た(27年1月12日)。墓誌については状態に難点があり、候補より外すことにしたが、金玉帯や金銅鋪首は問題がなく、見応えもあった。 ・東京国立博物館法隆寺宝物館にて候補作品の状態確認調査を実施し、担当者と展示方法などについて意見交換を行った(27年3月17日) ・長崎歴史文化博物館にて候補作品の状態確認調査を行った(27年3月24日)。			
【実績値】 出陳交渉延べ回数：40回 作品調査：5回			
【備考】			



法隆寺宝物館における
調査風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	C	B	C
判定理由 適時性：開館10周年を記念する特別展として企画するものであり、公共性・国際性・公開性を満たす。 独創性：開館記念展「美の国 日本」の第二弾として企画するものであり、独創性は高い。 発展性：10周年記念展として影響性は極めて高い。地元の期待度も高い内容である。 効率性：準備期間が短く、対象とする文化財はほとんどが国宝・重要文化財であるため必ずしも出陳交渉は順調ではない。 継続性：10年節目に開催する九州国立博物館の特別展として、今後の継続性が期待される。 正確性：出陳内諾を得られた文化財については、順次、輸送及び展示計画の策定のため事前調査を進めていく予定である。						

2. 定量的評価

観点	出陳交渉回数	調査回数				
評定	B	C				
判定理由 出陳交渉回数：順調に交渉数を増やし、目標を達成できた。 調査回数：出陳交渉を優先的に進めていることから、実数としての調査回数は少ないが、調査内容としては輸送・展示計画立案に有益な情報が多く蓄積できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	短期間での企画構想や出陳交渉となり、やや出遅れている感は否めないが、優れた作品が集まりつつある。共催者との協議も定期的に行っており、開催に向けて着実な準備を進めている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会の実施に向けて、準備作業を順調に進めている。今後は具体的な展示計画を立案するための作品調査を精力的に進め、その調査成果を輸送・展示作業の安全性を高めることにも活かしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-6 特別展「アフガニスタン美術展」に関する調査研究 ((5)-⑤)		
<p>【事業概要】</p> <p>特別展「アフガニスタン美術展」(28年1月1日～2月14日開催予定)に関する調査研究 シルクロードの要衝・古代アフガニスタンで栄えた様々な文化を、金、象牙、青銅製などの名品(カブール国立博物館所蔵)を通して紹介する。またソ連侵攻後の内戦などに伴う社会的混乱などから、多くの文化財が失われたアフガニスタンにおける奇跡的な作品の再発見のドラマも伝える。</p>			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】			
<p>【主な成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 展覧会図録(英文)を入手し、展覧会の内容と出品作品について把握した。オーストラリア・西オーストラリア博物館会場の展示状況などを調査した。展覧会出品作品の輸送用外箱の保管状況を含む、展覧会に関する様々な情報収集を行った。 ・ 展示室内の実物をつぶさに観察でき、展示作品の質の高さと保存状態を確認することができた。また国際巡回にあたって準備された展示具を多用する展示の手法についても検討することができた。 ・ 展覧会企画書作成、文化庁を含む関係者との打ち合わせにあっても、本展覧会に出品された作品の質の高さと文化財保護に関する意義を説くことができた。図録解説執筆及び展示のイメージを固めることができた。 			
<p>【年度実績概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オーストラリア・西オーストラリア州パースにある西オーストラリア博物館にて、「アフガニスタン展 カブール国立博物館所蔵の秘匿された至宝」を調査し、展覧会図録図版からでは確認しにくい出品作品細部の観察を行うことができた。(26年11月17～19日) ・ 金製品、銀製品、青銅製品、石製品、象牙製品など、旧石器時代から約2000年前に遡る、異なる時期に作られた作品群を調査し、ティリアテペ出土の金冠が帯と三つの前立て部品を組み立てたものであることなど、個別の作品制作技法及び作品の状態についての詳細な知見を得ることができた。 ・ 西オーストラリア博物館における展示作品を細かく調査することによって得られた制作技法やインド本国でも残存例のない古代の象牙製品の保存状態に関する詳細な知見を基に、より充実した解説を図録へ記載するための準備ができた。 ・ 西オーストラリア博物館における、支持具の状態や展示方法を調査したため、当館における展示の構想をより豊かにすることができた。 			
<p>【実績値】</p> <p>調査回数 1回(海外:1回) 研究員海外派遣数 延べ 1名</p>			
【備考】			



ティリアテペ出土金冠

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国際巡回展という枠組みによって、文明の十字路口に位置する古代アフガニスタンが体現していた国際性を認識するとともに、アフガニスタンの歩んできた歴史を各国と共有することができる。 独創性：社会的な混乱に伴い失われてしまったと思われていた至宝の数々を扱う本展は、我々日本人にとってなじみのない古代中央アジアにおける、複雑かつ高度な文化交流のありさまをはっきり示す点で、極めて独創的である。 効率性：国際巡回展という位置づけであるため既に出展された本展覧会図録や、これまで各分野で蓄積されてきた研究成果を利用でき、時間的・人的投資は比較的軽い。 継続性：展示品は、それぞれ旧石器文化、ギリシャ文化、遊牧民文化などが生み出した他に例を見ない優品揃いであり、我が国にあまりなじみのないアフガニスタンについてこれからも学んでいくための優れた契機を提供する。 正確性：発掘時の記録やその後の学問的蓄積があり、作品のデータや数値について正確さが担保されている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数				
評定	B	B				
判定理由 調査回数：事前に図録を通して展覧会の内容を把握できていたため、最小限回数で対応できた。 研究員海外派遣数：事前に図録を通して展覧会の内容を把握できていたため、最小限回数で対応できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	シルクロードの要衝であり、文明の十字路口とも呼ばれるアフガニスタンは、ソ連軍侵攻、その後の内戦などの混乱の結果、多くの文化財が失われてしまった。そうした中、奇跡的に再発見されたカブール国立博物館所蔵の至宝を我が国で紹介することは、アフガニスタンの過去と現在について周知することにつながるため、時宜を得た企画である。予定通り準備作業が進んでおり、次年度の作業計画策定に向けて準備作業も順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展の内容は、アジアを中心とする諸外国の歴史と文化を広く国民に紹介することを使命とする当館にふさわしく、また文化交流の象徴としてのシルクロードの役割を明瞭に示す点でも有意義なものであり、外務省及び文化庁との協議を重ねながら、アフガニスタン政府と作品のオーストラリアから我が国への輸送、会期前の保管、会場設営、広報や国内輸送などに関する様々な展覧会準備作業も順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究((5)－⑤)		
【事業概要】 当館がコンセプトに掲げているアジアとの交流について、関係諸国との様々な形での研究活動を進め、これを展覧会や研究報告の形などで示していく。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 原田あゆみ（特別展室主任研究員）、渡部史之（博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、望月規史（文化財課資料登録室アソシエイトフェロー）、川畑憲子（文化交流展室主任研究員）、市元壘（特別展室主任研究員）、小泉恵英（東京国立博物館学芸企画部企画課長）、末兼俊彦（京都国立博物館研究員）、藤田励夫（文化庁美術学芸課調査官）、猪熊兼樹（文化庁伝統文化課調査官）、佐藤留実（五島美術館学芸員）、續伸一郎（堺市博物館学芸課主査）、後藤恒（福岡市美術館学芸員）、山田均（名桜大学教授）			
【主な成果】 (1) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究 ・百済と倭国の交流を出土品で跡づけることができた。 ・特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」の企画や実施が大変効率的に進められた。 (2) 内蒙古所在壁画墓壁画の高精細画像データベースの構築 ・内蒙古博物院が所蔵する、内蒙古所在壁画墓壁画の高精細画像データベースの整備を進めた。 ・高精細画像データベースの展示事業への利活用のための基礎的作業を開始した。 (3) タイにおける異文化の受容と変容 ・国内にあるタイ由来文物や、タイに持ち込まれた我が国由来の作品について、両国研究者の理解が一層深まった。 ・27年の特別展のための準備が順調に進んだ。			
【年度実績概要】 (1) ・韓国及び国内の研究機関において、関連遺物を調査した。 (計5回) ・国内出土鏡と、武寧王陵出土鏡との先後関係に関する調査の結果、国内出土鏡について、従来考えられていた以上に踏み返しが進んでいるという新たな知見を得た。 (2) ・内モン自治区フフホトの内モン博物院において、関連壁画の高精細画像データを作成した。(計2回) ・赤外線を利用して、下描き線に関する明瞭な高精細画像データが取得できた。 (3) ・タイ及び国内の博物館などで調査を実施した。(計7回) 共同調査の成果を、我が国とタイで報告会の形で広く公表することができた。(場所：バンコク国立博物館、実施日：27年11月25日、タイトル：“Japan and Thailand Beyond Boundaries-Understanding Two Countries’ Cultural Relations through Antiquities and Living Museums.”)			
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 60%;"> <p>【実績値】 調査回数：14回（韓国・日本 5回 内モン古 2回 タイ・日本 7回） 研究員海外派遣数：17人（韓国 5人 内モン古 2人 タイ 10人） 研究員受入数：16人（韓国 10人 タイ 6人）</p> </div> <div style="width: 35%; text-align: center;">  <p>内モン古壁画墓剥ぎ取り壁画</p> </div> </div>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：アジアとの関係の中で我が国の歴史を考えるという目的をもつ当館に必要な研究である。 独創性：現地研究機関との緊密な協力体制のもと、国際的な視野に立った共同研究を実施している。互いに違う視点を持ち寄り、討議検討をしている点から博物館レベルとしては他にあまり例がなく卓越的な活動である。 発展性：現地研究機関との緊密な協力体制のもと、多様な研究成果を上げている。 効率性：事前の打ち合わせなどにより、現地調査は効率的に実施できている。 継続性：ここで挙げた計画以前から、関係研究機関とは研究実績があり、継続性に富んでいる。 正確性：現地研究機関がこれまでに蓄積してきた成果を適宜参照しているため、正確性が担保されている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数			
評定	B	B	B			
判定理由 調査回数：14回の調査を実施し、計画通り推移している。 研究員海外派遣数：順調に計画を実施している。 研究員受入数：計画通りに推移している。						

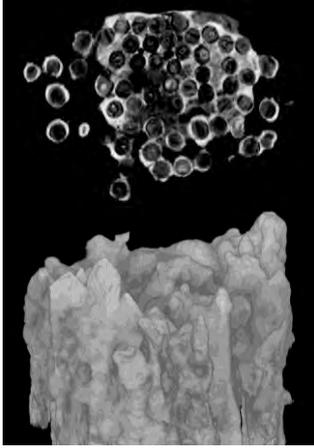
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	百済と古代日本との関係を取り上げた特別展、図録、シンポジウム、連続講演会などを通して、最新の研究成果を来館者に対して分かりやすく示すことができた。内蒙古所在の壁画墓剥ぎ取り、壁画に関する3種類の高精細画像データの集積が順調に進んでいる。国内及びタイにおける現地調査・研究報告会を通して、研究成果を共有し、今後の研究計画についても協議を深めていることから、計画に沿って順調である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は年度計画に沿って毎年所定の成果を上げた。次年度が最終年度となる内蒙古関連壁画墓剥ぎ取り壁画に関する高精細画像の集成については、次年度も継続し、展示への応用を図る。タイ関連共同研究については、協議内容に基づいて継続し、研究成果を国内及びタイにおける研究会で共有すると同時に公表していく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3)九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設(科学研究費補助金) (5)ー⑤)		
【事業概要】 九州はその地政学的特質から日本列島の窓口としてアジアや西洋の文化や技術をいち早く受け入れてきた。そのため、九州には対外交流に関連する文化財が多く残されている。本研究では、九州及びその周辺諸国・地域に所在する対外交流に係る文化財を対象とする。九州に東西南北4つの方向から流入した文化の中から代表的な事象を選んで調査を展開する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	学芸部付 伊藤嘉章
【スタッフ】 井上洋一(部長)、今津節生(博物館科学課長)、楠井隆志(展示課長)、赤司善彦(福岡県教育庁文化財保護課長)			
【主な成果】 (1)九州の特質とも言える外来文化の受容と展開における先進性や辺境性を示す文化財を対外交流文化財として位置づけ、東西南北4つの方向から流入した文化の中から代表的な事象を選んで調査を展開している。本研究期間内では、北ルート(古代を中心とする大陸との交流)及び西ルート(中世・近世を中心とするアジア・ヨーロッパとの交流)を中心に調査を展開した。 (2)各地で現地調査した文化財を必要に応じて九州国立博物館に移動して、大型X線CT、精密三次元計測機、高精細大型スキャナなどの最新鋭のデジタル計測機器を活用した科学調査を実施した。また、高精度の情報を網羅したデジタルアーカイブを新しい博物館情報として利用するために、展示への活用を計画した。 ・本年度は研究の最終年度にあたるので、本研究の総括報告書を作成した。			
【年度実績概要】 (1)北ルート・西ルートを中心にテーマを設定し、それぞれに研究を進めた。 研究テーマは、古代日本と百済の交流、元寇に関する鷹島海底遺跡出土遺物のCT調査、船原古墳・西都原古墳群出土資料のX線CT等の調査、南海産の貝の調査、公州、扶与招聘加唐島調査、長崎市内黄檗宗寺院の所蔵品調査、中近世社寺所蔵対外交流文化財の調査、近世初期における日本と海外との交流などである。 (2)調査の結果得られた知見として、長崎県松浦市鷹島の海底遺跡から発見された元寇関連遺物に関する調査については、X線CT調査を実施し、錆と泥に覆われた遺物の立体形状を明らかにした。元軍が用いた武器の中で数多く残っているのは矢束である。 従来は矢の数や矢先の形状が不明であったが、本調査によって、元軍の使った矢は殺傷能力の高い短距離用の矢であることが判明した。 ・近世琉球の船と港について、那覇市内において、近世の首里及び那覇を描いた絵図の調査を実施した。沖縄の研究者と絵図史料に関する研究会を2回開催した。 ・研究の成果は特別展「古代日本と百済の交流」と当館文化交流展示にて活用した。			
			
元軍が使用した矢束のX線			
【実績値】 調査件数 12件 収集資料数 200点 学会発表数 1件(①) 論文 1件(②) 展覧会への反映 2回 (参考値) 新聞等報道 1件			
【備考】 発表 ① 福岡県古賀市船原古墳遺物埋納坑出土資料のX線CTスキャナによる調査『日本文化財学会第31回大会研究発表要旨集』26年7月5日 論文 ② 「古代日本と百済の交流—太宰府・飛鳥そして広州・扶餘—」『古代日本と百済の交流』(赤司善彦;27年1月1日)			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-3

自己点検評価調査

4. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：九州各地には対外交流関連文化財が多く残されており、当博物館が中心となって研究に取り組む必要がある。 独創性：高精度の情報を網羅したデジタルアーカイブを構築することで、画期的な博物館情報を蓄積する。 発展性：高精度デジタル計測機器を用いた科学調査を実施して、汎用性の広い高精度の情報を網羅できる。 効率性：高精度の情報を基に文化財の保存状態、内部構造・材質技法を網羅した情報を効率的に取得できる。 継続性：対外交流文化財の基礎調査として、本研究を契機に各機関と連携して発展的に展開することができる。 正確性：高精度デジタル計測機器を用いた調査であり、世界最高レベルの信頼性を得ることができる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	収集資料数	学会発表数	論文	展覧会への反映
評価	B	B	B	B	B
判定理由 調査件数：計画通り実施できた。 収集資料数：目標を達成できた。 学会発表数：日本文化財科学会で研究発表を行うなど目標を達成できた。 論文：『古代日本と百済の交流』に論文を掲載するなど、計画通り実施できた。 展覧会への反映：特別展や文化交流展示室に反映するなど計画通り実施できた。					

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	多様な九州の対外交流文化財について12の研究テーマを設定して研究を実施している。本年度は北ルートの研究成果として特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」を開催し、国宝七枝刀や韓国武寧王陵出土品などを展示することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、当初計画に沿って、研究内容の水準を保ちながら、順調に遂行した。本年度は研究の最終年度にあたるので、特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」を開催すると共に、報告書を作成することによって目標を達成した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 中国・山東省を中心とする漆工品に関する調査研究(学術研究助成基金助成金)(5)-(5)		
【事業概要】			
<p>22年秋、中国山東省荷澤の工事現場で発見された一艘の木船から、螺鈿箱(いわゆる高麗経箱)をはじめとして、漆器、陶磁器、玉器、金属器、硬貨など117点の遺物が見つかった。本研究は、この沈没船遺物、なかでも螺鈿箱に焦点をあて、いまだ未解明である制作技法や、制作年代などについて、科学分析や伝世品との比較調査を通じて明らかにし、高麗螺鈿の歴史的な展開を捉えることを目標とするものである。</p>			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員 川畑憲子
【主な成果】			
<p>(1) 調査対象とする螺鈿箱の調査分析を、他作例と比較しながら多角的に進めることができた。 (2) 螺鈿器及び関連漆器の調査を広範囲に行うことにより、今まで知られていなかった比較作例を数多く集めることができた。 (3) 調査の過程で明らかになった新たな検討課題について、総括に向けて考察を深めることができた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>本年度は、これまでの調査をさらに進めるとともに、研究の総括に向けて調査データを整理し、考察を進めることに努めた。</p> <p>(1) 国内外に所蔵される高麗螺鈿器及び関連する漆器作品について、さらに広範囲に作品調査を行った。本年度、調査に訪れた主な所蔵先は、北京故宫博物院、個人(台湾)、個人(東京)などである。 (2) 調査では、高麗螺鈿器のみならず、時代の近い宋元漆器までも調査対象とし、当初の計画よりも多くの貴重な作品データを集積することができた。 (3) 調査データをもとに所蔵者や国内外の研究者と活発な議論を交わすことができた。このことは本研究のみならず、今後の当館の展示にも繋がる人的な交流を得ることになり、大変有益であった。また、文献資料をあらためて捜し、他の遺物や他の出土事例とも合わせて検討するなど、高麗螺鈿の制作地及び制作年代について、これまでの定説を再検討することができた。</p> <p>○本調査研究を通して得られた知見を、当館文化交流展示室における漆器展示解説等において公表することができた。</p>			
			
<p>作品調査の様子(台湾・個人)</p>			
【実績値】			
<p>調査回数 5回(国内 3回、海外 2回) 収集資料数 漆器ほか 約100点 研究者海外派遣数 2回</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：高麗螺鈿の制作技法や制作年代について検討する、必要な課題に取り組むことができた。 独創性：高麗螺鈿の初めての出土遺物であり、新規の知見を得ることができた。 発展性：調査を通して得られた知見を、展示を通して、広く一般に公開することができた。 効率性：時間的、人的、設備的に効率よく調査を進めることができた。 継続性：期間、質・内容において充実した成果を得ることができ、基礎的なデータを集積することができた。 正確性：各所蔵者の協力により、正確な調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究者 海外派遣数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：計画通りに実施することができた。 収集資料数：目標を達成することができた。 研究者海外派遣数：計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的にも定量的にも、当初の計画を達成することができた。これまで同様、作品調査をさらに進めつつ、研究の総括に向けてこれまでの調査データを整理し、設定した課題について考察を深めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、当初計画に沿って、作品調査及び検討を進めることができた。研究の成果は展示解説等で既に公表しているが、新たに報告書刊行の準備をすすめており、目標を達成したといえる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5)タイにおける異文化の受容と変容－13世紀から18世紀の対外交易品を中心として－（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（5）－⑤）		
【事業概要】 本研究は美術史的視点に立脚して、13～18世紀のタイにおける異文化の受容とその展開を探り、文化交流の実相を浮かび上がらせることを目的とする。タイにおける異文化の受容と変容を明らかにするために、交易品に着目してその関係資料を横断的に調査する。これまでに知られていた資料の理解を深め、新出資料も加えた基礎資料集成的を行うとともに、それぞれの資料について正しい評価を行う。なお、本研究はタイ文化省芸術局と共同で行い、その成果は九州国立博物館と同芸術局の学術交流事業の研究につながっていく。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 原田あゆみ
【スタッフ】 小泉恵英（東京国立博物館学芸企画部企画課長）、末兼俊彦（京都国立博物館学芸部企画室研究員）藤田励夫（文化庁美術学芸課調査官）、猪熊兼樹（文化庁伝統文化課調査官）、佐藤留実（五島美術館学芸員）、續伸一郎（堺市博物館学芸課主査）、後藤恒（福岡市美術館学芸員）、山田均（名桜大学教授）、望月規史（九州国立博物館文化財課アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 ・前年度に続き、タイ及び日本においてタイ関係交易資料の調査を実施した。 ・日タイ双方においては個人コレクター所蔵資料を含む調査研究を行い、基礎データを強化できた。特に在日本タイ資料についてはタイ側の協力により新しい視点から見直すための資料情報を得ることができた。 ・タイにおいてセミナーを開催し、調査研究について発表し、その成果について現地に還元することができた。			
【年度実績概要】 (26年)			
<ul style="list-style-type: none"> 6月12日～18日 タイ関係交易品について堺市博物館、京都国立博物館、大谷大学博物館、佐賀県立九州陶磁文化館、松浦史料博物館、福岡市美術館にて調査及び情報交換会を行った。 6月26日～7月2日 横浜・三会寺、名古屋・日泰寺、五島美術館、東京国立博物館において、在日タイ文化財について調査を行った。大谷大学に所蔵されているタイから日本に送られた貝葉経包裂には西洋更紗も含まれており、端物裂本帳の西洋更紗と比較することで資料について再評価を行うことができた。 8月16日～21日 バンコク国立博物館、アユタヤ・チャオサームプラヤー国立博物館等において日本刀を含む外来の金属工芸の調査を実施。タイにおいて日本刀は、その束や鞘を美しく装飾し上層位の持物として伝わっただけではなく、実際の戦闘に用いられたのち、威信財として刀身そのものが彩色され祀られていた例も確認できた。 11月22日～24日 バンコク国立博物館、バンコク都内王宮関係博物館、個人コレクションの調査を行い、現地研究協力者からタイにおける資料の位置づけ、来歴、関係資料に関する情報を得た。 11月25日 バンコク国立博物館において共同調査研究に係る発表を行った。セミナーは関係者含む100名を超える多くの参加者を得た。 11月26日 現地共同研究者と本研究を基盤に2017年開催を目指した展覧会についての協議を深めた。 27年1月26日～2月3日 文化省芸術局にて展覧会協議、バンコク国立博物館ほか古代沈没船遺跡において交流史に関する調査・意見交換を行った。 27年3月21日～3月25日 九州国立博物館、吉野ヶ里遺跡、東京国立博物館等において調査・意見交換を行い、次年度共同調査等の協議を行った。 			
 <p>タイ交易品調査 堺市博物館</p>  <p>タイ美術品調査 五島美術館</p>			
【実績値】			
調査回数	6回（海外：3回 国内：3回）		
調査報告会回数	2回（海外：1回 国内：1回）（①～③）		
【備考】 調査報告会（共同セミナー 11月25日：バンコク国立博物館）			
① 原田あゆみ・小泉恵英 “Intercultural and Comparative study of Buddhist narrative art”			
② 望月規史 “Acceptance and Transformation of Japanese Sword in Siam”			
③ 原田あゆみ “A subsequent report on investigation about Thai arts in Japan”			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：29年の日タイ修交条約130周年記念事業特別展開催準備として、公共性、国際性、緊急性、公開性に優れている。 独創性：従来確認されていなかった日本とタイに残る両国の文化財に関する具体的な調査をさらに進めることができた。 発展性：日タイ両国の研究者による共同調査と情報交換や発表会により、研究がさらに進展している。 効率性：事前の打ち合わせにより、短期間に多くの成果を効率よくあげている。 継続性：本事業は19年から始まった長期間の共同事業で、24年から改めて学術交流事業として位置づけられた。 正確性：両国における研究成果の蓄積を適宜参照することで、内容の正確性が担保されている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査報告会回数				
評定	B	B				
判定理由 調査回数：国内外合わせて6回の調査回数を確保でき、当初の予定を達成した。 調査報告会回数：目標通り調査報告会を2回行うことができ、日タイ両国の研究者が、研究成果を共有することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	学術交流事業として24年から新たにはじまった本事業は本年が3年目となる。本年度も、日タイ両国の研究協力者と十分な連携をとることができ、現地調査において多くの新知見を得た。また日タイ両国の研究者が一堂に会して、意見交換を行うことで、情報共有ができた。信頼関係も深まっているため、今後も調査は順調に進むものと思われる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日タイ両国における現地調査と意見交換など、予定していた事業は順調に実施できており、29年の展覧会（九州国立博物館から東京国立博物館へ巡回予定）実施に向けての準備も順調である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（⑤－⑤）		
【事業概要】 本研究は、中世～近世初期における対馬宗氏領国の特質を、日本列島の政治史、とりわけ中央政権との関連性のなかで連続的にとらえ、もって日本・朝鮮両国の国境地域に存立する宗氏領国の主体性・従属性のありかたを明らかにしようとするものである。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 荒木和憲
【スタッフ】			
【主な成果】 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館及び神宮文庫において、古文書・経典の調査を計4回実施した。 ・中世～近世初期の対馬の古文書の収集（撮影）・整理（データベース化）を行うとともに、対馬所在の大蔵経の印刷・将来年代等に関する知見を得ることができた。 ・前年度に引き続き、中世松浦地域に関する史料の収集（刊本めくり作業）・整理（データベース化）を行った。			
【年度実績概要】 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館において、中世～近世初期の古文書集というべき宗家判物写の調査を行った（7月23日～24日）。調査対象の史料は、全丁のカラー写真を撮影し、本研究のための基礎データを充実させた。 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館において、対馬所在の高麗版大蔵経、及び宗家判物写の調査を行った（8月20日～22日）。 ・神宮文庫において、中世の伊勢参宮帳（写本）の調査を行った（11月21日～22日）。 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館において、高麗版大蔵経の調査を行い、印刷年代・将来年代を明らかにするための基礎的データを得た（12月16日～17日）。			
			
論文掲載図書2点			
【実績値】 調査回数 4回 調査史料数 60点 収集図書数 105点 発表論文数 2本（①～②）			
【備考】 ① 荒木和憲「応永の外寇」（高橋典幸編『戦争と平和』（生活と文化の歴史学5）竹林舎、26年10月） ② 荒木和憲「中世対馬における朝鮮綿布の流通と利用」（佐伯弘次編『中世の対馬』勉誠出版、26年12月）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国際交流史研究は近年活発化している分野である。 独創性：中世～近世初期の宗氏領国・日朝交流を連続的に把握する研究は他にない。 発展性：日朝交流史研究にとどまらず、広く国際交流史研究に資するものである。 効率性：通常業務の繁忙のため本研究への時間的投資が制約されたが、効率的な研究の遂行に努めた。 継続性：制約された時間のなかで、最大限の成果を収めた。 正確性：正確なデータに基づくデータベースを作成した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査史料数	収集図書数	発表論文数		
評定	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：所期の目標を達成した。 調査史料数：所期の目標を達成した。 収集図書数：必要な図書を必要数収集した。 発表論文数：順調に研究成果を公表した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初計画通りの調査成果を収めることができた。 次年度は本研究の最終年度であるため、調査結果の整理を完了させ、研究成果のより一層の公表に努める。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、日本列島と朝鮮半島との交流の窓口であった対馬をフィールドとする調査研究であり、中期計画4-(5)-⑤「アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究」の趣旨に適うものである。順調に成果を挙げており、3ヵ年計画の最終年度となる次年度は、当該調査・研究の集計を図る。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 契丹壁画墓の集成と公開-唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解-(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)-⑤)		
【事業概要】 唐滅亡後の東アジアにあって、中国北方に覇をとらえた遊牧民族国家契丹（遼）は、中国文化や仏教を継承する一方、契丹文字を創出するなど文化的な自立を示している。こうした契丹国家形成における重層性を考えるのに、当時の社会構造を視覚的に示す、内蒙古自治区内所在の契丹壁画墓壁画を研究・記録/集成し、公開のための環境整備と新しい展示手法を検討する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 今津節生（博物館科学課長）、市元墨（特別展室主任研究員）、畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）			
【主な成果】 (1)・内蒙古自治区フフホト市の内蒙古博物院で、内蒙古自治区所在の壁画墓からはぎ取られた壁画資料について、高精細画像データ（通常の画像、斜光線下の画像及び赤外線画像の三種）を作成した。 ・内蒙古自治区エチナ旗の黒水城遺跡で、契丹と同様、独自の文字を作り出した西夏の文物について現地調査を行った。 (2) 契丹以前の五代の壁画墓資料についても高精細画像データを作成したため、契丹壁画の特性について比較する良質の材料が入手できた。 (3) 通常光下、斜光線下及び赤外線下の3種類の画像高精細画像データを比較しながら、技法を含む研究を進めている。			
【年度実績概要】 (1)・内蒙古自治区フフホト内蒙古博物院において、内蒙古自治区所在壁画墓剥ぎ取り資料の高精細画像データを作成した。(26年11月8～11日) ・内蒙古自治区エチナ旗黒水城遺跡及び博物館にて、西夏文物の調査を行った。(26年7月27日～8月3日) (2)・契丹国が制定した契丹文字に相当する西夏文字文書などの、西夏文物に関する調査を行い、かつての唐帝国周辺地域において見られた独自の文化形成に関する知見を得た。 ・内蒙古所在の壁画墓の剥ぎ取り壁画について、通常光、斜光線及び赤外線を利用した高精細画像データを作成したため、下描きの墨線と最終的な仕上げ画面との構図上の差異など、技法を含む様々な観点から研究する条件が整いつつある。 (3) 今回作成した膨大な高精細画像データを統合し、一般的なパソコンでも取り扱えるようなデータ形式に変換・整備した。五代壁画墓に関する写真データを利用して、パソコン上で内部空間を再現するデモプログラムを作成し、次年度以降の当館展示室内における応用について検討する条件が整った。			
【実績値】 海外出張回数 2回 出張人数 延べ 5人 取得データ数 300点（切り取り壁画 約40点について高精細画像データを作成した。） (参考値) 新聞報道 1件 (①)			
【備考】 ① 新聞報道 西日本新聞社 27年1月7日朝刊 「内蒙古の壁画 画像保存 九州国立博物館 10～12世紀の地下墳墓 契丹文化 再評価へ」			



高精細画像データ作成作業風景

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性	独創性	効率性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：中国内蒙古博物院との共同研究という国際性に富んでおり、同院と高精細画像データを共有している。 発展性：高精細画像データを博物館における展示に活用することを前提としており、応用性に富んでいる。 継続性：内蒙古博物院とは、本研究以前から学術文化協定を結んでおり、長期間に及ぶ協力関係にある。 正確性：フラットベッドスキャナーを利用しているため、画像データにレンズ収差から生ずる歪みがなく、正確である。 独創性：剥ぎ取り壁画の現状について3種類の高精細画像を集成している点で、独創的である。 効率性：事前の打ち合わせにより、現地での高精細画像データ作成を短期間で行っており、効率性に富んでいる。						

2. 定量的評価

観点	海外出張回数	出張人数	取得データ数			
評価	B	B	B			
判定理由 海外出張回数：計画通り実施できた。 出張人数：計画通り実施できた。 取得データ：前年度の通常光条件下における高精細画像データに加えて、斜光線と赤外光という新たな種類のデータ2種を含む合計3種類の高精細画像データを取得・整備することができたため、当初予定以上の成果が得られた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	壁画作成の準備から、構図上の変化や仕上げに至る様々な段階について研究できるよう、合計3種類の高精細画像データの集積及び整備作業を継続した。次年度は、契丹壁画墓剥ぎ取り壁画に関する、3種類の高精細画像データを作成できる見込みであり、順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高精細画像データの作成及び集積作業は順調に進んでいる。また、壁画墓内部空間を、一般的なパソコン画面上で再現するデモプログラムを作成できており、次年度以降、当館展示室内において実用化できる可能性が高くなっており、順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 水中遺跡の保存活用に関する調査研究（文化庁受託事業）（(5)-⑤）		
【事業概要】	我が国は、海外との交流によって歴史文化を育んできた。この直接の担い手が船であるが、近年も長崎県鷹島神崎の海底遺跡から沈没した元寇船が発見されるなど、海中には多くの船体や遺跡が存在すると思われる。こうした水中遺跡は、海外との交流を語る貴重な文化遺産であるが、水中という特殊な立地条件にあるため、その調査や保存活用の手法が確立されていない。そこで水中遺跡の保存活用について国内外の取組みについて調査研究を行う。		
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】	三輪嘉六（館長）、西村栄造（副館長）、井上洋一（学芸部長）、臺信祐爾（企画課長）、志賀智史（保存修復室主任研究員）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、進村真之（展示課情報サービス室主任研究員）、赤司善彦（福岡県教育庁文化財保護課長）		
【主な成果】	海外の水中遺跡についての取組状況を取りまとめるために、現地を訪問し調査を行った。 <ul style="list-style-type: none"> 本年度はデンマーク・スウェーデンを訪問して当該国の機関を調査した。また、日本の水中遺跡の探査に必要な機器の性能を把握するために、鹿児島県奄美大島宇検村倉木崎海底遺跡の調査を実施した。 本調査・研究の成果は我が国の海事文化財研究を推進する上で貴重な基盤事業となっている。また、水中遺跡の魅力をどのように市民に伝えるか、魅力的に展示するのかという課題についても、デンマークのヴァイキング博物館やスウェーデンの WASA 号博物館が参考になった。さらに、海底遺跡の魅力を臨場感豊かに伝える手段として 8K 映像を撮影した。 		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> 諸外国の水中遺跡の調査と保存活用に関する取組み状況調査 1回 主にヨーロッパ地域を対象として現地調査や、関係者を招聘する等、水中遺跡の一連の課題を調査した。 デンマーク・スウェーデン 現地調査 26年8月8日～14日 27年1月24日～2月5日にデンマーク国立博物館保存科学担当者1名を招聘 元寇船が発見された松浦市を訪問し、沈没船を活用した博物館のあり方について協議した。 水中文化遺産の調査と保存について長崎・福岡・東京で協議した。 国内の水中遺跡の把握調査 6回 水中遺跡の発見は主に漁で引き揚げられる遺物とその契機となっている。その実態について調査した。 現地調査 6回 長崎県松浦市鷹島町 26年5月21日、7月15・16日、9月30・10月1日 鹿児島県大島郡宇検村 26年6月11・12日、10月17～28日 沖縄県那覇市 26年12月6・7日 倉木崎海底遺跡の探査 水中遺跡の探査に必要な機器の性能を把握するために鹿児島県大島郡宇検村倉木崎海底遺跡の調査を実施した。 国外関連資料の収集 ヨーロッパを中心に、主要な海外の諸機関を対象にして、課題についての印刷物の中から必要なものを翻訳している。 オランダ、英国、デンマーク、スウェーデンの文献。 博物館での水中遺跡の活用手法（展示）の調査検討・展示の試み 海底遺跡の魅力を臨場感豊かに伝える手段として 8K 映像を撮影した。 		
			
	倉木崎海底遺跡の水中磁気探		
【実績値】	海外調査 1回 国内調査 6回 海外招聘 1回 （参考値） 文化庁との打ち合わせ 4回 発表件数 1件(①) 報告件数 1件(②)		
【備考】	発表 ① X線CTスキャナを活用した出土木製品の構造解析に係る基礎研究Ⅱ - 保存処理後の木製品内部における処理薬剤及び水分の分布について - 『日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集』、(26年7月4日) 報告 ② 『水中遺跡の保存活用に関する調査研究』 (27年1月31日)		

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-8

自己点検評価調書

5. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：鷹島海底遺跡で2隻目の船体が確認され、国民的な話題となっている。 独創性：水中遺跡の国内外の取組状況の把握はこれまでにない貴重な成果である 発展性：水中遺跡の調査研究のガイドライン作成につながる研究と期待できる。 効率性：翻訳業務等、委託できるものは外部に業務をお願いするなど、コストを意識した業務遂行となった。 継続性：ヨーロッパの主な水中遺跡に取り組んでいる国の状況を把握することができた。 正確性：各国のデータを刊行物によって基礎資料を作り、実際に訪問して関係者と面談したことで、正確かつ豊富な内容を収集することができた。						

2. 定量的評価

観点	海外調査	国内調査	海外招聘	発表数	報告数
評定	B	B	B	B	B
判定理由 海外調査：計画通り実施することができた。 国内調査：計画通り実施することができた。 海外招聘：予定通り実施することができた。 発表数：計画通り実施することができた。 報告数：計画通り実施することができた。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究によって我が国の水中遺跡のこれからの取り扱いを考えるための基礎資料を集積することができた。次年度はアメリカ等の現状把握に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、計画に沿って順調に遂行している。次年度はまとめの報告（中間報告）を刊行すると共に、引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続し、広く研究成果を普及させたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究(5)－⑤		
【事業概要】 百済・新羅・高句麗の三国時代の文化を中心とした朝鮮半島の文化財について、日韓共同で考古分野を中心に美術・工芸等の分野での調査研究を実施するものである。現地で実物資料を実見することを基本にするが、同時に我が国に将来された文化財を当館のX線CTなどの科学機器を利用した分析をすすめる。この成果は、26年度に開催予定の特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」、ならびに「日本発掘―発掘された日本列島2014―」で活用する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室長 河野一隆
【スタッフ】井上洋一(学芸部長)、今津節生(博物館科学課長)、河野一隆(文化交流展室長)、市元壘(特別展室主任研究員)、楠井隆志(展示課長)、岸本圭(展示課展示調整室主任研究員)、進村真之(展示課情報サービス室主任研究員)			
【主な成果】 ・ 展覧会の出陳作品調査と併せて、百済と倭国の交流を示す出土資料を実見し、調査することができた。 ・ 画像だけでは分かり難い作品コンディションや、細部の構造について、調査・検討を加えることができた。また、所蔵機関スタッフとの交流の中で、歴史背景をはじめとする付帯情報を入手することができた。 ・ 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」ならびに「日本発掘―発掘された日本列島2014―展」の展示企画や図録製作に活用することができ、準備作業を効率的に進めることができた。			
【年度実績概要】 ・ 関東や関西の百済文化と関連の深い伝世品や出土品について、実見を進めることができた。特に、当館所蔵の武寧王陵出土の獣帯鏡の3次元画像解析など、当館の最新分析機器を活用した新知見を得ることができた。また、韓国国内でも扶餘王興寺や公州・武寧王陵などの資料実見調査を、秋に実施した。 ・ 獣帯鏡の3次元画像解析調査の結果では、従来よりも踏み返しが進んでおり、武寧王陵出土鏡との製作の先後関係を再検討するデータが得られた。また、韓国国内出土品では、コンディションの確認ができ、輸送や展示方法等の企画を効率的に進めることができた。 ・ 調査の結果、作品カタログの色校正や執筆に係るコストを大幅に軽減することができた。また、展覧会の企画を効率的に進めることができた。			
【実績値】 調査回数 5回(韓国との共同調査) ・ 韓国国内での調査2回 ・ 日本国内での調査3回 X線CT分析 3件(宮崎県内出土考古資料・大分県出土考古資料・福岡県内出土考古資料) 刊行物 1件(①) 展示への反映 2回			
【備考】 ① 特別展図録「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」(27年1月1日発行) (執筆者:井上洋一・楠井隆志・岸本圭・進村真之・小嶋篤・市元壘・河野一隆)			



高井田山古墳出土品調査

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-9

自己点検評価調査

6. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展覧会準備に直結した形で進めることができた。 独創性：他に類のない企画のため、独創性は充分にある。 発展性：展覧会をさらにより充実した形で進めることのできるものである。 効率性：資料の実見、研究討議を行ったことで、展覧会・図録の設計や製作の進行に遅滞を生じることなく推進することができた。 継続性：学術文化交流協定を締結した韓国側の姉妹館との共同調査を今後も推進するための展示・研究を今後も継続していくための実績を積むことが出来た。 正確性：実見したことで正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	X線CT分析	論文数	展示への反映		
評定	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：展覧会の開催・図録執筆のための調査として十分な回数であるため。 X線CT分析：日韓考古資料の比較検討のための、十分な分析データを得ることが出来たため。 論文数：研究成果を、展覧会図録の形で1件公表することができ、目標を達成した。 展示への反映：調査・研究結果を展覧会に反映させるという形で2回実施でき、所期の目標を達成した。 展覧会内容はもちろん、図録の内容にも反映させることができ、充実したものとなったことは、本展図録の購入率が5%に迫る近年稀に見る売り上げを記録したことからも、明らかである。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会出陳作品について、韓国内における実見調査や韓国人研究者と活発な意見交換を行うことができ、効率的な準備作業を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度推進、実現した展示・研究活動を足がかりに、韓国側の調査・研究機関、博物館との緊密な連携を進め、交流を推進することが出来た。特に、次年度も展示事業を抱えており、そのための足がかりを着実に積み重ねることが出来た。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) VR技術を活用した装飾古墳アーカイブに関する調査研究(5)⑤		
【事業概要】九州を代表する文化財である装飾古墳に対して、当館では開館以来、実際に計測して作成したVRデータを蓄積してきた。これをより身近でインタラクティブに活用するために、AR技術と融合させて、HMDで楽しむことが出来るコンテンツを作成する。さらに、それをより良いものに高めていくための実証実験を、文化交流展示室における展示企画として行う。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展示室長 河野一隆
【スタッフ】			
【主な成果】			
<p>(1) 桂川町立王塚装飾古墳館で、王塚古墳石室模型を撮影し、実際の石室の装飾文様が浮かび上がるようなARコンテンツを作成した。</p> <p>(2) 今まで蓄積した装飾古墳VRデータを、映像コンテンツ以外で活用するため、様々な実験的な取り組みを行った。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 王塚古墳のVR(バーチャル・リアリティ)データを、映像以外で活用するために、ARの技術を活用したHMD(Head Mount Display)を考案し、スマートフォンのジャイロを使ったインタラクティブな装飾古墳の見せ方を試みることができた。</p> <p>(2) 王塚古墳以外の古墳でも、同じような試みをすべく、作成方法を検討し、またデータ配信についても各方面から検討を進め、VRデータをARの中で活用する見通しを得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回の試みについては、27年2月3日から文化交流展示室で開催した企画展示「進化する博物館Ⅲー最新技術でよみがえる九州の装飾古墳」の中で、実証実験を兼ねた展覧会を行い、そのヒアリングを反映しつつ、より精錬された形へとまとめていきたい。 <p>○27年3月14日に開催した「装飾古墳がやってきたーe-Heritageへの招待ー」では、報告会と講演会を開催し、当館が開館以来推進している情報技術の調査研究・展示への活用の方向性を「e-Heritage」という形で示す事ができ、世界の潮流である文化財のデジタルアーカイブに大きな前進を示すことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> また、「e-Heritage」の推進と関連して、中国科学院から招聘した研究者と文化財デジタルデータの研究面での展開の可能性や、展示への活用密接な検討、討議を行なうことができた。その結果、日中間でのデジタルアーカイブの推進に向けて萌芽的な課題の整理を行うことが出来た。 			
			
文化交流展示室「進化する博物館Ⅲー最新技術でよみがえる九州の装飾古墳」会場風景			
【実績値】			
海外共同調査数：1回			
海外研究者招聘・受入数：1人			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展覧会準備に直結した形で進めることができた。 独創性：他に類のない企画のため、独創性は充分にある。 発展性：展覧会をさらにより充実した形で進めることのできるものである。 効率性：今まで当館が取り組んできた九州の装飾古墳プロジェクトの成果を活用することが出来たため、短時間で完成度の高い成果を達成することが出来た。 継続性：本研究では開館時から取り組んでいる装飾古墳のデジタルアーカイブ事業の延長線上に位置づけられるものであり、大きな成果を得ることが出来た。 正確性：実見したことで正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	海外共同調査数	海外研究者招聘・受入数				
評定	B	B				
判定理由 海外共同調査数：e-Heritage という世界的に推進されている文化財のデジタルアーカイブ規格に則ったコンテンツの製作のために、海外研究者・機関から指導を得、展覧会、研究会（シンポジウム）を各1回開催し、目標を達成した。 海外研究者招聘・受入数：e-Heritage を推進している中国科学院から研究者1名を招聘し、コンテンツを実見、高評価を得ると共に今後の展開の方向性について、討議することが出来た。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、e-Heritage という世界標準化が進められている規格に基づいて発信したものであり、製作されたコンテンツは博物館の世界では初の試みであり、大きな反響と高評価を得ている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は九州の装飾古墳の当館が開館以来推進してきたデジタルアーカイブ事業の延長線上に位置づけられるものであり、かつその成果は今までに例の無い達成である。今後は、本年度示された活用可能性を広げ、野外博物館等、地域連携に立った博物館活動の展開に寄与したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 平成 20 年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への継続的かつ発展的な調査研究((5)－⑤)		
【事業概要】 九州・沖縄における伝統工芸作家の創作活動についての継続的調査研究である。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。これまで調査を行ってきた作家の調査を継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 井上洋一
【スタッフ】 原田あゆみ（企画課特別展室主任研究員）、池内一誠（交流課教育普及室主任研究員）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、望月規史（文化財課資料登録室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 (1) 染織工芸（久留米絣、久米島紬）、芦屋釜鋳造工房、津屋崎人形工房において作品及び制作方法や制作用具について調査を行った。 (2) 上記の調査に伴い、体験プログラムに応用する方法が確認できた。 (3) 次年度実施する体験プログラムの企画に調査結果を盛り込むことが可能となった。			
【年度実績概要】 (1) ・久米島紬工房調査：26年5月30日（久米島紬の制作技法について） ・久留米絣工房調査：26年6月5日（最近の作品の特徴、技法について、染織体験の方法について）；11月29日（絞り技法を用いた染織体験プログラムの手法について） ・芦屋釜鋳造工房：26年7月24日及び12月17日（芦屋釜及び梵鐘の鋳造方法について） ・津屋崎人形工房：26年12月17日（津屋崎人形の制作方法について、型の時代的変遷について）； ・工芸の全体的な傾向について調査（27年2月6日）  津屋崎人形の型について調査中 (2) ・染織技法の調査を通して、年少者も参加できる染織体験プログラム開発へのヒントが得られた。また、絞り技法を用いた染織法の調査において、幾何学文様の染め抜き技法についての知見を得た。 ・鋳造方法の調査において、鋳造方法の基本を利用した鋳造体験プログラムの手法についての知見を得た。 ・津屋崎人形の制作方法の調査において、伝統的な意匠、彩色素材及び手法等についての知見を得、体験プログラム、郷土人形展示への応用に関する見通しが得られた。 (3) ・染織体験の調査で得た知見を基に、当館でアウトリーチプログラムを実施し、100人程度の参加を得た。また、製織方法の基本を伝えるプログラムの調査を通して、次年度のアウトリーチプログラム開発のための新たな材料を準備することができた。 ・次年度のトピック展示（「芦屋鋳物師（仮称）」）において予定している教育普及事業の実施計画を立てることができた。 ・津屋崎人形工房の調査において、ボランティアによる郷土人形の展示活動を推進するうえでのテーマの設定方法、及びボランティアによる体験プログラム運営にむけての手がかりを得た。次年度の展示活動、及び体験プログラム運営に活用できる。 ○ 芦屋釜鋳造工房での調査成果を踏まえ、筑前・芦屋鋳物師が製作した現存する全ての鱧口をはじめ、九州と関わりの深い梵音具（鐘・雲版・鱧口）の特集展示を行った。 ・九州における中世の雲版を全点調査し、そのうちの4点をCT調査及び三次元実測を行い、製作技法を明らかにした上で展示した。 ・展示室内に、芦屋町立芦屋釜の里に所属する鋳物師が22年度に製作した鐘を懸垂し、来館者に実際に鐘を撞いてもらう体験コーナーを設けた。			
【実績値】 調査回数 7回 作家に関する調査6回（久米島紬、久留米絣×2、芦屋釜鋳造×2、津屋崎人形） 全体的な状況調査1回（日本伝統工芸展） 展示への反映 1件 特集展示「『鳴りもの』の世界—九州ゆかりの梵音具を中心に」（26年11月18日～27年2月15日）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名

処理番号

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：作家・工房の調査を通じて、各工芸の現時及び過去との比較を調査することができ、適時性は高い。</p> <p>独創性：通常工芸の調査は作品本体の調査が主であり、体験プログラムの開発まで視野に入れた調査には独創性がある。</p> <p>発展性：作品調査のみならず、技法を応用した体験プログラムの開発につなげているため、発展性は高い。</p> <p>効率性：限られた予算・時間のなかで、各研究員が計画的かつ効率的に調査を行った。</p> <p>継続性：伝統工芸展開催以降、長期にわたる調査研究を継続できている。</p> <p>正確性：技術的な詳細について、作家本人からの聞き取り調査を実施したことにより、伝統工芸を支える正確な技法を把握することができた</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	展示への反映				
評定	B	B				
<p>判定理由</p> <p>調査回数：染織・金工・塑造技法に関する調査を予定通り実施できた。</p> <p>展示への反映：調査研究の成果を、次年度の展示及び教育普及事業へ反映できる具体的な目処が立った。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	体験プログラムを考えるにあたり、伝統工芸作家から聞き取りした技法を年少者にどのようにかみ砕いて伝えるか、また体験してもらうにあたり、どの程度まで簡略化できるかといった観点から、検討できた。また「鳴りものの世界」に、調査の成果を反映させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	九州・沖縄における伝統工芸作家の創作活動について継続的な調査が順調に実施されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)和泉市久保惣記念美術館の収蔵品の調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】			
和泉市久保惣記念美術館が所蔵する中国古代青銅器コレクションを中心に、古代中国青銅器の鑄造技術の解明のためにX線CT、3Dデジタル、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて科学調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】			
井上洋一（学芸部長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は帯鉤金具を中心に計測画像から、青銅器の内部構造について非接触・非破壊で青銅器の構造を解析した。 ・殷周青銅器では取っ手などの立体造形の接続状況に着目して解析を行った。その結果、無垢でつくるものと中子を挿入して金属湯をまわすものの2種類が存在することを確認した。また、中子と外型とを固定するためのスペーサーについても具体的な位置を確認することができた。この研究成果は久保惣記念美術館の展示として生かすことができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・当館にて久保惣記念美術館所蔵品の科学的調査を行った（26年9月）。 ・本年度の調査では、殷周青銅器を対象として、肉眼観察と共に画像解析を実施した。殷周青銅器では青銅器本体から伸びる立体造形の接続状況に着目してデータ解析を行った。その結果、全て無垢でつくるものと中子を挿入して金属湯をまわすものの2種類の技法が存在することを確認した。また、中子と外型とを固定するためのスペーサーについても具体的な位置を確認することができた。このスペーサーを中心に蛍光X線による非破壊分析を行った。その結果、スペーサーに使用された金属は、わずかに銅の成分比率が高い金属を使用していることが確認できた。 ・青銅器の構造に関する非破壊的な調査研究によって、青銅器の製作技法について新知見を得た。 			
			
和泉市久保惣記念美術館所蔵 爵の三次元			
【実績値】			
調査回数 2回			
分析点数 8点			
発表数 2件（学会研究会発表数 1件（①）、論文1件（②））			
【備考】			
学会研究会等発表			
① 「X線CTを核にした三次元計測による博物館資料の活用と連携」（26年12月20日）			
論文			
② 「X線CTスキャナと3Dデータを応用した文化財調査・研究・展示への活用」『三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究』（27年3月31日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-12

自己点検評価調査

7. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国内・海外の研究者から注目を集めた。特徴ある博物館との連携研究として先駆的な研究である。 独創性：中国青銅器の構造研究に非破壊的手法を本格的に導入した最新の研究である。 発展性：調査資料の増加により世界に例のないデジタルアーカイブに発展している。 効率性：従来に比較して短時間でデータを取得できるために、時間的投資、人的投資が少ない。 継続性：X線CTは文化財の内部構造を非破壊で三次元的に調査できる唯一の方法である。 正確性：0.1mmの精度で記録することができ、正確である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	分析点数	発表数			
評定	B	B	B			
判定理由 調査回数：計画通り実施することができた。 分析点数：できうる分析は全て終了している。 発表数：計画通り実施することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究に使用している調査研究機器は、世界的に最も優れた装置の一つとしてすでに高く評価されている。大阪・和泉市久保惣記念美術館との連携研究の他に中国古代青銅器の著名なコレクション（住友コレクション）を有する泉屋博古館との共同研究の結果をまとめている。その成果は中国科学院との連携研究によって中国国内で研究成果を発表した。本年度をもって調査は終了するので、今後は双方で蓄積したデータの活用を図って行きたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では、文化財を外部の博物館から借用して展示することが多いので、展示借用の際に、当館の最新機器を用いて科学機器による共同研究を進めている。これまでの研究協力において、広く国内外の博物館や研究機関と共同研究が進んでいる。久保惣記念美術館との連携研究は報告書をもってひとまず終了するが、今後さらに他館とも連携を進めて共同研究を実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 中世大般若経の史料学構築に向けての基礎的研究 ((5)-(5))		
【事業概要】 日本中世の大般若経に関する資料を収集し、日本史研究に資する。このため、未翻刻史料を含む諸史料を広く調査するとともに、主要な大般若経の調査・展示を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室アソシエイトフェロー 渡部史之
【主な成果】 (1) 翻刻史料及び未翻刻史料を広く調査し、中世大般若経に関する資料を収集した。 (2) 前年度に引き続き、中世大般若経に関する基礎資料の収集を進めることができた。また、これにより、大般若経の果たした歴史的役割の変遷を跡づけることができた。 (3) 大般若経の果たした歴史的役割の変遷についての知見を展示に反映することができた。			
【年度実績概要】 (1) 刊行済みの翻刻史料に加え、未翻刻史料を含む諸史料を広く検索し、中世大般若経に関する基礎資料を収集した。 (2) 未翻刻史料にまで調査対象を拡大して、中世大般若経の基礎資料の収集を進めることができた。また、これにより、大般若経の転読など、古代から中世に至る大般若経が果たした歴史的役割について、その変遷を跡づけることができた。 (3) 未翻刻史料を含む諸史料の調査により得られた大般若経が果たした歴史的役割の変遷についての知見をもとに、より充実した解説を執筆することができた。			
			
「鎮護国家と仏教」の展示風景			
【実績値】 資料収集 500点 展示への反映 1回(①)			
【備考】 展示 ① 展示名「鎮護国家と仏教」、展示期間：27年1月6日～3月1日、展示場所：文化交流展示室 大般若経の展示を実施した。			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-13

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：現在、大般若経については個別研究が盛んであり、本研究はこれらを集大成するものである。 独創性：同様の研究は他にないため。 発展性：基礎資料の収集及びそれらの詳細な分析により、大きな発展が期待できる。 効率性：未翻刻史料の画像を先にまとめて収集することにより、資料収集を効率的に進めることができた。 継続性：未翻刻史料を含め、質量ともに十分な資料を収集することができた。 正確性：調査対象を未翻刻史料にまで拡大することで、中世大般若経に関する基礎資料を精密に収集した。						

2. 定量的評価

観点	資料収集	展示への反映				
評定	B	B				
判定理由 資料収集：未翻刻史料を含む諸史料について、関連資料を多く収集することができた。 展示：予定通り、展示することができた。						

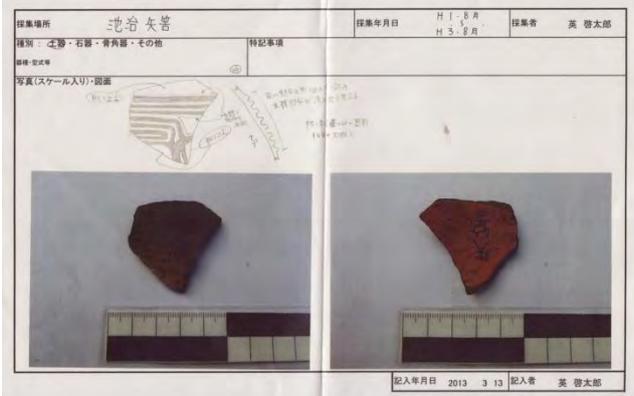
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大般若経の個別研究が盛んに行われるなか、前年度に引き続き基礎資料の収集を着実に進めることができた。また、それらの調査結果を踏まえた展示を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り調査が実施され、基礎資料の収集を進めることができた。今後、これらの分析を更に進めることにより、研究の進展を図るとともに、その成果を今後の大般若経の展示内容に反映させることが可能である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14)九州南島の交流史に関する調査研究(5)-⑤)		
【事業概要】	九州の対外交流の特質を考える上で、奄美・琉球等の南島は大変重要な地域と位置付けられている。とりわけ奄美地域の縄文文化は、九州本土と同系統と位置づけられる。しかし、相対的な様相が異なることも事実である。従って、当該地域の縄文土器のあり方を調査・研究することは、南島全体の縄文時代の交流を知る手がかりとなる。		
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】	水ノ江和同（文化庁文化財部記念物課）		
【主な成果】	前年度に調査を行った徳之島と喜界島の個人所蔵の縄文時代の土器・石器について、外部の専門家を交えて詳細な検討を行なった結果を、各調書に纏めた。このうち、特に重要であった喜界島の土器について論文に纏め、九州と南島に深い交流があったことを明らかにすることができた。		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度作成した調書 195 枚に対し、観察所見を記載した。 ・調査結果のうち、特に重要と考えられる喜界島の土器について考察を加えた。南九州の土器との共通性が多い点から交流が活発であったことが判明した。一方で喜界島独自の要素も認められ、これらの特徴が南島一帯でどの程度の広がりを持つかも含め、今後さらに検討が必要である。 		
			
	観察所見を記載した調書		
【実績値】	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度作成した調書 195 枚（土器 135・石器 6・陶磁器 29・貝製品 7・陶器 6・骨 12）への観察所見の記載 ・論文作成 1 件(①) 		
【備考】	論文		
	①水ノ江和同鹿児島県喜界島採集の縄文土器に関する考古学的位置づけ—英啓太郎コレクションから— 『九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設』 科研費基盤研究A報告書（研究代表者：伊藤嘉章）（27年3月）		

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-14

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本文化の成立を考える上で、南島ルートの起点の研究は必要である。 独創性：奄美大島以外の喜界島や徳之島の縄文時代資料はこれまでほとんど調査が行われておらず、独創性が高い。 発展性：沖縄以南へ至る交流のルートを解明する手がかりとなる。 効率性：前年度に作成した調査カードを基に熟覧と所見を記載できたので、調査の効率が良かった。 継続性：ほぼ出土資料の全てをカード化したので、将来の研究の基盤が確立できた。 正確性：九州を中心とした縄文土器の専門家を共同研究に加えたことで信頼性が増した。						

2. 定量的評価

観点	調査記録の記載	論文				
評定	B	B				
判定理由 調査記録の記載：カード 195 枚に観察結果を記載することができた。 論文：九州と南島の交流について考察することができた。						

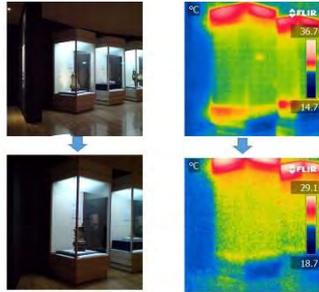
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り調査内容を纏めることができ、その成果を論文で公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。展示への反映、資料作成、論文という形で研究成果を発表し、十分に活かすことができ、目標を達成することが出来た。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 博物館の環境保存に関する研究((5)－⑥)		
【事業概要】			
東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】			
和田浩(保存修復課環境保存室長)			
【主な成果】			
今年度は展示環境に関する調査研究の内、展示ケース内の湿度環境について特殊な要件を実現するための手法に関する研究と既存の照明器具(蛍光灯、ハロゲンランプ)及び次世代型照明器具(LED、OLED)の比較評価と、次世代型照明器具を効果的かつ安全に導入するための研究を中心に実施した。具体的な成果は下記の通り。			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 展示ケース内を低湿度環境に維持するための研究を行い、文化財の材質の安定及び所蔵先からの要求条件を実現することができた。 ・ 展示室内及び展示ケース内蔵の照明器具から発する熱的影響を赤外線サーモグラフィーで観測・評価し、文化財への影響を回避するための手法を実践した。 ・ 展示環境をより安定化できる展示ケースを新たに設計した。 ・ 照明器具の熱的影響に関して学会発表を行ない、次世代型照明器具の評価と使用に関する論文を発表した。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 26年6月24日から9月15日 特別展示室において10台の展示ケース内湿度環境を低湿度に維持した。 ・ 26年6月24日から7月3日 特別展示室及び総合文化展展示室において照明器具から発する熱的影響を赤外線サーモグラフィーで観測・評価した。その結果から文化財への熱的影響を緩和することができた。 ・ 26年12月2日 新たに設計した展示ケースの性能について製作工場で安全性を確認した。 ・ 26年6月8日 文化財保存修復学会において照明器具の熱的影響に関して学会発表「次世代型展示用照明器具の評価法に関する研究」を行った。 ・ 27年3月 『展示学』52号に論文「OLED光源を用いた面発光照明器具による伝統的な屋内光環境効果の復元」を発表した。 			
			<p>赤外線サーモグラフィーを用いた展示ケース内蔵照明の熱的影響の調査</p>
【実績値】			
低湿度環境化実施展示ケース台数：10台			
サーモグラフィー調査実施箇所数：29箇所			
学会発表件数：1件、論文(査読付)発表数：1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4561-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展示効果を高めつつ展示環境の安定化を実現する研究である。 独創性：実際に用いられる展示ケースを対象にして、具体的な解決策を提示できた。 発展性：様々な材質や環境に対する要求に対して成果を活用できる。 効率性：課題や問題点が見出された際には即座に現場で改善できる体制の下で進められた研究である。 継続性：前年度実施した空調稼動に関する研究を踏まえ、今年度はより局所的な環境に絞り研究した。 正確性：各種の観測装置を駆使して客観的なデータを収集しながら実行した。						

2. 定量的評価

観点	低湿度環境化実施 展示ケース台数	サーモグラフィー 調査実施箇所数	学会発表件数	論文(査読付) 発表数		
判定	B	B	B	B		
判定理由 低湿度環境化実施展示ケース台数：多くの展示ケースにおいて実現することができた。 サーモグラフィー調査実施箇所数：客観的評価を行うには十分なデータを収集できた。 学会発表件数：成果の波及効果が期待される学術団体において公表することができた。 論文(査読付)発表数：学術雑誌において成果を社会に公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実績として十分なものと判定する。次年度以降も研究計画に沿って実施する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り達成しているものを判定する。展示及び収蔵環境における保存のあり方について、今期中期計画期間中に現場における運用面での基礎研究を完了し、次期中期計画においてはより高度な応用研究を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 被災博物館等の汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究(科学研究費補助金)((5)-⑥)		
【事業概要】 研究全体を通して、被災資料の情報収集調査、施設の空気室調査、資料汚染ガス調査、汚染空気室の改質調査研究を実施する予定であり、本年度は被災資料の情報収集調査として、災害発生時の取り扱いに関して災害対策プログラムに関する資料収集などをパリ市内で実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【スタッフ】 松井敏也(筑波大学芸術系准教授)、栗本康司(秋田県立大学木材高度加工研究所教授)、天野真志(東北大学災害科学国際研究所助教)、長野克則(北海道大学工学研究科教授)、片岡太郎(弘前大学人文学部特任助教)、奥山誠義(奈良県立橿原考古学研究所主任研究員)			
【主な成果】 ・パリ市内に所在する博物館施設を訪問し、セーナ川氾濫時における緊急避難プログラムの詳細を聞き取り調査した。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・ルーブル美術館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月22日) ・ケ・ブランリ美術館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月22日) ・装飾博物館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月23日) ・オルセー美術館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月23日) ・国立図書館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月24日) 			
			
オルセー美術館での調査			
【実績値】 ・調査実施施設数 5箇所			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4561-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	C	B	B	C	C
判定理由 適時性：東北地方太平洋沖地震で被災した施設の復興および今後の備えの一つとして本研究の成果が早急に求められている。 独創性：研究目的自体には独創性が認められるが本年度の成果としては評価できない。 発展性：過去に被災した施設の現在における取り組みを調査することで、今後災害対策を導入する上でより強固な仕様を作成できるという応用性が高い。 効率性：最小限度の時間で十分な施設の調査を実行できた。 継続性：初年度であり、継続性については評価するに至らない。 正確性：初年度であり、正確性を十分に担保できるデータが揃っていない。						

2. 定量的評価

観点	調査実施 施設数					
評定	B					
判定理由 調査実施施設数：パリ市内に所在する大規模な博物館施設をほぼ全て調査することができた。						

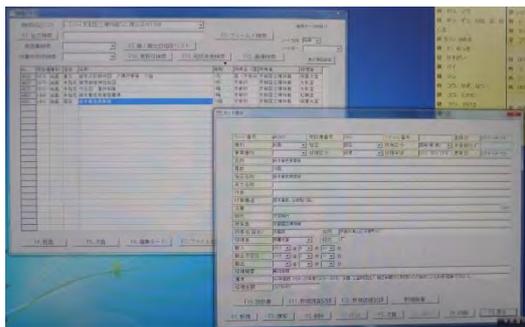
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	初年度の実績としては十分なものと判定する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	初年度の目標としては、達成しているものを判定する。次年度以降も研究計画に沿って実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究((5)-⑥)		
【事業概要】			
<p>京都国立博物館に設置された文化財保存修理所内の修理工房において、修復または模写事業が行われている文化財に関して、それらの情報を収集・整理し、必要に応じた調査を行う。あわせて、得ることのできた情報を年度ごとの報告書として刊行し、共有する。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】			
羽田聡（保存修理指導室主任研究員）			
【主な成果】			
<p>(1) 新規に搬入された文化財について、「修理計画書（設計書）」に基づきデータを入力した。また、京都国立博物館研究員による定期的な修理工房の巡回、あるいは適宜、行う調査を通して、修理中でなければ得ることのできない情報を収集した。</p> <p>(2) 修理が完成し、搬出した文化財については、修理工房から提出された「修理解説書（報告書）」によって、データの追加、及び更新を行った。</p> <p>(3) 以前、修理が完成した文化財に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告集』第12号に掲載し、修理時の調査により発見された銘文を「銘文集成」として報告した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 情報の収集と調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・26年度、文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、101件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。 ・京都国立博物館研究員により12回行った修理工房の巡回のほか、適宜、修理技術者とともに実施した調査を通じ、文化財の構造や使用材料、内部納入品など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。 <p>(2) 情報の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・25年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書）」に基づき、1,698件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。 <p>(3) 情報の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・23年度に修理が完成した文化財116件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告集』第12号(27年3月31日発行)に掲載した。 ・修理時の調査により発見された銘文14件を「銘文集成」として同書に報告した。 			
			
「修復文化財データベース」作業画面		修理時に発見された「三八教 日蓮筆」(妙顕寺蔵)の軸木	
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・データ収集件数 101件 ・巡回回数 12回 ・データベースの追加更新件数 1698件 ・報告書 1冊（修理報告116件、銘文報告14件を含む） 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化財の修理は社会的関心の高い問題であり、収集したデータがその貴重な資料となっている。 独創性：修復文化財を寄託品として受け入れ、修理によって得られたデータを各研究員の間で共有している。 発展性：修理データをデジタル化して、修復データベースへ登録し、将来の公開に備えている。 効率性：データをデジタル化することによって、修復文化財の情報検索を容易にしている。 継続性：収集したデータにより『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』を継続的に発行している。 正確性：報告書の発行に際して、データの正確性について再確認をしている。						

2. 定量的評価

観点	データ収集件数	巡回回数	データベースの追加更新件数	報告書		
評定	B	B	B	B		
判定理由 データ収集件数：予期した件数のデータ収集を実施した。 巡回回数：予定していた巡回を順調に行った。 データベースの追加更新件数：例年の実績を引き継ぎながら、データベースの追加更新を順調にこなした。 報告書：計画通り、修理報告書を刊行した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都国立博物館内の文化財保存修理所で行われた修復文化財から得られる情報を収集・整理、そして必要に応じた調査を実施し、その成果を報告書に反映させ、共有を図っている。これによって、修復文化財に関する情報の公開を適正に行っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修復文化財に関する資料の収集・整理及び調査研究を順調に実施して関連データの収集や整備を進め、相当程度の蓄積を果たすことができた。 次年度には、収集された情報を更に充実させながら、従来得られた情報との類似性や相違性の比較・検討など、相互の関連づけを図っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 文化財の保存・修復に関する調査研究((5)~(6))		
【事業概要】			
修理を実施している館蔵品をメインに、その保存修復に関する調査研究を修理事業者と協力して行い、文化財の保全と公開に役立てる。あわせて、調査研究の過程で得ることのできた貴重な情報を蓄積し、学術的な利用のみならず、最適な修理方針の策定など、今後の保存修復事業にも活用する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】			
鬼原俊枝（美術室研究員）、羽田聡（保存修理指導室主任研究員）、大原嘉豊（企画室主任研究員）			
【主な成果】			
(1)23年度から4カ年計画で修理を行っている国宝「病草紙」について、本紙の裏面に接着する肌裏紙の調査を行いつつ、修理完成にむけた装幀の検討会を実施した。 (2)本年度から2カ年計画で修理を行う「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」について、調査を実施し、修理の方針を策定した。 (3)国宝「釈迦金棺出現図」について、彩色に使用されている顔料の色見本を作成した。			
【年度実績概要】			
(1)国宝「病草紙」 ・本紙の裏面に接着する肌裏紙について、その明度・色目・紙厚・簀目に関する調査を博物館と修理事業者（岡墨光堂）とのあいだで実施した。 ・その結果、本紙の彩色を最も活かし、文化財の観賞性を高めるため、これまで用いられていた肌裏紙より明るい色目のものを採用した。 ・来年度の修理完成にむけた装幀の検討会を行い、一場面ずつ10面に分かれていた本紙を卷子装に改めることで、観賞性と保全性の両立を目指すよう決定した。			
(2)「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」 ・本格的な修理に着手するに際し、本紙の破損状況、紙質の調査を博物館と修理事業者（光影堂）とのあいだで実施し、あわせて適正な修理方針を策定するための検討会を催した。 ・これらの結果をふまえ、本年度は当該文化財に対し、本紙の剥落止め、クリーニング、表打ちまでを実施するよう決定した。			
(3)国宝「釈迦金棺出現図」 ・平成知新館の開館にむけ、ハイビジョン映像「国宝 釈迦金棺出現図—奇跡の瞬間 驚愕と歓喜—」を製作するため、平成26年度には当該文化財に対し、博物館と修理事業者（六法美術）とのあいだで蛍光X線分析装置による顔料調査が行われた。 ・今年度は調査結果の再度検討を行い、データの信頼性を確認したうえ、展示での活用も視野に入れた資料として、これらの色見本を作成した。			
			
「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」本紙破損箇所		国宝「釈迦金棺出現図」色見本（試作品）	
【実績値】			
・調査項目 7項目 (国宝「病草紙」…肌裏紙の明度・色目・紙厚・簀目、「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」…紙質・破損状況、国宝「釈迦金棺出現図」…顔料) ・修理方針など検討会 5回 (国宝「病草紙」…2回、「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」…2回、国宝「釈迦金棺出現図」…1回)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4562-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：適正な修理方針を決定するため、その進行状況にあわせて、必要な調査と検討会を実施している。 独創性：調査と検討会を通じて、文化財の保存とあわせ、修理後の公開も視野にいたった方針作りを行っている。 発展性：将来的に館藏品以外の文化財修理に関しても応用することのできる重要な情報を蓄積している。 効率性：決められた修理年限にそって、段階的な調査と検討会を行っている。 継続性：博物館の予算に館藏品の修理事業を位置づけることで、毎年、継続的な調査を実施している。 正確性：検討会を数回実施することで、博物館と修理事業者とのあいだで意見の齟齬が生じないよう努め、客観性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	調査項目	修理方針など 検討会				
評定	B	B				
判定理由 調査項目：館藏品の修理にとどまらず、他の文化財修理においても応用することの可能な項目について調査を行い、その情報を蓄積している。 修理方針など検討会：保存と公開とは本来、相反するものであるが、これらの両立を目指し、多角的な可能性を考慮している。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	保存と公開を念頭に置きながら、肌裏紙の明度や色目の調査、装幀の検討等、文化財修理のための重要な指針となりうる要素を核として、順調に調査研究活動を展開した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修理事業者を含めて綿密な調査、検討を重ね、文化財の保存と公開のため、参考となる情報を蓄積するなど、順調に成果を上げている。 次年度においては、基礎的な調査研究の方向性を収斂し、何十年、何百年という長期的な視野で文化財の保存と公開を図るうえでの指針等について、一定の成果をまとめていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究を持続的に実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る ((5)-(6))		
【事業概要】 展示室・展示ケース・収蔵庫等の環境が文化財に与える影響の解明を目的として、温湿度センサーによる展示室・展示ケース内等の温湿度データ収集、展示ケース内に浮遊する粉塵の電子顕微鏡観察、パッシブインジケータによるVOC調査、文化財害虫調査トラップの定期的な設置・回収等を継続的に実施し、調査で蓄積されたデータを分析することで展示室等の保存環境向上を計る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
【スタッフ】 内藤栄(学芸部長)、岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(ボランティア室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 (1) 展示室・展示ケース内や収蔵庫に設置した温湿度センサーのデータを分析し、展示・収蔵環境の保持に努めた。 (2) 展示ケース内から回収した粉塵の種類や量を計測し、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。 (3) 展示室・収蔵庫等への昆虫トラップの設置回収により、文化財害虫の生息状況を調査し害虫被害の回避につなげた。 (4) 「環境整備委員会 保存環境に関するワーキンググループ」会議を定期的に開催し、保存環境の改善に努めた。			
【年度実績概要】 (1) 展示室・展示ケース内の各所に無線機能付き温湿度センサーを設置し、24時間リアルタイムに温湿度の変化を監視するとともに、LAN回線を通じて学芸部内で収集したデータを蓄積し、展覧会ごと報告書にまとめた。収蔵庫、文化財保存修理所内においては、ロガータイプの温湿度センサーを各所に設置して、保存修理指導室員が定期的に温湿度データの回収を行った。これらのモニタリングによって得られたデータを分析し、文化財の展示・収蔵環境の保持及び改善につなげた。 (2) 正倉院展終了後、展示ケース内から回収した粉塵を電子顕微鏡で観察し、粉塵の種類及び単位面積当たりの量を計測して展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。その結果、粉塵量が多いと判断されたケースについては気密性確保の改修工事を実施した。 (3) 展示室・収蔵庫・文化財保存修理所内など館内150箇所を設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制により二か月に一度回収・交換する。回収したトラップは外部業者に委託して文化財害虫の種類と捕獲数のデータを蓄積した。この調査データをもとに、害虫被害が懸念される個所を中心に忌避対策及び殺虫処置を実施し、併せて害虫の侵入対策や発生を防ぐための清掃による衛生環境の保持などIPMの実践に努めた。 (4) 学芸部保存修理指導室員と総務課環境整備係員を中心に構成される「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」の会議を毎月開催し、上記の調査等で確認された保存環境にかかわる問題点について討議を重ね、施設の改修など保存環境の改善につなげた。			
			
文化財害虫調査用トラップ設置の様子			
【実績値】 保存環境調査実施箇所数:296箇所(展示室内温湿度調査:121箇所、展示ケース内粉塵調査箇所:25箇所、文化財害虫生息状況調査箇所:150箇所) 保存環境調査報告書作成件数:7件(温湿度モニタリング報告書3件、昆虫類調査用トラップ分類同定結果報告書4件) 研究者発表件数:「保存環境に関するワーキンググループ」開催回数10回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4563-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：温湿度モニタリングの報告書は展覧会ごと、昆虫トラップの報告書は二か月毎に作成した。 独創性：一日二万人近い入館者が継続する正倉院展という特殊環境において、展示ケースの温湿度変化や気密性に関して調査した。 発展性：保存環境にかかわる基礎データを着実に蓄積し、施設の改修につなげた。 効率性：無線式温湿度センサーなどの最新機器を導入し、効率的な保存環境データの蓄積に努めた。 継続性：無線機能付温湿度センサーによる24時間モニタリング、当番制による二か月に一度の昆虫トラップ回収・設置を着実に実施した 正確性：最新機器を用いてデータを収集し、得られた成果を定期的に報告書の形でまとめた。						

2. 定量的評価

観点	保存環境調査実施箇所数	保存環境調査報告書作成件数	研究発表件数			
評価	B	B	B			
判定理由 保存環境調査実施箇所数：前年度と同じ(調査実施箇所数としては必要十分な)点検箇所について継続的にデータ収集を実施した。 保存環境調査報告書作成件数：温湿度モニタリングの報告書を展覧会ごと、昆虫トラップの報告書を二か月毎に作成した。 研究発表件数：10回開催し、調査データの検討を重ねた。						

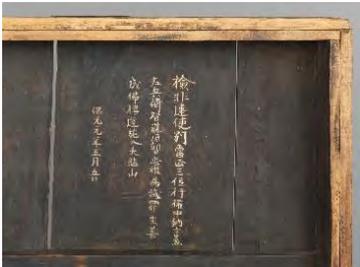
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前年度に引き続き、一年を通じて保存環境調査を着実に実施した。また、そこで得られたデータをもとに展示環境の維持・改善に努めることができた。次年度も本年度と同規模の調査を継続的に実施し、データの精度をさらに高めるとともに、保存環境の変化の兆候を把握できる体制を築いていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の保存環境向上に対する調査研究事業は、対応人員の増加により従来の上回る成果が得られたと考える。今年度の成果をふまえ、次年度もこの水準を維持しつつ保存環境の維持・改善に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 収蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する ((5) - (6))		
<p>【事業概要】・館蔵品、寄託品について詳細に保存状態の調査を実施し、保存カルテとして記録を蓄積することで、将来の文化財修理への指針に役立てる。</p> <p>・館蔵品、寄託品の修理に際し、事前に当該文化財の保存状態について入念な調査を実施し、その結果を基に修理調書を作成する。</p> <p>・文化財保存修理所内での修理中に文化財から得られた材質や銘文などの基礎情報について調査分析を実施し、その成果を当館研究紀要に掲載する形でデータを蓄積する。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
<p>【スタッフ】内藤栄(学芸部長)、岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)</p>			
<p>【主な成果】</p> <p>(1) ・館蔵品、寄託品について保存状態調査を実施し、その所見をもとに保存カルテを作成した。</p> <p>・文化財保存修理所で修理された文化財について、樹種同定調査及び銘文調査を実施した。</p> <p>(2) ・保存カルテをもとに修理調書を作成し、修理方針を決定した。</p> <p>・樹種同定調査は京都大学生存圏研究所との共同研究として実施し、銘文調査は当館で文字の翻刻を行った。</p> <p>(3) 修理の概要、樹種同定調査及び銘文調査の結果について、当館紀要への掲載の準備を進めた。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1) ・館蔵品・寄託品の貸与時に、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各部門担当者が、光学機器等を用いて保存状態を中心に入念な文化財調査を実施し、そこで得られた成果を保存カルテに記入して基礎データを蓄積した。</p> <p>・当館文化財保存修理所彫刻室で25～26年度の2箇年を工期として修理中の奈良・普光院所蔵地藏菩薩立像から自然に脱落した木片について当館研究員が目視による入念な状態確認を行い、樹種同定調査が必要であることを判断した(26年9月30日)。</p> <p>・当館文化財保存修理所装潢室で26年度の1箇年を工期として修理中の京都・峰定寺所蔵黒漆塗箱型礼盤の天板裏面に表される刻銘について、当館研究員と修理技術者が共同で調査を行った(26年11月7日)。</p> <p>(2) ・館蔵品及び寄託品の修理にあたり、光学機器等を用いた入念な文化財調査を実施するとともに、保存カルテに記載された保存状態に関わる基礎情報を参照しながら修理調書作成し、館内監査を経て修理方針を決定した。</p> <p>・文化財保存修理所彫刻室内で修理中の文化財から採取された木片は、当館と京都大学生存圏研究所との間で締結した協定に基づき、共同研究の一環として生存圏研究所員により樹種同定の分析が進められた。</p> <p>・京都・峰定寺所蔵黒漆塗箱型礼盤の天板裏面に表される刻銘を目視により調査した結果、保元元年(1156)に検非違使別当の藤原忠雅が施入したものであることが判明し、同銘文は当館研究員が翻刻を行った。</p> <p>(3) ・保存カルテを踏まえて作成された修理調書をもとに、本年度実施されている館蔵・寄託品の修理については、修理完成の翌年度冬に開催される特集展示「新たに修理されて文化財」においてその成果を公表する。</p> <p>・本年度実施した修理の概要、樹種同定調査の結果、銘文調査に基づく文字の翻刻は、当館研究紀要『鹿園雑集』18号(28年3月刊行予定)に掲載し、広く一般に公表される。</p>			
			
<p>黒漆塗箱型礼盤(京都・峰定寺蔵)天板裏面の刻銘</p>			
<p>【実績値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保存カルテ作成件数：総計96件 うち彫刻17件、絵画33件、書跡5件、工芸(金工・漆工・染織)13件、考古28件 ・修理調書作成件数：総計6件 うち彫刻2件、絵画1件、工芸2件、考古1件 ・調査件数：9件(木造文化財樹種同定調査実施件数：2件、修復文化財銘文調査実施件数：7件) ・調査概報：2件(「修復文化財(木造)材質調査報告」、「修復文化財関係銘文集成」) 			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名 奈良国立博物館処理番号 4563-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：当館では近年、文化財保存修理所における文化財修理を核として、修理作品の公開、修理への寄付金の募集、特集展示「新たに修理された文化財」での修理完成品の公開を博物館事業の重要な柱に据えており、修理に伴う調査を通じて得られる文化財の基礎情報を広く公開することもこれらの事業と密接不可分の研究活動に位置づけられる。</p> <p>独創性：京都大学生存圏研究所による木造文化財の樹種同定調査は、京都国立博物館などでも実施しているが、協定を結んだ共同研究の形で実施するのは当館が最初であり、その成果を当館の研究紀要に掲載して広く公表していく活動も当館が初めて取り組んだ。</p> <p>発展性：当館と同様に文化財保存修理所を設置する京都国立博物館が収集する樹種同定データ、銘文データを将来的に当館が公表するデータと統合することで、大きな文化財の基礎データベースに発展する可能性があり、多方面からデータの活用が期待できる。</p> <p>効率性：樹種同定調査に当たっては、所蔵者の同意を得るなどの事務連絡、研究紀要への掲載に伴う編集業務を当館が担当し、実際の調査・分析を京都大学生存圏研究所が担うことで、高い精度と効率性をもって調査データの取得、公開が実現している。</p> <p>継続性：木質文化財の樹種同定では世界的な研究機関である京都大学生存圏研究所と協定を結び、継続的に精度の高い樹種同定調査を実施できる体制を確立している。</p> <p>正確性：京都大学生存圏研究所の樹種同定に関する調査・分析の精度の高さは他の追随を許さないものがある。これまで当館と共同研究の形で蓄積されてきたデータに加え、京都国立博物館でも生存圏研究所が実施している同様の調査データを加味することで、日本彫刻史の指標となる基礎データベースを確立することが可能となる。</p>						

2. 定量的評価

観点	保存カルテ作成件数	修理調査作成件数	調査件数	調査概報		
評定	B	B	B	B		
<p>判定理由</p> <p>保存カルテ作成件数：順調に作成を進めることができた。</p> <p>修理調査作成件数：長期計画に基づいて館蔵・寄託品の修理を順調に進めることができた。修理調査の件数も計画どおり達成することができた。</p> <p>調査件数：木造文化財樹種同定調査2件、修復文化財銘文調査実施7件を実施し、年度当初の計画を達成することができた。</p> <p>調査概報：調査成果を当館研究紀要に掲載、公表する準備を順調に進めることができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所の修理技術者と緊密な連絡を取りながら、修理に伴う文化財調査を順調に遂行することができた。調査で得られた所見は保存カルテ、修理調査に反映され、修理仕様を決定するための基礎的資料となった。特に木造文化財の樹種同定調査に当たっては、当該分野の世界的研究機関である京都大学生存圏研究所と協定を結んでいるため、継続的に精度の高い調査・分析が実施できている。来年度以降は、文化財修理所の年報的性格を持つ単体の修理報告書を刊行することを模索しており、刊行のあかつきには修理に伴う調査で得られるこうした樹種同定や銘文などの基礎データはそちらに掲載する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所を併設する当館において、文化財修理は当館の重要な柱となる事業に位置づけられている。そうした文化財修理の過程で行われる調査の成果は、文化財修理所特別公開や特集展示「新たに修理された文化財」等の機会に広く公表され、今後の修理計画において指針の裏付けとなる重要な意義をもつものである。本年度は従来どおり順調に調査を進めることができたが、今後はとりわけ樹種同定の精度を一層高めるために、兵庫県佐用町にある大型放射光施設Spring-8の利用も検討したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 収蔵品・寄託品等の調査研究を保存科学の観点から実施し、貴重な文化財の後世への継承に資する。(5)～(6)		
【事業概要】			
(1) 館蔵品、寄託品等の修理に際し、修理前・修理中に当該文化財に対して透過X線や蛍光X線等を用いた光学調査を実施し、その所見を修理方針に反映させる。 (2) 館蔵品、寄託品の文化財の修理において、修理前に電子顕微鏡を用いた料紙・料絹の繊維組成調査を実施し、その成果をもとに補紙・補絹を調製する。 (3) 文化財保存修理所で修理中の文化財について、研究員と各工房職員が共同で光学機器を用いた材質調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
【スタッフ】 内藤栄(学芸部長)、岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、齋木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(ボランティア室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】			
(1) 館蔵、寄託品の修理に際し、X線透過撮影での構造調査を彫刻や漆工品に実施し、蛍光X線分析での顔料調査を絵画に実施した。 (2) 館蔵、寄託品のうち絹製文化財の修理において、電子顕微鏡を用いた料絹の組成調査、紙製文化財の修理において同じく料紙の繊維調査を実施し、その所見を修理に用いる補絹・補紙の調製に反映した。 (3) 文化財保存修理所の修理寄託中の文化財について、蛍光X線分析装置を用いた材料調査を実施し、修理方針に資するデータを蓄積した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 東大寺二月堂光背のX線撮影を行い、構造や鑄造欠陥等について調査を行った。また、蛍光X線分析も実施し、オリジナルや後補部分の材質に関する知見を得た。 ・ 逸翁美術館の螺鈿箱についてX線撮影を行い、金具と鉄釘の調査から安全な修理が可能となった。 ・ 絵画の数件について、表面の顔料調査や修理中の裏面からの顔料調査を行い修理に資するデータを蓄積した。 ・ 絹製や紙製文化財の修理において、組成や繊維を調べることで本紙に負荷をかけない補絹や補紙の調整に役立てた。 			
			
小型資料のX線透過撮影の様子			
【実績値】			
調査回数	15回	(館蔵品・寄託品等の修理に伴うX線撮影実施回数：12回) (館蔵品・寄託品等の修理に伴う蛍光X線調査実施回数：3回)	
研究会回数	18回	(館蔵品・寄託品等の修理に使用する補修材料の検討会実施回数：18回)	
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4563-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：修理前、修理中に実施した材質・構造調査の成果を修理方針に反映させた 独創性：最新の機器を用いた材質・構造調査を実施し、その成果を修理方針に反映させた 発展性：修理文化財の材質・構造に関する基礎データ着実に蓄積し、そのデータを修理技術者に提供することで修理技術の発展に努めた。 効率性：文化財保存修理所内で修理される文化財について、館が所有する最新機器を積極的に活用し、高精度の材質・構造調査を館内で効率的に実施した 継続性：修理文化財の材質・保存状態調査を継続的に実施し、得られた基礎データを着実に蓄積することができた 正確性：最新機器を用いて文化財修理に有益な材質・保存状態に関する基礎データを収集・精査し、そこで得られた所見を補修材料の選択等の修理方針決定に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究会回数				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：館贈品・寄託品の修理において確実に調査を実施することができた。 研究会回数：修理文化財の材質・構造調査で得られたデータについて、修理技術者と共同で検討を重ね、その成果を補修材料の選定等の修理方針に反映させた。						

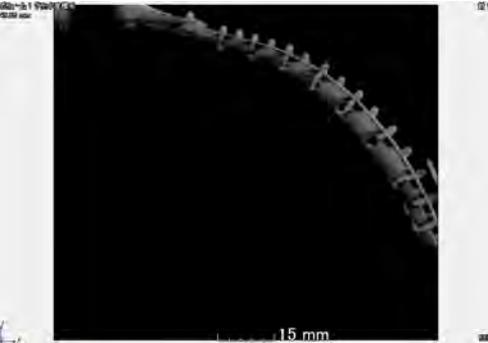
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館藏品・寄託品の修理に伴って、保存状態の確認や材質解明を主目的とした調査を着実に実施し、当該文化財の修理方針決定や、将来における文化財の研究・修復に資する基礎データを蓄積することができた。次年度以降も継続的に館藏品・寄託品を主対象とする保存科学的手法を用いた調査を着実に実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業は、その進捗度から従来の水準を維持しつつ堅調に実現できたと考える。次年度も修理に伴う調査を継続し、文化財の基礎データ蓄積に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((5)－⑥)		
【事業概要】			
文化財を解体することなく内部構造を立体的に調査する方法の開発を目指す。当館において、X線CTや透過X線を用いて鉄錆地三十六間四方白兜やの内部構造を調査する。また3Dデジタイザを用いて文化財の詳細な三次元形状を調査する。文化財の構造や制作技法を理解し、文化財の健康状態を知る。さらに、得られた成果を展示に活用することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 臺信祐爾(企画課長)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、市元星(企画課特別展室主任研究員)、楠井隆志(展示課長)			
【主な成果】			
<p>(1) 資料のX線CT撮影を行い、鉄錆地三十六間四方白兜の構造並びに金属の亀裂の有無を調査した。また繊維の断裂などを確認した。</p> <p>(2) 図2に示すように鋳と鉄板との接合状態を明らかにすることができた。また金属や繊維に亀裂または断裂は確認できず、良好な状態であることがわかった。</p> <p>(3) 展示前に状態調査を行ったことで、資料の状態を判断することができた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) ・鉄錆地三十六間四方白兜に使用された鋳の状態や寸法、鉄板の止め方といった構造に関する知見を得た。金属の亀裂や繊維の断裂など資料の健康状態を確認するためX線CT撮影を行った。</p> <p>・調査の結果、金属の亀裂や繊維の断裂などは確認できず、資料の健康状態としては非常に良好であることが分かった。</p> <p>(2) ・兜の金属部については、断面図から複数の鉄板を鋳によって留めていることがわかった。鉄板は厚さの異なる板を4枚確認することができた。鉄板の大きさは0.6mm、0.9mm、1.5mm、1.5mmと内側になるにつれて厚くなることが分かった。</p> <p>・四方白の部位の鉄板をみると、鋳は全て鉄板を留めているが、その他の鉄板に使用された鋳の半数は上面の鉄板に溶接されており、鉄板同士を留めていないことが分かった。</p> <p>・飾りとして使用された鋳と鉄板を留めるために使用された鋳は交互であることが分かった。</p> <p>(3) 今回の調査結果から、鉄錆地三十六間四方白兜の基本的な構造や鋳の仕様の特徴などの知見を得ることができた。また展示前に健康診断を行い、状態について検証することで安全に展示することができた。</p>			
			
		<p>図1 鉄錆地三十六間四方白兜全体図</p>	
			
		<p>図2 兜断面図</p>	
【実績値】			
調査件数	120件		
調査回数	600回		
学会研究会等発表数	6件(①～④)	日本文化財科学会3件 文化財保存修復学会3件	
論文掲載数	2件(⑤、⑥)	文化財調査におけるX線CTの活用2件	
【備考】			
<p>① 加藤和歳 小林啓 山崎悠郁子 今津節生 輪田慧 森下靖士 甲斐孝司 横田義章「X線CTスキャナの活用による遺跡で発見される豊富な遺物情報を得る調査福岡県古賀市船原古墳遺物埋納坑出土遺物の取り上げ・構造解析から公開活用に向けて」日本文化財科学会31回大会 26年7月5日～6日</p> <p>② 小林啓 加藤和歳 山崎悠郁子 森下靖士 甲斐孝司 横田義章 今津節生 輪田慧「福岡県古賀市船原古墳遺物埋納坑出土資料のX線CTスキャナによる調査」日本文化財科学会31回大会 26年7月5日～6日 他2件</p> <p>③ 小林幸雄 杉山智昭 今津節生 鳥越俊行 田中大之 相山英明「X線CTによる「アイヌ文化伝世の漆椀」の内部構造調査(2)―「熊図文入漆椀」と「津軽塗(系)漆椀」に注目して」文化財保存修復学会36回大会(26年6月7～8日)</p> <p>④ 杉山智昭 小林幸雄 今津節生 鳥越俊行「アイヌ民族資料の保存修復に向けた現況調査」文化財保存修復学会36回大会(26年6月7～8日)</p> <p>⑤ 今津節生「X線CTを核とした三次元計測による博物館資料の活用と連携」文化財調査におけるX線CTの活用 pp6-15</p> <p>⑥ 赤田昌倫「平取町所蔵耳飾り(ニンカリ)のCT調査」文化財調査におけるX線CTの活用 pp66-67</p>			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：CT調査は形状や保存状態の把握に大きな効果がある。鉄錆地三十六間四方白兜について新たな知見を得るなど、形状把握に効果があった。 独創性：非破壊で文化財の構造調査や三次元計測、三次元造形の文化財への応用性を発展させた。 発展性：X線CT・3Dデジタル・3Dプリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：X線CT・3Dデジタル・3Dプリンタは短時間でデータを取得できるので時間的投資効果が大きい。 継続性：非破壊で採取した計測データを基に、短時間で内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：X線CTでは文化財内部の構造を約0.2mm、3Dデジタルでは0.02mmの高精度で記録することができる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査回数	資料収集数	学会研究会等 発表数	論文掲載数	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 調査件数：計画していた120件の調査を実施することができた。 調査回数：特別展などを中心とした調査を予定通り600回実施することができた。 学会研究会等発表数：目標を達成できた。 論文掲載数：目標を達成できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館内の収蔵品寄託品や、館外からの依頼など多くの資料を調査することができた。次年度も更に多くの文化財を調査研究し、3Dプリンタの活用によって文化財に親しむための機会を作りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。次年度は現在と同等の調査・研究を行うため、引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続するとともに、これまでの調査成果をまとめる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館における文化財保存修復に関する研究((5)－⑥)		
【事業概要】 当館の文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装演技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】 渡部史之(保存修復室アソシエイトフェロー)、下田詩織(保存修復室研究補佐員)、伊藤理恵(博物館科学課環境保全室研究補佐員)、竹上幸宏(国宝修理装演師連盟技師長)、元 喜載(国宝修理装演師連盟技師)、弓場健太郎(国宝修理装演師連盟技師)			
【主な成果】 (1) 吉備国際大学 2 名、九州産業大学 2 名、別府大学 1 名、広島市立大学 1 名の計 4 大学 6 名を対象に研修を実施した。 (2) 修復技術者の協力を得て、少人数で実践的な研修を実施することができた。 (3) 本研修により、修理技術者育成に寄与すると共に、学生の文化財保護への理解を深めることができた。			
【年度実績概要】 (1) 4 大学 6 名の学生を対象に、26 年 8 月 18 日(月)～22 日(金)の 5 日間にわたり、装演技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」を実施した。 (2) 研修では、当館文化財保存修復施設を使用している国宝修理装演師連盟(国の認定する選定保存技術保存団体)の協力を得られたため、少人数で実践的な研修を実施することができた。 (3) 研修では、屏風の下貼り作製に関する講義と実習を通じて、文化財保存修復に対する参加学生の理解と研鑽を深めることができた。			
			
文化財保存修復研修 実習風景			
【実績値】			
研修開催数	1 回(17 年度より 10 回目)		
参加者数	計 4 大学 6 名 (吉備国際大学 2 名、九州産業大学 2 名、別府大学 1 名、広島市立大学 1 名)		
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：修復技術者の育成は、公共の財産である文化財を、修理を通じて後世に伝えていくためにも不可欠である。 独創性：中四国九州地域で同様の研修を行っている公的機関は、当館が唯一である。 発展性：文化財の修復は、近年メディア等でも注目される分野であり、社会への影響が強い。 効率性：文化財保存修復施設で修理を行う団体の協力を得られたため、効率的に実習を行うことができた。 継続性：修復技術者の育成は継続的に行う必要があり、開館以来毎年継続している研修を今後も行う必要がある。 正確性：国宝修理装演師連盟の協力により、正確な研修を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	研修開催数	参加者数				
評定	B	B				
判定理由 研修開催数：計画通り実施できた。 参加者数：研修としては適切な人数である。中国・九州の地域大学からの申し込みも多く、研修に対する関心の高さが窺え、26年度も研修に適切な人数の参加者を予定通り得ることができた						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大学で保存修復の基礎教育を受けた学生を対象に実践的な研修の場を提供できる機関は極めて少ない。次年度以降も地域大学の学生を対象に、本事業を継続していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	17年度より、少人数を対象とした研修を継続的に行っており、参加者数も安定し、計画通りに実施されている。そのため、27年度も、引き続き同様の研修を実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館危機管理としての市民協同型 I PMシステム構築に向けての基礎研究((5)－⑥)		
【事業概要】			
本研究の目的は、我が国の博物館等における I PM (総合的有害生物管理) 普及のための地域共働システムづくりである。本研究では、地元 NPO 法人や市民ボランティアとの共働による研修会の開催及び大学・専門研究機関・地域文化施設の連携による I PM 研修プログラム確立を通し、I PM の社会的理解度を深めつつ、博物館等における I PM を軸にした自立的な地域共働システムづくりを目指すものである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 本田光子
【スタッフ】			
三輪嘉六(館長)、西村栄造(副館長)、大西浩二(副館長)、井上洋一(部長)、阿部勝(総務課長)、今津節生(博物館科学課長)、篠崎孝司(交流課長)、大石淳子(総務課長補佐)、秋山純子(博物館科学課環境保全室研究員)、泊智子(博物館科学課研究補佐員)、光山文枝(博物館科学課研究補佐員)			
【主な成果】			
<p>(1) 継続的に行ってきたミュージアム I PM 研修(基礎編)の募集地域の範囲を広げ、これまで受講していない地域の博物館学芸員を積極的に受け入れることで、I PM の普及に努めた。</p> <p>(2) 参加申込受付開始日に定員 20 名のところ、80 名以上の応募があるなど、参加人数が大幅に増え、学芸員・市民の関心の高さがうかがえた。そこで本年度のミュージアム I PM 研修(基礎編)の実施回数を 1 回から 2 回に増やした。</p> <p>(3) I PM 研修会の成果を博物館の I PM 活動業務に生かすことができた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 日本国内における I PM の普及に努める</p> <p>ミュージアム I PM 研修(基礎編)の募集範囲を拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度新たに受け入れた地域 和歌山県、広島県、愛媛県 ・今年度新たに受け入れた博物館・美術館・資料館・図書館・文書館等 34 館 <p>(2) 開催の回数を増やし、より多くの方に I PM 研修を受講できるようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミュージアム I PM 研修(基礎編)を 7 月と 10 月に行い、合計 63 名の受講生を受け入れた。それにより、地域や館種を超えた新たな受講生が加わり、ミュージアム I PM 研修(基礎編)の内容をより充実したものに検討する材料を得られた。 <p>(3) ミュージアム I PM 研修は、専門機関や大学との連携による先進館や伝統的施設の調査結果及び協力者会議の指導助言により改善・実施したため、その内容を日常管理の I PM 活動に生かすことができた。</p>			
			
		<p>ミュージアム I PM 研修(基礎編)の様子 ワークショップ I (トラップについての実習)</p>	
【実績値】			
<p>○ミュージアム I PM 研修開催回数・・・4 回</p> <p>○ミュージアム I PM 研修参加者数・・・84 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミュージアム I PM 研修(基礎編): 63 名(内、市民ボランティア 14 名) ・ミュージアム I PM 研修(技術編): 15 名 ・ミュージアム I PM 研修(実践編): 6 名 			
【備考】			
<p>学会研究会等発表</p> <p>①「市民ボランティアと行う I PM ワークショップの取り組み」文化財保存修復学会(26 年 6 月 7 日)</p> <p>②「博物館における飲食スペースの I PM 活動」文化財保存修復学会(26 年 6 月 7 日)</p>			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：募集開始時に定員に達することから需要・必要性がある。 独創性：I P M活動に市民を組み込んで進めている。 発展性：募集の範囲を広げ、これまで応募のなかった地域に対し、具体的なI P M活動の普及に努めた。 効率性：地域のN P O法人と連携し、専門的立場より研修の運営を委託した。 継続性：ミュージアムI P M研修は本年度受講できなかった方も多く、毎年継続する必要がある。 正確性：募集の範囲を広げたことにより、より多くの館でI P Mの理解を深めるのに役立った。						

2. 定量的評価

観点	研修会開催回数	研修会参加者数				
評価	B	B				
判定理由 ミュージアムI P M研修会開催回数：目標回数以上に開催した。 ミュージアムI P M 研修会参加者数：予定を上回る人数の参加があった。						

3. 総合的評価

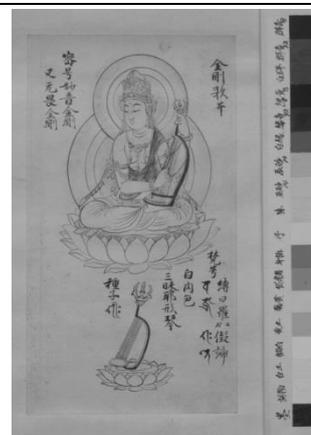
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ミュージアムI P M研修会（基礎編）を当初の予定では1回行うことにしていたが、予想を上回る受講希望数があり、より多くの受講生を受け入れるため急遽2回開催とし、I P Mの普及に寄与できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地域に展開可能なミュージアムI P M研修を広く実施し、館の保存管理機能の基盤強化と共に地域のIPM活動の拡大に寄与することができ、順調に遂行している。次年度はこれまでのI P M研修プログラム策定の集大成の年である。I P M研修の内容を精査し、地域市民や専門機関との連携を深めながら、より積極的に活動の普及に努める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究(学術研究助成基金助成金)((5)-(6))		
【事業概要】 彩色材料は当時の社会情勢や世界との交流の歴史を解明する上で重要な要素の一つである。近年の分析装置の発展により非破壊で多くの情報が得られるようになってきている。その中で彩色材料について確実な情報を得るには、有効な分析手法を確立する事が求められる。本研究では、赤外線撮影法により彩色材料を非破壊で二次元的に判断することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室研究員 秋山純子
【スタッフ】 畑靖紀(文化財課資料管理室主任研究員)、森實久美子(企画課特別展室研究員)、鷺頭桂(企画課特別展室研究員)			
【主な成果】 (1) 国内外の様々な絵画の赤外線画像を撮影し、画像データを蓄積するとともに、館蔵品に関しては分光反射スペクトルを測定した。 (2) 赤外線画像と分光反射スペクトルを比較し、彩色材料に関する情報が得られた。 (3) 画像や彩色の調査結果を展示に反映させることができた。 ・研究成果を日本文化財科学会で発表した。			
【年度実績概要】 (1) 絵画の赤外線画像撮影・調査 ・イギリス：大英博物館で彩色分析の聞き取り調査を行った(26年9月14日、15日)。 ・アメリカ：ワシントンフリーアギャラリーにて彩色の多い仏画を中心に赤外線撮影を行った(26年10月14日、15日)。 ・アメリカ：ボストン美術館にて彩色分析の聞き取り調査を行った(26年10月16日、17日)。 ・紙本着色金胎仏画帖断簡(金剛歌菩薩)の赤外線撮影を行った(26年5月28日)。 ・岐阜県汾陽寺所蔵の仏涅槃図の赤外線撮影を行った(26年12月17日)。 (2) 調査の結果得られた知見・発見等 様々な種類の絵画の赤外線画像を検討した結果、赤外線画像は面的調査に非常に有効であるということが分かった。 (3) 調査・研究の成果への反映 ・「大涅槃展」の作品を解釈する際に、赤外線画像によって作品のより詳細な観察が可能となった。 ・日本文化財科学会で研究成果を報告し、専門家と意見交換できた。			
【実績値】 ・調査回数4回(国内2回、海外2回) ・学会研究会等発表数件(①)			
【備考】 学会研究会等 ① 秋山純子、森實久美子「赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究2」日本文化財科学会(26年7月5日、6日)			



紙本着色金胎仏画帖断簡(金剛歌菩薩)の赤外線画像

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：何件か問合せがあり、かつ学会での関心も高かったため。 独創性：彩色材料の非破壊調査に系統的に赤外線を活用する手法は新たな試みであるため。 発展性：さらに適応例を増やし、より確実なデータを収集することで、汎用性が増す。 効率性：デジタルで撮影も簡単であるので、時間的投資、人的投資が少なくて済む。 継続性：基礎データを元に実際の絵画のデータを積み重ねることで面的調査に有効なデータとなるため。 正確性：赤外線撮影用のカメラを活用することで、高精細な画像データを得られる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会研究会等 発表数				
評定	B	B				
判定理由 調査回数：年間4回、計画通り国内外の絵画を調査した。 学会研究会等発表数：日本文化財科学会にて計画通り実施できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究に使用している撮影機材は、非破壊で簡便な撮影ができる。二次元スキャナによる分光反射スペクトルの結果と組み合わせ、より確実な彩色の面的調査が可能であることが分かった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前年度に引き続き、国内外の実際の絵画の赤外線撮影を行うことができた。特に分光反射スペクトルを測定できたことで、赤外領域の反射吸収を確実に把握することができ、赤外線画像の解析を進めることができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発 —興福寺 国宝阿修羅像を中心に— (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (5) - (6)		
<p>【事業概要】</p> <p>本研究は特別展の際に各地から収集された文化財を科学的に調査することによって、文化財研究の基礎資料を蓄積すると共に、その研究成果を活かして新しい展示手法を開発することを目的とする。具体的には、文化財用の大型X線CTスキャン調査によって得られた、奈良興福寺の国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4軀、八部衆像5軀の像内の高精細三次元データを分析し、奈良時代の脱活乾漆像の構造及び技法、修復履歴を明らかにした上で彫刻史上の作風の位置づけを行う。</p>			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
<p>【スタッフ】</p> <p>楠井隆志 (展示課長)、鳥越俊行 (奈良国立博物館学芸部保存修理指導室主任研究員)</p>			
<p>【主な成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良興福寺の特別な許可を得て、X線CT調査で得られた国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4軀、八部衆像5軀の高精細三次元データを、美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析した。 ・文化財科学・美術史・工芸・修復技術の専門家が集まって、X線CTによって得られた三次元画像を1000枚以上蓄積した。 ・本研究の成果を出版すべく編集作業を進めた。 			
<p>【年度実績概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本年度は諸像の内部構造解析を中心に研究を行った。三次元デジタルデータを基に各像の二次元断面像をそれぞれ100カ所以上作成した。また、使用された釘を中心に形状計測と三次元プリント化を行った。 ・天平時代に制作された諸像は概ね当初の状況を残しているが修理痕跡も発見された。修理に使用された釘や充填剤の特徴から鎌倉時代と江戸時代、明治時代に実施された修理の痕跡も明瞭に把握することができた。 ・本研究によって、言わば文化財の健康状態とも言える破損歴や修復歴を明らかにできた。文化財の今後の保管や運搬・展示に重要な基礎資料となった。また、本研究によって天平彫刻の基準作品を、科学調査を基盤として客観的に位置づけて日本彫刻研究の新しい研究基盤を形成することが期待される。 ・本年度は研究成果をまとめた研究報告書を作成した。 			
			
<p>阿修羅像に使用された釘の画像と3Dプリンタで作成した釘の模型</p>			
<p>【実績値】</p> <p>収集資料数 9点 論文掲載数 1件 (①) 学会発表 1件 (②)</p>			
<p>【備考】</p> <p>論文</p> <p>① X線CTによる興福寺塑像の研究 今津節生、他 (27年3月31日)</p> <p>学会発表</p> <p>② 「X線CTを核にした三次元計測による博物館資料の活用と連携」今津節生 (26年12月20日)</p>			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-5

自己点検評価調書

8. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：天平彫刻の最高傑作を、科学調査することによって日本彫刻研究の新しい研究基盤を形成することができた。 独創性：所蔵者である興福寺様の特別な許可を得て実施できた研究であり、これまでにない新たな研究基盤である。 発展性：X線CTと3Dプリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：展示会の際にCT調査を実施しており、高精度の三次元デジタルデータを解析しながら研究データを得られる。 継続性：採取した三次元データを基に、内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：正確な三次元データを基に、文化財の状態を把握することは、多くの文化財調査に有効である。						

2. 定量的評価

観点	収集資料数	論文掲載数	学会発表数			
評定	B	B	B			
判定理由 収集資料数：9点（写真数 1000枚）の調査を計画通り実施できた。 論文掲載数：計画通りに研究報告書1件を作成した。 学会発表数：1件の発表を行い、所期の目標を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、X線CTによる膨大な三次元データを美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析することにより、天平彫刻の最高傑作を日本彫刻研究の新しい研究基盤として位置づけることになる。本年度はこれまでの研究成果を集積した研究報告書を作成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、当初計画にそって研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。1000枚以上の画像データを収集し、膨大な画像データを集積した研究報告を作成した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6)三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)～(6)）		
【事業概要】 京都・泉屋博古館所蔵の住友コレクションのうち、中国古代青銅器コレクションを中心に、古代中国青銅器の鑄造技術の解明のためにX線CT、3Dデジタルサイザ、3Dプリンタ等の科学調査機器を用いて科学調査を実施、その成果を中国で出版して広く成果の普及と学術交流を図る。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸部付 谷豊信
【スタッフ】 今津節生（博物館科学課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元墨（企画課特別展室主任研究員）			
【主な成果】 ・中国古代青銅器の三次元調査成果に基づいて、研究チーム内での論文作成を進めた。 ・中国語版の報告書作成を進め、日中両国で刊行した。 ・相互に密な連絡を重ねて、日中の共同研究基盤を固めることができた。			
【年度実績概要】 ・泉屋博古館の住友コレクションを対象として行ってきた、三次元画像解析や日中の研究者間での検討会議を踏まえて、鑄造実験や画像解析の認識の擦り合わせを重ね、本年度中に両国で刊行する、調査報告書に掲載する原稿執筆を進めた。また、27年1月1～6日には中国・科学出版社を訪れ、3月末には出版の運びとなった。 ・三次元画像解析の結果、日中の研究者で齟齬が生じる部分や鑄造実験を踏まえた検討により、修正を必要とする見解などが明らかとなった。また、日中の青銅技術の研究史が総括されたことで、大変意義深い青銅器研究の到達を示すことができた。 ・本年度は学芸的な検討の中で、認識の一致を見た後、翻訳やページの割付を進め、日中間の研究者で検討した後、両国で調査研究の成果を纏めた報告書を刊行した。また、本件の製作にあたり、表現上の擦り合わせを行う必要が生じたため、翻訳を推進している研究者1名を招聘し、研究の今後の展開の方向性や日中の研究機関での協力体制等をより具体化すべく、研究討議を行った。実際には、2年間にわたる準備作業を行ってきたため、スムーズに検討・刊行作業を進めることができた。			
 <p>泉屋博古館での調査</p>			
【実績値】 海外共同調査数 1回 海外研究者招聘・受入数 1人 論文数 2件（①、②）			
【備考】 論文 ① X線CTによる殷周青銅器の構造解析（三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究、27年3月31日）今津節生・鳥越俊行・輪田慧 ② X線CTスキャナと3Dデータを応用した文化財の調査・研究・展示への活用（三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究、27年3月31日）今津節生・鳥越俊行・輪田慧			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展覧会準備に直結した形で進めることができた。 独創性：他に類のない企画のため、独創性は充分にある。 発展性：展覧会をさらにより充実した形で進めることのできるものである。 効率性：効率的な準備作業を進めることができた。 継続性：継続的な取り組みを続けている。 正確性：実見したことで正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	海外共同調査数	海外研究者招聘・受入数	論文数			
評定	B	B	B			
判定理由 海外共同調査数：共同調査を行ったことで実際にメールや電話では、伝わりにくい表現方法など、実際に膨大な数の報告書画像に基づきながら検討を進めることが出来た。 海外研究者招聘・受入数：中国側研究者を招聘し、今後の研究の展望や協力体制の推進について、具体的に討議することができ、目標を達成した。 論文数：報告書編集に力を注いだため、やや少なかったが、報告書の編纂という当初設定した目標を達成することが出来た。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	泉屋博古館所蔵の青銅器について、日中の研究者がそれぞれのバックグラウンドに基づいて検討を行い、今までに実績の無い成果を上げることができた。また、その成果を日中それぞれの言語で報告書に纏め、両国で研究成果を共有するための基盤を構築できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日中両国が共同して行った、三次元計測技術という新しい博物館科学の手法を用いた例の無い成果であり、今後の研究・展示のための基盤として大きな前進をみた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)-(6))		
【事業概要】	<p>本研究では、弥生時代～古墳時代の墳墓の埋葬施設(室、槨、棺)への赤色顔料の塗布について、その種類や塗布範囲の調査を行い、時期差や地域差、階層差の有無を検討することを目的とする。これまで墳墓から出土する赤色顔料の使用方法については、塗布や散布、敷かれたなどと言われることがあるが、使用対象が木棺や遺骸といった有機物であることが多く、実際にはその使用方法は明確では無い。ここでは、石棺や甕棺などの腐朽しない棺を主な調査対象とし、これらの点について検討を行うものである。</p>		
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】			
【主な成果】	<p>これまで赤色顔料使用の様相が不明であった日本列島東半部の前期古墳について調査を実施し、少なくとも新潟北部～栃木北部ライン以南では、墳墓内での朱とベンガラを使い分けが畿内とほぼ同時期に始まっていることが実証された。また、朱については、古墳を飾る壺に装飾を目的として塗布されたものがあること、ベンガラについては漆工品の下地として使用されているものもあること、青銅鏡や銅鏃に装飾目的で塗布されているものがあることなど、西日本の当該期ではあまり知られていないような使用方法も散見され、赤色顔料使用に多様性があることも判明した。</p>		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は、主に中四国地域を対象とする予定であったが、前年度に赤色顔料の塗布・付着が明瞭な木棺の痕跡が残る城の山古墳(新潟県胎内市)の現地調査に参加したことから、本年度はその報告書の準備も兼ねて赤色顔料使用の様相が不明であった日本列島東半部の古墳を中心に調査を行った。 ・調査を行った古墳は、福井5、富山6、新潟3、静岡5、長野3、神奈川1、千葉4、群馬4、栃木5、福島6の合計42遺跡である。 ・調査の結果、少なくとも新潟北部～栃木北部ライン以南では、墳墓内での朱とベンガラを使い分けが畿内とほぼ同時期の古墳時代前期中頃には始まっていることが実証された。 ・福井県にある前期後半の古墳では、石棺内に朱が塗布され、石室壁面にはベンガラが塗布されていた。この赤色顔料の使い分けについては、北部九州や讃岐の初現期の石棺を持つ古墳にも共通しており、大変興味深い現象である。 		
			
	群馬県埋蔵文化財調査事業団での調査風景		
【実績値】	<ul style="list-style-type: none"> ・調査件数 42 遺跡(福井5、富山6、新潟3、静岡5、長野3、神奈川1、千葉4、群馬4、栃木5、福島6) ・学会参加数 1回 		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・ポスター発表 「出土ベンガラ中に含まれているパイプ状ベンガラ粒子の認定方法について」日本文化財科学会第31回大会(26年7月5日～6日) 		

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：これまで遺物として認識されてこなかった赤色顔料について、基礎的な調査を行うことが求められている。 独創性：出土赤色顔料を考古学的に検討する研究は、ほとんど行われていないため独創的な研究であると言える。 発展性：出土赤色顔料は世界各国、色々な時期に認められることから、今後は世界的視野からの検討も必要である 効率性：出土状態の検討や顕微鏡観察は、長時間の観察が必要であるが、これまでの経験を生かし効率的に調査を実施することができた。 継続性：資料保管場所を訪問し、顕微鏡により調査を行うなど調査内容の質を保ちながら調査を継続している。 正確性：顕微鏡による付着状況の観察や赤色顔料粒子の観察も行っており、調査結果は極めて正確である。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	学会参加数				
評定	B	B				
判定理由 調査件数：これだけ調査数があれば、十分に分布を検討できる。 学会参加数：数は少ないが、会員数の最も多い文化財科学関連の学会に参加しており、適切な参加数と考えられる。						

3. 総合的評価

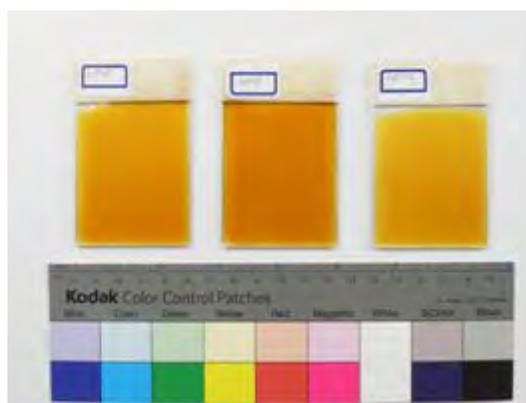
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費による4ヵ年継続事業の2年目であるが、様相が不明確であった列島東半において、状況が把握できたことは大きな成果である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画に若干の変更を行いつつ研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。 次年度は、今回調査を行えなかった中国・四国地方での調査を行い、次々年度に繋げたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8)酸化促進剤の添加による文化財建造物用油性塗料の塗膜形成 (学術研究助成基金助成金) ((5)-⑥)		
【事業概要】 近年の研究結果から、文化財建造物には漆や膠以外に油性塗料が用いられていたことがわかっている。一方で、塗料の性質に関する研究は他の二つの塗料と比べ十分とはいえない。本研究は、より実用性の高い油性塗料の開発を目的とした調査研究である。具体的には、建中寺の塗装材料調査と、油性塗料の重合乾燥と塗膜の形成実験を行う。本年は特に酸化促進剤の添加量による塗膜の重合乾燥の速度とそれに伴う諸変化を検証する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室アソシエイトフェロー 赤田昌倫
【スタッフ】			
【主な成果】 (1) 油性塗料で施工された可能性が指摘されていた建中寺や薬師寺などの文化財建造物について塗装材料調査を行った。その結果、赤色などの同一色で施工された部材について複数の色料、展色剤が用いられていたことを明らかにした。 (2) 塗膜の形成状況に関する知見を得るため、木材片を支持体として調査研究を行った。その結果、酸化促進剤を添加しなかった塗料は重合乾燥に非常に長い時間がかかり、表面に近い部位のみ膜が形成されることを明らかにした。			
【年度実績概要】 (1) ・文化財建造物の塗装材料調査については、建中寺文化財建造物の塗装材料調査を行った。その結果、赤色塗料において異なる三種類の色料 (2 種類の酸化鉄系赤色顔料、水銀朱) が使用され、展色剤についても少なくとも 2 種類 (漆、膠) の材料を使い分けて塗装していたことがわかった。また、この結果について、建中寺で講演会を行った。(26年10月23日) ・薬師寺東塔の部材には赤色塗料が残存しており、材料調査を行った。その結果、酸化鉄系赤色顔料が使用された部材と、酸化鉄系赤色顔料と鉛 (鉛丹) を使用された部材があることを明らかにした。 (2) ・油性塗料の塗装実験を行った。酸化促進剤 (一酸化鉛) の添加量としては、乾性油に対する重量比で 0%、0.1%、1%、5%、10%とした。その結果、添加量 0%では支持体への塗布から 6ヶ月経過後、表面の重合乾燥は見られたが、塗り層の内部から支持体直上にかけて塗料はゲル状のままであった。 ・添加量 1%では塗布数日で塗膜表面の重合乾燥が顕著に見られ、支持体への塗布から 6ヶ月経過後、内部から支持体直上についても重合乾燥が認められた。添加量 5%、10%では塗布数時間で塗膜表面の重合乾燥が顕著に見られ、特に添加量 10%では 1ヶ月経過後、表面から支持体直上まで重合乾燥が認められた。添加量 10%では急速な重合乾燥の影響によって塗膜の一部にクラックが発生した。 ・上記の結果から、酸化促進剤を添加しなかった塗料は重合乾燥に非常に長い時間がかかり、表面は塗膜が形成されても、内部の重合乾燥は不十分であることがわかった。また酸化促進剤の添加量によっては、重合乾燥が早すぎるため塗膜の収縮が発生し塗り層全体に細かなクラックが発生することがわかった。			
【実績値】 発表件数：2件 (学会発表1回 (①)、講演会1回 (②)) 実験回数：36回			
【備考】 発表 ① 金旻貞 赤田昌倫 高妻洋成 鈴木智大 馬場宏道 「薬師寺東塔に使用された彩色材料の分析」日本文化財科学会第31回大会 25年7月5~6日 ② 赤田昌倫 「建中寺文化財建造物の塗装材料調査」26年10月23日			



油性塗料の試験片

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：油系塗料で施工された文化財建造物の修理時例はほとんどなく、塗膜の劣化に対する処置方法についても一様ではない。そこで、油系塗料が確認された寺社で現状の塗膜の状態調査を行った。 独創性：油性塗料の塗膜形成において最も影響があると考えられる乾燥促進剤に着目し、実験を行った。その結果、乾性油に対する乾燥促進剤の添加量に伴って塗膜形成が変化することを明らかにした。 発展性：本研究の成果は、油性塗料を用いられた可能性がある文化財建造物は日本国内でも多いと考えられていること、また密仏絵など油性塗料を用いた文化財全般にも発展することが期待される。 効率性：実験試料作製には塗料の攪拌機や定厚塗膜作製機を購入した結果、効率よく研究を進めることができた。 継続性：実験は来年度まで継続して行うが、現在までに得られた結果は塗膜形成に関する重要な知見を含んでいる。 正確性：一つの検証項目につき複数の実験サンプルで実験していること、重合乾燥環境に対する数値を定めていることから、本実験結果の正確性は高いと考えられる。						

2. 定量的評価

観点	学会発表	講演会				
評定	A	B				
判定理由 学会発表：学会発表と講演会を行い、目標（年1件以上）を達成できた。 講演会：計画にはなかったが、一般の方に文化財建造物の塗装の重要性について周知してもらうことに貢献した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実験サンプルを作製し、乾燥作業を行っており、本年は経過観察中である。ただし、色調変化の調査や成分変化に対する検証は随時行っている。次年度は塗膜形成状態が良好だったサンプルと最も悪かったサンプルについて、乾燥作業の温湿度など重合乾燥条件を変更することによる塗膜形成を検証するため追加実験を行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	酸化促進剤を添加した各試料作製を完了させ、現在は試料の経過観察行っていることから、本年の研究計画を満たすことができたといえる。次年度も継続して暴露実験と各種分析調査を行う予定である。学会発表と講演会を行っており、中期計画に沿った結果の公開を行っている。次年度も経過観察を継続しつつ、各種分析結果について発表する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) みんなでまもるミュージアム (文化庁文化芸術振興費補助金) ((5)-⑥)		
【事業概要】 未曾有の大災害や地域の文化財の盗難が懸念されている昨今、館同士のみならず地域と一体となって対策を講じ危機を乗り越える強さを備えたミュージアム機能の強化が求められている。九州山口ミュージアム連携事業実行委員会(事務局：長崎県文化振興課)・各県立拠点館・地域市民と連携協力し、各地のミュージアムが地域の文化・文化財をまもる拠点となるように、関係職員と地域市民が共に防災危機管理能力を高めることのできる研修プログラムを策定する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 本田光子
【スタッフ】 三輪嘉六(館長)、西村栄造(副館長)、大西浩二(副館長)、井上洋一(部長)、阿部勝(総務課長)、臺信祐爾(企画課長)、今津節生(博物館科学課長)、富坂賢(文化財課長)、田端幸朋(広報課長)、楠井隆志(展示課長)、篠崎孝司(交流課長)、大石淳子(総務課長補佐)、井上裕介(総務課財務係長)、河北絵里子(学芸部事務補佐員)、野上真理子(学芸部事務補佐員)			
【主な成果】 (1) 事業計画検討実施及び教訓と課題を共有するための事例発表を含む全体合同会議を開催し、被災地の施設・団体と防災対策の先進館において調査・情報収集を行い、研修プログラムの一部を試行した。 (2) 災害の内容や地域性を考慮した研修プログラム策定のための基礎情報を共有した。 (3) 事例発表と調査で得た情報を活かした博物館職員及び市民が共に学ぶ研修プログラムの一部を試行し、事業報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 (1) 全体合同会議(協力者会議・ワーキング会議・実行委員会の合同会議)にて多数の事例発表から文化財防災危機管理にわたる教訓と課題を学んだ。 ・第1回 事例発表 3件：阪神淡路大震災と文化財の防災・危機管理について(6月19日：49名) ・第2回 事例発表 10件：文化財の防災・危機管理に関する取り組み(8月11～12日：68名) ・第3回 事例発表 12件：文化財の防災・危機管理に関する取り組み(1月21～22日：74名) (2) 被災地及び防災先進地の調査情報収集により、教訓と課題をより深く体験した。 ・第1回関西地方：阪神大震災の教訓とその後の施設整備や市民参加の保全活動を学ぶ(10月16～18日：22名) ・第2回東海地方：東海地震に備えた美術館の防災対策を学び実地訓練に参加(10月20～21日：22名) ・第3回東北地方：東日本大震災の被災施設と文化財の現況及び市民参加の保全活動を学ぶ(11月24～26日：23名) (3) 繰り返しの実施と工夫を要する市民向けワークショップ関係の研修プログラムについて、先行的に試行し、改善点を抽出することができた。(2月25-26日：34名) ○調査情報収集レポート及び事例発表の記録(市民ボランティアによる書き起こし)を報告書として刊行した。			
			
市民参加の保全活動：関西地方			
【実績値】 ・「みんなでまもるミュージアム」事業全体合同会議 3回、出席者計191名 ・事例発表件数 25件 ・調査情報収集 3回 計67名 ・試行研修会 開催回数、参加者数・・・・・・1回 34名 ・「みんなでまもるミュージアム」事業報告書 1冊 600部			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-9

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：災害多発の時代、地域の文化・文化財を守り継ぐために博物館は文化財の防災危機管理能力を高める必要がある。 独創性：九州山口8県との連携協力及び市民の参加を得ることで、地域ネットワーク構築を強力にすすめることができた。 発展性：国立博物館を核として複数の自治体が参画する文化・文化財にかかる地域連携協力事業の可能性を開拓した。 効率性：事業実施期間中、人的にも設備的にも常にスムーズな運営を行うことができた。 継続性：3ヵ年計画の初年度事業として、適切な実施内容であり、順調に継続し、目的を達成する見通しを得た。 正確性：定数事業は計画通りに実施し、協力により成立する事例報告件数では予定をはるかに超え内容充実が達成された。						

2. 定量的評価

観点	会議報告会開催回数・出席者数	事例報告件数	情報収集実施回数・参加者数	試行研修会開催回数・参加者数	報告書刊行
評定	B	B	B	B	B
判定理由 会議報告会開催回数・出席者数：計画通り実施することができた。 事例発表件数：当初計画を大きく超える発表の協力を得ることができた。 調査情報収集・参加者数：参加者数が予定を超えたが、内容は計画通り実施することができた。 試行研修会開催回数・参加者数：参加者数が予定を超えたが、内容は計画通り実施できた。 報告書：計画通り刊行することができた。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は、地域の文化・文化財を守り継ぐための防災・危機管理研修プログラム策定の基礎情報を順調に収集・活用することができた。国立博物館を核に広域にわたる地域連携によるネットワーク構築強化を進めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、計画に沿って順調に遂行している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続し、広く研究成果が活用されるように進展させたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館
業務実績書

処理番号 4571-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 博物館環境デザインに関する調査研究((5)-(7))		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青
【スタッフ】 矢野賀一（企画課デザイン室主任研究員）			
【主な成果】 <ul style="list-style-type: none">27年1月2日にリニューアルオープンした黒田記念館のため、東博から黒田記念館への〈案内・誘導サイン〉及び〈展示解説サイン〉について、多国語（4ヶ国語：日英中韓、2ヶ国語：日英）で整備を行った。黒田記念館の開館準備として、展示室・資料室・映像室・ショップ・トイレ・ホール等について、建築空間の質的調和を考慮した、木製家具補修・新規家具什器・カーテン・ロッカー・カサ立て及び照明がデザインされた。平成館改修工事に伴い、本館地下ラウンジへ移設された〈ポスター掲示板〉を新設し、東博及び他館での展覧会等とともに憩いのスペースとなるようした。東洋館の入口に東洋館名称「内照式サイン」と「懸垂バナー」を設置し、東洋館の認知度アップをはかった。2015年3月には懸垂バナーと獅子、計4ヶ所にLED スポット照明が追加設置された。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none">他館展示／観覧環境のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館での事例調査に加え、さらに地方博物館・美術館における環境デザインを調査し、特に今年度においては寄贈者顕彰コーナーの参考とした。調査先／韓国国立中央博物館、景福宮古宮博物館（ソウル）、シュテューデル美術館、シルン美術館（フランクフルト）、喜多方市立美術館（福島）、アムステルダム博物館、アムステルダム国立美術館、ゴッホ美術館（アムステルダム）、京都国立博物館 平成知新館（京都）、渋谷区立松涛美術館（東京）等			
			
黒田記念館・黒田記念室 〈解説サイン、家具什器〉	本館地下ラウンジ・ポスター掲示板 〈掲示板、ポスター掲出用アタリ〉	東洋館入口のサイン 〈内照式館名サイン・懸垂式バナー〉	
【実績値】 研究発表件数 4回 <ul style="list-style-type: none">《展示と照明》講演、ワークショップ 於・ソウル 古宮博物館、《トーハクのデザイン》千葉県立美術館、照明デザイン国際セミナー《ミュージアムライティングの今と未来》トークセッション 他 論文等掲載数 1回 <ul style="list-style-type: none">日韓美術解剖学会シンポジウムレジュメ（「博物館の展示照明と“顔”」）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：当館の来館者数拡大が事業目標とされる中で、より解り易い案内サインの整備が課題である。2015年1月2日「黒田記念館」開館に伴うサイン整備にあたり、様々なサインに関わる検討がなされた。 発展性：平成16年度の本館リニューアルから、プロジェクトごとに館内サイン・展示解説の充実がなされてきた。一方デジタルサイネージやデジタルコンテンツ等の進歩に対応しつつデザインを整備しつつある。 効率性：黒田記念館では、プロジェクトによる黒田清輝スライドショーや、タッチパネルモニタによる黒田清輝のコンテンツ等、黒田清輝に関わる情報データベースの外部への公開・情報発信が可能となる予定である。 継続性：東博の顔となるべき正門プラザでの情報提供を核としつつ、継続的な最新の技術面・デザイン面での館内サインへの展開や、デジタルサイネージ導入、黒田記念館との連携等について更なる調査研究が望まれる。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文等掲載数				
判定	B	B				
判定理由 研究発表件数：全館的な方針に沿って研究を行い、その成果として館内において計画を推進（製作・設置）し、その成果について国内外の事例も見据えつつ、東博での現状分析・課題の発信を行っている。 論文等掲載数：特にLED照明やデジタルサイネージについて、最新の技術的・意匠的な面での調査研究が望まれ、韓国との学会発表・レジュメの中で照明技術・手法について情報交換を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示・公開事業の基本的なメンテナンスは欠かせない一方で、急速な技術的進歩を遂げているサインのデジタル化（デジタルサイネージ）及び画像・映像利用の増進に対応して、展示解説等への応用的デザイン研究を計画的に進めている。 26年度に得られた成果、特に黒田記念館で実施・検証された、サイン掲出におけるコンセプトと、視認性・判読性等の方法論的知見は、現在進行中の「平成館リニューアル」「考古展示室リニューアル」、及び次期「本館リニューアル」へと反映させる予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度においては黒田記念館リニューアルオープンの事業を中心に計画通り実施している。 引き続き館内の環境デザインのファシリティ及び質的向上を計画的に行う必要がある。 中期計画との関係では、来る法隆寺宝物館等の設備改修、海外からのお客様増加への対応を念頭に、観覧環境整備を計画的に実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館教育に関する調査研究(5)―⑦)		
【事業概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・総合文化展及びコレクションに密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施。 ・スマートフォン向けアプリ「トーハクナビ」による、来館者への適切な情報並びに豊かな鑑賞体験の提供について調査・研究を実施。その成果をもとに新バージョンを一般公開し、さらにその成果についての調査も実施している。 			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 小林 牧
【スタッフ】			
<p>小山弓弦葉(教育普及室長)、鈴木みどり(ボランティア室長)、浅湫毅(教育講座室長)、藤田知織(教育普及室主任研究員)、神辺知加(教育講座室主任研究員)、川岸瀬里(教育普及室アソシエイトフェロー)、小島有紀子(ボランティア室アソシエイトフェロー)</p>			
【主な成果】			
<p>(1)各種教育プログラムの開発と運営に関して、これまでの研究をもとに発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9月18日 藤田千織 「学校のよりよい利用形態にむけて」(事例発表・ディスカッション)文化庁第4回ミュージアムエデュケーター研修、シンポジウム「コレクションを活かした鑑賞教育とは」 ・27年1月10日 藤田千織 科学研究費による研究「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」(代表 一條彰子)成果発表・美術科教育学会共同開催 <p>(2)・特集「熊めぐり」(4月22日～6月1日 神辺知加)では、来館者にとってのわかりやすさとはなにかについて考察を深めることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親と子のギャラリー「仏像のみかた 鎌倉時代編」(6月10日～8月31日 川岸瀬里)では、普段なじみのない仏像作品へのアプローチのしかたを提示することができた。 <p>(3)トーハクナビは、ISID(電通国際情報サービス)、クウジツ社との共同研究で開発し、24年4月より一般公開を始め、その後、コンテンツの拡充、各種OSに対応するバージョンをリリースしてきた。本年度は、4月に全館をカバーするコースガイドの配信、10月に展示替えに即した作品解説を搭載した「トーハクナビ3.0」へのバージョンアップを実施。また、外国語による情報発信の方法についての調査・研究の結果、人工音声エンジンを導入したシステムを構築した。12月には、これらについてのアンケート調査を実施し、今後の展開についての研究を継続中。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1)各種教育プログラムの開発と運営に関して、これまでの研究をもとに発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学校のよりよい利用形態にむけて」(事例発表・ディスカッション) ・9月18日 藤田千織 文化庁第4回ミュージアムエデュケーター研修、シンポジウム「コレクションを活かした鑑賞教育とは」 ・27年1月10日 藤田千織 科学研究費による研究「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」(代表 一條彰子)成果発表・美術科教育学会共同開催 <p>(2)・特集「熊めぐり」(4月22日～6月1日 神辺知加)では、来館者にとってのわかりやすさとはなにかについて考察を深めることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親と子のギャラリー「仏像のみかた 鎌倉時代編」(6月10日～8月31日 川岸瀬里)では、普段なじみのない仏像作品へのアプローチのしかたを提示することができた。 <p>(3)トーハクナビは、ISID(電通国際情報サービス)、クウジツ社との共同研究で開発し、24年4月より一般公開を始め、その後、コンテンツの拡充、各種OSに対応するバージョンをリリースしてきた。本年度は、4月に全館をカバーするコースガイドの配信、10月に展示替えに即した作品解説を搭載した「トーハクナビ3.0」へのバージョンアップを実施。また、外国語による情報発信の方法についての調査・研究の結果、人工音声エンジンを導入したシステムを構築した。12月には、これらについてのアンケート調査を実施し、今後の展開についての研究を継続中。</p>			
【実績値】			
<p>研究発表回数 計2回 (参考値)調査 計3回(特集「熊めぐり」 アンケート調査(4月22日～6月1日)、親と子のギャラリー「仏像のみかた 鎌倉時代編」アンケート調査(6月10日～8月31日)、「トーハクナビバージョン3.0」アンケート調査(12月2日～14日 2週間))</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：革新を続ける情報化社会のニーズに対応した情報発信及びプログラムの開発を目指しているため。また、2020年の東京オリンピックに向けて増加することが予想される外国人来館者に対するプログラムの開発を行っているため。 独創性：これまでの伝統文化に関わる展示やプログラムの枠組を超えた柔軟な発想による企画を開発しているため。また、今までの博物館にないサービスの提供を行っているため。 発展性：若年層や外国人など、ターゲットの拡大を図り、それぞれのニーズに対応したサービスの多様化に向けても多くの可能性を示しているため。 効率性：スクールプログラムへのボランティアの活用など人材の有効活用や、情報機器の適切な導入による効率化を図っている。 継続性：コレクションと総合文化展に密接に関連したプログラムを重視することによって、より充実した博物館体験のための施策の継続性が保たれるため。上野地区の連携事業の継続に向けて、各施設との良好な関係を築いているため。						

2. 定量的評価

観点	研究発表回数					
評定	B					
判定理由 研究発表回数： 予定通り、東京国立博物館の教育普及活動の考え方と実践例を多角的に紹介することができたため。						

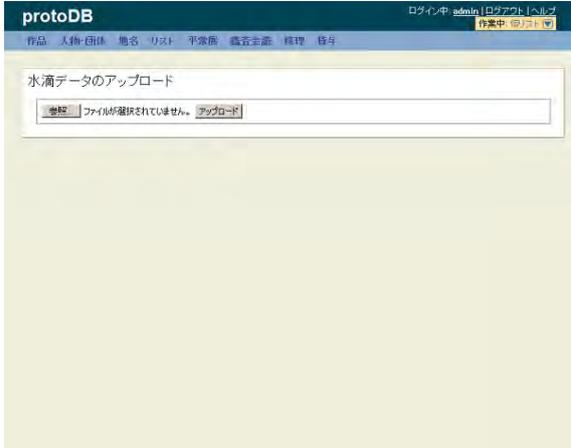
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	コレクションを核としたプログラムの調査研究、また、誰でも楽しめる親しみやすい博物館の実現を目指すプログラムの調査研究は、具体的なプログラムの実践を通して前進している。また、これらのプログラムの実施について、教育課研究員およびボランティアが積極的に関与し、来館者への充実した博物館体験の提供において確実な成果を上げている。また、スマートフォン向けアプリの充実により、情報化社会のニーズに応え、さらに外国人向けサービスの向上にも寄与している。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館教育に関しては、計画に沿って進行している。 コレクションを核とした教育プログラムにおいて、日本と東洋の伝統文化に関する理解促進を引き続き行うと同時に、多様化する来館者のニーズに対応したよりよい博物館体験の提供を目指して、次年度も取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究((5)－⑦)		
【事業概要】			
東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二
【スタッフ】			
和久井遥（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】			
東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議機能、貸与管理機能、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。また、様々な調査結果のデータを一括でアップロードする機能を複数実装した。さらに、今後の継続的なシステム改修・改善のため、システム全体のプログラムコードを大幅に整理した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・継続運用 収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、随時改善を重ねて一層の機能向上を図った。 ・一括登録機能の実装 館内で行われる列品に関する様々な調査の結果をまとめてデータベース上に反映させるため、CSV ファイルから一括で登録する機能を複数実装した。またこの際、今後新たに同様の機能を実装する場合に迅速に開発を進められるよう、一括登録に関わる箇所をフレームワーク化した。 ・プログラムコードの整理 システムに利用しているサーバソフトウェアやソフトウェアライブラリ等の環境の変化にあわせると同時に、メンテナンス性を向上させるため、プログラムコード全体を見直し、大幅な整理を行った。この結果、コードが削減され全体的見通しが改善された。特に鑑査会議機能と密接に連動する修理関連機能については、修理に関する手続の変化などを反映する必要からやや煩雑になっていた部分があったが、あらためて業務の内容を精査し、機能的でわかりやすいものとなるよう改善した。 			
			
収蔵品管理システム（データ一括登録画面）			
【実績値】			
収集データ件数 216,933 件 （内訳） 作品データ件数 209,410 件 平常展データ件数 3,740 件 鑑査会議データ件数 78 件 貸与データ件数 1,197 件 修理データ件数 2,508 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：業務に合わせて必要とされる改修・改善を随時行うとともに、新しいソフトウェア環境に適合させている。 独創性：既存のシステムにない総合的な博物館資料情報システムとなっている。 発展性：プログラムの整理により、機能追加・改善がさらに容易となった。 効率性：内製により効率的な開発を行った。 継続性：データ整備の基盤構築として継続的に実施した。 正確性：作品に関する調査結果を随時反映し、データの正確性をさらに向上させた。						

2. 定量的評価

観点	収集データ 件数					
評価	B					
判定理由 収集データ件数：効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れの中で効率的に無理のないデータ収集が可能となり、その結果データを着実に蓄積している。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品管理システムのさらなる発展・機能向上にむけて、既存システムのプログラムを全体として見直すことができ、将来の作業のための準備としてほぼシステム全体にわたってコードの整理ができた。また、こうした大幅な見直し作業の間も運用を継続し、データ整備の基盤としての役割を果たした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	システムの継続的開発を確実にするためには、既存コードを漸進的に改良することで充分可能であることが明らかとなった。中期計画期間最終年度となる次年度は、業務支援に必要な機能を最終的に確認し、機能面での整合性を整える。特に、ユーザインターフェースに関わる新しい技術の採用や、館内業務システムとのアカウント統合について検討を進める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 凸版印刷と共同で、ミュージアムシアターでの公開に向けた研究を引き続き実施する((5) -⑦)		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタル・アーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。 19年度から「国宝 聖徳太子絵伝」「国宝 灌頂幡」「重要文化財 洛中洛外図 舟木本」「土偶」「十一面観音菩薩立像」の高精細デジタル・アーカイブを作成し、それらを素材としてミュージアムシアターにおけるコンテンツの公開を実施している。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 伊藤嘉章
【スタッフ】 田良島哲(学芸研究部調査研究課長) 田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長) 後藤健(特任研究員) 小野塚拓造(企画課特別展室アソシエイト・フェロー)			
【主な成果】 (1) 前年度にデータ取得及びコンテンツ制作に着手した文化財について、ミュージアムシアターのコンテンツ2件を公開した。 (2) 新たに列品1件について新設したX線CTスキャナーを使用して3次元データを取得した。 (3) 既に取得した作品のデータを元にしたコンテンツの内容の修正について監修し、公開した。			
【年度実績概要】 (1) 前年度にデータ取得及びコンテンツ制作に着手した重要文化財「日本沿海輿地図」について、ミュージアムシアターのコンテンツ「伊能忠敬の日本図」として特集展示に連動して公開した。また、25年度まで保存修復事業を実施した国宝「檜図屏風」について、調査時に取得した高精細画像データをもとに、当館研究員監修のもとでコンテンツ「国宝 檜図屏風」を作成、公開した。 (2) パシェリエンプタハのミイラ(TJ-1835)について、CTスキャナーを使用したデータを取得し、来年度のコンテンツ制作にそなえた。 (3) 作成済みのデータ「土偶」「洛中洛外図屏風舟木本」をもとにしたコンテンツの内容の修正について監修を行い、特別展に関連した企画として公開された。			
			
新コンテンツの素材「国宝檜図屏風」			
【実績値】 データ取得件数 1件 コンテンツ化件数 2件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：博物館の情報化と、より広範な文化財の活用という現在の動向を反映している。 独創性：希少性の高い文化財を素材として、研究員の知見に基づいた他に類例のないコンテンツを制作している。 発展性：多目的に活用できるデータを蓄積している。 効率性：凸版印刷との協業により、効率のよいデータ蓄積を行っている。 継続性：共同研究以来6年を経過し、引き続き積極的な展開を図っている。 正確性：凸版印刷の持つ画像技術の応用により、高精細かつ正確なデータの取得とコンテンツの制作を行っている。						

2. 定量的評価

観点	コンテンツ化 件数					
判定	B					
判定理由 データ取得件数・コンテンツ化件数：所期のコンテンツ化ができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画どおりにデータの取得と新コンテンツの公開が行われた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	凸版印刷との共同研究を継続しており、アーカイブの方法も含めた作品データの蓄積と活用を進めるとともに、新シアター向けのコンテンツを公開することができた。引き続き、研究対象の選定と方法について協議を進め、新たな素材に関する研究とデータ及びコンテンツ制作に取り組む。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 聴力障がいを持つ児童・生徒のための鑑賞プログラムの構築(学術研究助成基金助成金)((5)－⑦)		
【事業概要】 聴覚に障がいをもつ児童・生徒の博物館での学習や鑑賞の困難さの特徴を示し、その具体的解決方法としての鑑賞プログラムを構築することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育普及室アソシエイトフェロー 川岸瀬里
【スタッフ】			
【主な成果】 聴覚障がいをもつ児童・生徒への特別支援教育についての調査と、国内外の美術館・博物館で行われているバリアフリー化、ユニバーサル化事業の調査を行った。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・聴覚特別支援学校、特殊教育学会、国立特別支援教育総合研究所、聾教育研究会などでの調査、情報収集のほか、特別支援教育研究者や教員、ろう者との意見交換を行った。 ・国内外の美術館・博物館で聴覚障がいに限らず、障がい者に対応しているプログラムや設備、ツールに関する調査、情報収集した。 ・東京国立博物館職員、ボランティアスタッフ、他館教育普及担当者等を対象に研修を計3回行った。 ・聴覚障がい者への対応の遅れと、その解決法について意見交換を行った。 都内調査：サントリー美術館、損保ジャパン東郷青児美術館、国立科学博物館、日本科学未来館			
			
東京国立博物館職員、ボランティアスタッフ等を対象に実施した研修			
【実績値】 美術館等調査回数 3回 特別支援教育施設等調査回数 2回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：博物館のユニバーサル化という時代の要請に込えているため。 独創性：これまで注目されてこなかった聴覚障がい者を対象とした、先進的な取組を行っているため。 発展性：今後の展開を視野に入れながら行っているため。 効率性：周到な計画の上に行っているため。 継続性：計画に基づき、情報収集及び検討を重ねているため。 正確性：美術館・博物館だけでなく、特別支援教育の現場と協力し検証しながら進めているため。						

2. 定量的評価

観点	美術館等 調査回数	特別支援教育 施設等調査回数				
判定	C	C				
判定理由 美術館等調査回数・特別支援教育施設等調査回数： 広く情報収集するとともに、意見交換等を通じ、聴覚障がい者の学びに関する新たな視点を提供してきたが、当初の計画よりも訪問調査回数が少なかったため。						

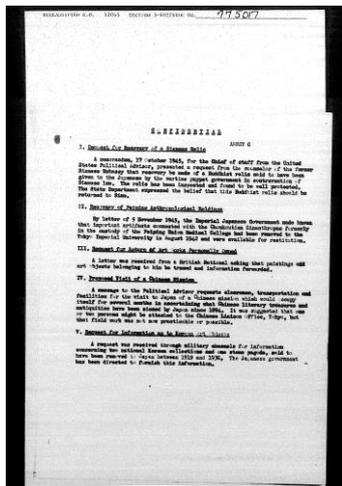
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	美術館・博物館ではほとんど行われていないという聴覚障がい者によるバリアフリーチェックなどを行い、その結果を職員にむけて公表し、改善点を発表した。外部機関の調査だけでなく、対内的調査を行ったことで東京国立博物館での実践に大きく近づいた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、概ね研究計画に沿ったかたちで順調に進められていると考える。来年度も新たな教育手法の有効性を検証し、また有形文化財に関する調査研究の最新の成果を活用しながら、博物館という場をいかした実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。また、特別支援教育やユニバーサルデザインなど、他分野での研究及び実践の成果に積極的にふれ、活用していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）（5）-⑦)		
【事業概要】	CIE 文書内博物館関連文書から戦後の民主化で国立博物館がどのような役割を果たしたかについての研究。CIE 文書のデータベース構築及び分析を行う。		
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	教育講座室 神辺 知加
【スタッフ】			
【主な成果】	<p>(1) 国立国会図書館が保管する CIE(民間情報教育局)文書の約 30,000 件から、『museum』、『exhibit』に関する 400 件の資料を調査し、そのうち 200 件を文字データ化し翻訳を行った。内容を分析し国立博物館関連の資料を発見した。</p> <p>(2) 国立博物館関連の資料についてデータベースを構築し一般公開する（27 年 3 月公開）</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 約 200 件の翻訳された資料の分析を行った。国立博物館関連資料について東京国立博物館が所蔵する資料との裏づけを行った。現在、結果報告をまとめている。</p> <p>(2) 約 200 件についてマイクロフィルムから文字おこしをしてデータ化し、翻訳からデータベースを構築するため、翻訳の用語統一を行った。</p>		
			
	<p>国立国会図書館に保管されている CIE 文書のマイクロフィルム</p>		
【実績値】	<p>調査件数 CIE(民間情報教育局)文書 400 件 文字データ化・翻訳 200 件 (参考値) データベース (27 年 3 月公開)</p>		
【備考】			

【書式B】
(様式1)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：博物館がモノ中心から人中心へ変わろうとしている現在、改めて占領時の資料に分析し、現在の博物館の基盤となった政策について考察することは重要だと考える。 独創性：他機関では、まとまった文書の翻訳及び調査は行われていないため。 発展性：国立博物館のあり方についてその方針が明らかになりつつある。 効率性：より多くの文書内容を確認するため翻訳を専門業者に依頼した。 継続性：新しいキーワードで検索し、まだ目を通していない文書も確認する予定である。 正確性：専門用語は専門書に則った翻訳になっており、より精度の高いものになっている。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	文字データ化 ・翻訳				
判定	B	B				
判定理由 調査件数：文書総件数 3,000 件のうち、『museum』、『exhibit』に関する文書については全て確認できたため。 文字データ化・翻訳：確認した文書のうち、国立博物館に関係ありそうなもののみ文字データ化し翻訳したが、計画どおり全て行うことができたため。						

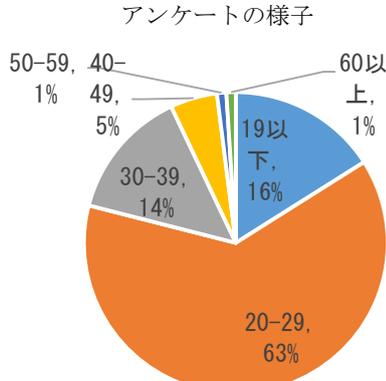
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	膨大な量の CIE 文書の内、1%であるが、個々の文書に目を通し、何が記されているか明らかにしたことは CIE 文書研究初である。さらにマイクロフィルムでしか確認できない文書についてある程度まとまった量での文字データ化と翻訳は大きな進展である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今回の調査で、博物館に直接関係がない文書も多数目にしたが、戦後の教育を分析する上で重要な資料と思われる文書が数多くあった。国立博物館に関する文書の分析研究をまとめた後、それらの文書の分析研究も行いたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																
プロジェクト名称	7) ミュージアムにおける鑑賞者開発の研究：新来館者の定着に向けた実証的調査分析(科学研究費補助金)(5)-(7)																
<p>【事業概要】本研究は、ミュージアムにおける「鑑賞者開発 (Audience Development)」の実証的な研究である。鑑賞者開発は、芸術団体と人々の関係強化を目指した考え方で、英国を中心に研究・導入されているが、ミュージアムにおける実証研究はいまだ発展途上にある。そこで申請者は、インターネットやモニタリング調査、海外比較等をもとに我が国ミュージアムにおける鑑賞者開発のモデルを構築し、それを実際のミュージアム事業と連動させることにより、ミュージアムにおける鑑賞者開発の先駆的な実証研究になりうると考え、本研究を計画した。研究を通して我が国ミュージアムに最適な鑑賞者開発の在り方を明らかにし、将来的にはミュージアムへの多様化するニーズを満たし、ミュージアムの社会的価値を増進することにつなげていきたい。</p>																	
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	総務部総務課渉外開発担当係長 関谷 泰弘														
【スタッフ】																	
【主な成果】																	
<p>(1) 鑑賞者開発を目指したイベント「博物館で野外シネマ」においてパイロット調査を実施した。 (2) 上記調査の分析により、過去の調査からの仮説「非来館者はきっかけがあれば来館する」を実証した。 (3) 全国の博物館・美術館に鑑賞者開発の現状を把握するためのアンケートを実施した。 (4) 今後のミュージアム・イベントと本格調査の方向性が定まった。</p>																	
【年度実績概要】																	
<p>(1) 26年度はデスクリサーチのほか、パイロット調査として、東京国立博物館における鑑賞者開発の一環として実施したイベント「博物館で野外シネマ」(26年10月9日、10日)においてアンケート調査を行い、その分析をした。iPadを使用した出口アンケートでは、2日間で207件を収集することができた。この成果は学術論文として公表する予定である(提出年度内、発表27年度)。また、年度内に国内ミュージアムへ鑑賞者開発に関する調査を行い、その分析をもとに次年度の調査計画を精査する予定である。</p>																	
<p>(2) 本イベントでは、新たな来館者の開拓として、情報発信をウェブに絞って行ったが、アンケート結果からは、その期待通り、これまでの博物館への来館とは異なり、インターネットやSNSなどを認知経路とする20代以下の来館者が大部分であった。93%が30代以下で50%は学生という結果からは、新たな層の開拓が何らかのきっかけや情報の発信方法の工夫により実現可能であることがうかがえた。また、来館者満足度や再来館意向も軒並み高く、展示とイベントの結びつき次第で新規来館者の獲得とリピーターの醸成は可能であろうことがうかがえた。</p>		<p>アンケートの様子</p>  <table border="1" style="margin: 0 auto;"> <caption>「博物館で野外シネマ」来場者の年代 (n=207)</caption> <thead> <tr> <th>年代</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>20-29</td> <td>63%</td> </tr> <tr> <td>19以下</td> <td>16%</td> </tr> <tr> <td>30-39</td> <td>14%</td> </tr> <tr> <td>40-49</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>50-59</td> <td>1%</td> </tr> <tr> <td>60以上</td> <td>1%</td> </tr> </tbody> </table>		年代	割合	20-29	63%	19以下	16%	30-39	14%	40-49	5%	50-59	1%	60以上	1%
年代	割合																
20-29	63%																
19以下	16%																
30-39	14%																
40-49	5%																
50-59	1%																
60以上	1%																
<p>(3) 国内のミュージアム338館へのアンケートを実施し、246通の回答を得た(回答率73%)。今後内容を精査し、国内の鑑賞者開発の状況を把握し、次年度の海外調査の前提としたい。</p>																	
<p>(4) 今回の調査からは、普段のミュージアム利用習慣とイベント参加者のイベント終了後の展示の観覧に有意の相関関係があった。今後のミュージアム・イベントの実施にあたっては、この点に留意するとともに、いかにイベント参加者に展示に関心を持ってもらえるかという視点を持ちながら企画していきたい。また、本格調査に当たっては、国内外へのミュージアムへの聞き取り項目としてセグメント設定におけるミュージアム利用習慣の可否を確認したい。</p>																	
【実績値】																	
イベント参加者サンプル数 207件																	
国内ミュージアムアンケートサンプル数 246件																	
(参考値)「博物館で野外シネマ」来場者数 8,600人																	
(参考値)「博物館で野外シネマ」アンケート集計数 207件																	
(参考値) 国内のミュージアムへの鑑賞者開発に関するアンケート回答数 246件 (送付先 338件)																	
【備考】																	

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：我が国において鑑賞者開発に関する調査研究は僅少であり、補助金の削減など、ミュージアムにおける社会的信認が揺らいでいる昨今においては、新たな層を開拓し、より幅広い層に門戸を開くための研究である本研究は重要である。 独創性：我が国における鑑賞者開発における研究はほとんどない。海外においても事例は非常に限られており、ミュージアムにおいてはまだまだ発展途上にある。我が国のミュージアムの事例を積み上げることは新たな研究といえ、新規性、卓越性があるといえる。 発展性：我が国ミュージアムにおける研究は我が国以外、ミュージアム以外のどのようなアート・マネジメントにおいても応用可能である。 効率性：「博物館で野外シネマ」の実施は科学研究費申請時には未確定であったので、26年度の予定には入れていなかったが、実施可能となったため、急遽研究スケジュールを見直してイベントの調査が実現できるように調整した。そのため、調査の一部に不備があるなど問題があったが、調整してなんとか順調に実施することができた。 継続性：次年度の研究に向けた論考がされており、継続性は担保されている。 正確性：統計ソフトを使用し、その数値の有意性を検証しながら調査を進めている。						

2. 定量的評価

観点	イベント参加者アンケートサンプル数	国内ミュージアムアンケートサンプル数				
評定	A	A				
判定理由 イベント参加者サンプル数：100件の目標サンプル数に対し、207件回収できた。 国内ミュージアムアンケートサンプル数：100件の目標サンプル数に対し、246件回収できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は研究初年度ということもあり、研究構想段階では想定されていないことも発生した。そのため、研究計画を一部変更することとなったが、鑑賞者開発に関する意義のある事業が実施でき、その結果を調査することができたため、B判定とした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度は3ヵ年計画の初年度であり、次年度以降につながる調査を実施することができた。次年度は、この成果を踏まえて、より踏み込んだ調査を実施することができるため、研究は順調に達成していると判断し、B判定とした。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財を活用した効果的な展示や教育活動等に関する調査・研究		
プロジェクト名称	8) 藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究(科学研究費補助金) ((5) -⑦)		
【事業概要】 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が所蔵する藤ノ木古墳出土品をはじめ11件(3000点以上)の国宝等国指定文化財を対象に、照度・大気・振動・温湿度等の展示・収蔵環境の調査と非接触高精度三次元形状計測及び透過X線撮影検査による微細物理的検査との相関性について研究し、適正保管・管理・公開を促進するための計画の指針(試案)を検討する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室 主任研究員 品川欣也
【スタッフ】 今尾文昭(奈良県立橿原考古学研究所調査課 課長)			
【主な成果】 (1) 藤ノ木古墳出土品(金銅製鞍金具・龍文飾金具)の輸送中における振動の記録と輸送前後の形状変化の比較検討。 (2) 輸送中における作品の振動に関する基礎データの集積を行うことができた。また輸送前後の形状比較のために三次元計測を行うことでその計測データを取得することができた。 (3) 今後の館内での作品移動や特別展などの貸出に伴う輸送について安全で適正な取扱や輸送方法を確立するための見通しと問題点が明らかになった。また三次元計測によって得られたデータによって、展示に伴う支持具の作成や輸送のための安定台の作成に反映させることができる。			
【年度実績概要】 (1) 橿原考古学研究所にて作品の輸送に先立つ事前調査を行った(26年9月10日)。また日本国宝展に伴って当該作品の借用時輸送(9月25日)、展示(10月10日)、撤収(12月8日)、返却時輸送(12月17日)を行い、輸送時の振動について記録を行った。 (2) 作品の保存状態ならびに輸送の際に梱包方法や輸送用箱、展示方法についての知見を得た。日本国宝展の出品に伴う輸送時の振動に関する基礎データの集めることができた。 (3) 輸送前後の形状変化の比較結果については検討部分が残るが、この検討で得られた三次元計測データを活用して奈良県立橿原考古学研究所附属博物館にて特別陳列「三次元で“作る”!藤ノ木古墳の国宝・馬具」(27年2月7日~3月22日)が開催された。			
			
梱包風景		輸送箱内の様子と振動計	
【実績値】 調査 2回 打ち合わせ 5回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本各地の博物館・美術館で数多くの展覧会が開催され、頻繁に作品が輸送されている現状がある。 独創性：輸送時の振動が記録されることは従来もあったが、輸送前後の形状の細かな比較検討によって、振動による物的影響の評価を行う点に独自性がある。 発展性：輸送前後の形状の細かな比較検討はまだ始まったばかりのため検討事例は少ないものの、輸送方法や距離の検討、作品に蓄積される振動疲労に対して一定の基準をもって評価できる可能が見えてきたといえる。 効率性：研究期間中の特別展の機会をうまく利用して、輸送前後の形状計測や輸送時の振動計測を行うことができた。 継続性：今後展覧会に出品されるごとに基礎データが蓄積され、比較検討の蓋然性が高くなっていくと考える。 正確性：形状計測は三次元計測データ、振動計を用いた振動記録のため客観性が高い。						

2. 定量的評価

観点	調査	打ち合わせ				
評定	B	B				
判定理由 調査：事前及び事後と適切な機会に調査を行うことができた。 打ち合わせ：事前・輸送前・展示・撤収・輸送後と適切な機会に調査を行うことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画の遂行が十分にでき、計測方法や記録の蓄積に加えて、その結果に対する一定の議論ができた。合せて成果の一部展示という形で公表できた。次年度は計画に基づいて研究を実施し、より一層の成果の公開を進められるようにする。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	三ヶ年の研究計画の二年目にあたる本年度は、計画通りに研究を遂行できた。来年度はこれを受けて、計測や比較検討のより一層の効率化や成果の公表に比重を置いて研究を進める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 日本とドイツの美術解剖学教育の発展と展開 (科学研究補助金) ((5)-(7))		
【事業概要】			
東京国立博物館所蔵の美術解剖学関連資料について調査を行い、我が国における美術解剖学の導入及び教育方法を位置付ける過程を明らかにする。さらにこれら資料の公開を目的として特集陳列を実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青
【スタッフ】			
宮永美知代 (東京藝術大学大学院美術教育 美術解剖学Ⅱ 助教・客員研究員)			
【主な成果】			
東京国立博物館所蔵の美術解剖学関係資料、特に森鷗外・久米桂一郎・黒田清輝に関する資料調査を、24年度より継続して行っている。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・他館における資料調査 <ul style="list-style-type: none"> 26年6月17日『バレエ・リュス展』(国立新美術館)において、身体と衣服に関する資料の展示調査を行った。 26年8月18日『黒田清輝展』(京都文化博物館)において、解剖学関連等資料の展示調査を行った。 26年10月13日『サン・シスター』の展示(喜多方・石蔵)において人体彫刻の照明手法についてした。 26年10月16日 特別展『国宝 醍醐寺展』(渋谷区立松濤美術館) 調査内容: 「国宝 絵因果経」等の日本美術における人体の表現に関する資料及び作品等の展示方法について 26年10月16日『菩薩半跏像』(韓国国立中央博物館)の身体表現に関する作品資料の展示方法について ・館内での資料調査 <ul style="list-style-type: none"> 26年12月 黒田清輝筆『智・感・情』(黒田記念館)の展示・照明調整に際し、資料の展示調査研究を行った。 26年8月～27年3月 黒田の滞欧時代のものと思われる「美術解剖学ノート」の翻刻を行った。 久米美術館所蔵の美術解剖学関連ノート・スケッチ・メモ(コピー)について整理を行った。 			
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>『サン・シスター』の展示 (喜多方・石蔵)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>『菩薩半跏像』の展示 (韓国国立中央博物館)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>『智・感・情』の展示 (東博・黒田記念館)</p> </div> </div>			
【実績値】			
資料調査回数	7回(内他館5回、館内2回)		
(参考値)			
研究発表件数	1件(①)		
【備考】			
研究発表			
①26年月12日15日(月) 「韓日 美術解剖学 シンポジウム」にて、『博物館の展示照明と“顔” —日本の仏像とギリシャ彫刻にみる光の東西比較—』について発表を行った。			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：森鷗外・黒田清輝・久米桂一郎がドイツ・フランスから移入した「美術解剖学」に関わる基礎資料が、歴史資料として当館（東京国立博物館と黒田記念館）に保管されており、総合的に調査する事が求められている。 発展性：科研のテーマであるドイツにおける教育的関連を研究する必要があるが、特にドイツや東京美術学校と関係の深い森鷗外関係資料との関連性について発展することも視野に置いている。 効率性：黒田清輝と同時期にフランスに学んだ久米桂一郎に関わる資料を保管する久米美術館所蔵資料と並行して調査研究することにより、より効率的に今後も新たな知見が得られることが考えられる。 継続性：昨年度に引き続き、資料紹介論文・展示デザインの上で、より広い対象に公開することができた。						

2. 定量的評価

観点	資料調査回数					
判定	B					
判定理由 資料調査回数：当初の計画通り資料調査を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	美術解剖学関連資料は現在「館史資料」の位置付けで、東京国立博物館所蔵の列品として保管されている。これらを横断的総合的に研究する必要があり、24年度に特集陳列企画としてまとめて公開する機会を得た事は意義深いことであった。25年度は「美術解剖学ノート」の翻刻・翻訳に着手し、引き続き26年度も作業を進めており、次年度以降その成果を『MUSEUM』等研究誌にて公開することを計画している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前年度までの成果をもとに未整理の資料を分類し、公開機会および新規研究費等獲得に向けて研究をすすめている。また次年度は東京藝大 宮永助教との共同研究まとめとして東博研究誌『MUSEUM』への成果発表を目標としている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	10) 文化財管理における美術品用語辞典の作成 (科学研究費補助金) ((5)-(7))					
【事業概要】						
本研究は、日本の文化財について使用されている用語を収集・体系化し、それら用語に関する典拠情報を作成することを目的とするものである。						
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二			
【スタッフ】						
河内晋平 (東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター 教育研究助手)、原田一敏 (東京藝術大学大学美術館 教授)						
【主な成果】						
文化財に関する情報を扱う施設から収集した用語データを整理、体系化した。特に分担者は、データの整理や公開方法について検討した。						
【年度実績概要】						
文化庁が公開している国宝・重要文化財リストと指定文化財目録、東京国立博物館が館内で使用している収蔵品データベース、東京藝術大学大学美術館の収蔵品データベースそれぞれから、絵画、書跡、工芸の分野を中心に、名称や品質形状といったカテゴリの用語をデータとして収集し、それら収集した用語について整理し、体系化を行った。整理にあたってはWikiをベースとしたデータベースに用語データを登録した上で、Wikiのシステム上で作業を行った。						
	RDF/RDFS	DCTerms	SKOS	その他	型	メモ
データタイプ	rdfs:type				リソース	
概念階層			skos:ConceptScheme skos:Concept		リソース	ConceptScheme > skos:prefLabel > * 日本画*@ja
分野				gd:category	リソース	
識別子(ID)		dcterms:identifier			リテラル	
用語(日本語)	rdfs:label@ja	dcterms:title@ja	skos:prefLabel@ja skos:prefLabel@ja-Hira		リテラル	
用語(ひらがな)	rdfs:label@ja-Hira	dcterms:title@ja-Hira	skos:prefLabel@ja-Latn		リテラル	
用語(ローマ字)	rdfs:label@ja-Latn	dcterms:title@ja-Latn			リテラル	
解説文(日本語)	rdfs:comment@ja	dcterms:description@ja	skos:definition@ja		リテラル	
上位概念			skos:broader		リソース	
下位概念			skos:narrower		リソース	
関連			skos:related		リソース	
対義語				gd:antonym	リソース	
権利保持者		dcterms:rightsHolder			リソース	
利用ライセンス				cc:license	リソース	
バージョン				gd:version	リテラル	
リファレンス(原本)		dcterms:reference			リソース	
画像				foaf:image	リソース	
用語のためのメタデータ案						
【実績値】						
整理用語件数：47,479件						
【備考】						

【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-10

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：用語の典拠情報を提供する手法は、近年求められているデジタルアーカイブの横断的利用の基盤となる。 独創性：同様の典拠データは国内では前例がない。 発展性：単なる用語集ではなく、データとして提供することにより様々な応用が可能である。 効率性：作業分担及びWikiを活用した作業基盤により効率的に進めることができた。 継続性：Wikiを利用した作業基盤により、作業の履歴を把握できるようにすることで、継続性を確保した。 正確性：分担者が互いに情報交換することで正確を期した。						

2. 定量的評価

観点	整理用語件数					
評価	B					
判定理由 整理用語件数：収集した用語データについて網羅的に整理した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	典拠情報の整備に向けて着実にデータを整理している。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財情報の整備のための基盤として期待される典拠情報の分析と整理が着実に進められた。また整理作業のためにWikiをベースとしたデータベースを導入し、効率的な作業環境を整えた。次年度は整備したデータを公開する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 有形文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発 (科学研究費補助金) ((5)-⑦)		
【事業概要】			
現在国内外で行われている鑑賞教育の理論と方法を整理した上で、学習指導要領に関連づけた鑑賞プログラムを、国立美術館・博物館の所蔵作品から分野別に作成することを目的とした共同研究である。これらが各地の美術館や学校で参照されることによって、全国的な鑑賞教育の普及に貢献できると考える。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育普及室 主任研究員 藤田千織
【スタッフ】 一條彰子 (東京国立近代美術館主任研究員)、上野行一 (帝京科学大学教授)、奥村高明 (聖徳大学教授)、岡田京子 (国立教育政策研究所調査官)、寺島洋子 (国立西洋美術館主任研究員)、今井陽子 (東京国立近代美術館工芸館研究員)、細谷美宇 (東京国立近代美術館研究補佐員)			
【主な成果】			
北米及びオーストラリアの美術館における鑑賞教育プログラムの調査を実施した。これにより、鑑賞教育プログラムと各美術館・博物館の所蔵作品、およびスタンダード (学習指導要領) との関係性について分析を行うことができた。また、研究に参加している中の数館で実践 (研究授業) を行い、相互行為分析と発達段階別の検証を行った。国内外の鑑賞プログラムの事例調査と、国立美術館・博物館の所蔵作品を使って行った鑑賞プログラムの実践・分析結果をとりまとめ、研究報告会を開催した。さらにこれをウェブサイトにて報告した。			
【年度実績概要】			
25年度に行った オーストラリアの美術館における鑑賞教育プログラムの調査結果について、鑑賞教育プログラムと各美術館・博物館の所蔵作品、及び学習指導要領との関係性という観点で学会発表 (日本美術教育研究発表会: 26年10月19日・美術科教育学会: 27年3月27・28日) し、論文を提出 (日本美術教育研究論集) した。共同研究メンバーの一條彰子、寺島洋子による発表。論文のコレクション部分は一條、寺島が、学習スタンダードについては岡田京子が主にとりまとめた。高校2・3年生に向けて美術館が行う専門教育や、アボリジニなど先住民族の文化理解など、同国の特徴的な美術館教育についての具体的な実践例を知ることができた。			
国内外の鑑賞プログラムの事例調査と、国立美術館・博物館の所蔵作品を使って行った鑑賞プログラムの実践・分析結果をとりまとめ、研究報告会を開催した。国内外の美術館において、学習スタンダード (学習指導要領) がどのように鑑賞プログラムに反映されているのかが明らかになった。また、グッゲンハイム美術館のギャラリートーク体験では、鑑賞プログラムを作成する際にコレクションから作品数点を選定する際のテーマ設定、ギャラリートークの手法などについて具体的に知ることができた。			
◆コレクションと鑑賞教育〈1〉「オーストラリアの美術館教育の現場から」(メルボルン・ヴィクトリア国立美術館 教育部長、ゲーナ・パネビエンコ氏を招いて) 26年9月21日 (日) 国立西洋美術館			
◆コレクションと鑑賞教育〈2〉「グッゲンハイム美術館のギャラリートーク体験」(グッゲンハイム美術館教育部ディレクター シャロン・バツスキー氏によるスライドトークとレクチャー) 27年1月9日 (金) 東京国立近代美術館			
◆コレクションと鑑賞教育〈3〉「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育の展開」(ウェブサイト「鑑賞教育コレクションmap」成果報告、グッゲンハイム美術館教育部ディレクター シャロン・バツスキー氏による講演、シンポジウム「コレクションを生かした鑑賞教育とは～国内外の美術館の実践から～」) 27年1月10日 (土) 国立西洋美術館 (右写真→)			
ウェブサイト「鑑賞教育コレクションmap」を作成した。共同研究に参加した国立美術館・博物館の所蔵作品を鑑賞教育に活用する際のヒントとなる視点や情報を、学習指導要領や対象年齢、館の種別など様々な観点から検索し、プログラムを組み立てることができるよう作成された。			
【実績値】			
調査 1件			
学会発表 2件			
研究報告会 (含シンポジウム) 3件(①)			
ウェブサイト制作 1件			
【備考】			
①シンポジウム「コレクションを生かした鑑賞教育とは～国内外の美術館の実践から～」(26年1月10日)において、東京国立博物館での鑑賞プログラム事例報告、シンポジウム登壇。			



【書式B】
(様式2)施設名 東京国立博物館処理番号 4571-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：美術館・博物館が学校と連携して行う鑑賞教育については、指導方法や作品選択について体系化された研究がまだ少なく、学校教育の観点からの検証も進んでいないため。 独創性：美術館・博物館が学校と連携して行う鑑賞教育については、指導要領や教科書に沿った作品選定の指針はあっても、それぞれの館のコレクションの種別や性質の側から鑑賞指導方法を考える提案は少なかったため。 発展性：国立美術館・博物館（東京国立近代美術館、同工芸館、国立西洋美術館、東京国立博物館）の所蔵作品を用いることで、さまざまな分野を網羅し、全国の美術館・博物館・学校にとって身近なコレクションに置き換えて鑑賞プログラムを考えることができるため。 効率性：内容の深度と人数規模にバリエーションをつけた研究報告会の複数回開催及びウェブサイトによって遠隔地の美術館・博物館・学校からも参照できる成果を発表したことで効率よく成果をあげている。 継続性：科学研究費としては最終年度となるが、成果をまとめる冊子作成（予定）及びウェブサイトを作成したことで、今後も研究内容を参照し、全国の美術館・博物館・学校での実践に役立ててもらえることができるため。 正確性：今年度の目標としていた研究発表機会件数を達成し、成果を一般に公開することで、科学研究費を用いた研究が有効になされたため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	学会発表	研究報告会	ウェブサイト制作		
評定	B	B	B	B		
判定理由 調査件数：25, 26年度でカバーできなかったアジアの事例の調査を科学研究費の最終年度で計画的に終えることができた。 学会発表：学会発表を予定通り実施し、研究成果の共有ができた。 研究報告会：研究報告会（含シンポジウム）を計画的に実施できており、研究成果の共有ができた。 ウェブサイト制作：計画していたウェブサイトの制作を完了し、研究成果の共有ができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	分担して進められた調査、実践、研究が研究報告会、シンポジウム、ウェブサイトによって共有された。これにより、研究メンバー及び研究報告会の参加者、またウェブサイトを通して全国の美術館・博物館教育に携わる関係者が所蔵作品の分野と学習指導要領を深く関連させた鑑賞プログラムを実践する一助となる。美術館・博物館における所蔵作品を活用した鑑賞プログラムの進展が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は科学研究費の完成年度である。研究分担者として、当該年度計画は達成することができた。次年度以降は、スクールプログラムなどの学校対応の中で、この成果をさらに鑑賞プログラムの実践に展開させていきたい。とくに次年度は、当研究の成果を、スクールプログラムのコース編成・内容の検証に援用したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 文化財情報に関する調査研究(5)-⑦		
【事業概要】			
当館のウェブサイトや文化財情報システムなど、運用中のコンテンツの問題点の検討や機構内の共通システムの運用に対する対応、博物館システムの発展的整備の方向性など、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】			
後藤 真（花園大学専任講師・客員研究員） 澁谷完滋（総務課事業推進係係員）			
【主な成果】			
<p>(1) 写真資料・作品情報のデジタル化を進め、ウェブサイトにおける収蔵品公開データベースの更新を随時行った。</p> <p>(2) デジタル化の推進やウェブサイトにおける公開機能の強化に対応するため、文化財情報システムの改良や運用改善を随時行うとともに、将来計画に向けた調査・検討を行った。</p> <p>(3) 平成知新館開館を期に、展示系システムに関わる整備や館内ネットワークの更新による処理能力向上を行った。</p> <p>(4) 科学調査機器の整備にあわせ、研究系サーバの能力強化や仮想化技術の導入を進めた。</p> <p>(5) 文化財防災に関わる機能強化のため、文化財情報のバックアップ強化を検討し、各種試験を行った。</p>			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 各月ごとに現時点での情報システムの運用面における実態調査を行い、その結果について、当館研究員・事務職員・情報システム技術担当と共同で検討会を実施して、システム全体の問題点を抽出。改良を随時行った。 ・ ウェブサイトにおける収蔵品公開データベースについて、新規にデジタル化した画像や研究の進展に伴う新たな知見を反映させ、更新を随時行った。 ・ デジタル撮影及び写真原板デジタル化の進展に伴い、画像の保管・検索に使用する大容量ストレージの整備を、継続して実施した。 ・ 増大するデジタル画像の管理、一層の充実を求められるウェブサイト公開やレファレンス機能の強化などに対応するため、収蔵品管理システムの将来計画に向けた検討を進めた。これに伴って、必要要件の洗い出し、機構内での情報交換、各社製品の情報収集などを行った。 ・ 蔵書検索システムの更新・データベース統合を検討・実施し、レファレンス機能の強化を行った。 ・ 研究系サーバの増強と仮想化技術の利用により、耐用年数を迎えた研究系システムの更新と能力強化を行った。 ・ 平成知新館開館にあわせ、デジタル絵巻やデジタルサイネージ等、展示系システムの稼働環境整備や運用上のトラブル対応・各種改善などを実施した。 ・ 平成知新館を中心に館内ネットワークの幹線機器を更新・再編し、研究・展示・無線など各ネットワーク系統の強化や通信速度の増速など、処理能力の向上を行った。 			
			
文化財情報システム（画像資料画面）			
【実績値】			
・ システム検討会	6 回		
・ システム更新・統合	3 件		
・ データベース情報交換	3 回		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4572-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：平成知新館開館のタイミングに間に合うよう、調査研究の基盤となる情報ネットワーク整備を進め、開館業務を支えた。 独創性：ウェブサイトのリニューアルにおいて、貸出情報連携など文化財情報システムが持つ独自機能も改修し、見やすく改善を図った。 発展性：今後予想されるデジタル画像の増大・公開強化に対応するための発展性を盛り込み、計画検討を進めた。 効率性：データベース統合によって、サーバ台数の削減や管理業務の省力化などのコスト削減、レファレンス効率の向上を実現した。 継続性：収蔵品管理や蔵書管理などの各種研究支援業務においてシステムを継続的に更新・運用し、維持を行った。 正確性：データベース移行作業における重点的な正確性点検や、更新業務における対応などを通じて正確性の維持・向上に配慮した。						

2. 定量的評価

観点	システム 検討会	システム更 新・統合	データベース 情報交換			
評定	B	B	B			
判定理由 システム検討会：所期の目標に適う検討会を開催した。 システム更新・統合：予定通り、更新・統合を実施し、機能強化を実現した。 データベース情報交換：目標に沿って情報交換を実施し、順調に調査を進めた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館情報システム・ネットワークの整備推進により平成知新館開館を支えたほか、文化財情報や画像ストレージの整備・将来計画の検討などを通じ、文化財情報の調査研究を推進できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通じて対応を要する事項を整理し、喫緊の問題から順次検討を行って改良を継続している。 次年度には、平成知新館を含め、新たな体制における運用を軌道にのせていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 平成知新館における教育ツールの開発((5)-(7))		
【事業概要】			
<p>平成知新館のオープンにあわせて、「ミュージアム・カート」の活動を開始する。ミュージアム・カートとは、カート上でハンズ・オン教材を展開し、来館者と京博ナビゲーター（ボランティア）が対話することによって展示作品や文化財への理解を深める手助けをする活動である。ツールは昨年度用意したものを使用する。今年度は実践とともに、実践をふまえたツール・手法の改善と、情報発信を行う。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 山川 暁
【スタッフ】			
水谷亜希（教育室研究員）			
【主な成果】			
<p>(1) 京博ナビゲーターのための実践マニュアル「虎の巻」を作成した（163部） (2) 京博ナビゲーターのための基礎講座を開催した（1日×8回） (3) 平成知新館において「ミュージアム・カート」の活動実践を行った（161日、1日最大約500人） (4) 実践をふまえて、ナビゲーターからの意見も集めツール・手法の改善を行った (5) ミュージアム・カートについて館外への情報発信を行った</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 京博ナビゲーターのための実践マニュアル「虎の巻」を、ナビゲーター163名に向けて作成した。「虎の巻」には、カートに設置した「考古」「彫刻」「絵画」の3分野の基礎知識、来館者への声掛けの例、参考文献などを掲載している。</p> <p>(2) 京博ナビゲーターが活動するにあたり、事前に基礎講座を計8回開催した。基礎講座の内容は、下記の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回 京都国立博物館の歴史・活動紹介・主要収蔵作品紹介（2回実施） ・第2回 施設紹介・来館者対応マナー講座・博物館環境について（2回実施） ・第3回 カート紹介・コミュニケーションと学び・カート実践（2回実施） ・第4回 レファレンス・コーナー説明・館内見学・カート実践（2回実施） <p style="text-align: right; margin-right: 50px;">ミュージアム・カートでの活動の様子</p>  <p>(3) 平成知新館において「ミュージアム・カート」の活動実践を行った。26年度は、9月13日の平成知新館オープンから3月末まで、計161日活動した。最も混雑した時期の簡易統計によれば、ミュージアム・カートは一日500人以上の来館者に利用されていた。</p> <p>(4) 実践をふまえて改善のための情報を収集し、ツール・手法の改善を行った。情報収集の方法は下記の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京博ナビゲーターの活動開始前に、彫刻分野のツールについては、「少年少女博物館くらぶ みほとけめぐり！」で活用し、参加者の子どもの反応を観察した ・京博ナビゲーターの活動開始後は毎日「終礼」を行い、各研究員が交代で出席し、来館者の反応や、改善要望などをナビゲーターから聞いて記録した。（161日） <p>以上の情報をもとに、教材の追加や改訂、補修などをこまめに行い、実践がスムーズにできるよう対応した。</p> <p>(5) ミュージアム・カートについて館外に情報発信を行った。主な情報掲載媒体は下記の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京都国立博物館公式ウェブサイト、京都国立博物館たより ・『月刊文化財』610号（特集 京都国立博物館・平成知新館の全て）、第一法規、2014年 ・橋本麻里『京都で日本美術をみる 京都国立博物館』集英社クリエイティブ、2014年 ・「まねる・まねぶ・まなぶ—複製からみる〈教育〉と〈保存〉—」展、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2015年1月13日～2月28日、パネル展示 <p>その他、平成知新館オープンに合わせた雑誌の特集記事や、ナビゲーター自身のブログでの情報発信など、様々な場所で情報発信を行い、ミュージアム・カートについて周知することができた。</p>			
【実績値】			
<p>(1) 「虎の巻」の作成（163部） (2) 基礎講座の実施（1日×8回） (3) 活動実践（161日、1日最大約500人） (4) 改善のための情報収集・対応（161日） (5) 情報発信（5件）</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4572-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	B	B	B	B
判定理由 適時性：平成知新館オープンにあわせた新しい取り組みである。来館者の中には「カートを目的に来た」という声も聞かれるようになり、当初の予想よりも好評を博している。 独創性：カート上でハンズ・オン教材を展開し、解説ではなく「対話」によって理解を深める方法は古美術の分野では珍しく、あまり例のない取り組みである。 発展性：来館者とボランティアの対話によって、様々な会話を展開させることができ、多様な鑑賞のあり方を生み出す点で多様性がある。また、カート内のツールを増やすことで、今後も発展的に展開させることができる。 効率性：研究員がナビゲーターに鑑賞のヒントを伝え、ナビゲーターが来館者と対話することで、多くの来館者に文化財に親しむきっかけを提供できている。 継続性：ナビゲーター163名が、それぞれ月に1回館に来館することで、負担なく活動を継続することができている。一方で、今後もナビゲーターのモチベーションを維持するために、定期的な研修の開催、自主活動への支援、新しい取り組みなども必要であるが、現状の人員ではこれ以上の対応が難しいため、解決策の検討が必要である。 正確性：ツールや「虎の巻」の作成にあたっては、各研究員や外部の専門家に制作や助言を依頼し、展示作品や文化財への理解を深めるために十分な質を確保した。						

2. 定量的評価

観点	「虎の巻」の作成	基礎講座の実施	活動実践	改善のための情報収集・対応	情報発信	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 「虎の巻」の作成：ナビゲーターが活動するにあたり、基礎知識を伝えるのに十分な内容と量を作成し配布することができた 基礎講座の実施：ナビゲーターが活動するにあたり、基礎知識を伝えるのに十分な回数を実施することができた（1日×8回） 活動実践：1月2日～4日をのぞくすべての開館日に実施し、多くの来館者に文化財と親しむ機会を提供することができた（161日、1日最大約500人） 改善のための情報収集・対応：当館の研究員全員の協力を得て、毎日の「終礼」に交代で出席し、来館者の反応や、改善要望などをナビゲーターから聞いて記録することができた。それらをふまえ、教材の追加や改訂、補修などをこまめに行い、実践がスムーズにできるように教育室員が対応した。ただし、現状のスタッフでは対応できる件数に限度があるため未対応の事案もあり、解決策の検討が必要である。 情報発信：各種の媒体にて効果的に情報発信を行うことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平成知新館のオープンにあわせて、無事にミュージアム・カートの実践を開始することができた。来館者からの反応も非常に良く、京博ナビゲーターも意欲的に、楽しみながら活動している。この実践で重要な役割を果たしているのが、来館者との対話を行う「京博ナビゲーター」である。彼らのモチベーションを維持し続けることがこの取り組みの鍵であるが、現状のスタッフだけでは対応しきれなくなることが予想されるため、解決策を検討する必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平成知新館のオープンにあわせて新たな教育ツールを開発し、新規ボランティアを立ち上げたうえで実践を行うことができた。ミュージアム・カートという移動可能なツールを開発し、ナビゲーターのための控室を小さいながらも確保することで環境を整える等、計画に沿って順調に活動を進めることができた。次年度には、より多くの分野について教育的なツールの開発を行い、ボランティア活動を軌道にのせることとしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究(5)-(7)		
【事業概要】			
<p>京都市教育委員会の協力のもと、京都国立博物館とNPO法人京都文化協会が共同で行っている訪問授業、「文化財に親しむ授業」の理論と実践に関する調査研究を実施し、その成果を社会に還元することを目的とする。成果を還元する方法として、訪問授業のほかに交流会の開催、教員による事業実践の支援などを行う。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 山川 暁
【スタッフ】 水谷亜希（教育室研究員）			
【主な成果】			
<p>(1)文化財ソムリエ（大学生ボランティア）に対するスクーリングを行った(21回) (2)文化財ソムリエによる京都市内の小中学校への訪問授業を行った（7回 488人） (3)文化財の複製を用いた授業に関する交流会を行った（1回 29人） (4)高精細複製を用いた授業実践への協力をを行った（4回） (5)研究員による訪問授業を行った（2回 93人） (6)館蔵品の高精細複製を制作した（2件） (7)他館の活動調査や、学生ボランティア同士の交流の機会を設けた（5回） (8)『小さな瞳にワクワクを—平成26年度「文化財に親しむ授業」記録集—』を刊行した（1,000部） (9)『文化財に親しむ授業ガイドブック』を配布（910部）、増刷した（500部） ※(3)～(9)は、「平成26年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を受けて実施した</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1)「文化財に親しむ授業」で講師を務める文化財ソムリエ（日本文化を専門に学ぶ大学生ボランティア）に対するスクーリングを21回行い、ソムリエが授業内容や教材を作成する課程で、指導・助言を行った。</p> <p>(2)京都市内の7校の小中学校で、高精細複製を用いた訪問授業を行った。授業では子どもとの対話を中心としながら、作者や制作された時代、画材などの紹介も行った。授業にあたっては、そのつど教員と事前に打ち合わせを行い、内容を検討した。</p> <p>(3)京都市内の小中学校教員、文化財ソムリエ、京都国立博物館・京都文化協会職員、その他文化財の複製を用いた教育活動に関心のある人々を交えて、「文化財に親しむ授業」の活動紹介や、意見交換を行った。過去の授業例紹介は、文化財ソムリエや、美術館で教育普及活動に携わるソムリエ卒業生が行った。</p> <p>(4)教員自身が複製を用いて授業を行う学校に対して、実践例の紹介や資料の提供、当日の設営・授業補助などを行った。</p> <p>(5)「文化財に親しむ授業」が教育関係者の中で知られるようになり、高等学校やPTAからも授業の依頼があった。初めての試みであるため、文化財ソムリエではなく研究員が試験的に実施した。</p> <p>(6)館蔵品の国宝「天橋立図」（雪舟筆）、重要文化財「四季花鳥図屏風」（雪舟筆）の高精細複製を新たに制作した。これらは次年度以降の訪問授業で活用する。</p> <p>(7)同じく文化財複製を活用し、学校と連携した教育普及を行っている館（三井記念美術館・岡山県立美術館）の事業を文化財ソムリエと共に調査・見学した（2回）。こどもひかりプロジェクト主催のイベントに文化財ソムリエと共に参加し、東北地域の大学生ボランティアや、他館の教育普及担当と交流・意見交換を行った（2回）。美術科教育学会リサーチフォーラム（コレクションと鑑賞教育）に参加し、参加者と意見交換を行った（1回）。</p> <p>(8)『文化財に親しむ授業2014報告書』（仮題）を刊行（1,000部）し、教育関係者に配布した。</p> <p>(9)前年度作成した『文化財に親しむ授業ガイドブック』を教育関係者に配布（910部）、好評のため増刷した（500部）。</p>			
訪問授業の様子			
【実績値】			
<p>スクーリング実施回数（21回） 訪問授業実施回数（7回 488人） 交流会の実施回数（1回 29人） 授業実践への協力回数（4回） 他館の活動調査・交流の回数（5回） 報告書等の配布・刊行部数（記録集1,000部、ガイドブック配布数910部、同増刷部数500部）</p>			
(参考値) 高精細複製の制作件数（2件）			
【備考】			
<p>『小さな瞳にワクワクを—平成26年度「文化財に親しむ授業」記録集—』京都国立博物館、2015年（企画・執筆 水谷亜希） 『文化財に親しむ授業ガイドブック』京都国立博物館、2014年（企画・執筆 水谷亜希）</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 京都国立博物館処理番号 4572-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	A	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：学習指導要領の改訂に伴い、学校教育では我が国の文化財への感心がいっそう高まっている。学外に児童・生徒を連れ出さなくてもよい訪問授業は、時間的・金銭的にも、安全面においても学校側の負担が少なく、最も要望の高い事業である。</p> <p>独創性：博物館が大学生を育成し、大学生が小中学生に教え伝える二重の教育を担っている点が独創的である。本事業は、大学生、小中学生の双方にとって学習の場となっている。特に今年度は大学生の学びの場としての機能が強化された（交流会・他館の活動調査）</p> <p>発展性：ガイドブックの配布、交流会の開催のち、教員自身による複製を使った授業が実施された。教員による授業は当初3回を予定していたが、4回実施された。加えて高校やPTAからの要望もあり、研究員が試験的に授業を実施（2回）するなど、当初の予定よりも多くの授業が実践された。活動に対する関心が年々高まっており、今後の発展が大いに期待できる。</p> <p>効率性：文化財ソムリエが講師と補助（子どもに話しかけたり、屏風を開いたりする）を務めることで、クラス単位での授業やグループ活動が可能になり、より親密なコミュニケーションを通して文化財の魅力を発信することが可能となっている。</p> <p>継続性：先輩の文化財ソムリエを後輩が見習うことで、人が入れ変わっても蓄積したノウハウが受け継がれていく。</p> <p>正確性：研究員が、教材となる文化財に関するレクチャーを毎年行っており、文化財ソムリエは最新の研究成果を学んだうえで授業を行っている。</p>						

2. 定量的評価

観点	スクーリング実施回数	訪問授業実施回数	交流会の実施回数	授業実践への協力回数	他館の活動調査・交流の回数	報告書等の配布・刊行部数
評定	B	A	B	A	B	B
<p>判定理由</p> <p>スクーリング実施回数： 当初の予定通り、月に約2回のペースで計21回実施し、文化財ソムリエの育成に十分な効果があった。また今年度は9月より教育普及の客員調査員を招き、活動に対する助言、スクーリングでの講義などを依頼しており、内容もより専門的で充実したものとなった。</p> <p>訪問授業 実施回数： 年間で計7回実施した。文化財ソムリエが授業内容や教材を作成するために必要な準備期間を考慮し、最大で実施できる回数を行った。さらに研究員による訪問授業を2回行い、当初の目標を大きく上回った。</p> <p>交流会の実施回数： 夏休み期間の8月に1回実施した。教員を中心として、複製を用いた教育活動に関心のある人々が交流を深め、その後の実践につなげるために十分な効果があった。</p> <p>授業実践への協力回数： 教員による授業は当初3回を予定していたが、4回実施された。そのつど資料の提供や当日の設営・授業補助などを行った。</p> <p>他館の活動調査・交流の回数： 文化財ソムリエが同行したものも含めて5回の活動調査・交流を行い、当館の今後の活動の参考としつつ、文化財ソムリエの学習・成長を促すために十分な効果があった。</p> <p>報告書等の配布・刊行部数： ガイドブックは昨年度作成した1,000部のうち大半の910部を配布し、事業の周知、教員による授業実践のために十分な効果があった。追加でガイドブック500部を増刷、あらたに活動報告書1,000部を刊行・配布し、次年度以降の活動の下地作りを行った。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本活動は21年度から継続しており、ノウハウの蓄積や文化財ソムリエの成長に伴い、年々内容が深まっている。特に今年度は文化庁の助成を受けて活動の幅を広げることができた。昨年度までは、増え続ける訪問授業の要望に全て答えられないことが課題であったが、ガイドブックの配布や交流会の開催をふまえ、教員による授業を実現できたことで、より多くの子供たちに文化財の魅力を伝えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高精細複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究は、これまでの活動の蓄積を生かし、年々内容が深まり、外部との協力・交流も広がりを見せている。博物館外に持ち出すことができ、間近で鑑賞できるという高精細複製の特性を生かし、今後も、文化財に対する興味関心を育む教育普及活動に取り組んでいく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究を行い、その成果を見童・生徒を対象として行う「世界遺産学習」等に反映させる。(5)～(7)		
【事業概要】	奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 岩井共二
【スタッフ】	斎木涼子（教育室員）、北澤菜月（教育室員）		
【主な成果】	<p>(1) 奈良の歴史と伝統文化に関する情報を、本年度開催した展覧会（名品展・特別展・特別陳列）の中から抽出した。</p> <p>(2) その情報を、児童・生徒が歴史への関心を高めるのに使える情報は何かを検討した。</p> <p>(3) ボランティアへの指導と話し合いを通して、世界遺産学習実践の場での「語りかけ」の精度を高めることに努めた。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 当館で開催した名品展や特別展、特別陳列、さらに正倉院展の中には、奈良の歴史と伝統文化を反映した作品や情報が多く含まれており、展覧会によって得られた情報を子供向けに発信する方法の検討を行っている。</p> <p>(2) 世界遺産学習の現場では、講堂におけるボランティアによる世界遺産学習解説と、なら仏像館の見学解説を行ってきたが、26年9月以降、なら仏像館が工事により閉館したため、実作品を前にした解説が行えなくなった。そこで、講堂で行う新たな教育プログラム「子どものための仏像の見方」を、ボランティアスタッフと協議しながら開発し、その実践を行った。プログラム開発には、当館で行ってきた仏教彫刻の調査・研究の成果が反映されている。</p> <p>(3) 「子どものための仏像の見方」プログラムは、未だ試行段階であるが、世界遺産学習の実地現場において生徒たちへの語りかけの内容が充実しつつある。今後も方法論的な検討を行い、より精度の高い教材となるよう向上を図る。また、仏像館開館後も、このプログラムを応用し新たな教育ツールの開発に繋げていく。</p>		
			
	<p>世界遺産学習解説 「子どものための仏像の見方」 実践の様子</p>		
【実績値】	・「世界遺産学習」に来校した小学校	35校	
【備考】	・「世界遺産学習」以外の学校団体案内	16校	

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4573-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：博物館が起点となった「世界遺産学習」の意義を追求する好事業となった。 独創性：「世界遺産学習」を中心とした子供向けの「語りかけ」を検討・実践することで、他の観光案内にはない博物館のオリジナリティを持たせることが出来た。 発展性：「世界遺産学習」を中心とした子供向けの教育・普及活動の充実により、ボランティアガイドの育成・充実にも貢献し、来館者向け解説サービスの向上にも繋がっている。 効率性：職員・ボランティアで共有された情報を繰り返し利用することで効率性を向上させた。 継続性：「世界遺産学習」は、内容を随時検証し、より正確で分かりやすい内容を継続的に検討していくことによって、その継続性と質の確保に努めている。 正確性：学芸部職員による研修や勉強会を通じて、内容の修正を行い、正確性を確保した。						

2. 定量的評価

観点	「世界遺産学習」に来校した学校数					
評価	B					
判定理由 「世界遺産学習」に来校した小学校数：35校に達した。(目標 20~30校)						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	なら仏像館の閉館により「世界遺産学習」プログラムの変更を行ったが、職員とボランティアとの間で情報の検討を行い、「世界遺産学習」の精度が向上し、来校する学校数も所期の目標に達している。この数値を維持するためにも今後とも検討を重ねていく必要があり、それらの成果が来館者サービスの向上につながるものとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	歴史、伝統文化の教育事業として継続して行ってきた「世界遺産学習」は一定の成果を上げている。次年度は、「世界遺産学習」をユネスコが提唱するESD（持続的開発のための教育）の一環として位置づけ、教育機関などとの連携により方法論の検討を行い「世界遺産学習」の質的向上を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究を行い、その成果をデジタル画像の作成・各種データベースの構築(收藏品・画像・図書)・各種情報資源の公開推進に反映させる。(学術研究助成基金助成金)(5)－⑦)		
【事業概要】 当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開ならびに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。			
【担当部課】	学芸部資料室	【プロジェクト責任者】	室長 宮崎幹子
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、清水健(企画室員)、岩戸晶子(列品室員)、齋木涼子(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 デジタル撮影の安定的な稼働を目指して、撮影機材、撮影環境、保存用ストレージ、体制等の整備を引き続き行い、多数の文化財を撮影した。館内の情報システムや公開用データベースのデータ更新を適宜行い、情報資源の拡充と公開に積極的に取り組んだ。今年度は、新たに修理記録のデータベースの公開も実施した。また、地下回廊において仏像写真展「大和のほとけたちー奈良博写真技師の眼ー」と題する展示を実施するなど、当館における文化財写真アーカイブズ形成の成果を一般に広めることにも取り組んだ。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・デジタル撮影 特別展「鎌倉の仏像ー迫真とエキゾチシズム」ならびに「国宝 醍醐寺のすべてー密教の仏と聖教」の開催と連動して、彫刻・絵画・書跡・工芸の各分野の文化財の撮影を多数行った。展覧会出陳作品の社寺、鎌倉国宝館、醍醐寺の理解と協力を得て、鎌倉を中心とする地域、そして醍醐寺という、これまで蓄積の少なかった分野の文化財写真の撮影を実施し、当館における文化財写真アーカイブズの更なる拡充をはかることが出来た。 ・奈良女子大学への学術協力 奈良地域の文化財の画像公開を目的とする「奈良地域関連資料画像データベース公開事業」において、奈良女子大学附属図書館と学術協力の協定を締結している。今年度はこの事業の一環として、寄託品の當麻曼荼羅(青蓮寺)、當麻練供養図(誕生寺)の撮影を実施し、画像提供を行った。 ・「日本美術院彫刻等修理記録」の整理とデータベース構築 かねてより学芸部内で共有していた「日本美術院彫刻等修理記録」のデータベースを公開用にあらたに作成し、全面的に外部に公開した。これまで未公開の資料であったため、文化財アーカイブズの一事例として専門家からも高い評価を得た。 当館では初めての試みとして、仏像写真展「大和のほとけたちー奈良博写真技師の眼ー」を開催し、地下回廊に一辺約2mの大型写真パネルの展示をおこなった。当館における文化財写真撮影の意義を幅広い層に向けてアピールすることが出来た。 			
			
<p>仏像写真展 「大和の仏たちー奈良博写真技師の眼」展示風景</p>			
【実績値】 画像撮影件数：5,471件 データ登録件数(画像データベースへの個別データ登録)：5,447件(そのうち公開 3,376件)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館処理番号 4573-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 独創性：展覧会や調査研究事業と密接に関連させることにより貴重な文化財の撮影を行い、当館以外では取得の困難な画像を多数蓄積し、稀少かつ学術的価値の高い文化財アーカイブズの形成へと繋げることができた。 継続性：画像の作成枚数及びデータベースへの登録件数を順調に増加させ、公開に結び付けた。 発展性：画像が文化財指定調査や修理時の基礎資料となるなど、文化財の研究や保存の進展に大きく貢献した。また、データベースの構築や連携にも積極的に取り組み、文化財アーカイブズの発展性を示した。 適時性：鎌倉地方、醍醐寺というこれまで文化財写真の蓄積が充分でなかった分野について新撮をおこない、適切なかたちで情報の共有化がはかられた。 効率性：限られた人員と予算の範囲内において、効率的に撮影ならびに登録件数を増加させた。 正確性：調査に伴って取得された一次的なデータに基づいてアーカイブズの形成を行っており、またデータベースの継続的かつ安定的な運用を行うことにより、信頼性の高い情報を公開している。						

2. 定量的評価

観点	画像撮影件数	データ登録件数				
判定	B	B				
備考 画像撮影件数：本年度も十分な調査と撮影を実施しており、画像撮影件数は豊富であった。 データ登録件数：撮影後の処理やデータベースへの登録件数については、当館の規模やスタッフ数を勘案しても他機関と比較して遜色のない数をこなしており、順調に増加している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>文化財の調査と撮影は、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、鎌倉地方や醍醐寺など、学術的に重要でありながら調査と撮影の機会を十分に得ることが難しかった分野について、調査を実施し、質の高い画像を取得して、公開へと繋げていることの意義は非常に大きい。今後も当館の事業と密接に連携しつつ情報の蓄積を続け、仏教美術情報の一大拠点として、コレクションの質・量双方の維持に努める予定である。</p> <p>情報資源の運用にあたっては、新たに修理記録のデータベースを公開するなど、文化財アーカイブズ形成の実践を鋭意進めている。今後も更なる発展を視野に入れた研究に力を注いでいく。</p> <p>また、仏像写真展では、高品質の画像を、一般来館者にも親しみやすいかたちで発信しており、調査研究の成果を幅広い層に向けて還元していくという意味でも大きな成果をあげている。人員と予算が限られる現在のような体制の中で、幅広い活動を展開している点でも評価できる。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>デジタル撮影については現在のところ安定的な稼働を実現できているが、館内での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が必須である。また、現在行っているカラー・近赤外線・透過X線のデジタル撮影にとどまらず、CT撮影についてもデジタル化を実現すべく、機材・設備の整備が急務である。当館では仏教美術分野では国内唯一と言っていい貴重な画像コレクションを維持管理しているが、文化財調査の拡充にあわせて、アーカイブズの維持拡充が今後ともはかれるよう体制を整備していくことが肝要である。</p> <p>今後も文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能すべく、文化財アーカイブズ形成の実践を続けていくとともに、それを支ええる理論の構築にも取り組んでいく</p>

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) NHKと協同で高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアター（シアター4000）での映像公開に向けた研究（(5)～(7)）		
【事業概要】	<p>テレビの世界ではフルハイビジョンが主流だが、その4倍の画素数の4Kテレビという高画質のテレビが近年シェアを伸ばしている。当館では開館以来、この4Kのさらに4倍の密度を有する8Kというスーパーハイビジョンシステムによる映像を、世界で唯一の常設施設として公開してきた。このスーパーハイビジョンの質感と臨場感に優れた特性を、文化財の保存と活用のために、魅力的なコンテンツ制作と、コストも考慮した新しいシステムの調査研究を推進する。</p>		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 市元 壘
【スタッフ】	三輪嘉六（館長）、井上洋一（部長）、臺信祐爾（課長）、河野一隆（文化交流展室長）、赤司善彦（福岡県教育庁文化財保護課長）		
【主な成果】	<p>(1) NHK放送技術研究所において8K映像技術の情報収集を行った。 (2) 九州国立博物館において映像の出力形式及び保守設備について打合せを実施し、新規コンテンツ制作のための基盤情報を整理した。 (3) 長野県の駒ヶ根美術館において、画像展示に関する調査を実施した。 (4) 宗像大社において沖ノ島の植生と生態に関する情報収集を実施した。 (5) 沖ノ島において祭祀遺跡の立地を調査した。 (6) 東京で関係者による打合せを実施し、本年度のまとめを行うとともに、番組構成案ならびに次年度のスケジュールを策定した。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 5月28日と29日にNHK放送技術研究所において、8K映像技術の最新情報を収集した。撮影機器の軽量化や、海中撮影技術の現状を把握したことにより、当館における新規コンテンツ開発に際しての現時点における技術的限界を明らかにすることができた。 (2) 6月3日に九州国立博物館においてスーパーハイビジョンシアターの出力形式及び保守設備について打合せを実施し、新規コンテンツ制作のための基盤情報を整理した。 (3) 8月24日に長野県駒ヶ根高原美術館において、画像展示の手法とその可能性について調査した。展示室内における写真展示とスーパーハイビジョンシアターとの役割をいかに棲み分けかつ共生させていくかという課題において、多くの知見を得た。 (4) 12月12日に宗像大社において、沖ノ島番組制作に関する打合せと出土資料の調査を実施し、沖ノ島を多視的にとらえるために不可欠である希少な植生や生態に関する知見を得た。 (5) 27年1月7日に沖ノ島に渡り、祭祀遺跡の現地調査を実施した。 (6) 27年3月に東京で関係者が集い、本年度の調査研究成果をまとめ、新規番組の構成案ならびに次年度スケジュールを策定した。</p>		
			
	<p>冬の玄界灘に浮かぶ沖ノ島 (27年1月7日 報告者 撮影)</p>		
【実績値】	<p>○調査回数 5回 ・現地調査 1回（27年1月7日）</p> <p>○打合せ回数 3回 ・コンテンツ制作の打合せ 2回 ・設備改善についての協議 1回</p>		
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：本事業が主眼とする沖ノ島は、現在、世界遺産を目指しており、近年注目を集めている。</p> <p>独創性：8K映像を常設している博物館は我が国においては九州国立博物館のみである。</p> <p>発展性：立ち入りが制限されている沖ノ島の8K公開を目指す本事業は、同祭祀遺跡への理解を深めるうえで有効である。</p> <p>効率性：福岡県教育委員会や宗像市教育委員会の協力を恵那型、効果的に事業を推進した。</p> <p>継続性：8K映像カメラはこの10年で大幅に軽量化しており、これまでにない新鮮な映像番組を制作することができる。</p> <p>正確性：関係資料を収集しながら、調査を実施した。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査回数	打合せ回数				
評価	B	B				
<p>判定理由</p> <p>調査回数：関係機関と調整のうえ、必要な調査を実施した。</p> <p>打合せ回数：年間の計画に基づいた打合せを実施した。</p>						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現地調査、関係機関との交渉、資料収集、台本制作を計画的に実施し、27年度に予定している番組制作にむけての基盤を構築することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予算と関係者の日程調整の制限から、沖ノ島での現地調査回数が真冬の1回に留まった。沖ノ島は四季によって植生や生態系の活動に変化がみられるため、本来であれば春夏の調査もすべきであった。その不足部分は環境報告書等で補ったが、次年度は計画性をさらに向上させて、研究の濃度を一層高めたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究 (5)－⑦)		
【事業概要】	特別展ごとに、観覧者に展示内容をよりよく理解してもらうため、教育普及プログラムを実施する。本年度は、「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」「クリーブランド美術館展―名画でたどる日本の美―」「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」ならびに同時開催「日本発掘―発掘された日本列島 2014―」の5つの特別展において、教育普及プログラムを実施する。		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】	酒井芳司（前展示課主任研究員）、鷲頭桂（研究員）、岸本圭（展示課展示調整室主任研究員）、進村真之（展示課情報サービス室主任研究員）、西島亜木子（アソシエイトフェロー）、山下久美子（研究補佐員）、鮫島由佳（研究補佐員）		
【主な成果】	展示室内での解説パネルの掲出や体験コーナーの設置、室外のワークショップや講演会などを実施。アンケートには、分かりやすかった、体験できて楽しかった、展示に対してもっと興味を持てた、などの感想がみられた。		
【年度実績概要】	<p>分かりやすい解説や、展示をより身近に感じさせる教育普及プログラムはあらゆる年齢層の来館者に好評であるため、来館者の要望を反映した様々なプログラムを展示室内外で実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」では、書跡の作品が多数出品されたことから、タブレットを使用した書に親しむ体験コーナー「かな文字を書いてみよう」を設置した。また、ワイヤーを曲げてつづけ字しおりを作るワークショップも行った。 特別展「クリーブランド美術館展―名画でたどる日本の美―」では、展示作品である渡辺華山筆の絵画「大空武左衛門」が写真鏡を使って描かれたことを理解してもらうため、写真鏡のレプリカを実際に手にとってもらい体験コーナーを設置した。また、展覧会期が夏休みと重なっていたことから、親子を対象にした「てづくりカメラワークショップ」を企画した。参加者自身が制作した写真鏡を使って絵を描く体験を通して、展示物の魅力を伝えることができた。 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」では、展示室内に掲示する章解説、作品解説、コラム等を、専門用語を省いた平易な言葉やイラストを用いて作成し、一般の来館者にも分かりやすい内容とした。また、展示物の理解を深めるためのイベントとして、展覧会関連史跡をめぐるウォーキングツアー「考古学者と行く！史跡探訪」を2回（2コース）実施した。子ども向けの企画としては、九州国立博物館を愛する会による影絵公演「水城のものがたり ひとつもっこ山と父子島」を上演した。事前告知の一環として、展覧会を分かりやすく伝える映像も作成した。また、地域の小学生に配布する招待券にクイズを掲載し、クイズを解きながら展示が楽しめる内容とした。 同時開催特別展「日本発掘―発掘された日本列島 2014―」では、考古学者が発掘現場で使用するメモ帳「野帳」に焦点を当て、展示作品が出土した遺跡で実際に使われた野帳6冊を、それぞれ関連する遺物とともに紹介した。併せて、当館考古担当者6名分の野帳も展示した。また、考古学者の仕事体験するワークショップとして「なりきり考古学者体験」を2回実施。大宰府政庁跡で平板測量の体験を行った。 		
【実績値】	<p>解説パネル枚数（コラム、作品解説等） 82枚（「古代日本と百済の交流」82枚） 講演会回数 19回（「近衛家の国宝展」5回、「クリーブランド美術館展」5回、「台北國立故宮博物院」4回、「古代日本と百済の交流」4回、「日本発掘」1回） ワークショップ回数 7回（「近衛家の国宝」3回、「クリーブランド美術館展」2回、「日本発掘」2回） 体験コーナー回数 2回（「近衛家の国宝」1回、「クリーブランド美術館展」1回） イベント回数 18回（「近衛家の国宝展」4回、「クリーブランド美術館展」6回、「台北國立故宮博物院」3回、「古代日本と百済の交流」3回、「日本発掘」2回） 論文数 1件 ① （参考値） 教育普及プログラム満足度（「近衛家の国宝」85%、「クリーブランド美術館展」81%、「古代日本と百済の交流」59%（展示解説に対する満足度、イベントについてのアンケート調査は実施していない）、「日本発掘」82%）</p>		
【備考】	①「展示理解を深める体験型プログラム」『東風西声 九州国立博物館紀要 第10号』（27年3月31日）		



「近衛家の国宝」展 体験コーナー
「かな文字を書いてみよう」

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評定	B	B	A	A		
判定理由 適時性：鑑賞者が求める作品や時代背景、展覧会テーマ等に関する情報をあらゆる年齢層に向けて適切に提供できた。 独創性：タブレットを使用した体験コーナーや、ワイヤーで筆の跡をたどって作るしおりワークショップ、写真鏡を作る体験など独自のプログラムを実施した。 発展性：新たな試みとして、展覧会に係る当館周辺の史跡などを巡るツアーや遺跡の測量体験など、展示室内にとどまらず館外でもプログラムを実施した。また、特別展だけでなく、文化交流展示でも応用できる内容のプログラムを開発した。 継続性：アンケート結果を見ると、当館の特別展で実施する教育普及プログラムは来館者に定着しつつあり、参加を楽しみにしている来館者もみられる。また、本年度初めて計画した館外イベントに対して、募集定員以上の応募があるなど、今後も継続が期待されるプログラムも開発することができた。本年度の実施結果を踏まえ、次年度以降も改良しつつ継続していく予定である。						

2. 定量的評価

観点	解説パネル 枚数	講演会 回数	ワークショップ 回数	体験コーナー 回数	イベント 回数	論文数
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 解説パネル枚数：専門用語を避けた言葉遣いやイラストを用いて、積極的に分かりやすい解説やパネルを82枚掲示し、初期の目標を達成した。 講演会回数：入門的なものから専門的な内容までバラエティに富む講演会を多数企画した。また、1つの特別展につき1回以上という当初の計画通り実施することができた。 ワークショップ回数：当初ワークショップの予定はなかったが、7回と比較的多くのワークショップを実施することができた。また、制作体験を通して、展覧会や作品に対する理解がより深まったという意見が多数あり、目標通りの結果を得ることができた。 体験コーナー回数：当初、体験コーナーの計画はなかったが、展示物の魅力を最大限に伝えることができる体験コーナーを2回設置し、満足度が高い展示となった。 イベント回数回数：特別展関連イベントを18回実施し、当初の計画を順調に達成した。大宰府政庁跡における測量体験「なりきり考古学者体験」など、事前申込制の館外イベントは応募が定員以上の応募があるなど大変反響が大きかった。対応者の手配や安全性の観点から募集枠を増やすことはできなかったが、参加者アンケートからも分かるように非常に満足度の高いイベントを行うことができた。 論文数：教育普及活動の調査研究についての論文執筆を、目標通り1件行うことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示理解促進を図るためのバラエティに富んだプログラムを計画・実施し、子どもから大人まで幅広い年齢層の参加者から高い評価を得た。次年度も来館者の要望を適切な形で反映していきたい。今後、特別展の内容に応じた館外イベント立案にあたっては、回数及び募集人員について十分検討したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り実施されており、来館者からの反応も好評である。本年度実施して好評であった教育普及プログラムについては、アンケート結果などを参考に、さらに磨きをかけ、次年度以降の特別展や文化交流展で実施したい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 学校教育現場との連携を図って作り上げる学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・調査((5)～⑦)		
【事業概要】 現在、13種類の「きゅうぱっく」を準備し(各2セット、計26セット)、学校や社会教育団体等への貸出を行っている。今後の新規ぱっく開発を見据えて、現在ある「きゅうぱっく」の有効な活用法に関する実践事例を収集するとともに、教員研修や出前授業を通して博物館の活用や「きゅうぱっく」に関する情報を発信し、利用の普及を図る。			
【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	教育普及室主任研究員 釜瀬進一郎
【スタッフ】 池内一誠(教育普及室主任研究員)			
【主な成果】 「きゅうぱっく」を活用した実践事例や博物館を活用した授業づくりに関する指導案を収集するとともに、「きゅうぱっく」に関する情報発信・利用の普及を図った。また、新規キットの開発に向けた研究を行っている。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・「きゅうぱっく」の利用報告書を基に、学校現場が「きゅうぱっく」を利用して改善が必要と感じている部分や追加してほしい内容等をキット別に集計することで、今後の新規キット開発に向けた調査・検討を行った。また、この調査とは別に、「きゅうぱっく」を活用した実践事例の指導案提供を求め、「社会科」や「総合的な学習の時間」に関する学習プリント等を含む多くの資料を収集することができた。 ・福岡県教育センターのキャリアアップ講座には、県下全域から40名の教諭が参加し、博物館を活用した実践事例を含む具体的な指導案を多数収集するとともに、「きゅうぱっく」の活用について周知を図ることができた。 ・太宰府市立太宰府中学校の「総合的な学習の時間(飛梅タイム)」の歴史探訪講座に九州歴史資料館(小郡市)と連携して職員を派遣し、出前授業を行った。また、春日市立須玖小学校・福岡県立小倉高校・福津市立福岡東中学校でも「きゅうぱっく」を利用した出前授業を行うことで、児童生徒の反応を検証した。 ・新規「きゅうぱっく」の開発のための研究を進めた。開発中の新シリーズ「アジアの海は日々是好日(仮称)」に搭載することが可能な資料がないかどうかについて、学術文化交流協定に基づく韓国研修の際に調査・検討を行った。その結果、高麗陶磁、数種の香辛料、紫檀木などが資料として搭載可能であるということが判明した。これらを含め、内容をどのように構成するか今後検討する必要がある。 			
			
「きゅうぱっく」を利用した授業			
【実績値】 <ul style="list-style-type: none"> ・「きゅうぱっく」貸出件数：67件 ・博物館職員による授業実践支援回数：7回(対象生徒数のべ350名) ・「きゅうぱっく」の活用に関する教員研修：1回(参加教員数40名) 			
【備考】			

【書式B】 施設名
(様式2)

九州国立博物館

処理番号 4574-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：小学校及び中学校の学習指導要領には、博物館や人材の活用が示されている。学校貸出キットなど博物館の資源を教材として活用した学習指導の展開は、必要性が高い。 独創性：多くの実践事例に関する指導案等を収集し、新たな活用法について調査研究する上での基礎資料を集めることができた。 発展性：同じキットでも多様な活用方法があり、活用される学年、教科、単元は多様である。本年度は、新規で大学の授業における実践事例を収集できた。今後も新たな活用法の開発が期待できる。 効率性：学校連携担当職員の配置により、活用や授業展開に関する教師との打ち合わせや資料の要望に応えやすい体制になっている。 継続性：文化交流展示IVテーマに対応した資料を、新規「きゅうぱっく」として製作予定である。現状の13セットに加えて、更なる活用や授業実践が期待できる。 正確性：三次元プリンタで出力した資料や、文化交流展示室のハンズオン資料と関連する教材が活用されている。今まで縮小して出力した青銅器を提供していたが、一部を原寸のものと差し替えた。資料の有する情報の正確性は非常に高い。						

2. 定量的評価

観点	きゅうぱっく貸出件数	授業実践支援回数	きゅうぱっく活用教員研修			
評定	B	B	B			
判定理由 きゅうぱっく貸出件数：特に目標値は定めていないが、貸出件数は67件で、前年度比93%（25年度72件）と減少したが、24年度の56件は上回っている。県外への貸出が8件（12%）と一定数を占めている。 授業実践支援回数：特に目標値は定めていないが、支援回数は7回で、前年度比140%（25年度5回）と増加した。きゅうぱっく活用に関する教員研修：特に目標値は定めていないが、研修回数は1回で、参加人数は40名であった。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「きゅうぱっく」の貸出については、貸出数自体は減少したものの、館内利用も少なくなく、概ね順調である。教員研修も内容を深化させながら継続して実施している。「きゅうぱっく」が有効な学習教材として、学習活動に活用されていると考えられる。今後は収集した実践事例を整理して公開し、学校へ提供するなどの活用が考えられる。 また、文化交流展示IVテーマに対応した資料を、新規「きゅうぱっく」として製作予定であり、今後も展示に関わる貸出キットの製作に向けた調査研究が必要である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	カリキュラムに「きゅうぱっく」活用が位置付けられる学校があるなど、学校教育との連携は着実に進展している。現行の学習指導要領が求める教育活動において、「きゅうぱっく」が意義ある教材であることは間違いない。また、館内での「きゅうぱっく」活用や特別支援学校での活用も少なからずあり、今後の活用の発展が期待できる。これらのことから、学校教育との連携は今後ますます強化が求められるといえる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 27年度に迎える開館10周年における一定程度のリニューアルを見据えた、現在の展示施設、展示環境や展示方法の課題や展望についての検討(5)～(7)		
【事業概要】 27年度には開館10周年を迎えることから、文化交流展示室のリニューアルを実施することを想定し、展示に関係する全研究員による討論や、外部委員会による意見の聴取あるいは、展示業者等との討議により、新しい展望を開こうとする取り組みである。			
【担当部課】	学芸部展示課	【プロジェクト責任者】	課長 楠井隆志
【スタッフ】 三輪嘉六(館長)、井上洋一(部長)、本田光子(特任研究員)、臺信祐爾(企画課長)、富坂賢(文化財課長)、今津節生(博物館科学課長)、秋山純子(博物館科学課環境保全室研究員)、志賀智史(博物館科学課保存修復室主任研究員)、渡部史之(博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー)、赤田昌倫(博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー)、河野一隆(企画課文化交流展示室長)、川畑憲子(企画課文化交流展示室主任研究員)、原田あゆみ(企画課特別展示室主任研究員)、森實久美子(企画課特別展示室研究員)、鷺頭桂(企画課特別展示室研究員)、西島亜木子(企画課アソシエイトフェロー)、酒井田千明(企画課アソシエイトフェロー)、丸山猶計(文化財課資料登録室主任研究員)、荒木和憲(文化財課資料登録室主任研究員)、畑靖紀(文化財課資料管理室主任研究員)、望月規史(文化財課資料登録室アソシエイトフェロー)、藤生京子(文化財課資料登録室研修生)岸本圭(展示調整室主任研究員)、進村真之(情報サービス室主任研究員)、一瀬智(展示調整室研究員)、遠藤啓介(展示調整室研究員)、小嶋篤(情報サービス室研究員)、池内一誠(交流課教育普及室主任研究員)、八尋智之(交流課ボランティア室主任研究員)			
【主な成果】 (1)学芸部研究員全員参加による学芸部会議をはじめ、各テーマ担当者会議、事務局会議などを開催し、これまで抽出してきた文化交流展示室の課題改善に向けての検討を重ねた。 (2)外部委員会「次の10年を考える懇話会」第10回(最終回)を開催した。 (3)上記検討の成果をリニューアル計画として具体化させるとともに実施に向けての館内調整を進めた。 (4)27年10月17日開催予定の開館10周年記念式典までにリニューアルを完了させる計画である。			
【年度実績概要】 (1)の詳細の例 ・毎月1回1～2時間程度、学芸部研究員が出席する学芸部会議を開催し、文化交流展示リニューアル計画の具体化に向けて討議を重ねた。 ・必要に応じてI～Vテーマ担当研究員によるテーマ会議も開催。テーマ担当者間の意見調整を行った。 (2)の詳細の例 ・26年6月3日に第10回(最終回)を開催するとともに、過去10回の懇話会で寄せられた意見の概要を小冊子にまとめ、館内におけるこれまでの活動評価や今後のあり方を検討する際の参考資料として活用した。 (参考：過年度実績) ・24年度より立ち上げた事業で、次の10年の展開をどう考えるかというテーマについて、識者や市民代表より率直な意見を伺ってきた。これまで24年度は4回、25年度は5回開催した。 (3)(4)の詳細の例 ・企画課文化交流展示室及び展示課職員による事務局会議を頻繁に開催し、(1)(2)各会議・懇話会で出た諸意見を集約し、リニューアル実施のための与件の検討や仕様書案の作成を進めた。			
【実績値】 (1)学芸部研究員による検討会 30回 (2)外部委員による次の10年を考える懇話会 1回 (3)展示業者等からの意見聴取 5回 作成物 『「九州国立博物館」次の10年を考える懇話会のまとめ』、次の10年を考える懇話会、26年6月			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：27年10月17日の開館10年記念式典までにはリニューアルを完了する予定であり、それに向けて着実に計画の具体化を進めている。開館10周年事業の大きな柱と位置づけられる。</p> <p>独創性：館員だけでなく、識者や市民代表からの様々な視点を取り入れ、新たな魅力づくりに繋げていこうとしている。</p> <p>発展性：開館以来の課題の改善を目指すとともに、リピーター確保のための新たな魅力づくりを目指している。</p> <p>効率性：研究員による検討会議は毎月の学芸定例会議開催日と同日に定例化しているため、出席率が高い。それ以外の臨時会議も必要に応じて随時開催している。</p> <p>継続性：館員による展示検討会は23年度から、外部委員による懇話会は24年度より継続されており、館員の共通認識を深めることにも繋がっている。</p> <p>正確性：計画の具体化に向けて頻繁に検討会議を開催した。</p>						

2. 定量的評価

観点	検討会実施回数	外部委員による懇話会開催	展示業者等からの意見聴取			
評価	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>検討会実施回数：定例の会議以外にも必要に応じて頻繁に会合を開催し、共通認識を構築することに繋がった。</p> <p>外部委員による懇話会開催：本年度は最終回1回のみで開催であったが、過去10回の意見を集約した冊子を編集した。これは計画の具体化にあたり多いに参考になった。</p> <p>展示業者等からの意見聴取：必要に応じて適宜実施し、計画の具体化にあたり参考とした。</p>						

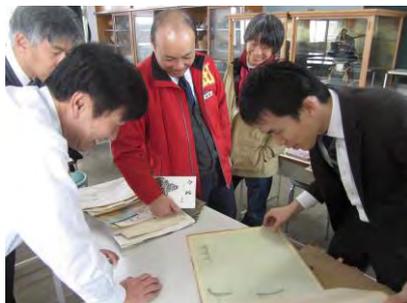
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究員全員による検討会の定例化、外部委員会の開催及び報告書作成を通して、確実に開館10周年リニューアルに対するある一定の方向性を見出すとともに、館員の共通理解を得ることに繋がっている。着実な検討を進めていると評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	学芸部研究員全員による討論、外部委員会による意見の聴取により、開館10周年リニューアル実施に向けて具体的な方向性を見出しつつあるとともに、館員の共通認識を構築しつつあり、順調に進んでいる。次年度は計画通りリニューアル作業を進めていき、10月完了を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5)高等学校所蔵考古資料の調査研究((5)－⑦)		
<p>【事業概要】日本各地の高等学校には様々な考古資料が保管されている。収蔵資料の多くは、教員や地元有志からの寄贈、構内遺跡出土品、歴史系クラブ活動の調査資料品などである。いずれも高校がその地域において知の集積地として機能していたことを示し、収蔵資料の実態把握は、考古学上重要であるばかりでなく、近現代の社会史的あるいは教育史的意義を有する。しかしながら、学校によっては管理者が不在であったり、知識不足から活用がなされなかったりと、各種の問題を抱え、資料の活用が進んでいない。本研究は、高等学校が所蔵する考古資料の更なる活用にむけて、全国的な調査を実施し、その成果を展示等の博物館機能を通じて広く公開していくものである。</p>			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 市元壘
<p>【スタッフ】 河野一隆（文化交流展示室長）、志賀智史（博物館科学課保存修復室主任研究員）池内一誠（交流課教育普及室主任研究員）</p>			
<p>【主な成果】</p> <p>(1)24年度からの調査研究の中間報告として、7月15日から9月23日にかけて当館文化交流展示室において「真夏のトピック展示 全国高等学校 考古名品展」を開催し、展示と図録を通じて、一般には知られていない高校所蔵考古資料の存在を浮き彫りにした。</p> <p>(2)高校が主体となる考古学活動は1970年代頃から下火となったとみられていたが、これまでの現地調査をまとめることにより、現在においても活動を続けている高校があることを確認した。</p> <p>(3)8月16日に当館ミュージアムホールにおいて「全国高等学校考古学フォーラム in 九州国立博物館 2014」を開催することにより、現役高校生による考古学研究発表の場を創出し、高校生による考古学活動はすでに下火になっているとの認識を改めることができた。</p> <p>(4)佐賀県下の県立高校の考古資料の所蔵実態と活動状況について、佐賀県に依頼して悉皆調査を実施し全容を把握した。</p> <p>・徳島県、愛媛県、秋田県、三重県、長野県における高校所蔵考古資料の実態について、当該自治体文化財関係者にヒアリングを行い、また文献調査を実施し、今後の調査にむけての基礎情報を収集した。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1)53件111点の資料を通して、一般には殆ど知られていない高等学校と考古学との関わりについて明らかにした。併せて、従来、考古学活動が盛んな高校は地域の伝統校という見方があったが、現状はこれにとどまらず、新設校であっても、地の利を活かして研究活動を続けている高校があることを明らかにした。このことは、現在高等学校に所蔵されている考古資料をはじめとする各種文化財についての認識を改める機会となるものである。</p> <p>(2)この活動を展示とフォーラムを通していかんなく紹介した。</p> <p>(3)学校現場において遺跡や考古遺物がどのように扱われているのか、またどのような歴史研究を行っているのかについて、理解を深めることができた。</p> <p>(4)27年2月に佐賀県立小城高等学校、同県神崎高等学校、愛媛県立今治西高等学校の調査を実施した。</p> <p>○27年1月に京都文化博物館で博学社連携シンポジウムに参加し、京都府立鴨沂高等学校等における実践例を調査した。</p>			
			
<p>愛媛県立今治西高等学校での調査</p>			
<p>【実績値】 現地調査校：3校 情報収集都道府県：6県 収集図書数：2件 学会研究会等発表数：1件 論文5件(①) (参考値)新聞取材：6件、テレビ取材3局(NHK、RKB、CSF)(②)</p>			
<p>【備考】</p> <p>① 市元壘「高等学校と考古学」『真夏のトピック展示 全国高等学校 考古名品展』(26年7月) 池内一誠「高等学校と考古学の新時代に向けて」『真夏のトピック展示 全国高等学校 考古名品展』(26年7月) 市元壘、池内一誠「高校考古資料の調査—学校現場での活用を視野に一」『東風西声』10号(27年3月)他2件 (参考) 取材記事 「考古学甲子園 お宝集合 九博13校の国重文含む53件」西日本新聞(26年7月4日)、「高校生発掘の「お宝」ずらり 九博で考古名品展 重文など全国13校の53件展示」読売新聞(26年7月29日)、「がんばれ! 高校考古部員たち 九州国立博物館「全国高等学校考古名品展」」朝日新聞(26年7月31日)、「高校の考古研究 九博で公開」西日本新聞(26年8月2日)、「高校考古学 60年代まで盛んに発掘 初の全国展 九博で13校53件」毎日新聞(26年8月10日)、「高校生が考古学発表 福島からも参加 九国博でフォーラム」毎日新聞(26年8月17日)</p>			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-5

自己点検評価調査

9. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	S	A	B	B	B
判定理由 適時性：考古学と社会との関係を考察する「パブリック・アーケオロジー」は今、世界的な議論をよんでおり、本事業はその一翼を担うものであり、九州史学会などの学会でも紹介がなされた。 独創性：高等学校所蔵の考古資料に対する全国規模での調査は当館のみの取り組みであることから、独創性が秀でていると言える。その結果、特別展並みかそれ以上数である6社から取材があり、またその扱いが各媒体で非常に大きかった。 発展性：当館の取り組みを基礎として、各地の自治体で学校所蔵資料の調査を進める機運が高まり、秋田、佐賀、長野、三重などで悉皆調査が実施された。 効率性：これまでの研究成果を展示と図録のなかで的確にまとめることができた。 継続性：調査できていない都道府県に対して、継続的に調査すべく計画を立案している。 正確性：情報が不足していた県に対する情報を十分に充当することができた。						

2. 定量的評価

観点	現地調査回数	収集資料数	収集図書数	学会研究会等発表数	論文数
評定	C	B	B	B	B
判定理由 現地調査回数：秋田県や沖縄県について現地調査を計画したが、業務多忙のため次年度に繰り越すこととなった。 資料収集数：全国視野での動向把握を目標とし、結果、東北から九州にかけての6県の情報を新たに追加できた。 収集図書数：各県の動向を掘り下げるべく、既刊の報告書などを計画的に収集した。 学会研究会等発表数：所期の目標通り展示図録、論文、研究発表など、想定される機会、媒体での発表ができた。 論文数：当初計画通り、当館の研究紀要、外部学術誌、図録など、多様な媒体に掲載することができた。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は現在社会において関心の高いテーマであることが、取材数の多さや、各県で実態調査が実施されたこと等からうかがえた。今後は、学校との連携をより緊密化させることを目標とし、考古資料の学校現場での活用についてさらに研究をすすめていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各都道府県における高校所蔵考古資料について、情報収集を積極的に進めた結果、前年度から飛躍的に情報が増えた。次年度はこの情報をもとに、実態調査を進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6)文化財管理及び画像情報データベースの効率的な運用についての調査研究((5)－⑦)		
【事業概要】			
収蔵品をはじめとする文化財情報のデータベース化の基盤となるシステムの構築と安定的運用、写真(画像)資料の永久的保管と撮影機材の整備を図る。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長 富坂 賢
【スタッフ】			
竹内俊貴(資料管理室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】			
<p>(1) 京都国立博物館(列品調査室)及び奈良国立博物館(情報サービス室)で運用されている文化財管理システムの調査・研究を、当該担当者の指導・助言を得て行った。</p> <p>(2) 現行システムの問題点を洗い出した結果、新システムの採用に向けた取り組みを行った。</p> <p>(3) (2)と並行して博物館データベース及びシステムの専任者を採用した。</p> <p>(4) 当館で撮影された写真フィルムの完全デュープ化を実現した。</p> <p>(5) より高品位の記憶媒体に画像データを保管した。</p> <p>(6) デジタル撮影の本格的稼働に備え、撮影機材、撮影環境、保存用ストレージ、体制等の整備に取り組んだ。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 京都国立博物館及び奈良国立博物館における調査・研究において、館を取り巻く環境の違いを踏まえ、各館で採用している文化財管理システムについての意見交換を行い、適切な文化財管理の方法を検討した。また、情報の機密性・完全性・可用性等を確保するためのハードウェア構成についても調査し、次期における堅牢なシステム構成案を作成した。</p> <p>(2) 27年3月27日、プロトタイプの実運用を開始した。当館の特徴的な事情を反映し、現行システムにおいて発生していた問題を解決した。</p> <p>(3) 26年10月1日付で文化財データベース専任のアソシエイトフェローを採用した。総務省主催の情報システム統一研修に3度参加するなど、より専門性を高め当館に成果を還元した。</p> <p>(4) 株式会社堀内カラーが保有していたデュープ用フィルムを一括購入し、当館所蔵の写真フィルムを完全デュープ化した。</p> <p>(5) DVD媒体で納品された画像をBlu-ray ディスク及びサーバへと保存し、複製先の画像を利用することとした。サーバ上でバックアップ体制を確立し、原本を利用する機会を減らすことで、情報の劣化・消失のリスクを軽減した。</p> <p>(6) 撮影機材、画像の編集や保存場所の確保、撮影画像を安全に保管するための体制を整え、当館にてデジタル撮影が十分可能となる環境が構築された。</p>			
			
デュープフィルム納品確認の様子			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・システム検討会 5回 ・4×5フィルム等のデュープ化 7,652枚 ・画像撮影件数 1,163件 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：内外の需要に応えるため、操作性に優れた文化財管理システムの構築は緊急の課題である。 独創性：画像データの安定的保管運用のためフィルムの全デュープ化を実現した。 発展性：文化財に関する様々な情報を一元的に管理する基礎を構築した。またデジタル化推進のため撮影環境を整えた。 効率性：現在は分散し、担当者個別に管理されている各種データを統合することで効率的な業務運営が可能となる。 継続性：画像の作成枚数及び登録件数を順調に増加させた。 正確性：文化財管理システムの見直しを図るなかで従前のデータの正確性を向上させる試みを継続して実施した。						

2. 定量的評価

観点	システム検討会	4×5 フィルム等のデュープ化	画像撮影件数			
評定	B	B	B			
判定理由 システム検討会：検討会の開催回数は必要に応じて開いたものであるが、26年度中の新システムの移行にたいする準備ができ、システム検討会として十分に役割を果たせた。 4×5 フィルム等デュープ化：デュープ化の終了していない7000枚フィルムについて、完全デュープ化でき、目標を達成した。国内のフィルム市場にあるデュープ用フィルムは、今回の事業で在庫がなくなり、今後は完全デジタル化に移行することが求められる。 画像撮影件数：従前通りの外部委託体制であったが、画像撮影件数は豊富であり、例年同様の件数を実施でき、所期の目標を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	専任のアソシエイトフェローを配置し、文化財機構間の担当者同士で検討を加えることができた。その結果、開館以来試行錯誤を繰り返していた情報管理システムについて、文化財管理及び画像データベースの構築に向けての基盤を構築できた。また4×5フィルムの完全デュープ化によってフィルム貸出及び永久的保管への対応ができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予算・人的資源を最大限に活用し、文化財の保存・活用そして研究の基盤としての文化財情報の整備に計画的に着手していく。26年度に導入した情報管理システムを、次年度はより使い勝手のよい、堅牢で精度の高いものに作りこんでいく。

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信(①-①)		
【事業概要】文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国における文化財保存・修復事業を推進する。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	主任研究員 江村知子
【スタッフ】 川野邊渉(センター長)、山内和也(地域環境研究室長)、友田正彦(保存計画研究室長)、加藤雅人(国際情報研究室長)、境野飛鳥(アソシエイトフェロー)、新免歳靖(研究補佐員)、渡部妥子(研究補佐員)、二神葉子(企画情報部情報システム研究室長)			
【主な成果】 ・世界遺産委員会(ドーハ)、奈良文書20周年記念会合(奈良)、ICOMOS総会(フィレンツェ)、ICCROM理事会(ローマ)、無形文化遺産政府間委員会(パリ)等の国際会議に出席し、文化財保護に関する国際情報収集を行った。 ・日本の文化財の所蔵館や、他の所内業務において関連のある美術館・博物館を中心にアメリカにおける動産文化財の所蔵・管理状況についての調査を行った。 ・文化財保護関連の法令の収集・分析及び翻訳作業を実施し、対訳法令集シリーズを新たに1冊刊行した。			
【年度実績概要】 ・国際会議等出席 文化財保護の国際動向を把握し、国内外の関連機関との連携を深めるために、以下の会合に参加した。 26年6月15日～6月25日 世界遺産委員会(ドーハ) 26年10月22日～25日 奈良文書20周年記念会合(奈良) 26年11月9日～14日 第18回ICOMOS総会(フィレンツェ) 26年11月17日～20日 第84回ICCROM理事会(ローマ) 26年11月24日～28日 無形文化遺産政府間委員会(パリ) 世界遺産委員会では、世界遺産委員会での分析を通じて、日本政府代表団を支援した。ICOMOS総会とICCROM理事会では、国際情報の収集に努め、各国の専門家と情報交換を行った。無形文化遺産政府間委員会では、審議の記録を作成した。 ・文化遺産(動産文化財)保護についての調査・研究 アメリカ国内には2万館を超えるミュージアムが存在し、指定品クラスの日本の美術作品を収蔵している美術館も少なくないが、文化行政を担当する省庁は存在しない。独自の方法で文化財を保護しているアメリカの現状を把握するため、国内外の関係者から聞き取り調査を行うとともに、下記の日程で現地調査を実施した。 27年3月9日～14日 メトロポリタン美術館、フィラデルフィア美術館 ・選定保存技術に関する調査 日本の選定保存技術の伝統や技術を広く国内外に発信していくために、蒔絵筆(京都)、本藍染(滋賀)、檜皮採取(兵庫)、左官(宮城)玉鋼製造(島根)、手漉和紙用具製作(静岡)についての調査を実施した。また、日本の文化財や当研究所の果たす役割についての理解を促進するために、カレンダーを作成した。 ・台湾師範大学との研究協力 台湾に所在する日本関係の文化遺産の調査・研究、保存修復に関する研究、人材育成、情報共有などに関して協力・交流を行うために協定書を調印し、先方から特に要請のあった染織関係の講座を開講した。 26年10月22日～24日、11月17日～20日 台湾師範大学 ・対訳法令集シリーズの刊行 本年度はシリアについて、文化財保護法令の条文を和訳し、対訳法令集シリーズとして1冊刊行した。またメキシコなど諸国の文化財保護関連の基本的法令の取得や情報収集を行った。			
【実績値】 国際会議出席 5回、海外現地調査 1回(アメリカ)、研究発表 2回(①②)、刊行物発行 2冊(文化財保護法令集1冊(③)、国際資料室蔵書目録1冊(④))			
【備考】 研究発表：①境野飛鳥 「日本の文化財保護」 東京文化財研究所「史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ」26年7月3日 ②二神葉子 「第38回世界遺産委員会」 第16回文化遺産コンソーシアム研究会「文化遺産保護の国際動向」27年3月2日 刊行物：③各国の文化財保護法令シリーズ[19]シリア、④国際資料室蔵書目録			



図1：無形文化遺産政府間委員会

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 5111

自己点検評価調査

研No.43

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	
評価	A	B	B	B	B	
判定理由 適時性：文化遺産保護の最新の国際動向を把握し、情報を必要とする関連組織や関係者に迅速に提供している。選定保存技術に関する調査や台湾師範大学との研究協力に関しては、本年度の予算に計上していなかったが、先方との調整が付き、プロジェクトを推進する上でも本年度中に行うことが必要であったため実施した。 独創性：様々な専門分野に対応し、国内外に発信できるネットワークを保持した当研究所においてこそ実行できる。 発展性：幅広く収集した情報を、所内外の調査研究活動及び文化遺産保護に関する業務において利用できる。 効率性：国内外のネットワークを通じて、最小限の従事者・規模で大きな成果を得た。 継続性：情報収集は継続して行うことでその利用価値が高まる。また刊行物や研究会などにおいても評価が高く、継続する意義が認められた。						

2. 定量的評価

観点	国際会議出席	海外現地調査	研究発表	刊行物発行		
評価	B	B	B	B		
判定理由 国際会議出席：5回の会議に出席して情報収集を行い、国際協力のネットワークを強化した。 海外現地調査：アメリカでの調査を実施し、次年度以降の発展的な調査研究につながる成果をあげた。 研究発表：世界遺産委員会の報告、最新の国際動向及び今後の課題について発表し、情報共有に努めた。 刊行物発行：2冊の刊行物により、専門性の高い情報を広く利用できるような形式で公開することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初計画の通り、文化財保護に関する国際情報を積極的に収集し、分析を行い、適切かつ迅速に情報発信を行った。また内戦によって文化遺産の荒廃が懸念されているシリアについての文化財保護法令を刊行することにより、国内外の関係各所に対して重要な情報提供ができた。また、研究発表には多くの専門家の参加を得て、充実した研究交流とネットワークの強化が実施できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国際会議への参加や研究発表を通じて、専門家間の交流や情報交換を推進できている。中期計画期間最終年度である次年度においても国際的な情勢や時事に鑑みながら、国際会議等に参加するとともに、文化財保護制度に関する海外調査等を行い、総合的な研究に発展させていく予定である。

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	中国の文化遺産の保存修復のための共同研究 (2)－①－ア)		
【事業概要】 国際共同研究を通じて東アジア諸国の保存・修復の考え方や技術に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を形成するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とする諸外国において文化財保護事業を推進することを目的として、中国・敦煌莫高窟壁画及び陝西省墳墓壁画の保護のための共同研究を実施する。			
【担当部課】	保存修復科学センター・ 文化遺産国際協力センタ ー	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健 地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 早川泰弘 (分析科学研究室長)、吉田直人 (主任研究員)、犬塚将英 (主任研究員)、森井順之 (主任研究員)、高林弘実 (京都市立芸術大学講師・客員研究員)、渡辺真樹子 (絵画修復家・客員研究員)、皿井舞 (企画情報部主任研究員)、津村宏臣 (同志社大学准教授・客員研究員)、増渕麻里耶 (文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、小川絢子 (研究補佐員)			
【主な成果】 敦煌研究院、陝西省考古研究院との共同関係を維持し、壁画文化財等の保護に関する研究について実績をあげた。 (1) 敦煌研究院保護研究所と共同で、莫高窟第 285 窟で壁画の材質調査と環境に関する調査を実施した。 (2) 陝西歴史博物館壁画展示館及び西安市所在の地下遺構保存に関連する施設、博物館を視察した。 (3) 前年度までの研究成果を国内学会で発表した。 (4) 中国で実施された壁画の保護に関する国際シンポジウムに参加し、発表を行った。 (5) 敦煌研究院の若手研究者の研修を行った。			
【年度実績概要】 (1) 莫高窟第 285 窟において調査を行い、壁画の絵画的構成と材料の選択・描画技法の関係について考察を行った (26 年 8 月 25 日～30 日、10 月 10 日)。また、洞窟内で発生する風 (空気流) によって飛ぶ微小な砂の挙動と壁画の劣化との関係についてデータを取得し、考察を行った (26 年 8 月 25 日、26 日)。 (2) 陝西省考古研究院と連携し、23 年に開館した陝西歴史博物館壁画館と地下遺構の環境制御装置の開発をしている西安交通大学、及び漢陽陵地下遺構博物館を視察し、文化財の展示保存に関する知見を得た (26 年 8 月 24 日)。 (3) 環境研究に関する成果を日本建築学会 (2 件)、材質分析研究に関する成果を日本文化財科学会 (2 件) で発表した。 (4) 敦煌研究院設立 70 年国際シンポジウムに招待され、第 285 窟共同研究の成果をもとに、基調講演を行った。陝西歴史博物館が開催した国際シンポジウムに招待され、ユーラシア地域の各国が共同して壁画研究と保護の活動を行うことの重要性について報告を行った。 (5) 敦煌研究院保護研究所の研究員 1 名を招聘し、非破壊分析機器による分析手法に関する講義と関西地区の文化遺産等についての視察を通して研修を行った (26 年 11 月 24 日～12 月 13 日)。 (6) 敦煌壁画の保護に関する日中共同研究の年度報告書を作成した。			
			
敦煌研究院設立 70 周年シンポジウム			
【実績値】 調査研究回数 3 回 (敦煌莫高窟調査: 8 月 1 回 9 人。10 月 1 回 1 人。取得データ = 蛍光 X 線元素分析 368 ヲ所、顕微鏡画像 378 ヲ所、分光光度計測定 240 ヲ所。西安市視察: 8 月 1 回 8 人) 発表件数 学会発表数 4 回 (①～④) 国際シンポジウム発表数 2 回 (⑤～⑥) 研修実施人数 1 回 1 名 報告書件数 年度報告書 1 冊 (⑦)			
【備考】 学会発表 ① 三箇山茜、銚井修一、小椋大輔、中田雄基、岡田健、蘇伯民: (ポスター) 敦煌莫高窟第 285 窟の壁画の劣化と外気流入との関係、日本建築学会平成 26 年度近畿支部研究発表会 (大阪) 26 年 6 月 21 日 ② 中田雄基、銚井修一、小椋大輔、岡田健、宇野朋子、蘇伯民、高林弘実、渡辺真樹子: (ポスター) 敦煌莫高窟第 285 窟壁画の劣化要因の検討、日本建築学会平成 26 年度近畿支部研究発表会 (大阪) 26 年 6 月 22 日 ③ 中田愛乃、高林弘実、崔強、岡田健: (ポスター) 敦煌莫高窟第 285 窟に描かれたパルメット文様の彩色材料および技法、日本文化財科学会第 31 回大会 (奈良)、26 年 7 月 5 日、6 日 ④ 福島千晴、高林弘実、岡田健、蘇伯民: (ポスター) 敦煌莫高窟第 285 窟西壁の供養菩薩群の制作工程、日本文化財科学会第 31 回大会 (奈良)、26 年 7 月 5 日、6 日 国際シンポジウム発表 ⑤ 岡田健: (基調講演) 壁画の“保存”とは、何を意味するのか—莫高窟第 285 窟壁画調査を通して、敦煌研究院設立 70 年国際シンポジウム「2014 年シルクロード古代遺跡保護国際学術検討会」、26 年 10 月 8 日 ⑥ 岡田健: (口頭発表) ユーラシア大陸壁画の研究と保護—国際協力の意義、2014 年陝西歴史博物館壁画論壇「全地球的視野のもとでの中国古代壁画の予防的保護研究に関する国際学術検討会」、26 年 10 月 16 日 報告書 ⑦ 敦煌壁画の保護に関する日中共同研究 2014、東京文化財研究所/敦煌研究院、1 冊			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 5211

自己点検評価調査

研No.44

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国際共同によって中国文化財の保護に協力することは、悪化したままになっている日中関係において文化財の分野が果たす役割の重要性を示すものであり、その果たす意義は大きい。 独創性：従来の国際協力の範囲を越え、ユーラシア各国が相互に連携して各地の壁画研究と保護の活動を行うことの重要性を、日本から中国の専門家に対して機会を捉えて発信している点で、極めて独創的である。 発展性：すでに20年来東京文化財研究所が導入して実践してきた携帯型の分析機器を活用した現場での分析・観察調査が中国国内でも定着しつつある中、単に分析を目的とするのではなく、文化財としての価値をいかに見極めるかという文化財研究の本質を提唱しつつ実践する研究は、それが理解されることによって、学術領域としての大きな発展が期待できる。次期中期計画に向けての話し合いを継続的に行っており、共同研究としての発展性も期待できる。 効率性：運営費交付金以外に、一部先方負担金等を活用し、調査内容と参加人員を厳選し、効率よく実施している。 継続性：長期にわたって共同研究を積み重ね、若手研究者の研修を実施して日本の文化財科学研究や文化財保護の理念についても理解を深めてもらい、若手研究者同士の信頼関係構築にも注意を払い、次期中期計画における共同研究の内容と方法についても前年度以来継続的に議論を始めている。 正確性：取得したデータの整理保管作業を着実に実施し、年度報告書に全データを掲載するなど、研究成果が正確に反映されている。						

2. 定量的評価

観点	調査研究回数	発表件数	研修実施人数	報告書件数		
評価	B	B	B	B		
判定理由 調査研究回数：当初の計画通りに実施した。 発表件数：当初の計画通り成果の発表を行った。 研修者人数：当初の計画通り招聘し実施した。 報告書件数：当初の計画通り作成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度の計画では、現地調査は前年度までの調査の補充調査、という位置づけであったが、前年度大きく前進した作画順序に関する研究、窟内の風に起因する砂の衝突による壁画の劣化についての研究で確認事項が増えたため、短期間であるが集中的な本格調査を実施した。またその環境調査に関連して、陝西省西安市で遺構露出展示の保存方法の研究について見学を実施したところ、今後の新たな日中共同研究についての可能性の萌芽があった。前年度も2件中国での国際学会の発表があったが、本年度も2カ所からの招待があり、前年度と同じ数の発表実績をあげることができた。敦煌研究院からの若手研究員受け入れは短期間ながら保存修復科学センター研究員による分析科学に関する集中的な講義を行い、最先端の分析機器にばかり頼るのではなく、環境を含む様々な要因を考慮して文化財の材料技法について制作当時どのような創意工夫がなされたか、というテーマに迫るための思考方法を伝えることができた。報告書は例年通りに1冊作成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国の文化財保存に関する共同研究は、敦煌研究院に代表される中国側各研究機関・大学の研究設備の充実、人材の成長により、ますます発展の可能性が広がっている。このような状況を認識しつつ、本年度は日本国内の壁画保護に資する共同研究、アジア全域を視野に入れた相互協力・相互理解を目的とした共同研究のあり方について思考した。中期計画の4年目として、現地での基礎調査を完了した。次年度はさらに中期計画最終年としての総括と、次期中期計画へ向けての準備を進めていきたい。

業務実績書

研No.45

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	韓国及び日本の石造文化財を対象に保存修復のための共同研究 ((2)-①-イ)		
【事業概要】			
韓国・国立文化財研究所（韓文研）と共同研究を行い、保存修復技術に関する情報共有を進める。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】			
早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、岡田健（同センター長）			
【主な成果】			
<p>「文化財の保存環境及び保存修復技術研究」に関する日韓共同研究合意書に基づく韓文研保存科学研究室との共同研究において（26年度で第4期4年目）、韓国側研究者との研究交流により双方の研究発展を図っている。26年度は、以下の内容を実施した。</p> <p>(1) 5月に韓文研保存科学センターセミナー室で研究会を開催し、両国の研究者による発表及び討議を行った。</p> <p>(2) 5月で韓国において、9月に日本国内での現地調査を実施した。</p> <p>(3) 研究会での発表内容については韓日共同研究報告書として刊行した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 研究会の開催（韓国）（26年5月27日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・26年度は韓国側が開催する順番であり、26年5月27日に韓文研保存科学センターセミナー室にて「文化財の環境と保全管理技術の研究」というテーマで研究会を開催した。研究会には日本側から岡田・朽津・森井が参加し、「日本における横穴墓の保存」（朽津）、「史跡・竹原古墳の保存環境に関する調査研究」（森井）の発表を行った。 <p>(2) 共同調査の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査日：26年5月27日（韓国）、26年9月2日～5日（日本） 韓国での共同調査は研究会と同日午前、丹芝里横穴墓群（公州市）を訪問し現地担当者から発掘当時の状況、埋戻しに至る経緯のヒアリングを行った。また、日本では26年9月2日に市ヶ尾横穴墓群（横浜市）、9月4日に西都原考古博物館（西都市）、東二原地下式横穴墓群（小林市）を訪問し、地下式横穴墓群の様々な保存展示手法について多くの情報を得た。 <p>(3) 報告書の刊行</p> <ul style="list-style-type: none"> ・26年度に開催した研究会での発表内容を報告書「2014年度韓日文化財保存環境成果報告書—文化財環境の保存管理技術研究」（26年5月刊行）にまとめた。 			
			
<p>西都原古墳群遺構保存覆屋における共同調査</p>			
【実績値】			
報告書：1件（①）			
【備考】			
報告書			
① 2014年度韓日文化財保存環境成果報告書—文化財環境の保存管理技術研究 韓国・国立文化財研究所／東京文化財研究所 26年5月			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 5212

自己点検評価調査

研No.45

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
評定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：研究会における各発表者の発表内容を報告書にまとめ、屋外文化財に関わるその他の研究者に向けて公表することができた。 発展性：今年は地下式横穴墓の展示と保存の在り方がテーマであり、石造文化財の劣化と環境について共同研究を行っていた以前と比べて、様々なジャンルの屋外文化財を扱うようになり発展的に進めることができた。 効率性：日韓ともに国内事業で多忙ななかで共同研究成果をあげるため、一度の調査で複数の用務地をまわることで効率的な調査に努めた。 継続性：毎年1回の研究会を日韓交互に開催することにしており、事務的負担を軽減しながら持続的に共同研究を進めている。						

2. 定量的評価

観点	報告書					
評定	B					
判定理由 報告書：研究会の発表内容を中心に報告書としてまとめることができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日韓共同研究合意書に基づく本調査研究において、26年度は韓国側で研究会を実施し、横穴墓及び遺構保存整備をテーマとして日韓研究者の議論及び情報共有を行うことができた。また、両国における調査研究は時間的な制約がある中、効率的に対象地を回ることができ、26年度のテーマである地下式横穴墓の展示と保存の在り方について把握することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通りに研究会も行き、報告書も出版できたため、中期計画及び日韓共同研究合意書における5ヵ年4年目の計画を順調に達成したと判断される。中期計画最終年度である次年度はまとめの年として、韓国側研究者と緊密な連携のうえで計画を進めて行きたい。

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力((2)-①-ウ)		
【事業概要】			
ASEAN 諸国を中心とする東南アジア及びその周辺地域は、多くの貴重な文化遺産を有し、我が国との文化的交流も緊密であるが、文化遺産保護体制や専門技術の水準において未だ課題を抱えている国が少なくない。このため、当該地域における保存修復事業への協力及びこれに関する調査研究の実施を通じて文化財の保存・修復に関する技術移転を図るとともに、この分野での国際協力を推進する。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	保存計画研究室長 友田正彦
【スタッフ】			
川野邊渉（センター長）、山下好彦（任期付研究員）、佐藤桂（アソシエイトフェロー）、山田大樹（アソシエイトフェロー）、増渕麻里耶（アソシエイトフェロー）、新免歳靖（研究補佐員）、北川瑞季（研究補佐員）、二神葉子（企画情報部情報システム研究室長）			
【主な成果】			
<p>(1) カンボジアでは、タネイ遺跡の保存整備に向けた作業工程及び現状記録技術の実地検討を行った。基本的手法を確立し、現地機関に活用されている。</p> <p>(2) タイでは、寺院扉の螺鈿装飾の科学的な現地調査を行い、技法・材料等に関するデータを取得した。分析結果は同作品の保存修復方針に反映される。</p> <p>(3) ミャンマーでは、伝統的漆工芸品の保存協力協定を締結したほか、同国木造建築に関する研究会を開催し、研究課題等を把握・共有した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) ・アプサラ機構の担当部局とともに、タネイ遺跡の保存整備計画策定に向けて今後必要な調査項目・内容の検討を行った。(26年5月18日～21日)</p> <p>・同遺跡現地で、デジタル写真画像から3次元データを作成するSfM (Structure from Motion) 技術を試行し、現状立面図作成のための作業フローを確立するとともに、精度の検証等を行った。(26年7月20日～30日)</p> <p>・アンコール遺跡保存国際調整委員会 (ICC) 第23回技術会議に参加して成果報告を行った(26年6月3日～6日)ほか、同第21回本会議、プレアヴィヒア ICC 第1回会議にも参加し、保存と国際協力の現状や課題に関する情報収集等を行った。(26年12月2日～5日)</p>			
			タネイ遺跡における測量作業風景
<p>(2) ・バンコク市内のラチャプラディット寺院で、日本製輸出漆器の作例である本堂扉の螺鈿装飾部位を対象に蛍光X線分析装置による測定を行い、螺鈿背面に使用されている金属箔片や顔料の同定等を行ったほか、タイ文化省芸術局関係者との研究打合せ等を行った。(27年1月12日～17日)</p> <p>・同寺院において高精細画像等の撮影を含む劣化状況の記録作業を行ったほか、同局関係者と修復方針等に関する研究会を行った。(27年2月22日～28日)</p>			
<p>(3) ・ネピドーの協同組合省にて、U Mya Than 小規模産業局長代理ほか出席のもと、同局との協定書の署名式を行った。これにより、同国で行う伝統的漆工芸品の保存に関する協力事業の目的や内容が明確に共有され、今後の事業実施の円滑化に資することが期待される。(26年9月8日～11日)</p> <p>・建築家の R. Myo Myint Sein 氏及び技術大学マンダレー校の Zar Chi Min 准教授を招聘し、東文研セミナー室にて研究会「ミャンマーの木造建築文化」を開催した。日本側研究者を含む発表とパネルディスカッションを行い、既往の研究成果を共有するとともに、今後の調査研究上の課題や歴史的建造物の適切な保護に向けた方向性などが議論された。また、招聘者とともに日本国内の文化財建造物やその修理現場等を見学しながら意見交換を行った。(27年2月11日～18日)</p>			
<p>(4) ・この他、ブータンにおいて過去に日本人専門家が行った建造物調査のデータ類をデジタル化し、目録等の整理を行った。その後に改造されたり既に失われたりした建物に関する記録もあることから、貴重な資料として同国の文化遺産保護担当部局と共有し、今後の活用が期待されている。</p>			
【実績値】			
海外調査（専門家派遣）7回、専門家招聘 1回、研究会開催 1回、報告書作成 2冊（①～②）、論文作成 1本			
【備考】			
報告書作成 ①東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力 平成26年度成果報告書 27年3月 ②ミャンマーの木造建築文化 Traditional Wooden Building in Myanmar (日本語、英語併記) 27年3月			
学会報告 ・佐藤桂、朴東熙「アンコール・タネイ遺跡の伽藍配置に見られる特徴について(2)」(日本建築学会大会 26年9月12日、神戸大学)			
論文 ・佐藤桂「タ・ネイ遺跡に見られる建造途中の改変について」『世界建築史論集 中川武先生退任記念論文集(西アジア・西洋・南アジア・カンボジア・ベトナム篇)』中央公論美術出版 27年3月 147-154			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 5213-1

自己点検評価調査

研No.46

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：協力相手国のニーズに応じた支援活動を実施し、その成果に関する情報提供、共有も行った。</p> <p>独創性：カンボジアで試行した SfM は特殊な機材を用いずに 3 次元データを取得できる技術として注目が高まりつつあるが、今回はさらにフリーソフトのみを用いて相当の精度を確保した点で、途上国に相応しい手法の選択肢を与えることとなった。タイやミャンマーでは、日本の伝統技術を活かした漆工芸分野の支援事業を実施している。</p> <p>発展性：アプサラが次年度から本格的に取り組むタネイ遺跡保存整備事業の進展に合わせて、引き続き必要な技術支援を行っていく予定である。タイ・ミャンマーの漆工芸分野における保存、ミャンマーの木造建築研究とともに既存の蓄積がない分野であり、今後多くの新知見を得られることが期待される。</p> <p>効率性：所内の専門人材を中心に実施しており、現地機関との協力、他事業との連携も通じて効率的に事業効果を上げることができた。既存の調査データや機材・設備を有効に活用して調査研究を実施している。</p> <p>継続性：いずれも前年度からの実施内容を発展的に継続しており、現地機関への技術移転等も着実に実施しつつ、新規の調査研究項目を加えてきている。</p> <p>正確性：外部資金事業との連携も図るとともに、計画通りに事業を実施した。</p>						

2. 定量的評価

観点	海外調査	専門家招聘	研究会開催	報告書作成	論文作成
評価	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>海外調査：当初予定した回数を上回る現地派遣を実施した。</p> <p>専門家招聘：ミャンマー人専門家を招聘して情報共有と意見交換を行うことができた。</p> <p>研究会開催：ミャンマー木造建築に関する調査研究を促進する機会として、予定通り研究会を開催した。</p> <p>報告書作成：研究調査や協力事業の内容を取りまとめた報告書を予定通り刊行し、成果の公開と普及を図ることができた。</p> <p>論文作成：カンボジアで実施した調査研究の内容の一部を論文として報告できた。</p>					

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>カンボジアにおいては、現地機関主体による遺跡保存整備を技術面で支援するという基本的考え方のもと、必要な現地作業を実施することができた。</p> <p>タイの間では、継続中の協力事業につき、着実な進捗を図ることができた。</p> <p>ミャンマーについては、懸案の協力協定が先方機関との間で締結され、漆工芸保存分野での調査研究促進が期待されるほか、木造建築研究についても受託事業と連携しながら専門家交流及び関係者間での情報共有を促進し、今後に向けた方向性を示すことができた。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>第3期中期計画の4年目として、カンボジアにおいてはタネイ遺跡保存整備に関する協力事業を引き続き実施し、アプサラ機構への技術移転及び研究交流をさらに促進することができた。また、タイ、ミャンマーにおいては、外部資金事業とも連携しながら文化遺産保存修復協力の成果を着実に挙げるとともに、専門家交流を通じた連携が強化されてきている。中期計画最終年度である次年度は、この流れを発展的に継続するとともに、域内の文化遺産保護状況とここまでの協力事業の成果を国際研究会にて総括する予定である。</p>

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力		
プロジェクト名称	カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ遺跡の建築学的・考古学的・保存科学的調査 (2)-①-ウ・エ)		
【事業概要】 カンボジア・アンコール遺跡群（西トップ遺跡、タネイ遺跡等）において、建築学的・考古学的・保存科学的調査を実施する。			
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山 洋
【スタッフ】 森本 晋(国際遺跡研究室長)、石村 智(国際遺跡研究室主任研究員)、田代亜紀子(国際遺跡研究室アソシエイトフェロー)、佐藤由似(国際遺跡研究室研究補佐員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)			
【主な成果】 (1) 西トップ遺跡に関しては、遺跡の安定化を図るための修復工事に本格的にとりかかり、まず南祠堂の解体修理に着手し、本年後半には再構築を開始した。 (2) 修復工事に伴って発掘調査を適時実施し、本遺跡の基壇構造、基壇構築にかかる祭祀遺構などの発見があった。 (3) 調査の成果を再構築のための基壇強化の手法に反映するとともに、遺跡の築造順位を確定することができた。			
【年度実績概要】 (1) 西トップ遺跡では南祠堂の解体修復を進めており、昨年度中に解体はほぼ終了した。本年度は基壇の下部構造を把握するために発掘調査を行うとともに、基壇再構築のための各種試験を行った。 (2) 調査によって25段の石組みの下にさらに60cmほどの掘り込み地業を行っていることが明らかとなった。またこの掘り込み地業のなかに石列が発見され、その機能に関して発掘所見からの検討を行った。また掘り込み地業の南側の3ヵ所から土器埋納遺構が発見され、層位等の所見から、基壇の構築に伴う地鎮のための埋納物と推定された。 (3) 調査の結果、掘り込み地業の構造は堅緻であり、上部の加重を十分受けられることが判明し、この地業の上に新たな版築を施して再構築を行うことに決定した。また石列や土器埋納遺構の発見は、カンボジアにおける基壇構築技法の新たな方法を確認するとともに、地鎮作法の類例に新たな土器を使用した事例を加えることができた。			
			
基礎地業内の石列		第25段目の再構築	
【実績値】 ・調査回数 4回（基壇周辺で2回、基壇内部で2回の発掘調査） ・論文数 1件（①） ・成果報告数 2件 （アンコール遺跡群国際調整会議技術委員会26年6月4～5日、26年12月4日における報告（口頭発表）） ・公刊図書数 3件 （西トップ遺跡ニューズレターNo.10（26年10月）、No.11（27年2月）の刊行（発行数各1,000部）計2件（②～③） 、西トップ遺跡の調査修復に関する年次報告書 南祠堂解体報告2 27年3月刊行（④））			
【備考】 ①杉山洋・石村智・佐藤由似「西トップ遺跡の調査と修復」『奈良文化財研究所紀要2014』2015.6 ②『西トップ遺跡ニューズレターNo.10』2014.10 ③『西トップ遺跡ニューズレターNo.11』2015.2 ④『西トップ遺跡調査修復中間報告 南祠堂解体編2』2015.3			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 5213-2

自己点検評価調査

研No.47

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：カンボジアの西トップ遺跡はいずれもその保存が国際社会によって切望されており、それに貢献する本事業は適時性にはなっている。 独創性：この事業は当該地では初めての調査修復という、調査と修復を同列に位置付けた新たな修復の形を取っている。その点、多くの修復活動が行われている当該地においても独創的な手法として評価されている。 発展性：現在南祠堂の再構築中であり、その手法は今後予想される北祠堂と中央祠堂の調査修復に、方法論的に発展継承されていく。 効率性：当該地に於ける修復事業の中では、際だって小規模な人員と予算で行っている修復活動である。しかし適切な人員配置と機材配置を実践することによって、最小規模で最大の効果を上げうる調査修復を試みている。 継続性：今後北祠堂と中央祠堂へと調査修復は続いていく計画であり、継続して調査と研究が進む予定である。 正確性：修復に当たっては3D測量等の最新測量手法を用い、各段階での詳細な記録を残している。また修復に当たっては、建築学、地質学など関係諸方面の学識経験者からの指導をいただきながら、正確性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	論文数	成果報告数	公刊図書数		
評定	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：南祠堂周辺で4回の発掘調査を行い、目標値を達成した。 論文数：1編を発表し目標値を達成した 成果報告数：年2回開催の国際会議で経過と成果を報告した。予定通りの報告となった。 公刊図書数：毎年1冊の解体報告書を刊行する。予定通り『南祠堂解体報告2』を上梓した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	西トップ遺跡の調査修復事業は、文化復興を進めるカンボジアへの国際文化協力として、適時性を有するとともに、2015年度まで修復工事を継続する予定であり、発展性・継続性も担保されている。また予算の執行に際しては、最大限の効果を発揮するように配慮して執行を行っており、効率性の上でも配慮した予算執行となっている。 以上、各項目に沿った評価においても、順調にかつ効率的に事業が推移していると判断しB評価とした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度に南祠堂の解体再構築を行うという当初計画に沿った内容となった。中期計画ではこの5年間で南祠堂と北祠堂の解体再構築を行う予定であり、今年度の南祠堂解体再構築を受けて、中期計画最終年度である来年度は、北祠堂の解体再構築を鋭意進め、中期計画の完遂を目指す。以上本年度の当該事業は順調であると判定した。

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力		
プロジェクト名称	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業((2)-①-エ)		
【事業概要】			
西アジア諸国等の文化財の保護・保存修復に関する協力・支援事業の一環として、特に内戦・紛争によって危機にさらされているアフガニスタン及びイラクの文化遺産の調査研究や文化遺産の保護・保存修復事業を通して、技術移転及び人材育成を図り、自国民の手による文化財保護事業の確立を目指し支援する。また、併せて周辺地域（特に中央アジア、インド、コーカサス）の文化遺産の調査研究・保護への協力を実施する。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 安倍雅史（前アソシエイトフェロー）、久米正吾（アソシエイトフェロー）、藤澤明（前アソシエイトフェロー）、山田大樹（アソシエイトフェロー）、増渕麻理耶（アソシエイトフェロー）、山藤正敏（アソシエイトフェロー）、近藤洋（研究補佐員）、間舎裕生（慶応大学非常勤講師・客員研究員）、釘屋奈都子（東京藝術大学大学院専門研究員・客員研究員）、谷口陽子（筑波大学准教授・客員研究員）、邊牟木尚美（金属文化財保存修復家・客員研究員）			
【主な成果】			
(1)アフガニスタン：保存修復専門家の人材育成・技術移転を実施した。前年度活動の報告書の作成・刊行を実施した。 (2)西アジア周辺諸国の文化遺産の調査研究・保護への協力等：タジキスタン、キルギス、イラン、エジプト、アルメニア等において実施した。			
【年度実績概要】			
(1)アフガニスタン			
<ul style="list-style-type: none"> ・『バーミヤーン遺跡保存事業第11次ミッション概報』（日）刊行（備考欄①） ・「バーミヤーン東大仏の「足」と「部分的再建」を考える」開催（日本イコモス国内委員会と共催） ・アフガニスタン国立博物館、情報文化省、考古学研究所より各1名、考古学及び建造物保存修復の専門家を招聘。文化遺産国際協力拠点交流事業 キルギス共和国及び中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業「史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ」と連携して、人材育成を実施：26年7月 			
(2)西アジア周辺諸国における文化遺産の調査研究・保護への協力等			
<ul style="list-style-type: none"> ・タジキスタン：国立古代博物館所蔵のフルブック断片壁画の保存修復及び展示：26年9月～10月（ユーラシア壁画の調査研究と保存修復事業と連携） ・キルギス：共和国科学アカデミーとの文化遺産保護の分野における協力・ワークショップ：26年11月、12月（文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業と連携） ・ユネスコ文化遺産保存信託基金事業による中央アジア文化遺産保護事業に関する報告書作成（備考欄②） ・インド：アジャンター壁画の保存修復に関する報告書の作成、刊行（英）（備考欄③） ・イラン：イラン文化財専門家の招聘、研究会の開催、視察：26年8月（新世紀国際教育交流プロジェクトと連携）イランにおける文化遺産視察および先方関係機関との意見交換：27年1月 ・エジプト：JICA事業「エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト」への協力 ・シリア：シンポジウム「シリア復興と文化遺産」報告書刊行（備考欄④）。パリ・ユネスコ本部でのシリア文化遺産会議への出席、及びシリアの文化遺産に関する情報収集：26年5月 ・アルメニア：アルメニア文化省との合意書締結及びワークショップの実施：26年5月（文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業と連携）、報告書の作成、刊行（英）（備考欄⑤） 			
【実績値】 海外派遣回数：6回、海外派遣者数：21名、招聘者数：7名、ワークショップ回数：3回、論文・発表件数：4件（①）、資料集2件、報告書件数：7件（②～⑥）			
【備考】			
論文・発表 ①『Results of the Archaeological Project at Ak Beshim (Suyab), Kyrgyz Republic from 2011 to 2013 and a Note on the Site's Abandonment』『Intercultural Understanding』4, pp.11-15 26年4月 他3件			
報告書 ②『バーミヤーン遺跡保存事業概報：2013年度（第11次ミッション）』27年2月			
③『NRICP Final Report of the 2011-2013 UNESCO/Japan Funds-in-Trust Project』27年3月			
④『Indo-Japanese Joint Project for the Conservation of Cultural Heritage, Series 4, Indo-Japanese Project for the Conservation of Ajanta Paintings Conservation and Scientific Investigation of the Paintings of Ajanta Caves 2 and 9』27年3月			
⑤『シリア復興と文化遺産』26年5月			
⑥『Conservation and Scientific Investigation of the Archaeological Metal Object at the History Museum of Armenia 2011-2015』27年3月 他2件			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 5214

自己点検評価調査

研No.48

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：紛争・災害・開発等によって危機にさらされている文化遺産（アフガニスタン、シリア等）を保護する活動は緊急かつ不可欠であり、当事国及び海外諸国と協調して取り組むべき国際的課題である。</p> <p>独創性：我が国の人的・技術的・学術的資源及び国際的ネットワークを基盤とし、適切に本事業を実施している。</p> <p>発展性：当事国の専門家の人材育成と技術移転を図ることによって、持続性のある文化遺産保護活動を支援しているのみならず、当事国と国際的な文化遺産専門家間交流の促進を図り、将来的な展開の基礎を構築している。</p> <p>効率性：国内外の他機関との連携や人的・設備的資源を横断的に活用することによって、十分な効率性を図っている。</p> <p>継続性：当事国側からの具体的な要請内容に基づいて人材育成・技術移転事業を展開しており、当事国による持続的な文化遺産保護活動の促進に寄与している。</p> <p>正確性：西アジア地域及びその周辺諸国、あるいは国際会議等に計6回の海外派遣を行い、十全かつ適切に事業を展開している。</p>						

2. 定量的評価

観点	海外派遣回数	海外派遣人数	招聘者数	ワークショップ回数	論文・発表件数	報告書件数
判定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>海外派遣回数：西アジア地域及びその周辺諸国という広範囲の地域を対象とするため7回の海外派遣を実施し、十分に目標を達成した。</p> <p>海外派遣者数：適切かつ多様な専門家を派遣し、文化遺産国際協力活動に貢献した。</p> <p>招聘者数：第3国専門家の招聘等を通じて、当事国の人材育成への貢献のみならず、専門家間の国際的交流の促進にも大きく寄与した。</p> <p>ワークショップ回数：当事国から個々に要請のある分野に配慮して、多様なワークショップを開催した。</p> <p>論文・発表件数：活動成果等については、学会等において積極的な公表を行った。</p> <p>報告書件数：バーミヤーン関連報告書やアジャランター報告書などこれまでの成果について積極的に公開した。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>情勢の安定しないアフガニスタンからは専門家を計3名10日間に渡って招聘し、研修を行い、技術移転を実施することができた。また、バーミヤーン東大仏の再建問題を巡る研究会を開催し、バーミヤーン遺跡の保護に関して国内外にメッセージを発信した。また西アジア周辺諸国では、特に内戦中のシリアの文化遺産保護のためにユネスコを通じて国際的な連携を図り、内戦後を意識した取り組みを引き続き行った。その他、中央アジア・コーカサス地域等では継続的に事業を展開し、当該諸国への技術移転が確実に実行されていると同時に、国際ワークショップ等を通じて専門家間の交流を促進させ、国際ネットワーク形成にも多大に寄与している。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>計画通り実施されており、当該年度計画を十分に達成したことから順調と判断した。また、人材育成、技術移転、調査研究、国際ネットワーク形成等の計画の主要素がバランスよく進展し、西アジア諸国等における文化遺産に係る国際協力の推進が確実に実行されている。なお、アフガニスタンに関しては、治安情勢が厳しいこともあり、人員の派遣が難しいものの、先方の要請に応じて、臨機応変に対応しながら、人材育成・技術移転等の協力を実施している。</p>

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	ユーラシア壁画の調査研究と保存修復 (2)-①-オ		
<p>【事業概要】ユーラシア世界の壁画の技法材料に関する調査研究を行い、適切な保護、保存修復の手法を検討するとともに、壁画の造形表現と歴史的・文化的背景についても調査研究を行う。さらに、他の分野の専門家と学際的に協力、連携し、壁画という文化遺産を総合的に調査研究する。地域的には、ユーラシア地域(含む北アフリカ)を対象とし、その中でもアジア地域の壁画を主な対象とする。また、時代幅については、6～8世紀を基軸におき、紀元前後から13世紀の壁画を主な対象とする。</p>			
【担当部課】	保存修復科学センター・文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健 文化遺産国際協力センター地域環境研究室長 山内和也
<p>【スタッフ】藤澤明(前文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、増淵麻里耶(同アソシエイトフェロー)、小川絢子(同研究補佐員)、釘屋奈都子(東京藝術大学大学院専門研究員・客員研究員)、成田朱美(愛知県立芸術大学非常勤講師・客員研究員)</p>			
<p>【主な成果】</p> <p>(1)タジキスタン：本年度は、フルブック壁画断片の安定化処置を完了し、展示公開が実現できた。また、新たにペンジケント遺跡等出土ソグド壁画断片の一部のドキュメンテーションを実施した。</p> <p>(2)イタリア、ドイツ：ユーラシア壁画の保存修復に着目してヨーロッパ諸国の壁画修復現場を視察し、修復技法や状態に関する調査を行った。</p> <p>(3)壁画研究会：ユーラシア壁画の技法材料研究に関する研究会を開催し、関連分野に携わる専門家間の意見交換、議論の場を提供した。</p> <p>(4)ウズベキスタン：ユーラシア壁画の保存修復に着目し、タシケントの関連機関での視察を行い、修復技法や状態に関する調査を実施した。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1)タジキスタン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・26年9月10日～10月3日、タジキスタン国立古代博物館が所蔵するフルブック遺跡出土イスラーム壁画断片の修復と、展示のためのマウント作業を行った。本ミッションをもって修復作業が完了し展示が可能となったため、国立古代博物館にて展示公開された。 ・27年3月1日～10日、タジキスタン国立新博物館所蔵のペンジケント遺跡出土壁画断片を対象とした写真撮影と調査、及び、フルブック博物館所蔵のフルブック遺跡出土壁画断片を対象とした写真撮影とナンバリングによる整理を実施し、今後の壁画画像復元のための諸知見を得た。 			
		 <p>フルブック出土壁画の保存修復</p>	
<p>(2)イタリア、ドイツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・26年11月26日～12月5日、イタリアローマ中央修復研究所、フィレンツェ貴石製作所及び修復研究所、ポンペイ他、及びドイツ国立博物館アジア美術館等へ、ユーラシア壁画の保存修復の技法と現状に関する視察を行い、各国の修復理念の相違点や現在直面している問題等の知見が得られた。本ミッションに係る報告書を出版した(備考欄①)。 			
		 <p>壁画研究会</p>	
<p>(3)壁画研究会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・26年12月11日、12日に、技法材料研究をテーマに「ユーラシア壁画の調査研究と保存修復に関する研究会」を開催した。周辺分野の専門家を中心に計40名が参加し、顔料編年やユーラシア地域各地に点在する主要な遺跡の壁画研究に関して活発な意見交換が行われた(備考欄②)。 			
<p>(4)ウズベキスタン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・27年2月15日～20日、ウズベキスタンの国立歴史博物館等への視察ミッションを実施し、中央アジア及び中国北西部の壁画に対する修復事例の調査を行った。 			
<p>【実績値】海外派遣回数：4回、海外派遣者数：10名、研究会主催：1件、報告書件数：2件(①②)、発表件数：1件(③)</p>			
<p>【備考】</p> <p>① 『ユーラシア壁画保存修復に関する比較調査報告書』27年3月</p> <p>② 『ユーラシア壁画の調査研究と保存修復に関する研究会報告書』27年3月</p> <p>③ Yamauchi Kazuya, Conservation of the Bamiyan Mural Paintings, Afghanistan. Dunhuang Forum, Dunhuang, China, 26年10月8・9日</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 5215

自己点検評価調査

研No.49

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：壁画の保存修復は、アジア諸国共通の緊急課題であり、本研究は国際的ニーズに応えるものである。 独創性：ユーラシアの壁画を技術・文化・技法の観点から横断的に研究する本プロジェクトは極めて革新的である。 発展性：本年度は、欧州の博物館等に所有されている壁画の調査を実現した。今後も順次調査範囲を広げる予定であることから、本プロジェクトは発展性を有する。 効率性：各ミッションでは、目的に合わせ異なる専門のプロジェクトメンバーを配置し、少人数でも効率よく保存修復作業や調査を実施した。また、その成果は報告書を中心に公表されている。 継続性：タジキスタンに関しては、前年度より引き続き着実に研究成果が蓄積されている。また、新たに開始した他の国々の視察調査も、継続によるデータの蓄積がなされた。 正確性：計4回のミッションを派遣し、十分な成果を挙げた。						

2. 定量的評価

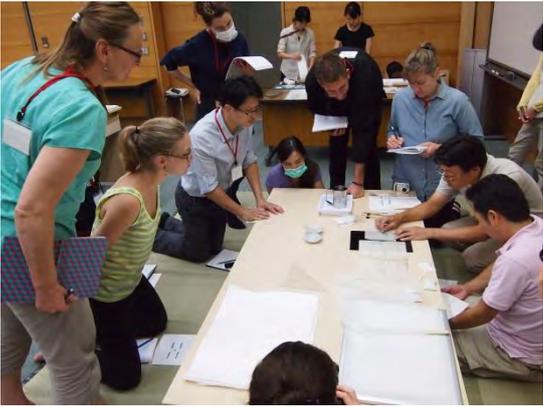
観点	海外派遣回数	海外派遣者数	研究会主催	報告書件数	発表件数
評定	C	B	B	B	B
判定理由 海外派遣回数：現地の治安情勢等の問題が生じたが、派遣予定地を変更するなどして対応し、予定していた5回のうち4回の海外派遣を行った。 海外派遣者数：適切かつ多様な専門家を派遣した。 研究会主催：壁画研究会を実施し、研究者間のネットワークづくりに寄与することができた。 報告書件数：比較調査及び壁画研究会に関する報告書を出版し、成果について積極的に公開した。 発表件数：これまでのユーラシア壁画の調査及び保存修復活動（アフガニスタン）の成果について公開した。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	壁画研究会の主催により、本プロジェクトの成果を研究者に公開するとともに、研究者間の情報、意見交換の場を提供し、ユーラシア壁画の調査研究や保存修復の発展に寄与することができた。また、各国の壁画に対する調査や保存修復に関しても、数年間かけて実施してきた作業を完了するとともに、今後の展開につながる新たな調査も行い、足がかりを作ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本プロジェクトは25年度より開始された。26年度は中期計画2年目として、これまで実施した作業を完了するとともに、事業の新たな展開を見据えた新規調査にも着手することができた。さらに、壁画研究会の主催により、これまで本事業が蓄積してきた成果を公表し、次年度に向けて当該分野の調査・研究の発展の基礎となる専門家間の関係構築を図ることができた。最終年度である27年度には、本年度研究会での議論を踏まえ、ソグド壁画の彩色材料の自然科学的調査を中心に事業を進め、美術史上及び保存修復に必要な一定の知見を取りまとめ公表する予定である。

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	国際研修「紙の保存と修復」(3)－①		
【事業概要】 海外に渡った日本の紙本文化財は多数存在するが、日本の修復技術を持つ保存修復専門家が所蔵館に所属していることは稀である。さらに近年では、和紙を使った修復技術が欧米の文化財修復に応用されるようになってきた。しかし、これらの正しい情報や経験を得る機会ほとんど提供されていない。こうした機会を設けるため日本国内では文化財保存修復研究国際センター（ICCRUM）との共催による国際研修を、メキシコ合衆国では ICCROM 及び INAH（メキシコ国立人類学歴史機関）との共催による国際研修を開催し、紙本文化財の保存と修復について広く海外に技術移転を行う。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 加藤雅人（国際情報研究室長）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、川端冴子（前研究補佐員）、山之上理加（研究補佐員）、嶋原由美（研究補佐員）、木原山奈々（研究補佐員）、北川瑞季（研究補佐員）、早川典子（保存修復科学センター主任研究員）			
【主な成果】 (1) 和紙を使用した紙文化財の保存修復に関する研修を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・国内研修：修復材料の基礎科学、道具の製作、学術的見地からみた文化財に関する講義。卷子修復、和綴じ冊子作製、掛軸・屏風の取り扱い実習。和紙製作現場や文化財修復工房等の見学。 ・メキシコ研修：修復材料、装こう技術、道具に関する講義。和紙やデンプン糊を用いた基礎的な修復実習。 (2) 両研修では日本の文化財修復の技術や知識を海外の修復技術者及び文化財関係者に伝えることができた。 (3) 昨年度の参加者からの意見を踏まえ、研修内容に若干の見直しを加えた。			
【年度実績概要】 (1) ・日本国内研修 タイトル：国際研修「紙の保存と修復 2014」 場所：東京文化財研究所 期間：26年8月25日～9月12日 参加国：ニュージーランド、台湾、デンマーク、イギリス、セルビア、フランス、キューバ、アメリカ、オーストラリア、タイ 内容：〈講義〉加藤雅人「日本の文化財保護と装幀修理技術」「紙の基礎」、早川典子「日本画修復に使われる接着剤について」、宇都宮啓吾「古写経と訓点」、田中重己・宏平「刷毛」。〈実習・その他〉卷子修復、和綴じ本製作、掛軸・屏風取り扱い、所内見学、討論。〈見学など〉岐阜県美濃市（長谷川和紙工房、美濃和紙の里会館及び和紙手漉き実習、美濃史料館、美濃市美濃町伝統的建造物群保存地区）、名古屋市（紙販売店、熱田神宮、名古屋城）、京都市（修復材料・道具店、岡墨光堂（修復工房）） ・メキシコ研修 タイトル：ICCRUM-LATAM プログラムにおける International Course on Paper Conservation in Latin America 場所：INAH 期間：26年11月5日～30日（うち、装幀修理技術に関する研修は11月5日～13日） 参加国：メキシコ、スペイン、キューバ、コロンビア、エクアドル、ブラジル、ペルー、アルゼンチン 内容：日本の伝統的な紙、接着剤、道具についての基本的な講義と和紙を使用した補強や補修、裏打ちの実習を行った。研修の前半は、装幀修理技術に用いる材料、道具、技術をテーマに日本人講師が講義、実習を行った。研修後半では、装幀修理技術の研修経験のある講師らが日本の材料、道具、技術が欧米の文化財修復に実際にどのように活用されているかを紹介し、実習を行った。また、本プログラムの一環として、昨年度より招聘していた INAH の職員に対し、和紙を欧米の文化財修復に応用するための基礎的な研究及び研修を行った。27年3月からも4か月間の予定で同機関から別の職員を招き、同様の研修を行う予定である。			
			実習風景
(2) 討論や参加者へのアンケートを通して、海外の文化財修復現場の情報を収集し彼らが必要としている内容を確認することができた。研修は国内研修、メキシコ研修ともに非常に好評であり今後も同様の内容で継続していく必要があることがわかった。 (3) 昨年度の参加者から質問の多かった内容についてより多く時間を割き、理解を深められるようプログラムを組んだ。国内研修においては道具の製造・取り扱いについての講義を新たに設けた。			
【実績値】 研修会開催数 2 回、国内研修参加数 10 名、メキシコ研修参加数 9 名、国内研修参加者満足度 100%、(参考値) 招聘研究員 2 名			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 5311

自己点検評価調査

研No.50

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評定	A	B	B	B	B	
判定理由 適時性：海外の博物館等、修復家などからの問い合わせが多く要望が高い。参加者は公的機関から選抜するため公共性がある。 独創性：修復技術のみならず材料科学、歴史学などの学術的な講義も含む多角的な紙文化財の保存財修復に関する研修は当研究所独自のものである。さらに本年は伝統的な修復道具製造技術及びその用法も加えたことにより、さらに独創性が増した。 発展性：各国で他の文化財関係者に普及できる人材を参加者として選抜している。すでに過去の参加者による各国での報告会やワークショップ等により情報共有がなされている。また、本プロジェクトの内容は日本の紙文化財のみならず海外の文化財にも応用可能である。 効率性：プログラム構成、旅程を工夫することで、限られた費用及び人員で効率的に事業を完遂した。また研修プログラムにおいても、限られた時間内で最大限の充実した内容を伝えられた。 継続性：参加者から好評を得ている。恒常的に求められている研修であり、今後も継続していく必要がある。						

2. 定量的評価

観点	研修開催数	国内研修参加者数	メキシコ研修参加者数	国内研修参加者満足度		
評定	B	B	B	B		
判定理由 研修開催数、国内研修参加者数、メキシコ研修参加数：全て計画通り完遂した。 国内研修参加者満足度：アンケートを通して全員から「満足した」との回答を得た。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国内研修、メキシコ研修ともに参加者から高評価を得た。 前年度から実施した INAH からの招聘研究員の研修において、研究の効果が得られたため、次年度も引き続き受け入れる予定である。 本プロジェクトにおける研修は恒常的に必要とされているため、次年度も基本的に今年度と同様の研修を行う。ただし、参加者からの意見や近年の修復の動向を踏まえて、海外の文化財への応用に関する内容を加える予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき計画通り遂行した。本年度の成果をもとに、若干の変更を加えつつ中期計画最終年度である次年度も同様の研修を行う予定である。

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	在外日本古美術品保存修復協力事業((3)-①)		
【事業概要】	<p>日本の文化財は欧米を中心に海外でも多く所蔵されている。しかし、これらの保存修復の専門家は海外にほとんどおらず、多くの博物館などで適切な処置に窮している。そこで、海外で所蔵されている掛軸などの紙本絹本文化財及び漆工芸品のうち、本格的な修復が必要な作品を一旦日本に運び修復して返還することを目的とする。また、ワークショップを開催し、保存修復に必要な日本の文化財に対する理解の深化、修復技術の移転を行う。</p>		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】	<p>加藤雅人(国際情報研究室長)、江村知子(主任研究員)、楠京子(アソシエイトフェロー)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、山下好彦(任期付研究員)、川端芽子(前研究補佐員)、山之上理加(研究補佐員)、嶋原由美(研究補佐員)、木原山奈々(研究補佐員)、北川瑞季(研究補佐員)、早川典子(保存修復科学センター主任研究員)、田中淳(副所長)、塩谷純(企画情報部近・現代視覚芸術研究室長)、今城裕香(研究支援推進部管理室企画渉外係員)、深井啓(前アソシエイトフェロー)、鈴木絢香(アソシエイトフェロー)</p>		
【主な成果】	<ul style="list-style-type: none"> 作品修復のため、掛軸1作品を輸入し、詳細な状態調査を開始した。使用されている材料および損傷状況等、修復作業に必要な基本的情報を得ることができた。 漆工芸品1作品の状態調査を行い、得られた情報に基づき修復を行った。 日本美術品を所蔵する海外の美術館博物館において絵画及び漆工芸品の調査を行い、今後の修復候補作品選定の基礎情報を収集することができた。 ベルリンにおいて紙本絹本文化財の保存修復に関するワークショップを、ケルンにおいて漆文化財の保存修復に関するワークショップを開催した。各国の文化財保存修復の専門家の参加があり、日本の文化財に対する理解の深化、修復技術の移転を行うことができた。 絹や色材といった修復に使用する材料の基礎的な研究を行い、学会発表を行った。研究によって明らかになった諸材料の特性を修復作業に反映させることができた。 25年度までに修復を行った作品についての報告書を発行した。 		
【年度実績概要】	<p>[作品修復]</p> <ul style="list-style-type: none"> グルジア国立博物館(グルジア)所蔵 高島北海作 富岳図 絹本着色 掛軸1幅 共同研究のための輸入準備。 ブロッツワフ国立博物館(ポーランド)所蔵 五十嵐道甫作 秋野蒔絵硯箱 1合 調査、修復中。 <p>[作品調査]</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本美術美術館マンガ(ポーランド)にて修復候補作品選定のための悉皆調査及び状態調査を行った(27年1月12日~23日及び2月1日~7日)。 ナバラ県文化財センター(スペイン)にて修復候補作品選定のための状態調査を行った(27年1月25日~30日)。 ビクトリアン&アルバート美術館およびマンチェスター博物館(イギリス)にて修復候補作品選定のための状態調査を行った(27年3月9日~14日)。 <p>[ワークショップ]</p> <ul style="list-style-type: none"> Workshops on Conservation of Japanese Artworks on Paper and Silk、場所 ベルリン国立博物館アジア美術館(ベルリン・ドイツ): (Workshop1) "Basic-Japanese paper and silk cultural properties-", 26年12月3~5日、参加者20名、(Workshop2) "Advanced Restoration of Japanese hanging scroll-", 26年12月8~12日、参加者15名(オブザーバー5名含む) Workshops on the Conservation and Restoration of Urushi (Lacquer ware)、場所 ケルン市博物館東洋美術館(ケルン・ドイツ): (Workshop I) 26年11月15日、参加者11名。(Workshop II) 26年11月18~21日、参加者6名。(Workshop III) 26年11月25~28日、参加者6名。 <p>[研究発表・報告書発行]備考①②③</p>		
【実績値】	修復作品数 2件	ワークショップ開催数 2件	研究発表数 2件(①②) ・報告書発行数 4件(③)
【備考】	<p>① 山田祐子、加藤雅人、楠京子「文化財修復材料として使用する除去可能な色材の検討」文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン(東京都)26年6月7~8日</p> <p>② 山田祐子、加藤雅人「絵画用絹の加工方法と照明角度による見え方の相違について」日本色彩学会第2回大会、清水文化会館マリナート(静岡県静岡市)、26年11月14~15日</p> <p>③ 「在外日本古美術品保存修復協力事業」(27年3月)、「在外日本古美術品保存修復協力事業 山出積迦図」修復報告書(27年3月)、「在外日本古美術品保存修復協力事業 山水図」修復報告書(27年3月)、「在外日本古美術品保存修復協力事業 寒山拾得図」修復報告書(27年3月)、「在外日本古美術品保存修復協力事業 霊照女図」修復報告書(27年3月)、「在外日本古美術品保存修復協力事業 ワークショップ2011」(27年3月)、「在外日本古美術品保存修復協力事業 ワークショップ2012」(27年3月)、「在外日本古美術品保存修復協力事業 ワークショップ2013」(27年3月)</p>		



グルジア国立博物館所蔵 富岳図

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 5312

自己点検評価調査

研No.51

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性
評定	B	B	B	B	B

判定理由

適時性：日本の文化財を所蔵する海外の美術館・博物館では、これらの保存修復の専門家が常駐していないことが多く、適切な処置に窮している場合が多い。そのため作品の調査・修復、修復技術に関する研修双方において海外からの要望が高い。

独創性：海外所蔵作品の修復は、既存の材料・技術だけでは対応できないことも多いため、修復材料や修復技術に関する当研究所の知見、新規の研究成果を生かすことができる。

発展性：研修で習得できる修復材料に関する知識や修復技術は、世界各地域の文化財修復にも応用することができる。

効率性：研修生の他に聴講生を募集し参加者を増やすことで、限られた予算及び時間のなかで成果をあげることができた。

継続性：1991年に始まった過去の修復実績が国内外で広く知られ、作品修復に関する海外の美術館・博物館の要望が高い。特に調査依頼や修復協力の依頼が多く継続に値する。
2007年に始まった研修にも、毎年60名を超える応募があり、関係者、参加者の評価が高く継続に値する。また、過去の研修参加者の同僚や後輩の参加も見られ、技術移転に貢献している。

2. 定量的評価

観点	修復作品数	ワークショップ開催数	研究発表数	報告書発行数
評定	B	B	B	B

判定理由

修復作品数：目標としていた修復作品数を満たし、予定していた修復工程を達成することができた。

ワークショップ開催数：目標としていた開催数どおりに遂行することができた。

研究発表数：修復に使用する材料の研究成果を発表することで、本事業における修復作品以外の作品への適用の可能性を周知することができた。

報告書発行数：海外所蔵の日本美術品修復に際して実施した詳細な調査結果や修復技術・材料について国内外に広く知らせることができた。

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	海外で日本美術品を所蔵する複数の博物館美術館から、作品調査や修復を希望する問い合わせや修復に関する技術的な相談が定期的であり、本事業が成果を上げていることがわかる。また、日本の修復技術に関する技術移転を目的とした研修に関しても、定員の6倍を上回る募集があり、継続が望まれていることがわかる。次年度も、修復事業や研修の内容の充実を図るために、修復技術及び材料に関する国内外での調査研究を精力的に行い修復・研修に反映させていく。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予算削減のため、規模縮小をしたが初期の目標を達成している。修復事業、ワークショップ事業ともに継続の要望が高く、また他機関からの新規のワークショップ開催の要望も聞かれることから、順調に成果を上げている。中期計画最終年度である次年度も継続して行う予定である。

業務実績書

研No.52

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際業務の推進		
プロジェクト名称	ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力 ((3)-②)		
【事業概要】	ユネスコアジア文化センターが企画する研修事業に協力する。本年度は集団研修「遺跡・遺物の調査と保存」(アジア太平洋諸国から16名)と個人研修「遺跡の調査・保存と管理活用」(バヌアツから2名)・「写真による文化遺産の記録とデジタルデータの管理・活用」(ブータンから3名)、「文化遺産ワークショップ」(バングラデシュで実施)の各事業に関して、研修の講師派遣、現地指導等、全面的に協力する。		
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	国際遺跡研究室室長 森本 晋
【スタッフ】	石村 智(企画調整部主任研究員)、田代亜紀子(国際遺跡研究室アソシエイトフェロー)		
【主な成果】	<p>(1) 集団研修「遺跡・遺物の調査と保存」ではアジア太平洋諸国16カ国、16名の研修生に対して、考古学的遺跡・遺物の調査と保存に関する研修を行った。</p> <p>(2) 個人研修「遺跡の調査・保存と管理活用」ではバヌアツ人専門家2名に対して、遺跡の調査・保存と管理活用に関する研修を行った。</p> <p>(3) 個人研修「写真による文化遺産の記録とデジタルデータの管理・活用」ではブータン人専門家3名に対して、写真による文化遺産の記録とデジタルデータの管理・活用に関する研修を行った。</p> <p>(4) バングラデシュで実施された「文化遺産ワークショップ」では当研究所の研究員1名を講師として派遣し、バングラデシュ人専門家15名に対して考古学的遺物の分析に関する研修を行った。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 集団研修「遺跡・遺物の調査と保存」(26年9月2日～10月3日、アジア太平洋諸国から16名参加)の実施に協力し、講義「遺物の保存科学Ⅰ(概説)」・実習「遺物の保存科学Ⅱ(脆弱遺物の取り上げ)」・実習「遺物の記録法(写真)」・臨地研修「遺跡の整備活用の実例：平城宮跡」・実習「デジタルデータ管理の実例」・講義「3Dスキャナーによる文化遺産の記録法」の講座(計6件)を担当した。</p> <p>(2) 個人研修「遺跡の調査・保存と管理活用」(26年7月31日～8月21日、バヌアツから2名参加)の実施に協力し、臨地研修「遺跡の記録と調査法」・臨地研修「遺物の整理法と保管・管理」・講義「文化的景観の保全とその概要」・講義「文化遺産マネジメントの実例」・実習「写真データ管理Ⅰ」・実習「写真データ管理Ⅱ」の講座(計6件)を担当した。</p> <p>(3) 個人研修「写真による文化遺産の記録とデジタルデータの管理・活用」(26年11月11日～12月5日、ブータンから3名参加)の実施に協力し、講義「文化財写真概論」・講義「デジタル写真記録概論」・講義「文化財建造物写真撮影概論」・講義「写真処理概論」・講義「デジタル写真処理概論」・講義「写真の仕上げと誌面構成」・講義「写真の評価と判定」・講義「文化遺産の写真記録とデータ管理システム」・実習「デジタル写真撮影(屋外)」・実習「室内・屋外でのデジタル写真撮影Ⅰ」・実習「室内・屋外でのデジタル写真撮影Ⅱ」・実習「レーザースキャン・SfMを使用した文化遺産の記録」・実習「デジタル写真処理」の講座(計13件)を担当した。</p> <p>(4) 「文化遺産ワークショップ」(バングラデシュで開催、27年1月11日～16日)の実施に協力し、当研究所の研究員1名を講師として派遣し、参加者15名に対して考古学的遺物の分析に関する6日間の研修を行った。</p>		
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>		
	<p>左：個人研修(バヌアツ)における文化遺産マネジメントに関する講義 右：個人研修(ブータン)におけるスタジオでの写真撮影実習</p>		
【実績値】	<p>研修件数 4件(うち集団研修1件、個人研修2件、ワークショップ1件) 講師派遣数 1名(バングラデシュ) 担当講座数 27件(うち集団研修6件、個人研修19件)</p>		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.52

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：近年諸外国からの文化財保存技術についての研修依頼が増加する傾向にあり、ユネスコアジア文化センターや国際協力機構等からの研修協力依頼に対して、適時迅速に対応したと考える。 独創性：当研究所が担当した研修の講座はいずれも、国内外においても当研究所が独自に優れた技術を開発してきた内容のものであり、独創性ある研修を提供できたと考える。 発展性：本年度は前年度までの講座の内容を再検討して改良を加え、特に近年要望の高い「文化財写真」に特化した研修を実施することができたと考える。 効率性：ユネスコアジア文化センターが実施する研修への協力については、研修の企画段階から先方と綿密な情報交換を行い、研修内容の効率化を行った。 継続性：当研究所は、ユネスコアジア文化センター奈良事務所の発足以来、文化遺産の保存、特に埋蔵文化財と建造物に関する保存の研修への協力を続けており、継続性のある事業と考えている。 正確性：当研究所が提供する研修内容はいずれも国内外の水準に照らしても高度な内容を有しており、世界のどこに出しても恥ずかしくない水準のものであると考えている。						

2. 定量的評価

観点	研修件数	講師派遣数	開講講座数		
評定	B	B	A		
判定理由 研修件数：集団研修1件、個人研修2件という当初の目標を達成したのに加え、ワークショップ1件にも講師を派遣したので、十分な達成度と考える。 講師派遣数：現地で研修・指導を行うのに十分な能力のある研究員を派遣したので、十分に成果を達成できたと考える。 開講講座数：集団研修6件（全22講座）、個人研修（バヌアツ）6件（全15講座）、個人研修（ブータン）15件（全27講座）に加え、ワークショップへの講師派遣1名（講師全3名）と、いずれの研修においても多くの部分を当研究所が担当しており、特に個人研修（ブータン）については主要な講座の大部分を当研究所が担当し、特に優れた成果を達成したと考える。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業はその適時性・独創性・発展性・効率性・継続性・正確性のいずれの観点においても十分な成果を達成しており、さらに事業内容においても研修回数・講師派遣数・開講講座数において十分以上の成果を達成した。次年度計画については、本年度の内容を踏まえ、研修実施機関ともよく協議しつつ、研修の内容の向上に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業はその適時性・独創性・発展性・効率性・継続性・正確性のいずれの観点においても十分な成果を達成しており、さらに事業内容においても研修回数・講師派遣数・開講講座数において十分以上の成果を達成しており、中期計画における予定通りの成果を達成していることから、順調に実施されていると考える。今後は、本年度までの実施内容を踏まえ、中期計画の目標を達成するのに必要な課題がまだ残されていないかを十分に検討しながら、その目標達成に努めることとしたい。

業務実績書

研No.53

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究の推進（4）		
【事業概要】アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護のための調査研究拠点として、同地域における危機に瀕した無形文化遺産の保護に向けた現地調査やワークショップを実施する。また、無形文化遺産保護の分野の研究データ及び同地域の研究機関や研究者についての総合的な情報収集を行うための国際会議を開催し、その成果についてデータベースを構築し、共有する。さらに国際会議への出席やユネスコとの連携を通じて、無形文化遺産保護を中心とした国際的動向の情報収集を図る。			
【担当部課】	—	【プロジェクト責任者】	所長 荒田明夫
【スタッフ】大貫美佐子(副所長(兼)研究担当室長)、児玉茂昭(アソシエイトフェロー)、野嶋洋子(アソシエイトフェロー)、サンドロヴィッチ・ティムール(アソシエイトフェロー)、パーウェルス・ルーベン(前アソシエイトフェロー)、辻修次(前アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 文化庁受託事業「平成26年度無形文化遺産保護パートナーシッププログラム」及び文部科学省補助金「平成26年度政府開発援助ユネスコ活動費補助金」による事業を通じ、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護の調査研究に関する情報収集と研究促進にむけたデータベース構築及び国際専門家会合、消滅の危機に瀕する無形文化遺産保護の現状・方策に関する現地での実態調査やワークショップを実施した。			
【年度実績概要】			
<p>(1) 無形文化遺産保護に関する国際的調査研究動向についての情報収集とアジア太平洋地域における研究促進を目的として、下記の3事業を実施した。</p> <p>① 国際専門家会合を実施した(マレーシア・イスラム美術館 27年1月26～27日)。(受託)</p> <p>② 昨年度に引き続き関連情報を収集し、データベースをIRCIウェブサイトにて公開した。(受託)</p> <p>③ 無形文化遺産関連の国際会議に出席した。(受託)</p> <p>(2) アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究として、下記の3事業を実施した。</p> <p>① 東南アジアにおける無形文化遺産保護に関する法制度研究：カンボジア・ラオス・ミャンマー・マレーシア・フィリピン・シンガポール・タイ・ベトナム・東ティモールの行政官・専門家を対象に、無形文化遺産保護の現状に関する事前アンケート調査を実施した上で、ワークショップを開催した(九州大学 26年12月19～20日)。(補助金)</p> <p>② 紛争後の国家における危機に瀕する伝統的手工芸の研究(スリランカ)：生活再建手段としての伝統的手工芸の保護を進めるため、昨年度現地調査の成果をもとにスリランカ政府関係者等へのヒアリングを実施した。(補助金)</p> <p>③ ベトナム・ドンホー版画を事例とする無形文化遺産のための保護措置の研究：Vietnam Institute of Culture and Arts Studies (VICAS)との共催により、ハノイ及びバクニン省ドンホー村において住民参加のワークショップを実施した(27年1月27～28日)。(補助金)</p> <p>(3) 我が国の知見を活用した無形文化遺産保護の充実のため、下記の2事業を実施した。</p> <p>① コミュニティ主導の無形文化遺産保護活動のツールとしてのドキュメンテーション：昨年度に引き続き、コミュニティ主体の記録作成推進を目的とするワークショップを開催した(東京国立博物館ほか27年3月16～18日)。(受託)</p> <p>② 上記(2)③で実施したワークショップに版画や工芸に関する日本人専門家を講師として派遣した。(補助金)</p>			
 <p>スリランカ伝統産業大臣との会合</p>			
受託事業の詳細は処理番号 8057 を参照。			
【実績値】			
実施事業件数 8件			
招聘数(海外研究者招聘・受け入れ実績) 延べ35名(用務先が海外の場合を含む。国内研究者の海外派遣延べ9名を含む。)			
海外派遣数 延べ22名			
刊行物 2件(①～②)			
(参考値)			
ウェブサイトアクセス件数 6200件(26年4月1日～27年3月31日)			
データベースアクセス件数 1767件(26年9月25日開設～27年3月31日)			
【備考】			
刊行物			
① “Towards Safeguarding Endangered Traditional Crafts in Post-Conflict Areas of Sri Lanka”			
② IRCI リーフレット(日本語1,000部・英語700部・ベトナム語100部)(英語改訂版200部)			

【書式B】
(様式2)

施設名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター

処理番号 5411

自己点検評価調査

研No.53

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：無形文化遺産とその保護への関心は年々高まっており、特に地域的紛争や途上国の多いアジア太平洋地域においては喫緊の課題である。IRCI では消滅の危機に瀕した無形文化遺産の保護に向けた現地調査、専門家会合を通じて、この課題に取り組むことができた。</p> <p>独創性：無形文化遺産は研究領域として新しく、研究者・専門機関間の国際的ネットワーク形成と連携強化が求められる。国際専門家会合は、アジア太平洋地域における研究者間交流のプラットフォームとして、調査研究・保護活動の活性化に貢献することを目指している。</p> <p>発展性：着実に情報収集・調査を進めており、次段階への基盤形成ができた。危機遺産関連の調査は、それぞれ異なる社会政治的状況下での保護事例研究であり、その成果は他地域における危機遺産保護にも活用できるものである。</p> <p>効率性：国内外の機関・国内外の外部研究者・機関と連携して活動することにより、限られた人員のなか、効率的に事業を推進することができた。</p> <p>継続性：今年度事業は昨年度より継続しており、当事国との関係も強化され、現地連携機関と十分な調整のもと活動できる体制となった。次年度の事業継続についても既に運営理事会の承認を得ている。ただし予算については毎年度申請が必要であるため、継続的に予算が獲得できるよう務める。</p> <p>正確性：RBM（結果重視のマネジメント）を取り入れ半年毎の経過報告を行うことにより計画通りに事業を実施し、所期の目標を達成することができた。</p>						

2. 定量的評価

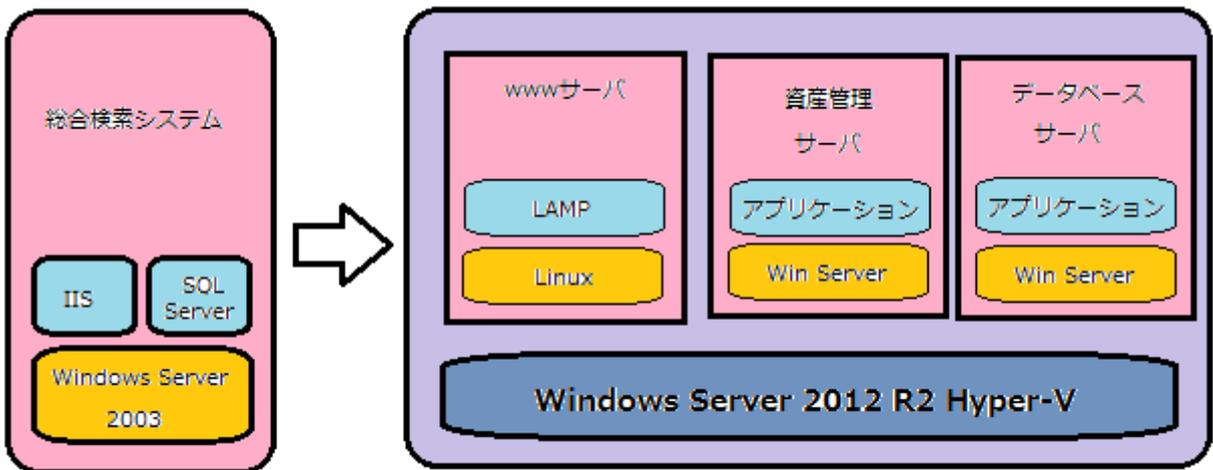
観点	実施事業件数	招聘数	海外派遣数	刊行物		
評価	B	B	B	B		
<p>判定理由</p> <p>実施事業件数：外部機関・研究者との連携により効率的に事業を遂行することにより、計画通り実施することができた。</p> <p>招聘数：IRCI 及び連携機関のネットワークを活用することにより、計画以上の研究者・専門家を招聘することができた。</p> <p>海外派遣数：効果的・効率的に事業を実施するために、スタッフのみでなく外部研究者や協力機関に調査研究を依頼することで、予定通り事業を遂行することができた。</p> <p>刊行物：計画通り、出版を行うことができた。</p>						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施できた。危機遺産関連の調査(スリランカ、ベトナム、メコン圏)では、スタッフ・連携研究者を派遣し調査・ワークショップ等を実施することにより所期の目標を達成するとともに、現地政府・連携機関等との調整を行うことにより次年度以降の活動案を立てることができた。専門家会合においても、次年度会合の開催テーマ・方針等について連携機関・研究者等と議論を行うことができた。本年度事業の成果を踏まえ、次年度事業の改善と一層の充実を図っていく。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度の主要な事業は、第2回IRCI 運営理事会で承認を受け25年度より多年度事業として継続的に実施しているものであり、中期計画の第4年度として成果の蓄積が進んでいる。危機遺産関連の調査では、当事国とより緊密な関係を構築した上で具体的事例の保護に取り組むことができ、無形文化遺産保護のための国際協力が着実に進行している。国際的研究動向の情報収集、専門家会合、ワークショップにおいては、多地域からの新規参加者・連携機関の増加がみられ、国際的な連携体制が強化されている。中期計画最終年度となる次年度は、これまでの成果を踏まえ事業の一層の充実を図り、成果を公表する予定である。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備((1)-①)		
【事業概要】文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図り、システムの面から文化財に関する専門的アーカイブの充実、データベースの充実を支援する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】 田中淳（副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務））、山梨絵美子（副部長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）、高橋佑太（研究補佐員） 広報委員（情報システム部会）：川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、各部門情報システム部会員：高砂健介（前研究支援推進部管理室長）、平出秀文（研究支援推進部管理室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、飯島満（無形文化遺産部長）、吉田直人（保存修復科学センター主任研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・保守期限切れを迎えるネットワーク機器の更新を実施し、無線 LAN のアクセスポイントを追加した。また、仮想サーバを導入した。 ・アクセスポイントについては接続状況を再調査し、設置が必要な場所に追加した。また、WordPress による総合検索システムの導入に伴い不要となったサーバを活用して仮想サーバ化を行い、物理的には 1 台のサーバを複数のサーバとして利用することとした。 ・費用対効果の面で効果的にウェブサイトの運用を行うことができたため、更新が必要な機器を前倒しで更新することができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・総合検索システムを WordPress 化し外部公開用サーバでの運用を始めたため不要となった従来の資料検索システムサーバは、更新から 2 年程度しか経過しておらず利用が可能だったため、仮想サーバ化し複数のサーバとして利用することとした。 ・仮想サーバの導入で物理的に 1 台のサーバを複数のサーバとして運用できるようになったため、ウィルス駆除のためのセキュリティソフトの更新状況や Windows Update の状況を監視し、セキュリティソフトに関してはリモートでの更新が行えるような管理サーバを導入することができた。 			
			
<p>仮想サーバ化により、1つの筐体で3サーバの機能を実現</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・機器の更新、また、セキュリティソフトや Windows Update の更新状況の監視及びセキュリティソフトの更新が可能な管理サーバの導入によって、ネットワークの安定運用により、ウェブサイトによる情報発信のみならず、ネットワークを利用する全ての業務を支障なく行うことができるようになった。 ・プロキシサーバのログ保管期間を 1 年に延長した。 			
【実績値】			
ネットワーク機器更新 1回			
仮想サーバ構築 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6111

自己点検評価調書

研No.54

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：適切な時期に機器及びシステムを更新することができた。 独創性：仮想サーバの導入により、費用対効果を高めるとともに、そのひとつを管理サーバとすることでネットワーク運用の安定性を高めた。 継続性：継続的にネットワークシステムを運用することができた。						

2. 定量的評価

観点	ネットワーク機器更新	仮想サーバ構築				
評定	B	B				
判定理由 ネットワーク機器更新：当初の計画になかったものの、節約により老朽化した機器を更新することができたため。 仮想サーバ構築：従来の複数のサーバ機能を1台の仮想サーバで行えるようにし、セキュリティ管理等の効率化を高めた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	情報システムの整備については、老朽化したネットワーク機器の更新及び仮想サーバの導入によりセキュリティの強化及び高速化、費用の縮減が図られた結果、適時性、効率性、継続性が向上したと判断した。次年度以降も、ネットワークの安定運用と効率化、利便性の向上を図り、蓄積した文化財調査研究情報の公開のための環境を整備する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当所の業務支援に資するネットワーク環境を保ち、中期計画上、順調に作業を行うことが出来た。情報システムの整備については、セキュリティの強化及び接続速度の高速化を図るに当たり、利便性を保ったうえでより効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新をさらに進めた。次年度以降も現有のスタッフの能力を最大限に活用し、ユーザの意見を適宜取り入れて費用対効果の高い機器の導入とその安定的な運用に努め、費用の削減を図る。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化((1)－①)		
【事業概要】	<p>無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。第1期中期計画(17年度終了)の事業案策定後の購入・寄贈にかかるアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。</p>		
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】	<p>高桑いづみ(無形文化財研究室長)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、菊池理予(研究員)、今石みぎわ(研究員)、佐野真規(アソシエイトフェロー)、橋本かおる(研究補佐員)</p>		
【主な成果】	<p>映像資料に関しては、前年度に引き続き、旧芸能部の年代に作成された映像資料の媒体変換を実施した。アナログ音声資料に関しては、オープンリールとカセットテープについて、収録内容の確認を含めた整理を行った。無形文化遺産部所蔵資料の内、稀少性の高い刊行年代が昭和30年代に溯る紙媒体資料のデジタル化に向けて所蔵調査を行った。</p>		
【年度実績概要】	<p>映像資料については、16ミリ(カラー)3本、『竹富島の種子取り』第1部・第2部と『雪まつり』の媒体変換を行い、HDCAM3本を作成した。 音声記録のデジタル化は、前年度に引き続き、1960年代に放送された邦楽関連のテープ録音を中心に収録内容を確認し、インデックス付与済みCDを21枚作成した。 カセットテープに関しては、旧芸能部所蔵テープの内、寺事の現地録音を中心に内容確認を行った。 無形文化遺産関連の映像資料205枚(作成DVD82枚・作成BD123枚)を所蔵資料として新たに登録した。 紙媒体資料に関しては、電子化を予定している『歌舞伎新聞』と『月刊 前進座』の2紙について調査し、前者は創刊号(昭和28年12月)から253号(昭和49年12月)、後者は123号(昭和35年1月)から393号(昭和57年10月)の所蔵を確認した。ともに所蔵機関は限定されており、かつ昭和30年代から40年代にかけては欠号なく揃っていること自体が極めて稀であることが判明した。</p>		
			
<p>【デジタル化した昭和49年撮影の記録映画『竹富島の種子取り』より】</p>			
【実績値】	<p>HDCAM(映像資料)3本 CD(音声資料)21枚 DVD・BD(映像資料)205枚</p>		
【備考】	<p> </p>		

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6112

自己点検評価調査

研No.55

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	発展性		
評定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：経年劣化が深刻化する前に、稀少な紙媒体資料の電子化に向けて、調査を完了することができた。 独創性：他の公的機関では所蔵されていない資料の恒久的な利用に向け、処理を行っている。 継続性：アナログ資料の継続的な媒体変換とともに、資料整理も着実に進めている。 発展性：将来の資料公開に備え、資料の蓄積に努めている。						

2. 定量的評価

観点	HDCAM (映像資料)	CD (音声資料)	DVD・BD (映像資料)			
評定	B	B	B			
判定理由 CD（音声資料）・DVD等（映像資料）・HDCAM（映像資料）：これまで集積してきたものを補完するような資料の整理が進められており、より充実した無形文化遺産アーカイブを構築することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価、定量的評価ともに、これまでの水準を維持していることに加え、昭和30年代から40年代に刊行された稀少な紙媒体資料についてもデジタル化作業に着手することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	事業は、従来水準を維持している。また、将来的なデータベース公開へ向け、資料作成を着実に進めている。アナログテープ（オープンテープ）のデジタル化に関しては、23年度（中期計画初年度）に予定していた分量をほぼ完了する予定である。なお、中期計画策定後に寄贈されたアナログテープについては、次期中期計画での電子化を計画している。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実(①-①)

【事業概要】
文化財情報の特性について具体的な資料の研究に基づいて検討を加え、それに最も適した電子化・情報化の方法を探り実際のデータベース入力を進める。

【担当部課】 企画調整部 【プロジェクト責任者】 企画調整部長 杉山洋

【スタッフ】
森本晋（文化財情報研究室長）

【主な成果】
GIS（地理情報システム）を活用した文化財情報の取得・分析に関する研究を行うとともに、成果を学会で発表している。文化財情報の電子化に関する研究を基に開発・改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても、記載方法の標準化を進めながらデータの充実を図った。

【年度実績概要】

- 文化財情報電子化の研究として報告書に関するデータベースの問題を扱い、成果を26年10月21日に「太平洋近隣友好協会大会」(PNC)で発表した。GISの技術を活用した考古情報の分析に関する調査研究を行い、成果を26年11月8日に地理情報システム学会で発表した。資料調査として関連学会の中でも重要な「考古学におけるコンピューターの応用と数量的方法」(CAA)に26年4月21日から25日に参加した。
- 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像、考古関連雑誌論文情報補充のデータベースについてデータの入力・更新を行うとともに、新規に考古関連雑誌論文情報補充データベースを一般公開した。



考古関連雑誌論文情報補充データベース

【実績値】
研究発表件数 2件 (①~②)
(参考値)
データベース件数 26年末 ただし () 内は平成25年度末の値
全文 213,667 (213,535)、木簡 159,834 (151,121)、抄録 84,562 (78,725)、写真 542,402 (448,922)、遺跡 479,239 (478,763)、航空写真 1,374,612 (1,353,481)、図面画像 172,123 (97,265)、考古関連雑誌論文情報補充 71,891 (36,428)

【備考】
研究会発表
①Susumu MORIMOTO, Total Informatization of Archaeological Excavation Reports in Japan (ポスター), PNC2014, 2014.10.21
②村尾吉章・碓井照子・森本晋・清水啓治・藤本悠・清野陽一・玉置三紀夫「遺構情報モデルに基づいた不確かな時間属性の適用」『日本地理情報システム学会第23回研究発表大会予稿集』2014.11.7

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.56

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性: データ入力にあたっては、刊行後間もない発掘調査報告書の記述も参照しており、十分に成果が認められた。</p> <p>独創性: 当研究所独自のデータベースを開発・整備して研究に資するとともに、公開用データベースを充実させており、独創性は十分に成果が認められた。</p> <p>発展性: 新規のデータベースを開発し関連する調査研究も進めており、十分に成果が認められた。</p> <p>効率性: データベースの種類が増加しても入力の効率化で対応しており、十分に成果が認められた。</p> <p>継続性: 各種データベースを最新情報に更新しながら、広く継続的に公開提供しており、十分に成果が認められた。</p> <p>正確性: データ入力に際し、典拠資料や関連文献の調査を行っており、正確性を十分に担保できた。</p>						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数					
判定	B					
<p>判定理由</p> <p>研究発表件数: 継続的な研究の成果を年間1件ないし2件、早期に公表するという予定を満たしており、目標を達成している。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、適時性・独創性・発展性・効率性・継続性・正確性のいずれの観点においても、十分な水準を維持しており、総合的にBと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各データベースにおいて、着実にデータの充実が進んでおり、新規データベースの公開も行うことができた。全体として当初計画通りに進捗し所期の目標を達成しているためBと判定した。

業務実績書

研No.57

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	被災文化財関連情報に関するデータの蓄積・分析及び情報発信(①-②)		
【事業概要】被災文化財関連情報に関するデータベースの充実とアーカイブ機能の更新と拡張を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
<p>【スタッフ】</p> <p>田中淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、福永八朗(アソシエイトフェロー)、小山田智寛(研究補佐員)</p> <p>文化財レスキュー旧事務局・日報担当:</p> <p>皿井舞(主任研究員)、菊池理予(無形文化遺産部研究員)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、今石みぎわ(研究員)、岡田健(保存修復科学センター長)、森井順之(主任研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター主任研究員)</p>			
<p>【主な成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化庁委託事業「文化財(美術工芸品)等緊急保全活動・現況調査事業」と連携し、文化財レスキュー事業によって蓄積された情報の分析と発信について検討を行った。 文化財レスキュー事業実施時に撮影された画像について、そのデータベース化と共有のためのシステムを構築し、所内で公開した。また、シンポジウムや報告書などの調査研究成果をウェブで発信した。 従来は困難であった画像の検索を、テキストと関連させることで可能とし、またウェブデータベース化することで遠隔地との共有を可能とした。また、文化財レスキュー事業に関する情報を共有することができた。 			
<p>【年度実績概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化財レスキュー事業実施時に撮影された画像のデータベース化について、所内にて随時検討を行った。 23年度に撮影された画像について、記録されているExifデータ(撮影時に自動的に画像自体に添付されているデータ)、及びExifデータに記録された撮影日時を用いて作業日報のIDと連携させ、ファイル名とあわせてExcelデータを作成した。このデータと画像データをWordPressによりデータベース化し、所内ウェブサイトで共有した。また、関係者に限定した情報共有のための仕組みについて検討し、ユーザIDとパスワードの設定により、情報公開の可否や公開レベルの設定が可能であることを確認した。 			
			
<p>Wordpress によるデータベースの画面の例</p>			
<ul style="list-style-type: none"> 文化庁委託事業「文化財(美術工芸品)等緊急保全活動・現況調査事業」の一環として26年12月4日に開催した研究会「これからの文化財防災-災害への備え」の記録及び当該事業の報告書をウェブサイトで公開した。 画像データベースの所内ウェブサイトでの公開と、公開レベルの設定の確認により、遠隔地の関係者との、また関係者に限定した情報共有が可能であることがわかった。 シンポジウムの記録及び報告書の公開により、文化財レスキュー事業に関する情報を広く発信することができた。 			
<p>【実績値】</p> <ul style="list-style-type: none"> データベース作成件数 1件 			
<p>【備考】</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6121

自己点検評価調査

研No.57

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：23年の東北地方太平洋沖地震の発生から4年が経過したに過ぎず、東海・東南海地震の発生が近いとされている現在、文化財レスキュー事業に関する情報を整理・公開することは時宜にかなっている。 独創性：テキストデータと異なり整理が困難な画像データについて、多数の画像から一括でExifデータをデータ化し、また作業日報と関連付けてデータベース化した。 発展性：作業日報と関連付けた画像データベースの構築により、文化財レスキュー活動に関する各種の分析に活用できるようになった。 効率性：データの手入力を極力減らし、Exifデータを一括で書きだすようにして効率化を図った。また、使用するソフトウェアは別途購入するのではなく、既存の汎用のソフトウェアや無料のものを用い、また外注ではなく内製とすることで、人件費及び物件費の別途の支出はほとんどなかった。 継続性：画像インデックス等の入力作業及びデータ分析を継続して実施した。 正確性：効率性のところでも触れたように、手作業でなくソフトウェアの機能により一括で必要な情報を得ることで、誤入力の発生を減らした。また、複数の人間が校正を行った。						

2. 定量的評価

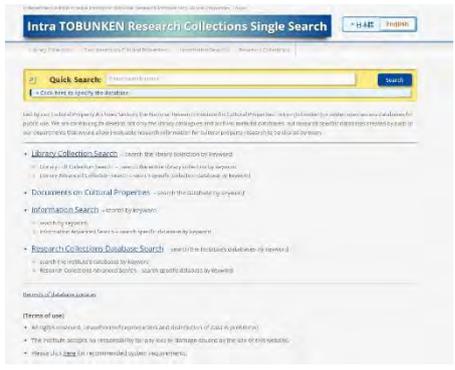
観点	データベース 作成件数					
評定	B					
判定理由 データベース作成件数：情報共有のための画像データベースを1件作成し、年度目標を達成することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的、定量的評価いずれについても初期の目標を達成していると考えた。次年度以降についても引き続き、文化財レスキュー事業で蓄積した情報を中心とした情報の分析と関係者間での共有及び発信を継続する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財レスキュー事業に関する情報をまとめ、関係者間での共有のための仕組みを構築するとともに、成果を公開することができた。次年度も資料の蓄積や共有、発信を行い、文化財レスキュー事業に関する分析を行うことで、今後の文化財防災に役立つ資料を提供していく。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	専門的アーカイブの充実（資料閲覧室運営）（1）-③）		
【事業概要】			
文化財関連資料の公開機関としての周知の広がりをつまみ、①受け入れた文化財関連の図書などの文字資料や、作成したアナログ・デジタル画像資料の登録管理、②閲覧室で一般利用者を対象とした週3回（月・水・金）の所蔵資料の提供、③データベースの作成、検索システムの構築並びにウェブサイト上での諸情報の提供を通常業務とするとともに、提供する資料や情報の質に主眼を置き、より専門性の高い文化財関連資料や情報の収集・構築・公開の場として専門的アーカイブの充実を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務） 田中淳
【スタッフ】			
山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、城野誠治（専門職員）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、飯島満（無形文化遺産部長）、佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）、吉田千鶴子（東京藝術大学非常勤講師・客員研究員）			
【主な成果】			
資料閲覧室の運営、並びに資料の登録と情報のデータベース化、またそれを利用した外部公開用 SQL データの更新・運用を行った。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・資料閲覧室を公開運営した（合計 139 日、利用者数のべ 1015 人）。 ・資料の登録と情報のデータベース化を継続した。 ・引き続き関係各部署の協力を得て貴重書のデジタル化を進めた。 ・情報を外部公開データベースに登録し、基礎情報を一般に提供した。 ・セインズベリー日本藝術研究所との「日本芸術研究の基盤形成のための事業」を継続し、VPN 回線を通じて東京文化研究所刊行物アーカイブシステムに、セインズベリー日本藝術研究所が収集した欧米圏の日本美術関連情報の入力を開始した。 ・26 年 10 月には皿井主任研究員がセインズベリー日本藝術研究所に赴き、システム及びデータ収集に関する協議を行い、あわせてセインズベリー日本藝術研究所の要請により、平安時代彫刻史に関する講演を行った。 ・地方公共団体が刊行する文化財関連報告書のうち、東北地方及び関東地方の情報収集を終えた。 ・田中副所長及び橘川アソシエイトフェローが実行委員として、JAL プロジェクト（委員長：加茂川幸夫東京国立近代美術館長）に参加し、招聘者の事前ヒアリング・研修における各種ガイダンス及び随行など、海外の美術資料専門家との交流・情報交換を行った。 ・前年度運用を開始した「文化財関係文献データベース（統合試行版）」に情報を追加し、東京文化財研究所定期刊行物のうち『保存科学』『芸能の科学』『無形文化遺産研究報告』の PDF の検索・閲覧を可能にした。 			
 <p style="text-align: right;">東文研総合検索の英文トップページ</p>			
【実績値】			
研究協議会の開催数 4 回			
資料受入数：和漢書 2459 件、洋書 18 件、展覧会図録・報告書等 4621 件、雑誌 3279 件（合計 10388 件）			
データベース公開件数：東文研総合検索 1 件（22 件のデータベースを統合したもの。）			
閲覧室利用状況：公開日総数 139 日・利用者年間合計 1015 人			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.58

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：資料閲覧室の公共性と特徴に則った運営をすることができた。 独創性：有形・無形の文化財を含む東京文化財研究所の業務に密着し、特徴あるデータ整理を行っている。 発展性：セインズベリー日本藝術研究所との共同研究や JAL プロジェクトにより国外との連携を促進した。 効率性：細分化されたデータベースの統合を目指し、効率的にデータを作成することができた。 継続性：研究基盤の形成のために継続性を重視し、中長期的視野に立って業務を行っている。 正確性：文化財専門機関として、精度の高いデジタル情報作成を期し、正確な情報提供を実践している。						

2. 定量的評価

観点	研究協議会の開催数	資料受入数	データベース公開件数	閲覧室利用状況		
判定	B	B	B	B		
判定理由 研究協議会の開催数： 4回 資料受入数：和漢書 2459 件、洋書 18 件、展覧会図録・報告書等 4621 件、雑誌 3279 件（合計 10388 件） データベース公開件数：「文化財関係文献データベース（統合試行版）」に情報を追加し、東京文化財研究所定期刊行物のうち『保存科学』『芸能の科学』『無形文化遺産研究報告』の PDF の検索・閲覧を可能にした。 閲覧室利用状況：公開日総数 139 日・利用者年間合計 1015 人 いずれも十分なものと判断する。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実施計画に沿って遂行することができた。セインズベリー日本藝術研究所との協力関係についても、実質的なデータベース作成をすすめることができた。 また、「文化財関係文献データベース（統合試行版）」に情報を追加し、東京文化財研究所定期刊行物のうち『保存科学』『芸能の科学』『無形文化遺産研究報告』の PDF の検索・閲覧を可能にした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料閲覧室の運営を順調に行うことが出来、また海外との交流を深めて海外発信力強化のための具体的な手がかりを得ることができた。次年度以降には、データベースの拡充、海外発信力の更なる強化とあわせて、公開する資料を増加、充実させたい。

業務実績書

研No.59

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供 (1)～③)		
【事業概要】			
文化財に関する資料・図書を計画的に収集・整理し、外部の研究者及び一般の利用者に積極的に公開・提供するための方策を検討し、実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】			
渡 勝弥(課長補佐)、伊藤久美、山内章子、中西晶子、堀内千嘉、井上江理奈、永岡美和、太田淳士(以下、文化財情報係事務補佐員)			
【主な成果】			
遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入及び寄贈による収集を行い、整理された資料をデータベースに蓄積してインターネットに公開した。また、図書館システムをクラウド化することにより、サーバの維持管理を省力化することができた。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書等の収集・整理： 遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心とする資料の収集・整理を行った。また、国立情報学研究所が構築しているオンライン共同分担目録方式による全国規模の総合目録データベース(NACSIS-CAT)への新規及び遡及入力継続等、所外の利用者への情報提供を行った。 図書資料以外では、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。 ・ 利用者サービス： 歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物等を一般公開施設として広く利用に供し、遠隔地からの図書利用については、国立情報学研究所が行っている NACSIS-ILL を通じて文献複写・現物貸借サービスを行った。 ・ 図書館システムメーカーのクラウドサーバを利用して10月1日に新図書館システムを本稼働させた。これにより、従来、職員が行っていたサーバの維持管理の省力化が可能となった。 			
			
仮設庁舎書庫			
【実績値】			
(参考値)			
受入数：			
購入図書	871 冊		
寄贈図書	6,782 冊		
雑誌	1,215 タイトル		
写真	13,554 点		
利用者サービス：			
一般利用者数	531 人		
利用冊数	3,613 冊		
来館者複写件数	774 件		
遠隔利用：			
複写受付件数	567 件		
貸借貸出冊数	79 冊		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6132

自己点検評価調書

研No.59

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：請求のあった図書資料等の提供及び購入希望のあった図書資料等を積極的に収集・整理を行い、公開を行った。 発展性：図書館システムを更新したことにより、最新のブラウザへの対応が可能となり、更なるサービスの向上が見られた。 効率性：サーバの維持管理を省力化することができた。 継続性：図書資料等の収集・整理・公開を滞ることなく遂行した。 正確性：受け入れた図書資料等に適切な分類を施し、適切な場所への保管を行った。						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	図書の収集・整理・公開・提供という業務において、毎年同じ業務を継続して行うことこそが最優先課題であり、独創性及び発展性を望むことは混乱を招く元となり得るが、本年度は図書館システムを更新したことにより、発展性と効率性を向上させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信という項目を滞ることなく遂行した。 停滞することなく図書資料等の収集・整理・公開・提供を行えたことは、中期計画を遂行するうえで最良の結果であると思われる。

業務実績書

研No.60

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（年報、概要、ニュース）（(2)－①）		
【事業概要】			
<p>本プロジェクトは研究所の業務に関する情報発信のうち特に紙媒体である『年報』『概要』『ニュース』、及び不定期に作成するパンフレットなどの編集・刊行を実施する。また、エントランスにおけるパネル展示などを通じて、来訪者に対しても研究所の活動をわかりやすく伝えることを目指す。</p>			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】			
<p>田中淳（副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務））、山梨絵美子（副部長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、城野誠治（専門職員）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）、高橋佑太（研究補佐員）</p> <p>広報委員（概要）：岡田健（保存修復科学センター長） 各部門概要担当：今城裕香（研究支援推進部管理室企画渉外係員）、塩谷純（企画情報部近・現代視覚芸術研究室長）、高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、早川典子（保存修復科学センター主任研究員）、友田正彦（文化遺産国際協力センター保存計画研究室長）</p> <p>広報委員（年報）：田中淳 各部門年報担当：平出秀文（研究支援推進部管理室長）、今城裕香、小林公治、久保田裕道（無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長）、佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）、山内和也（文化遺産国際協力センター地域環境研究室長）</p> <p>広報委員（東文研ニュース）：山梨絵美子、今城裕香、津田徹英、菊池理予（無形文化遺産部研究員）、早川泰弘（保存修復科学センター分析科学研究室長）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）</p>			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・『年報』2013年度版、『概要』2014年度版を編集、刊行した。また、『東文研ニュース』を年3回刊行した。さらに、エントランスロビーパネル展示を更新した。 ・東京文化財研究所による研究成果をまとめるとともに、わかりやすく発信することができた。 ・東京文化財研究所への来訪者や、訪問先の関係者に対する研究成果の説明について有効に活用することができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・『年報』2013年度版の刊行 <ul style="list-style-type: none"> 2014年6月30日付で『年報』を刊行した。2013年度版の構成は従来通り、機構、年度計画及びプロジェクト報告、その他の研究活動、個人の研究業績、研究交流、主な所蔵資料、研究所関係資料、東京文化財研究所プロジェクト、索引とした。刊行にあたっては、各部・センターの年報担当者が原稿のとりまとめを行った。 ・『概要』2014年度版の刊行 <ul style="list-style-type: none"> 『概要』2014年度版を刊行した。各ページの構成の決定や原稿のとりまとめについては、各部・センターの概要担当者が行った。 ・『東文研ニュース』の刊行 <ul style="list-style-type: none"> 『東文研ニュース』を年3回刊行した。基本的には、ウェブサイトに掲載した活動報告から四半期ごとの記事を掲載しているが、掲載する記事は各部・センターで選択している。ページ数は固定せず原稿の多寡によって自由に構成し、記事の配置については会議や研究会と現地調査とがバランスよく並ぶようにして見た目の印象にも配慮した。この他、東文研ニュースには、特定のトピックについてまとめた紹介を行うコラムや刊行物の案内、人事異動などを掲載している。 ・エントランスロビーパネル展示の実施 <ul style="list-style-type: none"> エントランスロビーに研究成果を伝えるためのパネルを作成し、展示した。26年度は前年度予算で作成した文化遺産国際協力センターによる「海外の文化財を守る日本の伝統技術」と題したパネルを4月21日に設置・展示している。また、26年度末に保存修復科学センターによる近代文化遺産の保存修復に関するパネルを作成し、3月30日に展示した。 			
【実績値】			
<p>刊行物数 計 8,900 部</p> <ul style="list-style-type: none"> 『東京文化財研究所年報』2013年度版 500 部 『東京文化財研究所概要』2014年度版 2,700 部 『東文研ニュース』55 2,500 部、同 56,57 号 各 1,600 部 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6211

自己点検評価調査

研No.60

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
評定	B	B	B	B		
<p>適時性：刊行物を年度目標数刊行し、ロビー展示も年度目標に従って行うことができた。</p> <p>効率性：『年報』・『概要』・『東文研ニュース』について配布先の見直しを行うことで印刷部数を削減し、経費削減に努めた。</p> <p>継続性：継続的に刊行物を作成した。</p> <p>正確性：『概要』・『年報』『東文研ニュース』は5回程度の校正をそれぞれ実施することで、情報の正確性を維持した。</p>						

2. 定量的評価

観点	刊行物数					
評定	B					
<p>刊行物数：前年度に引き続き配布実績に基づく部数の削減を行うことで、適切な部数を刊行することができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>年度計画通りに刊行物を作成し、ロビー展示を行うことができた。26年度に広報委員会関連の規則が改訂され、各部会員の役割が明確にされた。次年度はさらに各部会員への連絡を徹底し、効率的な業務の進行を図りたい。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画どおり概要、年報の刊行を順調に実施することができた。『東文研ニュース』については和英併記とし、コラムにも英文アブストラクトをつけることで内容の充実が図られ、当初予定の年4回刊行を達成することができ、適時性を持った改善を行うことができている。次年度以降も、概要・年報・東文研ニュースによる情報発信を継続するとともに、より効果的な情報発信の方法について検討し、ウェブサイトその他インターネットによる情報発信との連携にも努める。</p>

業務実績書

研No.61

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行 (『平成 25 年版日本美術年鑑』、『美術研究』) (2) - ①		
【事業概要】 各年の美術活動と美術研究、批評の状況を記録するために、昭和 11 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』を年 1 冊刊行するとともに、昭和 7 年 1 月以来、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術等に関わる研究論文・図版解説・書評・展覧会評、研究資料、研究ノート等を掲載する『美術研究』を年 3 冊刊行する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 塩谷純
【スタッフ】 田中淳 (副所長 (部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子 (副部長)、二神葉子 (情報システム研究室長)、小林公治 (広領域研究室長)、津田徹英 (文化形成研究室長)、小林達朗 (主任研究員)、皿井舞 (主任研究員)、安永拓世 (研究員)、橘川英規 (アソシエイトフェロー)、河合大介 (アソシエイトフェロー)、江村知子 (文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男 (客員研究員)、三上豊 (和光大学教授・客員研究員)、近松鴻二 (学習院大学非常勤講師・客員研究員)、吉田千鶴子 (東京藝術大学非常勤講師・客員研究員)			
【主な成果】 本年度は、『平成 25 年版 日本美術年鑑』及び『美術研究』413~415 号を刊行した。			
【年度実績概要】			
①『平成 25 年版 日本美術年鑑』 B5 版 (27 年 3 月) 2012 (平成 24) 年美術界年史、美術展覧会 (企画展、作家展、団体展)、美術文献目録 (定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献 (企画展、作家展))、物故者			
②『美術研究』413 号 (26 年 11 月) ・佐藤全敏「観心寺如意輪観音像 再考」 ・崔燁 (日比野民蓉訳)「近代における仏教界と仏画の制作」 ・小林公治「展覧会評 二〇一三年開催の南蛮漆器に関する展覧会から—Lacas Namban 展 (マドリッド) と「伊達政宗の夢」展 (仙台) —」 ・植野健造「研究資料 新出資料紹介『第八回白馬会出品目録』」 ・企画情報部報			
③『美術研究』414 号 (27 年 2 月) ・津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規「研究ノート ウェブ版『みづゑ』の研究—美術資料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望」 ・津田徹英「研究資料 滋賀・菅山寺蔵 十一面観音菩薩立像」 ・綿田稔・土屋貴裕・江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂—ポートランド美術館所蔵作品簡解 (一) —」 ・染谷香里「研究資料 画伝幼学 絵具彩色独稽古 (天保五年)」 ・吉田千鶴子「研究資料 黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」			
④『美術研究』415 号 (27 年 3 月) ・李相南 (安在媛 訳)「毛利博物館所蔵 韓国遺物を通してみる初期朝鮮王朝物質文化交流—大内氏と毛利氏を中心にして—」 ・藤川 哲「ビエンナーレのかたち—かたち=イメージ—」 ・佐藤直樹「かたちをめぐる日本美術史の可能性—西洋美術史からの視点—」 ・加治屋健司・上崎 千・橘川英規「研究ノート アート・アーカイヴの諸相」 ・江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂—ポートランド美術館所蔵作品簡解 (二) —」 ・児島 薫「藤島武二による黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について(一)」 ・児島 薫「黒田清輝、久米桂一郎宛藤島武二書簡 影印・翻刻・解題」			
			
②『美術研究』413 号 (26 年 11 月)			
【実績値】			
刊行数 1,800 部 『日本美術年鑑』(①) 600 部、『美術研究』(②~④) 各 400 部 配布部数 1,740 部 『日本美術年鑑』600 部、『美術研究』各 380 部			
【備考】			
①『平成 25 年版 日本美術年鑑』東京文化財研究所 2015. 3 ②『美術研究』413 号 東京文化財研究所 2014. 11 ③『美術研究』414 号 東京文化財研究所 2015. 2 ④『美術研究』415 号 東京文化財研究所 2015. 3			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6212

自己点検評価調査

研No.61

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
<p>判定理由</p> <p>適時性、独創性、発展性： (『美術研究』の刊行) ・海外編集委員によって推薦された韓国語圏と中国語圏で発表された論文を翻訳し掲載することで、広く東アジアにおいてどのような問題が最新のテーマとして文化財研究の俎上にあがっているかを提示した。 ・話題となった南蛮漆器の二つ展覧会「<i>Lacas Namban</i> 展 (マドリッド)」と「伊達政宗の夢」展 (仙台)」を展覧会評として取り上げ、今後の研究動向と展望を示した。 ・これまで全容が知られていなかった『第八回白馬会出品目録』を新出資料として紹介した。また、「黒田清輝宛外国人留学生書簡」を影印とともに翻刻・解題を付して公表した。さらに、所員の調査によってその存在が注目された、滋賀・菅山寺十一面観音菩薩像、ポートランド美術館所蔵の注目すべき日本絵画作品を「研究資料」として紹介した。</p> <p>(『日本美術年鑑』の刊行) ・平成12～24年版に掲載された物故者記事の執筆者に当研究所ウェブサイト掲載のための許諾をとり、ウェブ上での公開に向けて準備を行った。</p> <p>いずれも適時性・独創性・発展性において十分に成果が認められた。</p> <p>継続性・正確性： ・1936 (昭和11) 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』において、2012年の美術界に関する基礎データの集成に努め、成果が認められた。 ・1932 (昭和7) 年の創刊以来、日本・東洋の古美術、並びに日本近代・現代の美術とこれらに関連する西洋美術についての論文・研究ノート・図版解説・展覧会評・研究資料などを掲載する『美術研究』を計画通り年度内に3冊刊行した。</p>						

2. 定量的評価

観点	刊行数	配布部数				
評定	B	B				
<p>判定理由</p> <p>刊行数：目標を達成した (刊行数1,800部：『日本美術年鑑』(①)600部、『美術研究』(②～④)各400部)。 配布部数：関係機関への配布部数の目標を達成した (配布部数1,740部：『日本美術年鑑』600部、『美術研究』各380部)。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>定性的にB評価、定量的にもB評価とした。それゆえ総合的評価 (平均値) もB評価とした。</p> <p>年度計画通り、『美術年鑑』1冊と『美術研究』3冊を刊行した。前者においては、2012 (平成24) 年美術界年史、美術展覧会、美術文献目録を収録して、遺漏なく斯界の動向の記録に努めるとともに、後者では、論文、翻訳論文、展覧会評、研究資料のそれぞれにおいて国内外の文化財研究に資するべく充実を図った。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画にあげた実施状況は、所期の目的を達成している。</p> <p>次年度は、『日本美術年鑑 平成26年度版』1冊の刊行と、『美術研究』3冊の刊行を目指したい。</p>

業務実績書

研No.62

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（『無形文化遺産部研究報告』、『無形民俗文化財研究協議会報告書』）（2） －①）		
【事業概要】	無形文化遺産部スタッフによる業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』及び民俗文化財保護行政担当者、無形民俗文化財保存関係者、研究者の参加を得て開催する無形民俗文化財研究協議会の事例報告・総合討議を内容とする『無形民俗文化財研究協議会報告書』を刊行する。		
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】	高桑いづみ（無形文化財研究室長）、久保田裕道（無形民俗文化財研究室長）、今石みぎわ（研究員）、菊池理予（研究員）		
【主な成果】	<p>(1) 主として無形文化遺産部研究員の業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』第9号の刊行。</p> <p>(2) 26年12月5日に開催した無形民俗文化財研究協議会での事例報告・総合討議を内容とする『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 『無形文化遺産研究報告』第9号を以下の内容で刊行した。</p> <p>「染織技法書に見られる豆汁の役割一寛文6年刊『紺屋茶染口伝書』を中心として」 菊池理予 「無形文化遺産の保護に関する第9回政府間委員会における議論の概要と課題」 二神葉子 「〔資料紹介〕 昭和49年撮影『竹富島の種子取り』 —無形文化遺産部収蔵フィルムとそのデジタル化（2）—」 佐野真規 「梅村豊撮影歌舞伎写真（六）」 鎌田紗弓 「フィルモン音帯一覧（2015年3月現在）」 飯島満 「〔資料紹介〕 東京文化財研究所所蔵 フランス・パテ社製 SPレコード 長唄『吉原雀』を中心に」 星野厚子</p> <p>(2) 「地域アイデンティティと民俗芸能—移住・移転と無形文化遺産—」をテーマとした『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』を以下の内容で刊行した。</p> <p>趣旨説明</p> <p>【第1部 報告】</p> <p>「北海道への移住と民俗芸能」 舟山直治（北海道開拓記念館） 「沖縄の郷友会と民俗芸能」 入澤紀（東京八重山郷友連合会） 「福島県相双地方が培った真宗移民文化 —映画『土徳流離～相双地方復興への悲願』からの報告」 青原さとし（ドキュメンタリー映像作家） 「過疎集落の民俗芸能を継承する —山梨県甲州市塩山「一之瀬高橋の春駒」の事例から」 丸尾依子（山梨県立博物館）</p> <p>【第2部 総合討議】</p> <p>コメント ディスカッション 参考資料（アンケート集計結果・協議会参加者一覧）</p>		
			
	『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』表紙		
【実績値】	刊行数 2部（『無形文化遺産研究報告』第9号、『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』）27年3月		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6213

自己点検評価調査

研No.62

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：無形民俗文化財研究協議会で取り上げた住民の移動（自然災害や過疎化等が要因となる場合もある）が及ぼす民俗文化財への影響は、現代日本において検討をしなければならない最も重要な問題の一つと考える。 独創性：『無形文化遺産研究報告』掲載の資料紹介は、東京文化財研究所所蔵資料を中心としたものであるが、いずれもが稀少性の高い資料であり、現時点で当研究所以外での所在を確認できないものが含まれている。 発展性：情報の多様さ豊富さの点で、有用性が高い。						

2. 定量的評価

観点	刊行数					
評定	B					
判定理由 刊行数：予定通りの刊行数を達成している。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	無形文化遺産の報告書として、情報が豊富で質の高い研究報告が掲載されている。関係機関や専門研究者へ配布した後、広範な研究分野からの要請にも資するため、PDFでの公開も予定されている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り年間2冊の報告書が刊行されており、目的を順調に達成している。次年度も同様に報告書2冊の刊行を予定している

業務実績書

研No.63

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行(『保存科学』54号)((2)-①)		
【事業概要】 保存修復科学センター・文化遺産国際協力センターで行われた文化財の保存・修復に関する調査・研究成果の公開を目的に、年1回研究論文集『保存科学』を刊行する。様々な文化財の科学的調査結果や基礎研究に関する論文、受託研究に関する研究報告・修復処置報告等を掲載する。また、より一層の研究成果の公開に努めるため、『保存科学』掲載論文PDFファイル化を行い、インターネット上での公開を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 吉田直人(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)			
【主な成果】 『保存科学』第54号を発行した			
【年度実績概要】 (1)編集委員会 岡田健、川野邊渉、神庭信幸(東京国立博物館学芸研究部保存修復課長)、稲葉政満(東京藝術大学大学院美術研究科教授)の4名からなる編集委員会を編成した。 (2)査読及び編集作業 投稿された21件全ての原稿に対して、査読委員(保存修復科学センター及び文化遺産国際協力センターの正職員、編集委員、及び外部査読者)による査読を実施し、最終的に報文4件、報告14件、計18件の掲載を決定した。 (3)刊行 製本版(版型B5版、口絵カラー11頁、本文総ページ数239頁)を650部発行し、関係諸機関に485部配布した。また、全ての原稿についてPDFファイルを作成し、東京文化財研究所のウェブサイトから自由にダウンロードできるようにした。 掲載された記事のうち、報文4報の題名はそれぞれ下記のとおり 1. 鳥取県・花見瀉墓地赤碕塔に見られるハニカム状風化 2. 増裏打ち作業における古糊と打刷毛の接着効果について 3. 日岡古墳の保存施設内における温熱環境の調査 4. 日光東照宮唐門および透塀の塗装彩色材料に関する調査 他 報告14報			
			
『保存科学』54号表紙			
【実績値】 刊行数 1件 印刷部数 650部 配布部数 485部			
【備考】 『保存科学』54号、27年3月発行			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6214

自己点検評価調査

研No.63

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化財調査・研究に関わる最新の成果を公表している。 独創性：自然科学的方法論に基づいたオリジナリティの高い成果を公表している。 発展性：様々な種類の文化財、およびその材料を対象に、多様なテーマでの成果を公表している。 効率性：編集委員会のもとで速やかかつ確実な編集作業と発行を実現している。 継続性：年度ごとに発行することにより、成果の速やかな公表に寄与している。 正確性：専門家による厳正な査読により科学論文としての高い質を維持している。						

2. 定量的評価

観点	刊行数	印刷部数	配布部数			
評定	B	B	B			
判定理由 刊行数、印刷部数、配布部数：いずれも目標を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	多様な内容の報文と報告を、厳正な査読を経ることにより、自然科学論文としての水準を担保して公表することができた。部数が限られる製本版だけではなく、PDFとしてインターネット公開することにより、関心を持つあらゆる人々に最新の文化財調査研究に関わる知見にアクセスする機会を保証していることは、当該分野の地位を高めることにも貢献するものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、予定通り「保存科学」45号を発行した。次年度は中期計画最終年度にあたることから、各研究プロジェクトの総括的な成果を多く公表する予定である。

業務実績書

研No.64

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行 (2)－①		
【事業概要】			
文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を発行する。			
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 松村恵司
【スタッフ】			
【主な成果】			
紀要等 2 点、ニュース 2 種 8 点、合計 10 点を刊行した。			
【年度実績概要】			
(紀要等)	『奈良文化財研究所紀要 2014』 2014. 6 月刊、3,000 部 『奈良文化財研究所概要 2014』 2014. 9 月刊、2,700 部		
(ニュース)	『奈文研ニュース No. 53』 2014. 6 月刊、3,000 部 『奈文研ニュース No. 54』 2014. 9 月刊、3,000 部 『奈文研ニュース No. 55』 2014. 12 月刊、3,000 部 『奈文研ニュース No. 56』 2015. 3 月刊、3,000 部 『埋蔵文化財ニュース No. 158－石造文化財の保存研究－』 2015. 3 月刊、2,500 部 『埋蔵文化財ニュース No. 159－埋文センター40周年－』 2015. 3 月刊、2,500 部 『埋蔵文化財ニュース No. 160－埋文センターが保有する機器一覧－』 2015. 3 月刊、2,500 部 『埋蔵文化財ニュース No. 161－2013 年埋蔵文化財関係統計資料－』 2015. 3 月刊、2,200 部		
			
『奈良文化財研究所紀要 2014』、『奈良文化財研究所概要 2014』			
【実績値】			
刊行数：紀要 1 点、概要 1 点、奈文研ニュース 4 点、埋蔵文化財ニュース 4 点、計 4 種 10 点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6215

自己点検評価調査

研No.64

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
評価	B	B				
判定理由 適時性：調査研究の成果を適時に刊行できた。 継続性：継続的な定期刊行物として刊行できた。						

2. 定量的評価

観点	刊行数					
評価	B					
判定理由 刊行数：当初の計画どおりに刊行することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定期刊行物は、研究成果を公表するものとして計画的に刊行できた。 また、多様な研究成果、特に継続的な調査研究の成果を専門家だけでなく、一般の方にもわかりやすい形での刊行に努めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	紀要、概要、ニュースの刊行は、計画どおりに順調に実施できた。 また、中期計画最終年度である次年度においても、調査研究の成果を適時に刊行できるよう努める。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	第37回 文化財の保存と修復に関する国際研究集会の報告書作成 (2)―①
【事業概要】 昨年度開催した、第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会「かたち 再考―開かれた語りのために―」の報告書を作成する。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	主任研究員 皿井 舞
【スタッフ】田中淳 (副所長 (部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子 (副部長)、塩谷純 (近・現代視覚芸術研究室長)、津田徹英 (文化形成研究室長)、小林達朗 (主任研究員)、小林公治 (広領域研究室長)、二神葉子 (情報システム研究室長)	
【主な成果】 前年度の26年1月10日 (金)～12日 (日)、東京文化財研究所の地下セミナー室において開催した、第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会の報告書を作成した。	
【年度実績概要】 国際研究集会報告書『第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会 「かたち」 再考 開かれた語りのために』を刊行した。目次は次の通り。	
刊行にあたって 皿井舞「趣旨説明「今、なぜ「かたち」なのか」 イケムラレイコ (アーティスト)・田中淳「基調対談 生まれてくる「かたち」」	
セッション1: 群れとしての「かたち」 江村知子 (文化遺産国際協力センター主任研究員)「セッション趣旨説明―近世日本絵画の人物表現の細部に着目して」 サイモン・ケイナー (セインズベリー日本藝術研究所)「先史時代からみた「かたち」の概念―土偶や縄文時代の遺物の観察を通して」 高桑いづみ (無形文化遺産部無形文化財研究室長)「くり返す」ということ―音楽の「かたち」と変化する伝承―」 ユキオ・リピット (ハーバード大学)「蟠龍図の「かたち」と行為」 小沢朝江 (東海大学)「近代日本の行在所にみる様式の創造」 討議― 司会: 江村知子、荒川正明 (学習院大学)	
セッション2: 個としての「かたち」 塩谷純「セッション趣旨説明 狩野芳崖、晩年の山水画から」 小林達朗「美しい術―国宝千手観音像の場合」 内呂博之 (金沢21世紀美術館) 「「かたち」への挑戦―岡田三郎助と藤田嗣治」 大島徹也 (愛知県美術館)「ポロックをポロックとして見る―ジャクソン・ポロックのオールオーバーのポード絵画」 渡部泰明 (東京大学)「歌の「かたち」―源俊頼の方法」 討議二 司会: 塩谷純、藤川哲 (山口大学)	
セッション3: 「かたち」をささえるもの 綿田稔 (前企画情報部文化財アーカイブズ研究室長)「セッション趣旨説明 雪舟の「慧可断臂図」を例に」 メラニー・トレーデ (ハイデルベルグ大学)「八幡縁起のローカリゼーション」 崔公鎬 (韓国伝統文化大学校)「器―社会的形態・文明の記憶」 (翻訳: 稲葉真以/韓国光云大学) 塚本鷹充 (東京国立博物館)「中国絵画史における「人格」と「かたち」―呉彬「山陰道上図巻」と価値評価の構造」 桑木野幸司 (大阪大学) 「記憶のかたち―コスマ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』(1579年)における天国と地獄の表象」 討議三 司会: 綿田稔、佐藤直樹 (東京芸術大学) 本報告書は、以上に加えて、各発表者の英文レジュメ、サイモン・ケイナー及びメラニー・トレーデ氏の英文フルペーパー、崔公鎬氏の韓文及び英文フルペーパーを掲載。	
 報告書表紙	
【実績値】 報告書刊行数 1点 『文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「かたち」再考―開かれた語りのために―』(東京文化財研究所、26年12月17日、一部市販) 400部	
【備考】	

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6221

自己点検評価調査

研No.65

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	独創性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：前年度の成果について計画通りに刊行することができた。 発展性：シンポジウムを踏まえて発表時の原稿よりも深い考察を行った論考が集まり、また、校正による著者とのやり取りの中で、さらに内容を深めることができた。 継続性：前年度のシンポジウム成果を継承・吟味することができた。 独創性：前年度のシンポジウムでは学問諸分野をまたぐ「かたち」という枠組みを設定して議論した成果を刊行し広く公開することができた。						

2. 定量的評価

観点	報告書刊行数					
判定	B					
判定理由 報告書刊行数：計画通り報告書を刊行することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前年度開催した「かたち」再考 ―開かれたかたりのために― シンポジウムの内容を精査し、報告書として刊行することができた。したがって、定性的、定量的ともB評価と考え、総合的にもBと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的にも定量的にも高い水準で実施することができたので、Bと判断した。 また、本報告書刊行を準備するにあたって浮かび上がってきた課題は、次期中期計画を策定するにあたって大いに参考になるものであり、それらの課題をさらに深めるためにも、今後継続して研究会を開催していきたい。

業務実績書

研No.66

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平成26年度オープンレクチャー((2)-②)		
【事業概要】 企画情報部の美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務) 田中淳
【スタッフ】 山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、津田徹英(文化形成研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、中野照男(客員研究員)、三上豊(和光大学教授・客員研究員)、近松鴻二(学習院大学非常勤講師・客員研究員)、吉田千鶴子(東京藝術大学非常勤講師・客員研究員)			
【主な成果】 (1) 第48回企画情報部オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」と題して4講演を2日間にわたり開催した。 (2) 参加者数：163人、アンケートによる満足度：82.7% (回収率：78%) (3) 4講演中の1つは講演内容を踏まえて、次年度『美術研究』に論文として掲載を予定。			
【年度実績概要】 (1) 企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催している。本年はその48回目を迎えた。「モノ／イメージとの対話」を統一テーマに掲げ、金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開催した。 第1日目：26年10月31日(金) 午後1:30～4:30 東京文化財研究所地下セミナー室 「一流相承系図(絵系図)の構想と機能」津田徹英 「院政期絵画における二つの美の原理—似絵の成立をめぐる—」伊藤大輔(名古屋大学大学院教授) 第2日目：26年11月1日(土) 午後1:30～4:30 東京文化財研究所地下セミナー室 「仙台・昭忠碑、被災から復興へ向けて」塩谷純・高橋祐二(ブロンズスタジオ) 「戦争の「表象と本物」」河田明久(千葉工業大学教授) (2) 2日間でのべ163人が聴講した。聴講者にアンケートを実施したところ、127人から回答を得た(回収率：78%)。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」43人、「おおむね満足した」70人、「普通だった」7人、「不満が残った」2人、無回答5人。アンケート回答者の82.7%が満足感を得た。 (3) 4講演のうち「一流相承系図(絵系図)の構想と機能」については、次年度刊行の『美術研究』に講演内容を踏まえて論文として掲載することが『美術研究』編集会議で承認された。			
			
オープンレクチャーの開講(第1日目)			
【実績値】 参加者数 163人 満足度 82.7% (回収率：78%)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6222

自己点検評価調査

研No.66

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：東京文化財研究所企画情報部の研究の「今」を一般に公表し、その適時性において成果が認められた。 独創性・発展性：それぞれの研究成果を単に公表するのではなく、「モノ／イメージとの対話」という独自の統一のテーマで括ることで独創性を打ち出しつつ、これまで培われ・蓄積されてきた成果の公表を行い、それぞれに調査・研究への展望を示して、聴講者の満足度をアンケート集計結果から得ることができた。 継続性：企画情報部のオープンレクチャーとして、途切れることなく第48回目の開催を行うことができた。 正確性：講演は、作品に即した実査にもとづく所見に立脚する。その画像資料の提示にあたってパワーポイントの映写機器を更新し、作品のもつクオリティに肉薄するような画像資料を聴講者に提示することで、講演で取り上げた作品が正確に伝わるように心がけた。						

2. 定量的評価

観点	参加者数	満足度				
評定	B	B				
判定理由 参加者数：両日で160人の定員に対して、163人の聴講者を得た。 満足度：聴講者アンケートによる満足度は、集計の結果、8割以上に達した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的にB評価、定量的にもB評価を得た。総合的評価（平均値）もB評価（3点）とした。 次年度も文化財に関する調査・研究に基づく最新の成果・新知見を、時宜に適応しながら公表し、聴講者数、満足度においても目標値を満たすことを目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の趣旨に添いつつ、本年度も計画通り「平成26年度オープンレクチャー」を実施し、所期の目的を達成した。五ヵ年計画の最終年である次年度も、文化財に関する調査・研究に基づく最新の成果・新知見を、「モノ／イメージとの対話」という統一テーマで括りつつ、公開講演という形態で成果・知見を一般に公表・還元することを目指す。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信				
プロジェクト名称	公開講演会、現地説明会等の開催 ((2)-②)				
【事業概要】 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、公開講演会、現地説明会等の開催により、積極的に公開・提供する。					
【担当部課】	研究支援推進部 連携推進課、研究支援課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成 研究支援課長 今西泰益		
【スタッフ】 松本正典(連携推進課課長補佐)、車井俊也(連携推進課課長補佐)、米野元則(連携推進課専門職員)、江川正(宮跡等活用支援係長)、三本松俊徳(宮跡等活用支援係係員)					
【主な成果】 (1) 公開講演会は、例年実施している定例公開講演会(奈良)を2回、特別講演会(東京)を1回、飛鳥資料館特別展記念講演会等を2回開催した。いずれも多く参加者があり、日頃の当研究所研究成果を一般に発信ができた。 (2) 発掘調査に伴う現地説明会等を2回実施した。このことにより、調査研究成果を適時に適切に国民に公開・公表することができ、事業としては順調に実施できた。					
【年度実績概要】					
(1) 公開講演会等		 <p>第114回公開講演会風景</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 第114回公開講演会 26年6月28日(土) 聴講者数236人 場所：平城宮跡資料館講堂 講演者数3名 アンケート結果＝回収数160人 回収率67.8% 満足度A=134人(83.8%)/B=25人(15.6%)/C=1人(0.6%) ・ 第115回公開講演会 26年10月4日(土) 聴講者数210人 場所：平城宮跡資料館講堂 講演者数3名 アンケート結果＝回収数129人 回収率61.4% 満足度A=113人(87.6%)/B=16人(12.4%)/C=0人(0.0%) ・ 特別講演会(東京) 26年10月25日(土) 聴講者数480人 場所：有楽町朝日ホール 講演者数6名 アンケート結果＝回収数240人 回収率50.0% 満足度A=213人(88.8%)/B=25人(10.4%)/C=2人(0.8%) ・ 飛鳥資料館春期特別展「いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー」記念座談会 26年5月11日(日) 参加者数51人 場所：飛鳥資料館講堂 講演者数1名 アンケート結果＝回収数31人 回収率60.8% 満足度A=31人(100.0%)/B=0人(0.0%)/C=0人(0.0%) ・ 飛鳥資料館秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー」記念講演会 26年11月1日(土) 参加者数40人 場所：飛鳥資料館講堂 講演者数1名 アンケート結果＝回収数32人 回収率80.0% 満足度A=32人(100.0%)/B=0人(0.0%)/C=0人(0.0%) 					
(2) 現地説明会等				 <p>飛鳥藤原第182次(藤原宮大極殿院)発掘調査 現地説明会風景</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 飛鳥藤原第182次(藤原宮大極殿院)発掘調査1,450㎡ 現地説明会 26年11月8日(土) 参加者数794人 報告者1人 アンケート結果＝回収数172人 回収率21.7% 満足度A=111人(64.5%)/B=61人(35.5%)/C=0人(0.0%) ・ 飛鳥藤原第183次(藤原宮東方官衙北地区)発掘調査973㎡ 現地見学会 26年12月14日(土) 参加者数622人 報告者1人 アンケート結果＝回収数89人 回収率14.3% 満足度A=56人(62.9%)/B=31人(34.8%)/C=2人(2.3%) 					
【実績値】					
開催回数 7回					
(1) 公開講演会等開催回数 5回					
(2) 現地説明会等開催回数 2回					
(参考値)					
(1) 公開講演会等					
聴講者延人数1,017人 アンケート回収数592人 回収率58.2% 満足度A=523人(88.3%)/B=66人(11.1%)/C=3人(0.5%)					
(2) 現地説明会等					
参加者延人数1,416人 内アンケート実施回収数2回 回収数261人 回収率18.4% 満足度A=167人(64.0%)/B=92人(35.2%)/C=2人(0.8%)					
【備考】					

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6223

自己点検評価調査

研No.67

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：発掘調査成果など広く一般に公開し、その必要性に答えることができた。 独創性：公開は、当研究所の調査・研究内容の新規性及び卓越性を持たせ実施することができた。 発展性：聴講者、参加者は、多数かつ多種にわたり様々な分野への影響が期待される。 継続性：様々な媒体を活用して、調査・研究成果の継続的な公表を行った。 正確性：アンケート結果に見られるように多数が満足する正確性を持った内容であった。						

2. 定量的評価

観点	開催回数					
評定	B					
判定理由 開催回数：公開講演会、現地説明会等ともに予定どおり実施できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	公開講演会については5回実施、現地説明会等については2回実施し、いずれも多数の参加者があった。これらの参加者に対して行ったアンケートでは、公開講演会では99.5%、現地説明会等では99.2%の方から「大変満足である」または「おおむね満足である」という結果をもってBと評価する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	公開講演会、現地説明会等の開催は計画どおり所期の目標を達している。 今後も、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握を図る。さらに事業広報を充実させることにより参加者数の増加と満足度の向上を図る。最終年度となる27年度に向けて、講演会の講演者やその内容をさらに検討することにより、参加者のニーズの期待を高められるように努める。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	ウェブサイトの運用((2)ー③)		
【事業概要】			
研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】			
<p>田中淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、津田徹英(文化形成研究室長、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、城野誠治(専門職員)、橘川英規(アソシエイトフェロー)、福永八朗(アソシエイトフェロー)、小山田智寛(研究補佐員)、高橋佑太(研究補佐員)</p> <p>広報委員(情報システム部会): 川野邊渉(文化遺産国際協力センター長) 各部門情報システム部会員:高砂健介(前研究支援推進部管理室長)、平出秀文(研究支援推進部管理室長)、津田徹英、飯島満(無形文化遺産部長)、吉田直人(保存修復科学センター主任研究員)、加藤雅人(文化遺産国際協力センター国際情報研究室長)</p>			
【主な成果】			
<p>(1) 活動報告(和英)や研究会等の開催情報などの広報について、及び文化財アーカイブズ研究室と連携しての文献や写真などの所蔵資料、研究成果の発信についてその手法の検討を行った。</p> <p>(2) 黒田清輝関連のページを中心としたウェブサイトの更新を随時実施し、レイアウトやメニュー構成などデータへのアクセス方法を改善した。また、WordPressによるデータベースを昨年度に引き続き随時整備・公開した。さらに、それらの更新情報をソーシャルネットワークサービス(SNS)により発信した。</p> <p>(3) データベースの整備・公開により、調査研究情報へのアクセスが容易となった。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) ・広報の手法、所蔵資料や研究成果の情報の発信手法の検討は、情報システム研究室及び文化財アーカイブズ研究室を中心に随時行った。</p> <p>・特に、奈良国立博物館との共同研究の一環として撮影されてきた、仏画を中心とした文化財の高精細画像の蓄積・共有の方法に関して、奈良国立博物館との協議を26年5月28日に行った。</p> <p>(2) ・黒田記念館の再オープンにあわせ、26年12月までにウェブサイトの黒田清輝関連のページを全面的に更新した。従来も公開していた「黒田清輝日記」の一部について、WordPressのブログ機能を応用することで年月日や本文の記述の検索ができるようになった。</p> <p>・WordPressによるデータベースでは、「ガラス乾板データベース」「新海竹太郎関連ガラス乾板」「尾高鮮之助調査撮影記録」「和田新調査撮影記録」「日本美術年鑑所載物故者記事」「日本美術年鑑所載美術界年史彙報」「年鑑資料集成」を公開した。東京文化財研究所設立初期の職員である尾高鮮之助、和田新撮影の画像は約80年前に撮影されたもので、東南アジア・南アジア・西アジアの遺跡の当時の状況についての知見を得ることができた。</p> <p>・上記のアーカイブ・データベースは、所蔵資料などを含めた総合検索システムと連携することで、横断検索を可能とした。このことで、関連する事象を各種の資料から一度に抽出することが可能となり、調査の効率が改善された。</p> <p>・Facebook及びTwitterによるウェブサイトの更新情報の発信を開始し、英語と日本語による国内外の文化財関係者への情報発信を実施できるようになった。</p> <p>(3) ・物故者記事、美術界年史彙報など、従来は検索できなかった情報が横断検索できるようになったことで、専門家同士の交流などの動向を知ることができるようになった。</p> <p>・たとえば、アフガニスタン・バーミヤーンの大仏は2001年に爆破され、現在は世界遺産一覧表記載の文化遺産として整備が行われているが、その手法には問題も指摘されている。ユネスコ・世界遺産センターなどへの整備手法に対する提言が東京文化財研究所を中心とした専門家により26年6月に行われたが、その検討にあたって、尾高鮮之助撮影のバーミヤーンの大仏の画像を利用し、復元された足状構造物の不適切性について指摘することが可能となった。国際的な課題となっている文化遺産の復元の問題について提言を行うにあたり、データベース化された画像を活用することが可能になった事例といえる。</p>			
【実績値】			
奈良国立博物館との協議 1回			
データベース公開数(外部) 7件(備考欄①～⑦)			
(参考値)			
ウェブサイトアクセス件数 1,603,086件			
【備考】			
①「ガラス乾板データベース」			
②「新海竹太郎関連ガラス乾板」			
③「尾高鮮之助調査撮影記録」			
④「和田新調査撮影記録」			
⑤「日本美術年鑑所載物故者記事」			
⑥「日本美術年鑑所載美術界年史彙報」			
⑦「年鑑資料集成」			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6231

自己点検評価調査

研No.68

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：ウェブサイトによる情報公開は現在必須であり、海外への発信力も求められている。そのような需要に対し、時宜を得て対処することができた。 独創性：Wordpressによる研究情報のデータベースには新規性があり、その活用が独創的であるといえる。また、東京文化財研究所が所蔵する一次資料は他にないものである。 発展性：Wordpressによる研究情報のデータベースはテキストも画像も扱うことが可能なため、これからもさまざまな種類のデータを検索可能な形で公開することができる。 効率性：ウェブサイトの大きな変更は外部委託しているが、週2回程度来所して所員と協議しながら作業を実施し、結果的に短時間で目的に適合したウェブサイトを構築できている。データベース構築では外部委託は最小限にとどめ、ほとんどは職員が対応することで費用対効果が向上している。 継続性：ウェブサイトの更新は複数の職員があたっているが、その日ごとの作業の進捗状況について書面で情報共有することで継続的なデータ更新作業を行うことができている。 正確性：データの公開に当たっては、事前に所内限定で公開したうえで複数の職員により内容を確認し、精査したうえで外部公開を行っている。						

2. 定量的評価

観点	データベース公開数				
評定	B				
判定理由 データベース公開数：年度計画で挙げていたデータベースについて公開することができたため。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ウェブサイトの運用については、適時性、効率性、継続性、独創性、発展性、正確性が認められた。また、Wordpressによるデータベースに関しては、テキスト・画像によるデータベースを横断検索可能な形で7件公開することができた。したがって、実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ウェブサイトの情報へのアクセスの利便性向上、データの充実、速やかな更新を実施することができた。ウェブサイトのアクセス件数も増加している。このような実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると考えた。次年度以降も多くのデータベースの公開など、当研究所の広報・研究成果の公開をより効果的に実施するための業務を実施していくとともに、高精細画像の共有のための仕組みについて引き続き研究を実施していきたい。

業務実績書

研No.69

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	ウェブサイトの充実 (2)－③)		
【事業概要】研究所の事業・研究成果をはじめ、催し物案内など様々な広報を実施する。新たな情報発信をすべく更なる内容の検討を行う。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中 康成
【スタッフ】 渡 勝弥(文化財情報係長)、高田祐一(文化財情報係アソシエイトフェロー)、永岡 美和(文化財情報係事務補佐員)、鈴木 歩(文化財情報係事務補佐員)			
【主な成果】 (1) アクセス解析の精査による利用増加施策を戦略的に立案した。 (2) リポジトリコンテンツ増加により利用者数の増加が見られた。 (3) コラムの継続発信とブログの活用促進を行った。 (4) ウェブサイトの多言語化対応ページの充実を行った。 (5) ウェブサイト内コンテンツの再配置を行った。			
【年度実績概要】 (1) 25年度に設置したアクセス解析システムにより、蓄積されたページ単位の利用データを分析し、利用者の状況をきめ細かく把握することで各種施策の基礎情報とした。 (2) 学術情報リポジトリのコンテンツを増加した。コンテンツ増加に伴い、利用者が増加した。 (3) 研究員によるコラム「作寶樓」と「探検! 奈文研」を定期的にリリースした。催し物等の情報をタイムリーに発信することで、ブログ利用者が増加した。 (4) 昨年度に引き続きウェブサイトの多言語化を進め、今年度は弊所刊行物の英語サマリーや英語目次をテキスト入力し、ウェブサイトで公開した。196冊の刊行物をテキスト入力し、約200万文字を公開した。 (5) ウェブサイト内のコンテンツをアクセス解析の結果をもとに再配置した。その結果、閲覧が少なかったコンテンツがよく閲覧されるようになり、ページビュー数が劇的に向上した。			
 <p style="text-align: center;">ブログ利用者の増加が見られた 探検! 奈文研のページ</p>			
【実績値】 (参考値) ウェブサイトアクセス件数：525,886件 学術情報リポジトリ：アクセス数前年度比211%増加(2013年度：14,410件、2014年度：39,379件) 刊行物の英語サマリーと英語目次の公開：冊数196冊、文字数約200万文字 ウェブサイトページビュー：ページビュー数前年度比455%増加(2012年度：2,177,206件、2013年度：2,035,788件、2014年度：9,523,837件)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6232

自己点検評価調査

研No.69

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：ブログの活用を促進したことにより、適切な時期に適切なタイムリーな情報発信を実践した。 独創性：研究所の学術成果を公開する学術情報リポジトリのコンテンツが増加した。 発展性：多言語化対応によりグローバルな情報発信が可能となった。 効率性：アクセス解析システムのデータを分析することにより、効率よく各種施策の立案・事後評価が可能となった。 継続性：コンテンツの継続的な配信により閲覧者の定着を確認できた。 正確性：事業内容、活動状況等の適時公開を行った。						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	情報発信の国際化、学術情報の成果発信、最新情報の発信、アクセス解析システムの確立を適切に推進した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2010年以來、下降気味だったウェブサイトのアクセス数が、ウェブサイト内のコンテンツ増加、再配置及び多言語化対応を行ったことにより、アクセス数を大幅に増やすことができたため、B判定とした。 次年度以降においてもウェブサイト内のコンテンツ増強を予定しているため、更なるアクセス数の増加が見込まれるものと予想する。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡資料館における展示公開 ((3)-①)		
【事業概要】平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所が行なう平城宮・京の発掘調査及び研究の成果公開や情報発信のため、平城宮跡資料館において常設展・企画展を実施する。			
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山洋
【スタッフ】加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、渡邊淳子(前展示企画室アソシエイトフェロー)、中村 玲(展示企画室アソシエイトフェロー)、松本正典(連携推進課課長補佐)			
【主な成果】			
<p>(1) 常設展の円滑な実施のため、その維持・管理に努めるとともに、高精細画像鑑賞システムを新規設置した。</p> <p>(2) 夏期企画展「平城京ビックリはくらんかい」を開催した。</p> <p>(3) 秋期特別展「地下の正倉院展－木簡を科学する－/埋蔵文化財センターの40年」を開催した。</p> <p>(4) ミニ展示「発掘速報展平城2014」を2期へ分けて開催した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 常設展のみの開館日：124日</p> <p>本年度は、常設展示室に高精細画像鑑賞システム「名画ナビゲーション」を新規設置した。本年度の企画展・特別展に出品した一部の遺物の高精細写真を取り込み、企画展・特別展終了後も、来館者が過去の出品遺物の写真を自由に拡大して観覧することができるようになった。</p>			
			夏期企画展 展示室内風景
<p>(2) 開催期間：26年7月12日～9月21日</p> <p>55年間に及ぶ平城宮跡の発掘調査で出土した様々な遺物や遺構の中から、一番大きいものや一番多いものなど、卓越した特徴をもつものを集めた子供向けの展示を行なった。関連イベントとして、ギャラリートーク「ビックリ先生のじまん話」、親子ワークショップを開催した。</p>			
<p>(3) 開催期間：26年10月18日～11月30日</p> <p>本年で8回目となる年に一度の木簡の実物展覧会で、本年は「木簡を科学する」というテーマに基づいて展示を行なった。木簡の樹種や木取り、保存処理の方法、木製品や考古遺物としての特質などに焦点を当て、木簡研究の最新の成果を紹介した。あわせて、埋蔵文化財センター設立40周年を記念し、当センターのこれまでの歩みや各研究室の最新の研究成果などを写真パネルにて展示した。</p>			
<p>(4) 開催期間：26年12月6日～27年2月1日（Ⅰ期）、27年2月14日～3月31日（Ⅱ期）</p> <p>前年度は春期企画展として開催した平城地区の発掘速報展を、成果を展示として公開しやすい時期の選択と、企画展示室の開室期間の拡大のため、本年度より冬期に開催した。展示企画室半分のスペースを使用し、会期を2期に分けるミニ展示とし、Ⅰ期、Ⅱ期それぞれ主要2遺跡の調査成果について、出土品や調査写真を元に紹介した。</p>			
<p>(5) 前年度の展示についての研究成果を『奈良文化財研究所紀要』などで論文公表した。</p>			
<p>(6) 全国の博物館等展示施設企画展へ出土品の貸出業務、外部からの問い合わせ対応を行った。</p>			
【実績値】			
<p>平城宮跡資料館 26年度 入館者数 109,188名(目標値：83,500名)、開館日数 309日。 特別展開催数 1回(目標値年1回)、企画展等開催数 2回(目標値年1回)</p> <p>(参考値)</p> <p>(1) 常設展のみ 124日、入館者 52,221名</p> <p>(2) 会期 72日、展示品 85件、入館者 17,712名、ギャラリートーク 5回(参加者計 145名)、親子ワークショップ 1回(参加者 35名)、リーフレット 1部 ①)</p> <p>(3) 会期 39日、展示木簡 78点(3期に分けて各期 26点)、埋蔵文化財センターの40年展示パネル 11点、入館者 19,281名、ギャラリートーク 3回(参加者計 124名)、リーフレット 1部 ②)</p> <p>(4) Ⅰ期会期 45日、展示品 51件、Ⅱ期会期 45日、展示品 76件、入館者計 19,974名、リーフレット 2部 ③)</p> <p>(5) 論文数：2件④)、(6) 貸出件数 17件、問い合わせ件数 32件</p>			
【備考】			
<p>① 『平城京ビックリはくらんかい』2014.7.12、フルカラー16頁、5,000部刊行。</p> <p>② 『地下の正倉院展－木簡を科学する－』2014.10.18、フルカラー16頁、7,000部刊行。</p> <p>③ 『ミニ展示発掘速報展平城2014 Ⅰ期』2014.12.6、フルカラー4頁、1,500部刊行。 『ミニ展示発掘速報展平城2014 Ⅱ期』2015.2.14、フルカラー4頁、1,500部刊行。</p> <p>④ 中川あや・渡邊淳子「平城宮跡資料館夏期企画展における新たな試み」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6 中川あや「出土品をアートとして眺め・楽しむ試み」『歴博』No.185 国立歴史民俗博物館2014.7</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6311

自己点検評価調査

研No.70

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	A	B	B
判定理由 適時性：夏期企画展では、平城地区の本格的発掘調査 55 年の節目となる年に、それまでの調査を振り返って卓越した成果を取り上げ、秋期特別展では、埋蔵文化財センター創立 40 周年を記念して、考古科学分野での最新の研究成果を紹介し、さらに考古科学分野を意識したテーマで地下の正倉院展を行なうなど、本年度にふさわしい展示が実施できたといえる。 独創性：夏期企画展では、一般の歴史系展示施設で行なわれる考古学的な見地からではなく、子供が理解しやすい「一番ビックリするもの」という端的な視点にもとづく展示を実施した。また、秋期特別展では、木簡に書かれた文字ではなく、木製品や考古遺物としての側面に焦点を当てたことも従来の木簡展示にはみられなかった新規の視点といえる。 発展性：平城宮跡資料館の従来の企画展・特別展に比して小規模なミニ展示の開催は初の試みで、予算や準備時間を小規模に抑えつつ、来館者には変化のある資料館展示を印象づけることができるため、今後、ミニ展示という枠で様々な展示が行ないやすくなるという点で応用性が期待できる。 効率性：ミニ展示を、通常は常設展しか見られない冬期（12月～3月）に開催したことで、年間を通じた企画展示室での企画展・特別展開催期間を大幅に拡大することができた。 継続性：夏期企画展は前年度好評であった子供向け展示を本年度も開催した。秋期特別展の地下の正倉院展は年間を通じて最も来館者が獲得できる、平城宮跡ならではの人気の高い展示であり、本年度で8回目の開催となる。いずれの展覧会も、前年度以前とコンテンツは全く変えて、来館者の満足度を高める努力をしている。また、常設展示については、来館者と直接的に接するボランティアガイドの質問票への解答を行い（本年度 25 件）、常設展示のわかりやすさを向上させる努力を払い続けている。 正確性：企画展・特別展ともに、出土品を管理、研究する都城発掘調査部の協力の下に行なっており、展示構成立案段階、リーフレット入稿前に都城発掘調査部員に入念に内容確認してもらうことで、学術的正確性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	入館者数	開館日数	特別展開催数	企画展等開催数		
評定	A	B	B	A		
判定理由 入館者数：目標値 83,500 名に対して、実際の入館者数 109,188 名（達成率 131%） 公開日数：定期休館日を除けば例年同様、毎日開館した。 特別展開催数：目標値 1 回を達成した（達成率 100%）。 企画展等開催数：新規で行ったミニ展示（1 回）を含む、目標値 1 回に対し 2 回達成した（達成率 200%）。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価、定量的評価、いずれの観点からも、当初の目標を達成し、十分な成果を上げることができた。特に、従来は常設展のみの期間におけるミニ展示の開催が本年度初の試みとして評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平成 22 年のリニューアルオープン以降、地下の正倉院展、発掘速報展を連続的に実施しており、本年度も充実した内容の展示を行った。また、前年度以来、子供向け展示の開催が定着しつつある。開催数の達成はもちろん、平城宮跡にかかわる多彩なコンテンツを、様々な層の来館者に楽しんでもらえる様な展示内容を提供できたという点で、量のみならず質的にも所期の目標を十分に達成していると判断する。最終年度となる 27 年度は、引き続き充実した展示活動を行って来館者の獲得につなげ、リニューアル後の 5 年間の締めくくりとしたい。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	飛鳥資料館における展示公開(③-②)		
【事業概要】			
飛鳥資料館第1、第2展示室の常設展示の維持管理を行うとともに、展示の手直しを適宜行う。特別展を春秋の2回開催するとともに企画展、講演会を開催する。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】			
西田紀子(学芸室研究員)、丹羽崇史(学芸室研究員)			
【主な成果】			
<p>(1) 常設展示室の展示内容を部分的に改装、映像コーナーの映像を入れ替えた。</p> <p>(2) 春期特別展「いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー」を26年4月25日～6月15日に開催し、記念座談会を26年5月11日に開催した。ギャラリートークを3回(26年4月26日、5月11日、5月24日)実施した。</p> <p>(3) 夏期企画展「第5回写真コンテスト「飛鳥の薨」応募作品展」を26年7月25日～9月7日に開催し、写真教室を26年7月25日、8月23日に開催した。</p> <p>(4) 明日香村活性化事業「飛鳥光の回廊」に参加した。26年9月13日～14日開催。</p> <p>(5) 企画展「津田洋 大和の美仏に魅せられて」を26年9月12日～9月28日に開催した。</p> <p>(6) 秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー」を26年10月10日～11月30日に開催し、記念講演会を26年11月1日に開催した。ギャラリートークを4回(26年10月10日、11月22日に2回ずつ)実施した。</p> <p>(7) 冬期企画展「飛鳥の考古学2014- 縄文・弥生・古墳から飛鳥へ-」を27年1月16日～3月1日に開催。ギャラリートークを4回(27年1月17日、2月15日に2回ずつ)実施。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 第1展示室、第2展示室、特別陳列室の展示品を部分的に変更した。映像コーナーはソフトを入れ替え、奥飛鳥の文化的景観の新作映像と、既存映像をハイビジョン化した3本を導入した。</p> <p>(2) 飛鳥時代の様々な手工業生産技術に焦点をあて、古代の匠と再現品を作成した現代の匠を対比させた。脇田宗孝氏、小泉武寛氏と、当研究所の松村恵司、玉田芳英の4名による記念座談会「いにしへの技術を語る-現代の「匠」と考古学者-」を実施した。</p> <p>(3) 「飛鳥の薨」をテーマに募集した作品を展示し、優秀作品を選出した。写真教室「①写真のパソコン仕上げ術」「②デジタルプリントテクニック」を開催した。当研究所が撮影した薨のある民家を紹介した「飛鳥の薨マップ」を作成した。</p> <p>(4) 明日香村活性化事業の夜間照明イベントに参加し、前庭にろうそく約3,500本を並べて演出し、夜間無料開館した。</p> <p>(5) イラストレーター津田洋氏による大和の仏像画を展示した。</p> <p>(6) 当研究所の埋蔵文化財センター設立40周年を記念し、遺構を現地以外で保存・公開できるよう資料化する技術に焦点をあて、土層や遺構の剥ぎ取り(土層転写)または切り取りによる実物資料、型取りによるレプリカなどを紹介した。記念講演会として澤田正昭氏「もうひとつの遺跡保存ー土層転写と遺構切り取りー」を開催した。</p> <p>(7) 飛鳥時代の宮殿・寺院のイメージが強い飛鳥にも縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺跡が多数あることに焦点をあて、近年の発掘調査成果を中心に紹介するとともに、25年度の飛鳥地域の発掘成果を展示した。奈良県立橿原考古学研究所、明日香村と共催。</p>			
			
		(6) 秋期特別展 ギャラリートーク	
【実績値】			
飛鳥資料館 26年度来館者数38,096名(目標値:48,800名)。特別展開催2回(目標値:年2回)、企画展等開催3回(目標値:年1回以上)、講演会等開催13回(座談会1回、講演会1回、ギャラリートーク11回)、図録類刊行4冊。			
(2) 会期52日間。来館者数10,597人。陳列件数145件。座談会参加者51人。ギャラリートーク3回。図録1冊(①)			
(3) 会期39日間。来館者数3,505人。応募・陳列件数213点。写真教室参加者計25人。リーフレット1冊(②)。			
(4) 会期2日間。来館者数865人(昼間383人、夜間482人)。			
(5) 会期15日間。来館者数2,716人。陳列件数20点。カタログ1冊(③)。			
(6) 会期52日間。来館者数9,592人。陳列件数66件。講演会参加者40人。ギャラリートーク4回。図録1冊(④)。			
(7) 会期39日間。来館者数2,658人。陳列件数313点。ギャラリートーク4回。カタログ1冊(③)。			
【備考】			
①飛鳥資料館研究図録第60冊『いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー』2014.4. 1,600部刊行。			
②リーフレット「飛鳥の薨マップ」2014.7. 10,000部刊行。			
③飛鳥資料館カタログ第31冊『大和の美仏に魅せられて』2014.9. 1,600部刊行。			
④飛鳥資料館図録第61冊『はぎとり・きりとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー』2014.10. 1,600部刊行。			
⑤飛鳥資料館カタログ第32冊『飛鳥の考古学2014』2015.1. 1,600部刊行。			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6321

自己点検評価調査

研No.71

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：(6) 秋期特別展は埋蔵文化財センター40周年の節目をとらえ、一般に紹介されることが少ない遺構の剥ぎ取りなどの保存科学的技術を紹介し、学会の第一人者の講演会を実施できた。</p> <p>独創性：(3) 夏期企画展「飛鳥の甕」は一般から写真を募集する参加型の企画で、古民家の瓦屋根にテーマを限定した点が建築や景観を研究している当研究所にふさわしく、他の写真コンテストと一線を画する。(6) 秋期特別展は土層剥ぎ取り技術を開発した当研究所の歴史を最大に活かしている。</p> <p>発展性：(3) 夏期企画展は写真コンテストと連動した企画で、文化財や歴史に関心のある方々と写真に関心のある方々の双方にアプローチできる企画である。(7) 冬期企画展「飛鳥の考古学」は周辺の他機関と連携した企画で、飛鳥地域の発掘調査成果をもとにさまざまな切り口で紹介するものである。毎年新発見が続く飛鳥において学術的成果の還元と、地域住民に文化財保護と調査研究の最新情報を知っていただく場としても重要である。</p> <p>効率性：3名の学芸室研究員で6つの企画を滞りなく実施することができた。</p> <p>継続性：(3) 夏期企画展の写真コンテストは第5回となり、好評につき今後も継続する予定である。(7) 冬期企画展「飛鳥の考古学」は18年度から継続して実施しており、周辺自治体の文化財関連部門との連携を続けている。</p> <p>正確性：各展覧会では実物資料を中心に展示し、資料の真正性を確保した。(5) 企画展「津田洋 大和の美仏に魅せられて」では作者の津田氏にポスターデザインから会場での陳列方法まで直接意見交換をして、作家の意図を正確に表現した。</p>						

2. 定量的評価

観点	来館者数	特別展開催数	企画展等開催数	講演会等開催数	図録類刊行数
評定	D	B	A	A	A
<p>判定理由</p> <p>来館者数：来館者数は目標値の78%で目標値を下回った。</p> <p>特別展開催数：目標値(年2回)を達成した。</p> <p>企画展等開催数：企画展開催目標値(年1回以上)の120%以上(3回開催)を達成した。</p> <p>講演会等開催数：目標(年2回)に対し13回開催した。</p> <p>図録類刊行数：目標(年2冊以上)に対し4冊刊行した。</p>					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>来館者数は飛鳥全体の観光客が減少するなかで当館も伸び悩んでおり、増加のための工夫が求められる。</p> <p>展覧会は特別展2回、企画展3回を開催して、来館者を飽きさせない努力をしている。講演会やギャラリートークも精力的に開催している。写真コンテストと写真教室のように参加型の企画を設定し、当館の活動への積極的関与も工夫している。展覧会の内容は当研究所あるいは飛鳥という歴史的な地域の特性を活かした内容となっており、3名の学芸室研究員で複数回の展覧会を実施するために効率的な運営にも努力している。総合的評価としてはBといえる。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>特別展などによる当研究所の調査研究成果の公表、地方公共団体や他機関との連携・協力体制の構築については順調と判定できる。入館者数は課題だが、交通アクセスの不便さをたびたび指摘されているところであり、交通インフラ整備や広い駐車場確保など、容易に解決しがたい問題も多い。展覧会の内容は当研究所の展示施設として適切な質を維持しており、今後は参加型の企画も増やしつつ、最新の学術成果をわかりやすく伝えるよう努力していきたい。</p>

業務実績書

研No.72

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	藤原宮跡資料室における展示公開(3-③)		
【事業概要】 都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区) 庁舎に併設された藤原宮跡資料室及びエントランスにおいて、常設展示、発掘調査成果の速報展示などを実施し、展示公開の充実を図る。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、降幡順子、山本 崇、森川 実、廣瀬 覚(以上、都城発掘調査部主任研究員)、和田一之輔、諫早直人(以上、考古第一研究室研究員)、若杉智宏、大澤正吾(以上、考古第二研究室研究員)、森先一貴(考古第三研究室研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、金宇大(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【主な成果】 常設展示及び発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の充実を図った。庁舎エントランスの速報展示コーナーでは、最新の調査研究成果の公開を実施した。その他、適宜展示解説や各地の博物館への文化財貸与を行った。			
【年度実績概要】 ・都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区) 庁舎に併設された藤原宮跡資料室において、通年にわたり常設展示を実施した。 ・庁舎エントランスに設置した発掘調査成果の速報展示コーナーにおいては、夏季速報展として甘樫丘東麓遺跡の出土遺物と、藤原宮朝堂院地区の出土遺物の展示を行った。また、25年度から行っている「東日本大震災復興調査における奈文研の取り組み」のパネル展示を行った。 ・24年度から行っている橿原市の解説ボランティアによる土日開館を行った。 ・各地の博物館等の要請に応じ、当調査部保管遺物ならびに模型・模造品などの貸与を行った			
			
庁舎エントランスにおける速報展展示			
【実績値】 入室者数：8,461名(目標値4,509名)、開室日数：356日 (参考値) 他機関への所蔵品貸出：18件319点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6331

自己点検評価調査

研No.72

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：調査研究成果を常設展示と速報展示などにより公開し、社会からの多様な要望に対応した。 独創性：調査機関ならではの豊富な実物展示、発掘調査に関連した展示に独創性がある。 発展性：調査研究の進展に合わせ、展示内容を発展・更新させた。 効率性：最新の調査研究成果が得られてから、その公開を短期間のうちに効率的に行った。 継続性：常設展示及び速報展示を通年で公開し、研究の進展にあわせて継続的に内容を更新している。 正確性：調査研究の従来の蓄積と最新の成果をわかりやすく、正確な内容で展示公開した。						

2. 定量的評価

観点	入室者数	開室日数				
評価	A	B				
判定理由 入室者数：展示の更新や工夫を行い、目標値 4,509 人を上回った。 開室日数：計画通り土日開室を継続し、年末年始を除き、毎日開館した						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	昨年度に引き続き速報展示を随時変更するなどし、調査成果の速報性を維持している。また、昨年度に引き続き土日開館の実施により、入室者数及び開館日数を維持し、調査研究成果の公表に貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目にあたる26年度は、土日開館を継続し、常設展示及び速報展示なども充実した内容で継続的に実施し、最終年度の27年度に向けて着実な成果を上げているためBと判断した。

業務実績書

研No.73

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化庁平城宮跡管理事務所の運営への協力 ((4)-①)		
【事業概要】			
文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力する。			
【担当部課】	研究支援課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長 今西康益
【スタッフ】			
江川 正(宮跡等活用支援係長)、三本松俊徳(宮跡等活用支援係係員)			
【主な成果】			
(1)文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力し、文化庁の平城宮跡等整備事業に協力した。			
【年度実績概要】			
(1)文化庁平城宮跡等管理事務所の文化庁施設の公開・活用等に対し、以下のとおり積極的に協力した。			
○文化庁施設の公開・活用に対して利用申込者との連絡調整			
○文化庁が実施する各種行事及び宮跡利用者による各種行事、発掘調査等に係る連絡調整			
・関係機関等視察対応			
○宮跡内施設(建物、諸設備、工作物等)の整備、維持管理及び修繕等に係る文化庁への助言			
・県道奈良精華線への歩道の設置計画			
・第一次大極殿見学者用スロープ改修工事			
・平城宮跡内電気設備(高圧ケーブル)更新整備			
・東院庭園池設備等更新整備			
・便益施設機能整備(便所設備等)			
・東院庭園建物檜皮葺き替え設計			
・大極殿、東院庭園二重台風対策			
・遺構表示樹木(ツゲ)の剪定について			
・大極殿点検及び清掃			
・大極殿高御座の修理等			
・大極殿内部展示修理			
・佐紀池の管理について			
○住民等からの要望や意見の文化庁への取次ぎ			
・平城宮跡への来訪者、利用者、近隣住民等からの防火、防犯、植生及び運営等の意見			
			
第一次大極殿見学者用スロープ改修工事風景			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6411

自己点検評価調書

研No.73

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性				
評価	B	B				
<p>適時性：緊急性の高い事案に対して、提案、助言及び協力等を適時行った。</p> <p>正確性：現在の状況及び過去の経緯等に基づいた、提案、助言及び協力等を適切に行った。</p>						

2. 定量的評価

観点						
評価						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等に積極的に協力し、文化庁の要請に応じ、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等に対して適時、的確に対応している。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化庁管理事務所が行う文化庁施設の公開・利用等の連絡、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等の相談に対して適切に対応できている。また、文化庁施設（復原施設・便益施設等）の計画的整備に対しても現況に基づいた維持管理の提案、助言協力等が適切に行われている。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化庁・国土交通省が行う平城宮跡の復原・整備への協力（(4)－①）		
【事業概要】			
(1) 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力を行う。 (2) 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡等の公開・活用事業への協力を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】			
神野 恵、芝康次郎、庄田慎矢、浦 蓉子、尾野善裕、青木 敬、小田裕樹、今井晃樹、石田由紀子、川畑 純、 中川二美、渡邊晃宏、馬場 基、山本祥隆、箱崎和久、番 光、鈴木智大、松下迪生、中島咲紀、村山聡子、山本 崇、 清野孝之、森崎一貴、清野陽一、西山和宏、大林 潤、前川 歩（以上、都城発掘調査部）、林 良彦、海野 聡（以 上、文化遺産部）、小池伸彦、高妻洋成、脇谷草一郎（以上、埋蔵文化財センター）、上田浩司、田中康成、今西康益、 江川 正、三本松俊徳（以上、研究支援推進部）			
【主な成果】			
(1) 第一次大極殿院の建物復原研究のため、所内検討会及び有識者を招聘した検討会を開催し、記録集を作成した。 (2) 文化庁や国土交通省が開催する会議等に対して、専門的・技術的な援助・助言を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・文化庁や国土交通省と共催し、第一次大極殿院の復原整備についての講演会を開催した。 ・平成12年度までに行った平城宮跡の整備について報告書を作成した。 ・平城宮跡の整備設計・工事等に対して、設計条件の整理、提出資料に対する助言、立会調査等を実施した。 			
【年度実績概要】			
(1) 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力 <ul style="list-style-type: none"> ・所内検討会を3回開催し、発掘遺構や現存建築などの資料収集と整理を行った。 ・有識者を招聘した瓦関係の検討会を3回開催し、助言を得て復原設計に反映させた。 第一次大極殿院の復原研究は、細部の検討を進めているが、今年度は建物の外観にも大きな影響がある鴟尾を中心とする瓦の検討を行い、現存建物には類例のない双頭双尾形式の回廊隅の鴟尾を復原することができた。 ・国土交通省が開催する「平城宮跡第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」において、第一次大極殿院の建物復原検討成果を発表した。 ・前年度及び本年度に行った上記の検討会の記録を冊子として発行した(①～④)。 ・文化庁記念物課が行う史跡等における歴史的建造物等の復元の取り扱いに関する専門委員会（「復元検討委員会」）に国土交通省が提出する資料作成について助言等を行った。 (2) 国土交通省や文化庁が行う平城宮跡等の公開・活用事業への協力 <ul style="list-style-type: none"> ・文化庁が開催する「平城宮跡及び藤原宮跡等の保存整備に関する検討委員会」に出席し、平城宮跡及び藤原宮跡の発掘調査について発表し助言を得、研究に反映した。 ・平城宮跡の整備の歴史、第一次大極殿院の位置づけ及び建物の復原について、「特別講演会 第一次大極殿院の復原整備」として一般向けの講演会を開催し、復原案を公表した(⑤)。 ・平城宮跡内の整備工事にあたり、発掘調査や立会調査を行って記録を作成した。 			
			
第60回所内検討会（遺物を見ながらの検討）			
【実績値】			
(1) 検討会開催数 6回（第一次大極殿院建物復原に関する所内検討会開催数3回、有識者招聘検討会開催数3回） 報告書の刊行 4冊(①～④) (2) 講演会の開催と発表 1回(⑤)			
（参考値）			
(2) 平城宮跡内の整備工事に伴う立会調査出動件数；18件 119日以上。 (2) 文化庁や国土交通省が開催する会議等への出席；3回			
【備考】			
①～②『第一次大極殿院復原検討会記録9』・『同10』（内部資料）26年8月。 ③～④『第一次大極殿院復原検討会記録11』・『同12』（内部資料）27年3月。 ④ 特別講演会『平城宮跡第一次大極殿院の復原整備』27年2月8日、当研究所講堂にて開催。当研究所の発表者2名。			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6412

自己点検評価調査

研No.74

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：必要な検討を適時に行い、また有識者から有意義な助言等を得た。またこれらを復原設計に反映させた。文化庁や国土交通省の各種要請に対し、的確に対応することができた。 独創性：遺構と遺物の精緻な観察や分析、さらにそれらの総合的な学際的検討を行った。 発展性：『平城宮跡整備報告書』等の刊行により、今後の平城宮跡の整備・活用に資する基礎的資料をまとめた。講演会の開催により、一般市民の文化財研究・活用への理解・関心を高め、将来にわたる積極性を高めた。 効率性：事前に研究室内での検討を行い、所内検討会の論点を整理して、議論の効率化を図った。立会調査等にあたり、事前打ち合わせ等を通じて、作業効率の向上に努めた。 継続性：所内検討会の継続的開催、及び継続的な資料の収集や分析を、立会調査も含めて行った。 正確性：精緻な研究や分析に基づきつつ、かつ適宜外部有識者の意見を取り入れながら行った。各種の対応や助言は的確に行った。						

2. 定量的評価

観点	検討会開催数	講演会の開催と発表	報告書等の刊行			
評定	B	B	B			
判定理由 検討会開催数：目標回数6回を達成した。 講演会の開催と発表：当初計画にはなかった、講演会を1回行った 報告書等の刊行：目標件数検討会記録4件・報告書1件を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次大極殿院の復原研究を、計画通り行い、大きな成果を得た。また、検討会記録を、当初計画通りに刊行した ・整備に伴う立会調査等を、遅滞なく適切に行うことができた。 ・市民向け講演会を共催し、また発表を行って広く情報発信を行うことができた。 なお、講演会は当初計画にはなかったが、重要な活動と考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・『平城宮跡整備報告書』を発行し、平城宮跡の整備の課題や今後の展望等を検討するための材料をまとめた。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。 次年度以降も、建物の装飾的細部や形式について、十分な検討を行ってゆく予定である。 今後も研究の成果をわかりやすく公表できるよう、さらに工夫をしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力ため、復原研究を着実に進めた。また、報告書を計画通り刊行した。 ・文化庁と国土交通省が行う平城宮跡の公開・活用事業に関連する会議等に参加した。また、報告書を刊行した。 ・文化庁や国土交通省が行う平城宮跡整備工事等への立会調査等を遅滞なく行った。 以上よりBと判定する。 なお、第一次大極殿院の建物復原研究では、実際に建物を建てるために細部形式の検討が必要になっている。文化財建造物保存技術協会等と連携しつつ、遅滞なく細部形式の決定を行っていききたい。また、これらの研究の成果を報告書としてまとめ、全国の遺跡整備の参考となるようにしていきたい。 平城宮跡全体の整備に対しても、文化庁や国土交通省と連携を図りながら、よりよい保存・整備・活用ができるよう尽力したい。

業務実績書

研No.75

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設への協力((4)-①)		
【事業概要】			
国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設とその展示に対して、助言・協力を行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】			
西田紀子(学芸室研究員)、丹羽崇史(学芸室研究員)			
【主な成果】			
<p>(1) 国営飛鳥歴史公園事務所の依頼に基づき、キトラ古墳体験学習館の展示に資する奈文研所蔵資料一覧の中から実際に貸与可能な物件と、貸与の場合に求められる条件を提示した。</p> <p>(2) 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）と協力して国営飛鳥歴史公園事務所と展示内容について助言・協力を行った。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 飛鳥資料館及び都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）が保管しているキトラ古墳関連の出土品、土層断面剥ぎ取り、レプリカ、再現品、陶板などをリストアップし、文化庁と協議の上、貸与可能な物件を提示した。その際、実物文化財を展示する場合は相応の管理体制、環境制御などが必要であることを示した。それらの情報に基づき、具体的な内容は国営飛鳥歴史公園事務所側が検討中である。</p> <p>(2) 国営飛鳥歴史公園事務所から提示された体験学習館及び公園内解説パネル案について、学術的内容に関する助言と資料提供を、文化庁とともに、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）と協力して行った。協議は計5回行い、展示構成に関する助言、解説内容に関する助言、必要な学術的資料の提供あるいは教示、解説パネルの原稿のチェックなどを行った。</p>			
			
<p>キトラ古墳 土層断面剥ぎ取り資料</p>			
【実績値】			
協議回数 5回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6413

自己点検評価調査

研No.75

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：28年度開園にむけ作業が進む中で、展示、解説の内容を作成する過程で学術的な側面から協力することができた。 独創性：キトラ古墳、国営飛鳥歴史公園内檜隈地区の発掘調査と研究を継続してきた機関として、専門的知見を発揮できた。 発展性：わかりやすく解説するための関連情報の整理など、今後の当研究所の活動にも有益な情報を集めた。 効率性：定期的に文化庁、当研究所、国営飛鳥歴史公園事務所及び各種担当業者が介して協議することで、効率的に課題を洗い出して対応することができた。 継続性：昨年度まで継続してきた活動を踏まえて今年度から実際の展示内容の作成に動き出したものであり、来年度も継続し、開館に向けて活動を継続する必要がある、その体制が整っている。 正確性：調査研究を行ってきた当事者である当研究所が協力することで、文化庁の施策、国営公園の方針などに合致しつつ、学術的な正確さを確保できている。						

2. 定量的評価

観点	協議回数					
評定	B					
判定理由 協議回数：関係者が一堂に会する協議を5回実施し、十分な回数の協力をしていると判定できる。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	体験学習館及び公園内の展示・解説に関して、当研究所の保管する資料や知見の蓄積を活かして正確性を確保しつつ、効率的に協力することができた。 文化庁及び当研究所が行ってきた文化財保護と活用、調査研究活動について公園施設を通じて広く知っていただくことと、学術的成果を還元するという点でも有効な活動であり、次年度もさらに推進したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画どおり達成している。28年度の開館にむけ、さらに協力をすすめたい。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設への協力（6-(4)-①）		
【事業概要】 国土交通省が建設予定の平城宮跡展示館・詳覧ゾーンに関して、展示品の選定や展示内容の企画立案と、それらを効果的に行うための展示評価、類似展示施設の状況調査を実施する。			
【担当部課】	企画調整部展示企画室	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山洋
【スタッフ】 加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、渡邊淳子(前展示企画室アソシエイトフェロー)、中村 玲(展示企画室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 (1) 展示評価のためのアンケート調査、フォーカスグループインタビューを実施した。 (2) 遺跡立地型展示施設等にて展示手法の調査を実施した。 (3) 詳覧ゾーン基本設計の展示内容を一部修正し、展示候補品を再選定のうえ、リストと資料カードを作成した。			
【年度実績概要】 (1) 前年度にまとめた詳覧ゾーン基本設計案の課題等を克服するため、展示評価の各種調査を、展示評価の専門家とともに実施した。アンケート調査は、①通常遺物や文化財に接している非研究者、②平城宮跡資料館継続来館校を対象に、フォーカスグループインタビューは模型関連専門家、展示館近隣の小中学校教員、他施設異分野学芸員・展示関係者を対象に実施した。 (2) 遺跡立地型展示施設等の視察調査 平城宮跡展示館と同様、遺跡隣接型の展示施設について、展示施設と遺跡双方の関連づけ、誘導するための展示手法等について調査を行い、展示施設と遺跡が、双方を訪問したくなるような効果を狙って関連付けられている事例が少ない等の知見を得た。 (3) (1)と(2)の調査成果をふまえ、詳覧ゾーン基本設計展示案の見直しを行い、展示内容を一部修正した。修正案を元に、新たに展示室内平面図とスケッチ（パース）を作成した。また、新規の展示内容に基づいて、展示候補品を選定し、リストと資料カードを作成した。 ・ 詳覧ゾーン以外のゾーン（公園案内ゾーン、ガイダンスゾーン）の展示計画案について専門的な見地から指導をおこない、展示構成について詳覧ゾーンとのバランスや関連性について検証した。また、国土交通省が実施した当該ゾーン体験展示の展示評価について協力した。 ・ 前年度の詳覧ゾーン展示評価・視察調査の成果を論文として公表した。			
			
<p>フォーカスグループインタビューの様子</p>			
（参考値） 展示評価アンケート調査 2回（回答数①83件、②14件）、フォーカスグループインタビュー調査 3回（計11人）、他の博物館・展示施設の視察調査：32施設、 作製平面図 10点・スケッチ 9点、展示候補物資料カード 249件 論文数：1件 国土交通省地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所平城分室との定例会 7回 平面図・スケッチ作成業者との打ち合わせ 10回 展示評価専門家との打ち合わせ 4回			
【備考】 中川あや・渡邊淳子・黒岩啓子「平城宮跡資料館来館者を対象とした展示評価調査と都城関連遺跡展示の現状と課題『奈良文化財研究所紀要 2014』2014.6			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6414

自己点検評価調査

研No.76

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：27年秋に実施設計を迎えるにあたり、展示案の大幅な見直しが可能で最終年度である本年に、各種調査を実施し適切な修正を行うことができた。</p> <p>独創性：従来、平城宮跡内の展示施設は、高齢者や歴史愛好家を対象とした展示となっていたが、アンケート調査やフォーカスグループインタビューで、学習目的での来館利用度が高い小中学生層の志向を探ることで、従来とは異なる視点の、新たな展示内容を提案することができた。</p> <p>発展性：本年度の成果をもとに、次年度の実施設計にスムーズに臨むことが可能になった。</p> <p>効率性：前年度は国土交通省に業務委託された展示業者から、業務再委託を受けて展示内容の調整業務を行っていたが、今年度は、国土交通省から直接受託することで、国土交通省との情報共有や双方の意見交換を直接的に行うことができた。</p> <p>継続性：次年度の実施設計では、展示評価のうち製作途中評価の調査に進む予定であるが、25・26年度に展示評価（企画段階評価）を実施したことで問題意識を継続して持ち続け、一貫性のある調査が可能となる。</p> <p>正確性：展示評価のアンケート調査を、対象として抽出した人全員（学校全て）に行い、いずれも約9割の回答を得、データの網羅的な収集が叶った。また、展示候補品のリストを全点カード化し、それぞれの法量、画像などが確認できる基礎データを固めた。</p>						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>詳覧ゾーン基本設計の見直しが可能な最終年度にあたり、各種調査を滞りなく行い、迅速に展示内容にフィードバックすることで、より魅力ある展示内容へと修正を実施することができた。これによって、次年度の実施設計に順調に進むことができるため、総合的評価としてはBと判断した。次年度も引き続き、展示評価等の調査を行い、成果を実施設計に反映していく予定である。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>25・26年度は、基本設計と実施設計の間の空白期間で、当初は基本設計の見直しが計画されていなかったが、この二か年、展示評価や視察調査を継続的に実施した結果、基本設計での課題を克服するための大幅な内容変更を行うことができた。基本設計の見直しを二か年かけて行ったことにより、来館者にとって平城宮跡についてより分かりやすく、より魅力が感じられる内容になったと考える。最終年度となる27年度は、実施設計が行われる予定であり、今期5ヵ年かけて検討を重ねてきた内容が実際の展示として効果的に結実するよう、内容詳細を固めていく予定である。</p>

業務実績書

研No.77

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティア事業の実施 ((4)-②)		
【事業概要】			
平城宮跡への来訪者に当研究所の調査研究の成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化財に対する理解を深めてもらうため、平城宮跡資料館や遺構展示館、東院庭園、朱雀門、第一次大極殿の復原建物等の案内・解説を行う平城宮跡解説ボランティアの運営を実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】			
加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、渡邊淳子(前企画展示室アソシエイトフェロー)、中村 玲(企画展示室アソシエイトフェロー)、松本正典(連携推進課課長補佐)			
【主な成果】			
高い知識に基づく解説をより多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 定点解説のほか、予約及び当日受付した来訪者を対象に「ツアーガイド」として宮跡内散策に同行し解説を行った。 ・ 活動者に対しては、当研究所が主催する専門研修及び他機関の文化財に関するボランティアガイドが解説する場へ赴き、臨地研修を実施した。 ・ 活動拠点でもある平城宮跡資料館において、企画する展示ごとに展示趣旨の解説を、その都度当研究所研究員によって実施した。 			
			
平城宮跡解説ボランティアによるガイド風景			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 平城宮跡解説ボランティア登録数：144名 (参考値) <ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティア解説を受けた来場者延べ人数 83,773人 ・ 解説活動日数：308日 ・ 解説活動者延べ人数：3,915人(1日当たり：13人) ・ 解説ボランティアに対する学習会等回数：4回 <ul style="list-style-type: none"> 平城宮跡資料館夏期企画展の展示研修：1回 平城宮跡資料館秋期特別展の展示研修：1回 講演形式専門研修：1回 臨地ガイド研修：1回 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6421

自己点検評価調査

研No.77

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：来訪者の様々な知識需要・必要性に対し、その場にて十分な対応ができた。 発展性：多種多様な層の来訪者へ解説ができ、海外からの来訪者に対する反響は大きかった。 効率性：解説ガイド申込の際に、来訪者へのアドバイスなど行うことで、解説に係る時間的・人的投資は、効率よくできた。 継続性：年間を通して、とぎれず継続した解説者の配置を行うことができた。 正確性：研修で得た知識・経験を基に正確な情報を伝えることができた。						

2. 定量的評価

観点	平城宮跡解説ボランティア登録数					
評定	B					
判定理由 平城宮跡解説ボランティア登録数：ガイドに必要な人数が、十分に達成されている。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ガイドに必要なボランティアを確保することができた。 解説ボランティアに対しては、特別展など展示内容の講習会や公開講演会への参加を通して、登録ボランティアの知識を高め、解説ボランティアガイドを行うにあたっては、来訪者に対し文化財の理解を広めることに大いに貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	解説するボランティアへの学習・研修の機会を提供し、そのレベル向上につなげ、広報による解説受講者数の増加を図ることなど、ボランティア運営の積極的な実施ができたと考える。 今後もこのペースを維持し、当研究所の情報発信、さらには平城宮跡の公開活用につながるよう力を注ぎたい。 次期中期計画に向けて27年度においては、新しく解説ボランティアを募集し、研修を行うことによって、登録ボランティアの育成を行う。

業務実績書

研No.78

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡防災・防犯パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加（(4)－③）		
【事業概要】平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に関して、平城宮跡みまもり隊へ参加することにより、平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に寄与する。			
【担当部課】	研究支援推進部研究支援課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長 今西康益
【スタッフ】 江川 正(宮跡等活用支援係長)、三本松俊徳(宮跡等活用支援係係員)			
【主な成果】 平城宮跡来訪者に平城宮跡内でのマナーの向上や防災・防犯活動を行っていることを理解してもらうことができた。みまもり隊の活動が近隣住民、来訪者に浸透した結果、一般人の参加者が前年度を上回った。			
【年度実績概要】 平日は平城宮跡内を巡回し、火災や宮跡内にある看板等の毀損予防のパトロール活動を行った。月1回の土日のボランティア活動では、平城宮跡来訪者に防犯メッセージが書かれたティッシュペーパーの配布や声かけを行い、マナー向上や防災・防犯意識を高める活動を行う等、事務局として連絡調整を行った。 年1回、文化庁平城宮跡管理事務所、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所平城分室、奈良県、奈良市、所轄警察署及び所轄消防署の行政機関やNPO法人平城宮跡サポートネットワークによる連絡会議を開催しパトロール活動の報告を行った。			
			
平城宮跡みまもり隊(青色パトロール)		平城宮跡みまもり隊(宮跡内巡回パトロール)	
【実績値】 平均参加者数：13.22人 一般参加者数：14人			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.78

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：時期によって異なる事案（行楽シーズン、花火等）に対して、啓発の方法・パトロール開始時間等を変更して活動を行った。 発展性：参加者はみまもり隊員に加え、一般市民も加わった。 継続性：毎月の活動日をあらかじめ設定し、定期的に行うことにより、参加者が欠員することなく、継続的に事業を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	平均参加者数	一般参加者数				
評定	B	B				
判定理由 平均参加者数：予定していた数の参加者を得た。 一般参加者数：一般の参加者についても、予定していた参加者に協力を得られた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	一般参加者数が年々増えてきており、従来の関係行政機関・NPO法人等だけで行う活動ではなくなってきている。次年度以降については、より一般の参加者を増やすために、近隣の自治会、学校等に働きかけたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	行政機関・NPO法人等以外の一般参加者数が増加しており、みまもり隊の活動が平城宮跡の利用者や近隣住民に浸透したと思われる。中期計画最終年度である次年度は、近隣自治会、学校等に働きかけ、一般の参加者を増やし、平城宮跡に係る地域活動にしたい。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	NPO法人等への支援 (4)ー④		
【事業概要】			
平城宮跡で活動しようとする各種ボランティア、また文化財関係のボランティアに対して要請があれば、当研究所施設を活動の場所として提供することや、文化財に関する学習会等への講師の派遣を行う等の支援を行い、ボランティア団体の育成に寄与する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】			
松本正典(連携推進課課長補佐)			
【主な成果】			
ボランティア団体への支援は、その育成につながった。 第29回国民文化祭シンポジウムに招待されて、平城宮跡及び平城京と秋田城との繋がりを紹介するとともに、遺跡ボランティア団体などによる遺跡紹介や交流イベントに参加し、平城宮跡の現状と魅力を発表した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、活動場所、講師の派遣、資料の提供など、積極的な活動支援を行った。 ・「子ども歴史教室」を共催で実施するとともに、「平城宮跡歴史講座」、「遺跡見学会」、「平城宮跡探検隊」を後援し、年間を通して連続した支援ができた。 			
			
平城宮跡探検隊 (どんぐり拾い)		講師派遣による遺跡見学会風景	
【実績値】			
(参考値)			
当研究所が支援し、ボランティアが実施した主な事業名称、回数、活動場所、従事ボランティア数、参加者数			
・「子ども歴史教室」、3回開催、平城宮跡資料館講堂・平城宮跡内、従事ボランティア数延べ22名、参加者数32名			
・「平城宮跡歴史講座」(講演会)、3回開催、平城宮跡資料館講堂、従事ボランティア数延べ45名、参加者数542名			
・「遺跡見学会」、2回開催、従事ボランティア数延べ10名、参加者数18名(講師派遣)			
・「平城宮跡探検隊」、1回開催、従事ボランティア数延べ13名、参加者数65名			
・「萬葉集」勉強会、12回開催、平城宮跡資料館小講堂、従事ボランティア数延べ184名、参加者数延べ196名			
・「続日本記」読書会、12回開催、平城宮跡資料館小講堂、従事ボランティア数延べ210名、参加者数延べ210名			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6441

自己点検評価調書

研No.79

1. 定性的評価

観点	発展性	効率性	継続性			
評定	B	B	B			
判定理由 発展性：子供たち等の将来につながる好影響のある体験学習が実施された。 効率性：当研究所の施設を有効かつ効果的に使用し、参加者への広報・成果発表につながった。 継続性：NPO法人への支援事業は、特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワークが13年11月に認証されて以降、継続的に実施されてきた。						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワークが実施する子ども歴史教室、平城宮跡探検隊、平城宮跡歴史文化講座等への講師派遣、活動場所提供等の支援を行い、協力することによりその活動の活性化に貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ボランティア団体の活動要請に対し、地元コミュニティの活動に対しても積極的に支援し、各事業が行われた。 今後も各種ボランティア育成とともに、次期中期計画に向けた27年度において、文部科学省の「土曜学習応援団」に賛同し、その事業にも寄与していきたい。

業務実績書

研No.80

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	文化財の収集、保管に関する指導助言 (1)―①)		
【事業概要】 地方公共団体等の実施する文化財の収集、保管、展示に対して援助するために、指導助言を行う。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務） 田中淳
【スタッフ】 山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、小林達朗（主任研究員）、小林公治（広領域研究室長）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）			
【主な成果】 各研究員の専門的知識を活かして、地方公共団体等の行う文化財の収集、保存、展示に対して指導助言を行った。			
【年度実績概要】 26年度は以下の組織等において指導助言を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・京都国立近代美術館作品収集委員会 1件 ・小杉放菴記念日光美術館・碧南市立藤井達吉現代美術館・萬鉄五郎記念美術館、多和英子 vs 放菴・達吉・鉄五郎展実行委員会 1件 ・東京国立近代美術館 海外日本美術資料専門家（司書）の招聘・研修・交流事業 実行委員会 1件 ・文化庁 文化関係資料のアーカイブに関する有識者会議 1件 ・千葉県美術館資料審査委員会 1件 ・岩手県立美術館美術品収集評価委員会委員会 1件 ・佐倉市立美術館運営協議会委員会 1件 ・公益信託 倫雅美術奨励基金運営委員 1件 ・茨城県近代美術館美術資料審査委員会委員会 1件 ・愛知県美術館美術品収集委員会委員会 1件 ・小杉放庵記念日光美術館評議員会 1件 ・秋田県立美術館アドバイザー会議 1件 ・迎賓館の改修に関する懇談会委員 1件 ・芸術文化振興基金運営委員会美術専門委員会 1件 ・豊島区美術品等収集・活用委員会 1件 ・横須賀市美術館収集委員会 1件 ・静岡県立美術館研究活動評価委員会 1件 ・静岡県立美術館美術館専門委員会 1件 ・福井県立美術館 特別展「真宗の美 親鸞と福井、ゆかりの名宝」（会期 26年9月26日～10月26日） 1件 ・『黒田清輝展』（京都府京都文化博物館）の展示指導 1件 ・浦添市美術館 1件 ・京都国立博物館 1件 ・八尾市教育委員会 1件 			
【実績値】 指導助言件数 23件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.80

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性	発展性		
評定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：依頼先の求めに応じて時宜を得て対処することができた。 継続性：複数の委員が複数年にわたって継続的に委嘱されており、助言の継続性が認められる。 正確性：求められている件についての的確な助言をすることができた。 発展性：提示した助言がよりよい文化財の保存や活用に反映された。						

2. 定量的評価

観点	指導助言件数					
評定	B					
判定理由 指導助言件数：前年度同様、充分かつ適切な助言を行うことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	助言数とその内容において十分な業務を行うことができたと考えている。 次年度も依頼された課題を的確に把握し、適切な助言を行っていききたい。そのためにも、通常の調査研究を着実にやっていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の中でも、十分な業務を行うことができた。 次年度も依頼された課題を的確に把握し、適切な助言を行っていききたい。

業務実績書

研No.81

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	無形文化遺産に関する助言(1)－①)		
【事業概要】			
地方公共団体等の依頼に基づき、それらの実施する無形文化財・無形民俗文化財の調査・保存・活用などの事業に対し助言を行う。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】			
高桑いづみ(無形文化財研究室長)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、菊池理予(研究員)、今石みぎわ(研究員)			
【主な成果】			
26年度は、無形文化遺産の保存・伝承・活用等に関して、文化庁文化財部伝統文化課に対する助言を始め、以下の助言を実施した。			
【年度実績概要】			
26年度は、無形文化遺産の保存・伝承・活用等に関する各種委員会等へ出席し、以下の助言を行った。			
<ul style="list-style-type: none"> ・新進芸術家育成事業(文化庁)への助言 1件 ・日本芸術文化振興会への助言 2件 ・岡山県高梁市への助言 1件 ・静岡県川根本町への助言 1件 ・富山県高岡市への助言 1件 ・岐阜県岐阜市への助言 1件 ・一般財団法人日本青年館への助言 1件 ・財団法人伝統文化活性化国民協会への助言 1件 ・公益社団法人全日本郷土芸能協会への助言 2件 ・早稲田大学演劇博物館への助言 2件 			
【実績値】			
助言件数	13件		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 7112

自己点検評価調査

研No.81

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
評価	B	B	B			
判定理由 適時性：民俗芸能（岡山県高梁市の盆踊り）、民俗技術（岐阜県岐阜市の鶺鴒）等、様々な分野の無形文化遺産に関する助言に的確に対応できた。 継続性：多くの委員を継続的に委嘱されており、当研究所研究員の助言等が高く評価されている。 正確性：国立劇場文楽賞の選考（日本芸術文化振興会への助言）等、各状況に応じた的確な助言ができた。						

2. 定量的評価

観点	助言件数					
評価	B					
判定理由 助言件数：例年と同様、十分な助言を実施できたと考えている。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度も各種委員会等への出席及び助言の依頼が寄せられており、無形文化遺産分野での様々な要望に的確に対応できたものとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	例年通り、多様な助言依頼に対応できており、計画は順調に達成できた。

業務実績書

研No.82

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	文化財の修復及び整備に関する調査・助言((1)－①)		
【事業概要】 地方公共団体等の実施する文化財の調査・保存・整備・活用などの事業に対して援助するために、文化財の修復及び整備に関する調査・助言を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田 健
【スタッフ】 中山俊介（近代文化遺産研究室長）、北野信彦（伝統技術研究室長）、朽津信明（修復材料研究室長）、佐野千絵（保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、早川泰弘（分析科学研究室長）、犬塚将英（主任研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、山下好彦（任期付研究員）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、大河原典子（客員研究員）			
【主な成果】 26年度は、蛍光X線分析やX線回折分析による材質調査、X線透過撮影による構造調査等、以下に示す調査・助言を実施した。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・26年度に実施した各地の国宝、史跡や重要文化財の保存や修復に関する指導助言は以下のとおりである。 国宝高松塚古墳壁画、特別史跡キトラ古墳壁画、国宝臼杵磨崖仏、重要文化財菅尾磨崖仏、史跡屋形古墳群等うきは市内装飾古墳群、史跡竹原古墳、重要文化財通潤橋、史跡小田良古墳、東大寺所蔵重要文化財紙本著色東大寺大仏縁起、国宝平等院鳳凰堂、重要文化財八瀬童子関係資料、史跡石人山古墳、史跡大悲山石仏、史跡萩ノ尾古墳、史跡日野江城、史跡長崎出島遺跡、史跡清戸迫横穴、重要文化財羅漢寺、史跡下馬場古墳、国宝鎌倉大仏、国宝醍醐寺文書聖教、史跡佐渡金銀山遺跡、史跡足尾銅山、史跡葦山反射炉、史跡萩反射炉、史跡高島炭坑跡、国宝日光東照宮陽明門、国宝瑞巖寺本堂、国宝比叡山延暦寺根本中堂、重要文化財巖島神社反橋、重要文化財巖島神社荒胡子神社。 ・地方自治体指定その他の文化財の保存と修復に関する指導助言は以下のとおりである。 古賀志船原古墳、醍醐寺文書聖教、東京大学史料編纂所所蔵の落合佐平次道次背旗、泉穴師神社、教王護国寺所蔵の染織文化財、絵金屏風、大山崎町宝積寺石造塔、小豆島町石造文化財、臼杵市内キリシタン遺跡、町田市西谷戸横穴墓群、東大寺戒壇堂、京都市平安京跡出土資料、鎌倉市扇ヶ谷周辺遺跡出土資料、東京都指定文化財候補地の史跡整備、小石川後楽園得仁堂内螺鈿漆机、鍋島家伝来当世具足、鹿嶋市龍蔵院仏画 			
			
史跡葦山反射炉炉体石部表面近傍の水分測定		水分測定器詳細	
【実績値】 調査・助言件数 48件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 7113

自己点検評価調査

研No.82

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
評定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>適時性：文化財の所有者である地方公共団体等の要請に対して、的確な調査・助言を実施した。</p> <p>継続性・正確性：文化財の保存・修理・活用等に行われる調査・助言は、保存・展示環境等の変化に応じて継続的に実施することが必要な場合もあり、現場における継続的な環境調査や作品に関する各種非破壊検査等の結果をもとに客観的で正確な指導助言を行った。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査・助言件数					
評定	B					
<p>判定理由</p> <p>調査・助言件数：例年と同様、必要かつ十分な調査・助言を実施することができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査・保存・整備・活用を行っていく上で、科学的調査が果たす役割は年々高まっている。地方公共団体等の実施するこれらの事業に対して、的確な調査を行い、その調査結果に基づいた助言を行った。非破壊・非接触の科学的調査機器を主として活用し、調査対象の文化財にできる限りリスクを与えることのないよう配慮した。多様な調査・助言への依頼に対し、適切な機器を活用し、的確に対応することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地方公共団体や大学、研究期間等からの要請に応じ当所が持つ専門的知識を提供し指導助言を行った事で、各地に遺る文化財の保存に役立っている。指導・助言の依頼内容は多岐にわたり、調査対象作品の大きさや状態によって、調査場所や調査内容も異なる。作品を所蔵する博物館・美術館あるいは社寺等での調査を実施することも多く、現場で予期しない困難に直面することも少なくない。中期計画最終年度である次年度も、東文研が有する科学調査技術の信頼性を高め、より高度な調査を安全に実施できるように、調査技術の一層の向上を図る。

業務実績書

研No.83

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	文化財の虫菌害に関する調査・助言(1)－①)		
【事業概要】			
我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	生物科学研究室長 木川りか
【スタッフ】			
佐藤嘉則（研究員）、佐野千絵（保存科学研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、小峰幸夫（客員研究員）			
【主な成果】			
本年度は、対応件数が37件（内訳：国内35件、国外2件）であり、指導助言先も国内のみならず、文化財保存に携わる国外文化財関係機関からの問い合わせも含めて多岐にわたり、複数回の指導助言に及んだ場合もあった。適正に文化財の虫菌害対策が実施されるように努めるとともに、今後の研究の課題にもつながり得るような新たな知見も得ることを念頭に調査・助言を実施した。			
【年度実績概要】			
<p>公立・私立の美術館・博物館、地方公共団体の教育委員会、社寺等の文化財所有者、文化財修復関係者、あるいは国外の文化財関係機関に対して、文化財の虫菌害対策に関わる指導助言を実施した（対応件数37件（内訳：国内35件、国外2件））。</p> <p>相談や問い合わせは、一年を通してほぼ継続的にある。相談や問い合わせの内容としては、実際に害虫やカビの被害が出たときの対処法に対する相談や、害虫の種類同定についての問い合わせ、文化財害虫、浮遊菌などの調査法に関する問い合わせが多い。また、作品や資料を保存するうえで、生物被害を受けないような適正な保存環境を確保するための対策についての相談もある。</p> <p>現地を見て詳しい状況を把握しないと対応が難しいと考えられる場合は、出張して調査のうえ指導助言を実施した。そのほか、先方の担当者に状況がわかる資料をもってきてもらい、対面で相談を受ける場合と、資料を郵送や、メールなどであらかじめ送付してもらい詳しい状況を確認したうえで、電話やメールで相談内容についてやりとりをするなどの方式で実施した。</p>			
			
石造文化財に発生したバイオフィルムの調査			
【実績値】			
指導助言実施件数 : 37件（内訳：国内35件、国外2件）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 7114

自己点検評価調査

研No.83

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 <p>適時性：文化財の所有者のみならず、修復の現場、公開施設等では文化財の虫菌害に遭遇する事例は多いが、具体的・技術的な問題を相談できる機関は非常に限られている。文化財保存の質的向上のためには、個々の問題について適時性をもって対応する必要がある。東京文化財研究所では、これらの問題への対応について指導・助言、あるいは問い合わせへの回答を行っている。</p> <p>発展性：相談や問い合わせの中には、多くの現場で同様に困っている事象であると考えられるものも含まれ、その対応策を明確にすることは汎用性をもった対応策を考えていくうえでも有効である。</p> <p>効率性：生物被害に関する問い合わせは多く、実際に調査や試験を伴う場合には相当な時間と労力を要するが、現在のスタッフで可能な限り役割分担をし、最大限の成果を得たと考えられる。</p> <p>継続性：毎年、様々な質・内容の問い合わせがあるが、それぞれの現場にとって重要な課題であることを認識し、できる限りの対応をしている。</p> <p>正確性：助言を行ううえで、正確な状況を知ることが不可欠であるので、必要と判断される場合には現地を見る、あるいはそうでなくても、少なくとも画像や図面などを通して、状況をできる限り正確に詳しく伝えてもらったうえで、最も適切な助言ができるよう努力している。</p>						

2. 定量的評価

観点	指導助言件数					
評価	B					
判定理由 指導助言件数：研究プロジェクトも実施する中で、可能な限り多くの数の指導助言を実施した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	個別の案件に対して、誠意をもって可能な限り適切に対応をした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>地方公共団体等から要請される種々の問題に対して、調査・助言による協力を通して応えることができた。</p> <p>文化財の虫菌害は、様々な場面で突然発生することが多く、ひとつの案件についてのやりとりも複数回に及ぶ案件が数多くある。少ないスタッフで対応するためには、対応策をスタッフ間で共有していくとともに、今後も適正に文化財の虫菌害対策が実施されるように情報の広報活動に努めるとともに、的確な指導助言が行えるように努力する。</p>

業務実績書

研No.84

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	文化財の材質・構造に関する調査・助言((1)－①)		
【事業概要】 地方公共団体等の実施する文化財の調査・保存・整備・活用などの事業に対して援助するために、文化財の材質・構造に関する調査・助言を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	分析科学研究室長 早川泰弘
【スタッフ】 犬塚将英（主任研究員）			
【主な成果】 26年度は、蛍光X線分析やX線回折分析による材質調査、X線透過撮影による構造調査等、以下に示す調査・助言を実施した。			
【年度実績概要】 26年度に実施した文化財の材質・構造に関する調査・助言は以下のとおりである。 ・調査作品（所蔵先、調査日）			
(1)材質調査（10件）			
<ul style="list-style-type: none"> ・金字経（奈良大学、26年4月） ・建造物飾金具類（平等院、26年5月） ・螺鈿扉（ラチャプラディット寺院、26年7月） ・染織品（日本銀行、26年8月） ・小金銅仏、金字経（平山郁夫シルクロード美術館、26年8月） ・日本画屏風（名古屋市博物館、26年9月） ・螺鈿茶箱（サントリー美術館、26年10月） ・板絵（世田谷区、26年11月） ・出土赤色物質（名古屋城、26年11月） ・板壁絵（平等院、27年1月） 			
			
可搬型蛍光X線分析装置による金字経の材質調査			
(2)構造調査（5件）			
<ul style="list-style-type: none"> ・仏像（大津市歴史博物館、26年5月） ・螺鈿扉（ラチャプラディット寺院、26年7月） ・出土装飾部材（東京藝術大学、26年8月） ・蒔絵硯箱（プロツワフ国立博物館、26年9月） ・茶道具（遠山記念館、27年1月） 			
【実績値】 調査・助言件数 15件			
【備考】 上記の材質・構造調査について、調査終了後には全て調査報告書を依頼者及び作品所蔵者に提出している。			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.84

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
評定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>適時性：文化財の所有者である地方公共団体等の要請に応じて、的確な調査・助言を実施した。</p> <p>継続性及び正確性：文化財の保存・修理・活用等に関与して行われる調査・助言は、保存・展示環境等の変化に応じて継続的に実施することが必要な場合もあり、科学的調査データに基づいた客観的な正確さが求められる。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査・助言件数					
評定	B					
<p>判定理由</p> <p>調査・助言件数：例年と同様、必要かつ十分な調査・助言を実施することができた。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査・保存・整備・活用を行っていく上で、科学的調査が果たす役割は年々高まっている。地方公共団体等の実施するこれらの事業に対して、的確な調査を行い、その調査結果に基づいた助言を行った。非破壊・非接触の科学的調査機器を主として活用し、調査対象の文化財にできる限りリスクを与えることのないよう配慮した。多様な調査・助言への依頼に対し、適切な機器を活用し、的確に対応することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画第4年度として、地方公共団体・博物館美術館・社寺等の実施する文化財の調査・保存・整備・活用等に関して、東文研がこれまでに培ってきた科学的調査技術を活用した調査・助言を行った。</p> <p>調査・助言の依頼内容は多岐にわたり、調査対象作品の大きさや状態によって、調査場所や調査内容も異なる。作品を所蔵する博物館・美術館あるいは社寺等での調査を実施することも多く、現場で予期しない困難に直面することも少なくない。中期計画最終年度となる次年度は、東文研が有する科学調査技術の信頼性を高め、より高度な調査を安全に実施できるように、調査技術の一層の向上を図り、より効果的かつ効率的な調査・助言を行うよう努める。</p>

業務実績書

研No.85

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	美術館・博物館等の環境調査と援助・助言(①-①)		
【事業概要】			
文化財施設による国宝・重要文化財などの展示・収蔵・借用に係る館内環境調査を行い、報告書を作成・提出する。また、文化財を扱う施設からの保存環境等に関する相談に対して、必要な援助や助言を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存科学研究室長 佐野千絵
【スタッフ】			
吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、石井恭子（研究補佐員）			
【主な成果】			
国指定品の収蔵、展示を予定する58館を対象とした環境調査を行い、報告書を作成した。 また、全国の多くの文化財施設等からの保存環境に関する相談に対して、必要な対応を行った。			
【年度実績概要】			
26年度は、次の58館に対して環境調査を行い、計62通の報告書を作成・提出した。			
<p>壱岐市立一支国博物館、北海道立近代美術館、歴史に憩う樞原市博物館、新潟県立万代島美術館（2通）、鎌倉国宝館、今城塚古代歴史館、佐倉市立美術館、香雪美術館、若狭歴史民俗資料館、秋田県立近代美術館、下関市立美術館、宇和島市立伊達博物館、東京国立近代美術館、筆の里振興事業団、岐阜県現代陶芸美術館、いわき市立美術館、古河歴史博物館、山形美術館、高知県立美術館、三井記念美術館、富山県水墨美術館、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、但馬国府・国分寺館、海の道むなかた館、三重県総合博物館（2通）、渋谷区立松濤美術館、静岡市登呂博物館、頼山陽史跡資料館、佛教大学宗教文化ミュージアム、足利市立美術館、茶道資料館、津山洋学資料館、千葉県立中央博物館大多喜城分館、菅茶山記念館、一宮市博物館、桑名市博物館、奈良県立美術館、北九州市立自然史・歴史博物館、南種子町広田遺跡ミュージアム（2通）、あわら市郷土歴史資料館、松山市考古館、福岡市博物館、青森県立郷土館、長崎歴史文化博物館、山梨県立考古博物館、日光東照宮宝物館（2通）、仙台市博物館、吹田市立博物館、大分県立美術館、長野県信濃美術館、広島県立美術館、ひろしま美術館、京都府立丹後郷土資料館、埼玉県立近代美術館、岐阜県博物館、北海道立函館美術館、京都国立近代美術館、大阪市立東洋陶磁美術館</p> <p>また、全国の博物館、美術館、社寺、その他文化財収蔵施設の保存環境、及び新築・施設改修・増築などの相談に対して助言を行い、必要に応じた現地調査なども適宜行った。</p>			
【実績値】			
調査・助言件数 780 件 (参考値)			
環境調査報告書作成数 62 通			
保存環境に関する相談 施設数 160 館 相談件数のべ 780 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 7116

自己点検評価調査

研No.85

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化財保護法第53条にある所有者以外の重要文化財等の公開活用については、借用側の用意した保管場所の保存環境が適切であるかどうか第三者機関による公正な評価が求められている。借用側の博物館等からの依頼や相談に応じて、環境の評価、環境改善のための方法の指導など、適宜必要な対応を行った。 独創性：第三者機関として公正な評価ができる研究機関は当所のほかにはない。 発展性：環境相談を通して得た情報から、普遍的な問題点を研究テーマに抽出することができ、緊急性や社会的ニーズの高い研究対象を選択できるため、その後の調査研究を発展的に進めることができた。 効率性：博物館等の保存環境についてどのような問題が起こっており、建築的な問題解決の手法や建築材料の新規開発状況、収納方法や資材の多様化などの情報を効率的に収集でき、対応に必要な時間以上の成果を得ることができた。 継続性：将来的に借用側の館員が独自に環境管理できるよう、教育普及にも力を入れている。博物館美術館等学芸員研修が期間を決めて、受講者に概論と実習を組み合わせ教育普及を行っているのに対して、環境調査では具体的な問題に対して、時間をかけて対応し、館側の基礎力を上げることに力を入れた。 正確性：簡易的な手法で環境測定を館側が自主調査しているが、調査会社への委託の場合には調査会社の担当者からの質問に対して対応し、正確性を担保した。また必要な場合、現地調査を行い、状況を確認した。						

2. 定量的評価

観点	調査・助言件数				
評定	B				
判定理由 調査・助言件数：依頼や相談のあった施設に対して、必要十分な対応を行った。1回目の調査で環境に問題があった場合には改善方法を指導し、環境改善を達成した。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国宝・重要文化財の所有者による移動、所有者以外の公開展示に係る環境調査については、資料の保存環境として適切かどうかを客観的な調査結果に基づいて環境調査報告書を作成した。 保存環境に関する相談に対しては、施設の立地や設備、管理体制等も勘案しながら、必要かつ現実的、効率的な改善のための助言を行った。 今後も、この業務を通して得られた経験や知見を、保存環境に関する研究シーズ探索に活かしていく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	第3期中期計画として公私立博物館等に対して援助・助言を行うとし、保存環境に関するすべての依頼に対して相談、調査、結果の評価を行い、安全な文化財の保存と展示に資することができ、中期計画を順調に遂行した。 最終年度に当たる27年度には、多岐に渡る保存環境の相談業務から、これまでに得た情報をまとめQ&A集（仮）を作成して地方公共団体の博物館等施設への専門的な助言の基礎とし、保存科学に関する我が国の拠点としての役割を果たすという中期計画を、当初計画通り遂行する予定である。

業務実績書

研No.86

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上			
プロジェクト名称	地方公共団体等の要請による発掘調査等への協力・援助((1)－①)			
【事業概要】				
地方公共団体からの要請に応じて、特別史跡平城宮跡やその周辺、寺院跡等の重点地区における小規模開発に対し、奈良時代を中心とした各時代の土地利用の実態把握や、遺構面の深度の把握等を目的として発掘調査を実施する。また同地域において、発掘調査に及ばない小規模開発に対し、遺構面の深度の把握や開発による遺構破壊の有無の確認を目的として立会調査を行う。				
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉	
【スタッフ】				
庄田慎矢(考古第一研究室研究員)、今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、小田裕樹(考古第二研究室研究員)、番 光(遺構研究室研究員)、石田由紀子(考古第三研究室研究員)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、渡辺晃宏(史料研究室長)				
【主な成果】				
<ul style="list-style-type: none"> ・地方公共団体からの要請に基づき、平城宮・京跡における小規模開発に伴う発掘調査・立会調査を実施した。 ・緊急性を要する状況に適切に対応し、効率的な調査を実施した。 平城宮・京跡に関する基礎的資料を継続的に蓄積することができた。 ・地方公共団体に対し、調査成果を迅速に伝達し、文化財保護行政に資する情報として共有した。 また、紀要を通じて調査成果を公表し、学術的情報として公表した。 				
【年度実績概要】				
<ul style="list-style-type: none"> ・発掘調査の概要 調査件数合計 6 件。延べ日数 32 日。 調査面積合計 110 m² 調査の概略は下表の通り 				
次数	遺跡名	調査期間	面積	主な遺構・調査下見
527 次	平城宮	26 年 4 月 1 日 ～ 4 月 7 日	13 m ²	中世・近世の瓦を含む南北溝。奈良時代の顕著な遺構なし。
528 次	平城宮	26 年 4 月 1 日 ～ 4 月 11 日	45 m ²	攪乱による現代遺構のみで、奈良時代の基盤層の確認には至らず。
529 次	平城京左京一条二坊十坪	26 年 4 月 9 日 ～ 4 月 11 日	10 m ²	現代の土坑と小穴のみで、近世以前の顕著な遺構なし。
531 次	平城宮	26 年 4 月 16 日 ～ 4 月 24 日	32 m ²	市庭古墳の東側周濠の底と、平城宮造営時の埋め立てが 2m 近くにおよぶことを確認した。
535 次	平城京右京三条一坊十・十五坪	26 年 7 月 1 日 ～ 7 月 2 日	6 m ²	中世の穴 3 基、奈良時代の軒丸瓦を含む穴 1 基を検出したが、奈良時代の顕著な遺構は確認できず。
543 次	平城宮	26 年 12 月 16 日 ～ 12 月 24 日	14 m ²	市庭古墳の西側周濠底面と、平城宮造営時の埋立土を確認。
<ul style="list-style-type: none"> ・立会調査の概要 立会件数合計 47 件。延べ日数 134 日。 遺構面の深度に関する情報を蓄積し、また遺構保護に尽力した。 				
【実績値】				
終了報告書：6 件				
(参考値)				
出土遺物：瓦片 4 箱(うち軒丸瓦 1 点、軒平瓦 2 点)、土器片 6 箱、木製品 7 箱				
記録作成数：実測図 13 枚(A2 判)、遺構写真 32 枚(4×5)、デジタル写真 823 枚				
【備考】 『奈良文化財研究紀要 2015』27 年 6 月予定				

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 7117

自己点検評価調査

研No.86

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：奈良県及び奈良市からの緊急性の高い要請に対し、的確に対応した。また調査成果を終了報告書として迅速に地方公共団体に伝達し、文化財保護行政に資する情報を提供した。 独創性：従前の調査の蓄積を踏まえて、質の高い調査を行うことができた。 発展性：平城宮・京の実態解明に資する基礎データを蓄積することができた。 効率性：緊急性の高い要請に対し、日程・予算等の効率化によって適切に対応した。 継続性：平城宮・京地域の遺構に関するデータを、継続的に蓄積した。 正確性：円滑な文化財保護行政の実施に協力し、正確な調査を実施した。						

2. 定量的評価

観点	終了報告書					
評定	B					
判定理由 終了報告書：目標件数6件を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・地方公共団体の要請に迅速に対応しつつ、継続的な学術調査を、正確に実施することができた。 ・調査成果を、直ちに地方公共団体に提供し、文化財保護行政の円滑な実施に協力した。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地方公共団体からの要請に応じて、特別史跡平城宮跡やその周辺等の重点地区における発掘調査や立会調査を随時継続的に行い、土地利用の実態把握や、遺構面の深度の把握、遺構破壊の有無の確認等を積み重ね、データの蓄積を進めた。 以上よりBと判定した。

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上				
プロジェクト名称	地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言(①-①)				
【事業概要】					
飛鳥・藤原地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究では、地方公共団体と連携し、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行い、その成果を広く公開するとともに、遺跡の保存・活用についても取り組む。					
【担当部課】		都城発掘調査部(藤原)		【プロジェクト責任者】	
				副部長 玉田芳英	
【スタッフ】					
清野孝之(考古第三研究室長)、西山和宏、森川実、廣瀬覚、降幡順子、山本 崇(以上、都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、若杉智宏、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、大林 潤、前川歩(遺構研究室研究員)、桑田訓也(遺構研究室研究員)、森先一貴、清野陽一(考古第三研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、金宇大(考古第二研究室アソシエイトフェロー) 南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)、飯田ゆりあ(写真室アソシエイトフェロー)					
【主な成果】					
藤原宮跡において地方公共団体が行う発掘調査への援助・助言の事業は10件あり、主に工事に伴う事前調査や立会である。緊急性を要する事前調査に効率よく対応し、藤原宮ならびに飛鳥・藤原地域についての基礎資料を継続的に蓄積した。					
【年度実績概要】					
藤原宮跡及び飛鳥・藤原地域において地方公共団体が行う発掘調査及び立会への援助・助言の事業は10件あった。					
次 数	調 査 地	調査原因	発掘面積	調査期間	概 要
181-1次	本薬師寺跡	住宅建設	71 m ²	2014.4.3~4.16	古代の溝、土坑等を検出
181-6次	藤原宮跡	工事立会		2014.7.17	遺構面まで達せず
181-7次	藤原宮跡	住宅建設	6 m ²	2014.7.28~7.30	古代の遺構面を検出
181-8次	豊浦寺跡	境内整備	38 m ²	2014.8.22~10.31	古代の石列等を検出
181-10次	大官大寺跡	工事立会		2014.12.9~12.11	古代の遺構面を検出
181-11次	藤原宮跡	史跡整備		2014.12.22	遺構面まで達せず
181-12次	藤原宮跡	工事立会		2014.12.22~12.24	遺構面まで達せず
181-13次	田中庵寺跡	住宅建設	18 m ²	2015.2.5~18	古代の土坑等を検出。
181-14次	藤原宮跡	工事立会		2015.1.22	遺構面まで達せず
181-15次	本薬師寺旧境内	工事立会	33.6 m ²	2015.1.14~27	遺構面まで達せず
以下181-8次と181-10次調査の成果を述べる。					
<ul style="list-style-type: none"> ・181-8次 調査地は豊浦寺講堂付近にあたる。現、向源寺改築にともなう発掘調査で、豊浦寺講堂基壇土または基壇周囲の整地土、豊浦宮にさかのぼる可能性のある石列、中世の盛土、近世の石垣等を検出した。豊浦寺の変遷過程を解明する貴重なデータを蓄積した。 ・181-10次 調査地は大官大寺跡の推定寺域の東外側にあたる。道路工事にともなう工事立会で、地表下40から60cmで遺構面を検出し、古代の遺物が出土した。大官大寺跡の寺域東方の状況解明に重要なデータを蓄積した。 					
(写真 181-8次 豊浦寺下層遺構検出状況 東から見る)					
					
【実績値】					
論文等数：2件(①、②)					
(参考値)					
出土遺物(181-1~15次の合計)：					
木器・木製品0点、石器・石製品1点、土器・土製品コンテナ6箱					
軒瓦8点、丸・平瓦コンテナ21箱					
記録作成数(181-1~15次の合計)：遺構実測図20枚、写真(4×5)40枚、デジタル写真84枚、デジタルメモ写真554枚。					
援助・助言数：10件					
【備考】					
論文等					
①「本薬師寺跡の調査-第181-1次」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月(予定)					
②「豊浦寺跡の調査-第181-8次」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月(予定)					

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 7118

自己点検評価調査

研No.87

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：開発行為に対する緊急の事業に対応し、地方公共団体の文化財保護行政に協力した。 独創性：我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった飛鳥・藤原地域において、古代国家の具体像を復元すべく調査研究を行った。 発展性：今後の飛鳥・藤原地域の実態解明に資する遺跡情報を蓄積した。 効率性：開発事業に対する緊急の事業に効率的に対応し、今後の研究に活かすための調査成果を得た。 継続性：飛鳥・藤原地域に関する遺跡情報の収集と蓄積のために、規模の大小に関わらず、調査を継続した。 正確性：飛鳥・藤原地域に関する遺跡情報を、遺跡のもつ地域性や時代性、遺跡の内容及び性格の特性を踏まえ、正確に資料化した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
評定	B					
判定理由 論文等数：今年度公表が必要な2件の事業について公表ができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	開発行為に対する緊急の事業等、年間10件の案件に対して、迅速かつ適切に対応し、地方公共団体の埋蔵文化財行政に対して協力した。これらの調査を通して藤原京及び飛鳥地区の遺跡のデータを継続的収集し、今後の研究に生かすことができるデータを蓄積することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目にあたる26年度も、緊急性を要する事前調査に迅速に対応し、藤原京並びに飛鳥・藤原地域についての基礎資料を得ることができた。最終年度となる27年度に向け、継続的に着実な成果を蓄積している。

業務実績書

研No.88

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言 ((1)－①)		
【事業概要】			
地方公共団体等が行う遺跡、建造物等の調査・整備・修復・保存等について、専門委員会委員への就任等を通して、必要な事項に関し協力・助言を行う。			
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 松村恵司
【スタッフ】			
【主な成果】			
地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業について、専門委員会委員への就任等を通して、建造物修理、史跡整備、出土文字資料調査、発掘調査等に関する専門的・技術的な助言を行った。			
【年度実績概要】			
<p>主な協力・助言</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2回国宝薬師寺東塔保存修理事業臨時委員会出席 (奈良県) ・東大寺境内史跡整備計画委員会出席 (奈良県) ・鴻臚館跡整備検討委員会出席 (福岡県) ・第6回関市弥勒寺官衙遺跡群保存整備検討委員会出席 (三重県) ・斎宮跡調査研究指導委員会出席 (三重県) ・太宰府市史跡調査研究指導委員会出席 (福岡県) ・多賀城跡調査研究委員会出席 (宮城県) ・恵那市正家廃寺跡調査整備委員会出席 (岐阜県) ・名勝旧大乘院庭園保護管理委員会出席 (奈良県) ・橿原市文化審議会第一部会出席 (奈良県) ・第1回鳥取県青谷上寺地遺跡発掘調査委員会出席 (鳥取県) ・第1回史跡永納山城跡保存整備検討委員会出席 (愛媛県) ・第1回堅志田城跡保存整備検討委員会出席 (熊本県) ・平成26年度文化遺産保護協力事業運営審議会出席 (奈良県) ・島原藩主深溝松平家墓所保存整備委員会出席 (石川県) ・平成26年度第1回埋蔵文化財事業運営協議会出席 (愛知県) ・平成26年度第3回名勝旧松波城庭園保存整備基本計画策定委員会出席 (石川県) ・平成26年度第1回金沢城調査研究伝統技術専門委員会出席 (石川県) ・第11回宇治川太閤堤跡保存整備検討委員会出席 (京都府) ・平成26年度第1回大分元町石仏調査委員会出席 (大分県) ・平成26年度第1回香芝市史跡整備検討委員会出席 (奈良県) ・国指定名勝及び天然記念物「八重干瀬」保存管理計画策定委員会出席 (沖縄県) ・名勝慶雲館庭園保存整備委員会出席 (滋賀県) ・平成26年度第1回肥前陶器窯跡保存整備検討委員会出席 (佐賀県) ・第20回城陽市史跡整備委員会出席 (京都府) ・平成26年度第1回三徳山行者道保存修理検討委員会出席 (鳥取県) ・第2回高島炭鉱整備活用委員会出席 (東京都) ・平成26年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備検討会議出席 (和歌山県) ・特別史跡三内丸山遺跡発掘調査委員会への指導 (青森県) ・恭仁宮跡調査専門家会議への指導 (京都府) ・長者屋敷官衙遺跡調査指導委員会への指導 (大分県) ・平出地区の伝統的建造物群保存地区としての評価及び今後の歴史資産整備のあり方の検討指導 (長野県) ・屋嶋城跡調査整備会議城門遺構整備事業に伴う城門遺構復元に関する建築学的見地からの指導 (香川県) ・青谷横木遺跡の調査指導 (鳥取県) ・五塚原古墳発掘調査に係わる現地指導 (京都府) ・名勝旧松波城庭園の保存科学調査指導 (石川県) ・波怒棄館遺跡等出土の自然遺物の整理作業への指導 (宮城県) ・一条谷朝倉氏遺跡劣化対応事業に伴う現地指導 (福井県) ・正倉院宝物修理・保存技術指導 (奈良県) 			
【実績値】			
(参考値)			
協力・助言実施件数(出張依頼を受けた件数) : 384件(審議会出席、委員会出席、その他(現地指導・現地調査等))			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.88

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：地方公共団体の要請に応じ、実施業務に適時・適切に対応した。 発展性：的確な協力・助言により事業の順調な実施を実現させた。 継続性：就任した委員会等では、多くが継続的な委員会であり、再任・任期の延長によって専門的・技術的な助言を行ってきた。						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地方公共団体等が行う遺跡、建造物などの調査・整備・修復・保存等に関して、的確に協力・助言を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現在、全国で行われている遺跡の発掘調査、保存・整備・修復事業や、建造物の調査、修復事業について、各担当機関から専門的な協力・助言を求められ、特に東日本大震災関連の委員会において、適時・適切に対応している。当研究所に対する社会的要求に応えるべく、今後も的確に対応する。

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	他機関等との共同研究及び受託研究を実施 (1)―②)		
【事業概要】 地方公共団体等が行う文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、共同研究及び受託研究を実施する。			
【担当部課】	東京文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 亀井伸雄
【スタッフ】			
【主な成果】 地方公共団体等が行う文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、共同研究及び受託研究を行った。			
【年度実績概要】 地方公共団体等が行う文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、受託研究等を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業 ・絵金屏風の保存修理に関する調査研究 ・国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務 ・特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務 ・高松塚古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査 ・文化遺産国際協力コンソーシアム事業 ・第39回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成 ・第38回世界遺産委員会審議調査研究事業 ・ラチャプラディット寺院の螺鈿扉修復計画策定のための調査研究 ・文化遺産国際協力拠点交流事業 ・エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）に係る国内支援業務 ・エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（GEM-CC）「保存修復材料としての和紙修復」 （エジプト国別研修） ・小石川後樂園得仁堂の塗装彩色に関する保存修復科学的調査研究 ・日光の歴史的木造建造物の温風処理等による新たな殺虫処理方法の検討 ・万世特攻平和祈念館収蔵品調査事業 ・常磐橋鉄材資料の分析調査 ・美術工芸品修理技術者人材等に関する調査研究事業 など <p>このほか、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，一般財団法人日本航空協会，鎌倉市，金沢箔技術振興研究所，公益財団法人徳川記念財団と計5件の共同研究を行った。</p>			
【実績値】 (参考値) 受託研究件数：21件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 7121

自己点検評価調査

研No.89

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
評価	B	B	B			
判定理由 適時性：地方公共団体等の要請に応じて、研究課題を的確に遂行した。 発展性：多様な研究課題に対応するため、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かして取り組んだ結果、発展的な成果を得ることができた。 正確性：研究課題の実施に対し、正確な調査データを得るため、現地調査等綿密な調査を行った。						

2. 定量的評価

観点						
評価						
判定理由						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地方公共団体等からの依頼に対し、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、的確な受託研究等を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地方公共団体等からの受託研究の依頼に対し、中期計画に基づき、文化財に関する知見や調査成果を活かし、的確に対応している。 中期計画最終年度である次年度は、他機関との共同研究及び受託研究を実施することにより、文化財に関する調査・研究の中核として、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に取り組んでいく。

業務実績書

研No.90

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	他機関等との共同研究及び受託研究を実施 (1)－②)		
【事業概要】			
地方公共団体等が行う文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、共同研究及び受託研究を実施する。			
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 松村恵司
【スタッフ】			
【主な成果】			
地方公共団体等が行う文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、受託研究等を行った。			
【年度実績概要】			
<p>地方公共団体等が行った文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、受託研究等を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化遺産国際協力拠点交流事業 ・災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画 ・実相寺古墳群総合的探査委託業務 ・京都市の文化的景観保存計画策定調査 ・新潟牽糸魚川市六反田南遺跡出土の動物骨分析 ・相川地区文化的景観保存計画策定調査 ・平成26年度増田地区伝統的建築物詳細調査業務委託 ・史跡ガランドヤ古墳1号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究 ・東名遺跡出土動物遺存体調査 ・波怒棄館遺跡出土の動物遺存体の分析 ・宇治茶生産の文化的景観における特性調査及び全覧図作成業務委託 ・国宝薬師寺東塔木材年代測定業務 (第2回) ・喜界町出土金属製遺物の保存処理 ・木村定三コレクション黒漆厨子のテラヘルツイメージングによる診断調査の予備試験 ・法華寺旧境内の発掘調査 ・平城京左京二条二坊十一坪の発掘調査 ・平城京左京三条一坊十五坪の発掘調査 ・薬師寺東塔の解体修理に伴う発掘調査 ・興福寺防災工事に伴う発掘調査 ・興福寺西室・北円堂発掘調査 <p>など</p> <p>このほか、独立行政法人情報通信研究機構、独立行政法人国立環境研究所、公益財団法人大阪府文化財センター、公益財団法人辰馬考古資料館、都道府県教育委員会等と分担して24件の連携研究を行った。</p>			
【実績値】			
(参考値)			
受託研究件数：44件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 7121

自己点検評価調査

研No.90

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
評定	B	B	B			
<p>判定理由</p> <p>適時性：地方公共団体の要請に応じて、実施業務に適時・的確に対応した。</p> <p>発展性：実施業務は多様で、地方公共団体等の今後の業務に対し、発展的な成果となった。</p> <p>正確性：実施業務に対し、文化財保護法に基づき正確な調査等実施した。</p>						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地方公共団体等からの依頼に対し、これまで当研究所が培ってきた研究成果、調査技術等を活かし、的確な受託研究等を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地方公共団体等からの受託研究に迅速、かつ的確に対応している。 今後も我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与すべく他機関と共同して研究等取り組んでいく。また、中期計画の最終年度に向けて、地方公共団体等の今後の業務に対し、より積極的に取り組んでいく。

業務実績書

研No.91

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対する地方公共団体等への支援・協力((1)～③)		
【事業概要】			
東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査について、地方公共団体等の要請を受け支援・協力をを行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】			
青木 敬・馬場 基・森川 実・廣瀬 覚(以上、都城発掘調査部主任研究員)、小田裕樹、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、芝 康次郎・和田一之輔、諫早直人(考古第一研究室研究員)、森先一貴、川畑 純(考古第三研究室研究員)、金田明大(埋蔵文化財センター主任研究員)・山崎 健(環境考古学研究室研究員)、渡辺伸行(神戸市立上野児童館長・客員研究員)、石村 智(企画調整部主任研究員)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、田中康成(連携推進課長)			
【主な成果】			
東日本大震災被災地の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対し、今までの調査・研究の成果を反映させた発掘調査への効果的な支援や報告書作成に係る支援を行った。同時に、奈文研の特性を踏まえた写真撮影等の技術について、地方公共団体等の要請を受け支援・協力を実施した。			
【年度実績概要】			
(1) 現地に以下の通り派遣した。			
○ 上渋佐原田遺跡(福島県南相馬市：古代集落遺跡)			
・ 発掘調査 26年5月7日～7月25日			
・ 写真撮影 26年7月22日～24日			
○ 東町遺跡(福島県南相馬市：縄文時代・古代集落遺跡)			
・ 発掘調査 26年5月12日～6月21日			
・ 写真撮影 26年6月11日～13日			
○ 波怒棄館遺跡(宮城県気仙沼市：縄文時代貝塚)			
・ 整理指導：26年5月19日～21日、10月14日～17日			
○ 磯草貝塚(宮城県気仙沼市：縄文時代貝塚)			
・ 報告書作成協力：27年3月4日			
(2) その他、以下の取り組みを行った。			
○ 波怒棄館遺跡(宮城県気仙沼市)で発掘された動物遺存体について、受託調査研究により分析を行った。			
○ 磯草貝塚(宮城県気仙沼市)で発掘された動物遺存体について、分析・報告書執筆を行った。			
(3) 東日本大震災に伴う埋蔵文化財保護に関する会議に以下の通り出席した。			
○ 東日本大震災に伴う埋蔵文化財保護に関する会議(26年6月25日、10月10日、12月15日、27年3月5日)			
○ 東日本大震災の復旧・復興に伴う埋蔵文化財の発掘調査に係る派遣専門職員会議(26年4月25日、11月13日)			
【実績値】			
現地派遣人数：のべ162人日			
(参考値)			
発表件数：3件(論文等1件①、発表2件②～③)			
【備考】			
①青木敬「復興事業にともなう発掘調査に対する奈良文化財研究所の取り組み3」(『奈文研ニュース』No54、26年9月)			
②青木敬「復興関連発掘調査に対する奈良文化財研究所の取り組み」(埋蔵文化財担当職員等講習会、27年2月6日)			
③「復興調査への支援」その1～12(奈文研ウェブサイト 26年5月～7月掲載)			
http://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/cat109/ (27年1月13日現在)			



東町遺跡における高所リモート撮影(26年6月)

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 7131

自己点検評価調査

研No.91

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：復旧・復興事業に伴う緊急性の高い発掘調査や報告書作成に対し、地方公共団体からの要請に応え、即時かつ適切に対応した。派遣先での調査内容等についても奈文研ウェブサイトですぐ随時公表しており、一般に対する情報開示も行っている。</p> <p>独創性：高所リモート撮影による記録等、奈文研が独自に開発した技術を発掘調査支援に導入した。</p> <p>発展性：今年度は大規模な面積による集落遺跡の発掘調査にも支援の対象を広げ、遺構検出や各種記録化等発掘調査に係る一連の作業を行い、その一方で高度な専門性が要求される環境考古学分野等の報告書作成を支援する等、今後の発掘調査支援方法の選択肢を一層広げることができた。</p> <p>効率性：遺構検出や図化作業に留まらず、写真撮影や報告書作成等も含めた包括的な発掘調査支援を行うことで、短期間での調査完了を可能とした。</p> <p>継続性：研究所内で複数名の担当を決め、各種会議等に参加して関係諸機関との連携を進めることで、今後も継続的に支援要請に即応できる体制を整備し、支援体制の一層の強化も推し進めることができた。</p> <p>正確性：昨年度とほぼ同じ人数を現地へ派遣したことで、発掘調査や写真撮影、報告書刊行へ向けた整理指導等多様な支援内容に正確に応えることができた。</p>						

2. 定量的評価

観点	現地派遣人数				
評定	B				
<p>判定理由</p> <p>現地派遣人数：昨年度に引き続き、技術的支援以外に発掘調査員の派遣も行い、地方公共団体等からの要請に適切に応える人数を派遣することができた。</p>					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地方公共団体からの要請に応じた適切な活動を実施するとともに、昨年度に引き続き、写真撮影、各種記録作成等について、独自に開発した調査技術の導入を適切に行う等、より効率的な発掘調査を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目にあたる26年度は、被災地の地方公共団体からの要請に応じて、適宜適切かつ効率的な支援を行うことができた。最終年度にあたる27年度に向け、さらに実効性の高い支援方法を検討すると共に、調査の効率性を高める技術を開発し、案件に応じた柔軟な対応をより可能とする体制を構築するための着実な成果を上げることができた。

業務実績書

研No.92

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	文化財担当者研修 (2)－①		
【事業概要】 地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員若しくはこれに準ずる者に対する研修を実施する。 研修受講者のうち平均80%以上の者から「有意義だった」、「役にたった」と評価されるよう研修内容の充実を図る。			
【担当部課】	企画調整部 研究支援推進部総務課	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山 洋 総務課長 石澤 剛
【スタッフ】 加藤真二(企画調整室長)、南 幸一(総務課課長補佐)、桑原隆佳(総務係長) (研修内容に応じ、研究所の適任者及び外部の学識経験者が講師を行っている。)			
【主な成果】 遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員を対象として、専門研修15課程の研修を実施し、延べ171名が受講した。 研修受講者全員に対するアンケート調査では、ほぼ全員から「有意義であった」「役に立った」との回答を得ており、充実した研修が実施できた。			
【年度実績概要】 専門研修15課程を実施し、延べ171名が受講した。 また、研修受講者に対し、「今回受講した研修が『有意義だった』あるいは『役に立った』と思うか、思わないか」のアンケート調査を行った結果、99.6%の者から『思う』の回答を得た。			
			
建築遺構調査課程講義風景		保存科学基礎Ⅰ(金属製遺物)課程	
専門研修		実施期日(日数)	定員 受講者数 満足度
	建築遺構調査課程	6月9日～6月13日(5日)	12名 9名 100%
	植物遺体調査課程	6月16日～6月20日(5日)	10名 10名 100%
	庭園・自然名勝等保存活用基礎課程	6月23日～6月27日(5日)	10名 19名 100%
	報告書作成Ⅰ(編集基礎)課程	7月7日～7月11日(5日)	20名 15名 100%
	報告書作成Ⅱ(応用制作)課程	7月14日～7月18日(5日)	20名 9名 100%
	自然科学的年代測定法課程	9月1日～9月5日(5日)	10名 5名 100%
	文化的景観調査計画課程	9月8日～9月12日(5日)	10名 12名 100%
	遺跡測量課程	9月29日～10月3日(5日)	8名 10名 100%
	保存科学基礎Ⅰ(金属製遺物)課程	10月7日～10月16日(7日)	10名 9名 100%
	保存科学基礎Ⅱ(木製遺物)課程	10月16日～10月24日(7日)	10名 6名 100%
	古文書歴史資料調査基礎課程	12月8日～12月12日(5日)	10名 18名 100%
	遺跡情報記録調査課程	12月16日～12月19日(4日)	20名 18名 94%
	文化財写真課程	1月13日～1月23日(9日)	15名 13名 100%
	出土文字資料調査課程	1月26日～1月30日(5日)	15名 6名 100%
	保存科学基礎Ⅲ(応急処置)課程	2月16日～2月20日(5日)	10名 12名 100%
【実績値】			
研修実施回数	15課程(目標値:15課程)		
受講者数	延べ171人(目標値:延べ190人)		
受講者の満足度	99.6%		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 7211

自己点検評価調査

研No.92

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
評定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：庭園・自然名勝等保存活用基礎課程、文化的景観調査計画課程、保存科学基礎Ⅲ(応急処置)課程など、公共性、緊急性が特に高い研修を行い、これへの対応を行った。 独創性：いずれの研修も当研究所以外では実施できず、なおかつ最新の知見を盛り込むことで、研修内容のオリジナリティ、新規性、卓越性を実施した。 発展性：発掘・保存・整備等に関する技術の全国的な水準向上に対応した。 効率性：基本的に5日間、研究所の既存設備、適任者で行うこととし、時間的投資、人的投資、設備的投資上の効率性を実施した。						

2. 定量的評価

観点	研修実施回数	受講者数	受講者の満足度			
評定	B	C	B			
判定理由 研修実施回数：当初の予定どおり15課程を実施した。 受講者数：目標値である延べ190人に対し、延べ171人と目標値を下回った。これは本年度から本庁舎建替えに伴い研修棟が取り壊され、周辺の宿泊施設から当研究所への通いとなり、受講者への経費負担が少なからず影響していると思われる。よって、本研究所と周辺の宿泊施設との交渉において、宿泊料が安価で提供できるよう努めたい。 受講者の満足度：ほぼ100%が『有意義だった』あるいは『役に立った』と回答している。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は本庁舎建替えに伴い研修棟が取り壊され、仮設庁舎での研修が実施された。受講者は、周辺の宿泊施設からの通いの研修となり、受講者の経費の負担も増となったが、当初予定していた15課程を全て実施できた。 受講者数については、年度計画の延べ190人に対して171人と目標値を下回ったが、本研修の必要性は確保されている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仮設庁舎での研修でありながら、受講者に対するアンケートでは、「今回受講した研修が『有意義だった』あるいは『役に立った』と『思う』との回答がほぼ100%という結果であった。 このため、中期計画全体として、必要性に対応した質量とともに充実した内容が確保されて実施できたと判断している。 今後も本研究所では、真に地方公共団体が求める研修、さらには厳しい財源事情のなか、対費用効果も十分に勘案しながら研修事業の充実を図りたい。

業務実績書

研No.93

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	博物館・美術館等保存担当学芸員研修((2)－②)		
【事業概要】			
「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」は、全国の文化財施設で資料保存を担当する職員が、資料保存に関する基本的な知識や技術を習得し、現場における保存環境の向上に資することを目的として開催するものである。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】			
佐野千絵（保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、早川泰弘（分析科学研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、北野信彦（伝統技術研究室長）、朽津信明（修復材料研究室長）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、桐原瑛奈（前研究補佐員）			
【主な成果】			
各地の文化財施設で資料保存を業務とする学芸員や行政担当者などを対象として、第31回博物館・美術館等保存担当学芸員研修を開催した			
【年度実績概要】			
今回で31回目となる「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」を26年7月14日～25日の日程で開催し、31名が受講した。			
研修は講義と実習から成り、前半週では主に資料保存のために必要な施設の環境要件と、その管理維持のための基礎的な知識や技術、後半週では資料の種類ごとに、その劣化要因や保存、修復に関する内容を扱った。また、文化財レスキュー事業によって得た知見を踏まえた、大規模災害に耐える施設のあり方や、水損や放射性物質汚染対策についても講義と実習を行った。			
保存環境実習の現場実践として行う「ケーススタディ」は清瀬市郷土博物館で実施した。3人ないし4人ずつのグループがそれぞれ実習テーマを設定し、保存環境に関する調査と評価を行った。			
この研修により資料保存に対する基礎的な知識と方法論を習得した参加者は、それぞれの勤務施設で保存環境管理の重責を担っている。			
			
「文化財害虫同定」実習の様子			
【実績値】			
「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」実施期間 2週間(目標値：2週間)			
研修受講者数 31名(目標値：25名)			
受講者の満足度 100%			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.93

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化財施設の主要な役割である保存に関わる研修会の実施は文化財保護の観点から公益性が高い。 独創性：あらゆる資料の保存に適用可能な保存の知識と技術を学べるよう内容を精査している。 発展性：保存環境に関する研究成果や最新の知見を常に研修内容に活かしている。 効率性：2週間の研修期間に施設と資料の両面から保存にアプローチするカリキュラムを組んでいる。 継続性：30年以上に渡り継続していることで、資料保存技術の継承と発展に大きく寄与している。 正確性：自然科学的知見に根拠を置いた資料保存のあり方を内容としている。						

2. 定量的評価

観点	実施期間	研修受講者数	満足度			
評定	B	A	B			
判定理由 実施期間：目標値である2週間の期間で研修を行った。 研修受講者数：目標値である25名を上回る31名の受講生を得た。 満足度：受講者からのアンケート結果により、全員から「満足」との評価を得た。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	自然科学に立脚し、また「現場で役立つ」ことを主眼とした資料保存のための研修会として30年以上実施しているが、単に“継続”しているだけではなく、資料保存を取り巻く諸状況の進歩や変化に対応し、また、批判も含めた参加者からのフィードバックを毎回カリキュラム構成に反映させていることから、満足度も非常に高いものである。次年度も今回参加者からの意見を精査した内容としたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画どおり、順調に進捗している。参加者からのアンケート結果には、講義や実習の進め方、取り上げて欲しい内容に関する意見なども多かったため、次回研修に活かしたい。また、24年度より、大学の学芸員養成課程で「博物館資料保存論」が必須科目になったことで今後、資料保存に関する知識を得た学芸員が参加することも見込まれることから、将来的な本研修のあり方についても、検討を開始しなければならないと考えている。

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進(2)－③)		
【事業概要】	平成7年4月より東京藝術大学と連携してシステム保存学コースを開設し、21世紀の文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座の2講座から成る。6名の所員が連携教員として授業を開講している。		
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	佐野千絵(教室主任、保存科学研究室長)
【スタッフ】	木川りか(生物科学研究室長)、朽津信明(修復材料研究室長)、北野信彦(伝統技術研究室長)、中山俊介(近代文化遺産研究室長)、早川典子(主任研究員)、内田優花(東京藝術大学大学院教育研究助手)		
【主な成果】	保存環境計画論、修復計画論、修復材料学特論、保存環境学特論をシラバスに則り開講した。また文化財保存学演習(文化財保存学専攻修士課程1年対象)を1コマ担当した。 26年度修士課程1・2年に各1名の学生を受け入れ、修士論文指導を行った。		
【年度実績概要】	<p>連携教員は、保存環境学講座を佐野千絵連携教授、木川りか連携教授、朽津信明連携准教授の3名、修復材料学講座を北野信彦連携教授、中山俊介連携教授、早川典子連携准教授の3名が担当する。スタッフとして東京藝術大学経費で、内田優花が参加した。</p> <p>本年度開講した授業及び担当教員は以下のとおりであった。</p> <p>保存環境計画論(前期、火曜1限) 2単位 佐野千絵 修復計画論(前期、木曜1限) 2単位 北野信彦・中山俊介・早川典子・朽津信明 修復材料学特論(前期、木曜2限) 2単位 北野信彦・中山俊介・早川典子・朽津信明 保存環境学特論(後期、火曜1限) 2単位 木川りか・朽津信明</p> <p>上記の授業の他に、文化財保存学演習(26年6月17日)題目:「保存環境実習」(担当:佐野千絵 場所:東京文化財研究所)を実施した。</p> <p>システム保存学研究室 修士1年、2年の学生(各1名)に対して、前期・水曜日に英語論文の輪講を行った(担当教員:早川典子、佐野千絵)。また、修士論文指導を行った。</p> <p>修士2年生の修士論文要旨タイトルは以下のとおりである。 「分光分布の異なる照明間の損傷度評価方法の検討—蛍光灯とLED照明」 修士2年生は文化財保存修復学会、照明学会に研究成果を発表した。照明学会では優れた研究発表を行った3名に送られるポスター賞を受賞し、27年3月の照明学会主催「ヤングウェーブフォーラム」の招待講演者に選ばれた。</p> <p>27年度東京藝術大学大学院美術研究科(修士課程)入学試験に向けて、事前面接を9名行ったが、専門性の点で本研究室に適した志望者がおらず、最終的に受験者はいなかった。</p>		
			
	実習の様子(木川りか 連携教授)		
【実績値】	開講時間: 前期 火曜1限、木曜1限、木曜2限 / 後期 火曜1限 開講回数: 90分 x15回 受講者数: 42名 学生による研究成果の学会発表 2件		
【備考】	開講時間 1限 9:00~10:30 2限 10:40~12:10 開講回数 計4コマ 各2単位 受講者数内訳 保存環境計画論(21名)、修復計画論(8名)、修復材料学特論(8名)、保存環境学特論(5名) 学会発表 黄川田翔、吉田直人、古田嶋智子、佐野千絵:美術館・博物館照明による文化財劣化の評価方法に関する研究—積算照度と有効放射露光量—、文化財保存修復学会、26年6月7日、東京 黄川田翔、吉田直人、古田嶋智子、佐野千絵:美術館・博物館の資料保護に向けた光曝露量評価の研究—積算照度と有効放射露光量—、照明学会、26年9月4-6日、さいたま(ポスター賞受賞)		

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 7231

自己点検評価調査

研No.94

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：研究所の本務において得た専門性をもとに、基礎知識があり文化財保存上の問題に知識を応用展開できる保存科学者の育成が期待されている。また近年大きく変わった照明方式について、本来どのように評価するかを研究し従来の評価方法との整合性を作る研究を修士2年生が行い、研究成果が社会に評価され学会発表で受賞した。</p> <p>独創性：文化財の保存環境・修復材料研究に特化した研究分野と研究室開講は他大学にはなく、卓越した存在であり、Bと判定した。</p> <p>発展性：多様なテーマで学生指導ができるよう教員配置をしており、学生の能力を伸ばす教育ができたのでBと判定した。</p> <p>効率性：大学内での開講と当所内での授業を組み合わせて、学生及び当所員の負担に配慮して開講できたのでBと判定した。</p> <p>継続性：保存環境計画論は選択科目であるが学年全ての学生が受講しており、保存環境に関する知識の継続的な普及に役に立っているためBと判定した。</p> <p>正確性：授業内容は保存修復倫理に基づき、正確な知識・技術・経験が盛り込まれているためBと判定した。</p>						

2. 定量的評価

観点	開講時間	開講回数	受講者数		
評定	B	B	B		
<p>判定理由</p> <p>開講時間：文化財保存学専攻の他の授業と重ならず、また当所の業務時間への影響を最小限とした開講時間を設定しており、極めて効率的である。</p> <p>開講回数：文部科学省の定めた2単位（90分x15回）を満たしており、修了必要単位数として重視されている。</p> <p>受講者数：開講している授業はシステム保存学専攻の学生は必修、その他の学生に対しては選択科目である。各講座の受講予定者数は、必修のシステム保存学専攻の学生各1名であるが、他の専攻の学生を含め学年全員が出席している授業もある。これは、連携教員による授業成果に大きな期待が寄せられているためと推測され、当初の目標を十分に達成したと言える。</p>					

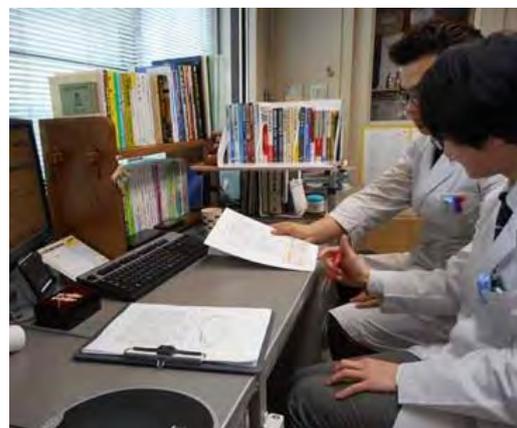
3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>所員の経験や知識から得た正確な情報や技術を元に授業を展開している。次世代の文化財保存修復を担う若い学生の基礎を作る重要な教育普及事業であり、その影響力は極めて高い。また東京藝術大学との連携は距離・時間の点で効率的であり、当所の教育に関する大学からの期待と評価は高い。修士学生の修士論文指導を順調に進め、修士1年生の研究テーマ探求の指導を終えた。修士2年生は2学会で異なる内容の研究成果発表を行い、研究成果が社会的に高い評価を受けた点で、本年度は目標を超える達成があった。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>第3期中期計画では修士学生の受け入れの再開を目指し、初年度は準備、2年目に入試の再開、3年目に学生受け入れを再開し、4年目の今年度にかけてシステム保存学教室に受け入れた修士学生の論文指導、中間報告会の開催等、充実した教育活動を行い、当初の計画通り順調に遂行することができた。一方、27年度入試では学生1名の受け入れを予定していたが、学力の点で連携教員の期待に届かず、27年度修士1年の学生受け入れが実施できないことが確定した。</p> <p>中期計画最終年度である27年度には、受け入れた修士学生（M2）及び文化財保存学に所属する学生全体への教育に力をいれる。また、東京藝術大学掲載のシステム保存学教室ウェブサイトを改訂し、連携教員の専門分野や求めている学生像を明確にし、受け入れ学生の安定的な確保を図る予定である。</p>

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進 (2)－③)		
【事業概要】	京都大学大学院人間・環境学研究科及び奈良女子大学大学院人間文化研究科との協定を締結、連携・協力し、文化財保存・活用に関する幅広い知識と高度な技術を兼ね備えた次代の研究者及び技術者の育成を図る。		
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 松村恵司
【スタッフ】	小野健吉、玉田芳英、渡邊晃宏、馬場 基(以上、都城発掘調査部)、中島義晴、恵谷浩子、高橋知奈津、前川 歩(以上、文化遺産部)、高妻洋成、小池伸彦、山崎 健(以上、埋蔵文化財センター)		
【主な成果】	京都大学大学院人間・環境学研究科において5名、奈良女子大学大学院人間文化研究科において2名の研究職員が、客員教授・准教授として各専門分野に関する講義、演習、実習を通して、大学院生の研究指導を行った。 なお、26年度の受講者数は京都大学44名、奈良女子大学7名であった。 その他、奈良大学との協定を締結し、5名の研究職員が非常勤講師として、学部生の教育を行った。		
【年度実績概要】	<p>京都大学大学院人間・環境学研究科〔共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野(客員)〕、奈良女子大学大学院人間文化研究科及び奈良大学文学部における26年度の実施状況については、以下のとおりである。</p> <p>京都大学大学院人間・環境学研究科</p> <p>①小野健吉 「庭園文化論1」【修士課程11名】 「庭園文化論2」【修士課程6名】 「環境構成論1」【学部生9名】 「文化遺産学特別演習」【修士課程2名】</p> <p>②玉田芳英 「原始古代精神文化論」【修士課程1名】 「文化遺産学演習1A」【修士課程2名】 「文化遺産学演習1B」【修士課程1名】</p> <p>③高妻洋成 「環境考古学論2」【修士課程3名】 「共生文明学特別研究Ⅱ」【博士後期課程1名】</p> <p>④馬場 基 「文化遺産学演習3A」【修士課程2名】 「史料学論2」【修士課程2名】</p> <p>⑤山崎 健 「環境考古学論2」【修士課程3名】 「共生文明学特別研究Ⅱ」【博士後期課程1名】</p> <p>奈良女子大学大学院人間文化研究科</p> <p>⑥小池伸彦 「文化財学の諸問題Ⅰ」【博士後期課程2名】 「文化財学の諸問題Ⅱ」【博士後期課程2名】</p> <p>⑦渡邊晃宏 「歴史資料論Ⅰ」【博士後期課程2名】 「歴史資料論Ⅱ」【博士後期課程1名】</p> <p>奈良大学文学部</p> <p>⑧小野健吉、中島義晴、恵谷浩子、高橋知奈津、前川 歩 「文化財修景学」【学部生78名】</p>		
【実績値】 (参考値)	受講者数(延べ人数):京都大学44名、奈良女子大学7名、奈良大学78名		
【備考】			



研究指導を受ける大学院生(奈文研にて)

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 7232

自己点検評価調査

研No.95

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	計画性		
評定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：本務において得た最新の研究成果などをもとに、研究指導を行った。 発展性：若手研究者の育成、充実において、人材確保に寄与した。 継続性：1996年から京都大学との大学院連携をはじめとして毎年多くの受講者があり、十分な成果が認められた。 正確性：協定に基づき、計画的に実施できた。						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存・活用に関する幅広い知識と高度な技術を兼ね備えた人材の育成を順調に行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	連携大学院協定に基づき、計画的かつ継続的に実施できた。次期中期計画に向けて27年度においても、これまで蓄積してきた研究成果を基に、引き続き連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成のために学生に対して研究指導を実施していく。

中項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上								
事業名	(1)④文化財防災ネットワーク推進事業								
【年度計画】	今後可能性が指摘されている巨大地震等大規模災害が発生した際に、各地域における文化財等の防災や被災した文化財等の救出・修復等の適切な処置を行うための体制を整備する。								
担当部課	本部事務局	事業責任者	事務局長 栗原祐司						
【実績・成果】	<ul style="list-style-type: none"> 文化財防災ネットワーク推進のため「文化財防災ネットワーク推進本部」を設置した 文化財防災ネットワーク構築の必要性和、今後の取り組みについて共通理解を得るため、文化遺産防災ネットワーク推進会議を設立した。 今後のネットワーク構築に向けた知見を得るため、文化遺産防災ネットワーク有識者会議を設立した。 全国各地に存在する史料ネットと連携のため、全国史料ネットネットワーク集会を共同開催した。 けいはんなオープンイノベーションセンター（略称：KICK、旧私のしごと館）の収蔵庫の整備を行い、防災・レスキュー拠点等として活用するための体制を整備した。（27年3月） 第3回国連防災世界会議の一部として、国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」を実施した。 国内外の事例現地調査及び災害痕跡のデータベース作成や動態記録の作成・研究等を実施した。 被災文化財等の救出、応急措置等に関する調査研究を複数実施した。 文化財レスキュー活動のノウハウの継承・発展のための研修を実施した。 								
【補足事項】	<ul style="list-style-type: none"> 「文化財防災ネットワーク推進本部」を設置（7月23日） 文化遺産防災ネットワーク推進会議を設立（第1回 10月21日：15団体参画、第2回 27年3月10日：19団体参画） 文化遺産防災ネットワーク有識者会議を設立（第1回 27年3月10日：委員19名） 全国史料ネットネットワーク集会を共同開催（27年2月14日～15日） 第3回国連防災世界会議の一部として、国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」を実施し、テーマ別会合（仙台）、7つのセッション（東京）と2つのシンポジウム（東京・仙台）を実施（27年3月11日～17日、機構以外の国内外の専門家54名参加） 文化財レスキュー活動のノウハウの継承・発展のための研修を3件実施 <ul style="list-style-type: none"> 阪神・淡路大震災への対応・教訓等についての研修（場所：神戸大学、12月8日～10日、職員等17名が参加） 地震、津波及び豪雨等に伴う被災文化財の応急措置技術についての研修会（於：奈良文化財研究所、27年3月3～5日、地方公共団体職員等17名が参加） 東京都上野消防署職員への研修を実施した。（於：東京国立博物館、12月9日、上野消防署員20名が参加） 								
									
	第1回文化遺産防災ネットワーク推進会議				第3回国連防災世界会議テーマ別会合				
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25	
—	—	—	—		—	—	—	—	
【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 年度途中に交付決定された補助金事業にもかかわらず、短い期間で体制を整備し、ネットワークの構築を行い、国際専門家会合等複数の事業を実施することができた。								
【中期計画記載事項】	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。								
【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 連携・協力体制を構築し、翌年度以降の事業実施とネットワークの拡大強化の基礎を築くことができた。今後は常置の事業となるよう努力が必要である。								

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8001

業務実績書(受託事業)

研No.6-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成26年度増田地区伝統的建造物群詳細調査業務委託(受託)((1)～③)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林 良彦
【スタッフ】	箱崎和久(遺構研究室長)、西山和宏(都城発掘調査部主任研究員)、番 光(遺構研究室研究員)、鈴木智大(遺構研究室研究員)、海野 聡(建造物研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>秋田県横手市増田は横手市南部に所在する在郷町である。道路に面して妻入りの町家が立ち並び、内部に左官技術の粋を凝らせた内蔵を持つ特異な町並みで、平成25年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。</p> <p>2 ヶ年継続の初年度となる本受託事業は、増田伝統的建造物群保存地区に所在する松浦千代松家、佐藤又六家の2件の町家についての詳細調査である。これらの町家はすでに伝統的建造物群保存地区の特定物件として保護されているが、横手市では建造物の指定を行い、さらに手厚く保護を図ろうとしている。</p> <p>26年度は主として松浦千代松家について主屋、内蔵、外蔵の実測調査、調査票作成、写真撮影等を行い、調査報告書の原稿を提出した。調査の結果、主屋は明治20年頃の建築で、主屋、外蔵、内蔵の順で建築され、内蔵の建築された明治33年に主屋が北側に半間増築されていること、昭和20年代に主屋の東側奥2階がさらに増築されていることなどが判明した。</p> <p>地方の特異な民家建築の姿が明らかになるとともに、地方行政が行う文化財保護施策に寄与する調査であると評価できる。</p>		
			
	松浦千代松家主屋		
【実績値】	調査票17枚、実測野帳40点、デジタル写真1600点、報告書原稿30ページ。		
【受託経費】	2,777千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8002

業務実績書(受託事業)

研No.13-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	道路建設及び分譲住宅新築に伴う法華寺旧境内の発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、庄田慎矢(考古第一研究室研究員)、番 光(遺構研究室研究員)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none">・調査の経緯 道路建設及び分譲住宅新築に伴う事前調査。調査地は法華寺旧境内の内部に位置する。 ・調査期間 26年4月22日～5月30日 ・調査面積 211㎡(A区：東西31m×南北5m、B・C区東西3.5m×南北8m) ・基本層序 A区：西部では表土(10～15cm)、灰色砂質土(10～15cm)、灰色粗砂の地山。東部では表土(25～40cm)、黒褐色土(20～40cm)、白色粗砂(地山)。 B区：表土(5～15cm)、黄灰色砂質土(10～20cm)、黄褐色砂質土(約5cm)、黄褐色粗砂(地山)。 C区：表土(10～40cm)、灰色砂質土(10～15cm)、黄褐色シルト(地山)。 ・主な検出遺構 A区：近世の廃棄土坑2基 B区：なし C区：掘立柱建物の柱穴2基 ・主な出土遺物 奈良時代から現代までの瓦片・磚が整理箱203箱(うち軒丸瓦73点、軒平瓦51点、道具瓦37点、磚4点)、土器及び陶磁器が整理箱6箱、銅銭及び鉄片が各1点、石製品2点。 ・調査所見 C区では東隣の平城第442次で検出した掘立柱建物のと一連となるとみられる柱穴を検出し、奈良時代の遺構の広がりを確認した。いっぽう、A区・B区では奈良時代の遺構は確認できず、後世の土地造成により遺構検出面が削平された可能性が考えられる。		
			
	柱穴の状況		
【実績値】	論文等数：1件 「法華寺旧境内の調査－平城第532次」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定		
(参考値)	出土遺物：瓦片203箱、土器片6箱、木製品・金属製品・石製品等1箱 記録作成数：実測図19枚(A2判)、遺構写真12枚(4×5)、デジタル写真約180枚		
【受託経費】	2,607千円		

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8003

業務実績書(受託事業)

研No.13-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城京左京二条二坊十一坪の発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	尾野善裕(考古第二研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、石田由紀子(考古第三研究室研究員)、鈴木智大(遺構研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)		
【年度実績概要】	<p>・調査の経緯 賃貸住宅及び擁壁の新築に伴う調査。調査地は平城京左京二条二坊十一坪の西辺にあたる。</p> <p>・調査期間 26年7月2日～8月22日</p> <p>・調査面積 270 m² (東西6m×南北45m)</p> <p>・基本層序 南：造成土、耕作土、床土、暗灰黄色土、地山 北：造成土、耕作土、床土、暗灰黄色土、灰褐色土、地山 遺構検出は暗灰黄色土、灰褐色土、地山面で行い、検出面の標高は約60.2m。</p> <p>・主な検出遺構 1期：古代以前。周溝1条を確認。古墳もしくは弥生時代の方形周溝墓に伴う周溝の可能性がある。 2～4期：奈良時代。掘立柱建物2棟、塀8条、溝2条等を検出。柱根や礎盤が多く残存。特に2期では、調査区中央やや北側で幅約3mの東西大溝、大型の東西塀(柱間約3m(10尺)、柱穴掘方径約1m以上)を確認。</p> <p>・主な出土遺物 土器・瓦・木製品をはじめとする遺物が大量に出土した 土器：須恵器、土師器が中心。他に、墨書土器・墨画土器・漆附着土器・製塩土器・転用硯など。 瓦：奈良時代の丸・平瓦、軒丸瓦、軒平瓦のほか、三彩瓦などの施釉瓦。 木製品：加工棒、曲物底板等。建物部材として、柱根、礎盤など。 金属製品：銅製蛇尾、鉄鎌。</p> <p>・調査所見 左京二条二坊十一坪の西辺部の土地利用の一端が明らかになった。 奈良時代には3期以上の遺構変遷が確認でき、坪中枢部以外でも、建物群が複雑に展開する状況が看取できた。特に、2期には、西辺部にまで大型の建物群が存在した状況も想定できる。 また、調査区南辺では、奈良時代以前の遺構を確認した。溝の形状から方形周溝墓や古墳の周溝である可能性が想定でき、奈良時代以前の当該地の土地利用の一端を知る手がかりを得ることができた。</p>		
【実績値】	論文等数：2件 ①石田由紀子「平城京左京二条二坊十一坪の調査(平城第533次)」『奈文研ニュースNo.55』26年12月 ②石田由紀子ほか「平城京左京二条二坊十一坪の調査-平城第533次」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定 (参考値) 出土遺物：瓦片46箱(うち軒丸瓦10点、軒平瓦18点、施釉瓦26点)、土器片50箱、木製品13箱、 記録作成数：実測図16枚(A2判)、遺構写真10枚(4×5)、デジタル写真420枚		
【受託経費】	5,229千円		



調査区全景(北から)

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8004

業務実績書(受託事業)

研No.13-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城京左京三条一坊十五坪の発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、庄田慎矢(考古第一研究室研究員)、番 光(遺構研究室研究員)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none">・調査の経緯 店舗建設に伴う事前調査。調査地は平城京左京三条一条十五坪南辺中央に位置する。・調査期間 26年6月3日～7月24日・調査面積 400㎡(東西16m×南北25m)・基本層序 表土(80cm)、黒褐色シルト質土(10～15cm)、暗灰黄色シルト質土(10～15cm)、灰色砂混りシルト質土(約40cm)、黒色粗砂(地山)。遺構検出は黒褐色シルト質土上面で行った。・主な検出遺構 奈良時代の東西棟掘立柱建物1棟。南北に廂が付く。梁行2間、桁行4間分を検出。柱穴掘方の規模が一辺約1.5mと大型。このほかに東西掘立柱塀2列、南北掘立柱塀1列を検出し、少なくとも2時期の遺構群があったことを確認。・主な出土遺物 奈良時代を中心とした瓦片・磚が整理箱19箱分(うち軒丸瓦3点、軒平瓦4点、道具瓦2点、磚11点)、土器が整理箱2箱分、加工板2点、炭少量。・調査所見 過去に調査地周辺で行われた調査により、奈良時代には左京三条一条十五坪は十六坪と一体で使用されていたこと、大型の掘立柱建物が整然と並ぶことが知られていたが、今回の調査地においても大型の掘立柱建物を確認し、十五坪の南端まで大型建物が広がる様相であったことを確認した。		
【実績値】	論文等数：2件 「平城京左京三条一坊十五坪の調査(平城第534次)」『奈文研ニュースNo.54』(26年9月) 「左京三条一坊十五坪の調査-平城第534次」『奈良文化財研究所紀要2015』(27年6月予定)		
(参考値)	出土遺物：瓦片19箱、土器片2箱 記録作成数：実測図14枚(A2判)、遺構写真23枚(4×5)、デジタル写真約290枚		
【受託経費】	4,672千円		



調査区全景(北西より)

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8005

業務実績書(受託事業)

研No.13-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	薬師寺東塔の解体修理に伴う発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	青木 敬(都城発掘調査部主任研究員)、箱崎和久(遺構研究室長)、金田明大(埋蔵文化財センター主任研究員)、中村一郎(写真室主任)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)		
【年度実績概要】	<p>・調査の経緯</p> <p>国宝薬師寺東塔解体修理事業に伴う発掘調査。 創建当初の基壇の規模や構造、材料などの調査を行い、基壇外装の旧状の確認及び後世の改変履歴を明らかにし、薬師寺東塔の変遷を解明すること、加えて不同沈下が著しい礎石の沈下原因を解明して修理方法についての検討材料を得ること等を目的とする。橿原考古学研究所との共同調査である。</p> <p>・調査期間</p> <p>26年7月8日～27年3月31日</p> <p>・調査面積</p> <p>314.16㎡</p> <p>・基本層序</p> <p>基壇：凝灰岩及び花崗岩の敷石、敷土層(明治修理時)、敷土層(礎石据付穴の沈下に対する高さ調整)、仕上土、版築層(約1.1m)。 基壇周辺：表土、堆積土(明治修理以前(近世～近代)、堆積土(中世)の、整地土(創建時)、地山(青灰色粘質土)。</p> <p>・主な検出遺構</p> <p>礎石等：基壇版築層最上面から掘り込まれる一辺2m前後の礎石据付穴を検出。また、礎石周辺に明治期やそれ以前の修理に伴うと推定される足場穴を多数検出。 基壇外装：創建時(花崗岩の地覆石上に凝灰岩羽目石・束石を据え付け)、中・近世(乱石積)、明治修理時(花崗岩切石)の3時期分を確認。 基壇周辺：階段の痕跡(基壇各辺中央)、玉石敷の犬走りならびに乱石組の雨落溝(創建時か)、足場穴(中近世～明治期の修理に伴うものか)等を検出。</p> <p>・主な出土遺物</p> <p>銭貨(和同開珎、寛永通宝など)、鉄製の釘・鏝、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土師器皿、陶磁器など。</p> <p>・調査所見</p> <p>版築層・礎石据付穴、基壇外装、基壇周りの諸施設など、薬師寺東塔創建時基壇の良好な遺存を確認した。加えて、中世～近世の基壇外装、修理時の足場穴など、創建以降の基壇の履歴が分かる遺構も確認した。 なお、基壇では北西部を中心とした基壇版築層の不同沈下、及び基壇各所で地割れ痕跡を多数確認し、これらが明治修理以前に生成したことも確認できた。地割れの生成原因については、今後の検討課題である。</p>		
【実績値】	<p>論文等数：2件</p> <p>①青木敬・米川裕司(奈良県立橿原考古学研究所)「薬師寺東塔の調査一第536次」『奈良文化財研究所紀要2015』(27年6月予定)</p> <p>②『国宝 薬師寺東塔の発掘調査』奈良県教育委員会(27年2月)</p> <p>報道発表等件数：2件</p> <p>(参考値)</p> <p>出土遺物：瓦片19箱、土器片3箱、木製品4点、金属製品260(うち銭貨5)点 記録作成数：実測図56枚(A2判)、遺構写真28枚(4×5)、デジタル写真約800枚</p>		
【受託経費】	3,944千円		



基壇全景(北西から)

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8006

業務実績書(受託事業)

研No.13-5

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	興福寺旧境内・奈良町遺跡の発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	尾野善裕(考古第二研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、石田由紀子(考古第三研究室研究員)、鈴木智大(遺構研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)		
【年度実績概要】			
・調査の経緯	ビル改築に伴う。調査地は左京三条六坊十四坪の北西隅にあたり、興福寺旧境内に位置する。		
・調査期間	26年9月16日～10月2日		
・調査面積	約50㎡		
・基本層序	造成土(約0.6m)直下で地山が露出(H=83.20m)。遺構は、埋甕以外は地山直上で検出。		
・主な検出遺構	調査区内北半は、大きく削平される。南半で中世～近世の遺構を検出。大土坑2基、廃棄土坑2基、埋甕1基等を検出。 廃棄土坑掘り下げの様子(東から)		
・主な出土遺物	「興福寺」銘軒丸瓦、軒平瓦等、大量の中世後半の瓦(大土坑)、17世紀前半の陶磁器や土師皿、下駄・漆器椀・箸・桶・折敷等の木製品、胡桃核・桃核・瓜種等の種実類(廃棄土坑)など。		
・調査所見	今回の調査では、古代の遺構は確認できなかったが、興福寺旧境内西辺における中世末期の様相の一端を知るとともに、近世前期の興福寺旧境内の生活をうかがえる重要な資料を得ることができた。		
【実績値】	論文等数：2件 ①石田由紀子「興福寺旧境内の調査(平城第539次)」『奈文研ニュースNo.55』26年12月 ②石田由紀子ほか「興福寺旧境内の調査—平城第539次」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定		
(参考値)	出土遺物：瓦片198箱(うち軒丸瓦15点、軒平瓦15点)、土器片17箱、木製品3箱、鉄釘3点、 記録作成数：実測図5枚(A2判)、遺構写真4枚(4×5)、デジタル写真約140枚		
【受託経費】	1,215千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8007

業務実績書(受託事業)

研 No. 13-6

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	興福寺防災工事に伴う発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	箱崎和久(遺構研究室長)、芝康次郎(考古第一研究室研究員)、山本祥隆(史料研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)		
【年度実績概要】	<p>・調査の経緯</p> <p>興福寺旧境内における防災設備工事に伴う発掘調査。工事に必要とされる掘削のうち、新規掘削となる箇所を中心に十数ヵ所の調査区(I(五重塔南西)・II(東金堂周辺)・III(三重塔周辺)・IV(西金堂北)・V(北円堂周辺))を設定。</p> <p>・調査期間</p> <p>26年10月7日～27年2月12日</p> <p>・調査面積</p> <p>合計約270㎡</p> <p>・基本層序</p> <p>①表土、②現代の造成土、③中世以降の包含層、④地山。 調査区によっては、②③間に近世または近代の舗装面(旧表土)、③④間に古代に遡る可能性のある整地土(遺物を含まず、地山由来の土による整地と思われる層)が確認できる。</p> <p>・主な検出遺構</p> <p>I区：会所枿1基及び土管2系統(東→西方向及び北東→南西方向)からなる近代の排水設備1式を検出した。</p> <p>II区：東金堂の南北中軸線の西側延長上(現在の灯籠の真下)で、現状で直径1.4m、深さ80cm程の大型の土坑1基を検出した。現在の灯籠に先行する何らかの設備の遺構である可能性がある。また、近世または近代に属すると思われる砂利敷き舗装面(H=95.30m程)を検出した。</p> <p>III区：近世または近代に属すると思われる砂利敷き舗装面2面(それぞれH=86.10m、H=85.90m程)を検出し、その下層に整地土と思われる茶褐色粘土層を確認した。また、地山を掘り込む大型の土坑2基を検出した。</p> <p>IV区：地山面(H=94.80m程)を確認した。</p> <p>V区：北円堂東側で地山面(H=94.80m程)を確認した。また、西側で北円堂院創建時に遡る可能性のある造成土層(H=94.30m以下、1層の厚さは10～20cm程)を検出した。</p> <p>・主な出土遺物</p> <p>各調査区において、古代から近代の瓦片や土器片などが出土した。大部分は包含層や整地土・造成土からの出土である。また、銭貨(寛永通宝)や角釘などの鉄製品も少量出土した。</p> <p>・調査所見</p> <p>各調査区にて地山面や整地土層、砂利敷き舗装面などを確認し、興福寺旧境内の原地形や各時代の表土面などを復元するための重要なデータを得た。また、現在の東金堂灯籠の先行遺構である可能性がある土坑や、近代の排水設備などを検出し、興福寺の歴史を知るための貴重な資料を得た。</p>		
【実績値】	<p>論文等数：1件</p> <p>芝康次郎ほか「興福寺旧境内の調査 一第540・541次」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定</p> <p>(参考値)</p> <p>出土遺物：瓦片整理用コンテナ18箱(うち軒丸瓦2点・軒平瓦1点)、土器片整理用コンテナ2箱、寛永通宝3点、鉄製品数点</p> <p>記録作成数：実測図31枚(A2判)、遺構写真4枚(4×5)、デジタル写真約1400枚</p>		
【受託経費】	2,081千円		



I区で検出した排水設備(北東から)

【受託】
(様式3)

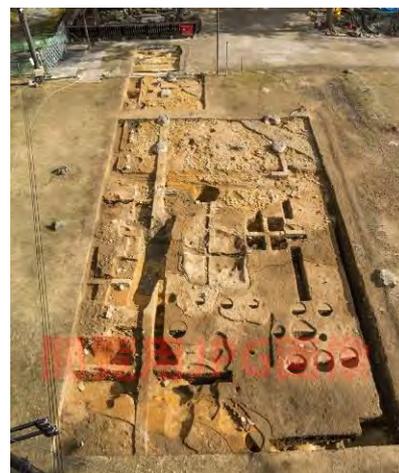
施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8008

業務実績書(受託事業)

研No.13-7

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	興福寺西室・北円堂院発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	箱崎和久(遺構研究室長)、芝康次郎(考古第一研究室研究員)、山本祥隆(史料研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none">・調査の経緯 興福寺境内第1期整備事業に伴う発掘調査。・調査期間 26年9月29日～27年16日・調査面積 西室北辺(A区): 268㎡、北円堂北面回廊(B区): 138㎡、北円堂南面(C区): 44㎡。・基本層序 A区の東辺では、上から表土、黄褐色礫混じり粘土(地山)。西辺では、表土と地山の間に、暗褐色細砂(包含層)が挟まる。B、C区東辺の層序は、A区西辺と同じだが、西辺では地山が西方に向かって急激に下降し、褐色粘土、暗褐色粘土の整地土が見られる。北面回廊の基壇部分では、この上位に黄褐色の粘土と砂を互層にした版築土を確認。・主な検出遺構 A区: 礎石建物(西室大房)1棟、掘立柱建物(小子房か)1棟、井戸1基、廃棄土坑11基以上、方形土坑4基、カマド6基。埋甕土坑11基。井戸以下はすべて中近世に属する。 B区: 礎石建物(回廊)1棟、廃棄土坑4基以上。廃棄土坑は近世以後。 C区: 小土坑(灯籠掘方)3基。いずれも古代か。・主な出土遺物 土器(中近世のものが多量に出土)、瓦(古代～近世)・調査所見 A区 礎石建物(西室大房) 桁行10間、梁行4間のうち、北辺の桁行1間半、梁行4間分の礎石及び礎石据付穴・抜取穴を確認した。また桁行の柱間に2基の小型礎石及びその据付穴・抜取穴を確認した。礎石は1石を除いて創建時の位置を動いていない。基壇外装は、北面では地覆石とみられる凝灰岩が大房礎石から北に6尺の位置で並ぶ。これにより、南北の基壇規模が確定した。西面ではこれらは抜き取られており、その痕跡のみを確認した。東面は後世の攪乱により壊されている。 掘立柱建物(小子房か) 桁行10間、梁行2間のうち東側柱筋の1間半分(間柱を含めると4間分)を確認した。この建物は、西室大房と梁行方向の柱筋を揃える。棟通りおよび西側柱筋の柱穴は、後世の遺構群等により壊されている。この建物の柱穴には遺物が入らず、また埋没後にはこの周辺で13世紀前後の土器を含む遺構が認められるので、それまでには廃絶したと考えられる。 中近世遺構群 中世に属するものとして、井戸(1基)と廃棄土坑群(3基以上)がある。井戸は深さ約2.5mで、廃絶後に土器の廃棄土坑となる。近世に属するものとして、カマド群(6基)と方形土坑群(4基)のほか、土師器や瓦等の廃棄土坑群(8基)があり、南北に並ぶ埋甕土坑群(11基)もある。近世の遺構群は、厨や貯蔵などに関連する施設群と考えられる。 B区 調査区南辺では礎石抜取穴2基を検出した(1基はカシ樹根のため検出できず)。西辺では回廊南辺の基壇外装の一部を検出したほか、西方に大きく下降する地山の上方に積まれた造成土と基壇版築土を確認した。調査区北辺は、中近世以降の瓦や土器、その他生活残滓を含む巨大な廃棄土坑によって、回廊廃絶後に大きく削平されている。 C区 南面階段の中軸にのる土坑と、それと東西の軸を揃える土坑を2基検出した。いずれも灯籠掘方と考えられる。中央部の穴の径60×90cm、深さ25cm、その他の穴の直径は約50cm、深さ20cmで、中央部のものがやや大きい。		
【実績値】	論文等数1件 『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定 (参考値) 出土遺物: 瓦片: コンテナ245箱(軒丸瓦23点、軒平瓦15点、鬼瓦1点)、土器片コンテナ80箱 記録作成数: 実測図40枚(A2判)、遺構写真220枚(4×5)、デジタル写真約1300枚		
【受託経費】	8,231千円		



A区西室北辺全景(西から)

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8009

業務実績書(受託事業)

研No.13-8

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	分譲住宅造成・建築に伴う法華寺旧境内の発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	尾野善裕(考古第二研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、石田由紀子(考古第三研究室研究員)、鈴木智大(遺構研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・調査の経緯 分譲住宅造成に伴う事前の発掘調査。 ・調査期間 26年8月5日～6日。 ・調査面積 12㎡(東西2m×南北6m)。 ・基本層序 調査区北端部：表土(約35cm)、地山(h=65.1m)。 調査区南端部：表土(約25cm)、近世以降の盛土(約30cm)、地山(h=64.9m)。 地山は、橙褐色を主体とする砂と灰白色を主体とする砂が混在する、風化の進んだ岩盤の様な様相を呈する。 ・主な検出遺構 土坑1基(近世以降の遺物含む) ・主な出土遺物 瓦・土器類 ・調査所見 奈良時代の遺構は確認できず、上述の地山の様子等を勘案すると、中世以降に大規模な造成が行われ、遺構面は失われている可能性が高い。 		
【実績値】 (参考値)	出土遺物：瓦片1箱、土器片1箱 記録作成数：実測図1枚(A2判)、遺構写真4枚(4×5)、デジタル写真約30枚		
【受託経費】	219千円		



調査区全景(北から)

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8010

業務実績書(受託事業)

研 No. 13-9

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	共同住宅建設に伴う法華寺旧境内の発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	渡辺晃宏(史料研究室長)、芝康次郎(考古第一研究室研究員)、番光(遺構研究室研究員)、松下迪夫(遺構研究室アシリエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<p>・調査の経緯 賃貸住宅建設に伴う事前発掘調査。調査地は、法華寺旧境内北端・重点地区平城宮跡周辺にあたる。</p> <p>・調査期間 27年1月13日(火)～2月6日(金)</p> <p>・調査面積 126㎡(東西9m×南北14m)</p> <p>・基本層序 上から造成土・耕土(計20～40cm)、床土(10～20cm)、遺構検出面(地山面・明黄褐粘土・現地表下約40～60cm)。 遺構検出の標高は69.1～69.2m。</p> <p>・主な検出遺構 南北柱列1条、東西柱列1条、円形土坑1基(以上奈良時代)、井戸2基(近世以降)など</p> <p>・主な出土遺物 奈良時代の瓦、土器など。</p> <p>・調査所見 法華寺旧境内北端部付近で、規模の大きい東西塀(柱穴規模及び10尺等間という柱間)を検出した。また、南北柱列も敷地北端と関係する様相を呈している点も注目される。これらから、法華寺旧境内敷地の周辺まで計画的な土地利用がなされていた様相を確認することができた。 今後も周辺の発掘調査事例を地道に積み重ねによって、藤原不比等邸・法華寺・宮寺(光明皇太后及び孝謙上天皇の居住空間)として利用されたこの地域の様相が、明確になっていくことが期待される。</p>		
【実績値】	論文等数：0件 報道発表等件数：0件 (参考値) 出土遺物：瓦片16箱(うち奈良時代の軒瓦1点、中世以降の軒瓦4点)、土器片14箱。 記録作成数：実測図7枚(A2判)、遺構写真8枚(4×5)、デジタル写真約190枚		
【受託経費】	1,587千円		



調査区全景(北西より)

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8011

業務実績書(受託事業)

研No.13-10

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城宮北方遺跡の発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	尾野善裕(考古第二研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、石田由紀子(考古第三研究室研究員)、鈴木智大(遺構研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)		
【年度実績概要】	<p>・調査の経緯 店舗新築に伴う調査。</p> <p>・調査期間 26年8月25日～28日。</p> <p>・調査面積 看板設置部分(以下西区)と、店舗部分(以下東区)。西区の調査面積は10㎡(東西2m×南北5m)、東区の調査面積は30㎡(東西3m×南北10m)。</p> <p>・基本層序 西区: 造成土(1.2m)、耕土(15cm)、床土(5cm)、黄褐色土(20cm)、地山(H=78.3m) 東区: 耕土(15cm)、床土(5cm)、暗褐色土(10～20cm)、地山(H=78.4m) なお、遺構は全て地山直上で検出。</p> <p>・主な検出遺構 西区 地山直上で西に向かう大きな落ち込みを検出。落ち込みは調査区内で深さ約40cmをはかり、さらに西に続くと思われる。 東区 ピット2基。</p> <p>・主な出土遺物 土器類が出土。</p> <p>・調査所見 今回の調査では、西区で落ち込みを検出した他は顕著な遺構は認められなかった。調査地は周辺部より一段低い位置にあたり、後世の水田開発等で古代の遺構面は削平されている可能性が高い。</p>		
【実績値】	<p>(参考値) 出土遺物: 土器片1箱、 記録作成数: 実測図2枚(A2判)、遺構写真3枚(4×5)、デジタル写真約80枚</p>		
【受託経費】	291千円		



西区全景(南東から)

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8012

業務実績書(受託事業)

研 No. 13-11

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	共同住宅建設に伴う法華寺旧境内東辺部の発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	馬場基(都城発掘調査部主任研究員)、小田裕樹(考古第二研究室研究員)、番光(遺構研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>・調査の経緯 共同住宅建設に伴う発掘調査。調査地は、法華寺旧境内東南隅部・重点地区平城宮跡周辺に当たる。</p> <p>・調査期間 27年2月4日～2月12日</p> <p>・調査面積 24 m²(南北 4m×東西 6m)</p> <p>・基本層序 調査区西側では、造成土(約 20～40cm)、暗褐色土(中近世の遺物包含層・約 20cm)、横灰土(奈良時代の整地土・約 10～30cm)、地山(黄灰色粘質土および黄灰色砂質土)。調査区東側では、横灰土の上に炭混黒色土(奈良時代の遺物包含層・約 15cm)が堆積。横灰土の標高は 63.2～63.5m。地山の標高は調査区西側が 63.4m、調査区東側が 63.0～63.1m。</p> <p>・主な検出遺構 井戸 1 基(室町時代)、小穴群。 井戸は炭混黒色土層から円形の掘方を掘削する。底部に人頭大の石を円形に据え、一部軒平瓦や平瓦片を配しながら 3 段程度積み上げる。これより上部では、木組みなどの井戸枠材が構築され、抜き取られたものとみられる。</p> <p>・主な出土遺物 瓦類、土器類、木製品、金属製品、銭貨</p> <p>・調査所見 奈良時代の遺物を含む整地土を検出した。法華寺旧境内の地形整備が、東南隅にまで及ぶことが明らかになった。また、室町時代の井戸を検出した。これらの成果により、法華寺造営から廃絶後に至る様相の変化を明らかにする重要な手がかりを得ることができた。</p>		
【実績値】	<p>(参考値) 出土遺物：瓦片 26 箱(うち軒丸瓦 5 点、軒平瓦 7 点)、土器片 14 箱、木製品 2 箱、金属製品 1 点(銭貨・乾元重宝) 記録作成数：実測図 2 枚(A2 判)、遺構写真 4 枚(4×5)、デジタル写真約 80 枚</p>		
【受託経費】	559 千円		



石組み井戸検出状況

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8013

業務実績書(受託事業)

研No.16-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	本薬師寺跡(北村宅)発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】	清野孝之(考古第三研究室長)、廣瀬 覚(都城発掘調査部主任研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、栗山雅夫(写真室技術職員)		
【年度実績概要】	<p>個人住宅の建て替えに伴う事前の発掘調査である。調査地は、本薬師寺跡旧境内西北隅であり、寺城北辺の区画施設や本薬師寺北側を通る七条大路の南側溝の存在が想定された。</p> <p>調査の結果、古代の遺構として南東-北西方向の斜行溝1条、性格不明の円形の土坑2基、中世の東西にやや長い土坑1基を検出したが、寺城区画施設や七条大路に関連する遺構は検出されなかった。</p> <p>調査期間は26年4月3日から4月15日まで、調査面積は70.7㎡である。</p> <p>調査地 : 本薬師寺旧境内西北隅、七条大路 調査期間 : 26年4月3日~4月15日 調査面積 : 70.7㎡ 調査成果 : 古代の斜行溝1条、土坑2基。中世の土坑1基 出土遺物 : 瓦、土器など。</p>		
			
	遺構検出状況(北から見る)		
【実績値】	<p>出土遺物 : 土器1箱、瓦1箱(軒瓦1点) 記録作成数 遺構実測図7枚、写真(4×5)16枚、デジタル写真24枚、デジタルメモ写真211枚</p>		
【受託経費】	1,185千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8014

業務実績書(受託事業)

研No.16-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	藤原京跡、田中廃寺(森田宅)発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】	山本崇(都城発掘調査部主任研究員)、西山和宏(都城発掘調査部主任研究員)、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、清野陽一(考古第三研究室研究員)、栗山雅夫(写真室技術職員)		
【年度実績概要】	<p>個人住宅の建て替えにともなう事前の発掘調査である。調査地は、田中廃寺跡の主要建物の基壇の想定されている通称「弁天の森」と呼ばれる土壇の北側にあたる。従来の調査成果によれば、十条条間路南側溝が調査区の一部にかかる位置にあたる。</p> <p>調査の結果、斜行溝1条、東西溝1条、土坑2基などを検出したが、いずれも時期が特定できなかった。十条条間路側溝に関連する遺構は調査区内では認められなかった。</p> <p>調査期間は平成27年2月5日から2月18日まで、調査面積は23.1㎡である。</p> <p>調査地 : 田中廃寺跡 「弁天の森」土壇北側 調査期間: 平成27年2月5日～2月18日 調査面積: 23.1㎡ 調査成果: 斜行溝1条、東西溝1条、土坑2基。 出土遺物: 瓦、土器など。</p>		
			
	遺構検出状況(北東から見る)		
【実績値】	出土遺物: 土器1箱、瓦1箱(軒瓦1点) 記録作成数 遺構実測図4枚、写真(4×5)4枚、デジタル写真18枚、デジタルメモ写真161枚		
【受託経費】	421千円		

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8015

業務実績書(受託事業)

研No.23-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	京都市の文化的景観保存計画策定調査(受託)(①-⑦)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 平澤 毅
【スタッフ】	恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊地淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> 京都市域の文化的景観として計104ヵ所の候補地を挙げ、それぞれの個票を作成した。なお、これに伴い現地調査を6回実施した。 「京都岡崎の文化的景観保存計画書」の加筆修正、「重要な構成要素個票」加筆修正を行い、それぞれ完成させた。保存計画案策定にあたっては、京都市・京都府・文化庁等との協議(のべ16回)を行った。 保存計画案は、「京都岡崎の文化的景観保存計画策定委員会(第6回)」において報告するとともに、各委員からの意見を集約し、修正作業を進めた。なお、委員会の議事録も作成した。 京都岡崎の文化的景観の普及啓発として、オカシル連続講座2014(主催:京都岡崎魅力づくり推進協議会)に協力し、「営みは水の流れに導かれて—京都岡崎の文化的景観①」(2015年1月25日)と「緑が語る、地域の本来と将来—京都岡崎の文化的景観②」(2015年3月22日)を開催した。 平成24年度に作成した『京都岡崎の文化的景観調査報告書』のPDF版を作成した。 北山杉の林業景観に関する現地調査を計8回実施した。 		
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="284 994 699 1576" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="746 1178 1302 1576" data-label="Image"> </div> </div>		
	<p style="text-align: center;">オカシル連続講座のチラシ</p> <p style="text-align: center;">北山杉の林業景観に関する林業技術調査</p>		
【実績値】	候補地個票：104点 保存計画書：1点 普及啓発事業：2回 調査報告書PDF版：1点 現地調査：14回 デジタル写真：522点		
【受託経費】	1,213千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 **奈良文化財研究所**

処理番号 **8016**

業務実績書(受託事業)

研No.23-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	相川地区文化的景観保存計画策定調査(受託)(1)～(7)		
【担当部課】	文化遺産部景観研究室	【事業責任者】	景観研究室長 平澤 毅

【スタッフ】

恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊地淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)

【年度実績概要】

新潟県佐渡市相川地区所在の鉱山都市に関する文化的景観を国の重要文化的景観に選定申出するため、以下の支援を行った。

- ・平成22年度～平成24年度に実施した価値調査成果に基づき、文化的景観価値調査報告書の編集を行った。
- ・文化的景観普及啓発のための価値調査報告書概要版の執筆・編集を行った。
- ・文化的景観保存にかかる提案・アドバイス等を実施した。
- ・佐渡市世界遺産推進課、新潟県文化行政課世界遺産登録推進室との協議(のべ10回)に基づき、文化的景観保存計画書(案)、重要な構成要素個票(案)、重要文化的景観選定申出書類添付資料(図面等)等の執筆・編集・調整を行った。
- ・「佐渡金銀山調査指導にかかる専門家会議(文化的景観専門分野)」(2回開催)に出席し、資料説明等を行った。
- ・文化的景観普及啓発パンフレット・マップ(2点)の作成及び印刷製本を実施した。
- ・地域づくり及び文化的景観普及啓発のための地域広報誌『あいかわらばん』の定期刊行にあたり、マスコットキャラクターデザイン等の支援を行った。



保存計画書表紙



価値調査報告書概要版(案)の抜粋(16頁～17頁)

【実績値】

保存計画書(案) : 1点

価値調査報告書概要版(案) : 1点

重要文化的景観選定申出書類添付資料 : 1式

(参考値)

記録作成数 : デジタル写真 284点

文化的景観重要な構成要素個票 : 1式

普及啓発パンフレット・マップ : 2点

【受託経費】

3,754千円

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8017

業務実績書(受託事業)

研No.23-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	宇治茶生産の文化的景観における特性調査及び全覧図作成業務委託(受託) ((1)-⑦)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 平澤 毅
【スタッフ】	恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊地淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・「宇治茶生産の文化的景観」の全覧図を作成した。 ・全覧図の作成にあたっては、現地調査及びヒアリング調査(計8回)を行った。 ・全覧図の案は、「宇治茶文化的景観等調査研究会議」(計4回)において報告するとともに、各委員からの意見を集約し、修正作業を進めた。 		
			
	「宇治茶生産の文化的景観」全覧図		宇治茶生産地の様子
【実績値】	全覧図：1点 現地調査：8回 デジタル写真：487点		
【受託経費】	377千円		

【受託】
(様式3)

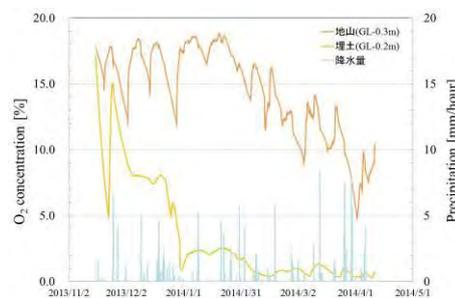
施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8018

業務実績書(受託事業)

研No.25-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国史跡田熊石畑遺跡墓域整備に伴う環境調査(受託)((1)-⑧-イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>宗像市に所在する田熊石畑遺跡では、弥生時代中期前半頃の6基の墳墓全てから、計15点の銅剣、銅矛及び銅戈の青銅製品が出土している。しかし、墓域には未だ発掘調査が行われていない墳墓が存在し、これまでの調査結果から、それらの墳墓にも青銅製品が埋蔵されている可能性が非常に高い。</p> <p>前年度は現地に環境調査機材を設置して、外界気象条件(外気温度、湿度、大気圧、降水量、全天日射量、風向風速)と、土中の埋蔵環境として遺物埋納深度とその直上で土壌温度と含水率、及び土中の酸素濃度について実測調査を開始した。本年度は引き続き環境調査のデータ収集を実施した。</p> <p>実測調査を行った結果は下記の通りであった。</p> <ul style="list-style-type: none">遺物埋納深度における土壌温度の年周期変化の振幅は、外気のものと比較してわずかに小さな程度で、土壌としては比較的大きな温度変化を示した。遺物埋納深度は現地地表から30cmの深さに位置するため、地表の温度変化の影響を大きく受けていると考えられる。遺物埋納深度における土壌の含水率は、常に飽和状態に近い値を示した。上記の通り、地表の降雨の影響を大きく受けていると考えられる。土中の空隙中の酸素濃度は、遺物埋納層でやや高く10%から15%の値を示した一方で、直上の層では5%以下と低い値を示した。埋納深度で比較的高い値を示したことから、土中の間隙水中の溶存酸素濃度は比較的高いと推察される。土中の金属製遺物の腐食に関しては、温度が高いほど、また金属の酸化剤となり得る水分(含水率)と溶存酸素濃度が高いほど腐食は促進されることが考えられる。したがって、遺物が地表付近に埋納されていると考えられる現状では、遺物の埋蔵環境としては過酷なものと考えられる。		
【実績値】	事業報告書: 1件 『国史跡田熊石畑遺跡墓域整備に伴う環境調査』2015.3 研究発表: 1件 脇谷草一郎・柳田明進・高妻洋成「田熊石畑遺跡における青銅器埋蔵環境に関する実測調査」日本文化財科学会第31回大会、2014.7		
【受託経費】	519千円		



(上) 外気温と土中温度、(下) 土中酸素濃度
橙色が推定遺物埋納深度

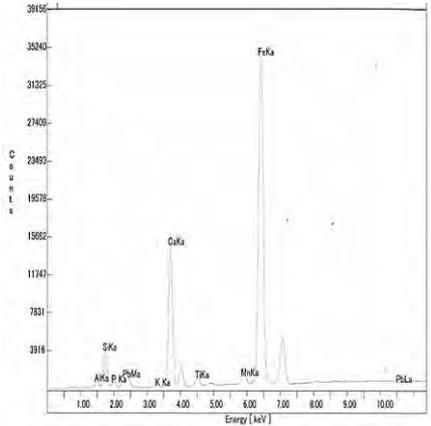
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8019

業務実績書(受託事業)

研No.25-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	三内丸山遺跡出土漆製品の分析(受託)((1)―⑧―イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	杉岡奈穂子(埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<p>三内丸山遺跡から出土した漆製品について、クロスセクション法で塗膜分析を行い、漆を使用していたかどうかをFT-IR法により明らかにする。さらに、漆と混ぜている混入材などの分析を行い、漆製品の製作工程を明らかにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 分析資料 分析には資料番号U-2468、U-2977、U-2850、漆2b、U-1及びAOM10060の6点から採取した破片を供した。 分析方法 フーリエ変換赤外分光分析(FT-IR) ・ 蛍光X線分析 分析結果 資料が漆製品であるかどうかを判定するために、FT-IR分析を行った。その結果、漆に特徴的なピークである、3370 cm^{-1}付近のOH基の伸縮振動、2920 cm^{-1}と2850 cm^{-1}付近のメチレン基の伸縮振動、1700 cm^{-1}付近のカルボキシル基のC=Oの伸縮振動、1610 cm^{-1}付近のC=O伸縮振動を確認することができた。したがって、6点とも漆製品であるということが明らかになった。 また、資料の赤色塗膜の色料を推定するため、蛍光X線分析を行った。分析にはEDAX社製エネルギー分散型蛍光X線元素分析装置を用いた。すべてのスペクトルから鉄(Fe)が強く検出され、水銀(Hg)は全く検出されなかったことから、赤色の色料は酸化鉄を主成分とする赤色顔料であると推測される。通称はベンガラと呼ばれるものであり、鉱物名はヘマタイト(Fe_2O_3)である。 		
			表
	U-2977の光学顕微鏡像		
			
	U-2977の蛍光X線スペクトル		
【実績値】	事業報告書：1件 『三内丸山遺跡出土漆製品の分析―受託研究成果報告書―』2014.12		
【受託経費】	396千円		

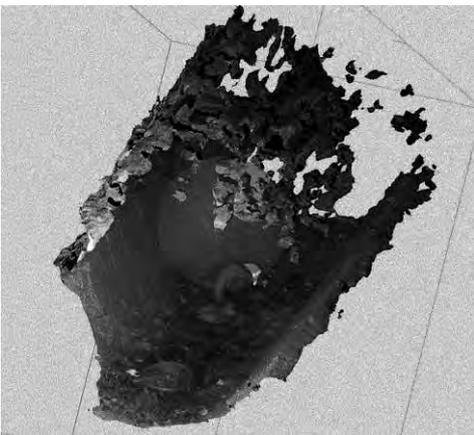
【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8020

業務実績書(受託事業)

研 No. 25-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	関鷄山古墳石槨の現状把握のための画像撮影と3Dデータ化(受託)((1)-⑧-イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学室長 高妻洋成
【スタッフ】	金田明大(埋蔵文化財センター主任研究員)、井上直夫(都城発掘調査部再雇用職員)		
【年度実績概要】	<p>未盗掘古墳である関鷄山古墳主体部について、ComputerVision 技術である SfM (Structure for Motion) 及び MVS (Multi-View Stereo) を用いた三次元データの作成を試みた。</p> <p>計測作業では、ポールの先端に遠隔操作での撮影を可能としたカメラを取り付け、それを石室天井部が除去された箇所から石室内部へ挿し入れて写真撮影を実施した。</p> <p>作業にあたり、撮影範囲がポールの可動域に制約されたため、石室内部を全て詳細に計測することは難しかったが、おおよその形状や規模を想定できるデータを取得することができた。</p>		
			
	関鷄山古墳主体部の三次元計測成果		
【実績値】	写真撮影：2回 SfM/MVSによる計測処理：3回(既存データによる試行含む)		
【受託経費】	428千円		

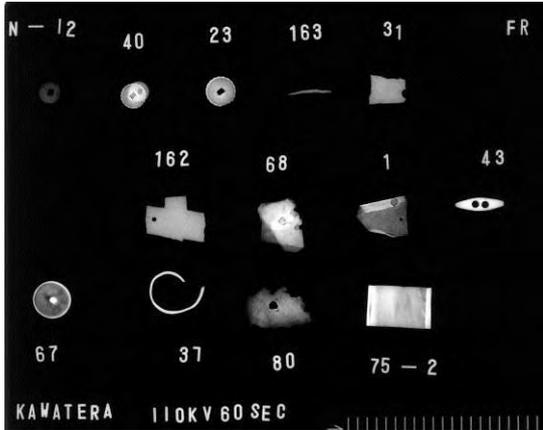
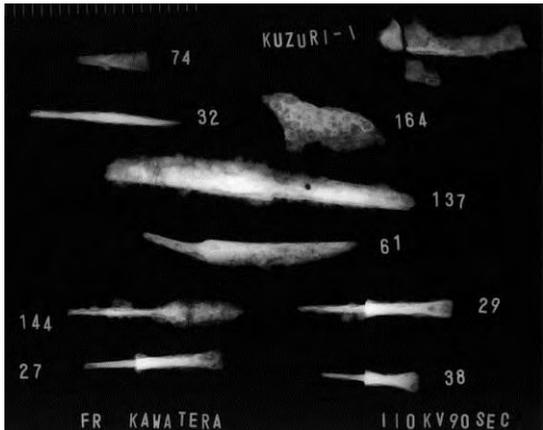
【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8021

業務実績書(受託事業)

研No.25-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	喜界町出土金属製遺物の保存処理(受託)((1)-(8)-イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>本事業の対象は、近年、喜界町の発掘調査で出土した古代・中世期の金属製遺物である。これらの金属製遺物は、南西諸島においては貴重な出土事例であり、できうる限り今ある状態で保存していくために保存処理を実施していく必要がある。</p> <p>本事業の対象とした金属製遺物は、青銅製品及び鉄製品である。本事業では保存処理に先立って、材質分析(蛍光X線分析、X線回折分析)と詳細な状態調査(写真撮影、肉眼観察、顕微鏡観察、X線ラジオグラフィ)を実施した。</p> <p>劣化状態の調査結果に基づいて、以下の保存修理を行った。まず、青銅製遺物については、表面に付着している土粒子を竹串などを用いて除去したのち、新たな腐食の進行を防ぐためにベンゾトリアゾール(アセトン・トルエン2%溶液)を用いた安定化処理を施した。さらに、これら青銅製遺物は脆弱であり、わずかな衝撃によってさらに細片化する危険性を有していたため、物理的な衝撃でこれ以上細片化することのないようにアクリル樹脂に含浸して強化し、接合可能なものについてはアクリル樹脂を用いて接合した。使用したアクリル樹脂はパラロイドB72である。</p> <p>鉄製遺物は表面に付着している砂粒子や錆ぶくれを形成している褐鉄鉱などの腐食生成物を、メス、竹串、グラインダー、超音波研磨装置、エアブレイシブなどを用いたクリーニングにより除去した。これらの鉄製遺物も青銅製品と同様に腐食により脆弱化していたため、アクリル樹脂(商品名:パラロイドNAD-10V)を用いて含浸強化した。また、接合可能なものについてはアクリル樹脂(パラロイドB72)を用いて接合した。なお、本年度事業の対象とした遺物には進行性の腐食を生じているものは確認されなかったため、脱塩処理は実施していない。</p> <p>保存処理が完了した金属製遺物は、低湿度環境下で保管することが望ましいため、ガスバリア袋内に脱酸素乾燥剤を同封のうえ密封した。</p>		
	 <p>青銅製遺物の状態調査(X線ラジオグラフィ)</p>		
	 <p>鉄製遺物の状態調査(X線ラジオグラフィ)</p>		
【実績値】	<p>実施報告書: 1件 『平成26年度 喜界町出土金属製遺物の保存修理報告書』2015.3 保存修理点数: 30点</p>		
【受託経費】	594千円		

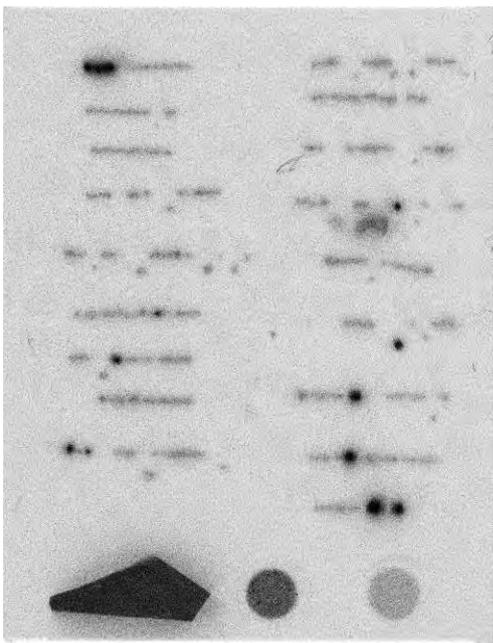
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8022

業務実績書(受託事業)

研 No. 25-5

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	群馬県金井東裏遺跡出土ガラス製遺物の材質・構造調査(受託)(1)－⑧－イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	田村朋美(保存修復科学研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>本事業の対象は、群馬県金井東裏遺跡出土のガラス小玉約350点である。この遺跡は6世紀初頭の榛名山の噴火の際の火山灰や火砕流に埋もれた「甲を着た古墳人」が発見された希有な遺跡である。この火砕流に埋もれた「古墳人」が装身具としてガラス小玉を身に着けていた。本事業では、この「古墳人」が身に着けていたガラス小玉の分析調査を実施するとともに、これらの人骨などとほぼ同時期の祭祀遺構および古墳から出土したガラス小玉についても併せて分析をおこなった。</p> <p>本事業では、これらのガラス小玉について、観察的手法により製作技法を推定し、分析的手法によりガラスの種類や着色剤を同定した。観察には、実体顕微鏡及びCR法を用いた。観察の結果、本資料には引き伸ばし法や鋳型法など数種類の製作技法が認められた。</p> <p>CR法は、アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスの判別にも利用した。CR法による材質調査の結果、本資料には鉛ケイ酸塩ガラスは含まれないことが明らかとなった。次に、アルカリケイ酸塩ガラスの細分を行うため、AR法を実施した。AR法は、物質から放射される放射線を記録して画像を得る方法であり、大量のガラス資料からカリガラス(^{40}Kに由来する放射線を放射している)を簡便に識別することができる。AR法の結果、本資料の大半がソーダガラスであったが、カリガラスも僅かに含まれることが明らかとなった。</p> <p>以上を踏まえてX線分析法による化学組成の非破壊元素測定を実施した。その結果、本資料には南～東南アジア起源と考えられるガラス小玉と西アジアないしは中央アジア産と考えられるガラス小玉が含まれていることが明らかとなった。着色剤については、コバルトや銅などのイオン着色のものが最も多いが、人工黄色顔料である錫酸鉛を用いた黄色や黄緑色不透明ガラス小玉も確認された。</p>		
			
	ガラス小玉のCR画像	ガラス小玉のAR画像	
【実績値】	実施報告書：1件 『平成26年度 群馬県金井東裏遺跡出土ガラス製遺物の材質・構造調査実施報告書』2015.2 分析点数：350点		
【受託経費】	422千円		

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8023

業務実績書(受託事業)

研No.25-6

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝薬師寺東塔顔料等分析調査業務委託(受託)((1)-⑧-イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、杉岡奈穂子(埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<p>国宝薬師寺東塔の解体修理のなかで、初重堂内荘厳に用いられている木部材(身舎天井裏板・身舎支輪裏板)に創建当初と思われる彩色部が新たに見つかった。本年度は、それらの板材に施されている彩色の顔料・有機染料及び展色材などについて、以下のような分析手法を用いて使用されている材料を明らかにすることを目的とし、分析を行った。</p> <p>本調査により彩色が施された時代や纏彩色等の技法の特徴が明らかになることで、後世の改造等についても検討することが可能となり、欠失部材の復旧(復元)等のための基礎的データが得られると期待される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分析方法(非破壊調査を原則として行った。) デジタル顕微鏡観察 ・ 蛍光X線元素分析 ・ 可視分光分析 デジタルアーカイブスキャニング(紫外・可視・近赤外) テラヘルツイメージング X線回折分析 ・ フーリエ変換赤外分光分析(FT-IR) ・分析結果 <p>彩色が施された板表面の状態をデジタル顕微鏡を用いて、彩色層の剥離状態、色の塗り重ね、顔料粒子の形状などについて詳細に観察を行った。また、蛍光X線を用いて元素分析を行い、可視反射スペクトルから色測定を行った。有機染料の使用が考えられる箇所については、上述の分析に加えて、紫外、可視及び近赤外の光を照射して、染料の特定を試みた。板材と彩色層の状態については、テラヘルツイメージングを用いて内部の層構造の観察を試みた。さらに、解体時の剥落片に関しては、蛍光X線元素分析に加えて、X線回折分析、フーリエ変換赤外分光分析等のより詳細な分析を行い、非破壊分析により得られた結果を補うためのデータを収集した。</p>		
	 <p style="text-align: center;">身舎天井裏板の分析箇所の一例</p>		
【実績値】	分析点数：15点(身舎天井裏板5点、身舎支輪裏板10点) 事業報告書：1件 『国宝薬師寺東塔顔料等分析調査報告書』2015.3		
【受託経費】	704千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8024

業務実績書(受託事業)

研No.25-7

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	元町石仏が彫刻された凝灰岩の不飽和水分移動特性に関する研究 その2(受託)((1)-⑧-イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>大分県大分市所在の史跡大分元町石仏は、軟弱な溶結凝灰岩の段丘崖底部に彫刻された磨崖仏である。石仏表面において多量の塩が析出して、磨崖仏表面の粉状化や剥離、あるいは塩による表面の白色化が進行している。塩の析出には覆屋内の温熱環境と、石仏へ浸潤する水に含まれる溶質が大きく影響をおよぼす。そこで、本年度は覆屋内の温熱環境に関する実測調査と水質調査、及び析出塩について季節毎の分析を実施した。調査の結果は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none">調査を実施した夏期から秋期にかけて、覆屋内の絶対湿度は外気と比較して有意に高い値を示した。したがって石仏表面からはこの時期水分が蒸発し続けていると考えられる。石仏背後のボーリング孔と石仏前面の集水孔において採水を行い、溶質成分の分析を行った。その結果、2カ所の採水地点では水質に有意な差異は認められなかった。陽イオンではナトリウムイオン、カルシウムイオンに富み、陰イオンは概ね同濃度の塩化物イオン、硝酸イオン、硫酸イオンが検出された。元町石仏で問題となっている塩の1つに硫酸ナトリウムが挙げられる。これは環境中の温湿度に応じて無水物と一〇水和物の間を相変化し、その石仏膝上に設置の日射量計と温湿度計際の体積変化によって多孔質材料の劣化を引き起こす。前年度実施された覆屋内の温熱環境調査結果について、各日平均値を算出し硫酸ナトリウムの相変化が生じる頻度を月毎に検討した。その結果、2月から3月にかけて相対湿度が上昇し始めるため、相変化の頻度が高くなることで石仏の劣化の危険性ももっとも高くなることが示唆された。		
【実績値】	事業報告書：1件 『元町石仏が彫刻された凝灰岩の不飽和水分移動特性に関する研究 その2』2015.3		
【受託経費】	478千円		



【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8025

業務実績書(受託事業)

研No.26-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	史跡ガランドヤ古墳1号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究(受託) ((1)-⑧-ウ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>大分県日田市に位置する史跡ガランドヤ古墳1号墳は、装飾が描かれた奥壁などの石材表面で剥離や析出物が認められる。このような装飾の劣化の主たる要因は、石材表面における結露の発生と考えられる。従って、石材の劣化を抑制し、装飾を保存するためには、結露の発生を抑制することが重要である。</p> <p>ガランドヤ古墳1号墳では、前年度から引き続き石室保護施設の建設工事が進められている。工事の過程でコンクリート製保護施設に防水処置がなされるまでの期間、石室周辺は一時的に高湿度環境となり、これまでの安定した環境から一転して、容易に結露が発生し得る環境となった。そこで本年度は以下の2点について調査、研究を実施した。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 60%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 石室内空気の露点温度と石室石材表面温度を中心に石室内の環境をモニタリングし続け、必要に応じて機械換気を実施することで石室内の湿気を排出し、結露の発生を防止するための対策を講じた。その結果、機械換気は石室内で発生した結露の解消に非常に効果的であった。 ・ 夏期に結露が発生する要因は、石室石材温度の上昇が緩慢なことにある。したがって、夏期の結露防止のためには、石材温度の上昇を促進することが有効である。前年度は石材温度を上昇させるために要するヒーターの熱量や運用方法について、数値実験から検討した。本年度はヒーターを石室内において実際に稼働させて、その際の結露性状の変化について検討した。その結果、ヒーターを単独で使用した場合には、石材温度は緩やかに上昇したが、石室内は非常に高湿度環境となった。石室内空気の換気が緩慢であるため、石室内の湿気が排出されないことが原因と考えられた。したがって、石室内空気と保護施設内空気の換気を促進することで、さらに結露発生リスクを軽減させ得ると考えられた。 </div> <div style="width: 35%; text-align: center;">  <p>恒久的保存施設内の石室</p> </div> </div>		
【実績値】	<p>事業報告書：1件 『史跡ガランドヤ古墳1号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究2』2015.3</p> <p>論文：1件 脇谷草一郎・高妻洋成「史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究2—結露抑制の手法に関する検討—」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6</p> <p>研究発表：1件 脇谷草一郎・小椋大輔・高妻洋成「史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究—結露の抑制方法に関する検討—」日本文化財科学会第31回大会、2014.7</p>		
【受託経費】	313千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8026

業務実績書(受託事業)

研No.26-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城宮跡遺構展示館の保存活用に関する調査研究事業(受託) (1)－⑧－ウ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>平城宮跡遺構展示館では奈良時代の土遺構を昭和40年代前半から露出展示している。展示館は南北2棟から主に構成され、北棟では掘立柱建物跡を、南棟では礎積基壇建物跡を露出展示している。北棟では主として遺構や盛土表面での塩析出による劣化が、南棟では磚や石材表面での塩析出や、常に湛水状態にある雨落ち溝での褐色沈殿物による汚損が顕著な劣化として挙げられる。本年度はこれらの劣化の要因を考察するために、環境調査を実施した。環境調査としては1) 外界気象条件として気象観測(外気温湿度、大気圧、水平面全天日射、降水量、風向風速)、2) 展示館内温湿度、3) 塩析出に関する調査として地下水の水質分析と遺構面に析出する塩の同定を行った。また、4) 褐色の沈殿物による汚損に関する調査として、地下水位観測と地下水中の溶存酸素濃度測定を行った。これらの実測調査とあわせて、遺構展示館における熱水分溶質移動の数値解析から、塩析出と褐色沈殿物による劣化を抑制する手法について検討した。実測調査の結果を下に記す。</p>  <p style="text-align: center;">磚表面から析出する塩</p> <ul style="list-style-type: none">・ 北棟で見られる塩は硫酸カルシウムのみである一方で、南棟では冬期に磚や石材表面で硫酸ナトリウムが認められた。後者は塩類風化による破壊力の大きな塩であるため、析出の抑制が喫緊の課題である。・ 館内に空調を有する北棟と比較して南棟館内の温熱環境は外気のものに近く、特に冬期は気温が低下するため硫酸ナトリウムが析出しやすい環境であった。・ 南棟で見られる褐色沈殿物は含水酸化鉄であった。南棟北側で地下水の酸化還元環境に関する測定を実施したところ、地下水は通年還元環境にあるため鉄が溶けた状態にあり、これらの地下水が南棟で浸み出した後に沈殿し続けていることが明らかとなった。・ 数値解析の結果、南棟南側に設けている復元基壇と遺構面の比高が大きいため、展示館外で降った雨水が館内遺構面にしみ出す状態にあることが示唆された。基壇表面における雨水の浸透率を低下させることで、遺構面における水分蒸発量を減少し、したがって遺構面における塩析出量を減少させ得ることが示唆された。		
【実績値】	<p>事業報告書：1件 『平城宮跡遺構展示館の保存活用に関する調査研究事業報告』2015.3</p> <p>研究発表：5件</p> <ol style="list-style-type: none">① 桑原範好・銚井修一・脇谷草一郎・小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」日本建築学会近畿支部研究報告、2014.6② 桑原範好・銚井修一・脇谷草一郎・小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」2014年度日本建築学会大会、2014.9③ 脇谷草一郎・桑原範好・銚井修一・小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における塩析出と沈殿物が引き起こす露出展示遺構の劣化に関する研究」2014年度日本建築学会大会、2014.9④ 脇谷草一郎・桑原範好・銚井修一・小椋大輔「土遺構の露出展示保存における保存施設的环境設計」日本建築学会 環境工学委員会 熱環境運営委員会 第44回熱シンポジウム、2014.10 ほかに1件		
【受託経費】	6,756千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8027

業務実績書(受託事業)

研No.28-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	実相寺古墳群総合的探査委託業務(受託)(2)－②)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】	西村 康((財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所長・客員研究員)、西口和彦(元兵庫県立考古博物館調査専門委員・客員研究員)		
【年度実績概要】	<p>実相寺古墳群の太郎塚、次郎塚および鷹塚の3古墳及び天神畑遺跡について、別府市教育委員会と連携して探査作業を行った。</p> <p>上記3古墳及び天神畑遺跡では、地中レーダー探査を行い、太郎塚・次郎塚古墳については電気(比抵抗)探査及び電磁探査を実施した。天神畑遺跡では電磁探査も行った。</p> <p>詳細は現在解析中であるが、以下のような暫定的結果が得られている。すなわち、各古墳ともに主体部が残存しているものの、太郎塚・次郎塚古墳については石室が壊れている可能性が高く、次郎塚では石室の床面が遺存している可能性があること、鷹塚については石室の範囲が推定できそうなことである。天神畑遺跡では既に発掘調査されている天神畑古墳の遺存部を確認するとともに、さらに2基の古墳が存在する可能性を示唆する結果が得られた。</p>		
			
	太郎塚・次郎塚古墳の電気探査		
【実績値】	<p>レーダー探査：古墳3基、遺跡1カ所</p> <p>電気(比抵抗)探査：古墳2基</p> <p>電磁探査：古墳2基</p> <p>墳丘測量：古墳2基</p>		
【受託経費】	720千円		

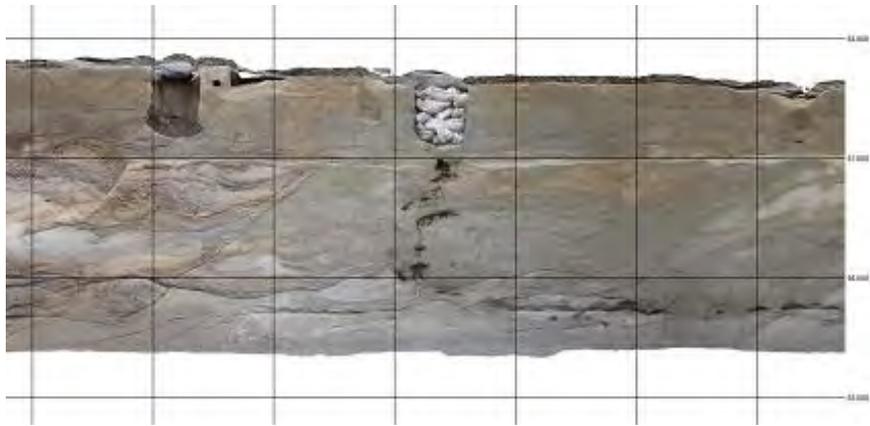
【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8028

業務実績書(受託事業)

研No.28-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	ネットワーク型遺跡調査システムの開発(受託)((2)-②)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】	西村 康((財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所長・客員研究員)、西口和彦(元兵庫県立考古博物館調査専門委員・客員研究員)		
【年度実績概要】	<p>本年度は東日本大震災復興事業関連の調査における遺構記録迅速化事例の蓄積を受けて、その処理方法に関して既存の記録との連携性についての検討などを実施した。主な検討対象として、南相馬市での調査関連データの処理と現地への成果の送付を行った。これは、現地で遺構記録に関する全ての作業を行うのではなく、遠隔地に熟練した作業者と高性能な機材を集中して解析を実施するもので、結果をより早く現地へ還元することを目的としており、今回その方法の有効性を試験的にではあるが確認することができた。</p> <p>また、探査部門では、新たに導入した探査機器を用いた試験的な探査を実施し、地方公共団体等から要望の多い城館跡の石垣内部や横穴墓等を対象として、探査・データ解析方法について検討を行った。</p>		
			
	遺構の高速計測試験例		
【実績値】	計測試験回数：12回(解析を含む) 探査試験回数：2回		
【受託経費】	368千円		

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8029

業務実績書(受託事業)

研No.29-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝薬師寺東塔木材年代測定業務(第2回)(受託)((2)-③)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
【スタッフ】	星野安治(年代学研究室研究員)		
【年度実績概要】	<p>国宝薬師寺東塔解体修理に伴い、構成部材の年代測定を行うことにより、建立年代及び建立後の修理の履歴等を推定する資料を得るための調査を前年度に引き続き実施した。調査結果は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象部材は、奈良県と協議の上、樹皮・辺材の有無等に注視するほか、当初材は無論のこと、いわゆる中古材と分類される材や近世以降の修理材と目される部材も含めて、可能な限り悉皆的に調査することを旨とした。 本調査では、解体修理工事と同時進行で行うため、本年度は解体の進んだ二層、及び初層の部材を優先した。 年輪年代測定は、選定部材のうち、77点について年輪計測用画像を高解像のデジタルカメラで撮影した。 放射性炭素年代測定は、前年度に得られた年代測定成果をさらに絞り込むためウィグルマッチングも行い、15点の試料を採取した。 		
			
	心柱の接写撮影風景		
【実績値】	年輪年代調査点数：77点 放射性炭素年代調査点数：15点		
【受託経費】	2,159千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8030

業務実績書(受託事業)

研No.30-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	新潟県糸魚川市六反田南遺跡出土の動物骨分析(受託)(2)－④		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	研究員 山崎 健
【スタッフ】			
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none">六反田南遺跡(新潟県糸魚川市)から出土した動物遺存体の調査を行い、約5,000点の動物遺存体を分析した。サケ科、サメ類、タイ科、エイ類、ニシン科、サバ属、アジ科などの魚類を同定した。河川ではサケ科魚類を集中的に獲得して、海では多様な漁撈活動を行っていたことが明らかとなった。骨が焼けると、タンパク質は燃焼され、無機質であるリン酸カルシウムのみが残存する。出土した動物遺存体は、貝塚の分布密度が低く出土事例の少ない日本海側における動物資源利用を検討する上で貴重な資料といえる。		
			
	六反田南遺跡から出土したサケ科魚類の椎骨		
【実績値】	分析点数：4,600点		
【受託経費】	1,855千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8031

業務実績書(受託事業)

研No.30-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	東名遺跡出土動物遺存体調査(受託)((2)-④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	元埋蔵文化財センター長・客員研究員 松井 章
【スタッフ】	大江文雄(愛知県環境審議会専門調査委員・客員研究員)、丸山真史(京都市埋蔵文化財研究所・客員研究員)、真貝理香(環境考古学研究室技術補佐員)		
【年度実績概要】	<p>・受託研究の概要</p> <p>縄文時代早期末の湿地性貝塚として、極めて良好な状態で動植物遺存体を保存する東名遺跡において、前年度に引き続き、魚の「耳石」による種同定及び分析を行った。当遺跡からは、他遺跡では類をみない1046点もの耳石が出土しており、前年度はこれらのうち、およそ半分の試料を種同定したが、本年度はすべての試料の同定を完了し、その結果を研究考察した。</p> <p>従来の研究では、主として出土した魚骨によって種同定がされてきたが、今回のように大量の耳石による研究は、日本の考古学史上初めての成果である。</p> <p>・同定結果</p> <p>前年度の実績と併せて、海生魚種:12科15属16種を同定することができた。その組成は、スズキ科スズキ(45.3%)、ニベ科ホンニベ(9.0%)・コイチ(10.1%)・シログチ(0.9%)、ボラ科メナダ(8.9%)・ボラ(8.3%)、タイ科クロダイ(7.9%)、ハモ科ハモ(0.8%)、その他魚種(0.2%以下):ハゼ2種、シロキス、テンジクダイ、アナゴ、ハマギギ、ギンイソイワシ、マゴチ等が確認された。</p> <p>耳石によって同定された魚種の中には、これまで魚骨では同定できなかった魚種が含まれ、また魚骨では「科」のレベルまでしか同定できなかったボラ科の魚が、耳石によってボラ・メナダと、「種」のレベルまで同定可能となるなど、耳石による種同定・研究の有効性が明らかとなった。</p> <p>また、出土耳石と現生魚種の耳石(長さ・重量を含む)との比較から、捕獲された魚の体長や年齢の推定も行いつつある。</p> <p>・動物考古学的意義</p> <p>特記すべきは、黄海・東シナ海の亜熱帯地域に生息し、現代の有明海には生息していないホンニベ(<i>Miichthys miuy</i>)の耳石(平均して23.7mm)が、全体の層準から見られたことである。このことは当時の有明海の古環境を復元する際に重要な資料となる。</p> <p>当遺跡から出土したホンニベの耳石は並はずれて大きく、推定総体長は1mを上回る。漁網錘、釣針、刺突具などの漁労具を持たない東名遺跡の人々が、こうした大形のホンニベを捕獲できたのは、産卵期に河口付近に接近した際である可能性が高い。また、東名の人々が大形の魚体を選択して捕獲していたことも伺える。このように、魚のサイズや生態から、当時の環境や漁労活動の手がかりを得ることができたことも、動物考古学的に極めて意義深い。</p> <p>・成果発表</p> <p>本年度の研究成果を、日本動物考古学会大会(2014年10月29日)において、口頭発表した。</p>		
	 <p>ホンニベ (<i>Miichthys miuy</i>) 耳石</p>		
【実績値】	耳石試料数:1,046点		
【受託経費】	491千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8032

業務実績書(受託事業)

研No.30-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	波怒棄館遺跡出土の動物遺存体の分析 (受託) ((2)-④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	研究員 山崎 健
【スタッフ】	松崎哲也(京都大学大学院生)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none">波怒棄館遺跡(宮城県気仙沼市)から出土した動物遺存体の分析を行い、約25,000点の動物遺存体を同定した。貝類では、アサリが最も多く、ついでムラサキインコ、イガイ、マガキ、クボガイ、スガイ、レイシガイ、タマキビ、イボニシなどが含まれている。魚類では、マグロ属やカツオが多く、タイ科、マダイ、ソウダガツオ属、サバ属、メバル科、カワハギ科、アイナメ属などが含まれている。哺乳類ではニホンジカ、イノシシ、イヌ、ノウサギなどを同定し、鳥類ではミズナギドリ科、キジ科、カモ亜科、カラス科、カモメ科を同定した。貝類・魚類に比べて哺乳類の出土量が非常に少なく、活発な漁撈活動が行われていた点の特徴である。魚類はマグロ属やカツオなどの回遊魚が多く出土しており、マグロ属は体長3m級の大型のものから数十cm程度のものまで存在していた。		
			
	波怒棄館遺跡から 出土したマグロ属の椎骨		
【実績値】	分析点数：24,300点		
【受託経費】	4,582千円		

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8033

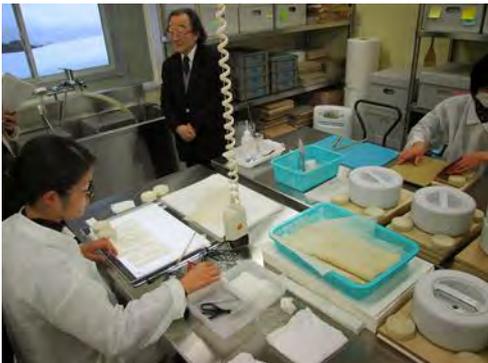
業務実績書(受託事業)

研No.34-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	木村定三コレクション黒漆厨子のテラヘルツイメージングによる診断調査の予備試験(受託) (3)-③-イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、杉岡奈穂子(埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<p>愛知県立美術館に寄託されている木村定三コレクションのひとつである黒漆厨子は、外面は黒漆で塗装され、内面絹本著色の絵画で装飾されている。愛知県立美術館においてこの厨子の修理を実施するにあたり、内部背面の絵画の状態を診断する必要があるが生じた。このような板材に絹本が貼られたものの深さ方向の構造調査にはテラヘルツイメージングが適している。しかしながら、黒漆厨子は箱の構造を有しており、既存のテラヘルツイメージング装置を用いることが困難である。本研究では、テラヘルツイメージングによる診断調査に先立ち、最適な測定条件を得るための予備試験を実施することを目的としている。</p> <p>テラヘルツイメージング装置を、箱構造を有する黒漆厨子の内部背面の測定ができるようにするため、黒漆厨子と同じ形状を有する試験体を作製し、それに対して測定が可能となるようXYステージの改造を行った。また、深さ方向の情報、すなわち黒漆層および絹本著色絵画層の断面情報を正確に得るために、標準試料として黒漆塗装サンプルおよび絹本著色サンプルを作製し、これらに対してイメージング試験を行った。</p> <p>XYステージを改良することで、奥行きのある黒厨子の内部背面を安全にイメージングすることが可能となった。また、板材上の黒漆層および絹本著色層の断面構造をテラヘルツイメージングすることで、それぞれの層の剥離箇所などの検出が可能であることが明らかとなった。</p>		
			
	黒漆厨子の模型と THz 測定風景		
【実績値】	事業報告書：1件 『木村定三コレクション黒漆厨子のテラヘルツイメージングによる診断調査の予備試験』2015.3		
【受託経費】	1,176千円		

業務実績書(受託事業)

研No.36-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業（受託）（(3)－④）		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
<p>【スタッフ】</p> <p>山梨絵美子（企画情報部副部長）、佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）、森井順之（主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）、二神葉子（企画情報部情報システム研究室長）、皿井舞（主任研究員）、久保田裕道（無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長）、菊池理予（研究員）、今石みぎわ（研究員）、田良島哲（東京国立博物館学芸研究部調査研究課長）、和田浩（保存修復課環境保存室長）</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>本調査研究は、文化庁からの受託事業である。25年度、26年度の2ヵ年間で実施した。</p> <p>23年3月に発生した東日本大震災を受け、被災各地で行われた被災文化財等の緊急保全活動について全容を把握し、今後予想される大災害等が発生した際の初動対応等の指針を策定する際に提供できるよう情報整理を行った。主な事業としては、①東日本大震災を受けて実施された文化財（美術工芸品）等の緊急保全活動の実績のとりまとめ、②①の活動により緊急保全された文化財等の保管状況や修復状況の調査、③全国組織の文化財・美術等関係団体、地域の資料保全に関わる団体等の災害に対する対応策の現状調査、から成る。</p> <p>① 文化庁による文化財レスキュー事業の2年間の活動において救援委員会が作成・集積した資料の整理・分析</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業において事務局が作成した活動日報のデータ解析 村井源氏（東京工業大学、自然言語処理）の協力を得て実施した活動日報のテキストデータ解析が完成し、救援事業における活動動向を分析するとともに、震災発生時の活動に備えた日報の新たなフォーマットを作成した。 2) 画像データに位置情報が付加され、活動日報データベースとの共有が可能になった。 3) 救援委員会構成団体が実施した研究会、及び発行した各種報告書、刊行物等に関してデータを収集した。 <p>② 文化財レスキュー事業により緊急保全された文化財等の保管状況や修復状況に関する調査</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 旧警戒区域から搬出され福島県埋蔵文化財収蔵施設（まほろん）で保管中の文化財資料の保管状況を調査した。 2) 津波で被災し応急処置の後所蔵者に戻されていた絵画作品の状況を岩手県宮古市文化会館で調査した。 3) 岩手県立博物館で現在も実施されている資料の安定化処理作業の状況を調査した。 4) 宮城県石巻市文化センター所蔵の被災資料の保管状況について同市旧湊第二小学校の状況を調査した。 <p>③ 災害時の対応策についての調査</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 兵庫県（県教育委員会、神戸市博物館）で阪神淡路大震災発生時の体制とその後の取り組みについて、和歌山県（県立近代美術館）で県内連携体制構築の取り組みと最近の自然災害発生時の対応について聞き取り調査を行った。 2) 人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」26年度第1回研究会「災害を見据えた博物館連携のあり方について」に参加し、三重県、高知県、文化庁、文化財保存修復学会等の活動について情報収集した。（4月14日、国立民族学博物館） <p>④ 情報収集と意見交換のための研究会参加と開催</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 研究会参加：宮城県被災文化財等保全連絡会議が主催した研修会に参加し、石巻市旧湊第二小学校仮設収蔵施設の保存環境についての報告をするとともに、宮城県内気仙沼市、涌谷町及び福島県の情報を収集した。（11月19日、20日、東北歴史博物館） 2) 文化庁との共催で研究会「これからの文化財防災―災害への備え」を開催した。旧被災文化財等救援委員会構成団体の専門家、文化庁から建造物、埋蔵文化財、無形文化財、美術学芸の各担当が参加し、今後に向けての取り組みについて報告した。参加者143名。（12月4日、東京文化財研究所） <p>⑤ 報告書作成</p> <p>2年間の成果をもとに「文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業報告書」を作成し、文化庁に提出した。</p>			
 <p>岩手県立博物館被災文化財保存修復室の調査</p>			
<p>【実績値】</p> <p>受託研究報告書「文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業報告書」 27年3月 村井源、森井順之、二神葉子、江村知子、菊池理予、皿井舞、今石みぎわ、久保田裕道、山梨絵美子、田良島哲、岡田健：東日本大震災後の文化財レスキュー活動参加者の傾向分析、人文科学とコンピュータシンポジウム、情報処理学会シンポジウムシリーズ、情報処理学会、Vol. 2014、No. 3、pp. 1-8、26年12月 村井源、森井順之、二神葉子、皿井舞、菊池理予、江村知子、今石みぎわ、久保田裕道、山梨絵美子、田良島哲、岡田健：東日本大震災後の文化財救出活動記録の計量的分析、情報知識学会年次大会、情報知識学会誌、情報知識学会、Vol. 24、No. 2、pp. 238-245、26年5月</p>			
<p>【受託経費】</p> <p>3,530千円</p>			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8035

業務実績書(受託事業)

研No.37-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	絵金屏風の保存修理に関する調査研究(受託)(3)－⑤		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】	<p>朽津信明(修復材料研究室長)、早川典子(主任研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)</p>		
【年度実績概要】	<p>燻蒸事故により汚損された絵画の保存修復に関して、調査研究を行った。</p> <p>これは、通常の汚損事故とは異なり、文化財に使用すべきでない燻蒸材料を使用した結果、化学反応によって作品に使われていた色料が変色・変化をした状況で、作品のみならず作業者の安全を図るため、当研究所が事故当事者である熊本市現代美術館との契約において実施するもので、この結果をもとに修理技術者が慎重な作業を行っている。</p> <p>本年度作業の概要は以下のとおり：</p> <p>(1) クリーニング終了後の作業方針についての検討への協力 前年度までに実施したクリーニング手法に関する研究と今後の顔料の変化に関する研究に基づく作業方法の提案をもとに、株式会社修護により、対象作品全5幅について8月までにクリーニング、裏打ち取り替え、下地作製までの工程が完了した。これをもとに、熊本市現代美術館、高知県教育委員会、香南市、絵金蔵、所蔵者が今後の方針について検討するに当たり、文化財保護の理念と方法に基づき、助言を行った。</p> <p>(2) 高精細画像の撮影 クリーニング作業終了後に企画情報部文化財アーカイブズ研究室により対象作品の高精細画像を撮影した。</p> <p>(3) 色彩処置作業のためのシミュレーション 方針検討において、緑青が黒変した部分について薄く緑色に染めた紙を貼るという案が議論されたので、その効果をイメージするために、上記画像に画像処理を行い、関係者の検討に供した。</p>		
			
	クリーニング終了画像	色彩処置修理イメージ	
【実績値】			
【受託経費】	167 千円		

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務(受託) ((4)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】	佐野千絵(保存科学研究室長)、木川りか(生物科学研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、朽津信明(修復材料研究室長)、北野信彦(伝統技術研究室長)、吉田直人(主任研究員)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、早川典子(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、酒井清文(客員研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、加藤雅人(国際情報研究室長)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)、大河原典子(鎌倉女子大学講師・客員研究員)、前川佳文(絵画修復家・客員研究員)		
【年度実績概要】	<p>○生物及び環境関連研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高松塚壁画修理施設の修理作業室等において、昆虫トラップ設置による害虫等生息調査、浮遊菌・付着菌調査を定期的に行い、環境の清浄度を確保するモニタリングを継続実施している。また、修理作業室とそれ以外の修理施設内各所における温湿度の測定も継続して実施し、適切な温湿度条件を安定して維持するための空調機の制御方法についても検討を行った。 ・高松塚古墳の微生物分離株は、劣化要因の調査や漆喰壁からのカビの除去試験などで利用されたのち、アンブルとして保存されており、貴重な資源となっている。これらの微生物株を今後も確実に保存していくため、公的機関への寄託を念頭に、菌株のデータ集、基本台帳やシーケンスデータファイルの作成を実施した。 ・福岡県うきは市珍敷塚古墳および日岡古墳で装飾古墳の保存環境調査を継続実施した。珍敷塚古墳では保存庫内の温湿度計測を継続するとともに、うきは市が定期的に行うモニタリングへ指導助言を行った。日岡古墳では、冬季に発生する保存施設の内壁の結露への対策を講じるため、保存施設の壁面温度の計測を行った。 <p>○修復関連研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高松塚古墳壁画のクリーニング方法として、酵素の使用方法に関して、現場での作業性の向上を検討し、適用した。また、再結晶化した表面のカルサイト部分について、国宝装飾師連盟と共同し、あらたに損傷地図の作成を行った。 		
			
	酵素を使用したクリーニング作業		
○材料技法研究	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良文化財研究所との共同により、高松塚古墳壁画に関する色料の分析調査を継続的に実施している。新たに蛍光分光法を適用するための基礎的検討を行った。また、これまでに取得した膨大な分析データの整理を行った。 		
○研究所古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議の開催	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良文化財研究所と高松塚古墳関連の事業全般について情報共有を行い、より実りのある事業を展開するために、26年5月8日、11月10日、27年2月4日の3回にわたり、研究所古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議を奈良文化財研究所とともに開催した。 		
【実績値】			
【受託経費】	直接経費 40,455 千円		

【受託】
(様式3)施設名 東京文化財研究所処理番号 8037

業務実績書(受託事業)

研No.40-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査(受託)((4)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】	佐野千絵(保存科学研究室長)、木川りか(生物科学研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、朽津信明(修復材料研究室長)、北野信彦(伝統技術研究室長)、吉田直人(主任研究員)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、早川典子(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、加藤雅人(国際情報研究室長)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)、大河原典子(鎌倉女子大学講師・客員研究員)、前川佳文(絵画修復家・客員研究員)		
【年度実績概要】	<p>○生物環境関連研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・24年9月に石室内から採取した試料、及び25年2月に実施されたキトラ古墳盗掘口のステンレス台取り外しに伴う盗掘口、閉塞石からの微生物採取試料について、菌叢を調査した結果をとりまとめた。また、キトラ古墳石室が発掘された16年から石室の埋戻しが行われた25年までの期間にわたる微生物の調査結果を踏まえ、微生物相の推移についてとりまとめを行った。 ・キトラ古墳に由来する微生物株についても、高松塚古墳由来の微生物株と並行して、公的菌株保存機関への寄託を念頭に、基本台帳とDNAシーケンスデータファイルの作成を実施した。 <p>○修復関連研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漆喰の再構成を行うために、修復材料の検討を行った。また、表面のクリーニングのために酵素の使用を検討し、汚れの状態によって異なるクリーニング手法を適用することを確認した。次年度以降に本格的に修理作業内に実施していく予定である。 <div data-bbox="150 1057 707 1476" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">天文図の再構成</p> <p>○材料技法研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良文化財研究所との共同により、キトラ古墳壁画に関する色料の分析調査を継続的に実施している。新たに蛍光分光法を適用するための基礎的検討を行った。また、これまでに取得した膨大な分析データの整理を行った。 <p>○東京国立博物館で開催された特別展「キトラ古墳壁画」では、輸送・梱包・環境調整・画像展示等について協力した。</p>		
【実績値】	<p>研究報告2件(①②)</p> <p>① 佐藤嘉則・木川りか・喜友名朝彦・立里臨・杉山純多：パイロシーケンス法によるキトラ古墳石室内の微生物群集構造解析、「保存科学」54、27年3月</p> <p>② 木川りか・喜友名朝彦・立里臨・佐藤嘉則・佐野千絵・杉山純多：キトラ古墳の微生物調査報告(24年～25年)および16年から25年までの微生物調査結果概要、「保存科学」54、27年3月</p>		
【受託経費】	直接経費 33,366千円		

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
【事業名称】	高松塚古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査 ((4) -①)
【担当部課】	保存修復科学センター
【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】	大塚将英 (主任研究員)、吉田直人 (主任研究員)、森井順之 (主任研究員)、佐藤嘉則 (研究員)
【年度実績概要】	<p>本調査研究は、文化庁からの受託事業である。事業は2カ年の予定で、その第1年目を担当した。</p> <p>高松塚古墳壁画は、「恒久保存方針」が17年度に決定され、それに基づき19年度に石室ごと解体され、現在国営飛鳥歴史公園内にある国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設において、10年を目途に修理作業が進められている。修理後の当分の間の保存の在り方については、古墳壁画の保存活用に関する検討会において議論が重ねられ、26年3月には「高松塚古墳壁画修理後の当分の間の保存の在り方について」(以下「修理後の保存方針」という。)が決定された。恒久保存方針及び修理後の保存方針は、「将来的には、カビ等の影響を受けない環境を確保した上で現地に戻す」ということについて共通しており、特に修理後の保存方針においては、「壁画・石室の保存管理・公開を行うための施設」の在り方についても検討することとされている。</p> <p>本調査においては、高松塚古墳壁画修理後の当分の間の保存・展示の在り方について調査を行い、古墳壁画の保存活用に関する検討会での議論に資することを目的とする。当研究所に与えられた任務は、主に保存科学、文化財科学の見地から日本国内の展示事例を調査し、その成果を事業第2年目に予定されている高松塚古墳壁画の保存・展示の望ましい形を提案するための検討作業に資することである。</p>
作業の実績	<p>(1) 調査資料の作成</p> <p>国内の装飾古墳を対象として、屋内環境で保存・公開をしている例、覆い屋など半屋内環境で保存・公開をしている例(古墳そのものが移築されている場合も含む)について、さらに複製や高精細画像等による二次的な展示手法についても範囲に入れ、これまでの装飾古墳に関する調査研究の成果、各地資料館等施設が公開している情報、その他インターネットによる情報までを収集し、全国から8府県、計21カ所についての基礎資料を作成した。</p> <p>(2) 事例調査とワークショップ開催</p> <p>○ワークショップ開催：熊本県・福岡県・福井県について東京文化財研究所へ各県・施設の担当者等を招聘し、ワークショップを開催し、基本方針に挙げた調査内容について事前に聞き取りと意見の交換を行った。(26年12月17日)</p> <p>○上記資料に基づき、主要な事例についての現地調査を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・滋賀県陶板複製制作会社、関西大学(陶板による高松塚古墳壁画再現展示施設)、柏原市立歴史資料館、同市安福寺所蔵割竹形石棺蓋。(26年11月26日、27日) ・熊本県鴨籠古墳(宇城市)、門前古墳(八代市)、大蔵蔵東麓第1号墳装飾石材(八代市立未来の森ミュージアム)、石貫穴観音横穴、同ナギノ横穴(玉名市)、広浦古墳装飾石材と鴨籠古墳石棺(熊本県立美術館)(27年1月15日、16日) ・大牟田市内出土石棺等(大牟田市三池カルタ歴史資料館)(27年1月21日) ・福井県内出土石棺等(福井県立歴史博物館、福井市郷土歴史博物館、同市文化財保護センター)(27年2月5日、6日) <p>(3) 報告書作成</p> <p>調査の成果をもとに「古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査事業報告書」を作成し、文化庁に提出した。</p>
	
	大牟田市三池カルタ歴史資料館での調査
【実績値】	受託研究報告書「古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査事業報告書」 27年3月
【受託経費】	3,530千円

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8039

業務実績書(受託事業)

研No.41-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務(受託)(4-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
<p>【スタッフ】</p> <p>廣瀬 覚、降幡順子、青木 敬(以上、都城発掘調査部主任研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、辻本与志一(株式会社文化財保存・客員研究員)、杉岡奈穂子(保存修復研究室アソシエイトフェロー)、中島義晴(文化遺産部部主任研究員)、高橋知奈津(遺跡整備研究室研究員)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)、肥塚隆保(元奈良文化財研究所副所長・客員研究員)、岡田 健、早川泰弘、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊(以上、東京文化財研究所)、水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所調査部)、相原嘉之(明日香村教育委員会文化財課)</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キトラ古墳仮設保護覆屋の解体作業において、立会調査を実施した。 ・仮設保護覆屋解体後、墳丘整備前の記録として、墳丘南側部分の3次元レーザー測量を実施した。 ・報告書未掲載資料の歯牙及び人骨片87箱のうち、31箱分について保存処置を実施し、仮保管ケースを作成した。 ・キトラ古墳墓道部の版築の剥取資料の活用を図るとともに、版築層の粒度分布に関する調査を実施した。 ・出土品の保管に関して、遺物の定期的な点検作業、環境モニタリング及び安全な保管に関する措置を講じた。 ・壁面の保存修復に資する情報を得るために、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、THz波を用いた漆喰層調査、分光光度計による顔料調査などを実施した。 ・キトラ古墳の整備活用について検討を行った。 			
			
<p>仮設保護覆屋解体作業</p>			
<p>【実績値】</p> <p>論文数5本(①～⑤)</p> <p>①若杉智宏・水野敏典・長谷川透「キトラ古墳の発掘調査」(特別展図録「キトラ古墳壁画」各論 26年4月)</p> <p>②井上直夫「キトラ古墳壁画のフォトマップ撮影」(特別展図録「キトラ古墳壁画」コラム 26年4月)</p> <p>③福永香・高妻洋成「壁画の下の漆喰を見たい！」(特別展図録「キトラ古墳壁画」コラム 26年4月)</p> <p>④高妻洋成「キトラ古墳壁画の材料調査」(特別展図録「キトラ古墳壁画」各論 26年4月)</p> <p>⑤降幡順子「キトラ古墳出土ガラス小玉(第135次)」(『奈文研紀要2014』pp.122-123、26年6月)</p> <p>記録作成数：仮設保護覆屋解体工事デジタル写真133枚</p>			
<p>【受託経費】</p> <p>20,719千円</p>			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8041

業務実績書(受託事業)

研№.41-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務(受託)((4)-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】	廣瀬 覚・降幡順子・青木敬(以上、都城発掘調査部主任研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、南部裕樹、大谷育恵(以上、都城発掘調査部アソシエイトフェロー)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、辻本与志一(株式会社文化財保存・客員研究員)、杉岡奈穂子(埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)、肥塚隆保(元奈良文化財研究所副所長・客員研究員)、岡田健・早川泰弘・朽津信明・犬塚将英・吉田直人・佐野千絵・三浦定俊(以上、東京文化財研究所) 青柳泰介・水野敏典(以上、奈良県立橿原考古学研究所調査部)、岡林孝作(奈良県教育委員会文化財保存課)、相原嘉之(明日香村教育委員会文化財課)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none">・石室解体に伴う発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、今年度から新たに解体時に石室外面から取り外した目地漆喰の保管兼展示のための台座作成に着手した。今年度は15点ほどある目地漆喰のうち、まず南壁石-西壁石1の間の目地漆喰1点を対象とし、シリコンで型取りを行った上で樹脂製の台座ベースを作成し、これに目地漆喰を安置することができた。これにより、来年度以降、残りの目地漆喰の台座を作成する上での見通しを立てることができた。・同じく石室解体に伴う発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、石室解体事業の3次元アニメーションの作成を行った。今年度は、石室解体事業の長編の作成、及びそれに必要となるモデルの補足作成を実施した。これにより、発掘調整成果にかかる一連のCG動画作成業務を完了させることができた。・壁画の保存修復(劣化原因)について、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、分光分析による顔料調査などを実施した。・高松塚古墳壁画の経年変化を記録するための写真撮影を同壁画仮設修理施設にて実施した。・26年8月、27年1月の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際して、解説員として研究員(延べ19人)を派遣した。		
			
	目地漆喰の保管兼展示用台座の完成状況		
【実績値】	<ul style="list-style-type: none">・高松塚古墳壁画経年変化記録写真(デジタル写真68枚)・赤田昌倫、吉田直人、辻本与志一、降幡順子、高妻洋成、朽津信明、早川典子、早川泰弘、岡田健、脇谷草一郎、田村朋美、建石徹、宇田川滋正「高松塚古墳壁画の材料調査-西壁女子群像の赤衣像青色裳に使用された色料について-」(『日本文化財科学会第31回大会要旨集』、26年7月)・降幡順子、早川泰弘、赤田昌倫、吉田直人、辻本与志一、朽津信明、早川典子、脇谷草一郎、田村朋美、高妻洋成、岡田健、宇田川滋正、建石徹「高松塚古墳壁画の赤色・黄色色料に関する調査」(『日本文化財科学会第31回大会要旨集』、26年7月)		
【受託経費】	53,016千円		

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8041

業務実績書(受託事業)

研No.41-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査業務(受託)(4-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】	<p>廣瀬 覚、降幡順子、青木 敬(以上、都城発掘調査部主任研究員)、前川 歩(遺構研究室研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、平澤 毅(景観研究室長)、中島義晴(文化遺産部主任研究員)、高橋知奈津(遺跡整備研究室研究員)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)、田村朋美、脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、石橋茂登(学芸室長)</p>		
【年度実績概要】	<p>平成19年度に壁画が石室ごと解体され、平成21年度に仮整備が行われた高松塚古墳について、今後の墳丘整備の在り方に関する調査を文化庁から受託し、下記の業務を実施した。</p> <p>(1) これまでの高松塚古墳に関する調査の成果と課題の整理 (2) 国内外の古墳等について、高松塚古墳の保存・活用に関して参考となる事例の調査 ・国内及び韓国における事例調査・ヒアリング (3) 高松塚古墳の整備案の提案 (4) 高松塚古墳に関する考古学的調査の成果を反映した保存・活用方策についての提案</p> <p>これらの業務に伴い下記の図を作成した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高松塚古墳周辺現況図 ・整備案図版 <p>最終的に成果を奈良文化財研究所『高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査報告書』にまとめた。</p>		
			
	参考事例の現地調査風景(陵山里古墳:韓国扶余邑)		
【実績値】	報告書等1件:奈良文化財研究所『高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査報告書』27年3月		
【受託経費】	4,160千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8042

業務実績書(受託事業)

研No.42-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡嚴重立会等調査(受託)((4)-②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】	清野孝之(考古第三研究室長)、西山和宏、降幡順子(以上、都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、森先一貴(考古第三研究室研究員)、前川 歩(遺構研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、栗山雅夫(写真室技術職員)		
【年度実績概要】	<p>国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所(以下、事業者)が実施する、国営飛鳥歴史公園(キトラ古墳周辺地区)整備工事に伴う嚴重立会等調査である。調査地は、檜隈寺跡の北の丘陵地から、史跡檜隈寺跡の東側に沿って南に延び、塔跡の東側に至る範囲の工事立会(A区)、檜隈寺跡の北の丘陵地の西斜面の工事立会(B区)の2カ所である。</p> <p>A区では、現代の造成盛土や耕作土などの中で収まるところがほとんどであったが、一部、遺構面を検出した部分については、事業者の理解と協力の下、設計変更され遺構面は現状保存された。</p> <p>B区では、東西方向を主軸とし、西側に開口する瓦窯を1基検出した。窯の構造は有畦式平窯で、窯体の残存長は約2.3m、最大幅は約1.8mである。出土遺物のほとんどは、7世紀後半から8世紀初頭の軒瓦を含む瓦類である。しかし、出土遺物の中に平安時代に下る土器がわずかに出土していることや、瓦窯の構造からみて、8世紀後半から平安時代頃のものとして推定される。なお、本瓦窯は、事業者の協力の下、現地保存された。</p> <p>調査期間は平成26年5月15日から6月17日まで、調査面積は269㎡である。</p> <p>調査地 : 檜隈寺跡北側の丘陵地と東側の平坦部(A区)と檜隈寺跡北西の斜面地(B区) 調査期間 : 26年5月15日～6月17日 調査面積 : 269㎡ 調査成果 : A区 古代と推定される遺構面、瓦溜まり1基 B区 瓦窯1基 8世紀後半から平安時代の有畦式瓦窯1基 出土遺物 : 瓦、土器など。</p>		
			
	B区 瓦窯検出状況 (西から見る。窯体内は南半のみ掘り下げ。周囲の溝は調査用排水溝)		
【実績値】	出土遺物 : 土器1箱、鉄釘1点、瓦・焼土塊24箱(軒丸瓦4点、軒平瓦4点) 記録作成数 遺構実測図10枚、写真(4×5)180枚、デジタル写真136枚、デジタルメモ写真558枚		
【受託経費】	1,246千円		

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8043

業務実績書(受託事業)

研No.42-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査等業務(受託)((4)-②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】	<p>山本 崇(都城発掘調査部主任研究員)、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、前川 歩(遺構研究室研究員)、清野陽一(考古第三研究室研究員)、金宇大(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、井上直夫(写真室再雇用職員)、飯田ゆりあ(写真室アソシエイトフェロー)</p>		
【年度実績概要】	<p>本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、①「体験工房」建設地、「広報展示施設」建設地、中心伽藍南東の排水管、中心伽藍北東の遊歩道部分の立会、②昨年度の調査区の南方にあたる、丘陵の南東裾部分の発掘調査、を実施した。</p> <p>調査地：①(立会)「体験工房」建設地、「広報展示施設」建設地、中心伽藍南東の排水管、中心伽藍北東の遊歩道部分 ②(発掘調査)檜隈寺跡回廊南東部。2013年度調査区の南方。</p> <p>調査期間：27年1月20日～3月27日 調査面積：①69㎡ ②377㎡ 調査成果：古代と推定される掘立柱建物2棟、掘立柱塀1基を検出した。中世と推定される掘立柱建物3基を検出した。その他、土坑3基、溝状土坑1基を検出した。 古代と推定される建物は檜隈寺伽藍の造営方位の振れにおおむね一致する 檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世初頭の二時期に建物等が建立されたという第180次調査での見解を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開することがあきらかとなった。</p> <p>出土遺物：瓦、土器、金属製品等</p>		
			
	調査区中段部遺構検出状況(北西から)		
【実績値】 (参考値)	<p>出土遺物 軒瓦5点、丸平瓦12箱、土器4箱、鉄器2点 記録作成数 遺構実測図33枚、写真(4×5)24枚、デジタル写真122枚、デジタルメモ写真349枚</p>		
【受託経費】	5,743千円		

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8044

業務実績書(受託事業)

研No.43-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力コンソーシアム事業(受託)(1)-①		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】	原本知実(前アソシエイトフェロー)、原田怜(前アソシエイトフェロー)、井内千紗(アソシエイトフェロー)、狩野麻里子(アソシエイトフェロー)、草薙綾(研究補佐員)、降旗翔(前研究補佐員)、大久保優美(研究補佐員)、佐多麻美(研究補佐員)		
【年度実績概要】	<p>文化遺産国際協力に係わる諸課題について議論するための分科会を12回、ワーキンググループ会合を1回開催するとともに、情報共有を促進するための場として研究会を2回開催した。文化遺産保護に関する国際協力の活動を広報するため、一般市民向けのシンポジウムを行ったほか、国際協力事業を紹介する冊子の作成、ウェブサイトへ国際協力事業に関するデータ追加を行った。さらに、マレーシア及びネパールにて協力相手国調査、並びにスリランカへの協力支援を実施した。</p> <p>(1) コンソーシアムの企画・運営</p> <ul style="list-style-type: none">・運営委員会を2回開催し、活動方針等を協議したほか、3月には活動報告のための総会を開催した。・企画分科会、東南アジア・南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会、欧州分科会、アフリカ分科会、中南米分科会を計12回開催した。・ミャンマーワーキンググループ会合を1回開催した。 <p>(2) 情報共有と情報発信</p> <ul style="list-style-type: none">・シンポジウム「世界遺産としてのシルクロードー日本による文化遺産国際協力の軌跡」を開催した。・研究会「文化遺産管理における住民参加」、「文化遺産保存の国際動向」を開催した。・広報活動のため、事業紹介冊子の作成及びウェブサイト上の文化遺産国際協力事業のデータベースに、529事業の情報を追加した。・調査報告書『スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用』、平成26年度協力相手国調査報告書『マレーシア調査報告書』、『ネパール調査報告書』をまとめた。 <p>(3) 文化遺産国際協力に関することから</p> <ul style="list-style-type: none">・マレーシア及びネパールを対象に協力相手国調査を実施した。・スリランカ東北部にて、文化遺産保護状況に関する事業の支援を行った。・香港にてHeritage Impact Assessment (HIA) ワークショップに参加し、アジア各国のHIAへの取組みについて情報収集した。・インターネット上での文化財不法取引に関する情報を収集した。		
			
	<p>シンポジウム「世界遺産としてのシルクロードー日本による文化遺産国際協力の軌跡」 (26年9月27日撮影)</p>		
【実績値】	<p>運営委員会の開催：2回、総会の開催：1回、シンポジウムの開催：1回、分科会の開催：(企画分科会4回、東南アジア・南アジア分科会2回、東アジア・中央アジア分科会2回、西アジア分科会2回、欧州・アフリカ合同分科会1回、中南米分科会1回)合計12回、ワーキンググループ会合の開催：1回、研究会の開催：2回、スリランカの文化遺産保護国際協力支援、文化遺産保護関係国際機関情報収集：HIAワークショップ参加、文化遺産国際協力事業データベース：事業554件追加</p> <p>(成果物ドキュメント名) ①調査報告書『スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用 日本語』(27年3月200部) ②調査報告書『スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用 英語』(27年3月150部) ③平成26年度協力相手国調査『マレーシア調査報告書』(27年3月150部) ④平成26年度協力相手国調査『ネパール調査報告書』(27年3月150部) ⑤「文化遺産国際協力事業紹介2014年度」(27年3月1500部) ⑥「文化遺産国際協力事業紹介2014年度 英語」(27年3月600部)</p>		
【受託経費】	43,678千円		

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8045

業務実績書(受託事業)

研No.43-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	第39回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成(受託)((1)-①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】	二神葉子(企画情報部情報システム研究室長)、境野飛鳥(文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、増渕麻里耶(アソシエイトフェロー)、原本知実(国際協力機構(JICA)専門家・客員研究員)		
【年度実績概要】	<p>当該事業では文化庁からの委託により、27年6月28日～7月8日にドイツ・ボンで開催予定の第39回世界遺産委員会に関連して下記の項目を実施した。</p> <p>(1) 世界遺産一覧表記載への推薦及び保全状況報告の対象となる物件の一覧の作成(27年1月上旬～3月下旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・締約国から推薦され、第39回世界遺産委員会での世界遺産一覧表への記載に関する審議(議題8:世界遺産一覧表の改訂)の対象となる予定の物件、及び議題7(保全状況の報告)での審議の対象となる予定の物件について、その物件の名称を和訳し、一覧表を作成した。 <p>(2) 世界遺産一覧表記載への推薦及び保全状況報告の対象となる物件に関する資料の作成(同上)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上記(1)で示した議題8の審議対象となる物件について、過去の世界遺産委員会の審議文書や文献、関連のウェブサイトなどにより情報を収集し、概要や保全体制、保全上の課題などについて資料を作成した。 ・議題7の審議対象となる物件に関しては、ユネスコ世界遺産センターなどで公開している文書に基づき、その概要を簡潔にまとめた。 <p>以上で作成した内容は、電子ファイル(Excel及びWord形式)で電子メールにより文化庁に提出した。</p>		
			
	<p>第39回世界遺産委員会での審議対象予定物件「大ブルハン・ハルドゥン山と周辺の聖なる文化的景観」(モンゴル)を構成するアラシャーン・ハダ遺跡</p>		
【実績値】	<p>作成データ数 3件</p> <p>第39回世界遺産委員会における審議物件概要一覧表</p> <p>議題8(世界遺産一覧表の改訂)での審議対象予定物件に関する資料</p> <p>議題7(保全状況の報告)での審議対象予定物件の概要</p>		
【受託経費】	671千円		

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	第 38 回世界遺産委員会審議調査研究事業 (受託) ((1)-①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
<p>【スタッフ】</p> <p>二神葉子 (企画情報部情報システム研究室長)、境野飛鳥 (文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、増渕麻里耶 (アソシエイトフェロー)、新免歳靖 (研究補佐員)、原本知実 (国際協力機構 (JICA) 専門家・客員研究員)</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>当該事業では文化庁からの委託により、26 年 6 月 15 日～6 月 25 日にカタール・ドーハで開催された第 38 回世界遺産委員会に関連して下記の項目を実施した。</p> <p>(1) イコモスによる推薦物件に関する勧告内容の分析 (26 年 4 月上旬～6 月上旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> 審議関連文書の公開に先立ち、新規推薦予定物件に関する情報を収集しまとめ、(2)の対処方針作成支援のための資料とした。 世界遺産一覧表記載物件の保全状況 (議題 7) 及び世界遺産一覧表推薦物件の審査 (議題 8) に関して、イコモスによる評価書及び決議案の日本語による要約を作成した。 <p>(2) 世界遺産委員会対処方針作成支援 (26 年 5 月上旬～6 月上旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> 議題 8 について、各物件の評価のポイントやその妥当性、着目すべき点についてコメントを作成した。また、当該物件や推薦国に関する知識を有する専門家にも情報提供を依頼し、あわせて提出した。 議題 7 に関して、議題 8 と同様にコメントを作成、提出した。 <p>(3) 世界遺産委員会での情報収集と議事概要の作成 (26 年 6 月中旬～7 月上旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 38 回世界遺産委員会に参加、本会議の全議題で、発言者 (国・団体) ごとに発言内容を記録した。我が国から推薦した「富岡製糸場と絹産業遺産群」の審議では、発言記録を審議終了後ただちに文化庁関係者と共有、報道発表資料の作成を支援した。 発言内容の記録は議事概要としてまとめ、会期終了 1 週間後に提出した。 <p>(4) 審議における議論の内容及び決議の分析と提言、報告書作成 (26 年 7 月中旬～9 月末)</p> <ul style="list-style-type: none"> (3) で作成した議題 7、8 及び作業指針の改訂に関連した各議題の議論の要約を作成した。 (1) で作成した事前配布資料の要約をさらにまとめ、決議の要約を付加した。 本会議での審議全体の概要と傾向を簡略にまとめ、提言を記した。 <p>以上を報告書とした。報告書のうち文化庁提出分以外は、事業の一環である関係者間での情報共有を目的に、各地方自治体の世界遺産、文化財担当部局に配布した。</p>			
<p>【実績値】</p> <p>作成報告書数 1 件 『平成 26 年度文化庁委託 第 38 回世界遺産委員会審議調査研究事業』26 年 9 月</p>			
<p>【受託経費】</p> <p>4,525 千円</p>			



イリーナ・ボコヴァ ユネスコ事務局長のスピーチ

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8047

業務実績書(受託事業)

研No.46-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ラチャプラディット寺院螺鈿扉修復計画策定のための調査研究(受託)((2)①ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊 渉
【スタッフ】	山下好彦(任期付研究員)、二神葉子(企画情報部情報システム研究室長)、早川泰弘(保存修復科学センター分析科学研究室長)、犬塚将英(主任研究員)、城野誠治(企画情報部文化財アーカイブズ研究室専門職員)、本多貴之(明治大学専任講師・客員研究員)		
【年度実績概要】	<p>(1) 事業概要</p> <p>タイ・バンコク所在の一級王室寺院であるラチャプラディット寺院拝殿の窓と出入口の扉の漆による装飾部材は、日本製の可能性が示唆されていた。タイ文化省芸術局からの協力依頼に基づく調査を経て、所有者であるラチャプラディット寺院からの受託研究として、螺鈿及び漆絵の施された部材各1点の調査と試験的な修理を実施している。</p> <p>(2) 実施項目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・材料の分析 木材や漆膜、下張の紙など、材料の分析を行った。木材はスギで、文様などの特徴とあわせ、日本での製作がほぼ確実となった。部材表側には日本もしくは中国産とされる漆、裏面や修理箇所ではタイ産の漆が用いられている。下張の紙の繊維はアジアに広く分布するコウゾであった。 ・X線透過画像撮影 部材の調製、枠組への固定方法、修理状況を知るため、X線透過画像を撮影した。画像の観察から、当初より文様にかかる形でネジ止めされ、裏一面に黒漆が施され錫粉がまかれていたこととあわせ、製作時に固定方法が想定されていなかったと考えられた。螺鈿部材の両端には厚さ約3mmの別の木材があり、収縮に伴う寸法調整のため修理時に付加された可能性が示唆された。 ・修理 部材の詳細な目視及び高精細画像により劣化状況を確認、修理を行っている。作業は浮いた漆や貝の接着、部材欠損部の充填、後世の修理の塗膜の除去が主である。当初、後世の塗膜除去は困難と考えられ除去しない方針であったが、有機溶剤(THF)に一部が可溶と判明し、THFと刃物により除去することとした。あわせて、事業完了を27年3月末から同年7月末に変更した。 ・専門家の研修 芸術局の伝統芸術部門及びバンコク国立博物館保存部門、王室工芸学校の専門家各2名の計6名に対し、26年9月16日～26日に東京文化財研究所で研修を行った。内容は、上記の分析・修理を行った専門家による講義、及び手板と実際の作品の修理実習である。研修費用のうち材料費は本受託研究から支出、渡航費・滞在費はラチャプラディット寺院が別途負担した。 		
【実績値】	扉部材調査・修理点数 2点 研修受入人数 6名		
【受託経費】	1,135千円		



後世の修理による塗膜除去に関する研修の様子

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8048

業務実績書(受託事業)

研No.46-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業(ブータン)(受託)(2)-①-ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 友田正彦
【スタッフ】	亀井伸雄(所長)、佐藤桂(アソシエイトフェロー)、北川瑞季(研究補佐員)		
【年度実績概要】	<p>ブータン王国の伝統的建造物保存に関する拠点交流事業</p> <p>文化庁より受託した本事業では、同国内務文化省文化局を相手国拠点とし、石造または版築造と木造との複合構造である同国の民家及び寺院等の伝統的建造物を対象として、その文化遺産としての歴史的価値付けと耐震性評価に向けた建築学的、構造学的調査、及び材料実験等を共同で実施することにより、効果的な技術移転と人材育成の促進を図ることを目的とした。なお、構造学的調査の実施及び分析に係る専門的業務については、名古屋市立大学と香川大学に再委託した。</p> <ul style="list-style-type: none">・事業の3ヵ年目、最終年度にあたる本年度は、以下の日程により2度の専門家派遣を行った。 26年9月18日～9月27日：建築工法及び構造調査(建築及び構造専門分野9名を派遣) 26年12月20日～24日：最終ワークショップ(建築及び構造専門分野8名を派遣)・第1回派遣では、構造調査として、所定の材料調査に従ってブータン側で事前に作成された複数の試料からコアを採取して強度試験を行い、石灰を混入することによる版築壁の補強効果を確認したほか、従来は職人の勘に頼ってきた材料土の粒度分布や最適含水比などを実験により数値化する作業を行うとともに、このような作業の手順をブータン側職員に指導した。一方、建築工法調査としては、パロ県内の農村集落で民家及びその廃墟を調査し、構造形式上の変遷や、版築壁に用いられている技法などを調査したほか、版築による伝統的建設技法について職人や技術者への聞き取り等を行った。・第2回派遣では、事業総括のためのワークショップをティンパー市内の国立図書館にて開催し、ブータン側からは文化局長をはじめ、遺産保存課、災害管理課、建設省の関係部局ほか職員約30名が参加した。構造、工法の両分野における調査研究成果を両国側専門家より発表して共有するとともに、伝統的版築造建造物に関する構造安全ガイドラインの策定という中長期的目標に向けて今後ブータン側が継続すべき作業の工程表について意見を交換し、内容に合意するに至った。・3年間にわたり実施した事業の成果としては、構造学分野では、版築造建造物の耐震性能評価についての方法論を初めて提示したことが最も大きい。また、建築学分野では、ブータンの版築造民家の形式編年に関して試案を提示したことや版築工法に関する各種の技法を明らかにしたことが大きい。それらの内容は、報告書「ブータン王国の版築造建造物保存に関する調査研究」に取りまとめて刊行したほか、調査データ等の詳細資料一式はブータン側当局と共有し、今後の業務において活用されることとなっている。		
			
	版築造民家の調査風景		
【実績値】	報告書 2冊		
	① 「ブータン王国の版築造建造物保存に関する調査研究」(日本語版)		
	② 「Study on the Conservation of Rammed Earth Buildings in the Kingdom of Bhutan」(英語版)		
	専門家派遣 2回、現地ワークショップ 1回		
【受託経費】	9,014千円		

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8049

業務実績書(受託事業)

研No.46-3

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（ミャンマー）（受託）（(2)－①－ウ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 友田正彦
【スタッフ】 亀井伸雄（所長）、川野邊渉（センター長）、山下好彦（任期付研究員）、佐藤桂（アソシエイトフェロー）、楠京子（アソシエイトフェロー）、増渕麻里耶（アソシエイトフェロー）、北川瑞季（研究補佐員）、前川佳文（壁画保存修復士・客員研究員）、森本晋（奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室長）、石村智（奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室研究員）			
【年度実績概要】 ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業 文化庁より委託された本事業では、同国文化省考古・国立博物館局を相手国拠点とし、有形文化遺産の保護に関する専門家交流及び技術移転・人材育成への協力を行った。前年度に引き続き、歴史的建造物、壁画・漆芸等の工芸、考古学遺跡・遺物の三分野に焦点を当て、現地への専門家派遣及び日本への同国専門家招聘等を通じて、調査や保存修復の手法を技術移転し、専門的人材の育成に協力しようとするものである。本年度の実施内容は以下の通りである。なお、考古分野は奈良文化財研究所への再委託により実施したほか、建造物研修は公益財団法人文化財建造物保存技術協会の協力を得て実施した。			
<ul style="list-style-type: none"> ・26年5月30日～6月15日：建築保存専門家4名をマンダレー及びインワに派遣し、考古局職員ほか12名を対象に第2回木造建造物保存研修を実施した。略平面図の作成や破損状況調査の方法を中心に現場実習と座学を行った。 ・26年6月10日～18日：壁画保存専門家4名をバガンに派遣し、No.1205寺院の壁画について状態調査や堂内環境調査を行い、損傷記録図を作成した。また、バガン考古博物館にて考古局職員6名を対象に壁画の保存修復等に関する研修として、講義・実習を行った。 ・26年6月10日～20日：漆工芸専門家1名をバガン及びマンダレーに派遣し、博物館所蔵の漆工品の技法や劣化状況に関する調査を行ったほか、漆材料に関する聞き取り調査、木造建造物に施された漆装飾及びガラスモザイク技法等についても観察調査を行った。 ・26年6月10日～18日：虫害専門家1名をバガン及びマンダレーに派遣した。バガンでは工芸品を展示する博物館と煉瓦造建造物、マンダレーでは木造建造物における虫害の状況を調査し、対策の検討を行った。また、上記2カ所での保存研修の一部として、虫害に関する講義と実習を行った。 ・26年11月23日～29日：考古学の専門家2名、文化財写真の専門家1名を派遣し、ピョ考古学フィールドスクール及びシュリクシエトラ遺跡にて文化財写真に関する研修ワークショップを開催した。 ・27年1月11日～24日：建築保存専門家4名をマンダレー及びインワに派遣し、考古局職員ほか12名を対象に第3回木造建造物保存研修を実施した。仕様調査の方法を中心に現場実習と座学を行った。 ・27年1月15日～24日：漆工芸及び金属分析の専門家各1名をマンダレー、バガンほかに派遣した。それぞれにおいて、木造僧院建築と博物館所蔵の漆工芸品に用いられた漆装飾やガラスモザイクに関する技法や材料の調査を行ったほか、下記壁画保存専門家の調査・研修にも協力した。 ・27年1月18日～27日：壁画保存専門家2名をバガンに派遣し、No.1205寺院の壁画に対する応急的な保存処置を行ったほか、考古局職員5名を対象に顔料調査や損傷記録に関する研修を行った。 ・26年8月20日～30日：上記木造建造物保存研修に参加している考古局職員3名を日本に招聘し、文化財建造物保存修理に関する研修を行った。当研究所ほかでの座学のほか、東京近郊及び関西方面にて修理工事現場を含む実地研修を行った。 ・27年1月17日～26日：考古局の考古学専門家3名を日本に招聘し、文化財写真に関する研修を奈良文化財研究所にて行った。 ・27年3月8日～13日：考古局の保存科学専門家2名を日本に招聘し、壁画の保存修復に関する研修を当研究所ほかにて行った。 			
【実績値】 専門家派遣 8回、招聘 3回、研修 8回			
【受託経費】 14,296千円			



木造建造物保存研修

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8050

業務実績書(受託事業)

研No.47-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	平成26年度文化遺産国際協力拠点交流事業(ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業・考古分野)(受託)(2)-①-ウ・エ)		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	企画調整部長 杉山 洋
【スタッフ】	森本 晋(国際遺跡研究室長)、石村 智(国際遺跡研究室研究員)、田代亜紀子(国際遺跡研究室アソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none">26年11月23日～29日に研究員2名・文化財写真の専門家1名を派遣し、シュリクシェトラ都城遺跡にある考古学フィールドスクールにおいて文化財写真に関するワークショップを開催した。受講者はスクールの講師が中心で計19名。27年1月17日～26日:ミャンマー文化省考古・国立博物館局の考古学専門家2名と保存科学専門家1名を日本に招聘し、文化財写真に関する研修を奈良文化財研究所において行った。写真の原理の講義、遺物写真撮影実習、遺構写真撮影実習、写真資料の管理と保管に関する講義を行ったほか、奈良・京都・大阪の文化財を視察した。		
			
ミャンマーにおける写真研修	奈良文化財研究所における写真研修		
【実績値】			
【受託経費】	3,300 千円		

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8051

業務実績書(受託事業)

研 No. 47-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	平成 26 年度文化遺産国際協力拠点交流事業 ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業(受託)((2)-①-ウ・エ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
<p>【スタッフ】</p> <p>脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、杉山 洋(企画調整部長)、森本 晋(企画調整部国際遺跡研究室長)、今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、和田一之輔(都城発掘調査部研究員)、石村 智(企画調整部主任研究員)、田代亜紀子(企画調整部アソシエイトフェロー)、佐藤由似(企画調整部研究補佐員)、杉山淳司(京大大学生存圏研究所教授)、Thi Ngoc Bich(ベトナム林業大学教授)、Le Xuan Phuong(ベトナム林業大学講師)、Bui Minh Tri(ベトナム都城研究センター所長)、Nguyen Van Anh(ベトナム都城研究センター研究員)</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1)平成 26 年 8 月 7 日～8 月 12 日の期間、ベトナム及びタイを訪問した。ベトナム林業大学においてワークショップを開催し、東南アジアにおける遺跡出土木製遺物の保存の問題について、最新の研究成果の発表と討議を行った。その後、ベトナム林業大学の Thi Ngoc Bich 教授と Le Xuan Phuong 講師とともに、タイを訪問し、Chantanaburi 博物館における沈船の保存に関する情報収集を行った。また、Samut Sakhon 遺跡を訪問し、現在、発掘調査が進められている 8 世紀の沈船を見学し、東南アジアにおける遺跡出土木製遺物の保存の問題について、現地で討議を行った。</p> <p>(2)平成 27 年 1 月 15 日～21 日の期間、インドネシアを訪問した。ガジャマダ大学において国際研究集会を開催し、インドネシアにおける遺跡出土木製遺物の保存の現状と課題について、議論を深めた。また、ボロブドール遺跡センターを訪問し、インドネシアにおける文化財の保存の現状について調査を行った。</p> <p>(3)京大大学生存圏研究所に招聘されていたベトナム林業大学 Nguen Duc Thanh 氏とともに、奈良文化財研究所において、ベトナム産木材の成分分析法に関する基礎研修を実施した。</p>			
			
タイの Samut Sakhon 遺跡出土沈船			
<p>【実績値】</p> <p>研究集会等開催件数：2 件</p> <p>Seminar on Conservation of Waterlogged Wood (2014. 8. 8、ベトナム林業大学、参加者 30 名)</p> <p>International Seminar on Conservation of Archaeological Waterlogged Wood (2015. 1. 19、ガジャマダ大学、参加者 40 名)</p> <p>発表件数：2 件</p> <p>① Y. Kohdzuma, “Conservation of Archaeological Waterlogged Wooden Relics in Japan”, Seminar on Conservation of Waterlogged Wood, Vietnam, 2014. 8</p> <p>② Y. Kohdzuma, “Conservation of Archaeological Waterlogged Wooden Relics in Japan”, International Seminar on Conservation of Waterlogged Wood, Indonesia, 2015. 1</p>			
<p>【受託経費】</p> <p>4,000 千円</p>			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8052

業務実績書(受託事業)

研No.48-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（アルメニア及びコーカサス諸国等）（受託）（(2)－①－エ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】	藤澤明（前アソシエイトフェロー）、有村誠（金沢大学准教授・客員研究員）、邊牟木尚美（金属文化財保存修復家・客員研究員）、釘屋奈都子（東京藝術大学大学院専門研究員・客員研究員）、日高真吾（国立民族学博物館准教授）、橋本沙知（元興寺文化財研究所）		
【年度実績概要】	<p>「アルメニアおよびコーカサス諸国等における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の枠組みにおいて、コーカサス諸国等の文化財保存修復専門家間のネットワーク作り貢献し、幅広い技術交流、人材育成の促進を図ることを目的とした。本事業では、アルメニア共和国文化省と文化遺産保護のための協力に関する合意書に基づき、アルメニア共和国歴史博物館が所蔵する金属考古資料の保存修復・調査研究活動を通じ、若手アルメニア人保存修復家の育成と技術移転を実施した。</p> <p>(1) ミッションの派遣 26年4月に第7次ミッション、26年5月に第8次ミッションを実施した。第7次ミッションは、第6回国内ワークショップのための準備ミッションであり、アルメニア歴史博物館や文化省との調整を行った。また、第8次ミッションでは、アルメニア歴史博物館が所蔵する金属考古資料の保存修復に関するワークショップを開催した（下記(2)参照）。ワークショップを通して、保存修復処置を行った金属考古資料を公開・展示するために必要な知識と技術を習得し、専門家間の意見交換や情報共有を行った。</p> <p>(2) ワークショップ開催 26年5月20日から27日までアルメニア歴史博物館において、第6回国内向けワークショップを開催した。本ワークショップは展示をテーマとし、講義と実習を行った。 講義は、国立民族学博物館の展示を例に、展示技術や管理、展示材料について行った。また、実習は、これまでの研修で修復された考古金属資料の公開を目的とした展示実習を行った。研修生たちは、展示紹介パネル、キャプション、展示品を置く斜台などの作製を行った。展示台に使う板についてはオフガス対策を行うなど、使用する展示材料が資料に影響を及ぼさないことを確認しながら作業をした。また、展示場では、資料の他に、修復工程の紹介の映像を流したり、修復工程や過去に行った科学調査の結果が掲載されたパンフレットを配布したりし、幅広い人が理解できる展示を行った。 本ワークショップには、アルメニア歴史博物館のみならず他の博物館や研究所からも参加者があり、国内のネットワーク作りにも貢献した。また、グルジア（グルジア国立博物館）、ロシア（国立エルミタージュ美術館）からの参加者もあり、国際交流や意見交換の場となった。</p>		
【実績値】	<p>① 報告書2件： 「Conservation and Scientific Investigation of the Archaeological Metal Object at the History Museum of Armenia 2011-2015」27年3月 「アルメニアおよびコーカサス諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」アルメニア歴史博物館所蔵の考古金属資料の保存修復・調査研究事業及びそれに係る人材育成・技術移転のための協力（第5次、6次ミッション）平成26年度業務報告書 27年3月</p> <p>② 資料集1件： 「アルメニア歴史博物館における考古青銅遺物保存修復ワークショップ」平成26年度資料集 26年12月</p> <p>③ 発表1件： 藤澤明、有村誠、邊牟木尚美、山内和也、Anelka GRIGORYAN「アルメニア共和国ルチャシェン遺跡から出土した考古金属資料の科学的調査」『文化財保存修復学会第36回大会』於：明治大学アカデミーコモン、26年6月8日</p> <p>④ ワークショップ参加人数：第6回アルメニア国内向けワークショップ参加者8名</p>		
【受託経費】	5,998千円		



国内ワークショップ展示実習の様子

【受託】
(様式3)施設名 東京文化財研究所処理番号 8053

業務実績書(受託事業)

研No.48-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業(キルギス及び中央アジア諸国)(受託)((2)-①-エ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 安倍雅史(前アソシエイトフェロー)、久米正吾(アソシエイトフェロー)、間舎裕生(慶應大学非常勤講師・客員研究員)、森本晋(奈良文化財研究所国際遺跡研究室長)			
【年度実績概要】 当事業は、文化庁の委託を受け、将来的な中央アジアの文化遺産保護を目標に、中央アジア若手研究者の人材の育成を目的とする。具体的には平成23年度から26年度までの4年間、キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と共同で、キルギス共和国チュウ河流域の都城址アク・ベシム遺跡を対象に、「ドキュメンテーション」、「発掘」、「保存修復」、「史跡整備」に関する一連の人材育成を実施している。 事業の最終年度である4年目に相当する今年度は、「史跡整備」、「文化財の博物館展示」、「考古調査の報告書作成」に関するワークショップを2回開催した。			
(1)1回目のワークショップは、「史跡整備」と「文化財の博物館展示」をテーマに26年7月3日から7月14日にかけて12日間にわたり実施した。このワークショップでは、奈良、飛鳥、吉野ケ里等の史跡公園、京都・神戸の伝統的建造物保存地区、広島原爆ドーム、兵庫県立考古博物館や大阪歴史博物館等、日本国内での史跡整備や博物館の現状について視察した。また、日本における文化財保護、史跡整備、日本考古学、博物館論・展示論等の講義を東京文化財研究所、奈良文化財研究所で実施した。 このワークショップには、キルギスから3名、アフガニスタンから3名、計6名の若手専門家が研修生として参加した。また、東京文化財研究所、奈良文化財研究所で実施した講義には、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラム大学院生計8名(日本3名、中国2名、インドネシア2名、ベトナム1名)も参加した。			
(2)2回目のワークショップは、「文化財の博物館展示」と「考古調査の報告書作成」をテーマに26年10月27日から11月1日にかけて6日間にわたりキルギス共和国国立科学アカデミーで実施した。このワークショップでは、博物館における展示手法や光・温湿度等の展示場管理手法に関する講義、動植物考古学等の自然科学分析手法の講義と実習、発掘報告書作成のための考古遺物の記録化作業に関する講義・実習を実施した。 このワークショップには、キルギスから計12名の若手研修者が参加した。			
【実績値】			
① 報告書1件： 文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」平成26年度業務報告書 27年3月			
② 資料集1件： 文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」講義資料集 26年11月			
③ 論文2件： Abe, M. Results of the Archaeological Project at Ak Beshim (Suyab), Kyrgyz Republic from 2011 to 2013 and a Note on the Site's Abandonment. <i>Intercultural Understanding</i> 4: 11-16. 26年4月 安倍雅史・新井才二「アク・ベシム遺跡出土の羊距骨とキルギス伝統遊戯チュコ」『西アジア考古学』16. 27年3月			
④ 発表1件： 安倍雅史・新井才二「アク・ベシム遺跡出土の羊距骨とキルギス伝統遊戯チュコ」『日本西アジア考古学会第19回総会・大会』於：鎌倉女子大学、26年6月15日			
⑤ ワークショップ開催数2回、参加人数：1回目14名、2回目12名、合計26名			
【受託経費】 10,000千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8054

業務実績書(受託事業)

研No.48-3

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産保護国際貢献事業(専門家交流)「ツバル・キリバス・フィジーの文化遺産保護に関する技術的調査」(受託)((2)-①-エ)		
【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】	高桑いづみ(無形文化財研究室長)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、菊池理予(研究員)、今石みぎわ(研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、境野飛鳥(アソシエイトフェロー)、石村智(奈良文化財研究所主任研究員)		
【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none">・日本側から26年8月6日～12日の日程で亀井伸雄(所長)・川野邊渉・久保田裕道・境野飛鳥・石村智がフィジーを訪問し、南太平洋大学「環境・サステイナブルデベロップメント太平洋センター(PaCE-SD, USP)」との間で研究交流及び交流に関する覚書(MOU)を交わすための協議を行い、後日締結した。その後、シンガトカ砂丘国立公園等で文化遺産の視察を行った。・フィジー側からは26年12月15日～22日の日程でPaCE-SD, USP所属のジョエリ・ベイタヤキ、セミ・サラウカ・マシロマニ、ジョン・ラグレレイ・カイトウの3名が来日。16日に所内で南太平洋の文化遺産に関する研究会を開催。17日～18日は東京都内及び千葉県で、19日～21日は沖縄で持続可能な発展における文化遺産の役割についての調査を共同で行った。		
			
	【左:フィジーでの研究交流(26年8月8日) 右:PaCE-SD一行の東京文化財研究所長への表敬訪問(26年12月16日)】		
【実績値】			
【受託経費】	4,224千円		

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8055

業務実績書(受託事業)

研No.51-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)に係る国内支援業務(受託) ((3)-①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】	藤澤明(前アソシエイトフェロー)、川口雄嗣(アソシエイトフェロー)、田島さか恵(アソシエイトフェロー)、松田泰典(大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト JICA 専門家テクニカルチーフアドバイザー・客員研究員)		
【年度実績概要】	<p>当事業は、独立行政法人国際協力機構(JICA)の委託を受け、主としてエジプト国大エジプト博物館保存修復センター(GEM-CC)における人材育成に係る以下の業務を行った。(1)計画策定支援、(2)研修支援、(3)専門家派遣支援</p> <p>(1)研修計画策定のための専門家全体会議を2回(26年5月、27年3月)開催し、「保存修復人材育成プログラム」における27年度までの各研修計画を策定した。</p> <p>(2)本格化した保存修復分野の研修のほか、保存科学分野や予防保存分野などの部門横断的な研修を引き続き支援するため、必要な教材・資機材についての助言、資料作成支援、翻訳、語彙集の作成、及び本邦研修について研修協力機関とのアレンジを含めた全般的な調整を行った。※()内は開催時期と参加人数</p> <p><現地研修(計11回)></p> <p>「第2回保存修復材料学研修」(26年5月、16名) 「国外視察研修(LACONA X)」(26年6月、2名) 「第8回所内移動・梱包研修」(26年6月、16名) 「第4回労働安全衛生研修」(26年8月、23名) 「第2回木材研修」(26年8月、12名) 「国外視察研修(ICOM-CC)」(26年9月、6名) 「第3回学術研究シンポジウム」(26年11月、約500名) 「第4回染織品研修」(26年11月、12名) 「第9回所内移動・梱包研修」(27年2月、9名) 「第3回彩色文化財研修」(27年2月、16名) 「第4回保存科学概論研修」(27年2月～3月、8名)</p> <p><本邦研修(計3回)></p> <p>「第2回保存修復材料としての和紙研修」(26年8月、6名) 「第3回保存修復材料としての和紙研修」(26年11月、2名) 「第4回微生物管理研修」(27年1月～2月、1名)</p> <p>このほか27年度上半期に実施予定の各研修の準備を継続して行った。</p> <p>(3)上記研修の講師としてのJICA派遣専門家の推薦と研修支援、研修協力機関との調整を行った。また、現地に派遣されているJICA長期及び短期専門家の活動に対し継続的な支援を行った。</p> <p>以上のほか、GEM-CCの運営体制や研修資機材の調達と管理についての助言等を行った。</p>		
【実績値】	<p>報告書 2件(①～②)、計画案 1件(③)</p> <p>① 『大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)業務実施報告書(上半期分)』26年10月 ② 『大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)業務実施報告書(下半期分)』27年3月 ③ 「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)27年度研修計画(案)」</p>		
【受託経費】	24,136千円		



微生物管理研修の様子

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8056

業務実績書(受託事業)

研No.51-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	2014 年度エジプト国別研修「保存修復材料としての和紙 (A)」に係る委託契約コースに係る委託契約 (受託) ((3)-①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】	川口雄嗣 (アソシエイトフェロー)、田島さか恵 (アソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<p>当事業は、独立行政法人国際協力機構 (JICA) の委託を受け、「エジプト国大エジプト博物館保存修復センター (GEM-CC) プロジェクト」における本邦研修「保存修復材料としての和紙研修 (第 1 期)」を実施したものである。本研修は、全 4 回実施予定の本邦研修のうちの第 1 期研修であり、6 名の GEM-CC スタッフを対象に実施した。</p> <p>①研修期間 26 年 8 月 7 日～15 日</p> <p>②研修講師 加藤雅人 (当研究所文化遺産国際協力センター国際情報研究室長)、 絵画修復を専門とする同センターのアソシエイトフェロー、国宝修理 装演師連盟の技師。</p> <p>③研修内容</p> <ol style="list-style-type: none">1. 講義 日本における文化財保存修復の現状、 掛軸の修理事例報告、修復材料学：和紙、接着剤2. 実習 日本の伝統的修復技術 (糊の調製、紙の取扱い、 紙の裁断、紙接ぎ、裏打ち)3. 見学 装演工房 (当研究所内) <p>講義では、日本の文化財保護の現状を概観する内容から始まり、掛軸の修理事例紹介や、修理装演技術に用いられる紙・和紙・糊・接着剤についての知見を得た。実習は特に修復材料となる和紙や糊、道具に焦点を絞ってデモンストレーションを交えて実施した。特に和紙や糊については、午前中に講義にて知識を得た後に、午後に実習で実際に糊吹きをしたり、紙を切ったり触ったりすることで研修員の理解がより深まるように工夫した。また、工房で実際に文化財の修復現場を視察したことにより、各自が得た知識や技術との実力差や、張り詰めた緊張感の中で息の合ったチームワークで行われるプロの仕事を体感することができ、第 2 期以降に予定されていた装演工房での実技研修をイメージすることが可能となった。</p> <p>教材及び講師については、特に実習において国宝修理装演師連盟の協力を仰ぐことにより、連盟が事前に作製した教材を裏打ち実習の各工程で用いることで、カリキュラムに沿った質を確保することができた。また、講師を厚く配置し、ほぼマンツーマンの形態できめ細かく実技指導に当たったことで、高い技術移転効果が得られた。</p> <p>なお、第 1 期研修の研修員 6 名より 2 名が選抜され、第 2 期以降の研修に参加することとなった。第 2 期研修は国宝修理装演師連盟加盟の装演工房で実施されたが、第 1 期研修で得た知見を活かし、集中して取り組むことにより、更なる経験や技術の習得につながった。</p>		
【実績値】	報告書 1 件 (①) ① 業務完了報告書 26 年 9 月		
【受託経費】	1,875 千円		



掛軸の修復方法について学ぶ様子

【受託】
(様式3)

施設名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター

処理番号 8057

業務実績書(受託事業)

研No.53-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	平成26年度 無形文化遺産保護パートナーシッププログラム(受託)(4)		
【担当部課】	—	【事業責任者】	副所長 大貫美佐子
【スタッフ】 児玉茂昭(アソシエイトフェロー)、野嶋洋子(アソシエイトフェロー)、サンドロヴィッチ・ティムール(アソシエイトフェロー)、パーウェルス・ルーベン(前アソシエイトフェロー)、辻修次(前アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】			
(1) アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究の情報収集			
a. アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する国際的調査研究の動向についての情報収集と関係構築のための調査を行った。			
<ul style="list-style-type: none"> ・マレーシア(クアラルンプール 26年6月20~22日) ・ミャンマー(ヤンゴン 27年2月8~12日) ・キルギス(ビシュケク 27年2月23~27日) ・ベトナム(ハノイ 27年3月25~28日) ・シンガポール(シンガポール 27年3月24~28日) 			
b. 上記活動で収集した情報をもとに検索可能なデータベース「Research Database on ICH Safeguarding in the Asia-Pacific Region」を構築し、ウェブ公開を開始した。			
c. アジア太平洋の6地域から専門家を招き、イスラム美術館(マレーシア)連携のもと、国際専門家会合「IRCI International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」を開催(クアラルンプール 27年1月26~27日)、各地域の実践事例をもとに保護手法に関する議論を行った。			
国際専門家会合(クアラルンプール)			
			
(2) 無形文化遺産の研究ネットワークの構築			
a. 国際会議への出席			
<ul style="list-style-type: none"> ・中国C2センター(CRIHAP)運営理事会(中国・北京 26年5月28日) ・第5回条約総会(フランス・パリ 26年6月2~5日) ・第2回無形文化遺産分野C2センター調整会議(フランス・パリ 26年6月6日) ・韓国C2センター(ICHCAP)運営理事会(韓国・全州 26年11月4日) ・The closing meeting on the integration of intangible cultural heritage in education for sustainable development (ベトナム・ハノイ 27年3月24~25日) ・Geographical Indications at the Crossroad of Trade, Development and Culture in Asia-Pacific Conference (シンガポール国立大学 27年3月26-27日) ・中国C2センター(CRIHAP)第4回運営理事会(中国・北京、曲阜 27年3月31日~4月1日) 			
b. 運営理事会の開催			
「第三回IRCI運営理事会」(堺市博物館 26年10月1日)を開催、25年度下半期-26年度事業報告、27年度事業計画について審議の上承認された。			
c. ウェブサイト管理			
定期的更新を行いIRCIの活動について発信した。従来の4言語(日本語、英語、タイ語、ベトナム語)にタミル語、シンハラ語、クメール語、ラオ語を追加し、8言語での情報公開を開始した。			
d. ユネスコによる外部評価ミッション受け入れ			
ユネスコとの連携の一環として、ユネスコが外部委嘱する評価ミッションを受け入れた(26年12月8~11日)。			
(3) 研修「コミュニティ主導の無形文化遺産保護活動のツールとしてのドキュメンテーション」			
ワーキンググループ会合(ライデン大学 26年4月19~21日)の後、4年間にわたる一連の事業の締め括りとしてワークショップを開催、コミュニティ代表者7名により総括的議論を行った。			
ドキュメンテーションワークショップ (東京国立博物館)			
			
【実績値】			
海外調査回数 5回			
国際会議出席回数 7回			
国際会議開催回数 3回(海外1回(クアラルンプール)、国内2回(理事会、ワークショップ))			
ウェブサイトアクセス件数 6200件(26年4月1日~27年3月31日)			
データベース登録件数 517件、閲覧件数 1698件(26年9月25日開設~27年3月31日)			
【受託経費】			
51,388千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8058

業務実績書(受託事業)

研 No. 74-1

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信			
【事業名称】	第一次大極殿院建造物復原整備にかかる調査(受託)((4)-①)			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉	
【スタッフ】 松村恵司(所長)、小野健吉(副所長)、箱崎和久・清野孝之・山本崇・西山和宏・今井晃樹・大林潤・森先一貴・番光・石田由紀子・鈴木智大・芝康次郎・川畑純・前川歩・清野陽一・中川二美・松下迪生・中島咲紀・南部裕樹・村山聡子(以上、都城発掘調査部)、林良彦・海野聡・高橋知奈津(以上、文化遺産部)、小池伸彦・脇谷草一郎(以上、埋蔵文化財センター)、窪寺茂(建築装飾技術史研究所長・客員研究員)、上田浩司・田中康成(以上、研究支援推進部)				
【年度実績概要】 (1)国土交通省による第一次大極殿院地区の整備に伴う復原検討 奈良時代前期(I-2期)第一次大極殿院の南門、東楼、西楼、築地回廊の各建物、及び大極殿院の地形等の形態の復原が目的である。 所内復原検討会(計3回)、復原建物の鴟尾や瓦について、有識者を招聘した検討会(計3回)を開催した。これらの検討の内容を収録した『第一次大極殿院復原検討会記録』(内部資料)を刊行した。 <ul style="list-style-type: none">・地形及び礎敷広場の諸施設の検討(第60,61回検討会)。・鴟尾・瓦の検討(第1~3回瓦検討会)。・彩色・金具の検討(第59,61回検討会)。				
【実績値】 <ul style="list-style-type: none">・第一次大極殿院復原検討会：3回(第59~61回)・第一次大極殿院瓦検討会：3回(第1~3回。有識者7名招聘)・類例調査：2回(国内2回) 論文等数：4件(①~④) ①番光・中島咲紀「磚積擁壁上の高欄の検討…—第一次大極殿院の復原研究16—」『奈良文化財研究所紀要2015』奈文研、2015.6(予定) ②今井晃樹・中川二美・南孝雄(京都市埋蔵文化財研究所)「大極殿院の鴟尾の検討…—第一次大極殿院の復原研究17—」同上 ③今井晃樹・村山聡子「回廊屋根の入隅の検討…—第一次大極殿院の復原研究18—」同上 ④窪寺茂・中島咲紀「展色材別丹土塗の劣化試験…—第一次大極殿院の復原研究19—」同上 報告書等数：4件(⑤~⑧) ⑤~⑧『第一次大極殿院復原検討会記録9~12』(26年8月、27年3月)(いずれも内部資料)				
【受託経費】 63,980千円				

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8059

業務実績書(受託事業)

研No.74-2

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
【事業名称】	平城宮跡歴史公園工事関連施設造成区域発掘調査(受託)(4)-①		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】	渡辺晃宏(史料研究室長)、今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、松下迪生(都城発掘調査部アソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	<p>・調査の経緯</p> <p>平城宮第一次大極殿院築地回廊の復原整備のための工事ヤード建設にともなう発掘調査。遺構面の高さなど、遺跡の状況の確認を目的とし、工事ヤード予定地のうち、木材保管庫と調整池予定部分の一部について、A区からF区までの6つの調査区計272㎡について実施した。</p> <p>なお、同施設は現地表面(旧耕土・表土)に、盛土造成(1~1.5m)を行った上で建設される。</p> <p>・調査期間</p> <p>26年10月14日~11月27日。</p> <p>・調査面積</p> <p>計272㎡(A区:80㎡、B区:80㎡、C区:28㎡、D区:28㎡、E区:28㎡、F区:28㎡)。</p> <p>・基本層序</p> <p>A・B・D・E区:表土、耕土、床土、遺物物包含層、整地土(遺構検出面)。</p> <p>C区:表土・耕土・床土直下、整地土(遺構検出面)。</p> <p>F区:表土、耕土、床土、遺物包含層(多量の土器含む)、整地土(遺構検出面)、地山(下層遺構検出面)。</p> <p>検出面の標高は、A区がH=70.1~70.2m。B区が69.7~69.9m、C・D区が69.4m、E区が69.4m、F区(上層)が69.1~69.2m。いずれも30~50cm程度の削平を受けているとみられる。</p> <p>・主な検出遺構</p> <p>A区:柱穴及び南北溝1条。</p> <p>B区:大規模な掘立柱穴6基(一辺1.2m・10尺等間)からなる2条の東西掘立柱列を検出。建物の一部とみられる。</p> <p>C区:複数の穴と土坑を検出。いずれも小規模。</p> <p>D区:東西に並ぶ大規模な柱穴2基(間隔10尺)、その東から南に逆L字状に曲がる溝を検出。掘立柱建物の南東隅とその東・南の両雨落溝の可能性が考えられる。</p> <p>E区:7尺等間で並ぶ掘立柱穴4基を検出。総柱建物の一部か。</p> <p>F区:多数の掘立柱柱穴を検出。なお、整地土下の地山面から掘り込まれた遺構も多数確認した。</p> <p>・主な出土遺物</p> <p>瓦(軒瓦約10点を含む)、土器(どの調査区も特に甕の破片の多さが目立つ)など。</p> <p>・調査所見</p> <p>平城宮東張り出し部北部にあたる調査地周辺は、従来調査がほとんど行われていない。東院地区の調査成果等から、官衙施設が想定されていた(東北官衙)。今回の調査成果はこの想定を裏付ける。さらに、甕の出土点数が多く、今回の調査区の南に位置する造酒司との関連を想起させる。この地域の様相を解明する大きな手がかりが得られた。</p> <p>調査地は水上池のすぐ南で、た谷筋の源頭部分にあたるかとみられていた。調査の結果、土層堆積状況が、東院西辺の、谷筋から尾根筋に上がる部分と酷似していることが判明し、谷筋とは言い難い。F区(敷地南西部)では分厚い包含層が見られること等から、谷筋は今回の調査区の西に位置する可能性が高い。</p> <p>なお、今回の調査の結果、この地域では奈良時代の遺構面が予想以上に浅いことが明らかになったため、工事ヤード造成の際にさらに十分な配慮を要請することができた。</p>		
【実績値】	<p>論文等数:1件(①)</p> <p>渡辺晃宏他「平城宮跡東北官衙の調査」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定(参考値)</p> <p>出土遺物:瓦片15箱(うち軒瓦10点)、土器片10箱</p> <p>記録作成数:実測図20枚(A2判)、遺構写真40枚(4×5)、デジタル写真約840枚</p>		
【受託経費】	7,367千円		



F区検出状況

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8060

業務実績書(受託事業)

研No.82-1

中期計画の項目	7. 地方公共団体への協力による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	小石川後樂園得仁堂収蔵物の保存修復科学的な調査委託((1)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	伝統技術研究室長 北野信彦
【スタッフ】	山下好彦(文化遺産国際協力センター・任期付研究員)、西山陽(漆工品修復家)、青木宏希(木工修復家)		
【年度実績概要】	<p>26年度は2カ年の継続事業の最終年度であり、塗装面の保存修復作業、破損や欠損が著しい脚部の復元、などの一連の作業を実施し、作業を終了させた。</p> <p>概要</p> <ul style="list-style-type: none">・調査対象 1点調査内容 <ol style="list-style-type: none">(1) クリーニング(脚部): 本年度は前年度に引き続き、主に脚部についてミュージアムクリーナー・刷毛・筆等を用いて慎重にドライクリーニングを行った。そのうえで表面状態の確認を行い、必要に応じてエタノール・アセトン・蒸留水等を用いた湿式クリーニングも併用して行った。(2) 漆固め・木地固め・下地強化: 「螺鈿の机」は表面の漆塗膜の劣化、破損、木地露出、下地の脆弱化が著しかった。そのため、数回に分けて生漆・呂色漆・膠材料などを場所に応じて使い分け、漆塗膜の強化を目的とした漆固め、木地固め、下地強化の作業を実施した。(3) 剥落止め: 「螺鈿の机」の劣化した漆塗膜面に生漆に澱粉を混入して接着塗料である麦漆を作成して劣化箇所注入して漆塗膜を固定する剥落止め作業を実施した。(4) 脚部の欠損部の修理・新調: 劣化や欠損がある脚部は新たに復元寸法にあわせた脚部を木工作業により白木で新調しオリジナルの脚部破片は別保管することとした。(5) 螺鈿機の組み立て: オリジナルの天板や長側板、短側板、欠損部を白木で復元した脚部や脚固めを組み合わせ、本来の形に復元した螺鈿機の組み立て作業を実施した。なお、復元した白木の脚部や脚固めは摺漆を施し、周りとの違和感が少ないよう配慮した。(6) 修理作業終了後の写真撮影: 本案件が目指す保存修理作業が完了した後、企画情報部において高精細デジタル画像による写真撮影を実施し、これを処理後写真記録とした。(7) 報告書の作成と返却: 以上の(1)～(6)で実施した内容を報告書に纏め、本年度の受託研究成果物品とした。その上で保存修理作業終了後の螺鈿机を先方に引き渡して全ての事業を完了した。 <ul style="list-style-type: none">・効果 <p>本年度は、剥落止め、漆固め、破損が著しい脚部の復元等の施工実験を行った。従来の漆塗料の身を使用する漆工品の修理作業とは異なり、膠材料や合成樹脂の応用、加温コテを使用した膜面の変形修正などの作業も施工実験により応用でき、今後同様な漆文化財資料の修理施工に役立てる目処がついた。</p>		
			
	写真1: 裏面のクリーニング作業風景	写真2: 麦漆による剥落止め作業風景	
【実績値】	受託事業報告書 1件 「小石川後樂園得仁堂収蔵物(螺鈿机)の保存修復科学的調査と保存修復作業」 本事業は東京都[東京都東部公園緑地事務所]からの委託		
【受託経費】	1,400千円		

【受託】
(様式3)施設名 東京文化財研究所処理番号 8061

業務実績書(受託事業)

研No.82-2

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	日光の歴史的木造建造物の温風処理等による新たな殺虫処理方法の検討 ((1)- ①)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	生物科学研究室長 木川りか
【スタッフ】	<p>佐藤嘉則(研究員)、藤井義久(京都大学教授・客員研究員)、古田嶋智子(東京藝術大学助手・客員研究員)、小野寺裕子(保存修復科学センター研究補佐員)、原田正彦((公財)日光社寺文化財保存会)、福岡憲((公財)文化財建造物保存技術協会)</p> <p>歴史的木造建築物の被覆くん蒸処理は、一度にほぼ確実に害虫を駆除できるものの、安全対策上の制約が多い。また、近い将来大規模な処理に対しては、対応できる技術者がいなくなるおそれがあること、別途予防工事が必要になること、日光のような冷涼な気候では実施期間が夏の短い期間に限定されるなどの課題も多くある。さらに日光には甲虫駆除対策の必要な建築物が他にもあり、また将来的には他の生物劣化(シロアリ食害や腐朽)を含めて、日光山全体について長期間にわたって繰り返し、実施できる有効で安全な手法で、かつ経済的にも妥当な生物劣化手法の確立が求められている。</p> <p>本共同研究では、これらの事情を背景として、被覆くん蒸にひとつの代替策として、甲虫駆除方法、とりわけ「湿度制御した温風処理」(以下、温風処理)についてその効果と日光山の木造建築物への適用性について、調査や検証実験を実施する。</p> <p>本年度は、26年5月に、実際にヨーロッパの建造物で温風処理を実施しているヨーロッパの技術者3名をドイツ、オーストリア、イギリスから招聘し、日光の歴史的建造物を実際に見ながら、日光社寺文化財保存会にて温風処理の適用の可能性について議論、検討を実施した。ヨーロッパで実施されている建物の温風処理の方法について情報交換を行ったのち、日光の歴史的建造物で求められる処理の要件の確認、今後日光の歴史的建造物を対象にしたときの適用可能性や、問題点、今後開発しなければならない技術について洗い出しを行った。</p> <p>そののち、東京文化財研究所や、日光社寺文化財保存会において、温風処理を実施する上で技術的に解決しなければならない課題、実施にあたり制度上解決すべき問題について話し合うために、研究スタッフで集まり、26年6月、7月、8月、9月、10月、12月にそれぞれ研究打ち合わせを実施した。</p>		
			
	日光社寺保存会における研究協議 (26年5月)		
【実績値】	<ul style="list-style-type: none"> ・海外からの招聘、研究打ち合わせ 1回(26年5月) ・国内スタッフによる研究打ち合わせ 6回(26年内) 		
【受託経費】	16,200千円 (ただし、26年4月1日から29年3月31日までの3か年の経費とする)		

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8062

業務実績書(受託事業)

研No.82-3

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	万世特攻平和祈念館所蔵品調査事業((1)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	近代文化遺産研究室長 中山俊介
【スタッフ】	加藤雅人(文化遺産国際協力センター国際情報研究室長)、小林芳妃(保存修復科学センター研究補佐員)、内田優花(研究補佐員)		
【年度実績概要】	<p>南さつま市に位置する万世特攻平和祈念館は平成5年に開館してから20年を経て、収蔵あるいは展示している紙製品の劣化が問題となって来たため、当祈念館に所蔵されている特攻隊員の遺書、手紙、写真、ノートや家族の手紙、手記等、紙製品に関して、その現状(紙の状態、破れ、裂け等の状態、紙の変色、記述されている文字の状態、展示に際して使われた糊やテープの状態)について一点ずつ調査を行い、それぞれ記録をすると共に、データベースに入力しながら、収蔵品のリスト化も合わせて行った。更には今回の調査を元に、修復の必要の有無を収蔵品ごとに決定し、データベースに組み入れた。</p> <p>南さつま市は今回の調査結果を元に、次年度以降修復が必要となる収蔵品に関する処理を進めることになる。</p>		
			
	調査風景	提出物(報告書及びデータ(USBメモリー))	
【実績値】	「万世特攻平和祈念館収蔵品調査事業 調査報告書」、東京文化財研究所、26年9月26日		
	(本事業は南さつま市からの受託事業)		
【受託経費】	2,500千円		

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8063

業務実績書(受託事業)

研No.89-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	常磐橋鉄材試料の分析調査(受託)((1)-②)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】	藤澤明(前アソシエイトフェロー)、釘屋奈都子(東京藝術大学大学院専門研究員・客員研究員)、中山俊介(保存修復科学センター修復材料研究室長)		
【年度実績概要】	<p>当事業は、千代田区より委託を受け、常磐橋に使用されたと考えられる鉄材について調査・分析することを目的としている。</p> <p>常磐橋(千代田区大手町、明治10年築造、石橋)は、経年変化および東日本大震災の影響により崩壊の危険があり、24年度より、千代田区による災害復旧事業が実施されている。25年度から26年度にかけて石橋の解体修理工事が実施され、その際には金属片が各所より発見されている。それらの金属片は築造当初の高欄手すり柵の部材の一部を再利用した可能性が考えられる。高欄は铸铁製であったことが記録に残されており、金属片が铸铁製であれば再利用された可能性が高くなる。また、一部の金属片には塗料が付着しており、これは防錆塗料として塗布されたものと考えられる。本調査では、金属片の材質の同定、付着塗料の同定を行い、築造当初の高欄手すり柵の部材である可能性があれば、復元する際の基礎資料とすることを目的とした。</p> <p>(1) 鉄材観察及び分析</p> <p>金属片試料については、金属組織観察と組成分析を行った。4資料から試料を切り出し、鏡面研磨・エッチングを行った後、光学顕微鏡(オリンパス製 BX51)と走査型電子顕微鏡(SEM)(日立ハイテクノロジー製 S-3700N)を用いて、試料の金属組織観察を行った。また、各資料から5~10gの試料を切り出し、炭素と硫黄については燃焼-赤外線吸収法、ケイ素、マンガン、リン、銅、チタン、バナジウムについては誘導結合プラズマ(ICP)発光分光分析法、アルミニウムについては原子吸光分析法にて定量分析を行った。結果、鉄材の化学成分、各部材に使用された鉄材の種類が明らかになった。</p> <p>資料には、铸铁製と炭素鋼製が混在している。築造当初の高欄手すり柵の部材は铸铁製であり、調査した中2資料については、当初の部材の可能性はある。この2資料については、塗料が付着しており、防錆処置が施されている。また、化学分析の結果から、铸铁製の2資料については、磁鉄鉱を原料鉱石としている。しかし、金属組織観察結果と考え合わせると、国内で製錬した材料であるのか輸入した材料であるのかは明らかではない。</p> <p>(2) 塗装部観察及び分析</p> <p>塗装部については、塗装が残る2資料と地覆石に付着していた塗料から採取した粉末状試料の調査を行った。光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡(SEM)を用いて、断面試料観察を行い、塗装方法を明らかにした。SEMに付属するエネルギー分散型X線分析計(EDS)とX線回折計(XRD)(PANalytical製 X'Pert Pro)を用い、塗料の同定を行った。</p> <p>資料には、塗装が最大3回塗布されているのが確認された。一方、塗装が1回のももある。これは、異なる塗装の回数によるのか、過去の塗装が除去されたことによるのかは不明である。最も初期の層は、バリウムを含む酸化鉛系防錆剤であり、赤みを有する橙色である。酸化鉄を混ぜ調色した可能性がある。その上部に橙色の酸化鉛系防錆剤が塗布されている。最上部には酸化鉄系塗料が塗布されている。</p> <p>(3) 報告書</p> <p>得られた結果については、報告書にまとめた。</p>		
【実績値】	① 報告書1件：受託研究報告書「常磐橋鉄材試料の分析調査」 26年7月		
【受託経費】	524千円		



常磐橋鉄材資料

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8064

業務実績書(受託事業)

研No.89-2

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上																																																										
【事業名称】	美術工芸品修理技術者人材等に関する調査研究事業(受託)(1)-②																																																										
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉																																																								
【スタッフ】	加藤雅人(国際情報研究室長), 江村知子(主任研究員), 境野飛鳥(アソシエイトフェロー)																																																										
【年度実績概要】	<p>本事業では、文化庁からの委託により、2カ年の予定で修理技術者等の現況調査を行い、今後の修理技術人材等の育成を、適切かつ効率的に行うための方針や方法等を検討するための基礎資料を作製する。対象となる修理技術者等は、国・都道府県・市区町村指定の文化財のうち、建造物を除く美術工芸品そのものを修理しており、保存箱等の修理、製造者は除くこととする。初年度である本年度は、国及び地方自治体の文化財主管課等へ協力を依頼し、各々の指定の現況とともに、過去数年の指定品修理実績を把握した。</p> <p>(1) 調査(アンケート)内容の決定 文化庁の委託内容に基づいて、都道府県・市町村に依頼するアンケートの内容を決定した。</p> <p>(2) eメールを使用したアンケートシステムの構築 アンケート内容を考慮し、eメールでのアンケート調査に最適な手法を検討した。</p> <p>(3) アンケートの送付 都道府県にアンケートを直接送付するとともに、各都道府県管内市町村にアンケートを配布するよう依頼した。</p> <p>(4) アンケート結果の集計 アンケートを回収して統計的解析を行った。また、次年度に行う調査のための資料を作製した。</p>																																																										
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><p style="text-align: center;">【文化庁委託】美術工芸品修理技術者人材等に関する調査研究 第一回 アンケート(自治体向け)(1/3)</p><p>不明の場合は「不明」、該当なしの場合は「なし」、0件の場合は「0」と記入してください。</p><p>※回答者情報 ご回答いただく自治体担当の担当者名、連絡先についてご記入下さい。</p><table border="1" style="width: 100%;"><tr><td>都道府県名</td><td></td></tr><tr><td>市区町村</td><td></td></tr><tr><td>担当部署名</td><td></td></tr><tr><td>担当者名</td><td></td></tr><tr><td>eメール名</td><td></td></tr><tr><td>担当部署名</td><td></td></tr><tr><td>eメールアドレス</td><td></td></tr><tr><td>氏名</td><td></td></tr><tr><td>職名</td><td></td></tr></table><p>※文化財指定情報 貴自治体指定の文化財について、種類と件数をご記入ください。</p><table border="1" style="width: 100%;"><thead><tr><th>種別</th><th>指定件数</th></tr></thead><tbody><tr><td>建造物</td><td></td></tr><tr><td>美術品</td><td></td></tr><tr><td>書画・典籍</td><td></td></tr><tr><td>古文書</td><td></td></tr><tr><td>考古資料</td><td></td></tr><tr><td>歴史資料</td><td></td></tr></tbody></table><p>※経年経緯 貴自治体指定の文化財について修理件数を記入ください。経年単位で実施した場合は、修理年(年度のみ「1」件と記入、よみ取りは誤りがないでください)。</p><table border="1" style="width: 100%;"><thead><tr><th>年度</th><th>修理</th></tr></thead><tbody><tr><td>2014 (H26)</td><td></td></tr><tr><td>2013 (H25)</td><td></td></tr><tr><td>2012 (H24)</td><td></td></tr><tr><td>2011 (H23)</td><td></td></tr><tr><td>2010 (H22)</td><td></td></tr><tr><td>2009 (H21)</td><td></td></tr><tr><td>2008 (H20)</td><td></td></tr><tr><td>2007 (H19)</td><td></td></tr><tr><td>2006 (H18)</td><td></td></tr><tr><td>2005 (H17)</td><td></td></tr><tr><td>2004 (H16)</td><td></td></tr></tbody></table></div>			都道府県名		市区町村		担当部署名		担当者名		eメール名		担当部署名		eメールアドレス		氏名		職名		種別	指定件数	建造物		美術品		書画・典籍		古文書		考古資料		歴史資料		年度	修理	2014 (H26)		2013 (H25)		2012 (H24)		2011 (H23)		2010 (H22)		2009 (H21)		2008 (H20)		2007 (H19)		2006 (H18)		2005 (H17)		2004 (H16)	
都道府県名																																																											
市区町村																																																											
担当部署名																																																											
担当者名																																																											
eメール名																																																											
担当部署名																																																											
eメールアドレス																																																											
氏名																																																											
職名																																																											
種別	指定件数																																																										
建造物																																																											
美術品																																																											
書画・典籍																																																											
古文書																																																											
考古資料																																																											
歴史資料																																																											
年度	修理																																																										
2014 (H26)																																																											
2013 (H25)																																																											
2012 (H24)																																																											
2011 (H23)																																																											
2010 (H22)																																																											
2009 (H21)																																																											
2008 (H20)																																																											
2007 (H19)																																																											
2006 (H18)																																																											
2005 (H17)																																																											
2004 (H16)																																																											
	都道府県・市町村対象に実施したアンケート (1ページ/3ページ)																																																										
【実績値】	実務実績報告書 1冊																																																										
【受託経費】	3,295千円																																																										

【受託】
(様式3)施設名 奈良文化財研究所処理番号 8065

業務実績書(受託事業)

研No.90-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	鳥取市青谷横木遺跡・金沢坂津口遺跡出土木簡の保存処理等の総合的研究(受託) ((1) - ②)		
【担当部課】	都城発掘調査部 (藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】	渡辺晃宏(史料研究室長)、山本 崇、降幡順子、馬場 基(以上、都城発掘調査部主任研究員)、桑田訓也、山本祥隆(以上、史料研究室研究員)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、藤井裕之(年代学研究室客員研究員)、中村一郎(写真室主任)、加川 崇(鳥取市教育委員会文化財課主任)		
【年度実績概要】	<p>・鳥取市青谷横木遺跡・金沢坂津口遺跡から出土した木簡について、最新の機器を用いた解読によりその歴史的な評価を確定し、また貴重な資料群を後世に残すために木簡の状態に即した最適の手法による科学的な保存処理を行うものである。木簡6点を対象とした。</p> <p>・本年度に実施した事業は、下記の通りである。</p> <p>(1)水漬け状態にある木簡について、現物の熟覧のほか、赤外線テレビカメラ装置と赤外線デジタル写真を用いて検討を加え、現状の釈文案を作成した。加えて、実体顕微鏡による樹種の観察を行った。</p> <p>(2)上記の作業完了後、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室において、科学的な保存処理を実施した。保存処理は、木簡の状態に応じて個別に検討を加え、高級アルコール法を採用した。</p> <p>(3)保存処理後の状態を記録し、再釈読に供するため、カラー・赤外線デジタル撮影を行った。作成した画像は、奈文研と鳥取市教育委員会の双方に保管している。</p> <p>(4)保存処理後、(1)と同じ要領で再度釈読検討会を実施し、6点の木簡の釈文を確定した。</p> <p>・以上の調査の結果、保存処理により墨痕が鮮明になるものも多く、従来の釈読に加えて、さらに読みを進めることができた。とりわけ、青谷横木遺跡からは、本事業が対象とした試掘調査に続き、本調査においても古代木簡が出土しており、出土点数は27点を数え、古代地方官衙研究において重要な資料群といえる。本事業が対象とした木簡を含む鳥取県出土古代木簡について、山本崇・高尾浩司((公財)鳥取県教育文化財団)(共著)「鳥取の古代木簡集成」(『木簡からみた古代の山陰一木簡と地域社会の諸相』木簡学会出雲特別研究集会研究集会資料集、26年9月)を公表するとともに、山本崇「因幡・伯耆の古代木簡」と題して、同月、島根県古代文化センターシンポジウム「よみがえる古代からのメッセージ～木簡が語る古代社会の実像」にて報告を行い、その記録集『しまねの古代文化』第22号に最新の成果を寄稿した。</p>		
			
	青谷横木遺跡出土の木簡 (保存処理後・赤外画像)		
【実績値】	解読木簡点数6点、木簡の保存処理点数6点、デジタル写真(カラー・赤外線写真)28点		
	(参考値) 発表件数3件(論文2件 山本崇・高尾浩司((公財)鳥取県教育文化財団)(共著)「鳥取の古代木簡集成」(『木簡からみた古代の山陰一木簡と地域社会の諸相』木簡学会出雲特別研究集会研究集会資料集、26年9月。山本崇「因幡・伯耆の古代木簡」(島根県古代文化センター編(共著)『しまねの古代文化』第22号、27年3月)、研究発表1件 山本崇「因幡・伯耆の古代木簡」島根県古代文化センターシンポジウム「よみがえる古代からのメッセージ～木簡が語る古代社会の実像」26年9月)		
【受託経費】	163千円		

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画 (受託) (1)－②)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
<p>【スタッフ】</p> <p>田中康成(研究支援推進部連携推進課長)、小池伸彦(遺跡・調査技術研究室長)、森本 晋(企画調整部国際遺跡研究室長)、渡辺晃宏(都城発掘調査部史料研究室長)、金田明大(埋蔵文化財センター主任研究員)、山崎 健(環境考古学研究室研究員)、脇谷草一郎(保存修復科学室研究員)、星野安治(年代学研究室研究員)、村田泰輔(埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー)、高田祐一(連携推進課アソシエイトフェロー)</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>本事業は、科学技術・学術審議会の建議「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」に基づき、「考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」という研究課題を設定して、2014年度からの5ヵ年計画で進めている。これは、全国の大学や関係機関からなる「地震・火山噴火予知研究協議会」からの依頼による受託事業である。この予知協議会に設置された「史料・考古部会」では、地震・火山噴火に関する近代的な観測データが整う以前の資・史料を収集・調査・分析・活用し、低頻度で発生する大規模な地震や災害現象等の理解・解明に資することがその役割となっている。そのなかで当研究所は、主として災害痕跡の考古・地質学的データの収集とデータベース構築・公開を担っており、本年度の主たる実績は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発掘調査報告書めくり作業、資料収集・整理 新潟県を中心に約7000件の災害の痕跡記録を確認した。このうち約300件の地震、火山噴火に係る災害の痕跡を抽出した。また、寒川旭氏(産業総合研究所嘱託)が収集した全国の地震痕跡データの整理を進めている。 ・データ項目検討・作製、データ入力 収集した資料からデータを整理しつつ、データベースを構成する項目の選定、項目ごとの情報型(文字情報、画像情報、ID化情報等)などを定めた。また各項目の有効性を検討しながら、エクセルへのデータ入力を進めている。 ・災害痕跡データベース構築の構築着手 データベースを構築するためのシステムサーバーの導入、データベースの基本構造の設計および構築(プログラミング)を行った。 ・発掘調査現場における災害痕跡の調査、試料採取・分析 当研究所が実施した平城第530次調査において複数時期にわたる地震痕跡を検出し、堆積構造調査・堆積土層断面剥ぎ取り調査、土壌の粒度組成解析のための試料採取と分析を行った。また都塚古墳(奈良県)、青谷横木遺跡、青谷上寺地遺跡、大桝遺跡、高住牛輪谷遺跡、高住宮ノ谷遺跡、常松菅田遺跡、下坂本清合遺跡、松原田中遺跡(以上、鳥取県)の発掘調査で検出された地震痕跡について現地調査をおこない、現地指導と共に土壌試料の採取を行った。 ・災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画成果報告シンポジウムにおける成果報告(平成27年3月2～3日)。 ・人間文化研究機構(大学共同利用機関法人)主催の第9回研究会における成果報告(平成27年3月28日)。 			
			
		<p>災害痕跡(噴砂)の調査(第530次調査)</p>	
<p>【実績値】</p> <p>実施報告書: 1件 「考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」『災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画平成26年度成果報告書』2015.3.</p> <p>発表: 2件 ①小池伸彦「考古資料及び文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」『災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画平成26年度成果報告シンポジウム』2015.3.2. ②村田泰輔「考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」大学共同利用機関法人人間文化研究機構主催第9回研究会、2015.3.28</p>			
<p>【受託経費】</p> <p>7,780千円</p>			

【書式A】

施設名 本部事務局

処理番号 9110

大項目	Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置							
中項目	1 一般管理費の削減							
事業名	(1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化							
【年度計画】								
1) 共通的な事務の一元化を推進し事務の効率化を引き続き図る。								
2) 国立博物館各館における翌年度以降の展覧会企画等について「研究・学芸系職員連絡協議会」において連絡・調整を行い、企画機能強化を図る。								
3) 機構共通のネットワーク及びシステムにより、業務の効率的な運用及び情報の共有化を引き続き推進する。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】								
1) 共通的な事務の一元化と事務の効率化のため、機構共通の業務システムである、グループウェア、財務会計システム、人事給与統合システム、web給与明細システムの運用を継続した。								
2) 国立博物館各館及び各研究成果公開施設における26～30年度の展覧会予定表を毎月更新し、研究調整役を中心に企画調整を継続するとともに、「研究・学芸系職員連絡協議会」を開催し、連絡・調整を行った。								
3) 業務の効率的な運用と情報共有化のため、機構共通の業務システムである、グループウェア「サイボウズ」、財務会計システム「GrowOne」、人事給与統合システム「U-PDS」、web給与明細システム「U-PHS HR」、また、これら各システムの基盤となるネットワーク「機構VPN(Virtual Private Network)」の運用を継続した。								
【補足事項】								
3) ・グループウェア「サイボウズ」は、耐障害性向上のため、アプリケーションサーバとストレージサーバとを分けた構成とすべく準備を進めた。26年3月に調達したストレージサーバの構築作業を27年3月30日に行い、本運用(27年度予定)に備えた。								
・グループウェア「サイボウズ」のバックアップサーバー(奈良文化財研究所に設置予定)については、本サーバー安定稼動確認後の作業となること、また奈良文化財研究所ネットワークとの調整作業が必要であるため、27年4月以降に作業予定とした。								
・グループウェア「サイボウズ・ガルーン3」26年度利用ユーザ数(25年度も同数)：								
機構全体 1,000								
内訳：本部事務局・東京国立博物館230、京都国立博物館100、奈良国立博物館60、九州国立博物館150、東京文化財研究所150、奈良文化財研究所250、アジア太平洋無形文化遺産研究センター20、予備40								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】			【判定根拠、課題と対応】					
評定：B			共通的な事務の一元化による業務の効率化として、必要な業務システムは既に稼動しており、適切に運用を継続することができた。					
【中期計画記載事項】中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を行う。ただし、文化財購入費、文化財修復費等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。								
なお19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を削減する。								
このため、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、事務、事業、組織等の見直しや、公用車の運転業務など外部委託できる業務を引き続き精査して計画的にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。								
具体的には下記の措置を講じる。								
(1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化								
(2) 計画的なアウトソーシング								
(3) 使用資源の減少								
・省エネルギー(エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減)								
・廃棄物減量化								
・リサイクルの推進								
【中期計画に対する評価】			【判定根拠、課題と対応】					
評定：B			必要な業務システムの運用を適切に継続することで、共通的な事務の一元化による業務の効率化を順調に達成している。					

中項目	1 一般管理費の削減							
事業名	(2) 計画的なアウトソーシング							
<p>【年度計画】以下の業務の外部委託を継続して実施する。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務 ・資料館業務の一部 ・施設内店舗業務 <p>(京都国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看視案内業務及び設備保全業務の一部 ・受付・案内・警備業務、売札業務及び清掃業務 <p>(奈良国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建物設備の運転・管理業務 ・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務 <p>(九州国立博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建物設備の運転・管理業務等 ・警備業務、看視案内業務及び清掃業務 <p>(東京文化財研究所・奈良文化財研究所)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・警備業務、清掃業務及び建物設備の運転・管理業務等 								
担当部課	本部事務局財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課 京都国立博物館総務課 奈良国立博物館総務課 九州国立博物館総務課 東京文化財研究所研究支援推進部 奈良文化財研究所研究支援推進部総務課	事業責任者	事務局長 栗原 祐司					
<p>【実績・成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全ての施設において、電気設備保守業務、機械設備保守業務、昇降機設備保守点検業務、構内樹木等維持管理業務、清掃業務、各種事務補助作業等について、民間委託を実施している。 ・博物館は警備・展示室監視等業務の大部分を民間委託している。また、研究所は警備業務の全てを民間委託している。 ・博物館の来館者サービスに関しては、売札業務、受付・案内業務、図書・写真資料を閲覧等の利用に供するサービス及び図書整理業務等について民間委託を実施している。 ・東京国立博物館及び東京文化財研究所の施設管理・運営業務（展示等の企画運営を除く）、東京国立博物館の展示場における来館者対応等業務について民間競争入札を実施している。 								
<p>【補足事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部委託が可能な業務については、民間委託を進めている。 ・また、複数の業務についての包括契約化、複数年契約、近隣の機関及び法人内同一地域での一括契約等の実施により、業務の効率化を図っている。 ・2件の民間競争については、26年6月の内閣府官民競争入札等管理委員会において、実施状況が良好であり終了プロセスの基準を満たしていることが認められたため、27年度からは民間競争入札の対象外となった。 								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】			【判定根拠、課題と対応】					
評価：B			判定根拠：計画どおり外部委託を実施している。					
<p>【中期計画記載事項】中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を行う。ただし、文化財購入費、文化財修復費等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。</p> <p>なお19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を削減する。</p> <p>このため、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、事務、事業、組織等の見直しや、公用車の運転業務など外部委託できる業務を引き続き精査して計画的にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。</p> <p>具体的には下記の措置を講じる。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化 (2) 計画的なアウトソーシング (3) 使用資源の減少 <ul style="list-style-type: none"> ・省エネルギー(エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減) ・廃棄物減量化 ・リサイクルの推進 								
【中期計画に対する評価】			【判定根拠、課題と対応】					
評価：B			判定根拠：計画どおり外部委託を実施している。					

【書式A】

施設名 法人全体

処理番号 9130

中項目	1 一般管理費の削減			
事業名	(3) 使用資源の減少			
【年度計画】				
・省エネルギー				
1) 光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に引き続き節減に努める。 (エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減)				
・廃棄物減量化				
1) 使用資源の節減に努め、廃棄物の減量化に引き続き努める。				
・リサイクルの推進				
1) 廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを引き続き推進する。				
担当部課	本部事務局財務課(取りまとめ) 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課	事業責任者	事務局長 栗原祐司	
【実績・成果】				
・日常の節電節水の周知徹底、クールビズ・ウォームビズの推進、冷暖房の省エネ運転等を行った。				
・廃棄物削減では、両面印刷の励行、館内LAN・電子メール等の活用を引き続き行い、会議でのiPad活用による文書のペーパーレス化を実施した。				
・リサイクルの実施(廃棄物の分別収集、リサイクル業者への古紙売り払い、再生紙の発注等)				
使用資源の推移等				
光熱水料金 (千円)				
	25年度	26年度	差額	増減率
電気料	496,266	549,706	53,440	10.77%
水道料	87,249	89,418	2,169	2.49%
ガス料	180,761	186,427	5,666	3.13%
計	764,276	825,551	61,275	8.02%
※電気料は、下記の特殊要因により使用量・料金ともに増額となった。				
・電気料特殊要因①：原料高騰、再生可能エネルギー発電促進賦課金の賦課による契約単価と燃料調整費の上昇により増額となった。				
・電気料特殊要因②：東京国立博物館における正門プラザ新設と黒田記念館の開館により使用量が増加した。				
・電気料特殊要因③：東京文化財研究所における大型実験装置の稼動により使用量が増加した。				
事項	25年度単価 (円/kwh)	26年度単価 (円/kwh)	差(円/kwh)	単価影響額 (千円)
電気料特殊要因①	19.3	20.8	1.5	37,933
事項	増加量(kwh)	26年度単価 (円/kwh)	単価影響額 (千円)	
電気料特殊要因②	505,103	22.6	11,409	
電気料特殊要因③	215,071	22.9	4,920	
※水道料は、全体として使用量ベースでは減少したが、単価の上昇により使用料金ベースで増額となった。				
事項	25年度単価 (円/m ³)	26年度単価 (円/m ³)	差(円/kwh)	単価影響額 (千円)
水道料特殊要因	566.9	602.7	35.8	3,521
※ガス料は、全体として使用量ベースでは減少したが、下記の特殊要因により使用料金ベースで増額となった。				
・ガス料特殊要因①：原料高騰により契約単価が上昇した。				
・ガス料特殊要因②：京都国立博物館における平成知新館(平常展示館)の開館により使用量が増加した。				
事項	25年度単価 (円/m ³)	26年度単価 (円/m ³)	差(円/m ³)	単価影響額(千円)
ガス料特殊要因①	94.5	97.9	3.4	4,705
事項	増加量(m ³)	26年度単価 (円/m ³)	単価影響額 (千円)	
ガス料特殊要因②	96,111	97.7	9,387	

【次ページへ続く】

【前ページから続く】

特殊要因を考慮した光熱水料金 (千円)

事項	25年度	26年度	差額	増減率
電気料(※)	496,266	495,444	△822	△0.17%
水道料(※)	87,249	85,897	△1,352	△1.55%
ガス料(※)	180,761	172,335	△8,426	△4.66%
計	764,276	753,676	△10,600	△1.39%

※それぞれ特殊要因を勘案して算定。

廃棄物排出量 (kg)

事項	25年度	26年度	差額	増減率(%)
一般廃棄物	238,041	241,900	3,859	1.62%

【補足事項】

【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
光熱水量	1.39%減	年間1.03%減	A		4.24%減	1.58%減	3.90%減	2.18%減
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：光熱水料金の削減目標を達成したほか、省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクル推進の取組状況も良好である。 課題と対応：廃棄物排出量が前年度比で僅かに増加しており、来年度は節減に努める。							
【中期計画記載事項】中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を行う。ただし、文化財購入費、文化財修復費等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。 なお19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を削減する。 このため、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、事務、事業、組織等の見直しや、公用車の運転業務など外部委託できる業務を引き続き精査して計画的にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。 具体的には下記の措置を講じる。 (1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化 (2) 計画的なアウトソーシング (3) 使用資源の減少 ・省エネルギー(エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減) ・廃棄物減量化 ・リサイクルの推進								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 判定根拠：光熱水料金の削減目標を達成したほか、省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクル推進の取組状況も良好である。 課題と対応：廃棄物排出量が前年度比で僅かに増加しており、来年度は節減に努める。							

【書式A】

施設名 法人全体処理番号 9140

中項目	1 一般管理費の削減							
事業名	(4) 自己収入の増大							
【年度計画】								
<p>独立行政法人整理合理化計画(19年12月24日閣議決定)の方針に基づき設定した外部資金の活用及び自己収入の増大に向けた定量的目標の達成を、引き続き目指す。</p> <p>1) 機構全体において、入場料収入(共催展を除く)及びその他収入について、1.16%の増加を目指す。</p> <p>2) 機構全体において、寄附金 350 件及び科学研究費補助金 76 件の確保を目指す。</p>								
担当部課	本部事務局財務課(取りまとめ) 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課	事業責任者	事務局長 栗原 祐司					
【実績・成果】								
1) 定量的目標を設定した自己収入については、下表のとおり 29.04%増となり、目標を上回った。 (単位：千円)								
	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度					
自己収入基準額	904,886	915,383	926,001					
自己収入目標額	915,383	926,001	936,743					
自己収入実績額	880,271	968,819	1,194,914					
増加率	△2.72%	5.91%	29.04%					
<p>※受託研究・受託事業を除く。</p> <p>※自己収入目標額は、前年度の目標額から 1.16%増加した場合の額。</p> <p>※増加率は、自己収入基準額(前年度の目標額)に対する増加率。</p>								
2) 下表のとおり、寄附金及び科学研究費補助金ともに目標件数を上回ることができた。								
	目標値	平成 26 年度						
寄附金	350 件	561 件						
科学研究費補助金	76 件	107 件						
【補足事項】 科研費採択件数は、「科学研究費補助金」と「学術研究助成基金助成金」の件数である。								
【定量的評価】 項目	26 年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
自己収入増加率	29.04%増	1.16%増	A		13.38%増	8.17%減	2.72%減	5.91%増
寄附金件数	561 件	350 件	A		314	393	438	486
科研費採択件数	107 件	76 件	A		81	76	88	95
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評価：A	判定根拠：自己収入及び寄附金ともに目標を上回ることが出来た。							
【中期計画記載事項】 中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を行う。ただし、文化財購入費、文化財修復費等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。								
なお19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を削減する。								
このため、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、事務、事業、組織等の見直しや、公用車の運転業務など外部委託できる業務を引き続き精査して計画的にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。								
具体的には下記の措置を講じる。								
(1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化								
(2) 計画的なアウトソーシング								
(3) 使用資源の減少								
<ul style="list-style-type: none"> ・省エネルギー(エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減) ・廃棄物減量化 ・リサイクルの推進 								
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評価：A	判定根拠：自己収入及び寄附金ともに目標を上回ることが出来た。							

中項目	2 給与水準の適正化等							
事業名	給与水準の適正化等							
【年度計画】 国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数は国家公務員の水準を超えないよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。また人件費改革の取り組みについて、今後の独立行政法人制度の見直し等を踏まえて検討する。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】 ・人事給与統合システムが20年4月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。 ・地域手当について、25年度においても21年度の率を据え置くことが決定された。また、27年度以降は国の状況及び当機構の人件費の状況を勘案し、毎年度検討することを決定した。 ・役職員の報酬額については、毎年度、総務省の実施している「独立行政法人の役員の報酬等及び職員の給与の水準の公表方法等について（ガイドライン）、平成15年9月9日策定」において、個別の額を公表しており、また、法人ウェブサイト上においても掲載している。今後も引き続き公表することとしている。								
【補足事項】 ・レクリエーション経費は運営費交付金からの支出はない。レクリエーション経費以外の福利厚生費（法定外福利費）は13,918千円である。また、国とは異なる諸手当は機構にはない。 ・ラスパイレス指数は事務・技術職員が97.1、研究職員が98.5となっている。								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 人件費削減に向けたシミュレーションを行い、26年度実績も概ね順調に人件費に関する計画を遂行できたが、今後は、中期的な人事計画をもとに、最広義人件費の削減についても検討を進めていく。						
【中期計画記載事項】 国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数については現状を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。また、これまでの人件費改革の取り組みを平成23年度まで継続するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、取り組むこととする。ただし、人事院勧告を踏まえた給与改定分及び競争的資金により雇用される任期付職員に係る人件費については本人件費改革の削減対象から除く。 なお、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬（給与）、賞与、その他の手当の合計額とし、退職手当、福利厚生費は含まない。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 引き続き、人件費改革の取り組みを実施し、順調に人件費削減を遂行している。						

【書式A】

施設名 法人全体

処理番号 9310

中項目	3 契約の適正化の推進														
事業名	契約の適正化の推進														
【年度計画】															
<p>1) 契約監視委員会を実施する。</p> <p>2) 施設内店舗の貸付・業務委託について引き続き企画競争を実施する。</p> <p>3) 民間競争入札を推進する。 (東京国立博物館・東京文化財研究所) ・施設管理・運営業務を継続して民間競争入札による外部委託を行う。 (東京国立博物館) ・展示場における来館者対応等業務を継続して民間競争入札による外部委託を行う。</p>															
担当部課	本部事務局財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課	事業責任者	事務局長 栗原 祐司												
【実績・成果】															
<p>1) 「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて（平成21年11月17日閣議決定）」に基づき、外部委員で構成された契約監視委員会を設置し、機構が26年度に締結した契約の点検・見直しを行った。 第1回契約監視委員会（26年11月28日開催） 第2回契約監視委員会（27年6月12日開催予定）</p> <p>2) 京都国立博物館平成知新館（ミュージアムショップ・レストラン）運営業務について、企画競争を実施した。 東京国立博物館（ミュージアムショップ・レストラン・黒田記念館カフェ、正門プラザ（ミュージアムショップ））、京都国立博物館（南門カフェ）、奈良国立博物館（ミュージアムショップ・レストラン）、奈良文化財研究所（ミュージアムショップ）については、既に企画競争を実施済み。 今後も、賃貸借期間終了時に順次企画競争を実施予定である。</p> <p>3) ・総務省からの要請に基づき、「独立行政法人整理合理化計画（平成19年12月24日閣議決定）」の一環として、随意契約の見直しを行い、随意契約によることがやむを得ないものを除き、引き続き競争契約に移行している。 ・より多くの競争参加者を募るため、公告期間をこれまでの「10日間以上」から自主的措置として20日間以上確保するように引き続き努めている。 ・列品等修理契約について、修理契約委員会を設置し、修理可能な業者が複数存在すると判断された契約は企画競争を実施している。</p> <p>一般競争入札件数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>25年度</th> <th>26年度</th> <th>増減</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>件数</td> <td>171件</td> <td>169件</td> <td>△2件</td> </tr> </tbody> </table>								年度	25年度	26年度	増減	件数	171件	169件	△2件
年度	25年度	26年度	増減												
件数	171件	169件	△2件												
【補足事項】															
東京国立博物館及び東京文化財研究所の施設管理・運営業務、東京国立博物館の展示場における来館者対応等業務について、官民競争入札監理委員会において良好な実施結果が得られていることが認められ、27年度から市場化テスト終了プロセスへ移行した上で事業を実施することが了承されたため、26年度に一般競争入札にて契約を行った。															
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25							
一般競争入札件数	169件	—	—		175	132	136	171							
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】														
評価：B	判定根拠：計画どおり取組を実施している。														
【中期計画記載事項】															
「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」（平成21年11月17日閣議決定）に基づき引き続き取組みを着実に実施し、文化財の購入等随意契約が真にやむを得ないものを除き、競争性のある契約への移行を推進することにより、経費の効率化を行う。また「独法の事務・事業の見直しの基本方針」（平成22年12月7日閣議決定）に基づき、施設内店舗の賃借について、企画競争を導入するなど競争性と透明性を確保した契約方式とする。なお民間競争入札については、現在実施している民間競争入札の検証結果等を踏まえ、一層推進する。															
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】														
評価：B	判定根拠：計画どおり取組を実施している。														

中項目	4 保有資産の有効利用の推進							
事業名	保有資産の有効利用の推進							
【年度計画】 (博物館4施設) 1) 講座・講演会等を開催する。 2) 講堂等の利用案内を関係団体、学校等に対し積極的に行う。 3) 国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。								
担当部課	総務部総務課	事業責任者	課長 竹之内勝典					
【実績・成果】 1) 月例講演会等の他、当館主催や外部利用による講演会を実施した。 2) 撮影件数増加のためインターネットロケーション検索サイト（ロケナビ!）への登録を継続した。 3) ・定期的にコンサート、寄席などの文化イベントを開催した。 ・「国際博物館の日」を記念して上野地区の機関と連携し、ガイドツアーなどを実施した。 ・「留学生の日」イベントを行い、ガイドツアーや茶道体験など日本文化の紹介を行った。 ・総合文化展100万人プロジェクトの一環として若年層の新規来館者を目指したイベント「博物館で野外シネマ」を前庭で実施し、室外スペースを有効利用した。								
【補足事項】 ○企業等のパーティー、撮影(映画、ドラマ、雑誌等)、茶室・講堂の貸出による施設の有効利用(それに伴う収入増)を図った。 ・企業等のパーティーによる収入は、8件35,671千円となった。 ・撮影による収入は、255件 28,281千円となった。(昨年度実績249件 38,225千円) ○撮影件数の更なる増加のため ・インターネットロケーション検索サイト（ロケナビ!）の申し込みプランを23年8月より更改(掲載写真増、間取り図追加)したところ、撮影件数が大幅に増加した。 ・ロケ担当者からの要望に対応するため、ロケハン（撮影下見）用の案内シートを各施設の開館状況に応じて更新した。 ・ロケスタッフへのきめ細かな対応と、更なるサービス向上の一環として、ロケ弁（弁当）業者の斡旋を引き続き実施した。また台東区とロケ弁業者の情報を共有することで、より手厚いサービス提供を図った。 ○来館者に展示観覧と合わせてコンサート等を楽しんでいただけるよう、イベントの開催時間を開館時間中に設定することに努めた。 ○イベント開催を来館者数が比較的少ない時期に行い、来館者数の増加に貢献した。 ○「博物館で野外シネマ」では、ウェブサイトを中心とした情報発信を行った結果、ツイッターでは、リツイート5,000以上のウェブニュースサイトも複数あるなど、SNSによる情報の拡散を図ることができた。2日間で8,600人の来館があり、アンケート結果では観覧者の80%が20代以下となるなど、若年層への当館認知に対するアピールができた。 ○博物館や美術館などの特別な場所でイベントを実施する「ユニークベニュー」としての施設利用を推進し、企業等のパーティーを積極的に実施した。特に、一般社団法人日本旅行業協会、公益社団法人日本観光振興協会が主催する「ツーリズムEXPOジャパン」の前夜祭である「JAPAN NIGHT2014」に全面協力し、「ユニークベニュー」としての博物館を国内外にアピールした。 ○ウェブサイトのトップページに「ロケ地利用」ページのリンクを設け、ページ閲覧数の増加を図るとともに、「施設有料貸出」ページの情報を追加・整理し、問い合わせ件数の増加及び対応事務の効率化を引き続き図った。 ○26年4月の消費税率改定に合わせ、施設利用料金の改定を行った。 ○今後とも企業等のパーティー、講堂・茶室貸出しが増えるよう方策を検討したい。								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
施設の有効利用件数	664件	—	—	—	538	618	637	676
うち有償利用件数	402件	—	—		256	341	342	393
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり施設の有効活用を進めることができたため。							
【中期計画記載事項】 保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、有効利用の推進を図るため、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に記載のとおり、順調に保有資産の有効利用を推進できている。							



「タリスカーストーム」PRイベント



「博物館で野外シネマ」の様子

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 9412

中項目	4 保有資産の有効利用の推進								
事業名	保有資産の有効利用の推進								
【年度計画】 (博物館4施設) 1) 講座・講演会等を開催する。 2) 講堂等の利用案内を関係団体、学校等に対し積極的に行う。 3) 国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。									
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長 植田義雄 学芸部長 松本伸之						
【実績・成果】 1) 展覧会等に関する講演会、土曜講座、特別シンポジウムを開催した。 2) 庭園を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進を図った。また、外部団体等の講演会・研修会等への施設の貸出を積極的に行った。 3) 来館者の拡大を目的としたコンサートを実施し、施設の有効利用を図った。									
【補足事項】 ○庭園(明治古都館前) ・全館休館期間中に、音楽イベント「音燈華 vol.5」を開催した。(来館者数584名) ・26年12月6日～12月23日にイルミネーションの点灯を行った。閉館後は庭園のみ無料で入場できるようにした。 ○茶室 ・茶会、撮影会等での貸出を行った。 ○講堂 ・「土曜講座」・「夏期講座」・「京都・らくご博物館」を開催した。 ・二胡コンサートを開催した。(3回開催 参加者数615名) ・聞香体験と講演会を開催した。(参加者数107名) ○明治古都館 ・屋根の葺替工事に際し、屋根修理現場他の見学会を開催した。(2日間開催 参加者数62名) ・クリスマスバロックコンサートを開催した。(参加者数100名) ○平成知新館グランドロビー ・平成知新館の開館前に、展示室等の事前見学会を開催した。(4回開催 参加者数448名) ・閉館後に夜間クラシックコンサートを開催した。(参加者数136名) ・ハンドベルコンサートを開催した。(2回開催 参加者数260名) ○会場提供 ・庭園：音楽イベント「音燈華 Daiwa Sakura Aid Concert -vol.3-」、レクサス車両展示、東映ドラマ撮影 ・講堂：ジャパン・ゴールド・アカデミー講義、京都仏具協同組合実地研修会、京都ホテルオークラ講義、京都市内博物館施設連絡協議会 研修会、第22回「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会」、大阪倶楽部美術茶話会、神慈秀明会講義、第3回「美術工芸 都のかたち」、健康長寿産業シンポジウム、京都国立博物館スタディツアー、「音燈華 ジュスカ・グランペール情熱快適コンサート」、ICOMフォーラム京都 ・平成知新館グランドロビー：宝飾品の新商品展示発表ディナー会 ・平成知新館講堂、管理棟：日本展示学会「展示論講座」 ・平成知新館大会議室：第9回指定文化財企画・展示セミナー									
【定量的評価】項目		26年度実績	目標値	評価	経年 変化	22	23	24	25
施設の有効利用件数		63件	—	—		59	42	59	28
うち有償利用件数		57件	—	—		44	35	46	25
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 館休館期間中には庭園を利用した大規模なコンサートを開催し、平成知新館開館後は講堂やグランドロビーを利用した講演会、コンサート等を積極的に開催した。							
【中期計画記載事項】保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、有効利用の推進を図るため、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って、順調に講堂・会議室等の貸与を実施している。							



音燈華vol.5 DEPAPEPEコンサート



屋根修理現場他の見学会

中項目	4 保有資産の有効利用の推進							
事業名	保有資産の有効利用の推進							
【年度計画】 (博物館4施設) 1) 講座・講演会等を開催する。 2) 講堂等の利用案内を関係団体、学校等に対し積極的に行う。 3) 国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。								
担当部課	総務課渉外室企画推進係	事業責任者	係長 石田義則					
【実績・成果】 1) 公開講座、サンデートーク、正倉院展ボランティア解説、特別鑑賞会、文化財保存修理所特別公開等を開催した。 2) 奈良市教育委員会と連携し、市内の小学校5年生を対象とした世界遺産学習を実施した。 3) 地元自治体等と連携し、敷地内でコンサート等のイベントを実施した。								
【補足事項】 ○講座・講演会 公開講座(13回)、サンデートーク(12回)、正倉院展ボランティア解説(92回)、特別鑑賞会(9回)、文化財保存修理所特別公開等 ○世界遺産学習(33校) ○イベントの実施 ・講堂：古典の日講演会「東大寺献物帳と光明皇后」、第66回正倉院展親子鑑賞会、特別陳列「お水取り」関連企画「お水取り「講話」と「粥」の会」、文化財保存修理所特別公開、お水取り展鑑賞とお松明 ・地下回廊：「チャッピー岡本のカブリモノ変心塾～仏像になってみよう！～」、奈良トライアングルミュージアムズワークショップなら2014「オリジナル散華をつくろう」 ・仏教美術資料研究センター：仏教美術資料研究センター公開(2回)、関野ホール特別無料公開(9月17日～10月22日、11月13日～12月7日) ・庭園・茶室：案内ツアー(4回)、庭園・茶室特別無料公開(9月17日～10月22日、11月13日～12月7日)、「おん祭と春日信仰の美術」茶会 ・なら仏像館：なら仏像館修理工事現場特別見学会 ○会場提供 ・講堂：東アジア隣人ネットワーク主催「民衆一知と文化」出版記念フォーラム、アジアフォーラム「奈良と醍醐寺と密教と」、小中学生を対象にした「大仏建立に込められた祈りの物語」講演等 ・地下回廊：コンサート「ムジークフェストなら2014」 ・仏教美術資料研究センター：コンサート「ムジークフェストなら2014」、言霊と音霊の夜会 ・庭園：コンサート 音燈華「ジェスカ・グランペール」 ・茶室：茶会 ・敷地内：なら燈花会、野点の茶会、奈良県柿の日消費拡大イベント、春日若宮おん祭執行に係る敷地提供、なら瑠璃絵等								
								
「チャッピー岡本のカブリモノ変心塾～仏像になってみよう！～」(地下回廊)		古典の日講演会「東大寺献物帳と光明皇后」(講堂)						
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
施設の有効利用件数	117件	—	—	変化	146	144	139	144
うち有償利用件数	34件	—	—		31	28	39	43
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 国内のみならず地方公共団体を通じてアジア地域に関連する催しにも会場提供を行い、博物館の認知及び、施設の有効活用ができた。							
【中期計画記載事項】 保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、有効利用の推進を図るため、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり順調に成果を上げている。							

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 9414

中項目	4 保有資産の有効利用の推進							
事業名	保有資産の有効利用の推進							
【年度計画】 (博物館4施設) 1) 講座・講演会等を開催する。 2) 講堂等の利用案内を関係団体、学校等に対し積極的に行う。 3) 国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。								
担当部課	交流課	事業責任者	交流事業室事務主査 岩橋神奈子					
【実績・成果】 (博物館4施設) 1) 文化交流展示や特別展に関連する講座・講演会等を開催した。 2) ミュージアムホール、エントランスホール、研修室、茶室等において、館主催事業及び各種団体主催のイベントを開催するとともに、希望団体にはミュージアムホール、研修室、茶室の貸出を行った。 3) 国際シンポジウム、アジア諸国に関するイベント、留学生の日のイベント等を開催した。また、ガムランワークショップや茶道体験、コンサートの開催等を継続的に実施し、施設の有効活用を促進した。								
【補足事項】 (博物館4施設) 1) ・文化交流展(トピック展)関連イベント トピック展示「柿右衛門-受け継がれる技と美- (仮称)」関連国際シンポジウム「世界の『アリタ』-有田焼の伝統と未来へ続く創造性-」(期間: 27年3月8日、参加者数: 253名)等を開催した。 ・特別展関連イベント 特別展「クリーブランド美術館展」関連記念講演会「アメリカ人の目利き-シャーマン・リーとクリーブランド美術館コレクション」(期間: 7月13日、参加者数: 275名)等を開催した。 ・主催イベント 9周年記念ガムランコンサート「青銅の響き・悠久の舞」(期間: 12月6日、7日、参加者数: 800名)等を開催した。 ・各種団体主催イベント 「東九州神楽人の祭展~京築神楽(福岡)と西米良神楽(宮崎)を愉しむ~」(期間: 8月19日~8月31日: 参加者数〔期間中来館者数〕: 42,543名)等を開催した。  「クリーブランド美術館展」関連記念講演会  9周年記念ガムランコンサート「青銅の響き・悠久の舞」								
2) ・施設の利用実績								
	計	321件(うち	有償	114件)				
	ミュージアムホールの利用	72件(うち	有償	10件)				
	研修室の利用	140件(うち	有償	85件)				
	茶室の利用	45件(うち	有償	18件)				
	その他(エントランスホール 外)	45件(うち	有償	1件)				
	撮影利用	19件(うち	有償	6件)				
3) ・コンサート きゅーはくミュージアムコンサートを定期的に開催した。								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
施設の有効利用件数	321件	—	—		321	264	246	269
うち有償利用件数	120件	—	—		76	90	86	122
【年度計画に対する総合評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 展示と関係のある講演会やワークショップを開催したほか、9周年記念イベントを来館者数が比較的小さい時期に開催し来館者数の増加に貢献するなど、施設の有効利用を図った。							
【中期計画記載事項】保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、有効利用の推進を図るため、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施する。								
【中期計画に対する評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき、適切に施設の貸与を行うことができた。							

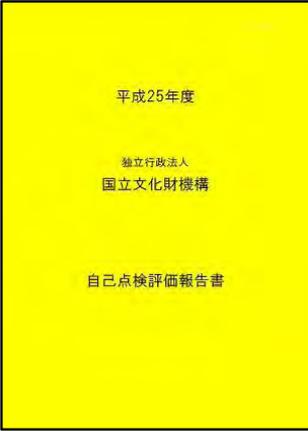
中項目	4 保有資産の有効利用の推進							
事業名	保有資産の有効利用の推進							
【年度計画】 (文化財研究所2施設) セミナー室、講堂等一般の利用の供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を引き続き図る。								
担当部課	研究支援推進部	事業責任者	部長 島崎正弘					
【実績・成果】 ・セミナー室、会議室等を利用することにより、施設の有効利用の推進を図った。 ・研究成果を広く一般にも公表するためのオープンレクチャーを本年度も開催した。この事業は台東区との連携事業として毎年開催されている「上野の山文化ゾーンフェスティバル」に東京文化財研究所のオープンレクチャーを同事業の講演会シリーズとして実施している。								
【補足事項】 								
第48回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
施設の有効利用件数	164件	—	—	13	178	196	181	177
うち有償利用件数	12件	—	—		12	20	23	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 会議・セミナーのための会議室・セミナー室の有料貸付を本来業務に支障のない範囲で実施したため。							
【中期計画記載事項】 保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、有効利用の推進を図るため、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 会議・セミナーのための会議室・セミナー室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施したため。							

【書式A】

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 9416

中項目	4 保有資産の有効利用の推進							
事業名	保有資産の有効利用の推進							
【年度計画】 (文化財研究所2施設) セミナー室、講堂等一般の利用の供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を引き続き図る。								
担当部課	研究支援推進部	事業責任者	研究支援推進部長 上田浩司					
【実績・成果】								
施設名		平成26年度						
平城宮跡資料館講堂		108件 (内 有償貸与 3件)						
平城宮跡資料館小講堂		115件 (内 有償貸与 9件)						
飛鳥資料館講堂		28件 (内 有償貸与 0件)						
その他(本庁舎・管理棟・収蔵庫等)		35件 (内 有償貸与 14件)						
合計		286件 (内 有償貸与 26件)						
<ul style="list-style-type: none"> 一般利用申し出への行政サービスの向上を図る方針のもと、ウェブサイト上での施設利用紹介等による積極的有効利用(貸付等)の促進を図った。 上記のほか、平城宮跡資料館、飛鳥資料館の各ミュージアムショップ(売店)の運営を外部委託し、図録等の販売を通して来館者の利便に供した。 本庁舎改築整備に伴って、当研究所が企画実施する研修等に際しての寄宿舍施設が取り壊わされた。 								
【補足事項】 平成25年度実績								
施設名		平成25年度						
平城宮跡資料館講堂		115件 (内 有償貸与 6件)						
平城宮跡資料館小講堂		156件 (内 有償貸与 4件)						
寄宿舍施設		805件 (内 有償貸与 13件)						
飛鳥資料館講堂		45件 (内 有償貸与 0件)						
その他(本庁舎・管理棟・収蔵庫等)		21件 (内 有償貸与 14件)						
合計		1,142件 (内 有償貸与 37件)						
								
解説ボランティア「続日本紀」読書会		平城宮跡資料館ミュージアムショップ						
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
施設の有効利用件数	286件	—	—	—	1,489	1,449	1,328	1,142
うち有償利用件数	26件	—	—		105	52	68	37
【年度計画に対する総合評価】 評価：C	【判定根拠、課題と対応】 特別要因として寄宿舍施設が取り壊しとなったため、全体の利用実績件数は大幅に減少した。寄宿舍を除くほかの施設の有効利用件数は、減少傾向にはあるが推移としては鈍い。現在、本庁舎改築整備のため仮設庁舎での業務を行っており、限られたスペースで本来業務に支障のない範囲で、施設の有効利用を実施している。これまでの経年変化でもわかるように有効利用件数の年々の減少は、施設の老朽化等による影響も少なくはない。よって、本庁舎が新営となったおりに、施設利用紹介等を含めて有効利用の促進が期待される。							
【中期計画記載事項】 保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、有効利用の推進を図るため、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施する。								
【中期計画に対する評価】 評価：C	【判定根拠、課題と対応】 特別要因として寄宿舍施設の取り壊し、寄宿舍を除くほかの施設の有効利用件数は、減少傾向で鈍く推移している。このことは施設の老朽化等による影響も少なくはない。現在、本庁舎改築整備が進められており、本庁舎の新営は、施設利用紹介等を含めて有効利用の促進につながる。但し、寄宿舍施設については、附設の計画はない。							

中項目	5 内部統制の充実・強化							
事業名	(1) 理事長のマネジメント強化							
【年度計画】								
1) モニタリングの実施 ・自己点検評価を行う。 ・監事監査を行う。 ・内部監査を行う。 2) リスクマネジメントの実施 ・リスク管理の必要に応じて、関連する諸規程の整備・見直しを行う。 ・危機管理マニュアルの見直し等を随時行う。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】								
1) モニタリングの実施 ・自己点検評価を行い、『平成25年度 独立行政法人国立文化財機構自己点検評価報告書』を作成(26年6月)し、評価結果をウェブサイトで公開した。外部評価委員からの意見等を踏まえ、評価のしやすさに配慮して自己点検評価報告書を作成した。 ・監事による定期監査(26年6月19日)を行ったほか、臨時監査を本部事務局・東京国立博物館(27年2月13日)、奈良国立博物館(27年2月19～20日)を対象に行った。 ・内部監査を、26年10月30日～11月28日の日程で、本部事務局及び各施設を対象に順次行った。 2) リスクマネジメントの実施 ・情報システム管理・セキュリティ対策の一環として関連する諸規程の見直しを行い、情報セキュリティ強化のため、独立行政法人国立文化財機構ネットワーク管理運用要項に、プロキシサーバ(中継サーバ)を情報化委員会申し合わせにより運用する事項を加えた。 ・理事長からの指示に基づき、危機管理マニュアルの見直しを行った。東京国立博物館は26年4月改訂、京都国立博物館は見直し作業を継続して27年度改訂予定、奈良国立博物館は27年3月改訂、九州国立博物館では暫定版から正式版に26年12月に改訂、東京文化財研究所では27年3月改訂、奈良文化財研究所では27年3月改訂を行った。								
【補足事項】								
1) ・定期監査は、業務の監査(機構の業務運営状況、調査研究活動の実施状況等の監査)及び会計の監査(決算の状況、契約の状況等の監査)を行った。 ・臨時監査は、業務及び会計についての実地監査を、物品購入に関する手続きの流れ及び帳票、関係書類の確認に重点を置いて実施した。 2) ・アジア太平洋無形文化遺産研究センターでは、堺市博物館の危機管理マニュアルを利用しており、今年度見直しはなかった。								
 <p>平成25年度 独立行政法人 国立文化財機構 自己点検評価報告書</p>		 <p>独立行政法人国立文化財機構ウェブサイト 25年度評価結果のページ</p>						
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 監事による定期監査及び臨時監査を行い、危機管理マニュアルの見直し・改訂を行うなど、モニタリング、リスクマネジメントともに適切に実施することができた。						
【中期計画記載事項】理事長のマネジメント強化のため業務の特性や実施体制に応じた効果的な統制機能の在り方を検討し、自己点検評価を始め監事監査、内部監査などモニタリングを行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 今年度も自己点検評価、監事監査及びモニタリングを適切に行うことができ、中期計画の達成に向けて順調である。						

【書式A】

施設名 本部事務局処理番号 9520

中項目	5 内部統制の充実・強化							
事業名	(2)外部有識者による事業評価							
【年度計画】								
1)運営委員会、外部評価委員会を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。								
2)職員の資質向上を図るため各種研修を実施する。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】								
1)運営委員会(26年7月23日)、外部評価委員会(研究所・センター調査研究等部会：26年4月23日、博物館調査研究等部会：4月25日、総会：5月30日)を実施し、その結果を機構の事業等の改善に反映させた。								
2)(各種研修について詳細は処理番号0230参照)								
【補足事項】								
								
運営委員会(26年7月23日)			外部評価委員会研究所・センター調査研究等部会(26年4月23日)			外部評価委員総会(26年5月30日)		
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 運営委員会、外部評価委員会を予定通り実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させることができた。						
【中期計画記載事項】 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 年1回以上の事業評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させることができ、順調である。						

中項目	5 内部統制の充実・強化							
事業名	(3)情報セキュリティ対策の向上と改善							
【年度計画】								
1)情報セキュリティについて定期監査等を実施する。								
2) 機構全体での情報セキュリティ強化のため、ネットワーク環境等の見直しについて、検討を継続する。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】								
1) ・保有個人情報管理監査を、本部事務局、東京国立博物館（27年2月13日）、奈良国立博物館（27年2月19日～20日）を対象に実施した。								
・情報システム監査を、奈良文化財研究所を対象に実施した。（27年2月24日）								
・情報システム自己点検・評価について、セキュリティ対策の実施状況に重点を置いて実施した。（26年4月）								
・監査法人による監査の一環として、システム監査を実施した。（27年1月）								
2) 情報セキュリティ水準の向上のための機器の更新、導入を行った。								
○政府機関における情報セキュリティ対策に基づき、26年6月25日に「独立行政法人における情報セキュリティ対策の推進について」が示された。これを踏まえ、機構の情報セキュリティポリシーの見直しを行うため、セキュリティポリシー見直しWGを設置し、27年度改正に向けた準備を進めた。								
【補足事項】								
1) ・情報システム監査は、20年度～24年度まで、情報システムの活用状況とセキュリティ対策を中心とした監査項目にて実施し、監査対象が機構内各施設を一巡した。25年度（京都国立博物館）、26年度（奈良文化財研究所）は、移転に関する監査項目にて監査を行った。								
・監査法人によるシステム監査では特に指摘事項はなかった。								
2)情報化委員会にてネットワーク環境等の見直しを行った結果、機構全体の情報セキュリティ強化のため、26年度本部予算にて以下の機器更新、導入を行った。								
・プロキシサーバ（ウェブサイト閲覧に関するセキュリティ強化）について、必要とする3施設へ導入した（うち1施設は26年度調達、27年度稼働予定）。また、小規模な施設ではログ保存のための機器を導入した。								
・迷惑メール対策機能（E-mail送受信に関するセキュリティ強化）について、必要とする3施設へ導入した（うち1施設は26年度調達、27年度稼働予定）。								
・耐障害性向上のため、各施設用VPNルータ予備器の調達を行い、各施設への設置に備えた。27年度に各施設へ設置予定である。								
・耐障害性向上及びパフォーマンス向上のため、東京国立博物館から外部インターネットへの接続用ルータを上位機種に更新した。この回線は、東京国立博物館から外部への接続が主目的である。加えて、機構VPN上の各種サーバーを東京国立博物館内に設置していることから、機構内各施設（東京国立博物館以外）からの機構VPN利用においても上記ルータは、重要な役割を果たしている。ルータ更新は、東京国立博物館からのインターネット接続先であるSINETの接続先ノード変更（27年3月26日）に、併せて行った。								
○セキュリティポリシー見直しWG（第1回）を27年2月12日に開催した。								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 情報システム監査の実施、情報セキュリティ水準の向上のための機器の更新・導入などにより、所期の目標を充分達成している。						
【中期計画記載事項】 管理する情報の安全性向上のため、政府の方針を踏まえた情報セキュリティに配慮した業務運営の情報化・電子化に取り組み、情報セキュリティ対策の向上と改善を図るため定期監査等を実施する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 政府の方針を踏まえた情報セキュリティ対策のために当該規程の見直しに着手するなど、中期計画達成に向けて順調である。						

【書式A】

施設名 本部事務局

処理番号 0110

大項目	IV その他主務省令で定める業務運営に関する事項							
中項目	1 施設・設備に関する計画							
事業名	施設・設備に関する計画							
【年度計画】								
別紙のとおり施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。								
別紙： 施設・設備に関する計画								
(単位：百万円)								
施設・整備の内容		予定額	財 源					
京都国立博物館 緊急屋根等漏水補修工事		182	施設整備費補助金					
奈良文化財研究所 本庁舎地区再開発計画の推進		2,808	施設整備費補助金					
合 計		2,990						
担当部課	本部事務局環境整備室	事業責任者	室長 大江信浩					
【実績・成果】								
(東京国立博物館)								
・観覧環境向上のため、平成館において、展示室改修及び連絡通路の増築等を実施しており、27年3月に完了した。								
(京都国立博物館)								
・緊急屋根等漏水補修工事は、本館中央室屋根修繕工事として屋根下地と瓦の葺替と正面破風銅板葺替等を7月に完了した。また11月末に文化財保存修理所改修一期工事として屋上及び外壁の防水改修、3階部分の建具改修及び断熱等内装工事、更に改修機械設備工事として、給水方式を直圧式に改修し、配管を更新した。								
・25年度に完成した平成知新館(新平常展示館)において、今年度は展示製作工事等を終え、26年9月13日に開館した。								
(奈良国立博物館)								
・なら仏像館において重要文化財建造物の保存修理工事として、屋根改修(回廊部分銅板屋根、中層瓦屋根(一部))、飾枘及び縦樋修繕、外壁洗浄・補修、飾石修繕、建具塗装、鋼製装飾塗装等を実施した。								
・なら仏像館において内部の展示室整備工事として、13室ある展示室の内6室(5・7・8・9・10・12室)について免震展示ケースの設置を伴う内装改修工事(電気設備・空調改修を含む)を実施した。								
(奈良文化財研究所)								
・旧庁舎取壊工事を平成25年度に引き続き実施しているが、埋蔵文化財発掘調査のため工期を26年度末まで延長した。								
・建設予定地地下の遺構を保存する必要が生じたため、新庁舎の設計を変更する準備を行っている。								
【補足事項】								
(京都国立博物館)								
・2階以下の工房が仮工房への移転後、文化財保存修理所改修二期工事を27年度に実施予定である。								
(奈良国立博物館)								
・なら仏像館の展示室整備工事について、26年度工事対象の6室以外の室については27年度に実施する予定である。								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評定：B		当該年度実施予定の施設整備費補助金事業等、計画に沿った整備が実施されているため。						
【中期計画記載事項】								
施設・設備の老朽化度合い等を勘案しつつ、別紙4のと通りの施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。								
(別紙4) 施設・設備に関する計画								
施設・整備の内容		予定額(単位：百万円)	財 源					
国立文化財機構施設整備費		19,189	施設整備費補助金					
(脚注) 金額については見込みである。また、施設・設備の老朽化度合等を勘案した改修(更新)等が追加されることがあり得る。								
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評定：B		施設整備費補助金事業等、計画に沿った整備が実施されているため。						

中項目	2 人事計画に関する計画							
事業名	(1) 職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討する。							
【年度計画】 職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討する。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】 平成20年度において、機構として統一的な運用及び規程を整備し、勤務評定制度を開始した。給与へは昇給及び勤勉手当に反映している。 また、現行制度についての課題等を洗い出し、職員の能力や業績等をより適切に評価できるように、新たな評価制度の検討を開始した。								
【補足事項】 職員の評価については、被評価者の直近の上司の他に、直近上司の上司及び実施権者である施設の長も評価者となっており、公正な評価が行われている。また、評価項目についても施設によって評価項目が大きく異なることがないよう職責に応じた統一的な項目に加え、各施設の特性も加味するため1項目については施設の長が定めることができ、各施設の特性に合致した評価が実施できている。								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 26年度においても、勤務評定制度を実施した。						
【中期計画記載事項】 ①国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。 ②人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供を行う。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 ③機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行う。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 例年同様、26年度においても、勤務評定制度を実施した。 また、職員の能力や業績等をより適切に評価できるよう、新たな評価制度の検討を開始した。						

【書式A】

施設名 本部事務局

処理番号 0220

中項目	2 人事計画に関する計画							
事業名	(2) 近隣大学等との交流を進め、優秀な人材を確保する。							
【年度計画】 近隣大学等との交流を進め、優秀な人材を確保する。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】 (事務系職員) ・本部事務局及び各施設において、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学及び(独)国立美術館等から受け入れており、人材の確保と適材適所の人員配置を行った。 ・機構内での人事交流を図るため、本部及び各施設間(計9人)における交流を行っている。								
年度	本部・東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	年度計(人)
22	18(東大、東近美、政研大、京博)	14(京大、阪大、民博、奈文研、東博)	8(文化庁、阪大、京大、京博)	8(九大、本部)	5(医科歯科大、東博、奈文研)	11(京大、阪大、総地研、奈女大)	—	64(9)
23	17(東大、東近美、政研大、奈文研)	14(京大、阪大、民博、奈文研、東博)	12(阪大、京大、京博、本部)	8(九大、本部)	6(医科歯科大、東博、本部)	12(文化庁、京大、阪大、奈女大)	1(奈文研)	70(12)
24	17(東大、学士院、奈文研)	14(京大、民博、奈文研、東博)	9(阪大、京大、京博、本部)	9(九大、本部)	7(医科歯科大、東近美、東博、本部)	8(京大、阪大、奈女大、京博)	1(奈文研)	65(11)
25	15(東大、学士院)	11(京大、東近美、民博、本部)	9(京大、阪大、本部、奈文研、京博)	8(九大)	5(東大、医科歯科大、東近美、本部、東博)	8(京大、阪大、奈女大、京博)	1(京博)	57(8)
26	15(東大、学士院、京博)	9(京大、東近美、滋賀医科大、本部)	8(京大、阪大、本部、奈文研)	7(九大)	4(東大、本部、東博)	7(京大、阪大、奈女大、京博)	1(京博)	51(9)
※表中の人事交流者の人数は、各年度末現在でカウントした。(機構に受け入れている人数) ※合計欄の()内の人数は、機構内の人事交流中的人数。								
(研究系職員) ・職員の適性・能力、年齢構成及び業務の効率化など総合的に勘案し、新規に研究職員を4人採用した。 ・また、文化庁から6人の受け入れ及び文化庁への出向を16人行っている。 ・機構内での人事交流並びに幹部職員の育成を図るため、各施設間にて計10人の交流を行っている。 ・研究休職制度を利用し、海外の研究機関に1人を派遣した。								
【補足事項】 ・事務系職員において、近隣大学等との交流数が7法人8機関あり、優秀かつ多様な人材を確保した。また、人事交流者数も51人と、引き続き優秀かつ多様な人材を確保し、計画に対し順調に成果をあげている。 ・事務系職員において、計5人を他機関へ派遣・出向させているが、他法人からの受け入れが交流の中心となっているため、27年度には双方向の人事交流の増加に向けた施策が行えるよう検討する。 ・研究職員については、文化庁との双方向の人事交流が行われているが、交流の多様化と交流先の拡大を図る必要がある。しかし、退職手当の通算ができない場合が多く、難しい問題がある。 ・また、4地方公共団体より事務系2名、研究系2名を研修生として受け入れ、交流の促進を行った。								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
—	—	—	—	—	—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 事務系においては、7法人8機関並びに機構内において51人の人事交流等を実施した。前年度に比して交流者数は減じたが、交流機関等と真に必要な交流ポストを選択し、集中的に優秀かつ多様な人材を確保した。研究系においても、主に文化庁との人事交流ではあるが、引き続き順調に交流を行った。						
【中期計画記載事項】 ①国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。 ②人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供を行う。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 ③機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行う。								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 交流機関、交流者数ともに減じているが、交流者受入の必要性を検討し、効率的に優秀かつ多様な人材を確保した。また、機構外だけでなく機構内の人事交流を活性化することにより中堅職員の育成、幹部職員候補の育成を図ることができた。						

中項目	2 人事計画に関する計画							
事業名	(3) 各種研修を積極的に実施し、また、職員を外部の研修に派遣するなど、その資質の向上を図る。							
【年度計画】 各種研修を積極的に実施し、また、職員を外部の研修に派遣するなど、その資質の向上を図る。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】 ・機構職員としての資質向上を図るため、新任職員や職員を対象とした各種研修(4件)、施設系の職員を対象とした研修(1件)、会計系の職員を対象とした研修(1件)及びハラスメントに関する研修(1件)を行った。 ・その他、他機関で実施する研修に延べ12名の職員を参加させ、職員の能力開発に寄与した。								
研修名称	日程	受講対象者	受講者数					
新任職員研修会	26年7月23日～25日	25年度以降の新任職員等	44人					
接遇研修	26年7月25日	25年度以降の新任職員等	44人					
個人情報保護についての研修・講演会	26年7月25日	25年度以降の新任職員等及び本部事務局、東京国立博物館、東京文化財研究所全職員及び近隣独立行政法人職員	約80人					
ハラスメント防止に関する研修・講演会	26年7月25日	各施設の職員、ハラスメント防止等委員会委員及び相談員等	約80人					
会計事務研修会	26年12月3日	機構内の会計系職員	25人					
施設系職員研修会	26年7月17日～18日、27年2月19日～20日	機構内の施設系職員	延べ19人					
文化財防災事業アソシエイトフェロー研修	26年12月8日～10日	文化財防災事業に関わるアソシエイトフェロー並びに機構内職員	21人					
【補足事項】 ・新任職員及び人事交流者に対しては、機構職員としての必要な業務・組織等についての基礎的知識及び執務要領を修得させ、新任職員等の資質の向上を図ることができた。 ・新任職員等を対象とした接遇研修の企画及び実施により、機構職員としての資質向上を図るとともに、修得した知識等(お客様からの苦情への対応方法等)を業務に反映させることができた。 ・保有個人情報の取扱いについて理解を深め、個人情報の保護に関する意識の高揚を図ることができた。 ・ハラスメント防止を目的とした研修・講演会を開催し、外部講師による専門的見地からのアドバイスによりハラスメントに対する理解を深め、発生防止に向けた意識の向上を図ることができた。 ・文化財防災ネットワーク補助事業により、主にそれに関わるアソシエイトフェローを対象に、講義、演習、討論等の研修を実施した。								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
研修機会の提供	7件	—	—		6	6	6	5
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 対象を限定し、機構全体の研修プログラムを6件実施した。また、文化財防災ネットワーク補助事業を活用した育成研修も実施した。今後の検討事項として、OJTをより効果的に行うための研修プログラムを効率的に実施する必要がある。また、専門的な研修等についても検討を実施する。							
【中期計画記載事項】 ①国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。 ②人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供を行う。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 ③機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行う。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 新任職員を対象とした集合研修、全階層を対象とした個人情報、ハラスメント等の倫理等研修を実施した。また、会計、施設等の職務能力の開発を対象とした研修を実施し、諸研修の機会を提供した。							

【書式A】

施設名 本部事務局

処理番号 0240

中項目	2 人事計画に関する計画							
事業名	(4) 非公務員化のメリットを活かした制度の活用方法について引き続き検討する。							
【年度計画】 非公務員化のメリットを活かした制度の活用方法について引き続き検討する。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> 19年度において、技術職員及び技能・労務職員について、機構独自で採用可能とする規程の整備を行い、20年度に施設の維持管理を行う職員を適用範囲とし、24年度において、事務職員を適用範囲とした。26年度においても同採用制度を活用し、事務職員4名の採用を行い、事務職員2名の採用内定を行った。 また、25年の採用方法を検証し、採用活動方法を改善した結果、当機構が想定する適切な母集団形成を実施することができ、より優秀な人物の獲得に寄与した。 20年度において、常勤の研究職員に準じた有期雇用職員の人事制度（アソシエイトフェロー）を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有する専門職を対象として採用可能とした。26年度は東京国立博物館で14人、京都国立博物館で4人、奈良国立博物館で2人、九州国立博物館で4名、東京文化財研究所で6人、奈良文化財研究所で8人及びアジア太平洋無形文化遺産研究センターで2人の計40人を採用した。 新たに26年度より、機構の専門的分野・事項を取り扱う職として専門職制度を創設し、国際交流分野に1名の採用内定を行った。 26年度の機構独自の採用人数は上記のとおり、事務職員4名、アソシエイトフェロー40名の計44名である。 								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> 研究職員においても、人事の流動化を図りたいが、退職手当の通算規定に課題があるので、難しい状況にある。 現在の国立大学法人等職員採用試験一次試験合格者名簿のみからの採用と相まって、機構が従来の任用・採用方法にとらわれず、独自に定める戦略的かつ柔軟な採用方法を実施することは、多様な人材の確保を可能にすることはもとより、最良の母集団形成及び専門知識、特殊技術並びに技能を持つ優れた人材の確保を可能にし、将来の機構の人事戦略に大きく寄与するものである。 文化財防災ネットワーク補助事業の立ち上げにより採用したアソシエイトフェローは11人である。 								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
機構独自の採用	44人	—	—		21	18	19	19
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 26年度において専門的分野・事項を取り扱う新たな職として専門職制度を創設し、国際交流分野（特にアジア圏）において人材の確保を行った。 事務職員については、25年度に引き続き26年度についても採用試験を実施し、複数名の優秀な人材の確保が行えた。							
【中期計画記載事項】								
<ol style="list-style-type: none"> ①国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。 ②人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供を行う。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 ③機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行う。 								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 専門的分野・事項を取り扱うパーマネントの職として新たに専門職制度を導入し、国際交流分野（特にアジア圏）において人材の確保を行った。 現行のアソシエイトフェロー制度をより柔軟に採用・登用ができるよう給与制度を含む制度の見直しが必要である。							

中項目	2 人事計画に関する計画							
事業名	(5) 専門スタッフの配置などの計画的な人材の確保・育成に向け、検討を進める。							
【年度計画】								
専門スタッフの配置などの計画的な人材の確保・育成に向け、検討を進める。								
担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長 池野浩幸					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 高度の専門的知識経験又は優れた識見を一定の期間活用して行うことが必要と認める業務に雇用する者とした任期付専門員制度を活用し、23年度において1名採用した。25年度において、柔軟かつ多様な人材の確保のため、新たに任期付専門職員制度を整備し、25年8月に1名を採用した。 ・ 高度に優れた専門的技術を兼ね備えた人材を確保すべく、専門職制度を創設し、採用活動を行ない、国際交流部門に1名を配置することが内定した。併せて、当該職の人事・給与制度の整備を行った。 								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 上記採用実績は、東京国立博物館総務部総務課渉外開発担当に、主に外国人等来訪者対応業務、国際化業務を担当する専門職員として採用している。 ・ 上記専門職制度で採用・配置される職員は、契約期間に定めがない職員である。 								
【定量的評価】項目	26年度実績	目標値	評価	経年変化	22	23	24	25
専門スタッフの配置	0人 (採用内定は1人)	—	—		—	1	0	1
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評価：B	配置実績はなかったが、新たに専門職制度を創設し、採用活動を行い、国際交流部門に1名を配置することが内定した。既存の任期付職員制度と新たな専門職制度の棲み分けを明確にする必要がある。							
【中期計画記載事項】								
<ol style="list-style-type: none"> ① 国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。 ② 人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供を行う。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 ③ 機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行う。 								
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評価：B	配置実績はなかったが、新たに専門職制度を創設し、採用活動を行い、国際交流部門に1名を配置することが内定した。							

Ⅲ 施設概要

【東京国立博物館】

土地・建物

(㎡)

土地面積	120,270 (黒田記念館、柳瀬荘含む)	
建物	建築面積	22,438
	延面積	72,222
展示館	展示面積 計	18,199
	収蔵庫面積 計	7,836
本館	建	6,602
	延	22,416
	展示面積	6,573
	収蔵庫面積	4,028
東洋館	建	2,892
	延	12,531
	展示面積	4,250
	収蔵庫面積	1,373
平成館	建	5,542
	延	19,406
	展示面積	4,471
	収蔵庫面積	2,119
法隆寺宝物館	建	1,935
	延	4,031
	展示面積	1,462
	収蔵庫面積	291
表慶館 ※休館中	建	1,130
	延	2,077
	展示面積	1,179
	収蔵庫面積	-
黒田記念館	建	724
	延	1,996
	展示面積	264
	収蔵庫面積	25
その他	建	3,613
	延	9,765

【京都国立博物館】

土地・建物

(㎡)

土地面積	53,182		
建物	建築面積	13,517	
	延面積	31,828	
展示館	展示面積 計	5,657	
	収蔵庫面積 計	5,421	
	平成知新館(新平常展示館)	建	5,568
		延	17,997
		展示面積	3,587
		収蔵庫面積	2,710
	明治古都館(特別展示館)	建	3,015
		延	3,015
		展示面積	2,070
		収蔵庫面積	803
	旧管理棟	建	590
		延	1,954
	資料棟	建	414
		延	1,125
	文化財保存修理所	建	728
		延	2,856
	技術資料参考館	建	101
		延	304
	東収蔵庫	建	1,084
		延	1,996
収蔵庫面積		1,412	
北収蔵庫	建	310	
	延	682	
	収蔵庫面積	496	
その他	建	1,707	
	延	1,899	

【奈良国立博物館】

土地・建物

(㎡)

土地面積	78,760		
建物	建築面積	6,769	
	延面積	19,116	
展示館	展示面積 計	4,079	
	収蔵庫面積 計	1,558	
	なら仏像館(本館)	建	1,512
		延	1,512
		展示面積	1,261
	青銅器館(本館付属棟)	建	341
		延	664
		展示面積	470
	東新館	建	1,825
		延	6,389
		展示面積	875
		収蔵庫面積	1,394
	西新館	建	1,649
		延	5,396
展示面積		1,473	
仏教美術資料研究センター	建	718	
	延	718	
文化財保存修理所	建	319	
	延	1,036	
地下回廊	延	2,152	
	収蔵庫面積	164	
その他	建	405	
	延	1,249	

【九州国立博物館】

土地・建物

(㎡)

土地面積	166,477	
建物	建築面積	14,623
	延面積	30,675
		(法人 9,300) (県 5,780) (共用 15,595)
展示館	展示面積 計	5,444
		(法人 3,844) (県 1,375) (共用 225)
		4,518
	収蔵庫面積 計	4,518
		(法人 2,744) (県 1,335) (共用 439)
		4,518

【東京文化財研究所】

土地・建物 (㎡)

土地面積	4, 1 8 1
建物	建築面積 2, 2 5 8
	延面積 1 0, 5 1 6

【奈良文化財研究所】

土地・建物 (㎡)

	土地面積	建物
本館地区	8, 8 6 0	建築面積 現在、建替中 延面積
平城宮跡資料館地区	(文化庁所属の国有地を無償使用)	建築面積 1 3, 3 2 8 延面積 2 1, 3 9 5
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)	2 0, 5 1 5	建築面積 6, 0 1 6 延面積 9, 4 7 7
飛鳥資料館地区	1 7, 0 9 3	建築面積 2, 6 5 7 延面積 4, 4 0 4

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】

土地・建物 (㎡)

建物	建築面積 2 4 4. 6 7
	延面積 2 4 4. 6 7
総室数	4室

※建物は大阪府堺市より借用。

財務諸表

目 次

1. 貸借対照表
2. 損益計算書
3. キャッシュ・フロー計算書
4. 行政サービス実施コスト計算書
5. 利益の処分に関する書類
6. 注記事項（重要な会計方針等）
7. 附属明細書

貸借対照表

平成27年3月31日現在

独立行政法人国立文化財機構

(単位:円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資産の部)		(負債の部)	
I 流動資産		I 流動負債	
現金及び預金	4,320,454,864	運営費交付金債務	316,489,209
たな卸資産	26,911,839	預り寄附金	842,632,811
立替金	28,150,076	未払金	3,328,995,523
前払費用	5,112,610	未払費用	107,762,007
未収金	1,037,575,419	前受金	699,220
その他の流動資産	6,055,058	預り金	250,088,090
流動資産合計	5,424,259,866	その他の流動負債	8,260,404
		流動負債合計	4,854,927,264
II 固定資産		II 固定負債	
1 有形固定資産		資産見返負債	
建物	86,089,082,977	資産見返運営費交付金	3,135,664,611
減価償却累計額	-28,387,576,649	資産見返寄附金	118,589,301
減損損失累計額	-294,658,061	資産見返物品受贈額	32,405,228
構築物	4,118,920,129	資産見返その他補助金	120,598,918
減価償却累計額	-2,219,929,641	建設仮勘定見返運営費交付金	11,518,500
機械・装置	703,906,587	建設仮勘定見返施設費	440,120,160
減価償却累計額	-199,420,120	資産見返負債合計	3,858,896,718
車両運搬具	60,070,427	引当金	
減価償却累計額	-44,381,408	退職給付引当金	9,292,782
工具器具備品	7,149,517,644	その他の固定負債	
減価償却累計額	-4,283,652,048	長期未払金	56,468,198
収蔵品	106,981,935,494	固定負債合計	3,924,657,698
土地	44,410,675,104	負債合計	8,779,584,962
建設仮勘定	451,638,660		
有形固定資産合計	214,536,129,095	(純資産の部)	
2 無形固定資産		I 資本金	
ソフトウェア	75,068,783	政府出資金	104,713,813,740
電話加入権	4,233,600	資本金合計	104,713,813,740
無形固定資産合計	79,302,383	II 資本剰余金	
3 投資その他の資産		資本剰余金	137,082,944,353
保証金	320,000	損益外減価償却累計額(一)	-31,238,480,035
長期前払費用	114,548	損益外減損損失累計額(一)	-298,034,861
投資その他の資産合計	434,548	資本剰余金合計	105,546,429,457
固定資産合計	214,615,866,026	III 利益剰余金	
		前中期目標期間繰越積立金	633,827,709
		積立金	141,786,007
		当期未処分利益	224,684,017
		(うち当期総利益224,684,017円)	
		利益剰余金合計	1,000,297,733
		純資産合計	211,260,540,930
資産合計	220,040,125,892	負債純資産合計	220,040,125,892

(注)運営費交付金から充当されるべき退職給付の見積額は1,934,787,826円であります。

(注)当期の運営費交付金による財源措置が手当されない賞与の見積額は206,302,378円であります。

損益計算書

(平成26年4月1日～平成27年3月31日)

独立行政法人国立文化財機構

(単位:円)

経常費用			
業務費			
人件費		3,131,865,346	
業務経費			
調査研究業務費	1,120,781,642		
情報公開業務費	138,632,851		
研修業務費	13,350,860		
国際研究協力業務費	121,724,356		
展示出版業務費	121,786,365		
展覧業務費	2,219,371,423		
教育普及業務費	77,018,731		
受託業務費	534,576,119	4,347,242,347	
減価償却費		623,606,631	8,102,714,324
一般管理費			
人件費	849,884,378		
一般管理経費	1,109,748,657		
減価償却費	89,856,945	2,049,489,980	
財務費用		1,173,919	
雑損		952,308	2,051,616,207
経常費用合計			10,154,330,531
経常収益			
運営費交付金収益		6,725,221,054	
受託収入			
政府関係・地方自治体受託収入	499,523,590		
その他受託収入	41,141,242	540,664,832	
入場料収入		1,030,664,932	
展示事業等附帯収入		454,058,085	
財産利用収入		234,656,735	
寄附金収益		154,314,060	
施設費収益		336,722,490	
その他補助金収益		133,698,015	
資産見返負債戻入			
資産見返運営費交付金戻入	619,761,073		
資産見返寄附金戻入	31,732,665		
資産見返物品受贈額戻入	5,373,500		
資産見返その他補助金戻入	25,027,120		
建仮見返施設費戻入	71,946,000	753,840,358	
財務収益			
受取利息		587,691	
その他財務収益		2,529	
雑益		12,362,246	
経常収益合計			10,376,793,027
経常利益			222,462,496
臨時損失			
固定資産売却損			231,679
固定資産除却損			2,405,073
			2,636,752
臨時利益			
資産見返運営費交付金戻入			1,941,722
資産見返寄附金戻入			409,500
資産見返物品受贈額戻入			53,851
			2,405,073
当期純利益			222,230,817
前中期目標期間繰越積立金取崩額			2,453,200
当期総利益			224,684,017

(注) ファイナンス・リース取引が損益に与える影響額は4,272,303円であり、当該損益を除いた当期総利益は220,411,714円であります。

キャッシュ・フロー計算書

(平成26年4月1日～平成27年3月31日)

独立行政法人国立文化財機構

(単位:円)

I	業務活動によるキャッシュ・フロー	
	人件費支出	-3,980,649,476
	業務支出	-5,454,162,589
	科学研究費支出	-278,424,771
	消費税等支払額	-23,576,200
	運営費交付金収入	8,238,870,000
	科学研究費収入	283,243,950
	展示事業等収入	1,546,249,359
	財産利用収入	231,805,888
	受託収入	602,633,920
	寄附金収入	789,808,101
	その他補助金による収入	20,637,999
	その他の業務収入	11,981,465
	小計	1,988,417,646
	利息の受取額	640,223
	利息の支払額	-1,350,782
	業務活動によるキャッシュ・フロー	1,987,707,087
II	投資活動によるキャッシュ・フロー	
	定期預金の預入による支出	-750,000,000
	定期預金の払戻による収入	500,000,000
	有形固定資産の取得による支出	-6,209,019,932
	無形固定資産の取得による支出	-32,392,620
	施設費による収入	3,214,325,195
	その他投資活動による収入	322,120
	投資活動によるキャッシュ・フロー	-3,276,765,237
III	財務活動によるキャッシュ・フロー	
	リース債務の支払による支出	-33,907,025
	財務活動によるキャッシュ・フロー	-33,907,025
IV	資金減少額	-1,322,965,175
V	資金期首残高	5,193,420,039
VI	資金期末残高	3,870,454,864

(注記事項)

(1)資金の期末残高の貸借対照表科目の内訳

現金及び預金勘定	4,320,454,864 円
うち定期預金(控除)	-450,000,000
資金期末残高	<u>3,870,454,864</u>

(2)重要な非資金取引

①現物寄附の受入

收藏品	522,941,541
工具器具備品	41,682,795
合計	<u>564,624,336</u>

②ファイナンス・リースによる資産取得

7,627,037

行政サービス実施コスト計算書

(平成26年4月1日～平成27年3月31日)

独立行政法人国立文化財機構

(単位:円)

I	業務費用		
	損益計算書上の費用		
	業務費	8,102,714,324	
	一般管理費	2,049,489,980	
	財務費用	1,173,919	
	雑損	952,308	
	臨時損失 (控除)	2,636,752	10,156,967,283
	受託収入	-540,664,832	
	入場料収入	-1,030,664,932	
	展示事業附帯収入	-371,252,669	
	財産利用収入	-234,656,735	
	寄附金収益	-154,314,060	
	財務収益	-590,220	
	雑益	-12,362,246	
	資産見返寄附金戻入	-32,142,165	-2,376,647,859
II	損益外減価償却相当額		3,617,415,405
III	損益外除売却差額相当額		795,365
IV	引当外賞与見積額		-674,440
V	引当外退職給付増加見積額		-97,397,798
VI	機会費用		
	国又は地方公共団体財産の無償又は 減額された使用料による貸借取引の 機会費用	135,071,734	
	政府出資等の機会費用	787,161,273	922,233,007
VII	行政サービス実施コスト		12,222,690,963

(注記)

- ・引当外退職給付増加見積額には、国からの出向職員にかかる者が10名、-443,584円が含まれております。
- ・国又は地方公共団体財産の無償又は減額された使用料による貸借取引の機会費用については、国の庁舎等の使用又は収益を許可する場合の取扱の基準(昭和33年1月7日付大蔵省管財局長通知蔵管第1号)及び堺市行政財産の目的外使用に関する条例(昭和39年5月29日付条例第36号)により計算しております。
- ・政府出資等の機会費用の計算利率については、10年もの長期国債の平成27年3月末利回りを参考に0.395%としております。

利益の処分に関する書類

独立行政法人国立文化財機構

(単位:円)

I	当期未処分利益		224,684,017
	当期総利益	224,684,017	
II	利益処分類		
	積立金	138,055,002	
	独立行政法人通則法 第44条第3項により 主務大臣の承認を受けた額		
	業務拡充積立金	<u>86,629,015</u>	<u>224,684,017</u>

注記事項

I. 重要な会計方針

1. 運営費交付金収益の計上基準

人件費のうちの役員給与、職員給与、法定福利費並びに管理部門の経費（特に指定するものを除く）及び減価償却費については、業務の実施が運営費交付金と期間的に対応しているため期間進行基準（一定の期間の経過を業務の進行とみなし、運営費交付金債務を収益化する方法）を採用しております。

人件費のうちの退職手当並びに事業部門の経費及び管理部門の経費のうち特に指定するものについては、業務達成基準（当該業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金債務を収益化する方法）を採用しております。

財務費用、その他計画外の発生費用については、費用進行基準（発生費用の額を限度として運営費交付金債務を収益化する方法）を採用しております。

2. 減価償却の会計処理方法

(1) 有形固定資産

定額法により行っております。

なお、主な資産の耐用年数は以下のとおりであります。

建物	2年～58年
構築物	2年～63年
機械・装置	2年～17年
車両・運搬具	2年～7年
工具・器具・備品	2年～20年

また、特定の償却資産（独立行政法人会計基準第87）の減価償却相当額については、損益外減価償却累計額として資本剰余金を減額しております。

(2) 無形固定資産

定額法により行っております。なお、機構内利用のソフトウェアについては、機構内における利用可能期間（5年）に基づいております。

3. 賞与に係る引当金及び見積額の計上方法

役職員の賞与については運営費交付金により財源措置がなされるため、賞与に係る引当金は計上しておりません。

また、行政サービス実施コスト計算書における引当外賞与見積額は、当事業年度の引当外賞与見積額から前事業年度の同見積額を控除した額を計上しております。

4. 退職給付に係る引当金及び見積額の計上方法

運営費交付金による財源措置のない有期雇用職員（アソシエイトフェロー）の退職給付に備えるため、当事業年度末にかかる自己都合要支給額を計上しております。

その他の役職員の退職給付については、運営費交付金により財源措置がなされるため、退職給付に係る引当金は計上しておりません。

また、行政サービス実施コスト計算書における引当外退職給付増加見積額は、自己都合退職金要支給額の当期増加額に基づき計上しております。

5. たな卸資産の評価基準及び評価方法

貯蔵品等・・・最終仕入原価法を採用しております。

6. 収蔵品の評価方法

国からの承継分については、承継時の物品目録上の価額をもって評価しており、新規取得分については取得時の価額をもって評価しております。

7. 行政サービス実施コスト計算書における機会費用の計上方法

(1) 国又は地方公共団体財産の無償又は減額された使用料による貸借取引の機会費用の計算方法

国の庁舎等の使用又は収益を許可する場合の取扱の基準（昭和33年1月7日付大蔵省管財局長通知蔵管第1号）及び堺市行政財産の目的外使用に関する条例（昭和39年5月29日付条例第36号）により計算しております。

(2) 政府出資等の機会費用の計算に使用した利率

10年利付国債の平成27年3月末利回りを参考にして0.395%で計算しております。

8. リース取引の処理方法

リース料総額が300万円以上のファイナンス・リース取引については、通常の売買取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

リース料総額が300万円未満のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

9. 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込方式によっております。

II. 固定資産の減損

該当なし

III. 重要な債務負担行為

京都国立博物館緊急屋根等漏水補修工事	168,181,920 円
奈良文化財研究所本庁舎建替工事	4,188,941,850 円
合 計	4,357,123,770 円

IV. 金融商品関係

1. 金融商品の状況に関する事項

当機構は、資金運用については短期的な預金に限定しております。また、活動資金は事業収入及び運営費交付金等によりまかなっているため、資金調達はありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

期末日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

(単位:円)

	貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1) 現金及び預金	4,320,454,864	4,320,454,864	—
(2) 未収金	1,037,575,419	1,037,575,419	—
(3) 未払金	(3,328,995,523)	(3,328,995,523)	—

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券等に関する事項

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(注2) 負債に計上されているものは、() で示しております。

V. 賃貸等不動産関係

当機構は、東京都その他の地域において、賃貸等不動産を保有しておりますが、賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略しております。

VI. 資産除去債務関係

石綿（アスベスト）関係

当機構では、石綿関連法令により使用等が規制されている石綿が、奈良文化財研究所収蔵庫3棟の天井材、東京国立博物館黒田記念館の床材に使用されております。

これらの石綿は全て封じ込め済みであり、建物の解体時に石綿の除去義務が発生しますが当該資産の具体的な解体計画はなく、今後も、現状のまま継続的に使用する予定であります。加えて計画策定には国による認可及び予算措置が必要であり機構単独の意思決定ではなし得ない状況にあるため、資産除去債務を合理的に見積ることができません。このため、貸借対照表に資産除去債務を計上しておりません。

附 属 明 细 书

第8期

自：平成26年 4月 1日

至：平成27年 3月31日

独立行政法人 国立文化財機構

第8期 附属明細書

自：平成26年 4月 1日

至：平成27年 3月31日

1. 固定資産の取得、処分、減価償却費（「第8 7 特定の償却資産の減価に係る会計処理」及び「第9 1 資産除去債務に係る特定の除去費用等の会計処理」による損益外減価償却相当額も含む。）及び減損損失累計額の明細
2. たな卸資産の明細
3. 有価証券の明細
4. 長期貸付金の明細
5. 長期借入金及び債券の明細
6. 引当金の明細
7. 退職給付引当金の明細
8. 資産除去債務の明細
9. 法令に基づく引当金等の明細
- 1 0. 保証債務の明細
- 1 1. 資本金及び資本剰余金の明細
- 1 2. 積立金の明細
- 1 3. 目的積立金の取崩しの明細
- 1 4. 運営費交付金債務及び当期振替額等の明細
- 1 5. 運営費交付金以外の国等からの財源措置の明細
- 1 6. 役員及び職員の給与の明細
- 1 7. セグメント情報
- 1 8. 主な資産、負債、費用及び収益の明細

1. 固定資産の取得、処分、減価償却費（「第87 特定の償却資産の減価に係る会計処理」及び「第91 資産除去債務に係る特定の除去費用等の会計処理」による損益外減価償却相当額も含む。）及び減損損失累計額の明細

(単位:円)

資産の種類	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	減価償却累計額		減損損失累計額			差引期末残高	摘要	
					当期償却額		当期損益内	当期損益外				
有形固定資産 (償却費損益内)	建物	2,442,274,297	53,594,195	0	2,495,868,492	1,130,437,061	155,942,848	0	0	0	1,365,431,431	
	構築物	143,201,317	6,723,000	1,575,000	148,349,317	72,740,557	11,623,355	0	0	0	75,608,760	
	機械・装置	37,328,754	0	0	37,328,754	6,596,154	2,638,606	0	0	0	30,732,600	
	車両運搬具	49,796,351	7,429,878	4,115,162	53,111,067	37,606,481	4,967,185	0	0	0	15,504,586	
	工具器具備品	4,023,644,264	597,114,933	23,899,451	4,596,859,746	2,651,700,355	497,087,561	0	0	0	1,945,159,391	
	計	6,696,244,983	664,862,006	29,589,613	7,331,517,376	3,899,080,608	672,259,555	0	0	0	3,432,436,768	
有形固定資産 (償却費損益外)	建物	81,150,569,490	2,442,947,480	302,485	83,593,214,485	27,257,139,588	3,205,459,562	294,658,061	0	0	56,041,416,836	(注)
	構築物	3,951,325,080	19,967,330	721,598	3,970,570,812	2,147,189,084	181,710,585	0	0	0	1,823,381,728	
	機械・装置	668,808,189	0	2,230,356	666,577,833	192,823,966	70,561,958	0	0	0	473,753,867	
	車両運搬具	6,959,360	0	0	6,959,360	6,774,927	139,181	0	0	0	184,433	
	工具器具備品	2,458,721,882	0	0	2,458,721,882	1,631,951,693	159,544,119	0	0	0	826,770,189	
	計	88,236,384,001	2,462,914,810	3,254,439	90,696,044,372	31,235,879,258	3,617,415,405	294,658,061	0	0	59,165,507,053	
非償却資産	工具器具備品	93,936,016	0	0	93,936,016	0	0	0	0	0	93,936,016	
	取藏品	105,099,427,953	1,882,507,541	0	106,981,935,494	0	0	0	0	0	106,981,935,494	
	土地	44,410,675,104	0	0	44,410,675,104	0	0	0	0	0	44,410,675,104	
	建設仮勘定	166,309,500	357,275,160	71,946,000	451,638,660	0	0	0	0	0	451,638,660	
	計	149,770,348,573	2,239,782,701	71,946,000	151,938,185,274	0	0	0	0	0	151,938,185,274	
有形固定資産合計	建物	83,592,843,787	2,496,541,675	302,485	86,089,082,977	28,387,576,649	3,361,402,410	294,658,061	0	0	57,406,848,267	
	構築物	4,094,526,397	26,690,330	2,296,598	4,118,920,129	2,219,929,641	193,333,940	0	0	0	1,898,990,488	
	機械・装置	706,136,943	0	2,230,356	703,906,587	199,420,120	73,200,564	0	0	0	504,486,467	
	車両運搬具	56,755,711	7,429,878	4,115,162	60,070,427	44,381,408	5,106,366	0	0	0	15,689,019	
	工具器具備品	6,576,302,162	597,114,933	23,899,451	7,149,517,644	4,283,652,048	656,631,680	0	0	0	2,865,865,596	
	取藏品	105,099,427,953	1,882,507,541	0	106,981,935,494	0	0	0	0	0	106,981,935,494	
	土地	44,410,675,104	0	0	44,410,675,104	0	0	0	0	0	44,410,675,104	
	建設仮勘定	166,309,500	357,275,160	71,946,000	451,638,660	0	0	0	0	0	451,638,660	
	計	244,702,977,557	5,367,559,517	104,790,052	249,965,747,022	35,134,959,866	4,289,674,960	294,658,061	0	0	214,536,129,095	
無形固定資産 (償却費損益内)	ソフトウェア	431,314,068	18,545,896	0	449,859,964	374,791,181	41,204,021	0	0	0	75,068,783	
	計	431,314,068	18,545,896	0	449,859,964	374,791,181	41,204,021	0	0	0	75,068,783	
無形固定資産 (償却費損益外)	ソフトウェア	2,600,777	0	0	2,600,777	2,600,777	0	0	0	0	0	
	計	2,600,777	0	0	2,600,777	2,600,777	0	0	0	0	0	
無形固定資産 (非償却)	電話加入権	7,610,400	0	0	7,610,400	0	0	3,376,800	0	0	4,233,600	
	計	7,610,400	0	0	7,610,400	0	0	3,376,800	0	0	4,233,600	
無形固定資産合計	ソフトウェア	433,914,845	18,545,896	0	452,460,741	377,391,958	41,204,021	0	0	0	75,068,783	
	電話加入権	7,610,400	0	0	7,610,400	0	0	3,376,800	0	0	4,233,600	
	計	441,525,245	18,545,896	0	460,071,141	377,391,958	41,204,021	3,376,800	0	0	79,302,383	
投資その他の資産	保証金	411,000	140,000	231,000	320,000	0	0	0	0	0	320,000	
	長期前払費用	1,653,146	114,548	1,653,146	114,548	0	0	0	0	0	114,548	
	計	2,064,146	254,548	1,884,146	434,548	0	0	0	0	0	434,548	

(注) 当期増加額のうち1,712,932,552円は東京国立博物館平成館特別展示室改修によるもの、583,335,078円は奈良国立博物館ならん像館外壁等補修ならびに展示室整備によるものであります。

2. たな卸資産の明細

(単位:円)

種 類	期首残高	当 期 増 加 額		当 期 減 少 額		期 末 残 高	摘 要
		当期購入・ 製造・振替	そ の 他	払出・振替	そ の 他		
貯蔵品等	24,900,107	19,767,819	0	17,756,087	0	26,911,839	
計	24,900,107	19,767,819	0	17,756,087	0	26,911,839	

3. 有価証券の明細

当該年度は有価証券を保有していないため、記載を省略しております。

4. 長期貸付金の明細

当該年度は長期貸付金に関して該当がないため、記載を省略しております。

5. 長期借入金及び債券の明細

当該年度は長期借入金及び債券に関して該当がないため、記載を省略しております。

6. 引当金の明細

当該年度は退職給付引当金以外の引当金を計上していないため、記載を省略しております。

7. 退職給付引当金の明細

(単位:円)

区 分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	摘 要
退職給付債務合計額	12,582,071	2,896,635	6,185,924	9,292,782	
退職一時金に係る債務	12,582,071	2,896,635	6,185,924	9,292,782	
退職給付引当金	12,582,071	2,896,635	6,185,924	9,292,782	

8. 資産除去債務の明細

当該年度は資産除去債務を計上していないため、記載を省略しております。

9. 法令に基づく引当金等の明細

当該年度は法令に基づく引当金等を計上していないため、記載を省略しております。

10. 保証債務の明細

当該年度は保証債務に関して該当がないため、記載を省略しております。

11. 資本金及び資本剰余金の明細

(単位:円)

区 分		期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	摘 要
資本金	政府出資金	104,713,813,740	0	0	104,713,813,740	
	計	104,713,813,740	0	0	104,713,813,740	
資本剰余金	施設費補助金	32,253,542,235	2,462,914,810	0	34,716,457,045	施設費による特定資産取得
	目的積立金	469,592,463	0	0	469,592,463	
	運営費交付金	14,540,072,811	1,359,566,000	0	15,899,638,811	運営費交付金による収蔵品購入
	寄附金等	202,357,850	0	0	202,357,850	
	贈与	86,960,158,429	522,941,541	0	87,483,099,970	寄贈品の受け入れ
	収蔵品編入	4,497,601	0	0	4,497,601	
	損益外固定資産 除売却差額	-1,689,650,148	-3,254,439	-205,200	-1,692,699,387	出資財産の除却 施設費により取得した特定資産の除却
	計	132,740,571,241	4,342,167,912	-205,200	137,082,944,353	
	損益外減価償却 累計額	-27,623,318,504	-3,617,415,405	-2,253,874	-31,238,480,035	出資財産の減価償却相当
	損益外減損損失 累計額	-298,034,861	0	0	-298,034,861	
差引計	104,819,217,876	724,752,507	-2,459,074	105,546,429,457		

12. 積立金の明細

(単位:円)

区 分	期 首 残 高	当 期 増 加 額	当 期 減 少 額	期 末 残 高	摘 要
通則法44条1項積立金	111,098,021	30,687,986	0	141,786,007	
前中期目標期間繰越積立金	636,280,909	0	2,453,200	633,827,709	

(注記)

1 通則法44条1項積立金の当期増加額は、平成25年度利益処分によるものです。

2 前中期目標期間繰越積立金の当期減少額の内訳は次のとおりです。

受託研究費及び使途不特定寄附金購入資産に係る減価償却相当分取崩額 2,453,200 円

13. 目的積立金の取崩しの明細

(単位:円)

区 分		金 額	摘 要
目的積立金取崩額	前中期目標期間繰越積立金取崩額	2,453,200	受託研究費及び使途不特定寄附金取得資産減価償却分
計		2,453,200	

14. 運営費交付金債務及び当期振替額等の明細

(1) 運営費交付金債務の増減の明細

(単位:円)

交付年度	期首残高	交付金当期交付額	当期振替額					期末残高
			運営費交付金収益	資産見返運営費交付金	建設仮勘定見返運営費交付金	資本剰余金	小計	
平成23年度	3,134,260	0	1,567,130	0	0	0	1,567,130	1,567,130
平成24年度	34,903,400	0	10,112,560	0	0	0	10,112,560	24,790,840
平成25年度	677,642,117	0	229,892,092	262,054,363	0	143,271,900	635,218,355	42,423,762
平成26年度	0	8,238,870,000	6,483,649,272	291,219,151	0	1,216,294,100	7,991,162,523	247,707,477
合計	715,679,777	8,238,870,000	6,725,221,054	553,273,514	0	1,359,566,000	8,638,060,568	316,489,209

(2) 運営費交付金債務の当期振替額の明細

①平成23年度交付分

(単位:円)

区分	金額	内容
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	1,567,130
	資産見返運営費交付金	0
	建設仮勘定見返運営費交付金	0
	資本剰余金	0
	計	1,567,130
		①業務達成基準を採用した経費:人件費のうちの退職手当及び事業部門の経費並びに管理部門の経費のうち特に指定するもの ②当該業務に係る損益等 ア)損益計算書に計上した費用の額:1,567,130円 (一般管理費 1,567,130円) イ)自己収入に係る収益計上額:該当なし ウ)固定資産の取得額:該当なし ③運営費交付金収益化の積算根拠 業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金の計画額を収益化

②平成24年度交付分

(単位:円)

区分	金額	内容
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	10,112,560
	資産見返運営費交付金	0
	建設仮勘定見返運営費交付金	0
	資本剰余金	0
	計	10,112,560
		①業務達成基準を採用した経費:人件費のうちの退職手当及び事業部門の経費並びに管理部門の経費のうち特に指定するもの ②当該業務に係る損益等 ア)損益計算書に計上した費用の額:10,112,560円 (退職手当 9,112,560円、調査研究事業費 1,000,000円) イ)自己収入に係る収益計上額:該当なし ウ)固定資産の取得額:該当なし ③運営費交付金収益化の積算根拠 業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金の計画額を収益化

③平成25年度交付分

(単位:円)

区 分		金 額	内 容
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	229,892,092	①業務達成基準を採用した経費:人件費のうちの退職手当及び事業部門の経費並びに 管理部門の経費のうち特に指定するもの ②当該業務に係る損益等 ア)損益計算書に計上した費用の額:229,892,092円 (退職手当 28,053,675円、調査研究事業費 29,247,969円、展覧事業費 172,590,448円) イ)自己収入に係る収益計上額:該当なし ウ)固定資産の取得額:405,326,263円 (陳列品購入費 143,271,900円、調査研究事業費 199,911,895円、展覧事業費 62,142,468円) ③運営費交付金収益化の積算根拠 業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金の計画額を収益化
	資産見返運営費交付金	262,054,363	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	143,271,900	
	計	635,218,355	

④平成26年度交付分

(単位:円)

区 分		金 額	内 訳
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	2,877,493,156	①業務達成基準を採用した経費:人件費のうちの退職手当及び事業部門の経費並びに 管理部門の経費のうち特に指定するもの ②当該業務に係る損益等 ア)損益計算書に計上した費用の額:2,877,493,156円 (退職手当 138,005,750円、調査研究事業費 1,052,127,410円、 情報公開事業費 203,040,055円、研修事業費 13,682,655円、 国際研究協力事業費 174,989,311円、展示出版事業費 153,044,202円、 展覧事業費 1,125,334,405円、教育普及事業費 17,269,368円) イ)自己収入に係る収益計上額:該当なし ウ)固定資産の取得額:1,464,726,122円 (陳列品購入費 1,216,294,100円、調査研究事業費 189,894,464円、 情報公開事業費 12,196,389円、研修事業費 827,225円、国際研究協力事業費 631,800円、 展示出版事業費 15,790,680円、展覧事業費 29,091,464円) ③運営費交付金収益化の積算根拠 業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金の計画額を収益化
	資産見返運営費交付金	248,432,022	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	1,216,294,100	
	計	4,342,219,278	
期間進行基準による振替額	運営費交付金収益	3,606,156,116	①期間進行基準を採用した経費:人件費のうちの役員給与、職員給与、法定福利費、 管理部門の経費(特に指定するものを除く)及び減価償却費 ②当該業務に係る損益等 ア)損益計算書に計上した費用の額:3,606,156,116円 (役員給与 2,634,406,921円、法定福利費 330,328,605円、一般管理費 641,420,590円) イ)自己収入に係る収益計上額:該当なし ウ)固定資産の取得額:42,787,129円(一般管理費) ③運営費交付金収益化額の積算根拠 期間が経過したので、財源と予定されていた運営費交付金の計画額を収益化
	資産見返運営費交付金	42,787,129	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	0	
	計	3,648,943,245	
合 計	7,991,162,523		

(3) 運営費交付金債務残高の明細

(単位:円)

交付年度	運営費交付金債務残高		残高の発生理由及び収益化等の計画
平成23年度	費用進行基準を採用した業務に係る分	0	
	業務達成基準を採用した業務に係る分	1,567,130	業務未達成等による運営費交付金債務の繰越による運営費交付金債務の残高。業務の達成に応じて、当該事業達成年度に収益化予定。
	期間進行基準を採用した業務に係る分	0	
	計	1,567,130	
平成24年度	費用進行基準を採用した業務に係る分	0	
	業務達成基準を採用した業務に係る分	24,790,840	業務未達成等による運営費交付金債務の繰越による運営費交付金債務の残高。業務の達成に応じて、当該事業達成年度に収益化予定。
	期間進行基準を採用した業務に係る分	0	
	計	24,790,840	
平成25年度	費用進行基準を採用した業務に係る分	0	
	業務達成基準を採用した業務に係る分	42,423,762	業務未達成等による運営費交付金債務の繰越による運営費交付金債務の残高。業務の達成に応じて、当該事業達成年度に収益化予定。
	期間進行基準を採用した業務に係る分	0	
	計	42,423,762	
平成26年度	費用進行基準を採用した業務に係る分	0	
	業務達成基準を採用した業務に係る分	247,707,477	業務未達成等による運営費交付金債務の繰越による運営費交付金債務の残高。業務の達成に応じて、当該事業達成年度に収益化予定。
	期間進行基準を採用した業務に係る分	0	
	計	247,707,477	

15. 運営費交付金以外の国等からの財源措置の明細

15-1 施設費の明細

(単位:円)

区 分	当期交付額	左の会計処理内訳			摘要
		建設仮勘定 見返施設費	資本剰余金	その他	
東京国立博物館 平成館特別展示室等改修工事	1,819,155,872	0	1,717,421,254	101,734,618	
京都国立博物館 緊急屋根等漏水補修工事	177,519,252	77,798,880	0	99,720,372	
奈良国立博物館 なら仏像館免震展示ケース等 整備工事	437,549,089	0	420,504,222	17,044,867	
奈良国立博物館 なら仏像館外壁等補修工事	166,849,200	0	162,830,856	4,018,344	
奈良文化財研究所 本庁舎建替工事	555,839,047	279,476,280	162,158,478	114,204,289	
計	3,156,912,460	357,275,160	2,462,914,810	336,722,490	

(注)その他の内訳は、施設費収益:336,722,490円です。

15-2 補助金等の明細

(単位:円)

区 分	当期交付額	左の会計処理内訳			摘要
		建設仮勘定 見返補助金	資産見返 補助金	収益計上	
国立文化財機構 文化芸術振興費補助金	184,653,160	0	79,604,912	105,048,248	
東京国立博物館 文化芸術振興費補助金	12,770,186	0	0	12,770,186	
京都国立博物館 文化芸術振興費補助金	7,579,581	0	0	7,579,581	
アジア太平洋無形文化 遺産研究センター 政府開発援助ユネスコ活動費補助金	8,300,000	0	0	8,300,000	
計	213,302,927	0	79,604,912	133,698,015	

(注)収益計上の内訳は、その他補助金収益:133,698,015円です。

16. 役員及び職員の給与の明細

(単位:千円, 人)

区 分	報 酬 又 は 給 与		退 職 手 当	
	支 給 額	支 給 人 員	支 給 額	支 給 人 員
役 員	(3,600) 48,440	(3) 3	(0) 0	(0) 0
職 員	(742,370) 2,562,001	(449) 329	(8,223) 170,604	(19) 12
合 計	(745,970) 2,610,441	(452) 332	(8,223) 170,604	(19) 12

- (1) 支給人員数は、報酬又は給与については平成26年4月～平成27年3月の平均支給人員数を記載しております。
また、退職手当については総支給人員数を記載しております。
- (2) 役員報酬基準の概要
 理事長 984,000円 (報酬月額)
 理事2名 834,000円 (報酬月額)
 その他諸手当については、独立行政法人国立文化財機構役員報酬規程に基づき支給しております。
 非常勤役員の報酬は、理事 80,000円、監事 120,000円を月額として支給しております。
- (3) 役員退職手当基準の概要
 役員の退職手当は、独立行政法人国立文化財機構役員退職手当規程に基づき支給しております。
- (4) 職員給与基準の概要
 職員の給与は、基本給及び諸手当としております。
 基本給は、一般職の職員の給与に関する法律(昭和25年法律第95号)及び人事院規則を準用し、独立行政法人国立文化財機構職員給与規程等に基づき支給しております。
- (5) 職員退職手当基準の概要
 職員の退職手当は、国家公務員退職手当法を準用し、独立行政法人国立文化財機構職員退職手当規程に基づき支給しております。
- (6) 非常勤の役員及び職員に係るものは、上段括弧書外数で記載しております。
- (7) 上記の金額には、法定福利費は含まれておりません。
- (8) 中期計画における予算上の人件費には、非常勤の役員・職員に係る給与は含まれておりません。

17. セグメント情報 (平成26年4月1日～平成27年3月31日)

独立行政法人 国立文化財機構

I 事業費用、事業収益及び事業損益

(単位: 円)

区分	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	計	法人共通	合計
事業費用										
業務費	2,194,508,653	1,048,584,396	835,332,243	1,305,911,300	996,581,430	1,597,674,791	78,422,536	8,057,015,349	45,698,975	8,102,714,324
人件費	953,892,921	318,246,387	270,120,086	315,057,624	461,920,761	797,046,325	15,581,242	3,131,865,346	0	3,131,865,346
業務経費	1,135,045,628	545,350,624	519,182,404	824,252,338	480,408,538	734,635,859	62,667,981	4,301,543,372	45,698,975	4,347,242,347
調査研究業務費	255,315,323	134,133,281	60,674,768	247,601,051	101,747,640	264,330,616	11,279,988	1,075,082,667	45,698,975	1,120,781,642
情報公開業務費	0	0	0	0	44,185,469	94,447,382	0	138,632,851	0	138,632,851
研修業務費	0	0	0	0	4,200,846	9,150,014	0	13,350,860	0	13,350,860
国際研究協力業務費	0	0	0	0	95,748,510	25,975,846	0	121,724,356	0	121,724,356
展示出版業務費	0	0	0	0	8,768,492	113,017,873	0	121,786,365	0	121,786,365
展覧業務費	813,605,669	395,258,711	449,306,752	561,200,291	0	0	0	2,219,371,423	0	2,219,371,423
教育普及業務費	50,904,636	15,958,632	9,200,884	954,579	0	0	0	77,018,731	0	77,018,731
受託業務費	15,220,000	0	0	14,496,417	225,757,581	227,714,128	51,387,993	534,576,119	0	534,576,119
減価償却費	105,570,104	184,987,385	46,029,753	166,601,338	54,252,131	65,992,607	173,313	623,606,631	0	623,606,631
一般管理費	535,225,739	386,682,507	165,755,362	129,236,794	213,427,656	349,900,983	11,726,893	1,791,955,934	257,534,046	2,049,489,980
人件費	183,536,833	88,089,954	87,418,830	55,986,461	131,045,699	121,326,338	6,432,517	673,836,632	176,047,746	849,884,378
一般管理経費	317,716,224	289,768,851	60,936,726	54,463,415	81,293,613	225,487,313	5,185,380	1,034,851,522	74,897,135	1,109,748,657
減価償却費	33,972,682	8,823,702	17,399,806	18,786,918	1,088,344	3,087,332	108,996	83,267,780	6,589,165	89,856,945
財務費用	0	0	0	199,680	249,313	724,926	0	1,173,919	0	1,173,919
雑損	622,025	0	0	208,635	2,638	119,010	0	952,308	0	952,308
事業費用計	2,730,356,417	1,435,266,903	1,001,087,605	1,435,556,409	1,210,261,037	1,948,419,710	90,149,429	9,851,097,510	303,233,021	10,154,330,531
事業収益										
運営費交付金収益	1,534,084,813	802,583,714	514,664,000	1,135,310,061	909,487,835	1,467,754,202	29,433,002	6,393,317,627	331,903,427	6,725,221,054
受託収入	15,220,000	0	0	14,496,417	225,762,711	233,797,711	51,387,993	540,664,832	0	540,664,832
入場料収入	531,481,636	152,807,735	238,881,550	104,274,641	0	3,219,370	0	1,030,664,932	0	1,030,664,932
展示事業等附帯収入	212,173,540	96,550,445	65,656,390	23,243,886	15,463,251	40,132,663	30,000	453,250,175	807,910	454,058,085
財産利用収入	167,056,251	30,461,265	24,377,227	3,973,579	3,012,195	5,776,218	0	234,656,735	0	234,656,735
寄附金収益	29,241,653	40,196,031	71,207,544	0	3,452,674	10,070,217	0	154,168,119	145,941	154,314,060
施設費収益	101,734,618	99,720,372	21,063,211	0	0	114,204,289	0	336,722,490	0	336,722,490
その他補助金収益	23,662,939	15,274,899	1,261,162	1,412,664	10,159,362	11,151,849	9,157,864	72,080,739	61,617,276	133,698,015
資産見返負債戻入	139,542,786	265,747,052	63,429,559	168,106,988	46,901,544	63,240,955	282,309	747,251,193	6,589,165	753,840,358
財務収益	251,928	48,893	3	0	2,523	471	0	303,818	286,402	590,220
雑益	536,068	3,678,345	89,243	218,589	2,371,176	4,074,229	1,385,976	12,353,626	8,620	12,362,246
事業収益計	2,754,986,232	1,507,068,751	1,000,629,889	1,451,036,825	1,216,613,271	1,953,422,174	91,677,144	9,975,434,286	401,358,741	10,376,793,027
事業損益	24,629,815	71,801,848	-457,716	15,480,416	6,352,234	5,002,464	1,527,715	124,336,776	98,125,720	222,462,496

II 総資産

(単位: 円)

区分	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	計	法人共通	合計
流動資産	1,813,955,761	271,883,510	723,292,760	513,638,938	304,492,328	351,441,234	76,504,523	4,055,209,054	1,369,050,812	5,424,259,866
固定資産	91,771,518,337	54,112,810,232	30,883,840,290	26,146,183,688	5,911,114,151	5,740,967,449	1,472,695	214,567,906,842	47,959,184	214,615,866,026
建物	17,048,794,224	18,737,827,473	6,193,596,012	9,270,594,543	2,947,939,951	3,174,547,285	0	57,373,299,488	33,548,779	57,406,848,267
収蔵品	46,596,077,886	24,223,136,545	20,276,504,284	15,779,242,212	0	106,974,567	0	106,981,935,494	0	106,981,935,494
土地	26,832,788,000	9,071,896,900	3,875,010,204	458,980,000	2,650,000,000	1,522,000,000	0	44,410,675,104	0	44,410,675,104
その他の固定資産	1,293,858,227	2,079,949,314	538,729,790	637,366,933	313,174,200	937,445,597	1,472,695	5,801,996,756	14,410,405	5,816,407,161
総資産	93,585,474,098	54,384,693,742	31,607,133,050	26,659,822,626	6,215,606,479	6,092,408,683	77,977,218	218,623,115,896	1,417,009,996	220,040,125,892

(注)

1. 事業の種類別の区分方法及び事業の内容

- (1) 東京国立博物館
我が国を代表する博物館として、日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる文化財について収集・保管・展示、調査研究、教育普及事業等を行っております。
- (2) 京都国立博物館
平安時代から江戸時代に至る京都文化を中心とした文化財について、収集・保管・展示、調査研究、教育普及事業等を行っております。
- (3) 奈良国立博物館
仏教美術を中心とした文化財について、収集・保管・展示、調査研究、教育普及事業等を行っております。
- (4) 九州国立博物館
日本とアジア諸国との文化交流を中心とした文化財について、収集・保管・展示、調査研究、教育普及事業等を行っております。
なお、事業の実施に当たっては、福岡県等と連携協力を行っております。
- (5) 東京文化財研究所
美術、伝統芸能並びに文化財の保存・修復に関する調査・研究等を行っております。
- (6) 奈良文化財研究所
遺跡、建造物、庭園等の不動産的文化財に関する調査・研究等を行っております。
- (7) アジア太平洋無形文化遺産研究センター
アジア太平洋地域の無形文化遺産について調査・研究を行っております。

2. 事業費用のうち共通の項目に含めた配賦不能金額は303,233,021円であり、全て本部事務局に係る費用であります。

3. 事業収益のうち国又は地方公共団体による財源措置等は、運営費交付金収益、施設費収益、その他補助金収益であります。
なお、事業収益のうち共通の項目に含めた配賦不能金額は401,358,741円であり、すべて本部事務局に係る収益であります。

4. 総資産のうち共通の項目に含めた金額は1,417,009,996円であり、全て本部事務局に係る資産であります。

5. 各セグメントにおける目的積立金の取り崩しを財源とする費用は以下の通りです。

(単位: 円)

区 分	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	計	法人共通	合計
目的積立金取崩額(費用)	0	40,140	0	0	20,371	2,392,689	0	2,453,200	0	2,453,200

6. 各セグメントにおける損益外減価償却相当額、損益外除売却差額相当額、引当外賞与増加見積額及び引当外退職給付増加見積額は以下の通りです。

(単位: 円)

区 分	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	計	法人共通	合計
損益外減価償却相当額	1,122,494,299	951,968,699	502,146,150	533,280,400	238,632,732	265,372,861	0	3,613,895,141	3,520,264	3,617,415,405
損益外除売却差額相当額	7,786	0	0	0	0	787,579	0	795,365	0	795,365
引当外賞与増加見積額	-3,086,820	-170,452	105,298	-1,239,233	2,821,442	-249,720	136,880	-1,682,605	1,008,165	-674,440
引当外退職給付増加見積額	-61,552,373	-15,570,639	1,989,406	-24,987,070	-10,447,381	10,333,869	404,818	-99,829,370	2,431,572	-97,397,798

18. 主な資産、負債、費用及び収益の明細

18-1 未払金の明細

(単位:円)

取 引 先	未 払 金 の 内 訳	金 額
株式会社大林組	東京国立博物館平成館特別展示室等改修工事 他	720,685,836
日本電設工業株式会社	東京国立博物館平成館特別展示室等改修電気設備工事 他	352,101,600
株式会社奥村組 関西支店	奈良国立博物館なら仏像館展示室整備工事 他	243,507,600
中林建設(株)	奈良文化財研究所第一・二収蔵庫等改修その他工事	123,552,000
(株)三冷社	平成館特別展示室等改修機械設備工事他	111,474,900
金剛(株)	東京国立博物館平成館独立展示ケース製作設置取付作業	102,322,440
株式会社尾田組	奈良国立博物館なら仏像館保存修理工事他	79,366,500
金剛(株) 大阪支店	京都国立博物館文化財用収蔵棚の製造他	78,082,920
株式会社 鈴木組	京都国立博物館文化財保存修理所改修工事 他	47,644,200
(株)カギオカ	奈良文化財研究所積層式収蔵棚(資材保管加工棟) 他	46,187,280
その他		1,424,070,247
合 計		3,328,995,523

18-2 資産見返運営費交付金の明細

(単位:円)

区 分	金 額
建物	1,292,028,876
構築物	43,515,165
機械・装置	30,718,816
車両運搬具	14,603,795
工具器具備品	1,684,875,874
ソフトウェア	69,742,085
差入敷金・保証金	180,000
合 計	3,135,664,611

平成26年度 決算報告書

(単位:円)

区 分	予算額	決算額	差 額	備 考
収 入				
運営費交付金	8,238,870,000	8,238,870,000	0	
施設整備費補助金	2,990,365,000	3,156,912,460	166,547,460	(注記)1
文化芸術振興費補助金	0	205,002,927	205,002,927	(注記)2
政府開発援助ユネスコ活動費	0	8,300,000	8,300,000	(注記)3
展示事業等収入	1,322,634,000	1,730,217,726	407,583,726	(注記)4
受託収入	26,000,000	540,664,832	514,664,832	(注記)5
その他寄附金等	0	789,808,101	789,808,101	(注記)6
計	12,577,869,000	14,669,776,046	2,091,907,046	
支 出				
運営事業費	9,561,504,000	10,287,856,862	726,352,862	
管理経費	1,696,346,000	1,582,160,958	-114,185,042	
人件費	688,307,000	749,926,177	61,619,177	(注記)7
一般管理費	1,008,039,000	832,234,781	-175,804,219	(注記)8
業務経費	7,865,158,000	8,705,695,904	840,537,904	
人件費	2,412,299,000	2,386,614,960	-25,684,040	
調査研究事業費	1,308,592,000	1,771,719,310	463,127,310	(注記)9
情報公開事業費	180,930,000	211,140,426	30,210,426	(注記)10
研修事業費	20,472,000	14,178,085	-6,293,915	(注記)11
国際研究協力事業費	213,739,000	175,014,734	-38,724,266	(注記)12
展示出版事業費	159,696,000	156,550,996	-3,145,004	
展覧事業費	3,493,532,000	3,891,240,094	397,708,094	(注記)13
教育普及事業費	75,898,000	99,237,299	23,339,299	(注記)14
施設整備費	2,990,365,000	3,156,912,460	166,547,460	(注記)1
文化芸術振興費	0	205,002,927	205,002,927	(注記)2
政府開発援助ユネスコ活動費	0	8,300,000	8,300,000	(注記)3
受託事業費	26,000,000	539,414,888	513,414,888	(注記)5
計	12,577,869,000	14,197,487,137	1,619,618,137	

(注記)

- 平成25年度予算の平成26年度への繰越及び平成26年度予算の平成27年度への繰越の差額によるものであります。
- 文化庁による美術館・歴史博物館重点分野推進支援事業及び地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業によるものであります。
- 文部科学省による消滅の危機に瀕したアジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究事業によるものであります。
- 展示事業等収入の差額は、入場者数が大幅に増加したことによるものであります。
- 受託収入及び受託事業費について、予算額と決算額の差異が多額になったのは、当初の受入見込みになかった受託発掘調査、受託調査研究の契約があったためであります。
- 文化財保存活用基金及び賛助会等の寄附金によるものであります。
- 管理人件費の差額は、当初退職を見込んでいなかった職員の退職手当の支給及び前年度からの繰越退職手当の支給によるものであります。
- 一般管理費の差額は、消費税支払額が予定よりも大幅に減少したことによるものであります。
- 調査研究事業費の差額は、寄附金財源の文化財保存や修理事業の増加及び前年度からの繰越による大型機器の整備費によるものであります。
- 情報公開事業費の差額は、当事業に従事する有期雇用職員の大幅な増加によるものであります。
- 研修事業費の差額は、予算作成時は予備費として見込んでいた費用を他の事業費に振替えたことによるものであります。
- 国際研究協力事業費の差額は、国際情勢により研究の一部を延期したことによるものであります。
- 展覧事業費の差額は、前年度からの繰越等による京都国立博物館の展示制作費等及び入場者数の大幅増に伴う業務委託費等の増加によるものであります。
- 教育普及事業費の差額は、当事業に係るアプリケーションの制作費及び有期雇用職員の増加によるものであります。

損益計算書の計上金額と決算金額の集計区分の相違の概要

- 博物館収蔵品の取得支出1,356,326,000円は展覧事業費に、研究所収蔵品の取得支出3,240,000円は調査研究事業費に、決算報告書上、表示されております。
- 有期雇用職員に係る人件費は損益計算書上、人件費として計上されておりますが、決算報告書上、各事業経費に表示されております。

一般管理費	99,958,201円
調査研究事業費	360,527,465円
情報公開事業費	59,407,737円
国際研究協力費	52,589,303円
展示出版事業費	19,317,743円
展覧事業費	212,598,134円
教育普及事業費	29,698,535円

- 損益計算書に計上されている一般管理費人件費のうち3,812,841円、一般管理経費のうち322,283,544円、調査研究事業費のうち1,020,220円、展覧事業費のうち9,605,885円は決算報告書上、施設整備費に計上されております。
- 損益計算書に計上されている一般管理経費のうち22,160,226円、調査研究事業費のうち84,546,739円、教育普及事業費のうち7,579,581円は決算報告書上、文化芸術振興費に計上されております。
- 損益計算書に計上されている調査研究事業費のうち8,300,000円は決算報告書上、政府開発援助ユネスコ活動費に計上されております。

目 次

1. 国民の皆様へ

2. 法人の基本情報

- (1) 目的、業務内容、沿革、設立に係る根拠法、主務大臣、組織図その他法人の概要
- (2) 事務所の所在地
- (3) 資本金の状況
- (4) 役員の状況
- (5) 常勤職員の状況

3. 財務諸表の要約

- (1) 要約した財務諸表
 - ① 貸借対照表
 - ② 損益計算書
 - ③ キャッシュ・フロー計算書
 - ④ 行政サービス実施コスト計算書
- (2) 財務諸表の科目

4. 財務情報

- (1) 財務諸表の概要
 - ① 資産、負債、経常費用、経常収益、当期総損益、キャッシュ・フローなどの主要な財務データの経年比較・分析
 - ② セグメント総資産の経年比較・分析
 - ③ セグメント事業損益の経年比較・分析
 - ④ 積立金の申請、取崩内容等
 - ⑤ 行政サービス実施コスト計算書の経年比較・分析
- (2) 重要な施設等の整備等の状況
 - ① 当事業年度中に完成した主要施設等
 - ② 当事業年度において継続中の施設等の新設・拡充
 - ③ 当該事業年度中に処分した主要施設等
- (3) 予算及び決算の概要
- (4) 経費削減及び効率化に関する目標及びその達成状況
 - ① 経費削減及び効率化目標
 - ② 経費削減及び効率化目標の達成度合いを測る財務諸表等の科目（費用等）の経年比較

5. 事業の説明

- (1) 財源の内訳
 - ① 内訳（補助金、運営費交付金、借入金、債券発行等）
 - ② 自己収入の明細（自己収入の概要、収入先等）
- (2) 財務情報及び業務の実績の説明

独立行政法人国立文化財機構 平成 26 年度事業報告書

1. 国民の皆様へ

私ども独立行政法人国立文化財機構（以下「機構」といいます。）は、平成 19 年 4 月に独立行政法人国立博物館と独立行政法人文化財研究所が統合されて設立されました。国の文化財保護行政を総合的に支え、社会の要請に機動的・効果的に対応することを目的とし、歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点として、収蔵品の整備と次代への継承、文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信及び文化財に関する調査・研究の推進等を任務としております。

平成 26 年度は、前年度に低調であった入場者数が回復し、389 万人という多くのお客様をお迎えすることができました。「台北 国立故宮博物院一神品至宝」展（東京国立博物館・九州国立博物館計 65 万人）、「国宝 鳥獣戯画と高山寺」展（京都国立博物館 20 万人）、「日本国宝展」（東京国立博物館 38 万人）、「第 66 回正倉院展」（奈良国立博物館 26 万人）など特別展が盛況だったことに加え、東京国立博物館総合文化展が 58 万人と独立行政法人化後初めて 50 万人を超える入場者数を記録し、京都国立博物館でも平成知新館開館後の半年間で 26 万人という記録的な入場者数となりました。

施設整備の面では、9 月に京都国立博物館の平成知新館をリニューアルオープンした外、年度末には東京国立博物館の平成館特別展示室等改修工事、奈良国立博物館のなら仏像館外壁等補修工事を計画通りしゅん工することができました。

収蔵品についても、国から特別の予算措置をいただくなど、着実に取得を進めることができました。

また、東日本大震災以降、機構を挙げて取り組んで参りました文化財レスキュー事業について、国からの予算措置を受け、文化財防災ネットワーク推進事業として継続的に実施する体制を整えました。

今後は継続中の奈良文化財研究所本庁舎建替工事の外、老朽化の著しい建物や設備の整備を計画的に進めるとともに、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、国内外の皆様には日本の文化財の魅力を発信できる環境の整備を進めて参ります。

私ども機構は、国の文化財行政の土台をしっかりと支えていくという大きな使命の下、引き続き、文化財の保存と活用、またそのための基礎研究と最先端の研究という四つの大きな柱を機能させ、更なる活性化を推進して参ります。

私どもの事業実施に、引き続き皆様の温かいご支援ご協力をお願い申し上げます。

2. 法人の基本情報

(1) 目的、業務内容、沿革、設立に係る根拠法、主務大臣、組織図その他法人の概要

① 法人の目的

独立行政法人国立文化財機構は、博物館を設置して有形文化財（文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）第二条第一項第一号に規定する有形文化財をいう。以下同じ。）を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、文化財（同項に規定する文化財をいう。以下に同じ。）に関する調査及び研究等を行うことにより、貴重な国民的財産である文化財の保存及び活用を図ることを目的としております。（独立行政法人国立文化財機構法第三条）

② 業務内容

当機構は、独立行政法人国立文化財機構法第三条の目的を達成するため以下の業務を行います。

- 1) 博物館を設置すること。
- 2) 有形文化財を収集し、保管して公衆の観覧に供すること。
- 3) 前号の業務に関連する講演会の開催、出版物の刊行その他の教育及び普及の事業を行うこと。
- 4) 第一号の博物館を文化財の保存又は活用を目的とする事業の利用に供すること。
- 5) 文化財に関する調査及び研究を行うこと。
- 6) 前号に掲げる業務に係る成果を普及し、及びその活用を促進すること。
- 7) 文化財に関する情報及び資料を収集し、整理し、及び提供すること。
- 8) 第二号、第三号及び前三号の業務に関し、地方公共団体並びに博物館、文化財に関する調査及び研究を行う研究所その他これらに類する施設（次号において「地方公共団体等」という。）の職員に対する研修を行うこと。
- 9) 第二号、第三号及び第五号から第七号までの業務に関し、地方公共団体等の求めに応じて援助及び助言を行うこと。
- 10) 前各号の業務に附帯する業務を行うこと。

③ 沿革

平成 19 年 4 月 独立行政法人国立博物館と独立行政法人文化財研究所が統合し、
独立行政法人国立文化財機構として設立

平成 23 年 10 月 アジア太平洋無形文化遺産研究センターを設置

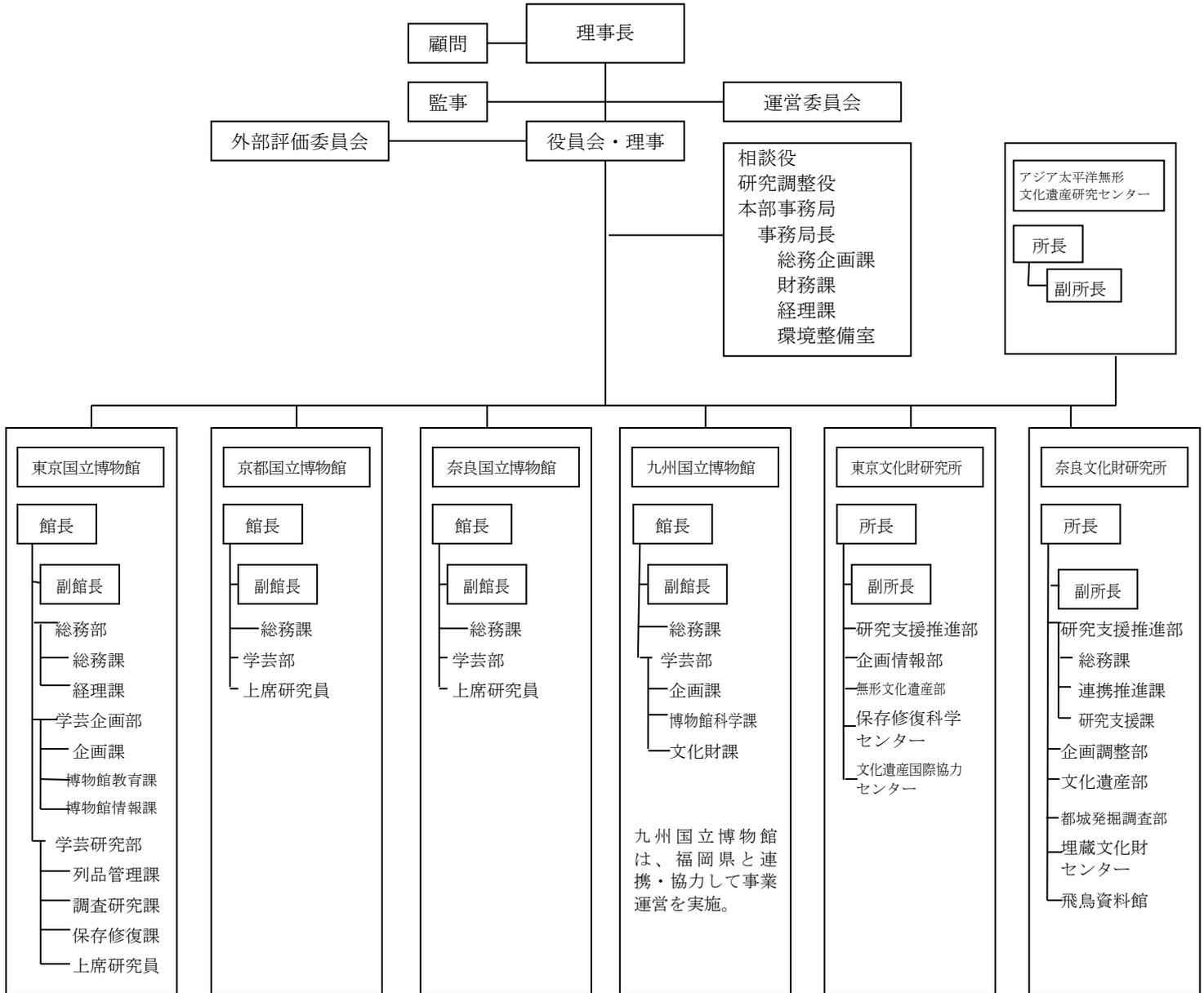
④ 設立根拠法

独立行政法人国立文化財機構法（平成 11 年法律第 178 号）

⑤ 主務大臣（主務省所管課等）

文部科学大臣（文化庁長官官房政策課）

⑥ 組織図（平成 27 年 3 月 31 日現在）



⑦ その他法人の概要

機構は、ともに文化財の保存及び活用という同一の目的を有する独立行政法人国立博物館と独立行政法人文化財研究所の二つの法人の統合により、平成 19 年 4 月に発足いたしました。

統一的なマネジメントの下で、貴重な国民的財産である文化財の保存・活用を一層効果的かつ効率的に推進するため、各施設はそれぞれ次のような役割を果たしています。

1) 東京国立博物館

我が国の人文系の総合的な博物館として、日本を中心として広くアジア諸地域にわたる文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

2) 京都国立博物館

京都に都が置かれた平安時代から江戸時代の京都文化を中心とした文化

財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

3) 奈良国立博物館

仏教美術及び奈良を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

4) 九州国立博物館

日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

5) 東京文化財研究所

我が国の文化財の研究を、基礎的なものから先端的・実践的なものまで多様な手法により行い、成果を積極的に公表・活用するとともに、世界の文化財保護に関する国際的な研究交流等を実施する国際協力の拠点としての役割を担っています。

6) 奈良文化財研究所

平城宮跡に隣接し、遺跡・建造物・庭園等の土地に結びついた文化財及び南都諸大寺及び近畿周辺を中心とした古社寺等における文化財の保存・活用を図るために発掘・調査・研究を行うとともに、全国各地の発掘調査等に対する協力・助言等を行っています。

7) アジア太平洋無形文化遺産研究センター

アジア太平洋地域における危機に瀕した無形文化遺産保護のための調査活動や、無形文化遺産保護の国際的動向に関する情報収集と配信を行っています。

(2) 事務所の所在地

本部：東京都台東区上野公園 13-9

支部：東京都台東区上野公園 13-9（東京国立博物館）

東京都台東区上野公園 13-43（東京文化財研究所）

京都府京都市東山区茶屋町 527（京都国立博物館）

奈良県奈良市登大路町 50（奈良国立博物館）

奈良県奈良佐紀町 247-1（奈良文化財研究所）

福岡県太宰府市石坂 4-7-2（九州国立博物館）

大阪府堺市堺区百舌鳥夕雲町 2 丁 堺市博物館内

（アジア太平洋無形文化遺産研究センター）

(3) 資本金の状況

（単位：百万円）

区分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
政府出資金	104,714	0	0	104,714
資本金合計	104,714	0	0	104,714

(4) 役員 の 状 況

役 職	氏 名	任 期	担 当	経 歴
理事長 (常勤)	佐々木丞平	自 平成 19 年 4 月 1 日 至 平成 29 年 3 月 31 日		昭和 45 年 4 月 京都府教育委員会 昭和 47 年 4 月 文化庁入庁 昭和 56 年 4 月 京都大学 平成 3 年 3 月 京都大学文学部教授 平成 12 年 4 月 京都大学附属図書館長(併任) 平成 12 年 11 月 京都大学 大学文書館長 平成 17 年 3 月 退職 平成 17 年 4 月 (独)国立博物館理事 ((兼)京都国立博物館長) 平成 19 年 3 月 退職 (統合のため)
理 事 (常勤)	松村 恵司	自 平成 23 年 10 月 1 日 至 平成 29 年 3 月 31 日	文化財の 調査・研 究・保存 修復、ナ ショナル センター 機能担当	昭和 52 年 10 月 奈良国立文化財研究所 昭和 62 年 10 月 文化庁入庁 平成 7 年 4 月 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 考古第二調査室長 平成 18 年 4 月 (独)文化財研究所奈良文化財研究所都城発掘調 査部 上席研究員・考古第一研究室長 平成 20 年 4 月 (独)国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘 調査部長 平成 21 年 4 月 文化庁文化財部文化財鑑査官 平成 23 年 3 月 退職
理 事 (常勤)	池原 充洋	自 平成 26 年 4 月 1 日 至 平成 29 年 3 月 31 日	総務、財 務、危機 管理担当	昭和 57 年 4 月 文部省入省 平成 11 年 7 月 文部科学省初等中等教育局特殊教育課長 平成 16 年 1 月 文化庁長官官房国際課長 平成 18 年 4 月 文部科学省研究開発局参事官 平成 22 年 7 月 文部科学省大臣官房国際課長 平成 24 年 4 月 国立大学法人埼玉大学理事・事務局長
理 事 (非常勤)	渡邊 妙子	自 平成 26 年 7 月 1 日 至 平成 29 年 3 月 31 日	対外広報 担当	昭和 31 年 4 月 株式会社国連社 昭和 32 年 6 月 株式会社第一銀行 昭和 41 年 8 月 財団法人佐野美術館 平成 12 年 6 月 財団法人佐野美術館長 現在に至る
監 事 (非常勤)	雪山 行二	自 平成 19 年 4 月 1 日 至 平成 27 年 3 月 31 日		昭和 51 年 4 月 国立西洋美術館 平成 4 年 9 月 国立西洋美術館学芸課長 平成 10 年 9 月 退職 平成 10 年 10 月 愛知県美術館副館長 平成 14 年 4 月 横浜美術館長 平成 21 年 4 月 和歌山県立近代美術館長 平成 24 年 3 月 退職 平成 24 年 4 月 富山県立近代美術館長 現在に至る
監 事 (非常勤)	中元 文徳	自 平成 26 年 7 月 1 日 至 平成 27 年 度財務諸表承 認日		昭和 50 年 3 月 監査法人中央会計事務所 平成 14 年 4 月 中央青山監査法人顧問 平成 16 年 4 月 国立大学法人金沢大学監事 平成 21 年 4 月 熊本学園大学会計専門職大学院専任教授 現在に至る 平成 22 年 11 月 石川県公立大学法人評価委員会委員 現在に至る 平成 24 年 4 月 国立大学法人総合研究大学院大学監事 現在に至る 平成 25 年 4 月 相模原市包括外部監査人 現在に至る

(5) 常勤職員 の 状 況

常勤職員は平成 26 年度末現在 332 人（前期末比 7 人減）、平均年齢は 45 歳（前期末比 1 歳増）です。このうち、国等からの出向者は 10 人、民間からの出向者は 0 人、平成 27 年 3 月 31 日退職者は△10 人です。

3. 財務諸表の要約

(1) 要約した財務諸表

① 貸借対照表

平成 27 年 3 月 31 日

(単位：百万円)

資産の部	金額	負債の部	金額
流動資産		流動負債	
現金及び預金	4,320	運営費交付金債務	316
未収金	1,038	未払金	3,329
その他	66	その他	1,210
流動資産合計	5,424	流動負債合計	4,855
固定資産		固定負債	
有形固定資産		資産見返負債	3,859
建物	57,407	その他の固定負債	66
収蔵品	106,982	固定負債合計	3,925
土地	44,411	負債合計	8,780
工具器具備品	2,866	純資産の部	
建設仮勘定	452	資本金	104,714
その他	2,419	資本剰余金	105,546
無形固定資産	79	利益剰余金	1,000
投資その他資産	0	純資産合計	211,260
固定資産合計	214,616	負債純資産合計	220,040
資産合計	220,040		

② 損益計算書

平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

(単位：百万円)

	金額
経常費用(A)	10,154
業務費	
人件費	3,132
業務経費	4,347
減価償却費	623
一般管理費	
人件費	850
一般管理経費	1,110
減価償却費	90
その他	2
経常収益(B)	10,377
運営費交付金収益	6,725
受託収入	541
入場料収入	1,031
展示事業等収入	454
財産利用収入	235
施設費収益	337
資産見返負債戻入	754
その他	300
臨時損失(C)	-2
臨時利益(D)	2
前中期目標期間繰越積立金取崩額(E)	2
当期総利益(B-A+C+D+E)	225

③ キャッシュ・フロー計算書

平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日 (単位：百万円)

	金額
I 業務活動によるキャッシュ・フロー(A)	1,988
人件費支出	-3,981
運営費交付金収入	8,239
自己収入等	3,474
その他の支出	-5,756
その他収入	12
II 投資活動によるキャッシュ・フロー(B)	-3,277
III 財務活動によるキャッシュ・フロー(C)	-34
IV 資金増加額(又は減少額)(D=A+B+C)	-1,323
V 資金期首残高(E)	5,193
VI 資金期末残高(F=D+E)	3,870

④ 行政サービス実施コスト計算書

平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日 (単位：百万円)

	金額
I 業務費用	7,780
損益計算書上の費用 (控除) 自己収入等	10,157 -2,377
(その他の行政サービス実施コスト)	
II 損益外減価償却相当額	3,617
III 損益外除売却差額相当額	1
IV 引当外賞与見積額	-1
V 引当外退職給付増加見積額	-97
VI 機会費用	922
VII 行政サービス実施コスト	12,222

(2) 財務諸表の科目

① 貸借対照表

現金及び預金	: 現金、銀行預金(定期預金含む)
未収金	: 受託事業実施のための立替金、施設利用料の未受領分など
その他(流動資産)	: 販売用図録などのたな卸資産、前払保険料、前払費用など
有形固定資産	: 土地、建物、大型研究機器、車両、收藏品など長期にわたって使用する固定資産で無形固定資産以外のもの
建設仮勘定	: 建設中の建物の建設等のため支出した相当額など
無形固定資産	: ソフトウェア、電話加入権など
その他(固定資産)	: 保証金、長期前払費用
運営費交付金債務	: 運営費交付金のうち翌年度に繰り越すものの相当額
未払金	: 退職給付(アソシエイトフェローを除く)、購入代金などの未払金で1年以内に支払期限が到来するもの
その他(流動負債)	: 住民税納付のための給与控除預り金など
資産見返負債	: 運営費交付金などにより取得した固定資産(償却資産)の取得額のうち未償却額
その他(固定負債)	: リース長期未払金など
政府出資金	: 国から出資された土地、建物等の相当額

資本剰余金	: 運営費交付金、施設費、目的積立金、寄附金などで取得した建物、収蔵品の相当額
利益剰余金	: 剰余金の累計額

②損益計算書

業務費	: 業務の実施に要した経費
人件費	: 給与、賞与、法定福利費等の経費
減価償却費	: 固定資産の取得額をその耐用年数にわたって費用として配分する経費
運営費交付金収益等	: 運営費交付金、補助金等のうち、当期の収益として認識した相当額
資産見返負債戻入	: 固定資産の償却時に当該資産の見返勘定を戻入したことによる収益
臨時損失	: 固定資産除却損
臨時利益	: 運営費交付金及び寄附による備品の除却により資産見返運営費交付金等を戻入したことによる利益
前中期目標期間繰越積立金取崩額	: 前中期目標期間に受託研究費で取得した研究機器の当該年度の減価償却費相当額

③キャッシュ・フロー計算書

業務活動によるキャッシュ・フロー	: 通常業務の実施に係る資金の状態。サービス提供等による収入、原材料、商品又はサービス購入による支出、人件費支出等
投資活動によるキャッシュ・フロー	: 将来に向けた運営基盤の確立のために行われる投資活動に係る資金の状態、固定資産の取得・売却等による収入・支出
財務活動によるキャッシュ・フロー	: 増資等による資金の収入・支出、債券の発行・償還及び借入れ・返済による収入・支出等、資金の調達及び返済等

④行政サービス実施コスト計算書

業務費用	: 損益計算書における一切の費用から運営費交付金、施設整備費補助金等の国からの措置に基づく収益を控除した相当額
損益外減価償却相当額	: 建物などで減価に対応すべき収益の獲得が予定されないとした資産の減価償却費相当額（損益計算書には反映されていないが、減価償却累計額は貸借対照表に反映）
損益外除売却差額相当額	: 上記のような建物などを除売却した場合の損益計算書には反映されない除売却損相当額
損益外減損損失相当額	: 独立行政法人が中期計画等で想定した業務を行ったにもかかわらず生じた減損損失相当額
引当外賞与見積額・引当外退職給付増加見積額	: 財源措置が運営費交付金により行われる場合の賞与引当金増加見積額・退職給付引当金増加見積額（損益計算書には反映されていないが、貸借対照表に注記）
機会費用	: 政府から出資された土地・建物等の出資額及び政府から譲与を受け資本剰余金となっている収蔵品等の相当額を市場で運用すると仮定した場合に得られたと考えられる運用益相当額

4. 財務情報

(1) 財務諸表の概要

- ① 資産、負債、経常費用、経常収益、当期総損益、キャッシュ・フローなどの主要な財務データの経年比較・分析

主要な財務データの経年比較

(単位：百万円)

区 分	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
資産	202,650	206,245	220,156	220,058	220,040
負債	9,316	15,189	15,469	9,747	8,780
利益剰余金（又は繰越欠損金）	1,304	691	752	778	1,000
純資産	193,334	191,056	204,687	210,311	211,260
経常費用	9,703	8,908	8,746	9,257	10,154
経常収益	9,844	8,946	8,820	9,280	10,377
当期総利益	143	44	67	31	225
業務活動によるキャッシュ・フロー	1,410	664	1,171	2,056	1,988
投資活動によるキャッシュ・フロー	-1,981	867	2,206	-5,310	-3,277
財務活動によるキャッシュ・フロー	-6	-14	-13	-14	-34
資金期末残高	3,581	5,098	8,462	5,193	3,870

(資産)

平成26年度末現在の資産合計は、2,200億40百万円と前年度比18百万円(0.0%)減少しました。これは、前年度にしゅん工した工事の支払等により現金預金が43億20百万円と同10億73百万円(19.9%)減少したこと、收藏品、土地、建設仮勘定を除く有形固定資産について減価償却額が新規取得額を上回り、差引11億63百万円

(1.8%)の減少となったこと、国から別途措置頂いた予算による購入や寄贈により收藏品が1,069億82百万円と同18億83百万円(1.8%)増加したこと、継続中の工事により建設仮勘定が4億52百万円と同2億85百万円(172%)増加したことが主な要因です。

(負債)

平成26年度末現在の負債合計は、87億80百万円と前年度比9億67百万円(9.9%)減少しました。これは、前年度に比べ今年度しゅん工の工事が少なく、期末での未払金計上額が33億29百万円と同15億77百万円(32.1%)減少したこと、展示室整備等についての繰越予算があった前年度に比べ今年度繰越予算が少なく、運営費交付金債務が3億16百万円と同3億99百万円(55.8%)減少したこと、新規の寄附等により預り寄附金が8億43百万円と同6億58百万円(357%)増加したこと、建設仮勘定等増加に伴い資産見返負債が38億59百万円と同2億79百万円(7.8%)増加したことが主な要因です。

(純資産)

平成26年度末現在の純資産合計は、2,112億61百万円と前年度比9億49百万円(0.5%)増加しました。これは、資本剰余金が1,055億46百万円と同7億27百万円(0.7%)増加したこと、利益剰余金が10億円と同2億22百万円(28.6%)増加したことによるものです。資本剰余金の増加は、今年度しゅん工の工事による増加24億63百万円、收藏品購入及び寄贈による増加18億83百万円、損益外減価償却累計額によ

る減少 36 億 17 百万円等の差し引きによるものです。利益剰余金の増加は、当期未処分利益の前年度比増加額 1 億 94 百万円、前年度利益の積立金繰入 31 百万円、前中期目標期間繰越積立金の取崩し 2 百万円の差し引きによるものです。

（経常費用）

平成 26 年度の経常費用は、101 億 54 百万円と前年度比 8 億 97 百万円（9.7%）増加しました。財務状況に影響を及ぼす社会環境の変化として「国家公務員の給与の改定及び臨時特例に関する法律」に準じた職員給与の平均 7.8%減額支給が終了したこと、消費税率が 5%から 8%に改定されたことが挙げられます。

人件費は、総額で同 2 億 63 百万円（7.1%）増の 39 億 82 百万円と、削減支給の影響の範囲内でしたが、業務人件費が同 1 億 43 百万円（4.8%）増の 31 億 32 百万円であったのに対し、一般人件費は同 1 億 19 百万円（16.3%）増の 8 億 50 百万円となりました。一般職員定年退職者への退職手当と欠員の補充が増加の主な要因です。

物件費は、消費税率改定等の影響により業務経費が同 63 百万円（1.5%）増の 43 億 47 百万円、一般管理経費が同 3 億 98 百万円（55.9%）増の 11 億 10 百万円となりました。一般管理経費の増加が大きい要因としては、施設整備費補助金での工事に係る修繕費や発掘経費など 3 億 16 百万円を一般管理経費に計上したこと、消費税納付額が 44 百万円と同 30 百万円（226%）増加したこと、新規事業の文化財防災ネットワーク推進事業による旅費が 10 百万円発生したことなどが挙げられます。

（経常収益）

平成 26 年度の経常収益は、103 億 77 百万円と前年度比 10 億 96 百万円（11.8%）増加しました。入場者数増により、入場料収入が同 3 億 57 百万円（52.9%）増の 10 億 31 百万円となった外、ミュージアムショップやレストランの売上が伸び販売手数料収入が 74 百万円と同 26 百万円（54.9%）増、パスポート収入が 1 億 16 百万円と同 33 百万円（40.2%）増となりました。また、東京、奈良の両研究所での科学研究費補助金の採択件数・金額が増加したことにより間接経費収入が 83 百万円と同 14 百万円（20.1%）増となるなど、展示事業等附帯収入が同 1 億 10 百万円（32.1%）増の 4 億 54 百万円となりました。財産利用収入は、東京国立博物館でのイベント向け建物貸付 26 百万円などにより同 33 百万円（16.3%）増の 2 億 35 百万円となりました。運営費交付金収益は人件費等の増加により同 3 億 20 百万円（5.0%）増の 67 億 25 百万円、資産見返負債戻入は減価償却費の増加により同 1 億 94 百万円（34.6%）増の 7 億 54 百万円となりました。

（当期総利益）

以上による経常利益 2 億 23 百万円に、固定資産の除却に伴う臨時損失 2 百万円とこれに伴う資産見返勘定の戻入による臨時利益 2 百万円を差し引きし、前中期目標期間繰越積立金取崩額 2 百万円と合わせて、平成 26 年度の当期総利益は 2 億 25 百万円と前年度比 1 億 94 百万円（633%）増加しました。

（業務活動によるキャッシュ・フロー）

平成 26 年度の業務活動によるキャッシュ・フローでは、収入が 19 億 88 百万円と前年度比 68 百万円（3.3%）減少しました。これは、支出面で人件費支出が 39 億 81 百万円と同 3 億 32 百万円（9.1%）、業務支出が 54 億 54 百万円と同 4 億 94 百万円（10.0%）

増加したこと、収入面で展示事業等収入が 15 億 46 百万円と同 7 億 2 百万円(83.1%)、寄附金収入が 7 億 90 百万円と同 6 億 22 百万円 (370%) 増加し、運営費交付金収入が 82 億 39 百万円と同 1 億 53 百万円 (1.8%)、消費税等還付額が同 4 億 39 百万円 (皆減) 減少したことが主な要因です。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

平成 26 年度の投資活動によるキャッシュ・フローでは、支出が 32 億 77 百万円と前年度比 20 億 33 百万円 (38.3%) 減少しました。これは、有形固定資産の取得による支出が 62 億 9 百万円と同 71 億 46 百万円 (53.5%)、施設費による収入が 32 億 14 百万円と同 48 億 51 百万円 (60.1%) とそれぞれ減少したことが主な要因です。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

平成 26 年度の財務活動によるキャッシュ・フローでは、支出が 34 百万円と前年度比 19 百万円 (135%) 増加しました。当該区分は、リース債務の支払による支出のみであり、同支払の増加によるものです。

② セグメント総資産の経年比較・分析

セグメント総資産の経年比較

(単位：百万円)

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度
東京国立博物館	92,163	89,950	89,786	92,548	93,585
京都国立博物館	38,005	42,128	51,806	56,092	54,385
奈良国立博物館	31,486	30,667	30,512	31,725	31,607
九州国立博物館	27,183	26,850	26,443	26,610	26,660
東京文化財研究所	7,192	6,774	6,605	6,508	6,216
奈良文化財研究所	6,270	6,171	6,016	5,897	6,092
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	-	4	56	66	78
共 通	351	3,701	8,932	611	1,417
合 計	202,650	206,245	220,156	220,058	220,040

総資産は 2,200 億 40 百万円と、前年度比で 18 百万円 (0.0%) 減少しました。

以下、施設毎に概況について報告いたします。

東京国立博物館においては 935 億 85 百万円と、同 10 億 37 百万円 (1.1%) 増加しました。これは、建物が同 17 億 28 百万円(6.3%)、収蔵品が同 3 億 85 百万円(0.8%)、工具器具備品が同 42 百万円 (6.2%)、流動資産が同 1 億 30 百万円 (7.7%) それぞれ増加し、損益外を含め 12 億 62 百万円相当の減価償却が進行したことが主な要因です。

京都国立博物館においては 543 億 85 百万円と、同 17 億 08 百万円 (3.0%) 減少しました。これは、建物が同 5 百万円 (0.0%)、収蔵品が同 4 億 94 百万円 (2.1%)、工具器具備品が同 3 億 7 百万円 (20.2%)、建設仮勘定が同 6 百万円 (7.0%) それぞれ増加した一方で、流動資産が同 13 億 80 百万円 (83.5%) 減少し、損益外を含め 11 億 46 百万円相当の減価償却が進行したことが主な要因です。

奈良国立博物館においては 316 億 7 百万円と、同 1 億 18 百万円 (0.4%) 減少しました。これは、建物が同 5 億 83 百万円 (5.8%)、収蔵品が同 2 億 62 百万円 (1.3%)、工具器具備品が同 10 百万円 (2.7%) それぞれ増加した一方で、流動資産が同 4 億 15 百万円 (36.4%) 減少し、損益外を含め 5 億 66 百万円相当の減価償却が進行した

ことが主な要因です。

九州国立博物館においては266億60百万円と、同49百万円(0.2%)増加しました。これは、建物が同15百万円(0.2%)、収蔵品が同7億37百万円(4.9%)、工具器具備品が同1億23百万円(4.6%)それぞれ増加した一方で、流動資産が同1億28百万円(19.9%)減少、損益外を含め7億19百万円相当の減価償却が進行したことが主な要因です。

東京文化財研究所においては62億16百万円と、同2億92百万円(4.5%)減少しました。これは、建物が同2百万円(0.1%)、工具器具備品が同35百万円(6.8%)増加した一方で、流動資産が同36百万円(10.6%)減少、損益外を含め2億94百万円相当の減価償却が進行したことが主な要因です。

奈良文化財研究所においては60億92百万円と、同1億95百万円(3.3%)増加しました。これは、建物が同1億65百万円(3.6%)、建設仮勘定が同2億79百万円(337%)、構築物が同15百万円(2.8%)、工具器具備品が同60百万円(8.2%)、流動資産が同2百万円(0.5%)それぞれ増加し、損益外を含め3億34百万円相当の減価償却が進行したことが主な要因です。

アジア太平洋無形文化遺産研究センターにおいては、総資産が78百万円となりました。建物は借用しており、資産のほとんどは現金預金及び未収金となります。

共通は、機構本部事務局その他の資産であり、14億17百万円と、同8億6百万円(132%)増加しました。これは、本部事務局に入金されていた施設整備費補助金や寄附金による現金預金8億96百万円、文化庁に対する未収金4億70百万円が主な内容です。

③ セグメント事業損益の経年比較・分析

セグメント事業損益の経年比較

(単位：百万円)

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
東京国立博物館	29	69	20	2	25
京都国立博物館	0	-185	5	2	72
奈良国立博物館	0	-10	0	1	-0
九州国立博物館	-7	16	35	-3	15
東京文化財研究所	23	51	10	4	6
奈良文化財研究所	-4	-35	1	0	5
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	-	2	1	0	2
共通	100	130	2	18	98
合計	141	38	74	23	223

事業損益は2億23百万円の利益と前年度比1億99百万円(850%)増加しました。

以下、施設毎に概況について報告いたします。

東京国立博物館においては25百万円の利益と、同23百万円(1,424%)増加しました。これは、事業費用が27億30百万円と同2億98百万円(12.3%)、事業収益が27億55百万円と同3億21百万円(13.2%)それぞれ増加したことの差し引きによります。事業費用のうち人件費については、給与特例法終了や欠員補充、退職手当の影響により業務人件費が9億54百万円と同70百万円(7.9%)、一般人件費が1億84百万円と同49百万円(36.4%)増加しました。物件費については、来館者対応業務委託費や光熱水費の増加により展覧業務費が8億14百万円と同1億8百万円(15.3%)、老朽化した情報機器の更新等により調査研究業務費が2億55百万円と同

56 百万円 (28.3%) 増加しました。事業収益は、入場者数の増加等により入場料収入が 5 億 31 百万円と同 2 億 16 百万円 (68.6%)、展示事業等附帯収入が 2 億 12 百万円と同 40 百万円 (23.4%)、財産利用収入が 1 億 67 百万円と同 24 百万円 (17.1%) と増加した外、人件費増加等により運営費交付金収益が 15 億 34 百万円と同 1 億 18 百万円 (8.3%)、文化財防災ネットワーク推進事業経費等によりその他補助金収益が 24 百万円と同 19 百万円 (360%) 増加しました。一方、受託研究の減少により受託収入が 15 百万円と同 14 百万円 (47.6%)、施設整備費補助金での修繕費等減少により施設費収益が 1 億 2 百万円と同 26 百万円 (20.1%) 減少しました。

京都国立博物館においては、72 百万円の利益と同 70 百万円 (3,987%) 増加しました。これは、事業費用が 14 億 35 百万円と同 3 億 24 百万円 (29.2%)、事業収益が 15 億 7 百万円と同 3 億 94 百万円 (35.4%) それぞれ増加したことの差し引きによります。事業費用のうち人件費は、給与特例法終了の影響等により業務人件費が 3 億 18 百万円と同 2 百万円 (0.7%)、一般管理人件費が 88 百万円と同 9 百万円 (12.1%) 増加しました。物件費は、展示室整備に伴う多額の備品消耗品費を計上した前年度に比べ、展覧業務費が 3 億 95 百万円と同 79 百万円 (16.6%) 減少した一方、緊急屋根等漏水補修工事により一般管理経費が 2 億 90 百万円と同 2 億 23 百万円 (331%) 増加しました。また、文化芸術振興費補助金により「文化財に親しむ授業」を充実させた結果、教育普及業務費が 16 百万円と同 5 百万円 (52.1%) 増加しました。事業収益は、平成知新館開館に伴う入場者数増等により、入場料収入が 1 億 53 百万円と同 1 億 13 百万円 (284%)、展示事業等附帯収入が 97 百万円と同 52 百万円 (116%)、財産利用収入が 30 百万円と同 11 百万円 (53.8%)、いずれも増加しました。この外、施設整備費補助金による修繕費の増加により施設費収益が 1 億円と同 65 百万円 (185%)、文化財防災ネットワーク推進事業経費等により、その他補助金収益が 15 百万円 (皆増) と増加しました。運営費交付金収益については、前年度に比べ展示室整備のための費用が少なかったこと等により 8 億 3 百万円と同 1 億 5 百万円 (11.6%) 減少しました。

奈良国立博物館においては、46 万円の損失と同 1 百万円 (186%) 減少しました。これは、事業費用が 10 億 1 百万円と同 31 百万円 (3.0%)、事業収益が 10 億 1 百万円と同 32 百万円 (3.1%) それぞれ減少したことの差し引きによります。事業費用のうち人件費は、給与特例法終了の影響等により業務人件費が 2 億 70 百万円と同 4 百万円 (1.6%)、一般管理人件費が 87 百万円と同 7 百万円 (8.1%) 増加しました。物件費は、前年度実施の情報機器更新の影響等により調査研究業務費が 61 百万円と同 11 百万円 (15.1%)、前年度実施の施設修繕の影響により一般管理経費が 61 百万円と同 61 百万円 (50.0%) それぞれ減少した一方、共催展負担金の増加等により展覧業務費が 4 億 49 百万円と同 39 百万円 (9.5%) 増加しました。事業収益は、正倉院展の開催日数増により、入場料収入が 2 億 39 百万円と同 13 百万円 (5.8%)、展示事業等附帯収入が 66 百万円と同 9 百万円 (15.9%) 増加しました。施設整備費補助金修繕費減の影響により施設費収益が 21 百万円と同 37 百万円 (63.5%) 減少した外、資産購入等により運営費交付金収益が 5 億 15 百万円と同 8 百万円 (1.5%) 減少しました。

九州国立博物館においては 15 百万円の利益と、同 19 百万円 (578%) 増加しました。これは、事業費用が 14 億 36 百万円と同 1 億 40 百万円 (10.8%) 増加し、事業収益が 14 億 51 百万円と同 1 億 59 百万円 (12.3%) 増加したことの差し引きにより

ます。事業費用のうち人件費は、給与特例法終了や退職手当の影響により、業務人件費が3億15百万円と同17百万円(5.9%)、一般管理人件費が56百万円と同7百万円(13.8%)増加しました。物件費は共催展負担金等により展覧業務費が5億61百万円と同70百万円(14.3%)、老朽化した機器の更新等により調査研究業務費が2億48百万円と同16百万円(6.8%)、一般管理経費が54百万円と同15百万円(38.3%)それぞれ増加しました。事業収益は、入場料収入が1億4百万円と同15百万円(17.1%)増加した外は、展示事業等附帯収入が23百万円と同7百万円(23.5%)、寄附金収益が0円と同7百万円(皆減)、受託収入が14百万円と同1百万円(6.7%)減少しました。運営費交付金収益については、人件費及び物件費の増加に伴い11億35百万円と同1億54百万円(15.6%)増加しました。

東京文化財研究所においては6百万円の利益と、同2百万円(51.4%)増加しました。これは、事業費用が12億10百万円と同47百万円(4.0%)、事業収益が12億17百万円と同49百万円(4.2%)それぞれ増加したことの差し引きによります。事業費用のうち人件費は、給与特例法終了の影響等により業務人件費が4億62百万円と同27百万円(6.1%)、一般人件費が1億31百万円と同8百万円(6.9%)増加しました。物件費は、施設老朽化に伴う修繕費により一般管理経費が81百万円と同19百万円(29.7%)増加した一方、運営費交付金削減のため国際研究協力業務の見直しを行い、同業務費が96百万円と同22百万円(18.9%)減少しました。事業収益は、前年度からの繰越事業や人件費増加により運営費交付金収益が9億9百万円と同31百万円(3.5%)、文化財防災ネットワーク推進事業によりその他補助金収益が10百万円(皆増)増加した外は、受託収入が2億26百万円と同4百万円(1.9%)、寄附金収益が3百万円と同3百万円(44.6%)、施設費収益が0円と同8百万円(皆減)減少しました。自己収入として、科学研究費補助金採択件数・金額の増加により展示事業等附帯収入(科学研究費間接経費)が15百万円と同6百万円(60.6%)増加しました。

奈良文化財研究所においては、5百万円の利益と、同5百万円(2,449%)増加しました。これは、事業費用が19億48百万円と同44百万円(2.3%)、事業収益が19億53百万円と同49百万円(2.6%)いずれも増加したことの差し引きによります。事業費用のうち人件費は、給与特例法終了の影響等により業務人件費が7億97百万円と同22百万円(2.9%)、一般管理人件費が1億21百万円と同9百万円(8.1%)増加しました。物件費は、調査研究業務費が2億64百万円と同74百万円(21.8%)、情報公開業務費が94百万円と同2百万円(2.1%)、国際研究協力業務費が26百万円と同6百万円(19.7%)、展示出版業務費が1億13百万円と同16百万円(12.6%)、受託業務費が2億28百万円と同57百万円(20.0%)いずれも減少した一方、一般管理経費が2億25百万円と同1億65百万円(274%)増加しました。調査研究業務費の減少については前年度に本庁舎改修工事に伴う機器移動費を計上していたこと、展示出版業務費の減少については前年度に展示公開施設に係る展示制作費を計上していたことが主な要因です。一般管理経費の増加については今年度に施設整備費補助金での発掘作業費や重機賃借料を同経費に計上していることが要因です。事業収益は、運営費交付金収益が14億68百万円と同29百万円(2.0%)、施設費収益が1億14百万円と同67百万円(140%)、その他補助金収益が11百万円(皆増)と増加した一方、受託収入が2億34百万円と同61百万円(20.6%)、寄附金収益が10百万円と同3百万円(22.6%)減少しました。自己収入として、科学研究費補助金採択件数・金

額の増加により展示事業等附帯収入（科学研究費間接経費）が 40 百万円と同 11 百万円（35.5%）増加しました。

アジア太平洋無形文化遺産研究センターにおいては、2 百万円の利益となりました。これは、事業費用が 90 百万円と同 2 百万円（2.7%）、事業収益が 92 百万円と、同 1 百万円（1.4%）それぞれ減少したことの差し引きによります。

共通は、機構本部事務局その他の損益で 98 百万円の利益と、同 80 百万円（446%）増加しました。これは、事業費用が 3 億 3 百万円と同 78 百万円（34.5%）増加し、事業収益が 4 億 1 百万円と同 1 億 58 百万円（64.8%）増加したことの差し引きによります。事業費用のうち人件費は、給与特例法終了の影響等により一般管理人件費が 75 百万円と同 29 百万円（19.9%）増加しました。物件費は、文化財防災ネットワーク推進事業により調査研究業務費が 46 百万円（皆増）、一般管理経費が 75 百万円と同 3 百万円（3.5%）増加しました。事業収益は、消費税納付予定額を収益化したことにより運営費交付金収益が 3 億 32 百万円と同 1 億円（43.2%）、文化財防災ネットワーク推進事業によりその他補助金収益が 62 百万円（皆増）と増加しました。

④ 積立金の申請、目的積立金の取崩内容

当期末処分利益 2 億 25 百万円については、現金の裏づけのない臨時損益、前中期目標期間繰越積立金取崩額 2 百万円を除く 2 億 23 百万円を目的積立金として申請する予定です。

目的積立金取崩は、前中期目標期間において自己収入により取得した償却資産に関する減価償却費相当額などについて 2 百万円計上しております。

⑤ 行政サービス実施コスト計算書の経年比較・分析

行政サービス実施コストの経年比較

（単位：百万円）

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度
業務費用	7,527	6,962	6,463	6,847	7,780
損益計算書上の費用	9,715	8,910	8,801	9,282	10,157
（控除）自己収入等	-2,188	-1,948	-2,338	-2,434	-2,377
損益外減価償却相当額	2,322	2,843	2,882	3,265	3,617
損益外除売却差額相当額	42	55	35	151	1
損益外減損損失相当額	-	1	-	295	-
引当外賞与見積額	-7	-29	5	21	-1
引当外退職給付増加見積額	12	48	105	-76	-97
機会費用	2,431	1,970	1,207	1,398	922
行政サービス実施コスト	12,327	11,850	10,697	11,900	12,222

平成 26 年度の行政サービス実施コストは 122 億 22 百万円と、前年度比 3 億 23 百万円（2.7%）増加しました。これは、業務費用が 77 億 80 百万円と同 9 億 33 百万円（13.6%）増加したこと、損益外減価償却相当額が同 3 億 53 百万円（10.8%）増の 36 億 17 百万円となった一方、損益外除売却差額相当額が 1 百万円と同 1 億 50 百万円（99.5%）、損益外減損損失相当額が 0 円と同 2 億 95 百万円（皆減）減少したこと、引当外賞与見積額がマイナス 1 百万円と同 21 百万円（103%）、引当外退職給付増加見積額がマイナス 97 百万円と同 21 百万円（27.6%）減少したこと、機会費用が 9 億 22 百万円と同 4 億 76 百万円（34.0%）減少したことによる差し引きです。

(2) 重要な施設等の整備等の状況

① 当事業年度中に完成した主要施設等

<東京国立博物館>

平成館特別展示室等改修工事

<京都国立博物館>

平常展示館建替工事（展示制作等）

<奈良国立博物館>

なら仏像館外壁等補修工事

② 当事業年度において継続中の主要施設等の新設・拡充

<京都国立博物館>

緊急屋根等漏水補修工事

<奈良国立博物館>

なら仏像館免震展示ケース等整備工事

<奈良文化財研究所>

本庁舎建替工事

③ 当事業年度中に処分した主要施設等

該当なし

(3) 予算及び決算の概要

国立文化財機構

(単位：百万円)

区 分	22 年度		23 年度		24 年度		25 年度		26 年度		
	予算	決算	差額理由								
《収入》											
運営費交付金	8,192	8,192	7,941	7,941	7,602	7,366	8,392	8,392	8,239	8,239	
施設整備費補助金	3,992	5,094	4,792	4,414	6,884	10,273	2,854	6,830	2,990	3,157	繰越による
文化芸術情報電子化推進費補助金	-	136	-	-	-	-	-	-	-	-	
文化芸術振興費補助金	-	-	-	-	-	-	-	5	-	205	文化庁補助金交付決定
政府開発援助ユネスコ活動費補助金	-	-	-	-	-	-	-	10	-	8	文部科学省補助金交付決定
展示事業等収入	1,132	1,580	1,188	1,318	1,309	1,587	1,322	1,240	1,323	1,730	入場料収入増等
その他寄附金等	-	143	-	241	-	200	-	172	-	790	賛助会等
受託収入	26	518	26	507	26	634	26	625	26	541	当初見込外契約の増加
合 計	13,342	15,663	13,947	14,421	15,821	20,060	12,594	17,274	12,578	14,670	
《支出》											
運営事業費	9,324	11,010	9,129	8,952	8,911	8,856	9,714	9,720	9,562	10,288	
・人件費	3,165	3,162	3,119	3,116	3,078	2,806	2,781	2,900	3,101	3,137	
・業務経費	6,159	7,848	6,010	5,836	5,833	6,050	6,933	6,820	6,461	7,151	
(一般管理費)	980	932	833	917	811	681	801	607	1,008	832	消費税支払額減
(展覧事業費)	2,905	4,672	3,206	2,846	3,138	3,229	3,485	3,896	3,493	3,891	展示制作費増
(調査研究事業費)	1,517	1,633	1,297	1,440	1,167	1,481	1,955	1,776	1,309	1,772	保存修復事業増
(教育普及事業費)	120	89	55	96	47	64	76	64	76	99	アプリ制作費増

(国際研究協力事業費)	303	227	245	178	265	163	224	152	214	175	国際情勢による延期
(情報公開事業費)	155	127	169	147	133	201	187	161	181	211	有期雇用人件費増
(研修事業費)	22	18	18	16	13	18	20	13	20	14	他経費へ振替
(展示出版事業費)	157	150	187	196	259	213	185	151	160	157	
受託事業費	26	507	26	512	26	620	26	611	26	539	当初見込外契約の増加
施設整備費	3,992	5,094	4,792	4,414	6,884	10,273	2,854	6,830	2,990	3,157	繰越による
文化芸術情報電子化推進費補助金	-	142	-	-	-	-	-	-	-	-	
文化芸術振興費	-	-	-	-	-	-	-	5	-	205	
政府開発援助ユネスコ活動費	-	-	-	-	-	-	-	10	-	8	
合計	13,342	16,753	13,947	13,878	15,821	19,749	12,594	17,176	12,578	14,197	

(4) 経費削減及び効率化に関する目標及びその達成状況

① 経費削減及び効率化目標

機構においては、当中期目標期間終了年度における一般管理費を、前中期目標期間の最終年度に比べて、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き5年期間中で一般管理費15%以上の削減を目標としております。

この目標を達成するため、具体的には下記の措置を講じています。

- 1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化
- 2) 使用資源の減少
 - ・省エネルギー（5年期間中1年に1.03%の減少）
 - ・廃棄物減量化（一般廃棄物排出量を5年期間中5%減少）
 - ・リサイクルの推進（古紙の回収、ディスプレイ材料の再利用徹底等）
- 3) 施設有効使用の推進
 - ・施設の利用推進
- 4) 民間委託の推進
 - ・一般管理部門を含めた組織・業務の見直し、民間開放の推進
 - ・各施設の警備・清掃業務についての民間委託の推進
 - ・来館者サービスを中心とした業務の見直し、民間委託の推進
- 5) 競争入札の推進
 - ・契約業者の競合を推進することによる経費の効率化
 - ・包括契約、近隣他機関や法人内同一地域での共同購入及び複数年契約への変更等による経費の効率化

② 経費削減及び効率化目標の達成度合いを測る財務諸表等の科目（費用等）の経年比較

一般管理費の経年比較

(単位：百万円)

区分	前中期目標期間 終了年度		当中期目標期間							
	金額	比率	平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度	
			金額	比率	金額	比率	金額	比率	金額	比率
一般管理費	932	100%	917	98.4%	681	73.1%	607	65.1%	832	89.3%

※比率は対前中期目標期間終了年度

5. 事業の説明

(1) 財源の内訳

① 内訳（補助金、運営費交付金、借入金、債券発行等）

機構の経常収益は 103 億 77 百万円で、その内訳は、運営費交付金収益 67 億 25 百万円（64.8%）、受託収入 5 億 41 百万円（5.2%）、入場料収入 10 億 31 百万円（9.9%）、展示事業等附帯収入 4 億 54 百万円（4.4%）、財産利用収入 2 億 35 百万円（2.3%）、寄附金収益 1 億 54 百万円（1.5%）、施設費収益 3 億 37 百万円（3.2%）、その他補助金収益 1 億 34 百万円（1.3%）、資産見返負債戻入 7 億 54 百万円（7.3%）等です。

② 自己収入の明細（自己収入の概要、収入先等）

機構では、年間を通じて博物館を開館し、収蔵品を観覧に供する外、年複数回の特別展覧会を開催し、今年度は 10 億 31 百万円の入場料収入を得ています。この外に展示事業等附帯収入として 4 億 54 百万円を得ています。主な内訳としては、年間パスポート販売 1 億 16 百万円、ミュージアムショップやレストランの販売手数料収入 74 百万円、科学研究費補助金間接経費収入 83 百万円などです。また財産利用収入として 2 億 35 百万円を得ています。主な内訳としては、文化財画像利用等に伴う著作権・特許権使用料 62 百万円、ショップやレストラン等の建物年間貸付料 53 百万円、イベント等の建物貸付料 43 百万円などです。

(2) 財務情報及び業務の実績の説明

ア 調査研究事業

調査研究事業は、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究を通して、国内の機関との共同研究や研究交流を深め、種々の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与すること、及び文化財の調査手法に関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与することを目的としています。

事業に要した費用は 11 億 21 百万円です。その財源は、運営費交付金 8 億 35 百万円及び自己収入等 2 億 86 百万円です。

イ 情報公開事業

情報公開事業は、調査・研究に基づく資料の作成及び文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査・研究成果を積極的に公表・公開し、研究者や広く一般の方が調査・研究成果を容易に入手できるようにすることを目的としています。

事業に要した費用は 1 億 39 百万円です。その財源は、運営費交付金 1 億 38 百万円及び自己収入等 1 百万円です。

ウ 研修事業

研修事業は、文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修、及び保存科学に関する保存担当学芸員研修等を行うことにより、文化財保護に必要な人材を養成することを目的としています。

事業に要した費用は 13 百万円です。その財源は、運営費交付金のみです。

エ 国際研究協力事業

国際研究協力事業は、文化財の保存・修復に関する国際研究協力に関する事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際研究協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与することを目的としています。

事業に要した費用は1億22百万円です。その財源は、運営費交付金1億21百万円及び自己収入等1百万円です。

オ 展示出版事業

展示出版事業は、文化財に関する調査・研究に基づく成果について刊行物を発行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供すること、及び研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことを目的としています。

事業に要した費用は1億22百万円です。その財源は、運営費交付金1億21百万円及び自己収入等1百万円です。

カ 展覧事業

展覧事業は、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施すること、及び国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行うことを目的としています。

事業に要した費用は22億19百万円です。その財源は、運営費交付金12億3百万円及び自己収入等10億16百万円です。

キ 教育普及事業

教育普及事業は、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化への理解促進を図るための中心的拠点として相応しい事業を重点的に行うこと、及び教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努めることを目的としています。

事業に要した費用は77百万円です。その財源は、運営費交付金18百万円及び自己収入等59百万円です。

ク 受託事業

受託事業は、高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施することを目的としています。

事業に要した費用は5億35百万円です。その財源は、受託収入のみです。

以 上

V 評価

1. 独立行政法人国立文化財機構の 平成26年度における業務の実績に関する評価

平成27年8月

文部科学大臣

1

様式1-1-1 中期目標管理法人 年度評価 評価の概要

1. 評価対象に関する事項			
法人名	独立行政法人国立文化財機構		
評価対象事業年度	年度評価	平成26年度(第3期)	
	中期目標期間	平成23~27年度	
2. 評価の実施者に関する事項			
主務大臣	文部科学大臣		
法人所管部局	文化庁文化財部美術学芸課	担当課、責任者	美術学芸課長 萬谷宏之
評価点検部局	大臣官房政策課	担当課、責任者	政策課長 柳孝
3. 評価の実施に関する事項			
・政策評価に関する有識者会議国立文化財機構ワーキングチーム委員とともに東京国立博物館に赴き展示、収蔵、保存・修復の状況について調査した(平成27年7月2日)。 ・監事ヒアリングを実施し、監査の実施状況について確認するとともに法人の業務運営に係る意見交換を行った(平成27年7月21日)。 ・ワーキングチームに評価結果案を諮り、意見を聴取した(書面審議)。 ・法人ヒアリングを実施し、26年度自己評価及び第3期中期目標期間自己評価(見込)について説明を受けるとともに意見交換を行った(平成27年7月24日)。			
4. その他評価に関する重要事項			
特になし。			
5. 国立文化財機構ワーキングチーム 委員名簿			
坂井 秀 弥	奈良大学文学部教授(専門分野:考古学)		
佐野 みどり	学習院大学文学部教授(専門分野:日本絵画史)		
園田 直子	国立民族学博物館文化資源研究センター教授(専門分野:保存科学)		
竹本 幹夫	早稲田大学文学部教授(専門分野:演劇学)		
筑紫 みずえ	榊グッドバンカー代表取締役社長		
丸山 伸彦	武蔵大学人文学部教授(専門分野:染織史)		
宮島 博和	公認会計士		

2

様式1-1-2 中期目標管理法 年度評価 総合評価

1. 全体の評価							
評価 (S、A、B、C、D)	B: 全体としておおむね中期計画における所期の目標を達成していると認められる。				(参考) 本中期目標期間における過年度の総合評価の状況		
	23年度		24年度		25年度		
	業務の質の向上		業務運営の効率化		財務内訳の改善等		
		A		A		A	
		A		A		A	
		A		A		A	
						B	
評価に至った理由							
項目別評価の一部にAがあるが、Bが大半を占めており、C以下はない。また、全体の評価を引き下げた事象もなかったため、Bが相当であると判断した。							

2. 法人全体に対する評価

法人全体の評価	<p>東京、京都、奈良、九州(福岡・大宰府)の四つの国立博物館は、国民共有の貴重な財産である有形文化財を収集し、適切な環境で保管し又必要な修復等を行っている。平常展は来館者数、陳列替等の計画値を達成しており、また特別展も計画回数以上に開催し、目標数を上回る来館者の実績が上がっている。これらの活動を支える調査研究、教育活動、情報の発信等も所期の成果を挙げているものと認められる。</p> <p>東京及び奈良の文化財研究所は、文化財に関する基礎的・体系的及び科学的・先端的な調査研究を行うとともに、新たな調査手法の研究開発等を継続して行っている。いずれの調査研究も、年度計画に従い着実に実施されていると認められる。さらに、これらに関する情報・資料の収集・整備及び成果の公開並びに国際協力の推進についても、計画に従い着実に実施されている。</p> <p>アジア太平洋無形文化遺産センターは、日本国政府とユネスコの協定に基づく活動を計画的に実施している。</p> <p>業務運営の効率化、財務内容の改善、施設・設備に関する計画及びび人事に関する計画については、年度計画に従い着実に実施されている。</p> <p>○有識者コメント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 収蔵品を有効に活用した平常展示のリニューアルや、わかりやすく面白さを伝える展示手法の採用など、機構全体の努力はおおいに評価される。 ・ 業務全体にわたって、デジタル化の進展が顕著であるが、国民へのサービスという点で、双方向性の推進、そのコンセンサスをどこに(どのように)設定するのかといった視点が必要。 ・ 適切に評価されている。 ・ 学術的・文化的に多様かつ高度な事業が展開されており、わが国博物館行政の充実の証しと評価出来る。とくに前年比で実質的な予算の増額が行われたらしいが、活動の活発化をもたらしたことは、文化国家のあり方として高く評価される。この水準を今後も維持することが強く期待される。
全体の評価を行う上で特に考慮すべき事項	<p>東日本大震災における未曾有の文化財被害に対する経験を踏まえ、全国規模で巨大地震等の大規模災害に備え、各地域における文化財の防災対策や、被災した文化財の救出・修復等の処置を適切に行うネットワークを構築することを目的として、文化庁の補助事業により、法人全体で「文化財防災ネットワーク推進事業」を実施した。〈地方公共団体への協力等による文化財保護への質的向上〉に関する項目別評価はAとしたが、これをもって全体の評価を押し上げるまでには至らないと判断した。</p>

3. 項目別評価における主要な課題、改善事項など

項目別評価で指摘した課題、改善事項	特になし。
その他改善事項	特になし。
主務大臣による改善命令を検討すべき事項	特になし。

4. その他事項

監事等からの意見	特になし。
その他特記事項	<p>○有識者コメント 有形文化財購入予算の増額による顕著な成果を鑑み、今後の購入予算においても配慮が望ましい。</p> <p>・ 審査の日程が短く、もう少し時間的余裕を与えられたい。</p>

※1 S: 中期目標管理法の活動により、全体として中期計画における所期の目標を重層的及び質的に上回る顕著な成果が得られていると認められる。A: 中期目標管理法の活動により、全体として中期計画における所期の目標を上回る成果が得られていると認められる。
 B: 全体としておおむね中期計画における所期の目標を達成していると認められる。C: 全体として中期計画における所期の目標を下回っており、改善を要する。D: 全体として中期計画における所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた本格的な改善を求める。
 ※2 平成25年度評価までは、文部科学省独立行政法人評価委員会において総合評価を付けておらず、項目別評価の大項目について段階別評価を行っていたため、この評価を過年度の評価として参考に記載することとする。

様式1-1-3 中期目標管理法 年度評価 項目別評価総括表

中期目標(※1)	年度評価(※2)					項目別 調査No.	備考
	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		
I. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項							
収蔵品の収集	A	A	A	B		1-1-(1)	
収蔵品の管理、保存	A	A	A	B		1-1-(2)	
収蔵品の保存技術の向上	A	A	A	B		1-1-(3)	
展覧事業の充実	A	A	A	B		1-2-(1)	
教育活動の充実	A	A	A	B		1-2-(2)	
快適な観覧環境の充実	A	A	A	B		1-2-(3)	
文化財情報の発信と広報の充実	A	A	A	B		1-2-(4)	
収蔵品等の調査研究成果の公表	A	A	A	B		1-3-(1)	
専門家等との学術・人物交流	S	A	A	B		1-3-(2)	
文化財保存修理に関する人材育成	A	A	A	B		1-3-(3)	
収蔵品の貸与	A	A	A	B		1-3-(4)	
公私立博物館・美術館等に対する援助・助言	A	A	A	B		1-3-(5)	
調査研究の目的・内容の適切性／調査研究の実施状況／調査研究の成果の状況	文化財に関する基礎的・体系的調査研究			B		1-4-(1)	
	文化財の研究に関する調査手法の研究開発			B		1-4-(2)	
	文化財の保存修復に関する科学的・先端的な調査研究	A	A	A	B	1-4-(3)	
	国・地方公共団体の要請に基づく調査研究			B		1-4-(4)	
	有形文化財の収集等に関する調査研究			B		1-4-(5)	
国際協力に関する研究基盤の整備	A	A	A	B		1-5-(1)	
保存修復に関する研究基盤の整備	A	A	A	B		1-5-(2)	
アジア太平洋地域における無形文化遺産保護	A	A	A	B		1-5-(2)	
II. 業務運営の効率化に関する事項							
一般管理費の削減	A	A	A	B		2-1	
給与水準の適正化等	A	A	A	B		2-2	
契約の適正化の推進	-	-	-	B		2-3	
保有資産の有効活用の推進	-	-	-	B		2-4	
内部統制の充実・強化	A	A	A	B		2-5	
項目評価	A	A	A	B			
III. 財務内容の改善に関する事項							
予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画	自己収入の増加	A	A	A	A	3-1	
	固定経費の削減				B	3-2	
項目評価	A	A	A	B			
IV. その他の事項							
施設・整備に関する計画	-	-	-	B		4-1	
人事に関する計画	A	A	A	B		4-2	
項目評価	-	-	-	B			

※1 評価項目については中期目標の事項毎に基づく。ただし、平成23年度から平成25年度までの事項については、中期目標より評価事項が結合・細分化されているため、左側に旧事項名、右側に26年度以降の事項名を記載している。
 ※2 平成23年度から平成25年度までの評価については、「文部科学省所管独立行政法人の業務実績評価に係る基本方針」(平成14年3月22日文部科学省独立行政法人評価委員会)に基づく。
 また、平成26年度以降の評価については、「文部科学省所管の独立行政法人の評価に関する基準」(平成27年6月文部科学大臣決定)に基づく。詳細は下記のとおり。
 平成23年度から平成25年度までの評価
 S: 中期目標管理法の活動により、中期計画における所期の目標を重層的及び質的に上回る顕著な成果が得られていると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の120%以上で、かつ質的に顕著な成果が得られていると認められる場合)。
 A: 中期目標管理法の活動により、中期計画における所期の目標を上回る成果が得られていると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の120%以上とする。)、中期計画における所期の目標を達成していると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の100%以上120%未満)。
 B: 中期計画における所期の目標を下回っており、改善を要する(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の80%以上100%未満)。
 C: 中期計画における所期の目標を下回っており、改善を要する(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の80%未満)。
 D: 中期計画における所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた本格的な改善を求める(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の80%未満)。
 E: 評価委員会として業務運営の改善その他の助言を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の助言が必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)
 F: 評価委員会として業務運営の改善その他の助言を行う必要はない。
 平成26年度以降の評価
 S: 中期目標管理法の活動により、中期計画における所期の目標を重層的及び質的に上回る顕著な成果が得られていると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の120%以上で、かつ質的に顕著な成果が得られていると認められる場合)。
 A: 中期目標管理法の活動により、中期計画における所期の目標を上回る成果が得られていると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の120%以上とする。)、中期計画における所期の目標を達成していると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の100%以上120%未満)。
 B: 中期計画における所期の目標を下回っており、改善を要する(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の80%以上100%未満)。
 C: 中期計画における所期の目標を下回っており、改善を要する(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の80%未満)。
 D: 中期計画における所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた本格的な改善を求める(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の80%未満)。
 E: 評価委員会として業務運営の改善その他の助言を行う必要はない。
 F: 評価委員会として業務運営の改善その他の助言を行う必要はない。

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-1-1	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 1. 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (1)収蔵品の収集			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
収蔵品 件数 (件)	(東博)	実績値	—	113,897	114,362	115,653	116,268	—		予算額(千円)	1,100,000	1,100,000	530,000	1,238,500	1,410,000
	(京博)	実績値	—	6,621	6,708	6,721	7,109	—		決算額(千円)	720,023	874,185	891,828	1,356,326	—
	(奈良博)	実績値	—	1,831	1,834	1,862	1,877	—		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(九博)	実績値	—	453	474	493	512	—		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(4館計)	実績値	—	122,802	123,378	124,729	125,766	—		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
文化財 購入費 (百万 円)	(東博)	実績値	—	0	106	124	140	—		従事人員数(人)	100	99	99	94	94
	(京博)	実績値	—	48	22	0	227	—		※予算額は、4国立博物館の年度当初の文化財購入費の予算額を計上している。 ※決算額は、4国立博物館の文化財購入費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。					
	(奈良博)	実績値	—	102	27	40	262	—							
	(九博)	実績値	—	569	719	727	727	—							
	(4館計)	実績値	—	719	874	891	1,356	—							
(東博)	実績値	—	2,689	2,563	2,519	3,064	—								
寄託品 件数 (件)	(京博)	実績値	—	6,013	5,914	5,892	6,001	—							
	(奈良博)	実績値	—	1,945	1,951	1,994	1,984	—							
	(九博)	実績値	—	1,219	1,238	1,081	795	—							
	(4館計)	実績値	—	11,866	11,666	11,486	11,844	—							

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (1)国の文化財保護政策との整合性、一体性を保ちつつ機構の設置する博物館各館の役割・任務をそれぞれ収集方針を定め、これに基づき、計画的かつ適切な購入と寄贈・寄託の受け入れを進め、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の充実と保全を図ること。	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (1)-1 適時適切な収集 各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ確かな情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。 (1)-2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・収蔵品件数 ・文化財購入費 ・寄託品件数 〈評価の視点〉 ○購入、寄贈、寄託の受け入れにより、各館の特色に沿った体系的・通史的にバランスのとれたコレクションを形成したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P1~8 1(1)-1、1(1)-2 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 P1~26 1-(1)収蔵品 〈主要な業務実績〉 4館とも、各館の収集方針に沿って文化財の収集を行った。購入及び寄贈・寄託の受入においては、規程に従い、「鑑査会議」(東博・九博)、「陳列品鑑査会」(京博・奈良博)での審議を経て行っている。 ・収蔵品件数 125,766 件 26 年度新収品 1,037 件(うち購入 47 件、寄贈 484 件、編入 506 件) ※25 年度新収品 1,351 件 ・文化財購入費 1,356 百万円 ※25 年度 889 百万円(467 百万円増) ・寄託品件数 11,844 件 26 年度新規寄託 785 件、返却 427 件。 ※25 年度 11,486 件(358 件増) 各指標の詳細はアウトプット情報を参照。 購入 ・文化財購入費は特殊要因運営費交付金 910 百万円が措置されるなど昨年度から大幅な増額となった。購入件数は 47 件(25 年度購入件数 23 件)であった。 ・購入文化財のうち代表的なものは、狩野永徳の大作「紙本墨画松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風 狩野永徳筆」(九博)や、春の歌を装飾料紙に揮毫した「関戸本古今和歌集切」(東博)など。 寄贈 ・364 件一括での寄贈受入があった。江戸時代から続いている商家の方からの寄贈で、分野は多岐にわたっており、寄贈を前提とした調査は 27 年度も続く予定である。(京博)	〈自己評価書参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 総括表 P1~4 1(1)収蔵品の収集 〈評定と根拠〉 評定:B 4館とも、各館の収集方針に従い、国指定文化財を含む価値の高い文化財を多数収集した。 各館の特色に沿ったコレクションの形成をバランスよく行っており、収蔵品件数は、購入のほか寄贈の受け入れ等により順調に増加している。 購入については、文化財購入予算の大幅増は、これまで継続してきた予算要求等が、26 年度特殊要因として実現したものである。購入件数・質ともに順調である。 寄贈については、個人からの大量の寄贈(京博)や、館蔵品の少ない分野での優品の寄贈(九博)など、計 484 件の受入があり、順調である。 寄託については、寄託品件数は、九州国立博物館で登録美術品認定に伴う寄託の解除等による減少があったものの、積極的な受け入れの結果、全体としては昨年度より 358 件の増加となった。社寺の改修に合わせた寄託受入や、社寺におけるデジタル複製品への入れ替えに伴う原品保存としての寄託など、博物館が担うべき文化財保存の役割を果たしつつ、文化財の調査を通じて所蔵者との良好な関係を継続することにより、博物館における展示及び調査研究の充実に繋げることができている。	評定 B 〈評定に至った理由〉 東京国立博物館(以下「東博」という。)、京都国立博物館(以下「京博」という。)、奈良国立博物館(以下「奈良博」という。))及び九州国立博物館(以下「九博」という。))は、それぞれの収集方針に沿って有形文化財の収集を順調に行っていることが自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 平成 26 年度は、運営費交付金の特殊要因として有形文化財の購入予算が大幅に増額され、購入件数が前年度の約 2 倍になり顕著な成果が上がった。寄贈又は寄託による有形文化財の収集・展示活動も継続的に行っており、例えば京博においては 364 件の一括寄贈の受け入れや、重要文化財である大型仏像彫刻二体の長期借用(寄託)などの成果が上がった。 〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善策〉 なし。 〈その他事項〉 文化財保護法第 48 条第 1 項に基づく重要文化財の所有者に対する出品の催告、又は同第 5 項に基づく国立博物館からの申出に基づく重要文化財の出品の承認によるものが寄託品に含まれており、その件数は次のとおりである。文化財保護法において国立博物館が担うべきミッションが果たされているものと認められる。 (重要文化財の催告出品及び承認出品) 東京国立博物館: 催告出品 127 件、承認出品 16 件、計 143 件 京都国立博物館: 催告出品 160 件、承認出品 55 件、計 215 件 奈良国立博物館: 催告出品 149 件、承認出品 32 件、計 181 件 九州国立博物館: 催告出品 6 件、承認出品 3 件、

				<p>・館蔵品の少ない考古分野において、「金銅装単龍環柄頭付大刀」、全国的に出土例が稀少で九州では唯一の「青銅鈴釧」など、優品3件の寄贈を受けることができた。(九博) 寄託</p> <p>・天野山金剛寺の重文「大日如来坐像」と重文「不動明王坐像」は、同寺本堂の改修期間に合わせて借用しているもので、圧倒的な存在感の丈六仏であり、26年9月にリニューアル・オープンした名品ギャラリーの顔ともなった。(京博)</p> <p>・天球院の重文・狩野山楽・山雪筆「竹虎図模」「梅遊禽図模」の寄託は、寺坊でのデジタル複製の模への入れ替えに伴う原因保存のための寄託である。(京博)</p> <p>・現存例が極めて少ない遺例である「最勝曼荼羅」の寄託を受け、名品展にて陳列した。(奈良博)</p>	<p><課題と対応></p> <p>文化財の調査等を通じた所蔵者との良好な関係の維持・発展により、更に寄贈や寄託の充実を図ってきたい。</p>	<p>計9件</p> <p>合計: 勸告出品 442件、承認出品 106件、計 548件</p> <p>○有識者コメント</p> <p>・京博の重文美術品購入と貴重資料の大量寄贈、奈良博の行方不明古代文書の再発見・購入と重文仮面類その他の寄託は、特に高く評価すべき。</p> <p>・十分に達成されていると判断される。</p>
--	--	--	--	--	---	---

4. その他参考情報	
特になし	

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-1-(2)	<p>1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項</p> <p>1. 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承</p> <p>(2) 収蔵品の管理、保存</p>				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ														
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)				
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
保存力 ル テ 作 成 件 数 (件)	(東博)	実績値	—	1,187	1,594	1,492	1,721		予算額(千円)	4,792,204	6,883,691	2,853,965	2,990,365	2,920,551
	(京博)	実績値	—	249	215	253	204		決算額(千円)	4,413,828	10,273,364	6,829,529	3,156,912	
	(奈良博)	実績値	—	130	127	120	115		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(九博)	実績値	—	107	91	94	75		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(4館計)	実績値	—	1,673	2,027	1,959	2,115		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
									従事人員数(人)	111	110	110	105	105
<p>※予算額は、決算報告書・施設整備費の予算額を計上している。</p> <p>※決算額は、決算報告書・施設整備費の決算額を計上している。</p> <p>※予算額と決算額の差額は、各年度間の繰越等によるものである。</p> <p>※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。</p>														

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
<p>1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承</p> <p>(2) 収蔵品全体を常時、適切な保存及び管理環境下に置くこと。特に、施設の老朽化、耐震対策に計画的かつ速やかに取り組み、収蔵品と人の安全を守る施設・設備の整備を図ること。</p>	<p>1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承</p> <p>(2) 1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。</p> <p>(2) 2 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。</p>	<p>1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承</p> <p>(2) 1 収蔵品の管理・保存</p> <p>収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。</p> <p>(2) 2 施設の環境整備</p> <p>展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。</p>	<p>〈主な定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 保存カルテ作成件数</p> <p>〈評価の視点〉 ○収蔵品の写真・管理データを蓄積することにより、収蔵品の保存・管理の徹底に努めたか。 ○展示場、収蔵庫の老朽化対策や温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施したか。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P9～16 1(2)-1、1(2)-2 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 P27～28 1-(2)収蔵品の管理・保存</p> <p>〈主要な業務実績〉 (2) 1 収蔵品の現状を確認の上作成したデータ(写真・テキスト)を蓄積してデータベース化し、展示・研究等の業務に活かした。(4館) 収蔵品の修理や列品貸与の際の点検時等に作成している保存カルテについて、作成・蓄積を継続して行った。(4館) ・保存カルテ作成件数 2,115 件 詳細はアウトプット情報を参照。 ・寄託品の確認作業を定期的に行った。(4館) ・文化財情報システム(業務システム)について、運用を継続し、収蔵品データを更新した。(4館) なお九州国立博物館では、より充実した業務システムの構築を目指し、新システムに向けた取組を行った。</p> <p>(2) 2 展示場、収蔵庫等において、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的に実施した。(4館)</p> <p>・IPM(総合的有害生物管理)活動に関して、市民ボランティアや地元 NPO 法人と連携して実施した。(九博) ・平成知新館の開館に際し、収蔵庫・展示室の環境を万全に整え、収蔵品・寄託品の移動を行った。(京博) ・明治古都館(本館)免震補強ほかの準備として、保存活用計画報告書の原案を作成し</p>	<p>〈自己評価書参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 総括表 P4～9 1(2)適切な保存</p> <p>〈評定と根拠〉 評定: B 収蔵品の管理・保存は、4館とも徹底した取り組みがなされており、データの蓄積、文化財情報システム、保存カルテ作成件数の推移を含め順調である。 展示場、収蔵庫の環境についても、IPM の実施・徹底、温湿度管理等により、対応がなされている。 九州国立博物館では、非接触で取得した3次元データを3D プリンタで出力し、複製品展示や触れる展示として活用している。これは文化財の適切な保存と利活用という相反するもの。 〈課題と対応〉 特になし</p>	<p>評定 B</p> <p>〈評定に至った理由〉 東博、京博、奈良博及び九博(以下単に「4館」という。)において収蔵品の保存・管理が適切に継続されていることが、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 修理や貸出の際に作成する保存カルテを含め、保存・管理する文化財のデータの蓄積が着実に進められており、今後の修理計画等に関する基本的な情報として共有されることが可能となっている。 〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針〉 なし。 〈その他事項〉 ○有識者コメント ・東博の視察において、収蔵品の管理、保存が適切に行われることを確認した。 ・管理・保存業務の可視化に関する視点が必要。展示だけがナショナルギャラリーの使命ではないことへの理解に向けて発信してほしい。 ・定量的評価になりにくい項目だけに評価が難しいかもしれないが、各館において展示場及び収蔵庫の環境管理等が適切に行われていることは、より強調されてよいと思われる。 ・九博による「てつほう」の復元・展示は特色ある保存事業の一つとして特に評価すべき。 ・国内最高の水準にあると判断される。</p>
				た。(京博)		

4. その他参考情報						
特になし						

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-1-(3)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 1. 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (3)収蔵品の保存技術の向上			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ																
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)						
指標等			達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
修理件数 (本格修理)(件)	(東博)	計画値	—	—	40	40	40	40			予算額(千円)	140,000	140,000	140,000	140,000	140,000
		実績値	—	—	106	95	93	78			決算額(千円)	140,047	144,144	145,147	126,341	
		達成度	—	—	265.0%	237.5%	232.5%	195.0%			経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(京博)	計画値	—	—	10	10	10	10			経常利益(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	—	10	13	15	11			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
		達成度	—	—	100.0%	130.0%	150.0%	110.0%			従事人員数(人)	48	47	46	45	45
	(奈良博)	計画値	—	—	8	9	9	9			※予算額は、年度当初の文化財修理費の予算額を計上している。 ※決算額は、文化財修理を外注した決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、契約差額である。 ※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。					
		実績値	—	—	11	9	8	9								
		達成度	—	—	137.5%	100.0%	88.9%	100.0%								
	(九博)	計画値	—	—	15	15	15	21								
		実績値	—	—	19	20	17	23								
		達成度	—	—	126.7%	133.3%	113.3%	109.5%								
	(合計)	実績値	—	—	146	137	133	121								

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (3)収蔵品の保存技術の向上に努めること。	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (3)-1 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (3)-1 収蔵品の修理 ① 計画的な修理及びデータの蓄積 ② 科学的な技術を取り入れた修理	(主定量的指標) ・修理件数(本格修理) (その他の指標) 特になし (評価の視点) ○緊急性の高い収蔵品等から計画的に修理を実施したか。 ○文化財保存修理所の整備・充実のための取組を行ったか。 ○計画的な収蔵スペースの確保が図られたか。	<実績報告書等参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P17~26 1(3)-1, 1(3)-2, 1(3)-3 平成26年度自己点検評価報告書 統計表 P29~48 1-(3)収蔵品の修理	<自己評価書参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P9~16 1(3)計画的な修理	(評定に至った理由) 4館それぞれの文化財の修理計画に基づきながら、全体では計画値を大きく上回る件数の本格修理が実施された。修理に際しては、最先端の科学的分析が行われており、例えば解体しなければならぬ彫刻の内部構造や、絵画に用いられている紙の繊維、顔料の種類等の解明結果を活用している。 京博においては、文化財保存修理所の改修工事が順調に進行しているとともに、平成26年度に開館した平成知新館に最新の環境モニタリングシステムを導入し、展示室、収蔵庫の温湿度環境のデータを自動的に計測しサーバーに蓄積する運用を開始した。 収蔵品、寄託品等の増加に対する収蔵スペースの確保については、限られた容積に最大限の工夫を施している。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 (指摘事項、業務運営上の課題及び改善策) なし。 (その他事項) ○有識者コメント ・東博の視察において、保存技術が向上していることを確認した。合わせてそれを展示して公開していることは大いに評価される。 ・各館いずれも保存技術の向上に努めているが、得られた情報の共有活用の実態、もしくはそれに向けての見取り図の開示が望まれる。 ・事例を示した、具体的な評価になっている。 ・寄付金による高額補修の実現(東博)や、保存技術自体を展示することにより国民の理解を促めるなどの事業(複数館)も順調に行われた。 ・保存修復技術そのものは高水準にあるといえる
				<主要な業務実績> (3)-1 4館とも、各館の修理計画に基づいて収蔵品の修理を行い、修理件数は当年度の目標値を上回った。 ・修理件数(本格修理) 121件 ・詳細はアウトプット情報を参照。 ・緊急性の高い収蔵品等から計画的に修理を実施した。(4館) ・作品の劣化予防のため413件の応急修理を実施するなどの取組を行っている。(東博) ・大型垂直式X線断層撮影装置(東博)やマイクロフォーカスX線CTシステム(京博)の運用を開始、X線透過撮影(奈良博)や蛍光X線分析(九博)など、全館で最新の科学機器を文化財の修理に活用している。	<評定と根拠> 評定:B 緊急性の高い収蔵品等から計画的に本格修理を実施し、劣化予防の応急修理もを行っている。また、最新の科学機器の活用を全館で行い、計画的な修理へ役立っている。収蔵品等の修理においては、寄附金や助成金を活用しており、各館とも目標値以上の修理を実施することができた。 文化財保存修理所の整備・充実についても、京都国立博物館文化財保存修理所改修工事の進捗を含め、順調である。 博物館にとって収蔵品・寄託品の増加への対応は喫緊の課題であり、収蔵スペースの確保については、各館とも安全かつ効率的な収容について検討を継続し、対応している。	
				(3)-2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に向けた取組を継続し、対応している。 (京博・奈良博・九博) ・京都国立博物館文化財保存修理所の改修工事は、一期工事を完了し、電気設備及び機械設備の改修工事に着手した。 ・京都国立博物館と奈良国立博物館の文化財保存修理所の空調機を点検し、フィルタ一を交換した。九州国立博物館の保存修復施設については、室内温湿度環境の改善や中二階増設の検討を行い、修復収蔵庫内の既存木製棚に棚板を設置した。	<課題と対応> 特になし	
(3)-3 収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査・研究並びに修理に伴う	(3)-2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に向けた取組を継続し、対応している。 (3)-3 収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査・研究並びに修理に伴う	(3)-3 収蔵スペースの確保、及び調査研究のための基本設備の充実について検討・実施し、機器の導入を進めた。 ・東京国立博物館と京都国立博物館の収蔵庫に棚を設置した。				

	調査・研究のための基本設備の充実を図る。	調査研究のための基本設備の充実に向けた検討を行う。		・京都国立博物館平成知新館にて「環境モニタリングシステム」の運用を開始し、温湿度を即時にモニタリングし、データ蓄積が出来るようになった。 ・京都国立博物館のフィルム保管庫、九州国立博物館の写場の整備を行った。		が、これに関わる領域には絶対的な人的不足の問題が慢性化しつつあり、おおきな危惧を抱かざるを得ない。
--	----------------------	---------------------------	--	---	--	---

4. その他参考情報						
特になし						

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報						
1-2-(1)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (1) 展覧事業の充実					
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385	

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
博物館の年間総来館者数(人)	(東博)	実績値	—	1,756,590	1,555,694	1,322,288	1,913,643			予算額(千円)	2,105,668	2,037,862	2,955,208	2,255,032	1,942,926
	(京博)	実績値	—	239,767	234,540	148,429	539,134			決算額(千円)	2,125,773	2,354,675	3,004,190	2,534,914	
	(奈良博)	実績値	—	469,463	450,235	461,690	476,993			参考決算額(千円)	854,149	1,769,673	2,081,253	2,219,371	
	(九博)	実績値	—	712,594	1,107,036	727,603	804,663			経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)	実績値	—	3,178,414	3,347,505	2,660,010	3,734,433			経常利益(千円)	—	—	—	—	—
平常展来館者数(人)	(東博)	計画値	—	362,470	362,470	362,470	362,470			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	—	324,597	416,430	484,429	587,528		従事人員数(人)	100	99	99	94	94
		達成度	—	—	89.6%	114.9%	133.6%	162.1%							
	(京博)	計画値	—	171,110	—	—	—	96,981							
		実績値	—	—	—	—	—	265,791							
※基準値は、前中期目標期間実績の年度平均		達成度	—	—	—	—	—	274.1%							
	(奈良博)	計画値	—	118,032	118,032	118,032	118,032	94,338							
		実績値	—	—	130,839	145,914	122,075	92,147							
		達成度	—	—	110.9%	123.6%	103.4%	97.7%							
	(九博)	計画値	—	380,690	380,690	380,690	380,690	380,690							
平常展陳列替件数(件)		実績値	—	—	358,366	460,525	349,848	357,362							
		達成度	—	—	94.1%	121.0%	91.9%	93.9%							
	(合計)	実績値	—	—	813,802	1,022,869	956,352	1,302,828							
	(東博)	計画値	—	—	4,000	4,000	5,800	5,800							
		実績値	—	—	4,914	6,989	5,708	5,506							
※予算額は個別に計上することができないため、展覧事業費予算額から文化財購入費予算額を控除した額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、展覧事業費決算額から文化財購入費決算額を控除した額を計上している。 ※参考決算額は、上記決算額のうち、ディスプレイ費等の損益計算書・展覧事業費の費用額を計上している。 (平成 23 年度の予算額と決算額の差額は、決算において「その他業務費」の勘定に 916,492 千円を計上していることによる。 平成 24 年度以降は、「その他業務費」の勘定を廃止し、展覧事業費等の各事業に費用計上している。) ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。		達成度	—	—	122.9%	174.7%	98.4%	94.9%							
	(京博)	計画値	—	—	—	—	—	700							
		実績値	—	—	—	—	—	693							
	達成度	—	—	—	—	—	99.0%								

(奈良博)	計画値	—	—	400	400	70	80	※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。	
	実績値	—	—	481	465	130	208		
	達成度	—	—	120.3%	116.3%	185.7%	260.0%		
(九博)	計画値	—	—	1,100	1,100	1,100	800		
	実績値	—	—	1,373	1,195	1,157	1,027		
	達成度	—	—	124.8%	108.6%	105.2%	128.4%		
(東博)	計画値	—	—	5,500	6,500	7,500	7,500		
	実績値	—	—	7,394	9,190	8,824	8,161		
	達成度	—	—	134.4%	141.4%	117.7%	108.8%		
(京博)	計画値	—	—	—	—	—	1,000		
	実績値	—	—	—	—	—	980		
	達成度	—	—	—	—	—	98.0%		
(奈良博)	計画値	—	—	700	700	500	475		
	実績値	—	—	1,092	814	632	675		
	達成度	—	—	156.0%	116.3%	126.4%	142.1%		
(九博)	計画値	—	—	1,700	1,700	1,700	1,000		
	実績値	—	—	2,417	2,416	2,750	1,904		
	達成度	—	—	142.2%	142.1%	161.8%	190.4%		
平常展外国 語パネル の設置数 (%)	(東博)	計画値	80%	—	80%	80%	80%	80%	
		実績値	—	—	96%	97%	100%	100%	
		達成度	—	—	120.0%	121.3%	125.0%	125.0%	
	(京博)	計画値	80%	—	—	—	—	80%	
		実績値	—	—	—	—	—	100%	
		達成度	—	—	—	—	—	125.0%	
	(奈良博)	計画値	80%	—	80%	80%	80%	80%	
		実績値	—	—	89%	100%	91%	100%	
		達成度	—	—	111.3%	125.0%	113.8%	125.0%	
	(九博)	計画値	80%	—	80%	80%	80%	80%	
		実績値	—	—	94%	87%	85%	92%	
		達成度	—	—	117.5%	108.8%	106.3%	115.0%	
特別展来館 者数(人)	(東博)	実績値	—	—	1,431,993	1,139,264	837,859	1,326,115	
	(京博)	実績値	—	—	239,767	234,540	148,429	273,343	
	(奈良博)	実績値	—	—	338,624	304,321	339,615	384,846	
	(九博)	実績値	—	—	354,228	646,511	377,755	447,301	
	(合計)	実績値	—	—	2,364,612	2,324,636	1,703,658	2,431,605	
特別展開催 回数(回) ※海外展を 含む	(東博)	計画値	3~4	—	3~4	3~4	3~4	3~4	
		実績値	—	—	7	9	8	8	
		達成度	—	—	175.0%	225.0%	200.0%	200.0%	
(京博)	計画値	2~3	—	2~3	2~3	2~3	2~3		

15

海外展開催 (回)	(奈良博)	実績値	—	—	6	5	3	2		
		達成度	—	—	200.0%	166.7%	100.0%	100.0%		
		計画値	2~3	—	2~3	2~3	2~3	2~3		
	(九博)	実績値	—	—	3	3	3	3		
		達成度	—	—	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		
		計画値	2~3	—	2~3	2~3	2~3	2~3		
	(合計)	実績値	—	—	5	4	5	5		
	(合計)	実績値	—	—	21	21	19	18		
		(東博)	実績値	—	—	1	2	1	1	
		(京博)	実績値	—	—	2	0	0	0	
		(奈良博)	実績値	—	—	0	0	0	0	
		(九博)	実績値	—	—	1	0	1	0	
(合計)		実績値	—	—	4	2	2	1		

16

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。	<p>(主たる定量的指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平常展来館者数 ・平常展陳列替件数 ・平常展陳列総件数 ・平常展外国語パネルの設置数 ・特別展開催回数 ・特別展来館者数 <p>(その他の指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博物館の年間総来館者数 ・特別展来館者数 ・海外展回数 <p>(評価の視点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国民のニーズや学術的動向等を踏まえた質の高いものとしたか。また、観覧者の理解が深まるよう展示・解説を工夫したか。 ○(平常展) 展示事業の中核として、各館の特色を十分に発揮した体系的・適時的な展示としたか。 ○(平常展) 作品のキャプションについては、すべてに英語訳を付したか。また、海外からの来館者向けに、展示テーマごと外国語の解説パネル等を80%以上設置したか。 ○(特別展) 我が国の博物館の中核的拠点にふさわしい質の高い展示としたか。また、個々の展示内容・観覧環境を踏まえた目標来館者数を定め、それを達成したか。さらに来館者数満足度を把握し、改善を図ったか。 ○(海外展) 海外において展示会を開催し、日本の歴史と伝統文化を紹介したか。 	<p><実績報告書等参照箇所></p> <ul style="list-style-type: none"> 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P27～51 2(1) 平成26年度自己点検評価報告書 統計表 P118～132 a <p><主要な業務実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・博物館の年間総来館者数 26 年度合計 373 万 4,433 人 ※25年度 266 万 0,010 人 (約107万人、40.4%増) 内訳はアウトプット情報を参照 <p>(平常展)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平常展来館者数 1,302,828 人 内訳はアウトプット情報を参照 ・平常展陳列替件数 ・平常展陳列総件数 ・平常展外国語パネルの設置数 それぞれアウトプット情報を参照 ・新平常展示館「平成知新館」を26年9月13日に開館した。(京博) ・黒田記念館を27年1月にリニューアルオープンした。(東博) ・定期的な陳列替を実施し、テーマ性を持った特集陳列等を随時開催し平常展の充実に向けた。(4館) <p>(特別展)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別展来館者数 2,431,605 人 ・特別展開催回数 18 回 (海外展含む) 内訳はアウトプット情報を参照 ・九州国立博物館では25年6月に世界記憶遺産に登録された国宝「御堂関白記」の公開を中核とする特別展「近衛家の国宝 京 	<p><自己評価書参照箇所></p> <ul style="list-style-type: none"> 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P17～34 2(1) <p><評定と根拠></p> <p>評定：B</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博物館の年間総来館者数は、今中期目標期間中最高値の3,734,433人を記録した。この来館者数は国民のニーズを踏まえて質の高い展示等を実施したことを反映している。(平常展) 各館の特色を十分に活かし、テーマ別、時代順等の展示を行った。 ・平常展来館者数については、平成知新館が開館した京都国立博物館と東京国立博物館において計画を大きく上回る来館者数を達成した。奈良国立博物館と九州国立博物館での若干の未達成があったが、全体としては来館者数増となっている。 ・平常展陳列替件数については、奈良国立博物館と九州国立博物館で目標値を大幅に上回った。なお、東京国立博物館は本館で特別1室緊急改修の影響で、京都国立博物館では平成知新館の実際の利用開始の際の陳列案の見直しにより目標値を若干下回ったが、全体としては順調な結果となっている。また、テーマ性を持った特集陳列等を随時開催し平常展の充実に向けた。 ・平常展陳列総件数は、京都国立博物館は陳列替件数と同じ事情で若干目標値に届かなかったものの、他の3館で目標値を大幅に超える実績を上げており、順調である。 ・平常展外国語パネルの設置数はいずれの館も目標を大きく上回っている。また、作品キャプション全てに英語訳を付しており順調 	<p><評定に至った理由></p> <p>4館とも平常展及び特別展を計画的に実施しており、それぞれの目標とする計画値を達成しているとともに、来館者のアンケート調査の結果も概ね良好である。</p> <p>平常展の来館者数は、東博及び京博が計画値を大幅に超え、奈良博及び九博はこれに達せず課題を残すこととなったが、全体としては計画値の139%に達する水準で成果を上げた。とりわけ平成26年9月に開館した京博の平成知新館での平常展は、開館記念展「京へのいざない」と銘打って多数の国宝・重要文化財を展示し、積極的な広報活動を行った結果、計画値に対し274%の高い水準で顕著な成果を示した。平常展については定期的に陳列替えを行うこととし、目標とする陳列件数の計画値を掲げているが、陳列替えの回数はほぼ計画通りであり、陳列総件数は計画値の117%に達する水準で成果を上げた。また、外国語による解説パネルの設置数についても目標値を掲げており、これについても計画値の118%に達する水準で成果を上げた。来館者の平常展に関する満足度アンケート調査で上位の評価(「とても良かった」又は「良かった」)を上げた人は、東博においては77%、京博においては74%、奈良博においては81%、九博においては62%、4館全体の平均で72.8%となっており、概ね満足を得られているものと判断した。</p> <p>特別展の来館者数の目標値は、展示会ごとに定めている。4館全体の合計では、目標値1,917,000人に対し来館者数は2,431,605人により126.8%の達成率となった。また、開催回数は計画値の13回に対して18回になっており、達成率は138.5%となっている。来館者の満足度アンケート調査で上位の評価(「とても良かった」「良い」及び「良かった」「まあまあ良い」)を上げた人は、東博の平均値で72.5%、京博の平均値で88%、奈良博の平均値で82.8%、九博の平均値で85.4%、4館全体の平均値で</p>
(1) 展示事業の充実 我が国の中核的拠点として、展示事業については常に点検・評価を行うなど改善への取組みを進め、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外に発信し、これらについての理解促進に寄与するものとなるように努めること。	(1) 展示事業の充実 我が国の中核的拠点として、展示事業については常に点検・評価を行い国民のニーズ、学術的動向等を踏まえた質の高いものを実施するとともに、展示会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、国際文化交流に配慮する	(1) 展示事業の充実 東京、京都、奈良、九州4館それぞれの特色を活かし、国内はもとより、海外からも国立博物館を訪れたいくなるような魅力ある平常展や特別展を実施する。	①-1 平常展	①-2 展示説明の充実		

17

				<p>都・陽明文庫展」を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京都国立博物館の特別展示会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」展においても予備調査や修理を通じて得られた最新の知見を盛り込んだ。他の展示会においても同様に事前調査や普段の調査研究の成果を反映した展示会を企画し、実施した。 ・東京国立博物館の特別展「キトラ古墳壁画」では、複製陶板により剥き取り以前の壁画全体を実感してもらう工夫を行なった。また、奈良国立博物館の「国宝 醍醐寺のすべて」展では単なる名品紹介や時代順展示ではなく、醍醐寺の歴史的特色と役割を明確に打ち出す展示構成とした。以上に代表されるように、観覧者の理解が深まるよう展示・解説の工夫を行った。(4館) ・特別展ではアンケートを実施して来館者の満足度を把握し、会期中の対応や次の展示会への改善へ活かした。(4館) ・複製の利用や展示構成の工夫により観覧者の理解が深まるよう展示・解説の工夫を行った。(4館) <p>(海外展)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外展回数 1 件 ・クリーブランド美術館(米国)にて、「伝統の再創造：東京国立博物館所蔵 日本の近代美術」を開催した。(東博) 	<p>である。</p> <p>(特別展)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別展開催回数は、アウトプット指標に掲載の年度計画上の展示会を全て実施し、予定の開催回数をこなした。加えて、東京国立博物館では特別展「11 大津波と文化財の再生」を年度計画外で実施した。 ・特別展来館者数は、15 件中12 件の展示会で目標値を上回り全体として順調である。 奈良国立博物館の特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像」の来館者数 37,022 人が目標値 50,000 人を大きく下回り達成率 74.0%となったのは、近畿圏の仏像愛好家にとって東国の仏像に関する関心が、予想より低かったことが一因と考えられる。 ・事前調査や普段の調査研究の成果を反映した質の高い展示会を企画し、実施した。 ・特別展アンケートの集計結果は、京都国立博物館の特別展示会「南山城の古寺巡礼」の満足度 92%など、多くの展示会で高い満足度となった。 <p>(海外展)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画通り実施でき、日本の歴史と伝統文化を海外で紹介できた。 <p><課題と対応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・平常展来館者数の目標に達しなかった館があった。対応としては、一般のニーズや意識等の調査分析を行い、広報戦略を積極的に打ち出していくこと等で、来館者数増を図って行きたい。 ・京都国立博物館では特別展示会場である明治古館の耐震強度が必ずしも充分ではないため、開催の在り方を検討する予定である。 	<p>82.2%となっており、満足を得られているものと判断した。</p> <p>以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>(指摘事項、業務運営上の課題及び改善策)</p> <p>なし。</p> <p>(その他事項)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○有識者コメント ・外国語による解説パネルについては充実されつつあり、評価に異論はないが、入館者における外国人の著しい増加に対応して、設置の速度をさらに上げることが望まれる。 ・質の高い展示事業が実施された。特に京博の「南山城の古寺巡礼」の満足度92%は驚異的である。 ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・特別展の多くが魅力的な内容であった上に、各館の平常展の充実も、国立博物館のあるべき姿を実現したものと高く評価出来る。 ・大規模で社会的注目を集める展示事業は拡充の途にあるが、入館者数はあまり望めなくても、最新の研究を反映した展示を、たとえ小規模であっても補完的に推進すべきと考える。
--	--	--	--	---	---	--

4. その他参考情報

特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-2-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (2)教育活動の充実				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第3号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ																
①主要なアウトプット(アウトカム)情報						②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)										
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
講演会、ギャラリートークの参加者数(人)	(東博)	計画値	—	7,830	7,830	7,830	7,830			予算額(千円)	55,238	46,592	75,943	75,898	85,209	
		実績値	—	12,664	13,193	15,777	14,419			決算額(千円)	95,876	63,571	63,499	99,237		
		達成度	—	161.7%	168.5%	201.5%	184.2%			経常費用(千円)	—	—	—	—	—	
	(京博)	計画値	—	2,638	2,380	1,860	3,120			経常利益(千円)	—	—	—	—	—	
		実績値	—	1,450	3,150	2,062	4,596			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—	
		達成度	—	55.0%	132.4%	110.9%	147.3%			従事人員数(人)	51	49	49	47	47	
	(奈良博)	計画値	—	2,450	2,600	2,600	2,650			※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・教育普及事業費の予算額を計上している。						
		実績値	—	3,006	3,454	3,219	3,525			※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・教育普及事業費の決算額を計上している。						
		達成度	—	122.7%	132.8%	123.8%	133.0%			※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。						
	(九博)	計画値	—	2,030	3,100	3,100	3,100			※従事人員数は東京国立博物館の学芸企画部博物館教育課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤研究職員の人数を計上している。						
		実績値	—	7,833	8,354	7,276	4,694									
		達成度	—	385.9%	269.5%	234.7%	151.4%									
(合計)	実績値	—	24,953	28,151	28,334	27,234										
キャンパスメンバーズ加入校数(件)	(東博)	実績値	—	37	38	43	44									
	(京博)	実績値	—	30	30	29	29									
	(奈良博)	実績値	—	28	27	26	27									
	(九博)	実績値	—	28	24	24	24									
	(合計)	実績値	—	123	119	122	124									
ボランティア数(人)	(東博)	実績値	—	169	170	169	173									
	(京博)	実績値	—	64	45	45	210									
	(奈良博)	実績値	—	87	121	114	110									
	(九博)	実績値	—	355	308	287	352									
	(合計)	実績値	—	675	644	615	845									

賛助会等加入件数(件)	(東博)	実績値	—	292	332	379	414				
	(京博)	実績値	—	375	353	336	351				
	(奈良博)	実績値	—	65	68	70	73				
	(合計)	実績値	—	732	753	785	838				
	(東博)	友の会	実績値	—	1,802	1,570	1,586	2,145			
友の会・バスポート加入者数	(東博)	バスポート	実績値	—	17,672	16,569	16,474	20,302			
		ページック	実績値	—	—	—	1,038				
		小計	実績値	—	19,474	18,139	18,060	23,485			
	(京博)	バスポート※	実績値	—	2,667	3,064	2,295	6,522			
		(奈良博)	バスポート※	実績値	—	2,615	2,486	2,598	3,162		
		(九博)	友の会	実績値	—	117	196	141	192		
	(合計)	バスポート	実績値	—	3,093	4,224	4,633	4,990			
		小計	実績値	—	3,210	4,420	4,774	5,182			
		(合計)	実績値	—	27,966	28,109	27,727	38,351			

※機構内で統一するため、京都国立博物館では24年4月より、奈良国立博物館では24年1月より、「友の会」から「バスポート」へ名称変更した。(会費・特典等に変更無し)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。 (2)教育活動の充実 日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、子どもから人まで、対象に応じた多彩な学習機会の提供を実施し、ボランティアを育成し、教育活動の充実を図るとともに、次代の博物館事業を担う人材育成に寄与すること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図るとともに、政府の観光政策と連動した観光資源として活用を図る。 (2)教育活動の充実 日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、子どもから人まで、対象に応じた多彩な学習機会の提供を実施し、ボランティアを育成し、教育活動の充実を図るとともに、次代の博物館事業を担う人材育成に寄与すること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (2) 教育活動の充実 日本の歴史・伝統文化及びアジア諸地域の歴史・文化の理解促進を図り、国立博物館としてふさわしい教育普及事業を実施する。 ①学習機会の提供 ②-1 ボランティア活動の支援 ②-2 博物館支援者の増加 ③大学との連携	〈主な定量的指標〉 ・講演会、ギャラリートークの参加者数 〈その他の指標〉 ・キャンパスメンバーズ加入校数 ・ボランティア数 ・賛助会等加入件数 ・友の会・パスポート加入者数 〈評価の視点〉 ○講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の目標参加者数を達成したか。 ○ボランティアを支援したか。また、企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図ったか。 ○大学との連携事業等を実施したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P52～73 2-(2) 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 P50～84 2-(2) 〈主要な業務実績〉 学習機会の提供 特別展・平常展に関連した講演会・ギャラリートーク等のほか、ファミリー向けプログラムや小中学生向けワークショップなど、幅広い層に楽しむ機会を提供した。 ・講演会、ギャラリートークの参加者数 27,234 人 内訳はアウトプット情報を参照 ・キャンパスメンバーズ加入校数 124 件 内訳はアウトプット情報を参照 ・「アジアンめりえ」等の体験型プログラム(東博)、訪問授業「文化財に親しむ授業」(京博)、世界遺産学習事業(奈良博)、館外における体験プログラム「きゅーはくきやらばん」(九博)等を実施した。 ボランティア活動の支援 各館でボランティアの自主企画等を支援した。 ・ボランティア数 845 人 内訳はアウトプット情報を参照 ・平成知新館の開館に合わせ、新規ボランティア事業「京博ナビゲーター」の活動を立ち上げた。(京博) 博物館支援者の増加 各種会員制度によるリピーターの拡大、及び支援者の増加に努めた。 ・賛助会等加入件数 838 件 ・友の会・パスポート加入者数 38,351 件 内訳はアウトプット情報を参照	〈自己評価書参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 総括表 P35～48 2(2) 〈評定と根拠〉 評定:B 講座・講演会をはじめ、体験型プログラムなど多様なプログラムを各館で提供し、目標を大きく上回る参加者を得ている。 講演会、ギャラリートークの参加者数については、順調に目標を達成している。 キャンパスメンバーズの加入校数については、継続的な取組みの結果、前年度より加入校を増やすことが出来た。 ボランティア数については、平成知新館開館もあり昨年度より大幅に増加した。また、その活動も支援した。 賛助会等加入件数については、順調に加入者数が増え、支援者の増加となっている。 友の会・パスポート加入者数については、新規の会員区分を設定するなど加入者増への取組みも実施している。また、展覧会の来館者数増加に伴って増加している。 企業との連携については、共同企画や広報協力を実施し、博物館の認知度向上につなげた。 大学との連携事業等については、各種の事業を継続して実施している。 〈課題と対応〉 特になし	〈評定に至った理由〉 講演会等の教育活動は、4館ともイベントの種別ごとに回数及び参加者数の目標値を設定し、実施している。東博は、4種のイベントを計77回実施し7,830人の参加者を得る目標に対し、計127回、参加者数14,419人の実績(達成率113.8%、120.6%)の平均は実施回数155.2%、参加者137.8%。以下同)を上げた。京博は、4種のイベントを計23回実施し3,240人の参加者を得る目標に対し、計34回、参加者数4,400人の実績(達成率113.8%、120.6%)を上げた。奈良博は、3種のイベントを計27回実施し2,650人の参加者を得る目標に対し、計27回、参加者数3,525人の実績(達成率100%、131.7%)を上げた。九博は、3種のイベントを計54回実施し3,100人の参加者を得る目標に対し、計82回、参加者数4,694人の実績(達成率163.3%、153.1%)を上げた。4館合計では、14種のイベントを計181回実施し16,820人の参加者を得る目標に対し、計270回、参加者数27,038人の実績(達成率133.1%、135.8%)を上げた。 このほか東博では、教育活動のため、新たに本館19室に「みどりのライオン 体験コーナー」を開設した。このコーナーでは、伝統模様のデザインによるポストカードの作成、「e国宝」を利用した国宝の高精細画像、制作工程模型展示、文化財の三次元データを利用した3D画像などが体験でき、年間で197,544人が利用した。また京博では、平成知新館に新たな講堂が設けられたことにより、従前に増して参加者数を得られる環境が整った。 教育活動に対するボランティア協力への支援については、3館(東博、奈良博、九博)は継続的に実施しており、平成26年度から新たに京博でも開始した。このうち東博では、新たにスクールプログラム班を立ち上げ研修を行った後、プログラムの一部をボランティアによって実施した。京博は平成知新館の開館に合わせ、新規ボランティアである京博ナビゲ

21

				<p>・26年4月に会員制度の見直しを行った。その結果、個人会員の大幅増を達成できた。団体会員は数減となったが、金額ベースでは増となった。(東博)</p> <p>・百貨店との共同企画(東博)や広報協力(京博・奈良博・九博)を実施し、博物館の認知度向上につなげた。</p> <p>大学との連携 ・インターンシップ事業を継続して実施した。(東博・奈良博・九博) また、博物館実習の受け入れ(九博)や大学への客員教授等の派遣(京博・奈良博)を行った。</p>	<p>ーターを募集した。150名の募集に対し350名の応募があり、選考の結果163名が登録され研修を実施した。</p> <p>教育活動の一環として、年度計画に博物館支援者の増加を掲げ、友の会、パスポート会員、賛助会員、キャンパスメンバーズ等の多様な制度を設け拡充に努めている。東博は、平成26年度に新たに平常展を何回でも見られるベシック会員制度を設け1,038人の新規会員を募ったほか、大口会費の賛助会員の入会があった。各制度を合計した会員数については、4館とも前年度より増加させており、4館合計(個人・団体の合計)では39,286会員となっており、前年度に比べ10,678会員が増加した(平成25年度は28,608会員)。また企業や観光関係団体等と連携した教育・普及活動も継続的に進められており、例えば東博では、百貨店と連携した「博物館に初もうで」の広報活動と各種イベントで成果を上げるとともに、JR上野東京ライン開業に合わせ地元観光団体と連携した、国立科学博物館、国立西洋美術館との期間限定共通チケットの販売を行った。</p> <p>以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・参加者増加を評価。みどりのライオン体験コーナー等体験型プログラムが充実した。 ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・各館とも充実した教育活動を継続的に展開している。京博に代表されるパスポート会員の増加も、そうした活動との連携の成果であろう。 ・大きな前進を感じる。</p>
--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報	特になし
------------	------

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-2-(3)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (3) 快適な観覧環境の充実				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ																		
①主要なアウトプット(アウトカム)情報							②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)											
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度						
							予算額(千円)	20,000	29,500	29,000	60,000	55,000						
							決算額(千円)	19,003	35,015	28,950	61,970							
							参考決算額(千円)	18,049	22,330	20,533	34,962							
							経常費用(千円)	-	-	-	-	-						
							経常利益(千円)	-	-	-	-	-						
							行政サービス実施コスト(千円)	-	-	-	-	-						
							従事人員数(人)	85	86	84	84	84						
							※予算額は個別に計上することができないため、年度当初の平常展印刷費の予算額を計上している。											
							※決算額は個別に計上することができないため、平常展印刷費の決算額を計上している。											
							※参考決算額は、上記決算額のうち、4国立博物館の平常展に要するチラシ、パンフレット等の作成費を計上している。											
※従事人員数は東京国立博物館の総務部及び京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館の各総務課の常勤事務職員の人数を計上している。																		

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。 (3) 快適な観覧環境の提供 国民に親しまれ、他館の見本となる施設を目指し、来館者の立場に立った観覧環境の整備や観覧料金及び開館時間の弾力化などの利用者の要望を踏まえた管理運営を行い、来館者の期待に応えること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図るとともに、政府の観光政策と連動した観光資源としても活用を図る。 (3) 快適な観覧環境の提供 国民に親しまれる施設を目指し、来館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (3) 快適な観覧環境の提供 ①施設・設備等の充実 ② 来館者満足度調査及び利用者に対応した運営 ③ ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 特になし 〈評価の視点〉 ○高齢者、障がい者、外国人等の利用に配慮した観覧環境の提供を行ったか。 ○利用者のニーズを踏まえ、観覧料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行ったか。 ○利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等のサービスを改善したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P74~87 2(3) 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 P85 2-(3)	〈自己評価書参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 総括表 P49~56 2(3)	〈評定に至った理由〉 バリアフリー施設は、関係法令で推奨される水準に達しており、高齢や障がいのある来館者に対し、適当な環境とサービスが提供されていると認められる。このほか、乳幼児及びその保護者や外国人を対象とするサービスの改善にも努めており、例えば東博では託児室や授乳室を新設するとともに、外国人モニターに対するインタビューを行うなど、サービスの改善に努めている。 観覧のため長い待ち時間が生じる特別展については、ウェブサイト等で混雑状況等を広報するとともに、臨時の日除けテントや給水所等を設けるなどの対策をとっている。特に来館者の多かった東博の「台北 国立故宮博物院展」と「日本国宝展」では、開館時間を臨時に延長し夜間開館を行った。 飲食サービスの提供では、東博敷地内においてケータリングカーによる軽食販売が本格的に行われた。 このようなサービスの改善は、来館者のアンケートに寄せられたご意見が重要な情報源となっているが、アンケートの集計結果はウェブサイトでも公表されている。例えば、「もっと詳しい説明がほしい。」「行列を予測し、予約制や整理券など混雑緩和の努力をしてほしい。」「照明が暗い」などのご意見があげられているが、観覧環境をさらに改善するための課題を公表し、継続的な努力が行われているものと認められる。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針〉 なし。 〈その他事項〉 ○有識者コメント
				〈主要な業務実績〉 施設のバリアフリー化、各種案内の充実等により、高齢者、障がい者、外国人等の利用に配慮した快適な観覧環境を提供した。 ・授乳室を、東京国立博物館正門プラザ(26年4月新設)内、及び京都国立博物館平成知新館(26年9月開館)内に新たに設置した。 ・幼児用補助便座を身障者トイレに取り付けた。(九博) ・多言語(6~7言語)による案内パンフレットの製作・配布を行った。(4館) ・特別展音声ガイドの貸出を行った。(4館) ・平常展音声ガイドは4言語(京博)、3言語(九博)での提供を行った。 ・スマートフォンアプリ「トコハクナビ」(日・英)を引き続き提供し、機能追加のバージョンアップを行った。ダウンロード件数も順調に伸びている。(東博) ・平常展及び各特別展において来館者アンケートを実施し、その結果を観覧環境改善に活かした。(4館) ・特別展「台北 国立故宮博物院一神品至宝一」では、混雑緩和のため開館時間を延長した。(東博・九博) ・混雑対策として、入場待ち来館者向けのテントの設置(東博・京博・奈良博)、ウェブ等で混雑状況・待ち時間情報の提供等を行った。(4館) ・京都国立博物館平成知新館の開館に伴	〈評定と根拠〉 評定:B 各館施設のバリアフリー化は一定の水準に達しており、更に、我が国を代表する施設として多様な来館者に対応すべく、検討・工夫を継続して行っている。 京都国立博物館における平常展(平成知新館名品ギャラリー)音声ガイドは、4言語にて新たに導入し、外国人利用者へのサービス向上を図っている。 来館者アンケートを実施し、随時館の運営に反映している。特に特別展の混雑対策には継続して取り組んでおり、来館者のニーズを踏まえた開館時間延長も行っている。 ミュージアムショップ・レストランにおいて、オリジナルグッズの開発や、特別展に関連したメニューを提供するなどの取組みを行い、サービスを改善している。 〈課題と対応〉 混雑対策については、引き続き検討を重ね、「一」では、混雑緩和のため開館時間を延長した。(東博・九博) ・混雑対策として、入場待ち来館者向けのテントの設置(東博・京博・奈良博)、ウェブ等で混雑状況・待ち時間情報の提供等を行った。(4館) ・京都国立博物館平成知新館の開館に伴	

				い、館内に新たにミュージアムショップとレストランを設けた。 ・東京国立博物館では正門プラザと黒田記念館内に新たにミュージアムショップを設置した。 ・ミュージアムショップと協力し、オリジナルグッズの開発を行った。(4館) ・特別展に関連したメニューを提供した(4館)	・京博における音声ガイドの四か国語化を評価する。スマートフォンアプリや Twitter による待ち時間情報等、双方向性に向けて一層の努力工夫が望まれる。 ・一般見学者のための環境改善もさることながら、パンフレットや表示を中心に、海外からの見学者向けのサービスにも向上が認められる。
--	--	--	--	---	---

4. その他参考情報					
特になし					

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-2-(4)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (4)文化財情報の発信と広報の充実				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第7号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報								②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)							
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
収蔵品写真等の既存フィルムデジタル化件数(件)	(東博)	計画値	—	3,000	1,000	1,000	300			予算額(千円)	597,470	577,268	1,283,989	686,536	965,171
		実績値	—	1,468	776	550,305	79			決算額(千円)	654,394	716,198	953,078	1,174,915	
		達成度	—	48.9%	77.6%	55030.5%	26.3%			参考決算額(千円)	80,513	33,364	22,966	17,397	
	(京博)	計画値	—	2,000	2,000	2,000	2,000			経常費用(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	2,165	2,732	2,682	5,536			経常利益(千円)	—	—	—	—	—
		達成度	—	108.3%	136.6%	134.1%	276.8%			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(奈良博)	計画値	—	3,000	3,000	3,000	3,000			従事人員数(人)	64	63	58	56	56
		実績値	—	5,297	4,924	7,615	5,154			※予算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の予算額を計上している。					
		達成度	—	176.6%	164.1%	253.8%	171.8%			※決算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の決算額を計上している。					
	(九博)	計画値	—	1,000	1,000	200	500			※参考決算額は、上記決算額のうち、4国立博物館の文化財情報の発信と広報の経費を計上している。					
		実績値	—	2,146	1,450	62	776			※従事人員数は東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の人数を計上している。					
		達成度	—	214.6%	145.0%	31.0%	155.2%								
収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数(件)	(東博)	計画値	—	3,000	3,000	3,000	6,000								
		実績値	—	10,566	9,566	9,865	10,720								
		達成度	—	352.2%	318.9%	328.8%	178.7%								
	(京博)	計画値	—	3,000	3,000	3,000	3,000								
		実績値	—	3,580	2,713	4,525	4,927								
		達成度	—	119.3%	90.4%	150.8%	164.2%								
	(奈良博)	計画値	—	3,000	3,000	3,000	3,000								
		実績値	—	6,103	4,960	4,648	5,478								
		達成度	—	203.4%	165.3%	154.9%	182.6%								
	(九博)	計画値	—	500	500	2,000	1,000								
		実績値	—	4,441	2,142	1,512	1,167								
		達成度	—	888.2%	428.4%	75.6%	116.7%								

ウェブサイト アクセス 件数(件)	(東博)	実績値	—	—	2,772,633	2,982,729	2,898,885	4,248,437		
	(京博)	実績値	—	—	1,835,640	1,837,113	1,562,480	2,964,705		
	(奈良博)	実績値	—	—	722,249	845,202	893,553	1,196,669		
	(九博)	実績値	—	—	1,150,408	2,078,279	1,209,272	1,827,152		
	「e 国宝」	実績値	—	—	1,139,318	1,420,662	1,676,762	1,515,442		

(※)東京国立博物館、九州国立博物館では、既存フィルムのデジタル化はほぼ完了している。

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	<p>〈主な定量的指標〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数 ・収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数 <p>〈その他の指標〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウェブサイトアクセス件数 <p>〈評価の視点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○収蔵品等に関するデジタル化目標件数を定め、それを達成したか。また、公開データ件数を増加させたか。 ○情報資料を収集し、レファレンス機能を充実させたか。 ○計画的な広報・情報提供を行ったか。 ○積極的な広報活動に努めたか。 	<p>〈実績報告書等参照箇所〉</p> <p>平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P88～109 2(4) 平成26年度自己点検評価報告書 統計表 P86～99 2-(4)</p> <p>〈主要な業務実績〉</p> <p>①デジタル化の推進 収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化について、各館ごとに目標値を定めて実施し、可能なものから随時公開した。(4館) ・収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数 アウトプット情報を参照 ・国宝・重要文化財の高精細画像(e 国宝)を継続して公開した。またiOS、Androidそれぞれのアプリ版「e 国宝」を継続して公開した。(4館) ・「日本美術院彫刻等修理記録」の整理とデータ修正が完了し、公開用のデータベースを新規に作成し、公開した(26年7月)。(奈良博)</p> <p>②博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化 ・収蔵品・展覧会出品作品等の新規撮影を計画どおり実施して関連データを整備・蓄積し、また、図書資料等の収集を継続的にし、レファレンスに供した。(4館)</p>	<p>〈自己評価書参照箇所〉</p> <p>平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P56～70 2(4)</p> <p>〈評定と根拠〉</p> <p>評定:B 収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化については、4館とも順調に実施しており、可能なものから随時公開をしている。東京国立博物館における既存フィルムのデジタル化については、保有するフィルム約32万枚のうち大半が既にデジタル化が完了している。このため、26年度のデジタル化件数目標値設定にあたっては、26年度新規撮影予定のうち、フィルム撮影分については、そのフィルムを26年度内にデジタル化する予定として、目標値設定をしていた。しかしながら、デジタル撮影への移行が予想以上に進んだため、撮影後にデジタル化する必要があるフィルムの数がそもそも少ないという状況となった。具体的には、26年度のフィルム撮影件数は、年度計画策定時の当初予定では300件(撮影6,000件のうち5,700件がデジタル撮影)に対し、実績では77件(撮影10,720件のうち10,643件がデジタル撮影)であった。このため、26年度は、新規フィルム撮影77件のフィルムにその他2件を加えた79件のフィルムについて、デジタル化を行ったものである。アウトプット情報等の記載は、目標値300件に対し実績79件、達成度26.3%ではあるが、デジタル化可能な分については全て実施しており、当事業の目的は達成されている。加えて、撮影そのもののデジタル化が当初の想定以上に進んだことも、むしろプラス要因として評価する。</p>	<p>評定 B</p> <p>〈評定に至った理由〉 収蔵品写真等のデジタル化は、東博は保有フィルム分(約32万枚)を既に完了しており、新規に撮影したフィルムのデジタル化を行っている。東博を除く3館の目標値に対する達成率は、京博が277%、奈良博が172%、九博が155%、平均で201%となっており、顕著な成果が認められる。京博は館内でデジタル化作業を行う要員を増やし、効率化を図った。現在では所蔵品等の写真撮影はデジタル撮影に移行しており、デジタル画像データの蓄積は順調である。その成果は、各館のウェブサイトでの画像検索サービスに活用されている。</p> <p>図書の収集活動は継続して行われており、新規入庫に関する情報も随時更新してウェブサイトで公表されている。東博では、図書振興財団の助成によりシーボルト旧蔵本の修理・保管箱の作成を行うとともに画像の一部をウェブサイトで公開した。</p> <p>ウェブサイト等の活用については、東博がスマートフォン向けモバイルサイトを新たに公開したほか、各館ともコンテンツの充実にも努めた。その結果、各館のウェブサイトアクセス件数は、東博が約425万件(対前年度135万件増)、京博が約296万件(対前年度140万件増)、奈良博が約120万件(対前年度30万件増)、九博が約183万件(対前年度62万件増)、合計で約1,024万件(対前年度367万件増)という大幅な増加を示した。</p> <p>以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・ウェブサイトのアクセス数は前年度比で大幅に増</p>

<p>情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。</p> <p>③展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。</p> <p>④広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。</p> <p>⑤ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。</p>	<p>③ 広報計画の策定と情報提供</p> <p>④ 広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動</p> <p>⑤ ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。</p>			<p>・収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数 アウトプット情報を参照 ・東京国立博物館資料館では、レファレンス機能とサービスの充実を図り、利用者数は前年度に引き続き増加した。(東博)</p> <p>③ 広報計画の策定と情報提供 概要や年報(機構)、年間スケジュールのリーフレット、ポスター・チラシの作成・配布(4館)を計画的に行い、情報提供を行った。</p> <p>④ 広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動 各種広報印刷物の発行、ウェブサイト・モバイルサイトによる情報提供、メールマガジンの配信、SNSの活用等を行うとともに、マスメディアや公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。</p> <p>⑤ ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。 ウェブサイトの内容の充実を図り、アクセス件数(アウトプット情報を参照)の向上を図った。 ・平成知新館(新平常展示館)開館を控えた26年6月にウェブサイトを全面リニューアルした。(京博) ・スマートフォン対応のモバイルサイトを開発し、26年12月17日より公開した。(東博)</p>	<p>資料の収集・レファレンス機能の強化については、各館とも積極的な取組を行っており、撮影件数実績は4館とも目標値を上回っている。</p> <p>広報については、各館とも多様なメディアを通して積極的に行っている。</p> <p>ウェブサイトの充実については、4館とも各種の取組を行っており、いずれの館もアクセス件数は前年度より増加している。特に、平成知新館が開館した京都国立博物館では倍近くまで増えている。</p> <p><課題と対応> 収蔵品等に関するデジタル化件数について、中期計画にて「目標値を設定する」としていたが、東京国立博物館・九州国立博物館で中期目標期間中に既存フィルムのデジタル化が完了し、毎年度の目標値設定が困難な状況となった。次期中期計画策定時の課題として対応したい。</p>	<p>加しており、今後も増大傾向に向かうと考えられる。コンテンツの使いやすさ等、一層の努力工夫が求められる。</p> <p>・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。</p> <p>・ウェブサイトの充実が著しく、公開されているデータベースもきわめて質の高い優れた内容と評価出来る。アクセス数の大幅な上昇も当然の結果だ。</p>
--	--	--	--	---	--	--

4. その他参考情報
特になし

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-3-(1)	<p>1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 (1)収蔵品等の調査研究成果の公表</p>				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第6号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ																				
①主要なアウトプット(アウトカム)情報								②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)												
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度							
								予算額(千円)	597,470	577,268	1,283,989	686,536	965,171							
								決算額(千円)	654,394	716,198	953,078	1,174,915								
								参考決算額(千円)	23,155	28,023	26,246	21,319								
								経常費用(千円)	—	—	—	—	—							
								経常利益(千円)	—	—	—	—	—							
								行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—							
								従事人員数(人)	100	99	99	94	94							
																※予算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の予算額を計上している。				
																※決算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の決算額を計上している。				
																※参考決算額は、上記決算額のうち、紀要等調査研究に係る印刷物作成の決算額を計上している。				
								※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。												

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
<p>3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与</p> <p>博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。</p> <p>(1) 収蔵品等に関する調査・研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く博物館関係者の知見の向上に資すること。</p>	<p>3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与</p> <p>博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。</p> <p>(1) 収蔵品等に関する調査・研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展示会に関わる刊行物などで発表するとともに、こうした刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を行う。</p>	<p>3 我が国における博物館の中核としての機能の強化</p> <p>(1) 調査研究の成果の発信 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。 (東京国立博物館) 1) 東京国立博物館情報アーカイブを運用し、「東京国立博物館情報アーカイブ」等、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2) 紀要・図版目録等を刊行する。 3) 法隆寺遺跡納宝物特別調査概報を刊行する。 4) 研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回) (京都国立博物館) 1) 平成知新館開館に伴い、『京都国立博物館所蔵名品 120選—京(みやこ)へのいざない—』を刊行する。 2) 研究紀要『学叢』</p>	<p>〈主な定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 特になし</p> <p>〈評価の視点〉 ○各種刊行物等で調査・研究の成果を広く公表したか。また、各種刊行物の電子書籍化、インターネットでの公開を行ったか。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度業務実績報告書 個別表 P110～113 I3(1) 平成26年度業務実績報告書 統計表 P172～208 c-③～⑥</p> <p>〈主要な業務実績〉 博物館における調査研究成果の発信として、図版目録や研究紀要、展示会図録等の各種刊行物を発行した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究誌『MUSEUM』を6回、研究紀要を1冊、特別展等図録を13冊、調査概報と図版目録を各1冊発行し、その他のリーフレット等や増刷12件も発行した。(東博) ・研究紀要を1冊、特別展等図録を3冊刊行した。(京博) ・研究紀要を1冊、特別展等図録を10冊刊行した。(奈良博) ・研究紀要を1冊、特別展等図録を11冊刊行した。(九博) ・東京国立博物館・京都国立博物館で文化財修理報告書を発行した。文化財修理に関して、奈良国立博物館は研究紀要に包摂する形で発行し、九州国立博物館ではトピック展示図録に解説を掲載した。 ・例年行っている特集印刷物(リーフレット)PDFファイル版のウェブサイト公開については、26年度は5件公開した。(東博) ・調査研究や修理に関するパネル展示を行った。(奈良博、九博) 	<p>〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P71～73 3(1)</p> <p>〈評定と根拠〉 評定:B 研究紀要、展示会図録、文化財修理報告書やその他のリーフレット等を多数刊行し、調査研究成果の公表について順調である。</p> <p>印刷物PDFファイル版のウェブサイト公開や、パネル展示の実施など、多様な媒体での成果公表を行っている。</p> <p>〈課題と対応〉 特になし</p>	<p>評定 B</p> <p>〈評定に至った理由〉 4館とも年度計画に沿って、調査研究の成果を概ね計画どおりに刊行した。京博は社寺調査報告書のデータ編集作業に想定外の時間を要したため、刊行が次年度にずれ込むこととなったが、その成果を示す特別展『南山城の古寺巡礼』を開催し、図録も刊行されており、概ね計画どおりに実施されたと判断した。</p> <p>刊行物の一部を、ウェブサイト公開することが年度計画に掲げられており、奈良博は研究紀要『庭園雑集』の全文、東博は特集陳列のリーフレット5点、京博は研究紀要『学叢』の創刊号(昭和54年)から第23号(平成13年)まで(全文又は一部)が公開されている。</p> <p>以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・評価に異論はないが、刊行物のウェブサイトへの公開がさらに望まれる。 ・紀要類の研究成果は、書物の配布は最低限に留め、ウェブサイトで公開する方向をさらに進めるべきである。保存科学などの全世界共通のテーマについては論文の英文化も必要とならう。</p>

		<p>を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイト公開する。</p> <p>3) 社寺調査報告書等を刊行する。 (奈良国立博物館) 1) 研究紀要『庭園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイト公開する。 2) 入場無料ゾーンを利用し、調査研究活動実績をパネル等で公開する。 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。 2) 保存修復活動の成果を教育普及事業に反映させる。</p>				
--	--	---	--	--	--	--

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-3-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 (2)専門家等との学術・人物交流			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ														
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)				
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
海外研究者招へい数(人)	(東博)	計画値	—	6	6	6	6		予算額(千円)	597,470	577,268	1,283,989	686,536	965,171
		実績値	—	16	11	21	47		決算額(千円)	654,394	716,198	953,078	1,174,915	
		達成度	—	266.7%	183.3%	350.0%	783.3%		参考決算額(千円)	5,050	6,452	1,370	991	
	(京博)	計画値	—	5	5	3	2		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	21	3	0	2		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
		達成度	—	420.0%	60.0%	0.0%	100.0%		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(奈良博)	計画値	—	6	6	6	6		従事人員数(人)	56	55	53	51	51
		実績値	—	20	7	9	9		※予算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の予算額を計上している。					
		達成度	—	333.3%	116.7%	150.0%	150.0%		※決算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の決算額を計上している。					
	(九博)	計画値	—	3	3	4	4		※参考決算額は、上記決算額のうち、4国立博物館の国際シンポジウム開催に要する旅費等を計上している。					
実績値		—	21	3	16	35		※従業人員数は東京国立博物館の学芸企画部企画課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤研究職員の人数を計上している。						
達成度		—	700.0%	100.0%	400.0%	875.0%								
(合計)	実績値	—	78	24	46	93								
研究員派遣数(人)	(東博)	計画値	—	6	6	6	6							
		実績値	—	48	34	41	18							
		達成度	—	800.0%	566.7%	683.3%	300.0%							
	(京博)	計画値	—	6	6	15	15							
		実績値	—	25	15	19	14							
		達成度	—	416.7%	250.0%	126.7%	93.3%							
	(奈良博)	計画値	—	6	6	6	6							
		実績値	—	19	17	8	13							
		達成度	—	316.7%	283.3%	133.3%	216.7%							
	(九博)	計画値	—	4	4	4	4							

	実績値	—	—	56	60	87	82	
	達成度	—	—	1400.0%	1500.0%	2175.0%	2050.0%	
(合計)	実績値	—	—	148	126	155	127	

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。 (2)国内外の博物館関係者及び文化財とその活用に関する専門家と積極的に学術・人物交流等を行い、国際的な博物館の拠点となることを目指すこと。	3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。 (2)文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化 (2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。 (18人・東京6、京都2、奈良6、九州4) 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 (31人・東京6、京都15、奈良6、九州4) 3) 国際的な講演・研究会、シンポジウムを開催する。 4) ICOM(国際博物館会議)大会の日本への招致に向けた活動を促進する。 (東京国立博物館) 1) 学術交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米	〈主な定量的指標〉 ・海外研究者招へい数 ・研究員派遣数 〈その他の指標〉 特になし 〈評価の視点〉 ○国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施した。また、職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関や国際会議等に派遣した。	〈業務実績〉 平成26年度業務実績報告書 個別表 P114~117 I3(2) 平成26年度業務実績報告書 統計表 P140~165 c① 〈主要な業務実績〉 海外研究者の招へい、研究員の海外派遣を通して、海外の博物館・研究者との交流を行った。 ・海外研究者招へい数 93人 ・研究員派遣数 127人 内訳はアウトプット情報を参照 ・国際シンポジウムを東京国立博物館で2回、京都国立博物館で1回、九州国立博物館で2回開催した。 ・国際研究セミナー(京博)、国際研究集会(奈良博)、招聘者による講演会(東博、九博)を実施した。 ・第8回日中韓国立博物館長会議を開催した。(東博) ・国際展覧会オーガナイザー(IEO)会議に研究員を派遣し、欧米の主要美術館・博物館の展覧会担当責任者との意見交換を実施した。(東博) ・「米欧ミュージアム専門化交流事業」を行った。(東博、京博) ・学術交流協定に基づく研究員の交流を継続して行った。(東博、奈良博、九博)	〈自己評価参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P73~76 3(2) 〈評定と根拠〉 評定:B 海外研究者招へい数は、外部資金活用等により、4館とも目標値を上回った。 研究員派遣数は、東京国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館で目標値を上回っている。京都国立博物館では、平成知新館開館準備に重点を置いたため目標値に1人届かなかったが、全体として順調である。 国際シンポジウムや国際研究セミナー等を各館で実施し、また、第8回日中韓国立博物館長会議の開催やIEO会議への参加により、情報交換とネットワークの強化を実現している。 「米欧ミュージアム専門化交流事業」の実施は、2019年 ICOM 大会の日本招致決定に繋げることができた。 〈課題と対応〉 特になし	評定 B 《評定に至った理由》 海外研究者の招へいは、4館合計で18人の計画値に対し93人の実績(達成率517%)を挙げた。東博は計画値6人に対し47人の実績(達成率783%)を、また九博は計画値4人に対し35人の実績(達成率875%)をそれぞれ示した。計画を大きく上回る実績を挙げた要因として、学術交流協定や特別展に基づく招へいが活発に行われたほか、文部科学省や文化庁の招へい事業や補助事業に積極的に応募して得た外部資金による成果が大きい。 各博物館の研究者の海外派遣は、4館合計で31人の計画値に対し127人の実績(達成率410%)を挙げた。特に、東博は計画値6人に対し18人の実績(達成率300%)、九博は計画値4人に対し82人の実績(達成率2050%)をそれぞれ示した。その要因として、招へい事業と同様、学術交流協定や特別展に基づく出張が活発に行われたことが大きい。 自己評価による評定はBとされているが、『独立行政法人の評価の指針』においては「法人の活動により、中期計画における所期の目標を上回る成果が得られている」と認められる(定量的指標においては対中期計画値(又は対年度計画値)の120%以上とする。)場合は、「A」評定とするとされており、本評価項目の定量的指標が120%を大きく超える実績値を示していることに着目し、法人の自己評価の妥当性を検討した。 まず計画値の妥当性について検討したところ、計画値は当初予算に基づく数値であることが自己点検評価報告書に記載されており、一応合理性が認められる。一方、実績値は展覧会事業など他の事業(予算)や外部資金等による成果を加えた結果であり、計画値と実績値の単純な比較による評価は、

		<p>主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。</p> <p>2) 日中韓国立博物館長会議を開催するとともに、IEO(国際展示会オーガナイザー会議)等の国際会議へ参加する。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>1) 学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館との交流を活発に行う。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>1) 国際交流活動推進へ向けての基盤を整備するとともに学術文化交流協定を締結している海外博物館等との交流を活発に行う。</p> <p>2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招聘し、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。</p>			<p>予算面から見て合理性に欠ける面がある。この事情は、研究者の海外派遣においても同様である。したがって本項目については、定量的指標による単純な評価ではなく、法人の自己評価の結果を踏まえ、B判定とするのが妥当であると判断した。</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・評価に異論はないが、今後、計画値の算定において、実績をふまえた合理的な数値を設定すべきである。 ・達成率を鑑みて評価の妥当性を検証しており、丁寧な評価になっている。その検証結果も妥当と思われる。 ・東博・九博の海外学術交流の実績は特筆に値するものといえよう。他2館も着実に交流を進めている。少なくとも東博・九博についてはA判定でもよいのではないかと。</p>
--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報
特になし

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-3-(3)	<p>1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項</p> <p>3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与</p> <p>(3)文化財保存修理に関する人材育成</p>				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第6号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ									
①主要なアウトプット(アウトカム)情報					②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)				
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		
								予算額(千円)	23年度 24年度 25年度 26年度 27年度
								決算額(千円)	— — — — —
								経常費用(千円)	— — — — —
								経常利益(千円)	— — — — —
								行政サービス実施コスト(千円)	— — — — —
								従事人員数(人)	48 47 46 45 45
					<p>※研修テキストなどはコピー機を利用して作成しており外注額が少額のため、予算額・決算額は個別に計上することができない。</p> <p>※従事人員数は4国立博物館の常動保存修復担当職員の人数を計上している。</p>				

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
<p>3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与</p> <p>博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。</p> <p>(3) 国内外の文化財の保存・修理に関する人材育成に寄与すること。</p>	<p>3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与</p> <p>博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。</p> <p>(3) 保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施する。</p>	<p>3 我が国における博物館の中核としての機能の強化</p> <p>(3) 保存修理事業者への研修プログラム(4館共通)</p> <p>1) 保存修理事業者を対象とした研修会を開催するとともに、インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を開催する。</p>	<p>〈主な定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 特になし</p> <p>〈評価の視点〉 ○研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施したか。</p> <p>○業務の効率化について、教材作成作業等の効率化、研修施設の有効活用、施設管理業務の民間委託等の取組を行っているか。</p> <p>○受益者負担の妥当性・合理性があるか。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P118～121 I3(3)</p> <p>〈主要な業務実績〉 保存修理事業者を対象とする研修会を、関係機関と連携協力して実施した。 ・特定非営利活動法人文化財保存支援機構(NPO-JCP)と共催し、セミナーを2回・ワークショップを1回実施した。(東博) ・文化財保存修理所内の工房と連携し研修会を行った。また、修理所内の工房の視察を受け入れ情報交換を行った。(京博・奈良博) ・NPO法人ミュージアムサポートセンターと連携しIPM普及のための連絡会議や研修会を実施した。また、文化財保存国際交流セミナーを実施した。(九博) ・インターンシップの受け入れを行った。(4館)</p> <p>【業務の効率化について】 京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館では、関係者を対象とした、文化財保存修理所内の工房視察や、各工房技術者との情報交換等が主であり、主催者側が用意した教材に沿って行われるものではないため、一般的な研修とは異なる。また、専用の研修施設もない。 東京国立博物館では、NPO主催の専門家セミナーへの共催という形をとっており、館内の修理施設・展示施設を会場として提供している。教材はNPOが作成している。</p> <p>【受益者負担の妥当性・合理性について】 京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館における当該研修の受講料は無料である。</p>	<p>〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P76～79 3(3)</p> <p>〈評定と根拠〉 評定：B ・諸機関や修理工房と連携し、セミナーや研修、情報交換等を効果的に行った。 ・インターンシップの受け入れを行い、人材育成を行った。</p> <p>研修の実施にあたり、当該業務は効率化されている。</p> <p>研修の目的は、文化財保護に必要な人材の育成である。よって、これらの研修の受講を必要とする者の参加を促進し文化財保護に必要な知識・技術等の普及を図るため、受講料無料は妥当と考える。</p> <p>〈課題と対応〉 特になし</p>	<p>評定 B</p> <p>〈評定に至った理由〉 4館とも、文化財の保存修理の現場や経験を有する立場から専門人材の研修を実施している。 東博は、NPO法人文化財保存支援機構と共催で、専門家及び専門家を指す学生を対象とする実践セミナーを開催した。参加者のレベルを分けて2回開催し、合計17日間に37名の参加者があった。このほか東博は、東京藝術大学、日本博物館協会、岩手県立博物館、陸前高田市立博物館、NPO法人文化財保存支援機構と共催で、津波被災文化財に関するワークショップを開催した。 京博は、修理技術者を対象として、文化財を熟習する機会を提供する研修会を継続的に実施している。平成26年度は、特別展「南山城の古寺巡礼」、「国宝 鳥獣戯画と高山寺」の開催中に実施し、87名の参加者があった。 奈良博は、文化財保存修理所の各工房の修理技術者を対象として研修会を継続的に実施している。平成26年度は、漆に関する研修会を1回実施し41名の参加があった。 九博は、保存修理技術者を対象として古文書保存基礎講座を2回開催し24名の参加者があった。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント。 ・業務効率化をめざし、受講者の参加を促進するための施策があると良い。 ・人的措置が必要かと思われるが、随時開催から定期開催を目指すことが望ましい。 ・海外研究者の受け入れや、海外博物館への補修</p>
				<p>東京国立博物館共催の専門家セミナーにおいても、東京国立博物館としては受講料を徴収していない。</p>		<p>指導も例年に比して増加している。国立博物館の補修技術の素晴らしさを示すものと評価出来る。 ・現状の修理だけでも対応に限界がある。より一層の修復に関わる技術者の育成および登用が強く望まれる。</p>

				<p>東京国立博物館共催の専門家セミナーにおいても、東京国立博物館としては受講料を徴収していない。</p>		<p>指導も例年に比して増加している。国立博物館の補修技術の素晴らしさを示すものと評価出来る。 ・現状の修理だけでも対応に限界がある。より一層の修復に関わる技術者の育成および登用が強く望まれる。</p>
--	--	--	--	---	--	---

4. その他参考情報

特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-3-(4)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 (4) 収蔵品の貸与				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第3号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
文化財の貸与件数(件)	(東博) 実績値	—	—	905	1,295	1,137	1,130			予算額(千円)	15,608	14,813	14,232	14,070	13,881
	(京博) 実績値	—	—	429	304	626	582			決算額(千円)	10,633	21,904	21,261	16,234	
	(奈良博) 実績値	—	—	118	102	135	149			経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(九博) 実績値	—	—	119	113	143	101			経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(合計) 実績値	—	—	1,571	1,814	2,041	1,962			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
貸与先件数(件)	(東博) 実績値	—	—	129	159	123	115			従事人員数(人)	100	99	99	94	94
	(京博) 実績値	—	—	74	71	82	82			※予算額は個別に計上することができないため、考古相互貸借事業の予算額を計上している。					
	(奈良博) 実績値	—	—	37	37	35	47			※決算額は個別に計上することができないため、考古相互貸借事業の決算額を計上している。					
	(九博) 実績値	—	—	26	44	32	30			※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。					
	(合計) 実績値	—	—	266	311	272	274			※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。 (4) 国内外の博物館等の展示事業の活性化を支援するため、収蔵品の貸与を実施すること。	3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。 (4) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等の要請に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を実施する。	3 我が国における博物館の中核としての機能の強化 (4) 収蔵品の貸与(4館共通) 1) 国内の博物館等で開催する展示会等へ収蔵品を貸与する。 (東京国立博物館・奈良国立博物館) 1) 国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。 (東京国立博物館) 1) 長崎歴史文化博物館の平常展示のため、引き続き長期貸与する。 2) 海外の美術館・博物館等で開催する展示会へ貸与する(海外交流展出品作品を含む)。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・文化財の貸与件数 ・貸与先件数 〈評価の視点〉 ○収蔵品の保存状況に配慮した貸与を実施したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度業務実績報告書 個別表 P122~125 13(4) 平成26年度業務実績報告書 統計表 P100~101 3(4) 〈主要な業務実績〉 所蔵品・寄託品の貸与については、国内外の博物館等からの要請に対し、文化財の保存状況を見極めながら、積極的に対応した。 ・文化財の貸与件数 1,962件 ・貸与先件数 274件 内訳はアウトプット情報を参照 ・考古資料相互貸借事業を1博物館(東京国立博物館)、5博物館等(奈良国立博物館)を相手方として、それぞれ実施した。 ・展示期間や会場の温湿度の設定、警備体制など貸与先の環境と作品の状態を確認した上で貸出を行っている。	〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P79~81 3(4) 〈評定と根拠〉 評定:B 貸与先からの要請に4館が積極的に対応した結果、文化財の貸与件数、貸与先件数ともに、昨年度と同水準の件数となった。海外への貸与も行っている。 ・考古資料相互貸借事業では、通常は少数の相手方との間で実施するものであるが、特に奈良国立博物館においては、26年度は5つもの博物館等との間で実施した。 ・貸与先の環境と作品の状態を確認し、収蔵品の保存状況に配慮し貸出を行っている。 〈課題と対応〉 特になし	評定 B 〈評定に至った理由〉 4館とも、国宝・重要文化財を含む収蔵品・寄託品の依頼に応じた貸与を文化財の保存状態を勘案しつつ行っており、合計で1459件を貸与した。また、依頼に応じて、寄託品の貸与に関する便宜供与を合計で503件行い、収蔵品と寄託品を合わせて1962件の貸与件数となった。このほか、考古資料の相互貸借事業を2館(東博、奈良博)で実施している。 東博は、相互貸借事業により大阪府立近つ飛鳥博物館との間で考古資料の相互貸借を行ったほか、米国のロサンゼルスカウンティ美術館の「日本所蔵の中国絵画展」への貸与も行った。収蔵品の貸与が1091件、寄託品の貸与が39件、合わせて1130件の貸与件数となった。 京博は、東博の特別展「栄西と建仁寺」及び「日本国宝展」に計91件の貸与を行ったほか、奥田元宗・小由女美術館、パラミュージアム、京都国立近代美術館、サントリー美術館、広島県立歴史民俗資料館、三井記念美術館、仙台市博物館の特別展等にまとまった貸与を行った。海外には、韓国国立中央博物館、グラン・パレ・ナショナルギャラリー(仏)、フィラデルフィア美術館(米)の特別展への貸与を行った。収蔵品の貸与が272件、寄託品の貸与が310件、合わせて582件の貸与件数となった。 奈良博は、考古相互貸借事業により平泉文化遺産センター(岩手県)、島根県立八雲立つ風土記の丘資料館、湯谷町立わくや万葉の里歴史館(宮城県)、色麻町立農業伝習館(宮城県)及び市立五條文化博物館(奈良県)との間で相互貸借を行った。収蔵品の貸与が47件、寄託品の貸与が102件、合わせて149件の貸与件数となった。 九博は、文化庁、東博、京博のほか、福岡県内の公立博物館等8か所、福岡県外の公立博物館等9か所、私立博物館等6か所への貸与のほか、韓国国立公州博物館、韓国国立古宮博物館、フィラデル

						フィア美術館(米)への貸与を行った。収蔵品の貸与が49件、寄託品の貸与が52件、合わせて101件の貸与件数となった。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針〉 なし。 〈その他事項〉 ○有識者コメント ・評価に異論はないが、収蔵品のうち考古資料など出土した地域における展示が望まれるものについて、さらに活発に行われることを期待したい。 ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・海外館への貸与の実績が例年比で増加しているのは喜ばしい。
--	--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報	
特になし	

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-3-(5)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 (5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第3号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ																
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)						
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
公私立博物館等に対する援助・助言(件数)	(東博)	実績値	—	—	126	85	114	119			予算額(千円)	—	—	—	—	—
	(京博)	実績値	—	—	91	65	43	29			決算額(千円)	—	—	—	—	—
	(奈良博)	実績値	—	—	98	67	71	58			経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(九博)	実績値	—	—	97	109	64	57			経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)	実績値	—	—	412	326	292	263			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
										従事人員数(人)	100	99	99	94	94	
※公立博物館・美術館に対する援助・助言に係る外注額が少額なため、予算額・決算額は個別に計上することができない。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。																

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
<p>3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与</p> <p>博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。</p> <p>(5) 全国の博物館等の運営に対する援助、助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めること。</p>	<p>3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与</p> <p>博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。</p> <p>(5) 公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等を行う。</p>	<p>3 我が国における博物館の中核としての機能の強化</p> <p>(5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進</p>	<p>〈主定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 ・公私立博物館等に対する援助・助言件数</p> <p>〈評価の視点〉 ○公私立博物館等に対する援助・助言を行ったか。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度業務実績報告書 個別表 P126～129 13(5) 平成26年度業務実績報告書 統計表 P102～109 3(5)</p> <p>〈主要な業務実績〉 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、援助・助言を行った。 ・公私立博物館等に対する援助・助言件数 263件 内訳はアウトプット指標に掲載</p> <p>当該実績件数は、文化財の調査や保存修理に関する援助・助言、講演会やセミナー等における講演等での協力、さらに、文化庁や地方公共団体等の文化財関係事業・会議への協力を含めたものである。(4館) また、新規貸与館(ハラミタミュージアム等)に対する環境調査(東京国立博物館)、「法隆寺展」への学術協力(奈良国立博物館)や「古文書保存基礎講座」「ミュージアムPM研修」(九博)等も行った。</p>	<p>〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P81～82 3(5)</p> <p>〈評定と根拠〉 評定:B 公私立博物館等から4館への要請に対して例年多数の助言・協力を行っており、26年度においても昨年度と同水準の件数となった。 なお、京都国立博物館では平成知新館開館に向けた準備業務に重点を置いたため、対応件数が減少した。</p> <p>〈課題と対応〉 特になし</p>	<p>評定理由</p> <p>B</p> <p>〈評定に至った理由〉 国、地方公共団体の行政への協力、公立の博物館等の展覧会等への援助・助言、講演会等の講師、作品の展示環境の調査等の依頼に応じて、東博が119件、京博が29件、奈良博が58件、九博が57件、合計で263件の専門家の派遣等を行った。 奈良博は、福岡市美術館、静岡市立美術館、岡崎市美術館で開催された「法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り—」に対して学術協力を行い、各会場に展示指導・援助・助言のため研究員3名を派遣するとともに、法隆寺等での借用・返却作業のため延べ10日間にわたり研究員8名を派遣した。 依頼に基づく業務であり目標値を設定することがなじまないが、各館とも限られた人員の中で自館の業務を行いながら、専門的知見を広く活用する援助・助言に努めていると認められる。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・各館ともその特色に応じた適切な助言・援助を行っており、国立博物館としてのわが国文化行政の一翼を十分に担っていると評価出来る。</p>

4. その他参考情報
特になし

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-4-(1)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (1)文化財に関する基礎的・体系的な調査研究				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度				23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研) 実績値	—	15	13	11	18				予算額(千円)	684,064	576,783	656,845	607,986	690,752
	(奈文研) 実績値	—	51	73	67	64				決算額(千円)	781,760	764,853	822,463	596,804	
	(合計) 実績値	—	66	86	78	82				経常費用(千円)	—	—	—	—	—
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研) 実績値	—	21	22	21	24				経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(奈文研) 実績値	—	32	36	45	22				行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(合計) 実績値	—	53	58	66	46				従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										<p>※予算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の予算額を計上している。</p> <p>※決算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の決算額を計上している。</p> <p>※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。</p> <p>※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。</p>					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。</p> <p>(1)文化財の各分野に関する基礎的・体系的な調査・研究や、総合的な視点に基づく文化財の調査・研究手法の開発等を推進することにより、国及び地方公共団体における文化財保護施策の企画立案及び文化財の評価等に係る業務の基盤形成に寄与すること。</p>	<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。</p> <p>(1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進</p> <p>国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組む。国・地方公共団体における文化財保護施策の企画立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。</p>	<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>(1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進</p> <p>国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究を推進することにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。</p>	<p>〈主な定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得</p> <p>〈評価の視点〉 ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。</p> <p>○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施したか。</p> <p>また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施したか。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 ・平成26年度自己点検評価報告書 個別表 p130～p181 4(1) ・平成26年度自己点検評価報告書 統計表 p166～p217 共通資料 c-2～⑧</p> <p>〈主要な業務実績〉 26件の研究テーマを設定し、調査研究を実施した。うち主要な研究テーマは以下のとおり。 ・文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究(東文研) ・我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究(奈文研) ・無形文化財の保存・活用に関する調査研究(東文研) ・藤原宮跡の発掘調査(東方官衛北地区)(奈文研) ・平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等(奈文研) ・飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等(奈文研) ・東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究(奈文研) ・アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力(奈文研) ・文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究(奈文研) ・遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集(奈文研)</p> <p>主な研究成果は以下のとおり。 ・文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究(東文研) 国立情報学研究所との連携を図り、多種多様な文化財の研究情報について、効果的か</p>	<p>〈自己評価書参照箇所〉 ・平成26年度自己点検評価報告書 個別表 p130～p181 4(1)</p> <p>〈評定と根拠〉 評定:B 設定した研究テーマは、中期計画に沿ったものである。 また、それぞれの調査研究は、計画に沿って適切に実施され、国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究を推進することにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与した。</p> <p>特に「アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力」では、中国・韓国双方の研究機関との共同研究が継続的に行われており、同時にそれが、研究成果の共有・研究水準の向上に資するものとなっている。 「文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究」では、検討会において文化的景観の概念及び調査・計画等の体系化に関する検討を深め、また、現地調査・研究では、保存計画や整備・活用計画の策定について検討を進めることができたことで、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与した。</p> <p>〈課題と対応〉 特になし</p>	<p>〈評定に至った理由〉 東京文化財研究所(以下「東文研」という。)及び奈良文化財研究所(以下「奈文研」という。)は、中期計画に沿って文化財に関する基礎的・体系的な調査研究を継続的に行っている。 東文研では、文化財の研究情報(所蔵資料、関係文献、研究資料等)、日本・東アジアにおける美術、無形文化財、無形民俗文化財、無形文化遺産保護に関する基礎的・体系的な調査研究を行っている。具体的には、希少性の高い明治期の美術雑誌『日本美術画報』、『みずゑ』の所載記事、画像等の研究情報のウェブサイト公開、美術史研究に必要な年表等の作成、能楽の音楽的な分析、上演される機会の少ない落語、講談等の実演記録、衰退の危機にさらされている工芸技術の原材料、道具、実技等の記録等を行っている。また、東日本大震災被災地の無形民俗文化財の資料収集、記録作成等を集中的に行っており、平成26年度は福島県南相馬市の山田神社祭礼、福島県浪江町の苜宿鹿舞・田植踊り、宮城県女川町の祭礼・獅子舞、岩手県遠野市の鹿踊りを調査した。さらに国際的な無形文化遺産保護に関する調査研究として、韓国国立無形遺産院との交流協定に基づく研究者の相互受入のほか、ユネスコの無形文化遺産保護条約政府間委員会での調査等を行っている。 奈文研では、歴史資料、書跡、建築、庭園、文化的景観、平城京、飛鳥・藤原地域等に関する基礎的・体系的な調査研究を行っている。具体的には、興福寺、仁和寺、薬師寺、唐招提寺、東大寺における記録・経典等の整理・解読、法隆寺金堂の古材調査、奈良市内の寺院・民家の庭園調査、平城京、平城宮跡、藤原宮跡及び飛鳥地域の遺跡の発掘調査、出土遺物の整理・分析等を継続して行っている。平成26年度は、例えば、長年の調査研究の成果に基づく『仁和寺史料目録編(稿)二』を刊行し学術的貢献を果たしたほか、「戦国時代の城館の庭</p>

				<p>つ有機的に蓄積して発信していくための手法を総合的に研究・開発した。「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に、図書情報と目録情報の移行を進め、各種データベースの一体化のための作業を進めることができた。</p> <p>・アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力(奈文研)</p> <p>中国社会科学院との共同調査・研究及び国際シンポジウムでの成果発表を行った。また、日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を韓国国立文化財研究所と実施するなどした。</p> <p>・文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究(奈文研)</p> <p>文化的景観に関する研究集会等の実施による保護行政や学術研究への貢献、宇治市、四万十川流域阿蘇地域などを対象とした現地での調査研究、文化的景観に関する重要な海外事例の調査及び海外文献の翻訳、報告書の刊行や学会・学術雑誌等での研究成果発表等した。</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数82件 内訳はアウトプット情報を参照 ・学会、研究会での発表件数46件 内訳はアウトプット情報を参照 ・外部資金の獲得 科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調査No.3-1「自己収入の増加」を参照。 なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。</p>	<p>園)をテーマにした研究会を開催し、大内氏館跡、小田原城御用米曲輪、岐阜城跡織田信長居館跡の事例を討議し、中世庭園研究史の進展に寄与した。発掘調査においては、平城京の造営期の河川埋立、道路敷設に係る土木工事の遺構や、藤原宮官衛地区で初事例となる桁行4間×梁行3間の東西棟総柱礎石建物を検出するなどの成果があった。</p> <p>以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護施策の企画立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。</p> <p>また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>(指摘事項、業務運営上の課題及び改善方案) なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・学術雑誌への論文掲載や学会・研究会での発表等も着実に進んでいるので、評価に加えて良いと思う。 ・近畿地方の大寺院の文書調査は、これまで門外不出であった資料群を公開へと導くものであり、その学術的価値は非常に高い。東北地方の民俗文化財の実態調査も大震災後の対応として不可欠の事業といえる(いずれも東文研)。両研究所とも国際的な学術交流をも積極的に推進しており、その成果は高く評価出来る。</p>
--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報

特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-4-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (2)文化財に関する調査手法の研究開発				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研) 実績値	-	-	2	0	0	1			予算額(千円)	684,064	576,783	656,845	607,986	690,752
	(奈文研) 実績値	-	-	31	24	14	20			決算額(千円)	781,760	764,853	822,463	596,804	
	(合計) 実績値	-	-	33	24	14	21			経常費用(千円)	-	-	-	-	-
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研) 実績値	-	-	1	1	1	0			経常利益(千円)	-	-	-	-	-
	(奈文研) 実績値	-	-	39	49	17	19			行政サービス実施コスト(千円)	-	-	-	-	-
	(合計) 実績値	-	-	40	50	18	19			従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										※予算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
4 文化財に関する調査及び研究の推進 我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。 (2)文化財の研究に関する調査手法の拡充と新たな技術開発を推進すること。	4 文化財に関する調査及び研究の推進 貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。 (2)文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進 文化財の調査手法に関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。	4 文化財に関する調査及び研究の推進 (2)文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進 文化財の調査手法に関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。	(主定量的指標) 特になし (その他の指標) ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得 (評価の視点) ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。 ○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施したか。 また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施したか。	<実績報告書等参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 p182~p189 4(2) 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 p166~p217 共通資料 c-②~⑧ <主要な業務実績> 以下4件の研究テーマを設定し、調査研究を実施した。 ・文化財デジタル画像形成に関する調査研究(東文研) ・文化財の測量・探査等に関する研究(奈文研) ・年輪年代学研究(奈文研) ・動植物遺存体による環境考古学的研究(奈文研) 主な研究成果は以下のとおり。 ・文化財デジタル画像形成に関する調査研究(東文研) 長年行ってきた類稀な文化財の調査によって得られた様々な実地経験と画像形成に対する種々の研究から生み出された独自の手法に基づくデジタル画像形成手法により、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「春日権現験記絵」の光学調査ほか、共同研究や所内外の様々な依頼に対応し、調査を実施した。また、報告書5冊と成果の公表も十分に行了た。 ・文化財の測量・探査等に関する研究(奈文研) SfM/MVS 技術やアレキ式地中レーダー機器等の新技術を導入し独自の改良を加えることにより、計測、探査を始めとする発掘及び調査技術について、導入ならびに利用コストの低い方法を開発した。また、連携研究等により人材育成や技術の移転を進めた。 ・年輪年代学研究(奈文研)	<自己評価書参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 p182~p189 4(2) <評定と根拠> 評定:B 設定した研究テーマは、中期計画に沿ったものである。 また、それぞれの調査研究は、計画に沿って適切に実施され、文化財の調査手法に関する研究・開発を推進した。 特に、「文化財の測量・探査等に関する研究」においては、発掘及び調査技術について、導入ならびに利用コストの低い方法を開発し、地方公共団体等に普及させる可能性を示した。また、他機関における研究の活性化と人材の育成に貢献したことで、高まりつつある技術に対する注目と期待に込めている。 「動植物遺存体による環境考古学的研究」においては、緊急性を要する復興支援に従事しながら他の地方公共団体からの要請にも応えている。 <課題と対応> 特になし	(評定に至った理由) 東文研及び奈文研は、中期計画に沿って文化財に関する調査手法の研究開発を継続的に行っている。 東文研は、絵画等のデジタル画像形成に関する研究開発を行っている。具体的には、可視光線、近赤外線等の様々な撮影手法を用いたデジタル画像の形成技術の開発を行っており、平成 26 年度は、国宝平等院鳳凰堂板扉絵等の蛍光X線分析による彩色材料調査を行うとともに、重要文化財である泰西王侯騎馬図屏風及び洋人奏楽図屏風の光学調査報告書の刊行を行った。 奈文研は、発掘調査における測量・計測技術の開発、木造文化財の製作年代を分析する年輪年代学研究及び動植物遺存体による環境考古学的研究を行っている。具体的には、三次元デジタルデータによる文化財計測、空中写真計測システム、アレキ式地中レーダー等による遺跡調査システム等の調査研究を行っており、平成 26 年度は、平城宮木簡等の遺物の三次元レーザーキャナーによる計測及び三次元プリンター及びコンピュータ数値制御自動旋盤(CNC)によるレプリカの作成試験、複数画像から撮影位置と方向を復元する技術(SfM)と三次元計測データ生成技術(MVS)を用いた安価かつ迅速な三次元計測手法の実用化、小型無人飛行機(UAV)による安価な空中写真計測システムの実用化等を行った。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護政策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。 また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 (指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針)

				<p>標準年輪曲線の地域的拡充、独自開発したマイクロフォーカスX線CT装置の多角的応用など、より発展的な研究成果が得られてきている。</p> <p>・動植物遺存体による環境考古学的研究(奈文研) 緊急性を要する復興に伴う整理作業や報告書作成支援に従事しながら他の地方公共団体からの要請にも応えつつ、幅広い地域や時代の動物遺存体の調査研究を進めるとともに、研究の基礎となる標本の収集を継続的に進めた。また、非接触三次元レーザースキャナーによる現生骨格標本のデジタルアーカイブ化を実施した。</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数 21 件 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・学会、研究会での発表件数 19 件 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・外部資金の獲得 科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調査 No.3-1「自己収入の増加」を参照。</p> <p>なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。</p>	<p>なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・奈文研の測量・計測技術、年輪年代学研究、環境考古学研究は、わが国における先端研究を牽引するものであり、大きな成果が上げられている。</p> <p>・研究の継続性は文化財に関する中核拠点としての重要な座標である。また、人材育成や技術移転の実績も評価されるべき。</p> <p>・学術雑誌への論文掲載や学会・研究会での発表等も着実に進んでいるので、評価に加えて良いと思う。また、人材育成への貢献、技術移転、基礎データ集積なども評価対象となるのではないか。</p> <p>・これまで継続的に行ってきた事業であり、日進月歩で進展する新技術を駆使した研究を着実に進めている。</p> <p>・研究環境の整備が求められる。</p>
--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報	
特になし	

様式 1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-4-(3)	<p>1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項</p> <p>4. 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>(3)文化財の保存修復に関する科学的・先端的な調査研究</p>				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報					②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)										
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研)	実績値	—	—	18	14	14	18		予算額(千円)	684,064	576,783	656,845	607,986	690,752
	(奈文研)	実績値	—	—	5	2	3	3		決算額(千円)	781,760	764,853	822,463	596,804	
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研)	実績値	—	—	23	16	17	21		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(奈文研)	実績値	—	—	18	17	23	20		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
(合計)		実績値	—	—	30	19	26	20		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
										従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										<p>※予算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の予算額を計上している。</p> <p>※決算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の決算額を計上している。</p> <p>※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。</p> <p>※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。</p>					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。</p> <p>(3)最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査・研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査・研究を通じて、文化財の保存・修復に係る技術・技法や材料の開発・評価等を推進し、文化財の保存や修復の質的向上に寄与すること。</p>	<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。</p> <p>(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進</p> <p>最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する以下の調査・研究に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。</p>	<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進</p> <p>最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する以下の調査・研究に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。</p>	<p>(主な定量的指標) 特になし</p> <p>(その他の指標) ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得</p> <p>(評価の視点) ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。</p> <p>○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施したか。</p> <p>また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施したか。</p>	<p><実績報告書等参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 p190～p207 4(3) 平成26年度自己点検評価報告書 統計表 p166～p217 共通資料 c-2②～⑧</p> <p><主要な業務実績> 9件の研究テーマを設定し、調査研究を実施した。 主要な研究テーマは以下のとおり。 ・文化財のカビ被害予防と対策のシステム化に関する研究(東文研) ・ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等(奈文研) ・周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究(東文研) ・文化財の防災計画に関する研究(東文研) ・文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究(東文研) ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究(東文研)</p> <p>主な研究成果は以下のとおり。 ・周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究(東文研) 石造文化財では、出島の旧石倉(長崎市)において砂岩の劣化機構の解明と周辺環境の影響に関する調査、幸橋(平戸市)において既に修復された物件の保存状態に関する追跡調査などを実施した。また、木造建造物では加賀市内神社(中嶋神社、稲荷神社)において材質の違いによる覆屋内環境と本体の保存状態の違いについて調査を継続した。 ・文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究(東文研) 劣化が著しい考古資料等の漆文化財や、伝統的な文化財建造物の塗装材料である</p>	<p><自己評価書参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 p190～p207 4(2)</p> <p><評定と根拠> 評定:B 設定した研究テーマは、中期計画に沿ったものである。 また、それぞれの調査研究は、計画に沿って適切に実施され、最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査・研究としての課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与した。</p> <p>特に、「周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究」では、屋外文化財について、劣化要因及び保存環境に関する調査研究成果を出すことができた。特に出島旧石倉の表面劣化機構の解明については高い独創性を有するとともに、材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査については、近年オリジナルを保存することが多い建造物壁面についてより良い保存環境条件の提案に役立つなど、応用性が期待できる研究を進めることができた。</p> <p>「文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究」では、文化財建造物に使用する屋外塗装や彩色材料の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験を行い、実際の塗装修理の現場の施工に役立てた。綿などの表具裂見本のデータベース化、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。</p>	<p>評定 B</p> <p>(評定に至った理由) 東文研及び奈文研は、中期計画に沿って文化財の保存修復に関する科学的・先端的な調査研究を継続的に行っている。 東文研は、カビ被害対策、博物館等の環境調査、文化財の劣化・防災対策、文化財の修復技術・材料等に関する科学的な調査研究を行っている。具体的には、古墳や寺社等の浮遊菌等の分析、木材成分を分解する生物メカニズム、博物館の展示ケース環境の科学的分析、分析機器による文化財の材質調査、環境による文化財の劣化に関する調査研究等を行っている。平成26年度は、長崎・出島の旧石倉の劣化調査、日光東照宮陽明門、厳島神社反橋等の塗装修理における施工等に調査研究の成果が反映された。また、近代の文化財で問題となっている洋紙の酸性化、没食子インクによるインク焼けや、鉄道車両・航空機等の防錆対策、重山反射炉の劣化状況の調査研究等を実施した。 奈文研は、ミリ波(30～300GHz)の電波を用いて肉眼では見えない又は見えにくい物体を像として可視化するイメージング技術や、文化財の非破壊調査に応用する研究を行っている。平成26年度は、サブミリ波を用いて、漆器の塗装構造に関する非破壊調査を行った。また、東博で開催したキラ古墳壁画展の図録に、テラヘルツイメージングによる調査研究の成果を公表した。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。 また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>(指摘事項、業務運営上の課題及び改善策) なし。</p>

51

				<p>漆塗装や乾性油塗料等の過去の塗装彩色修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。例として、Py-GC/MS分析法をさらに応用して日光東照宮陽明門の西壁壁面の彩色修理に油彩画修理の方法を応用することができた。</p> <p>・近代の文化遺産の保存修復に関する研究(東文研) 明治時代になってから急速に普及した洋紙及び没食子インクで記された文書の保存と修復に関して、各種書類の保存と修復に関して、調査研究を行った。また、屋外展示されている大型建造物、鉄道車両や航空機等の文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外曝露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査した。さらに、建造物・構造物である佐渡金銀山遺跡、長崎県端島(軍艦島)、山口県萩市や静岡県伊豆の国市の反射炉等、史跡指定地に建つ建造物や構造物の保存や修復に関する研究を行い、地盤工学会にて発表を行った。</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数 21件 内訳はアウトプット情報を参照 ・学会、研究会での発表件数 20件 内訳はアウトプット情報を参照 ・外部資金の獲得 科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調書No.3-1「自己収入の増加」を参照。 なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。</p>	<p><課題と対応> 特になし</p>	<p>(その他事項) ○有識者コメント ・屋外文化財の劣化要因・保存環境に関する研究や、非破壊調査技術の開発等の成果の、今後の応用可能性、汎用性をより評価すべきではないか。 ・学術雑誌への論文掲載や学会・研究会での発表等も蓄積に行われているので、評価に加えて良いと思う。 ・わが国の誇る高度な文化財保存・修復技術の基盤となる研究であり、継続的に広範な研究が実施されている。 ・他の項目でも触れたように、保存修復に関わる領域には絶対的な不足の問題が慢性化しつつあり、おおきな危機を抱かざるを得ない。</p>
--	--	--	--	--	-------------------------------	--

4. その他参考情報

特になし

52

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-4-(4)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (4)国・地方公共団体の要請に基づく調査研究			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研) 実績値	—	—	0	0	0	0			予算額(千円)	26,000	26,000	26,000	26,000	26,000
	(奈文研) 実績値	—	—	7	4	13	3			決算額(千円)	512,338	619,805	626,105	568,065	
	(合計) 実績値	—	—	7	4	13	3			経常費用(千円)	—	—	—	—	—
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研) 実績値	—	—	0	0	0	0			経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(奈文研) 実績値	—	—	2	2	3	4			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(合計) 実績値	—	—	2	2	3	4			従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・受託事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・文化芸術振興費(1-7に計上している文化財防災ネットワーク推進事業を除く)、政府開発援助ユネスコ活動費、受託事業費の決算額の合計額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、文化芸術振興費及び政府開発援助ユネスコ活動費は当初予定されていない事業であること、受託事業費では当初の受入見込みになかった受託発掘調査、受託調査研究の契約が多数あったことによる。 ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
4 文化財に関する調査及び研究の推進 我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。 (4)国や地方公共団体の要請に応じて、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性の高い文化財の保存・修復に係る実践的な調査・研究を実施すること	4 文化財に関する調査及び研究の推進 貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。 (4)高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。	4 文化財に関する調査及び研究の推進 (4)高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得 〈評価の視点〉 ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。 ○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施したか。 また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合において、必要な実践的な調査研究を迅速かつ適切に実施したか。	<実績報告書等参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P208~p213 4(4) 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 p166~p217 共通資料 c-2~⑧ <主要な業務実績> 3 件の研究テーマを設定し、調査研究を実施した。 研究テーマは以下のとおり。 ・文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁面の調査及び保存・活用に関する技術的協力(東文研) ・文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁面の調査及び保存・活用に関する技術的協力(奈文研) ・国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的協力(奈文研) 主な研究成果は以下のとおり。 ・文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁面の調査及び保存・活用に関する技術的協力(東文研) 高松塚古墳・キトラ古墳壁画共にクリーニングに効果が期待される酵素群の利用に関する研究を継続実施し、キトラ古墳壁画では基室壁画からの取り外しによって分かれている漆喰の再構成のための修復材料の検討を行った。修復施設の生物・温湿度環境の安定化のための調査を実施した。劣化原因調査で採取された両壁画由来の微生物株について整理と公的機関への寄託についての準備を行った。高松塚古墳壁画の色料について、奈良文化財研究所と共同で調査を行った。 ・文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁面の調査及び保存・活用に関する技術的協	<自己評価書参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P208~p213 4(4) <評定と根拠> 評定:B 設定した研究テーマは、中期計画に沿ったものである。 また、それぞれの調査研究は、計画に沿って適切に実施され、高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、文化庁、国土交通省の要請に応じて、保存措置等のために必要な調査・研究を迅速かつ適切に実施した。 特に、「文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁面の調査及び保存・活用に関する技術的協力」について、東京文化財研究所では、修理の完成に向けた調査と修復材料の検討が着実に進められており、安全性と正確性を考慮しつつ、重要な成果をあげている。修理施設の環境管理の課題に対しても迅速に対応している。また、奈良文化財研究所では、高松塚古墳の発掘調査成果の整理・検討、壁画材料の分析調査が進み、キトラ古墳仮設保護覆屋の解体作業が完了した。 <課題と対応> 特になし	評定 B 〈評定に至った理由〉 東文研及び奈文研は、文化庁の委託により、高松塚古墳及びキトラ古墳の壁面の調査及び保存・活用に関する技術的協力を行った。 東文研は、壁面のクリーニングに効果が期待される酵素群の利用及びキトラ古墳の漆喰の再構成のための修復材料に関する調査研究、修理施設の生物・環境調査、壁画由来の微生物株の整理と公的機関への寄託準備等を実施した。 奈文研は、高松塚古墳の石室解体作業の三次元アニメーション及びそのモデル並びに目地漆喰の保管・展示用台座の作成を行うとともに、壁面の蛍光X線分析による材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像作成、分光分析による顔料調査を行った。キトラ古墳については、墳丘の三次元レーザー測量を行うとともに、国立天文台と共同で壁面の天文図の観測年代等に関する研究を行った。また、出土遺物のクリーニング、強化処置、接合や定期点検、環境モニタリングを実施した。 このほか奈文研は、国土交通省の国営飛鳥歴史公園の整備に協力し、キトラ古墳周辺地区の発掘調査を行った。飛鳥の古代寺院である権限寺跡の周辺地区の発掘調査を行ったところ、瓦窯を検出したため現地保存することとなった。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護政策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。 また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善策〉 なし。 〈その他事項〉

				<p>カ(奈文研)</p> <p>文化庁が進める国宝高松塚古墳壁画の保存・活用に関する事業が円滑かつ適正に遂行するよう協力した。壁画の保存修復(劣化原因)について、蛍光X線分析による材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、分光分析による顔料調査などを実施した。キトラ古墳では、史跡整備にむけて、仮設保護覆屋解体作業の立会調査や解体後の記録作業を実施した。また、古墳の保存、活用、整備の方向性を検討するにあたり、技術的な支援・協力を行った。</p> <p>・国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的協力(奈文研)</p> <p>国営公園整備事業の事前調査として、本年度は檜隈寺跡の北の丘陵地から、史跡檜隈寺跡の東側に沿って南に延び、塔跡の東側に至る範囲の工事立会(A区)、檜隈寺跡の北の丘陵地の西斜面の工事立会(B区)の2カ所において調査を実施した。</p> <p>A区では一部、古代の遺構面を検出した。B区では、8世紀後半から平安時代頃の瓦窯を1基検出した。</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数3件 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・学会、研究会での発表件数4件 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・外部資金の獲得</p> <p>科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調書No.3-1「自己収入の増加」を参照。</p> <p>なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。</p>	<p>○有識者コメント</p> <p>・学術雑誌への論文掲載や学会・研究会での発表等も着実に進められているので、評価に加えて良いと思う。</p> <p>・キトラ古墳・高松塚古墳の保存・活用研究が行われ、劣化防止の工夫が重ねられている。</p> <p>・現状では人的限界がある。近年の予算動向に鑑みると、人事面での補充には時間が掛るであろうが、調査・研究に関連する情報収集については即時体制を充実させ、当該組織が調査研究の拠点となるべく組織の構築を推進していただきたい。</p>
--	--	--	--	---	--

4. その他参考情報
特になし

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-4-(5)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (5)有形文化財の収集等に関する調査研究				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ														
①主要なアウトプット(アウトカム)情報						②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)								
指標等		達成 目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度						
学術雑誌 等への論 文掲載数 (件)	(東博) 実績値	—	—	91	92	134	126		予算額(千円)	597,470	577,268	1,283,989	686,536	956,171
	(京博) 実績値	—	—	72	60	30	34		決算額(千円)	654,394	716,198	953,078	1,174,915	
	(奈良博) 実績値	—	—	29	31	22	22		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(九博) 実績値	—	—	48	35	21	24		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(合計) 実績値	—	—	240	218	207	206		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
学会、研 究会での 発表件数 (件)	(東博) 実績値	—	—	72	65	76	104		従事人員数(人)	100	99	99	94	94
	(京博) 実績値	—	—	18	32	10	25		※予算額は個別に計上することができないため、4博物館の決算報告書・調査研究事業費の予算額を計上している。					
	(奈良博) 実績値	—	—	16	32	21	39		※決算額は個別に計上することができないため、4博物館の決算報告書・調査研究事業費の決算額を計上している。					
	(九博) 実績値	—	—	43	76	35	23		※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。					
	(合計) 実績値	—	—	194	205	142	191		※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。</p> <p>(5)有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等に必要な調査・研究を計画的に実施すること。</p>	<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。</p> <p>(5)有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究を進める。</p>	<p>4 文化財に関する調査及び研究の推進</p> <p>(5)有形文化財の保存と活用を推進し、次世代に継承して、我が国の文化の向上に資するため、その収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究を進める。</p>	<p>(主な定量的指標) 特になし</p> <p>(その他の指標) ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得</p> <p>(評価の視点) ○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧に係る調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次世代への継承及び我が国の文化の向上に寄与したか。</p>	<p><実績報告書等参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P214～p503 4(5) 平成26年度自己点検評価報告書 統計表 p166～p217 共通資料 c-②～⑧</p> <p><主要な業務実績> ・各博物館とも、調査研究の成果を踏まえた特別展や特集陳列などの展示を実施した。 例えば、京都国立博物館における特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」では、龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センターと合同して、非破壊による写本と版本の紙質調査を実施するなどした。(京博) ・東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査 24年度に高精細デジタル画像撮影を行った国宝「普賢菩薩」について東京文化財研究所との検討会を開催し、これまで認識されてこなかった細部の技巧についての知見を深めることができた。(東博) ・極薄青銅器の製作技術解明—中国金属工芸史を再構築するための基礎研究 国内外の博物館において極薄青銅器ないしそれに関連するユゴの調査と分析を実施し、製作技法を東京芸術大学における実験で検証し、技法各種を可能とする条件について知見を得た。(東博) ・近畿旧家伝来文化財総合調査 現地に担当研究員が赴き、漆工300件等の調査書作成、ならびに資料写真撮影を行った。また、調査関連データの整備とデータベース化を図った。また、調査成果をもとに、所蔵者より多数の文化財が寄贈された。(京博) ・南都の古代・中世の彫刻に関する調査と研究 館内外において多数の彫刻の調査・撮影を</p>	<p><自己評価書参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P214～p503 4(5)</p> <p><評定と根拠> 評定：B 有形文化財の保存と活用を推進し、次世代に継承して、我が国の文化の向上に資するため、その収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究を進めた。</p> <p>・京都国立博物館における特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」では、紙質調査などの科学的な調査を活用した成果を図録の解説に盛り込んだ。また、今後の料紙調査の方向性を示した。 ・「近畿旧家伝来文化財総合調査」においては、数年にわたる作業を通じて、所蔵者との厚い信頼関係を構築し、膨大な種類・数量に及ぶ文化財について、効率的かつ有用な調査を進めることができ、360件余り上る寄贈を受けることができた。旧家伝来の文化財の総合的調査を進めてその価値を明らかにすると共に、文化財散逸の防止にもつなげることができた。そして、所蔵者より多数の文化財が寄贈される結果となった。 ・「収蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する」については、調査で得られた所見は保存カルテ、修理調書に反映され、修理仕様を決定するための基礎的資料となった。特に木造文化財の樹種同定調査に当たっては、当該分野の世界的研究機関である京大大学生存圏研究所と協定を結んでいるため、継続的に精度の高い調査・分析が実施できている。</p>	<p>評定 B</p> <p>(評定に至った理由) 国立博物館4館は、収蔵品、寄託品及びそれらの関連品並びに今後の収集、展示活動に関する調査研究を継続的に行っている。 東博は、計62のプロジェクトを組んで実施したが、このうち40のプロジェクトに競争的資金が含まれており、積極的に取り組んでいることが認められる。国宝「普賢菩薩像」の高精細画像による調査研究で、従来認識されていない細部の技巧が明らかになり、平安仏画の研究に重要な資料が得られるなどの成果が得られた。 京博は、計18のプロジェクトを組んで実施したが、このうち2件のプロジェクトに競争的資金が含まれている。南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究においては、10人の研究員が現地へ赴き25日間の調査を実施し、約600件の調査とデータベースを作成した。その成果により所蔵者から計488件の寄贈が行われることとなった。 奈良博は、計18のプロジェクトを組んで実施したが、このうち2件のプロジェクトに競争的資金が含まれている。南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究においては、普段寺院で安置されている状態では調査が困難な文化財について、展覧会への出品機会をとり詳細な調査が行われた。その結果、法隆寺・夢達観音像(国宝)、深大寺・釈迦如来像(重要文化財)等について、多くの新知見が得られ、平成27年度の特別展「白鳳」においてその成果が示されることとなった。 九博は、計38のプロジェクトを組んで実施したが、このうち10件のプロジェクトに競争的資金が含まれ、1件は文化庁の委託事業である。日本とアジア諸国の文化交流に関する調査研究においては、三国時代の朝鮮半島の考古・美術に関し百済と徳国の交流を出土品で跡付け、特別展「古代日本と百済の交流」で研究成果を示した。また、韓国国立博物館、文化財研究所における調査や国内各機関に</p>

57

				<p>行った。調査の結果、学術的に重要な新知見が得られ、特別展等の図録の解説等に新知見を反映させることができた。(奈良博)</p> <p>・日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究、内蒙古所在壁画墓壁画の高精細画像データベースの構築等の共同研究を行った。(九博)</p> <p>・収蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する 文化財保存修理所で修理された文化財について、樹種同定調査及び銘文調査を実施した。樹種同定調査は京大大学生存圏研究所との共同研究として実施した。(奈良博)</p> <p>・高等学校所蔵考古資料の調査研究 徳島県他4県における高校所蔵考古資料の実態について、当該自治体文化財関係者にヒアリングを行い、文献調査を実施し、今後の調査にむけての基礎情報を収集した。本件に関する全国規模での調査は当館のみの取り組みである。(九博)</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数206件 内訳はアウトプット情報を参照 ・学会、研究会での発表件数191件 内訳はアウトプット情報を参照 ・外部資金の獲得 科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調査No.3-1「自己収入の増加」を参照。 なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。</p>	<p><課題と対応> 特になし</p>	<p>おける調査を通じて、多くの研究者と共同研究や意見交換を行うことができ、今後の研究の進展に資する交流につながった。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>(指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針) なし。</p> <p>(その他事項) ○有識者コメント ・各機関の積極的な調査・研究が、文化財の価値の確認や散逸防止をもたらしていることをより評価すべきである。 ・事例や数値を示した、具体的な評価にになっている。 ・購入・寄贈による貴重資料の収集は順調に成果を挙げた。これと相まって国際的・学際的研究を含む広範・多様な研究プロジェクトが実施された。 ・近年、博物館の運営に関わる充実は図られているが、調査および研究の基盤が若干低調気味であるように思われる。</p>
--	--	--	--	---	-------------------------------	--

4. その他参考情報
特になし

58

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-5-(1)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 5. 文化財保護に関する国際協力の推進 (1)文化財保護に関する国際協力			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研)実績値	—	0	0	2	3				予算額(千円)	244,894	265,375	223,876	213,739	156,187
	(奈文研)実績値	—	0	2	1	0				決算額(千円)	177,711	163,407	152,350	175,015	
	(合計)実績値	—	0	2	3	3				経常費用(千円)	—	—	—	—	—
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研)実績値	—	2	8	11	14				経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(奈文研)実績値	—	2	2	2	0				行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)実績値	—	4	10	13	14				従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・国際研究協力事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・国際研究協力事業費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、国際情勢により事業の実施が困難であるため予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
5 文化財保護に関する国際協力の推進	5 文化財保護に関する国際協力の推進	5 文化財保護に関する国際協力の推進	(主な定量的指標) 特になし (その他の指標) 学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 (評価の視点) ○情報の収集・分析及びその提供を行い、国際協力のネットワークを構築したか。 ○アジア地域を主とする諸外国において、文化財保護事業を進めたか。	<実績報告書等参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 p504～p525 5(1)～(3) 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 p166～p217 共通資料 c-2～8 <主要な業務実績> ・世界遺産委員会(ドーハ)、無形文化遺産政府間委員会(パリ)等の国際会議に出席し、文化財保護に関する国際情報収集を行った。また、文化財保護関連の法令の収集・分析及び翻訳作業を実施し、対訳法令集シリーズを新たにシリアについて 1 冊刊行した。(東文研) ・敦煌研究院、陝西省考古研究院との共同関係を維持し、壁画文化財等の保護に関する研究について、材質調査と環境に関する調査、視察、学会発表、国際シンポジウムでの発表や、敦煌研究院の若手研究者の研究を行った。(東文研) ・カンボジアでは、タネイ遺跡の保存整備に向けた作業工程及び現状記録技術の実地検討を行った。基本的な手法を確立し、現地機関に活用された。また、ミャンマーでは、伝統的漆工芸品の保存協力協定を締結したほか、同国木造建築に関する研究会を開催し、研究課題等を把握・共有した。(東文研) ・アフガニスタンで、保存修復専門家の人材育成・技術移転を実施した。タジキスタン、キルギス、イラン、エジプト、アルメニア等において文化遺産の調査研究・保護への協力を実施した。(東文研) ・「紙の保存と修復」は、国内研修として修復材料の基礎科学、道具の製作、学術的見地からみた文化財に関する講義。巻子修復、和綴じ冊子作製、掛軸・屏風の取り扱い実	<自己評価書参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 p504～p525 5(1)～(3) <評定と根拠> 評定:B 文化財保護に関する国際協力に関して、事業を有機的・総合的に展開し、文化財保護に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与した。 ・世界遺産委員会を初めとする国際会議に出席するなど、文化財保護に関する国際情報を積極的に収集し、分析を行い、適切かつ迅速に情報発信を行った。また内戦によって文化遺産の荒廃が懸念されているシリアについての文化財保護法令を刊行することにより、国内外の関係各所に対して重要な情報提供ができた。また、研究発表には多くの専門家の参加を得て、充実した研究交流とネットワークの強化が実施できた。 ・カンボジアにおいては、現地機関主体による遺跡保存整備を技術面で支援するという基本的考え方のもと、必要な現地作業を実施し、漆工芸保存分野での調査研究促進が期待されるほか、木造建築研究についても受託事業と連携しながら専門家交流及び関係者間での情報共有を促進し、今後に向けた方向性を示すことができ、文化財保護事業を進めた。	(評定に至った理由) 東文研及び奈文研は、中期計画に沿って文化財保護に関する国際貢献や協力が積極的に参画している。 東文研は、8 件のプロジェクトを組んで実施した。文化財保護に関する国際情報の収集等については、ユネスコの世界遺産委員会、無形文化遺産政府間委員会をはじめ、文化財保護に関する国際機関の総会等に出席し、積極的に活動した。敦煌研究院(中国)、韓国国立文化財研究所等との国際共同研究や、アジアの文化遺産保護への協力も継続して行われており、カンボジア・タネイ遺跡やアフガニスタン・パルミヤーン遺跡のほか、タイ、ミャンマー、ブータン、タジキスタン、ウズベキスタン、キルギス、インド、イラン、エジプト、シリア、アルメニアに対する事業を行った。また、和紙を用いる文化財修復技術の研修会を、国際機関と共同で日本及びミャンマー、ポーランドの国立博物館の所蔵品の修復を行うとともに、ドイツにおいて文化財保存修復専門家を対象とするワークショップを2度開催した。 奈文研は、2 件のプロジェクトを組んで実施した。いずれも継続事業であるが、カンボジア・アンコールワット遺跡群の西トブ遺跡の調査においては、南祠堂の解体修復工事に伴う発掘調査を行い、石組基礎の基礎構造を明らかにするとともに、地盤の埋納物を検出した。ユネスコ関係機関が行う研修事業への協力においては、遺跡・遺物の調査と保存に関する集団研修で、アジア太平洋諸国の参加者 16 名に対し講義、実習、現地研修を行ったほか、個人研修、ワークショップにおいて講義等を行った。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。

	<p>存・修復の考え方や技術に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を形成するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とする諸外国において文化財保護事業を推進する。</p> <p>(3)文化財保護の担当者や学芸員並びに保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化財の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。</p>	<p>存・修復の考え方や技術に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を形成するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とする諸外国において文化財保護事業を推進する。</p> <p>(3)文化財保護の担当者や学芸員及び保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化財の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。</p>	<p>習。和紙製作現場や文化財修復工房等の見学。メキシコ研修として、修復材料、装こう技術、道具に関する講義。和紙やデンプン糊を用いた基礎的な修復実習を行った。(東文研)</p> <p>・在外日本古美術品保存修復協力事業として、漆工芸品の状態調査を行い、得られた情報に基づき修復を行った。また、日本美術品を所蔵する海外の美術館博物館において絵画及び漆工芸品の調査を行い、今後の修復候補作品選定の基礎情報を収集することができた。さらに、ベルリンにおいて紙本絹本文化財の保存修復に関するワークショップを、ケルンにおいて漆文化財の保存修復に関するワークショップを開催した。(東文研)</p> <p>・ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力として、集団研修6件(全22講座)、個人研修(バヌアツ)6件(全15講座)、個人研修(プータン)15件(全27講座)に加え、ワークショップへの講師派遣1名(講師全3名)を行った。特に個人研修(プータン)については主要な講座の大部分を奈良文化財研究所が担当した。(奈文研)</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数3件 内訳はアウトプット情報を参照 ・学会、研究会での発表件数14件 内訳はアウトプット情報を参照</p>	<p>特になし</p>	<p>また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>(指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針)なし。</p> <p>(その他事項) ○有識者コメント ・事例を示した、具体的な評価になっている。 ・東南アジア・中央アジア諸国を中心に、懸念の協定締結を実現するなど、積極的な交流を通じて国際協力事業を展開した。 ・一定の貢献はされていると思われる。</p>
--	---	--	--	-------------	--

4. その他参考情報	特になし
------------	------

様式1-1-4-1 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-5-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 5. 文化財保護に関する国際協力の推進 (2)アジア太平洋地域における無形文化遺産保護				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報						②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)									
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(アジア太平洋無形文化遺産研究センター) 実績値	—	—	0	1	1	1			予算額(千円)	8,600	8,600	8,600	8,600	8,600
学会、研究会での発表件数(件)	(アジア太平洋無形文化遺産研究センター) 実績値	—	—	2	6	1	0			決算額(千円)	45,048	62,653	66,475	76,093	
ウェブサイトアクセス件数(件)※	(アジア太平洋無形文化遺産研究センター) 実績値	—	—	※1,838	5,289	5,454	6,200			経常費用(千円)	—	—	—	—	—
										経常利益(千円)	—	—	—	—	—
										行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
										従事人員数(人)	1	1	1	1	1
<p>※予算額は、アジア太平洋無形文化遺産研究センターの当初予算額を計上している。</p> <p>※決算額は、アジア太平洋無形文化遺産研究センターの受託事業費等の決算額を計上している。</p> <p>※予算額と決算額の差額は、当初の受入見込みになかった受託事業等があったことによる。</p> <p>※従事人員数は、アジア太平洋無形文化遺産研究センターの常勤研究職員の人数を計上している。</p>															

※23年12月16日サイト開設

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
				業務実績	自己評価	評価	B
5 文化財保護に関する国際協力の推進文化財の保護に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するともに、その機能の充実を図り、我が国の国際貢献に寄与すること。 (2)平成23年度にアジア太平洋無形文化遺産研究センターを開設し、同地域における無形文化遺産保護に寄与すること。	5 文化財保護に関する国際協力の推進文化財保護に関する国際協力に關して、以下の事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財保護に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。 (4)23年度にアジア太平洋無形文化遺産研究センターを設置し、ユネスコ無形文化遺産保護条約を中心とした国際的動向の情報収集を図り、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に係る調査・研究の拠点として、同地域の無形文化遺産保護の分野の調査・研究を行うとともに、我が国の知見を通じて、無形文化遺産保護の国際的充実に資する。	5 文化財保護に関する国際協力の推進文化財保護に関する国際協力に關して、以下の事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財保護に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。 (4)アジア太平洋無形文化遺産研究センターは、アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護のための調査研究拠点として、同地域における危機に瀕した無形文化遺産の保護に向けた現地調査やワークショップを実施する。また、無形文化遺産保護の分野の研究データ及び同地域の研究機関や研究者についての総合的な情報収集を行うための国際会議を開催し、その成果についてデータベースを構築し、共有する。さらに国際会議への出席やユネスコとの連携を通じて、無形	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・ウェブサイトアクセス件数 〈評価の視点〉 ○アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究を行ったか。	〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 p524～p525 5(4) 平成26年度自己点検評価報告書 統計表 p166～p217 共通資料 c-②～⑧ 〈主要な業務実績〉 文化庁受託事業「平成26年度無形文化遺産保護パートナーシッププログラム」及び文部科学省補助金「平成26年度政府開発援助ユネスコ活動費補助金」による事業を通じ、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護の調査研究に関する情報収集と研究促進にむけたデータベース構築及び国際専門家会合、消滅の危機に瀕する無形文化遺産保護の現状・方策に関する現地での実態調査やワークショップを実施した。 特に、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究として、東南アジアにおける無形文化遺産保護に関する法制度研究として、事前アンケート調査を実施した上で、ワークショップを開催した。また、ベトナム・ドンホー版画を事例とする無形文化遺産のための保護措置の研究として、ハノイ及びバクニン省ドンホー村において住民参加のワークショップを実施するなどした。	〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 p524～p525 5(4) 〈評定と根拠〉 評定：B 当初の計画通り事業を実施できた。危機遺産の保護に関する研究のマッピングと題する国際専門家会合の開催（マレーシア・クアラルンプール）、データベースの構築（Research Database on ICH safeguarding in the Asia-Pacific Region）、無形文化遺産関連の国際会議への出席等を行った。 このほか文部科学省「政府開発援助ユネスコ活動費補助金」により、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究を実施している。平成26年度は、東南アジアにおける無形文化遺産保護に関する法制度研究として、カンボジア、ラオス、ミャンマー、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム、東ティモールの行政官・専門家を対象にアンケート調査及びワークショップを開催するとともに、スリランカ政府関係者のヒアリング調査、ベトナムにおけるワークショップを実施した。 いずれの事業も日本政府とユネスコの国際協定に基づくものであり、計画どおり実施したことが、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。	〈評定に至った理由〉 アジア太平洋無形文化遺産研究センターは、文化庁委託事業「無形文化遺産保護パートナーシッププログラム」により、無形文化遺産保護に関する国際的動向の情報収集、アジア太平洋地域における研究促進等を行っている。平成26年度は、「無形文化遺産の保護に関する研究のマッピング」と題する国際専門家会合の開催（マレーシア・クアラルンプール）、データベースの構築（Research Database on ICH safeguarding in the Asia-Pacific Region）、無形文化遺産関連の国際会議への出席等を行った。 このほか文部科学省「政府開発援助ユネスコ活動費補助金」により、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究を実施している。平成26年度は、東南アジアにおける無形文化遺産保護に関する法制度研究として、カンボジア、ラオス、ミャンマー、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム、東ティモールの行政官・専門家を対象にアンケート調査及びワークショップを開催するとともに、スリランカ政府関係者のヒアリング調査、ベトナムにおけるワークショップを実施した。 いずれの事業も日本政府とユネスコの国際協定に基づくものであり、計画どおり実施したことが、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。	〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策〉 なし。 〈その他事項〉 ○有識者コメント ・アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のパートナーシップの重要性を認識し、我が国の貢献を一層推進すべきである。 ・東南アジア諸国を中心に無形文化財保護事業に

		文化遺産保護を中心とした国際的動向の情報収集を図る。				関する指導的役割を果たした。
--	--	----------------------------	--	--	--	----------------

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-6	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 6. 情報資料の収集・整備および調査研究成果の発信			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構 第12条 第5号	業務に関連する政 策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・ 行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ

①主要なアウトプット(アウトカム)情報								②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)						
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
平城宮跡 資料棟 館数	計画値	85,214	—	85,300	85,300	85,300	85,300		予算額(千円)	355,938	391,581	372,224	340,626	374,079
	実績値	—	—	132,295	124,515	108,896	109,188		決算額(千円)	343,275	414,774	312,413	367,691	
	達成度	—	—	155.1%	146.0%	127.7%	128.0%		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
飛鳥資料 館球館者 数	計画値	45,589	—	48,800	48,800	48,800	48,800		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	実績値	—	—	42,479	38,854	41,736	38,096		行政サービス実施コ スト(千円)	—	—	—	—	—
	達成度	—	—	87.0%	79.6%	85.5%	78.1%		従事人員数(人)	89	87	89	89	89
藤原宮跡 資料室来 館者数	計画値	4,509	—	4,400	4,509	4,509	4,509		※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・情報公開事業費及び展 示出版事業費予算額の合計額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・情報公開事業費及び展 示出版事業費決算額の合計額を計上している。 ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数に、アジア太平洋無形文化 遺産研究センターの研究職員の人数を加えた人数を計上している。					
	実績値	—	—	2,971	9,510	7,869	8,461							
	達成度	—	—	67.5%	210.9%	174.5%	187.6%							
(合計)	実績値	—	—	177,745	172,879	158,501	155,745							
ウェブサイト アクセス 数(件)	(東文研) 実績値	—	—	1,314,541	(*) 1,230,718	1,410,075	1,603,086							
	(奈文研) 実績値	—	—	457,154	425,044	447,563	525,886							
	(合計) 実績値	—	—	1,771,695	1,655,762	1,857,638	2,128,972							
学術雑誌 等への論 文掲載数 (件)	(東文研) 実績値	—	—	0	0	1	0							
	(奈文研) 実績値	—	—	0	0	9	4							
	(合計) 実績値	—	—	0	0	10	4							
学会、研 究会での 発表件数 (件)	(東文研) 実績値	—	—	0	0	0	0							
	(奈文研) 実績値	—	—	2	1	1	0							
	(合計) 実績値	—	—	2	1	1	0							

*1 参考値。サーバの入替の際にアクセスログ保存期間の設定に誤りがあり、24年10月~25年2月のアクセスログが消失したことから、アクセス件数は不明である。ログが保存されている7ヵ月間のアクセス件数717,919件の月平均を1.2倍した値を、参考値として記載している。

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価

中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信 国際化の推進を図るためインターネット等による情報発信を強化し、調査・研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信(前文略) (1)文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を行う。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査・研究に基づく成果としてのデータベースの充実を行う。 (2)文化財に関する調査・研究に基づく	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信 以下のとおり、調査・研究に基づく資料の作成及び文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査・研究成果を積極的に公表・公開し、国内外の研究者や広く一般の人が調査・研究成果を容易に入手できるようにする。 (1)文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を行う。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査・研究に基づく成果としてのデータベースの充実を行う。 (2)文化財に関する調査・研究に基づく	〈主な定量的指標〉 ・前中期計画期間年度平均来館者数(特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く) 〈その他の指標〉 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・ウェブサイトアクセス件数 〈評価の視点〉 ○ネットワークセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図った。また、文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図った。 ○公開講演会、現地説明会、国際シンポジウム等を積極的に行った。また、ウェブサイトの充実を図るとともに、アクセス件数の向上を図った。	<実績報告書等参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 p526~p577 6 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 p112~p114 6.共通資料 c-②~③.d <主要な業務実績> (1) ・保守期限切れを迎えるネットワーク機器の更新を実施し、無線 LAN のアクセスポイントを追加した。また、仮想サーバを導入した。(東文研) ・遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面 ・ウェブ関連雑誌論文情報補完のデータベースについてデータの入れ替えを行うとともに、新規に考古関連雑誌論文情報補完データベースを一般公開した。(奈文研) ・「文化財関係文庫データベース(統合試行版)」に情報を追加し、東京文化財研究所定期刊行物のうち『保存科学』『芸術の科学』『無形文化遺産研究報告』の PDF の検索・閲覧を可能にした。(東文研) (2) ・図書の収集・整理・公開・提供を行った。(東文研)(奈文研) ・定期刊行物の刊行を行った。(東文研)(奈文研) ・第 48 回企画情報部オープンレクチャー「モノノイメージとの対話」と題して 4 講演を 2 日間にわたり開催した。(東文研) ・公開講演会は、例年実施している定例公開講演会(奈良)を 2 回、特別講演会(東京)を 1 回、飛鳥資料館特別展記念講演会等を 2 回開催した。発掘調査に伴う現地説明会等を行う。また、飛鳥資料館の来館者数については、目標を下回ったが、飛鳥の意義、重要性を来館者に伝えるため、特別展 2 回、企画展 3 回、講	<自己評価参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 p526~p577 6 p35 2(1)② <評定と根拠> 評定:B ウェブサイト、刊行物、研究成果公開施設における展示等により、調査・研究成果の発信を順調に行うことができた。 ・老朽化したネットワーク機器の更新及び仮想サーバの導入によりセキュリティの強化及び高速化、費用の削減が図られた結果、適時性、効率性、継続性が向上した。 ・データベースへの入力と更新を継続し、新規のデータベースの公開をするなど、専門的アーカイブの拡充と文化財に関するデータベースを充実させた。 ・オープンレクチャー、講演会、現地説明会を行った。定例講演会に加え座談会と特別講演会を各 1 回開催し、積極的に開催した。 ・コンテンツの再配置の結果、閲覧が少なかつたコンテンツの閲覧数を増加させ、ページビュー数を劇的に向上させた。 ・平城宮跡資料館、飛鳥資料館では、特別展のみならず企画展を目標以上に実施し、藤原宮跡資料室でも通常の遠観展示を実施し、展示を充実させた。 また、来館者数については平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室では目標値を大きく上回った。飛鳥資料館の来館者数については、目標を下回ったが、飛鳥の意義、重要性を来館者に伝えるため、特別展 2 回、企画展 3 回、講	評定 B (評定に至った理由) 東文研及び奈文研は、文化財に関する図書・逐次刊行物の収集・公開、各種情報のデータベースの構築、調査研究の成果等に関する刊行、講演会、展示等を行っている。 東文研は、資料閲覧室において図書のレファレンスサービスを行っており、平成 26 年度は新たに和漢書 2,459 冊、洋書 18 冊、展覧会図録・報告書等 4,621 冊、雑誌 3,279 冊、計 10,388 冊を収集し、蔵書数は 261,218 冊となり、年間の一般利用者は 1,015 人であった。またネットワーク機器を更新し、新たに仮想サーバを設けたことにより、安定的な運用が可能となった。7 種類のデータベースをウェブサイトで公開しているが、所蔵資料等を含めた総合検索システムと連携した横断検索が可能となり機能が向上した。定期刊行物として、年報、概要、ニュースのほか、『日本美術年鑑』、『美術研究』、『無形文化遺産研究報告』、『無形民俗文化財研究協議会報告書』、『保存科学』を計画どおり刊行するとともに、公開学術講座としてオープンレクチャー「モノノイメージとの対話」を開催した。ウェブサイトのアクセス件数は約 160 万件であり、前年度(約 141 万件)を上回った。 奈文研は、図書資料室において図書のレファレンスサービスを行っており、平成 26 年度は新たに図書 7,653 冊を収集し蔵書数は 323,240 冊となり、年間の一般利用者は 531 人であった。ウェブサイトの充実のため、学術情報リポジトリのコンテンツの増加、多言語化対応ページの充実、コンテンツの再配置等を行った結果、学術情報リポジトリのアクセスは前年度の約 2 倍に、ページビュー件数は 4 倍以上に増加した。データベースのウェブサイト公開については、新たに「考古関連雑誌論文情報補完」を追加し 8 種類となった。定期刊行物については、紀要、概要、

<p>成果について、定期的な刊行物を刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図るとともに、ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。</p> <p>(3) 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。来館者数については、前期中期目標期間の年度平均(特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く。)以上を確保する。</p> <p>(4) 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財及び奈良文化</p>	<p>成果について、定期的な刊行物を刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図るとともに、ウェブサイトアクセス件数の向上を図る。</p> <p>(3) 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。来館者数については、前期中期計画期間の年度平均(特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く。)以上を確保する。</p> <p>(4) 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財及び奈良文化</p>	<p>か。</p> <p>○平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示の充実を図った。また、来館者数については、前期中期計画期間の年度平均(特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く。)以上を確保したか。</p> <p>○文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力したか。また、ボランティアへの活動支援を行ったか。</p>	<p>クセス方法を改善した。(東文研)</p> <p>・ウェブサイト内のコンテンツをアクセス解析の結果をもとに再配置した。(奈文研)</p> <p>(3)</p> <p>・平城宮跡資料館における展示公開 来館者数はアウトプット情報を参照</p> <p>・秋期特別展「地下の正倉院展 一木簡を科学するー埋蔵文化財センターの40年」など特別展を開催し、企画展・講演会を目標以上に開催した。(奈文研)</p> <p>・飛鳥資料館における展示公開 来館者数はアウトプット情報を参照</p> <p>・春期特別展「いにしへの匠たち」など特別展を開催し、企画展・講演会を目標以上に開催した。(奈文研)</p> <p>・藤原宮跡資料室における展示公開 来館者数はアウトプット情報を参照</p> <p>・発掘調査の速報展示などを通年で実施した。(奈文研)</p> <p>(4)</p> <p>・文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の復原・整備への協力では、第一次大極殿復原のため、所内検討会及び有識者を招聘した検討会を開催し、記録集を刊行した。また、関連の講演会や整備工事にあたり立会調査等も実施した。(奈文研)</p> <p>・平城宮跡解説ボランティア事業では、専門研修及び他機関の文化財に関するボランティアガイドが解説する場に赴き、臨地研修を実施するなどした。(奈文研)</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数4件 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・学会、研究会での発表件数0件 内訳はアウトプット情報を参照</p>	<p>演会・ギャラリートーク13回を開催し、奈良文化財研究所あるいは飛鳥の歴史的な地域の特徴を活かした展示を行った。また、夏期企画展の写真コンテスト作品展「飛鳥の麓」では展示と連動して写真教室2回を開催し、参加型の展示と連動する企画を行うという工夫を試みた。さらに、キトラ古墳壁画の修理と保存管理の取組を紹介する展覧会として、東京国立博物館を会場として特別展「キトラ古墳壁画」を開催し、25日間で119268人の来館者を集めた。以上のように、飛鳥資料館では特別展等を目標値以上に開催し、また、奈良文化財研究所の研究成果を広く公開するため東京でも特別展を開催するなど、精力的な活動を行っており、総合的にみて、調査・研究成果の内容を広く一般的に理解を深めてもらうという中期計画の目的を達成している。</p> <p>・平城宮跡第一次大極殿復原のため記録集を刊行するなど、文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力した。</p> <p>・平城宮跡解説ボランティアに対しては、特別展など展示内容の講習会や公開講演会への参加を通して、登録ボランティアの知識を高める等、ボランティアの活動を支援した。</p> <p><課題と対応></p> <p>飛鳥資料館の来館者数が目標値に達しなかったことは課題だが、交通アクセスの不便さをたびたび指摘されているところであり、交通インフラ整備や広い駐車場確保など、自力では容易に解決がたい問題も多い。展覧会の内容は奈良文化財研究所の展示施設として適切な質を維持しており、今後は参加型の企画も増やしつつ、最新の学術成果をわかりやすく伝えるよう努力していきたい。</p>	<p>ニュースを計画どおり刊行した。一般を対象に公開講演会を2回、特別講演会を1回、飛鳥資料館座談会を1回、飛鳥資料館講演会を1回、発掘調査現地説明会を2回開催した。調査研究の成果を展示する施設として平城宮跡資料館、飛鳥資料館、藤原宮跡資料室を運営しており、常設展示、企画展示を行っている。平城宮跡資料館は常設展のほか夏期企画展、秋期特別展を開催して年間約10万9千人の来館者が、また飛鳥資料館は常設展のほか特別展を2回、企画展を3回開催し年間約3万8千人の来館者があった。藤原宮跡資料室は常設展示に約8千人の来館者があった。このほか調査研究成果の公開の一環として、平城宮跡の来訪者への解説ボランティア事業を運営している。144名のボランティア登録者が年間を通じて活動し、その利用者は約8万4千人であった。</p> <p>以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>(指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策) なし。</p> <p>(その他事項)</p> <p>○有識者コメント</p> <p>・評価に対する異論はない。奈文研の展示は大変わかりやすい内容になっており、大いに評価される。</p> <p>・飛鳥資料館の来館者数については過去にも指摘されており、高松塚周辺公園化事業とも連携し、抜本的な対応策を探るべき時期が来ているのではないかと。</p> <p>・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。</p> <p>・両文化財研究所はいずれもデータベースの充実、学術刊行物の出版で、積極的に事業を継続した。合わせて遺跡資料の展示解説など一般向けサービスをも行い、十全な研究成果の発信を達成している。</p>
--	--	---	---	---	---

<p>究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成するとともに、NPO法人等が自主的に行う各種ボランティア事業に対して活動機会・場所の提供等の支援を行う。</p>	<p>財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成するとともに、NPO法人等が自主的に行う各種ボランティア事業に対して活動機会・場所の提供等の支援を行う。</p>				
--	--	--	--	--	--

<p>4. その他参考情報</p> <p>特になし</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-7	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 7. 地方公共団体への協力等による文化財保護への質的向上				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報							②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)								
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度								
													23年度	24年度	25年度
埋蔵文化財担当者研修	課程数(課程)	計画値	—	—	13	14	9	15		予算額(千円)	17,806	13,140	19,665	20,472	12,435
		実績値	—	—	13	24	9	15		決算額(千円)	15,684	17,515	13,432	198,831	
		達成度	—	—	100.0%	171.4%	100.0%	100.0%		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	受講者数(人)	計画値	—	—	160	160	117	190		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	—	136	156	138	171		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
		達成度	—	—	85.0%	97.5%	117.9%	90.0%		従事人員数(人)	88	86	88	88	88
保存担当学芸員研修	研修期間(週)	計画値	—	—	2	2	2	2		※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・研修事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・研修事業費の決算額を計上している。(26年度決算額には、文化財防災ネットワーク推進事業 184,653 千円を含む。) ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。					
		実績値	—	—	2	2	2	2							
		達成度	—	—	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%							
受講生数(人)	計画値	—	—	25	25	25	25								
	実績値	—	—	27	30	30	31								
	達成度	—	—	108.0%	120.0%	120.0%	124.0%								
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研)	実績値	—	—	0	0	0	0							
		(奈文研)	実績値	—	—	6	5	0	0						
		(合計)	実績値	—	—	6	5	0	0						
学会・研究会での発表件数(件)	(東文研)	実績値	—	—	0	0	0	2							
		(奈文研)	実績値	—	—	0	0	0	0						
		(合計)	実績値	—	—	0	0	0	2						

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価												
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価						
				業務実績	自己評価							
7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上 我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、地方公共団体や大学、研究機関とのネットワークや連携協力体制を構築し、機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を図り、我が国全体の文化財の収集・展示、調査・研究の質的向上に寄与すること。また、地方公共団体等の指導者層を主たる対象とする高度な研修事業や、若手研究者の育成に寄与するため実践的な連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成すること。	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上 我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。 (1)地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。 (2)文化財に関する	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上 我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。 (1)地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。 (2)文化財に関する	〈主定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・埋蔵文化財担当者研修 ・保存担当学芸員研修 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 〈評価の視点〉 ○文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行ったか。	〈実績報告書等参照箇所〉 ・平成26年度自己点検評価報告書 個別表 p578~p610 7 ・平成26年度自己点検評価報告書 統計表 p115~p116 7 〈主要な業務実績〉 協力・助言については、以下のような内容で1,335件実施した。 ・文化財の収集、保管に関する指導助言(東文研)23件 ・無形文化遺産に関する助言(東文研)13件 ・文化財の修復及び整備に関する調査・助言(東文研)48件 ・文化財の虫歯害に関する調査・助言(東文研)37件 ・文化財の材質・構造に関する調査・助言(東文研)15件 ・美術館・博物館等の環境調査と援助・助言(東文研)780件 ・地方公共団体が行う平城京域の発掘調査等への協力・援助(奈文研)6件 ・地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言(奈文研)10件 ・地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言(奈文研)384件 ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対する地方公共団体等への支援・協力(奈文研)19件 研修に関して主な実績は以下のとおり。 ・文化財担当者研修(奈文研) 遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公	〈自己評価参照箇所〉 ・平成26年度自己点検評価報告書 個別表 p578~p610 7 〈評定と根拠〉 評定:A 地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、多岐にわたる領域について、文化財に関する多数の協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行った。 「文化財担当者研修」では、文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等の中核となる文化財担当者に対し埋蔵文化財等に関する15課程の研修を実施し、人材の要請に貢献した。 「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」では、自然科学に立脚し、また「現場で役立つ」ことを主眼とした資料保存のための研修会と調査への援助・助言(奈文研)10件を行っているだけでなく、資料保存を取り巻く諸状況の進歩や変化に対応し、また、批判も含めた参加者からのフィードバックを毎回リキラム構成に反映させていることから、満足度も非常に高いものである。 中期計画外で実施した事業については以下のとおり。 ・東日本大震災の被災地の地方公共団体からの要請に応じた適切な活動を実施するとともに、昨年度に引き続き、独自に開発した	〈評定に至った理由〉 東文研及び奈文研は、地方公共団体等への協力、連携大学院における教育研究、受託研究、専門家の研修等を行っている。 東文研は、地方公共団体等の依頼に応じた指導助言を、文化財の収集等に関し23件、無形文化遺産に関し13件、保存・修復等に関し48件、虫歯害に関し37件、材質・構造に関し15件、美術館等の環境調査に関し780件を行った。連携大学院については、東京藝術大学大学院修士課程にシステム保存学コースを開設し、6名が連携教員として教育活動を行っている。受託研究は21件実施した。研修については、31名の受講者を得て、第31回博物館・美術館等保存担当学芸員研修を2週間にわたり実施した。施設の環境要件と維持管理、文化財の劣化要因や保存修復等に関する内容であり、受講者の満足度は100%であった。 奈文研は、地方公共団体の依頼に応じた発掘調査を16件、発掘調査への立会いを57件、史跡整備等に関する指導助言を384件行った。発掘調査は、自然科学に立脚し、また「現場で役立つ」ことを主眼とした資料保存のための研修会と調査への援助・助言(奈文研)10件を行っているだけでなく、資料保存を取り巻く諸状況の進歩や変化に対応し、また、批判も含めた参加者からのフィードバックを毎回リキラム構成に反映させていることから、満足度も非常に高いものである。 研修については、地方公共団体等の文化財担当職員を対象に、遺跡の発掘調査や保存・整備等に関する15課程の専門研修を9ヶ月間にわたり実施した。1課程が5日間から9日間に及び講義・実習であり、171人の受講者を得て満足度は99.6%であ						

<p>高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に対し埋蔵文化財等に関する研修を実施するとともに、保存担当学芸員に対し保存科学に関する研修を実施する。</p>	<p>高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に対し埋蔵文化財等に関する研修を実施するとともに、保存担当学芸員に対し保存科学に関する研修を実施する。</p>	<p>共団体等の文化財担当職員を対象として、最新の知見を盛り込んだ専門研修 15 課程の研修を実施し、延べ 171 名が受講した。研修受講者全員に対するアンケート調査では、ほぼ全員から満足との回答を得ており、充実した研修が実施できた。</p> <p>・博物館・美術館等保存担当学芸員研修(東文研)</p> <p>各地の文化財施設で資料保存を業務とする学芸員や行政担当者などを対象として、第 31 回博物館・美術館等保存担当学芸員研修を開催した。受講者からのアンケート結果により、全員から「満足」との評価を得た。</p> <p>中期計画外で以下の事業を実施した。</p> <p>・東日本大震災被災地の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対し、今までの調査・研究の成果を反映させた発掘調査への効果的な支援や報告書作成に係る支援を行った。同時に、高所リモート撮影等の奈文研の特性を踏まえた写真撮影等の技術について、地方公共団体等の要請を受け支援・協力を実施した。(奈文研)</p> <p>・「文化財防災ネットワーク推進本部」を設置し、文化遺産防災ネットワーク推進会議を設立した。また、第3回国連防災世界会議の一部として、国内外の専門家 54 名が参加した国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」を実施した。(本部)</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数 0 件 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・学会、研究会での発表件数 2 件 内訳はアウトプット情報を参照</p>	<p>調査技術の導入を適切に行う等、より効率的な発掘調査を行うことができた。</p> <p>・文化財防災ネットワーク推進事業については、年度途中で交付決定された補助金事業にもかわらず、短い期間で体制を整備し、大規模な国際専門家会合等複数の事業を実施することができ、防災に関する国内外のネットワークの構築の基礎を築いた。</p> <p>以上のとおり、中期計画に沿った事業を十分に実施したのみならず、それに加えて、東日本大震災を受けた中期計画外の事業を実施しており、評定をAとした。</p> <p><課題と対応> 特になし</p>	<p>た。</p> <p>地方公共団体等の依頼によるものほか文化庁の補助事業として、国立文化財機構全体で「文化財防災ネットワーク推進事業」を実施した。巨大地震等の大規模災害に備え、各地域における文化財の防災対策や被災した文化財の救出・修復等の処置を適切に行うため、全国規模の文化財防災ネットワークを構築する目的で、文化遺産防災ネットワーク推進会議、文化遺産防災ネットワーク有識者会議、国際専門家会合、研修等を実施した。</p> <p>自己評価の評定はAとされているが、その根拠は中期計画に記載のない「文化財防災ネットワーク推進事業」を実施したことにある。『独立行政法人の評価の指針』において、年度評価の項目別評定の評定区分「A」は、「法人の活動により、中期計画における所期の目標を上回る成果が得られていると認められる(定量的指標においては対中期計画値(又は対年度計画値)の 120% 以上とする。)」とされているが、本評価項目においては定量的指標が設けられていない。したがって、「中期計画における初期の目標を上回る成果」の度合いが評定の根拠となるが、中期計画においては「地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。」と記載されている。「文化財防災ネットワーク推進事業」は、中期計画の認可後に発生した東日本大震災という想定外の事態を受けて企画・実施しているものであり、既知の対処方法あるいは既存の枠組みを超えた成果を目指している。その意味において本評価項目については、中期計画における初期の目標を上回る成果を挙げたと認めることは妥当であり、A評定とした。</p> <p><指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策> なし。</p> <p><その他事項> ○有識者コメント</p>
---	---	---	---	---

				<p>・文化財機構全体として「文化財防災ネットワーク推進事業」を実施し、大きな成果を上げたことは今後のわが国の文化財防災においてきわめて重要なことであり、A評価とすることにまったく異論はない。今後、全国各地の史料ネット団体の拡大・充実や、この事業を恒常的に行う常設の組織の設置を強く要望したい。</p> <p>・自己評価の妥当性を検証しており、丁寧な評価になっている。その検証結果も妥当と思われる。</p> <p>・地方公共団体への事業協力・指導、連携大学院での教育事業、文化財防災ネットワークの構築と推進のいずれにおいても、例年を超える充実した事業を展開した。</p> <p>・現状の体制を今後も維持されることを期待する。</p>
--	--	--	--	--

<p>4. その他参考情報 特になし</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
2-1	2. 業務運営の効率化に関する事項 1. 一般管理費の削減		
当該項目の 重要度、難易度	-		関連する政策評価・ 行政事業レビュー
			平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ										
評価対象となる指標		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報) 22年度実績値に対する26年度実績値の減少(増加)率	
一般管理費(物件費) (千円)	実績値	中期目標期間で 15%削減	932,061	917,667	680,932	606,818	832,235		10.71%減(特殊要因を考慮すると17.10%減)	
業務経費(物件費) (千円)	実績値	中期目標期間で 5%削減	6,915,703	4,918,593	5,369,179	6,213,253	6,319,081		8.63%減	
光熱水量	電気量 (kwh)	実績値	25,860,045	25,114,550	24,277,289	25,749,324	26,425,896		2.19%増	
	ガス量(m ³)	実績値	1,475,110	1,725,133	1,583,761	1,912,122	1,904,708		29.12%増	
	水道量(m ³)	実績値	145,792	147,403	148,672	153,108	148,365		1.76%増	
廃棄物排出量(kg)	実績値	-	273,407	255,976	245,438	238,041	241,900		11.52%減	

※基準値は22年度実績

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価									
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価			
				業務実績	自己評価	評定	B		
1 一般管理費等の削減 業務運営に関しては、「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」(平成22年12月7日閣議決定)等を踏まえ、国立文化財機構の活性化が損なわれないよう十分配慮しつつ、一層の業務の効率化を推進することにより、文化財購入等の効率化になじまない特殊要因経費を除き、中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費についても5%以上の効率化を図ること。ただし、人件費については次項に基づいた効率化を図る。 なお、19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費削減を図ること。	1 一般管理費等の削減 中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を行う。ただし、文化財購入費、文化財修復費等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。 なお19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を削減する。 このため、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、事務、事業、組織等の見直しや、公用車の運転業務など外部委託できる業務を引き続き精査して計画的	1 一般管理費の削減 (1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化 (2) 共通的な事務の一元化を推進し事務の効率化を引き続き図る。 2) 国立博物館各館における翌年度以降の展覧企画等について「研究・芸系職員連絡協議会」において連絡・調整を行い、企画機能強化を図る。 3) 機構共通のネットワーク及びシステムにより、業務の効率的な運用及び情報の共有化を引き続き推進する。 (2) 計画的なアウトソーシング (3) 使用資源の減少 ・省エネルギー 1) 光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に引き続き節減に努める。 (エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減) ・廃棄物減量化	(主な定量的指標) ・一般管理費(物件費)の削減状況 ・業務経費(物件費)の削減状況 ・光熱水料金 (その他の指標) ・廃棄物排出量 (評価の視点) ○ 中期目標の期間中、一般管理費15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を行ったか。 ・共通的な事務の一元化を図ったか。 ・計画的なアウトソーシングを図ったか。 ・エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%の削減を図ったか。 ・リサイクルの推進を図ったか。 ○ 競争性のある契約への移行を推進したか。また、民間競争入札等の推進を図ったか。 ○ 一般管理費の削減は順調に進められたか。	<実績報告書等参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P677~680、683 <主要な業務実績> 共通的な事務の一元化による業務の効率化、計画的なアウトソーシング、使用資源の減少に努めた。詳細は以下のとおり。 ○ 中期目標期間中の業務の効率化 ・共通的な事務の一元化 機構内で共通のグループウェアや財務会計システム、人事給与システムを本部主導で運営した。 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P677 参照 ・計画的なアウトソーシング 個別表 P678 参照 ・エネルギー使用量 個別表 P679 参照 ・廃棄物の減量化 個別表 P683 参照 ○ 競争性のある契約への移行 個別表 P683 参照 ○ 一般管理費の削減 一般管理費(物件費)について、決算報告書による平成25年度支出額は606,818千円、平成26年度支出額は832,235千円であり、225,417千円(37.15%)の増加となっている。これは、東京国立博物館の各所修繕費が60,350千円、奈良文化財研究所の発掘経費が41,602千円、消費税納付額が46,191千円それぞれ増加したことが主な要因である。平成22年度支出額932,061千円に対しては、99,826千円の削減(Δ10.71%)を行っている。また、消費税については、平成22年度は132,880千円還付され、平成26年度は59,572千円納付していることから、平成	<自己評価書参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P143~146、149 <評定と根拠> 評定:B 効率化について、可能なものについて実施済である。 エネルギー使用量については、新設建物である京都国立博物館の平成知新館のオープンや東京国立博物館の正門プラザのオープンと黒田記念館の開館、東京文化財研究所における大型実験装置の移動の影響で増加しているが、削減に引き続き取り組んでいる。 競争性のある契約への移行については、特殊な契約を除き実施済みであり、性質上代替品が存在しない文化財の購入を除いた場合目標を達成している。 一般管理費の削減についても、当該年度の特異要因を除き順調に進んでいる。また、事業費の削減についても計画どおり順調に削減している。 <課題と対応> 特になし	評定 B (評定に至った理由) 一般管理費については東博の修繕や文芸研の建設工事に伴う発掘経費の発生、及び消費税の増額により前年度比37.2%増となっている。平成26年度支出より消費税の増額分を差し引いた額と平成22年度支出を比較した場合、平成22年度より15.7%減となっていることから中期計画における所期の目標を上回る成果と認められる。 業務経費については平成22年度より8.6%減となっていることから中期計画における所期の目標を上回る成果と認められる。 共通的な事務の一元化及び、計画的なアウトソーシングについても実績の通り実施されている。 また、競争性のある契約への移行の推進及び民間競争入札等の推進については契約額全体における競争性のある契約額の割合が基準値より19.3%増となっており、これらの取り組みが推進されていることが認められる(評価項目2-3の主要な経年データ参照)。 エネルギーの使用量については各施設において施設の開館等が発生していることから以下の条件により平成22年度と平成26年度の評価を行ったところ、電気については11%減、水道については18%減、ガスについては7%減となっており、中期計画における所期の目標を上回る成果と認められる。			

<p>にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。 具体的には下記の措置を講じる。 (1)共通的な事務の一元化による業務の効率化 (2)計画的なアウトソーシング (3)使用資源の減少 ・省エネルギー(エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減) ・廃棄物減量化 ・リサイクルの推進</p>	<p>1)使用資源の節減に努め、廃棄物の減量化に引き続き努める。 ・リサイクルの推進 1)廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを引き続き推進する。</p>	<p>○事業費の削減は順調に進められたか。</p>	<p>26年度支出額から消費税納付額 59,572 千円を控除した 772,663 千円と比較した場合は、159,398 千円の削減(△17.10%)となる。 ○事業費の削減 業務経費(物件費)について、決算報告書による平成 22 年支出額は 6,915,703 千円、同平成 26 年度支出額は 6,319,081 千円であり、△8.63%の削減を行っている。</p>	<p>(ガスのみ) ・奈良文化財研究所:平成 26 年 1 月に旧庁舎より移転し、ガス設備を使用しなくなった。 ○平成 23 年 10 月より稼働したアジア太平洋無形文化遺産研究センターについては 24 年度の数値を参考として比較を行う。(水道・ガスの使用量については事務所施設を所有する堺市との協定により、機構負担の対象外となっているため使用量は計上していない) 廃棄物の減量化については前年度より排出量が 1.62%増となっているが平成 22 年度の数値と比較して 11.52%の減であり、リサイクルが推進されていると認められる。 (指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策)なし。 (その他事項) ○有識者コメント ・数値を示した、具体的な評価になっている。</p>
--	---	---------------------------	---	--

<p>4. その他参考情報 特になし</p>

様式 1-1-4-2 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(業務運営の効率化に関する事項、財務内容の改善に関する事項及びその他業務運営に関する重要事項)

<p>1. 当事務及び事業に関する基本情報</p>			
<p>2-2</p>	<p>2. 業務運営の効率化に関する事項 2. 給与水準の適正化等</p>		
<p>当該項目の重要度、難易度</p>	<p>—</p>		<p>関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385</p>

<p>2. 主要な経年データ</p>										
<p>評価対象となる指標</p>			<p>達成目標</p>	<p>基準値</p>	<p>23年度</p>	<p>24年度</p>	<p>25年度</p>	<p>26年度</p>	<p>27年度</p>	<p>(参考情報)</p>
<p>対国家公務員指数</p>	<p>事務・技術職員</p>	<p>実績値</p>	<p>96.9</p>	<p>94.0</p>	<p>96.5</p>	<p>97.0</p>	<p>97.1</p>			
	<p>研究職員</p>	<p>実績値</p>	<p>98.3</p>	<p>98.4</p>	<p>97.7</p>	<p>98.4</p>	<p>98.5</p>			
<p>財政支出割合</p>	<p>実績値</p>		<p>91.3%</p>	<p>91.3%</p>	<p>91.7%</p>	<p>89.5%</p>	<p>89.5%</p>			
<p>累積欠損金(円)</p>	<p>実績値</p>		<p>—</p>	<p>0</p>	<p>0</p>	<p>0</p>	<p>0</p>			
<p>法定外福利費(千円)</p>	<p>実績値</p>		<p>15,030</p>	<p>14,917</p>	<p>13,559</p>	<p>13,171</p>	<p>13,918</p>			

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
				業務実績	自己評価	評定	B
<p>2 給与水準の適正化等 給与水準については、「公務員の給与改定に関する取扱いについて」(平成22年11月1日閣議決定)を踏まえ、国家公務員の給与水準等を十分考慮し、検証したうえで、業務の特殊性を踏まえた適切な目標水準・目標期限を設定し、その適正化に取組むとともに、検証結果や取組状況を公表すること。</p> <p>総人件費についても、平成23年度はこれまでの人件費改革の取組を引き続き着実に実施するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、厳しく見直すこと。</p>	<p>2 給与水準の適正化等 国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数については現状を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。また、これまでの人件費改革の取り組みを平成23年度まで継続するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、取り組みこととする。ただし、人事院勧告を踏まえた給与改定及び競争的資金により雇用される任期付職員に係る人件費については本人件費改革の削減対象から除く。 なお、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職手当、福利厚生費は含まない。</p>	<p>2 給与水準の適正化等 国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数は国家公務員の水準を超えないよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。また人件費改革の取り組みについて、今後の独立行政法人制度の見直し等を踏まえて検討する。</p>	<p>〈主な評価指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 ・対国家公務員指数 ・財政支出割合 ・累積欠損金 ・法定外福利費</p> <p>〈評価の視点〉 ○対国家公務員指数について、現状を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組水準を公表したか。 ○給与水準の高い理由及び講ずる措置(法人の設定する目標水準を含む)が、国民に対して納得の得られるものとなっているか。 ○法人の給与水準自体が社会的な理解の得られる水準となっているか。 ○国の財政支出割合の大きい法人及び累積欠損金のある法人について、国の財政支出規模や累積欠損の状況を踏まえた給与水準の適切性に関して検証されて</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P682</p> <p>〈主要な業務実績〉 ○対国家公務員指数の検証と公表 対国家公務員指数の状況 事務・技術職員 97.1 研究職員 98.5 事務・技術職員、研究職員ともに国家公務員を下回っており、適正な水準と言える。また、検証結果、取組実績等を法人ウェブサイトにおいて公表している。 ○給与水準が高い理由及び講ずる措置 対国家公務員指数は事務・技術職員、研究職員ともに国家公務員を下回っており、給与水準は適正である。 また、引き続き適正な給与水準を維持する。 ○法人の給与水準 独立行政法人通則法第50条の10第3項に基づき、業務の実績を考慮し、かつ、社会一般情勢(国家公務員の給与水準)に適合するよう、学歴、試験、経験及び職務の責任の度合いを基に給与水準を決定しており、その水準は対国家公務員を下回っている。 ○国の財政支出割合と累積欠損金を踏まえた給与水準の検証 平成26年度財政支出割合 89.5% 平成26年度累積欠損金 なし ○法人の福利厚生の見直し 平成26年度法定外福利費 13,918千円 (法定福利費を含む福利厚生費 465,074千円) レクリエーション経費の支出はない。また、国家公務員と異なる諸手当はない。</p>	<p>〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P148</p> <p>〈評定と根拠〉 評定:B ・対国家公務員指数を事務・技術職員で2.9ポイント、研究職員で1.5ポイント下回っている。公表についても行なっている。 ・対国家公務員指数を下回っており、給与水準は適正である。 ・人事院勧告等に準拠し、給与規程等の改定を実施した。 ・支出予算の総額に占める国からの財政支出割合は89.5%と50%を上回っているが、給与水準の比較指標では国家公務員の水準未満となっていることから給与水準は適正である。 ・法定外福利費の支出内訳は法律に基づく健康診断経費、産業医の委託費用、職員研修費等、最低限必要なものであり、適正な支出と考える。</p> <p>〈課題と対応〉 特になし</p>	<p>評定 B</p> <p>〈評定に至った理由〉 給与水準について、指標ごとに自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・特に意見無し。</p>	

	い。		いるか。 ○法人の福利厚生について、法人の事務・事業の公共性、業務運営の効率性及び国民の信頼確保の観点から、必要な見直しが行われているか。			
--	----	--	--	--	--	--

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
2-3	2. 業務運営の効率化に関する事項 3. 契約の適正化の推進		
当該項目の 重要度、難易度	-		関連する政策評価・ 行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ										
評価対象となる指標			達成 目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
一般競争入札	件数(件)	実績値		199	132	136	171	169		
	金額(千円)	実績値		2,009,789	3,438,898	5,135,513	4,206,183	10,028,154		
企画競争・公募等	件数(件)	実績値		36	39	34	31	53		
	金額(千円)	実績値		324,789	241,360	236,781	338,031	365,428		
上記競争性のある契約 の合計	件数(件)	実績値		235	171	170	202	224		
	金額(千円)	実績値		2,334,578	3,680,258	5,372,293	4,544,214	10,393,583		
随意契約	件数(件)	実績値		81	69	80	63	80		
	金額(千円)	実績値		1,103,603	983,703	1,190,924	1,051,603	1,523,640		
競争性のある契約のうち、 一者応札・応募となった契約	件数(件)	実績値		87	66	74	84	103		
	金額(千円)	実績値		783,429	1,586,048	3,115,671	1,745,254	1,940,909		

※基準値について、上位4項目は22年4月公表の随意契約等見直し計画による。

競争性のある契約のうち、「一者応札・応募となった契約」の基準値は平成22年度実績による。(参考：平成22年度 競争性のある契約の合計 217件 2,114,321円)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
3 契約の適正化の推進 契約については、「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」(平成21年11月17日閣議決定)に基づき取組を着実に実施し、一層の競争性と透明性の確保に努め、契約の適正化を推進するとともに外部委託の活用等により、定型的な管理・運営業務の効率化を図ること。	3 契約の適正化の推進 「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」(平成21年11月17日閣議決定)に基づき引き続き取組を着実に実施し、文化財の購入等随意契約が真にやむを得ないものを除き、競争性のある契約への移行を推進することにより、経費の効率化を行う。また「独法の事務・事業の見直しの基本方針」(平成22年12月7日閣議決定)に基づき、施設内店舗の賃借について、企画競争を導入するなど競争性と透明性を確保した契約方式とする。なお民間競争入札については、現在実施している民間競争入札の検証結果等を踏まえ、一層推進する。	3 契約の適正化の推進 1) 契約監視委員会を実施する。 2) 施設内店舗の貸付・業務委託について引き続き企画競争を実施する。 3) 民間競争入札を推進する。 (東京国立博物館・東京文化財研究所) ・施設管理・運営業務を継続して民間競争入札による外部委託を行う。 (東京国立博物館) ・展示場における来館者応対等業務を継続して民間競争入札による外部委託を行う。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・一般競争入札等件数 〈評価の視点〉 ○契約方式等、契約に係る規定類について、整備内容や運用は適切か。 ○契約事務手続きに係る執行体制や審査体制について、整備・執行は適切か。 ○「随意契約等見直し計画」の実施・進捗状況や目標達成に向けた具体的取組状況は適切か。 ○再委託の必要性等について、契約の競争性、透明性の確保の観点から適切か。 ○一般競争入札等における一社応札・応募の状況はどうか。その原因について適切に検証されているか。また検証結果を踏まえた改善方策は妥当か。 ○法人の目的・事業に照らし、会費を支出しなければならぬ	〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P683 〈主要な業務実績〉 ・契約監視委員会を2回実施した。 ・施設内店舗の貸付・業務委託について、企画競争を実施した。 ・東京国立博物館・東京文化財研究所の民間競争入札2件については、平成26年6月17日の内閣府官民競争入札等監視委員会において、「市場化テスト終了プロセス及び新プロセス運用に関する指針」(平成26年3月19日官民競争入札等監視委員会)に基づき、終了プロセスへの移行が了承された。よって、平成27年度以降の事業については、平成26年度に一般競争入札にて契約を行った。 ○契約方式等、契約に係る規程類整備規程は整備されている。 ○再委託の適切性 当法人においては、再委託の実績は無い。 ○随意契約等見直し計画 ○一般競争入札等の検証・改善 詳細は、上記報告書P683参照 ○会費の必要性 ○会費支出による便宜等 ○監事による会費の精査 該当する10万円以上の会費は、公益財団法人日本博物館協会の維持委員会会費の1件のみ、平成26年度支出額は246千円である。これは、中期目標で定めた「我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与することを実現するため、同協会の主催する「全国博物館会議」に参画している。監事においても精査されている。 ○公益法人に対する支出の公表	〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P149~150 〈評定と根拠〉 評定：B 契約方式等、契約に係る規程類整備については、特殊な契約を除き順調に整備等がなされている。その他の事項についても、適切に対応している。 会費については、最低限の会費支出となっており、特に問題はない。 〈課題と対応〉 特になし	評定 B 〈評定に至った理由〉 契約に係る規程類及び契約事務手続きに係る執行・審査体制は「4. その他参考情報」欄の通り整備されており、随意契約等見直し計画に基づき外部有識者による契約監視委員会による契約の点検・見直しが行われていることから適切に整備・執行がされていると認められる。 随意契約等見直しについては、平成22年度より契約額全体に占める随意契約の割合が19.2%減となっていることから適切に実施されていると認められる。 一般競争入札等における一者応札・応募については、競争性のある契約のうち一者応札・応募となった契約の割合が平成22年度より17.9%減となっていることから、適切に見直し実施されていると認められる。 会費の必要性、会費支出による便宜等、監事による会費の精査等については自己評価書によって具体的に説明されており、「独立行政法人が支出する会費の見直しについて」(平成24年3月23日行政改革実行本部)に従い、適切に実施されている。 〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策〉 なし。 〈その他事項〉 契約等に係る規定類については「4. その他参考情報」欄に記載。 ○有識者コメント ・特に意見無し。

			<p>い必要性が真にあるか(特に長期間にわたって継続してきたもの、多額のもの)</p> <p>○会費の支出に見合った便宜が与えられているか、また、金額・口座・種別等が必要最低限のものとなっているか。(複数の事業所から同一の公益法人等に対して支出されている会費については集約できないか)</p> <p>○監事は、会費の支出について、本見直し方針の趣旨を踏まえ十分な精査を行っているか。</p> <p>○公益法人等に対し(年10万円未満のものを除く。)を支出した場合には、四半期ごとに支出先、名目・趣旨、支出金額等の事項を公表しているか。</p>	<p>独立行政法人国立文化財機構のホームページ内「法人情報」、「法令等に基づく公表事項」において公表している。</p>	
--	--	--	---	---	--

<p>4. その他参考情報</p> <p>【契約に係る規程類】</p> <p>①独立行政法人国立文化財機構会計規程</p> <p>②独立行政法人国立文化財機構会計規程の特例を定める規程</p> <p>③独立行政法人国立文化財機構予算、決算及び出納事務取扱細則</p> <p>④独立行政法人国立文化財機構契約事務取扱細則</p> <p>⑤独立行政法人国立文化財機構施設等設計業務プロポーザル実施細則</p> <p>⑥独立行政法人国立文化財機構工事に係る競争参加資格審査委員会及び総合評価審査委員会に関する取扱細則</p> <p>⑦独立行政法人国立文化財機構における大型設備等の調達に係る仕様策定等に関する取扱要項</p> <p>⑧独立行政法人国立文化財機構契約情報公表要項</p> <p>⑩契約情報公表に必要な事項に関する取扱</p>

<p>⑪独立行政法人国立文化財機構修理契約委員会要項</p> <p>⑫独立行政法人国立文化財機構契約監視委員会要項</p> <p>⑭標準型プロポーザル方式の実施要項</p> <p>⑮公募型及び簡易公募型プロポーザル方式の実施要項</p> <p>⑯調査の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式</p> <p>⑰研究開発の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式</p> <p>⑱広報の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式</p> <p>⑲情報システムの調達に関する入札に係る総合評価落札方式</p> <p>⑳独立行政法人国立文化財機構における「企画競争・公募」ならびに「総合評価落札方式」に関するマニュアルについて</p> <p>【審査体制】</p> <p>①内部のチェック体制</p> <p>各施設に分任契約担当役を設置し、各施設において契約処理並びに適正な契約が行われているかをチェックする体制を整備している。特に随意契約の場合、契約が適正かを十分に精査し契約を行うよう本部から指導を行っている。</p> <p>東京国立博物館における1千万円を超える物品調達の場合の例</p> <p>[購入依頼]: 購入依頼者が所属課長の承認を得て購入依頼書を契約担当へ送付→契約担当係員チェック→同主任チェック→同係長チェック→経理課室長チェック→経理課長チェック→総務部長(分任契約担当役)決裁により発注を決定 (必要に応じ仕様策定等を実施: 実施した場合は購入依頼と同様にチェック・決裁)</p> <p>[予定価格]: 契約担当係員が予定価格調書を作成し、購入依頼と同様にチェック・決裁</p> <p>[一般競争入札]→[契約者決定]→[契約書作成]: 契約担当係員が作成し、購入依頼と同様にチェック・決裁→[契約書締結]</p> <p>[物品の納品検収]: 検査職員が物品の内容が契約と相違ないかチェック→[検査調書作成]</p> <p>[支払い]: 契約担当係員が支払伝票を作成し、購入依頼と同様に係員から室長のチェック→経理課長(分任出納命令役)決裁し支払いを決定→経理課室長(分任出納役)→[契約者への支払い]</p> <p>②内部でのチェック対象案件の抽出方法</p> <p>各施設において契約された契約のうち、契約金額や案件等から抽出した契約に係る書類等を監事監査並びに内部監査においてチェックを実施し、適正な契約処理が行われているかの確認を実施している。</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
2-4	2. 業務運営の効率化に関する事項 4. 保有資産の有効利用の推進		
当該項目の 重要性、難易度	-		関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ									
	評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
	施設の有効利用件数(件)		-	2,698	2,604	2,436	1,615		茶室、講堂等の貸出及び撮影利用

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価									
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価			
				業務実績	自己評価	評定	B		
4 保有資産の有効利用の推進 保有資産については、その必要性や規模の適切性については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、本来業務に支障のない範囲で有効利用の推進を図ること。	4 保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、本来業務に支障のない範囲で有効利用の推進を図ること。	4 保有資産の有効利用の推進(博物館4施設) 1) 講座・講演会等を開催する。 2) 講堂等の利用案内を関係団体、学校等に対し積極的に行う。 3) 国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。(文化財研究所2施設) セミナー室、講堂等一般の利用の供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開	(主定量的指標) 特になし (その他の指標) ・施設の有効利用件数	<実績報告書等参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P684~689 平成 26 年度自己点検評価報告書 統計表 P117 <主要な業務実績> 【実物資産の保有状況】 平成 26 年 4 月 1 日現在 東京国立博物館 土地120,270㎡、建物(延面積)72,192㎡ 京都国立博物館 土地53,182㎡、建物(延面積)31,828㎡ 奈良国立博物館 土地78,760㎡、建物(延面積)19,116㎡ 九州国立博物館 土地166,477㎡(うち九博10,798㎡) 建物(延面積)30,675㎡(うち九博9,300㎡) ※九州国立博物館は、福岡県と共有しており、福岡県は土地 155,679 ㎡、建物 5,780 ㎡を共有している。また、建物のうち 15,595 ㎡は共有面積である。 東京文化財研究所 土地4,181㎡、建物(延面積)10,516㎡	<自己評価書参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 総括表 P150~152 <評定と根拠> 評定:B 実物資産、金融資産、知的財産とも適切に管理され、有効に利用されている。また、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等も積極的に行っている。 詳細はその他参考情報参照 <課題と対応> 特になし	<評定に至った理由> 保有資産の有効活用について、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 また、施設の有効利用件数の減は奈良文化財研究所の寄居舎施設の取り壊しによるものであり(平成 25 年度利用実績 805 件)、合理的な理由が認められる。 資金の運用体制の整備状況については、平成 22 年度に東博における運用体制を整備し、平成 23 年度に本部における運用体制を整備しており、本部、東博のいずれにおいても余裕金の運用を行う部署とは別の部署にて運用状況等確認することとしているなど十分な運用・管理体制が置かれていることが認められる。 (指摘事項、業務運営上の課題及び改善方案) 特になし。 <その他事項> 独立行政法人国立文化財機構本部事務局余裕金運用取扱要綱(抜粋)	B		

83

		施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を引き続き図る。	奈良文化財研究所 土地46,468㎡、建物(延面積)35,276㎡ 保有資産の有効利用の推進 26年度の貸付総件数は1615件に上り、多数の貸付が実施されている。 詳細は上記自己点検評価報告書参照	(運用の決定) 第2条 余裕金の運用は役員会の議を経て理事長が決定するものとする。 2 余裕金の運用の具体的な業務は出納命令役が行うものとする。 (本部事務局への報告) 第9条 本部事務局経理課(経理担当)は、余裕金の運用をしている場合はその運用状況等について、毎年9月末日と3月末日の状況を遅滞なく本部事務局財務課(予算・主計担当)に別表の余裕資金運用実績(状況)報告書により報告するものとする。 東京国立博物館余裕金運用取扱要項(抜粋) (運用の決定) 第2条 余裕金の運用は運営会議の議を経て館長が決定するものとする。 2 余裕金の運用の具体的な業務は分任出納命令役が行うものとする。 (本部事務局への報告) 第9条 東京国立博物館総務部経理課(経理担当)は、余裕金の運用をしている場合は、その運用状況等について、毎年9月末日と3月末日の状況を遅滞なく本部事務局財務課(予算・主計担当)に別表の余裕資金運用実績(状況)報告書により報告するものとする。 ○有識者コメント 特に意見無し。
--	--	---	--	---

84

			<p>か)</p> <p>○実物資産について、利用状況が把握され、必要性等が検証されているか。</p> <p>○資産の活用状況等が不十分な場合は、原因が明らかにされているか。その理由は妥当か。</p> <p>○実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取り組みは適切か。</p> <p>○金融資産について、保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模は適切か。</p> <p>○資産の売却や国庫納付等を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。</p> <p>○資産の運用状況は適切か。</p> <p>○資金の運用体制の整備状況は適切か。</p> <p>○資金の性格、運用方針等の設定主体</p>	<p>○減損対象資産の利用状況は毎年度調査しており、全ての資産が使用されており減損の兆候はない。</p> <p>○該当なし。</p> <p>○博物館・研究所の本来業務以外にも、講堂・会議室の貸与、建物・庭園等を映画等のロケーションとして貸出すなど部外者に対しても積極的な貸出しを行い、適切に施設の有効利用を図っている。</p> <p>○現金及び預金の平成26年度末残高は約43億円であり、そのほとんどは施設整備費の未払金に充てるもの及び運営費交付金の繰越に相当するものである。</p> <p>○該当なし。</p> <p>○大口定期預金として、平成26年6月20日～平成27年3月6日(260日)1億円、平成26年6月20日～平成27年6月22日(368日)1億円、平成26年7月16日～平成27年2月6日(206日)2億円、平成26年7月16日～平成27年4月3日(262日)1億円、平成26年3月31日～平成28年3月30日(365日)2億円の運用を適切に行っている。</p> <p>○適切に整備されている。</p> <p>○独立行政法人国立文化財機構会計規程第27条において、出納命令役は、業務の</p>	
--	--	--	--	--	--

			<p>及び規定内容を踏まえて、法人の責任が十分に分析されているか。</p> <p>○貸付金、未収金等の債権について、改修計画が策定されているか。改修計画が策定されていない場合、その理由は妥当か。</p> <p>○回収計画の実施状況は適切か。</p> <p>i) 貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額やその貸付金等残高に占める割合が増加している場合、ii) 計画と実績に差がある場合の要因分析が行われているか。</p> <p>○回収状況等を踏ま</p>	<p>執行に支障がない範囲で、法令で定められた安全資産により余裕金の運用をすることができると定めている。</p> <p>また、東京国立博物館余裕金運用取扱要項において、余裕金の運用は運営会議の議を経て、館長が決定すること。運用の対象を寄附金、入場料等自己収入、その他館長が定める資金とすること。資金繰計画の作成を要すること。運用方法は、国債等、独立行政法人通則法第47条に指定する有価証券、預金等とすること。債権の発行者等の経営状況の把握することを定めている。</p> <p>○貸付金はない。</p> <p>未収金(建物、収蔵品画像使用料等)の管理は、独立行政法人国立文化財機構債権管理要項に基づき実施している。使用後精算する建物使用料、外国からの後払いの収蔵品画像使用料等の少額の未収金が大半のため、回収コスト等も考慮しながら実施している。</p> <p>・平成26年度末の未収金 267件、1,037,575千円。(うち285,711千円が東京国立博物館平成館特別展示室等改修工事に係る文化庁からの施設整備費補助金)</p> <p>・平成27年6月17日現在の未収金 18件972千円。(12件872千円は平成27年7月までに回収予定、6件100千円は継続して督促を実施中)</p> <p>○同要項に基づき、未収金の債権管理を帳簿により行い、回収計画、督促状況等を記録している。滞留管理としての管理、保全手続きについても定めている。</p> <p>○回収状況は良好であり未回収額も少額で</p>	
--	--	--	--	---	--

			え回収計画の見直しの必要性等の検討が行われているか。 ○特許権等の知的財産について、法人における保有の必要性の検討状況は適切か。	あることから、当面は見直しの計画はない。 ○特許権4件(研究技法関係)と商標権12件(ロゴマーク等)を保有している。取得費用がいずれも少額であるため財務諸表上の資産計上はしていないが、権利として管理している。研究継続の必要性から研究技法関係特許の保有は必要であり、ロゴマーク等の商標権も運営上の支障となる他者の使用を未然に防止するために必要である。 なお、特許権は当然収入につながるものであれば活用するが、維持費との兼ね合いが今後の課題である。 取得特許件数4件 ①木材又は木造文化財の年輪幅又は密度測定装置並びに測定方法(21.5.22 登録:奈良文化財研究所) ②壁画漆喰層剥離用ワイヤソー装置及び壁画漆喰層剥離方法(22.3.5 登録:東京文化財研究所、奈良文化財研究所) ③文化財用表打ち材料及びそれを用いた文化財修復方法(22.12.10 取得:東京文化財研究所) ④フノリ抽出物の精製方法(26.7.18 取得:東京文化財研究所) ○機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明及び商標取扱規程」に基づき対応することになる。 ○機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明及び商標取扱規程」により整備されている。 ○研究成果の結実として特許権取得をしている。当機構における特許権取得は、パテント収入を目指すためではなく、研究継続の必要性から防衛的な対抗特許として保有することを主眼としているため、特別な取組みは行っていない。		
			○検討の結果、知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取り組み状況や進捗状況等は適切か。			

4. その他参考情報
特になし

様式1-1-4-2 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(業務運営の効率化に関する事項、財務内容の改善に関する事項及びその他業務運営に関する重要事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報	
2-5	2. 業務運営の効率化に関する事項 5. 内部統制の充実・強化
当該項目の重要度、難易度	— 関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
				業務実績	自己評価	評定	B
5 内部統制の充実・強化 (1)法令等を遵守するとともに、業務の特性や実施体制に応じた効果的な統制機能の在り方を検討し、内部統制の充実・強化を図ること。	5 内部統制の充実・強化 (1)理事長のマネジメント強化のため業務の特性や実施体制に応じた効果的な統制機能の在り方を検討し、自己点検評価を始め監事監査、内部監査などモニタリングを行う。	5 内部統制の充実・強化 (1)理事長のマネジメント強化 1)モニタリングの実施 ・自己点検評価を行う。 ・監事監査を行う。 ・内部監査を行う。 2)リスクマネジメントの実施 ・リスク管理の必要に応じて、関連する諸規程の整備・見直しを行う。 ・危機管理マニュアルの見直し等を随時	(主な定量的指標) 特になし (その他の指標) 特になし	<実績報告書等参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P690~692 <主要な業務実績> (1) ・自己点検評価、監事監査、内部監査を行った。詳細はその他参考情報参照。 ・リスク管理の一環として、情報セキュリティ強化のため、独立行政法人国立文化財機構ネットワーク管理運用要項に、プロキシサーバ(中継サーバ)について情報化委員会申し合わせにより運用する事項を加えた。 ・理事長からの指示に基づき、危機管理マニュアルの見直しを行い、5施設で26年度に改訂し、他の1施設で27年度改訂に向けた作業を進めた。 (2) ・運営委員会、外部評価委員会を実施した。	<自己評価書参照箇所> 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P153~155 <評定と根拠> 評定:B すべての項目に対し順調に実施した。 詳細は、その他参考情報に記載のとおり。 <課題と対応> 特になし	<評定に至った理由> 内部統制の充実・強化について、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。詳細は以下の通り。 モニタリングの実施について、理事長の適切なリーダーシップのもと、リスクマネジメントについての検討、危機管理マニュアル等の見直しが随時行われているとともに、自己点検評価、監事監査、内部監査及び外部評価委員会による評価が行われている。 リスクマネジメントの実施について、役員会、運営委員会、連絡協議会等、理事長がリーダーシップを発揮できる体制が整備されており、それぞれが機能していると認められる。役員会、各種委員会により連絡調整と情報共有が行われており、従業員に周知していると認められる。さらに、法人内グループウェアを継続して運用しており、各施設の意思疎通も図られている。 中期目標・計画の未達成項目(業務)について	

<p>(2) 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ事業評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させること。</p> <p>(3) 管理する情報の安全性向上のため、政府の方針を踏まえた適切な情報セキュリティ対策を推進し、必要な措置をとること。</p>	<p>(2) 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員理解促進、意識や取り組みの改善を行う。</p> <p>(3) 管理する情報の安全性向上のため、政府の方針を踏まえた適切な情報セキュリティ対策を推進し、必要な措置をとること。</p>	<p>行う。</p> <p>(2) 外部有識者による事業評価</p> <p>1) 運営委員会、外部評価委員会を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。</p> <p>2) 職員の資質向上を図るため各種研修を実施する。</p> <p>(3) 情報セキュリティ対策の向上と改善</p> <p>1) 情報セキュリティについて定期監査等を実施する。</p> <p>2) 機構全体での情報セキュリティ強化のため、ネットワーク環境等の見直しについて、検討を継続する。</p>	<p>《評価の視点》</p> <p>○自己点検評価、監事監査、内部監査等を行ったか。また、事業評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させたか。</p> <p>○法人の長がリーダーシップを発揮できる環境は整備され、実質的に機能しているか。</p> <p>○法人の長は、組織にとって重要な情報等について適時的確に把握するとともに、法人のミッション等を役員に周知徹底しているか。</p> <p>○法人の長は、法人の規模や業種等の特性を考慮した上で、法人のミッション達成を阻害する課題(リスク)のうち、組織全体として取り組むべき重要なリスクの</p>	<p>詳細はその他参考情報参照。</p> <p>・職員研修等については、4-2 人事に関する計画参照。</p> <p>(3)</p> <p>・情報セキュリティについて定期監査等を実施し、ネットワーク環境等の見直しについて、検討を継続した。</p> <p>○自己点検評価、監事監査、内部監査等を行った。運営委員会を1回と外部評価委員会を3回(部会2回、総会1回)行い、その結果を機構の事業等の改善に反映させた。</p> <p>○運営上の諸課題への対応方針の決定等については、「役員会」での協議を踏まえて理事長が行った。また、理事長の勤務地(京博)と本部の所在地(東博)が離れていることから、20年度に便宜上置いた「理事長代理」を21年度に「相談役」として規程化し、東京国立博物館長を充て、トップマネジメントとそれを支える体制を整えた。方針の決定に当たっては「運営委員会」などの評価及び提言を十分検討するとともに、方針決定後は速やかに実施するように留意した。また、各施設間で調整を図る必要がある課題については、「国立文化財機構7施設連絡協議会」及び「国立文化財機構研究・学芸系職員連絡協議会」にて協議を行っている。</p> <p>○日常の報告や役員会(26年度開催回数:7回)を通じて報告を受けることにより情報収集し、役員員に対するミッションの周知状況及びミッションを役員員により深く浸透させる取組を行っている。また、法人内グループウェアを継続して運用し、さらなる周知を図っている。</p> <p>○役員会(26年度開催回数:7回)や各種会議を通じて、情報収集しリスクを把握し、組織全体として取り組むべき重要なリスクの把握をしている。その把握を元に役員会で指示し、対応を行っている。把握している重要なリスクは以下の通りである。</p> <p>・適切な人員の確保</p>	<p>は、要因の把握・対応を行う体制が整備されていると認められる。</p> <p>内部統制のリスクについては、リスクの把握・対応を行う体制が整備されていると認められる。</p> <p>監事監査については、規程及び体制は整備されており、適切に実施されていると認められる。また、役員会等への出席を通して理事長のマネジメントに留意していると認められる。なお、監事監査報告においては、特段改善を要する事項はない。</p> <p>職員の資質向上・能力開発を目指し、多様な分野の職員研修が実施されている。</p> <p>また、情報セキュリティについては水準向上のための取り組みや監査の実施が認められ、セキュリティ対策に重点を置いた自己点検・評価が行われている。</p> <p>(指摘事項、業務運営上の課題及び改善方針)なし。</p> <p>(その他事項)</p> <p>○有識者コメント</p> <p>・情報セキュリティに関しては、危機管理セキュリティポリシーの浸透、確認に際してさらに一層の取り組みが要請されねばならない。</p>
--	---	---	---	--	--

			<p>把握・対応を行っているか。</p> <p>○その際、中期目標・計画の未達成項目(業務)についての未達成要因の把握・分析・対応等に着目しているか。</p> <p>○法人の長は、内部統制の現状を的確に把握した上で、リスクを洗い出し、その対応計画を作成実行しているか。</p> <p>○監事監査において、法人の長のマネジメントについて留意しているか。</p> <p>○監事監査において把握し</p>	<p>業務の拡充・拡大にもかかわらず、人件費削減などにより人員の補充が困難であり、職員の負担が過大となっている。身分的に不安定な任期付きの非常勤職員やアソシエイトフェローによる対応には限界があり、文化財の取扱・展示・調査研究等に必要な専門知識や技術の継承が困難になりつつある。</p> <p>・大規模自然災害等への対応(耐震化等)</p> <p>・文化財の破損・盗難・劣化等</p> <p>・収蔵庫の不足</p> <p>・電力逼迫下における収蔵庫・展示室等の適切な温湿度管理</p> <p>○未達成項目については役員会において各施設長から聴取するなど、常に状況等を把握するよう努めている。またその対応についても、その都度協議している。26年度実績において、未達成項目はなかった。</p> <p>○リスクについては役員会において各施設長から聴取するなど常に把握し、リスクへの対応計画などについては役員会において協議し、最終的に理事長の判断により実施時期、実施期限などを定めている。また、その進捗状況等については役員会にて随時報告している。</p> <p>把握している内部統制のリスクは以下の通りである。</p> <p>・競争的資金にかかる不正防止</p> <p>・個人情報の管理</p> <p>・ハラスメント防止</p> <p>・情報システム管理・セキュリティ対策</p> <p>把握しているリスクについては、関連する規程等を整備し、リスクに対応できる体制を整えるとともに、監査・研修等の実施により状況の確認及び職員への周知等を図っている。</p> <p>○監事は、役員会その他重要な会議に出席するほか、役員員から事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧し、本部において、財務及び業務についての状況を調査し、法人の長のマネジメントについて留意している。</p> <p>○監査終了後に報告書を提出している。また第3回</p>	
--	--	--	---	---	--

			<p>た改善点等について、必要に応じ、法人の長、関係役員に対し、報告しているか。その改善事項に対するその後の対応状況は適切か。</p> <p>○職員研修等を実施したか。</p> <p>○情報セキュリティに配慮した情報化・電子化に取り組んだか。また、情報セキュリティ対策の向上・改善のための定期監査等を実施したか。</p>	<p>役員会においてその結果を報告している。よって、役員会での報告により理事長及び役員が内容について認識した。監事が役員会・国立文化財機構7施設連絡協議会等に出席することにより、監事の要望事項が法人の運営に適切に反映されるよう確認を行った。</p> <p>○職員研修等については、4-2人事に関する計画参照</p> <p>○情報セキュリティ水準の向上のための機器の更新、導入を行った。また、「独立行政法人における情報セキュリティ対策の推進について」に対応するため、セキュリティポリシー見直しWGを設置し、27年度改正に向けた準備を進めた。</p> <p>また、保有個人情報管理監査を2回、情報システム監査を1回、監査法人による監査の一環としてのシステム監査を1回それぞれ実施した。さらに、情報システム自己点検・評価を、セキュリティ対策の実施状況に重点を置いて実施した。</p>	
--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報	
特になし	

様式1-1-4-2 中期目標管理法人 年度評価 項目別評定調書(業務運営の効率化に関する事項、財務内容の改善に関する事項及びその他業務運営に関する重要事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
3-1	3. 財務内容の改善に関する事項 1. 自己収入の増加		
当該項目の重要度、難易度	-		関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
自己収入増加率	計画値	-	1.16%	1.16%	1.16%	1.16%		※受託研究・受託事業を除く。 ※自己収入増加率は、自己収入基準額(前年度の目標額)に対する増加率。
	実績値	-	△8.17%	△2.72%	5.91%	29.04%		
	達成度	-	90.78%	96.16%	104.70%	127.56%		
寄附金(件)	計画値	-	226	226	226	350		
	実績値	-	393	438	486	561		
	達成度	-	173.89%	193.81%	215.04%	160.29%		
科学研究費採択件数(件)	計画値	-	76	76	76	76		
	実績値	-	76	88	95	107		
	達成度	-	100.00%	115.79%	125.00%	140.79%		

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
				業務実績	自己評価	評価	A
<p>入場料収入、寄付金等による自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。</p> <p>1 自己収入の増加</p> <p>入場料収入、寄付金等の外部資金、本業業務に支障のない範囲で施設の有効利用により自己収入を確保することで財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に向けた取り組みを進めること。</p> <p>また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。</p>	<p>管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営を行う。</p> <p>また、収入面に関しては、実績を勘案しつつ、入場料収入、寄付や賛助会員等への加入者の増加、募金箱の設置などによる外部資金、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなど、施設の有効利用により自己収入を増加に向けた取り組みを進めることにより、計画的な収支計画による運営を行う。</p>	<p>1 一般管理費の削減</p> <p>(4) 自己収入の増大</p> <p>独立行政法人整理合理化計画(19年12月24日開議決定)の方針に基づき設定した外部資金の活用及び自己収入の増大に向けた定量的目標の達成を、引き続き目指す。</p> <p>1) 機構全体において、入場料収入(共催展を除く)及びその他収入について、1.16%の増加を目指す。</p> <p>2) 機構全体において、寄付金350件及び科学研究費補助金76件の確保を目指す。</p>	<p>〈主定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 ・自己収入増加率 ・寄付金件数 ・科学研究費採択件数</p> <p>〈評価の視点〉 ○短期借入金はあるか、有る場合はその額及び必要性は適切か。 ○重要な財産の処分に関する計画は有るか。有る場合は計画に沿って順調に処分に向けた手続きが進められているか。 ○当期総利益(又は当期総損失)の発生要因は明らかにされているか。 ○また、当期総利益(又は当期総損失)の発生要因は法人の業務運営に問題等があることによるものか。 ○利益剰余金が計上されている場合、国民生活及び社会経済の安定等の公益上の見地から実施されることが必要な業務を遂行するという法人の性格に照らし過大な利益となっていないか。 ○繰越欠損金が計上されている場合、その解消計画は妥当か。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書個別表 P681</p> <p>〈主要な業務実績〉</p> <p>○該当なし。 ○該当なし。</p> <p>○当期総利益224,684千円は、入場料収入の増加及び消費税納付額が予定より少額となったことから生じている。</p> <p>○問題等はない。</p> <p>○利益剰余金は、現金ではない前中期目標期間繰越積立金633,828千円、平成23~25年度の積立金141,786千円、当期未処分利益224,684千円の合計1,000,298千円であり、過大なものとはなっていない。</p> <p>○該当なし。</p>	<p>〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P147</p> <p>〈評定と根拠〉 評定:A 自己収入増加率は、主要な経年データ記載のとおり博物館の入館者数の増加により、前年度実績を大きく上回り、達成度が127.9%となった。また、寄付金350件及び科学研究費採択件数も目標値を大幅に上回って達成率が120%を超えており、A評定とした。</p> <p>〈課題と対応〉 特になし</p>	<p>評定 A</p> <p>〈評定に至った理由〉 自己収入増加率、寄付金件数、科学研究費採択件数のいずれについても計画値の120%以上の実績であり、前年度の実績を上回っていることから自己評価の客観性が認められる。</p> <p>※自己収入増加率について(平成26年度) 自己収入基準額(A) = 926,001千円 自己収入目標額(B) = 936,743千円 自己収入実績額(C) = 1,194,914千円 目標増加率(D) = (B) ÷ (A) = 101.16% 実績増加率(E) = (C) ÷ (A) = 129.04% 達成度 = (E) ÷ (D) = 127.56%</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ・有識者コメント ・計画値の120%以上の実績であり、自己評価の客観性が認められる。全般的な努力は大いに評価できる。 ・「A」評価は、妥当と思われる。 ・従来を超える達成率を示したことは高く評価される。</p>	

93

			<p>○当該計画が策定されていない場合、未策定の理由の妥当性について検証が行われているか。さらに、当該計画に従い解消が進んでいるか。</p> <p>○当該年度に交付された運営費交付金の当該年度における未執行率が高い場合、運営費交付金が未執行となっている理由が明らかにされているか。</p> <p>○運営費交付金債務(運営費交付金の未執行)と業務運営との関係についての分析が行われているか。</p> <p>○いわゆる溜まり金の精査において、運営費交付金債務と欠損金等との相殺状況に着目した洗い出しが行われているか。</p> <p>○中期目標期間を超える債務負担は有るか。有る場合は、その理由は適切か。</p> <p>○積立金の支出は有るか。有る場合は、その使途は中期計画と整合しているか。</p>	<p>○該当なし。</p> <p>○未執行額は316,489千円(8,238,870千円の3.8%)、文化財の購入等の経費であり、全額が次年度において執行する予定となっている。</p> <p>○文化財の購入等の経費の繰越であり、業務運営との関係は明白であり特段の問題はない。</p> <p>○該当なし。</p> <p>○該当なし。</p> <p>○該当なし。</p>		
--	--	--	---	---	--	--

4. その他参考情報
特になし

94

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
3-2	3. 財務内容の改善に関する事項 2. 固定的経費の節減		
当該項目の重要度、難易度	-		関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
				業務実績	自己評価	評価	B
<p>入場料収入、寄付金等による自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。</p> <p>2 固定的経費の節減管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定的経費の節減を図ること。</p>	<p>評価項目2-1 「2. 業務運営の効率化に関する事項 1. 一般管理費の削減」に同じ。</p>	<p>評価項目2-1 「2. 業務運営の効率化に関する事項 1. 一般管理費の削減」に同じ。</p>	<p>〈主な定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 特になし</p> <p>〈評価の視点〉 評価項目2-1 「2. 業務運営の効率化に関する事項 1. 一般管理費の削減」に同じ。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P677</p> <p>〈主要な業務実績〉 評価項目2-1「2. 業務運営の効率化に関する事項 1. 一般管理費の削減」に同じ。</p>	<p>〈自己評価書参照箇所〉 平成 26 年度自己点検評価報告書 総括表 P 143～144</p> <p>〈評定と根拠〉 評定:B 建物新設、単価上昇等の特殊要因を除外すると、目標値以上に削減している。</p> <p>〈課題と対応〉 特になし</p>	<p>評定 B</p> <p>〈評定に至った理由〉 一般管理費については東博の修繕や奈文研の建設工事に伴う発掘経費の発生、及び消費税の増額により前年度比 37.15%増となっている。平成 26 年度支出より消費税の増額分を差し引いた額と平成 22 年度支出を比較した場合、平成 22 年度より 15.7%減となっていることから中期計画における所期の目標を上回る成果と認められる。 業務経費については平成 22 年度より 8.6%減となっていることから中期計画における所期の目標を上回る成果と認められる。</p> <p>〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 本項目については、他項目と内容が重複するものであるが、これは平成 26 年度からの評価項目の設定が、「独立行政法人の目標の策定に関する指針」</p>	

						<p>(平成 26 年 9 月 2 日決定)に基づくことによるものである。</p> <p>「独立行政法人の目標の策定に関する指針」 II 中期目標管理法人の目標について 3 中期目標の項目の設定について (3) 評価に際しては、原則中期目標を設定した項目を評価単位として評価を実施する。 なお、中期目標期間における実績評価(見込評価)の結果、当該機関に設定した目標の項目について改善が必要とされた場合は、当該評価結果を、次期中期目標期間における目標の項目の設定に適切に反映させる。</p> <p>○有識者コメント ・特に意見無し。</p>
--	--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報						
特になし						

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
4-1	4. その他業務運営に関する重要事項 1. 施設・設備に関する計画		
当該項目の 重要度、難易度	-		関連する政策評価・ 行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
1 施設・設備に関する計画 各施設の安全かつ良好な施設環境を維持するとともに、業務の目的・内容に適切に対応するため長期的視野に立った施設・設備の整備計画、研究機器の整備・更新計画を作成し、整備を図ること。	1 施設・設備に関する計画 施設・設備の老朽化度合い等を勘案しつつ、別紙4のとおり施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。	1 施設・設備に関する計画 以下のとおり施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。 ・京都国立博物館緊急屋根等漏水補修工事 (予定額)182百万円 ・奈良文化財研究所本庁舎地区再開発計画の推進 (予定額)2,808百万円 (合計)2,990百万円 ※いずれも施設整備費補助金を財源とする。	〈主定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 特になし 〈評価の視点〉 ○施設及び設備に関する計画はあるか。 有る場合は、当該計画の進捗は順調か。	〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P693 〈主要な業務実績〉 京都国立博物館緊急屋根等漏水補修工事(予算額182百万円)は、繰越を実施し平成27年度に竣工予定である。 奈良文化財研究所本庁舎建替工事は、(同2,808百万円)は、埋蔵文化財調査の結果を踏まえ、設計見直しを行う予定である。 平成25年度補正予算による東京国立博物館平成館特別展示室等改修工事(同1,819百万円)、ならら仏像館外壁等補修工事(同167百万円)、ならら仏像館免震展示ケース等整備工事(同439百万円)は、平成26年度において竣工した。 平成26年度補正予算による東京国立博物館法隆寺宝物館空調設備更新工事(同302百万円)は、平成27年度に繰越して工事を継続し、同年竣工予定である。	〈自己評価書参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 総括表 P161 〈評定と根拠〉 評定:B 埋蔵文化財調査の結果、見直しが必要になった奈良文化財研究所本庁舎建替工事以外は、埋蔵文化財調査の結果を考慮した工事は、計画どおりに進捗している。 〈課題と対応〉 奈良文化財研究所本庁舎建替工事については、埋蔵文化財調査の結果を考慮した工事計画とするよう十分に検討する必要があり、検討中である。	評定 B 〈評定に至った理由〉 施設・設備の整備については、展覧会や文化財に対する十分な配慮を行う必要がある中で老朽化や耐震への対策を実施しているところであるが、やむを得ない事情により平成27年度へ繰越が実施された事業については合理的な説明が行われており、適切に事業が実施されていると認められる。 〈指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策〉 自己評価における課題と対応の通り、奈良文化財研究所本庁舎建替工事については、埋蔵文化財調査の結果を考慮した工事計画とするよう十分に検討すべきである。 〈その他事項〉 京都国立博物館緊急屋根等漏水補修工事に係る繰り越しの理由については「4. その他参考情報」欄に記載。 ○有識者コメント

97

						・奈良文化財研究所本庁舎建替工事においては、文化財保護を旨とする国の機関であることから、重要な遺構の保存に配慮した工事計画とする必要がある。
--	--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報	
<p>京都国立博物館緊急屋根等漏水補修工事は平成25年度から2カ年で工事が実施され、当初計画においては、平成27年3月に完了する予定であったが、下記の事由より繰越が必要となった。</p> <p>(経緯) 本事業は、平成25年度予算により管理棟の仮工房への改修、文化財保存修理所(以下「修理所」という。)の屋上防水、外壁修理、3階部分改修等の第一期工事を行い、当該工事後、平成26年度予算により修理所地下1階、1階、2階及び電気機械設備の改修等の第二期工事を行う予定としていた。しかし、第一期工事の完了が仕様変更や入札不調等により約8ヶ月遅延したことにより、第二期工事に着手することが可能となる時期が8ヶ月遅れの平成26年12月となった。</p> <p>(事由) ① 第二期工事を行うためには、修理所から仮工房へ移転している修理所3階の修理業者及び文化財が仮工房から戻り、入れ替わりで修理所地下1階、1階、2階の修理業者及び文化財を仮工房へ移転させなければならないが、平成26年12月の一期工事完了時において修理所の環境測定を行ったところ、約2ヶ月間の枯らし期間が必要であることが判明したため、平成27年2月以降でないと、移転作業を行うことが不可能となった。しかし、2月時においては、修理中の文化財が大型パネルに貼られた仕上げ状態であり、エレベーターでの移動が行えず、また、外気の温湿度環境が文化財の移動に適さないことから、移転作業を行うことができなかった。文化財の修理が完成し、環境が整う平成27年5月中旬まで地下1階、1階、2階部分の改修工事に着手することができず、また、電気機械設備改修についても、中断せざるを得ない状況であるため、約5ヶ月半工期が遅延することとなった。</p> <p>② 第一期工事の実施結果から、断熱材の吹き付け後の乾燥期間、修理作業員に与える騒音・臭気の影響を極力抑えるための日程調整期間、建具改修時の風雨対策に必要な作業他のための期間等、適正な工期を確保するため、約1ヶ月半の工期確保が必要となった。</p> <p>以上の事由により、7ヶ月の計画延長が必要となり、工事が完了が平成27年10月となったため、予算額の一部を次年度に繰り越すこととなった。</p>	

1. 当事務及び事業に関する基本情報	
4-2	4. その他業務運営に関する重要事項 2. 人事に関する計画
当該項目の 重要性、難易度	— 関連する政策評価・行政事業レビュー 平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成 目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
人事交流者数(人)	実績値	—	—	30	32	32	32	
研修件数(件)	実績値	—	—	6	6	6	7	

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	年度計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
				業務実績	自己評価	
2 人事に関する計画 人事管理、人事交流の適切な実施により、内部管理事務的改善を図り、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用すること。 また機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を図ること。	(1)方針 ①国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員的能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討する。 ②人事交流を促進するとともに、職員の高質向上を図るための研修機会の提供を行う。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 ③機構の将来を見据	2 人事計画に関する計画 (1)職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討する。 (2)近隣大学等との交流を進め、優秀な人材を確保する。 (3)各種研修を積極的に実施し、また、職員を外部の研修に派遣するなど、その資質の向上を図る。 (4)非公務員化のメリットを活かした制度の活用方法について引き続き検討する。 (5)専門スタッフの配置などの計画的な人	(主定量指標) 特になし <その他の指標> ・人事交流者数 ・研修件数 <評価の視点> ○職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討・導入を図ったか。 ○人事交流の促進、職員への研修機会の提供等を行ったか。	<実績報告書等参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 個別表 P694～698 <主要な業務実績> (1) ○能力や業績を反映できる人事・給与制度の検討・導入 平成 20 年度から、勤務評定制度を実施しており、昇給及び勤奨手当に反映している。より職員的能力や業績が適切に反映できるように、新たな評価制度の検討を開始した。 ○人事交流の促進、研修 平成 26 年度人事交流者数 (機構内施設間交流を含む) 事務系職員 51 名 研究系職員 23 名	<自己評価書参照箇所> 平成 26 年度自己点検評価報告書 総括表 P161～165 <評定と根拠> <評定: B (1) ・平成 26 年度においても勤務評定制度を実施した。新たな評価制度の検討を開始した。 ・例年と同程度の人事交流を実施した。交流機関等と真に必要な交流ポストを選択し、集中的に優秀かつ多様な人材を確保した。また、研修についても例年以上の件数を提供し、新たな育成研修も実施した。 ・引き続き、任期付職員制度を活用しつつ、新たに契約期間に定めのない専門人材の確保策として専門職制度を創設した。配置実績はなかったが、採用活動を行い国際交流部門に 1 名を配置することが内	評定 B <評定に至った理由> 専門職制度の創設や、アソシエイトフェロー制度を活用し専門スタッフの計画的な確保を行ったことは、職員的能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討や、非公務員化のメリットを生かした制度の活用方法の検討が計画的かつ具体的に行われていると認められる。 近隣大学等との人事交流については、事務系職員、研究系職員ともに交流が実施されていることが認められる。これらの交流により、適切な人員配置の推進等が行われていることが認められる。 また、研修の実施にあたっては他機関で実施する研修への派遣も含め各種研修が実施され、今後の研修についても検討されていることから積極的な取り組みが認められる。 人事管理については、専門的な人材の確保に努めながら一般管理費や業務経費の削減を実現させていることから、計画的かつ適切な人事管理が行われていることが認められる。

え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行う。 (2)人員に係る指標 給与水準の適正化等を図りつつ、業務内容を踏まえた適切な人員配置等を推進する。 中期目標期間中の人件費総額見込額 13,087 百万円 但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。	材の確保・育成に向け、検討を進める。	この他に地方公共団体から事務系、研究系ともに 2 名の研修生を受け入れ、交流の促進を図った。 平成 26 年度研修件数及び参加者数 新任職員、その他職員を対象とした研修 4 件 (延べ 189 名) 会計系職員研修 1 件 (25 名) 施設系職員研修 1 件 (19 名) ハラスメント研修 1 件 (約 80 名) この他に他機関で実施する研修に延べ 12 名の職員を参加させ、職員能力開発に寄与した。 ○専門スタッフの計画的な確保・育成 任期付職員制度の活用 平成 23 年度 任期付専門員 1 名採用 平成 25 年度 任期付専門職員 1 名採用 高度に優れた専門的技術を兼ね備えた人材を確保すべく、専門職制度を創設し、平成 26 年度においては国際交流部門に 1 名を内定した。 (2) ○適切な人員配置等の推進 適切な人員配置を推進した。 ○人事に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。 ○人事管理は適切に行われているか。	定した。 (2) ・限られた人員数の中において、適材適所の人員配置に努めた。 ・事務系・研究系ともに計画通りの新規職員を採用できた。 ・専門職制度の創設を行い、専門人材の確保を行った。 ・アソシエイトフェロー制度を活用し、優れた専門的知識等を有する者を採用・配置を行った。 ・人事交流を通じて効率的に優秀かつ多様な人材を確保できた。また、機構内の人事交流を活性化することにより中堅職員が育ち、幹部職員候補の育成を図ることができた。 <課題と対応> (1) ・職員能力や業績等をより適切に評価できるような新たな評価制度の導入の検討を行なっていく。 ・人事交流については、受入が中心となっており、双方向の人事交流の増加に向けた施策が行えるよう検討する。また、研究系職員の交流の多様化と交流先の拡大を図る必要がある。研修については、OJT をより効果的に行なうための研修プログラムを効率的に実施する必要があるが、退職手当の通算等の問題もあるため、検討が必要である。さらには、専門的な研修等の導入についても検討する必要がある。 (2) ・雇用実績はあるが、採用数も少ないため、運用しやすくする等、任期付職員制度を見直す必要がある。 ・必要に応じ、組織の見直しについても検討する。 ・現行のアソシエイトフェロー制度をより	<指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策> 高度に優れた専門的技術を兼ね備えた人材の確保・育成と効率的かつ効果的な運営の両立にあたって、機構においても様々な課題と対応が検討されているところである。常勤職員についての人員費の抑制が専門分野への人員配置、技術の継承、年齢構成などに支障をきたす恐れがないか検討し、今後の人事計画にその検討結果を反映させることが望まれる。 <その他事項> ○有識者コメント ・常勤職員についての人員費の抑制が専門分野への人員配置、技術の継承、年齢構成などに支障をきたさないように、今後の人事計画を立てる必要がある。 ・任期付職員、アソシエイトフェロー制度の活用は、人材の流動性の面においては有効だが、デメリットに関する言及もほしい。 ・専任の研究職を増やす必要性を認める。アソシエイトフェロー等の非正規職員の増員が、専任職の不足を補う方便となつてはならない。
---	--------------------	--	---	--

			<p>事制度（アソシエイトフェロー）を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有する専門職を対象として採用可能としている。</p> <p>平成26年度においては、</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京国立博物館 14名 京都国立博物館 4名 奈良国立博物館 2名 九州国立博物館 4名 東京文化財研究所 6名 奈良文化財研究所 8名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター 2名 <p>合計40名を採用した。</p> <p>・人事交流の実績 「人事交流の促進、研修」を参照</p>	<p>柔軟に採用・登用ができるよう給与制度を含む制度の見直しが必要である。</p> <p>・人事交流については、事務系職員において双方向の人事交流の増加に向けた施策が行えるよう検討する必要がある。</p>	
--	--	--	---	--	--

4. その他参考情報				
特になし				

独立行政法人国立文化財機構の 第3期中期目標期間の終了時に見込まれる 業務の実績に関する評価

平成27年8月

文部科学大臣

1

様式1-2-1 中期目標管理法人 中期目標期間評価 評価の概要

1. 評価対象に関する事項			
法人名	独立行政法人国立文化財機構		
評価対象中期目標期間	見込評価	第3期中期目標期間	
	中期目標期間	平成23～27年度	
2. 評価の実施者に関する事項			
主務大臣	文部科学大臣		
法人所管部局	文化庁文化財部美術学芸課	担当課、責任者	美術学芸課長 萬谷宏之
評価点検部局	大臣官房政策課	担当課、責任者	政策課長 柳孝
3. 評価の実施に関する事項			
<ul style="list-style-type: none"> ・政策評価に関する有識者会議国立文化財機構ワーキングチーム委員とともに東京国立博物館に赴き展示、收藏、保存・修復の状況について調査した(平成27年7月2日)。 ・監事ヒアリングを実施し、監査の実施状況について確認するとともに法人の業務運営に係る意見交換を行った(平成27年7月21日)。 ・ワーキングチームに評価結果案を諮り、意見を聴取した(書面審議)。 ・法人ヒアリングを実施し、26年度自己評価及び第3期中期目標期間自己評価(見込)について説明を受けるとともに意見交換を行った(平成27年7月24日)。 			
4. その他評価に関する重要事項			
特になし。			
5. 国立文化財機構ワーキングチーム 委員名簿			
坂井 秀弥	奈良大学文学部教授(専門分野:考古学)		
佐野 みどり	学習院大学文学部教授(専門分野:日本絵画史)		
園田 直子	国立民族学博物館文化資源研究センター教授(専門分野:保存科学)		
竹本 幹夫	早稲田大学文学部教授(専門分野:演劇学)		
筑紫 みずえ	榊グッドバンカー代表取締役社長		
丸山 伸彦	武蔵大学人文学部教授(専門分野:染織史)		
宮島 博和	公認会計士		

2

1. 全体の評価	
評価 (S、A、B、C、D)	B：全体としておおむね中期目標における所期の目標を達成していると認められる。
評価に至った理由	項目別評価の一部にAがあるが、Bが大半を占めており、C以下はない。また、全体の評価を引き下げる事象もなかったため、Bが相当であると判断した。

2. 法人全体に対する評価	
法人全体の評価	<p>東京、京都、奈良、九州（福岡・大宰府）の四つの国立博物館は、国民共有の貴重な財産である有形文化財を収集し、適切な環境で保管し又必要な修復等を行いながら、平常展等において計画的な展示を行っている。特別展も計画回数以上に開催しており、目標数を上回る来館者の実績が上がっている。これらの活動を支える調査研究、教育活動、情報の発信等も所期の成果を挙げているものと認められる。</p> <p>東京及び奈良の文化財研究所は、文化財の歴史的、芸術的又は学術的な価値の解明や文化財の保存・修復・公開等に関する科学的・技術的な進展に資すること等を目的に、これらに関する基礎的・体系的及び科学的・先端的な調査研究を行うとともに、新たな調査手法の研究開発等を継続して行っている。いずれの調査研究も、所期の目標を達成すべく計画的に実施されていると認められる。さらに、これらに関する情報・資料の収集・整備及び成果の公開並びに国際協力の推進についても、計画に従い着実に実施されている。</p> <p>平成23年度に開設されたアジア太平洋無形文化遺産センターは、日本政府とユネスコの協定に基づく活動を計画的に実施している。</p> <p>業務運営の効率化、財務内容の改善、施設・設備に関する計画及び人事に関する計画については、中期計画、年度計画に従い着実に実施されている。</p> <p>○有識者コメント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・業務全体が多様化する一方で、予算や人的体制など厳しくなるなかで、法人全体がおおいに努力しながら、業務を遂行しており大いに評価される。 ・適切に評価されている。 ・全体として順調に事業が推進され、大きな成果を挙げつつあると言ってよからう。
全体の評価を行う上で特に考慮すべき事項	東日本大震災において未曾有の文化財被害が発生し、文化財レスキュー事業をはじめ被災地の要請に応じて被害対策や発掘調査への協力等を積極的に行った。これら非常時における経験を踏まえ、全国規模で巨大地震等の大規模災害に備え、各地域における文化財の防災対策や、被災した文化財の救出・修復等の処置を適切に行うネットワークを構築することを目的として、平成26及び27年度に文化庁の補助事業により、法人全体で「文化財防災ネットワーク推進事業」を実施することとした。これらの実績を評価し、(地方公共団体への協力等による文化財保護への質的向上)に関する項目別評価はAとしたが、これをもって全体の評価を押し上げるまでには至らないと判断した。

3. 課題、改善事項など	
項目別評価で指摘した課題、改善事項	特になし。
その他改善事項	特になし。
主務大臣による改善命令を検討すべき事項	特になし。

4. その他事項	
監事等からの意見	特になし。
その他特記事項	<p>○有識者コメント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解説等の多言語化の推進に当たって、英語化に関しては十分な成果が見られるが、それに比して、中国語化、韓国語化が遅れている。早急に進めるべきである。 ・デジタルデバインドへの配慮が欠かれない。 ・スマートフォンの急速な浸透(パーソナルな端末の浸透)を踏まえて、今後の展示事業や教育活動、観覧環境における開示技術のさらなる開発は喫緊の課題となる。 ・かなり厳しい削減策を達成したが、予算面での削減はすでに限界に達しているため、今後もある程度実質予算に余裕を持たせる方策を設けられたい。

※ S：中期目標管理法人の活動により、全体として中期計画における所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られていると認められる。A：中期目標管理法人の活動により、全体として中期計画における所期の目標を上回る成果が得られていると認められる。B：全体としておおむね中期計画における所期の目標を達成していると認められる。C：全体として中期計画における所期の目標を下回っており、改善を要する。D：全体として中期計画における所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する。

1-2-3 中期目標管理法人 中期目標期間評価 項目別評価総括表

中期目標(※1)	年度評価(※2)					中期目標期間評価		項目別調書No.	備考
	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	見込評価	期間実績評価		
I. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項									
収蔵品の収集	A	A	A	B		B		1-1-(1)	
収蔵品の管理、保存	A	A	A	B		B		1-1-(2)	
収蔵品の保存技術の向上	A	A	A	B		B		1-1-(3)	
展示事業の充実	A	A	A	B		B		1-2-(1)	
教育活動の充実	A	A	A	B		B		1-2-(2)	
快適な観覧環境の充実	A	A	A	B		B		1-2-(3)	
文化財情報の発信と広報の充実	A	A	A	B		B		1-2-(4)	
収蔵品等の調査研究成果の公表	A	A	A	B		B		1-3-(1)	
専門家等との学術・人物交流	S	A	A	B		B		1-3-(2)	
文化財保存修理に関する人材育成	A	A	A	B		B		1-3-(3)	
収蔵品の貸与	A	A	A	B		B		1-3-(4)	
公立博物館・美術館等に対する援助・助言	A	A	A	B		B		1-3-(5)	
調査研究の目的・内容の適切性／調査研究の実施状況／調査研究の成果の状況	文化財に関する基礎的・体系的な調査研究				B	B		1-4-(1)	
	文化財の研究に関する調査手法の研究開発				B	B		1-4-(2)	
	文化財の保存修復に関する科学的・先端的な調査研究	A	A	A		B		1-4-(3)	
	国・地方公共団体の要請に基づく調査研究				B	B		1-4-(4)	
	有形文化財の収集等に関する調査研究				B	B		1-4-(5)	
国際協力に関する研究基盤の整備	文化財保護に関する国際協力	A	A	A		B		1-5-(1)	
	保存修復に関する研究基盤の整備	A	A	A		B		1-5-(2)	
アジア太平洋地域における無形文化遺産保護	A	A	A	B		B		1-5-(2)	
II. 業務運営の効率化に関する事項									
情報基盤の整備充実	A	A	A						
調査研究成果の公開・提供	A	A	A		B				1-6
公開施設の運用	A	A	A						
地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制の構築	A	A	A		A				1-7
中核的文化財担当者の研修、若手研究者の育成	A	A	A						
項目評価	A	A	A	B		B			
III. 財務内容の改善に関する事項									
一般管理費の削減	A	A	A	B		B			2-1
給与水準の適正化等	A	A	A	B		B			2-2
契約の適正化の推進	-	-	-	B		B			2-3
保有資産の有効活用の推進	-	-	-	B		B			2-4
内部統制の充実・強化	A	A	A	B		B			2-5
項目評価	A	A	A	B		B			
IV. その他の事項									
予算(人件費の見積りを含む)、収支計画及び資金計画	自己収入の増加	A	A	A		B			3-1
	固定的経費の節減					B			3-2
項目評価	A	A	A	B		B			
施設・整備に関する計画									
施設・整備に関する計画	-	-	-	B		B			4-1
人事に関する計画	A	A	A	B		B			4-2
項目評価	-	-	-	B		B			

※1 評価項目については中期目標の事項毎に基づく。ただし、平成23年度から平成25年度までの事項については、中期目標より評価事項が統合・細分化されているため、左側に旧事項名、右側に26年度以降の事項名を記載している。

※2 平成23年度から平成25年度までの評価については、「文部科学省所管独立行政法人の業務実績評価に係る基本方針」(平成14年3月22日文部科学省独立行政法人評価委員会)に基づく。

また、平成26年度以降の評価については、「文部科学省所管の独立行政法人の評価に関する基準」(平成27年6月文部科学大臣決定)に基づく。詳細は下記の通り。

平成23年度から平成25年度までの評価

S:特に優れた実績を上げている。(法人独自の基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。)

A:中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かつて順調に、または中期目標を上回るペースで実績を上げていく。(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が100%以上)

B:中期計画通りに履行しているとは言えない面もあるが、工夫や努力によって、中期目標を達成しると判断される。(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70%以上100%未満)

C:中期計画の履行が遅れており、中期目標達成のためには業務の改善が必要である。(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70%未満)

F:評議員会として業務運営の改善その他の動向を行う必要がある。(定量的基準は事前に設けず、業務改善の必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)

平成26年度以降の評価

S:中期目標管理法人の活動により、中期計画における所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られていると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の120%以上、かつ質的に顕著な成果が得られていると認められる場合)。

A:中期目標管理法人の活動により、中期計画における所期の目標を上回る成果が得られていると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の120%以上とする。)、B:中期計画における所期の目標を達成していると認められる(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の100%以上120%未満)、C:中期計画における所期の目標を下回っており、改善を要する(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の80%以上100%未満)、D:中期計画における所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する(定量的指標においては対中期計画(又は対年度計画)の80%未満、又は主務大臣が業務運営の改善その他の必要な措置を講ずることを要する必要があると認められた場合)。

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-1-1(1)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 1. 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (1)収蔵品の収集				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度								
															23年度
収蔵品 件数 (件)	(東博)	実績値	—	—	113,897	114,362	115,653	116,268							
	(京博)	実績値	—	—	6,621	6,708	6,721	7,109							
	(奈良博)	実績値	—	—	1,831	1,834	1,862	1,877							
	(九博)	実績値	—	—	453	474	493	512							
	(4館計)	実績値	—	—	122,802	123,378	124,729	125,766							
文化財 購入費 (百万 円)	(東博)	実績値	—	—	0	106	124	140							
	(京博)	実績値	—	—	48	22	0	227							
	(奈良博)	実績値	—	—	102	27	40	262							
	(九博)	実績値	—	—	569	719	727	727							
	(4館計)	実績値	—	—	719	874	891	1,356							
寄託品 件数 (件)	(東博)	実績値	—	—	2,689	2,563	2,519	3,064							
	(京博)	実績値	—	—	6,013	5,914	5,892	6,001							
	(奈良博)	実績値	—	—	1,945	1,951	1,994	1,984							
	(九博)	実績値	—	—	1,219	1,238	1,081	795							
	(4館計)	実績値	—	—	11,866	11,666	11,486	11,844							
										予算額(千円)	1,100,000	1,100,000	530,000	1,238,500	1,410,000
										決算額(千円)	720,023	874,185	891,828	1,356,326	
										経常費用(千円)	—	—	—	—	—
										経常利益(千円)	—	—	—	—	—
										行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
										従事人員数(人)	100	99	99	94	94
										※予算額は、4国立博物館の年度当初の文化財購入費の予算額を計上している。 ※決算額は、4国立博物館の文化財購入費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (1)国の文化財保護政策との整合性、一体性を保ちつつ機構の設置する博物館各館の役割・任務にそって収集方針を定め、これに基づき、計画的かつ適切な購入と寄贈・寄託の受け入れを進め、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の充実と保全を図ること。	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・収蔵品件数 ・文化財購入費 ・寄託品件数 〈評価の視点〉 ○購入、寄贈、寄託の受け入れにより、各館の特色に沿った体系的・通史的にバランスのとれたコレクションを形成したか。	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期目標期間実績補足資料PI~2 〈主要な業務実績〉 4館とも、各館の収集方針に沿って文化財の収集を行った。購入及び寄贈・寄託の受入においては、規程に従い、「鑑査会議」(東博・九博)、「陳列品鑑査会」(京博・奈良博)での審議を経て行っている。 ・収蔵品件数 125,766件(26年度末) 23年度新収品 701件(うち購入34件、寄贈176件、編入491件) 24年度新収品 576件(うち購入26件、寄贈153件、編入397件) 25年度新収品 1,351件(うち購入23件、寄贈513件、編入815件) 26年度新収品 1,037件(うち購入47件、寄贈484件、編入506件) ・文化財購入費 1,356百万円(26年度) ・寄託品件数 11,844件(26年度末) 各指標の詳細はアウトプット情報を参照。 購入 ・文化財購入費は、23年度の東京国立博物館の東洋館、25年度の京都国立博物館の平成知新館のリニューアル開館に向けた準備のため購入経費が確保できなかった。しかしながら、平成26年度に特殊要因運営費交付金910百万円が措置され増額傾向である。 寄贈 ・寄贈については、上記のとおり、毎年度多数の寄贈を受けている。	〈評定と根拠〉 評定:B 4館とも、各館の収集方針に従い、国指定文化財を含む価値の高い文化財を多数収集した。 各館の特色に沿ったコレクションの形成をバランスよく行っており、収蔵品件数は、購入のほか寄贈の受け入れ等により順調に増加している。 購入について、文化財購入予算の確保に苦慮してきたところであるが、これまで継続してきた予算要求等が、26年度特殊要因として実現し、27年度も予算措置がされた。このことにより、中期期間後半は安定的な文化財購入予算が確保できた。また、購入件数・質ともに順調である。 寄贈については、個人収集家等への積極的な働きかけをおこなった結果、個人からの大量の寄贈(京博)の受入があるなど、継続的に受入れており順調である。 寄託については、社寺等が自ら収蔵庫や展示施設を整備し寄託を解除することによる減少がある中で、積極的な受け入れ努力の結果、全体としては寄託品件数を維持している。また、社寺の改修に合わせた寄託受入や、社寺におけるデジタル複製品への入れ替えに伴う原品保存としての寄託など、博物館が担うべき文化財保存の役割を果たしつつ、文化財の調査を通じて所蔵者との良好な関係を継続することにより、博物館における展示及び調査研究の充実に繋げることができている。 〈課題と対応〉 文化財の調査等を通じた所蔵者との良好な	〈見込評価〉 評定 B 〈評定に至った理由〉 東京国立博物館(以下「東博」という。)、京都国立博物館(以下「京博」という。)、奈良国立博物館(以下「奈良博」という。))及び九州国立博物館(以下「九博」という。))は、それぞれの収集方針に沿って有形文化財の収集を行っている。 また、収集は、規程に従い審議を経て行っており、収集した文化財についても内容を公表していることから、透明性を確保しつつバランスのとれたコレクションを形成していることが認められる。 平成23年度から26年度までの4年間に、4館全体で収蔵品は3,533件増加した。 収蔵品の増加事由の内訳は、購入が130件、寄贈が1,326件、編入が2,209件である。館ごとの増加数の内訳は、東博が3,010件、京博が525件、奈良博が50件、九博が79件である。東博の増加数が著しいが、これは計画的に行っている資料整理に基づく編入の成果が多いが、これは平成26年度に行った旧家調査に基づく一括寄贈の成果が大きい。平成26年度に購入予算が増加され、購入件数が前年度に比して倍増した。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。 〈今後の課題〉 平成23年度から26年度までの4年	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉	

				<p>関係の維持・発展により、更に寄贈や寄託の充実を図っていききたい。</p>	<p>間に、4館全体で寄託品は131件減少した。</p> <p>所有者の意志に基づき寄託品の数値が変動するのはやむを得ず、当該評価項目においては参考値として取り扱うことが適当であるが、京博、奈良博及び九博は、収蔵品より寄託品のほうが多い場合もあり、展示活動においては重要な要素となっている。その意味において、平成25年度、26年度と連続して減少数が多い九博は、その影響を評価し、必要に応じて対策をとられるよう留意されたい。</p> <p><その他事項></p> <p>文化財保護法第48条第1項に基づく重要文化財の所有者に対する出品の勧告、又は同第5項に基づく国立博物館からの申出に基づく重要文化財の出品の承認によるものが寄託品に含まれており、その件数は次のとおりである。文化財保護法において国立博物館が担うべきミッションが果たされているものと認められる。</p> <p>(平成26年度末における重要文化財の勧告出品及び承認出品)</p> <p>東京国立博物館:勧告出品127件、承認出品16件、計143件</p> <p>京都国立博物館:勧告出品160件、承認出品55件、計215件</p> <p>奈良国立博物館:勧告出品149件、承認出品32件、計181件</p> <p>九州国立博物館:勧告出品6件、承認出品3件、計9件</p> <p>合計:勧告出品442件、承認出品106件、計548件</p> <p>○有識者コメント</p> <p>・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。</p>
--	--	--	--	---	--

7

					<p>・学術的にも重要かつ貴重な資料が購入されており、寄贈件数も順調に伸びている。寄託については、参考値程度と認め、年度毎の増減にはあまりこだわらるべきではない。</p> <p>・十分に達成されていると判断される。</p>
--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報				
特になし				

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-1-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 1. 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (2)収蔵品の管理、保存				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条第2号	当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条第2号	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
保存力	(東博)	実績値	—	1,187	1,594	1,492	1,721		予算額(千円)	4,792,204	6,883,691	2,853,965	2,990,365	2,920,551	
	(京博)	実績値	—	249	215	253	204		決算額(千円)	4,413,828	10,273,364	6,829,529	3,156,912		
ルテ作成件数(件)	(奈良博)	実績値	—	130	127	120	115		経常費用(千円)	—	—	—	—	—	
	(九博)	実績値	—	107	91	94	75		経常利益(千円)	—	—	—	—	—	
	(4館計)	実績値	—	1,673	2,027	1,959	2,115		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—	
									従事人員数(人)	111	110	110	105	105	
										※予算額は、決算報告書・施設整備費の予算額を計上している。 ※決算額は、決算報告書・施設整備費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、各年度間の繰越等によるものである。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。					

9

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (2)収蔵品全体を常時、適切な保存及び管理環境下に置くこと。特に、施設の老朽化、耐震対策に計画的かつ速やかに取り組み、収蔵品と人の安全を守る施設・設備の整備を図ること。	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。 (2)-2 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。	<主な定量的指標> 特になし <その他の指標> 保存カルテ作成件数 <評価の視点> ○収蔵品の写真・管理データを蓄積することにより、収蔵品の保存・管理の徹底に努めたか。 ○展示場、収蔵庫の老朽化対策や温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施したか。	<実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 P2 <主要な業務実績> 施設の老朽化対策、耐震対策として、各施設にて改修工事や収蔵庫の利用開始を行った。 主なものは以下のとおり。 ・23年度:東洋館収蔵庫に稼働棚を設置、利用開始(東博) ・25年度:収蔵庫ガス消火設備工事完了(奈良博) ・26年度:25年度まで建替工事と内装工事を行っていた平成知新館の収蔵庫等の利用開始(京博) ・27年度:法隆寺宝物館改修工事着手予定(東博) 収蔵品全体を常時、適切な保存及び管理環境下に置くため、以下の取組みを行った。 ・収蔵品の現状を確認の上作成したデータ(写真・テキスト)を蓄積してデータベース化し、展示・研究等の業務に活かした。(4館) 収蔵品の修理や列品貸与の際の点検等に作成している保存カルテについて、作成・蓄積を継続して行った。(4館) ・保存カルテ作成件数 詳細はアウトプット情報を参照。 ・文化財情報システム(業務システム)について、システムを改修しつつ、運用を継続し、収蔵品データを更新した。(4館) ・展示場、収蔵庫等において、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的に実施した。(4館)	<評定と根拠> 評定: B 施設の老朽化対策、耐震対策として、改修工事や新設工事を計画的かつ速やかに実施し、収蔵品と人の安全を守る施設・設備を整備した。27年度も実施中である。 収蔵品の管理・保存は、4館とも徹底した取り組みがなされており、データの蓄積、文化財情報システム、保存カルテ作成件数の推移を含め順調である。また、展示場、収蔵庫の環境についても、IPM(総合的有害生物管理)の実施・徹底、温湿度管理等により、対応がなされている。26年度に新システムによる温湿度モニタリングを導入するなど27年度に向けて取組みを継続し、順調である。	評定 B <評定に至った理由> 東博、京博、奈良博及び九博(以下単に「4館」という。)において収蔵品の保存・管理が適切に継続されていることが、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 修理や貸出の際に作成する保存カルテを含め、保存・管理する文化財のデータの蓄積が着実に進んでおり、今後の修理計画等に関する基本的な情報として共有されることが可能となっている。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。	評定 <評定に至った理由> <今後の課題> <その他の事項> ○有識者コメント ・中核的拠点として、収蔵品の管理・保存業務に関する知識を共有するという点で、各館の連携が重要である。 ・定量的評価になりにくい項目だけに評価が難しいかもしれないが、各館において展示場及び収蔵庫の環境管理等が適切に行われていることは、より強調されてよいと思われる。 ・京都国立博物館の常設展示スペースの改修完了など、管理・保存に関わる計画が着々と実行されたことは高く	
							<課題と対応> —

					評価出来る。 ・国内最高の水準にあると判断される。	
--	--	--	--	--	------------------------------	--

4. その他参考情報						
特になし						

1. 当事務及び事業に関する基本情報						
1-1-(3)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 1. 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (3) 収蔵品の保存技術の向上					
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート	事業番号 0385

2. 主要な経年データ																	
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)							
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		
修理件数 (本格修理) (件)	(東博)	計画値	—	—	40	40	40	40	40		予算額(千円)	140,000	140,000	140,000	140,000	140,000	
		実績値	—	—	106	95	93	78			決算額(千円)	140,047	144,144	145,147	126,341		
		達成度	—	—	265.0%	237.5%	232.5%	195.0%			経常費用(千円)	—	—	—	—	—	
	(京博)	計画値	—	—	10	10	10	10	10			経常利益(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	—	10	13	15	11			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—	
		達成度	—	—	100.0%	130.0%	150.0%	110.0%			従事人員数(人)	48	47	46	45	45	
	(奈良博)	計画値	—	—	8	9	9	9	8		※予算額は、年度当初の文化財修理費の予算額を計上している。 ※決算額は、文化財修理を外注した決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、契約差額である。 ※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。						
		実績値	—	—	11	9	8	9									
		達成度	—	—	137.5%	100.0%	88.9%	100.0%									
	(九博)	計画値	—	—	15	15	15	21	19								
		実績値	—	—	19	20	17	23									
		達成度	—	—	126.7%	133.3%	113.3%	109.5%									
	(合計)	実績値	—	—	146	137	133	121									

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (3) 収蔵品の保存技術の向上に努めること。	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 (3) 収蔵品の保存技術の向上に努めること。	(主な定量的指標) ・修理件数(本格修理) (その他の指標) (評価の視点) ○緊急性の高い収蔵品等から計画的に修理を実施したか。 ○文化財保存修理所の整備・充実のための取組を行ったか。 ○計画的な収蔵スペースの確保が図られたか。	<実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 P3 <主要な業務実績> 収蔵品の保存技術の向上のため、収蔵品の修理を継続して行い、科学機器の導入と活用、文化財保存修理所の整備を実施した。 ・4館とも、各館の修理計画に基づいて収蔵品の修理を行い、修理件数はほぼ毎年度、目標値を上回った。 修理件数(本格修理) 121件(26年度) 詳細はアウトプット情報を参照。 ・緊急性の高い収蔵品等から計画的に修理を実施した。(4館) ・25年度に調達した大型垂直式X線断層撮影装置(東博)やマイクロフォーカスX線CTシステム(京博)の運用を26年度から開始、X線透過撮影(奈良博)や蛍光X線分析(九博)など、全館で最新の科学機器を計画的に導入し文化財の修理に活用している。 ・26年度に、京都国立博物館文化財保存修理所の改修工事は、一期工事を完了し、電気設備及び機械設備の改修工事に着手した。 ・26年度に、京都国立博物館と奈良国立博物館の文化財保存修理所の空調機を点検し、フィルターを交換するなど改善した。 ・収蔵スペースの確保のため、改修工事等を行った(主なものは以下のとおり)。 ・26年度より平成知新館収蔵庫の運用開始。(京博) ・23年度に東洋館収蔵庫の改修工事を行った。(東博)	<評定と根拠> 評定:B 収蔵品の保存技術の向上のため、収蔵品の修理を継続して行い、科学機器の導入と活用、文化財保存修理所の整備を実施し、収蔵品の保存技術の向上に貢献した。 ・緊急性の高い収蔵品等から計画的に本格修理を実施し、劣化予防の応急修理もしている。また、最新の科学機器の導入と活用を全館で行い、計画的な修理へ役立てている。収蔵品等の修理においては、寄附金や助成金を活用しており、各館とも目標値以上の修理を継続して実施することができた。27年度も計画的に修理を実施予定である。 ・文化財保存修理所の整備・充実についても、京都国立博物館文化財保存修理所改修工事の進捗を含め、27年度に向けても順調である。 ・収蔵スペースについては、改修工事や新営工事の実施により、確保を図っている。各館とも安全かつ効率的な収納について検討を継続し、対応している。 <課題と対応> ・博物館にとって収蔵品・寄託品の増加への対応は喫緊の課題であり、中長期的に更なる収蔵スペースの確保が必須である。収蔵庫の改修や増設には多額の費用がかかることから、自己努力での実施に限界があるため、施設整備費獲得を目指す。	(見込評価) 評定 B <評定に至った理由> 平成23年度から26年度までの間、4館それぞれの文化財の修理計画に基づきながら、計画値を大きく上回る件数の本格修理が実施された。4年間合計の計画達成率は181%であり、特に東博の成果(達成率233%)が全体に大きく寄与している。修理の費用を調達するため、民間の寄付金や助成金を獲得する取組も積極的に行われた。 保存・修理に際して必要な、最先端の科学的分析に必要な調査研究機器の調達も計画的に行われ、実際の修理等に活用されている。 保存・修理関係の施設については、文化財保存修理所の改修工事が順調に進行しているとともに、新たに開館した京博の平成知新館では、最新の環境モニタリングシステムの導入も行われている。 収蔵品、寄託品の増加に対する収蔵スペースの確保については、限られた容積に最大限の工夫を施している。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されている。修理件数に関する定量的指標が、見込評価時点でA評定の基準120%以上を大きく超えているが、本評価項目はその他の定性的評価を含め、全体の評定を行うこととなっており、法人の自己評価ではBとされている。修理件数の増加は、本項目の目標達成の水準をさらに高めているものと認められるが、自己評価の(課題と	(期間実績評価) 評定 <評定に至った理由> <今後の課題> <その他事項>	

13

					対応)において記載されている、収蔵品の増加に対応した収蔵スペースの確保の問題もあり、全体としてはB評定が相当と判断した。 <今後の課題> なし。 <その他事項> なし。 ○有識者コメント ・京博の文化財保存修理所の整備・充実が評価できる。他機関でも施設・機器の整備を適切に行うことが重要である。 ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・収蔵スペースの問題については、長期計画を立てておく事が望ましい。 ・保存修復に関する技術は高水準にあるが、この領域は絶対的な人的不足の問題が慢性化しつつあり、おおきな危機を抱かざるを得ない。	
--	--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-2-(1)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (1) 展覧事業の充実				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成 27 年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ									
① 主要なアウトプット(アウトカム)情報					② 主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)				
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
博物館の年間総来館者数	(東博)	実績値	—	1,756,590	1,555,694	1,322,288	1,913,643		
	(京博)	実績値	—	239,767	234,540	148,429	539,134		
	(奈良博)	実績値	—	469,463	450,235	461,690	476,993		
	(九博)	実績値	—	712,594	1,107,036	727,603	804,663		
	(合計)	実績値	—	3,178,414	3,347,505	2,660,010	3,734,433		
平常展来館者数	(東博)	計画値	—	362,470	362,470	362,470	362,470		
		実績値	—	—	324,597	416,430	484,429	587,528	
		達成度	—	—	89.6%	114.9%	133.6%	162.1%	
	(京博)	計画値	—	171,110	—	—	96,981		
		実績値	—	—	—	—	265,791		
※ 基準値は、前中期目標期間実績の年度平均	(奈良博)	計画値	—	118,032	118,032	118,032	118,032	94,338	
		実績値	—	—	130,839	145,914	122,075	92,147	
		達成度	—	—	110.9%	123.6%	103.4%	97.7%	
	(九博)	計画値	—	380,690	380,690	380,690	380,690		
		実績値	—	—	358,366	460,525	349,848	357,362	
	達成度	—	—	94.1%	121.0%	91.9%	93.9%		
(合計)	実績値	—	—	813,802	1,022,869	956,352	1,302,828		
平常展陳列替件数	(東博)	計画値	—	—	4,000	4,000	5,800	5,800	5,500
		実績値	—	—	4,914	6,989	5,708	5,506	
		達成度	—	—	122.9%	174.7%	98.4%	94.9%	
	(京博)	計画値	—	—	—	—	700	700	
		実績値	—	—	—	—	693		
		達成度	—	—	—	—	99.0%		
	(奈良博)	計画値	—	—	400	400	70	80	180
		実績値	—	—	481	465	130	208	
		達成度	—	—	120.3%	116.3%	185.7%	260.0%	

15

平常展陳列替件数	(九博)	計画値	—	—	1,100	1,100	1,100	800	600
		実績値	—	—	1,373	1,195	1,157	1,027	
		達成度	—	—	124.8%	108.6%	105.2%	128.4%	
	(東博)	計画値	—	—	5,500	6,500	7,500	7,500	7,200
		実績値	—	—	7,394	9,190	8,824	8,161	
		達成度	—	—	134.4%	141.4%	117.7%	108.8%	
	(京博)	計画値	—	—	—	—	—	1,000	1,000
		実績値	—	—	—	—	—	980	
		達成度	—	—	—	—	—	98.0%	
	(奈良博)	計画値	—	—	700	700	500	475	600
	実績値	—	—	1,092	814	632	675		
	達成度	—	—	156.0%	116.3%	126.4%	142.1%		
平常展外国語パネルの設置数(%)	(九博)	計画値	—	—	1,700	1,700	1,700	1,000	700
		実績値	—	—	2,417	2,416	2,750	1,904	
		達成度	—	—	142.2%	142.1%	161.8%	190.4%	
	(東博)	計画値	80%	—	80%	80%	80%	80%	80%
		実績値	—	—	96%	97%	100%	100%	
		達成度	—	—	120.0%	121.3%	125.0%	125.0%	
	(京博)	計画値	80%	—	—	—	—	80%	80%
		実績値	—	—	—	—	—	100%	
		達成度	—	—	—	—	—	125.0%	
	(奈良博)	計画値	80%	—	80%	80%	80%	80%	80%
	実績値	—	—	89%	100%	91%	100%		
	達成度	—	—	111.3%	125.0%	113.8%	125.0%		
(九博)	計画値	80%	—	80%	80%	80%	80%	80%	
	実績値	—	—	94%	87%	85%	92%		
	達成度	—	—	117.5%	108.8%	106.3%	115.0%		
特別展来館者数	(東博)	実績値	—	—	1,431,993	1,139,264	837,859	1,326,115	
	(京博)	実績値	—	—	239,767	234,540	148,429	273,343	
	(奈良博)	実績値	—	—	338,624	304,321	339,615	384,846	
	(九博)	実績値	—	—	354,228	646,511	377,755	447,301	
	(合計)	実績値	—	—	2,364,612	2,324,636	1,703,658	2,431,605	
特別展開催回数(※海外展を含む)	(東博)	計画値	3~4	—	3~4	3~4	3~4	3~4	3~4
		実績値	—	—	7	9	8	8	
		達成度	—	—	175.0%	225.0%	200.0%	200.0%	
	(京博)	計画値	2~3	—	2~3	2~3	2~3	2~3	2~3
		実績値	—	—	6	5	3	2	
	達成度	—	—	200.0%	166.7%	100.0%	100.0%		
(奈良博)	計画値	2~3	—	2~3	2~3	2~3	2~3	2~3	

16

		実績値	—	—	3	3	3	3		
		達成度	—	—	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		
	(九博)	計画値	2～3	—	2～3	2～3	2～3	2～3	2～3	
		実績値	—	—	5	4	5	5		
		達成度	—	—	166.7%	133.3%	166.7%	166.7%		
	(合計)	実績値	—	—	21	21	19	18		
海外展回数 (回)	(東博)	実績値	—	—	1	2	1	1		
	(京博)	実績値	—	—	2	0	0	0		
	(奈良博)	実績値	—	—	0	0	0	0		
	(九博)	実績値	—	—	1	0	1	0		
	(合計)	実績値	—	—	4	2	2	1		

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価

中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
			業務実績	自己評価	(見込評価)	(期間実績評価)
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。 (1) 展覧事業の充実 我が国の中核的拠点として、展覧事業については常に点検・評価を行うなど改善への取り組みを進め、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外に発信し、これらについての理解促進に寄与するものとなるように努めること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図るとともに、政府の観光政策と連動した観光資源としても活用を図る。 (1) 展覧事業の充実 我が国の中核的拠点として、展覧事業については、常に点検・評価を行い国民のニーズ、学術的動向等を踏まえた質の高いものを実施するとともに、展覧会を開催するにあたって	〈主な定量的指標〉 ・博物館の年間総来館者数 ・平常展来館者数 ・平常展陳列替件数 ・平常展陳列総件数 ・平常展外国語パネルの設置数 ・特別展来館者数 ・特別展開催回数 ・特別展来館者数 ・海外展回数 〈その他の指標〉 〈評価の視点〉 ○国民のニーズや学術的動向等を踏まえた質の高いものとしたか。また、観覧者の理解が深まるよう展示・解説を工夫したか。 ○(平常展) 展覧事業の中核として、各館の特	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P3～9 〈主要な業務実績〉 展覧事業については、毎年自己点検評価を行い、改善に取り組んだ。また、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化に関する平常展や特別展等を国内のみならず海外でも実施した。 概要は以下のとおり。 (平常展) ・平常展来館者数 1,302,828人(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・平常展陳列替件数 ・平常展陳列総件数 ・平常展外国語パネルの設置数 それぞれアウトプット情報を参照 ・前中期計画期間から工事を行っていた、新平常展示館「平成知新館」を26年9月に開館した。(京博) ・東洋館を25年1月に、黒田記念館を27年1月にリニューアルオープンした。(東博)	〈評定と根拠〉 評定：B 我が国の中核的拠点として、展覧事業については、毎年自己点検評価を行い、改善に取り組んだ。 日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外に発信するため、多岐に渡る調査研究の成果を踏まえた多様なテーマの平常展・特別展等(海外展含む)を実施し、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外に発信した。また、これらについての理解促進に寄与するものとなるように、展示と解説に工夫をし、多言語化も実施した。 27年度も計画通りの実施が見込まれる。 (平常展) ・平常展来館者数については、特に26年度に京都国立博物館で平成知新館が開館したことにより目標を大きく上回る来館者数を達成した。九州国立博物館で未達成の年が複数あったが、全体としては来館者数増加傾向となっている。 ・平常展陳列替件数と平常展陳列総件数	評定 B 〈評定に至った理由〉 平成23年度から26年度までの間、4館とも平常展及び特別展を計画的に実施した。 成果を示す定量的指標としては、平常展については来館者数、陳列替件数、陳列総件数及び外国語パネルの設置数を、及び特別展については開催回数を掲げている。 平常展の定量的指標の達成率については4館合わせて、来館者数が116%、陳列替件数が118%、陳列総件数が130%、外国語パネルの設置件数が118%を示しており、順調である。来館者の展示に関する満足度アンケート調査で上位の評価(「とても良かった」又は「良かった」)を付けた人は、4年間平均で73%となっており、概ね満足を得られているものと判断した。 以上のとおり平常展については、定量的指標は計画値を達成するとともに	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉

17

は、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、国際文化交流に配慮するなど魅力あるものとする。	色を十分に発揮した体系的・通史的な展示としたか。 ○(平常展) 作品のキャプションについては、すべてに英語訳を付したか。また、海外からの来館者向けに、展示テーマごとに外国語の解説パネル等を80%以上設置したか。 ○(特別展) 我が国の博物館の中核的拠点にふさわしい質の高い展示としたか。また、個々の展覧会ごとに、展示内容・観覧環境を踏まえた目標来館者数を定め、それを達成したか。さらに展覧会来館者数の満足度を把握し、改善を図ったか。 ○(海外展) 海外において展覧会を開催し、日本の歴史と伝統文化を紹介したか。	定期的な陳列替を実施し、テーマ性を持った特集陳列等を随時開催し平常展の充実に向けた。(4館) (特別展) ・特別展来館者数 ・特別展開催回数 内訳はアウトプット情報を参照 (海外展) ・海外展は毎年度実施した。 内訳はアウトプット情報を参照	は、ほぼ全ての館と年度で目標値を大幅に超える実績を上げており、順調である。 ・平常展外国語パネルの設置数はいずれの館も安定的に目標を大きく上回っている。また、作品キャプション全てに英語訳を付しており順調である。 (特別展) ・基礎的な調査研究や調査、特別展に係る事前調査等の成果を踏まえて、展覧会を実施しており、我が国の博物館の中核的拠点にふさわしい質の高い展示としている。 ・特別展開催回数は、常に目標値を上回る実績を残した。 ・特別展来館者数は、多くの展覧会で目標値を上回り全体として順調である。 ・特別展ではアンケートを実施し来館者の満足度を把握し、会期中の対応や次の展覧会への改善へ活かした。 (海外展) ・毎年開催し、日本の歴史と伝統文化を海外で紹介できた。27年度も1件開催している。	に、定性的評価の目安となる来館者のアンケート調査でも一定の満足度が得られているものと判断した。 特別展の定量的指標である開催回数等の達成率については、4館合わせて152%を示しており、非常に順調である。特別展は来館者数の目標値を展覧会ごとに定めており、達成率に関する定量的指標の計画値は設けていない。平成23年度から26年度までの来館者数の目標値の達成率は、平成23年度が170%、24年度が145%、25年度が111%、26年度が127%となっており、4年間の全79回の特別展の来館者数の目標値の達成率は138%であった。4年間の館ごとの来館者数の目標値の達成率(平均)は、東博が123%、京博が156%、奈良博が126%、九博が190%であった。同じく4年間の来館者の満足度アンケート調査では、上位の評価(「とても良かった」・「良い」及び「良かった」・「まあまあ良い」)を付けた人は、東博の平均値で71%、京博の平均値で89%、奈良博の平均値で81%、九博の平均値で86%、4館全体の平均値で82%となっており、満足を得られているものと判断した。 以上のとおり特別展については、定量的指標である開催回数は計画値を上回って達成するとともに、来館者数も目標値を大きく上回っており、また、定性的評価の目安となる来館者のアンケート調査でも一定の満足度が得られているものと判断した。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。
--	--	---	--	---

18

						<p><今後の課題> なし。</p> <p><その他事項> なし。</p> <p>○有識者コメント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評定に異論はないが、外国語のパネル・キャプションの設置は、外国人の入館者の著しい増加やオリンピック開催を考慮すると、さらに検討する余地がある。 ・特別展に関しては、定量的及び定性的評価が目標を高く上っており、A評定としても良いのではないかと。 ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・平常展の充実が博物館としてあるべき姿を実現したものとして高く評価出来る。 ・特別展については年度毎に変動があるが、観覧者数のみを評価すべきではなく、内容主体の評価をすべき。観覧者が多すぎれば、見学しづらくなり、サービスは低下せざるを得ない。 ・大規模で社会的注目を集める展示事業は拡充の途にあるが、入館者数はあまり望めなくても、最新の研究を反映した展示を、たとえ小規模であっても補完的に推進すべきと考える。
--	--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-2-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (2)教育活動の充実				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第3号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ																
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)						
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
講演会、ギャラリートークの参加者数(人)	(東博)	計画値	—	—	7,830	7,830	7,830	7,830	7,790	予算額(千円)	55,238	46,592	75,943	75,898	85,209	
		実績値	—	—	12,664	13,193	15,777	14,419	決算額(千円)	95,876	63,571	63,499	99,237	—		
		達成度	—	—	161.7%	168.5%	201.5%	184.2%	経常費用(千円)	—	—	—	—	—		
	(京博)	計画値	—	—	2,638	2,380	1,860	3,120	3,300	経常利益(千円)	—	—	—	—	—	
		実績値	—	—	1,450	3,150	2,062	4,596	行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—		
		達成度	—	—	55.0%	132.4%	110.9%	147.3%	従事人員数(人)	51	49	49	47	47		
	(奈良博)	計画値	—	—	2,450	2,600	2,600	2,650	2,650	※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・教育普及事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・教育普及事業費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は東京国立博物館の学芸企画部博物館教育課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤研究職員の人数を計上している。						
		実績値	—	—	3,006	3,454	3,219	3,525								
		達成度	—	—	122.7%	132.8%	123.8%	133.0%								
	(九博)	計画値	—	—	2,030	3,100	3,100	3,100	5,500							
		実績値	—	—	7,833	8,354	7,276	4,694								
		達成度	—	—	385.9%	269.5%	234.7%	151.4%								
(合計)	実績値	—	—	24,953	28,151	28,334	27,234									
キャンパスメンバーズ加入校数(件)	(東博)	実績値	—	—	37	38	43	44								
	(京博)	実績値	—	—	30	30	29	29								
	(奈良博)	実績値	—	—	28	27	26	27								
	(九博)	実績値	—	—	28	24	24	24								
	(合計)	実績値	—	—	123	119	122	124								
ボランティア数(人)	(東博)	実績値	—	—	169	170	169	173								
	(京博)	実績値	—	—	64	45	45	210								
	(奈良博)	実績値	—	—	87	121	114	110								
	(九博)	実績値	—	—	355	308	287	352								
	(合計)	実績値	—	—	675	644	615	845								
賛助会等加入件数(件)	(東博)	実績値	—	—	292	332	379	414								
	(京博)	実績値	—	—	375	353	336	351								
	(奈良博)	実績値	—	—	65	68	70	73								

	(合計)	実績値	—	—	732	753	785	838		
友の会・パスポート加入者数	(東博)友の会	実績値	—	—	1,802	1,570	1,586	2,145		
	パスポート	実績値	—	—	17,672	16,569	16,474	20,302		
	ページブック	実績値	—	—	—	—	—	1,038		
	小計	実績値	—	—	19,474	18,139	18,060	23,485		
	(京博)パスポート※	実績値	—	—	2,667	3,064	2,295	6,522		
	(奈良博)パスポート※	実績値	—	—	2,615	2,486	2,598	3,162		
	(九博)友の会	実績値	—	—	117	196	141	192		
	パスポート	実績値	—	—	3,093	4,224	4,633	4,990		
	小計	実績値	—	—	3,210	4,420	4,774	5,182		
	(合計)	実績値	—	—	27,966	28,109	27,727	38,351		

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価								
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価			
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)	
					評定	B	評定	
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。 (2)教育活動の充実 日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、子どもから成人まで、対象に応じた多彩な学習機会の提供を実施し、ボランティアを育成し、教育活動の充実に努めるとともに、次代の博物館事業を担う人材育成に寄与すること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図るとともに、政府の観光政策と連動した観光資源としても活用を図る。 (2)教育活動の充実 日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、機構の人的資源・物的資源・情報資源を活用した教育活動を実施する。	〈主な定量的指標〉 ・講演会、ギャラリートークの参加者数 〈その他の指標〉 ・キャンパスメンバーズ加入校数 ・ボランティア数 ・賛助会等加入件数 ・友の会・パスポート加入者数 〈評価の視点〉 ○講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の目標参加者数を達成したか。 ○ボランティアを支援したか。また、企業との連携や友の会活動の活性化により博物館支援者の増加を図ったか。 ○大学との連携事業等を実施したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P9～10 〈主要な業務実績〉 学習機会の提供 特別展・平常展に関連した講演会・ギャラリートーク等のほか、ファミリー向けプログラムや小中学生向けワークショップなど、幅広い層に楽しむ機会を提供した。 ・講演会、ギャラリートークの参加者数 27,234 人(26 年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・キャンパスメンバーズ加入校数 124 件(26 年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・「アジアンめりえ」等の体験型プログラム(東博)、訪問授業「文化財に親しむ授業」(京博)、世界遺産学習事業(奈良博)、学校貸出キット「きゆうばつく」の提供(九博)等を継続的に実施した。 ボランティア活動の支援 各館でボランティアの自主企画等を支援した。 ・ボランティア数 845 人(26 年度) 内訳はアウトプット情報を参照 大学との連携 ・インターシップ事業を継続して実施した。(東博・奈良博・九博)また、博物館実習の受け入れ(九博)や大学への客員教授等の派遣(京博・奈良博)を行った。 博物館支援者の増加 各種会員制度によるリピーターの拡大、及び支援者の増加に努めた。 ・賛助会等加入件数 838 件(26 年度)	〈評定と根拠〉 評定：B 子どもから成人まで、対象に応じた多彩な学習機会を提供するため、講座・講演会をはじめ、体験型プログラム、ワークショップ、小中学校への訪問授業、学校貸出キットなど多様なプログラムを各館で毎年度工夫しながら提供した。また、ボランティアの育成のため、研修やスクーリング等の実施を行い、人数も増やして教育活動の充実につなげている。さらに、次代の博物館事業を担う人材育成のため、大学との連携事業等を行っている。 27 年度も計画的に実施する予定である。 ・講演会、ギャラリートークの参加者数については、順調に目標を達成している。 なお、23 年度の京都国立博物館については、平常展示館建替工事に伴う講堂閉鎖のため外部施設での講演会実施により、人数が目標より少なかったものの、その後は営業努力により人数を増やし、目標を達成した。 ・キャンパスメンバーズの加入校数については、継続的な取組みの結果、加入校数を維持している。 ・ボランティア数については、平成知新館開館もあり26 年度に大幅に増加した。 ・賛助会等加入件数については、順調に加入者数が増えている。 ・友の会・パスポート加入者数については、新規の会員区分を設定するなど加入者増への取組みも実施している。また、展覧会の来館者数増加に伴って増加している。いずれの件数も順調に推移している。 ・企業との連携については、共同企画や広報協力を実施し、博物館の認知度向上に	〈評定に至った理由〉 平成 23 年度から 26 年度までの間、4 館とも講演会等の教育活動及び博物館支援者を増加させる取組を計画的に実施した。 教育活動に関する定量的指標として、講演会等の参加者数については、平成 23 年度から 26 年度までの目標値の達成率は、平成 23 年度が 167%、24 年度が 177%、25 年度が 184%、26 年度が 163%となっており、4 年間の平均達成率は 173%であった。4 年間の館ごとの来館者数の目標値の達成率(平均)は、東博が 179%、京博が 113%、奈良博が 128%、九博が 249%であった。 また、教育活動に対するボランティア協力への支援については、3館(東博、奈良博、九博)は継続的に実施しており、平成 26 年度から新たに京博でも開始した。 教育活動の一環として、博物館の支援組織として友の会、パスポート会員、賛助会員、キャンパスメンバーズ等の多様な制度を設け拡充に努めている。定量的指標の計画値・目標値は設定していないが、様々な制度について平成 22 年度末から平成 26 年度末の会員数の変動状況を示せば、東博が 8,528 会員(55%)の増、京博が 4,013 会員(139%)の増、奈良博が 675 会員(26%)の増、九博が 1,717 会員(49%)の増、4 館全体で 14,933 会員(61%)の増となっており、順調に成果を上げている。 以上については、自己評価書及び関	〈今後の課題〉 〈その他事項〉		

		・友の会・バスポート加入者数 38,351 件(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・企業の協力による障がい者内覧会(東博)や広報協力(京博・奈良博・九博)を実施し、博物館の認知度向上につなげた。	つなげている。 <課題と対応> —	係資料によって具体的に説明されており、講演会等に関する定量的指標が、見込評価時点でA評定の基準120%以上を大きく超えているが、本評価項目はその他の評価指標や視点を含め全体で評定を行うこととなっており、法人の自己評価ではBとされている。定量的指標は、教育活動の一部を構成する指標として重要であるが、本指標がA評定の基準を達成しているという理由だけで全体をA評定とする根拠にはならず、B評定が相当と判断した。 <今後の課題> なし。 <その他事項> なし。 ○有識者コメント ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・事業全体に共通して言える事ながら、年をおって充実している印象があり、とくに講座の充実やサポート人口の増加は、目に見える成果として高く評価出来る。 ・大きな前進を感じる。
--	--	---	-------------------------	---

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-2-(3)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (3) 快適な観覧環境の充実				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第2号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ																			
①主要なアウトプット(アウトカム)情報								②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)											
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度						
								予算額(千円)	20,000	29,500	29,000	60,000	55,000						
								決算額(千円)	19,003	35,015	28,950	61,970							
								参考決算額(千円)	18,049	22,330	20,533	34,962							
								経常費用(千円)	—	—	—	—	—						
								経常利益(千円)	—	—	—	—	—						
								行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—						
								従事人員数(人)	85	86	84	84	84						
								※予算額は個別に計上することができないため、年度当初の平常展印刷費の予算額を計上している。						※決算額は個別に計上することができないため、平常展印刷費の決算額を計上している。					
								※参考決算額は、上記決算額のうち、4国立博物館の平常展に要するチラシ、パンフレット等の作成費を計上している。						※従事人員数は東京国立博物館の総務部及び京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館の各総務課の常勤事務職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
					評定	B	評定
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。 (3) 快適な観覧環境の提供 国民に親しまれ、他の館の見本となる施設を目指し、来館者の立場に立った観覧環境の整備や観覧料金及び開館時間の弾力化などの利用者の要望を踏まえた管理運営を行い、来館者の期待に応えること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図るとともに、政府の観光政策と連動した観光資源としても活用を図る。 (3) 快適な観覧環境の提供 国民に親しまれる施設を目指し、来館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 特になし 〈評価の視点〉 ○高齢者、障がい者、外国人等の利用に配慮した観覧環境の提供を行ったか。 ○利用者のニーズを踏まえ、観覧料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行ったか。 ○利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等のサービスを改善したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3 期中期期間実績補足資料 PI0 〈主要な業務実績〉 観覧環境の整備として以下の取組みを行った。 施設のバリアフリー化、各種案内の充実等により、高齢者、障がい者、外国人等の利用に配慮した快適な観覧環境を提供した。 主な整備状況は以下のとおり。 ・24 年度に、東洋館と本館のショップをリニューアルオープンした。(東博) ・25 年度に黒田記念館と表慶館のバリアフリー化工事を実施(東博)、また「ほじょ犬」専用トイレ設置をした。(九博) ・26 年度に開館した平成知新館はバリアフリーに配慮した施設として設計・建築し、館内に新たにミュージアムショップとレストランを設けた。(京博) 同様に、正門プラザと黒田記念館内に新たにミュージアムショップを設置した。(東博) ・多言語(6~7 言語)による案内パンフレットの製作・配布を行った。(4館) ・音声ガイドの貸出を行った。(4館) ・24 年度からスマートフォンアプリ「トウ・ハクナビ」(日・英)の提供を開始し、随時機能追加のバージョンアップを行った。ダウンロード件数も順調に伸びている。(東博) ・一部の特別展では、混雑緩和のため開館時館を延長した。(東博・九博) ・混雑対策として、入場待ち来館者向けのテントの設置(東博・京博・奈良博)、ウェブ等で混雑状況・待ち時間情報の提供等を行った。(4 館)	〈評定と根拠〉 評定：B 国民に親しまれ、他の館の見本となる施設を目指し、来館者の立場に立った観覧環境の整備として、バリアフリー化工事や設備充実を継続的に実施し、ミュージアムショップのリニューアルやレストランの新設、託児所の設置等によるサービスの充実や多言語化による外国人対応、開館時間の延長などの利用者の要望を踏まえた管理運営を行い、来館者の期待に応えた。 来館者アンケートを実施し、館の運営やサービスに随時反映している。特に特別展の混雑対策には継続して取り組んでおり、来館者のニーズを踏まえた開館時間延長も行って いる。 〈課題と対応〉 混雑対策については、引き続き検討を重ね、待ち時間等を含めた観覧環境が少しでも快適になるよう工夫していく。	〈評定に至った理由〉 平成23 年度から26 年度までの間、4 館ともバリアフリー施設の整備及び展覧会を快適に鑑賞するためのサービスの改善に関する取組等を実施した。 見込評価の時点において、バリアフリー施設は、関係法令で推奨される水準に達しており、高齢や障がいのある来館者に対し、適当な環境とサービスが提供されていると認められる。 このほか、乳幼児及びその保護者や外国人を対象とするサービスや飲食サービスの改善にも努めているとともに、観覧のため長い待ち時間が生じる特別展については、ウェブサイト等で混雑状況等を広報するとともに、臨時の日除けテントや給水所等を設けるなどの対策をとっている。 来館者アンケートの集計結果は、ウェブサイトで公表されており、「もっと詳しい説明がほしい。」「行列を予測し、予約制や整理券など混雑緩和の努力をしてほしい。」「照明が暗い」などのご意見もあるが、観覧環境をさらに改善するための課題を公表し、継続的な取組を行う意識が表れているものと認められる。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B 評定が相当と判断した。	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉	
							〈その他事項〉 なし。 ○有識者コメント ・評定に異論はないが、全体に展示デザインが洗練されてきていることは大いに評価される。 ・社会環境の加速度的な変化に対応できているが、特にデジタルデバイスへの配慮がなされねばならない。 ・バリアフリー化や外国語案内板の設置など施設面での充実が著しいが、特別展の待ち時間などはマイナス要因として評価せねばならない。 ・目標に向かって順調に前進していると判断される。

--	--	--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-2-(4)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 (4)文化財情報の発信と広報の充実				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第7号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報					②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)										
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
収蔵品写真等の既存フィルム等のデジタル化件数(数件)	(東博)	計画値	—	3,000	1,000	1,000	300	(※)		予算額(千円)	597,470	577,268	1,283,989	686,536	965,171
		実績値	—	1,468	776	550,305	79		決算額(千円)	654,394	716,198	953,078	1,174,915		
		達成度	—	48.9%	77.6%	55030.5%	26.3%		参考決算額(千円)	80,513	33,364	22,966	17,397		
	(京博)	計画値	—	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	2,165	2,732	2,682	5,536		経常利益(千円)	—	—	—	—	—	
		達成度	—	108.3%	136.6%	134.1%	276.8%		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—	
	(奈良博)	計画値	—	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000		従事人員数(人)	64	63	58	56	56
		実績値	—	5,297	4,924	7,615	5,154		※予算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の予算額を計上している。						
		達成度	—	176.6%	164.1%	253.8%	171.8%		※決算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の決算額を計上している。						
	(九博)	計画値	—	1,000	1,000	200	500	(※)	※参考決算額は、上記決算額のうち、4国立博物館の文化財情報の発信と広報の経費を計上している。						
		実績値	—	2,146	1,450	62	776		※従事人員数は東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の人数を計上している。						
		達成度	—	214.6%	145.0%	31.0%	155.2%								
収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数(数件)	(東博)	計画値	—	3,000	3,000	3,000	6,000	8,000							
		実績値	—	10,566	9,566	9,865	10,720								
		達成度	—	352.2%	318.9%	328.8%	178.7%								
	(京博)	計画値	—	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000							
		実績値	—	3,580	2,713	4,525	4,927								
		達成度	—	119.3%	90.4%	150.8%	164.2%								
	(奈良博)	計画値	—	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000							
		実績値	—	6,103	4,960	4,648	5,478								
		達成度	—	203.4%	165.3%	154.9%	182.6%								
	(九博)	計画値	—	500	500	2,000	1,000	1,000							
		実績値	—	4,441	2,142	1,512	1,167								
		達成度	—	888.2%	428.4%	75.6%	116.7%								
ウェブサイトアクセス件数(数件)	(東博)	実績値	—	2,772,633	2,982,729	2,898,885	4,248,437								
	(京博)	実績値	—	1,835,640	1,837,113	1,562,480	2,964,705								
	(奈良博)	実績値	—	722,249	845,202	893,553	1,196,669								

27

(九博)	実績値	—	—	1,150,408	2,078,279	1,209,272	1,827,152		
「e国宝」	実績値	—	—	1,139,318	1,420,662	1,676,762	1,515,442		

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価										
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価				主務大臣による評価			
			業務実績		自己評価		(見込評価)		(期間実績評価)	
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図ること。 (4)文化財情報の発信と広報の充実 文化財情報の蓄積と発信の充実とともに、展示及び各種事業に関し、積極的な広報に努めること。	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図るとともに、政府の観光政策と連動した観光資源としても活用を図る。 (4)文化財情報の発信と広報の充実 ①収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、データ整備及びデジタル化を推進する。また、整備したデータを公開するウェブサイトなどの公開システムの充実を図る。公開データの件数は継続的に増加させる。収蔵品等に関するデジタル	〈主な定量的指標〉 ・収蔵品写真等の既存フィルム等のデジタル化件数 ・収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数 〈その他の指標〉 ・ウェブサイトアクセス件数 〈評価の視点〉 ○収蔵品等に関するデジタル化目標件数を定め、それを達成したか。 また、公開データ件数を増加させたか。 ○情報資料を収集し、レファレンス機能を充実させたか。 ○計画的な広報・情報提供を行ったか。 ○積極的な広報活動に努めたか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P10~11 〈主要な業務実績〉 文化財情報の蓄積と発信の充実 ・デジタル化を推進し、収蔵品写真等の既存フィルム等のデジタル化について、各館ごとに目標値を定め実施し、可能なものから随時公開した。(4館)また、国宝・重要文化財の高精細画像(e国宝)を継続して公開した。 またiOS、Androidそれぞれのアプリ版「e国宝」を継続して公開した。(4館) ・収蔵品写真等の既存フィルム等のデジタル化件数 アウトプット情報を参照 ・収蔵品・展覧会出品作品等の新規撮影を計画どおり実施して関連データを整備・蓄積し、また、図書資料等の収集を継続的にを行い、レファレンスに供した。(4館) ・収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数 アウトプット情報を参照 ・東京国立博物館資料館では、レファレンス機能とサービスの充実や導線の改善を行った結果、利用者数は中期計画期間中に継続して増加した。(東博) 展示及び各種事業に関する、積極的な広報	〈評定と根拠〉 評定:B 文化財情報の蓄積と発信の充実と努めるとともに、展示及び各種事業に関し、積極的な広報に努めた。 文化財情報の蓄積については、収蔵品写真等の既存フィルム等のデジタル化は、4館とも順調に実施されており、可能なものから随時公開しており、公開データ件数を増加させている。 なお、東京国立博物館と九州国立博物館では、既存フィルム等のデジタル化は大半が既に完了しているため、件数は減少傾向である。 このため、東京国立博物館と25年度以降の九州国立博物館においては、デジタル化件数目標値設定にあたっては、各年度新規撮影予定のうち、フィルム撮影分については、そのフィルムを当該年度内にデジタル化する予定として、目標値設定をしていた。しかしながら、デジタル撮影への移行が各年度の計画策定時の想定以上に進んだため、撮影後にデジタル化する必要のあるフィルムの数がそもそも少ないという状況が多々あった。このため、目標値を下回っている年度があるが、デジタル化可能な分については全て実施しており、当事業の目的は達成されている。加えて、撮影そのもののデジタル化が当	〈評定〉 B 〈見込評価〉 〈評定に至った理由〉 平成23年度から26年度までの間、4館とも収蔵品写真等のデジタル化、収蔵品に関するデータの整備、図書資料等の収集・公開及びインターネットによる情報発信等を計画的に実施した。 見込評価の時点において収蔵品写真等のデジタル化については、東博は保有フィルム分(約32万枚)を既に完了しており、東博を除く3館についても4年間の計画値を大きく超える実績値をあげており、全体として順調である。 また、収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データの整備が計画値を大きく超えて実施されており、これらの成果は各館のウェブサイトでの画像検索サービス等に活用されている。 図書の収集活動は継続して行われており、新規入庫に関する情報も随時更新してウェブサイト上で公表されている。 ウェブサイト等の活用については、東博がスマートフォン向けモバイルサイトを新たに公開したほか、各館ともコンテンツの充実と努めている。平成22年度末から26年度末の4年間のウェブサイトアクセス件数を比較する	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉				

28

<p>化件数は、その都度目標を設定する。</p> <p>②美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。</p> <p>③展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。</p> <p>④広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。</p> <p>⑤ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。</p>		<p>・概要や年報(機構)、年間スケジュールのリーフレット、ポスター・チラシの作成・配布(4館)を計画的に行い、情報提供を行った。</p> <p>・各種広報印刷物の発行、ウェブサイト・モバイルサイトによる情報提供、メールマガジンの配信、SNSの活用等を行うとともに、マスメディアや公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。</p> <p>・ウェブサイトのリニューアルや内容の充実を行い、アクセス件数(アウトプット情報を参照)の向上を図った。また、スマートフォン対応のモバイルサイトを開発し、26年12月より公開した。(東博)</p>	<p>初の想定以上に進んだことも、むしろプラス要因として評価する。</p> <p>さらに、東京国立博物館では、25年度に館内予算からの捻出によって、当初予定していなかった館史資料を中心とする550,000コマ(1,039リール)のマイクロフィルムをデジタル化し、マイクロフィルムのデジタルをほぼ完了するなど、当事業の目的は達成されている。</p> <p>発信の充実に関しては、e国宝をはじめウェブサイトの充実にも努め、4館とも各種の取組みを行っており、いずれの館もアクセス件数を伸ばしている。</p> <p>資料の収集・レファレンス機能の強化については、各館とも積極的な取組を行っており、撮影件数実績は4館とも目標値を上回っており、順調に推移している。</p> <p>広報については、各館とも多様なメディアを通して積極的に行っている。</p> <p><課題と対応> 収蔵品等に関するデジタル化件数について、中期計画にて「目標値を設定する」としていたが、東京国立博物館・九州国立博物館で中期目標期間中に既存フィルムのデジタル化が完了し、毎年度の目標値設定が困難な状況となった。次期中期計画策定時の課題として対応したい。</p>	<p>と、東博が約72万件(15%)の減、京博が約89万件(43%)の増、奈良博が約43万件(56%)の増、九博が約44万件(32%)の増、4館全体で約103万件(11%)の増となっている。</p> <p>以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、収蔵品写真等のデジタル化や収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データに関する定量的指標が、見込評価時点でA評定の基準120%以上を大きく超えているが、本評価項目はその他の評価指標や視点を含め全体で評定を行うこととなっており、法人の自己評価ではBとされている。定量的指標は、文化財情報の発信と広報に関する活動の一部を構成する指標として重要であるが、本指標がA評定の基準を達成しているという理由だけで全体をA評定とする根拠にはならず、B評定が相当と判断した。</p> <p><今後の課題> なし。</p> <p><その他事項> なし。</p> <p>○有識者コメント ・評定に異論はないが、デジタル資料の活用、ウェブサイトのさらなる活用が望まれる。 ・ウェブサイトのアクセス数の増加割合が意外と低いのではないか。そのような認識による課題設定が必要ではないか。 ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・ウェブサイトやデータベースの充実</p>
--	--	---	---	--

				<p>ふりには目を醒めるものがある。アクセス数も総体的に飛躍しており、注目に値する</p>
--	--	--	--	---

<p>4. その他参考情報 特になし</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-3-(1)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 (1) 収蔵品等の調査研究成果の公表				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第6号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ													
①主要なアウトプット(アウトカム)情報								②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
								予算額(千円)	597,470	577,268	1,283,989	686,536	965,171
								決算額(千円)	654,394	716,198	953,078	1,174,915	
								参考決算額(千円)	23,155	28,023	26,246	21,319	
								経常費用(千円)	—	—	—	—	—
								経常利益(千円)	—	—	—	—	—
								行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
								従事人員数(人)	100	99	99	94	94
<p>※予算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の予算額を計上している。</p> <p>※決算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の決算額を計上している。</p> <p>※参考決算額は、上記決算額のうち、紀要等調査研究に係る印刷物作成の決算額を計上している。</p> <p>※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。</p>													

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。 (1) 収蔵品等に関する調査・研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く博物館関係者の知見の向上に資すること。	3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。 (1) 収蔵品等に関する調査・研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧会に關する刊行物などで発表するとともに、こうした刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を行う。	<p><主な定量的指標> 特になし</p> <p><その他の指標> 特になし</p> <p><評価の視点> ○各種刊行物等で調査・研究の成果を広く公表した。また、各種刊行物の電子書籍化、インターネットでの公開を行ったか。</p>	<p><実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 P12</p> <p><主要な業務実績> 博物館における調査研究成果の発信として、図版目録や研究紀要、展覧会図録等の各種刊行物を継続的に発行した。 中期期間中の主な刊行物は以下のとおり。 ・研究誌(東博) ・研究紀要(4館) ・特別展等図録(4館) ・調査概報(東博) ・図版目録(東博) ・文化財修理報告書(東博・京博)</p> <p>ウェブサイト公開 ・特集印刷物(リーフレット)PDFファイル版のウェブサイト公開(東博) ・研究紀要のPDFファイル版のウェブサイト公開(京博・奈良博) ・調査研究や修理に関するパネル展示を行った。(奈良博、九博、26年度)</p>	<p><評定と根拠> 評定：B 調査研究成果を継続的に広く公開するため、研究紀要、展覧会図録、文化財修理報告書やその他のリーフレット等を多数刊行しており順調である。27年度も適宜刊行を行っていく予定である。</p> <p>印刷物PDFファイル版のウェブサイト公開や、パネル展示の実施など、多様な媒体での成果公表を行っている。</p> <p><課題と対応> —</p>	<p>評定 B</p> <p><評定に至った理由> 平成23年度から26年度までの間、4館とも各年度の計画に沿って調査研究の成果を刊行した。 定期刊行物については、東博が『MUSEUM(隔月刊)』のほか『紀要』、『文化財修理報告』及び『法隆寺献宝物特別調査概報』を各年1回、京博が『研究紀要 学叢』、『文化財保存修理所 修理報告書』を各年1回、奈良博が『研究紀要 鹿園雑集』を年1回、九博が『紀要 東風西声』を年1回それぞれ刊行している。このほか平成23年度から26年度の間に図版目録等不定期の刊行物を、東博が5件、京博が2件、九博が22件、合計で29件刊行した。 展覧会図録については、各館の特別展、特集陳列等においてそれぞれ刊行している。4年間の刊行状況は、東博が特別展図録27件、特集陳列図録7件、その他の図録9件、計43件、京博が特別展図録11件、特別展観図録2件、その他の図録1件、計14件、奈良博が特別展図録15件、特別陳列図録7件、その他の図録6件、九博が特別展図録16件、海外展図録2件、トピック展示図録21件、計39件であった。4館合計して124件の展覧会図録を刊行している。 刊行物の一部をウェブサイトで公開しているが、奈良博は研究紀要『鹿園雑集』の全文、東博は特集陳列のリーフレット5点、京博は研究紀要『学叢』の創刊号(昭和54年)から第23号(平成13年)まで(全文又は一部)が公開さ</p>	<p><評定に至った理由></p> <p><今後の課題></p> <p><その他事項></p>	

					れている。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。 <今後の課題> なし。 <その他事項> なし。 ○有識者コメント ・評定に異論はない。質の高い調査研究が行われていることは大いに評価される。 ・研究成果のウェブ公開や学術情報リポジトリの構築を、さらに推進すべきではないか。ウェブ公開できない場合は、合理的な理由や公開に関するポリシーも開示すべきではないか。 ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・刊行物はおおむね遅滞なく発行されており、内容の充実も著しい。
--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-3-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与(2)専門家等との学術・人物交流			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
海外研究者招へい数(人)	(東博)	計画値	—	—	6	6	6	6	6	予算額(千円)	597,470	577,268	1,283,989	686,536	965,171
		実績値	—	—	16	11	21	47	—	決算額(千円)	654,394	716,198	953,078	1,174,915	—
		達成度	—	—	266.7%	183.3%	350.0%	783.3%	—	参考決算額(千円)	5,050	6,452	1,370	991	—
	(京博)	計画値	—	—	5	5	3	2	2	経常費用(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	—	21	3	0	2	—	経常利益(千円)	—	—	—	—	—
		達成度	—	—	420.0%	60.0%	0.0%	100.0%	—	行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(奈良博)	計画値	—	—	6	6	6	6	6	従事人員数(人)	56	55	53	51	51
		実績値	—	—	20	7	9	9	—	※予算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、4国立博物館の調査研究事業費の決算額を計上している。 ※参考決算額は、上記決算額のうち、4国立博物館の国際シンポジウム開催に要する旅費等を計上している。 ※従業人員数は東京国立博物館の学芸企画部企画課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤研究職員の人数を計上している。					
		達成度	—	—	333.3%	116.7%	150.0%	150.0%	—						
	(九博)	計画値	—	—	3	3	4	4	4						
		実績値	—	—	21	3	16	35	—						
		達成度	—	—	700.0%	100.0%	400.0%	875.0%	—						
(合計)	実績値	—	—	78	24	46	93	—							
研究員派遣数(人)	(東博)	計画値	—	—	6	6	6	6	6						
		実績値	—	—	48	34	41	18	—						
		達成度	—	—	800.0%	566.7%	683.3%	300.0%	—						
	(京博)	計画値	—	—	6	6	15	15	15						
		実績値	—	—	25	15	19	14	—						
		達成度	—	—	416.7%	250.0%	126.7%	93.3%	—						
	(奈良博)	計画値	—	—	6	6	6	6	6						
		実績値	—	—	19	17	8	13	—						
		達成度	—	—	316.7%	283.3%	133.3%	216.7%	—						
	(九博)	計画値	—	—	4	4	4	4	4						
		実績値	—	—	56	60	87	82	—						
		達成度	—	—	1400.0%	1500.0%	2175.0%	2050.0%	—						
	(合計)	実績値	—	—	148	126	155	127	—						

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
					評定	B	評定
3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。 (2)国内外の博物館関係者及び文化財とその活用に関する専門家と積極的に学術・人物交流等を行い、国際的な博物館の拠点となることを目指すこと。	3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。 (2)文化財とその活用に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。	〈主な定量的指標〉 ・海外研究者招へい数 ・研究員派遣数 〈その他の指標〉 特になし 〈評価の視点〉 ○国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施したか。また、職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関や国際会議等に派遣したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P12 〈主要な業務実績〉 海外研究者の招へい、研究員の海外派遣を通して、海外の博物館・研究者との交流を行った。 ・海外研究者招へい数 93人(26年度) ・研究員派遣数 127人(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・国際シンポジウム、国際研究セミナー、国際研究会、招聘者による講演会を実施した。(4館) ・26年度に第8回日中韓国立博物館長会議を開催した。(東博) ・23年度、25年度アジア国立博物館協合理事会・定期大会(東博) ・学術交流協定に基づく研究員の交流を継続して行った。(東博、奈良博、九博)	〈評定と根拠〉 評定:B 国内外の博物館関係者及び文化財とその活用に関する専門家と積極的に学術国流を図った結果、海外研究者招へい数と研究員派遣数は、東京国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館で常に目標値を上回っている。なお、京都国立博物館では、平成知新館開館準備に重点を置いたため24年度と25年度の招へい数と26年度の派遣数が目標値に届かなかったが、全体として順調である。27年度は目標どおり達成できる見込みである。 さらに、国際的な博物館の拠点として、国際シンポジウムや国際研究セミナー等を各館で実施し、また、23年度、25年度アジア国立博物館協合理事会・定期大会や第8回日中韓国立博物館長会議の開催への参加により、情報交換とネットワークの強化を実現している。 〈課題と対応〉 -	評定 B 〈評定に至った理由〉 平成23年度から26年度までの間、4館とも海外の研究者の招へい、海外の博物館等への研究員派遣及び国際シンポジウムの開催等を通じて、専門家等の学術・人物交流を行った。定量的指標として、海外の研究者の招へい者数及び研究員の海外派遣者数の計画値を掲げている。 4年間の海外の研究者の招へい数の計画値は、4館合計で77人であるが、これに対し241人の実績(達成率313%)を挙げた。それぞれの実績値及び達成率は、東博が95人(396%)、京博が26人(173%)、奈良博が45人(188%)、九博が75人(536%)となっている。計画を大きく上回る実績を挙げた要因として、学術交流協定や特別展に基づく招へいが活発に行われたほか、国際シンポジウム等の開催、外部資金の獲得等が挙げられている。 4年間の研究者の海外派遣者数の計画値は、4館合計で106人であるが、これに対し557人の実績(達成率526%)を挙げた。それぞれの実績値及び達成率は、東博が142人(592%)、京博が73人(174%)、奈良博が57人(238%)、九博が285人(1781%)となっている。計画を大きく上回る実績を挙げた要因として、招へい事業と同様、学術交流協定や特別展に基づく出張が活発に行われたことが挙げられる。 4年間の国際シンポジウム等の開催状況は、国際シンポジウムを11回、	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉	

					<p>国際会議を1回、その他の催しを5回、計17回行われている。各館の開催状況は、東博が4回、京博が3回、奈良博が2回、九博が8回となっており、特に九博が積極的に取り組んでいる。</p> <p>自己評価による評定はBとされているが、海外研究者の招へい数が313%の達成率を、また研究者の海外派遣者数が526%の達成率を示しており、定量的指標のA評定の基準120%以上を大きく超えているため、法人の自己評価の妥当性を検討した。</p> <p>計画値については、当初予算に基づく数値であることが自己点検評価報告書に記載されており、一応合理性が認められるが、実績値については、展覧会事業など他の事業(予算)や外部資金等による成果を加えた結果であり、計画値と実績値の単純な比較による評価は、予算面から見て合理性に欠ける面がある。この事情は、研究者の海外派遣においても同様である。したがって本項目については、定量的指標による単純な評価ではなく、法人の自己評価の結果を踏まえ、B評定が相当と判断した。</p> <p>〈今後の課題〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 定量的指標の計画値に対し実績値が大きく上回っている状況が4年間継続している。これは、計画値の積算根拠である予算に、実績を構成する事業の予算が加えられていないことが影響している。次期中期目標の期間においては、計画に対する実績の達成率を合理的に示すことができるよう、</p>
--	--	--	--	--	--

					計画値の積算方法を見直すことが適当である。 ○有識者コメント ・評定に異論はない。計画値の算定に今後改善の余地がある。 ・達成率を鑑みて評価の妥当性を検証しており、丁寧な評価になっている。その検証結果も妥当と思われる。 ・予算以外に競争的外部資金導入などの努力の成果で、毎年大幅な増加を示している。
--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-3-(3)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 (3)文化財保存修理に関する人材育成				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第6号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ													
①主要なアウトプット(アウトカム)情報							②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)						
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
									予算額(千円)	-	-	-	-
									決算額(千円)	-	-	-	-
									経常費用(千円)	-	-	-	-
									経常利益(千円)	-	-	-	-
									行政サービス実施コスト(千円)	-	-	-	-
									従事人員数(人)	48	47	46	45
									※研修テキストなどはコピー機を利用して作成しており外注額が少額のため、予算額・決算額は個別に計上することができない。				
									※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。				

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価								
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価				主務大臣による評価	
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)	
3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。	3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 特になし 〈評価の視点〉 ○研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施したか。 ○業務の効率化について、教材作成作業等の	<実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 P12 <主要な業務実績> 国内外の文化財の保存・修理に関する人材育成に寄与するため、NPOや文化財保存修理所内の工房との連携の下、保存修理事業者を対象とする研修会を、関係機関と連携協力して毎年度実施した。また、インターンシップの受け入れを行った。 【業務の効率化について】 京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国	<評定と根拠> 評定：B 国内外の文化財の保存・修理に関する人材育成に寄与するため、諸機関や修理工房と連携し、セミナーや研修、情報交換等を効果的に行った。また、インターンシップの受け入れを行った。27年度も同様に実施する予定である。 なお、研修の目的は、文化財保護に必要な人材の育成である。よって、これらの研修の受講を必要とする者の参加を促進し文化財保護に必要な知識・技術等の普及を図るため、受講料無料は妥当と考える。	評定 B <評定に至った理由> 平成23年度から26年度までの間、4館とも文化財の保存修理の現場や経験を有する立場から、専門人材の研修を計画的に実施した。 4館の研修プログラムの実施回数は4年間で79回、参加者数は1,910人となっている。各館の実施回数及び参加者は、東博が8回・169人、京博が3回・139人、奈良博が7回・82人、九博が8回・214人である。研修プログラムの内容は、東博が文化財保存修復専	評定 B <評定に至った理由> <今後の課題>		

<p>(3)国内外の文化財の保存・修理に関する人材育成に寄与すること。</p>	<p>事業を実施する。 (3)保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施する。</p>	<p>効率化、研修施設の有効活用、施設管理業務の民間委託等の取組を行っているか。 ○受益者負担の妥当性・合理性があるか。</p>	<p>立博物館では、関係者を対象とした、文化財保存修理所内の工房視察や、各工房技術者との情報交換等が主であり、主催者側が用意した教材に沿って行われるものではないため、教材作成作業が必要なく一般的な研修とは異なる。また、専用の研修施設もない。 東京国立博物館では、NPO主催の専門家セミナーへの共催という形をとっており、館内の修理施設・展示施設を会場として提供している。教材はNPOが作成している。 【受益者負担の妥当性・合理性について】 京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館における当該研修の受講料は無料である。 東京国立博物館共催の専門家セミナーにおいても、東京国立博物館としては受講料を徴収していない。</p>	<p><課題と対応> —</p>	<p>門家を対象とした実践セミナー、京博が特別展における修理技術者の熟覧、奈良博が修理工房の修理技術者の研修会、九博が保存修理技術者を対象としたセミナー、研修となっている。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。 <今後の課題> なし。 <その他事項> なし。 ○有識者コメント ・課題として「参加者促進を一層進める」の一文があるとよい。 ・国立博物館の研修事業による人材育成は大きな成果を挙げたと評価出来る。 ・現状の修理だけでも対応に限界がある。より一層の修復に関わる技術者の育成及び登用が強く望まれる。</p>	<p><その他事項></p>
---	--	---	--	----------------------------	---	----------------------

<p>4. その他参考情報 特になし</p>

<p>1. 当事務及び事業に関する基本情報</p>					
<p>1-3-(4)</p>	<p>1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 (4)収蔵品の貸与</p>				
<p>当該事業実施に係る根拠</p>	<p>独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第3号</p>	<p>業務に関連する政策・施策</p>	<p>12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実</p>	<p>関連する政策評価・行政事業レビュー</p>	<p>平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385</p>

<p>2. 主要な経年データ</p>															
<p>①主要なアウトプット(アウトカム)情報</p>										<p>②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)</p>					
<p>指標等</p>		<p>達成目標</p>	<p>基準値</p>	<p>23年度</p>	<p>24年度</p>	<p>25年度</p>	<p>26年度</p>	<p>27年度</p>							
<p>文化財の貸与件数(件)</p>		<p>(東博)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>905</p>	<p>1,295</p>	<p>1,137</p>	<p>1,130</p>						
		<p>(京博)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>429</p>	<p>304</p>	<p>626</p>	<p>582</p>						
		<p>(奈良博)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>118</p>	<p>102</p>	<p>135</p>	<p>149</p>						
		<p>(九博)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>119</p>	<p>113</p>	<p>143</p>	<p>101</p>						
		<p>(合計)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>1,571</p>	<p>1,814</p>	<p>2,041</p>	<p>1,962</p>						
<p>貸与先件数(件)</p>		<p>(東博)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>129</p>	<p>159</p>	<p>123</p>	<p>115</p>						
		<p>(京博)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>74</p>	<p>71</p>	<p>82</p>	<p>82</p>						
		<p>(奈良博)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>37</p>	<p>37</p>	<p>35</p>	<p>47</p>						
		<p>(九博)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>26</p>	<p>44</p>	<p>32</p>	<p>30</p>						
		<p>(合計)</p>	<p>実績値</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>266</p>	<p>311</p>	<p>272</p>	<p>274</p>						
										<p>予算額(千円)</p>	<p>23年度</p>	<p>24年度</p>	<p>25年度</p>	<p>26年度</p>	<p>27年度</p>
										<p>15,608</p>	<p>14,813</p>	<p>14,232</p>	<p>14,070</p>	<p>13,881</p>	
										<p>10,633</p>	<p>21,904</p>	<p>21,261</p>	<p>16,234</p>		
										<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	
										<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	
										<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	
										<p>100</p>	<p>99</p>	<p>99</p>	<p>94</p>	<p>94</p>	
										<p>※予算額は個別に計上することができないため、考古相互貸借事業の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、考古相互貸借事業の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。</p>					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価								
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価			
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)	
					評定	B	評定	
3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。 (4)国内外の博物館等の展覧事業の活性化を支援するため、収蔵品の貸与を実施すること。	3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。 (4)収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等の要請に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を実施する。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・文化財の貸与件数 ・貸与先件数 〈評価の視点〉 ○収蔵品の保存状況に配慮した貸与を実施したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P12～13 〈主要な業務実績〉 ・文化財の貸与件数 1,962件(26年度) ・貸与先件数 274件(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 なお、展示期間や会場の温湿度の設定、警備体制など貸与先の環境と作品の状態を確認した上で貸出を行っている。	〈評定と根拠〉 評定：B 国内外の博物館等の展覧事業の活性化を支援するため、貸与先からの要請に4館が積極的に対応した結果、文化財の貸与件数、貸与先件数ともに、高い水準の件数を保っている。海外への貸与も行っている。 また、考古資料相互貸借事業を毎年度実施した。(東博・奈良博) これらの貸与の際は、貸与先の環境と作品の状態を確認し、収蔵品の保存状況に配慮している。 27年度も同様に貸与を行っていく予定である。 〈課題と対応〉 -	評定	B	〈評定に至った理由〉 平成23年度から26年度までの間、4館とも他の博物館の展覧会への出品等を目的とする収蔵品の貸与を行った。 4年間の所蔵品の貸与件数は5,601件、貸与先件数は829件となっている。1年あたりに平均すると216件の貸与先に1,400件の所蔵品を貸与していることとなる。このほか依頼に応じて、寄託品の貸与に関する便宜供与を4年間で1,620件行った。 館ごとの所蔵品の貸与件数の内訳は、東博が4,181件、京博が959件、奈良博が214件、九博が247件である。また貸与先件数の内訳は、東博が499件、京博が184件、奈良博が96件、九博が86件である。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。 〈今後の課題〉 なし。 〈その他事項〉 なし。 ○有識者コメント ・評価に異論はないが、収蔵品のうち考古資料など出土した地域における展示が望まれるものについて、さらに活発に行われることを期待	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉

						したい。 ・海外への貸与も含め、おおむね妥当な実績と評価出来る。貸与による損耗の問題についてはとくに言及がないが、当然念頭に置くべき事柄である。
--	--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-3-(5)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 3. わが国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 (5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第3号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
公私立博物館等に対する援助・助言件数(件)	(東博)	実績値	—	—	126	85	114	119		予算額(千円)	—	—	—	—	—
	(京博)	実績値	—	—	91	65	43	29		決算額(千円)	—	—	—	—	—
	(奈良博)	実績値	—	—	98	67	71	58		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(九博)	実績値	—	—	97	109	64	57		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)	実績値	—	—	412	326	292	263		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
										従事人員数(人)	100	99	99	94	94
										※公立博物館・美術館に対する援助・助言に係る外注額が少額なため、予算額・決算額は個別に計上することができない。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価								
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価			
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)	
3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与する。 (5) 全国の博物館等の運営に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めること。	3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。 (5) 公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等を行う。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・公私立博物館等に対する援助・助言件数 〈評価の視点〉 ○公私立博物館等に対する援助・助言を行ったか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 PI3 〈主要な業務実績〉 公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、援助・助言を行った。 ・公私立博物館等に対する援助・助言件数263件(26年度) 内訳はアウトプット指標に掲載 当該実績件数は、文化財の調査や保存修理に関する援助・助言、講演会やセミナー等における講演等での協力、さらに、文化庁や地方公共団体等の文化財関係事業・会議への協力を含めたものである。(4館) なお、援助・助言の一環として東日本大震災の文化財レスキュー事業を行ない、放射能汚染立ち入り警戒区域でも文化財救出作業を含む活動を行った。	〈評定と根拠〉 評定：B 博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めつつ、公私立博物館等からの4館への要請に対して例年多数の助言・協力をを行っている。 なお、東日本大震災の発生直後の23年度は、文化財レスキュー事業を多数行った結果、特に援助・助言の件数が多くなっている。 〈課題と対応〉 —	評定	B	〈評定に至った理由〉 4館は、平成23年度から26年度までの間、全国の博物館等からの依頼に応じて、運営等に対する援助・助言を行った。4年間の援助・助言件数は、4館合わせて1,293件であり、1年あたりの平均にすると323件となる。館ごとの内訳は、東博が444件、京博が228件、奈良博が294件、九博が327件となる。 依頼に基づく業務であり目標値を設定することがないが、各館とも限られた人員の中で自館の業務を行いながら、専門的知見を広く活用する援助・助言に努めていると認められる。 以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。 〈今後の課題〉 なし。 〈その他事項〉 なし。 ○有識者コメント ・国立博物館として各館共に十分な数値を挙げたと言える。	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-4-(1)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (1)文化財に関する基礎的・体系的な調査研究				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等			達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研)	実績値	—	—	15	13	11	18		予算額(千円)	684,064	576,783	656,845	607,986	690,752
	(奈文研)	実績値	—	—	51	73	67	64		決算額(千円)	781,760	764,853	822,463	596,804	
	(合計)	実績値	—	—	66	86	78	82		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研)	実績値	—	—	21	22	21	24		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(奈文研)	実績値	—	—	32	36	45	22		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)	実績値	—	—	53	58	66	46		従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										<p>※予算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の予算額を計上している。</p> <p>※決算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の決算額を計上している。</p> <p>※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。</p> <p>※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。</p>					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
4 文化財に関する調査及び研究の推進 我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。 (1)文化財の各分野に関する基礎的・体系的な調査・研究や、総合的な視点に基づく文化財の調査・研究手法の開発等を推進することにより、国及び地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に係る業務の基盤形成に寄与すること。	4 文化財に関する調査及び研究の推進 貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。 (1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組む、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。	<p><主な定量的指標> 特になし</p> <p><その他の指標> ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得</p> <p><評価の視点> ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。</p> <p>○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施したか。また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施したか。</p>	<p><実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 PI4～17</p> <p><主要な業務実績> 毎年度ごとに研究テーマを設定し、調査研究を実施した。 23年度21件 24年度23件 25年度27件 26年度26件 (目的) 国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究を推進することにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。 (主な研究テーマ) ・文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究(東文研)(23～26年度) ・我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究(東文研)(23～26年度) ・無形文化財の保存・活用に関する調査研究(東文研)(23～26年度) ・平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等(奈文研)(23～26年度) ・飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等(奈文研)(23～26年度) ・東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究(奈文研)(23～26年度) ・アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力(奈文研)(23～26年度) ・文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究(奈文研)(23～26年度)</p>	<p><評定と根拠> 評定:B 設定した研究テーマは、中期目標に沿ったもので適切である。 また、それぞれの調査研究は、計画に沿って適切に実施された。 文化財の各分野に関する基礎的・体系的な調査・研究や、総合的な視点に基づく文化財の調査・研究手法の開発等を推進することにより、国及び地方公共団体における文化財保護施策の企画立案及び文化財の評価等に係る業務の基盤形成に寄与した。 例えば、「遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集」では、国内外で解析・試験・実測調査・研究に基づき、埋め戻し・保存法や、結露発生を抑制するための手法や、石材基質強化剤及び撥水剤使用の良否について検討している。これらは、継続的な研究の上に行われ、25年度以降もさらに研究を深化させており、適切に実施しているといえる。</p> <p><課題と対応> —</p>	<p>評定 B</p> <p><評定に至った理由> 東京文化財研究所(以下「東文研」という。)及び奈良文化財研究所(以下「奈文研」という。)は、中期計画に沿って文化財に関する基礎的・体系的な調査研究を継続的に進めている。 平成23年度から26年度までの間に、東文研は7件の研究テーマを、奈文研は15件の研究テーマを中期計画に示された課題や文化芸術の振興に関する基本的な方針(第3次基本方針)に応じて設定し、継続して調査研究を行った。東文研の研究内容は、文化財に関する研究情報・資料学、近現代美術に関する交流史、美術の表現・技法・材料に関する多角的な研究、無形文化財・無形民俗文化財の保存活用、無形文化遺産の国際研究交流であり、これらに関する成果については、学術雑誌等への論文掲載(57件)、学会等での発表(88件)において公開している。 奈文研の研究内容は、歴史資料、書跡、建築、庭園、文化的景観、平城京、飛鳥・藤原地域等に関するものであり、これらに関する成果については、学術雑誌等への論文掲載(255件)、学会等での発表(135件)において公開している。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。 また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明</p>	<p><評定に至った理由></p> <p><今後の課題></p> <p><その他事項></p>	

			<p>・遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集(奈文研)(23~26年度)</p> <p>・藤原宮跡の発掘調査(東方官衙北地区)(奈文研)(26年度)</p> <p>研究内容の一例を挙げると、「遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集」では、25年度には、土質遺構の露出展示を実施予定の平城宮跡遺構展示館を調査フィールドとして、遺構土壌における熱・水分同時移動解析を行い、遺構土壌の適切な含水状態を維持し塩類析出を抑制するための環境条件、及び保護施設としての覆屋の仕様について検討した。ベトナムのタンロン皇城遺跡では遺構土壌の熱・水分移動特性に関する試験を行い、現地で実測調査を行った外界気象条件に基づき、埋め戻し保存法について検討した。ガランドヤ古墳では石室周辺の熱・水分同時移動解析を行い、石室内石材表面での結露発生を抑制するための手法として、石室内空気への熱源の使用、及び石室外の地盤を断湿材で覆うことの有効性を検討した。また、元町石仏では塩析出を抑制する手法を検討するため、最も重要な物性値である石材の透水性状について試験を行うとともに、磨崖仏表面への石材基質強化剤及び撥水剤使用の良否について検討している。</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数 82 件(26 年度)</p> <p>内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・学会、研究会での発表件数 46 件(26 年度)</p> <p>内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・外部資金の獲得</p> <p>科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調書 No.3-1「自己収入の増加」を参照。</p>		<p>されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。</p> <p><今後の課題> なし。</p> <p><その他事項> なし。</p> <p>○有識者コメント</p> <p>・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。</p> <p>・研究水準は極めて高く、研究内容は独創的である。単に数値のみの定量評価においても順調な伸びを示しているが、それ以上に定性的に評価出来る。</p>
--	--	--	--	--	---

			<p>なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない</p>		
--	--	--	---	--	--

4. その他参考情報					
特になし					

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-4-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (2)文化財に関する調査手法の研究開発			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ																
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)						
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研)	実績値	—	—	2	0	0	1			予算額(千円)	684,064	576,783	656,845	607,986	690,752
	(奈文研)	実績値	—	—	31	24	14	20			決算額(千円)	781,760	764,853	822,463	596,804	
	(合計)	実績値	—	—	33	24	14	21			経常費用(千円)	—	—	—	—	—
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研)	実績値	—	—	1	1	1	0			経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(奈文研)	実績値	—	—	39	49	17	19			行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)	実績値	—	—	40	50	18	19			従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										※予算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。						

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
4 文化財に関する調査及び研究の推進 我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。 (2)文化財の研究に関する調査手法の拡充と新たな技術開発を推進すること。	4 文化財に関する調査及び研究の推進 貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。 (2)文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進 文化財の調査手法に関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすること。	<主な定量的指標> 特になし <その他の指標> ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得 <評価の視点> ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。 ○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施したか。また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施したか。	<実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 P17~18 <主要な業務実績> 毎年度ごとに研究テーマを設定し、調査研究を実施した。 23年度5件 24年度4件 25年度4件 26年度4件 (目的) 文化財の調査手法に関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすること。 (主な研究テーマ) ・文化財デジタル画像形成に関する調査研究(東文研)(23~26年度) ・文化財の測量・探査等に関する研究(奈文研)(23~26年度) ・年輪年代学研究(奈文研)(23~26年度) ・動植物遺存体による環境考古学的研究(奈文研)(23~26年度) 研究内容の一例を挙げると、「文化財デジタル画像形成に関する調査研究」においては、脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財に対して最先端の光学調査を行うことによって得られた高精細画像や特殊撮影画像を分析研究し、さらにその公開による広範な利用を目指して、24年度は宮内庁三の丸尚蔵館との共同調査研究として春日権現験絵巻、奈良国立博物館との共同調査研究として国宝富根本曼荼羅(富麻寺所蔵)他の調査・撮影を実施した。この他、経年変化で判読不能となったジアソ式湿式青焼コピーの撮影による復元研究を行った。こ	<評定と根拠> 評定:B 設定した研究テーマは、中期目標に沿ったもので適切である。 また、それぞれの調査研究は、計画に沿って適切に実施された。 文化財の研究に関する調査手法の拡充と新たな技術開発を推進した。 例えば、「文化財デジタル画像形成に関する調査研究」においては、24年度に国宝富根本曼荼羅(富麻寺所蔵)等へ最先端の光学調査を行うことによって得られた高精細画像や特殊撮影画像を分析研究した。さらにその公開による広範な利用を目指して、継続して実績を積み重ねている。また、ジアソ式湿式青焼コピーの撮影による復元研究のように新たな技術開発に関しても成果を上げている。 <課題と対応> —	(見込評価) 評定 B <評定に至った理由> 東文研及び奈文研は、中期計画に沿って文化財に関する調査手法の研究開発を継続的に行っている。 平成23年度から26年度までの間に、文化財の研究に関する調査手法の拡充と新たな技術開発を推進した。 東文研は1件の研究テーマを、奈文研は3件の研究テーマを中期計画に示された課題や文化芸術の振興に関する基本的な方針(第3次基本方針)に応じて設定し、継続して調査研究を行った。 東文研の研究内容は、絵画等のデジタル画像形成に関する研究開発であり、これらに関する成果については、学術雑誌等への論文掲載(3件)、学会等での発表(3件)において公開している。 奈文研の研究内容は、文化財の測量・探査等、年輪年代学、動植物遺存体による環境考古学に関するものであり、これらに関する成果については、学術雑誌等への論文掲載(89件)、学会等での発表(124件)において公開している。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。 また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。 <今後の課題> なし。	(期間実績評価) 評定 <評定に至った理由> <今後の課題> <その他事項>	

		れらの研究は翌年度以降も継続され、大きな成果を上げている。 ・学術雑誌等への論文掲載数 21 件(26 年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・学会、研究会での発表件数 19 件(26 年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・外部資金の獲得 科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調書 No.3-1「自己収入の増加」を参照。 なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。	<その他事項> なし。 ○有識者コメント ・評定に異論はない。奈文研の測量・計測技術、年輪年代学研究、環境考古学研究は、わが国における先端研究を牽引するものであり、大きな成果が上げられている。 ・研究の継続性の重要性を強調すべきである。 ・自己評価に記載されている成果の事例も含め、評価できる。 ・先進的な技術を取り入れ、常に高度な調査手法の開発に努めていると評価出来る。 ・研究環境の整備が求められる。
--	--	---	---

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-4-(3)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (3)文化財の保存修復に関する科学的・先端的な調査研究			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研)	実績値	-	18	14	14	18			予算額(千円)	684,064	576,783	656,845	607,986	690,752
	(奈文研)	実績値	-	5	2	3	3			決算額(千円)	781,760	764,853	822,463	596,804	
	(合計)	実績値	-	23	16	17	21			経常費用(千円)	-	-	-	-	-
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研)	実績値	-	18	17	23	20			経常利益(千円)	-	-	-	-	-
	(奈文研)	実績値	-	12	2	3	0			行政サービス実施コスト(千円)	-	-	-	-	-
	(合計)	実績値	-	30	19	26	20			従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										※予算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、3研究所の決算報告書・調査研究事業費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
					評定	B	評定
4 文化財に関する調査及び研究の推進 我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。 (3)最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査・研究や、伝統的な修復技術・製作技法、利用技法に関する調査・研究を通じて、文化財の保存・修復に係る技術・技法や材料の開発・評価等を推進し、文化財の保存や修復の質的向上に寄与すること。	4 文化財に関する調査及び研究の推進 貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。 (3)科学技術の活用による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進 最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術・製作技法、利用技法に関する以下の調査・研究に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得 〈評価の視点〉 ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。 ○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施したか。また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施したか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 PI8～20 〈主要な業務実績〉 毎年度ごとに研究テーマを設定し、調査研究を実施した。 23年度12件 24年度9件 25年度11件 26年度10件 (目的) 最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術・製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。 (主な研究テーマ) ・文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究(東文研)(23～26年度) ・周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究(東文研)(23～26年度) ・文化財の災害対策及び被災文化財の救援と保存修復手法に関する研究(東文研)(23年度) ・伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究(東文研)(23～24年度) ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究(東文研)(23～26年度) ・在外日本古美術品保存修復協力事業(23年度、24～26年度は「5.文化財保護に関する国際協力の推進」で実施) ・ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等(奈文研)(24～26年度) ・文化財の防災計画に関する研究(東文研)(24～26年度)	〈評定と根拠〉 評定：B 設定した研究テーマは、中期目標に沿ったもので適切である。 また、それぞれの調査研究は、計画に沿って適切に実施された。 文化財の保存や修復の質的向上に寄与すべく、最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査・研究や、伝統的な修復技術・製作技法、利用技法に関する調査・研究を行い、文化財の保存・修復に係る技術・技法や材料の開発・評価等を推進した。例えば、25年度の「文化財の放射線対策に関する研究」においては、文化財を放射線から防御するための対策に関して基本的な考え方をまとめ、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合における、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施した。	評定 B 〈評定に至った理由〉 東文研及び奈文研は、中期計画に沿って文化財の保存修復に関する科学的・先端的な調査研究を継続的に行っている。 平成23年度から26年度までの間に、東文研は8件の研究テーマを、奈文研は1件の研究テーマを中期計画に示された課題や文化芸術の振興に関する基本的な方針(第3次基本方針)に応じた設定し、継続して調査研究を行った。 東文研の研究内容は、カビ被害対策、博物館等の環境調査、文化財の劣化・防災対策、文化財の修復技術・材料等に関するものであり、これらに関する成果については、学術雑誌等への論文掲載(64件)、学会等での発表(78件)において公開している。 奈文研の研究内容は、ミリ波(30～300GHz)の電波を用いたイメージング技術に関するものであり、これらに関する成果については、学術雑誌等への論文掲載(13件)、学会等での発表(17件)において公開している。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。 また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉	

53

			<ul style="list-style-type: none"> 文化財の放射線対策に関する研究(東文研)(25年度) 文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究(東文研)(25～26年度) <p>一例を挙げると、「文化財の放射線対策に関する研究」においては、平成25年度は、(1)放射線量の測定方法、環境評価等に関する研究では、ワーキンググループ会議を3回開催し、放射線被害に関する危機管理マニュアル案を作成した。(2)汚染状態の現状把握と除染方法等に関する研究では、福島県で現地調査を開催するとともに、ワーキンググループ会議を開催して、文化財の除染に関する基本的な考え方をまとめた。これらの結果に関して、プロジェクトチーム会議及び研究会で議論を行い、文化財を放射線から防御するための対策に関して基本的な考え方をまとめた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学術雑誌等への論文掲載数21件(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 学会、研究会での発表件数20件(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 外部資金の獲得 科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調書No.3-1「自己収入の増加」を参照。 なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。 	<p>〈今後の課題〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 なし。</p> <p>○有識者コメント</p> <ul style="list-style-type: none"> 中核拠点としての使命を果たしている。 自己評価に記載されている成果の事例も含め、評価できる。 震災被害やその他の災害への対応をはじめ、わが国のみならず広く国際社会でも貢献出来る研究実績を供えている。 他の項目でも触れたように、保存修復に関わる領域には絶対的な人的不足の問題が慢性化しつつあり、おおきな危惧を抱かざるを得ない。
--	--	--	---	---

4. その他参考情報 特になし

54

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-4-(4)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (4)国・地方公共団体の要請に基づく調査研究			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等			達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研)	実績値	—	—	0	0	0	0	0	予算額(千円)	26,000	26,000	26,000	26,000	26,000
	(奈文研)	実績値	—	—	7	4	13	3	3	決算額(千円)	512,338	619,805	626,105	568,065	
	(合計)	実績値	—	—	7	4	13	3	3	経常費用(千円)	—	—	—	—	—
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研)	実績値	—	—	0	0	0	0	0	経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(奈文研)	実績値	—	—	2	2	3	4	4	行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)	実績値	—	—	2	2	3	4	4	従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										<p>※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・受託事業費の予算額を計上している。</p> <p>※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・文化芸術振興費(1-7に計上している文化財防災ネットワーク推進事業を除く)、政府開発援助ユネスコ活動費、受託事業費の決算額の合計額を計上している。</p> <p>※予算額と決算額の差額は、文化芸術振興費及び政府開発援助ユネスコ活動費は当初予定されていない事業であること、受託事業費では当初の受入見込みになかった受託振興調査、受託調査研究の契約が多数あったことによる。</p> <p>※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。</p>					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
4 文化財に関する調査及び研究の推進 我が国唯一の文化財に関する総合的な研究機関として、文化財に関する以下の調査・研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。 (4)国や地方公共団体の要請に応じて、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性の高い文化財の保存・修復に係る実践的な調査・研究を実施すること	4 文化財に関する調査及び研究の推進 貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査・研究を行う。 (4)高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。	<p><主な定量的指標> 特になし</p> <p><その他の指標> ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・外部資金の獲得</p> <p><評価の視点> ○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。</p> <p>○それぞれの調査・研究を計画に沿って適切に実施したか。また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置が必要となった場合において、必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施したか。</p>	<p><実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 P20~21</p> <p><主要な業務実績> 毎年度ごとに研究テーマを設定し、調査研究を実施した。 23年度6件 24年度5件 25年度7件 26年度7件 (目的) 高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。 (目的) 高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。 (主な研究テーマ) ・文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力(東文研・奈文研)(23~26年度) ・国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的協力(奈文研)(23~26年度) ・農林水産省が行う大和紀伊平野土改良事業大和野鳥舎飛鳥工区2号幹線の調</p>	<p><評定と根拠> 評定:B 設定した研究テーマは、中期目標に沿ったもので適切である。 高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、文化庁、国土交通省の要請に応じて、保存措置等のために必要な調査・研究を迅速かつ適切に実施した。 特に、「文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力」については、東京文化財研究所と奈良文化財研究所が協力して実施している。東京文化財研究所では、修理の完成に向けた調査と修復材料の検討が着実に進められており、安全性と正確性に考慮しつつ、重要な成果をあげている。修理施設の環境管理の課題に対しても迅速に対応している。また、奈良文化財研究所では、高松塚古墳の発掘調査成果の整理・検討、壁画材料の分析調査が進み、26年度にキトラ古墳仮設保護覆屋の解体作業が完了するなど、順調に調査・研究を実施している。</p>	<p>評定 B</p> <p><評定に至った理由> 東文研及び奈文研は、平成23年度から26年度までの間、文化庁、国土交通省、農林水産省の事業に関係する7件の調査研究を継続的に進めている。文化庁の事業に関係するものとしては、東文研及び奈文研において、高松塚古墳及びキトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力を継続して行っている。国土交通省の事業に関係するものとしては、奈文研において、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の調査及び保存活用並びに体験学習館の建設に関する協力、平城宮跡の復原・整備、平城宮跡展示館(仮称)の建設に関する技術的協力を継続して行っている。農林水産省の事業に関係するものとしては、奈文研において、大和平野鳥舎飛鳥工区2号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力を継続して行っている。このほか、奈文研は地方公共団体の要請を受けて、平成25年度から東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査にたいする支援・協力を行った。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護政策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。 また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明</p>	<p><評定に至った理由> <今後の課題> <その他事項></p>	
			<p><課題と対応></p>				

			査及び保存活用に関する技術的協力(奈文研)(25～25年度) ・国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的協力(奈文研)(26年度) ・学術雑誌等への論文掲載数3件(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・学会、研究会での発表件数4件(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・外部資金の獲得 科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調書 No.3-1「自己収入の増加」を参照。 なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。	—	されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。 <今後の課題> なし。 <その他事項> なし。 ○有識者コメント ・東日本大震災に伴う埋蔵文化財発掘調査に対する、地方公共団体への支援・協力は、大いに評価されるべきものであり、今後必要に応じて行う必要がある。 ・自己評価に記載されている成果の事例も含め、評価できる。 ・キトラ古墳・高松塚古墳についての恒常的な調査研究に加え、震災被害に対する救援・指導要請にも十分に対応している。 ・現状では人的に限界がある。近年の予算動向に鑑みると、人面での補充には時間がかかるであろうが、調査・研究に関連する情報収集については即時体制を充実させ、当該組織が調査研究の拠点となるべく組織の構築を推進していただきたい。
--	--	--	---	---	---

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-4-(5)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 4. 文化財に関する調査及び研究の推進 (5)有形文化財の収集等に関する調査研究			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ														
①主要なアウトプット(アウトカム)情報						②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)								
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度						
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東博)	実績値	—	91	92	134	126		予算額(千円)	597,470	577,268	1,283,989	686,536	956,171
	(京博)	実績値	—	72	60	30	34		決算額(千円)	654,394	716,198	953,078	1,174,915	
	(奈良博)	実績値	—	29	31	22	22		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	(九博)	実績値	—	48	35	21	24		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)	実績値	—	240	218	207	206		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
学会、研究会での発表件数(件)	(東博)	実績値	—	72	65	76	104		従事人員数(人)	100	99	99	94	94
	(京博)	実績値	—	18	32	10	25		※予算額は個別に計上することができないため、4博物館の決算報告書・調査研究事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、4博物館の決算報告書・調査研究事業費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、事業・収入等の状況により予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤研究職員の人数を計上している。					
	(奈良博)	実績値	—	16	32	21	39							
	(九博)	実績値	—	43	76	35	23							
	(合計)	実績値	—	194	205	142	191							

			博) (23~26年度) ・九博に関連する絵本の次シリーズの企画に関する調査研究(九博) (23年度) ・学術雑誌等への論文掲載数 206件 (26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・学会、研究会での発表件数 191件 (26年度) 内訳はアウトプット情報を参照 ・外部資金の獲得 科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調書 No.3-1「自己収入の増加」を参照。 なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。		
--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報	
特になし	

1. 当事務及び事業に関する基本情報					
1-5-(1)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 5. 文化財保護に関する国際協力の推進 (1)文化財保護に関する国際協力				
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報										②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研)	実績値	—	—	0	0	2	3		予算額(千円)	244,894	265,375	223,876	213,739	156,187
	(奈文研)	実績値	—	—	0	2	1	0		決算額(千円)	177,711	163,407	152,350	175,015	
	(合計)	実績値	—	—	0	2	3	3		経常費用(千円)	—	—	—	—	—
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研)	実績値	—	—	2	8	11	14		経常利益(千円)	—	—	—	—	—
	(奈文研)	実績値	—	—	2	2	2	0		行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
	(合計)	実績値	—	—	4	10	13	14		従事人員数(人)	88	86	88	88	88
										※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・国際研究協力事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・国際研究協力事業費の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、国際情勢により事業の実施が困難であるため予算額を組替えたことによる。 ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。					

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
					評定	B	評定
<p>5 文化財保護に関する国際協力の推進</p> <p>文化財の保護に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図り、我が国の国際貢献に寄与すること。</p> <p>(1) 研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークの構築、アジア諸国における文化財の保護協力、技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行い、人類共通の財産である文化財の保護に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与すること。</p>	<p>5 文化財保護に関する国際協力の推進</p> <p>文化財保護に関する国際協力に関して、以下の事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財保護に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。</p> <p>(1) 文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用する。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化を図るとともに、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア地域を中心とする諸外国の文化財の保護事業を推進する。</p> <p>(2) 国際共同研究等を通じて諸外国の保存・修復の考え方や技術に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を形成するとともに、そ</p>	<p>〈主な定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数</p> <p>〈評価の視点〉 ○情報の収集・分析及びその提供を行い、国際協力のネットワークを構築したか。 ○アジア地域を主とする諸外国において、文化財保護事業を進めたか。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P36～37</p> <p>〈主要な業務実績〉 中期計画に従い事業を継続して実施した。主な事業は以下のとおり。 ・文化財保護に関する国際情報の収集・研究・発信(東文研) ・中国の文化遺産の保存修復のための共同研究(東文研) ・東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力(東文研) ・カンボジア・アンコールワット遺跡群の西トップ遺跡の建築学的、考古学的、保存科学的調査(奈文研) ・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業(東文研) ・「紙の保存と修復」などの国際研修の実施。(東文研) ・ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力。(奈文研) ・24～26年度に在外日本古美術品保存修復協力事業を実施(東文研、23年度は「4(3)文化財の保存修復に関する科学的・先端的な調査」で実施。)</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数3件(26年度)内訳はアウトプット情報を参照 ・学会、研究会での発表件数14件(26年度)内訳はアウトプット情報を参照</p>	<p>〈評定と根拠〉 評定：B 我が国の国際貢献に寄与するため、研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークの構築により、情報の収集分析及びその提供を行った。また、カンボジアや西アジア諸国等における文化財の保護への協力、国際研修などによる技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行っている。 国際的な文化財機構のネットワーク構築のため、国際会議への参加や国際シンポジウムの開催等を継続的に行い、専門家間の交流や情報交換を推進した。国際協力事業については、カンボジアなどアジア地域を中心に文化財保存修復に積極的に協力し、国際協力が図られている。</p> <p>〈課題と対応〉 —</p>	<p>〈評定に至った理由〉 東文研及び奈文研は、中期計画に沿って文化財保護に関する国際貢献や協力に積極的に参画している。 平成23年度から26年度までの間に、文化遺産保護に関する国際情報の収集等に参画した。また、カンボジアや西アジア諸国等における文化財の保存・修復に関する技術移転を12件実施した。 東文研が行っている文化財保護に関する国際情報の収集・研究・発信については、国際会議等への出席、各国の文化財法令対訳シリーズの刊行、シンポジウム・研究会の開催等を通じて行っている。国際会議は、ユネスコの世界遺産委員会、無形文化遺産政府間委員会のほか、文化財保護に関する国際機関の総会等に合わせて12回出席した。各国の文化財法令対訳シリーズの刊行は、4年間に8カ国の文化財法令集を刊行した。このほか、国として文化財保護法制が定まっていないアメリカ合衆国における文化遺産保護について、15カ所の博物館や関係機関を訪問し実地調査を行った。諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転については、東文研が合わせて10件の調査研究テーマを、奈文研が合わせて2件の調査研究テーマをそれぞれ設定し、計画的に実施している。 東文研は、東南アジア・西アジアの文化遺産保存修復協力事業、中国・韓国との共同研究のほか、紙の保存と修復に関する国際研修や、外国の美術館等が所蔵している日本の古美術</p>	<p>〈評定に至った理由〉</p> <p>〈今後の課題〉</p> <p>〈その他事項〉</p>	

<p>の成果をもとにアジア地域を中心とする諸外国において文化財保護事業を推進する。</p> <p>(3) 文化財保護の担当者や学芸員並びに保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化財の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。</p>			<p>品の保存修復に協力する事業を継続して実施している。 奈文研は、カンボジア・アンコールワット遺跡群、ベトナム・タンロン皇城遺跡の発掘調査及び保存修復に継続して協力するとともに、ユネスコの関係機関が実施する国際研修への協力を行っている。 これらの研究成果は各事業に直接反映されるとともに、学術雑誌等への論文掲載(8件)、学会等での発表(41件)において公開している。 以上のような調査研究の成果は、外部資金の獲得にも繋がるなど評価でき、文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するものと認められる。 また、上記については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。</p> <p>〈今後の課題〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 なし。</p> <p>○有識者コメント ・国際会議への積極的参画や協力体制など、国際貢献を果たしている。 ・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。 ・アジア地域の文化財保護活動への参画を主体として、学術交流を含む積極的な協力事業を展開した。 ・一定の貢献はされていると思われる。</p>
---	--	--	--

4. その他参考情報

特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-5-(2)	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 5. 文化財保護に関する国際協力の推進 (2) アジア太平洋地域における無形文化遺産保護			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ															
①主要なアウトプット(アウトカム)情報					②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)										
指標等			達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(アジア太平洋無形文化遺産研究センター)	実績値	-	-	0	1	1	1			予算額(千円)	8,600	8,600	8,600	8,600
学会、研究会での発表件数(件)	(アジア太平洋無形文化遺産研究センター)	実績値	-	-	2	6	1	0			決算額(千円)	45,048	62,653	66,475	76,093
ウェブサイトアクセス件数(件)	(アジア太平洋無形文化遺産研究センター)	実績値	-	-	※ 1,838	5,289	5,454	6,200			経常費用(千円)	-	-	-	-
										経常利益(千円)	-	-	-	-	-
										行政サービス実施コスト(千円)	-	-	-	-	-
										従事人員数(人)	1	1	1	1	1
										※予算額は、アジア太平洋無形文化遺産研究センターの当初予算額を計上している。 ※決算額は、アジア太平洋無形文化遺産研究センターの受託事業費等の決算額を計上している。 ※予算額と決算額の差額は、当初の受入見込みになかった受託事業等があったことによる。 ※従事人員数は、アジア太平洋無形文化遺産研究センターの常勤研究職員の人数を計上している。					

※23年12月16日サイト開設

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価								
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価			
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)	
					評定	B	評定	
5 文化財保護に関する国際協力の推進 文化財の保護に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図り、我が国の国際貢献に寄与すること。 (2)平成23年度にアジア太平洋無形文化遺産研究センターを開設し、同地域における無形文化遺産保護に寄与すること。	5 文化財保護に関する国際協力の推進 文化財保護に関する国際協力に関して、以下の事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財保護に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。 (4)23年度にアジア太平洋無形文化遺産研究センターを開設し、ユネスコ無形文化遺産保護条約を中心とした国際的動向の情報収集を図り、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に係る調査・研究の拠点として、同地域の無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究を行うとともに、我が国の知見を通じて、無形文化遺産保護の国際的充実に資する。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・ウェブサイトアクセス件数 〈評価の視点〉 ○アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究を行ったか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P37～38 〈主要な業務実績〉 23年10月にアジア無形文化遺産研究センターを設置し、同地域における無形文化遺産保護のため、以下のとおり事業を実施した。 文化庁受託事業及び文部科学省補助金により、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護の調査研究に関する情報収集と研究促進にむけたデータベース構築及び国際専門家会合、消滅の危機に瀕する無形文化遺産保護の現状・方策に関する現地での実態調査やワークショップを実施した。 特に、25年度には、「無形文化遺産保護条約採択10周年記念シンポジウム」を開催した。 ・学術雑誌等への論文掲載数 1件 (26年度) ・学会、研究会での発表件数 0件 (26年度) ・科学研究費補助金 0件 (26年度) 詳細はアウトプット情報を参照	〈評定と根拠〉 評定:B 計画どおり23年度にアジア太平洋無形文化遺産研究センターを開設した。同地域における無形文化遺産保護のため、事業を計画に従い実施した。調査では、当事国とより緊密な関係を構築した上で具体的事例の保護のための国際協力が着実に進んでいる。国際的研究動向の情報収集、専門家会合、ワークショップにおいては、多地域からの新規参加者・連携機関の増加がみられ、年々国際的な連携体制が強化されている。 形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究を行っている。	評定 B	評定 B	〈評定に至った理由〉 アジア太平洋無形文化遺産研究センター(以後単に「センター」という)は、日本国政府とユネスコが平成22年8月30日に締結した協定に基づき、平成23年4月1日に設立したユネスコの賛助するカテゴリー2センターに区分される組織である。 このような設立の経緯があることから、センターの事業は、文化庁の委託費及び文部科学省の補助金を基盤として実施されており、国の施策と密接な関係を有している。 センターの主な役割は、アジア太平洋地域において危険にさらされている種々の無形文化遺産の保護に関する実践及び方法について調査研究を推進し、及び調整することとされている。文化庁委託事業「無形文化遺産保護パートナーシッププログラム」においては、無形文化遺産保護に関する調査研究、ネットワークの構築、シンポジウムの開催等を行っている。また、事前に現地の専門家にアンケートを行うなど、当事国と関係構築に取り組んだ上で調査を行っている。 文部科学省の政府開発援助ユネスコ活動費補助金による事業においては、海外調査、国際会議等への出席、研修事業等を行っている。 いずれの事業についても、計画どおり実施したことが自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉

67

							<p>〈今後の課題〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 なし。</p> <p>○有識者コメント ・東南アジア諸国を中心に着実な保護活動に従事している。</p>
--	--	--	--	--	--	--	---

4. その他参考情報
特になし

68

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-6	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 6. 情報資料の収集・整備および調査研究成果の発信			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ									
①主要なアウトプット(アウトカム)情報					②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)				
指標等	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		
平城宮跡 資料館 館者数	計画値	85,214	—	85,300	85,300	85,300	85,300	85,300	
	実績値	—	—	132,295	124,515	108,896	109,188		
	達成度	—	—	155.1%	146.0%	127.7%	128.0%		
飛鳥資料 館来館者数	計画値	45,589	—	48,800	48,800	48,800	48,800	48,800	
	実績値	—	—	42,479	38,854	41,736	38,096		
	達成度	—	—	87.0%	79.6%	85.5%	78.1%		
藤原宮跡 資料室来 館者数	計画値	4,509	—	4,400	4,509	4,509	4,509	4,509	
	実績値	—	—	2,971	9,510	7,869	8,461		
	達成度	—	—	67.5%	210.9%	174.5%	187.6%		
(合計)	実績値	—	—	177,745	172,879	158,501	155,745		
ウェブサイト アクセス件 数(件)	(東文研) 実績値	—	—	1,314,541	(*) 1,230,718	1,410,075	1,603,086	—	
	(奈文研) 実績値	—	—	457,154	425,044	447,563	525,886	—	
学術雑誌 等への論 文掲載数 (件)	(東文研) 実績値	—	—	0	0	1	0		
	(奈文研) 実績値	—	—	0	0	9	4		
	(合計) 実績値	—	—	0	0	10	4		
学会、研 究会での 発表件数 (件)	(東文研) 実績値	—	—	0	0	0	0		
	(奈文研) 実績値	—	—	2	1	1	0		
	(合計) 実績値	—	—	2	1	1	0		

※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・情報公開事業費及び展 示出版事業費予算額の合計額を計上している。
 ※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・情報公開事業費及び展 示出版事業費決算額の合計額を計上している。
 ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数に、アジア太平洋無形文化 遺産研究センターの研究職員の人数を加えた人数を計上している。

*1 参考値。サーバの入替の際にアクセスログ保存期間の設定に誤りがあり、24年10月～25年2月のアクセスログが消失したことから、 アクセス件数は不明である。ログが保存されている7ヵ月間のアクセス件数717,919件の月平均を12倍した値を、参考値として記載している。

69

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価										
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価				主務大臣による評価			
			業務実績		自己評価		(見込評価)		(期間実績評価)	
6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信 国際化の推進を図るためインターネット等による情報発信を強化し、調査・研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信(前文略) (1)文化財関係の情報収集を積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を行う。 また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行う。 (2)文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウム等を積極的に開催する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの実現を図るとともに、ウェブサイトアクセス件数のカウント	〈主な定量的指標〉 ・前中期計画期間年度平均来館者数(特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く) 〈その他の指標〉 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 ・ウェブサイトアクセス件数 〈評価の視点〉 ○ネットワークセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備充実を図ったか。また、文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行う。調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図ったか。 ○公開講演会、現地説明会、国際シンポジウム等を積極的に開催したか。また、ウェブサイトの充実を図るとともに、アクセス件数の向上を図ったか。 ○平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示の充実を図	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P38～39 〈主要な業務実績〉 以下のとおり、継続的に情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信に取り組んだ。 ・ネットワーク機器の更新を逐次実施し、機器の更新や無線 LAN のアクセスポイントを追加した。(東文研)(奈文研)また、26年度には仮想サーバを導入した。(東文研) ・データベースについてデータの入力・更新と改善に継続的に取り組んだ。(東文研)(奈文研) ・図書収集・整理・公開・提供を行った。(東文研)(奈文研) ・定期刊行物の刊行を行った。(東文研)(奈文研) ・23年度の「第35回文化財の保存及び修復に関する国際研究会」を初め、国際研究会やオープンレクチャーを実施した。(東文研) ・公開講演会を実施し、発掘調査に伴う現地説明会等を随時実施した。(奈文研) ・平城宮跡資料館における展示公開来館者数はアウトプット情報を参照 特別展「企画展・ギャラリートークを開催した。(奈文研) ・飛鳥資料館における展示公開来館者数はアウトプット情報を参照 特別展「企画展・講演会を開催した。(奈文研) ・藤原宮跡資料室における展示公開来館者数はアウトプット情報を参照 発掘調査の速報展示などを通年で実施した。(奈文研) ・文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の復原・整備への協力で	〈評定と根拠〉 評定：B 国際化の推進を図るためインターネット等による情報発信を強化し、調査・研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図り、社会へ還元した。 ・老朽化したネットワーク機器の更新を逐次実施すると共に、仮想サーバの導入等によりセキュリティの強化及び高速化、費用の削減に努力し、適時性、効率性、継続性が向上した。 ・データベースへの入力と更新を継続し、新規のデータベースの公開をするなど、専門的アーカイブの拡充と文化財に関するデータベースを充実させた。 ・オープンレクチャー、講演会、国際シンポジウム、現地説明会を毎年度行った。定例講演会に加え特別講演会を開くなど、積極的に開催した。 ・26年度にコンテンツの再配置を行った結果、閲覧が少なかったコンテンツの閲覧数を増加させ、ページビュー数を劇的に向上させた。 ・平城宮跡資料館、飛鳥資料館では、特別展のみならず企画展を各年度の目標以上に実施し、展示を充実させた。 また、来館者数については平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室では目標値を大きく上回った。特に、藤原宮跡資料室では24年度より、土日開館を開始し、来館者数を増やすことに成功した。 飛鳥資料館の来館者数については、目標を下回ったが、飛鳥の意義、重要性を来館者に伝えるため、特別展、企画展、講演会、ギャラリートークを開催し、奈良文化財研究	評定 B 〈評定に至った理由〉 東文研及び奈文研は、文化財に関する図書・逐次刊行物の収集・公開、各種情報のデータベースの構築、調査研究成果に関する刊行、講演会、展示等を行っている。 平成23年度から26年度までの間の図書等の収集活動については、東文研が6997冊、奈文研が8,309冊、計15,306冊増加し、蔵書数は平成22年度末に比べ約11%増加し、東文研が約26万冊、奈文研が約34万冊となっている。公開に際しては、図書等の検索サービスの改良等を図り、レファレンスサービスの向上にも努めている。 平成26年度末現在でウェブサイトに関する研究情報・資料に関するデータベースは、東文研が26種類(データ件数約23万)、奈文研が20種類(データ件数約73万)である。4年間のウェブサイトアクセス件数は、東文研が約556万回(年平均約139万回)、奈文研が約185万回(年平均約46万回)となっている。 定期刊行物として、東文研が年報、概要、ニュース、『日本美術年鑑』、『美術研究』、『無形文化遺産部研究報告』、『無形民俗文化財研究協議会報告書』、『保存科学』の9件、奈文研が紀要、概要、ニュース、埋蔵文化財ニュースの4件を継続して刊行している。また、調査研究成果に関する報告書の刊行を、東文研は4年間で159件、奈文研は105件行った。講演会の開催件数は、4年間に東文研が4件(年平均1件)、奈文研が22	〈今後の課題〉 〈その他事項〉				

70

<p>の統一を図り、アクセス件数の向上を図る。</p> <p>(3) 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料館、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。来館者数については、前期中期目標期間の年度平均(特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く。)以上を確保する。</p> <p>(4) 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成するとともに、NP〇法人等が自主的に行う各種ボランティア事業に対して活動機会・場所の提供等の支援を行う。</p>	<p>ったか。また、来館者数については、前期中期計画期間の年度平均(特別展示等による来館者数の著しい変動実績を除く。)以上を確保したか。</p> <p>〇文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力したか。また、ボランティアへの活動支援を行ったか。</p>	<p>は、専門的・技術的な援助・助言を行い、立会調査等も実施した。(奈文研)</p> <p>・平城宮跡解説ボランティア事業では、専門研修及び他機関の文化財に関するボランティアガイドが解説する場へ赴き、臨地研修を実施するなどした。(奈文研)</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数 4 件 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・学会、研究会での発表件数 0 件 内訳はアウトプット情報を参照</p>	<p>所あるいは飛鳥の歴史的な地域の特性を活かした展示を行った。また、23 年度より写真コンテストを開催するなど、参加型の展示を行うといった工夫を試みた。さらに、キトラ古墳壁画の修理と保存管理の取組を紹介する展覧会として、26 年度に東京国立博物館を会場として特別展「キトラ古墳壁画」を開催し、25 日間で119,268 人も来館者を集めた。以上のように、飛鳥資料館では特別展等を目標値以上に開催し、また、奈良文化財研究所の研究成果を広く公開するため東京でも特別展を開催するなど、精力的な活動を行っており、総合的にみて、調査・研究成果の内容を広く一般的に理解を深めてもらうという中期計画の目的を達成している。</p> <p>・26 年度に平城宮跡第一次大極殿院復原のため記録集を刊行するなど、文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力した。</p> <p>・平城宮跡解説ボランティアに対しては、特別展など展示内容の講習会や公開講演会への参加を通して、登録ボランティアの知識を高める等、ボランティアの活動を支援した。</p> <p><課題と対応></p> <p>飛鳥資料館の来館者数が毎年目標値に達しなかったことは課題だが、交通アクセスの不便さをたびたび指摘されているところであり、交通インフラ整備や広い駐車場確保など、自力では容易に解決しがたい問題も多い。展覧会の内容は奈良文化財研究所の展示施設として適切な質を維持しており、今後は参加型の企画も増やしつつ、最新の学術成果をわかりやすく伝えるよう努力していきたい。</p>	<p>回(年平均6件)であり、このほか東文研はシンポジウムを5回、奈文研は発掘調査の現地説明会を26回(年平均7回)それぞれ行った。</p> <p>奈文研は、調査研究の成果を展示する施設として、平城宮跡資料館、飛鳥資料館、藤原宮跡資料館を運営しており、常設展示、企画展示を行っている。4 年間の各施設の来館者数は、平城宮跡資料館が約47万5千人(計画値約34万1千人、達成率139%)、飛鳥資料館が約16万1千人(計画値約19万5千人、達成率83%)、藤原宮跡資料館が約2万9千人(計画値約1万8千人、達成率161%)、合計で約66万5千人(計画値約55万4千人、達成率120%)となった。現時点で、飛鳥資料館は計画値に満たないが、全体としては目標を達成している。</p> <p>このほか調査研究成果の公開の一環として、平城宮跡の来訪者への解説ボランティア事業を運営している。4 年間で、のべ627名(年平均157名)のボランティア登録者により、約40万人の来訪者への解説が行われた。</p> <p>以上については、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められ、B評定が相当と判断した。</p> <p><今後の課題></p> <p>なし。</p> <p><その他事項></p> <p>なし。</p> <p>〇有識者コメント</p> <p>・大臣評価に対する異論はない。奈文研の展示は、大変わかりやすい内容</p>
---	--	---	--	--

				<p>になっており、大いに評価される。</p> <p>・事例や数値を示した、具体的な評価になっている。</p> <p>・毎年多数の学術刊行物が出版された。可能であればWebデータベースを通じてのPDF形式での公開をさらに積極的に進められたい。</p>
--	--	--	--	---

<p>4. その他参考情報</p> <p>特になし</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報				
1-7	1. 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項 7. 地方公共団体への協力等による文化財保護への質的向上			
当該事業実施に係る根拠	独立行政法人国立文化財機構法 第12条 第5号	業務に関連する政策・施策	12 文化による心豊かな社会の実現 12-2 文化財の保存及び活用の充実	関連する政策評価・行政事業レビュー 平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ

①主要なアウトプット(アウトカム)情報								②主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)							
指標等		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		
埋蔵文化財担当者研修	課程数(課程)	計画値	—	—	13	14	9	15	14	予算額(千円)	17,806	13,140	19,665	20,472	12,435
		実績値	—	—	13	24	9	15	—	決算額(千円)	15,684	17,515	13,432	198,831	—
		達成度	—	—	100.0%	171.4%	100.0%	100.0%	—	経常費用(千円)	—	—	—	—	—
	受講者数(人)	計画値	—	—	160	160	117	190	164	経常利益(千円)	—	—	—	—	—
		実績値	—	—	136	156	138	171	—	行政サービス実施コスト(千円)	—	—	—	—	—
		達成度	—	—	85.0%	97.5%	117.9%	90.0%	—	従事人員数(人)	88	86	88	88	88
保存担当学芸員研修	研修期間(週)	計画値	—	—	2	2	2	2	2	※予算額は個別に計上することができないため、決算報告書・研修事業費の予算額を計上している。 ※決算額は個別に計上することができないため、決算報告書・研修事業費の決算額を計上している。(26年度決算額には、文化財防災ネットワーク推進事業184,653千円を含む。) ※従事人員数は2文化財研究所の全常勤研究職員の人数を計上している。					
		実績値	—	—	2	2	2	2							
		達成度	—	—	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%							
	受講生数(人)	計画値	—	—	25	25	25	25	25						
		実績値	—	—	27	30	30	31							
		達成度	—	—	108.0%	120.0%	120.0%	124.0%							
学術雑誌等への論文掲載数(件)	(東文研) 実績値	—	—	0	0	0	0	0							
	(奈文研) 実績値	—	—	6	5	0	0	0							
	(合計) 実績値	—	—	6	5	0	0	0							
学会、研究会での発表件数(件)	(東文研) 実績値	—	—	0	0	0	2	2							
	(奈文研) 実績値	—	—	0	0	0	0	0							
	(合計) 実績値	—	—	0	0	0	2	2							

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価

中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
			業務実績	自己評価	(見込評価)	(期間実績評価)
7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上 我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、地方公共団体や大学、研究機関とのネットワークや連携協力体制を構築し、機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を図り、我が国全体の文化財の収集・展示・調査・研究の質的向上に寄与すること。また、地方公共団体等の指導者層を主たる対象とする高度な研修事業や、若手研究者の育成に寄与するため実践的な連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成すること。	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上 我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。 また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。 (1)地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。 (2)文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等の中核となる文化	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・埋蔵文化財担当者研修 ・保存担当学芸員研修 ・学術雑誌等への論文掲載数 ・学会、研究会での発表件数 〈評価の視点〉 ○文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行ったか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P40～41 〈主要な業務実績〉 協力の助言については、以下のような内容で実施した。 総数の推移 23年度 652件 24年度 699件 25年度 839件 26年度 1,335件 内訳の推移 ・無形文化遺産に関する助言(東文研) 23年度 32件 24年度 25件 25年度 9件 26年度 13件 ・文化財の修復及び整備に関する調査・助言(東文研) 23年度 228件 24年度 40件 25年度 44件 26年度 48件 ・文化財レスキュー事業(被災文化財等救出作業支援)※文化庁受託経費からの件数(東文研) 23年度 50件 24年度 50件 参考:他施設における文化財レスキュー事業(被災文化財等救出作業支援)件数※文化庁受託経費以外も含む 23年度 東京国立博物館55件、京都国立博物館5件、奈良国立博物館6件、九州国立博物館8件、奈良文化財研究所55件 24年度東京国立博物館8件、京都国立博	〈評定と根拠〉 評定:A 当初目標を順調に達成したのみならず、中期計画外で文化財レスキュー事業等の重要な事業を実施し大きな成果を上げたため、Aと評定する。 我が国の文化財に関する調査・研究の中核として、地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、多岐にわたる領域について、文化財に関する多数の協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行った。 特に、東日本大震災後の文化財レスキュー事業については、通常業務がある中で、東京文化財研究所を中心に機構全体で取り組みを行ない、放射能汚染地区からの文化財の救出など、きわめて危険な任務を果たし、機構の存在意義を高め、ナショナルセンターとしての大きな貢献を果たしたといえる。 また、東日本大震災の被災地の地方公共団体からの要請に応じた適切な活動を実施するとともに、昨年度に引き続き、独自に開発した調査技術の導入を適切に行う等、より効率的な発掘調査を行うことができた。 さらに、文化財防災ネットワーク推進事業については、26年度途中に交付決定された補助金事業にもかかわらず、短い期間で体制を整備し、大規模な国際専門家会合等複数の事業を実施することができ、防災に関する国内外のネットワークの構築の基礎を築いた。 「文化財担当者研修」と「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」を毎年度実施し、高	評定 A 〈評定に至った理由〉 東文研及び奈文研は、地方公共団体等への協力、連携大学院における教育研究、受託研究、専門家の研修等を行っている。 東文研は、地方公共団体等の依頼に応じて、無形文化遺産、文化財の保存・修復、生物被害、美術館等の環境調査等に関する指導・助言等を行っており、平成23年度から26年度までの4年間に2,045件(年平均511件)行った。依頼件数は毎年増加しており、23年度が319件、24年度が345件、25年度が465件、26年度が916件に達している。平成22年度の実績159件と比較しても著しく増加している。東日本大震災の被災文化財を救出する文化財レスキュー事業にも大きく貢献し、23年度に59件、24年度に60件対応した。 奈文研は、全国の史跡整備・復原事業、奈良県の平城京、飛鳥・藤原地区の発掘調査等に対する指導・助言等を行っており、平成23年度から26年度までの4年間に1,541件(年平均385件)を行った。東日本大震災への対応においては、文化財レスキュー事業のほか、被災地の復興・復旧事業に伴う埋蔵文化財発掘調査への援助を行っている。 連携大学院については、東文研が東京芸術大学大学院修士課程(システム保存学コース)において、また奈文研が京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程及び奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉

<p>財担当者に対し埋蔵文化財等に関する研修を実施するとともに、保存担当学芸員に対し保存科学に関する研修を実施する。</p>		<p>・ 博物館 2 件、九州国立博物館 3 件、奈良文化財研究所 6 件</p> <p>・ 所外経費による指導・助言 (文化財のカビ被害予防と対策、文化財の保存環境、文化財の材質及び劣化等に係る指導・助言)(東文研) 24 年度 230 件</p> <p>・ 地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言(奈文研) 23 年度 315 件 24 年度 337 件 25 年度 345 件 26 年度 384 件</p> <p>・ 地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言(奈文研) 23 年度 5 件 24 年度 10 件 25 年度 7 件 26 年度 6 件</p> <p>・ 地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言(奈文研) 23 年度 13 件 24 年度 7 件 25 年度 10 件 26 年度 10 件</p> <p>・ 文化財の収集、保存、展示に関する指導助言(東文研) 25 年度 25 件 26 年度 23 件</p> <p>・ 文化財の虫菌害に関する調査・助言(東文研) 25 年度 33 件 26 年度 37 件</p> <p>・ 文化財の材質・構造に関する調査・助言(東文研) 25 年度 13 件 26 年度 15 件</p> <p>・ 美術館・博物館等の環境に関する調査・助言(東文研) 25 年度 341 件</p>	<p>い満足度を得ており、人材の育成に貢献している。</p> <p><課題と対応> —</p>	<p>において、それぞれ教育活動を行っている。</p> <p>研修については、地方公共団体や公立博物館等の専門職員を対象に、東文研が博物館・美術館等保存担当学芸員研修を、奈文研が埋蔵文化財担当者研修を、それぞれ継続して実施している。4 年間の研修の受講者数は、東文研の研修が 118 名(計画値の 118%)、奈文研の研修が 601 名(計画値の 96%)となっており、ほぼ計画どおり実施されている。</p> <p>平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災においては、未曾有の文化財被害が発生し、国立文化財機構においても中期目標・中期計画で想定していなかった重要な業務が発生した。前述の文化財レスキュー事業や地方公共団体等の依頼に積極的に対応したほか、平成 26 年度には文化庁の補助事業に申請し、法人全体で「文化財防災ネットワーク推進事業」を実施することとした。これは、巨大地震等の大規模災害に備え、各地域における文化財の防災対策や、被災した文化財の救出・修復等の処置を適切に行うため、全国規模の文化財防災ネットワークを構築することを目的としており、平成 27 年度も継続して行っている。</p> <p>平成 26 年 3 月に中央防災会議が定めた大規模地震防災・減災対策大綱には、様々な地域的課題への対応の項目に、文化財の防災対策を掲げ、国・地方公共団体による文化財の所在情報の充実、文化財保護部局等と防災関係機関等との情報共有を図る等の施策が挙げられている。当中期計画の認可時には想定されなかった「文化財防災ネットワーク推進事業」の実施を理由に、自己評定はAとされ</p>
--	--	--	---	---

		<p>26 年度 780 件</p> <p>・ 東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対する地方公共団体等への支援・協力(機構) 25 年度 12 件 26 年度 19 件</p> <p>研修に関して主な実績は以下のとおり。</p> <p>・ 文化財担当者研修(奈文研) 遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員を対象として、最新の知見を盛り込んだ専門研修 15 課程の研修を実施し、延べ 171 名が受講した。(課程数は 26 年度実績) アウトプット情報を参照</p> <p>研修受講者全員に対するアンケート調査では、ほぼ全員から満足との回答を得ており、充実した研修が実施できた。</p> <p>・ 博物館・美術館等保存担当学芸員研修(東文研) 各地の文化財施設で資料保存を業務とする学芸員や行政担当者などを対象として、博物館・美術館等保存担当学芸員研修を開催した。受講者からのアンケート結果により、26 年度には全員から「満足」との評価を得た。 アウトプット情報を参照</p> <p>中期計画に記載のない時候の実績として、文化財レスキュー以外に、以下の事業等を実施した。</p> <p>・ 東日本大震災被災地の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対し、今までの調査・研究の成果を反映させた発掘調査への効果的な支援や報告書作成に係る支援を行った。同時に、高所リモート撮影等の奈文研の特性を踏まえた写真撮影等の技術について、地方公共団体等の要請を受</p>	<p>ているが、本評価項目については、このほか東日本大震災における文化財救出等の実績や、地方公共団体等に対する援助件数の実績を鑑みて、中期計画の想定を上回る成果を挙げていると認めることは妥当であり、A評定とした。</p> <p><今後の課題> なし。</p> <p><その他事項> なし。</p> <p>○有識者コメント</p> <p>・ 文化財機構全体として「文化財防災ネットワーク推進事業」を実施し、大きな成果を上げたことは、今後のわが国の文化財防災においてきわめて重要なことであり、A評定とすることにまったく異論はない。今後、全国各地の史料ネット団体の拡大・充実や、この事業を恒常的に行う常設の組織の設置を強く要望したい。</p> <p>・ 自己評価の妥当性を検証しており、丁寧な評価になっている。その検証結果も妥当と思われる。</p> <p>・ 震災被害への対応があるため、実績は年々増加の傾向にある。また大学院との連携等の教育事業への協力も実を挙げている。</p> <p>・ 現状の体制を今後も維持されることを期待する。</p>	
--	--	---	---	--

			<p>け支援・協力を実施した。(案文研)</p> <p>・26年度に「文化財防災ネットワーク推進本部」を設置し、文化遺産防災ネットワーク推進会議を設立した。また、第3回国連防災世界会議の一部として、国内外の専門家54名が参加した国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」を実施した。(本部)</p> <p>・学術雑誌等への論文掲載数0件(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・学会、研究会での発表件数2件(26年度) 内訳はアウトプット情報を参照</p> <p>・外部資金の獲得</p> <p>科学研究費助成事業による補助金・助成金の獲得件数については、全体の合計件数にて目標値設定している。詳しくは、項目別調書 No.3-1「自己収入の増加」を参照。</p> <p>なお、項目別の科研獲得件数については、複数項目横断的なテーマが多いため、算出できない。</p>		
--	--	--	---	--	--

4. その他参考情報	
特になし	

1-2-4-2 中期目標管理法人 中期目標期間評価 項目別評定調書(業務運営の効率化に関する事項、財務内容の改善に関する事項及びその他業務運営に関する重要事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
2-1	2. 業務運営の効率化に関する事項 1. 一般管理費の削減		
当該項目の 重要度、難易度	—	関連する政策評価・ 行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ									
評価対象となる指標		達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報) 22年度実績値に対する26年度実績値の減少(増加)率
一般管理費(物件費) (千円)	実績値	中期目標期間で 15%削減	932,061	917,667	680,932	606,818	832,235		10.71%減(特殊要因を考慮すると17.10%減)
	実績値	中期目標期間で 5%削減	6,915,703	4,918,593	5,369,179	6,213,253	6,319,081		8.63%減
光熱水量	電気量 (kwh)	実績値	25,860,045	25,114,550	24,277,289	25,749,324	26,425,896		2.19%増
	ガス量(m ³)	実績値	1,475,110	1,725,133	1,583,761	1,912,122	1,904,708		29.12%増
	水道量(m ³)	実績値	145,792	147,403	148,672	153,108	148,365		1.76%増
廃棄物排出量(kg)	実績値	—	273,407	255,976	245,438	238,041	241,900		11.52%減

※基準値は22年度実績

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価			主務大臣による評価	
			業務実績	自己評価	(見込評価)	(期間実績評価)	
1 一般管理費等の削減 業務運営に関しては、「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」(平成22年12月7日閣議決定)等を踏まえ、国立文化財機構の活性化が損なわれないよう十分配慮しつつ、一層の業務の効率化を推進することにより、文化財購入等の効率化になじまない特殊要因経費を除き、中期目標の期間中、一般管理費については15%以上の効率化を図ること。ただし、文化財購入等の効率化については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。 なお19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を削減する。 このため、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、事務、事業、組織等の見直しや、公用車の運転業務など外部委託できる業務を引き続き精査して計画的	1 一般管理費等の削減 中期目標の期間中、一般管理費については15%以上の効率化を行う。ただし、文化財購入等の効率化については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。 なお19年度の法人統合に伴い、機構の業務運営に際しては、平成23年度までの統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を削減する。 このため、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、事務、事業、組織等の見直しや、公用車の運転業務など外部委託できる業務を引き続き精査して計画的	〈主定量的指標〉 ・一般管理費(物件費)の削減状況 ・業務経費(物件費)の削減状況 ・光熱水料金 〈その他の指標〉 ・廃棄物排出量 〈評価の視点〉 ○中期目標の期間中、一般管理費15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を行ったか。 ・共通的な事務の一元化を図ったか。 ・計画的なアウトソーシングを図ったか。 ・エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%の削減を図ったか。 ・廃棄物の減量化を図ったか。 ・リサイクルの推進を図ったか。 ○競争性のある契約への移行を推進したか。 また、民間競争入札等の推進を図ったか。 ○一般管理費の削減は順調に進められたか。 ○事業費の削減は順調に進められたか。	〈実績報告書等参照箇所〉 平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P677～678 第3期中期期間実績補足資料 P42～43 〈主要な業務実績〉 共通的な事務の一元化による業務の効率化、計画的なアウトソーシング、仕様資源の減少に努めた。詳細は以下のとおり。 ○中期目標期間中の業務の効率化 ・共通的な事務の一元化 機構内で共通のグループウェアや財務会計システム、人事給与システムを本部主導で運営した。 最新の状況は平成26年度自己点検評価報告書 個別表 P677参照 ・計画的なアウトソーシング 毎年度、計画的にアウトソーシングをおこなった。最新の状況は個別表 P678参照 ・エネルギー使用量 使用量は主要な経年データ参照 平成22年度と平成26年度の比較では、電気量は 565.851 kwh(2.19%)、ガス量は 429.598 m ³ (29.12%)、水道量は 2,573 m ³ (1.76%)、といずれも増加している。 平成23年10月のアジア太平洋無形文化遺産研究センター新設、平成25年1月の東京国立博物館東洋館リニューアールオープン、平成25年9月の東京国立博物館黒田記念館上島珈琲店新設、平成26年4月の東京国立博物館正門プラザ新設、平成26年9月の京都国立博物館平成知新館リニューアールオープンと平成22年度にはなかった新分野の研究センター新設、快適な観覧・保存環境の整備、お客様サービスの向	〈評定と根拠〉 評定:B 効率化について、可能なものについて実施済である。 競争性のある契約への移行については、特殊な契約を除き実施済みであり、性質上代替品が存在しない文化財の購入を除いた場合目標を達成している。 一般管理費の削減についても、特殊要因を除き順調に進んでいる。また、事業費の削減についても計画どおり順調に削減している。 エネルギー使用量については、平成26年度にはなかった施設の新設等があった東京国立博物館・京都国立博物館では必然的に増加しているが、奈良国立博物館・九州国立博物館、東京文化財研究所・奈良文化財研究所ではいずれも減少しており、順調といえる。 〈課題と対応〉 -	〈評定〉 B 〈評定に至った理由〉 一般管理費については、平成26年度支出より消費税の増額分を差し引いた額と平成22年度支出を比較した場合、平成22年度より15.7%減となっており、平成26年度時点で目標を達成していることから中期目標期間終了時についても所期の目標を達成することが見込まれる。 業務経費については、平成26年度は平成22年度より8.63%減となっており、平成26年度時点で目標を達成していることから中期目標期間終了時についても所期の目標を達成することが見込まれる。 共通的な事務の一元化及び、計画的なアウトソーシングについても平成26年度実績の通り取り組みの推進が認められる。 また、競争性のある契約への移行の推進及び民間競争入札等の推進については平成26年度の契約額全体における競争性のある契約額の割合が基準値より19.3%増となっており、これらの取り組みが推進されていることが認められる(評価項目2-3の主要な経年データ参照)。 エネルギーの使用量については各施設において施設の開館等が発生していることから以下の条件により平成22年度と平成26年度の比較を行ったところ、電気については11%減、水道については18%減、ガスについては7%減となっており、平成26年度時点で目標を達成していることから中期目標	〈評定〉 B 〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉	

79

にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。 具体的には下記の措置を講じる。 (1) 共通的な事務の一元化による業務の効率化 (2) 計画的なアウトソーシング (3) 使用資源の減少 ・省エネルギー(エネルギー使用量は、5年計画期間中に5%削減) ・廃棄物減量化 ・リサイクルの推進	上のための増加が主な要因である。特にガスについては、展示室等の大空間の冷暖房用エネルギーとして使用されているため増加が著しい。 使用量は、上記により東京・京都国立博物館では増加しているが、奈良・九州国立博物館、東京・奈良文化財研究所ではいずれも減少している。 平成27年度においても、引き続き省エネルギーに努めることとする。 ・廃棄物の減量化 減量は主要な経年データ参照 平成22年度と平成26年度の比較では、31.507kg減量化(△11.52%)している。 平成27年度においても、引き続き減量化に努めることとする。 ○競争性のある契約への移行 総務省からの要請に基づき、「独立行政法人整理合理化計画(平成19年12月24日閣議決定)」の一環として、随意契約の見直しを行い、随意契約によることやむを得ないものを除き、引き続き競争契約に移行している。 ○一般管理費の削減 決算報告書による支出額 主要な経年データ参照 平成26年度支出額は832,235千円であり、平成22年度支出額は932,061千円に対し99,826千円の削減(△10.71%)を行っている。また、消費税について、平成22年度は132,880千円還付され、平成26年度は59,572千円納付していることから、平成26年度支出額から消費税納付額59,572千円を控除した772,663千円と比較した場合は、1,59,398千円の削減(△17.10%)となる。 平成27年度においても、消費税等の特殊要因を除いた場合15%以上の削減が可能	期間終了時についても所期の目標を達成することが見込まれる。 ○基準値となる平成22年度より稼働数が増減している以下の施設については比較対象としい。 ・東京国立博物館：正門プラザのオープン(平成26年4月～)、黒田記念館の展示再開(平成27年1月～)、上島珈琲店(黒田記念館にて営業)の通年営業(平成25年9月4日から営業開始) ・京都国立博物館：平成知新館開館(平成26年9月～)に伴う増加 ・奈良国立博物館：なら仏像館休館(平成26年9月～)のため減(ガスのみ) ・奈良文化財研究所：平成26年1月に旧庁舎より移転し、ガス設備を使用しなくなった。 ○平成23年10月より移動したアジア太平洋無形文化遺産研究センターについては24年度の数値を参考として比較を行う。 廃棄物の減量化については平成26年度は平成22年度より11.52%の減であり、リサイクルが推進されていると認められる。 〈今後の課題〉 なし。 〈その他事項〉 なし。 ○有識者コメント ・数値を示した、具体的な評価になっている。
---	--	--

80

			な見込である。 ○事業費の削減 主要な経年データ参照 業務経費(物件費)について、決算報告書 による平成22年支出額は6,915,703千円、 同平成26年度支出額は6,319,081千円で あり、8.63%の削減を行っている。 平成27年度においても、5%以上の削減が 可能な見込である。		
--	--	--	---	--	--

4. その他参考情報					
特になし					

1. 当事務及び事業に関する基本情報						
2-2	2. 業務運営の効率化に関する事項 2. 給与水準の適正化等					
当該項目の 重要度、難易度	-				関連する政策評価・ 行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ										
評価対象となる指標			達成 目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
対国家公務員指数	事務・ 技術職員	実績値		96.9	94.0	96.5	97.0	97.1		
	研究職員	実績値		98.3	98.4	97.7	98.4	98.5		
財政支出割合	実績値			91.3%	91.3%	91.7%	89.5%	89.5%		
累積欠損金(円)	実績値			-	0	0	0	0		
法定外福利費(千円)	実績値			15,030	14,917	13,559	13,171	13,918		

※基準値は22年度実績

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
					評定	B	評定
2 給与水準の適正化等 給与水準については、「公務員の給与改定に関する取扱いについて」(平成 22 年 11 月 1 日閣議決定)を踏まえ、国家公務員の給与水準等を十分考慮して、検証したうえで、業務の特殊性を踏まえた適切な目標水準・目標期限を設定し、その適正化に取組むとともに、検証結果や取組状況を公表すること。 総人件費についても、平成23年度はこれまでの人件費改革の取組を引き続き着実に実施するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、厳しく見直すこと。	2 給与水準の適正化等 国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、对国家公務員指数については現状を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。また、これまでの人件費改革の取り組みを平成23年度まで継続するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、取り組むこととする。ただし、人事院勧告を踏まえた給与改定分及び競争的資金により雇用される任期付職員に係る人件費については本人件費改革の削減対象から除く。 なお、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職手当、福利厚生費は含まない。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・对国家公務員指数 ・財政支出割合 ・累積欠損金 ・法定外福利費 〈評価の視点〉 ○对国家公務員指数について、現状を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組水準を公表したか。 ○給与水準の高い理由及び講ずる措置(法人の設定する目標水準を含む)が、国民に対して納得の得られるものとなっているか。 ○法人の給与水準自体が社会的な理解の得られる水準となっているか。 ○国の財政支出割合の大きい法人及び累積欠損金のある法人について、国の財政支出規模や累積欠損の状況を踏まえた給与水準の適切	<実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 P42~43 <主要な業務実績> ○对国家公務員指数の検証と公表 对国家公務員指数の状況 主要な経年データ参照 事務・技術職員、研究職員ともに国家公務員を下回っており、適正な水準と言える。また、検証結果、取組実績等を法人ウェブサイトにおいて公表している。 ○給与水準が高い理由及び講ずる措置 对国家公務員指数は事務・技術職員、研究職員ともに国家公務員を下回っており、給与水準は適正である。また、引き続き適正な給与水準を維持する。 ○法人の給与水準 独立行政法人通則法第50条の10第3項に基づき、業務の実績を考慮し、かつ、社会一般情勢(国家公務員の給与水準)に適合するよう、学歴、試験、経験及び職務の責任の度合いを基に給与水準を決定しており、その水準は対国家公務員を下回っている。 ○国の財政支出割合と累積欠損金を踏まえた給与水準の検証 主要な経年データ参照	評定:B ・对国家公務員指数を事務・技術職員、研究職員ともに下回っている。公表についても行なっている。 ・对国家公務員指数を下回っており、給与水準は適正である。 ・人事院勧告等に準拠し、給与規程等の改定を実施した。 ・支出予算の総額に占める国からの財政支出割合は50%を上回っているが、給与水準の比較指標では国家公務員の水準未満となっていることから給与水準は適正である。 ・法定外福利費の支出内訳は法律に基づく健康診断経費、産業医の委託費用、職員研修費等、最低限必要なものであり、適正な支出と考える。 <課題と対応> —	<評定に至った理由> (評定に至った理由) 給与水準について、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 <今後の課題> なし。 <その他事項>	<評定に至った理由> <今後の課題> <その他事項>	<評定に至った理由> <今後の課題> <その他事項>

83

		性に関して検証されているか。 ○法人の福利厚生について、法人の事務・事業の公共性、業務運営の効率性及び国民の信頼確保の観点から、必要な見直しが行われているか。	○法人の福利厚生の見直し 主要な経年データ参照 レクリエーション経費の支出はない。 また、国家公務員と異なる諸手当はない。 平成27年度も同様の予定である。				
--	--	--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報

特になし

84

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
2-3	2. 業務運営の効率化に関する事項 3. 契約の適正化の推進		
当該項目の 重要度、難易度	-		関連する政策評価・ 行政事業レビュー
			平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ										
評価対象となる指標			達成 目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
一般競争入札	件数(件)	実績値		199	132	136	171	169		
	金額(千円)	実績値		2,009,789	3,438,898	5,135,513	4,206,183	10,028,154		
企画競争・公募等	件数(件)	実績値		36	39	34	31	53		
	金額(千円)	実績値		324,789	241,360	236,781	338,031	365,428		
上記競争性のある契約 の合計	件数(件)	実績値		235	171	170	202	224		
	金額(千円)	実績値		2,334,578	3,680,258	5,372,293	4,544,214	10,393,583		
随意契約	件数(件)	実績値		81	69	80	63	80		
	金額(千円)	実績値		1,103,603	983,703	1,190,924	1,051,603	1,523,640		
競争性のある契約のうち、 一者応札・応募となった契約	件数(件)	実績値		87	66	74	84	103		
	金額(千円)	実績値		783,429	1,586,048	3,115,671	1,745,254	1,940,909		

※基準値について、上位4項目は22年4月公表の随意契約等見直し計画による。

競争性のある契約のうち、「一者応札・応募となった契約」の基準値は平成22年度実績による。(参考：平成22年度 競争性のある契約の合計 217件 2,114,321円)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
3 契約の適正化の推進 契約については、「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」(平成21年11月17日閣議決定)に基づき引き続き取組を着実に実施し、一層の競争性と透明性の確保に努め、契約の適正化を推進するとともに外部委託の活用等により、定型的な管理・運営業務の効率化を図ること。	3 契約の適正化の推進 「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」(平成21年11月17日閣議決定)に基づき引き続き取組を着実に実施し、一層の競争性と透明性の確保に努め、契約の適正化を推進するとともに外部委託の活用等により、定型的な管理・運営業務の効率化を図ること。また「独法の事務・事業の見直しの基本方針」(平成22年12月7日閣議決定)に基づき、施設内店舗の賃借について、企画競争を導入するなど競争性と透明性を確保した契約方式とする。なお民間競争入札については、現在実施している民間競争入札の検証結果等を踏まえ、一層推進する。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・一般競争入札等件数 〈評価の視点〉 ○契約方式等、契約に係る規定類について、整備内容や運用は適切か。 ○契約事務手続きに係る執行体制や審査体制について、整備・執行は適切か。 ○「随意契約等見直し計画」の実施・進捗状況や目標達成に向けた具体的取組状況は適切か。 ○再委託の必要性等について、契約の競争性、透明性の確保の観点から適切か。 ○一般競争入札等における一社応札・応募の状況はどうか。その原因について適切に検証されているか。また検証結果を踏まえた改善策は妥当か。 ○法人の目的・事業に照らし、会費を支出しなければならない必要性が真にあるか(特に長期間にわたって継続して	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P45 〈主要な業務実績〉 ・契約監視委員会を2回実施した。 ・施設内店舗の貸付・業務委託について、企画競争を実施した。 ・東京国立博物館・東京文化財研究所の民間競争入札2件については、平成26年6月17日の内閣府官民競争入札等監視委員会において、「市場化テスト終了プロセス及び新プロセス運用に関する指針」(平成26年3月19日官民競争入札等監視委員会)に基づき、終了プロセスへの移行が了承された。よって、平成27年度以降の事業については、平成26年度に一般競争入札にて契約を行った。 ○契約方式等、契約に係る規程類整備規程は整備されている。 ○契約事務手続きに係る執行体制等適切に整備・執行されている。 ○随意契約等見直し計画 主要な経年データ参照 ○再委託の適切性 当法人においては、再委託の実績は無い。 ○一般競争入札等の検証・改善 主要な経年データ参照 各施設において、競争契約を原則とし、規程に定めた適切な方法により調達契約等が実施されている。また、契約監視委員会が毎年度適切に実施されている。契約情報については、本部ウェブサイト「法人情報」において公開している。 ○会費の必要性 ○会費支出による便宜等 ○監事による会費の精査	〈評定と根拠〉 評定：B 契約方式等、契約に係る規程類整備については、特殊な契約を除き順調に整備等がなされている。その他の事項についても、適切に対応している。 会費については、最低限の会費支出となっており、特に問題はない。 〈課題と対応〉 -	評定	B	評定
			〈評定に至った理由〉 契約に係る規程類及び契約事務手続きに係る執行・審査体制は「4. その他参考情報」欄の通り整備されており、随意契約等見直し計画に基づき外部有識者による契約監視委員会による契約の点検・見直しが行われていることから適切に整備・執行がされていると認められる。 随意契約等見直しについては、平成22年度より契約額全体に占める随意契約の割合が平成26年度では19.2%減となっていることから適切に推進されていると認められる。 一般競争入札等における一者応札・応募については、競争性のある契約の割合が平成22年度から平成26年度までで17.9%減となっていることから、適切に見直しが進められていると認められる。 会費の必要性、会費支出による便宜等、監事による会費の精査等については自己評価書によって具体的に説明されており、「独立行政法人が支出する会費の見直しについて(平成24年3月23日行政改革実行本部)」に従い、適切に実施されている。 〈今後の課題〉 なし。 〈その他事項〉 ○有識者コメント	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉			

	<p>きたもの、多額のもの) ○会費の支出に見合った便宜が与えられているか、また、金額・口座・種別等が必要最低限のものとなっているか。 (複数の事業所から同一の公益法人等に対して支出されている会費については集約できないか) ○監事は、会費の支出について、本見直し方針の趣旨を踏まえ十分な精査を行っているか。 ○公益法人等に対し(年10万円未満のものを除く。)を支出した場合には、四半期ごとに支出先、名目・趣旨、支出金額等の事項を公表しているか。</p>	<p>平成23年度より、該当する10万円以上の会費は、公益財団法人日本博物館協会の維持会員会費の1件のみ、平成26年度支出額は246千円である。これは、中期目標で定めた「我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与する」ことを実現するため、同協会の主催する「全国博物館会議」に参画している。監事においても精査されている。 ○公益法人に対する支出の公表 独立行政法人国立文化財機構のホームページ内「法人情報」、「法令等に基づく公表事項」において公表している。 契約の適正化については、平成27年度も同様に適切に実施する予定である。</p>		<p>・妥当と認められる。</p>	
--	--	--	--	-------------------	--

4. その他参考情報

<p>【契約に係る規程類】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 独立行政法人国立文化財機構会計規程 ② 独立行政法人国立文化財機構会計規程の特例を定める規程 ③ 独立行政法人国立文化財機構予算、決算及び出納事務取扱細則 ④ 独立行政法人国立文化財機構契約事務取扱細則 ⑤ 独立行政法人国立文化財機構施設等設計業務プロポーザル実施細則 ⑥ 独立行政法人国立文化財機構工事に係る競争参加資格審査委員会及び総合評価審査委員会に関する取扱細則 ⑦ 独立行政法人国立文化財機構における大型設備等の調達に係る仕様策定等に関する取扱要項 ⑧ 独立行政法人国立文化財機構契約情報公表要項 ⑩ 契約情報公表に必要な事項に関する取扱 ⑪ 独立行政法人国立文化財機構修理契約委員会要項 ⑫ 独立行政法人国立文化財機構契約監視委員会要項 ⑭ 標準型プロポーザル方式の実施要項 ⑮ 公募型及び簡易公募型プロポーザル方式の実施要項 ⑯ 調査の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑰ 研究開発の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式

<p>⑱ 広報の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑲ 情報システムの調達に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑳ 独立行政法人国立文化財機構における「企画競争・公募」ならびに「総合評価落札方式」に関するマニュアルについて</p> <p>【審査体制】</p> <p>① 内部のチェック体制 各施設に分任契約担当役を設置し、各施設において契約処理並びに適正な契約が行われているかをチェックする体制を整備している。特に随意契約の場合、契約が適正かを十分に精査し契約を行うよう本部から指導を行っている。 東京国立博物館における1千万円を超える物品調達の場合の例 [購入依頼]: 購入依頼者が所属課長の承認を得て購入依頼書を契約担当へ送付→契約担当係員チェック→同主任チェック→同係長チェック→経理課室長チェック→経理課長チェック→総務部長(分任契約担当役)決裁により発注を決定 (必要に応じ仕様策定等を実施: 実施した場合は購入依頼と同様にチェック・決裁) [予定価格]: 契約担当係員が予定価格調書を作成し、購入依頼と同様にチェック・決裁 [一般競争入札]→[契約者決定]→[契約書作成]: 契約担当係員が作成し、購入依頼と同様にチェック・決裁→[契約書締結] [物品の納品検収]: 検査職員が物品の内容が契約と相違ないかチェック→[検査調書作成] [支払い]: 契約担当係員が支払伝票を作成し、購入依頼と同様に係員から室長のチェック→経理課長(分任出納命令役)決裁し支払いを決定→経理課室長(分任出納役)→[契約者への支払い]</p> <p>② 内部でのチェック対象案件の抽出方法 各施設において契約された契約のうち、契約金額や案件等から抽出した契約に係る書類等を監事監査並びに内部監査においてチェックを実施し、適正な契約処理が行われているか等の確認を実施している。</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報		2. 業務運営の効率化に関する事項		関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385
2-4		4. 保有資産の有効利用の推進			
当該項目の重要度、難易度	-				

2. 主要な経年データ									
	評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
	施設の有効利用件数(件)		-	2,698	2,604	2,436	1,615		茶室、講堂等の貸出及び撮影利用

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
4 保有資産の有効利用の推進	4 保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、有効利用の推進を図るため、本来業務に支障のない範囲で有効利用の推進を図ること。	<p><主な定量的指標> 特になし</p> <p><その他の指標> ・施設の有効利用件数</p> <p><評価の視点></p>	<p><実績報告書等参照箇所> 第3期中期期間実績補足資料 P45~46</p> <p><主要な業務実績> 【実物資産の保有状況】 平成26年4月1日現在 東京国立博物館 土地120,270㎡、建物(延面積)72,192㎡ 京都国立博物館 土地53,182㎡、建物(延面積)31,828㎡ 奈良国立博物館 土地78,760㎡、建物(延面積)19,116㎡ 九州国立博物館 土地166,477㎡(うち九博10,798㎡) 建物(延面積)30,675㎡(うち九博9,300㎡) ※九州国立博物館は、福岡県と共有しており、福岡県は土地 155,679㎡、建物 5,780㎡を分有、建物のうち15,595㎡は共有面積である。 東京文化財研究所 土地4,181㎡、建物(延面積)10,516㎡ 奈良文化財研究所 土地46,468㎡、建物(延面積)35,276㎡</p>	<p><評定と根拠> 評定:B 実物資産、金融資産、知的財産とも適切に管理され、有効に利用されている。また、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等も本来業務に支障のない範囲で積極的に行っている。なお、施設の有効利用件数が26年度に大幅に減っているのは、奈良文化財研究所の本庁舎建替に伴い寄宿舍の取り壊しにより、寄宿舍利用件数が25年度の805件から0件に減ったことによるものである。その他の貸出は順調なため、問題はない。</p> <p>詳細はその他参考情報参照</p> <p><課題と対応> -</p>	<p>評定 B</p> <p><評定に至った理由> 保有資産の有効活用について、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。 資金の運用体制の整備状況については、平成22年度に東博における運用体制を整備し、平成23年度に本部における運用体制を整備しており、本博のいづれにおいても余裕金の運用を行う部署とは別の部署にて運用状況を確認することとしていることが認められる。</p> <p><指摘事項、業務運営上の課題及び改善案> 特になし。 <その他事項> 独立行政法人国立文化財機構本部事務局余裕金運用取扱要綱(抜粋) (運用の決定) 第2条 余裕金の運用は役員会の議を経て理事長が決定するものとする。 2 余裕金の運用の具体的な業務は出納命令が行うものとする。</p> <p>(本部事務局への報告) 第9条 本部事務局経理課(経理担当)は、余裕金の運用をしている場合はその運用状況等について、毎年9月末日と3月末日の状況を遅滞なく本部事務局財務課(予算・主計担当)に別表の余裕資金運用実績(状況)報告書により報告するものとする。</p>	<p><評定に至った理由></p> <p><今後の課題></p> <p><その他事項></p>	
		<p>○実物資産について、保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等の観点からの法人における見直し状況及び結果は適切か。</p> <p>○見直しの結果、処分等又は有効活用を行うものとなった場合は、その法人の取り組み状況や進捗状況等</p>	<p>○展示棟、研究施設、事務所、収蔵品倉庫、資料館等として全ての建物を使用しており、博物館・研究所としての任務を遂行するために必要不可欠である。そのため見直しは行っていない。</p> <p>○見直しは行っていない。</p>				

		<p>は適切か。</p> <p>○「勤告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」、宿舎戸数、使用料の見直し、廃止等「独立行政法人の職員宿舎の見直し計画」、「独立行政法人の宿舎見直しに関する実施計画」等の政府方針を踏まえて、宿舎戸数、使用料の見直し、廃止等とされた実物資産について、法人の見直しが適時適切に実施されているか(取り組み状況や進捗状況等は適切か)</p> <p>○実物資産について、利用状況が把握され、必要性等が検証されているか。</p> <p>○資産の活用状況等が不十分な場合は、原因が明らかにされているか。その理由は妥当か。</p> <p>○実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取り組みは適切か。</p> <p>○金融資産について、保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模は適</p>	<p>○職員宿舎は所有していない。九州国立博物館における民間住宅の借上げ宿舎については、平成26年4月1日より使用料の見直しを実施した。廃止等とされた実物資産はない。</p> <p>○減損対象資産の利用状況は毎年度調査しており、全ての資産が使用されており減損の兆候はない。</p> <p>○該当なし。</p> <p>○博物館・研究所の本来業務以外にも、講堂・会議室の貸与、建物・庭園等を映画等のロケーションとして貸出すなど部外者に対しても積極的な貸出しを行い、適切に施設の有効利用を図っている。</p> <p>実物資産については、平成27年度も同様に適正に管理し、有効活用に努める予定である。</p> <p>○現金及び預金の平成26年度末残高は約43億円であり、そのほとんどは施設整備費の未払金に充てるもの及び運営費交付金の繰越に相当するものである。</p>			
--	--	--	---	--	--	--

		<p>切か。</p> <p>○資産の売却や国庫納付等を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。</p> <p>○資産の運用状況は適切か。</p> <p>○資金の運用体制の整備状況は適切か。</p> <p>○資金の性格、運用方針等の設定主体及び規定内容を踏まえて、法人の責任が十分に分析されているか。</p> <p>○貸付金、未収金等の債権について、改修計画が策定されているか。改修計画が策定されていない場合、その</p>	<p>○該当なし。</p> <p>○大口定期預金として、平成26年6月20日～平成27年3月6日(260日)1億円、平成26年6月20日～平成27年6月22日(368日)1億円、平成26年7月16日～平成27年2月6日(206日)2億円、平成26年7月16日～平成27年4月3日(262日)1億円、平成26年3月31日～平成28年3月30日(365日)2億円の運用を適切に行っている。</p> <p>○適切に整備されている。</p> <p>○独立行政法人国立文化財機構会計規程第27条において、出納命令役は、業務の執行に支障がない範囲で、法令で定められた安全資産により余裕金の運用をすることができることと定めている。</p> <p>また、東京国立博物館余裕資金運用取扱要項において、余裕資金の運用は運営会議の議を経て、館長が決定すること。運用の対象を寄附金、入場料等自己収入、その他館長が定める資金とすること。資金繰計画の作成を要すること。運用方法は、国債等、独立行政法人通則法第47条に指定する有価証券、預金等とすること。債権の発行者等の経営状況の把握することを定めている。</p> <p>平成27年度も余裕資金の状況により、安全かつ有利な方法で運用を実施する予定である。</p> <p>○貸付金はない。</p> <p>未収金(建物、収蔵品画像使用料等)の管理は、独立行政法人国立文化財機構債権管理要項に基づき実施している。使用後精算する建物使用料、外国からの後払いの収</p>			
--	--	--	--	--	--	--

		理由は妥当か。	<p>蔵品画像使用料等の少額の未収金が大半のため、回収コスト等も考慮しながら実施している。</p> <p>・平成26年度末の未収金 267件、1,037,575千円。(うち285,711千円が東京国立博物館平成館特別展示室等改修工事に文化庁からの施設整備費)</p> <p>・平成27年6月17日現在の未収金 18件972千円。(12件872千円は平成27年7月までに回収予定、6件100千円は継続して督促を実施中)</p>			
		<p>○回収計画の実施状況は適切か。</p> <p>i) 貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額やその貸付金等残高に占める割合が増加している場合、ii) 計画と実績に差がある場合の要因分析が行われているか。</p> <p>○回収状況等を踏まえ回収計画の見直しの必要性等の検討が行われているか。</p> <p>○特許権等の知的財産について、法人における保有の必要性の検討状況は適切か。</p>	<p>○同要項に基づき、未収金の債権管理を帳簿により行い、回収計画、督促状況等を記録している。滞留管理としての管理、保全手続きについても定めている。</p> <p>○回収状況は良好であり未回収額も少額であることから、当面は見直しの計画はない。平成27年度においても貸付金は実施しない予定、未収金等の債権については、同様に適切に管理する予定である。</p> <p>○特許権4件(研究技法関係)と商標権12件(ロゴマーク等)を保有している。取得費用がいずれも少額であるため財務諸表上の資産計上はしていないが、権利として管理している。研究継続の必要性から研究技法関係特許の保有は必要であり、ロゴマーク等の商標権も運営上の支障となる他者の使用を未然に防止するために必要である。</p> <p>なお、特許権は当然収入につながるものであれば活用するが、維持費との兼ね合いが今後の課題である。</p> <p>取得特許件数4件</p> <p>①木材又は木造文化財の年輪幅又は密度測定装置並びに測定方法(21.522 登録: 奈良文化財研究所)</p> <p>②壁画漆喰層剥離用ワイヤソー装置及び壁画漆喰層剥離方法(22.3.5 登録: 東京文化財研究所・奈良文化財研究所)</p> <p>③文化財用表打ち材料及びそれを用いた</p>			

		<p>○検討の結果、知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取り組み状況や進捗状況等は適切か。</p> <p>○特許権等の知的財産について、特許出願や知的財産活用に関する方針の策定状況や体制の整備状況は適切か。</p> <p>○実施許諾に至っていない知的財産の活用を推進するための取組は適切か。</p>	<p>文化財修復方法(22.12.10 取得: 東京文化財研究所)</p> <p>④フノリ抽出物の精製方法(26.7.18 取得: 東京文化財研究所)</p> <p>○機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明及び商標取扱規程」に基づき対応することになる。</p> <p>○機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明及び商標取扱規程」により整備されている。</p> <p>○研究成果の結実として特許権取得をしている。当機構における特許権取得は、パテント収入を目指すためではなく、研究継続の必要性から防衛的な対抗特許として保有することを主眼としているため、特別な取組みは行っていない。</p> <p>知的財産については、平成27年度も同様に適切に管理する予定である。</p>			
--	--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
2-5	2. 業務運営の効率化に関する事項 5. 内部統制の充実・強化		
当該項目の 重要度、難易度	—	関連する政策評価・ 行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)	(期間実績評価)	
5 内部統制の充実・強化 (1)法令等を遵守するとともに、業務の特性や実施体制に応じた効果的な統制機能の在り方を検討し、内部統制の充実・強化を図ること。 (2)外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ事業評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させること。 (3)管理する情報の安全性向上のため、政府の方針を踏まえた適切な情報セキュリティ対策を推進し、必要な措置をとること。	5 内部統制の充実・強化 (1)理事長のマネジメント強化のため業務の特性や実施体制に応じた効果的な統制機能の在り方を検討し、自己点検評価を始め監事監査、内部監査などモニタリングを行う。 (2)外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の情報セキュリティの向上を図る。 (3)管理する情報の安全性向上のため、政府の方針を踏まえた情報セキュリティに配慮した業務運営の情報化・電子化に取り組み、情報セキュリティ対策の向上と改善を図るため定期監査等を実施する。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 特になし 〈評価の視点〉 ○自己点検評価、監事監査、内部監査等を行ったか。また、事業評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させたか。 ○法人の長がリーダーシップを発揮できる環境は整備され、実質的に機能しているか。 ○法人の長は、組織にとって重要な情報等について適時的確に把握するとともに、法人のミッション等を役員に周知徹底しているか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P46～47 〈主要な業務実績〉 ○自己点検評価、監事監査、内部監査等を行った。毎年度、運営委員会を1回と外部評価委員会を3回(部会2回、総会1回)行い、その結果を機構の事業等の改善に反映させた。 ○運営上の諸課題への対応方針の決定等については、「役員会」での協議を踏まえて理事長が行った。また、理事長の勤務地(京博)と本部の所在地(東博)が離れていることから、20年度に便宜上置いた「理事長代理」を21年度に「相談役」として規程化し、東京国立博物館長を充て、トップマネジメントとそれを支える体制を整えた。方針の決定に当たっては「運営委員会」などの評価及び提言を十分検討するとともに、方針決定後は速やかに実施するように留意した。また、各施設間で調整を図る必要がある課題については、「国立文化財機構7施設連絡協議会」及び「国立文化財機構研究・学芸系職員連絡協議会」にて協議を行っている。 ○日常の報告や役員会(毎年度7回)を通じて報告を受けることにより情報収集し、役員に対するミッションの周知状況及びミッションを役員により深く浸透させる取組を行っている。また、法人内グループウェアを継続して運用し、さらなる周知を図っている。	〈評定と根拠〉 評定:評定:B すべての項目に対し順調に実施した。 詳細は、その他参考情報に記載のとおり。 〈課題と対応〉 —	評定 B 〈評定に至った理由〉 内部統制の充実・強化について、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。詳細は以下の通り。 モニタリングの実施について、理事長の適切なリーダーシップのもと、リスクマネジメントについての検討、危機管理マニュアル等の見直しが随時行われているとともに、自己点検評価、監事監査、内部監査及び外部評価委員会による評価が行われている。 リスクマネジメントの実施について、役員会、運営委員会、連絡協議会等、理事長がリーダーシップを発揮できる体制が整備されており、それぞれが機能していると認められる。役員会、各種委員会により連絡調整と情報共有が行われており、役員に周知していると認められる。さらに、法人内グループウェアを継続して運用しており、各施設の意思疎通も図られている。 中期目標・計画の未達成項目(業務)については、要因の把握・対応を行う体制が整備されていると認められる。内部統制のリスクについては、リスクの把握・対応を行う体制が整備されていると認められる。 監事監査については、規程及び体制は整備されており、適切に実施されていると認められる。また、役員会等への出席を通して理事長のマネジメントに留意していると認められる。なお、監	評定 〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉	

	<p>○法人の長は、法人の規模や業種等の特性を考慮した上で、法人のミッション達成を阻害する課題(リスク)のうち、組織全体として取り組むべき重要なリスクの把握・対応を行っているか。</p> <p>○その際、中期目標・計画の未達成項目(業務)についての未達成要因の把握・分析・対応等に着目しているか。</p> <p>○法人の長は、内部統制の現状を的確に把握した上で、リスクを洗い出し、その対応計画を作成実行しているか。</p> <p>○監事監査において、</p>	<p>○役員会(毎年度7回)や各種会議を通じて、情報収集しリスクを把握し、組織全体として取り組むべき重要なリスクの把握をしている。その把握を元に役員会で指示し、対応を行っている。</p> <p>把握している重要なリスクは以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適切な人員の確保 業務の拡充・拡大にもかかわらず、人件費削減などにより人員の補充が困難であり、職員の負担が過大となっている。身分的に不安定な任期付きの非常勤職員やアソシエイトフェローによる対応には限界があり、文化財の取扱・展示・調査研究等に必要な専門知識や技術の継承が困難になりつつある。 ・大規模自然災害等への対応(耐震化等) ・文化財の破損・盗難・劣化等 ・収蔵庫の不足 ・電力逼迫下における収蔵庫・展示室等の適切な温湿度管理 <p>○未達成項目については役員会において各施設長から聴取するなど、常に状況等を把握するよう努めている。またその対応についても、その都度協議している。各年度実績において、未達成項目はなかった。</p> <p>○リスクについては役員会において各施設長から聴取するなど常に把握し、リスクへの対応計画などについては役員会において協議し、最終的に理事長の判断により実施時期、実施期限などを定めている。また、その進捗状況等については役員会にて随時報告している。</p> <p>把握しているリスクについては、関連する規程等を整備し、リスクに対応できる体制を整えるとともに、監査・研修等の実施により状況の確認及び職員への周知等を図っている。</p> <p>○監事は、役員会その他重要な会議に出席</p>	<p>事監査報告においては、特段改善を要する事項はない。</p> <p>職員の資質向上・能力開発を目指し、多様な分野の職員研修が実施されている。</p> <p>また、情報セキュリティについては水準向上のための取り組みや監査の実施が認められ、セキュリティ対策に重点を置いた自己点検・評価が行われている。</p> <p><今後の課題> なし。</p> <p><その他事項></p>
--	---	--	--

	<p>法人の長のマネジメントについて留意しているか。</p> <p>○監事監査において把握した改善点等について、必要に応じ、法人の長、関係役員に対し、報告しているか。その改善事項に対するその後の対応状況は適切か。</p> <p>○職員研修等を実施したか。</p> <p>○情報セキュリティに配慮した情報化・電子化に取り組んだか。また、情報セキュリティ対策の向上・改善のための定期監査等を実施したか。</p>	<p>するほか、役員会から事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧し、本部において、財務及び業務についての状況を調査し、法人の長のマネジメントについて留意している。</p> <p>○監査終了後に報告書を提出している。また役員会においてその結果を報告している。</p> <p>よって、役員会での報告により理事長及び役員が内容について認識した。監事が役員会・国立文化財機構7施設連絡協議会等に出席することにより、監事の要望事項が法人の運営に適切に反映されるよう確認を行った。</p> <p>○職員研修等については、4-2人事に関する計画参照</p> <p>○情報セキュリティ水準の向上のための機器の更新、導入を行った。また、「独立行政法人における情報セキュリティ対策の推進について」に対応するため、セキュリティポリシー見直しWGを設置し、27年度改正に向けた準備を進めた。</p> <p>また、保有個人情報管理監査、情報システム監査、監査法人による監査の一環としてのシステム監査をそれぞれ実施した。さらに、情報システム自己点検・評価を、セキュリティ対策の実施状況に重点を置いて実施している。</p>		
--	---	--	--	--

4. その他参考情報

--

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
3-1	3. 財務内容の改善に関する事項 1. 自己収入の増加		
当該項目の 重要度、難易度	-		関連する政策評価・ 行政事業レビュー
			平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ									
	評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
自己収入増加率	計画値	—	—	1.16%	1.16%	1.16%	1.16%	1.16%	※受託研究・受託事業を除く。 ※自己収入増加率は、自己収入基準額(前年度の目標額)に対する増加率。
	実績値	—	—	△8.17%	△2.72%	5.91%	29.04%		
	達成度	—	—	90.78%	96.16%	104.70%	127.56%		
寄附金 (件)	計画値	—	—	226	226	226	350	400	
	実績値	—	—	393	438	486	561		
	達成度	—	—	173.89%	193.81%	215.04%	160.29%		
科学研究費採択件数 (件)	計画値	—	—	76	76	76	76	76	
	実績値	—	—	76	88	95	107		
	達成度	—	—	100.00%	115.79%	125.00%	140.79%		

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)
<p>入場料収入、寄附金等による自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。</p> <p>1 自己収入の増加 入場料収入、寄附金等の外部資金、本来業務に支障のない範囲で施設の有効利用により自己収入を確保することで財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に向けた取り組みを進めること。</p> <p>また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。</p>	<p>管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営を行う。</p> <p>また、収入面に関しては、実績を勘案しつつ、入場料収入、寄付や賛助会員等への加入者の増加、募金箱の設置などによる外部資金、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなど、施設の有効利用により自己収入の増加に向けた取り組みを進めることにより、計画的な収支計画による運営を行う。</p>	<p>〈主な定量的指標〉 特になし</p> <p>〈その他の指標〉 ・自己収入増加率 ・寄附金件数 ・科学研究費採択件数</p> <p>〈評価の視点〉 ○短期借入金はあるか、有る場合はその額及び必要性は適切か。 ○重要な財産の処分に関する計画は有るか。 有る場合は計画に沿って順調に処分に向けた手続きが進められているか。 ○当期総利益(又は当期総損失)の発生要因は明らかにされているか。 ○また、当期総利益(又は当期総損失)の発生要因は法人の業務運営に問題等があることによるものか。 ○利益剰余金が計上されている場合、国民生活及び社会経済の安定等の公益上の見地から実施されることが必要な業務を遂行するという法人の性格に照らし過大な利益となっていないか。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P49～50</p> <p>〈主要な業務実績〉</p> <p>○該当なし。平成27年度も同様の予定である。</p> <p>○該当なし。平成27年度も同様の予定である。</p> <p>○問題等はない。</p> <p>○利益剰余金は、現金ではない前中期目標期間繰越積立金 633,828 千円、平成23～25年度の積立金 141,786 千円、当期未処分利益 224,684 千円の合計 1,000,298 千円であり、過大なものとはなっていない。平成23～27年度の積立金については、平成28年度において国庫納付する予定である。</p>	<p>〈評定と根拠〉 評定：B 自己収入増加率は、当初は増加が見られなかったが、主要な経年データ記載のとおり、毎年度改善している。特に26年度は、博物館の入館者数の増加により、前年度実績を大きく上回っている。 27年度以降も引き続き、自己収入の増加に取り組む予定である。 また、寄附金及び科学研究費採択件数も毎年度目標を上回っており、順調に推移している。</p> <p>〈課題と対応〉 —</p>	<p>評定 B</p> <p>〈評定に至った理由〉 自己収入の増加について、自己評価書及び関係資料によって具体的に説明されており、自己評価の客観性も認められる。</p> <p>〈今後の課題〉 なし。</p> <p>〈その他事項〉 ○有識者コメント ・順調と認められる。</p>	<p>〈評定に至った理由〉</p> <p>〈今後の課題〉</p> <p>〈その他事項〉</p>	

	<p>○繰越欠損金が計上されている場合、その解消計画は妥当か。</p> <p>○当該計画が策定されていない場合、未策定の理由の妥当性について検証が行われているか。さらに、当該計画に従い解消が進んでいるか。</p> <p>○当該年度に交付された運営費交付金の当該年度における未執行率が高い場合、運営費交付金が未執行となっている理由が明らかにされているか。</p> <p>○運営費交付金債務（運営費交付金の未執行）と業務運営との関係についての分析が行われているか。</p> <p>○いわゆる溜まり金の精査において、運営費交付金債務と欠損金等との相殺状況に着目した洗い出しが行われているか。</p> <p>○中期目標期間を超える債務負担は有るか。有る場合は、その理由は適切か。</p> <p>○積立金の支出は有るか。有る場合は、その用途は中期計画と整合しているか。</p>	<p>○該当なし。平成27年度も同様の予定である。</p> <p>○該当なし。平成27年度も同様の予定である。</p> <p>○未執行額は316,489千円(8238,870千円の3.84%)、文化財の購入等の経費であり、全額が次年度において執行する予定となっている。</p> <p>○文化財の購入等の経費の繰越であり、業務運営との関係は明白であり特段の問題はない。</p> <p>平成27年度においては、運営費交付金全額を執行する予定である。</p> <p>○該当なし。平成27年度も同様の予定である。</p> <p>○該当なし。平成27年度も同様の予定である。</p> <p>○該当なし。平成27年度も同様の予定である。</p>			
--	---	--	--	--	--

4. その他参考情報

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
3-2	3. 財務内容の改善に関する事項 2. 固定的経費の節減		
当該項目の重要性、難易度	-	関連する政策評価・行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価						
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
			業務実績	自己評価	(見込評価)	
					評定	評定
<p>入場料収入、寄付金等による自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。</p> <p>2 固定経費の削減</p> <p>管理業務の削減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定経費の削減を図ること。</p>	<p>評価項目2-1</p> <p>「2. 業務運営の効率化に関する事項</p> <p>1. 一般管理費の削減」に同じ。</p>	<p>〈主な定量的指標〉</p> <p>特になし</p> <p>〈その他の指標〉</p> <p>特になし</p> <p>〈評価の視点〉</p> <p>評価項目2-1</p> <p>「2. 業務運営の効率化に関する事項 1. 一般管理費の削減」に同じ。</p>	<p>〈実績報告書等参照箇所〉</p> <p>第3期中期期間実績補足資料 P49～50</p> <p>〈主要な業務実績〉</p> <p>評価項目2-1</p> <p>「2. 業務運営の効率化に関する事項 1. 一般管理費の削減」に同じ。</p>	<p>〈評定と根拠〉</p> <p>評定：B</p> <p>建物新設、単価上昇等の特殊要因を除外すると、目標値以上に削減している。</p> <p>平成27年度も同様の削減を予定している。</p> <p>〈課題と対応〉</p> <p>—</p>	<p>評定</p> <p>B</p> <p>〈評定に至った理由〉</p> <p>一般管理費について、平成26年度支出より消費税の増額分を差し引いた額と平成22年度支出を比較した場合、平成22年度より15.7%減となっていることから中期計画における所期の目標を上回る成果と認められる。平成26年度時点で目標を達成していることから中期目標期間終了時についても所期の目標を達成することが見込まれる。</p> <p>業務経費についても、平成26年度は平成22年度より86%減となっており目標を達成していることから中期目標期間終了時についても所期の目標を達成することが見込まれる。</p> <p>〈今後の課題〉</p> <p>なし。</p> <p>〈その他事項〉</p> <p>本項目については、他項目と内容が重複するものであるが、これは平成26年度からの評価項目の設定が、「独立行政法人の目標の策定に関する指針」(平成26年9月2日決定)に基づきことによるものである。</p> <p>「独立行政法人の目標の策定に関する指針」</p> <p>Ⅱ 中期目標管理法人の目標について</p> <p>3 中期目標の項目の設定について</p> <p>(3) 評価に際しては、原則中期目標を設定した項目を評価単位として評価を</p>	<p>評定</p> <p>〈評定に至った理由〉</p> <p>〈今後の課題〉</p> <p>〈その他事項〉</p>

103

					<p>実施する。</p> <p>なお、中期目標期間における実績評価(見込評価)の結果、当該機関に設定した目標の項目について改善が必要とされた場合は、当該評価結果を、次期中期目標期間における目標の項目の設定に適切に反映させる。</p>	
--	--	--	--	--	--	--

4. その他参考情報
特になし

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
4-1	4. その他業務運営に関する重要事項 1. 施設・設備に関する計画		
当該項目の 重要度、難易度	—	関連する政策評価・ 行政事業レビュー	平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価							
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
			業務実績	自己評価	(見込評価)	(期間実績評価)	
1 施設・設備に関する計画 各施設の安全かつ良好な施設環境を維持するとともに、業務の目的・内容に適切に対応するため長期的視野に立った施設・設備の整備計画、研究機器の整備・更新計画を作成し、整備を図ること。	1 施設・設備に関する計画 施設・設備の老朽化度合い等を勘案しつつ、別紙4のとおり施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 特になし 〈評価の視点〉 ○施設及び設備に関する計画はあるか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P50～51 〈主要な業務実績〉 平成26年度実績 京都国立博物館緊急屋根等漏水補修工事(予算額182百万円)は、繰越を実施し平成27年度に竣工予定である。 奈良文化財研究所本庁舎建替工事は、(同2,808百万円)は、埋蔵文化財調査の結果を踏まえ、設計見直しを行う予定である。 平成25年度補正予算による東京国立博物館平成館特別展示室等改修工事(同1,819百万円)、なら仏像館外壁等補修工事(同167百万円)、なら仏像館免震展示ケース等整備工事(同439百万円)は、平成26年度において竣工した。 平成26年度補正予算による東京国立博物館法隆寺宝物館空調設備更新工事(同302百万円)は、平成27年度に繰越して工事を継続し、同年度竣工予定である。 平成27年度は、前年度から継続する東京国立博物館法隆寺宝物館空調設備更新工事、京都国立博物館緊急屋根等漏水補修工事を竣工させ、奈良文化財研究所本庁舎建替工事の工事計画の見直しを行う。また、平成27年度予算による東京国立博物館法隆寺宝物館展示機能充実整備等工事(予算額110百万円、京都国立博物館本館(明治古都館)免震改修等工事(同171百万円)、なら仏像館免震展示ケース等整備工事(同1,085百万円)を実施する予定である。	〈評定と根拠〉 評定：B 埋蔵文化財調査の結果、見直しが必要になった奈良文化財研究所本庁舎建替工事以外は、計画どおりに進捗している。 〈課題と対応〉 奈良文化財研究所本庁舎建替工事については、埋蔵文化財調査の結果を考慮した工事計画とすることがあり、検討中である。	評定 B 〈評定に至った理由〉 施設・設備の整備については、展覧会や文化財に対する十分な配慮を行う必要がある中で老朽化や耐震への対策を実施しているところであるが、やむを得ない事情により繰越が実施された事業については合理的な説明が行われており、適切に事業が実施されていると認められる。 また、奈良文化財研究所本庁舎建替工事については埋蔵文化財調査により遺構が発見されたが、法人の責に帰さない事由によるものであること、報道発表を行い発掘内容等について適切に説明を行っていることから適切に事業を実施していると認められる。 〈今後の課題〉 自己評価における課題と対応の通り、奈良文化財研究所本庁舎建替工事については、埋蔵文化財調査の結果を考慮した工事計画とするよう十分に検討すべきである。 〈その他事項〉 ○有識者コメント ・奈文研本庁舎建替工事においては、文化財保護を旨とする国の機関であることから、重要な遺構の保存に配慮した工事計画とする必要がある。	〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉	

4. その他参考情報	
特になし	

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
4-2	4. その他業務運営に関する重要事項 2. 人事に関する計画		
当該項目の 重要度、難易度	-		関連する政策評価・ 行政事業レビュー
			平成27年度行政事業レビューシート 事業番号 0385

2. 主要な経年データ									
評価対象となる指標		達成 目標	基準値	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	(参考情報)
人事交流者数(人)	事務系職員	実績値	-	70	65	57	51		
	研究系職員	実績値	-	30	32	32	32		
研修件数(件)	実績値		-	6	6	6	7		

3. 各事業年度の業務に係る目標、計画、業務実績、年度評価に係る自己評価及び主務大臣による評価										
中期目標	中期計画	主な評価指標	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価					
			業務実績	自己評価	(見込評価)		(期間実績評価)			
2 人事に関する計画 人事管理、人事交流の適切な実施により、内部管理事務の改善を図り、効果的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用すること。 また機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を図ること。	(1)方針 ①国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討・導入する。 ②人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供を行う。また、効果的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 ③機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行う。 (2)人員に係る指標 給与水準の適正化等を図りつつ、業務内容を踏まえた適切な人員配置等を推進する。 中期目標期間中の人員費総額見込額 13.087百万円 但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の	〈主な定量的指標〉 特になし 〈その他の指標〉 ・人事交流者数 ・研修件数 〈評価の視点〉 ○職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討・導入を図ったか。 ○人事交流の促進、職員への研修機会の提供等を行ったか。 ○専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を行ったか。 ○適切に人員配置等を推進したか。 ○人事に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。 ○人事管理は適切に行われているか。	〈実績報告書等参照箇所〉 第3期中期期間実績補足資料 P51～52 〈主要な業務実績〉 ○能力や業績を反映できる人事・給与制度の検討・導入 平成20年度から、勤務評定制度を実施しており、昇給及び勤労手当に反映している。より職員の能力や業績が適切に反映できるように、新たな評価制度の検討を開始した。 ○人事交流の促進、研修 人数は主要な経年データ参照 平成27年度においても同程度の人事交流を実施していく予定である。 この他に地方公共団体から事務系、研究系ともに研修生を受け入れ、交流の促進を図った。 前中期目標期間最終年度 平成22年度研修件数及び参加者数 新任職員、その他職員を対象とした研修 3件(延べ172名) 施設系職員研修 1件(10名) ハラスメント研修 1件(12名) 接遇研修会 1件(約100名) 第3期中期目標期間 平成23年度研修件数及び参加者数 新任職員、その他職員を対象とした研修 3件(延べ168名) 施設系職員研修 1件(11名) ハラスメント研修 1件(約200名) 個人情報保護研修 1件(102名) 平成24年度研修件数及び参加者数		〈評定と根拠〉 評定:B 人事管理、人事交流を適切に実施し、非公務員化のメリットを活かした。また機構の将来を見据え、専門スタッフの配置などの計画的な確保・育成を図った。 詳細は以下のとおり。 ・各年度において勤務評定制度を実施した。また、平成26年度から新たな評価制度の検討を開始した。 ・各年度において人事交流を実施した。交流機関等と真に必要な交流ポストを選択し、集中的に優秀かつ多様な人材を確保した。また、研修についても5～7件を提供し、平成26年度からは新たな育成研修も実施した。 ・引き続き、任期付職員制度を活用しつつ、新たに契約期間に定めのない専門人材の確保策として専門職制度を創設した。配置実績はなかったが、平成26年度に採用活動を行い国際交流部門に1名を配置することが内定した。 ・限られた人員数の中において、適材適所の人員配置に努めた。 ・事務系・研究系ともに計画通りの新規職員を採用できた。 ・専門職制度の創設を行い、専門人材の確保を行った。 ・アソシエイトフェロー制度を活用し、優れた専門的知識等を有する者を採用・配置を行った。 ・人事交流を通じて効果的に優秀かつ多様な人材を確保できた。また、機構内の人事交流を活性化することにより中堅職員の育成、幹部職員候補の育成を図ることができた。		〈見込評価〉 評定 B 〈評定に至った理由〉 専門職制度の創設や、アソシエイトフェロー制度を活用し専門スタッフの計画的な確保を行ったことは、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討や、非公務員化のメリットを生かした制度の活用方法の検討が計画的かつ具体的に行われていると認められる。 近隣大学等との人事交流については、事務系職員、研究系職員ともに交流が実施されていることが認められる。これらの交流により、適切な人員配置の推進等が行われていることが認められる。 また、研修の実施にあたっては他機関で実施する研修への派遣も含め各種研修が実施され、今後の研修についても検討されていることから積極的な取り組みが認められる。 人事管理については、専門的な人材の確保に努めながら一般管理費や業務経費の削減を実現させていることから、計画的かつ適切な人事管理が行われていることが認められる。 〈今後の課題〉 高度に優れた専門的技術を兼ね備えた人材の確保・育成と効果的かつ効果的な運営の両立にあたって、機構においても様々な課題と対応が検討されているところである。常勤職員についての人員費の抑制が専門分野への人員配置、技術の継承、年齢構成などに支障をきたす恐れがないか検		〈評定に至った理由〉 〈今後の課題〉 〈その他事項〉	

<p>合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。</p>		<p>新任職員、その他職員を対象とした研修 3件（延べ168名）</p> <p>施設系職員研修 1件（20名） ハラスメント研修 1件（約230名） 個人情報保護研修 1件（約600名）</p> <p>平成25年度研修件数及び参加者数 新任職員、その他職員を対象とした研修 3件（延べ124名）</p> <p>施設系職員研修 1件（19名） ハラスメント研修 1件（約70名）</p> <p>平成26年度研修件数及び参加者数 新任職員、その他職員を対象とした研修 4件（延べ168名）</p> <p>会計系職員研修 1件（25名） 施設系職員研修 1件（延べ19名） ハラスメント研修 1件（約80名）</p> <p>平成27年度においても同様の研修を実施する予定である。</p> <p>この他に他機関で実施する研修に参加させ、職員の能力開発に寄与した。</p> <p>○専門スタッフの計画的な確保・育成 任期付職員制度の活用 平成23年度 任期付専門員 1名採用 平成25年度 任期付専門員 1名採用</p> <p>高度に優れた専門的技術を兼ね備えた人材を確保すべく、専門職制度を創設し、平成26年度においては国際交流部門に1名を内定した。</p> <p>併せて当該職の人事・給与制度の整備を行なった。</p> <p>○適切な人員配置等の推進 適切な人員配置を推進した。</p> <p>○人事計画の進捗状況、適切な人事管理 人事計画の進捗は比較的順調に進んでいる。</p> <p>・常勤職員等の計画的な採用状況 事務系においては平成24年度より機構独自の採用制度を整備し、下記のとおり採用し施設に配置した。</p>	<p><課題と対応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員的能力や業績等をより適切に評価できるような新たな評価制度の導入の検討を行なっていく。 ・人事交流については、受入が中心となり、双方向の人事交流の増加に向けた施策が行えるよう検討する。また、研究系職員の交流の多様化と交流先の拡大を図る必要がある。研修については、OJTをより効果的に行なうための研修プログラムを効率的に実施する必要があるが、退職手当の通算等の問題もあるため、検討が必要である。さらには、専門的な研修等の導入についても検討する必要がある。 ・雇用実績はあるが、採用数も少ないため、運用しやすくする等、任期付職員制度を見直す必要がある。 ・必要に応じ、組織の見直しについても検討する。 ・現行のアソシエイトフェロー制度をより柔軟に採用・登用ができるよう給与制度を含む制度の見直しが必要である。 ・人事交流については、事務系職員において双方向の人事交流の増加に向けた施策が行えるよう検討する必要がある。 	<p>話し、今後の人事計画にその検討結果を反映させることが望まれる。</p> <p><その他事項></p> <ul style="list-style-type: none"> ○有識者コメント ・常勤職員についての人件費の抑制が継続するなかで、専門分野への人員配置、技術の継承、年齢構成などに支障をきたさないように、今後の人事計画を立てる必要がある。 ・これ以上の人件費の抑制は、将来に亘っての業務の質の維持という点で問題である。 ・アソシエイトフェロー計画が大きな成果を挙げているが、専任職員の欠を埋める代替措置として機能することを期待してはならない。 	
--------------------------------	--	--	--	---	--

		<p>平成25年度採用者数 1名 平成26年度採用者数 4名 また、平成27年度においても2名を採用したところである。</p> <p>研究系においては適性・能力、年齢構成及び業務の効率化、技術の継承等を総合的に勘案し、下記のとおり採用した。</p> <p>前中期目標期間最終年度 平成22年度採用数 13名</p> <p>第3期中期目標期間 平成23年度採用数 13名 平成24年度採用数 8名 平成25年度採用数 6名 平成26年度採用数 4名</p> <p>また、平成27年度においても1名を採用したところである。</p> <p>平成26年度において高度に優れた専門的技術を兼ね備えた人材を確保すべく、専門職制度を創設し、国際交流部門に1名を配置することが内定した。</p> <p>平成20年度において、有期雇用職員の人件費制度（アソシエイトフェロー）を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有する専門職を対象として採用可能としている。</p> <p>前中期目標期間最終年度 平成22年度採用数 17名</p> <p>第3期中期目標期間 平成23年度採用数 18名 平成24年度採用数 19名 平成25年度採用数 17名 平成26年度採用数 40名</p> <p>・人事交流の実績 「人事交流の促進、研修」を参照</p>			
--	--	---	--	--	--

<p>4. その他参考情報 特になし</p>

3. 独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価

目 次

1. 外部評価委員会報告

2. 外部評価委員評価書

(1) 総会

(2) 博物館調査研究等部会

(3) 研究所・センター調査研究等部会

1. 外部評価委員会報告

はじめに

本委員会は、国立文化財機構（以下、「機構」という。）における平成26年度事業及び自己点検評価について、研究所・センター調査研究等部会、博物館調査研究等部会、総会の3回に分けて開催し、評価の適正性や、各事業内容及び業務運営の効率化等について、外部有識者による評価を実施した。評価にあたっては、定性的・定量的評価を基に客観性のある評価に努めた。

総 評

（平成 26 年度実績の概観）

- 平成 26 年度も機構は全体として、日本の文化財保護における中核的な組織として、基礎的な業務から先端的なものまで、幅広く実施してきており、その実績は高く評価されるべきである。
- 平成 26 年度の自己点検評価については、独立行政法人の評価に関する指針が改訂され、B 評価を標準とすることになり統一が図られた。それを踏まえ、機構による自己評価は B 評価が中心となり、大半の業務が順調に進んでいることが確認された。しかしながら、公共性・有益性が高い事業成果についても B 評価とする傾向にあるため、次年度以降は、いまだ積極的に S ないし A 評価を配することを検討していただきたい。また、成果に応じて C 評価とすることも重要であり、そこから予算上の問題、人材不足の問題等も具体的に見つけ、改善していくためにも、このような評価のシステムと外部評価委員会を積極的に活用してほしい。なお、独立行政法人通則法の改正により、自己点検評価の重点を定量的な指標に移行し、定性的な指標は重点的なものに絞り込むなどの対応が必要となることを見込まれるという報告があったが、研究業務や博物館活動の成果の大半は数値によって評価出来るものではない。定性的な業務成果をいかに数値化するかの検討も必要だが、定量評価の重視が機構に最善の方策といえるのか、真剣に議論すべきである。
- 平成 26 年度の機構の活動において特筆すべきは自助努力の成果である。多彩な特別展の開催、平常展示のリニューアル等により、博物館の総来館者数が 370 万人を超え、前年度よりおよそ 40% も増加した。そして、これによる入場料収入の増加に加え、併設されているミュージアムショップやレストランの営業による付帯収入の拡大が自己収入増大に大きく貢献した。これは機構の不断の努力の成果であると言える。このような取り組みの成果である自己収入を機構の長期的な発展の資金として活用するため、平成 26 年度未処分利益の目的積立金化に尽力してほしい。
- 平成 26 年度に完成した京都国立博物館（以下、「京博」）の平成知新館は、単に展示・収蔵施設の充実というにとどまらず、機構全体の新たな発展を示すものである。これに続いて奈良文化財研究所（以下、「奈文研」）の本庁舎改築が進行しているが、歴史・伝統文化の保存と継承をめざす国の拠点としての機構の存在意義や役割をいっそう高めてほしい。
- 東京文化財研究所（以下、「東文研」）、奈文研、アジア太平洋無形文化遺産センター（以下、「センター」）においては、基礎的・先端的な多岐にわたる無形・有形文化財の調査・研究において様々な成果を挙げている。数多くの継続的で地道な調査・研究の成果とともに、特に平成 26 年度は東文研における近代文化遺産への取り組みや、奈文研における東日本大震災の復旧復興事業にともなう簡便かつ迅速な発掘調査記録の作成方法の開発等が見られ、地方公共団体への協力もさらに活発化していくと思われる。
- 文化財レスキュー事業の成果が東京国立博物館（以下、東博）の特別展「3・11 大津波と文化財の再生」「みちのくの仏像」などにおいて結実した。今後も機構として十分に専門性を生かし、被災地の復興

に寄与していかれることを望む。また、新たに「文化財防災ネットワーク推進本部」を設け、事業が本格的にスタートしたことは、今後の大規模災害等に備える点で、重要な意義がある。

(国立文化財機構をとりまく状況について)

- ・機構は独法化以降、組織をあげて様々な改善に精力的に取り組み、自己収入や寄附金の増加を実現してきた。しかし、健全な事業運営の上で、これ以上の総予算の削減は、限界に達していると言わざるを得ない。単純な経済利益の原理と即応しない文化・文化財を専門とする法人に対しては、特段の配慮があるべきと考える。さらには、国立博物館、研究所ともに、諸外国の同様の機関等と比較すると、その予算規模・職員定数は全く少ないと言わざるを得ない。国には文化国家の責務として、機構への理解を一層深め、財政的にも積極的な支援を期待したい。
- ・さらに、センターに本来付くべき運営交付金が全くないというのは異常な事態である。ユネスコの期待にも背くことであり、センターへの運営交付金が、しっかりと新しく割り当てられるよう特段の配慮を求め、調査・研究体制の整備・充実を進めていただきたい。
- ・機構の事業改善に伴い、各職員の業務の範囲が拡大し、対応能力の幅を広げるといった人材育成上の効果も数多くもたらされたと思われる。一方では繁忙度が増幅し、加えて、人件費削減のため非正規雇用の増大を招いており、文化財の調査・研究、修理・保存といった機構の活動の根幹となる専門能力の深化や後進への継承が危うい状況に置かれている。今後もこの限られた人員・予算により全ての業務をこなして行けるのかどうか、現在の職員配置計画等がはたして妥当かどうか等を抜本的に考え直すべき時期に来ているように思われる。

(国立文化財機構の将来について)

- ・日本の歴史・伝統文化の継承と理解は、豊かな人間形成や活力ある社会構築、さらには将来の日本の文化・社会の発展の基礎として大きく寄与するものであり、「文化芸術立国」の実現を目指す我が国において、機構が果たす役割は将来にわたって大きなものがある。また、来る2020年に東京で開催される第32回オリンピック競技大会・パラリンピック競技大会の際には、外国人が日本の歴史・伝統文化に触れることのできる象徴的な場として、機構が重要な役割を果たすことが期待される。
- ・2019年にICOM（国際博物館会議）世界大会の日本（京都）招致が決定したことは、我が国の博物館及び博物館学の歴史の上で記念すべき事象である。この招致に機構が果たした役割は大きく、大会開催の実現に向けて、機構には一層のリーダーシップが求められる。西アジアやアフリカで多くの博物館や遺跡での武力衝突やテロによる被害が後を絶たず、また文化財の違法な流通にも国際的な監視の体制強化が求められている折り、この大会招致の意義は大きい。まさに今、機構自身の将来ビジョンを策定して広く社会にアピールし、理解を深めていただくチャンスが到来した。文化、文化財は心を豊かにして、平和を築く重要なツールにもなりうる。この追い風を逃さずに具体化を加速していただきたい。

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため にとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承【博物館】

(概観)

- ・各館ともに限られた財源のなかで、収蔵作品の充実を図り、重要性や緊急性に応じて、文化財の応急

修理や本格修理に適切に取り組んでいる。寄贈・寄託の受入れについては従来の実績を大幅に増加しており、博物館への信頼の表れと評価したい。

(特記事項)

- ・館によって新規収蔵品の件数と予算枠にかなりのばらつきが生じるという問題に関しては、今年度はかなりバランスがとれており、機構全体で必要な予算枠を確保し、各館の方針と要請に従って予算を配分する体制ができつつある。
- ・各館とも館蔵品の修理は計画的に行われているが、九博の館外所蔵者負担による文化財の修理に注目したい。

(希望事項)

- ・地方における博物館の相次ぐ閉館や、また寺社仏閣の文化財の盗難等、地域の文化財の保存の問題は深刻である。機構は、文化財の海外や民間への流出を防ぎ、守るべく、従来にも増して、資料の寄贈や寄託はもとより、購入も積極的に進める必要が生じて来ている。そのためにも、資料買取り予算の増額や、収蔵スペースの新規確保は欠かせない課題である。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信【博物館】

(概観)

- ・各館とも特別展・平常展をはじめ、文化財と接する多様な機会を国民・来館者に提供した。特に、平成26年度は大規模な展覧会が多く開催され、企画の適時性、内容の充実、国際性、来館者数において目覚ましい成果を上げるとともに、特色のある教育活動が充実してきたことが注目される。

(特記事項)

- ・京博の平成知新館は、これまでの平常陳列の展示館としてのあり方を一新した斬新な展示環境である。本来、最も重視されるべき館の特色を示す平常陳列に光を当てており、京都文化の多彩な様相とその本質を紹介できる態勢が整ったと言える。また、それを契機としたボランティア活動等も順調に推移したようである。今後の京博の取り組みを注視したい。
- ・実物大の建物内部を再現してリアル性を入館者が体験できた東博の「栄西と建仁寺」展、東北の文化のすばらしさを示した「みちのくの仏像」、一地域を取り上げた、冒険的だが斬新な内容の京博の「南山城の古寺巡礼」展、国宝指定への道のりを紹介して文化財保存の取り組みも紹介した奈良国立博物館（以下、「奈良博」）の「国宝 醍醐寺のすべて」、九州国立博物館（以下、「九博」）の「古代日本と百済の交流」など意欲的な特別展が目立った。
- ・日中韓の国立博物館が共同研究し、合同企画特別展が開催されたことには高く評価したい。今後もこうした展覧会が継続的に各国持ち回りで開催されることを期待したい。
- ・東博の「みどりのライオン 体験コーナー」の実施、「ジュニアガイド」の作成、京博での「ミュージアム・カート」や小中学生向け「ワークシート」の発行、奈良博での小中学校向け「メールマガジン」の配信、「世界遺産学習」の中で「仏像の衣裳を着てみよう」の試み、九博での学校貸出キット「きゅうぱっく」の実施など、各館で工夫を凝らした事業が展開されている。
- ・東博における託児サービス、障がい者のための点字版パンフレットの配布等はバリアフリーを超えたユニバーサル・ミュージアムの実現に向けた試みとして高く評価したい。

(希望事項)

- ・快適な鑑賞環境の提供に関して、最も重要な問題は、特別展の待ち時間の対策であろう。各館で既に苦慮しているところではあるが、2～3 時間待ちが常態化している実情を放置して病人などが出れば訴訟問題にもなりかねない。世界の博物館の先進事例、病院や娯楽施設等における待ち時間対策のあり方も徹底的に調査し、有効な対策を講じていただきたい。なお、鳥獣戯画展において、長い待ち列に並ぶ来館者に対してテントと飲料水を用意し、退屈させないようクイズ用紙を配布するなどのきめ細やかな配慮がなされていた。こうした工夫と配慮は高く評価される。混雑緩和のための抜本的な対策も必要だが、今後もこのような取り組みも継続して実施すべきであろう。

3 我が国における博物館の中核としての機能の評価【博物館】

(概観)

- ・公立博物館・美術館等への助言や援助は着実にこなわれており、目標値以上の成果を上げている。また、関連出版物等を刊行し、世界各地から海外の研究者を招聘するなどして、我が国における博物館の中核としての役割を果たしている。

(特記事項)

- ・2019 年の ICOM 世界大会の日本への招致に機構が果たした役割は大きく、大会開催に向けてナショナルミュージアムとしての機能の強化がますます期待される。
- ・特別展「みちのくの仏像」や特別展「3. 11 大津波と文化財の再生」、ならびに「東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究」等、東日本大震災の被災地に関わる展覧会企画や研究を行うことなどによってもまた、文化財の保護等に関する役目を大いに果たしている。

4 文化財に関する調査及び研究の推進【博物館・研究所・センター】

(概観)

- ・基礎的・先端的な多岐にわたる文化財の調査・研究において、様々な成果を挙げている。また、科学研究費・寄附金など外部資金による研究費を獲得して共同の調査・研究を多方面にわたって展開し、大きな成果を挙げていることを高く評価したい。

【研究所・センター】

- ・文化財に関する基礎的・先端的な調査・研究について多方面にわたり、多数の研究者が協力して総合力を発揮し、期待される成果を十分に挙げている。
- ・センターは極めて少ない予算と人員の中、果敢に東南アジアの無形文化遺産保護に関する調査・研究に取り組んでいる。

(特記事項)

○東文研において以下の点を特に評価する。

- ・美術雑誌「みづゑ」のアーカイブによる明治期全期間分の一般公開の開始や、文化財デジタル画像形成に関する研究において、『大徳寺伝来五百羅漢図』、『洋人奏楽図屏風光学調査報告書』等が刊行される等、めざましい研究成果が広く知られる意義は大きい。
- ・古社寺所蔵の歴史資料調査では仁和寺御経蔵聖教目録の刊行や三仏寺神像の研究で顕著な成果がみられた。
- ・近代文化遺産への取り組みは先駆的で極めて高く評価される。静岡県の葦山反射炉、山口県萩市の反

射炉、長崎市のいわゆる軍艦島などの調査や研究、さらに修復方法の検討などは、ユネスコの世界文化遺産登録への道を実にした。

○奈文研においては以下の点を特に評価する。

- ・継続的な平城宮跡や藤原宮跡での発掘調査は長年の地道な成果が毎年、蓄積されている。また、平城宮佐伯門西側の南一坊大路の発掘調査では、敷粗朶工法や側溝土留め工事等を含む大路の良好な遺構を明らかにするなど、日頃のたゆまぬ努力とその成果を評価したい。
- ・デジタル技術等を用いた簡便かつ迅速な発掘調査記録の作成方法の開発に努めていることは、被災地での埋蔵文化財の発掘調査等にかかる協力を支える有意義な取り組みである。
- ・受託研究のうち「地震・火山噴火予知研究協議会」委託事業の災害痕跡の考古・地質学的データの収集・データベース構築は、学術的に有意義であるとともに、社会的貢献度も大きい。

○センターでは以下の点を評価する。

- ・研究ネットワークづくりに力を入れており、マレーシア、ベトナムなど 5 か国での情報収集、データベースの構築、中国やフランスでの国際会議への出席など精力的な活動が成果として形になりつつある。

(希望事項)

- ・日本における昨年来の世界遺産事情から、近代の文化財や産業遺産への注目度が高まっている。機構にはそれらの調査や評価、保存計画などさまざまな分野で、国内中核機能を担うべく体制の強化が望まれる。
- ・センターについては基礎研究を行うための組織的・財政的基盤を発足当初より欠いており、特に研究職員の科研費獲得が独自にも行えるようになることを望みたい。また、東文研との密接な連携を取りながら、調査・研究体制の整備・充実を進めていただきたい。

【博物館】

- ・各館の特徴・個性を生かした有形文化財等に関する調査・研究に取り組んでおり、着実に成果を上げている。また、平成 26 年度は、これまでもまして機構内の各施設、機構外の機関との交流が一段と進み、相互の情報交換、研究協力により著しい成果を上げたと評価される。

(特記事項)

- ・京博の実施した京都旧家の蔵品調査によって文化財の寄贈を受けることになったことは、大いに意義のあることであった。「旧家の文化財」への取り組みは、これを先進事例として、他館に於いても検討されたい。
- ・東博の宮崎県西都原古墳群、京博の島根県鱒淵寺などのように、地方との研究交流が進むことは地方の貴重な文化財に光を与えるのみならず、研究の質の向上に資するものと考えられる。今後もより多くの地方との研究交流が進むことを期待したい。
- ・九博における「市民ボランティアと行う IPM」や「みんなでまもるミュージアム」等の活動は、機構のイメージを変えて行くものと期待される。さらに、高校所蔵考古資料の所在調査も全国的な広がりを見せていることは、新しい取り組みとして評価すべきであるし、「考古学の甲子園」となるよう今後に期待したい。

(希望事項)

- ・保存環境・保存修復に関わる調査・研究や、効果的展示や教育活動に関する調査・研究は、博物館で

なければ取り組めない領域であり、引き続き積極的に展開されることを期待したい。

5 文化財保護に関する国際協力の推進【研究所・センター】

（概観）

- ・両研究所とも、文化財保護のための調査・研究、保存修復、人材育成や技術移転など多分野にわたる国際協力や国際研究集会の開催などにおいて、日本ならではの質の高さで大きな実績を挙げており、非常に高く評価できる。

（特記事項）

- ・東文研が同研究所内とメキシコで行った「紙の保存と修復」に関する研修は、多くの外国の研究者が参加し、きめ細かな内容が好評であった。さらに厚みのある人材育成を発展させ、いずれは受講者が自国で自分の手で紙文化財を修復できる態勢づくりを担っていくことを期待したい。
- ・日中韓の外交関係の低迷、西アジア等における国際的なテロ活動等、文化財関係の国際協力は困難の度合いを増しているが、無形文化遺産部門での交流、中国敦煌での共同、日韓合意書に基づく研究会など、貴重な人的交流を維持し、多面的な成果が見られた。

（希望事項）

- ・イスラム過激派組織による文化財の破壊、盗掘等が起こっている。バーミヤーン石窟東大仏再建の問題も含め、研究所がシリアなどの中東地域で文化財の保存に取り組んできたノウハウや経験を生かし、文化庁、ユネスコなどと協力し、展望を見出してほしい。
- ・センターもユネスコによる5年評価を十分に踏まえた上で、アジア太平洋地域での国際的な協力に向けて、さらなる体制整備をお願いしたい。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信【研究所・センター】

（概観）

- ・研究所のウェブサイト等による調査・研究成果やデータベース・デジタルアーカイブ等の発信・公開が多様に展開されており、多くの人々からアクセスされていることを高く評価したい。また、定期刊行物、報告書、各資料館における展示など多岐にわたる成果発信においても意欲的な取り組みが見られた。

（特記事項）

- ・東文研は、従来、ウェブを用いた文献検索システムの開発に力を入れてきたが、今年度はとくに横断的な総合検索システムを開発した努力を評価したい。
- ・奈文研における「文化的景観」に関する調査・研究は、各地の世界遺産事業でも頻繁に適用されるカテゴリーであるだけに、その成果が注目されており、年度末に翻訳刊行された「World Heritage Paper 26」は時宜を得たものといえる。
- ・奈文研の平城宮跡資料館は「最大」「最多」「最小」などの視点で子供向けに分かりやすい展覧会を開催して入館者増に結びつけるなど、創意工夫の取り組みが成果を挙げた。また、飛鳥資料館では、地理的な条件もあって来館者数が伸びなかったものの、企画展や講演会の開催数、図録類刊行では例年以上の努力がなされた。
- ・奈文研の庁舎建替えにかかる調査結果の公表では報道発表のほか、ウェブサイトの「奈文研だより」

でも 39 回を数える報告を行うなど積極的に取り組んでいる。

- ・センターのウェブサイトにおける 8 言語での情報発信については、特筆に価する。

(希望事項)

- ・東日本大震災に対応した「文化財レスキュー」事業での東文研及び奈文研の素晴らしい実績を活かして、これからの危機対応体制の整備に向けた成果発信をさらに進めていただきたい。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上【研究所・センター】

(概観)

- ・国・地方公共団体等に対する協力・援助・助言では、委託事業・連携事業はもとより、多分野において高いレベルの大きな実績を挙げていることは、非常に高く評価できる。

(特記事項)

- ・機構が新たに「文化財防災ネットワーク推進本部」を設け、文化財防災事業に取り組むことになったことは、今後の大規模災害等に備える点で重要な意義がある。とりわけ歴史史料ネット等との連携強化は、行政と民間が新たな形で協力関係を築く試みであり、今後の活動を大いに期待したい。また、「けいはんなオープンイノベーションセンター」（旧私のしごと館）での収蔵庫整備は、今後のレスキュー事業に大きく貢献するであろうことを期待したい。
- ・奈文研に関して、東日本大震災の復旧復興事業にともなって、埋蔵文化財を記録するために、独自に開発された高所リモート撮影が導入されたことは興味深い。このような協力は今後、さらに活発化していくことだろう。

(希望事項)

- ・「文化財防災ネットワーク推進本部」が災害時における文化財保護組織の中心になっていくよう、活動体制を充実させていただきたい。
- ・国交省所管の平城宮跡の国営公園、飛鳥の国営公園（キトラ古墳）における展示公開・体験学習施設が実現段階にあるが、その展示内容や学芸機能、専門家の配置等に対して国交省と適切な関係を築いて奈文研が積極的に関与し、真に国民の歴史理解に役立つ施設になることを望む。また、文化庁所管のキトラ古墳の保存施設については、文化庁の人的・財政的な組織に対して奈文研・東文研が積極的に協力していくべきである。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

(概観)

- ・経費削減については、使用資源（電気、ガス、水道料金等）の節約、共通的事務の一元化による業務効率化、計画的に一定の業務をアウトソーシング等による地道な努力を積み重ねており、大いに評価できる。
- ・財政難の中、定量的目標を設定した自己収入が 29% 増に達し、寄附金件数は目標の 1.6 倍、科学研究費補助金も 107 件と目標の 1.4 倍を獲得しており、経営努力を高く評価したい。

(特記事項)

- ・東博では、平均的採択率からすると評価すべき高採択率を背景として、科学研究費が各所で活用されている。また、資金獲得という点で、ISID・クウジット社（東博）、凸版印刷・NHK（九博）などとの

共同事業の例に見るように、民間企業との共同事業の展開も重要である。

- ・東博では平成 26 年春、正門脇の無料ゾーンにミュージアムショップを新設したが、ミュージアムショップやレストランのリニューアル、あるいは新たなグッズやメニューの開発は、博物館利用者の獲得の上で重要である。

(希望事項)

- ・多様化し高度化する機構の活動に対応するため、現在の枠組みを超えた一段と広範囲での業務のアウトソーシングと外部リソースの導入を検討する余地がある。また、一般競争入札を推進することは止むを得ないが、委託業務の「質」が担保されるように配慮を願いたい。
- ・寄附金については、機構の財源の新しい柱としてさらに強化するべきである。海外の著名美術館、博物館から積極的に情報を入手し、寄附金獲得のための実務や環境整備の実情について検討し、これまでに無い新たな仕組みの開発も検討してはどうか。

Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

(概観)

- ・平成 26 年度は自己収入の増加が目覚ましく財源の大きな一部を構成するようになってきた。このような収入増加と財源の多様化を図ることは機構の将来にとって非常に大事であり、こうした成果が今後も継続して達成されることが期待される。さらに、これまでほとんど認められることの難しかった経営努力に対して、その認定基準要件が幾分なりとも改善され、収入目標を超えたものを新規に利益として認められるようにするという方針が示されたことは同慶の至りである。

(特記事項)

- ・本年度は来館者数の大幅な増加に伴う入場料収入増、ミュージアムショップ等での販売手数料増、科学研究費の採択件数など、機構の本来的な事業の展開によって収入増が図られたことは誠に健全である。

(希望事項)

- ・平成 26 年度末処分利益の目的積立金化は何としても実現し、機構の長期的な発展の資金として活用してほしい。また、各施設が独自に活用できる仕組みへの改善を検討してほしい。
- ・センターに本来付くべき運営交付金が全くないというのは異常な事態である。ユネスコの期待にも背くことであり、センターへの運営交付金が、しっかりと新しく割り当てられるよう特段の配慮を求めたい。

Ⅳ その他人事計画等

(概観)

- ・諸外国の国立博物館に比較して、我が国の博物館は予算規模とともに職員定数についても全く少ないと言わざるを得ない。適正な機構運営のためには、これ以上の人員削減や人件費の圧縮は決して望ましいことではない。特に、将来の研究体制維持のためにも、できるだけ常勤の研究職を増やす努力を進めるべきである。その為に人事給与制度の見直し、外部の人材・組織・資金の活用を視野に、新たな協業のあり方を検討されることが急務である。

(特記事項)

- ・研究職・事務職の中間的立場として専門職を平成 26 年度に創設し、国際交流分野での人材確保を行ったことは、一つの試みとしてその成果を注目したい。成果によっては、専門職のさらなる拡大も考えられよう。

(希望事項)

- ・任期付き常勤職員のアソシエイトフェロー、非常勤の客員研究員・特任研究員・研究補佐員などの役割比率がかなり高くなってきており、将来の研究体制維持に危機感を覚える。できるだけ常勤の研究・学芸職を増やす努力を進めていただきたい。優秀な人材を、世代構成において切れ目のないように獲得・育成できるように、また研究環境のさらなる整備充実に、予算的な配慮をお願いしたい。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

- 委員長 小林 忠（学習院大学名誉教授・岡田美術館館長）
- 副委員長 横里 幸一（NHKプロモーション特別主幹）
- 委員 鮎川 眞昭（公認会計士）
- 委員 稲田 孝司（岡山大学名誉教授）
- 委員 岡田 保良（国士舘大学イラク古代文化研究所教授）
- 委員 河合 正朝（慶應義塾大学名誉教授・千葉市美術館館長）
- 委員 酒井 忠康（世田谷美術館長）
- 委員 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
- 委員 玉蟲 敏子（武蔵野美術大学造形学部教授）
- 委員 浜田 弘明（桜美林大学教授）
- 委員 藤田 治彦（大阪大学大学院文学研究科教授）
- 委員 森 弘子（福岡県文化財保護審議会専門委員）
- 委員 柳 林 修（読売新聞大阪本社記者）

2. 外部評価委員会評価書

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎総会

外部評価委員名

横 里 幸 一

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

当機構の基盤的業務とも言える文化財の収集・整備は、今年度も概ね順調に成果を上げていると見受けられる。今後も寄贈・寄託の一層の拡充を図るため、広く内外の情報を集めるなど更に工夫を重ねていただきたい。

近年、地域の文化財の保存について必ずしも十分な対応がとられていない、とのニュースが報じられている。盗難も少なからず起きているようである。寺社仏閣の文化財は、信仰上の理由により取り扱いが難しいと思われるが、散逸を防ぎ安定的に後世に継承するため、当機構が大きな役割を果たすことが出来るのではないだろうか。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

今年度の特別展開催については、各館がそれぞれの個性・得意分野に応じて魅力ある企画をラインナップし、たいへん見応えのある展開となったことは大いに評価したい。今後も多彩な企画が仕込まれていると伺っており、期待している。

また、ウェブサイトの制作やメールマガジンの配信など新たな広報活動に大変力を注がれている。この業務は、更にレベルを上げることで大きな効果が見込まれるものである。今後、新たな手法の開発だけでなく、国内外のアクセス数・配信数など数量的なデータについても提供していただきたい。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

今、日本文化の海外発信が強く望まれている。勿論当機構だけで実現できるものではないが、期待される大きな役割のひとつであり、既に幾つかの実績も重ねて来ている。今後、行政機関、民間団体やメディアの協力を求め、自主企画展の開催などより積極的な展開を図り、期待に応えていただきたい。

昨今は人気の高いクールジャパン、サブカルチャーといった面が取り上げられることが多く、これは結構なことであるが、加えて日本への観光客増加等に伴い伝統文化への関心の高まりも感じられる。この追い風を逃さずに具体化を加速していただきたい。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

5 文化財保護に関する国際協力の推進

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

独法化以降、組織をあげて様々な改善に精力的に取り組み、事業活動を活性化させるとともに、社会的な認識・評価を高めてきた。ここに至る皆様の努力に対しては、心から敬意を表したい。その過程で各職員のやるべき業務の範囲が拡大し、対応能力の幅を広げるといった人材育成上の効果も数多くもたらされたと思われる。しかし一方では繁忙度が増幅し、肝心の専門能力の深化や後進への継承といった基本部分が危うい状況に置かれているのではないかと気がかりである。

文化に対する国民的な関心が深まるなか、当機構には多様な期待が寄せられている。それに応えるため、今後も機構だけの限られた要員・予算により全ての業務をこなし続けて行けるのだろうか、この点を抜本的に考え直すべき時期に来ているように思われる。この度の専門職制度の導入も有効な施策であろうが、大きな展開を図るためには、やはり外部の人材・組織・資金の活用を視野に、新たな協業のあり方を検討されることを強く望みたい。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

長年の課題であった利益の目的積立金としての活用がようやく認められる見通しであるとの報告を伺ったが、何としてもこれは実現していただきたいと願っている。

外部資金の活用は、言うはたやすいが極めてハードルの高い困難なテーマである。昨年も述べて繰り返しになるが、例えば海外で導入されているように支援企業名を冠した職位名称を用いる、あるいは展示室ごとに支援企業名を明示するなど、外部の協力レベルを一段上げるためには、これまでには無い新たな仕組みの開発も検討してみたいかであろうか。

IV その他人事計画等

今後の文化政策を進めて行く上で、実務的なリーダーシップの一端は当機構が担って行かねばならないであろう。そしてその活動を円滑に進めて行くためには、国民がしっかり機構のあり方を支持してくれることが必須である。2020年に向け各方面が様々な声を上げ始めているが、今、機構自身も将来ビジョンを策定して広く社会にアピールし、今後のあり方に理解を深めていただくチャンスが到来したと思われる。このチャンスをぜひ活かしていただきたい。

あわせてサポーター層を広げていくことも重要である。ボランティア、インターンシップ、キャンパスメンバーズなどの施策は、その直接的な目的・成果に加え理解者・支持者の拡大にも大きな効果をもたらしていると思われる。オピニオンリーダー層だけでなく一般の人々を機構のサポーターとして増やすことはたいへん大切なことであり、今後もぜひ持続していただきたい。

◎総会

外部評価委員名

鮎川眞昭

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

外部評価委員会総会の冒頭、両部会長から発言があり、例年のことではあるが、予算面での制約の中、様々な工夫を重ねて実績を上げているとの認識が示されました。私も前年同様、この点については全く同感であり、限られた予算と人員の中で努力し、創意工夫のもとに機構は業務を遂行していることは高く評価されるべきと思います。

なお、今年度においては「独立行政法人通則法」の改正がなされ、これに伴い自己点検の評価報告書における“評定区分”が変更されています。これは従来、標準的達成値としてのA評価を、新基準ではB評価に変更するものであり、このため自己点検の段階でも些か戸惑いがあったように見受けられます。部会長のコメントでもこの点が指摘されていました。評価基準値の認定には、やはり自己点検の経験と実績を積み重ねていくことが必要であり、それによって評価の客観性が定着してくるものと思われます。

評価委員会による評価も回数を重ね、長年にわたって継続されていますが、そうした中で評価委員会の機能や評価自体もマンネリ化しているのではないかと、あるいは評価が形式的になっているのではないかという意見が委員の発言の中にありました。今回の評価基準（区分）の見直しは、こうした懸念と何らかの関連があるのかもしれませんが、理由は明確にはされていないとの印象を持ちました。また、評価において定量評価を重視して、定性評価は相対的に劣後するとの印象を与える基準の在り方に些か疑問を感じます。行政当局が独立行政法人の運営に可能な限りの合理性と効率性を求め、経費削減と合理化を要求するのは理解できるものの、こうした画一的な効率性追求は、当機構の場合には必ずしも最善の方策といえるのか、真剣に議論すべきだと思います。

収蔵品の取得がそれぞれの博物館単位で行われており、新規収蔵品の件数と予算枠にかなりのばらつきが生じるという問題に関しては、今年度は東京国立博物館（以下、「東博」）、9件、139百万円、京都国立博物館（以下、「京博」）9件、227百万円、奈良国立博物館（以下、「奈良博」）、15件、261百万円、九州国立博物館（以下、「九博」）、14件、727百万円という実績でした。各博物館の独自性と個性を尊重し、それぞれの判断で収蔵品の取得を行うのが原則であると理解しています。ただ個別枠に偏らず、全体の予算をうまく充当するという観点では今年度はかなりバランスがとれており、機構全体に必要な予算枠を確保し、各博物館の方針と要請に従って予算を配分する体制ができつつあるとの印象を受けました。結果として必要かつタイムリーな文化財の購入確保ができているとの印象を受けました。

運営費交付金が機構の自助努力による自己収入の増大によって結果的に削減されてしまうのではないかと、この構造的な問題については昨年度の評価書でも触れました。しかし平成25年度末の剰余金31百万円に関して、機構では京都博物館の達成利益（約1.7百万円程度）についてのみ認定対象でありましたが、少額であり経営努力の説明が困難であったため、これは結果的に目的積立金としては認められなかったとのこと。一方、国立美術館では目的積立金の申請が認められていることから、機構の当年度の剰余金222百万円については、国立美術館の事例も勘案して、目的積立金として承認を受けられるよう文化庁と協議する予定であるとの報告がありました。自己収入の拡大に努力した結果が正しく機構に留保され、自らの活動に充当できるよう、行政側の理解が必要であると強く感じます。

当年度の機構の活動において特筆すべきは自助努力の成果です。当年度は昨年度に比較して博物館来館者数は107万人増の389万人に達しました。これは京博の平成知新館のリニューアルオー

ブンや東博の平成館特別展示室改修工事完成などの施設面での拡充とともに台北故宮博物館展や鳥獣戯画展などの特別展の大成功の結果であり、機構の不断の努力の成果であると言えます。これによる入場料収入の増加に加え、博物館に併設されているミュージアムショップやレストランの営業による付帯収入の拡大が大きく貢献しています。入場料収入は前年度の675百万円から357百万円増の1,031百万円と53%増となり、付帯収入も721百万円から978百万円と36%増となっています。これも機構による自己収入増大への積極的な取り組みの成果であると言えます。前述のとおり、このような自助努力の成果は機構に留保され、今後の機構運営の積極的財源として活用されるべきであると考えます。

前回も申し述べましたが、緊急災害時のリスク管理についての対応の更なる必要性です。当年度は「文化財防災ネットワーク推進」事業が本格的にスタートしたことが特筆すべきことです。今後30年以内に首都直下型地震や東海、南海、東南海トラフ連動の大震災など、マグニチュード9クラスの巨大地震が発生する可能性が非常に高いと言われており、文化財を保護するために当機構の保有する施設等について高い耐震強度を確保することが急務です。予算が限られている中でこうした分野にどれだけ先行投資が出来るかがカギとなります。すでに「理事長のマネジメント強化」策の一環として危機管理マニュアル等リスク管理に関連した諸規定類の改訂を行っているとの報告がなされています。今後の評価項目として、このような対策の充実度が評価項目として追加され、安全性の指標とすべきではないでしょうか。

文化財の修理、修復のため、あるいは科学的な調査研究に様々な最新機器や技術の導入、並びに文化財保護のための国際協力の推進も多角的に推進されています。これらの活動を支えるための財源の手当ても強く望まれます。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

来館者対応サービスについては、今年度、鳥獣戯画展においてマスコミでも取り上げられたとおり、長い待ち列に並ぶ来館者に対してテントと飲料水を用意し、また待ち時間を退屈させないようなクイズ用紙を配布するなどのきめ細やかな配慮と工夫がなされています。こうした工夫と配慮は非常に高く評価されています。今後もこのような工夫と心配り（おもてなしの心）が機構の評価につながると思います。

来館者に対して快適な観覧環境を提供するという目的のため、施設、設備の整備充実はもちろんですが、付帯設備としてのミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実も付帯収入確保の点からも有益です。その成果が出ていることは前述した通りですが、今後もこのような努力を継続されることが望まれます。

“音声ガイド”や日本語以外の解説パンフレットなどもサービスが充実してきており、今後益々増えるであろう海外からの観光客（外国人来館者）対応にも更に積極的に取り組んでいくことが大事だと思います。

今年度においても平常展は、来館者数および出品数など、概ね目標を上回る活動が展開されていますが、奈良博のみ前年度を下回る結果となっています。

一方、特別展で見ると、東博、京博、奈良博、九博ともに好評を博した特別展が目白押しでほとんどが目標来館者数を上回り、大成功を収めています。前回の評価書でも述べましたが、これまでは定量評価値として来館者数と陳列品数などが報告されているものの、それぞれの入場料収入金額は「評価委員会」に報告されていませんでした。しかし今年度の報告ではこれらのデータもすべて記載されており機構による情報開示の透明性は大きく改善していると思います。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

多岐にわたるテーマが設けられ、それぞれに適切な調査研究活動が展開されていると思います。研究成果の公表も多様なメディアを利用して活発に行われており、情報のデジタルアーカイブスや検索システムの充実推進されていることが評価されます。

調査研究能力の維持、向上には優れた人材の確保が欠かせませんが、機構では調査研究向けの人件費予算に制約があり、常勤職員を確保するのが困難な状況であると聞いています。質的水準を維持するためには調査研究員の専任化、常勤化が欠かせませんが現状ではこうした人材の確保が難しく、便宜的にアソシエイトフェローという職位の人材を利用しています。現在、「専門職」制度を新設して1名を採用したとのことですが、正規職員の増員が難しい中でこの制度が定着するのか、今後の推移を見守る必要があります。また、機構の業務の拡大と高度化、専門化に伴い外部からの人材を導入するシステムを確立する必要もあります。IT専門家や国際業務対応などに必要なスキルを備えた人材を当面考えているようですが、外部リソースの更なる導入、拡大を検討することが急務であると思われます。

調査研究の国際化の活動については、海外からの研究者招聘も活発化し、日本から海外への調査研究員の派遣ともバランスが取れていると思われます。今年度はかなり積極的に海外からの研究員招聘を増やしたことが顕著にみられます。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

多岐にわたる調査研究テーマが設けられ、それぞれに適切な活動が展開されており、特段のコメントはありません。

5 文化財保護に関する国際協力の推進

文化財保護に関する様々な分野での国際協力事業が展開され、適切な活動が実施されており、特段のコメントはありません。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化が推進されています。各博物館の広報印刷物の刊行やウェブサイトの活用推進も高く評価できますので、特段のコメントはありません。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

地方公共団体への協力等は全国各地の公私立博物館に対する収蔵品の貸出やこれらに対する援助、指導助言などを通じて活発になされており、特段のコメントはありません。前述のとおり、今年度は東日本大震災を契機として「文化財防災ネットワーク推進」事業が実施されていることが特筆すべき点であり、高く評価される事業だと思います。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

現在、文化財機構に対しては平成22年12月7日閣議決定の基本方針のもとで、中長期的に一般管理費の15%以上の削減、業務経費の5%以上の削減という目標が設けられています。また、平成19年度の法人統合による機構運営に際しては平成23年度までの5年間で19年度一般管理費の10%相当の削減を図ることが目標に掲げられています。昨年度も指摘させていただきましたが、この目標は既に平成23年度までに達成すべき過去のものとなっており、機構においてこのような目標自体に意味があるのか理解できません。

当年度、一般管理費中の業務経費に次ぐ重要費目である人件費の削減については「国家公務員の給与水準等を十分考慮してその適正化に取り組むこと」とされており、昨年度までは、「国家公務員の給与の改訂および臨時特例に関する法律」に準じて平均7.8%の減額が行われていました。しかし、この削減支給は昨年度で終了したことから、当年度の人件費は増加に転じ、総額では前年比900百万円増の、10,157百万円となりました。文化財機構の運営上、人件費問題にどう対処すべきか、一般の国家公務員給与に追随するだけでよいのか、職員人事制度全体の在り方を再検討すべき時期に来ているのではないかと考えます。

前年度に続き、文化財機構は使用資源（電気、ガス、水道料金等）の節約、削減に努めるほか、経費削減のための具体策として以下のような対応が含まれています。

- ・ 共通的事務を一元化して業務効率化を図ること（具体的には財務会計システムや web 給与システム、機構 VPM の導入など）
- ・ 計画的に一定の外注可能な業務をアウトソーシングして経費削減につなげること（博物館の施設管理運営や来館者対応業務等の民間競争入札による業務委託などを推進すること）

機構は、これらの地道な努力を積み重ねており、経費削減努力は大いに評価できると思います。ただ、多様化し高度化する機構の活動に対応するため、現在の枠組みを超えた一段と広範囲での業務のアウトソーシングと外部リソースの導入を検討する余地があると思われま

す。自己収入の財源としてもう 1 つ大事なものは寄附金です。機構の財源の新しい柱としてさらに強化すべきものと考えます。我が国では寄附金文化がない、公益のための寄付の習慣が乏しいのは致し方ありませんが、長期的には寄附金収入をどうしたら飛躍的に伸ばせるのかを研究してみる価値はあります。海外の著名美術館、博物館から積極的に情報を入手し、寄附金獲得のための実務や環境整備の実情について検討されることを期待します。

文化財の調査・研究や修理・保存などの専門家の確保、育成の観点から現在の公務員人事制度を準用した形での人事給与制度がはたして機構の場合、適切かつ妥当かどうかを議論することは極めて大事です。貴重な専門家人材の流出、過重労働負担などの問題や、文化財に関わる人々の間に非正規雇用（不定期採用、パートタイマーや嘱託などの人員）を生むことも懸念されています。こうした人事にかかる長期的・継続的な問題については文化財機構においての継続的な取り組みとモニタリングを行い、その結果を総会に報告することが望まれます。

Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

今年度の「運営費交付金収入」は 6,725 百万円であり、前年度の 6,405 百万円と比較して 320 百万円（5%）の増加とわずかな伸びになっています。また、「施設整備費補助金」は 337 百万円であり、前年度の 275 百万円から 62 百万円（22%）増加となっており、絶対額において小規模の額にとどまっています。このように国からの補助金収入には大きな増額は期待できない状況です。

これに対して、自己収入（入場料収入とその他収入の合計）は 2,009 百万円に達しており、機構が国から得ている収入の 28% に相当します。言うまでもなく、機構の財政基盤は国（文化庁と文部科学省など）の政策や方針に大きく依存しており、我が国の文化芸術立国の視点からすると国による機構への財務支援は十分とは言えないことは毎年繰り返し指摘されていることです。しかし、当年度は自己収入の増加が目覚ましく財源の大きな一部を構成するようになっていました。このような収入増加と財源の多様化をはかることは機構の将来にとって非常に大事だと思います。こうした成果が今後も継続して達成されることを期待します。

保有資産の活用による自己収入の増大も対策の一つであります。施設を様々なイベントや講演会、セミナーやシンポジウムなどの場として提供し利用料収入を得ることになれば財源確保にもつながります。こうした利用実績を拡大していく努力を今後も継続していただきたいと思

Ⅳ その他人事計画等

特にコメントはありません。

◎総会

外部評価委員名

稲 田 孝 司

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

平成26年度に完成した平成知新館は、たんに京都国立博物館（以下、京博）の展示・収蔵施設の充実というにとどまらず、国立博物館全体の新たな発展を示すものであり、これに続いて奈良文化財研究所の本庁舎改築が進行しつつあることは、歴史・伝統文化の保存と継承をめざす国の拠点としての文化財機構の存在意義や役割をいっそう高めるものとなるにちがいない。中期目標にかかわる諸事業を推進しながらの大規模施設建設であり、関係者の努力に敬意を表したい。とりわけ京博の場合、平成知新館での平常展や本館での「国宝鳥獣戯画と高山寺」展が好評であったのに加え、施設建設費への流用によって収蔵品収集が滞った25年度のような事態が解消され、新規の寄贈・寄託も大幅に増加した。開館に伴うご祝儀ムードを割り引いてもきわめて順調な再出発といえ、今後とも機構全体がこのような活力を維持・発展させていただきたい。一方、地味な仕事ではあるが東京国立博物館（以下、東博）では『文化財修理報告』15を刊行し、京博・奈良国立博物館（以下、奈良博）・九州国立博物館（以下、九博）も修理報告またはそれに準じる形で収蔵資料の修理の成果を報告した。文化財を次代へ継承する上でもっとも大切でありながら光の当たりにくいこうした事業に、今後とも力を入れられるよう期待したい。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

定評ある内外の第一級文化財を展示して好評をばくした特別展（「栄西と建仁寺」、「キトラ古墳壁画」、「台北 故宮博物院」、「日本国宝展」、「国宝鳥獣戯画と高山寺」、「国宝醍醐寺のすべて」、「クリーブランド美術館展」、「古代日本と百済の交流」等）は、それ故の格別な苦心や苦労があったと思われ、来館者数も相当なものであるから、自己評価でのSないしA評価は十分にうなずける。同じA評価でも、「みちのくの仏像」と「南山城の古寺巡礼」は、どちらかといえば小規模な寺院や一般にはひろく名の知られない仏像等の展示資料が多く、テーマやタイトルは明白にローカルをうたっている。こういう地域色の強い特別展が目標値以上の来館者数を得て高く評価されるには、ねらいどころの良さや新しいテーマを開拓しようとする意欲に加え、企画や実施においてさまざまな工夫があったものと思われる。来館者は、第一級の文化財に当然惹かれるけれども、企画さえ良ければ、地方に埋もれた文化財にも深い関心を寄せる健全なバランス感覚をもっていることが知られ、今後の特別展企画にも参考となろう。

「武家のみやこ 鎌倉の仏像—迫真とエキゾチズム—」展は、出展作品件数53件のうち重要文化財は26件とされ（展示図録では53件中の30件）、上記の前者に類する展示資料であったが、来館者数は少なくD評価とされた。この特別展の事業全体はB評価であり、鎌倉の仏像多数を関西に集めて展示した学術的な意義や図録中での詳しい作品解説などは、十分その評価に値している。それにもかかわらず来館者数がD評価であった理由を、自己点検評価報告書は「近畿圏の仏像愛好家にとって、東国の仏像に対する関心が予想よりも低かったこと」を一因と記す。おそらくそういう一面はあっただろう。ただ、「武家のみやこ」と「鎌倉の仏像」との距離は、日本の美術史家や歴史家が思い込んでいるほどに近くはない。修学旅行で鎌倉へ行っても、鎌倉幕府の遺跡は見られない。文化財レベルで見ると、「武家のみやこ」は現実感がなく、観光客が訪れるのはほと

んど宗教関係遺跡だ。世界遺産候補であった「武家の古都・鎌倉」に関するイコモスの不記載勧告（平成 25 年）の理由は、中世鎌倉の都市計画や経済活動等の証明が不十分という点にあったが、「武家のみやこ」や「武家の古都・鎌倉」と鎌倉の寺院・仏像との間を隔てる距離は、海外研究者にとっても、日本の一般市民にとっても、それほど大きい。既存の仏教寺院や仏像に頼って、政治・経済・社会の中核遺跡の保護に遅れをとった観光地・鎌倉の悲劇とってよいが、こうした現地の実情を考慮していれば、今回の展示はいま少し来館者の関心をひきやすいテーマ・タイトルになったかもしれない。

博物館・文化施設や文化遺産保護に対する民間の資金援助・ボランティア活動は欧米でよく発達しているところであり、東博・京博をはじめとする各館で博物館支援者拡大に努め、成果を収めつつあることは高く評価される。しかしなおその規模は小さく、今後の継続した努力が必要であろう。

快適な鑑賞環境の提供に関する大きな問題は、人気のある特別展の時間待ち対策であろう。来館者からの苦情もあって各館ですでに苦慮しているところだが、来館者の苦労を何とか軽減する方法はないものだろうか。例えば、来館者に順番の整理券を渡し、待ち時間を他の展示室やレストランあるいは近隣の美術館・博物館等で有意義に過ごす（この場合は電車等に習って‘途中下車’を認める）などすれば、棒立ちの苦労から解放されるとともに、他施設の有効活用や利益にもつながる。具体策にはさまざまな工夫が必要だが、2時間・3時間待ちが常態化している実情を放置して病人などが出れば（来館者には年配者が多い）、訴訟問題にもなりかねない。病院や娯楽・スポーツ施設等における待ち時間対策のあり方も徹底的に調査し、対策を講じていただきたい。マスメディアに煽られて群衆が押しかければ短期的には博物館の利益になるだろうが、人間的・文化的とはいいいがたい長蛇の列をいつまでも放置すれば、長期的にはマイナスイメージが確実にひろがる。来館者数の増加と入場料収入で主に博物館の実績が問われる現状ではあるけれども、今後は節度のある観覧者数という観点が必要かもしれない。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

公私立博物館への貸与については各館とも努力されており、とくに奈良博の実績を評価したい。

なお、収蔵品の公開という観点で忘れてならないのは、大学・博物館・地方公共団体等に属する研究者が専門事項に関して収蔵品を個人的に調査研究する場合である。この種の公開は、学術研究と文化財の研究の上できわめて意義が大きいにもかかわらず、そうした希望への対応措置や件数が自己評価・外部評価の対象となっていない。若手研究者には国立博物館収蔵資料へ近づきたい面があり、専門研究者育成の観点からもこうした公開を組織的に進めていく必要があるのではないだろうか。もとより資料の内容や保損状況によって対応の仕方が変わるのはやむを得ない。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

（研究所部会報告参照）

<p>5 文化財保護に関する国際協力の推進 (研究所部会報告参照)</p> <p>6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信 (研究所部会報告参照)</p> <p>7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上 機構が新たに文化財防災ネットワーク推進本部を設け、補助事業として文化財防災ネットワーク推進事業にとりくむことになったことは、東日本大震災レスキュー事業での機構の積極的な役割を継承しつつ今後の大規模災害等に備える点で、重要な意義がある。とりわけ歴史史料ネットなど民間任意団体を含む各種機関・団体との連携強化は、文化財保護に向けて行政と民間が新たな形で協力関係を築く試みであり、今後の活動を大いに期待したい。</p>
<p>II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置 来館者数の大幅な増加に伴う入場料収入増、ミュージアムショップ等での販売手数料増、東京・奈良の両文化財研究所で科学研究費の採択件数と採択金額増など、博物館・研究所の本来の事業の展開によって収入増がはかられたことはまことに健全で、機構の長期的な発展の資金として活用するため、未処分利益 2 億 2000 万円の目的積立金化に尽力していただきたい。 外部評価委員会総会・部会については、開催地を東京に限らず、地方所在の博物館・研究所で開催していくらかでも現地・現場の実情にふれるのが効果的である。</p>
<p>III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画 平成 26 年度の財政状況は好調であったが、年によっては特別展入場者数等にかなり大きな増減があるので毎年度そういう期待もしがたいのが実情であろう。そうした変化を許容しつつ、着実な事業推進を期待したい。</p>
<p>IV その他人事計画等 文化財防災ネットワーク推進事業にアソシエイトフェロー13人が雇用されたことを含め、有期雇用者は機構全体でかなりの人数にのぼると思われるが、若手研究者育成の観点から彼らが諸機関での教員・研究職・学芸員等として定着できるよう今後とも努力していただきたい。東博において、研究職・事務職の他に専門職を設け、定員化をはかったことは一つの有意義な方向であろう。</p>

◎総会

<p>外部評価委員名 岡田保良</p>

※事項ごとに評価コメントを記入

<p>I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置</p>
--

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

京都国立博物館（以下、京博）では、平成知新館の開館とそれを契機とした展示企画、ボランティア活動等が順調に推移したようである。

また京博が大量の寄贈を受けて収蔵品の充実を果たしたことが評価 A とされ、他館も参考にするべきという委員の意見があった。他 3 館が今後どう応えるか、そういう可能性がどの程度期待できるのか注目したい。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

陳列/展示の事業に対する評価について、来館者数の多寡や展示替えの数によって一面的にランクを決めるという評価法が採用されている。やむを得ないとも思うが、それは単に一般的な人気度の反映であるともいえるので、少なくとも、少数派に対する十分な配慮も博物館の使命であることは了解したい。

またいくつかの特別展では、とくに東京国立博物館では数時間待ちの列ができることも珍しくない。首都圏で同規模のリレー展示が可能な施設との連携など、工夫の余地を検討したい。

奈良国立博物館（以下、「奈良博」）におけるコンテンツのデジタル化とその公開成果が好成績の由、地道な努力の継続を評価する。また音声ガイドなど展示や作品解説での新たな試みが成功を収めているようで、今後益々増加が予想される外国人向けの対応にも期待したい。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

京都府にある旧「私のしごと館」が京博の施設として再活用されるという方向が示され、今のところ、収蔵機能を補完するという用途が考えられているとのことであったが、国民の納得いく活用に留意していただきたい。

海外研究者、関係者との交流が概ね良好に推移しているようだが、他方政治外交面ではむしろ軋轢が増している状況にある。それだけに文化面での相互理解を進める意義は一層深いといえる。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

（研究所部会での評価書参照）

5 文化財保護に関する国際協力の推進

2019 年の ICOM 世界大会が京都で開催されることになったという。朗報である。西アジアやアフリカで多くの博物館や遺跡での武力衝突やテロによる被害が後を絶たず、また文化財の違法な流通にも国際的な監視の体制強化が求められている折り、この大会招致の意義は大きい。機構本来の業務ではないかもしれないが、日本委員会の ICOM 活動が、外部から大いに評価される機会となることを望む。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

（研究所部会での評価書参照）

<p>7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上 (研究所部会での評価書参照)</p>
<p>II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置</p> <p>国の法人に対する評価手法の面で、定量的観点重視の方向が打ち出され、本委員会にもその傾向が反映されつつあるように見受けられる。文化活動に対してそれがほんとうに有効な手法なのについては、多くの委員諸氏から疑念が表明されているように思われる。定性的評価が重視されてしかるべき分野であることを、今後の指針等の表明の折に強調することを望みたい。</p>
<p>III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画</p> <p>独自の事業収入の活用面で改善が図られたというものの、緊縮状況が人材確保をつよく制約している状況は基本的に変わらないとみるべきだろう。多くの評価委員が繰り返し訴えている点もあり、新たな目標に、より積極的な方針を打ち出していただきたい。</p>
<p>IV その他人事計画等</p> <p>平成 26 年度から新たに専門職制度を創設し 1 名の人材確保がなされ、中期目標・計画にも叶うとのことで自己評価は A とされている。今日の財政状況では大きな成果ということだが、目標はもっと高いところにおいて然るべきだとすれば、今評価は若干甘いのではないか。</p>

◎総会

<p>外部評価委員名 河 合 正 朝</p>	<p>※事項ごとに評価コメントを記入</p>
<p>I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置</p>	
<p>1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承</p> <p>各館は、それぞれにその目指す方針に従い、特徴のある活動を展開し、相応の成果をあげたものと判断する。各館とも財源の確保に好転が期待し難い現状の中で、文化財の次世代への継承、その保存、活用（収蔵品、展示資料の整備）を図るという観点からも、寄贈、寄託に従来を上回る実績を上げていることを特に評価したい。</p>	
<p>2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信</p> <p>学術的動向等を踏まえ、かつ国民の求めるところが何たるかを考えながら、質の高い展覧会の実施を目指して各館がそれぞれに工夫、努力をしている跡が認められる。京都国立博物館（以下、「京博」）の「文化財ソムリエ」や「京博ナビゲーター」、奈良国立博物館（以下、「奈良博」）におけるボランティア活動を活用した「世界遺産学習」、九州国立博物館（以下、「九博」）の高校所蔵の考古品展示などを通して、また、各館は国際学術交流にも努め、歴史・伝統文化の国内外への発信に実績を上げていることを評価する。</p>	

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

機構が掲げる「文化財情報の発信と広報の充実」、「教育活動の充実」という目標に対して、ナショナルセンターとしての責めを負う各館には、その機能の強化を図りもてる能力を発揮することが期待される。そのうち、次世代の教育を担う立場にある、小、中、高校の教員に対する研修の場が設けられ、相応の成果を上げ、順調に推移していることを評価したい。なお、大学との連携、インターンシップの整備、ボランティアの多様な活用に関しても、一段の工夫とその成果を期待するものである。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

昨年も指摘したことであるが、機構内の研究職員にとどまらず、他機構、他研究機関の研究員、その他、当該の調査・研究に関わる専門の研究者の参加を促進することで、その質の向上を図ることが期待されたが、本年は、その実績に基づき着実な成果を上げていることが認められる。

5 文化財保護に関する国際協力の推進

各館ともに努力の跡が認められるものの、その協力・交流の対象範囲は、アジア諸国に重点が置かれる恨みは残ろう。奈良博、九博における継続的な交流・協力の実績は評価してよい。

さらに今後は、国際的に活躍し得る、次代を担う若い世代の人材の育成にも視野を拡げた各館の対応も必要となろう。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

各館の特徴を生かした研究成果の発信に努めたあとが窺え、併せて、情報基盤の整備充実を目指していることが理解される。しかし、求められる事業の実現には、それに相応しい人材と相応な経費の導入がなお必要不可欠との印象が強い。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

地方公共団体に対する、文化財保護の質的向上を目途とする協力や助言については、自己評価の報告によって本年も順調に推移していることが確認出来た。しかし、問題は、当該団体の文化財担当者たる専門職員ではなく、地方公共団体の、例えば、教育委員会に属する文化財保護の部署にかかわる担当事務職員および管理職職員に対する研修を行うことこそ肝要であって、その実行なくしては、実質的な文化財保護の質的向上を図ることは現状では難しいのではないかと言うのが、現在における私の見解である。この点に関しても今後の課題として検討の機会を持って頂きたい。とりわけ都市部における開発と文化財保護の問題は深刻である。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

共通的な事務の一元化による業務の効率化に関しては、本年も評価すべき成果が上がっているものと理解したい。しかし、効率化を図ることが、業務の質的内容、なかんずく、それが質的向上を図るべき性格のものであるあるなら、そこにはしばしば齟齬をきたす恐れも生じかねない。業務の質的内容を吟味し、検討して、個別的な配慮や判断というものも必要となろうか。

Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

人件費削減が進められるなか、給与体系に工夫を加え、専門職常勤職員の採用をはかる試みがなされているのを聞いたことは評価できる。しかし、優秀な人材の育成とその確保は、いわば博物館活動の生命線であり、この点に関しては正規職員採用の増加をも視座にいれて、引き続き真摯な検討が必要となろう。

また、自己収入目標額を超えた収入があった場合の処理に関して改善が加えられ、同時に経営努力に対する認定基準要件が幾分なりとも改善され、収入目標を超えたものを新規に利益として認める方針が示されたことは、当機構の長年にわたる努力によるものとして高く評価することが出来るとともに法人自立の道を拓く一歩として、今後とも着実な取り組みを重ねていかれることを期待したい。

Ⅳ その他人事計画等

経費節減、定員削減の要請をまともに受ける中、事業の拡大と充実を図ることを求められる一方、方便として取られたのが、任期付き、非常勤職員の採用であったのであろう。しかし、それは、その内実を隠ぺいし、かつ効率化実現の見せかけの一手段であったとは言わないまでも、当機構がナショナルセンターとしての責めと誇りを担う立場にあることからすれば、短期的解決策に留まっているとの誇りを逃れ難く、より中・長期的なビジョンを打ち出すことが期待されよう。とは言え、Ⅲで述べたように、いま、専門職員（常勤職）の採用をはかる試みが、実現化し継続的に推し進められるという方針が打ち出されたことは、高く評価したく、その実の上がることを大いに期待するものである。（なお、そもそもアソシエイトフェローとは、米国の大学ほかの諸研究機関においては、客員研究員、委託研究員に与えられる職位であって、雇用関係の生じないことを前提にしているものと理解する立場からする些か不可解なカタカナ職名に見えることを否めない）。

◎総会

外部評価委員名

酒井忠康

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

各館ともに限られた財源のなかで、収蔵作品の充実をはかり、施設整備とあわせて修理等の作業は適切に行われている。寄贈・寄託の受け入れは従来の実績を大幅に上回り、順調に推移していることを評価したい。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

各館それぞれが事業的な面で工夫を凝らして成果を上げている。「京博ナビゲーター」の活動もその一つ。特別展はいずれも目標を大きく上回り、「クリーブランド美術館展」や「台北國立

故宮博物院展」などでは来館者に鑑賞の喜びをつたえる様々な工夫があった。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

目標値以上の成果を上げている。機能の強化に関しては、2019年のICOM（国際博物館会議）の日本への招致（京都）に向けた活動を視野に入れて、もっと国際化を図る必要がある。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

各種の基礎的調査・研究を継続的で総合的なものにする長期計画の具体案を作る時期にある。

5 文化財保護に関する国際協力の推進

現時点ではアジア諸国との協力関係は相応に展開されている。今後はこの方面で国際的に活躍する人材の育成が必要である。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

ウェブサイトの充実だけでなく、紙媒体を活かした発信の可能性も検討してほしい。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

大学等との連携や学芸員研修プログラムなども視野に入れてはどうだろうか。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

効率化を合目的化するのではなく、業務の質的内容によっても判断する必要がある。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

特に具体的な提案はないが、国際的に見て、いまは文化の発信が重要視される時代である。文化財機構の活性化のためにも予算の増額を望む。

IV その他人事計画等

常勤職員の増加を望む。

◎総会

外部評価委員名

佐藤 信

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

展示や調査・研究などを通して、収蔵品ばかりでなく日本各地の多様な文化財の保存やその解

明に大きな成果を挙げていることは、高く評価したい。収蔵品の整備・展示や文化財の調査・研究の成果を、さらに国民にわかりやすく発信する努力を展開していただきたい。

全国の博物館の中心的拠点として、都道府県・大学・民間などの他博物館における展示や展示技術などへの協力・普及の事業をさらに展開し、その国民への発信も積極的に進めていただきたい。

文化財修理事業や基礎的な調査では、四博物館・二研究所・センターの機構全体による、さらに有機的な連携・協力の体制を作っていただきたい。

博物館収蔵品の目録・データの情報のインターネットによる発信・公開をさらに展開していただきたい。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

特別展・平常展のほか、多角的に企画展示・シンポジウム・講座・列品解説・コンサート・イベントなどが展開され、展示説明の多言語的充実も図るなど、文化財と接する多様な機会を国民・来館者に提供していることは、高く評価したい。

平成26年度は京都国立博物館の平成知新館のオープンにより平常展の来館者が多かったが、新年度も引き続き来館者を確保するべく努力をお願いしたい。

海外の博物館・研究所などとの調査・研究・展示（海外展など）をはじめとした協力・交流が多角的に展開されていることは、高く評価できる。さらに、組織的な協力関係の強化を進めていただきたい。

考古学・日本史学・保存科学・美術史・遺跡学・建築史・庭園史・写真学など、関連する多様な学界の最先端の研究成果とリンクして、タイムリーに文化財の意義を発信するタイプの調査・研究・展示を進めていただきたい。諸レベルの学校教育との連携も、さらに推進していただきたい。

世界文化遺産や民俗文化財・文化的景観・登録文化財・日本遺産など、新しいタイプの文化財の展示や調査・研究にも、配慮をお願いしたい。

人気のある特別展の中に（鳥獣戯画と高山寺展・正倉院展など）、会場混雑のために入館待ち・展示室入室待ちに過度の待ち時間を入館者に強いる場合がみられた。混雑の解消や待ち時間対策のために、有効な方法を是非本気で模索していただきたい。世界の他館の先進事例や、「渋滞学」の研究なども参考になるのではないかな。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

機構の四博物館・二研究所・センターの間の相互連携をさらに進めるとともに、国内の他の博物館・美術館や文化財所有施設と連携した展示や調査・研究をさらに展開していただきたい。

ナショナルセンターとして、国宝・重文・史跡・名勝などの文化財情報や国内の諸博物館の展覧会・収蔵品情報などを、国内外に発信するリンク機能をもっと展開していただきたい。

高度で先端的な調査研究成果を、研究者・専門家向けだけでなく、国民・市民向けに分かりやすい形で発信願いたい。多岐にわたる「博物館の仕事」の実際を、国民に向けて発信してほしい。

機構各機関の発行する研究紀要・報告書や年報・概要などの内容を、ホームページで公開する事業を、さらに進めていただきたい。

機構の博物館・研究所などで所蔵する図書・資料などを研究者・市民にも公開する事業をさらに展開していただきたい。

国内の博物館・美術館や大学の博物館学講座などに向けた専門知識・技術の発信や連携・協力を進めていただきたい。

文化財の総合的な把握・調査・研究をもととした「博物館型の研究統合」のあり方と研究成果を、是非発信していただきたい。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

東日本大震災での「文化財レスキュー」事業での大活躍の成果をふまえて、文化財防災ネットワーク推進事業を積極的に展開していることを、高く評価したい。今後策定される各地の「文化財防災計画」のために、実務的で有効な対策の策定に向けて機構のノウハウを活用していただきたい。

基礎的・先端的な文化財の調査・研究に、限られた人員・予算の制約下で大変大きな成果を挙げていることを、高く評価したい。その成果を、国民向けにわかりやすい形でさらに広く発信していただきたい。

基礎的で地道な史跡・歴史資料・美術工芸・無形文化財・保存科学などの文化財に関する調査・研究事業についても、さらに積極的に推進し、その成果を発信していただきたい。

科学研究費・寄付金など外部資金による研究費を獲得して共同の調査・研究を多方面にわたって展開し、大きな成果を挙げていることを、高く評価したい。

5 文化財保護に関する国際協力の推進

文化財の保存・修復事業や調査・研究・展示を通じた国際協力の面では、文化財研究所・博物館ならではの高いレベルの協力事業が多角的に推進されており、高く評価したい。さらに多様な国際協力の展開に期待したい。

中国・韓国との国際協力に最近の国家間外交における政治情勢悪化の影響がみられるが、文化財担当機関同士の交流については、それにかかわらず従来どおり着実に進めていただきたい。

国際協力は、所属研究者の個人的努力のみに負うことなく、機構として組織体制を構えて国際協力を展開していただきたい。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

博物館・文化財研究所のホームページによるアーカイブズ・データベースの情報発信サービスは、数多くのアクセスを得ており、高く評価できる。東文研などのデータの横断的検索を可能とする方向での努力も評価でき、さらにその充実を進めていただきたい。

調査研究成果を、研究者・専門家向けのみでなく、一般国民に対しても分かりやすい形で出版したりホームページで公表するなど、発信を進めていただきたい。

機構の四館・二所・センターのニュース・たより・パンフレット・年報・紀要・報告書などの

冊子体の出版物を、インターネットで閲覧できるようにする事業をさらに進めてほしい。

電子媒体だけでなく、四館・二所が所蔵する膨大な冊子体の図書資料・写真資料などを、研究者・市民が閲覧出来る体制と、資料群の横断型の情報提供体制をさらに充実させていただきたい。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

国・地方公共団体・博物館・美術館等に対する協力・助言では、委託事業をはじめとして多分野において高いレベルで大きな実績を挙げており、高く評価できる。

大学における高等教育との連携は、国立文化財機構の文化財に関する高い調査・研究能力を活かして、文化財研究の裾野拡大や後継者育成を進める上でも、さらに積極的に展開していただきたい。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

四館・二所・センターとも、限られた人員・予算の中で、学術的レベルの高い優れた展示・調査・研究・協力・発信の成果を多方面で挙げていることを高く評価したい。そうした費用対効果の面での「効率性」をどのように進展させ、評価するかが課題となると思う。

四館・二所・センターの研究・学芸系職員の協力体制をさらに強化して、機構全体のスケールメリットを活かした調査・研究・学芸業務をさらに有機的に推進していただきたい。そのために、機構として四館・二所・センターの横断型研究に、戦略的な研究助成を行ってもよいのではないか。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

機構は大変な努力のもとによって事業目標を順調に達成し、自己収入や寄付金の増加を実現してきた。しかし、運営費交付金の一律削減がそれ以上に進む状況にある。単純な経済利益の原理と即応しない文化・文化財を専門とする法人に対しては、特段の配慮があるべきと考える。自己収入の目的積立金化が十分に認められ、努力が報われる制度が実現するように、さらに努力・発信していただきたい

外部資金や寄付金の積極的な受容に向けて、「ふるさと納税」のような形での寄付金についての税制優遇制度の実現と発信ができないものか。

IV その他人事計画等

研究・学芸職の優秀な人材を、世代構成において切れ目のないように獲得・育成できるように、また研究環境のさらなる整備充実に、予算的な配慮をお願いしたい。

事業に果たす、任期付き非常勤のアソシエイトフェロー・客員研究員・特任研究員・研究補佐員などの役割比率がかなり高くなってきており、将来の研究体制維持に危機感を覚える。できるだけ常勤の研究・学芸職を増やす努力を進めていただきたい。

そのような状況への対応の意味からも、研究職・事務職の中間的立場として専門職を平成26年度に創設し、国際交流分野での人材確保を行ったことは、一つの試みとしてその成果を注目したい。成果によっては、専門職のさらなる拡大も考えられよう。

機構内の博物館・研究所・センターなどの間での、研究・学芸職や事務職における人事の交流があってもよいのではないか。

◎総会

外部評価委員名

玉 蟲 敏 子

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

26年度は、京都国立博物館（以下、「京博」）においては、昨年度の購入物件0という衝撃的な報告から一転して、購入数、寄贈数、寄託数が伸び、収蔵品整備の充実がうかがわれた。他の三館に関しても、順調に前年度の水準の維持が図られている。とはいえども、博物館全体を取り巻く蒐集、寄託、修理、保存環境の整備が十分ではないことは明らかである。今後の課題として、何か節目の時期を選んで、当該年度から遡って十年、二十年単位のスパンから、変化や動向、また問題解決の進展度をうかがうような長期的な視点の報告も必要なのではないかと思われる。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

26年度は、四館ともに国内においては大規模な展覧会が多く開催され、企画の適時性、内容の充実、国際性、来館者数において目覚ましい成果を上げており、S評価、A評価が多かったことは納得されるものであった。いっぽう、国外においては、アメリカ・クリーブランド美術館における一件のみということであり、国際化が叫ばれるわりには不活発であることが印象づけられた。まだまだ普遍的に知られているとは言いがたい日本美術の魅力在海外に伝えるために、展覧会はむろんのこと、ウェブにおける国内外への発信においても、世界の美術館・博物館の例をよく学び、親しまれる存在になれるよう、いっそう努力していただきたいと思う。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

26年度は、京博の平成知新館がオープンし、すぐれた日本美術の伝統的系譜を視覚的に通覧できる施設がまた一つ増えたことを率直に喜びたい。ここ数年不振だった中国、韓国との学术交流も研究者の交流が復調してきており、陶磁器をめぐって日中韓の三カ国による国際共同企画展が実現したことは特筆すべき成果であるように思う。国内の公私立博物館・美術館への助言や援助も順調であり、リーダー的存在として確実に信頼されているようである。ナショナルミュージアムとしての機能の強化はますます期待される場所である。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

26年度も、昨年度と同様に、文化財研究の二所、博物館の四館ともに科学研究費等の外部資金を積極的に獲得し、それ以外の研究にも熱心に取り組まれていることを高く評価したい。高精細デジタル画像や三次元デジタル計測技術の応用になど最新の科学技術を駆使した調査研究が、ますます充実してきており、研究所の研究機能と、多くの調査対象を所蔵する博物館のそれぞれの特徴や長所を活かした共同的な取り組みが、さまざまな分野において進展していくことを

期待したいと思う。

5 文化財保護に関する国際協力の推進

この分野に関して全般に低調であることは否めないが、そのなかで、規模は決して大きくないが、保存に関する国際共同研究の推進や技術者の養成など、さまざまな取り組みが進められている。とりわけ、東京文化財研究所（以下、「東文研」）の紙本文化財の保存修復に関する国際的な研修の取り組みなどは、過去の研修の成果で人材も育ってきており、まだまだ点つなぎの段階だと思われるが、さらに機会を増やし、厚みのある人材育成が発展していくことを期待したい。成果の情報発信も今後は積極に取り組まれることが望まれる。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

収蔵資料のデジタル化は四館ともに進展しており、e 国宝などのウェブサイトも発展してきている。今後は、東文研の文献検索システムの総合化と歩調を合せて、四館の収蔵品の横断検索システムの開発などさらなる充実を望みたい。26年度も従来通りの紙媒体による刊行物の出版、展示活動やその情報発信などが行われるいっぽうで、ウェブを活用してのデータベース類を発信する試みも充実してきている。努力が国民に素直にとどくよう、より魅力的なサイト作りを考案していただきたい。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

二所・四館とも昨年同様に従来からの事業を順調に進展させている。東日本大震災後の文化財レスキュー活動を土台として、文化財防災ネットワーク推進本部が文化財機構に置かれたが、災害時における文化財保護組織の中心になっていくよう、活動体制を充実させていただきたい。ただし、そうした活動が進展しているいっぽうで、地方自治体において文化財担当者研修の受講者数の減少傾向であることは危惧される報告であった。経費的な問題が背景にあるようだが、上から目線だけでなく、地道な人材育成への補助金の整備などにも目を向ける必要があるのではなかろうか。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

昨年と同様に、奈良、東京の二研究所、四博物館とも懸命な努力をはかっており、その上で数多くの魅力的な展示や優れた研究活動が行われている。ただし、内側からの努力は最早、限界に達しており、2020年開催予定の東京オリンピックなどが、状況を好転させる起爆剤となりうるのか、次年度以降の動きを注視したい。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

経費削減が叫ばれ、さまざまな面でスリム化がはかれることは必要であるが、いっぽう、研究費の獲得が自己収入の観点で整理されていることについて、毎回ながらいささか違和感をもっている。26年度は前年度に比べて若干の増加が見込まれたことで、A評価が提示されている。二所・四博物館に属する組織内研究者であるとはいえ、それぞれの個人の能力によって獲得した研

究費である。目標値とされた76件が何を根拠にしているのか。研究者個人の努力といった観念的なものに頼るだけでなく、採択件数に見合う研究環境の整備についても、努力目標を掲げていただけるよう要望したい。

IV その他人事計画等

毎年、指摘していることだが、常勤職員数の抑制のために行われている退職後のスタッフの不補充と任期制研究員の採用は常態化している。しかしながら、報告よりそうした雇用条件の人材のなかには、所属機関の科研費獲得に貢献する者もおり、調査・研究・展示・発信といった博物館、研究機関の根幹を担う活動を行っている。若い研究者にも希望の持てるように、改めて、四博物館・二研究所は、能動的に文化や学術活動の取り組む人材を長い時間をかけて育成しうる場として、主導的に立場にあることを自覚し、変革期の設計図をじっくりと描いていただけるよう要望したい。

◎総会

外部評価委員名

浜田 弘明

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

本年度から評定区分が変更されたが、自己評価の大半が基準のBと示されている通り、概ね計画は達成されていると評価できる。

地方における博物館の相次ぐ閉館や、管理者の高齢化に伴う文化財保管の困難化の問題は深刻である。国立博物館は、海外や民間への文化財流出を防ぎ、国・地方の宝を守るべく、従来にも増して、資料の寄贈や寄託はもとより、購入も積極的に進める必要が生じて来ている。そのためにも、資料買取り予算の増額や、収蔵スペースの新規確保は欠かせない課題である。

資料保存の基礎となる、保存カルテの作成やIPMの徹底化も重要な業務である。さらに、文化財情報システムでの資料公開は、国民への公開手段の一つとして重要である。こうした事業の推進には、新たなシステムの整備とともに人的整備も必要で、アソシエイトフェローの導入は、試みの一つとして評価出来るが、有期雇用職員であることから、終身雇用化が急務の課題と思われる。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

本項目についても、ほぼ計画は達成されていると評価できる。近年の博物館入館者数の低迷を打破するための一対策として、海外からの観光客の呼び込みを視野に入れた、外国語による解説パネルの設置はもちろんのこと、京都国立博物館（以下、「京博」）が実現した外国語による音

声ガイドも、是非、各館で取り入れて欲しいシステムである。

また、リピーターを増やす対策として、展示のリニューアルはもとより、日ごろからの常設展示資料の定期的更新も欠かすことは出来ない。各館とも、こうした日々の努力を惜しみなく実施している点は評価したいが、利用者に対して、どこがどう変わったのかについてのアピールが弱い気がする。そうしたPRにも力を入れて行く必要があると思われる。

東京国立博物館（以下、「東博」）では26年春、正門脇の無料ゾーンにミュージアムショップを新設したが、ミュージアムショップやレストランのリニューアル、あるいは新たなグッズやメニューの開発は、博物館利用者の獲得の上で重要である。

特別展の来館者アンケート結果は、概ね高いものとなっており、努力の成果が窺える。しかし、東博のみ満足度が60～70%前後で、決して悪い数値ではないが、京博・奈良国立博物館（以下、奈博）・九州国立博物館（以下、「九博」）の80～90%と比較すると、やや低目となっている。これは、入館までの長い待ち時間が影響している可能性が高いが、原因の究明を是非行なって欲しい。

また、次世代を担う子どもの博物館利用促進も重要な課題である。東博に26年度設置された「みどりのライオン 体験コーナー」は、子どものみならず、大人も楽しめる体験・参加型のスペースとして評価出来る。さらに、東博での「ジュニアガイド」の作成、京博での小中学生向け「ワークシート」の発行、奈良博での小中学校向け「メールマガジン」の配信、九博での「きゅうばっく」の実施など、各館で工夫を凝らした事業が展開されており、館相互で参考にして頂きたい。

その他、大学生に対するキャンパスメンバーズ制度・インターンシップ制度（全館）及び「文化財ソムリエ」制度（京博）、高校生に対する「ジュニア学芸員」制度（九博）、小中学生を対象とした「スクールプログラム」（東博）・「世界遺産学習事業」（奈博）・職場体験学習など各館の努力が見られる。

東博における、26年度から通年で実施された託児サービス、障がい者のための点字版パンフレットの配布、7言語の総合案内パンフレットの配布は、バリアフリーを超えたユニバーサル・ミュージアムの実現に向けた試みとして高く評価したい。

さらに情報発信として、東博が開発したスマートフォンに対応したモバイルサイトの一般向け公開をはじめとするSNSの利活用に、今後を期待したい。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

ほぼ計画通りに達成されていると評価できる。去る6月2日に、ICOM（国際博物館会議）世界大会の日本（京都）招致が決定したことは、我が国の博物館及び博物館学の歴史の上で、記念すべき事象である。この招致に成功したのも、東博を中心とする国立博物館が果たした役割は大きいと言える。今後、大会開催の実現に向けて、国立博物館には一層のリーダーシップが求められる。

また、日本の博物館の国際化のために、海外への多言語発信は重要となるし、海外の研究者・技術者への支援や交流も、更なる活性化が必要である。さらに、日本の中心的博物館として、国内の公私立博物館への支援も一層推進して欲しい。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

ほぼ計画は達成されていると評価できる。当機構は、わが国の物質文化研究の拠点として重要な役割を果たしている。調査研究の柱とも言うべき、有形文化財に関わる調査研究に多数取り組み、多数の新規科学研究費が採択され、着実に成果を上げていることは、喜ばしく思うとともに高く評価したい。とくに国内資料の調査研究にとどまらず、欧米に渡っている日本資料の現地調査や記録作業については、立ち遅れている領域であり、引き続き国立博物館の使命として積極的に進めて頂きたい。

また保存環境・保存修復に関わる調査研究や、効果的展示や教育活動に関する調査研究は、博物館でなければ取り組めない領域であり、全国の博物館の模範となるべく、積極的に展開されることを期待したい。

昨年度、新館がオープンした京博において、「ミュージアムカート」や「京博ナビゲーター」の配置が実践されたことは、従来、子どもの目線から眺めると近寄り難い印象が拭えない国立博物館のイメージを、大きく変えるきっかけになるものと考えられる。

九博においても、市民を取り込んだ「市民ボランティアと行うIPM」や「みんなでまもるミュージアム」活動が展開され、同様に国立博物館のイメージを変えて行くものと期待される。さらに、高校所蔵考古資料の所在調査も全国的な広がりを見せていることは、新しい取り組みとして評価すべきであるし、「考古学の甲子園」となるよう今後に期待したい。

5 文化財保護に関する国際協力の推進

計画は達成されていると評価できる。高い保存・修復技術を持つ当機構の使命として、アジア地域を中心とする文化財保護への技術支援と人材育成の更なる促進に期待したい。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

計画は達成されていると評価できる。当機構の研究成果が国内はもとより、多言語発信により広く世界に向けて公開されることは重要である。さらには、専門家のみならず広く国民に理解されるよう平易な形で、ウェブサイトを含め、公開講座や展示等を通して発信されることにも期待したい。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

計画が達成されていると評価できる。博物館「冬の時代」と言われる中で、今後、当機構が地方公共団体等に果たす役割は、より大きくなることが予想され、全国の文化財担当者や学芸員に対する技術研修の促進に期待したい。

また、東日本大震災被災地への文化財等救援・復旧・復興事業にも、引き続き力を入れる必要がある。それに関連して、文化財防災ネットワーク推進事業における、「けいはんなオープンイノベーションセンター」（旧私のしごと館）での収蔵庫整備は、今後のレスキュー事業に大きく貢献するであろうことを期待したい。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

経費の削減が進む厳しい状況下にも関わらず、各館の努力の跡を窺い知ることが出来、健闘していると言えよう。とくに財政難の中、自己収入が29%増に達し、寄付金件数は目標の1.6倍、外部資金となる科学研究費の補助金も目標の1.4倍を獲得しており、館員一人一人の経営努力を高く評価したい。自己収入の剰余金については、各館が独自に活用できる仕組みへの改善が必要であると思われる。また、科学研究費の獲得については、今後も、研究・保存型の国立博物館にとって重要な課題である。

資金獲得という点では、事務的な部分で煩雑な点もあるかとは思いますが、I S I D・クウジツ社（東博）や凸版印刷・NHK（九博）との共同事業のように、民間企業との共同事業の展開も重要である。さらに経費節減のために、一般競争入札を推進することは止むを得ないが、委託業務の「質」が担保されるように配慮を願いたい。

寄附金件数が目標を大きく上回ってきていることは、喜ばしいことであるが、欧米の博物館運営のような寄付金による博物館運営のあり方についても、国民に一層広く知らしめる必要があるかと思われる。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

昨年度の評価においても述べたが、健全な事業運営の上で、機構の総予算の削減は、限界に達していると言わざるを得ない。国内最大規模の東博でさえも、諸外国の国立博物館に比較すると、その予算規模・職員定数は全く少ないと言わざるを得ず、国（政府）には、文化国家の責務として、博物館への理解を一層深めて欲しいと願うばかりである。

国民に、より親しみが持てる機構（博物館）づくりを目指して、各館は、今後も地道な活動を一つ一つ積み上げていって欲しい。こうした地道な活動の上に、国民の文化が成り立っているということを国（政府）にも是非ご理解いただき、積極的支援がなされることを期待したい。

IV その他人事計画等

諸外国の国立博物館に比較して、わが国の博物館は予算規模とともに職員定数についても全く少ないと言わざるを得ない。適正な機構運営のためには、これ以上の人員削減や人件費の圧縮は決して望ましいことではない。人事制度として、アソシエイトフェロー制度を導入したこと自体は評価できるものの、有期雇用職員であり、終身雇用の専任化への移行は急務と思われる。

平成26年9月の独立行政法人通則法の改正に伴い、今後、自己点検評価の重点が定量的な指標に移行し、定性的な指標は重点的なものに絞り込まれるという。しかし言うまでも無く、研究業務や博物館活動の成果の大半は、数値によって評価出来るものではない。もし、評価方法の見直しが現実のものとなるのであれば、定性的な業務成果をいかに数値化するかが来年度に向けての大きな課題と言える。

◎総会

外部評価委員名

藤田 治彦

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点として、国立文化財機構は国立博物館各館における収蔵品の整備等を推進するなどして、十分な働きをしている。わが国は、アジアではもっとも歴史的な文化財の保存と継承を着実にやっている国で、無形文化財をも含めた伝統文化の保存・継承では世界的にも進んだ国である。世界遺産の申請等では、不幸な近代史との関係で、特定の近隣国から批判されることもあるが、より古い建築物等の遺産や有形無形の伝統は近隣諸国の国民も、それらの国々では失われてしまったアジアの貴重な文化財として、その価値を十分に認めている。歴史的な文化財の保護と保存、そして次世代への継承は、わが国にとっては国策としてもいいほどの大きな意味を持っており、国立文化財機構が果たすべき役割は大きい。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

上の1に述べたように、わが国にとって歴史的な文化財は国を挙げて守り、活用すべきものであり、それに関する情報の国内外への発信は極めて重要である。いま急増している海外からの観光客の訪日の目的のひとつは日本製品の購入とされるが、そのようなブームが去った後も残るのは、価値ある歴史的な文化財と伝統文化であろう。関連情報の国外への発信は重要であり、国内へは、そのような歴史的・文化的価値を、どのように公開し、どのように守り、それをどのようにして地域の活性化に生かすべきかといった実践的な情報の発信が必要である。国立文化財機構は、各国立博物館における展示会の開催や、ウェブサイトの充実等に加えて、さまざまな方法で国内外の関連するネットワークを広げ、発信者であると同時に積極的な助言者、推進者の役割をも果たすべきであろう。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

国立博物館各館は、関連出版物等を刊行し、世界各地から海外の研究者を招聘するなどして、わが国における博物館の中核としての役割を果たしているが、その機能の強化は一層必要であろう。それらの事業や、保存修理事業者のための研修プログラムの充実等も含め、機能の充実には予算上のバックアップがぜひとも必要である。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

国立博物館各館、各文化財研究所とも、文化財に関する調査及び研究を積極的に推進している。それらの調査や研究は、学術的にしっかりした内容のものであるべきであると同時に、1や2に述べたように、わが国の今後の方向性の確立や、国民のよりよい、文化的により豊かな生活のサポートにも役立つような、実践的な内容も伴うものであるなら、一層推進の価値が高いと思われる。

5 文化財保護に関する国際協力の推進

保存修理事業者のための研修プログラムの充実等も含め、各国立博物館および文化財研究所は、文化財保護に関する国際協力の推進に努めている。アジア各国をはじめ、世界の国々は、これまでわが国が培ってきた文化財保護の経験と能力に大いに期待しており、国際協力は今後も積極的に推進すべきである。

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

国立博物館各館、各文化財研究所とも、情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信に力を入れている。調査研究成果は大小の印刷物として関係機関、関係研究者に送付され、役立っている。ただし、その一部はやや形式的で、全般的に英語による情報が少ない。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

国立文化財機構は、地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上を計っている。文化財防災ネットワーク推進のために、その本部と推進会議を設置したことは意義深い。

東日本大震災の被災県への協力も継続しているが、年月が経つにつれて、やや忘れられつつあるところもある。岩手県と宮城県、そしてとくに原発事故にみまわれた福島県への、その他の地方公共団体の関連機関による協力は重要であろう。国立文化財機構の果たすべき役割は大きい。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

共通的な事務の一元化など、業務運営の効率化は必要であり、国立文化財機構はそれを推進している。計画的なアウトソーシング等も進めるべきであろう。ただし、このような効率化が、無責任で機械的な組織を生みぬように十分配慮しながら、業務運営の効率化を進めるべきである。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

各国立博物館、文化財研究所は自己収入の増大ならびに、自己保有資産の有効利用の推進に努めている。しかし、各国立博物館を含む国立文化財機構の予算は、先進各国の比較すべき関連予算と比べても、日本の近隣国の関連予算と比べても非常に少なく、政府は大いに改善に努めるべきである。

IV その他人事計画等

国立研究開発法人科学技術振興機構の JREC-IN Portal その他にもアソシエイトフェローの求人情報が掲載されており、国立文化財機構の積極的努力が感じられる。国立文化財機構は、芸術系、歴史系、さらには情報系の若手職員を必要としており、バランスのいい人事計画の推進は非常に重要である。それらの職員の採用に際して、英語力等の語学力を重視することも、今後の関連活動の一層の国際化のためには重要である。例えば、情報化推進に関係する職員を、その点で進んでいる欧米の主要ミュージアムに派遣し、世界的状況を把握し、国際的なレベルに押し上げることも必要であろう。

◎総会

外部評価委員名

森 弘子

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

寄贈・寄託件数が増加していることは、博物館への信頼の表れと評価したい。ただ、収蔵スペースの問題が顕在化しつつあり、早急な検討が必要であろう。

保存については先端機器の導入と共に、「人が心がける」ことの大切さにも配慮がなされている。

修理については館蔵品の修理は各館とも計画的に行われているが、九州国立博物館（以下、九博）の館外所蔵者負担による文化財の修理に注目したい。修理の必要性を感じながら修理施設や業者の情報の少ない九州に於いては、大変ありがたい取り組みである。

収蔵品についての基礎的調査研究、修理に伴う調査研究に対して、京都国立博物館（以下、京博）で科学機器を備えたり、九博では写場や撮影機器が整備された。今後これらが大いに活用されることに期待したい。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

各館とも評価指標に示された特別展の回数を上回る特別展を開催し、来館者数に於いてもS評価、A評価と実績を上げており、職員の努力を評価したい。これには共同主催もしくは共催のメディアの力が大なるものであると考えるが、平常展に於いては平成知新館が新たにオープンした京博以外は、来館者数に於いて成果が上げられていない。陳列替えは頻繁に行われているようであり、その努力は評価したいが、何処が変わったのか、今何が展示されているのか、そうしたことが一般にはほとんど知られていない。陳列替えが多ければ良いというものでもないであろう。全体のバランスを取りながら、陳列替えの効果が発揮される視覚的な見せ方、広報の在り方など工夫が必要であろう。館員が展示替えに追われるという現状も考慮する必要があると思われる。

平成知新館開館を機に「新たな京博を印象づける」京博の広報活動は大いに功を奏している。また開館にあわせて、ナビゲーター制度、セミナー、平常展示に於ける特別展観などさまざまな新規事業を開始したことは、従来、教育活動に於いて低調ではないかと危惧していたことを一気に挽回した感がある。

他館に於いても、各館の特色ある教育活動を充実してきており、ことにボランティアが自主的な活動を行っていることは注目される。

ウェブサイトの運用は、今後さらなる可能性を切り開くものとする。運用については十分に研究を重ねられることを期待したいが、とりあえず、ツイッターによる混雑情報の発信はありがたい。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

海外で開催する展覧会が機構全体で年1回平均というのは少ないとも感じるが、研究者の招聘や派遣などを通じてわが国の文化の発信は活発に行われていると考えられる。ウェブサイトを利用した外国向け発信はなされているのであろうか。

保存修理技術者への研修プログラムは各館とも能動的に行っているが、公私立博物館等に対する研修あるいは援助・助言は九博の古文書保存基礎講座、IPM などわずかな例はあるものの、ほとんど受身と感じられる。全国の公私立博物館のレベルアップのためにも、国立博物館側から働きかける研修があっても良いのではないかと考える。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

5 文化財保護に関する国際協力の推進

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

文化財の防災、あるいはレスキュー活動に非常に力を入れている点を大いに評価したい。今後とも地方公共団体や消防、自衛隊など他機関との連携を密に推進されることを望む。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

経費削減に対する有効な手段は、これまでに十分検討、実施されている。26年度も前年度比でわずかに悪化している事項もあるが、毎年検証され続け、反省材料としていることを評価したい。

自己収入が増大し、しかも剰余金の目的積み立てが認められることになった事は、大変喜ばしく、意義ある事業展開と機構の発展に期待したい。

各館とも年ごとに努力を重ね業績を伸ばしているが、前へ前へ進むばかりでは仕事量が増加するばかりで、職員の疲労にもつながってくる。前へ進むと共に定期的に見直しをし、切り捨てるところは切り捨て、業務の適正化を図るべきではなかろうか。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

運営費交付金以外に自己収入の面に於いて多様な財源からの増収を計画されており、今後も安定的に自己収入が得られるよう、努力を続けていただきたい。

IV その他人事計画等

専門職制度が創設され、国際交流分野において人材が確保されたことは、今後の機構の在り方を考える上でも注目されるが、26年度1名のみでの採用であり、まだその成果は様子見という所であろうか。一方アソシエイトフェローの制度は定着した感があるが、年々採用人数が増加の傾向にあるのは如何なものであろうか。

◎総会

外部評価委員名

柳 林 修

※事項ごとに評価コメントを記入

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

極めて限られた財源の中で、各博物館がそれぞれの存立と運営の特色や独自性を生かした収蔵品の整備に適切に取り組んでいる。平成26年度の購入費用は1.4～7.3億円で妥当だ。各館で工夫を凝らした購入品だが、質と量のバランスを考慮し、時には一点豪華主義があってもいいのではないか。それが館の新しい目玉になることも考えられるからだ。各館の協力で、時には高価な収蔵品を購入できる重点配分を行うことも検討したらどうかと思う。

少ない財源の中で、館蔵品を補完し、展示の充実を図る意味で文化財の寄託や寄贈は大きな意義を持つ。東京国立博物館（以下、「東博」）や京都国立博物館（以下、「京博」）は順調だったが、奈良国立博物館（以下、「奈良博」）や九州国立博物館（以下、「九博」）は明らかに少ない。とくに奈良博の寄贈ゼロが気にかかる。所有者の保管状態がいいので寄贈に至らないことも考えられるが、適切な寄贈や寄託に努めていただきたい。

収蔵品を次代へきちんと継承することは、国民の負託を得て貴重な文化財を所持、保管、展示する各博物館の重大な責務だ。各館とも文化財修理での重要性や緊急性を判断して順位を決め、応急修理や本格修理に取り組んでいるのは喜ばしい。文化財修理にとってもトリアージが求められるから、しっかりと文化財の状況を判断して敵意適切な順番を決め、文化財の保存にとって遅きに失することのないような正しい対応をいっそう確立してほしい。

そのためには各館の連携が必要なことはいままでもない。そこで役立つのが文化財修理資料のデータベースである。いっそうの拡充を図り、他館も活用できるよう尽力するとともに、各館がそれぞれに購入している最新の調査機器の共同利用をより盛んにして修理にいっそう役立ててもらいたい。

京博が京都府精華町の「旧私のしごと館」を収蔵庫として整備することを始めたのは朗報である。ただ単なる収蔵庫としてだけでなく、研究、調査の機能を少しでも持たせることはできないだろうか。また、地域的なことを考えると、奈良博も利用できるような態勢が考えられないか。検討をお願いしたい。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

各館とも館の特色を紹介する平常陳列（常設展）で多くの展示替えや展示の工夫などを通して魅力ある展示に取り組んでおり、入館者の増加傾向がうかがえて努力が伝わってくる。それとともに、国民のニーズをとらえて多彩な特別展を実施して多くの入館者の関心に応えており、国民の文化的要求に対応する姿勢は評価できる。平成26年度の総入館者数が389万人となり、初めて300万人を割り込んだ前年度からわずか1年で大幅に回復したことは、各館の積極的な取り組みが奏功したことの現れだ。一方で入館者が多くなくても満足度が高ければ、それはそれで

博物館の役割を果たしていることは確かだろう。現実にはそう考えるのは甘いと思われるが、そういった意識を持つことも大事だろう。「量より質」との指摘は弁明に取られがちだが、そうではないこともあることを共通認識として持ち、入館者に感動を与える、心に残る内容の濃い展覧会の実現にも努めてもいい。

平成26年9月13日に開館した京博の平成知新館は、これまでの平常陳列の展示館としてのあり方を一新した斬新な展示環境だ。本来、最も重視されるべき館の特色を示す平常陳列に光を当てており、望ましいし、展示状態を見て感動的でさえあった。京都文化の多彩な様相とその本質を平常陳列で紹介できる態勢が整ったといえよう。しかし、1年目は入館者が多いのは当然で、試されるのは2年目からである。京博の取り組みを注視したい。一方で九博の平常展の入館者が目標に達しなかったという。10年目を迎えて好調な九博だけに検証して戦略の見直しを求めることも必要だろう。

4館とも展示説明での英語訳作品キャプションを設けたのは喜ばしい。中国語や韓国語の説明の充実もさらにお願したい。円安傾向が進んでおり、外国人訪日者数は大きく伸びている。国も東京五輪が行われる2020年度までに年間2,000万人の達成を目標にしており、博物館への外国人入館者が多くなるのは必然だ。日本文化の真相や多様性、独自性などを理解してもらい絶好の場所である博物館の意義はさらに増す。外国人対策に本腰で取り組んでいただきたい。

そこで思うのは日本人が海外旅行する時のツアーでは大英博物館とかルーブル博物館とかが組み込まれている。そういった企画を外国人旅行者の訪日でもできないか、旅行会社と企画しても面白い。

個々の展覧会を見ると、実物大の建物内部を再現してリアル性を入館者が体験できた東博の「栄西と建仁寺」展、初めての国際共同企画展「東アジアの華 陶磁名品展」、一地域を取り上げた、冒険的だが斬新な内容の京博の「南山城の古寺巡礼」展、国宝指定への道のりを紹介して文化財保存の取り組みも紹介した奈良博の「国宝 醍醐寺のすべて」、九博の「古代日本と百済の交流」など意欲的な特別展が目立った。「南山城……」は京博の3年間のこの地域の文化財調査の成果を反映させたもので、本来の博物館の展示のあり方を示した内容として素晴らしいし、地域の文化財にも勇気を与える展示といえる。特別展は集客では博物館の収入に総じて寄与しており、力を入れるのは当然だ。それによって研究員のスキルや研究の幅の向上が見込める。しかし、厳選しての開催であってほしい。研究員や職員の過重な負担になることは厳にっつしまなければならない。

気になったのは、東博と九博で行われた「台北国立故宫博物院—神品至宝」の入館者である。メディア各社の全面的な協力を得て“千人力、万人力”と思えたが、九博では目標を大幅に超えたものの、東博では目標に達しなかった。出品物が少し変わったのが影響したとは思えず、展覧会の名称における政治的な問題などが影響しているのか不明だが、検証が必要だろう。しかし、中国文化の奥深い特質や優秀さ、洗練性を価値ある文化財を通して発信して入館者に感動を与えたことは確かであり、今回、未公開の収蔵品も多数あることから、今回の困難を克服して第2弾、第3弾の展覧会を期待したい。

一方、奈良文化財研究所（以下、「奈文研」）飛鳥資料館の入館者減少に歯止めがかからないのが心配である。人数の少ない同館として様々な取り組みや展示をしている努力は涙ぐましい限

りだが、今年開館40周年を迎えるだけに、日本の始まりの地「飛鳥」を総合的に理解できる重要施設の同資料館の入館者増に本腰を入れて取り組みたい。交通の不便さなどが原因とみられる、行政や交通機関と協力し、近くオープンする隣接する国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園との連携も図っての魅力アップと入館者増の取り組みが必要だ。

奈良市では国交省の平城宮跡展示館（仮称）建設も始まる。奈文研平城宮跡資料館との住み分けをどうするのか、人員はどう手配するのか。また、キトラ古墳周辺地区公園にできる体験学習館の展示内容や人員配置もどうなるか気がかりだ。日本の古代文化を国内外に発信する絶好の施設だから、その運営には国、地域が連携を取って協力しあって万全を期していただきたい。

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

4 国立博物館のナショナルセンターとしての役割は日増しに高まりつつある。とくに地方の博物館や博物館相当施設にとって、その存在は大きい。指導的役割、相談相手として頼りがいのある立場だ。それだからこそ、自身の調査や研究に力を入れている姿勢がはっきりとうかがえることは頼もしい。サイトや報告書、研究会、講演会などで情報発信にも果敢に取り組んでいる姿は高く評価されよう。海外文化の紹介にも意欲的であり、中核としての機能は着実に強化されている。

中核であり続けるためには、国民の信頼と理解が何より大切であることは言うまでもない。その意味では、博物館をより身近に感じてもらう取り組みとしての体験型プログラムの積極的な導入は時機を得ていると思う。少ない財源で、十分な人員補充もままならない中で、機能強化策としてはボランティア活動の充実が効果的だろう。各館とも研修に取り組んで質の向上を図っている。九博は出前授業にも今後、活用しようという。ボランティアの幅広い可能性を生かすことも機能強化の一端を担うのではないか。

また、博物館支援者の増加も着実に進んでいることがわかる。東博は会員制度の一元化で拡充に成功し、金額ベースで8%増を達成した。厳しい運営費交付金の現状の中で支援者を増やすのは機能強化の大きな手段だ。民間のノウハウと意識を持ち、支援者増を目指すいっそうの取り組みを求めたい。

東日本大震災から4年が過ぎた。被災地はまだ復興の途上だ。その中で被災文化財の救出、被災地の今後の文化財保護や文化財行政の重要性がいっそう増している。それだけに機構所属の機関の役割は極めて大きい。文化財防災ネットワーク推進本部を早期に立ち上げて専門家会合を開催するなど、素早い対応は称賛される。アソシエイトフェローをこの取り組みに11人採用したことも意欲の表れである。継続的に取り組みが行われ、今後の災害に対する文化財保護行政にとって大黒柱になることを願う。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

（研究所部会での外部評価書を参照願います）

5 文化財保護に関する国際協力の推進

（研究所部会での外部評価書を参照願います）

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

(研究所部会での外部評価書を参照願います)

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

(研究所部会での外部評価書を参照願います)

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

二研究所、センター、四博物館の業務での効率化はかなり進んでいる。協力関係も構築されており、共同研究や最新の調査機器を相互に活用し合う態勢をさらに進めてもらいたい。調査資料の運搬など課題もあるが、東京文化財研究所と東博、奈文研と奈良博、京博なら距離的にも近く、共同研究や共同調査はもっと積極的に推進することができるだろう。それぞれに調査機器をそろえなくても補完できる態勢が整えることができれば効率化にプラスになる。

研究員の研究分野があまりにも細分化され過ぎていると感じることもある。難しい面もあるが、研究分野のグローバル化、共通化が必要なこともあるだろう。そうすることによって多数の視点からの研究指導も可能となる。それができれば、7機関での人事交流もより可能になるだろう。専門分野の研究で人事交流は難しいとの指摘はもっともだが、奈文研と京博や奈良博との交流などで機関が活性化している面もあり、人事交流を進めるべきだろう。

自己点検評価報告書の内容を見ても、極めて多分野にわたる、数多くの研究や事業が書かれており、その裏面からは忙しすぎる職員や研究員の姿が浮かび上がる。その忙しさを増やさない方法での研究分野の統合などができればと思うのだが……。

多方面で多角的に業務を見直すことで効率化が生まれることも考えられる。民間から業務運営の効率化に関するアドバイスを受けることも効率化に寄与するのではないか。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

研究所部会での外部評価書で書いたが、平成25年4月の参議院予算委員会での質疑応答がどうしても頭から離れない。再度、その点を述べておきたい。

その委員会で文化芸術予算の貧弱さを指摘した中山恭子議員の質問に、下村文科相は「しっかりとした予算の裏打ちで文化芸術立国にしたい。来年度以降、予算が飛躍的な増額になるような取り組みをしたい」と述べ、安倍首相も「支援していきたい」と後押しした。下村文科相は「32年度までに（予算を）倍増させる」とも語ったという。国民への約束である。

ところが、今年度の文化芸術予算は前年度比0.2%増に過ぎない1037億円である。国全体の予算のわずか0.1%強だ。以前からよく指摘されるフランスの文化芸術予算は国全体の1.06%と日本の10倍である。文化芸術立国を声高に言う割には、何と貧弱で心もとない施策かと嘆いてしまう。これは国民共通の思いであろう。大臣が国会審議という場で公言して約束したのに、不実行とは落胆を通り越して情けなさどむなしさでいっぱいだ。幸い、二人は今もその職が変わっていない。継続的に施策を実現するためには長期的に取り組む体制が必要であり、その意味でも二人がいる間にこの発言の実行を求める強い取り組みを行うべきだ。この発言を思い起

こして、お二人には来年度予算で誠意を見せていただきたい。このことを訴えるために国会議員への陳情も必要だろう。行動しないと前に進まない。

そんな思いを巡らせていたら、東京五輪に向けて建設される新国立競技場が1,500億円の当初費用から3,000億円にもなるとして、開閉式のドームの建設を先延ばしするとか、金がかかりすぎる建設計画を検討し直す方向だとかのニュースが耳に入ってきた。もちろん、東京五輪は重要であり、成功を祈るばかりだが、3年間の文化芸術予算を新国立競技場一つに費やすということに唾然とした思いだ。

外国人観光客の増加を目指す国の考えに賛成するが、そういう外国人に日本の素晴らしい誇るべき文化を体感してもらい、理解を深めて分かり合って平和外交につながることを考えれば、文化芸術予算の増加は当然で、国民の理解を得られることに異論はない。国には安心して文化芸術予算の増額を推し進めていただきたい。

つまり、国立文化財機構への運営費交付金の増額をお願いしたい。少ない人数で、これだけの仕事や業務を行っており、事業目標は確実に達成してきた。自己収入も寄付金や科学研究費助成金などの獲得に努めた結果、基準額より29.04%増加させた。職員や研究員の努力が結実したとあっていい。しかし、運営費交付金の額は事業の内容や成果に見合わない、全体で82億3900万円の予算はあまりにも少ない。こういう状態だから、大阪府堺市に本部を置くアジア太平洋無形文化遺産研究センターに、本来付くべき運営交付金がまったくないという異常な事態が続いている。ユネスコの期待にも背くことであり、同時にオープンした韓国の研究センターに人員でも予算でも施設でも見劣りするの明らかだ。同センターへの運営交付金が、これまでの機構の枠外で、しっかりと新しく割り当てられるよう国財政当局に特段の配慮を求めたい。数億円でもいいのである。

だれがみても、二研究所、センター、四博物館が所属する国立文化財機構への運営費交付金が少なすぎる額であることは明らかである。センター同様に理解ある、当然の対応を期待したい。

人員の不足は組織の根幹を左右する一大事である。人員の年齢構成にも影響し、業務の継続的な取り組みにも断点を生じかねないことを危惧する。いろいろな方法で採用枠を広げているようで、機構や機関の努力がうかがえるのはよいことだ。それでも言えることは減ってきた正式職員の補充や増加が本来の姿であり、その旗を降ろすようなことがあってはならないということだ。期限付き職員のアソシエイトフェローは懸命に仕事に取り組んでいて優秀なのだが、どうしても研究といった長期的な視野に立った仕事ではメインの役割を担えない部分が生まれてきて、補助的な分野での仕事に限られてくる恐れがある。継続研究の観点からも本人のモチベーションの点からも、正職員の採用に積極的に取り組む努力を続ける方針は持ち続けていただきたい。予算の裏付けがないと難しいことを分かりきった上での指摘である。

IV その他人事計画等

研究所部会での外部評価書で書いたが、平成25年4月の参議院予算委員会での質疑応答がどうしても頭から離れない。再度、その点を述べておきたい。

その委員会で文化芸術予算の貧弱さを指摘した中山恭子議員の質問に、下村文科相は「しっかりと予算の裏打ちで文化芸術立国にしたい。来年度以降、予算が飛躍的な増額になるような

取り組みをしたい」と述べ、安倍首相も「支援していきたい」と後押しした。下村文科相は「3年度までに（予算を）倍増させる」とも語ったという。国民への約束である。

ところが、今年度の文化芸術予算は前年度比0.2%増に過ぎない1037億円である。国全体の予算のわずか0.1%強だ。以前からよく指摘されるフランスの文化芸術予算は国全体の1.06%と日本の10倍である。文化芸術立国を声高に言う割には、何と貧弱で心もとない施策かと嘆いてしまう。これは国民共通の思いである。大臣が国会審議という場で公言して約束したのに、不実行とは落胆を乗り越えて情けなさどむなしさでいっぱいだ。幸い、二人は変わっていない。継続的に施策を実現するためには長期的に取り組む体制が必要であり、その意味でもこの発言を思い起こして来年度予算には誠意を見せていただきたい。このことを訴えるために国会議員への陳情も必要だろう。行動しないと前に進まない。

そんな思いを巡らせていたら、東京五輪に向けて建設される新国立競技場が1,500億円の当初費用から3,000億円にもなるとして、開閉式のドームの建設を先延ばしするとか、金がかかりすぎる建設計画を検討し直す方向だとかのニュースが入ってきた。もちろん、東京五輪は重要であり、成功を祈るばかりだが、3年間の文化芸術予算を一つの新国立競技場の建設に費やすということに唖然とした。新国立競技場を比べるのはおかしいことは分かりきったうえで、文化芸術予算の正しいあり方を再考願いたい。

外国人観光客の増加を目指す国の考えに賛成するが、そういう外国人に日本の素晴らしい、誇るべき文化を体感してもらい、理解を深めて平和外交につながることを考えれば、文化芸術予算の増加は当然で、国民の理解を得られることに異論はない。安心して予算の増額を押し進めていただきたい。

少ない予算で、あふれんばかりの事業を達成してきた機構職員や研究者の姿に、毎年のことながら敬意を表す。国際交流や平和外交にも通じる文化、文化財の調査、研究、保存等は誇るべき仕事であり、今後も胸を張って業務や研究に邁進していただくことを祈念したい。戦後、経済優先があまりにも重視されて日本人が本来もつ素晴らしい心や日本人としての誇り、思いやり、自信が失われかけた。「それではいけない」と心の大切さを求める運動や国民の思いが起きた。今、再び、日本人が本来持っている素晴らしい心や日本人としてのアイデンティティーを大切に作る時代であると思う。文化、文化財は心を豊かにして、平和を築く重要なツールにもなりうる。文化、文化財をそのような目的に最初から考えることは不遜のそしりを免れず、効率的に考えてはいけないことは承知の上で、文化と文化財の大切さを改めてこの時期に思い、そういうことに国が積極的に支援する体制づくりに重い腰を上げることを重ねて期待して、それを証明するのは何よりも手厚い支援であることを訴えたい。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 博物館調査研究等部会

部会長 河 合 正 朝（慶應義塾大学名誉教授・千葉市美術館館長）

酒 井 忠 康（世田谷美術館長）

浜 田 弘 明（桜美林大学教授）

藤 田 治 彦（大阪大学大学院文学研究科教授）

森 弘 子（福岡県文化財保護審議会専門委員）

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

河 合 正 朝

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

それぞれに持てる特色（地域性や構成員等の）を活かし、各館の個性を發揮すべく、業務に取り組んでおり、各館が目的相応の成果を上げていることが認められる。しかし、相変わらず予算面における締め付けが続いている点に苦慮されていることが窺える。とはいえ3法人の統合を見送る閣議決定がなされたことを機に、当機構がナショナルセンターとして、各館がそれぞれに機能を十分に發揮するよう組織の拡充を図ることが望まれよう。一方、自己収入目標額を超えた収入があった場合の処理についての改善が、たとえ取敢えずであっても平成26年度は、これまでほとんど認められることの難しかった経営努力にたいして、その認定基準要件が幾分なりとも改善され、収入目標を超えたものを新規に利益として認められるようにするという方針が示されたことは、同慶の至りとも言うべきか。更なる法制上の整備も必要かと思われるが、法人自立の道の一步として着実な努力を重ねて欲しい。

2 自己点検評価に関する事項

評価は、各館とも適切に行われているものと評価出来る。総務大臣決定として、評価に関する指針ないしは、基準が示されたことは、自己評価それ自体に対する信頼性を増すことになったと考える。また、正しい自己評価は、反省、改善のための材料でもあり、各自にとって次に取り組む業務にとっての高次の努力の指針なることが望まれる。

3 調査研究に関する事項

調査研究の成果が展覧会の展示や博物館の教育普及事業に反映されていることが認められ評価することが出来る。調査研究にあたっては、同一館の研究員に限らず、その目的に応じて、他館の研究員、さらに拡げて、その分野の大学、研究所など他機関の専門研究者を加えることで、質の高い成果を希求しており、それは昨年度に比しても、増してその実をあげていることが窺え、高い評価が与えられよう。こうした調査研究の機会を広く研究者等のうちに関することは当機構に課された、いわば責めの一つとしてその促進を図ることが肝要であろう。

京都国立博物館（以下、「京博」）の実施した、京都旧家の藏品調査および調査結果に基づく作品・資料等の寄贈は、特記すべき事項と言えよう。引き続きその調査研究は行われるものと思うが、受け入れに関しては、慎重かつ十分な検討を重ねながら行われることが望ましい。それは、これを良き善例とすべきであるからだ。

4 その他

4館がそれぞれに業務遂行のための資金の調達（外部資金の導入）はもとより、調査研究の対象（海外学術交流を含めて）の決定にあたっては、限られた状況のなかで、工夫をこらし、

努力している跡が窺えて好感が持てる。九州国立博物館の高校所蔵の考古資料に対する調査研究と活用に関する教育普及的なところみは、今後、研究後継者の育成への発展も期待出来る点を含めて高い評価を与えたい。教育普及的な意味合いから、昨年度も委員からの関心を集めた、京博の文化財ソムリエや京博ナビゲーター。奈良国立博物館のボランティアを活用しての「世界遺産学習」のプロジェクトは今後とも継続を図ることで成果が期待される、また、東京国立博物館の「ミュージアムにおける鑑賞者開発」に関するプロジェクトの立ち上げは、これからの博物館・美術館のありかたを探る果敢な試みとして評価すべきであり、将来に向けての期待も大きい。

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

酒井忠康

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

各館それぞれが、予算削減などの状況にもかかわらず、当初の目的をほぼ計画通りに達成していると思う。その意味では特に大きな問題はない。しかし問題がないことを評価するのではない。年々減っていく国立文化財機構の予算そのものと関連しているということを根本から見直す必要があり、その時期に来ているということでもある。

2 自己点検評価に関する事項

公平性も図られていて、概ね評価に関しては妥当である。

3 調査研究に関する事項

各館が活動の中心的な柱でもある調査研究の成果を着実なものとしている点については評価したい。しかし国際的な大きなプロジェクトを立ち上げて、長期的な活動と積極的な展開を望む。

4 その他

個々の研究者の発意による調査研究の推進と、学際的な見地から異分野の領域－例えば文化人類学や現代美術など－にも関心の枠を拡げて、国際的な研究者間の交流を必要とする時期に入っているのではないかと思う。

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

浜田 弘明

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

総論としては、定数や予算が厳しい状況下にも関わらず、各館の努力の跡を窺うことが出来、大変健闘していると評価したい。とくに財政難の中、東京国立博物館（以下、「東博」）では、外部資金として、平均的採択率からすると評価すべき高採択率を背景として、科学研究費が各所で活用されている。研究・保存型の国立博物館にとって研究経費の獲得は、ことに重要な課題であり、今後の継続的採択に期待したい。また、資金の獲得という点で、事務的には難しい点も生ずるかと思うが、I S I D・クウジツ社（東博）、凸版印刷・NHK（九州国立博物館（以下、「九博」））などとの共同事業の例に見るように、民間企業との共同事業の展開も重要である。

各館の個別努力は窺えるものの、日本の国立博物館は、諸外国の国立博物館に比較すると、その予算規模・人員は未だに少ないと言わざるを得ず、文化国家の責務として国（政府）には、博物館への理解を一層深めてもらい、一層の財政支援を願うばかりである。

2 自己点検評価に関する事項

今年度から評価基準が変更され、B評価が100%以上の達成基準となったが、自己評価としてこのB評価が中心となっていることから、大半の調査研究業務は順調に進んでいるものと理解する。また部分的には、A評価も散見され、多くの業務で想定以上の収穫があったことを窺い知ることが出来る。

定量的評価、定性的評価ともに、昨年度は報告担当者によって項目数にバラつきが見られたが、本年度はそれらが改善されている様子が窺える。

また特別展のための調査研究は、博物館にとって大変重要な位置を占めるものであるが、調査研究成果を展示によって国民に還元するという博物館の使命から考えると、実績値として催し物や刊行物の件数のみならず、国民に向けたマスコミへの情報発信件数の実績記載などについても記載されることを、昨年度に引き続き提言したい。

3 調査研究に関する事項

多忙を極める日常業務の中で、博物館における調査研究の柱とも言うべき、多数の有形文化財に関わる調査研究に取り組み、着実に成果を上げていることは、喜ばしく思うとともに、高く評価したい。国内やアジア地域における資料の調査研究はもとより、欧米に渡っている日本資料の現地調査や記録作業は、とりわけ立ち遅れている領域であり、引き続き、国立博物館の使命として積極的に進めて頂きたい。

また保存環境・保存修復に関わる調査研究や、効果的展示や教育活動に関する調査研究は、博物館でなければ取り組めない領域であり、引き続き積極的に展開されることを期待したい。

東博で実施された「野外シネマ」の実践例などは、博物館利用者としては低調な若者層の

新規開拓に向けて期待出来るものと言える。また昨年度、新館がオープンした京都国立博物館において、「ミュージアム・カート」や「京博ナビゲーター」の配置が実践されたことは、従来、子どもの目線から眺めると近寄り難い印象が拭えない国立博物館のイメージを、大きく変えるきっかけになるものと考えられる。

九博においても、市民を取り込んだ「市民ボランティアと行うIPM」や「みんなでまもるミュージアム」活動が展開され、同様に国立博物館のイメージを変えて行くものと期待される。さらに、高校所蔵考古資料の所在調査も全国的な広がりを見せていることは、新しい取り組みとして評価すべきであるし、「考古学の甲子園」となるよう今後期待したい。

4 その他

国民に、より親しみが持てる国立博物館づくりを目指して、今後も引き続き、地道な活動を一つ一つ積み上げていって欲しい。こうした地道な活動の上に、国民の文化が成り立っているということを国（政府）にも是非理解頂き、ことに積極的財政的支援がなされることを期待したい。

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

藤田 治彦

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

国立博物館各館とも、また人的、予算的に大変な館はとくに、それぞれ工夫を重ねて、国立博物館としての役割を果たしている。日本の国立博物館は他の先進諸国とは比較にならないような低予算で運営されており、国立文化財機構はそのような運営上の工夫や努力を重ねると同時に、しかるべき予算要求の努力も十分行わなければならない。

2 自己点検評価に関する事項

従来の自己点検評価は、A評価が大半を占めていたが、今回はB評価が標準的評価となり、わかりやすくなった。とはいえ、各館における仕事のレベルが下がったわけではなく、全般的に優れた企画がなされ、適切に実施されている。ただし、S評価は特別であるにしても、A評価やC評価が極めて少ないことも気になる。単に標準をAからBに変えただけでは今回の改革の意味が薄れてしまうので、より積極的にA評価やC評価等もなされることを望ましい。

A評価は高い評価であることはもちろんだが、C評価も決して低い評価ではなく、そこから「1 総合的な事項」に述べたような、予算上の問題、人材不足の問題等も具体的に見えてくることありうるので、このような評価のシステムと自己点検評価報告書、そして外部評価委員会を積極的に活用してほしい。

3 調査研究に関する事項

全般的に優れた調査研究が行われている。日中関係、日韓関係等、わが国は外交的、国際的に困難な状況にあるが、各国立博物館等、国立文化財機構が果たす国際交流の役目は大きい。各館は引き続き、その役割を積極的に果たして行くべきであろう。

4 その他

特別展「みちのくの仏像」や特別展「3・11 大津波と文化財の再生」、ならびに「東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究」等、東日本大震災の被災地に関わる展覧会企画や研究を行うことなどによって、東京国立博物館を中心として各館は、文化財の保護等に関する国立博物館として役目を大いに果たしている。しかし、岩手、宮城両県、そして、とくに原発事故に見舞われた福島県はいまだに極めて困難な状況にある。

文化財の保存修復や有意義な展覧会の企画、県や各市町村の博物館や資料館、あるいは高等学校をはじめとする教育機関へのサポート等によって、それらの地域の文化的復興、文化的活性化に一層の貢献が期待される。

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

森 弘 子

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

平成 26 年度は、これまでもまして機構内の各施設、機構外の機関、あるいは海外研究機関との交流が一段と進み、相互の情報交換、研究協力により著しい成果を上げたと評価される。

東日本大震災より 4 年が経過したが、文化財レスキューなど変わらぬ支援が続けられ、東京国立博物館（以下、「東博」）の特別展「3・11 大津波と文化財の再生」「みちのくの仏像」などに成果が結実した。「みちのくの仏像」では、東北の文化のすばらしさに心打たれた観覧者も多かったと聞く。展覧会を通じて他地方の人々が東北への理解を深めることは、復興の大きな力となることであろう。今後も文化財機構として十分に専門性を生かし、東北の復興に寄与していかれることを望む。

2 自己点検評価に関する事項

今回より「B」評定を基準とされ、かつ目標値が細分化されたため、自己評価する側にとっても、私共にとっても評価がやりやすくなったと思う。旧来は「C」（70%未満）の下は「D」がなく「F」（成果が認められない）となっていたが、今回「D」（80%未満）で「業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する」となっていて、より効率的に、かつ厳しく事業の見直しがなされることになったと評価される。

評価項目（プロジェクト名称）が、館藏品などによる基礎的調査研究、展覧会に関する調

査研究というように、順序立て述べられていることも改善された点かと思う。どの研究がどういう展覧会に反映されているのか、どういう成果を生み出しているのか、理解が容易になった。

3 調査研究に関する事項

日中韓三国は、政治的には難しい局面にあるが、それだからこそ一層文化的交流を続けることは大事なことであり、日中韓国立博物館が共同研究し合同企画特別展が開催されたことには喜ばしいことである。今後こうした展覧会が継続的に各国持ち回りで開催されることを期待したい。

九州国立博物館（以下、「九博」）の特別展「古代日本と百済の交流―太宰府・飛鳥そして公州・扶余―」が、水城・大野城・基肄城 1350 年祭に呼応して開催されたこと、日韓関係の難しい中でのご苦勞を思うと、地元の方として感謝に堪えない。七支刀が展示され、韓国から高校教師 300 人が見学に訪れたことは喜ばしいことであった。

多くの文化財を所蔵する「旧家」は、代替わりの時などに文化財が流出したり、破却されたりする事態が近年多発している。京都国立博物館（以下、「京博」）の調査によって、江戸時代からの旧家より、多くの文化財の寄贈を受けることになったことは意義あることであった。国立の館蔵品に相応しいかどうかの判断も難しいところであろうが、そうでない場合の行き先についても指導できるよう、日頃の取り組みに期待したい。「寺社」ばかりでなく「旧家の文化財」への取り組みは、これを先進事例として、他館に於いても検討されたい。

東博の宮崎県西都原古墳群、京博の島根県鱒淵寺などのように、地方との研究交流が進むことは地方の貴重な文化財に光りを与えるのみならず、研究の質の向上に資するものと考えられる。今後もより多くの地方との研究交流が進むことを期待したい。

東博において聴力障がいを持つ児童生徒のための鑑賞プログラムの構築にむけての研究がなされているが、海外博物館に比し日本ではこの面が遅れていると感じられる。他館に於いても、聴力障がい者ばかりでなく、一層のユニバーサル化、バリアフリー化の研究がなされることを望む。

奈良国立博物館は仏像館修理中とのことであるが、世界遺産学習の中で「仏像の衣裳を着てみよう」の試みは、子ども達にとって非常に興味ある内容であろう。仏像館再開後もさらなる教育プログラムの充実を期待したい。

4 その他

東博は創立 150 年に向けての館史編纂の基礎的調査を続けておられ、九博は今年開館 10 周年を期して次の 10 年を考える懇話会で各界委員の意見を拝聴したり、10 年の館史をまとめられている。周年事業や新館建設などを機に、未来に向かって各博物館のありかたを再考しようとする姿勢に敬意を表したい。

京博に於いては、平成知新館の開館を機に従来の文化財ソムリエの外に、京博ナビゲーターの制度を導入され、ミュージアム・カートなど新しい教育ツールを開発された。また九博のトピック展に相当するものであろうか、「特別展観」が新たに加わり、研究員の研究の成果

が反映された展覧会が開催されるようになった。他館に比して教育普及の面では後れを取っていると感じられていた京博であったが、建物ばかりでなく、内容も一新されたことは大いに評価したい。ただこうした試みの実施が、一般に浸透するには時間を要するであろう。さらに広報に尽力されることを望む。

文化大使・広報特使の任命も良いアイデアだと思う。タレントは発信力が大きく、彼らにとっては国立博物館のこうした役職に就けることはステータスであり、積極的に発信している様子が覗える。しかし特別展覧会に重点が置かれている感がしないわけではない。もっと自由に博物館の「あらゆる魅力」を発信して頂けたらと思う。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 研究所・センター調査研究等部会

部会長 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

稲田 孝司（岡山大学名誉教授）

岡田 保良（国士舘大学イラク古代文化研究所教授）

玉 蟲 敏子（武蔵野美術大学造形学部教授）

柳 林 修（読売新聞大阪本社記者）

◎研究所・センター調査研究等部会

外部評価委員名

佐藤 信

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

文化財に関する基礎的・先端的な調査・研究、国際協力などの多方面にわたり、期待される成果を十分に挙げていると評価できる。研究成果の発信にも十分な努力が為されているが、高レベルの成果を研究者向けのみでなくさらに国民全般に向けてわかりやすく発信していただきたい。

東日本大震災に対応した「文化財レスキュー」事業での東京文化財研究所（以下、「東文研」）及び奈良文化財研究所（以下、「奈文研」）の素晴らしい実績を活かして、これからの危機対応体制の整備に向けた成果発信をさらに進めていただきたい。

東文研・奈文研の両研究所やアジア太平洋無形文化遺産研究センター（以下、「センター」）の調査・研究事業に果たす、非常勤のアソシエイトフェロー・客員研究員・研究補佐員などの比率が高くなっており、常勤研究員の数を増やす経営努力をお願いしたい。

調査・研究成果の社会的発信をさらに強化していただきたいが、話題となりにくい基礎的な調査・研究事業についても、研究所・センターの基礎的体力の強化のためにも、充分配慮するべきと考える。

2 自己点検評価に関する事項

定性的評価・定量的評価のいずれも、所期の目的達成・100%達成をBとする新基準に対する遠慮からか、公共性・有益性が高い素晴らしい事業成果についても、Bを中心として少数のAを配した控えめな自己評価が為されていたが、もっと自信をもって高い評価を主張していただいてもよいと思う点はいくつもあった。

両研究所・センターとも、限られた人員・予算の中で諸事業に大きな実績を挙げていると評価できる。一方で、非常勤職員の比率が次第に高くなってきている。「効率化」努力について評価する際に、「常勤人員と予算が減った一方で実績は増加した」ことを示すための、過去の実績との比較方法は考えられないか。

両研究所・センターの調査・研究成果がマスコミ等で好意的に取り上げられた実績、研究員の受賞、そして科学研究費など外部資金の獲得件数・金額なども、実績としてもっと評価対象としてよいのではないか。

3 調査研究に関する事項

基礎的・先端的な文化財の調査・研究において、多方面にわたり十分な成果を挙げていると評価できる。都城発掘・歴史史料調査・保存科学・無形文化遺産調査などにおける、地味ながら重要な基礎的研究の分野にも、十分な人的・財政的な配慮をするべきと考える。

東文研・奈文研の両研究所間の調査・研究上の協力体制や、国立文化財機構の他の博物館等との協力体制を、所員・館員どうしの私的な交流のみでなく、組織的な形で積極展開して

いただきたい。

機構外の大学・学会との調査・研究上の連携も、さらに組織的に進めていただきたい。研究集会の開催にあたっては、限られた範囲の研究者だけでなく、広範囲な研究者に参加を呼びかけるタイプの研究集会を増やしていただきたい。

近代文化遺産について、保存修復のみでない歴史的な調査・研究の充実化と、その保存活用・文化財マネジメントに関する調査・研究をも進めていただきたい。

重要な成果を挙げている東文研の文化財アーカイブズ・保存修復・無形民俗に関する調査・研究事業について、体制の整備・充実を進めていただきたい。

大きな成果を挙げている奈文研の文化財の探査・測量に関する調査・研究事業や、高レベルの発掘調査技術の発信事業について、体制の整備・充実を進めていただきたい。

センターの調査・研究体制の整備・充実を進めていただきたい。とくに研究職員の科研費獲得が独自にも行えるようになることを望みたい。

考古学・日本史学・保存科学・美術史学・遺跡学・建築史学・民俗学・民族学・庭園史学・写真学など、文化財と関連する多くの学会への様々な形での協力も、実績として評価する方向で扱っていただきたい。

4 文化財保護に関する国際協力の推進に関する事項

東文研・奈文研とも、文化財保護のための調査・研究、保存修復、人材育成や技術移転など多分野にわたる国際協力や国際研究集会の開催などにおいて、日本ならではの質の高さで大きな実績を挙げており、非常に高く評価できる。各国・各組織との協力体制を、個々の所員の尽力に負うのみでなく、研究所としての組織的な事業としてさらに展開していただきたい。

文化財保護は政治や国境を超えた世界的な課題であり、歴史認識問題が外交課題となっている中国・韓国との間の国際協力についても、これまでの実績をふまえ、むしろこれまで以上に積極的に努力していただきたい。

センターも、今後出されるユネスコによる5年評価を十分にふまえた上で、アジア太平洋地域での国際的な協力に向けて、さらなる体制整備をお願いしたい。

研究所・センターの共通テーマとして、有形・無形の「世界文化遺産」に関する調査・研究を推進していただきたい。

5 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信に関する事項

ホームページ・ウェブサイトによる調査・研究成果やデータベース・デジタルアーカイブ等の発信・公開が多様に展開されており、多くの人々からアクセスされていることを高く評価したい。さらに魅力的で便利な情報発信を推進していただきたい。

研究所の報告書・研究論集などの出版物が、多様かつ大量に刊行されていることは、成果の発信として高く評価できる。こうした刊行物が、入手しにくい外部・地方の研究者や一般に向けても販売されるようにできないか。インターネットによる論文・データなどのPDF公開を、さらに積極的に展開していただきたい。

調査研究の高レベルの成果を、研究者向けのみでなく一般国民に対しても分かりやすい形で、出版や講演会・シンポジウムによって伝えるなど、さらに発信の幅を広げていただきたい。

両研究所の図書資料や、所内での公開データ・資料などの閲覧・公開について、さらに部外研究者や市民による利用を促進する方向で、公開体制のさらなる整備と広報を進めていただきたい。

機構内の国立博物館や外部の各地の自治体立博物館・大学博物館等と協力する形で展示・公開事業をできないものか。また、両研究所がもつ資料館や展示スペースをもっと活用して、調査・研究成果を国民向けにさらに発信していただきたい。

国交省所管の平城宮跡の国営公園、飛鳥の国営公園（キトラ古墳）における展示公開・体験学習施設が実現段階にあるが、その展示内容や学芸機能に対して、国交省と適切な関係を築いて奈文研が積極的に関与していただきたい。また、文化庁所管のキトラ古墳の保存施設については、文化庁の人的・財政的な組織に対して奈文研・東文研が積極的に協力していくべきではないか。

平城宮跡のボランティア解説や、藤原宮跡資料室のボランティアによる土日開館など、奈文研のボランティア事業が順調に展開していることを評価したい。こうしたボランティア制度が、調査・研究成果発信を進めるための蓄積となる方向性を考えていただきたい。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

国・地方公共団体・博物館・美術館等に対する協力・援助・助言では、委託事業・連携事業はもとより、多分野において高いレベルの大きな実績を挙げていることは、非常に高く評価できる。

両研究所として、文化財研究における高い専門性を活かした高等教育への協力を、さらに積極的に展開していただきたい。それに加えて、地元などの初等・中等教育の学校教育との連携も、進めていただきたい。また、大学の「オープンキャンパス」のような研究所公開事業なども、進められないものか。

7 その他

機構内において、博物館と違って収益・集客事業をあまりもたない研究所・センターの努力目標として、科研費・寄附金・研究補助金や企業協賛など外部資金の獲得に向けた努力をお願いしたい。「ふるさと納税」のような制度で研究所・センターの財政支援の体制を組むことはできないだろうか。また、調査・研究成果の博物館・大学・学会・自治体・報道機関などでの社会的発信・還元を積極的に進めていただきたい。多様な文化財の保存・活用事業に関して、蓄積されたノウハウをさらに広く提供・活用していただきたい。

◎研究所・センター調査研究等部会

外部評価委員名

稲田 孝司

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

自然災害の多発や激しく変動する現代の社会的・経済的要因等により、文化財保護の意義はますます重要度を増している。東京・奈良の両文化財研究所は、東日本大震災に伴うレスキュー事業に見られるように直面する課題に果敢に対応して行政・学界・報道等からも高く評価されてきたが、それは何より長い時間をかけた地道な基礎研究の積み重ねの上においてこそ発揮し得た成果とあってよい。基礎研究の継続、新しい発見や新しい保護・保存手法の開発、必要とされる時々の課題への柔軟かつ迅速な対応という三つの側面が、両研究所の平成 26 年度事業においてもバランスよく、しかも高い質で実現されたと思われる。

ただ、アジア太平洋無形文化遺産センターについては基礎研究を行うための組織的・財政的基盤を発足当初より欠いており、日本政府においては、このたびのユネスコによる外部評価の結果等をも参考とし、この分野での日本の国際的な貢献に積極的に取り組むことが求められる。

2 自己点検評価に関する事項

研究所部会外部評価委員会の会議については、午後 5 時まで時間を十分使って報告と質疑の時間にいくらかでも余裕をもたせていただきたい。予算的な保証があるのかないのかわからないが、研究の現場をまったく見ることもなく評価することが妥当なのかどうか、会議を東京と奈良の両研究所で交互に開催する方が効果的ではないか、等々、外部評価の形骸化を避けるため、いまま少しの工夫があってもよい。

独立行政法人の評価に関する指針が改訂され、B 評価を標準とすることになったが、全体的に見て両研究所の平成 26 年度各事業に関する自己評価は低過ぎる傾向にあり、内容のふさわしい事業については次年度からいまま少し積極的に S ないし A 評価としたほうがよいと思う。

3 調査研究に関する事項

長期的な基礎研究における成果は充実していた。古社寺所蔵の歴史資料調査では仁和寺御経蔵聖教目録の刊行や三仏寺神像の研究（研究所 No.5）で顕著な成果がみられ、建造物資料では法隆寺の古材調査を通して古代建築技法の再検証（No.6）が着実に進められた。

藤原宮跡の東方官衙地区発掘調査では、礎石の楼閣建物、大型掘立柱建物が大極殿と中心線を合わせながら東西に配列されていることが判明し（No.17）、本格的な都城の中枢部構造の成り立ちを解明する上で重要な意義をもった。また、大極殿院（No.16）や東方官衙地区において一部遺構が奈良時代あるいは平安時代まで存続したことを明らかにした点は、当地への条里制波及時期とのかかわりもあって興味深い。平城宮佐伯門西側の南一坊大路の発掘調査（No.13）では、秋篠川の流路が及んでいたにもかかわらず、敷粗朶工法や側溝土留め

工事等を含む大路の良好な遺構を明らかにした。この発掘調査は奈良文化財研究所の施設改築とかかわるものであり、旧施設の制約がある状況下で事前の試掘調査がどの程度効果があったのかを検証しておくことは、今後の埋蔵文化財行政にとっても有意義であろう。

平城宮・藤原宮とも、これまでの長期にわたる調査で資料が膨大となっており、学報による最終報告の積み残しが増えているかと思われる。概報・年報・紀要等で成果の概略は学界や一般に伝えられているものの、学術的基礎資料としては最終報告の刊行が肝要であり、計画的な推進を期待したい。

応用的な研究として実施した「地震・火山噴火予知研究協議会」委託事業の災害痕跡の考古・地質学的データの収集・データベース構築（No.90-2）は、学術的に有意義であるとともに、社会的貢献度も大きいので、今後とも積極的に推進していただきたい。文化財の測量・探査等に関する研究において、デジタル技術等を用いた簡便かつ迅速な発掘調査記録の作成方法の開発に努めていること（No.28）は、大いに評価される。ただし遺跡・遺構の土層判断の場合、もっとも重要なのは地質学・堆積学的な理解であり、人為的遺構であってもその基本は変わらない。文化財研究所に堆積学の専門家が一人もいないことは、日本の考古学と埋蔵文化財行政のもっとも大きな学術的欠陥の反映であるとはいえ、基礎研究に責任をもつ研究所がまず専門家のポストを配置し、遺跡遺構の堆積学的研究を深化させる必要があるだろう。正確で科学的な地層・土層の理解抜きにして記録法の簡便化のみに走れば、いずれつまづく可能性なしとしない。

文化財デジタル画像形成に関する研究（No.27・33）では、『大徳寺伝来五百羅漢図』、『洋人奏楽図屏風光学調査報告書』『泰西王侯騎馬図屏風光学調査報告書』等が刊行され、めざましい研究成果がひろく知られる意義は大きい。自己評価で記された「文化財調査の基礎的な存在」としてのこの研究の意義や「調査後迅速な調査成果の公表」という目標は十分に達成されており、S評価に値すると思う。

美術の表現・技法・材料に関する研究においては、琉球をはじめとする各国・各時代の螺鈿漆器に関する研究が進展しており（No.4）、バンコク市内ラチャプラディット寺院本堂の扉螺鈿装飾部位の調査（No.46、No84）も含め、今後においてさらに多彩な研究の発展が期待できよう。

無形文化財の保存・活用では、落語「鯉沢」等の実演が記録された（No.7）。ラジオ・テレビ等でのこの種の放送番組が激減し、まさに「ほろびゆく」という表現があてはまりそうな大衆芸能を文化財として、あるいは学術資料として記録することの意義は大きい。ただ、文化財的・学術的側面に加えて、民衆芸能が本来備えている実演時の演者・観客一体となった盛り上がりや熱っぽい雰囲気等をどう記録するのか、それらは放送局の録画・録音に任せて研究所の仕事になじまないと判断するのかどうか、なお議論の余地があるかもしれない。

4 文化財保護に関する国際協力の推進に関する事項

アジアの外交関係、西アジア等における国際的なテロ活動の影響を受けて文化財関係の国際協力は困難の度合いを増しているが、それでもカンボジア・タイ・ミャンマー等インドシナ半島での継続的な活動では多面的な成果が見られた（No.46・47・53）。受託事業ではある

が、世界遺産委員会審議調査研究事業（No.43-2・43-3）に関する報告書は、当面する課題に必要な情報としてばかりではなく、文化財保護の歴史的経過を示す記録としても重要であろう。

5 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信に関する事項

定期刊行物が着実に刊行されたほか、遺跡データベースの作成（No.24）では井戸関連遺跡へ収集範囲を拡大するとともにデータの入力・補訂件数が目標値を大きく上回り、また、東文研でも資料閲覧室を公開運営するなど、資料の整備・成果の発信等で意欲的な取り組みが見られた。飛鳥資料館では、地理的な条件もあって来館者数が伸びなかったものの、企画展や講演会の開催数、図録類刊行では例年以上の努力がなされており（No.71）、今後の来館者数増加につながることを期待したい。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

国交省が行う国営飛鳥歴史公園と平城宮跡展示館における展示企画や資料提供に対して研究所が積極的に協力すること（No.75・76）は当然であるが、しかしそれはあくまでも協力なのであって、それぞれの展示施設には専門家のポストを置き、学術的見地に立った日常運営・普及活動につとめるよう国交省に強く申し入れていただきたい。自前の専門職員の関与なく運営を安易に民間業者委託すれば、ひたすらテーマパーク化の道をたどる恐れなしとしない。

7 その他

◎研究所・センター調査研究等部会

外部評価委員名

岡田保良

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

前年度と変わらず、限られた人材と予算の中で着実に成果を上げ続ける構成機関の実績を、日本人として誇らしく思う一方、その先行きは、とくに人材の確保充実の面で不安が拭えない。文化立国という言葉ばかりが声高に伝えられる中、平成 27 年度は次なる中期計画を模索する年として、不安を拭うべく実質的な配慮を望みたい。

また、こうした自己点検評価や外部評価のシステムが、機構の事業に、あるいは中長期の計画にどれほど反映されているのか、形骸化の懸念はないか、さらにもう一段上の点検評価も必要なのではないか。

なお、報告会のなかで、アジア太平洋無形文化遺産センター（以下、「センター」）の報告

は、時間と詳細に及ぶ内容の点で、一事業枠としては異例の扱いだったように思うが、本機構に仲間入りしてまだ日の浅い機関の実情を知る良い機会であった。

2 自己点検評価に関する事項

今回から評価書式上の定性定量各評定の目安に変更があり、5段階の中庸（B）で「100%達成」という観点のもと、自己評価がなされた。その結果、100%の上にもまだ2段階があるにもかかわらず、定性、定量ともほとんどの評定は、Bとされた。相対的に前年度より評価を下げているように写る。評価委員の中にはA評価がもっと多くあってよいのでは、という意見に同感すると同時に、とくに定性的に目標達成のうえに2段階設ける意味があるのか、疑問に思う。

3 調査研究に関する事項

近代遺産の報告は一つの事業にのみにとどまっているが、日本における昨年来の世界遺産事情から、近代の文化財や産業遺産への注目度が高まり、それらの調査や評価、保存計画などさまざまな分野で、公的機関としては本機構でもとくに東京文化財研究所（以下、「東文研」）に期待が集まる。今後、国内中核機能を担うべく体制の強化が望まれる。

奈良文化財研究所（以下、「奈文研」）による「文化的景観」に関する調査研究は、まだ日の浅い文化財概念を扱うと同時に、各地の世界遺産事業でも頻繁に適用されるカテゴリーであるだけに、その成果が注目されており、年度末に翻訳刊行された「World Heritage Paper 26」は時宜を得たものといえよう。

無形文化遺産保護への関心は世界的に益々高まっており、センターと東文研の無形部門とがともに国際活動に重きを置くこともあり、それぞれの住み分けに意を払う必要がある。その点、センターによるアジア太平洋諸国への啓発事業には見るべきものがあり、東文研では国内遺産のコンテンツについて、国民協会の遺産を受け継ぐ形で一段と充実化が図られたこと、自己評価通りに評価したい。

4 文化財保護に関する国際協力の推進に関する事項

両研究所、センターいずれも、国際業務の比重はますます増大し、それとともに研修事業や海外支援協力など組織間、あるいは研究部門間の協力協働の傾向も、望ましい方向に進んでいるようである。センターや東文研の国際協力センターに限らず、多くの研究部や室において、国際協力事業が柱の一つになりつつある一方、同一機構内での非効率とみなされぬよう、予めそれぞれの特色を生かした明確な役割を打ち出すことを意識していただきたい。

この領域では、とくに東文研の枠組みとスタッフの活躍が際立つ。限られた人材での取り組みは依然として変わらず、むしろより厳しくなっているのが現状のようだ。そのなかでも、バーミヤーン石窟東大仏再建の問題は年度を越えて注目がつづく課題といえる。海外の専門家を交えた議論の中から展望を見出してほしい。

日・中・韓の外交関係が低迷している昨今において、無形部門での交流、中国敦煌での共同、日韓合意書に基づく研究会など、貴重な人的交流を維持している点、評価したい。また、

相手国のニーズに応じた持続的協力の点では、ミャンマー、ブータンとの関係を重視したい。

5 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信に関する事項

図書資料に始まり、定期刊行物、報告書、展示など多岐にわたる成果発信は、飛鳥資料館の企画努力を始めとして、順調に推移したことが 26 項目に及ぶ報告から伺える。その一つに史跡平城宮跡で進められている国営歴史公園化事業がある。大極殿院の建築復原はもはや既定の方向のようだが、その様式復原、実施設計には本機構も責任ある位置にあるはずで、報告にあるとおり、引き続き公園化が史跡整備の原則を逸脱せぬようモニターしていただきたい。

また情報発信分野でも、東アジア近代美術やセインズベリー研究所情報など、国境を超えた情報収集や交流が進んでいることを評価する。

奈文研の展示業務と比較するものではないが、東文研エントランスロビーの展示活用が進むことは好ましい。ただ一般への公開、開放の原則にさらなる検討が必要ではないか。

最近の文化財情報ソースについて、今回の報告には含まれないが、文化庁で開始した「日本遺産」に伴う歴史資料コンテンツ、ユネスコ記憶遺産で求められる地方アーカイブなど、広くアクセスが求められる情報源とネットワーク化を進めることを検討していただきたい。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

調査研究のあらゆる分野で、本機構は中核機関として期待されており、スタッフは日々の研鑽が強く求められる。懸念される点として、協力関係にある諸機関団体が本機構に依存するあまり、自身で人材を養成確保の努力を怠ることがないよう、これもまた指導助言のあり方ではないか。

世界遺産の現場自治体では、専門性を有する人材による不断のモニタリングや、継続的な補修事業がつきものであり、文化庁の意向も踏まえ、本機構との間で人材交流や長期派遣などが考慮されてよいのではないか。また大学等の教育研究機関とも相互の利益にかなう人的交流をもっと進めてよいと考える。

7 その他

毎年の繰り返しになるが、国の本機構に対する予算措置、とくに人材の拡充については悲観的にならざるを得ない現状がある。こうした自己点検、外部評価は一体なんのために、そして誰に向けて行われるのか、関係者一同、熟慮を求めたい。

◎研究所・センター調査研究等部会

外部評価委員名

玉 蟲 敏 子

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

今回の報告で非常に衝撃的に思われたのは、民主党政権下の予算仕訳のあおりを受けて、公益法人伝統文化活性化国民協会が解散となったことである。同協会が蓄積されていたデジタルコンテンツが東京文化財研究所（以下、「東文研」）に委譲され、今後、保全・活用が図られていくということで安堵したが、コンテンツ形成のための調査研究がこれまでと同様に進展していくか、地道な活動について軽視される風潮に異議をとらえるとともに、国民的な理解が得られるような発信の必要性も感じられる。

2 自己点検評価に関する事項

今年度は、定性的評価基準について、所期の目標を達成している場合、B 評価となり、また定量的評価についても、達成率 100%以上、120%未満の場合は B 評価となるなど、基準が変わったことが注目されたが、そのためか東文研・奈良文化財研究所（以下、「奈文研」）ともに控え目な評価が目立ったように感じた。達成度だけでなく、独自の取り組みが功を奏している場合は、一歩すすめて A 評価にしてもいいのではないか。

3 調査研究に関する事項

奈文研に関して、平城京の土木工事において敷葉工法を用いて埋め立てが行われていたことなどの新知見、新発見が発表されたことには驚かされた。地道な調査研究活動による成果であると思われるが、その歴史的な意義がしっかりと国民にも伝わるようになってほしいと強く思う。

奈文研に関して三次元レーザースキャナーによる文化財計測方法の精緻化、迅速化、考古遺物の非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光分析の有効性の確認など新技術が次々と導入され、優れた伝統が現在も生きつづけていることに感銘を受けた。

4 文化財保護に関する国際協力の推進に関する事項

今回印象に残った成果は、東文研の紙本文化財の保存修復に関する国際的な研修の取り組みであった。国内とメキシコにおける研修が紹介され、過去の研修成果で人材も育ってきているとこと。まだまだ点つなぎの段階だと思われるが、さらに機会を増やし、厚みのある人材育成が発展していくことを期待したい。成果の情報発信も今後は積極的に取り組まれることが望まれる。

5 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信に関する事項

東文研は、従来、ウェブを用いた文献検索システムの開発に力を入れてきたが、今年度はとくに横断的な総合検索システムを刷新したという報告を受け、順調な活動が確認できた。これらが活用されて今後、どのような成果が上がっていくか、次年度以降はそうしたフォローについての報告もうかがいたいと思う。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

奈文研に関して、東日本大震災の復旧復興事業にともなって、埋蔵文化財の記録するために、独自に開発された高所リモート撮影が導入されたことは興味深く感じられた。このような協力は今後、さらに活発化していくことだろう。

そうした新しい活動のいっぽうで、文化財担当者研修の受講者数の減少が気になる話題であった。経費的な問題が背景にあるようだが、受講者の満足度が高いだけに次年度の改善が期待される。

7 その他

全般の話題にもなるが、アソシエイトフェローなど任期制の研究員に頼らなければならない現状について、近年は追認するような風潮が目立つが、けっして推奨できるような状況ではないはずである。文化財をめぐる難しい問題の一つは、次世代を担う人材育成のシステムが後退していることにあるが、それは翻って、国民的な理解や認知度の不足などに還ってくるように思われる。かつて何度も指摘されてきた問題だが、改善への道は遠いとしても、やはり継続して批判していく視点を委員として保ちたいと考える。

◎研究所・センター調査研究等部会

外部評価委員名

柳 林 修

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

国立文化財機構を巡る財政環境の厳しさはいっこうに改善しない。「文化芸術立国」を目指すと言った日本なのにいったいどうしたことか。国際的な信用にもかかわる重大事態である。平成25（2013）年度の機構の年報で運営交付金を見ると、21年度は83億6700万円だったが、その後、毎年減り、24年度は73億6600万円にはなった。25年度は当年度限りの京都国立博物館の展示制作費などが含まれて83億9200万円に増えたが、一時的な現象であり、減少傾向に歯止めがかからない。傘下の各機関の存亡をも左右しかねない危機的状況で、機構としての早急な力強い対応が求められる。

以前、平成25年4月の参議院予算委員会で中山恭子議員が日本の文化、文化財に対する予算の貧弱さを追及したことを書いた。中山議員は全予算に対する文化芸術予算の割合についてフランスは1.06%なのに日本はわずか0.11%と指摘した上で、「思い切った拡充が必要。文化芸術立国を柱に」と訴えた。これに対し、下村文部科学大臣は「しっかりとした予算の裏打ちの中で文化芸術立国にしたい。来年度以降、予算が飛躍的な増額になるような取り組みをしたい」と答え、安倍首相も「支援していきたい」と述べたとの内容である。下村文科相は「32年度までに倍増させる」と語ったともいう。

ところが、文化庁の27年度当初予算は前年度比わずか0.2%（2億円）増の1037億円で過ぎない。2年前の二人の答弁がむなし。幸い、長期安定政権で二人とも変わっていない。今なら「有言実行」を求めることもできる。よもや2年前のことを忘れてはいまい。

あえてもう一度書かせていただいた。

経済状況は上向きと国は分析している。その意味では文化芸術予算の増加にとって環境は整いつつある。外国人観光客が増加の一途をたどり、日本の文化や芸術に自国にはない魅力を感じていると訪日の理由を述べる中、5年後のオリンピックに向けて日本をアピールする文化芸術立国づくりを今、しないでいつ、するのだろうか。来年度の運営交付金の増額に向けての積極的な活動を今から粘り強く取り組んでほしい。二人の答弁を指摘し、理路整然と訴えれば、難しい点はあるが、必ずや前進すると確信する。

そんな厳しさが増す中で、東京文化財研究所（以下、「東文研」）、奈良文化財研究所（以下、奈文研）及びアジア太平洋無形文化遺産研究センター（以下、「センター」）の3機関の活動は年度計画の事業を着実にこなし、さらに期待以上の成果を挙げたことが事業報告から理解できる。精鋭な研究者や職員をそろえているからだろう。調査、研究はもちろん、文化財の保護、人材育成、国際協力など幅広い分野で想定以上の活躍が見受けられるのは頼もしい。しかも、それらを多数の出版や報告で対外的にも紹介している。敬意を表して当然であり、高く評価する。ただ、それでも国民にはわかりにくい面もある。財務省に活動の重みが伝わらない点もあろう。それらの理解をさらに得ることができれば、財政的な不備を少しでも改善することにつながる。3機関の活動を国民に知らしめる広報活動をもっと積極的に行い、とくに国際協力には力を入れてほしい。平和外交にも結びつく。少ない人員と予算でも、仕事を愛して生きがいにして取り組む機構やその関係者に頭が下がる。

東日本大震災から4年が過ぎた。機構や両研究所の被災地における文化財調査、保存、指導などの文化財レスキューの使命は十分に果たした。これからも指導的立場で地元自治体に協力していただきたい。無形文化遺産はとくに地域住民の心のよりどころだ。それによって人々が集まり、地域が活性化し、力が生まれる。継承に向けての取り組みにさらなる力を注いでほしい。今こそ、しっかりとした文化財ネットワークづくりが求められている。機構の役割がさらに増す。復興の一端を担っている。

2 自己点検評価に関する事項

今回から自己点検評価報告書における評定区分が変更された。これまでは「A」評定が標準だったが、「B」評定が標準に変わった。学校教育における5段階評価で標準は「3」というのと同じであり、ある意味で当然の変更といえる。ただ、「3」は普通という評価につながりかねないのを恐れる。

そんな変更に対し、両研究所やセンターともほとんどすべての事業について「B」の評価をして対応した。最初なのでどう評価していいのかとの戸惑いがあり、実際は他の機関の評価の様子見したようで無理もないことかもしれない。しかし、評価委員会で各委員から意見が上がったように、事業の大半は期待される成果を十分に挙げており、「A」以上の評価がなされてしかるべきで、「B」は控えめ過ぎた自己評価と指摘されたのはその通りである。「謙譲」「謙虚」は日本人の素晴らしい美德だが、事業内容をしっかり評価すれば「B」評価は卑下しすぎと思われる。これらの“奥ゆかしさ”で、もし「B」と評価したのであれば、次回からはもっと自信を持って評価する方針に変更すべきだ。危惧するのは文科省などから機関

の事業が「普通」と取られかねないことである。決してそうでない、一歩でも二歩でも先を越した先進的で斬新な事業が数多くあった。「A」とすべき事業は多数見受けられた。素直に報告を読めば理解できる。

委員会でのプレゼンテーションは要領を得ていてわかりやすい。しかし、すべてを説明する必要はない。事前に委員は報告書を読んでいるはずで、機関が精選して3分の2程度の重点的な事業を説明すればいいと考える。現在のプレゼンは数が多すぎる。平板な説明で終わっているケースもあり、取捨選択し、必要なところは重点的に質疑応答を行って内容を深めたい。プレゼンの質疑応答で余裕を持ちたい。

3 調査研究に関する事項

東文研、奈文研とも文化系、理科系の研究者が協力して総合力を発揮し、多方面の課題に対して先駆的に果敢にチャレンジしていることがうかがえ、それらを多彩な出版物や報告などで公表している実情が理解できる。調査、研究という両機関の設立に関する根本理念の分野は、もっとも重視して力を入れる分野であり、それが今回の報告書から実態を伴って成果を挙げていることがわかる。人員や財政的な制限がある中でのこの分野における盛りだくさんの取り組みに高い評価を与えていい。

3機関がそれぞれに専門的な分野で棲み分けすべきとの意見は以前から出ているが、重なる分野があっても研究姿勢の多様化で充実した成果が挙がることもある。ただ、情報交換は入念に行ってほしい。被災地での東文研、奈文研の調査、研究は埋蔵文化財の発掘調査はもちろん、無形民俗文化財の調査やアーカイブの構築、ネットワークづくりなど、被災地の復興を支える有意義な取り組みである。被災地の地方公共団体からの要請に適切に対応しており、心強い支援になった。今後も継続すべきだ。

近年、近代文化遺産の重要性が指摘されている。今のうちに適切な保存対策を取っておかないと将来的に悔いを残しかねない。東文研の近代文化遺産への取り組みは先駆的で極めて高い評価が与えられている。静岡県 の 葦山反射炉、山口県萩市の反射炉、長崎市のいわゆる軍艦島などの調査や研究、さらに修復方法の検討などは、ユネスコの世界文化遺産登録への道を実確にした。6月に世界遺産に登録されることを期待したい。その面での貢献度は極めて高いが、23件もある構成資産の実確な保存への道のりは厳しい。文化庁がこれらの近代文化遺産の保存に積極的に乗り出すよう、機構としての働きかけを期待する。

また、近代美術への理解も、東文研が美術雑誌「みづゑ」のアーカイブによる明治期すべての分の公開を開始するなど秀でている。近代文化遺産や美術への保存、調査、研究の取り組みは緒に就いたばかりだ。航空機、鉄道などを含めて対応を充実させてほしい。

奈文研の継続的な平城宮跡や藤原宮跡での発掘調査は長年の地道な成果が毎年、蓄積されている。また、平城京における受託調査や南都諸大寺、他府県の文化財の発掘調査の指導など多岐にわたる事業の幅広さと奥深さの取り組みは日頃のたゆまぬ努力の成果と確信する。京都大学や奈良女子大学との連携も成果を挙げており、いっそうの発展が望まれる。

4 文化財保護に関する国際協力の推進に関する事項

3機関とも国際協力での指導的役割を十分に果たしている。外国からの研修者に対する日本での講習はもちろん、海外での研修は高い人気があるという。たとえば近年の和紙に対する関心の高まりがある。海外に渡った紙文化財は多数にのぼるが、適切な保存対応がなされないうちに劣化して取り返しがつかない事態に陥ったケースも多い。劣化しやすい洋紙とは対照的だ。和紙の価値が高まるのも当然である。

東文研が同研究所とメキシコで行った「紙の保存と修復」に関する研修では、多くの外国の研究者が参加して紙文化財修復の基礎的な対応を学んだ。昨年度の参加者のアンケートをもとにプログラムを組んだきめ細かな内容が好評で、受講者が自国で自分の手で紙文化財を修復できる態勢づくりが期待される。ただ、人員と予算が少なく、他国からの開催の要望に応えられないのは悲しい。限られた予算だから事業についてメリハリをつけ、重点的に国際協力を推進することが求められる。今後は量より質への適正な転換が求められるだろう。上記のような研修は機構挙げて取り組んでもらいたい。

イスラム過激派組織のいわゆる「イスラム国」(ISIL)がシリアなどで貴重な文化財を破壊し、盗掘していることに重大な懸念を抱く。宗教的な違い、民族の壁を乗り越えて守られてきた人類共有の遺産が、いとも簡単に破壊される映像を目の当たりにすると、非力と無念さ、むなしさ、やるせなさを感じる。東文研、奈文研ともシリアなどの中東地域で文化財の保存に取り組んできたノウハウや経験を生かし、機構や文化庁とともに積極的な対応を考える提言などに取り組むべきだ。ユネスコなどと協力することも必要。東文研が保存事業を通して培った現地の文化財関係者とのパイプを生かしてほしい。

5 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信に関する事項

奈文研の庁舎建て替えが行われている。新庁舎は当初、平成28年度末のオープンを目指していたが、発掘調査で平城京造営時の秋篠川の流路付け替え工事跡などが見つかるなど、平城京の成り立ちを知る重要な成果が次々と得られた。このため、調査がいつそう慎重になり、発見遺構の保存にも心を配るのは当然で、設計変更などに伴ってオープンが遅れるのはやむをえない。調査結果の公表には報道発表のほか、ホームページの「奈文研だより」でも39回を数える報告を行うなど積極的に取り組んでおり、国民共有の文化財を保護していく研究所の役割に沿った対応は極めて適切である。

センターはすでに記述したように、極めて少ない予算と人員の中、果敢に東南アジアの無形文化遺産保護に関する調査研究に取り組んでいるし、研究ネットワークづくりに力を入れている。頼もしいことだ。マレーシア、ベトナムなど5か国での情報収集、データベースの構築、中国やフランスでの国際会議への出席など精力的な活動が成果として形になりつつあり、見守りたい。中でもセンターのウェブサイトは8言語での情報公開を始めており、その活動が広く世界各国に周知されることにつながって素晴らしい。前からも指摘しているが、東文研との密接な連携を取りながら、センターのなすべき役割をこれまで同様、さらに一歩進んで着実にこなして欲しい。

奈良県明日香村で国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業が進み、奈文研による

発掘調査も同地区の檜隈寺跡などで行われて、渡来人建立とされる同寺の実像に迫る成果が次々と挙がっている。同公園は平成28年度オープンが予定されており、完成すれば飛鳥における新たな歴史展示、体験施設として注目されよう。キトラ古墳壁画が展示され、近くに高松塚古墳もあり、壁画のはぎ取り保存という経験を生かした内容の公園に期待が集まることは確かだ。これが現在は停滞状態にある「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世界遺産登録への機運を促進させることにつながることを願う。

ただ、公園内の体験学習館の人員をどうするのか、奈文研飛鳥資料館との連携をどう考えるのか、さらに高松塚古墳壁画をどう扱うのか等々、課題が山積しており、国交省と文科省が開かれた意見交換で真に国民の歴史理解に役立つ施設になることを望む。十分な人員の配置は当然のことだ。個人的には高松塚古墳壁画の保存、展示も同地区の施設で同時に行うことを望みたいし、将来的には壁画に関する国際研究センターの設置を考えてもいい。それが両古墳の壁画が経験した未曾有の歴史を未来に生かすことにつながると確信する。機構が文化庁を通じて国交省に要望することも必要だろう。

奈文研の平城宮跡資料館と飛鳥資料館で入館者の状況に大きな差が出ている。平城宮跡資料館は「最大」「最多」「最小」などの視点で子供向けに分かりやすい展覧会を開催して入館者増に結びつけるなど、創意工夫の取り組みが成果を挙げた。

一方、飛鳥資料館は目標の入館者がクリアできなかった。78%という。展覧会は必ずしも入館者の多い少ないでその取り組みを判断すべきではないが、やはり多いことに越したことはない。飛鳥資料館は極めて少ない人員の中で特別展、企画展などをかなり実施しており、努力に敬意を表するし、展示内容も充実していることは認める。春期特別展「いにしへの匠たち」では現代の匠による再現品を並べて対比し、現代の匠を招いた座談会を開くなどの意欲的な視点での内容が目を見張った。飛鳥を対象にした写真展も、飛鳥への新たな関心を呼び起こす起爆剤になって、今までと違った人々への飛鳥資料館へのいざないに成功している。今後は明日香村や周辺自治体、さらに教育機関や交通機関、旅行会社などといった協力を図って、「日本の始まりの地」への集客に一段の努力を望みたい。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

上記のような奈文研の庁舎建て替えて、同研究所が大きな役割を担っている地方公共団体の文化財担当職員への研修に影響が出ていることが気がかりだ。これまで、研修では庁舎内の研修棟を宿泊施設として活用していた。建て替えてこれが使えなくなり、宿泊施設の確保が心配されると以前から指摘していた。それが現実になった。今回の報告では、研修受講者が目標の延べ190人に対し、171人と下回っていたのだ。初めてのことでないか。受講者は周辺の宿泊施設からの通いとなって経費負担が増えて影響したと分析されているが、研修は文化財保護行政の質の向上を確保する上で極めて重要な取り組みであり、奈文研の存在意義を支えるものでもあるので、自治体への積極的な説明と研修参加へのアプローチをいっそう強め、宿泊施設への協力の呼びかけにも力をいれたい。

ナショナルセンターとしての意義は、やはり全国の文化財研究者の指導であるし、助言である。東文研や奈文研の研究者は、地方公共団体の文化財担当者の心のよりどころになって

いることを、改めて肝に銘じていただきたい。その助言や指導が地方の文化財保存や研究にとって大きな励ましになり、貴重な光明を与えることは確実だ。そのために自身の調査、研究にもしっかりと邁進することはいうまでもない。自身に誇れる業績があつてこそ、他者が尊敬して指導を受け入れることを忘れないでほしい。

7 その他

センターの運営について一言述べたい。2011年に設立されたが、今だに持続的な予算措置がない。文化庁の受託事業や文科省の補助金で人件費までもやりくりする状態は本来の姿ではない。機構としてセンターにも運営交付金が出るよう、さらなる要望をしてもらい、ユネスコが期待する役割や機能が果たせるような人員を含めた態勢づくりに力を入れるべきだ。ユネスコの評価では十分な予算、人員でないとの指摘がある。平成26年度予算は約6000万円。それくらいの予算は要望すれば実現するのではないか。センターの運営交付金の実現したものの、機構全体の収入が増えなければパイの奪い合いになってしまうので困る。もちろんプラス α を要求すべきである。同時に設立された韓国のセンターは予算が日本の2.5倍、人員は3倍と聞いた。あまりにも落差のある態勢は早急に改善すべきであり、センターを招致した日本政府がユネスコに対して実行する重要な責務である。

東文研が東京国立博物館と協力して、同博物館での展覧会に出品されたのを機に国宝「孔雀明王像」を最新の科学的機器で調査するなど、機構傘下の他機関と共同で調査を実施したことは喜ばしい。これが初めてではないが、それぞれの機関の長所を生かした横断的な調査、研究で幅広い成果に結びつけることが望まれる。これを機に、各機関での人事交流や共同研究をいっそう推進してほしい。思わぬ視点が生まれて、斬新な手法での成果が期待できる。機構外の大学との人事交流も課題だ。幅広い視野を育成し、「井の中の蛙」になるのを防ぐ方策が秘められているに違いない。21世紀を背負う真の研究者を育てる術が見いだせるかもしれない。

研究者や職員に余裕がほしい。自己点検評価報告書からは人員や予算の少なさを乗り越えた、個人や組織の努力の成果があふれんばかりに記載されていて感動を感じる。ただ、これに甘えてはいけないことは確かである。余裕があれば、さらに上の取り組みがなされることは当然だ。量も大切だが、質を求める努力を怠らないでいただきたい。目的積立金申請や経営努力の認定にたいしての緩和が行われた、運営交付金が漸減される厳しい状況の中で、ますます自己努力による収入の増加が求められる。科研費や寄附などの取り組みをもっと積極的に行ってほしい。確かに博物館とは違って研究所やセンターにとっては難しい面はあるが、そんなことを言っている事態ではない。調査、研究を理解して助成しようとする団体があるかもしれないし、資金を集める努力はなされてしかるべきだ。今後、いっそう必要とされる文化財機構の傘下の機関として、誇りと自信を持ってグローバルな取り組みに励んでいただきたい。賢明な文化庁や財政当局も自ずと理解し、支援してくれると確信している。

VI 日誌

(法人全体及び7施設共通事項)

年	月	日	記	事
26.	4.	11	第1回役員会	(東京文化財研究所)
26.	4.	23	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会	(研究所・センター調査研究等部会)
26.	4.	25	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会	(博物館調査研究等部会)
26.	5.	30	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会	(総会)
26.	6.	6	第2回役員会	(東京国立博物館)
26.	6.	12	監査法人の監査結果(平成25年度)通知	
26.	6.	19	平成25年度定期監査	(東京国立博物館)
26.	6.	30	独立行政法人国立文化財機構の第8期事業年度財務諸表の提出	
26.	7.	4	文部科学省独立行政法人評価委員会文化分科会国立文化財機構部会	(第72回)
26.	7.	23	平成26年度新任職員研修会(個人情報保護及びハラスメントに関する講演も同時実施)	(東京国立博物館)(~7月25日)
26.	7.	23	第3回役員会	(東京国立博物館)
26.	7.	23	独立行政法人文化財機構運営委員会	(東京国立博物館)
26.	7.	30	第1回7施設連絡協議会	(東京国立博物館)
26.	7.	31	第1回研究・学芸系連絡協議会	(東京国立博物館)
26.	8.	20	文部科学省独立行政法人評価委員会総会	(第59回)
26.	9.	26	第4回役員会	(奈良文化財研究所)
26.	10.	29	第1回情報化委員会	(東京国立博物館)
26.	11.	26	第2回7施設連絡協議会	(東京国立博物館)
26.	12.	5	第2回研究・学芸系連絡協議会	(京都国立博物館)
26.	12.	19	第5回役員会	(東京国立博物館)
27.	1.	23	第6回役員会	(九州国立博物館)
27.	3.	20	第7回役員会	(東京国立博物館)

(東京国立博物館)

年	月	日	記 事
26.	4.	1	東京・春・音楽祭桜コンサート「桜の街の音楽会」 東京・春・音楽祭ミュージアム・コンサート「東博でバッハ vol.20」
26.	4.	6	東京・春・音楽祭桜コンサート「桜の街の音楽会」
26.	4.	10	東京・春・音楽祭ミュージアム・コンサート「東博でバッハ vol.21」
26.	4.	15	正門プラザオープン
26.	4.	21	特別展「キトラ古墳壁画」開会式及び特別内覧会
26.	4.	22	「飛鳥ーキトラ 2016」開催（表慶館 1 階）
26.	4.	24	開山・栄西禅師 800 年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」10 万人セレモニー
26.	4.	25	特別展「キトラ古墳壁画」 賛助会特別鑑賞会
26.	4.	28	特別展「栄西と建仁寺」関連企画 国宝「風雨人雷神図屏風」8Kスーパーハイビジョン上映会（～5月2日）
26.	5.	1	皇太子殿下 特別展「栄西と建仁寺」・特別展「キトラ古墳壁画」行啓
26.	5.	2	特別展「キトラ古墳壁画」5万人セレモニー
26.	5.	9	開山・栄西禅師 800 年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」20 万人セレモニー
26.	5.	10	上野ミュージアムウィーク「国際博物館の日」記念事業 2014（～5月25日）
26.	5.	11	国際博物館の日 記念事業 三館園連携事業「上野の山でクマめぐり」
26.	5.	14	ピノキオ コンサート ～大人と子どものための音・学・会～ a t 東京国立博物館
26.	5.	15	特別展「キトラ古墳壁画」10 万人セレモニー
26.	5.	18	国際博物館の日 総合文化展無料観覧日
26.	6.	1	初夏東博寄席 2014
26.	6.	3	臨時休館日（電気設備保守点検）
26.	6.	8	東京国立博物館ファミリーコンサート「FAMILY CONCERT 2014」
26.	6.	22	初夏のコンサート 堀了介（チェロ）堀沙也香（チェロ）百武恵子（ピアノ）鷺見恵理子（ヴァイオリン）
26.	6.	23	特別展「台北国立故宫博物院ー神品至宝ー」開会式及び特別内覧会
26.	7.	3	特別展「台北国立故宫博物院ー神品至宝ー」10 万人セレモニー
26.	7.	11	特別展「台北国立故宫博物院ー神品至宝ー」賛助会特別内覧会
26.	7.	25	特別展「台北国立故宫博物院ー神品至宝ー」20 万人セレモニー
26.	8.	8	連続講座「国宝」（～8月10日）
26.	8.	11	特別展「台北国立故宫博物院ー神品至宝ー」関連企画 「故宫の美」8Kスーパーハイビジョン上映会（～8月15日）
26.	8.	27	特別展「台北国立故宫博物院ー神品至宝ー」30 万人セレモニー
26.	9.	9	平成 26 年度キャンパスメンバーズ連携事業「博物館学講座」（～9月13日）
26.	9.	19	日中韓国立博物館長会議
26.	9.	19	2014 年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」開会式及び特別内覧会
26.	9.	21	秋のコンサート～クロアチアよりゴラン・フィリペツを迎えて～
26.	9.	30	「博物館でアジアの旅」（～10月13日）
26.	10.	4	Music Weeks in TOKYO 2014 まちなかコンサート～芸術の秋、音楽さんぽ～

26. 10. 10 野外シネマ「時をかける少女」上映（～10月11日）
26. 10. 11 留学生の日
26. 10. 11 Music Weeks in TOKYO 2014 まちなかコンサート～芸術の秋、音楽さんぽ～
26. 10. 11 上野の山文化ゾーンフェスティバル講演会
26. 10. 14 「日本国宝展」開会式及び特別内覧会
26. 10. 17 東京国立博物館評議員会
26. 10. 17 「日本国宝展」賛助会特別内覧会
26. 10. 25 秋の庭園開放（～12月7日）
26. 10. 31 「日本国宝展」10万人セレモニー
26. 10. 31 特別夜間開館および本館スペシャルライトアップ（～11月2日）
26. 11. 6 東大寺講演会
26. 11. 11 第11回台東区伝統工芸職人展開催（～11月16日）
26. 11. 18 「日本国宝展」20万人セレモニー
26. 11. 20 「日本国宝展」関連企画 「日本国宝展」8Kスーパーハイビジョン上映会（～11月24日）
26. 11. 28 「日本国宝展」30万人セレモニー
26. 12. 2 皇太子殿下「日本国宝展」行啓
26. 12. 3 ファンドレイジング講演会
26. 12. 6 東博ボランティアデー2014開催（～12月7日）
26. 12. 14 クリスマスコンサート「～世界の堀正文によるストラディヴァリウスの音色を～」
27. 1. 2 博物館に初もうで2015 新春イベント「江戸の遊芸 紙切り」他（～1月12日）
27. 1. 3 博物館に初もうで2015 新春イベント「クラリネット・コンサート」
27. 1. 13 特別展「みちのくの仏像」開会式及び特別内覧会
27. 1. 13 特別展「3.11 大津波と文化財の再生」開会式及び特別内覧会
27. 1. 16 特別展「みちのくの仏像」賛助会特別鑑賞会
27. 2. 23 防災訓練
27. 3. 16 特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流」開会式及び特別内覧会
27. 3. 17 春の庭園開放（～4月19日）
27. 3. 17 博物館でお花見を（～4月12日）
27. 3. 17 東京・春・音楽祭ミュージアム・コンサート「東博でバッハ vol.22」
27. 3. 19 桜の街の音楽会 Vive!サクソフーン・クワルテット
27. 3. 20 特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流」賛助会特別鑑賞会
27. 3. 24 桜の街の音楽会
27. 3. 26 東京・春・音楽祭ミュージアム・コンサート「東博でバッハ vol.23」

(京都国立博物館)

年	月	日	記 事
26.	4.	21	特別展覧会「南山城の古寺巡礼」開会式、内覧会
26.	4.	22	特別展覧会「南山城の古寺巡礼」(~6月15日)
26.	4.	26	土曜講座「南山城の歴史と文化」
26.	5.	4	二胡コンサート
26.	5.	10	土曜講座「古代南山城の観音像」
26.	5.	11	少年少女博物館くらぶ 小・中学生向け鑑賞会「みほとけめぐり！」
26.	5.	16	京都・らくご博物館(春) ~新緑寄席~
26.	5.	17	土曜講座「一休さんと酬恩庵の絵画」
26.	5.	18	少年少女博物館くらぶ 小・中学生向け鑑賞会「みほとけめぐり！」
26.	5.	18	京博で聞香体験と講演会
26.	5.	24	土曜講座「浄瑠璃寺と当尾の里」
26.	5.	31	土曜講座「南山城の仏像と慶派仏師」
26.	6.	3	「南山城の古寺巡礼」入館者5万人セレモニー
26.	6.	7	土曜講座「万葉歌にみる馬場南遺跡(神雄寺)と恭仁京のトポス」
26.	6.	10	文化財に親しむ授業「風神雷神図屏風」(俵屋宗達筆)京都市立醍泉小学校
26.	6.	19	明治古都館屋根修理現場 他の見学会(~6月20日)
26.	7.	9	文化財に親しむ授業「松鷹図」(二条城)京都市立朱雀第一小学校
26.	7.	12	平成知新館事前見学会(~7月13日)
26.	7.	30	夏期講座「古社寺と文化財Ⅱ」(~8月1日)
26.	8.	23	音燈華 vol.5 ~DEPAPEPE コンサート~
26.	8.	30	京都市総合防災訓練 会場:京都国立博物館
26.	9.	2	文化財に親しむ授業「風神雷神図屏風」(俵屋宗達筆)京都市立祥豊小学校
26.	9.	6	保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会
26.	9.	8	避難誘導訓練
26.	9.	12	平成知新館開館記念式典
26.	9.	13	平成知新館オープン記念展 「京へのいざない」(~11月16日)
26.	9.	13	土曜講座 平成知新館オープン記念講演会「京都国立博物館—未来を見つめて—」
26.	9.	20	土曜講座「京の都の成り立ち」
26.	9.	27	土曜講座「国宝 雪舟筆天橋立図」
26.	10.	4	土曜講座「天野山金剛寺の大日如来・不動明王坐像」
26.	10.	6	特別展覧会「修理完成記念国宝鳥獣戯画と高山寺」開会式、内覧会
26.	10.	7	特別展覧会「修理完成記念国宝鳥獣戯画と高山寺」(~11月24日)
26.	10.	7	文化財に親しむ授業「八橋図屏風」(尾形光琳筆)京都市立烏丸中学校
26.	10.	10	Student Days
26.	10.	11	「京へのいざない」来場者10万人セレモニー
26.	10.	11	土曜講座「明恵上人と高山寺の文化財」
26.	10.	18	土曜講座「高山寺の仏画」
26.	10.	22	社会科教員のための向上講座「秀吉と京都について」
26.	10.	25	土曜講座「鳥獣戯画の愉しさ—後世の画家に及ぼした影響—」

26. 10. 30 文化財に親しむ授業「風神雷神図屏風」(俵屋宗達筆)京都市立葵小学校
26. 10. 31 「京へのいざない」来場者 20 万人セレモニー
26. 10. 31 京都・らくご博物館(秋) ～紅葉寄席～ 平成知新館開館記念公演
26. 11. 1 土曜講座「古典の日記念 料紙装飾」
26. 11. 2 京都・らくご博物館(秋) ～紅葉寄席～ 米朝アンドロイド落語会(～11月3日)
26. 11. 5 「国宝鳥獣戯画と高山寺」来場者 10 万人セレモニー
26. 11. 7 留学生の日
26. 11. 8 土曜講座「国宝 金銅藤原道長経筒をめぐって」
26. 11. 8 秋の夜間クラシックコンサート
26. 11. 14 高円宮妃殿下「国宝鳥獣戯画と高山寺」「京へのいざない」お成り
26. 11. 14 文化財に親しむ授業「風神雷神図屏風」(俵屋宗達筆)「松鷹図」(二条城)京都聖母学院高等学校
26. 11. 15 特別シンポジウム「鳥獣戯画を語る」
26. 11. 19 文化財に親しむ授業「風神雷神図屏風」(俵屋宗達筆)京都市立衣笠小学校
26. 11. 22 土曜講座 京都ミュージアムズ・フォー連携講座「高山寺と版本—宋版を中心に—」
26. 11. 29 土曜講座「名物裂 茶席を彩る染織の背景」
26. 12. 6 庭園内イルミネーション(～12月23日)
26. 12. 6 土曜講座「愛刀家とは何か—コレクションからみる人物像—」
26. 12. 10 文化財に親しむ授業「風神雷神図屏風」(俵屋宗達筆)京都市立伏見住吉小学校
26. 12. 13 土曜講座「南蛮漆器から紅毛漆器へ—海外向け特注品のプロデューサーは誰か—」
26. 12. 20 土曜講座「北京・上海・広東の近代絵画」
26. 12. 21 クリスマス・ハンドベルコンサート
26. 12. 24 クリスマス・バロックコンサート
27. 1. 2 特別展観「山陰の古刹・島根鱒淵寺の名宝」(～2月15日)
27. 1. 2 正月イベント「餅つき」
27. 1. 3 正月イベント「福引き抽選会」
27. 1. 10 土曜講座「古墳時代の銅鏡」
27. 1. 17 土曜講座「室町絵巻のイメージネーション—日高川草紙を中心に—」
27. 1. 24 土曜講座「禅僧の書 —墨蹟—」
27. 1. 25 国際研究セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」
27. 1. 26 総合防災訓練
27. 1. 30 京都・らくご博物館(冬) ～新春寄席～
27. 1. 31 土曜講座「中世出雲国 鱒淵寺の歴史」
27. 2. 7 土曜講座「鱒淵寺と天台の密教法具」
27. 2. 14 土曜講座「仏涅槃図の世界」
27. 2. 19 文化財に親しむ授業「風神雷神図屏風」(俵屋宗達筆)京都市立洛南中学校
27. 2. 21 特集陳列「雛まつりと人形」(～4月7日)
27. 2. 21 土曜講座「中国の吉祥絵画—音と形から読み解く—」
27. 2. 28 土曜講座「人形コレクションの近代—守る人・蒐める人—」
27. 3. 4 特別展観「天野山金剛寺の名宝」(～3月29日)
27. 3. 7 土曜講座「近世の障壁画—「場」を飾るといふこと—」

- 27. 3. 14 土曜講座「金剛寺学術調査の成果について」
- 27. 3. 21 土曜講座「『日月山水図屏風』の基層」
- 27. 3. 28 土曜講座「開山堂に納められた高麗青磁」

(奈良国立博物館)

年	月	日	記	事
26.	4.	4	特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像―迫真とエキゾチシズム―」 開会式、特別招待日（会期4月5日～6月1日）	
26.	4.	8	賛助会員特別鑑賞会	
26.	4.	19	公開講座「中世律宗の鎌倉進出と善派仏師」	
26.	4.	20	サンデートーク「密教法具の始まりを求めて」	
26.	4.	23	春季仏像供養法要	
26.	4.	26	第2回庭園・茶室案内ツアー、仏教美術資料研究センター公開（4月26日、27日）	
26.	5.	3	ワークショップ「チャッピー岡本のカブリモノ変心塾 ～仏像になってみよう！～」	
26.	5.	5	名品展無料観覧日（こどもの日）	
26.	5.	10	公開講座「鎌倉の仏像に見るエキゾチシズム」	
26.	5.	18	サンデートーク「平安時代の写経 九・十世紀篇」 名品展無料観覧日（国際博物館の日）	
26.	5.	31	公開講座「鎌倉地方で花開いた肖像彫刻」	
26.	6.	15	サンデートーク「幸せの王国 ブータン Part2」	
26.	6.	20	第1回陳列品鑑査会	
26.	7.	18	特別展「醍醐寺のすべて」 開会式、特別招待日（会期7月19日～9月15日）	
26.	7.	20	サンデートーク「続・山形の話」	
26.	7.	23	賛助会員特別鑑賞会	
26.	7.	26	公開講座「醍醐寺と南都の密教絵画」	
26.	8.	2	公開講座「醍醐寺の造営と創建期の仏像」	
26.	8.	8	第2回陳列品鑑査会	
26.	8.	9	公開講座「醍醐寺の文化財」	
26.	8.	11	夏休み親子講座「守ろう！知ろう！文化財」	
26.	8.	17	サンデートーク「仏像の〈中国化〉をめぐる ―5・6世紀の如来像を中心に―」	
26.	8.	19	夏季講座「醍醐寺と南都の密教」（～8月21日まで）	
26.	8.	22	第1回評議員会	
26.	8.	26	夏季仏像供養法要	
26.	9.	6	公開講座「醍醐寺の密教修法と聖教」	
26.	9.	8	第1回買取等協議会、買取等評価会	
26.	9.	17	特別企画「正倉院展ポスター 昭和22―昭和63」（～11月30日まで）	
26.	9.	21	サンデートーク「第5回 茶室・八窓庵をのぞいてみませんか」	
26.	9.	30	第3回陳列品鑑査会	
26.	10.	5	サンデートーク「仏像調査からわかること その3」	
26.	10.	23	皇太子殿下下行啓 特別展「天皇皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展」開会式、特別招待日 （会期10月24日から11月12日）	
26.	10.	24	賛助会員特別鑑賞会	
26.	10.	25	公開講座「鳥毛立女屏風と唐時代絵画」	

26. 11. 1 古典の日講演「東大寺献物帳と光明皇后」
留学生の日
26. 11. 2 正倉院学術シンポジウム 2014「正倉院宝物に日本文化の源流をみる」
26. 11. 3 公開講座「正倉院宝物の科学的調査」
第66回正倉院展 親子観賞会
26. 11. 8 公開講座「正倉院の武器・武具」
26. 11. 9 高円宮妃殿下お成り
26. 11. 12 第66回正倉院展 無料観覧日
26. 11. 13 第4回陳列品鑑査会
26. 11. 16 サンデートーク「文化財を科学する」
26. 12. 2 仏像写真展「大和の仏たち ー奈良博写真技師の眼ー」
26. 12. 9 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」（～平成27年1月18日まで）
26. 12. 16 第5回陳列品鑑査会
26. 12. 14 ボランティア・フェスタ
26. 12. 17 「おん祭と春日信仰の美術」茶会
名品展無料観覧日（おん祭お渡り式の日）
26. 12. 21 サンデートーク「文化財を撮る ー信頼のおける写真を求めてー」
写真展「大和の仏たち」関連イベント「仏像を撮ってみよう！」
26. 12. 23 特集展示「新たに修理された文化財」（～平成27年1月18日まで）
27. 1. 10 公開講座「おん祭と威儀物」
27. 1. 15 文化財保存修理所特別公開
27. 1. 18 サンデートーク「内山永久寺と南都の密教絵画」
27. 1. 20 冬季仏像供養法要
27. 1. 21 第6回陳列品鑑査会
27. 1. 27 特集展示「和紙ー文化財を支える日本の紙ー」（～3月15日まで）
27. 1. 29 第61回文化財防火デー消防訓練
27. 2. 3 名品展無料観覧日（節分の日）
27. 2. 7 特別陳列「お水取り」（～3月15日まで）
27. 2. 10 第2回買取等協議会、買取等評価会
27. 2. 12 第7回陳列品鑑査会
27. 2. 14 お水取り「講話」と「粥」の会
27. 2. 15 サンデートーク「阿弥陀来迎図をめぐる」
27. 2. 28 特集展示「和紙ー文化財を支える日本の紙ー」記念講座・座談会
27. 3. 4 なら仏像館修理工事現場特別見学会（3月4日、5日）
27. 3. 9 第2回評議員会
27. 3. 8 公開講座「東大寺二月堂修二会（お水取り）の行法」
27. 3. 15 サンデートーク「文化財とアーカイブズ 奈良国立博物館の取り組みから」

(九州国立博物館)

年 月 日	記 事
26. 2. 25	トピック展示「館蔵近世絵画名品展」 (会期 前期：26年2月25日～4月6日 後期：4月8日～5月18日)
26. 4. 8	「国宝 琉球国王尚家関係資料修理完成記念特別公開」(～26年5月18日)
26. 4. 13	文化財保存国際交流セミナー「バンコク国立博物館における保存修復」
26. 4. 14	特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」開会式及び内覧会 (会期：4月15日～6月8日)
26. 4. 19	特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」特別講演会「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」
26. 4. 22	特別公開「国宝 西光寺梵鐘」(～26年8月31日)
26. 4. 23	青柳正規文化庁長官 来館 文化庁「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会 来館
26. 4. 25	特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」入場者1万人セレモニー
26. 4. 27	第119回 きゅーはくミュージアムコンサート 第34回 はじめての茶道体験
26. 5. 6	第1回 ガムランワークショップ
26. 5. 16	特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」入場者3万人セレモニー
26. 5. 18	文化交流展無料観覧日(国際博物館の日)
26. 5. 20	特別公開「解剖書にみる東洋と西洋 - ファブリカからターヘル・アナトミアへ -」 (～26年7月13日)
26. 5. 24	第120回 きゅーはくミュージアムコンサート 第40回 親子で茶道体験
26. 5. 25	第35回 はじめての茶道体験
26. 5. 27	トピック展示「中国を旅した禅僧の足跡」(～26年7月6日)
26. 6. 3	特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」入場者5万人セレモニー
26. 6. 21	第121回 きゅーはくミュージアムコンサート 第41回 親子で茶道体験
26. 6. 22	第36回 はじめての茶道体験
26. 7. 1	展示「小中学生からの考古学」(～26年9月23日)
26. 7. 6	第2回 ガムランワークショップ
26. 7. 7	特別展「クリーブランド美術館展」開会式及び内覧会(会期：7月8日～8月31日)
26. 7. 12	第122回 きゅーはくミュージアムコンサート 第37回 はじめての茶道体験
26. 7. 13	特別展「クリーブランド美術館展」特別講演会「アメリカ人の目利きーシャーマン・リーとクリーブランド美術館コレクション」
26. 7. 15	特別公開「海を越えた再会ークリーブランド美術館の仲間たちー」(～26年8月24日) トピック展示「全国高等学校 考古名品展」(～26年9月23日)
26. 7. 24	太宰府ブランド創造協議会「ゆかた de 太宰府」コラボイベント 茶室でポーズ

(26年7月25日)

- 26. 7. 26 第42回 親子で茶道体験
いこうよ！あじっば夏祭り 2014（～26年7月27日）
- 26. 7. 27 第43回 親子で茶道体験
- 26. 8. 2 第123回 きゅーはくミュージアムコンサート
第38回 はじめての茶道体験〈特別編〉夏のお茶会
- 26. 8. 7 メンタルヘルス研修
- 26. 8. 8 特別展「クリーブランド美術館展」入場者3万人セレモニー
- 26. 8. 9 第44回 親子で茶道体験
- 26. 8. 10 第45回 親子で茶道体験
第3回 ガムランワークショップ
- 26. 8. 16 トピック展示「全国高等学校 考古名品展」関連
全国高等学校考古学フォーラム in 九州国立博物館 2014
- 26. 8. 20 第1回 評議員会
- 26. 8. 22 特別展「クリーブランド美術館展」入場者5万人セレモニー
- 26. 9. 7 第39回 はじめての茶道体験
- 26. 9. 15 第46回 親子で茶道体験
文化交流展無料観覧日（敬老の日）
- 26. 9. 20 ボランティアイベント「お月見」（～26年9月21日）
- 26. 9. 25 第9回 太宰府 古都の光（17時半以降 文化交流展無料観覧日）
第124回 きゅーはくミュージアムコンサート in 古都の光～悠久なる音～
- 26. 10. 4 第4回 ガムランワークショップ
- 26. 10. 6 特別展「台北 国立故宮博物院 - 神品至宝 - 」開会式及び内覧会
（会期：10月7日～11月30日）
- 26. 10. 9 特別展「台北 国立故宮博物院 - 神品至宝 - 」入場者1万人セレモニー
- 26. 10. 17 特別展「台北 国立故宮博物院 - 神品至宝 - 」入場者5万人セレモニー
- 26. 10. 18 第40回 はじめての茶道体験
- 26. 10. 21 特別展「台北 国立故宮博物院 - 神品至宝 - 」人と熊 公開セレモニー
- 26. 10. 25 第47回 親子で茶道体験
国際シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味 - 工芸における復古と革新 - 」
- 26. 10. 28 特別展「台北 国立故宮博物院 - 神品至宝 - 」入場者10万人セレモニー
- 26. 11. 1 特別展「台北 国立故宮博物院 - 神品至宝 - 」特別講演会「皇帝を魅了した名品たち
—中国書跡を中心に—」
- 26. 11. 3 第41回 はじめての茶道体験〈文化の日特別編〉留学生限定
文化交流展無料観覧日（留学生の日）
国際文化交流ツアーin九博
- 26. 11. 4 職員定期健康診断
- 26. 11. 17 文化交流展無料観覧日（家族の日）
- 26. 11. 21 特別展「台北 国立故宮博物院 - 神品至宝 - 」入場者20万人セレモニー
- 26. 11. 24 第48回 親子で茶道体験
- 26. 12. 6 開館9周年記念ガムランコンサート「青銅の響き・悠久の舞」（～26年12月7日）

26. 12. 13 第42回 はじめての茶道体験
26. 12. 20 第49回 親子で茶道体験
26. 12. 23 第125回 きゅーはくミュージアムコンサート～絵本と音の玉手箱～
27. 1. 1 特別展「古代日本と百済の交流」同時開催「発掘された日本列島2014」開幕
(会期：27年1月1日～3月1日 開会式及び内覧会：1月15日)
新春特別公開「徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」(～27年1月25日)
27. 1. 12 第126回 きゅーはくミュージアムコンサート 新春寄席
第126回 きゅーはくミュージアムコンサート関連イベント「お茶で学ぼう『茶の湯』の世界」
ボランティアイベント「新春餅つき会」
27. 1. 14 トピック展示「大涅槃展」(～27年2月15日)
27. 1. 16 特別展「古代日本と百済の交流」同時開催「発掘された日本列島2014」入場者1万人
セレモニー
27. 1. 23 「発掘された日本列島」展 入場者200万人セレモニー
27. 1. 24 第43回 はじめての茶道体験
公開シンポジウム 日本文化財科学会公開講演会シリーズ「文化遺産と科学『文化財科学が解き明かす自然災害Ⅲ』」
27. 1. 25 第50回 親子で茶道体験(第50回記念特別企画 お茶会編)
第5回 ガムランワークショップ
27. 1. 27 特別展「古代日本と百済の交流」特別講演会「七支刀と百済研究の最前線」
27. 2. 7 第127回 きゅーはくミュージアムコンサート
27. 2. 20 特別展「古代日本と百済の交流」同時開催「発掘された日本列島2014」入場者5万人
セレモニー
27. 2. 21 第44回 はじめての茶道体験
第51回 親子で茶道体験
27. 2. 22 有松育子文化庁次長 来館
第7回 九博子どもフェスタ～博物館ってともだちだ!～
27. 2. 27 第2回 評議員会
27. 3. 3 トピック展示「柿右衛門—受け継がれる技と美—」(～27年5月10日)
27. 3. 8 国際シンポジウム「世界のアリタ - 有田焼の伝統と未来へ続く創造性 - 」
27. 3. 14 特別シンポジウム 進化する博物館Ⅲ「装飾古墳がやってくる～e-Heritage への招待～」
27. 3. 16 防災訓練
27. 3. 21 第128回 きゅーはくミュージアムコンサート サキタハヂメ ミュージカルソーコンサート
第45回 はじめての茶道体験
27. 3. 22 第52回 親子で茶道体験
27. 3. 29 第19回 九博デー「古代の歴史散策らくらくツアー」

(東京文化財研究所)

年	月	日	記 事
26.	4.	22	エントランスロビーパネル展示「海外の文化財を守る日本の伝統技術」
26.	4.	25	企画情報部研究会第1回「廉泉の大村西崖宛書簡について」
26.	4.	30	研究会「バーミヤーン東大仏の「足」と「部分的再建」を考える」
26.	5.	13	タイ文化省文化振興局事務局長他17名 所長表敬訪問及び施設見学
26.	5.	13	インドネシア ジャカルタ文化財保存研究所所長他4名 所長表敬訪問及び施設見学
26.	5.	20	拠点交流事業(アルメニア):アルメニア歴史博物館所蔵考古金属資料の保存修復国内ワークショップ(第6回)(~5月27日)
26.	5.	22	企画情報部研究会第2回「現代美術におけるかたち—国際美術展を中心に」,「かたちをめぐる日本美術史の可能性—西洋美術史からの視点」
26.	5.	26	「アルメニア共和国文化省と東京文化財研究所の間の文化遺産保護のための協力に関する合意書」調印式,ワークショップ修了式,並びに保存修復処置を終えた資料の展示開会式(アルメニア共和国文化省及びアルメニア歴史博物館)
26.	5.	27	「日韓共同研究—文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究—2014年度研究報告会」(大韓民国・国立文化財研究所)
26.	5.	30	拠点交流事業(ミャンマー):第2回木造建造物保存研修(~6月15日)
26.	6.	9	大エジプト博物館長 所長表敬訪問及び講演
26.	6.	10	拠点交流事業(ミャンマー):壁画の保存修復に関する調査及び研修(~6月18日)
26.	6.	10	拠点交流事業(ミャンマー):博物館所蔵の漆工品の技法や劣化状況に関する調査(~6月20日)
26.	6.	10	拠点交流事業(ミャンマー):工芸品を展示する博物館,煉瓦造建造物及び木造建造物における虫害状況の調査,並びに虫害に関する講義と実習(~6月18日)
26.	6.	15	第38回世界遺産委員会参加(~6月25日)(カタール ドーハ)
26.	6.	23	シンポジウム「シリア文化遺産の保護に向けて」
26.	6.	24	企画情報部研究会第3回「貞明皇后のイメージ:二十世紀初頭の日本社会における「女らしさ」の変遷」,「彫刻家・新海竹太郎の遺した資料について」
26.	6.	26	第15回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産管理における住民参加」(東京会場)
26.	6.	27	第15回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産管理における住民参加」(大阪会場)
26.	7.	3	タイ文化省芸術局伝統文化部門長他9名 所長表敬訪問及び施設見学
26.	7.	3	拠点交流事業(キルギス):第7回ワークショップ「史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ」(~7月14日)
26.	7.	14	博物館・美術館等保存担当学芸員研修(~7月25日)
26.	7.	24	国立文化財機構新任職員研修会44名 施設見学
26.	7.	29	企画情報部研究会第4回「平安木彫像における内削りの始源をめぐる」
26.	8.	6	企画情報部研究会第5回「黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」,「藤島武二からの黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について」
26.	8.	6	拠点交流事業(大洋州島しょ国):南太平洋大学環境・サステイナブルデベロップメント太平洋センターとの研究交流(~8月12日)

26. 8. 7 JICA エジプト GEM-CC プロジェクト 和紙研修 (～8月15日)
26. 8. 18 高岡地域文化財等修理協会 13名 施設見学
26. 8. 20 拠点交流事業 (ミャンマー) : 第1回木造建造物保存に関するミャンマー文化省職員招聘研修 (～8月30日)
26. 8. 25 ICCROM 国際研修「紙の保存と修復」(～9月12日)
26. 9. 2 総合研究会第1回「国際文化財保存修復学会(IIC)香港大会での研究成果発表」
26. 9. 5 イラン イスファハン大学工学部土木工学科准教授 所長表敬訪問
26. 9. 9 「ミャンマー協同組合省小規模産業局とミャンマーの漆工文化遺産保護に関する協定」調印式 (ミャンマー小規模産業局)
26. 9. 16 タイ文化省芸術局伝統芸術部門・国立博物館部門及び王室工芸学校一行 所長表敬訪問
26. 9. 18 トルクメニスタン科学アカデミー総裁 所長表敬訪問及び施設見学
26. 9. 18 拠点交流事業 (ブータン) : 伝統的建築工法及び構造調査 (～9月27日)
26. 9. 27 国際シンポジウム「世界遺産としてのシルクロードー日本による文化遺産国際協力の軌跡ー」(イイノホール)
26. 9. 30 企画情報部研究会第6回「黒田清輝『昔語り』再考」, 「岸田劉生と古屋芳雄 — 劉生の「駒沢村新町」療養期を中心に」
26. 10. 4 一般公開講座 (～10月5日)
26. 10. 18 第9回無形文化遺産部公開学術講座「流行歌としての道行ー「海道下り」を中心とした能・狂言歌謡の源流と広がりー」(東京国立博物館)
26. 10. 22 アメリカ ゲッティ財団ゲッティ研究所長及び同研究所評議員一行 視察
26. 10. 27 拠点交流事業 (キルギス) : 第8回ワークショップ「展示と調査報告書作成に関する人材育成ワークショップ」(～11月1日)
26. 10. 28 アメリカ フーリア美術館 アーサ・M・サックラー美術館 保存科学修復部及び保存科学部一行 所長表敬訪問
26. 10. 30 文化庁主催 文化財 (美術工芸品) 修理技術者講習会受講者 29名 施設見学
26. 10. 31 第48回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」(～11月1日)
26. 11. 4 総合研究会第2回「染織技術の伝承における道具の役割ー熊谷染を事例としてー」
26. 11. 5 ICCROM 国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」(～11月30日)(メキシコ国立人類学歴史機構)
26. 11. 21 第28回 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「洋紙の保存と修復」
26. 11. 23 拠点交流事業 (ミャンマー) : 文化財写真に関する研修ワークショップ (～11月29日)
26. 11. 26 アソシエイトフェロー (防災担当) 等研修会
26. 12. 1 朱銘美術館 (台湾) 5名 施設見学
26. 12. 3 在外日本古美術品保存修復協力事業ワークショップ「日本の紙本・絹本文化財の保存修復」基礎編 (ベルリン国立博物館アジア美術館) (～12月5日)
26. 12. 4 研究会「これからの文化財防災ー災害への備え」
26. 12. 5 第9回無形民俗文化財研究協議会「地域アイデンティティと民俗芸能ー移住・移転と無形文化遺産ー」
26. 12. 8 在外日本古美術品保存修復協力事業ワークショップ「日本の紙本・絹本文化財の保存修復」応用編 (ベルリン国立博物館アジア美術館) (～12月12日)
26. 12. 9 企画情報部研究会第7回「南蛮漆器書見台編年試論」, 「東京国立博物館蔵 国宝・普賢

菩薩像の表現—附論 仏画における「荘嚴」

26. 12. 15 拠点交流事業（大洋州島しょ国）：南太平洋大学環境・サステイナブルデベロップメント太平洋センター 研究者招へい研修（～12月21日）
26. 12. 16 総合防災訓練
26. 12. 18 第8回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会「日光東照宮陽明門西壁面唐油蒔絵の調査と修理」
26. 12. 19 台湾新北市政府副秘書長他3名 施設見学
26. 12. 20 拠点交流事業（ブータン）：最終ワークショップ（～12月24日）
27. 1. 2 黒田記念館リニューアルオープン
27. 1. 11 拠点交流事業（ミャンマー）：第3回木造建造物保存研修（～1月24日）
27. 1. 13 総合研究会第3回「文化財アーカイブズ構築の取り組み」
27. 1. 15 拠点交流事業（ミャンマー）：木造僧院建築と博物館所蔵の漆工芸品に用いられた漆装飾やガラスモザイクに関する調査（～1月24日）
27. 1. 15 安全衛生講習会
27. 1. 17 拠点交流事業（ミャンマー）：文化財写真に関する招聘研修（～1月26日）（奈良文化財研究所）
27. 1. 18 拠点交流事業（ミャンマー）：壁画に対する応急的な保存処置及び顔料調査や損傷記録に関する研修（～1月27日）
27. 1. 19 日本写真学会37名 施設見学
27. 1. 27 企画情報部研究会第8回「美術文献情報をめぐる最近の国際動向—米国ゲティ研究所と「アート・ディスカバリー・グループ目録」を中心に—」
27. 1. 28 中国 敦煌研究院 所長表敬訪問
27. 2. 2 宗教法人祐天寺7名 施設見学
27. 2. 3 無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究会「染織技術をささえる人と道具」（文化学園大学）
27. 2. 9 文化財の保存環境に関する研究会「文化財の保存環境の制御と予測」
27. 2. 13 研究会「ミャンマーの木造建築文化」
27. 2. 17 企画情報部研究会第9回「韓国の「東洋画」」
27. 3. 2 文化遺産国際協力コンソーシアム第16回研究会「文化遺産保護の国際動向」
27. 3. 3 総合研究会第4回「海外における日本の修復技術（和紙・装潢）の利用」
27. 3. 3 拠点交流事業（ミャンマー）：壁画の保存修復に関する招へい研修（～3月13日）
27. 3. 6 石崎武志前副所長講演会「文化財を取り巻く環境と保存—特に水に関わる諸問題について—」
27. 3. 24 企画情報部研究会第10回「反芸術・脱主体化・匿名性—山手線事件と赤瀬川原平を中心に—」、「観光芸術多摩川展パノラマ図を観る—富士山、機関車、少女、井戸」
27. 3. 27 第3回無形文化遺産情報ネットワーク協議会
27. 3. 31 エントランスロビーパネル展示「近代文化遺産の保存と修復 東京文化財研究所の関わり」

(奈良文化財研究所)

年 月 日	記 事
26. 4. 12	第12回平城宮跡クリーン大会実施
26. 4. 25	春期特別展「いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代—」(飛鳥資料館)(~6月15日) ※ギャラリートーク3回実施
26. 5. 10	平城宮跡防犯・防災パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加
26. 5. 11	春期特別展記念座談会「いにしへの技術を語る—現代の「匠」と考古学者—」(飛鳥資料館)
26. 6. 7	平城宮跡防犯・防災パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加
26. 6. 9	文化財担当者専門研修「建築遺構調査課程」(~6月13日)
26. 6. 16	文化財担当者専門研修「植物遺体調査課程」(~6月20日)
26. 6. 23	文化財担当者専門研修「庭園・自然名勝等保存活用基礎課程」(~6月27日)
26. 6. 28	公開講演会(第114回)「藤原京の地鎮と富本銭」「役人を育てる」「壁画古墳の世界—星宿と四神—」(平城宮跡資料館講堂)
26. 7. 4	文化財写真技術研究会の開催(平城宮跡資料館講堂)(~7月5日)
26. 7. 7	文化財担当者専門研修「報告書作成I(編集基礎)課程」(~7月11日)
26. 7. 12	夏期企画展「平城京ビックリはくらんかい—奈良の都のナンバーワン—」(平城宮跡資料館)(~9月21日) ※ギャラリートーク5回、親子ワークショップ1回実施
26. 7. 14	文化財担当者専門研修「報告書作成II(応用製作)課程」(~7月18日)
26. 7. 22	消防訓練(本庁舎・平城地区)
26. 7. 25	夏期企画展「第5回写真コンテスト「飛鳥の薨」応募作品展」(飛鳥資料館)(~9月7日)
26. 7. 31	ユネスコアジア文化センターが企画する研修事業の個人研修「文化遺産の保護に資する研修2014」の実施協力(~8月22日)
26. 9. 1	文化財担当者専門研修「自然科学的年代測定法課程」(~9月5日)
26. 9. 2	ユネスコアジア文化センターが企画する研修事業の集団研修「文化遺産の保護に資する研修2014」の実施協力(~10月3日)
26. 9. 8	文化財担当者専門研修「文化的景観調査計画課程」(~9月12日)
26. 9. 12	企画展「津田洋 大和の美仏に魅せられて」(飛鳥資料館)(~9月28日)
26. 9. 13	夜間無料開館(飛鳥資料館)(~9月14日)
26. 9. 17	コロンビア大学中世日本研究所及び建築・計画・保存大学院との講演会を共催「Ideal management of historic parks: From past to present to future」「A Review of the Application of Dendrochronology to Japanese Cultural Heritage」
26. 9. 29	文化財担当者専門研修「遺跡測量課程」(~10月3日)
26. 10. 4	公開講演会(第115回)「和同開珎1文の価値は?」「植物種実からみた古代の生活」「文化的景観の味わい方」(平城宮跡資料館講堂)
26. 10. 7	文化財担当者専門研修「保存科学基礎I(金属製遺物)課程」(~10月16日)
26. 10. 10	秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどり—大地にきざまれた記憶—」(飛鳥資料館)(~11月30日) ※ギャラリートーク4回実施
26. 10. 16	文化財担当者専門研修「保存科学基礎II(木製遺物)課程」(~10月24日)
26. 10. 18	「地下の正倉院展—木簡を科学する」/「埋蔵文化財センターの40年」(平城宮跡資料

- 館) (～11月30日) ※ギャラリートーク3回実施
26. 10. 25 特別講演会(東京会場)『遺跡の年代を測るものさしと奈文研』「年代を測るものさしの作り方」「古代土器の年代測定一都の調査・研究成果と地方の視点一」「時を測るものさしとしての木簡」「土器の年代と木簡の年紀」「白鳳か天平か、瓦が解決した「薬師寺論争」」「木の年輪で作った年代を測るものさし一年輪年代学の成果一」(有楽町朝日ホール)
26. 10. 25 庭園の歴史に関する研究会「戦国時代の城館の庭園」
26. 11. 1 秋期特別展記念講演会「もうひとつの遺跡保存一土層転写と遺構切り取り一」(飛鳥資料館)
26. 11. 8 現地説明会「飛鳥藤原第182次(藤原宮大極殿院)発掘調査
26. 11. 11 ユネスコアジア文化センターが企画する研修事業の個人研修「文化遺産の保護に資する研修2014」の実施協力(～12月5日)
26. 11. 23 ミャンマーの考古学フィールドスクールおよびシェリクシェトラ遺跡において文化財写真に関するワークショップ開催(～11月29日)
26. 11. 29 日本遺跡学会2014年度総会および大会「遺跡は何を伝えられるか一貝塚からの情報一」の開催(品川区立品川歴史館)(～11月30日)
26. 12. 6 ミニ展示「発掘速報展 平城2014 第1期」(平城宮跡資料館)(～2月1日)
26. 12. 6 木簡学会研究集会(第36回)の開催(平城宮跡資料館講堂)(～12月7日)
26. 12. 8 文化財担当者専門研修「古文書歴史資料調査基礎課程」(～12月12日)
26. 12. 12 古代官衙・集落研究会(第18回)の開催(～12月13日)
26. 12. 14 現地見学会「飛鳥藤原第183次(藤原宮東方官衙北地区)」発掘調査
26. 12. 16 文化財担当者専門研修「遺跡情報記録調査課程」(～12月19日)
27. 1. 11 ユネスコアジア文化センターが企画する文化遺産の保護に資する「文化遺産ワークショップ」の実施協力(～1月16日)
27. 1. 13 文化財担当者専門研修「文化財写真課程」(～1月23日)
27. 1. 16 冬期企画展「飛鳥の考古学2014一縄文・弥生・古墳から飛鳥へ一」(飛鳥資料館)(～3月1日) ※ギャラリートーク4回実施
27. 1. 23 保存科学研究集会「石造文化財の保存の現状と課題」の開催
27. 1. 26 文化財担当者専門研修「出土文字資料調査課程」(～1月30日)
27. 2. 8 特別講演会「平城宮跡第一次大極殿院の復原整備」(平城宮跡資料館講堂)
27. 2. 9 消防訓練(本庁舎・平城地区)
27. 2. 14 ミニ展示「発掘速報展 平城2014 第2期」(平城宮跡資料館)(～3月31日)
27. 2. 14 古代瓦研究会(第15回)「8世紀の瓦づくりIV一平城宮式軒瓦の展開2 6282-6721系一」の開催(～2月15日)
27. 2. 16 文化財担当者専門研修「保存科学Ⅲ(応急処置)課程」(～2月20日)
27. 2. 28 現地見学会(奈良県教育委員会主催第4回国宝薬師寺東塔保存修理現場見学会の一環)
27. 3. 7 第31回条里制・古代都市研究会大会「条理地割の形成」の開催(平城宮跡資料館講堂)(～3月8日)

(アジア太平洋無形文化遺産研究センター)

年	月	日	記 事
26.	5.	16	タイ文化省文化振興局 18 名 来所
26.	5.	28	中国 C2 センター (CRIHAP) 第 3 回運営理事会 (チベットホテル, 中国) への参加
26.	6.	2	ユネスコ無形文化遺産保護条約締約国会議総会 (ユネスコ本部, フランス) (～6 月 5 日) への参加
26.	6.	6	無形文化遺産分野 C2 センター第 2 回調整会議 (ユネスコ本部, フランス) への参加
26.	6.	25	文化庁文化財部文化財鑑査官 来所
26.	7.	16	文化庁文化財部伝統文化課文化財国際協力室長 来所
26.	9.	1	第 3 回小島嶼開発途上国 (SIDS) 国際会議と同時開催の会議「Safeguarding ICH for sustainable development in SIDS」(南太平洋大学, サモア) (～9 月 4 日)への参加
26.	10.	1	第 3 回アジア太平洋無形文化遺産研究センター (IRCI) 運営理事会 (堺市博物館)
26.	11.	4	韓国 C2 センター (ICHCAP) 第 5 回運営理事会 (大韓民国全州国立文化遺産センター, 韓国) への参加
26.	12.	19	「IRCI 1st Workshop on the Study of Legal Systems Related to Intangible Cultural Heritage in Southeast Asia」(九州大学)
27.	1.	26	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage (ICH) in the Asia-Pacific Region”」(イスラム美術館, マレーシア) (～1 月 27 日)
27.	1.	27	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH Revitalization: A Case Study of Dong Ho Woodblock Printing」(ベトナム文化芸術院(VICAS), ベトナム) (～1 月 28 日)
27.	2.	21	第 10 回無形文化遺産理解セミナーでの「ユネスコ無形文化遺産条約と IRCI の歩み」講演 (堺市博物館)
27.	3.	16	「Intensive Working Session on Intangible Cultural Heritage Documentation as a Tool for Community-led Safeguarding Activities」(東京国立博物館) (～3 月 18 日)
27.	3.	24	「The Closing Meeting on the Integration of Intangible Cultural Heritage in Education for Sustainable Development」(メリアホテル, ベトナム) (～3 月 26 日) への参加
27.	3.	26	「Conference on Geographical Indications at the Crossroad of Trade, Development, and Culture in Asia-Pacific」(シンガポール国立大学, シンガポール) (～3 月 27 日) への参加
27.	3.	31	中国 C2 センター (CRIHAP) 第 4 回運営理事会 (チベットホテル, 中国) への参加

VII 運営委員・評議員・外部評価委員名簿及び組織図

独立行政法人国立文化財機構運営委員会委員名簿

(平成27年3月31日現在、敬称略)

氏名	現職	備考
石澤良昭	上智大学アジア人材養成研究センター所長	委員長
辻惟雄	東京大学名誉教授	副委員長
阿部充夫	東京国立博物館名誉館長	
安藤裕康	独立行政法人国際交流基金理事長	
今村峯雄	国立歴史民俗博物館名誉教授 総合研究大学院大学名誉教授	
風岡典之	宮内庁長官	
神居文彰	平等院住職	
佐藤宗諄	奈良女子大学名誉教授	
白石太一郎	大阪府立近つ飛鳥博物館長	
田中浩二	九州旅客鉄道株式会社特別顧問	
辻村泰善	公益財団法人元興寺文化財研究所理事長	
中島史子	フリーライター	
西田厚聰	株式会社東芝相談役	
林田スマ	公益財団法人大野城まどかぴあ館長	
馬淵明子	独立行政法人国立美術館理事長	
マリ・クリスティーヌ	異文化コミュニケーター	
冷泉為人	公益財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長	

・各館の評議員会評議員名簿

東京国立博物館評議員会評議員名簿

(平成27年3月31日現在、敬称略)

氏名	現職	備考
大沼 淳	学校法人文化学園理事長	会長
浦井 正明	寛永寺長 藤	副会長
阿部 充夫	東京国立博物館名誉館長	
太田 稔	東日本旅客鉄道株式会社上野駅長	
岡田 正治	東京都立上野高等学校長	
小寺 正樹	台東区立忍岡中学校長	
嶋田 実名子	公益財団法人 花王芸術・科学財団 常務理事(兼) 事務局長	
中川 修一	台東区立根岸小学校長	
服部 征夫	台東区長	
福原 義春	株式会社資生堂名誉会長	
二木 忠男	上野観光連盟会長	
牧 美也子	漫画家	
馬 渕 明子	独立行政法人国立美術館国立西洋美術館長	
マリ・クリスティーヌ	異文化コミュニケーター	
宮田 亮平	東京藝術大学長	
山田 五郎	編集者・評論家	
林原 行雄	シティグループ・ジャパン・ホールディングス株式会社常任監査役	

京都国立博物館評議員会評議員名簿

(平成27年3月31日現在、敬称略)

氏名	現職	備考
興膳宏	京都大学名誉教授	会長
荒巻禎一	京都府京都文化博物館長	
池坊由紀	華道家元池坊次期家元	
上野尚一	朝日新聞社社主	
柳原正樹	独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館長	
神居文彰	平等院住職	
佐藤茂雄	京阪電気鉄道株式会社最高顧問	
高橋隆博	関西大学文学部教授	
竹下景子	俳優	
藤田裕之	京都市副市長	
服部重彦	株式会社島津製作所代表取締役会長	
藤井讓治	京都大学名誉教授、石川県立歴史博物館長	
湯山賢一	独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館長	
冷泉為人	公益財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長	

奈良国立博物館評議員会評議員名簿

(平成27年3月31日現在、敬称略)

氏名	現職	備考
森本 公誠	東大寺長老	会長
大野 玄妙	聖徳宗管長・法隆寺住職	
花山院 弘匡	春日大社宮司	
河瀬 直美	映画監督	
栄原 永遠男	大阪歴史博物館長	
佐々木 丞平	独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館長	
杉本 一樹	宮内庁正倉院事務所長	
田辺 征夫	公益財団法人大阪府文化財センター理事長	
檀 ふみ	女優	
辻村 泰善	公益財団法人元興寺文化財研究所理事長	
中島 史子	フリーライター	
西口 廣宗	株式会社南都銀行代表取締役会長	
野村 政樹	奈良県地域振興部長	
松村 恵司	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	
山口 昌紀	近畿日本鉄道株式会社取締役会長	

九州国立博物館評議員会評議員名簿

(平成 27 年 3 月 31 日現在、敬称略)

氏 名	現 職	備 考
田 中 浩 二	九州旅客鉄道株式会社特別顧問	会長
高 倉 洋 彰	西南学院大学名誉教授	副会長
阿 川 佐和子	文筆家	
井 上 保 廣	太宰府市長	
今泉 今右衛門	陶芸作家	
海老井 悦 子	福岡県副知事	
王 貞 治	福岡ソフトバンクホークス株式会社取締役会長	
川 崎 隆 生	株式会社西日本新聞社代表取締役社長	
高 良 倉 吉	沖縄県副知事	
田 口 五 朗	NHK福岡放送局長	
西高辻 信 良	太宰府天満宮宮司	
林 田 ス マ	公益財団法人大野城まどかぴあ館長	
三 島 寿 子	国際ソロプチミストアメリカ日本南リジョン (九州・沖縄地区) ガバナー	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会委員名簿

(平成27年3月31日現在、敬称略)

氏名	現職	備考
小林 忠	学習院大学名誉教授・岡田美術館館長	委員長
横里 幸一	NHKプロモーション特別主幹	副委員長
鮎川 眞昭	公認会計士	
稲田 孝司	岡山大学名誉教授	
岡田 保良	国土舘大学イラク古代文化研究所教授	
河合 正朝	慶應義塾大学名誉教授・千葉市美術館館長	
酒井 忠康	世田谷美術館長	
佐藤 信	東京大学大学院人文社会系研究科教授	
玉蟲 敏子	武蔵野美術大学造形学部教授	
浜田 弘明	桜美林大学教授	
藤田 治彦	大阪大学大学院文学研究科教授	
森 弘子	福岡県文化財保護審議会専門委員	
柳林 修	読売新聞大阪本社記者	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

博物館調査研究等部会委員名簿

(平成 27 年 3 月 31 日現在、敬称略)

氏 名	現 職	備 考
河 合 正 朝	慶應義塾大学名誉教授 千葉市美術館館長	部会長
酒 井 忠 康	世田谷美術館長	
浜 田 弘 明	桜美林大学教授	
藤 田 治 彦	大阪大学大学院文学研究科教授	
森 弘 子	福岡県文化財保護審議会専門委員	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

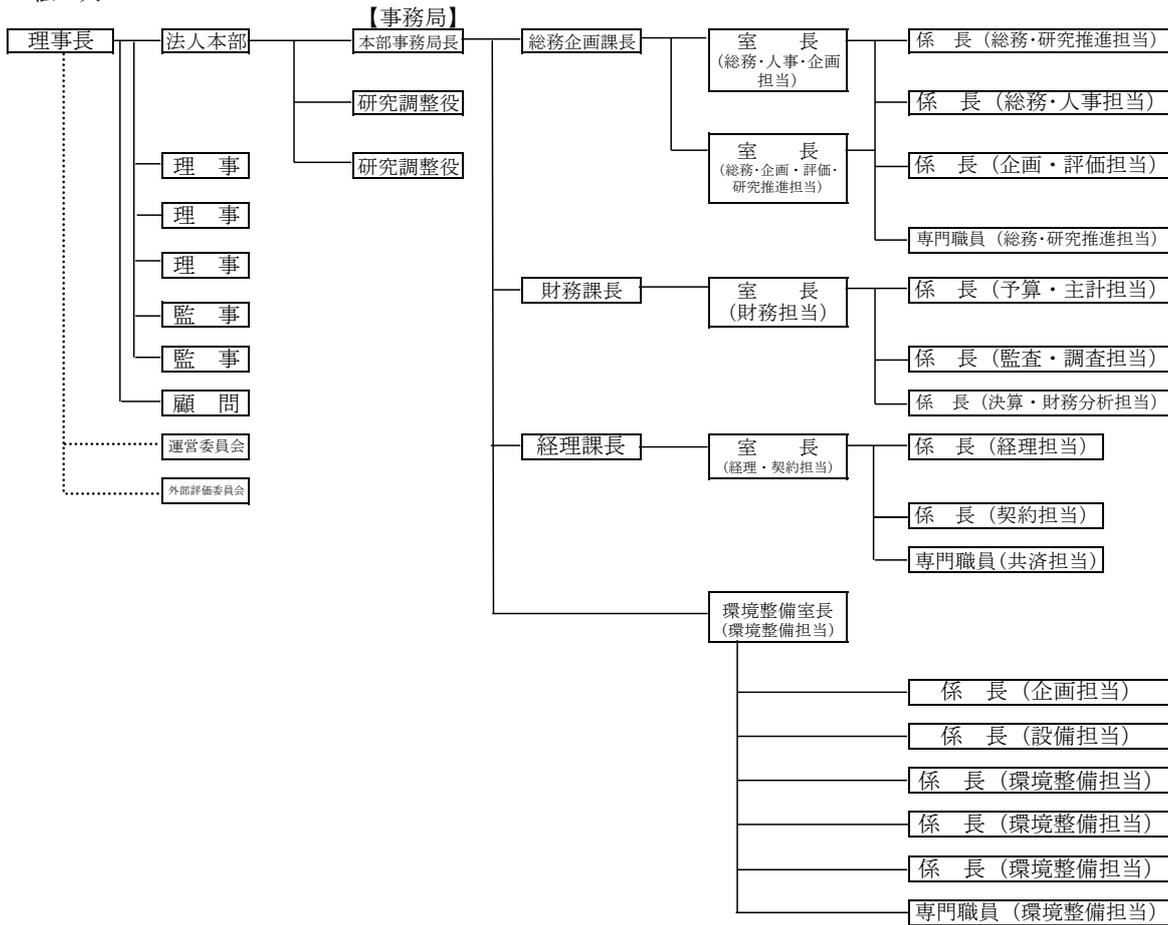
研究所・センター調査研究等部会名簿

(平成 27 年 3 月 31 日現在、敬称略)

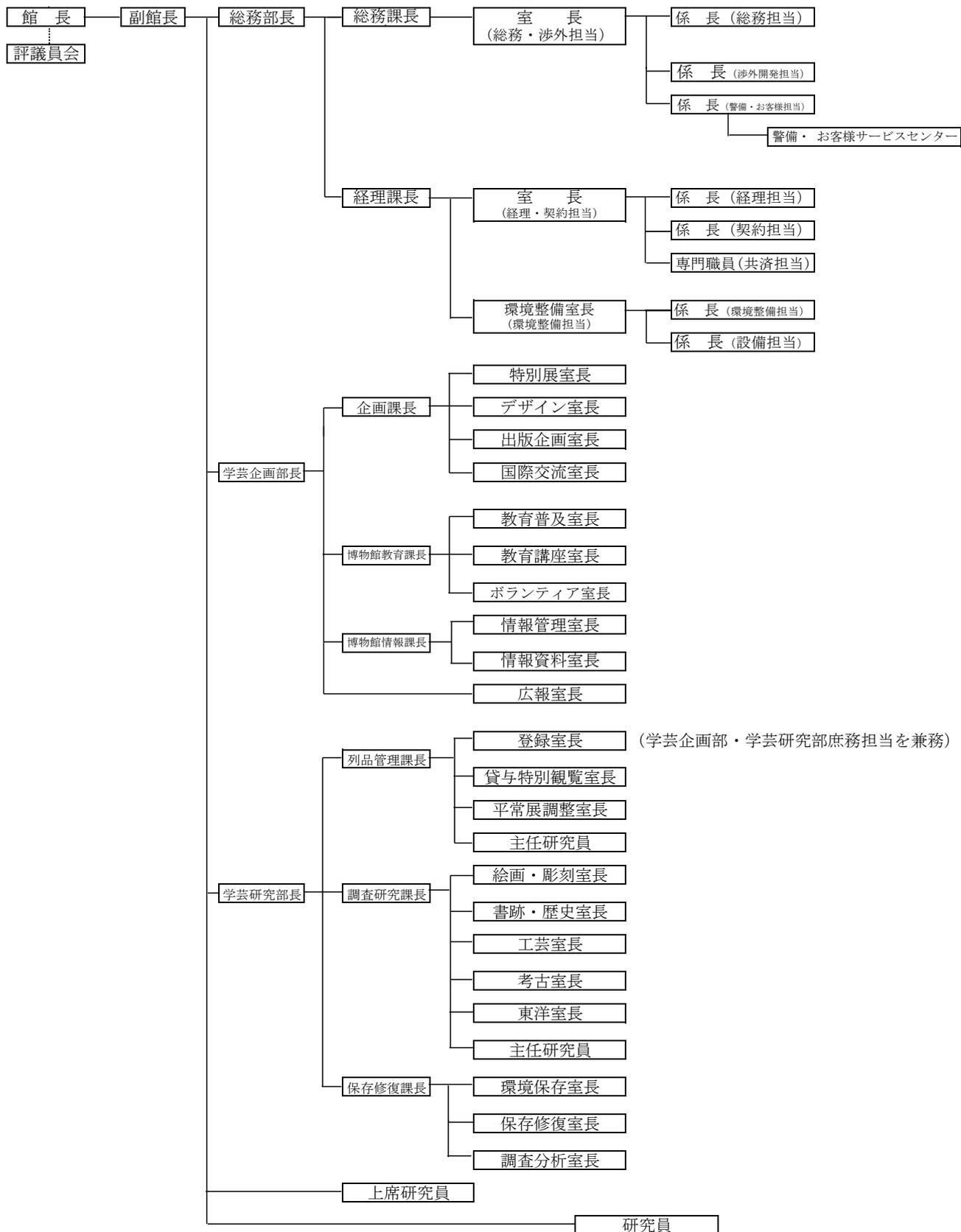
氏 名	現 職	備 考
佐 藤 信	東京大学大学院人文社会系研究科教授	部会長
稲 田 孝 司	岡山大学名誉教授	
岡 田 保 良	国士舘大学イラク古代文化研究所教授	
玉 蟲 敏 子	武蔵野美術大学造形学部教授	
柳 林 修	読売新聞大阪本社記者	

◇組織図

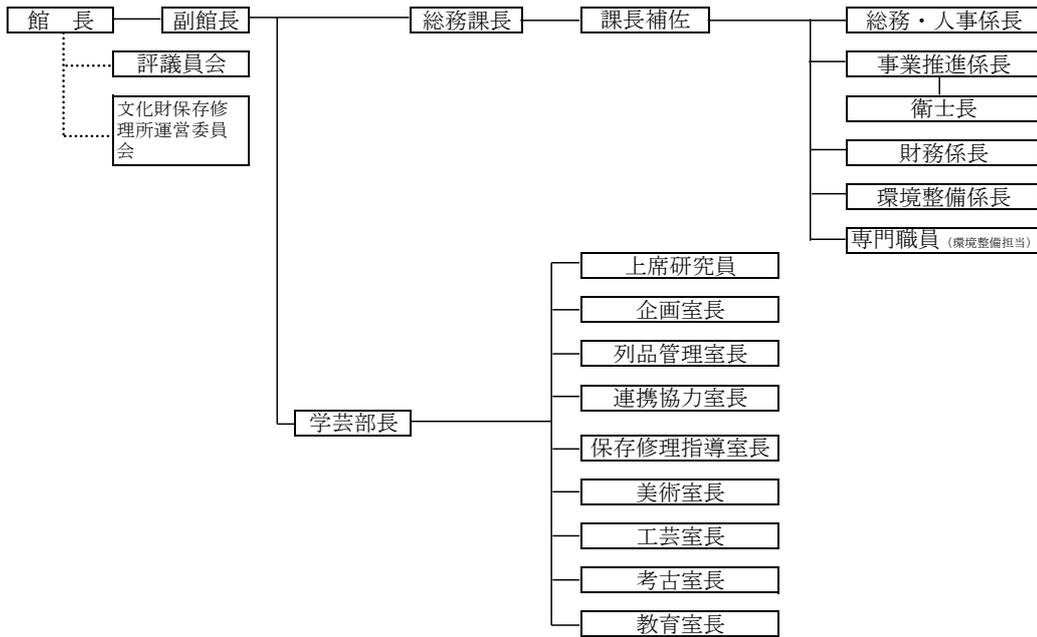
・法人



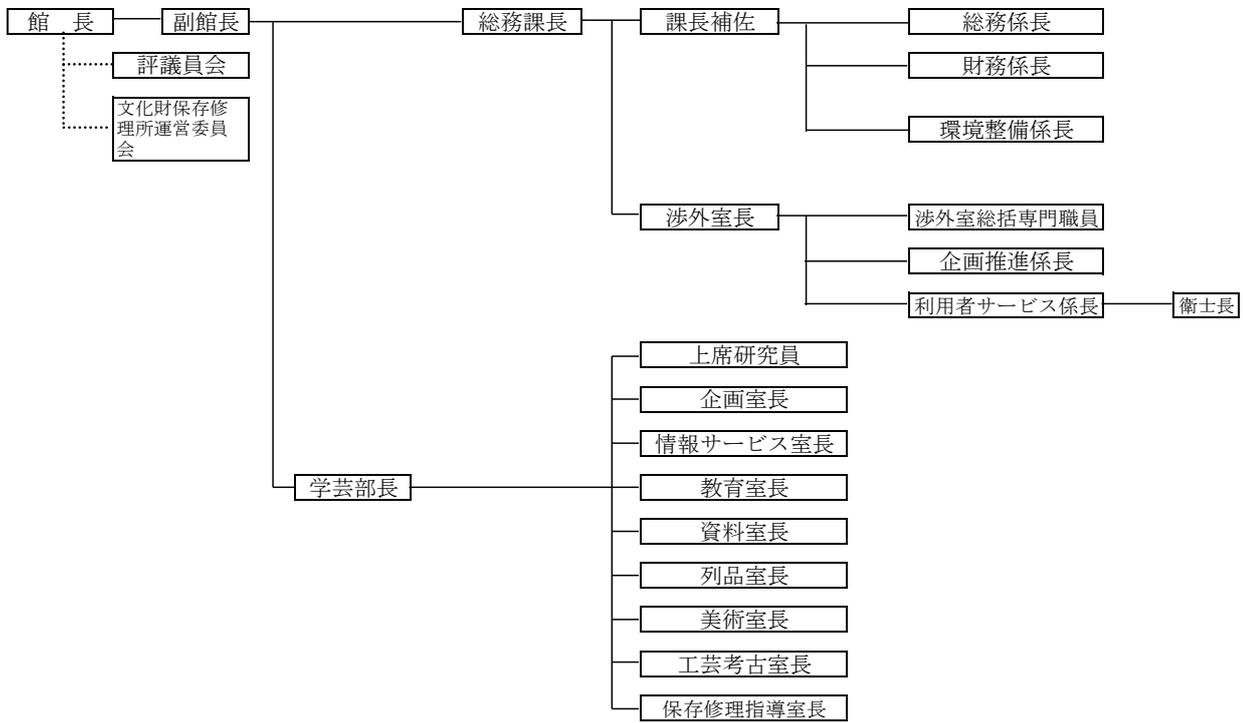
【東京国立博物館】



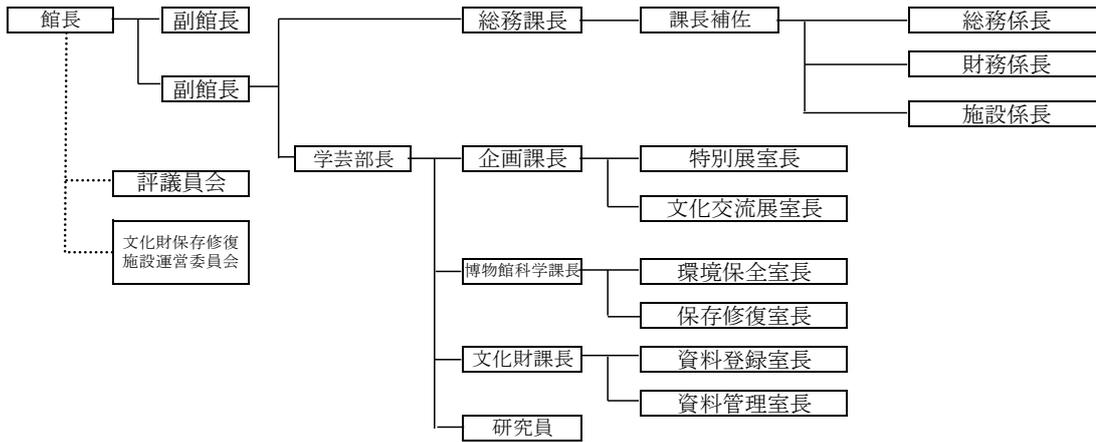
【京都国立博物館】



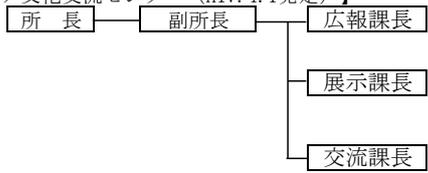
【奈良国立博物館】



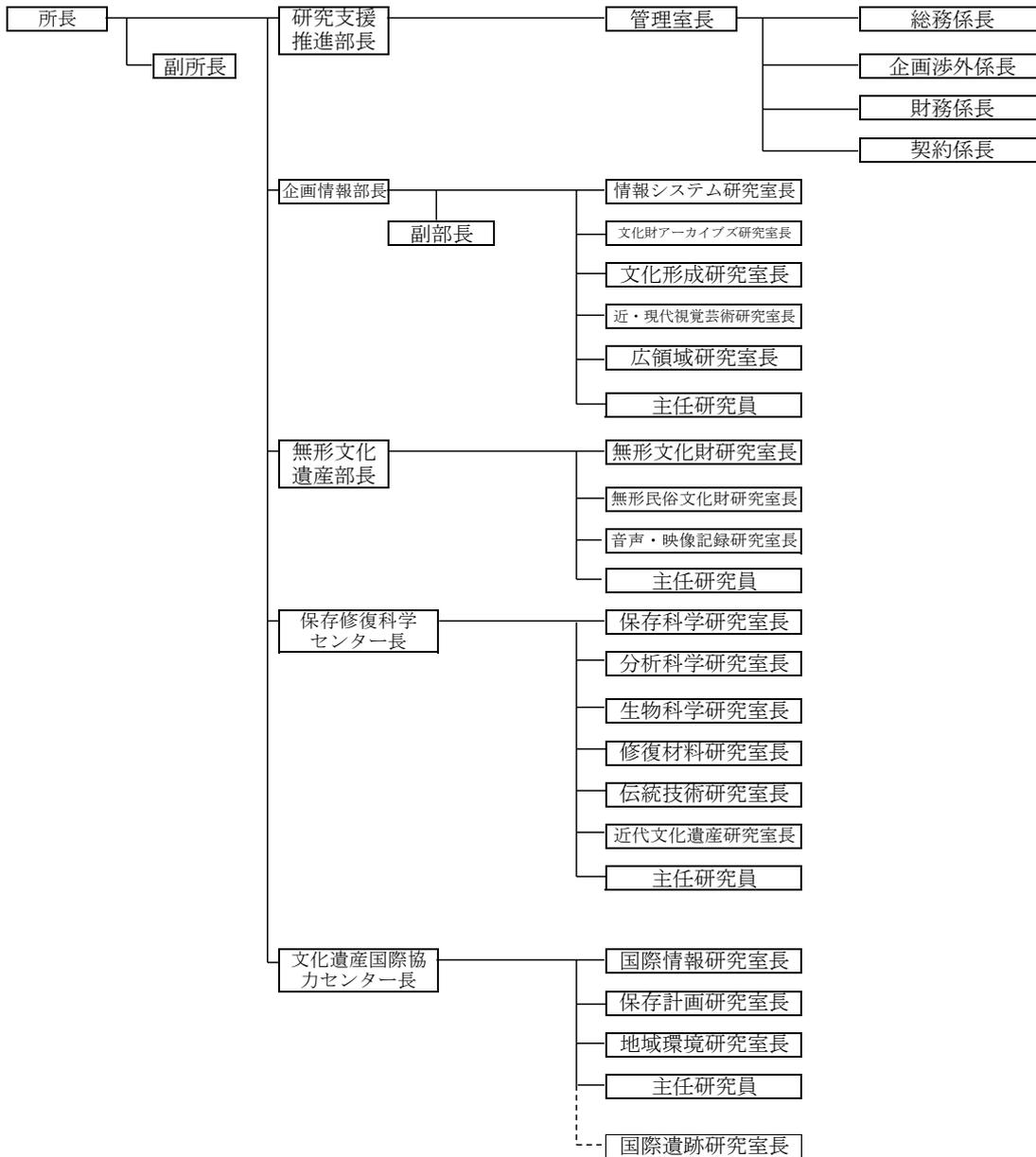
【九州国立博物館】



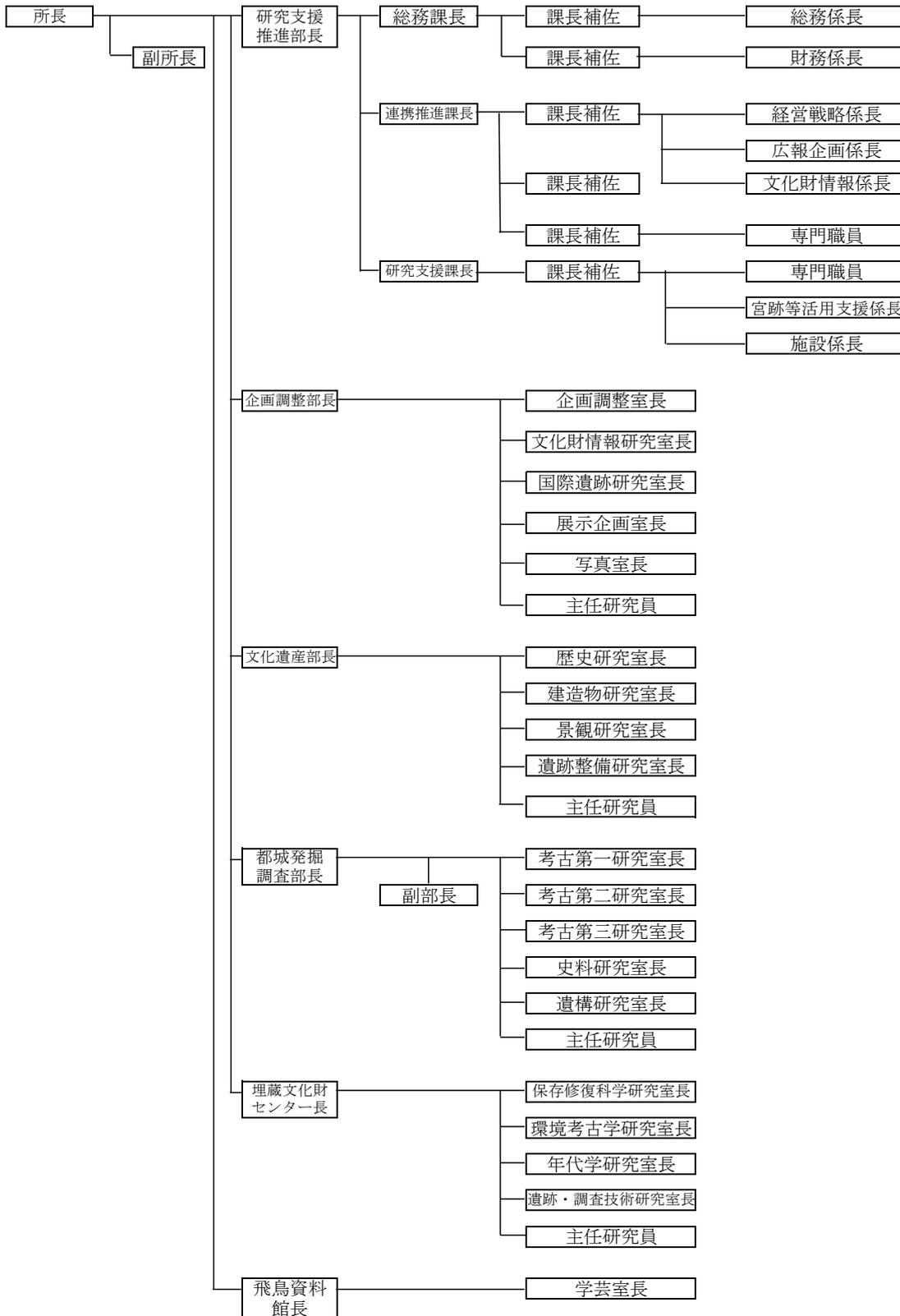
【福岡県立アジア文化交流センター (H17.4.1発足)】



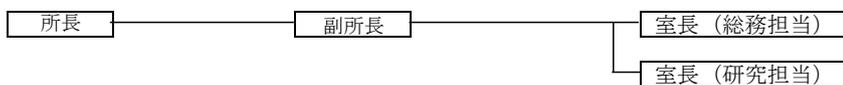
【東京文化財研究所】



【奈良文化財研究所】



【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】



平成26年度 自己点検評価報告書統計表

平成26年度 自己点検評価報告書 統計表

I	国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	
1.	歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	
1-(1)	収蔵品	
1-(1)-①	収蔵品一覧表	1
	(参考)収蔵品・寄託品件数合計(過去5ヵ年)	3
1-(1)-②	平成26年度新収品一覧表	4
1-(1)-③	平成26年度新収品一覧	
	【東京国立博物館】	5
	【京都国立博物館】	17
	【奈良国立博物館】	21
	【九州国立博物館】	23
1-(1)-④	寄託品一覧表	26
1-(1)-⑤	寄託品増減表	26
1-(1)-⑥	登録美術品一覧表	26
1-(2)	収蔵品の管理・保存	
1-(2)-①	保存カルテ作成件数	27
1-(2)-②	各収蔵庫、展示場の温湿度	28
1-(3)	収蔵品の修理	
1-(3)-①	本格修理件数	29
1-(3)-②	修理概況	
	【東京国立博物館】	30
	【京都国立博物館】	40
	【奈良国立博物館】	42
	【九州国立博物館】	43
1-(3)-③	文化財修理データのデータベース化件数	48
2.	文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	
2-(1)	展覧事業の充実	
2-(1)-①	来館者数推移(入館料別)(過去5ヵ年)	(P. 118◎共通資料 a-①)
2-(1)-②	来館者数推移(展覧会別)(過去5ヵ年)	(P. 119◎共通資料 a-②)
2-(1)-③	入場料収入	(P. 121◎共通資料 a-③)
2-(1)-④	展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等の設置	49
2-(1)-⑤	平常展・特別展・海外展	(P. 122◎共通資料 a-④)
2-(2)	教育活動の充実	
2-(2)-①	学習機会の提供(過去5ヵ年)	50
2-(2)-②	キャンパスメンバーズ	51
2-(2)-③	講座・講演会等の開催実績	54
2-(2)-④	児童生徒を対象とした教育普及事業	64
2-(2)-⑤	大学生・大学院生を対象とした教育事業	72
2-(2)-⑥	ボランティア受入れ実績	(P. 136◎共通資料 b)
2-(2)-⑦	友の会	74
2-(2)-⑧	賛助会	75
2-(2)-⑨	渉外活動	76

2-(2)-⑩ 留学生の日	84
2-(3) 快適な観覧環境の提供	
2-(3)-① 高齢者、障がい者等に配慮した設備等	85
2-(3)-② 音声ガイド実施状況	85
2-(4) 文化財情報の発信と広報の充実	
2-(4)-① 収蔵品写真(フィルム)のデジタル化件数	86
2-(4)-② 収集した情報資料数(総数)	86
2-(4)-③ 特別観覧件数	87
2-(4)-④ 画像利用件数	87
2-(4)-⑤ 広報実績一覧	88
2-(4)-⑥ 広報刊行物一覧	97
2-(4)-⑦ ウェブサイトアクセス件数	(P. 218◎共通資料 d)
3. 我が国における博物館の中核としての機能の強化	
3-(1) 調査研究の成果の発信	
3-(1)-① 学会、研究会等発表実績一覧	(P. 172◎共通資料 c-③)
3-(1)-② シンポジウム開催実績一覧	(P. 186◎共通資料 c-④)
3-(1)-③ 論文等発表実績一覧	(P. 188◎共通資料 c-⑤)
3-(1)-④ 調査研究刊行物一覧	(P. 205◎共通資料 c-⑥)
3-(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施	
3-(2)-① 研究交流実績一覧	(P. 140◎共通資料 c-①)
3-(3) 保存修理事業者への研修プログラム	
3-(4) 収蔵品の貸与	
3-(4)-① 公私立博物館等への収蔵品・寄託品貸与件数	100
3-(4)-② 公私立博物館等への収蔵品・寄託品貸与先別件数	100
3-(4)-③ 海外への列品貸与	101
3-(4)-④ 考古の相互貸借実績	101
3-(5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進	
3-(5)-① 公私立博物館等に対する援助・助言	102
4. 文化財に関する調査及び研究の推進	
4-(1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進	
4-(1)-① 調査研究テーマ一覧	(P. 166◎共通資料 c-②)
4-(1)-② 学会、研究会等発表実績一覧	(P. 172◎共通資料 c-③)
4-(1)-③ 論文等発表実績一覧	(P. 188◎共通資料 c-⑤)
4-(1)-④ 調査研究刊行物一覧	(P. 205◎共通資料 c-⑥)
4-(2) 文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進	
4-(2)-① 調査研究テーマ一覧	(P. 166◎共通資料 c-②)
4-(2)-② 学会、研究会等発表実績一覧	(P. 172◎共通資料 c-③)
4-(2)-③ 論文等発表実績一覧	(P. 188◎共通資料 c-⑤)
4-(2)-④ 調査研究刊行物一覧	(P. 205◎共通資料 c-⑥)
4-(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、 先端的調査研究等の推進	
4-(3)-① 調査研究テーマ一覧	(P. 166◎共通資料 c-②)
4-(3)-② 学会、研究会等発表実績一覧	(P. 172◎共通資料 c-③)

- 4-(3)-③ 論文等発表実績一覧 (P. 188◎共通資料 c-⑤)
- 4-(3)-④ 調査研究刊行物一覧 (P. 205◎共通資料 c-⑥)
- 4-(4) 国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施
 - 4-(4)-① 調査研究テーマ一覧 (P. 166◎共通資料 c-②)
 - 4-(4)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (P. 172◎共通資料 c-③)
 - 4-(4)-③ 論文等発表実績一覧 (P. 188◎共通資料 c-⑤)
 - 4-(4)-④ 調査研究刊行物一覧 (P. 205◎共通資料 c-⑥)
- 4-(5) 有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究
 - 4-(5)-① 調査研究テーマ一覧 (P. 166◎共通資料 c-②)
 - 4-(5)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (P. 172◎共通資料 c-③)
 - 4-(5)-③ 論文等発表実績一覧 (P. 188◎共通資料 c-⑤)
 - 4-(5)-④ 調査研究刊行物一覧 (P. 205◎共通資料 c-⑥)
 - 4-(5)-⑤ 科学研究費補助金による調査研究 (P. 209◎共通資料 c-⑦)
 - 4-(5)-⑥ 客員研究員一覧 (P. 215◎共通資料 c-⑧)

5. 文化財保護に関する国際協力の推進

- 5-(1) 保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤の整備
 - 5-(1)-① 調査研究テーマ一覧 (P. 166◎共通資料 c-②)
 - 5-(1)-② 国際ワークショップ開催実績一覧 110
 - 5-(1)-③ 学会、研究会等発表実績一覧 (P. 172◎共通資料 c-③)
 - 5-(1)-④ 論文等発表実績一覧 (P. 188◎共通資料 c-⑤)
- 5-(2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進
 - 5-(2)-① 調査研究テーマ一覧 (P. 166◎共通資料 c-②)
- 5-(3) 研修、専門家の派遣を通じた諸外国における人材育成、技術移転
 - 5-(3)-① アジア諸国文化財保護担当者などの人材養成に関する研修等実施状況..... 111
- 5-(4) アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究
 - 5-(4)-① 研究交流実績一覧 (P. 140◎共通資料 c-①)
 - 5-(4)-② 調査研究テーマ一覧 (P. 166◎共通資料 c-②)
 - 5-(4)-③ 学会、研究会等発表実績一覧 (P. 172◎共通資料 c-③)
 - 5-(4)-④ シンポジウム開催実績一覧 (P. 186◎共通資料 c-④)
 - 5-(4)-⑤ 論文等発表実績一覧 (P. 188◎共通資料 c-⑤)
 - 5-(4)-⑥ 調査研究刊行物一覧 (P. 205◎共通資料 c-⑥)
 - 5-(4)-⑦ ウェブサイトアクセス件数 (P. 218◎共通資料 d)

6. 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

- 6-(1) ネットワークのセキュリティの強化及び情報基盤の整備充実
 - 6-(1)-① 文化財関係資料及び図書の入館件数 112
- 6-(2) 研究所の研究成果の発信
 - 6-(2)-① 公開講演会、現地説明会 112
 - 6-(2)-② シンポジウム開催実績一覧 (P. 186◎共通資料 c-④)
 - 6-(2)-③ 調査研究刊行物一覧 (P. 205◎共通資料 c-⑥)
 - 6-(2)-④ ウェブサイトアクセス件数 (P. 218◎共通資料 d)
- 6-(3) 研究所所管の展示公開施設の充実
 - 6-(3)-① 来館者数推移(入館料別) (過去5ヵ年) (P. 118◎共通資料 a-①)
 - 6-(3)-② 来館者数推移(展覧会別) (過去5ヵ年) (P. 120◎共通資料 a-②)

6-(3)-③ 入場料収入	(P. 121◎共通資料 a-③)
6-(3)-④ 平常展・特別展・海外展	(P. 122◎共通資料 a-④)
6-(4) 文化庁が行う平城宮跡・飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用への協力	
6-(4)-① ボランティア受入れ実績	(P. 136◎共通資料 b)

7. 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

7-① 国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言	115
7-② 専門指導者層を対象とした研修等実施状況及び研究参加者等に対するアンケート結果	115

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

II-1. 一般管理費の削減

II-1-① 施設の有効利用件数	117
------------------	-----

◎共通資料

a. 展示

a-①来館者数推移(入館料別) (過去5ヵ年)	118
a-②来館者数推移(展覧会別) (過去5ヵ年)	119
a-③入場料収入	121
a-④平常展・特別展・海外展	
【東京国立博物館】	122
【京都国立博物館】	128
【奈良国立博物館】	129
【九州国立博物館】	130
(参考)	
【平城宮跡資料館】	133
【藤原宮跡資料室】	134
【飛鳥資料館】	134

b. ボランティア受入れ実績	136
----------------	-----

c. 調査研究

c-①研究交流実績一覧	140
1) 海外研究者招聘・受入実績	140
2) 他機関の共同研究への参画実績	150
3) 研究者海外派遣実績	154
c-②調査研究テーマ一覧	166
c-③学会、研究会等発表実績一覧	172
c-④シンポジウム開催実績一覧	186
c-⑤論文等発表実績一覧	188
c-⑥調査研究刊行物一覧	205
c-⑦科学研究費補助金による調査研究	209
c-⑧客員研究員一覧	215

d. ウェブサイトアクセス件数	218
-----------------	-----

e. 平成26年度平常展・特別展アンケート結果	219
-------------------------	-----

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

1 - (1) 収蔵品

1-(1)-① 収蔵品一覧表

(単位:件) 平成27年3月31日現在

	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文
合計	125,766	130	954	116,268	87	634	7,109	27	180	1,877	13	111	512	3	29
絵画	13,575	34	202	11,154	20	101	2,039	9	55	294	4	42	88	1	4
書跡	3,331	35	170	1,811	14	59	1,330	15	77	145	5	28	45	1	6
彫刻	1,418	1	45	1,105	0	22	145	0	1	146	1	16	22	0	6
建築	78	0	2	21	0	0	49	0	1	5	0	0	3	0	1
金工	17,030	3	54	16,415	1	17	438	2	24	163	0	11	14	0	2
刀剣	3,459	20	57	3,436	19	57				16	0	0	7	1	0
陶磁	3,925	0	18	2,947	0	12	863	0	2	81	0	0	34	0	4
漆工	4,414	6	30	3,793	4	20	363	0	2	100	2	5	158	0	3
染織	4,738	2	26	3,696	0	19	915	1	6	92	1	1	35	0	0
考古	30,112	4	76	28,644	4	55	685	0	11	734	0	8	49	0	2
民族資料	1,308	0	1	1,197	0	0	0	0	0	101	0	0	10	0	1
歴史資料	5,934	0	5	5,608	0	4	282	0	1	0	0	0	44	0	0
和書	17,562	0	1	17,562	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0
東洋	絵画	685	4	31	685	4	31	/	/	/	/	/	/	/	/
	書跡	1,693	10	12	1,693	10	12								
	彫刻	799	0	20	799	0	20								
	金工	1,033	0	0	1,033	0	0								
	陶磁	3,045	0	10	3,045	0	10								
	漆工	529	0	4	529	0	4								
	染織	592	0	1	592	0	1								
	考古	5,880	0	2	5,880	0	2								
	民族	3,484	0	0	3,484	0	0								
法隆寺献納宝物	321	11	183	321	11	183									
黒田記念館収蔵品	816	0	2	816	0	2									
準歴史資料(含和書)	2	0	2	2	0	2									

* 東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり
 京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館は、東洋の作品も「日本」に含む
 * 列品に編入されていない資料については、「準歴史資料(含和書)」の項目にするし、列品化整理中の資料と分けて表示している。
 * 東京国立博物館、京都国立博物館では、国宝・重要文化財の数は文化庁の指定件数に合わせている。

(参考)

【奈良文化財研究所】

○保管及び所蔵文化財・資料概要(主なもの)

平成27年3月31日現在

保管及び所蔵文化財・資料名	数
[文化遺産部]	
国宝・重要文化財建造物保存図	約30,100枚
国宝・重要文化財建造物摺拓本	約26,000枚
国宝・重要文化財建造物写真乾板	約32,200枚
北浦定政関係資料(重要文化財)	約1,100点
棚田嘉十郎関係資料	26点
関野貞関係資料	54点
菅原大三郎関係資料	7箱
森濠資料	約4,500点
村岡正資料	約3,000点
小林剛関係資料	約38箱
牛川喜幸関係資料	2,927点
塚原家寄贈資料(歴史資料)	3箱
[都城発掘調査部(平城地区)]	
平城宮跡大膳職推定地出土木簡(重要文化財)	39点
平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡(重要文化財)	1,785点
平城宮跡内膳司推定地出土木簡(重要文化財)	483点
興福寺旧境内土壌(一乗院宸殿跡下層)出土品(重要文化財)	一括
平城宮・京出土土器・土製品	30,379
平城宮・京出土木製品・金属製品・石製品	34,967
平城宮・京出土瓦類	999,708
平城宮・京出土木簡	209,221
塚原家寄贈資料(考古資料)	7箱
[都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)]	
軒丸瓦・軒平瓦	約36,053点
丸瓦・平瓦 土嚢袋	約167,843袋
丸瓦・平瓦 整理箱	約38,611箱
土器 整理箱	約16,354箱
土製品	約15,061点
木器・木製品	約34,007点
木簡	約355,155点
建築部材	約2,971点
金属製品	約19,858点
石器・石製品	約14,276点
漏刻復元模型	1点
帷帳復元模型(台付き)	一式
飛鳥大仏頭部複製(模刻)	1点
藤ノ木古墳鞍復元模型	1点
富本銭枝銭復元模型	一式
基盤復元模型	1点
鉄釜鋳造土坑復元模型	1点
[飛鳥資料館]	
高松塚古墳出土品(海獸葡萄鏡 銀製太刀金具 棺金具 ガラス小玉漆塗り木棺)(重要文化財)	一式
須弥山石	1点
石人像	1点
飛鳥寺塔跡出土舍利荘嚴具	一式
飛鳥寺出土瓦類	一式
山田寺跡出土品(重要文化財)	一括
和田麁寺鷗尾(都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区所屬))	1点
川原寺出土水波紋土磚	2点
岡出土車石	8点
飛鳥各地出土瓦類	一式
川原寺裏山出土三尊佛	2点
飛鳥川原宮出土唐居敷	1点
高松塚古墳壁画模写(前田青邨、平山郁夫等)	3面
高松塚古墳人物復元衣装	一式
石上神宮七枝刀レプリカ	1点
水落遺跡遺構1/20模型	1点
猿石模刻	一式
亀石模刻	1点
須弥山石復元模刻	1点
石人像復元模刻	1点
出水酒船石模刻	2点
阿武山古墳出土 玉枕 冠帽 復元模型	3点
川原寺伽藍1/50模型	1点
山田寺金堂復元	1点
飛鳥京復元模型	1点
山田寺発掘遺構1/100模型	1点
石舞台古墳1/20模型	1点
飛鳥寺発掘遺構1/100模型	1点
石のカラト古墳1/20模型	1点
野中寺銅造弥勒菩薩半伽像レプリカ	1点
銅造摩耶夫人及天人像レプリカ	4点
威奈大村骨蔵器レプリカ	1点
長谷寺法華説相図レプリカ	1点
諸陵周垣成就記並諸陵図譜	1点
鼓銅図録	1点
高松塚古墳木棺模造	1点
八釣マキト5号古墳石室	1点
十二支拓本(表装済み・収納箱あり)	一式

保管及び所蔵文化財・資料名	数
キトラ古墳模型	1点
山東省濟南市解放橋北唐墓石棺 青龍・白虎・小口面拓本	各1点
近藤千尋関連資料	1式
武人復原	1点
山田寺灯籠復原	1点
貝注歴木簡レプリカ	1点
天皇木簡	1点
壬申の乱ジオラマ	一式
牽牛子塚古墳ミニジオラマ	1点
キトラ古墳出土品金銅製座金具レプリカ	2点
キトラ古墳出土品銀鍍付六花形飾金具レプリカ	2点
キトラ古墳出土品大刀・銀製鞘金具レプリカ	2点
キトラ古墳出土品大刀・銀装把レプリカ	1点
キトラ古墳出土品鉄地銀張金象嵌帯執金具レプリカ	3点
キトラ古墳出土品琥珀玉レプリカ	4点
キトラ古墳出土品金銅製座金具復元品	10点
キトラ古墳出土品銅釘復元品	一括
キトラ古墳出土品銀鍍付六花形飾金具復元品	10点
キトラ古墳出土品円環棺金具復元品	10点
飛鳥池遺跡出土施釉陶器復元品	3点
鍛冶工房風景想定復元図	1点
銅造観音菩薩立像(夢違観音)複製品	1体
隅田八幡宮人物画像鏡複製品	1点
山田寺仏頭複製品	1点
金銅小野毛人墓誌複製品	1点
筑前国嶋郡川辺里大宝2年戸籍残簡複製品	2点
人頭石(光永寺)複製品	1点
鰐淵寺銅造観音菩薩立像複製品	1点
重要文化財陶勝寺銅壺鋳造模型(下道関依母婦人骨蔵器)	1点
四十八体仏如来坐像複製	1点
丙寅年銘菩薩半伽像複製品	1具
於美阿志神社石塔婆のうち供養具	一括
牽牛子塚古墳出土品	一括
マルコ山古墳出土品	一式
[埋蔵文化センター]	
埼玉県真福寺貝塚資料	一式
岡山県福田貝塚資料	一式
埼玉県上福岡貝塚資料	一式
神奈川県田戸遺跡資料	一式
神奈川県子母口貝塚	一式
神奈川県大口坂貝塚資料	一式
能登縄文資料(15遺跡)	一式
千葉県曾谷貝塚資料	一式
長野県石小屋遺跡資料	一式
山形県蛸沢洞窟資料	一式
東京都小豆沢貝塚資料	一式
茨城県広畑貝塚資料	一式
中国・朝鮮瓦磚資料	一式
岡山地方陶棺資料	一式
下総国分寺・尼寺資料	一式
関東地方加曾利B式資料	一式
岩手県足沢遺跡資料	一式
茨城県浮島貝塚資料	一式
千葉県幸田貝塚資料	一式
滋賀県安土遺跡資料	一式
岡山県黒土遺跡資料	一式
神奈川県保土ヶ谷貝塚資料	一式
千葉県姥山貝塚資料	一式
宮城県川下り・響き資料	一式
大木岡貝塚	一式
東貝塚	一式
室浜貝塚	一式
福浦島貝塚	一式
里浜貝塚	一式
東北縄文晩期末資料	一式
東北各地発見縄文資料	一式
北海道資料	一式
発見地不詳縄文資料	一式
発見地不詳須恵器資料	一式
発見地不詳石器・石斧資料	一式
愛知県西滋賀貝塚資料	一式
愛知県吉胡貝塚資料	一式
茨城県前浦遺跡資料	一式
関東地方埴輪資料	一式
静岡県登呂遺跡資料	一式
発見地不詳須恵器資料	一式
発見地不詳石器・石斧資料	一式
愛知県西滋賀貝塚資料	一式
愛知県吉胡貝塚資料	一式
茨城県前浦遺跡資料	一式
関東地方埴輪資料	一式
静岡県登呂遺跡資料	一式

1-(1)-① (参考)

収蔵品・寄託品件数合計(過去5カ年)

(単位:件) 平成27年3月31日現在

		平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度			平成26年度		
		計	国宝	重文												
収蔵品・ 寄託品 合計	国立博物館 計	134,077	315	2,128	134,668	316	2,126	135,044	317	2,136	136,215	323	2,143	137,610	325	2,162
	東京国立博物館	115,984	137	886	116,586	137	883	116,925	136	884	118,172	140	878	119,332	143	890
	京都国立博物館	12,589	110	789	12,634	110	787	12,622	112	789	12,613	114	801	13,110	113	803
	奈良国立博物館	3,774	65	423	3,776	66	425	3,785	66	431	3,856	66	432	3,861	66	435
	九州国立博物館	1,730	3	30	1,672	3	31	1,712	3	32	1,574	3	32	1,307	3	34
収蔵品	国立博物館 計	122,102	130	943	122,802	130	946	123,378	130	950	124,729	130	952	125,766	130	954
	東京国立博物館	113,258	87	629	113,897	87	631	114,362	87	631	115,653	87	633	116,268	87	634
	京都国立博物館	6,584	27	177	6,621	27	177	6,708	27	179	6,721	27	179	7,109	27	180
	奈良国立博物館	1,827	13	109	1,831	13	109	1,834	13	111	1,862	13	111	1,877	13	111
	九州国立博物館	433	3	28	453	3	29	474	3	29	493	3	29	512	3	29
寄託品	国立博物館 計	11,975	185	1,185	11,866	186	1,180	11,666	187	1,186	11,486	193	1,191	11,844	195	1,208
	東京国立博物館	2,726	50	257	2,689	50	252	2,563	49	253	2,519	53	245	3,064	56	256
	京都国立博物館	6,005	83	612	6,013	83	610	5,914	85	610	5,892	87	622	6,001	86	623
	奈良国立博物館	1,947	52	314	1,945	53	316	1,951	53	320	1,994	53	321	1,984	53	324
	九州国立博物館	1,297	0	2	1,219	0	2	1,238	0	3	1,081	0	3	795	0	5

1-(1)-② 平成26年度新収品一覧表

(単位：件)

平成27年3月31日現在

	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入
合計	1,037			615			388			15			19		
計	47	484	506	9	100	506	9	379	0	15	0	0	14	5	0
絵画	13	52	0	3	3	0	2	49	0	4	0	0	4	0	0
書跡	3	28	0	1	11	0	0	17	0	1	0	0	1	0	0
彫刻	3	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0
建築	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
金工	5	71	0	0	14	0	1	56	0	4	0	0	0	1	0
刀剣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
陶磁	0	86	0	0	0	0	0	86	0	0	0	0	0	0	0
漆工	8	162	0	1	1	0	5	161	0	1	0	0	1	0	0
染織	4	7	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	3	0	0
考古	5	12	0	0	6	0	0	3	0	3	0	0	2	3	0
民族資料	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
歴史資料	2	0	506	0	0	506	0	0	0	0	0	0	2	0	0
和書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東洋	絵画	0	0	0	0	0	/								
	書跡	0	0	0	0	0									
	彫刻	0	0	0	0	0									
	金工	0	1	0	0	1									
	陶磁	0	0	0	0	0									
	漆工	0	0	0	0	0									
	染織	4	0	0	4	0									
	考古	0	62	0	0	62									
民族	0	1	0	0	1										
法隆寺献納宝物	0	0	0	0	0	0	/								
黒田記念館収藏品	0	0	0	0	0										

* 東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり。

付表・文化財収集件数の推移

5年間の新収集品一覧表

(単位：件)

	平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度			平成26年度		
	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入
合計	591			701			576			1,351			1,037		
小計	65	70	456	34	176	491	26	153	397	23	513	815	47	484	506
絵画	12	16	0	11	23	1	9	10	0	6	11	28	13	52	0
書跡	9	12	1	7	33	0	3	36	0	2	12	1	3	28	0
彫刻	1	2	1	2	0	0	1	2	0	2	1	0	3	1	0
建築	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
金工	13	4	0	1	1	0	0	0	0	2	417	155	5	71	0
刀剣	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	38	0	0	0
陶磁	2	0	0	0	5	0	1	61	0	1	1	15	0	86	0
漆工	5	11	0	0	24	0	1	0	0	1	29	33	8	162	0
染織	13	7	0	5	7	0	1	1	0	3	5	65	4	7	0
考古	3	2	0	1	0	1	4	23	0	1	1	109	5	12	0
民族資料	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	1	0
歴史資料	6	2	453	7	0	489	6	1	397	3	1	334	2	0	506
和書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東洋	絵画	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	書跡	0	0	0	0	44	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	彫刻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	金工	0	0	0	0	0	0	16	0	0	29	1	0	1	0
	陶磁	0	2	0	0	34	0	1	0	0	0	4	0	0	0
	漆工	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	染織	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	4	0	0
	考古	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	62	0
民族	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	1	0	
法隆寺献納宝物	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
黒田記念館収藏品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0

1-(1)-③ 平成26年度新収品一覧

【東京国立博物館】(615件)

(1) 購入 (9件)

<絵画> (3件)

- 1 ○名称 柿本人麻呂像 (かきのものひとまるぞう)
○時代 室町時代・15世紀
○品質 絹本着色
○員数 1幅
○寸法等 縦75.4cm 横38.3cm
○作品概要 掛幅装。牙軸。豹皮の上に坐す歌聖・柿本人麻呂が、肘をつき筆を持った右手を頬にあて、料紙を持った左手を脇息に置く姿で描かれている。人麻呂の前には、中国風の団扇の上に二つ折りにした料紙の束と、竹で編まれたと思しき硯箱が置かれる。
- 2 ○名称 融通念仏縁起絵断簡 (ゆうずねんぶつえんぎえだんかん)
○時代 南北朝時代・14世紀
○品質 紙本着色
○員数 1幅
○寸法等 縦31.8cm 横90.6cm
○作品概要 掛幅装。牙軸。平安時代の後期、大原の良忍上人(1073-1132)によって始められた融通念仏の功德を描く「融通念仏縁起絵」の断簡。本図は、融通念仏の教えが畜類にも広まったという場面である。屋根の上に毘沙門天が出現し、縁先には良忍上人が立ち、庭には鼠が、樹木の枝には鶯の姿が描かれる。重美認定時には、本図は六図からなる零巻であった。
- 3 ○名称 桜下美人図 (おうかびじんず)
○作者等 長沢芦雪(1754~99)筆
○時代 江戸時代・18世紀
○品質 絹本着色
○員数 1幅
○寸法等 縦126.0cm 横55.1cm
○作品概要 掛幅装。牙軸。しだれ桜の下、若い娘を大きくとらえ、背後に侍女を描く。娘は、薄紫の紋付振袖、裏地に墨竹図、青海波絞りの緋襦袢、雲竜模様の蝦夷錦の帯、鼈甲や赤い布の髪飾り、といった具合に豪華に装い、裾から素足をのぞかせる。生彩な目、精緻な髪を生え際、眉、まつ毛、精細な文様の着物の入念な描写が秀逸である。桜の花びらが枝の間にちらほらと舞い落ちる。それを受けとめようと娘は右の手のひらを上に向け、左手で着物を押さえて全身に弓形の姿をつくる。右袖の手前に、花びらをひとひらスナップショット風にとらえ、右下に3頭の蝶を宙に舞わせて、上から下への動きを生んでいる。

<書跡> (1件)

- 4 ○名称 関戸本古今和歌集切「梅の香を」(せきどぼんこきんわかしゅうきれ うめのかを)
○作者等 伝藤原行成(972~1027)筆
○時代 平安時代・11世紀
○品質 彩箋墨書
○員数 1幅
○寸法等 本紙 縦21.2cm 横35.0cm
○作品概要 旧状別帖装本の『古今和歌集』に含まれる薄緑色の料紙一葉を相剥ぎして2枚とし、掛幅装に仕立てる。本文は巻第一の46番「よみひと不知梅の香を袖に移して留めては春は過ともかたみならまし」から49番「つらゆき ことしよりはるしりそむるさくらはなちるてふことはならはざらなむ」の途中までを書く。

<漆工> (1件)

- 5 ○名称 花卉漆絵片口 (かきうるしえかたくち)
○時代 安土桃山時代・16世紀
○品質 木製漆塗
○員数 1口
○寸法等 短径20.1cm 長径(注口含)26.4cm 高13.3cm
○作品概要 口縁に注ぎ口をつくりだし、高台を付けた片口。表面は外側を黒漆塗、内側を朱漆塗とする。胴の上部には朱漆で雲形をかたどり、その内に切箔で菱格子文を表わす。また胴の下部には朱漆で澤瀉、山葡萄、松に竹の図柄を描いている。

<東洋染織> (4件)

- 6 ○名称 スレندان (肩衣) 茜地草花文様緯緋浮紋織 (すれんだん (かたぎぬ) あかねじくさばなもんようよこがすりうきもんおり)
○時代 19世紀
○品質 絹製
○員数 1枚
○寸法等 幅78.5cm 長さ350.5cm
○作品概要 茜で染めた絹糸を平織にし、両端に燃金糸で火焰状の文様を織り出したスレندان(肩衣)である。通常のスレندانは長さ250cmあまりであるが、本品は350cmもあることから、貴族の葬礼に際し遺体を被うのに用い、その後、死者の片身として大切に保管された可能性がある。紋織に用いられる燃金糸は、紙に金箔を擦り細く裁断した平金糸を絹糸にコイル状に巻きつけた、中国産特有のものである。中国から輸入した燃金糸を用いてスマトラ島で織られたものであろう。中央部には、緯糸を緋に染めた糸を織り込み、インドの経緯緋であるパトラを模した草花文様を表わす。中央を境に、左右で緯緋の文様を変えている点が珍しい。このような緯緋のことを、スマトラ島ではリマル・ムント(Limar Mentok)と称する。多彩に染めた緯糸で文様を織り出す緯緋はパレンバンの特徴である。
- 7 ○名称 頭巾 紫地段幾何文様浮紋織 (ずきんむらさきじだんきかもんよううきもんおり)
○時代 19世紀
○品質 絹・木綿
○員数 1枚
○寸法等 幅50.2cm 長さ253.5cm
○作品概要 経糸に茜色の絹糸、緯糸に紫色の木綿糸を用いて平織にした頭巾。両端には、緑・黄色・紫・赤などに染めた絹糸を緯糸にして段状に織り入れ、さらに金糸による浮紋織で、さまざまな幾何文様を対称に表わす。ミナンカバウ族では、文様のない部分を頭部の周囲に巻き、文様の部分を頭の左右に円錐状の突起を形作り、頭巾とする。浮紋織に用いられる金糸は、薄く延ばした金箔を細く裁断し、黄色に染められた絹糸にコイル状に巻きつけたもので、インド産と考えられる。ここに、古くからインドと交易を行ってきた西スマトラ地域の織物の特色がうかがえる。浮紋織で織り出された文様のヴァリエーションは20種類もあり、細い燃金糸で繊細に織り出されている。燃金糸による緊密な幾何文様の繰り返しはミナンカバウ族の特色である。

- 8 ○名称 帯 茜地段幾何文様浮紋織（おびあかねじだんきかもんようきもんおり）
 ○時代 19世紀
 ○品質 絹製
 ○員数 1枚
 ○寸法等 幅23.8cm 長さ200.0cm
 ○作品概要 茜色に染めた絹糸を平織にし、撚銀糸で文様を織り出した帯である。村長が儀式の際に飾帯として用い、代々受け継がれてきたものであろう。両端には、紫や緑の緯糸を段状に織り込み、それぞれの段に異なった文様を撚銀糸による浮紋織で表わす。中間部には縁にのみ、撚銀糸で菱繋ぎ文様の浮紋織が施される。また、両端にはヨーロッパから輸入したと考えられるモール（金属紐）で縁飾りをつける。浮紋織に用いられる撚銀糸は、薄く延ばした銀箔を細く裁断し、黄色に染められた絹糸にコイル状に巻きつけたもので、インド産と考えられる。その文様のヴァリエーションは菱形や石畳文、鱗形などを組み合わせた26種類におよび、幾何文様の豊かさを示す。ミナンカバウ族が織る浮紋織よりも、段文様の数がさらに多く、織も繊細で古様であることから、バリアンガンで製作されたと考えられる。
- 9 ○名称 スレンダン（肩衣） 茜地段幾何文様浮紋織（すれんだん（かたぎぬ）あかねじだんきかもんようきもんおり）
 ○時代 19世紀後半～20世紀初頭
 ○品質 絹製
 ○員数 1枚
 ○寸法等 幅41.0cm 長さ207.5cm
 ○作品概要 黒味があった茜色の絹糸を平織にし、撚金糸による浮紋織で文様を織り出したスレンダン（肩衣）である。文様は、山道に菱を繋げた縁文様を表わし、全体に段状にさまざまな幾何文様を表わす。文様のヴァリエーションは18種類である。このような撚金糸の浮紋織は、西スマトラ州のものと同様だが、布の周囲に額状の縁文様を織り出すのがパセマの特徴である。浮紋織に用いられる撚金糸は、紙に金箔を捺し細く裁断した平金糸を絹糸にコイル状に巻きつけた、中国産特有のものである。中国から輸入した撚金糸を用いてスマトラ島で織られたものであろう。撚金糸が19世紀のものと比較してやや太めで文様もやや繊細さに欠けることから、19世紀後半から20世紀初頭に製作されたものと考えられる。全面に撚金糸で文様を織り出した豪華な肩衣である。

(2) 寄贈 (100件)

<絵画> (3件)

- 1 ○名称 林逋帰亭図屏風（りんぼきていずびょうぶ）
 ○作者等 池大雅（1723～76）筆
 ○時代 江戸時代・18世紀
 ○品質 紙本淡彩
 ○員数 6曲1双
 ○寸法等 縦154.2cm 横359.3cm
 ○作品概要 屏風装。6曲1双の左隻には、画面いっぱい山と松、右上隅に飛翔する鶴が見え、右隻には、橋上を高士たち、右方過半をしめる満開の梅と家が見える。山から帰ってきた高士たちを、玄閣で童子が待ち受ける構成である。画面を支配する梅の林、宙を舞う鶴の描写から、梅を愛し鶴と暮らしたという北宋の詩人、林和靖（林逋）が自亭に帰る場面とみなせる。各隻に大雅の印が捺され、山や松樹の描法、人物の描法や表情は、大雅の筆の特徴をよくしめす。
- 2 ○名称 年中行事図屏風（ねんちゅうぎょうじびょうぶ）
 ○作者等 狩野益信（洞雲）（1625～1694）筆
 ○時代 江戸時代・17世紀
 ○品質 紙本金地着色
 ○員数 6曲1隻
 ○寸法等 縦154.6cm 横386cm
 ○作品概要 屏風装。6曲1隻に東山の山並みを背景として、第1・2扇の上段に正月の弓初め、下段に咲き誇る梅の下での小弓遊びと独楽遊びを描く。第3扇から第6扇に鶯舞や傘鉦、太刀や鎧で飾られた、応仁の乱以前の様相を示す祇園祭の山鉾行列とそれを見物する町家の人々を描いている。画中モチーフの多くは、原本の制作が応仁の乱以前に遡る当館所蔵の「月次風俗図屏風」（模本・A-2425）と同様が一致するため、室町時代の原本からモチーフを踏襲したものと考えられ、本来、年中行事を6曲1双に描いた屏風の春・夏部分である右隻に相当する。
- 3 ○名称 当麻曼荼羅図（たいまんだらぢう）
 ○作者等 神田宗庭隆信（1794～1844）筆
 ○時代 江戸時代・天保7年（1836）
 ○品質 絹本着色描表装
 ○員数 1幅
 ○寸法等 総寸法（含描表装） 縦165.0cm 横156.0cm；除描表装 縦124.5cm 横132.5cm
 ○作品概要 鎌倉時代以降の浄土教の隆盛により多くの転写本が制作された当麻曼荼羅の転写本。二分の一、四分の一、六分の一、八分の一など様々な縮小率のものが制作されたが、本図はほぼ八分の一サイズの作例で、江戸時代に版画として開板され流行したサイズである。画面下辺の九品来迎図は坐像形式、銘文帯は全文を収録する形式をとり、当麻寺文庫本に代表される系統の形式を示している。

<書跡> (11件)

- 4 ○名称 李花集抄（りかしゅうしょう）
 ○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
 ○時代 昭和25年（1950）
 ○品質 彩箋墨書
 ○員数 1巻
 ○寸法等 本紙 縦24.5cm 横360cm
 ○作品概要 卷子装。宗良親王の私家集「李花集」から、「たつなみも かすみをそへて あら玉の としやこゆらん すゑの松山」など3首を書く。
- 5 ○名称 いにしへの（万葉集）（いにしへの まんようしゅう）
 ○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
 ○時代 昭和55年（1980）頃
 ○品質 紙本墨書
 ○員数 1面
 ○寸法等 本紙 縦143cm 横56.5cm
 ○作品概要 額装。『百人一首』にも収載されている伊勢大輔の「いにしへの ならのみやこの 八重桜 今日九重に 薫ひぬる哉」を書く。
- 6 ○名称 タ立や（ゆうだちや）
 ○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
 ○時代 昭和58年（1983）
 ○品質 紙本墨書
 ○員数 1面

- 寸法等 本紙 縦 231cm 横 53cm
○作品概要 額装。蕪村の「夕立や くさ葉をつかむ むら雀」を書く。
- 7 ○名称 山里は（やまざとは）
○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
○時代 昭和 60 年（1985）
○品質 紙本墨書
○員数 1 面
○寸法等 本紙 縦 69.5cm 横 177cm
○作品概要 額装。西行の「山里は かすみわたれる けしきにて そらにや春の たつをしるらん」など和歌 6 首を書く。
- 8 ○名称 秋ぎりの（あきぎりの）
○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
○時代 昭和時代・20 世紀
○品質 紙本墨書
○員数 1 幅
○寸法等 本紙 縦 138cm 横 35cm
○作品概要 掛幅装。『新千載和歌集』所載の永福門院作「秋ぎりの むらむらはるる たえ間より めれていろきき 山の紅葉は」を書く。
- 9 ○名称 万葉の歌「妹がため」（まんようのうた いもがため）
○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
○時代 昭和 63 年（1988）
○品質 紙本墨書
○員数 1 巻
○寸法等 本紙 縦 29.7cm 横 176.8cm
○作品概要 卷子装。『万葉集』巻第七所載の「妹為菅野実探行吾山路或此日暮」などを書く。
- 10 ○名称 古今和歌集 春の歌抄（こきんわかしゅう はるのうたしょう）
○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
○時代 平成時代・21 世紀
○品質 彩箋墨書
○員数 1 巻
○寸法等 本紙 縦 35.2cm 横 544.8cm
○作品概要 卷子装。『古今和歌集』巻第一の「としのうちに はるはきにけり ひととせを こぞとやいはむ 今年とやいはむ」など春の歌を抄出して書く。
- 11 ○名称 はるたてば（はるたてば）
○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
○時代 平成 21 年（2009）
○品質 紙本墨書
○員数 4 曲 1 隻
○寸法等 本紙 1cm 扇 縦 135cm 横 34cm
○作品概要 屏風装。『古今和歌集』巻第一所収の「はるたてば 花とやみらん しらゆきの かかれるえだに うぐひすのなく」など 4 首を書く。
- 12 ○名称 三十六歌仙かるた（さんじゅうろくかせんかるた）
○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
○時代 平成 25 年（2013）
○品質 彩箋墨書
○員数 1 組
○寸法等 各 縦 13.8cm 横 12.5cm
○作品概要 「佐竹本三十六歌仙」所載の和歌を 1 首ずつ装飾料紙のかるた札に書く。
- 13 ○名称 臨元永本古今和歌集 上（りんげんえいほんこきんわかしゅう じょう）
○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
○時代 昭和 33 年（1958）
○品質 彩箋墨書
○員数 1 帖
○寸法等 縦 21.3cm 横 16.5cm
○作品概要 列帖装。装飾料紙に元永本古今和歌集を全臨する。
- 14 ○名称 臨関戸本古今和歌集（りんせきどほんこきんわかしゅう）
○作者等 高木聖鶴（1923～）筆
○時代 昭和 56 年（1981）
○品質 彩箋墨書
○員数 1 帖
○寸法等 縦 21.0cm 横 17.5cm
○作品概要 列帖装。装飾料紙に関戸本古今和歌集を全臨する。

<彫刻> (1 件)

- 15 ○名称 押出如来立像（おしだしによらいりゅうぞう）
○時代 飛鳥～奈良時代・7～8 世紀
○品質 銅板押出鍍金
○員数 1 枚
○寸法等 縦 19.5cm 横 9.2cm
○作品概要 銅板押出のうえ鍍金。目には墨によると見られる線を入れる。銅版は長方形に裁断され、周囲に固定用の釘穴 11 箇所が残る。頭部を素髪とする如来の立像を表わし、裙の上から大衣を偏袒右肩に着す。右肩に覆肩衣を着けるか。大衣の末端は左肘に掛ける。正面に三弁を表わした蓮華座上に立ち、光焰を發する頭光を負う。また上方に対葉花文を五つ連ねた天蓋を表し、六条の瓔珞を垂らす。また天蓋の上下左右に雲気および蓮華座を伴う宝珠形を表現する。

<金工> (14 件)

- 16 ○名称 唐草双鳥八稜鏡（からくさそうちょうはちりょうきょう）
○時代 平安時代・11 世紀

- 品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径7.8cm 縁高0.1cm
○作品概要 八稜形、蒲鉾式中縁、素鈕、細線単圈。中央に鈕を据え、鈕の上下左右に唐草文を表し、外区にも唐草文の単位を均等に配する。
- 17 ○名 称 唐草双鳥鏡（からくさそうちょうきょう）
○時 代 平安時代・11～12世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径8.3cm 縁高0.15cm
○作品概要 円形、蒲鉾式低縁、素鈕、無圈。鏡背の中央に鈕を据え、鈕の上下に双鳥、左右に唐草文を表す。
- 18 ○名 称 瑞花双鳥八稜鏡（ずいかそうちょうはちりょうきょう）
○時 代 平安時代・12世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径12.0cm 縁高0.6cm
○作品概要 八稜形、蒲鉾式中縁、菊座鈕、へ字八花形段圈。内区は中央に鈕を据え、左右に双鳥、間地に瑞花文を表す。外区には瑞花の単位を均等に配する。
- 19 ○名 称 七宝繫双鳥鏡（しっぽうつなぎそうちょうきょう）
○時 代 平安時代・12世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径8.6cm 縁高0.2cm
○作品概要 円形、蒲鉾式低縁、素鈕、無圈。鏡背の中央に鈕を据え、左右斜め下方に七宝繫文、上方に双鳥を配する。上方に円孔1箇所がある。鈕に紫組紐を通す。
- 20 ○名 称 芙蓉薄双鳥鏡（ふようすすきそうちょうきょう）
○時 代 平安時代・12世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径9.9cm 縁高0.5cm
○作品概要 円形、外傾式高縁、菊座鈕、細線単圈。中央に鈕を据え、圈線をまたいで下方から左過半に立ち上がる薄および円周に添って左回りに円転する菊花を表し、鈕の上部に双鳥を配する。鈕に紫丸組紐を結ぶ。
- 21 ○名 称 水草萩双鳥鏡（みずくさはぎそうちょうきょう）
○時 代 平安時代・12世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径10.7cm 縁高0.5cm
○作品概要 円形、直角式中縁、菊座鈕、細線単圈。中央に鈕を据え、圈線をまたいで下部に流水と水草、左下部から上部に円転する萩を表し、上部左に双鳥を配する。
- 22 ○名 称 松喰双鶴鏡（まつくいそうかくきょう）
○時 代 平安時代・12世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径10.2cm 縁高0.5cm
○作品概要 円形、直角式中縁、菊座鈕、細線単圈。鏡背の中央に鈕を据え、内区の鈕の上下に双鶴、内区・外区にわたって松葉文を散らし表す。
- 23 ○名 称 菊花双鳥鏡（きくかそうちょうきょう）
○時 代 平安～鎌倉時代・12～13世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径9.75cm 縁高0.5cm
○作品概要 円形、直角式中縁、菊座鈕、中線単圈。内区下部より上方に展開する菊花と枝および双鳥を表す。鈕に革紐を結ぶ。
- 24 ○名 称 蓬萊方鏡（ほうらいほうきょう）
○時 代 平安～鎌倉時代・12～13世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 方10.3cm 縁高0.3cm
○作品概要 方形、蒲鉾式中縁、素鈕、無圈。中央に鈕を据え、下半に洲浜と流水、洲浜から立ち上がる岩と松樹を表し、上方に雲および2羽の鶴を配する。
- 25 ○名 称 洲浜菊花双鳥鏡（すはまきくかそうちょうきょう）
○時 代 鎌倉時代・13世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径9.4cm 縁高0.5cm
○作品概要 円形、外傾式中縁、菊座鈕、中線単圈。鏡背の中央に鈕を据え、内区の下部に洲浜および双鳥、内区の円周に添って展開する菊花、外区に連続する流水を表す。
- 26 ○名 称 洲浜牡丹双鳥鏡（すはまぼたんそうちょうきょう）
○時 代 鎌倉時代・14世紀
○品 質 銅鑄造
○員 数 1面
○寸 法 等 径20.0cm 縁高0.45cm
○作品概要 円形、蒲鉾式厚縁、素鈕、中線単圈。中央に鈕を据え、圈線をまたいで、下部に洲浜と取水、洲浜の右から円周に沿って左回りに円転する牡丹を表し、内区の左に2羽の尾長鳥および松葉を配する。

- 27 ○名称 孔雀文磬（くじゃくもんけい）
○時代 平安時代・12世紀
○品質 銅鑄造
○員数 1面
○寸法等 肩幅17.0cm 裾幅18.9cm 高10.1cm 縁高0.5cm
○作品概要 銅鑄造、山形、片面式。縁の内側に1条の圏線を出だして子持縁とし、中央に蓮華をかたどった撞座を表し、撞座の左右に孔雀文を対向して配する。上縁の左右二箇所に吊環を鑄出する。
- 28 ○名称 孔雀文磬（くじゃくもんけい）
○時代 鎌倉時代・13世紀
○品質 銅鑄造・鍍金
○員数 1面
○寸法等 肩幅17.0cm 裾幅16.1cm 高9.6cm 縁高0.6cm
○作品概要 銅鑄造、山形、両面式。縁の内側に1条の圏線を出だして子持縁とし、中央に蓮華をかたどった撞座を表し、撞座の左右に孔雀文を対向して配する。上縁の左右二箇所に吊環を鑄出する。全体に鍍金を施す。
- 29 ○名称 自在蟻螂置物（じざいとうろうおきもの）
○作者等 高瀬好山(1869-1934)作
○時代 大正～昭和時代・20世紀
○品質 銀鍛造
○員数 1個
○寸法等 体長9.4cm
○作品概要 銀鍛造、蟻螂の体、顔、足、羽などを銀板の鍛造で成形し、各部にややゆるぎを持たせて鎮留めする。

<漆工> (1件)

- 30 ○名称 桔梗蒔絵螺鈿聖龕（ききょうまきえらでんせいがん）
○時代 安土桃山～江戸時代・16～17世紀
○品質 木製漆塗
○員数 1基
○寸法等 縦18.3cm 横15.2cm 厚3.0cm
○作品概要 長方形の額縁の側面に細長い穴を穿って引戸を通し、内に「殉教聖女キリアケと諸聖女、キリスト」の銅製アイコンを納めた小型の聖龕。表面は全体を黒漆塗として、額縁には正面から側面にかけて、南蛮唐草や鋸歯文、葛の文様などを、金銀平蒔絵と螺鈿によって描いている。また引戸の表裏にも同様に、桔梗や花菱繫文、朝顔や葛の文様を表わす。

<考古> (6件)

- 31 ○名称 銅製経筒（どうせいきょうづつ）
○時代 平安～鎌倉時代・12～13世紀
○品質 銅鑄造
○員数 1個
○寸法等 蓋 口径8.8cm 高2.9cm；筒身 口径8.5cm 高20.0cm
○作品概要 被蓋式の経筒であり、蓋と筒身からなる。蓋は傘蓋を呈し宝珠形の鈕を有する。筒身は円筒で、底部は和鏡（菊花双鳥鏡か）を転用し、鏡面を底面とし、筒身に嵌め込んでいる。
- 32 ○名称 銅製経筒（どうせいきょうづつ）
○時代 平安時代・康治元年（1142）
○品質 銅鑄造
○員数 1個
○寸法等 蓋 口径8.0cm 高3.2cm 筒身 口径5.2cm 高24.3cm
○作品概要 被蓋式の経筒であり、蓋と筒身からなる。蓋は傘蓋を呈し乳頭状の鈕を有する。筒身は円筒で、底部は高台状をなす。筒身に三行の銘文が刻まれており、康治元年（1142）製と判断される。筒身底裏にも銘文が刻まれているが、詳細不明。経巻残欠が筒身内に納められていたと考えられる。
- 33 ○名称 経巻残欠（きょうかんざんけつ）
○時代 平安時代・康治元年（1142）
○品質 紙本
○員数 1巻
○寸法等 現存長23.0cm 現存軸径2.7cm
○作品概要 経巻の残欠。巻かれた状態で軸木に固着。文字の記載等は不明。康治元年銘の経筒の付属品。
- 34 ○名称 方格規矩四神鏡（ほうかくきくしんきょう）
○時代 後漢時代・1世紀
○品質 青銅鑄造
○員数 1面
○寸法等 径18.2cm 縁高0.8cm
○作品概要 円形。円鈕、四葉文鈕座。方格内に十二支銘を配す。内区に規矩文、四神文のほか、鳥・獣などの文様を表す。外区に「□氏作鏡真大巧 上有□□不知老 渴飲玉泉口食糞 寿而（如？）□（金？）石」の銘帯をめぐらす。縁部には三角鋸歯文、水波雲文からなる文様帯を飾る。
- 35 ○名称 磨製石斧（ませいせきふ）
○作者等 神奈川県小田原市久野出土
○時代 弥生時代(中期)・前2～前1世紀
○品質 石製
○員数 1個
○寸法等 最大長10.5cm 刃部幅6.1cm 最大厚2.2cm 重量280.5cmg
○作品概要 石製の片刃石斧で、薄いその形状から扁平片刃石斧と呼ばれる大陸系磨製石器の一種。扁平片刃石斧は、稲作とともに伝えられた木製農具の製作に使用したと考えられ、関東地方では弥生時代中期以降に出土する。
- 36 ○名称 磨製石戈（ませいせつか）
○作者等 群馬県富岡市富岡鍋川河床出土
○時代 弥生時代(中期)・前2～前1世紀
○品質 石製
○員数 1個

- 寸法等 最大長 8.4cm 最大幅 10.0cm 最大厚 1.95cm 重量 132.5cm g
 ○作品概要 石製の戈。戈とは長い柄の先に直角に装着して使う武器。本例は援(刃部)が極めて短く、援の下半が外反して突出する胡や内(茎)の表現も簡略化されている。援には樋および穿(孔)をもつ。

<東洋金工> (1件)

- 37 ○名称 走獸花枝文八稜鏡 (そうじゅうかしもんはちりょうきょう)
 ○時代 唐時代・8~9世紀
 ○品質 青銅鑄造
 ○員数 1面
 ○寸法等 幅 17.7cm 縁高 0.9cm
 ○作品概要 八稜形。円鈕。鈕の左右に狻猊(獅子)と思しき動物文を対置させ、上下に花枝文を飾る。縁部には花と蜂・蝶といった虫の文様を交互に配す。

<東洋考古> (62件)

- 38 ○名称 アンフォリスコス (あんふおりすこす)
 ○作者等 地中海東部出土
 ○時代 前3~前1世紀
 ○品質 ガラス製
 ○員数 1口
 ○寸法等 高 14.5cm、胴径 5.8cm、口径 2.7cm
 ○作品概要 コア技法により作られた典型的なアンフォラ形の香油容器。濃紺色の本体に水色、黄色のガラス紐を巻きつけた後加熱し、平行線、平行波状文を表している。無色のガラス紐を口縁部下から肩部に1対接着して両把手としている。底部は球状。
- 39 ○名称 アンフォリスコス (あんふおりすこす)
 ○作者等 地中海東部出土
 ○時代 前6~前4世紀
 ○品質 ガラス製
 ○員数 1口
 ○寸法等 高 8.7cm、胴径 4.6cm、口径 2.2cm
 ○作品概要 コア技法により作られたやや頸部の短いアンフォラ形の香油容器。濃紺色の本体に黄色(口縁部)、白色のガラス紐を巻きつけた後加熱し、平行線、平行波状文を表している。本体と同色のガラス紐を口縁部下から肩部に1対接着して両把手としている。底部は平坦。
- 40 ○名称 アンフォリスコス (あんふおりすこす)
 ○作者等 地中海東部出土
 ○時代 前5世紀
 ○品質 ガラス製
 ○員数 1口
 ○寸法等 高 9.2cm、胴径 4.8cm、口径 2.6cm
 ○作品概要 コア技法により作られた香油容器。典型的なアンフォラ形をなす。濃紺色の本体に黄色、水色のガラス紐を巻きつけて、平行線、平行波状文を表し、本体と同色のガラス紐を口縁部下から肩部に1対接着して両把手としている。底部はやや平坦。
- 41 ○名称 アンフォリスコス (あんふおりすこす)
 ○作者等 地中海東部出土
 ○時代 前6~前5世紀
 ○品質 ガラス製
 ○員数 1口
 ○寸法等 高 14.2cm、胴径 4.8cm、口径 6.1cm
 ○作品概要 コア技法により作られ、典型的なアンフォラ形をなす。濃紺色の本体に赤色、白色のガラス紐を巻きつけて、平行線、フェストゥーン文を表し、無色のガラス紐を口縁部下から肩部に1対接着して両把手としている。底部は球形。
- 42 ○名称 アラバストロン (あらばすとろん)
 ○作者等 地中海東部出土
 ○時代 前6~前5世紀
 ○品質 ガラス製
 ○員数 1口
 ○寸法等 高 10.2cm、胴径 3.2cm、口径 3.5cm
 ○作品概要 コア技法により作られた円筒形の香油容器。白色の本体に紫色のガラス紐を巻きつけて平行線、ジグザグ文を表し、本体と同色のガラスによる小輪と小突起を各1対接着して両耳としている。丸底。
- 43 ○名称 アラバストロン (あらばすとろん)
 ○作者等 地中海東部出土
 ○時代 前4~前3世紀
 ○品質 ガラス製
 ○員数 1口
 ○寸法等 高 17.0cm、胴径 4.0cm、口径 5.3cm
 ○作品概要 コア技法により作られた円筒形の香油容器。紺色の本体に黄色、白色、水色のガラス紐を巻きつけてジグザグ文を表し、本体と同色のガラスによる小輪と小突起を各1対接着して両耳としている。丸底。
- 44 ○名称 アラバストロン (あらばすとろん)
 ○作者等 地中海東部出土
 ○時代 前6~前5世紀
 ○品質 ガラス製
 ○員数 1口
 ○寸法等 高 11.4cm、胴径 2.5cm、口径 2.6cm
 ○作品概要 コア技法により作られた円筒形の香油容器。紺色の本体に黄色のガラス紐を巻きつけて平行線、ジグザグ文を表し、本体と同色のガラスによる小さな両耳としている。やや平底。
- 45 ○名称 オイノコエ (おいのこえ)
 ○作者等 地中海東部出土
 ○時代 前6~前4世紀
 ○品質 ガラス製

- 員数 1口
○寸法等 高9.4cm、胴径5.3cm
○作品概要 コア技法により作られた香油容器。濃紺色の本体に白色、黄色のガラス紐を巻きつけて加熱し、平行線、ジグザグ文を表す。本体と同色のガラス紐を口縁部から肩部に1本接着して片把手とし、口縁部は工具で摘みみだしている。底部は小さな高台をなす。
- 46 ○名称 パテラ杯（ばてらはい）
○作者等 地中海東部出土
○時代 前1～後1世紀
○品質 ガラス製
○員数 1口
○寸法等 高4.2cm、口径9.8cm、底径4.0cm
○作品概要 口縁部の下に1段括れがつき、断面が「3」に似た小型の杯で、古代ローマ人はパテラと呼んだ。本作品はモザイクガラスで作られ、千華文（ミルフィオリ）と呼ばれる華やかな作品。白色、黄色、濃紺色、緑色などのガラスで作られた棒を輪切りにした数種のモザイク片多数を鑄型に敷き詰めて加熱鑄造したもの。底部は低い輪高台。
- 47 ○名称 瓶（へい）
○作者等 地中海東部出土
○時代 1～2世紀
○品質 ガラス製
○員数 1口
○寸法等 高10.0cm、胴径6.4cm、口径2.5cm
○作品概要 球形の胴部と筒状の頸部からなる瓶。3種の濃度の紺色のガラス板を重ねて加熱、宙吹きによって成形した大理石文様の容器。底部はやや平坦で自立する。白く見える部分は経年変化による結晶化（銀化）によるもの。
- 48 ○名称 瓶（へい）
○作者等 地中海東部出土
○時代 ローマ時代、2～3世紀
○品質 ガラス製
○員数 1口
○寸法等 高15.4cm、胴径10.5cm、口径7.5cm
○作品概要 無色ガラスを型吹きした極めて薄い容器。やや下膨れの球状の胴部と筒状の頸部、大きく開いた口縁部からなる。口縁部内面に沈線が1条めぐり、胴部全体に幅1.0センチの縦畝が施される。底部はほぼ平坦で自立可能。
- 49 ○名称 首飾（くびかざり）
○作者等 地中海東部出土
○時代 ローマ時代、前1～後1世紀
○員数 1連（29珠）
○寸法等 各珠長0.5cm～3.4cm
○作品概要 縞模様の大玉と単色（ほとんどは青色）の小玉を綴った首飾。大玉は扁平な楕円形、紡錘形などの形をしており、緑色、白色、黒色、褐色ガラスに金箔が挟み込まれている。
- 50 ○名称 円形切子碗（えんけいきりこわん）
○作者等 イラン出土
○時代 ササン朝時代、6世紀
○品質 ガラス製
○員数 1口
○寸法等 口径10.2cm、高7.5cm
○作品概要 無色透明ガラスの酒杯。厚手に吹いた碗の表面に円形の切子装飾を施してある。上から第1段目には径2.0×2.5センチの円形切子が15個、第2段目には径2.0センチの円形切子が15個、第3段目には径2.0センチの円形切子が13個、第4段目には径2.5センチの円形切子が7個、底部は径3.8センチの円形切子1個が施される。東大寺正倉院献納宝物と類似。
- 51 ○名称 切子長頸瓶（きりこちょうけいへい）
○作者等 イラン出土
○時代 ササン朝時代、9世紀
○品質 ガラス製
○員数 1口
○寸法等 高15.0cm、胴径6.5cm、底径3.1cm
○作品概要 器表のほぼ全体を切子で装飾された無色ガラスの厚手の容器。球状の胴部と細長い頸部からなる。肩部に幅広の沈線が1条めぐり、その下は円形切子で装飾される。それは上・中・下の3段からなり、径0.6～0.7センチの円形切子が、各段に13個施される。頸部は3段の六角柱、底部は低い高台をなすが、いずれも切子によるもの。
- 52 ○名称 トウエリス女神像（とうえりすめがみぞう）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝～プトレマイオス朝時代、前4世紀
○品質 ファイアンス製、青釉
○員数 1軀
○寸法等 高6.6cm、幅1.5cm、奥2.0cm
○作品概要 女性用髪をつけ、河馬の頭、ライオンの四肢、鱈の尾、人間の乳房をもち、妊婦の特徴を示す女神トウエリスの立像。その名は「偉大なるもの」を意味する古代エジプト語タア・ウレトのギリシア語版。その容貌から、家庭と出産の守護神とされていた。
- 53 ○名称 バステト女神像（ばすてとめがみぞう）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝～プトレマイオス朝時代、前4世紀
○品質 本体青銅鑄造、金製耳飾
○員数 1軀
○寸法等 高14.2cm、幅4.5cm
○作品概要 金の耳輪をつけ、縞模様の半袖長衣を着た猫頭の女神立像。右手にシストラム（ハトホル女神と関連する女性神官が持つ楽器）、左腕には籠を掲げ、左手にはアイギスの盾を持つ。バステトは音楽、保護、多産などを象徴する神で、その信仰はデルタ地帯のプバスティスに始まり、各地に広まった。
- 54 ○名称 双耳壺（そうじこ）

- 作者等 エジプト出土
○時代 ローマ時代、2世紀
○品質 ファイアンス製、青釉
○員数 1口
○寸法等 高18.3cm、幅19.2cm、胴部最大径16.5cm、底部径11.8cm
○作品概要 鐔状に水平に開いた口縁部と太くて短い頸部、張り出した肩と大きな底部、低い輪高台、口縁部の端と肩部をつなぐ1対の直線的な把手からなる。肩部には連続ジグザグ文、胴部には貼り付けによる植物文がめぐらされる。青色の釉が器の内外面全体にかけられている。高台にはトチン痕が見られる。メンフィスカデルタ地帯のナウクラティスあるいはアレクサンドリアで作られたもの。
- 55 ○名称 浮彫 神官頭部と鳥（うきぼり しんかんとうぶととり）
○作者等 エジプト出土
○時代 ブトレマイオス朝・前4～前3世紀
○品質 石灰岩製
○員数 1枚
○寸法等 高14.3cm、幅14.2cm、厚2.7cm
○作品概要 浮き彫り製作の手本として各地の神殿に配布された「彫刻用モデル」。片面には剃髪の神官頭部、他の面には隼（ホルス神）が上下逆位で表される。両側面中央に穴が開けられており、現在はそこに金属製の軸棒を入れて回転可能としているが、穴は本来のものと考えられる。
- 56 ○名称 山羊形リュトン（やぎがたりゆとん）
○作者等 イラン出土
○時代 鉄器時代・前13～前7世紀
○品質 土器
○員数 1口
○寸法等 長27.3cm、幅8.0cm、高19.5cm
○作品概要 四足で立つ山羊を模した儀式用の酒器リュトン。オレンジ色胎土の土器で、表面の磨耗、修復の痕跡が見られるが、全形を留めている。使用法は、背中から注入した酒を口の孔から注ぎ出し、酒杯で受けて飲むというもの。動物形のリュトンは、イランの初期鉄器時代文化を彩る要素の一つである。
- 57 ○名称 フィアレ杯（ふいあれはい）
○時代 前6～前4世紀
○品質 青銅製
○員数 1口
○寸法等 径21.3cm、高4.3cm
○作品概要 打ち出し技法によって、4重30枚の花弁文様が施された青銅製フィアレの優品。フィアレ杯は前9世紀頃メソポタミアからフェニキアにいたる地域で製作が始まり、アケメネス朝時代には西アジアや地中海東部に広まった儀式用酒器。リュトンから注ぎ出した酒を受けて飲む。そのために、器の中心部に「臍」があり、底部のくぼみに中指をかけて持ちやすいように工夫されている。
- 58 ○名称 無文地連弧文鏡（むもんじれんこもんきょう）
○時代 戦国時代・前5～前3世紀
○品質 青銅鑄造
○員数 1面
○寸法等 径18.1cm 縁高0.6cm
○作品概要 円形。三弦鈕、七面縁。地文のない背面に、鈕を中心とする凹んだ圏帯をめぐらせ、その外側に11弧の連弧文を凸線で表す。
- 59 ○名称 蟠螭葉文鏡（ばんちようもんきょう）
○時代 戦国時代・前4～前3世紀
○品質 青銅鑄造
○員数 1面
○寸法等 径11.9cm 縁高0.6cm
○作品概要 円形。三弦鈕、円鈕座、七面縁。文様は雲雷文からなる地文を施し、そのうえに四葉文と蟠螭文からなる主文を均等に配す。
- 60 ○名称 雲雷文地連弧文鏡（うんらいもんじれんこもんきょう）
○時代 戦国時代・前4～前3世紀
○品質 青銅鑄造
○員数 1面
○寸法等 径16.0cm 縁高0.7cm
○作品概要 円形。三弦鈕、円鈕座、七面縁。鈕座の周囲を圏帯と絡縄文がめぐる。その外側に雲雷文を地文とする、7弧の内向きの連弧文を主文として配す。
- 61 ○名称 鳥獸文鏡（ちようじゅうもんきょう）
○時代 戦国時代・前4～前3世紀
○品質 青銅鑄造
○員数 1面
○寸法等 径18.2cm 縁高0.5cm
○作品概要 円形。半環鈕、円鈕座、12弧の連弧文縁。細かい雲雷文を地文とする。鈕座の四方に四葉文を置き、葉と葉のあいだに2頭の怪獣と2羽の鳥を交互に配す。
- 62 ○名称 草葉文鏡（そうようもんきょう）
○時代 前漢時代・前2～前1世紀
○品質 青銅鑄造
○員数 1面
○寸法等 径13.2cm 縁高0.6cm
○作品概要 円形。円鈕、四葉文鈕座、16連弧文縁。方格内に「見日之光、天下大明」の銘文を施す。方格外の四辺には、1個の乳釘を中心として、その左右に麦穂状の草葉文をそれぞれ均等に配す。
- 63 ○名称 獸面文帶鉤（じゅうめんもんたいこう）
○時代 戦国～前漢時代・前4～前2世紀
○品質 青銅鑄造・鍍金
○員数 1個
○寸法等 長8.0cm 幅1.8cm
○作品概要 細い柄に長方形の板状鉤面が付く。弓なりで、鉤尾に獸面を飾る。鉤面には2本の凸稜が走る。全体に鍍金を施す。

- 64 ○名称 玉帯鉤（ぎょくたいこう）
 ○時代 戦国時代・前4～前3世紀
 ○品質 玉
 ○員数 1個
 ○寸法等 長15.2cm 幅1.8cm
 ○作品概要 柄に長方形の板状鉤面が付く青銅製の帯鉤を玉で象つたもの。弓なりで、鉤面には縦方向に2本の凹線が走る。鉤首は簡略化された獣面形をなす。柄、鉤面、鈕ともに横断面は長方形を呈する。
- 65 ○名称 絡獣形帯鉤（らくじゅうがたたいこう）
 ○時代 戦国～前漢時代・前4～前2世紀
 ○品質 青銅鑄造・鍍金、トルコ石象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長17.5cm 幅4.2cm
 ○作品概要 細い柄に板状鉤面が付く。弓なりで、鉤面は2頭の怪物が絡みあった姿を表す。全体に鍍金を施し、鉤面4箇所にも円形のトルコ石を象嵌する。
- 66 ○名称 獣面文帯鉤（じゅうめんもんたいこう）
 ○時代 戦国～前漢時代・前4～前2世紀
 ○品質 青銅鑄造・鍍金、トルコ石象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長20.2cm 幅1.2cm
 ○作品概要 鉤首から鉤尾にかけて、幅がほぼ一定。鉤体中央が大きく曲がり、鉤首と鉤尾が逆に反って、全体が波打った形になる。断面はほぼ半円形で、鉤面の両端と鉤首の計3箇所と同じ獣面を飾る。全体に鍍金を施し、トルコ石を象嵌する。
- 67 ○名称 羽渦文帯鉤（うかもんたいこう）
 ○時代 戦国～前漢時代・前4～前2世紀
 ○品質 青銅鑄造・金銀象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長17.6cm 幅1.8cm
 ○作品概要 鉤首から鉤尾にかけて、幅がほぼ一定。弓なりで、断面は円形を呈する。鉤体は両端および中位の3箇所において3本1組の金象嵌帯で2区画に分けられる。各区画内には一対の金銀象嵌羽渦文を交差させて配す。裏面には鳥文と花文、鉤尾には花文、鈕には円渦文をそれぞれ金銀象嵌で飾る。
- 68 ○名称 菱田文帯鉤（ひしえんもんたいこう）
 ○時代 戦国時代・前4～前3世紀
 ○品質 青銅鑄造・金、トルコ石象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長21.4cm 幅2.5cm
 ○作品概要 細長い琵琶形を呈する。弓なりで、鉤面上に3面および側面の面取りを施す。鉤面上にはトルコ石象嵌で表した菱形の文様帯が展開する。菱形文の内側には円文と雲気文をそれぞれ金象嵌で飾る。
- 69 ○名称 菱田文帯鉤（ひしえんもんたいこう）
 ○時代 戦国時代・前4～前3世紀
 ○品質 青銅鑄造・金、トルコ石象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長18.2cm 幅1.9cm
 ○作品概要 細長い琵琶形を呈する。弓なりで、鉤面上に3面および側面の面取りを施す。鉤面上にはトルコ石象嵌で表した菱形の文様帯が展開する。菱形文の内側には円文と雲気文をそれぞれ金象嵌で飾る。
- 70 ○名称 獣面文帯鉤（じゅうめんもんたいこう）
 ○時代 戦国～前漢時代・前4～前2世紀
 ○品質 青銅鑄造・鍍金・トルコ石、ガラス象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長15.6cm 幅2.7cm
 ○作品概要 細い柄に長方形の板状鉤面が付く。弓なりで、鉤面の両端に獣面を飾り、長辺の両側には綾杉状に凹凸を連ねる。中軸線上には円形のトルコ石2片と長方形のガラス板3枚を象嵌する。全体に鍍金を施す。
- 71 ○名称 雲気文帯鉤（うんきもんたいこう）
 ○時代 戦国時代・前4～前3世紀
 ○品質 青銅鑄造・金銀象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長23.7cm 幅2.5cm
 ○作品概要 細長い琵琶形を呈する。弓なりで、鉤面上に3面および側面の面取りを施す。鉤面・側面には銀糸と幅広の金片による象嵌で表した雲気文を飾る。
- 72 ○名称 楕円獣形帯鉤（だえんじゅうけいたいこう）
 ○時代 戦国～前漢時代・前4～前2世紀
 ○品質 青銅鑄造・鍍金・トルコ石もしくはガラス象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長10.2cm 幅4.8cm
 ○作品概要 細い柄に楕円形の板状鉤面が付く。弓なりで、鉤面は外向きの獣面と、それをとりまくように巻きつく胴体を表す。全体に鍍金を施す。円形の窪みと獣面文の両眼には恐らくトルコ石かガラスが象嵌されていたものと推定される。
- 73 ○名称 羽渦文帯鉤（うかもんたいこう）
 ○時代 戦国～前漢時代・前4～前2世紀
 ○品質 青銅鑄造・金銀象嵌
 ○員数 1個
 ○寸法等 長13.2cm 幅1.6cm
 ○作品概要 鉤首から鉤尾にかけて、幅がほぼ一定。弓なりで、断面は円形を呈する。鉤体は両端および中位の3箇所において2本1組の金銀象嵌帯で2区画に分けられる。各区画内には同形の金銀象嵌羽渦文を配す。鉤尾と鈕には円文をそれぞれ銀象嵌で飾る。

- 74 ○名称 夔龍形帯鉤（きりゅうがたたいこう）
○時代 戦国時代・前4～前3世紀
○品質 青銅鑄造
○員数 1個
○寸法等 長12.0cm 幅3.5cm
○作品概要 細長い柄に鉤面が付く。弓なりで、鉤面は全体で夔龍の側面形を半立体的に表す。柄は夔龍の口から伸び出ている。
- 75 ○名称 短剣（たんけん）
○時代 春秋時代・前6～前5世紀
○品質 青銅鑄造
○員数 1本
○寸法等 長27.7cm 幅3.5cm 剣首径2.7cm
○作品概要 柱脊の明瞭な刃部、獣面文を飾る格、断面が八角形の柄、透彫り状の装飾を施した球形の剣首からなる。柄は中位が竹の節状にやや隆起する。
- 76 ○名称 色ガラス断片（いろがらすだんぺん）
○作者等 エジプト出土
○時代 新王国時代～初期イスラム時代・前16世紀～後8世紀頃
○品質 ガラス
○員数 80点
○寸法等 0.7cm～2.9cm×0.8cm～5.8cm
○作品概要 ガラスは紀元前15世紀にエジプトに伝わったとされ、以来、様々な工芸品に用いられた。本コレクションは様々な形、大きさをした破片群であるものの、古代エジプトのガラス工芸品の色味や技術をよく示している。
- 77 ○名称 象嵌用の眼（ぞうがんようのめ）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝時代～プトレマイオス朝時代初期・前7世紀～前3世紀頃
○品質 ガラス
○員数 1個
○寸法等 高2.5cm 幅6cm 厚さ1.6cm
○作品概要 人形の木棺に象嵌されていたと思われる左眼。眼球の白目は白色、黒目は黒色、縁取りは青色のガラスで作られている。
- 78 ○名称 象嵌用の腕（ぞうがんようのうで）
○作者等 エジプト出土
○時代 プトレマイオス朝時代・前3世紀～前1世紀
○品質 ガラス
○員数 1個
○寸法等 長さ3.6cm 幅0.8cm 厚さ0.6cm
○作品概要 家具や祠堂に象嵌されていたと思われるオシリス神の右腕。淡青色で、手は握った状態。
- 79 ○名称 象嵌用の衣服断片（ぞうがんようのいふくだんぺん）
○作者等 エジプト出土
○時代 プトレマイオス朝時代・前3世紀～前1世紀
○品質 モザイク・ガラス
○員数 1個
○寸法等 縦2.0cm 横1.8cm 厚さ0.6cm
○作品概要 家具や祠に象嵌されていたと思われる網目模様の部分。赤色の地に濃紺、黄色のガラスで連続する4弁の花柄を表す。通常この文様はイシスなどの女神の衣服に用いられる。一部に2次加工を試みた形跡がある。
- 80 ○名称 ガラス象嵌蓋（がらすぞうがんふた）
○作者等 エジプト出土
○時代 新王国時代 前16世紀～前12世紀頃
○品質 木、ガラス
○員数 1個
○寸法等 長さ14.5cm 幅5.9cm 厚さ1.8cm
○作品概要 何らかのケースの蓋のように見えるが用途は分からない。長円形の厚めの木板に彫刻を施し、上面と側面に青、赤、黄色のガラス部品を象嵌して、ロゼット、帯、斜め帯などの文様をあらわしていた。ガラスの一部が残存する。上面の両端にパピルス、ロータス（上下エジプトの象徴植物）の象嵌が施されていたと思われるが、現存しない。
- 81 ○名称 彩色板絵 神々と王（さいしきいたえ かみがみとおう）
○作者等 エジプト出土
○時代 ローマ時代・前1世紀～後2世紀
○品質 木板、漆喰、彩色
○員数 1枚
○寸法等 縦30cm 横42.7cm 厚さ1.1cm
○作品概要 本来は木棺の一部であったと考えられるが、全体の形状は不明。表面に漆喰を塗り、その上にピンク、黒、黄土色の顔料を用いて描画。パハレイヤ・オアシスなどの地方的様式。主たるモチーフは右手を挙げて左向きに並んだ4柱の神と王で、白地に粗雑な黒線で表現される。それぞれの像の前には銘文を記すべき欄があるがいずれも空白のままである。それらの頭上には、黒地に5弁の花（本来は星を意味する）を連続配置している。さらにその上には、中心に白点を配した黒、黄土、赤色の長方形と3本の縦白線が交互に並ぶ文様帯が配される。また主モチーフの下には、黒線のアウトラインに赤・黄土色の顔料で着色した8弁の花文が、ピンク色の地に5個配される。
- 82 ○名称 彩色板絵 船上人物（さいしきいたえ せんじょうじんぶつ）
○作者等 エジプト出土
○時代 第3中間期～ローマ時代・前11世紀～後2世紀
○品質 木板、漆喰、彩色
○員数 1枚
○寸法等 縦12.4cm 横37.9cm 厚さ1.9cm
○作品概要 本来は人形棺の足台部分であった。足台は、葬送儀礼の際に木棺を垂直に立てるために必要であったとされ、本作品に描かれている葦舟も被葬者を送る葬送のモチーフと捕らえることができる。葦舟の左右にウアス、アヌク、ネブの組み文字が表されている。ピンク、赤、緑、深青色（エジプシャンブルー）などの顔料がよく残っている。
- 83 ○名称 セティ1世像断片（せていっせいぞうだんぺん）

- 作者等 エジプト出土
○時代 第19王朝時代・前13世紀頃
○品質 彩色パピルス
○員数 1枚
○寸法等 縦30cm 横21cm
○作品概要 天蓋の中に立つ人物が描かれており、頭にはヘムヘム冠を被り、両手には笏を持つ。傍らには蓮の花が置かれている。カルトゥーシュ（王名粹）から彩色で描かれた人物は第19王朝のセティ1世であることがわかる。セティ1世は紀元前13世紀初頭のファラオで、有名なラムセス2世の父親。オシリス神の姿をしていることから、本作品は葬祭関連文書であったことが明らかで、王の縁者の「死者の書」の一部である可能性がある。緻密な筆使いによる見事な線画であり、社会的地位の高い人物のものであったと考えられる。
- 84 ○名称 葬祭文書断片（そうさいもんじょだんぺん）
○作者等 エジプト出土
○時代 プトレマイオス朝時代・前3世紀～前1世紀頃
○品質 亜麻布墨書
○員数 1枚
○寸法等 縦220cm 横38.2cm
○作品概要 黒色顔料で記入された、縦2欄からなる聖刻文字（ヒエログリフ）の文。字体がかなり崩れているため、プトレマイオス朝時代の文書と推測される。葬祭に関連する文書の一部であった可能性が高く、右欄には供物（牛やパンなど）が列挙されている。
- 85 ○名称 人面刺繍織物断片（じんめんししゅうおりものだんぺん）
○作者等 エジプト出土
○時代 コプト時代・4世紀～8世紀頃
○品質 亜麻布、染色羊毛
○員数 1枚
○寸法等 縦19.6cm 横14.4cm
○作品概要 ループ織りの亜麻布に赤、橙、緑、黒色の羊毛の糸で人面らしきものを刺繍で表わした。縦長の菱形の中に、両眼と口が単純化されて表現されている。
- 86 ○名称 アメン神官のウシャブティ（あめんしんかんのうしゃぶてい）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝時代・前664～前332年頃
○品質 ファイアンス
○員数 1軀
○寸法等 高20.8cm 幅6.4cm 奥行3.3cm
○作品概要 ファイアンス製で、表面には青釉が施されている。型式、銘文ともに、典型的な第30王朝のウシャブティ。ウシャブティとは墓に納められたミイラ形の人形で、「答える者」の意。あの世で死者に課せられる強制労働を肩代わりすると考えられた。本作品も、両手に鋤とツルハシを持ち、背中には収穫物を入れる籠を背負っている。銘文によれば、死者はアメン神に仕える者、ヘル・イブ・ネイトの子だが、本人の名前の部分は碑文が不明瞭で解読できない。アメン神官と思われる。
- 87 ○名称 「兵士の長」のウシャブティ（「へいしのちょう」のうしゃぶてい）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝時代・前664～前332年頃
○品質 ファイアンス
○員数 1軀
○寸法等 高16.0cm 幅3.7cm 奥行3.8cm
○作品概要 ファイアンス製で、表面には青釉が施されている。型式、銘文ともに、典型的な第30王朝のウシャブティ。ウシャブティとは墓に納められたミイラ形の人形で、「答える者」の意。あの世で死者に課せられる強制労働を肩代わりすると考えられた。本作品も、手には鋤とツルハシを持ち、背中には籠を背負う。銘文によれば、死者の名前は「兵士の長、プサメティックの息子、アंक（ワア・イブ・ラー）メリ・ネイト」。
- 88 ○名称 ホルス神を抱くイシス女神倚像（ほるすしんをいだくいしすじょしんいぞう）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝時代～プトレマイオス朝時代初期・前7世紀～1世紀頃
○品質 ファイアンス
○員数 1軀
○寸法等 高13.7cm 幅3.7cm 奥行7.5cm
○作品概要 幼児（ホルス）に授乳する母親（イシス）の倚像。ファイアンス製で黄緑色及び赤褐色の釉薬が施されている。イシスは大地の神ゲブと天空の女神ヌトの娘で、死者の神オシリスの妹であり妻。ホルスの母、妹、妻。頭上に神名を示す聖刻文字を載せる。この像では、女神の冠と顔面、ホルスの顔付近に赤色の、その他の部分には黄緑色の釉がかけられている。この種の母子像は、後世、キリスト教における聖母子像に影響を及ぼした。
- 89 ○名称 ホルス神像（ほるすしんぞう）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝時代・前664～前332年頃
○品質 青銅製
○員数 1軀
○寸法等 高12.0cm 幅4.6cm 奥行6.7cm
○作品概要 ホルスはオシリス神とイシス女神の息子。本作品は本来別鑄の母イシス像の膝上に載っていたが、分離してしまったもの。首飾のみを身に着けた裸の幼児の姿をしており、両手は腿の脇に添えられる。両足は揃えて台座に載せられる。頭部は剃られ、右側頭部に少年神と王子に特有の髪束が下がっている。この髪束も別鑄。
- 90 ○名称 隼形アミュレット（はやぶさがたあみゆれつと）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝時代（前664～前332年頃）前後か
○品質 石灰岩
○員数 1個
○寸法等 高2.2cm 幅1.4cm 奥行2.0cm
○作品概要 ホルス神の化身とされた隼の座った姿を象った垂飾。頭の後ろに吊り下げ用の小輪が作られている。魔除けとして使用されたもの。
- 91 ○名称 ウジャト眼の垂飾（うじゃとめのすいしょく）
○作者等 エジプト出土
○時代 末期王朝時代・前664～前332年頃

- 品 質 ファイアンス製、青釉・黒色釉
○員 数 1 個
○寸 法 等 縦 3.6cm 横 4.2cm 厚さ 0.6cm
○作品概要 透かし細工でウジャト眼を表わした長方形の垂飾。眉部分のみ黒色釉、その他には青色釉が施され、中央部に横方向の 1 孔が貫通している（径約 2mm）。ウジャトとは「健全な」を意味し、化粧した人間の眼とホルス神の化身である隼の眼を合成したものの。神話では、セト神との戦いで破壊され、トト神によって回復されたホルス神の左眼。左眼が太陽を意味するのに対して、右眼は月を意味するので、本作品は表裏でその両方を表わしている。
- 92 ○名 称 アメン神立像（あめんしんりゆうぞう）
○作 者 等 エジプト出土
○時 代 プトレマイオス朝時代～ローマ時代・前 3 世紀～後 1 世紀頃
○品 質 木彫、彩色
○員 数 1 躯
○寸 法 等 高 24.7cm 幅 6.5cm 奥行 7.7cm
○作品概要 右足を一步踏み出した男子の立像。国家神アメンを表わしたもの。右手は垂らし、左手は肘を曲げて前方に向けられる。両足の下にはホゾが作り出されている。頭には緑なし帽冠（モルチエ）を被り、身には縦髪のある神々の腰布をつけている。また頸には編んだつけ鬚が下がっている。両腕は別造りで、左腕はさらに肘の部分で 2 つに分かれる。帽冠の上面には横方向に幅 0.4 センチ、深さ 0.6 センチの溝があり、2 本の羽（及び太陽円盤）の形をしたものが取り付けられていたと思われるが、失われている。また両手はアंक（生命の象徴）とウウス（神の杖）を握っていたと思われるが、うしなわれている。白目に白彩、眉、黒目、つけ鬚等に黒彩、顔、胸、ベルトなどに金彩の痕跡が残る。冠や持物といった付属品は失われている。
- 93 ○名 称 セクメト女神倚像（せくめとじょしんいぞう）
○作 者 等 エジプト出土
○時 代 末期王朝時代～プトレマイオス朝時代初期・前 7 世紀～前 3 世紀頃
○品 質 ファイアンス製、青釉
○員 数 1 躯
○寸 法 等 高 5.6cm 幅 1.2cm 奥行 3.3cm
○作品概要 セクメトは雌ライオンの頭をもった女性像で表される女神。メンフィスのプタハ神の妻で、息子はネフェルテム神。その名は「力強きもの」を意味し、国王の強さを象徴している。古代エジプトを代表する神の 1 柱である。本作品は椅子にすわり、左手に「アイグスの盾」を持っている。釉薬がトルコ石のように発色している。
- 94 ○名 称 鴉像（ときぞう）
○作 者 等 エジプト出土
○時 代 末期王朝時代・前 664～前 332 年頃
○品 質 木彫、金彩、一部青銅
○員 数 1 躯
○寸 法 等 本体 全長 14.7cm 高 10.8cm 幅 4.2cm；木製台 長さ 14.3cm 幅 5.3cm 高 3.4cm
○作品概要 鴉（アフリカクロトキ）の小像。鴉はその知覚能力から「知恵の神」トトを表す動物として尊ばれ、特に末期王朝時代に小像が多数製作された。本作品は歩行中の鴉を表している。目の象嵌や金属製の尾羽を失われているが、羽根の塗金はよく残っている。足は太く、薄い台と一体となり、木台に取りつけられている。嘴の下には奉納人物像あるいは奉納台があったと考えられる。
- 95 ○名 称 オクシリンコス（おくしりんこす）
○作 者 等 エジプト出土
○時 代 末期王朝時代・前 664～前 332 年頃
○品 質 青銅製、赤色象嵌による目
○員 数 1 躯
○寸 法 等 長さ 10.6cm 高 7.1cm 幅 2.3cm
○作品概要 オクシリンコスは、ナイル川にも生息する特徴的な「鼻」（下顎）をエレファントノーズフィッシュをモデルとする「聖魚」。古代エジプトの神話では、殺害され解体されたオシリス神の体の一部を飲み込んだ魚として、特に末期王朝時代に神聖視された。プトレマイオス朝時代には同名の都市が建設された。本作品は頭上に太陽円盤と角からなるハトホル風の冠をいただく典型的な姿で、下部は 2 本の支柱（鱧）で板状の台とながっている。冠の後ろには小輪があり、両目には赤色の玉（ガラス？）が象嵌されている。
- 96 ○名 称 冠断片（かんむりだんぺん）
○作 者 等 エジプト出土
○時 代 第 24～25 王朝・前 8 世紀頃
○品 質 銅、色ガラス
○員 数 1 個
○寸 法 等 高 28.5cm 幅 13.8cm 厚さ 1.9cm
○作品概要 青銅製。神像や王像にとりつけられた冠の一部である。サイズから判断すると、かなり大きな像の頭部を飾っていたものと推測できる。鳥の羽、頭上に太陽円盤を頂くコブラ、動物の角からなる冠の右部分で、中央部と左部分を欠く。コブラには空色、赤色、黄色のガラスが象嵌されている。類品が大英博物館に所蔵される。
- 97 ○名 称 鉢（はち）
○作 者 等 エジプト出土
○時 代 プトレマイオス朝時代・前 3 世紀～前 1 世紀
○品 質 ファイアンス製、青釉
○員 数 1 口
○寸 法 等 口径 9.8cm 高 3.8cm 底径 5.6cm
○作品概要 やや丸みを帯びた完形品のファイアンス製鉢。底部には、低い輪高台がつき、ハリと呼ばれる、焼成時に用いられた粘土の小塊が残存している。
- 98 ○名 称 彩文土器 双把手付甕（さいもんどきそうとつてつきかめ）
○作 者 等 エジプト出土
○時 代 先王朝時代・前 4 千年紀後半
○品 質 彩文土器
○員 数 1 口
○寸 法 等 高 13.7cm 口径 8.1cm 底径 3.0cm
○作品概要 エジプト先王朝時代のナカダ期に典型的な彩文土器。黄褐色の地肌に暗褐色の彩文が施される。卵形の本体に 1 対の小把手が取り付けられ、底部は平坦。口縁部下から底部にかけて波線による梯子状の文様が描かれ、鏝状の口縁部にも波線による二重円文が描かれている。
- 99 ○名 称 黒頂土器 甕（こくちょうどき かめ）
○作 者 等 エジプト出土

- 時代 先王朝時代・前4千年紀後半
- 品質 土器
- 員数 1口
- 寸法等 像高14.3cm 口径5.9cm 底径4.2cm 最大幅8.7cm
- 作品概要 黒頂土器 (black-topped ware) と呼ばれるエジプト先王朝時代、特にナカダ文化を代表する土器様式の優品。器形は卵形で、単純な口縁部と小さな平底をもつ。把手や器面装飾はなく、上部約4分の1が黒色、その余は赤褐色で、いずれも光沢を放つほどによく研磨されている。色調の違いは還元炎と酸化炎の違いと思われる。

<東洋民族> (1件)

- 100 ○名称 団扇 (だんせん)
- 時代 20世紀
- 品質 木、紙、真鍮
- 員数 5柄
- 寸法等 最大幅28.5cm
- 作品概要 紙製団扇。柄と骨は木製。柄は先が扇形、要は宝珠の形で、黒漆を塗る。地紙に要を囲むように黒い紙で切絵風の様をあらわし、要の宝珠を縁取るように朱を塗る。要には真鍮製の五弁の花形の金具が2つ縦にならぶ。地紙向かって右下に「羅州邑団扇商会製品」と印を押す。

(3) 編入 (506件)

<歴史資料>

- 1 ○名称 歴史資料 (れきしりょう)
- 時代 江戸～昭和時代
- 品質 卷子、掛軸等／紙本墨書、紙本着色、拓本等
- 員数 506件
- 作品概要 「歴史資料(P)」と称される分野は、昭和13年(1938)旧歴史部の解体に伴い、当時の列品から「学芸課資料」として再編成された資料群を基礎としている。構成としては、江戸幕府からの引継ぎ資料や、当館の前身といえる書籍館、浅草文庫、内務省博覧会事務局収集資料も多く含まれ、その内容は多様である。今回編入分には、黒川真頼旧蔵の金石拓本類、表慶館の設計図面、幕末明治期の画家菊池容斎旧蔵の資料、第二次大戦後の寄贈・購入による資料が含まれる。

【京都国立博物館】 (計 388 件)

(1) 購入 (9 件)

<絵画> (2 件)

- 1 ○名称 仏涅槃図 (ぶつねはんず)
- 作者等 不詳
- 時代 平安時代～鎌倉時代 (12～13 世紀)
- 品質 絹本着色
- 員数 1 幅
- 寸法等 縦 99.0 cm、横 67.6 cm
- 作品概要 近年新たに発見された、絹本着色 2 副 1 鋪の小型の仏涅槃図。図像的には、応徳 3 年 (1086) の和歌山・金剛峯寺蔵仏涅槃図と共通する要素が多い。月及び叢雲に銀泥を刷く点は、12 世紀後半の感覚をよくとどめると言える。一方、釈迦に見られる明度の高い色彩感覚は、新しい感覚を見せる。よって、本図の制作年代は、12 世紀末から 13 世紀前半を想定すべきものと推測される。本図の最大の特徴は、その小型の法量である。仏涅槃図でこのような小型のものはこの時期には非常に珍しく、本図は十二世紀に文献上確認される小規模な涅槃講で使用されていたと推測される。藤末鎌初作品が発見されること自体が貴重であり、仏教史的な意義も高い作品である。
- 2 ○名称 重要文化財 鍾秀齋図 (しょうしゅうさいず)
- 作者等 祥啓 (しょうけい) 筆
- 時代 室町時代 (16 世紀)
- 品質 紙本墨画
- 員数 1 幅
- 寸法等 縦 78.7 cm 横 27.6 cm
- 作品概要 鎌倉建長寺第百六十四世で文筆僧としても有名な玉隠英瑛 (一四三二～一五二四) と、円覚寺第百四十七世を務めた子明紹俊 (?～一五三六) の賛をもつ山水図である。筆者の祥啓 (生没年不詳) は建長寺の画僧で道号は賢江、職階は書記であった。文明十年 (一四七八) 画の修行のために上京し、幕府の唐物奉行・芸阿弥 (一四三一～八五) に師事すること三年。帰郷するにあたり、そのはなむけと修了証書の代わりとして、芸阿弥から「観瀑僧図」(根津美術館蔵) を描き与えられたことも知られる。祥啓の山水図にはやはりその芸阿弥の画風にならう厳格な楷体描写をとるものが多いが、本図ではむしろ柔和な筆遣いを駆使することによって、平明かつ瀟洒な雰囲気醸成している。

<金工> (1 件)

- 3 ○名称 七宝唐花文手付盆 (しっぽうからはなもんでつきぼん)
- 時代 江戸時代 (18～19 世紀)
- 品質 銅・七宝
- 員数 1 口
- 寸法等 縦 24.9 cm 横 40.5 cm 高 16.5 cm
- 作品概要 アーチ状の取手と花先形の小脚をもうけた銅製の盆に有線七宝を施したもの。見込みを斜めに二分分割する片身替の構成や、変形の菊菊紋を各所に散らすなど、その意匠と図様構成に明らかな日本的感性が見られる。その一方で、図様の中で最も大きく描かれた如意頭形八弁唐花文や掬十弁唐花文に中国的な要素の混入を認める。本品は明時代の七宝を参考に江戸中期の日本の工人によって製作されたものであると考えられる。これほどまでに大型で、状態の良い江戸時代の七宝盆は大変珍しく、日本的要素と中国的要素を取り混ぜた作例として江戸時代の七宝を代表する作品である。加賀藩家老横山家の旧蔵品。

<漆工> (5 件)

- 4 ○名称 千鳥蒔絵手箱 (ちどりまきえてばこ)
- 時代 室町時代 (15 世紀)
- 作者等 不詳
- 品質 木製 漆塗 蒔絵
- 員数 1 合
- 寸法等 縦 30.8cm 横 24.2cm 高 16.4cm
- 作品概要 隅丸長方形、甲盛、塵居、胴張、畳付を面取とし、錫縁をつけた合口造の手箱。黒漆地に無数の千鳥を金研出蒔絵で散らし描いた後、淡い平目地を作り、蓋裏には同技法で浜松に千鳥を描く。内部には七宝花蔓地に菊花文様を唐織で表した錦を貼る。東京国立博物館所蔵の千鳥蒔絵手箱によく似るが、本品は千鳥の数がより多く、東京国立博物館の手箱の蓋裏が外面同様の千鳥散らしてあるのに対し、本品は、波に囲まれた土坡に松が伸びる景色の中に千鳥を舞わせる点が異なる。中世の手箱の貴重な例である。

- 5 ○名 称 桐蓮鷹羽蝶紋蒔絵筆筥（きりちがいたかのはちょうもんまきえたんす）
○時 代 桃山時代（16世紀末～17世紀初頭）
○作 者 等 不詳
○品 質 木製 漆塗 蒔絵
○員 数 1基
○寸 法 等 幅41.8cm 奥行30.7cm 高45.9cm
○作品概要 長方形、椗負蓋造、両短側面に銅製提手をつけた筆筥。外部は黒漆地に金平蒔絵、絵梨地、付描で、各面に桐紋、丸に蓮鷹羽紋、揚羽蝶紋を配し、いわゆる高台寺蒔絵の様式を示す。浅野幸長（1576-1613）と池田恒興の娘（輝政の異母姉妹）の婚姻に関わる調度であった可能性がある。内部は桧材の枠に二段の棚板を渡した旅筆筥に改造されており、江戸時代以降の数寄者たちの間で高台寺蒔絵が流行したことを物語る。正面の扉に亀裂があり修理を必要とするが、平成知新館オープン記念展にも陳列されたように、近世初頭の蒔絵の好例として今後も活用が見込まれる。
- 6 ○名 称 野分蒔絵扇形箱（のわかまきえおうぎがたばこ）
○時 代 江戸時代（17世紀）
○作 者 等 不詳
○品 質 木製 漆塗 蒔絵
○員 数 1合
○寸 法 等 縦21.6cm 横29.5cm 高5.6cm
○作品概要 扇形、印籠蓋造の箱。扇面部分は扇の折り目を山や谷として彫り出す。現在内部は硯箱の体裁だが、後世に整えられた構造と思われる。詰梨地に金銀平蒔絵、薄肉高蒔絵、金金貝、付描、描割などの技法で『源氏物語』の「野分」の帖を表し、蓋裏には籬に秋草を描く。丁寧かつ伸びやかな描線は桃山時代の表現を踏襲する。17世紀には扇形の漆器が輸出されたことが貿易記録からわかり、実際に海外の伝世例が多いが、国内にはあまりない。本品は、江戸時代前期に遡りうる扇形の箱として貴重であり、また展示効果の高い華やかな作品である。
- 7 ○名 称 舟橋蒔絵酒盆（ふなばしまきえしゅぼん）
○時 代 江戸時代（18～19世紀）
○作 者 等 不詳
○品 質 木製 漆塗 蒔絵 螺鈿 鉛板
○員 数 1枚
○寸 法 等 幅35.0cm 奥行23.8cm 高3.0cm
○作品概要 隅入長方形、縁付、四足付の盆。外箱墨書に従えば「酒盆」。黒漆地に金平蒔絵、金薄肉高蒔絵、螺鈿、鉛板の象嵌の手法で、波、舟、橋を描き、『後撰和歌集』の歌から「東路・の・さのの（舟橋）・かけて・のみ・思・わたる・を知・人そ・なき」の文字を散らす。東京国立博物館所蔵の国宝「舟橋蒔絵硯箱」を横長の画面に写したものである。光悦作として知られる品は、特に近代以降の名のある蒔絵師たちによって忠実に模倣される場合が多いが、本品のように形を変えた、江戸時代に遡りうるような大らかな作風は珍しい。琳派の流行を探る上で重要な品である。
- 8 ○名 称 胡蝶扇面蒔絵硯箱（こちょうせんめんまきえすずりばこ）
○時 代 江戸時代（17世紀末～18世紀）
○作 者 等 不詳
○品 質 木製 漆塗 蒔絵
○員 数 1合
○寸 法 等 縦23.8cm 横22.0cm 高4.6cm
○作品概要 隅切方形、面取、被蓋造の硯箱。円形銅製鍍金の水滴と方形硯を仕込んだ下水板1枚と懸子1枚を納める。梨地に金銀平蒔絵、研出蒔絵、金銀切金、銀鈿、描割、針描、付描などの諸技法で3本の扇を表す。扇面のうち1面は菊の咲く殿舎の庭、1面は金銀の瓶子と「その・秋まつむし」の文字を散し『源氏物語』『胡蝶』の帖の「花園の胡蝶をさへや下草に秋まつ虫は疎く見るらむ」の歌意を描く。見込に「道甫作」と読まれてきた蒔絵銘があるが、二文字目は「秋」の字のように見える。読み方の結論は出ていないが、文様、技法とも、五十嵐派の特徴を示す入念作であり、江戸時代中期の五十嵐派の動向を探る上で、またとない研究資料でもある。

<染織> (1件)

- 9 ○名 称 紅縹子地吉祥挿花車文様繡掛下帯（べにしゅすじきしょうそうかくるまもんようぬいかけしたおび）
○時 代 江戸時代（19世紀）
○作 者 等 不詳
○品 質 絹（縹子地・繡）
○員 数 1筋
○寸 法 等 長171.0cm 幅26.0cm
○作品概要 掛下帯とは、打掛着装時に使用する幅の狭い帯である。打掛は、小袖形式の衣服のうち最も格式の高い場に用いる衣裳であるため、帯も刺繍で豪華な文様を施す例が多い。この掛下帯は、鮮やかな紅縹子地に、松、竹、梅、菊などの吉祥の植物を活けた籠を載せた花車が波間を進む様子が、すべて刺繍であらわされる。金糸と白・黄・紅・萌葱濃淡・茶・黒の絹刺繍糸を使用し、金糸の駒繡と平繡で文様を表現する。一枚の生地を半分折って仕立てるため、文様は帯の表裏にわたって配置されている。結ぶことによって傷みが生じるため、帯の作例はたいへん少ないのが現状であり、市場に出ることは多くない。本来、きものと帯はともに用いるものであり、両者の取り合わせによる展示での活用が期待される。

(2)寄贈(379件)

<絵画> (49件)

- 1 ○名 称 花鳥人物図扇面貼交屏風（かちょうじんぶつぜんめんはりまぜびょうぶ）ほか
○時 代 室町時代～昭和時代（16～20世紀）
○員 数 44件
○作品概要 大阪の旧家に伝わった文化財から、初期狩野派による「花鳥人物図扇面貼交屏風」6曲1双、大岡春卜筆「裏四季草花図・表天保九如图屏風」6曲1双、狩野益信筆「太公望図」6曲1双、酒井抱一筆「梅に鶯・椿に雀図屏風」2曲1隻、司馬江漢筆「富岳遠望之図」1面、狩野永岳筆「六歌仙図小襖」2面、河鍋暁斎筆「梅に鳥」1幅、橋本閑雪筆「売花娘図」1幅など、中世から近現代までの絵画、44件。
- 45 ○名 称 人物鳥獸画巻 長澤蘆雪筆（じんぶつちょうじゅうがかん ながさわろせつひつ）
○時 代 江戸時代（18世紀）
○作 者 等 長澤蘆雪筆
○品 質 紙本着色
○員 数 1巻
○寸 法 等 31.1×1610.0cm
○作品概要 布袋唐子・福神や花鳥モチーフを季節の推移とともに描く。画風と署名の書体等から、天明6年（1786）の南紀滞在をさかのぼる若い時期の制作とみられる。主題・描法の多彩さ、機知に富む画面構成、大巻であること等鑑みて、芦雪初期の代表作といって差し支えない。しかも、芦雪の巻子作品はこれまで2点しか知られていない。これらはいずれも晩年作で、若い時期の巻子作品としては類例がなく貴重である。

- 46 ○名称 板絵千仏画像部分模写 三井田久子筆 (いたえせんぶつがぞうぶぶんもしゃ みいだひさこひつ)
 ○時代 昭和時代 (20世紀)
 ○作者等 三井田久子筆
 ○品質 紙本淡彩
 ○員数 4枚
 ○寸法等 (1) 縦36.1cm、横33.0cm (四方四仏B群a面)、(2) 縦41.8cm、横41.6cm (四方四仏A群a面)
 (3) 縦30.3cm、横16.8cm (千仏二体分)、(4) 縦36.3cm、横24.5cm (千仏六体分)
 ○作品概要 板絵千仏画像 (京都国立博物館所蔵、A甲390) の部分模写。オリジナルの表面は、長年の燻染で描写が確認困難となっているが、本図によってその概要がうかがえる。1980年頃の模写。
- 47 ○名称 白描伊勢物語絵料紙梵字陀羅尼経断簡下絵白描模写 三井田久子筆 (はくびょういせものがたりえりょうしぼんじだらにきょうだんかんしたえはくびょうもしゃ みいだひさこひつ)
 ○時代 昭和時代 (20世紀)
 ○作者等 三井田久子筆
 ○品質 紙本墨画
 ○員数 1幅
 ○寸法等 縦24.8cm、横36.9cm
 ○作品概要 白描伊勢物語絵料紙梵字陀羅尼経断簡 (東京芸術大学所蔵) の下絵白描模写。筆者三井田氏の師・吉田善彦東京芸術大学教授所蔵速水御舟遺墨二片の内一片を授与され使用されたという。吉田氏は、速水御舟義兄・吉田幸三郎の従兄弟にあたる。
- 48 ○名称 釈迦金棺出現図部分白描模写 三井田久子筆 (しゃかきんかんしゅつげんずぶぶんはくびょうもしゃ みいだひさこひつ)
 ○時代 昭和時代 (20世紀)
 ○作者等 三井田久子筆
 ○品質 紙本墨画
 ○員数 1幅
 ○寸法等 縦159.8cm、横48.6cm
 ○作品概要 釈迦金棺出現図 (京都国立博物館所蔵、A甲373) の部分白描模写。昭和五二年度文化庁模写事業「釈迦金棺出現図」(奈良国立博物館蔵、原本京都国立博物館蔵、吉田善彦監修、林功・井上耐子・富沢千砂子・宮城真・三井田久子筆) 製作時の下絵。分担者毎に統一表装保存。本図は画面右端五分の一分に相当する。修理前の状況を伝える貴重な模本。
- 49 ○名称 江邨漁隠図巻 (こうそんぎょいんずかん)
 ○時代 中国・清時代 道光21年 (1841)
 ○作者等 黄均筆
 ○品質 紙本墨画淡彩
 ○員数 1巻
 ○寸法等 縦22.1cm、長226.8cmセンチ
 ○作品概要 清時代後期の画家・黄均 (1775~1850) の筆になる山水の画卷で、江南の穏やかな秋の情景を描く。黄均は字を穀原といい、香疇、墨華居士と号した。元和 (蘇州) の人。本図は、北宋初期の范寛の筆意を真似て、山峰に密集した樹叢をあらわす点苔を多用するが、全体の基調をなす潤いのある墨線や淡い彩色は同時代の山水図の典型である。巻頭には道光、咸豊、同治帝を教え「三代帝師」と称された祁寯藻 (1793~1866) の題がつく。
- <書跡> (17件)
 50~65 ○名称 重要美術品 消息 豊臣秀吉筆 (しょうごく とよとみひでよしひつ) ほか
 ○時代 桃山時代~昭和時代 (16~20世紀)
 ○品質 紙本墨書
 ○員数 16件
 ○作品概要 豊臣秀吉 (1536~98) が文禄元年 (1592) 12月、上原二郎右衛門にあてた消息。当時、秀吉は朝鮮に出兵するため、肥前の名護屋にあった。これに従軍させる意図があったらしく、来春早々に自分の許まで来るよう命令し、築城がはじまったばかりの伏見城の普請については前田玄以に指示をだしたとのべる。末尾の署名は、これまで使用していた「てんか (天下)」にかえ、「大かう (太閤)」となっている。大阪府貝塚市の旧家よりの寄贈品で、ほか三条西実隆筆「和歌懐紙 (春日同詠雨後花和歌)」1幅、日野内光筆「和歌懐紙 (七夕同詠星名言志和歌)」1幅、近衛基熙筆「和歌懐紙 (春日詠若菜知時和歌)」1幅など、桃山時代から昭和時代までの消息・和歌懐紙・文人の書を中心とした書跡、16件。
- 66 ○名称 五言絶句 (ごごんぜっく)
 ○時代 中国・清時代 (18世紀)
 ○品質 紙本墨書
 ○員数 1幅
 ○作品概要 明時代末期の官僚で書画に秀でた張瑞図 (1570~1641) の筆との伝称をもつ作品。張瑞図は字を長公、号を二水、白毫菴主、果亭山人といい、福建晋江の人。独自の書風で人気を博し、「明末四大家」の一人に数えられる。日本でも江戸時代以降、福建を拠点とした黄檗宗が隆盛したことにともない、数多くの張瑞図作品がもたらされた。本作もその一つと考えられるが、落款印章の相違や筆勢の弱さから真筆とは認めがたい。ただし、戦後比較早い時期に京都の書道界が主催した展覧会に出品されており、近現代日本の中国書画鑑賞史を理解するうえで資料的価値を有する。
- <金工> (56件)
 67~122 ○名称 唐犬釜 (とうけんがま) ほか
 ○時代 桃山時代~昭和時代 (17~20世紀)
 ○品質 鉄・銅・七宝ほか
 ○員数 56件
 ○作品概要 大阪の旧家に伝わった文化財から、孫三郎作「七宝釜」、辻与次郎作「尾垂釜」をはじめとする京釜。中川浄益作「秋田銀板灰匙」など茶道具類。「七宝雄形香炉」など七宝器。加賀・陀羅尼勝家作「短刀 銘勝家」など刀剣・鉄砲類など、桃山時代から昭和時代までの金工品、56件。
- <陶磁> (86件)
 123~207 ○名称 黒楽茶碗 樂了入作 (くろらくちやわん らくりょうにゅうさく) ほか
 ○時代 明時代、清時代、朝鮮時代 (17世紀)、奈良時代、江戸時代~明治時代 (17~19世紀)
 ○品質 陶器、磁器、須恵器、玉器
 ○員数 85件
 ○作品概要 大阪の旧家に伝わった文化財から、樂了入作「黒楽茶碗 銘数寄太郎」、「御本刷毛目茶碗」、「青磁四方花卉文花入」、「銚絵松竹梅文水指 志賀焼」などの茶道具を中心に、「掛分船形鉢 一方堂焼」、「銚絵白泥大根文鉢 仁阿弥道八作」、「染付周茂叔愛蓮図茶壺 尾形周平作」、「染付山水人物文水注 清水六兵衛作」などといった京焼の作品を含む陶磁器の品、85件。
- 208 ○名称 三彩婦女立俑 (さんさいふじょりゅうよう)
 ○時代 唐時代 8世紀

- 品 質 陶器
- 員 数 一躯
- 作品概要 姿勢よく胸を張り、袖口を合わせて両手を包んだ気品ある姿の女子俑である。足元に何かをくわえた狎を従えている。青、緑、黄の釉薬が鮮やかで下裳（したも）に七曜文を施した衣装は華やかである。顔や口元には赤い釉薬がほんのり残り、頭部は双髻（そうけい）と呼ばれる、左右二ヶ所で結った髻が二つある髪型をしている。

<漆工> (161 件)

- 209～369 ○名 称 屈輪唐草堆朱天目台（ぐりからくさついしゅてんもくだい）ほか
- 時 代 明時代、江戸時代～昭和時代（17～20 世紀）
 - 品 質 竹、籐、象牙、木製、漆塗、蒔絵、螺鈿、漆絵、彫漆ほか
 - 員 数 161件
 - 作品概要 大阪の旧家に伝わった文化財から、柴田是真作「青海塗菓子銘々盆」、中山胡民作「富士蒔絵盆」、小島漆壺斎作「七宝花菱唐草鯉鱒棗」、勝軍木庵光英作「菊蒔絵棗」など有名蒔絵師の作品をはじめ、表千家歴代の花押の入った棗や茶杓といった茶道具、初代早川尚古斎や初代田邊竹雲斎など幕末近代の竹細工の名工による花籠など、多種多様な漆工および木竹工の品、161 件。

<染織> (7 件)

- 370 ○名 称 御殿雛飾り（ごてんびなざり）
- 時 代 江戸時代（天保 15 年・1844 頃）
 - 品 質 御殿：木製、一部漆塗蒔絵 人形：桐塑胡粉塗 衣裳絹製、道具：木製漆塗蒔絵
 - 員 数 1 式
 - 作品概要 正徳年間から続く京都の商家に伝わった雛飾り。京阪地方に多い御殿の内部と周囲に人形を飾る御殿雛飾りで、御殿の幅は 235 センチにも及ぶ。古今雛形式の男雛と女雛に、三人官女、雅楽を奏でる五人囃子を御殿内に配し、階下の左右に随人、仕丁二体を置く。五人囃子を納める箱の蓋裏に天保 15 年の初節句に贈られたとの墨書がある。雛御殿および雛道具一式には、黒漆塗地に抱菊花紋を金蒔絵で施す。
- 371 ○名 称 髪飾り類（かみかざりるい）
- 時 代 大正～昭和時代（20 世紀）
 - 品 質 亀甲、銀、珊瑚、翡翠、真珠ほか
 - 員 数 一括
 - 作品概要 和歌山の商家で、大正年間を中心に購入された髪飾り類で、39 種 54 点。多くは亀甲細工で、洋髪に用いたピン類が多く含まれる。大阪の高島屋などで購入した際の箱や伝票が付随しており、近代の大阪圏の消費文化を示す。
- 372 ○名 称 帯留類（おびどめるい）
- 時 代 大正～昭和時代（20 世紀）
 - 品 質 金・銀・貴石・珊瑚・絹製組紐ほか
 - 員 数 1 括
 - 作品概要 和歌山の商家で、大正年間を中心に購入された帯留め類で、8 種 15 点。帯留めは近代の帯結びで用いられ始めた和装小物で、貴金属や貴石が用いられている。大阪の越後屋亀甲店で購入した際の箱が付随しており、近代の大阪圏の消費文化を示す。
- 373 ○名 称 人形類 本咲和子コレクション（にんぎょうるいほんさきかずここれくしょん）
- 時 代 江戸時代～昭和時代（19～20 世紀）
 - 品 質 桐塑胡粉塗 衣裳絹製
 - 員 数 1括（内訳 46種54点）
 - 作品概要 大阪の旧家に伝わった文化財から、寄贈者の実母である本咲和子氏が京都で収集した日本人形類。節供人形、衣裳人形、御所人形、三つ折人形、市松人形、賀茂人形が含まれる。多くは御所人形で、江戸時代から近代までの作例が含まれている。
- 374 ○名 称 白地柳に鷺文様天鷲絨友禅染帯（しろやなぎにさぎもんようびろうどゆうぜんぞめおび）
- 時 代 明治時代 二十世紀
 - 品 質 絹 描絵
 - 員 数 1筋
 - 寸法等 長402.5cm、幅33.0cm。
 - 作品概要 女物の丸帯である。表裏に柳の枝にとまって憩う鷺一羽を、墨を基調に淡彩を交えながら描く。垂れ部分に「栖鳳寫 栖鳳（朱文方印）」との落款があり、京都画壇の大家である竹内栖鳳（1864～1942）筆と知られる。棲鳳から栖鳳へと名を改めるのは明治33年であり、本作への染筆はそれ以降であろう。明治の漢学者として名高い依田學海（1834～1909）の令嬢のために制作された。
- 375 ○名 称 衣裳御所人形 稚児輪袴着立姿（いしょうごしょにんぎょうちごうはかまぎたちすがた）
- 時 代 江戸時代 十九世紀
 - 品 質 木胎胡粉塗、絹
 - 員 数 1軀
 - 寸法等 高23.5cm。
 - 作品概要 立姿の御所人形で、毛植えの髪を稚児輪に結び、白平絹の振袖に紗絞形に蘭菊文様を織り出した浅葱地輪子の袴を着用する。「いづくら衣裳人形」との貼札のある桐箱が附属する。住友財閥で活躍し、歌人としても知られた川田順夫人の遺品と伝える。
- 376 ○名 称 唐美人押絵（とうびじんおしえ）
- 時 代 江戸時代 十七世紀
 - 品 質 紙胎絹包
 - 員 数 1面
 - 寸法等 高38.0cm。
 - 作品概要 羽子板に見られる押絵の技法で作られた中国風の衣裳をまとった立姿の女性像。国内での類例としては、東福門院和子（1607～78）の手になる押絵観音像や歌仙絵が数例知られる。唐人物の作例としては、ドイツのバーデンバーデンに所在するファヴォリート城の壁面装飾に転用された例が知られ、この城の装飾は 1710 年代から 20 年代になされている。佐渡の名家に伝わった品で、流刑地の佐渡にて没した小倉実起（1622～84）からの拝領品と考えられている。

<考古> (3件)

- 377 ○名 称 麻江型銅鼓（まこうがたどうこ）
- 時 代 清時代（18～19 世紀）
 - 作者等 不詳
 - 品 質 青銅鑄造
 - 員 数 1口
 - 寸法等 面径 50.0cm。高さ 28.0cm
 - 作品概要 紀元前に始まる中国南部からインドシナ半島に展開した銅鼓のうち最も新しい型式の銅鼓である。主に貴州省の山間部に多く分布するので、本例もその付近の出自と推定される。円形の鼓面と屈曲する胴部からなる。胴部に 4 本の取手を持ち、ここに綱を架けて銅鼓を垂下させて打ち鳴らす。

らす。本例は麻江型銅鼓の典型例であり保存状態も良好。銅鐸関連遺物として展示するに相応しい。大阪府貝塚市の旧家に伝来していたもの。

- 378 ○名称 青磁輪花碗（破片） 越州窯（せいじりんかわん（はへん） えっしゅうよう）
 ○時代 北宋
 ○品質 青磁
 ○員数 1個
 ○寸法等 現存高 5.5cm、現存長径は 13.4cm
 ○作品概要 北宋代の越州窯製の青磁碗片。口縁部はなく、底部と体部みの破片。胎土は灰白色、釉は草色。焼成は非常に硬い。底面にヘラで「大」の字が施される。1975年頃に京都府宇治市木幡の畑地で採集されたものという。この地は平安時代に藤原氏の累代墓やそれを供養する淨妙寺などが造られた場所である。この青磁碗はそれらに関連する副葬品あるいは寺院の什器であった可能性ある。付属品なし。
- 379 ○名称 縄文土器片・石器類ほか（じょうもんどきへん・せつきるいほか）
 ○時代 縄文時代～古墳時代
 ○品質 縄文土器片・須恵器片・石器・化石等
 ○員数 縄文土器片 256点、須恵器片 5点、石器 51点、化石等 10点
 ○寸法等 磨製石斧の全長 18.0cm ほか
 ○作品概要 京都府在住の個人の方から近年亡くなられたご主人が実家である福島県内などで採集された縄文土器・石器を主とするコレクションの寄贈である。ご実家は福島県田村市滝根町菅谷猿内であるという。内容は縄文時代後期頃の土器片が主であり、磨製石斧や打製石鏃など同じ縄文時代の石器とその石材など、さらに一部に関西の古墳時代の須恵器などを含む。また二枚貝の化石も含まれる。状態は良好とは言いがたく一部だけが展示に耐えるものだが、文化財の保存と研究および教育資料として活用したい。

【奈良国立博物館】（計 15 件）

(1) 購入 (15 件)

<絵画> (4 件)

- 1 ○名称 絹本着色春日宮曼荼羅（けんぼんちやくしよくかすがみやまんだら）
 ○時代 鎌倉時代 13世紀
 ○品質 絹本着色 掛幅装
 ○員数 1幅
 ○寸法等 本紙 縦 87.3cm 横 41.8cm 表具 縦 175.5cm 横 59.3cm
 ○作品概要 西から東を向いた視点で春日社の景観を描く作品。一の鳥居を起点として参道をたどり、上部に社殿、さらに春日山を描く。その上に五個の円相を配し、その中に春日の若宮を含めた五柱の神の本地仏を表す。この種の作品のなかでもとりわけ古様を示し、春日宮曼荼羅の初期の様相を示す貴重な作品。
- 2 ○名称 絹本着色釈迦十六善神像（けんぼんちやくしよくしゃかじゅうろくぜんじんぞう）
 ○時代 鎌倉時代 13世紀
 ○品質 絹本着色 掛幅装
 ○員数 1幅
 ○寸法等 本紙 縦 176.5cm 横 122.4cm 表具 縦 258.2cm 横 140.4cm
 ○作品概要 大画面の中央に釈迦如来坐像、その周囲に大般若経の守護神である十六善神ほかの諸尊を配する。賦彩の手法や全体の作風から、鎌倉時代前期に南都で制作された作品とみられ、この種の作品のなかでも古い時期の大作として貴重なもの。なお箱書によって大コレクターとして名高い武藤山治の旧蔵品と判明する点も興味深い。
- 3 ○名称 愛染明王印仏（あいぜんみょうおういんぶつ）
 ○時代 鎌倉時代 14世紀
 ○品質 紙本朱印
 ○員数 1枚
 ○寸法等 縦 16.4cm 横 48.5cm
 ○作品概要 奈良・元興寺の重要文化財・木造弘法大師坐像の納入品であったと見られる愛染明王の印仏。同像の納入品として今も付属する 42枚の愛染明王印仏は、印捺される愛染明王の尊容・像高や、料紙 1紙あたり 3体 16列、合計 48体前後を表す構成も、本品と共通する。色鮮やかな朱色の印影を残す、展示効果の高い作品。
- 4 ○名称 最勝曼荼羅（さいしょうまんだら）
 ○時代 室町時代 文安元年（1444）
 ○品質 絹本着色 掛幅装
 ○員数 1幅
 ○寸法等 縦 335.0cm 横 202.8cm 総縦 383.7cm 総横 218.8cm
 ○作品概要 室町時代の興福寺では数年に 1度、祈雨のため『金光明最勝王経』6部の書写と「最勝曼荼羅」の制作・祈禱が行われたが、本品はこの法要のため描かれ祈禱されたことが確定できるもの。年紀をともない、このときの法要については『大乗院寺社雑事記』などの文献にも記録がある。文献と実作例が結びつく点において、稀少かつ貴重な美術作品。

<書跡> (1 件)

- 5 ○名称 天永二年十一月二十一日東大寺注進状案（紙背 遠江国条里坪付帳断簡）（てんえいにねんじゅういちがつにじゅういちにちとうだいじちゅうしんじょうあん（しはい とおとうみのくにじょうりつぽつけしょうだんかん））
 ○時代 平安時代 天永 2年（1111）
 ○品質 紙本墨書 未装丁
 ○員数 1通
 ○寸法等 縦 28.8cm 横 97.4cm
 ○作品概要 天永 2年 10月に設置された記録所に関する数少ない史料のひとつとして、学会では著名なものである。伊賀国黒田荘の領有権をめぐる東大寺と興福寺の相論に関わる内容で、日本の荘園史上の重要文書。裏面は遠江国条里坪付帳の断簡。「遠江倉印」が捺された現存唯一の文書として、これも重要かつ著名なもの。

<彫刻> (2 件)

- 6 ○名称 木造如来立像（もくぞうによらいりゅうぞう）
 ○時代 平安時代 10～11世紀
 ○品質 木造 彩色
 ○員数 1軀
 ○寸法等 像高 147.8cm 髮際高 137.9cm
 ○作品概要 櫃の一材から根幹部を彫成する一木彫像で、周尺にもとづく六尺像とみられる。肘を脇につけたやや窮屈な姿勢や、着衣の襷の形式、顔の表情や耳のかたちなどから、南都を中心に散見する、古代の金銅仏を木彫に写した作品とみなされる。像内の墨書から、いずこかの春日社に伝

来した可能性があり、神仏習合の遺品と考えられる。

- 7 ○名称 銅造光背（どうぞうこうはい）
○時代 平安時代 12世紀
○品質 銅製 鍍金
○員数 1面
○寸法等 総高28.9cm 最大幅22.4cm
○作品概要 銅造透彫の光背。中央部は八葉蓮華を中心とする二重円相光で、雲文を表した周縁部がこれに付く。モチーフや構造技法及び寸法の一一致する作品に、京都・醍醐寺の銅造阿彌陀如来坐像（重要文化財）光背があり、本品とはその制作工房・制作時期を同じくするものと思われ、平安後期の工房制作の実態を考えるうえで貴重なもの。

<金工> (4件)

- 8 ○名称 金銅火焰宝珠形舍利容器（こんどうかえんほうじゅがたしやりようき）
○時代 鎌倉～南北朝時代 14世紀
○品質 銅製 鍍金
○員数 1基
○寸法等 総高13.2cm 框座径6.8cm 舍利容器高3.7cm 同径3.7cm
○作品概要 金銅製の蓮台上に水晶製の宝珠形舍利容器が乗るつくりで、舍利容器は金銅板製の火焰で固定されている。釈迦牟尼仏の骨になぞらえられる舍利に対する信仰は古代から存在するが、鎌倉時代以降、とくに盛んとなり、多くの舍利容器が作られたが、本品はそのなかでも精巧なつくりを示し、この種遺品を代表するに足るもの。
- 9 ○名称 金銅能作性塔（こんどうのうさしょうとう）
○時代 南北朝～鎌倉時代 14～15世紀
○品質 銅製 鍍金
○員数 1基
○寸法等 総高25.5cm 框径14.5cm 宝珠高7.4cm 同径7.5cm
○作品概要 蓮台上に火焰宝珠を安置する形式をとる。宝珠は内部を空洞とし、鍍金を施しており、ここに能作性珠を奉納できる構造。能作性珠は釈迦の遺骨である舍利と密教の最高尊である大日如来とを同一視する思想を背景としており、とくに醍醐寺系の真言密教において重視された。本品は醍醐寺系密教の影響を受けた西大寺等真言律宗において製作・安置された可能性がある。
- 10 ○名称 金銅蓮華形磬（こんどうれんげがたけい）
○時代 鎌倉時代 13世紀
○品質 銅製 鍍金
○員数 1面
○寸法等 最大縦9.6cm 最大幅17.3cm
○作品概要 仏具のなかでも音を仏に供する梵音具に属する遺品。通常の磬と異なり、蓮華形をなす点に特徴があるが、平安時代以降、他にも若干の作例がある。他の類品との形状の比較から、13世紀後半頃の制作期が推定される。鍍金もおおむねよく残り、保存状態は良い。
- 11 ○名称 金銅都五鈷杵（こんどうすべごこしよ）
○時代 南北朝時代 14世紀
○品質 銅製 鍍金
○員数 1口
○寸法等 全長12.3cm
○作品概要 密教法具の一遺品。鈷部が五叉に分岐する五鈷杵だが、脇鈷が中鈷に向かってすばまり、独鈷杵に近い形状を示し、いわゆる都五鈷杵と呼ばれるもの。都五鈷杵は重要文化財に指定される京都・仁和寺の作品を代表として、数例が知られている。形状の特徴から、14世紀頃の制作と目される。

<漆工> (1件)

- 12 ○名称 愛染明王彩繪舍利厨子（あいぜんみょうおうさいえしやりずし）
○時代 室町時代 弘治2年（1556）
○品質 木製 黒漆塗
○員数 1基
○寸法等 高20.0cm
○作品概要 銘文によって舍利奉納のための厨子であることが判明する作品。奈良・正暦寺円満院の僧興盛の発願により、春日社西之屋の地藏菩薩の宝前に寄進されたことがわかる。奥壁には愛染明王像を描いており、舍利ないし宝珠と愛染明王の信仰が重層的に結びついた密教修法である「如法愛染法」に関わる遺品と考えられる。

<考古> (3件)

- 13 ○名称 人面付蓮華文鬼瓦（八島廃寺出土）（じんめんつきれんげもんおにがわら（やしまはいじしゅつど））
○時代 飛鳥時代 7世紀
○品質 瓦製
○員数 1面
○寸法等 高22.1cm 幅23.0cm 厚2.9cm
○作品概要 滋賀県長浜市に所在する飛鳥時代（白鳳期）の寺院遺跡である八島廃寺から出土したとみられる鬼瓦。中央に蓮華文をおき、周囲に童子風の人面を配する。このモチーフは朝鮮半島からの影響を受けたものと考えられ、渡来系氏族との関連が指摘されている。7世紀の日韓交流史を考えるうえで重要な資料。
- 14 ○名称 伝滋賀県比叡山根本如法堂付近出土品（でんしがけんひえいざんこんぽんによほうどうふきんしゅつどひん）
○時代 平安時代 12世紀
○品質 外容器：陶製 和鏡：銅製 青白磁合子・小壺：磁製 ガラス小壺・水滴：ガラス製
○員数 一括
○寸法等 外容器：総高33.0cm 和鏡：径8.4～10.0cm 青白磁合子：総高2.9～3.1cm 青白磁小壺：総高6.2cm ガラス小壺：身高3.2cm ガラス水滴：高4.2cm
○作品概要 天台宗の総本山延暦寺の所在する比叡山の横川根本如法堂付近は、慈覚大師円仁が行った法華経如法書写ならびに埋経への結縁の意識により、多数の経塚が営まれた地域だが、本品もその付近からの出土と伝えられる。猿投か常滑で焼かれたらしい陶製外容器や2面の和鏡、中国・宋代の青白磁合子および小壺、同じく宋代のガラス小壺、ガラス水滴等からなる。とくにガラス水滴は世界でも唯一の現存遺品と目され、きわめて貴重な遺品。
- 15 ○名称 伝奈良県葛城市出土品（銅製骨藏器）（でんならけんかつらぎししゅつどひん（どうせいこつぞうき））
○時代 奈良時代 8世紀

- 品 質 銅製
- 員 数 1口
- 寸法等 口径19.2cm 現状高12.8cm
- 作品概要 奈良県葛城市(旧新庄町)の城山から出土したと伝えるもの。形状の特徴から奈良時代の遺品と見られ、内部にはわずかに骨片状物質が付着している。銅製の骨蔵器で奈良時代にさかのぼる遺品は西日本に約十例がある程度で、その意味でも貴重。

【九州国立博物館】(計19件)

(1) 購入 (14件)

<絵画> (4件)

- 1 ○名 称 絹本着色釈迦三尊二比丘十六羅漢図(けんぼんちゃくしよくしゃかさんぞんにびくじゅうろくらかんず)
 - 時 代 鎌倉時代・13世紀
 - 品 質 絹本着色
 - 員 数 1幅
 - 寸法等 本紙:縦103.7cm 横55.4cm 表具:縦181.0cm 横73.8cm 軸長78.8cm
 - 作品概要 釈迦三尊と十大弟子のうちの阿難・迦葉、さらに十六羅漢を加えた計23尊を描いた、きわめて珍しい組み合わせの諸尊図。制作年代については、描線や色彩感覚が鎌倉時代・13世紀に描かれた「観經十六観變相図」(重要文化財、京都・長香寺所蔵)などに近似し、諸尊の体軀や衣文線の重ね方に北宋・雍熙2年(985)造立の「釈迦如来像」(国宝、清凉寺所蔵)胎内に納められた「靈山變相図」(国宝、北宋時代)に近い造形感覚を示すことなどから、宋代絵画、とくに版画あるいは拓本を祖本とする13世紀の作と推測される。異色の図像として稀少であると共に、鎌倉時代における宋代絵画の受容を考えるうえで欠かすことのできない貴重な作品である。
- 2 ○名 称 紙本墨画淡彩陶淵明愛菊図 伝周文筆・瑞溪周鳳賛(しほんぼくがたんさいとうえんめいあいきくず でんしゅうぶんひつ・ずいけいしゅうほうさん)
 - 作 者 等 伝周文筆・瑞溪周鳳賛
 - 時 代 室町時代・15世紀 文明4年(1472)賛
 - 品 質 紙本墨画淡彩
 - 員 数 1幅
 - 寸法等 本紙:縦78.2cm 横23.9cm 表具:縦151.5cm 横26.4cm 軸長30.6cm
 - 作品概要 中国・六朝時代の詩人・陶潜(陶淵明、365-427)が、道服をつけ杖をもって歩む姿を描く。作者については足利將軍家の御用絵師・周文(?-1454-?)の伝承があり、上部には鹿苑僧録をつとめた文筆僧・瑞溪周鳳(1392-1473)が81歳で記した賛文がある。陶淵明は、自然を愛して田園生活を送った隠逸詩人として、日本ではすでに平安時代にはよく知られた存在であるが、関連する古い絵画作品は数少ない。新出資料である本図は、室町時代における中国文人文化の受容を考える上で重要な資料である。その人物の姿形は、東アジアにおいて伝統的に描き継がれた図像を受け継いでおり、とくに応永32年(1425)着賛の陶淵明賞菊図(重要文化財、梅澤記念館所蔵)に共通しており興味深い。
- 3 ○名 称 紙本墨画山水図 伝狩野玉染筆(しほんぼくがさんすいず でんかのうぎょくらくひつ)
 - 作 者 等 伝狩野玉染筆
 - 時 代 室町時代・16世紀
 - 品 質 紙本墨画
 - 員 数 1幅
 - 寸法等 本紙:縦85.6cm 横31.5cm 表具:縦167.4cm 横43.6cm 軸長48.4cm
 - 作品概要 墨一色で晩夏から初秋にかけての景観を細やかに描き出す。その特徴は墨点で立体感を描写する米法山水の主山である。この表現は中国・宋時代の文人画家の山水画に由来するもので、とくに元時代に盛行したが、日本・室町時代には作例が多くない。そのため米点や無根樹などの描法を採用する本図は、米法山水の表現を学んだ室町水墨画の一つとして貴重である。作者については、狩野元信(1477-1559)に学び小田原で活躍した狩野玉染の伝承がある。そのため本図は、京都の狩野派に学んだ関東水墨画の優品として重要であり、文化交流の観点からも独自の位置づけを持つ米法山水として貴重である。
- 4 ○名 称 紙本墨画松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風 狩野永徳筆(しほんぼくがまつにははちょう・やなぎにしらさきず ろつきょくびょうぶかのうえいとくひつ)
 - 作 者 等 狩野永徳筆
 - 時 代 室町-安土桃山時代・16世紀
 - 品 質 紙本墨画
 - 員 数 1双
 - 寸法等 本紙:各縦160.5cm 横351.0cm 折畳時:各縦176.3cm 横62.0cm 厚11.4cm
 - 作品概要 近年再発見された、狩野永徳(1543-1590)の花鳥図の大作である。本作品は、数少ない永徳の大画面花鳥画であることに加え、その代表作「花鳥図」(国宝、京都・大徳寺聚光院所蔵)に酷似しており、日本美術史において極めて重要な価値をもつ。右隻では、松のまわりを叭叭鳥が舞い、勢よく流れる滝や葦などが澗刺とした春の景色を表している。左隻は、芦が茂る穏やかな秋の水辺の景で、柳のそばで白鷺が羽根を休める。安定感のある構図に、春と秋、静と動、黒い叭叭鳥と白い鷺を対比的に表わした、理知的な構成である。永徳の祖父・元信が確立した端正な花鳥図を継承しつつ、桃山時代の豪壮な様式の到来を予感させる、極めて重要な作品である。

<書跡> (1件)

- 5 ○名 称 藍紙墨書大方広華嚴經卷第十五(泉福寺焼経) (らんしほくしよだいほうこうぶつけごんきょうまきだいじゅうご(せんぶくじやげぎょう))
 - 時 代 平安時代・12世紀
 - 品 質 藍紙墨書
 - 員 数 1巻
 - 寸法等 縦25.5cm 全長1279.1cm
 - 作品概要 「泉福寺焼経」は平安時代12世紀初期の装飾経の優品で、河内国・泉福寺に伝来した。ある時期に火災に遭い、経巻の上下端が焼損したことからこの名で呼ばれる。澹染めの藍色の料紙に、金の捺箔を散らし、金泥界を引いた中に、『大方広華嚴経』(旧訳華嚴経、仏駄跋陀羅訳、60巻本)を楷書体で書写する。本作品は、巻子装で、巻第十五(「如来昇兜率天宮一切宝殿品第十九」「兜率天宮菩薩集讚仏品第廿」)が1行17字詰で26紙にわたって書写される。「泉福寺焼経」は、戦後に10巻前後が巻間に出て、存在が知られるようになった。巻子のかたちで伝わる僚巻が、東京・京都・奈良の国立博物館、根津美術館、立命館大学などに所蔵される。本作品も僚巻同様、和様の筆致で一貫して書写されるが、点画の丸みが強調される以前の端正な楷書体の字姿を留める。また、本作品は、焼損痕も含めてうぶな状態であり、巻末の軸木と上端の軸先を遺存する点も貴重である。

<彫刻> (1件)

- 6 ○名 称 阿弥陀如来坐像(あみだによらいざどう)
 - 時 代 平安時代・10世紀
 - 品 質 木造 漆箔・彩色 彫眼
 - 員 数 1軀

- 寸法等 像高 56.0cm
- 作品概要 両手屈臂として腹前で左手の上に右手を重ね置く弥陀定印を結び、右足を外にして結跏趺坐する阿弥陀如来像。両腕の遊離部を含めて広葉樹(ケヤキか)の縦一材から彫出し、内割りを施さない古式の一木彫像である。大きく張り出す胸肉、圧倒的に肥満した体軀、翻衣式の名残が認められる幅広の衣襷など9世紀彫像の特徴を濃厚に示すが、肉髻と地髪を段を不明瞭で尖っているようにみえる頭部の形、仰月形の目と小さな鼻や唇を配する面貌など、京都や琵琶湖周辺に伝存する10世紀の天台系如来像に見出される特徴が多く認められる。よく整えられた衲衣の衣襷、右足首にまとわる裳先の折り返しを幅広い真円形に表現する点、衲衣を通して左胸肉の張りや右足の指先を明瞭に表現する点など、本像では着衣の質感と肉身性の強調に特別の関心が払われていることが注目される。

<漆工> (1件)

- 7 ○名称 龍鳳彫彩漆合子(りゅうほうちょうさいしつごうす)
- 時代 中国・明時代・嘉靖年間(1522-66)
- 品質 木製漆塗
- 員数 1合
- 寸法等 径 29.2cm 高 13.3cm
- 作品概要 木製漆塗。円形、印籠蓋造の合子。蓋表中央に雲芝をあらわし、その上に丸枠で囲んだ寿字を篆書体であらわして、上に逆卍をあらわす。その左右には鳳凰と龍を、間隙を雲文地とし、雲芝雲をあらわしている。さらに肩と尻の部分には、波文地に朱色と緑色の龍を二匹ずつ交互に配し、龍と龍の間には雲芝雲をあらわす。色漆を塗り重ねた漆層に文様を彫り表す彫彩漆技法は、明時代・嘉靖年間に隆盛を迎えた。また、さまざまな吉祥文や文字を組み合わせて器物を飾る作風は、明時代・嘉靖年間から盛んになり、後の隆慶年間(1567-72)、万暦年間(1573-1620)へ引き継がれた。本作は嘉靖期彫彩漆の典型作であり、同趣の作例は、北京・故宫博物院や台北・国立故宫博物院などに所蔵されている。

<染織> (3件)

- 8 ○名称 浅葱地椿燕文紅型衣裳(あさぎじつばきつばめもんびんがたいしょう)
- 作者等 琉球
- 時代 琉球・第二尚氏時代-明治時代・190-20世紀
- 品質 木綿単糸平織
- 員数 1領
- 寸法等 丈 120.0cm 桁 64.3cm
- 作品概要 型染め、両面染め。単仕立て。牡丹文を主文として、瑞雲、飛翔する燕を配した大文様の紅型衣裳。浅葱色の地色上に赤、黄、茶、緑、藍色にて文様を染めている。肩山で文様の向きを変え染め方はせず、前身左右ともに模様は上向きで、後身は下向きとなっている。本品は、広袖で身八つ口の開口部分をつくらないなど琉服の形を残すが衿は和服の特徴である棒衿に変化している。
- 9 ○名称 黄地松皮菱繫ぎ檜扇団扇菊椿文紅型胴衣(きじまつかわびしつなぎびおうぎうちわきくつばきもんびんがたどうじん)
- 時代 琉球・第二尚氏時代・19世紀
- 品質 木綿単糸平織
- 員数 1領
- 寸法等 丈 91.5cm 桁 64.5cm
- 作品概要 型染め、片面染め。元は袷仕立てと考えられるが現状は裏地なし。松皮菱繫ぎ文に、檜扇、団扇を中心に椿、菊を配した大模様の胴衣で、松皮菱に市松文様を充填させた文様は、鹿の子絞りあるいは摺匹田を模したものと考えられる。黄色の地色上に赤、橙、紫、茶、緑、藍色にて文様を染めている。胴衣には脇(体側)にスリットをいれるものもあるが、本品は脇を縫い閉じている。衿付けは袋縫いで上前衿には3本髪を入れる。胴衣(ドウジン)とは上衣のことで、カカンと呼ばれる裙(巻きスカート)とともに二部式の衣裳として着用された。
- 10 ○名称 茜地幾何学文更紗儀礼用布(あかねじきかがくもんさらさぎれいようふ)
- 作者等 インド・コロマンデル海岸か
- 時代 17-18世紀
- 品質 木綿単糸平織
- 員数 1枚
- 寸法等 縦 656.0cm 横 83.5cm
- 作品概要 木綿単糸平織。両面染め、媒染模様染め・蠟防染模様染め(手描き)。蠟防染で染め抜かれた3本線が中央部と周囲を区画する。中央部には、方形を組み合わせた「格天井」文様をの中心に花形を表す幾何学文様と、破風のような三角形に十字を組み合わせた建物風の文様を交互に配す。周囲のうち長辺の両側の区画は、一方は正方形をピラミッド状に積み上げた山形を連続させ、もう一方は三角形と凸形を組み合わせた文様を連続させる。切り取りによる欠失部が1か所あるものの、完形をほぼ残す点で貴重である。

<考古> (2件)

- 11 ○名称 伝青森県五所川原市十三五月女泡出土 四脚付鉢形土器(でんあおもりけんごしょがわらしじゅうさんそとめやしゅつど しきやくつきはちがたどき)
- 時代 縄文時代・前1000年-前400年
- 品質 土製
- 員数 1点
- 寸法等 径 16.0cm 高 10.0cm
- 作品概要 直立する4つの脚を持つ鉢形の土器。口縁部には工字状の文様が施されている。東北地方の縄文時代晩期の文化として著名な亀ヶ岡文化の土器で、本例のような形態を持つものは大変希少である。この文化の後半は、西日本では既に水田稲作が伝わっており、弥生時代が始まっている。亀ヶ岡文化の土器は、西日本各地でも出土し、弥生土器の成立にも大きな影響を与えており、当時の文化交流を考える上で大変重要である。
- 12 ○名称 伝青森県つがる市森田町床舞出土 長胴異形壺形土器(でんあおもりけんつがるしもりたまちとこまいしゅつど ちょうどういぎょうつぼがたどき)
- 時代 縄文時代・前1000年-前400年
- 品質 土製
- 員数 1点
- 寸法等 径 6.8cm 高 33.2cm
- 作品概要 非常に長い胴部を持つ壺形もしくは徳利形の土器。器壁は手握土器風の凹凸を持ち、肩部から胴部にかけて全面に雲形の磨消縄文が施されている。東北地方の縄文時代晩期の文化として著名な亀ヶ岡文化の土器で、本例のような形態を持つものは大変希少である。この文化の後半は、西日本では既に水田稲作が伝わっており、弥生時代が始まっている。亀ヶ岡文化の土器は、西日本各地でも出土し、弥生土器の成立にも大きな影響を与えており、当時の文化交流を考える上で大変重要である。

<歴史資料> (2件)

- 13 ○名称 紙本墨書徳川家康御内書(しほんぼくしょとくがわいえやすごないしょ)
- 時代 江戸時代・慶長10年(1605)
- 品質 紙本墨書
- 員数 1幅
- 寸法等 本紙:縦 23.2cm 横 59.1cm 表具:縦 104.8cm 横 61.5cm 軸長 66.8cm

○作品概要 徳川家康(1542-1616)が対馬の大名・宗義智(1568-1615)に宛てた御内書。差出書の部分に「源家康」と刻する重廓黒文楕円印を捺し、宛所は「対馬侍従殿」とする。文書様式・内容からみて、発給年月は慶長10年(1605)5月と考えられる。文禄・慶長の役(1592-98)後の日朝講和交渉の過程において、慶長10年3月、宗義智は対馬を訪れた使僧惟政(松雲大師)を京都・伏見城まで誘導し、大御所徳川家康・將軍秀忠との会見を実現させた。家康は義智の功績を賞するとともに、朝鮮王朝から正式の外交使節を招聘するよう命じている。本文中で「無事之儀、弥相調候様」と指示するのは、正式な講和成立のため奔走するよう指示したものと解される。

14 ○名称 紙本着色長崎唐館図及蘭館図(しほんちゃくしよくながさきとうかんずおよびらんず)
○時代 江戸時代・18-19世紀
○品質 紙本着色
○員数 2巻
○寸法等 (唐館図)本紙:縦36.6cm 横485.5cm(4紙) 表具:縦36.6cm 横521.3cm
(蘭館図)本紙:縦36.6cm 横404.3cm(3紙) 表具:縦36.6cm 横440.4cm

○作品概要 江戸時代・18世紀初頭の長崎の唐人屋敷と出島オランダ商館とにおける生活・風俗を描いた絵巻。唐館図には、唐人店(香餅・焼酒)、唐人部屋での宴席と中国楽器の演奏、土神堂の礼拝、広場での博打、小間物・食料品市など11の場面が、蘭館図には、水門、カピタン部屋の宴席と洋楽器の演奏、庭園、涼所(遊戯所)とビリヤード、など7つの場面が描かれている。両図ともに、構図が類似する諸本が神戸市立博物館など複数伝来する。景観年代は、渡辺秀石が長崎巡見に訪れた幕府勘定奉行・荻原重秀の命(元禄12年・1699)により描いた「絵図」(『唐通事会所日録』・『長崎オランダ商館日記』)との関連性から、18世紀初頭と判断される。

(2) 寄贈 (5件)

<金工> (1件)

1 ○名称 金剛鈴(こんごうれい)
○作者等 インドネシア
○時代 時代・世紀 15世紀
○品質 銅・鋳造
○員数 1口
○寸法等 総高16.2cm 鈴身高5.8cm 鈴口径8.5cm
○作品概要 銅製鋳造の密教法具。本品は、インドネシアの各種鋳造品に特有な蠟型による制作と考えられ、鉦と把、鈴身は、それぞれ別鋳して接合する。鉦は、把上につくり出した平坦面から3本の鉦が垂直に伸びる三鉦形をなし、鑄を立てず平板に仕上げる。脇鉦は刃を外側にに向けた片刃状で、その根元から箆手状に外側から内側へ向けて巻き込みを伴う。一方、中鉦は両刃状で下部に逆刺をもつ。3本の鉦を受ける把は、中央にやや扁平な珠形を設け、その上下に円盤状の突帯を2つずつ添える。また、鈴身は、椀を伏せたようなかたちをとり、口縁部分を厚手につくり出す。なお、鈴身の内側には環を設け、そこから本体と同じ材質でつくられた舌を吊り下げる。

<考古> (3件)

2 ○名称 金銅装馬具他(こんどうそうばぐほか)
○時代 縄文時代-江戸時代(主体となるのは古墳時代)
○品質 青銅鋳造、金銅製、鉄製、鉄地金銅製、石製、鉄地金貼り
○員数 23件
○寸法等 玉類等:縦0.02cm-3.76cm 横0.3cm-2.12cm 広形銅矛:長83.4cm 幅13.7cm 厚5.0cm
○作品概要 個人から寄贈を受けた福島仙掌庵コレクションは、豊前地域から出土した縄文時代から江戸時代にかけての考古資料として重要な意義を持ち、とくに古墳時代が充実している。なかでも、青銅鉦鈴・青銅三鈴杏葉は出土例が少なく貴重である。また、小玉類も多彩であり、さまざま時代の鏡、武器形青銅器(広形銅矛・中広形銅矛)についても特筆される。さらに、金銅半龍環頭柄頭はみやこ町彦徳横穴墓出土品として明治年間に刊行された『筑前豊前考古図譜』にも記され、出土の分かる学術的に重要なものである。このうち、金銅装馬具は整理の結果、3組あることが分かり、うち1組は奈良県藤ノ木古墳出土品に類例がある。豊前地域の地域史を復原する上で、欠くことのできない資料と言える。

3 ○名称 大分県丹生遺跡群出土 石器(おおいたけんにゆういせきぐんしゆつど せつき)
○時代 旧石器時代-縄文時代・3万年前-6000年前
○品質 石製
○員数 13点
○寸法等 縦10.7cm 横10.9cm 厚6.0cmほか
○作品概要 縄文時代の礫器6点とその素材6点、旧石器時代の石核1点で構成されている。本資料の中で主体となる礫器は、使用石材や加工技術から縄文時代草創期・早期に位置づけられる礫器の典型例である。昭和30年代後半に丹生遺跡群から採集された本資料と同形態の礫器は、その所属時期をめぐって「丹生論争」や「前期旧石器存否論争」と呼ばれる当時の日本考古学会を二分するほどの大論争を巻き起こした。本資料はその丹生遺跡から出土した礫器であり、考古学的にも大変重要な資料である。太田亘氏旧蔵。

4 ○名称 タイ・バンチェン遺跡出土 土器他(たい・ばんちえんいせきしゆつど どきほか)
○時代 新石器時代:アフガニスタン、青銅器時代-スコータイ時代:タイ、先クメール時代-クメール時代:カンボジア
○品質 石製、土製、青銅鋳造、金銅
○員数 23件
○寸法等 小玉類:径0.1cm-0.5cm 土器:径16.2cm 高10.0cm
○作品概要 個人から寄贈を受けたコレクションは、タイ、カンボジア、アフガニスタンから出土した新石器時代からスコータイ時代ないしくメール時代のものだが、その中核をなすのがバンチェン文化出土品である。バンチェン文化は東北タイにある東南アジア最古の青銅・鉄器文化である。1966-1967年にアメリカのペンシルバニア大学の考古学的調査で当該文化期に属する墓葬が調査され、スリッパ掛け胎土に赤色で彩文を描いた土器は後期バンチェン文化に該当し、中国・ベトナムの青銅器文化の影響を受けた青銅器や鉄器も共存することが分かった。当館で以前購入したバンチェン文化出土品に加え、東南アジア考古資料を充実させるものとして重要である。

<民族資料> (1件)

5 ○名称 蓋付壺他(ふたつきつぼほか)
○時代 蓋付壺:現代(20世紀)・タイ タタキ板・当て具:現代(20世紀)・ミャンマー
○品質 土製、木製
○員数 2件
○寸法等 蓋:径11.5cm 高5.8cm 壺:径16.5cm 高12.5cm タタキ板:長27.0cm 幅7.3cm 厚2.9cm 当て具:径9.5cm 高7.0cm
○作品概要 現代の東北タイで作られている土器である。ロクロを使用せずに、土器製作者自身が土器のまわりをまわりながら成形する点が特筆される。土器成形の基本技法は「タタキ」技法である。前期バンチェン文化土器に代表されるように、東南アジアでは紀元前20世紀には、土器づくりに「タタキ」技法を用いていた。現在の東北タイの土器づくりも、その系譜に連なるものと言える。あわせて個人から寄贈を受けたタタキ板・当て具は隣国のミャンマーで使用されていたものだが、東南アジアにひろく分布する「タタキ」技法の実態を伝える資料として重要である。

1-(1)-④ 寄託品一覧表

(単位:件) 平成27年3月31日現在

	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館			
	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	
合計	11,844	195	1,208	3,064	56	256	6,001	86	623	1,984	53	324	795	0	5	
絵画	3,330	56	418	476	13	66	2,108	28	246	591	15	105	155	0	1	
書跡	1,672	67	271	396	12	29	905	42	203	316	13	37	55	0	2	
彫刻	882	12	208	248	2	37	256	1	65	373	9	105	5	0	1	
建築	4	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	
金工	917	13	90	133	5	18	535	1	40	238	7	32	11	0	0	
刀剣	249	10	68	213	8	55				34	2	13	2	0	0	
陶磁	1,209	1	7	137	0	3	779	1	3	11	0	0	282	0	1	
漆工	693	13	52	99	6	15	455	4	15	107	3	22	32	0	0	
染織	861	7	36	286	2	4	497	3	31	49	2	1	29	0	0	
考古	916	12	32	168	4	13	427	6	10	228	2	9	93	0	0	
民族資料	120	0	0	5	0	0	0	0	0	6	0	0	109	0	0	
歴史資料	91	0	10	5	0	0	35	0	10	29	0	0	22	0	0	
和書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
その他	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	
東洋	絵画	170	2	11	170	2	11									
	書跡	39	1	3	39	1	3									
	彫刻	31	0	0	31	0	0									
	金工	5	0	1	5	0	1									
	陶磁	124	1	0	124	1	0									
	漆工	33	0	1	33	0	1									
	染織	9	0	0	9	0	0									
	考古	487	0	0	487	0	0									
	民族	0	0	0	0	0	0									

* 東京国立博物館は、列品管理規定による「旧東洋課所掌分」あり。京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館は、東洋の寄託品も「日本」に含む。
 * 東京国立博物館では、国宝・重要文化財の数は文化庁の指定件数に合わせている。

1-(1)-⑤ 寄託品増減表

(単位:件) 平成27年3月31日現在

	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館							
	25年度		26年度	25年度		26年度	25年度		26年度	25年度		26年度	25年度		26年度					
	計	新規	返却	計	新規	返却	計	新規	返却	計	新規	返却	計	新規	返却					
合計	11,486	785	427	11,844	2,519	604	59	3,064	5,892	162	53	6,001	1,994	7	17	1,984	1,081	12	298	795
絵画	3,201	218	89	3,330	392	86	2	476	2,003	122	17	2,108	592	1	2	591	214	9	68	155
書跡	1,670	45	43	1,672	378	26	8	396	890	18	3	905	322	0	6	316	80	1	26	55
彫刻	799	114	31	882	147	104	3	248	255	5	4	256	374	3(4)*	4	373	23	2	20	5
建築	4	0	0	4	0	0	0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
金工	1,026	17	126	917	168	6	41	133	529	9	3	535	238	2	2	238	91	0	80	11
刀剣	246	3	0	249	210	3	0	213				34	0	0	34	2	0	0	0	2
陶磁	1,220	8	19	1,209	134	4	1	137	792	4	17	779	11	0	0	11	283	0	1	282
漆工	701	20	28	693	84	16	1	99	461	3	9	455	107	1	1	107	49	0	17	32
染織	724	218	81	861	69	217	0	286	496	1	0	497	49	0	0	49	110	0	81	29
考古	911	12	7	916	157	12	1	168	427	0	0	427	230	0	2	228	97	0	4	93
民族資料	121	0	1	120	5	0	0	5	0	0	0	6	0	0	6	110	0	1	109	
歴史資料	87	4	0	91	1	4	0	5	35	0	0	35	29	0	0	29	22	0	0	22
和書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0
東洋	絵画	149	22	1	170	149	22	1	170											
	書跡	24	15	0	39	24	15	0	39											
	彫刻	11	20	0	31	11	20	0	31											
	金工	1	4	0	5	1	4	0	5											
	陶磁	70	55	1	124	70	55	1	124											
	漆工	25	8	0	33	25	8	0	33											
	染織	9	0	0	9	9	0	0	9											
	考古	485	2	0	487	485	2	0	487											
	民族	0	0	0	0	0	0	0	0											

* () 新規寄託品は4件であるが、うち1件は既に寄託されている作品1件に点数の追加としたため、合計値には含まない。

1-(1)-⑥ 登録美術品一覧表

(単位:件) 平成27年3月31日現在

	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文
合計	27	0	2	25	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0
絵画	3	0	2	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
書跡	18	0	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
彫刻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
陶磁	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
染織	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
金工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東洋	陶磁	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	歴史資料	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
複合資料	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	

1-(2) 収蔵品の管理・保存

1-(2)-① 保存カルテ作成件数

【東京国立博物館】

平成27年3月31日現在

合計		1,721		
計	列品貸与時	本格修理調査時	応急修理時	
	695	334	692	
絵画	110	19	244	
書跡	49	3	1	
彫刻	216	6	7	
建築	0	0	0	
金工	21	3	0	
刀剣	9	220	0	
陶磁	50	3	3	
漆工	30	2	0	
染織	20	2	7	
考古	52	31	5	
歴史資料	30	2	17	
民族資料	3	2	0	
和書	11	6	102	
東洋	絵画	33	8	17
	書跡	14	3	4
	彫刻	3	3	0
	金工	0	0	0
	陶磁	15	2	5
	漆工	5	0	3
	染織	7	1	69
	考古	10	4	2
民族	0	0	0	
法隆寺献納宝物	2	11	0	
その他(黒田含)	5	3	206	

【京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館】

計	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
	204	115	75
絵画	50	41	12
書跡	8	10	2
彫刻	1	21	0
建築	0	0	0
金工	9	9	2
刀剣		0	0
陶磁	52	0	1
漆工	51	6	0
染織	2	0	5
考古	30	28	6
民族資料	0	0	0
歴史資料	1	0	1
和書	0	0	0
その他	0	0	46

1-(2)-② 各収蔵庫、展示場の温湿度

【東京国立博物館】

会場等		空調実施時間	温度(年間)	湿度(年間)
本館	展示会場	09:00~17:00	11~30℃	22~77%
	収蔵庫	09:30~17:00	15~26℃	25~82%
平成館	展示会場	09:00~17:00	19~29℃	39~63%
	収蔵庫	09:30~17:00	21~26℃	48~64%
東洋館	展示会場	09:30~17:00	15~29℃	23~64%
	収蔵庫	09:30~17:00	11~28℃	43~68%
宝物館	展示会場	24時間運転	22~26℃	49~60%
	収蔵庫	24時間運転	21~24℃	51~60%

【京都国立博物館】

会場等		空調実施時間	温度(年間)	湿度(年間)
明治古都館 (特別展示館)	展示会場	09:00~18:00	18~25℃	57~60%
	収蔵庫	09:00~17:30	18~22℃	55~60%
平成知新館 (新平常展示館)	展示会場	9:00~17:00	20~23℃	50~60%
	収蔵庫	9:00~17:00	20~23℃	50~60%
北収蔵庫		9:00~17:30	18~25℃	55~60%
東収蔵庫		09:00~17:30	18~22℃	55~60%
文化財保存修理所		09:00~17:30	22~24℃	57~60%

【奈良国立博物館】

会場等		空調実施時間	温度(年間)			湿度(年間)
			冬	夏	中	
なら仏像館	展示会場	24時間運転	20±2℃	24±2℃	22±2℃	60±5%
青銅器館	展示会場	24時間運転	20±2℃	24±2℃	22±2℃	60±5%
西新館	展示会場	24時間運転	20±2℃	24±2℃	22±2℃	60±5%
東新館	展示会場	24時間運転	20±2℃	24±2℃	22±2℃	60±5%
	収蔵庫	24時間運転	20±1℃	22±1℃	21±1℃	60±2%
地下回廊	収蔵庫	24時間運転	20±1℃	22±1℃	21±1℃	60±2%

【九州国立博物館】

会場等		空調実施時間	温度(年間)	湿度(年間)
3階展示会場		8:00~19:00	22~26℃	55±5%
4階展示会場		7:00~21:00	22~26℃	55±5%
収蔵庫		8:30~21:30	22~24℃	材質別に50±2%、 55±2%、 60±2%

1-(3) 収蔵品の修理

1-(3)-① 本格修理件数

平成27年3月31日現在

	計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
合計	121	78 (14)	11	9	23
絵画	25	8	4	4	9
書跡	4	1	0	1	2
彫刻	1	1	0	0	0
建築	0	0	0	0	0
金工	5	3	1	0	1
刀剣	3	3	0	0	0
陶磁	4	3	0	0	1
漆工	3	2	1	0	0
染織	21	12	3	1	5
考古	39	31 (14)	1	3	4
歴史資料	2	0	1	0	1
和書	1	1	0	0	0
民族資料	0	0	0	0	0
東洋	絵画	3	3		
	書跡	1	1		
	彫刻	0	0		
	金工	0	0		
	陶磁	2	2		
	漆工	1	1		
	染織	1	1		
	考古	4	4		
	民族	0	0		
法隆寺献納宝物	0	0			
黒田記念館収蔵品	0	0			
館史資料(収蔵品外)	1	1			

※東京国立博物館()内は考古相互貸借経費、内数。

1-(3)-② 修理概況

【東京国立博物館】 (78件)

〈絵画〉(8件)

- 1 ○列品番号 A-56
○名称 牧馬図屏風(ぼくばずびょうぶ)
○指定 重文
○指定年月 平成17年(2005)6月9日 絵第2014号
○時代 安土桃山時代
○年代世紀 16c
○品質 紙本着色
○員数 6曲1双
○寸法等 156.6×342.5 cm
○施工会社 榎岡墨光堂
○修理内容 1. 屏風装を解体する。2. 絵具層の剥落止めを行なう。3. 表打ちを行ない、画面を保護する。4. 旧裏打ち紙、補紙を除去する。5. 欠損部に補紙を、亀裂部分に補強紙をあてる。6. 補紙に補彩を行なう。7. 新規裏打ちを行なう。8. 屏風下地を新調し、下地に本紙、裂、裏貼紙を貼り込む。9. 製木や金具を新調する。(平成26年度は②の途中まで、平成27年度は⑦の途中まで)
- 2 ○列品番号 A-122
○名称 藤・牡丹・楓図(ふじ ぼたん かえです)
○時代 江戸
○年代世紀 17c
○品質 絹本着色
○員数 3幅
○寸法等 109.0×37.8 cm
○施工会社 榎半田九清堂
○修理内容 1. 表装を解体する。2. 剥落止めを施し、汚れを除去する。3. 旧裏打ち紙を除去し、本紙の欠損部の補綴を行なう。4. 新規裏打ちを行ない、折れ伏せを入れる。5. 新規補綴部分に補彩を施す。6. 表装裂、軸首は可能な限り再使用し、掛幅装に仕立てる。7. 桐製太巻添軸、包裂、桐製保存箱を新調する。(平成25年度は2まで)
- 3 ○列品番号 A-9972
○名称 鷹見泉石像(たかみせんせきぞう)
○指定 国宝
○指定年月 昭和26年(1951)6月9日
○時代 江戸
○年代世紀 天保8年(1837)
○品質 絹本着色
○員数 1幅
○寸法等 本紙 縦115.0 横57.2、表具 縦190.7 横69.2 cm
○施工会社 榎半田九清堂
○修理内容 1. 表装を解体する。2. 剥落止めを施し、汚れを除去する。3. 旧裏打ち紙を除去する。4. 新規裏打ちを行ない、折れ伏せを入れる。5. 表装裂、軸首は可能な限り再使用し、掛幅装に仕立てる。6. 桐製太巻添軸、包裂、桐製保存箱を新調する。(平成25年度は2まで)
- 4 ○列品番号 A-11180
○名称 山水図(さんすいず)
○時代 江戸時代
○年代世紀 17c
○品質 紙本墨画淡彩
○員数 2幅
○寸法等 各119.2×55.0 cm
○施工会社 アソシエイトフェロー
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 旧裏打ち紙を除去する。4. 欠失部に補修紙を施す。5. 新規裏打ちを行ない、折れ伏せをする。6. 補紙部分に地色合わせの補彩をする。7. 上下裂地は新調、一文字・中廻しは再使用する。8. 太巻添軸、保存箱を新調する。(平成26年度は④の途中まで)
- 5 ○列品番号 A-11182
○名称 林和靖図(りんなせいず)
○時代 江戸時代
○年代世紀 17c
○品質 紙本墨画淡彩
○員数 1幅
○寸法等 119.2×55.0 cm
○施工会社 アソシエイトフェロー
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 旧裏打ち紙を除去する。4. 欠失部に補修紙を施す。5. 新規裏打ちを行ない、折れ伏せをする。6. 補紙部分に地色合わせの補彩をする。7. 上下裂地は新調、一文字・中廻しは再使用する。8. 太巻添軸、保存箱を新調する。(平成26年度は④の途中まで)
- 6 ○列品番号 A-12087
○名称 坪内老大人像画稿(つぼうちろうたいじんぞうがこう)
○時代 江戸
○年代世紀 文政元年(1818)
○品質 紙本墨画淡彩
○員数 1幅
○寸法等 本紙 縦82.0 横74.4、表具 縦145.0 横82.5 cm
○施工会社 アソシエイトフェロー、国宝修理装こう師連盟関東支部
○修理内容 1. 表装を解体する。2. 剥落止めを施し、汚れを除去する。3. 旧裏打ち紙を除去し、本紙の欠損部の補綴を行なう。4. 新規裏打ちを行ない、折れ伏せを入れる。5. 補紙に補彩を施す。6. 表装裂、軸首を新調し、掛幅装に仕立てる。7. 桐製太巻添軸、包裂、桐製保存箱を新調する。(平成25年度は2まで)
- 7 ○列品番号 A-12336
○名称 坪内老大人像(つぼうちろうたいじんぞう)
○時代 江戸

- 年代世紀 19c
 ○品 質 絹本着色
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙 縦149.7 横73.3、表具 縦196.8 横76.7 cm/ 附本紙 縦136.3 横62.4、附表具 縦191.8 横73.0 cm
 ○施工会社 アソシエイトフェロー、国宝修理装こう師連盟関東支部
 ○修理内容 1. 表装を解体する。2. 剥落止めを施し、汚れを除去する。3. 旧裏打ち紙を除去し、本紙の欠損部の補綴を行なう。4. 新規裏打ちを行ない、折れ伏せを入れる。5. 新規補綴部分に補綴を施す。6. 表装裂、軸首を新調し、掛幅装に仕立てる。7. 桐製太巻添軸、包裂、桐製保存箱を新調する。(平成25年度は2まで)
- 8 ○列品番号 A-12105
 ○名 称 釈迦三尊像(しゃかさんぞんぞう)
 ○時 代 南北朝~室町
 ○年代世紀 14~15c
 ○品 質 絹本着色
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 135.7×60.4 cm
 ○施工会社 榎岡墨光堂
 ○修理内容 1. 表装を解体する。2. 剥落止めを施し、汚れを除去する。3. 旧裏打ち紙を除去し、料絹の欠損部に補綴を行なう。4. 新規裏打ちを行ない、折れ伏せを入れる。5. 新規補綴部分に補綴を施す。6. 表装裂、軸首を新調し、掛幅装に仕立てる。7. 桐製太巻添軸、包裂、桐製保存箱を新調する。(平成25年度は2まで)
- 〈東洋絵画〉(3件)**
- 9 ○列品番号 TA-160
 ○名 称 二菩薩立像(にぼさつりゅうぞう)
 ○時 代 五代~北宋
 ○年代世紀 10c
 ○品 質 麻布着色
 ○員 数 1面
 ○寸 法 等 153.0×126.1 cm
 ○施工会社 榎テラ
 ○修理内容 1. 作品を額装から外す。2. クリーニングを行なう。3. 変形修正を行なう。4. アクリル板付の額を新調し「プレッシャーマウント方式」で作品を固定し、額装する。(平成25年度は4. の途中まで) 1. 作品を額装から外す。2. クリーニングを行なう。3. 変形修正を行なう。4. アクリル板付の額を新調し「プレッシャーマウント方式」で作品を固定し、額装する。(平成25年度は4. の途中まで)
- 10 ○列品番号 TA-618
 ○名 称 放猿図(ほうとくず)
 ○指 定 重文
 ○指定年月 昭和34年(1959)6月27日 絵第1455号
 ○時 代 元時代
 ○年代世紀 14c
 ○品 質 絹本墨画
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙108.0×46.5 cm
 ○施工会社 榎半田九清堂
 ○修理内容 1. 解体し、クリーニングする。2. 旧裏打ち紙除去、欠損部に補綴をして、新規裏打ち、折れ伏せを行ない、補綴に補綴する。3. 上下裂は新調、一文字・中廻し、軸首は再使用する。4. 太巻添軸、保存箱を新調する。(平成26年度は②の途中まで)
- 11 ○列品番号 TA-642
 ○名 称 雪景山水図(せつけいさんすいず)
 ○指 定 国宝
 ○指定年月 平成19年(2007)6月8日
 ○時 代 南宋~元
 ○年代世紀 13~14c
 ○品 質 紙本墨画淡彩
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙 縦110.3 横49.7 cm
 ○施工会社 榎岡墨光堂
 ○修理内容 1. 解体する。2. 裏打ち等補綴を施す。3. 表装裂、軸首を再使用し、掛幅装に仕立てる。4. 桐製保存箱、桐製太巻添軸、包裂、布貼帙等を新調する。(平成25年度は2の途中まで)
- 〈書跡〉(1件)**
- 12 ○列品番号 B-2936
 ○名 称 拾遺抄切(しゅういしょうぎれ)
 ○時 代 平安時代
 ○年代世紀 12c
 ○品 質 彩箋墨書
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙 縦21.2 横12.7 cm
 ○施工会社 榎岡墨光堂
 ○修理内容 1. 表装を解体する。2. 剥落止めを行なう。3. クリーニングする。4. 旧裏打ち紙を除去し、新規に裏打ちを行なう。5. 表装裂などを新調し、軸首を再使用し、もとの形に仕立てる。6. 太巻添軸、保存箱を新調する。(平成26年度は4. の途中まで)
- 〈東洋書跡〉(1件)**
- 13 ○列品番号 TB-1445
 ○名 称 楷書四字額「丹宸冊府」(かいはしよじがくたんしんさつぷ)
 ○時 代 清
 ○年代世紀 19c
 ○品 質 紙本墨書
 ○員 数 1面
 ○寸 法 等 本紙 縦56.3 横159.5 cm
 ○施工会社 榎岡墨光堂
 ○修理内容 1. 額装を解体する。2. 剥落止めを施し、汚れを除去する。3. 旧裏打ち紙を除去し、本紙料絹の欠損部の補綴を行なう。4. 新規裏打ちを行ない、折れ伏せを入れる。5. 補綴に補綴を施す。6. 縁木を新調し、額装に仕立てる。7. 中性紙保存箱を新調する。(平成25年度は2まで)

《彫刻》(1件)

- 14 ○列品番号 C-1018
○名称 独尊磚仏(如来坐像) (どくそんせんぶつ (によらいざどう))
○時代 奈良時代
○年代世紀 8c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高5.0 幅3.5 厚1.8 cm
○施工会社 巖山隆司
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。

《金工》(3件)

- 15 ○列品番号 E-14970
○名称 白磁合子(はくじごうす)
○時代 平安
○年代世紀 12c
○品質 磁製
○員数 1個
○寸法等 高4.2 口径8.1 cm
○施工会社 榎東都文化財保存研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)
- 16 ○列品番号 E-15159
○名称 白磁合子蓋(はくじごうすふた)
○時代 平安
○年代世紀 12c
○品質 磁製
○員数 1個
○寸法等 高1.7 口径8.3 cm
○施工会社 巖山隆司
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)
- 17 ○列品番号 E-15248
○名称 カワラケ(かわらけ)
○時代 平安時代～鎌倉時代
○年代世紀 11～14c
○品質 陶製
○員数 1括
○寸法等 高1.5～2.5 口径7.0～12.0 cm
○施工会社 南武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成26年度は2まで)

《刀剣》(3件)

- 18 ○列品番号 F-15812
○名称 太刀 銘 恒遠(たち めい つねとう)
○時代 平安時代
○年代世紀 12c
○品質 鍛鉄製
○員数 1口
○寸法等 刃長78.0 反2.6 cm
○施工会社 小野博
○修理内容 1. 全身を研磨する(下地研ぎ)。2. 白鞘を新規製作する。3. 全身を研磨する(仕上げ研ぎ)。(平成26年度は2まで)
- 19 ○列品番号 F-17053
○名称 短刀 銘 備州長船住長義 正平十七年十月日(たんとう めい)
○時代 南北朝
○年代世紀 正平17年(1362)
○品質 鍛鉄製
○員数 1口
○寸法等 刃長27.6 反り0.2 cm
○施工会社 本阿彌道弘
○修理内容 1. 全身を研磨する。2. 白鞘を製作する。(平成25年度は1の途中まで)
- 20 ○列品番号 F-20094-2
○名称 脇指 銘 筒井越中守藤原輝邦入道紀充 南無妙法蓮華経行年七十七歳(わきざし めい なんぶにすまうかなぼうひょうえのじょうまさつぐ)
○時代 江戸
○年代世紀 18c
○品質 鍛鉄製
○員数 1口
○寸法等 刃長43.1 反1.0 cm
○施工会社 本阿彌道弘
○修理内容 1. 全身を研磨する。2. 白鞘の搔き入れを行う。(平成25年度は1の途中まで)

《陶磁》(3件)

- 21 ○列品番号 G-32
○名称 銚絵観鴈角皿(さびえかんおうすかくざら) 尾形光琳・深省合作
○指定 重要文化財
○指定年月 昭和58年(1983)6月6日 工第2487号
○時代 江戸
○年代世紀 18c

- 品 質 陶製
 ○員 数 1 枚
 ○寸 法 等 高 2.9 径 22.2 cm
 ○施工会社 蘭山隆司
 ○修理内容 1. オーバーペイントを除去し、破損箇所を解体する。2. 破損箇所を接合する。3. 欠失部分がある場合は補填する。4. 接合および補填箇所に最低限の色合わせを行なう。(平成 25 年度は 1 まで)
- 22 ○列品番号 G-214
 ○名 称 瑠璃地金彩唐草文仙蓋瓶(るりじきんさいからくさもんせんさんびん) 四代高橋道八作
 ○時 代 明治
 ○年代世紀 明治 6 年(1873)
 ○品 質 磁製
 ○員 数 2 口の内 1 口
 ○寸 法 等 高 27.9 口径 5.8 底径 8.6 cm
 ○施工会社 陶磁器修復たま工房
 ○修理内容 1. オーバーペイントを除去し、折損箇所を解体する。2. 折損箇所を再接合する。3. 欠失がある場合は補填する。4. 接合および補填箇所に最低限の色合わせを行なう。
- 23 ○列品番号 G-4218
 ○名 称 大燈籠(だいとうろう)
 ○時 代 明治時代
 ○年代世紀 明治 41 年(1908)
 ○品 質 陶製
 ○員 数 1 基
 ○寸 法 等 総高 130.0 基礎高 14.0 竿高 53.0 火袋高 66.0 傘高 47.0 宝珠高 67.0 cm
 ○施工会社 文化財修理工房明舎
 ○修理内容 1. クリーニングする。2. 亀裂を補強する。3. 欠失部に補填、補彩を行なう。4. 補強材を設置する。5. もとの位置にある土台部分をクリーニングする。6. もとの位置でもとの形に組み立て直す。(平成 26 年度は 2 まで、平成 27 年度は 4 まで)

〈東洋陶磁〉(2 件)

- 24 ○列品番号 TG-959
 ○名 称 青花龍文大皿(せいかりゅうもんおおざら) 景德鎮窯
 ○時 代 明
 ○年代世紀 嘉靖年間(1522~66 年)
 ○品 質 磁製
 ○員 数 1 枚
 ○寸 法 等 高 10.5 径 52.9 高台径 30.9 cm
 ○施工会社 ますぶち工房
 ○修理内容 1. クリーニングする。2. 破損箇所を接合する。3. 破損箇所に欠失がある場合は補填する。4. 接合および補填箇所に最低限の色合わせを行なう。(平成 25 年度は 2 の途中まで)
- 25 ○列品番号 TG-1014
 ○名 称 粉彩牡丹文大瓶(ふんさいぼたんもんたいへい) 景德鎮窯
 ○時 代 清
 ○年代世紀 雍正年間(1723~35 年)
 ○品 質 磁製
 ○員 数 1 口
 ○寸 法 等 高 51.1 口径 12.0 底径 16.2 cm
 ○施工会社 ますぶち工房
 ○修理内容 1. 旧修理のオーバーペイントを除去する。2. 解体する。3. 再接合する。4. 欠失部分へ状況に応じて補填する。5. 接合・補填部分に補彩する。(平成 25 年度は 2 の途中まで)

〈漆工〉(2 件)

- 26 ○列品番号 H-438
 ○名 称 蓬萊沈金手箱(ほうらいちんきんてばこ)
 ○時 代 室町
 ○年代世紀 16c
 ○品 質 木製漆塗
 ○員 数 1 合
 ○寸 法 等 総高 24.5 幅 34.0 奥行 22.8 cm
 ○施工会社 (株)小西美術工藝社
 ○修理内容 1. クリーニングする。2. 塗膜の浮きをおさえる。3. 亀裂箇所に補填、補彩を施す。(平成 25 年度は 2 の途中まで)
- 27 ○列品番号 H-3502
 ○名 称 葵牡丹紋竹蔭絵女乗物(あおいぼたんもんたけまきえおんなのもの)
 ○時 代 江戸時代
 ○年代世紀 寛文 4 年 (1664)
 ○品 質 木製漆塗
 ○員 数 1 挺
 ○寸 法 等 駕籠 127.3×90.9×121.2 担ぎ棒 長 454.5cm
 ○施工会社 (株)修護
 ○修理内容 1. (絵画) 絵画面の付着物を除去し、必要に応じて表打ちなどの養生を絵画面に行なう。2. (絵画・漆工) 絵画面および金箔紙を乗物内部から取り外す。3. (絵画) 絵画面の汚れを除去し、剥落止めを行ない、旧裏打ち紙を除去する。また、類似した補修材を作製して欠失箇所に補填し、染色した楮紙を用いて肌裏打ちを行なう。4. (絵画) 増裏打ちを行なった後、補填箇所に補彩を施す。5. (漆工) 乗物の内外装、担ぎ棒の補修を行なう(必要に応じて金物、部材を取り外す)。6. (絵画) 乗物内部に 3 層程度の下貼をして下地を整え、補修を終えた絵画面および金箔紙を原状通りに貼り戻す。7. (漆工) 染織品の破損箇所を修繕し、金物および木部材を原状通りに取り付ける。8. (絵画・漆工) 木綿製のカバーを作製し、取り付ける。(平成 26 年度は絵画が 3 の一部終了まで、漆工は 5 の途中まで)

〈東洋漆工〉(1 件)

- 28 ○列品番号 TH-439
 ○名 称 朱漆化粧筆筒(しゅううるしけしょうだんす)
 ○時 代 朝鮮

○年代世紀 19～20c
○品 質 木製漆塗
○寸 法 等 高 27.0 幅 23.0 奥行 32.5 cm
○員 数 1 基
○施工会社 ㈱小西美術工藝社
○修理内容

1. クリーニングする。2. 脚部の欠失部分を木材で復元し、色合わせをする。3. 虫損、亀裂箇所を補填、補強し、塗膜の浮きをおさえる。4. 外れた部材を元に戻す。5. 保存箱、包装を新調する。(平成 25 年度は 3 まで)

《染織》(12 件)

- 29 ○列品番号 I-4072
○名 称 黒紅地熨斗藤模様繡箔小袖(くろべにじのしふじもよう)
○指 定 重文
○指定年月 昭和 57 年(1982)6 月 5 日 工第 2480 号
○時 代 江戸時代
○年代世紀 17c
○品 質 絹製、綸子地に刺繍、絞り、摺箔
○員 数 1 領
○寸 法 等 丈 140.8 衿 64.0 cm
○施工会社 ㈱松鶴堂
○修理内容 1. もとの縫い目に留意しながら解体し、表裂と裏裂を分ける。2. 糸印や穴をつまんだ部分など、後世の使用で追加された部分については、作品に支障がない範囲で除去する。3. 白地の部分に当てる似寄りの綸子地を新調し、横切れの箇所之地模様を合わせながら裏から綸子をあてて縫い留める。4. 肩山の切れなど、黒紅地の部分の横切れについては、似寄りの綸子地を黒紅地に染めた後、裏から当てて縫い留める。5. 裏地を新調し、中綿を入れて、小袖の状態に戻す。(平成 26 年度は 2 の途中まで。平成 27 年度は 4 の途中まで)
- 30 ○列品番号 未登録品
○名 称 上代製(ガラス多重挟み)(じょうだいぎれ(がらすたじゅうばさみ))
○時 代 奈良時代 他
○年代世紀 8c 他
○品 質 絹製、刺繍 他
○員 数 1 括
○寸 法 等 14.5×10.5 cm 他
○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れなどを除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. 小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする(検討を要する)。5. マット装にする。
- 31 ○列品番号 I-337-178
○名 称 黄地亀甲紫花葉文錦幡足垂端飾(きじきこうつなぎかようもんにしきばんそくすいたんかざり)
○時 代 奈良時代
○年代世紀 757 年
○品 質 絹・紙(芯)製
○員 数 1 枚
○寸 法 等 13.1×11.5 cm
○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-179 とともに低加圧式マット装にする。
- 32 ○列品番号 I-337-179
○名 称 緑地唐花獅子文錦幡足垂端飾(みどりじからはなしもんきんばんそくすいたんかざりざんけつ)
○時 代 奈良時代
○年代世紀 757 年
○品 質 絹・紙(芯)製
○員 数 1 枚
○寸 法 等 12.4×11.7 cm
○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-178 とともに低加圧式マット装にする。
- 33 ○列品番号 I-337-180
○名 称 淡紅地花鳥文錦幡足垂端飾(うすべにじかちようもんにしきばんそくすいたんかざり)
○時 代 奈良時代
○年代世紀 757 年
○品 質 絹・紙(芯)製
○員 数 1 枚
○寸 法 等 12.3×11.6 cm
○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-181 とともに低加圧式マット装にする。
- 34 ○列品番号 I-337-181
○名 称 黄緑地鹿雲文錦幡足垂端飾(きみどりじしかうんもんにしきばんそくすいたんかざり)
○時 代 奈良時代
○年代世紀 757 年
○品 質 絹・紙(芯)製
○員 数 1 枚
○寸 法 等 13.0×11.8 cm
○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-180 とともに低加圧式マット装にする。
- 35 ○列品番号 I-337-182
○名 称 紫地唐花文錦幡足垂端飾(むらさきじからはなもんにしきばんそくすいたんかざり)
○時 代 奈良時代
○年代世紀 757 年
○品 質 絹・紙(芯)製
○員 数 1 枚

- 寸法等 11.5×10.8 cm
 ○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
 ○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-183 とともに低加圧式マット装にする。
- 36 ○列品番号 I-337-183
 ○名称 黄地亀甲繫花葉文錦幡足垂端飾 (きじきっこうつなぎかようもんにしきばんそくすいたんかざり)
 ○時代 奈良時代
 ○年代世紀 757年
 ○品質 絹・紙(芯)製
 ○員数 1枚
 ○寸法等 13.5×12.0 cm
 ○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
 ○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-182 とともに低加圧式マット装にする。
- 37 ○列品番号 I-337-192
 ○名称 紫地唐花獅子文錦幡足垂端飾 (むらさきじからはなししもんにしきばんそくすいたんかざり)
 ○時代 奈良時代
 ○年代世紀 757年
 ○品質 絹・紙(芯)製
 ○員数 1枚
 ○寸法等 13.3×11.2 cm
 ○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
 ○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-193 とともに低加圧式マット装にする。
- 38 ○列品番号 I-337-193
 ○名称 緑地錦幡足垂端飾 (みどりじにしきばんそくすいたんかざり)
 ○時代 奈良時代
 ○年代世紀 757年
 ○品質 絹・和紙製
 ○員数 1枚
 ○寸法等 12.3×11.0 cm
 ○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
 ○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-192 とともに低加圧式マット装にする。
- 39 ○列品番号 I-337-194
 ○名称 長斑花文錦幡足垂端飾 (ちょうはんかもんにしきばんそくすいたんかざり)
 ○時代 奈良時代
 ○年代世紀 757年
 ○品質 絹・紙(芯)製
 ○員数 1枚
 ○寸法等 13.0×10.5.5 cm
 ○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
 ○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-195 とともに低加圧式マット装にする。
- 40 ○列品番号 I-337-195
 ○名称 黄緑地唐花文錦幡足垂端飾 (きみどりじからはなもんにしきばんそくすいたんかざり)
 ○時代 奈良時代
 ○年代世紀 757年
 ○品質 絹・紙(芯)製
 ○員数 1枚
 ○寸法等 13.1×11.8 cm
 ○施工会社 澤田むつ代、三田覚之、アソシエイトフェロー
 ○修理内容 1. ガラスを外して裂を取り出す。2. 汚れ等を除去する。3. 糸目を揃えながら、文様を合わせて形を整える。4. I-337-194 とともに低加圧式マット装にする。

〈東洋染織〉(1件)

- 41 ○列品番号 TI-418-3
 ○名称 コート 金茶色縹子地花唐草文様刺繍(きんちやいろしゆすじはなからくさもんようししゅう)
 ○年代世紀 19c
 ○品質 絹、襦子地に絹糸と金銀モール糸で刺繍
 ○員数 1着
 ○寸法等 丈88.5 肩幅34.5 袖長49.5 cm
 ○施工会社 株式会社 榎染技連
 ○修理内容 1. 部分的に解体する。2. 損傷箇所にも補修裂をあてて縫いとめる。3. 可能な箇所についてシミ抜きをする。4. 刺繍のほつれをとめる。5. しわをのばす。6. 保存箱、包装(羽二重)、布団を新調する。(平成25年度は1まで)

〈考古〉(31件)

- 42 ○列品番号 J-20
 ○名称 須恵器 ハソウ(すえき はそう)
 ○時代 古墳
 ○年代世紀 6c
 ○品質 陶製
 ○員数 1個
 ○寸法等 高21.0 口径17.8 cm
 ○施工会社 株式会社 榎東都文化財保存研究所
 ○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所にも補彩する。(平成25年度は2まで)
- 43 ○列品番号 J-21
 ○名称 須恵器 ハソウ(すえき はそう)
 ○時代 古墳
 ○年代世紀 6c
 ○品質 陶製

- 員数 1個
○寸法等 高14.0 口径12.1 cm
○施工会社 榎東都文化財保存研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)
- 44 ○列品番号 J-38
○名称 須恵器 有蓋脚付長頸壺(すえき ゆうがいきやくつきちようけいこ)
○時代 古墳
○年代世紀 6c
○品質 陶製
○員数 1個
○寸法等 高28.5 胴径15.0 cm
○施工会社 藤山隆司
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)
- 45 ○列品番号 J-43
○名称 須恵器 脚付長頸壺(すえき きやくつきちようけいこ)
○時代 古墳
○年代世紀 6c
○品質 陶製
○員数 1個
○寸法等 高25.9 胴径14.0 口径8.8 cm
○施工会社 南武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)
- 46 ○列品番号 J-57
○名称 須恵器 平瓶(すえき ひらべ)
○時代 古墳
○年代世紀 6c
○品質 陶製
○員数 1個
○寸法等 高13.1 長15.0 口径5.7 cm
○施工会社 南武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)
- 47 ○列品番号 J-598
○名称 刀子(とうず)
○時代 古墳時代
○年代世紀 6c
○品質 鉄製
○員数 1本
○寸法等 長10.7 幅1.3 cm
○施工会社 榎東都文化財保存研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 脱塩処理する。3. 強化する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。
- 48 ○列品番号 J-1521
○名称 壺形土器(つぼがたどき)
○時代 縄文時代(晩期)
○年代世紀 前1000~前400年
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高9.6 胴部最大径7.2 cm
○施工会社 南武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 補填、復元する。3. 補填箇所を補彩する。
- 49 ○列品番号 J-1540
○名称 深鉢形土器(ふかばちがたどき)
○時代 縄文 後期
○年代世紀 前2000~前1000年
○品質 土製
○員数 1本
○寸法等 高21.0 口径13.0 cm
○施工会社 南武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)
- 50 ○列品番号 J-1991
○名称 壺形土器(つぼがたどき)
○時代 弥生 後期
○年代世紀 1~3c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高17.7 口径11.0 cm
○施工会社 南武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)
- 51 ○列品番号 J-4136
○名称 鐔(つば)
○時代 古墳
○年代世紀 6c
○品質 鉄製
○員数 2個

- 施工会社 有武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 脱塩処理する。3. 強化する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所にも補彩する。(平成25年度は2まで)
- 52 ○列品番号 J-7663
○名称 須恵器 脚付壺 (すえき きやくつきわん)
○時代 古墳時代
○年代世紀 6c
○品質 陶製
○員数 1個
○寸法等 高11.7 口径12.4 脚径11.2cm
○施工会社 有武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 補填、復元する。3. 補填箇所にも補彩する。
- 53 ○列品番号 J-7672
○名称 土師器 長頸壺 (はじき ちょうけいこ)
○時代 古墳時代
○年代世紀 6c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高21.3 口径10.7 胴径15.0cm
○施工会社 有武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 旧修理材料の余剰分を除去する。3. 欠失部を補填、復元する。4. 補填箇所にも補彩する。
- 54 ○列品番号 J-8054
○名称 内耳土器 (ないじどき)
○年代世紀 14~16c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高10.0 口径17.5×25.0cm
○施工会社 株式会社文化財保存研究所
○修理内容 1. 解体する。2. 付着物を保護しながらクリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所にも補彩する。(平成25年度は2まで)
- 55 ○列品番号 J-8057
○名称 鉢形土器 (はちがたどき)
○時代 オホーツク文化併行期
○年代世紀 6~8c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高12.5 口径11.0cm
○施工会社 株式会社文化財保存研究所
○修理内容 1. 解体する。2. 付着物を保護しながらクリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所にも補彩する。(平成25年度は2まで)
- 56 ○列品番号 J-12002
○名称 注口付壺形土器 (ちゅうこうつきつぼがたどき)
○時代 縄文後期
○年代世紀 前2000~前1000年
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高24.0cm
○施工会社 株式会社文化財保存研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所にも補彩する。(平成25年度は2まで)
- 57 ○列品番号 J-22925
○名称 壺形土器 (つぼがたどき)
○時代 縄文時代中期
○年代世紀 前3000~前2000年
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高11.6 口径9.6 底径7.2cm
○施工会社 有武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 補填、復元する。3. 補填箇所にも補彩する。
- 58 ○列品番号 J-22931
○名称 触角式柄頭銅剣 (しょっかくしきつかがしらどうけん)
○時代 弥生 中期
○年代世紀 前2~前1c
○品質 青銅製
○員数 1本
○寸法等 長48.6 柄頭幅8.6cm
○施工会社 飛鳥工房
○修理内容 1. クリーニングする。2. 強化する。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所にも補彩する。(平成25年度は2まで)
- 59 ○列品番号 J-22943
○名称 壺形土器 (つぼがたどき)
○時代 弥生時代中期
○年代世紀 前200~前100年
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高33.6 底径10.1cm
○施工会社 有武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所にも補彩する。

- 60 ○列品番号 J-23059
○名称 甕 (かめ)
○時代 弥生時代後期
○年代世紀 1~3c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高19.2 口径5.3 cm
○施工会社 南武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 補填、復元する。3. 補填箇所に補彩する。
- 61 ○列品番号 J-34374
○名称 河童形土偶 (かっぱがたどき)
○時代 縄文時代中期
○年代世紀 前3000~前2000年
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高30.0 幅19.1 厚8.7 cm
○施工会社 南武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所に補彩する。(平成26年度は2まで)
- 62 ○列品番号 J-36636-4
○名称 土師器 小型埴 (はじき こがたかん)
○時代 古墳時代
○年代世紀 4~5c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高7.4 口径8.0 胴径7.3 cm
○施工会社 株東都文化財保存研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 欠失部を補填、復元する。3. 補填箇所に補彩する。
- 63 ○列品番号 J-36636-9
○名称 土師器 甗 (はじき こしき)
○時代 古墳時代
○年代世紀 4~5c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高12.0 口径18.0 cm
○施工会社 株東都文化財保存研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 亀裂の補填とともに表面を強化する。3. 欠失部を補填、復元する。4. 補填箇所に補彩する。
- 64 ○列品番号 J-36636-18
○名称 土師器 埴 (はじき かん)
○時代 古墳時代
○年代世紀 4~5c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高11.0 口径7.0 胴径11.0 底径5.0 cm
○施工会社 株東都文化財保存研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 表面を強化する。3. 欠失部を補填、復元する。4. 補填箇所に補彩する。
- 65 ○列品番号 J-36636-19
○名称 土師器 甗 (はじき こしき)
○時代 古墳時代
○年代世紀 4~5c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高10.5 口径15.0 底径5.0 cm
○施工会社 株東都文化財保存研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 欠失部を補填、復元する。3. 補填箇所に補彩する。
- 66 ○列品番号 J-36636-20
○名称 土師器 甗 (はじき こしき)
○時代 古墳時代
○年代世紀 4~5c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高13.9 口径15.3 胴径15.7 底径5.5 cm
○施工会社 株東都文化財保存研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 亀裂の補填とともに表面を強化する。3. 欠失部を補填、復元する。4. 補填箇所に補彩する。
- 67 ○列品番号 J-36636-32
○名称 土師器 埴 (はじき かん)
○時代 古墳時代
○年代世紀 4~5c
○品質 土製
○員数 1個
○寸法等 高5.4 口径7.8 胴径9.6 cm
○施工会社 株東都文化財保存研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 欠失部を補填、復元する。3. 補填箇所に補彩する。

- 68 ○列品番号 J-36788
 ○名称 鉄戈 (てつか)
 ○時代 弥生 中期
 ○年代世紀 前2～前1c
 ○品質 鉄製
 ○員数 1本
 ○寸法等 長23.6 胡幅6.5 cm
 ○施工会社 (有)武蔵野文化財修復研究所
 ○修理内容 1. クリーニングする。2. 脱塩処理する。3. 強化する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所ニ補彩する。(平成25年度は2まで)
- 69 ○列品番号 J-37538
 ○名称 深鉢形土器 (ふかばちがたどき)
 ○時代 縄文時代中期
 ○年代世紀 前3000～前2000年
 ○品質 土製
 ○員数 1個
 ○寸法等 高25.5 cm
 ○施工会社 (有)武蔵野文化財修復研究所
 ○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所ニ補彩する。(平成26年度は2まで)
- 70 ○列品番号 J-38864-4
 ○名称 土師器 高坏形土器 (はじき たかつきがたどき)
 ○時代 古墳時代
 ○年代世紀 3～4c
 ○品質 土製
 ○員数 1個
 ○寸法等 高9.0～12.0 口径11.5～22.5 cm
 ○施工会社 (株)東都文化財保存研究所
 ○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所ニ補彩する。
- 71 ○列品番号 J-38868
 ○名称 土師器 壺形土器 (はじき つぼがたどき)
 ○時代 古墳時代
 ○年代世紀 4c
 ○品質 土製
 ○員数 1本
 ○寸法等 高13.5 口径9.5 cm
 ○施工会社 (株)東都文化財保存研究所
 ○修理内容 1. 解体する。2. クリーニングする。3. 接合する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所ニ補彩する。
- 72 ○列品番号 J-39374
 ○名称 漆塗籠棺残片 (うるしぬりかごかんざんぺん)
 ○時代 古墳(飛鳥)時代
 ○年代世紀 7c
 ○品質 籠製漆塗
 ○員数 1括
 ○寸法等 厚1、棧部約1.5 cm
 ○施工会社 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
 ○修理内容 1. 構造調査、成分分析を行なう。2. 樹脂含浸・強化・乾燥を行なう。3. 表面を強化する。(平成26年度は①の途中まで、平成27年度は②の途中まで)
- 〔東洋考古〕(4件)**
- 73 ○列品番号 TJ-997
 ○名称 鉄鉞戟(てつえつげき)
 ○時代 漢
 ○年代世紀 前2～後3c
 ○品質 鉄鍛造
 ○員数 1本
 ○寸法等 長43.3 幅15.3 cm
 ○施工会社 (株)東都文化財保存研究所
 ○修理内容 1. クリーニングする。2. 脱塩処理する。3. 強化する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所ニ補彩する。(平成25年度は2まで)
- 74 ○列品番号 TJ-998
 ○名称 鉄鉞戟(てつえつげき)
 ○時代 漢
 ○年代世紀 前2～後3c
 ○品質 鉄鍛造
 ○員数 1本
 ○寸法等 長43.3 幅15.3 cm
 ○施工会社 (株)東都文化財保存研究所
 ○修理内容 1. クリーニングする。2. 脱塩処理する。3. 強化する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所ニ補彩する。(平成25年度は2まで)
- 75 ○列品番号 TJ-2209
 ○名称 鉄鉞戟(てつえつげき)
 ○時代 漢
 ○年代世紀 前2～後3c
 ○品質 鉄鍛造
 ○員数 1本
 ○寸法等 長43.3 幅15.3 cm
 ○施工会社 (株)東都文化財保存研究所
 ○修理内容 1. クリーニングする。2. 脱塩処理する。3. 強化する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所ニ補彩する。(平成25年度は2まで)

- 76 ○列品番号 TJ-2224
○名称 鉄剣(てっけん)
○時代 前漢
○年代世紀 前2~前1c
○品質 鉄製、格：青銅製
○員数 1本
○寸法等 長106.9 幅4.8 cm
○施工会社 株式会社 株東都文化財保存研究所
○修理内容 1. クリーニングする。2. 脱塩処理する。3. 強化する。4. 補填、復元する。5. 補填箇所を補彩する。(平成25年度は2まで)

〈館資〉(1件)

- 77 ○列品番号 館資 671
○名称 重要雑録(じゅうようざつろく)
○時代 明治
○年代世紀 明治15年(1882)
○品質 紙本墨書・インク・鉛筆
○員数 1冊
○施工会社 株式会社 南東京修復保存センター
○修理内容 1. 冊子本を解装する。2. 各頁ごとに折れや皺をのます。3. 劣化が著しい箇所には両面より典拠貼紙による補強を行う。4. 欠失部分に渡き嵌めにて補紙を施す。5. 表紙は新調し、題簽、ラベルなどは再用する。6. 封筒や付箋は、補紙等を施し、元の場所に貼り付ける。7. 冊子本に仕立てる。

〈和書〉(1件)

- 78 ○列品番号 QA-4216
○名称 近江国図(おうみのくにず)
○時代 江戸
○年代世紀 19c
○品質 紙本着色、折仕立
○員数 1鋪
○寸法等 92.8×145.1 cm
○施工会社 株式会社 株墨仁堂
○修理内容 1. 本紙の剥落止めを行った後、裏打ち紙を除去する。2. 本紙の紙質に合わせた補修紙を作成し、欠損箇所に補紙を施す。3. 美濃紙にて裏打ちを行う。4. 表紙は補修して再使用する。5. もとの折り目で畳んで、表紙を取り付け、折り畳み装に仕立てる。

【京都国立博物館】(11件)

〈絵画〉(4件)

- 1 ○名称 病草紙(やまいのそうし)
○指定 国宝
○時代 平安時代(12世紀)
○品質 紙本着色
○員数 10面
○寸法等 縦25.9~26.0cm 横25.3~49.3cm
○施工会社 株式会社 岡墨光堂
○修理内容 1 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。2 台紙貼り装の解体を行う。3 膠水溶液にて絵具層の剥落止めを行う。4 浄化水にて本紙の汚れを除去する。5 布海苔を用い、養生紙にて表打ちを行う。6 旧肌裏紙及び旧補紙を除去する。7 調査に基づいて補修紙を作成し、料紙欠失箇所に補紙を行う。8 染薄美濃紙にて肌裏打ちを行い、表打ちの養生紙を除去する。9 軸首を5巻分新調する。10 美濃紙にて増裏打ちを行う。11 折れ伏せを入れ、折れを直す。12 美濃紙にて中裏打ちを行う。13 混合紙にて総裏打ちを行い、仮張りし乾燥させる。14 軸首を4巻分新調し、表紙裂、見返し紙を新調する。15 補紙の箇所に補紙を行う。16 隔及び軸巻紙を本紙料紙に合わせて作成し、本紙同様の裏打ちを施す。17 表紙裂及び見返しは、肌裏を打ち、合わせて表紙の形に仕立てる。18 本紙に、隔、軸巻紙、表紙を継ぎ、新調した軸首、中軸、紐等を取り付け巻装に仕上げる。19 桐製太巻添軸、桐製屋郎箱を新調し、本紙を納入する。(24年度より4ヶ年事業)
- 2 ○名称 地藏菩薩像(じぞうぼさつぞう)
○時代 南北朝時代(14世紀)
○品質 絹本着色
○員数 1幅
○寸法等 本紙縦105.4cm 本紙横56.6cm 総縦186.5cm 総横74.0cm
○施工会社 株式会社 松鶴堂
○修理内容 1 損傷状態について調査・撮影記録を行う。2 顔料剥落箇所に剥落止めを行う。3 表装を解装し、表装裂と本紙を外す。4 クリーニングを行う。5 折伏・旧肌裏紙の除去を行う。6 旧補絹を除去する。7 本紙欠失箇所に補絹を施す。8 薄美濃紙にて本紙に肌裏打ちを施す。9 美濃紙にて増裏打ちを施す。10 本紙の折損脆弱箇所に折伏せによる補強補修を施す。11 美濃紙にて2度目の増裏打ちを施す。12 補絹箇所に補彩を行う。13 表装裂地については相応しいものに新調する。14 表装裂地に肌裏打ち、増裏打ちを施し、一時仮張り乾燥させる。15 本紙・表装裂地を仮張りから外し、付廻しを行う。16 美濃紙にて中裏打ち、宇陀紙で総裏打ちを施し、上巻絹を施す。17 仮張りを行い、十分に乾燥させる。18 紐・軸木(上下一組)は新調、軸首は清浄にし再用し、軸装に仕立てる。19 包裂・桐太軸巻(木口詰)・桐屋郎箱・紙帙を新調する。20 完成後の写真撮影・記録を行い、修理報告書を作成する。(24年度より3ヶ年事業)
- 3 ○名称 紙本淡彩耕作図(しほんたんさいこうさくず)
○指定 重要文化財
○時代 江戸時代(17世紀)
○品質 紙本淡彩
○員数 6曲1双
○寸法等 本紙(各)縦151.0cm 横347.0cm
○施工会社 株式会社 岡墨光堂
○修理内容 1 修理前の調査・写真撮影を行う。2 金具、襲木を取り外し、本紙を下地骨から取り外す。3 クリーニングを行う。4 絵具の剥落止めを行う。5 肌裏紙を含む旧裏打ち紙を除去する。6 本紙欠失箇所に補修紙を補填する。7 肌裏打ちを行う。8 増裏打ちを行う。9 新たに補填した補修紙に地色補彩を施す。10 新調した下地骨に充分な下貼りを施す。11 本紙を屏風下地に張り付ける。12 大縁、小縁の裂を本紙の周囲に取り付ける。13 屏風裏面に雀型唐紙を貼る。14 新調した襲木を取り付け、隅金具、飾金具、散鉾を取り付ける。15 修理後の調査・写真撮影を行う。16 報告書を作成する。(26年度より3ヶ年事業)
- 4 ○名称 竹石図(ちくせきず)

- 時代 中国・明時代 (16世紀)
 ○品質 絹本墨画
 ○員数 1幅
 ○寸法等 本紙 縦 143.3cm 横 80.9cm
 ○施工会社 株式会社 光影堂
 ○修理内容 1 本紙の状態確認を行い、写真撮影をする。 2 掛軸装を解体し、本紙の肌裏紙以外の旧裏打紙を除去する。 3 濾過水を用いて本紙のクリーニングを行う。 4 本紙の肌裏紙を除去する。 5 本紙欠失箇所に電子線劣化絹で補絹を施す。 6 本紙の色調に合わせて、新たに肌裏紙を施す。 7 増裏打を行う。 8 表装裂地を新調し、肌裏を打つ。 9 折れが発生している箇所に折れ伏せを施す。 10 本紙と表装裂とを付け廻しする。 11 中裏打をする。 12 総裏打をする。 13 上下軸などを新調し、元のような袋表具装とする。 14 太巻添軸、屋郎箱を新調して、本軸を取める。 15 写真撮影をして、修理報告書を作成する。

<金工> (1件)

- 5 ○名称 刀 無銘 (名物島津正宗) (かたな むめい (めいぶつしまづまさむね))
 ○時代 鎌倉時代 (13~14世紀)
 ○品質 鉄・鍛造
 ○員数 1口
 ○寸法等 刃長 68.7cm
 ○施工会社 本阿彌道弘
 ○修理内容 1 刀身の状況に応じて、研磨作業の方針を定める。 2 白鞘より解体し、全体を洗浄する。 3 名倉砥で小さな錆を除去し、細名倉砥で、砥石目を一層細かくする。 4 内曇砥 (刃砥・地砥) を用い、細名倉砥の砥石目を完全に除去し、地肌と刃文の動きを整え、下地研磨を終える。 5 白鞘作成を鞆師に依頼する。 6 刀工の独自色が発揮される地肌を現すために、柔らかめの地艶砥から始め、順次堅めの地艶砥を用いる。 7 刃艶砥を用い、内曇砥の砥石目を除去する。本修理の要である「金肌拭い」を施す。 8 この間、刃文部が黒くなるので刃艶砥も用いて、刃文と地肌を整える。錆地も同様に整える。 9 帽子部分のなるめ作業を行う。竹の定規とへらを用い、厚めの刃艶砥で横手線を決める。帽子部分を、なるめ台に載せた薄い刃艶砥でなるめ、帽子部分を完成させる。 10 棟と錆地部分は、磨きへらと磨き棒を用いて、磨き仕上げを行う。 11 以上の作業を終えた後、全体の様子を確認し、研磨作業を終える。 12 修理前は全身のカット、修理後は全身・部分 (刃文) ・なかご両面などのカットを撮影する。(昨年度からの繰り越し事業)

<漆工> (1件)

- 6 ○名称 花鳥蒔絵螺鈿書筆筒 (かちょうまきえらでんしよたんず)
 ○時代 桃山時代 (16世紀)
 ○品質 木造、漆塗、蒔絵、螺鈿、金銅製金具
 ○員数 1基
 ○寸法等 幅 60.8cm 奥行 34.7cm 高 43.3cm
 ○施工会社 北村繁
 ○修理内容 1 修理前の写真撮影を行う。 2 作業中に剥落の恐れがある螺鈿や漆塗膜を和紙片で養生する。 3 クリーニングを行う。 4 剥離した螺鈿や漆塗膜を圧着する。 5 漆塗の表面を漆固めで強化する。 6 螺鈿の欠失部の周囲は際錆を施す。 7 漆塗膜の欠失部は刻字や漆下地で補う。 8 木地の欠失部は刻字漆、檜材の埋め木、漆下地で補う。 9 前扉の本体側蝶番金具を、所定の位置に打ち込んで扉を固定する。 10 修理後の写真撮影を行う。(25年度より3ヶ年事業)

<染織> (3件)

- 7 ○名称 紺地鴛鴦金襴 (こんじえんおうきんらん)
 ○時代 中国・明時代 (17世紀)
 ○品質 紺地
 ○員数 1裂
 ○寸法等 長 9.4cm 幅 11.8cm
 ○施工会社 株式会社 染技連
 ○修理内容 1 作品および旧畳紙・名称小札を台紙および表紙から安全に取り外す。 2 作品に間接的に湿気を与え、クリーニングを行うとともに、裁断部のほつれを整える。 3 中性紙製の新しい台紙を作成し、旧畳紙・名称小札もともに収納し、タイベック性の袋に納める。
- 8 ○名称 浅黄小蔓金襴 (あさぎこづるきんらん)
 ○時代 中国・元~明時代 (14~15世紀)
 ○品質 水浅葱地
 ○員数 1裂
 ○寸法等 長 24.5cm 幅 15.2cm
 ○施工会社 株式会社 染技連
 ○修理内容 1 作品および旧畳紙・名称小札を台紙および表紙から安全に取り外す。 2 作品に間接的に湿気を与え、クリーニングを行うとともに、裁断部のほつれを整える。 3 中性紙製の新しい台紙を作成し、旧畳紙・名称小札もともに収納し、タイベック性の袋に納める。
- 9 ○名称 紫地角龍金襴 (むらさきじかくりゅうきんらん)
 ○時代 中国・宋時代 (13世紀)
 ○品質 紫地
 ○員数 1裂
 ○寸法等 長 20.4cm 幅 12.7cm
 ○施工会社 株式会社 染技連
 ○修理内容 1 作品および旧畳紙・名称小札を台紙および表紙から安全に取り外す。 2 作品に間接的に湿気を与え、クリーニングを行うとともに、裁断部のほつれを整える。 3 中性紙製の新しい台紙を作成し、旧畳紙・名称小札もともに収納し、タイベック性の袋に納める。

<考古> (1件)

- 10 ○名称 神人歌舞画像鏡 飯岡トツカ古墳出土 (しんじんかぶがざうきょう いのおかとづかこふんしゅつど)
 ○時代 古墳時代 (5世紀)
 ○品質 青銅
 ○員数 1面
 ○寸法等 面径 19.7cm
 ○施工会社 公益財団法人元興寺文化財研究所
 ○修理内容 1 銅鏡の現状についての詳細な観察と記録、写真撮影を行う。 2 修理に先立ってX線写真撮影を行う。 3 銅鏡表面の錆汚染物質の除去を行う。 4 樹脂含浸および樹脂塗布によって鏡の強化をはかる。 5 防錆処理を行う。 6 欠損部を樹脂で補い彩色する。 7 処理後の銅鏡を保存する箱を新調する。

<歴史資料> (1件)

- 11 ○名称 賀茂御祖神社絵図 (かもみおやじんじやえず)
 ○時代 室町時代 (15世紀)

- 品質 絹本著色
- 員数 1枚
- 寸法等 本紙 縦214.0cm 横193.0cm 総丈 縦225.0cm 横202.0cm
- 施工会社 株式会社 光影堂
- 修理内容 1 修理前の損傷状態について、調査・記録を行う。 2 脆弱化している本紙の絵具層の養生を行う。 3 表面の汚れを可能な限り除去する。 4 解装に耐えられない可能性のある絵具層にたいし、剥落止を行う。 5 表装裂地と本紙を取り外し、仮裏を打つ。 6 濾過水を噴霧し、本紙の汚れを除去する。 7 絵具層の剥落止を行う。 8 裏打紙を除去する。 9 新規に補修紙を作成し、本紙欠失箇所にも補紙を補填する。 10 新たな肌裏を打つ。 11 増裏打を行う。12 折れ伏せを施し、補強を行う。 13 仮張りを行う。 14 表装裂地を新調し、肌裏を打つ。 15 仮張りされた本紙、および表装裂地を袋表装の形に付け廻しする。 16 中裏を打つ。 17 総裏を打ち、仮張りし十分な乾燥期間を置く。 18 補紙を施した箇所にも補彩を行う。 19 上巻絹、発装、中軸、軸首等を新調し、掛軸装に仕立てる。 20 太巻添軸、桐屋郎箱（一重）を新調し、羽二重の包装に包み納入する。（26年度より・2ヶ年事業）

【奈良国立博物館】(9件)

<絵画>(4件)

- 1 ○名称 絹本著色六字経曼荼羅（けんぼんちゃくしよくろくじきょうまんだら）
 - 員数 1幅
 - 時代 鎌倉時代 13世紀
 - 品質 絹本著色
 - 寸法等 縦79.5cm 横38.6cm
 - 施工会社 (株)文化財保存
 - 修理内容 解体修理。経年による硬化で失われた掛軸装としてのしなやかさの回復を図り、本品觀賞の妨げになっている旧肌裏紙を張り替えるため、表装を解体し裏打紙を全て取り替える。旧肌裏紙の除去に際しては乾式肌上げ法を採用する。過去の修理で施された伏裏絹や補絹は、折りの組織が異なるため、全て除去して、欠失箇所にも本紙料絹の織り組織に合わせた電子線劣化絹を新たに補い、補填箇所にも地色補彩を行う。全面に発生した折れは、それを軽減するために折れ伏せを施す。太巻添軸、表装裂、上下軸、軸首、桐製保存箱、裂貼四方帙は新調する。（継続2か年事業のうちの第2年目）
- 2 ○名称 絹本著色山越阿彌陀図（けんぼんちゃくしよくやまごしあみだず）
 - 員数 1幅
 - 時代 鎌倉時代 14世紀
 - 品質 絹本著色
 - 寸法等 縦146.9cm 横94.3cm
 - 施工会社 (株)文化財保存
 - 修理内容 解体修理。表装を解体し、裏打紙を取り替える本格修理を行う。過去の修理や損傷の状態について詳細な損傷図を作成し、旧補絹の除去及び再使用については修理過程で綿密に検討する。軸装を解体の上、クリーニングを施し、剥落止めを行う。表打ちをし、可能な範囲で旧肌裏紙、旧補絹を除去。新たな補絹、肌裏紙を施し、折れ伏せを行う。軸首は再使用、表装裂、太巻、印籠蓋箱、四方帙は新調。（継続3か年事業のうちの第1年目）
- 3 ○名称 紙本著色泣不動縁起（しほんちゃくしよくなきふどうえんぎ）
 - 員数 2巻
 - 時代 室町時代 16世紀
 - 品質 紙本著色
 - 寸法等 上巻：縦31.7cm 横504.3cm 下巻：縦31.7cm 横553.0cm
 - 施工会社 (株)文化財保存
 - 修理内容 解体修理。料紙の折れや欠失部分、絵具の剥離・剥落に対する処置を行い、表面に付着した汚れ等はクリーニングを施す。卷子装を解体し、現在の裏打紙は適切な厚みと材質のものに全て取り替え、一般的な日本の絵巻の形式に則して一紙毎に総裏打ちまで行った後に継ぐ。表紙は新調するが、見返しは再使用とし、間に隔紙を入れて補強する。軸首は再使用し、八双・太巻添軸・軸巻紙・桐印籠箱・紐を新調する。付属品は旧箱とともに別保存とする。（継続2か年事業のうちの第1年目）
- 4 ○名称 絹本著色東大寺曼荼羅（けんぼんちゃくしよくとうだいじまんだら）
 - 員数 1幅
 - 時代 室町時代 16世紀
 - 品質 絹本著色
 - 寸法等 縦132.2cm 横71.9cm
 - 施工会社 (株)文化財保存
 - 修理内容 解体修理。本紙料絹の欠失や折れなどの構造的な不具合を改善するために、表装を解体し裏打紙を全て取り替える本格修理を行う。旧肌裏紙の除去に際しては乾式肌上げ法を採用する。旧補絹は全て除去して、欠失箇所にも本紙料絹の織り組織に合わせた電子線劣化絹を新たに補い、補填箇所にも地色補彩を行う。全面に発生した折れを軽減するために折れ伏せを施し、新たに裏打ち紙をあてる。表装については、筋付きの二段仏表具に改装し、軸首・軸木・啄木を新調。太巻添軸・桐印籠箱・裂貼四方帙を新調。（継続2か年事業のうちの第1年目）

<書跡>(1件)

- 5 ○名称 紺紙金字五苦章句経（こんしきんじごくしきょうききょう）
 - 指定 重要美術品
 - 員数 1巻
 - 時代 平安時代 12世紀
 - 品質 紺紙金字
 - 寸法等 縦26.3cm 横603.2cm
 - 施工会社 (株)文化財保存
 - 修理内容 解体修理。欠失箇所は、料紙に合わせ作成した補修紙により補修を行う。表紙は、旧補修紙を除去するが、困難な場合は随時検討する。八双、紐は新調する。本紙の不適切な紙継箇所は、継ぎ直しを行い修整する。また毛羽立ちを押えるため、プレス作業や布海苔を用いた処置を行う。巻末は、本紙への負担を軽減するため軸巻紙を新調する。軸首は再使用、軸木は新調する。保存箱は新調する。

<染織>(1件)

- 6 ○名称 刺繍釈迦如来説法図（ししゅうしゃかによらいせつぼうず）
 - 指定 国宝
 - 員数 1面
 - 時代 奈良または中国・唐時代 8世紀
 - 品質 絹製 刺繍
 - 寸法等 縦207.0cm 横157.0cm
 - 施工会社 (株)文化財保存
 - 修理内容 解体修理。過去の修理や経年・構造による損傷の軽減を図るため、装丁を解体する。装丁は全て復元新調するが、床に接する下端には薄い浅縁を付ける。額装扉が刺繍面に直接当たらないように、本紙周囲に厚みを付ける。現行の縁まわしをめくり、刺繍面を全てあらわす。縁まわし裂は現行のものを復元した裂を新調する。剥落の危険がある箇所を接着し、剥落止めを施す。旧補修箇所は表から剥落止めし、オリジナル部分との高低差をなくす処置を施しつつ、現行より刺繍になじむ色となるよう調整する。裂けている部分や画面全体の安定のため裏打ち紙を打ち替える。銘文は現行に準じた箇所にも貼り付ける。取り扱い及び収納用の木枠を作製し、木枠ごと収納する箱を作製する。箱は作品を立てて保管する仕様とする。（継続4か年事業のうちの第3年目）

<考古>(3件)

- 7 ○名称 鉄製品 (二塚古墳出土)(てつせいひん【ふたつかこふんしゅつど】)
 鐵銚、鉄鋸、挂甲小札、鉄鋸まか
 ○員数 一括
 ○時代 古墳時代 6世紀
 ○品質 鉄製
 ○施工会社 (財)元興寺文化財研究所
 ○修理内容 鉄錆の進行による脆弱化を軽減するため、過去修理時に樹脂が塗布されているものは、その古い樹脂を除去する。遺存している有機質を損傷しないよう、錆などのクリーニングを行い、脱塩処理と樹脂含浸処置を施す。その後、接合及び形状復元の為に樹脂補填する。錆化を止めるための樹脂を塗布して仕上げる。(継続2カ年事業のうちの第2年目)
- 8 ○名称 銅碗(靈安寺塔跡出土)(どうわん【りょうあんじとうせきしゅつど】)
 ○員数 2口
 ○時代 平安時代 8~9世紀
 ○品質 鑄銅製
 ○施工会社 (財)元興寺文化財研究所
 ○修理内容 クリーニング、脱塩、樹脂含浸。復元・補強。但し、非常に薄い為通常の樹脂による復元は難しく、一部和紙を用いての復元または補強となる可能性が高い。これに関しては担当者との打ち合わせによって状態を見ながら方針を立てる。中性紙保存箱作成。
- 9 ○名称 双鳳文杏葉・忍冬唐草文鏡板(珠城山古墳出土)(そうほうもんぎょうよう・にんどうからくさもんかがみいた【たまきやまこふんしゅつど】)
 ○員数 1点・1個
 ○品質 鉄地 金銅製
 ○施工会社 (財)元興寺文化財研究所
 ○修理内容 クリーニング、脱塩、樹脂含浸。接合・復元。中性紙保存箱作成。

【九州国立博物館】(23件)

<絵画>(9件)

- 1 ○名称 扇面画帖(七十二図)(せんめんがちょう) 1帖(24年度より継続・3カ年計画)
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 室町時代・15-16世紀
 ○品質 絹本着色、画帖、表紙：白茶地二重蔓牡丹唐草文金襴
 ○寸法等 本紙 縦 30.2 cm 横 51.0 cm 高 7.0 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装潢師連盟
 ○修理内容 1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。2. 現装の解体を行う。3. 膠などの接着剤を用い剥落止めを施す。4. 浄化水を表面から噴霧し、浸透させる方法で汚れを除去する。5. 布海苔を用い、養生紙にて表打を行う。6. 旧肌裏紙および旧補紙を除去する。7. 本紙裏面より料紙欠失箇所へ補紙を行う。8. 本紙の色合いに合わせて、染薄美濃紙にて肌裏を打つ。9. 表打の養生紙を除去する。10. 折れ伏せを入れ、折れを直す。11. 和紙を新糊にて重ね厚みを調整し台紙を作成する。12. 和紙を新糊にて重ね厚みを調整しマットを新調する。13. マット表面、台紙裏面貼付の装飾紙(金砂子・切箔散し)、見返しを作成する。14. マットを扇面の形にくり抜き、台紙に本紙を貼り、重ねて接着する。15. 本紙を貼り込んだ台紙を36帖毎に蝶番紙で繋ぎ、天地に縁紙を取り付ける。16. 表紙を新調する。17. 表紙背表紙を、繋いだ台紙に取り付け上下2帖の画帖に仕上げる。18. 下足板付桐野郎箱を新調し、包裂に包み納める。26年度は12~18を施工
- 2 ○名称 紙本墨画 布袋図(しほんぼくが【ぼていず】) 1幅(25年度より継続・2ヶ年計画)
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 中国 南宋~元時代・13世紀
 ○品質 紙本墨画
 ○寸法等 (本紙) 縦 96.5 cm 横 41.3 cm (表具) 縦 191.0 cm 軸長 62.6 cm (外箱) 縦 70.0 cm 横 13.4 cm 高さ 13.5 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装潢師連盟
 ○修理内容 1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。2. 本紙の旧裏打紙を肌裏紙を残して除去する。3. 詳細な本紙料紙の損傷(欠失)図面を作成する。この調査結果によっては肌裏を除去する可能性がある(肌裏除去は別途費用が必要)。4. 作業中に移動する恐れのある汚れを出来る限り除去する。5. 旧肌裏紙及び旧補紙を除去する。6. 本紙裏面より欠失箇所へ補紙を行う。7. 本紙の色合いに合わせて、染薄美濃紙にて肌裏を打つ。8. 表装裂地は元使いし、肌裏を打つ。9. 美濃紙にて増裏打を行い、仮張りをする。10. 折れ伏せを入れ、折れを直す。11. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。12. 美濃紙にて中裏打を行い、仮張りをする。13. 宇陀紙にて総裏打を行い、仮張りし十分な乾燥期間をおく。14. 補紙の箇所へ補彩をする。15. 中軸、発装、打込銀、啄木等を新調し軸装に仕立てる。なお、表装裂、軸首は元の物を使用することを基本方針とするが、修理の過程で裂の再使用に支障があると判断した時は九州国立博物館支給の裂を使用する。風袋の裏裂は後補のものであり、九州国立博物館支給の裂にて新調する。16. 桐太巻添軸・桐印籠箱を新調し、羽二重の包裂に包み納入する。26年度は4~16を施工
- 3 ○名称 両界曼荼羅(りょうがいまんたら) 2幅(25年度より継続・3ヶ年計画)
 ○所蔵者 奈良国立博物館
 ○時代 室町時代・応永4年(1397)
 ○品質 絹本着色
 ○寸法等 縦 169.0 cm 横 134.4 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装潢師連盟
 ○修理内容 1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。2. 本紙の旧裏打紙を肌裏紙を残して除去する。3. 膠水溶液にて絵具層の剥落止を行う。4. 浄化水を表面から噴霧し、浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。5. 布海苔を用い、養生紙にて表打を行う。6. 旧肌裏紙及び旧補紙を除去する。7. 本紙裏面より料紙欠失箇所へ劣化絹にて補紙を行う。8. 本紙の色合いに合わせて、染薄美濃紙にて肌裏を打つ。9. 表打の養生紙を除去する。10. 美濃紙にて増裏打を行い、仮張りをする。11. 折れ伏せを入れ、折れを直す。12. 九州国立博物館支給の裂に肌裏打ち、増し裏打ちを行い仮張りをする。13. 本紙と裂を表装の形態に付け廻しを行う。14. 美濃紙にて2層の中裏打を行う。15. 宇陀紙にて総裏打を行い、仮張りし十分な乾燥期間をおく。16. 補紙の箇所へ補彩をする。17. 軸首は再使用し、中軸、発装、紐等を新調し軸装に仕立てる。18. 桐太巻添軸2本、桐印籠箱1合を新調し、羽二重の包裂に包み納入する。26年度は6~8を施工
- 4 ○名称 絹本墨画 羅漢図(けんぼんぼくが【らかんず】) 1幅
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 中国 南宋~元時代・13世紀
 ○品質 絹本墨画
 ○寸法等 縦 109.0 cm 横 51.8 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装潢師連盟
 ○修理内容 1. 本紙や装丁状況を観察し、寸法及び損傷状態を写真や記録に詳細に留め、修理前の調査を行った後、掛軸装を解体し、少量の湿り(湿式)にて肌裏紙以外の旧裏打紙を除去する。2. 筆や刷毛などによるドライクリーニングを行った後、吸い取り紙に本紙を載せ、濾過水を画面表面に噴霧し、汚れを吸い取り紙に吸収させる方法にて汚れの除去を行う。3. 経年の劣化による膠着力の低下と、表面の擦れにより不安定になっている墨線に、免膠水溶液 1~2%を用い剥落止めを行う。4. 肌裏及び伏せ裏を除去する。5. 天然染料にて染色した薄美濃紙を、新糊を用いて新たに肌裏打ちを行う。6. 肌裏前もしくは肌裏後に、本紙料紙欠失箇所へ電

子線劣化網を用い、本紙と似寄りの組成で出来た劣化網にて補綴を施す。7. 肌裏打ち後、染色した美楮紙にて古糊を用いて増裏打ちを行う。増裏打ち後、折れの発生していた箇所及び今後折れが発生する恐れがある箇所に、薄美濃紙にて新糊を用いて折れ伏せを施す。8. 表装裂地は全て新調し、薄美濃紙にて新糊を用いて肌裏打ちを行う。肌裏打ち後、美楮紙にて古糊を用いて増裏打ちを行う。仮張り後、新糊と古糊を半々に混ぜた糊にて本紙と裂との付け直しを行う。9. 本紙と裂の付け直し後、美楮紙にて古糊を用いて中裏打ちを行う。中裏打ち後、一段目には上巻裂を用い、2 段目以降は宇陀紙を用い、古糊にて総裏打ちを行う。10. 補綴箇所に補綴を施す。11. 軸首、座繰、八双、軸木、啄木等を新調し掛軸装に仕立てる。12. 桐太巻添軸を新調し、太く巻き保存する。新調した羽二重の包み裂に本紙を包み、中箱は桐屋野郎箱、外箱は黒漆塗桐台差し箱を新調し納める。

- 5 ○名称 紙本著色 北野天神縁起絵巻（しほんちやくしよくきたのてんじんえんぎえまき） 1巻
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 南北朝時代・14世紀
 ○品質 紙本著色
 ○寸法等 縦 31.2 cm 横 983.0 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装演師連盟
 ○修理内容

1. 本紙や装丁状況を観察し、寸法及び損傷状態を写真や記録に詳細に留め、修理前の調査を行った後、継を外し、卷子装を解体する。2. 筆や刷毛を用いてドライクリーニングを行い、本紙表面に付着した埃等を除去する。3. 墨線の調査を行い、水によるクリーニングの作業に対して危険な状態になる可能性がある墨線に対して、兎膠水溶液 1~2%を用い、剥落止めを行う。4. 本紙下に吸い取り紙を敷き、濾過水を本紙表面より噴霧し、汚れを吸い取り紙に吸収させる方法にて汚れの除去を行う。5. 経年変化による劣化により膠着力が低下している本紙表面の墨線に対して、1~2%膠水溶液を用い、剥落止めを行う。6. レーヨン紙にて本紙表面の養生を行った後、最小限の湿りを裏面より与え肌裏紙の除去を行う湿式肌上法にて、肌裏紙の除去を行う。7. 虫損による料紙欠失箇所に、裏面より本紙基調色に染色した本紙と同繊維の補綴紙を製作し、補綴を施す。表紙裂も同様に欠失箇所に似寄りの組織の平絹具引き加工を施して補綴を施す。8. 本紙を、薄美濃紙（染色は天然染料にて行う）にて新糊を用いて新たに肌裏打ちを行う。肌裏打ち後、折れの発生していた箇所及び今後折れが発生する恐れがある箇所に、薄美濃紙にて新糊を用いて折れ伏せを施す。9. 表紙裂と見返しを、新糊と布海苔の混合糊にて合わせ、仮張りし十分な乾燥期間をおく。10. 折れ伏せ後、楮と雁皮の混合紙を用いて、新糊と布海苔の混合糊にて総裏打ちを行う。総裏打ち後は仮張りし、十分な乾燥期間をおく。11. 補綴箇所に補綴を施す。12. 各料紙を継ぎ、巻末に新調の軸巻紙を取り付ける。軸首は元のものを再使用し、軸木、八双、紐は新調して卷子装に仕立てる。13. 桐太巻添軸を新調し、卷子を太く巻き保存する。新調した包み裂に本紙を包み、桐屋郎箱を新調し納める。

- 6 ○名称 紙本墨画 月夜山水図（しほんぼくがげつやさんすいず） 1幅
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 室町~安土桃山時代・16世紀
 ○品質 紙本墨画
 ○寸法等 縦 93.2 cm 横 39.8 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装演師連盟
 ○修理内容

1. 本紙や装丁状況を観察し、寸法、損傷状態を写真や記録に詳細に留め、修理前の調査を行った後、掛軸装を解体し、少量の湿り（湿式）にて肌裏紙以外の旧裏打ち紙を除去する。2. 筆や刷毛などによるドライクリーニングを行った後、吸い取り紙上に本紙を載せ、濾過水を画面表面に噴霧し、汚れを吸い取り紙に吸収させる方法にて汚れの除去を行う。3. 膠着力の低下と、表面の擦れにより不安定になっている墨に兎膠水溶液 1~2%を用い、墨の剥落止めを行う。4. 肌裏除去について、間接的に湿りを与え（湿式）、最小限の湿りにて肌裏紙の除去を行う。5. 本紙欠失箇所に、本紙と同質の繊維による補綴紙を製作し、新糊を用いて補綴を行う。6. 本紙の色調に合わせ天然染料にて染色した薄美濃紙を、新糊を用いて新たに肌裏打ちを行う。肌裏打ち後、天然染料を用いて染色した美楮紙にて古糊を用いて増裏打ちを行う。増裏打ち後、折れの発生していた箇所及び今後折れが発生する恐れがある箇所に、薄美濃紙にて新糊を用いて折れ伏せを施す。7. 表装裂地は全て新調し、薄美濃紙にて新糊を用いて肌裏打ちを行った後、美楮紙にて古糊を用いて増裏打ちを行う。仮張り後、新糊と古糊の混合糊を用いて本紙と裂との付け直しを行う。8. 本紙と裂の付け直し後、美楮紙にて古糊を用いて中裏打ちを行う。中裏打ち後、一段目には上巻裂を用い、2 段目以降は宇陀紙を用い、古糊にて総裏打ちを行う。9. 補綴箇所に補綴を施す。10. 軸首は再使用し、座繰、八双、軸木、啄木等を新調し、掛軸装に仕立てる。11. 桐太巻添軸を新調し、掛軸を太く巻き保存する。新調した羽二重の包み裂に本紙を包み、桐屋野郎箱を新調し納める。

- 7 ○名称 紙本著色 物語図 二曲屏風（しほんちやくしよくものがたりずきよくびょうぶ） 2曲1双
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 江戸時代・17世紀
 ○品質 紙本著色
 ○寸法等 縦 122.5 cm 横 271.1 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装演師連盟
 ○修理内容

1. 本紙や装丁状況を観察し、寸法及び損傷状態を写真や記録に詳細に留め、修理前の調査を行った後、本紙に負担がかけないように屏風装を解体し、本紙を下地より取り外す。2. 本紙裏面の周囲に補助紙を貼り付け、補助紙にて仮張りを行う。筆や刷毛を用いてドライクリーニングを行い、本紙表面に付着した埃等を除去する。3. 絵具層の調査を行い、水によるクリーニングの作業に対して危険な状態になる可能性がある絵具層に対して、兎膠水溶液 1~3%を用い、剥落止めを行う。4. 本紙下に吸い取り紙を敷き、濾過水を本紙表面より噴霧し、汚れを吸い取り紙に吸収させる方法にて汚れの除去を行う。5. クリーニング後の本紙表面の調査を行い、膠着力が低下している絵具層に対して 1~3%膠水溶液を用い、剥落止めを行う。6. 布海苔水溶液とレーヨン紙にて本紙表面の養生を行った後、最小限の湿りを裏面より与え肌裏紙の除去を行う乾式肌上法にて、肌裏紙の除去を行う。7. 本紙欠失箇所に、裏面より補綴を行う。8. 薄美濃紙を、新糊を用いて新たに肌裏打ちを行う。肌裏打ちの後、さらに薄美濃紙を用いて 2 回目の裏打ちを行う。9. 縁裂は、大縁と小縁の金襴に薄美濃紙にて新糊を用い、肌裏打ちを行う。裏面の唐紙を新調し、新糊を用いて肌裏打ちを行う。10. 材杉を用い総納軸阻止めとした下地を 2 枚新調する。新調した下地の両面に石州紙を用いて 6 種 8 層の下貼りを施し、よく乾燥させる。下貼りを施した下地に蝶番を取り付け、屏風装の形に組み立てる。11. 補綴箇所に補綴を施す。12. 屏風装に組み立てられた下地に、補綴の完了した本紙に新糊を用いて上貼りを行う。裏面には裏打ちされた唐紙に新糊を用いて上貼りする。上貼り後、縁裂に新糊を用いて付け直しを行う。13. 飾り金物は再使用し、襲木を新調し、屏風装に仕立てる。14. 新調した包み裂に本紙を包み納める。

- 8 ○名称 絹本著色 釈迦如来像（けんぼんちやくしよくしやくにょらいぞう） 1幅（26年度より2カ年計画）
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 中国 元時代・14世紀
 ○品質 絹本著色
 ○寸法等 本紙 縦 139.0 cm 横 60.9 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装演師連盟
 ○修理内容

1. 本紙や装丁状況を観察し、寸法及び損傷状態を写真や記録に詳細に留め、修理前の調査を行った後、掛軸装を解体し、本紙を表装より取り外す。2. 本紙裏面の周囲に補助紙を貼り付け、補助紙にて仮張りを行う。筆や刷毛を用いてドライクリーニングを行い、本紙表面に付着した埃等を除去する。3. 絵具層の調査を行い、水によるクリーニングの作業に対して危険な状態になる可能性がある絵具層に対して、兎膠水溶液 1~3%を用い、剥落止めを行う。4. 旧肌裏紙以外の裏打ち層の除去を最小限の湿りにて行い、仮裏打ちを行う。5. 本紙下に吸い取り紙を敷き、濾過水を本紙表面より噴霧し、汚れを吸い取り紙に吸収させる方法にて汚れの除去を行う。6. クリーニング後の本紙表面の調査を行い、経年変化による劣化により膠着力が低下している絵具層に対して 1~3%膠水溶液を用い、剥落止めを行う。7. 料紙欠失箇所を裏彩色層が残留している箇所に対して、表面より本紙基調色に染色した電子線劣化網を用いて補綴を施す。8. 布海苔水溶液とレーヨン紙にて本紙表面の養生を行った後、最小限の湿りを裏面より与え肌裏紙の除去を行う乾式肌上法にて、肌裏紙の除去を行う。9. 表補綴を施した箇所以外の本紙欠失箇所に、裏面より電子線劣化網にて補綴を行う。10. 染色した薄美濃紙（染色は天然染料にて行う）を、新糊を用いて新たに肌裏打ちを行う。肌裏打ちの後、天然染料を用いて染色した美楮紙にて古糊を用いて増裏打ちを行う。増裏打ち後、折れの発生していた箇所及び今後折れが発生する恐れがある箇所に、薄美濃紙にて新糊を用いて折れ伏せを施す。11. 表装裂地は、中廻し風帯の金襴と総縁の綾裂に、薄美濃紙にて新糊を用いて肌裏打ちを行った後、美楮紙にて古糊を用いて増裏打ちを施し、仮張りを行う。12. 表装裂地の仮張り後、新糊と古糊の混合糊にて本紙と裂地との付け直しを行う。13. 本紙と裂地の付け直し後、美楮紙にて古糊を用いて中裏打ちを行う。中裏打ち後、一段目には上巻裂を用い、2 段目以降は宇陀紙を用いて、古糊にて総裏打ちを行う。14. 補綴箇所に補綴を施す。15. 軸首は再使用し、座繰、上下軸木、啄木等を新調し、掛軸装に仕立てる。16. 桐太巻添軸を新調し、掛軸を太く巻き保存する。新調した羽二重の包み裂に本紙を包み、桐屋郎箱を新調し納める。26年度は1~9を施工

- 9 ○名称 紙本金地著色 柳に柴垣図 六曲屏風 (左隻) (しほんきんじちやくしよくやなぎにしはがきずろつきよくびょうぶ) 6曲1隻 (26年度より2カ年計画)
 ○所蔵者 梅林寺
 ○時代 江戸時代・17世紀
 ○品質 紙本金地著色
 ○寸法等 本紙 各縦 150.4 cm 横 314.0 cm 折畳時 各縦 168.8 cm 横 57.0 cm 厚 10.8 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装潢師連盟
 ○修理内容 1. 本紙や装丁状況を観察し、寸法及び損傷状態を写真や記録に詳細に留め、修理前の調査を行った後、屏風装を解体し、本紙を下地より取り外す。2. 筆や刷毛を用いて、ドライクリーニングを行い、本紙表面に付着した埃等を除去する。3. 絵具層の調査を行い、今後の作業に対して危険な状態になる可能性がある絵具層に対して、膠水溶液1~3%を用い、剥落止めを行う。4. 必要最小限の湿りを用いて、本紙裏面より肌裏紙、及び旧補修紙の除去を行う。5. 本紙欠失箇所に対して、本紙と同質の補修紙を用いて、本紙裏面より補修を行う。6. 楮紙を用い、新糊にて新たに肌裏打ちを行う。肌裏打ちの後、胡粉入り楮紙を用い、新糊にて2回目の裏打ちを行う。7. 杉材を用い総納組隅止めとした下地を12枚新調する。8. 両面に8度下貼りを施し、よく乾燥させる。9. 補紙の箇所に補彩を行う。10. 下地に本紙及び縁装を上貼りする。裏には新調の唐紙を貼る。11. 元の金物を洗い調整する。12. 襲木を新調し、屏風装に仕立てる。26年度は1~6を施工。27年は7~12を施工予定。施工会社は未定。修理内容は概要のため、変更の可能性あり。

<書跡> (2件)

- 10 ○名称 栄花物語 (えいがものがたり) 17帖 (24年度より継続・3カ年計画)
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 鎌倉時代・13世紀
 ○品質 紙本墨書
 ○寸法等 (大型本) 縦 30.6 cm 横 24.2 cm (小型本) 縦 16.3 cm 横 14.9 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装潢師連盟
 ○修理内容 1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。2. 必要に応じて冊子を解体する。3. 本紙の汚れをクリーニングする。4. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。5. 本紙欠失箇所に、上記補修紙にて補修を行う。6. 本紙の折れ・シワを伸ばす。7. 本紙をプレス乾燥する。8. 本紙を元の冊子装に綴じ直す。9. 箱帙を新調して本紙を納め、新調した桐印籠箱2号に納入する。26年度は冊子番号5-10を施工
- 11 ○名称 孤峯覺明墨蹟 与保樹大姉法語 (こほうかくみょうぼくせき よほじゅだいしほうご) 1幅 (25年度より継続・2カ年計画)
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 南北朝時代 14世紀
 ○品質 紙本墨書
 ○寸法等 本紙 縦 31.2 cm 横 87.3 cm 表装 縦 120.0 cm 横 89.0 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装潢師連盟
 ○修理内容 1. 写真撮影及び赤外線調査を行い、本紙の状態を調査する。各紙ごとに紙質調査を行う。2. 軸装を解体後、本紙の旧裏打紙を除去し、仮裏打ちによるクリーニングを行う。3. 必要に応じて、本紙欠失箇所に、本紙料紙に類似した補修紙を用いて補修を行う。4. 本紙の色合いに合わせて、染薄美濃紙にて肌裏を打つ。5. 元の表装裂地に補修調整を行い、肌裏を打つ。6. 美洒紙にて増裏打を行い、仮張りをする。7. 折れ伏せを入れ、折れを直す。8. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。9. 美洒紙にて中裏打を行い、仮張りをする。10. 宇陀紙にて総裏打を行い、仮張りし充分な乾燥期間をおく。11. 補修箇所に補彩をする。12. 軸首、打込鏝は再用し、中軸、発装、啄木等を新調し軸装に仕立てる。13. 桐太巻添軸、桐印籠箱を新調し、羽二重の包製に包み納入する。26年度は6~13を施工

<金工> (1件)

- 12 ○名称 朱漆花鳥草樹螺鈿二層 (しゅうりょうしかちょうそうじゅらでんにそう) 1基 (25年度より継続・2カ年計画)
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 朝鮮 近代・20世紀前半
 ○品質 木製漆塗
 ○寸法等 幅 46.1 cm 横 91.3 cm 高 150.5 cm
 ○施工会社 目白漆芸文化財研究所
 ○修理内容 1. 修理前撮影・記録。2. クリーニング・剥落止め。3. 内貼り紙の除去。国宝修理装潢師連盟施工。4. 隅金具の取り外し。構造安定等の作業に必要な箇所のみ取り外しを行う。5. 構造安定処置。充填接着用に調合した漆を溶剤で希釈して流し入れる。6. 塗膜接着。亀裂部より塗膜接着用に調合した漆を溶剤で希釈し、塗膜下に流し入れ、溶剤が揮発し漆が締まった状態で圧着固定する。7. 螺鈿接着。膠で圧着固定をする。8. 刻字。木地の割れや木地構造接合部の隙間には刻字を充填する。打損等による欠損部は刻字で形態を復元する。9. 下地付け。10. 隙鏝。刻字の肌面を整え、復元箇所と漆塗膜との段差部に極少量の下地を付ける。11. 支え棒制作。下段扉の開閉を改善するため、箆管内に上段箆箭の重量を受けるための取り外し可能な支え棒を制作する。12. 台の調整。箆箭と台の間に薄板を入れ安定させる。13. 受け台制作。箆箭の重量を支えるための受け台座を作成する。14. 隅金具、取付け。15. 内貼り新補。内張りの紙は九州国立博物館支給の紙を用いる。16. 修理後撮影。17. 報告書作成。26年度は7の70%と8~17を施工

<陶磁> (1件)

- 13 ○名称 白磁薫炉 (はくじくろ) 1点
 ○所蔵者 福岡県立アジア文化交流センター
 ○時代 中国 隋-唐時代初期・7世紀
 ○品質 磁器
 ○寸法等 口縁 5.7 cm 高 18.5 cm 底径 17.5 cm
 ○施工会社 芸匠
 ○修理内容 1. 資料の現状を把握し、接合面を確認しながら接着剤による接合・復元部分を解体し、クリーニングを行う。2. エポキシ系接着剤 (ハイスーパー5) で接合後隙間をエポキシ樹脂 (アラルダイト XNR-6504: 主剤、XNH-6504: 硬化剤)、パラロイド B72 (溶剤アセトン) とマイクロバレーン及び顔料を混合したものを使用して充填成形する。3. 脆弱部分にパラロイド B72 (アセトン希釈: 5%程度) を塗布し、樹脂による強化を行う。4. 復元部分には、エポキシ樹脂 (アラルダイト XNR-6504: 主剤、XNH-6504: 硬化剤)、パラロイド B72 (溶剤アセトン) とマイクロバレーン及び顔料を混合した物を使用して充填復元を行う。5. 修理部分に、アクリル絵具で補彩色を施す。

<染織> (5件)

- 14 ○名称 ショール 縞格子文様金糸織織 (しよーる しまこうしもんようきんしもんおり) 1枚 (24年度より継続・3カ年計画)
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 20世紀前半
 ○品質 絹、撚銀糸、平織、銀糸浮織織
 ○寸法等 幅 56.5 cm 長さ 204.0 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装潢師連盟
 ○修理内容 1. 写真撮影を行い、生地、縁、房の状態を調査する。2. 破損状況や今後の保存活用を検討し、補修裂や補修糸の作製調達をする。3. 補修裂や補修糸を生地の色味に合わせて馴染む色味を検討して染色をする。4. 旧補修糸の補修効果や性質などの検討をする。生地に負荷をかけている場合は生地優先。5. 生地感や損傷状況を観察すると全体的な補修裂あても考えられるが、今回は裏面も考慮して可能な限り最小限の部分補修とする。生地の欠失箇所の裏面から部分的、あるいは

は、帯状に補修裂(薄地平絹)をあてて補修糸(極細絹糸)で縫い綴じ、端口の補修をする。6. 房を可能な限り整える。縁位置から帯状補修裂をあて縫い綴じ、房の付け際と縁の補修補強をする。26年度は5~6を施工

- 15 ○名称 ショール 緋地花文様両面刺繍(しよーる かすりじはなもんようりょうめんししゅう)1枚 (24年度より継続・3カ年計画)
○所蔵者 九州国立博物館
○時代 20世紀前半
○品質 絹、スパンコール、平織、緯緋、刺繍(平織・サテンステッチ)。
○寸法等 幅93.0cm 長さ203.8cm
○施工会社 一般社団法人国宝修理装飾師連盟
○修理内容 1. 写真撮影を行い、生地、刺繍、スパンコール、付着物の状態を調査する。2. 破損状況や今後の保存活用を検討し、補修裂や補修糸の作製調達をする。3. 補修裂や補修糸を生地の色味に合わせて馴染む色味を検討して染色をする。4. 生地に負荷をかけている場合は生地優先で付着物はピンセットで小さくするなどして生地の損傷に繋がらない範囲で除去をする。5. 生地を整え、裏面から全体的、あるいは、刺繍・スパンコールのある四辺の全体的に補修裂(薄地平絹)をあて補修糸(極細絹糸)で縫い綴じ、欠損端口の補修をする。あてる範囲については生地の状態と見え方とを検討して決定する。6. 金糸の大きな浮きは補修裂を支えにして補修糸(極細絹糸)で縫い綴じる。7. スパンコールは欠けたものはそのままとする。留め糸は弱っているので全て補修糸(極細絹糸)を入れ留める。26年度は5~7を施工
- 16 ○名称 ショール 緋緋幾何学文様浮織(しよーる しまかすりきかがくもんよううきもんおり)1枚 (24年度より継続・3カ年計画)
○所蔵者 九州国立博物館
○時代 19-20世紀
○品質 木綿、平織、経緋、経浮、緯浮、両端カードウィーブ
○寸法等 幅87.0cm 長さ265.0cm
○施工会社 一般社団法人国宝修理装飾師連盟
○修理内容 1. 写真撮影を行い、生地、房、くすみ、付着物の状態を調査する。2. 破損状況や今後の保存活用を検討し、補修裂や補修糸の作製調達をする。3. 補修裂や補修糸を生地の色味に合わせて馴染む色味を検討して染色をする。4. 旧補修糸の補修効果や性質などの検討をする。生地に負荷をかけている場合は生地優先で取り外す。5. 付着物はピンセットで小さくするなどして生地の損傷に繋がらない範囲で除去をする。6. 生地の折り皺を伸ばす。次のくすみ処置にも連動するので現状では決定ではないが、まずは湿り気を利用し整え紙と重しで押しをする仕方を想定している。7. 生地のくすみの状態を観察の上、その軽減処置の検討をする。水の使用が想定されるが、その使い方、加減については生地の状態と染色との兼ね合いになる。8. 生地の裏面から部分的に補修裂(薄地平絹)をあて補修糸(極細絹糸)で縫い綴じ、欠損端口の補修をする。耳のほつれは補修糸で留める。9. 房の絡まりを直し整える。26年度は9を施工
- 17 ○名称 装飾布 茜地花葉文様更紗(そうしよくふ あかがねじかようもんようさらさ)1枚 (24年度より継続・3カ年計画)
○所蔵者 九州国立博物館
○時代 19世紀
○品質 木綿、平織、手描端防染、両面染
○寸法等 幅98.0cm 長さ324.0cm
○施工会社 一般社団法人国宝修理装飾師連盟
○修理内容 1. 写真撮影を行い、生地、旧補修、汚れの状態を調査する。2. 破損状況や今後の保存活用を検討し、補修裂や補修糸の作製調達をする。3. 補修裂や補修糸を生地の色味に合わせて馴染む色味を検討して染色をする。4. 旧補修糸の補修効果や性質などの検討をする。生地に負荷をかけている場合は生地優先で取り外す。5. 付着物はピンセットで小さくするなどして生地の損傷に繋がらない範囲で除去をする。6. 生地の折り皺を伸ばす。次のくすみ処置にも連動するので現状では決定ではないが、まずは湿り気を利用し整え紙と重しで押しをする仕方を想定している。7. 生地の汚れの状態を観察の上、その軽減処置の検討をする。水の使用が想定されるが、その使い方、加減については生地の状態と染色との兼ね合いになる。8. 生地の裏面から部分的、または、帯状に補修裂(極薄地)をあて補修糸(極細絹糸)で縫い綴じ、欠損端口の補修をする。26年度は8を施工
- 18 ○名称 ショール 赤緋地金銀歯文様縫取織(しよーる あかがすりじきんぎんきよしもんようぬいとりおり)1枚 (24年度より継続・3カ年計画)
○所蔵者 九州国立博物館
○時代 20世紀
○品質 絹、平織、緯緋、金糸紋織
○寸法等 幅42.0cm 長さ260.0cm
○施工会社 一般社団法人国宝修理装飾師連盟
○修理内容 1. 写真撮影を行い、生地、旧補修の状態を調査する。2. 破損状況や今後の保存活用を検討し、補修裂や補修糸の作製調達をする。3. 補修裂や補修糸を生地の色味に合わせて馴染む色味を検討して染色をする。4. タブリのあるままでは生地に影響するので、旧補修は糸を短く切りながら取り外す。5. 生地の折れ皺を伸ばす。湿り気を利用し整え紙と重しで押しをする仕方を想定している。6. 解体後の生地の状態を観察して脆弱度によって補修の範囲を決める。裂けやすい生地と思われるので、生地の裏面から全体的に補修裂(薄地平絹)をあて補修糸(極細絹糸)で縫い綴じ、補強し、欠損端口の補修を想定する。7. 両端の房を整える。26年度は6~7を施工

<考古> (4件)

- 19 ○名称 伝青森県出土 屈折像土偶(でんあおもりけんしゅつど くっせつどぐう) 1点
○所蔵者 九州国立博物館
○時代 縄文時代・前2000年 - 前1000年
○品質 土製
○寸法等 高10.3cm 幅7.1cm 奥行8.3cm
○施工会社 芸匠
○修理内容 1. 資料の現状を把握し、接合面を確認しながら石膏及び接着剤による接合・復元部分を解体し、クリーニングを行う。2. 解体後、接合面の洗浄を行う。3. エポキシ系接着剤で接合後、隙間をエポキシ樹脂、パラロイドB72(溶剤アセトン)とマイクロバレーン及び顔料を混合したものを使用して充填成形する。4. 脆弱部分にパラロイドB72(アセトン希釈:5%程度)を塗布し、樹脂による強化を行う。5. 復元部分には、エポキシ樹脂、パラロイドB72(溶剤アセトン)とマイクロバレーン及び顔料を混合した物を使用して充填復元を行う。6. 修理部分に、アクリル絵具で補彩色を施す。
- 20 ○名称 伝青森県つがる市木造ヶ岡出土 中空土偶(でんあおもりけんつがるしきづくりかめがおかしゅつど ちゅうくうどぐう) 1点
○所蔵者 九州国立博物館
○時代 縄文時代・前2000年 - 前1000年
○品質 土製
○寸法等 高12.5cm 幅18.0cm 奥行5.1cm
○施工会社 株式会社 芸匠
○修理内容 1. 資料の現状を把握し、接合面を確認しながら樹脂及び接着剤による接合・復元部分を解体し、クリーニングを行う。2. 解体後、接合面の洗浄を行う。3. エポキシ系接着剤で接合後、隙間をエポキシ樹脂、パラロイドB72(溶剤アセトン)とマイクロバレーン及び顔料を混合したものを使用して充填成形する。4. 脆弱部分にパラロイドB72(アセトン希釈:5%程度)を塗布し、樹脂による強化をおこなう。5. 復元部分には、エポキシ樹脂、パラロイドB72(溶剤アセトン)とマイクロバレーン及び顔料を混合した物を使用して復元を行う。6. 修理部分に、アクリル絵具で補彩色を施す。7. 木製黒漆塗の台座を作製する。

- 21 ○名称 青森県岩木川流域出土 深鉢形土器 (あもりけんいんゆきがわりゆういしきゆつど ふかみちがたどき) 1点
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 縄文時代・前1000年 - 前400年
 ○品質 土製
 ○寸法等 高 44.8 cm 最大径 46.0 cm 底径 14.0 cm
 ○施工会社 株式会社 芸匠
 ○修理内容 1. 資料の現状を把握し、接合面を確認しながら石膏及び接着剤による接合・復元部分を解体し、クリーニングを行う。2. 解体後、接合面の洗浄を行う。3. エポキシ系接着剤で接合後、隙間をエポキシ樹脂、パラロイドB72 (溶剤アセトン) とマイクロバレン及び顔料を混合したものを使用して充填成形する。4. 脆弱部分にパラロイドB72 (アセトン希釈: 5%程度) を塗布し、樹脂による強化を行う。5. 復元部分には、エポキシ樹脂、パラロイドB72 (溶剤アセトン) とマイクロバレン及び顔料を混合した物を使用して充填復元を行う。6. 修理部分に、アクリル絵具で補彩色を施す。
- 22 ○名称 石棒 (「田島外雄収集考古資料」のうち) (せきぼう (たじまほかおしゅうしゅうこうこしりょうのうち)) 1点
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 縄文時代・前2000年 - 前400年
 ○品質 石製
 ○寸法等 長 67.3 cm 幅 5.2 cm 厚 4.5 cm
 ○施工会社 株式会社 芸匠
 ○修理内容 1. 資料の現状を把握し、接合面を確認しながら接着剤による接合・復元部分を解体し、クリーニングを行う。2. エポキシ系接着剤で接合後、隙間をエポキシ樹脂、パラロイドB72 (溶剤アセトン) とマイクロバレン及び顔料を混合したものを使用して充填成形する。3. 脆弱部分 (破断面) にパラロイドB72 (アセトン希釈: 5%程度) を塗布し、樹脂による強化を行う。4. 修理部分に、アクリル絵具で補彩色を施す。

<歴史資料> (1件)

- 23 ○名称 対馬宗家関係資料 (つしまそうけかんけいしりょう) 18箱 12巻 (26年度より4カ年計画)
 ○所蔵者 九州国立博物館
 ○時代 江戸時代・18世紀
 ○品質 紙本墨書
 ○寸法等 本紙 縦 18.0-34.5 cm 横 45.5-56.9 cm
 ○施工会社 一般社団法人国宝修理装飾師連盟
 ○修理内容 1. 本紙や装丁状況を観察し、寸法及び損傷状態を写真や記録に詳細に留め、修理前の調査を行った後、継を外し、卷子装を解体する。2. 筆や刷毛を用いてドライクリーニングを行い、本紙表面に付着した埃等を除去する。3. 墨線の調査を行い、水によるクリーニングの作業に対して危険な状態になる可能性がある墨線に対して、珉膠水溶液 1~2%を用い、剥落止めを行う。4. 本紙下に吸い取り紙を敷き、濾過水を本紙表面より噴霧し、汚れを吸い取り紙に吸収させる方法にて汚れの除去を行う。5. クリーニング後の本紙表面の調査を行い、経年変化による劣化により膠着力が低下している墨線に対して 1~2%珉膠水溶液を用い、剥落止めを行う。6. レーヨン紙にて本紙表面の養生を行った後、最小限の湿りを裏面より与え肌裏紙の除去を行う湿式肌上法にて、肌裏紙の除去を行う。7. 虫損による料紙欠失箇所、裏面より本紙基調色に染色した本紙と同繊維の補修紙を作製し、補修を施す。表紙裂も同様に欠失箇所に似寄りの組織の平絹具引き加工を施して補修を施す。8. 本紙に薄美濃紙 (染色は天然染料にて行う) を、新糊を用いて新たに肌裏打ちを行う。肌裏打ち後、折れの発生していた箇所及び今後折れが発生する恐れがある箇所に、薄美濃紙にて新糊を用いて折れ伏せを施す。9. 表紙裂と見返しを、新糊と布海苔の混合糊にて合わせ、仮張りし十分な乾燥期間をおく。10. 折れ伏せ後、楮と雁皮の混合紙を用いて、新糊と布海苔の混合糊にて総裏打ちを行う。総裏打ち後は仮張りし、十分な乾燥期間をおく。11. 表紙裂の地色を基調色とし、補修箇所に補彩を施す。12. 各料紙を継ぎ、巻末に新調の軸巻紙を取り付ける。軸木、紐は再使用し、卷子装に仕立てる。13. 桐太巻添軸を新調し、卷子を太く巻き保存する。新調した包み裂に本紙を包み、中性紙箱を新調し納める。26年度は巻 1~3 を施工

1-(3)-③ 文化財修理データのデータベース化件数

単位：件 平成27年3月31日現在

	計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館
合計	276	86	113 (4,573)	77 (686)
絵画	82	10	48 (1,832)	24 (234)
書跡	39	0	23 (1,032)	16 (160)
彫刻	49	0	29 (1,260)	20 (188)
建築	1	0	0 (15)	1 (1)
金工	5	2	0 (1)	3 (4)
刀剣	2	2	0 (0)	0 (0)
陶磁	1	1	0 (1)	0 (0)
漆工	9	0	0 (39)	9 (59)
染織	37	29	4 (172)	4 (6)
考古	28	28	0 (13)	0 (0)
歴史資料	4	2	2 (175)	0 (31)
和書	0	0	0 (0)	0 (0)
民族資料	0	0	0 (3)	0 (2)
その他	9	2	7 (30)	0 (1)
東洋	絵画	3	3	
	書跡	2	2	
	彫刻	2	2	
	金工	0	0	
	陶磁	1	1	
	漆工	0	0	
	染織	1	1	
	考古	0	0	
	民族	0	0	
法隆寺献納宝物	0	0		
黒田記念館収蔵品	0	0		
館史資料(収蔵品外)	1	1		

※ 東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり。

※ 記載の件数は当年度新規入力件数、()内は当年度までの新規入力件数の累計。

※ 京都国立博物館の()内の記載については、24年度統計表まで、追加・更新件数を含む当年度のデータ入力の件数を記載していたが、25年度以降上記に統一している。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

2-(1) 展示の充実

2-(1)-① 来館者数推移（入館料別）

（後述の資料に記載）◎共通資料a-①

2-(1)-② 来館者数推移（展覧会別）

（後述の資料に記載）◎共通資料a-②

2-(1)-③ 入場料収入

（後述の資料に記載）◎共通資料a-③

2-(1)-④ 展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等の設置

平成27年3月31日現在

東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
100%	100%	100%	92%
131件(外国語)	63件(外国語)	65件(外国語)	50件(外国語)
131件(日本語)	63件(日本語)	65件(日本語)	54件(日本語)

パネル等（パネルと同内容の配布資料・音声ガイドを含む）

【東京国立博物館】計131件(外国語)/131件(日本語)

- ・総合文化展（特集を除く） 99件(外国語) / 99件(日本語) 含国宝室
- ・特集陳列 22件(外国語) / 22件(日本語)
- ・黒田記念館 10件(外国語) / 10件(日本語) (27年1月開館)

※参考 本館2階陳列「日本美術の流れ」案内・解説パンフレットを作成・配布した。(日本語のテーマ解説はスマートフォンアプリ「トーハクナビ」(日・英)へ26年11月より以降。パンフレット(英・中・韓)の配布は継続した)

【京都国立博物館】計63件(外国語)/63件(日本語) 3月末の数字

- ・名品ギャラリー（特集陳列等を除く） 60件(外国語) / 60件(日本語)
- ・特別展観「島根鰐淵寺の名宝」、「天野山金剛寺の名宝」 2件(外国語) / 2件(日本語)
- ・特集陳列「雛まつりと人形」 1件(外国語) / 1件(日本語)

【奈良国立博物館】計65件(外国語)/65件(日本語)

- ・名品展（なら仏像館） 19件(外国語) / 19件(日本語)
- ・名品展（珠玉の仏像美術） 5件(外国語) / 5件(日本語)
- ・名品展（青銅器館） 12件(外国語) / 12件(日本語)
- ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」 4件(外国語) / 4件(日本語)
- ・特集展示「新たに修理された文化財」 5件(外国語) / 5件(日本語)
- ・特別陳列「お水取り」 2件(外国語) / 2件(日本語)
- ・仏像写真展「大和の仏たち－奈良博写真技師の眼－」 18件(外国語) / 18件(日本語)

【九州国立博物館】計50件(外国語)/54件(日本語)

- ・文化交流展示（トピック展示・特別公開を除く） 40件(外国語)/47件(日本語)
- ・文化交流展示 音声ガイド 3件(外国語)/0件(日本語)
- ・文化交流展示 トピック展示・特別公開
 - うち「館蔵近世絵画名品展」 1件(外国語)/1件(日本語)
 - 「中国を旅した禅僧の足跡」 1件(外国語)/1件(日本語)
 - 「全国高等学校 考古名品展」 1件(外国語)/1件(日本語)
 - 「特別公開 海を越えた再開－クリーブランド美術館の仲間たち－」 1件(外国語)/1件(日本語)
 - 「新春特別公開 徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」 1件(外国語)/1件(日本語)
 - 「大涅槃展」 1件(外国語)/1件(日本語)
 - 「柿右衛門－受け継がれる技と美」 1件(外国語)/1件(日本語)

2-(1)-⑤ 平常展・特別展・海外展

（後述の資料に記載）◎共通資料a-④

2-(2) 教育活動の充実

2-(2)-① 学習機会の提供（過去5カ年）

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
○キャンパスメンバーズ					
東京国立博物館	35校	37校	38校	43校	44校
京都国立博物館	29校	30校	30校	29校	29校
奈良国立博物館	28校	28校	27校	26校	27校
九州国立博物館	27校	28校	24校	24校	24校
○講演会等の回数					
東京国立博物館					
講演会等 実施回数	126回	112回	126回	131回	127回
講演会等 参加者数	13,319人	12,664人	13,193人	15,777人	14,419人
①講演会	39回 9,290人	32回 8,224人	31回 6,952人	30回 7,184人	30回 6,735人
アンケート結果	91%	91%	82%	84%	92%
(内訳)					
・月例講演会等	11回 1,637人	13回 2,457人	12回 1,791人	12回 1,951人	12回 1,893人
アンケート結果	89%	91%	82%	80%	88%
・記念講演会	12回 3,467人	15回 4,669人	12回 3,682人	11回 3,368人	13回 3,651人
アンケート結果	91%	89%	85%	88%	85%
・テーマ別講演会	1回 180人	3回 775人	4回 1,051人	6回 1,709人	4回 1,096人
アンケート結果	92%	—	77%	84%	96%
・その他講演会	15回 4,006人	1回 323人	3回 428人	1回 156人	1回 95人
アンケート結果	—	—	78%	83%	98%
②列品解説（ギャラリートーク等）	83回 3,659人	76回 3,963人	90回 5,805人	98回 8,205人	94回 7,326人
③連続講座	1回（3日） 278人	1回（3日） 380人	1回（3日） 303人	1回（3日） 354人	1回（3日） 320人
アンケート結果	81%	89%	75%	95%	87%
④公開講座	3回 92人	3回 97人	4回 133人	2回 34人	2回 38人
アンケート結果	100%	97%	94%	97%	97%
京都国立博物館					
講演会等 実施回数	17回	15回	19回	21回	36回
講演会等 参加者数	2,313人	1,450人	3,150人	2,062人	4,596人
①土曜講座	15回 2,076人	13回 1,199人	16回 2,682人	10回 1,257人	31回 3,888人
アンケート結果	81%	77%	84%	87%	80%
②記念講演会	—	—	1回 215人	1回 190人	1回 193人
アンケート結果	—	—	89%	88%	—
③夏期講座	1回（3日） 205人	1回（3日） 193人	1回（3日） 213人	1回（3日） 219人	1回（3日） 206人
アンケート結果	92%	78%	92%	91%	89%
④社会科教員のための向上講座	1回 32人	1回 58人	1回 40人	1回 30人	1回 66人
⑤セミナー・シンポジウム等	—	—	—	—	2回 243人
⑥ギャラリートーク	—	—	—	8回 366人	—
⑦ギャラリートーク	—	—	—	8回 366人	—
奈良国立博物館					
講演会等 実施回数	28回	28回	29回	26回	27回
講演会等 参加者数	3,349人	3,006人	3,454人	3,219人	3,525人
①特別展等講座	15回 2,172人	15回 1,839人	16回 2,172人	13回 1,682人	14回 1,986人
アンケート結果	93%	87%	85%	85%	86%
②夏期講座	1回（3日） 556人	1回（3日） 522人	1回（3日） 438人	1回（3日） 587人	1回（3日） 561人
アンケート結果	95%	90%	95%	95%	91%
③サンデートーク	12回 621人	12回 645人	12回 844人	12回 950人	12回 978人
アンケート結果	88%	88%	85%	85%	87%
④大学との合同公開講座	—	—	—	—	—
アンケート結果	—	—	—	—	—
⑤世界遺産学習特別勉強会の共同開催	—	—	—	—	—
アンケート結果	—	—	—	—	—
九州国立博物館					
講演会等 実施回数	64回	89回	102回	90回	82回
講演会等 参加者数	3,996人	7,833人	8,354人	7,276人	4,694人
①特別展記念講演会	9回 1,410人	7回 1,500人	5回 966人	6回 1,108人	4回 980人
アンケート結果	—	—	—	—	—
②講演及びシンポジウム	11回 1,266人	39回 4,592人	45回 4,918人	38回 4,450人	26回 2,132人
アンケート結果	—	—	—	—	—
③ミュージアムトーク	44回 1,320人	43回 1,741人	52回 2,470人	47回 1,718人	52回 1,582人
○大学等との連携事業					
奈良国立博物館					
①放送大学の面接授業	1回	0回	0回	0回	0回
②奈良女子大学との連携講座	7人	7人	10人	9人	8人
③神戸大学との連携講座	10人	10人	7人	8人	16人
九州国立博物館					
①放送大学の面接授業	2回 50人	1回 50人	1回 50人	1回 50人	2回 50人

2-(2)-② キャンパスメンバーズ

平成27年3月31日現在

東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
44校	29校 (※)	27校 (※)	24校

※うち京都国立博物館・奈良国立博物館共通加入22校

【東京国立博物館】

①加入校数 (44校)

	学校名	学生数	入会日	備考
1	桜美林大学	9,591人	20年4月1日	
2	武蔵野美術大学	8,478人	20年4月1日	
3	文化学園 (文化学園大学, 文化ファッション大学院大学, 文化学園大学短期大学部, 文化服装学院, 文化服装学院広島校, 文化外国語専門学校)	8,127人	20年4月1日	
4	東京学芸大学	6,734人	20年4月1日	
5	東京藝術大学	4,440人	20年4月1日	
6	東京大学	34,203人	20年4月1日	
7	お茶の水女子大学	3,673人	20年4月1日	
8	杉野学園 (杉野服飾大学, 杉野服飾大学短期大学部, ドレスメーカー学院)	1,419人	20年4月1日	
9	大正大学	5,218人	20年4月1日	
10	東海大学	33,227人	20年4月1日	
11	青山学院大学・青山学院女子短期大学	23,071人	20年4月1日	
12	ハリウッド大学院大学・ハリウッドビューティ専門学校	805人	20年4月1日	
13	多摩美術大学	5,156人	20年4月1日	
14	立教大学	23,631人	20年4月1日	
15	首都大学東京	10,246人	20年4月1日	
16	女子美術大学・女子美術大学短期大学部	4,028人	20年4月1日	
17	東京造形大学	1,965人	20年4月1日	
18	法政大学	38,687人	20年4月1日	
19	筑波大学	20,620人	20年4月1日	
20	昭和女子大学・昭和女子大学短期大学部	5,973人	20年4月1日	
21	実践女子大学・実践女子短期大学	4,581人	20年5月1日	
22	東洋大学	31,497人	20年6月1日	
23	東洋美術学校	1,137人	20年6月1日	
24	日本大学 (芸術学部)	4,427人	20年6月1日	
25	文教大学	9,440人	20年7月1日	
26	上智学院 (上智大学, 上智短期大学部, 上智社会福祉専門学校)	15,380人	20年10月1日	
27	国際基督教大学	3,268人	21年4月1日	
28	学習院女子大学	1,891人	21年11月1日	
29	獨協大学	9,456人	22年4月1日	
30	学習院大学	9,491人	22年4月1日	
31	東京工業大学	12,032人	22年7月1日	
32	日本女子大学	8,764人	23年4月1日	
33	二松学舎大学	3,088人	23年5月1日	
34	東京家政大学・東京家政大学短期大学部	6,353人	23年6月1日	
35	神奈川大学	20,012人	24年6月1日	
36	日本工業大学	5,000人	24年7月1日	
37	東京女子大学	4,987人	24年8月1日	
38	尚美学園大学	3,407人	25年4月1日	
39	中央大学	32,366人	25年6月1日	
40	麗澤大学	2,705人	25年6月1日	
41	慶応義塾大学	42,963人	25年8月1日	
42	一橋大学	6,792人	25年11月1日	
43	共立女子大学・共立女子短期大学	5,963人	26年4月1日	
44	成城大学 文芸学部	1,910人	26年4月1日	

②キャンパスメンバーズを対象とした事業

事業名：キャンパスメンバーズ博物館セミナー	
期 間	9月8・9日 (計7回実施)
開催場所	平成館大講堂
参加者数	215人
担当研究員数	7人
事業内容	キャンパスメンバーズ加入校の学生を対象に、博物館の歴史、保存修復、博物館情報、教育普及事業等について当館の職員が実例を交えた解説を実施。
事業名：キャンパスメンバーズ教育連携事業	
期 間	9月8～13日 (6日間)
開催場所	全館

参加者数	34人
担当研究員数	10人
事業内容	キャンパスメンバーズ加入校の学芸員志望学生を対象として、作品の取り扱いを含む博物館実務全般について演習・実習の形式により体験的講座を実施。

【京都国立博物館】

① 加入校数 (29校)

	学校名	学生数	入会日	入会内容	申請場所	備考
1	佛教大学	19,593人	19年4月1日	奈良博との2館併用	京博	
2	奈良教育大学	1,396人	18年4月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
3	就実大学人文科学部	1,115人	20年4月1日	奈良博との2館併用	京博	
4	学校法人同志社	39,797人	19年4月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
5	奈良大学	4,148人	19年5月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
6	学校法人 関西大学	33,188人	23年6月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
7	学校法人 京都産業大学	14,707人	24年8月1日	奈良博との2館併用	京博	
8	帝塚山大学・附属高等学校	4,248人	18年6月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
9	奈良女子大学	2,720人	18年6月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
10	京都造形芸術大学	9,384人	18年6月1日	京博のみ	京博	
11	京都工芸繊維大学	4,061人	19年6月1日	奈良博との2館併用	京博	
12	京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学	893人	18年7月1日	奈良博との2館併用	京博	
13	京都精華大学	3,755人	18年7月1日	奈良博との2館併用	京博	
14	龍谷大学・龍谷短期大学	19,840人	18年7月1日	奈良博との2館併用	京博	
15	京都女子大学・京都女子短期大学	7,429人	18年7月1日	京博のみ	京博	
16	京都橘大学	3,982人	18年7月1日	奈良博との2館併用	京博	
17	京都教育大学・附属高等学校	2,447人	20年7月1日	奈良博との2館併用	京博	
18	成安造形大学	826人	18年8月1日	京博のみ	京博	
19	京都市立芸術大学	1,084人	20年8月1日	京博のみ	京博	
20	京都大学	23,493人	18年9月1日	奈良博との2館併用	京博	
21	近畿大学文芸学部	2,212人	18年9月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
22	花園大学	2,198人	18年11月1日	京博のみ	京博	
23	奈良先端科学技術大学院大学	1,099人	19年12月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
24	大谷大学・大谷短期大学	3,716人	18年12月1日	京博のみ	京博	
25	大阪大学	24,650人	20年12月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
26	京都文教大学	2,892人	21年6月1日	奈良博との2館併用	奈良博	
27	京都外国語大学・京都外国語短期大学	4,921人	21年8月1日	奈良博との2館併用	京博	
28	京都府立大学	2,185人	23年7月1日	京博のみ	京博	
29	立命館大学	36,372人	26年4月1日	奈良博との2館併用	奈良博	

【奈良国立博物館】

①加入校数 (27校)

	学校名	学生数	入会日	入会内容	備考
1	奈良学園大学 (奈良文化高等学校、奈良学園高等学校、奈良文化女子短期大学部、奈良学園登美ヶ丘高等学校)	2,245人	18年10月1日	奈良博のみ	奈良産業大学より名称変更
2	奈良佐保短期大学	349人	18年11月29日	同上	
3	天理大学	3,434人	20年7月1日	同上	
4	奈良県立大学	656人	21年4月1日	同上	
5	奈良工業高等専門学校	1,119人	23年7月1日	同上	
6	奈良教育大学	1,396人	18年4月4日	京博との2館併用	
7	帝塚山大学	4,248人	18年5月8日	同上	
8	奈良女子大学	2,720人	18年5月15日	同上	
9	京都嵯峨芸術大学、京都嵯峨芸術大学短期大学部	893人	18年6月9日	同上	
10	京都精華大学	3,755人	18年6月28日	同上	
11	京都橘大学	3,982人	18年6月30日	同上	
12	龍谷大学、龍谷大学短期大学部	19,840人	18年6月30日	同上	
13	京都大学	23,493人	18年8月22日	同上	
14	近畿大学 文芸学部、近畿大学大学院文芸学研究科	2,205人	18年8月24日	同上	
15	佛教大学	19,593人	19年4月1日	同上	
16	奈良大学	4,148人	19年5月2日	同上	
17	京都工芸繊維大学	4,061人	19年6月1日	同上	
18	学校法人 同志社 (同志社大学、同志社女子大学、同志社高等学校、同志社香里高等学校、同志社女子高等学校、同志社国際高等学校)	39,797人	19年6月1日	同上	
19	奈良先端科学技術大学院大学	1,099人	19年11月7日	同上	
20	就実大学 人文科学部	1,100人	20年4月1日	同上	
21	京都教育大学、京都教育大学附属高等学校	2,447人	20年7月1日	同上	
22	大阪大学	24,650人	20年12月1日	同上	
23	京都文教大学、京都文教短期大学	2,892人	21年6月1日	同上	
24	京都外国語大学、京都外国語短期大学	4,921人	21年8月1日	同上	
25	関西大学、関西大学第一高等学校、関西大学北陽高等学校、関西大学高等部	33,188人	23年6月1日	同上	
26	立命館大学、立命館大学大学院	36,372人	26年4月1日	同上	
27	学校法人 京都産業大学 (京都産業大学、京都産業大学付属高等学校)	14,707人	26年4月1日	同上	今年度より2館利用 (京博申込分)

②キャンパスメンバーズを対象とした事業

事業名：キャンパスメンバーズカード	
内 容	キャンパスメンバーズ加入大学の学生のレポート来館を促すことを目的にキャンパスメンバーズカードを作成、来館毎にスタンプを押印し、3回目と6回目に当館のオリジナルグッズを進呈するスタンプラリーを実施。キャンパスメンバーズカードと併せて、告知のポスターとカード立てを作成しキャンパスメンバーズ加入大学に配布。

【九州国立博物館】

① 加入校数 (24校)

	学校名	学生数	入会日	備考
1	九州産業大学	11,279人	25年4月1日	
2	九州情報大学	546人	26年4月1日	
3	九州大学	19,174人	26年4月1日	
4	久留米大学	7,460人	25年4月1日	
5	西南学院大学	8,209人	25年4月1日	
6	筑紫女学園大学	2,684人	24年4月1日	
7	日本赤十字九州国際看護大学	477人	26年4月1日	
8	日本経済大学 (福岡キャンパス)	2,685人	26年5月1日	
9	福岡教育大学	5,703人	26年4月1日	
10	福岡国際大学	445人	25年4月1日	
11	福岡女子大学	847人	24年4月1日	
12	福岡大学	20,790人	25年4月1日	
13	放送大学福岡学習センター	2,330人	26年4月1日	
14	早稲田大学大学院情報生産システム研究科 (北九州キャンパス)	376人	26年4月1日	
15	九州造形短期大学	244人	25年4月1日	
16	筑紫女学園大学短期大学部	402人	24年4月1日	
17	福岡女子短期大学	391人	25年4月1日	
18	久留米大学医学部附属臨床検査専門学校	152人	25年4月1日	
19	久留米大学附設高等学校	608人	25年4月1日	
20	西南学院高等学校	1,297人	25年4月1日	
21	筑紫女学園高等学校	1,743人	24年4月1日	
22	筑紫台高等学校	1,508人	24年4月1日	
23	福岡大学附属大濠高等学校	1,963人	25年4月1日	
24	福岡大学附属若葉高等学校	1,032人	25年4月1日	

②キャンパスメンバーズを対象とした事業

事業名：筑紫女学園大学文学部アジア文化学科必修科目「体験－ミュージアムで学ぶアジア」	
開催日	4月22日、4月29日、4月30日、5月13日、6月11日、6月25日 (計6日)
開催場所	筑紫女学園大学、文化交流展示室、体験型展示室「あじっば」
出席校	筑紫女学園大学
参加者数	72人
事業内容	博物館の概要について講義、博物館展示見学、博物館体験型展示室での異文化体験を実施

2-(2)-③ 講座・講演会等の開催実績

平成27年3月31日現在

	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
回数・人数	127回・14,419人 講演会 30回・6,735人 列品解説（ギャラリートーク等）94回・7,326人 連続講座 1回（3日）・320人 公開講座 2回・38人	36回・4,596人 土曜講座31回・3,888人 記念講演会1回・193人 夏期講座1回（3日）・206人 社会科教員のための向上講座 1回・66人 セミナー・シンポジウム等2回・243人	27回・3,525人 特別展等講座 14回・1,986人 （公開講座 12回・1,600人、シンポジウム1回・192人） 記念講座&座談会1回・194人 夏季講座 1回（3日）・561人 サンデートーク12回・978人	82回・4,694人 特別展記念講演会 4回・980人 講演及びシンポジウム 26回・2,132人 ミュージアムトーク 52回・1,582人
	その他展示に関連する事業 18回・817人	その他展示に関連する事業 2回・57人	その他展示に関連する事業 11回・774人	その他展示に関連する事業 23回・143,786人

【東京国立博物館】

1) 講演会 30回 参加者数 6,735人

①月例講演会 計12回 参加者数1,893人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	“良い”の割合
4月5日	端午の節句 鎧と兜 講師：池田宏（上席研究員）	86	2	76%
5月24日	帝室博物館のアイス・琉球展示について 講師：佐々木利和（北海道大学アイス・先住民研究センター特任教授）	117	2	91%
6月7日	高雄曼荼羅—金銀で描かれた密教の世界 講師：沖松健次郎（保存修復課主任研究員） 安藤香織（徳川美術館）	129	2	60%
7月19日	伊能忠敬の日本図 講師：田良島哲（調査研究課長）	220	2	91%
8月23日	夏休みの宿題—わたしの仏像自由研究— 講師：浅見龍介（東洋室長） 飯島可琳（生駒市子ども学芸員1号）	200	2	87%
9月6日	米内山陶片と米色青磁 特集 日本人が愛した官窯青磁と横河コレクションについて 講師：佐藤サアラ（常盤山文庫） 三笠景子（保存修復室研究員）	280	2	95%
10月11日	中国青銅器をめぐる旅 4千年のものがたり 講師：川村佳男（列品管理課主任研究員）	202	2	88%
11月8日	縄文土器のうつわを考える 講師：井出浩正（考古室研究員）	141	2	89%
12月6日	「法隆寺と聖徳太子をめぐる空間と美術」 講師：土屋貴裕（平常展調整室研究員） 阿部泰郎（名古屋大学教授）	224	2	99%
27年1月10日	「博物館に初もうで〜ひつじと吉祥図様を探す旅」 講師：金井裕子（特別展室研究員）	84	2	86%
27年2月21日	「平成の大修理を終えた国宝檜図屏風」 講師：神庭信幸（保存修復課長） 田沢裕賀（絵画・彫刻室長）	130	2	100%
27年3月14日	「保存の道を探求して」 講師：神庭信幸（保存修復課長）	80	2	92%

②記念講演会 計13回 参加者数3,651人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	“良い”の割合
4月12日	栄西と建仁寺「栄西と茶の歴史」 講師：千宗屋（武者小路千家 家元後嗣）	380	2	91%
4月19日	栄西と建仁寺「建仁寺ゆかりの美術」 講師：田澤裕賀（絵画・彫刻室長）	347	2	89%
4月26日	キトラ古墳壁画展「キトラ古墳壁画保護の歩み」 ①「キトラ古墳壁画保護の歴史」 講師：建石徹（文化庁文化財部古墳壁画室・古墳壁画対策調査官） ②「キトラ古墳壁画の取り外しと修理」 講師：川野邊渉（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター長） ③「キトラ古墳壁画の材料調査」 講師：高妻洋成（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長） ④鼎談「キトラ古墳壁画の保護から学ぶもの」 講師：建石徹・川野邊渉・高妻洋成 コーディネーター：齊藤孝正（上席研究員）	340	2	81%
5月3日	キトラ古墳壁画展「キトラ古墳壁画に迫る—高松塚古墳壁画との比較から—」 講師：有賀祥隆（東北大学名誉教授）	380	2	63%
6月28日	故宮博物院「故宮コレクションと「倣古」—青銅器・玉器のかたちに象徴された伝統」 講師：川村佳男（展示調整室主任研究員）	380	2	73%

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	“良い”の割合
7月5日	中国皇帝コレクションの意味—書画における復古と革新— 基調講演「国立故宫博物院書画コレクションの淵源」 講師：何傳馨(国立故宫博物院副院長) ①「王羲之と小野道風」 講師：丸山猶計(九州公立博物館) ②皇帝コレクションにおける模写・模造事業—乾隆帝の書画コレクションと狩野派— 講師：塚本麿充(東洋室研究員) ③徽宗と義満—日本における皇帝コレクションの意味— 講師：畑靖紀(九州国立博物館) ④蘇軾「寒食帖」と米芾「草聖帖」—台北と大阪を結ぶ縁— 講師：弓野隆之(大阪市立美術館)	233	2	85%
7月6日	⑤元宋四大家—文人画の確立— 講師：湊信幸(客員研究員・名誉館員) ⑥公主の雅集—モンゴル皇室と書画鑑蔵活動— 講師：陳韻如(国立故宫博物院) ⑦乾隆帝が見た江南山水画—伝巨然「蕭翼賺蘭亭図」を中心に— 講師：竹浪遠(黒川古文化研究所) ⑧乾隆帝と澄心堂紙 講師：何炎泉(国立故宫博物院) ⑨徽宗の七壺と乾隆帝の八壺について 講師：富田淳(列品管理課長) 総合討論	189	2	80%
7月26日	故宮博物院「文物がつくる社会—中国書画・故宮コレクションからアジア世界へ—」 講師：塚本麿充(東洋室研究員)	300	2	95%
9月27日	東アジアの華 陶磁名品展 記念講演会 講師：杜衛民(中国国家博物館保管一部副研究員) 具一會(韓国国立扶余博物館長、前韓国国立博物館美術部長) 伊藤嘉章(学芸企画部長)	220	2	95%
11月1日	日本国宝展「国宝指定制度と日本国宝展」 講師：伊藤信二(広報室長)	312	2	91%
11月22日	日本国宝展「国宝縄文のビーナスと国宝仮面の女神誕生の地・ハヶ岳山麓北山浦の縄文文化」 講師：鶴飼幸雄(尖石縄文考古館前館長)	350	2	92%
27年1月24日	みちのくの仏像展「みちのくの仏像」 講師：丸山士郎(平常展調整室長)	122	2	85%
27年3月11日	シンポジウム「文化財を守る絆—津波被災文化財再生への挑戦」 講師：熊谷賢氏(陸前高田市立博物館 副主幹) 赤沼英男氏(岩手県立博物館 首席専門学芸員) 前川さおり氏(遠野文化研究センター調査研究課 課長補佐) 真鍋真氏(国立科学博物館 地学研究部 生命進化史研究グループ グループ長) 半田昌之氏(日本博物館協会 専務理事)、神庭信幸氏(東京国立博物館 保存修復課 課長)	98	2	-

③テーマ別講演会 計4回 参加者数1,096人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	“良い”の割合
8月20日	台北 国立故宫博物院—神品至宝—展席上揮毫会 講師：榎本樹邨(読売書法会常任総務) 星弘道(読売書法会常任総務) 高木聖雨(読売書法会常任理事)	277	2	94%
8月21日	台北 国立故宫博物院—神品至宝—展席上揮毫会 講師：石飛博光(毎日書道会常任理事) 仲川恭司(毎日書道会理事) 永守蒼穹(毎日書道会理事)	350	2	-%
9月14日	趙之謙の書画と北魏の書画 講師：鍋島稲子(書道博物館主任研究員) 富田淳(列品管理課長)	219	2	94%
10月25日	第2回石橋財団レクチャーシリーズ 考古学をめぐる日欧交流の物語 講師：サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所 考古・文化遺産学センター長) オリバー・クレイグ(イヨーク大学 考古学部准教授) 白井克也(考古室長)	250	2	100%

④その他講演会 計1回 参加者数95人

実施日	内容	参加者数(人)	担当研究員(人)	“良い”の割合
10月3日	井浦新と楽しむアジアの仏像の旅 講師：井浦新、小泉恵英(企画課長)	95	2	98%

2) ギャラリートーク (旧称：列品解説) 94回 参加者総数 7,326人

①ギャラリートーク 61回 参加者総数 6,046人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)
4月1日	十二ヶ月花鳥図屏風 講師：遠藤楽子(出版企画室研究員)	180	2
4月2日	屏風に咲く桜 講師：山下善也(絵画彫刻室主任研究員)	90	2
4月8日	名物「岡山藤四郎」について 講師：酒井元樹(保存修復室研究員)	80	2

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)
4月9日	桜でつくられた仏像 講師：丸山士郎（平常展調整室長）	80	2
4月15日	新しくなった「近代の美術」の展示室 講師：伊藤嘉章（学芸研究部長）・松嶋雅人（特別展室長）	98	2
4月15日	新しくなった本館17室のみどころ 講師：土屋裕子（保存修復室長）	77	2
4月15日	《本館リニューアル》と《正門プラザ》 講師：木下史青（デザイン室長）	74	2
4月22日	アイヌの人びとの祈り 講師：品川欣也（考古室研究員）	72	2
4月22日	歴史の記録 講師：高橋裕次（博物館情報課長）	70	2
5月13日	熊めぐり 講師：神辺知加（教育講座室主任研究員）	78	2
5月20日	平成25年度の新たな館藏品 講師：田良島哲（調査研究課長）	65	2
5月27日	3つの形象土器 講師：白井克也（東洋館10室）	49	2
6月10日	考古展示が語る日本の歴史時代 講師：田島太良（登録室アソシエイトフェロー）	80	2
6月17日	人の頭を2つもつ鳥の話 講師：勝木言一郎（出版企画室長）	63	2
6月24日	海外に渡った縄文土器 講師：鈴木希帆（登録室アソシエイトフェロー）	80	2
7月1日	トーハクの石榴 講師：川村佳男（平常展調整室主任研究員）	130	2
7月8日	鎌倉彫刻の魅力 講師：西木政統（絵画・彫刻室アソシエイトフェロー）	130	2
7月15日	インドネシアのワヤン 講師：白井克也（平常展調整室長）	70	2
7月25日	田園詩人、久隅守景の納涼図 講師：山下善也（絵画彫刻室主任研究員）	125	2
7月29日	経塚というタイムカプセル 講師：井出浩正（考古室研究員）	78	2
8月1日	美しき春日野の風景 講師：土屋貴裕（平常展調整室研究員）	68	2
8月5日	紅型 講師：高木結美（特別展室アソシエイトフェロー）	57	2
8月12日	『瀟湘臥遊図巻』の物語 講師：塚本麿充（東洋室研究員）	163	2
8月19日	インドネシアの染織 講師：小山弓弦葉（教育普及室長）	125	2
8月26日	趙之謙の書画と北魏の書 講師：富田淳（列品管理課長）	194	2
9月2日	甕った飛鳥・奈良染織の美 講師：澤田むつ代（客員研究員）	98	2
9月5日	法隆寺染織の文様世界 講師：三田覚之（工芸室研究員）	80	2
9月9日	呉春筆山水図屏風 講師：小野真由美（貸与特別観覧室）	100	2
9月30日	漆芸に見る東西交流 講師：竹内奈美子（工芸室長）	82	2
10月1日	絵画をめぐる旅 講師：塚本麿充（東洋室研究員）	100	2
10月2日	楽の音が聞こえる シルクロードの美術 講師：勝木言一郎（出版企画室長）	96	2
10月4日	仏さまの物語 講師：三田覚之（工芸室研究員）	116	2
10月5日	仏像はなぜ作られた？ 講師：小泉惠英（企画課長）	50	2
10月7日	インド細密画の世界 講師：小泉惠英（学芸企画課長）	58	2
10月8日	考古で比べる日本と中国 講師：川村佳男（平常展調整室主任研究員）	80	2
10月9日	縄文土器の個性をさぐる旅 講師：小野塚拓造（特別展室アソシエイトフェロー）	100	2
10月10日	アジアの染織文様を旅する 講師：小山弓弦葉（教育普及室長）	100	2
10月12日	馬でめぐるアジア 講師：白井克也（考古室長）	120	2
10月13日	アジア、青磁の旅 講師：三笠景子（保存修復室研究員）	100	2
10月21日	西日本の埴輪の造形・変遷と伝播 講師：古谷毅（列品管理課主任研究員）	80	2
10月28日	横河民輔と中国陶磁 講師：三笠景子（保存修復室研究員）	106	2
10月21日	円筒埴輪と形象埴輪の見方 講師：河野正訓（考古室アソシエイトフェロー）	45	2

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)
11月11日	シリア青銅器時代の墓出土品 講師：後藤健（特任研究員）	81	2
11月18日	「唐物」を考える 講師：横山梓（特別展室研究員）	150	2
11月21日	陶棺レリーフに見る7世紀の風景と日本古代文化史 講師：古谷毅（平常展調整室主任研究員）	93	2
11月28日	国宝 破墨山水 雪舟筆 講師：教仁郷秀明（貸与特別観覧室長）	90	2
12月2日	特集 中国書画精華 明清絵画の愉しみ 講師：塚本鷹充（東洋室研究員）	74	2
12月9日	天部のほとけ 講師：浅瀨 毅（教育講座室長）	95	2
27年1月6日	松林図屏風 講師：金井裕子（特別展室研究員）	230	2
27年1月20日	世尊寺家の古筆 講師：島谷弘幸（副館長）	146	2
27年1月27日	水滴を楽しむ 講師：伊藤信二（教育普及室長）	72	2
27年2月3日	旗をなびかせた新羅の馬 講師：白井克也（平常展調整室長）	120	2
27年2月17日	永徳一門による檜図 講師：山下善也（絵画彫刻室主任研究員） 檜図屏風平成の大修理 講師：神庭信幸（保存修復課長）	164	2
27年2月24日	絵画・書跡修理の現場から 講師：沖松健次郎（保存修復室主任研究員）	128	2
27年3月3日	予防保存と修理保存 講師：和田浩（環境保存室長）	60	2
27年3月10日	愛染明王の事と、その修理前後 講師：鷲塚麻季（調査研究課主任研究員）	157	2
27年3月17日	中国江南の文化都市・南京の書画の魅力 講師：塚本鷹充（東洋室研究員）	140	2
27年3月18日	屏風に描かれた桜 講師：小野真由美（貸与特別観覧室主任研究員）	171	2
27年3月24日	黒田記念館へ行こう 講師：木下史青（デザイン室長）	92	2
27年3月25日	着物に描かれた桜 講師：小山弓弦葉（教育普及室長）	96	2

②特別展関連ギャラリートーク 4回 参加者総数 478人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)
6月25日	故宮の白菜 講師：川村佳男（平常展調整室主任研究員）	62	2
6月25日	故宮の白菜 講師：川村佳男（平常展調整室主任研究員）	115	2
6月25日	故宮の白菜 講師：川村佳男（平常展調整室主任研究員）	71	2
1月31日	ミニ講演会「被災現場からの報告」 講師：赤沼英男(岩手県立博物館学芸第2課長) 前田浩士(陸上自衛隊富士学校機甲科部車両生徒班長) ギャラリートーク「被災現場からの報告」 講師：熊谷賢(陸前高田市立博物館副主幹) 神庭信幸(保存修復課長)	230	2

③東京藝術大学大学院インターンシップによるギャラリートーク等 29回 参加者総数 802人

実施日	回数	テーマ	氏名	参加者(人)
6月29日、7月9日、7月26日、8月6日、8月24日、9月10日、9月13日、9月14日10月19日10月25日	10	ギャラリートーク「突起装飾坏ができるまで一作ってみてわかったこと」	林佳美、治部亜美香、日暮花里、近岡令、岡田麻里恵、渡辺諒子、斉藤祐、藤枝奈々、栗田絵莉子、小池俊起、佐々木怜央、小池俊起	166
8月27日	1	スライドトーク「突起装飾坏ができるまで一作ってみてわかったこと」	林佳美、治部亜美香、日暮花里	33
12月14日、12月16日、12月18日、12月23日、1月15日、1月22日	6	ギャラリートーク「若沖と鶏」	日比野杏香	275
1月8日、1月11日、1月25日、1月29日、2月3日、2月8日	6	近代日本彫刻としての佐藤朝山「シャクンタラ姫とドウシャンタ王」	山崎泰行	155
1月20日、1月27日、2月1日、2月5日、2月10日、2月12日	6	ひび割れたうつわ	菅沢そわか	173

3) 連続講座「日本国宝展」 計1回(3日) 参加者総数 320人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	“良い”の割合

8月8日	第1講「日本国宝展と工芸の国宝」 講師：伊藤信二（広報室長） 第2講「絵画の国宝1号—トーハクと国宝の絵画」 講師：沖松健次郎（保存修復室主任研究員）	320	2	87%
8月9日	第3講「国宝元興寺五重小塔を探る」 講師：狭川真一（公益財団法人元興寺文化財研究所研究部長） 第4講「指定制度と仏像・神像の国宝」 講師：川瀬由照（文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官） 第5講「国宝彫刻の修理」 講師：藤本青一（公益財団法人美術院国宝修理所所長）			
8月10日	第1講「発掘の成果と国宝」 講師：品川欣也（考古室主任研究員） 第2講「美と歴史を語る国宝の書」 講師：田島良哲（保存修復室主任研究員）			

4) 公開講座 計2回 参加者総数38人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	“良い”の割合
27年3月5日	見学ツアー 保存と修理の現場へ行こう 講師：神庭信幸（保存修復課長）ほか	19	2	100%
27年3月6日	見学ツアー 保存と修理の現場へ行こう 講師：神庭信幸（保存修復課長）ほか	19	2	94%

5) その他展示に関連する事業 計18回 参加者総数 817人

実施日	内容	会場	参加者数(人)	担当研究員(人)
5月11日	恩賜上野動物園・国立科学博物館連携事業 上野の山でクマめぐり	恩賜上野動物園・国立科学博物館・東京国立博物館	45	2
10月4日	博物館でYOGA体験「朝YOGA 仏像と始める一日」	東京国立博物館東洋館第1室	18	2
10月4日	韓国伝統芸能 2回	東京国立博物館東洋館前	300	2
10月5日	博物館でYOGA体験「朝YOGA 仏像と始める一日」	東京国立博物館東洋館第1室	17	2
10月5日	中国伝統芸能 2回	東京国立博物館平成館大講堂	400	2
10月8日	博物館でYOGA体験「夜YOGA 仏像と過ごす夕べ」	東京国立博物館東洋館第1室	17	2
10月9日	博物館でYOGA体験「夜YOGA 仏像と過ごす夕べ」	東京国立博物館東洋館第1室	20	2
1月31日	特別展「3・11大津波と文化財の再生」関連イベント オルガン演奏 3回 演奏：中村由利子氏	東京国立博物館本館大階段	—	2
2月21日	特別展「3・11大津波と文化財の再生」関連イベント オルガン演奏 3回演奏：相田南穂子氏	東京国立博物館本館大階段	—	2
3月14日	特別展「3・11大津波と文化財の再生」関連イベント オルガン演奏 3回演奏：伊藤園子氏	東京国立博物館本館大階段	—	2

【京都国立博物館】

1) 土曜講座31回 参加者総数 3,888人

特別展覧会関連などの講座

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
4月26日	南山城の歴史と文化	企画室長 宮川禎一	193
5月10日	古代南山城の観音像	同志社大学教授 井上一稔	186
5月17日	一休さんと酬恩庵の絵画	上席研究員 山本英男	171
5月24日	浄瑠璃寺と当尾の里	浄瑠璃寺副住職 佐伯功勝	165
5月31日	南山城の仏像と慶派仏師	東京国立博物館教育講座室長 浅秋 毅	174
6月7日	万葉歌にみる馬場南遺跡（神雄寺）と恭仁京のトポス	京都府教育庁文化財保護課 伊藤 太	157
9月20日	京の都の成り立ち	副館長 松本伸之	193
9月27日	国宝 雪舟筆天橋立図	上席研究員 山本英男	195
10月4日	天野山金剛寺の大日如来・不動明王坐像	列品管理室長 浅見龍介	159
10月11日	明恵上人と高山寺の文化財	北海道大学名誉教授 石塚晴通	193
10月18日	高山寺の仏画	主任研究員 大原嘉豊	138
10月25日	鳥獣戯画の愉しさ—後世の画家に及ぼした影響—	同志社大学教授 狩野博幸	200
11月1日	古典の日記念 料紙装飾	主任研究員 羽田 聡	119
11月8日	国宝 金銅藤原道長経筒をめぐって	企画室長 宮川禎一	146
11月22日	京都ミュージアムズ・フォー連携講座 高山寺と版本—宋版を中心に—	上席研究員 赤尾栄慶	113
11月29日	名物裂 茶席を彩る染織の背景	教育室長 山川 暁	91
12月6日	愛刀家とは何か—コレクションからみる人物像—	研究員 末兼俊彦	58
12月13日	南蛮漆器から紅毛漆器へ—海外向け特注品のプロデューサーは誰か—	主任研究員 永島明子	52
12月20日	北京・上海・広東の近代絵画	研究員 呉 孟晋	39
1月10日	古墳時代の銅鏡	企画室長 宮川禎一	88
1月17日	室町絵巻のイメージ—日高川草紙を中心に—	研究員 鬼原俊枝	65
1月24日	禅僧の書 —墨蹟—	主任研究員 羽田 聡	71
1月31日	「中世出雲国 鱒淵寺の歴史」	島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員 佐伯徳哉	106
2月7日	鱒淵寺と天台の密教法具	研究員 末兼俊彦	105
2月14日	仏涅槃図の世界	主任研究員 大原嘉豊	129
2月21日	中国の吉祥絵画—音と形から読み解く—	研究員 呉 孟晋	60
2月28日	人形コレクションの近代—守る人・甞める人—	教育室長 山川 暁	83
3月7日	近世の障壁画—「場」を飾るということ—	研究員 福士雄也	95
3月14日	金剛寺学術調査の成果について	上席研究員 赤尾栄慶	130

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
3月21日	『日月山水図屏風』の基層	静岡県立美術館学芸部長 泉 万里	139
3月28日	開山堂に納められた高麗青磁	研究員 降矢哲男	75

2) 記念講演会 1回 193人

実施日	テーマ	講師	参加者数(人)
9月13日	京都国立博物館—未来を見つめて—	館長 佐々木丞平	193

3) 夏期講座 1回 (3日) 206人

開講日	テーマ	講師	参加者数(人)
7月30日	第1講「威信財としての袈裟—東福寺伝法衣—」	教育室長 山川 暁	206
	第2講「仏画と寺院—仏画をとりまく環境—」	主任研究員 大原嘉豊	
	第3講「中近世イタリアの祭壇画—儀礼の場とその演出—」	西南学院大学国際文化学部教授 松原知生	
7月31日	第1講「禅宗寺院の建築にみる日中交流」	奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室研究員 鈴木智大	
	見学 東福寺		
8月1日	第1講「イスラム宗教建築とその周辺」	東京大学東洋文化研究所教授 樹屋友子	
	第2講「文化財とコーパス—土蔵でみつける漆器のものさし—」	主任研究員 永島明子	
	第3講「寺院における文書の整理—「かたまり」からみえること—」	主任研究員 羽田 聡	

4) 社会科教員のための向上講座 1回 66人

開講日	テーマ	講師	参加者数(人)
10月22日	講演「秀吉と京都について」 館内実地研修「京へのいざない」展 館内実地研修「国宝 鳥獣戯画と高山寺」展	主任研究員 羽田 聡	66

5) セミナー・シンポジウム等 2回 243人

開講日	テーマ・講師	参加者数(人)
11月15日	「鳥獣戯画を語る」 日 時 2014年11月15日(土) 13:00~17:00 第1部「絵巻と戯画」 講師: 上野友愛氏(サントリー美術館学芸員) ジャクリーヌ・ベルント氏(京都精華大学・マンガ学部・教授) 鼎談: 上野友愛氏、ジャクリーヌ・ベルント氏、大原嘉豊(京都国立博物館 学芸部) 第2部「鳥獣戯画の修理」 講師: 岡墨光堂 岡岩太郎氏 鼎談: 岡岩太郎氏、鬼原俊枝(京都国立博物館 学芸部)、赤尾栄慶(京都国立博物館 学芸部)	168
27年1月25日	国際研究セミナー「日仏漆交流史を学ぶ」 主任研究員 永島明子 パリ装飾美術館 主任学芸員 アンヌ・フォレ・キャルリエ	75

6) その他展示に関連する事業 2回 57人

実施日	内容	講師	参加者数(人)
5月11日	小中学生向け鑑賞会「みほとけめぐり！」	研究員 水谷亜希	21
5月18日	小中学生向け鑑賞会「みほとけめぐり！」	研究員 水谷亜希	36

【奈良国立博物館】

1) 特別展等講座 14回 参加者総数 1,986人

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
4月19日	「中世律宗の鎌倉進出と善派仏師」	学芸部研究員 山口隆介	106
5月10日	「鎌倉の仏像に見るエキゾチズム」	三井記念美術館長 清水真澄	111
5月31日	「鎌倉地方で花開いた肖像彫刻」	鎌倉国宝館副館長 内藤浩之	127
7月26日	「醍醐寺と南都の密教絵画」	学芸部保存修理指導室長 谷口耕生	130
8月 2日	「醍醐寺の造営と創建期の仏像」	東京文化財研究所主任研究員 皿井舞	149
8月 9日	「醍醐寺の文化財」	総本山醍醐寺公室室長 長瀬福男	77
9月 6日	「醍醐寺の密教修法と聖教」	学芸部研究員 齋木涼子	194
10月25日	「鳥毛立女屏風と唐時代絵画」	東京大学東洋文化研究所教授 板倉聖哲	194
11月 2日	「正倉院宝物の性格について」	元宮内庁正倉院事務所長 北啓太	192
	「正倉院宝物にみる資源の有効利用について」	宮内庁正倉院事務所保存課調査室長 飯田剛彦	
	「日本工芸の源流としての正倉院宝物」	学芸部長 内藤栄	
	パネルディスカッション	北啓太、飯田剛彦、内藤栄	
11月 3日	「正倉院宝物の科学的調査」	宮内庁正倉院事務所保存課保存科学室員	126
11月 8日	「正倉院の武器・武具」	学芸部研究員 岩戸晶子	116
27年1月10日	「おん祭と威儀物」	春日大社権宮司 岡本彰夫	78
27年2月28日	「和紙—文化財を支える日本の紙—」	上窪良二、岡岩太郎、湯山賢一	194
27年3月 8日	「東大寺二月堂修二会(お水取り)の行法」	東大寺長老 森本公誠	192

2) 夏季講座 第43回「醍醐寺と南都の密教」 1回 (3日間) 561人

開講日	テーマ	講師	参加者数(人)
8月19日	「聖宝理源大師の祈り—南都への思い」	総本山醍醐寺百三世座主 仲田順和	561
	「醍醐寺・南都の仏教建築と境界曼荼羅」	京都大学大学院工学研究科准教授 富島義幸	
	「醍醐寺の仏画」	東京藝術大学客員教授 有賀祥隆	

8月20日	「国宝醍醐寺文書聖教の史的価値について」	日本女子大学文学部教授 永村真
	「醍醐寺の仏像—国宝薬師三尊像と弥勒堂弥勒菩薩像を中心に—」	大正大学文学部歴史学科教授 副島弘道
	「中世の醍醐寺と修験道」	埼玉県立文書館学芸員 関口真規子
	「醍醐寺の舍利信仰と南都」	当館学芸部長 内藤栄
8月21日	「中世における醍醐寺」	総本山醍醐寺霊宝館学芸員 藤井雅子
	「醍醐寺のすべて—展覧会紹介—」	当館学芸部研究員 齋木涼子

3) サンデートーク 12回 参加者総数 978人

実施日	テーマ	解説者	参加者数(人)
4月20日	「密教法具の始まりを求めて」	学芸部長 内藤栄	72
5月18日	「平安時代の写経 九・十世紀篇」	学芸部企画室長 野尻忠	71
6月15日	「幸せの王国 ブータン Part2」	学芸部研究員 岩戸晶子	72
7月20日	「続・山形の話」	学芸部主任研究員 清水健	67
8月17日	「仏像の〈中国化〉をめぐって—5・6世紀の如来像を中心に—」	学芸部教育室長 岩井共二	137
9月21日	「第5回 茶室・八窓庵をのぞいてみませんか」	学芸部情報サービス室長 吉澤悟	61
10月5日	「仏像調査からわかること その3」	学芸部上席研究員 岩田茂樹	68
11月16日	「文化財を科学する」	学芸部主任研究員 鳥越俊行	73
12月21日	「文化財を撮る —信頼のおける写真を求めて—」	学芸部資料室員 佐々木香輔	75
1月18日	「内山永久寺と南都の密教絵画」	学芸部保存修理指導室長 谷口耕生	106
2月15日	「阿弥陀来迎図をめぐって」	学芸部研究員 北澤菜月	116
3月15日	「文化財とアーカイブズ 奈良国立博物館の取り組みから」	学芸部資料室長 宮崎幹子	60

4) その他展示に関連するイベント 11回 (内、中止1回) 参加者総数 774人

実施日	内容	会場	参加者数(人)
5月3日	チャッピー岡本のカブリモノ変心塾〜仏像になってみよう!〜	地下回廊	11
8月10日	消しゴムはんこで、ほとけさまを彫ってみよう!	地下回廊	※台風接近のため中止
8月11日	夏休み親子講座「守ろう!知ろう!文化財」	講堂	84
10月24日 ~11月12日	正倉院展作文コンクール入賞作品展示	地下回廊	—
11月1日	古典の日講演会「東大寺献物帳と光明皇后」	講堂	110
11月2日	正倉院学術シンポジウム2014 「正倉院宝物に日本文化の源流をみる」	奈良県新公会堂	192
11月3日	第66回正倉院展 親子鑑賞会	講堂・展示室	171
12月17日	おん祭と春日信仰の美術「茶会」	茶室・庭園、西新館南側ピロティ	84
12月20日	奈良トライアングルミュージアムズ 東京セミナー ~冬の奈良の魅力~	奈良まほろば館	63
12月21日	仏像を撮ってみよう!	講堂、地下写場	24
2月14日	お水取り「講話」と「粥」の会	講堂・展示室・茶室控室・東大寺二月堂	35

【九州国立博物館】

1) 特別展記念講演会 4回 参加者総数 980人

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
4月19日	特別展「近衛家の国宝」関連 特別記念講演会「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」	公益財団法人陽明文庫文庫長 名和修	250
7月13日	特別展「クリーブランド美術館展」関連 特別記念講演会「アメリカ人の目利き—シャーマン・リーとクリーブランド美術館コレクション」	明治学院大学教授 山下裕二	275
11月1日	特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」関連 特別講演会「皇帝を魅了した名品たち—中国書跡を中心に—」	東京国立博物館列品管理課長 富田淳	150
1月27日	特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘」 特別講演会「七支刀と百済研究の最前線」	石上神宮宮司 森正光 韓国国立公州博物館長 金鍾萬 韓国国立中央博物館研究企画部学芸研究官 李炳鎬 福岡県教育庁文化財保護課長 赤司善彦	305

2) 講演及びシンポジウム等 26回 参加者数 2,132人

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
4月13日	文化財保存国際交流セミナー 「バンコク国立博物館における保存修復」	タイ王国芸術局国立博物館部保存科学専門官 シリチャイ・ワンチャルントラクン	35
4月25日	特別展「近衛家の国宝」関連 しつこ九博!「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」解説講座(筑紫野市)	九州歴史資料館学芸調査室学芸員(元九州国立博物館展示課主任研究員) 酒井芳司	24
4月26日	特別展「近衛家の国宝」関連 リレー講座 近衛家の国宝展の魅力に迫る 「近衛家の曙光—藤原道長の登場—」 「信尹と家熙—近衛家が生んだ桃山・江戸の文化人—」	元展示課主任研究員 酒井芳司 文化財課資料登録室主任研究員 荒木和憲	68
5月3日	特別展「近衛家の国宝」関連 関連講演会 「藤原道長『御堂関白記』と世界記憶遺産への道程」	国際日本文化研究センター教授 倉本一宏	190
5月10日	特別展「近衛家の国宝」関連 リレー講座 近衛家の国宝展の魅力に迫る 「近衛家の成立—藤原道長以後—」 「陽明文庫の書の魅力」	博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー 渡部史之 文化財課資料登録室主任研究員 丸山猶計	70

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
5月30日	文化財保存交流セミナー 「文化財科学研究の発展を辿る—考古学を中心に—」	東京学芸大学名誉教授 大沢真澄	25
6月28日	特別展「クリーブランド美術館展」関連 アクロス文化学び塾 プレ講座 「準備万端! クリーブランド美術館展の楽しみ方」	企画課研究員 鷺頭桂	70
7月11日	特別展「クリーブランド美術館展」関連 しつこ九博! 「クリーブランド美術館展 名画でたどる日本の美」解説講座 (筑紫野市)	企画課研究員 鷺頭桂	24
7月16日	特別展「クリーブランド美術館展」関連 講演会「夏の夜の日本美術入門」 (公益財団法人 九州経済調査協会)	企画課研究員 鷺頭桂	30
7月19日	特別展「クリーブランド美術館展」関連 リレー講座 「日本絵画入門: 千年の歴史をたどる」	文化財課資料管理室主任研究員 畑靖紀 企画課研究員 鷺頭桂	80
8月16日	トピック展示「高等学校所蔵考古名品展」関連 全国高等学校考古学フォーラム in 九州国立博物館 2014	福島県立磐城高等学校 西山結衣氏 東邦大学付属東邦高等学校 伊東雄也氏 熊本県立鹿本高等学校 堀啓太氏 福岡県立糸島高等学校 風呂ノ上拓志氏	93
10月23日	「建中寺文化財建造物の塗装材料調査」	博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー 赤田昌倫	60
10月25日	特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」関連 シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味—工芸における復古と革新—」 「乾隆帝收藏の汝窯磁器と関連する諸問題」 「日本でつくられた倣中国製彫漆器」 「乾隆帝の玉器評価基準」 「考古資料から見た徽宗の青銅器文化復興」	國立故宮博物院 器物処副所長 余佩瑾 企画課文化交流展室主任研究員 川畑憲子 國立故宮博物院 器物処科長 張麗端 東京国立博物館 学芸研究部長 谷豊信	150
10月25日	特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」関連 しつこ九博! 「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」解説講座 (筑紫野市)	企画課文化交流展室主任研究員 川畑憲子	47
11月8日	特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」関連 講演会「中国における文物の意義—皇帝たちが受け継いだ名画—」	文化財課資料管理室主任研究員 畑靖紀	50
27年 1月13日	九州国立博物館の魅力を学ぼう!! ①	展示課情報サービス室研究員 小嶋篤	60
27年 1月20日	九州国立博物館の魅力を学ぼう!! ②	展示課情報サービス室主任研究員 進村真之	30
27年 1月22日	九州国立博物館の魅力を学ぼう!! ③	展示課展示調整室主任研究員 岸本圭	60
27年 1月23日	九州国立博物館の魅力を学ぼう!! ④	企画課文化交流展室長 河野一隆	200
27年 1月24日	特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」関連講演会「文化財科学は解き明かす 自然災害Ⅲ『文化遺産と科学—過去に学ぶ防災—』」 「1.17から3.11 - 文化財の危機管理意識 -」 「八重山諸島の巨大津波を探る」 「西日本沿岸の巨大津波痕跡から将来を考える」 「地震考古学と九州の地震災害」	館長 三輪嘉六 石垣市教育委員会文化財係長 島袋綾野 高知大学総合研究センター特任教授 岡村眞 産業技術総合研究所客員研究員 寒川旭	110
27年 1月30日	特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」関連 しつこ九博! 「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」 解説講座 (筑紫野市)	展示課展示調整室主任研究員 岸本圭	78
27年 2月1日	特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」関連 リレー講座 九博研究員が語る! 考古学を100倍楽しむ方法 「獣帯鏡の謎」 「右片袖の思想—日本の横穴式石室のはじまり」	展示課展示調整室主任研究員 岸本圭 企画課文化交流展室長 河野一隆	120
27年 2月7日	文化趣味講座 「九州国立博物館 古代日本と百済の交流」鑑賞教室	展示課展示調整室 岸本圭	25
27年 2月22日	特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」関連 リレー講座 九博研究員が語る! 考古学を100倍楽しむ方法 「激動の7世紀を戦った兵士」 「発掘された日本列島2014の見どころ」	展示課情報サービス室研究員 小嶋篤 展示課情報サービス室主任研究員 進村真之	90
27年 3月8日	トピック展示「栴右衛門 受け継がれる技と美」関連 国際シンポジウム「世界のアリタ —有田焼の伝統と未来へ続く創造性—」	元佐賀県立九州陶磁文化館館長 大橋康二 メゾ・フィツキー氏	253
27年 3月14日	「進化する博物館Ⅲ」特別シンポジウム 「装飾古墳がやってくる」~e-Heritageへの招待~ 第1部「九州装飾古墳群」 第2部「VR作品特別上演会」 VR作品「アンコール遺跡バイヨン寺院」特別上演解説 VR作品「百舌鳥古墳群」特別上演 映像作品「装飾古墳バーチャルシアター作品上映」	東京大学大学院情報学環教授 池内克史 東京文化財研究所保存修復科学センター修復材料研究室長 朽津信明 企画課文化交流展室長 河野一隆	90

3) ミュージアムトーク 52回 参加者総数 1,582人

- ・担当研究員数 延べ 32人
- ・事業内容 文化交流展示室にて担当の研究員が作品に関する解説を行った。
(原則として毎週火曜日の午後3時より15~30分間)

実施日	テーマ	解説者	参加者数(人)
4月1日	須恵器のまつり	企画課文化交流展室長 河野一隆	20
4月8日	蒙古襲来絵詞と関連遺物	文化財課資料登録室主任研究員 荒木和憲	15
4月15日	近世絵画名品展(3)	企画課特別展室研究員 鷺頭桂	30

実施日	テーマ	解説者	参加者数(人)
4月22日	近世絵画名品展(4)	文化財課資料管理室主任研究員 畑靖紀	30
4月30日	アジアの民族造形	展示課長 楠井隆志	20
5月7日	大宰府と鬼瓦	展示課情報サービス室研究員 小嶋篤	69
5月13日	神話のふるさと日向の考古学	展示課展示調整室主任研究員 岸本圭	20
5月20日	解剖書に見る東洋と西洋	元展示課主任研究員 酒井芳司	30
5月27日	博物館の環境管理について	博物館科学課環境保全室研究員 秋山純子	20
6月3日	中国を旅した禅僧の足跡	文化財課資料登録室主任研究員 丸山猶計	40
6月10日	針聞書のひみつ	交流課教育普及室主任研究員 池内一誠	30
6月17日	受け継がれる正倉院宝物	博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー 渡部史之	20
6月24日	火焰土器と3Dプリンタ	博物館科学課長 今津節生	30
7月1日	和漢三才図絵(わかんさんさいずえ)	文化財課長 富坂賢	25
7月8日	御玉貫(うたますき)について	文化財課資料登録室アソシエイトフェロー 望月規史	25
7月15日	クリーブランドの仲間たちpart1	企画課特別展室研究員 鷲頭桂	20
7月23日	クリーブランドの仲間たちpart2	文化財課資料管理室主任研究員 畑靖紀	97
7月29日	クリーブランドの仲間たちpart3	企画課特別展室研究員 森實久美子	40
8月5日	高校考古エピソード集	企画課特別展室主任研究員 市元壘	32
8月12日	見て さわって 聞いて 楽しい展示	展示課情報サービス室主任研究員 進村真之	20
8月15日	銅鐸の輝きと音色	神戸市立博物館 橋詰清孝	30
8月19日	寿司屋の銅鐸	学芸部長 井上洋一	25
8月26日	高校と考古学の歴史	企画課特別展室主任研究員 市元壘	25
9月2日	田中丸コレクション	展示課展示調整室研究員 遠藤啓介	20
9月9日	江戸時代の婚礼調度	企画課文化交流展室主任研究員 川畑憲子	30
9月17日	縄文時代の石器について	博物館科学課保存修復室主任研究員 志賀智史	30
9月25日	アジアの辞令書	交流課教育普及室主任研究員 池内一誠	10
9月30日	ガンダーラにおける仏伝図	企画課課長 臺信祐爾	30
10月7日	古文書に親しむ	博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー 渡部史之	20
10月14日	お金の歴史	文化財課資料登録室主任研究員 荒木和憲	30
10月21日	豊前求菩提山について	展示課長 楠井隆志	30
10月29日	展示室(文化交流展示3室)から眺める古墳時代	展示課情報サービス室研究員 小嶋篤	45
11月5日	倭人の暮らし	展示課情報サービス室主任研究員 進村真之	30
11月11日	人物埴輪のよそおい	展示課展示調整室主任研究員 岸本圭	30
11月18日	宮地獄古墳出土 国宝超大型大刀の復原製作	企画課文化交流展室長 河野一隆	30
11月25日	筑紫君と宗像君	展示課情報サービス室研究員 小嶋篤	40
12月2日	梵音具の魅力	文化財課資料登録室アソシエイトフェロー 望月規史	15
12月9日	対馬宗家文書	展示課展示調整室研究員 一瀬智	15
12月16日	朝鮮通信使	文化財課長 富坂賢	18
27年1月6日	国宝 初音の調度	企画課文化交流展室主任研究員 川畑憲子	20
27年1月14日	日中韓の書法の競演	文化財課資料登録室主任研究員 丸山猶計	26
27年1月20日	トピック展示「大涅槃展」の楽しみ方	企画課研究員 森實久美子	60
27年1月27日	四天王について	企画課長 臺信祐爾	40
27年2月3日	広開土王碑を語り継ぐ	企画課特別展室主任研究員 市元壘	50
27年2月10日	円筒埴輪のおもしろさ	展示課情報サービス室研究員 小嶋篤	60
27年2月17日	装飾古墳の色を調査する	博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー 赤田昌倫	28
27年2月24日	桃山時代の華 - 円満院宸殿の障壁画について -	企画課研究員 鷲頭桂	15
27年3月3日	柿右衛門窯の歩み	企画課特別展室アソシエイトフェロー 酒井田千明	50
27年3月10日	火焰土器と3Dプリンタ	博物館科学課長 今津節生	20
27年3月17日	貝塚について	博物館科学課保存修復室主任研究員 志賀智史	30
27年3月24日	青銅器の色	博物館科学課環境保全室研究員 秋山純子	20
27年3月31日	古墳時代の武装	展示課情報サービス室研究員 小嶋篤	27

4) その他展示に関連するイベント 23回 参加者数 143,786人

展覧会名等	期間	内容	会場	参加者数(人)
文化交流展	7月20日、27日、 8月3日、10日、 17日、24日、31 日	関連展示「小中学生からの考古学」 関連企画 考古学者と話そう!	文化交流展示室	160
	8月16日	全国高等学校考古学フォーラムin九州国立博物館2014 福島県立磐城高等学校「天冠埴輪の発掘とその特色」 東邦大学附属東邦高等学校(千葉県)「東邦大学校内に残る習志野騎兵連隊兵舎 周辺調査」 熊本県立鹿本高等学校「鹿本高校考古学部の歴史と現在の活動」 福岡県立糸島高等学校「火山(ひやま)の烽火台を訪ねて」	ミュージアムホール	100
	2月15日	九州国立博物館開館9周年記念イベント 小編成ガムラン「ガドン」の開催	文化交流展示室 関連第9室	100

展覧会名等	期間	内容	会場	参加者数(人)
特別展「近衛家の国 宝」	5月5日	「ちはやふる」の世界 一かるたクイーンに学ぶ競技かるた」	ミュージアムホール	150
	5月11日	「源氏物語 千年の謎」上映会	ミュージアムホール	236
	5月17日	つづけ字しおりワークショップ	エントランス	95
	5月25日	書の甲子園優勝!太宰府高校芸術科生徒による書道実演&つづけ字しおりワーク ショップ	エントランス	200
特別展「グリーブランド美術館展」	7月5日~8月31 日	紹介パネル展示	エントランス	132,526
	7月15日~27日 8月5日~17日	「雷神めり絵はがき」ワークショップ	エントランス	2,600
	7月24日	親子鑑賞会「親子で楽しむグリーブランド美術館展」	研修室	34
	8月3日	尺八の演奏とともに楽しむグリーブランド美術館展	ミュージアムホール	520
	8月10日	夏休み親子工作「てづくりカメラ」つくって、覗いて、描いてみよう!	研修室	27
	8月22日~23日	日本画ワークショップ「琳派の燕子花を描く」	交流サロン	15
特別展「台北 国立故宮 博物院―神品至宝―」関 連	9月11日	イベント①セミナー&ランチ「台北故宮展を先取り! 至宝のレシピを一挙公開」	鼎泰豊(博多阪急5階)	40
	9月14日	イベント②谷原章介×九州国立博物館学芸員トークショー「谷原章介が現地で 出逢った!台北故宮の魅力とは?」	FFGホール(福岡市中央区 天神2-13-1)	600
	11月8日~16日	8Kスーパーハイビジョン「故宮の美」上映会	4階文化交流展示室 スーパーハイビジョンシ アター	5,304
特別展「古代日本と百済の交流―大宰 府・飛鳥そして公州・扶餘―関連	27年1月11日	スペシャルサポーター・SHUI スペシャルコンサート	ミュージアムホール	390
	27年1月18日	九州国立博物館を愛する会による影絵公演「水城跡のものがたり ひとつこ山 と父子島」	ミュージアムホール	295
	27年1月25日	ウォーキングツアー「考古学者と行く! 史跡探訪」てくてく水城コース	九州国立博物館、観世音 寺、大宰府政庁跡、水城 跡	12
	27年2月8日	ウォーキングツアー「考古学者と行く! 史跡探訪」健脚向き 大野城登山コース	九州国立博物館、大野城 跡、県民の森センター、 岩屋城跡、大宰府政庁跡	12
	27年2月15日	もうすぐ九博10周年イベント「福岡発市民ミュージカル“ASUKA”」	ミュージアムホール	360
特別展「日本 発掘発掘さ れた日本列 島2014 」関連	27年1月18日	なりきり考古学者体験 スペシャル・バージョン	大宰府政庁跡	7
	27年2月15日	なりきり考古学者体験 スペシャル・バージョン	大宰府政庁跡	3

2-(2)-④ 児童生徒を対象とした教育普及事業

平成27年3月31日現在

【東京国立博物館】

1) みどりのライオンプロジェクト

開催期間	通年
開催場所	本館19室みどりのライオン体験コーナー、本館地下教育普及スペース、東洋館6室オアシス
入場者数	197,544 (※東洋館6室オアシスと本館19室参加者数を計数)
担当研究員数	10人
事業内容	4月16日から本館19室に「みどりのライオン体験コーナー」を開設。伝統模様のスタンプでポストカードを作る「トーハクでデザイン」、作品の制作工程や技法がわかる「トーハクで〇〇ができるまで」、e 国宝がさらに使いやすくなった「トーハクで国宝をさぐる」、3Dの作品画像を自由に動かせる「トーハクをまわそう」の5つの体験コーナーを設置した。各種レクチャーや体験型プログラムなどを児童生徒から一般まで幅広い層に向けて展開。博物館へのアプローチから作品の鑑賞を深めるためのプログラムまで、伝統文化の理解促進に寄与するさまざまな教育普及活動を実施した。また、総合文化展鑑賞の手引きとして、ワークシート4種を制作し、通年配布した。

2) 「親と子のギャラリー」

「仏像のみかた」	
開催期間	6月10日～8月31日(74日間)
開催場所	本館11,14室
入場者数	206,884人 (※本館入館者数を計数)
担当研究員数	3人
事業内容	家族での来館のきっかけ、および、総合文化展鑑賞の一助となることを目的に、わかりやすいテーマ設定のもと時代やジャンルを超えた作品を展示する教育普及的展示を夏休みにあわせて実施。仏像を自分の目で見るという切り口でわかりやすく伝えることを目指した。仏像の表現や制作技法の豊かさに触れ、「ほんもの」の作品の鑑賞を通して、歴史のなかで培われてきた日本文化のすばらしさを伝える。関連ギャラリートークも実施。
関連事業	・ファミリーワークショップ「仏像のみかた」 7月27日 (※詳細は 2-(2)-④ 3)③ワークショップ を参照)

3) 体験型プログラムの実施 参加者数計204,765人、

① 平常展示関連体験型プログラム 参加者数計 203,044人

ハンズオン体験型展示	総合文化展(東洋館)関連「アジアの占い体験」	
	期 間	4月1日～12月23日
	開催場所	東洋館6室オアシス
ハンズオン体験型展示	総合文化展(本館)「トーハクでデザイン」「トーハクで〇〇ができるまで」「トーハクで国宝をさぐる」「トーハクをまわそう」	
	期 間	4月15日～12月23日
	開催場所	本館19室みどりのライオン体験コーナー
アクティビティ	特集陳列「博物館に初もうで」(本館特別1・特別2室)関連「トーハク 羊めぐり」	
	期 間	27年1月2日～1月3日
	開催場所	本館特別4室
	参加者数	5,500人

② 平常展示関連 ワークショップ及び関連事業 回数 25回 参加者数計1,721人

ワークショップ及び関連事業	桜ワークショップ めり絵 日本のデザイン、色づかい	
	期 間	①4月5日、②4月6日
	開催場所	平成館ラウンジ
	参加者数	①192人、②228人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展(本館)関連 中高生のためのワークショップ「学芸員に挑戦！」(事前申込制)	
	期 間	5月27日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	7人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展(本館)関連 おとなのためのワークショップ「学芸員に挑戦！」(事前申込制)	
	期 間	5月27日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	18人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展(本館)関連 ワークショップ「季節のもようのお血作り」(事前申込制)	
	期 間	①6月6日、②6月7日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	①16人 ②18人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展「親と子のギャラリー 仏像のみかた 鎌倉時代編」(本館11・14室)関連 ファミリーワークショップ「仏像のみかた」(事前申込制)	
	期 間	7月27日 ①10時～ ②14時～
	開催場所	本館11・14室
	参加者数	①9人 ②11人
	担当研究員数	3人

ワークショップ及び関連事業	総合文化展「特集 古文書の世界」(本館15室)関連 中高生のためのワークショップ「古文書のかたち」(事前申込制)	
	期 間	8月8日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	7人
	担当研究員数	5人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展「特集 古文書の世界」(本館15室)関連 ファミリーワークショップ「古文書のかたち」(事前申込制)	
	期 間	8月9日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	19人
	担当研究員数	5人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展「特集 古文書の世界」(本館15室)関連 ワークショップ「古文書のかたち」(事前申込制)	
	期 間	8月9日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	22人
	担当研究員数	5人
ワークショップ及び関連事業	特集「趙之謙の書画と北魏の書—悲盒没後130年—」(東洋館8室)関連 ファミリーワークショップ「趙之謙&北魏の書に挑戦!」(事前申込制)	
	期 間	8月23日 ①10時~ ②14時~
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	①12人 ②21人
	担当研究員数	5人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展「屏風と襖絵」(本館7室)関連 ファミリーワークショップ「屏風体験!」(事前申込制)	
	期 間	9月6日 ①10時~ ②14時~
	開催場所	応挙館
	参加者数	①11人 ②20人
	担当研究員数	5人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展(東洋館)関連 ファミリーワークショップ 親子でぶつぞう探検 in ナイト・ミュージアム	
	期 間	10月12日
	開催場所	東洋館展示室
	参加者数	65人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展「特集国宝再現—田中親美と模写の世界—」(平成館企画展示室)関連 おとなのためのワークショップ「唐紙の魅力、料紙の魅力」	
	期 間	①10月24日、②10月25日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	①18人、②18人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展「特集国宝再現—田中親美と模写の世界—」(平成館企画展示室)関連 ファミリーワークショップ「きらきら光る唐紙を摺ろう」	
	期 間	10月25日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	10人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展「金工」(本館13室)関連 ファミリーワークショップ「エビを作ってみよう」	
	期 間	①11月29日 ②11月30日
	開催場所	本館地下教育普及スペース
	参加者数	①16人 ②21人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	桜ファミリーワークショップ ふれて納得! 茶の湯の茶碗	
	期 間	3月21日 ①10時~ ②15時~
	開催場所	九条館
	参加者数	①23人 ②20人
	担当研究員数	5人
ワークショップ及び関連事業	桜ワークショップ 春らんまん 桜ぬりえ	
	期 間	①3月28日 ②3月29日
	開催場所	本館2階ラウンジ
	参加者数	①468人 ②451人
	担当研究員数	3人

4) 東博スクールプログラム

期 間	年間
開催場所	全館対象
参加者数	小学校27校1,267人/中学校91校2,923人/高校51校 1,404人/中高一貫0校0名 計169校5,594人 ※児童・生徒のみを計数。この他引率教員が529人 ※特別支援学校、特別支援学級で「盲学校のスクールプログラム」以外を受講した場合も計数
担当研究員数	盲学校のためのスクールプログラム 3校 17名 3人

事業内容	総合的な学習などでより充実した見学ができるよう、ガイダンスや対話形式の伝統文化理解のための鑑賞教育プログラムを児童・生徒に実施した。スクールプログラムのパンフレットは近隣県の学校へ配布し、全国で閲覧・ダウンロードできるよう、ウェブサイトにも掲載した。 視覚障害者の鑑賞支援プログラム「盲学校のためのスクールプログラム」を継続実施した。
------	--

5) 職場体験の受入

期 間	年間
開催場所	全館対象
参加者数	中学校16校51人／高校 3校12人、計19校63人
担当研究員数	2名
事業内容	学校教育活動の一環として実施される職場体験の受入を行った。生涯学習ボランティアとともに、お客様案内やアクティビティの補助等、お客様サービスに関わる業務の体験をする。要項は近隣学校へ配布し、全国で閲覧・ダウンロードできるよう、ウェブサイトにも掲載した。

6) 教員を対象とした事業の実施

① 教員鑑賞会の実施

期 間	①8月5日（親子のギャラリー）、②10月18日（特別展「日本国宝展」）、③1月17日（特別展「みちのくの仏像」）
開催場所	平成館大講堂
参加者数	①20人、②272人、③177人、計469人
担当研究員数	5人
事業内容	学校との連携を考慮した教員を対象のプログラム「スクールプログラム」を中心とした博物館利用方法、特別展観覧の手引きとして作成したジュニアガイドの活用方法の説明とともに、展示の解説を行った上で実際に展示を観覧することで、博物館利用についての興味関心、理解を深める。また、指導要領と関連した授業案を提案した。

② 全国高等学校美術・工芸教育研究会との連携事業の実施（共催：東京藝術大学）

期 間	7月30日～8月1日
開催場所	本館地下教育普及スペース、展示室、会議室／東京芸術大学
参加者数	41人
担当研究員数	3人
事業内容	全国の高等学校で美術、工芸の授業を担当している教員を対象とした研修会。研修を通じて伝統美術や工芸に対する理解を深めることを目指す。今年度は第10回目として「日本の陶磁」をテーマに博物館では歴史に関する講義と鑑賞、大学では実技研修を実施した。

【京都国立博物館】

1) 少年少女博物館くらぶ

事業名：小・中学生向け鑑賞会「みほとけめぐり！」	
実施日	5月11日、18日
対象	小学生から中学生
参加者数	小中学生23人、保護者34人

2) 博物館Dictionaryの発行 4回

- ・発行部数 8,000部
- ・配布先 館内観覧者等

3) 児童・生徒の無料入場

- ・特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」 中学生以下の入場料を無料
- ・平成知新館「名品ギャラリー」 高校生以下の入場料を無料

4) 特別展覧会「南山城の古寺巡礼」こども向けワークシート作成

- ・発行部数 50,000部
- ・配布先 館内観覧者

5) 特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」鑑賞ガイド作成

- ・発行部数 140,000部
- ・配布先 館内観覧者

6) 「さわって発見！ミュージアム・カート」の実施

事業名：	
実施日	9月13日～3月31日の開館日 10:15～16:15
場所	平成知新館 2階、3階
対象	子どもを含む来館者全員
参加者数	定員なし
事業内容	新規に立ち上げたボランティアである「京博ナビゲーター」が、館内に設置された「ミュージアム・カート」で来館者と対話しながら、文化財の魅力を発信し、展示品への理解を深める手助けをした。考古・彫刻・絵画の三分野に関するハンズオン教材を、ミュージアム・カートの教材として開発・作成し、活用した。

7) 訪問授業

①文化財ソムリエによる京都市内の小中学校への訪問授業 7回 488人

事業名：文化財に親しむ授業	
実施概要	NPO法人京都文化協会、京都市教育委員会との連携事業。高精細複製を教材とした訪問授業を実施。講師は、文化財ソムリエ（京都国立博物館 文化財に親しむ授業講師）が担当した。
対象	京都市内の小中学校
主催	文化財に親しむ授業実行委員会（京都国立博物館、NPO法人京都文化協会、京都市教育委員会）
実施内容	6月10日 京都市立醒泉小学校 6年生37名 「風神雷神図屏風」 俵屋宗達筆 7月9日 京都市立朱雀第一小学校 6年生100人 「松鷹図」（二条城） 9月2日 京都市立祥豊小学校 6年生61人 「風神雷神図屏風」 俵屋宗達筆 10月7日 京都市立烏丸中学校 1・2年生94人 「八橋図屏風」 尾形光琳筆 10月30日 京都市立葵小学校 6年生66人 「風神雷神図屏風」 俵屋宗達筆 11月19日 京都市立衣笠小学校 6年生65人 「風神雷神図屏風」 俵屋宗達筆 12月10日 京都市立伏見住吉小学校 5年生65人 「風神雷神図屏風」 俵屋宗達筆

② 研究員による訪問授業 2回 93人

事業名：文化財に親しむ授業	
実施日	11月14日
場所	京都聖母学院高等学校
対象	京都聖母学院高等学校 3年生
参加者数	75人
担当研究員数	1人
主催	文化財に親しむ授業実行委員会（京都国立博物館、NPO法人京都文化協会、京都市教育委員会）
事業内容	「風神雷神図屏風」（俵屋宗達筆）、「松鷹図」（二条城）の高精細複製を教材として、ワークショップもまじえた授業を行った。
事業名：文化財に親しむ授業	
実施日	2月19日
場所	京都市立洛南中学校
対象	京都市立洛南中学校 PTA
参加者数	18人
担当研究員数	1人
主催	京都国立博物館、NPO法人京都文化協会
事業内容	「風神雷神図屏風」（俵屋宗達筆）の高精細複製を教材として、子どもと一緒に文化財を楽しむためのヒントを保護者に伝えるための授業を行った。

8) 教員を対象とした事業の実施

① 社会科教員のための向上講座 1回 66人

実施日	10月22日
開催場所	平成知新館及び明治古都館
参加者数	66人
担当研究員数	1人
事業内容	京都市教育委員会との連携事業。研究員による講義のあと、平成知新館オープン記念展「京へのいざない」展のギャラリートークと質疑応答、特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」の観覧を実施した。小中学校社会科教員と総合支援学校全教員を対象とする。

② 教員研修への協力 3回 66人

事業名：（中・総）美術科夏季研修講座	
実施日	7月28日
開催場所	京都市総合教育センター
参加者数	27人
担当研究員数	1人
事業内容	京都市教育委員会と京都市立中学校教育研究会美術部会が主催する、美術科の教員向けの研修講座にて、文化財複製を用いた授業実践のための講義を行った。
主催	京都市教育委員会、京都市立中学校教育研究会美術部会
事業名：（小・総）授業実践力向上講座〈図画工作①〉	
実施日	6月18日
開催場所	京都市総合教育センター
参加者数	32人
担当研究員数	1人
事業内容	京都市教育委員会、京都市図画工作教育研究会が主催する、小学校教員向けの図画工作の研修講座にて、文化財複製を用いた授業実践のための講義を行った。
主催	京都市教育委員会、京都市図画工作教育研究会
事業名：臨地研修	
実施日	10月22日
開催場所	京都国立博物館 平成知新館研修室・明治古都館展示室
参加者数	7人
担当研究員数	1人
事業内容	社会科教員に向けて、展示品に関する解説・展示見学を行った
主催	神戸市立葺合高等学校（兵庫県）

③ 文化財の複製を用いた授業に関する交流会 1回 29人

実施日	8月2日
開催場所	NPO 法人京都文化協会 会議室
参加者数	29人

担当研究員数	2人
事業内容	京都市内の小中学校教員、文化財ソムリエ、京都国立博物館・京都文化協会職員、その他文化財の複製を用いた教育活動に関心のある人々を交えて、「文化財に親しむ授業」の活動紹介や、意見交換を行った。過去の授業例紹介は、文化財ソムリエ（学生ボランティア）や卒業生が行った。
主催	文化財に親しむ授業実行委員会（京都国立博物館、NPO法人京都文化協会、京都市教育委員会）

④高精細複製を用いた授業実践への協力

事業概要	高精細複製を用いた授業実践を希望する学校に対して、実践例の紹介や資料の提供、当日の設営・授業の補助などを行った。
対象	京都市内の小中学校
実施内容	10月9日 朱雀第六小学校 6年生27人 「松鷹図」（二条城） 11月8日 烏丸中学校 3年生2クラス 「八橋図屏風」尾形光琳筆 11月21日 翔鷲小学校 6年生27人 「風神雷神図屏風」俵屋宗達筆 27年1月22日 粟陵中学校 2年生160人 「風神雷神図屏風」俵屋宗達筆

9) 来館学校団体等への対応 7回 161人

内容	解説や体験プログラム等を提供する
対象	解説や体験を希望した学校団体等
実施内容	5月13日 川根本町立本川根中学校（静岡県）生徒5人・引率1人、博物館業務に関するインタビュー・体験活動 5月14日 佐賀市立金泉中学校（佐賀県）生徒5人・引率1人、博物館業務に関するインタビュー 5月31日 静岡市立城山中学校（静岡県）生徒5人、展示見学・文化財に関する質問 9月20日 鴨沂高等学校（京都府）生徒20人・引率1人、ワークショップ・展示品に関する解説・展示見学 10月18日 鴨沂高等学校（京都府）生徒20人・引率1人、ワークショップ・展示品に関する解説・展示見学 10月21日 銅駝美術工芸高等学校（京都府）生徒94人・引率6人、展示品に関する解説・展示見学 11月9日 ジュニア京都観光大使2人、「家庭教育新聞」記事作成のための取材（展示品に関する解説・展示見学）

10) 館外でのワークショップ 3回 700人

事業名：岩絵具でつくる 夏のキラキラ☆はがき	
実施日	7月21日
開催場所	仙台市産業情報プラザ
参加者数	500人
事業内容	「子どもひかりプロジェクト」が主催する「ミュージアム・キッズ・フェア」にブース出展し、日本の伝統的な絵具の材料をつかった、吉祥文様のハガキづくりワークショップを行った。ブース運営には子どもひかりユース（東北地方の大学生ボランティア）や、京都国立博物館の文化財ソムリエ（大学生ボランティア）も参加した。
事業名：京都国立博物館ワークショップ こども美術ひろば	
実施日	8月24日
開催場所	ゼスト御池（京都市）
参加者数	80人
事業内容	ゼスト御池の子ども向け学習体験イベントの「ゼスト寺子屋」に参加し、日本の伝統的な絵具の材料をつかった、吉祥文様のハガキづくりワークショップを行った。
事業名：岩絵具でつくるキラキラ☆年賀状	
実施日	12月23日
開催場所	アエル（仙台市）
参加者数	120人
事業内容	「子どもひかりプロジェクト」が主催する「ミュージアムストリート2014」にブース出展し、日本の伝統的な絵具の材料をつかった、吉祥文様のハガキづくりワークショップを行った。ブース運営には子どもひかりユース（東北地方の大学生ボランティア）や、京都国立博物館の文化財ソムリエ（大学生ボランティア）も参加した。

【奈良国立博物館】

1) 修学旅行生等を対象とした文化財の案内・説明資料等の作成と解説

- ・期間 事前申し込み制
- ・場所 展示会場・講堂等
- ・学校団体案内数 18件、計1,045名
- ・担当職員数 3人（ボランティア室）
- ・事業内容 当館ボランティアによるスライド学習と展示会場での作品の解説

2) 世界遺産学習への対応

- ・期間 4月～12月 事前申し込み制
- ・対応実績 奈良市内の小中学校35校（5年生の全クラスを対象） 計2,281名
- ・担当職員数 3人（ボランティア室）
- ・事業内容 奈良市教育委員会との共同で、市内の全小中学校5年生を対象に、世界遺産「奈良」を通して歴史や文化への愛着を育み、未来に伝え残すことの重要性を学んでもらう。
当館ボランティアによる「世界遺産学習」プログラム（スライド解説と実際の仏像を前にした観賞など）を1時間程度で実施する。

3) 子ども向け音声ガイドの制作

- ・特別展「天皇皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展」で制作、計1,218台の利用があった。

4) 子ども向けイベントの実施

実施日	内 容	会 場	参加者数
5月3日	チャッピー岡本のカブリモノ変心塾～仏像になってみよう～	地下回廊	11
8月10日	消しゴムはんこで、ほとけさまを彫ってみよう！	地下回廊	（台風接近のため中止）

10月24日 ～11月12日	正倉院展作文コンクール入賞作品展示	地下回廊	—
11月3日	第66回正倉院展 親子鑑賞会 小学生とその保護者を対象に正倉院展の見所を解説。展覧会を自由観覧。 講師：清水 健（奈良国立博物館学芸部主任研究員）	講堂	171

5) 職場体験の受入

期 間	年間
開催場所	全館対象
参加者数	中学校3校12名 (2年生)
担当職員数	1名
事業内容	学校教育活動の一環として実施される職場体験の受入を行った。券売業務や監視業務、ミュージアムショップや館内レストラン等に関わる業務の体験をする。

【九州国立博物館】

1) 博物館における体験型事業の充実

① 教育普及ゾーン（体験型展示室「あじっば」）で活用する様々な教育キットの開発

体験型キットの開発・展開	
内容	「あじっば」の展示に関する理解を促進するための体験型キット・プログラムの開発 新規開発キット、プログラム：「藍の生葉で繭を染めてみよう」「藍の生葉でたき染めをしてみよう」「考古・自然史融合プログラム【南の貝の物語】」「ガムランと三線のコラボ演奏」
対象	こどもおよび親子連れを中心とした来館者全般
人数	定員なし
実施	開館時は常時開放

② 幅広い層に向け体験活動の促進を図るため、教育活動の場を提供

夏休み子ども向けイベント「いこうよ！あじっば夏祭り」	
内容	「あじっば」の資料・コンテンツを活用して夏休みに博物館を訪れた子ども、および親子連れに対して博物館体験の場を提供するとともに、ボランティア活動の活性化を図る。平成26年度は、「花に花を咲かせよう」「紙着物」「拓本」「タングラム」「ひも結び」のコンテンツを提供した。
対象	こどもおよび親子連れを中心とした来館者全般
人数	定員なし
実施	7月26日（土）、27日（日）
九博子どもフェスタ	
内容	“博物館っておもしろいところ”をテーマに楽しいものづくりや色々な体験ができるイベント
対象	子どもおよび親子連れを中心とした来館者全般
人数	九博ボランティア122名、愛する会 約60名、香崎市立一支国博物館6名、参加者のべ2,773名
実施	27年2月22日
茶道体験（「親子で茶道体験」、「はじめての茶道体験」）	
内容	茶室にて茶道初心者に対して茶道体験を実施
対象	「親子で茶道体験」小・中・高校生とその保護者、「はじめての茶道体験」中学生以上
人数	「親子で茶道体験」30名程度、「はじめての茶道体験」10名程度
実施	各月1回実施

③ アジア諸国の文化を理解する様々な体験学習プログラムの開発

体験型展示室「あじっば」の運営	
内容	日本と古くから交流のあるアジア・ヨーロッパ7カ国の文物を屋台風風に展示、資料を実際に使用する・制作する等の体験をととして素材やデザイン、用途などにおける国相互の類似性や相違性を体感する。 「あじっば」における特集展示 ①「あじ庵」：「桃の節句」「ひと針に込めた思い」「楽器のいろいろ」「装う」 ②「あじざら」：「はらのなかのはらっぱで」「木から生まれるもの」「花と鳥（アジア各国の工芸品に表現された花と鳥）」「インドネシアの伝統文化」「郷土人形」 ③ディスプレイ：「インドネシア」「オランダ」「ちょっとひと休み（アジア各国の喫茶具）」「日本・韓国・中国のお正月」 ④あじっば屋台展示替え：日本屋台を中心に5回
対象	こどもおよび親子連れを中心とした来館者全般
人数	最大収容可能人数約80人
実施	開館時は常時開放

④ 博物館の諸活動を体験できるプログラムの開発

なりきり学芸員体験、なりきり考古学者体験	
内容	①なりきり学芸員体験：作品の扱い方、展示の方法を通して学芸員の仕事を紹介する。 ②なりきり考古学者体験：作品の調書の作成、拓本体験を通して考古学者の仕事を紹介する。
対象	小学校中学年以上
人数	1回につき最大6名
実施	「なりきり考古学者」8回、「なりきり学芸員」10回（計18回）

2) 学校教育との連携事業の実施

① 職場体験の受け入れ

中学生・高校生の職場体験	
内容	中学校・高等学校で実施される「総合的な学習」に対応し、働く現場での体験を提供することで、自らの進路や職業について考える機会を提供するとともに、博物館への理解を促進する。
人数	1校につき最大6名
実施	23校から101名（のべ51日間）を受け入れ（受け入れ校：太宰府市立太宰府中学校、福岡県立輝翔館中等教育学校、祐誠高等学校、小郡市立三國中

	学校、福岡県立太宰府高等学校、福岡雙葉中学校、宇美町立宇美南中学校、春日市立春日北中学校、福岡市立筑紫丘中学校、大野城市立大利中学校A、大野城市立大利中学校B、筑紫野市立筑山中学校、大野城市立大野東中学校、太宰府市立太宰府東中学校、太宰府市立学業院中学校、春日市立春日野中学校、大野城市立大野中学校、大野城市立御陵中学校、筑紫野市立二日市中学校、筑紫野市立筑紫野中学校、宇美町立宇美中学校、春日市立春日南中学校、筑紫野市立筑紫野南中学校)
--	---

② ジュニア学芸員（高校生）による教育プログラムの開発

ジュニア学芸員活動	
内容	高校生を対象に、学芸業務体験を通して博物館に親しむ機会を提供する。博物館の活動を高校生と学校に理解してもらうことで、今後の博学連携に向けての布石とする。今年度は体験型展示室「あじっば」をお客様により親しんでもらえる方策について企画した。
人数	9校24名
実施	11月～3月の日曜日を中心に全8回（参加校：福岡大学附属若葉高等学校、筑紫台高等学校、久留米大学附設高等学校、福岡県立武蔵台高等学校、福岡県立春日高等学校、筑紫女学園高等学校、福岡県立筑紫高等学校、福岡県立太宰府高等学校、福岡県立筑紫丘中学校）

③ 教員研修の受け入れ

社会体験研修	
内容	教員を対象に社会貢献等の体験の場を提供し、教員の資質向上を支援しつつ、博物館活動への理解促進を図る。
人数	4校6名
実施	平成26年8月9日～11日（初任者6名）

④ 教員を対象としたプログラムの実践

内容	教員を対象に博物館機能や展示内容、学校貸出キットなどについて解説し、博物館活動への理解を深め、学校による博物館利用を促進する。
人数	40名
実施	平成26年8月29日 福岡県教育センターキャリアアップ講座「博物館を活用した社会科授業づくり」（40名）

⑤ 学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸し出し

学校貸出キット「きゅうぱっく」	
内容	博物館の展示に関連するハンズオン資料をバック化して貸し出し、学校教育および社会教育を支援する。
対象	学校、社会教育団体等
実施	計67件（小学校30件、中学校19件、高等学校9件、特別支援学校4件、大学2件、その他3件）

⑥ 出前講座・授業実践支援事業への対応

出前講座への対応	
内容	学校で実施される「総合的な学習」等に対応し、学校に向いて博物館の機能やアジア各地・日本の歴史・文化についての講義を行う。また、学校貸出キット「きゅうぱっく」を活用した授業に関して、交流課職員がチーム・ティーチングなどで活動のサポートを行う。
対象	研究員による出前講座・授業実践支援事業を希望した学校
実施	計7校 5月2日 春日市立須玖小学校（「きゅうぱっく」を活用した授業支援） 5月28日 太宰府市立太宰府中学校（連続出前講座のガイダンス） 6月18日 太宰府市立太宰府中学校（連続出前講座の一環として「きゅうぱっく」を活用した授業支援） 7月2日 福岡県立小倉高等学校（来館の事前学習として「きゅうぱっく」を活用した授業支援） 7月16日 太宰府市立太宰府中学校（連続出前講座の一環として学芸員体験のワークショップ） 12月18日 福津市立福岡東中学校（「きゅうぱっく」を活用した授業支援） 2月13日 那珂川町立岩戸小学校（「きゅうぱっく」を活用した授業支援）

⑦ 来館学校団体への対応

来館学校団体への対応	
内容	体験プログラムやバックヤード見学等を提供する。
対象	来館した学校団体のうち、体験や支援等を希望した学校
実施	計14校 4月24日 宇美町立原田小学校（「きゅうぱっく」を活用したハンズオン体験） 4月30日 麻生建築&デザイン専門学校（「きゅうぱっく」を活用したハンズオン体験） 5月13日 みやま市立瀬瀬中学校（ガイダンス、バックヤード見学） 6月6日 筑紫野市立筑紫野中学校（九博敷地内でのスケッチ大会 および 展示見学）※雨天のため当日中止 6月9日 福岡県立城南高等学校（進路学習に伴う博物館業務の説明） 6月15日 福岡県立筑紫丘高等学校（郷土研究部のフィールドワークに伴うワークショップやバックヤード見学） 7月15日 福岡教育大学附属福岡中学校（総合学習に於ける調査としてアジアの楽器について説明） 7月31日 福岡市立南福岡特別支援学校（車いす利用でのあじっば体験） 8月1日 福岡県立小倉高等学校（博物館機能と学芸業務についての講義、見学<文科省スーパーサイエンスハイスクール事業>） 9月18日 太宰府市立太宰府小学校（九州国立博物館のバリアフリー施設に関する調査活動） 10月23日 福岡県立香椎高等学校（博物館機能と学芸業務についての講義、見学） 11月6日 筑陽学園中学校（博物館機能と学芸業務についての講義、見学） 11月21日 福岡市立南福岡特別支援学校（車いす利用でのあじっば体験） 12月11日 大野城市立大利中学校（ふるさと学習の一環としての展示見学） ※展示解説を希望した学校団体への対応は含まない（別項ボランティアの欄に含む）

3) 文化交流展、特別展に関連した教育普及事業の実施

特別展「近衛家の国宝」体験コーナー	
内容	一般的には難しいと思われる書の楽しみ方を伝える体験コーナー。タブレットを使って、展示されている書の作品の一部を書く体験。ひらがなの成り立ちや書かれた時の筆の動きが理解できる内容とした。
開催場所	特別展示室
実施	4月15日～6月8日
特別展「近衛家の国宝」つづけ字しおりワークショップ	

内容	ワイヤーを使ってかなが書かれた時の筆の跡をなぞり、しおりを作るワークショップ。かな文字の形の美しさや筆の動きなどを認識し、書の世界に親しんでもらう目的で行った。
開催場所	エントランスホール
人数	190名(小学生以上)
実施	5月17日・25日
特別展「クレーブランド美術館展」体験コーナー	
内容	写真鏡のレプリカを実際に手にとってもらって体験コーナー。展示作品である渡辺華山作「大空武左衛門」が写真鏡を使って描かれたことを、体験を通して知ってもらうことが目的。
開催場所	特別展示室
実施	7月8日～8月31日
トピック展示「中国を旅した禅僧」展 漢字しおりワークショップ	
内容	展示された書の作品の中の漢字一文字をワイヤーでしおりにするワークショップ。書かれた時の筆の動きを、楽しみながら学ぶ。
人数	20名
開催場所	エントランスホール
実施	7月3日
トピック展示「全国高等学校考古名品」プロモーションビデオ	
内容	高校生にも展示会に興味を持ってもらえるよう、出品される埴輪などのミニチュアを粘土で作り、コマ撮り映像を作成。
開催場所	ホームページ
実施	7月15日～9月23日
特別展「クレーブランド美術館展」てづくりカメラワークショップ	
内容	親子を対象にした「てづくりカメラワークショップ」を行い、写真鏡の製作と写真鏡を使って絵を描く体験を行った。
開催場所	研修室
人数	27名
実施	8月10日(午前と午後の2回実施)
特別展「古代日本と百済の交流」わかりやすい作品解説、パネルなど	
内容	考古の専門用語を極力避けたわかりやすい章解説、作品解説、コラムを掲出。コラムにはイラストを用いて親しみやすい内容とした。
開催場所	特別展示室
実施	1月1日～3月1日
特別展「古代日本と百済の交流」ウォーキングツアー「考古学者と行く！史跡探訪」	
内容	展示会関連史跡を当館考古学担当者が案内するウォーキングツアーを実施。
開催場所	九博から水城跡まで歩く①「てくてく水城コース」と九博から四王寺山に登る②「健脚向け 大野城登山コース」の2コース。
人数	①12名 ②12名
実施	①1月25日 ②2月8日
特別展「日本発掘」考古学者のメモ帳「野帳」公開	
内容	展示物が出土した遺跡で使用された野帳を6冊展示。また、当館考古担当者の野帳も合わせて展示。考古学者の仕事を知ってもらうことが目的。
開催場所	特別展示室
実施	1月1日～3月1日
特別展「日本発掘」ワークショップ なりきり考古学者体験	
内容	考古学者の仕事を経験するワークショップ。遺跡調査方法の一つ、平板測量を体験。2回実施。
実施場所	大宰府政庁跡
人数	①7名 ②3名
実施	①1月18日 ②2月15日

4) 高等教育との連携

① 筑紫女学園大学の指導によるガムランワークショップ

内容	筑紫女学園大学の指導によるガムランワークショップの定期的な開催 (筑紫女学園大学准教授と学生、卒業生の指導で、ジャワの伝統的な楽器であるガムランの演奏を体験するワークショップ。)
実施期間	5月6日(火)、7月6日(日)、8月10日(日)、10月4日(土)、1月25日(日) 計5回
開催場所	1階ミュージアムホール
参加者数	毎回28人

5) 館外の文化施設等における体験型ワークショップ

内容	館への理解促進・生涯学習支援の活動として館外の文化施設等において体験型ワークショップを実施した。
対象	子どもおよび親子連れを中心とした一般の方
実施	計11件(参加総数 1,526人) 実施箇所等は以下のとおり(人数は当館担当ブースの体験者数) 5月 3日(土) : 広島県立博物館(参加192人) 7月22日(火) : 仙台AER(参加100人) 8月 2日(土) : 香川県立一支部博物館(参加100人) 8月19日(火) : 大和公民館(参加40人) 9月20日(土) : ムシテックワールド、田村市船引公民館(参加440人) 10月11日(土) : 九州芸文館(参加235人) 10月25日(土) : 吉野ヶ里歴史公園(参加75人) 11月1日(土) : 兵庫県立考古博物館(参加56人) 11月2日(日) : 兵庫県立人と自然の博物館(参加30人) 11月23日(日) : 福岡県立少年自然の家「玄海の家」(参加138人) 12月23日(火) : 仙台AER(参加120人)

2-(2)-⑤ 大学生・大学院生を対象とした教育事業

平成27年3月31日現在

1) 大学等との連携事業

【京都国立博物館】

内 容	京都大学大学院人間・環境学研究所の歴史文化社会論講座
実施日	通年
開催場所	京都国立博物館
受入人数	6人
担当研究員数	6人

内 容	保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会
実施期間	9月6日
開催場所	京都国立博物館
参加者数	18人
担当研究員数	2人

【奈良国立博物館】

内 容	奈良女子大学大学院人間文化研究科との連携講座
実施期間	前期、後期
開催場所	奈良女子大学、奈良国立博物館
参加者数	前期 4人、後期 4人
担当研究員数	1人

内 容	神戸大学大学院人文学研究科との連携講座
実施期間	通年
開催場所	神戸大学、奈良国立博物館
参加者数	16人
担当研究員数	2人

【九州国立博物館】

内 容	放送大学の面接授業 「美術工芸品にみる文化交流の諸相」
実施期間	11月15日～16日
開催場所	九州国立博物館1階研修室
参加者数	50人

内 容	筑紫女学園大学文学部アジア文化学科必修科目「ミュージアムで学ぶアジア」 (博物館の概要について講義、博物館展示見学、博物館体験型展示室での異文化体験)
実施期間	4月22日、4月29日、4月30日、5月13日、6月11日、6月25日(計6日)
開催場所	筑紫女学園大学、九州国立博物館文化交流展示室、体験型展示室「あじっば」
参加者数	72人

内 容	博物館実習生の受け入れ
実施期間	8月20日～9月1日の間、延べ10日間実施
参加者数	15人(11大学)

内 容	カフェコンサート(福岡女子短期大学の学生による演奏)
実施期間	4月18日、5月23日、6月20日、7月11日、8月8日、8月15日、11月7日、12月19日、1月16日、2月13日、3月6日
開催場所	九州国立博物館1階エントランス(オープンカフェ)

2) インターンシップ

【東京国立博物館】

受入期間	7月23日～27年3月31日
受入部署	学芸企画部 デザイン室、教育普及室、教育講座室、広報室 学芸研究部 上席研究員、東洋室、保存修復課、平常展調整室
参加者数	11人(11大学)
担当研究員数	のべ20人
事業内容	博物館学芸員を目指す学生の学習意欲の喚起、高い職業意識の育成を目的とした就業体験プログラム。学生は受入部署において、10～30日間の活動を行った。

【京都国立博物館】

受入期間	8月18日～9月19日
開催場所	文化財保存修理所
参加者数	1人(1大学)
担当研究員数	2人
事業内容	文化財修復大学院生インターンシップ協議会より推薦を受けた学生について、文化財修復に関わる加盟大学院生1名のインターンを受け入れた。12月10日には平成知新館4F研修室にて2名による報告会を行った。(出席者42名)

【奈良国立博物館】

受入期間	8月11日～8月15日
受入部門	総務課
参加者数	3人(1大学)
担当職員数	1人(総務係)
事業概要	立命館大学とのインターンシップに関する覚書に基づき、将来博物館の運営業務(事務系)への就職を検討している学生を募集し、3名

	の学生を受け入れた。
--	------------

【九州国立博物館】

受入期間	8月18日～22日の5日間
受入部署	博物館科学課
参加者数	6人 (4大学)
担当研究員数	2人
事業内容	当館の文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装こう技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施した。

3) 学生ボランティア

【東京国立博物館】

実施日	①ギャラリートーク(研究発表)班 12月14日、12月16日、12月18日、12月23日、1月8日、1月11日、1月15日、1月20日、1月22日、1月25日、1月27日、1月29日、2月1日、2月3日、2月5日、2月8日、2月10日、2月12日 (計18回) ②調査研究班 展示：4月15日～(通年) ギャラリートーク：6月29日、7月9日、7月26日、8月6日、8月24日、9月10日、9月13日、9月14日、10月19日、10月25日 (計10回) スライドトーク：8月27日
開催場所	①本館7室、18室、東洋館10室 ②東京藝術大学構内、本館19室みどりのライオン体験コーナー、本館地下みどりのライオン
参加者数	①インターン3人 聴講者603人 ②インターン12人 聴講者199人
担当研究員数	①4人 ②3人
事業内容	①東京藝術大学大学院インターンシップギャラリートーク班により入館者に対する総合文化展でのギャラリートークを実施。 ②東京藝術大学大学院インターンシップ調査研究班により「突起装飾坏(TJ-5401)」の工程見本の展示および教育普及事業を実施。

【京都国立博物館】

文化財ソムリエに向けたスクーリング	
実施日	26年5月21日、5月28日、6月4日、6月11日、6月25日、7月2日、7月16日、7月23日、8月6日、9月10日、9月17日、10月1日、10月15日、10月22日、11月5日、11月12日、11月26日、12月3日、27年1月21日、2月18日、2月25日 (計21回)
開催場所	京都国立博物館
参加者数	22人
担当研究員数	3人
内容	京都市内の小中学校で訪問授業を行う「文化財ソムリエ」養成のためのスクーリングを実施した。 参加者は、京都市内の大学で日本文化を専門に学ぶ大学生、大学院生。
文化財ソムリエによる訪問授業の実施	
実施日	26年6月10日、7月9日、9月2日、10月7日、10月30日、11月19日、12月10日 (計7回)
開催場所	京都市内の小中学校
参加者数	ボランティア22人、聴講者488人 (小学校6校 聴講者394人、中学校1校 聴講者94人)
担当研究員数	2人
内容	「文化財ソムリエ」として登録している大学生・大学院生が、研究員によるスクーリングを受けたのち、京都市内で訪問授業等を実施した。

4) 見学対応

【東京国立博物館】

期 間	年間
開催場所	全館対象
参加者数	12件254人 (大学6件、135人/専門学校6件119人)
担当研究員数	3人
事業内容	鑑賞の手助け、文化財・博物館への理解促進のため、大学生や大学院生、専門学校生を対象に、東京国立博物館の展示や事業についての解説を含めたガイダンスを実施した。

【京都国立博物館】

期 間	年間
開催場所	全館対象
参加者数	5件20人 (大学5件、20人)
担当研究員数	1人
事業内容	大学生や大学院生を対象に、京都国立博物館の展示や事業についての解説等を行った。

【九州国立博物館】

期 間	年間
開催場所	全館対象
参加者数	16件 (大学14件316人/短期大学2件175人 計491人)
担当研究員数	2人
事業内容	大学生等を対象に、九州国立博物館の概要についての講義、博物館施設・展示室等の見学を実施した。

2-(2)-⑥ ボランティア受入れ実績
(後述の資料に記載) ◎共通資料b

2-(2)-⑦ 友の会・パスポート等

1) 会員数

友の会 平成27年3月31日現在

区分 館名	友の会会員数 (年会費 10,300 円) ※継続：9,800 円/東京国立博物館
東京国立博物館	2,145 人
九州国立博物館	192 人

パスポート 平成27年3月31日現在

区分 (年会費) 館名	パスポート 会員数	一般 (4,100 円)	一般 (3,100 円)	29 歳以下 (3,000 円)	学生 (2,500 円)	学生 (2,100 円)	家族 (6,200 円)
東京国立博物館	20,302 人	18,716 人	—	368 人	1,218 人	—	—
京都国立博物館	6,522 人	—	6,372 人	—	—	150 人	—
奈良国立博物館	3,162 人	—	3,026 人	—	—	99 人	37 人
九州国立博物館	4,990 人	—	2,687 人	—	—	2,303 人	—

ベーシック (26年4月1日より新設)

平成27年3月31日現在

区分 (年会費) 館名	ベーシック 会員数	一般 (1,500 円)	29 歳以下 (1,100 円)	学生 (900 円)
東京国立博物館	1,038 人	911 人	79 人	48 人

2) 友の会会員を対象とした事業

【東京国立博物館】

『東京国立博物館ニュース』、東大寺講演会開催案内送付、コンサートの鑑賞割引、当館ミュージアムショップの商品の一部割引、レストラン・カフェでの飲食料金の割引、総合文化展招待券の配布。

【九州国立博物館】

季刊情報誌「アジアージュ」、トピック展示ちらし、特別展連続講座等イベント案内送付、当館ミュージアムショップ・レストラン・カフェでの割引、入会時の記念品プレゼント。

2-(2)-⑧賛助会

1) 会員数

平成27年3月31日現在

館名	東京国立博物館	京都国立博物館		奈良国立博物館
		(社団法人清風会)	(ミュージアム・パートナー)	
件数	414件	350人	1件	73件
内訳	プレミアム会員(個人): 2人 特別会員(団体): 20団体 特別会員(個人): 6人 維持会員(団体): 41団体 維持会員(個人): 345人	賛助会員: 32人 特別会員: 63人 普通会員: 255人	団体会員: 1件	特別支援会員: 5団体 特別会員: 4団体 一般会員(団体): 18団体 一般会員(個人): 46人

2) 賛助会員を対象とした事業

【東京国立博物館】

- ①当館総合文化展、特別展（維持会員および特別会員個人は展覧会毎に1回）の無料観覧
- ②各特別展開会式へのご招待
- ③各特別展につき1回の特別鑑賞会へのご招待
- ④『東京国立博物館ニュース』（年6回）の配布
- ⑤当館ミュージアムショップの商品の一部割引
- ⑥当館レストラン、カフェでの飲食料金の割引

【京都国立博物館】

- ①『京都国立博物館だより』（年4回）の配布
- ②当館平常展（平成知新館名品ギャラリー）、特別展の無料観覧
- ③清風会が行う鑑賞会、見学会、会報に協力
- ④当館ミュージアムショップの商品の一部割引
- ⑤国際シンポジウム（年1回）案内の発送

【奈良国立博物館】

- ①当館平常展、特別展の無料観覧
- ②各特別展開会式へのご招待
- ③展覧会図録の1冊贈呈
- ④『奈良国立博物館だより』（年4回）の配布
- ⑤当館ミュージアムショップでの展覧会図録の割引
- ⑥当館レストランでの飲食料金の割引
- ⑦当館研究員による解説付きの賛助会員特別鑑賞会を実施
 - ・ 4月8日（火） 特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 —迫真とエキゾチシズム—」
特別鑑賞会 参加人数36名
 - ・ 7月23日（水） 特別展「国宝 醍醐寺のすべて —密教のほとけと聖教—」
特別鑑賞会 参加人数51名
 - ・ 10月24日（金） 特別展「第66回正倉院展」
特別鑑賞会 参加人数129名

2-(2)-⑨ 渉外活動

平成 27 年 3 月 31 日現在

【東京国立博物館】

1) 会場提供 9 件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者数 (人)
4 月 3 日	展示会	エルメネジルド ゼニア「クチュール コレクション」	平成館ラウンジ	約 150
6 月 25 日	懇親会	ESDユネスコ世界会議周知のためのエクスカーショ(非公式教育大臣会合(第17回 OECD/Japan セミナー) エクスカーショ・レセプション)	法隆寺宝物館	約 200
9 月 8 日	懇談会	「タリスカーストーム」PR イベント	法隆寺宝物館	約 150
9 月 25 日	懇親会	JAPAN NIGHT 2014	法隆寺宝物館	約 1,500
10 月 20 日	講演会	第 8 回資料保存シンポジウム	法隆寺宝物館	約 250
10 月 20 日	懇親会	Red Bull Music Academy presents The Garden Beyond	平成館	約 500
11 月 11 日 ～11 月 18 日	展示会	台東区主催によるイベント (伝統工芸職人展)	表慶館	—
12 月 1 日	懇親会	特別エキシビジョン「エルメス レザー・フォーエバー」レセプション	法隆寺宝物館	約 460
12 月 2 日 ～12 月 23 日	展示会	特別エキシビジョン「エルメス レザー・フォーエバー」	表慶館	約 45,000

2) 館主催・協カイベント 27 件

期間	種類	タイトル	会場	出席者数 (人)	備考
4 月 1 日	音楽会	東京・春・音楽祭 2014「林はるか (チェロ)」	法隆寺宝物館	273	東京・春・音楽祭実行委員会共催
4 月 1 日	音楽会	東京・春・音楽祭 2014「東博でバッハ vol. 20」川崎洋介	法隆寺宝物館	80	東京・春・音楽祭実行委員会共催
4 月 6 日	音楽会	東京・春・音楽祭 2014「Vive!サクソフォン・コンサート」	正門内池前	214	東京・春・音楽祭実行委員会共催
4 月 10 日	音楽会	東京・春・音楽祭 2014「東博でバッハ vol. 21」ウェン=シン・ヤン	法隆寺宝物館	118	東京・春・音楽祭実行委員会共催
5 月 14 日	音楽会	ピノキオコンサート～大人と子どものための音・学・会 at 東京国立博物館～	平成館ラウンジ	232	公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団共催
6 月 1 日	イベント	東博寄席	平成館大講堂	254	当館主催
6 月 8 日	音楽会	ファミリーコンサート	平成館ラウンジ	415 (2 回計)	東京クワリネット・クワイア共催 上野のれん会、東京国立博物館協カ会協賛
6 月 22 日	音楽会	東京国立博物館 初夏のコンサート	平成館ラウンジ	228	サロン・ド・ソネット共催
9 月 21 日	音楽会	東京国立博物館 秋のコンサート	平成館ラウンジ	178	サロン・ド・ソネット共催
10 月 4 日	音楽会	Music Weeks in TOKYO 2014 まちなかコンサート	表慶館	97	東京文化会館他共催
10 月 9 日 ～11 月 2 日	イベント	柳瀬荘アート・教育プロジェクト	柳瀬荘	226 人	日本大学芸術学部共催
10 月 10 日 10 月 11 日	イベント	博物館で野外シネマ 映画「時をかける少女」(2006 年、細田守監督) 上映	本館前	約 8600 (2 回計)	当館主催
10 月 11 日	音楽会	Music Weeks in TOKYO 2014 まちなかコンサート	表慶館	100	東京文化会館他共催
10 月 11 日	講演会	上野の山文化ゾーンフェスティバル「中国青銅器をめぐる旅 4 千年のものがたり」	平成館大講堂	202	上野の山文化ゾーン連絡協議会
10 月 30 日 ～11 月 2 日	イベント	創エネ・あかりパーク 2014 に伴うライトアップ	本館前庭	—	「創エネ・あかりパーク 2014」実行委員会共催
11 月 6 日	講演会	東大寺講演会	平成館大講堂	256	東大寺共催
12 月 14 日	音楽会	東京国立博物館 クリスマスコンサート	平成館ラウンジ	248	サロン・ド・ソネット共催
1 月 2 日	イベント	和太鼓 (批懸鼓)	本館前	839	当館主催
1 月 2 日	イベント	太神楽 (仙丸)	本館前	579	当館主催
1 月 2 日	イベント	獅子舞 (東部葛西囃子睦会)	本館前	882	当館主催
1 月 3 日	イベント	和太鼓 (白梅太鼓)	本館前	753	当館主催
1 月 3 日	イベント	クラリネット (ジュリアンズ)	法隆寺宝物館	996	当館主催
1 月 3 日	イベント	獅子舞 (東部葛西囃子睦会)	本館前	909	当館主催
27 年 3 月 17 日	音楽会	東京・春・音楽祭 2015「東博でバッハ vol. 22」安田謙一郎	平成館ラウンジ	118	東京・春・音楽祭実行委員会共催
27 年 3 月 19 日	音楽会	東京・春・音楽祭 2015「Vive! サクソフォン・クワルテット」	正門内池前	90	東京・春・音楽祭実行委員会共催
27 年 3 月 24 日	音楽会	東京・春・音楽祭 2015「加藤えりな 無伴奏ヴァイオリン・コンサート」	法隆寺宝物館	139	東京・春・音楽祭実行委員会共催
27 年 3 月 26 日	音楽会	東京・春・音楽祭 2015「東博でバッハ vol. 23」松尾俊介	法隆寺宝物館	117	東京・春・音楽祭実行委員会共催

【京都国立博物館】

1) 会場提供 64件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
4月5日	音楽会	音燈華 vol.5 押尾コータロー、ジュスカ・グランペール	明治古都館横広場	600	寧屋舎中合同会社
4月23日	茶席	茶会	茶室	16	内藤貴美子
4月24日	茶席	茶会	茶室	8	吉田市蔵
5月6日	撮影	撮影会	茶室	10	安藤史緒
5月10日	茶席	茶会	茶室	10	松井幸雄
5月11日	茶席	茶会	茶室	50	松井幸雄
5月13日	茶席	茶会	茶室	7	麻柄清
5月14日	茶席	茶会	茶室	27	麻柄清
5月25日	講義	特別展覧会鑑賞のための講義	平成知新館講堂	200	ジャパン・ゴールド・アカデミー
5月31日	茶席	茶会	茶室	5	前田寿子
6月1日	茶席	茶会	茶室	80	前田寿子
6月24日	撮影	撮影会	茶室	5	吉永健太郎
6月27日	撮影	結婚式前撮り写真撮影	噴水前広場、明治古都館前広場	2	佐野友美
8月2日	撮影	撮影会	茶室	20	黒川智久沙
8月28日	撮影	ドラマ撮影	噴水前広場、正門前広場	40	東映
9月3日 ~9月5日	講演会	日本展示学会「展示論講座」	平成知新館、管理棟	30	主催：日本展示学会 当館共催
9月13日	イベント	平成知新館開館記念セレモニーパーティー	平成知新館	100	ハイアットリージェンシー京都
9月21日 ~9月28日	展示会	レクサス車両展示	平成知新館前芝生	350	トヨタ自動車
9月24日	研修会	実地研修会	平成知新館講堂	30	京都仏具協同組合
9月27日	特別鑑賞会	そうだ京都、行こう 平成知新館特別鑑賞会「京博でナイトミュージアム」	平成知新館	100	JR 東海 京都・奈良・近江文化情報事務局
9月28日	講義	平成知新館オープン記念展鑑賞のための講義	平成知新館講堂	5	京都ホテルオークラ
10月17日	研修会	京都市内博物館施設連絡協議会 研修会	平成知新館講堂	200	京都市内博物館施設連絡協議会
10月18日	講演会	第22回「コロンブス技術の保存と印刷文化を考える会」	平成知新館講堂	80	便利堂
10月20日 ~10月24日	講義	第9回指定文化財企画・展示セミナー	平成知新館大会議室	25	文化庁文化財部美術学芸課
10月21日	茶席	茶会	茶室	5	栗岡史歩
10月22日	特別鑑賞会		茶室	5	京都ホテルオークラ
10月24日	講義	大阪倶楽部 美術茶話会	平成知新館講堂	40	阪急交通社
10月27日	撮影	佛教大学 大学案内用写真撮影	噴水前広場、明治古都館前広場	8	佛教大学 長尾秀則
10月27日	特別鑑賞会	平成知新館特別鑑賞会	平成知新館	120	ハースト婦人画報社
10月27日	特別鑑賞会	平成知新館および明治古都館特別鑑賞会「三越の旅」	平成知新館、明治古都館	194	三越伊勢丹
11月3日	撮影	撮影会	茶室	10	安藤史緒
11月5日	茶席	授業	茶室	50	京都府立すばる高等学校
11月5日	講義	特別展覧会鑑賞のための講義	平成知新館講堂	200	神慈秀明会
11月5日	研修会	研修会	平成知新館講堂	50	京都美術商協同組合
11月8日	特別鑑賞会	そうだ京都、行こう 明治古都館特別鑑賞会「京博でナイトミュージアム」	明治古都館	70	JR 東海 京都・奈良・近江文化情報事務局
11月9日	講義	第3回「美術工芸 都のかたち」	平成知新館大会議室	52	慈照寺
11月10日	展示会	CHAUMET 宝飾品の新商品展示発表ディナー会	平成知新館グランドロビー	25	K2
11月12日	撮影	撮影会	茶室	20	片井博行
11月17日	講演会	健康長寿産業シンポジウム	平成知新館講堂	120	ジェイアール東日本企画
11月23日	茶席	茶会	茶室	6	菊地原節子
11月29日	講演会	京都国立博物館スタディツアー	平成知新館大会議室	10	京都文化協会
11月30日	茶席	茶会	茶室	3	永井由佳梨
11月30日	音楽会	音燈華 ジュスカ・グランペール情熱快適コンサート	平成知新館講堂	200	寧屋舎中合同会社
12月9日	特別鑑賞会	熊本県立熊本高校 平成知新館特別鑑賞会	平成知新館	415	JTB九州熊本
12月13日	茶席	茶会	茶室	15	北詰宜史
12月14日	茶席	茶会	茶室	15	北詰宜史
12月20日	撮影	メンズスーツカタログ制作のための写真撮影	明治古都館前広場	20	こばやし事務所
12月23日	講演会	ICOM フォーラム京都	平成知新館講堂	100	日本博物館協会
1月11日	茶席	茶会	茶室	20	前田寿子
1月30日	撮影	広告制作のための写真撮影	茶室	4	有限会社スタジオ・コーソ

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
1月31日	茶席	茶会	茶室	30	五条坂茶わん坂ネットワーク
2月11日	講演会	展覧会鑑賞に係る解説	平成知新館講堂	15	ハイアットリージェンシー京都
2月23日	記者発表・記念式典	大型電気路線バスお披露目会及び運行開会式	平成知新館講堂	80	京都急行バス株式会社
2月28日	茶席	茶会	茶室	15	平金昌人
3月2日	講演会	平成26年度京都美風シンポジウム	平成知新館講堂	200	京都商工会議所 産業振興部
3月16日	撮影	カタログ制作のための写真撮影	平成知新館グランドロビー	15	株式会社パイロット
3月19日	講演会	京都商工会議所女性会 会員の集い講演会	平成知新館講堂	50	京都商工会議所女性会
3月20日	茶席	茶会	茶室	10	栗岡史歩
3月28日	記念式典・パーティー	経営コンサルティング会社 20周年記念事業	平成知新館講堂・グランドロビー	105	ハイアットリージェンシー京都
3月29日	撮影	撮影会	茶室	3	安達彩実
3月30日	撮影	結婚式前撮り写真撮影	茶室	5	エル・ピューバ (elle pupa)
3月11日～15日	イベント	琳派400年記念プロジェクトマッピング「21世紀の風神・雷神伝説」	明治古都館前広場 噴水前広場 正門前広場	16,100	琳派400年記念プロジェクトマッピング委員会
3月14日～15日	展示販売	伝統工芸品の展示販売	西の庭	800	京都府染織・工芸課
3月29日	音楽会	中国琵琶・古筝コンサート 櫻花情緒	平成知新館講堂	180	

2) 館主催・協カイベント 12件

期間	種類	タイトル	会場	出席者(人)	備考
5月4日	音楽会	二胡コンサート	平成知新館講堂	615	
5月16日	落語	京都・らくご博物館(春)～新緑寄席～	平成知新館講堂	200	
5月18日	講演	京博で間香体験と講演会	平成知新館講堂	107	
6月19日 ～6月20日	見学会	明治古都館屋根修理現場 他の見学会	明治古都館屋上	62	
7月12日 ～7月13日	見学会	平成知新館事前見学会	平成知新館	448	
8月23日	音楽会	音燈華 vol.5 ～DEPAPEPE コンサート～	庭園	584	大和ハウス工業共催 特別協賛:京阪電気鉄道株式会社
10月31日	落語	京都・らくご博物館(秋)～紅葉寄席～ 平成知新館開館記念公演	平成知新館講堂	202	
11月2日 ～11月3日	落語	京都・らくご博物館(秋)～紅葉寄席～ 米朝アンドロイド落語会	平成知新館講堂	265	
11月8日	音楽会	秋の夜間クラシックコンサート	平成知新館グランドロビー	136	
12月6日 ～12月23日	イベント	庭園内イルミネーション	庭園	約200	
12月21日	音楽会	クリスマス・ハンドベルコンサート	平成知新館グランドロビー	260	
12月24日	音楽会	クリスマス・バロックコンサート	明治古都館中央室	100	

【奈良国立博物館】

1) 会場提供 36件(内、中止1件)

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
4月23日	会議	奈良県文化財保安連絡会	会議室	20	奈良県警察本部
4月24日	特別観覧	なら仏像館夜間貸切観覧	なら仏像館	170	山梨大学教育人間科学部附属中学校
4月28日	キャンペーン	交通安全啓発活動	西新館北側敷地内通路	—	奈良県奈良警察署
5月23日	特別観覧	なら仏像館夜間貸切観覧	なら仏像館	175	横浜市立菅田中学校
5月26日	特別観覧	なら仏像館夜間貸切観覧	なら仏像館	110	大田区立東蒲中学校
6月21日	講演	「民際-知と文化」出版記念フォーラム in Nara	講堂	60	NPO 法人東アジア隣人ネットワーク
6月21日	展示	「民際-知と文化」出版記念フォーラム in Nara 実施にかかるパネル展	講堂出入口付近スペース	60	奈良県知事公室国際課
6月24日	茶会	茶会	茶室	7	小林順子
6月25日	特別観覧	なら仏像館夜間貸切観覧	なら仏像館	128	市川市立大洲中学校
8月9日	コンサート	音燈華 ジュスカ・グランペール(ギター・バイオリンの演奏)	庭園・西新館南側ピロティ	—	寧屋舎中合同会社 (台風接近のため中止)
8月12日	講義	第26回夏季中学高校生セミナー	講堂	55	NPO 法人まほろば教育事業団
9月6日	講義	学習の旅「心に刻む名刹～長谷寺・室生寺～」	講堂	43	学校法人NHK学園

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
9月29日	コンサート	音燈華 ジュスカ・グランパール(ギター・バイオリンの演奏)	庭園・西新館南側ピロティ	150	寧屋舎中合同会社
10月24日 ~11月12日	茶席	正倉院展「野点のお茶席」	西新館南側ピロティ 庭園	17,819	結の会
10月24日 ~11月12日	休憩所	休憩所及び甘味の販売	新館西側敷地	—	(株)鶴屋吉信
10月24日 ~11月12日	休憩所	休憩所及び喫茶の販売	新館西側敷地	—	(有)日本クリーンシステムズ
10月24日 ~11月12日	キャンペーン	奈良県特産品の物販	新館西側敷地	—	校倉な会
10月24日 ~11月12日	キャンペーン	奈良県特産品の物販	新館西側敷地	—	なら和み館
10月24日 ~11月12日	キャンペーン	記念切手の販売	新館西側敷地	—	郵政事業株式会社
10月24日 ~11月12日	キャンペーン	記念写真の撮影・販売	新館西側敷地	—	小路谷写真(株)
10月24日 ~11月12日	キャンペーン	正倉院展 図録、グッズ等の販売	西新館、地下回廊	—	(財)仏教美術協会
10月29日	講義	第5回東アジア地方政府会合エクスカッション 参観者への展示品等の説明	講堂	69	奈良県知事公室国際課
11月28日 ~11月29日	茶会	茶会	茶室	13	小林順子
11月30日	茶会	茶会	茶室	53	橋本玲子
12月16日	セミナー	おん祭りについてのセミナー	講堂	16	株式会社J-MIND
12月17日	敷地提供	春日若宮おん祭執行に係る敷地提供	一の鳥居付近の敷地	—	春日大社
1月11日	茶会	茶会	茶室	17	三木ひとみ
1月25日	茶会	茶会	茶室	19	中村多津子
1月31日	講演会	柳澤吉保没後300年記念講演会	講堂	146	公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会
2月7日	特別観覧	奈良の冬キャンペーン期間中における奈良国立博物館(新館)夜間特別観覧	展示室	38	奈良うまし冬めぐり実行委員会
2月8日	結婚式	結婚式	仏教美術資料研究センター	28	オーシャンフロント
2月12日	茶会	第二回珠光茶会	茶室・西新館南側ピロティ	94	奈良市
2月19日	講座	福島大学の授業科目「日本文化史演習旅行」による実地演習	講堂	6	福島大学人間発達文化学類
2月21日	特別観覧	奈良の冬キャンペーン期間中における奈良国立博物館(新館)夜間特別観覧	展示室	87	奈良うまし冬めぐり実行委員会
2月28日	特別観覧	奈良の冬キャンペーン期間中における奈良国立博物館(新館)夜間特別観覧	展示室	16	奈良うまし冬めぐり実行委員会
3月12日	セミナー	お水取りについてのセミナー	講堂	7	株式会社J-MIND

2) 館主催・協カイベント 47件(内、中止1件)

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
4月8日	鑑賞会	賛助会特別鑑賞会	講堂・展示室	36	
4月9日 4月10日	鑑賞会	タクシー・ホテルなど関係者特別鑑賞会	講堂・展示室	35	
4月24日	鑑賞会	わいず倶楽部 解説付き小ツアー	奈良仏像館	第1回 22 第2回 19 第3回 20 第4回 15	主催:わいず倶楽部事務局
4月26日	講義	特別展鑑賞のための講義	講堂	22	読売新聞大阪本社企画事業部
4月26日	イベント	第2回庭園・茶室案内ツアー	庭園・茶室	第1回 19 第2回 20	
4月26日	イベント	仏教美術資料研究センター公開	仏教美術資料研究センター	第1回 212 第2回 234	
4月27日	イベント	第2回庭園・茶室案内ツアー	庭園・茶室	第1回 23 第2回 21	
4月27日	イベント	仏教美術資料研究センター公開	仏教美術資料研究センター	第1回 277 第2回 485	
5月3日	イベント	チャッピー岡本のカプリモノ変心塾~仏像になってみよう!~	地下回廊	11	
6月26日	コンサート	ムジークフェストなら2014「宝の館で聴くヴィオラ・ダ・ガンバ」	地下回廊・応接室	140	主催:ムジークフェストなら2014実行委員会
6月28日	コンサート	ムジークフェストなら2014「明治の館とバロックの花」	仏教美術資料研究センター	163	主催:ムジークフェストなら2014実行委員会

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
7月23日	鑑賞会	賛助会特別鑑賞会	講堂・展示室	51	
7月24日 7月25日	鑑賞会	タクシー・ホテルなど関係者特別鑑賞会	講堂・展示室	65	
8月5日～14日	観光 イベント	「なら燈花会」オブジェ等を配置	新館周辺	—	主催：なら燈花会の会
8月10日	イベント	消しゴムはんこで、ほとけさまを彫ってみよう!	地下回廊	—	台風接近のため中止
8月11日	イベント	夏休み親子講座「守ろう!知ろう!文化財」	講堂	84	協力:奈良市消防局
8月19日	法話	醍醐寺展法話	会議室	26	醍醐寺
8月22日	講義・観覧	「国宝 醍醐寺のすべて」展に関するレクチャー	講堂	11	(株)日経カルチャー
8月31日	取材	「国宝 醍醐寺のすべて」展に関する取材対応	応接室 会議室	20	日本経済新聞社大阪本社
9月5日	講義・観覧	「国宝 醍醐寺のすべて」展に関するレクチャー	講堂	11	(株)日経カルチャー
9月6日	講演	アジアフォーラム「奈良と醍醐時と密教と」	講堂	194	日本経済新聞社大阪本社
9月23日	イベント	ライトアップコンサート 「言霊と音霊の夜会-第六章-」	仏教美術資料研究センター	139	主催:ライトアッププロムナード・なら実行委員会
9月27日	イベント	ワークショップなら2014「オリジナル散華を作ろう」	地下回廊	70	
10月10日 ～12月15日	敷地提供	大古事記展に係る看板設置のための敷地提供	敷地内のフェンス	—	奈良県観光局
10月24日	観光 イベント	「柿の日」に因み、奈良県特産物である柿を配布し「奈良の柿」をPR	新館前広場	—	主催:奈良県農林部 奈良県農業協同組合
10月24日 ～11月12日	観光 イベント	正倉院展「あるくん奈良スタンプラリー」	正倉院展読売新聞ブース	—	主催:はじまりは正倉院展実行委員会
10月24日 ～11月12日	展示	正倉院展「いけばな展示」 法華寺御流のいけばな展示	西新館1階ロビー	—	
10月24日 ～11月12日	展示	正倉院展作文コンクール入賞作品展示	地下回廊	—	主催:奈良国立博物館 読売新聞社
10月24日	鑑賞会	賛助会員特別鑑賞会	講堂・展示室	129	
10月25日	セミナー	正倉院展特別セミナー	仏教美術資料研究センター	96	
10月27日 10月28日	鑑賞会	タクシー・ホテル等関係者特別鑑賞会	講堂・展示室	210	
11月1日	イベント	古典の日講演会「東大寺献物帳と光明皇后」	講堂	110	
11月1日	特別観覧	留学生の日	展示室	98	
11月2日	シンポジウム	正倉院学術シンポジウム2014 「正倉院宝物に日本文化の源流をみる」	奈良県新公会堂	192	
11月3日	鑑賞会	第66回正倉院展 親子鑑賞会	講堂・展示室	171	
11月15日～16日	特別観覧	関西文化の日	青銅器館	1日目222 2日目284	
12月17日	茶会	おん祭と春日信仰の美術「茶会」	茶室・庭園、西新館南側ピロティ	84	主催:裏千家 泉本宗悠
12月20日	イベント	奈良トライアングルミュージアムズ 東京セミナー ～冬の奈良の魅力～	奈良まほろば館	63	
12月21日	イベント	仏像を撮ってみよう!	講堂、地下写場	24	
12月24日	特別鑑賞会	奈良国立博物館文化財修復プレミアム・ミュージアム・ビューイング	講堂・展示室・茶室・庭園・仏教美術資料研究センター	27	
1月15日	特別公開	文化財保存修理所特別公開	講堂・修理所	第1回目35 第2回目37 第3回目38	
2月3日～16日	イベント	「なら瑠璃絵」オブジェの設置	新館前池、園路	—	主催:なら瑠璃絵実行委員会
2月10日	講演会	なら瑠璃絵特別講演会「正倉院宝物と大仏さま」	講堂	97	主催:なら瑠璃絵実行委員会
2月14日	講演・特別鑑賞	お水取り「講話」と「粥」の会	講堂・展示室・茶室控室・東大寺二月堂	35	
3月1日～ 11、13、14日	特別鑑賞	修二会期間中の定期観光バス向けボランティア解説	展示室	103	奈良交通株式会社
3月4日～5日	見学会	なら仏像館修理工事現場特別見学会	なら仏像館	1日目57 2日目47	

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
3月6日	講演	お水取り展鑑賞とお松明	講堂・展示室	167	主催: 結の会

【九州国立博物館】

1) 会場提供 7件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
4月21日 4月22日	貸館	九州茶道文化交流協会茶会	茶室	10	主催: 九州茶道文化交流協会
4月26日 4月27日	貸館	ひびのこぶえワークショップ「虫をつくろう」	研修室/和室	190	主催: NPO 法人太宰府アートのたね
8月9日	貸館	エレキット夏休み工作教室	研修室	26	主催: 株式会社イーケイジャパン
8月17日	貸館	一支国座	ミュージアムホール / 研修室	150	主催: 香崎市立一支国博物館
12月15日~22日	貸館	諸富家具コレクション	ミュージアムホール	1,165	主催: 諸富家具振興協同組合
27年2月3日~ 2月13日	貸館	マークエステル 日本神話展	ミュージアムホール	-	主催: 九州国立博物館振興財団
27年3月15日	貸館	太宰府ロータリークラブ 知的障がい者音楽バンド ビュアアートコンサート	ミュージアムホール	210	主催: 太宰府ロータリークラブ

2) 館主催・協カイベント 101件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
4月18日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	40	主催: 九州国立博物館/福岡女子短大
4月19日	主催	特別展「近衛家の国宝」関連記念講演会「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」	ミュージアムホール	250	主催: 九州国立博物館/西日本新聞社
4月26日	主催	特別展「近衛家の国宝」関連リレー講座 近衛家の国宝展の魅力に迫る『近衛家の曙光-藤原道長の登場-』『信尹と家熙-近衛家が生んだ桃山・江戸の文化人-』	ミュージアムホール	68	主催: 九州国立博物館/西日本新聞社
4月27日	主催	第119回 きゅーはくミュージアムコンサート	ミュージアムホール	140	主催: 九州国立博物館
4月27日	主催	第34回 はじめての茶道体験	茶室	18	主催: 九州国立博物館
5月3日	主催	特別展「近衛家の国宝」関連講演会「藤原道長『御堂関白記』と世界記憶遺産への道程」	ミュージアムホール	190	主催: 九州国立博物館/西日本新聞社
5月5日	主催	特別展「近衛家の国宝」関連イベント「ちはやふる」の世界 -かるたクイーンに学ぶ競技かるた-	ミュージアムホール	150	主催: 九州国立博物館/西日本新聞社
5月6日	主催	第1回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	28	主催: 九州国立博物館
5月10日	主催	特別展「近衛家の国宝」関連リレー講座 近衛家の国宝展の魅力に迫る『近衛家の成立-藤原道長以後-』『陽明文庫の書の魅力』	ミュージアムホール	70	主催: 九州国立博物館/西日本新聞社
5月11日	主催	特別展「近衛家の国宝」関連上映会「源氏物語-千年の謎-」	ミュージアムホール	236	主催: 九州国立博物館/西日本新聞社
5月15日	共催	日韓伝統音楽コンサート「遙かなる百済へ」	ミュージアムホール	250	主催: 日韓伝統音楽国際ネットワーク協議会
5月17日	主催	特別展「近衛家の国宝」関連イベント「つづけ字しおりワークショップ」	エントランス	95	主催: 九州国立博物館
5月17日	後援	つくしフォーラム	ミュージアムホール / 和室	288	主催: つくし青年会議所
5月23日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	80	主催: 九州国立博物館/福岡女子短大
5月24日	主催	第120回 きゅーはくミュージアムコンサート	ミュージアムホール	210	主催: 九州国立博物館
5月24日	主催	第40回 親子で茶道体験	茶室	51	主催: 九州国立博物館
5月25日	主催	第35回 はじめての茶道体験	茶室	7	主催: 九州国立博物館
5月25日	主催	特別展「近衛家の国宝」関連イベント「書の甲子園優勝! 太宰府高校芸術科生徒による書道実演&つづけ字しおりワークショップ」	エントランス	200	主催: 九州国立博物館
6月3日~8日	共催	第3回ステンドグラスアート・九州会作品展“希望”	ミュージアムホール	2,926	主催: ステンドグラスアート・九州会
6月3日~ 7月13日	共催	アジア代表日本2014 展示	エントランス	57,129	主催: アジア代表日本2014 実行委員会
6月20日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	60	主催: 九州国立博物館/福岡女子短大
6月21日	主催	第121回 きゅーはくミュージアムコンサート	ミュージアムホール	90	主催: 九州国立博物館
6月21日	主催	第41回 親子で茶道体験	茶室	40	主催: 九州国立博物館
6月22日	主催	第36回 はじめての茶道体験	茶室	10	主催: 九州国立博物館
6月29日	共催	まほろばコンサート	ミュージアムホール	605	主催: 太宰府市吹奏楽団
7月5日~ 8月31日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連パネル展示	エントランス	132,526	主催: 九州国立博物館

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
7月6日	主催	第2回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	20	主催：九州国立博物館
7月11日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	50	主催：九州国立博物館／福岡女子短大
7月12日	主催	第122回 きゅーはくミュージアムコンサート	ミュージアムホール	250	主催：九州国立博物館
7月12日	主催	第37回 はじめての茶道体験	茶室	3	主催：九州国立博物館
7月13日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連記念講演会「アメリカ人の目利き－シャーマン・リーとクリーブランド美術館コレクション」	ミュージアムホール	275	主催：九州国立博物館／西日本新聞社
7月15日～27日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連ぬり絵はがきワークショップ	エントランス	1,300	主催：九州国立博物館
7月19日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連リレー講座「日本絵画入門：千年の歴史をたどる」	ミュージアムホール	80	主催：九州国立博物館／西日本新聞社
7月24日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連イベント「親子で楽しむクリーブランド美術館展」	研修室	34	主催：九州国立博物館／西日本新聞社
7月24日 7月25日	主催	太宰府ブランド創造協議会「ゆかた de 太宰府」コラボイベント 茶室でポーズ	茶室	22	主催：九州国立博物館
7月26日 7月27日	主催	第42・43回 親子で茶道体験	茶室	87	主催：九州国立博物館
7月26日 7月27日	主催	いこうよ！あじっば夏祭り2014	ミュージアムホール	400	主催：九州国立博物館
7月29日～ 8月3日	主催	九州国立博物館、北九州市立自然史・歴史博物館連携・交流事業	エントランス	12,944	主催：北九州市立自然史・歴史博物館
8月2日	主催	第38回 はじめての茶道体験（夏の特別編）	茶室	25	主催：九州国立博物館
8月2日	主催	第123回 きゅーはくミュージアムコンサート	ミュージアムホール	220	主催：九州国立博物館
8月3日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連イベント「尺八の演奏とともに楽しむクリーブランド美術館展」	ミュージアムホール	520	主催：九州国立博物館／西日本新聞社
8月5日～17日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連ぬり絵はがきワークショップ	エントランス	1,300	主催：九州国立博物館
8月8日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	60	主催：九州国立博物館／福岡女子短大
8月9日	共催	あなたを韓流の世界に	ミュージアムホール	135	主催：九州国立博物館振興財団
8月9日 8月10日	主催	第44・45回 親子で茶道体験	茶室	39	主催：九州国立博物館
8月10日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連イベント夏休み親子工作「てづくりカメラ」つくって覗いて、描いてみよう！	研修室	27	主催：九州国立博物館
8月10日	主催	第3回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	28	主催：九州国立博物館
8月15日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	100	主催：九州国立博物館／福岡女子短大
8月19日	共催	東九州 神楽人の祭展～京築神楽（福岡）と西米良神楽（宮崎）を愉しむ オープニングイベント	ミュージアムホール／エントランス／研修室	300	主催：京築連帯アメニティ都市圏推進会議／京築神楽の里づくり推進協議会
8月19日～31日	共催	東九州 神楽人の祭展～京築神楽（福岡）と西米良神楽（宮崎）を愉しむ パネル展示	エントランス	42,543	主催：京築連帯アメニティ都市圏推進会議／京築神楽の里づくり推進協議会
8月22日 8月23日	主催	特別展「クリーブランド美術館展」関連イベント日本画ワークショップ「琳派の燕子花（かきつばた）を描く」	交流サロン	15	主催：九州国立博物館
8月23日 8月24日	共催	吉野ヶ里Days in 九博	ミュージアムホール	1,045	主催：佐賀県教育委員会／国営海の中道海浜公園事務所（国営吉野ヶ里歴史公園）／吉野ヶ里歴史公園マネジメント共同企業体、吉野ヶ里公園管理センター
8月30日 8月31日	共催	東九州 神楽人の祭展～京築神楽（福岡）と西米良神楽（宮崎）を愉しむ	ミュージアムホール／エントランス	-	主催：京築連帯アメニティ都市圏推進会議／京築神楽の里づくり推進協議会
9月2日～15日	共催	第13回太宰府の香り・風景写真コンテスト入賞作品展	エントランス	18,096	主催：太宰府観光協会
9月2日～23日	主催	考古パネル展示	エントランス	25,236	主催：九州国立博物館
9月7日	主催	第39回 はじめての茶道体験	茶室	27	主催：九州国立博物館
9月12日～28日	主催	ガムラン展示	ミュージアムホール	-	主催：九州国立博物館
9月15日	主催	第46回 親子で茶道体験	茶室	54	主催：九州国立博物館
9月18日 9月19日	主催	先生向けガムランワークショップ	ミュージアムホール	31	主催：九州国立博物館
9月20日 9月21日	主催	ボランティアイベント「お月見」	エントランス	80	主催：九州国立博物館
9月25日	主催	第124回 きゅーはくミュージアムコンサート in 古都の光	エントランス／屋外	170	主催：九州国立博物館

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者(人)	備考
10月4日	主催	第4回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	27	主催：九州国立博物館
10月18日	主催	第40回 はじめての茶道体験	茶室	17	主催：九州国立博物館
10月21日～26日	主催	特別展「台北国立故宮博物院展」関連台湾グルメフェア	屋外	-	主催：九州国立博物館／西日本新聞社
10月25日	主催	第47回 親子で茶道体験	茶室	50	主催：九州国立博物館
10月25日	主催	特別展「台北国立故宮博物院展」関連シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味－工芸における復古と革新－」	ミュージアムホール	150	主催：九州国立博物館／西日本新聞社
11月1日	主催	特別展「台北国立故宮博物院展」関連特別講演会「皇帝を魅了した名品たち－中国書跡を中心に－」	ミュージアムホール	150	主催：九州国立博物館／西日本新聞社
11月3日	主催	第41回 はじめての茶道体験（留学生限定）	茶室	25	主催：九州国立博物館
11月3日	主催	留学生向け 文化交流ツアー in 九博	文化交流展示室／研修室／茶室	19	主催：九州国立博物館
11月7日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	200	主催：九州国立博物館／福岡女子短大
11月8日	主催	特別展「台北国立故宮博物院展」関連講演会「中国における文物の意義－皇帝たちが受け継いだ名画－」	ミュージアムホール	50	主催：九州国立博物館／西日本新聞社
11月16日	主催	家族の日関連イベント「家族で茶室」	茶室	21	主催：九州国立博物館
11月24日	主催	第48回 親子で茶道体験	茶室	46	主催：九州国立博物館
12月6日 12月7日	主催	九州国立博物館9周年記念ガムランコンサート 青銅の響き・悠久の舞	ミュージアムホール／エントランス／文化交流展示室	800	主催：九州国立博物館
12月13日	主催	第42回 はじめての茶道体験	茶室	19	主催：九州国立博物館
12月13日	共催	キャンパスフェスタ	ミュージアムホール／エントランス	1,335	主催：太宰府キャンパスネットワーク会議
12月15日	主催	九州国立博物館開館9周年記念イベント 小編成ガムラン「ガドン」の開催	文化交流展示室 関連展示室第9室	100	主催：九州国立博物館
12月19日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	40	主催：九州国立博物館／福岡女子短大
12月20日	主催	第49回 親子で茶道体験	茶室	54	主催：九州国立博物館
12月23日	主催	第125回 きゅーはくミュージアムコンサート～絵本と音の玉手箱～	ミュージアムホール	105	主催：九州国立博物館
27年1月12日	主催	第126回 きゅーはくミュージアムコンサート	ミュージアムホール	245	主催：九州国立博物館
27年1月12日	主催	きゅーはくミュージアムコンサート関連イベント「お茶室で学ぼう『茶の湯』の世界」	茶室	39	主催：九州国立博物館
27年1月12日	主催	ボランティアイベント「新春餅つき会」	屋外	400	主催：九州国立博物館
27年1月16日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	40	主催：九州国立博物館／福岡女子短大
27年1月20日～ 2月1日	共催	ひなの国九州フェスタ 2015	エントランス	-	主催：九州のひなまつり広域振興協議会
27年1月24日	主催	第43回 はじめての茶道体験	茶室	14	主催：九州国立博物館
27年1月25日	主催	第50回 親子で茶道体験（第50回記念特別企画 お茶会編）	茶室	47	主催：九州国立博物館
27年1月31日	共催	博多にわか笑演会 in 九州国立博物館	ミュージアムホール	130	主催：博多仁和加振興会
27年2月7日	主催	第127回 きゅーはくミュージアムコンサート	エントランス	600	主催：九州国立博物館
27年2月10日～ 15日	共催	「宗像・沖ノ島と関連遺産群」パネル展、シンポジウム	ミュージアムホール／エントランス	-	主催：「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
27年2月15日	主催	九州国立博物館開館9周年記念イベント 小編成ガムラン「ガドン」の開催	文化交流展示室 関連第9室	100	主催：九州国立博物館
27年2月20日	共催	博多伝統芸能～博多芸妓の世界～	ミュージアムホール	500	主催：九州国立博物館振興財団
27年2月21日	主催	第44回 はじめての茶道体験	茶室	7	主催：九州国立博物館
27年2月22日	主催	第51回 親子で茶道体験	茶室	61	主催：九州国立博物館
27年2月24日	共催	平成26年度筑紫地区文化財写真展 ちくし再発見～いのりの風景～	ミュージアムホール／エントランス	-	主催：筑紫地区社会教育振興協議会
27年2月24日～ 3月1日	後援	甲木恵都子五十周年個展「女人平家物語」	ミュージアムホール	-	主催：甲木工房
27年3月6日	主催	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	75	主催：九州国立博物館／福岡女子短大
27年3月21日	主催	第128回 きゅーはくミュージアムコンサート：天上の響き2015 サキタハチメ ミュージカルソーコンサート～4年ぶりに九博へ帰ってきました～	エントランス	150	主催：九州国立博物館
27年3月21日	主催	第45回 はじめての茶道体験	茶室	4	主催：九州国立博物館
27年3月22日	主催	第52回 親子で茶道体験	茶室	55	主催：九州国立博物館
27年3月22日	共催	東日本大震災復興ボランティア「CLOVERS MUSIC」活動報告『東日本大震災』あの日から4年	ミュージアムホール／エントランス	150	主催：CLOVERS MUSIC

2-(2)-⑩ 「留学生の日」

館名・日程	内容	アンケート結果概要
<p>東京国立博物館</p> <p>10月11日(土) 9:30~22:00</p>	<p>○参加者数 1021人《663人》 留学生 935人《568人》 同伴者 86人《95人》</p> <p>・無料観覧(総合文化展のみ) ・ボランティアによる茶会 参加者数:36人(2回計) ・ボランティアによる英語ガイド 参加者数:324人 ・ボランティアによるガイドツアー 参加者数:289人</p>	<p>・アンケート実施せず</p>
<p>京都国立博物館</p> <p>11月7日(金) 9:30~19:30</p>	<p>○参加者数 73人《128人》 留学生 73人《124人》 同伴者 0人《4人》</p> <p>・平成知新館オープン記念展「京へのいざない」、 平成知新館講堂映像プログラム(4Kシアター) の無料観覧 ・特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」の観覧 料割引</p>	<p>・留学生アンケート回答者数16人 (回収率22%) ・来館頻度:初めて95%、2回目以降5% ・認知経路:友人・教師71%、ポスター・チラシ 18% 他 ・出身国:中国31%、台湾13%、ドイツ13% 他 ・名品ギャラリーの満足度:94% ・特別展の満足度:61%</p>
<p>奈良国立博物館</p> <p>11月1日(土) 9:00~19:00 (正倉院展会期中 のため9:00開館)</p>	<p>○来館者数 15,346人《15,158人》 留学生 98人《92人》</p> <p>・「正倉院展」(特別展)の無料観覧</p>	<p>・アンケート実施せず (正倉院展開催中につき実施困難)</p>
<p>九州国立博物館</p> <p>11月3日(月・祝) 9:30~17:00</p>	<p>○来館者数 文化交流展(平常展) 2,613人《2,528人》 留学生 15人《29人》 ※同伴者のカウントはなし</p> <p>・文化交流展(平常展)のみ無料観覧 ・留学生向け 文化交流ツアー in 九博 ・留学生限定 はじめての茶道体験</p>	<p>・留学生アンケート回答者数17人(回収率100%) ※一部重複回答あり) ・出身国:中国59%、フランス24% 他 ・来館頻度:初めて82%、2回目17% 他 ・認知経路(複数回答):学校関係者から5人、友 達から3人、ウェブサイト4人 他 ・来館理由(複数回答):日本文化や歴史をもっと 知りたいから13人、博物館に来るのが好きだか ら3人 他 ・参加イベント:文化交流ツアー59%、茶道体験 82% ・文化交流展満足度:76% ・文化交流ツアー参加者19人 ・茶道体験参加者25人</p>

* 来館者数、参加者数等:《 》内は平成25年度

2-(3) 快適な観覧環境の提供

2-(3)-① 高齢者、障がい者等に配慮した設備等

平成27年3月31日現在

	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
障がい者用トイレ	14カ所 (本館5、平成館2、東洋館1、法隆寺宝物館1、資料館1、黒田記念館2、表慶館2(要介添え))	8カ所 (平成知新館4、明治古都館1、南門施設1(乳児ベッド併設)、屋外トイレ1、文化財保存修理所1)	3カ所 (東新館1、地下回廊2)	6カ所 (本体建物)
障がい者用エレベータ	10基 (本館1、平成館1、東洋館4、法隆寺宝物館1、黒田記念館2、表慶館1)	5基 (平成知新館4)昇降装置1基(管理棟1)	4基 (なら仏像館1、なら仏像館附属棟1、東新館1、西新館1)	2基 (本体建物)
スロープ	5カ所 (本館、東洋館、法隆寺宝物館、表慶館、黒田記念館)	4カ所 (平成知新館1、明治古都館1、南門施設1、文化財保存修理所1)	3カ所 (なら仏像館1、なら仏像館附属棟1、西新館1)	—
ハンディキャップ優先駐車	2台	2台	足の不自由な方に対して有	23台
車椅子	26台 (正門・正門プラザ3、本館4、東洋館2、平成館14、法隆寺宝物館2、資料館1)	22台 (検札2台、明治古都館12台、平成知新館8台)	13台	28台
乳幼児用設備	○ベビーカー 2台 ○ベビーシート 15カ所 ○ベビーカーチェア 12カ所 ○授乳室 1カ所	○ベビーカー 6台 ○ベビーシート 12カ所 ○ベビーカーチェア 11カ所 ○授乳室 2カ所	○ベビーシート 2カ所 ○ベビーカー 1カ所 ○おむつ交換台 1カ所	○ベビーカー 11台 ○ベビーシート 15カ所 ○ベビーカーチェア 6カ所 ○幼児用補助便座 6カ所
26年度整備事項	新設された正門プラザ内に授乳室を開設した。	平成知新館内に、授乳室を開設した。		身障者トイレに幼児用補助便座を取り付けた。(6カ所: 1階、3階、4階)

2-(3)-② 音声ガイド実施状況

東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
26年度計: 261,241台	26年度計: 76,671台	26年度計: 55,466台	26年度計: 67,665台
・特別展「栄西と建仁寺」 26年度期間(26.4.1~5.18) 42,536台 (全期間 46,378台)	・特別展 「南山城の古寺巡礼」 (日本語版) 8,753台	特別展 「鎌倉の仏像—迫真とエキゾチズム—」 (日本語版・一般向け) 2,565台	・文化交流展示 5,550台 (英語版 1,864台) (中国語版 1,193台) (韓国語版 2,493台)
・特別展「キトラ古墳壁画」 30,468台	・平成知新館オープン記念展 「京へのいざない」 (日本語版) 16,856台 (英語版) 534台 (中国語版) 721台 (韓国語版) 105台	・特別展 「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」 (日本語版・一般向け) 8,636台	・特別展 「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」 8,955台
・特別展「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」 78,600台	・特別展 「国宝 鳥獣戯画と高山寺」 (日本語版) 40,328台	・特別展 「天皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展」 (日本語版・一般向け) 42,803台	・特別展 「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」 7,416台
・日本国宝展 77,347台	・平成知新館名品ギャラリー (日本語版) 6,687台 (英語版) 711台 (中国語版) 1,681台 (韓国語版) 295台	(英語版・一般向け) 244台	・特別展 「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」 39,633台
・特別展「みちのくの仏像」 26年度期間(27.1.14~3.31) 27,240台		(日本語版・子供向け) 1,218台	・特別展 「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして広州・扶餘—」 同時開催 「日本発掘—発掘された日本列島2014—」 6,111台
・特別展「コカタ・インド 博物館所蔵インドの仏教美術の源流」 26年度期間(27.3.17~3.31) 4,644台			
・特集「趙之謙の書画と北魏の書」 406台			
(参考) 今年度ダウンロード件数 ・「トーハクナビ」 Android版 2,615件 iOS版 5,995件 ・「法隆寺宝物館30分ナビ」 iOSアプリ 1,071件			

2-(4) 文化財情報の発信と広報の充実

2-(4)-① 収蔵品写真（フィルム）等のデジタル化件数

東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
画像 79件	画像 5,536件 文字 10,679件	画像 5,154件 文字 5,447件	画像 776件

2-(4)-② 収集した情報資料数（総数）

	東京国立博物館		京都国立博物館		奈良国立博物館		九州国立博物館		
	26年度新規	総数	26年度新規	総数	26年度新規	総数	26年度新規	総数	
写真原板(フィルム)	77件	321,114件	557件	257,681件	7件	361,488件	4件	23,622件	
デジタル撮影	10,643件	56,540件	4,370件	8,204件	5,471件	31,179件	1,163件	8,780件	
資料	模造								
	模写								
	その他								
	計								
図書	和書	6,367冊	188,913冊	9,758冊	138,613冊	2,563冊	80,213冊	(*1)29,196冊	110,928冊
	漢書	362冊	39,514冊	11冊	21,580冊	36冊	5,137冊	0冊	0冊
	洋書	120冊	12,785冊	14冊	4,396冊	54冊	1,783冊	(*1)79冊	2,445冊
	計	6,849冊	241,212冊	9,783冊	164,589冊	2,653冊	87,133冊	29,275冊	113,373冊
映画フィルム	巻	巻	巻	0巻	0巻	30巻	0巻	0巻	
スライド	本 コマ	本 コマ	0本 0コマ	26本 2,779コマ	0本 0コマ	21本 2,192コマ	0本 0コマ	0本 12コマ	
マイクロフィルム	0巻	3,657巻	0巻	359巻	0巻	68巻	0巻	515巻	

※(*1)の項目については、平成26年4月に新システムを導入し、旧システムに登録されていなかったため総計上に表れなかった図書(和書15,647冊、洋書29冊)も加えた。平成26年度に純粋に増えた冊数は、和書13,549冊、洋書50冊である。

東京国立博物館資料館の利用者数（過去5年間）

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
利用者数	2,796人	3,385人	4,828人	5,661人	6,118人
閉架図書（閲覧）	3,138件	3,032件	3,571件	3,909件	3,800件
マイクロフィルム（閲覧）	994件	573件	603件	466件	562件
レファレンスサービス	3,339件	2,783件	6,249件	6,802件	4,401件
コピーサービス	26,210枚	19,983枚	25,419枚	23,801枚	26,200枚

※23年9月1日より、従来からの西門入館利用に加え、正門からの来館者に対し資料館東口からの利用を開始した。以後の利用者数はこれを含む。

2-(4)-③ 特別観覧件数

申請件数

平成27年3月31日現在

区 分	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料
合 計	377	16	361	173	6	167	57	5	52	69	2	67	78	3	75
写 真 撮 影	88	5	83	4	0	4	21	2	19	29	1	28	34	2	32
映 画 撮 影							0	0	0		0	0	0	0	0
テ レ ビ 撮 影	12	9	3	6	6	0	3	3	0	1	0	1	1	0	1
ビ デ オ 撮 影							0	0	0				1	0	1
模 写	12	0	12	2	0	2	0	0	0	3	0	3	4	0	4
模 造							1	0	1				2	0	2
熟 覧	265	2	263	161	0	161	32	0	32	36	1	35	36	1	35

点数

平成27年3月31日現在

区 分	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料
合 計	2,476	29	2,447	1,255	11	1,244	283	10	273	607	4	603	331	4	327
写 真 撮 影	490	7	483	28	0	28	49	2	47	259	2	257	154	3	151
映 画 撮 影							0	0	0	0	0	0	0	0	0
テ レ ビ 撮 影	22	19	3	11	11	0	8	8	0	1	0	1	1	0	1
ビ デ オ 撮 影							0	0	0				1	0	1
模 写	15	0	15	2	0	2	0	0	0	6	0	6	4	0	4
模 造							1	0	1				2	0	2
熟 覧	1,949	3	1,946	1,214	0	1,214	225	0	225	341	2	339	169	1	168

2-(4)-④ 画像利用件数（フィルムを含む）

申請件数

平成27年3月31日現在

区 分	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料
画 像 利 用	フィルムでの提供	モノクロ	3	2	1	(画像提供業務を外部へ委託)	/			/			3	2	1
		カラー	2	2	0								2	2	0
	デジタルデータ提供	モノクロ	1,107	725	382		695	514	181	282	157	125	8	1	7
		カラー											122	53	69
	プリントでの提供	モノクロ	100	88	12		97	87	10	3	1	2	/		
カラー		3	2	1	0	0	0	3	2	1					
画像再利用		164	98	66					158	94	64	6	4	2	

点数

平成27年3月31日現在

区 分	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料
画 像 利 用	フィルムでの提供	モノクロ	5	2	3	(画像提供業務を外部へ委託)	/			/			5	2	3
		カラー	6	6	0								6	6	0
	デジタルデータ提供	モノクロ	7,268	2,216	5,052		3,511	1,604	1,907	1,336	469	867	59	3	56
		カラー											2,362	140	2,222
	プリントでの提供	モノクロ	523	203	320		262	201	61	261	2	259	/		
カラー		33	5	28	0	0	0	33	5	28					
画像再利用		382	193	189					326	140	186	56	53	3	

2-(4)-⑤ 広報実績一覧

【東京国立博物館】

(1) 総合文化展（平常展）

・特集「趙之謙の書画と北魏の書一悲倉没後130年ー」

会期：26年7月29日（火）～9月28日（日）

ターゲット：書道愛好家

重点項目：新聞及び書・美術専門雑誌に向けてのプロモート

特記事項：台東区立書道博物館、朝倉彫塑館との連携企画。

リリースの配信（約280件）

2館連携報道内覧会の実施（7月28日、15人出席）

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付	台東区書道博物館から送付
交通広告	駅貼り広告（JR上野、鶯谷、日暮里、秋葉原、品川など11駅22面、東京メトロ 上野、浅草、表参道、六本木、大手町、銀座など11駅22面）
新聞・雑誌広告	朝日半5段 1回
テレビ広告	—
新聞掲載	毎日新聞 ほか
テレビ／ラジオ	—
雑誌掲載	月刊書道界（藤樹社） ほか
博物館ニュース	特集1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、ブログ関連記事1回、メールマガジン・SNSでの情報配信

・特別企画

「博物館でアジアの旅」

会期：26年9月30日（火）～10月13日（月・祝）

ターゲット：一般の美術愛好家、若年層特に20～30代女性、国内外からの観光客、留学生

重点項目：広く一般のマスコミを通じた情報提供

特記事項：同時期開催の特別展「東アジアの華 陶磁名品展」と併せ、「アジアフェス in トーハク」として広報展開。リリース配信（約550件）。

報道内覧会（9月19日 43人）

FMラジオ局J-WAVEとのコラボによるリスナー招待コンサート開催。

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付	約1,200件（1都3県博物館・美術館・高校・中学・小学校（台東・墨田・文京）・ギャラリー・ホテル・旅館・カルチャーセンター等）
交通広告	駅貼り広告（JR上野、鶯谷、日暮里、秋葉原、品川など22駅、東京メトロ 上野、浅草、表参道、六本木、大手町、銀座など11駅、京成線10駅、京王線4駅、東急線5駅）、JR上野駅ADビジョン
新聞・雑誌広告	朝日新聞1回、読売新聞2回
テレビ広告	—
新聞掲載	朝日新聞、東京新聞 東洋経済日報、陶業時報 ほか
テレビ／ラジオ	アートのステージ（TOKYO MX）、zappa（J-WAVE）
雑誌掲載	CREA（文藝春秋）、美しいキモノ（ハースト婦人画報社）、TOKYO WALKER（角川書店）、目の眼（目の眼）、アートコレクターズ（生活の友社） ほか
博物館ニュース	告知2回、特集1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、ブログ関連記事4回、メールマガジン・SNSでの情報配信

・特別企画

「留学生の日」

会期：26年9月21日（土）

ターゲット：留学生

重点項目：学校を通じた広報

特記事項：ポスター・チラシの制作、学校へのDM

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付	約500件（大学、語学専門学校等）
交通広告	駅貼り広告（京王線新宿駅、明大前など4駅）
新聞・雑誌広告	—
テレビ広告	—
新聞掲載	—
テレビ／ラジオ	—
雑誌掲載	—
博物館ニュース	告知2回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジン・SNSでの情報配信

(2) 特別展・共催展等（海外展・巡回展を含む）

展覧会名：開山・栄西禅師800年遠忌特別展「栄西と建仁寺」

会期：26年3月25日（火）～5月28日（日）

ターゲット：一般の歴史及び美術ファン、禅宗文化ファン

重点項目：マスコミ及び交通広告、新聞広告等による広く一般への情報提供。

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付 ジュニア用ワークシートDM送付	約7,000件(博物館・美術館・学校(小・中・高・大)、ギャラリー、図書館等) ジュニア用ワークシート: 東京近郊小中学校に送付、ウェブサイトからのダウンロード、会場内にて配布
交通広告	JR山の手ベストボード(19駅25面)、メトロUボード(17駅20面) ポスター駅貼り(京成62駅、西武全駅、京成他)、上野商店街フラッグ
新聞・雑誌広告	読売新聞、朝日新聞
テレビ広告	—
新聞掲載	読売新聞、朝日新聞、日経新聞、毎日新聞、東京新聞ほか
テレビ/ラジオ	日曜美術館本編(NHK)、ひるまほっと(NHK)、首都圏ニュース(NHK)、ぶらぶら美術博物館(BS日テレ)、美の巨人たち ほか
雑誌掲載	美術手帳(美術出版ホールディングス)、美術の窓(生活の友社)、月刊美術(サンアート)、目の眼(目の眼)、サンデー毎日(毎日新聞社)、週刊新潮(新潮社)ほか多数
博物館ニュース	告知2回、特集2回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、ブログ関連記事10回、メールマガジンでの情報配信、公式ホームページ、共催者(読売新聞社、NHK、NHKプロモーション)ウェブサイトでの紹介 インターネットミュージアム(丹青社)、WEDGE Infinity(ウェッジ)、Yahoo!ニュース(ヤフー)、MSN産経ニュース(産経デジタル) ほか

②パブリシティ情報掲載・放映

新聞 101件、雑誌 375件、テレビ/ラジオ 25件、インターネット 39件

③報道発表会 25年10月28日 平成館大講堂にて (88人出席)

④報道内覧会 26年3月24日 (197人出席)

展覧会名: 特別展「キトラ古墳壁画」

会期: 26年4月22日(火)~5月28日(日)

ターゲット: 広く一般の美術・考古ファン

重点項目: マスコミ及び交通広告、新聞広告等による広く一般への情報提供

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付 ジュニア用ワークシートDM送付	約7,000件(博物館・美術館・学校(小・中・高・大)、ギャラリー、書団体、古美術商、ホール、会館、書店、図書館等) ジュニア用ワークシート: 1都3県小中学校に送付
交通広告	駅ボード/JR: NT(87駅94面)、山手ステーションボード(17駅20面)、上野駅3×4 ポスター駅貼り・車内吊等(京王、京成 多数) 電飾看板(20駅20面)
新聞・雑誌広告	朝日新聞
テレビ広告	—
新聞掲載	読売新聞、朝日新聞、日経新聞、毎日新聞、東京新聞 ほか
テレビ/ラジオ	ニュース(NHK)、ゆうどき(NHK)、情報まるごと(NHK)、首都圏ネットワーク(NHK)、Nスタ(TBS)、ニュース23(TBS)、サンデーモーニング(TBS)、グッドモーニング(TB朝日) ほか
雑誌掲載	美術手帳(美術出版ホールディングス)、美術の窓(生活の友社)、月刊美術(サンアート)、目の眼(目の眼)、サンデー毎日(毎日新聞社)、週刊新潮(新潮社)、和楽(小学館)、日経おとなのOFF(日経BP)、大人の隠れ家(日経BP) ほか多数
博物館ニュース	告知2回、特集2回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、ブログ関連記事5回、メールマガジン・SNSでの情報配信、公式ホームページ、共催者(朝日新聞社)ウェブサイトでの紹介 インターネットミュージアム(丹青社)、WEDGE Infinity(ウェッジ)、Yahoo!ニュース(ヤフー)、MSN産経ニュース(産経デジタル) ほか

②パブリシティ情報掲載・放映

新聞 351件、雑誌 57件、テレビ/ラジオ 14件、インターネット 40件

③報道発表会 26年1月19日 VRシアターにて (26人出席)

④報道内覧会 26年4月21日(137人出席)

⑤教員内見会 26年7月26日(119人出席)

展覧会名: 特別展「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」

会期: 26年6月24日(火)~9月15日(月)

ターゲット: 広く一般の歴史及び美術ファン、中国美術・東洋美術ファン

重点項目: マスコミ及び交通広告、新聞広告等による広く一般への情報提供。

特記事項: 共催のNHK、NHKプロモーション、読売新聞社、参詣新聞社、フジテレビジョン、朝日新聞社、毎日新聞社、東京新聞、特別協力のTBS、テレビ朝日、日本テレビ、共同通信社による広範な広報展開

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付 ジュニア用ワークシートDM送付	約6,500件(博物館・美術館・学校(小・中・高・大)、ギャラリー、図書館等)

交通広告	JR上の駅大型ボード、JR山の手ベストボード(19駅25面)、メトロUボード(17駅20面) ポスター駅貼り(京成ドア横、京王ニューボード他)、上野商店街フラッグ
新聞・雑誌広告	毎日新聞(連載、広告各2回)、日経新聞(1回)
テレビ広告	—
新聞掲載	読売新聞、毎日新聞、正論(産経新聞)ほか
テレビ/ラジオ	ニュース(NHK)、日曜美術館(NHK)、スーパーニュース(フジテレビ)、今感テレビ(RKB) ゆうがた5(調布エフエム)ほか
雑誌掲載	月刊美術(サン・アート)、美術の窓(生活の友社)、炎藝術(安部出版)書道ジャーナル(書道ジャーナル研究所)和楽(小学館)、日経おとなのOFF(日経BP)、エクラ(集英社)ほか多数
博物館ニュース	告知2回、特集2回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、ブログ関連記事10回、メールマガジンでの情報配信 インターネットミュージアム(丹青社)、マイナビニュース(マイナビ)、日経ウーマンオンライン(日経BP)、レッツエンジョイトーキョー(株式会社ぐるなび)ほか

②パブリシティ情報掲載・放映

新聞 126件、雑誌 45件、テレビ/ラジオ 8件、インターネット 13件

③報道発表会 26年1月29日 平成館大講堂にて(141人出席)

④報道内覧会 26年6月23日(341人出席)

展覧会名：2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」

会期：26年9月20日(土)～11月24日(月・祝)

ターゲット：一般の美術愛好家、陶磁器愛好家

重点項目：広く一般のマスコミを通じた情報提供

特記事項：同時期開催の特別企画「博物館でアジアの旅」と併せ、「アジアフェスintorhak」として広報展開。リリース配信(約550件)。
報道内覧会(9月19日 43人)

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付	約1,200件(1都3県博物館・美術館・高校・中学・小学校(台東・墨田・文京)・ギャラリー・ホテル・旅館・カルチャーセンター等)
交通広告	駅貼り広告(JR上野、鶯谷、日暮里、秋葉原、品川など22駅、東京メトロ 上野、浅草、表参道、六本木、大手町、銀座など11駅、京成線10駅、京王線4駅、東急線5駅)、JR上野駅ADビジョン
新聞・雑誌広告	朝日新聞1回、読売新聞2回
テレビ広告	—
新聞掲載	朝日新聞、東京新聞 東洋経済日報、陶業時報ほか
テレビ/ラジオ	アートステージ(TOKYO MX)、zappa(J-WAVE)
雑誌掲載	CREA(文藝春秋)、美しいキモノ(ハースト婦人画報社)、TOKYO WALKER(角川書店)、目の眼(目の眼)、アートコレクターズ(生活の友社)ほか
博物館ニュース	告知2回、特集1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、ブログ関連記事4回、メールマガジン・SNSでの情報配信

②パブリシティ情報掲載・放映

新聞 15件 雑誌 12件 テレビ・ラジオ 3件 インターネット 6件

③報道内覧会 26年9月19日(43人出席)

展覧会名：「日本国宝展」

会期：26年10月15日(水)～12月7日(日)

ターゲット：広く一般の歴史及び美術ファン

重点項目：マスコミ及び交通広告、新聞広告等による広く一般への情報提供。

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付	約9,800件(博物館・美術館・学校(小・中・高・大)、ギャラリー、図書館、百貨店、ホテルほか ジュニア用ワークシート：東京近郊小中学校に送付、ウェブサイトからのダウンロード、会場内にて配布)
交通広告	駅ボード/JR：NTI(87駅101面)、JR+私鉄：SSボード(91駅91面)、東京メトロUボード(13駅21面)私鉄：PLボード(東急、京急、京王、小田急、東武、西武、相模)18駅22面)、京王ニューボード(新宿駅16面) ポスター駅貼り・車内吊等(JR、京王、西武 多数) 東急ドア横、JR品川駅大型フラッグ、西武池袋駅フラッグ
新聞・雑誌広告	読売新聞 5回、朝日新聞 2回、雑誌特集ページ(美術手帖、美術の窓、目の眼、洋泉社MOOK、和楽、サライ、日経おとなのOFF)
テレビ広告	—
新聞掲載	読売新聞、朝日新聞、日経新聞、毎日新聞、東京新聞 ほか
テレビ/ラジオ	ひるまえほっと(NHK)、ねまきでアート(NHK)、日曜美術館(NHK)、日本美インパクト(NHKBSプレミアム)、ぶらぶら美術博物館(BS日テレ)、アート・ステージ(TOKYO MX)、美の巨人たち(テレビ東京)、グッド!モーニング(テレビ朝日)、もしもツアーズ(フジテレビ)ほか
雑誌掲載	美術手帖(美術出版ホールディングス)、美術の窓(生活の友社)、目の眼(目の眼)、洋泉社MOOK、(洋泉社)、和楽(小学館)、サライ(小学館)、日経おとなのOFF(日経BP)、女性自身(光文社)ほか多数
博物館ニュース	告知2回、特集2回

インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、ブログ関連記事13回、メールマガジン/SNSでの情報配信、公式ホームページでの紹介 インターネットミュージアム（丹青社）、マイナビニュース（マイナビ）、日経ウーマンオンライン（日経BP）、レッツエンジョイトーキョー（株式会社ぐるなび）、ハフィントンポスト日本版ほか
---------	--

②パブリシティ情報掲載・放映

新聞 426件、雑誌 127件、テレビ/ラジオ 13件、インターネット 66件

③報道発表会 26年4月4日 平成館大講堂にて（73人出席）

④報道内覧会 26年10月14日（254人出席）

⑤教員内見会 26年10月17日（272人出席）

展覧会名 特別展「みちのくの仏像」

会期：27年1月14日（水）～4月5日（日）

ターゲット：広く一般の歴史及び美術ファン、仏像ファン

重点項目：マスコミ及び交通広告、新聞広告等による広く一般への情報提供。

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・DM送付	約1,200件（1都3県博物館・美術館・高校・中学・小学校（台東・墨田・文京）・ギャラリー・ホテル・旅館・カルチャーセンター等）
交通広告	駅貼り広告（JR上野、鶯谷、日暮里、秋葉原、品川など）、東京メトロ 上野、浅草、表参道、六本木、大手町、銀座など）、東武線、京王線など44駅、有楽町Bic Vision
新聞・雑誌広告	朝日新聞1回、読売新聞3回
テレビ広告	—
新聞掲載	朝日新聞、東京新聞 東洋経済日報、陶業時報ほか
テレビ/ラジオ	アートのステージ（TOKYO MX）、ひるまほっと（NHK）、ぶらぶら美術博物館（BS日テレ）
雑誌掲載	SANKEI EXPRESS、三陸河北新報、目の眼、和楽、東京ウォーカーほか
博物館ニュース	告知2回、特集1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、ブログ関連記事8回、メールマガジン・SNSでの情報配信

②パブリシティ情報掲載・放映

新聞 11件、雑誌 38件、テレビ/ラジオ 5件

③報道発表会 26年9月16日 平成館大講堂にて（41人出席）

④報道内覧会 27年1月13日（94人出席）

展覧会名：3.11大津波と文化財の再生

会期：27年1月14日（水）～3月15日（日）

ターゲット：一般観覧者

重点項目：被災文化財の状況と修復の取り組みを、実際の被災・修復文化財の展示により広く伝える

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
新聞掲載	毎日新聞、朝日新聞、産経新聞、聖教新聞、赤旗新聞、ほか
テレビ/ラジオ	NHKラジオ、NHK「情報まるごと」、NHK「首都圏ネットワーク」、NHK「おはよう日本」
雑誌掲載	週刊SPA！（扶桑社）
博物館ニュース	告知1回、特集1回

【京都国立博物館】

(1) 平常展（名品ギャラリー）

展覧会名：オープン記念展「京へのいざない」

会期：26年9月13日～11月16日（56日間）

広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞等

記者発表会：26年3月18日、5月26日、9月10日、10月14日に実施

展覧会名：特別展観「山陰の古刹 島根鰐淵寺の名宝」

会期：27年1月2日～2月15日（39日間）

広報媒体：ちらし、情報誌、ホームページ、新聞等

展覧会名：特集陳列「雛まつりと人形」

会期：27年2月21日～4月7日（39日間）

広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞等

記者発表会：27年2月20日に実施（予定）

展覧会名：特別展観「天野山金剛寺の名宝」

会期：27年3月4日～3月29日（23日間）

広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞等

記者発表会：27年3月3日に実施

(2) 特別展等・共催展等

展覧会名：特別展覧会「南山城の古寺巡礼」

会 期：26年4月22日～6月15日（49日間）
 広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞等
 記者発表会：26年4月21日、5月26日に実施

展覧会名：特別展「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」
 会 期：26年10月7日～11月24日（43日間）
 広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞等
 記者発表会：5月26日、7月7日、10月6日に実施

【奈良国立博物館】

(1) 名品展（平常展）

広報媒体：博物館だより、新聞、テレビ等

(2) 特別展・共催展等

展覧会名：特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 追真とエキゾチズム」

会期：26年4月5日～6月1日
 広報媒体：ポスター、ちらし、博物館だより、新聞、テレビ等

展覧会名：醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて ―密教のほとけと聖教―」

会期：26年7月19日～9月15日
 広報媒体：ポスター、ちらし、博物館だより、新聞、テレビ等

展覧会名：天皇后両陛下下傘寿記念「第66回正倉院展」

会期：26年10月24日～11月12日
 広報媒体：ポスター、ちらし、博物館だより、新聞、駅構内看板、テレビ特集番組等

(1) 名品展（平常展）

広報媒体：博物館だより、新聞、テレビ等

【九州国立博物館】

(1) 文化交流展（平常展）

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約 350 件（学校・公共施設・ホテル・旅行会社等）
交通広告	ポスター駅貼り等（JR・西鉄）、チラシの設置（JR・西鉄）、車内窓広告（文化交流展示室展示替 300 回以上、年間パスポート）（西鉄）
新聞掲載	朝日新聞「名宝細見」、西日本新聞 記事掲載
雑誌掲載	太宰府市の広報誌に博物館コラムを毎月掲載、九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパーに掲載（年 4 回）、九州王国、飛翔（西日本シティ銀行広報誌）、西日本リビング新聞に掲載（年 2 回）、e p（高速バス車内等で配付）
テレビ	CM を制作
季刊情報誌「アジアージュ」	年 4 回発行（4 月 1 日、7 月 1 日、10 月 1 日、27 年 1 月 1 日） 特別展、文化交流展示解説、トピック展示特集、博物館ニュース、イベントスケジュール等を掲載。
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	・文化交流展示室にてトピック展示のスタンプラリーを開催した。 ・ガイドブック「きゅーはく攻略本」を増刷し、県内全小中学校及び館内で配付した。

・トピック展示「館蔵近世絵画名品展」

会期：前期：26年2月25日（火）～4月6日（日）
 後期：26年4月8日（火）～5月18日（日）

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約 200 件（友の会・太宰府市内公民館等）
新聞掲載	毎日新聞、西日本新聞、読売新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパーに掲載
季刊情報誌「アジアージュ」	特集 1 回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信

・国宝 琉球国王尚家関係資料修理完成記念特別公開

会期：26年4月8日（火）～5月18日（日）

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
季刊情報誌「アジアージュ」	特集 1 回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信

・国宝「西光寺梵鐘」特別公開

会期：26年4月22日（火）～8月31日（日）

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信

・特別公開「解剖書に見る東洋と西洋－ファブリカからターヘル・アナトミアへ－」

会期：26年5月20日(火)～7月13日(日)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
新聞掲載	西日本新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパーに掲載
季刊情報誌「アジアージュ」	特集1回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	マスコミ内覧会の開催 4社出席

・トピック展示「中国を旅した禅僧の足跡」

会期：26年5月27日(火)～7月6日(日)

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター等送付	約530件(博物館、美術館、文化施設等)
新聞掲載	朝日新聞「名宝細見」、西日本新聞、大分合同新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパー、リビング福岡、e p、西鉄ニュースに等掲載
季刊情報誌「アジアージュ」	特集1回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	マスコミ内覧会の開催 4社出席

・特別公開「海を越えた再会－クリーブランド美術館の仲間たち－」

会期：26年7月15日(火)～8月24日(日)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
新聞掲載	西日本新聞、毎日新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパー、リビング福岡、e p、西日本新聞「金鷲旗、玉竜旗」企画広告、西鉄ニュース、スターフライヤー機内誌等に掲載
季刊情報誌「アジアージュ」	特集2回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	マスコミ内覧会の開催 10社出席 JR駅デジタルポスター、バス停広告掲出

・トピック展示「全国高等学校 考古名品展」

会期：26年7月15日(火)～9月23日(火・祝)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約150件(友の会)
新聞掲載	西日本新聞、朝日新聞、毎日新聞 日経新聞、読売新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパー、リビング福岡、e p、西日本新聞「金鷲旗、玉竜旗」企画広告、西鉄ニュース、スターフライヤー機内誌等に掲載
テレビ	TVQ、NHK、RKBのニュースで紹介
季刊情報誌「アジアージュ」	特集1回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	マスコミ内覧会の開催 10社出席 JR駅デジタルポスター、バス停広告掲出

・新春特別公開「徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」

会期：27年1月1日(木・祝)～1月25日(日)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約50件(太宰府市内公民館等)
新聞掲載	新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパーに掲載、e p、SUNDAY下関等に掲載
季刊情報誌「アジアージュ」	特集1回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	JR駅デジタルポスター、西鉄福岡駅ポスター掲示

・トピック展示「大涅槃展」

会期：27年1月14日(火)～2月15日(日)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約200件(友の会)

新聞掲載	朝日新聞（名宝細見）、新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパーに掲載、e p、SUNDAY下関等に掲載
季刊情報誌「アジアージュ」	特集1回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	マスコミ内覧会の開催 社出席 JR駅デジタルポスター

・トピック展示「柿右衛門－受け継がれる技と美－」

会期：27年3月3日(火)～5月10日(日)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
新聞掲載	西日本新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、佐賀新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパーに掲載
季刊情報誌「アジアージュ」	予告1回、特集1回
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	マスコミ内覧会の開催 8社出席 JR駅デジタルポスター、バス停広告掲出

・長期的な広報

西鉄太宰府駅 広告ボードの設置 (21年～26年)

福岡空港 宣伝用看板(電照広告)の設置 (22年～)

(2)特別展・共催展等

展覧会名：特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」

会期：26年4月15日(火)～6月8日(日) (49日間)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約1,150件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・図書館・文化施設・太宰府市内公民館等)
交通広告	駅ボード(西鉄・JR)、ポスター駅貼り等(西鉄・JR)、ポスター車内(西鉄・JR・太宰府市コミュニティバス)
新聞掲載	西日本新聞(展示解説を連載)、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、大分合同新聞、長崎新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパー 特集1回
テレビ	TVQにて告知CM・番組での紹介
季刊情報誌「アジアージュ」	告知1回、特集1回、送付 約30,000件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・友の会・図書館・文化施設・大学等)
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	太宰府市役所デジタルサイネージ等への広告掲載

②記者発表会 26年1月22日(11社出席)

② 報道内覧会 4月17日(15社出席)

展覧会名：特別展「クリーブランド美術館展―名画でたどる日本の美―」

会期：26年7月8日(火)～8月31日(日) (49日間)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約3,650件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・図書館・文化施設・太宰府市内公民館等)
交通広告	駅ボード(西鉄・JR)、ポスター駅貼り等(西鉄・JR)、ポスター車内(西鉄・JR・太宰府市コミュニティバス)
新聞掲載	西日本新聞(展示解説を連載)、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、公明新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパー 特集1回、リビング福岡、e p、西日本新聞「金鷲旗、玉竜旗」企画広告、西鉄ニュース、スターフライヤー機内誌等に掲載
テレビ	TVQ、NHK、FBS、TNC番組での紹介・TVQにて告知CM
季刊情報誌「アジアージュ」	告知1回、特集1回、送付 約30,000件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・友の会・図書館・文化施設・大学等)
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、YouTubeで配信、メールマガジンでの情報配信
その他	太宰府市役所デジタルサイネージ等への広告掲載

②記者発表会 4月22日(10社出席)

③報道内覧会 7月7日(18社出席)

展覧会名：特別展「台北 国立故宮博物院―神品至宝―」

会期：26年10月7日(火)～11月30日(日) (51日間)

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約5,100件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・図書館・文化施設・太宰府市内公民館、県内全小中学校・高校・特別支援学校等)
交通広告	駅ボード(西鉄・JR)、ポスター駅貼り等(西鉄・JR)、ポスター車内(西鉄・JR・太宰府市コミュニティバス)
新聞掲載	西日本新聞、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞(展示解説を連載)、産経新聞、大分合同新聞、報知新聞、中日新聞、台湾新聞記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパー 特集1回、チャイナエアライン機内誌、ふくおか県議会だより 第10号

テレビ	TNC、TVQ、RKB、FBS、NHK、KBCの番組での紹介・TNC、TVQ、RKBにて告知CM
ラジオ	RKBにて展覧会紹介および告知CM
季刊情報誌「アジアージュ」	告知1回、特集1回、送付 約30,000件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・友の会・図書館・文化施設・大学等)
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信、公式webサイト特別展『徳川家の至宝』展覧会ホームページ、facebook 周知活動
その他	太宰府市役所デジタルサイネージ等への広告掲載 看板等…大丸地下通路電照看板、博多駅地下ビジョン、地下鉄天神駅電照看板、大丸南側看板、西日本ビジョン 書店タイアップ

- ②記者発表会 7月10日(23社出席)
③報道内覧会 10月6日(34社出席)

展覧会名：特別展「古代日本と百済の交流 一大宰府・飛鳥そして公州・扶餘」

会期：27年1月1日(木・祝)～3月1日(日) (52日間)

特記事項：次項記載の特別展と一体で実施

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約3,700件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・図書館・文化施設・太宰府市内公民館等)
交通広告	駅ボード(西鉄・JR)、ポスター駅貼り等(西鉄・JR)、ポスター車内(西鉄・JR・太宰府市コミュニティバス)
新聞掲載	朝日新聞、産経新聞、西日本新聞(連載)、日経新聞、読売新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパー 特集1回、e p、SUNDAY下関等に掲載
テレビ	TVQの番組での紹介および告知CM
季刊情報誌「アジアージュ」	告知1回、特集1回、送付 約31,000件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・友の会・図書館・文化施設・大学・県内商業施設等)
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	太宰府市役所デジタルサイネージ等への広告掲載

- ②記者発表会 10月22日(10社出席)
③ 報道内覧会 12月26日(16社出席)

展覧会名：特別展「日本発掘 発掘された日本列島2014」

会期：27年1月1日(木・祝)～3月1日(日) (52日間)

特記事項：前項記載の特別展と一体で実施

①広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等送付	約3,700件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・図書館・文化施設・太宰府市内公民館等)
交通広告	駅ボード(西鉄・JR)、ポスター駅貼り等(西鉄・JR)、ポスター車内(西鉄・JR・太宰府市コミュニティバス)
新聞掲載	朝日新聞、西日本新聞、毎日新聞 記事掲載
雑誌掲載	九州国立博物館&太宰府天満宮フリーペーパー 特集1回、e p、SUNDAY下関等に掲載
季刊情報誌「アジアージュ」	告知1回、特集1回、送付 約31,000件(博物館・美術館・キャンパスメンバーズ・友の会・図書館・文化施設・大学・県内商業施設等)
ウェブサイト	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信
その他	太宰府市役所デジタルサイネージ等への広告掲載

- ②記者発表会 10月22日(10社出席)

(参考)

【平城宮跡資料館】

(1) 平常展

広報媒体：チラシ、ホームページ、情報誌等

(2) 特別展等

展覧会名：夏期企画展「平城京ビックリはくらんかい」

会 期：26年7月12日(土)～9月21日(日)

広報媒体：ポスター・チラシ・ホームページ・新聞・情報誌等・奈文研ニュース

展覧会名：秋期特別展「地下の正倉院展—木簡を科学する—埋蔵文化財センターの40年」

会 期：26年10月18日(土)～11月30日(日)

広報媒体：ポスター・チラシ・ホームページ・ブログ・新聞・情報誌等・奈文研ニュース

展覧会名：ミニ展示「発掘速報展 平城2014」

会 期：26年12月6日(土)～27年2月1日(日)〈I期〉

27年2月14日(土)～27年3月31日(火)〈II期〉

広報媒体：ポスター・チラシ・ホームページ・新聞・情報誌等・奈文研ニュース

【藤原宮跡資料室】

(1) 平常展

広報媒体：チラシ、ホームページ、情報誌等

・速報展

- ①「甘樫丘東麓遺跡の調査」
- ②「藤原宮朝堂院の調査」
- ③「東日本大震災復興調査における奈文研の取り組み」

【飛鳥資料館】

(1) 平常展

広報媒体：チラシ、ホームページ、情報誌等

(2) 特別展等

展覧会名：春期特別展「いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー」

会 期：26年4月25日(金)～6月15日(日)

広報媒体：ポスター・ホームページ・新聞・情報誌等・奈文研ニュース

展覧会名：夏期企画展「第5回写真コンテスト「飛鳥の葦」応募作品展」

会 期：26年7月25日(金)～9月7日(日)

広報媒体：ポスター・チラシ・ホームページ・新聞・情報誌等・奈文研ニュース

展覧会名：企画展「津田洋 大和の美仏に魅せられて」

会 期：26年9月12日(金)～9月28日(日)

広報媒体：ポスター・チラシ・ホームページ・新聞・情報誌等

展覧会名：秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどりー大地にぎざまれた記憶ー」

会 期：26年10月10日(金)～11月30日(日)

広報媒体：ポスター・チラシ・ホームページ・新聞・情報誌等・奈文研ニュース

展覧会名：冬期企画展「飛鳥の考古学 2014ー縄文・弥生・古墳から飛鳥へー」

会 期：27年1月16日(金)～3月1日(日)

広報媒体：ポスター・チラシ・ホームページ・新聞・情報誌等・奈文研ニュース

2-(4)-⑥ 広報刊行物一覽
【東京国立博物館】

刊行物名	発行部数	配布先
東京国立博物館ニュース725号～729号	隔月刊年6回 各30,000部	館内で来館者に無償配布 マスコミ媒体等に送付 定期郵送希望者 2,115件 (パスポート同時申込 271件含) 寄贈 国内1,302件 海外85件 (国内外の美術館・博物館・大学・研究所等) 賛助会 438件 (キャンパスメンバーズ 44件含) 友の会 1,937件 (27年3月31日現在)
東京国立博物館「案内と地図」	日本語 26.4 改訂 48,000部 日本語 26.8 増刷 60,000部 英語 26.4 改訂 20,000部 英語 26.8 増刷 40,000部 中国語 (簡体字) 26.4 改訂 10,000部 中国語 (繁体字) 26.4 改訂 10,000部 韓国語 26.4 改訂 15,000部 フランス語 26.4 改訂 3,000部 フランス語 26.8 増刷 2,500部 スペイン語 26.4 改訂 3,000部 スペイン語 26.8 増刷 2,500部 ドイツ語 26.4 改訂 3,000部 ドイツ語 26.8 増刷 2,500部	館内で来館者に無償配布 マスコミ媒体、大使館、学校等に送付
東京国立博物館 展示・催しのご案内2014.4-2015.3	26.3 26年度版 35,000部	館内で来館者に無償配布 観光案内所、マスコミ媒体等に送付

【京都国立博物館】

刊行物名	発行時期	発行部数	配布先
京都国立博物館だより	4、7、10月、27年1月	182号 (4・5・6月) 15,000部 183号 (7・8・9月) 10,000部 184号 (10・11・12月) 30,000部 185号 (26年1・2・3月) 20,000部	観覧者、新聞・雑誌・放送局各社、学校・図書館・美術館・博物館ほか、郵送希望者にも発送
Kyoto National Museum Newsletter Vol. 121～124 (英文)	4、7、10月、27年1月	Vol. 121～124 各3,000部	観覧者、京都市観光案内所
特別展覧会「南山城の古寺巡礼」関連ワークシート	4月	50,000部	観覧者 (小・中学生対象)
特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」関連 鑑賞ガイド	10月	140,000部	観覧者
博物館Dictionary No. 172～175	10、11、12月 27年1月	8,000部	観覧者 (小・中学生対象)
平成26年度年間スケジュール (増刷)	9月	10,000部	観覧者、新聞・雑誌・放送局各社、学校・図書館・美術館・博物館ほか、郵送希望者にも発送
平成26年度留学生の日ポスター・チラシ	10月	ポスター500部、チラシ10,000部	観覧者 (関西圏の大学、専門学校へ送付)
京都国立博物館 展示案内	26年9月	日本語版 100,000部 日本語版 (27.3 増刷) 50,000部 英語版 20,000部 中国語版 10,000部 日本語版 (27.3 増刷) 10,000部 韓国語版 10,000部 仏語版 10,000部 西語版 10,000部	観覧者、京都市観光案内
平成27年度年間スケジュール	27年3月	40,000部	観覧者、パスポート会員、新聞・雑誌・放送局各社、学校・図書館・美術館・博物館ほか、郵送希望者にも発送
京都国立博物館シアター案内	26年9月	日本語版 5,000部 英語版 10,000部	観覧者
文化財に親しむ授業ガイドブック (増刷)	27年2月	500部	教員・教育関係者などへ無償配布
『小さな瞳にワクワクを—平成26年「文化財に親しむ授業」記録集』	27年3月	1000部	教員・教育関係者などへ無償配布

【奈良国立博物館】

刊行物名	発行部数	配布先
奈良国立博物館だより (年4回)	春号 20,000部 夏号 20,000部 秋号 31,000部 冬号 15,000部	美術館・博物館・大学・研究所等 約120件
奈良国立博物館リーフレット	日本語版 35,000部 英語版 5,500部 フランス語版 1,000部 ドイツ語版 1,000部 中国語版 4,000部 韓国語版 1,500部 スペイン語版 1,000部	館内で来館者に配布

奈良国立博物館展示案内	35,000部	館内で来館者に配布
仏教美術資料研究センター利用案内	30,000部	館内で来館者に配布

【九州国立博物館】

刊行物名	発行部数	配布先
九州国立博物館案内リーフレット	日本語版 80,000部 中国語版 8,000部 韓国語版 11,000部 英語版 13,000部 ドイツ語版 3,000部 フランス語版 3,000部 スペイン語版 3,000部 合計 121,000部	・館内で来館者に配布 ・学校関係、旅行会社等へ郵送
文化交流展示室案内マップ	日本語版 24,000部 中国語版 6,000部 韓国語版 3,000部 英語版 6,000部 合計 39,000部	・館内で来館者に配布 ・学校関係、旅行会社等へ郵送
九州国立博物館概要	日本語版 3,000部 中国語版 300部 韓国語版 300部 英語版 500部 合計 4,100部	・視察者等に配布
季刊情報誌「アジアージュ」	春(32)号 50,000部 夏(33)号 50,000部 秋(34)号 50,000部 冬(35)号 50,000部 合計 200,000部	・館内で来館者に配布 ・美術館・博物館、近隣文化施設、県内市町村 近隣大学、太宰府市、友の会会員等へ郵送
九州国立博物館の展示並びにイベントのご案内	毎月発行 各号14,000部	・館内で来館者に配布 ・郵便局、学校、図書館、ホテル、公共施設、道の駅等に配布
九州国立博物館 展示スケジュールのご案内	50,000部	・館内で来館者に配布
九州国立博物館 わくわく通信	年5回毎回 682,000枚	・福岡市を含む博物館近隣14市町
九州国立博物館 きゅーはく攻略本	80,000部	・館内で来館者に配布 ・県内全小中学校に配布

2-(4)-⑦ ウェブサイトアクセス件数 (後述の資料に記載) ◎共通資料 d

3 我が国における博物館の中核としての機能の強化

3-(1) 調査研究の成果の発信

3-(1)-① 学会、研究会等発表実績一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-③

3-(1)-② シンポジウム開催実績一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-④

3-(1)-③ 論文等発表実績一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑤

3-(1)-④ 調査研究刊行物一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑥

3-(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施

3-(2)-① 研究交流実績一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-①

3-(4) 収蔵品の貸与

3-(4)-① 公立博物館等への収蔵品・寄託品貸与件数

平成27年3月31日現在

	国立博物館計			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	計	国内	海外	計	国内	海外	計	国内	海外	計	国内	海外	計	国内	海外
貸与先件数	274	261	13	115	108	7	82	79	3	47	47	0	30	27	3
合計	1,962	1,867	95	1,130	1,059	71	582	570	12	149	149	0	101	89	12
絵画	392	366	26	134	125	9	186	174	12	59	59	0	13	8	5
書跡	92	91	1	45	44	1	34	34	0	11	11	0	2	2	0
彫刻	361	359	2	294	292	2	20	20	0	39	39	0	8	8	0
建築	3	3	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0
金工	94	84	10	34	25	9	42	42	0	16	16	0	2	1	1
刀剣	10	10	0	10	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
陶磁	257	241	16	81	65	16	163	163	0	0	0	0	13	13	0
漆工	109	108	1	37	37	0	60	60	0	9	9	0	3	2	1
染織	35	35	0	14	14	0	13	13	0	0	0	0	8	8	0
考古	243	238	5	120	118	2	61	61	0	15	15	0	47	44	3
民族資料	8	4	4	8	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
歴史資料	36	34	2	30	30	0	3	3	0	0	0	0	3	1	2
和書	13	12	1	13	12	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東 洋	絵画	42	23	19	42	23	19								
	書跡	13	13	0	13	13	0								
	彫刻	5	3	2	5	3	2								
	金工	4	0	4	4	0	4								
	陶磁	28	26	2	28	26	2								
	漆工	5	5	0	5	5	0								
	染織	7	7	0	7	7	0								
	考古	10	10	0	10	10	0								
民族	0	0	0	0	0	0									
法隆寺献納宝物	2	2	0	2	2	0									
黒田記念館収蔵品	193	193	0	193	193	0									

* 巡回展等で複数館に貸与する場合は、それぞれ館数と文化財件数をカウント。

付表・貸与件数の推移

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	
貸与先件数	301	266	311	272	274	
合計	1,936	1,571	1,814	2,041	1,962	
絵画	395	376	436	461	392	
書跡	89	75	91	101	92	
彫刻	198	146	224	183	361	
建築	2	3	5	4	3	
金工	100	61	84	63	94	
刀剣	24	42	13	46	10	
陶磁	117	98	99	250	257	
漆工	92	66	57	121	109	
染織	63	152	98	47	35	
考古	350	203	327	324	243	
民族資料	9	12	2	0	8	
歴史資料	95	24	44	68	36	
和書	4	21	14	13	13	
東 洋	絵画	27	15	12	13	42
	書跡	23	9	6	13	13
	彫刻	9	9	27	9	5
	金工	0	1	0	0	4
	陶磁	91	9	29	37	28
	漆工	2	6	3	0	5
	染織	2	0	0	1	7
	考古	53	30	49	47	10
民族	0	0	0	0	0	
法隆寺献納宝物	8	2	0	0	2	
黒田記念館収蔵品	183	211	194	240	193	

* 東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり。

3-(4)-② 公立博物館等への収蔵品・寄託品貸与先別件数

○収蔵品

平成27年3月31日現在

	国立博物館計		東京国立博物館		京都国立博物館		奈良国立博物館		九州国立博物館	
	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数
国内	192	1,380	101	1,020	49	268	26	47	16	45
国・国立	30	157	11	53	12	87	4	7	3	10
地方・公立	123	1,015	68	835	25	115	20	37	10	28
私立団体	39	208	22	132	12	66	2	3	3	7
海外	12	79	7	71	2	4	0	0	3	4

○寄託品

平成27年3月31日現在

	国立博物館計		東京国立博物館		京都国立博物館		奈良国立博物館		九州国立博物館	
	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数
国内	115	487	18	39	50	302	32	102	15	44
国・国立	16	125	2	8	6	83	7	33	1	1
地方・公立	67	180	8	24	31	73	17	43	11	40
私立団体	32	182	8	7	13	146	8	26	3	3
海外	4	16	0	0	2	8	0	0	2	8

3-(4)-③ 海外への列品貸与

【東京国立博物館】 海外貸与先 7件 海外貸与文化財 71件[うち寄託品 0件] 平成27年3月31日現在

展覧会名称	申請者【会場】	貸与期間	種別・員数
常設展示(長期貸与)	フランス国立ギメ美術館【フランス国立ギメ美術館(フランス共和国パリ市)】	14年1月1日~26年12月31日	東洋彫刻2
日本美術室常設展示(長期貸与)	ヒューストン美術館【ヒューストン美術館日本美術室(アメリカ合衆国)】	24年2月17日~28年3月31日	19件 彫刻2、金工5、陶磁10、考古2
「日本所蔵の中国絵画」展	ロサンゼルスカウンティ美術館【ロサンゼルスカウンティ美術館(アメリカ合衆国)】	26年5月11日~8月3日	東洋絵画19件
企画特別展「朝鮮 青花白磁」	国立中央博物館【国立中央博物館(大韓民国)】	26年9月30日~11月16日	6件 陶磁4、東洋陶磁2
「パリ北斎展」	グラン・パレ・国立ギャラリー【グラン・パレ・国立ギャラリー(フランス共和国)】	26年10月1日~27年1月18日	絵画4件
特別展「琉球王国の至宝」	国立古宮博物館【国立古宮博物館(大韓民国)】	26年12月9日~27年2月8日	20件 絵画5、書跡1、金工4、陶磁1、民族4、和書1、東洋金工4
「楽一茶碗の中の宇宙」展	ロサンゼルスカウンティ美術館【ロサンゼルスカウンティ美術館(アメリカ合衆国)】	27年3月29日~27年6月7日	陶磁1件

【京都国立博物館】 海外貸与先 3件 海外貸与文化財 12件[うち寄託品 8件]

展覧会名称	申請者【会場】	貸与期間	種別・員数(件)
「パリ北斎」展	グラン・パレ・ナショナル・ギャラリー【グラン・パレ・ナショナル・ギャラリー(フランス)】	26年9月24日~11月20日、26年12月1日~27年1月18日	絵画2
特別展「山水画、理想郷を追い求める(Landscapes: Seeking the Ideal Land)」	大韓民国国立中央博物館【大韓民国国立中央博物館】	26年7月22日~9月21日	絵画1
海外展『Ink and Gold: Art of the Kano「狩野派」展』	文化庁長官 フィラデルフィア美術館長	平成27年1月29日~平成27年5月24日	絵画9

【奈良国立博物館】 海外貸与先 0件 海外貸与文化財 0件[うち寄託品 0件]

【九州国立博物館】 海外貸与先 3件 海外貸与文化財 12件[うち寄託品 8件]

展覧会名称	申請者【会場】	貸与期間	種別・員数(件)
「第60回百済文化祭記念特別展 武寧王時代の東アジア世界」	大韓民国国立公州博物館	26年9月18日~11月28日	考古3
「琉球王国の至宝：沖縄の輝かしい歴史」	大韓民国国立古宮博物館	26年11月27日~27年2月26日	7件 絵画3、金工1、漆工1、歴史資料2
「狩野派展」	フィラデルフィア美術館	27年1月14日~27年6月19日	絵画2

3-(4)-④ 考古の相互貸借実績

【東京国立博物館】

貸与先名	貸与件数(件)	借用件数(件)
大阪府立近つ飛鳥博物館	50	12

【奈良国立博物館】

貸与先名	貸与件数(件)	借用件数(件)
平泉町(平泉文化遺産センター)	1	15
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館	3	5
涌谷町教育委員会(涌谷町立わくや万葉の里歴史館)	1	5
色麻町(色麻町立農業伝習館)	1	0
五條市教育委員会(市立五條文化博物館)	1	7

(参考)

その他(収蔵品・寄託品以外)の貸与

【東京国立博物館】

区分	貸与件数(件)	貸与先件数(件)
古写真	4	1

3-(5) 公立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進

3-(5)-① 公立博物館等に対する援助・助言

平成27年3月31日現在

計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
263件	119件	29件	58件	57件

【東京国立博物館】119件

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
1	筆の里工房	筆の里工房 20 周年特別展の展示に関わる助言	4 月～9 月	副館長 島谷弘幸、客員研究員 恵美千鶴子
2	高知県	高知県新資料館建設会議	12 月 1 日	副館長 島谷弘幸
3	高梁市成羽美術館	特別展の展示に関わる助言	4 月～10 月	同上
4	大阪市立美術館	日本書芸院と共催の書道展に関わる助言	4 月～27 年 1 月	同上
5	公益財団法人・陽明文庫	文庫運営に関わる助言	6 月 17 日、27 年 3 月 10 日	同上
6	町田市	(仮称)町田市立国際工芸美術館整備基本計画検討委員会	5 月 27 日	学芸企画部長 伊藤嘉章
7	東京国立近代美術館	評議員	7 月 9 日、27 年 2 月 13 日	同上
8	文化庁	買取鑑査会議委員 (美術・工芸部会)	8 月 1 日	同上
9	国際交流基金・ロサンゼルスカウンティ美術館、エルミタージュ美術館、プーシキン美術館	『樂一茶碗の中の宇宙』専門委員	8 月～27 年 3 月	同上
10	可児市	可児市大萱古窯跡群調査・保存・整備指導委員会	10 月 3 日	同上
11	文化庁	文化審議会専門委員 (文化財分科会)	27 年 3 月 3～5 日	同上
12	日本学術振興会	科学研究費委員会専門委員	27 年 2 月 23、24 日	同上
13	トリノコマリー海軍海事史博物館	展示手法、作品管理などに関する指導・助言	5 月 16 日	企画課長 小泉恵英
14	出光美術館	出光文化福祉財団 美術品修復事業助成事業への推薦	12 月 24 日	企画課特別展室長 松嶋雅人
15	日本学術振興会	科学研究費委員会専門委員 (審査委員)	12 月～27 年 11 月	同上
16	渋谷区立松濤美術館	展覧会における彫刻の展示台製作方法等について助言した。	8 月	企画課デザイン室長 木下史青
17	一ツ橋大学	鼻煙壺の展示について、木製棚を展示ケースとして使用する 場合の展示・照明方法、施工業者等について助言した。	9 月～10 月	同上
18	国立大学法人 福島大学 芸術による地域創造研究所	福島県喜多方の歴史的建造物である米蔵における展示・照明 デザインに関する調査・指導・助言を行った。	6 月～11 月	同上
19	東京藝術大学	指導教官 (准教授) よりの依頼で、大学美術館における作家 (大学院博士課程) の展示・照明方法等について助言した。	11 月～12 月	同上
20	東京都美術館	「Museum Start あいうえの“ティーンズ学芸員”」事業のプログラム《東洋館見学》について、展示や照明のデザインに関する レクチャー援助を行った。	27 年 1 月 7 日	同上
21	平等院	鳳翔館における文化財展示環境の調査協力および展示照明の 刷新等に関する指導・助言を行った。	6 月～27 年 3 月	同上
22	ルーブル美術館	来館者数の推移と傾向に関わる助言	26 年 1 月～12 月	企画課出版企画室長 遠藤楽子
23	国立民族学博物館	平成 26 年度「博物館学集中コース」見学研修講師	6 月 11 日	企画課国際交流室長 鬼頭智美
24	日本博物館協会	日本のミュージアムのための国際発信力向上推進事業委員	4 月～27 年 3 月	同上
25	国際展覧会オーガナイザー会議	運営委員会委員・アジアの博物館における展覧会運営について	5 月 8 日	同上
26	シンガポール国立博物館	シンガポール建国 50 年記念展覧会に向けて日本関係資料調査 についての助言	27 年 2 月 2 日	同上
27	東京都庭園美術館	スマートフォンによるアプリの開発と運用について	6 月	博物館教育課長 小林牧
28	九州国立博物館	グーグルアートプロジェクトへの参加について	7 月	同上
29	香川県立ミュージアム	同上	9 月	同上
30	文化庁	古墳壁画の保存活用に関する検討会	10 月～28 年 3 月	同上
31	仙台市立博物館	スマートフォン向けアプリ「トーハクなび」について	27 年 3 月 11 日	博物館教育課長 小林牧、博物館教育課教育講座室主任研究員 神辺知加
32	浜松市立博物館	浜松にもたらされた黄檗文化展の展覧会構成、展示への助言	10 月～11 月	博物館教育課教育講座室長 浅瀬毅
33	静岡県教育委員会	三嶋大社所蔵「三十六歌仙図刺繍額」の県指定文化財指定に関わる 調査・助言	4 月～27 年 3 月	博物館教育課教育普及室長 小山弓弦葉
34	文化庁	伝統工芸技術の保護に関わる調査・助言	4 月～27 年 3 月	同上
35	東京手描友禅伝統工芸士産地委員会	東京手描友禅の伝統工芸士認定に関わる審査委員	8 月～10 月	同上
36	東京都庭園美術館	教育普及スペースと触知図設置の助言	7 月 25 日	博物館教育課ボランティア室長 鈴木みどり
37	日本博物館協会	ドイツ国立博物館学芸員への博物館教育の助言	11 月 5 日	同上
38	日本動物園協会	ボランティアの緊急時対応・防災訓練についての助言	11 月 5 日	同上
39	横浜美術館	ボランティア制度についての助言	12 月 6、7 日、27 年 2 月 26 日	同上

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
40	北九州市立自然史・歴史博物館	盲学校のためのスクールプログラム・ユニバーサルミュージアム・ボランティア制度についての助言	27年2月3日	同上
41	富士通株式会社	ユニバーサルデザイン、視覚障害者対応についての助言	27年2月24日	同上
42	文化庁	第9回指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー講師(文化財情報システム構築とネットワーク活用)	7月7日、10月20日	博物館情報課情報管理室長 村田良二
43	東京国立近代美術館	「海外日本美術資料専門家(司書)の招聘・研修・交流事業2014」研修講師	12月3日	博物館情報課長 高橋裕次、 博物館情報課情報管理室長 村田良二、博物館情報課情報 資料室専門職員 住広昭子
44	奈良文化財研究所	平成24年度文化財担当者専門研修「遺跡情報記録調査課程」講師	12月18日	博物館情報課情報管理室長 村田良二
45	情報科学技術協会	ISO/TC46/SC4 国内委員会委員	27年1月16日	同上
46	山梨県	山梨県指定文化財調査委員	10月31日	広報室長 伊藤信二
47	久能山東照宮	金陀美具足及び白檀塗具足保存修理検討会議	6月25日	同上
48	文化庁、春日大社	春日大社国宝古神宝類の復元模造製作事業	7月3、4日	同上
49	國學院高等学校	日本文化史資料館の収蔵品の展示・保存の助言	8月27日、11月22日	同上
50	文化庁	文化財買取協議会(工芸品)	9月8日	同上
51	歴史に憩う榎原市博物館	「特別展 新沢千塚」の展示および梱包における協力・助言等	6月28、29日、9月10日	列品管理課主任研究員 古谷毅
52	国立歴史民俗博物館	鑑査委員会(購入資料:館外委員)における評価・助言等	11月17日	同上
53	岡田美術館	収蔵品の作品解説に関わる助言	8月5日～9月9日	列品管理課平常展調整室主任 研究員 川村佳男
54	文京区立森鷗外記念館	運営協議会委員として、館の運営について助言	4月～27年3月	調査研究課長 田良島哲
55	文化庁	買取鑑査会議委員(美術・工芸部会)	8月1日	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕實
56	第37回日本の象牙彫刻展組織委員会	第36回日本の象牙彫刻展審査委員	7月6日	調査研究課工芸室長 竹内奈美子
57	東京都生活文化局	東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会(資料評価部会)臨時委員	10月30日	調査研究課工芸室長 竹内奈美子
58	東京文化財研究所	在外日本古美術品保存修復協力事業に係る調査	27年1月25日～30日	調査研究課工芸室長 竹内奈美子
59	国立歴史民俗博物館 木更津市郷土博物館金のすず	金鈴塚古墳出土遺物の調査研究に関わる助言	4月～27年3月	調査研究課工芸室 三田覚之
60	韓国国立中央博物館	同館の金工展示室のリニューアルにかかわる助言	5月1日	企画課デザイン室長 木下史青、 企画課デザイン室主任研究員 矢野賢一、 保存修復課環境保存室長 和田浩、 調査研究課考古室長 白井克也
61	韓国国立古宮博物館	同館の特別展開催にかかわる助言	6月25日	調査研究課考古室長 白井克也、 調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
62	国立歴史民俗博物館	同上	10月3日	調査研究課考古室長 白井克也
63	山梨県立博物館	同上	10月6日	同上
64	韓国国立中央博物館	同上	12月5日	調査研究課考古室長 白井克也、 調査研究課考古室 井出浩正、 調査研究課考古室アシエイトフェロー 河野正訓
65	国立科学博物館	国際博覧会など、相互の館史にかかわる今後の研究計画について、助言	27年2月19日	学芸企画部長 伊藤嘉章、 博物館情報課長 高橋裕次、 調査研究課長 田良島哲、 調査研究課考古室長 白井克也
66	韓国国立中央博物館	同館の特別展開催にかかわる助言	27年2月26日	学芸研究部長 谷豊信、 調査研究課考古室長 白井克也、 調査研究課考古室主任研究員 品川欣也、 調査研究課考古室 井出浩正
67	島根県立古代出雲歴史博物館	三木文雄氏寄贈資料の調査	8月26～28日	調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
68	島根県立古代出雲歴史博物館	同館の特別展開催にかかわる助言	6月26日	調査研究課考古室研究員 井出浩正
69	アイヌ文化財団	同上	27年2月25～26日	調査研究課考古室主任研究員 品川欣也、 調査研究課考古室研究員 井出浩正
70	NPO 法人文化財保存支援機構	文化財保存修復専門家養成実践セミナー レベル2・A 陸前高田学校 講師	7月28日～8月3日	保存修復課長 神庭信幸
71	NPO 法人文化財保存支援機構	文化財保存修復専門家養成実践セミナー レベル1・B 講師	9月1日～9月11日	同上
72	公益財団法人日本博物館協会	「博物館研究」編集委員会委員	27年1月26日	同上
73	イコム日本委員会	委員	5月19日	同上

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
74	民俗共生の象徴となる空間における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会	施設整備専門部会委員	4月23日、5月28日、8月27日、12月11日	同上
75	大津波被災文化財保存修復技術連携プロジェクト	実行委員会委員	8月1日、8月2日、11月21日、1月30日	同上
76	渋谷区立松涛美術館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	25年10月1日～4月1日	保存修復課長 神庭信幸、保存修復課環境保存室長 和田浩
77	榎原市千塚資料館	同上	25年11月29日～6月26日	同上
78	岡田文化財団パラミタミュージアム	同上	25年7月1日～26年7月8日	同上
79	都城市立美術館	同上	7月25日～10月3日	同上
80	ヤマザキマザック美術館	同上	6月5日～10月3日	同上
81	三菱一号館美術館	同上	8月1日～11月10日	同上
82	大分県立美術館	同上	12月5日～27年3月31日	同上
83	富有柿の里古墳と柿の館	同上	8月26日、27年3月31日	同上
84	イラク共和国スレイマニア博物館	資料保存環境、修理について	7月22日	保存修復課調査分析室長 荒木臣紀
85	中国陝西歴史博物館	保存環境、保存修復材料についての助言	7月23日	同上
86	島根県立古代出雲歴史博物館	写真資料の保存、紙資料の保存と修理、コレクションマネジメントとボランティアの関わりについての助言	8月27、28日	同上
87	NPO 法人文化財保存支援機構	文化財保存修復専門家養成実践セミナー レベル2・A 講義「接着剤」講師	9月2日	同上
88	学習院大学資料館	文化財収蔵施設環境についての助言	9月20日	同上
89	大阪市立東洋陶磁美術館	陶磁器の修理についての助言	9月28日	同上
90	東京大学東洋文化研究所	写真技法のアイデンティフィケーションと保存についての助言	27年1月13日	同上
91	上海博物院	エックス線 CT の文化財撮影についての設定・助言	27年3月23日	保存修復課調査分析室長 荒木臣紀、保存修復課調査分析室アソシエイトフェロー 宮田将寛、企画課国際交流室アソシエイトフェロー 楊鋭
92	天理大学、天理大学附属天理参考館	「古代オリエントにおける都市遺跡の盛衰に関する考古学的研究」による、テル・ゼロール遺跡出土資料の調査研究への援助・助言	11月18日～11月24日	企画課特別展室アソシエイトフェロー 小野塚拓造
93	豊田市	茶道具の寄贈に関わる助言	6月～10月	学芸企画部長 伊藤嘉章、企画課特別展室 横山梓、客員研究員 恵美千鶴子
94	中国四川省成都博物院	出土織機の組み立て等に関する助言	11月30日	客員研究員 澤田むつ代
95	文化庁文化審議会文化財分科第四専門調査会	平成26年度選定保存技術の選定・認定について	6月27日	同上
96	文化庁分科審議会文化財分科会第一専門調査会	国宝・重要文化財・登録有形文化財の指定・登録等について	27年3月2日～4日	同上
97	文化庁	文化財等災害対策委員会委員	8月1日～27年3月31日	総務部長 栗原祐司
98	文化庁	「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会委員、組織運営専門部会委員	6月13日～27年3月31日	総務部長 栗原祐司
99	観光庁	MICE アンバサダー	9月2日～28年3月31日	総務部長 栗原祐司
100	観光庁	ユニークベニュー利用促進協議会委員	25年8月19日～27年3月31日	総務部長 栗原祐司
101	群馬県	上野三碑世界記憶遺産登録推進協議会の助言	27年3月18日	総務部長 栗原祐司
102	田川市	世界記憶遺産活用等推進委員会委員	25年12月20日～27年12月20日	総務部長 栗原祐司
103	田川市教育委員会	田川市石炭・歴史博物館等運営協議会委員	6月1日～28年5月31日	総務部長 栗原祐司
104	南九州市	南九州市世界記憶遺産推進会議アドバイザー	27年1月8日～28年3月31日	総務部長 栗原祐司
105	舞鶴市	舞鶴市ユネスコ世界記憶遺産有識者会議委員	24年12月26日～27年3月31日	総務部長 栗原祐司
106	独立行政法人日本スポーツ振興センター	秩父宮記念スポーツ博物館・図書館展示基本業務に係る建設コンサルタント選定委員会委員長	6月9日～8月10日	総務部長 栗原祐司
107	公益財団法人日本博物館協会	日本のミュージアムのための国際発信力向上推進委員会委員、同検討会議委員、同企画会議委員	4月15日～27年3月31日	総務部長 栗原祐司、国際交流室長 鬼頭智美
108	公益財団法人日本博物館協会	博物館の登録制度の在り方に関する調査研究に関する委員会委員	7月15日～28年3月31日	総務部長 栗原祐司
109	Museum2015 実行委員会	Museum2015 実行委員会監事	4月15日～27年3月31日	総務部長 栗原祐司
110	上野の山文化ゾーン連絡協議会	上野の山文化ゾーン連絡協議会幹事	5月29日、8月29日	総務部長 栗原祐司
111	上野「文化の杜」新構想推進会議	上野「文化の杜」新構想推進会議ワーキンググループ委員	26年1月29日～27年3月31日	総務部長 栗原祐司

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
112	全国美術館会議	全国美術館会議総会（広島市）において講演	5月22日	総務部長 栗原祐司
113	国宝修理装こう師連盟	国宝修理装こう師連盟評議員	9月4日	総務部長 栗原祐司
114	明日の京都文化遺産プラットフォーム	明日の京都文化遺産プラットフォーム幹事会において講演	9月24日	総務部長 栗原祐司
115	人権資料・展示全国ネットワーク	人権資料・展示全国ネットワーク総会において講演	9月25日	総務部長 栗原祐司
116	名古屋大学博物館	名古屋大学博物館において講演	11月5日	総務部長 栗原祐司
117	せとうち美術館ネットワーク	せとうち美術館ネットワーク総会において講演	11月15日	総務部長 栗原祐司
118	文化庁	ミュージム・マネジメント研修会において講義	12月11日	総務部長 栗原祐司
119	岩手県旧出生小学校 (現：陸前高田市博物館)	文化財レスキュー事業 講話	7月31日～8月1日	館長 銭谷真美

【京都国立博物館】 29件

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
1	大津市教育委員会	大津曳山祭総合調査の指導	4月25日	企画室研究員 末兼俊彦
2	国際仏教学大学院大学	公開研究会に参加し助言	5月10日	上席研究員 赤尾栄慶
3	大津市教育委員会	大津曳山祭総合調査の指導	5月17日	企画室研究員 末兼俊彦
4	ICOM 日本委員会	総会に参加し助言	5月19日	アソシエイトフェロー リンネ マリサ
5	福井市愛宕坂茶道美術館	収蔵作品調査の指導	6月19日～20日	保存修理指導室主任研究員 羽田 聡
6	大津市教育委員会	大津曳山祭総合調査の指導	6月21日	企画室研究員 末兼俊彦
7	奥田元宋・小由女美術館	作品撤収・点検の指導	7月7日～9日	同上
8	福島県立美術館	特別展出品作品交渉への助言	7月18日～19日	列品管理室長 浅見龍介
9	上海・復旦大学中華文明国際研究中心	国際検討会へ参加し助言	7月19日～21日	上席研究員 赤尾栄慶
10	碧南市藤井達吉現代美術館	作品展示の指導	9月8日	企画室研究員 末兼俊彦
11	静岡県立美術館	展覧会撤収作業の指導	9月8日	美術室研究員 福士雄也
12	パラミタミュージアム	展示作品撤収の指導	9月30日～10月2日	企画室研究員 末兼俊彦 工芸室研究員 降矢哲男
13	日本のミュージアムのための国際発信力向上推進事業実行委員会事務局	応用美術の博物館とコレクションに関する国際委員会2014年大会へ参加し助言	10月14日～16日	アソシエイトフェロー リンネ マリサ
14	香川県立ミュージアム	作品展示の指導	10月17日	上席研究員 赤尾栄慶
15	碧南市藤井達吉現代美術館	作品撤収・梱包の指導	10月20日	企画室研究員 末兼俊彦
16	海住山寺	公開展示作業の指導	10月24日	保存修理指導室主任研究員 羽田 聡
17	浜松市博物館	作品展示の指導	10月28日	列品管理室研究員 呉 孟晋
18	福井市愛宕坂茶道美術館	福井市愛宕坂茶道美術館に寄贈の作品調査の指導	10月31日	保存修理指導室主任研究員 羽田 聡
19	唐津市教育委員会	唐津焼美術館（仮称）検討委員会に参加し助言	10月31日～11月1日	工芸室研究員 降矢哲男
20	香川県立ミュージアム	作品撤収作業の指導	11月4日	保存修理指導室主任研究員 羽田 聡
21	プリンストン大学	シンポジウムに参加し助言	11月5日～8日	アソシエイトフェロー リンネ マリサ
22	海住山寺	撤収作業の指導	11月10日	保存修理指導室主任研究員 羽田 聡
23	福井市愛宕坂茶道美術館	所蔵品調査の指導	11月14日～15日	工芸室研究員 降矢哲男
24	土岐市美濃陶磁歴史館	出土陶片調査の指導	12月5日	同上
25	米子市埋蔵文化財センター	調査の指導	12月13日	同上
26	河内長野市文化振興財団	講演会で講演	12月17日	同上
27	新潟市新津美術館	展示の指導	27年1月19日	企画室研究員 末兼俊彦
28	徳島市立德島城博物館	資料調査に助言	27年2月15日～16日	工芸室研究員 降矢哲男
29	島根県	文化財保護審議会へ出席し助言	27年3月16日	教育室長 山川 暁

【奈良国立博物館】 58件

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
1	福岡市美術館・静岡市美術館・岡崎市美術館・読売新聞大阪本社	学術協力「法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り—」における出陳品借用作業立会	4月7日、9日、10日 6月6日	上席研究員 岩田茂樹 研究員 岩戸晶子 研究員 北澤菜月
2	同上	同上	4月14日～19日 6月9日～13日 8月4日～7日	学芸部長 内藤 栄 上席研究員 岩田茂樹 研究員 北澤菜月
3	同上	同上	5月18日、19日 7月14日 9月7日、8日	研究員 北澤菜月
4	同上	同上	6月1日～4日 7月27日～30日 9月21日～24日	学芸部長 内藤 栄 上席研究員 岩田茂樹 研究員 北澤菜月

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
5	同上	同上	9月25日、26日、29日～ 10月2日、6日	学芸部長 内藤 栄 上席研究員 岩田茂樹 企画室長 野尻 忠 研究員 岩戸晶子 研究員 北澤菜月
6	雲辺寺	雲辺寺所蔵品修復に関して指導・助言	4月23日	保存修理指導室長 谷口耕生 研究員 北澤菜月
7	公益社団法人 日本工芸会	日本伝統工芸展運営委員会に委員として出席し助言	4月24日	館長 湯山 賢一
8	九州国立博物館	三次元データに基づく文化財研究に関する助言	4月28日～29日	主任研究員 鳥越俊行
9	インドネシア・ジャカルタ特別州文化財センター	保存修復状況に関する助言	5月15日	館長 湯山賢一 保存修理指導室長 谷口耕生
10	一般財団法人 文化財保存修復学会	文化財保存修復学会理事会に理事として出席し助言	5月23日	保存修理指導室長 谷口耕生
11	京大大学生存圏研究所	シロアリ被害材 X線 CT 測定に関して指導・助言	5月30日 11月26日	主任研究員 鳥越俊行
12	九州国立博物館	文化財保存修復施設運営委員会に委員として出席し助言	6月5日	学芸部長 内藤 栄
13	京都国立博物館	文化財保存修理所運営委員会に委員として出席し助言	6月9日	同上
14	公益財団法人 大和文華館	評議員会に評議員として出席し助言	6月10日	同上
15	奈良女子大学	経営協議会に委員として出席し助言	6月18日 27年1月27日	館長 湯山賢一
16	公益財団法人 仏教美術協会	評議員会に評議員として出席し助言	6月19日	館長 湯山賢一
17	島根県立八雲立つ風土記の丘	考古資料相互活用促進事業に関する指導・助言	6月19日	研究員 岩戸晶子
18	公益財団法人 仏教美術研究上野記念財団	評議員会及び理事会に理事として出席し助言	6月23日	館長 湯山賢一
19	文化庁	文化審議会文化財分科会第四専門調査会に委員として出席し助言	6月27日	同上
20	島根県立八雲立つ風土記の丘	考古資料相互活用促進事業に伴う文化財輸送	7月9日～11日	研究員 岩戸晶子
21	福岡市美術館・静岡市美術館・岡崎市美術館・読売新聞大阪本社	学術協力「法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り—」における講演会にて講演	7月13日	研究員 北澤菜月
22	公益財団法人 四国民家博物館	貸与作品の展示に伴う指導・助言	7月13日	研究員 山口隆介
23	福岡市美術館・静岡市美術館・岡崎市美術館・読売新聞大阪本社	学術協力「法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り—」における講演会にて講演	7月21日 9月7日	上席研究員 岩田茂樹
24	涌谷町	考古資料相互活用促進事業に関する指導・助言	7月31日	研究員 岩戸晶子
25	国立歴史民俗博物館	人間文化研究機構連携研究「正倉院文書の高度情報化」における研究会に出席し助言	7月31日	企画室長 野尻 忠
26	神戸市教育委員会	神戸市文化財保護審議会に委員として出席し助言	7月31日	上席研究員 岩田茂樹
27	奈良教育大学	奈良 ESD コンソーシアム構成団体連絡会議に出席し助言	7月31日 11月9日	教育室長 岩井共二
28	九州国立博物館	貸与作品の修理に関する指導・助言	7月31日	保存修理指導室長 谷口耕生 研究員 北澤菜月
29	天理市教育委員会	天理市文化財保護審議会に委員として出席し助言	8月1日	保存修理指導室長 谷口耕生
30	米沢市教育委員会	米沢市上杉博物館資料収集委員会に委員として出席し助言	8月5日	館長 湯山賢一
31	文化庁	イタリアにおける仏教美術展企画会議に議員として出席し助言	8月15日	上席研究員 岩田茂樹
32	平泉町	考古資料相互活用促進事業に伴う文化財輸送	8月21日～26日	研究員 岩戸晶子
33	奈良市教育センター	教職員研修講座にて講演	8月26日	学芸部長 内藤 栄
34	文化庁	熊本県所在文化財の調査に関して助言	9月2日	館長 湯山賢一
35	一般社団法人 国宝修理装演師連盟	理事会・評議員会に顧問として出席し助言	9月4日	同上
36	愛知県美術館	愛知県美術館所蔵品修理検討委員会に委員として出席し助言	9月5日	保存修理指導室長 谷口耕生
37	沖縄県立博物館・美術館	旧首里城正殿鐘保存状態調査に関して助言	9月9日	主任研究員 鳥越俊行
38	読売新聞大阪本社	「正倉院フォーラム 2014 東京」にて講演	9月27日	学芸部長 内藤 栄
39	同上	「正倉院展の楽しみ方～まほろばの集い in 名古屋」にて講演	10月4日	主任研究員 清水 健
40	公益財団法人 京都市環境保全活動推進協会	博物館・公園等ボランティア交流会に出席し講演	10月5日	ボランティア室員 鈴木民子
41	読売新聞大阪本社	「正倉院展の楽しみ方～まほろばの集い in 福岡～」にて講演	10月11日	館長 湯山賢一
42	奈良文化財研究所	飛鳥資料館運営に関する懇談会に委員として出席し助言	11月11日	学芸部長 内藤 栄
43	奈良県教育委員会	奈良県文化財保護審議会に委員として出席し助言	11月27日	同上
44	公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所	海外招聘者に対する「文化遺産の保護に資する研修 2014」にて指導・助言	12月3日	企画室長 野尻 忠
45	奈良教育大学	第7回百済文化国際シンポジウムにて講演	12月6日	学芸部長 内藤 栄
46	海外日本美術資料専門家(司書)の招聘・研修・交流事業 2014 実行委員会	招聘者に対する研修にて指導・助言	12月8日	資料室長 宮崎幹子
47	東大寺	東大寺経巻聖教原本調査に関して指導・助言	12月11日 12月12日	館長 湯山賢一 企画室長 野尻 忠
48	九州国立博物館	貸与作品の展示に伴う指導・助言	12月11日	教育室長 岩井共二
49	読売新聞大阪本社	平成 26 年正倉院展作文コンクール審査会に出席し審査	12月15日	館長 湯山賢一 学芸部長 内藤 栄
50	同上	同上	12月18日	館長 湯山賢一

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
51	唐招提寺・凸版印刷株式会社	大型オルソスキャナーによる唐招提寺所蔵品のスキャン作業に伴う指導・助言	27年1月20日～26日	学芸部長 内藤 栄 企画室長 野尻 忠 教育室長 岩井共二 研究員 北澤菜月 研究員 原瑛莉子
52	「2015 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良」実行委員会	実行委員会に委員として出席し助言	27年1月24日	主任研究員 鳥越俊之
53	奈良県教育委員会	奈良県文化財保護審議会に委員として出席し助言	27年2月19日	学芸部長 内藤 栄
54	文化庁	文化審議会文化財分科会第一専門調査会に委員として出席し助言	27年3月1日	館長 湯山賢一
55	神戸市教育委員会	神戸市文化財保護審議会に委員として出席し助言	27年3月2日	上席研究員 岩田茂樹
56	松伯美術館	理事会に理事として出席し助言 臨時評議員会に評議員として出席し助言	27年3月10日	館長 湯山賢一
57	公益財団法人 大和文華館	理事会に理事として出席し助言 臨時評議員会に評議員として出席し助言	27年3月10日	館長 湯山賢一
58	沖縄県立博物館・美術館	旧首里城正殿鐘保存状態調査委員会に委員として出席し助言	27年3月25日	主任研究員 鳥越俊之

【九州国立博物館】57件

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
1	文化庁	文化審議会美術品補償制度部会専門調査会にて保存修理に係る助言	4月11日	学芸部長 井上洋一
2	公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団	第14回事業委員会にて運営に係る助言	4月15日	館長 三輪嘉六
3	公益社団法人日本工芸会	第61回日本伝統工芸展運営委員会にて運営に係る助言	4月24日	同上
4	日本学術会議	文化財の保護と活用に関する分科会にて保存に係る助言	5月2日	学芸部特任研究員 本田光子
5	松浦市	平成26年度第1回松浦市鷹島海底遺跡調査指導委員会合同会議にて調査に係る助言	5月21日	博物館科学課長 今津節生
6	公益財団法人文化財虫菌害研究所	平成26年第1回評議員会にて運営に係る助言	5月26日	館長 三輪嘉六
7	文化庁	文化財審議会第3専門調査会にて調査に係る助言	5月22日	学芸部特任研究員 本田光子
8	一般社団法人文化財保存修復学会	平成26年度理事会にて運営に係る助言	5月23日	同上
9	沖縄県博物館協会	平成26年度沖縄県博物館協会総会における講演	5月29日	交流課主任研究員 池内 一誠
10	文化庁	文化審議会美術品補償制度部会専門調査会（第2回）にて保存修理に係る助言	5月30日	学芸部長 井上洋一
11	全国大学博物館学講座協議会	平成26年度全国大会での講演	6月6日～7日	同上
12	公益財団法人文化財虫菌害研究所	第36回文化財の虫菌害・保存対策研修会での講師	6月13日	学芸部特任研究員 本田光子
13	文化庁	国有文化財等（美術工芸品）保存修理事業協力者会議にて保存修理に係る助言	6月20日	企画課主任研究員 川畑憲子
14	阿蘇火山博物館	博物館教育のあり方にかかる助言	6月20日	交流課主任研究員 池内 一誠
15	首里城公園	博物館教育のあり方にかかる助言	6月27日	同上
16	日本学術会議	博物館・美術館等の組織運営に関する分科会にて運営に係る助言	7月17日	学芸部長 井上洋一
17	大野城市	第13回（仮称）大野城心のふるさと館整備検討委員会にて運営に係る助言	7月23日	学芸部特任研究員 本田光子
18	文化庁	文化庁買取監査会議にて保存に係る助言	8月1日	学芸部長 井上洋一
19	「次世代のチカラ FUKUOKA」	ふくおかの歴史に関する講演	8月4日	交流課主任研究員 池内 一誠
20	鳥根県立古代出雲歴史博物館	博物館教育のあり方に関する助言	8月6日	同上
21	文化遺産国際協力コンソーシアム	第19回東アジア・中央アジア分科会にて調査に係る助言	8月26日	博物館科学課長 今津節生
22	大分県立歴史博物館	平成26年度大分県立歴史博物館協議会にて運営に係る助言	8月27日	学芸部特任研究員 本田光子
23	熊本博物館	平成26年度第1回熊本博物館協議会にて運営に係る助言	9月5日	同上
24	ベトナム歴史博物館	博物館教育のあり方に関する助言	9月6日	交流課主任研究員 池内一誠
25	岡山県立博物館	平成26年度博物館講座での講演	9月7日	学芸部長 井上洋一
26	白石町教育委員会	佐賀県史跡龍王崎古墳群6号墳保存対策における指導助言	9月11日	博物館科学課長 今津節生
27	延岡市	第1回内藤記念館再整備基本構想・基本計画検討専門者会議にて運営に係る助言	9月19日	学芸部長 井上洋一
28	文部科学省	平成26年度博物館長研修講師	10月9日	学芸部特任研究員 本田光子
29	文化庁	国有文化財等（美術工芸品）保存修理事業協力者会議にて保存修理に係る助言	10月17日	文化財課主任研究員 畑靖紀
30	文化庁	水中遺跡調査検討委員会にて調査に係る助言	10月19日	博物館科学課長 今津節生
31	瑞浪市教育委員会	第2回瑞浪市櫻堂薬師調査指導委員会にて調査に係る助言	10月23日	館長 三輪嘉六
32	佐賀県	第1回九州陶磁文化館のあり方検討委員会にて運営に係る助言	10月30日	同上
33	中城村教育委員会	博物館教育のあり方に関する助言	11月14日	交流課主任研究員 釜瀬進一郎
34	高知県立埋蔵文化財センター	平成26年度職員専門研修での講師	11月20日～21日	博物館科学課長 今津節生
35	一般社団法人文化財保存修復学会	平成26年度第3回理事会にて運営に係る助言	11月28日	学芸部特任研究員 本田光子
36	宮内庁	宮内庁陵墓管理委員会にて調査に係る助言	12月3日～4日	館長 三輪嘉六

	機 関	内 容	期 間	担 当 者
37	大分県芸術文化スポーツ振興財団	おおいた姫島黒曜石フォーラムにて調査に係る助言	12月8日	学芸部長 井上洋一
38	同上	大分公立美術館・博物館担当者意見交換会における講演	12月11日	同上
39	鹿児島県歴史資料センター黎明館	鶴丸城跡保全整備事業に係る専門家・有識者会議にて保存修理に係る助言	12月11日	博物館科学課長 今津節生
40	福岡県	国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈発見50周年記念シンポジウムでの講演	12月14日	学芸部長 井上洋一
41	松浦市	平成26年度第2回松浦市鷹島海底遺跡調査指導委員会合同会議にて調査に係る助言	12月15日	博物館科学課長 今津節生
42	北海道開拓記念館	シンポジウム：文化財調査におけるX線CTの活用での講演	12月20日	同上
43	日本学術会議	文化財の保護と活用に関する分科会にて保存修理に係る助言	12月22日	学芸部長 井上洋一
44	一般財団法人環境文化創造研究所	座談会ミュージアムIPMの現状と課題での講演	12月24日～25日	学芸部特任研究員 本田光子
45	一般社団法人環境文化創造研究所	座談会ミュージアムIPMの現状と課題での講演	12月25日	館長 三輪嘉六
46	日本学術会議	博物館・美術館等の組織運営に関する分科会にて運営に係る助言	12月25日～26日	学芸部長 井上洋一
47	世界記憶遺産推進会議	第1回世界記憶遺産推進会議にて運営に係る助言	27年1月8日～9日	学芸部特任研究員 本田光子
48	唐津市	平成26年度第1回鶴殿石仏群保存整備検討委員会にて保存修理に係る助言	27年1月15日	博物館科学課長 今津節生
49	文化庁	文化審議会第4期美術品補償制度部会専門調査会（第4回）での保存修理に係る助言	27年1月19日	学芸部長 井上洋一
50	福岡県	国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈発見50周年記念講演会での講演	27年1月25日～26日	同上
51	文化庁	文化審議会文化財分科会第三専門調査会埋蔵文化財委員会での現地調査に係る助言	27年1月26日～28日	学芸部特任研究員 本田光子
52	佐賀県庁	第1回九州陶磁文化館のあり方検討委員会での運営に係る助言	27年2月4日	館長 三輪嘉六
53	公益財団法人文化財虫菌害研究所	文化財虫菌害研究所IPMコーディネーター委員会での運営に係る助言	27年2月16日～17日	学芸部特任研究員 本田光子
54	南九州市	南九州市世界記憶遺産推進会議での運営に係る助言	27年3月1日～2日	学芸部特任研究員 本田光子
55	同上	知覧特攻平和会館保存検討委員会での保存修理に係る助言	27年3月1日～2日	同上
56	一般社団法人文化財保存修復学会	文化財保存修復学会第37回大会学術発表プログラム作成委員会での運営に係る助言	27年3月6日	博物館科学課環境保全室研究員 秋山純子
57	福岡市美術館	平成26年度美術資料収集（古美術）の審査	27年3月10日	企画課主任研究員 原田あゆみ

4 文化財に関する調査及び研究の推進

4-(1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

- 4-(1)-① 調査研究テーマ一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-②
- 4-(1)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-③
- 4-(1)-③ 論文等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑤
- 4-(1)-④ 調査研究刊行物一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑥

4-(2) 文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進

- 4-(2)-① 調査研究テーマ一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-②
- 4-(2)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-③
- 4-(2)-③ 論文等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑤
- 4-(2)-④ 調査研究刊行物一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑥

4-(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、 先端的調査研究等の推進

- 4-(3)-① 調査研究テーマ一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-②
- 4-(3)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-③
- 4-(3)-③ 論文等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑤
- 4-(3)-④ 調査研究刊行物一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑥

4-(4) 国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施

- 4-(4)-① 調査研究テーマ一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-②
- 4-(4)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-③
- 4-(4)-③ 論文等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑤
- 4-(4)-④ 調査研究刊行物一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑥

4-(5) 有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

- 4-(5)-① 調査研究テーマ一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-②
- 4-(5)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-③
- 4-(5)-③ 論文等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑤
- 4-(5)-④ 調査研究刊行物一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑥
- 4-(5)-⑤ 科学研究費補助金による調査研究 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑦
- 4-(5)-⑥ 客員研究員一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑧

5 文化財保護に関する国際協力の推進

5-(1) 保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤の整備

5-(1)-① 調査研究テーマ一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-②

5-(1)-② 国際ワークショップ開催実績一覧

【東京文化財研究所】

	研修・ワークショップ	実施時期	回数	適用
1	キルギス共和国及び中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業「史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ」	7月3日～14日	1回	一部受託
2	キルギス共和国科学アカデミーとの文化遺産保護の分野におけるワークショップ	10月27日～11月1日	1回	一部受託
3	アルメニア文化省とのワークショップ	5月20日～27日	1回	一部受託
4	Workshops on Conservation of Japanese Artworks on Paper and Silk 会場：ベルリン国立博物館アジア美術館（ベルリン・ドイツ）	12月3日～5日 12月8日～12日	2回	
5	Workshop on the Conservation and Restoration of Urushi (Japanese Lacquer ware) 会場：ケルン市博物館東洋美術館（ケルン・ドイツ）	11月15日 11月18日～21日 11月25日～28日	3回	
6	国際研修「紙の保存と修復2014」（日本国内研修）	8月25日～9月12日	1回	
7	ICROM-LATAM プログラムにおけるInternational Course on Paper Conservation in Latin America（メキシコ研修）	11月5日～30日	1回	
8	タイ・ラチャプラディット寺院の螺鈿及び漆絵の施された部材各1点の調査と試験的な修理、専門家の研修	9月16日～26日	1回	受託
9	ブータン王国の伝統的建造物保存に関する拠点交流事業：ワークショップ	12月20日～24日	1回	受託
10	ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業：木造建造物保存研修	5月30日～6月15日 27年1月11日～24日	2回	受託
11	ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業：壁画の保存修復に関する研修	6月10日～6月18日 27年1月18日～27日 27年3月8日～3月13日	3回	受託
12	ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業：文化財建造物保存研修	8月20日～30日	1回	受託
13	ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業：考古遺跡の保存管理と考古遺物の記録法に関する研修	11月23日～29日 27年1月17日～26日	2回	受託
14	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）に係る国内支援業務： <現地研修（計12回）> 「第2回保存修復材料学研修」 「国外視察研修（LACONA X）」 「第8回所内移動・梱包研修」 「第4回労働安全衛生研修」 「第2回木材研修」 「国外視察研修（ICOM-CC）」 「第3回学術研究シンポジウム」 「第4回染織品研修」 「第9回所内移動・梱包研修」 「第3回彩色文化財研修」 「第4回保存科学概論研修」 「第4回マネージメント計画策定研修」 <本邦研修（計3回）> 「第2回保存修復材料としての和紙研修」 「第3回保存修復材料としての和紙研修」 「第4回微生物管理研修」	5月4日～15日 6月9日～13日 6月11日～26日 8月10日～12日 8月17日～28日 9月15日～19日 11月3日～5日 11月16日～27日 27年2月8日～22日 27年2月10日～19日 27年2月25日～3月9日 27年3月25日～26日 8月7日～15日 11月4日～28日 27年1月19日～2月6日	15回	受託

5-(1)-③ 学会、研究会等発表実績一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-③

5-(1)-④ 論文等発表実績一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑤

5-(2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進

5-(2)-① 調査研究テーマ一覧

(後述の資料に記載) ◎共通資料c-②

5-(3) 研修、専門家の派遣を通じた諸外国における人材育成、技術移転

5-(3)-① アジア諸国文化財保護担当者などの人材養成に関する研修等実施状況

【東京文化財研究所】

※5-(1)-② 国際ワークショップ開催実績一覧にまとめて記載

【奈良文化財研究所】 4件

	研修課程	研修期間	日数	研修対象	参加者数
1	ACCUの実施する文化遺産の保護に資する研修2014（個人研修）	7月31日～8月22日	23日	バヌアツ人専門家	2人
2	ACCUの実施する文化遺産の保護に資する研修2014（集団研修）	9月2日～10月3日	32日	アジア太平洋地域の政府機関、大学、研究所などに勤務し、文化遺産の管理、保護、修復に携わっているもの。	16人
3	ACCUの実施する文化遺産の保護に資する研修2014（個人研修）	11月11日～12月5日	25日	ブータン人専門家	3人
4	ACCUの実施する文化遺産の保護に資する「文化遺産ワークショップ」（バングラデシュで開催）	27年1月11日～1月16日	6日	バングラデシュ人専門家	15人

5-(4) アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究

- 5-(4)-① 研究交流実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-①
- 5-(4)-② 調査研究テーマ一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-②
- 5-(4)-③ 学会、研究会等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-③
- 5-(4)-④ シンポジウム開催実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-④
- 5-(4)-⑤ 論文等発表実績一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑤
- 5-(4)-⑥ 調査研究刊行物一覧 (後述の資料に記載) ◎共通資料c-⑥
- 5-(4)-⑦ ウェブサイトアクセス件数 (後述の資料に記載) ◎共通資料d

6 情報発信機能の強化

6-(1) ネットワークのセキュリティの強化及び情報基盤の整備充実

6-(1)-① 文化財関係資料及び図書の受入件数

	東京文化財研究所		奈良文化財研究所	
	26年度受入件数	総件数	26年度受入件数	総件数
図 書	10,388冊	261,218冊	7,653冊	343,240冊

6-(2) 研究所の調査・研究成果の発信

6-(2)-① 公開講演会、現地説明会

【東京文化財研究所】

公開講演会 1件 (2日)

○公開講演会「第48回企画情報部 オープンレクチャー「モノノイメージとの対話」

- ・開催日：10月31日（金）
- ・開催場所：東京文化財研究所セミナー室
- ・主催：上野の山文化ゾーン連絡協議会
- ・参加人数：108人
- ・事業内容：美術史研究の成果を一般に公表すること
「一流相承系図（絵系図）の構想と機能」
「院政期絵画における二つの美の原理—似絵の成立をめぐる—」

- ・開催日：11月1日（土）
- ・開催場所：東京文化財研究所セミナー室
- ・主催：上野の山文化ゾーン連絡協議会
- ・参加人数：55人
- ・事業内容：美術史研究の成果を一般に公表すること
「仙台・昭忠碑、被災から復興へ向けて」
「戦争の「表象と本物」」

【奈良文化財研究所】

公開講演会 5件

○公開講演会「飛鳥資料館春期特別展『いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代—』記念座談会」

- ・開催日：5月11日
- ・開催場所：飛鳥資料館講堂
- ・主催：奈良文化財研究所飛鳥資料館
- ・参加人数：51人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「いにしへの技術を語る—現代の「匠」と考古学者—」

○公開講演会「第114回公開講演会」

- ・開催日：6月28日
- ・開催場所：平城宮跡資料館講堂
- ・主催：奈良文化財研究所
- ・参加人数：236人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「藤原宮の地鎮と富本銭」
「役人を育てる」
「壁画古墳の世界—星宿と四神—」

○公開講演会「第115回公開講演会」

- ・開催日：10月4日
- ・開催場所：平城宮跡資料館講堂
- ・主催：奈良文化財研究所
- ・参加人数：210人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「和同開珎1文の価値は？」
「植物種実からみた古代の食生活」
「文化的景観の味わい方」

○公開講演会「特別講演会（東京会場）『遺跡の年代を測る ものさしと奈文研』」

- ・開催日：10月25日
- ・開催場所：有楽町朝日ホール
- ・主催：奈良文化財研究所
- ・参加人数：480人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「年代を測るものさしの作り方」
「古代土器の年代推定—都の調査・研究成果と地方の視点—」
「時を測るものさしとしての木簡」
「土器の年代と木簡の年紀」
「白鳳か天平か、瓦が解決した「薬師寺論争」」
「木の年輪で作った年代を測るものさし—年輪年代学の成果—」

○公開講演会「飛鳥資料館秋期特別展『はぎとり・きりとり・かたどり—大地にきざまれた記憶—』記念講演会」

- ・開催日：11月1日
- ・開催場所：飛鳥資料館講堂
- ・主催：奈良文化財研究所飛鳥資料館
- ・参加人数：40人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「もうひとつの遺跡保存—土層転写と遺構切り取り—」

現地説明会 2件

○現地説明会「飛鳥藤原第182次（藤原宮大極殿院）発掘調査」

- ・開催日：11月8日
- ・開催場所：橿原市高殿町
- ・主催：奈良文化財研究所
- ・参加人数：794人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。

発掘調査

○現地見学会「飛鳥藤原第183次（藤原宮東方官衙北地区）発掘調査」

- ・開催日：12月14日
- ・開催場所：橿原市高殿町
- ・主催：奈良文化財研究所
- ・参加人数：622人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。

発掘調査

6-(2)-② シンポジウム開催実績一覧

（後述の資料に記載）◎共通資料c-④

6-(2)-③ 調査研究刊行物一覧

（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑥

6-(2)-④ ウェブサイトアクセス件数

（後述の資料に記載）◎共通資料d

6-(3) 研究所所管の展示公開施設の充実

6-(3)-① 来館者数推移（入館料別）（過去5ヵ年）
（後述の資料に記載）◎共通資料a-①

6-(3)-② 来館者数推移（展覧会別）（過去5ヵ年）
（後述の資料に記載）◎共通資料a-②

6-(3)-③ 入場料収入
（後述の資料に記載）◎共通資料a-③

6-(3)-④ 平常展・特別展・海外展
（後述の資料に記載）◎共通資料a-④

6-(4) 文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用への協力

6-(4)-① ボランティア受入れ実績
（後述の資料に記載）◎共通資料b

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

7-① 国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言

平成27年3月31日現在

計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
1,335件	916件	419件

【東京文化財研究所】916件

	プロジェクト名称	件数
1	文化財の収集、保存、展示に関する指導助言	23件
2	無形文化遺産に関する助言	13件
3	文化財の修復及び整備に関する調査・助言	48件
4	文化財の虫菌害に関する調査・助言	37件
5	文化財の材質・構造に関する調査・助言	15件
6	美術館・博物館等の環境調査と指導・助言	780件

【奈良文化財研究所】419件

	プロジェクト名称	件数
1	地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言	384件
2	地方公共団体等が行う平城京域発掘調査等への協力・援助	6件
3	地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言	10件
4	東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対する地方公共団体等への支援・協力	19件

7-② 専門指導者層を対象とした研修等実施状況及び研究参加者等に対するアンケート結果

平成27年3月31日現在

計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
16件	1件	15件

【東京文化財研究所】1件

	研修課程	研修期間	日数	研修対象	研修内容	参加者数	満足度
1	博物館・美術館等の保存担当 学芸員研修	7月14日～ 7月25日	9日	博物館・美術館等の文化財 の保存担当者	文化財の保存科学の基礎と実践上の諸 問題についての講義と実習	31人	100%

【奈良文化財研究所】15件

	研修課程	研修期間	日数	研修対象	研修内容	参加者数	満足度
1	建築遺構調査課程	6月9日 ～6月13日	5日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	発掘調査で検出される建築遺構や出土 建築部材に関して必要な、上部構造の専 門的知識や発掘方法などについての研 修	9人	100%
2	植物遺体調査課程	6月16日 ～6月20日	5日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	木材、種実、花粉、プラント・オパール などの植物遺体を発掘調査現場で扱う ための専門的知識と調査方法の取得を 目的とした研修	10人	100%
3	庭園・自然名勝等保存活用 基礎課程	6月23日 ～6月27日	5日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	歴史的庭園の保護をはじめとして、名勝 の調査及び保存管理・修理等について、 基本的な考え方から実務に至る基礎知 識を習得することを目的とする研修	19人	100%
4	報告書作成Ⅰ（編集基礎） 課程	7月7日 ～7月11日	5日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	文化財調査に必要な不可欠な報告書等 の学術出版物制作にあたって、編集に必 要な基礎知識と印刷工程の基礎知識につ いての研修	15人	100%
5	報告書作成Ⅱ（応用制作） 課程	7月14日 ～7月18日	5日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	報告書等の出版物制作にあたり、実際 の編集作業に必要な知識や技術、特にデ ジタル編集の実習を通じて制作のノウ ハウを学べる研修	9人	100%
6	自然科学的年代測定法課程	9月1日 ～9月5日	5日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	文化財調査に年輪年代測定や放射性炭 素年代測定など自然科学的年代測定を 積極的に取り入れるための基礎知識や 留意点の習得を目指す研修	5人	100%
7	文化的景観調査計画課程	9月8日 ～9月12日	5日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	文化的景観の保護にこれから取り組む 担当者を対象に、文化的景観の歴史・概 念、保護制度、調査手法及び保存計画立 案についての基礎知識を習得すること を目的とする研修	12人	100%
8	遺跡測量課程	9月29日 ～10月3日	5日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	『発掘調査のてびき』（文化庁）に準拠 した遺跡の測量および外注に必要な専 門的知識と技術の研修	10人	100%
9	保存科学基礎Ⅰ（金属製遺 物）課程	10月7日 ～10月16日	7日	地域の中核となる地方公 共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	金属製遺物の材質および劣化状態に応 じた保存処理法の策定、仕様書の作成を おこなうことができるよう、金属製遺物 の材質、劣化状態および保存処理に関 する基礎知識を習得することを目的と する研修	9人	100%
10	保存科学基礎Ⅱ（木製遺物）	10月16日	7日	地域の中核となる地方公	木製遺物の樹種、木取りおよび劣化状態	6人	100%

	研修課程	研修期間	日数	研修対象	研修内容	参加者数	満足度
	課程	～10月24日		共同体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、木製遺物の劣化状態および保存処理に関する基礎知識を取得することを目的とする研修		
11	古文書歴史資料調査基礎課程	12月8日 ～12月12日	5日	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	古文書・歴史資料の調査・管理等を担当する立場にあるが、当該分野に関する専門的教育を受けたことのない地方公共団体等の文化財担当者を対象に、基礎知識の習得を目指す研修	18人	100%
12	遺跡情報記録調査課程	12月16日 ～12月19日	4日	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	遺跡・遺物の正確な記録とその保存活用手法としてGISやデータベースの利用、遺跡情報の公開に関する知識の取得を目指す研修	18人	94%
13	文化財写真課程	1月13日 ～1月23日	9日	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	文化財の記録についての中核をなす記録写真撮影について、様々な文化財分野の写真についての基礎的知識と実習による実技を習得できる研修	13人	100%
14	出土文字資料調査課程	1月26日 ～1月30日	5日	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	木簡・墨書土器・漆紙文書など、出土文字資料の調査のための実践的な技術や知識の習得を目的とする研修	6人	100%
15	保存科学基礎Ⅲ（応急処置）課程	2月16日 ～2月20日	5日	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員 若しくはこれに準ずる者	発掘調査において出土した脆弱遺物の取り上げ、保存処理までの一時保管方法等の遺物の取り扱いに関する応急処置について、講義と実習を通して習得することを目的とする研修	12人	100%

Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

Ⅱ-1 一般管理費の削減

Ⅱ-1-① 施設の有効利用件数

平成27年3月31日現在

○件数

		国立文化財機構計	博物館					文化財研究所		
			計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
合計	総件数	1,615	1,165	664	63	117	321	450	164	286
	うち有償	651	613	402	57	34	120	38	12	26
	うち無償	964	552	262	6	83	201	412	152	260
茶室	総件数	193	193	111	27	10	45			
	うち有償	107	107	56	27	6	18			
	うち無償	86	86	55	0	4	27			
講堂等 (講堂、会議室、研修室)	総件数	966	551	289	20	30	212	415	164	251
	うち有償	225	201	83	16	7	95	24	12	12
	うち無償	741	350	206	4	23	117	391	152	239
その他 (左記以外の建物、敷地)	総件数	166	131	9	11	66	45	35	0	35
	うち有償	55	41	8	11	21	1	14	0	14
	うち無償	111	90	1	0	45	44	21	0	21
撮影利用	総件数	290	290	255	5	11	19	0	0	0
	うち有償	264	264	255	3	0	6	0	0	0
	うち無償	26	26	0	2	11	13	0	0	0

○有償利用の利用金額

(単位：千円)

	国立文化財機構計	博物館					文化財研究所		
		計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
合計	86,843	82,559	72,731	5,457	2,752	1,619	4,284	202	4,082
茶室	4,606	4,606	3,870	389	133	214			
講堂等 (講堂、会議室、研修室)	7,760	7,383	4,909	988	151	1,335	377	202	175
その他 (左記以外の建物、敷地)	46,071	42,164	35,671	3,974	2,468	51	3,907	0	3,907
撮影利用	28,406	28,406	28,281	106	0	19	0	0	0

※アジア太平洋無形文化遺産研究センターは、堺市博物館の施設の一部を使用しているため、外部利用は行っていない。

◎共通資料
a 展示

a-① 来館者数推移 (入館料別)

平成27年3月31日現在

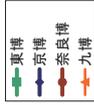
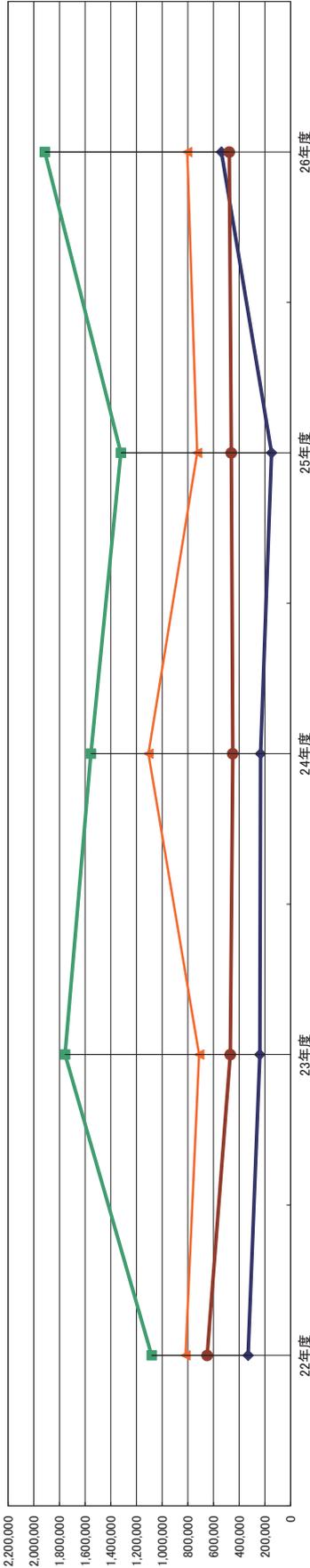
年 度		22	23	24	25	26		
国立文化財機構	平常展	総来館者数	3,392,243	3,356,159	3,520,384	2,818,511	3,890,178	
		計	947,439	913,409	1,109,550	1,011,274	1,372,538	
		有料	一般	344,070	293,323	355,419	373,417	522,569
			大学生	34,579	27,778	34,218	36,886	59,208
			小・中・高生	—	—	—	546	537
		無料	友の会	67,151	53,383	86,938	89,509	123,720
			一般(黒田含む)	212,611	96,561	74,968	47,371	85,285
	小・中・高生		156,236	173,323	173,386	166,233	165,340	
	招待者等	132,792	269,041	384,621	297,312	415,879		
	計	2,444,804	2,442,750	2,410,834	1,807,237	2,517,640		
	特別展	有料	一般	1,459,486	1,585,799	1,535,741	1,132,319	1,670,944
			高・大生	88,515	89,985	82,665	66,814	93,348
			小・中生	48,563	24,501	30,770	23,243	22,149
		無料	友の会	47,012	40,845	47,758	44,592	58,421
小・中生・一般			198,991	95,130	88,927	99,764	102,343	
招待者等			602,237	606,490	624,973	440,505	570,435	
計		2,444,804	2,442,750	2,410,834	1,807,237	2,517,640		
東京国立博物館	平常展	総来館者数	1,082,269	1,756,590	1,555,694	1,322,288	1,913,643	
		計(24年度：黒田含む)	373,068	324,597	416,430	484,429	587,528	
		有料	一般	196,312	143,017	201,988	250,330	269,639
			大学生	24,140	16,073	22,155	26,117	31,324
			小・中・高生	—	—	—	—	—
		無料	友の会	58,496	44,388	76,333	77,771	96,297
			高校生	17,570	13,861	14,773	18,844	20,345
			小・中生	33,585	33,401	36,660	41,197	50,040
		招待者等	42,965	60,620	63,381	70,170	95,280	
		黒田記念館(無料)	—	13,237	1,140	—	24,603	
	計	709,201	1,431,993	1,139,264	837,859	1,326,115		
	特別展	有料	一般	424,337	972,328	729,470	561,236	926,279
			高・大生	24,169	52,296	36,874	29,955	51,690
			小・中生	—	—	—	—	—
無料		友の会	9,867	12,072	11,448	9,585	12,920	
	小・中生	15,301	31,888	20,368	14,715	31,503		
招待者等	235,527	363,409	341,104	222,368	303,723			
計	1,414,068	3,764,138	3,351,926	2,663,817	4,000,171			
京都国立博物館	平常展	総来館者数	331,131	239,767	234,540	148,429	539,134	
		計	—	—	—	—	265,791	
		有料	一般	—	—	—	—	147,106
			大学生	—	—	—	—	16,801
			小・中・高生	—	—	—	—	—
		無料	友の会	—	—	—	—	12,764
			高校生	—	—	—	—	11,137
	小・中生		—	—	—	—	—	
	招待者等	—	—	—	—	77,983		
	計	331,131	239,767	234,540	148,429	273,343		
	特別展	有料	一般	205,194	140,395	124,569	76,358	190,015
			高・大生	18,386	13,912	13,570	10,734	14,231
			小・中生	3,856	2,375	5,022	3,224	1,683
		無料	友の会	10,953	10,719	13,228	9,174	11,978
小・中生			862	3,007	386	1,471	4,571	
招待者等			91,880	69,359	77,765	47,468	50,865	
計		331,131	239,767	234,540	148,429	273,343		
奈良国立博物館	平常展	総来館者数	649,878	469,463	450,235	461,690	476,993	
		計	71,566	130,839	145,914	122,075	92,147	
		有料	一般	36,436	56,747	56,997	44,307	31,433
			大学生	2,417	4,578	4,754	3,967	3,519
			小・中・高生	—	—	—	546	537
		無料	友の会	2,891	3,765	3,843	2,703	3,344
			小・中・高生	15,293	40,864	48,183	39,249	20,933
			招待者等	14,529	24,885	32,137	31,303	32,381
		計	578,312	338,624	304,321	339,615	384,846	
		特別展	有料	一般	428,121	243,704	227,929	258,597
	高・大生			24,411	12,508	12,304	13,756	13,403
	小・中生			19,106	9,380	8,143	7,622	9,208
	無料		友の会	15,358	9,417	10,291	11,206	14,443
		小・中生	6,107	—	—	3,067	0	
招待者等	85,209	63,615	45,654	45,367	74,218			
計	649,878	469,463	450,235	461,690	476,993			
九州国立博物館	平常展	総来館者数	818,034	712,594	1,107,036	727,603	804,663	
		計	274,545	358,366	460,525	349,848	357,362	
		有料	一般	105,638	86,974	91,786	75,827	71,014
			大学生	7,560	6,561	6,831	6,571	7,251
			小・中・高生	—	—	—	—	—
		無料	友の会	5,764	5,230	6,762	9,035	11,315
			高校生	35,990	28,625	26,193	26,305	22,494
			小・中生	50,295	51,740	43,351	38,785	38,507
		招待者等	69,298	179,236	285,602	193,325	206,781	
		計	543,489	354,228	646,511	377,755	447,301	
	特別展	有料	一般	343,079	219,615	443,965	224,247	271,895
			高・大生	19,068	10,570	19,108	11,482	13,249
			小・中生	25,601	12,746	17,605	12,397	11,258
		無料	友の会	10,834	8,637	12,791	14,627	19,080
招待者等	144,907		102,660	153,042	115,002	131,819		
計	818,034	712,594	1,107,036	727,603	804,663			
黒田記念館	平常展	18,458	(東京国立博物館平常展に含む)	(東京国立博物館平常展に含む)	(東京国立博物館平常展に含む)	(東京国立博物館平常展に含む)		
	特別展	18,458	(東京国立博物館平常展に含む)	(東京国立博物館平常展に含む)	(東京国立博物館平常展に含む)	(東京国立博物館平常展に含む)		
平城宮跡資料館	平常展	354,346	132,295	124,515	108,896	109,188		
	特別展	189,338	80,353	64,318	39,502	52,221		
藤原宮跡資料室	平常展	165,008	51,942	60,197	69,394	56,967		
	特別展	4,815	2,971	9,510	7,869	8,461		
飛鳥資料館	平常展	総来館者数	133,312	42,479	38,854	41,736	38,096	
		計	15,649	16,283	12,853	7,551	9,028	
		有料	一般	5,684	6,585	4,648	2,953	3,377
			大学生	462	566	478	231	313
			小・中・高生	3,503	4,832	4,226	1,853	1,884
		招待者等	6,000	4,300	3,501	2,514	3,454	
		計	117,663	26,196	26,001	34,185	29,068	
	特別展	有料	一般	58,755	9,757	9,808	11,881	9,181
			大学生	2,481	699	809	887	775
			小・中・高生	11,713	8,293	7,976	11,117	9,302
		招待者等	44,714	7,447	7,408	10,300	9,810	
		計	117,663	26,196	26,001	34,185	29,068	
		計	133,312	42,479	38,854	41,736	38,096	
		計	133,312	42,479	38,854	41,736	38,096	

※飛鳥資料館特別展有料高校生入場者数は、春期特別展(22)及び特別公開(25)のみ有料(大学生)に含み、それ以外は無料(小・中・高生)に含みます。
※京都国立博物館における平常展については高校生以下の区別せず。

独立行政法人国立文化財機構 展覧会来館者数 (22～26年度)

22年度		23年度		24年度		25年度		26年度	
総合計	来館者数	総合計	来館者数	総合計	来館者数	総合計	来館者数	総合計	来館者数
合計	3,992,243	3,358,150	3,520,384	2,810,511	3,990,176	2,810,511	3,990,176	2,810,511	3,990,176
平常展のみ	947,430	813,009	1,109,550	1,011,274	1,372,530	1,011,274	1,372,530	1,011,274	1,372,530
特別(共催)展計	2,444,804	2,442,750	2,410,834	1,807,237	2,517,646	1,807,237	2,517,646	1,807,237	2,517,646

1) 国立博物館

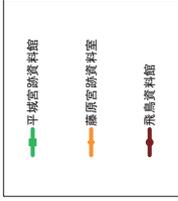
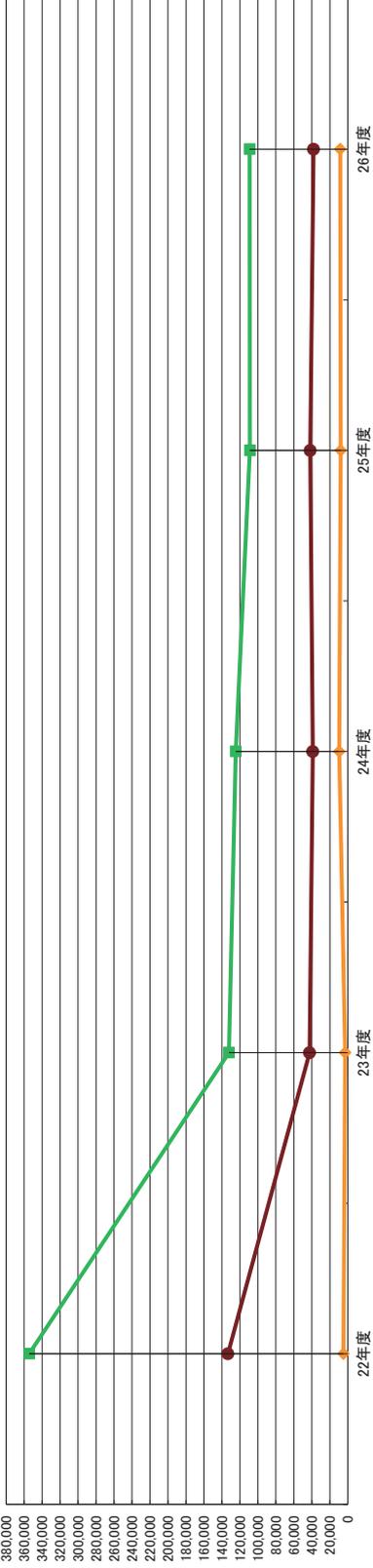


	22年度		23年度		24年度		25年度		26年度	
	総合計	来館者数								
計	2,881,312	719,179	3,178,414	813,602	3,347,505	1,022,669	2,660,010	956,352	2,810,511	3,794,433
平常展のみ	719,179	1,162,133	813,602	2,364,636	1,022,669	2,394,636	1,022,669	2,394,636	1,022,669	2,431,605
特別(共催)展計	1,082,269	1,082,269	1,756,390	1,756,390	1,555,694	1,555,694	1,322,288	1,322,288	1,322,288	1,913,613
平常展のみ	709,201	709,201	1,431,993	1,431,993	1,139,264	1,139,264	837,859	837,859	837,859	1,326,115
特別(共催)展計	182,470	182,470	99,088	99,088	486,683	486,683	20,544	20,544	20,544	229,994
平常展のみ	105,538	105,538	229,628	229,628	51,327	51,327	193,990	193,990	193,990	119,268
特別(共催)展計	232,791	232,791	550,398	550,398	486,683	486,683	104,577	104,577	104,577	402,241
平常展のみ	188,402	188,402	28,780	28,780	137,646	137,646	137,646	137,646	137,646	386,708
特別(共催)展計	42,022	42,022	212,150	212,150	141,507	141,507	104,865	104,865	104,865	162,948
平常展のみ	53,409	53,409	258,252	258,252	169,578	169,578	174,801	174,801	174,801	382,2
特別(共催)展計	19,297	19,297	53,693	53,693	152,523	152,523	22,122	22,122	22,122	24,556
平常展のみ	37,535	37,535	13,237	13,237	1,140	1,140	1,140	1,140	1,140	24,603
特別(共催)展計	8,247	8,247	13,237	13,237	1,140	1,140	1,140	1,140	1,140	24,603
平常展のみ	649,878	649,878	239,767	239,767	234,510	234,510	148,479	148,479	148,479	339,131
特別(共催)展計	578,312	578,312	239,767	239,767	234,510	234,510	148,479	148,479	148,479	268,791
平常展のみ	202,166	202,166	84,682	84,682	101,006	101,006	85,811	85,811	85,811	69,443
特別(共催)展計	81,342	81,342	21,705	21,705	79,218	79,218	24,659	24,659	24,659	203,900
平常展のみ	294,804	294,804	19,297	19,297	24,699	24,699	38,929	38,929	38,929	203,900
特別(共催)展計	818,034	818,034	37,535	37,535	4,401	4,401	461,690	461,690	461,690	476,993
平常展のみ	274,545	274,545	649,878	649,878	450,235	450,235	122,075	122,075	122,075	92,147
特別(共催)展計	543,489	543,489	71,566	71,566	130,839	130,839	304,321	304,321	304,321	384,846
平常展のみ	202,166	202,166	578,312	578,312	338,624	338,624	304,321	304,321	304,321	384,846
特別(共催)展計	81,342	81,342	202,166	202,166	35,672	35,672	24,317	24,317	24,317	37,022
平常展のみ	81,342	81,342	81,342	81,342	63,364	63,364	41,985	41,985	41,985	78,476
特別(共催)展計	294,804	294,804	239,581	239,581	238,019	238,019	246,269	246,269	246,269	269,348
平常展のみ	818,034	818,034	1,107,036	1,107,036	1,107,036	1,107,036	727,603	727,603	727,603	804,663
特別(共催)展計	274,545	274,545	358,368	358,368	460,525	460,525	349,848	349,848	349,848	357,362
平常展のみ	543,489	543,489	354,228	354,228	646,511	646,511	377,755	377,755	377,755	447,301
特別(共催)展計	84,738	84,738	46,536	46,536	110,047	110,047	71,192	71,192	71,192	60,808
平常展のみ	42,022	42,022	118,528	118,528	75,415	75,415	77,554	77,554	77,554	70,794
特別(共催)展計	53,409	53,409	75,880	75,880	224,324	224,324	133,448	133,448	133,448	256,070
平常展のみ	354,311	354,311	113,290	113,290	236,725	236,725	89,561	89,561	89,561	59,629
特別(共催)展計	9,009	9,009	113,290	113,290	236,725	236,725	89,561	89,561	89,561	59,629

※1 この特別展は、平常展料金のため、平常展のみの来館者に計上。
 ※2 この特別展会場は平常展の一部で、別途カウントを行っている。

独立行政法人国立文化財機構 展覧会別来館者数 (22～26年度)

2) 研究展示公開施設



	22年度		23年度		24年度		25年度		26年度	
	総 合 計	平常展のみの来館者 特別(共催)展計	総 合 計	平常展のみの来館者 特別(共催)展計						
計	510,931	228,260	177,745	172,879	156,501	54,922	155,745	155,745	69,710	86,035
平城宮跡資料館	282,671	18,458	177,745	86,681	86,198	103,579	86,035	86,035	54,922	54,922
平常展のみの来館者	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458
特別(共催)展計	164,213	0	159,287	68,233	67,740	85,120	67,577	67,577	36,464	36,464
藤原宮跡資料室	165,008	38,443	172,879	60,197	69,394	103,579	69,394	69,394	52,221	56,967
平常展のみの来館者	165,008	38,443	165,008	60,197	69,394	103,579	69,394	69,394	52,221	56,967
特別(共催)展計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
飛鳥資料館	18,458	92,394	172,879	86,681	86,198	103,579	86,035	86,035	54,922	54,922
平常展のみの来館者	18,458	92,394	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458	18,458
特別(共催)展計	0	0	154,421	68,233	67,740	85,120	67,577	67,577	36,464	36,464
計	510,931	228,260	177,745	172,879	156,501	54,922	155,745	155,745	69,710	86,035
平常展のみの来館者	354,346	189,338	64,318	39,502	39,502	52,221	39,502	39,502	52,221	52,221
特別(共催)展計	156,585	138,922	113,427	133,371	117,003	101,701	116,243	116,243	17,489	33,814
平城宮跡資料館	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282
平常展のみの来館者	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282	20,282
特別(共催)展計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
藤原宮跡資料室	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889
平常展のみの来館者	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889	13,889
特別(共催)展計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
飛鳥資料館	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815
平常展のみの来館者	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815	4,815
特別(共催)展計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(23年度より東京国立博物館に含めて記載)

(24年度より東京国立博物館に含めて記載)

(25年度より東京国立博物館に含めて記載)

(26年度より東京国立博物館に含めて記載)

※1 平常展のみの来館者

※2 「飛鳥寺2013」と同時開催期間は同展と一体でカウントのため、単独開催期間の来館者数2,648人のみ計上。なお、同時開催期間も含めた全期間の来館者数は10,473人

※3 「日光男体山のかがやき」と同時開催期間は同展と一体でカウントのため、単独開催期間の来館者数2,313人のみ計上。なお、同時開催期間も含めた期間の来館者数は3,359人

a-③ 入場料収入

(単位：円)

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
国立文化財機構 計	891,598,757	804,337,682	814,309,524	673,986,101	1,030,664,932
東京国立博物館	268,900,600	428,268,290	375,602,560	315,141,843	531,481,636
京都国立博物館	93,829,670	71,429,440	67,028,455	39,724,945	152,807,735
奈良国立博物館	355,735,620	213,777,640	207,961,850	225,693,950	238,881,550
九州国立博物館	131,683,367	90,862,312	160,398,639	89,050,933	104,274,641
飛鳥資料館	41,449,500	4,058,960	3,318,020	4,374,430	3,219,370
東京文化財研究所 黒田作品共催展	0	0	0	0	0

a-④ 平常展・特別展・海外展

【東京国立博物館】

(1) 総合文化展（平常展）

1) 開館期間 4月1日～27年3月31日(312日間) 平常展のみの開館日数 76日間

2) 会場

- ①本館 1階、2階
- ②東洋館 1階、2階、3階、4階、5階
- ③表慶館 休館中
- ④法隆寺宝物館 1階、2階
- ⑤平成館 1階(26年12月8日より休館)
- ⑥黒田記念館(27年1月2日より開館)

3) 陳列品総件数 8,161件(うち国宝124件、重要文化財733件)

- ①本館・平成館企画展示室 3,918件(うち国宝60件、重要文化財329件)
- ②東洋館 2,145件(うち国宝4件、重要文化財53件)
- ③表慶館 0件(うち国宝0件、重要文化財0件)
- ④法隆寺宝物館 417件(うち国宝13件、重要文化財218件)
- ⑤平成館考古展示室 1,596件(うち国宝47件、重要文化財128件)
- ⑥黒田記念館 85件(うち国宝0件、重要文化財5件)

4) 陳列替件数 5,506件 ・ 陳列替回数 延べ311回

5) 入場料金

黒田記念館以外 一般620円、大学生410円
 黒田記念館 無料

6) 特集 全22件

●国宝 ◎重要文化財 ○重要美術品

場所	テーマ	開催期間	陳列件数(国宝・重文)
平成館1階 考古展示室	須恵器の展開—吉備の古墳時代—	26年3月11日(火)～6月29日(日)	49(0.0)
<p><主な作品> 甕 岡山県赤磐市東郷部出土、子持高坏 岡山県岡山市北区下足守 冠山古墳出土、子持装飾付脚付壺 岡山県瀬戸内市長船町小笠山出土、革袋形提瓶 岡山県久米郡美咲町錦織松ヶ峪出土、平瓶 岡山県新見市唐松出土</p> <p>吉備地方は古墳時代における中心的な須恵器生産地のひとつであり、特色ある製品も生産している。馬をはじめとする動物・人物装飾を施した須恵器はその作例のひとつである。本特集陳列では、午年にちなみ、馬の刻文や馬形の装飾を持つ作品を含めた陳列を通じて、吉備地方の須恵器の実体を描出した。あわせて、当該地域の古墳時代研究において、編年上重要な一括資料等を紹介した。上記を組み合わせた通時的な展示によって、当該地域における6世紀を中心とする須恵器の変遷も紹介した。</p>			
本館1階 14室	日本の仮面 舞楽面と行道面	26年3月12日(火)～6月9日(日)	31(1.0)
<p><主な作品> 舞楽面 崑崙八仙、舞楽面 貴徳、舞楽面 納曾利、行道面 菩薩、行道面 菩薩</p> <p>平安時代以降、寺社で行なわれた法会に際して舞楽面、行道面が用いられた。本展では奈良・手向山八幡宮、愛知・熱田神宮、愛知・真清田神社所蔵の舞楽面、高野山天野社伝来の行道面などを展示し、古代、中世の芸能の多様性と彫刻的魅力に触れていただいた。</p>			
平成館1階 企画展示室	熊めぐり	26年4月22日(火)～6月1日(日)	28(0.0)
<p><主な作品> 縄文人が土で作った熊、お酒を入れる容器、冬眠から目覚めた熊の親子、博物画家が描いた熊</p> <p>国際博物館の日記念のイベントツアー「動物めぐり」に関連した展示。「動物めぐり」は、国立科学博物館、恩賜上野動物園、当館の三館園合同のイベントで、1種類の動物について動物園で観察、科学博物館で生態を学ぶ、東京国立博物館で人との関わりを考えるという各館の特色を生かした役割分担がある。今年のテーマは「熊」。展示では、熊へ向けられた人のまなざしを作品から読み解くことを目的とした。幅広い時代の作品を展示することで、熊への人のまなざしが時を経てどのように変化していったかがわかるような構成にした。熊に対する「脅威」や「畏怖」をイメージしやすいように、国立科学博物館と恩賜上野動物園から毛皮や頭骨などの標本を借用し、あわせて展示する。</p>			
本館2階 特別2室	平成25年度新収品	26年5月20日(火)～6月1日(日)	34(0.0)
<p><主な作品> 金華山真景、書状 なほなほ不取敢云々、線刻千手観音鏡像、振袖 鶯色縮緬地桜藤菊尾長鳥模様、如意輪観音菩薩坐像、萌黄緞威胴丸具足</p> <p>25年度に新たに収蔵品に加わった文化財のうち、34件を公開する。新収品を通じ、当館のもっとも重要な事業のひとつに位置づけられる「文化財の収集」について、その成果と意義をお示しする。</p>			
東洋館3階 5室	日本人が愛した官窯青磁	26年5月27日(火)～10月13日(月・祝)	21(1.2)
<p><主な作品> ◎青磁輪花鉢、●青磁下無瓶、南宋官窯址採集陶片(郊壇下)</p> <p>2014年度は、東洋陶磁収集家の横河民輔(1864～1945)生誕150年を記念して、横河コレクションの中国陶磁を特集する。今回は5室にて同時開催される特集「日本人が愛した官窯青磁」にちなみ、「横河コレクション—中国青磁のすべて」として三国時代から清時代に至る14点の青磁作品を展示する。その他、「横河コレクション—万暦・天啓赤絵」として、茶の湯を通して日本人がとくに好んで将来し、価値を与えた明末16世紀末～17世紀初頭の景德鎮民窯の作品を展示する。</p>			
本館1階 11・14室	親と子のギャラリー 仏像のみかた 鎌倉時代編	26年6月10日(火)～8月31日(日)	29(0.22)

	<p><主な作品>◎大日如来坐像、◎大日如来坐像、◎愛染明王坐像および厨子、◎菩薩立像</p> <p>夏休みの時期に、当館収蔵の鎌倉時代仏像彫刻の名品を一挙公開し、その魅力を知ってもらおうとするもの。学校教材でとりあげられることの多い仏像彫刻だが、その指導内容は信仰や時代背景の学習が中心となっている。彫刻の背景にある物語(場面)や、貴族と武士などのテーマに焦点をあて、鎌倉時代の名品を彫刻作品として楽しむ視点を提供する。展示にあたってはパネルやパンフレットを活用し、わかりやすい解説を心がけ、関連イベントを実施する。また、この特集をテーマに教員研修を開催し、教科指導等での博物館あるいは博物館資料の利用を促す。</p>		
平成館1階 企画展示室	伊能忠敬の日本図	26年6月24日(火)～8月17日(日)	15(0.8)
	<p><主な作品>◎日本沿海輿地図(中図) 東北 伊能忠敬作、◎九州沿海図(中図) 伊能忠敬作</p> <p>伊能忠敬は下総・佐原の商家の経営者を務めて隠退した後、天文学や地理学を学び、ほとんど独力で蝦夷地を測量して、幕府の注目するところとなった。その後幕府の命を受けて生涯を全国の測量に捧げ、その成果は日本全図である「大日本沿海輿地全図」として結実した。当館には伊能忠敬とその関係者が作成に関与した各種日本図が伝来している。本展示では代表的な伊能図と忠敬以前の地図、江戸時代の測量に関連する書籍類を紹介し、忠敬の業績を明らかにする。</p>		
本館2階 特別2室	春日権現験記絵模本 I—美しき春日野の風景—	26年7月23日(水)～8月31日(日)	12(0.0)
	<p><主な作品>春日宮曼荼羅図、春日本地仏曼荼羅図、春日権現験記絵(模本) 卷第十六 冷泉為恭他模、春日鹿曼荼羅図、春日権現験記絵(模本) 卷第十九 冷泉為恭他模、春日宮曼荼羅彩絵舎利厨子</p> <p>春日権現験記絵(三の丸尚蔵館所蔵)は、藤原氏の氏神である春日明神の利益と靈験を描く全20巻の絵巻である。鎌倉時代後期、高階隆兼という絵師が描いたもので、絵巻作品の最高峰の一つに数えられている。江戸時代後期には、この春日権現験記絵の模本が紀州藩主徳川治宝の命によって制作された。浮田一蕙、冷泉為恭、岩瀬広隆といった名だたる復古やまと絵師たちによって写されたこの模本には、彼らの画技がいかに発揮されている。</p> <p>この特集は、春日権現験記絵模本の魅力とともに、春日信仰の諸相を様々な角度から探る企画の第1回目で、今回は「美しき春日野の風景」をテーマとする。春日大社の鎮座する聖地・春日野の美しい景観を、春日権現験記絵模本、および春日宮曼荼羅などの関連作品からご紹介する。</p>		
東洋館4階 8室	趙之謙の書画と北魏の書—悲愴没後130年—	26年7月29日(火)～9月28日(日)	54(0.1)
	<p><主な作品>趙之謙四十二歳肖像軸 西川寧模、蘆花芙蓉図軸 趙之謙筆、臨楊大眼造像記横披 趙之謙筆、楊大眼造像記、隸書張衡畫象四屏 趙之謙筆、行書吳鎮詩四屏 趙之謙筆、魏靈藏造像記</p> <p>清時代の中期には、青銅器や石碑など中国古代の文字資料が一躍脚光を浴び、伝統的な書の流れとは異なる、新たな書の流れ「碑学派」が興った。趙之謙(1829～84)ははじめ伝統的な書を学ぶが、のちに北魏時代の書に触発され、北魏書とよばれる独特の表現を確立し、碑学派は全盛期を迎える。趙之謙の没後130年にちなみ、国内に現存する趙之謙の書画篆刻を、趙之謙が学んだ北魏の拓本などと共に展示し、趙之謙の魅力を紹介する。台東区立書道博物館との連携企画第12弾。</p>		
本館1階 15室	古文書の世界	26年8月5日(火)～8月31日(日)	25(3.6)
	<p><主な作品>●讃岐国司解、●延喜式 卷第二十八 紙背文書</p> <p>古文書には、差し出し人と受け取り人との関係や、伝える内容によって、その様式、手続、使用する紙の種類と寸法、封のしかたまで、いくつもの取り決めがあった。展示では、①著名な人物の文書、②家族の間で取り交わされた文書、③再利用されたために残った紙背文書、④書き替えられた外交文書などをとりあげる。書いた人物とその文字をはじめ、どのような目的で何を伝えようとしたのか、そのために用いた紙の特徴や使用法など、さまざまな様相を示す文書のあり方を紹介する。古写真コーナーでは、帝室博物館の美術課が撮影した古文書などの写真を展示する。</p>		
法隆寺宝物館 2階 6室	甕った飛鳥・奈良染織の美—初公開の法隆寺裂—	26年8月19日(火)～9月15日(月・祝)	53(0.0)
	<p><主な作品>茶地蝶文描絵平絹(東院)銘、茶地花卉鳥文摺絵平絹、黄地平絹 銘 山部名嶋呂古連公過命時幡、淡茶地白虎文描絵綾天蓋垂飾、天寿国繡帳、赤地ホラ羅</p> <p>法隆寺伝来のガラス挟み作品について、この2年度間(24・25年度)に修理が完了したものを展示する。これらの作品はガラス内での移動やガラス自体の劣化によりガラス内面にくもりなどの問題があり、これまで展示できない状況であった。22年度より、継続してマット装に改める本格修理をおこなっており、25年度をもって完了。これらの作品には法隆寺裂を代表する錦や綾、また聖徳太子の薨去にともなって製作された天寿国繡帳の断片、絹の綾裂に描かれた絵画としては日本最古と目される天蓋垂飾など、学術的にも非常に価値の高い作品が多く含まれており、この機会にひろくお披露目したい。</p>		
平成館1階 企画展示室	キリシタン関係遺品	26年8月26日(火)～10月5日(日)	73(0.41)
	<p><主な作品>◎三聖人像、◎天正遣欧使節記、◎板踏絵 キリスト像(ピエタ)、◎聖母像(親指のマリア)、◎マリア観音像</p> <p>日本のキリスト教信仰は、天文18年(1549)イエズス会宣教師ザビエルの渡来に始まり、およそ50年ほどの間に西日本を中心に浸透し、最盛期には40万人の信徒を得た。しかし、豊臣秀吉、次いで江戸幕府はその信仰を禁じたため、江戸時代には信徒のごく一部が長崎に潜伏するのみとなった。しかし潜伏したキリシタンは厳しい監視を乗り越えて信仰を守り続けた。この展示では、主に長崎奉行所が信徒から押収した遺品を通して、禁制以前のイエズス会を中心とした布教の状況、禁制下の信仰の一面をご覧いただく。遺品の中にわずかながらあるフランシスコ会、ドミニコ会関連と見られる作品も展示する。</p>		
本館1階 14室	漆芸に見る東西交流	26年9月2日(火)～11月3日(月・祝)	23(0.2)
	<p><主な作品>楼閣山水蒔絵宝石箱、◎南蛮人蒔絵交椅、◎花樹鳥獸蒔絵螺鈿聖龕</p> <p>漆芸という東洋独特の工芸にあらわれた西洋文化の影響について、南蛮文様の作例や輸出漆器をとりあげ、文化交流の一端として紹介する。漆器における西洋の影響はポルトガル人やスペイン人が来航した安土桃山時代より見られ、当時から彼らを描いた漆器が流行した。また彼らが日本の漆器に注目したことにより、その交易が始まり、以後明治期に至るまで、わが国では西洋向けの輸出漆器が製作され続けた。輸出漆器は彼らの注文にしたがって製作されたため、国内向のものとは全く異なる文様や器種が見られる。各時代の輸出漆器を展示して、その移り変わりをご覧いただく。</p>		
平成館1階 考古展示室	西日本の埴輪 畿内・大王陵古墳の周辺	26年9月9日(火)～12月7日(日)	21(0.2)
	<p><主な作品>◎埴輪 船、◎埴輪 入母屋造家、◎円筒埴輪、埴輪 猪、埴輪 跪く男子、埴輪 入れ墨のある男子頭部、埴輪 寄棟造家、埴輪 盾</p>		

	古墳時代初めに畿内地方で出現した埴輪は葬送儀礼の中心的役割を果たしたと考えられ、中期(5世紀)には東北～九州南部地方まで伝播する。多様な形象埴輪をはじめとした大型品や中・小型品は、機能や格式の差を示すとみられる。今回の展示では、多くの大王陵古墳が所在する大阪府古市古墳群出土埴輪を中心に、畿内地方の埴輪の構成・変遷と西日本の造形の特徴を展示する。平成26年度考古相互貸借事業として実施する。	
本館2階 特別2室	唐物ってなに? 26年9月30日(火)～11月24日(月・祝) 57(0.2)	<主な作品>君台観左右帳記(模刻本)、禾目天目、青磁尊形花生、鼈甲釉天目、○鳳凰桐紋沈金経箱、◎青花魚藻文壺、○古赤絵花唐草文鉢
	わが国では古くから、中国舶来の文物に憧れを抱き、求め続けてきた。「唐物」と呼ばれるそれらは、鎌倉・室町時代に至って、将軍家や武家を中心とした会所の室礼を飾るものとして珍重される。「唐物」を取り入れたいという願いは、やがて喫茶文化の普及とともに、いわゆる「和製唐物」を生み出すこととなった。そして国内で作られる美術工芸品にも新たな価値が与えられたのである。また、陶磁器における古染付や祥瑞、呉州手にみとめられる中国への注文による作例は本国では見られない日本独特のものであり、いわば「もう一つの唐物」である。 この特集では、会場を大きく3つに分け構成する。まず、室町の会所飾りを示す『君台観左右帳記』の世界を再現することにより、将来された「唐物」を紹介する。次に、そうした「唐物」観にもとづいて国内で作られた天目や茶入、あるいは「唐物」の技術をもとに作られた鎌倉彫といった「和製唐物」を取り上げる。後半は「もう一つの唐物」をテーマに、輸入および国産の陶磁器に見られる中国趣味に焦点をあて、日本における受容の変遷や注文制作の様相、伊万里焼・京焼に与えた影響などを紹介する。	
東洋館4階 8室	中国書画精華—護り伝えられてきた名品たち— 26年9月30日(火)～12月7日(日) 42(3.8)	<主な作品>◎千手観音図、◎竹鶴図 蘿窓筆、◎離合山水図 杜貫道賛、◎雛雀図 伝宋汝志筆、◎五龍図巻 伝陳容筆、●碣石調幽蘭第五、行書王史二氏墓誌銘稿巻
	今年も、秋の中国美術の名品展として「中国書画精華」を開催する。日本には古くから中国の書画が舶載され、それらは日本美術にも大きな影響を与えてきた。特に、宋元時代の書画は、鎌倉時代以降の禅宗とともに数多く伝えられ、書院や茶室において、日本の趣味にもとづく新たな鑑賞法のもとに親しまれてきた。東山御物に代表される中国の書画の名品の中には、中国では伝わることがなく、今日、日本においてのみ伝世しているものも少なくない。また、明治以降、新たに中国本来の文人趣味を理想とする優れた収集家によって、中国伝世の歴代書画の精品が、少なからず日本に伝えられた。それらは、中国の書画の神髄を示すものといえる。この機会に、唐・宋・元・明・清の歴代の書画を、心ゆくまでお楽しみいただきたい。	
平成館1階 企画展示室	国宝再現—田中親美と模写の世界— 26年10月15日(水)～12月7日(日) 20(0.0)	<主な作品>孔雀明王像(模本) 横山大観模、平家納経 宝塔品 第十一(模本) 田中親美模、平家納経 提婆品 第十二(模本) 田中親美模、本願寺本三十六人家集 赤人集(模本) 田中親美模、本願寺本三十六人家集 伊勢集(模本) 田中親美模
	平成館で開催の特別展「日本国宝展」にあわせて、国宝の模写・模造を作った田中親美(1875～1975)に焦点をあてる。田中親美は厳島神社の依頼で「平家納経」(原本国宝)の模本を作成するなど、生涯にわたって平安時代の書画の名品の再現をしてきた。その内容は、絵画や書を写すだけでなく、装飾料紙や金具の復元まで、徹底的なものである。また、東京国立博物館でも明治5年(1872)の創立当時より模本の収集や作成を行ってきた。田中親美の模本とともに、博物館初期の模写模造活動の一端をご紹介します。	
本館1階 14室	日本の仮面 能面 創作と写し 26年11月5日(水)～1月12日(月・祝) 27(0.9)	<主な作品>◎能面 小面、能面 鼻瘤悪尉、◎能面 鷲鼻悪尉、◎能面 曲見、能面 万媚、◎能面 長霊癒見
	日本には数多くの仮面が伝来するが、能狂言面は日本で成立した能楽に用いられ、日本人の美意識が反映した独自性の高いものである。室町時代前期、世阿弥による能楽の大成期には新たな種類の創作面が盛んに作られた。江戸時代、能が武家の式楽になると面の需要が爆発的に増え、専ら古面の写しを行うようになった。ここでは創作の時代の面と写しを対比、あるいは写しどうしを比較することにより、創作面の造形の魅力と写しのあり方をご覧いただく。	
本館2階 特別1室	博物館に初もうで～ひつじと吉祥～ 27年1月2日(金)～1月12日(月・祝) 34(0.3)	<主な作品>羊頭部形垂飾、青玉筆洗、◎十二神将立像 未神、羊図扇面 森狙仙筆、○寿星図、○梅下寿老図 伝雪舟等楊筆、◎松鷹図 雪村周継筆
	27年は干支で乙未[きのとひつじ]、未年にあたるため、羊を表わした考古遺物・美術工芸品、および吉祥図様の作品を展示する。羊は紀元前より人類にとって最も身近な家畜のひとつであり、東西の別を超え、神への最適な捧げものとして考えられていた。やがて羊は「よきもの」の意を備え、古代中国では青銅器などに羊文が表わされたほか、「美」「善」「祥」といった言葉にも羊の字が使われるようになる。羊に対する吉祥イメージはアジア全域に広がり、日本でも『日本書紀』に記載があるほか、正倉院宝物にも羊文を表わした白綾や羊を描いた縹緞屏風が存在するが、羊の生息しない日本では、明治時代に実物が持ち込まれるまで半ば想像上の動物に近い存在として表現されていたことがうかがえる。今年の「博物館に初もうで」では、Ⅰ「アジア各地域の羊」、Ⅱ「十二支」、Ⅲ「日本人と羊」、Ⅳ「吉祥」という4つの切り口から、正月にふさわしい作品の数々を紹介する。	
本館1階 14室	水滴の美—潜淵コレクションの精華— 27年1月14日(水)～4月5日(日) 138(0.0)	<主な作品>耳長兔水滴、八角瓶形八橋文水滴、桃に鹿水滴、尾長鳥水滴、鹿に寿老人水滴、重丸瓶形花文七宝水滴
	水滴は墨を摺るための水をたたえる小器で、筆墨文化圏においては欠かせぬ文房具として、造形や意匠に様々な趣向が凝らされた。材質では陶磁器に次いで、銅や金銅などの金属製が多い。平成25年、当館に一括して寄贈された「潜淵コレクション」の金属製水滴は、渡邊豊太郎(潜淵)氏とご子息の誠之氏が収集した442件から形成される。大半を占める江戸時代の作品は、動物・植物・器物・人物故事など多彩なジャンルに亘り、各々の種類もバラエティに富む。類例の少ない七宝の作品も多く含まれる。銅の蝟型鑄造を主体とする自由な表現も優れており、質・量ともに日本を代表する水滴コレクションといえる。本特集ではその中の各ジャンルから138件を展示し、金属製水滴の多彩な内容と豊かな造形表現をご覧いただく。	
本館2階 特別1室	東京国立博物館コレクションの保存と修理 27年2月17日(火)～3月15日(日) 28(1.3)	<主な作品>瑠璃地金彩唐草文仙蓋瓶 四代高橋道八作、◎四季山水図(春) 雪舟等楊筆、◎四季山水図(夏) 雪舟等楊筆、●無相居士あて尺牘 大慧宗杲筆
	本特集では、東京国立博物館が手がける保存と修理の成果をより分かりやすく紹介するため、近年に本格的な修理を終えた絵画、書跡、工芸、考古、歴史資料などさまざまな分野の作品に加え、応急修理を施した作品やその工程を示す資料などもあわせて展示する。	

<p>さまざまな分野、形態、技法の作品を取り上げ、修理工程および修理過程で得られた情報をパネルなどを用いることにより、博物館が担う文化財修理の役割を広く理解していただくことを目指す。 また、26年3月末に修理を終えた「国宝 檜図屏風(A-1069)」が同期間に本館2室(国宝室)にて展示されるのに合わせて、本特集では檜図屏風の修理工程の詳細をパネルにて紹介するとともに、新規唐紙を製作するために宮内庁京都事務所から借用した版木、また、その版木で刷った実物の唐紙、新旧の縁金具なども展示する。</p>		
東洋館4階 8室	南京の書画—仏教の聖地、文人の楽園—	27年2月24日(火)～4月12日(日) 49(0.2)
<p><主な作品>◎保寧寺賦跋 馮子振筆、○夢筠図巻 唐寅筆、臨大令帖軸 王鐸筆、漁楽図巻 李著筆、秦淮水榭図巻 馬守真筆、小倉山房図巻 袁樹筆、墨竹図 吳宏筆、金陵赤山図 張大千筆</p>		
<p>「王氣の満ちる地」とされた金陵(南京)は、六朝から明、中華民国に至るまで、江南の文化都市として個性的な文化を発展させてきた。宋元時代には阿育王舎利と梅檀瑞像の故地として、また禅宗の聖地として発展し、日本からも多くの禅僧が参禅した。続く明代初期、北京に首都が移ってから後も、南京に置かれた王府のパトロンを受けた浙派の個性的な画家が活躍し、明末には南明の精神的な首都として、多くの遺民が南京に集った。清朝になると次第にその意識は薄れ、秦淮河を中心とする妓街が発達し、文人たちによる出版文化が花開くこととなる。中華民国の首都となった南京には、美術大学がおかれ、西洋や日本からの留学から帰国した画家たちが教鞭をとり、今も多くの画家や文学者を輩出する学問の都となった。北京や上海に比較すれば、今まであまり注目されることのなかった南京の、中国文化史上における重要な位置づけの全貌を示す、日本で初めての展示となる。</p>		

(2) 特別展・共催展等(海外展・巡回展を含む)

展覧会名：開山・栄西禅師 800年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」

- ・会 期 26年3月25日(火)～5月18日(日) (49日間)
- ・会 場 平成館 特別展示室第1～4室
- ・主 催 東京国立博物館、建仁寺、読売新聞社、NHK、NHKプロモーション
- ・協 賛 ジェイティービー、日本写真印刷
- ・協 力 あいおいニッセイ同和損保
- ・作品件数 183件(うち、国宝4件、重要文化財37件、重要美術品3件)
- ・来館者数 252,116人(目標200,000人・達成率126.1%)
- ・入場料金 一般1,600円(1,400円/1,300円)、大学生1,200円(1,000円/900円)、高校生900円(700円/600円)
中学生以下無料 * ()内は前売り/20名以上の団体料金
- ・アンケート結果 満足度72%
- 担当研究員数：3人

展覧会の内容：

建仁寺開山・栄西の事跡と建仁寺の法脈をたどり、建仁寺に関わる文化にも注目した。

- 講演会等：「栄西と茶の歴史」講師：千 宗屋(武者小路千家 家元後嗣) 平成館大講堂 4月12日(土)
「建仁寺ゆかりの美術」講師：田澤裕賀(絵画・彫刻室長) 平成館大講堂 4月19日(土)

展覧会名：特別展「キトラ古墳壁画」

- ・会 期 26年4月22日(火)～5月18日(日) (25日間)
- ・会 場 本館 特別5室
- ・主 催 文化庁、東京国立博物館、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、国土交通省近畿地方整備局、奈良県教育委員会、明日香村
- ・共 催 朝日新聞社
- ・協 賛 岡村印刷工業
- ・特別協力 情報通信研究機構、大塚オーミ陶業、日本通運
- ・作品件数 18件(そのほか、参考出品13件)
- ・来館者数 119,268人(目標87,000人・達成率137.1%)
- ・入場料金 一般900円(800円)、大学生700円(600円)、高校生400円(300円) 中学生以下無料
* ()内は前売り・20名以上の団体料金
- ・アンケート結果 満足度63%
- 担当研究員数：4人

展覧会の内容：

キトラ古墳壁画の修理や、今後の保存活用の展開をより広く国民に紹介した。

- 講演会等：「キトラ古墳壁画保護の歩み」平成館大講堂 4月26日(土)
- ①「キトラ古墳壁画保護の歴史」講師：建石徹(文化庁文化財部古墳壁画室・古墳壁画対策調査官)
 - ②「キトラ古墳壁画の取り外しと修理」講師：川野邊渉(東京文化財研究所文化遺産国際協力センター長)
 - ③「キトラ古墳壁画の材料調査」講師：高妻洋成(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長)
 - ④鼎談「キトラ古墳壁画の保護から学ぶもの」講師：建石徹・川野邊渉・高妻洋成
コーディネーター：齊藤孝正(上席研究員)
- 「キトラ古墳壁画に迫る—高松塚古墳壁画との比較から—」講師：有賀祥隆(東北大学名誉教授) 平成館大講堂
5月3日(土)

展覧会名：特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」

- ・会 期 26年6月24日(火)～9月15日(月・祝) (78日間)
- ・会 場 平成館、本館特別5室
- ・特別後援 日華議員懇談会

- ・主 催 東京国立博物館、国立故宮博物院、NHK、NHKプロモーション、読売新聞社、産経新聞社、フジテレビジョン、朝日新聞社、毎日新聞社、東京新聞
- ・特別協力 TBS、テレビ朝日、日本テレビ放送網、共同通信社
- ・協 力 チャイナ エアライン（中華航空）
- ・作品件数 186件
- ・来館者数 402,241人（目標450,000人・達成率89.4%）
- ・入場料金 一般1,600円（1,400円／1,300円）、大学生1,200円（1,000円／900円）、高校生700円（600円／500円）、中学生以下無料 *（ ）内は前売り／20名以上の団体料金
- ・アンケート結果 満足度63%
- 担当研究員数：7人

展覧会の内容：

台北故宮博物院の収蔵品の中から、北宋山水画、名筆、青磁・汝窯、玉器・青銅器などの名品を初めて日本で展示した。

講演会等：「故宮コレクションと「倣古」—青銅器・玉器のかたちに象徴された伝統」講師：川村佳男（展示調整室主任研究員）
平成館大講堂 6月28日（土）

- シンポジウム中国皇帝コレクションの意味—書画における復古と革新— 平成館大講堂 7月5日（土）7月6日（日）
基調講演「国立故宮博物院書画コレクションの淵源」講師：何傳馨（国立故宮博物院副院長）
- ①「王羲之と小野道風」 講師：丸山猶計（九州公立博物館）
 - ②皇帝コレクションにおける模写・模造事業—乾隆帝の書画コレクションと狩野派— 講師：塚本麿充（東洋室研究員）
 - ③徽宗と義満—日本における皇帝コレクションの意味— 講師：畑靖紀（九州国立博物館）
 - ④蘇軾「寒食帖」と米芾「草聖帖」—台北と大阪を結ぶ縁— 講師：弓野隆之（大阪市立美術館）
 - ⑤元宋四大家—文人画の確立—講師：湊信幸（客員研究員・名誉館員）
 - ⑥公主の雅集—モンゴル皇室と書画鑑蔵活動—講師：陳韻如（国立故宮博物院）
 - ⑦乾隆帝が見た江南山水画—伝巨然「蕭翼賺蘭亭図」を中心に—講師：竹浪遠（黒川古文化研究所）
 - ⑧乾隆帝と澄心堂紙講師：何炎泉（国立故宮博物院）
 - ⑨徽宗の七璽と乾隆帝の八璽について講師：富田淳（列品管理課長）
- 総合討論

「文物がつくる社会—中国書画・故宮コレクションからアジア世界へ—」講師：塚本麿充（東洋室研究員）
平成館大講堂 7月26日（土）

展席上揮毫会平成館大講堂 8月20日（水）
講師：樽本樹邨（読売書法会常任総務）星弘道（読売書法会常任総務）高木聖雨（読売書法会常任理事）

展席上揮毫会平成館大講堂 8月21日（木）
講師：石飛博光（毎日書道会常任理事）仲川恭司（毎日書道会理事）永守蒼穹（毎日書道会理事）

展覧会名：2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」

- ・会 期 26年9月20日（土）～11月24日（月・休）（57日間）
- ・会 場 本館 特別5室
- ・主 催 東京国立博物館、中国国家博物館、韓国国立中央博物館
- ・作品件数 45件（うち、国宝1件、重要文化財10件）
- ・来館者数 65,075人（目標34,000人・達成率191.4%）
- ・入場料金 一般620円（520円）、大学生410円（310円）総合文化展観覧料、*（ ）内は20名以上の団体料金
- ・アンケート結果 満足度 60%

担当研究員数：3人

展覧会の内容：

日中韓国立博物館の合同企画として、各館の収蔵品の中から、東アジアの陶磁器の名品を選び一堂に展示した。

講演会等：東アジアの華 陶磁名品展 記念講演会 平成館大講堂 9月27日（土）
講師：杜衛民（中国国家博物館保管一部副研究員）
具一會（韓国国立扶余博物館長、前韓国国立博物館美術部長）
伊藤嘉章（学芸企画部長）

展覧会名：「日本国宝展」

- ・会 期 26年10月15日（水）～12月7日（日）（47日間）
- ・会 場 平成館 特別展示室第1～4室
- ・主 催 東京国立博物館、読売新聞社、NHK、NHKプロモーション
- ・協 賛 損保ジャパン日本興亜、大伸社、日本通運、みずほ銀行
- ・作品件数 130件（うち、国宝119件、正倉院宝物11件）
- ・来館者数 386,708人（目標350,000人・達成率110.5%）
- ・入場料金 一般1,600円（1,400円／1,300円）、大学生1,000円（1,000円／900円）、高校生900円（700円／600円）
中学生以下無料 *（ ）内は前売り／20名以上の団体料金
- ・アンケート結果 満足度70%
- 担当研究員数：5人

展覧会の内容：

大切に継承されてきた「信ずるもの」の評価の結晶こそが「国宝」であると考え、国宝によって日本文化形成の精神をたどった。

- 講演会等：連続講座 平成館大講堂 8月8日（金）8月9日（土）8月10日（日）
- 第1講「日本国宝展と工芸の国宝」講師：伊藤信二（広報室長）
 - 第2講「絵画の国宝1号—トーハクと国宝の絵画」講師：沖松健次郎（保存修復室主任研究員）
 - 第3講「国宝元興寺五重小塔を探る」講師：狭川真一（公益財団法人元興寺文化財研究所研究部長）
 - 第4講「指定制度と仏像・神像の国宝」講師：川瀬由照（文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官）
 - 第5講「国宝彫刻の修理」講師：藤本青一（公益財団法人美術院国宝修理所所長）
 - 第6講「発掘の成果と国宝」講師：品川欣也（考古室主任研究員）
 - 第7講「美と歴史を語る国宝の書」講師：田良島哲（保存修復室主任研究員）

「国宝指定制度と日本国宝展」講師：伊藤信二（広報室長）平成館大講堂 11月1日（土）
 「国宝縄文のビーナスと国宝仮面の女神誕生の地・ハケ岳山麓北山浦の縄文文化」
 講師：鶴飼幸雄（尖石縄文考古館前館長）平成館大講堂 11月22日（土）

展覧会名：特別展「みちのくの仏像」

- ・会 期 27年1月14日（水）～4月5日（日）（73日間）
- ・会 場 本館 特別5室
- ・主 催 東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション、読売新聞社
- ・後 援 文化庁、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県
- ・協 賛 大伸社
- ・協 力 あいおいニッセイ同和損害保険
- ・作品件数 19件（うち、国宝1件、重要文化財8件）
- ・来館者数 179,521人（目標140,000人・達成率128.2%）
- ・入場料金 一般1,000円（900円）、大学生700円（600円）、高校生400円（300円）、中学生以下無料
 *（ ）内は前売り・20名以上の団体料金
- ・アンケート結果 満足度79%
 担当研究員数：2人

展覧会の内容：東京において、東北の優れた仏像がまとまって展示される初めての展覧会とした。

講演会等：「みちのくの仏像」講師：丸山士郎（平常展調整室長）平成館大講堂 1月24日（土）

展覧会名：特別展「3.11大津波と文化財の再生」

- ・会 期 27年1月14日（水）～3月15日（日）（53日間）
- ・会 場 本館 特別2室・特別4室
- ・主 催 東京国立博物館、津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト
 実行委員会
- ・この特別展は会場が平常展の一部で別途カウントを行っていない。
 参考値：78,615人（開催期間中の平常展来館者数）
- ・入場料金 一般620円（520円）、大学生410円（310円）総合文化展観覧料、*（ ）内は20名以上の団体料金
- ・アンケート結果 満足度59%
 担当研究員数：3人

展覧会の内容：東日本大震災における被災文化財の再生の取り組みの成果とその現状を紹介した。

- 講演会等：
 ミニ講演会&ギャラリートーク「被災現場からの報告」本館地下教育普及スペースみどりのライオン及び本館特別2室 1月31日
 講師：赤沼英男（岩手県立博物館学芸第2課長）
 前田浩士（陸上自衛隊富士学校機甲科車両生徒班長）
 熊谷賢（陸前高田市立博物館副主幹）、神庭信幸（保存修復課長）
 シンポジウム「文化財を守る絆—津波被災文化財再生への挑戦」東京文化財研究所 3月11日
 講師：熊谷賢（陸前高田市立博物館 副主幹）
 赤沼英男（岩手県立博物館 首席専門学芸員）
 前川さおり（遠野文化研究センター調査研究課 課長補佐）
 真鍋真（国立科学博物館 地学研究部 生命進化史研究グループ グループ長）
 半田昌之（日本博物館協会 専務理事）、神庭信幸（東京国立博物館 保存修復課 課長）
 オルガン演奏 本館大階段 1月31日、2月21日、3月14日
 演奏：中村由利子、相田南穂子、伊藤園子

展覧会名：海外展「伝統の再創造：東京国立博物館所蔵 日本の近代美術」

- Remaking Tradition: Modern Art of Japan from the Tokyo National Museum
- ・会 期 26年年2月16日（日）～5月11日（日）（72日間）
 - ・会 場 アメリカ・クリーブランド美術館ケルビン&エレノア・スミス財団展示ホール
 - ・主 催 クリーブランド美術館、東京国立博物館
 - ・作品件数 55件（うち、重要文化財6件）
 - ・来館者数 37,648人

担当研究員数：2人

展覧会の内容：東京国立博物館の近代美術作品により、日本近代美術を伝統の再創造という観点で紹介した。

【京都立博物館】

(1) 平常展(名品ギャラリー)

- ①開館日数：213日(名品ギャラリーのみの開館日数：164日)
- ②陳列総件数：980件

特別展示等

	名称	会期	陳列件数(うち指定品件数)
開館記念展	京へのいざない	9月13日～11月16日	397件(国宝45件、重要文化財125件)
特別展観	山陰の古刹・島根鰐淵寺の名宝	27年1月2日～2月15日	36件(重要文化財4件)
特集陳列	雛まつりと人形	2月21日～4月8日	23件
特別展観	天野山金剛寺の名宝	3月4日～3月29日	41件(国宝3件、重要文化財16件)

- ③陳列替件数：693件(3月末現在)

(2) 特別展等・共催展等

展覧会名：特別展覧会「南山城の古寺巡礼」

- ・会 期 26年4月22日～6月15日(49日間)
- ・会 場 明治古都館(特別展示館)全室
- ・主 催 京都国立博物館、朝日新聞社
- ・後 援 文化庁、京都府、木津川市、京田辺市、井手町、宇治田原町、笠置町、公益財団法人京都文化交流コンベンションビューロー
- ・協 賛 岡村印刷工業、きんでん、京阪電気鉄道、竹中工務店、福寿園
- ・特別協力 京都南山城古寺の会、飛鳥園
- ・協 力 日本香堂
- ・作品件数 139件(うち国宝2件、重要文化財27件)
- ・来館者数 69,443人(目標来館者数50,000人・達成率138.9%)
- ・入場料金 一般1,500円、大高生900円、中小生500円
- ・アンケート結果 満足度92%

講演会：6回 参加者数合計 1,046人

・関連土曜講座

4月26日 南山城の歴史と文化

京都国立博物館企画室長 宮川 禎一
193名参加

5月10日 古代南山城の観音像

同志社大学教授 井上 一穂氏
186名参加

5月17日 一休さんと酬恩庵の絵画

京都国立博物館美術室長 山本 英男
171名参加

5月24日 浄瑠璃寺と当尾の里

浄瑠璃寺副住職 佐伯 功勝氏
165名参加

5月31日 南山城の仏像と慶派仏師

東京国立博物館学芸企画部博物館教育課講座室長 浅湊 毅
174名参加

6月7日 万葉歌にみる馬場南遺跡(神雄寺)と恭仁京のトボス

京都府教育庁文化財保護課 伊藤 太氏
157名参加

広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞、ラジオ、公共放送等

展覧会名：特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」

- ・会 期 26年10月7日～11月24日(43日間)
- ・会 場 明治古都館(特別展示館)全室
- ・主 催 京都国立博物館、高山寺、朝日新聞社
- ・後 援 公益財団法人京都文化交流コンベンションビューロー
- ・協 賛 カネカ、京都銀行、きんでん、JR西日本、竹中工務店、凸版印刷
- ・特別協力 岡墨光堂
- ・協 力 朝日放送、日本香堂
- ・作品件数 84件(うち国宝8件、重要文化財54件)
- ・来館者数 203,900人(目標来館者数100,000人・達成率203.9%)
- ・入場料金 一般1,500円、大学生1200円、高校生900円
- ・アンケート結果 満足度 84%

講演会：5回 参加者数合計812人

・関連土曜講座

10月11日 「明恵上人と高山寺の文化財」

北海道大学名誉教授 石塚 晴通氏

193名参加

10月18日 「高山寺の仏画」

京都国立博物館 企画室主任研究員 大原 嘉豊

138名参加

10月25日 「鳥獣戯画の愉しさ—後世の画家に及ぼした影響—」

同志社大学教授 狩野 博幸氏

200名参加

11月22日 京都ミュージアムズ・フォー連携講座「高山寺の版本—宋版を中心に—」

京都国立博物館 上席研究員 赤尾 栄慶

113名参加

・特別シンポジウム

11月15日 「鳥獣戯画を語る」

サントリ—美術館学芸員 上野友愛氏、京都精華大学・マンガ学部教授ジャクリーヌ・ベルント氏、京都国立博物館 企画室主任研究員 大原嘉豊、岡墨光堂 岡岩太郎氏、京都国立博物館美術室研究員 鬼原俊枝、京都国立博物館 上席研究員 赤尾栄慶

168名参加

広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞、ラジオ、公共放送等

【奈良国立博物館】

(1)名品展（平常展）

①開館日数：321日（名品展のみの開館日数：198日）

②陳列件数：675件

名品展

珠玉の仏たち（なら仏像館）137件

珠玉の仏教美術（西新館）281件

特集展示「新たに修理された文化財」（西新館）7件

特集展示「和紙—文化財を支える日本の紙—」（西新館）13件

中国古代青銅器（青銅器館）237件

特別陳列等

	名称	会期	陳列件数（うち指定品件数）
特別陳列	おん祭と春日信仰の美術	12月9日～27年1月18日	54件（国宝1件、重要文化財2件）
特別陳列	お水取り	27年2月7日～3月15日	62件（重要文化財16件）
特集展示	模造にみる飛鳥時代の宝冠	25年9月20日～26年9月7日	3件※
特集展示	模造にみる頭塔	25年9月20日～26年9月7日	1件※
特集展示	模造にみる伎楽面	25年9月20日～26年9月7日	2件※
特集展示	新たに修理された文化財	12月23日～27年1月18日	7件（重要文化財4件）〔再掲〕
特集展示	ユネスコ世界無形文化遺産登録記念 和紙—文化財を支える日本の紙—	27年1月27日～3月15日	13件（国宝1件、重要文化財3件）〔再掲〕
特別公開	金剛寺 降三世明王坐像	23年10月4日～26年9月7日	1件（重要文化財1件）※
特別公開	定朝様の丈六阿弥陀像	24年6月26日～26年9月7日	1件※

※「名品展 珠玉の仏像（なら仏像館）」の陳列件数（137件）に含む。

③陳列替件数：208件

(2)特別展・共催展等

展覧会名：特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像—迫真とエキゾチシズム—」

- ・会 期 26年4月5日（土）～6月1日（日）（51日間）
- ・会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館
- ・主 催 奈良国立博物館、鎌倉国宝館、読売新聞社
- ・後 援 文化庁、NHK奈良放送局、奈良テレビ放送
- ・協 賛 あいおいニッセイ同和損保、岩谷産業、大伸社、大和ハウス工業、非破壊検査
- ・協 力 日本香堂、仏教美術協会
- ・作品件数 53件（うち重要文化財26件）
- ・来館者数 37,022人（目標50,000人・達成率74.0%）
- ・観覧料金 一般1,300円、高校・大学生800円、小・中学生500円
- ・アンケート結果 満足度85%
- ・公開講座：3回 参加者数合計 364人
 - 4月19日（土）「中世律宗の鎌倉進出と善派仏師」 山口隆介（研究員）/ 参加者数 106人
 - 5月10日（土）「鎌倉の仏像に見るエキゾチシズム」 清水眞澄（三井記念美術館長）/ 参加者数 111人
 - 5月31日（土）「鎌倉地方で花開いた肖像彫刻」 内藤浩之（鎌倉国宝館副館長補佐）/ 参加者数 127人
- ・広報媒体：ポスター、ちらし、博物館だより、新聞、テレビ等

展覧会名：醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—」

- ・会 期 26年7月19日（土）～9月15日（月・祝）（52日間）

- ・会場 奈良国立博物館 東新館・西新館
- ・主催 奈良国立博物館、総本山醍醐寺、日本経済新聞社
- ・共催 NHK奈良放送局
- ・後援 文化庁、奈良テレビ放送
- ・協賛 岩谷産業、オリックス、京都銀行、住友林業、ダイキン工業、大和ハウス工業
- ・協力 朝日生命保険、日本香堂、日本通運、仏教美術教会
- ・作品件数 192件（うち国宝62件、重要文化財85件）
- ・来館者数 78,476人（目標50,000人・達成率157.0%）
- ・観覧料金 一般1,500円、高校・大学生1,000円、小・中学生500円
- ・アンケート結果 満足度84%
- ・公開講座：4回 参加者数合計 550人
 - 7月26日（土）「醍醐寺と南都の密教絵画」谷口耕生（保存修理指導室長）/ 参加者数 130人
 - 8月2日（土）「平安初期の醍醐寺の彫刻」皿井 舞（東京文化財研究所研究員）/ 参加者数 149人
 - 8月9日（土）「醍醐寺の文化財」長瀬福男（醍醐寺公室室長）/ 参加者数 77人
 - 9月6日（土）「醍醐寺の密教修法」斎木涼子（研究員）/ 参加者数 194人
- ・広報媒体：ポスター、ちらし、博物館だより、新聞、テレビ等

展覧会名：天皇皇后両陛下傘寿記念「第66回正倉院展」

- ・会期 26年10月24日（金）～11月12日（水）（20日間）
- ・会場 奈良国立博物館 東新館・西新館
- ・主催 奈良国立博物館
- ・特別協力 読売新聞社
- ・協賛 岩谷産業、NTT西日本、キャノン、京都美術工芸大学、近畿日本鉄道、JR東海、JR西日本、ダイキン工業、大和ハウス工業、白鶴酒造、丸一鋼管
- ・協力 NHK奈良放送局、奈良テレビ放送、日本香堂、仏教美術協会、ミネルヴァ書房、読売テレビ
- ・作品件数 59件
- ・来館者数 269,348人（目標180,000人・達成率149.6%）
- ・観覧料金 一般1,100円、高校・大学生700円、小・中学生400円
- ・アンケート結果 満足度69%
- ・公開講座：3回 参加者数合計 436人
 - 10月25日（土）「鳥毛立女屏風と唐時代絵画」板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所教授）/ 参加者数 194人
 - 11月3日（月・祝）「正倉院宝物の科学的調査」中村力也（宮内庁正倉院事務所保存課保存科学室員）/ 参加者数 126人
 - 11月8日（土）「正倉院の武器・武具」岩戸晶子（研究員）/ 参加者数 116人
- ・シンポジウム：1回 参加者数 192人
 - 11月2日（日）正倉院学術シンポジウム2014「正倉院宝物に日本文化の源流をみる」
 - 第1部 「正倉院宝物の性格について」北 啓太（元宮内庁正倉院事務所長）、「正倉院宝物にみる資源の有効利用について」飯田剛彦（宮内庁正倉院事務所保存課調査室長）「日本工芸の源流としての正倉院宝物」内藤 栄（学芸部長）、
 - 第2部 パネルディスカッション 北 啓太、飯田剛彦、内藤 栄
- ・広報媒体：ポスター、ちらし、博物館だより、新聞、駅構内看板、テレビ特集番組等

【九州国立博物館】

(1)文化交流展（平常展）

- ①開館日数：310日（うち平常展のみ開館日数 84日）
- ②陳列替件数：1,027件
- ③陳列総件数：1,904件（うち国宝61件 重要文化財94件）
- ④入場料金：一般430円、大学生130円
- ⑤トピック展示・特別公開等：全11件

展示名称	館蔵近世絵画名品展				
開催期間	前期：26年2月25日（火）～4月6日（日） 後期：26年4月8日（火）～5月18日（日）	開催場所	文化交流展示室 関連展示室11室、基本展示室Vテーマ	陳列件数（うち指定品件数）	18件（うち重文1件、重美1件）
内容	17世紀から19世紀の絵画を中心に、当館がこれまで収集してきた作品を広く紹介した。				

展示名称	国宝 琉球王国尚家関係資料修理完成記念特別公開				
開催期間	26年4月8日（火）～ 5月18日（日）	開催場所	文化交流展示室 基本展示室Vテーマ	陳列件数（うち指定品件数）	7件（うち国宝7件）
内容	毎年度行なっている琉球国王尚家関係資料の修理成果をお披露目する特別公開企画。				

展示名称	国宝「西光寺梵鐘」特別公開				
開催期間	26年4月22日（火）～ 8月31日（日）	開催場所	文化交流展示室 基本展示室IIIテーマ	陳列件数（うち指定品件数）	1件（うち国宝1件）
内容	承和6年（839年）に制作された狐峯山西光寺（福岡市早良区）が所蔵する梵鐘を、昨年引き続き紹介した。				

展示名称	解剖書に見る東洋と西洋—ファブリカからターヘル・アナトミアへ—				
開催期間	26年5月20日（火）～ 7月13日（日）	開催場所	文化交流展示室 基本展示室Vテーマ	陳列件数（うち指定品件数）	9件（うち重文1件）
内容	近代日本にもたらされた西洋解剖書と翻訳書をあわせて展示し、解剖書を通じた近世の日本と西洋との交流を紹介した。				

展示名称	中国を旅した禅僧の足跡				
開催期間	26年5月27日（火）～	開催場所	文化交流展示室	陳列件数（うち指定品件数）	23件（うち国宝1件、重文6件）

	7月6日(日)		関連展示室 11 室	指定品件数)	
内容	14 世紀の日本僧、無夢一清の中国での旅と生涯をたどり、個性豊かな禪書の魅力と、日中禅僧による文化交流を紹介した。				
展示名称	小中学生からの考古学				
開催期間	26 年 7 月 1 日(火)～ 9 月 23 日(火・祝)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室 1 室	陳列件数(うち 指定品件数)	19 件(うち国宝 1 件、重文 5 件)
内容	遺跡から出土したものが、今のくらしのどんな物につながっているのかを小中学生にも分かりやすく紹介した。3Dプリンター等で本物そっくりりに制作したレプリカを使い、みて・触って・きいて・嗅いで・感じてと五感で楽しむ展示を行った。				
展示名称	特別公開「海を越えた再会―クリーブランド美術館の仲間たち―」				
開催期間	26 年 7 月 15 日(火)～ 8 月 24 日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室 11 室	陳列件数(うち 指定品件数)	15 件(うち国宝 1 件、重文 1 件)
内容	特別展「クリーブランド美術館―名画でたどる日本の美―」を記念し、クリーブランド美術館所蔵の優品にゆかりの深い、日本国内に所蔵されている作品を公開した。				
展示名称	全国高等学校 考古名品展				
開催期間	26 年 7 月 15 日(火)～ 9 月 23 日(火・祝)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室 3 室	陳列件数(うち 指定品件数)	55 件(うち重文 1 件)
内容	全国の高等学校に所蔵されている考古資料から選りすぐった優品を通して、日本の考古文化に光をあて、あわせて高等学校の考古学に関する研究活動を紹介した。				
展示名称	新春特別公開「徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」				
開催期間	27 年 1 月 1 日(木・祝)～ 1 月 25 日(日)	開催場所	文化交流展示室 中央ケース	陳列件数(うち 指定品件数)	2 件(うち国宝 2 件)
内容	恒例企画。徳川美術館が所蔵する国宝「初音の調度」を公開した。				
展示名称	大涅槃展				
開催期間	27 年 1 月 14 日(火)～ 2 月 15 日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室 11 室、基本展示室 V テーマ	陳列件数(うち 指定品件数)	20 件(うち重文 5 件)
内容	当館が所蔵する命尊による涅槃図の修復作業完成お披露目と合わせ、様々な地域、時代の涅槃図を一堂に集め、釈迦の入滅を描いた図の多彩な世界を紹介した。				
展示名称	柿右衛門―受け継がれる技と美				
開催期間	27 年 3 月 3 日(火)～ 5 月 10 日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室 9 室、基本展示室 今月の名品	陳列件数(うち 指定品件数)	60 件
内容	14 代酒井田柿右衛門の功績を偲ぶとともに、歴代柿右衛門の名品の展示を通じて、柿右衛門窯が継承する技と、それに裏打ちされた美に迫った。				

(2) 特別展・共催展等

展覧会名：特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」

- ・会 期 26 年 4 月 15 日(火)～6 月 8 日(日) (49 日間)
- ・会 場 九州国立博物館 特別展示室
- ・主 催 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、TVQ九州放送、公益財団法人陽明文庫
- ・作品件数 114 件(うち、国宝 18 件、重要文化財 34 件、重要美術品 13 件)
- ・来館者数 60,808 人(目標来館者数 70,000 人・達成率 86.9%)
- ・入場料金 一般 1,500 円、高大生 1,000 円、小中生 600 円
- ・アンケート結果 満足度 88%
- ・講演会等：5 回 参加者合計 352 人
- ・記念講演会

期日	講演会名	所属・講師	参加者
4月19日	「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝」	公益財団法人陽明文庫文庫長 名和修	250人

・講座等

期日	講演会名	所属・講師	参加者
4月25日	しつこ九博！「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」解説講座(筑紫野市)	元展示課主任研究員 酒井芳司	24人
4月26日	リレー講座 近衛家の国宝展の魅力に迫る 「近衛家の曙光―藤原道長の登場―」 「信尹と家瀬―近衛家が生んだ桃山・江戸の文化人―」	元展示課主任研究員 酒井芳司 文化財課主任研究員 荒木和憲	68人
5月3日	関連講演会 「藤原道長『御堂関白記』と世界記憶遺産への道程」	国際日本文化研究センター教授 倉本一宏	190人
5月10日	リレー講座 近衛家の国宝展の魅力に迫る 「近衛家の成立―藤原道長以後―」 「陽明文庫の書の魅力」	博物館科学課アソシエイトフェロー 渡部史之 文化財課主任研究員 丸山猶計	70人

・イベント等

期日	イベント名	参加者
5月5日	「ちはやふる」の世界―かるたクィーンに学ぶ競技かるた	150人
5月11日	上映会 源氏物語―千年の鍵―	236人

5月18日	「つづけしおりワークショップ」	95人
5月25日	「書の甲子園優勝！太宰府高校芸術科生徒による書道実演&つづけしおりワークショップ」	200人

展覧会名：特別展「クリーブランド美術館展一名画でたどる日本の美ー」

- ・会 期 26年7月8日(火)～8月31日(日) (49日間)
- ・会 場 九州国立博物館 特別展示室
- ・主 催 九州国立博物館・福岡県、クリーブランド美術館、西日本新聞社、TVQ九州放送、テレビ西日本
- ・作品件数 51件
- ・来館者数 70,794人(目標来館者数 50,000人・達成率141.5%)
- ・入場料金 一般1,400円、高大生1,000円、小中生600円
- ・アンケート結果 満足度 86%
- ・講演会等：5回 参加者 合計 479人
- ・記念講演会

期日	講演会名	所属・講師	参加者
7月13日	「アメリカ人の目利きーチャーマン・リーとクリーブランド美術館コレクション」	明治学院大学教授 山下裕二	275人

・講座等

期日	講演会名	所属・講師	参加者
6月28日	アクロス文化学び塾 プレ講座 「準備万端!?クリーブランド美術館展の楽しみ方」	企画課研究員 鷲頭桂	70人
7月11日	しとこ九博！「クリーブランド美術館展 名画でたどる日本の美」解説講座(筑紫野市)	企画課研究員 鷲頭桂	24人
7月16日	講演会「夏の夜の日本美術入門」 (公益財団法人 九州経済調査協会)	企画課研究員 鷲頭桂	30人
7月19日	リレー講座 「日本絵画入門：千年の歴史をたどる」	企画課主任研究員 畑靖紀 企画課研究員 鷲頭桂	80人

・イベント等

期日	イベント名	参加者
7月5日～8月31日	特別展「クリーブランド美術館展一名画でたどる日本の美」紹介パネル展示	132,526人
7月15日～27日、 8月5日～17日	「雷神めり絵はがき」ワークショップ	2,600人
7月24日	親子鑑賞会「親子で楽しむ クリーブランド美術館展」((公財)福岡文化財団 招待事業)	34人
8月10日	夏休み親子工作 てづくりカメラ つくって、覗いて、描いてみよう!	27人
8月22日、23日	日本画ワークショップ「琳派の燕子花を描く」	15人

展覧会名：特別展「台北 国立故宮博物院ー神品至宝ー」

- ・会 期 26年10月7日(火)～11月30日(日) (51日間)
- ・会 場 九州国立博物館 特別展示室
- ・主 催 九州国立博物館・福岡県、東京国立博物館、国立故宮博物院、西日本新聞社、NHK福岡放送局、NHKプラネット九州、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、RKB毎日放送、TVQ九州放送
- ・作品件数 110件
- ・来館者数 256,070人(目標来館者数 150,000人・達成率170.7%)
- ・入場料金 一般1,600円、高大生900円、小中生400円
- ・アンケート結果 満足度 79%
- ・講演会等：4回 参加者合計 397人
- ・記念講演会

期日	講演会名	所属・講師	参加者
11月1日	特別講演会 「皇帝を魅了した名品たちー中国書跡を中心にー」	東京国立博物館列品管理課長 富田淳	150人

・講座等

期日	講演会名	所属・講師	参加者
10月25日	シンポジウム 「中国皇帝コレクションの意味ー工芸における復古と革新ー」 「乾隆帝收藏の汝窯磁器と関連する諸問題」 「日本でつくられた倣中国製彫漆器」 「乾隆帝の玉器評価基準」 「考古資料から見た徽宗の青銅器文化復興」	国立故宮博物院 器物処副所長 余佩瑾 企画課主任研究員 川畑憲子 国立故宮博物院 器物処科長 張麗端 東京国立博物館 学芸研究部長 谷豊信	150人
10月25日	しとこ九博！「台北 国立故宮博物院ー神品至宝ー」解説講座(筑紫野市)	企画課主任研究員 川畑憲子	47人
11月8日	講演会「中国における文物の意義ー皇帝たちが受け継いだ名画ー」	企画課特別展示室主任研究員 畑靖紀	50人

・イベント等

期日	イベント名	参加者
9月11日	セミナー&ランチ 「台北故宮展を先取り！至高のレシピを一挙公開」(福岡市)	40人
9月14日	谷原章介×九州国立博物館学芸員トークショー 「谷原章介が現地でも出逢った！台北故宮の魅力とは？」(福岡市)	600人
10月21日～26日	台湾グルメフェア	-

展覧会名：特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」

- ・会 期 27年1月1日(木・祝)～3月1日(日) (52日間)
- ・会 場 九州国立博物館 特別展示室
- ・主 催 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、TVQ九州放送
- ・特別協力 国立公州博物館、国立扶餘文化財研究所、太宰府天満宮
- ・作品件数 74件(うち、国宝 4件、重要文化財 5件、重要美術品 2件、韓国国宝 2件、韓国宝物 1件)
- ・来館者数 59,629人(目標来館者数 30,000人・達成率 198.7%)
- ・入場料金 一般 1,400円、高大生 1,000円、小中生 600円
- ・アンケート結果 満足度 87%
- ・講演会等：5回 参加者合計 613人
- ・記念講演会

期日	講演会名	所属・講師	参加者
27年 1月27日	特別展記念講演会 「七支刀と百済研究の最前線」	石上神宮宮司 森 正光、韓国国立公州博物館超金鍾萬、韓国国立中央博物館学芸研究官 李炳鎬、福岡県教育庁文化財保護課長 赤司善彦	305人

・講座等

期日	講演会名	所属・講師	参加者
27年 1月24日	特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」展関連講演会「文化財科学は解き明かす 自然災害Ⅲ」 「1.17から3.11 - 文化財の危機管理意識 -」 「八重山諸島の巨大津波を探る」 「西日本沿岸の巨大津波痕跡から将来を考える」 「地震考古学と九州の地震災害」	館長 三輪嘉六 石垣市教育委員会文化財係長 島袋綾野 高知大学総合研究センター特任教授 岡村眞 産業技術総合研究所客員研究員 寒川旭	110人
27年 1月30日	しつとこ九博！「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」解説講座(筑紫野市)	展示課主任研究員 岸本圭	78人
27年 2月1日	リレー講座 九博研究員が語る！ 考古学を100倍楽しむ方法 「獣帯鏡の謎」 「右片袖の思想—日本の横穴式石室のはじまり」	展示課主任研究員 岸本圭 企画課文化交流展室長 河野一隆	120人

・イベント等

期日	イベント名	参加者
1月11日	スペシャル・サポーター・SHU-I スペシャルコンサート	280人
1月25日	ウォーキングツアー 考古学者と行く！ 史跡探訪 てくてく水城コース	10人
2月8日	ウォーキングツアー 考古学者と行く！ 史跡探訪 健脚向き 大野城登山コース	10人
2月15日	もうすぐ九博開館10周年記念イベント 福岡発市民ミュージカル“ASUKA”	10人

同時開催展覧会：「発掘された日本列島2014」

- ・会 期 27年1月1日(木・祝)～3月1日(日) (52日間)
- ・会 場 九州国立博物館 特別展示室
- ・主 催 九州国立博物館、文化庁、東北歴史博物館、東京都江戸東京博物館、堺市博物館、長野市立博物館
- ・作品件数 960件(重要文化財 47件)
- ・来館者数 59,629人(目標来館者数 30,000人・達成率 198.7%)
- ・入場料金 一般 1,400円、高大生 1,000円、小中生 600円(古代日本と百済の交流展と共通チケット)
- ・アンケート結果 満足度 87%
- ・講演会等：1回 参加者合計 90人
- ・講座等

期日	講演会名	所属・講師	参加者
27年 2月22日	リレー講座 九博研究員が語る！ 考古学を100倍楽しむ方法 「激動の7世紀を戦った兵士」 「発掘された日本列島2014の見どころ」	展示課研究員 小嶋篤 展示課主任研究員 進村真之	90人

・イベント等

期日	イベント名	参加者
1月18日	なりきり考古学者体験 スペシャルバージョン	7人
2月15日	なりきり考古学者体験 スペシャルバージョン	3人

【平城宮跡資料館】

(1) 平常展

開館日数：309日(平常展のみの開館日数：124日) 陳列件数：656件 陳列替回数：1回
平常展のみの来館者数：52,221人
入場料金：無料

(2) 特別展等・共催展等

展覧会名：夏期企画展「平城京ビックリ！はくらんかい」

会 期：26年7月12日(土)～9月21日(日) (72日間)
 会 場：平城宮跡資料館 企画展示室
 主 催：奈良文化財研究所
 陳列件数(うち指定品数)：85件(0件)
 来館者数：17,712人
 入場料金：無料
 講演会等：ビックリ先生のじまん話5回・参加者数合計145人
 親子ワークショップ1回・参加者数合計35人

展覧会名：秋期特別展「地下の正倉院展—木簡を科学する—」

「埋蔵文化財センターの40年」

会 期：26年10月18日(土)～11月30日(日) (39日間)
 会 場：平城宮跡資料館 企画展示室
 主 催：奈良文化財研究所
 陳列件数(うち指定品数)：78件(6件)
 来館者数：19,281人
 入場料金：無料
 講演会等：ギャラリートーク3回・参加者数合計124人

展覧会名：ミニ展示「発掘速報展平城2014」

会 期：I期 26年12月6日(土)～27年2月1日(日) (45日間)
 II期 27年2月14日(土)～27年3月31日(日) (39日間)
 会 場：平城宮跡資料館 企画展示室
 主 催：奈良文化財研究所
 陳列件数(うち指定品数)：76件(0件)
 来館者数：19,974人
 入場料金：無料

【藤原宮跡資料室】

(1) 平常展

- ①開館日数：356日 陳列件数：7件 陳列替回数：1回
 ②特集陳列等 3件

名称	会期	陳列件数(うち指定品件数)
【特集陳列】 震災復興調査とその支援	26年 1月23日～	パネル展示
甘樫丘東麓遺跡の調査	26年 6月30日～	土器4
藤原宮朝堂院の調査	26年 6月30日～	瓦3

入場料金：無料
 来館者数：8,461人

【飛鳥資料館】

(1) 平常展

開館日数：319日(平常展のみの開館日数：122日) 陳列件数：349件 陳列替回数：1回
 入場料金：一般270円(170円) 大学生130円(60円) 高校生及び18歳未満、65歳以上は無料
 ※ () は20名以上の団体
 平常展のみの来館者数：9,028人

(2) 特別展等・共催展等

展覧会名：春期特別展「いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代—」

会 期：26年4月25日(金)～6月15日(日) (52日間)
 会 場：飛鳥資料館 特別展示室
 主 催：奈良文化財研究所
 陳列件数(うち指定品数)：145件(0件)
 来館者数：10,597人
 入場料金：一般270円(170円) 大学生130円(60円) 高校生及び18歳未満、65歳以上は無料
 ※ () は20名以上の団体
 座談会：1回 参加者数合計 51人

期日	講演会名	講師(所属)
5月11日	「いにしへの技術を語る—現代の「匠」と考古学者—」	脇田宗孝(奈良教育大学名誉教授) 小泉武寛(和銅寛) 松村恵司(奈良文化財研究所長) 玉田芳英(奈良文化財研究所都城発掘調査部副部長)

展覧会名：夏期企画展「第5回写真コンテスト「飛鳥の壘」応募作品展」

会 期：26年7月25日(金)～9月7日(日) (39日間)
 会 場：飛鳥資料館 特別展示室
 主 催：奈良文化財研究所
 応募点数：213点
 来館者数：3,505人

入場料金：一般270円（170円） 大学生130円（60円） 高校生及び18歳未満、65歳以上は無料
 ※（ ）は20名以上の団体

展覧会名：ミニ企画展「津田洋 大和の美仏に魅せられて」

会 期：26年9月12日（金）～9月28日（日）（15日間）
 会 場：飛鳥資料館 特別展示室
 主 催：奈良文化財研究所
 陳列件数（うち指定品数）：20件（0件）
 来館者数：2,716人
 入場料金：一般270円（170円） 大学生130円（60円） 高校生及び18歳未満、65歳以上は無料
 ※（ ）は20名以上の団体

展覧会名：秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどりー大地にぎざまれた記憶ー」

会 期：26年10月10日（金）～11月30日（日）（52日間）
 会 場：飛鳥資料館 特別展示室
 主 催：奈良文化財研究所
 陳列件数（うち指定品数）：66件（0件）
 来館者数：9,592人
 入場料金：一般270円（170円） 大学生130円（60円） 高校生及び18歳未満、65歳以上は無料
 ※（ ）は20名以上の団体
 講演会：1回 参加者数合計 40人

期日	講演会名	講師（所属）
11月1日	「もう一つの遺跡保存ー土層転写と遺構切り取りー」	澤田正昭（東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター長）

展覧会名：冬期企画展「飛鳥の考古学2014」

会 期：27年1月16日（金）～3月1日（日）（39日間）
 会 場：飛鳥資料館 特別展示室
 主 催：奈良文化財研究所
 陳列件数（うち指定品数）：313点（0件）
 来館者数：2,658人
 入場料金：一般270円（170円） 大学生130円（60円） 高校生及び18歳未満、65歳以上は無料
 ※（ ）は20名以上の団体

b ボランティア受入れ実績

1 受入人数

平成27年3月31日現在

国立文化財機構計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	奈良文化財研究所
989人	173人	210人	110人	352人	144人

2 活動内容

【東京国立博物館】 計173人

種別 (登録人数)	概要
生涯学習ボランティア (158人)	<p>1) 各種教育普及事業の補助活動の充実を図る</p> <p>【教育普及事業の補助】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクールプログラム「はじめての東博」実施 (通年) ・学校向けワークショップ補助 (通年) ・ファミリー向けワークショップ補助 (通年) ・一般向けワークショップ補助 (通年) ・工程見本展示鑑賞補助 (通年) ・ギャラリートーク、各種講演会、イベント事業の実施補助 (通年) ・教育普及事業の告知(「本日の博物館」シール貼替え・通年) ・東洋館オアシス「アジアの古い体験」実施 (通年) ・本館19室みどりのライオン体験コーナー実施 (通年) <p>【館内案内】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本館 1階エントランス、2階、17室 (通年実施) ・多言語案内・手話の告知バッジによる来館者の案内・誘導 (通年) <p>【資料印刷・作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パンフレット「日本美術の流れ」日本語版の印刷 (～11月24日) ・点字パンフレットの印刷 (通年) ・東洋館オアシススタンプ台紙の印刷 (通年) ・たんけんマップの作成・印刷 (通年) <p>【職場体験実施活動補助】</p> <p>受入数：19校 生徒数：63人 (中学、高校合計数)</p> <p>【障がい者対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バリアフリー対応班の発足 (26人) ・東京国立博物館紹介パンフレットの点訳版作成 (22冊) ・ボランティアによるガイドツアー「たてもの散歩」において手話通訳付ガイドツアー (隔月1回、6回実施) ・博物館案内・各ガイドにおける聴覚障がい者対応のためのコミュニケーションボードの使用 (通年) ・触知図を使用した館内案内 (通年) ・盲学校のためのスクールプログラムの実施補助 (通年) <p>【各種連携事業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「留学生の日」(10月11日)内プログラム ボランティアによる茶会、法隆寺宝物館ガイド、考古展示室ガイド、彫刻ガイド、陶磁ガイド、本館ハイライトツアー、刀剣・武士の装いツアー、浮世絵ガイド、英語ガイド実施、館内案内 <p>【ボランティアデー開催】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新規ボランティア募集説明会、ボランティアによる活動紹介ツアー、各ガイドツアー、お茶会、ワークショップの実施 (12月6・7日) <p>2) 来館者参加型ガイドツアー等の実施374回13,428人 自主企画プログラム (予約ガイド、各種連携事業、留学生の日、ボランティアデーにおける対応を含む。一日複数回実施の場合は、延べ回数)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹木ツアー 28回794人参加 ・浮世絵ガイド 44回1,772人 ・本館ハイライトツアー 51回2,967人 ・法隆寺宝物館ガイド 26回1,044人 ・考古展示室ガイド 30回1,069人 ・陶磁ガイド 24回716人 ・庭園茶室ツアー 21回422人 ・お茶会 20回360人 ・彫刻ガイド 36回1,139人 ・英語ガイド 28回778人(留学生の日の定点ガイド含む) ・こどもたちのアートスタジオ 9回217人 ・たてもの散歩ツアー 19回731人 ・近代美術ガイド 12回415人 ・東洋館ツアー 15回464人 ・刀剣・武士の装いツアー 7回405人 ・ボランティア活動紹介ツアー 4回135人

種別 (登録人数)	概要
東京芸術大学大学院インターンシップ (15人)	<p>当館研究員と東京芸術大学大学院生が連携し準備、事業を行った。学生の貴重な経験や研究の一助となり、かつ、来館者にとっても展示についての理解を深めるきっかけとなった。</p> <p>【ギャラリートーク(研究発表)班] 3名 総合文化展示作品に関するギャラリートークを展示室で行った。【計18回、603人】 「若沖と鶏」6回、275人 「近代日本彫刻としての佐藤朝山『シャクンタラ姫とドウシャンタ王』」6回、155人 「ひび割れたうつわ」6回、173人</p> <p>【調査研究班] 12名 平成25・26年度の2カ年で活動。今年度は当館所蔵品「突起装飾坏(TJ-5401)」の工程見本の展示、パンフレットの作成、ギャラリートークとスライドトークの教育普及事業を行った。 ギャラリートーク 10回166人 スライドトーク 1回33人</p> <p>※「東京芸術大学大学院インターンシップ」は、従前との比較のため、ボランティア数の内数として計上している。従前の「東京芸術大学学生ボランティア」を25年4月より名称変更し、現在は「2(2)③大学との連携」の事業である。詳細は処理番号2231を参照。</p>

【生涯学習ボランティアに対する研修の実施】 計80回

- ・新規ボランティア研修 3回
- ・基本活動関連研修 39回
- ・バリアフリー班研修 3回
- ・イベント班研修 1回
- ・ワークショップ班研修 4回
- ・スクールプログラム班研修 22回
- ・各種自主企画グループ研修 8回

【生涯学習ボランティアに対する解説会の実施】(以下の展示等につき実施) 計6回

- ・特別展「栄西と建仁寺」1回
- ・特別展「台北国立故宮博物館院一神品至宝」1回
- ・特別展「東アジアの華 陶磁名品展」1回
- ・特別展「日本国宝展」1回
- ・特別展「みちのくの仏像」1回
- ・特別展「3.11大津波と文化財再生」、特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」、国宝「檜図屏風」1回

【京都国立博物館】 計210人

種別 (登録人数)	概要
京博ナビゲーター (163人)	9月13日の平成知新館オープンとともに、新規ボランティアである京博ナビゲーターの活動を開始した。京博ナビゲーターの募集・活動開始にあたっては、募集説明会(1日×6回)や基礎講座(1日×8回)を実施した。選考の結果163名が登録され、それぞれ月1回程度来館し、平成知新館内で活動している。「ミュージアム・カート」では来館者と対話しながら、文化財の魅力を発信し、さらに探究したい来館者のためには、館内の情報機器や、参考図書資料の利用案内も行っている。
調査・研究支援ボランティア(16人)	各研究員の指導のもと、調査・研究支援ボランティアが収蔵品調査及び社寺調査の補助を行った。
文化財ソムリエ(22人)	「文化財ソムリエ」として登録している大学生・大学院生のボランティアが、当館研究員によるスクーリングを受けたのち、京都市内の小中学校訪問授業において下記の通り講師をつとめた。6月10日(醒泉小学校)、7月9日(朱雀第一小学校)、9月2日(祥豊小学校)、10月7日(烏丸中学校)、10月30日(葵小学校)、11月19日(衣笠小学校)、12月10日(伏見住吉小学校)
京都・らくご博物館学生ボランティア (9人)	年3回当館主催で開催する「京都・らくご博物館」において、京都女子大学落語研究会の有志が運営に協力した。

【奈良国立博物館】 計110人

種別 (登録人数)	概要
世界遺産グループ (38人)	<p>【世界遺産学習】(奈良市教育委員会との連携で、奈良市の公立小学校5年生の受け入れ) ・6月~7月、及び10月~12月にかけて (35校) 2,281名</p> <p>【学校団体案内】 ・小学生、中学生、高校生(外国人含む) (18校) 1,045名</p> <p>【ワークショップ】 ・特集展示「和紙-文化財を支える日本の紙-」のワークショップ(1月27日~3月15日) 45日 110名</p> <p>【ボランティア・フェスタ】の実施 ・活動紹介、ワークショップなど 36名</p> <p>【イベントの補助】 ・奈良市消防局協力「夏休み親子で学ぶ 守ろう!知ろう!文化財」受付と補助 1回</p> <p>【掃除】 ・スタッフルーム 3回</p>
解説グループ(43人)	<p>【通年の活動】 ・なら仏像館のデスクでの質問対応と解説 138日 ・青銅器館のデスクでの質問対応と解説 284日 ・西新館名品展のデスクでの質問対応と解説 80日</p> <p>【展示案内】 ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の質問対応(12月9日~1月18日) 29日 65名 ・特別陳列「お水取り」質問対応(2月7日~3月15日) 35日 83名 ・特別陳列「お水取り」ミニ・ツアー解説(3月1日~3月14日) 14日 41名</p>

	<p>【その他、予約による解説実施】 28件</p> <p>【ボランティア・フェスタ】の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動紹介、展示解説、ワークショップなど 29名 <p>【掃除】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタッフルーム 3回
サポートグループ (29人)	<p>【教育普及事業の補助】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開講座の受付 12回 ・サンデートークの受付 12回 ・親子鑑賞会の受付 1回 ・夏季講座の受付 3回 ・記念講演&座談会「和紙—文化財を支える日本の紙—」 1回 <p>【ワークショップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特集展示「和紙—文化財を支える日本の紙—」のワークショップ (1月27日～3月15日) 45日 80名 <p>【イベントの補助】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良トライアングルミュージアムズワークショップ「オリジナル散華をつくろう」受付と補助 1回 ・古展の日講演会「東大寺献物帳と光明皇后」受付と補助 1回 ・ワークショップ「カブリモノ 変心塾—仏像になってみよう—」受付と補助 1回 ・写真展「大和の仏たち」関連イベント「仏像を撮ってみよう」受付と補助 1回 ・「文化財保存修理所特別公開」受付と補助 1回 ・お水取り「講話」と「粥」の会 受付と補助 1回 ・奈良の冬キャンペーン期間中における奈良国立博物館 (新館) 夜間特別鑑賞 3回 ・奈良国立博物館なら仏像館修理工事現場特別見学会 2回 <p>【館及びボランティア室の業務の補助】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏季講座の配布資料袋詰め作業 1回 ・正倉院学術シンポジウムの配布資料袋詰め作業 1回 ・ボランティア対象の各種研修等の受付 16回 <p>【ボランティア・フェスタ】の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合受付、活動紹介、ワークショップ、庭園茶室散策など 27名 <p>【掃除】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタッフルーム 3回 ・庭園等 1回 <p>【交流チームの活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社寺旧跡の見学会の実施 3回 164名 ・他施設ボランティアとの交流会 3回 <p>【企画チームの活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・茶室庭園ツアーの立案と実施 2回 ・仏教美術資料研究センター見学ツアーの立案と実施 2回 ・総務課来客 (アメックス) の見学ツアー 1回 <p>【通信誌チームの活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア通信誌「ぶりっじ」発行 6回

【ボランティアに対する研修の実施】 計16回

- ・名品展研修 8回
- ・特別展、特別陳列、特集展示の研修 8回

【グループ別の勉強会の実施】計32回

- ・世界遺産グループ 8回
- ・解説グループ 14回
- ・サポートグループ 10回

【各グループ共通】

- ・正倉院展講堂ボランティア解説 20日 103回
- ・「ボランティア・フェスタ」の実施 1日 92名

【九州国立博物館】 計 352人

種別 (登録人数)	概要
展示解説ボランティア (86人)	文化交流展示室での案内、及び展示室内及び展示室入口において来館者の質問や案内依頼等に対応。展示案内は予約団体 (一般・学校)、当日受付 (個人・グループ) に対応。
教育普及ボランティア (37人)	「あじっば」で来館者への対応。参加体験型のものづくり教室などを企画・実施。来館者と展示物を介して交流し、体験を通してアジアの文化を伝える。
館内案内ボランティア (38人)	館内の概要・施設案内 (ガイド) およびバックヤードツアーの案内。館内案内は予約団体 (一般・学生)、及び当日来館者に対応。バックヤードツアーも毎週火・金曜は予約団体のみ、日曜は当日受付で実施。
外国語案内ボランティア (94人)	英語・韓国語・中国語で、館内のガイド、バックヤードツアーの案内。
環境ボランティア (33人)	IPM (総合的有害生物管理) 活動に関する支援。
イベントボランティア (6人)	お正月、昭和の日、七夕関連のボランティアイベントの企画・立案・実施。

種 別 (登録人数)	概 要
資料整理ボランティア (25人)	郷土人形(土人形)の調書の作成・データ化。 あじぎやらでの郷土人形の企画展示。
サポートボランティア (24人)	ボランティア広報紙の作成や他部会のボランティアの活動のサポート。 ボランティア同士の横のつながりや、他館ボランティアとの交流の構築。
学生ボランティア (9人)	他部会のボランティアの活動のサポート。 各種イベントの企画・立案・実施。

・この他、地域の手話ボランティアグループ 31人が障がい者対応として、また博物館周辺の環境整備活動グループとして35人が活動。
(上記35名は、九州国立博物館を愛する会所属のため、ボランティアではない。)

(研修)全体研修 3回、部会別研修 40回、グループ研修 40回

(対応来館者数) 展示解説(8,146人)、館内案内(5,437人)、バックヤードツアー(2,184人)

【奈良文化財研究所】 計144人

種 別 (登録人数)	概 要
解説ボランティア (144人)	平城京跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説

・各種ボランティアに対する学習会等

平城宮跡資料館夏期企画展の展示研修 1回

” 秋期特別展の展示研修 1回

講演形式専門研修 1回

臨地ガイド研修 1回

c 調査研究

c-① 研究交流実績一覧

1) 海外研究者招聘・受入実績（延べ人数）

平成27年3月31日現在

国立文化財機構合計	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
277人	93人	47人	2人	9人	35人
	文化財研究所計	東京文化財研究所		奈良文化財研究所	
	114人	38人		76人	
	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	文化財防災ネットワーク推進事業			
	35人	35人			

【東京国立博物館】47人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	何 炎泉	台湾	台北故宮博物院書画処助理研究員	当館シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味」にかかる講演のため	7月3日～7月7日
2	陳 韻如	同上	台北故宮博物院書画処副研究員	同上	7月3日～7月11日
3	何 傳馨	同上	台北故宮博物院副院長	同上	7月4日～7月7日
4	宋 紀蓉	中国	北京故宮博物院副院長	東博・北京故宮博間の情報交換および協力関係の推進のため	8月25日～8月29日
5	史 寧昌	同上	北京故宮博物院文物保存科学技術部主任	同上	同上
6	雷 勇	同上	北京故宮博物院文物保存科学技術部副主任	同上	同上
7	韋 鐘鐘	同上	北京故宮博物院基本建設弁公室副主任	同上	同上
8	王 絲滢	同上	北京故宮博物院故宮博物院公会助理編修	同上	同上
9	金 炫廷	韓国	韓国国立中央博物館学芸員	特別展「東アジアの華 陶磁名品展」にかかる展示作業のため	9月12日～9月18日
10	蘇 生文	中国	中国国家博物館展覧一部研究館員	同上	9月15日～9月19日
11	黄 振春	同上	中国国家博物館副館長	特別展「東アジアの華 陶磁名品展」にかかる開会式出席のため	9月16日～9月20日
12	黄 琛	同上	中国国家博物館社会教育宣伝部主任	同上	同上
13	耿 東升	同上	中国国家博物館芸術品鑑定センター副主任	同上	同上
14	馬 海鵬	同上	中国国家博物館文物価額技術保護部副主任	同上	同上
15	王 石	同上	中国国家博物館外事処副処長	同上	同上
16	杜 衛民	同上	中国国家博物館所蔵品保管一部副研究館員	特別展「東アジアの華 陶磁名品展」にかかる講演のため	9月25日～9月28日
17	具 一会	韓国	韓国国立扶余博物館長	同上	同上
18	サハプム・ブミティテラト	タイ	タイ文化庁芸術局国立博物館事務局長	平成26年度外国人芸術家・文化財専門家招へい事業のため	10月16日～10月22日
19	トッサポー・シーサーマン	同上	バンコク国立博物館長	同上	同上
20	柳 京熙	韓国	韓国国立中央博物館学芸研究室美術部学芸員	日本・韓国間の学術情報交流および研究推進のため	10月30日～11月12日
21	朴 恵元	同上	韓国国立中央博物館教育文化交流団展示課学芸員	同上	同上
22	ジョン・カーベンター	米国	メトロポリタン美術館	米欧ミュージアム専門家交流事業参加のため	11月7日～11月15日
23	マシュー・ウェルチ	同上	ミネアポリス美術館	同上	同上
24	シネード・ヴィルパー	同上	クリーブランド美術館	同上	同上
25	ロッセラ・メネガッツォ	イタリア	ミラノ大学	同上	11月8日～11月14日
26	ロバート・ミンツ	米国	ウォルターズ美術館	同上	11月8日～11月15日
27	アン・ローズ・キタガワ	同上	ジョーダン・シュニッツラー美術館	同上	同上
28	ユーピン・チュン	英国	グラスゴー博物館	同上	同上
29	ニコル・クーリッジ・ルマニエール	同上	大英博物館	同上	11月8日～11月16日
30	ジャニス・カツ	米国	シカゴ美術館	同上	同上
31	アン・西村・モース	同上	ボストン美術館	同上	同上

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
32	陳 克倫	中国	上海博物館副館長	東博・上海博間の展覧会協力および学術交流の推進のため	11月23日～11月27日
33	金 炫廷	韓国	韓国国立中央博物館学芸員	特別展「東アジアの華 陶磁名品展」にかかる撤収作業のため	11月24日～11月28日
34	劉 亜楠	中国	中国国家博物館所蔵品保管一部館員	同上	同上
35	畢 勝	同上	陝西省文物交流中心副主任	特別展「始皇帝と大兵馬俑展（仮称）」にかかる視察のため	27年2月9日～2月13日
36	張 正	同上	陝西省文物交流中心プロジェクト担当	同上	同上
37	周 瑞	同上	陝西省文物交流中心情報資料中心副主任	同上	同上
38	Ms. Nita Sen Gupta	インド	インド美術館	特別展「インドの仏」にかかる事前調査のため	27年2月11日～2月14日
39	Ms. Shrabanti Sardar	同上	同上	同上	同上
40	Dr Mita Chakraborty	同上	同上	特別展「インドの仏」にかかる作品輸送のため	27年3月6日～3月16日
41	Dr Bhargaviamma Venugopal	同上	同上	特別展「インドの仏」にかかる展示作業のため	27年3月15日～3月19日
42	華 慈祥	中国	上海博物館工芸研究部研究員	東京国立博物館・上海博物館の学術調査、研究および協力関係推進のため	27年3月16日～3月25日
43	ソムチャイ・ナ・ナコンパノム	タイ	文化省芸術局上級専門調査官・タイ考古学者	2017年のタイ展開催にともなう事前調査ほかのため	27年3月21日～3月25日
44	サネー・マハーボン	同上	文化省芸術局博物館部・保存修復課長	同上	同上
45	ウィラヤー・チャムナンボン	同上	文化省芸術局コンピュータ技師専門官	同上	同上
46	ポウォーンウェート・ルンルチャー	同上	文化省芸術局長	同上	同上
47	伊 一梅	中国	北京故宫博物院研究室研究館員	東京国立博物館・北京故宫博物院の学術交流および研究推進のため	27年3月30日～4月4日

【京都国立博物館】 2人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	Julia Hutt	イギリス	ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館 学芸員	漆器展示等見学、文献調査	27年1月10日～17日
2	Anne Forray-Carlier	フランス	パリ装飾美術館	国際シンポジウム講演、研究交流、調査、他	27年1月20日～31日

【奈良国立博物館】 延べ 9人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	閔 新民	中国	上海博物館副主任	当館との協定に基づく学術交流	4月14日～4月23日
2	舒 寅	同上	上海博物館エンジニア	同上	4月14日～4月23日
3	華 焦宝	同上	上海博物館副主任	同上	4月14日～4月23日
4	劉 康	同上	河南博物院主任	同上	5月12日～6月10日
5	蘭 恩強	同上	河南博物院辦公室科長	同上	5月12日～6月10日
6	申 大坤	韓国	慶州博物館学芸研究室長	同上	7月28日～8月6日
7	李 榮勳	同上	慶州博物館館長	正倉院展視察並びに当館研究員との意見交換のため	11月4日～11月6日
8	韓 英美	同上	慶州博物館館員	同上	11月4日～11月6日
9	金 庚洙	同上	慶州博物館学芸研究士	当館との協定に基づく学術交流	11月27日～12月24日

【九州国立博物館】 延べ 35人

	氏名	国名	所属機関・役職	用務	期間	備考
1	シリチャイ・ワンチャルントラクン	タイ	タイ文化省芸術局博物館事務局・保存科学専門官	文化財の保存修復に係る協議及び講演	4月13日～19日	他機関負担
2	ラクチャノック・コーチャラノン	同上	博物館推進課長	学術文化交流協定に基づく研究者の交流	6月12日～19日	他機関負担
3	サムキット・チャイモコン	同上	博物館研究課 学芸員	同上	6月12日～19日	他機関負担
4	スッパワン・ノンヌット	同上	バンコク国立博物館学芸員	同上	6月12日～19日	他機関負担
5	ソムラック・カムトロン	同上	博物館推進課 学芸員	同上	6月12日～19日	他機関負担
6	パンヤ・スワンヌボン	同上	デザイン部職員	同上	6月12日～19日	他機関負担
7	パッチャリン・スックプラムー	同上	文化財登録課長	同上	6月25日～7月1日	他機関負担

	氏名	国名	所属機関・役職	用務	期間	備考
8	デンダオ・シンラバノン	同上	バンコク国立博物館主任学芸員	同上	6月25日～7月1日	他機関負担
9	ルータイワン・マノーサ	同上	王室御座船博物館学芸員	同上	6月25日～7月1日	他機関負担
10	ユッタナワラコン・セーンアラーム	同上	バンコク国立博物館学芸員	同上	6月25日～7月1日	他機関負担
11	ポッチャサコン・スリチャンカー	同上	デザイン部職員	同上	6月25日～7月1日	他機関負担
12	チュラット・チュアチン	同上	文化財登録課 学芸員	同上	6月25日～7月1日	他機関負担
13	マーティン・レネ・マンダース	オランダ	オランダ政府海事プログラム・局長	文化庁委託事業「水中遺跡の保存活用に関する調査研究」	7月13日～19日	他機関負担
14	ト・ティ・トウイ・ラム	ベトナム	コミュニケーション部長兼ボランティアクラブ責任者	文部科学省招聘事業 新世紀国際教育交流プロジェクト・行政官等受入事業（第1回）	9月5日～10日	他機関負担
15	ゲン・ティ・カム・フォン	同上	公教育副部長	学術文化交流協定に基づく研究者等の交流	9月5日～10日	他機関負担
16	チョー・ウーリン	ミャンマー	文化省 考古・国立博物館・図書館部長官	同上	12月18日	他機関負担
17	蔡 玫芬	台湾	國立故宮博物院 器物処・処長	特別展「台北 國立故宮博物院-神品至宝-」開催記念国際シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味-工芸における復古と革新-」における講演	10月25日	九博負担
18	余 佩滢	同上	國立故宮博物院 器物処・副処長	同上	10月25日	九博負担
19	張 麗端	同上	國立故宮博物院 器物処・科長	同上	10月25日	九博負担
20	金 鍾萬	韓国	国立公州博物館・館長	特別展記念講演会「七支刀と百済研究の最前線」講演	27年1月14日～18日	九博負担
21	李 炳鎬	同上	国立中央博物館 研究企画部・学芸研究官	同上	27年1月14日～18日	九博負担
22	ユ・ソン	韓国	国立公州博物館 行政主査	同上	27年2月2日～8日	他機関負担
23	ウン・スンウ	同上	国立公州博物館 施設管理・警備	同上	27年2月2日～8日	他機関負担
24	キム・チンギョン	同上	国立公州博物館 学芸員・高句麗瓦専門	同上	27年2月2日～13日	他機関負担
25	ディビット・ジョン・グレゴリー	デンマーク	デンマーク国立博物館	同上	27年1月24日～2月5日	他期間負担
26	ディビット・ジョン・グレゴリー	デンマーク	デンマーク国立博物館	文化庁委託事業「水中遺跡の保存活用に関する調査研究」	27年1月24日～2月5日	他期間負担
27	ヨーエン・デンカー	同上	ヴァイキングシップ博物館	同上	27年1月24日～2月5日	他機関負担
28	メノー・フィツキ	オランダ	アムステルダム国立美術館 東アジア美術部門・学芸員	国際シンポジウム「世界のアリタ-有田焼の伝統と未来へ続く創造性-」講演のため	27年3月7日～8日	県負担
29	黄 栄光	中国	中国科学院自然科学史研究所	中国古代青銅器の製作技法に関する調査研究の報告書打合せ、文化財デジタルアーカイブに係る指導・助言	27年3月7日～9日	九博負担
30	ポウオーンウェー・ルンルチー	タイ	文化省芸術局長	文部科学省招聘事業 新世紀国際教育交流プロジェクト・行政官等受入事業（第2回）	27年3月21日～25日	他機関負担
31	ソムチャイ・ナ・ナコンパノム	同上	文化省芸術局・上級専門調査官 考古学専門	学術文化交流協定に基づく研究者等の交流	27年3月21日～25日	九博・東博負担
32	サネー・マハーポン	同上	文化省芸術局・博物館部・保存修復課長	同上	27年3月21日～25日	九博・東博負担
33	ウィラヤー・チャムナンボン	同上	コンピュータ技師専門官兼局長秘書	同上	27年3月21日～25日	九博・東博負担
34	ウィバラット・ブラディットアチー	同上	文化省芸術局・研究員	同上	27年3月21日～25日	九博負担
35	パッタラ・サムランスック	同上	文化省芸術局・デザイナー	同上	27年3月21日～25日	九博負担

※上記には、他機関が招聘し、九州国立博物館を訪問（滞在）したものや、自己負担での外国人研究者の訪問実績は含んでいない。

※上記には、日本国内の機関（大学、研究所等）に所属する外国人研究者の招聘は含んでいない。

【東京文化財研究所】延べ 38人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	Bernhard Schachenhofer	オーストリア	ドイツ・サーモリグナムインターナショナルディレクター	日光二社一寺、日光社寺文化財保存会・日光における現地視察と研究打合せ、東京文化財研究所での打合せ	5月25日～5月30日

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
2	Nikolaus Wilke	ドイツ	ドイツ・サーモリグナムインターナショナル コンサーベーター	日光二社一寺、日光社寺文化財保存会・日光における現地視察と研究打合せ、東京文化財研究所での打合せ	5月25日～5月29日
3	Jinya Mizuno	イギリス	サーモリグナム・UK オペレーションマネージャー	日光二社一寺、日光社寺文化財保存会・日光における現地視察と研究打合せ、東京文化財研究所での打合せ	5月25日～5月29日
4	Aidai Sulaimanova	キルギス	キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所 研究員	第7回ワークショップ 史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ参加	7月2日～7月15日
5	Dmitrii Luzhanskii	キルギス	キルギス・ロシア・スラブ大学博物館 考古学者	第7回ワークショップ 史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ参加	7月2日～7月15日
6	Altnai Karimzhan Kyzy	キルギス	キルギス共和国文化情報観光省 専門家	第7回ワークショップ 史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ参加	7月2日～7月15日
7		アフガニスタン		第7回ワークショップ 史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ	7月2日～7月15日
8		アフガニスタン		第7回ワークショップ 史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ	7月2日～7月15日
9		アフガニスタン		第7回ワークショップ 史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ	7月2日～7月15日
10	Daw Aye Phyu Pyar Nyo	ミャンマー	文化省考古・国立博物館局 技官	歴史的建造物保存に関する研修	8月21日～8月30日
11	Thet Zaw	ミャンマー	文化省考古・国立博物館局 技官	歴史的建造物保存に関する研修	8月21日～8月30日
12	Thura Bo	ミャンマー	文化省考古・国立博物館局 技官	歴史的建造物保存に関する研修	8月21日～8月30日
13	Nathamon Yudee	タイ	文化省 保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
14	Hilda Perez De Penamil Rodriguez	キューバ	ハバナ歴史事務所 書物修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
15	Ludivine Emilie, Liliane, Odette LEROY-BANTI	フランス	国立公文書館科学部保存修復部門修復研究所 紙保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
16	Pia Irene Hansen	デンマーク	オデンセ市立美術館 紙保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
17	Ting-fu Fan	台湾	三間アートコンサーベーション株式会社保存修復部 主任保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
18	Emily Jane Ramos	アメリカ	カルフォルニア大学バークレー校図書館保管部 図書館保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
19	Louise Jane Wilson	オーストラリア	ヴィクトリア国立美術館保存修復部 紙保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
20	Jennifer Gjeneve Cauchi	ニュージーランド	ニュージーランド国立博物館 テ・パバ・トンガレワ保存修復部 紙保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
21	Elizabeth Hepher	イギリス	スコットランド古代歴史遺跡王立委員会コレクション部 紙保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
22	Miloš Jelenić	セルビア	ベオグラード保存修復中央研究所 紙保存修復技術者	国際研修「紙の保存と修復」2014	8月24日～9月13日
23	Mehrdad Hejazi	イラン	イスファハン大学工学部土木工学科准教授	文化遺産国際協力拠点交流事業立案のための情報交換、技術協力内容の検討	8月27日～9月5日
24	Dmitriy Voyakin	カザフスタン	NGO考古学エキスパートイズ	文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム講演	9月23日～9月30日
25	Wang Xiaofei	中国	トルファン地区文物局局長	文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム講演	9月25日～10月1日
26	Alejandra Odor Chavezt	メキシコ	メキシコ国立公文書館 修復部門責任者	近代文化遺産の保存修復に関する研究会	11月15日～11月22日
27	Anne Frances Maheux	カナダ	カナダ国立図書館公文書館 紙・地図及び原稿類修復部門責任者	近代文化遺産の保存修復に関する研究会	11月15日～11月22日
28	Thomas J.K. Strang	カナダ	カナダ保存研究所 上級保存科学者	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての共同研究と打合せ	11月15日～11月21日

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
29	Alfred Gottwaldt	ドイツ	ドイツ技術博物館 鉄道部門上級学芸員	鉄道遺産の保存に関する講演及び意見交換	11月4日～11月10日
30	張 文元	中国	敦煌研究院保護研究所 館員	中国壁画の保護に関する日中共同研究	11月24日～12月13日
31	Joeli Veitayaki	フィジー	南太平洋大学 講師・研究者	文化遺産と持続的発展に関するワークショップ	12月14日～12月22日
32	Semi Salauca Masilomani	フィジー	南太平洋大学 地域調整役	文化遺産と持続的発展に関するワークショップ	12月14日～12月22日
33	John Laglelei Kaitu'u	フィジー	南太平洋大学 大学院生	文化遺産と持続的発展に関するワークショップ	12月14日～12月22日
34	Zar Chi Min	ミャンマー	マンダレー工科大学建築学科 准教授	ミャンマーの伝統的建造物に関する研究会	27年2月11日～2月17日
35	Raymond Myo Myint Sein	アメリカ	建築家(元ラングーン工科大学教授)	ミャンマーの伝統的建造物に関する研究会	27年2月11日～2月18日
36	Jeniffer Arlett Ponce Fernandez	メキシコ	メキシコ国立人類学歴史機構 国立文化遺産保存修復機構 保存修復技術者	国際研修「ラテンアメリカにおける紙文化財保存修復国際研修」の準備への協力	27年3月2日～6月30日
37	Ye Win	ミャンマー	ミャンマー文化省国立博物館考古学局 修復士	日本の壁画修復の研修、技術移転	27年3月9日～3月13日
38	Chaw Su Su Hlaing	ミャンマー	ミャンマー文化省国立博物館考古学局 研究技術者	日本の壁画修復の研修、技術移転	27年3月9日～3月13日

【奈良文化財研究所】延べ76人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	Benjawan Narasaj	タイ	コンケン大学	コミュニティ考古学についての意見交換	4月8日
2	黄建秋	中華人民共和国	南京大学 歴史系教授	共同研究(科研費)	4月11日～15日
3	全洪	中華人民共和国	南越王宮博物館 館長	共同研究(科研費)	4月11日～15日
4	夏晶	中華人民共和国	儀征市博物館 副館長	共同研究(科研費)	4月11日～15日
5	Enny Prihantini 他4名	インドネシア	ジャカルタ首都特別区文化財保存センター所長	ジャカルタ特別区文化財センター視察	5月14日
6	Dumrong Thongsom 他17名	タイ	タイ文化省	代表団の表敬訪問	5月16日
7	崔文禎他3名	大韓民国	韓国国立文化財文化財研究所	「古代宮園復元研究」のための試料調査	6月24日～6月26日
8	姜泰一他3名	大韓民国	韓国伝統文化大学校	視察	6月25日
9	李恩碩	大韓民国	文化財庁発掘制度課 学芸研究官	大韓民国国立文化財研究所との共同研究	7月3日～7月8日
10	アイダイ・スレイマノヴァ	キルギス	国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所	文化庁拠点交流事業による招聘研修	7月8日
11	ディミトリ・ルジャンスキー	キルギス	ロシア・スラブ大学博物館	文化庁拠点交流事業による招聘研修	7月8日
12	チナルベク・ジョルドシヨフ	キルギス	文化情報観光省	文化庁拠点交流事業による招聘研修	7月8日
13		アフガニスタン		文化庁拠点交流事業による招聘研修	7月8日
14		アフガニスタン		文化庁拠点交流事業による招聘研修	7月8日
15		アフガニスタン		文化庁拠点交流事業による招聘研修	7月8日
16	Danijela Trajkova-Krstic	マケドニア	Museum of the Macedonian Struggle ・学芸員	地震考古学に関する情報収集	7月9日
17	Othman Tawfeeq	イラク	スレマニア博物館・副館長	視察	7月18日
18	Richard Matanik Lore・	バヌアツ	バヌアツ共和国文化センター レレマ世界遺産委員会	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修(個人研修)への協力	7月31日～8月31日
19	Richard Japuneyo Shing	バヌアツ	バヌアツ共和国文化センター 国家登録局	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修(個人研修)への協力	7月31日～8月31日
20	Feng Wang	中華人民共和国	南京林業大学材料科学・工程学院・大学院修士課程	共同研究のため	8月4日～9月6日
21	丁焱	中華人民共和国	天津大学建築歴史与理論研究所・副所長	古代建築および文化財保護・修理に関する情報交換	8月15日～8月30日
22	張早	中華人民共和国	天津大学建築学院・予備教師	古代建築および文化財保護・修理に関する情報交換	8月15日～8月30日
23	耿昀	中華人民共和国	天津大学建築学院・博士生	古代建築および文化財保護・修理に関する情報交換	8月15日～8月30日

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
24	李晴	中華人民共和国	天津大学建築学院・建築師	古代建築および文化財保護・修理に関する情報交換	8月15日～8月30日
25	王喆	中華人民共和国	天津大学建築学院・建築師	古代建築および文化財保護・修理に関する情報交換	8月15日～8月30日
26	John Ertl	アメリカ	金沢大学所属	文化財担当者研修制度に関する聞き取り調査	8月25日
27	宋紀蓉	中華人民共和国	故宮博物院・副院長	文化財保護技術の交流	8月28日
28	史寧昌	中華人民共和国	故宮博物院・文化財保護技術部・部長	文化財保護技術の交流	8月28日
29	雷勇	中華人民共和国	故宮博物院 文化財保護技術部・副部長	文化財保護技術の交流	8月28日
30	韦鐘鐘	中華人民共和国	故宮博物院基本建設弁公室 副主任	文化財保護技術の交流	8月28日
31	王丝滢	中華人民共和国	故宮博物院 外事処	文化財保護技術の交流	8月28日
32	Corinna Ludovica	デンマーク	デンマーク工科大学・大学院生	保存科学に関する研修	9月1日～12月1日
33	Jayed Md	バングラディッシュ	考古局	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
34	Tenzin Wangchuk	ブータン	文化省文化遺産保護部 考古局	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
35	Hour Sothorn	カンボジア	APSARA局	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
36	Katawai Sakiusa Rocky Nadakuitavuki	フィジー	フィジー博物館	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
37	Altynbekova Dana	カザフスタン	オストロフ・クリム有限会社 修復科学研究所	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
38	Akmatov Kunbolot Toktosunovich	キルギス	キルギス共和国 国家歴史博物館	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
39	Sivorravong Souksavanh Souk	ラオス	情報・文化・観光局 文化管理課	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
40	Ashraf Ismail	モルディブ	青年スポーツ省遺産局 国立博物館	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
41	Tserendorj Tsolmon	モンゴル	文化・スポーツ・観光省 文化遺産センター	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
42	Myo Sandar Oo	ミャンマー	文化省考古博物館局	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
43	Arshad Ullah	パキスタン	考古博物館局	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
44	Meyar Egan	パラオ	コロール州政府 保護・法務行局	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
45	Priyadarshani Weerakoon Mudiyansele Nirupa	スリランカ	国会遺産省考古局 北中部地域事務所	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
46	Abdulloev Umar	タジキスタン	文化省 ヒッサール歴史文化保護局	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
47	Srisomboon Puangporn	タイ	文化省芸術局 保存科学課	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
48	Kinh Dang Ngoc	ベトナム	南部社会科学研究所 考古学研究センター	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	9月2日～10月3日
49	金東烈	大韓民国	国立慶州文化財研究所・学芸研究士	韓国国立文化財研究所との共同研究	9月16日～11月7日
50	アレン・グリーンバーグ 他2名	アメリカ	在大阪・神戸アメリカ合衆国総領事	視察	9月17日
51	Magale Mauiliu Magele	サモア	サモア教育大臣	文化庁外国人芸術家・文化財専門家招へい事業	10月2日～10月10日
52	賈連敏	中華人民共和国	河南省文物考古研究院・院長	共同研究	10月27日～10月31日
53	曹艶朋	中華人民共和国	河南省文物局・調研員	共同研究	10月27日～10月31日
54	朱樹政	中華人民共和国中国	河南省財政庁教科文処・副所長	共同研究	10月27日～10月31日
55	楊振威	中華人民共和国	河南省文物考古研究院・館員	共同研究	10月27日～10月31日
56	梁兆奎	中華人民共和国	河南省文物考古研究院・館員	共同研究	10月27日～10月31日
57	Kinley Gyeltshen	ブータン	内務文化省文化局遺産保存課・技監	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	11月11日～12月4日
58	Leki Wangchuk	ブータン	内務文化省文化局遺産保存課・上級保存技師	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	11月11日～12月4日
59	Phuntsho Wangmo	ブータン	内務文化省文化局遺産保存課・技師	ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施する研修 (個人研修) への協力	11月11日～12月4日

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
60	Bui Min Tri	ベトナム	ベトナム都城研究センター・准教授	意見交換	11月24日～11月29日
61	Le Dinh Ngoc	ベトナム	ベトナム都城研究センター・研究員	意見交換	11月24日～11月29日
62	呉炎亮	中華人民共和国	遼寧省文物考古研究所・研究員	講演会・共同研究の打合せ	12月16日～12月19日
63	李 霞	中華人民共和国	遼寧省文物考古研究所・館員	講演会・共同研究の打合せ	12月16日～12月19日
64	高振海	中華人民共和国	遼寧省文物考古研究所・館員	講演会・共同研究の打合せ	12月16日～12月19日
65	肖俊涛	中華人民共和国	遼寧省文物考古研究所・館員	講演会・共同研究の打合せ	12月16日～12月19日
66	Ohn Mar	ミャンマー	ミャンマー連邦共和国 文化省 考古博物館部	ミャンマー文化省との拠点交流事業：文化財写真ワークショップ	27年1月18日～1月26日
67	Zaw Min Aung	ミャンマー	ミャンマー連邦共和国 文化省 考古フィールドスクール (ピイ)	ミャンマー文化省との拠点交流事業：文化財写真ワークショップ	27年1月18日～1月26日
68	Man Thit Nyein	ミャンマー	ミャンマー連邦共和国 文化省 考古フィールドスクール (ピイ)	ミャンマー文化省との拠点交流事業：文化財写真ワークショップ	27年1月18日～1月26日
69	バージ・マジョーリー	アメリカ	カルフォルニア大学パークレイ校・大学院博士課程	日韓交流の研究	2月27日
70	I Made Geria 他1名	インドネシア	インドネシア国立考古学研究所・所長	視察 (JICA 依頼)	3月6日
71	張誠允	大韓民国	国立文化財研究所・学芸研究士	保存科学分野における調査研究のための視察	3月12日
72	Carol Westrick	オランダ	ユネスコ世界遺産センター職員	文化的景観に関する調査研究	3月13日
73	罗蓓 (Luo Bei)	中華人民共和国	西南林業大学材料工程学院・講師	共同研究 (科研費)	27年3月14日～3月24日
74	Mand Vally	カンボジア	王立芸術大学卒業生	カンボジア文化遺産復興支援事業における招へい研修	3月22日～3月28日
75	Kheng Sokleng	カンボジア	王立芸術大学卒業生	カンボジア文化遺産復興支援事業における招へい研修	3月22日～3月28日
76	Tim Thida	カンボジア	王立芸術大学卒業生	カンボジア文化遺産復興支援事業における招へい研修	3月22日～3月28日

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】延べ35人

※用務先が海外である場合を含む。また国内研究者を海外に派遣したものの延べ9名を含む (用務欄に用務先を記載)

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	Harriet Deacon	イギリス	Archive Platform Correspondant	「コミュニティ主導の無形文化遺産記録とその活用に関するレポートの出版」専門家との会合出席 文化庁受託	26年4月20日
2	Metje Postma	オランダ	Leiden University, Lecturer	「コミュニティ主導の無形文化遺産記録とその活用に関するレポートの出版」専門家との会合出席 文化庁受託	26年4月20日
3	千葉 茂恵	インド共和国	ユネスコデリー事務所プログラムスペシャリスト	工芸技術の継承に係る実態調査に関するスリランカ政府との打合せ 文部科学省補助金	26年9月16日～9月20日
4	Ritu Sethi	インド共和国	Craft Revival Trust Chairperson	工芸技術の継承に係る実態調査に関するスリランカ政府との打合せ 文部科学省補助金	26年9月16日～9月20日
5	Timothy Curtis	タイ王国	ユネスコバンコク事務所文化ユニット・チーフ	「第三回IRCI運営理事会」出席 文化庁受託	26年9月30日～10月2日 (10月1日開催)
6	Ling Zhang	中華人民共和国	文化部対外文化連絡局国際処長	「第三回IRCI運営理事会」出席 文化庁受託	26年9月30日～10月2日 (10月1日開催)
7	Eunseon Jeong	大韓民国	文化財庁国際協力課プログラムスペシャリスト	「第三回IRCI運営理事会」出席 文化庁受託	26年9月30日～10月2日 (10月1日開催)
8	Chi Ben Nguyen	ベトナム社会主義共和国	Vietnam Institute of Culture and Arts Studies, Director	「ベトナムの危機に瀕する無形文化遺産保護 (バクニン省のドンホー木版画を事例として)」の本年度のワークショップの開催内容についての詳細打ち合わせ 文部科学省補助金	26年11月3日～11月7日
9	Hoai Son Bui	ベトナム社会主義共和国	Vietnam Institute of Culture and Arts Studies, 副所長	「Study of legal systems related to ICH in southeast Asia」第1回ワークショップ参加 文部科学省補助金	26年12月17日～21日 (12月19日開催)
10	Sypha Chanthavong	ラオス人民民主共和国	National University of Laos, Lecturer	「Study of legal systems related to ICH in southeast Asia」第1回ワークショップ参加 文部科学省補助金	26年12月17日～21日 (12月19日開催)

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
11	Irene Gonçalves dos Reis	東ティモール民主共和国	観光省文化遺産部研究広報課長	「Study of legal systems related to ICH in southeast Asia」第1回ワークショップ参加 文部科学省補助金	26年12月17日～22日 (12月19日開催)
12	Van Anh Thi Lai	ベトナム社会主義共和国	Division of International Law Dept, Ministry of Justice, Deputy Chief	「Study of legal systems related to ICH in southeast Asia」第1回ワークショップ参加 文部科学省補助金	26年12月17日～21日 (12月19日開催)
13	Kyaw Oo Lwin	ミャンマー連邦共和国	Department of Archaeology, National Museum and Library, Ministry of Culture, Director General	「Study of legal systems related to ICH in southeast Asia」第1回ワークショップ参加 文部科学省補助金	26年12月16日～23日 (12月19日開催)
14	Ade Meretui Tuvou Ratanabuabua	フィジー	Pacific Heritage Hub Manager, University of the South Pacific, Fiji	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」参加 文化庁受託	27年1月24日～29日 (1月26-27日開催)
15	Gulnara Aitpaeva	キルギス	Director, Aigine Cultural Research Centre	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」参加 文化庁受託	27年1月24日～28日 (1月26-27日開催)
16	Sang Mee Bak	大韓民国	Professor, Division of International Studies, Hankuk University of Foreign Studies	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」参加	27年1月25日～28日 (1月26-27日開催)
17	愛川紀子	日本	文化庁無形文化遺産アドバイザー	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」参加 文化庁受託	27年1月25日～29日 (1月26-27日開催)
18	Thi Hien Nguyen	ベトナム社会主義共和国	Center for Cultural Heritage Data, Vietnam Institute of Arts and Studies, Director	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」参加 文化庁受託	27年1月25日～28日 (1月26-27日開催)
19	Janet Blake	イラン	Assistant Professor of International Law, University of Shahid Beheshti, Meydan Danashgah, Evin, Tehran	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」参加 文化庁受託	27年1月25日～28日 (1月26-27日開催)
20	飯田卓	日本	国立民族学博物館准教授	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」参加 文化庁受託	27年1月27日～28日 (1月26-27日開催)
21	Molly Kaushal	インド	Professor, Janapada Sdampada Division Indira Gandhi National Centre for the Arts	「International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region”」参加 文化庁受託	27年1月24日～28日 (1月26-27日開催)
22	五十嵐祐介	日本	男鹿市教育委員会生涯学習課主任	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH revitalization: a case study of Dong Ho Woodblock printing」参加 文部科学省補助金	27年1月25日～30日 (1月27日-28日開催)
23	岡本健	日本	岡本健事務所代表取締役	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH revitalization: a case study of Dong Ho Woodblock printing」参加 文部科学省補助金	27年1月25日～30日 (1月27日-28日開催)
24	中山周	日本	アダチ伝統木版画技術保存財団理事	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH revitalization: a case study of Dong Ho Woodblock printing」参加 文部科学省補助金	27年1月26日～30日 (1月27日-28日開催)
25	原嶋亮輔	日本	Root design office	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH revitalization: a case study of Dong Ho Woodblock printing」参加 文部科学省補助金	27年1月26日～30日 (1月27日-28日開催)

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
26	並木誠士	日本	京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH revitalization: a case study of Dong Ho Woodblock printing」参加 文部科学省補助金	27年1月27日～30日 (1月27日-28日開催)
27	Steven Van Uytsel	日本	九州大学大学院法学研究院准教授	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH revitalization: a case study of Dong Ho Woodblock printing」参加 文部科学省補助金	27年1月25日～30日 (1月27日-28日開催)
28	Celestino da Silva Mendes Sarmento	東ティモール民主共和国	State Secretariat for Art and Culture, Head of Culture, Manufahi District, Timor-Leste	コミュニティ主導の保護活動のためのICHドキュメンテーションについての集中ワーキングセッション	27年3月14日～19日 (3月16日-18日開催)
29	Francisco Abelda da Silva	東ティモール民主共和国	Technical Staff, State Secretariat of Arts and Culture, Directorate-general of Arts and Culture	コミュニティ主導の保護活動のためのICHドキュメンテーションについての集中ワーキングセッション	27年3月14日～19日 (3月16日-18日開催)
30	Nuno Vasco Oliveira	東ティモール民主共和国	Adviser to Cultural Heritage Policies and Management Secretaria de Estado da Arte e Cultura, Avenida de Portugal	コミュニティ主導の保護活動のためのICHドキュメンテーションについての集中ワーキングセッション	27年3月14日～17日 (3月16日-18日開催)
31	Buddhi Keerthisena	スリランカ	Chairman, National Crafts Council	コミュニティ主導の保護活動のためのICHドキュメンテーションについての集中ワーキングセッション	27年3月14日～20日 (3月16日-18日開催)
32	Himali Jinadasa	スリランカ	Chairperson, National Enterprise Development Authority (NEDA), Advisor to the Hon. Minister, Ministry of Industry and Commerce	コミュニティ主導の保護活動のためのICHドキュメンテーションについての集中ワーキングセッション	27年3月14日～19日 (3月16日-18日開催)
33	Wettasinghe Appuhamilage Sandya Dilrukshi	スリランカ	Artisan, Eastern Province, Sri Lanka	コミュニティ主導の保護活動のためのICHドキュメンテーションについての集中ワーキングセッション	27年3月14日～19日 (3月16日-18日開催)
34	Subramaniyam Selvi	スリランカ	Artisan, Northern Province, Sri Lanka	コミュニティ主導の保護活動のためのICHドキュメンテーションについての集中ワーキングセッション	27年3月14日～19日 (3月16日-18日開催)
35	Steven Van Uytsel	日本	九州大学大学院法学研究院准教授	シンガポールの無形文化遺産保護に係る情報収集・ワークショップ参加 文化庁受託経費	27年3月24日～28日

【文化財防災ネットワーク推進事業】35人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	Giovanni BOCCARDI	Italy	UNESCO Chief, Emergency Preparedness and Response, Culture Sector	第3回国連防災世界会議の枠組みにおける国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」参加のため	27年3月11日～3月17日
2	Stefano De Caro	Italy	ICCROM Director	同上	27年3月11日～3月17日
3	Terry CANNON	UK	Institute of Development Studies Senior Research Fellow	同上	27年3月11日～3月17日
4	Yasmeen LARI	Pakistan	Heritage Foundation of Pakistan CEO	同上	27年3月11日～3月17日
5	Timothy CURTIS	Australia	UNESCO Bangkok	同上	27年3月11日～3月17日
6	Christopher MARRION	USA	Marrion Fire & Risk Consulting CEO	同上	27年3月11日～3月17日
7	Webber NDORO	Zimbabwe	African World Heritage Fund Director	同上	27年3月11日～3月17日
8	Randolph LANGENBACH	USA	1. Conservationtech Consulting CEO 2. Federal Emergency Management Agency (FEMA) Professor Emeritus . Senior Analyst	同上	27年3月11日～3月17日
9	Jeremy BARNS	Philippines	National Museum of the Philippines Director	同上	27年3月11日～3月17日
10	Alissandra CUMMINS	Barbados	Barbados Museum & Historical Society Director	同上	27年3月11日～3月17日
11	Paula HOLLAND	Australia	Secretariat of the Pacific Community (SPC) Manager/Acting Deputy Director	同上	27年3月11日～3月17日

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
12	Erika Hedhammar	Sweden	Swedish National Heritage Board Advisor, Conservator	同上	27年3月11日～3月17日
13	Diane Douglas	UK	ICOMOS ICORP	同上	27年3月11日～3月17日
14	Gabriele WEICHART	Austria	University of Vienna Senior Lecturer	同上	27年3月11日～3月17日
15	France DESMARAIS	Canada	ICOM Director, Programmes and Partnerships	同上	27年3月11日～3月17日
16	Nagtsho Dorji	Bhutan	Ministry of Home and Cultural Affairs Director, Heritage Conservation Division, Department of Culture	同上	27年3月11日～3月17日
17	Aparna TANDON	India	ICCROM Project Specialist, Collection Unit	同上	27年3月11日～3月17日
18	Akatsuki TAKAHASHI	Japan	UNESCO APiA Programme Specialist for Culture	同上	27年3月11日～3月17日
19	Scott BRANTING	USA	American Schools of Oriental Research (ASOR) Director of Geospatial Initiatives	同上	27年3月11日～3月17日
20	Xavier ROMAO	Portugal	University of Porto Assistant Professor	同上	27年3月11日～3月17日
21	Corine WEGENER	USA	Smithsonian Institution Cultural Heritage Preservation Officer	同上	27年3月11日～3月17日
22	Peter STONE	UK	Newcastle University Head of School	同上	27年3月11日～3月17日
23	Fredrik ROSEN	Denmark	The Danish Institute for International Studies (DIIS) Senior Researcher	同上	27年3月11日～3月17日
24	Akiko UMEZU	Japan	ICCROM Project Manager, Site Unit	同上	27年3月11日～3月17日
25	Shen-Wen CHIEN	Taiwan	National Science and Technology Center for Disaster Reduction Deputy Division Manager	同上	27年3月11日～3月17日
26	M. R. Rujaya ABHAKORN	Thailand	SEAMEO SPAFA Director	同上	27年3月11日～3月17日
27	Robyn RIDDETT	Australia	ICOMOS ICORP Treasurer	同上	27年3月11日～3月17日
28	Joseph KING	USA	ICCROM Unit Director, Site Unit	同上	27年3月11日～3月17日
29	Rohit JIGYASU	India	Ritsumeikan University Professor	同上	27年3月11日～3月17日
30	Henry Tzu NG	USA	World Monuments Fund Exective Vice President	同上	27年3月11日～3月17日
31	Michael TURNER	Israel	BEZALEL Academy of Arts and Design Jerusalem Professor	同上	27年3月11日～3月17日
32	Xiaofan DU	China	Fudan University Professor	同上	27年3月11日～3月17日
33	Julio VARGAS-NEUMANN	Peru	Catholic University of Peru Professor/President's Advisor	同上	27年3月11日～3月17日
34	Galina Angarova	USA	Tebtebba	同上	27年3月11日～3月17日
35	Pierpaolo Campostrini	USA	CORILA Managing Director	同上	27年3月11日～3月17日

2) 他機関の共同研究への参画実績

科学研究費補助金の研究分担者等として参画（延べ人数）

平成27年3月31日現在

国立文化財機構合計	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
124人	69人	37人	11人	13人	8人
	文化財研究所計	東京文化財研究所		奈良文化財研究所	
	55人	24人		31人	
	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	0人			

【東京国立博物館】延べ 37人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	法政大学	在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信	ヨーゼフ・クライナー	副館長 島谷弘幸
2	金沢美術工芸大学	日本における「美術」概念の再構築—語彙と理論にまたがる総合的研究	美術工芸学部 山崎剛	学芸企画部長 伊藤嘉章
3	九州国立博物館	タイにおける異文化の受容と変容—13世紀から18世紀の対外交物品を中心として—	原田あゆみ	企画課長 小泉恵英
4	東京藝術大学	日本とドイツの美術解剖学教育の発展と展開	大学院助教 宮永美知代	企画課デザイン室長 木下史青
5	筑波大学	東アジア文化の基層としての儒教の視覚イメージに関する研究	守屋正彦	企画課出版企画室長 勝木言一郎
6	大阪大学	5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究	藤岡穰	博物館教育課教育講座室長 浅湊毅
7	奈良文化財研究所	アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築	杉山洋	博物館教育課教育講座室長 浅湊毅
8	東京国立近代美術館	美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発	一條彰子	博物館教育課ボランティア室主任 研究員 藤田千織
9	東京藝術大学	文化財管理における美術品用語辞典の作成	河内晋平	博物館情報課情報管理室長 村田良二
10	島根大学	山陰地方における既掘考古資料の再検討と歴史文化遺産の持続的活用（法文学部山陰研究プロジェクト）	文学部准教授 岩本崇	列品管理課主任研究員 古谷毅
11	鹿児島大学	X線CT調査による古墳時代甲冑のデジタルアーカイブおよび型式学的新研究	総合研究博物館 准教授 橋本達也	列品管理課主任研究員 古谷毅
12	宮崎県立西都原考古博物館	西都原古墳群基礎調査における東京国立博物館との共同調査	学芸普及担当リーダー 副主幹 東憲章	列品管理課主任研究員 古谷毅
13	奈良県立橿原考古学研究所	三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獣鏡の総合的研究	水野敏典	列品管理課主任研究員 古谷毅
14	国立歴史民族博物館	武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質	上野祥史	列品管理課主任研究員 古谷毅
15	九州国立博物館	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発 —興福寺 国宝阿修羅像を中心に—	博物館科学課長 今津節生	列品管理課平常展調整室長 丸山士郎
16	成城大学	東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究	岩佐光晴	列品管理課平常展調整室長 丸山士郎
17	九州国立博物館	三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究	学芸研究部長 谷豊信	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男
18	京都大学人文科学研究所	中国典籍日本古写本の研究	高田時雄	調査研究課長 田良島哲
19	東京大学東洋文化研究所	共同研究 関野貞・竹島卓一による中国史跡調査写真に関する史料学的研究	（受入研究者）平勢陸郎	調査研究課長 田良島哲
20	実践女子大学	描いた女性たちに関する研究—桃山時代から明治・大正期まで	仲町 啓子	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
21	実践女子大学	描いた女性たちに関する研究 — 桃山時代から明治・大正期まで —	仲町啓子	調査研究課絵画・彫刻室主任研究員 山下善也
22	国立歴史民俗博物館	展示型共同研究「学際的研究による漆文化史の新構築」	教授 日高薫	調査研究課工芸室長 竹内奈美子
23	奈良県立橿原考古学研究所	藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究	今尾文昭	調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
24	大阪歴史博物館	大阪歴史博物館所蔵「高島多米治と下郷コレクションについて（岩手県瀬沢貝塚出土資料）の目録など作成に伴う調査」のため	加藤俊吾	調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
25	東京国立博物館	古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究	客員研究員 澤田むつ代	調査研究課工芸室 三田覚之
26	九州大学	作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究	井手誠之輔	調査研究課東洋室 塚本磨充
27	九州国立博物館	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発 —興福寺 国宝阿修羅像を中心に—	博物館科学課長 今津節生	保存修復課長 神庭信幸
28	国立民族学博物館	有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成	教授 園田直子	保存修復課長 神庭信幸、保存修復課調査分析室長 荒木臣紀、保存修復課環境保存室長 和田浩
29	成城大学	東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究	岩佐光晴	保存修復課環境保存室長 和田浩
30	森林総合研究所	木彫像の樹種識別技術の高度化	安部久	保存修復課環境保存室長 和田浩
31	筑波大学	被災博物館等の汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究	松井敏也	保存修復課環境保存室長 和田浩
32	大正大学	仁寿舍利塔の信仰と荘厳に関する総合的調査研究	加島勝	保存修復課環境保存室長 和田浩

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
33	九州国立博物館	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発—興福寺 国宝阿修羅像を中心に—	博物館科学課長 今津節生	保存修復課環境保存室長 和田浩
34	大阪大学	5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究	藤岡 穰	学芸研究部 浅見龍介
35	木更津市郷土博物館 金のすず、国立歴史民俗博物館	金鈴塚古墳研究(繊維等の織物資料担当)	稲葉昭智、上野祥史	客員研究員 澤田むつ代
36	上智大学	古代イスラエルの墓制と世界観に関する総合的研究	月本昭男	企画課特別展室アソシエイトフェロー 小野塚拓造
37	島根大学	山陰地方における既掘考古資料の再検討と歴史文化遺産の持続的活用(法文学部山陰研究プロジェクト)	文学部准教授 岩本崇	調査研究課考古室アソシエイトフェロー 河野正訓

【京都国立博物館】 延べ11人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	大正大学	仁寿舍利塔の信仰と荘厳に関する総合的調査研究	教授 加島勝	副館長 松本伸之
2	北海道大学	漢字文化圏における典籍の集積、国際伝播及びその伝承に関する実証的研究	名誉教授 石塚晴通	学芸部上席研究員 赤尾栄慶
3	成城大学	金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究—聖教の形成と伝播把握を基軸として	元教授 後藤昭雄	学芸部上席研究員 赤尾栄慶
4	法政大学	在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信	客席所員 クライナー・ヨーゼフ	学芸部上席研究員 赤尾栄慶
5	大阪大谷大学	多面的把握に基づく新義真言宗系聖教の解明と公開促進を果たす研究	教授 宇都宮啓吾	学芸部上席研究員 赤尾栄慶
6	成城大学	東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究	教授 岩佐光晴	学芸部列品管理室長 浅見龍介
7	東京国立博物館	多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究—図的典拠と分担製作の視点から—	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 浅瀨 毅	学芸部列品管理室長 浅見龍介
8	九州国立博物館	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発—興福寺 国宝阿修羅像を中心に—	学芸部博物館科学課長 今津節生	学芸部列品管理室長 浅見龍介
9	大阪大谷大学	多面的把握に基づく新義真言宗系聖教の解明と公開促進を果たす研究	教授 宇都宮啓吾	学芸部列品管理室主任研究員 羽田聡
10	国際日本文化研究センター	海賊史観から交易を検討する：国際法と密貿易—海賊商品流通の学術的・文明的的研究	教授 稲賀繁美	学芸部列品管理室研究員 呉孟晋
11	九州国立博物館	タイにおける異文化の受容と変容—13世紀から18世紀の対外交易品を中心として—	学芸部文化財課主任研究員 原田あゆみ	学芸部企画室研究員 末兼俊彦

【奈良国立博物館】 延べ13人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	九州大学	作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究	教授 井手誠之輔	学芸部保存修理指導室長 谷口 耕生
2	九州大学	作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究	教授 井手誠之輔	学芸部美術室研究員 北澤 菜月
3	福山市立大学	「ESD」にアプローチする「地域・世界遺産教育」の創造	教授 田淵五十生	学芸部情報サービス室長 吉澤 悟
4	九州国立博物館	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発—興福寺 国宝阿修羅像を中心に—	博物館科学課長 今津節生	学芸部保存修理指導室主任研究員 鳥越 俊行
5	東京文化財研究所	近江の古代中世彫像の基礎的調査・研究—基礎データと画像蓄積のために—	文化形成研究室長 津田徹英	学芸部上席研究員 岩田 茂樹
6	東京国立博物館	多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究—図的典拠と分担製作の視点から—	教育講座室長 浅瀨 毅	学芸部上席研究員 岩田 茂樹
7	東京国立博物館	多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究—図的典拠と分担製作の視点から—	教育講座室長 浅瀨 毅	学芸部情報サービス室研究員 山口 隆介
8	大阪市立大学	東大寺史の総合的再構成—『東大寺要録』を中心に—	名誉教授 米原永遠男	学芸部情報サービス室研究員 山口 隆介
9	九州国立博物館	三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究	学芸研究部長 谷 豊信	学芸部保存修理指導室主任研究員 鳥越 俊行
10	大阪大学	5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究	教授 藤岡 穰	学芸部上席研究員 岩田 茂樹
11	京都大学	東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態	准教授 稲本 泰生	学芸部保存修理指導室長 谷口 耕生
12	アジア文化交流センター	国宝桜ヶ丘銅鐸の総合診断調査と今後の保存活用—発見50年目を迎えるにあたって—	主任研究員 進村真之	学芸部保存修理指導室主任研究員 鳥越 俊行
13	北海道開拓記念館	アイヌ民族資料のX線CTによる現況調査および長期保存方針の策定に関する基礎的研究	学芸員 杉山智昭	学芸部保存修理指導室主任研究員 鳥越 俊行

【九州国立博物館】 延べ 8人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	大阪大学	5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究	文学研究科教授 藤岡 穰	展示課長 楠井 隆志
2	桃山学院大学	東南アジア史における絶対年代と相対年代の統合に関する研究：7～10世紀を中心に(科学研究費助成事業 基盤研究(B))	国際教養学部教授 深見純生	企画課特別展室主任研究員 原田あゆみ
3	奈良県立橿原考古学研究所	藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究(科学研究費助成事業 基盤研究(A))	調査部調査課長 今尾文昭	博物館科学課長 今津節生
4	京都大学	木製文化財の非破壊材質評価とデジタルアーカイブ作成(科学研究費助成事業 基盤研究(A))	生存圏研究所教授 杉山淳司	博物館科学課長 今津節生
5	鹿児島大学	X線CT調査による古墳時代甲冑のデジタルアーカイブおよび型式学的新研究(科学研究費助成事業 基盤研究(B))	総合研究博物館准教授 橋本達也	博物館科学課長 今津節生 企画課文化交流展室長 河野一隆

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
6	熊本大学	阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達・文化交流の実証的研究(科学研究費助成事業 基盤研究(B))	文学部准教授 杉井健	博物館科学課保存修復室主任研究員 志賀智史
7	九州大学	作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究(科学研究費助成事業 基盤研究(A))	人文科学研究院教授 井手誠之輔	文化財課資料管理室主任研究員 畑靖紀
8	北海道開拓記念館	アイヌ民族資料のX線CTによる現況調査および長期保存方針の策定に関する基礎的研究(科学研究費助成事業 基盤研究(C))	学芸員 杉山智昭	博物館科学課長 今津節生

【東京文化財研究所】延べ 24人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	東京藝術大学	迎賓館赤坂離宮天井絵画修復事業に関わる損傷と劣化原因の解明	木島 隆康	企画情報部副部長 山梨 絵美子
2	東京国立博物館	中世聖徳太子絵伝の図様展開に関する調査研究	沖松 健次郎	企画情報部主任研究員 小林 達朗
3	大阪大学	5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究	藤岡 稷	企画情報部主任研究員 皿井 舞
4	金沢美術工芸大学	日本における「美術」概念の再構築-語彙と理論にまたがる総合的研究	山崎 剛	企画情報部副部長 山梨 絵美子
5	奈良文化財研究所	アンコール遺跡群を事例とした考古情報資源共有化に関する研究	森本 晋	文化遺産国際協力センター長 川野邊 渉
6	早稲田大学演劇博物館	享保以降義太夫浄瑠璃作品のデジタル・アーカイブ化に向けての研究	鳥越 文蔵	無形文化遺産部長 飯島 満
7	金沢文庫	中世都市鎌倉を中心とする宗教的ネットワークの研究	西岡 芳文	企画情報部文化形成研究室長 津田 徹英
8	大谷大学	新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築	松川 節	企画情報部情報システム研究室長 二神 葉子
9	桃山学院大学	東南アジア史における絶対年代と相対年代の統合に関する研究:7-10世紀を中心に	深見 純生	文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 佐藤 桂
10	国士舘大学	ユーラシア古代遊牧社会形成の比較考古学	大沼 克彦	文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 久米 正吾
11	国立民族学博物館	ミュージアムと研究機関の協働による製作者情報の統合	丸川 雄三	副所長 田中 淳
12	東京大学	観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究	松岡 心平	無形文化遺産部無形文化財研究室長 高桑 いづみ
13	東京大学	文化遺産としてのマイクロフィルム保存に関する基礎研究:実態調査からの実証的分析	小島 浩之	保存修復科学センター保存科学研究室長 佐野 千絵
14	桃山学院大学	東南アジア史における絶対年代と相対年代の統合に関する研究:7-10世紀を中心に	深見 純生	文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 佐藤 桂
15	国立民族学博物館	ミュージアムと研究機関の協働による製作者情報の統合	丸川 雄三	副所長 田中 淳
16	愛知県立芸術大学	絵画表現における風土と技術-膠を中心とする伝統的材料の持続性に関する調査研究-	北田 克己	保存修復科学センター主任研究員 早川 典子
17	東京国立博物館	ディルムン文明の起源-バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究-	後藤 健	文化遺産国際協力センター客員研究員 原田 玲
18	鹿児島大学	住吉派の事例にみる古典受容の在り方の解明-画像パターンの分析を中心に-	下原 美保	文化遺産国際協力センター主任研究員 江村 知子
19	東京大学史料編纂所	日本絵画の〈復元〉に関する基礎的研究	鷹野 佳世子	保存修復科学センター主任研究員 吉田 直人
20	東京藝術大学	バーナード・ベレンソンと矢代幸雄の往復書簡に関する研究	越川 倫明	企画情報部副部長 山梨 絵美子
21	京都工芸繊維大学	蛍光寿命測定 of 文化財材料への応用に関する基礎研究	佐々木 良子	保存修復科学センター主任研究員 吉田 直人
22	茨城大学	内生細菌を利用した糸状菌形質転換体作出技術の開発	太田 寛行	保存修復科学センター研究員 佐藤 嘉則
23	茨城大学	糸状菌エンドファイト-内生バクテリア間相互作用の解明とその利用	成澤 才彦	保存修復科学センター研究員 佐藤 嘉則
24	大谷大学	モンゴル国カラコルム博物館における歴史研究を基軸とした情報化と国際協働の推進	松川 節	企画情報部情報システム研究室長 二神 葉子

【奈良文化財研究所】延べ31人

○科学研究費補助金 延べ28人

	機関名	研究課題	代表者名	分担者名
1	東京大学	日本目録学の確立と古典学研究支援ツールの拡充 一天皇家・公家文庫を中心に-	教授 田島 公	都城発掘調査部主任研究員 馬場 基
2	東京大学	ポーンデジタル画像管理システムの確立に基づく歴史史料情報の高度化と構造転換の研究	教授 山家 浩樹	都城発掘調査部主任研究員 馬場 基
3	鳴門教育大学	年輪年代学の総合的研究-文化財科学における応用的展開をめざして-	教授 米延 仁志	埋蔵文化財センター年代学研究室 研究員 星野 安治
4	東京大学	正倉院文書の多角的解析支援と広領域研究資源化	准教授 山口 英男	都城発掘調査部史料研究室長 渡邊 晃宏

	機関名	研究課題	代表者名	分担者名
5	立命館大学	古代中世東アジアの関所と交通政策	教授 鷹取 祐司	都城発掘調査部主任研究員 馬場 基
6	名城大学	クメール帝国の空間構造と地方拠点都市遺跡に関する研究	教授 溝口 明則	企画調整部長 杉山 洋
7	東京大学	植物・土器・人骨の研究を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究	教授 設楽 博己	都城発掘調査部考古第一研究室 研究員 庄田 慎矢
8	京都工芸繊維大学	近代日本の博覧会における建築展示に関する研究	教授 石田 潤一郎	都城発掘調査部遺構研究室 研究員 松下 迪生
9	京都工芸繊維大学	近代日本の博覧会における建築展示に関する研究	教授 石田 潤一郎	埋蔵文化財センター保存修復科学 研究室研究員 高妻 洋成
10	東京大学	歴史知識情報のオープンデータ化に向けたスキームと情報利活用手法の再構築	教授 久留島 典子	都城発掘調査部主任研究員 馬場 基
11	奈良大学	文字文化からみた東アジア社会の比較研究	教授 角谷 常子	都城発掘調査部史料研究室長 渡邊 晃宏
12	神戸女子大学	能・狂言面の創出と派生に関する学際的研究	教授 大谷 節子	埋蔵文化財センター保存修復科学 研究室研究員 高妻 洋成
13	大阪市立大学	東大寺史の再構成-『東大寺要録』を中心に-	特任教授 柴原 永遠男	文化遺産部歴史研究室長 吉川 聡
14	東京文化財研究所	西スマトラ州パダン歴史地区における文化遺産復興に関する総合的研究	所長 亀井 伸雄	企画調整部国際遺跡研究室アソ シエイトフェロー 田代 亜紀子
15	東北大学	年輪幅・年輪同位体比・DNAマーカーを用いた新たな木材産地推定法の検討	助教 大山 幹成	埋蔵文化財センター年代学研究 室 研究員 星野 安治
16	歴史民俗博物館	愛知県保美貝塚出土資料による考古学・人類学のコラボレーションモデルの構築と展開	准教授 山田 康弘	埋蔵文化財センター環境考古学 研究室研究員 山崎 健
17	歴史民俗博物館	愛知県保美貝塚出土資料による考古学・人類学のコラボレーションモデルの構築と展開	准教授 山田 康弘	埋蔵文化財センター客員研究員 茂原 信生
18	歴史民俗博物館	武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質	准教授 上野 祥史	都城発掘調査部考古第三研究室 研究員 川畑 純
19	歴史民俗博物館	武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質	准教授 上野 祥史	都城発掘調査部考古第一研究室 研究員 諫早 直人
20	大阪市立大学	密林に覆われた古代水利都市アンコール遺跡群の実像解明・保全・修復研究	准教授 原口 強	企画調整部長 杉山 洋
21	関西外国語大学	ミクロネシアにおける巨石文化の成立と社会複雑化のプロセスを探る考古学的研究	教授 片岡 修	企画調整部国際遺跡研究室 研究員 石村 智
22	元興寺文化財研究所	出土青銅製文化財の保存処理に使用されたアクリル樹脂の劣化について	研究員 植田 直見	埋蔵文化財センター長 難波 洋三
23	榎原考古学研究所	古墳時代中期における甲冑生産組織の研究-「型紙」と製作工程の分析を中心として-	総括研究員 吉村 和昭	企画調整部客員研究員 小林 謙一
24	京都大学	オントロジー指向による考古遺跡情報の知識体系化-東南アジア大陸部を事例に-	研究員 柴山 守	企画調整部国際遺跡研究室長 森本 晋
25	京都大学	オントロジー指向による考古遺跡情報の知識体系化-東南アジア大陸部を事例に-	研究員 柴山 守	企画調整部国際遺跡研究室アソ シエイトフェロー 田代 亜紀子
26	京都大学	覆屋とその周辺地盤が露出展示遺構の劣化に及ぼす影響に関する検討	教授 銚井 修一	埋蔵文化財センター保存修復科学 研究室研究員 脇谷 草一郎
27	京都大学	古代・中世東西回廊-ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交易網の歴史的動態-	研究員 柴山 守	企画調整部長 杉山 洋
28	京都大学	古代・中世東西回廊-ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交易網の歴史的動態-	研究員 柴山 守	企画調整部国際遺跡研究室アソ シエイトフェロー 田代 亜紀子

○学術研究助成基金助成金 延べ3人

	機関名	研究課題	代表者名	分担者名
1	九州国立博物館	三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究	学芸部長 谷 豊信	企画調整部展示企画室 研究員 丹羽 崇史
2	新潟県立看護大学	韓国出土古人骨への自然人類学的総合アプローチ	准教授 藤田 尚	都城発掘調査部考古第一研究室 研究員 庄田 慎矢
3	立命館大学	異宗教の相剋により生じた社会現象の比較史的研究-古代仏教説話に見る伝統と革新	教授 本郷 真紹	都城発掘調査部主任研究員 山本 崇

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】延べ0人

3) 研究者海外派遣実績（延べ人数）

平成27年3月31日現在

国立文化財機構合計	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
445人	127人	18人	14人	13人	82人
	文化財研究所計	東京文化財研究所		奈良文化財研究所	
	291人	149人		142人	
	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	文化財防災ネットワーク推進室			
	21人	6人			

【東京国立博物館】延べ18人（科学研究費補助金、その他助成金及び先方負担を除く）

（参考：科学研究費補助金、その他助成金及び先方負担を含む合計人数は56人）

○海外交流展経費・招へい共通事業費 11人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	鬼頭 智美	ドイツ・オーストリア	5月5日～13日	国際展覧会オーガナイザー会議に出席のため	招へい共通事業費
2	川村 佳男	韓国	8月6日～14日	韓国・国立中央博物館と当館との2014年度学術交流のため	同上
3	島谷 弘幸	中国	9月3日～5日	中国上海博物館との展覧会の交流にかかる協議のため	海外交流展経費
4	三田 覚之	韓国	10月20日～30日	韓国・国立中央博物館と当館との2014年度学術交流のため	招へい共通事業費
5	小野 真由美	米国	12月1日～6日	米国・サンフランシスコアジア美術館と当館との2014年度学術交流のため	同上
6	小泉 恵英	タイ	11月23日～27日	学術シンポジウム参加・タイ特別展準備のため	海外交流展経費
7	白井 克也	中国	11月30日～12月3日	特別展「東アジアの華 陶磁名品展」にかかる中国作品返却のため	同上
8	小泉 恵英	タイ	27年1月25日～1月29日	芸術局長表敬訪問及び視察のため	海外交流展経費
9	鬼頭 智美	米国	27年2月11日～2月18日	フィラデルフィア美術館「狩野派展」開幕式出席ほかのため	同上
10	古谷 毅	中国	27年2月26日～3月7日	中国・上海博物館と当館との2014年度学術交流のため	招へい共通事業費
11	竹内 奈美子	同上	27年3月8日～3月20日	同上	同上

○職員旅費（その他）：延べ7人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	白井 克也	中国	9月8日～12日	特別展「東アジアの華 陶磁名品展」にかかる中国作品輸送のため	日中韓陶芸名品展経費
2	島谷 弘幸	台湾	9月22日～23日	特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」にかかる展覧会閉幕御礼のため	館長裁量経費
3	小山 弓弦葉	中国	10月30日～11月5日	第9回国際校会議での研究発表のため	研究奨励費
4	同上	米国	12月15日～21日	研究奨励費による染織文化財調査のため	同上
5	島谷 弘幸	タイ	27年1月25日～1月29日	タイ芸術局長表敬訪問及び視察のため	研究奨励費
6	同上	英国	27年2月24日～3月1日	研究奨励費による文化財調査のため	同上
7	富田 淳	同上	同上	同上	同上

○科学研究費補助金：延べ28人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	古谷 毅	韓国	5月2日～5日	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）武装員の集積現象と古墳時代中期社会の特質にかかる調査のため	科学研究費補助金
2	小野塚 拓造	イスラエル	8月9日～24日	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）古代イスラエルの墓制と他界観に関する総合的研究にかかる考古学調査のため	同上
3	伊藤 信二	英国	8月12日～17日	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）東アジアにおける繻仏の基礎的研究のため	同上
4	塚本 慶充	同上	8月12日～18日	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究A）中世聖徳太子絵伝の図様展開に関する調査研究のため	同上
5	土屋 貴裕	同上	8月12日～19日	同上	同上
6	高木 結美	同上	同上	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）東アジアにおける繻仏の基礎的研究のため	同上
7	松嶋 雅人	マケドニア	8月20日～27日	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）「中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察」に関する調査のため	同上
8	和田 浩	フランス	9月21日～25日	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）海外における災害への取り組みに関する情報・資料収集のため	同上
9	金井 裕子	フランス・オランダ・イギリス	10月28日～11月6日	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究のため	同上
10	瀬谷 愛	同上	同上	同上	同上
11	塚本 慶充	中国	11月15日～18日	平成26年度科学研究費補助金（若手研究B）東アジアからみた乾隆画壇の総合的研究のため	同上
12	高橋 裕次	ドイツ	11月15日～22日	平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究のため	同上
13	鬼頭 智美	同上	11月15日～22日	同上	同上

	氏名	用務先	期間	用務	備考
14	木下 史青	韓国	12月14日～16日	平成26年度科学研究費補助金(基盤研究C)2014年日韓美術解剖学シンポジウム「顔」発表のため	同上
15	後藤 健	バーレーン	27年1月4日～2月1日	平成26年度科学研究費補助金(基盤研究(B)海外)ディルムン文明の起源-パハレーン島における古墳群の考古学的調査研究-調査のため	同上
16	田良島 哲	オーストラリア	27年1月26日～2月1日	博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究のため(白井科研)	同上
17	白井 克也	同上	同上	同上	同上
18	藍原 有理子	同上	同上	同上	同上
19	鈴木 希帆	同上	同上	同上	同上
20	鬼頭 智美	マレーシア・シンガポール	27年1月31日～2月4日	海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究のため(鬼頭科研)	同上
21	沖松 健次郎	インド	27年2月2日～2月7日	高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相にかかる調査のため(松本科研)	同上
22	塚本 磨充	同上	27年2月2日～2月8日	同上	同上
23	丸山 士郎	同上	同上	同上	同上
24	伊藤 信二	同上	同上	同上	同上
25	和田 浩	米国	27年2月3日～2月6日	木彫像の樹種識別技術の高度化に調査のため(安部科研分担金)	同上
26	藤田 千織	韓国	27年3月2日～3月5日	美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発にかかる調査のため(一條科研分担金・基盤研究(B))	同上
27	和田 浩	韓国	27年3月6日～3月8日	被災博物館等の汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究のため(松井科研分担金・基盤研究(A))	同上
28	塚本 磨充	中国	27年3月6日～3月9日	東アジアからみた乾隆画壇の総合的研究のため(塚本科研・若手研究(B))	同上

○その他助成金：延べ10人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	小泉 恵英	スリランカ	5月14日～5月20日	スリランカ東部トリンコマリ地区における内戦後の博物館および文化遺産の現状調査のため	国際交流基金助成金
2	古谷 毅	オランダ・ドイツ	11月29日～12月5日	平成館展示ケース改修にかかる工場検査のため	施設整備費補助金
3	木下 史青	オランダ・ドイツ	11月29日～12月5日	同上	同上
4	竹内 奈美子	ドイツ	12月1日～5日	同上	同上
5	松嶋 雅人	同上	12月1日～4日	同上	同上
6	和田 浩	同上	同上	同上	同上
7	高木 結美	同上	12月1日～5日	同上	同上
8	伊藤 久美	韓国	12月29日～27年1月2日	平成26年度助成金「華嚴宗祖師絵伝」義湘絵における祖師像制作にかかる調査のため	鹿島財団助成金
9	貫井香那子	ドイツ	27年3月4日～3月8日	平成館展示ケース制作にかかる検査のため	施設整備費補助金
10	品川 欣也	同上	同上	同上	同上

【京都国立博物館】延べ14人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	赤尾栄慶	中国	7月18日～21日	「中国中古仏教研究の新資料と新方法」国際検討会に参加	復旦大学
2	末兼俊彦	タイ	8月9日～8月16日	金工工房調査、古美術品調査、収蔵品調査	科研費
3	リンネ マリサ	オーストリア	10月14日～17日	応用美術の博物館とコレクションに関する国際委員会2014年大会参加・発表	日本のミュージアムのための国際発信力向上推進事業実行委員会
4	赤尾栄慶	中国	10月24日～27日	「仏教と文学—日本金剛寺仏教典籍研究」国際学術研討会に参加	科研費
5	リンネ マリサ	アメリカ	11月4日～9日	シンポジウム参加、展覧会観覧	プリンストン大学
6	永島明子	イギリス・フランス	11月9日～24日	漆器の調査	科研費
7	呉 孟晋	イギリス	12月10日～16日	作品調査、展覧会参観、打合せ	同上
8	赤尾栄慶	イギリス・フランス	27年1月22日～2月3日	敦煌写本の書誌学的調査研究	同上
8	呉 孟晋	台湾	12月25日～27日	展覧会参観	国立故宮博物院
9	赤尾栄慶	イギリス・フランス	27年1月22日～2月3日	敦煌写本の書誌学的調査研究	科研費
10	呉 孟晋	中国	27年2月22日～25日	展覧会参観	南京博物院
11	松本伸之	フランス	27年2月22日～27日	国際学術交流に関する協議他	ギメ美術館 他
12	植田義雄	同上	同上	同上	同上
13	植田義雄	台湾	27年3月4日～3月7日	海外の顧客獲得のための営業活動	国立歴史博物館 他
14	白石大作	同上	同上	同上	同上

【奈良国立博物館】延べ13人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	鳥越 俊行	中国	8月6日～8月15日	中国上海博物館との協定に基づく学術交流	中国上海博物館
2	原 瑛莉子	韓国	8月19日～9月12日	韓国国立慶州博物館との協定に基づく学術交流	韓国国立慶州博物館
3	山口 隆介	中国	12月18日～27年1月11日	中国河南博物院との協定に基づく学術交流	中国河南博物院

・その他の調査等のための海外渡航実績

	氏名	用務先	期間	用務	備考
4	清水 健	中国	4月5日～4月8日	科研費「東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態」に関する海外調査	雷峰塔、浙江省博物館 他（中国）
5	岩田 茂樹	フランス	5月20日～5月25日	なら仏像館展示室設計業務にかかる展示ケース及び展示施設の視察	ルーブル美術館 他（フランス）
6	山口 隆介	同上	同上a	同上	同上
7	岩戸 晶子	韓国	7月20日～7月22日	韓国国立慶州博物館における特別展開幕式参席と博物館運営に関する意見交換・交流のため	韓国国立慶州博物館
8	岩田 茂樹	アメリカ	8月30日～9月5日	科研費「春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究」に関する海外調査	カウンティ美術館（アメリカ）
9	岩井 共二	同上	同上	同上	同上
10	山口 隆介	同上	同上	同上	同上
11	岩戸 晶子	中国	12月15日～27年3月14日	学芸員等在外派遣研修	西北大学 他（中国）
12	谷口 耕生	インド	27年2月16日～2月22日	科研費「東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態」に伴う現地調査	シュラヴァスティ遺跡他（インド）
13	鳥越 俊行	中国	27年3月9日～3月11日	中国古代青銅器に関する打合せ	上海博物館（中国）

【九州国立博物館】延べ82人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	原田あゆみ	アメリカ	5月14日～20日	平成26年度科学研究費助成事業（基盤研究B）、「タイにおける異文化の受容と変容－13世紀から18世紀の対外交易品を中心として－」に係る情報収集および作品調査	科学研究費
2	三輪嘉六	中国	5月20日～24日	特別展「瀋陽故宮展」に係る協議及び事前調査	職員旅費
3	臺信祐璧	同上	5月20日～24日	同上	同上
4	市元壘	同上	5月20日～24日	同上	同上
5	志賀智史	ベトナム	6月10日～14日	ベトナム国立歴史博物館との学術文化交流事業のうち修理事業に係る調査と打合せ	同上
6	川畑憲子	中国	6月10日～14日	科研に関わる漆器資料調査	科学研究費
7	井上洋一	韓国	6月29日～7月3日	特別展「古代日本と百済の交流」に係る調査・競技	職員旅費
8	岸本圭	同上	6月29日～7月3日	同上	県費
9	小島篤	同上	6月29日～7月3日	同上	同上
10	三輪嘉六	中国	7月27日～8月3日	基盤（B）契丹壁画墓の集成と公開	職員旅費
11	臺信祐璧	同上	7月27日～8月3日	同上	科学研究費
12	今津節生	デンマーク、スウェーデン	8月8日～14日	基盤（A）「木製文化財の非破壊材質評価とデジタルアーカイブ作成に係る調査研究及び情報収集	同上
13	三輪嘉六	デンマーク、スウェーデン	8月8日～14日	北欧における博物館での水中文化遺産活用のある方を調査	職員旅費
14	望月規史	タイ	8月10日～16日	科学研究費「タイにおける異文化の受容と変容-13世紀から18世紀の対外交易品を中心として-」に係る調査	科学研究費
15	楠井隆志	韓国	8月27日～29日	特別展「古代日本と百済の交流」に係る協議	県費
16	三輪嘉六	中国	9月2日～5日	中国文物交流中心との学術交流協定に伴う調査	職員旅費
17	今津節生	同上	同上	同上	同上
18	市元壘	同上	同上	同上	同上
19	原田あゆみ	ベトナム	9月4日～15日	科学研究費「東南アジア史における絶対年代と相対年代の統合に関する研究：7-10世紀を中心に」に係る調査	科学研究費
20	河野一隆	イギリス	9月6日～13日	特別展「大英博物館100のモノが語る世界の歴史展」（仮称）に係る現地調査	職員旅費
21	西島亜木子	同上	同上	同上	同上
22	秋山純子	イギリス	9月13日～20日	基盤研究（C）赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究に係る調査	科学研究費
23	岸本圭	韓国	9月20日～26日	韓国民国公立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア世界」展に係る日本国内出品作品の輸送及び展示	先方負担
24	丸山猶計	台湾	9月21日～25日	特別展「台北 國立故宮博物院-神品至宝-」に係る作品集荷のため	同上
25	畑靖紀	同上	9月21日～24日	同上	同上
26	川畑憲子	台湾	9月21日～24日	特別展「神品至宝-台北 國立故宮博物院」展に関する借用	先方負担
27	井上洋一	同上	9月29日～10月2日	同上	同上
28	志賀智史	ベトナム	9月30日～10月3日	ベトナム国立歴史博物館との学術文化交流事業のうち修理事業に係る調査と監督業務	職員旅費

	氏名	用務先	期間	用務	備考
29	渡部史之	同上	9月30日～10月3日	同上	同上
30	森貫久美子	アメリカ	10月12日～19日	基盤研究(C)「赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究」に係る調査	科学研究費
31	秋山純子	同上	10月12日～19日	アメリカの博物館における保存科学・保存修復の調査見学及び専門家との意見交換	職員旅費
32	志賀智史	ベトナム	10月14日～17日	ベトナム国立歴史博物館との学術交流事業のうち修理事業に係る調査と打合せ業務	同上
33	井上洋一	台湾	10月22日～24日	特別展「台北 国立故宮博物院-神品至宝-」に関する借用作品返却	先方負担
34	渡部史之	ベトナム	10月28日～30日	ベトナム国立歴史博物館との学術文化交流事業のうち修理事業に係る監督業務	職員旅費
35	市元壘	中国	10月29日～31日	「瀋陽故宮展」に関する協議及び事前調査	同上
36	川畑憲子	同上	同上	同上	同上
37	川畑憲子	イギリス	11月1日～6日	科研に関わる漆器資料調査	科学研究費
38	今津節生	中国	11月3日～10日	西夏文書の保存と環境整備及び文化財保存修復調査	同上
39	臺信祐爾	中国	11月8日～11日	基盤(B)契丹壁画墓の集成と公開-唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解-に係る調査	同上
40	市元壘	中国	11月9日～14日	科研費 基盤研究(B)契丹壁画墓の集成と公開に係る調査	同上
41	臺信祐爾	オーストラリア	11月15日～20日	特別展「アフガン美術」(仮)に係る作品調査	職員旅費
42	原田あゆみ	タイ	11月21日～27日	科学研究費「タイにおける異文化の受容と変容-13世紀から18世紀の対外交易品を中心として-」に係る調査及びシンポジウム参加	科学研究費
43	望月規史	同上	11月21日～26日	同上	同上
44	三輪嘉六	同上	11月23日～27日	2017年日タイ修好130周年特別展「タイ展(仮)」に係る協議及びタイ芸術局との共同研究の中間報告会出席のため	職員旅費
45	今津節生	同上	同上	同上	科学研究費
46	岸本圭	韓国	11月23日～26日	韓民国国立公州博物館特別展「東アジア文化交流の宝庫、武寧王陵」展に係る日本国内出品作品の撤収および輸送	先方負担
47	森貫久美子	同上	11月27日～30日	韓国・古宮博物館で開催される特別展「琉球王国の至宝」輸送同行および展示のため	同上
48	川畑憲子	台湾	12月8日～17日	特別展「台北 国立故宮博物院-神品至宝-」に係る作品返却のため、新春特別公開「徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」に係る作品借用のため	同上
49	鷲頭桂	同上	12月9日～19日	特別展「台北国立故宮博物院-神品至宝-」作品返却、購入・寄託候補作品調査、トピック展示「八幡展」(仮称)の調査研究	先方負担、職員旅費
50	畑靖紀	同上	12月10日～16日	特別展「台北国立故宮博物院-神品至宝-」に係る作品返却のため	先方負担
51	三輪嘉六	同上	12月11日～13日	特別展「台北国立故宮博物院-神品至宝」開催終了に係る打合せのため	職員旅費
52	市元壘	韓国	12月20日～24日	特別展「古代百済と日本の交流」に関する文化財借用	職員旅費
53	小嶋篤	同上	同上	同上	県費
54	河野一隆	中国	27年1月4日～6日	基盤(B)三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究に係る調査	科学研究費
55	臺信祐爾	同上	27年1月6日～10日	成都博物院との交流事業に係る協議のため	職員旅費
56	三輪嘉六	同上	27年1月10日～14日	特別展「美の国 日本II」に係る出品交渉、交流協定館との協議	職員旅費
57	市元壘	同上	27年1月11日～14日	同上	職員旅費
58	原田あゆみ	韓国	27年1月18日～20日	貸与作品展示替え作業	職員旅費
59	原田あゆみ	タイ	27年1月25日～2月3日	日タイ修好130周年記念特別展「タイ」展に係る協議および作品調査	同上
60	池内一誠	ミャンマー	27年1月26日～2月1日	体験型展示室「あじっば」において展開する体験用資料、伝統文化・工芸品についての調査	県費
61	市元壘	中国	27年1月26日～31日	特別展「始皇帝と大兵馬俑」作品調査	先方負担
62	畑靖紀	ポルトガル、パチカン市国、スペイン	27年1月31日～2月11日	海外交流展「特別展 大航海時代の南蛮美術(仮称)」に係る出品交渉および作品調査	職員旅費
63	鷲頭桂	同上	同上	同上	同上
64	川畑憲子	同上	同上	同上	同上
65	今津節生	タイ	27年1月31日～2月1日	タイ修好130周年記念特別展「タイ」展に係る協議および作品調査	同上
66	渡部史之	韓国	27年1月31日～2月3日	「琉球王国の至宝 沖縄の輝かしい歴史」展に係る貸与作品の撤収業務	先方負担
67	三輪嘉六	中国	27年2月11日～12日	「美の国日本」出陳交渉	職員旅費

	氏名	用務先	期間	用務	備考
68	市元壘	同上	同上	同上	同上
69	西島亜木子	台湾	27年2月22日～24日	特別展「大英博物館展100のモノが語る世界の歴史」にかかる調査	同上
70	河野一誠	同上	同上	同上	同上
71	釜瀬進一郎	韓国	27年2月23日～3月1日	学術文化交流協定に基づく交流事業に係る研修	県費
72	池内一誠	同上	27年3月2日～8日	同上	同上
73	大西浩二	同上	同上	同上	職員旅費
74	市元壘	同上	27年3月5日～8日	特別展「百済展」返却業務	同上
75	岸本圭	同上	27年3月5日～10日	同上	県費
76	小嶋篤	同上	27年3月16日～22日	学術文化交流協定に基づく交流事業に係る研修	同上
77	臺信祐爾	スイス	27年3月20日～26日	特別展「ビュールレ・コレクション展（仮）」に係る作品調査	職員旅費
78	井上洋一	同上	同上	同上	同上
79	大西浩二	同上	同上	同上	同上
80	三輪嘉六	韓国	27年3月26日～28日	「美の国日本」出陳交渉	職員旅費
81	大石淳子	同上	同上	同上	同上
82	楠井隆志	同上	同上	同上	県費

【東京文化財研究所】延べ 149人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	安倍雅史	フランス	5月2日～5月29日	ユネスコ会議「To Safeguard Syria's Cultural Heritage: International Expert Meeting」への参加	運営費交付金
2	安倍雅史	キルギス	10月26日～11月5日	人材育成ワークショップの実施	運営費交付金
3	飯島満	フランス	11月23日～11月28日	第9回無形文化遺産の保護に関する政府間委員会出席	運営費交付金
4	飯島満	台湾	12月17日～12月18日	台湾師範大学との共同研究の打合せ	運営費交付金
5	井内千紗	スリランカ	5月13日～5月21日	内戦後の博物館及び文化遺産の現状調査	受託経費
6	石崎武志	韓国	5月19日～5月23日	国際シンポジウム「International Conference on Conservation of Stone and Earthen Architectural Heritage」への出席	運営費交付金
7	石崎武志	フランス	8月25日～8月29日	研究打合せおよび視察	運営費交付金
8	犬塚将英	香港	9月23日～9月26日	IIC(International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works)2014国際会議への出席	運営費交付金
9	犬塚将英	台湾	12月24日～12月26日	文化資産保存研究センター主催「Science Quest: Cultural Heritage Conservation and Environmental Changes」での講演	他機関負担
10	今城裕香	ミャンマー	9月8日～9月11日	ミャンマー協同組合省小規模産業局とのMoU調印	運営費交付金
11	江村知子	ポーランド	27年1月12日～1月23日	日本絵画作品の調査	運営費交付金
12	江村知子	アメリカ	27年3月9日～3月14日	アメリカの動産文化財保護制度の調査	運営費交付金
13	江村知子	オーストラリア	27年3月16日～3月21日	在外日本古美術品保存修復協力事業における修復候補作品の調査	運営費交付金
14	岡田健	韓国	5月26日～5月28日	日韓共同研究発表会	運営費交付金
15	岡田健	中国	8月23日～9月1日	敦煌壁画の保護に関する日中共同研究	運営費交付金
16	岡田健	中国	10月6日～10月19日	壁画保存に関するシンポジウムへの出席他	他機関負担 運営費交付金
17	小川絢子	中国	8月23日～9月1日	敦煌壁画の保護に関する日中共同研究	運営費交付金
18	小川絢子	タジキスタン	9月10日～10月3日	フルブック壁画断片の保存修復と展示	助成金
19	小川絢子	イタリア、ドイツ	11月26日～12月5日	西欧諸国によるユーラシア壁画の修復事例の視察と意見交換	運営費交付金
20	小川絢子	タジキスタン	27年3月1日～3月10日	タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の整理・記録	運営費交付金
21	加藤雅人	メキシコ	11月3日～11月15日	LATAM-JPC「紙の保存と修復」開催	運営費交付金
22	加藤雅人	ドイツ	11月30日～12月14日	在外日本古美術品保存修復協力事業ワークショップの開催	運営費交付金
23	加藤雅人	ポーランド	27年1月13日～1月17日	日本絵画作品の調査	運営費交付金
24	加藤雅人	ポーランド	27年2月1日～2月6日	在外日本古美術品保存修復協力事業における修復候補作品の調査	運営費交付金
25	加藤雅人	オーストラリア	27年3月14日～3月19日	在外日本古美術品保存修復協力事業における修復候補作品の調査	運営費交付金
26	狩野麻里子	ネパール	27年2月8日～2月22日	協力相手国調査	受託経費
27	亀井伸雄	アルメニア	5月25日～6月2日	アルメニア文化省との合意書締結、講演、視察及びワークショップ開催	受託経費 他機関負担
28	亀井伸雄	カタール	6月19日～6月25日	第38回世界遺産委員会に係る調査の実施	運営費交付金
29	亀井伸雄	フィジー	8月6日～8月12日	MoU調印	受託経費
30	亀井伸雄	ミャンマー	9月8日～9月11日	ミャンマー協同組合省小規模産業局とのMoU調印	運営費交付金
31	亀井伸雄	オーストリア	10月5日～10月11日	漆工芸品の保存と修復に関するワークショップの実施	運営費交付金
32	亀井伸雄	台湾	10月22日～10月24日	台湾師範大学とのMoU締結	運営費交付金
33	亀井伸雄	インドネシア	10月31日～11月4日	歴史地区復興支援ワークショップの開催	科学研究費
34	亀井伸雄	ブータン	12月20日～12月24日	協議およびワークショップの実施	受託経費
35	川野邊渉	カタール	6月14日～6月25日	第38回世界遺産委員会への出席	運営費交付金

	氏名	用務先	期間	用務	備考
36	川野邊渉	ミャンマー	6月10日～6月13日	ミャンマー壁画保存ワークショップの実施	受託経費
37	川野邊渉	フィジー	8月6日～8月12日	MoU調印	受託経費
38	川野邊渉	ミャンマー	9月8日～9月11日	ミャンマー協同組合省小規模産業局とのMoU調印	運営費交付金
39	川野邊渉	オーストリア	10月5日～10月11日	漆工芸品の保存と修復に関するワークショップの実施	運営費交付金
40	川野邊渉	台湾	10月22日～10月24日	台湾師範大学とのMoU締結	運営費交付金
41	川野邊渉	イタリア、フランス	11月15日～11月30日	イタリア：ICCROM理事会出席 フランス：世界無形遺産政府間委員会出席	他機関負担 運営費交付金
42	川野邊渉	台湾	12月17日～12月19日	台湾師範大学との共同研究の打合せ	運営費交付金
43	菊池理予	韓国	8月18日～8月30日	無形文化遺産に関する調査	運営費交付金
44	菊池理予	台湾	12月17日～12月19日	台湾師範大学との共同研究の打合せ	運営費交付金
45	北川瑞季	台湾	10月22日～10月24日	台湾師範大学とのMoU締結	運営費交付金
46	北川瑞季	ドイツ	11月30日～12月8日	在外日本古美術品保存修復協力事業ワークショップの開催	運営費交付金
47	橋川英規	アメリカ	9月11日～9月18日	「ポスト1945日本美術ディスカッション・グループ/現代美術懇談会主催シンポジウム」での発表およびアーカイブ調査	国際交流基金
48	橋川英規	アメリカ	11月12日～11月16日	「海外日本美術資料専門家(司書)の招へい・研修・古流事業」の招へい者現地ヒアリング	他機関負担
49	楠京子	ミャンマー	6月10日～6月18日	ミャンマー壁画保存ワークショップの実施	受託経費
50	楠京子	メキシコ	11月3日～11月15日	LATAM-JPC「紙の保存と修復」開催	運営費交付金
51	楠京子	ドイツ	11月30日～12月14日	在外日本古美術品保存修復協力事業ワークショップの開催	運営費交付金
52	楠京子	ミャンマー	27年1月18日～1月27日	ミャンマー国の文化遺産(美術工芸品)保護に係る現地調査および研修	受託経費
53	楠京子	ポーランド	27年2月1日～2月6日	在外日本古美術品保存修復協力事業における修復候補作品の調査	運営費交付金
54	楠京子	オーストラリア	27年3月14日～3月21日	在外日本古美術品保存修復協力事業における修復候補作品の調査	運営費交付金
55	朽津信明	韓国	5月26日～5月28日	日韓共同研究発表会	運営費交付金
56	小林公治	トルコ、イスラエル	6月1日～6月19日	トルコ：イスタンブール市内宮殿での日本由来文物調査および螺鈿調査 イスラエル：螺鈿調査	他機関負担 科学研究費
57	小林公治	イタリア、スペイン	6月28日～7月13日	イタリア、スペイン両国内に伝世する南蛮螺鈿漆器の調査	科学研究費
58	小林公治	中国	10月24日～10月30日	中国浙江省における螺鈿工房および螺鈿漆器の調査	科学研究費
59	小林公治	アメリカ	27年2月6日～2月20日	アメリカの博物館美術館に所蔵される朝鮮螺鈿漆器を中心とした研究	助成金
60	久保田裕道	フィジー	8月6日～8月12日	MoU調印	受託経費
61	久保田裕道	韓国	10月15日～10月17日	ユネスコ無形遺産諮問機構(NGO)国際シンポジウム参加	他機関負担
62	久保田裕道	ネパール	27年2月15日～2月22日	協力相手国調査	受託経費
63	久保田裕道	韓国	27年3月2日～3月14日	無形文化遺産の保護及び伝承に関する日韓研究交流	運営費交付金
64	久米正吾	キルギス	7月4日～7月26日	日本-キルギス合同発掘調査参加	科学研究費
65	久米正吾	トルコ	9月9日～9月15日	ヨーロッパ考古学者協会大会での発表	助成金 科学研究費
66	久米正吾	キルギス	10月14日～11月5日	人材育成ワークショップの実施	受託経費
67	久米正吾	キルギス	11月28日～12月9日	拠点交流の資料整理、打合せ	運営費交付金
68	久米正吾	イラン	27年1月7日～1月21日	イランにおける文化遺産視察および先方関係機関との意見交換	運営費交付金
69	境野飛鳥	カタール	6月14日～6月25日	第38回世界遺産委員会の出席	運営費交付金
70	境野飛鳥	フィジー	8月6日～8月12日	MoU調印	受託経費
71	境野飛鳥	オーストリア	10月5日～10月11日	漆工芸品の保存と修復に関するワークショップの実施	運営費交付金
72	境野飛鳥	イタリア、フランス	11月7日～11月30日	イタリア：ICOMOS総会およびICCROM理事会への参加 フランス：世界無形遺産政府間委員会出席	運営費交付金
73	境野飛鳥	アメリカ	27年1月13日～1月19日	GHQ/SCAPの史料調査	科学研究費
74	境野飛鳥	アメリカ	27年3月9日～3月14日	アメリカの動産文化財保護制度の調査	運営費交付金
75	佐藤桂	カンボジア、ミャンマー	6月3日～6月15日	カンボジア：ICC会議への参加 ミャンマー：ミャンマー建築保存ワークショップの実施	受託経費 運営費交付金
76	佐藤桂	カンボジア	7月20日～7月27日	タネイ遺跡の測量技術指導	運営費交付金
77	佐藤桂	ブータン	9月21日～9月27日	拠点ブータン事業に係る現地調査	受託経費
78	佐藤桂	ベトナム	9月4日～9月7日	チャンパ建築調査	科学研究費
79	佐藤桂	インドネシア	10月29日～11月4日	歴史地区復興支援ワークショップの開催	科学研究費
80	佐藤桂	カンボジア、フランス	12月2日～12月10日	カンボジア：ICC(アンコール遺跡救済国際調整委員会)への出席 フランス：文化財情報関連調査	運営費交付金 科学研究費
81	佐藤桂	ブータン	12月20日～12月24日	協議およびワークショップの実施	受託経費
82	佐藤桂	ミャンマー	27年1月11日～1月19日	第3回木造建造物保存研修の実施	受託経費
83	佐野千絵	香港	9月21日～9月27日	IIC(International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works)2014国際会議への出席	運営費交付金
84	皿井舞	イギリス、フランス、ドイツ	10月9日～11月3日	日本美術に関するデータベース構築のための共同研究他	他機関負担 運営費交付金
85	嶋原由美	ドイツ	11月12日～11月23日	漆工芸品の保存と修復に関するワークショップの実施	運営費交付金

	氏名	用務先	期間	用務	備考
86	島崎正弘	フランス	8月25日～8月29日	研究打合せおよび視察	運営費交付金
87	城野誠治	タイ	27年2月22日～3月1日	螺鈿扉に関するセミナーへの参加、螺鈿扉及び日本製螺鈿製品に関する調査	助成金 運営費交付金
88	友田正彦	カンボジア	5月18日～5月21日	タネイ遺跡保存に関するAPSARA機構との協議	運営費交付金
89	友田正彦	ミャンマー	5月31日～6月11日	ミャンマー建築保存ワークショップの開催、ユネスコワークショップへの参加	他機関負担 受託経費
90	友田正彦	ミャンマー	8月17日～8月22日	バガン遺跡インベントリ更新に関するユネスコワークショップへの出席	他機関負担
91	友田正彦	中国	9月2日～9月7日	科研費による資料収集および比較研究のための海外調査	科学研究費
92	友田正彦	ブータン	9月18日～9月27日	拠点ブータン事業に係る現地調査	受託経費
93	友田正彦	インドネシア	10月29日～11月4日	歴史地区復興支援ワークショップの開催	科学研究費
94	友田正彦	中国	11月22日～11月27日	科研費による資料収集および比較研究のための海外調査	科学研究費
95	友田正彦	ミャンマー	12月2日～12月6日	バガン遺跡保存ユネスコ日本信託基金事業に係るワークショップへの参加	他機関負担
96	友田正彦	中国	12月15日～12月19日	2014年度国際会議「木造建造物の保存理念を再考する一木造建造物のある文化的景観と地域社会」への参加	他機関負担
97	友田正彦	ブータン	12月20日～12月24日	協議およびワークショップの実施	受託経費
98	友田正彦	ミャンマー	27年1月16日～1月31日	木造建造物保存研修の実施、およびバガン遺跡保存ユネスコ日本信託基金事業ワークショップへの参加	受託経費
99	友田正彦	ベトナム	27年3月1日～3月10日	科学研究費助成事業「考古遺物等を通じたベトナム木造建築様式の形成過程に関する研究」に係る現地調査	科学研究費
100	中山俊介	ドイツ、カタール	6月10日～6月26日	ドイツ：世界遺産委員会に関連したドイツのサイト視察 カタール：第38回世界遺産委員会出席	運営費交付金
101	中山俊介	メキシコ、カナダ	9月16日～9月29日	近代文化遺産（洋紙関連）の保存状態及び修復手法に関する現地調査	運営費交付金
102	中山俊介	台湾	12月19日～12月22日	漆喰飾りの修復を主とした研修会における現地指導および講演	他機関負担
103	早川典子	韓国	8月18日～8月20日	染織文化財に使用される材料に関する調査	運営費交付金
104	早川典子	香港	9月23日～9月26日	IIC(International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works)2014国際会議への出席	運営費交付金
105	早川典子	ドイツ	11月14日～11月19日	漆工芸品の保存と修復に関するワークショップの実施	運営費交付金
106	原田玲	香港	5月13日～5月18日	Asian Academy for Heritage Management HIA Workshopへの参加	受託経費
107	平出秀文	アルメニア	5月25日～6月2日	アルメニア文化省との合意書締結及びワークショップの開催	受託経費
108	藤澤明	アルメニア	4月21日～4月28日	アルメニア歴史博物館におけるワークショップの打合せと準備	受託経費
109	藤澤明	アルメニア	5月18日～5月30日	アルメニア歴史博物館におけるワークショップ開催	受託経費
110	藤澤明	エジプト	8月8日～8月22日	大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト・短期専門家(労働安全衛生2)としての講義	他機関負担
111	二神葉子	カタール	6月14日～6月26日	第38回世界遺産委員会に係る調査の実施	受託経費
112	二神葉子	モンゴル	9月4日～9月9日	国際会議「世界遺産カラコルムの10年-回顧と展望-」での発表	他機関負担 科学研究費
113	二神葉子	フランス	11月23日～11月30日	第9回無形文化遺産の保護に関する政府間委員会出席	運営費交付金
114	二神葉子	タイ	27年1月12日～1月17日	ラチャプラディット寺院螺鈿扉に関する調査及び打合せ	運営費交付金
115	二神葉子	タイ	27年2月22日～3月1日	螺鈿扉に関するセミナーへの参加、螺鈿扉及び日本製螺鈿製品に関する調査	運営費交付金
116	古澤誠	台湾	10月22日～10月24日	台湾師範大学とのMoU締結	運営費交付金
117	増淵麻里耶	イタリア、ドイツ	11月26日～12月5日	西欧諸国によるユーラシア壁画の修復事例の視察と意見交換	運営費交付金
118	増淵麻里耶	タイ、ミャンマー	27年1月12日～1月24日	タイ：ラチャプラディット寺院螺鈿扉に関する調査 ミャンマー：漆製品、壁画の材質分析および技術指導	受託経費 運営費交付金
119	森井順之	韓国	5月19日～5月23日	国際シンポジウム「International Conference on Conservation of Stone and Earthen Architectural Heritage」への参加及び発表	運営費交付金
120	森井順之	韓国	5月26日～5月28日	日韓共同研究発表会	運営費交付金
121	森井順之	メキシコ	10月14日～10月18日	歴史建造物の構造解析に関する国際会議(SAHC2014)への参加、発表	運営費交付金
122	山内和也	エジプト	4月15日～4月24日	JICA GEM-CCプロジェクト打合せ及び中間レビューへの出席	他機関負担
123	山内和也	フランス、アルメニア	5月25日～6月2日	フランス：ユネスコ会議「To Safeguard Syria's Cultural Heritage: International Expert Meeting」への参加 アルメニア：アルメニア文化省との合意書締結及びワークショップの開催	受託経費 運営費交付金
124	山内和也	フランス	7月7日～7月12日	バーミヤーン第5期事業打合せ会議	他機関負担 運営費交付金
125	山内和也	エジプト	8月15日～8月22日	JICA GEM-CCプロジェクト打合せ及び協議	他機関負担
126	山内和也	タジキスタン	9月28日～10月3日	フルブック壁画断片の保存修復と展示	運営費交付金
127	山内和也	中国	10月5日～10月11日	国際シンポジウム「Dunhuang Forum 2014」への参加	他機関負担 運営費交付金
128	山内和也	カザフスタン、キルギス	10月24日～11月3日	カザフスタン：博物館、史跡整備事業等の視察 キルギス：人材育成ワークショップの実施および博物館、史跡整備事業等の視察	運営費交付金
129	山内和也	イタリア	11月26日～12月3日	西欧諸国によるユーラシア壁画の修復事例の視察と意見交換	運営費交付金
130	山内和也	イラン	27年1月18日～1月23日	イランにおける文化遺産視察および先方関係機関との意見交換	運営費交付金

	氏名	用務先	期間	用務	備考
131	山内和也	タジキスタン、カザフスタン、ウズベキスタン	27年2月15日～2月20日	西アジア諸国等プロジェクト（中央アジア）に関する打合せ	運営費交付金
132	山内和也	タジキスタン	27年3月4日～3月8日	タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の整理・記録	運営費交付金
133	山下好彦	ミャンマー	6月10日～6月20日	ミャンマー漆工芸調査	受託経費
134	山下好彦	オーストリア	10月5日～10月12日	漆工芸品の保存と修復に関するワークショップの実施	他機関負担 運営費交付金
135	山下好彦	ドイツ、オランダ	11月12日～12月5日	ドイツ：ケルン東洋美術館に於ける漆工芸品修復に関するワークショップの運営 オランダ：アムステルダム国立美術館所蔵作品の調査および助言	他機関負担 運営費交付金
136	山下好彦	タイ、ミャンマー	27年1月12日～1月24日	タイ：ラチャプラディット寺院螺鈿扉に関する調査 ミャンマー：ミャンマー国の文化遺産（美術工芸品）保護に係る現地調査	受託経費 運営費交付金
137	山下好彦	スペイン	27年1月25日～1月30日	輸出漆器の現地調査	運営費交付金
138	山下好彦	タイ	27年2月22日～3月1日	螺鈿扉に関するセミナーへの参加、螺鈿扉及び日本製螺鈿製品に関する調査	運営費交付金
139	山下好彦	イギリス	27年3月9日～3月14日	在外日本古美術品修復協力事業に係る漆工品調査	運営費交付金
140	山田大樹	カンボジア	7月24日～7月31日	タネイ遺跡の測量技術指導	運営費交付金
141	山田大樹	タジキスタン	9月10日～10月3日	フルブック壁画断片の保存修復と展示	運営費交付金
142	山田大樹	イラン	27年1月7日～1月23日	イランにおける文化遺産視察および先方関係機関との意見交換	運営費交付金
143	山田大樹	マレーシア	27年2月11日～2月19日	協力相手国調査	受託経費
144	山田祐子	ドイツ	11月30日～12月14日	在外日本古美術品保存修復協力事業ワークショップの開催	運営費交付金
145	山田祐子	ポーランド	27年1月12日～1月23日	日本絵画作品の調査	運営費交付金
146	山田祐子	オーストラリア	27年3月14日～3月21日	在外日本古美術品保存修復協力事業における修復候補作品の調査	運営費交付金
147	山梨絵美子	韓国	11月13日～11月15日	特別展覧会「東洋を蒐集する Collecting Asia: A History of Asian Art Collections in the Japanese Colonial Period」連携国際学術シンポジウムでの発表	他機関負担
148	山梨絵美子	イタリア	11月17日～11月23日	矢代幸雄、バーナード・ベレンソン往復書簡にかかる調査	科学研究費
149	山藤正敏	タジキスタン	27年3月1日～3月10日	タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の整理・記録	運営費交付金

【奈良文化財研究所】延べ142人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	佐藤 由似	カンボジア	4月6日～4月12日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
2	杉山 洋	カンボジア	4月8日～4月13日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
3	森山 晋	フランス	4月21日～4月28日	考古学におけるコンピューターの応用と数量的方法学会（CAA）2014に出席のため	運営費交付金
4	田村 朋美	大韓民国	4月24日～4月29日	慶・閔交流保存科学研究会への参加。大邱国立博物館および慶州国立博物館所蔵遺物の調査・施設見学を行う	運営費交付金
5	降幡 順子	大韓民国	4月25日～4月27日	慶・閔交流保存科学研究会への参加	科学研究費
6	杉山 洋	カンボジア	4月29日～5月2日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
7	川畑 純	大韓民国	5月2日～5月4日	出土資料（韓国出土倭系甲冑）の調査	科学研究費
8	星野 安治	中国	5月9日～5月16日	科学研究課題にかかる調査・研究資料収集のため	科学研究費
9	石村 智	アメリカ	5月12日～5月18日	アジア太平洋地域水文化遺産会議にて研究発表	科学研究費
10	脇谷 草一郎	大韓民国	5月19日～5月22日	ICOMOS-ISGS Koreaにおける研究発表	運営費交付金
11	星野 安浩	中華人民共和国	5月19日～5月27日	天津市・河北省・山西省の古建築における年代学調査に対する協力・指導・助言	先方負担
12	鈴木 智大	中華人民共和国	5月19日～5月27日	天津市・河北省・山西省の古建築における建築史的調査	科学研究費
13	佐藤 由似	カンボジア	5月19日～7月25日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
14	杉山 洋	カンボジア	5月29日～5月31日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
15	石村 智	カンボジア、シンガポール	6月2日～6月8日	科研費「アンコール王朝末期の総合的歴史学建築」のための資料調査	科学研究費
16	杉山 洋	カンボジア	6月2日～6月12日	カンボジア・西トップ遺跡の調査	助成金
17	森本 晋	カンボジア	6月4日～6月10日	アンコール地域における遺跡登録情報に関する調査	科学研究費
18	丹波 崇史	モンゴル	6月5日～6月11日	SEAA 6（第6回世界東アジア考古学会）への参加	科学研究費
19	渡邊 敦子	カンボジア	6月5日～6月9日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
20	田村 朋美	モンゴル	6月9日～6月10日	SEAA 6（第6回世界東アジア考古学会）への参加・研究発表	運営費交付金
21	田代 亜紀子	カタール	6月14～6月25日	第38回世界遺産委員会出席	運営費交付金
22	恵谷 浩子	カタール	6月14日～6月25日	第38回世界遺産委員会出席	運営費交付金
23	箱崎 和久	大韓民国	6月25日～6月28日	慶州市主催シンポジウム：「慶州の東宮と月池」への出席	運営交付金
24	田代亜紀子	タイ	6月27日～7月1日	基盤（B）「古代・中世東西回廊ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交易網の歴史的動態（代表：京都大学 柴山守）研究打ち合わせ	科学研究費
25	杉山洋	カンボジア	6月29日～7月3日	カンボジア・西トップ遺跡の調査	科学研究費
26	森先 一貴	ロシア連邦	7月2日～7月9日	ロシア連邦ティモフスコエ州における日露国際共同遺跡調査	科学研究費

	氏名	用務先	期間	用務	備考
27	石村 智	台湾・パラオ	7月11日～7月17日	パラオにおける日本統治時代遺構の調査	科学研究費
28	石橋 茂登	大韓民国	7月12日～7月18日	研究打ち合わせ、資料調査	運営費交付金 先方負担
29	庄田慎矢	大韓民国	7月12日～7月18日	研究打ち合わせ、資料調査	運営費交付金 先方負担 科学研究費
30	海野 聡	大韓民国	7月18日～7月21日	韓国古建築調査	科学研究費
31	渡邊 晃宏	大韓民国	7月23日～7月25日	日韓共同研究による木簡調査・撮影	運営費交付金 先方負担
32	山本 祥隆	大韓民国	7月23日～7月25日	日韓共同研究による木簡調査・撮影	運営費交付金 先方負担
33	諫早 直人	大韓民国	7月23日～7月25日	日韓共同研究による木簡調査・撮影	運営費交付金 先方負担
34	栗山 雅夫	大韓民国	7月23日～7月25日	日韓共同研究による木簡調査・撮影	運営費交付金
35	杉山 洋	カンボジア ベトナム	7月23日～8月7日	ベトナム・タンロン皇城遺跡の調査指導およびカンボジア・西トップ遺跡の調査	文化庁受託 科学研究費
36	石村 智	ベトナム	7月24日～7月28日	拠点交流事業ベトナム出土木製品に関する調査	文化庁受託 先方負担
37	清野 孝之	ベトナム	7月24日～7月28日	タンロン皇城遺跡出土瓦と展示方法検討支援	先方負担
38	諫早 直人	イギリス	8月2日～8月10日	大英博物館所蔵ゴーランドコレクションの調査	科学研究費
39	今井 昇樹	中華人民共和国	8月5日～8月8日	国際シンポジウムでの報告	運営費交付金
40	石村 智	フィジー	8月6日～8月12日	拠点交流事業によるフィジーでの現地調査	東文研 (文化庁受託)
41	高妻 洋成	ベトナム・タイ	8月7日～8月12日	拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業ワークショップ開催および出土木製品調査	文化庁受託
42	和田 一之輔	ベトナム・タイ	8月7日～8月12日	拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業ワークショップ開催および出土木製品調査	文化庁受託
43	田代 亜紀子	ベトナム・タイ	8月7日～8月12日	拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業ワークショップ開催および出土木製品調査	文化庁受託
44	平澤 毅	中華民国	8月9日～8月14日	台湾の名勝地の現状に関する現地調査等	科学研究費
45	佐藤 由似	カンボジア	8月14日～9月10日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
46	庄田 慎矢	イギリス、フランス、スイス	8月18日～8月31日	研究打ち合わせ、資料調査、学会発表	科学研究費
47	廣瀬 覚	大韓民国	8月18日～10月2日	慶州国立文化財研究所との発掘調査交流	運営費交付金
48	森本 晋	カンボジア	8月23日～8月26日	アンコール地域における上智大学調査資料に関する調査	科学研究費
49	田代 亜紀子	カンボジア・タイ	8月23日～8月29日	アンコール遺跡群調査および研究打ち合わせ	科学研究費
50	菊地淑人	インドネシア・シンガポール	8月24日～8月30日	海外文化的景観（世界遺産）に関する現地調査	運営費交付金
51	玉田 芳英	中華人民共和国	8月25日～8月28日	京都大学大学院講義のための資料調査研究	他機関負担
52	難波 洋三	中華人民共和国	8月25日～8月29日	河南省文物考古研究院との協議、ならびに資料調査	運営費交付金
53	丹波 崇史	中華人民共和国	8月25日～8月28日	河南省文物考古研究院との協議、ならびに資料調査	運営費交付金
54	大澤正吾	中華人民共和国	8月25日～8月28日	河南省文物考古研究院との協議、ならびに資料調査	運営費交付金
55	杉山 洋	カンボジア	8月25日～8月31日	プレアヴィヒア遺跡の調査	科学研究費
56	森先 一貫	チェコ	8月25日～9月1日	ミクロフ国際人類学会議への参加・研究発表	助成金 運営交付金
57	渡邊 晃宏	大韓民国	8月27日～9月1日	研究分担者をつとめる科学研究費による研究の遂行のため	科学研究費
58	杉岡 奈穂子	チェコ・スイス・フランス	9月7日～9月21日	The 18th International Microscopy Congress 2014 (Plague)にて成果発表 欧州で流通したインド製唐栴布の材料調査	科学研究費
59	清野 孝之	アメリカ	9月15日～9月23日	コロンビア大学との研究協力および交流	運営費交付金
60	星野 安浩	アメリカ	9月15日～9月23日	コロンビア大学との研究協力および交流	運営費交付金
61	若杉智宏	大韓民国	9月24日～9月26日	日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究にかかる調査	運営費交付金
62	田代 亜紀子	イギリス	10月6日～10月19日	資料収集・庭園観光調査	科学研究費
63	佐藤由似	中華民国・中華人民共和国	10月9日～10月18日	海から見た近世カンボジアに関する調査	助成金
64	海野 聡	大韓民国	10月10日～10月13日	韓国古建築調査	科学研究費
65	前川 歩	大韓民国	10月10日～10月13日	シンポジウム「森羅の王宮 建築物 復元」への参加・発表	先方負担
66	小野健吉	イギリス	10月10日～10月19日	資料収集・庭園観光調査	科学研究費
67	脇谷 草一郎	ベルギー	10月12日～10月19日	SWBSS 2014 (Salt Weathering of Buildings and Stone Sculptures) における研究発表	運営費交付金
68	杉山 洋	カンボジア	10月16日～10月22日	西トップ遺跡の調査修復	助成金
69	加藤 真二	中華人民共和国	10月18日～10月25日	北京で開かれるシンポジウムへの出席および天津、済南で関連の調査を行う	私費 (研修規程に基づく研修)

	氏名	用務先	期間	用務	備考
70	森本 晋	中華民国	10月20日～10月24日	PNC(太平洋近隣会)2014年次大会「博物館コンピューティング」で発表	運営費交付金
71	石橋 茂登	大韓民国	10月27日～10月29日	「高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査」に伴う韓国文化財庁、国立扶余文化財研究所へのヒアリング及び陵山里古墳群見学	文化庁受託
72	降幡順子	大韓民国	10月27日～10月29日	「高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査」に伴う韓国文化財庁、国立扶余文化財研究所へのヒアリング及び陵山里古墳群見学	文化庁受託
73	前川 歩	大韓民国	10月27日～10月29日	「高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査」に伴う韓国文化財庁、国立扶余文化財研究所へのヒアリング及び陵山里古墳群見学	文化庁受託
74	杉山 洋	カンボジア	10月27日～10月31日	西トップ遺跡の調査修復	助成金
75	田代 亜紀子	インドネシア	10月27日～11月6日	科研研究調査および文化省受託拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業ワークショップ準備	科学研究費 文化庁受託
76	諫早 直人	大韓民国	10月30日～11月3日	日韓交渉の考古学—古墳時代—第2回共同研究会における通訳および資料調査への参加	科学研究費
77	海野 聡	中華人民共和国	11月1日～11月3日	中国文献資料・町並み・庭園調査	科学研究費
78	伊東隆夫	中華人民共和国	11月4日～12月12日	科学研究費研究課題の研究遂行のための調査および研究資料の収集	科学研究費 先方負担
79	佐藤 由似	カンボジア	11月5日～12月31日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
80	森本 晋	タイ・カンボジア	11月11日～11月15日	アンコール関連資料の調査ならびにアンコール地域における上智大学調査資料調査打ち合わせ	科学研究費
81	加藤 真二	大韓民国	11月12日～11月16日	アジア旧石器協議会への出席、海外共同研究の成果についての発表	運営費交付金
82	石橋 茂登	アメリカ	11月12日～11月18日	在外青銅器関係資料調査	科学研究費
83	杉山 洋	カンボジア・ミャンマー	11月17日～11月25日	西トップ遺跡の調査修復およびミャンマーにおける遺跡保存と活用	科学研究費
84	石村 智	ミャンマー	11月23日～11月29日	ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野におけるワークショップでの講義	文化庁受託
85	森本 晋	ミャンマー	11月23日～11月30日	ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野におけるワークショップでの講義	文化庁受託
86	小野健吉	大韓民国	11月25日～11月28日	慶州市・森羅文化遺産研究院主催「慶州の古代宮殿遺跡の望ましい活用に関する国際シンポジウム」招聘参加	先方負担
87	石村 智	カンボジア	12月3日～12月9日	科研費「アンコール王朝末期の総合的歴史学建築」のための資料調査	科学研究費
88	杉山 洋	カンボジア	12月3日～12月9日	西トップ遺跡の調査修復	助成金
89	今井 昇樹	中華人民共和国	12月3日～12月12日	洛陽、鄴城出土資料の調査	運営費交付金
90	栗山 雅夫	中華人民共和国	12月3日～12月12日	洛陽、鄴城出土資料の調査	運営費交付金
91	森本 晋	フランス	12月7日～12月15日	ギメ美術館・フランス極東におけるアンコール関係データベースの調査	科学研究費
92	田村 朋美	中華人民共和国	12月8日～12月17日	中国南部におけるガラス製遺物の調査	科学研究費 運営費交付金
93	星野 安浩	ペルー	12月12日～12月23日	植生調査、遺跡年輪試料に関する研究打合せ、考古・歴史年代測定に関する現状調査	先方負担
94	恵谷 浩子	中華人民共和国	12月15日～12月19日	ACCU2014年度国際会議出席	先方負担
95	杉山 洋	カンボジア	12月17日～12月26日	カンボジア・アンコール・トム内の水利企画についての調査	科学研究費
96	青木 敬	大韓民国	12月27日～12月30日	新羅・朝鮮王陵の構築技術調査および現地調査	科学研究費
97	田代 亜紀子	タイ	27年1月4日～1月8日	科研「古代・中世東西回廊—ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交流網の歴史的動態」研究打ち合せ・アジア歴史地理情報学会出席	科学研究費
98	加藤 真二	バングラディッシュ	27年1月8日～1月18日	ACCU実施の「文化遺産ワークショップ2014」講師	先方負担
99	佐藤 由似	カンボジア	1月14日～1月27日	海から見た近世カンボジアに関する調査	助成金
100	高妻 洋成	インドネシア	27年1月15日～1月21日	拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業国際研究会参加とインドネシア出土木製品調査	文化庁受託
101	田村朋美	インドネシア	27年1月15日～1月21日	拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業国際研究会参加とインドネシア出土木製品調査	文化庁受託
102	松村 恵司	カンボジア	27年1月17日～1月21日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金
103	上田浩司	カンボジア	27年1月17日～1月21日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力にかかる西トップ遺跡の調査研究ならびに監査・視察	運営費交付金
104	田中 康成	カンボジア	27年1月17日～1月21日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力にかかる西トップ遺跡の調査研究ならびに監査・視察	運営費交付金
105	高梨 泰裕	カンボジア	27年1月17日～1月21日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力にかかる現状確認	運営費交付金
106	杉山 洋	カンボジア	1月17日～1月24日	カンボジア・西トップ遺跡の調査修復	運営費交付金
107	高田 祐一	カンボジア	1月19日～1月24日	アンコール遺跡群における砂岩材の調査	助成金
108	飯田 ゆりあ	カンボジア	1月19日～1月24日	カンボジア出土資料の写真撮影	科学研究費
109	井上 直夫	カンボジア	1月19日～1月24日	カンボジア出土資料の写真撮影	科学研究費
110	田村 朋美	大韓民国	1月28日～2月3日	大韓文化財研究院2015国際学術大会に参加、および光州出土ガラス製品の調査	科学研究費

	氏名	用務先	期間	用務	備考
111	加藤 真二	中華人民共和国	2月4日～2月7日	平城宮跡展示館の基本設計修正のための資料調査	国交省受託
112	諫早 直人	モンゴル	2月8日～2月16日	匈奴・突厥墓出土金属製品の調査	科学研究費
113	森本 晋	カンボジア ラオス	2月10日～2月15日	アンコール期の遺構・遺物の記録方法に関する調査	科学研究費
114	佐藤 由似	カンボジア ミャンマー	2月10日～3月14日	アンコール文化遺産の保護に関する研究協力およびミャンマーにおける文化財調査	運営費交付金
115	杉山 洋	カンボジア ミャンマー	2月13日～2月23日	カンボジアおよびミャンマーにおけるポストアンコール期遺跡の調査	科学研究費
116	森本 晋	ミャンマー	2月19日～2月25日	アンコール朝と平行する時期の遺跡・遺構・遺物の記載方法に関する現地調査	科学研究費
117	田代 亜紀子	ミャンマー	2月20日～2月24日	科研「古代・中世東西回廊ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交易網の歴史的動態」現地調査	科学研究費
118	石村 智	ミャンマー	2月20日～2月26日	ミャンマーにおけるポストアンコール期関連遺跡の現地調査	科学研究費
119	森先 一貴	ロシア連邦	2月24日～3月1日	科研「北東アジア新石器時代の広領域分散型社会における相互影響の解明に向けた考古学研究」に関わる資料調査	科学研究費
120	星野 安治	グアテマラ	2月28日～3月15日	ボーリング調査、植生調査	科学研究費
121	平澤 毅	中華人民共和国	3月5日～3月11日	中国の名勝地の現状に関する現地調査等	科学研究費
122	馬場 基	中華民国	3月10日～3月12日	科研「古代中世東アジアの関所と交通政策」による資料見学のため	科学研究費
123	神野 恵	中華民国	3月10日～3月12日	科研「古代中世東アジアの関所と交通政策」による資料見学のため	科学研究費
124	浦 蓉子	中華民国	3月10日～3月12日	科研「古代中世東アジアの関所と交通政策」による資料見学のため	科学研究費
125	諫早 直人	大韓民国	3月11日～3月16日	国立歴史民俗博物館共同研究に係る資料調査、第2回研究会および全羅南北道西南海岸地域の墳墓踏査	先方負担
126	杉山 洋	カンボジア	3月17日～3月20日	カンボジアにおけるポストアンコール遺跡の調査	科学研究費
127	小池 伸彦	中華人民共和国	3月17日～3月21日	遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
128	清野 孝之	中華人民共和国	3月17日～3月21日	遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
129	今井 晃樹	中華人民共和国	3月17日～3月21日	遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
130	廣瀬 覚	中華人民共和国	3月17日～3月21日	遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
131	石田 由紀子	中華人民共和国	3月17日～3月21日	遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
132	栗山 雅夫	中華人民共和国	3月17日～3月21日	遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
133	高妻 洋成	オーストリア	3月18日～3月23日	漆喰資料の調査（ウィーン世界博物館所蔵大名屋敷模型の漆喰壁）	科学研究費
134	鈴木 智大	大韓民国	3月20日～3月22日	韓国慶州の古建築および遺跡の建築史的調査	科学研究費
135	玉田 芳英	大韓民国	3月25日～3月27日	京都大学大学院講義のための資料調査研究および発掘現場の視察	他機関負担
136	清野 孝之	韓国	3月25日～3月27日	韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
137	廣瀬 覚	韓国	3月25日～3月27日	韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
138	小田 裕樹	韓国	3月25日～3月27日	韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
139	諫早 直人	韓国	3月25日～3月27日	韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
140	若杉 智宏	韓国	3月25日～3月27日	韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）	運営費交付金
141	今井 晃樹	中国	3月27日～3月30日	北京大学で開催される学会への参加	運営費交付金
142	森本 晋	イタリア	3月28日～4月6日	国際学会「考古学におけるコンピューターへの応用と数量的方法（CA A）」出席	運営費交付金

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】延べ21人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	大貫 美佐子	オランダ（ライデン・アムステルダム）	26年4月17日～22日	「コミュニティ主導の無形文化遺産記録とその活用に関するレポートの出版」専門家との会合	文化庁受託経費
2	荒田 明夫	中華人民共和国（北京）	26年5月27日～29日	中国C2センター（CRIHAP）の第3回運営理事会出席	文化庁受託経費
3	三島 貴雄	中華人民共和国（北京）	26年5月27日～29日	中国C2センター（CRIHAP）の第3回運営理事会出席	文化庁受託経費
4	荒田 明夫	フランス共和国（パリ）	26年5月31日～6月8日	第5回ユネスコ無形文化遺産総会及びカテゴリー I I I センター会議出席	文化庁受託経費
5	辻 修次	マレーシア（クアラルンプール）	26年6月20日～6月22日	東南アジア島嶼部におけるICH研究動向に係る情報収集	文化庁受託経費

	氏名	用務先	期間	用務	備考
6	荒田 明夫	サモア (アピア)	26年8月31日～9月5日	"The parallel event on safeguarding ICH for sustainable development in SIDS"出席	文化庁補助金(防災)
7	大貫 美佐子	スリランカ (コロンボ)	26年9月15日～20日	「工芸技術の継承に係る実態調査」(平成26年度文科省政府開発援助ユネスコ活動費補助金事業)に関するスリランカ政府との打合せ	文部科学省補助金
8	児玉 茂昭	スリランカ (コロンボ)	26年9月16日～19日	「工芸技術の継承に係る実態調査」(平成26年度文科省政府開発援助ユネスコ活動費補助金事業)に関するスリランカ政府との打合せ	文部科学省補助金
9	荒田 明夫	大韓民国 (杭州)	26年11月3日～11月5日	韓国C2センター(ICHCAP)の第5回運営理事会出席	文化庁受託経費
10	児玉 茂昭	マレーシア (クアラルンプール)	27年1月25日～28日	「International Experts Meeting of the Project "Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region"」参加	文化庁受託経費
11	三島 貴雄	マレーシア (クアラルンプール)	27年1月24日～27日	「International Experts Meeting of the Project "Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region"」参加	文化庁受託経費
12	サンドロヴィッチ ティムール	マレーシア (クアラルンプール)	27年1月24日～29日	「International Experts Meeting of the Project "Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region"」参加	文化庁受託経費
13	荒田 明夫	マレーシア (クアラルンプール)	27年1月24日～29日	「International Experts Meeting of the Project "Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region"」参加	文化庁受託経費
14	大貫 美佐子	ベトナム (ハノイ)	27年1月26日～29日	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH revitalization: a case study of Dong Ho Woodblock printing」参加	文部科学省補助金
15	児玉 茂昭	ベトナム (ハノイ)	27年1月28日～31日	「Workshop on the Roles of the Community Centre in ICH revitalization: a case study of Dong Ho Woodblock printing」参加	文部科学省補助金
16	野嶋 洋子	ミャンマー (ヤンゴン)	27年2月8日～12日	ヤンゴン大学とのネットワーク構築	文化庁受託経費
17	大貫 美佐子	シンガポール (シンガポール)	27年3月24日～28日	「Conference on Geographical Indications at the Crossroad of Trade, Development, and Culture in Asia-Pacific」出席及び現地調査	文化庁受託経費
18	児玉 茂昭	シンガポール (シンガポール)	27年3月25日～28日	「Conference on Geographical Indications at the Crossroad of Trade, Development, and Culture in Asia-Pacific」出席及び現地調査	文化庁受託経費
19	荒田 明夫	ベトナム (ハノイ)	27年3月23日～26日	「The closing meeting on the integration of intangible cultural heritage in education for sustainable development」出席	文化庁受託経費
20	サンドロヴィッチ ティムール	ベトナム (ハノイ)	27年3月25日～28日	「無形文化遺産の保護に関する研究のマッピング」事業における専門家との打ち合わせ及び現地調査	文化庁受託経費
21	荒田 明夫	中華人民共和国 (北京・曲阜)	27年3月30日～4月2日	中国C2センター(CRIHAP)の第4回運営理事会出席	

【文化財防災ネットワーク推進室】延べ6人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	栗原 祐司	スウェーデン	8月1日～11日	ICOM-CAMOC Conference2014 参加他	美術館・歴史博物館重点分野推進支援事業補助金
2	益田 兼房	ポルトガル	10月2日～11日	イコモス文化遺産防災国際学術委員会会議参加及び大地震被災復旧状況調査	同上
3	岩田 侑利子	韓国	10月6日～10日	Museums and the Web Asia2014会議出席	同上
4	栗原 祐司	エジプト	10月9日～14日	ICOM-UMAC/CECA年次大会への出席及びポスター発表・文化財現況調査	同上
5	益田 兼房	イタリア	11月3日～15日	イタリアの文化遺産防災マップ調査及びイコモス防災部会出席	同上
6	栗原 祐司	スイス	27年2月17日～22日	国連防災世界会議打合せ及び関連施設視察	同上

c-② 調査研究テーマ一覧

平成27年3月31日現在

国立文化財機構合計	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
202 件	145 件	71 件	18 件	18 件	38 件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	56 件	25 件	31 件	0 件	
	アジア太平洋無形文化遺産研究センター				
	1 件				

【東京国立博物館】 計71件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者（役職・名前）
1	收藏品・寄託品及び関連品に関する調査研究	学芸研究部	調査研究課長 田良島哲
2	特別調査「法隆寺献納宝物」（第36次）「書跡」「聖徳太子伝私記（古今目録抄）」（第1年度）	学芸研究部	調査研究課長 田良島哲
3	特別調査「書跡」第12回	学芸研究部	調査研究課長 田良島哲
4	特別調査「工芸」第6回	学芸研究部	調査研究課工芸室長 竹内奈美子
5	特別調査「彫刻」第4回	学芸研究部	列品管理課平常展調整室長 丸山 士郎
6	油彩画の材料・技法に関する共同調査	学芸研究部	保存修復課長 神庭信幸
7	漆塗籠棺残片の保存に関する共同調査	学芸研究部	保存修復課長 神庭信幸
8	東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査	学芸研究部	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
9	創立150年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究	学芸研究部	調査研究課長 田良島哲
10	板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
11	中世聖徳太子絵伝の図像展開に関する調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課保存修復室主任研究員 沖松健次郎
12	模写資料における書の受容・鑑賞に関する基礎的研究（学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	調査研究課書跡・歴史室客員研究員 恵美千鶴子
13	博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	調査研究課考古室長 白井克也
14	宮崎県西都原古墳群出土資料基礎調査（共同調査）	学芸研究部	列品管理課主任研究員 古谷毅
15	家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究（学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	列品管理課主任研究員 古谷毅
16	縄文時代における浅鉢形土器の研究（学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	調査研究課考古室研究員 井出浩正
17	博物館における文化財の情報資源化に関する研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課長 高橋裕次
18	古墳時代の農具研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課考古室アソシエイトフェロー 河野正訓
19	古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究（学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	客員研究員 澤田むつ代
20	法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究（学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	調査研究課工芸室研究員 三田寛之
21	多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 浅湊毅
22	海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	学芸企画部企画課国際交流室長 鬼頭智美
23	能狂言面の美術史的アプローチによる基礎的調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	学芸企画部付 浅見龍介
24	日本における「美術」概念の再構築—語彙と理論にまたがる総合的研究（科学研究補助金）	学芸研究部	学芸企画部長 伊藤嘉章
25	描いた女性たちに関する研究—桃山時代から明治・大正期まで（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課絵画・彫刻室主任研究員 山下善也
26	武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	列品管理課主任研究員 古谷毅
27	三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獸鏡の総合的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課主任研究員 古谷毅
28	木彫像の樹種識別技術の高度化（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課環境保存室長 和田浩
29	作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課東洋室研究員 塚本慶充
30	在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信（科学研究費補助金）	学芸研究部	副館長 島谷弘幸
31	特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」に関する調査研究	学芸企画部	学芸研究部列品管理課長 富田 淳
32	2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」に関する調査研究	学芸企画部	企画課特別展室研究員 横山 梓
33	特別展「日本国宝展」に関する調査研究	学芸企画部	広報室長 伊藤信二
34	特別展「みちのくの仏像」に関する調査研究	学芸企画部	列品管理課平常展調整室長 丸山 士郎
35	特別展「3.11大津波と文化財の再生」に関する調査研究	学芸研究部	保存修復課長 神庭信幸
36	特別展「鳥獣戯画—京都 高山寺の至宝—」に関する調査研究	学芸企画部	学芸研究部列品管理課平常展調整室研究員 土屋貴裕
37	特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏—仏教美術の源流—」に関する調査研究	学芸企画部	企画課長 小泉惠英
38	特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」に関する調査研究	学芸企画部	学芸研究部調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
39	特別展「始皇帝と大兵馬俑展」に関する調査研究	学芸企画部	学芸研究部列品管理課主任研究員 川村佳男
40	特別展「生誕150年 黒田清輝」（仮称）に関する調査研究	学芸企画部	企画課特別展室長 松嶋雅人
41	館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究	学芸研究部	博物館情報課長 高橋裕次
42	東洋民族資料に関する調査研究	学芸研究部	平常展調整室主任研究員 川村佳男
43	東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究	学芸研究部	保存修復課長 神庭信幸
44	絵巻の〈伝来〉をめぐる総合的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課平常展調整室研究員 土屋貴裕
45	神像表現における物語性に関する研究（学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	学芸研究部平常展調整室長 丸山士郎
46	江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究（学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	列品管理課貸与特別観覧室主任研究員 小野真由美
47	刀装具—一派後藤家の鑑定 極帳（鑑定控）の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸研究部	保存修復課保存修復室研究員 酒井元樹
48	中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察に関する研究（科学研究費補助金・学術	学芸研究部	学芸企画部企画課特別展室長 松嶋雅人

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
	研究助成基金助成金)		
49	東アジアにおける繡仏の基礎的研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)	学芸研究部	広報室長 伊藤信二
50	極薄青銅器の製作技術解明-中国金属工芸史を再構築するための基盤研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)	学芸研究部	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男
51	ディルムン文明の起源-パハレーン島における古墳群の考古学的調査研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)	学芸研究部	特任研究員 後藤 健
52	東アジアからみた乾隆画壇の総合的研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	調査研究課東洋室研究員 塚本磨充
53	高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相(科学研究費補助金)	学芸研究部	学芸企画部付 松本伸之
54	古代イスラエルの墓制と他界観に関する総合的研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	学芸企画部企画課特別展室アソシエイトフェロー 小野塚拓造
55	中国典籍日本古写本の研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	調査研究課長 田良島哲
56	5~9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	学芸企画部博物館教育課講座室長 浅湊 毅
57	東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	保存修復課環境保存室長 和田浩
58	東アジア文化の基層としての儒教の視覚イメージに関する研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	学芸企画部企画課出版企画室長 勝木言一郎
59	博物館の環境保存に関する研究	学芸研究部	保存修復課長 神庭信幸
60	被災博物館等汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	保存修復課環境保存室長 和田浩
61	博物館環境デザインに関する調査研究	学芸企画部	企画課デザイン室長 木下史青
62	博物館教育に関する調査研究	学芸企画部	博物館教育課長 小林 牧
63	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	学芸企画部	博物館情報課情報管理室長 村田良二
64	凸版印刷と共同で、ミュージアムシアターでの公開に向けた研究を引き続き実施する	学芸研究部	学芸企画部長 伊藤嘉章
65	聴力障がいを持つ児童・生徒のための鑑賞プログラムの構築(学術研究助成基金助成金)	学芸企画部	博物館教育課教育普及室アソシエイトフェロー 川岸瀨里
66	占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究(科学研究費補助金)	学芸企画部	教育講座室 神辺知加
67	ミュージアムにおける鑑賞者開発の研究: 新来館者の定着に向けた実証的調査分析(科学研究費補助金)	学芸企画部	総務部総務課渉外開発担当主任 関谷泰弘
68	藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究(科学研究費補助金)	学芸企画部	学芸研究部調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
69	日本とドイツの美術解剖学教育の発展と展開(科学研究費補助金)	学芸企画部	企画課デザイン室長 木下史青
70	文化財管理における美術用語事典の作成(科学研究費補助金)	学芸企画部	博物館情報課情報管理室長 村田良二
71	美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発(科学研究費補助金)	学芸企画部	博物館教育課教育普及室主任研究員 藤田千織

【京都国立博物館】 計18件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	收藏品・寄託品及び関連品に関する調査研究	学芸部	学芸部長 松本伸之
2	訓点資料としての典籍に関する調査研究	学芸部	上席研究員 赤尾栄慶
3	特別調査「彫刻」	学芸部	列品管理室長 浅見龍介
4	出土・伝世古陶磁に関する調査研究	学芸部	工芸室研究員 降志哲男
5	特別調査「漆工」(科学研究費補助金)	学芸部	列品管理室主任研究員 永島明子
6	特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」に関する調査研究	学芸部	上席研究員 赤尾栄慶
7	特別展覧会「桃山時代の狩野派」に関する調査研究	学芸部	上席研究員 山本英男
8	特別展覧会「琳派(仮称)」に関する調査研究	学芸部	教育室長 山川 暁
9	特別展覧「山陰の古刹 鳥根鰐淵寺の名宝」に関する調査研究	学芸部	企画室研究員 末兼俊彦
10	特別展覧「天野山金剛寺の名宝」に関する調査研究	学芸部	上席研究員 赤尾栄慶
11	近畿地区(特に京都)社寺文化財の調査研究(科学研究費補助金)	学芸部	企画室長 宮川禎一
12	近世絵画に関する調査研究	学芸部	上席研究員 山本英男
13	近畿旧家伝来財総合調査	学芸部	企画室研究員 末兼俊彦
14	修復文化財に関する資料収集及び調査研究	学芸部	上席研究員 赤尾栄慶
15	文化財の保存・修復に関する調査研究	学芸部	上席研究員 赤尾栄慶
16	文化財情報に関する調査研究	学芸部	列品管理室長 浅見龍介
17	平成知新館における教育ツールの開発	学芸部	教育室長 山川 暁
18	高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究	学芸部	教育室長 山川 暁

【奈良国立博物館】 計18件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	收藏品・寄託品及び関連品に関する調査研究	学芸部	学芸部長 内藤 栄
2	復元模写制作に伴う仏教絵画の光学的調査と研究	学芸部	保存修理指導室長 谷口耕生
3	平安時代の大般若経を総合的に調査し、歴史資料としての情報資源化を図る(学術研究助成基金助成金)	学芸部	企画室長 野尻 忠
4	仏教工芸の総合的調査	学芸部	部長 内藤 栄
5	古墳・古墓出土品の調査と研究	学芸部	情報サービス室長 吉澤 悟
6	醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて-密教のほとけと聖教-」に関する調査研究	学芸部	教育室員 斎木涼子
7	特別展「天皇后兩陛下傘寿記念 第66回正倉院展」に関する調査研究	学芸部	学芸部長 内藤 栄
8	特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に関する調査研究	学芸部	情報サービス室長 吉澤 悟
9	特別陳列「お水取り」に関する調査研究	学芸部	教育室員 斎木涼子
10	特別展「まぼろしの久能寺経に出会う 平安古経展」に関する調査研究	学芸部	企画室長 野尻 忠
11	開館120年記念特別展「白鳳」に関する調査研究	学芸部	部長 内藤 栄
12	南都の古代・中世の彫刻に関する調査と研究	学芸部	上席研究員 岩田茂樹
13	綴織當麻曼荼羅(當麻寺蔵)、信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵)の調査など、東京文化財研究所と共同で仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術等の解明に寄与する。	学芸部	保存修理指導室長 谷口耕生

14	収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究を持続的に実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る。	学芸部	保存修理指導室長 谷口耕生
15	収蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する。	学芸部	保存修理指導室長 谷口耕生
16	収蔵品・寄託品等の調査研究を保存科学の観点から実施し、貴重な文化財の後世への継承に資する。	学芸部	保存修理指導室長 谷口耕生
17	歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究を行い、その成果を児童・生徒を対象として行う「世界遺産学習」等に反映させる。	学芸部	教育室長 岩井共二
18	文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究を行い、その成果をデジタル画像の作成・各種データベースの構築（収蔵品・画像・図書）・各種情報資源の公開推進に反映させる。	学芸部	資料室長 宮崎幹子

【九州国立博物館】 計 38件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者（役職・名前）
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	学芸部	学芸部長 井上洋一
2	X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析	学芸部博物館科学課	博物館科学課長 今津節生
3	日本中世の工芸、特に茶道具に関する調査研究	展示課	研究員 遠藤啓介
4	日本中世における仏涅槃図の基礎的研究	学芸部企画課	研究員 森實久美子
5	特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」に関する調査研究	展示課	主任研究員 岸本圭
6	特別展「発掘された日本列島2014」に関する調査研究	展示課	主任研究員 進村真之
7	特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—」に関する調査研究	学芸部文化財課	資料登録室主任研究員 荒木和憲
8	特別展「大英博物館 世界の歴史展（仮称）」に関する調査研究	学芸部企画課	文化交流展室長 河野一隆
9	特別展「美の国日本partⅡ」展に関する調査研究	展示課	展示課長 楠井隆志
10	特別展「アフガニスタン美術展」に関する調査研究	学芸部企画課	企画課長 臺信祐爾
11	日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	学芸部企画課	企画課長 臺信祐爾
12	九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設（科学研究費補助金）	学芸部付	研究員 伊藤嘉章
13	中国・山東省荷澤出土の螺鈿箱（高麗経箱）に関する調査研究（学術研究助成基金助成金）	学芸部企画課	文化交流展室主任研究員 川畑憲子
14	タイにおける異文化の受容と変容—13世紀から18世紀の対外交易品を中心として—（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸部企画課	特別展室主任研究員 原田あゆみ
15	中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究（学術研究助成基金助成金）	学芸部文化財課	資料登録室主任研究員 荒木和憲
16	契丹壁画墓の集成と公開 —唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解—（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸部企画課	企画課長 臺信祐爾
17	水中遺跡の保存活用に関する調査研究（文化庁受託事業）	学芸部博物館科学課	博物館科学課長 今津節生
18	朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究	企画課	文化交流展室長 河野一隆
19	VR技術を活用した装飾古墳アーカイブに関する調査研究	学芸部企画課	文化交流展室長 河野一隆
20	平成20年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への継続的かつ発展的な調査研究	学芸部	学芸部長 井上洋一
21	和泉市久保記念美術館の収蔵品の調査研究	学芸部博物館科学課	博物館科学課長 今津節生
22	中世大般若經の史料学構築に向けての基礎的研究	学芸部博物館科学課	博物館科学課長 今津節生
23	九州南島の交流史に関する調査研究	展示課	保存修復室主任研究員 志賀智史
24	文化財の材質・構造等に関する共同研究	学芸部博物館科学課	博物館科学課長 今津節生
25	博物館における文化財保存修復に関する研究	学芸部博物館科学課	保存修復室主任研究員 志賀智史
26	博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎的研究	学芸部	特任研究員 本田光子
27	赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究（学術研究助成基金助成金）	学芸部博物館科学課	環境保全室研究員 秋山純子
28	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発 —興福寺 国宝阿修羅像を中心に—（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸部博物館科学課	博物館科学課長 今津節生
29	三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）	学芸部付	研究員 谷豊信
30	石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究（学術研究助成基金助成金）	学芸部博物館科学課	保存修復室主任研究員 志賀智史
31	酸化促進剤の添加による文化財建造物用油性塗料の塗膜形成研究（学術研究助成基金助成金）	学芸部博物館科学課	環境保全室アシエイトフェロー 赤田昌倫
32	みんなでまもるミュージアム（文化庁文化芸術振興費補助金）	学芸部	特任研究員 本田光子
33	NHKと協同で高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターでの映像公開に向けた研究	展示課	特別展室主任研究員 市元壘
34	特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究	学芸部企画課	企画課長 臺信祐爾
35	学校教育との連携を図りながら、学校貸出キット「きょうばっく」の研究・開発	交流課	教育普及室主任研究員 釜瀬進一郎
36	平成27年度を迎える開館10周年における一定程度のリニューアルを見据えた、現在の展示施設、展示環境や展示方法の課題や展望についての検討	展示課	展示課長 楠井隆志
37	高等学校所蔵考古資料の調査研究	学芸部企画課	特別展室主任研究員 市元壘
38	文化財管理及び画像情報データベースの効率的な運用についての調査研究	学芸部文化財課	文化財課長 富坂賢

【東京文化財研究所】 計25件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（7件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者（役職・名前）
1	文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究	企画情報部	副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務）田中 淳
2	文化財の資料学的研究	企画情報部	文化形成研究室長 津田徹英
3	近現代美術に関する交流史的研究	企画情報部	近・現代視覚芸術研究室長 塩谷 純
4	美術の表現・技法・材料に関する多角的な研究	企画情報部	広領域研究室長 小林公治
5	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化遺産部	無形文化遺産部長 飯島 満
6	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化遺産部	無形文化遺産部長 飯島 満
7	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	無形文化遺産部	無形文化遺産部長 飯島 満

○文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進 (1件)

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	文化財デジタル画像形成に関する調査研究	企画情報部	広領域研究室長 小林公治

○科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進 (9件)

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究	保存修復科学センター	生物科学研究室長 木川りか
2	文化財の保存環境の研究	保存修復科学センター	保存科学研究室長 佐野千絵
3	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究	保存修復科学センター	分析化学研究室長 早川泰弘
4	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	保存修復科学センター	修復材料研究室長 朽津信明
5	文化財の防災計画に関する研究	保存修復科学センター	修復材料研究室長 朽津信明
6	文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究	保存修復科学センター	伝統技術研究室長 北野信彦
7	文化財修復材料の適用に関する調査研究	保存修復科学センター	修復材料研究室長 朽津信明
8	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	保存修復科学センター	近代文化遺産研究室長 中山俊介
9	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	保存修復科学センター	保存修復科学センター長 岡田 健

○保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤の整備 (1件)

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	文化財保護に関する国際情報の収集・研究・発信	文化遺産国際協力センター	主任研究員 江村知子

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進 (7件)

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	中国の文化遺産の保存修復のための共同研究	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	保存修復科学センター長 岡田 健 地域環境研究室長 山内和也
2	韓国及び日本の石造文化財を対象に保存修復のための共同研究	保存修復科学センター	修復材料研究室長 朽津信明
3	東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力	文化遺産国際協力センター	保存計画研究室長 友田正彦
4	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	文化遺産国際協力センター	地域環境研究室長 山内和也
5	ユーラシア壁画の調査研究と保存修復	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	保存修復科学センター長 岡田 健 地域環境研究室長 山内和也
6	国際研修「紙の保存と修復」	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター長 川野邊 渉
7	在外日本古美術保存修復協力事業	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター長 川野邊 渉

【奈良文化財研究所】計31件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 (19件)

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究	文化遺産部	歴史研究室長 吉川 聡
2	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	文化遺産部	文化遺産部長 林 良彦
3	我が国の記念物に関する調査・研究 (遺跡等整備)	文化遺産部	文化遺産部長 林 良彦
4	我が国の記念物に関する調査・研究 (庭園)	文化遺産部	文化遺産部長 林 良彦
5	我が国の記念物に関する調査・研究 (国際研究交流)	文化遺産部	文化遺産部長 林 良彦
6	平城京右京一条二坊一坪・二条二坊四坪・一条南大路の発掘調査	都城発掘調査部 平城地区	副所長 小野健吉
7	古代官衙・集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行	都城発掘調査部 平城地区	副所長 小野健吉
8	古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行	都城発掘調査部 平城地区	副所長 小野健吉
9	藤原宮跡の発掘調査 (大極殿院)	都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
10	藤原宮跡の発掘調査 (東方官衙北地区)	都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
11	飛鳥地域発掘調査	都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
12	平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等	都城発掘調査部 平城地区	副所長 小野健吉
13	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
14	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究	飛鳥資料館	飛鳥資料館学芸室長 石橋茂登
15	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力	都城発掘調査部 平城地区	副所長 小野健吉
16	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	文化遺産部	景観研究室長 平澤 毅
17	遺跡データベースの作成と公開	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦
18	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長 高妻洋成
19	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長 高妻洋成

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進 (3件)

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	文化財の測量・探査等に関する研究	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦
2	年輪年代学研究	埋蔵文化財センター	埋蔵文化財センター長 難波洋三
3	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター	埋蔵文化財センター長 難波洋三

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進 (1件)

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者 (役職・名前)
1	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長 高妻洋成

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施 (6件)

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者（役職・名前）
1	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
2	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的に協力	都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
3	文化庁・国土交通省が行う平城宮跡の復原・整備への協力	都城発掘調査部 平城地区	副所長 小野健吉
4	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設への協力	飛鳥資料館	飛鳥資料館学芸室長 石橋茂登
5	国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設への協力	企画調整部	企画調整部長 杉山 洋
6	東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に対する地方公共団体等への支援・協力	都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長 玉田芳英

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者（役職・名前）
1	カンボジア・アンコールワット遺跡群の西トップ遺跡、ベトナム・タンロン皇城遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査	企画調整部	企画調整部長 杉山 洋
2	ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力	企画調整部	国際遺跡研究室長 森本 晋

【東京文化財研究所と奈良文化財研究所との共同研究】計0件

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】計1件

○アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者（役職・名前）
1	アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究の推進	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	所長 荒田明夫

（参考）受託研究一覧

合計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	アジア太平洋無形文化遺産研究センター
66件	21件	44件	1件

【東京文化財研究所】計21件

	調査研究テーマ名	担当部課
1	文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ツバル・キリバス・フィジーの文化遺産保護に関する技術的調査」（受託）	無形文化遺産部
2	文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業（受託）	保存修復科学センター
3	絵金屏風の保存修理に関する調査研究（受託）	保存修復科学センター
4	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務（受託）	保存修復科学センター
5	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査（受託）	保存修復科学センター
6	高松塚古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査（受託）	保存修復科学センター
7	小石川後楽園得仁堂収蔵物の保存修復科学的な調査委託（受託）	保存修復科学センター
8	日光の歴史的木造建造物の温風処理等による新たな殺虫処理方法の検討（受託）	保存修復科学センター
9	万世特攻平和祈念館所蔵品調査事業（受託）	保存修復科学センター
10	文化遺産国際協力コンソーシアム事業（受託）	文化遺産国際協力センター
11	第39回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成（受託）	文化遺産国際協力センター
12	第38回世界遺産委員会審議調査研究事業（受託）	文化遺産国際協力センター
13	ラチャプラディット寺院螺鈿扉修復計画策定のための調査研究（受託）	文化遺産国際協力センター
14	文化遺産国際協力拠点交流事業（ブータン）（受託）	文化遺産国際協力センター
15	文化遺産国際協力拠点交流事業（ミャンマー）（受託）	文化遺産国際協力センター
16	文化遺産国際協力拠点交流事業（アルメニア及びコーカサス諸国等）（受託）	文化遺産国際協力センター
17	文化遺産国際協力拠点交流事業（キルギス及び中央アジア諸国）（受託）	文化遺産国際協力センター
18	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）に係る国内支援業務（受託）	文化遺産国際協力センター
19	2014年度エジプト国別研修「保存修復材料としての和紙(A)」に係る委託契約コースに係る委託契約（受託）	文化遺産国際協力センター
20	常磐橋鉄材試料の分析調査（受託）	文化遺産国際協力センター
21	美術工芸品修理技術者人材等に関する調査研究（受託）	文化遺産国際協力センター

【奈良文化財研究所】計44件

	調査研究テーマ名	担当部課
1	平成26年度文化遺産国際協力拠点交流事業（ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業・考古分野）（受託）	企画調整部
2	平成26年度増田地区伝統的建造物詳細調査業務委託（受託）	企画調整部
3	京都市の文化的景観保存計画策定調査（受託）	文化遺産部
4	相川地区文化的景観保存計画策定調査（受託）	文化遺産部
5	宇治茶生産の文化的景観における特性調査及び全覧図作成業務委託（受託）	文化遺産部
6	道路建設及び分譲住宅新築に伴う法華寺旧境内の発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
7	平城京左京二条二坊十一坪の発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
8	平城京左京三条一坊十五坪の発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
9	薬師寺東塔の解体修理に伴う発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
10	興福寺旧境内・奈良町遺跡の発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
11	興福寺防災工事に伴う発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
12	興福寺西室・北円堂発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
13	分譲住宅造成・建築に伴う法華寺旧境内の発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
14	共同住宅建設に伴う法華寺旧境内の発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
15	平城宮北方遺跡の発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
16	共同住宅建設に伴う法華寺旧境内東辺部の発掘調査（受託）	都城発掘調査部 平城地区
17	第一次大極殿院建造物復原整備にかかる調査委託（受託）	都城発掘調査部 平城地区

18	平城宮跡歴史公園工事関連施設造成区域発掘調査（受託）	都城発掘調査部	平城地区
19	本薬師寺跡(北村宅)発掘調査（受託）	都城発掘調査部	飛鳥・藤原地区
20	藤原京跡・田中廃寺(森田宅)発掘調査（受託）	都城発掘調査部	飛鳥・藤原地区
21	特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（受託）	都城発掘調査部	飛鳥・藤原地区
22	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（受託）	都城発掘調査部	飛鳥・藤原地区
23	高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査業務（受託）	都城発掘調査部	飛鳥・藤原地区
24	キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡重立会等調査（受託）	都城発掘調査部	飛鳥・藤原地区
25	キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査業務（受託）	都城発掘調査部	飛鳥・藤原地区
26	鳥取市青谷横木遺跡・金沢坂津口遺跡出土木簡の保存処理等の総合的研究（受託）	都城発掘調査部	飛鳥・藤原地区
27	国史跡田熊石畑遺跡墓域整備に伴う環境調査（受託）	埋蔵文化財センター	
28	三内丸山遺跡出土漆製品の分析（受託）	埋蔵文化財センター	
29	闘鶏山古墳石槨の現状把握のための画像撮影と3Dデータ化（受託）	埋蔵文化財センター	
30	喜界町出土金属製遺物の保存処理（受託）	埋蔵文化財センター	
31	群馬県金井東裏遺跡出土ガラス製遺物の材質・構造調査（受託）	埋蔵文化財センター	
32	国宝薬師寺東塔顔料等分析調査業務委託（受託）	埋蔵文化財センター	
33	元町石仏が彫刻された凝灰岩の不飽和水分移動特性に関する研究 その2（受託）	埋蔵文化財センター	
34	史跡ガランドヤ古墳1号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究（受託）	埋蔵文化財センター	
35	平城宮跡遺構展示館の保存活用に関する調査研究事業（受託）	埋蔵文化財センター	
36	実相寺古墳群総合的探査委託業務（受託）	埋蔵文化財センター	
37	ネットワーク型遺跡調査システムの開発（受託）	埋蔵文化財センター	
38	国宝薬師寺東塔木材年代測定業務(第2回)（受託）	埋蔵文化財センター	
39	新潟県糸魚川市六反田南遺跡出土の動物骨分析（受託）	埋蔵文化財センター	
40	東名遺跡出土動物遺存体調査（受託）	埋蔵文化財センター	
41	波怒楽館遺跡種度の動物遺存体の分析（受託）	埋蔵文化財センター	
42	木村定三コレクション黒漆厨子のテラヘルツイメージングによる診断調査の予備試験（受託）	埋蔵文化財センター	
43	文化遺産国際協力拠点交流事業 ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業（受託）	埋蔵文化財センター	
44	災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画（受託）	埋蔵文化財センター	

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】計1件

	調査研究テーマ名	担当部課
1	平成26年度 無形文化遺産保護パートナーシッププログラム（受託）	アジア太平洋無形文化遺産研究センター

c-③ 学会、研究会等発表実績一覧

平成27年3月31日現在

国立文化財機構合計	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
296件	191件	104件	25件	39件	23件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	105件	60件	45件	0件	
	アジア太平洋無形文化遺産研究センター 0件				

【東京国立博物館】 104件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	「書の楽しみ」	副館長 島谷弘幸	4月19日	山陽新聞社
2	同上	「高木聖鶴の書と魅力」	同上	6月7日	岡山県立美術館
3	同上	パネルディスカッション「世界的な事業：機会と起こりうる落とし穴 異文化間の共同事業における成功と挑戦についての事例研究」	同上	7月15日	サンフランシスコ・アジア・アート美術館
4	同上	「詩文書 その表現と未来」	同上	7月19日	日本詩文書作家協会
5	同上	「ゲーム美術館でのアジア美術紹介活動」（ゲーム美術館マカリウ館長と対談）	同上	7月20日	毎日書道会
6	同上	「書の鑑賞について」	同上	9月20日	熊野町筆の里工房
7	同上	「書の鑑賞と創造」	同上	10月4日	第六十六回毎日書道展北海道展
8	同上	「平安時代の書」	同上	10月9日	現代書道研究所
9	同上	「夢の実現に向けて」	同上	10月24日	高梁中学校
10	同上	「中国書法の受容と呉昌碩」	同上	10月25日	高梁市立成羽美術館
11	同上	「『大手鑑』の書」	同上	27年1月24日	陽明文庫講座
12	同上	基調講演「日本の寺院壁画をめぐる諸問題」	企画課出版企画室長 勝木言一郎	7月26日	国際シンポジウム「嶺南地域における伝統寺院の仏殿壁画研究の現状と課題」
13	同上	基調報告「大谷探検隊とパキスタン北部の仏教遺跡について」	同上	11月8日	日本・パキスタン協会 シンポジウム・パーキスターン2014「文化財」
14	同上	東京国立博物館所蔵十二月花鳥和歌巻の制作背景について ―後水尾院との関係を中心に―	企画課出版企画室 遠藤 菜子	5月17日	美術史学会全国大会
15	同上	浄瑠璃寺の九体阿弥陀と四天王をめぐる	博物館教育課教育講座室長 浅萩 毅	5月12日	仏教美術研究上野記念財団助成研究会
16	同上	南山城の鎌倉彫刻と慶派仏師	同上	5月31日	京都国立博物館
17	同上	鰐淵寺の歴史と文化財	同上	11月15日	島根県文化財愛護協会
18	同上	「Tsujiyahana Stitch-resist Dyeing in Muromachi-Momoyama Period in Japan」	博物館教育課教育普及室長 小山弓弦葉	11月1日	杭州・シルク博物館
19	同上	「辻が花にみる染織技術とその暮らし」	同上	27年3月19日	公益社団法人 京都染織文化協会
20	同上	「徽宗の古代青銅器文化復興」	学芸研究部長 谷豊信	10月25日	特別展「台北國立故宮博物院 神品至宝」記念シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味 工芸における復古と革新」（九州国立博物館）
21	同上	端午の節句 鎧と兜	上席研究員 池田宏	4月5日	東京国立博物館 月例講演会
22	同上	甲冑・絵図・文書―日御碕神社の白糸威鎧を例として―	同上	10月29日	國學院栃木短期大学
23	同上	書譜と黄州寒食詩巻	列品管理課長 富田淳	6月29日	大正大学、書道カレッジ特別公開講座
24	同上	皇帝コレクションの魅力	同上	7月4日	聖心女子学院、文化講座
25	同上	徽宗の7聖と乾隆帝の8聖について	同上	7月6日	東京国立博物館、記念シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味―書画における復古と革新―」
26	同上	台北國立故宮博物院 ―神品至宝―皇帝の愛した品々	同上	7月17日	千代田区立日比谷図書文化館、日比谷カレッジ
27	同上	台北國立故宮博物院 ―神品至宝―中国書跡の鑑賞法	同上	9月5日	大東文化大学、日中書法文化伝習塾
28	同上	趙之謙の書画と北魏の書―悲倉没後一三〇年―	同上	9月14日	東京国立博物館、連携講演会
29	同上	皇帝を魅了した名品たち―中国書跡を中心に―	同上	11月1日	九州国立博物館、特別講演会
30	同上	Collaborative Chinese Art Exhibitions at the Tokyo National Museum, 2012-14	同上	12月5日	大英博物館、2014 Forum for Curators of Chinese Art Programme
31	同上	西都原古墳群出土 重要文化財 埴輪子持家・船と国宝 金銅装馬具―その特徴と歴史的意義―	列品管理課主任研究員 古谷毅	5月11日	宮崎県立西都原考古博物館「特別展 西都原の100年 考古博の10年展」特別講演会
32	同上	古墳時代武装の性格―日本列島における武器武具の社会的役割―	同上	11月15日	埼玉県立歴史と民俗の博物館「特別展 甕の鉄剣展」記念講演会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者(職名・名前)	実施日	学会等名
33	同上	三峡地区の塩竈形明器	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男	4月26日	塩業考古と古代社会国際学術研究会
34	同上	伊能忠敬の日本図	調査研究課長 田良島哲	7月19日	東京国立博物館 月例講演会
35	同上	「大名家の美術について」	絵画・彫刻室長・田沢裕賀	4月27日	弘前市立美術館リニューアルオープン記念展 記念講演会
36	同上	「木を描く風景-「松林図屏風」と「雪松図屏風」を中心に	同上	10月11日	仙台市博物館特別展 記念講演会
37	同上	狩野山楽・山雪についての新知見	調査研究課絵画・彫刻室主任研究員 山下善也	4月12日	美術史学会東支部例会(東京大学)
38	同上	狩野探幽における富士山図制作の重要性	同上	27年3月15日	フィラデルフィア美術館「The Art of Kano」展 Study's Day (フィラデルフィア美術館)
39	同上	栄西と建仁寺展	同上	6月15日	京都工芸繊維大学芸術資料館アートマネージャー養成講座(京都工芸繊維大学)
40	同上	土居ノートと狩野山雪の老梅図襖について	同上	9月6日	大阪大学 声フェスセミナー(大阪大学)
41	同上	富士山を描いた画家たち—近世を中心に—	同上	11月29日	柳川市史編さん委員会 第21回歴史文化講演会(柳川市立図書館)
42	同上	東北地方伝来の蒔絵絵馬について	調査研究課工芸室長 竹内奈美子	12月25日	歴博・展示型共同研究「学際的研究による漆文化史の新構築」平成26年度第6回研究会
43	同上	五十嵐道甫様式の蒔絵について—細部表現と地蒔を中心に	調査研究課工芸室長 竹内奈美子	27年2月26日	歴博・展示型共同研究「学際的研究による漆文化史の新構築」平成26年度第7回研究会
44	同上	“Ichikawa Beian Collection: Transitional Period of Collecting Chinese Art in Japan”	調査研究課東洋室 塚本 磨充	5月28日	Los Angeles County Museum, “Chinese Paintings from Japanese Collections” Scholars' Day Symposium
45	同上	「皇帝コレクションにおける模写・模造事業—乾隆帝の書画コレクションと狩野派—」	同上	7月5日	「特別展シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味」—書画における復古と革新—」(於: 東京国立博物館)
46	同上	「北京・故宮博物院本「清明上河図」と中国都市図の展開」	同上	10月5日	「開館50周年記念シンポジウム「描かれた都、開封と京都」(於: 林原美術館)
47	同上	「如何展示故宮文物—東京国立博物館的挑戦」	同上	12月4日	臺北藝術大學美術學院
48	同上	「《唐繪手鑑(筆耕園)》與江戸時代中國繪畫知識的架構」	同上	12月6日	「創新與創造: 明清知識建構與文化交流」國際學術研討會(於: 中央研究院 中國文哲研究所)
49	同上	世界の博物館の中国陶磁—故宮コレクションに憧れて	保存修復課保存修復室 三笠景子	7月27日	菊池寛実記念智美術館講座
50	同上	縄文の美の発見—美術史に現れた縄文土器—	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 鈴木希帆	10月8日	船橋市飛ノ台史跡公園博物館事業「縄文大学」
51	同上	Final Shaping of Iron Objects in Kofun Period Japan	カリフォルニア大学博士課程 James Scott Lyons、調査研究課考古室アソシエイトフェロー 河野正訓	4月12日	CalDay at ARF (US Berkeley Events)
52	同上	大室古墳群の群構造	調査研究課考古室アソシエイトフェロー 河野正訓	5月18日	日本考古学協会第80回総会
53	同上	染織品の展示方法における新案	米倉乙世、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、調査研究課工芸室 三田覚之、客員研究員 澤田むつ代、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課長 神庭信幸	6月7日	文化財保存修復学会第36回大会
54	同上	劣化で一部分状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例—東京国立博物館所蔵作品の事例—	客員研究員 沢田むつ代、調査研究課工芸室 三田覚之、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、米倉乙世、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、北島恭代、保存修復課長 神庭信幸、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、山崎真紀子	6月7日	同上
55	同上	国宝障子屏風(東京国立博物館蔵)の修理事例 —本紙裏面に遺されていた情報に着目して—	国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、保存修復課長 神庭信幸、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修	6月7日	同上

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
			復課保存修復室主任研究員 沖松健次郎、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、米倉乙世、国宝修理装講師連盟 君嶋隆幸		
56	同上	東京国立博物館における修理技術専門職員の役割について	保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、米倉乙世、保存修復課長 神庭信幸、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課保存修復室主任研究員 沖松健次郎	6月7、8日	同上
57	同上	大型エックス線CTスキャナーの導入	保存修復課長 神庭信幸	12月20日	エックス線CTシンポジウム
58	東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究	津波被災資料の安定化処理—陸前高田市立博物館の取り組み—	保存修復課長 神庭信幸、保存修復課環境保存室長 和田浩、保存修復課調査分析室長 荒木臣紀、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、米倉乙世、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、陸前高田市立博物館長 本多文人、陸前高田市立博物館副主幹 熊谷賢、岩手県立博物館学芸第二課長 赤沼英男、盛岡第一高等学校教諭 目時和哉	6月7日	同上
59	同上	Stabilization processing of cultural assets damaged by the tsunami of 11 March 2011	保存修復課長 神庭信幸、保存修復課環境保存室長 和田浩、保存修復課調査分析室長 荒木臣紀、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、陸前高田市立博物館副主幹 熊谷賢、岩手県立博物館学芸第二課長 赤沼英男	9月17日	ICOM-CC, 17th Triennial Conference, 2014 Melbourne
60	同上	被災文化財等救援活動における保存修理—カンバス作品の脱塩の試み—	保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課環境保存室長 和田浩、保存修復課調査分析室長 荒木臣紀、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、米倉乙世、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、東京文化財研究所 小川絢子、保存修復課長 神庭信幸、土師広、西原紀江、池上久美	6月7日	文化財保存修復学会第36回大会
61	同上	陸前高田市立博物館染織資料修理経過報告	女子美術大学 岡田宣世、女子美術大学 大崎綾子、女子美術大学 安部みよ子、多摩美術大学 深津裕子、保存修復課長 神庭信幸、陸前高田市立博物館副主幹 熊谷賢、岩手県立博物館学芸第二課長 赤沼英男、盛岡第一高等学校教諭 目時和哉	6月7日	同上
62	博物館環境デザインに関する調査研究	「博物館の展示照明と“顔”」	企画課デザイン室長 木下史青	12月15日	日韓美術解剖学会シンポジウム（ソウル 宮宮博物館）
63	同上	「アムステルダム国立美術館の施設改修・展示リニューアルのデザインについて」	同上	27年1月10日	「みんなのアムステルダム国立美術館へ」（於：渋谷ユーロスペース）
64	同上	「トーハクのデザイン 1999年～この15年」	同上	27年1月30日	千葉県美術館・博物館等職員研修会（於：千葉県立美術館）
65	同上	トークセッション『ミュージアムライティングの今と未来』	同上	27年3月5日	照明デザイン国際セミナー ENLIGHTEN ASIA+ライティング・フェア（於：東京ビックサイト）
66	博物館教育に関する調査研究	学校のよりよい利用形態にむけて（事例発表・ディスカッション）	博物館教育課教育普及室主任研究員 藤田千織	9月18日	文化庁 第4回ミュージアムエデュケーター研修
67	同上	シンポジウム「コレクションを活かした鑑賞教育とは」	同上	27年1月10日	上記科研成果発表・美術科教育学会共同開催
68	博物館資料・業務の情	ミュージアムアーカイブズとデータベース	博物館情報課情報管理室	6月7日	2014年度アート・ドキュメンター

	研究テーマ	発表テーマ	発表者(職名・名前)	実施日	学会等名
	報処理に関する調査研究		長 村田良二		シオン学会年次大会
69	同上	インタラクティブメディアによる来館者向けデジタルアーカイブの公開	博物館情報課情報管理室 アソシエイトフェロー 和久井暹、博物館情報課情報管理室長 村田良二	11月22日	アート・ドキュメンテーション学会2014年度秋季研究発表会
70	同上	東京国立博物館における資料のデジタル化の現状	博物館情報課情報管理室 長 村田良二	27年2月27日	みんぱくフォーラム型情報ミュージアム アーカイブズ関係研究会
71	特別展「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」に関する調査研究	故宮コレクションと「倣古」—青銅器・玉器のかたちを象徴された伝統	列品管理課平常展調整室 主任研究員 川村佳男	6月28日	特別展「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」記念講演
72	「日本国宝展」に関する調査研究	美と歴史を語る国宝の書	調査研究課長 田良島哲	8月10日	東京国立博物館 連続講座「国宝」
73	古墳時代の農具研究	Nature of Authority during the Kofun Period from the Standpoint of Iron Agricultural Tools	調査研究課考古室アソシエイトフェロー 河野正訓	4月26日	SAA(Society For American Archaeology) 79th Annual Meeting
74	同上	古墳・三国時代における外来系農具の定着過程	同上	10月31日	「韓日交渉の考古学—三国・古墳時代—」研究会第2回共同研究会
75	同上	古墳時代前期の農工漁具の編年	同上	11月30日	中国四国前方後円墳研究会第17回研究集会
76	古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究	「古墳～飛鳥・奈良時代における金糸の仕様と変遷」	客員研究員 澤田むつ代	5月17日	東アジア考古学研究会
77	同上	「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き」	同上	5月24日	工芸文化研究会
78	同上	「劣化で一部粉状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例—東京国立はく物漢所蔵作品の事例」	同上	6月7日	文化財保存修復学会
79	同上	「古墳～飛鳥・奈良時代の金糸の変遷—金鈴塚古墳出土の金糸を中心に—」	同上	8月10日	千葉県木更津市郷土博物館金のすず
80	同上	「武者塚古墳出土の遺体の埋葬仕様と経緯の用途について」	同上	11月9日	重要文化財指定記念シンポジウム「武者塚古墳とその時代」
81	同上	法隆寺と正倉院の染織品—用途にみる形状の違い—	同上	12月3日	中国四川省成都・成都博物院・四川大学
82	同上	法隆寺と正倉院の染織品—さまざまな技法と文様—	同上	12月3日	同上
83	法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究	法隆寺献納宝物における百済系文物	調査研究課工芸室 三田覚之	10月29日	韓国国立中央博物館
84	同上	日本・韓国 学術交流報告会—法隆寺献納宝物の源流を求めて—	同上	12月18日	東京国立博物館
85	極薄青銅器の製作技術解明 —中国金属工芸史を再構築するための基礎的研究—	古代中国における極薄青銅器の製作技法 —東アジア諸地域との比較を視野に入れて—	列品管理課平常展調整室 主任研究員 川村佳男	8月8日	韓国国立中央博物館学術交流発表会
86	同上	中国青銅器をめぐる旅 4千年のものがたり	同上	10月11日	東京国立博物館10月月例講演会
87	同上	漢代青銅器にみる官宮工場の流派	同上	12月6日、7日	日本中国考古学会2014年度大会
88	中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的研究	次世代型展示用照明器具の評価法に関する研究	保存修復課環境保存室長 和田浩、企画課特別展室長 松嶋雅人、企画課デザイン 室主任研究員 矢野賀一、 列品管理課平常展調整室 土屋貴裕	6月8日	文化財保存修復学会
89	タイにおける異文化の受容と変容—13世紀から18世紀の対外交易品を中心として—	An Intercultural and Comparative Study of Buddhist Art - Transformation of Narrative Art (タイの仏教説話美術の展開)	企画課長 小泉恵英、九州国立博物館 原田あゆみ	11月25日	タイ芸術局
90	古代イスラエルの墓制と世界観に関する総合的研究	アッシリア後のパレスチナ —テル・レヘシュ第8次発掘報告—	立教大学准教授 長谷川修一、上智大学教授 月本昭男、古代オリエント博物館 津本英利、企画課特別展室アソシエイトフェロー 小野塚拓造	10月26日	日本オリエント学会 第56回大会
91	同上	油滴の地—聖書時代のオリーブ油生産—	企画課特別展室アソシエイトフェロー 小野塚拓造	11月15日	『聖書の世界を発掘する—聖書考古学の現在—』(上智大学キリスト教文化研究所 2014年度聖書講座)
92	同上	Multiple aspects of the 'Egypto-Canaanite system' during the Late Bronze Age and the Early Iron Age	同上	11月30日	Symposium "The Levant and Egypt in Contact" (早稲田大学エジプト学研究所主催・公開シンポジウム)
93	同上	新バビロニアの拠点遺跡を探る—イスラエル、テル・レヘシュ第8次発掘調査(2014年)	同上	27年3月22日	日本西アジア考古学会主催『平成26年度 考古学が語る古代オリエント 第22回西アジア発掘調査報告会—2014年度発掘調査の速報』
94	在欧日本仏教美術の	「海外展による日本美術の情報発信と国立	副館長 島谷弘幸	11月11日	文化庁海外専門家交流シンポジウ

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
	基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信	博物館の現状			ム
95	スリランカ内線後の博物館および文化遺産に関する調査報告	スリランカ内線後の博物館および文化遺産に関する調査報告	企画課長 小泉恵英	7月23日	文化遺産国際協力コンソーシアム
96	博物館のマネジメントに関する調査研究	独立行政法人の統合問題—その経緯と問題点	総務部長 栗原祐司	6月28日	全日本博物館学会第40回研究大会
97	博物館展示に関する調査研究	日本博物館展示の最新趨勢	総務部長 栗原祐司	10月24日	Chinese International Exhibition innovation and Development Forum (中国・上海)
98	学芸員養成に関する調査研究	大学における学芸員養成を展望する	総務部長 栗原祐司	12月13日	法政大学学芸員課程設立50周年記念シンポジウム
99	我が国の博物館ネットワークに関する調査研究	Current Situation and Issues of the Human Rights Museum in Japan	総務部長 栗原祐司	5月3日	ICOM-INTERCOM & FIHRM 2014 Taipei Conference
100	同上	The Current Status and Challenges of Japan's University Museum Networks	総務部長 栗原祐司	10月10日	ICOM-CECA&UMAC 2014 Alexandria Conference
101	同上	我が国のスポーツ博物館の課題と可能性	総務部長 栗原祐司	12月7日	スポーツ史学会第28回大会
102	同上	都市博物館のあり方について—ICOM-CAMOCにおける議論から—	総務部長 栗原祐司	27年1月18日	京都文化博物館博学社連携シンポジウム
103	同上	ICOM大会招致に向けて	総務部長 栗原祐司	27年3月7日	文化遺産国際協力コンソーシアム
104	Museum Management	Challenge to Change: A Case Study of Branding of the Tokyo National Museum	Yasuhiro Sekiya Chief Officer Business Development	9月4日	MPR 2014 Taiwan Conference

【京都国立博物館】25件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	京都国立博物館の名品「人形と京都」	教育室長 山川 暁	4月12日	金沢中日文化センター 京都国立博物館の名品
2	訓点資料としての典籍に関する調査研究	「京都国立博物館蔵『続高僧伝』二種」	上席研究員 赤尾栄慶	7月19日	中国・復旦大学中華文明国際研究センター 国際学術検討会「仏教と中国宗教研究の新視野と新方法」
3	同上	「重要文化財「在家人布薩法巻第七」について—書誌学的観点から—」	同上	7月26日	国際仏教学大学院大学・東アジア仏教研究会「東アジア仏教写本研究拠点の形成」
4	同上	「高山寺旧蔵『安楽集』の古写本—書誌情報について—」	同上	7月27日	国際仏教学大学院大学・東アジア仏教研究会「東アジア仏教写本研究拠点の形成」
5	同上	「天野山金剛寺の文化財」	同上	10月25日	中国人民大学外国語学院「仏教と文学—日本金剛寺仏教典籍調査研究成果報告国際学術シンポジウム—」
6	同上	「つながらない手紙の謎—後深草天皇宸翰消息—」	保存修理指導室主任研究員 羽田 聡	6月14日	京都国立博物館名品は語る（金沢中日文化センター）
7	出土・伝世古陶磁に関する調査研究	「茶の湯と朝鮮陶磁」	工芸室研究員 降矢哲男	4月26日	第130回高麗美術館研究講座
8	同上	「京都・堺の茶の湯文化」	同上	10月5日	大分市戦国時代館セミナー「戦国時代の庭園と茶の湯」
9	同上	「秀吉と茶の湯」	同上	12月17日	河内長野地域学講座V I <歴史編2>
10	特別展覧会「琳派」に関する調査研究	「琳派と染織」	教育室長 山川 暁	5月23日	京鹿の子紋振興協同組合総会
11	特別展覧会等の開催に伴う調査研究	「博物館における企画展・特別展の企画等について」	副館長兼学芸部長 松本伸之	9月5日	展示学会「展示論講座」（京都国立博物館講堂）
12	近世絵画に関する調査研究	「鉄斎と東坡：近代日本における文人への憧憬」	列品管理室研究員 吳 孟晋	10月5日	大和文華館・関西中国書画コレクション研究会公開研究会
13	同上	「近世京都の絵師たち—『京洛三十六家山水花鳥人物図貼交屏風』から見えるもの—」	教育室研究員 水谷亜希	10月28日	佛教学歴史学部歴史文化講座「文化財の復元・修復の世界」
14	同上	「<複製>から何をみるか」	同上	27年1月31日	シンポジウム「<複製>から何をみるか」
15	文化財の保存・修復に関する調査研究	「鳥獣戯画の修理」鼎談	美術室研究員 鬼原俊枝	11月15日	国際シンポジウム「鳥獣戯画を語る」於京都国立博物館
16	平成知新館における教育ツールの開発	国宝「風神雷神図屏風」を鑑賞する	教育室研究員 水谷亜希	6月18日	授業実践力向上講座（京都市教育委員会、京都市図画工作教育研究会）
17	同上	「文化財に親しむヒント～風神雷神図屏風と八橋図屏風を中心に～」	同上	7月28日	美術科夏季研修講座（京都市教育委員会・京都市立中学校教育研究会美術部会）
18	同上	「ユースを核とした、ミュージアム連携の可能性」（総合司会）	同上	27年2月1日	公開研究交流会 in KOBE 2015 ミュージアム×ユース for キッズ

	研究テーマ	発表テーマ	発表者(職名・名前)	実施日	学会等名
19	特別調査「漆工」	「世界史を語る日本の蒔絵—輸出漆器の名品たち—」	列品管理室主任研究員 永島明子	5月17日	金沢中日文化センター 開設40周年記念 「京都国立博物館 名品は語る」講座
20	同上	「文化財とコーパス」	同上	8月1日	京都国立博物館 夏期講座 古社寺と文化財II
21	同上	「うるしの魔法 まきえの魅力」	同上	11月30日	大阪青山歴史文学博物館2014秋季特別展 開館15周年記念「蒔絵名品展」関連講演会
22	同上	「南蛮漆器から紅毛漆器へ—海外向け特注品のプロデューサーは誰か—」	同上	12月13日	京都国立博物館 土曜講座
23	同上	「日本製蒔絵の輸出に関する基礎知識」	同上	27年1月25日	京都国立博物館 国際研究セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」
24	同上	「大航海時代と日本の蒔絵」	同上	27年3月6日	明治大学大学院研究科共同研究プロジェクト(代表:理工学研究科教授宮腰哲雄)主催 平成 漆の講演会「スペインの南蛮漆器の文化と科学2015」
25	同上	「桃山の華—高台寺蒔絵と南蛮漆器—」	同上	27年3月22日	大和文華館 展覧会「花を愛でる」特別講演

【奈良国立博物館】 39件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表テーマ	発表者(職名・名前)	実施日	学会等名
1	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館蔵品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	手紙と書札	館長 湯山賢一	7月26日	法隆寺夏季大学
2	同上	和紙の歴史	同上	2月28日	『特集展示 和紙 —文化財を支える日本の紙』記念講演&座談会 基調講演
3	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	正倉院展 - 歴史と見どころ-	同上	10月11日	正倉院の楽しみ方〜まほろばの集い IN福岡〜 基調講演
4	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館蔵品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	平泉中尊寺の仏教美術	学芸部長 内藤 栄	2月10日	第4回歴史教室(於:平泉文化センターふれあいホール)
5	同上	密教法具の始まりを求めて	同上	4月20日	奈良国立博物館サンデートーク
6	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	飛鳥寺と日本の舎利信仰の始まり	同上	6月1日	うつき祭〜法会と公演(於:明日香村公民館)
7	同上	醍醐寺の舎利信仰と南都	同上	8月20日	奈良国立博物館夏季講座
8	同上	正倉院宝物から見えてくる聖武天皇像	同上	8月30日	奈良女子大学社会連携センター地域公開講座(於:奈良女子大学)
9	同上	基調講演「今年の正倉院展の見どころ」	同上	9月27日	正倉院フォーラム東京(於:よみうり大手町ホール)
10	同上	せいぶ正倉院講座	同上	10月28日	奈良市西部公民館
11	同上	日本工芸の源流としての正倉院宝物	同上	11月1日	正倉院学術シンポジウム2014「正倉院宝物に日本文化の源流を見る」(於:奈良県新公会堂)
12	同上	せいぶ正倉院講座	同上	11月5日	奈良市西部公民館
13	同上	正倉院宝物にみる百済文化—瑠璃杯を中心に—	同上	12月6日	第7回百済文化国際シンポジウム(於:奈良教育大学)

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
14	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	仏像調査からわかること その3	上席研究員 岩田茂樹	10月5日	奈良国立博物館サンデートーク
15	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	平安時代の写経 九・十世紀篇	企画室長 野尻 忠	5月18日	奈良国立博物館サンデートーク
16	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	「第5回 茶室・八窓庵をのぞいてみませんか」	情報サービス室長 吉澤 悟	9月21日	奈良国立博物館サンデートーク
17	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	考古学よりみた奈良時代の仏への祈りー正倉院宝物・鎮壇具・墳墓ー	同上	2月27日	ブレ戦略イニシアティブ「日本語日本文化発信力強化研究拠点形成」 「祈り」プロジェクト第3回ワークショップ（於：筑波大学）
18	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	仏教のく中国化>をめぐるー五・六世紀の如来像を中心にー	教育室長 岩井共二	8月17日	奈良国立博物館サンデートーク
19	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	醍醐寺と南都の密教絵画	保存修理指導室長 谷口耕生	7月26日	奈良国立博物館公開講座
20	同上	内山永久寺と南都の密教絵画	同上	1月18日	奈良国立博物館サンデートーク
21	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	文化財とアーカイブズ 奈良国立博物館の取り組みから	資料室長 宮崎幹子	3月15日	奈良国立博物館サンデートーク
22	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	正倉院宝物——至宝にみる天平の暮らしと祈り	主任研究員 清水 健	7月20日	正倉院展の楽しみ方～まほろばの集いIN名古屋～ （於：電気文化会館イベントホール）
23	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	X線CTによる「アイヌ文化伝声の漆椀」の内部構造調査(2)	主任研究員 鳥越俊行	6月7日	文化財保存修復学会 （於：明治大学）
24	同上	沖縄県立博物館・美術館所蔵三線のCT調査	同上	6月7日	文化財保存修復学会 （於：明治大学）
25	同上	アイヌ民族資料の保存修復に向けた現況調査	同上	6月7日	文化財保存修復学会 （於：明治大学）
26	同上	沖縄県立博物館・美術館所蔵 梵鐘の科学的調査	同上	7月5日	日本文化財科学会 （於：奈良教育大学）
27	同上	ハンディ蛍光X線分析装置による琉球鐘の科学調査	同上	10月4日	鑄造遺跡研究会（於：京都橘大学）
28	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	文化財を科学する	同上	11月16日	奈良国立博物館サンデートーク
29	同上	最新の計測技術を駆使した調査の成果	同上	12月14日	国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈の謎に迫るシンポジウム（於：神戸市立王子動物園ホール）
30	同上	CT利用の現状と課題	同上	12月20日	文化財調査におけるX線CTの活用シンポジウム（於：北海道大学）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
31	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	幸せの王国 プータン Part2	研究員 岩戸晶子	6月15日	奈良国立博物館サンデートーク
32	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	正倉院の武器・武具	同上	11月8日	奈良国立博物館公開講座
33	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	醍醐寺の密教修法と聖教	研究員 斎木涼子	9月6日	奈良国立博物館公開講座
34	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	阿弥陀来迎図をめぐる	研究員 北澤菜月	2月15日	奈良国立博物館サンデートーク
35	同上	聖徳太子の伝記絵について	同上	7月13日	静岡市美術館
36	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	中世律宗の鎌倉進出と善派仏師	研究員 山口隆介	4月19日	奈良国立博物館公開講座
37	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	正倉院宝物の魅力	研究員 田澤 梓	12月13日	平成26年度佐野市民大学 (於：佐野市中央公民館)
38	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	盛岡地方務局大船渡出張所と仙台法務局気仙沼支局の被災公文書に施す科学的保存処理	研究員 大江克己	12月7日	シンポジウム“被災地歌津と奈良を繋ぐ、そしてこれから” (於：奈良大学)
39	同上	飾られた馬具への問いー洲浜金具の機能に関する認識の客観性ー	同上	1月11日	ここまでわかった！考古学 (於：京都市考古資料館)

【九州国立博物館】 23件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」に関する調査・研究	「信尹と家熙ー近衛家が生んだ桃山・江戸の文化人ー」	文化財課資料登録室主任研究員 荒木和憲	4月26日	特別展「近衛家の国宝」展開連 りレー講座 近衛家の国宝展の 魅力に迫る
2	同上	「近衛家の成立ー藤原道長以後ー」	博物館科学課保存修復室ア ソシエイトフェロー 渡部 史之	5月10日	特別展「近衛家の国宝」展開連 りレー講座 近衛家の国宝展の 魅力に迫る
3	同上	「陽明文庫の書の魅力」	文化財課資料登録室主任研 究員 丸山猶計	5月10日	特別展「近衛家の国宝」展開連 りレー講座 近衛家の国宝展の 魅力に迫る
4	博物館の環境保全に 関する研究	市民ボランティアと行うIPMワー クショップの取り組み	学芸部特任研究員 本田光子	6月7日	第36回文化財保存修復学会大会 (会場：明治大学)
5	博物館の環境保全に 関する研究	博物館における飲食スペースのIPM活動	博物館科学課環境保全室研 究員 秋山純子	6月7日	第36回文化財保存修復学会大会 (会場：明治大学)
6	文化財の材質・構造等 に関する共同研究	「X線CTによる「アイヌ文化伝世の漆椀」 の内部構造調査(2)ー「熊図文入漆椀」と 「津軽塗(系)漆椀」に注目して」	小林幸雄、杉山智昭、九州国 立博物館博物館科学課長 今津節生、鳥越俊行、田中大 之、相山英明	6月7～8日	文化財保存修復学会36回大会
7	同上	「アイヌ民族資料の保存修復に向けた現況 調査」	杉山智昭、小林幸雄、九州国 立博物館博物館科学課長 今津節生、鳥越俊行	6月7～8日	文化財保存修復学会36回大会
8	水中遺跡の保存活用 に関する調査研究	X線CTスキャナを活用した出土木製品の 構造解析に係る基礎研究Ⅱ-保存処理後の 木製品内部における処理薬剤及び水分の分 布について-	小林啓、伊藤幸司、九州国立 博物館博物館科学課長 今 津節生	7月4日	日本文化財科学会第31回大会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
9	九州における対外交 流文化財の保存と活 用に向けた研究基盤 の創設／文化財の材 質・構造等に関する共 同研究	福岡県古賀市船原古墳遺物埋納坑出土資料 のX線CTスキャナによる調査	小林啓、加藤和蔵、山崎悠郁 子、森下靖士、甲斐孝司、 横田義章、九州国立博物館博 物館科学課長 今津節生、輪 田慧	7月5日	日本文化財学会第31回大会
10	文化財の材質・構造に 関する共同研究	赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性 に関する研究2	博物館科学課環境保全室研 究員 秋山純子 企画課研究員 森實久美子	7月5日、6日	第31回日本文化財学会、（会 場：奈良教育大学）
11	同上	「X線CTスキャナの活用による遺跡で発 見される豊富な遺物情報を得る調査 福岡 県古賀市船原古墳遺物埋納坑出土遺物の取 り上げ・構造解析から公開活用に向けて」	加藤和蔵、小林啓、山崎悠郁 子、九州国立博物館博物館科 学課長今津節生、輪田慧、森 下靖士、甲斐孝司、横田義 章	7月5日、6日	日本文化財学会31回大会
12	同上	「トレハロース含浸処理法における含浸と 結晶化のイメージ（その1）—X線CTスキ ャナによる含浸具合の可視化」	伊藤幸司、藤田浩明、小林啓、 九州国立博物館博物館科学 課長今津節生	7月5日、6日	日本文化財学会31回大会
13	石棺に塗布された赤 色顔料についての基 礎的研究	「出土ベンガラ中に含まれているパイプ状 ベンガラ粒子の認定方法について」	博物館科学課保存修復室主 任研究員 志賀智史	7月5日、6日	日本文化財学会第31回大会
14	酸化促進剤の添加に よる文化財建造物用 油性塗料の塗膜形成 に関する調査・研究	「薬師寺東塔に使用された彩色材料の分析」	金受貞、九州国立博物館博 物館科学課環境保全室アソシ エイトフェロー 赤田昌倫、 高妻洋成、鈴木智大、馬場宏 道	7月5日、6日	日本文化財学会第31回大会
15	特別展「クリーブラン ド美術館展」について の調査・研究	「クリーブランド美術館展 名画でたどる 日本の美」	企画課研究員 鷲頭桂	7月11日	特別展「クリーブランド美術館展」 関連 解説講座（筑紫野市）
16	特別展「クリーブラン ド美術館展」について の調査・研究	「日本絵画入門：千年の歴史をたどる」	文化財課資料管理室主任研 究員 畑靖紀 企画課研究員 鷲頭桂	7月19日	特別展「クリーブランド美術館展」 関連 リレー講座
17	特別展「台北 國立故 宮博物院—神品至宝 —展」に関する調査・ 研究	「日本でつくられた倣中国製彫漆器」	企画課文化交流展室主任研 究員 川畑憲子	10月25日	特別展「台北 國立故宮博物院— 神品至宝—」関連 シンポジウム「中国皇帝コレク ションの意味—工芸における復古と 革新—」
18	タイにおける異文化 の受容と変容	Intercultural and Comparative study of Buddhist narrative art	東京国立博物館学芸企画部 企画課長 小泉恵英、企画課 特別展室主任研究員 原田 あゆみ	11月25日	バンコク国立博物館
19	同上	A Subsequent report on investigation about Thai arts in Japan	企画課特別展室主任研究員 原田あゆみ	11月25日	バンコク国立博物館
20	同上	Acceptance and Transformation of Japanese Sword in Siam	文化財課資料登録室アソシ エイトフェロー 望月規史	11月25日	バンコク国立博物館
21	和泉市久保惣記念美 術館の収蔵品の調査 研究／X線CTスキ ャナによる青銅器・彫 刻・漆工などの構造技 法解析／X線CTに よる興福寺塑像の研 究	「X線CTを核にした三次元計測による博物 館資料の活用と連携」	博物館科学課長 今津節生	12月20日	シンポジウム 文化財調査におけるX線CTの活 用
22	特別展「古代日本と百 済の交流—大宰府・飛 鳥そして公州・扶餘 —」に関する調査研究	「激動の7世紀を戦った兵士」	展示課情報サービス室研 究員 小嶋篤	27年2月22日	特別展「古代日本と百済の交流— 大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」 関連リレー講座
23	特別展「日本発掘—発 掘された日本列島 2014」に関する調査研 究	「発掘された日本列島2014の見どころ」	展示課情報サービス室主任 研究員 進村真之	27年2月22日	特別展「古代日本と百済の交流— 大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」 関連リレー講座

【東京文化財研究所】計60件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（24件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	文化財の資料学的研究	黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻 刻・解題	客員研究員 吉田千鶴子	8月6日	企画情報部研究会
2	同上	一流相承系図（絵系図）の構想と機能	企画情報部文化形成研究室 長 津田徹英	10月31日	第48回オープンレクチャー「モノ ／イメージとの対話」
3	近現代美術に関する交 流史的研究	黒田清輝『昔語り』再考	企画情報部副部長 山梨絵 美子	9月30日	企画情報部研究会
4	同上	李王家コレクションの位置づけをめぐって	企画情報部副部長 山梨絵 美子	11月14日	韓国国立中央博物館シンポジウム 「東洋を蒐集する」
5	同上	岸田劉生と古屋芳雄—劉生の「駒沢村新町」 療養期を中心に	副所長（企画情報部長兼務） 田中淳	9月30日	企画情報部研究会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者(職名・名前)	実施日	学会等名
6	同上	仙台・昭忠碑、被災から復興へ向けて	企画情報部近・現代視覚芸術研究室長 塩谷純	11月1日	第48回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」
7	同上	反芸術・脱主体化・匿名性—1960年前後の赤瀬川原平周辺から	企画情報部アソシエイトフェロー 河合大介	27年3月24日	企画情報部研究会
8	同上	観光芸術多摩川展パノラマ図を観る	企画情報部アソシエイトフェロー 橋川英規	27年3月24日	企画情報部研究会
9	美術の表現・技法・材料に関する多角的研究	琉球王国時代の螺鈿漆器製作技術を探る(ポスター発表)	企画情報部広領域研究室長 小林 公治	11月15日	第5回琉球の漆文化と科学
10	同上	トルコの螺鈿—本格調査に向けた予備的検討—(ポスター発表)	企画情報部広領域研究室長 小林 公治	11月15日	第5回琉球の漆文化と科学
11	同上	パレスチナの螺鈿—その特徴と歴史に関する予察—(ポスター発表)	企画情報部広領域研究室長 小林 公治	11月15日	第5回琉球の漆文化と科学
12	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	謡のフシ付けを考える	無形文化遺産部無形文化財研究室長 高桑いづみ	6月24日	観世流若手研修会講座
13	同上	放下の歌と能・狂言	無形文化遺産部無形文化財研究室長 高桑いづみ	10月18日	第9回無形文化遺産部公開学術講座
14	同上	ヨワ吟・ツヨ吟 現在に至る変遷	無形文化遺産部無形文化財研究室長 高桑いづみ	12月8日	観世流若手研修会講座
15	同上	山崎家旧蔵伝書の概要	無形文化遺産部無形文化財研究室長 高桑いづみ	27年2月27日	『よみがえる音色—幸流名家山崎家旧蔵伝書と鼓胴』法政大学能楽研究所
16	同上	染織技術の伝承における道具の役割—熊谷染を事例として—	無形文化遺産部研究員 菊池理予	11月4日	平成26年度第2回総合研究会
17	同上	日本伝統染織技術の継承と発展	無形文化遺産部研究員 菊池理予	27年1月26日	文化学園大学特別講義
18	同上	無形文化遺産(伝統技術)の伝承に関する研究会「染織技術をささえる人と道具」趣旨説明とパネルディスカッションコーディネーター	無形文化遺産部研究員 菊池理予	27年2月3日	文化学園大学
19	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	伝統技術を伝えていくということ—『長良川の鵜飼漁の技術』の保存・活用	無形文化遺産部研究員 今石みぎわ	27年1月25日	岐阜市
20	同上	暮らしの記憶を記録する ごいし民俗誌その後	無形文化遺産部研究員 今石みぎわ	27年2月15日	岩手県大船渡市碁石地区
21	同上	菅笠作りは福岡の宝	無形文化遺産部研究員 今石みぎわ	27年3月29日	ふくおか文化総合センター
22	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	染織技術に関わる原材料と道具の現状	無形文化遺産部研究員 菊池理予	9月4日	韓国国立無形遺産院
23	同上	日本における風流芸能の伝承と保存	無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長 久保田裕道	27年10月16日	韓国文化財保護財団
24	同上	日韓の正月儀礼を中心とした比較研究	無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長 久保田裕道	27年3月13日	韓国国立無形遺産院

○文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進 (0件)

○科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進 (20件)

	研究テーマ	発表テーマ	発表者(職名・名前)	実施日	学会等名
1	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究	歴史的木造建造物を加害するオオナガシバムシ幼虫のセルラーゼ活性について	保存修復科学センター生物科学研究室長 木川りか、研究員 佐藤嘉則、客員研究員 小峰幸夫	6月7日~8日	文化財保存修復学会第36回大会
2	文化財の保存環境の研究	Estimation of acetic acid and ammonia gases concentration in museum display cases using emission rate of construction materials	保存修復科学センター保存科学研究室長 佐野千絵、客員研究員 呂俊民、客員研究員 古田嶋智子	4月13日~16日	11th International Conference - Indoor Air Quality in Heritage and Historic Environments
3	同上	気流解析と実測によるLED照明を用いた展示ケース内の温湿度分布の調査	保存修復科学センター主任研究員 大塚将英、客員研究員 間淵創	6月8日	文化財保存修復学会第36回大会
4	同上	気密性を有する展示ケースのガス濃度推移	保存修復科学センター保存科学研究室長 佐野千絵、客員研究員 呂俊民、客員研究員 古田嶋智子	12月5日~6日	室内環境学会
5	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究	平等院の国宝鳳凰・梵鐘・装飾金物の材料調査	保存修復科学センター分析科学研究室長 早川泰弘、企画情報部専門職員 城野誠治	7月5日~6日	日本文化財科学会第31回大会
6	同上	蛍光寿命測定のための文化財材料への応用に関する基礎研究1	保存修復科学センター主任研究員 吉田直人	同上	同上
7	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	臼杵市・下藤キリシタン墓地における遺構の凍結防止策(2)	保存修復科学センター修復材料研究室長 朽津信明	6月7日	文化財保存修復学会第36回大会
8	同上	冬場の臼杵石仏における覆屋の有効性評価のためのリアルタイム環境観測システム	保存修復科学センター主任研究員 森井順之	7月5日~6日	日本文化財科学会第31回大会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
9	同上	長崎市出島で見られる砂岩石材の風化現象について	保存修復科学センター修復材料研究室長 朽津信明、主任研究員 森井順之、研究補佐員 佐藤円香	10月29日～30日	日本応用地質学会平成26年度研究発表会
10	同上	臼杵磨崖仏における保存環境調査と次期保存修理計画	保存修復科学センター主任研究員 森井順之	27年1月23日	保存科学研究集会2014「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」
11	文化財の防災計画に関する研究	石巻市仮収蔵施設の保存環境	保存修復科学センター主任研究員 森井順之	11月20日	平成26年度宮城県被災文化財等保全連絡会議研修会
12	文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究	日光東照宮陽明門側面大羽目絵画の彩色に関する調査	保存修復科学センター伝統技術研究室長 北野信彦、主任研究員 犬塚将英、主任研究員 吉田直人、客員研究員 本多貴之	6月8日	文化財保存修復学会第36回大会
13	同上	日光桃山文化期欄間彩色の保存と資料活用に関する基礎的調査	保存修復科学センター伝統技術研究室長 北野信彦、客員研究員 本多貴之	7月5日～6日	日本文化財科学会第31回大会
14	文化財修復材料の適用に関する調査研究	Characterization of Funori as a conservation material	保存修復科学センター主任研究員 早川典子、文化遺産国際協力センター長 川野邊渉、アソシエイトフェロー 楠京子、学振特別研究員 貴田啓子	9月24日	IIC-HongKong Influence of seaweed species and extraction temperature
15	同上	典籍類に使用された「豆粕」に関する赤外分光分析	保存修復科学センター主任研究員 早川典子	6月8日	文化財保存修復学会第36回大会
16	同上	日本画の修復および制作に用いる膠の基礎的特性に関する報告	保存修復科学センター主任研究員 早川典子、客員研究員 大河原典子	同上	同上
17	近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究	洋紙の保存と修復	保存修復科学センター近代文化遺産研究室長 中山俊介	11月21日	洋紙の保存と修復に関する研究会
18	同上	保存科学による文化遺産の修復—建造物を中心に—	同上	12月20日	台湾総督府鉄道部の保存修復活動における講演会
19	同上	近代文化遺産の保存と動態保存に関して	同上	27年2月22日	中部産業遺産研究会第33回シンポジウム「日本の技術史を見る眼」
20	同上	史跡・葦山反射炉の保存環境について	保存修復科学センター近代文化遺産研究室長 中山俊介、修復材料研究室長 朽津信明、主任研究員 森井順之	10月10日	地盤工学会「土木史跡の地盤工学的分析・評価に関するシンポジウム」

○保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤の整備（2件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	日本の文化財保護	文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 境野飛鳥	7月3日	史跡整備と展示に関する人材育成ワークショップ
2	同上	第38回世界遺産委員会	企画情報部情報システム研究室長 二神葉子	27年3月2日	第16回文化遺産コンソーシアム研究会「文化遺産保護の国際動向」

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進（12件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	中国の文化遺産の保存修復のための共同研究	敦煌莫高窟第285窟の壁画の劣化と外気流入との関係	保存修復科学センター長 岡田健、	6月21日	日本建築学会平成26年度近畿支部研究発表会
2	同上	敦煌莫高窟第285窟壁画の劣化要因の検討	保存修復科学センター長 岡田健、客員研究員 渡辺真樹子、客員研究員 高林弘実	6月22日	同上
3	同上	敦煌莫高窟第285窟に描かれたパルメット文様の彩色材料および技法	保存修復科学センター長 岡田健、客員研究員 高林弘実	7月5日～6日	日本文化財科学会第31回大会
4	同上	敦煌莫高窟第285窟西壁の供養菩薩群の制作工程	同上	同上	同上
5	同上	壁画の“保存”とは、何を意味するのか—莫高窟第285窟壁画調査を通して	保存修復科学センター長 岡田健	10月8日	敦煌研究院設立70年国際シンポジウム「2014年シルクロード古代遺跡保護国際学術検討会」
6	同上	ユーラシア大陸壁画の研究と保護—国際協力の意義	同上	10月16日	2014年陝西歴史博物館壁画論壇「全地球的視野のもとでの中国古代壁画の予防的保護研究に関する国際学術検討会」
7	東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力	アンコール・タネイ遺跡の伽藍配置に見られる特徴について(2)	文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 佐藤桂	9月12日	日本建築学会大会
8	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	アルメニア共和国ルチャシェン遺跡から出土した考古金属資料の科学的調査	文化遺産国際協力センター地域環境研究室長 山内和也、前アソシエイトフェロー 藤澤明、客員研究員	6月8日	文化財保存修復学会第36回大会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
			邊牟木尚美、		
9	同上	アク・ベシム遺跡出土の羊距骨とキルギス伝統遊戯チュコ	前文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 安倍雅史	6月15日	日本西アジア考古学会第19回総会・大会
10	ユーラシア壁画の調査研究と保存修復	Conservation of the Bamiyan Mural Paintings, Afghanistan	文化遺産国際協力センター地域環境研究室長 山内和也	10月8日～9日	Dunhuang Forum
11	在外日本古美術品保存修復協力事業	文化財修復材料として使用する除去可能な色材の検討	文化遺産国際協力センター国際情報研究室長 加藤雅人、アソシエイトフェロー 山田祐子、アソシエイトフェロー 楠京子	6月7日～8日	文化財保存修復学会第36回大会
12	同上	絵画用絹の加工方法と照明角度による見え方の相違について	文化遺産国際協力センター国際情報研究室長 加藤雅人、アソシエイトフェロー 山田祐子	11月14日～15日	日本色彩学会第2回大会

○地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上（2件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進	美術館・博物館照明による文化財劣化の評価方法に関する研究－積算照度と有効放射露光量－	保存修復科学センター保存科学研究室長 佐野千絵、主任研究員 吉田直人、客員研究員 古田嶋智子	6月7日	文化財保存修復学会第36回大会
2	同上	美術館・博物館の資料保護に向けた光曝露量評価の研究－積算照度と有効放射露光量－	同上	9月4日～6日	照明学会

【奈良文化財研究所】計45件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（22件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究	近世の伊賀街道と古代恭仁宮	歴史研究室長 吉川 聡	27年1月25日	木津川市ふれあい文化講座第77回
2	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	平出集落の価値－伝統的建造物群保存対策調査から－	文化遺産部長 林良彦	9月30日	塩尻市平出伝統的建造物群保存対策調査現地説明会
3	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	長谷川家住宅の建築の価値	文化遺産部長 林良彦	10月26日	松阪長谷川家住宅文化財シンポジウム
4	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	関宿のこれまでとこれから	文化遺産部長 林良彦	12月13日	亀山市関宿重伝建30周年シンポジウム
5	我が国の記念物に関する調査・研究（庭園）	平安貴族の遊覧と文芸 一道長と桂、宇治	文化遺産部研究員 高橋知奈津	8月29日	京都造形大学 日本庭園・歴史遺産研究センター 庭園学講座2 1
6	我が国の記念物に関する調査・研究（庭園）	戦国城館の庭園遺構	文化遺産部研究員 高橋知奈津	10月25日	奈良文化財研究所「平成26年度庭園に関する研究会 戦国時代の城館の庭園」
7	我が国の記念物に関する調査・研究（庭園）	庭園と八景	文化遺産部研究員 高橋知奈津	27年3月21日	文化講演会「大乘院庭園文化サロン」
8	我が国の記念物に関する調査・研究（国際研究交流）	Ideal management of historic parks : From past to present to future	都城発掘調査部考古第三研究室長 清野孝之	9月17日	Inquiry HP (Columbia University, U. S. A.)
9	我が国の記念物に関する調査・研究（国際研究交流）	A review of the Application of Dendrochronology to Japanese Cultural Heritage	埋蔵文化財センター研究員 星野安治	9月17日	Inquiry HP (Columbia University, U. S. A.)
10	古代官衙・集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行	平城宮とその周辺の土器様相	都城発掘調査部主任研究員 森川 実	12月12日	「第18回古代官衙・集落研究集会 宮都・官衙と土器(官衙・集落と土器I)」
11	古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行	平城宮の6282-6721型式軒瓦	都城発掘調査部研究員 川畑 純	27年2月14日	「8世紀の瓦づくりIV－平城宮式軒瓦の展開2 6282-6721系－」第15回シンポジウム
12	平城宮・京跡出土遺物と検出遺構の調査研究等	平城宮・京出土鞆羽口の製作技法と皮革	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦	7月19日	学際的共同研究体制に基づくタンパク質考古学創生事業主催シンポジウム「皮と膠」
13	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	藤原宮・京跡出土土瓦の胎土分析	都城発掘調査部主任研究員 降幡順子、都城発掘調査部研究員 森先一貴、都城発掘調査部考古第三研究室長 清野孝之	7月6日	日本文化財科学会第31回大会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
14	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力	平城京の造営規格	都城発掘調査部主任研究員 今井晃樹	8月6日-7日	「都城国際シンポジウム」
15	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	諸戸家の遺産の価値	景観研究室長 平澤毅	6月1日	新桑名市誕生10周年記念シンポジウム「近代桑名を考える」
16	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	文化財庭園の保護と景観	景観研究室長 平澤毅	6月22日	文化財庭園の保存継承シンポジウム～登録記念物 盛合氏庭園～
17	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	フィリピンとインドネシアの文化的景観－農業に関する文化的景観を中心に	文化遺産部アソシエイトフェロー 菊地淑人	9月20日	文化的景観講演会
18	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	文化的景観の味わい方	文化遺産部研究員 惠谷浩子	10月4日	奈良文化財研究所第115回公開講演会
19	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	宇治の文化的景観の調査研究からみえる宇治の魅力	文化遺産部研究員 惠谷浩子	10月23日	第42回歴史的景観都市協議会総会トークセッション
20	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	四万十川流域における沈下橋の意味－変化の連鎖	文化遺産部研究員 惠谷浩子	27年1月24日	研究会はたのおと2015
21	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	京都岡崎の文化的景観と六勝寺跡の近代	文化遺産部研究員 惠谷浩子	27年1月25日	第4回オカシル連続講座2014「営みは水の流れに導かれて－京都岡崎の文化的景観①」
22	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	京都岡崎の文化的景観と南禅寺界隈のアカマツ文化	文化遺産部研究員 惠谷浩子	27年3月22日	第5回オカシル連続講座2014「緑が語る、地域の本来と将来－京都岡崎の文化的景観②」

○文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進（19件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	文化財の測量・探査等に関する研究	S f mによる近接写真計測の遺跡への応用	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	7月5日-6日	日本文化財科学会第31回大会
2	文化財の測量・探査等に関する研究	S f m各手法による三次元計測の比較	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	7月5日-6日	日本文化財科学会第31回大会
3	文化財の測量・探査等に関する研究	U A VとS f mによる遺跡の三次元計測	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	7月5日-6日	日本文化財科学会第31回大会
4	文化財の測量・探査等に関する研究	九十九里地域における古墳のレーダ探査	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	7月5日-6日	日本文化財科学会第31回大会
5	文化財の測量・探査等に関する研究	可見市大萱古窯跡における探査と発掘の連携	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	7月5日-6日	日本文化財科学会第31回大会
6	文化財の測量・探査等に関する研究	古代の土器研究と年代論への希望	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	10月10日	総合地球環境学研究所 気候適応史プロジェクト先史・古代史グループ研究会
7	文化財の測量・探査等に関する研究	遺跡をみる、まもる沢山の目	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	11月8日	けいはんな情報通信フェア2014
8	年輪年代学研究	宮城県追戸横穴墓出土斑点紋トンボ玉の自然科学的研究	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美、星野安治	7月5日	日本文化財科学会第31回大会
9	年輪年代学研究	富山県小竹貝塚から出土した鯛の歯を象嵌した漆製品片	埋蔵文化財センター研究員 山崎健、田村朋美、星野安治、主任研究員 大河内隆之、客員研究員 丸山真史、菊地大樹、赤田昌倫、鈴木三男、小林和貴	7月5日	日本文化財科学会第31回大会
10	年輪年代学研究	木の年輪で作った年代を測るものさし－年輪年代学の成果－	埋蔵文化財センター研究員 星野安治	10月25日	奈良文化財研究所特別講演会「遺跡の年代を測るものさしと奈文研」
11	動植物遺存体による環境考古学的研究	私たちは何を語るべきか？－環境考古学の活用と社会還元－	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	4月26日	近江貝塚研究会第246回例会
12	動植物遺存体による環境考古学的研究	小竹貝塚の動物遺存体	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	5月18日	日本考古学協会第80回総会
13	動植物遺存体による環境考古学的研究	富山県小竹貝塚から出土した「鯛の歯を象嵌した漆製品片」	埋蔵文化財センター研究員 山崎健、客員研究員 丸山真史、客員研究員 菊地大樹ほか	7月5日-6日	日本文化財科学会第31回大会
14	動植物遺存体による環境考古学的研究	3D laser scanningの動物考古学への応用	客員研究員 菊地大樹、客員研究員 松井章	7月5日-6日	日本文化財科学会第31回大会
15	動植物遺存体による環境考古学的研究	都城における多様な動物利用	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	8月3日	平成26年度みはま土曜歴史講座
16	動植物遺存体による環境考古学的研究	縄文時代におけるイノシシやニホンジカの生息環境	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	9月5日	日本ほ乳類学会2014年度大会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
17	動植物遺存体による環境考古学的研究	自然史標本と文化財	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	9月19日	日本学術会議公開シンポジウム 『自然史標本の継承—人類の財産を失わないために今なすべきこと—』
18	動植物遺存体による環境考古学的研究	小竹貝塚における動物資源利用	埋蔵文化財センター研究員 山崎健 客員研究員 丸山真史、 客員研究員 菊地大樹ほか	11月29日-30日	日本動物考古学会第2回大会
19	動植物遺存体による環境考古学的研究	佐賀市東名遺跡群出土の耳石の種同定と、その動物考古学的意義について	客員研究員 松井章、客員研究員 大江文雄、客員研究員 丸山真史ほか	11月29日-30日	日本動物考古学会第2回大会

○科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進（0件）

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施（4件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画	土が報せるさまざまな出来事～減災に向けて考古学の新たな挑戦～	遺跡・調査技術研究室アソシエイトフェロー 村田泰輔	27年1月30日	奈良文化財研究所総合研究会（第25回）
2	災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画	考古資料および分研資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベースの構築・公開	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦	27年3月2日	「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」平成26年度成果報告シンポジウム
3	災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画	考古資料および分研資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベースの構築・公開	遺跡・調査技術研究室アソシエイトフェロー 村田泰輔	27年3月2日	「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」平成26年度成果報告シンポジウム
4	災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画	考古資料から抽出される災害情報とそのデータ化	遺跡・調査技術研究室アソシエイトフェロー 村田泰輔	27年3月28日	人文科学における災害情報の共有化に関する研究会（大学共同利用機関法人人間文化研究機構・研究資源共有化事業委員会）

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進（0件）

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】計0件

c-④ シンポジウム開催実績一覧

平成27年3月31日現在

国立文化財機構合計	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
12件	9件	2件	1件	1件	5件
	文化財研究所計	東京文化財研究所		奈良文化財研究所	
	0件	0件		0件	
	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	文化財防災ネットワーク推進室			
	0件	3件			

【東京国立博物館】

○特別展「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」開催記念シンポジウム 『中国皇帝コレクションの意味—書画における復古と革新—』

開催日 26年7月5/6日
 開催場所 東京国立博物館平成館大講堂
 主催 東京国立博物館
 参加人数 233/189人
 事業内容 世界で活躍する第一線の研究者を招き、中国皇帝コレクションについて語るシンポジウムを開催。

○特別展「3・11大津波と文化財の再生」シンポジウム「文化財を守る絆—津波被災文化財再生への挑戦—」

開催日 27年3月11日
 開催場所 東京文化財研究所
 主催 東京国立博物館 日本博物館協会
 参加人数 98人
 事業内容 陸前高田市立博物館、岩手県立博物館、遠野文化研究センターの方を招き、被災現場での文化財保護の取り組みについて語るシンポジウムを開催。

【京都国立博物館】

○特別シンポジウム『鳥獣戯画を語る』

開催日 11月15日
 開催場所 京都国立博物館
 主催 京都国立博物館
 参加人数 168人
 事業内容 特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」にあわせて開催し、2部構成のうち、第1部には日英同時通訳をつけた。3名の講師による発表とパネルディスカッションを行った。

【奈良国立博物館】

○正倉院学術シンポジウム2014「正倉院宝物に日本文化の源流をみる」

開催日 11月2日
 開催場所 奈良県新公会堂 レセプションホール
 主催 奈良国立博物館
 後援 読売新聞社
 参加人数 192名
 事業内容 本シンポジウムが10回目という大きな節目を迎えるにあたり、千数百年の歳月を経て伝来した正倉院宝物のすばらしさを内外に発信し、わが国の文化財保護活動に対する理解を広く共有することを目的とし、3名の研究者による研究発表と、パネルディスカッションをおこなった

【九州国立博物館】

○フォーラム 全国高等学校考古学フォーラム in 九州国立博物館 2014（トピック展示「高等学校所蔵考古名品展」関連）

開催日 8月16日
 開催場所 ミュージアムホール
 主催 九州国立博物館
 参加者数 93人
 事業内容 現役高校生による考古学活動の研究発表を行った。

○国際シンポジウム 「中国皇帝コレクションの意味—工芸における復古と革新—」（特別展「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」展関連）

開催日 10月25日
 開催場所 ミュージアムホール
 主催 九州国立博物館
 参加者数 150人
 事業内容 「国立故宮博物院の名品から見た清朝皇帝コレクション」、「乾隆帝収蔵の汝窯磁器と関連する諸問題」、「日本でつくられた倣中国製彫漆器」、「乾隆帝の玉器評価基準」、「考古資料から見た徽宗の青銅器文化復興」の講演が行われた。

○公開シンポジウム 日本文化財科学会公開講演会シリーズ『文化遺産と科学』文化財が解き明かす自然災害Ⅲ

開催日 27年1月24日
 開催場所 ミュージアムホール
 主催 日本文化財科学会・九州国立博物館
 参加者数 110人
 事業内容 「1.17 から3.11 —文化財の危機管理意識—」、「八重山諸島の巨大津波を探る」、「西日本沿岸の巨大津波痕跡から将来を考える」、「地震考古学と九州の地震災害」の講演が行われた。

○国際シンポジウム 「世界のアrita —有田焼の伝統と未来へ続く創造性—」（トピック展示「柿右衛門 受け継がれる技と美」関連）

開催日 27年3月8日
 開催場所 ミュージアムホール
 主催 九州国立博物館
 参加者数 253人
 事業内容 特別講演「陶片から読み解く柿右衛門」、講演「世界を魅了した有田焼」、パネルディスカッション「有田焼の伝統と未来へと続く創造性」が行われた。

○特別シンポジウム 進化する博物館Ⅲ「装飾古墳がやってくる ～e-Heritageへの招待～」

開催日 27年3月14日
 開催場所 ミュージアムホール
 主催 九州国立博物館
 参加者数 90人

事業内容 第1部「九州装飾古墳群」、第2部「VR作品特別上演会」、VR作品「アンコール遺跡バイヨン寺院」特別上演解説、VR作品「百舌鳥古墳群」特別上演、映像作品「装飾古墳バーチャルシアター作品上映」が行われた。

【東京文化財研究所】

該当なし

【奈良文化財研究所】

該当なし

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】

該当なし

【文化財防災ネットワーク推進室】

- 国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」東京シンポジウム
 - 開催日 27年3月13日
 - 開催場所 品川プリンスホテル
 - 主催 独立行政法人国立文化財機構、文化庁、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）、ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）
 - 参加人数 151人
 - 事業内容 国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」の一部として東日本大震災に関する経験について講演と報告。

- 国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」テーマ別会合
 - 開催日 27年3月15日
 - 開催場所 仙台国際センター展示棟展示室1
 - 主催 独立行政法人国立文化財機構、文化庁、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）、ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）
 - 参加人数 250人
 - 事業内容 第3回国連防災世界会議の一部として開催。

- 国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」仙台シンポジウム
 - 開催日 27年3月16日
 - 開催場所 仙台市情報・産業プラザ AER（アエル）
 - 主催 独立行政法人国立文化財機構、文化庁、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）、ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）
 - 参加人数 142人
 - 事業内容 国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」の成果を広く伝えるために開催。

c-⑤ 論文等発表実績一覧

平成 27 年 3 月 31 日現在

国立文化財機構合計	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
341 件	206 件	126 件	34 件	22 件	24 件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	134 件	40 件	94 件	0 件	
	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	1 件			

【東京国立博物館】126件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフ エリ ー 有無
1	收藏品・寄託品及び関連品に関する調査研究	副館長 島谷弘幸	「浦上玉堂の書」	『玉堂片影』	浦上家史編纂委員会	6 月	無
2	同上	同上	「書の鑑賞と楽しみ」	『日本の書と筆の宇宙』	筆の里工房	9 月	無
3	同上	同上	「書の至宝 金剛場陀羅尼経」ほか（連載）	『書写書道』	日本武道館	4 月～27 年 3 月	無
4	同上	同上	「書の美」（連載）	『毎日新聞 日曜版』	毎日新聞社	4 月～27 年 3 月	無
5	同上	学芸企画部長 伊藤嘉章	桃山の茶陶	『楽一茶碗の中の宇宙』図録	国際交流基金・ロサンゼルスカウンティ美術館, エルミタージュ美術館, プーシキン美術館	27 年 3 月 29 日	無
6	同上	企画課特別展室長 松嶋雅人	(名宝細見) 焔 東京国立博物館から	朝日新聞	朝日新聞社	5 月 3 日	無
7	同上	同上	同上	同上	同上	12 月 20 日	無
8	同上	同上	Japanese paintings of Chinese historical figures	Ink and Gold: Art of the Kano	Philadelphia Museum of Art	27 年 2 月 16 日	無
9	同上	企画課出版企画室長 勝木言一郎	敦煌壁画の阿弥陀浄土変相に描かれた鳥類の図像, p. 204-219	図像学Ⅱ —イメージの成立と伝承(浄土教・説話画)(仏教美術論集第3巻)	竹林舎	5 月 15 日	無
10	同上	同上	敦煌の薬師経変相に描かれた浄土景観に関する一考察	『東京国立博物館紀要』50号	東京国立博物館	27 年 3 月 31 日	無
11	同上	博物館教育課 小林牧	東京国立博物館のマーケティング—来館者調査から 140 周年事業まで	東京国立博物館紀要	東京国立博物館	27 年 3 月	無
12	同上	博物館教育課教育講座室長 浅湊毅	興福寺等金堂の維摩居士・文殊菩薩像をめぐって	仏教美術論集3 図像学Ⅱ —イメージの成立と伝承(浄土教・説話画)	竹林舎	5 月	有
13	同上	同上	須磨家旧蔵の木造菩薩坐像と像内納入品	学叢 36	京都国立博物館	5 月 25 日	無
14	同上	同上	南山城古仏巡礼	南山城の古寺巡礼	京都国立博物館	4 月 20 日	無
15	同上	博物館教育課教育普及室長 小山弓弦葉	「染織で表された「絵画」—中国絵画、知られざる伝統—	『台北 國立故宮博物院 神品至宝』図録	東京国立博物館	6 月 24 日	無
16	同上	同上	「織繡珍品選」	『典藏古美術』第 263 期』	典藏雑誌社	8 月	無
17	同上	同上	「帯 銀地花卉段文様モール錦」	『國華』第 1428 号	國華編輯委員会	10 月 20 日	有
18	同上	同上	「Tsujiyahana Stitch-resist Dyeing in Muromachi-Momoyama Period in Japan」	『第 9 回国際校会議』報告書	国際校会議	10 月	無
19	同上	同上	「辻が花」の通説と実像」	『染織情報 α』2015 年 3 月号	染織と生活社	27 年 3 月	無
20	同上	学芸研究部長 谷豊信	青銅器の銘文	『台北 國立故宮博物院 神品至宝』図録	東京国立博物館	6 月 24 日	無
21	同上	特任研究員 後藤健	アラビア湾岸古代文明の「王墓」	アジア考古学四学会編 『アジアの王墓』161～189 頁	高志書院	11 月 15 日	無
22	同上	列品管理課長 富田淳	中国士大夫の精神—宋元時代の書画	『台北 國立故宮博物院 神品至宝』図録	東京国立博物館	6 月 24 日	無
23	同上	同上	孫過庭の草書書譜卷	同上	同上	同上	無
24	同上	同上	蘇軾の行書黄州寒食詩卷	同上	同上	同上	無
25	同上	同上	乾隆帝の書画コレクション	同上	同上	同上	無
26	同上	同上	四庫全書	同上	同上	同上	無
27	同上	同上	唐宋書法風流 600 年	『典藏古美術』第 261 期	典藏雑誌社	6 月	無
28	同上	同上	悲盒問詰—趙之謙の生涯—	『趙之謙の書画と北魏の書—悲盒没後一三〇年—』図録	東京国立博物館・公益財団法人台東区芸術文化財団	7 月 29 日	無
29	同上	同上	売芸捐官—代筆ものがたり—	同上	同上	同上	無
30	同上	同上	趙之謙藝術在日本の傳布	『典藏古美術』第 264 期	典藏雑誌社	9 月	無
31	同上	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男	(名宝細見) 緑釉犬 東京国立博物館から	朝日新聞	朝日新聞社	10 月 11 日	無
32	同上	調査研究課長 田良島哲	東京国立博物館所蔵『古賀穀堂遺稿』と森鷗外	MUSEUM 650	東京国立博物館	6 月	有

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフエ リー 有無
33	同上	同上	文化財としての写真原板が含む 情報	平成 26 年度文化庁「文化関 係資料のアーカイブの構築 に関する調査研究」報告書	公益社団法人日 本写真家協会 日本写真保存セ ンター	27 年 3 月	無
34	同上	同上	三越・ブランギン・鷗外	文京区立森鷗外記念館 NEWS 10	文京区立森鷗外 記念館	27 年 3 月	無
35	同上	同上	明治後期における逓信省から帝 室博物館への切手類の寄贈	郵政博物館研究紀要 6	公益財団法人通 信文化協会博物 館部	27 年 3 月	無
36	同上	同上(平勢隆郎、三輪紫都 香と共編)	東洋学研究情報センター叢刊第 18 輯 東京国立博物館所蔵 竹島 卓一旧蔵『中国史跡写真』目録	東洋学研究情報センター叢 刊第 18 輯 東京国立博物館 所蔵 竹島卓一旧蔵『中国史 跡写真』目録	東京大学東洋文 化研究所	27 年 3 月	無
37	同上	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀	絶海中津賛 開山明庵栄西頂相 について	『禅文化』232 号	禅文化研究所	4 月 25 日	無
38	同上	同上	狩野永徳と「檜図屏風」	MUSEUM 第 654 号	東京国立博物館	27 年 2 月 15 日	有
39	同上	調査研究課絵画・彫刻室主 任研究員 山下善也	(名宝細見) 納涼図屏風 東京国 立博物館から	朝日新聞	朝日新聞社	6 月 28 日	無
40	同上	調査研究課工芸室長 竹 内奈美子	色彩と彫技の豊穡—明代漆芸の 魅力	特別展「台北 國立故宮博物 院—神品至宝—」図録	東京国立博物館 ほか	6 月 24 日	無
41	同上	調査研究課東洋室 塚本 麿充	「北宋文物の受容とその場—宋、 高麗、日本の比較から—」	『日本美術全集 東アジア のなかの日本美術』	小学館	27 年 2 月	無
42	同上	同上	「中国絵画史における「人格」と 「かたち」—呉彬「山陰道上回巻」 と価値評価の構造」	『「かたち」再考 開かれた語 りのために』	平凡社	12 月	無
43	同上	同上	《唐繪手鑑(筆耕園)》與江戸時 代中國繪畫知識的架構	『創新與創造: 明清知識建構 與文化交流』國際學術研討會 論文集』	中央研究院中國 文哲研究所	同上	無
44	同上	同上	「中国伝統文化の再編—清朝皇 帝の世界—」	『台北 國立故宮博物院—神 品至宝—』図録	東京国立博物館	6 月	無
45	同上	同上	「唐代から五代・北宋山水への発 展」	同上	同上	同上	無
46	同上	同上	「徽宗のコレクション」	同上	同上	同上	無
47	同上	同上	「趙孟頫と元末四大家—反俗・友 人・故郷へのまなざしと筆墨文化 —」	同上	同上	同上	無
48	同上	同上	「國立故宮博物院開院の以前と 以後」	同上	同上	同上	無
49	同上	同上	「千年企盼 日本人の中國繪畫 新解—台北「國立故宮博物院— 神品至寶」繪畫精品選介」	『典藏 古美術』6 月号、第 261 期	典藏美術出版社	8 月	無
50	同上	同上	「赴日中國畫家: 來船清人及其交 流活動」	同上	典藏美術出版社	同上	無
51	同上	同上	「台北 國立故宮博物院—神品至 宝—今を生きる文物たち」	『趣味の水墨画』	日本美術教育セ ンター	6 月	無
52	同上	保存修復課保存修復室 三笠景子	珠玉の中国陶磁—特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」・ 横河コレクション—	陶説第 735 号	日本陶磁協会	6 月 1 日	無
53	同上	同上	図版口絵解説「台北 國立故宮博 物院—神品至宝—」	同上	同上	同上	無
54	同上	同上	天と人との競合—宋・元・明・清 の工芸品	特別展「台北 國立故宮博物 院—神品至宝—」図録	東京国立博物館 ほか	6 月 24 日	無
55	同上	同上	コラム 皇帝が愛したやきもの —汝窯青磁	同上	同上	同上	無
56	同上	同上	コラム 南宋官窯とは—東京国 立博物館所蔵品との比較にみる	同上	同上	同上	無
57	同上	同上	コラム 粉彩・珐瑯彩	同上	同上	同上	無
58	同上	同上	中国青磁研究史ノート—横河コ レクションの意義について	MUSEUM 第 651 号	東京国立博物館	8 月 15 日	有
59	同上	同上	稀代の中国陶磁コレクション— 欧米に向けた横河民輔の眼	陶説第 743 号	日本陶磁協会	27 年 2 月 1 日	無
60	同上	同上	図版口絵解説「東京国立博物館・ 横河コレクション」	陶説第 743 号	同上	同上	無
61	同上	列品管理課登録室アソシ エイトフェロー 鈴木希 帆	スウェーデン皇太子に贈られた 縄文土器—紀州徳川コレクショ ンの調査を兼ねて—	武蔵野美術大学研究紀要 第 45 号	武蔵野美術大学	27 年 3 月 1 日	有
62	同上	調査研究課考古室アソシ エイトフェロー 河野正 訓	大室古墳群の群構造	日本考古学協会第 80 回総会 研究発表要旨	日本考古学協会	5 月 17 日	有
63	同上	カリフォルニア大学博士 課程 James Scott Lyons、 調査研究課考古室アソシ エイトフェロー 河野正 訓	加工痕からみた鉄製品製作に関 する試論	信濃大室積石塚古墳群の研 究IV	明治大学文学部 考古学研究室	27 年 3 月 31 日	無
64	同上	調査研究課考古室アソシ エイトフェロー 河野正 訓	大室古墳群の群構造とその変遷	同上	同上	同上	無
65	同上	客員研究員 恵美千鶴子	「上野・西郷隆盛銅像」	『國華』1426 号	國華社	8 月	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフエ リー 有無
66	同上	学芸企画部長 伊藤嘉章	桃山茶陶—美濃窯という視点から—	聚美 12号	株式会社 展望社	7月1日	無
67	同上	同上	織部様式の誕生 その展開と意味について	『古田織部四〇〇年忌 大織部展』図録	岐阜県現代陶芸美術館	9月6日	無
68	同上	広報室長 伊藤信二	日本国宝展—「折り、信じる力」の造形	『日本国宝展』図録	東京国立博物館	10月15日	無
69	同上	保存修復課長 神庭信幸	『博物館資料の臨床保存学』	『博物館資料の臨床保存学』	武蔵野美術大学出版局	4月1日	無
70	同上	米倉乙世、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、調査研究課工芸室 三田覚之、客員研究員 澤田むつ代、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課長 神庭信幸	染織品の展示方法における新案	文化財保存修復学会第36回大会研究発表要旨集	文化財保存修復学会第36回大会	6月7日	有
71	同上	客員研究員 沢田むつ代、調査研究課工芸室 三田覚之、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、米倉乙世、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、北島恭代、保存修復課長 神庭信幸、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、山崎真紀子	劣化で一部粉状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例—東京国立博物館所蔵作品の事例—	同上	同上	同上	有
72	同上	国宝国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、保存修復課長 神庭信幸、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課主任研究員 沖松健次郎、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、米倉乙世、国宝修理装講師連盟 君嶋隆幸	繪図屏風（東京国立博物館蔵）の修理事例 —本紙裏面に遺されていた情報に着目して—	同上	同上	同上	有
73	同上	保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、米倉乙世、保存修復課長 神庭信幸、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課保存修復室主任研究員 沖松健次郎	東京国立博物館における修理技術専門職員の役割について	同上	同上	6月8日	有
74	同上	保存修復課長 神庭信幸	人文系資料のヘルスケア	博物館研究、第49巻第10号	日本博物館協会	9月	有
75	同上	同上	国宝繪図屏風修理を巡る諸課題と保存修理環境の構築	MUSEUM 第654号 2月発行	東京国立博物館	27年2月	有
76	同上	調査研究課絵画・彫刻室アソシエイトフェロー 西木政統	定印薬師考—覚園寺蔵薬師如来坐像を中心に—	林温編集『仏教美術論集』3、図像学Ⅱ—イメージの成立と伝承（浄土教・説話画）	竹林舎	5月10日	無
77	東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究	保存修復課長 神庭信幸、保存修復課環境保存室長 和田浩、保存修復課調査分析室長 荒木臣紀、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、米倉乙世、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー 平河智恵、陸前高田市立博物館長 本多文人、陸前高田市立博物館副主幹 熊谷賢、岩手県立博物館学芸第二課長 赤沼英男、盛岡第一高等学校教諭 目時和哉	津波被災資料の安定化処理—陸前高田市立博物館の取り組み—	文化財保存修復学会第36回大会研究発表要旨集	文化財保存修復学会第36回大会	6月7日	有
78	同上	保存修復課長 神庭信幸、保存修復課環境保存室長 和田浩、保存修復課調査分析室長 荒木臣紀、国宝修理装講師連盟 鈴木晴彦、保存修復課保存修復室長 土屋裕子、陸前高田市立博物館副主幹 熊谷賢、岩手県立博物館学芸第二課長 赤沼英男	Stabilization processing of cultural assets damaged by the tsunami of 11 March 2011	Preprints of the ICOM-CC, 17 th Triennial Conference, 2014 Melbourne	ICOM-CC, 17 th Triennial Conference, 2014 Melbourne	9月17日	有

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
79	同上	保存修復課保存修復室長 土屋裕子、保存修復課環境 保存室長 和田浩、保存修 復課調査分析室長 荒木 臣紀、鈴木晴彦、米倉乙世、 保存修復課保存修復室ア ソシエイトフェロー 平 河智恵、東京文化財研究所 小川絢子、保存修復課長 神庭信幸、土師広、西原紀 江、池上久美	文化財等救援活動における保存 修理—キャンバス作品の脱塩の試 み—	文化財保存修復学会第36回 大会研究発表要旨集	文化財保存修復 学会第36回大会	6月7日	有
80	同上	女子美術大学 岡田宣世、 女子美術大学 大崎綾子、 女子美術大学 安部みよ 子、多摩美術大学 深津裕 子、保存修復課長 神庭信 幸、陸前高田市立博物館副 主幹 熊谷賢、岩手県立博 物館学芸第二課長 赤沼 英男、盛岡第一高等学校教 諭 目時和哉	陸前高田市立博物館染織資料修 理経過報告	同上	同上	同上	有
81	同上	保存修復課長 神庭信幸、 保存修復課環境保存室長 和田浩	救出した資料の保管	安定化处理	大津波被災文化 財保存修復技術 連携プロジェクト 実行委員会	12月26日	無
82	博物館資料・業務 の情報処理に関 する調査研究	長野大学 田中法博、信州 大学大学院 望月宏祐、長 野大学 宮下朋也、東京国 立博物館 村田良二、国立 歴史民俗博物館 鈴木卓 治	分光情報に基づいた文化財展示 システムの開発	国立歴史民俗博物館研究報 告、第189集	国立歴史民俗博 物館	27年1月	有
83	特別展「キトラ古 墳壁画」に関する 調査研究	調査研究課考古室長 白 井克也、文化庁 宇田川滋 正、東京文化財研究所 川 野邊渉	東京国立博物館における特別展 「キトラ古墳壁画」	『月刊文化財』613号	第一法規	10月1日	無
84	特別展「台北 國 立故宮博物院— 神品至宝—」に関 する調査研究	列品管理課平常展調整室 主任研究員 川村佳男	従上古重器到帝王收藏、名品俱現	『典藏 古美術』No.261	典藏・古美術	6月1日	無
85	同上	同上	「散氏盤」他作品解説19点	『台北 國立故宮博物院—神 品至宝—』	東京国立博物 館・九州国立博物 館・NHK・NH Kプロモーション・読売新聞社・ 産経新聞社・フジ テレビジョン・朝 日新聞社・毎日新 聞社	6月24日	無
86	同上	同上	中国皇帝コレクションの淵源— 青銅器・玉器と祭礼	同上	同上	同上	無
87	同上	同上	「倣古」とは何か—古代青銅器・ 玉器がもつ「第二の歴史」	同上	同上	同上	無
88	同上	同上	多宝格	同上	同上	同上	無
89	同上	同上	翠玉白菜	同上	東京国立博物 館・九州国立博物 館・NHK・NH Kプロモーション・読売新聞社・ 産経新聞	同上	無
90	特別展「3.11大 津波と文化財の 再生」に関する調 査研究	保存修復課長 神庭信幸、 保存修復課環境保存室長 和田浩	環境および施設整備の考え方	『大津波被災文化財保存修 復技術連携プロジェクト 安定化处理』	津波により被災 した文化財の保 存修復技術の構 築と専門機関の 連携に関するプ ロジェクト、日本 博物館協会、ICOM 日本委員会	12月26日	無
91	同上	同上	環境および施設整備の実態	同上	同上	同上	無
92	同上	同上	環境モニタリング	同上	同上	同上	無
93	「コルカタ・イン ド博物館所蔵 インドの仏—仏 教美術の源流」に 関する調査研究	企画課長 小泉恵英	パールフットー インド古代仏教 美術のあけぼの	特別展 コルカタ・インド博 物館所蔵 インドの仏 仏 教美術の源流	日本経済新聞社	27年3月 17日	無
94	同上	同上	作品解説49件	同上	同上	同上	無
95	絵巻の〈伝来〉を めぐる総合的研 究	列品管理課平常展調整室 土屋貴裕	「続稀蹟雑纂—ポートランド美 術館所蔵作品簡解」(綿田稔・江 村知子と共著)	『美術研究』414号	東京文化財研 究所	27年2月1 日	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフエ リー有 無
96	中世聖徳太子絵伝の図様展開に関する調査研究	同上	太子絵伝のある空間—法隆寺伝来の二つの聖徳太子絵伝—	『明日香風』131号	公益財団法人 古都飛鳥保存財団	7月1日	無
97	古墳時代の農具研究	調査研究課考古室アソシエイトフェロー 河野正訓	『古墳時代の農具研究—鉄製刃先の基礎的検討をもとに—』	『古墳時代の農具研究—鉄製刃先の基礎的検討をもとに—』	雄山閣	8月25日	無
98	同上	同上	古墳・三国時代における外来系農具の定着過程	武器・武具の農具・漁具—韓日三国・古墳時代資料—	「韓日交渉の考古学—三国・古墳時代—」研究会第2回共同研究会	10月30日	無
99	同上	同上	古墳時代前期の農工漁具の編年	前期古墳編年を再考する—広域編年再構築の試み—発表要旨集・資料集	中国四国前方後円墳研究会	11月29日	無
100	模写資料における書の内容・鑑賞に関する基礎的研究	客員研究員 恵美千鶴子	「後西天皇と書 装飾料紙の粋『本願寺本三十六人家集』」	『ピオ・シティ』59号	ブックエンド	7月	無
101	同上	同上	「博物館制作『厳島神社蔵経模本』—明治の人々が見た『平家納経』」	『MUSEUM』第651号	東京国立博物館	8月	有
102	同上	同上	「国宝再現—田中親美と模写の世界」	特集リーフレット	同上	10月	無
103	同上	同上	「藤原行成の尊重 直筆の発見『九層断簡』」	『ピオ・シティ』61号	ブックエンド	27年1月	無
104	同上	同上	「藤原行成筆『陣定文案』の書誌・伝来」	『禁裏・公家文庫研究』第5輯	思文閣出版	27年3月	無
105	古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究	客員研究員 澤田むつ代	「原始古代の織物からみた金鈴塚古墳出土の金糸と織物等」	『金鈴塚古墳研究』第3号	木更津市郷土博物館金のすず	27年3月	無
106	同上	同上	「武者塚古墳出土の遺体の埋葬仕様について」	『特別展 武者塚古墳とその時代展』	上高津貝塚ふるさと歴史の広場	10月	無
107	同上	同上	「甕った飛鳥・奈良染織の美—初公開の法隆寺裂—」	東京国立博物館特集陳列リーフレット	東京国立博物館	8月19日	無
108	同上	同上	「劣化で一部粉状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例—東京国立博物館所蔵作品の事例」	『文化財保存修復学会』第36回大会 研究発表要旨集	文化財保存修復学会	6月	有
109	法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究	調査研究課工芸室 三田覚之	玉虫厨子本尊変遷考	『仏教美術論集3 図像学Ⅱ—イメージの成立と伝承(浄土教・説話画)』	竹林舎	5月1日	無
110	同上	同上	聖徳太子ゆかりの宝物—天寿国繚帳と呉竹形の塵尾—	『季刊 明日香風』131号	公益財団法人 古都飛鳥保存財団	7月1日	無
111	同上	同上	甕った飛鳥・奈良染織の美—初公開の法隆寺裂—	東京国立博物館特集陳列リーフレット	東京国立博物館	8月19日	無
112	同上	同上	武者塚古墳出土の銀帯状金具と宝珠形中心飾の源流	『上高津貝塚ふるさと歴史の広場 第13回特別展 武者塚古墳とその時代』	上高津貝塚ふるさと歴史の広場	10月15日	無
113	同上	同上	仏教美術を中心とする上代工芸作品から見た金鈴塚古墳出土金具	『金鈴塚古墳研究』第3号	木更津市郷土博物館金のすず	27年3月	無
114	江戸幕府による自然科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究	列品管理課貸与特別観覧室主任研究員 小野真由美	予楽院の庭—陽明文庫所蔵「花木真写」考—	『國華』1429号	國華社	11月20日	無
115	同上	同上	異国趣味と博物図—若冲の夢見た楽園	『別冊太陽』227号	平凡社	27年3月24日	無
116	極薄青銅器の製作技術解明—中国金属工芸史を再構築するための基礎的研究—	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男	漢代青銅器にみる官営工房の流派	『日本中国考古学会2014年度大会 発表資料集』	日本中国考古学会	12月6日	無
117	中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的研究	保存修復課環境保存室長 和田浩、企画課特別展室長 松嶋雅人、企画課デザイン室主任研究員 矢野賀一、列品管理課平常展調整室 土屋貴裕	OLED光源を用いた面発光照明器具による伝統的な屋内光環境効果の復元	『展示学』52号	日本展示学会	3月	有
118	古代イスラエルの墓制と他界観に関する総合的研究	企画課特別展アソシエイトフェロー 小野塚拓造	考古資料に見るフェニキア人による最初の交易活動	高梨学術奨励基金年報(平成18年度)	高梨学術奨励基金	11月	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
119	同上	企画課特別展室アソシエイトフェロー 小野塚拓造、天理大学文学部教授 桑原久男、天理大学文学部准教授 橋本英将	新パピロニアの拠点遺跡を探る—イスラエル、テル・レヘシュ第8次発掘調査(2014年)	考古学が語る古代オリエント—第22回西アジア発掘調査報告会報告集	日本西アジア考古学会	27年3月	無
120	スリランカ北部ジャフナにおける内戦後の博物館および文化遺産の現状調査	企画課長 小泉恵英、福山泰子、井内千紗、原本知実	スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用	スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用調査報告書 (Survey Report on the Protection and Utilization of Cultural Property in the Northern and Northeastern Provinces of Sri Lanka) (和英別冊)	文化遺産国際協力コンソーシアム	27年3月	無
121	博物館のマネージメントに関する調査研究	総務部長 栗原祐司	我が国の博物館法制度の現状と課題	『國學院雑誌』8月号	國學院大學	8月	無
122	同上	総務部長 栗原祐司	独立行政法人の統合問題—その経緯と問題点	全日本博物館学会第40回研究大会発表予稿集	全日本博物館学会	6月28日	有
123	我が国の博物館ネットワークに関する調査研究	総務部長 栗原祐司	Current Situation and Issues of the Human Rights Museum in Japan	Preprints of the ICOM-INTERCOM & FIHRM 2014 Taipei Conference	ICOM-INTERCOM & FIHRM 2014 Taipei Conference	5月3日	有
124	同上	総務部長 栗原祐司	The Current Status and Challenges of Japan's University Museum Networks	Preprints of the ICOM-CECA & UMAC 2014 Alexandria Conference	ICOM-CECA&UMAC 2014 Alexandria Conference	10月10日	有
125	同上	総務部長 栗原祐司	我が国のスポーツ博物館の課題と可能性	スポーツ史学会第28回大会発表抄録集	スポーツ史学会	12月7日	有
126	ミュージアム・マネージメント	総務課渉外開発担当係長・関谷 泰弘	若者はなぜミュージアムに来ないのか? : 我が国ミュージアムと東京国立博物館を事例とした非来館動機に関する研究	文化経済学 第11巻 第2号 19-34 ページ	文化経済学会	9月	有

【京都国立博物館】34件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	赤尾栄慶(上席研究員)、山本英男(上席研究員)、宮川禎一(企画室長)、浅見龍介(列品管理室長)、山川暁(教育室長)、永島明子(列品管理室主任研究員)、大原嘉豊(企画室主任研究員)、羽田聡(保存修復指導室主任研究員)、呉孟晋(列品管理課主任研究員)、降矢哲男(工芸室研究員)、福土雄也(美術室研究員)、末兼俊彦(企画室研究員)、水谷亜希(教育室研究員)、鬼原俊枝(学芸部研究員)	「京都国立博物館名品手帳」354回シリーズ	京都新聞(朝刊に毎日掲載)	京都新聞社	4月1日~27年3月31日	無
2	同上	企画室主任研究員 大原嘉豊	「流転の仏画—南山城地域伝存仏画から見える歴史の断片—」	『南山城の古寺巡礼』京都国立博物館特別展覧会図録	京都国立博物館	4月22日	無
3	同上	同上	「五代宋初に至る仏画における呉道玄様式の展開」	佐藤文子他編『仏教がつなぐアジア—王権・信仰・美術—』	勉誠出版	6月3日	無
4	同上	同上	「国宝 鳥獸戯画—その歴史と作者—」	京都国立博物館編『京博が新しくなります—至宝の数々、語ります—』	クバプロ	8月20日	無
5	同上	教育室長 山川 暁	表紙解説「紋縮緬地熨斗文友禅染振袖」	『Beauty Science』3	ビューティーサイエンス学会	4月25日	無
6	同上	同上	「日本禅宗における袈裟—東福寺伝法衣を一例として—」	『学芸』第36号	京都国立博物館	5月25日	無
7	同上	同上	「東アジア染織の宝蔵・日本」	『京博が新しくなります 至宝の数々、語ります』	クバプロ	8月20日	無
8	同上	同上	「京の底力」	『美しいキモノ』249	ハースト婦人画報社	8月20日	無
9	同上	同上	「名物裂の故郷」	『京都支部たより』71	表千家同門会京都支部	9月1日	無
10	同上	同上	植物が登場するアートたち「菊に棕櫚文様帷子」	『小原流挿花』766	財団法人小原流	9月1日	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
11	同上	同上	博物館案内「京都国立博物館 平成知新館」	『服飾美学』59	服飾美学会	9月30日	無
12	同上	同上	名宝細見「小葵文様直衣」	『朝日新聞』	朝日新聞社	10月31日	無
13	訓点資料としての典 籍に関する調査研究	上席研究員 赤尾栄慶	「隋経『阿難見水光瑞経』の出現」	『高田時雄教授退職記念 東方 学研究論集 [日英文分冊]』	東方学研究論集 刊行会	6月	無
14	同上	保存修理指導室主任 研究員 羽田 聡	「京都国立博物館の歴史と収蔵 品」	『月刊文化財』610号	第一法規	7月1日	無
15	同上	同上	「名宝細見 古今和歌集巻第十 二残巻(本阿弥切)」	「be on Saturday」	朝日新聞社	9月20日	無
16	特別調査「彫刻」	列品管理室長 浅見龍介	能面 創作と写し	「日本の仮面能面創作と写し」図 録	東京国立博物館	11月5日	無
17	同上	同上	「蘭溪道隆の頂相—建仁寺西来 院調査報告を中心に—」	『東アジアの中の建長寺』	勉誠出版	11月18日	無
18	出土・伝世古陶磁に関 する調査研究	工芸室研究員 降矢哲男	「最近出土の陶磁トピックス (平成25年) 近畿地方」	『東洋陶磁学会会報』第80号	東洋陶磁学会		無
19	同上	同上	「茶道資料館開館35周年秋季 特別展「茶の湯の名碗」展につ いて」	『淡交』68(11)	淡交社	10月28日	無
20	特別調査「漆工」(科 学研究費補助金)	列品管理室主任研究 員 永島明子	「ルーヴル美術館蔵アドルフ・ ティエール(一七九七〜一八七 七) 蒔絵コレクション」	『学叢』第36号	京都国立博物館	5月25日	無
21	特別展覧会「南山城の 古寺巡礼」に関する調 査研究	企画室長 宮川禎一	「南山城の古寺巡礼」	『南山城の古寺巡礼』展覧会図録	京都国立博物 館・朝日新聞社	4月22日	無
22	同上	企画室主任研究員 大原嘉豊	「流転の仏画—南山城地域伝存 仏画から見える歴史の断片—」	『南山城の古寺巡礼』展覧会図録	同上	4月22日	無
23	同上	学芸部研究員 浅瀨 毅	「南山城古仏巡礼」	『南山城の古寺巡礼』展覧会図録	同上	4月22日	無
24	特別展覧会等の開催 に伴う調査研究	副館長兼学芸部長 松本伸之	「博物館における企画展・特別 展の企画等について」	『展示論講座』	展示学会	9月4日	無
25	近世絵画に関する調 査研究	美術室研究員 鬼原俊枝	海北友雪筆「徒然草絵巻」の魅 力	『徒然草 美術で楽しむ古典文 学』展覧会目録	サントリ—美術 館	6月11日	無
26	同上	列品管理室研究員 吳 孟晋	(動向) 美術	『中国年鑑2014』	中国研究所	5月31日	無
27	同上	同上	「弥勒菩薩像・目連尊者像 独 湛性瑩筆」「阿弥陀如来像 独 湛性瑩筆」「地藏面然大士像 独 湛性瑩筆」「文殊菩薩像 独湛 性瑩筆」「負米図 独湛性瑩筆」 「老松寿石図 独湛性瑩筆」「倣 呉彬観音図 独湛性瑩筆」「独 湛性瑩像 喜多元規筆」「近藤 貞用夫妻像 喜多元規筆」(作 品解説)	『浜松にもたらされた黄檗文化』 展覧会図録	浜松市博物館	11月1日	無
28	同上	同上	中華民国期の絵画における「風 俗」へのまなざし	『風俗絵画の文化学3：瞬時をう つすフィロソフィー』	思文閣出版	12月9日	無
29	同上	同上	(コラム) 石濤への憧れとその 実際：大正後期の「解衣社」の 画家たちをめぐって	『日本美術全集 東アジアのな かの日本美術』(テーマ巻1)	小学館	27年2月25 日	無
30	同上	同上	「黄山八勝画冊 石濤筆」「松 竹梅図 呉昌碩筆」「凍雲危棧 図 橋本閑雪筆」「前赤壁図 富 岡鉄斎筆」(作品解説)	『日本美術全集 東アジアのな かの日本美術』(テーマ巻1)	小学館	27年2月25 日	無
31	同上	同上	(釈文、作品紹介)「論語集註 草稿 朱熹筆」「論語集註草稿 残稿 朱熹筆」「遠浦帰帆図 牧 谿筆」	『関西九館所蔵中国書画録Ⅱ』	関西中国書画コ レクション研究 会	27年3月31 日	無
32	同上	美術室研究員 福土雄也	「拓版画の技法と系譜」	『別冊太陽 若冲100図』	平凡社	27年2月20 日	無
33	同上	教育室研究員 水谷垂希	「京洛三十六家 山水花鳥人物 図貼交屏風」(佛教大学附属図 書館蔵)	『学叢』第36号	京都国立博物館	5月25日	無
34	文化財の保存・修復に 関する調査研究	美術室研究員 鬼原俊枝	「鳥獣人物戯画の保存修理につ いて」	『国宝鳥獣戯画と高山寺』展覧会 図録	京都国立博物 館・朝日新聞社	10月7日	無

【奈良国立博物館】22件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
1	館藏品・寄託品等の調 査研究を文化財修理 の観点から実施し、文 化財の活用及び後世 への継承に資する。	館長 湯山賢一	古文書が語る、歴史その瞬間 平清盛請文	『歴史読本』4月号	株式会社KAD OKAWA 中 経出版	4月	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフエ リー 有無
2	同上	同上	法隆寺と聖徳太子信仰の美術	『法隆寺展 — 聖徳太子と平和への祈り—』	読売新聞社	4月	無
3	同上	同上	第66回正倉院展 天平という時代の文・治・乱	『目の眼』12月号	株式会社目の眼	12月	無
4	同上	同上	料紙の変遷	ユネスコ無形文化遺産登録記念『特集展示 和紙 — 文化財を支える日本の紙』	奈良国立博物館	1月	無
5	同上	同上	対談 醍醐寺と紙の文化	『書物学4』	勉誠出版株式会社	2月	無
6	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	学芸部長 内藤 栄	醍醐寺の舍利・宝珠信仰	醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展『国宝 醍醐寺のすべて 密教のほとけと聖教』	奈良国立博物館	7月	無
7	同上	同上	古密教の三鉢杵について	天皇后兩陛下傘寿記念 第六十六回『正倉院展』目録	奈良国立博物館	10月	無
8	同上	同上	唐招提寺金亀舍利塔と戒律	ザ・グレートブッダ・シンポジウム論集第12号『中世東大寺の華嚴世界—戒律・禪・浄土』	東大寺	11月	無
9	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	上席研究員 岩田茂樹	中世彫刻史上の奈良と鎌倉	特別展『武家のみやこ 鎌倉の仏像 迫真とエキゾチシズム』	奈良国立博物館	4月	無
10	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	保存修理指導室長 谷口耕生	醍醐寺聖教としての白描図	醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展『国宝 醍醐寺のすべて 密教のほとけと聖教』	奈良国立博物館	7月	無
11	同上	同上	鳥毛立女屏風と唐墓壁画樹下人物図屏風	天皇后兩陛下傘寿記念 第六十六回『正倉院展』目録	奈良国立博物館	10月	無
12	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	主任研究員 清水 健	垂迹美術	日本美術史	美術出版社	4月	無
13	同上	同上	鎌倉・南北朝時代の工芸	日本美術史	美術出版社	4月	無
14	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	主任研究員 鳥越俊行	X-ray tomographic analysis of the initial structure of the royal chamber and the nest-founding behavior of the drywood termite	Journal of Wood Science	Springer	9月	有
15	同上	同上	アイヌ民族文化財のX線CTによる現況調査(Ⅰ)	北海道開拓記念館研究紀要	北海道開拓記念館	3月	無
16	歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館藏品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。	研究員 北澤菜月	林庭珪と周季常、二人の画家とその傾向について	大徳寺伝来五百羅漢図	思文閣出版	5月	無
17	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	研究員 斎木涼子	醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—	醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展『国宝 醍醐寺のすべて 密教のほとけと聖教』	奈良国立博物館	7月	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフ エ リ ー 有 無
18	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	研究員 山口隆介	中世律宗の鎌倉進出と善派仏師一神奈川・浄光寺両脇侍像を中心に	特別展『武家のみやこ 鎌倉の仏像 迫真とエキゾチズム』	奈良国立博物館	4月	無
19	同上	同上	醍醐寺三寶院弥勒菩薩像と仏師快慶一後白河院追善像としての側面に注目して	醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展『国宝 醍醐寺のすべて 密教のほとけと聖教』	奈良国立博物館	7月	無
20	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	研究員 原瑛莉子	五重塔壁画の両界曼荼羅諸尊一金胎同等の均斉配置	醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展『国宝 醍醐寺のすべて 密教のほとけと聖教』	奈良国立博物館	7月	無
21	正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。	研究員 大江克己	盛岡地方法務局大船渡出張所と仙台法務局気仙沼支局の被災公文書に施す科学的保存処理	歌津と奈良を繋ぐー奈良大学保存科学研究所の東日本大震災津波被災文書等保存の活動ー	奈良大学保存科学研究所	12月	無
22	同上	同上	飾られた馬具への問い	合同企画展展示図録『ここまでわかる！考古学』	京都市考古資料館	12月	無

【九州国立博物館】24件

○有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフ エ リ ー 有 無
1	特別展「近衛家の国宝」に関する調査研究	文化財課資料登録室主任研究員 荒木和憲	近衛信尹と九州	特別展「近衛家の国宝」図録	九州国立博物館	4月8日	無
2	日本中世における仏涅槃図の基礎的研究	企画課研究員 森久美子	命尊筆仏涅槃図試論	図像Ⅱーイメージの成立と伝承(浄土教・説話画)ー(仏教美術論集3)	竹林舎	5月10日	無
3	高等学校所蔵考古資料の調査研究	企画課特別展室主任研究員 市元壘	「夢中」に出会うー真夏のトピック展示「全国高等学校考古名品展」ー	文化庁広報誌ぶんかる	文化庁	5月14日	無
4	同上	同上	高等学校と考古学	真夏のトピック展示「全国高等学校考古名品展」図録	九州国立博物館	7月15日	無
5	同上	交流課教育普及室主任研究員 池内一誠	高等学校と考古学の新時代に向けて	真夏のトピック展示「全国高等学校考古名品展」図録	同上	7月15日	無
6	特別展クリーブランド美術館展に関する調査研究	企画課特別展室研究員 鷲頭桂	クリーブランド美術館の仲間たち(リーフレット)	関連展示「海を越えた再会ークリーブランド美術館の仲間たち」	同上	7月15日	無
7	高等学校所蔵考古資料の調査研究	企画課特別展室主任研究員 市元壘	考古学と高校教育	西日本文化 470号	西日本文化協会	8月1日	無
8	日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	同上	鎮墓獣の進化論	獅子と狛犬 神獣が来たはるかな道	青幻舎	26年9月	無
9	中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究	文化財課資料登録室主任研究員 荒木和憲	応永の外寇	高橋典幸編『戦争と平和』	竹林舎	10月9日	無
10	日本絵画に関する調査研究	文化財課資料管理室主任研究員 畑靖紀	山水画の伝統と雪舟ー北京と山口で描いた大作ー	『日本美術全集』第9巻『室町時代 水墨画とやまと絵』	小学館	10月29日	無
11	同上	企画課特別展室研究員 鷲頭桂	「四季花木図屏風」ほか6件(作品解説)	『日本美術全集9 水墨画とやまと絵』	小学館	10月29日	無
12	高等学校所蔵考古資料の調査研究	企画課特別展室主任研究員 市元壘	高校考古の企画、調査、展示	花園大学考古学研究室たより』66号	花園大学考古学研究室	11月1日	無
13	中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究	文化財課資料登録室主任研究員 荒木和憲	中世対馬における朝鮮綿布の流通と利用	佐伯弘次編『中世の対馬』	勉誠出版	12月8日	無
14	文化財の材質・構造等に関する共同研究	博物館科学課長 今津節生	X線CTを核とした三次元計測による博物館資料の活用と連携	文化財調査におけるX線CTの活用	北海道開拓記念館	12月20日	無
15	文化財の材質・構造等に関する共同研究	博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー 赤田昌倫	平取町所蔵耳飾り(ニンカリ)のCT調査	文化財調査におけるX線CTの活用	北海道開拓記念館	12月20日	無
16	朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究	元展示課長 赤司善彦	古代日本と百済の交流ー大宰府・飛鳥そして公州・扶餘ー	特別展図録「古代日本と百済の交流ー大宰府・飛鳥そして公州・扶餘ー」	九州国立博物館	27年1月1日	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
17	和泉市久保惣記念美術館の収蔵品の調査研究／X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析／三次元デジタル計測技法を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究	博物館科学課長 今津節生	X線CTスキャナと3Dデータを応用した文化財調査・研究・展示への活用	三次元デジタル計測技法を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究	九州国立博物館 泉谷博古館	27年 3月31日	無
18	三次元デジタル計測技法を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究	博物館科学課長 今津節生 他2名	X線CTによる殷周青銅器の構造解析	同上	同上	27年 3月31日	無
19	同上	企画課特別展室主任研究員 市元壘 交流課教育普及室主任研究員 池内一誠	高校考古資料の調査—学校現場での活用を視野に—	「東風西声」九州国立博物館紀要第10号	九州国立博物館	27年 3月31日	無
20	大航海時代の美術に関する調査研究	文化財課資料管理室主任研究員 畑靖紀	ピオンボ序説—大航海時代の日本美術に関する覚書—	「東風西声」九州国立博物館紀要第10号	同上	27年 3月31日	無
21	同上	同上	メキシコのピオンボ—副王宮殿図屏風をめぐる諸問題—	「東風西声」九州国立博物館紀要第10号	同上	27年 3月31日	無
22	大航海時代の美術に関する調査研究	企画課特別展室研究員 鷲頭桂	伝マカオ製キリスト教主題の屏風について	「東風西声」九州国立博物館紀要第10号	同上	27年 3月31日	無
23	特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究	企画課アソシエイトフェロー 西島亜木子、企画課研究補佐員 山下久美子、企画課研究補佐員 鮫島由佳	展示理解を深める体験型プログラム	「東風西声」九州国立博物館紀要第10号	同上	27年 3月31日	無
24	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発	博物館科学課長 今津節生	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発—X線CTによる興福寺聖像の研究—	平成24～26年度 科学研費助成事業 基盤研究(B) 研究成果報告書	九州国立博物館	27年 3月31日	無

【東京文化財研究所】40件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 (18件)

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
1	文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究	企画情報部文化形成研究室長 津田徹英、客員研究員 丸川雄三、客員研究員 中村佳史、客員研究員 吉崎真弓、企画情報部アソシエイトフェロー 橋川英規	研究ノート ウェブ版『みづゑ』の研究—美術史料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望—	『美術研究』414号	東京文化財研究所	27年2月	無
2	同上	企画情報部アソシエイトフェロー 橋川英規、	アートアーカイブの諸相	『美術研究』414号	東京文化財研究所	27年2月	無
3	文化財の資料学的研究	文化遺産国際協力センター 主任研究員 江村知子	研究資料 続稀蹟雑纂—ポートランド美術館所蔵作品簡介(一)—	『美術研究』414号	東京文化財研究所	27年2月	無
4	同上	同上	研究資料 続稀蹟雑纂—ポートランド美術館所蔵作品簡介(二)—	『美術研究』415号	同上	27年3月	無
5	同上	客員研究員 吉田千鶴子	研究資料 黒田清輝宛外国人留学生書簡影印・翻刻・解題	『美術研究』414号	同上	27年2月	無
6	近現代美術に関する交流史的研究	企画情報部近・現代視覚芸術研究室長 塩谷 純	明治期やまと絵断章	『美術フォーラム21』29	一般社団法人美術フォーラム21	5月	無
7	同上	同上	春草と“金銀体”	『菱田春草』展図録	東京国立近代美術館	9月	無
8	同上	同上	開国から1920年代プロローグとしての日本近代美術史	東京美術倶楽部編『日本の20世紀芸術』	平凡社	11月	無
9	美術の表現・技法・材料に関する多角的な研究	企画情報部 広領域研究室長 小林公治	2013年開催の南蛮漆器に関する展示会から	『美術研究』413号	東京文化財研究所	10月24日	無
10	同上	企画情報部 主任研究員 小林達郎	美麗の術—国宝千手観音の場合	『「かたち」再考』	東京文化財研究所	12月17日	無
11	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化財研究室長 高桑いづみ	返シを謡うということ—[上げ歌]形成の一過程とその応用—	『能と狂言』12	能楽学会	8月	無
12	同上	同上	『四季祝言』『敷島』の謡復元	『能と狂言』12	能楽学会	8月	無
13	同上	同上	上げ歌の「放下僧」と「海道下り」放下の歌	『花もよ』第15号	ぶんがく社	9月1日	無

14	同上	同上	『能と狂言 謡の変遷』	『能と狂言 謡の変遷』	檜書店	27年2月	無
15	同上	無形文化遺産部長 飯島満	フィルモン音帯関連資料	『無形文化遺産研究報告』第9号	東京文化財研究所	27年3月	無
16	同上	無形文化遺産部研究員 菊池理予	染織技法書に見られる豆汁の役割-寛文6年刊『紺屋染口伝書』を中心として-	『無形文化遺産報告報告』第9号	東京文化財研究所	27年3月	無
17	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化遺産部研究員 今石みぎわ	『花とイナウ—世界の中のアイヌ文化』	『花とイナウ—世界の中のアイヌ文化』	北海道大学アイヌ民族文化センター	27年3月	無
18	無形文化遺産保護に関する研究 交流・情報収集	企画情報部情報システム研究室長 二神葉子	無形遺産保護の保護に関する第9回府間委員会における議論の概要と今後の課題	『無形文化遺産研究報告』第9号	東京文化財研究所	27年3月	無

○文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進（1件）

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	文化財デジタル画像形成に関する調査研究	企画情報部専門職員 城野誠治	「大徳寺伝来五百羅漢図」銘文可視画像化について	『大徳寺伝来五百羅漢図』	奈良国立博物館・東京文化財研究所編	5月20日	無

○科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進（18件）

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究	保存修復科学センター研究員 佐藤嘉則、主任研究員 犬塚将英、主任研究員 森井順之、生物科学研究室長 木川りか	虎塚古墳公開保存施設の管理方法変更による微生物汚染状況の推移	『保存科学』54	東京文化財研究所	27年3月	有
2	同上	保存修復科学センター研究補佐員 小野寺裕子、客員研究員 小峰幸夫、生物科学研究室長 木川りか	低酸素濃度殺虫法-25℃、27.5℃、30℃における処理期間の検討-	『保存科学』54	同上	27年3月	有
3	同上	保存修復科学センター学研究室長 木川りか、研究員 佐藤嘉則、客員研究員 小峰幸夫	歴史的木造建造物を加害するオオナガシバムシ幼虫のセルラーゼ活性について	『保存科学』54	同上	27年3月	有
4	文化財の保存環境の研究	保存修復科学センター主任研究員 犬塚将英	“Modelling temperature and humidity in storage spaces used for cultural property in Japan”	『Studies in Conservation vol.59 supplement 1』	International Institution for Conservation of Historic and Artistic Works	26年9月	有
5	同上	保存修復科学センター客員研究員 古田嶋智子、客員研究員 呂俊民、保存科学研究室長 佐野千絵	試験用実大展示ケースを用いたケース内ガス濃度の解析	『保存科学』54	東京文化財研究所	27年3月	有
6	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究	保存修復科学センター分析科学研究室長 早川泰弘	平等院鳳凰堂の金属部材の材料調査、	『鳳翔学叢』11	平等院	27年3月	無
7	同上	保存修復科学センター主任研究員 吉田直人	膠の主成分ゼラチンの蛍光特性変化について -濃度依存性と硫酸アルミニウムカリウムの影響-	『保存科学』54	東京文化財研究所	27年3月	有
8	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	保存修復科学センター修復材料研究室長 朽津信明、主任研究員 森井順之、研究補佐員 佐藤円香	鳥取県・花見瀧墓地赤碓塔に見られるハニカム状風化	『保存科学』54	東京文化財研究所	27年3月	有
9	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	保存修復科学センター修復材料研究室長 朽津信明	日本における横穴墓の保存	『日韓共同研究成果報告会報告書 2014』	韓国国立文化財研究所・東京文化財研究所	5月	無
10	同上	保存修復科学センター主任研究員 森井順之	屋外文化財の保存と公開のための覆屋について	第44回熱シンポジウム『役に立つ湿気研究』	日本建築学会	10月	無
11	文化財の防災計画に関する研究	保存修復科学センター主任研究員 森井順之、保存修復科学センター修復材料研究室長 朽津信明、研究補佐員 佐藤円香	Fundamental research about vibration of stone lantern (ishi-toro) by earthquake	『Proceedings of the international conference on conservation of stone and earthen architectural heritage』	ICOMOS IASCStone, Kongju National University	5月	有
12	文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究	保存修復科学センター伝統技術研究室長 北野信彦、客員研究員 本多貴之	日光東照宮唐門および透塀の塗装彩色材料に関する調査	『保存科学』54	東京文化財研究所	27年3月	有

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
13	同上	保存修復科学センター 伝統技術研究室長 北野信彦	出土装飾部材の漆塗装に関する調査	『東京都千代田区有楽町一丁目遺跡』	武蔵文化財研究所	27年3月	無
14	文化財修復材料の適用に関する調査研究	保存修復科学センター 主任研究員 早川典子	増裏打ち作業における古糊と打刷毛の接着効果について	『保存科学』54	東京文化財研究所	27年3月	有
15	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	保存修復科学センター 森井順之、朽津信明、中山俊介	史跡・葦山反射炉の保存環境について	『土木史跡の地盤工学的分析・評価に関するシンポジウム』	地盤工学会	10月	無
16	同上	保存修復科学センター 中山俊介	近代テキスタイルの保存と修復	『近代テキスタイルの保存と修復』	東京文化財研究所	27年3月	無
17	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	保存修復科学センター研究員 佐藤嘉則、生物科学研究室長 木川りか	パイロシーケンス法によるキトラ古墳石室内の微生物群集構造解析	『保存科学』54	東京文化財研究所	27年3月	有
18	同上	保存修復科学センター生物科学研究室長 木川りか、研究員 佐藤嘉則、保存科学研究室長 佐野千絵	キトラ古墳の微生物調査報告(2012年~2013年)および2004年から2013年までの微生物調査結果概要	『保存科学』54	東京文化財研究所	27年3月	有

○保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤の整備 (3件)

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力	文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 佐藤桂	タ・ネイ遺跡に見られる建造途中の改変について	『世界建築史論集 中川武先生退任記念論文集(西アジア・西洋・南アジア・カンボジア・ベトナム篇)』	中央公論美術出版	27年3月	有
2	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	前文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 安倍雅史	アク・ベシム遺跡出土の羊距骨とキルギス伝統遊戯チュコ	『西アジア考古学』16	日本西アジア考古学会	27年3月	有
3	同上	前文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー 安倍雅史	Results of the Archaeological Project at Ak Beshim (Suyab), Kyrgyz Republic from 2011 to 2013 and a Note on the Site's Abandonment.	『Intercultural Understanding 4: 11-16』	Mukogawa Women's University	4月	無

【奈良文化財研究所】94件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 (64件)

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究	歴史研究室長 吉川聡ほか	三徳山三佛寺所蔵木造勝手権現像について	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
2	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	都城発掘調査部研究員 大林潤	法隆寺所蔵古材調査4-昭和の大修理と古材の整理-	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
3	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	都城発掘調査部研究員 鈴木智大	大兵庫における伝統的展開-兵庫県近代和風建築総合調査4-	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
4	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	前都城発掘調査部主任研究員 黒坂貴裕	集落町並みの保存活用-日中韓建築文化遺産保存学術会議から-	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
5	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	都城発掘調査部アソシエイトフェロー 松下迪生	長野県塩尻市平出集落の特質-伝統的建造物群保存対策調査から-	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
6	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	都城発掘調査部研究員 鈴木智大	黄檗様建築における中国建築の穿插枋	2014年度大会(関西)学術講演梗概集F-2	日本建築学会	9月12日	無
7	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究	文化遺産部長 林良彦	長谷川家住宅の建築の評価	松阪長谷川家住宅文化財シンポジウム予稿集	松阪市教育委員会	10月26日	無
8	我が国の記念物に関する調査・研究(遺跡等整備)	景観研究室長 平澤毅 文化遺産研究室主任研究員 中島義晴	計画の意義と方法	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
9	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)	文化遺産部主任研究員 中島義晴	室町時代の将軍の庭園	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
10	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)	文化遺産部主任研究員 中島義晴、前アソシエイトフェロー 大平和弘	奈良市における庭園の悉皆的調査－宗教法人の庭園－	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
11	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)	副所長 小野健吉	『法然上人行状絵図』に描かれた月輪殿の庭園	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
12	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)	文化遺産部研究員 高橋知奈津	平安貴族の遊覧と文芸－道長と桂、宇治	庭園学講座21『日本庭園と文芸』	京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター	8月29日	無
13	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)	文化遺産部研究員 高橋知奈津	戦国城館の庭園遺構	戦国時代の城館の庭園	奈良文化財研究所	27年3月31日	無
14	平城京左京二条二坊十五坪の発掘調査	都城発掘調査部主任研究員 神野 恵 他	平城京左京二条二坊十五坪の発掘調査 平城第514次	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
15	興福寺西室の発掘調査	都城発掘調査部研究員 番 光 他	興福寺西室の発掘調査 平城第516次	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
16	薬師寺十字廊跡の発掘調査	都城発掘調査部研究員 庄田慎矢 他	薬師寺十字廊跡の発掘調査 平城第519次	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
17	古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行	都城発掘調査部研究員 大林 潤	長舎の構造的検討	第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置	奈良文化財研究所	12月11日	有
18	古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行	都城発掘調査部研究員 小田裕樹	饗宴施設の構造と長舎	第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置	奈良文化財研究所	12月11日	有
19	平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等	都城発掘調査部研究員 芝 康次郎 他	薬師寺食堂と西大寺旧境内における放射性炭素年代測定 第500次・第505次	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
20	平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦、元興寺文化財研究所 木沢直子、元興寺文化財研究所 小村眞理	平城宮・京出土編羽口の製法技法と皮革	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
21	平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦	平城京左京三条一坊一坪の組織的鉄鍛冶工房について	たたら研究 No. 53	たたら研究会	8月31日	無
22	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部主任研究員 降幡順子、都城発掘調査部研究員 森先一貴	藤原宮・京出土瓦の胎土分析	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
23	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部主任研究員 今井晃樹	藤原宮出土の鬼瓦と面戸瓦	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
24	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部主任研究員 降幡順子	キトラ古墳出土ガラス小玉	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
25	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部研究員 庄田慎矢、埋蔵文化財センター研究員 星野安治、都城発掘調査部主任研究員 降幡順子、パレオラボAMS年代測定グループ	C14年代ウイグルマッチングによる甘樫丘東麓遺跡の年代学的検討	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
26	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究	飛鳥資料館長 松村恵司、学芸室長 石橋茂登、飛鳥資料館研究員 西田紀子、飛鳥資料館研究員 丹羽崇史	鏡に関する研究雑感	飛鳥資料館研究図録第18冊『鏡に関する研究雑感』	飛鳥資料館	27年3月27日	無
27	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦、都城発掘調査部研究員 川端 純、都城発掘調査部研究員 諫早直人	遼寧省北票市金嶺寺遺跡および大板営子遺跡出土遺物の調査	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
28	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	景観研究室長 平澤毅、文化遺産部主任研究員 中島義晴	計画の意義と方法	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
29	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	文化遺産部アソシエイトフェロー 菊地淑人	文化的景観の価値と保存計画の連動性－佐渡相川の鉱山都市景観における模索－	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
30	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	文化遺産部研究員 恵谷浩子	生産と製造が結びついた農業景観の保護手法－日仏の比較－	奈良文化財研究所 紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
31	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	文化遺産部アソシエイトフェロー 菊地淑人ほか	Local Visions of the landscape : Participatory Photographic Survey of the World Heritage Site, the Rice Terraces of the Philippine	Landscape Research39(4)	Routledge	7月3日	有

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
			Cordilleras				
32	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	文化遺産部研究員 恵谷浩子	文化的景観という取組の有効性と課題	農村計画学会誌 32巻22号	農村計画学会	9月30日	無
33	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	景観研究室差長 平澤毅	公園に生きる歴史文化資産	公園緑地 75(2)	日本公園緑地協会	10月17日	無
34	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	文化遺産部研究員 恵谷浩子ほか	第38回世界遺産委員会(ドーハ)報告	遺跡学研究第11号	日本遺跡学会	11月20日	無
35	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔 埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	古墳の周辺および内部環境が遺物の劣化に与える影響に関する研究(その1) 模擬古墳を用いた土中空間の環境計測とその性状の把握	日本建築学会近畿支部研究報告集	日本建築学会近畿支部	6月22日	無
36	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美 埋蔵文化財センター研究員 星野安治	宮城県追戸横穴墓出土トンボ玉の自然科学的研究	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
37	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美 埋蔵文化財センター客員研究員 大賀克彦 埋蔵文化財センター客員研究員 赤田昌倫	エジプト・カラニス遺跡出土ガラスの考古学的研究	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
38	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美	宮城県追戸横穴墓出土の斑点紋トンボ玉の自然科学的研究	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
39	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美	XRF, ESR法による芝ヶ原古墳出土土玉類の産地分析	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
40	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美 埋蔵文化財センター客員研究員 赤田昌倫	富山県小竹貝塚から出土した「鯛の歯を象眼した漆製品片」	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
41	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	出土木製遺物の屋外水中保管環境における溶存酸素の分布と挙動	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
42	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	海洋環境における鉄製遺物の腐食過程の研究 - 国史跡鹿島神崎遺跡における埋蔵環境の季節変動と堆積物の状態 -	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
43	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	田熊石畑遺跡における青銅器埋蔵環境に関する実測調査	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
44	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	模擬古墳から検討した埋蔵環境下における遺物保存に関する研究(その1) 模擬古墳を用いた土中空間の環境計測とその性状の把握	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
45	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	模擬古墳から検討した埋蔵環境下における遺物保存に関する研究(その2) 埋葬主体内部の環境が金属製遺物の腐食速度に及ぼす影響	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
46	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター客員研究員 赤田昌倫 保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター主任研究員 降幡順子、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎、埋蔵文化財センター研究員 田村朋美	高松塚古墳壁画の材料調査 - 西壁女子群像の赤衣像青色裳に使用された色料について -	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
47	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター主任研究員 降幡順子 保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎、埋蔵文化財センター研究員 田村朋美 埋蔵文化財センター客員研究員 赤田昌倫	高松塚古墳壁画の赤色・黄色色料に関する調査	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
48	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター客員研究員 赤田昌倫 保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財セ	観察手法によるキトラ古墳壁画表面の調査結果報告	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
		センター主任研究員 降幡順子、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎、埋蔵文化財センター研究員 田村朋美					
49	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター客員研究員 赤田昌倫 保存修復科学研究室長 高妻洋成	薬師寺東塔に使用された塗装材料の分析	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
50	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美	芝ヶ原古墳出土土玉類	埼玉大学紀要第50巻第1号	埼玉大学	9月	無
51	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美 埋蔵文化財センター客員研究員 大賀克彦	Distribution of lead-barium glasses in ancient Ja-pan	CrossRoad vol.9	OSTASIEN Verlag	27年3月	無
52	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美 埋蔵文化財センター客員研究員 大賀克彦	佐賀県内出土ガラス製玉類の考古学的研究	佐賀県立博物館・美術館調査研究書第39号	佐賀県立博物館・美術館	27年3月	無
53	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美 埋蔵文化財センター客員研究員 大賀克彦	目梨泊遺跡出土ガラス小玉の考古学的検討	枝幸研究 No. 6	オホーツクミュージアムえさし	27年3月	無
54	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美	免ヶ平古墳出土ガラス製遺物の考古学的研究	大分県立歴史博物館研究紀要 No. 16	大分県立歴史博物館	27年3月	無
55	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美 埋蔵文化財センター客員研究員 大賀克彦	古墳時代前期のナトロンガラス	古代学 第6号	奈良女子大学古代学学術研究センター	27年3月	有
56	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査	埋蔵文化財センター研究員 田村朋美	引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播	物質文化 No. 95	物質文化研究会	27年3月	有
57	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	Study on Preservation Methods of Imperial Citadel of Thang Long Based on Heat and Moisture Movement in the Remains	Proceedings of the International Conference on Conservation of Stone and Earthen Architectural Heritage	ICOMOS-ISCS	5月21日	有
58	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔 埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究	日本建築学会近畿支部研究報告集	日本建築学会近畿支部	6月22日	無
59	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究2—結露抑制の手法に関する検討—	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
60	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究—結露の抑制方法に関する検討—	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
61	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	保存修復科学研究室長 高妻洋成、埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔、埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	墳丘の被覆条件が石室内の温熱環境に与える影響に関する検討	日本文化財科学会第31回大会発表要旨集	日本文化財科学会	7月6日	無
62	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔 埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	Measurement of sorption isotherm of porous materials influenced by salt	Proceedings of SWBSS 2014	Third International Conference on Salt Weathering of Buildings and Stone Sculptures	10月15日	有
63	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔 埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	Measurement of salt solution uptake by ceramic brick using γ -ray projection	Proceedings of SWBSS 2014	Third International Conference on Salt Weathering of Buildings and Stone Sculptures	10月15日	有

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
64	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集	埋蔵文化財センター客員研究員 小椋大輔 埋蔵文化財センター研究員 脇谷草一郎	土遺構の露出展示保存における保存施設の環境設計	第44回熱シンポジウム論文集	日本建築学会	10月25日	無

○文化財の研究に関する調査手法の研究・開発の推進 (20件)

	研究テーマ	発表者 (職名・名前)	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェ リー 有無
1	文化財の測量・探査等に関する研究	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	Structure from Motionによる遺構計測の試行	奈良文化財研究所紀要2014	日本文化財科学会	6月27日	無
2	文化財の測量・探査等に関する研究	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	S f mによる近接写真計測の遺跡への応用	日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集	日本文化財科学会	7月5日	有
3	文化財の測量・探査等に関する研究	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	S f m各手法による三次元計測の比較	日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集	日本文化財科学会	7月5日	有
4	文化財の測量・探査等に関する研究	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	U A VとS f mによる三次元計測	日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集	日本文化財科学会	7月5日	有
5	文化財の測量・探査等に関する研究	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	九十九里地域における古墳のレーダ探査	日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集	日本文化財科学会	7月5日	有
6	文化財の測量・探査等に関する研究	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	可児市大萱古窯跡における探査と発掘の連携	日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集	日本文化財科学会	7月5日	有
7	文化財の測量・探査等に関する研究	埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大	奈良山Ⅱ	奈良文化財研究所学報	奈良文化財研究所	10月8日	無
8	年輪年代学研究	埋蔵文化財センター主任研究員 大河内隆之、埋蔵文化財センター研究員 星野安治、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長 高妻洋成、都城発掘調査部研究員 芝康次郎	平城京二条大路出土画板のマイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊年輪年代調査	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
9	年輪年代学研究	都城発掘調査部研究員 庄田慎矢、埋蔵文化財センター研究員 星野安治、都城発掘調査部主任研究員 降幡順子	¹⁴ Cウイグルマッチングによる甘樫丘東麓遺跡の年代学的検討	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
10	年輪年代学研究	都城発掘調査部研究員 芝康次郎、諫早直人、埋蔵文化財センター研究員 星野安治	薬師寺食堂と西大寺旧境内における放射性炭素年代測定	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
11	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	藤原宮造営の運河から出土した小児骨	奈良文化財研究所紀要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無
12	動植物遺存体による環境考古学的研究	葛飾区郷土と天文の博物館 谷口榮、埋蔵文化財センター研究員 山崎健、客員研究員 丸山真史	歴史考古学における水産資源の研究	季刊考古学 128	雄山閣	8月1日	無
13	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	近現代の貝卸	季刊考古学 128	雄山閣	8月1日	無
14	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健、埋蔵文化財センター主任研究員 大河内隆之	X線CT投影データを用いた複製品の製作—愛知県朝日遺跡から出土した石鏃の刺さった動物骨を事例として—	文化財の壺 3	文化財方法論研究会	12月31日	有
15	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	東日本大震災に伴う復興調査の支援	奈良分会研究所総合研究会(第25回)資料集	奈良文化財研究所	27年1月30日	無
16	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	木曾田遺跡から出土した火葬骨	木曾田遺跡	鈴鹿市考古博物館	27年3月31日	無
17	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	動物遺存体	南鴻沼遺跡	さいたま市遺跡調査会	27年3月31日	無
18	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	丸山B遺跡から出土した焼骨	丸山B遺跡	三鷹市教育委員会	27年3月31日	無
19	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	神谷地遺跡から出土した動物遺存体	神谷地遺跡	横手市教育委員会	27年3月31日	無
20	動植物遺存体による環境考古学的研究	埋蔵文化財センター研究員 山崎健	若狭の漁撈と製塩—浜瀾遺跡における酒誌報告(1966)の再検討—	若狭の塩、再考	美浜町教育委員会	27年3月31日	無

○科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中核的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進 (3件)

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等	保存修復科学研究室長 高妻洋成	壁画の下の漆喰が見たい！	特別展「キトラ古墳壁画」図録	朝日新聞社	4月22日	無
2	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等	保存修復科学研究室長 高妻洋成	科学の目で観る古代壁画	O PLUS E	(株)アドコム・メディア	7月	無
3	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等	保存修復科学研究室長 高妻洋成	高松塚古墳壁画とキトラ古墳壁画の材料調査	大塚薬報 No. 695	(株)大塚ホールディングス	5月10日	無

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施（3件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦	「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」への参画	『奈文研ニュース』No. 54	奈良文化財研究所	9月	無
2	災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画	埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー 村田泰輔	平城第530次発掘調査で発見された巨大地震の痕跡	『奈文研ニュース』No. 55	奈良文化財研究所	12月	無
3	他機関等との共同研究及び受託研究を実施	都城調査部部主任研究員 山本崇、客員研究員 藤井裕之、鳥取県教育文化財団 高尾浩司	鳥取県良田平田遺跡の出土文字資料	奈良文化財研究所概要2014	奈良文化財研究所	6月27日	無

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進（0件）

○平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館における調査・研究成果（4件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	飛鳥資料館における展示公開	飛鳥資料館館長 松村恵司、学芸室長 石橋茂登、飛鳥資料館研究員 西田紀子、飛鳥資料館研究員 丹羽崇史	春期特別展「いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー」	飛鳥資料館図録第60冊『いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー』	飛鳥資料館	4月25日	無
2	飛鳥資料館における展示公開	飛鳥資料館館長 松村恵司、学芸室長 石橋茂登、飛鳥資料館研究員 西田紀子、飛鳥資料館研究員 丹羽崇史	企画展「大和の美仏に魅せられて」	飛鳥資料館カタログ第31冊『大和の美仏に魅せられて』	飛鳥資料館	9月12日	無
3	飛鳥資料館における展示公開	飛鳥資料館館長 松村恵司、学芸室長 石橋茂登、飛鳥資料館研究員 西田紀子、飛鳥資料館研究員 丹羽崇史	秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー」	飛鳥資料館図録第61冊『はぎとり・きりとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー』	飛鳥資料館	10月10日	無
4	飛鳥資料館における展示公開	飛鳥資料館館長 松村恵司、学芸室長 石橋茂登、飛鳥資料館研究員 丹羽崇史	冬期企画展「飛鳥の考古学2014」	飛鳥資料館カタログ第32冊『飛鳥の考古学2014』	飛鳥資料館	27年1月16日	無

○地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上（0件）

【東京文化財研究所と奈良文化財研究所との共同研究】0件

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】1件

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する基礎的な調査・研究の推進	副所長 大貫美佐子	Documentation of ICH in danger of disappearing as a tool for community-led safeguarding activities: Analysis of the case studies conducted in 5 communities in Asia	Safeguarding and revitalizing intangible cultural heritage 2012-2014	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	27年3月31日	無

c-⑥ 調査研究刊行物一覧

平成27年3月31日現在

【東京国立博物館】

○調査研究刊行物

刊行物名	発行部数	配布先
「MUSEUM」649～654号	各1,900	美術館・博物館・大学・研究所等 2,796件 (各466件×6)
「東京国立博物館紀要」50号	700	美術館・博物館・大学・研究所等 368件
「東京国立博物館文化財修理報告」XV	700	美術館・博物館・大学・研究所等 94件
「法隆寺献納宝物特別調査概報」XXV 古今目録抄1	1,000	美術館・博物館・大学・研究所等 198件
「東京国立博物館図版目録 東洋彫刻篇」	800	美術館・博物館・大学・研究所等 163件

○展覧会図録等

刊行物名	発行部数	配布先
特別展 『キトラ古墳壁画』	—	美術館・博物館・大学等 111件
『台北 國立故宮博物院—神品至宝—』	—	美術館・博物館・大学等 111件
『東アジアの華 陶磁名品展』	3,000	美術館・博物館・大学等 111件
『日本国宝展』	—	美術館・博物館・大学等 111件
『みちのくの仏像』	—	美術館・博物館・大学等 111件
『コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流』	—	美術館・博物館・大学等 111件
特別展印刷物（リーフレット） 「3.11大津波と文化財の再生」	10,000	
特集図録 『能面 創作と写し』	2,000	
特集印刷物（リーフレット） 「古文書の世界」	5,000	
「甦った飛鳥・奈良染織の美—初公開の法隆寺裂—」	3,000	
「国宝再現—田中親美と模写の世界—」	4,000	
「東京国立博物館コレクションの保存と修理」	8,000	
「国宝 檜図屏風」	10,000	
その他 「3.11 大津波と文化財の再生」	10,000	
「The Great Tsunami of March 11, 2011 and Restoration of Cultural Properties」	10,000	
『文化財の“臨床保存” —東京国立博物館の挑戦—』	10,000	
『東京国立博物館所蔵 重要考古資料学術調査報告書(第4冊) — 国宝埴輪掛甲武人・重要文化財埴輪盛装女子・重要文化財埴輪猪附埴輪男子—』	800	
『東京国立博物館ハンドブック』（日本語改訂版）	3,000	
『東京国立博物館ハンドブック』（英語改訂版）	3,000	
『自在置物』増刷	1,000	
『根付 高円宮コレクション』増刷	2,000	
「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成21年度版増刷	1,000	
「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成22年度版増刷	1,000	
「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成23年度版増刷	1,000	
「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成24年度版増刷	1,000	

【京都国立博物館】

○調査研究刊行物

刊行物名	発行部数	配布先
研究紀要「学叢」第36号	850	美術館・博物館・大学等
文化財保存修理所 修理報告書12	450	美術館・博物館・図書館・大学・研究機関・教育委員会等

○展覧会図録等

刊行物名	発行部数	配布先
特別展覧会『南山城の古寺巡礼』	—	美術館・博物館・大学等
特別展覧会『国宝 鳥獣戯画と高山寺』	—	美術館・博物館・大学等
『京都国立博物館所蔵名品120選 京（みやこ）へのいざない』	16,000	美術館・博物館・大学等

【奈良国立博物館】

○調査研究刊行物

刊行物名	発行部数	配布先
奈良国立博物館研究紀要「鹿園雑集」第15号・16号	700	美術館・博物館・大学・研究機関等

○展覧会図録

刊行物名	発行部数	配布先
特別展 特別展『武家のみやこ 鎌倉の仏像 迫真とエキゾチシズム』	6,800	美術館・博物館・大学・研究機関等
醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展『国宝 醍醐寺のすべて —密教のほとけと聖教—』	8,600	美術館・博物館・大学・研究機関等
天皇后両陛下傘寿記念 『第66回正倉院展』	35,600	美術館・博物館・大学・研究機関等
Commemorating the 80th Birthdays of their Majesties the Emperor and Empress 『The 66th Annual Exhibiton of Shoso-in Treasures』	3,000	美術館・博物館・大学・研究機関等
特別陳列 『おん祭と春日信仰の美術』	1,800	美術館・博物館・大学・研究機関等
特別陳列 『お水取り』	1,800	美術館・博物館・大学・研究機関等
その他 〔復刻版〕正倉院展特別展観目録（第1回正倉院展）	5,000	—
『正倉院展ポスター 昭和22—昭和63』	10,000	美術館・博物館・大学・研究機関等

『大和の仏たち —奈良博写真技師の眼—』	3,000	美術館・博物館・大学・研究機関等
ユネスコ無形文化遺産登録記念 特集展示「和紙—文化財を支える日本の紙—」	3,000	美術館・博物館・大学・研究機関等

【九州国立博物館】

○調査研究刊行物

刊行物名	発行部数	配布先
九州国立博物館紀要『東風西声』 第10号	1,000	美術館・博物館・大学・研究機関等
平成26年度 文化庁 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「みんなでまもるミュージアム」報告書	500	連携協力機関、九州・山口の美術館・博物館等

○展覧会図録等

	発行部数	配布先
特別展		
「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝—京都・陽明文庫展」	—	美術館・博物館・大学・研究機関等
「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」	—	美術館・博物館・大学・研究機関等
「台北 國立故宮博物院—神品至宝— 記念図録」	—	美術館・博物館・大学・研究機関等
「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」	1,550	美術館・博物館・大学・研究機関等
トピック展示		
「館蔵近世絵画名品展」	1,500	美術館・博物館・大学・研究機関等
「中国を旅した禅僧の足跡」	2,100	美術館・博物館・大学・研究機関等
「真夏のトピック展示・全国高等学校 考古名品展」	1,600	美術館・博物館・大学・研究機関等
「大涅槃展」	1,500	美術館・博物館・大学・研究機関等
「柿右衛門 - 受け継がれる技と美 -」	1,500	美術館・博物館・大学・研究機関等
文化交流展印刷物（パンフレット）		
「特別公開 海を越えた再会—クリーブランド美術館の仲間たち」	2,200	展示室内等で配布（非売品）
その他		
文化交流展示室公式ガイドブック「ビジュアルガイドブック Asiage（アジアージュ）」（17年10月15日発行）	増刷1,000	館内ミュージアムショップにて販売

【東京文化財研究所】

○調査研究刊行物

刊行物名	発行部数	配布先
『東京文化財研究所年報』2013年度版	500	博物館・美術館・大学・研究機関等
『東京文化財研究所概要』2014年度版	2,700	博物館・美術館・大学・研究機関等
『東文研ニュース』55、56、57号	55号 2,500 56、57号 1,600	博物館・美術館・大学・研究機関等
『平成25年版 日本美術年鑑』	600	博物館・美術館・大学・研究機関等
『美術研究』413号～415号	各400	博物館・美術館・大学・研究機関等
『無形文化遺産研究報告』第9号	600	博物館・美術館・大学・研究機関等
第9回無形民俗文化財研究協議会報告書	600	博物館・美術館・大学・研究機関等
『大徳寺伝来五百羅漢図』	500	博物館・美術館・大学・研究機関等
『保存科学』54号	650	博物館・美術館・大学・研究機関等
『文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 「かたち」再考—開かれた語りのために』	400	博物館・美術館・大学・研究機関等
『大洋州島嶼国調査報告書』	300	文化庁・関係機関
『洋楽奏楽図屏風光学調査報告書』	400	博物館・美術館・大学・研究機関等
『泰西王侯騎馬図屏風光学調査報告書』	400	博物館・美術館・大学・研究機関等
『文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究報告書 2014年度』	100	文化庁・関係機関
『文化財建造物における塗装彩色材料の調査・修理・活用』	300	文化庁・関係機関
『近代テキスタイルの保存と修復』	500	文化庁・関係機関
『各国の文化財保護法令シリーズ[19]シリア』	300	文化庁・関係機関
『国際資料室蔵書目録』	200	文化庁・関係機関
『敦煌壁画の保護に関する日中共同研究2014』	100	中国側機関・大学・研究機関等
『2014年度韓日文化財保存環境成果報告書—文化財環境の保存管理技術研究』	100	関係機関
『東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力 平成26年度成果報告書』	100	文化庁・関係機関
『ミャンマーの木造建築文化 Traditional Wooden Building in Myanmar』	100	文化庁・関係機関
『バーミヤーン遺跡保存事業概報：2013年度（第11次ミッション）』	250	文化庁・関係機関
『NRIC Final Report of the 2011-2013 UNESCO/Japan Funds-in-Trust Project』	200	文化庁・関係機関
『Indo-Japanese Joint Project for the Conservation of Cultural Heritage, Series 4, Indo-Japanese Project for the Conservation of Ajanta Paintings Conservation and Scientific Investigation of the Paintings of Ajanta Caves 2 and 9』	200	文化庁・関係機関
『シリア復興と文化遺産』	400	各所蔵館、各修理工房、その他関係者機関
『Conservation and Scientific Investigation of the Archaeological Metal Object at the History Museum of Armenia 2011-2015』	200	関係研究機関・国内外図書館
文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「アルメニアおよびコーカサス諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」アルメニア歴史博物館所蔵の考古金属資料の保存修復・調査研究事業及びそれに係わる人材育成・技術移転のための協力 平成26年度 業務報告書	50	文化庁・関係機関
文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「アルメニアおよびコーカサス諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」アルメニア歴史博物館における考古青銅遺物保存修復ワークショップ」平成26年度 資料集	50	文化庁・関係機関
文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業『キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業』平成26年度 業務報告書	30	文化庁・関係機関
文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業『キルギス共和国および中央アジア諸国にお	30	文化庁・関係機関

る文化遺産保護に関する拠点交流事業』 講義資料集		
『ユーラシア壁画保存修復に関する比較調査報告書』	40	文化庁・関係機関
『ユーラシア壁画の調査研究と保存修復に関する研究会報告書』	40	文化庁・関係機関
『ケルン東洋美術館所蔵「伊藤若冲筆 寒山拾得図」修復報告書』	200	各所蔵館、各修理工房、その他関係者機関
『ケルン東洋美術館所蔵「賢江祥啓筆 山水図」修復報告書』	200	各所蔵館、各修理工房、その他関係者機関
『ケルン東洋美術館所蔵「仲安真康筆 出山釈迦図」修復報告書』	200	各所蔵館、各修理工房、その他関係者機関
『ケルン東洋美術館所蔵「豊照女図」修復報告書』	200	文化庁・関係機関
『古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査事業報告書』 27年3月	200	文化庁・関係機関
調査報告書『スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用 日本語』	300	コンソーシアム会員・研究会協力機関
調査報告書『スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用 英語』	200	コンソーシアム会員・研究会協力機関
平成26年度協力相手国調査『マレーシア調査報告書』	150	コンソーシアム会員・研究会協力機関
平成26年度協力相手国調査『ネパール調査報告書』	150	コンソーシアム会員・研究会協力機関
『文化遺産国際協力事業紹介 2014年度』	1500	コンソーシアム会員・研究会協力機関
『文化遺産国際協力事業紹介 2014年度 英語』	1000	コンソーシアム会員・研究会協力機関
『平成26年度文化庁委託 第38回世界遺産委員会審議調査研究事業』	300	文化庁・地方自治体
文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業 『ブータン王国の版築造建造物保存に関する調査研究』 (日本語版)	150	文化庁・関係機関
文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業 『ブータン王国の版築造建造物保存に関する調査研究』 (英語版)	150	文化庁・関係機関
『Conservation and Scientific Investigation of the Archeological Metal Object at the History Museum of Armenia 2011-2015』	200	文化庁・関係機関

【奈良文化財研究所】

○調査研究刊行物

刊行物名	発行部数	配布先
奈良文化財研究所概要2014	2,700	大学、研究機関、図書館等
奈良文化財研究所紀要2014	3,000	大学、研究機関、図書館等
奈文研ニュースNo.53~56	各3,000	大学、研究機関等
埋蔵文化財ニュースNo.158~161	158 : 2,500 159 : 2,500 160 : 2,500 161 : 2,200	教育委員会、図書館、博物館等
奈良文化財研究所特別講演 (東京会場) 『〈歴史の証人〉木簡を究める』講演録	200	関係機関、協力機関等
『いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー』飛鳥資料館図録第60冊	1,600	関係機関、協力機関等
『はぎとり・きりととり・かどりー大地にきざまれた記憶ー』飛鳥資料館図録第61冊	1,600	関係機関、協力機関等
『大和の美仏に魅せられて』飛鳥資料館カタログ第31冊	1,600	関係機関、協力機関等
『飛鳥の考古学2014』飛鳥資料館カタログ第32冊	1,600	関係機関、協力機関等
第5回写真コンテスト展リーフレット『飛鳥の葦マップ』	10,000	館内観覧者
東アジア金属工芸史の研究『鏡に関する研究雑感』	550	関係機関、協力機関等
『平城京ビックリ! はくらんかい』リーフレット	5,000	館内観覧者
『地下の正倉院展ー木簡を科学するー』リーフレット	7,000	館内観覧者
ミニ展示『発掘速報展平城2014 I期』リーフレット	1,500	館内観覧者
ミニ展示『発掘速報展平城2014 II期』リーフレット	1,500	館内観覧者
『仁和寺史料 目録編〔稿〕二』	600	大学、研究機関等
『ベトナム カイベイ市集落調査報告書』	700	大学、研究機関等
『Village Surver Report in Cai Be Tien Giang Province Socialist Republic of Viet Nam』	700	大学、研究機関等
『奈良山発掘調査報告Ⅱー歌姫西須恵器窯の調査ー』奈良文化財研究所学報第93冊	600	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
『計画の意義と方法』平成25年度遺跡等マネジメント研究会 (第3回) 報告書	1,000	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
『戦国時代の城館の庭園』平成26年度庭園の歴史に関する研究会報告書	300	大学、研究機関等
『世界遺産の文化的景観 保全・管理のためのハンドブック』	1,000	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
『8世紀の瓦づくりIVー平城宮式肆伍の展開2ー6282-6721系ー』第15回シンポジウム予稿集	300	関係者・協力者等
第17回古代官衙・集落研究会研究報告書『長舎と官衙の建物配置』 (報告編)	600	関係者・協力者等
第17回古代官衙・集落研究会研究報告書『長舎と官衙の建物配置』 (資料編)	600	関係者・協力者等
第18回古代官衙・集落研究会研究会『宮都・官衙と土器 (官衙・集落と土器1) 研究報告資料』	260	関係者・協力者等
『第一次大極殿院復原検討会記録』9 (内部資料)	200	関係機関・協力機関等
『第一次大極殿院復原検討会記録』10 (内部資料)	200	関係機関・協力機関等
『第一次大極殿院復原検討会記録』11 (内部資料)	200	関係機関・協力機関等
『第一次大極殿院復原検討会記録』12 (内部資料)	200	関係機関・協力機関等
『現場のための環境考古学 (携帯版)』	1,000	関係機関・協力機関等
『西トップ遺跡の調査修復に関する年次報告書 南祠堂解体編2』	500	関係機関・協力機関等
『Annual Report on the Research and Restoration Work of the Western Prasat Top Dismantling Process of the Southern Sanctuary II』	300	関係機関・協力機関等

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】

○調査研究刊行物

刊 行 物 名	発行部数	配 布 先
IRC1リーフレット（日本語1,000部・英語500部・越語100部）（英語改訂版200部）	1,800	関係機関、協力機関等
Towards Safeguarding Endangered Traditional Crafts in Post-Conflict Areas of Sri Lanka	100	ユネスコ関係、研究協力依頼機関等
2013 Study Tour Report: Toward Safeguarding the Intangible Cultural Heritage for the Promotion of Cultural Identity and Community Resilience in Timor-Leste（改訂版）	100	ユネスコ関係、研究協力依頼機関等

c-⑦ 科学研究費助成事業による調査研究

平成27年3月31日現在

件数	国立文化財 機構計	博物館					文化財研究所			アジア太平洋 無形文化遺産 研究センター
		計	東京国立 博物館	京都国立 博物館	奈良国立 博物館	九州国立 博物館	計	東京文化 財研究所	奈良文化 財研究所	
合計	107	41	26	3	2	10	66	23	43	0
科学研究費 補助金のみ	20	11	6	3	1	1	9	2	7	0
学術研究助成基金 助成金のみ	57	16	10	0	1	5	41	16	25	0
科学研究費補助金と 学術研究助成基金助 成金の両方からの交 付を受けた調査研究	30	14	10	0	0	4	16	5	11	0

※平成22年度までの科学研究費補助金事業は、平成23年度より「科学研究費補助金」と「学術研究助成基金助成金」による科学研究費助成事業として取り扱うこととなった。

※各施設に所属する研究員が研究代表者として交付された研究課題のみ記載している。（日本学術振興会特別研究員を除く）

【東京国立博物館】

1) 科学研究費補助金のみ 6件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	交付決定額 (千円)
1	板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究	田沢 裕賀	学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室長	基盤研究 (A)	5,720
2	中世聖徳太子絵伝の図様展開に関する調査研究	沖松 健次郎	学芸研究部保存修復課保存修復室主任研究員	基盤研究 (A)	5,590
3	博物館における文化財の情報資源化に関する研究	高橋 裕次	学芸企画部博物館情報課長	基盤研究 (A)	7,150
4	占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究	神辺 知加	学芸企画部博物館教育課教育講座室主任研究員	基盤研究 (C)	390
5	絵巻の〈伝来〉をめぐる総合的研究	土屋 貴裕	学芸研究部列品管理課平常展調整室研究員	若手研究 (A)	3,640
6	古墳時代の農具研究	河野 正訓	学芸研究部調査研究課考古室アソシエイトフェロー	研究成果公開促進費(学術図書)	900

2) 学術研究助成基金助成金のみ 10件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	当年度の交付決定額 (採択時) (千円)	全研究期間での 交付決定額 (千円) 〈研究期間〉
1	家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究	古谷 毅	学芸研究部列品管理課主任研究員	基盤研究 (C)	0	※1 4,680 〈当初:平成23~25年度〉 〈変更後:平成23~26年度〉
2	浅鉢形土器の型式学的検討を通じた縄文社会構造の研究	井出 浩正	学芸研究部調査研究課考古室研究員	若手研究 (B)	0	※1 2,340 〈当初:平成24~25年度〉 〈変更後:平成24~26年度〉
3	神像表現における物語性の研究	丸山 士郎	学芸研究部列品管理課平常展調整室長	基盤研究 (C)	780	4,810 〈平成25~28年度〉
4	模写資料における書の内容・鑑賞に関する基礎的研究	恵美 千鶴子	客員研究員	基盤研究 (C)	1,300	4,550 〈平成25~27年度〉
5	江戸幕府による自然科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究	小野 真由美	学芸研究部列品管理課貸与特別観覧室主任研究員	基盤研究 (C)	1,430	4,290 〈平成25~27年度〉
6	聴力障害を持つ児童・生徒のための鑑賞プログラムの構築	川岸 瀬里	学芸企画部博物館教育課教育普及室アソシエイトフェロー	若手研究 (B)	1,300	4,160 〈平成25~27年度〉
7	古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術学的研究	澤田 むつ代	客員研究員	基盤研究 (C)	910	4,680 〈平成26~28年度〉
8	法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究	三田 覚之	学芸研究部調査研究課工芸室研究員	若手研究 (B)	1,300	3,380 〈平成26~28年度〉
9	東アジアからみた乾隆画壇の総合的研究	塚本 磨充	学芸研究部調査研究課東洋室研究員	若手研究 (B)	1,300	3,640 〈平成26~29年度〉
10	ミュージアムにおける鑑賞者開発の研究; 新来館者の定着に向けた実証的調査分析	関谷 泰弘	総務部総務課渉外開発担当主任	若手研究 (B)	2,340	3,900 〈平成26~28年度〉

※1 補助事業の延長により、当初の研究期間に変更があったものである。

3) 科学研究費補助金と学術研究助成基金助成金の両方からの交付を受けた調査研究 10件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	科学研究費補助金	学術研究助成基金助成金	
					交付決定額(千円)	当年度の交付決定額(採択時)(千円)	全研究期間での交付決定額(千円)<研究期間>
1	刀装具一派後藤家の鑑定 極帳(鑑定控)の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察	酒井 元樹	学芸研究部保存修復課保存修復室研究員	若手研究(A)	130	1,430	6,500<平成24~27年度>
2	多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究-図像的典拠と分担製作の視点から-	浅湫 毅	学芸企画部博物館教育課教育講座室長	基盤研究(B)	2,730	2,080	6,500<平成24~27年度>
3	中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察	松嶋 雅人	学芸企画部企画課特別展室長	基盤研究(B)	2,210	0	6,500<平成25~27年度>
4	東アジアにおける繡仏の基礎的研究	伊藤 信二	学芸企画部広報室長	基盤研究(B)	3,640	780	6,500<平成25~28年度>
5	極薄青銅器の製作技術解明-中国金属工芸史を再構築するための基盤研究-	川村 佳男	学芸研究部列品管理課平常展調整室主任研究員	基盤研究(B)	3,380	2,080	6,500<平成25~27年度>
6	博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究	白井 克也	学芸研究部調査研究課考古室長	基盤研究(B)	4,160	1,430	6,500<平成25~27年度>
7	海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究	鬼頭 智美	学芸企画部企画課国際交流室長	基盤研究(B)	1,560	2,600	6,500<平成26~28年度>
8	高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相	松本 伸之	学芸企画部付	基盤研究(B)	2,600	4,290	6,500<平成26~29年度>
9	能狂言面の美術史的アプローチによる基礎的調査研究	浅見 龍介	学芸研究部付	基盤研究(B)	2,470	4,030	6,500<平成26~28年度>
10	ディルムン文明の起源-バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究-	後藤 健	特任研究員	基盤研究(B)海外学術調査	1,170	2,080	6,500<平成26~30年度>

【京都国立博物館】

1) 科学研究費補助金のみ 3件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	交付決定額(千円)
1	内外伝世品の調査ならびに比較に基づく京都製蒔絵の歴史的研究	永島 明子	学芸部列品管理室主任研究員	若手研究(A)	1,170
2	中近世染織品の基礎的研究	山川 暁	学芸部教育室長	研究成果公開促進費(学術図書)	1,200
3	南山城地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究	佐々木 丞平	館長	基盤研究(B)	※ 0

※平成25年度完了予定であったが、繰越制度を利用し補助事業期間を平成26年度まで延長した。

2) 学術研究助成基金助成金のみ 0件

3) 科学研究費補助金と学術研究助成基金助成金の両方からの交付を受けた調査研究 0件

【奈良国立博物館】

1) 科学研究費補助金のみ 1件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	交付決定額(千円)
1	春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究	湯山 賢一	館長	基盤研究(A)	13,000

2) 学術研究助成基金助成金のみ 1件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	当年度の交付決定額(採択時)(千円)	全研究期間での交付決定額(千円)<研究期間>
1	平安時代の「大般若波羅蜜多經」遺品の総合的調査と歴史研究資料としての資源化	野尻 忠	学芸部企画室長	基盤研究(C)	910	5,070<平成25~27年度>

【九州国立博物館】

1) 科学研究費補助金のみ 1件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	交付決定額(千円)
1	九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設	伊藤 嘉章	学芸部付	基盤研究 (A)	7,930

2) 学術研究助成基金助成金のみ 5件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	当年度の交付決定額(採択時)(千円)	全研究期間での交付決定額(千円)〈研究期間〉
1	赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究	秋山 純子	学芸部博物館科学課環境保全室 研究員	基盤研究 (C)	1,040	5,200 〈平成24~26年度〉
2	中国・山東省荷澤出土の螺鈿箱(高麗経箱)に関する調査研究	川畑 憲子	学芸部企画課文化交流展室主任研究員	若手研究 (B)	650	4,550 〈平成24~26年度〉
3	石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究	志賀 智史	学芸部博物館科学課保存修復室 主任研究員	基盤研究 (C)	1,300	5,200 〈平成25~28年度〉
4	中世~近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究	荒木 和憲	学芸部文化財課資料登録室主任研究員	若手研究 (B)	1,170	2,730 〈平成25~27年度〉
5	酸化促進剤の添加による文化財建造物用油性塗料の塗膜形成研究	赤田 昌倫	博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー	若手研究 (B)	1,820	2,600 〈平成26~27年度〉

3) 科学研究費補助金と学術研究助成基金助成金の両方からの交付を受けた調査研究 4件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	科学研究費補助金	学術研究助成基金助成金	
					交付決定額(千円)	当年度の交付決定額(採択時)(千円)	全研究期間での交付決定額(千円)〈研究期間〉
1	三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究	谷 豊信	学芸部付	基盤研究 (B)	3,250	2,340	6,500 〈平成24~26年度〉
2	三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発-興福寺 国宝阿修羅像を中心に-	今津 節生	学芸部博物館科学課長	基盤研究 (B)	4,420	1,300	6,500 〈平成24~26年度〉
3	タイにおける異文化の受容と変容-13世紀から18世紀の対外交易品を中心として-	原田 あゆみ	学芸部企画課特別展室主任研究員	基盤研究 (B) 海外学術調査	4,420	1,690	6,500 〈平成24~26年度〉
4	契丹壁画墓の集成と公開-唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解-	臺信 祐爾	学芸部企画課長	基盤研究 (B) 海外学術調査	2,600	1,690	6,500 〈平成25~27年度〉

【東京文化財研究所】

1) 科学研究費補助金のみ 2件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	交付決定額(千円)
1	文化財展示収蔵施設の実状に即したカビ調査技術と制御に関する研究	木川 りか	保存修復科学センター生物科学研究室長	基盤研究 (B)	2,470
2	能・狂言 謡の変遷	高桑 いづみ	無形文化遺産部無形文化財研究室長	学術図書	1,300

2) 学術研究助成基金助成金のみ 16件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	当年度の交付決定額(採択時)(千円)	全研究期間での交付決定額(千円)〈研究期間〉
1	インド・アジャンター石窟壁画消失メカニズムの解明に向けた微生物生態学的調査	佐藤 嘉則	保存修復科学センター研究員	基盤研究 (C)	1,430	5,200 〈平成24~26年度〉
2	中世・近世日本絵画における白色顔料の利用に関する科学的調査研究	早川 泰弘	保存修復科学センター分析科学研究室長	基盤研究 (C)	1,430	5,070 〈平成24~26年度〉
3	螺鈿のアジア史-技術史と交流史を中心に-	小林 公治	企画情報部広領域研究室長	基盤研究 (C)	1,430	5,070 〈平成24~26年度〉
4	自然共生型博物館における野外由来微生物の浮遊真菌濃度予測に関する研究	間瀬 創	保存修復科学センター客員研究員	若手研究 (B)	650	4,420 〈平成24~26年度〉
5	文化財保護法の成立過程に関する研究-日本における文化財概念と史跡名勝天然記念物-	境野 飛鳥	文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー	若手研究 (B)	1,300	4,160 〈平成24~26年度〉

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	当年度の交付決定額 (採択時) (千円)	全研究期間での 交付決定額 (千円) (研究期間)
6	絵画修復と絵画制作に使用される膠の物性にに関する基礎的研究	楠 京子	文化遺産国際協力センター アソシエイトフェロー	若手研究 (B)	390	2,210 (平成24~26年度)
7	黒海周辺地域における中世組積造 建築遺産の系譜と保存継承に關 する研究	鈴木 環	文化遺産国際協力センター 客員研究員	若手研究 (B)	910	3,510 (平成24~26年度)
8	GISを用いた古代クメール都市発 展史の復元的研究	佐藤 桂	文化遺産国際協力センター アソシエイトフェロー	若手研究 (B)	1,560	4,550 (平成24~26年度)
9	古代メソポタミアの葬送儀礼に關 する多角的な研究	久米 正吾	文化遺産国際協力センター アソシエイトフェロー	若手研究 (B)	1,300	2,210 (平成25~26年度)
10	空間情報データベースによる文化 財の災害被害予測の高度化及び防 災計画策定への応用	二神 葉子	企画情報部 情報システム研究室長	基盤研究 (C)	2,210	4,030 (平成26~28年度)
11	平安仏画の技法に関する画像情報 による調査研究	小林 達朗	企画情報部 主任研究員	基盤研究 (C)	1,430	4,940 (平成26~28年度)
12	平安時代前期における神仏習合の 展開とその彫刻に関する研究	皿井 舞	企画情報部 主任研究員	基盤研究 (C)	1,820	4,680 (平成26~28年度)
13	文化財の材質調査のための2次元 イメージング検出器の開発	犬塚 将英	保存修復科学センター 主任研究員	挑戦的萌芽	2,080	2,990 (平成26~27年度)
14	実演用能装束の保存継承に關する 研究-能楽の包括的継承の一指針 として-	菊池 理予	無形文化遺産部 研究員	挑戦的萌芽	1,820	3,640 (平成26~28年度)
15	塑像・乾漆像の部材構造を考慮し たより高精度な地震時応答解析手 法の開発	森井 順之	保存修復科学センター 主任研究員	若手研究 (B)	2,340	3,640 (平成26~27年度)
16	パネル保存型壁画における劣化の 検証と保存管理環境の確立	前川 佳文	文化遺産国際協力センター 客員研究員	若手研究 (B)	1,560	3,900 (平成26~27年度)

3) 科学研究費補助金と学術研究助成基金助成金の両方からの交付を受けた調査研究 5件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	科学研究費補助金	学術研究助成基金助成金	
					交付決定額 (千円)	当年度の交付決定額 (採択時) (千円)	全研究期間での 交付決定額 (千円) (研究期間)
1	近江の古代中世彫像の 基礎的調査・研究—基礎 データと画像蓄積のた めに—	津田 徹英	企画情報部 文化形成研究室長	基盤研究 (B)	2,340	1,430	6,500 (平成24~26年度)
2	西スマトラ州パダン歴 史地区における文化遺 産復興に関する総合的 研究	亀井 伸雄	東京文化財研究所 所長	基盤研究 (B) 海外学術調査	3,120	1,560	6,500 (平成24~26年度)
3	考古遺物等を通じたベ トナム木造建築様式の 形成過程に関する研究	友田 正彦	文化遺産国際協力 センター 保存計画研究室長	基盤研究 (B) 海外学術調査	2,340	1,690	6,800 (平成25~27年度)
4	酵素を利用した文化財 の新規クリーニング方 法の開発-旧修理材料や 微生物痕の除去-	早川 典子	保存修復科学セン ター 主任研究員	基盤研究 (B)	3,510	5,850	8,840 (平成26~30年度)
5	文化財建造物の伝統的 な塗装彩色材料の再評 価と保存・修理・資料活 用に関する研究	北野 信彦	保存修復科学セン ター 伝統技術研究室長	基盤研究 (B)	3,120	5,070	6,500 (平成26~30年度)

【奈良文化財研究所】

1) 科学研究費補助金のみ 7件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	交付決定額(千円)
1	木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結 集	渡邊 晃宏	都城発掘調査部史料研究 室長	基盤研究 (S)	46,540
2	マルチチャンネル機器を利用した高速遺跡探査技術の開発	金田 明大	埋蔵文化財センター主任 研究員	基盤研究 (A)	7,800
3	アンコール遺跡群を事例とした考古情報資源共有化に関する研究	森本 晋	企画調整部国際遺跡研究 室長	基盤研究 (A)	17,160
4	中国新石器時代における家畜・家禽の起源と、東アジアへの拡散 の動物考古学的研究	松井 章	埋蔵文化財センター客員 研究員	基盤研究 (A)	11,960
5	歴史的な文字に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人 文・情報学融合研究	馬場 基	都城発掘調査部主任研究 員	基盤研究 (A)	4,290
6	東北アジアにおける金属器の拡散と在地社会の変化に関する考古 学的研究	庄田 慎矢	都城発掘調査部考古第一 研究室研究員	若手研究 (A)	1,820
7	近世における石材生産と運搬に関する広領域域的情報の資源化と 実証的研究	高田 祐一	研究支援推進部連携推進 課アソシエイトフェロー	研究活動スタ ート支援	910

2) 学術研究助成基金助成金のみ 25件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	当年度の交付決定額 (採択時) (千円)	全研究期間での 交付決定額 (千円) (研究期間)
1	「鎖国」下の日本における清朝陶磁の受容とその影響に関する調査研究	尾野 善裕	都城発掘調査部考古第二研究室長	基盤研究 (C)	1,040	4,160 (平成23～26年度)
2	三次元計測による飛鳥時代の石工技術の復元的研究	廣瀬 覚	都城発掘調査部考古第一研究室主任研究員	若手研究 (B)	780	3,770 (平成23～26年度)
3	古代東アジアにおける土木技術系譜の復元的研究	青木 敬	都城発掘調査部考古第二研究室主任研究員	基盤研究 (C)	1,170	5,200 (平成24～27年度)
4	中世日本と東アジアの木造建築における架構システムに関する比較研究	鈴木 智大	都城発掘調査部遺構研究室研究員	基盤研究 (C)	1,300	5,460 (平成24～27年度)
5	南洋群島の戦争遺跡の保存と活用：特に水中文化遺産に重点を置いて	石村 智	企画調整部国際遺跡研究室主任研究員	若手研究 (B)	910	4,550 (平成24～26年度)
6	弥生時代の地域間関係と青銅器の受容	石橋 茂登	飛鳥資料館学芸室長	若手研究 (B)	780	2,730 (平成24～26年度)
7	甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究	川畑 純	都城発掘調査部考古第三研究室研究員	若手研究 (B)	650	2,600 (平成24～27年度)
8	東アジアにおける鉛釉陶器の原料とその時間的・地域的特徴に関する研究	降幡 順子	都城発掘調査部主任研究員	基盤研究 (C)	1,300	4,030 (平成25～27年度)
9	平安時代出土文字資料の動態的歴史分析-〈荷札の終焉〉にみえる木簡の機能	山本 崇	都城発掘調査部主任研究員	基盤研究 (C)	1,300	4,160 (平成25～27年度)
10	ツガ年輪による近世以降の建造物の年代測定および用材産地推定手法の確立	藤井 裕之	埋蔵文化財センター客員研究員	基盤研究 (C)	910	3,120 (平成25～27年度)
11	装飾古墳を安定に保存するための環境制御法の開発に関する研究	脇谷 草一郎	埋蔵文化財センター保存修復科学研究室研究員	若手研究 (B)	650	2,210 (平成25～27年度)
12	古代東アジアにおける食器構成と食事作法の変化に関する比較研究	小田 裕樹	都城発掘調査部考古第二研究室研究員	若手研究 (B)	650	3,640 (平成25～28年度)
13	古代日本の宮都、寺院出土磚の基礎的研究	中川 二美	都城発掘調査部遺構研究室アソシエイトフェロー	若手研究 (B)	650	3,380 (平成25～28年度)
14	大工道具とその加工痕跡から見た建築技術史の研究	番 光	都城発掘調査部遺構研究室研究員	若手研究 (B)	1,430	3,380 (平成25～27年度)
15	重要文化的景観の評価方法と保護手法における現状と課題	恵谷 浩子	文化遺産部景観研究室研究員	若手研究 (B)	780	3,770 (平成25～28年度)
16	近世庭園の様式と地域性に関する基礎的研究-重森編年への検証として	高橋 知奈津	文化遺産部遺跡整備研究室研究員	若手研究 (B)	1,430	3,120 (平成25～28年度)
17	中国由来の木彫像の用材観	伊東 隆夫	埋蔵文化財センター客員研究員	基盤研究 (C)	1,690	4,680 (平成26～28年度)
18	「復元学」構築のための基礎的研究	海野 聡	文化遺産部建造物研究室研究員	挑戦的萌芽研究	1,560	3,900 (平成26～28年度)
19	古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造にかんする考古学的研究	諫早 直人	都城発掘調査部考古第一研究室研究員	若手研究 (B)	1,040	3,640 (平成26～29年度)
20	七世紀土器編年からみた古代宮都の変遷に関する考古学的研究	若杉 智宏	都城発掘調査部考古第二研究室研究員	若手研究 (B)	1,040	2,730 (平成26～29年度)
21	九州旧石器編年の再構築と集団関係の研究-中九州石器群の再検討	芝 康次郎	都城発掘調査部考古第一研究室研究員	若手研究 (B)	1,040	3,770 (平成26～29年度)
22	古代都城造営における造瓦体制の復元的研究	石田 由紀子	都城発掘調査部考古第三研究室研究員	若手研究 (B)	1,560	3,640 (平成26～29年度)
23	荘厳化を目的とした建築装飾に関する研究	大林 潤	都城発掘調査部遺構研究室研究員	若手研究 (B)	1,300	2,600 (平成26～30年度)
24	古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究	山崎 健	埋蔵文化財センター環境考古研究室研究員	若手研究 (B)	1,040	3,900 (平成26～29年度)
25	中近世における標準年輪曲線の広域ネットワーク整備による木材産地推定	星野 安治	埋蔵文化財センター年代学研究室研究員	若手研究 (B)	1,170	3,900 (平成26～29年度)

3) 科学研究費補助金と学術研究助成基金助成金の両方からの交付を受けた調査研究 11件

	研究テーマ	名前	役職	研究種目	科学研究費補助金	学術研究助成基金助成金	
					交付決定額 (千円)	当年度の交付決定額 (採択時) (千円)	全研究期間での 交付決定額 (千円) (研究期間)
1	和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究	松村 恵司	所長	基盤研究 (B)	2,340	1,690	6,500 (平成24～27年度)
2	中国漢代の木槨・木棺材を用いた年輪年代学の確立と用材選択の意義	光谷 拓実	埋蔵文化財センター客員研究員	基盤研究 (B)	2,340	910	6,500 (平成25～29年度)
3	弥生時代における青銅器生産の総合的研究	難波 洋三	埋蔵文化財センター長	基盤研究 (B)	2,600	1,170	6,500 (平成25～29年度)
4	文化財および美術工芸材料のナノ構造と物性・機能の解明	北田 正弘	埋蔵文化財センター客員研究員	基盤研究 (B)	2,600	2,340	6,500 (平成25～27年度)
5	東アジアを中心とした名勝地の保護に関する	平澤 毅	文化遺産部景観研究室長	基盤研究 (B)	2,990	1,170	6,500 (平成25～28年度)

	研究						
6	歴史と現状からみた庭園の観光資源としての可能性に関する研究－欧州との比較から	小野 健吉	副所長	基盤研究（B）	1,300	2,340	6,500 〈平成26～29年度〉
7	東大寺を中心とする南都の未整理文書聖教の復元的調査研究	吉川 聡	文化遺産部歴史研究室長	基盤研究（B）	1,170	1,820	6,500 〈平成26～30年度〉
8	アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築	杉山 洋	企画調整部長	基盤研究（B）	1,560	2,730	6,500 〈平成26～29年度〉
9	19世紀の東西文化交流でもたらされた染色・絵画材料のナノ構造解明	杉岡 奈穂子	埋蔵文化財センター保存修復科学研究室アソシエイトフェロー	若手研究（A）	130	2,340	6,500 〈平成24～26年度〉
10	東アジアにおける「西のガラス」の流通からみた古代の物流に関する考古学的研究	田村 朋美	埋蔵文化財センター保存修復科学研究室研究員	若手研究（A）	130	1,560	6,500 〈平成25～28年度〉
11	古代東アジアにおける建築技術の重層性と日本建築の特質	海野 聡	文化遺産部建造物研究室研究員	若手研究（A）	2,600	1,820	6,500 〈平成26～29年度〉

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】 0件

c-⑧ 客員研究員一覧

平成27年3月31日現在

国立文化財機構合計	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
124人	38人	28人	5人	5人	0人
	文化財研究所計	東京文化財研究所		奈良文化財研究所	
	86人	48人		38人	
	アジア太平洋無形文化遺産研究センター		0人		

【東京国立博物館】 28人

	氏名(所属)	研究課題
1	松原 茂 (財団法人根津美術館学芸部長)	当館所蔵の絵画に関する研究
2	岩崎 均史 (たばこと塩の博物館主席学芸員)	当館所蔵の大小絵巻に関する研究
3	松田 清 (京都外国語大学教授)	当館所蔵の江戸幕府旧蔵の洋書、シーボルト献納本などの古洋書に関する研究
4	宮永 美知代 (東京藝術大学美術学部助教)	解剖学・美術解剖学および医学関係の館史資料に関する調査研究
5	東野 治之 (奈良大学文学部教授)	法隆寺献納宝物の資料の研究
6	田辺 龍太 (財団法人切手の博物館主任)	当館所蔵の切手に関する調査研究
7	水上 嘉代子 (財団法人遠山記念館学芸員)	当館に所蔵される小袖形を中心とする日本近世染織の調査・研究
8	小笠原 小枝	当館所蔵のインド更紗に関する研究
9	大脇 潔 (近畿大学文芸学部教授)	当館所蔵古瓦の整理および、当館所蔵の藤原宮および藤原京内寺院出土瓦に関する研究
10	金子 浩昌 (日本考古学協会会員)	当館所蔵原始・古代骨角製品に関する研究
11	宮下 佐江子 (古代オリエント博物館学芸部長)	西アジア古代ガラスの研究
12	丸山 清志 (城西国際大学物質文化研究センター研究員・助手)	東洋民族オセアニア採集品の調査研究
13	湊 信幸 (元東京国立博物館副館長)	当館所蔵の絵画に関する研究
14	鍋島 稲子 (台東区立書道博物館主任研究員)	中国書跡の調査研究
15	西岡 康宏 (元東京国立博物館副館長)	当館所蔵の東洋漆工に関する研究
16	小野 博 (美術刀剣研摩技師)	刀剣コレクションに関する保存状態の評価と保存修理の対策
17	保坂 裕興 (学習院大学大学院人文科学研究科教授)	館史資料アーカイブズ学的研究
18	田中 淑江 (共立女子大学家政学部准教授)	当館所蔵の江戸時代を中心とする小袖に関する研究
19	佐々木 利和 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター特任教授)	アイヌ・琉球民族資料に関する調査研究
20	望月 幹夫 (元東京国立博物館上席研究員)	当館所蔵の考古資料(原史・有史)に関する調査研究
21	歌田 眞介 (東京藝術大学名誉教授)	東京国立博物館所蔵油彩画の材料・技法および保存状態についての調査・研究
22	松井 敏也 (筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授)	考古出土遺物に関する保存科学的研究
23	稲本 泰生 (京都大学人文科学研究所准教授)	東洋彫刻及び大谷探検隊将来西域美術の調査研究
24	澤田 むつ代 (元東京国立博物館上席研究員)	法隆寺献納宝物のうち法隆寺裂などの上代切れの保存と修理に関する調査研究
25	恵美 千鶴子 (東京大学史料編纂所)	模写資料における書の受容・鑑賞に関する基礎的研究
26	クライナー・ヨゼフ	在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信
27	佐藤 サアラ (公益財団法人常盤山文庫上席研究員)	東洋陶磁(宋・元代)に関する研究
28	木本 諒 (東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター特任助教)	芸術機関におけるデジタルアーカイブズと文化財

【京都国立博物館】 5人

	氏名(所属)	研究課題
1	井上一稔 (同志社大学文学部教授)	南山城の彫刻に関する調査研究
2	宇都宮啓吾 (大阪大谷大学文学部教授)	訓点資料としての典籍に関する調査研究
3	奥平俊六 (大阪大学大学院文学研究科教授)	京狩野に関する調査研究
4	狩野博幸 (同志社大学文化情報学部教授)	近世絵画に関する調査研究
5	後藤 真 (人間文化研究機構本部特任助教)	文化財情報に関する調査研究

【奈良国立博物館】 5人

	氏名(所属)	研究課題
1	井出誠之輔 (九州大学大学院人文科学研究院教授)	仏教絵画の調査及び整理
2	木村法光 (元宮内庁正倉院事務所保存課長)	漆工品の調査及び研究
3	清水 昭博 (帝塚山大学文学部准教授)	飛鳥・奈良時代の仏教考古、斑鳩地区出土瓦の調査及び整理
4	根立研介 (京都大学大学院文学研究科教授)	仏教彫刻の調査と整理
5	板倉聖哲 (東京大学東洋文化研究所教授)	中国・朝鮮絵画の調査及び整理

【九州国立博物館】 0人

【東京文化財研究所】 48人

	氏名(所属)	研究課題
1	吉田千鶴子 (東京藝術大学非常勤講師)	近代美術資料群の調査・研究
2	三上 豊 (和光大学表現学部教授)	現代美術に関する調査研究
3	中村佳史 (国立情報学研究所研究員)	デジタル資料学の研究
4	丸川雄三 (国立民族学博物館准教授)	近代美術に関する調査研究
5	中野照男 (成城大学特任教授)	美術の表現・技法・材料に関する多角的な研究
6	津村宏臣 (同志社大学文化情報学部文化情報学科准教授)	東京文化財研究所アーカイブズ構築に関する調査研究

	氏名(所属)	研究課題
7	吉崎真弓(国立情報学研究所特任研究員)	文化財情報の発信に関する調査研究
8	近松鴻二(国士館大学非常勤講師ほか)	黒田清輝宛書簡ならびに記事珠等の明治期文書資料に基づく調査研究
9	永井美和子(早稲田大学非常勤嘱託(演劇博物館))	無形文化財の記録作成
10	今岡謙太郎(武蔵野美術大学造形学部教授)	無形文化財の記録作成
11	齋藤裕嗣	無形民俗文化財の調査研究
12	原田一敏(東京藝術大学大学美術館教授)	無形文化財工芸技術(金工分野)の調査研究
13	荒川正明(学習院大学文学部哲学科(美術史専攻)教授)	無形文化財工芸技術(陶芸分野)の調査研究
14	山崎 剛(金沢美術工芸大学准教授)	無形文化財工芸技術(漆工分野)の調査研究
15	俵木 悟(成城大学文学部准教授)	無形民俗文化財の調査研究
16	星野厚子(東京藝術大学助手)	無形文化財(芸能)に関する調査研究
17	大西秀樹(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター非常勤講師)	音声映像記録に関する調査研究
18	松山直子	アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護活動の調査研究
19	三浦定俊(公益財団法人文化財虫害研究所理事長)	X線透過画像調査データ等に関する整理およびアーカイブ業務等
20	藤井義久(京都大学農学部教授)	文化財の生物劣化対策の研究
21	呂 俊民	文化財の保存環境の研究
22	小峰幸夫(公益財団法人文化財虫害研究所研究員)	文化財の生物劣化対策の研究
23	北原博幸(トータルシステム研究所代表)	環境制御および環境解析に関する研究
24	宇高 健太郎	文化財の伝統修復に関する調査研究
25	古田嶋 智子(東京藝術大学助手)非常勤	文化財の保存環境に関する調査研究
26	間瀬 創(三重県立博物館学芸員)	文化財保存収蔵環境におけるカビの付着菌、浮遊菌の調査
27	横山晋太郎	近代文化遺産の保存修復に関する調査研究
28	長島宏行(一般財団法人日本航空協会)	近代文化遺産の保存修復に関する調査研究
29	小堀信幸(公益財団法人日本海事科学振興財団船の科学館)	近代文化遺産の保存修復に関する調査・研究
30	本多真之(明治大学理工学部専任講師)	伝統的修復材料に関する調査研究
31	高林弘実(京都市立芸術大学美術部講師)	中国壁画の保護に関する調査研究
32	渡邊真樹子(絵画修復家)	中国壁画の保護に関する調査研究
33	酒井清文	伝統的修復材料に関する調査研究
34	堤 一郎(中央大学理工学部非常勤講師)	近代文化遺産の保存修復に関する調査研究
35	谷口陽子(筑波大学大学院人文社会学研究科歴史・人類准教授)	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業に関する調査研究
36	石崎 武志(東北芸術工科大学教授)	材料の基本物性の計測に関する調査研究
37	松田泰典(JICA大エジプト博物館保存修復センター専門家)	「エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト」人材育成と技術移転事業
38	大河原典子(日本画家)	古墳壁画の修復に関する調査研究
39	石井美恵(染織品保存修復士)	在外日本文化財保存修復協力事業に関する調査研究
40	前川佳文(壁画保存修復士)	古墳壁画の修復に関する調査研究
41	成田朱美(愛知県立美術大学研究員)	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業に関する調査研究
42	間舎裕生(慶応大学文学部講師)	キルギス等文化遺産国際協力拠点交流に係る調査研究
43	邊牟木尚美(ローマ・ゲルマン中央博物館研修員)	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業に関する調査研究
44	鈴木 環(国士館大学アジア日本研究センター研究員)	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業に関する調査研究
45	釘屋奈都子(東京藝術大学大学院専門研究員)	アルメニア及びコーカサス諸国等における文化遺産保護に関する調査研究
46	原本 知実	文化財保護に関する調査研究及び世界遺産委員会における資産調査
47	原田 怜(JICA専門家)	西アジア諸国等の文化財保護に関する調査研究
48	藤澤 明(帝京大学文化財研究所講師)	アルメニア及びコーカサス諸国等における文化遺産保護に関する調査研究

【奈良文化財研究所】 38人

	氏名(所属)	研究課題
1	小原 嘉記(中京大学国際教養学部准教授)	日本古代・中世の地方支配制度及び中性寺院の研究
2	小浦 久子(大阪大学大学院工学研究科准教授)	都市計画、環境デザインの研究
3	廣田 純一(岩手大学農学部教授)	農業土木学及び農村計画学
4	EDWARDS Walter Drew(中国科学院心理学研究所嘱託)	考古学、文化人類学の研究
5	巽 淳一郎(京都橋大学文学部教授)	歴史考古学の研究
6	松井 章(元奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長)	動物考古学の研究
7	水野 裕史(熊本大学教育学部講師)	文化財情報学・美術史学の研究
8	小林 謙一(財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修事業部長)	遺物及びその調査技術、文化財情報に関する研究
9	Carl Gellert(カリフォルニア大学バークレー校博士後期課程)	日本美術史の研究
10	登谷 伸宏(京都橋大学文学部助教)	日本建築・都市史の研究
11	MARES Emmanuel Bernard(総合地球環境学研究所事務補佐員)	日本庭園史に関する研究
12	窪寺 茂(建築装飾技術史研究所)	第一次大極殿院復原のための建築塗装・彩色の研究
13	谷本 啓(奈良大学通信教育部非常勤講師)	日本古代史の研究
14	深澤 芳樹(元奈良文化財研究所副所長)	歴史考古学の研究
15	黒羽 亮太(日本学術振興会特別研究員)	日本古代史の研究
16	肥塚 隆保(元奈良文化財研究所副所長)	文化財科学、保存修復科学の研究
17	佐藤 昌憲(元京都工芸繊維大学名誉教授)	文化財科学、分析化学の研究
18	北田 正弘(元(独)物質・材料研究機構特別研究員)	金属材料工学、文化財科学の研究
19	辻本 與志一(株式会社文化財保存)	保存修復科学、精密工学の研究
20	赤田 昌倫	文化財建造物における塗料材料の劣化研究
21	澤田 正昭(国士館大学アジア・日本研究センター客員研究員)	保存修復科学の研究
22	小椋 大輔(京都大学大学院工学研究科准教授)	建築環境工学、保存科学の研究
23	大賀 克彦(奈良女子大学古代学学術センター特任講師)	古代における玉類の生産と流通についての研究
24	丸山 真史	動物考古学の研究

	氏名(所属)	研究課題
25	芹原 信生 (元京都大学霊長類研究所教授)	自然人類学、動物考古学の研究
26	渡辺 伸行 (神戸市立上野児童館長)	日本考古学(弥生時代~古代)及び自然災害と考古学の研究
27	大江 文雄	古生物学(魚類系統進化)の研究
28	菊地 大樹 (元奈良文化財研究所任期付研究員)	中国考古学、動物考古学の研究
29	上中 央子	花粉分析、文化財科学、環境考古学、古環境の研究
30	光谷 拓実	年輪年代学及び木材解剖学の研究
31	伊東 隆夫 (南京林業大学(中国)特別招聘教授)	木材組織学の研究
32	藤井 裕之	年輪年代学の研究
33	児島 大輔 (大阪市立美術館学芸員)	美術史(仏教美術・東洋美術)及び年輪年代学の研究
34	山中 敏史 (元奈良文化財研究所文化遺産部長)	遺跡及びその調査技術の研究
35	西村 康 (財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所長)	遺跡探査及び測量の研究
36	西口 和彦 (元兵庫県立考古博物館調査専門員)	遺跡探査の研究
37	狭川 真一 (財団法人元興寺文化財研究所研究部長)	遺跡及びその調査技術の研究
38	小澤 毅 (三重大学人文学部教授)	遺跡及びその調査技術と測量の研究

【アジア太平洋無形文化遺産研究センター】 0人

d ウェブサイトアクセス件数

平成27年3月31日現在

	H22	H23	H24	H25	H26
国立博物館計	9,202,862	6,480,930	7,743,323	6,564,190	10,236,963
東京国立博物館	4,971,306	2,772,633	2,982,729	2,898,885	4,248,437
京都国立博物館	2,077,562	1,835,640	1,837,113	1,562,480	2,964,705
奈良国立博物館	769,293	722,249	845,202	893,553	1,196,669
九州国立博物館	1,384,701	1,150,408	2,078,279	1,209,272	1,827,152
文化財研究所計	2,130,786	1,771,695	1,655,762	1,857,638	2,128,972
東京文化財研究所	1,489,091	1,314,541	(*1)1,230,718	1,410,075	1,603,086
奈良文化財研究所	641,695 (参考:4,977,076)	457,154	425,044	447,563	525,886
アジア太平洋無形文化遺産 研究センター		1,838 (H23.12.16サイト開 設)	5,289	5,454	6,200
機構本部	270,913	208,982	260,558	283,412	325,132
e国宝	659,056	1,139,318	1,420,662	1,676,762	1,515,442

※アクセス件数の単位は、ユーザーセッション数である。

*1 参考値。サーバの入替の際にアクセスログ保存期間の設定に誤りがあり、24年10月～25年2月のアクセスログが消失したことから、年間アクセス件数は不明である。ログが保存されている7ヵ月間のアクセス件数717,919件の月平均を12倍した値を、参考値として記載している。

e 平成 26 年度平常展・特別展アンケート結果

<平常展>

東京国立博物館総合文化展	220
京都国立博物館名品ギャラリー	221
奈良国立博物館名品展	222
九州国立博物館文化交流展	223

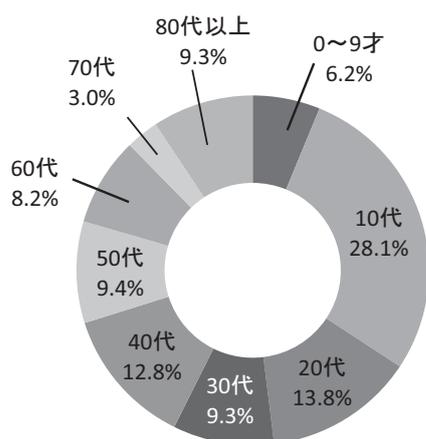
<特別展>

東京国立博物館	224
特別展「栄西と建仁寺」	
特別展「キトラ古墳壁画」	
特別展「台北 国立故宮博物院「神品至宝」	
特別展「東アジアの華 陶磁名品展」	
「日本国宝展」	
特別展「3.11 大津波と文化財の再生」	
特別展「みちのくの仏像」	
京都国立博物館	231
特別展覧会「南山城の古寺巡礼」	
特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」	
奈良国立博物館	233
特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 —迫真とエキゾチシズム—」	
特別展「国宝 醍醐寺のすべて —密教のほとけと聖教—」	
天皇皇后両陛下傘寿記念「第 66 回正倉院展」	
九州国立博物館	236
特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」	
特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美—」	
特別展「台北 国立故宮博物院「神品至宝」	
特別展「古代日本と百済の交流 —大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」	
同時開催「発掘された日本列島 2014」	

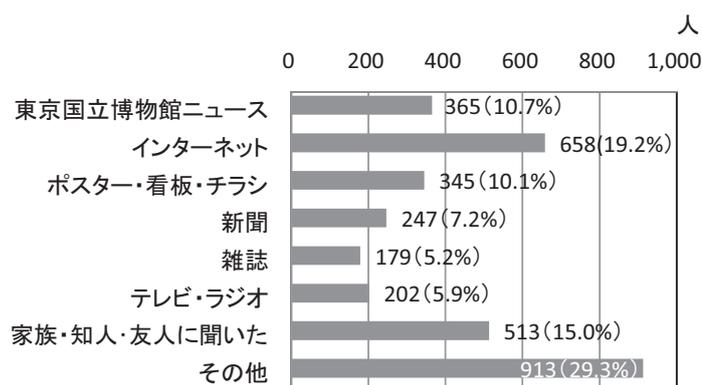
平常展（総合文化展） アンケート集計結果

開催期間：平成26年4月1日（火）～平成27年3月31日（火）開館日数：312日間
 回答者数：4,561人（うちタッチパネルアンケート回答者数：4,211人＜92.3%＞）
 来館者数：587,528人
 アンケート回収率：0.78%

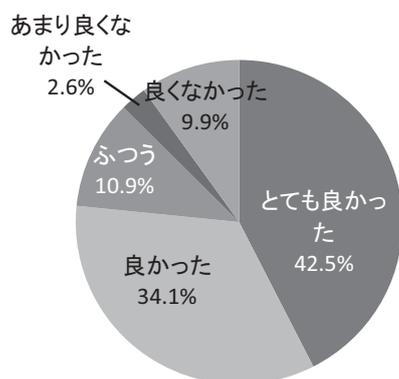
①アンケート回答年齢層



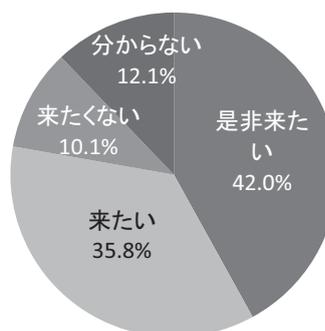
②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④再来館率



⑤主な意見・感想

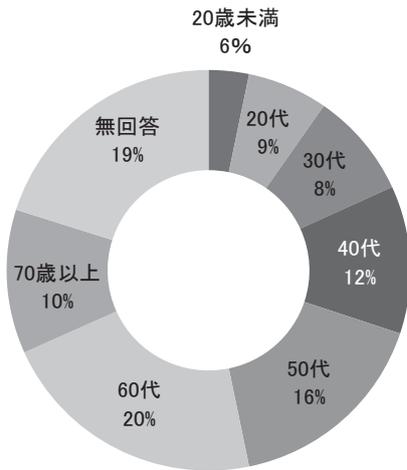
- ・良かった、楽しかった、面白かった、素晴らしかった。
- ・～の展示が良かった（埴輪、青磁、上村松園の「焰」等多岐にわたる）。
- ・展示替えがあるので楽しい。飽きない。
- ・近代美術の部屋が以前よりも明るくなっていて良かった。
- ・展示の仕方が良くない。見えにくい。
- ・外国語の説明を増やしてほしい。
- ・分かりやすい案内表示をしてほしい。
- ・もっと広報活動に力を入れたほうが良い。
- ・～の展示を見たい（国宝・三日月宗近 等）

京都国立博物館

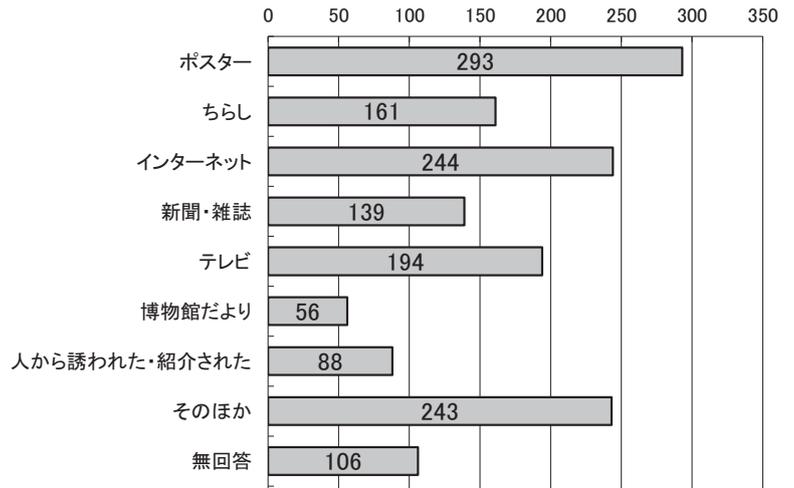
平常展（名品ギャラリー） アンケート集計結果

開催期間：平成26年9月13日(土)～平成27年3月31日(火) 開館日数：164日間
 回答者数：1,233人
 来館者数：265,791人
 アンケート回収率：0.46%

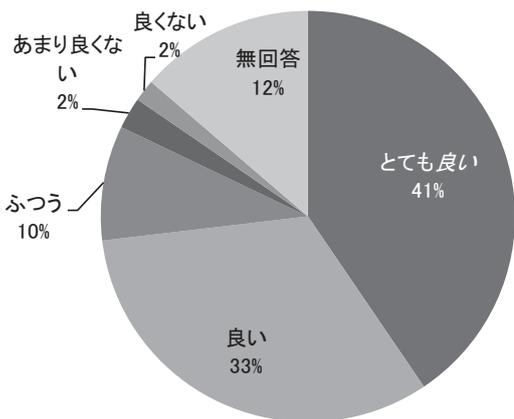
①アンケート回答年齢層



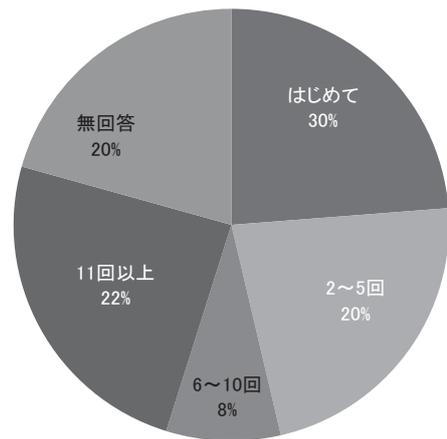
②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④再来館率



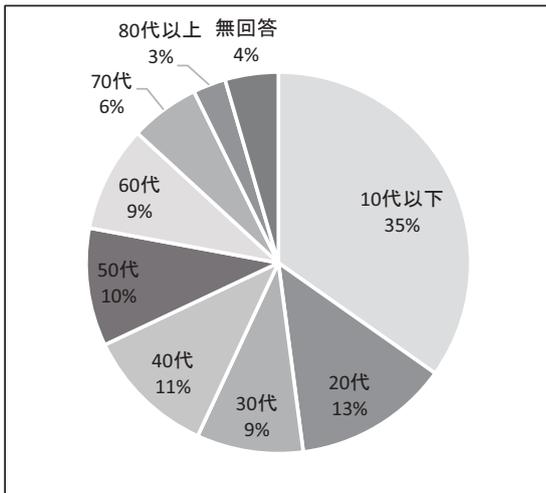
⑤主な意見・感想

- ・良かった、素晴らしかった、面白かった、楽しかった
- ・展示品の質が高い 展示が素晴らしい
- ・展示替えが多く、何度来ても楽しめる
- ・建物が新しく美しい、洗練されている 景観も素晴らしい
- ・展示品の解説文が小さくて読みづらい 少ない 英語の解説が少なすぎる
- ・展示館は綺麗だが、順路やトイレなどの場所がわかりづらい

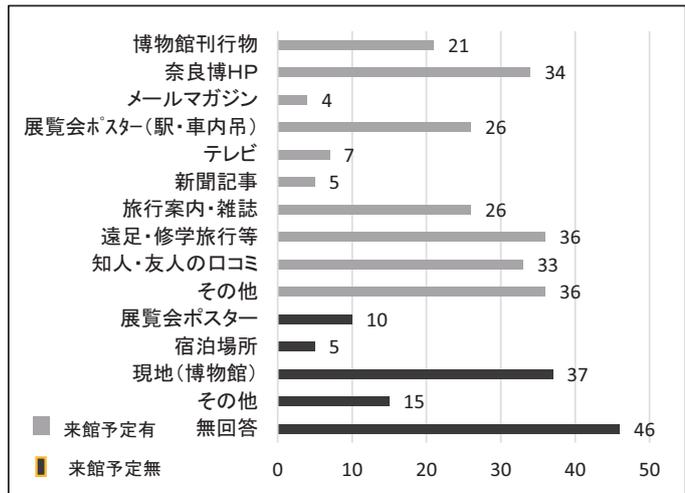
平常展（名品展） アンケート集計結果

開催期間：平成26年4月1日（火）～平成27年3月31日（火） 開館日数：321日間
 （ただし9月8日よりなら仏像館休館のため、9月9日～10月22日および11月13日～12月7日は青銅器館のみ開館）
 回答者数：290人（来館者数：92,147人 アンケート回収率：0.31%）

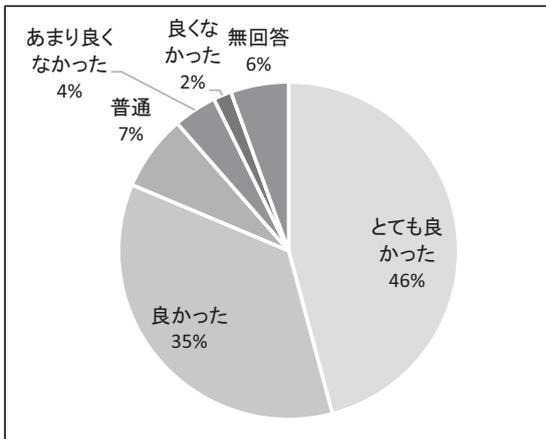
①年齢層



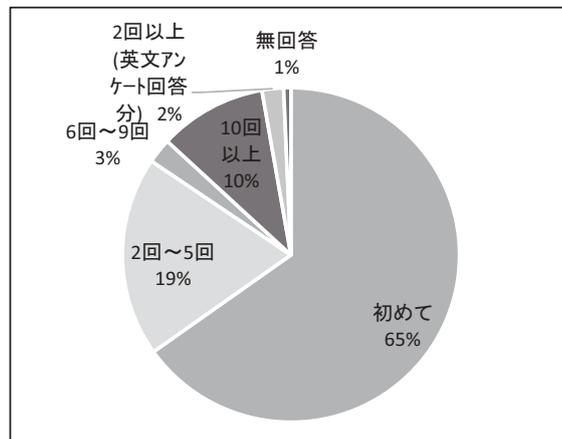
②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④再来館率



⑤主な意見・感想

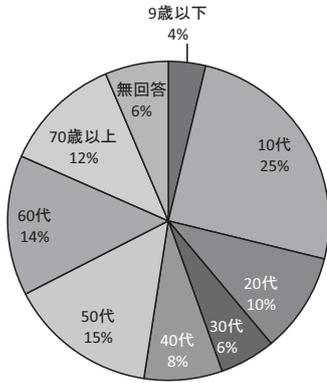
- ・たくさんの仏像を一度に見ることができてよかった。スペースも広く静かで見やすかった。
- ・全体的に見やすく、展示されている仏像の説明書きも分かりやすかった。
- ・授業で習った青銅器や仏像が見られてよかった。
- ・実物の大きさを実感できた。
- ・間近で仏像を見れて良かったが、順路があった方が進みやすいと思った。
- ・小さい仏像の照明に工夫を。上からの光で、顔の表情がはっきり見えないことがある。

九州国立博物館

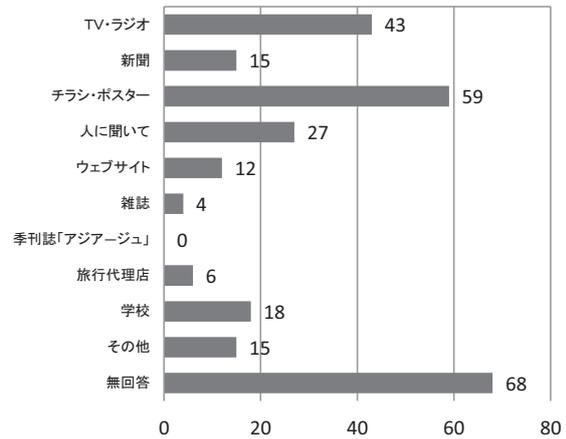
文化交流展 アンケート集計結果

開催期間：平成26年4月1日(火)～平成27年3月31日(火) 開館日数：310日間
 総回答者数：267人（総来館者数：357,362人 アンケート回収率：0.07%）

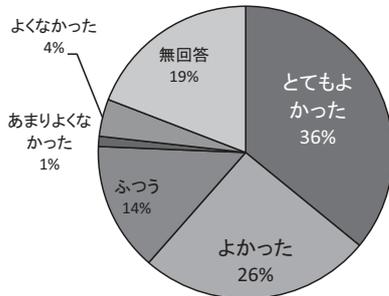
①年齢層



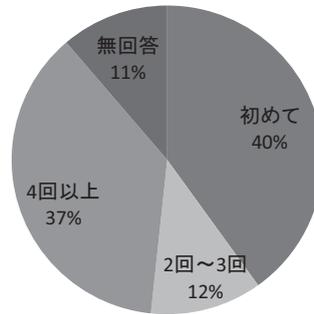
②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④再来館率



④主な意見・感想

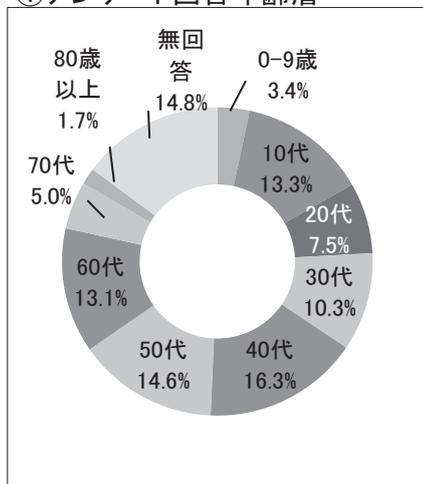
- ・歴史を感じられてとにかく良かった。
- ・背もたれがある椅子を増やして、ゆっくり休めるようにしてほしい。
- ・随所に直接触れるコーナーがあり、良かった。
- ・内容も豊富で見応えがあった。
- ・車椅子の人には展示品が見えにくい高さや角度だった。可能であれば改善をお願いしたい。
- ・高校考古学展やアジアの文化についての展示はとても興味を湧いた。
- ・すごく良かったが、もう少しオーディオ解説を増やしてほしい。
- ・解説の文字が小さすぎるのもっと大きくしてほしい。
- ・展示室内でお茶を飲めるスペースがあるといい。

特別展「栄西と建仁寺」 アンケート集計結果

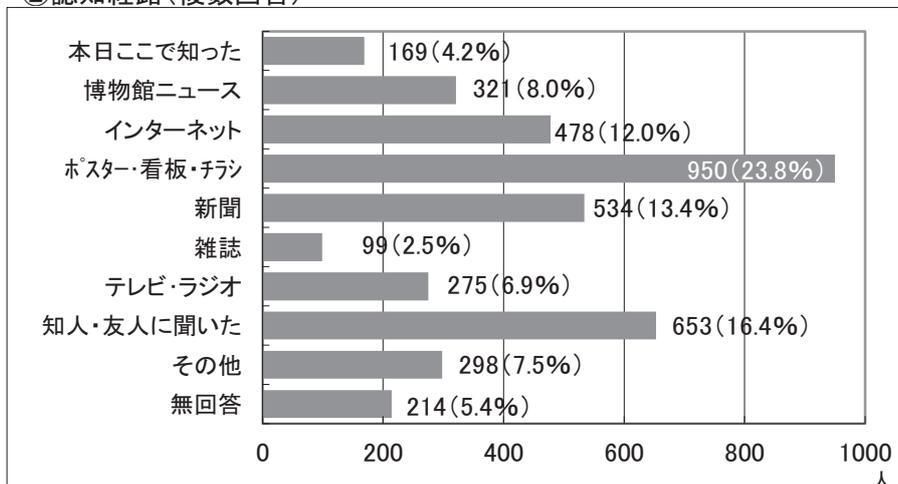
開催期間：平成26年3月25日（火）～ 5月18日（日）（49日間）

回答者数：3,462人（総入館者数：252,116人 アンケート回収率：1.37%）

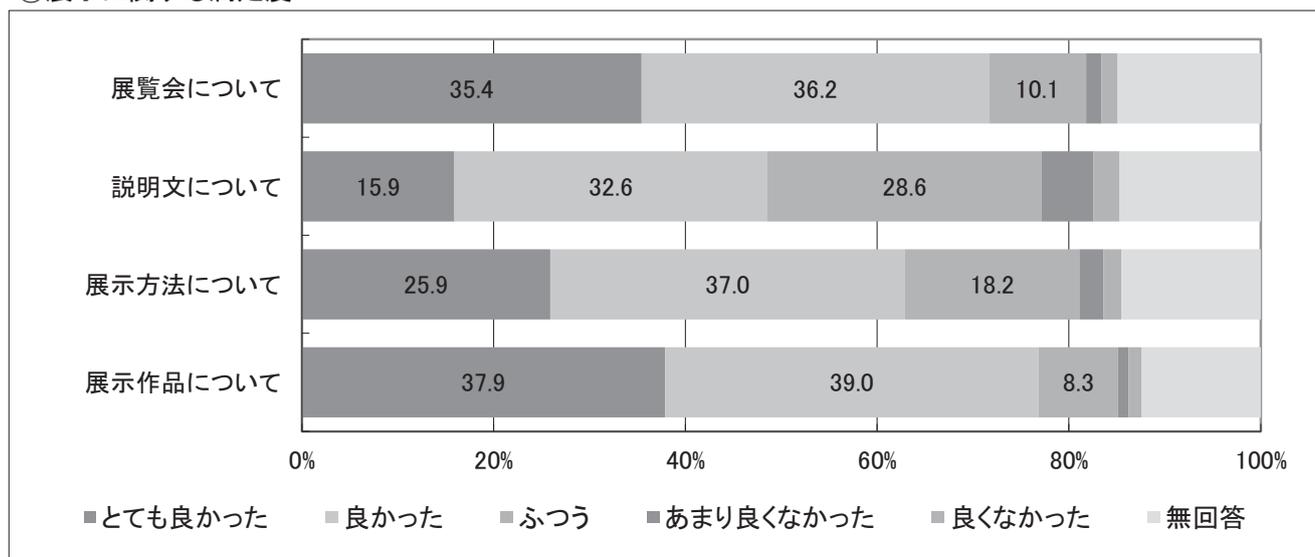
①アンケート回答年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・風神雷神図屏風、四頭茶会の再現がすばらしかった。
- ・小野篁像の目が光るライティングは迫力があって良かった。
- ・禅宗や喫茶のはじまりなどを知り、大変勉強になった。
- ・展示位置が高い作品があり、見づらかった。
- ・もう少し文字を大きくしてほしい。

注：上記数字は以下の通り

	あまり良くなかった	良くなかった	無回答
展覧会	1.6	1.7	14.9
説明文	5.4	2.7	14.7
展示方法	2.5	1.9	14.5
展示作品	1.1	1.4	12.4

(%)

本展覧会は、日本に禅宗(臨済宗)を広め、京都最古の禅寺「建仁寺」を開創した栄西禅師(ようさいぜんじ、1141～1215)の800年遠忌にあたる本年、栄西ならびに建仁寺にゆかりの宝物を一堂に集めて開催いたしました。建仁寺の至宝・琳派の美を象徴する俵屋宗達の最高傑作、国宝「風神雷神図屏風」を筆頭に、海北友松筆の重文「雲龍図」など建仁寺本坊方丈障壁画、山内の塔頭に伝わる工芸や絵画の名品、栄西をはじめとした建仁寺歴代の書蹟、全国の建仁寺派寺院が所蔵する宝物を展示し、また日本で最初の茶書である『喫茶養生記』を著した栄西にちなみ、茶道の原形とされる「四頭茶会」を再現しました。

本展には、25万人を超えるお客様にご来場いただきました。アンケートの結果、71%の方々から「とても良かった」「良かった」と好意的な評価をいただいた他、展示作品全般に関しても多くの好評意見が寄せられました。一方で「もっと詳しい説明がほしい」「一連の作品を前期と後期で分割して展示しないでほしい」といったご意見もいただきました。

今後も、お客様からお寄せいただきましたご意見・ご感想を参考に、観覧環境のより一層の充実に努めてまいります。

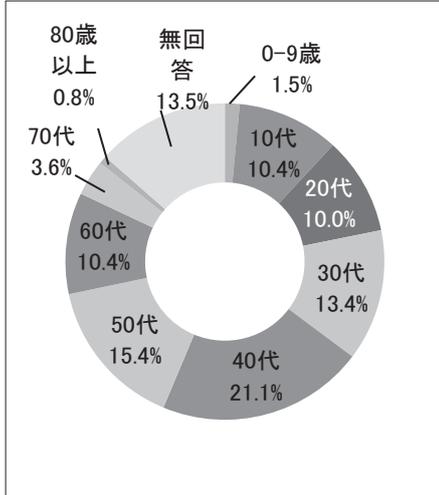
東京国立博物館

特別展「キトラ古墳壁画」 アンケート集計結果

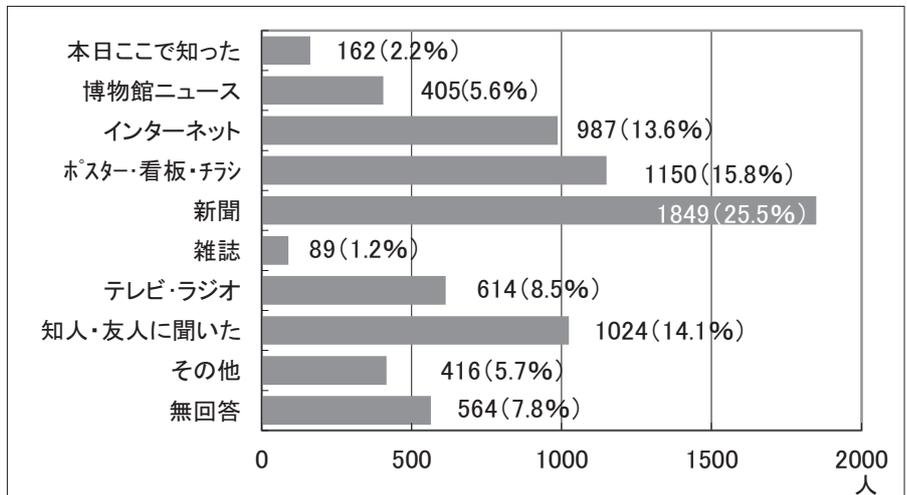
開催期間：平成26年4月22日（火）～ 5月18日（日）（25日間）

回答者数：6,238人（総入館者数：119,268人 アンケート回収率：5.23%）

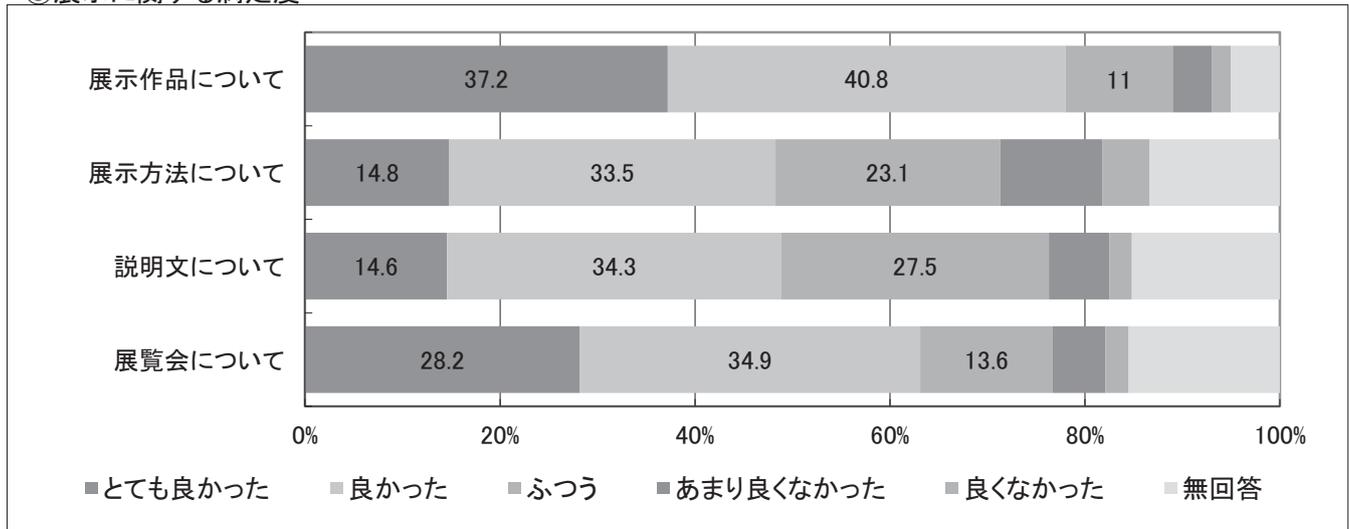
①アンケート回答年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



注：上記数字は以下の通り

	あまり良くなかった	良くなかった	無回答
展示作品	4.0	2.0	5.0
展示方法	10.5	4.8	13.4
説明文	6.2	2.3	15.2
展覧会	5.4	2.4	15.5

(%)

④主な意見・感想

- ・東京で見られて嬉しかった。
- ・また、このような企画が見たい。
- ・表慶館でやっていた展示が良かった。
- ・展示の仕方が悪く、見にくかった。
- ・整理券方式にする等、何か対策をとってほしい。

本展覧会では、奈良県明日香村のキトラ古墳の極彩色壁画を、村外で初めて特別公開いたしました。国内で発見された極彩色壁画は高松塚古墳に続き2例目ですが、盗掘の被害を免れ、ほぼ完全な姿を残す「四神」や、四神の周りに描かれる獸頭人身の「十二支」など、高松塚古墳とはまた違った魅力があります。「四神」から朱雀・白虎・玄武を、「十二支」から子と丑を展示した本展には約12万人のお客様にご来場いただきました。

アンケートの結果、63.1%の方々から「とても良かった」「良かった」と好意的な評価をいただいた他、展示作品全般に関しても多くの好評意見が寄せられました。一方で「作品が少なく、物足りない」「何回も急かされて不快だった」といった感想や展示方法等に関する要望・ご意見もいただきました。

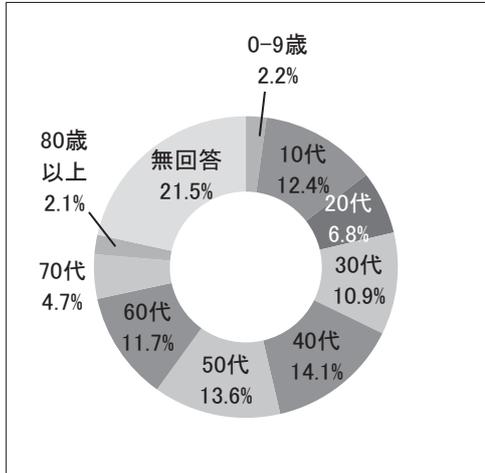
今後も、お客様からお寄せいただきましたご意見・ご感想を参考に、観覧環境のより一層の充実に努めてまいります。

特別展「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」 アンケート集計結果

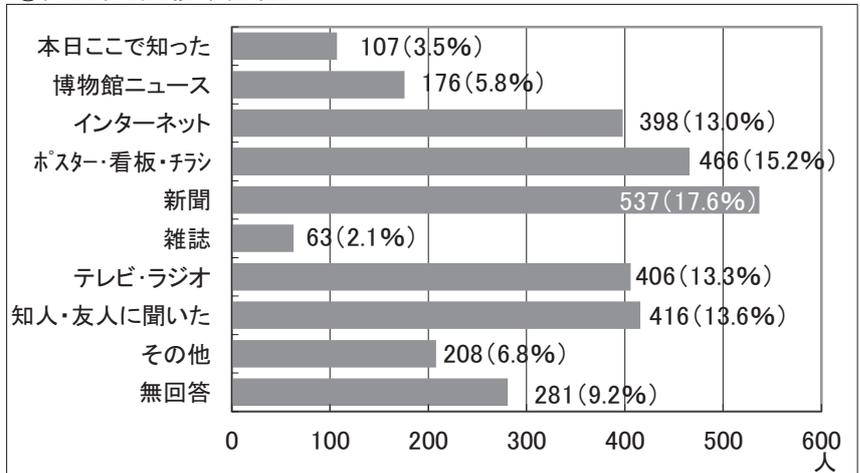
開催期間：平成26年6月24日（火）～ 9月15日（月・祝）（78日間）

回答者数：2,571人（総入館者数：402,241人 アンケート回収率：0.64%）

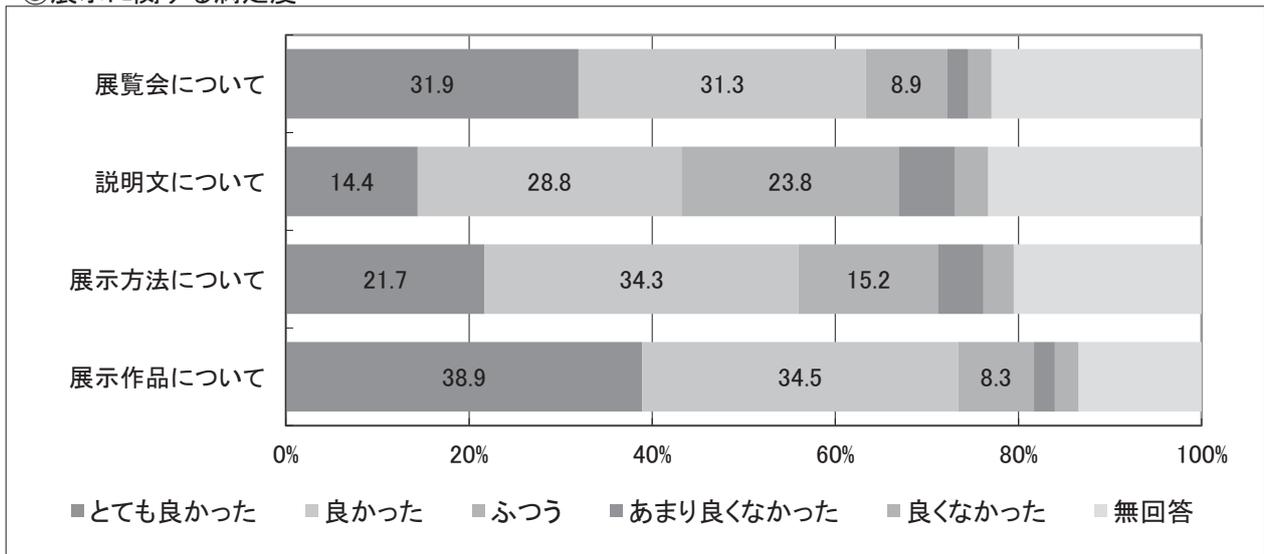
①アンケート回答年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・説明文やキャプションにユーモアがあり、分かりやすかった。
- ・貴重な品が多く、見応えがあった。
- ・もう一度見に来たい。またこのような企画が見たい。
- ・展示方法に工夫が欲しい。
- ・「翠玉白菜」が限定公開とは知らなかった。展示期間が短すぎる。

注：上記数字は以下の通り

	あまり良くなかった	良くなかった	無回答
展覧会	2.3	2.5	22.9
説明文	6.1	3.6	23.3
展示方法	5.0	3.3	20.5
展示作品	2.3	2.6	13.4

(%)

本展は、世界4大博物館とも称される台北 国立故宮博物院が収蔵するひととき優れた中国の文化財から、特に代表的な作品を厳選してご紹介する日本初の展覧会です。美しい翡翠と至高の技が織り成す門外不出の神品『翠玉白菜』が海外初公開となり、そのほかにも故宮で大変人気のある『人と熊』、〈皇帝の玩具箱〉とも呼ばれている『紫檀多宝格方匣』、刺繍で表された吉祥画『刺繍九羊啓泰図』など、歴代皇帝の至宝186件が集まった本展には、40万人を超えるお客様にご来場いただきました。

アンケートの結果、63%の方々から「とても良かった」「良かった」と好意的な評価をいただいた他、展示作品全般に関しても多くの好評意見が寄せられました。一方で「説明が足りない。もっと詳しい説明がほしい」「『翠玉白菜』の公開対方法に不満。行列を予測し、予約制や整理券など混雑緩和の努力をしてほしい」といったご意見もいただきました。

今後も、お客様からお寄せいただきましたご意見・ご感想を参考に、観覧環境のより一層の充実に努めてまいります。

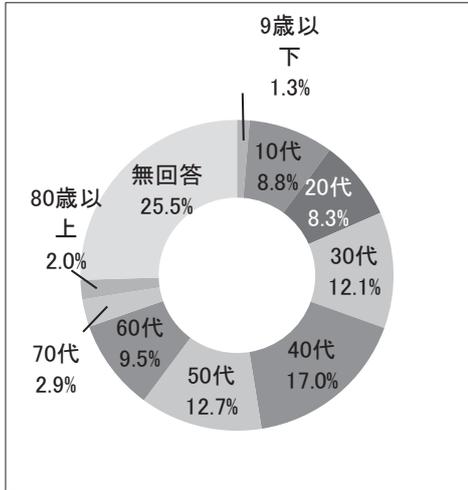
東京国立博物館

2014年日中韓国立博物館合同企画特別展 「東アジアの華 陶磁名品展」アンケート集計結果

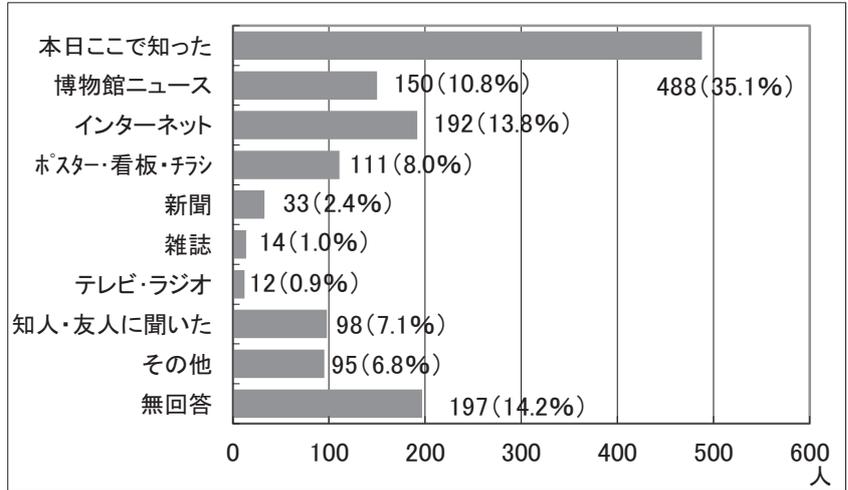
開催期間：平成26年9月20日（土）～ 11月24日（月・休）（57日間）

回答者数：1,390人（総入館者数：65,075人 アンケート回収率：2.14%）

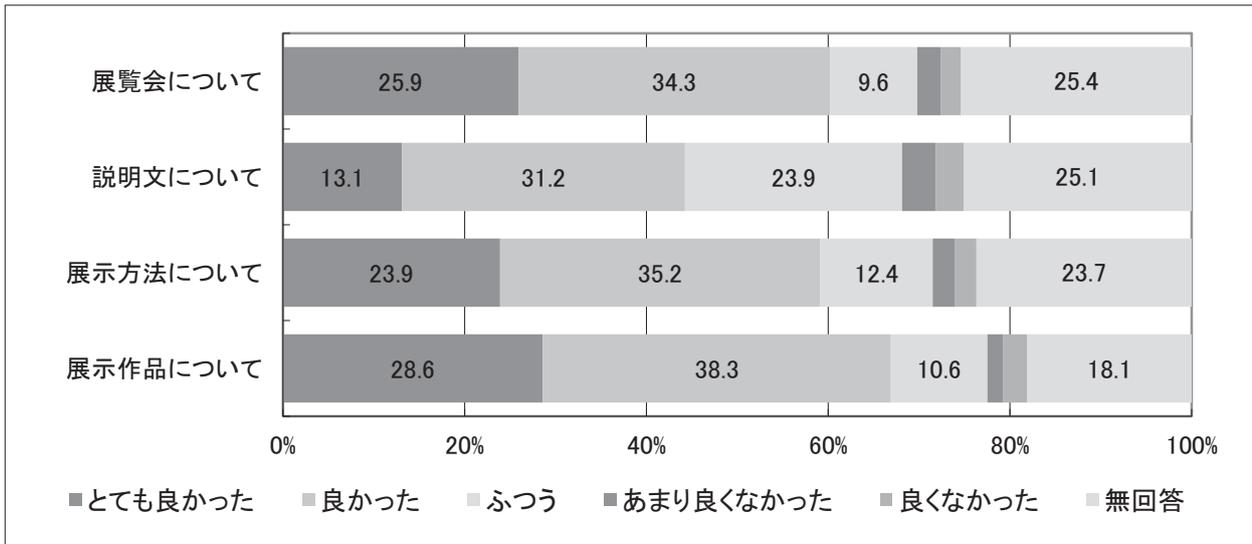
①アンケート回答年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・3カ国の陶磁を比較して見られるという展示テーマがよかった。
- ・「黒楽茶碗 銘ムキ栗」「火焰型土器」「三彩馬」「家形容器」がよかった。
- ・もう一度見に来たい。またこのような企画が見たい。
- ・陶磁器をとおして3カ国の文化・歴史に触れ、大変勉強になった。
- ・名品ぞろいで見応えがあった。

注：上記数字は以下の通り

	あまり良くなかった	良くなかった
展覧会	2.6	2.2
説明文	3.7	3.1
展示方法	2.4	2.4
展示作品	1.7	2.7

(%)

本展覧会は、日本、中国、韓国の3カ国を代表する国立博物館の館長会議において、3カ国の文化財を通じた連携強化を図る取り組みの一つです。この度、3カ国による初めての国際共同で実施する初めての国際共同企画展を東京国立博物館で開催いたしました。中国は中国国家博物館、韓国は韓国国立中央博物館の所蔵品、日本からは東京国立博物館の所蔵・寄託品と文化庁の所蔵品を各国15件ずつ、あわせて45件が出品されました。各館の陶磁器コレクションの特徴をふまえて厳選された名品が一堂に会した本展には、6万人を超えるお客様にご来場いただきました。

アンケートの結果、60%の方々から「とても良かった」「良かった」と好意的な評価をいただいた他、展示作品全般に関しても多くの好評意見が寄せられました。一方で「3カ国の歴史的背景や比較についての説明が足りない」「関連作品が展示されている東洋館への案内が足りない」といったご意見もいただきました。

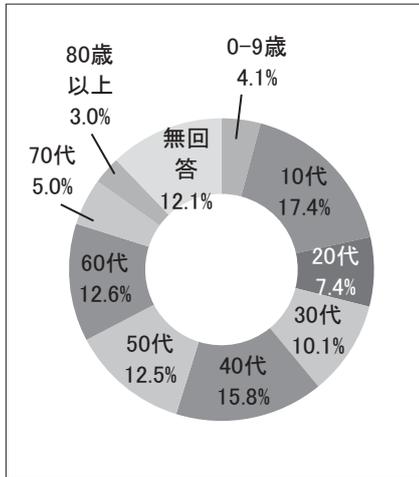
今後も、お客様からお寄せいただきましたご意見・ご感想を参考に、観覧環境のより一層の充実に努めてまいります。

「日本国宝展」アンケート集計結果

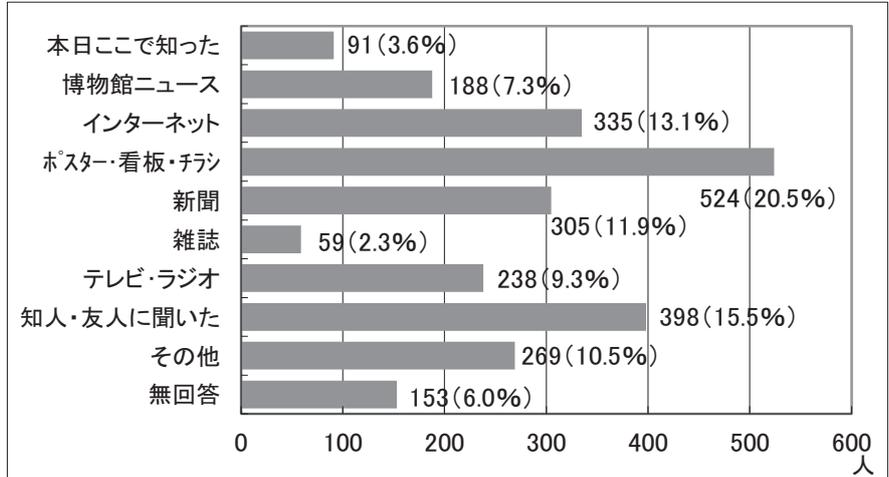
開催期間：平成26年10月15日（水）～ 12月7日（日）（47日間）

回答者数：2,080人（総入館者数：386,708人 アンケート回収率：0.54%）

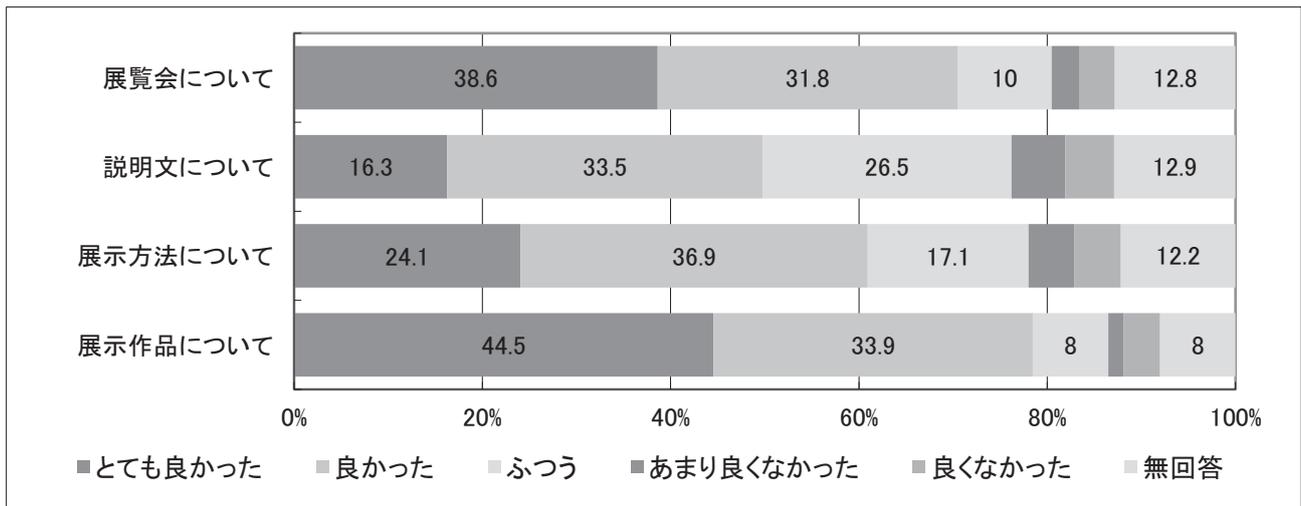
①アンケート回答年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・貴重な国宝が勢揃いで、見応えがあった。
- ・「金印」「土偶」「元興寺極楽坊五重小塔」「玉虫厨子」がよかった。
- ・信仰に根ざした日本文化に触れて、大変勉強になった。
- ・展示の仕方が良かった。工夫されている。
- ・説明文が理解の助けになった。

注：上記数字は以下の通り

	あまり良くなかった	良くなかった
展覧会	2.9	3.8
説明文	5.7	5.2
展示方法	4.9	4.9
展示作品	1.6	3.9

(%)

日本には、美術的、歴史的に貴重な意義を有する文化財が数多くあり、中でも世界文化の見地から、高い価値をもつものを、類い稀な国の宝として、「国宝」に指定しています。本展覧会は、これら国宝の中で、人々の篤い信仰心が結実した文化的遺産を集め、日本文化形成の精神を見つめ直すことを試みた壮大な展覧会です。今回は、正倉院宝物から11件が特別出品されるなど、平成時代に入り3回目の「日本国宝展」の開催となりました。

本展覧会は、天皇陛下の傘寿を記念する年にあたり、国宝約120件が集結し、38万人を超える方々にご来館いただきました。アンケートの結果、展覧会に対して約70%の方々から「とても良かった」「良かった」との好意的な意見をいただくことが出来ました。一方で、「照明が暗い」「会場が混雑していて作品が見え難い」などのご意見も寄せられました。今後も、来館者からお寄せいただきましたご意見・ご感想を参考に、観覧環境のより一層の充実に努めて参ります。

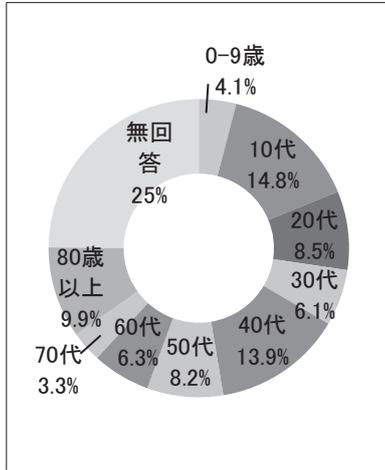
東京国立博物館

特別展「3.11 大津波と文化財の再生」アンケート集計結果

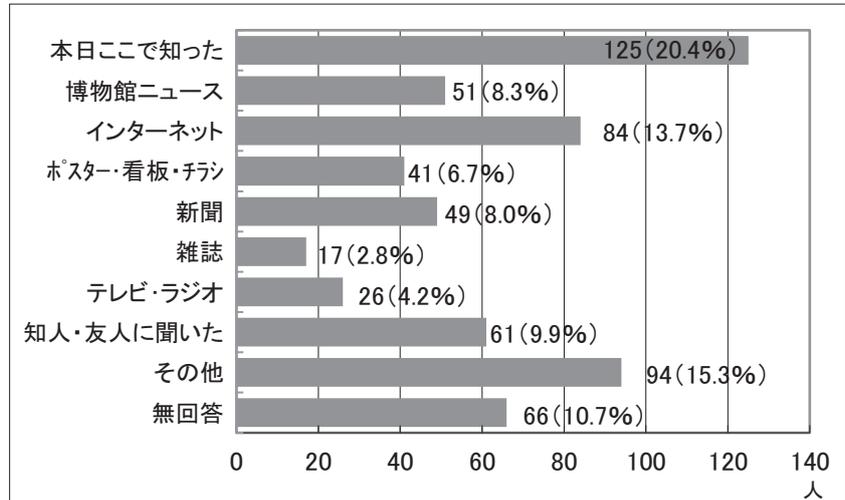
開催期間：平成27年1月14日（水）～ 3月15日（日）（53日間）

回答者数：574人（総入館者数：78,615人 アンケート回収率：0.73%）

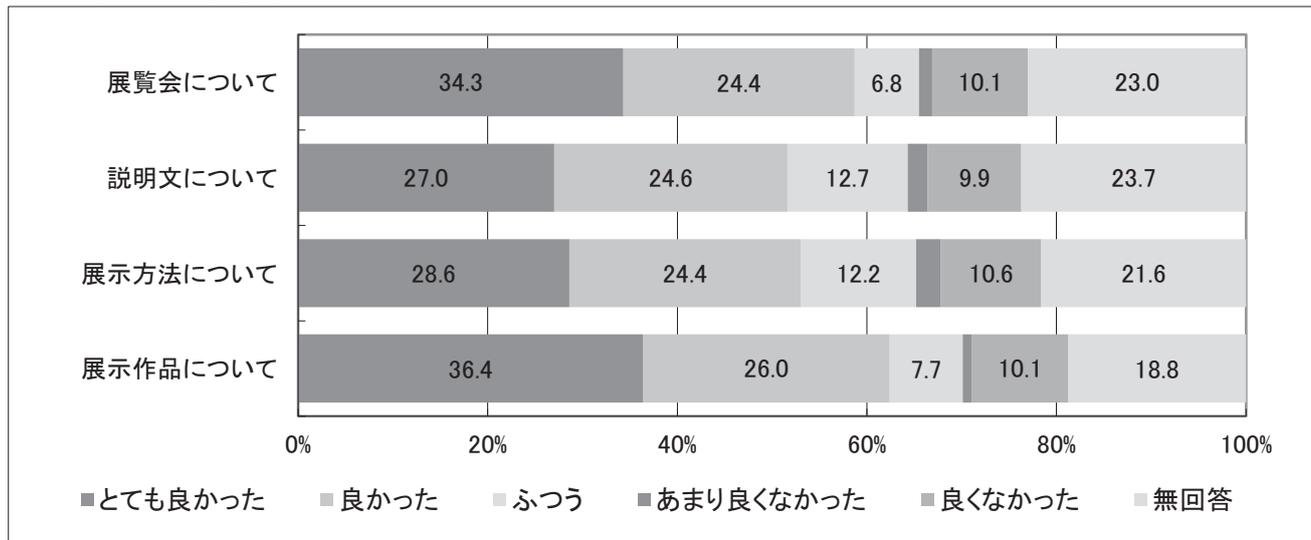
①アンケート回答年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・文化財レスキューの活動を初めて知った。
- ・再生のために尽力している方々の存在を知って、感動した。
- ・東北の震災の様子や関わりが興味深く、心に残った。
- ・展示場所が分かれていて分かり難い。
- ・陸前高田市に限定されているのが残念だった。

注:上記数字は以下の通り

	あまり良くなかった
展覧会	1.4
説明文	2.1
展示方法	2.6
展示作品	1.0

(%)

2011年3月11日東北地方太平洋沖地震が引き起こした大津波は、地域の文化を支えてきた文化財にも甚大な被害をもたらしました。

救出された文化財は、海底のヘドロ、生活雑排水に含まれる様々な雑菌類などが原因となり、変色や腐敗腐食といった劣化が急激に進む恐れがあります。そのため、「安定化処理」と呼ばれる劣化の原因を取り除く作業が必要となりますが、すべてを終えるには今後10年はかかるといわれています。

本展では、これまでの4年にわたる修復作業の過程および現状を紹介し、7万8千人にご来館いただきました。アンケートの結果、展覧会に対して約60%の方々から「とても良かった」「良かった」との好意的な意見をいただくことが出来ました。一方で、「会場が分かれていて分かり難い」「地域が陸前高田市に限定されているのが残念だ」などのご意見も寄せられました。

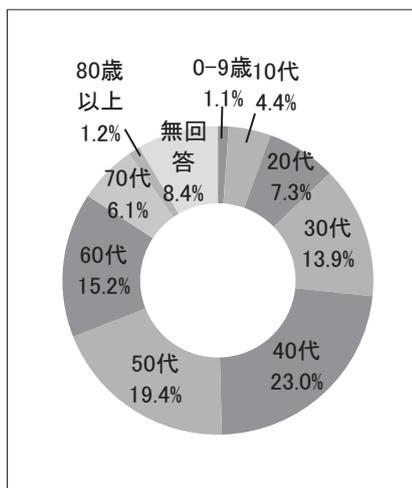
今後も、来館者からお寄せいただきましたご意見・ご感想を参考に、観覧環境のより一層の充実に努めて参ります。

特別展「みちのくの仏像」アンケート集計結果

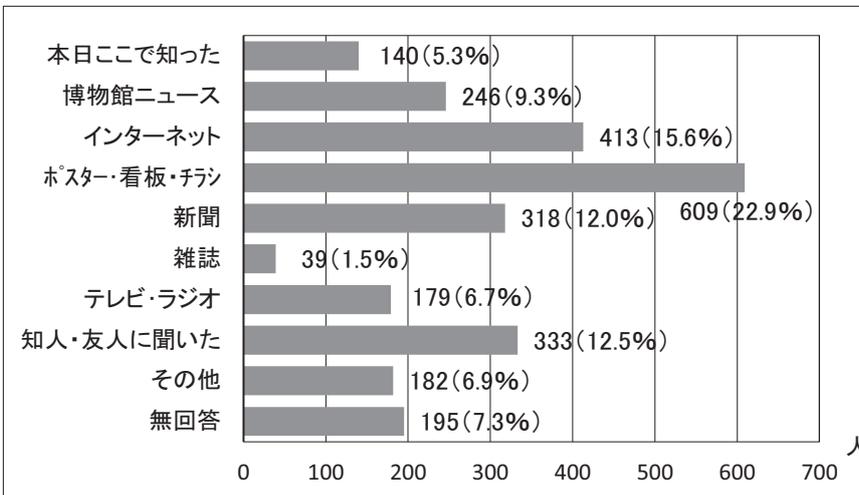
開催期間：平成27年1月14日（水）～ 4月5日（日）〔73日間〕

回答者数：2,252人（総入館者数：179,521人 アンケート回収率：1.25%）

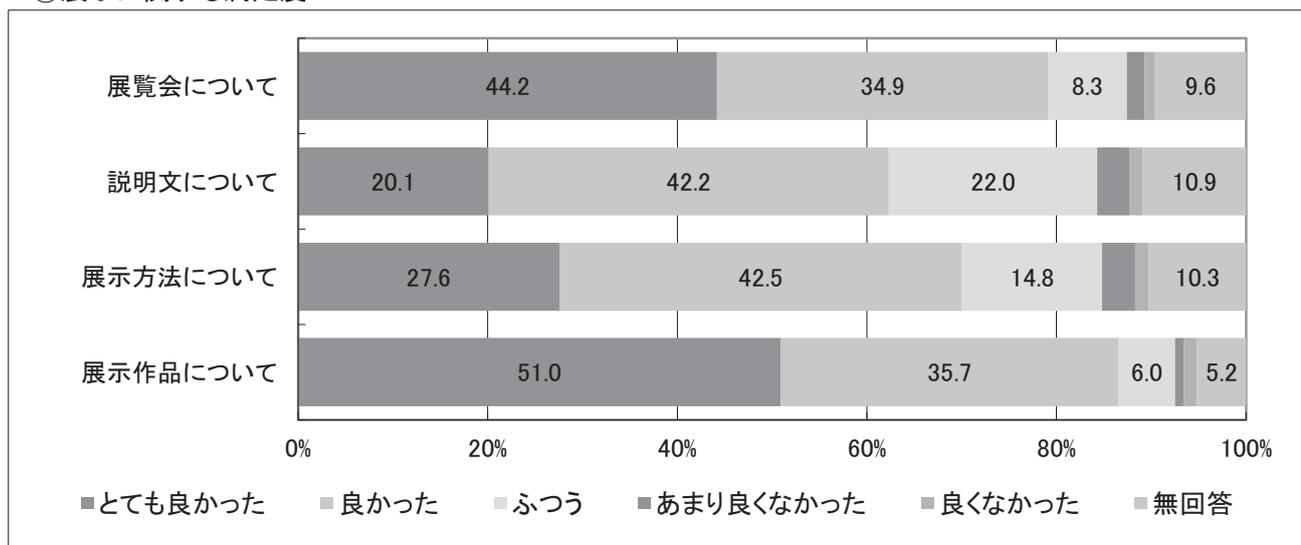
①アンケート回答年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・素朴で力強く、素晴らしい仏像ばかりだった。
- ・「薬師如来坐像（勝常寺蔵）」「十一面観音菩薩立像」「十二神将」がよかった。
- ・全ての寺社を実際にお参りに周るのは難しいため、このように一度に全て見られてよかった。
- ・音声ガイドの薬師丸ひろ子さんのナレーションがとてもよかった。

注：上記数字は以下の通り

	あまり良くなかった	良くなかった
展覧会	1.9	1.1
説明文	3.4	1.4
展示方法	3.5	1.4
展示作品	0.9	1.4

(%)

本展覧会は、東北の三大薬師と称される、黒石寺(岩手県)、勝常寺(福島県)、双林寺(宮城県)の薬師如来をはじめ、東北各県を代表する仏像が一堂に会する展覧会です。東北地方の仏像は、一木造、素地仕上げなど、独特の手法で制作され、その力強い表現と特有の人間味あふれる雰囲気知られています。会期中に東日本大震災から4年を迎え、そのような「みちのくの仏像」とおして東北の魅力にふれていただく機会とさせていただいた本展には、18万人近い方々にご来場いただきました。

アンケートの結果、展覧会に対して約80%の方々から「とても良かった」「良かった」との好意的な評価をいただいた他、展示作品全般に関しても多くの好評意見を賜りました。一方で、「出品数が少ない」「会場が狭い」などのご意見も寄せられました。

今後も、来館者からお寄せいただきましたご意見・ご感想を参考に、観覧環境のより一層の充実に努めて参ります。

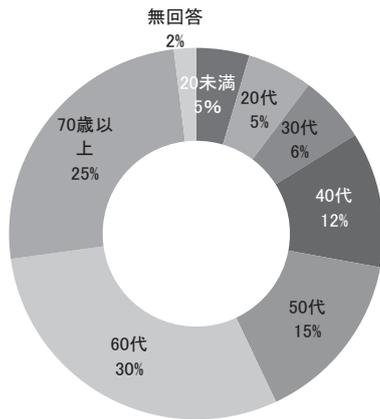
京都国立博物館

特別展覧会「南山城の古寺巡礼」

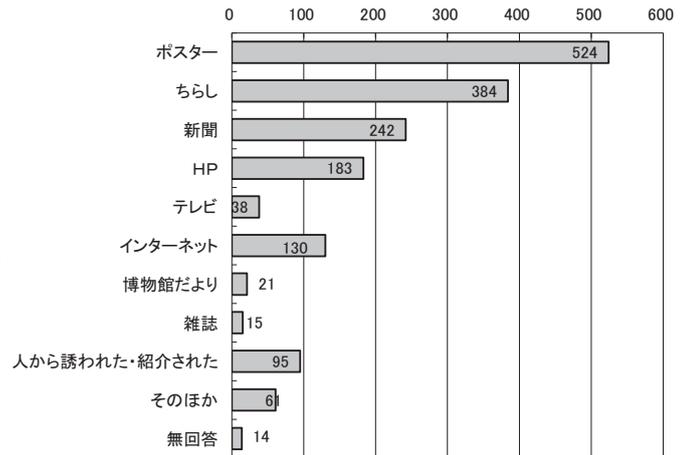
アンケート集計結果

開催期間：平成26年4月22日（火）～ 6月15日（日）（49日間）
 回答者数：1,093人（総来館者数 69,443人 アンケート回収率1.6%）

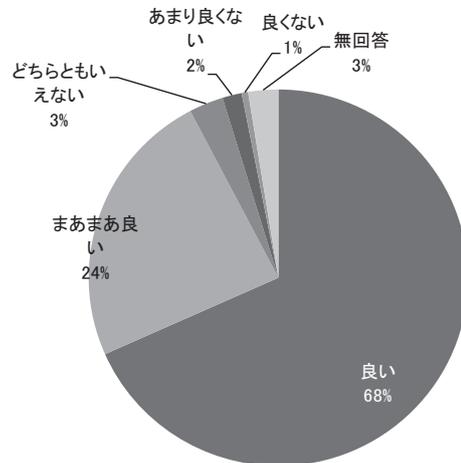
①年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

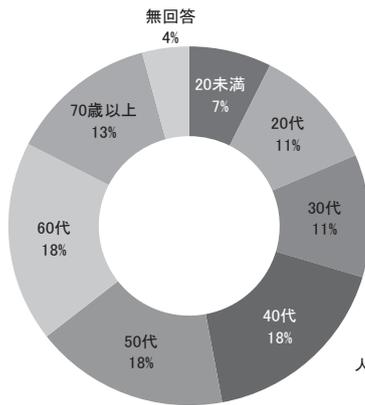
- ・良かった、面白かった、素晴らしかった、感動した
- ・今後も充実した展覧会を期待している
- ・見ごたえがあった、充実した内容だった
- ・実際巡るのは大変なお寺の作品を拝見できて、よかった

特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」

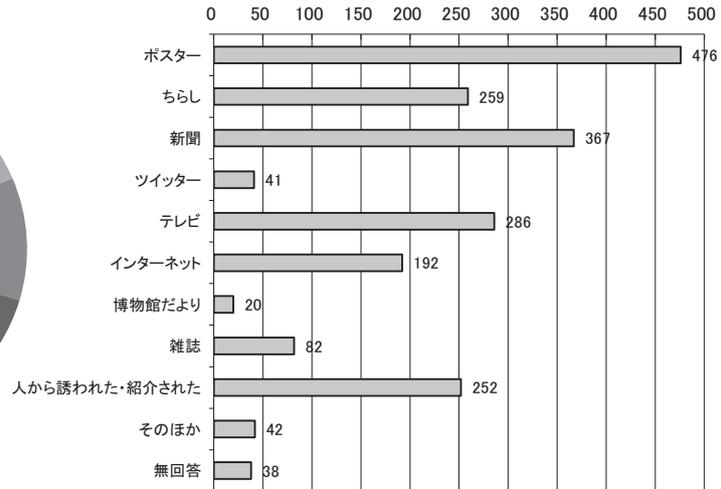
アンケート集計結果

開催期間：平成26年10月7日（火）～ 11月24日（月）（43日間）
 回答者数：2,171人（総来館者数 203,900人 アンケート回収率 1.1%）

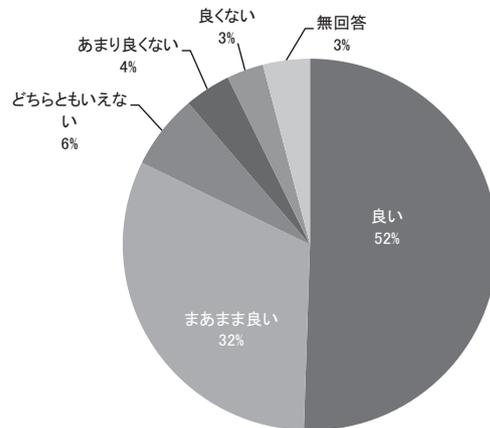
①年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



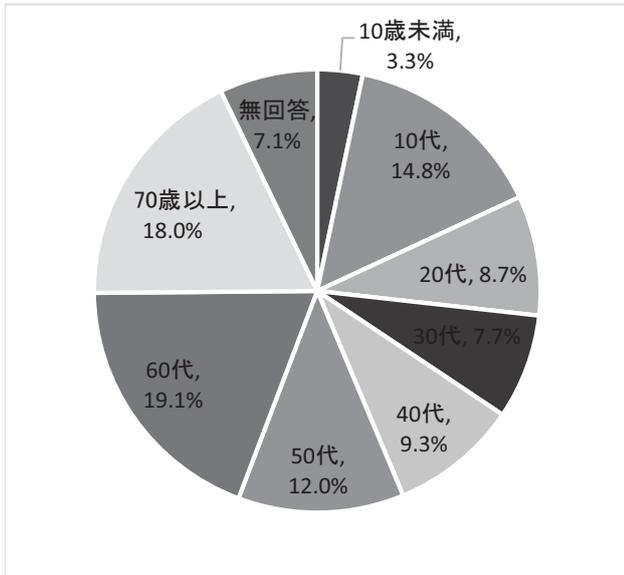
④主な意見・感想

- ・良かった、面白かった、素晴らしかった、感動した
- ・見ごたえがあった、充実した内容だった
- ・見やすい、わかりやすい展示だった
- ・本物を間近で見ることが出来て、よかった
- ・長時間並んだのに、ゆっくり見られなかった・待ち時間が長すぎた

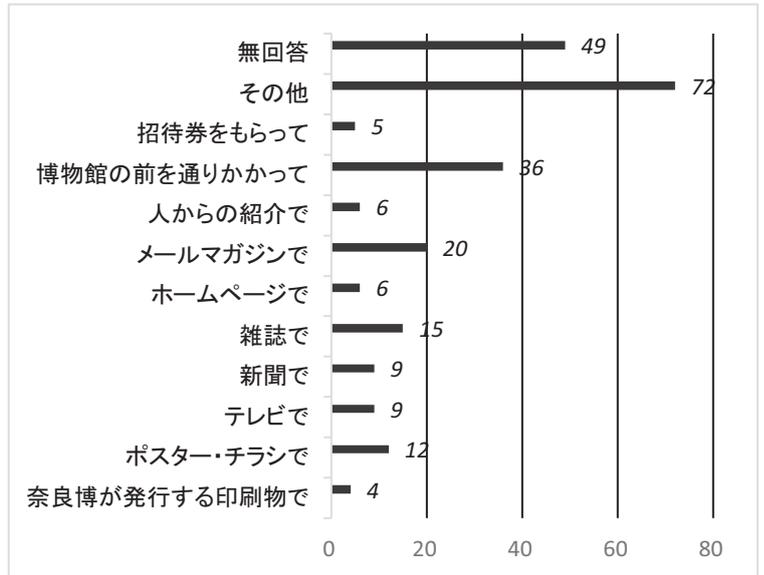
特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 迫真とエキゾチシズム」 アンケート集計結果

開催期間:平成26年4月5日～6月1日(51日間)
回答者数:183人 入場者数37,022人 回収率 0.49%

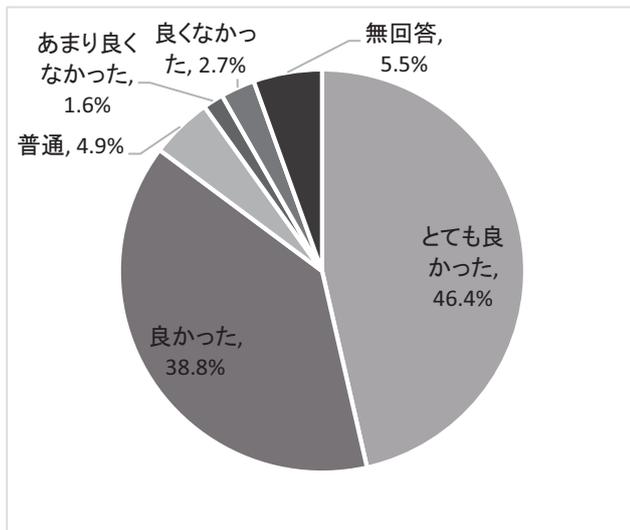
①年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

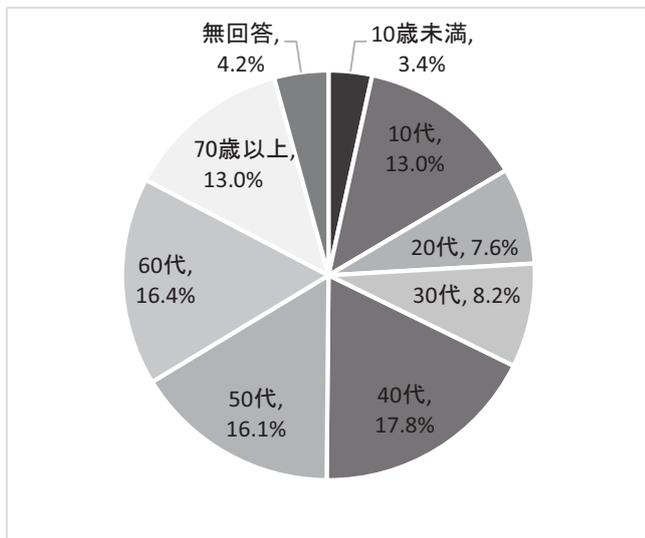
- ・京都・奈良の仏像とはまた一味異なり、鎌倉で発展した仏像を見る事ができた。
- ・エキゾチックな雰囲気非常に印象的。
- ・質の高い作品が多くて良し。いつ来ても仏像展示が秀逸。
- ・ポスターにひかれて来た。エキゾチシズムというだけあって、京都、奈良と一風違った仏様が多くおもしろかった。
- ・鎌倉時代の仏像が一堂に見られてよい企画でした。
- ・館内が暗すぎ、文字が読みづらい。仏像の細部、頭部も見えづらく、残念です。

特別展「国宝 醍醐寺のすべて 密教のほとけと聖教」

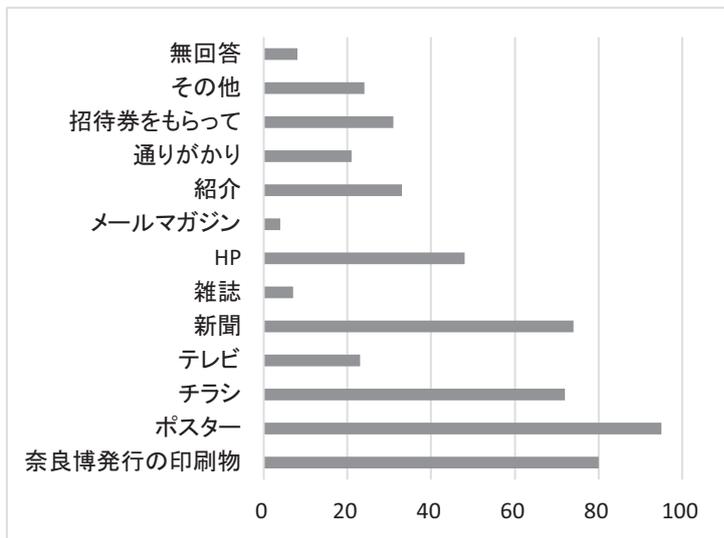
アンケート集計結果

開催期間：平成26年7月19日～9月15日(52日間)
 回答者数：353人 入場者数：78,376人 回収率：0.45%

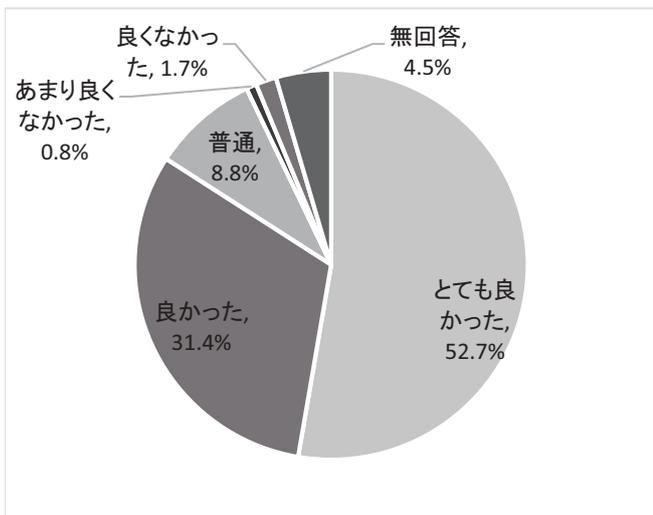
①年齢層



②認知経路(複数回答あり)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

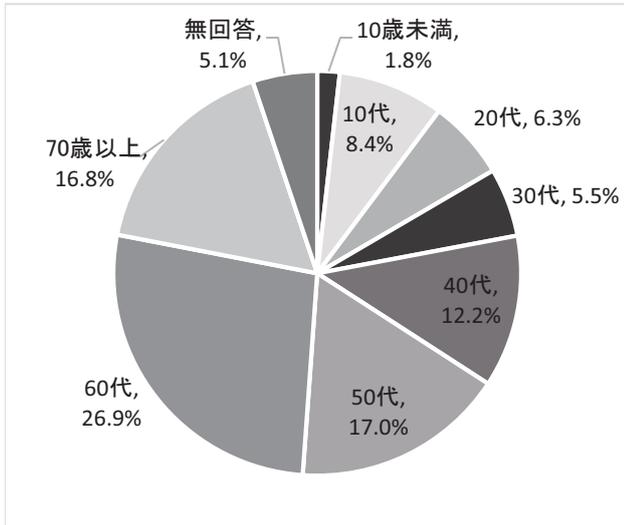
- ・醍醐寺の開山から近世に至る歴史を良く理解できました。素晴らしさに感動のひと言に尽きます。
- ・ふだんお寺では見ることができないものまで見ることができたのがよかった。
- ・五大明王五体をそろえて迫力があつた。
- ・仏像が好きなので間近で見ることが出来、とても良かったです。
- ・古文書の展示は出来れば全文訳を併記して欲しかった。
- ・通路の幅が広く、ゆったり歩きやすかった。
- ・文書が予想以上に良かった。

天皇皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展

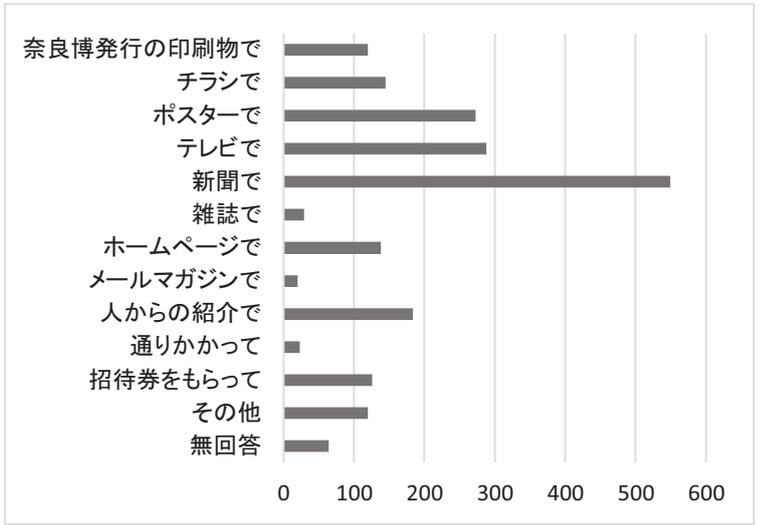
アンケート集計結果

開催期間:平成26年10月24日～11月12日(20日間)
 回答者数:1,404人 入場者数:269,348人 回収率: 0.52%

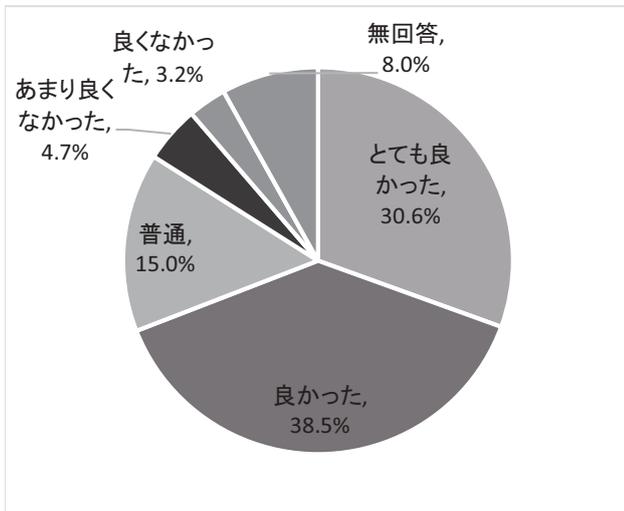
①年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



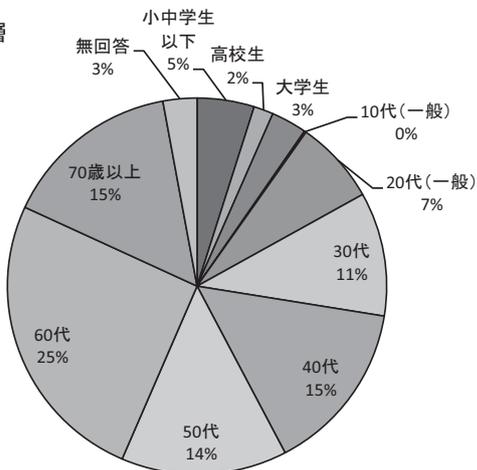
④主な意見・感想

- ・正倉院の様々な種類の宝物が、まんべんなく展示され概要がつかみやすかった。
- ・1300年近く前のものをていねいに大事に美しく保存し、見せてくださって感激です。
- ・見づらい細かな文様をパネル展示することで、宝物の詳細がよくわかった。
- ・古文書に細かく注が付してあり、わかりやすい。展示解説は年々わかりやすく工夫されていると思う。
- ・人が多すぎてゆっくりと見られなかったのが残念。
- ・展示室内の人の流れが悪かった。順路等工夫できる余地があると思う。

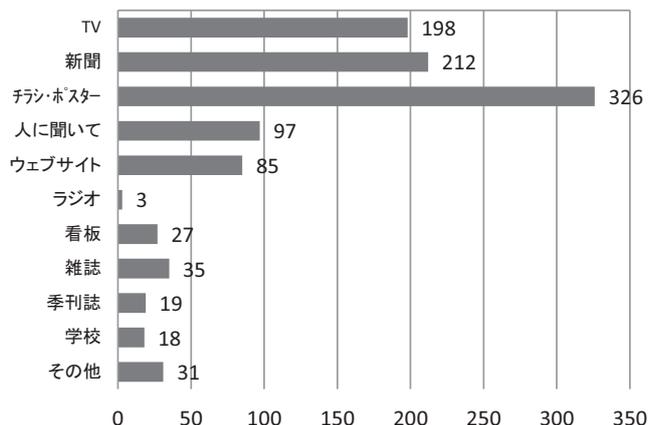
特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」 アンケート集計結果

開催期間：平成26年4月15日(火)～6月8日(日) (49日間)
 総回答者数：657人 (総来館者数：60,808人 アンケート回収率：1.08%)

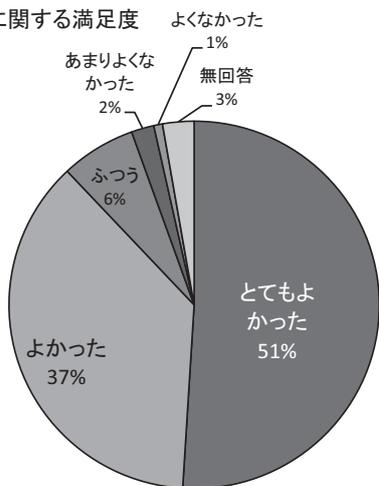
①年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・展示室が広すぎず、見やすかった。・体験コーナーが良かった。
- ・音声ガイドが大変良かったです。・天井からかな文字を吊り下げてライティングしているのが美しく良かった。
- ・レイアウトは見やすく良かったが、もう少し屏風や絵画も展示して欲しい。・車椅子では見えづらいレイアウトだった。
- ・全体的に暗いので良く見えない。・靴音が気になるので、何か対策をして欲しい。
- ・講演会等が良かった。
- ・観覧態度の悪い人たちをきちんと注意して欲しい。
- ・図録がとても良かった。

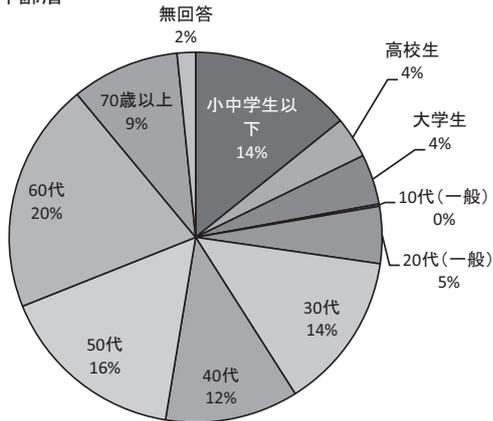
九州国立博物館

特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美—」 アンケート集計結果

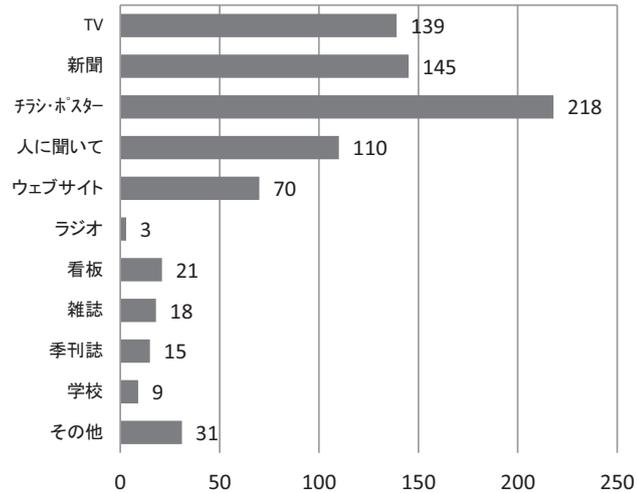
開催期間：平成26年7月8日(火)～8月31日(日) (49日間)

総回答者数：502人 (総来館者数：70,794人 アンケート回収率：0.7%)

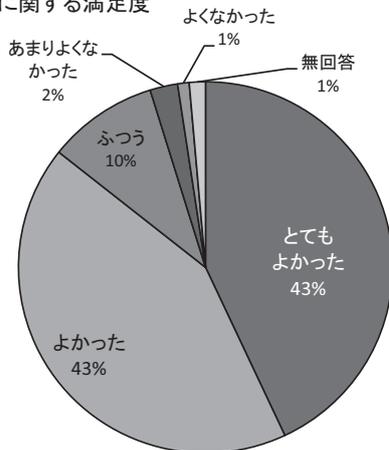
①年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

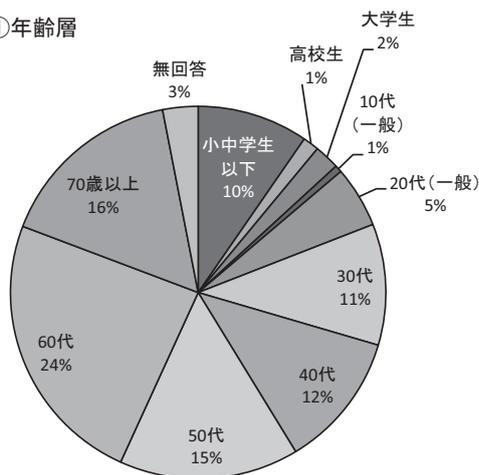
- ・レイアウトや作品の説明が分かりやすく、見やすかった。
- ・ただ観覧だけでなく、体感することが出来る展示でとても楽しめた。
- ・巻物や屏風絵は基本的に右から見るものと思いますが、進行方向の流れで左から見ざるを得ず、何となく気持ち悪かったです。
- ・もっと多くの作品があれば良かった。
- ・作品に鑑賞のポイントのコメントがあり、分かりやすくて良かった。
- ・会場内の靴の音が響き、大変気になった。
- ・観覧態度の悪い人をきちんと注意して欲しい。
- ・再入場出来る様にして欲しい。
- ・展示品解説文を作品の両側に置いてもらえるともっと見やすいのでは。
- ・見るもの全てが良かった。感動的でした。
- ・遠くから見たい作品は離れて見る事が出来る配置にあり、良かった。

特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」 アンケート集計結果

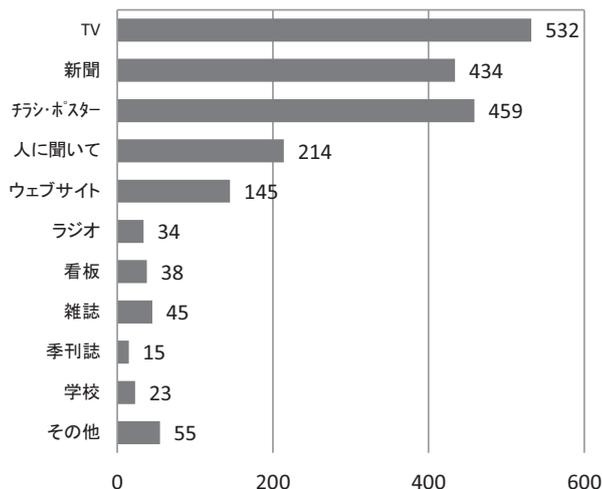
開催期間：平成26年10月7日(火)～11月30日(日) (51日間)

総回答者数：1,150人 (総来館者数：256,070人 アンケート回収率：0.4%)

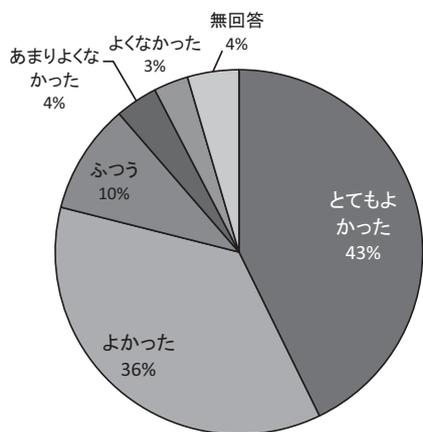
①年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・混雑はしていたが観覧しやすかった。・係員の誘導が適切だった。
- ・以前、谷原さんのトークショーに参加し、展覧会へ行きました。ただ観覧するよりも予習していったので、より一層理解が深まりました。
- ・時代を越えた空間に一時入り込むことでリフレッシュ出来た。
- ・会場内のレイアウトはもう少し人が流れるようにして欲しい。
- ・展示品の裏(底)が見たいので鏡等の設置をして欲しい。
- ・車椅子の人にはケースが高すぎて見えない。鏡を利用し、正面からだけでなく他の角度からも見られるようにして欲しい。
- ・解説文は展示品のケースの四面に付けられれば、混雑時でも見えやすいのでは。
- ・ミュージアムホールを使い映像を流す。大変良いアイデアだと思った。
- ・バーコードリーダー機能のタブレットを貸し出して、外国の人が作品の説明を作品ごとに添えたバーコードリーダーを読み込むことで、自国の言語で読めるようにしてはどうでしょうか。
- ・ガラスについての指紋をもっと頻繁に拭いてほしい。

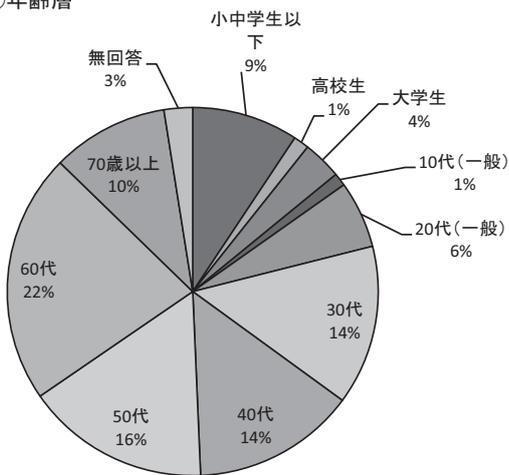
九州国立博物館

特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」 同時開催「発掘された日本列島2014」 アンケート集計結果

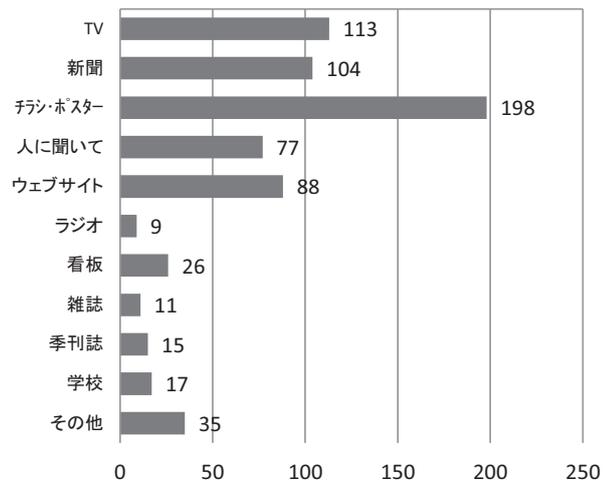
開催期間：平成27年1月1日(木)～3月1日(日) (52日間)

総回答者数：442人 (総来館者数：59,629人 アンケート回収率：0.7%)

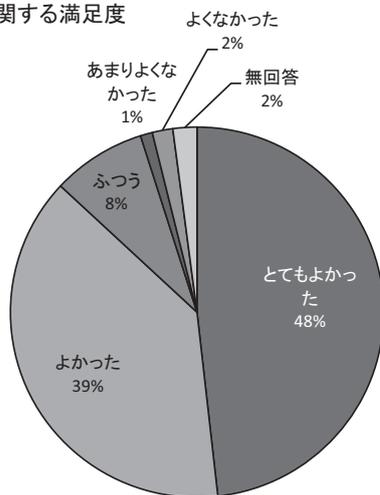
①年齢層



②認知経路(複数回答)



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・毎回丁寧な展示内容に感心している。特に若い方にもっと来て見てもらえたら良いと思う。
- ・日本発掘が予想以上に良かった。
- ・発掘作業、考古学者の仕事の貴重さと大変さがよく伝わった。
- ・会場のレイアウトが良かった。
- ・子供が資料にメモを取る時、展示ケースを下敷き替わりに使用し、ガラスが汚れている。バインダー等の使用を促して欲しい。
- ・韓国の方もみえてるので、ハングルの説明もつけてはどうでしょう。
- ・暗すぎず明るすぎず、天上も高くすっきりしていて良かった。
- ・最後の映像の音が小さかった。出口付近なので人の出入りがあり、聞き取りにくかったので字幕をつけて欲しい。

(奥付)

平成 26 年度 独立行政法人国立文化財機構年報

平成 28 年 1 月 31 日発行

編集・発行 独立行政法人国立文化財機構

〒110-8712 東京都台東区上野公園 13 番 9 号

電話 (03)3822-1111 (代表)

Fax (03)3822-1113

印刷 株式会社長谷工システムズ

©2015. National Institutes for Cultural Heritage,

printed in Japan